
魔法少女 リリカルなのは StS,EX

テストメント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女 リリカルなのは S t S , E X

【Nコード】

N 8 8 7 7 F

【作者名】

テストメント

【あらすじ】

機動六課が解散して半年。久しぶりに皆で集まる事になった。楽しい時間は過ぎていく。だが、見えない所で動乱はゆっくりと元機動六課メンバーに近づいていた。そして、とある少女はとある少年に出会う。ひどく、不器用な少年に。魔法少女リリカルなのはのファンフィクション（二次創作作品）ですが、是非よろしく願います♪

第一話「ボーイ・ミーツ・ガール」(前書き)

作者は英語が得意ではないのでデバイス等の言葉は全部日本語でいかせて頂いてます。オリジナル設定が多数あります。その為、原作を知ってる方には不愉快な思いをしてしまうかも知れませんが何卒ご容赦下さい。

第一話「ボーイ・ミーツ・ガール」

「強くなれ……」

その言葉を忘れない。

「強くなれ。誰より強く誰よりも高く」

けっして忘れるものか。

「強くなれ、シオン。そして……」

そしていつか、アンタを。

「俺を殺せる程に」

この手で……



蒼い空の下。

ミッドチルダ地上，元，機動六課隊舎前に懐かしい面々が半年ぶりに顔を揃えていた。

八神はやてを始めとするロングアーチ一同、そして守護騎士シヤマル、守護獣ザフィーラ。

ライトニング分隊。

隊長のフェイト・T・ハラオンを始めとして。

副隊長の守護騎士

シグナム。

そして、フォワードのエリオ・モンディアル。

キャロル・ル・ルシエ。

スターズ分隊。

隊長の高町なのはを始めとして。

副隊長の守護騎士ヴィータ。

フォワードのティアナ・ランスターがそれぞれ集まって、雑談に華を咲かせていた。このメンバーが集まるのは滅多にない。皆、それぞれ忙しく、シフト等も合わない為だ。今日はそれぞれ忙しい時間を縫って計画を立て。

シフトを合わせたのである。

同窓会……と、いうには早過ぎるが、久しぶりに集まる事になった為だ。だが……

「遅い……！」

まだ来ない元相棒を思い。ティアナが唸る。

「そうだね……スバル。どうしたんだろ？」

流石に心配になって来たらしい、なのはが疑問符を浮かべる。

「ま、しばらくしたら来るだろ。あいつシフトでは休みだったけど昨日。夜に出動だったんだろ？」

ヴィータが苦笑いを浮かべながらではあるが、珍しくフォローに回る。

「確か海上の大型客船のレスキューだっけ？」

「はい。今朝方まで出動だったらしいんですが」

なのはの質問にティアナが答える。

流石にきつかったのか早朝にティアに連絡が掛かってきたのだ。

「あんまり無理するな、て言ったのにアイツは……」

「でも、やっぱり皆と会えるの楽しみだったんですよ。」

「うん。私もエリオ君も昨日遅くまで寝られなくて。」

エリオとキャロルことキャロが朗らかに笑う。

「そりゃあね。私だって楽しみだったわよ。皆と久々に会えるんだもの」

スバルとも昨日連絡をとっていたがそうとうはしゃいでいたのだ。

「噂をすれば……と、言う奴かな。来たようだぞ？」

シグナムの声と顔が向いた方に皆顔を向ける。

大通りを走りながら少女が走ってくる。

スバル・ナカジマ。

スターズ少隊のフォワードメンバーだった少女である。

「すみませ〜〜ん！」

「遅い!!」

開口1番。ティアナがスバルに怒鳴る。

「あう〜ティアもゴメン。起こしてくれたのに……」

「まったく。……それよりアンタ。身体、大丈夫なの？」

あんまり

寝てないんじゃない？」

ティアナの疑問にスバルは満面の笑顔を浮かべる。

「うん！ 大丈夫だよ！」

「ならいいけどさ……」

「みなさん。遅れてゴメンなさい！ そして……お久しぶりです♪」

「まあ、遅刻言うても10分ぐらいやしな。大丈夫やよ」

「いえ……でもありがとうございます♪ 待ってて下さって」

「ま、でも遅れるなら遅れるでちゃんと連絡しろよな。なのはも皆も心配したんだぞ？」

「あううう。すみません。ヴィータ副隊長」

もう副隊長じゃねえ。と、続けてヴィータが訂正を入れた所で笑いが起こる。

うううと、恥ずかしがるスバルになのはが微笑を入れる。

「それじゃあ立ち話もなんだし、行こうか？」

なのはが先を促し。

皆も進み出した。

そこには確かに平和があった。



皆で落ち着ける場所として元機動六課の隊舎を借りられた。

その為、隊舎を同窓会、会場として使い。

はやて、なのは、フェイト。隊長陣の他。フェイトの義母であるリンディ・ハラオウン。

そして六課の寮母さんも加わり。

同窓会もどきの前日から腕によりを掛けて、料理を作っていた。結果。

「……すっごくいい」

スバルが感嘆の声を上げる。

六課の設立と解散の挨拶をしたホールにはテーブルが並べられ、そこに、数多くのご馳走が並んでいた。

「これ……皆。なのはさん達が作ったんですか？」

ティアナも目の前のご馳走に目を見開いて驚いている。

「そや♪ まだまだ料理の腕は衰えてないよ〜♪」

はやてが自慢気に二の腕を叩く。

「うん♪ 昨日から頑張ったんだよ♪」

なのはも満面の笑顔で答える。

「ちびっこ達はあんまり驚いてないのね……」

「あ、僕は前にフェイトさんやリンディ提督に料理を作って貰って……」

「私です♪」

そうは言う二人だが、目の前のご馳走に嬉しいそうにしている。

「本当なら毎日作ってあげたいんだけど……そうもいかなかったから」

フェイトがちよっと寂し気に言う。

普段の忙しさがよく解る言葉だった。

「さ、皆。席についてな♪」

はやての号令で皆思い思いの席に着く。

「さて、皆集まってくれてホンマありがとう♪ 皆一緒にこう言う席を設けられてホンマ嬉しいです♪」

はやてが乾杯の挨拶を述べる。

誰一人として欠けずに。そこにはそんな嬉しさも含まれていた。

「さて、長い挨拶は嫌われるしな♪ 皆、グラスを持って〜」

それぞれグラスを持つ。未成年が多いはずのためお酒は入っていない……としたい。

レテイ提督もない訳だし。

「うん♪ 皆、準備はええな？ それじゃあ、カンパ〜〜〜イ♪」

カンパ
~~~~~  
イ!!!

はやての音頭に合せて皆が杯を掲げる。

宴が始まった。



「フウ……」

夜の街をスバルが歩いていく。

飲み物が切れた為。

ジャンケンで負けたスバルが買い出しに出たのだ。

「に、しても。凄かったな〜」

ご馳走はもちろん美味しかった。

だが、スバルが言っているのはもちろん違う。

平たく言うところグラスにお酒が入っていたのだ。

ちなみに犯人はシャルである。

いつから注がれたのか。

なのはやフェイト、はやてまでいつの間にか飲んでしまっており。

さらに、あの人が来たのだ。

そう、酒乱大魔王こと、レティ提督が。

ちなみに後ろにユーノ・スクライアと、クロノ・ハラウンを引き連れていた。

二人の顔が引き攣っていたのは言うまでもあるまい。

その後宴会がどうなったかは察して頂きたい。

スバルは逆に宴会から逃げられてちよっとほっとしていた。

（皆、いろいろな酔い方があるんだな〜）

スバルはお酒を飲まれた方々に思いを馳せる。

泣き出したり、笑い出したり、……脱ぎ出したり。

主に誰がやったのかは伏せる。

歩くスバルを撫でる様に風が吹く。

気付けばもう秋である。いろいろな事があった。

機動六課が解散した後もレスキューで人を救い。

今も夢を追いかけている。

その事が誇らしく、またちよっとだけ寂しかった。

今日のようにまた皆とは会える。

だけど、あの日のように皆で動く事はない、と……

そんな風に少しばかりアンニュイな気分に浸っていたが、急に空気

が変わった。  
ふと気付く。

……ここはこんなにも暗かったろうか？  
後ろをふり向く。  
だがそこもまた明かりはない。

……結界！？

スバルは思わず目を見張る。  
誰が何の為に？

そう思う、が。今は考えるのは後だ。

（マッハキャリバー。……いける？）  
はい。いつでも。

よし。

スバルは相棒の返答に頷き。  
ポケットから自らの相棒。

インテリジェント・デバイス。マッハ・キャリバーを取り出し、空  
へと掲げた。

「マッハキャリバー！ セット、アップ！！」  
スタンバイ、レディ。セット、アップ。

瞬時にスバルの身体は光に包まれ、バリアジャケットを身に包んだ。

（リボルバーナックル……よし。）

カートリッジの残弾を確認する。  
そして、自分の体調。……あまりよくはない。昨日の出動もあり少

しだけ疲労感がある。

（だけど……まだ、大丈夫！！）

ギュッと右の拳を握りしめる。

「時空管理局…陸士。スバル・ナカジマです！ 誰かいるのなら今すぐ結界を解きなさい！！」

強い口調で言ってみる……が、反応はない。

（こんな何もわからない所で一人で戦っちゃ、駄目だ。）

ならばまず行う事は

マツハキヤリバーの返答に頷き返す。

（うん、結界から抜き出なくっちゃ）

だが、もし。

この結界を張った存在が自分を狙ったのなら。結界を破壊していると言う。

そんな絶好の機会を逃す訳がない。

（念話は……やっぱり駄目）

繋がらない。

助けは期待出来ない、という事である。

そもそも結界張った相手も解らないのだ。

手の出しようがない。

(どう出る?)

瞬間。

背に悪寒が走る。

後ろだ。

振り向き様に一気に後退する。

そこにいたのは……異形、だった。

(……何? ……コレ?)

いや、その生物だけならスバルも知っている。

時空管理局の管理する世界にはこうした大型の生物もいる。

確か、オーガ種の生物だ。

だが、オーガは果たして、四本も手があっただろうか?

回りにうごめく黒い点は何だ?

明らかに違う。

何より、存在が。

異形が吠える。

「ガA a b a a a ! ! ! ! ! !」

咆哮と同時に四本の手がスバルへと叩きつけられる!

「ーっ! マッハキャリバー!!  
ウイング・ロード!!!」

驚き。

しかし、スバルは叫ぶ。

掛け声と共に光の道が空まで延び。

マッハ・キャリバーが唸りを上げ。  
スバルは天まで一気に駆け上がった。

「おうりゃあああ!!」

そのままくるとウイング・ロードを逆さになりつつスバルは異形に右の拳を叩きつける!

―激!―

……だが。

(固っ……!)

頭に叩きつけられた拳、リボルバー・ナックルは、しかし異形の皮膚で止まっていた。

直後、異形の手が動く。

(させない!!)

再び足元からウイングロードが伸び。手を回避する。

(動き自体は大丈夫。遅いから避けられる!)

地面に降り立ったスバルは止まる事なく次の技を放つ。

「リボルバー、シュート!」

―破―

リボルバーナックルが回転し、カートリッジ・ロード。  
そのまま右手を突き出すと、同時。

リボルバーナックルから衝撃波が放たれる。  
直撃。

だが、あまり効いた感じではない。

（けど、体勢は崩した！）

一気に異業の懷に潜り込む。

……しかし、そこにはあるはずがないものがあつた。

異形の前に光り輝く壁が展開している。

プロテクション、だ。

「な……！ けど……！！」

一瞬驚くスバルだがすぐに持ち直す。

思考の柔軟さはなのはにより、みっちり鍛えられている！

「はあっ……！！」

一気にプロテクションに拳を叩きつける。

同時にカートリッジロード。

少しずつ拳がプロテクションを突き抜ける。

「りいやああああ……！！」

さらに、カートリッジロード。

ー破！ー

次の瞬間。

異形のプロテクションが砕けた。

さらに体勢を崩す異業にスバルは止まらない。

左手に環状魔法陣が展開。

さらに、左手の先には光球が灯り、そのまま掲げた光球を押し付け。

「デイベインっ！」

振りかぶった右手を光球に叩き付ける！

「バスターっ！！」

「煌！」

一撃が異業を貫いた。



「スバル、遅いな……」

そうティアナが呟くのは宴会の真っ只中だ。

ティアナは買い出しに出かけたスバルに思いを馳せる。

……現実逃避、とも言う。

目の前の状態はそれはもう賛嘆たる有様だった。

はやて達を始めとした一同が酒を飲み、暴れているのだ。

おそらく、明日はさらなる地獄が彼女達を襲うだろう。

主に頭痛が。



「確かに遅いですよね」

エリオがトコトコとティアに近付きながら、声を掛けて来た。  
それにティアナは目を向ける。

「……エリオ。こっちに戻って来たの？ キャロは？」

「キャロは……。捕まりました」

フツとエリオが陰りのある表情となる。

それにティアナがエリオが来た方向に視線を送る。

そこではキャロがお酌の相手をさせられていた。

雷部隊の隊長と副隊長に。

「……アンタ。ひょっとして、キャロを囚に？」

「い、いえ！ 違いますよ！ ただフェイトさんもシグナムさんも  
何故か僕を脱がそうとするから……」

ティアナから白い目で見られそうになり、慌てて弁明する。

「それでキャロが逃げろ、て？」

「ハイ……。助かりました」

ある意味哀れと言えば哀れである。

「しかし本当。アイツは買い出しにどんくらい掛かってるんだか  
……」

「案外、逃げ出したのかもしれませんが……」

再び二人共会場を見る。

そこに広がるは正しく地獄絵図。

「笑えないわね」

「笑えませんか」

二人共頷きあう。

だが逃げる事はないだろう。

無茶苦茶だがそれでも楽しいのだから。

「仕方ないわね……」

フウ、とため息をつく。スバルに念話で呼びかける。

（スバル……。聞こえる？）

返事がない。

（ちょっと。スバル？）

再度呼びかけるが返事はなかった。

嫌な感じがする。

予感とか、そういった事をティアナは信じないが、それでも何か嫌な感じがした。

「エリオ、ちょっとゴメン。スバル探してくるわね」

「え？ あ、ハイ。了解しました」

返事を聞く前にティアナは飛び出した。



「はぁっ……。はぁっ」

スバルは膝に手を付き。肩で息をしていた。  
流石に疲労が激しいのだ。

だが、異形は倒した。  
完全に沈黙している。

「これで、ようやく……。かな？」

瞬間。

まるで言葉に对应するように結界が崩れ始めた。

「よっし♪」

歓声を上げる。

直後ティアから念話が入った。

（スバル！）

（あ、ティア〜）

ようやく念話ができる。

スバルは安堵の声をあげた。

（このっ……。馬鹿！ 買い出しにいつまで掛かってんのよ！？）

（えっとね？ いろいろあって。……。いきなり結界に閉じ込められちゃってさ）

（はぁ？ 結界？ ……どういう事よ？）

（よく解らないんだけど……。っ！）

瞬間。

背筋にぞくりという感覚をスバルは覚える。  
急に背後から気配生まれたのだ。

それにスバルはゆっくりと振り向く。

そこには倒した筈の異形が立っていた。

”無傷で”。

（そんな……！）

（ちょ……。スバル？ スバル！？）

ティアナに答える間もない。

異業は即座に手を突き出してきた。

スバルはそれを見て。

後退して避けようとする。

しかし、足が動かない。

スバルは即座に足元に視線を送る。

そこには。

（……っ！？）

足元を見るとそこには異形に纏わり付いていた、黒い点がスバルに張りついていた。

（何これ！？）

スバルはそれを見て、嫌悪感を抱く。

だが一瞬の驚愕について異形から拳が放たれた。

ー轟ー

最早回避も防御も出来るタイミングではない。

(そんな、こんな所で……)

放たれた拳に何の反応も出来ないままスバルはその拳を見る。  
やけにゆっくりと迫る拳。  
着弾する……瞬間。

ー閃ー

(へ………?)

光が走った。

スバルの目の前で。

その光に触れた四つの手がそのまま消滅した。

何が起こったのか？

……スバルにもわからない。

異形が吠える。

痛みのせいか、あるいは。

「吠えるな……。うぜえ……」

光が走った方向から声がした。

スバルはそちらを向く。

声の主は少年だった。

銀髪の少年で歳はおそらくスバルと同じくらい。

顔立ちは整っている、というよりはもはや女性的だ。

黒を基調としたバリアジャケットを着ている。

半袖に膝下までのズボンであり、防御力よりは機動性重視のスタイルだ。

手には大剣を持っている。

かなり大きい。

恐らくはデバイスだ。

少年はそれを肩に担ぐ。

「一つだけ聞くぞ。デカブツ」

少年は眼光鋭く。

異形を睨みつける。

そしてその言葉をスバルもまた聞いた。

その言葉は……。

「ナンバー・オブ・ザ・ビーストを知ってるか？」

それが少女と少年の出会い。

そして新たなる事件の幕開けだった。

（第二話に続く）

## 第一話「ボーイ・ミーツ・ガール」(後書き)

予告「平和な日々、ずっと続くと思ったけれどそれは続かなくて」

「現れた謎の少年は異業の敵に、そしてスバルに剣を向け

る」

「次回、剣の行方。」

## 第二話、「剣の行方」(前書き)

「懐かしい人達と過ごす、楽しい時間。」 「だけど事態は待  
ってくれなくて」 「現れたのは謎の異業」 「そして、  
謎の少年」 「動乱はまた、再び現れ始める」 「魔  
法少女リリカルなのはS t S， E X。始まります。」



## 第二話、「剣の行方」

咆哮。それには様々な用途がある。

威嚇だったり求愛だったり、仲間を逃がす為の危険信号だったり。あるいは恐怖をまぎわらすためだったり。

だが異形の獣が放つ咆哮はこの場では意味を為していなかった。異形に対峙するは銀髪黒衣の少年。

その目は対峙する存在に対して、恐怖も畏怖も抱いていなかった。あるのはただ一つ。

死刑執行者の目であった。

「……もう答える意思も残ってねえか……」

先程の問いだ。

ナンバー・オブ・ザ・ビーストを知っているか？

その問いをスバル・ナカジマは思い出していた。

（何の事だろう？）

自分を先程助けてくれた？ 少年はそんな事を異形に聞いていた。だが。

「Ru u u G A a a !」

当然異形は答えなかった。

いや、そもそも感情なんて物は、もはやないのではないのか？ 知性など更に期待出来まい。

「使えねえな……」

少年はただそれだけ呟いた。

腰を落とし、左手に剣を持ち腰溜めに構える。

その構えを見て一瞬。

確かに異形はうろたえた。

だが、その恐怖をまぎわらすかのように異形は突進した。

もはや腕を無くした異形は最後の武器とばかりに頭ごと突進して、その顎を開く。

乱杭歯によだれが尾を引く。

異形が少年に迫る。

しかし、少年は意に返さない。

少年は異形に対して。

たった一步を踏み込んだ。

一閃一

瞬間、剣が閃いた。

少年が放った一刀だ。同時、” 何かが ” 飛んだのをスバルは見た。

……異形の首だ。

首が宙を舞う空の下で少年は異形に背を合わせる様に、剣を振り抜いた姿で残心している。

「嘘……」

スバルは目を見張った。スバルが放った拳もなんの魔法もなく堪えた異形。

それが一刀の元に伏されるとは。

しかも……

「全っ然、見えなかった」

スバルは呆然と呟く。

いつ斬撃を放ったのかも解らなかった。

恐るべき速度である。

「神覇、壱ノ太刀・絶影」

少年がぼそりと呟く。

それがあの技の名前なのか。

残心を解いた少年はしかし、異形から目を離さない。

「……ここから再生するか。……タフだな」

「え？ ……っ！」

疑問符を浮かべるスバルであつたが次の瞬間。

少年の言ってる意味を理解した。

あの黒い点が斬られた部分に集まり、その形を取り戻していく。  
再生。

そう再生している。

斬られた首から上を、そして。

消えたはずの四つの腕を。

「うそ……」

だがスバルもまた理解した。

何故自分が倒した筈の異形が、あの時無傷で立っていたのかを。  
再生していたのだ。

「チッ……！　これだから、因子、に感染した奴は……。うぜーな」  
「ちょ、そんな事言ってる場合じゃないよ！」

少年に声をかける。

だが少年は目のみをスバルに向けると興味なさげに無視した。

「無視しないでよ！」

「黙れ、うぜーな」

あまりと言えばあまりの言葉にスバルは絶句する。

ここまで言葉が悪い人と会話をした事がない。

近い人ではヴィータがいるがそれでもここまで悪くはない。

再生が終わったのか再び、異形は突進してくる。

「馬鹿の一つ覚えか……。ん？」

少年が完全に見下しながら異形を見ていると、突進してくる異業の

足元から何かが突っ込んでくる。

先程スバルを捕まえた黒い点だ。

「舐めんなっ！」

対する少年は足元に剣を突き立てた。

黒い点は剣にぶつかり霧散する。

……しかし。

「G A a a a !」

直後に少年の頭上から異形の手が迫る！

「ハッ！　ない頭使った。てか？　……笑わせんな！」

向かい来る異形に、しかし少年は嘲笑すらも浮かべ、そのまま一気に剣を地面から引き抜いた。

「吠えろ……。イクス！」

フル・ドライブ！

剣のデバイスが主の声に従い魔力を爆発的に吹き出す。

「神覇、弐ノ太刀・剣牙！」

少年は剣を地面から引き抜きざま、振り上げ。

一気に振り下ろす！

ー轟！ー

振り下ろされた先から放たれた光斬の形状をもって魔力が放たれた。

ー斬ー

一撃は異形をあっさりと両断。

そして空へと消えた。

「……終わった、な」

再び再生する気配がないか少年は探ったようだが、異形が塵に変わっていく事を確認すると気を抜いた。

「終わった、の？」

スバルは少年に問い掛ける、が少年は完全に無視。振り向きもしない。

「……ねえっ！ 聞いてるの！？ 君！」

スバルが怒鳴る。

そうした所で漸く、少年がスバルに向き合った。ひどく面倒臭そうにはあるが。

「そうそう、会話のキャッチボールは大切だよ？」

「お前……。何モンだよ？」

少年の言葉には顔がひくりとなる事を自覚する。本当、言葉使いが悪い。スバルはそう思う。

「普通、名乗って欲しかったら自分の名前名乗ろうよ」  
「……」

少年はしかめっ面をして考え。暫くして漸くその口を開いた。

「シオンだ。神庭シオン」

「それだけ？」

「お前は名乗れ、て言ったんだ。んで俺は名乗った。……文句あるか？」

あるに決まっている。  
だが確かに向こうは名乗ったのだ。

だからこちらにも名乗る事にした。

「スバル。スバル・ナカジマ」

「それだけか？」

「君だって。……シオンだけ？　だって、それだけじゃない」

だが少年は……。シオンはスバルの言葉に素知らぬ顔をする。

「生憎、無所属でな」

「そうですか〜」

その返答にスバル自身気の無い返答をする。  
むろん信じるつもりはない。

「でも今の事件、何か知ってるんでしょう？　詳しく話を聞かせて貰うよ？」

「答える義理はないと思うがな？」

シオンはあくまでも答える積もりはないらしい。  
だが。

「あのね、私。襲われたんだよ？　話して貰う義理はあるよ。……  
それに義務も」

「……何？」

スバルの言葉にシオンの目が細まる。  
スバルは構わずに続けた。

「時空管理局・一等陸士。スバル・ナカジマです。ちゃんと事情、聞かせて貰うからね？」

「管理局？ ……成る程な」

シオンはその言葉に納得したのだろう。フムと頷く。

「解った？ ならまず武装を解除して……」

「飛んで火に入る夏の虫。 ……だな」

瞬間、スバルの首筋に刃が押し当てられた。  
シオンに剣を首筋に突き付けられたのだ。

「……っ！」

突き付けられた剣にスバルは目を見開き。  
直後にシオンをキッと睨み付ける。  
シオンはその視線すらも構わない。

「これ、どういう意味？」

「そのままの意味だ。聞きたい事がある。」

スバルの問いにシオンは答える。  
そして、あの質問がスバルにも突き付けられた。

「ナンバー・オブ・ザ・ビーストを知ってるか？」

その質問が。



……あの馬鹿っ！ どこ行ったのよ！？



スバルとの先程の念話が途絶えてからティアナはずっと走り続けていた。

息は荒く、肩で息を吐く。

あんな目茶苦茶気になる所で念話切るなんて……！

スバルが何かの事件に巻き込まれた。

それは間違いない。

念話が途切れた後、エリオ達に連絡を取り、動かせる人数を動かせて貰ってる。

幸い。宴会場には六課のメンバーが集結中だ。

すぐに見つかる。

ティアナはそう信じる事にした。

《見つけた！》

管制担当にして、ヘリパイロットでもあったアルトの声がティアナに響き渡る。

今、六課の隊舎に残っていた設備でスバルの魔力反応を追って貰っていたのだ。

幸い、設備はまだ撤去されておらず、すぐに使える状況だったのも幸いした。

《スターズ3が何処にいるか解りました！ スターズ3市街地の七番エリアにいます！》

《ティアさんが1番近いです。お願いできますか！？》

エリオの声が響く。

スバルの念話が切れた直後、同窓会会場にいた官制達とエリオに連

絡を取り、スバルと一緒に探して貰っていたのだ。

……隊長陣は深酒をしていた事もあり、あえて連絡は取らなかった。  
エリオの念話にティアナは頷き返す。

《うん！ 先に行くわ！》

今は早く元相棒の元へ。ティアナは更に足を速めた。  
走りながらティアナは脳裏で愚痴る。

（まったく！ これで何もなかった時は覚えてなさいよ！）

スバルの顔を思い描き、ティアナは内心スバルに向けて頬をどの角度で引っ張ればいいかを考えた。



（ナンバー・オブ・ザ・ビースト）

先程異形に少年。シオンが問うた単語だ。

スバルはその響きを反芻する。

だが……

「知らない……」

スバルはシオンを睨みながらそう答える。

ロスト・ログアの名前か、何かか。

どちらにしろ。スバルには解らなかった。

「……チっ。使えねえな」

シオンがあからさまに悪態をつく。

舌打ちまでして来た。

あんまりな態度に流石のスバルもムツと来る。

「そんなの見た事も聞いた事もないんだよ!? 解る訳ないじゃん  
!」

思いつきり怒鳴る。

だがシオンはそんなスバルの文句を完全に無視した。

「ま、大して期待してた訳でもねえしな……」

その返答に更にスバルは怒りのボルテージを上げる。

元より期待してなかったらしい。

ならこの扱いは何なのか、と思う。

「なら、どうしてこんな方法で聞いたりしたの!?」

「もし、万が一お前が知ってたら、て思っただけだ」

あっさりと言ってくる。

言い返してやろうかと思ったがシオンが喉に剣を突き付けたままなので何も言えなくなる

「なんで剣を突き付けたままなの……!?!」

「お前、正直やかましい。うぜーんだよ」

要するに喋らせたくないらしい。

そんな風にシオンとスバルは話していて。

突如、シオンは左へと顔を向けた。  
同時にシオンの手元が動く。  
スバルの首筋に当てられていた刃が離れる。  
シオンはその勢いのまま剣を振るう。  
瞬間。

―撃、撃、撃、撃―

光が剣とぶつかり、煌めく。  
突如として飛来した弾丸を弾いたのだ。  
弾いているのはオレンジの弾。

「スバル！」

弾を放ったのは少女。  
スバルの親友であり、元相棒。  
ティアナ・ランスターだった。  
スフィアを引き連れて彼女は走って来る。

「ティア！」

現れたティアに内心喜ぶ。  
だが、

「一人で来る、か。……そこまで自信があるのか？」  
「

―閃―

シオンは向かってくるティアナに向かって右の足で一步を踏み込み、体重を乗せ。

斬撃を放つ。

しかし、その斬撃は完全に空を切っていた。

「!?! 幻影か!」

「やああああ……!」

驚愕し、シオンが声を挙げる。

斬撃を放ち、振り抜いたシオンにティアナが姿を現した。

疾走してくる。

クロスミラーージュを2ndモードに移行。

光が刃を形作る。

と、同時に展開していたスフィアを放つ。

(既に振り抜いた剣を今から戻すのは容易じゃないはず……!)

ならば今放った一撃はかわせない。

よしんば防御できたとしてもさらに勢いで体勢を崩す事になる。

そこでダガーを突き付けたら終わる。

そう、ティアナは思い。

だがシオンはそこからとんでもない行動に出た。

斬撃の勢いのままに剣を手から離れたのだ。

「な……!?!」

剣を離れたシオンはその勢いのまま軽くなった身で測転での宙返りを行う。

結果、放ったスフィアは全て。空を切った。

「っ！　でも……！」

さらにティアナは走る速度を上げる。

相手はデバイスを離れたのだ。

このまま突っ込んだら勝てる。

しかし、シオンはそんなティアナの顔を見ながら。

笑っていた。

直後に測転での宙返りの最中。

引っ掛けるようにして蹴りを放つ。

相手はティアナではない。

自分が離れた剣。

……イクスだ。

柄を蹴り上げ、そのまま斬撃の勢いを回転ベクトルに変換。

その場でシオンとイクスは左右対象のように同じ速度で回転する。

そして、シオンは地に着地したと同時に、右手を横に差し出す。

一回転したイクスはそのまますなりとシオンの手に納まった。

（そんな……！）

シオンの挙動を見て、内心ティアナは驚愕していた。

自分が放ったスフィアをかわしつつ、体勢までも整える。

軽業師を思わせる、とんでもない手だ。

（けど……！）

確かに相手は体勢を整え、剣をその手に戻した。

だが、そこまでだ。

既にティアナは少年の眼前まで迫っている。

大剣型のデバイスではここからでは斬撃できない。  
近すぎるからだ。

(勝った……！)

そう思い。

しかし、ティアナもまた見た。

いまだに笑みを消さない。

少年の顔を。

「イクス、モードセレクト。ブレイズ」  
トランスファー！

瞬間。シオンのバリアジャケットは変質した。

黒から赤へ。

ジャケットの部分が無くなり上は完全にシャツ一枚になった。

更に所々パーツが無くなり、より機動に特化したフォームへと変質する。

そして、何より。

ティアナは自分の額から汗が流れ落ちるのを感じていた。

今まさにクロスミラージュを突き付けようとした瞬間。

既に自分の首筋に刃が突き付けられていた。

大剣は既に無く。

少年の手に握られているのは二刀一対の大型のナイフである。

デバイスが変型したのだ。

「く……！」

「お前の負けだ。……まだやるか？」

少年は、シオンは未だ、不敵な笑みを消さずにそうティアナに問う

た。

（そんな……）

一方。

かやの外に置かれたスバルはティアナの敗北をその目で見る事になった。

目茶苦茶な方法で、だが無理矢理でも勝利をもぎ取ったシオン。

（でも……。凄い）

シオンの技量。

そんな大胆な手を躊躇いなく使う胆力。

そのどれもだが、何よりその何が何でも勝ちに行く姿勢。

そのどれもスバルにとって凄いと感じられた。

「さて……。普通ならここでギプアップするか聞くんだろうがな」

「誰が……！」

挑発的なシオンの言葉にティアナが唸る。

「状況考えろよ。今、ここは意地になる所か？」

「アンタ、一体何者よ……？」

「質問するのはこっちだ。拒否権は認めない」

質問するティアナをさらりと無視しつつシオンは告げる。

取り合うつもりもないらしい。

それにティアナが歯噛みする。

「聞きたい事はたった一つだ。ナンバー・オブ・ザ・ビーストを知



っているか？」

「なん……？ 何？ それ？」

「成る程、いやもういい。」

この少女もまた知らないらしい。

それに気付くとシオンは少し頭を振った。

重い溜息を吐きながらぼんやりと思う。

またハズレか、と。

気を取り直すと、少女から刃を離した。

「……何のつもりよ？」

「もう用が無えんな。帰る」

訝し気に見るティアナにシオンはあつさりと言い放ち、踵を返した。  
帰ろうとする。

「て、ちょ、認める訳ないでしょ……！？」

「お前に認められる筋合いなんざあるかよ」

取り付く島もない。

もはやスバルにもティアナにも興味を失ったらしく。

シオンはさっさと離れていく。

「待って！」

瞬間。

突如として、放ったスバルの大声にティアナはおろか、シオンまでも立ち止まる。

スバルは構わない。

「何か、探しものがあるんでしょう？　その……。ナンバーなんとか、て奴」

「ナンバー・オブ・ザ・ビーストだ」

名前を覚え切れないスバルに、シオンが訂正を入れる。

「うん、それぞれ。それで……。よかったら私達と一緒に来ない？」

「スバル!？」

ティアナから驚きの声上がる。

スバルは念話でティアナに話し掛ける。

《大丈夫だよ……ティア。シオンは多分、そんなに悪い人じゃないと思う》

《……もうっ！　後でどうなっても知らないからね！》

ゴメンね、と念話を返す。

何だかんだで自分の事を許してくれる、そんなティアにありがとう。と、そう思う。

「その、管理局ならたいいていの事も解るし、情報も集まるよ。シオンの探しものも見つかりやすくなる、と思う。」

ゆっくりと、シオンに近付く。

シオンの目を見て話したい。

何故かそう思った。

「……どう、かな？」

スバルはシオンの目を見る。  
しかし、その目はただただ。  
無感情で。

「お前さ、うぜーんだよ」  
「え……？」

シオンは無感情のまま続ける。

「いちいち人に構うな。そう言うの。なんて言うか知ってるか？  
……有難迷惑なんだよ」

「で……。でも！」

スバルは更に引き止めようとする、だが。

シオンは背を向けて、完全に拒絶する。

もはや話す気もないらしい。

魔法陣が現れる。

見た事もない魔法陣だ。

だが、意図は解る。

空間転移

ここから離れるつもりだ。

「シオン……！」

「……お前、本当。もう俺に構うな」

じゃあな。と、だけ付け加えてシオンは転移した。

スバルは手を伸ばしたまま。

その場に立ち尽くす。

差し出し。しかし、拒絶された手が風に触れて。

寂し気に震えた。

（第三話に続く）

## 第二話、「剣の行方」（後書き）

予告「拒絶された手は寂しく震えて」

「だけど少女の心

をまるで関知しないまま周囲の状況は動く」

「再び、動

き始める事件。そして新たな予言。」「再び出会う少女に少年は剣を突き付けるのか」「そして、少女は拳を向けられるのか」

「次回第三話、『刃と拳』」

### 第三話、「刃と拳」(前書き)

「あの目を見た時からずっと気になってた。」 「無感情の中に隠れてた激しい思い」 「孤独を望む思いと、孤独を否定する感情と」 「大切なものを失った喪失感で溢れてて」 「だから思った。なんとかしてあげたい、て」 「孤独に怯えなくていいよ、て伝えたくて」 魔法少女リリカルなのはSTS，EX。始まります。

### 第三話、「刃と拳」

時空管理局ミッドチルダ地上本部。

かつてジェル・スカリエッティの引き起こした事件により、無惨にも破壊された。

だがあの事件より、一年が経ち。

地上本部は再建されていた。

その地上本部の会議室の一室に元機動六課の面々、そして。クロノ提督。リンディ提督。そして、無限書庫の司書長のユーノ・スクライアにくわえ。

スバルの父親のゲンヤ・ナカジマ、そしてスバルの姉のギンガ・ナカジマが集まっていた。

スバル・ナカジマが強襲された一件。

その直後に事件の詳細を聞こうと、集まったのである。

「スバルは・・・大丈夫なんですか？」

ギンガが問う。連絡が来た時は不安で仕方なかったろう。可愛い妹なのだから当然だ。

「落ち着け、ギンガ。」

・・・八神。スバルには特にケガはなかったんだろ？」

「はい・・・でも今は念の為、医務室に検査に行って貰ってます」  
はやてが答える。

自分達が目と鼻の先にいてスバルが襲われたのだ。

ゲンヤには申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「気にすんな。」

スバルもそう思ってるだろ」

ゲンヤはあっさりと言う。それでも謝りたかった。スバルが襲われたその時、知らなかったとはいえ、自分達は宴会をしていたのだ。

「あ・・・」

扉が開く。検査を受けていた。スバルとティア、そして検査を手伝

っていたのだろう。シャルが付き添っていた。

「スバル、ティア・・・！」

なのは、ギンガを始めとして、皆が一気に集まる。

スバルが苦笑いを浮かべる。

「はい、すみません。お騒がせして」

「そんな事、ないよ。」

大丈夫だった？どこもケガとかない？」

なのはが尋ねる。

かつて、なのははスバルと似たような状況で大怪我を負った事がある。

心配もひとしおだった。

「シャル？」

「はい」

はやてに促され、シャルが前に出る。検査の結果を聞く為だ。

「スバルちゃん、ティアちゃん。共にケガなしですよ♪」

「そか〜〜」

はやてを始めとして皆、一気に息を吐く。

ようやく安心した為だ。

「本当、申し訳ありませんでした」

ティアが頭を下げる。

スバルもそれに従った。

「そんな、頭をあげて」

フェイトが慌てる。

謝りたいのは自分達なのである。

「いや、謝るのはこっちや。ゴメンな。」

スバル、ティア

「うん、ゴメンね」

はやてを始めとして、皆が頭を下げる。

「え・・・。そ、そんな！？頭を上げて下さい！」

「そ、そうですよ！」



ほら、ケガも無くて。ぴんぴんしてますし！」

慌てたのはスバルとティアだ。

皆、全然悪くなんてないのに謝られては申し訳ない気持ちでいっぱいになってしまう。

「ううん。そんな事ない。二人共、大変な時に私達はお酒なんて、飲んで・・・」

なのはがそう言った途端。

「あうっ！」と、シャルが胸を押さえながら後ずさる。

重ねて言うが最初にお酒を飲ませたのはシャルである。

「うむ。・・・酒には飲まれるな。とは言うが今回はそれを痛感した。

・・・いつの間にか注がれたとは言え。弁解も出来ん」

シグナムも続くと、さらにシャルが

「あうっ！あうっ！！」とダメージを受けていく。

無論、精神的な意味で。

「だね・・・元々なのは私もお酒、得意じゃないし・・・いくら、シャルが旅の扉まで使って注いだ、と言っても。気付けなかった私達も悪いし」

フェイトも続く。シャルは

「あうう・・・！。あうう・・・！」と悶える。

「そやね。約一名。妙に腹黒いんを忘れてもうたんが失敗やった。ウチの子の教育も含めて、ホンマ。ゴメンな〜」

はやてが止めをさす。

シャルは泣き崩れた。

（え、ええっと・・・）

（これ、イジメなのかな？ティア〜）

（そ、そんな事。無い、と思うけど）

確信犯が何名かはいるが。それ以外は天然だった。

「あの、このまんまじゃ話が進みませんし。お互い、謝るのはこの辺で・・・」



(どうすりゃいい?)

解らない。一人で数多の世界から隠れた存在を探しだすのはやはり不可能なのか。

(私達と一緒に来ない?)

「つつ・・・!!」

くそ!!」

思わず毒づく。イクスを握る手の力を強めた。

自分の情けなさに。

(情けねえ・・・っ!)

久々に人の優しさに触れた。

その記憶がシオンに染みわたっていく。

俺は一人で強くならなきゃいけないのに。

(忘れろ・・・)

(管理局ならたいていの事わかるし)

(忘れろ・・・!)

(無視しないでよ!!)

(忘れろ・・・っ!!)

(シオン・・・っ!!)

思いだしてしまった。

少女のまるで泣いているような顔を・・・

(こんな、後悔するなんて・・・)

思わなかった。自分はずっと強くなってる、て思ってた。

こんな、悲しい顔をさせたくらいで辛くなんてならないと。

(俺は・・・何て、弱いんだ)

強くなりたい。そう思う。冷たく、動じず。ただ強く。

そう、思う。

、感染者、発見。

イクスから報告が入る。イクスは、感染者、を感知する事が出来るのだ。

「そ、か・・・」

目を閉じる。

一秒、二秒。

目を開けた。

「どこだ？」

もう、大丈夫。俺は迷わない。迷っている時間なんて、ない。

イクスは次の、感染者、のいる場所を告げた。



「むむむ……」

スバルとティアからの事情の説明。

それを聞いた。はやては呻く。

「異業のオーガ種に、……関係のありそうな少年な……」

「神庭、シオン。て言うみたいです」

スバルがはやての言葉を引き継ぐ。

「どう思う？ フェイト執務官？」

「……そう、だね。探してみる価値はあると思う。公務執行妨害だし」

フェイトが答える。

「それに……あの異業のオーガ。私達が追ってるのと同関係あるかも」

ティアとシャーリーを見る二人はフェイトの執務官補佐でもある。

二人共、一度見合い。

そして頷く。

「恐らく……いえ、間違いなくそうだと思います」

「なら、重要参考人もつけられる。かな」

ティアの言葉にフェイトは頷く。

「どっちにしても話を聞かなきゃ、ね」

だが……

「あの、……ちょっと待って下さい」

スバルが立ち上がる。

「どうしたん？ スバル？」

「スバル？」

はやてとなのはが疑問不を浮かべる。

「えっと、その・・・反対。して、いいですか？」

「？どういう事、なの？」

フェイトの目が鋭くなる。

（スバル！！アンタ一体何言ってるのよ！？）

（テ、ティア～～）

念話でティアが話し掛ける。

（アンタね、お人よしも大概にしときなさい。・・・アンタも、私も武器を突き付けられたのよ？）

（でも・・・）

その、あの、と念話でゴニョゴニョ言う。

それにだんだんティアは苛つき。

そして、爆発した。

「あ～～～～！！！！」

もう、苛々する・・・っ！！」

念話だった事も忘れ。

思いつきり怒鳴る。

「ティ・・・っ！」

「はつきり言いなさい！はつきりと！！」

アンタ、あいつにどんな事を感じたのよ！？」

思いつきり問い詰める。

それに、スバルは答えた。

「悪い人じゃ、ない。て思うんだ」

「さっきもそう言ってたわね。・・・根拠は？」

しばらく躊躇う。

根拠じゃない。だけどあの目を見た時。そう感じたのだ。

「目・・・」

「目え？」

ティアの問い掛けにスバルは頷く。

「根拠なんて、ないよ。だけど、シオンのあの目を見た時。そう、感じたんだ」

スバルははっきりと、だが確信を持って話す。  
横でそれを聞いていたなのははその感覚に覚えがあった。

（私とフェイトちゃんが出会った時と同じ・・・）

あの時もそうだった。

なのははフェイトの無表情の奥にある、寂しいさ。悲しみを目で見た時。感じたのだ。

理屈じゃない。

フェイトを見る。

フェイトもまた同じ事を考えたのだろう。なのはに頷いて見せた。

だが・・・

「スバル」

ゆっくりとフェイトが話しだす。

「はい」

スバルがこちらを向く。真っ直ぐない目だ。

人の本質を見抜く。そういう目だ。

フェイトはそう思う。

でも・・・

「スバルの考えは解ったよ。でも彼は犯罪を行った・・・公務執行妨害。暴行未遂。どれも犯罪だ・・・それは解るね？」

「はい・・・」

スバルは頷く。

フェイトは更に続けた。

「それに、話しも聞かなくやいけない。ひょっとしたら、これは大変な事件かもしれないんだ」

「え・・・？」

スバルが聞き返す。フェイトは自分が今追っている事件を話そうとして。

突然。エマージェンシー・コールが鳴り響いた。





神庭シオンだった。



「ああっっっ!!!!」

気合いの叫びをあげながらシオンは斬撃を放つ。が、

「p, E C A a a a!!!!」

異業のマンモスは全く斬撃を気にもせず突っ込んでくる。

切り裂く。

だが浅い。

「くっ・・・!!」

剣を引き抜く間もなく。異業は突っ込んで来た。

「舐めんな!!」

シオンは今だ刺さった剣を踏み台にして、一気に異業の登頂を開始。瞬時にかかる。

異業は近くのビルに盛大に突っ込んだ

「G b G A a a!!」

「やかましい!!」

間近で聞く、叫び声に顔をしかめる。

異業の頭から扉下りると右手を 掲げる。

「イクス!!」

リターン!!

異業の鼻先に突き刺さったイクスをその手に引き戻す。

傷口から血がまるで噴水のように吹き出す。

血のシャワーをシオンは盛大に浴びてしまい。それが目に入ってしまう。

「くそ・・・!!」

失態だ。先程からつまらないミスばかりをしている。

目をバリア・ジャケットの肩口で拭く。が、

「B R U G a a a!!」

そこに異業が突っ込む。

「がっ・・・!!」



弾き飛ばされた勢いのまま数メートルを転がる。

「ぐっ……！！！！」

（くっそ！！）

身体が上手く動かない。理由は簡単だ。疲労である。

スバル達と対峙した後。シオンは一切休まず戦っていた。

その疲労がピークに達したのである。

ゆっくりと近づく異業。今ならくびり殺せると。そう確信しながら。

だが……

「舐めんな……！」

シオンがイクスを構える。

「舐めんなっつっ！！！！」

咆哮一斉！！

シオンは身体から魔力を放出させ、立ち上がる。

（勝負……！！）

この一撃で決める。

「ああああ……」

神覇参の太刀・双牙！！

地面を斬撃が走る。

それも二つ。

斬撃が異業の前足を切り飛ばしていた。

さらにシオンはイクスで突きの構えを取る！！

「再生される前に終わらせる！！」

突貫。

まるで引き絞られた矢の如く突っ走る。

「神覇伍ノ太刀。剣魔！！」

放たれた突きは迷う事なく、異業の中央を穿ち。そしてシオンは内部から魔力を叩きつけた。

異業は一瞬だけ身を震わせると、

ゆっくりと崩れ落ち、灰と化していく。

「勝っ……た」

シオンはそれを確認すると、ゆっくりと片膝をついた。  
疲労のきわみで視界が危うい。だが・・・

シオンは次の来訪者に備えなければならなくなった。

「俺に関わるな、て言っただろうが・・・！」

前からスバル・ナカジマが走ってきた。



「シオン・・・っ!!」

スバルは叫びながらシオンの元に走る。

あんなに血だらけで!! あんな血の気を失った顔で!!

シオンの元に辿りつくまであと2メートル。

だがその先から近づけなくなった。

シオンが再び剣をスバルに突き付けたからだ。

「何しに来た・・・っ!!」

「その、シオンが戦ってるの見て、気になって・・・!!」

その言葉を聞くやいなや、シオンはスバルを押しつけて歩きだす。

「そんな、ボロボロで何処行くの!？」

「手前に関係あるかよ」

まただ、シオンは自分を避けている、それが解った。

シオンは次の‘感染者’を見つけたのか、また転移を行おうとする。

「ダメだよ!!」

スバルが止めに入った。

シオンは構わない。

「シオン!!」

「うぜーな。何度も言わせんな。関係無えだろうがよっ!？」

「あるよ!!」

シオンの怒鳴りに負けないくらいの声で叫ぶ。

「あるもん・・・」

シオンはそんなスバルの顔を見ないようにする。

忘れよう、て思ったのに。

「どうしても俺を止めなきゃ、力づくで止めるんだな」

「そんなの、嫌だよ・・・」

その言葉にカッとなる。再び剣をスバルに突き付ける。

「ふざけんな！」

俺を止めたい、けど戦わない、て？

舐めてんのか！？手前は！」

だがスバルはバリアジャケットすら纏わない。

スバルが出した答え。それはただ一つ。

‘戦わない’事

だった。

少年は少女に剣を突き付けた、

だが、少女は少年に拳を向けない。

スバルは再びシオンの目を見る。

そこには、困惑が浮かんでいた。

「退けよ・・・」

「退かない」

「なら戦え・・・」

「戦わない・・・」

まるで平行線。

「なんで、だよ・・・」

シオンが言葉を吐き出す。

苦しく重い言葉を。

「なんで、お前は俺を・・・？」

「・・・わかんないよ」 スバルもまた言葉を放つ。

自分の中にあるまったく解らない感情を。

「でも、あの時、シオンの目を見た時思ったんだ。

シオンに傷ついて欲しく、ない。て」

スバルの目をシオンは見る。あまりに真っ直ぐな目。それを綺麗だ

な、とシオンは場違いな事を思った。

「お前は・・・」

っ！？」

次の瞬間。スバルはシオンに突き飛ばされた。

「！！っ！シオン！！」

スバルもまた見た。突き飛ばされた瞬間。

今さっきのマンモスがシオンに突っ込んでいくのを。

「がああああ！！！！」

直撃を喰らったシオンはまるで冗談のようにすっ飛ば。

「シオン！！！！」

スバルは瞬時にマッハキャリバーを呼び出すとシオンが吹っ飛んで行く先に身体を割り込ませる。

受け止めた。

「うっ・・・！！」

そのままシオンを抱きかかえる。

「シオン！シオン！！」

「うるさい・・・少しは黙れよお前は・・・」

シオンはゆっくりと立ち上がる。

「あっこれから再生するのか・・・とんでもないな」

「でも、完全じゃないみたいだよ？」

スバルが異業を指差す。異業は身体の所どころが欠落していた。無理矢理再生した為だろう。

「・・・お前、スバル。て言ったよな？」

「え・・・うん！」

少しうれしいような声をスバルがあげる。

覚えててくれた事がうれしいのだ。「止めはお前が刺せ」「え・・・」

「

シオンがイクスを構え直す。

「俺にはあいつを仕留めるほどの力がもう、ない」

「シオン・・・」

「任せたぜ？」

「・・・その後で俺の知ってる事、教えてやる」

「シオン・・・？」

「知りたいんだろ？」

お前と、その仲間達は？」

「うん、でも・・・」

いいの？

その言葉を紡ぐ前に、

「G A a a a ・ ・ !」 異業が突っ込んで来た。

「来るぞ・・・！」

「え、・・・うん！」 異業が吠える。その咆哮で敵対する物、全て消えろとばかりに。

「おお・・・！」

シオンは左手にシールドを展開。

そのまま異業の突進を受け止める。

「ああ・・・っ！」

さらにシールドの内側にイクスを叩きつける。

「神覇・四ノ太刀。裂波！！」

フル・ドライブ！

リフレクション！！

イクスが吠える。

同時にシールドが砕け。そこから波紋状の衝撃が異業を震わせる。

「行け！！」

さらにシオンの横からスバルが突っ込んでいく。狙いは一点。

先程シオンが貫いた箇所だ。

「おお・・・っ！」

カートリッジ、ロード。

リボルバーナックル。

スバルがはなった一撃が異業の腹に食い込み。

戦闘機人モードに移行。

I S 振動破壊。発動。

異業は内部からの超振動による破壊でのたうち回る。巻き込まれる前に離れる。



顔が赤くなったのを自覚した。

（‘惚れた奴が負けだから’なんて言える訳が無いだろうが！？）  
まだ騒ぐスバルに背中を向けたままにいる事にする。  
ヘリが降りたった。

### 第三話、「刃と拳」(後書き)

「通じた思い。でも擦れ違う思い。」

「少年と少女は不

器用に手を取り合っていく」 「そして、新たなる予言の内容」

「その内容を覆す為。今再び、力が集まる」 「次

回、第四話

『独立機動時空航行部隊。』



#### 第四話「独立次元航行部隊」(前書き)

「俺はただ求めていた」「前に行く背中をどうしても追いつけない背中を」

「だからずっと歩いた。一人で」

「でも気付かされた。ある少女に『一人で歩かなくてもいいんだよ』、て」

「そして、俺は『仲間』

に最初の一步を歩みよる」

「魔法少女リリカ

ルなのはSTS，EX。始まります」

#### 第四話「独立次元航行部隊」

夜の森。それは一切の人工の光がない世界である。

その闇は幼い少年を怯えさせるのに十分だった。  
ぐすぐすと泣いている少年。

それを神庭シオンは見ていた。

（これは・・・？）

その光景を見てシオンは何よりも懐かしい気持ちでいっぱいになってしまった。

あの泣いている少年。

あれは自分だ。

そして、これは過ぎ去った筈の過去の光景。

（て、事は・・・こりゃ夢か・・・）

嘆息する。いやに意識がはっきりとした夢を見るものだ。

そして、未だに泣き続けるかつての自分を見る。

（・・・泣き虫、だな・・・）

そう、ガキのころの自分は泣き虫だった。

森の草木がガサガサと、鳴る。

泣いていた子供シオンはビクっとなり。続いてガタガタと震えだす。

その光景を今のシオンは苦い思いで見つめる。

次に出てくる存在を知っているからだ。

「・・・ここに居たか・・・」

現れたのは10、11歳くらいの少年だ。

顔だけは端正ながら、やけに吊り上がった目がやたらと目立つ。

目つきが非常に悪い。

その少年を見た。子供シオンは顔をパッと綻べさすと。

走って近づいた。

「タ・・・！」

「ていやさー！」

走って来た子供シオンに対して、少年は思いっきりチョップを叩きこんだ。

（・・・あれは、痛かったもんな・・・）

苦笑いを浮かべる。

子供シオンも打たれた頭を押さえる。

「痛い・・・！！！」

「やかましいわ！！！！着いてくんな、つったのに着いて来て。さらに迷子にまでなりやがったんだ。」

こんくらい当たり前だ！！！」

きっぱりと少年が言う。

それに子供シオンはうううう、とまた泣きかける。

「泣くな。この泣き虫」

「泣いてなんか、ないやい！！！」

子供シオンが叫ぶ。

そう、負けず嫌いなのはこの時から全然変わっていない。

（本当は、泣きそうだったんだよな）

結構、恥ずかしい。

さすがにそう思う。

「ほれ、いつまでしゃがんでやがんだ。帰えるぞ」

「うん・・・」

っ！？」

子供シオンが立ち上がろうとして、また尻餅をつく。

・・・どうやら緊張が一気にとけて、腰が抜けたらしい。

「・・・何やってんだ・・・」

少年が呆れ顔でぼやく。

うっ、と子供シオンは呻き。また目尻に涙が浮かぶ。

それを見て、少年は一つ嘆息し。

「ほれ。」

しゃがんで背中を向けた。

「え・・・」

「一つだけ教えとく、俺はさっさと帰りたい。  
・・・乗れ」

少年の意図を理解したのだろう、子供シオンは顔を赤くする。  
恥ずかしいのである。

「い、いいよ!!」

「ほう、ちなみにシオン。お前には三つ選択肢がある。

一つ、このまま置いてきぼり。

二つ、俺にチョップ式の説得で背中に乗る。

三つ、・・・素直に背中に乗る。

どれがいい？ちなみに俺のオススメは二番目だ」

「・・・うう」

置いてぼりもチョップも御免であるのだろう。

少年の背中に腕を巻き付ける。

そのまま少年は立ち上がった。

「・・・軽いな・・・お前、飯。ちゃんと食ってんのか？」

「食べてるよ!」

子供シオンが呻く。

「ま、ならいいけどな」

少年はそのまま歩き出す。

しばらくして、少年は話しかけてきた。

「に、してもお前の泣き虫、治らんな」

「泣き虫なんかじゃないやい!!」

また、叫ぶ。本当、負けず嫌いであつた。

それに少年は笑いを浮かべ。

「そういった台詞は頬つぺたを濡らさないようになってからほざけ」

「あう・・・」

痛い所をつかれた。

子供シオンがうなだれる。

「ま、いい。でもいつまでもこのままじゃ、駄目だな」

「うん・・・」

コクリと頷く。

「……今はいい。」

けど。いつか泣かないようにんなきなな。

「どんな辛い事があっても・・・男ならどんな時でも涙を見せん」  
目茶苦茶な事を言っている。

だがこの時の自分は。

「うん！」

あつさり頷く。

シオンはそれに再度苦笑いを浮かべる。

光が差し込むような感じがした。

目を覚ますと、そこには見覚えのない天井が広がっていた。

(こゝは・・・?)

「あ、気が付いたみたいね」

声が出た方に顔を向ける。

そこには茶色い制服？の上に白衣を着た、金髪の女性が立っていた。多分、自分より3〜5歳くらい上の女性だ。

「はい、お水」

「どもども」

受け取り水を飲む。

相当、咽が渴いていたらしい。

一氣に飲み干す。

その間に女性はコンソールを操作し、どこかと通信をしていた。

$$\begin{pmatrix} \cdot \\ \cdot \\ ? \\ \cdot \\ \cdot \end{pmatrix}$$

こちらに戻る。

「それにしてもよく眠っていたわね。」

「……ここ、しばらくろくに休んでなかったみたいけど……」

「て、あの。聞きたいんですけど……ここ、どこっすか？」

いろいろ尋ねてくる女性を制して。ここがどこだか聞く。

「あ、ごめんなさい。」

まずはそこからね。

・・・ここは時空管理局。地上本部の医務室よ。  
私はシャル、ていうの。よろしく」

「はぁ・・・よろしく。」

て、管理局？」

シオンが疑問不を浮かべる。何故に自分はそんな所にいるのか？

「覚えてない？」

おとついの夕方。市街地で・・・」

「あ・・・！！」

全て思い出した。

あの後。ヘリが降りた時からの記憶がない。

「現場に到着した時点で君は意識を失っていたの。

疲労がもの凄かったのね。まる一日半も寝るなんて」

「・・・そんなに？」

流石に驚く。

そこまで疲れていたのか、と。

そこで医務室の扉が開いた。

女性が二人、入って来る。

「あ、ちゃんと目、覚めたんやね。シャル、お疲れ様♪」

「はい♪はやてちゃん。フェイトちゃん」

シャルが二人を迎える。

「さて、まずは自己紹介しとこうか。

はじめまして。時空管理局二佐。八神はやてです」

「同じく、時空管理局。執務官。フェイト・T・ハラオウンです」

二人から自己紹介される。

シオンも居住まいを正す。

「神庭、シオンです。

はじめまして」

二人して、ジーーーー、とこちらを見てくる。

(????)

「どうかしたんスカ？」

俺、何かおかしい、スカ？」

「いや、そういう訳やないんやけど」

はやてが苦笑する。フェイトもだ。

ますます解らない。

「あんな？」

スバル・ナカジマ。て覚えてる？

君と一緒にいた娘やけど」

「？はい。」

頷く。いろんな意味で忘れる事はない。

・・・ちよっとだけ赤面した。

「その娘がな？『シオン。て、もう目茶苦茶、言葉使いが悪いんですよ〜』、て言うてたから覚悟しとったんやけど。

思っとなよりまともやったから驚いとったんよ」

「な・・・」

絶句する。

・・・そんなに言葉使い、悪かっただろうか？

自覚症状がない、て言うのは結構恐ろしい事である。

「あ、と話しが逸れたな。フェイトちゃん？」

「うん。・・・シオン、君だっけ？」

「呼び捨てでいいっスよ。」

思考から立ち戻る。

「うん。じゃあ。シオン。

君には、今。公務執行妨害。並びに騒乱罪。加えて管理局、局員に対する傷害未遂容疑がかけられているの・・・。

これは間違い、ない？」

フェイトが一つずつ指を立てて、罪状を説明する。

「・・・はい」

シオンとしても今さら否定するつもりはない。

「うん、それで私達としては事情徴収の上。

逮捕、て形になるんだけど・・・」

そこでフェイトは一旦言葉を区切る。

「でも、君は局員を・・・スバルを助けてくれた、て報告もある」

「いや、あれは・・・」

シオンは否定しようとする。

自分としては助けるつもりなぞ更々なかったのだから。

「最初にスバルと会った時はそうかも知れど、二回目の時は違うよね？」

「う・・・」

言われて言葉に詰まる。

あれも無意識の行動なので、助けた、て意識はなかったのだが。

「それに、肝心のスバルとティアからは傷害の容疑を取り消して欲しいとも言われてる。

被害者が容疑を取り消すのなら傷害未遂は無し」

まず立てた薬指を仕舞う。

「続いて騒乱罪。こちらは局員がつくまで。危険な暴走生物を止めてくれていた。て報告だし。

・・・君がどんな思いで戦っていたのかは解らないけど、少なくとも。君が戦ってくれたおかげで周辺の住民は避難できた。

だからこちらも容疑を取下げるよ」

中指を仕舞う。

「でも公務執行妨害。これは消せない」

人差し指を立てたまま言ってくる。

シオンも黙って頷く。

「・・・けど、君が今私達が調べている案件に協力してくれるなら司法取引で減罪出来る」

なる程、とシオンは思う。シオンとしては初っからスバルとその仲間達に自分の知る情報を教える積もりだったのだ。

「どう、かな？」

「はい。その司法取引にのります」



即答する。

「うん。話しは決まったみたいやね」

今度ははやてが話しだす。

「さて、今度はこっちのお話しや。

シオン君。

何か、探してるそうやね？」

「はい。・・・それは、スバ・・・ナカジマから？」

名前で呼びかけていい直す。

それに、はやても苦笑し。

「うん、スバルから聞かせて貰ったよ。

・・・それと、スバルとは私達も知り合いやし。名前で呼んでも大丈夫やよ？」

「そう、ですか」

うん、とはやてが頷き。先を続ける。

「そんでな。多分やけどシオン君。また、その探し物する為に、あの異業の奴とか追っかけるやろ？」

「・・・」

シオンは沈黙する。

それはこの場では肯定と同じだった。

「それでこれは私からの提案。

シオン君、嘱託魔道師になってみらんか？」

「・・・嘱託魔道師？」

シオンの疑問に、はやては頷く。

「そう。民間人でも管理局員のお仕事が出来るんや。

これやったら情報も集まるし、戦える」

成る程、とシオンは頷く。

正式に局員になる訳ではないのだ。自分にとっては願ってもない事である。

「シオン君、どやろか？」

「・・・そう、スね。」

・・・はい。なります」

その、答えにはやては笑みを浮かべる。

「うん、よかったわ。そんなら、はい。コレ」

はやてがシオンの傍らに何らかの本を置いていく。

「これ、何、スか？」

「囑託魔道師になる人には試験を受けなアカンのや」

はやてが質問に答える。・・・とても嫌な予感がした。

「あ、あの・・・？」

「安心しい。試験は学科と実技。実技はさらに儀式魔法と、模擬戦での試験があるけど、これから家庭教師付きで教えたるから♪」

とても、とても。いい笑顔ではやてが言う。

冷や汗を背中が流れていくのを感じた。

「フェイトちゃんが学科を。いい？フェイトちゃん」

「捜査協力で話しを聞かせて貰ってからだけど。」

うん、任せて♪」

フェイトもまた。いい笑顔を浮かべる。

シオンの経験上。

この類の笑顔を浮かべられた時はろくな目にあつた覚えがない。

「儀式魔法はウチが教えたる。」

安心し。厳しくもしっかり教えたるから♪」

「え、とあの・・・」

やっぱ考え直して、イイツすか？

それを言いたかったのだが。

聞いてくれる気配がない。

「実技はもちろんなのはちゃんが♪」

あ、シオン君はまだなのはちゃんの事、わからんよな？

ちゃんと、紹介したるから安心しい♪」

「いや、ちょ。待つ・・・っ!!」

シオンが何か言う前にはやてが指を付きつける。

シオンは思わず黙った。

「試験は一週間後や♪

みっちり行くからな〜♪」

・・・退路がないのをシオンは感じ。

絶句する羽目になった。

フェイトが苦笑いを浮かべる。

「さて、シオン。いろいろ聞かせて貰うけど、いいかな？」

「・・・はい」

先の事は取りあえず置いて、シオンは気持ちを切り替える事にした。

少し時間は遡り。

ここ、聖王教会。

その教会前に。高町なのは。フェイト・T・ハラオウン。そして、八神はやてが集まっていた。

「さて、着いたな〜」

はやてが制服の上からローブを着用する。

ここでははやては必ずローブを着けていた。

「うん、カリムさん。何の用件なんだろう？」

なのはが疑問不を浮かべる。

フェイトもまた、急に呼ばれた為。戸惑っていた。

「うん、こっちで直接話す。て言うてたけど。」

急ぎの話らしいよ？

・・・二人共、ごめんな。

いろいろ忙しいやろうに。」

「ううん、大丈夫だよ。」

それより、スバルが保護したあの子。まだ目を覚まさない？」

なのはが尋ねる。スバルに剣をむけ、そして助けたあの少年。

かつての自分達と似たような状況に置かれた二人だから。なのはとしても気になっていたのだ。

「うん・・・怪我の方はそれほど重傷、て訳やなかったけど。疲労が大きいかったんやね。」

・・・殆ど、休みなく動いてたみたいや」  
はやても少し、俯いて話す。

あの少年。シオンが抱える危うさは正直、放っておけない。そう考えていた。

「あんな？なのはちゃん、フェイトちゃん。

ウチ、ちよつと考えがあるんやけど。ええか？」

「？うん。」

「何？」

なのはとフェイトが先を促す。

はやては先程の不安と、シオンを囑託魔道師にしないかという事を話した。

「うん♪それいい考え♪」

「だね。司法取引で話しも聞けそうだし」

二人の同意を得られた事にはやても笑みを浮かべる。

「そんでな？二人に頼みたい事があるんや。

よかったらあの子の家庭教師やってくれんか？」

「家庭、教師？」

はやてが頷く。

「ウチの予想が正しいかったら多分。早くにもあの子を使えるようにせなあかん」

「・・・その予想、て？」

フェイトが先を促す。

「・・・まだ確証がないから今は内緒や。

多分今から話しがあるやろうし」

はやてのその言葉に釈然としながら二人は頷く。はやてが今は話すべき内容ではない。と決めたのなら聞くべきではないだろう。

「ようこそ。こんにちは♪はやてさん。フェイトさん。なのはさん」

「こんにちは♪シャツハさん♪」

なのはと一緒にフェイト、はやても挨拶を返す。

「こちらで騎士カリムがお待ちです。」

・・・後でヴィヴィオちゃんの様子も見ていきますか？」

「はい♪是非♪」

シャッハが苦笑いを浮かべながら提案する。

三人共、たまに来てはヴィヴィオの授業風景を覗いていたのだ。

「こちらで騎士カリムがお待ちしてます。

・・・騎士カリム。入ります」

ノックした後。

シャッハが扉を開ける。

そこには騎士カリム。クロノ・ハラOWN提督。

リンディ・ハラOWN提督。

騎士カリムの義弟でもある監査役のヴェロッサ・アコース査察官。

そして、伝説の三提督である。

レオーネ・フィルス法務顧問相談役

ラルゴ・キール武装隊栄誉元帥

そして、ミゼット・クローベル本局総幕議長が居た。

「・・・な」

あまりに大物揃いの状態に三人揃って一瞬言葉を失う。  
が、すぐに気を取り直し。

「高町なのは一等空尉入ります！」

「フェイト・T・ハラOWN執務官入ります！」

「八神はやて二佐入ります！」

と、姿勢を正し。

挨拶をした。

それにミゼットがおやおやと、笑い。

「そんな、畏まらなくても大丈夫よ。

三人とも元氣そうね」

と、返した。

それには三人ともいえ、と返したが。

「カリムも久しぶり♪」

で、この管理局大人物大盤振る舞いはなんなん？」

「ええ、久しぶり。

はやて。

フェイトさんもなのはさんもお久しぶり。

まずは席に座って？」

三人ともカリムに促されるまま席に座った。

直後、カリムは手元にコンソールを表し。何かを操作する。

しばらくして、部屋のカーテンが閉まった。

これは外部に漏らさない時の為に使う状態である。

三人は少し緊張に顔を強張らせた。

「さて、三人に来て貰ったのは他でもないの。

私の『プロフェーティン・シュリーフテン』が新たな詩文を 書き出したの」

成る程、と三人は頷く。『プロフェーティン・シュリーフテン』

平たく言うとも未来予知であるただそれは詩文形式で掻き出されるのだが。

と、そこではやてが気付く。

「ちょっ、待ちい。

まだ時期が・・・！」

「そう・・・私の『プロフェーティン・シュリーフテン』は、二つの月が重なる時にしか、使えない、能力なんだけど・・・」

そこで、カリムは一度言葉を切る。

そして、ゆっくりと続きを紡いだ。

「今回の私の意思とは関係なく、勝手、に発動したの」

「・・・」

流石に三人共、言葉を無くす。

それがどれほど異常な事態か解った為だ。

「その、詩文、の内容もまた恐ろしい事が書かれていたの・・・で、その判断をしてもらう為に旧知の仲である。リンディ・ハラオウン提督やクロノ・ハラオウン提督。

そして、今の実質の管理局最高の責任者であるお三方に来て戴いた

の」

「私達としてはもう隠居したいんだけどねえ・・・」  
ミゼットの呟きに他の二人も頷く。

先のJS事件で実質の最高権力者達を失った為。すでに隠居寸前であつた三人もまた引つ張り出されたのだ。

それに、クロノ、リンディは苦笑いを浮かべるしかない。

「ま、お三方。その話はまた後で、と言う事で」

クロノが三人を宥めつつ、・・・老人の愚痴は一旦始まると非常に長い為である。

カリムに先を促した。

「そして、これがその内容なのだけど・・・」

カリムが顕れた詩文の一枚を掴み。

そつと詠みはじめる。

＜黒き闇の黒き遺思。

其は須らく遍く世界に終焉の鐘を鳴り響きかせる。

黒き闇は黒き亡者を呼び、666の名を持つ獣は亡者と遺思を喰らう。

666の獣、聖剣を用い。

黒き遺思と共に世界の全てに創誕の歌を奏でる。

かくて、世界の全ては新たなる新生を迎える＞

・・・一同、黙る。詩文の内容、それが大問題だったからだ。

‘世界の終焉’

それも遍く、だの世界の全て、だのついていた。

「・・・まるで、世界が終わるみたいな予言やな・・・」

はやてが唇を震わせながら呟く。

カリムはそれに頷き。

「突拍子もない話だし。現実味もないけど・・・ここに在る皆さん。同じ意見よ」

カリムの言葉にミゼットを始めとして皆、頷く。

クロノが続く。

「それに、正直。心当たりが無い訳じゃあない」

フェイトの方を見る。

フェイトはそれに頷き。

「はい。」

実は私が今、追っている事件に。今の予言に多分に重なる部分があるんです」

フェイトがコンソールを出し。

画像を表示する。

そこにはあの黒い点が絡みついた。無数の獣・・・中にはシオンと争った獣も含まれてあった。

「これです。この、黒い点。」

この黒い点が絡み着いた獣はその全てが狂気に侵されたように暴走し、少なくとも被害を出しています」

フェイトが説明する。

それにミゼットが質問する。

「この、黒い点。ね・・・どのくらいの被害が広がっているのかしら？」

それに、フェイトはちらりとカリムを見る。

が、すぐに視線を戻し。

「・・・かなり広い範囲で。」

管理世界の内、ほぼ三割の世界で出現が確認されています」

「ッ！！」

衝撃が広がる。

管理世界の三割。この広大な次元連結世界の内。管理局が管理出来ている世界とはそれこそ千の桁ではない。

その、三割。

・・・周りに沈黙が広がる。

「今、現在の状態では世界を滅ぼすような被害ではありません・・・ですが、この広さは異常です」



フェイトが続ける。

「それと、この黒い点が絡みついた獣達なんですが・・・いくつか特徴があります。

まず一つ。普通ならありえないような力が備わる事。ある獣は防御魔法を使用しました」

スバルと戦った。オーガ種の事である。オーガ種はまず魔法など使用しない。知性はかなり高のだが。

「続けて、二つ目。これは管理世界駐在の局員が相当てこずっているのですが、

異常なまでの再生力。

殆ど生命活動を止めてもほぼ間違いなく再生します」

モニターに再生の様子が現れる。

・・・余りに異常すぎる再生力だった。半身を吹き飛ばされて、尚。再生する映像はビデオの巻き戻しを連想させる。

流石に皆、顔を引き攣らせる。ご飯時には絶対見たくない光景だ。

「続いて、第三点。

・・・1番。重要なんです、この黒い点が絡みついた獣達。ほぼ例外なく死亡してるんです」

ミゼット達が疑問不を浮かべる。

「・・・それは、暴走したが為に攻撃によって？」

「いえ。・・・正確には時間で勝手に」

フェイトの言葉に合点がいく。

「つまり・・・何も、していないにも関わらず。勝手に死んでいくのね？」

「・・・はい」

フェイトが頷く。

辺りに神妙な空気が落ちる。

続いて、クロノが質問した。

「・・・治療方や元に戻ったという報告は？」

「ありません。・・・例外なく死亡しています」

その言葉に頷き。そして、最後の確認を取る。

「・・・人にこの黒い点が顕れた。という事例は？」

「それありません。・・・、今の所は、」

あえて強調した。

つまりは人にこれが発現してもその生存は望めない、という事だ。

「成る程な・・・」

クロノが呟き。リンディ、そして、三提督もまた頭を悩ませる。

そして、

「やはり、あの案で行くしかないみたいですね」

リンディが呟く。同時。三提督も頷いた。

「あの、案？」

なのはがクロノに聞く。クロノはああ、と頷き。

「現状。この黒い点と暴走体はランダムにあらゆる世界へ現れていて、管理局はその対応が出来ていない」

その余裕もない、と続ける。

「だが、この被害範囲の広さ。そして予言。

これらを考えると、この一件。放置する訳にも、まして。対応に遅れる訳にもいかない」

そして、チラリと三提督を見、次にリンディを見て。それぞれが頷くのを確認した後。

続ける。

「故に、管理局本局。及び地上本部はある提案を出した」

「地上本部も・・・？」

さすがに驚いたのだろう、なのはが目を丸くする。

地上本部。いくら前のレジアスの時程ではないとはいえ。お固いであるのである。

「ああ・・・そこで八神二佐」

「はい」

はやてが頷く。

それを確認し。

「君には一度。本局に異動してもらい。  
ある次元航行部隊を任せたい」  
そう、と区切る。

「独立次元航行部隊」の」



「さて・・・」

ここは本局の会議室の一室。

そこにははやてを始めとした元6課のロングアーチ。及び前線メン  
バー。さらに後見人の三人が集まっていた。

シオンの事情説明を聞く為である。

聖王教会での話しの後。その場にいた人物、全員にシオンの事は告  
げられた。

故に皆、事情を聞きにきた訳である。

情報は何もない状態なのだ。今は少しでも欲しい所なのである。  
ちなみに三提督も通信で聞いている。

「八神はやて、入ります」

「フェイト・T・ハラOWN入ります」

「・・・神庭シオン。入ります」

三人が入ってきた。

スバルはパツと顔を明るくさせてシオンの元に走ってくる。  
シオンは何とか動揺を堪え。

「よ・・・」

と、だけ挨拶する。

「うん、シオン。よかったよ〜♪」

怪我とか、大丈夫？」

「ま、特には・・・ッ!!」

殺気を感じた。その方に振り向く。  
そこにはティアナ・ランスターがいた。  
もんのすごい目で睨みつけてくる。

「・・・何だよ？」

「何よ・・・？」

二人して睨み合う。  
当然か。

シオンからして見れば、いきなり攻撃された女であり、ティアナから見れば。友達と自分に武器を突き付けた男である。  
仲のよくなりようがなかった。

「あの・・・二人共、その辺で・・・」

『ふんッ！！！！』

二人、まったく同じ仕草で顔を背ける。

・・・意外と気が合うのかもしれない。

そこで、ハタッとシオンは何か気付いた動作をする。

胸元に手をやり。続けてポケット。

何かを探しているらしい。

「どうしたの？」

フェイトが尋ねる。シオンは困った顔で

「俺の剣・・・知らないっスか？」

そう言えば・・・

一同に沈黙が降りる。

まさか、忘れた？

「あ、ゴメンなさ〜い」

何故か手を上げた後、その手を重ねて謝る少女が居た。

シャリオ・フィニーノ。フェイトの副官にして元6課の官制担当として、デバイスマイスターでもある少女である

「あのデバイスなら私が持ってきてます」

シャリオが右手を差し出す。

そこにはちょうどイクスの鏢の部分小さくしたアクセサリーが乗っていた。中央の宝玉がキラリと光る。

「・・・ちなみに、こいつ。何か喋った？」

「え。いいえ、何も。」

と、いうか喋るんですか？」

その言葉にシオンは口許を引き攣らせる。

「おい・・・」

「・・・」

イクスに話しかける。

がイクスは何も話す気配がない。

シオンはむんずつとイクスを掴み取ると、迷わず手近な壁に全力で投げ付けた。

「！！」

流石き皆驚く。当然だ。

自分の半身とも言える。

デバイスを投げる魔道師がどこに居よう。

・・・ここに、居るが。

だがイクスは壁に当たる直前。急停止した。

『は・・・？』

一同、啞然とする。

形からして、ユニゾンタイプでは有り得ないはずだが・・・？

《何故に投げる？》

「投げるでか！！無愛想も大概にしろよ！！」

中に浮いたデバイスと怒鳴り合う。

・・・ものすつごく珍しい光景であった。

と、言うかまず有り得ないとも言う。

《ふ・・・事情の説明等。一介のデバイスがやっても信頼は得られまい？》

「む・・・確かにな。」

・・・で、その心は？」

《単に面倒くさかった》

「やっぱりか！！」

《むう！！しまった！

ええい師匠を嵌めるとはそんな弟子を持って俺は悲しいぞ》

「うっさいわ！！」

弟子だろうが主に対してちつとはその負担を軽くしてやろう、とか  
そんなのは無いのかよ!？」

《微塵も無い!》

「潰すッ!」

シオンの手が伸びるがそれんひよいひよいとかわしていく。

「待てコラ!!」

《はっはっは。人の言葉にして。嫌なこった》

「潰す!!。マジでスクラップにしてやる!!」

さすがに見ていられなくなったのだろう。

スバルやなのはが止めに入る。

「ちよっ・・・待って、待って!」

「その・・・デバイス。・・・イクス君も、止まって!!」

二人の説得にようやく二人?共止まる。

「・・・後で覚悟しとけ」

《ハッ!出来もせん事を言うな》

後々、怨恨は残ったみたいだが。

「とりあえず。イクス。」

元に戻れよ」

《致し方なしか・・・面倒くさいんだがな》

デバイスがため息?らしきものをはくと光りを放ち始め。

次の瞬間。

いきなり人型になった。

『は・・・?』

更なる珍事に目を丸くする一同。

それにシオンはため息をつきながら。シオンを指さし。

「紹介します。・・・俺のデバイス兼師匠のイクスです」

《よろしく!》

『はぁ・・・よろしく』

世にも珍しい。挨拶であった。



「つまりはユニゾンタイプでありながらアームドタイプでもある訳なんやね？」

ようやく、騒ぎが収まり。自己紹介を行っていた。

まずは師匠から。らしくイクスの方から紹介されていた。

《いや、正確には元はユニゾンタイプであるが、アームドユニットも組み込まれている、が正解か》

さらりと答える。

ちなみにイクス。人型では、銀髪銀眼。服も白銀の服を着ていた。さらに言う、この場にも居る。リインフォース＝（ツヴァイ）やアギトよりちよつと背が高い上に珍しい事に男性型だった。

「はあ〜〜」

はやてが嘆息する。

シャリオこと、シャーリーは目をキラキラと光らせていたが。

「イクス君については一先ず置いとこ・・・  
で、神庭シオン君？」

はい、と答える。

「自己紹介。してくれるかな？」

先ずは出身世界から」

「え〜神庭、シオン。て、言います。

出身世界は・・・なんか名前似てる人がいるからもしかして、と思いますけど、第97管理外世界・・・平たく言うとその地球。日本の出身です」

『え〜〜〜!!』

皆、声をあげる。

当たり前と言え。当たり前だが。

「ま、待って!! 地球にそんな魔法あるなんて知らないよ!？」  
なのはが叫ぶ。当たり前である。

地球、日本はおもいつきりなのは、はやての出身である。

「まあ、秘密組織と言うか、何と言うか・・・ぶっちゃけると世界の裏側じゃ結構使われてたんすよ」

シオンがあっけからんと答える。

流石にはやても目を丸くしていた。

「はあゝゝゝ、何、というか縁がある、と言うか」

「まあ、世界の裏側で見えないようにして細々とやってたんでね。まず一般の方々にゃ、わかりませんね」

あっさり答える。

どうも、ミッドチルダに着いてから見慣れぬ術式にこう言った質問が絶えなかったみたいである。

「術式の名前は、カラバ式」。戦闘スタイルは剣撃特化型の神覇ノ太刀です」

さらさらと答える。

「質問。なんや？そのカラバ式。て？」

「んゝゝ歴史を語るの面倒、スから簡単に言うと。ミッド式と、ベルカ式。であるじゃないですか？あれの両方を足して。2で割った感じっス」

めっちゃめっちゃ、適当な説明だった。

「・・・ま、今詳しく聞くのはやめとこか

・・・後で詳しく教えてもらおか♪」

「・・・」

非常にまずい事をしたのでは、としばし沈黙するシオン。

何事も面倒くさがりはいけないものだ。

「で・・・これは本題なんやけど・・・なんでミッドや他の世界に？」

その質問にシオンの顔つきが変わる。

「・・・ナンバー・オブザ・ビーストを探しに」

スバルとティアが体を固くする。

シオンの探し物。それが解る時が来たのだ。

「それは、ちなみに何やの？」

「・・・人、です。」

ただの人、て訳じゃないですけどね」



シオンが少しだけ顔を俯かせる。  
何故か、そこには哀しみがあつた。

「俺達の世界でもロストログア扱いの禁断の秘宝。『魔王の紋章』を盗み出し。揚句。暴走して、世界を放浪する男。コードネーム。’ナンバー・オブ・ザ・ビースト’、それが俺が探す存在です」

シオンは迷わず言い切った。

《……》

イクスは何も言わずに中に浮いていた。  
だがその目に浮かぶは悲哀。

「それを……何で、シオン君が？」

「あれは……俺の大切な物を盗んでいったからです」  
苦々しい顔で話す。

それはあまりに痛々しい顔だった。

「それは何なのか……教えては貰えんのやろね」

「……すいません」

それは教えない。という事に関しての肯定の証であつた。  
しばし息をつく

「そんで？その男はどんな恰好してるんかな？」

「……黒髪黒瞳。恰好も真っ黒で。目つきはひたすら悪いです。  
そして……」

シオンは続ける。その次の言葉は、はやて達に衝撃を与えた。

「666の文字を右手に刻んでいます」

「ッ……!!」

そこであの会議に出ていたメンバーが思い出すのは予言の内容。  
666の魔王。

まさか、これとも関係あるとは……

（これは、予想外の収獲やね）

少なくともシオンは666の魔王を知っている事になる……！  
「……どうか、しましたか？」



はやての額からも少し、汗が流れる。

「手の内ようがない訳じゃあないんです、・・・近くのものに感染すれば、俺達はそれを、感染者、て、呼んでましたけど。それを殲滅すればアポカリプス因子も消えます」

それは最悪の答え。

つまりは感染したらアウトと、言う事だ。

「治療方は・・・？」

「・・・事例はたった一人だけ。でも、たった一人の成功例です。あてになりません」

場が暗くなる。

「そか・・・他には？」

「いえ・・・アポカリプス因子に関しては俺に解るのはこれくらいです」

シオンは嘘をついている。

スバルは直感でそう悟った。

理由は簡単である。

何故、ナンバー・オブ・ザ・ビーストを追う彼が。何故アポカリプス因子感染者を追っていたのか。

(聞いても教えてくれないんだろうな)

何となく、そう思った。

「そか・・・どうやって感染するかは解るか？」

「それなら。」

アポカリプス因子に、喰われ、たらおしまいです」

沈黙が漂う。

「どういう意味や？」

「・・・詰まる所、あれは精神生命体で、そして群体なんです  
つまりは

「体を覆い隠す程の因子に取り囲まれて、取り込まれる。・・・これを俺達は喰われる。て表現してますが、この状態になると、感染します」

「・・・成る程、なあゝゝゝ」

ゆっくりと息をつく。

思った以上の話しだった。

しばらく目を閉じ。

最初になのはを續いてフェイトを見る

二人共、頷いた。

「ん。シオン君。ありがとう。今の情報でかなり助かったよ」

はやてが礼を言う。

シオンはそれに頬を指でかきながら

「いや、司法取引ですし」

と、返した。

「さて、皆。今の話し、どう思う？」

はやてが問いかける。

皆、各々意見はあるだろう。

だがはやてはあえて自分の意見を言った、

「私は・・・放っておけん、て思ってる」

今の話しが本当ならば、いわば世界中の生命の危機である。

はやては続ける。

「・・・それで皆にも聞きたいんや。アポカリプス因子。皆も止め

たいか？」

ざわめきが起こる。

だがしばらくすると、ざわめきは止まった。

「怖い事や。

本当に全ての世界の危機やからな。

それでも・・・だからこそ止めたい、て思う」

こんな恐怖を普通に生きてる人には味あわせたくない。

そう、思う。

皆、頷いた。

「だから、皆。もう一度、私に力を貸して下さい！

この危機を、この恐怖を皆。一緒に止めて欲しい！」

そこで一旦区切り。

「お願いします!!」

はやてが頭を下げる。

しばらく沈黙が流れる。

(駄目、なんか?)

意を決して頭を上げる。

そこには、皆。笑顔を浮かべていた。

「も～～～今さらだよ?はやてちゃん?」

「そうだよ?」

なのはとフェイトが

『ね、皆!?』

と、問い掛けると、

『おお～～～!!』

と、声が上がった。

はやてが徐々に顔を綻ばせていく。

「みんな・・・ッ!!」

おおきにな・・・!!」

そして、クロノが宣言する。

「ここに、クロノ・ハラオウン。並びにリンディ・ハラオウン。そ

して、カリム・グラシア。

さらに、伝説の三提督、を後見人として、

、独立次元航行部隊、の設立を認める。

責任者、八神はやて」

はい、と頷く。

目を合わせ。そしてクロノが頷く。

「任務内容。アポカリプス因子の感染阻止。並びにその調査。

困難任務だが、君なら・・・君達なら出来ると信じている」

ゆっくりと皆を見る。

いい目だ。そう思い。続ける。

「期待している!!」

敬礼をする。

皆もまた敬礼を返した。



(凄い事になっちゃった)

スバルはそう思う。

シオンの話し。

そして、それを契機にした独立次元航行部隊の設立。  
でも、

(アポカリプス因子・・・)

そんな物に、こんな筈じゃなかった、結果なんて出させない。  
スバルもまた拳を握りしめた。

「・・・で、シオン君？」

盛り上がる会議室で唯一、黙ったままのシオンにはやてが問い掛ける。

シオンはおもいきり無然としていた。

「・・・俺を囑託魔道師にする、てのはこれのせい、スカ？」

「うん・・・駄目、かな？」

シオンはしばらくはやての目を見て。

ため息を一つ、つく。

「誰かの掌の上、てのは気に入っていませんがね・・・」

ニヤリと、笑う。

「正直、面白そうだ・・・」

そして、一息に

「俺も部隊に参加します！」

と、宣言した。

#### 第四話「独立次元航行部隊」(後書き)

予告「独立次元航行部隊設立に向けて慌ただしくなる元六課メンバー達」 「そして、シオンの囑託試験勉強も大詰めを向かえ」

「そして、いよいよ試験が始まる」

次

回「『始める為に』」

## 第五話「始める為に」（前書き）

「災厄に対して集まる力達」

「その準備はまる

で嵐の前の静かさで」

「そして、シオンは私達の舞台に上

がる為に、先生、達と修練の日々を過ごす」

「優

しくも厳しい日々を」

「魔法少女リリカルな

のはSttS，EX。始まります」



## 第五話「始める為に」

神庭シオン

魔力ランク（ミッド方式）Sー

所有デバイス…イクス。デバイスタイプ『ユニゾンアームドデバイス』（八神はやて二佐命名）

クラス（ジョブとも呼ばれる、ミッドでの陸戦や空戦と、いった分けかたに近い。なお。かなり細かく分けられている。）…セイバー（剣士）

魔法術式。カラバ式。

戦闘スタイル…剣撃特化型スタイル。『神覇ノ太刀』

カラバ式に関する考察。

ミッド式や近代ベルカ式。古代ベルカ式のどれにも属さない術式。ただ近似としては古代ベルカより。

ただ対人戦、というよりは対巨大生物等のより大きな生物との戦闘を主眼に置いている。

そこだけみればミッド式に近いが、ミッド式と違う点として、砲撃等による遠距離からの射撃ではなく。あくまで近接戦での戦闘を前提としている事である。

唯に、その魔力使用も、身体強化。並びに斬撃強化、打撃強化が計られ、また空間を『足場』と、する事で、空戦に於ける三次元的な動きを組み込まれている。

なお、ミッドに於ける『レアスキル』に近い物として、『アビリティ・スキル』があり。

この『アビリティ・スキル』は魔力の大小。さらに戦闘スタイル。そして、魔力制御等の各戦闘技法にかなり影響を与えている。

個人個人で保有しているスキルにもかなり違いがでており、『インヒュレーション』（先天的）なスキルよりと思われる。

神庭シオンの『アビリティ・スキル』

### 『魔力放出・A＋』

魔法を介さず、魔力を放出する技法。この魔力は防御、攻撃追加。攻撃加速等、はば広く使用できる。なお、余談になるがそれぞれスキルはランク付けされておりミッドにおける魔力ランクと同じランク付けがされている。最高位はEX（実質の測定不能）

### 『対魔力耐性・A』

純粋な魔力に対する攻撃の耐性スキル。対魔法戦闘であくまで近接戦にこだわるカラバ式ではこのスキルの有無、大小はかなり明暗を分ける。

Aは純粋な魔力攻撃ならばA以下は全て耐えうる。だがあくまで純粋な魔力であり、副次作用を持つ攻撃には意味をなさず。また魔力による衝撃も消せない。

### 『直感・A＋』

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を選択するスキル。

一種の第六感であり未来予知にも等しい。

僅かな勝率の戦いでも無理矢理勝利する為の手段を、閃く、とも言える。

### 『戦技変換・B』

シオン、と言うよりは所有デバイスであるイクスのスキル。

戦闘時、自らのフォームを変換する事で、多彩な戦闘スタイルに変化できる。

尚、元来はSSスキル。

現在はシオンが、'ノーマル'と、'ブレイズ'にしか変換できない為、Bランクにまで落ちてしまっている。

### 『神覇ノ太刀』の技名並びに、その威力検

証。

シオンの戦闘スタイル。神覇ノ太刀の威力のランク付け。ちなみに『魔力放出・A』による追加効果では各技の威力は1ランク上がる。

### 『神覇・壱ノ太刀・絶影』

威力A＋、速度S＋

効果対象。1名

斬撃技。速さに特化した技でその速度が最大の特徴。尚、スキルによる恩恵もあり、威力は『シグナム二等空尉』の『紫電一閃』と、同等。

『神覇・弐ノ太刀・剣牙』

威力・B＋、速度・A

効果対象。1名～4名

放出技、飛び道具とも言う。斬撃を飛ばす技であり。近ければ近い程威力が上がる。

『神覇・参ノ太刀・双牙』

威力・A、速度・B

効果対象。1名～10名

放出技、こちらも飛び道具と言える。地面を走りながら二つの斬撃を飛ばす技。

ただ、技の特性状。空では使えず。また射程も低い。

『神覇・四ノ太刀・裂波』

威力・C、速度・C＋

効果対象。1名～10名

放出技、掲げた剣を対象に衝撃波を放つ技。

攻撃というよりは捕縛用の技である。

尚、防御に組み合わせると、効果は絶大。

また、威力によっては射撃魔法や砲撃魔法を跳ね返すことも出来る。

『神覇・伍ノ太刀・剣魔』

威力・S＋、速度A＋

効果対象。1名

突撃技、魔力を身に纏い。敵に突っ込む技。

威力、速度共にかなり高いが、突撃技という特殊性の為。回避、カウンターを狙われやすい。

『陸ノ太刀』以降は奥技ではあるが、今だシオンは習得していない為。

ここでは割愛する。

イクス『ユニゾンアームドデバイス』に対する考察。

元来の名称は『イクスカリバー』

だが本機の意向もあり『イクス』と短縮で呼ぶ。

元々は『ユニゾンデバイス』であるがユニゾンするための条件があまりに特殊過ぎる為。(戦技変換におけるフォームチェンジの最終形態)

後からアームドデバイスとしての装備を取り付けられた。

デバイスとして使用されている時は使用者と体。(両手)の一部分のみユニゾンしている。

尚、本機は元々はロストログア扱いの物である。



「ほらほら!次、

行くよ〜!」

「ッ!」

なのはの宣言と、ともにアクセル・シューターの数が増える。

それをシオンはひたすらに回避しまくっていた。

嘱託魔道師試験。実技模擬戦における家庭教師としてシオンは今、なのはに戦技教導をしてもらっていた。

今はそのなのはとの模擬戦の最中である。

(すごい、これ。全部かわすんだ・・・)

涼しい顔でアクセル・シューターを放ちながらなのはは内心驚愕していた。

シオンは今、一切の防御を取らず。身体を振り回し。全て回避していた。

アクセル・シューターの数。今、追加した分を含めて20。

ほぼオールレンジ攻撃とかしたそのシュータをシオンはひたすら回避しつづける。

「砲撃。行くよー！」

「ぐっ・・・！！！」

一方。そのシオンもまた、なのはに近づく事が出来なかった。攻撃濃度が高すぎる。

正直、回避に専念しなければ落とされている。

そこでシオンはハタッと気付くと。身体を捻りながら回転し、空中に足場を展開。その場からさらに離れる。

（気付かれちゃったか）

なのはが笑う。

今、シオンが気付いた場所はなのはがバインドを仕掛けた場所である。

捕まえられたら、直後にバスターを叩きこんで終わりだっただろう。バスターを溜める。

シオンはそこから『瞬動』を発動。

なのはに急接近しようとして。

前方に足場を形成。そこを足場にして、後ろに回転。

直後、シオンの元の進行方向に、シューターが殺到した。

（あれも、気付くんだった？）

なのはの口元が緩む。

（でも、これならどうかな？）

「デバイスン・ッ！」

狙うのはシオンの空中での着地点。

「バスター！！！！！」

一撃が放たれる。

バスターは狙い変わらず。

シオンに殺到し。

だが、シオンは逃げない。

「神覇・四ノ太刀・」

左手でシールドを張り。

バスターを堪える。

直後、シールドの内側にイクスを叩きつけ。

「裂波！！」

波が広がる。

その波はバスターを減衰させ、そして失速。

だがその波の範囲には今、まさにシオンを取り囲もうとしたシューターがあつた。

相殺。

シューターと波が消える。

そこをシオンは見逃さない。

『瞬動』で一氣に近づき。

「神覇・壺ノ太刀！」

なのはに接近した所で最速の技を放つ。

「絶影！！」

だが。

なのはのレイジング・ハートの先端には既に光りが集まり。

「ッ！！！」

それに気付いたシオンは止まろうと、形成した足場に足を叩きつけ。しかし、間に合わず。

「バスター！！！！！」

二発目のバスターが直撃した。



「惜しかったね〜」

なのはとの模擬戦が終わり。シオンはイクスを通常に戻し。

その場にへたりこんだ。

完敗。

見事に敗北してしまった。

なのはが満面の笑みを浮かべながら歩いてくる。

「発想はよかったよ♪」

バスターを弾いて。シューターを無効。

こっちの守りはもう無いからね」

なのはがシオンを褒める。

「けど、動きが直線すぎ。

あれじゃあカウンター狙われちゃうよ?」

まさしく今さっきカウンターを叩きこまれたのでシオンとしても黙ったまま頷く。

「うん。今回の課題はこんな所かな?

・・・それにしてもシオン君。すごい空間把握能力だね?」

なのはが言っているのは自分が放ったシューターをシオンがひたすらによけまくった事だ。

かなり高いレベルで空間を把握してなくては出来ない。

「・・・んゝゝ、ほら、俺。空間に足場とか作るじゃないっスか? だから自分の周囲の空間の把握は絶対条件なんっスよ」

肩で息をしながら言う。

なのはも

「そっかゝゝ」と頷く。

(まだまだだな。)

シオンは思う。自分の未熟さにちよつと呆れる。

これで一人で戦おうとしていたとは。

(でも・・・)

シオンは一つの確信を得ていた。

まだまだ自分は強くなれる。

その事を。

「さて、次はフェイトちゃんの番だね」

そこでシオンはピシッと固定する。

シオンにとって1番苦手な時間が来たのだ。

訓練室にフェイト・T・ハラOWNが入ってくる。まさに時間ピッタリ。タイミングピッタリである。

「なのは、終わった?」

「うん♪今終わった所だよ♪」

なのはが満面の笑みで答える。

「そっか。・・・なら、シオン?」

シオンに声をかける。

その時、シオンはゆっくりと出口に向かおうと最初の一步を踏みだそうとしていた。

フェイトはやはり満面の笑みで。

「お勉強・・・始めようか♪

それと、逃げよう。なんて考えないようにね？」

「・・・はい」

シオンは心の中で涙を流した。



「へへへ。シオン。頑張ってるんだ？」

ナカジマ家、スバル部屋。

元六課が解散した後。スバルは自宅に戻っていたのだ。

今は『独立次元航行部隊』による新たな艦船に自分の生活用品等を持ち込むため。

いろいろな荷造りしていた所である。

今、現在。二週間後に『独立次元航行部隊』に異動するメンバーはおおあらわで引き継ぎを行っている最中で。

スバルも例外ではなく。

所かしこを走り回っていた。

（そうみたいよ。

な～んか、なのはさん達から家庭教師、て事で学科。実技の二種を徹底的にしごかれてるみたいね）

念話しているティアナが笑いながら答える。

内心はざまあ見ろ、と言った所か。

「うわあ～。。すごいね。あ、そう言えばティア。私達の行く部隊名、て聞ってる？」

スバルが衣服を畳みながら聞く。

（そう言えば聞かないわね。

艦の名前も聞かないな～）



「まさか、『アースラ』だったって♪」

スバルが笑いながら言う。アースラはかのJS事件の際、機動六課が乗り込んだ艦だ。

ティアナはそれに呆れたような念話を返す。

（アースラは完全に廃艦。有り得ないわよ）  
あっさりと否定してきる。

「そっか」。気になるな」

（ま、当日まで内緒なんですよ。

さて、そろそろ寝るか」

アンタもさっさと寝なさい）

「は」

スバルは頷き、布団にはいる。

（それじゃあ、また今度ね）

「うん。じゃあ」

そして二人は眠りの挨拶をかわす。  
まるで同じ部屋にいた時のように。

（オヤスミ）

「オヤスミ」

電気が消えた。



「ふ、フェイトさん。テスト、終わったス」

シオンが疲れきった声をだす。

いや、実際疲れたのだが、

「そう？どれどれ」

そう、いいながらフェイトはテストに目を走らせ。  
無言のままに赤ペンで採点する。

「・・・七十点。間違えた箇所。六問。

シオン・・・解ってるよね？」

その言葉にシオンがビクツ！となる。

フェイトはその反応を見遣り、だが次の一言を放った。

「間違った箇所。書き取り。十回。合わせて六十回」

「嫌だゝゝゝ!!」

その言葉にシオンは立ち上がり。

扉に向かい全力疾走開始。

だが、フェイトがパチリと指を鳴らすとその場にすっころんだ。  
慌てて足を見る。

バインドがかかっていた。

「どこに、行くのかな？」

ビクウ!!とシオンの肩が跳ね上がる。

ゆっくりと近寄る。フェイトに心底。恐怖する。

「い、いや。だって。ほら。もう三時間もしてますよっ!?  
ほ、ほらフェイト先生も疲れてるんじゃない?」

必死に叫ぶシオン。

だが、フェイトは耳を貸さない。

「大丈夫だよ♪」

全然疲れてないから♪」

ニッコリと笑う。

とってもいい笑顔だった。

シオンにとってはひたすら恐怖だが。

「さ、続けようか」

もはや。?マークすらでない。

「ご、後生です。これ以上はっ!これ以上はっ!!」

シオンが必死に拝み倒す。

フェイトは拝むシオンの顔の前に移動し、

目の前でニッコリと微笑む。

その微笑みにシオンは一縷の希望を見出だし。

ゆっくりと顔を破顔していき・・・

「だ・め♪」

フェイトの駄目出しを喰らった。

「いいいやあああああ!!!!!!」

その、切ない叫びは本局に響き渡ったとか渡らなかったとか。



「お、待ったよ♪・・・て、シオン君。どうしたん？」

シオンが訓練室に入ってきたなを確認して微笑むはやて。だがシオンの様子をみて。さすがに心配そうな表情を浮かべる。

「うう・・・フェイト先生。もう、もう書き取りは・・・」

何か呻きながら涙を流している。

「ちよっ・・・シオン君？シオン君・・・」

そこでもうやくシオンは正気に戻る。

「うう、はやて先生・・・」

「・・・なんか、私の番になる前。絶対フラフラやな。そんなにフェイトちゃん厳しいん？」

答え。めっちゃめっちゃ厳しい。

特にシオンは学科は不得意であったので、ここぞとばかりにフェイトはシオンに教え込んでいた。

ある意味。気にいられてはいる。

「そ、その件についてはノーコメントで!!」

「そうなん？なんや、めっちゃ気になるな・・・」

それはやめておいた方がいい。

人間。普段は優しくとも怖い時、と言うのは必ずあるものだ。

「ま、いいか。」

それなら、始めようか・・・」

その言葉に頷くシオン。

こちらの授業もまた。

かなり厳しいものがある為、気が抜けないのだ。

「さて、第一章から第二章まで永唱、開始しよっか」

そして、シオンは目を閉じる。

儀式魔法永唱。開始。

シオンは唱える

「アイン・ソフ・オウル。アイン・ソフ・アイン」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

そして、数日がたった。

『独立次元航行部隊』に編入するメンバーはそれぞれ引き継ぎや部隊申請の為、疾走し。

一人は来たるべき囑託試験に対して。先生Sにしごかれ。そして、試験当日が訪れた。

「さて、私が今回の囑託試験の試験官を行う。

クロノ・ハラOWNだ」

表れた人物にシオンはア然とする。

見覚えがあったからだ。

「返事はどうした？

神庭、シオン君？」

「と、すみません！」

敬礼をしようとする、片手を上げて制された。

「さて、試験の種類は知っているね？

まず学科を。

次に実技で儀式魔法の試験を

最後に模擬戦を見させてもらう事になる。」

そこで一つ息をつき。

「がんばりたまえ。」

「はい！！」

と、言われた。

まずは学科試験だ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「や♪クロノ君♪」

「お、君達か・・・」

表れた三人にクロノが笑みを浮かべる。

はやて、なのは、フェイトの三人が揃って歩いてきたからだ。

「なんだ？ 神庭シオンの試験の様子を見にきたか？」

「ご明察や♪」

はやてが答える。

やはり三人とも気にはなっていたらしい。

「学科試験の結果は、どう？」

「ああ、それなら問題ない。文句なしの、合格、だ」

そこでフェイトの眉がピクリと動く。

「満点、じゃあないんだね？」

「ん？ ああ、その通りだが・・・」

妹の妙な気迫にクロノは気圧される。

こめかみを一筋の汗がすべり落ちた。

「・・・間違った所、後で教えてくれる？」

「・・・ああ、でも何に使うんだ？」

フェイトの背後ではなのはとはやてが曖昧な笑みを浮かべる。

何に使うか、大体検討が着いたからだ。

・・・シオンの明日を祈りたい。

「さて、なら今は儀式魔法の実技試験やな？」

「ああ、ちなみにこちらははやてが？」

勿論。とはやてが答える。

「お、始まるぞ？」

クロノの言葉に皆、試験が行われている訓練室を見る。

シオンが広域に魔法陣を展開していた、

永唱が始まる。

「アイン・ソフ・アイン

アイン・ソフ・オウル。

・・・」

繰り返す。

ゆっくりと魔力が上がっていく。

「そう、それでええ♪」

はやてが頷く。

永唱は続く。

「汝、忌むべき闇にして芳名の使徒。

光りの中で世界に還れ」

一息区切り。

「招かれざる者よ」

魔法が発動する。

「セラフィック・レイ」

光りの柱が魔法陣より伸びたった。

「・・・これは、合格だな」

クロノが一人ごちる。

残るは実技。模擬戦のみ。



## 本局第六訓練室

シオンはそこにいた。

（最終関門）

実技試験・模擬戦。

シオンはイクスを握る手に力を込める。

《あまり気負い過ぎるな》

イクスから声が掛かる。

それにシオンもまた息をつく。

確かに。肩に力が入り過ぎるのはよくない。

前方に魔法陣が出る。ベルカ式だ。

（俺の相手・・・）

その存在は女性であり。

髪はポニーテール。

手には魔剣レヴァンティン

顔は美しいながらも凛々しく。一降りの剣を彷彿とさせた。

その名をこう呼ぶ。

『ヴォルケン・リッター

烈火の将。シグナム』、と。

「待たせたな」

「いえ・・・」

シオンは否定する。

多分に緊張していたので逆に助かったのだ。

「では、早速だが始めるとしよう」

「・・・はい！」

シオンが頷き。

どちら共なく。距離をとるため短く。後ろに跳んだ。

数歩の距離を挟んで対峙する。

（どう、来る？）

シオンの額に汗が浮かぶ。

目の前の女性。間違いなく強い。

その強さを肌で感じる。

シグナムがレヴァンティンを鞘より抜く。

静寂・・・

瞬間。互いに距離を詰めた。

「ハアツ・・・！！」

「だぁぁ・・・ッ！！」

剣撃・・・剣撃・・・剣撃！

互いに幾度も剣をぶつけ合う。顔に浮かぶは笑み。

（おもしれえ・・・！）

シオンは歓喜していた。

目の前の女性の腕前。

間違いなく。エース級である。

シグナムもまた笑っていた。

「レヴァンティン！！」

エクス・プロジオ！！

カートリッジロード

弾丸が吐き出される。

レヴァンティンに炎が巻き付いた。

大上段に構える！

「紫電・・・」

「・・・！！」

シオンもまた。腰だめにイクスを構える。

「神覇・壱ノ太刀・・・！」

シグナムは静かに。

シオンは荒々しく。

剣を構えた。

「一閃！！！」

「絶影！！！」

互いの剣撃がぶつかり合い。

衝撃波が訓練室を奮わせた。



## 第五話「始める為に」（後書き）

予告「ついに始まった嘱託試験。」

「実技試験でシオンはシグナムと切り結ぶ」

「シオンはシグナムを敗る事が出来るのか？」

「てついに『独立次元航行部隊』は動きだす」

「次回、第六話『その名は』」

「最後の関門であ

「果たして。

「そし

## 第六話「その名は」(前書き)

「最初に剣を持ったのは、十歳くらいの時だった」

「ただ奮いただ振るい」「でも、いつも何か掴めない気がしてた」 「でも、今なら何か掴める気がする」 「舞

台に上がる為に必要な事」

「あの、背中、を追う

為に必要な事」

「でも、今。それらは俺の中では存在し

ない」 「ただ俺は、語り合い、に夢中になっていく」 「魔法少

女リリカルなのはStS, EX。始まります」

## 第六話「その名は」

剣音が響き渡る。

それは、まるで一つの音楽を彷彿とさせた。

時空管理局嘱託魔道師試験。

実技・模擬戦。

神庭シオンはヴォルケン・リッターのシグナムと剣劇を演じていた。

「おお・・・！」

吠える。届けと。

そして大上段に構えた自らの大剣型のデバイス。イクスを振り下ろす。

しかし、

「ふ・・・っ！」

斬り流される。

一撃の重みはシオンが上だがシグナムの技量は半端ではない。

この技量の差は簡単には埋められない。

一撃を斬り流したレヴァンティンがそのままシオンの首を狙う。

シオンはスウエーでぎりぎりでかわす。

1時後退。

数メートル下がる。

だがシグナムは待たない。

「レヴァンティン！！！」

カートリッジロード。

連結刃となったレヴァンティンがシオンを襲う。

「ぐっ・・・！！！」

真っ直ぐに突っ込んで来たレヴァンティンを首を反らせてかわす。

しかし、レヴァンティンはそのままシオンを包囲し、さらにその首を擡げシオンを襲う。

「このっ・・・！！四ノ太刀。裂波！！！」

空間に波紋が広がり、レヴァンティンによる包囲から一時逃れる。その一時があれば充分。

‘瞬動’で脱出を計る。

行き先はシグナムの目の前。

連結刃の状態のレヴァンティンを直ぐに戻す事は出来ない。

その隙をつき、疾走。

斬撃をシグナムに放つ。

・・・が、その一撃はシグナムの左手の鞘によって受け止められる。

「ぐっ・・・！」

「はぁあっ・・・！」

直後蹴りを顔に叩き付けられる。

体勢を崩すシオンにさらに連結刃を解除したレヴァンティンを叩きつける。

その刃をシオンはしゃがむ事でやり過ぎし。

直後。

シオンの真下からの斬撃。

しかし、シグナムはその場で後ろに倒れ込むようにバク宙。

斬撃をかわす。

そして、シグナムは体勢を整える為。

シオンはイクスを引き戻す為。

互いに。一時。間が開いた。



「・・・やるものだな・・・」

管理局本局。第六訓練室。今、神庭シオンの嘱託魔道師試験の模擬戦が行われている部屋の前で、なのは。クロノ。フェイト。はやてが観戦していた。

いや、クロノは試験官なのだが。

完全にギャラリーと化していた。

「うん、ちゃんと教えた通り出来てる♪」

なのはが嬉しそうな声をあげる。

「シオンて、前。なのはとの模擬戦じゃ結構アクロバティックな事してたよね？」

試験じゃ、あまり派手な動きしてないけど。

あれは、なのはが？」

フェイトが尋ねる。

そう、シオンはなのはとの模擬戦では、カラバ式の特徴である空間に足場を形成してのアクロバティックな動きを使っていた。だが今回はその使用頻度が少ない。

「うん。あの動きはかなり隙が大きいから滅多な事じゃ使わないように教えたんだよ♪」

なのはが答える。

実際。なのはとの模擬戦では、攻撃をかわした直後に生じた隙をつかれての撃破が多かった。

その為、試験までの期間なのははシオンに一切の足場形成を禁じた。その甲斐があったのかシオンは足を地につけての安定した戦い方を覚えていった訳だ。

「さすがやね。結構シグナムが戦い辛そうにしてるし」

「何事も安定した戦い方というのは相手にとってはやりづらいからな」

はやてとクロノが頷く。

しかし、とクロノは続ける。

「神庭シオンはシグナム相手に接近戦のみで戦うつもりか？」

技量の差は身を持って解っただろうに」

「ううん。あれでいいんだよ」

クロノの疑問になのはが答える。

「技量の差があるからこそ、前に出て戦わなきゃ。後ろに下がると後は一方的にやられちゃうだけだから」  
成る程。と一同納得する。

高町なのは。

自分より上の存在との戦闘を数多く行い。

その全てを制した言葉はとつっても説得力があった。

「・・・なのはさくくん!!」

「あ、スバル。それにティアナも!」

スバルとティアナがなのは達の元に駆けてくる。

「どうしたの? 引き継ぎとかいろいろ忙しいんじゃない?」

「いえ。たまたま時間が空いちゃいました♪

ね、ティア♪?」

「ん。・・・そうね」

ティアナが投げやりな返事を返す。

確かに。奇跡的にこの忙しい中。たまたま時間が出来た。

だがいつの間にやら元相棒が本局に来ていて。

ま、時間あるからと、話しをしていたら、いつの間にかここまで来ていた。

スバル。なかなかの確信犯っぷりである。

(この借り。楽しみにしてなさいよ?)

「あは、あははくく」

ティアナのかなりドスの効いた念話に冷や汗をかきながら渴いた笑いを返すスバル。

その様子をなのは達が疑問不を浮かべながら見ていると、

「お。なんだオメー達も来てたのか?」

今度はヴィータとシヤマル。リインフォースIIこと、リインとアギトが来た。

「なのはさん達も応援に来たですかくく?」

リインの問いになのはも微笑みながら

「うん♪リインもかな?」

「はいです♪」

リインが元気よく答える。

「ちなみにあたしはちび二人の引率な?」

ヴィータが笑いながら言う。

横からアギトが

「ちび、てのはあたしの事か！」  
と、怒鳴る。

「ちなみにわたしはシグナムを応援すっからな！」  
「わーった。わーった」

ヴィータの気のない返事にさらにヒートアップするアギト。  
ちなみにシャルは完全な冷やからしい。

「・・・すごい人数になってきたな」

クロノの眩きになのはもにやはと苦笑いする。  
その直後にさらにエリオとキャロが合流する。

「待った。待った!!」

流石に人数が多過ぎる。

確か、ミーティングルームの空きがあつたはずだからそこに移動しよう！」

流石にクロノが移動の提案を出す。

どう考えても通路にこれだけ集まるのは異様だ。  
一同。

『は~~~~い!』

と、頷く。

クロノ・ハラウン。

二児の父になってからますます保護者気質になっていった。



「ふむ・・・」

シオンと対峙し、シグナムは息を一つつく。

今の剣撃でシグナムの中でシオンの評価は。

‘筋はいい。’

で、あつた。

(これ以上は酷か?)

シグナムはそう思う。

シオンがなかなかの使い手だった為にシグナムはつい楽しくなってしまうて、決着を長引かせてしまった。

だが自分とシオンでは技量にかなりの差がある。

これ以上は、はっきりいって勝負にならない。

(さて、どうやって・・・ん?)

ふと、違和感を覚え。

シオンを見遣る。

シオンの顔に浮かぶもの。そこにあるのは・・・笑みだった。

寧猛な、獣のような笑み。

だが、その笑いを。

その目を。

シグナムは純粋な子供のようにだと思った。

「楽しいな!」

笑いながら話しかけてくる。

それは、シグナムが思い描いた、シオンの感想ではなかった。

シグナムの予想では、技量の差にかなり追い詰められていると思っていた。

だが・・・

「アンタと戦つてると・・・」

イクスをシオンが振りかぶる。

大上段。

シグナムはすぐに反応するのを忘れ。

だが瞬時にレヴァンティンを受けに構え。

「自分が強くなっていてる、て・・・」

魔力が吹き上がる。

シオンの足元から膨大な。

(だが・・・!)

今までもシオンはイクスに魔力放出のスキルで威力強化を計っていた。

その一撃もシグナムは受け流していた。



だが。

シオンの放出していた魔力は今までのようにただ放出されるのではなく。

一つの流れのように束ねられ。

まるで激流のようにイクスと共にシグナムに叩きつけられた!!

「実感できるっ!!!」

「がっあ・・・!!!」

激音。

その一撃をシグナムは受け流せず。

数メートル吹き飛ばされた。

「なん、だ?・・・今のは?」

シオンを見る。

その顔に浮かぶのは相変わらずの笑み。

だが、自分と先程、剣撃を繰り返していた時とは明らかに違う。

それは、魔力だ。

魔力放出。

シオンのアビリティー・スキルだが。

シオンは今までとまるで違う方法でその魔力を用いていた。

「まだだ・・・っ!」

シオンが瞬動でシグナムに接近する。

疾い。

次は右からの斬撃。

その時。シグナムは見た。

シオンから吹き出ている魔力。

それが足元から螺旋を描き。そして、刀身に巻き付いているのを。衝撃。

「ぐっ・・・うつ!」

シグナムは受け止めこそしたがその衝撃に顔をしかめる。

重い。先程より、遥かに。

技量も何もかも無視せんとするばかりの一撃。

「お・・・っ!!」

おおおおおおおっ!!」  
連撃。

遙かに重い斬撃がシグナムに襲いかかる。

「くうううつつっ!」

凌ぐ。凌ぐ凌ぐ凌ぐ凌ぐ凌ぐ凌ぐ・・・!!  
だが堪えきれない。

シオンの斬撃はシグナムの防御を抜けて。

右の脇腹に叩きこまれた。



「何だ? あれ! ?」

ミーティングルームでそれぞれ観戦していた。面々だが。  
いきなりのシオンの攻勢に一同ア然としていた。

戦技教導をしていた。

なのはがぐっと息を飲む。

「最初に教導する前に・・・」

「なのは?」

フェイトがなのはを見る。

なのはは手元のコンソールを操作し、あるデーターを出す。

「これ、シオンの・・・?」

「うん・・・」

なのはが頷く。

最初に戦技教導をする前になのはは、シオンからの情報。

そして、技等を確認した後、データーを作っていた。

それを呼び出したのである。

「彼にはアビリティ・スキル。て言うのがあってね?

さっきのはコレ」

データーの表示を下に持っていき。

その場所を皆に見せる。

そこには『魔力放出A+』との表示と。

それにたいするなのは個人的解釈が載せられていた。

「まさか、こういう風に使うなんて・・・」

「どう言う事だよ!？」

全然訳わかんねえ!!」

ヴィータの疑問になのはは頷き。

「シオン君はね。最初はただ吹き出した魔力を・・・そうだな・・・まるでロケットの推進器みたいに使ってたの」

なのはがロケットの絵・・・まあ、かなりデフォルトされている。を描き、その下に火が吹き出している絵を描く。

一同、頷いたのを確認する。

「でも、今シオン君が使ったのはちょっと違うんだ。今はまるで一つに束ねるようにして使ってる」

「えっと・・・それ、何か変わりあるんですか？」

スバルが質問する。

が、今度はヴィータがなのはの説明で理解したのだろう。

代わりに答えを出す。

「例えばだな？」

水道をただ出すのと指で押さえるの。

どっちがより多く飛ぶか、考えてみる」

あ。と一同が頷く。

「そう、おおざっぱにいつてそんな感じだよ。

ただ、他には螺旋のように渦を巻く事によって回転エネルギーとかもまとめてる、て所かな？」

成る程・・・、

一同、納得する。

ただ・・・と、なのはが呟く。

「これを、もし模擬戦で考えついたら・・・」

それは異常な事だ。

危地に陥った時。今まで出来なかった事が急に出来た。て事は。

まあ、ある。

だが、これは今まで出来なかった事。では、ない。今、考えついた事、だ。はっきり言おう。異常な成長速度である。

(シオン君・・・君は・・・)

モニターに目を戻す。

シグナムが立ち上がろうとしていた。



(私・・・は?)

朦朧とする意識で、だがシグナムが立ち上がろうとしている。自分が何故、ここに倒れていたのか、全くわからなかった。

「くっ・・・!」

軽く頭を振り、朦朧とする頭を起こす。

目の前にはシオンがいる。

(そうか・・・私は・・・)

シオンの斬撃をくらい、地に臥していた。

非殺傷設定にされているデバイスは刃引きがされており。

かつ、肉体的なダメージとしてはあまり残らない。

だが、これは模擬戦である。

これが実戦だったらと考えると震えが出てくる。

「な?・・・おもしれえだろ?」

シオンが問うてくる。

何を言っているのだろう。そう、思っていると、シオンは笑いを苦

笑いと変え。

「気付いてねえのか?・・・自分が笑ってる事に?」

瞬間。シグナムは目の前の少年の言葉に疑問を浮かべる。

しかし、レヴァンティン

の刀身を鏡にして見る事でそれが真実だと気付いた。

「もう一度言うぜ?

おもしれえだろ?」

シオンの言葉を反芻する。

そう、自分もまた楽しんでる。

何より、目の前のシオンの成長に、そしてそれに立ち向かう事に。

「ああ、・・・楽しいな」

シグナムもまた笑う。

その笑みは、あまりに穏やかで。

互いに、近接の距離まで移動する。

もはや二人に模擬戦だの試験だのといった、諸事情、は頭から綺麗さっぱりない。

今はただ剣を合わせる事のみを。

そして、また剣がぶつかりあった。

「ぐっ・・・!!」

シオンの一撃に押されるシグナム。

シオンの一撃はもはや受け流す事も容易ではない。

しかし、シオンの中で何かが変わったように。

シグナムの中でもまた、何かが変わりつつあった。

自身の魔力を意識する。

シオンのような真似はシグナムには出来ない。

だが、似たような事は出来る。

カートリッジロード。

それを自身の基礎魔力の瞬間的向上に使用し、そして体内を流れる魔力をある一つの流れとして。使う。

下斜めからの斬撃を放つ。同時に下から斜めへ重心を移動させ、そして魔力を重心と共に流れるように剣に乗せる。

激突。

シオンの一撃と同等の威力で斬撃は放たれ。

剣が触れた合った所でさらに重心を移動。

シグナムはシオンには未だ出来ぬ技法で斬撃を放つ。

「う・・・あっ!!」

シオンのイクスが後ろに弾かれた。

自身が為した、新たな技術の獲得にシグナムは笑みを強くする。

「どうだ？ 私もまだまだ強くなるぞ？」

その言葉にシオンは一瞬ポカンとし。

その後でまた笑いを強める。

「本当にスゲエな。アンタ！！」

その笑顔のなんて邪気のない事か。

「そういや、名前・・・聞いてなかったな」

シオンがぼつりと言う。確かに自分も名乗っていない。

「済まない。

今からでも名乗らせて貰おう。

ヴォルケン・リッター

シグナムだ」

「うん。・・・ありがとう。そして、シグナム」

そこで一息区切る。

ゆっくりと息を吸い、そして吐く。

「貴女に心からの尊敬を」

その言葉に二人共、笑い。

再度。剣を叩きつけあった。



「何をやってるんだ？」

あの二人は？」

クロノが呟く。

モニターに映る二人は一切離れず。他の魔法を使用する気配すら、ない。

それは、模擬戦ではなく。まるで騎士の決闘を思わせた。

「ありゃあ、もう二人共。試験、て事は頭にねーな」

ヴィータがあっさりと言う。

それにはやても笑いながら同意する。

「そやね。・・・に、してもシグナム。何か斬り方とか変わったか

？」

はやてはなのはに問う。なのはもまた頷き。

「多分、魔力を身体の中で束ねて流してるんだと思う。

これで威力の差は無くなったね」

つまりはシオンに有利だった点が無くなったと、言う事だ。

モニターを見る。

次第にシオンの斬撃が弾かれ、二、三步。離される。

シグナムはさらに踏み込み。シオンに追撃をかける。

「これは、もう決まった。かな？」

シオンの手数に対して。

明らかにシグナムの手数が増える。

技量の差が出てきたのだ。

「・・・善戦、したがな」

クロノが、呟く。

「えっと、ハラOWN提督」

スバルの問いにクロノがそちらを振り向く。

そこには立ち上がりながらも、顔を俯かせるスバルがいた。

「スバル？」

その様子になのはがスバルを呼ぶ。

だが、スバルはそれには返事をせず。

「シオン。負けたら、試験失格でしようか？」

それが聞いたかったらしい。

クロノは苦笑を浮かべ。

「それは・・・」

「おいおい・・・」

ヴィータが喋る。

そこには驚愕が微かに入っていた。

「？どうした、の・・・っ？」

なのはが尋ね。

だが、それを見た瞬間。絶句する。

「あいつ・・・この一戦でどこまで強くなるつもりだよ・・・」  
ヴィータの目はモニターにくぎづけになっている。  
そこには、シグナムと、互角、に切り結ぶシオンがいた。



「違う・・・こうじゃ、ない」

シオンはシグナムと剣ををぶつけながら、一人。ぶつぶつと呟く。  
シグナムとの間に、もはや、一撃の重さの差はなく。  
そして、その技量にシオンは押されつつあった。  
だが・・・

「違う・・・ここで、こうやって」

さらに切り合いながら、自身の斬り方、角度や体重の乗せ方を変えていく。

それは、シオンの斬撃に変化をあたえつつあった。

（先程より、後退しない。剣も弾きにくくなっている）

シグナムも、また一人ごちる。

感じているのだ。

目の前のシオンの成長を。

今、シオンはシグナムの太刀筋を真似たりして。

重心の変化等の技量も取り込みつつある。

それは、つまり。

二人の隔絶した差があった技量が。

埋まっていっている事を意味する。

「こう、だ!!」

「む・・・!」

放たれる一撃にシグナムは一撃を返し。

まるで鋼が絡み合うような音が響く。

そして甲高い音を立てて、二人が弾き飛ばされる。

「つつ・・・!」

「うお・・・!」



互いに、二歩、三歩とさがり。しかし、シオンもシグナムも止まらない。

音が絡み合う。

既にシオンも、シグナムも一歩も下がらない。

ここに至り、二人は完全に互角と相成った。

だが。

「・・・まだだ」

シオンが呟く。

それは自らの技量の改善。

為していく。

成していく。

それは、相手を。シグナムを通じて行われる自らとの対話。身体をどのように捻ればよいのか？。

力をどのタイミングで入れればよいのか？。

刃の角度は？。

対話する。

対話する。

そして、それは。シオンに確かな成長を促す。

「ふっ・・・！！」

シオンが左から腰だめにイクスを放つ。

シグナムは上からの上段からの一撃。

剣が重なり。だが、今度は音は鳴らず。

そして、その一瞬は起こった。

シグナムは目の前の光景をみる。

自分の一撃が為した結果を。

シオンとの一撃が重なり合った。その、瞬間。

シオンはシグナムのレヴァンティンを中心として

イクスを当てながら横向きに、回転、していた。

「・・・」

絶句する。

重みを感じない。いや、そもそも。剣が触れ合っている。という感覚がない。

合気。

シオンは剣でそれを行っていた。

シグナムの一撃が触れた瞬間。

完全な形で斬り流し。

さらにシグナムの一撃の力をそのまま回転ベクトルへと変換。

例えば話しをしよう。バケツに水をくんで。縦に回転してみると、段々重さが無くなる。

理屈としてはそれと、同じ。

だが、果たしてそれを剣で行えるのか？

そして、シオンが地面に降り立った、その瞬間。

豪音。

シグナムは十メートル以上も吹っ飛ばされる。

シグナムの斬撃の威力。そして、シオン自身の斬撃。

それらが全て重なり合った結果だった。

シグナムはポカン、としている。

シオン自身もだ。

今、自分は一体何をした？

集中しすぎて自分が何をしたのか、出来たのかを理解できない。

だが、その顔は改心の笑みを浮かべ。

「・・・へへっ。・・・

どうよ？」

シグナムに尋ねる。

シグナムもこちらを見遣る。

それを確認しながら。

「俺もまだまだ強くなるぜ？」

その言葉にシグナムもまた微笑みを返す。

今の一撃は何だ？

それは今思いついたのか？

聞きたい事は山とある。  
しかし、それは言葉を介して聞くものではなく。  
刃を重ねて聞くものだ。  
だからシグナムは言葉の変わりにレヴァンティンを構え。  
シオンもまた、イクスを構えた。  
二人の戦いは最終局面を迎える。



「えっと・・・ちなみに今の、誰か。解る人居ますか？」  
スバルが尋ねる。  
しかし、誰も答えない。  
シオンが今シグナムに対して使った合気の事だ。  
何だ、あれは？

「後で聞いて見なくちゃ、ね」  
なのはもまた顔を強張らせながら頷く。  
神庭シオン。

本当に一体、何者だろう。  
そう、思う。  
試験前と試験後では明らかに別人だろう。  
さらにその成長に引っ張られるようにシグナムもまた強くなっ  
た。

疼く。  
疼く。

二人の戦いは今は互いの斬撃のみの戦いから通常の魔法戦へと移行  
している。

まるで今までの斬り合いを実戦として使えるかどうかを試すように。  
「・・・・」  
なのはは黙りながら、自分の手をギュッと握りしめていた。  
戦いたい。  
そう思ってしまう。

なのははかつて大怪我をおった事もあり、全力での模擬戦等は控えている。

だが、今。なのははモニターに映る少年と戦ってみたくなかった。あのような戦いを自分もしてみたい。

命を賭けるでもなく。

信念をぶつけ合う訳でもなく。

純粋な、戦士として。

あのような戦いが出来たならば果たして、どのような物が見えるのか？

それを知りたくなっていた。

横を見る。ヴィータはモニターをずっと見ている。

その表情を見て、やはり自分と同じ事を考えていると悟る。

モニターに目を戻す。

中の二人の戦いは、それがまるで舞踏のように思えた。

手と手を取り合う変わりに、剣を重ね。

そして斬り、結ぶ。

踊る。

踊る。

ステップは歩法。

そして、踏み込み。

シオンはまるで、背に手をやるように、優しく。

だがそれとは似ても似つかない。斬撃を放つ。

シグナムはそれに応えるかのように、もう片方の手を握るように、はかなげに。

だが、それと似ても似つかない斬り流しを行う。

二人の表情は絶えず微笑み。

それは凄絶とも言えるはずの戦いなのに、何故か華麗な踊りを反芻させた。

「これ、が？」

ティアナはその戦いを見て。誰にも聞かれないように一人ごちる。

これがあの少年か？  
表情を見る。

戦ってるはずなのに、その表情は優しい微笑み。  
最初に見た。少年の表情は不敵。  
次に見た表情は落胆と失望。

そしてその次は意地とムキになった顔。  
そして、今は微笑み。

何故、か胸の奥でキュンツとしたものを感じた。  
「?・・・」

それが何なのか、ティアナには解らない。

「神庭シオン・・・」

ただ自分でも知らず。名前を呟いた。  
そして、その横で。

スバルもまたモニターにくぎづけになっていた。

だがその表情は何故かちよつと曇りがちである。

シオンが怪我をするのが心配なのか？

当たり前だ、でも今の思いとは違う。

もしくは試験に落ちる事が心配なのか？

それもそう。でも今の感情とは違う。

「何だろ・・・？」

スバルもまた一人ごちる。シオンの表情を見て。優しい微笑みを見て、自分は何を考えた？

(羨ましい・・・?)

近い感覚ではそれがある。

だが、決して違う心の動き。

「?・・・」

それが何なのかスバルには解らない。

二人の少女がその感情の名を知るのは、もう少し先の事。

「もう決着かな・・・？」

ヴィータが呟く。

二人共肩で息をしている。

もう魔力も殆ど残っていない。

「そやね。・・・それにシグナムの持ってたカートリッジも残り少ないやろ」

はやてもまた頷く。

決着が着く。

この、戦いに。

ある意味に於いて勿体ないとも言える時間。

それぞれ思う事がありながら。

モニターに集中する。



互いに十歩の距離を挟んで離れる。

二人共息は上がっており、魔力もほぼ枯渇した。

だがその表情は微笑みのまま。

続けたかった。ずっとずっとこの、語らい、を続けたかった。

だが、どんな時間でも必ず終わりは来る。

シグナムが空薬莖を排出し。

残りの残弾三発を装填していく。

シオンはそれを見遣る。

「それで、ラストか？」

「ああ・・・カートリッジはこれで終わりだ」  
装填が終わる。

「次の一撃で、幕だ」

「・・・」

その言葉にシオンは堪らなくなってしまう。

シグナムはそれに苦笑する。

「そんな顔をするな。」

私まで寂しくなる」

「でも・・・」

まるで子供のように、シオンは呟く。

シグナムはまるであやすように言葉を重ねる。

それは自分にも言い聞かせている事。

「だから、次の一撃は今までで最高の一撃でしょう」

シグナムの言葉にシオンはゆつくりとだが頷く。

そして、二人共黙る。

もはや言葉はない。

要らない。

だって刃が語ってくれるから。

最後の'語らい'を交わす。

（最後の一撃は互いのもっとも信頼する技で）

二人共、声を介さずに会話する。

ゆつくりと、ゆつくりと近付く。

「レヴァンティン・・・」

エクス・プロジオ！！！！

三連カートリッジロード。

シオンはまるでそれに応えるかのように、イクスの名を呼ぶ。

「イクス・・・」

フル・ドライブ！！！！

そして、一瞬の微笑みを交換し。

駆け出した。

互いに放つは最も信頼する一撃。

「紫電・・・！！」

「壱ノ太刀・・・！！」

振るかぶる。

今、互いに放つ技は・・・。

掛値なしに最高の一撃！

「一・閃・・・！！」

「絶・影・・・！！」

爆碎。

爆音。

互いが放った一撃は、その余波を周りにぶちまけ。

訓練室どころか、本局そのものを揺るがした感じがした。

一撃の後。

二人は背中を合わせて五歩の距離を挟み。

そして、片方は倒れ。

片方は立ったまま。

そう、立ったまま。

そして、それがそのまま決着となった。



シオンは朦朧としながら目を覚ます。

どっかで見た天井だな、とか愚につかない感想を抱く。

「あ、起きたわね」

声がかかる。

声を発した女性は・・・？

「確か、シャル。さん」

「はい♪よかった。すぐに気がついて」

そう、声をかけられながら水を出される。

有り難く戴く事にし、

一気に飲み干した。

なんか、前にも同じ事があったな。とかそんな事を思う。

そして、あの時と同じように、コンソールを操作し、通信する。

その間。シオンが思い出すのは、模擬戦。

決着はついた。そして、シオンは気絶して、医務室行き。

それが意味するものは一つだ。

(・・・負けた、か)

だが、シオンは晴々としていた。

あの一戦。

あの、語らい、だけでも試験を受けた甲斐がある、と。



そして、戻って来たシャルと話す。

その会話も前と似た感じであるが。

ここまで同じような感じ、てのも面白いな。

と、シオンは一人ごち。

そして、扉が開く。

違うのは、ここからだ。

『シーーーーオン!!!』

「……おいおい……」

ぞろぞろと入って来る。

あの時、見物に来ていたメンバーだ。

「何だよ……この、大量人数は……」

「皆、心配したんだよ？ シオン君。いきなり気絶しちゃったから」  
なのは答える。

「てか、いろいろ忙しいんじゃないんすか？

部隊申請とか引き継ぎとか？」

「ま、そこは蛇の道は蛇言うてな♪」

はやてがにこやかに答える。

「……どんな手段を使って時間を作ったか。

ものすごい興味があるが、聞けない。

他に身体の具合とか、いろいろ話す。

「?……」

何か違和感を感じていたのだが、よく見るとスバルが後ろの壁に引っ付いていた。

いつもだったら真っ先に間近に来そうなものだが。

そして、ティアナ。

皮肉の一つも言ってこない。

「……まあ、いいか。

妙に気になったが。

今は置いておく事にした。

そして、なのは。フェイト。はやてに向き直る。

頭を下げた。

「・・・すみません」

「て、え？え？シオン君、どうしたの？」

三人共目を丸くする。

何故謝られたのか解らないからだ。

シオンが頭を上げずに続ける。

「いえ、・・・試験。落ちちゃって」

「・・・え？」

シオンの言葉に、皆。疑問不を浮かべ。

そして、その'誤解'に気付く。

「えと。シオン？」

「いや、もう本当。あんなだけ、いろいろ教えてくれたのに」

「あの・・・」

「最後の最後でポカやらかして」

「いや、だから・・・」

「本当、情けないと言うか」

「ちよっと・・・」

「いや、でも模擬戦自体は面白かったと言うか、すごいいろいろ  
掴めたし」

「だから・・・」

「えっと。だから、ありがとうございます。」

ああ、でも。学課の追試だけは勘忍を・・・勘忍を！！」

「はあ・・・」

結局、なのはただ溜息をつき。

そして、クロノを見遣る。

クロノは苦笑いを浮かべながらシオンに近付き。

「神庭シオン」

「え、と。あ、はい！」

クロノに呼ばれた事で我を取り戻す。

クロノは返事を聞いて、そのまま続ける。

「試験の結果だが・・・」

「・・・はい」

シオンもまた居住まいを正す。

クロノは試験官であった。

きっちりその口から結果を聞く必要がある。

息を、吸い。そして、吐く。

覚悟を決めて、言葉を聞く。

「合格おめでとう。」

これから、頑張ってくれ」

「・・・はい？」

言われた内容がよく解らない。

えっと、確か俺は負けて・・・

「・・・ちなみ模擬戦の合格は勝負によって決める訳じゃない」

「・・・」

ようやく。自分の勘違いに気付き。

シオンは首から耳まで真っ赤になり。

「・・・だぁ~~~~っ!!」

と、吠えた。



数日後。

時空管理局。本局。

そして、新たな次元航行艦に。

はやて達を始めとした元六課メンバー。

そして、新たな少隊メンバー達。

・・・何故か、スバル達と親しく気なのか、仇敵なのかよく、解らない会話をした少女達。

そして、自分。

神庭シオンが乗り込んでいた。

一同が集まれる場所がここ、食堂しか、なかったのかそこに集合す

る。

はやてからの挨拶があるのだ。

「皆さん。お久しぶりです。」

今回の独立次元航行部隊の指揮を任せられた  
八神はやてです。

・・・さて、皆さん。

この部隊の設立目的は聞いたやろうけど。

私達はこれからアポカリプス因子の感染阻止。

そして、この因子の調査が任務となります。

・・・大変な任務です。

でも、あの事件を乗り越えたメンバー達。

そして、才能溢れる。新たな前線メンバー。

この、皆ならどんな任務でもやり遂げられる。

そう、信じてます」

そこで、区切り。

食堂に集まったメンバー達一人一人を見るように。

ゆっくりと視線を巡らせ。

そして、

「皆さん。必ずこの任務。やり遂げましょう！」

『はい！！！！』

はやての挨拶の締め。

皆。返事をする。

「んで、な。」

この艦の名前なんやけど。

実はまだ決まっていないや。

そこで。皆に決めて欲しい。て思うんやけど・・・？」

どうやろ？

と、聞く。

皆、申し合わせたように、見合せ。

そして、笑う。

答えは一つだからだ。

「もう、決まったみたいやね♪

それじゃあ。この艦の名前はくくく?」

『アースラ!!』

事情を知らないメンバー以外が綺麗に声を合わせる。

はやてもそれに頷き。

「それじゃあ。皆。

頑張って行こうか♪

各員持ち場に着いて・・・そして、新生アースラ出航や!」

『了解!!』

そしてその日。思い出の艦の名を継ぐ新たな艦が本局より初出航を果たした。



## 第六話「その名は」(後書き)

予告「ついに動き出した。独立次元航行部隊。アースラ」

「そして、新たな新メンバー達との交流を深める為には皆さんがある事を行う」

「そして、響く音は最初の出

動の合図」

「次回、第七話『二回目の始まり』」

## 第七話「二回目の始まり（前）」（前書き）

「ついに出航したアースラ」

「そして、その中

で集まった力達は自らの力を確かめる為に剣を重ねあう」

「そこには憎しみも悲しみも。信念のぶつかり合いもない。ただ強くなろうとする思いがこめられて」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まります。」

## 第七話「二回目の始まり（前）」

独立次元航行艦『アースラ』

かつての次元航行艦アースラの名を継いだ艦。

その特務性の為か、移動性（次元航行速度の事）に特化した性能を持つ。

従来の管理局主流の次元航行艦より、およそ25%以上の移動性を持つ。

が、代わりに武装の殆どを積み込んでおらず。

防御性能もかなり低い。

武装はアルカンシエルのみ。

防御もSランク以上の砲撃には障壁が持たない。

その性能を移動性と積載性に費やしているから当たり前だが。

なお、独立次元航行部隊の名前通り。

この艦は、許可つきで全管理内・外問わず。世界全てに介入可能。

さらに個人と本局間での転移も認められている。

なお、艦船には高性能AIが搭載されており。

インテリジェント・デバイスのそれに匹敵する。

八神はやて二佐の許可付きでユニゾンデバイスでもある。リインフォースII空曹長とのリンクによるワンマンオペレーティングが可能。

だが武装はワンマンオペレーティング状態では使用不可。

実質。時空管理局最速の艦である。

『アースラ』に於ける主要スタッフ。

ロングアーチ1

八神はやて二佐／部隊長／艦長。

ロングアーチ2

グリフィス・ロウラン事務官／副長／副艦長。

ロングアーチ3



シャリオ・フィニーノ執務官補佐／官制

ロングアーチ4

アルト・クラエッター一等陸士／官制、及びヘリパイロット2

ロングアーチ5

ルキノ・リリエ事務官補／操舵手

他。官制及び、設備士官。

#### 前線メンバー

スターズ少隊。

スターズ1

高町なのは一等空尉／少隊長／教導官。

スターズ2

ヴィータ二等空尉／副少隊長／教導官。

スターズ3

スバル・ナカジマ一等陸士

スターズ4

ティアナ・ランスター執務官補佐

#### ライトニング少隊

ライトニング1

フェイト・T・ハラOWN執務官／少隊長

ライトニング2

シグナム一等空尉／副少隊長

ライトニング3

エリオ・モンデアル二等陸士

ライトニング4

キャロル・ル・ルシエ二等陸士

#### N2R少隊

N2R1

ギンガ・ナカジマ陸曹／少隊長

N2R2

チンク・ナカジマ三等陸士／副少隊長

N2R3

ノーヴェ・ナカジマ三等陸士

N2R4

ディエチ・ナカジマ三等陸士

N2R5

ウエンディ・ナカジマ三等陸士

セイヴァー。

神庭シオン囑託魔道士

備考…神庭シオンは正式な局員ではないため。

少隊に編入させるのではなく。状況、及び作戦等でそれぞれ各少隊の前衛人員として入ってもらう。

アーチャー

ヴァイス・グランセニック陸曹長／ヘリパイロット1／武装隊後衛狙撃手

備考…元来はヘリパイロットだが、状況、及び作戦等で各少隊後衛人員として入ってもらう。

ブルー

リンフォースII<sup>ツヴァイ</sup>空曹長／前衛官制

備考…状況と作戦等で前衛官制とユニゾンデバイスとして。ヴィータ二等空尉、並びに八神はやて二佐とのユニゾンを行ってもらう。

レッド

アギト三等空士

備考…状況、作戦等でシグナム一等空尉とユニゾンしてもらう。

『アースラ』

備考…1。独立次元航行部隊の権限で各駐留魔道士や結界魔道士に協力を要請できる。

2。独立次元航行部隊の権限で艦長の責任で、独自の判断で行動が許される。なお、独立次元航行部隊に命令する事が出来るのは秘匿コードAAAでの命令のみである。

3。独立次元航行部隊と、任務の特性状。

保有魔力制限に左右されない戦力の保有を認める。

任務内容…広域次元災害『アポカリプス』に於けるアポカリプス因子の感染阻止並びに当該因子の調査。



「さて、前線メンバーはこれで全員かな？」  
初出航を果たしたアースラ内。

そのアースラの中には広大な訓練施設がある。

アースラは現場での魔道師を投入しての戦闘を前提として設立された部隊だ。

それ故に、訓練施設はかなり広大なものを用意されている。  
そこには各少隊に別れて、前線メンバーが集結していた。

「それじゃあ、各員、自己紹介してもらおうかな？」

なのはの言葉に従い。

各自、前に出てコールサインと戦闘スタイル。

保有スキルを発表する。

シオンも自分の自己紹介を終え。

フゥ。と息を吐く。

N2Rの面々は全員ナカジマ性を名乗っていたので、気になったが。  
全員養子らしく。そこで得心がいった。

「全員、終わったかな？コールサインは必ず覚えてね。」

さて、それじゃあ・・・シャーリー？」

なのはの呼びかけに応じて

「はーい」と眼鏡をかけた少女が出て来た。

確か官制担当の少女だったけ？

とシオンはロングアーチ組のメンバーを思い浮かべる。

「彼女はデバイスマイスターでもあるの。」

それでね。

皆のデバイスの調整もしてくれるの」

「はい。度々訓練にお邪魔すると思いますけど、どうかよろしくお願いしま〜す！」

シャーリーが元気よく片手を上げて挨拶する。

少隊メンバーはそれを苦笑まじりで眺める。

「さて。じゃあこれから訓練に入りたい、と思うけど、戦闘スタイルや保有スキルなんて、聞いただけじゃあ解らないよね？」

その言葉にシオンは頷く。

なにしろ、まともに戦闘を見た事があるのは、なのはとスバル。シグナムだけであるからだ。

「でね？」

親交を深める意味も兼ねて、各少隊での模擬戦をしたいと思います」  
・・・親交を深めるのに何故に模擬戦？

一同、冷や汗まじりに思う。

確かに必要な事ではある。

だが、親交を深めるのに模擬戦はなからう。と思うのだが。  
一部。うんうんと頷く、某烈火の将は置いておくが。

「あ、あれ？」

どうしたのかな？

何かおかしいかな？」

いや、まあ。

だが、それを言うのは憚られるし、さらに言うに必要な事ではある。  
アポカリプス因子感染体。

通称『感染者』はいっ現れるか解らないのだから、各自。スキルの把握等は出来るだけ早いほうがいい。

疑問不を浮かべるなのはに皆で揃って

「いやいや大丈夫です。おかしくないですよ〜」と言う。

高町なのは。基本的にそういった部分は昔から変わらないものである  
「うん♪それじゃあ、早速始めようか？ シ  
ャーリー？」

なのはの言葉に再度『は〜い』と片手を  
あげて返事をする、近くのコンソールを操作する。  
すると、訓練室そのものが拡大し、そして、辺りにビルが立ち並ん  
だ。

「これ、六課の時の・・・」  
旧六課メンバーが呟く。それにシャーリー  
が胸を張る。

「そうで〜す。  
六課にあったなのはさん完全監修の訓練施設。  
それをアースラに積みこんだんですよ♪」

空間に結界を張り。任意の広さにまで広げ  
るシステムすら追加されている。  
心底贅沢な訓練施設であった。

「ああ、そうだ。  
シオン君は今日はN2Rに入ってね？」

なのはの言葉にシオンは頷く。  
こちらの面々とは認識がないから少し戸惑ったが。

「さて、それじゃあ各員質問は？  
なかったらこのまま模擬戦に入るよ？」

問い掛けた後、皆をしばし眺める。

誰も質問しない。

「・・・ないみたいだね。

それじゃあ模擬戦。  
始めよっか！」

『はい!!』

なのはの言葉に一同。一斉に頷いた。



「・・・で。チーム戦。と、言う訳なんだけど」

N2R少隊の隊長。ギンガ・ナカジマが少隊の皆を集め、作戦会議を行う。

N2Rの面々は家族だ。

故にスキル等の問題はない。

N2R

かつてJS事件でその力を奮った。

ジェル・スカリエッティの作品群。ナンバーズ。

彼女達は事件終了後。

ミッド地上の保護施設で厚生プログラムを受けていた。

そして、厚生プログラム終了後、チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウエンディの四人はナカジマ家に引き取られたのだ。

そして、直後、管理局入局。

元来ならば、士官学校や各訓練校に通い。

その後で、任務につくはずだったのだが、

今回の事件を鑑みて。

艦長の八神はやてがスカウトした訳だ。

閑話及第

そう、家族達に問題はない。今、問題なのは外の要因。つまり。

「・・・俺、チーム戦。初めてなんだが？」

セイヴァー。

神庭シオン。

彼にはチーム戦の経験が無かった。

元々は一人で戦い続けた為、集団戦闘という概念そのものに欠如している。

頭を抱えるギンガにノーヴェがハンっ！と息を吐いて、シオンを睨みつける。

「ギンガ姉え。こんな使えねえ奴。ハナッ

から数に入れなきゃいいじゃんか？」

人の性格は変わらないもの。相変わらずの  
ノーヴェの台詞にギンガは苦笑する。

「そう言う訳にはいかないわよ」

「でもウチ達の連携の邪魔になったんじゃないっスよ  
？」

ウェンディもノーヴェに続く。ギンガは次  
にチンクに目を向けると彼女もヤレヤレと苦笑いを浮かべていた。

「でも、確かにノーヴェの言う事も確かな  
んだよな」

「・・・て、言われてもね」

N2Rの面々がうーんと頭を悩ましている  
と、肝心の人物であるシオンが手を挙げた。

「提案があるんだけど」

何々、と集まりほしよほしよと話す。

シオンの提案を聞いた皆は一同揃って呆れた顔をする事になった。



「それじゃあ。模擬戦を始めたいと思いま  
す。」

第一戦はスターズ対N2R。・・・準備はいい？」

『はい！！！！』

皆から返事が返る。

それん聞き頂き。片手を挙げる。

「それじゃあ・・・」

レディ・・・」

なのはの言葉に一同。構えを取る。

そして・・・

「ゴー！！！！」

スタートの合図が鳴った。

「よし。じゃあまず・・・っ!？」

ティアナがスバルにポジションの確認を取

ろうとした瞬間。

絶句させられる。

神庭シオンが突っ込んで来たからだ。

「シオン!!」

突っ込んで来た。シオンにスバルが迎撃に向かう。放たれる拳を斬り流し、斬撃を放つシオン。

しかし、プロテクションで弾かれる。

さらに、ティアナから放たれたマルチショットがスバルを援護。

だが、シオンはその場から動かない。

「何考えて・・・っ!？」

ティアナの放ったマルチショットが爆裂す

る。

チンクの放った、ステインガーによって全て迎撃されたからだ。

さらにチンクの横からギンガとノーヴェが現れる。

だが。

「シュート!!」

上空にいる。なのはから放たれたアクセル

シューターが二人を襲う。

二人は乱数回避を行いながら、なのはに接近しようとするが、あまりの攻撃濃度にたまらず、一度下に下りる。

直後、さらにヴィータが追撃をかけてくる。

「ッ!？」

だが。前方から来た、砲撃を回避する為、ブレーキを掛け、1時停止。

ディエチの砲だ。

(やるじゃんか)



なかなかのチームワークだ。うまく連携が取れている。

神庭シオンがいる事で、連携の邪魔になる可能性もあったのだが。さらにチンクがステインガーを放ち。

ランブルデトネイターによる爆発を起こし。

煙幕を起こす。

直後、ギンガがヴィータに突っ込み。拳を叩き込む。

それをヴィータはシールドで弾く。

さらに拳を叩き込み、シールド破壊を試みようとするが、直後にティアナからの援護射撃でギンガは追撃出来ない。

1時後退。

ギンガは再び、煙幕の中に戻る。

それと入れ代わるようにノーヴェとシオンが突っ込む。

「させない!!」

ヴィータの横からスバルも駆け付ける。

スバルにはノーヴェが、ヴィータにはシオンがそれぞれ向かう。

「壺ノ太刀・・・絶影!!」

シオンの斬撃をヴィータはシールドで防ぎ。

そのまま後退。

直後、なのはが放っていた。シューターがシオン達を襲う。だが。

「私を忘れちゃあ困るっスよ!!」

ウェンディが放ったマルチショットがアク

セルシューターを迎撃。

まるで弾と弾の追いかけっこのように。

弾が交わり合う。

さらに、なのはには長距離からの砲撃が襲う。

当然、回避されるがこれはなのはの集中を遮る為だ。

シューターへの集中が切れれば。

なのはへ、接近できる。

シオンは、後退した、ヴィータの追撃に向かわずにティアナに駆ける。

シオンはその戦闘スタイルから遠間からチクチクやられるのは嫌いな為。

ティアナをまず迎撃しようと、考えた訳だ。

だが、

「甘い!!!」

ティアナが多数のスフィアを作りだし。

一斉に放つ。

「クロスファイアー・・・シュート!!」

!

計20発の弾がシオンとノーヴェを襲う。

ノーヴェはたまらず後退。

だが、シオンは止まらない。

その場で真横にジャンプすると、まるで壁があるように三角跳び。さらに、そこから直角に急激な方向転換を交えて、ティアナに突っ込む。

カラバ式の特性である。空間への足場の設置。それを利用した直角の乱数回避。

(もらう・・・っ!!)

棒立ちするティアナに斬撃を放つ。

が、空を斬る。

そして、ティアナの姿は消えた。

「幻・・・っ!？」

「でええい・・・!!」

隙が生じた、シオンに今度は突っ込んで来た。ヴィータがラケーテン・ハンマーを叩き込む。

シールドで防ぐ。が、ハンマーの突起がシールドを貫いていく。持たない。

「ブチ抜けえ!!!」

「四ノ太刀・・・」

貫かれる瞬間。シオンもまた、シールドにイクスを叩きつけた。

「裂波!!!!!!」

放たれる振動波にヴィータの動きが1時、止まる。

その隙をつき。シオンが後退開始。

追撃を掛けようとするスバル。ティアナだが。

直後にチンクの放つランブルデトネイターによって追撃が掛けられない。

N2Rは後退を完了し、そして仕切り直しとなった。



「・・・うまく、行くものね・・・」

1時後退したシオン達と合流したギンガは一人ごちる。

何故に連携戦闘の、れ、の字も知らないシオンがこれ程うまく連携を組めたのか？

何の事はない。

シオンは一切連携戦闘をする。と言う事を考えていない。

それだけであった。

つまりは・・・

（始めっから連携なんて俺、考えずにいくから。

援護等は勝手にやってくれ）

これがシオンが出した提案である。

当然、ギンガ達は呆れた。だが、まあ無理に援護をやらせて自分達

に攻撃がくるのも頂けない。

なら、自分達がシオンに合わせてやればいいのか、と作戦は決まり。  
(ノーヴェは文句を言っていたが)

結果。予想外にうまくいった訳だ。

「なんだお前、そこそやるじゃんか！」

ノーヴェが横のシオンの肩をばっしと叩きながら満面の笑みで話す。シオンは痛いわ！！と怒鳴りながら、駆け抜ける。

「さて、次はどうする？」

「向こうに攻めさせるのはよくねえな」

チンクの問いにシオンは答える。

何しろ本当はチーム戦はこちら（と、いうか自分）はずぶの素人だ。  
攻めさせたら、間違いなく瓦解し。確固撃破がオチである。

「なるだけ、先手を打ち続けようぜ。」

向こうに攻めさせたらチーム戦じゃ、まず勝てねえだろ」

「君、以外なら大丈夫なんすけどねえ♪」

ウエンディがエリアル・レイブでシールドの上に座って駆ける。

「まあ、仕方ないな。」

・・・と、言うかウエンディ。それ、楽そうだな。私も乗せろ」  
「嫌っス♪」

横でイチャついてんだか喧嘩してんだか解らない姉妹に苦笑いしながらシオンもまた走る。

そこでデイエチから念話が入った。

（向こうはポジションは相変わらずのまま。  
どうする？）

フムウ、と皆で頭を悩ませる。

安定した戦い方であるポジションを常に選択しているとこちらではまともな方法では崩せない。

なら、  
、 まともでない方法、  
なら？

(皆、耳貸せ)

シオンがニヤリとそれはもう人が悪そうな笑いを浮かべる。

そんな、シオンの顔を見て、N2Rの面々はああこいつ絶対Sだと確信に至った。



変わってこちらスターズ少隊は変わらず。

適正なポジションを維持。

スバルがフロントアタッカー。

ヴィータがガードウイング

ティアナがセンターガード

そして、**なのはがフルバック**。

元々はF A、C Gが二人いる訳だが。

そこはヴィータ、なのはがうまくカバーしていた。

（さて、なのは。次あいつ達。どんな手で来ると思う？）

（そうだね。普通なら人数で勝る分。さっきみたく手堅く真つ正面からだけど・・・）

だが向こうは問題を抱えている。

先程の戦闘。うまく連携できていたように見えていたが実際はシオ

ンに合わせていただけである。

次に同じ手で来たとしてもなのはにもヴィータにも落とせる自信があった。そして、それは向こうも理解しているはずである。

（さて、どんな手でくるか・・・？）

距離を数十メートル離れた所にシオンがいる。

ここで現れる意味は・・・

（陽動ですか？）

（かも。でもあんまりにもわかりやす過ぎなような・・・）

直後。スターズに砲撃が叩き込まれる。

ディエチの砲撃だ。

それと同じくして。ノーヴェ、ウェンディが突っ込んで来る。

（？陽動でもない？）

砲撃を回避しながらそれぞれポジションを取る。

リーダーである、なのはは皆より後ろ寄りに。

その時。シオンが笑った。

ニタリと。

それは悪ガキが渾身の悪戯に成功したがごときの笑み。

だが、シオンが企んでいたのはそんな、可愛いらしい、ものではない。

直後。なのはの真横にあるビルが震えた。

（え・・・っ！？）

なのはは絶句した。

ビルが崩れている。

さらに、ディエチからの砲撃がビルの側面に直撃。

角度が修正される。

まるで自分達を分断するように・・・？

そこでなのはシオンの狙いに気付く。

仮想シミュレーターのビルは例え倒れてその真下にいたとしても肉体的にダメージにはならない。

だが、'障害物'にはなるのだ。

なのは自分の少隊の元に駆ける。

既に、他のメンバーは。ノーヴェ、ウエンディ、そして後から合流したギンガと交戦中だ。

(まだ間に合う!!)

なのはは崩れ落ちるビルをくぐり抜けようとする。だがこの仕掛け人はそれを許すほど甘くなかった。

「残念でした!!」

真っ正面に突如としてシオンが現れる。

長距離瞬動。

シオンはビルが崩れ出した。その瞬間からなのはに突っ込んでいた。

そして、シオンの渾身の斬撃。

なのはは。真っ正面から振り下ろされたその一撃を回避できず。

シールドでガード。

だが、仲間の元に行く動きは止まった。

さらに。シオンは瞬動の勢いも合わせて身体ごとなのはにぶつかり。そのまま、仲間と離れていく。

「後、任せた!!!!」

「任されました!!!」

シオンの言葉にギンガが返す。

そして、シオンはそのままなのはとビルを挟んだ向こう側に消えた。



「さつてと・・・」

シオンはなのはから数メートル離れた所でイクスを構える。  
なのはもレイジングハートを構えた。

「最初、からこれが狙い・・・?」

なのはが肩を竦めるようにして笑う。

流石に呆れたというべきか。

なんとも無茶をしたものである。

「流石に実戦でこんな真似はしませんよ」

シオンも苦笑する。自分がどれだけ無茶をしたのか?

そして今からするのかを解っているからだ。

「狙いは時間稼ぎ・・・だね?」

「御明答です♪」

あっさり答える。隠してもしょうがないと解っているからだ。

「俺じゃあ連携の邪魔にはなっても助けにはなりませんからね。」



・・・なら、最大戦力を足止めして、向こうの戦力を削る」

これがシオンの立てた作戦である。

つまりはこうだ。

（まず俺が出て。目を俺に向けさせる。

その後でチンク。あんたにはあるビルに仕掛けをして欲しい。）

走りながら作戦をシオンは皆に伝える。

（俺が教えるタイミングでビルの柱に仕掛けたスティングガーをタイミングよく爆破。

んでディエチ。あんたはこのビルの倒れる位置の細かい修正を）

ディエチには念話で話す。

了解。と返ってきた。

（そして、残りもの。・・・ノーヴェ。うるせえ！！

で、だ。ギンガさん達はこの直前まで向こうの三人を足止め。・・・  
任すぜ？）

それぞれ領いたのをシオンは確認し、最後に締め括る。

（最後は俺だ。向こうのエースを足止めする。

まず、勝てないから俺の事は初っから犠牲にするつもりでいけ。  
俺に連携戦闘は無理があるからな。

ちようにどいい役回りだろ）

シオンはそれぞれの顔を見遣り、ニヤリと笑う。

（マジ頼むぜ？

一人でも多く、数減らしてくれ。

後が楽になる・・・

そんなじゃあ。リーダー？

後は頼むぜ？）

「成る程ね・・・作戦立案能力もあるんだ」

「んな、ご立派なもんじゃないですよ」

でも、と続ける。

「これで少ない人数がさらに少なくなって、尚且つ、向こうはN2 Rの面々が勢揃いですからね・・・一人か二人を撃破できりゃあもう、こっちの勝ちだ。」

「それはどうかな？」

なのはが珍しく不敵な笑みを浮かべる。

なのはをよく知る人物がいたらさぞや驚く事だろう。

「皆を甘く見すぎだよ？」

スバルもティアナもヴィータ副隊長もそんなに弱くないよ？」

なのはが抱くその信頼にシオンも確かに、と返す。その上で続ける。

「だからこそこで時間を稼がせて貰います」

「どうかな？」

私も急ぐからね。

・・・全力全開。フルパワーでいくよ？」

なのはの言葉に震える。

と、同時にシオンは強く思う。ここに来てよかったと。

（シグナム、そしてなのはさん。他にも強い人がいる。・・・ここなら俺はもっと強くなれる！！）

イクスを握る手に力を入れる。  
風が吹いた。

「行くよ・・・？」

「はい・・・！」

そして二人は周辺に衝撃波をぶちまけながら。  
魔力を叩きつけあった。

（後半に続く）

## 第七話「二回目の始まり（前）」（後書き）

文字数が多くなりそうだったので例外的に急遽、前後編にしました。  
後半。なるべくはやくお届けしますのでご容赦下さい（汗）

## 第七話「二回目の始まり（後）」（前書き）

すみません。第七話の後編です。しばらく更新できないですみませんでした。

## 第七話「二回目の始まり（後）」

光が走る。

縦横無尽に。

その光は桜色。

桜色の花火が色鮮やかに咲く。

その光を少年。神庭シオンは横断していく。

光の正体は魔法。

高町なのはの、手加減一切なしの魔法の乱舞だった。

「レイジング・ハート！」

アクセル・シューター！！

インテリジェント・デバイス。レイジングハートの先端に光が灯る。その光をシオンは見ながら、さらに増えるのか、と半ば血の気が引いた顔で見る。

しかし、その顔には笑みが浮かぶ。

目標は高ければ高い程いい。

今、目の前にいる。高町なのははまさしく目標とすべき人だった。

「シュート！！」

光が放たれた。その数40。今、回避に努めているシューターと合わせて計60発。

もちろん全てを制御してる訳ではない。

半分はレイジング・ハートの自動制御だ。

だが、それが尚更厄介だった。

甘い一撃をかわしたと思ったら狙い澄ませた一撃がこちらを直撃する。

シオンは未だに自分が墜ちていないのが奇跡と思った。  
逆になのはもまた、追い詰められている。

ここまでやって墜ちていないのだ。

それどころか、最初に放った。40発の内、半分も消されている。  
シオンがうまくビル内に逃げこんでシューターを無効化しているのだ。

（これを凌がれたら）

はい。最悪、エクシード・モードを使用しなければなりません。

レイジング・ハートの返答に頷く。

既にバスター等の砲撃系は発射、チャージタイムを見極められつつある。

範囲は言わずもがなだ。

前に模擬戦を行った時はシオンの空間把握力に驚かされたが。

それよりも驚異とすべき能力がシオンにはあった。

分析能力だ。

この僅かな模擬戦回数。そして、今のこの模擬戦で、なのはの戦術、  
間合いに対応されつつある。

故に今のシオンを時間をかけずに墜とそう思うなら、シオンが知らなくて、かつ一撃で墜とせる魔法が必要だ。

そして、なのはにはそれに心当たりがある。

だが、まだここで使う訳には行かない。

切り札の一種である為、ここで、と言うタイミングでないと、ま  
ずい事になる。

もし、外した場合。一撃目でどのような攻撃か、そして、その対応  
を必ず思いつくだろう。

シューターの豪雨がシオンに降り注ぐ。

回避するべく、シオンは動くが、そこで愕然とする。シューターの  
軌道を頭で思い浮かべるが、どう考えても。何十発かは直撃を免れ

ない。

ならば。

シオンは一気に後退を開始。

ビルの中に再度突っ込む。

数が多ければ、多いい程、障害物があればシューターを無効化出来る。

ビルの中を壁を蹴り、床を蹴り、天井を蹴り。回避していく。

シューターはシオンが回避するたび、そこかしこに当たり。消滅していく。

（これなら、凌げる・・・ッ！！！）

そこでシオンは背中に走る悪寒に絶句する。

天井を蹴って、床に着地した後、窓を見るとそこには桜色の光が周りを照らしていた。

（ま、まさか・・・ッ！）

だが、なのはの次の言葉はシオンの想像を肯定した。

「デバイー——ン！。

バスター———！！」

そして、シオンに光の壁としか表現出来ない、砲撃が叩き込まれた。



壁抜き。

かつてスバルを救った際に、そして聖王のゆりかごでクアットロを撃ち抜いた方法だ。

目の前のビルには穴が穿たれており、完全に向こう側まで貫通。



シオンは直撃したのだろう。気配がしない。

（これで撃破かな？）

なのはがそう思い。踵を返すと、同時。

レイジング・ハートが叫ぶ。

マスター！！

（え・・・ッ！！）

背を走る悪寒に、なのはは慌ててプロテクションを張る。

そこに、先程と違う。赤のバリアジャケットに身を包む。シオンがいた。

戦技変換。

シオンのアビリティー・スキルの一つだ。

そして。両の手には大型のナイフが握られている。

それをプロテクションに突き付けていた。

「よく、気付いたっスね？」

「・・・感。みたいなものだったけどね」

なのはも苦笑する。

そして残りのシューターを呼びよせ、シオンに向かわせる。

しかし、シオンはその場で急後退。

そして、背中に光で出来た。幾何学模様の剣の翼を伸ばす。

そこから魔力が粒子状に広がる。

「なのは先生。悪いですが延長戦。続けさして貰いますよ？」

「いいよ。でもそんなに長くは付き合うつもりはないから」

そして、シオンはなのはに向かって急接近を。  
なのはは迎撃の魔法を。  
再び、ぶつかり合う。



変わってこちら、N2Rの別動隊。  
こちらにもまた残ったスターズ相手にてこずっていた。  
二人のフロントに素早く出す。  
ティアナの指示の適切さ。そしてヴィータ。スバルの連携。  
その全てが合致し、見事にこちらの攻撃を防ぎ切っていた。

「見事・・・ね」

ギンガも苦笑いで呟く。  
シオンが時間稼ぎしている間にこちらの数を減らさなければなら  
ないのだが。  
どうにも攻められない。

（こいつ達~~~~!!）  
（ノーヴェ、落ち着くっスよ〜）

ノーヴェとウエンディの念話が響く。  
流石に焦れ始めている。

（しかし、まずいな。いい加減時間を掛けすぎだ。シオンももう持  
たんかもしれない。）

チンクの念話にギンガもまた頷く。  
シオンが念話を切っている為。  
向こうの状態は定かではないが、いくらなんでもなのは相手にそう

は持つまい。

(どうするか・・・ッ！)

その時。訓練室にサイレンが響き渡る。

このサイレンは緊急出動の合図だ。

それが意味する事はただ一つ。

アポカリプス因子、感染体。則ち、感染者、の出現を意味していた。



「終わり・・・だね」

「そうですね・・・」

シオンとなのはもまた。

互いに正面で向かいあった状態でサイレンを聞いていた。

「仕方ないかゝゝ」

「ま、続きはいくらでも出来ますよ」

シオンとなのはは、下に降りながら、会話する。

ちよつとなのはとの戦いが盛り上がっていたのでシオンとしてもちよつとばかり残念であった。

「うん。そうだね。

とりあえずは皆。集合ゝゝ！！」

『はい！！』

全員集まる。

【アースラ】初任務が始まろうとしていた。



「さて、前線メンバーは皆。集まったな？」

はやての言葉に一同。皆頷く。

『アースラ』のブリーフィングルーム。

そこに各前線メンバーと部隊長のはやて。

そして、シャーリーが揃っていた。

「まずは現状確認といこうか。シャーリー？」

呼びかけられたシャーリーが

「はい」と頷き。各々の前にあるディスプレイにデーターを表示する。

「今、アースラは時空管理局管理内世界第67世界に向かっている。

・・・そこでアポカリプス因子、感染者、が出現したそうや」

「待って下さい」

シオンが声を上げる。

何故か、それは表示されたデーターを見た一同も解っていた。

一同汗を浮かべている。

「・・・このデーターを見るとまさか、とは思いますが・・・」

「・・・そう。今回。感染者が複数出てる。

でな。こん中で1番アレを知ってるシオン君の意見を聞こうと思っ  
てな」

シオンはジッとディスプレイを睨んでいたと思うと、頭を振る。  
そして、重い口を開けた。

「・・・最悪ですね。  
なんでここまで、時間が掛かった、んです？」

シオンが問う。はやてはそれに少しだけ目を伏せる。

「・・・管理内世界の駐留魔導士が報告を怠って、自分達で解決しようとしたらいんや」

シオンが小さく舌打ちする。久しぶりに乱暴な態度のシオンにスバルは聞く。

「えっと。そんなに問題事なの？」  
「当たり前だ」

シオンが答える。  
そこには明らかな怒りがあった。

「アポカリプス因子、感染者、は感染後、次の固体に感染を広げようとする。」

お前も知ってんだろ？

あの異様な再生力。

生半可な力じゃあ感染者はまず倒せない。

まごまごしてる内に感染は広がる。

・・・これが単なる病気ならまだ対処方があるけど、感染されたら後に待つのは、死、だけなんだぞ？

・・・いや、最悪、死になくなった、ほうが問題だけどな」

シオンの言葉にはやてが反応する。

聞き逃せない事を今シオンが言ったからだ。

「待った。それ、どう言う事なん？」

「有り体に言うのアポカリプス因子に感染して。死なない奴は次の段階に進むんです」

シオンはそこで一旦言葉を区切る。

フウ。

と一息吐く。

「俺もまだ見た事はありません。

でもその段階に至った奴を俺達は第2段階で、言ってます」

「第2・・・段階」

なのはが呟く。シオンはそれに頷き。

「はい。この段階に至った感染者は生物だけじゃなく。・・・無機物にも感染するんです」

そこではやて達はシオンが言わんとしている事を悟った。無機物とはつまる所。大地も星も。最悪気体も含まれる。

「もう。解るでしょう？これがアポカリプス因子のとてもないない所です。

文字通り、侵略、ですよ」

草も大地も星も、あらゆる全てが感染する。

想像するだけで嫌悪感に顔を皆歪めた。

無論。人だけが感染しない訳がない。

「成る程な・・・ちなみにシオン君。  
第3段階とかあるん？」

シオンははやての疑問に苦々しい顔で頷く。

「ええ。・・・第3段階は、空間、に感染します」

シオンの答えに一同絶句する。空間に感染する。  
もはや、物理的な現象すらも越えている。

「そして、最後が第4段階。・・・もう言うまでもないですね？  
最後は世界そのものに感染していきます。  
ここまでなると。もう救う救わないの問題じゃないですね。

いかに、その感染した世界を切り離すかを考えなきゃいけない。て  
段階です。

・・・実質の終わりですよ」

流石にはやてを始めとして、皆。沈黙する。

シオンの怒りが理解出来たのだ。

詰まらないプライドや情けはその場で世界の終わりを意味するのだ  
から。

「・・・でも、まだそんな事態やないんやな？」

「映像を見る限りでは、第1段階でしょうね。

まあ。第2段階なんて見た事、俺はないですしね。  
今の話しも人づてです」

シオンの話を聞いて、はやてが首を傾げる。

「？でもえらい詳しそうやったけど？」

「簡単ですよ。証拠があるんです。地球、て言ったら解ると思うんですけど・・・」

シオンの言葉にはやてをはじめとして。皆頷く。  
シオンはそれを確認する

「あの世界は元々は多重に重なりあった世界だったんですけど、あの日を境に一つになったらいいんです。  
もう、解りますよね？」

多重に重なった世界は全て感染して、ただ一つだけ残ったのが俺達の居た世界らしいんですよ」

空気が重くなる。シオンの放った言葉はそれ相応のインパクトがあった。

「・・・で、そんな感染してしまった世界の遺された遺産が俺の使うカラバ式です」

「成る程・・・な。いろいろ調べなあかん事が出てきたな」

はやてもあごに手をやり。ふむ。と一人頷くと。

「取り合えずは今目の前の事件を解決しよう」

まずは今出来る事を。

はやての言葉に皆頷く。

「データーを見て貰ったら解る通り、感染者は7体。三体と二体。んで一体ずつに別れて行動しとるな。  
これの元になった生物は・・・」

「オーガ種。ですか・・・」



「やね。確かスバルが初めて襲われたのと同類やね」

スバルの言葉にはやてが頷く。

「・・・で、体調陣の意見も合わせてやけど次の編成にしてみた」

それぞれのディスプレイに各自の編成が現れる。

感染者三体

スターズ1、2

ライトニング1、2

感染者二体

N2R少隊。

感染者一体A

スターズ3、4

感染者一体B

ライトニング3、4

及びセイヴァー

「これが私達が決めた編成や。今回は複数が相手やから、こちらも人数を分けた。

・・・何か、質問ある人いるか？」

誰も答えない。はやてはそれに一つ頷く。

「皆。シオン君の話し。聞いた後でちょっと緊張するかもしれん。・・・でも皆、なんも緊張する事、あらへんよ？」

・・・皆、強いんやから」

そう言っ、はては少し笑い。  
そして、皆の顔を見る。

皆、それに頷き返す。

はやてもまた頷き返した。

「作戦開始や。

行こう!! 皆!!」

『はい!!』



管理内第67世界に到着後。

それぞれ、ヘリ1。ヘリ2に搭乗し。

現場に向かう。

ヘリ1。

にはスターズ。ライトニング少隊とセイヴァーことシオンが乗っていた。

「それじゃあ行ってくるね」

「お前達もしっかりやれよ」

「エリオ、キャロ。あんまり無茶しないようにね?」

「では、行ってくる」

隊長陣は今回。三体との戦いの為、先にヘリから降りる事になった。  
ふと、なのはとフェイトが気付く。キャロが複雑そうな顔をしている事に。

「キャロ・・・」

フェイトが心配そうな声を出す。  
キャロは召喚術士だ。

故に抵抗があるのだらう。例えば、感染者であろうと、その命を奪わねばならない事に。

「ル・ルシエ、とか言った。け？」

いきなり、シオンから声を掛けられて。キャロがビクツとなる。  
よく考えると話すのは初めてだ。

「は、はい!!」

「いや、・・・そんな目一杯返事せんでも大丈夫な訳だが」

シオンは苦笑いを浮かべる。

だが次の瞬間にはその笑いも引っ込む。

「お前。迷いがあるんならここに残れ。

邪魔だ」

『ッ!!!!』

シオンの容赦のない言葉に皆、非難の目を向ける。  
フェイトに至っては殺気まで滲ませていた。

「そんな言い方・・・!」

「フェイトさん。大丈夫です」

フェイトを止めたのはエリオだった。  
その顔には。信頼の笑みがあった。

「キャロは、大丈夫です」

しっかりと断言する。

キャラもまた、エリオの言葉に頷き。シオンを見る。ニコリと花が咲くように笑った。

「大丈夫です♪

神庭さん。心配かけてごめんなさい」

「・・・いいんだな？」

シオンが再度問う。キャラはしっかりと頷いた。

「はい♪」

「・・・解った。アテにさせて貰うぜ？」

・・・モンディアル。お前も・・・な」

エリオもまた

「はい!!」と力強く。頷く。

二人の信頼。そして成長を見たフェイトはなにやら感動したのか目に涙を浮かべる。

て、言うか。その場の人達。皆感動していた。

そして、シオンは冷ややかに一言。

「・・・ところで、隊長陣はいつになったら出撃するんスか？」

『・・・あ!!!』

どうやら忘れてたらしい。慌てて飛び降りていく。落ちていく途中でバリアジャケットを着込み。

颯爽と現場に向かう。

それに、シオンはやれやれと笑うと。

「あの・・・神庭さん？」

エリオに再び呼ばれる。エリオはキャロの隣に移動すると。

「僕達の事は1stネームでいいですよ。エリオとキャロで」

と、言ってきた。シオンは了解。と軽く笑うと、二人に向かい。自分も下の名前で呼ぶように言う。しかも、さん、なしで。

二人とも

「いえ、それは！」と慌てる。

「・・・まあ、うまい呼び方。見つけとけよ。

とりあえずは、さん、は禁止。鳥肌がたつ」

『はぁ・・・』

二人共。

生返事をする。

それを見て。スバルは真面目な二人には酷だなあと人事で笑う。ただ隣のティアはぶつぶつと

「私、名前。てか性すら呼んで貰った事ないなあ」とか呟いてる。

「・・・?」

そんなティアに声を掛けようとしたら。シオンから先に声が掛かる。

「お～～い。お前達の降下場所じゃねえの？」

二人して、ハツとするとシートベルトを外し。

ハッチの前に出る。

「行ってらっしゃい、スバルさん。ティアさん♪」  
「頑張って下さいね♪」

それぞれエリオとキャロが応援してくれる。それに二人ともにこやかに応える。

シオンは？と見遣ると何故か窓から外を見ている。  
声掛けてくれないのかな？

と、ちよつと残念な気分でいると、ハッチが開く。  
よし。と二人で飛び降りようとした時。シオンからぼそりと声がかかった。

「スバル。ランスター。二人共、頑張って、必ず戻って来いよ」

振り向く。だがシオンはやはりこちらを見ない。  
それにスバルは満面の笑みで応える。だがティアナは少し顔を赤らめて

「私だけ、上の名前・・・」  
と、呟く。

「・・・帰ったら名前と呼んでやんよ」

どうも聞こえたらしい。シオンがぼそりとやはり呟く。

ティアナはそれには応えずプイと横を向く。

ただ先程より顔は赤らんでいた。

「それじゃあランスター3!!」

「ランスター4!!」

『行きます!!!!!!』

二人共、降下した。

「次は俺達・・・だな？」

「はい。それと。シオンさん？」

「おま・・・さん付けはやめろ。て・・・何よ？」

二人共にっこり笑う。

シオンはさらに疑問不を浮かべていると、

「さっき言ってたじゃあないですか？シオンさん「うまい呼び方見つけとけよ」て」

「ああ、言ったな」

シオンは頷く。

エリオとキャラは顔を見合わせて。ニッコリと笑う。

「それで、ですね。シオンさんの事、シオン兄さん、て呼んでいいですか？」

「私は、シオンお兄さん、で♪」

シオンはそれに笑う。

それは、ある意味での夢であった。

「えっと・・・」

「ハハッ！

ああ、いいぜ。

そう呼びな」

二人共。シオンの返事を聞いて『はい！！』と、元気に応えた。  
ハッチが開く。

シオン達もシートベルトを外し。

「そんじゃあ行くぜ？」

エリオ、キャロ！」

『はい!!』

そして、三人共。空に身を踊らせた。

それは、シオンにとって。元六課メンバーにとって。元ナンバーズ達にとって。

二回目の始まりとなる出撃となった。



## 第七話「二回目の始まり（後）」（後書き）

予告「アースラ初出動」「分かれ分かれで戦う。アースラメンバーにさらに驚愕の事態が起こる。」 「その事態にシオンは・・・」 「次回。第八話『切り札』」

## 第八話「切り札」(前書き)

「ずっと、ずっと憧れていた存在がいる」 「だから、なりた

い。て思ったその存在に」 「夢だった。だからそう呼ばれた時、

堪らなくうれしかった」 「だから守り抜く事を誓った。・

・・例え」 「切り札を使う事になっても」 「

魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まります」

## 第八話「切り札」

時空管理局。管理内世界第67世界  
そこに異業のオーガが立っていた。

彼等の思考はただ一つ。

‘喰らい’，‘壊し’，‘潰す’事。

ただそれだけしかない。

いや、正確にはそれしか遺ってない。というべきか。

声が響く。朗々とした声が。

「・・・あんまり期待しちゃいねえが。

一応、聞くのが俺の義務でな」

異業に声が届く。だが、恐らく何を言われてるのか理解する事はないだろう。

声は続く。

「ナンバー・オブ・ザ・ビーストを知ってるか？」

声の主、神庭シオンは自らの所持デバイスであるイクスを肩に担いで問うた。

それに対する異業の返答はただ一つ。

「R U G a a a a !」

咆哮。それのみだった。

「やっぱ。無駄か・・・」

シオンはげんなりとする案の定と言うべきか。  
異業・・・感染者に理性等期待出来なかった。

「えっと。シオン兄さん。もうあんまり時間掛けないほうが・・・」

先程の会話からシオンの事をキャロ共々、兄さん、と呼ぶようになったエリオが遠慮氣に言う。

それにシオンは確かに、と呟き。

「んじゃ、一丁やるか。

キャロ。補助頼む。

エリオ、援護よろしくな」

シオンの指示に二人共頷く。

感染者との戦闘経験はシオン以外にはスバルしかない。

故に二人共、シオンの指示で動く事にしたのだ。

「基本的に致命傷を与えてもすぐに復活するから手は一切緩めるな。  
例え半身潰してもお構いなく攻撃しかけて来やがるからな」

二人共、頷いたのをシオンは確認する。

素直な子達だな。

と、改めて思う。

一瞬だけ目を閉じ過去の自分を思いだし苦笑いする。

だが、すぐにその顔は切れ味のある真顔に戻る。

「よし・・・行くぞ！」

『はい!!』

そして、シオンとエリオは異業に飛び込み。

キャラは二人を補助すべく永唱を開始した。



「アイゼン!!」

ヴィータが叫ぶ。その声に応じるように、所持デバイスであるグラ  
ーファイゼンがカートリッジロードを行う。

ギカントフォルム!!

グラーフアイゼンが形状変化し、ギカントフォルムへと変化。  
ヴィータはすかさず振りかぶる。

と、同時にさらにカートリッジロード。

グラーフアイゼンが倍にそして、さらに倍に。

その大きさは今、対峙している異業を遥かに越える。

「ギカント・シュラーク!!!!!!」

異業に叩き込まれる。

異業は目の前で放たれた一撃を耐えようとしたのかプロテクション  
を展開。

だが、寸秒も持たずに破碎され、そのまま直撃。

だがヴィータはまだ止まらない。

「うおおおお・・・!!」

そのまま異業をグラーフアイゼンに張り付けたまま回転開始。

異業は碎かれた骨や肉を再生しながら、そのまま持っていかれる。

「なのは!! そっちに飛ばすぞ!!」

「了解!!」

行くよ。レイジングハート」

はい。マスター。

ヴィータは回転を停止。

そのまま異業を虚空へと放り投げる。

くるりと舞う異業。

次の瞬間。

なのはが叫ぶ。

「デバイーン!

バスター!!」

鮮やかな桜色の光が放たれ、異業を貫く。

断末魔の悲鳴さえも残さずに。

異業は塵と消えた。

「これで二体!!」

隊長陣は最初の方こそ。その再生力にてこずった。

だが、流石と言うべきか。既に、対応ができるようになっていた。

一体を撃破し、さらに二体目を撃破していた。

「はああ・・・!!」

そしてラスト一体にフェイトが迫る。

迫るフェイトに気付いたのか異業がフェイトに振りかぶり。

口を開ける。

光が放たれた。

「・・・!!」

唐突に放たれた光。

完全に不意打ちだったのにも関わらず。フェイトには掠りもしない。

「砲撃・・・!!」

「成る程。徐々に身体の機能を進化させている。

戦いを長引かせれば長引かせる程。厄介になるな」

回避機動を行いながら驚くフェイトにシグナムの冷静な分析が飛ぶ。  
シグナムもまた。愛剣であるレヴァンティンを構える。

「レヴァンティン!!」

エクス・プロージョン!!

カートリッジ・ロード。

続けて。シュランゲ・フォルムに変化し。

さらにカートリッジ・ロード。

魔力が一気に連結刃を走る。

さらに。フェイトも続け様に走る砲撃をかわしながら。シグナムと  
反対側に移動。

スフィアを展開する。

「プラズマ・ランサー・・・ファイア!!」

放たれたプラズマ・ランサーを異業はプロテクションでガードする  
が。

持たない。

次々に刺し貫かれ。

痛みによる激怒からか咆哮をあげる。

だが雷の効果か、再生しつつも身体は動かない。

「バルディッシュ・・・・」

ロード・カートリッジ。

トライデント・スマッシャー。スタンバイ。

フエイトが 掲げた左手に環状の魔法陣が三連で展開。

さらに左掌の前に魔法陣が展開する。

そして、二人は異業に断罪の一撃を叩き込むべくそれぞれの魔力を開放する。

「飛龍・・・・」

「トライデント・・・・」

異業は今だ動けず。自らの処刑を告げる声を聞くしかない。

「一閃!!!!」

「スマッシャー!!!!」

前後から放たれた一撃は異業を再生の間もなく、塵へと変えた。



空高く響く咆哮。

異業の咆哮だ。

だが、それに一切構わず。ギンガ、ノーヴェがウイングロードとエアライナーを展開し、疾走する。

「はあ!!」

「おりゃあ!!」



拳と蹴。

両側から挟み込むように叩きこまれ、異業が吠える。

苦痛の叫びだ。

異業にとつての苦痛はしかし。いまだ止まない。

「IS・・・」

ディエチが他のメンバーより後方から自身の固有武装。

イノームス・キャノンを構える。

既にチャージは完了。

そして、光は放たれた。

「ヘヴィ・バレル!!」

一撃が走る。

その光は迷う事なく異業の頭部に直撃。

頭を失った、異業が膝をつく。

だが、そこから異業の頭部に、黒い点、が集まる。

再生。

まるで最初っからそうであるかのように。

異業は復活した。

異業が天を仰ぎ、吠える。

しかし・・・

「悪いっスね〜」

その視線の先にはウェンディがいた。

固有武装。ライディングボードの砲は既に、異業に向けられている。  
一撃が放たれた。

放たれた一撃はすっぽりと異業の口内に侵入する。

しかし・・・それだけ。一瞬の間を置いて異業が吠える。  
ウェンディに襲い掛かるつもりだ。

「・・・流石にそう何度も再生されたら対応ぐらい思い付くっスよ」

ウェンディが呆れたように呟き。ライデングボードに乗ったまま。  
ふよふよと下がる。

異業の動きがピタリと止まる。  
体内で膨れ上がる魔力に気付いたのだろう。  
しかし、もう遅い。

「炸裂反応弾、これ使うのも久しぶりスね〜」

そう呟くと同時。  
異業が爆裂する。

そして、そのまま塵と化した。

「さて、つぎつぎ・・・と」

次の獲物を捜さんとウェンディがもう片方の異業を見遣る。  
そこでまた嘆息する。

「なんだ・・・もう決着着きそうじゃないっスか」

もう片方の異業と対峙するのはチンク。

しかし、ギンガ、ノーヴェ、ディエチの援護もあつたのか既に異業  
の軀は朽ちかけていた。

だがまだ再生しようとする。

もちろん、そんな隙をチンクが見逃すはずがなかった。

「ステインガー・・・」

チンクの眩きに応じるように異業の周辺に固有武装。ステインガーが何十。何百。何千と顕れる。

チンクが左手を挙げ。

そして下ろす。

異業に殺意の群集が殺到する。

もはや朽ちかけた軀ではろくに動けず。また、防御も出来ず、全身を貫かれる。

異業が吠える。

痛みに。

そして、その苦痛を憎悪と化し。チンクを睨みつける。

しかし、チンクは異業に背を向け。

既に終わつとばかりにスタスタとその場から離れた。

「IS・・・ランブルデトネイター・・・」

爆砕。

全身のステインガーが一斉に爆発する。

異業は苦痛の咆哮すらも爆炎に飲み込まれ、その身を塵と化した。



管理内第67世界。

この世界の今居る星は自然保護区として有名である。

エリオ、キャロがJS事件後に就任した世界と同じく。また近いこの世界は近い世界だから非常に似通っている部分があった。

その森をスバルが駆ける。

目差すは異業のオーガ。

かつてのパートナーと共に駆ける戦場に、不謹慎ながらもスバルは

懐かしいさを抱いていた。

<スバル！クロス・シフトB、行くわよ！！>

ティアナから念話が放たれる。

スバルもまた、笑顔で頷いた。

<うん！！>

一気に異業へとスバルは接近。

異業もまた咆哮を挙げ。

迎撃せんと右の一撃を放つ。

しかし、スバルはその一撃をかい潜る。

マッハキャリバーが叫ぶ。

ウイングロード！！

スバルは異業の足元からウイングロードを伸ばし、一気に駆け上がる。

目指すは異業の頭。

「うおおおお！！！」

お返しとばかりにスバルが異業の顔面に一撃を放つ。

異業は瞬時にプロテクションを展開。

寸で、スバルの拳は止まる。

しかし、リボルバーナックルはそのままカートリッジロード。

プロテクションを打ち崩す。

異業はそのまま体勢を崩す。

スバルは止まらない。

その場で回転。

蹴りを放つ。

右蹴りが異業に叩き込まれる。だが、まだ止まらない。

ショットガン・キャリバーシュート!!

連続蹴り。

頭頂から腹まで余す事なく蹴りは叩き込まれる。

さらに。

その回転エネルギーを右手に還元。

従来の威力を凌ぐリボルバー・キャノンを異業の顔面に叩き込む。

リボルバー・マグナム。

ロード・カートリッジ!!

「打ち。貫け!!」

一撃は異業を完全に捉え。

首から先がすっ飛んだ。

しかし、即座に再生開始。

スバルはさらにウィングロードを展開し、離れる。

「ティア!!」

呼ぶ。パートナーの名前を。

そして、ティアナはその呼び掛けに応える。

その一撃で。

「クロス・ファイアー・・・シュート!!」

放たれた合計25発の光は空を切り、異業に殺到。

先程スバルにプロテクションを破られている為、防御は叶えられず、全身に光を浴びる。

苦痛の叫びを挙げる異業。

だがスバルも、またティアナもまだ止まらない。

「マツハキヤリバー！」

ウイングロード！！

スバルは空から真下に堕ちるより早く駆け。

「クロス・ミラージュ。

3rdモード！！」

ブレイズモード。

ティアナはクロス・ミラージュを3rdモードの砲撃形態へと移行。構える。

チャージ開始。

再生していく異業にスバルが疾駆し接近する。

異業は空を仰ぎ。

口を開いた。

光が集まる。

フェイトの時に見せた。

砲撃だ。

放たれる。

プロテクション！！

ラウンド・シールド！！

しかし、スバルはその砲撃を受け止めた。  
二重に展開した防御で砲撃を弾く。

そのままスバルは異業に向かう。  
やがて、砲撃が止まる。

既に、スバルは異業の鼻先へ到達していた。  
左手を掲げる。

その左手には光。

「デバイン・・・!!」

そして、その光を右の拳が、撃ち抜く。

「ブレイカー!!」

右の拳に全身を載せ。

その全身を魔力が覆う。拳から一本の錐のようだ。そして一本の矢の如く。

スバルは駆ける。

デバイン・バスターからの派生技。

‘一直線’に向かう事を突き詰めた技だ。

その一撃は異業の顔面に叩き込まれ。

抵抗を一切許さぬまま頭部から、股間まで一気に引き裂く。

地面にスバルが降り立つ。

残心。

そのままの姿でスバルは固まる。

だが、異業はまだ倒れない。

その状態から再生を行い。

スバルに手を伸ばす。

だが、次の瞬間。

ティアナの一撃が放たれた。

「フロントム!!」

ブレイザー!!!!」

ティアナが放った砲撃は迷う事なく、異業の上半身へと叩き込まれ。その半身を灰にする。

光が納まった頃にはもはや。

異業は塵へと還って逝っていた。



三つの戦場での決着が着き始めた頃。

シオン達もまた、異業を相手に剣を奮っていた。

「神覇・弐ノ太刀・・」

シオンがイクスを振りかぶる。

異業との間合いは10メートル程。

狙いは異業の右腕。

魔力放出。螺旋を描く魔力がイクスに纏う。

「剣牙!!!!」

振り下ろした。

斬撃が飛ぶ。

剣牙はあっさりと右腕を斬り飛ばす。

だが異業はお構いなしとばかりにシオンに突撃。

だが駆け出した先には魔法陣が展開されていた。

「アルケミック・チェーン!」

キャロがケリユケイオンに包まれた左手を掲げる。

召喚されたのは鎖。



異業はなす術なく鎖に全身を捕われる。  
さらに、エリオが駆ける。

「ストラーダ!!」

エリオが愛槍に声を掛ける。

ストラーダはそれに応える為にカートリッジをロード。

穂先の両側からブースターが迫り出す。

2ndモード。デューゼン・フォルムへと変化した。

そこから光が放出。

エリオはその身体毎、異業に突貫する。

異業は捕われた軀では防御も叶わず。

その一撃を腹に受け、さらに左腕を断たれる。

腹と両腕を失った異業はしかしまだ、その命を失わず。再生を開始する。

「チッ・・・!!」

シオンが舌打ちする。

いくらなんでも再生し過ぎる。

計七度に及ぶ致命傷を与えたが、今だ異業は動き続ける。

(まさか・・・)

アースラでのブリーフィングで自らの放った言葉を思い出す。

’死なくなったら’

まさかなと再度一人ごちる。

異業の再生が瞬時に起きる。

従来の速度を遥かに上回る再生にエリオが驚愕する。

「再生が早い！  
それに……」

エリオが驚く理由。それは異業の両腕にあった。  
再生した両腕にはまるで大剣のような鉤爪が備えられていた。  
近接特化に進化。

アポカリプス因子は時としてこのような進化を感染者に促す。

「シオン兄さん!!」

「構えろ……来るぞ!!」

次の瞬間。異業を縛っていた鎖は散り散りに切り裂かれる。  
異業が吠える。と、同時に駆け出した。  
その巨体に似合わぬ速度でエリオに接近する。

「くっ……!!」

エリオは異業目掛けてストラダーダで横に薙ぐ。  
しかし、次の瞬間。  
異業の姿が消えた。

「な……っ!!」

背中を走る悪寒にエリオは戦慄する。  
自らの背後には背を屈めて五つの刃を振りかぶる異業が居た。  
回避、防御。共に間に合わない！

「壱ノ太刀・絶影!!!」

その殺意の刃が振り下ろされんとした瞬間。

シオンが絶影をもってエリオと異業の間に割り込む。  
振られる鉤爪と振られるイクス。

刃が交錯する。

結果。異業はその左手と共に鉤爪を失った。

だがそこから瞬時に再生。

しかし、エリオもシオンもそのまま止まらない。

「お前は左！俺は右だ！！」

「はい！！」

両側からの同時攻撃。

さらにキャロからスピードブーストが掛けられる。

二人の速度は異業を越え、異業は二人を捕らえられなくなる。

エリオのストラダーがシオンのイクスが両腕を裁断。

エリオはそのまま異業の目の前に跳ぶ。

「ストラダー！！」

エクス・プロージョン！

ストラダーが吠える。

カートリッジロード。

3rdモード。

ウンヴェッター・フォルムに変化する。

「雷光一閃！！」

ライトニング・スラッシャー！！

雷を伴う斬撃が異業の上半身と下半身を割かつ。

さらに雷が走り、異業が苦痛の叫びを挙げる。

そして、そのままエリオは跳躍する。

そして、異業は見る。イクスを振りかぶるシオンの姿を。シオンはエリオが一撃を放つと同時にその後ろ5メートル程に移動し。イクスを振りかぶっていたのだ。

「膝まづけ・・・!!」  
フル・ドライブ!!

そして、一撃を放つ。

「神覇・参ノ太刀、双牙!!」

振り下ろされた刃を中心とて地を駆ける二つの斬撃が走る。だが、シオンはまだ止まらない。

「壺ノ太刀・絶影!!」

一気に駆ける。

双牙は右の膝を、絶影は左の太腿を斬り裂く。異業がシオンの放った言葉通り、膝まづく。

エリオは異業の肩を足場にさらに上空へと駆け。シオンもまた、それを追う様に空へ跳ぶ。

二人が、射線、から離れると、同時にキャロが自らの竜に一撃を命ずる。

「フリード!  
ブラスト・レイ!!」  
「○○○○!!」

既にその真なる姿を開放したフリードがその口を開く。焰が集う。

さらに、キャロのケリュケイオンから威力ブーストがかかる。一瞬だけ、キャロは目を閉じる。目の前の異業を悼むように、助けられない事を悔やむように。

だが、見開いた目に浮かぶは覚悟。そして、一撃を命ずる。

「ファイア!!!」

焰が走る。

異業に叩き込まれた焰はすぐに異業の全身に回り、その身を焼く。苦悶の叫びを挙げる異業。

だがその軀はいまだ朽ちない。

焰が消え、ボロボロになった軀を前へと押し出す。

そこにギロチンの刃が放たれる。

空へと駆けた、エリオとシオン。

シオンはエリオを追い越し、足場を形成。そしてイクスを野球のバットの様に振るう。

刃を、横、にして。

そしてエリオは器用にその場で身を捻らせ、一回転。

振られたイクスに着地。足場にする。

跳ぶ。

目標は異業の首。

『いっけえええ!!!』

二人が叫ぶ。

そして、エリオはまるでミサイルの様に空を駆け、地に向かう。次の瞬間。

異業の首は跳ね。

一瞬の間を置いて。漸く塵と化していった。



「全前線での、感染者、沈黙しました」

官制のシャーリーからの報告はやてはホッと安堵した。  
アースラ初任務。どうやら無事に終われそうである。

「駐留魔導士から、御礼の言葉と現場検証を行いたい。との要請がきてます。それと、魔導士隊の隊長から事情の説明と会談の申し込みが」

「・・・断る。て訳にはいかんね。

了解。なら私は地上に下りる。

グリフィス君、後頼むな？」

「了解です。各前線メンバーはどうしましょう？」

「そやね〜」

はやてが首を傾げながら思考する。現場検証に付き合う必要はある。  
故に前線メンバーから数人残さねばならない。

さらに周辺警備等も考えねばならない。

思考するはやてに、しかし。その思考全てを台なしにする音が鳴り響く。

エマー・ジェンシーコールだ。

「な・・・！」

シャーリー、どないしたん！！」

「そんな・・・っ！！」

シャーリーの驚愕に満ちた声が響く。

シャーリーはそのまま、報告、を行い。

そして、その内容に。  
はやてもグリフィスも一気に顔を青ざめさせた。



時はほんの少し戻し。

シオンは地に倒れ臥した異業を見つめていた。

それぞれのメンバーや官制からの念話を聞きながらエリオはその様子を見ていた。

（何かあったのかな？）

シオンが呟く。

「・・・違う・・・ッ」

その言葉にエリオは首を傾げ、シオンに声を掛けようとする。  
だが、その前にシオンはエリオに振り向くと急に駆け出す。  
エリオは襟首を掴まれ、そのまま抱えられる。

「シ・・・!!」

「キャロ!! 今すぐフリードに乗って空に上がれ!!」

襟首掴まれて非難の声をあげようとするエリオだが、シオンはそれ以上の剣幕で吠える。

「急げ! 早く・・・ッ!!」

そして、またエリオも見る。シオンが見たものを、塵と化していきつつあった異業だ。

その軀は胴体しか残っておらず。

しかし、どういう原理か、宙に浮いて、いる。

エリオを抱えたままのシオンとキャロを乗せたフリードが空に飛び上がった瞬間。

それは起こった。

宙に浮いた異業から黒い点が零れ落ちる。

まるで滝のように。

それは一瞬にして地面に到達し、そして地面が黒く染まる。

さらに、近場の木達も異業を中心として、一気に黒く染まる。

エリオもキャロもその光景を呆然と見ていた。

異業の軀に大地が寄せ集まる。

そして、オーガ種であったハズの、それ、は漆黒の大地に繋がったまま30メートルの柱となる。

続けて、そこから腕が生え。

竜を模した頭が生える。

その顔は竜の頭蓋骨を思わせた。

さらに、大地で出来た軀が甲殻化する。

目に光が灯る。

シオンが呆然と呟く。

「感染者は死なくなつた場合。

周囲の無機物を取り込んで、さらにその形状を変化させる」

「シオン、兄さん？」

エリオがシオンに呼びかける。何を言ってるのだろう。とだがシオンは構わない。

「そして、無機物に因子を感染させて。自らと繋がり。やがて。星をも飲み込む」





「シャーリー！」

今、どのくらいまで、感染、された!？」

「え?、あ。はい!・・・。今、感染者を中心として半径2キロが感染!。さらに感染。広がってます!！」

「くっ・・・!!」

駐留魔導士隊に連絡!

強装結界の展開を!！」

はやてが矢継ぎ早に指示を飛ばす。

シャーリーは

「了解」とだけ応えた。

「全前線メンバー、セイヴァー、ライトニング3、4と合流!急いで!！」

はやてから前線メンバーに指示が飛ぶ。

<それは、やめて下さい!!!>

しかし、シオンから通信で拒絶される。

「どう言う事なん?シオン君!？」

はやてから疑問不が飛ぶ。

シオンはそれに答える。

<結界が展開されたら感染者はまず、間違いなく結界を破壊に掛かります。

でもそれはさせたらいけない。

だから、他のメンバーには結界の破壊を妨害して欲しいんです>  
「なら、シオン君達はどうするん？」

はやてが問う。感染者第2段階。もはや対策はアースラのアルカンシエルか、隊長陣達の殲滅砲撃での一斉掃射くらいしか、ない。だが、今、現場に残る三人ではどうしようもない、と。

<・・・策があります。

成功するかどうかはわかりませんが>

シオンの言葉にはやては迷う。

あの現場に残ると言うのはもはや無謀以外の何物でもない。  
半径2キロ以上の範囲の大地、'全て'が感染者そのものなのだ。  
シオン達は今、感染者の腹の中に居るのに等しい。

「・・・成功の確率は？」

<五分。がいい所、です>

五分、完全な賭けだ。

それが失敗したらはやては仲間を失う事になる。

「駄目や・・・そんな、危ない事。させられへん・・・！」

<はやて先生！！>

シオンから非難の声が上がる。

それにはやては首を振る。

<・・・ここにも人が大勢います。

もし、結界が破られでもしたら犠牲になるのは住民なんですよ！！>  
「それは・・・」

計算では感染者から10キロ程離れた所に人里がある。  
今から避難を行っても間に合うとは思えなかった。

<先生!!>

シオンが叫ぶ。

はやては一瞬だけ目をつぶる。

そして、目を開いた。

「・・・解った。

でもその策が失敗したら三人とも強制転送で移動してもうよ。  
後は、隊長陣での広域殲滅砲撃で感染者を倒す。

異義は・・・ないな？」

<はい・・・!!>

はやての言葉に三人共、頷く。

「三人共、必ず。必ず帰ってくるんや・・・

約束・・・出来るな？」

<はい。・・・勿論です>

三人の答えにはやては頷く。

そして、前線メンバーに声を掛ける。

「皆。聞いた通りや。

感染者本体はシオン君達に任す。

皆は結界を破壊しようとする感染者の妨害を！」

<・・・了解!!>

なのはやフェイトは幾分迷ったみたいだが。  
すぐに了承の声が返ってきた。

「三人共・・・どうか、無事で・・・」

そして、はやてはぽつりと呟いた。  
作戦が始まる



「聞いての通りだ。

二人共、準備はいいな？」

シオンの声にエリオとキャロは頷く。

「まずは結界張るまでの時間稼ぎ。

キャロ。エリオと平行してプロテクション。張れるな？」

「はい！」

「よし。俺はこれから囃になる。

いいか？俺達の敵は今ここの大地全てだ。

無茶はすんな？

・・・後で、どうせ無茶なくちゃいけねえんだからな」

二人共再度頷く。

「よし、それじゃあ・・・

行くぞ・・・！」

そして、シオンは宙を駆ける。  
と、同時にイクスを振るい。

「イクス!!」

ブレイズフォーム。

戦技変換。

シオンの姿は黒から赤へ。

イクスも大剣からナイフへと変化する。

「行っくぞ・・・!!」

急加速。

一気にシオンは感染者に向かって疾る。

感染者はそんなシオンに気付いたのだろう。

シオンに視線を向ける。

そして、軀中から触手が生え。

シオンを襲う。

「チィ・・・!」

シオンはそれをかわし。また斬り飛ばす。

だが、触手の先端から目玉のようなものが迫り出す。

そこから漆黒の光りが生み出された。

「ッ・・・砲撃っ!？」

放たれた。

光が縦横無尽に。

シオンは砲撃を辛くも回避する。

そして、エリオとキャロもまた。大地から生えた触手に襲われていた。

近くの触手はエリオが斬り飛ばし。

砲撃はキャロが防ぐ。

「これじゃあ、キリがない!!」

触手を斬り臥せながらエリオが叫ぶ。

斬っても斬っても触手は生えてくるからだ。

このままではこちらが先に倒れる。

「シオンお兄さん・・・」

キャロが呟く。シオンは今、最も危険な場所に居た。

砲撃をかわし。触手を切り裂く。

空間への足場設置。

そして浮遊術が出来るシオン以外は囷になれない。

大地に足をつけたらその時点で、喰われ、

感染する為だ。

「頑張って・・・」

シオンはその頃。

感染者本体へと接近していた。

砲撃、触手を回避しながらの接近はシオン自身相当のリスクがあったが。接近せねば話しにならないのである。

「・・・くあッ!!」

右のイクスを叩き付ける。

しかし、そこにあるのはシールド。

通らない。

（やっぱ。ブレイズフォームじゃ、攻撃力は下がるか）

シオンは一人ごちるブレイズフォームはノーマルフォームと比べて格段に攻撃力が下がる。

元々、スピード重視の姿だ。

当たり前と言え、当たり前前ではあるが。

（やっぱ使わなきゃ駄目・・・か）

それは、シオンにとって禁じ手。

完全に切り札だ。

その瞬間。結界が展開された。

「よし・・・!!」

シオンは歓声を挙げる。そして、シオンはエリオ達の元へと急後退した。



近くで触手が延びる。

それをエリオは斬り飛ばした。

荒い息で回りを見遣る。

すると、まるでその隙をつくように触手がエリオ達に殺到する。だが。

「シオン兄さん!!」

戻ってきたシオンがエリオに返答するが如く。

触手に一撃を叩き込む。



「神覇・壱ノ太刀、絶影。連牙!!」

縦横無尽。

回りにある触手全てを切り臥せる。

「漸く、結界、展開完了。か」

「はい。・・・で、ここからどうするんです？」

エリオが問う。シオンは確かに言ったのだ、策、があると。

「ん。俺が聞いた話しが本当。というのが前提条件なんだけどな。感染者第2段階。

こいつには核、てのがあるらしいんだ。

言わば心臓だな。こいつを潰せば。感染者はくたばる」

シオンはエリオとキャロに答える。

二人は黙って頷いた。

「で、だ。その核に攻撃をしなきゃならないんだけど。どうにも向こうの防御性能が高くてな。

俺の刃が通じん」

先程の一撃。シオンとしてはかなり本気で放った一撃である。しかも、それが全身にシールドが及んでいると見るべきだ。

「どうするんです？」

「ま、防御は何とか崩せる。任せろ。

問題はその後だ」

シオンは言いながらキャロを見遣る。  
キャロもまた、シオンに頷いた。

「奴の防御を突破した後、核を露出させなきゃいけない。  
キャロ・・・任せていいか？」

シオンの問いにしかし、キャロはしっかりと頷く。  
シオンはそれに微笑を浮かべる。

「最後はお前だエリオ。  
止め、任すぜ？」

奴の核。ぶち抜け」

エリオもまた力強く頷いた。

「よし、んじゃ作戦開始だ。

・・・イクス？」

<・・・本当に使うつもりか？>

イクスの問い。しかし、シオンは柔らかな微笑を浮かべ、エリオと  
キャロを見る

「弟」と、妹、が出来たんだ。

ここで二人を守り抜けなきゃ、逆に後悔すんよ」

<そうか・・・了解した。我がマスターよ>

イクスの答えきシオンは小声でサンキュ、と返す。

そして、目を閉じた。

右の親指を口元に持ってくる

皮膚を噛む。

血が、流れた。

「シオン兄さん！何を！？」

「いいから、黙って見とけ」

突然のシオンの行動にエリオが叫ぶ。

しかし、シオンは構わない。

永唱が始まる。

「契約の元。我が名、我が血を持って。

今、汝の顕現を求めん。

汝、世界をたゆたう者

汝、世界に遍く意思を広げる者。

汝、常に我と共に在る隣人」

流れる血をシオンはイクスごと握りしめ。

そして、その拳の前後にカラバ式特有の魔法陣が顕れる。セフィロ

トの樹。

そう、呼ばれる魔法陣を。

そこでキャロは気付いた。

その術式は自分が使う術によく似ていると。

つまりは・・・

「召喚、術・・・？」

呆然て呟くキャロに、しかし、シオンは構わない。

永唱に集中する。

「今、此処に汝を召喚する。

汝が枝属，雷，

汝が柱名は、ヴォルト、」

そこでシオンの足場から巨大な魔法陣が広がる。  
魔力粒子が当たりを照らす。

そこで感染者の触手が再生したシオンに向かって迫る。

しかし、フリードが焰を放ち。

触手は余さず燃え尽きた。

そして、永唱が完了する。シオンは閉じた目を見開いた。

「来たれ。汝、雷の精霊。、ヴォルト、！！」

そして、それ、は顕れた。

巨大な雷が幾重にも重なり。

そして、球体となる。

その球体に両側から目が現れる。

精霊召喚。

世界意思端末存在たる精霊を呼び出す、召喚術。

キャロは現れた精霊に呆然とする。

真竜召喚とはまた違う。召喚術。

シオンはそんなキャロの姿を見て微苦笑を一つ放つ。

「詳しい説明はまた後でな？

今は時間がない。

・・・イクス！！！！」

了解。イクスカリバー

フル：バレル  
全兵装

フル：オープン  
全開放

フル：ドライブ  
超過駆動、スタート。

そして次の瞬間。ヴォルトの像が、ぶれた、

そのままシオンと存在が重なっていく。  
完全に一つとなった。

背より延びる剣翼から金色の魔力粒子が放出され、当たりを包む。  
エリオとキャロはシオンを見る。  
存在がもはや違っていた。

‘ヒト’、これは呼んでいいのか？

そんな疑問が浮かぶ程、今のシオンは神々しかった。  
シオンが呟く。

自らの切り札の正体を。その能力の名を。

「精霊・融合・・・」

スピリット・ユニゾン

精霊融合。

シオンのアビリティー・スキルの一つであり、そして、切り札。  
カラバ式思想である。

セフィロトの樹。

これは人間、天使、神様の身分階級を解りやすく十段階評価した図である。

だが、この図には肝心の神様の事が書かれていない。

神の領域には、‘ヒト’は行けない。と言う概念だ。

ならば、‘ヒト’を超えたならば？

その一つの完成形がこれである。

世界意思端末存在たる精霊。言わば神様の一部と、融合、する事に  
より、

ヒトを超える存在となる。

世界の一部とはいえ、それと融合する事により、実質の魔力は無限。  
さらに限界反射。限界機動、‘ヒト’が持つ限界を超える事が可能。

スキル・ランクSSS++。

それがシオンの精霊融合であった。

「シオン・・・お兄さん・・・」

「キャロ」

「はい!!」

唐突に呼ばれてキャロが飛び上がる。

シオンは構わず、話す。

「この状態はもって三分。それ以上は無理だ。  
そして、三分が過ぎれば我は力尽きる」

「故に今の内にキャロも召喚を。  
・・・後は頼むぜ?」

シオンの頼みにキャロは

「はい!」と変事を返す。

そして、シオンは両のイクスを構える。

「神庭シオン。推して、参る」

シオンが疾る。

感染者は迎撃の為に触手を延ばす。

だがそれ全てが一瞬で斬り臥せられる。

もはや知覚不能な速度だ。

触手を斬り臥せ、感染者に到達。

そして、右のイクスを振るう。

シールドも甲殻も何の抵抗もなく切り裂かれる。

感染者が吠える。

しかし、シオンはもはやそこにはいない。

右、左、背中、顎、腹、胸、。

ありとあらゆる場所に斬撃が打ち込まれる。  
一撃一撃が半端じゃなく重く、また疾い。  
次々とシールドが甲殻が剥がれていく。

「凄い・・・!!」

エリオはそんなシオンの姿を見て眩く。  
あれがヒトに可能な動きなのか。

「・・・天地轟命!!」

気付けばキャロもまた永唱を完了する。  
呼ぶ。彼女もまたその切り札たる存在を

「来よ・・・ヴォルテール!!」

焰の柱が建つ。

中から漆黒の人の姿を持つ竜が顕れた。  
真竜召喚。

「エリオ君・・・!」

「うん、行こう。キャロ」

キャロはヴォルテールの掌に乗り移り。

エリオはフリードを翔る

既にシオンによって花道は作られた。

後は最高のポジションに移動するだけである。

そして、シオンもまた。キャロがヴォルテールを召喚した事を確認する。

残り時間あと一分半。

既にシールドと甲殻はあらかた剥がし終えている。

その時、感染者が動き出した。

右腕を延ばす。

その右腕は変化し、砲台とかす。

キャラ達に砲撃を叩き込むつもりだ。

しかし。

「させん」

シオンは一瞬で右の肘まで移動。

技を解き放つ。

「神覇・壺ノ太刀、絶影雷刃」

一撃が右腕を断つ。

痛みに吠える感染者。

しかし、甲殻まで含めて再生しようとするが再生したはじからシオンは全て剥がしていく。

更にシオンは永唱する。

「・・・汝が枝属は炎。

汝が柱名は、イフリート、

来たれ。汝、炎の精霊。イフリート、」

ヴォルト、ユニゾン・アウト。送還。イフリート。スピリット・ユニゾン

炎の巨人を彷彿とさせるイフリートを召喚し、すぐに精霊融合。  
残り時間、30秒。



「イクス」

神覇、陸ノ太刀。リミットリリース。  
開放。

イフリート、炎熱加速。開始。

シオンが跳ぶ。天高く。

そして、その身体から溢れた炎は不死鳥を象る。

「神覇・陸ノ太刀。’奥技’・・・」

振りかぶる。

未だシオンにとっても未完成の技だ。

だが、今は上手くいく。

その確信がシオンにはあった。

「朱雀・・・」

放たれたその一撃は感染者に叩き込まれ。

その半身を灰へと変えた。

半身を失い。感染者がぐらつく。

しかし、直ぐに再生を始める。

だが、託された、少女はそれを許さなかった。

「ヴォルテール！！

ファイアー！！！！」

その命を受けたヴォルテールはその翼に掲げた光球から大威力の砲撃を感染者にたたき込む。

その威力に感染者の残り半分の半身も碎かれ。

そして、漆黒の、球、

だけがそこに残る。

そして、その球にフリードを駆るエリオは突っ込む。  
それは竜騎士として放つ。フリードとの連携攻撃。

「ドラゴン・ストライク!!!」

そして、エリオはフリードと共に光りの矢と化し。一撃が球を打ち貫いた。

一瞬の間を置いて。

今度こそ完全な塵となり、感染者は消滅した。



感染者が滅びた後。

回りの風景は一変した。

本体を倒した為。

もはや、その場にあったアポカリプス因子が死滅したのだろう。

黒の点が綺麗に消えていた。

だが、回りの風景は黒ならず真っ白と化している。

大地も木も感染したものは全て、死んで、しまっていたからだ。

その中でキャロは一人、そこで佇む。

その光景を見ながら浮かぶのは悲しみ。

「キャロ・・・」

「ほれ・・・」

その姿を見ていたエリオの背中をシオンが叩く。

自分を見上げるエリオをシオンはニツと笑ってやる。

「大切な娘、なんだろう？」

慰めてやんな」

「でも・・・」

迷うエリオに、だがシオンは頭をポフと叩いてやる。

「ああ言う時は共に悲しんであげられる奴と一緒にがいい。  
いいから、行ってやれ」

「・・・そう、ですね」

そのまま小走りでキャロの元に向かうエリオ。

二、三言。何かを話し後。泣き出したキャロに抱きしめられる。  
しばらくオタオタしていたが、やがてその背に手を回す。

シオンはそれ以上は野暮だな。とエリオ達に背を向けて歩き出す。  
と、前からスバルとティアナが歩いて来た。

「よう・・・」

そう声を掛けたつもりだったが。失敗した。

そのまま倒れ込みそうになるのを慌ててティアナ、スバルが支える。

「ちょ・・・ちょっと！大丈夫！！」

「シオン！！」

二人に支えられながらシオンは

「悪い」と呟いた。

「何で、こんな状態に！？」

「・・・精霊・・・融合は・・・極度の体力、・・・精神力を消費・  
・・・する。」

「・・・その反動・・・で術者は・・・極め・・・て・・・短い・・・  
が、睡眠を・・・必要と・・・する。」

・・・用・・・は・・・冬眠・・・だ」

シオンが眠いながらも呟く。

既に目が閉じていた。

「反動。てまた厄介な代物なのね・・・」

「悪い・・・もう、無理・・・このまま・・・寝るわ・・・」

え、と気付いた時にはシオンはもう寝息を経て始めていた。

「もう・・・！」

「あゝゝゝ。ほら、シオンも頑張ったし。ね？」

頬を膨らませるティアナにスバルがフォローを入れる。

だが次の一言に二人共黙る事になった。

「大切・・・な奴達。・・・今度は・・・守れたよ・・・」  
, , , , , ルシア

二人共顔を見合わせる。

今の一言でまあしょうがないか。と言う顔で二人で意外に重いシオンを引きずる。

今回は確かに頑張ったからシオンは。

だがしかし、それとは別にして。二人の胸中にはある疑問が浮かぶ。それはモヤモヤ、としていて考えるのにちよつとした痛みを伴った。シオンの最後の一言。

二人は同じ事を考えていた。つまり・・・

ルシア、て誰？

遠く、陽が地平線に沈んでいった。

## 第八話「切り札」(後書き)

予告「どうにか、こうにか成功した初任務。」 「でも出動は続けて容赦なく続く」 「そんな、アースラでシオンに一日休めの命令が下される」 「そして、明かされるシオンの意外すぎる趣味」 「次回、第九話。『とあるセイヴァーの休日』」

## 第九話「とあるセイヴァーの休日」(前書き)

「アースラ初出勤はかなりのピンチの連続で」

「でもシオンの切

り札と大切な弟と、妹の連携で乗り来って」

「そして、

新しい環境。新しい生活になれていく」

「そ

してそれはシオンも・・・」

「魔法少女リリカルな

のはStS, EX。始まります」

## 第九話「とあるセイヴァーの休日」

追加事項

神庭シオン

(ブレイズ・フォーム)

推定魔導士ランク…S

アビリティー・スキル。

精霊召喚。

(スキル・ランクS)

世界意思端末存在である精霊を召喚するスキル。

元来の精霊召喚は大威力砲撃魔法の補助として召喚するのが普通であるが(カラバ式のみ、ミッド及びベルカでは精霊の概念は廃れている)、シオンは砲撃系のスキル未修得の為、スキル・ランクが下がっている。

なお、元来はSSSランクスキル。

なお、シオンが、契約、により召喚出来る精霊は以下の通りである。

枝属、炎、イフリート、

枝属、雷、ヴォルト、

枝属、水、ウンディーネ、

精霊に対しての考察は以下を参考の事。

精霊融合。

(スキル・ランクSSS++++)

召喚した精霊と融合するスキル。

世界意思端末存在である精霊と融合する事により、ヒト、としての器を超える。

その為、反射能力。運動能力。魔力。等。あらゆる面で次元の違う存在となる。

ただし、反動として。



精霊融合後。短くて2～3時間。長くて丸一日の、冬眠、を要する。さらに、その後、一日程は精神衰弱。体力消耗。魔力枯渇。と、様々な障害を起こす。

だがシオンの所有デバイスであるイクスの言によればその程度の反動ならば軽い方、との事。

カラバ式での、禁術、（バランス・ブレイカー）であり。元々は、自己を完全に放棄、する程の反動を伴う。

シオンが何故、その程度の反動で済むのかは謎。

なお、何故精霊融合はそこまでの反動を伴うのかは以下の精霊についての考察で説明する。

各精霊との融合はそれぞれ能力を特化する事が出来る。

イフリート…攻撃力に特化。魔法変化資質、炎熱、の追加。さらに神覇、陸ノ太刀。朱雀を使用可能。

ヴォルト…速度に特化。魔法変化資質、雷撃、の追加。

ウンディーネ…防御力に特化。魔法変化資質、水変、の追加。

（水の変化資質はカラバ式特有。

カラバ式は各属性が多々有る。詳しくは下記の精霊についての考察を参考）

使用技。

神覇、陸ノ太刀、奥義、朱雀

威力…SS+

速度…S

攻撃対象範囲…1～10

0名

神覇ノ太刀に於ける奥義。炎熱加速による莫大な熱量により、自身を中心に巨大な不死鳥を形成。突撃する技。極大な破壊力を誇る。

なお、余談になるが陸ノ太刀から先の四つ技は、四神奥義、と呼ばれ。

その制御は緻密を極める。

（追加…神覇ノ太刀は全部で捨ノ太刀まである）

朱雀は、絶対近接範囲攻撃、とも呼ばれ。  
発動速度、攻撃範囲共に反則レベルの技である。  
当然シオンの技は未完成であり。元来の朱雀よりランクは落ちる。

精霊についての考察。

精霊とは世界意思端末存在と呼ぶ。

世界統合意思（要は集団無意識の固まり）を一つの、神、とカラバ式では考え。その意思の端末を、精霊、と呼称する。

故に、精霊、を召喚するという事は神の一部を召喚する。と言う事であり。それをもつての魔法行使は絶大な破壊力を秘める。

精霊融合については言わずもがなである。

だが、精霊融合はとてつもない危険も同時に秘める。仮にも神の一部の意思を自らに内蔵する為だ。

ヒト一人と精霊の意思。比べるまでもなく精霊の意思の方が巨大であり。その思考性や処理する情報はとてもではないがヒトが納められるものではない。

先に述べた反動はこれの為だ。

精霊融合を正しく使用しようとするならば。精霊の意思に真っ向から立ち向かう程の意思力が必要である。

言ってみれば、巨大な津波を生身で受け止めるのと同じで。受け止めそこなれば当然。自己の意思は流される。

つまりは精神崩壊だ。

だが、それに見合う程の力を手に入れられるのもまた事実である。  
なお、各精霊については以下の種類があげられる。

炎…イフリート

水…ウンディーネ

風…ジン

地…ノーム

氷…セルシウス

雷…ヴォルト

光…レム、アスカ  
闇…シャドウ  
物…マクスウェル  
時…ゼグンドウス

なお、'神、や'精霊'についての研究は第97管理外世界'地球'に置いて、進められているとの事。

余談ではあるがシオンの言いわく。それぞれ個性があつて'話し'てみると面白いらしい。

(対話に言語を使用するかは謎)



アースラ艦内午前4時。

シオンの部屋で目覚まし時計のベルが鳴る。

シオンの部屋はちよつとばかり殺風景で、基本的に物が無い。ある物と言えばシオンが唯一持ち込んだ物と、机。椅子。ベットくらいか。

目覚まし時計のベルが鳴っているが、シオンは構わずくうくう寝る。やがて、シオンの所有デバイスであるイクスが浮かび上がる。

人型だ。

シオンの側まで近寄るとイクスが光に包まれる。

そこから顕れたのは成人と変わらぬ身長となった。イクスだ。

大体の融合機に共通する事であるが、基本彼等、彼女等は、平均的な人の大きさになる事が出来る。

普段それをしていないのは魔力の消費が多い為だ。

だが、イクスはほぼ毎日成人クラスの大きさになる。

いわく。弟子の修練に師匠が小さくてどうする。

との事。

イクスが目覚まし時計のベルを消す。

そしてシオンの顔・・・正確には耳元に顔を近付ける。

そこで息を一息吸い。

<起っ床~~~~~!!!!!!!!!!>  
「うっどわあああああ!!!!!!!!!!」

力一杯耳元で怒鳴られ、シオンは跳ね起きる。  
そう、これがシオンの毎日の朝の風景であった。

午前4時15分。

アースラの訓練室にシオンとイクスの姿がある。  
シオンがカードを差し込むと、訓練室がそのデータに従い空間が拡大し、街の風景を形作る。

<さあ。今日も張り切っていこう!>  
「……おお〜」

朝が弱いらしいシオンが気のない返事をすると同時に、イクスが手に木刀が握られる。  
シオンの頭に叩きつけられた。

<返事ははつきり大きくと!!>  
「お、おお!!」

弟子であるシオンはイクスに修業中は基本従う。  
例え頭を木刀ではたかれようと、だ。  
……青筋が浮かんでいるのは御愛嬌であろう。

<さあ、今日も楽しい散歩の時間だ!!>  
「……毎度ツツコムのもアレだけど、お師匠、?これは、確実

に散歩じゃないって・・・」

そう言うシオンにはロープが巻き付けられ、そのロープはタイヤへと巻き付けられていた。

さらにタイヤの後ろにはロープが巻き付けられ、そのロープにはバールがこれでもかと思われつけられている。

止めに、そのタイヤにはイクスが乗っている。

合計の重量は軽く百キKgを越えていた。

<口ごたえしない!!>

「へいよ・・・、て痛い!!」

シオンに今度は鞭が叩きつけられた。

どこからそんな怪しいものを持ってきたのかは謎である。

<返事は

「はい」だろうが!!>

「・・・は、はい・・・」

怒りで体が震えるシオンだが、そこはぐっと堪える。・・・鞭はとっても痛いのだ。

<では、今日は軽く5周程走る、か・・・魔力は使うなよ?>

ちなみに距離にして75キロ。これを散歩と言い切れるあたり凄まじい。

<さあ、走れ!!

馬車馬の如く!!!!>

「い、いつか・・・いつかスクラップにしてやる・・・っ!」

涙ながらシオンが呟く。

もはや、歩、じゃないのが涙を誘う。そして、シオンは走り出した。

＜遅い！！もっと速く！！カメのほうがいくらか速いぞ！！＞

「痛っ！！痛っ！！！！」

ぬお おお・・・いつそ殺せ！！！！」

シオンの怨嗟の聲が響く中、散歩の時間は過ぎる。

午前6時。ようやく、散歩が終わったのか、シオンが道端に寝転がる。

だがあの距離を、あの重りで1時間掛からず走れるあたり、シオンも常人ではない。

だが師匠であるイクスに、容赦、の文字はない。

寝転がるシオンにバケツ・．．これもどこにあつたか謎だ。  
に、汲んだ水をぶっかける。

＜散歩でいちいちへばるな。次、いくぞ＞

「  
・  
・  
・  
・  
はい  
」

もはや反論も出来ず。

シオンはイクスに続く。

だが、勿論。そこから先も、地獄、と名付けるのが相応しい、修練が待っていた。

「ひろとごころし!!!」

く人聞きの悪い事を言うなあ、この弟子は

喚くシオンにイクスがさも心外とばかりに首を振る。

だが、もしこの場に第三者がいたら、決してシオンの言葉を否定しないだろう。

シオンは鉄棒に逆さで括りつけられ、下ではイクスが・・・もう何処から持って来たのかは問うまい。

七輪で、火を起こしていた。

シオンは火傷しないように腹を屈め、背中が熱くなったら背を反らせ、腹が熱くなったら・・・

と、交互に繰り返していた。

・・・傍から見れば立派な拷問である。

勿論、意味はある。

要は腹筋、背筋の修練だ。

・・・ただやり方、と言うものがあるような気はするが。

<・・・もうちょっと火力を上げるか>

「お~~~~に~~~~!!」

あ~~~~く~~~~ま~~~~!!!!」

午前6時半。

ようやく、スルメ踊り、（命名イクス）  
が終わる。

だが当然、修練は終わらない。

<・・・頭が高あ~~~~い!!!!>

「ぬああああ!!!!」

シオンの頭上を木刀が通り過ぎる。

シオンは今、半腰になって、さらに腕を肩の高さに伸ばし、その両

手には水が満載の壺（気合い、根性と名前付き）を握り。  
そして、木の杭をすり足でぐり抜けている。  
・・・筋トレなのだがいちいちレトロなのはイクスの趣味なのか。

午前7時。

まだ修練は終わらない。

今度は杭の上に片手で乗り、逆立ちし。さらに足の上にイクスを乗せたまま腕立てを行っていた。  
バランス感覚と腕の筋肉を鍛える為だろう。

午前7時10分。

くふむ。朝のウォーミング・アップ、終わり。  
飯にするぞ>

「・・・うわあい・・・」

心体疲れ果てたシオンがイクスに続き。訓練室を出る。  
ようやく。朝ご飯であった。

午前7時半。

シャワーを浴びたシオンが食堂に入る。  
ちなみにイクスは待機モード（大剣状態の鐔の形）である。

「シーーーーオンーーーー！」

名前を呼ばれる。声の方を見るとスバルを始めとした前線メンバーが勢揃いしていた。



ちなみに名前を呼んだのはスバルだ。

「よう、皆。飯？」

「うん、シオンもここに座りなよ〜」

勧められるがままに席に座る。

目の前にはどん、と山となったスパゲティーがあった。

「んじゃ、いったきます」

両手を合わせる。シオンは何故かこんな風に礼儀正しい時があった。

・・・礼儀正しいのはここまでだが。

食らう。

喰らう。

喰らい尽くす。

シオンがフォークを延ばすと、山が見る間に消えていく。

先の修練の後でよくぞそれだけ食べれるものだ。

流石のスバル、エリオ（二人共大食い）

苦笑する。

「そう言えばシオン兄さん」

「んア？」

更なる山を消費しながらエリオの方を向く。

頬っぺたがリスのように膨らんでいるが、次の瞬間には飲み込まれている。

本当に嚙んでいるのか問いたくなるが、シオンの顎の速度は並ではない。

「シオン兄さん、て朝の訓練の時、皆と一緒にじゃないですよね？」

どんな訓練してるんですか？

「……まあ、いろいろ。な」

エリオの問いに若干顔を引き攣らせながらシオンは笑う。  
なのは教導官による。朝の教導。

シオンはそれには参加していなかった。（出来なかった）

「そう言えば、そうだね。朝ご飯。毎回凄い食べっぷりだけど、朝、何してるの？」

「……まあ、修練を、ちよつと」

あれをちよつとは決して言わないだろうが。

<ふむ……興味があるならスバル・ナカジマ。

君も修練に参加……>

「……人死に出るから却下」

シオンがすげなく却下する。

こうして、朝の時間は過ぎていく。

午前11時。

アースラにエマージェンシー・コールが鳴り響きシオン達は出勤する。

基本的に感染者は時間を問わず発生する為、少隊毎に待機時間は違う。

今回の昼待機はスターズ少隊であった。

だがシオンは必ずと言っていい程毎回出勤する。

感染者にシオンが捜すナンバー・オブ・ザ・ビーストが関係している？ 為なのだろう。

はやてやなのはもシオンに休むよう度々言うがシオンはまったく聞く耳を持たない。

負けず嫌いの上、超、が付く程の頑固者であるシオンらしいと言えばシオンらしいが。

「OOOaaaaaa!!!」

「・・・・っと!」

今度の感染者はゴーレム。・・・魔法生命なのだが、アポカリプス因子にはあまり関係ないらしい。まあ無機物にも感染する事を考えるとまだ理解の範疇だろう。

ゴーレムのただ一つある目から光が放たれる。  
砲撃。

しかし、シオンも、そしてスバルもあっさり回避する。

「神覇、参ノ太刀。双牙!!」

シオンが放つ。地を走る刃は二連。

ゴーレムの膝に直撃。

両の足を崩したゴーレムが前に倒れる。

その進行方向にはスバルと放つリボルバー・ナックルがあった。

スバルの一撃が胸部に直撃。

ゴーレムはのけ反る。

そこにさらになのはのアクセル・シューターとティアナのクロス・ファイアーシュートが叩き込まれる。

再生能力を持つ感染者に対する有効な手段。

それは間断ない連続攻撃で再生をさせずに倒す。  
と言うものだ。

「行くぞ!!!」

アイゼン!!!」

了解

カートリッジ・ロード。

グラーフアイゼンの片側からは突起がもう片側からロケットブースターが迫り出す。

そして、そのままヴィータは回転開始。ロケットが火を吹く。

「ぶち抜け～～～～！！！！」

ラケーテン・ハンマー。

ヴィータは回転しながらゴーレムに突っ込み。

そして、ゴーレムの胸部にラケーテン・ハンマーを叩き込む。

既にスバルから一撃もらった所であり、あっさり破碎。

そのまますっ飛ぶ。

そこに、

「神覇、弐ノ太刀・・・」

「デバイ～～～ン・・・」

シオンとスバルの声が重なる。

ボロボロになったゴーレムはただその一撃を座して待つしか、ない。

「剣牙！！！！」

「バスター！！！！」

そして、両側から光は放たれ。

ゴーレムはあっさりと塵へと還った。

午後3時。

ようやく感染者との戦闘の事後処理終了。

スターズの面々は事務仕事に戻る。

シオンも書類作成の為、ティアナからの助言を受けながら、報告書を作成する。

「・・・そこ、誤字があるわよ？」

「ぬ、ぐうううう！」

・・・つくづく、机に向かうのが苦手なシオンであった。

午後5時。

なのは教導官の元、集団模擬戦。

及び、各個人技能の訓練。

シオンは連携戦闘が基本苦手な為、なのはにみっちり扱かれる。

模擬戦の後の反省会。

そして少隊を変えての再度模擬戦。

これをくり返す。

シオンも最初の方は足を引っ張りまくりだったが、なかなかどうして。

慣れて来たのか様になってきていた。

・・・油断すると、ヴィータから手痛い一言を貰う嵌めになるが。

午後8時。

各少隊への申し送りなどの書類仕事を終らせ、ヴィータやなのは。フェイト等の隊長陣のチェックの後、漸くオフ・シフト。風呂に入る。

「・・・しかし、男が俺達だけ、て寂しい過ぎだな。オイ」

「前線メンバーはシオン兄さんと僕だけですしね〜」

広々とした湯舟にシオンとエリオが浸かる。  
非常に寂しい光景であった。

たまにヴァイス、グリフィスも交じる時もあるが、それでも少ない。

「どうせならエリオ。お前、女風呂に入ったらどうよ？」

「・・・流石にもう勘弁して下さい」

六課設立時の地球への出張任務の話しを聞いていたシオンがにんまりと笑いながらエリオを冷やかす。  
平和な時間であった。

午後9時。

再度、エマージェンシー・コールが鳴る。  
シオンは今度はN2Rチームと出動する。  
そこには先程と同じゴーレムの感染者がいた。

「・・・流行ってんのか？ゴーレム、て。」

勿論、そんな訳がない。単なる偶然である。

ゴーレムに踊り掛かるN2R。

・・・あっさり倒した為、戦闘描写は割愛する。

午後11時。

再度報告書を作成するシオン。今度の助言者はギンガだ。

「・・・ここ、脱字してるね？」

「うぬ！うぬぬぬ！！」

・・・いい加減。机仕事に慣れようと思うシオンがここに居た。

午前0時。

「・・・おやすみ〜」

床につくなり速攻で寝息を立てるシオン。

彼は寝付きはよかった。

以下、シオンの一日である。



「・・・流石に、シオン君。動き過ぎやな〜」

アースラのブリッジにある艦長席。そこではやてが呟く。

休めと言っても聞かないシオン。

普段何してるのかちよつと気になり、シャマルに頼みモニターして貰ったのだが。（風呂の場面は除く）

・・・よく、体が持つものだ。朝の修練等、見ているだけで絶句ものなのだが。

「働き者なのは結構なんですけど倒れられるのは困りますしね」

副官であるグリフィスも額に汗を浮かべる。

いろんな意味で就業規則の緩い管理局。

だが、だからといって体を壊すまで働けとは言わない。

「・・・やっぱり、無理にでも休ませるべきやろうね」

「同感です。なのはさんを始めとした隊長陣からも無理にでも休ませるべき。と意見が」

やろうなあと、頷くはやて。

物事には限度と言うものがある。

そして、シオンはその限度を越えまくっていた。

「シャリー？悪いけどシオン君、ブリッジに呼んでくれるか？」

「はっ。いい。了解しました」

シャリーがシオンに通信を掛ける。

程なくして、シオンはブリッジにやって来た。

「ども。どうしたんスカ？はやて先生」

「うん。あんな？シオン君」

はやては休暇の話をする。

だがシオンの返答は当然

「NO」

であった。

「・・・あんな、シオン君。勘違いしとるようやけど、これは命令。

」  
「いや、でもですね？」

「でもも、へったくれもあらへん。アースラ初出航から一ヶ月。

最初の感染者戦の後以外、休んでないやんか」

そう、シオンは最初の感染者との戦いで切り札である、精霊融合、  
を使い。丸一日昏睡。



さらに、もう一日を体力の消耗等から休んだのだ。それ以外は全部例の一日のような感じであった。

「とにかくや。これは決定事項。

反論等は聞かんから」

「いや、ちよっ。そんな横暴な!!」

「休みは、そうやな。今日と明日。

以上。解散!」

シオンはしばらく喚くが、はやてが笑顔で

「なら、医務室にでもバインドかけてほうり込んどこうか?」と言  
い出したので、仕方なしに退散する。

「二日間も何をしろってんだよ・・・」

シオンはハア、と休みの癖にやたら重いため息を吐きながらとぼと  
ぼと部屋に戻った。



「・・・と、言う訳でだ。今絶賛。暇人な訳だが」  
『はぁ・・・』

とりあえず、時間を潰そうと来たのは休憩所。

前線メンバーはここ等でだべる事が多い。

ちなみにシオン。此処に来る前に訓練室に行っている。

が、どこをどうやったのか訓練室に入れないのだ。

どうやら徹底的に休ませるつもりらしい。

と、言う訳で来てみたのは休憩室。そこでティアナ、スバル、エリ  
オ、キャロがお菓子を食べながらだべっていた為。

時間の使い方なんぞを聞いた訳だ。

「・・・うゝゝん。ならミッドのクラナガンに遊びに行ったら、どうかな？」

「ダチがいるならともかく、一人で行って何をしろと？」

「なら、部屋で寝てたらどうなの？」

「・・・なんぼ、なんぼでも二日も寝っぱなしは遠慮したい所だ」

「読書とかはどうです？」

「最近、本読んでないからな。それに性に合わん」

「詩でも書き綴るとか」

「・・・キャロ。」

お前は俺にどんなキャラを期待しとるんだ・・・」

うゝゝん。と再び思考の渦に入り込む一同。

「てか、趣味とか無いの？あんた？」

「趣味か・・・無い事も無いんだが・・・？」

そこでシオンはハタッと動きを止め。ティアナをジーと見つめる。

「な、何よ。そんな人の顔ジロジロと・・・」

「・・・お前、今日はもうオフ・シフトだよな？」

見つめられた為か顔赤らめるティアナにシオンはなおも見つめながら問う。

「そう、だけど・・・？」

「よし、ちょうどいいや。そのまま此处で待ってろ」

シオンは立ち上がると自分の部屋へと戻っていく

「  
・  
・  
・  
なに、あれ？」

『さあ？』

シオンの背中を見ながら、三人は首を傾げた。

数分後、シオンが戻ってくる。

その手にあるのはキャンバスとイーゼル。

そして、各絵の具とデッサン用の黒炭であつた。

「えつと。・・・一応聞くわね？」

「何をするつもり？」

「ん？ ああ。俺、絵を描くのがちよとした趣味でな」

[illegible]

沈黙が広がる。

一秒二秒と、そして、三十を数える頃、

四人が爆発した。

[illegible]

「・・・なんだよ？」

四人揃ってその反応は？」

シオンがイーゼルにキャンバスをセットしながら聞く。

だが四人はそれどころではない。

あんまりにも意外過ぎるからだ。

シオンはどちらかと言えばそう言った繊細な事は不得手なイメージがあった。

その為だ。

「シオン！！絵なんて描けたの！！！」

「ああ、地球出てから描いてないけどな。

ある人の影響で描き始めたんだが、これがいろいろ楽しいんだよ。

・・・もつとも、俺が得意なのは人物画だけど」

「・・・待ちなさい」

んあ？と今まさしくデッサンを始めようとするシオンにティアナが静かに静止を掛ける。

「一応、聞くわね？

・・・あんた、誰を描くつもり？

私、とっても嫌な予感がするんだけど？」

「お前」

即答である。

やっぱりか、とティアナはこめかみに手をやる。

「・・・私、描いていい。なんて、一言も言っていないんだけど？」

「おお、そう言えば！」

忘れてたのか、とゲンナリするティアナ。

文句を言おうとするが、しかし、シオンの一言が機先を制した。

「悪い。でもお前の顔、綺麗だし。なんか絵映しそうだったからさ」

何の邪気もない一言。

故にティアナは思いつきりうろたえた。

「えっ・・・その・・・」

「ん？駄目か？なら諦めるけど」

あっさりと言うシオンにしばらくあれこれ迷う。

だが、結局の所。興味が勝った。果たして、シオンは自分をどう描くのか？

気になって気になって仕方なくなってしまった。

「・・・もう！！」

わかった。描いていいわよ。

・・・その代わり、ちゃんと綺麗に描きなさいよ？」

「任せろ。本物より綺麗に描いてやんよ」

シオンの返答に小さく

「ばっかっ」とだけ呟くと観念したのか、椅子に座る。

そこで、シオンふと気が付く。

「お、と。そうだ。スバル？」

「え？な、何？」

どうやら考え事をしていたのだろう。若干慌てながらスバルが聞き返す。

シオンはそんなスバルの様子に気付かず。朗らかな笑みで問う。

「次、お前を描かせてな？」

お前も綺麗だし、結構絵映えすると思うんだよ」

「・・・へ？・・・ええ！？」

シオンの言葉に焦りまくるスバル。

シオン自身は何気なく放った言葉でも。

その威力は絶大であった。

「駄目か？まあ、なら諦めるが……」

「え……でも、その……う。」

や、やっぱりお願いします」

最後等辺は消え入りそうであったが結局。ティアナと同じく好奇心にまけたらしい。

シオンがよしつと満面の笑みを浮かべる。

その顔を見て、スバルもまたティアナに負けなくらい赤くなる。

その頃、ティアナはシオンにいろいろ褒められたり緊張のせいかわりが見えない程、まあ、なんかいろいろ駄目になっていた。

二人を駄目にした。シオンはさらに続ける。

「明日はエリオとキャロな？」

「えっ？」

「私達もですか？」

二人の問いにシオンが

「おう」と答える。

「二人、ツーショットで描いてやんよ」

「えっと、その。それじゃあ」

「よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる二人に先程と同じく頷くシオン。  
そして、ティアナに向き合う。

「んじゃあ、描くな？」

……ああ、それと。

そんなガチガチにならんでも大丈夫だぞ？

普通にしてろ。普通に」

「・・・う、うん」

だがティアナは聞こえているのか聞こえていないのか。ガチガチのまままだ。シオンはまあ、いいか。とデッサン用の黒炭を走らせ始めた。



「・・・凄い・・・」

「・・・んんん。でもないぞ？ やっぱり腕、鈍ったん」

自らが描かれたデッサンをティアナは茫然と見る。

シオンが描いたティアナは素人から見れば充分綺麗だった。

ただシオンはちょっと不満そうである。

「うん。全然上手いよ。シオン才能あるって♪」

「そうですよ。こんな絵が描ける。て充分凄いです」

「うん♪この絵のティアさんとても綺麗です♪」

キャロの言葉にティアナが

「あうっ」と声を漏らす。何やら相当恥ずかしいらしい。

「んんん。俺としちゃいろいろ不満なんだが・・・ティアナ。モデルありがとうな」

「えと。その・・・私こそありがとう」

ティアナの礼にシオンが首を傾げる。

「・・・ほら、さっき言った本物より綺麗に描く、て・・・」  
「ああ。でも駄目だな。まだお前のが綺麗だ」

自分が描いたデッサンを見てシオンが言う。

・・・この時、シオンに勿論邪念はない。  
故にティアナにも破壊力満載の言葉となった。

「その・・・あの、それ。どういう・・・」

「まあ。」

また描かせてくれよな？次こそは本物より綺麗に描いて見せるぜ」

ニつと笑う。シオン。

ティアナの顔がさらに赤くなる。

・・・無自覚とは、本当に本当～～～に怖いものである。

「さって、次はスバルだな。ほれ、そこに座って」

「う、うん！！」

ティアナが居た席に座るスバル。

しかし、緊張の為かティアナ以上にカチンコチンであった。

「・・・お前ね。絵を描かれる位でそんな緊張してどうんすの？」

「だ、だって！」

呆れたようなシオンにスバルが珍しく食ってかかる。

「・・・ふむ。」

なあ、スバル。服脱いで見ないか？」

ニンマリと笑いながシオンが告げる。



「え。えええ!!!!!!」

「ちょ、シオン。あんたどういう積もりで・・・!!」  
「何を驚く？ヌード、デッサンてのはあるんだぜ？」

いけしゃあしゃあと言いつつシオン。  
さらに慌てまくる二人。

「シ、シオン。流石にそれはちよつと・・・」  
「・・・まあ。勿論冗談なんだが」

涼しい顔でシオンは先程の自分の言葉を否定する。

「・・・アンタね・・・」  
「・・・シオン。酷いよ・・・」  
「で、どうだ？緊張。解けただろ？」

シオンがニヤツと笑う。  
そこでようやく二人共気付く。  
つまり今の冗談はスバルの緊張を解す為だと。

「・・・ん。いい表情になったな。それでいいんだよ。  
普通のお前を描きたいんだから」  
「う、うん・・・」

スバルに、にこやかな笑みを返す。  
スバルは少し俯く。

「ほれ。・・・顔上げろ。・・・よっし描くぞー」

こうして静かに、だが平和な時は過ぎる。  
今、この時だけは五人の中で感染者への不安も恐れも消えていた。



時限航行部隊。XV級艦

その艦長。クロノ・ハラオン提督はモニターを見ながら顔をしかめていた。

「・・・被害者は現地の人。で間違いないんだな？」

【はい。間違いありません。】

そこでは壁に背をつけてぐったりとする男の姿がある。

男は意識不明。目覚める気配はないらしい。

そして、その男の胴には異質極まりない刻印が刻まれていた。

その刻印は・・・

「・・・ナンバー・オブ・ザ・ビースト・・・か・・・」

666の文字が刻印されていた。

## 第九話「とあるセイヴァーの休日」(後書き)

予告「ついにその陰を現し始めるナンバー・オブ・ザ・ビースト」

「そして、増え始める感染者達。」 「そして、

再び顕れる最悪の異業」

「その危機にシオンは・・・」

「次回第十話『ウィズダム・フォーム』」

「その姿は新たな力」

後書き。 は

じめましての方ははじめまして。テストメントと申します。ようやく第一部『邂逅編』が終わりました。いや、長かった。次から第二部『666編』です。どう考えても第一部より長くなります。すみません。お付き合いよろしくお願いします♪さて、さて、EXに於けるヒロインはあえてスバルとティアナです。親友が故にいろいろな事になります。勿論。シオンも。ナンバー・オブ・ザ・ビーストが現れた時、シオンの過去。そしてその闇も一緒に出てきます。一部ではシオンの情報を意図的に隠した訳ですが。キチンと主役張れたかどうかとブルブル震えておりますよ？そして、スバル、ティアナは果たしてシオンの闇をどう受け止めるのかこうご期待です。それから感想。評価。ありがとうございます。めっちゃうれしいです♪ 本当、力になります。これからもどしどし感想も評価もよろしく♪ではでは

## 第十話「ウィズダム・フォーム」(前書き)

「その背中を覚えてる」「ずっと、ずっと、追い求めてきて、その背中に追い付きたくて、肩になりびたくて」

「だから許せなかった。あの人を、その裏切りを」

「だから俺は力を求めて・・・」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX始まります」

## 第十話「ウィズダム・フォーム」

その背中を、覚えている。

その背中は大きくて、力強くて。

気が付けばその背中に守られていた。

ずっと、ずっと。

だけどその背中には自分をそして、周りを守る度に傷だらけになって。

一度だけ、問うたことがある。

何故、そこまでして皆を守るのか、と。

それを問われたその背中の主はニッとだけ笑い、そして答えてくれた。

「・・・理由、か。考えた事も無えな。ただ、守りたいから守る。

ただ、助けたいから助ける。

それじゃあ駄目か？」

そう、その主は言い切った。

だが、自分は納得しなかった。

だって、その主は自分の周りの人であれ、善人であれ、悪人であれ。救ったのだから。

だから理由が別にある、て思った。けど違った。

「俺がやってんのはあくまで自己満足だな。

別に助けた奴の為じゃあない。

どっちか、て言うとな最悪の偽善者なんだろうさ。

俺は。

あん？なら、なんで悪人も助けるのかって？

そんなの決まってるんだろ？

・・・気に入ったからだよ」

その返答に首を傾げる自分に、底意地の悪い顔で笑いながら、その主は続ける。

「世の中の為になるか、ならないか？

そんなもん考えた事も無え。

ただ気に入った奴なら例え人殺しだろうが、世界征服を企む悪の統領だろうが、破滅を望む狂ったバカだろうが助ける、てだけだ。

・・・まあ、どこかの馬鹿兄に言わせりゃあ

、理解不能末期到達型馬鹿、になるんだろうな。

・・・今、考えてみたら俺、相当酷い事言われてねえか？」

それにはただ苦笑いを返した。

そして、思った。

なんでその主はそんな風に思うようになったのかを。

「・・・さあな？

だけど確かに言えるのはこの身は、彼女、に救われたから、決って生まれてはならなかった。

決って今、こうして存在してはならなかった。

決って・・・ヒトとして生きてはならなかったこの身を、救ってくれた、彼女、がいたから。

この、俺を。こんな産まれ落ちたその瞬間からヒトで在っては為らなかったこの俺にいろんな事を教えてくれた。

、此処、にいていいと言ってくれた。

・・・生きていて、よかったと思わせてくれた。

・・・だから、俺は今。

、此処、にいる」

だから、と続け。

「だから、俺も気に入った奴等には此処いい。て思ってた。欲しい。理由をつけるんならそんな所だ」

そう、言っ頭を撫でられた。

・・・それには文句を言ったが。

「忘れるな？人が人を救う、なんてのはただの幻想だ。本当の意味で救われる人なんていやしない。

・・・でも、俺は救われてしまったから。

だから、この身をもって。彼女を、お前を、兄者を、気に入った奴等も助けたい。て思ったのさ」

そう、と続ける。

「俺は、救われた分だけ人を救いたいんだよ」

その生き方を、そんな在り方を。

だけど自分は、眩しいと思う反面。

悲しい、て思った。

だから、思った。そんな背中の主を守りたい、ていつか、その背中を守りたい、て。

だから、

「そんな生き方もある、てだけの話しさ。  
, シオン,」

俺は今、, 此処, にいる。



「シオン!!」

感染者との戦闘中。スバルから声がかかる。  
本日の感染者はこれで四体目。  
いい加減、皆。疲労が溜まりだしている。  
シオンは特にそれが顕著だった。

「・・・っ!!」

スバルの声に反応して、シオンが眼前の感染者に気付く。  
だが、その反応は間に合わない。  
突撃。

もろにそれを受けたシオンはしかし、そのまま踏み止まり。  
感染者の顎を蹴り上げる。

「イクス!!」

トランスファ―

戦技変換。

瞬時にブレイズ・フォームに変化したシオンはそのまま二振りのナイフと成ったイクスを掲げる。

魔法を解き放つ。

「神覇・壱ノ太刀。絶影連牙!!」

縦横無尽。

軀中を切り刻まれ、感染者が悲鳴を挙げる。  
そして、上空を飛ぶのはが止めを刺す。



「ディバイーン!!  
バスターーーー!!」

光が感染者を穿ち。  
そして、灰へと変えた。

「シオン!!」

スバル、ティアナがシオンに近寄る。  
シオンは大丈夫、と手を振るが、しかし二人共離れない。

「シオン君。

大丈夫? あんまり無理、してちゃ、駄目だよ?」

なのはも空から降りがてらシオンに心配そうな顔で近づく。  
シオンは困り顔をする。

「・・・でも、最近。酷いよな、感染者の出現率」

ヴィータも近づきばやく。一同に沈黙が下りる。

ここ一週間程の感染者の出現率は日に日に上昇している。  
故に毎回出勤するシオンだけではなく、前線メンバーには疲労が溜まりだしていた。

「・・・なんとか、しないといけない。ね」

なのはの呟きに。皆、深く頷いた。



「感染者、消滅!!  
状況。クリアーです」

官制のシャーリーからの報告にアースラ艦長であるはやてはホッと一息つく。

最近の感染者の異常発生。それにより前線メンバーに拘わらず、アースラメンバー全員に濃い疲労が溜まっていた。

「スターズからの報告。

周辺警備に残しますか？」

「・・・いや、スターズは引き上げさせてや。

・・・少しでも休憩させんと・・・」

シャーリーからの

「了解」の声と共にはやては艦長席に身を沈める。

「・・・昨日は十件。おとついは九件。

・・・発生件数が前と段違いや・・・」

はやての頭を過ぎるのは昨日のクロノ・ハラオウンからの報告。

666の刻印を刻まれた人達。

現れたのはちょうど一週間前からである。

そして刻印を刻まれた人達に共通する事がある。

意識不明。

被害者は皆、未だ昏睡状態である。

ちょうど感染者が増大し始めた時と時期は同じ。

はやてでなくても関連性を疑うだろう。

(……いっそシオン君に聞いた方が……)

そこまで考えて、はやてはフルフルと首を振る。  
恐らくは、だが。

シオンはアースラを飛び出して666を追うだろう。自分があの時感じたシオンの危うさを考えれば、最近は随分と柔らかくなった感じはする。

だが、それはシオンの危うさが無くなる事とはイコールではない。

（考えてみれば私達はシオン君の事、何もしらんのやな）

シオンの過去、シオンの家族。

アポカリプス因子との関係。

そして、666との因縁。

考えれば考える程、謎が多い。

「艦長。スターズ少隊。ならびにセイヴァー。帰還しました」

シャーリーの声で思考から立ち戻る。

今の段階ではシオンの事は何もわからない。

それに、今の異常の原因をシオンが知るなら教えてくれるだろう。

そこはシオンを信じれる。

はやてはシャーリーに頷き返すと、次元航行に移行する為に指示を出した。



「皆さん、お疲れ様です！」

アースラに帰還したシオン達に今はオフ・シフトのエリオとキャロが労いの言葉を掛ける。

「さて、それじゃあ今からスターズとセイヴァーはオフ・シフト。しっかり休もうね。」

報告書は明日のシフト時間までに仕上げて。

……N2Rへの申し送りも大丈夫だね？

それじゃあ、解散」

「「はい！！」」

「オフ・シフトだから、てあんなだらけんなよ？」

ヴィータからの締め言葉にそれぞれ頷き返し、部屋に向かう。それを見送った後、なのはは深くため息をついた。

「……やっぱ、皆疲れてんな」

「うん、ヴィータちゃんも早く休んだほうがいいよ？」

「お前が休むんなら私も休むけど……まだ、休まないんだろ？」

ヴィータの疑問になのははただ

「にやはは」と笑う。

「……気持ちは解るけどよ。今、私達は休まなきゃ、意味ねえだろ？」

「………うん。」

でも、もうちょっと調べたいんだ」

そう言って、なのはは手元のコンソールを操作する。

そこに映るのは感染者達の出現状況。

最近の感染者の異常な発生にはそれぞれ、技術部やフェイト達、執務官の方でも調べているが、なのはもただそれを見ているだけはず。時間があれば何か手掛かりがないか、調べていた。

「そもそも因子がどうやって世界を渡ってんのかもわかんねえんだよな？」

「うん。シオン君もそれは解らない、て」

今の所、アースラ・・・管理局のアポカリプス因子の情報源はシオンだけだ。

それだけでは当然心許ないのでシオンのかって属してた組織。

『グノーシス』なる組織に管理局も情報開示を迫ったのだが、結果は拒否。

どうも交渉に当たった者がかなりのクセモノだったらしく、傲慢にも『命令』と言う形で情報や『グノーシス』の魔法技術。はては所有ロスト・ロギア・・・ここで言うロスト・ロギアはあくまで管理局側からの視点で、グノーシス側からしたら先祖代々から脈々と受け継がれた武装や霊装である。の接收まで強要したらしい。

当然、受け入れられるはずもなく。

目下両組織は対立。と言う形になっている。

クロノ・ハラオウンが珍しく頭を抱えてはやてに愚痴るのも当然と言えた。

両組織の橋掛けになりそうなシオンはこの問題に対して

「知ったこっちゃない」と、言い放っている。

まあ自業自得の為、シオンの態度も解るのだが。ここに来て、そうも言ってられない事情が出来た。感染者の異常発生である。

「……：そーいやさ、ヴィヴィオに今日は会いに行かねえのか？」

「う……」

痛い所を突かれる。

最初の頃はなのはもオフはヴィヴィオに会いに本局まで個人転送で戻っていたのだが、最近戻るに戻れなくなっている。

預かってくれているユーノにもそうだが。

何より、ヴィヴィオが可哀相であった。

「……今日はちょっと無理だからまた今度、になるかな……？」

「……ヴィヴィオがすっかりしてるのは解るけどよ。」

私が言うのも何だけど、あんまり良い事じゃねえんじやねえか？」

ヴィータの言葉になのはもうなだれる。

解っているのだ。なのはもかつては幼少時、一人ぼっちだった時があるから、何とかしたいとは思うのだが……

「ま。今は仕方ないんだろうけど、時間が出来たらちゃんと、会いに行ってやれよ？」

「……うん。ありがとう、ヴィータちゃん」

「……おう。それといい加減休もうぜ。」

ちゃんと休んで置かないと明日持たないぞ」

「うん」となのはは頷き。コンソールを操作して表示されたウィンドウを閉じる。

そして、なのはは背を向け続ける。同僚にして親友に言葉を掛ける。

「本当に、ありがとう」



アースラ艦内に警報が鳴り響く。

感染者発見の警報だ。

次いで、艦内に官制のシャーリーからアナウンスの声が響く。

「各前線メンバー、及び。セイヴァーはブリーフィングルームに移動して下さい」

「……前線メンバー全員だと？」

そのアナウンスにシオンが疑問の声を挙げる。  
アースラで前線メンバー全員を集める事は滅多に、と。言うより1  
番最初の複数発生した感染者の時だけだ。

「どしたんだろ？」

報告書を作成するためにスバルとティアナと一緒に自分のディスク  
にいたシオンの疑問にスバルもまた声を上げる。

「とりあえず、行ってみましょ」

ティアナの声にスバルとシオンも立ち上がる。

何やら嫌な予感がする。

シオンの直感はそう告げている。

「……また、複数発生とかじゃあねえだろうな？」

「流石にあれ以来もう無いし、それは無いと思うけど」

シオンの声にスバルは否定する。

最初の感染者事件の被害はかなり大きな物だった。人的被害こそな  
かったが。

あの死んだ森は未だ、白い死のまま取り残されている。

「わかんないけど、嫌な予感だけはするわね……」

現実主義であるティアナもまた二人と同意のようだ。

「ま、着いたら解んだろ」

そう言いながらブリーフィング・ルームに急ぐシオンに二人も続く。  
・・・結果として、感染者の複数発生と、言う事ではなかった。  
'それ以上'の事態が今、進んでいたのである。



「皆、集まったな？」

ブリーフィングルームに前線メンバーと各官制が集まったのを確認してはやてが声を挙げる。  
シオン達もそれぞれ着席しそれに頷く。

「それじゃあ、シャーリー。皆にデーターを」

はやての声にシャーリーが応え、前線メンバー全員の前にウィンドウが展開し、それを見た一同が首を傾げる。

第307管理外世界。無人世界だ。だが、その世界は巨大生物が闊歩する世界である。

「一体………？」

データーを見たシオンから声が挙がる。

そう、データーに印されて感染者は一体。

しかし、その感染者を中心として円状に黄色い線で他の地域と区切られている。

それを見てしばらく訝しいんでいた前線メンバーだが、その意味に気付くと顔を蒼白にさせた。

「ちょ………！これ、もしかして……！」



「そう、そのもしかして。や」

シオンの声をはやてが肯定する。

シオンは茫然して、次の言葉を紡いだ。

「第、2。段階……」

かつての悪夢、汚れた産声。

その存在が再び、現れた。

「……今回は報告が遅れた訳でもない。

ましてや周辺管理内世界隊員達はよくやってくれた。

……けど、間に合わなかったんや……」

局員が駆け付けた時。既に感染者は第2段階になり、それを知った局員達は即座に強装結界を張った。

まず、合格と言える対応である。

だが、感染者は今度は結界を破壊に掛かった。

今、結界の境界線は局員と感染者が大地と同化した所から生み出した触手と戦闘中である。

だが感染者本体。及び、その核を破壊しない限り、無限の再生力を持つ感染者では旗色が悪く。

局員は次第に追い詰められつつあった。

「今の段階やと、はっきりいって。結界の維持で手一杯や。

そこでシオン君の意見も聞きたい。

どういう作戦でいけばいい？」

はやての言葉にシオンは悩む。

第2段階相手なら、まずその防御を貫く必要がある。

そして核を露出させて、その核を貫かねばならない。

「……まず、結界維持組と対感染者本体組とに分かれて、行動したほうがいいですね」

「ふむ……」

その後は言わずもがな、だ。

そのチーム分けをはやては考える。

まず、空戦可能。これが絶対条件だ。

地面に足を付けたら喰われて感染者の出来上がりである。それだけは駄目であった。

続いて火力。

なのは、フェイトクラスの火力がいる。

そして、スピード。

結界に入ってその結界内全てとも言える感染者を相手どらなければならぬ。

「……うん。ならこんなチーム分けはどうやろ？」

結界守護チーム。

スターズ3、4。

ライトニング3、4。

N2R少隊

アーチャー

感染者本体撃破チーム

スターズ1、2。

ライトニング1、2。

セイヴァー

ブルー

レッド

「今回シグナムとヴィータはそれぞれアギト、リインとユニゾンしてもらおう。

尚、なのは隊長とフェイト隊長はそれぞれファイナルリミットブレイク禁止や。

……それとシオン君も、精霊融合は最悪の状況になるまで禁止。いいな？」

「はやてちゃん……」

はやての命令になのはが弱々しく呟く。

今、はやてが禁じたのはなのはのブラスター・モード。

フェイトの真・ソニック・フォームである。

だがシオンは別であった。精霊融合、その反動は無視できるものではない。

故にこそその最終手段。

本当に最悪の事態の場合、シオンの精霊融合に賭けるしかないと言いう事だ。

「……ごめんな。シオン君」

「謝んなくて大丈夫ですよ。」

俺としても初っからそのつもりです」

はやての謝罪にシオンが笑いながら言う。

シオンにとってみれば寧ろ禁じられるほうがキツイ。

「……うん。なら言い変えよ。」

……ありがとな。シオン君」

「それならば、どういたしまして。と返します」

はやての礼にシオンも返す。  
場が少しだけ明るくなった感じがした。

「よし、ほんなら皆。  
行こう！」

『了解!!』

はやての掛け声に皆元気よく返事を返す。  
今回は最初っからの第2段階。  
アースラとしては実質最初の第2段階攻略作戦が始まる。



管理外第307世界。

その一画で第2段階に至った感染者を封じ込めた結界の境界線で時  
空管理局局員側と感染者が作りだした触手が激しい戦闘をくり広げ  
ていた。

結界の内部にいる局員。空戦魔導士が触手に砲撃を叩き込む。  
触手の先端が吹き飛ぶ。  
しかし、瞬時に再生。  
触手が局員に巻き付く。

「く……っ!!」

巻き付いた触手から黒い点がこぼれる。  
それを見た局員から血の気がひく。  
これが全身を覆いつくした時、自分はアポカリプス因子に感染され  
る。  
それは死を意味する。

ポコポコと溢れ出す因子が局員を包んでいく。

（助け……！！）

助けを呼ぼうとしたがその瞬間に絶句する。

自分と共にいた同僚もまた触手に捕縛されている。

（万事……休すか。

だが、感染者などにはならない。

せめて人として……）

永唱開始。

その魔法は砲撃魔法だが、只の砲撃魔法ではない。

バリアジャケットを一部解除。

その部分は心臓だった。

デバイスを逆手に持ち。突き付ける。

（……これで……！！）

砲撃を放つ。

だが、次の瞬間。

「駄目……！！！！」

（な？）

一直線に疾る青の光が触手を破碎する。

「あれ、は……」

局員が茫然と呟く。

走る光は鮮やかな青と紫。

スバルとギンガだ。

二人はウィング・ロードで縦横無尽に疾る。  
あたりの触手は全てなす術なく消えていく。

「アースラの連中か……、間に合った。か」

自由を取り戻した局員達にスバルが大声で叫ぶ。

「独立航行部隊アースラ前線メンバー。ナカジマ二等陸士です!!  
大丈夫でしたか!」

その声に局員達は手を挙げて返礼する。

「よかった……」

ここから先はアースラ隊が受け持ちます。

貴方達は後退を!!」

そう叫ぶとスバルは新たに生えた触手に向かって走る。  
それを見ていた局員達だが。

「……後退を、か。

だが、女の子だけに戦わせちゃあ男が廃るな」

仲間達と頷きあう。

「よし、これより第705武装隊はアースラチームを援護する!!」

結界護衛班!!」

気を抜くなよ!

行くぞ!!」

応。応。

と声が挙がる。

そして先行するスバルとギンガを追うように局員達は空を駆けていった。



感染者本体はイカのような形をしていた。

と、言うよりもイカをまるごと串に刺しているような感じか。

なんせ、イカの足の部分から一本。

地面に向かって柱が突き刺さっているのである。

取りあえず当分イカは食えねえな。

それだけをシオンは確信する。

なんせ30メートル台のイカだ。

考えて欲しい。

あのイカが大きさ30メートルである。

はつきり言って気持ち悪い。

ふと、周りを見るとやはりと言うべきか。女性陣。・・・詰まる所

シオン以外だが全員何となしに腰が引けている。

イカの形状をした感染者に目を戻し。

・・・即座に後悔した。

「R O O O o o ! !」

感染者の叫び声と共に感染者の、全身、から足がビチャビチャと生えてくる。

訂正しよう。当分イカを見るのも嫌になってきた。

シオン自身でここまで引くのだ。当然と言うべきか女性陣が一斉にきっかり2メートル下がる。

つまりは自分だけ取り残されているのだが。

「……さっきの威勢の良さは何処に行ったんスカ……」

「えっと、でも。ね」

アレは無い、て思うの……」

なのはが珍しく涙を目に浮かべて、感染者の名を借りたイカもどきを指さす。

フェイトも同意とばかりに首を激しく縦に動かす。

「……て、言うかヴィータ副隊長はともかく。

……シグナム副隊長？

なんでそこまで下がる？」

「……………いや、ああいう奴にちよつと嫌な思い出が、な」

なのは達よりさらに1メートル程後ろに下がったシグナムが流石に弁明する。

思い出すはまだ闇の書の守護騎士だったころ。

はやての為に収集を行っていた時の事。

砂竜に不意を突かれて触手で全身グルグル巻きにされた事があった。あれ、以来不名誉な仇名で呼ばれたりした原因ともなった事がある。察しの良い読者ならば理解してもらえると確信しているのであえて説明はしないが。

「……てか、こいつ。わざとじゃ、ねえだろうな……………」

「ROOOOー！！」

見事にこちらの士気をくじいてくれたものだ。

《皆、気持ちはよくよく解るけど……勘弁してや……》



はやてから通信が入る。

それはそうだろう。

折角残りのメンバーと局員達で結界を守ってくれているのに。

「……ですね。ほら、皆。」

「うん……、ゴメン。」

……じゃあ。皆。作戦通りの位置に！！」

シオンに促されて皆それぞれのポジションにつく。

イカもど（感染者と呼ぶには何かプライドが許さなかった）は攻撃をしてこない。

それを怪訝に思うが、訝しいんでも仕方ない。

《……よし、皆。ポジションオツケーやな？

作戦開始！！》

はやての言葉と同時にヴィータとシグナムから『ユニゾン・イン』と、声が響く。

と、同時にフェイトからプラズマ・ランサーが十五発なのはからアクセル・シューターが二十発飛ぶ。

イカもどの表面で光芒が閃く。

だが持ち前の再生力で回復しようとする。

だが、それを騎士と剣士は許さない。

「うおおー！！」

初手はヴィータ。

ギガント・シュラクがイカもどに叩きつけられる。だがそこは軟体生物。

叩きつけられた衝撃を見事に受け流す。

しかし、これで解った事がある。  
軟らかい、と言う事はつまるところ、甲殻を持たない。と、言う事だ。

則ち、炎の将。シグナムの面目躍如である。

「レヴァンティン!!」

エクス・プロージョン!!

《炎熱加速!!》

シグナムの、レヴァンティンの、アギトの声が響く。  
放たれるは火竜が乱撃!

「『火竜・乱閃!!』」

シュランゲ・フォルムのレヴァンティンがイカもどを囲み。  
そして、一瞬で全身を引き裂いた。さらに、止めとばかりに爆発が起こる。

「G、G A a a a a a!!!!」

イカもどが悲鳴を挙げる。

しかし、更なる追撃がその苦痛をさらに引きずり出す。

「イクス、ブレイズ・フォーム」  
トランスファァー。

イカもどの直上。ブレイズ・フォームになったシオンが居る。  
放たれるは更なる乱撃。

「神覇・弑ノ太刀、剣牙。連牙!!!!」

フル・ドライブ！！

二振りのナイフを振るう。

それが幾十の斬閃となってイカもどを襲う。

斬閃はイカもどをさらに細切れにする

再生すらも叶わずイカもどは悲鳴を挙げようとして・・・それすらも光へと消える。

放たれるのは今までとは比較にならない桃色と金色の光。

イクシード・モードのなのはとザンバーとなったバルデッシュを構えるフェイト。

「エクセリオン・バスターーーーー！！！！」

「ジェット・ザンバーーーーー！！！！」

叩きつけられた殲滅級の一撃。

イカもどはその形の全てを失う。

「コアは任せろ！！」

アイゼン！！」

了解！！エクス・プロージョン！！

ツェアシュテレーン・フォルム！！

ギガント・フォルムから更にドリルと噴射機が迫り出す。

感染者相手に必要なのは再生させずに倒す事だ。

つまり大威力の連続攻撃でコアを即座に露出させ、潰す。

その点で言えば、はやてが立てた作戦はまさしく正しく合格だろう。

・・・そう、イレギュラーがなければ。

なのはとフェイトの一撃の光が消える。

しかし、そこにはコア等無かった。

《……………ッ!!》

《……………ッ!!》

「コアが……無い……?」

そこにあるのはただ空っぽの空間だけ、何も無い。

しかし、シオンは嫌な予感を覚えていた。

そう、確かイカもどからは、一切の、攻撃が無かった。

冷静になって考えれば有り得ない。

なら、どう言う事か。

答えは地面から出てきた。

イカもどの触手がいきなり地面から出現し、

1番上空にいたシオン以外を瞬時に絡めとる。

「な……!!」

「え……!!」

「なんだよ!!これ!!」

「く……!!」

更にシオンも拘束しようと触手が迫るがシオンはイクスで斬り飛ばす。

「皆!!」

シオンが助けようとなのは達に近付くが触手が次々に現れシオンを近付けさせない。

そして、地面から先程消えたばかりのイカもど本体が出てきた。

そこでシオンは気付く。

先程のイカもどは何だったのかを。

「擬似餌……か!」

「んう……!!」

「ふう……!!」

「ぐっ……!!」

「つつ……!!」

四人が苦しそうに呻く。

更に最悪な事に触手から零れる黒い点。  
アポカリプス因子だ。

「……………最悪。だ」

残る手立てはあと一つ。

精霊融合。

しかし……

《…………シオン君。》

「……………解ってます。解ってますよ!

……………チックショオ!!」

はやての呼び掛けにシオンがいらだたしげに答える。

今、戦えるのはシオン一人。

この状況で精霊融合は使えない。制限時間を過ぎれば終わりだ。

そしてこのイカもどを制限時間内に倒せるか否か?

余りにも分の悪い賭けにはやても許可を出せない。

(どうすりゃ、いい!!)

シオンには砲撃は使えない。

故に、今この状況ではコアの露出も出来ない。

（俺は、この期に及んで無力かよ!!）

シオンの自問自答。

接近戦に特化し過ぎたスタイルがここまで仇になるとは・・・

思い出すは一人の男。

その男は槍を持ち。

ありとあらゆる場面で危機を危難をぶち貫いていた。

（あの力が欲しい……!!）

願う。強く。強く。

だがその願いは届かない。

奇跡は起きない。

斬り飛ばした触手は八十を超す。

しかし、再生した触手が更にシオンを襲う。

四人への感染はそれぞれ、フィールドを張ることで何とか堪えているが、あれでは時間の問題だ。

（どうすりゃ、いい!!）

どうすりゃあ!!）

シオンの内なる問いに、しかし答える者は居なかった。



「スターズ1、2。

ライトニング1、2。

未だ。拘束!!」

「セイヴァー。なんとか堪えていますけど、  
このままじゃあ……!!」

官制二人の声にはやてもまた顔をしかめる。  
感染者にして、やられた。  
まさか擬似餌とは。

（そんな知性ない、て決めてかかったんがまずかった……！）

はやての胸を占めるのは過ぎた後悔。

しかし、それをはやては頭を一振りし追い出す。

（後悔なんて、後でも出来る！！）

……今、やる事は一つや！！）

「……グリフィス君」

「行かれますか？艦長？」

こちらが言う前にグリフィスから声がかけられる。

はやてがそれに頷き返した。

現状。他の前線メンバーを送る事は出来ない。

しかし、隊長陣を感染者などにするつもりはない。

なら、後の選択肢はない。

はやて自らの出陣だ。

そこまで読み切った副官にはやては信頼の笑みを浮かべる。

「……うん。今からアースラの指揮権をグリフィス君に委譲。

私はあの状況を止めてくる！！」

「了解！！」

……艦長。お気を付けて」

それはグリフィスの心からの言葉。

はやてもまた頷く。

「よし、それじゃあ……!!」

「え……。何、この反応……」

しかし、次の瞬間。シャーリーから声が挙がる。  
はやてもグリフィスもそちらのモニターを見る。  
そこには。一人の人が浮かんでいた。

「……オーバーS?

違う。何、この反応。

何なの!？」

「シャーリー!! 落ち着いて! 何があったんや!」

「艦長……これ、を見て下さい」

シャーリーが呼び出したデーターをはやての元に送る。

「これ、は……?」

はやてもまた呆然とする。

そのあまりにも出鱈目なデーターに。

《……あああつ!!!!!!

テメエエエエエ!!!!!!》

「つ!! シオン君!？」

はやてがその叫び声の主の名を呼ぶ。

そこには怒りに我を忘れて魔力を吹き出すシオンがいた。





それはいきなり起きた。  
イカもどが急に動きを停めた。  
シオンもだ。

（一体。何が……？  
っ………！！！？）

そして、それは起きた。

なのはは、フェイトは、ヴィータは、シグナムは生まれて初めて。  
‘気配’で空間が軋む音を聞いた。  
濃厚過ぎる気配。

もはや一種の物理現象とまで化したそれ。  
なのははそれを、まるで巨大な怪物の胃袋に入った気分と感じた。  
あまりの重圧。

そして、その気配の主は唐突に現れた。  
四角の窓を思わせるモノが現れ、そこから漆黒の男が現れる。  
バリア・ジャケットなのか全身、黒。

半袖だが左右非対象。右の袖は肩口まで、左の肩口は長く。肘まで  
ある。

下は、ふっくらとした黒いズボン。

そして、頭は右半分の顔を覆い隠すようなフード。

故に左の顔が現れているのだが、それもフードの前部分のせいで目  
元が解らない。

そして、両の拳のグローブ。

特に右手が異質だった。

まるで鍵を思わせる拘束具が手の甲を覆っている。

その右手に描かれるは・・・

666

の文字。

(……………っ。

あれ、が……………?)

理解した。

あの男こそがシオンの探し人。

予言にありし。666の獣。つまりは。

ナンバー・オブ・ザ・ビースト

666がシオンの方向を向く。

なのは達からは背中しか見えない。

故にシオンが何を見たのかも解らない。

だが、次の瞬間。シオンは吠えた。

「……………あ、あ

ああ、あああああ!!

……………テメエエエエエ!!!!」

叫ぶと、同時に魔力が吹き出す。

柱のように激しく。

しかし、666はそれを見ない。

666が行ったのは唯一つ。足を30センチ上げた。

そして、それを下ろした。

それだけ。

しかし、それだけで変化は起きた。

空間が震える。

世界が震える。

イカもどもまた震えた。

そして、666を中心として触手が千切れ、細切れになる。

まるで連鎖のように。

全ての触手が滅っしていく。

四人を拘束していた触手もまた消えた。



ノーマル・フォームに戻ったイクスの先端を666の背中に向ける。  
シオンは砲撃を持たない。  
故に届く一撃を持たない。  
しかし、シオンはそれでも思う。願う。祈る。  
頭を過ぎるのは鎖。  
一降りの刀を封印するかのように巻き付いた。鎖。

(邪魔だ……………!!)

理解する。この鎖は自分を封じるものだ。  
ならば引き千切れればいい。  
頭に思い浮かぶは一人の男。  
カバラ式でありながら遠距離の相手すらぶち貫いた。その槍の使い手。

鎖が軋む。  
そして、音をたてて切れた。

……………ウィズダム・フォーム。  
モード。リリース。

イクスから声が挙がる。  
それは自らの新たな到達点。  
新たな力。

シオンは迷いなくそれを引きずり出す!!

「イクス!!モード・セレクト!、ウィズダム、……………!!」  
トランスファー!!!!!!

そして、シオンはイクス共に光に包まれた。



「シオン……君……？」

なのはが呆然と呟く。

シオンは今、その姿を変えていた。

纏うバリア・ジャケットは青。

そして、半袖半ズボンだった服は長袖長ズボンになっている。

背に広がるは幾何学模様の2対4枚の翼。

そして、最大の相違点。

右手の持ちし、突撃槍、（ランス）

その槍は突撃槍としては小さめだ。

どちらかと言えば。

短槍のイメージ。

そして、シオンがイクスを666に向ける。

呟える。

「届け………」

呟える。

「届け………！」

呟える………！！

「届け………！！」

そして突撃槍は弾けた。

、内側、から、

「な……………っ！」

最初からそういう代物だったのかパーツが刃の部分が分かれ。展開する。

先端がロケットみたいに突き進む。

魔力内蔵型。

それがウィズダム・フォームのイクスの姿だった。

だが穂先はが届く前に、666はその姿を消す。

「ちい……………！」

舌打ちし、展開したイクスを戻す。

そのまま666を追おうとして。

「シオン君!!」

触手がシオンに殺到した。

いつの間に復活したのか触手が四人をそしてシオンを襲う。

しかし、シオンはそれを構えもせず受け止めた。

プロテクション。

しかし、その強度の恐ろしいまでの物。

なのはのソレに匹敵する。

「……………邪魔だよ……………」

殺気だった目でイカもどを睨む。

そして、親指を噛む。

精霊召喚。

それに気付いたはやてが制止する。

《シオン君!!アカン!!》

しかし、シオンは聞かない。  
頭に浮かぶは今の自分のスキル。  
精霊融合とは違う。  
新たな力。

(…………試させてもらうぜ?)

眼下のイカもどを見るシオン。  
その目は死刑失効者のそれである。

「契約の元。我が名、我が血を持って。  
今、汝の顕現を求めん。

汝、世界をたゆたう者  
汝、世界に遍く意思を広げる者。  
汝、常に我と共に在る隣人」

唱える。そしてシオンの足元から広がる魔法陣。  
セフィロトの樹だ。

「今、此処に汝を召喚する。  
汝が枝属は、水、  
汝が柱名は、ウンディーネ、」

シオン自身、この精霊を呼ぶ事は滅多にない。  
しかし、今頭に浮かぶ。二つの四神奥義。その一つはこの精霊が相  
応しい。

「来たれ。汝、水の精霊。ウンディーネ、!!」

そして、それは現れた。  
水で構成された人魚。  
その姿はあまりに美しかった。

《シオン君!!!》

「イクス!!!」

イクス・カリバー。

フル・バレル  
全兵装

フル・オーバーン  
全開放

フル・ドライブ  
超過駆動

スタート  
開始

イクスの声に従い。イクスが展開する。  
しかし、そこからが違った。

精霊がイクスに吸い込まれていく。

《な……………!!?》

「え……………!!?」

はやてとなのはが驚きの声を挙げる。  
そして、シオンは叫ぶ。  
新たな自らの力を。

「精霊・装填!!!!」

スピリッツ・ローディング!!

精霊装填。

融合ではなく、イクスに精霊を装填する事により、たった一発のみ。  
だが、必殺の一撃を放つスキルである。  
融合程の反動がなく。またヒトを越える。と言う意味すら無い。



兵器としての、スキル。

スキル・ランクSSS＋スキル。

シオンは今、それを開放する。

「神覇・八ノ太刀。奥義。玄武!!」

フル・インパクト!!

突撃槍が展開し、イカもど大地と繋がっている柱の部分にささる。そこからまるで亀の甲羅を思わせる魔法陣が走る。それは分解して、四人に、そしてシオンの前に展開する。

「これ……………?」

触手が呟くのはに襲い掛かるが甲羅がそれを許さない。襲い掛かる触手を次々に弾いていく。

「すごい……………」

フェイトもまた呟く。

この甲羅、どれほど硬いのか叩きつけられる触手にビクともしない。

「無駄だ。」

お前にそれは貫けない。

」

シオンがイクスを降ると残る甲羅から蛇が次々と現れ、イカもどを拘束する。

神覇・八ノ太刀。玄武。

絶対防御。並びに絶対拘束能力を持つ技だ。

いくら感染者であろうとこの技には抗えない。

「今、此処に汝を召喚する。

汝が枝属は、雷、

汝が柱名は、ヴォルト、

来たれ。汝、雷の精霊。、ヴォルト、！！」

シオンは新たにヴォルトを召喚し、装填する。

「……死ぬ準備はできたか？イカもどき？」

「シオン………？」

シグナムが信じられないものを見るようにシオンを見る。  
しかし、シオンは取り合わない。

その目はただひたすらに冷徹だった。

そして、シオンは二つ目の奥義を開陳する！！

「引き裂き！

喰らい尽くせ！！

神覇・九ノ太刀。青龍！！」

フル・ドライブ！！！！

掲げるイクスが展開し、内蔵された魔力が龍と化す。

それは龍の化身。<sup>アヴァター</sup>

今、ここに暴れ狂う龍がシオンの手により生まれ落ちた。

「ブチ、貫けー！！！」

ゴー・アヘッド！！

龍がイカもどに突っ込む。

一撃が貫通し、しかし。そこで収まらない。

そのまま首を擡げ、  
イカもどを喰らう。

「シオン……君……？」

なのはもフェイトもヴィータもシグナムも信じられない目でシオン  
を見る。

これは、ダレだ？

自分達が知るシオンと遥かに掛け離れたシオン。  
暴虐に笑い。叫ぶ。

「ハ、ハハハハハハハハ！！！！  
喰らえ。引き裂け！！！」

喰らう。

喰らう。

喰らう。

それはもはや戦いではなく。

一方的な殺戮。

やがて、イカもどの体内から龍がコアを喰らったまま出てくる。

シオンはそれを見て左を掲げる。

五指をゆつくりと閉じていく。

「…………喰い殺す…………」

コアにヒビがはいる。

それを見てシオンが暴虐の笑みを浮かべ。

そして握り潰さんとした瞬間。

「シオン！！！！！！」

声が響いた。



「シオン!!!!!!」

その叫びは殺戮の処刑所にあって清廉に響く。  
ウィング・ロードに乗りスバルが叫ぶ。  
前線メンバーの皆が居た。

「皆、どうして此処に……………!?!」

「シオン兄さんがおかしくなった、て聞いてスバルさんとギンガさん。  
ん。

ノーヴェさんのウィング・ロードでここに来たんです!」

エリオが答える。

結界エリアに既に感染者は無く。

シャーリーからシオンがおかしくなったと聞き慌てこっちに来たのである。

「シオン、駄目だよ……………」

そんな心で戦っちゃあ、駄目だよ」

「俺、……………は……………」

暴虐の龍が消える。

コアが落ちる。

それをシグナムが両断して。漸く。感染者は完全に滅んだ。

「今……………俺……………なに、を……………?」

「シオン？」

シオンは自分の両手を目の前に持つてくる。  
震えていた。  
カタカタと、まるで子供のよう。

「シオン……シオン！！」

「俺……は」

スバルが叫ぶ。

その瞬間。

シオンは糸が切れたように意識を失った。

（第十一話に続く）



ト  
ト  
ト  
ト  
ト  
ト  
ト  
ト  
ト。

ア

「……!!!!」

す

「お！！！！」

ア

「アリサ！」

す

「すずかの！」

ア、  
す

「チキチキ！ アリサ道場！！」

ア

「久しぶり。初めまして。」

当道場の主、アリサと  
す

「弟子のすずかです！」  
作

「んで、作者です」  
ア

「これ、何？と、思う方がいるでしょう。  
とってもわかりやすい事を言うの後書き。タ〇ガー道場版です。」  
す

「そして、まず出番がなさそうな私達にお鉢が回ってきた訳だね。  
アリサちゃん」  
ア

「葛あ~~~~っ!!」  
す

「痛!なんで叩くの!しかも竹刀で!!」  
作

「俺もかよ!!」  
ア

「決まってんじゃない。すずかは私の弟子なんだから師匠。て呼ば  
なきゃいけないのよ!!」  
す

「う……………そうなんだ?  
そう言えば私達のこの格好。」  
ア

「袴とブルマね……………ちなみにその作者？」  
作

「何だよ？」  
ア

「これ、誰の趣味？」  
作

「俺だが？」

ア、す

「……………」

作

「やめ、やめ、無言で近付くな！！怖いわ！！」

ア

「……………まあ、いいとしましょう」

す

「私は納得出来ないんだけど……………！」

ア

「大丈夫。似合ってるわよ？……………適度にエロくて」

す

「ガァァァン！」

うう、何が悲しくてブルマ……………」

作

「まあ、そういう仕様だし」

ア、す

「「アンタが言うな！！！！！」」

作

「これ以上話を伸ばすのもあれだし。まず一つ！！！」

ア

「ん？」

す

「どうしたの？」

作

「スンマセンした！！！」

ア、す

「「ど、土下座……………」」

作

「いや、流石に洒落にならんくらい遅れたしさ。本編も途中で終わ

りみたいな形になったしな」

ア

「ま、確かにね〜」

す

「と、言うかこの道場自体が本編の鬱展開に堪えられない作者が作ったものですもんね」

作

「ま、ね。第二部はほぼ鬱展開だからな〜」

ア

「ま、仕方ないと言えば仕方ないんだけどね」

す

「まあ、だからここではお笑いをやろうと？」

作

「そう言う事ですな」

ア

「ま、でも今回はなんといってもイカもどよね？」

作

「…………いや、確かに悪ノリし過ぎたとちょっと反省してるんだけどな汗」

す

「本編の緊迫感。かなり台なしだね？」

作

「うう、すみません…………」

ア

「イカもどもそうだけど666強すぎでしょ？  
アレは駄目でしょ？」

作

「いや、あれに関しては全然オツケー」

ア、す

「「え〜〜〜〜」」



作

「いや、マジでマジで。ぶっちゃけ第二部は666VSアース組なんだけど。……あんくらい強くしなきゃあ驚異にもならない言う。

……アース組。強すぎです」

ア

「確かに原作でも六課の戦力は異常とか言われてたけどさらに戦力上がってるしね」

作

「しかも666は単体だからな」

す

「うわ~~~~」

作

「ま、てなわけで主人公最強ではなく。その敵が最強なのですよ笑」

ア

「でも、666で、どんくらい強いのか？」

作

「内緒に決まってるだろうが!!」

す

「そこを目安だけでも・・・」

作

「……まあ、レベルに例えるなら666はレベル93くらい。シオンは40くらいだな」

ア、す

「は、半分!」

作

「そんなくらいしないと壁にすらならないからな……さて、んじやあ今日はこの辺で。」

それと、いつも評価、感想ありがとうございます♪

いつも励みにさせて頂いてます♪

今後とも末長くよろしくお願いします♪  
ア、す

「それでは！また次回くくく」

## 第十話「ウイズダム・フォーム」(後書き)

予告「告げられるのは悲しみ。そして、絶望」 「アポカリプス因子により遂に最悪の事態は起こる」 「その時、

シオンは選択する。一か十かを」 「そして、666は」

「次回、第十一話「ナンバー・オブ・ザ・ビースト」

「魔王は爪痕だけを残す」

## 第十一話「ナンバー・オブ・ザ・ビースト（前編）（前書き）」

「恐怖。と言うのは誰にでもある。」

「夜の闇が怖い人。」

架空のお化けが怖い人、色々だ」

「でも、私

はそんな事よりも余程怖い事がある……」

「そ

れは無くす事。ひとりぼっちになってしまう事。」

「周りの人が居なくなる、と言うのは私にとって。ただただ恐怖

で」 「魔法少女リリカルなのはStS，EX始まります」

## 第十一話「ナンバー・オブ・ザ・ビースト（前編）」

神庭シオン

（ウィズダム・フォーム）推定魔導士ランク…S

イクス・ウィズダム

ランス  
突撃槍

追加アビリティー・スキル

スピリッツ・ローディング  
精霊装填スキル・ランク…SSS+

世界端末意思存在である所の精霊をデバイスであるイクスに、装填する事で一撃のみだが強烈な一撃を使用可能とする。

精霊融合と違い、反動等はないが、その魔力消耗はかなり高い。

（シオンが二発しか撃てない程）

元来の精霊を召喚しての戦いは実質こちらが普通。

精霊融合は使える者がまず極少なく、また反動がとてつもない。

そのため、この精霊装填が基本的な主流となった訳である。

なお、精霊融合とは違うため、融合のような付加効力もまた、ない。

追加技。

神覇・八ノ太刀、玄武

威力AA

速度A

効果範囲1～1000名

神覇ノ太刀に於ける奥義。四神の名を冠する技である。

発動と、同時に亀の甲羅を思わせるシールド・ビットを展開する。

最高千人もの人間をガードでき、さらに甲羅一枚一枚がなのはのデ  
イバイン・バスターの直撃にも耐えうる。

さらに甲羅から蛇のようなバインドで敵対象者を捕縛できる。

このバインド。実は概念的に、異質、を取り払う術式が編まれている。

つまり、捕まると一切の魔法の使用が不可能になる。

対人としては最高レベルの捕縛術であり。

その性能から

絶対防御・捕縛魔法とも呼ばれる。

なお、現状シオンはウンディーネを装填せぬ限りはこの技を使えない。

神覇・九ノ太刀、青龍。

威力SS+

速度A

効果範囲1〜100名

神覇ノ太刀の奥義にして唯一の砲撃魔法。

龍の化身を生み出す事により絶大な威力を持ち。

また、技を解かない限り対象を追い掛ける。

シオンの意思に応じて操作も可能。

その威力と操作性から

絶対貫通魔法とも呼ばれる。

なお、現状シオンはウンディーネとヴォルトを装填しなければこの技を使えない。



夜は怖い。

それは恐怖、畏怖の象徴であり、シオンにとっては死のイメージであつた。

故に夜の森で少年にチョップで黙らされたりもしたものだ。けどある少女と出会いがシオンを変えていった。

その少女は不思議な人だった。

大人しいとかおしとやかとかそんなイメージをシオンは第一印象で抱いていたが、出会って三分でそのイメージは崩された。

「シオン、て言うんだ？ いい名前だね。」  
ねえ……？

「アンタ、何してんの？」

「いや、初めて顔を合わせるからお土産でもと」

「……ふうん。」

……で、その掌で隠した中には何があるのかな？」

「勿論お土産」

「……見せないさい」

「……………」

「三度はないわよ？」

「見せないさい」

直後少年はダッシュ。

しかし、少女は瞬間で少年に追い付く。

「必殺！！スラ○ユ・キ~~~~ック！！！」

「それは色々問題があると思っ！！ぐはっ！！」

と、出会いからして珍妙な夫婦漫才を繰り広げた。

因み掌の中にはカエルが入っており、少女は苦手だったのかさらに少年に蹴りを喰らわせていたのを後述する。

お世辞にも人懐っこくなかったシオンはドン引きした。

最初の印象からか、少女にひたすら恐怖をいただいたが、段々そのお転婆な少女が大らかな母性を併せ持つ少女と解ってきた。それはある夜の事。

また森の中で迷子になった自分を捜しにきた少女との話し。

「さて、シオン。」

「なんでこんな夜に出掛けたのかな？」

「……………」

「大丈夫。怒らないから言ってごらん？」

「絵……」

「絵？」

自分の言葉に逐一頷く少女にシオンは洗いざらい自白した。

シオンは子供の頃、秘密基地を作って遊んでいた。

・・・当然。木や草とかで作った簡素なものだったが。

シオンはその秘密基地を森の奥にある大きな木に作っていた。

そこから見る風景が好きだった。

だからシオンは当時から好きだった絵を描いた。

で、その絵を秘密基地に置いていたのだが、

明日に台風が来ると言う。当然秘密基地は持たないだろう。

そして絵も。

秘密基地も守りたかったが、絵の方が大事だった。だから、絵だけでも取りに行きたかった。

でも色々、剣の修業とか魔法の修業とかで行けなかったのだ。

だから全部終わった後に秘密基地に向かったのだが、そこは夜の森。当然、日頃遊んでいる風景とは違う。

そして、シオンはあっさりと迷子になった訳だ。

「そっか……」

「…………ごめんなさい」



全てを話し終えた後、シオンは連れ戻される事を覚悟した。  
しかし、少女はそんなシオンに笑いかけ。

「それじゃあ。行こっか」

と、のたもうた。

あまりに予想外な言葉に呆然としたのを覚えてる。

結局、シオンと少女は秘密基地に向かった。

歩いて向かう最中、いろんな事を話した。

学校の事。修業の事。昨日見たテレビの事。

いつもドツキ漫才を繰り広げる少年の事。

とても楽しかったのを覚えている。

そして、なんやかんやで秘密基地に着いたのだが、そこで唐突に風が吹いて来た。

台風が来たのである。

シオンはあわあわと慌てて涙目で少女を見ると少女はフツと微笑を浮かべると。

「……よし、こうなったらこの秘密基地も守るわよ!!」

と、叫んだ。

あんまりな少女の発言に今度は呆然を超えて絶句した。

少女は一旦言い出すと聞かない性格であった。

あの思いつきのよさはいろいろ見習うべきだと思わざるを得ない。  
結局、二人で秘密基地に上がり。

プロテクションを二人ががりで張った。

二人で大騒ぎしながら台風が過ぎるのを待ったのである。  
気が付けば台風は過ぎていた。

どうも途中で急に進路を変更したらしく。シオン達がいた所を掠め

る形で台風は過ぎ去った。

それに、二人で笑い合った。

いろいろあったけど二人で秘密基地は守れたのだ。抱き合って喜んだ。

そして、シオンは少女と守りきった秘密基地でまたいろんな話をした。

その中で少女がシオンに唐突にある事を聞いてきた。

「……シオン。夜、怖い？」

シオンは少し黙ると頷く。

夜は怖い。不気味だからだ。

暗いのも怖い。

そうシオンが言うと少女は微笑を浮かべて空を指す。

「シオン、見てごらん？」

そして、シオンは暗いはずの恐怖しか感じなかった夜空を見る。

その瞬間、シオンの中に駆け巡ったのは感動とかそんな言葉で言い表せないものだった。

星空。

満天の雲一つない星空がそこに広がっていた。

今でも思いだす。あの星空を、あまりに綺麗なその空を。

その星空を見て、呆然とするシオンに少女が微笑む。

視線を感じて少女を見たシオンはその微笑みを見て、今まで感じた事の無い感情を抱いた。

今思えば、それが初恋だった。

「どう？まだ怖い？」

「……ううん、怖くない」

そう、その微笑みを、その星空と共にシオンはずっと胸中に刻み込む。

その少女の名と共に。

「怖くない。

怖くないよ。……ルシアお姉ちゃん」



「G, G a a a ! !」

断末魔の咆哮が響く。

その咆哮をあげるのは感染者であり、そしてその感染者を冷徹な目で見る存在がいた。

神庭シオンである。

シオンの手にはノーマルのイクス。

あたりには感染者の手や足、だった、ものが散らばっていた。シオンが、残った、部分にイクスを突き付ける。

【シオン！！】

イクスから声がかかる。しかし、シオンはそれを無視。

「……ナンバー・オブ・ザ・ビーストを知ってるか？」

抑揚のない声。もし、数日前のシオンを知る人間がいれば目を疑っただろう。

それ程、シオンは変質していた。

「U，G，a a……」

「……やっぱ、無駄か」

そう言いながら、寸秒も待たずに首を落とす。

その動作に躊躇いも迷いもない、そして、その目に浮かぶ感染者はシオンにとっては屠殺場の豚となんら変わらない。

シオンにとってすれば感染者に当たっていけば666とまた会える可能性があるので。

だから感染者が出ればお構いなしに出撃する。

「……シオン」

一緒に出撃していたスバルが名を呼ぶ。

それに一瞬だけ、シオンは目を向けると。

踵を返す。

「……状況、クリア。

……帰ろうぜ」

「……うん」

スバルは頷きながら、シオンの変貌ぶりを考える。

それはあの時、第二段階との戦いに現れた謎の男。666の出現からだった。第二段階を倒すと同時にシオンは倒れた。

イクスの話しによると魔力消耗とウィズダム解放が原因らしい。

【……シオンは、一つ。封印を解いてしまった】

イクスはそう漏らした。

それを聞いたアースラの皆はイクスに封印とは何なのかを聞こうと

したがイクスはただただ首を振り答え無かった。  
それからだ。シオンが変わったのは、常にピリピリした空気を放ち。  
そして、感染者に対しては一切の情を持たずに惨殺していった。

「……シオン。」

「何だよ？」

スバルが名を呼ぶ。

シオンはそれに返事こそ返すが、一切振り向かない。

「……なんでも、ないよ」

「そうか」

それだけ、スバルは問いたい事を問えず。

そして、シオンもまた話さない。

結局二人はアースラに着くまでの間、無言だった。



「スターズ3、及びセイヴァー帰還しました。」

「スターズ1、2、4。あと300秒で帰還します」

「……………うん。」

スターズ全員帰還後、アースラ次元航行に入ってたな

『了解』

各官制から報告を受けた後、はやては操舵士のルキノに次元航行を  
命令すると、フゥ。と息を吐く。

グリフィスも、官制達からも心配そうな目をはやてに向ける。

はやての悩みであった感染者の異常発生は今の所、納まっていた。

あの第二段階の感染者との戦いの後、急に、だ。

そして、それと反比例するかのように増加している事がある。  
意識不明者である。

もう、100を越える人数が意思不明に陥っている。

そして、あの共通点。

つまり刻印が全員に刻まれていた。

結局の所、はやてはこれをシオンには言っていない。

はやての予想通りになったからだ、シオンが。

1時は艦を降りようとしたシオンだが、何とか説得をくり返して、  
ようやく残ってもらった。

だが、いつ飛び出るか正直、解らない状況が続いている。

(666とシオン君……)

はやての頭を過ぎるのはあのシオン。怒りに我を忘れ、感染者を虐  
殺しようとしたシオンだ。

まさかあれ程感情を表すとは。

シオンにとって666はどんな関係なのか。

はやては思う。自分達ではシオンのあんな感情は出せない、と。

シオンにとって、666はそれ程。特別な関係、と言う事である。

(よくも悪くも、純粹なんやな。シオン君は)

そう、はやては結論する。純粹だからこそ、その感情の発露は不安  
定だ。

それはたやすく、暴走、に繋がる。

「……それに、こっちの問題もあるしな……」

呟きながらコンソールを操作し、データを呼び出す。現れたデータ  
の名前は『グノーシス』。

はやて、なのはの故郷であり。フェイトにとっても故郷のようなものである地球。

その地球にある魔法組織。

ぶっちゃけ、管理局としてはなんとしてでもグノーシスとコンタクトを取り、情報や協力を要請したいのである。

しかし……

「よりにもよって、な〜〜………」

このグノーシスとの交渉を受け持っている人物。

グリム・アーチル提督。

この人物が大問題であった。

ちなみにはやてが管理局において、嫌い、な人物の内5本の指に入る。

性格はきっぱりといって傲慢。

自分より歳若い人間が活躍するのが許せないのか毎回毎回会うたびにこちらに絡んでくる。

実力に見合わない力や権力を欲する傾向にあり、彼のせいでいろいろ苦労させられた人物もまた多い。

はやても機動6課設立の時は散々嫌がらせを受けた。

かのレジアスや最高評議會は自らが考える、平和、の為にはやてと対立する存在になっていたが。

この男にはそんな正義感すらもない。

はつきり言おう。あまりに巨大な組織である管理局が抱える、膿、。

それがグリムであり、それと同じ考えの人間達なのだ。

そんな男が今回の交渉役。

あんまりと言えばあんまりである。

と、言うより管理局は交渉するつもりがあるのだろうか？

このままでは管理局側とグノーシス側とでの争いにも成り兼ねない。そんな状況なのだ。

「…………やっぱり、シオン君に頼まな、アカンかな……」

シオンに頼みたいのは橋渡しだ。が、今のシオンにそれを頼むのは気が引けた。

シオンは命令もちゃんと聞く。

だが、前述の通りシオンは今、不安定だ。

こんな事を頼んだ日にはアースラを出ていきかねない所か、前と同じ状況になりかねない。

「……どうした、もんやろう。ね」

はやてがそう呟くと、同時にアースラが次元航行に入る。

（さて、思案は後回し、やね）

「アースラ、進路は管理局本局に」

「「了解」」」

そして、アースラは久しぶりに本局に戻る事になった。



「……休暇、ですか？」

「うん。そうや♪」

管理局本局。

今、アースラは補給。整備中である。

その為、現在クルー全員に半弦休息を申し送った所である。

そして、シオンに休暇を与える。とはやては言ったのである



「今、アースラは補給、整備中やしね。

大体、シオン君囑託職員なのに、局員より働いとるし」

「……ちなみ、断った場合は？」

「言わんでも解るやろ？」

はやての答えにため息をつく。

確かにここ最近、休みも何も考えずにただただ動き続けている。

ここらで休むのも手か。

その結論に行き着く。

「了解です」

「んで、ついでなんやけど。

これ」

そう言いながらはやてが差し出すのは三枚のチケット。

次元転移による。他世界移動用のチケットだ。

「……これ、は？」

「うん。実はグノーススとの交渉役。私が受け持つ事になってな？」

その言葉にシオンが目を細める。

「俺は橋渡しなんかしませんよ？」

「いや、それは期待しとらんよ。ただ、先方さんから交渉にあたり三名程前交渉、て形で来て欲しい。てなってな？」

つまりは、だ。一度交渉の前に局員に来てもらい。前交渉を行おう。と、言っただけである。

そこでははやてはミッドと地球に詳しい人、と言う事でなのはを。そ

して、交渉人の護衛として、シオンとスバルを指名した訳だ。  
そこで、シオンは首を傾げる。

「どうせ、交渉に行くならフェイト先生の方がよくないですか？」  
「私もそう思うんやけど、先方さんが、なんや地球出身にこだわってな？ んで、これは前交渉と言うよりは親交を少しでも深めたい。て事らしいんよ。」

流石にこのままじゃあ管理局とグノーシスとでぶつかる可能性まで出てきたからな」

まずは衝突回避の為の前交渉と、言う訳だ。  
成る程、と頷くが、そこでシオンは気付く。  
自分が行く意味が無い。と言う事に。

「なら、なんで俺やスバルが？」

「……それについては先方さんの希望や。」

それと、シオンには先方さんから手紙が来てる」

そう言いながらシオンに手紙を差し出す。

手紙の宛て名には

叶・統夜。

と、書いてあった。

スバルの記憶が正しければ叶トウヤとはグノーシスの最高指導者。  
ようはトップだった筈である。

そして、はやてと交渉相手となる人物だ。

何故に、そんな人間からシオンに手紙が送られるのかは解らない、  
何か関係があるのは確実なのだが。

「……………」

シオンが苦虫を飲み込んだような表情で手紙を受け取る。  
内容は気になったが自分が突っ込む所ではない。と悟ったはやては  
あえて何も聞かない。

「出発は今日の午後から。向こうに一泊する予定やね。  
で、私達は本交渉の為に明後日に地球に向かう」

「……………了解です」

話しは終わったとばかりにシオンが退出しようとする。  
ドアのノブに手を掛けた時はやてから声がかかる。

「どうせなんやし、ゆっくり休んでな？」

「……………失礼します」

シオンははやての気遣いにしかし、返す言葉を持てず。答えられな  
いまま艦長室を退出した。



雨、それは生命が生きるのに大切な現象だ。  
雨が降らなければそも、生命は生まれる事らなかったのだから。  
だが、まあそんな高唱な事とは関係無しに、こんな時に雨なんて降  
らなくていいのに。

そう、スバルは思う。

ただでさえシオンのピリピリが酷くなっている。

転移してる最中。

なのはとスバルはよく話すのだが、シオンは口を閉じたまま最低限  
の返事しかしなかった。

そして、地球に着いてみれば今度は雨だ。

何の嫌がらせだろう。

などと考えてしまう。

「失礼します。管理局、局員の方でしょうか？」

突然女性から話しかけられる。  
なのはがスッと前に出る。

「はい。時空管理局。

高町なのは一尉です。

貴女は？」

「ああ、これは申し訳ありません。私はグノーシスの位階『第6位』  
アシエル・リリエスと申します。」

アシエルはそう言いながら名刺を出す。  
なのはもまた名刺を出し、交換する。

「そちらの方は……？」

「あ。スバル・ナカジマ二等陸士であります！」

「……………」

アシエルに聞かれ、スバルが敬礼する。

しかし、シオンは鬱陶しい気に挨拶すらしない。

「ちょ！……シオン！

挨拶しなきゃ！？」

「シオン？……………」

まさか、シオン『様』！？」

‘様’？

アシエルの叫びの内容になのはもスバルも驚きの表情で見る。  
シオンはチツと珍しいく舌打ちする。

「アシエル。俺の事は様なんか付けなくていい」

「そんな訳には参りません！」

ああ、二年も見ない間に随分ご立派になられて。

きつとおにー」

「アシエル！！！」

アシエルの言葉の途中でシオンが叫ぶ。

そして、そのまま首を横に振る。

「…………俺は、もう。グノーシスと関係無い人間だ。だからあの人の事は持ち出すな」

「…………はい」

シオンの強い拒否にそのままアシエルは頷く。

「…………申し訳ありません。お客人を放ってしまい…………」

「いえ、そんな事は…………」

アシエルの謝罪になのはも手を振る。

「…………シオン。ひょっとして、お坊ちゃんとか？」

「…………そんなんじゃない。偉いのは、俺、じゃない」

スバルの問いにシオンはそれだけ答える。

ちらりとアシエルを見る。それを見てアシエルはただ一つだけ頷いた。

「それでは、こちらへ」

アシエルに促されるままついていく。  
雨は未だ止む気配を見せなかった。



グノーシス本部。

しかし、それは別の名前で巨大なビルとして、そこにあった。  
出雲本社。

そこにはそう書いてあった。

「…………ビル。おつきいね〜」

「…………出雲。これが、グノーシスの……」

「はい。出雲コンツェルン。それがグノーシスの表向きの顔です」

そう言いながらアシエルはなのは達を促す。

ロビーを抜け、エレベーターに向かう。

そのエレベーターには1〜80階用の表示があるがアシエルはボタンの場所でコンソールを操作し、そして現れたスリットにカードキーを通す。

すると、エレベーターが、地下、に向かって降り始める。

「表向きの人に地下に来て頂く訳には参りませんから」

アシエルはそれだけを言った。

暫くして漸くエレベーターが止まる。

そこはスバルやなのはの考えてた場所とまったく違っていた。  
人が逆さに。真横に。座って、いるのである。

「さ、参りましょう」

「て、ええ!!」

アレ、スルーですか!？」

スバルが逆さづりの人を指差す。  
それにアシエルも納得する。

「ああ、此処は、足を下にする、と、言う概念魔法がかけられていますので」

「?????」

スバルもなのはもアシエルの説明でもちよつと解らず。？顔を浮かべる。

それに、シオンがフォローを入れる。

「…………つまり、此処じゃあ足が…………正確には両の足の裏な？  
を向けた方に重力がかかるんだよ」

「…………はあ」

シオンの説明でなんとはなしに理解するスバル。  
なのはは思う所があるのかちよつと思索気味だ。

「ほら、なのは先生も。先、急ぎましょう？」

「あ、うん」

シオンの言葉になのはも我に返るとアシエルを追う。  
シオンもスバルもそれに続いた。

その後も奇天烈な光景がいろいろ広がる事になる。

例えば文字から火が出たり。

いきなり身体が軽くなったり。

形を常に変える石があったりとまあ、しっちゃんめっちゃかだ。

そんなこんなで漸く  
『応接間』に着く。

「ここでグノーシスの『第一位』叶トウヤ様がお待ちになっています。

……トウヤ様？  
失礼いたします」

アシエルに続き、なのは、スバル、シオンが応接間に入る。  
そこに居たのは  
華麗に宙を舞う男であった。



あまりの事態に一同凍りつく。  
しかし、時まで凍りつくはずもなく宙を舞う男は当然重力に従い落下。  
頭から落ちる。

「……………」

誰一人として反応出来ない。  
まあ、当然か。

部屋に入って一人が綺麗に宙を舞っていたら誰でも凍る。  
そんな中声が響く。

「……フ、フフ。  
ユウオ。君は相変わらずシャイだね？」

その声の主は今まさに頭から落ちた男だ。  
スクッと立ち上がる。



顔は端正。

美形である。

髪は短い髪を逆立てた黒に。何故か目は緑色だった。

身長も高い。

190に届くかもしれない程だ。

だが、その身は細身。

一切の余分な筋肉がないその身は綺麗といっても差し支えない。

そして歳だが、恐らくは20代前半。なのは達とさほど変わるまい。

服装は仕立ての良いスーツ。

この青年が着こなしがよいのかビシッと決まっている。

だが、このプラスなイメージ全てをぶち壊しにしている部分がある。首だ。先ほどの落ち方が悪かったのか首がヤバイ方向に曲がっている。

それで平然と会話するのだからある意味とんでもない。

「……トウヤ。僕、言ったよね？ 仕事中に人のお尻、撫でるのは駄目だって」

更に声が響く。

その声色は見事。鈴が鳴るような声だ。

僕、と言う一人称を使う女性は腰まで届く黒髪。

背は意外と低く160に届くかどうか、

意外とグラマーなスタイルをしている。

その身を包むのはこれ、また良いスーツだ。

「む。そうは言うがね？ ユウオ。君のそのエロく……そう、そのエロいお尻が私の前を過ぎる度に私の理性をノックアウトせんばかりにダメージを与えてくるのだよ？

……我慢等、出来る訳がない。

そう、断じてない！！」

「……………お客が来てる前で変態全としたを全力で叫ぶな——！！！」

あ、ちゃんと解ってたんだ？

と、まあ、そんな感想だけを抱きながらその漫才を見遣る。

……………漫才と言うにはあまりに肉体言語を使用しすぎな気がするが。

「コホン！！」

アシエルが一つ咳ばらいをする。

そこで漸く気付いたが如く青年がこちらを向く。

……………首が変な方向なのでかなり気持ち悪い。

「……………フム。どなたかな？」

「管理局からいらっしゃった方達です。

本日の予定より少々早いですがお連れしました。

……………それと、トウヤ様？いい加減首を直して下さいませ。

かなり怖いです」

「そうかね？

……………では」

アシエルの注意を受けトウヤが首に手を添える。

瞬間、ゴキンツとかなり鈍い音を立ててトウヤの首が直る。

……………いろんな意味で信じがたい光景なのは、スバルは声が出せない。

「まずは自己紹介からだね？

始めまして。グノーシス統領にして、最高指導者。

位階『第一位』

名を叶<sup>かのう</sup>トウヤ。と、言う。

「お見知りおきを」

そう名乗りをあげた。

（第十一話、後編に続く）

## 第十一話「ナンバー・オブ・ザ・ビースト（前編）（後書き）」

すみません。少々長くなるので前後編に分けます。後編は近々お届けします。

第十一話「ナンバー・オブ・ザ・ビースト（後編）」（前書き）

後編です。

今回は早く書けました♪このペースを守れ

たらいいのですが（汗）

## 第十一話「ナンバー・オブ・ザ・ビースト（後編）」

出雲本社ビルの存在しない筈の地下施設。

その応接間のソファアの坐り心地が良く、スバルは思わず気を休める。

「ふむ。緊張は解けたかね？」

前に座る叶トウヤから声が掛けられる。

今、応接間のテーブルを挟んでトウヤと対面するようになるのは、スバル、シオンはソファアに座っている。

ちなみにユウオと言う女性はお盆を持って、紅茶を入れたカップを置いた後、トウヤの後ろに立ったまま控えている。

その感じから秘書かな？

と、思う。

・・・先ほどの衝撃映像に関しては取り合えず置いておく事にした。

「あ。いえ、……ありがとうございます」

「ふむ。構わないさ。」

さて、私は名乗ったのだから是非、君達の名前を聞きたい所だね？」

トウヤが柔らかい笑顔を向けながら名を聞いてくる。

その笑顔をどこかで見た気がする。

だが、どうにも思い出せないのだからこちらも置いておく事にした。

「はい。」

では、まず私から。

時空管理局教導官。

高町なのは一等空尉です」

「えっと、同じく。

時空管理局局員。

スバル・ナカジマ二等陸士です」

「……………」

なのは、スバルがそれぞれ自己紹介をするがシオンだけは口を開かない。

それに、なのはもスバルも先を促そうとするが、その前にトウヤが手を出し留める。

「ああ、彼については構わない。

’よく、知っている’のだね。

…………シオン。久しぶりだね」

「…………うん。久しぶり」

シオンもトウヤも言葉少なげにしか話さない。

かってシオンはグノーシスに所属していたのだから知り合いでも何もおかしくは、ない。

「では、自己紹介も済んだ事だし、…………始めるとしようか？

お互いが解り合う為の、交渉を」

トウヤの宣言と共にグノーシスと管理局の実質最初の交渉が始まる。

「…………まずはそちらの要求から聞こう。

ああ、ちなみに前の担当者がこちらに要求した件については忘れるとするので安心したまえ」

「…………では」

トウヤに促されるままなのはが口を開く。

「管理局が貴方達、グノーシスに望むのは二点です。一つは情報。アポカリプス因子。」

そして、ナンバー・オブ・ザ・ビースト。

この二つの事柄について

情報の開示を」

「ふむ。条件付き、でよければこちらは構わない。

……もう一点について聞こうか」

「……もう一点は、アポカリプス因子感染者に対しての協力を」

「ふむ」

なのはの言葉に一つ頷くトウヤ。そして、紅茶を一口啜る。  
そして、きっぱりとこう言った。

「その件については断る」

それだけを言い放った。

「……………何故、と聞いても良いでしょうか？」

「簡単な事だ。こちらは自分達の世界を守るのに手一杯なのでね。」

‘無関係’な世界にボランティアで貸し出せる人員はいない、と言う事だ」

平然と、言っただけ。

なのははそんな態度に少し、ムツとする。

「無関係、とはどう言う事でしょう？」

そもそも、シオン君の話によればアポカリプス因子はこの世界から生まれたものでは？」

「…………ふむ。その前提からもう間違っているのだがね」



事もなげに言う。  
それになのはは軽く驚く。

「……どういう事でしょう？ 因子はこの世界から他の世界に渡ったのでは？」

「いや、違う」

きっぱりと言い放つ。

それになのはもスバルも、そしてシオンも驚く。  
なら、何故。因子はいろんな世界に出現しているのか。

「解らないかね？」

考えてみればすぐに解る事なのだが……

そも、因子は何故、感染するのだと思う？」

「………それ、は」

解らない。

なのはが答えに窮しているのを見遣りつつトウヤは答えを出す。

「簡単な話しだ。

あれは単体では進化の敵わない存在。と考えればたやすい。

あれの目的が進化にあるかは解らないが。

そも、アポカリプス因子は感染者が第三段階にならないと、空間、  
に干渉する事は出来ない。

ましてや世界に感染しつつ渡るなど最終段階にならないと不可能だ」

「なら、どうして多くの世界に出現しているんですか？」

なのはの言葉にトウヤはまたもふむ。と頷き。

そして、足を組む。

「渡っていないのなら後は自明の理だと思うがね？  
簡単な話だよ。」

因子はその世界で生まれている」

「……………」

トウヤの出した答えに暫くなのはも絶句する。

それは、則ち。一つ一つの世界で因子が生まれている、と言う事に  
他ならない。

「……後でそちらに渡すデータに添付するが他世界でアポカリプス  
因子が生まれている映像もある。」

ああ、勿論。偽造などではない。

安心したまえ」

勿論、一向に安心などは出来ない。

それが真実ならば全ての世界で因子が生まれる可能性もあるのだ。

「さて、これで理解は出来たと思うが、こちらが君達に協力する謂  
れも義務も、ましてや義理すらもない。

この件はこれで終わりでいいかね？」

「……………それ、は……………」

「何が不満かね？」

こちらは情報を開示すると言っている。

それ自体が協力行為だろう？」

トウヤの言葉になのは唇を噛む。

確かにその通りだ。

こと、アポカリプス因子については1番欲しかったのは情報なのだ

から。

なのはがそのまま頷こうと、して。

「……意義あり」

その言葉に動きを止めた。



「……意義あり」

その言葉を放ったのはシオンだった。  
なのはも呆然とシオンを見る。

「意義、かね？」

「ああ。」

確かに。グノーシスが他世界に関与する義務はない。  
だけど義理はある」

シオンの言葉にトウヤはフムと、再度頷く。  
その目が楽しそうに細められているのは気のせいか。

「よかったら聞かせて貰えるかね？」

「簡単な話だよ。」

そもそのグノーシスの理念だ。

……グノーシスは元々は因子を消し去る事を目的として創られた。  
……俺の記憶が確かならその筈だろ？」

シオンの言葉にトウヤも頷く。

「その通りだ。

そもそも、グノーシスは元々感染者により滅んだ世界の寄せ集めのだからね」

「そう、グノーシスは因子による世界の崩壊を未然に防ぐ。

それが目的だった筈だ。

だから、義務は無くても義理はあるはずだろ？

その理念の為、と言う義理が」

トウヤはシオンを見てニヤリと笑う。

よく出来た。

その瞳がそう語っている。

「だが、それだけでは動けないのもまた必定だろう？

いくらそれが目的だろうと。それだけでは組織は成り立たない、こちらと無償のただ働きをする余裕は無い」

「……………それについてならこちらから提供させて貰えるかと」

シオンの後をなのはが繋ぐ。

「ふむ。何を提供して貰えるのかな？」

「……………シオン君の話しによればイクスのようなロスト・ロギアは珍しいくない、と言う話でしたね？」

そう、地球にはそんな謎がある。

まるで引き寄せられるが如く、ロスト・ロギアがあるのである。

グノーシスは今の所、地球で出土したロスト・ロギアに関しては管理している、が。

「曲がりなりにもロスト・ロギア。扱いや封印が出来ないものも多数あるのでは？」

「ふむ。その通りだ。

……なる程。つまりは君達は……」

はい。となのはは頷く。

「ロスト・ログIA関連に於ける技術提供。  
これを提供させて頂きます」

成る程、とトウヤは頷く。

実際、その話しは大きい。

管理局はその巨大さ故に様々な問題がある組織だが、その大きさ故の利点もある。

つまり、技術力だ。

様々な世界との交わりで常に技術は向上しているのだ。

実際、グノーシスと管理局ではその技術力の差は十年や二十年では済むまい。

「……なる程。

これは、検討のしがいがあるね……」

「如何でしょう？」

ふむ、と頷く。

「協力について検討しよう」

「ありがとうございます」

なのははトウヤの答えに礼をする。

トウヤはそれに苦笑いを浮かべているが。

「まあ、詳しくは明後日の本交渉しだいだがね」

「はい」

二人の会話にスバルがおや、と声を上げる。

「えっと、じゃあ今日の前交渉、て……」

「ようはお互いの要求を出すだけ、が今回の前交渉の目的だよ。……もつとも、面白い話しが聞けたがね」

トウヤの答えに成る程、と手を打つ。

「ふむ。紅茶、冷めてしまったね。」

ユウオ君。悪いが煎れ直してくれるかね？」  
「うん」

ユウオがカップを下げていく。

「さて、では前交渉は終わりだ。  
これから、どうするかね？」

「せっかくなので私は施設を見せて貰おうと。  
スバルとシオン君はどうする？」

「あ、私もなのはさんと一緒に見て回ります」  
「俺は………」

シオンは一旦言葉を切り、横を見遣る。  
そこには新たに煎れた  
紅茶を飲むトウヤがいる。

「少し、この人と話しがありますから……」  
「そっか。うん。」

なら後で合流。て形でいいかな？」

「はい」

シオンが頷くのを見る。

「リリエ君。

悪いが高町君と、ナカジマ君の案内。  
頼めるかね？」

トウヤがそう言うのと、今まで壁に控えていた。  
アシエルが

「はい」と、答えた。

「では、高町一等空尉。ナカジマ二等陸士。  
案内させて頂きます」

「はい。よろしくお願いします」

そう言ってなのは、スバル。アシエルが退室していく。

「それじゃあ、シオン君。また後でね」

「シオン、あんまり遅くならないようにね」

「……了解」

そして、退室した。

暫くしてユウオもまた退室する。

トウヤから促されたからだ。

「さて、こうやって会話するのは本当に久しぶりな気がするがね……  
シオン。元気そうで何よりだ」

「うん。皆も元気そうだったよ」

ソファから立ち上がり、トウヤは自らの執務席へと向かう。

「……二年。長いものだね？ シオン、色々聞かせては貰えるのかな？」

「……うん。その積もり、だよ……」

そこでシオンは言葉を切る。

そして、目の前のトウヤを見る。

目を見て、まっすぐに。  
続けた。

「トウヤ兄い、」



アポカリプス因子は何処にでも現れる。

それが例え、どんな場所であろうと、だ。

そう、因果。と、言うのがあるとすればそれはあまりに皮肉。とし  
か言いようがなかっただろう。

「すずか、走って!!」

「アリサちゃん!!」

そう、感染者が町に現れる可能性もあるのだ。

そして、それが人を襲わない。なんて保証はない。

「痛っ………っ!!」

「アリサちゃん!」

そう、そして襲われる人がどんな存在なのかも、また関係がない。



「……すずか、アンタは先行きなさい」  
「駄目！駄目だよ、アリサちゃん！！」

そう、そして。

「いいから、はやく！」  
「嫌！！」

感染者が人を新たな感染者にしない理由はない。

「……ごめん。すずか」  
「いいから、急ごう？」

そう、それはよくある話し。  
それが例え。悲劇だったとしても。

「……ごめん……」  
「アリサ、ちゃん？」

現実には容赦がない。そして、また。

「アリサ……ちゃん……」。  
「いや、いやああああ！！」

「こんな筈じゃない」  
結果が生まれる。

◆◆◆◆◆  
シオンはトウヤと会話を終え、町に出ていた。

海鳴市。

海を仰ぐ。いい町だろう。

なのはいわく久しぶりに親友達と会うそうなので、そちらにセーフハウスとして用意して貰ってる別荘があるらしい。

なのはもスバルもまだ出雲本社ビルにいる。

いろいろ興味を引かれるものがあつたらしい。

故にシオンは先にこの海鳴に来ていた。

来ていたはいいのだが、道が解らない。

まあ、後でなのは達と合流すればいいや、とブラブラ歩く。

シオンにとって徒歩とはそれだけで有意義だ。

歩くのが好きなのである。

まあ、なんで好きなのかと聞かれたら困るのだが。

海を臨む公園に出る。

さぞかしいい景色なのだろう。

・・・雨が降っていなければ。

ザアザアと降る雨はそれだけで気が滅入る。

思い出すのはさっきのトウヤとの会話だ。

先ほど話していたのは666について。

しかし、グノース側でも何も解らない。との事だ。

だが、一つ解った事がある。

管理局はやはり信用出来ない。と言う事だ。

666と仕業と思わしき被害者達。

それを自分に黙っていた事が管理局に対しての不信感になっていた。

実際の所、はやてはシオンを心配したからの措置だったのだが。

ここに来て、完全に裏目となりつつあった。

「……666……」

許せない存在。

何を置いても最優先しなければならない存在だ。

だが、それに割り込む奴達がいる。  
アースラの面々だ。

彼等、彼女達と過ごす時間はシオンにとって幸福だった。  
幸せすぎて、忘れていた。

幸せすぎて、見ないようにしていた。

でも、この間、再認識した。やはり自分は666を優先する、と言う事を。

「…………降りる、か…………」

アースラを降りるか、否か。

それをシオンは迷う。

だが、時は運命はシオンを待たない。

【シオン!!】

「イクス？」

イクスに疑問の声を上げる。滅多に喋らないイクスが声を上げるのは珍しい。

【感染者の反応!! 近い!!】

「ッ……………!!」

何処だ!!!!」

反応があった場所に駆ける。

そう、運命は待たない。

選択、と言う名の運命は



なのは達に緊急連絡し、そのまま駆ける。

吹き上げる魔力を放出し、トップスピードで駆け抜ける。

感染者は、2'体

最短の道をイクスの指示に従い走る。

シオンの胸中にあるのは焦燥。

今、走っている区域はどう見ても街中だ。

こんな所で感染者が出たらそれだけとんでもない事になる。

最悪の事にもなりかねないのだ。

【左の曲がり角を曲がれ！その路地裏だ！！】

イクスの指示に従い、路地裏に入る。

そこには、今、正に女性に襲い掛からんとする異業。

感染者だ。

オーク鬼。そう呼ばれる生物だ。

何故にこの世界にそんなのがいるのか？

一瞬だけ疑問に思うがシオンは即座にその思考を頭から追い出す。

「イクス！！」

セツト・レディ！！

瞬時にバリア・ジャケットを纏い。

イクスが大剣に変わる。

女性と感染者に割り込むと、同時にイクスを一閃。

感染者の首を落とす。

しかし、そこから更に再生開始。

だが、無論。シオンの攻撃は止まらない。

「絶影！！」

放つは最速の斬撃。

今度は胴を断つ。

悲鳴が上がる。

感染者と、背後の女性から。

しかし、シオンは止まらない。

「終わりだ!!」

神覇・参ノ太刀。双牙!!」

地を走る斬撃がたやすく感染者の右四肢を断ち。

そして、落ちてきた胴体と頭を真っ正面から一撃で両断する。

「……………絶影…………」

そして、漸く感染者は塵へと消えた。

「…………大丈夫、ですか？」

倒れていた女性に手を貸して起こす。

だが女性はブンブンと首を振ると、シオンの背後に向けて叫ぶ。

「アリサちゃん!!」

そう、シオンは失念していた。

感染者は2体。

ゆっくりとシオンは後ろを振り向く。

そこに居たのは、

黒の点に全身を侵され、こちらへとにじり寄る民間人。

アリサ・バニングスが居た。



雨が降る。

ざあざあと。

それを受けながらシオンは呆然とし、

「……………ッ!!」

次の瞬間。振るわれた右の拳を受け止めた。

それで我にかえる。

現状を認識する。

無理やり、に。

「イクス……………?」

【……………駄目だ。もう、完全に】

感染している

それはあまりに無情な結果。

もう、どうしようもないと言う事を意味する。

《シオン君!! そっちの状況。どう!?!》

「……………なの、は先生……………」

「なのはちゃん!?!」

シオンの横にウィンドウが展開して、なのはの顔が映る。

空を飛んで向かって来ているのだろう。

背に見えるのは未だ降り止まぬ雨雲。

《すずかちゃん!?!》

「なのはちゃん!」

アリサちゃんが! アリサちゃんが!?!」

すずかの剣幕。そして、親友の名前になのは顔から血の気が引く。そのなのはにシオンが淡々と、報告する。

「……………先程、感染者一体撃破しました。でも、その後ろに民間人がいて……………」

《……………どう、なったの……………?》

一瞬、迷う。だが、それは告げねばならない事。一度だけ目を閉じ。そして、事実だけを告げた。

「民間人はアポカリプス因子に感染。今、攻撃を受けてます」

《……………う、そ……………?》

なのはの呆然とした声に、しかしシオンは首を振る。横に。

そして、ウィンドウを感染者に――。アリサと呼ばれた女性に向ける。

《……………そん、な……………》

アリサの姿を見て絶句するなのは。しかし、シオンは更に告げる。

「……………恨んでくれていい」  
「え……………?」

《シオン、君?》

二人が呆然と、シオンに問う。

「憎んでくれていい。

ただ、俺だけを。

……俺だけを憎んでくれ」

《何？何を言ってるの？シオン君》

なのはが問いを重ねる。

シオンは答える。

そう、一を切り捨てて十を助けられるならそう、すべきだと。

……例え、それが憎まれる結果になろうとも。

「彼女を殺します」

それだけ、それだけを二人に告げた。



《だ、駄目!!》

なのはが叫ぶ。

しかし、シオンはそれを無視する。

ゆっくりと、ゆっくりとイクスを掲げる。

《シオン君!!》

「なら、貴女に彼女を殺せるんですか？」

シオンの問いになのはは絶句する。

そう、感染者の末路はただ一つ。一つしか、ない。

イクスを構えると、同時に隣にいるすずかにバインドをかける。

「…………っ!!」



「済まない。でも、邪魔されたくはない」

上段にイクスを構える。

感染者となったアリサと言う女性は、しかし。

そのまま動かない。

まるで、刃を待つかのように。

「アリサちゃん!!」

逃げてえ!!!!」

《シオン君!! 駄目え!!》

二つの声を見捨てる。

そして、目の前の感染者を見る。

腕が、いや全身が震える。

怖い。

目の前の命を奪う事が、ただ、ただひたすらに怖い。

ゆっくりと、目を閉じ。

そして、開けた。

「……………済まない……………」

「……………」

シオンの謝罪に、しかし。感染者となった少女は答えない。

咆哮すらもあげない。

そして、シオンは刃を振りかぶり。

「おおおおお!!」

叫ぶ。

せめて苦しいまないように、と。

次の瞬間。刃は放たれ。

しかし、刃が届く寸前に虹の光芒が感染者となったアリサを貫いた。

「なーーーーー!!」

「……………Aaaaaa!!」

「っ……………!!」

虹の光に押されてシオンは後退する。

やがて、虹の光芒はアリサの身体から、何か、を取り出した。  
そして、アリサの身体に刻まれる刻印。

666

舞い降りる。黒の王が。

軋む。その存在の前に世界が。

その存在はシオンの前に降り立った。



雨が降る。

ざあざあ。と、降り止む気配を見せない。

そして、その光景にあって尚、その黒の男は異質だった。

声が出ない

喉がやけに渴く。

目の前の存在はただそこに在る。

立ち去る気配は、ない。

シオンの脳裏を色々な思いが駆け巡る。

<お前は、相変わらず……………>

その言葉と、そして思い出すのは教会。その床に寝そべって、刻印を刻まれた少女。

<ごめん、ね……………>

そして、その刻印を刻んだ。男。

「…………えめええ……………っ!!!!!!」

叫び、そして、シオンは目の前の男に、666に襲い掛かる。

「シオン君!!!!」

「シオン!!!!」

たった今到着したのだろう。なのはとスバルの声が飛ぶ。  
しかし、今のシオンには聞こえない。

「イクス!!!!」

トランスファー!!!!

ブレイズ・フォームに変化。

逆手に持った左のイクスを上段から叩きつける!

しかし、666はただ左腕を掲げるだけでそれを受ける。

「……………!!!!」

一切の魔法は使われていない。  
にも、関わらず。イクスは666の肌すら傷つけられない。

「があああああああ！！！」

「……………」

連撃。

右の斬撃が左の膝が右の蹴りが左の突きが。

しかし、全て、左腕で防がれる。

左腕以外は一切動かしていない。

使う必要もない、と言う事か。

「っ……………！！！」

業を煮やしたシオンは一気に後退。

イクスをノーマルへと戻す。

そう、一撃の重さならばブレイズよりノーマルの方が上だ。

「らあああああああ！！！！絶・影！！！！」

瞬動と共に666に絶影に叩き付ける！

「……………」

だが、しかし。その一撃すらも掲げた左腕により防がれる。

「っ……………！！！！くたばれ……………！！！！！！！！！！」

「……………」

そのままイクスを押し込もうとするシオン。

少しずつ押し込まれていく。

しかし。

「……………」

左腕に少し力を入れた。

それだけでイクスは持ち上げられ、そしてシオンの腹に右の掌が押し当てられた。

瞬間、鉄骨がたたき付けられた音になると同時。

シオンが至近で爆発を受けたかのように吹き飛ぶ。

「シオン！！！！！」

「シオン君！！！！！」

「……がは……！」

なのはとスバルが再び叫ぶ。

シオンは腹を押さえて悶絶する。

二人がシオンに近付こうとするが、しかし、シオンによって遮られる。

「来るな！！！！！」

「っ……………！」

「シオン……………」

よろめきながらも立ち上がる。

シオンの脳裏に過ぎるは一人の女性。

その笑み。

ゆっくりと近寄る666。

それをシオンは睨む。

あの、笑顔を奪った存在。誰より、彼女に近かったくせに。裏切った存在。

「アンタが！……………何で、アンタが！！！」  
「……………」

シオンの叫びにしかし、666は空虚なる瞳を浮かべるだけ。  
シオンはそれにさらに猛る。何としてでも倒す。  
この男だけは、この男だけは！！

「まだまだぁー！！！！！！」  
トランスファー！！！！

ウィズダムに変化。  
槍を向けようとして。

【……………がつ！！！！】

だが、次の瞬間。'イクス'が砕けた。

「……………え……………イク、ス？」

砕けて、待機モードに戻るイクス。  
それを見て呆然とする。

【……………馬鹿！よそ見をー！】  
「……………」

イクスから忠告が飛ぶがしかし、間に合わない。

「……………え……………？」

瞬動。

縮地とも呼ばれる程の速度で間合いを詰められ、頭を掴まれ。

また、吹き飛ぶ。

今度はさほど強くなかったのか距離は4メートル程。

しかし、それが致命的だった。

.....

右手を掲げる。そしてシオンに向けられる。その右手は666の正位置の幾何学模様の魔法陣とそこから4枚に伸びる剣翼。

「あ……」

呆然とシオンが呟く。

回避も防御も間に合わない。

「あ、ああ！」

ただ悲鳴しか挙げられず。

そして、虹色の光芒は放たれた。

「あああああああああああああああああああああ  
あ!!!!!!!!!!!!!!」

自分を貫く虹色の光。

吹き飛ぶバリア・ジャケット。

そして、焼き付く音と共に。刻まれる刻印。

何故か、痛みは感じなかった。

だが、意識が急速に奪われていく。

意識が消える最後に見たのは涙を流しながら駆け寄るスバルと、な

のは。

「……ご、めん……」

そして、シオンの意識は闇へと消えた。



「シオン!!!!」

叫び。シオンの元に駆け寄るスバル。

バリア・ジャケットは弾け。

露出した胸に刻まれた刻印。

なのは知っている。

それを刻まれた存在がどうなるのかを。

地球に戻る前にはやてに教えて貰った。

666の刻印を刻まれた人達の事を。

アリサを見る。

アリサもまた刻印が刻まれている。

「……アリサ、ちゃん………シオン君……」

スバルがシオンを何度も呼ぶ。しかし、シオンは応えない。

応える事はない。

バインドが解けたすずかもアリサの元に走る。

そして、シオンと同じく何度も呼ぶ。

だが、応えない。

応える事はない。

足音が響く。

666だ。



踵を返し、去ろうとしている。

「……………待ちなさい」

なのはが666に呼びかける。自分でも思った以上に冷たい声が出た。

しかし、666は構わない。振り返る事すらしない。

ならば遠慮はしない。

レイジング・ハートを起動させると同時にエクシード・モードに。そして警告も無しに一撃を放つ。

「エクセリオン・バスター—————!!!!!!」

抜き撃ち。

その威力は怒りによって暴走してしまい。制御の効かない。

しかし、激烈な威力となって666に向かう。

「……………」

それを666は。

事もなげに、振り向き様に左手で弾き飛ばした。

「……………ッ！」

「……………」

なのはが睨み。

しかし、666は感情の無い瞳で見るだけ。

やがで八角の魔法陣が展開し、666は消えた。

「……………」

なのはは周りを見る。  
泣きじゃくるすずかとスバル。  
そして、目を覚まさないシオンとアリサ。  
空を見上げる。

なのはの瞳にもまた涙が浮かぶ。  
どうして、こんな事になったんだろう。と。

未だ、雨は止まない。

止む気配はない。

ざあざあ と振り続ける。

冷たく。冷たく。

（第十二話に続く）



ア

「今回はいきなり容赦なくかあつ!!」

作

「いきなりかい!!」

す

「落ち着いて! アリサちゃん!」

ア

「落ち着ける訳ないでしょうが!!」

漸く出番かと思ったらいきなり死亡フラグかい!!」

作

「いや、死んではないぞ?」

ア

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさい……!!」

作

「そのネタは色んな意味で危険……!!」

バキメシヤと言う音が響く

ア

「はぁー、すっきりした」

す

「作者さん……生きてます？」

作

「……………」

返事がない。ただのしかばねのようだ。

作

「そのネタも危ないだろ!!」

す

「あ、復活した」

ア

「ち。しぶといわね」

作

「勝手に殺すなよ……………」

ア

「まあ、こんな作者はほつといて。今晚は!!アリサ道場です!!」

作

「うわ、本当。今回は怒ってんな〜」

ア

「……………当たり前でしょうが」

す

「ア、アハハハハ汗」

ア

「と、言うかこれ、最初。からこの構成だったの？」

作

「おう。ま、どっちが犠牲になるかは最後まで悩んだんだがな汗」

す

「え、ひょっとしたら私も犠牲者候補だったんですか？」

作

「うむ。どちらかを意識不明にするのは決まっていた」  
ア、す

「……………」

作

「だから、無言で近寄るな、て!! 怖いんだよ! マジに!!」  
ア

「ま、いいでしょう。」

に、しても今回からオリキャラ、めっちゃめっちゃ増えたわね」  
作

「ま、な〜。」

トウヤとかかなりはっちゃけたキャラにしちまったしな笑」  
す

「そういえば強いんですか? トウヤさん」

作

「強いよ」

ア、ふ

「「だ、断言」」

作

「うむ。そういや今回は666の事突っ込まないんだな?」

ア

「いや、まあアレも味。て事にしとくわ」

作

「是非、そうしてくれ。さて、ではでは。」

今日はこの辺で♪

今回の話の感想、ばりばり待ってます♪

あ、でも虐めないで欲しいな〜」

す

「ヘタレですな〜」

作

「うっさいわい。

では」

ア、す

「「また次回」~~~~~」  
~~~~~♪  
「」

第十一話「ナンバー・オブ・ザ・ビースト（後編）」（後書き）

予告「意識不明となったアリサ」

「責任を感じる者、

悲しむ者」

「そして、復讐に生きる少年は。優し

さとの離別を決意する」

「その時少女は……」 「次回。

第十二話 『優しさにさよなら』 「こんなにも叫んでいるの
に」

第十二話「優しさにさよなら」(前書き)

「あの目を覚えている」「深い哀しみと深い怒り」

「けど、優しさが彼を変えていった」「でも、気

付けなかった。その優しさでも救えないものもある、て」「そ
して背を向ける彼に私は……」

「魔法少女リリカルな

のはStS，EX。始まります」

第十二話「優しさにさよなら」

時空管理局本局。

その中の会議室の一室にアースラの主要メンバー達は集まっている。満ちる空気は暗く。そして重い。

その中でティアナは相棒とも呼べる少女に目を向ける。

スバルだ。

いつもは元気な彼女も、また先程まで泣きじゃくりながらある少年により添っていた。

少年の名前は神庭シオン。

666の襲撃から半日経った今でも意識を取り戻さない。

・・・いや。この先、ずっと取り戻す事は無いかもしれない。

自分の嫌な考えにティアナは自己嫌悪を覚える。

管理外世界。第97世界。通称地球。

そこで起きた感染者の襲撃。そして、民間人・・・ティアナも知る所の人物アリサ・バニングスへの感染。

だが、結局彼女は死ぬ事はなかった。

・・・そう、死ぬ事は。

アリサ、シオンは666から謎の攻撃を受け、意識不明。

それは、今。管理内外で多発している意識不明者と症状が酷似していた。

666

その刻印。

いかなる意味があるのか、それを刻まれた人は誰一人として目を覚まさない。

最低限の生命維持に必要な身体機能以外は全て停止していた。

つまりは植物人間の状態だ。

今回の件で666に対する警戒レベルは第一級広域次元犯罪レベルに跳ね上がった。

現在、各駐留部隊も展開し、666の足跡を追っている。

単身で第一級広域次元犯罪レベルとされるのも異例なれば。その対応もまた異例。

とてもたった一人の人間に対しての対応ではない。

何故、そんな事態にまでなったのか？

答えは一つ。その馬鹿げた被害者の多さだ。

現在、刻印を刻まれ、意識不明となった人数は200を超える。

広域テロだとかそんな物ではなく。

一人の人間が、管理局にの警戒システムを抜けて、成した結果だ。

こんなにも馬鹿げた話しはない。

ティアナの思考を中断するようにある女性が入ってくる。

ヴォルケン・リッター守護騎士にして、アースラの医療全般を管理する女性。シャルマルである。

「シャルマル。……シオン君とアリサちゃん、どうなんや？」

はやてが問う。

シャルマルはそれに、首を横に振りながら答える。

「怪我はアリサちゃんは無いわ。」

シオン君は、肋骨が二本骨折。……折れた骨が内臓に刺さらなかったのは奇跡、ね」

「……それで、二人は目を覚ます気配。あるんか？」

はやての問いにシャルマルは目を伏せる。

「……………今の所。二人共、目を覚ます気配はないわ」

予想はしていた。

だが改めて突き付けられた事実の皆、目を伏せる。

「…………私の、責任、だよ」

「なのは、さん……」

なのはが絞り出すように声を出す。

それに、スバルが首を振って否定する。

「なのはさんの所為じゃないですよ。

あんなの、止められる訳、ないです」

「…………ううん。私の所為だよ。シオン君にバインド掛けてでも止めればよかった……」

アリサちゃんだって、昨日。私が行く。て伝えなきゃ……………」

自分を責めるなのは。

だが、それを遮るようにフェイトが前に立つ。

「…………フェイトちゃん？」

「…………先に謝るね。なのは、ゴメン」

パシン

会議室に渴いた音が響く。

フェイトがなのはの頬を張ったのだ。

「フェ……………」

「なのは、今する事はぐじぐじ、て後悔する事？

…………私は、違うと思う」

なのはの目を見据え。

はっきりとフェイトは言う。

「今、大事なものはアリサをシオンを元に戻す事を考える事だよ。
……そんな風に、悩む事じゃ、ない」

「…………ゴメン。そうだね」

フェイトの言葉に、まだ後悔を滲ませながらもなのは頷く。
そう、今大事なものは二人の意識を取り戻す方法を探る事、だ。

「…………スバル…………」

「…………大丈夫」

ティアナがスバルに声を掛ける。
なのはと同じく落ち込んでいたスバルは、しかし。無理やりには
あるが笑って見せる。

「大丈夫、だよ」

「そう…………」

スバルの強がりとも取れる返事に、ティアナは頷く。
大丈夫。この娘がそう言っているのだ。
なら、それを信じる。

「…………さて、皆、聞いて欲しい事があるんや」

場が収まったのを感じ、はやてが切り出す。
皆がはやての言葉に集中する。

「アースラは本部からAAAランクの特秘コードを受けて、任務を
追加になった。
追加された任務は666の拿捕、や」

「はやてちゃん……」

なのはが呟く。艦長であり、親友である人の名を。

「……アリサちゃんにシオン君。

666は親友と生徒に手を出したんや。

……ただじゃあ、おかん」

「……うん！」

はやては言っているのだ。666に、相応の報いを、と。

復讐ではない。だが、こちらの大切な者を傷つけられてまで大人しく出来る人間でもない。それはアースラのメンバー全員がそうだった。

「……よし。じゃあ。アースラは今から……！」

「……まあ、待ちたまえ。情報も何もなく、行くつもりかね？ 君達は？」

はやての言葉を遮るように声が響く。

それは此処には絶対いないはずの人物。

いてはならない人物がそこにいた。

「……叶、さん？」

「シオンは何処かね？」

いつからそこに居るのか会議室のドアを背に凭れかかり。

腕を組むグノーシスのトップ位階『第一位』叶トウヤがそこにいた。



「叶さん？」

「……………ふむ……………」

管理局本局医療室。

そこに一同が集まっていた。

シオンがそこに眠って。

いや、意識を失っている。

結局、トウヤが何故此処にいるのか聞けないまま医療室まで来てしまった。

すぐ近くにはアリサの姿もある。

つい数時間前まではさすがが付き添っていた。

だが、このままでは体を壊す。と無理やり本局内の空いていた士官室へと押し込み。眠るように言ったのである。

「あの……………聞いてもいいですか？」

「答えられる範囲の質問には答えよう。

何かね？」

シオンからなのはへと視線を移す。

促された事もある為、そのまま聞く。

「何故、此処に？」

「……………ふむ。まあ、ここまで来て、内緒にする事でも、ない。か」

「シオンの意思には反するのだがね？」と続ける。

「家族が意識不明と聞いたのだ。普通、見にくるものだろう？」

「……………え……………？」

トウヤはこう言った。家族と。

確かに家族ならば見舞いに来るのが当たり前だ。

アリサの両親とて、さっきまでですかと共に本局に来ていたのだから。

と、言う事は、トウヤは・・・

「…………再度、自己紹介をしよう。

グノーシス位階『第一位』

…………そして、神庭シオンの異母兄。叶トウヤだ」

「……兄弟…………？」

「正確には異母兄弟だがね」

直後、叫び出しそうになるアースラメンバーにしかし、トウヤは柏手を打つように。

パンツと絶妙なタイミングで鳴らす。

「色々と言わねばならぬ事や渡すものがある。

とりあえずは先程の部屋に戻らないかね？」

一同、頷く。

さすが、歳若いながら一組織のトップに立つ男である。

あっさりと場を纏めると、また、先程の部屋にゾロゾロと戻る。

再び、会議室に戻ると。トウヤは、はやてにチップを放る。

「これ、は…………？」

「666とアポカリプス因子についての情報をまとめたもの、だ。と、言っても666については二年前の情報だがね」

二年前、確かシオンがグノーシスを出奔したのも二年前ではなかったか。

「…………叶さん」

「先に言っておこう。」

シオンが何故、666を追うのか、何故地球を出たのかについては私からは言えない」

はやてが疑問を形として出す前にトウヤはその疑問を潰す。

「…………いつか、知る時も来よう。」

その時まで、待っていてくれたまえ」

「…………はい」

シオンの過去、それはトウヤの口からは語れない。

そう、トウヤは言っているのだ。

はやては、後ろ髪を引かれる思いでトウヤに返事をする。

「…………それと、この度は申し訳ありませんでした。」

預かっていた弟さんを…………」

「…………いや、謝罪しなければならないのは私の方だろう。」

謝ろうとするはやてにしかし、トウヤはそう告げる。

「今回の件はグノーシスの管理下で起きた。」

こちらが謝りこそすれ。謝られる事ではない」

「…………ですが…………」

「こちらとしては謝られる方が困る」

それだけ告げると、トウヤは踵を返して退出しようとする。

「帰るんですか？」

「…………シオンの安否は確認出来たのでね。では、また会おう」

それだけ言うと、会議室を出ていく。
はやてがせめて見送ろうと、会議室を出ると、既にトウヤは何処にもいなかった。

「…………あの一瞬で何処に行ったんやろ……」

「今、本局の警備システムにデータを呼び出して貰ったですけど。
叶トウヤさんの反応。
何処にもありませんです」

リンから告げられた内容にははやては驚く。

「…………あの人、本当。何もんなんやろ?……」

はやては呟く。

その疑問が解けるのは。かなり長く先の事になる。

「はやてちゃん?」

「ああ、ゴメン。叶さん。もう行ってしもうた」

当然、なのは達も疑問に思うが、解るはずもない。

「とりあえず、は貰えるもんは有効に使わせてもらおう」

そう言いながら、データが入ったチップを手で弄ぶ。

「それじゃあ、皆。

アースラに戻ろう。

んで、666。

追っかけよう!!」

『はい!!』

はやての言葉に一同頷く。
そして、アースラへと向かった。



シオンはまどろむ。

思い出すのはかつての光景。

『お前はとことん剣しか才能がない』

異母兄の一人にはそう言われた。

『お前は一流には至れるだろ。

でも、俺達のような。異端にまでは届かない』

憧れた存在には断言された。

『貴方のような人が、きっと、辿り着く、のね』

月を仰ぐ少女はそう、予言、した。

それは神庭、シオンという存在をもって初めてヒトが、辿り着く、
と、そう少女は告げた。

「う……………」

目を開ける。

此処は……………?

暗い病室で、シオンはぼんやりとした顔で当たりを見回す。

【やっと、起きたか】

傍らから声が掛けられた。イクスだ。

シオンはくあつと身体を伸ばしつつイクスに尋ねる。

「……………なんか、良く寝た感じがするな」

【それは、そうだろう。二日も寝ればな】

「二日も……………っ！！！！！！」

そこで目が醒めた。

「……………イクス！！」

あれからどうなった！？」

【それ以前にシオン。お前はどこまで覚えてる？】

「決まってるだろ！！」

あの人に、'サイン' 食らわされ……………て…」

自分で自分がいかに何を言ったのか悟ったシオンは胸をはだけて、自分の胸元を見る。

そこには、消えかけてはいるが間違いなく666の文字。

「……………なん、で俺。起きれたんだ……………？」

【そこまでは、解らん】

イクスがきつぱりと言う。

シオンは暫く頭を抱える。

刻印を受けたはずなのに、ぴんぴんしている自分。だが、シオンの胸中にあるのは別の事だった。

666と戦い。手も足も出ずに負けた。
拳を握りしめる。

強くなったと思っていた。

でも、666にはまだ至れない。

全然追い付いていなかった。

「…………俺、は…………」

【…………シオン】

イクスから声が掛かる。

が、シオンはそれを聞かないフリをする。

改めて思いしらされた。

666の強さを。

【シオン。奴に負けたのは別に恥でも何でもない】

「ッ……………!!」

それでも!!」

そう、それでも。だ。

勝ちたかったのだ。何としてでも。

「……………ッ……」

顔を立てた膝に押し付けてうずくまる。

その姿はまるで、泣いているよう。

「……………イクス…………」

【何だ？ マイマスター？】

シオンの呼びかけにあえて主と、イクスは呼ぶ。

顔をあげる。拳を握りしめる。

「……アースラの皆は？」

【つい、数時間前にトウヤと来ていた。で、命令が追加になったそうだ。666の拿捕が、な】

そう、か。と呟く。

そして、ベットから出る。

ふと、前を見るとそこにはアリサと言う女性がいる。666の犠牲者が。

「……………俺、は……………」

思い出すのはある少女。

彼女も未だ、目を覚まさない。頭を降る。

そして、待機状態のイクスを掴む。

【……………行くのか？】

「……………ああ」

何処に？

とは聞かない。

もう、シオンは、決めてしまった、のだから

「行こう」

そして、シオンは病室を出る。

朝方。見回りに来た看護師が見たのはもぬけの殻となったベットだ

けだった。



翌日。

それぞれ準備を終え、アースラが出航せんとしていた時、はやての元に届いたのは一つの報告。

「……………行方、不明……………」

《……………はい。朝方、看護師が見回りに来た時には既にもぬけの殻だったそうで……………》

シオンが行方不明になった。

その報告にはやては絶句する。

誘拐か、それとも……

《警備システムのカメラに映っていたのですが……………、自分で、出て行ったようです……………》

「……………な、んやて……………」

さらに告げられる報告にはやてはさらに動揺する。

当然だ。アリサも含めてサインを刻まれた人間は未だ意識不明なのだから。

シオンが目を醒ましたのは驚愕以外の何物でもない。

詳しく調べれば、もしかしたら他の意識不明者も治せるかもしれない。

だが。そのシオンはいない。

「すぐにシオン君を見つけんと……………!」

「ですが、艦長。

今、我々は……………!」

アースラは命令を受けて今から出航だ。
シオンの搜索には向かえない。

「……………っ！」

せめて、シオン君の行き場所さえ分かれば、誰かを行かせられるん
やけど……………」

《……………それならば、本局の転移履歴に残ってます》

今、はやてが通信しているのは本局の警備担当者である。
故に、転移履歴をまず調べたのだろう。

「ホンマ！？」

なら、そのデータを至急こちらに送って！」

担当者は

「了解」と言い、アースラにデータが送られる。

その行き場所は……………」

「……………よりにもよって、か……………」

はやては苦々しく呟く。

だが、理解は出来る。

シオンがアースラを降り、そして666の追跡のみに集中するのな
らば。

まず最後に666が確認された場所に行くのが普通だ。

シオンが転移した先は第97管理外世界。つまり地球であった。

「……………で、どうしましょう？アースラで向かいますか？」

「……………うん、次元航行で向かってても時間がかかり過ぎる。」

……シャーリー。悪いんやけど、スターズ3、4とライトニング3、4を呼んでくれるか？」

はやての指示にシャーリーは頷き、四人を呼び出す。

暫くして、スバル、ティアナ、エリオ、キャロがブリッジに現れた。

「八神艦長。どうしたんですか？」

ティアナが皆を代表して聞く。

それにはやても頷き。

事情を告げる。

シオンが目を醒ました事。そして、自分の意思で行方を眩ませた事を。

最初シオンが目を醒ました事に四人とも喜ぶ、が次に告げられた事にショックを受ける。

「……そん、な……」

「なんで、シオン兄さんが……」

シオンの行動に疑問を抱く四人にはやてが目を伏せながら言う。

「……多分。私の責任や……」

「え!？」

そして、はやては告げる。666の情報をシオンに意図的に黙っていた事を。

先程トウヤからシオンがグノーシスに来た時に666の被害者の件を話したと聞いた。

それ故にシオンがアースラを出たとはやては考えたのだ。四人はそれを聞いて。しかし、はやてはシオンの身を案じての行動であると容易に理解した。

「……あの、バカ。

単なる誤解じゃない……」

「いや、意図的に黙ってたんは事実やし、な……」

はやては目を再度伏せる。

ただシオンに無茶をして欲しくなかったただけなのに完全に逆効果になってしまったのだ。

「……話を戻すよ？」

今、シオン君はどうも地球に向かったらしいんよ」

「……地球に……？」

あ、そうか。

あそこで666を見たから……」

はやての言葉にスバルが納得の声を挙げる。

はやてはそれに頷く。

「うん。で、どちらにしろアースラも調査の為に地球に向かうけど、……どっちにしろシオン君には追いつけないと思うんよ。

それで、四人には本局の転移ポートから長距離転移で地球に先に向かってシオン君を捜し出して欲しいんよ……頼めるか………？」

はやての言葉に四人共頷く。

「絶対、見つけて来ます!!」

「あの、はた迷惑を放って置くのは色々危険な気がしますしね」
「シオン兄さん。病み上がりですし、このままじゃあ心配ですし」
「それに、誤解されたままなのも嫌です」

スバル。ティアナ。エリオ。キャロはそれぞれ言う。
それだけ、シオンがアースラに馴染んでいた。
と、いう事でもある。

「ゴメン、な。
よろしく。お願いな？」
『はい!』

そして、四人もまたシオンを捜す為に地球に向かった。



管理外世界第97世界。地球、日本。海鳴市。

その町の一角でシオンは佇む。今、居るのは666と戦った場所である。

そこから666の転移反応を探っていた訳だが。

「…………わざと、か？」

シオンは思わず呟く。

666の使う魔法術式は特別だ。

と、言うより666固有の物である。

その名を固有魔法

八極八卦太極図。

と、言う。

666が僅か、十四歳の時に自らで編み出した魔法術式。
それは異常や天才、と言う言葉では表せない事だった。

異端。

かつての666は自らをそう評した。

それはヒトとして決定的に違ってしまった事だと。

そして、この魔法術式による転移反応はおそらくシオンとトウヤを
始めとした数人しか解らない。

だが、それを差し置いても解る程に転移反応が

’あからさま’に過ぎた。

今からでも追えるだろう。

「……畏、か？」

【……それ、は無いな。

と、言うより出来んだろう】

そう、今の666がそれを出来る筈が、ない。

何故ならば666にそんな思考は今、出来ないのだから。

そこまで考え、シオンは頭を振る。

余計な考えだった。と。

「……行くか……」

【まあ、待て。

お前、何も食べとらんだろう？

それに、休みもとってない。

しばし、休め。

それに……】

イクスの言葉にシオンは空を見上げる。

そこには今にも雨が降り出しそうな空。

【……少なくとも雨が止むまでは、何処か店にでも入って休め】
「……解ったよ……」

イクスの言に、ため息を吐きながら場所を離れる。
暫くすると雨が降り出した。
あの時と同じく、ざあざあ。と。

「……降って来やがったか……」

それを見やりながらシオンの胸中にあるのは666との対峙した時の事。

そして、救えなかったアリサの事、だ。
・・・シオン自身。認めたくは無かったが、666の干渉がなければ間違いなく彼女を自分は殺していた。
その事に苦い表情をする。

「俺は、666に救われたの。かな……」

【……さあな……】

答えは出ない。出る筈が、ない。

雨の中を歩きながら近くの店に入った。

喫茶翠屋。という名前の喫茶店に。



スバルを始めとした四人。シオン搜索組は、まず地球に着くと同時に666の襲撃場所に向かった。

しかし、当然。と言うべきか、シオンの姿はどこにもない。

そこでシオンが既に666を追い駆けた可能性を考え、その場所に残った転移反応をティアナとキャロが調べたのだが・・・

「……キャロ。この術式、解る？」

「その、解りません……」

二人して、その魔法術式に頭を抱える羽目になった。

特別を飛び越してもはや理解不能なレベルの術式なのだ。

あからさまに残された転移反応なのだが。

高度なレベルで編まれているのは解る。

だが、その構成は極めて緻密。

ここまですになると、いつそ魔法術式の専門家を呼んだ方が早い。

「でも、これでまだシオンは此処にいる可能性が出て来たわね」

「え？何で？」

ティアナの言にスバルが疑問不を浮かべる。

「流石にこんな魔法術式じゃあ転移反応なんて解んないわよ。

なら、666か感染者が見付かるまでは下手に転移しないとと思うし」

「成る程ー」

ティアナの予想にスバル達が感嘆の声をあげる。

……実際は、シオンはもはや転移先を知っていたのだが、
当の本人は翠屋で休憩を取ってる最中だったりする。

「それじゃあ、此処から先はそれぞれ手分けして捜すわよ？」

「うん。解った」

「了解です」

ティアナの指示にそれぞれ頷く。

そして、それぞれ何処から捜すか。

合流場所は何処か。

定時連絡は何時間置きかを決める。

「……雨が降っているから皆。

滑って転んだりしないようにね？

それじゃあ行くわよ！」

「「了解！」」

ティアナの号令に四人共、弾かれたように動き出す。
かくして、シオンの搜索は開始された。



シオンが翠屋に入ってしばし経つ。

そのシオンの前のテーブルには所狭しと並ぶ料理があった。

シオンは三日程何もお腹に入れていない。

それ故か出された料理を片っ端からお腹に入れた。

「いや。」

いい食べっぷりだね？」

翠屋の店長。高町士郎がシオンに声を掛ける。

これだけ食べて貰えれば料理人冥利に尽きるだろう。

「いや、俺もまだまだですよ」

士郎の言葉にシオンもまた謙遜する。

なにせ、自分を越える食欲の持ち主を知っているからだ。

スバルとかギンガとか。

他の戦闘機人はさほど食べないのに、どういう胃袋してるんだろう。

と、疑問に思った事があったりする。

だが、そこまで考えて、頭を振る。

・・・自分はあるところをもう降りた身だ。と。
そんなシオンを見て、士郎が言葉を掛けてくる。

「そうかい？」

「……なあ、君。無理、してないかい？」

「……無理、ですか？」

「ああ」とシオンに士郎は返す。

胸中に浮かぶは未娘の姿。自分は怪我をおい。病院から出られず。
そして、妻と息子、そして娘は忙しくて幼少時にあまり構えなかったのだ。

いつも明るく振るまっていたが無理をしていたのは解っていた。
今、目の前の少年はそれのかつての未娘と多分に重なる。

「……してないですよ。

無理なんか……

でも……」

「……でも？」

士郎に促され、シオンは話す。

それは普段のシオンであれば考えられない事。

「……優しさに背を向けるの、て辛いな。とは思います」

「……」

シオンの言葉に士郎は黙る。

優しさに背を向ける。

その言葉を放った少年の顔が、まるで泣きだしそうにも見えたからだ。

「……一つだけお節介を焼いてもいいかな？」
「お節介？」

士郎の言葉に疑問不を浮かべるシオン。
それに

「ああ」と士郎は頷く。

「君に何があったのかは僕には解らない。
優しさに背を向ける理由もね」

「……………」

シオンの前の空になった食器を片付けながら士郎は言葉を紡ぐ。

「でも、いつかはその優しさに応えてあげなさい。

それは、君にとって大切な物の筈だろうから」

「……………」

士郎の言葉に、しかし。シオンは答える事は出来ない。
だが、その言葉はシオンの中にスッと入った。

「今は解らなくていい。

でも、いつかは考える事だよ。

……その時に僕の言葉を覚えていて欲しいな？」

「……………はい……………」

士郎の言葉にシオンは頷く。
不思議だった。

この男性に自分は何も状況を喋っていない。

だが、この男性はまるでそれらを理解しているように話す。
何故かそれに苛つくこともなくシオンは素直に頷いた。

そこまで考えてシオンは目の前の男性に名前を聞きたくなった。

「名前、聞いてもいいですか？」

士郎はその言葉に笑いながらも答える。

「士郎。高町士郎」

「俺は、神庭シオン、ていいます」

二人は名前を互いに教える。

シオンにとって何故この男性にそこまで親しみを覚えているのか自分でも疑問だったが。

その答えがフツと浮かぶ。

（そっか。お父さん。てこんな感じなのかも知れない……）

その存在はシオンにとって一度も見た事のない存在。

故に士郎にそんな幻を見たのかもしれない。

「さて、コーヒーでも飲むかい？シオン君？」

「はい。頂きます」

その時、シオンは666の襲撃以来。始めて笑みを浮かべた。



雨の町を歩く。

先日も雨だったが、今日はむしろ小雨に近い。

スバルはそこだけ救いがある、と思った。

（……シオン……）

心の中で少年の名を呟く。

666と対峙したシオンを見て、自分は何と思ったか。

それは恐怖だったかもしれない。

しかし、それ以上に感じたのは哀しみ。だった。

あのシオンはどこか哀しかった。

そう、まるで大切な人と戦ってるような感覚。

それをシオンから感じたのだ。

（アンタが!!!!!!）

何でアンタが!!!!!!）

あの言葉にどんな気持ちが込められていたのか。

嫉妬。

憤怒。

あの時のシオンは他の誰にも向けた事のない程、感情に溢れていた。
それはスバルには引き出せ無かったもの。

（何か、モヤモヤする……）

その感情をスバルは解らない。

まだ。

だから尚更にモヤモヤするのだが。

《……スバル、そっちはどう？》

ティアナから通信が入る。

と、同時に海鳴公園に入る。

海を臨む公園だ。

雨が降ってなければさぞかしい景色だろう。

気付けば辺りは暗くなり始めている。
日が沈み出しているのだ。

《ううん、まだ見付から……？》

何故だろう。

スバルはそこで言葉を切った。

何故だろう。

街灯が照らす。

向こうが気になったのは。

そして、何故だろう。

そこに、彼、が居ると確信したのは。

《スバル……？》

ティアナから呼び掛けられる。

スバルは無意識に通信を切った。

歩く。

歩く。

そして、その姿を見る。、彼、を見つける。

「……シオン」

そこにはベンチに座り。佇むシオンが居た。



その背中を見る。

シオンをスバルが見つけた時、胸に抱いたのは喜び、だった。

それは。はやてから目を醒ましたと聞かされても抱けなかった程の感情。

だけど、近付けなかった。

何故かは解らない。

ひょっとしたら近付いてしまうと消えてしまいそうな感覚を覚えたからか。

シオンの背中中は、まるで幻のようにスバルには思えた。

気が付けば、日は完全に沈み。辺りは夜の帳が包む。

スバルはしかし、シオンに声が掛けられない。

時間だけが過ぎていく。

暫くして、シオンが立ち上がる。

雨の中、ゆっくりと。

「あ……………」

声が出ない。シオンは行ってしまうと言うのに。

「あ、あ…………シ……………」

脳裏に描くのは二日前のシオン。

666にサインを刻まれ、意識を奪われたシオンだ。

もし、またサインをシオンが刻まれたら？

次は目覚めなかったら？

最悪の結末だけがスバルの脳裏を過ぎる。

声が出た。

「シオン！！」

叫び。

届けと張り上げるその声に漸くシオンが振り向く。

「スバ、ル…………？」

シオンが驚いた顔でスバルを見る。
その顔を見て、スバルは泣きそうになる。
自分の名前を呼ぶシオンの声に泣きそうになる。
幻のようだったシオンは漸く実像をスバルの中で結んだ。

「シオン……」

だけど言葉が見付からなくて、ただ名前だけを呼ぶ。
それにシオンはゆっくりと近付く。
雨が降る。ざあざあと。

「……よう……」

「……うん……」

それは会話にすらならない会話。
二人共言葉が見付からないのだ。
ややあつてシオンが喋る。

「……俺を、連れ戻しに来たのか？」

「………うん。」

あのね、シオン」

そして、スバルは話し始める。
はやての事が誤解である事。アースラの任務に666の捕縛が加わった事を、だ。

「だから、……ね？
シオン。帰ろう？」

アースラに。それはスバルに取って、祈りとも言える言葉。だけど、シオンはただただ首を振る横に。

「……なん、で？」

スバルの疑問にシオンは答える。

「もう、決めたんだ。

俺は666しか、見ない。てそして……」

そんな自分はアースラに居る事は出来ない。と告げる。

「そんな……

そんな事ないよ!!」

声を荒らげるスバル。

しかし、シオンは取り合わない。

「……俺は、優しさの中に居れない。

入れない。

だって俺は……」

復讐者。だから。

それは哀しい答え。

スバルはシオンの答えに首を横に振る。

「なら、忘れよう？

復讐なんて、忘れて……」

「それは、出来ない。

過去の俺が否定する。

今の俺が拒絶する。

そして、未来の俺が許さない」

淡々と、淡々とシオンは告げる。

「……済まない。

スバル。俺はこれだけしか言えない」

「シオン……！」

スバルは叫ぶ。

こんなにも叫んでいるのに。

気持ちが届かない。

通じない。

「ゴメン……」

シオンはそう言いながらスバルの横を抜ける。

スバルは横を抜けたシオンに振り向こうとして。

次の瞬間。シオンに抱き着かれた。

「え………」

背に手が廻される。

キュッと力を込められる。

「シ……シオン……？」

「最後に伝えとく」

抱き着いたままシオンは言う。

それは多分。今生の別れとして。

それを悟ったスバルは涙を浮かべ、唇を噛む

「優しさの中に居させてくれて

ありがとう。

そして……」

別れの言葉を紡ぐ。

「さよなら」

背に廻された手は離れ、シオンは背中を向けたまま歩く。

「シオン……！」

それにスバルは駆け寄れない。

その場に膝をついて、涙を流す。

ただ名を呼ぶ事しか出来ない。

そして、スバルの目の前で魔法陣が展開し。

シオンはこの世界から消えた。

「シ、オン………」

う、ううう……！」

スバルは泣き続ける。

雨の中で。

ただ、ただ。泣き続けた。

（第十二話に続く）



ア

「はい!! 本編の鬱展開、及び雰囲気を台なしにするアリサ道場です!!」

す

「うわぁ、本編読んだ後だと、とんでもなくシュールだね、これ」

シ

「まぁ、そもそも鬱展開が嫌だからこそこの道場らしいですし笑」

ア

「……て、ちょっと待ちなさい？」

貴方、何故にこの道場に!？」

シ

「はい、作者に代行として出された神庭シオンっス♪」

ア

「何故？」

なんでこのカオス道場に主人公が!？」

??

「まぁ、それにはいろいろあるんじゃないか？」

ア

「そして、また待ちなさい!!」

神代銀杏! アンタがなんで此処にいるのよ!？」

ここはStS, EXであってSilverFriendじゃあ。ないのよ!？」

シ

「あ、はじめまして。

神庭シオン。ていいます」

銀

「お。なかなか礼儀正しいな。俺は神代銀杏。よろしくな」

ア

「無視すんなー!!」

銀

「うおお!!」

何しやる!

んな、人が殺せる勢いで竹刀振ってんじゃねえ!!」

ア

「そんな事より!

何でアンタが此処に居るのよ!」?

銀

「まあ、それを説明する前に二人に一つだけ聞いていいか?

ア、す

「何?」

銀

「その恰好は……?」

ア、す

「「突っ込み禁止」」

銀

「……さいですか……」

す

「それで結局なんで他作者のSSである所の銀杏君が?

シ

「それについては作者からお手紙が来てるっスよ?」

ア

「なんで、手紙なのよ……?」

シ

「では読みあげます。

《パンパカパーン。

祝二万PV越え♪特別企画。多作品のオリジナルキャラを召喚♪》」

ア、す

「「は……?」」

銀

「まあ、つまりこの道場には他作者の立候補でオリジナルキャラが召喚されてくるんだよ」

ア

「え?何ソレ。私初めて聞いたんだけど……」

「私も……」

シ

「決まったのはついこないだだそうっスよ?」

ア

「あんの作者あ……!」

銀

「人を殺せそうな声出すなよ」

す

「でも一言くらい言って欲しかったかも……」

シ

「てな、訳で。」

これからアリサ道場はリリカルなのはを書いてる方のオリジナルキャラに属するキャラを召喚します♪

是非出したい、て方は感想にて、立候補して下さい♪
ついでに出すキャラも教えて下さい♪

銀

「そういえば疑問なんだが……アリサ、すずかは何で俺に普通に接してるんだ?」

ア、す

「「あ、そう言えば……」」

シ

「それについてはアリサ道場の特性で、ここにいる道場主、アリサさんとすずかさんは全ての並行世界（二次創作作品）のお二人の記

憶があるそうです♪

それ故、銀杏さんの記憶もある訳なんですよね〜」

銀

「……それは、一種無敵なんじゃ……?」

シ

「しかも、この道場は一切魔法が届かないので、お二人は銀杏さんの事、全部覚えてるそうです」

銀

「マジで!？」

俺も初めて聞くんだが。

その設定!？」

ア

「……そう言えば向こうの私達、て銀杏の事覚えてないのよね?」

す

「あ、そうだね」

銀

「……ほん、と。

とんでもないな。この道場」

シ

「尚。この道場に来られた方は全て道場因子の特性を受けて、キャラが変質するそうです」

銀

「待った、待った!？」

今のは流せねえ!」

シ

「そこは流して頂きます」

銀

「容赦ねえ!！」

ア

「まあ、諦めなさい。

私達でさえ変質しちゃってんだから……」

す

「これはこれで楽になるよ？」

銀

「それが嫌なんだろうか!？」

シ

「まあ、グダグタになりつつ今回はここまで♪

銀杏さんの召喚に立候補して頂いたnaonoさんに深い感謝を申し上げます♪

尚、次の話にも銀杏さんを召喚したまま行く事になりますんでよろしくです♪」

銀

「まあ、今回。突っ込みだけで終わったしな。俺。」

シ。

ボソッと（実は、それがキャラ変質なんですが……）

銀

「……待て、今の聞き流せない一文があったような……」

シ

「気のせいですよ♪」

ア

「そうそう♪」

す

「気のせいだよ♪」

銀

「……お前等……」

シ

「ではでは♪また次回……♪」

ア、す、銀

「「次のお話で……♪」」

第十二話「優しさにさよなら」（後書き）

「雨の中での別れはただただ悲しくて」

「そして、スバル

は自分の殻に閉じこもる」

「そして、そんな彼女をよそに猛威

を奮う666と。追いつけるシオン」

「そして、ティアナは：

……」

「次回。第十三話『決意』

「信じ続ければ、きっと届くと信じて」

第十三話「決意」(前書き)

「楽しかった思い出」 「だからこそ別れは悲しくて」

「復讐と友愛。彼は復讐を選んで」 「私は彼を

……」 「魔法少女リリカルなのはS t S', E X。始まります」

第十三話「決意」

二年前の666のデータ。

666（ナンバー・オブ・ザ・ビースト）

本名…伊織タカト

年齢…十九歳（二年前。今は二十一歳）

魔力ランク…SS＋EX（評価規格外）

グノーシスに於ける位階『第二位』（現在は失効）

魔法術式…八極八卦太極図。

戦闘スタイル…魔神闘仙術

クラス…格闘士^{グラップラー}

デバイス…なし（現在では魔王の紋章がその役割を果たしていると思われる）

八極八卦太極図について。

666事、伊織タカトが考案した魔法術式。

だが、この術式そのものは、異端、である事を前提として頂きたい。
この術式の特徴は

『自己改造』

ヒトのままでいかに神の位階に近付けるかを念頭に置いている。

まず、タカトが着目したのは『リンカーコア』の改造である。

自らの『リンカーコア』を露出し。自己改造した訳だ。タカトの『リンカーコア』は『八卦太極図』と呼ばれるものになっている。

これはリンカーコアを八門遁甲と呼ばれるもので囲み。そして、分解。

次に八門遁甲を常に回転するように改造した。

これを『八卦太極図』と呼ぶ訳だ。

これにより。空間内の八極素。つまりは

天 火 水 土 山 雷 風 月

の八素を特殊な呼吸方で身体に取り込み。練り上げた所で八卦太極
炉に流し込む事で従来では考えられない魔法特性を持つに至る。

つまり、彼は呼吸をする事で魔力を補給出来るのだ。（空気の有無
に関わらず）

さらに、八の門に魔力を流し込む事により。各属性の変化を可能に
した。

つまり、タカトは変化資質を天然で八つ持つ事になる。

『リンカーコア』を改造した後で次に行ったのはそれを応用した術
式の構成である。

それをタカトは東洋の魔法である所の『仙術』を研究する事により、
構成した。つまり『カラバ式』を下地に『仙術』を組み込む事によ
り。まったく別種の魔法を作った訳だ。

『仙術』の特性は究極の肉体コントロール。

そして、空間すらも制御する、術制御。

つまり『八極八卦太極図』の目指す物に限りなく近かった訳だ。

『カラバ式』の魔力運用に『仙術』の制御能力。

この二つの組み合わせにより。

途方もない緻密な制御を持って大魔力を運用する技法を持つ術式が
生まれた訳だ。

いわく。

『大魔力と高速・並列処理は衝突するのが普通』
で、あるが。

『八極八卦太極図』はそれに当て嵌まらない例外となってしまうっている。

とは、言う物のこの魔法術式を使用する為には『カラバ式』の魔法構築能力と『仙術』の肉体コントロール・術制御を極めて高いレベルで修めなければならず。それは才能で表すには余りに異才。

それは努力で表すには余りに異常。

ともとれる出鱈目な練武が求められた。

これを十四で完成させたタカトが異常過ぎただけであり。

実質タカト以外にこの術式を使う者はいない。

（タカトいわく。

『やれば誰でも出来る』）

666のアビリティー・スキル。

一応。タカトはグノーシス側に居た人間である為。アビリティー・スキルでそのスキルを表す。

魔力放出…S+

魔力を体外に放出する技法。

これにより、攻撃加速。

防御。威力増加等はば広い効果が期待出来る。

S+は実質の最高レベル。放出する魔力自身を攻撃に転化する事すら可能。

対魔力耐性…S

純粋な魔力に対する防御スキル。対魔力耐性SはSランク以下の魔力攻撃をほぼ完全に防ぐ。

しかし、衝撃までは消えず。また追加効果に関してはダメージを受ける。

心眼…AAA+

直感の正反対のスキル。

修業。鍛練にて培った洞察力。戦闘に置いて、今までの経験を引きずり出し。その戦闘と比較し、勝利する為の活路を見出だす戦闘論理。

無窮なる練技…SS+

心。技。体。

の完全なる一体により。
あらゆる戦場に置いて。

いかなる精神制約下でもその能力を十全に発揮するスキル。

八極八卦太極図…EX

上で説明した通り、大魔力運用を高速・並列処理可能とするトンデモスキル。

しかも、呼吸するだけで魔力を補給するので、実質の魔力制限はない。

つまり、彼に魔力ダメージでのノックダウンは不可能と言う事である。

666の魔法技の威力検証。

天破疾風。

威力…S。

速度…SS+。

効果対象…一名。

魔神闘仙術に置ける『風』の属性変化（カラバ式では変化資質の事をこう呼ぶ）技。

纏う風を拳に込め圧縮。

拳を対象にたたき付ける事により。発動する。

その風圧は台風レベル。効果範囲が一名だけではあるがその威力、速度は絶大。

天破紅蓮

威力…S+

速度…S

効果対象…一名。

魔神闘仙術に置ける『火』の属性変化。

基本は足でたたき付ける。

風と同じく。火を足に圧縮。

対象に蹴りをたたき付ける事で同時に着火。爆発する。

威力は瞬間で疾風を超える程。

これも効果対象が一名ではあるが、威力、速度共に絶大。

天破水迅

威力…A A+

速度…A A

効果対象…一〇千名。

魔神闘仙術に置ける『水』の属性変化。

水を魔力と共に練り上げ、水系とし、広範囲に展開。対象を切り裂

く。

水を高密度に圧縮する事により、とんでもない水圧で放つ。

威力、速度、範囲。

共に強力。

天破震雷

威力…SS+

速度…A

効果範囲…一名

魔神闘仙術に置ける『雷』『土』の混合技。

雷だけでも土だけでも威力としては乏しいかったらしく二つを組み合わせたらしい。

土をもって雷を集める。

収束。圧縮する事により、結局。四つの技では最強の威力となってしまった。

0距離で対象に掌底をたたき込む事で発動。

0距離でしか使えない為、速度こそAだが、威力はSS+。

天破光覇弾

威力…SS+

速度…BBB

効果範囲…一〇百名

魔神闘仙術に置ける『天』の属性変化。

光を掌中で収束。圧縮し、放つ。砲撃技。

砲撃技の為、速度にやや難があるが、威力や範囲は絶大。

絶・天衝

威力…SSS

速度…S

効果範囲…一名。

魔神闘仙術に置ける『天』『月』の混合技。

左右どちらかの掌に天と月の属性を組み合わせた魔力を収束、圧縮。そして加速する事により『闇』（もしくは『冥』）の異常属性変化を起こし。

対象に『斬れぬ物なき斬撃』としてたたき付ける。斬撃技。

この闇は侵食。という特性を持っており、あらゆる物質を闇へと帰す。

（タカトは高密度の魔力で手を防御して、侵食を防いでいる）

範囲こそ一名だが。

威力は必殺。速度も速く。

タカト最強の技（ただこのデータは二年前の物）

他属性技。

金剛体

威力…Ⅰ

速度…Ⅰ

効果範囲…Ⅰ

魔神闘仙術に置ける『山』の属性変化技。

と、いつでも。これは山の効果により自身の身体を金剛とする技法。

その硬さはまさしく金剛のそれに比肩する。
しかし、俊敏性にやや欠ける為、あまり使われない。

魔王の紋章。

ロスト・ロギア扱いの代物。

だが、あまりに情報がない為、その能力は不明。

一説にはある一つの術式を発動するためのデバイスでもあるらしい。
タカトは二年前に事故でこの紋章と接触し。

自我が飲み込まれ暴走したと推測される。

その後、グノース位階『第三位』の一人を刻印により、意識不明にした後。

グノースを出奔。

今に至るまで暴走を続けていると思われる。

やっかいなのは暴走しているにも拘わらず、スキル。無窮の練技によりその技能の全てを十全に扱え。心眼すらも使えてしまう、という事にある。

つまり暴走しているのに本人自身はいたって冷静と、いう事になってしまっている。

しかも、八極八卦太極図で魔力は無制限である。

以下、666の二年前の最後の情報である。



「……………出鱈目やね……………」

モニターを見てはやてが呟く。

666の二年前のデータだ。

「普通考えませんよ。自分のリンカーコアを改造なんて……」

隣のグリフィスも若干顔を青くして答える。

666事、タカトの思考はスカリエッティのそれに近い。

自分を改造するか、他人を改造するかの違いだけでやっている事はいったい違いもなかった。

問題は、コレと戦わなければならない。という事だ。

今666の被害者は拡大傾向にある。

正直、各駐留部隊では相手にならないどころか、足止めにもならないのである。

実際。データを見たが納得のいく数字が並んでおり。

現在、666に対する戦力はアースラしかない。という事だ。

「……結局。シオン君も行方不明のままやし、な……」

はやてが嘆息しながら呟く。

地球についたのは半日前。そこに居たのは涙を流し続けるスバルと慰めるティアナ達だけであった。

どうもスバルはシオンと接触した方がいいが説得に失敗。引き止める事も出来ないままシオンを行かせたらしい。

ぽつりぽつりと状況を聞いたが、酷い事を言われた訳ではなく。

しかし、真っ正面から拒絶されたいらしい。

それが尚更ショックらしく、スバルは今、部屋に閉じ籠りつきりだ。

「変な所で素直な癖に肝心の部分が頑固と言うか……」

シオンの事をはやてはそう評した。
素直なのだが、同時にとんでもなく頑固なのだ。
彼は。

一旦線引きをするとそこから先には絶対に行こうとしないし、そして踏み込ませない。

ある意味では、いい人、なのだが

「『優しさの中に居させてくれてありがとう』、か……」

シオンが最後にスバルに語った言葉だ。

シオンのあるがのままの言葉だろう。

故に切なかった。

「まだ、そんな事、言うんには早過ぎやろ……」

そう、スバルからそれを聞いた時、はやては決めていた。

シオンをまた、その優しさの中に入れる事を。

それが短い間でありながら、自らを、先生、と呼ぶ、生徒に対してのはやての選択。

それはなのは、フェイトも同意であった。

「……取り敢えず捕まえたらお説教やな……」

女性陣全てはスバルを泣かせた、という段階でシオンに対してお説教をする事が決定事項となっている。

シオンは知るだろう。

なのはのお説教の怖さ等を。

伊達にアースラメンバーの多くは女性陣で構成されている訳ではないのだ。

そんな事を考えていると、いきなりエマージェンシー・コールが鳴

る。

このエマージェンシー・コールは・・・

「艦長!!」

第40管理内世界で666出現!!

現在、511武装隊及び、駐留部隊と戦闘中です!」

「!……。来た、ね……」

総員第一戦闘配備!!

前線メンバーをブリーフィングルームに呼んでな!？」

「了解!!」

さらにはやては駐留部隊のカメラで戦線をモニターする事を指示。
先程の666のデータは二年前のものである。
今のデータが是非欲しかった。

「!……新たな転移反応……。これは……!!
艦長!」

「どうした？」

「……っ!!」

シャーリーに促され、モニターに顔を向ける。
そのモニターに表示されたのは……

「……シオン、君……」

アースラを降りた彼が、そこに居た。



管理内世界第40世界。

その内のある惑星で、511部隊、部隊長は心の底から今目の前にいる。

‘異端’に恐怖していた。

世界が軋む、その存在に。

それは、嘆きか、あるいは歓喜か。

「う、撃てー！ー！！！」

その気配にしかし、部隊長は砲撃を放つ事を命じる。

しかし、それは使命感からでも、ましてや正義感に駆られての命令ではない。

純然たる恐怖によって防衛本能のまま命じただけだ。

しかし、周りの部隊員にはそんな事は関係ない。

‘撃たねばやられる’

それを本能のレベルで理解したが為に、その命令のまま砲撃を放つ。

511部隊のほぼ全ての人員から放たれる砲撃。

それがその気配の主。

異端なる者である666に向かう。

オーバー・キル。

一度だけでは足りないを見たか。部隊員は次々と砲撃を叩き込む。

その数、数千発。

たった一人の人間に放たれる量ではない。

周りは砲撃によって生まれた煙で立ち込める。

（仕留めた……！！）

部隊長以下、全員がそう思う。

しかし、煙が消えた時。

そこに在るのは絶望の証。

666は、無傷、でそこに佇んでいた。

「う……嘘だ……」

「何で！！どうして!？」

叫ぶ。しかし、現実是不変。

實際666は防御も何もしていない。

666は自分に当たる砲撃を全て、殴り、消し飛ばしたに過ぎないからだ。

彼の持つアビリティ・スキルは、魔導士殺し、と呼ぶに相応しい代物だ。

Sランク以下の純粹魔力攻撃を無効とし、さらに魔力放出が一つのフィールド魔法のそれと同じ代物と化している。

まさしくミッド式のものにとっては文字通り、手も足も出ない、代物なのだ。

例外はエース級だけだろう。

666が一步を踏み込む。

右手を横に肩の高さまで持ち上げる。

すると、どこからか水が現れ、666の右手を螺旋を巻きながら対流する。

もし、部隊の人間に冷静なものがいれば、周りの空氣が異常に乾燥している事に気付いただろう。

666は空氣から水分を取り出しているのだ。

魔神闘仙術…天破水迅。

踊る水系が辺りに悲鳴を響かせる。

水系の射程距離、およそ2km。

今、511部隊がいる全ての空間に届く距離だ。

一瞬に張り巡らされた水系は511部隊、部隊員全てを貫き。

そして、666が手に在る水系を切ると同時に水系はただの水に戻り。

666以外立つ者は誰一人いなかった。

誰一人立つ事のない、荒野を666は歩く。

目指す標的は511部隊員の中に居た。

まだ若い。恐らくは少年だろう。

たった今感染したのかは定かではないが、彼は完全に因子に感染していた。

近付く666に少年は・・・感染者は逃げようとするが、既に手足は水系で碎かれ。

再生したはしから飛ばされる魔力に碎かれる。

666が歩きを止め、右手を掲げる。

閃く666の正位置を模した魔法陣。

断末魔が響いた。

少年は倒れ、そして胴に刻まれる刻印。

またここに一人。意識不明者が生まれた。

666は踵を返す。

もはや、用は無い。とばかりに。

が、唐突に左手を掲げる。

掴む。刃を。

その刃は大剣。イクス。

持ち主はその主。シオン。

今、再び両者は巡り会う。

「……手前え……っ！」

「……………」

吠えるシオンに、しかし感情の無い瞳で見つめ返す666。
シオンは一旦刃を引き。

3mの距離を挟んでイクスを構える。

【シオン。あまり熱くなるな……】

「……っ……解ってる。イクス」

自らの相棒に返事をすると同時に666を睨む。

「……アンタ。自分が何やってんのか、理解してんのか？」

「……………」

尋ねるシオンに、しかし。666は無言。

あたり前だ。喋れる訳が無い。

彼の自意識は、もう。とっくの昔にない。

解っていた。

でも許せなかった。

そう。彼だから。そんな事は許せなかった。

「……っ……」

なあ？アンタは……！」

【シオン……】

666にしかし語り掛けをシオンは止めない。

泣きそうな程に切ない思いのまま話す。

しかし、語り掛けは続かない。

666が一步を踏み出す。

「！！くっ！！」

【シオン！！】

放たれる拳は疾く。

シオンはギリギリで反応し、イクスで受け止める。

しかし、受け止めたまま二歩の距離を飛ぶ。

拳の威力にシオンの身体が浮いた為だ。

666は尚も間合いを詰める。

「……このっ！！」

シオンはその場で足場を形成。

さらに斬撃を放つ。

しかし、今度は右手でイクスを弾かれる。

シオンはそれを見て、そのまま空へ後退。

しかし、次の瞬間。

666の姿が消える。

「なーっ！！」

右。666の姿があり。

既に攻撃体制。

放たれるは左の拳。

着弾。

受け止めるとかそんなレベルではない。

シオンは数mの距離をすっ飛ぶ。

「……ぐっ……！！」

【シオン！！】

イクスから飛ぶ声。

シオンは勢いのまま地面に辛うじて着地。

しかし、666を見た瞬間。血相を変える。

666は既に目の前。

放たれるのは風の一撃。

天破疾風。

螺旋を描いて放たれた拳にシオンはギリギリシールドを発動。

しかし、一瞬の抵抗の後。

簡単に碎ける。

「ーイクス!!!」

トランスファー!!!

ブレイズ・フォームへと変化。

増した速度で後ろへ下がる。

疾風が空を切る。

だが、その余波は軽くシオンを空へと持ち上げる。

「くっそ！無茶苦茶だ！」

【あれの出鱈目さは今に始まった事じゃないだろう！】

実力の違いに歯噛みするシオン。

666は疾風を放った後。

そのまま佇む。

666もシオンもその実力を完全に発揮する距離はクロス・レンジだ。

しかし、シオンは今の段階で攻撃力。防御力。速度に負け。

戦闘に於ける経験については比べるべくもない。

暴走状態だからとまだ甘く見ていた。

今の666は無窮の練技による十全たる戦闘力と。

さらに経験からなる心眼すらも引き出している。

勝ち目がない。そう、シオンに切り札がなければ。

「……イクス」

【使う、か……】

精霊融合。

アレならば恐らく666とも互角に戦える。

・・・そう、'互角'に。

それがシオンとイクスが考えた。

精霊融合を用いて666と戦った場合に於ける仮想戦闘結果。

つまり三分を過ぎれば負けるだけ、である。

だが……

「このまま負ける方が嫌だしな……」

【ああ……】

使う。

今の状態ではジリ貧もいい所だ。

どうあがいても精霊融合無しでは勝てない。

分の悪い賭けだが。

故にこそ賭ける価値がある。

「契約の元。我が名、我が血を持って。

今、汝の顕現を求めん。

汝、――っ！」

精霊召喚の永唱開始しようとした瞬間。

666が現れる。'頭上'にいつ移動したのかも解らない程の鮮やかな瞬動。

そして、円を描いて高々と上げられる足。

、炎、が燃え盛る。

「――まず――っ!!」

最後まで声を出せ無かった。

出来たのはイクスを掲げシールドを張るまで。

瞬間、蹴りがシールドに叩き込まれ。

爆炎。

シオンの視界を炎が埋めた。

天破紅蓮。

その一撃は蹴りが叩き込まれた瞬間に炎の柱として顕現。

シオンの意識が一瞬。完全に途切れる。

が、自らを焼く炎に瞬間で目が醒める。

「が、あっ……」

【シオン！生きてるか！？】

イクスからの声が遠くから聞こえる気がする。

シオンは地面に叩き付けられ。

さらに、シオンを中心とした半径十mが焼け野原と化している。

よく、生きているな、と自分を褒めたいが。今は戦闘の真っ最中である。

痛む身体を無理やり起こす。

666がさらに瞬動で現れる。

「……っのお……!!」

「……………」

横に振られるイクス。

しかし、666はその斬撃を身を屈めて避け、シオンの脇を抜ける。

ヌルリと。

「ーっ！」

身を延べる。

古流の格闘術にある秘伝の技法。

666はそれを持ってシオンの背後へと廻り。

瞬間。無音の衝撃がシオンを貫いた。

「か、あ……」

【シオン！。シオン！！】

鉄山甲。

ハ極拳の一撃である。

666はシオンの背後に廻ると同時に身体を回転させ、それを放ったのである。

打撃により。呼吸が止まり。シオンの身体から力が抜ける。

膝を付く。

意思に反して動かぬ身体。

イクスすらも取り落とす。

そして後頭部を掴む右手の感触。

後ろで刻印を刻む為の魔法陣が展開するのを感じる。

しかし、シオンは何故か懐かしさを抱く。

‘彼’に頭を撫でられたあの感触を……。

そして虹色の光が……

「ファントム！！」

ブレイザー！！！」

放たれる直前に右手からの砲撃が666に叩き込まれた。



時間は少し遡りアースラ。

ティアナは自室に居た。

部屋の中で立ち。

目の前のベットを睨む。

二段ベット。

その上の段にはルームメイトが居る。

スバルだ。

布団を頭から被り、外界からの情報を見ないようにしている。

それにティアナは苛立つ。

「いつまで、そこに居るつもりよ？」

「……………」

スバルは答えない。

黙ったままだ。

それにティアナはさらに苛立つ。

「あと、10分もしたら出撃よ。

アンタ、出撃命令無視するつもり？」

「……………」

答えない。

「そう。」

勝手にしなさい。

私は行くわ。

アンタみたいになんかしたくないもの」

「……ティアには分かんないよ」

漸く。声が返ってきた。

ティアナはそれに。しかし、喜ばない。

「分かんないわよ。」

アンタがうじうじしてる理由なんか」

「……シオン。さよなら、て言った」

スバルの声が紡ぐ。

拒絶された事を、それを直に言われた事を。

「ティアには分かんないよ……」

真っ正面から拒絶されてないんだもん」

「スバル……」

ティアナの声が響く。

それはたった一つの事を告げるため。

「甘ったれないでくれる？」

「ッ………！」

ティアナは断言した。今のスバルはただ現状に甘えているだけだと。

「アンタ。そこでそうやってたらシオンが帰ってくるの？」

「……………」

ティアナの問いにスバルは答えることが出来ない。
出来る筈が、ない。

「いつか聞いた事があつたわよね？
アンタ、結局の所、どうしたいの？」

「私、は……」

ティアナの問いに、スバルは迷いの言葉を紡ぐ。

「答えが出せないならそこで一生悩んで下さい。
ぐじぐじ、ね」

「ティアは!!」

その言葉にスバルが布団を跳ね退ける。
目に浮かぶのはやはり涙。

「シオンに直接言われてないからそんな事言えるんだよ!？」
「知った事じゃないわよ」

スバルの叫びにしかし、ティアナは取り合わない。

「直接言われた？」

だから何なのよ。

さよなら、て言われた？

だから何よ？

アンタ、持ち前の我が儘はどうしたのよ？」

「だって!」

叫ぶスバルに、しかし。ティアナは容赦なく続ける。

「何度でも何度でも捕まえればいいじゃない！
優しさの中に居れない？」

それがどうしたってのよ！

なら何度でも入れてやればいいじゃない！」

「ティ……っ！」

「私は……！」

名を呼ぼうとするスバルに、しかし。ティアナはそれを遮る。

「アンタと違う。諦めない。必ず、あのバカを連れ戻すわ」

「ティア……」

《出撃前です。各前線メンバーはヘリポートに》

艦内放送が鳴る。

それを聞き、ティアナはスバルに背を向ける。

「行くわ」

「……」

ティアナの宣言もあり。スバルは何も答える事が出来ない。

「ああ、そうそう。最後に一つだけ。

アンタ、自分がどれだけ恵まれてるか、理解してる？」

「私が……？」

呆然と聞き返すスバルにティアナは答えてやる。

「アンタ一人だけよ？ あいつにお別れ言われたの」

「……っ！」

そう、ティアナは羨ましかった。スバルが。
シオンは他の誰でもない。スバルにしか別れを告げていないのだ。

「その所。よく考えなさい」
「ティ……！」

スバルの返事を待たずしてティアナは部屋を出た。



(……アンタ、そこで何してんのよ)

ティアナはそう、思う。

ティアナが見ているのは今、再度刻印を刻まれかけたシオンだ。

「クロス・ミラージュ」
1stモード。

砲撃形態から元の銃型に戻る。

(アンタはそこで何やってんのよ!?)
「クロス・ファイアー」
シュート!!」

ティアナが放つ。クロス・ファイアーシュートが666に殺到する。
しかし、666はその全てを拳で消し飛ばす。

だが、想定内、だ。

何せ自分は一人ではない。

666にシグナムが。ヴィータが。ギンガが。ノーヴェが襲い掛かる。

しかし、666は腕を捻り、肩で弾き、足で蹴っ飛ばし、身体で跳ね飛ばす。

あれだけの近接戦闘者達と、互角にやり合っている。

（アンタはあの子を！）

「レイジング・ハート！！」

アクセル・シューター、スタンバイ、レディ！！

「バルデッシュュ！！」

イエス。プラズマ・ランサー、ゲットセット。

なのは、フェイトがシューターとランサーを展開。
同時に接近戦組が離れる。

「シューーート！！」

「ファイアー！！」

（あの子を泣かせたんでしょうが！！）

閃く光芒が666に向かって突き進み。

しかし、666は一撃を持って、これを粉碎する。

天破疾風。

放たれた風巻く一撃が纏めてシューターとランサーを砕く。

（そのアンタが！！）

だが、その隙をチンクが見逃さない。
666を中心としてスティングアの包囲を完成させ。

（何でこんな所で膝をついてんのよ！？）

そしてスティングアが666の元に殺到する、が。その全てを666は視認すらも霞む速度で拳を放ち撃ち落とす。
だが、直後、巨大な爆発が起こる。

さらに、駄目出しとばかりになのはからはエクセリオン・バスターとフェイトからはトライデント・スマッシュャーが叩き込まれる。

（シオン！！！）

しかし、666は大したダメージを受けたそぶりもなく炎の中から現れた。



暗い、暗い室内でスバルは考える。

ティアナに言われた事をシオンの言葉を。

（私は、どうしたいんだろう？）

シオンに帰ってきて欲しい。

これが偽らざるスバルの気持ち。

でも、シオンに戻る気はないだろう。

（私、は……）

シオンには帰ってきて欲しい。
ならば。

何回でも説得すればいい。

何回でも、何回でも。

（受け入れて貰えないかも知れない）

シオンの言葉を思いだす。

俺は優しさの中に居れない。といった表情を思いだす。

（今度は嫌われるかも知れない）

思い出すのは最初に会った時のシオンだ。
信じられないくらい言葉遣いが悪かった。

（でも、私は……）

思い出す。楽しそうに絵を描くシオンを。

思い出す。一緒に戦った日々を

（シオンと、一緒に居たい）

思い出す。滅多に浮かべないシオンのあの柔らかな笑み。

（だから、もう一度。話したい。シオンと）

例え、それが剣と拳が交わる事になっても。

（シオンを取り戻したい）

そして、スバルは漸く気付く。

自分が何をしたいのか？それについてもう答えが出ている事に。
そして、知識としてしか知らなかった感情の正体に。

（行こう）

ベットから降りる。

そして部屋の中央に立つ。

「マツハ・キャリバー？」

はい。我が相棒？

自らの相棒の声にスバルが笑みを浮かべる。

答えは出た。

ならば、後は向かうだけ。

（シオン……会いに行くよ！）

「行こう！マツハ・キャリバー！」

はい。行きましょう。

相棒。

そして、少女もまた向かう。少年が居る。

自分のパートナーも居る。

戦場へ

（第十四話に続く）



ア

「はい♪

貴方の心の清涼剤。

アリサ道場です♪」

す

「これで四回目だね」

ス

「ちなみに前話と同じく銀杏さんに来て頂いてます♪」

銀

「てな訳でども♪

銀杏です♪」

ア

「に、しても今回はまた……、666の設定。

とんでもない事になってるわね……」

銀

「と、言うかシオン。フルボッコだな。

実力が違い過ぎなんだろうけど」

シ

「いやいや汗

どう考えてもタカ……じゃ、なかった666はセコいと思うんすよ

！！

つか、格下相手に本気出すなよコンちくしょー！」

す

「と、言うより今回の主役はスバルちゃんとティアナちゃんだもんね笑」

ア

「なんと言うか、今回はシオンはヘタレだもんね」

シ

「うう……噛ませ役な俺……」

銀

「てか、これ前後編じゃねえの？」

ア

「流石♪銀杏。ツッコミ王になれる男ね♪
話しとしては前後編ね」

銀

「待て、ツッコミ王で……！」

す

「作者さんはたまにこんな真似しちゃうから」

銀

「いや、聞けよ俺の話し！」

ツッコミ王、て!!」

シ

「まあ、次話をお楽しみに、て事ですな」

銀

「……ホン、ト人の話し聞かないよな。お前等……」

ア

「やり甲斐はあるでしょ？」

銀

「いや、まあ。」

「そういや、シオン。」

「666は年齢が公開されたけどお前何歳なんだ？」

シ

「十七ですよ？数えて十八ですな」

ア

「なら、ティアナと同じ年ね」

ス

「そうなりますな」

す

「て、言うか何気に666の名前が出てたりするね？」

銀

「伊織タカトか」

「そういや、オリキャラの下の名前。みんなカタカナだが。漢字とかあるのか？」

シ

「勿論あります。」

叶統夜（かのう、とうや）

伊織天斗（いおり、たかと）

そして、

神庭紫苑（かんば、しおん）

です♪」

銀

「ほ」。

「キツチリ考えてるのな」

ア

「まあ、あの作者だからどうせ漢字どれにするか迷ってたらかタカナにしちまえ。て出したんでしょうけど」

す

「その可能性があるから怖いね……」

シ

「さて、キリの良い所でこの辺で。」

「銀杏さんがあまり突っ込まなかったのは珍しいですね」

銀

「流石に前回突っ込み入れっぱなしだったからな。今回は大人しくして置いたぜ」

ア

「ま、でも二度ある事は三度ある。」

「次召喚した時が楽しみだわ」

銀

「次もあるみたいない方すんなよ汗。」

「そんじゃあな♪アリサ道場なかなか楽しかったぜ?。」

「シオン、機会があればいつか手合わせしような♪」

シ

「はい♪負けませんよ〜♪」

す

「ちなみに次召喚するのは誰かな?」

シ

「次は魔法少女リリカルヴィヴィオの三人組ですね♪」

ア

「へ〜。一名とは会った記憶があるけど、あと二人が無いわね汗」

銀

「大丈夫。大丈夫」

ア

「なんでよ?」

銀

「お前のツツコミ能力なら捌ききれる、て♪」

「なあ、元祖突っ込み王?」

ア

「ちょっ!待ちなさい!人を変な役職にすんな!!」

銀

「聞く耳持たない♪」

「じゃな〜〜〜♪」

ア

「待ちなさい!銀杏!

銀杏!!!!!!!」

シ

「え〜〜、二人程突っ走って行ったので我々で締めを♪」

それから銀杏さんの二回連続召喚オツケーを頂いたn a o n a oさん。ありがとうございました♪

感謝、感謝です♪

いつか、SilverfriendとEXでクロス作品とかやって
みたいですね笑

では次の話で~~~~♪

ア、す、銀

「また次回~~~~♪」

シ

「お二方、早あ!!」

第十三話「決意」(後書き)

「彼に対してのホントの気持ちを自覚して」 「だからまた話し

をしたい、と思った」 「しかし、さらなる真実が、シオン

を、そしてアースラメンバーを驚愕させる」 「そ

して、シオンは……」 「次回第十四話『その

真意』」 「その意思是少年の絶望」

第十四話「その真意」(前書き)

「ずっと。ずっと追い掛けて。でも、届かなくて」

「裏切られたと思った。例え。それがあの人の意思でなくても……」

「そして、思ったんだ。あの人を倒して。あの人をとり戻そう、て」

「だから俺は、此処に……」

「魔法少女リリカルなのはStS, EX。始まります」

第十四話「その真意」

N2R少隊が一人。

砲撃手のディエチ・ナカジマは長距離・・・1100m先からその戦闘を見る。

666との戦闘だ。

今はシグナムが斬撃を浴びせている。が。

全ての斬撃は666によって片手でいなされている。

とんでもない技量である。

なにせ、666と近接戦を繰り返しているのはシグナムだけではない。

666の右手から振るわれるはハンマーの一撃。

ヴィータだ。

666は今、信じがたい事に左半身でシグナムを右半身でヴィータの攻撃を捌ききっていた。

上段から放たれたシグナムの斬撃を左手が巻き付くように絡め取り。

その一撃の威力を足に伝達し、振るわれるヴィータのグライフ・アイゼンに叩き込む。

666はヴィータを見ていないのに、だ。

後ろに目が付いているのかと疑いたくなる光景である。

しかし、666はさらに止まらない。

右の蹴りでヴィータを弾き飛ばすと、その勢いのままシグナムに密着。

肩がシグナムの腹に当たる。

瞬間。シグナムが弾き飛ばされた。

傍目からは666の肩がシグナムに軽く当たったようにしか見えない。

しかし、あの威力。

シグナムが空にいるまま、しかし。しゃがみ込み、激しく咳込む。

666の周りには誰もいない。

先程、ギンガとノーヴェもシグナム達と同じく接近戦を演じていたが、しかし二人仲良く空を舞った。

合気。

二人は自らの力をそのまま利用され投げとばされたのだ。

今、二人は地面に倒れている。

既に接近戦組は悟っている。

666に対してのクロス・レンジは自殺行為だと。

技量の桁が違い過ぎるのだ。

そして、今。ヴィータは蹴りの一撃で吹き飛ばされ、シグナムは妙な技で弾き飛ばされた。

しかし、ディエチはこの瞬間を待っていた。

666の周りに誰もおらず。そして、自然な形でその形になる事を。

ディエチの狙いは狙撃。

彼女の一撃ならば666の防御を抜ける事が出来る。

ファイ打ちならば各スキルの発動も遅れる。

そう、今この瞬間こそがディエチの待ち望んでいた瞬間。

ディエチは自らの体内のエネルギーを固有武装イノーマス・キャノンに注ぎ込もうとして。

666と目があつた。

(なーーーー!……ッ!……!)

瞬間、ディエチは悪寒と呼ぶのも生温い予感に突き動かされて引き金を引こうとして。

しかし。それは叶えられなかった。

糸

水で出来た糸だ。それがいつの間にかイノーマス・キャノンに無数突き刺さっていた。

（これ、は！）

そう、ディエチはそれを知っている。

511武装隊を一撃で全員戦闘不能にした技。

天破水迅。

まずい。と思った時には既に遅い。

水の糸はディエチの四肢に突き刺さり。

瞬時に骨の代わりにある関節部のフレームを裁断する。

そう、手足を切り裂く事なく。

彼女の最低限の身体機能のみを破壊する。

（そ、ん……な）

だがその事実ディエチは戦慄する。

これだけの長距離に於いて、尚これだけの精密作業を行った666に。

「化物、か……」

かつて、ディエチはなのはに対して人間かと疑った事があるが、しかしこれは別物だ。

ヒトかどうかなんてものじゃない。

666は左手を伸ばす。

水系が一斉に前線メンバーを襲う。

しかし、ディエチの手足は動かず。

その光景をただただ見ている事しか出来なかった。



《N2R4！戦闘不能！！》

「……っ！！」

シャーリーからの通信に前線メンバーは一斉に息を飲む。

ジャマーを用いての長距離からの狙撃。

これがはやてが考案した対666用の策の一つだ。

しかし、それはあっさりと失敗した。

何の事はない。666が前線メンバーより上手だっただけの事。

そして、今666と戦闘中の者もまた、その驚異に晒される。

天破水迅。

既に666を中心として水系は無数に形勢されている。

その射程は666を中心に半径2Km。

そして、暴虐の糸は放たれた。

「皆！固まって！！」

なのはの叫びに近くににいる者はなのはの背に下がる。

他の者もプロテクションを発動する。

水系の驚異はその広範囲性と操作性にある。

威力も確にあるが、驚異には程遠い。

それを見切り、なのはの号令の元、防御した訳だ。

水系はプロテクションに阻まれ、前線メンバーに触れられない。

「これで……っ！」

しかし、なのはは見てしまった。

666を。

666は、左手、で水系を操作し。

そして右手には膨大な風を巻く。

そして、なのはの前に立っていた。

「……二つ、同時に……」

もう、666のやる事に驚く事はないと思っていたが、そんな事はなかった。

666は二つの大威力術式を同時に展開しているのだ。

これは、マルチ・タスクでどうにか出来る物ではない。

ただでさえ制御の難しい術を二つ同時に使用しているのだ。

限度と言う物がないのかとなのはも苦々しく思う。

そして、右の拳がなのはのプロテクションに叩き込まれた。

天破疾風。

なのはのプロテクションEXは、刹那の抵抗も許されず碎かれる。

同時に襲い来る水系。

なのはのプロテクション内に居たのはヴィータとウエンディ。そしてギンガだ。

なのははプロテクションが碎かれると同時にラウンド・シールドを張る。

ヴィータも瞬時の判断でプロテクションを張るが、ギンガ。ウエンディは防御が間に合わない。

キュンっという音と共にギンガ、ウエンディの体に水系が突き刺さ

る。

「うぁ……っ！」

「っ……！」

水系は二人の体内に入ると、その中を蹂躪する。

二人は体内から関節フレームを絶たれる。

ディエチと同じだ。

「ギンガ！ウエンディ！！」

「こんのお！」

チンクが叫び。そして、ノーヴェが666に向かう。蹴撃。

ノーヴェの一撃はしかし、666に辿り着く前に碎かれる。

水系だ。

「下がって！！」

なのはが叫ぶが、しかし間に合わない。

水系はノーヴェの固有武装を碎き。

そして、ノーヴェ自身には666の右の拳が叩き込まれる。

「あ、ぐ……」

ノーヴェがぐったりとなる

鳩尾に刺さった拳がノーヴェの意識を刈り取ったのだ。

さらに666はノーヴェの首筋を掴み。

チンクに投げた。

「……っ！ノーヴェ！！！」

投げられたノーヴェは相当な速度でチンクに向かう。
意識がない彼女がこの勢いのまま地面にたたき付けられれば重大な
損傷をおう事になる。

チンクはそれが絶対の隙を作ると確信しながらも、しかし。妹を見
捨てられない。

勢いを殺すようにその小さい体で抱き止める。

瞬間。

疾る水系が他の妹同様チンクに撃ち込まれる。

「ッ……」

既にそれは覚悟していた事。

彼女は自らの体内のフレームを切り断っていく水系を感じながら6
66を睨み付ける。

しかし、666はもはやチンクに目を向けない。

ここに至り。前線メンバーの三分の一が戦闘不能となった。

666に一切のダメージを与えられぬ、まま。



「N2R少隊。全員戦闘不能!!」

シャーリーからの報告にはやては拳を握る。

奇襲作戦は失敗に終わり、さらに近接戦闘組が離れた所で広範囲攻
撃による攻撃。

本当に暴走してるのか?と疑いたくなる光景である。

しかもN2Rのメンバーは、最低限、のダメージだけで戦闘不能に

追いやられている。

緻密にして繊細。

666が行ったのはそういう代物だ。

あそこまでの操作性を持つ魔法等、クロノ・ハラオンでも使えまい。

「……？。あれ？」

「艦長？如何しました？」

疑問不を浮かべるはやてにグリフィスが聞き返す。

はやては今、何かどうしようもない違和感を感じていた。

何かおかしい。

そう、彼は暴走している筈だ。

それが、何故。敵に対して最低限のダメージだけで戦闘不能に追いつているのか？

暴走しているのなら、そもそも手加減なんてする思考性からしてあ
るまい。

666のスキル、無窮の練技。

確か、あれは戦闘時において、十全の戦闘能力を発揮する技能の筈
だ。

ならば、一々難易度を上げて敵を戦闘不能にする事などは出来ない
筈……

「……ま、さか……？」

「艦長？」

そこまで考えて、はやては恐ろしい事に気付く。

そう、暴走しているのなら有り得ない思考性。

ならば、その逆ならば？

「っ……！！グリフィス君！！作戦中止！」

前線メンバーを下がらせて!!」

「……? 了解!!」

はやての命令に1時疑問不を浮かべるが、しかしグリフィスは即座に従う。

各官制にその命令を伝える。

「……間に合えばいいんやけど……」

はやては一人ごちる。

モニターの中では666に対して、1時下がる前線メンバーが映っていた。



少し、時間は遡る。

前線メンバーが666と激戦を繰り広げている最中。

ティアナ。エリオ。キャロはシオンと共に居た。

「何、やってんのよ?

アンタ?」

「……ティアナ、にエリオとキャロ……?」

漸く呼吸が落ち着いたのか、シオンがティアナ達を見ながら呆然と呟く。

それにティアナはとんでもなく苛立つ。

「もう一度聞いわよ?

アンタ、アースラを降りてまでここで何やってんのよ?」

「……俺、は……」

眩き。しかし答える事が出来ないシオンにティアナの手が迫る。
襟首を掴む。

「ティアさん!!」

「駄目です!ティアさん!!」

エリオ、キャロがティアナを止めようとする、がティアナはそれに構わない。

「アンタはあの娘を泣かせてまで、皆を置いてまで。アレを追い掛けたんでしょが……っ!」

「……ああ。」

眩くようなシオンの返答にティアナはくっつかんばかりに顔を近付ける。

「そのアンタが!」

何でこんな所で惨めな姿、晒してんのよ!!」

「……………」

今度は答える事が出来ない。

無言なシオンに拳を叩きつけようとして

「……っ!!エリオ。キャロを!!」

「え……。あ、はい!!」

突如としてシオンに抱きすくめられる。

エリオもまたキャロを抱きしめたまま後ろに下がる。

「て、ちょっと！何を！！」

「黙ってる！！」

顔を赤らめながらシオンに文句を言うティアナ。

しかし、シオンは取り合わない。シオンも後退しながらノーマル・フォームに戻りイクスを振るう。

シオンが斬ったのは水、だった。

「天破、水迅。か」

「これ……666の……」

さらに後ろに下がり、ティアナを下ろす。

エリオもまたキャロを後ろに下ろした。

「！、ギンガさん達が！！」

エリオが指す先でギンガ、ウェンディが666により。戦闘不能に追いやられる。

「……。イクス。まだ、行ける、な？」

【条件付き、ならばな】

精霊融合。それが絶対条件だとイクスは告げる。

「……解った」

「待ちなさい！まだこっちの話しは終わって………」

行こうとするシオンにティアナは行かせまいとする。シオンはティアナに振り返る。

「……アースラを出たのは666に集中したかったからだ。元々の目的はそれだし、な」

シオンは淡々と告げる。

ティアナはだが、それに納得しない。

「666の拿捕なら、アースラにも命令来てたわよ……」

「……違うんだよ。ティアナ」

首を振るシオン。

そう、シオンの目的は666の拿捕ではない。

「……俺は、一人で666を倒したいんだ」

「……何で？」

さらに問うティアナに、しかしシオンは笑いしか浮かべない。

そう、解っているのだ。シオン自身。これは、ただの我が儘だと。

「……悪い」

「ッ……！。シオン！！」

ただ一言だけ謝り。シオンは飛び立つ。

「く………！。アイツ！！」

エリオ、キャロ。追うわよ！！」

「「はい！！」」

すぐに追おうとして、しかし。そこでシャーリーからの通信が入る。
666から1時下がるように、と。

「……どう、します？ ティアさん……？」
「……。追うわよ」

命令無視。しかし、ティアナは構わなかった。
先程のシオンの顔を思い出す。
それにイライラする。

（とりあえずは一発ぶん殴る！！）
「行くわよ！！」
「「はい！！」」

そして、ティアナ達もまた、シオンを追い掛けて666の元に向かった。



「一時後退！？
なんでだよ！！」

シャーリーの通信にヴィータが叫ぶ。

《……ゴメン。でも今は下がってや……》
「でも……！！」
「ヴィータちゃん」

尚も食い下がるヴィータになのはから制止がかかる。
既にN2Rの面々は転送で下げられている。

現在はなのは達で666を囲んでいる状態だ。

「シグナムさん、フェイトちゃん……」

「ああ」

「うん」

二人もまた頷き、666から距離を取る。

いきなりのはやてからの命令。

666から一時下がる事。

なのはは、しかし。

それに葛藤する。

なのはの666に対する気持ちは複雑だ。

アリサを始めとして何の関係もない人達を意識不明にした怒りがある。

しかし、同時に因子に侵されて死を待つしかない人達を生かしているのもまた事実。

故になのはの胸中は複雑であった。

666を見る。666もまた、なのはを見ていた。

その瞳は感情を映さない。

「……？」

「なのは？ どうかした？」

フェイトがなのはを見て不思議そうな顔をする。

それになのはは、笑う事でどうにかごまかす。

666は暴走している筈だ。だけど、その瞳に何故か。強い意思を感じられた。

「……て、おい。アイツ……！」

「え………？。」

あ……!!」

ヴィータの叫びに我に返り、見遣った先にはシオン。
巨大な魔法陣を展開しながらブレイズ・フォームへと変わっている。

「あれ。まさか……!!」

「間違いない、な」

叫ぶフェイトにシグナムが同意する。

精霊召喚。

今、再びシオンは666と対峙しようとしているのだ。
しかし。

「……………」

666が、動く。

その身に莫大な魔力を宿して。

「つ……。シオン君!!」

「やべえ!!」

なのは、ヴィータが駆け出す。

シグナム。フェイトもまた666へと向かう。

しかし、間に合わない。

666はシオンへと肉薄し……

「デイベイン・バスター!!」

しかし、その一撃に吹き飛ばされた。



シオンは呆然とする。

たった今、永唱中の自分を守るように放たれた一撃。

それは、この戦場に居なかった者の声。

そして、何より。

666が吹き飛ばされた。

その事実に出ない。

そして、シオンの目の前に道が顕れる。

蒼い。綺麗な道が。

スバルが走ってきた

「……シオン」

「なん、で……」

シオンの前で止まるスバルにシオンは何も言えない。

スバルを置いて行ったのは自分だ。

そこまでして我が儘を通したかった。

一人で666を倒す、と言う我が儘を。

「スバル……」

「うん。」

……ねえ。シオン」

まだ呆然とするシオンにスバルはゆっくりと近付く。

「私ね？聞きたいんだ。シオンの事、色々」

「……俺は」

しかし、シオンは答える事が出来ない。
自分は、スバルを置いて行った人間だ、と。

「私、決めたんだ」

「決めた？」

問うシオンにスバルは笑顔を見せる。
晴れやかな。そして綺麗な笑顔、だった。

「シオンが私を置いて行っても、絶対追いつける。て」
「……………」

スバルの決意。しかし、シオンは答える事が出来ない。

「俺は、二度とアースラに戻るつもりはない」
「でも、私は諦めない」

帰らない。と言うシオンにしかし、スバルは諦めないと返す。
まるで、平行線。

「シオンと話したい。」

シオンに絵を描いて欲しい。

シオンとご飯食べたい。

シオンと……

一緒に居たい」

「……我が儘、だな」

しかし。初めてシオンはスバルに微笑む。
柔らかい。柔らかい笑みを。

「うん。知らなかった？」

「ああ……っ!!」

会話する二人に、しかし拳が放たれたる。

666だ、だが。

「エクセリオン・バスター!!」

放たれたる一撃に666は踏み止まり、回避する。

「なのはさん!!」

「なのは先生!!」

「二人共、お話しは後!!」

特に、シオン君!!

後でちゃんとお話し聞いて貰うから!!」

何故かその時シオンの背筋を寒い物が吹き抜けたが。

「なのは、どうする？」

《……皆。堂々と命令無視。し過ぎやよ……》

集まる一同の前にウィンドウが現れ、はやてが苦笑いしている顔が映る。

「う……。はやてちゃん。ゴメン……」

《……ま、あの状況なら仕方ない、ね。

で、シオン君》

「……はい」

はやてがシオンを呼ぶ。

シオンもまた答えた。

《後で、キツチリ。

お話し聞かせてもらおうよ?》

「……俺、は……」

シオンは言い淀む。

しかし、はやては有無を言わせない。

《その件も含めて、後でゆっくり話そうや。

今は……》

そう、今は。

666に向き直る。

今は戦いの最中だ。

「シオン君。精霊融合で666とどれくらい渡り合える?」

「五分……ですかね」

問うなのはにシオンは答える。

「五分。か……」

「それより、スバル。

さっき何したんだ?

666簡単に吹き飛んだけど……」

シオンの問いにあたふたとするスバル。

戦闘機人である事をシオンにはまだ伝えていないのだ。

「……まあ、いいや」

「う……ゴメン」

謝るスバルに、シオンも苦笑いを浮かべる。
どうにも二人揃ってすれ違いまくりだと。

「とにかく、スバルの攻撃は666には通じるみたい、だね」
「なら、スバルを中心に……」

「その件、なんですけど。」

作戦を決めようとする一同にシオンが手を挙げる。

「俺、一人でやりたいんです」

「……シオン君？」

なのはが咎めるようにシオンを見る。
しかし、シオンは譲らない。

「すみません。でも、俺は一人で戦います」

シオンの返答になのは達は嘆息する。
何故に、こうも頑固なのかと。

「……解った。でも私達は私達で戦うから」
「それ、は……」

渋るシオンにしかし、なのはも譲らない。

「こればかりは駄目」
「……解りました」

シオンもまた渋々頷く。

直後にフリードに乗ったティアナ達も追い付いた。

「スバル……」

「うん。ティア。心配かけて、ゴメン」

それからありがとう、と伝える。

「……うん。それから、シオン……」

「……悪い、また後で皆と話すよ……」

ティアナはシオンの言葉に頷く。

後で話す。ならば、今は問わない。

「……666」

シオンが眼前の敵を睨む。

666はまるで、こちらの準備が整うのを待つかのように佇んでいた。

「……今、此处に汝を召喚する。

汝が枝属、雷、

汝が柱名は、ヴォルト、」

最後の永唱を開始。

呪を紡ぎ、召喚を果たす。

「来たれ。汝、雷の精霊。、ヴォルト、！！」

そして、ここに精霊、ヴォルトが顕れる。

「イクス!!」

【了解！

フル：バレル
全兵装

フル：オープン

全開放

フル：ドライブ

超過駆動

スタート

開始】

ヴォルトの姿がぶれ。シオンと重なる。

それは、シオンの切り札。

精霊との合一。

「精霊・融合」

【スピリッツ・ユニゾン】

シオンの身体は雷と同じ。その身は精霊と同一であった。

「これが……精霊融合……」

間近で始めて見る精霊融合になのはを初めとして声が出せない。

「……神庭、シオン。

推して……」

シオンが構える。

666は身構えない。ただ力を抜いて待ち受けるだけ。

「参る」

瞬間で666の懷に飛び込むシオン。

放たれたるは雷纏いし刃。

666はその一撃に吹き飛ばされる。

シオンと666の戦いはここに第2局面を迎える。



「おおおっ」

「……………」

雷を纏う刃が2連。

像をブラしながら放たれる。

シオンの一撃だ。

666はそれに対して右手で防御するも、受けきれず。弾き飛ばされる。

「……………」

「……………」

しかし、666は予備動作を排した拳を放つ。

無拍子。

それは物理的な速度すらも上回る。

シオンはカウンターで放たれた拳を辛くも避け、右の斬撃を放つ。

動のシオンと静の666。

ここに至り。二人は完全に互角と相成る。

しかし、666の相手はシオンだけではない。

「やああ!!」

666の直上から舞い降りるスバル。その瞳は金色。

シオンは直感に従い瞬時に後退。

666はN2Rの面々と同様。

振るわれる拳を受け流そうとして。

逆に左手が弾かれた。

「そこっ！！」

「……………」

そのまま666に拳を叩きつけ。

666が吹き飛ぶ。

振動破碎。

スバルのISである。

666は基本。体術で振るわれる剣を鎚を拳を受け流したが、スバルのISは別物だ。

手を取ろうにも超振動で弾かれるのである。

666の技にも身体に触れた物を超振動させる事を前提とされるなど有り得ない。

故にこそ、スバルの一撃は666に対して有効なのだ。

「まだまだっ！！」

ショットガン・キャリバーシュート！！

更に追撃をかけるスバル。

しかし、666は攻撃を受けない。

見切り。

心眼による。完全な攻撃対処法。

先程、ギンガとの戦い。そしてノーヴェの動きを見て。

心眼による戦闘論理は完成の域に達しつつある。

つまり、スバルの技を放つ直前の筋肉の動きを見て、事前にどの技

が来るかを知る事が出来る訳だ。

「くっ！！マツハ・キャリバー！！」
ウィング・ロード！！

全ての蹴撃を避されたスバルはさらにウィング・ロードを発動し。
しかし、後退する。

「シュート！！」
「ファイヤー！！」

放たれたる桜と黄金。
なのはとフェイトの砲撃だ。
666はそれに対して。
燃える一撃を放つ。

天破紅蓮。

その一撃を足元に向かって放つ。
爆炎。

一瞬炎の柱が立ち。
砲撃も余波に巻き込まれ消え去る。
しかし、炎の柱が消えた瞬間現れたのはシグナムとヴィータ。
すでに二人共。ユニゾンしている。

「ギガント・シュラク！！」
「火竜・一閃！！」

放たれたる極大の威力を放つ二つの一撃。
666はここで初めてシールドを張る。

五連で展開するシールド。

しかし、二人の一撃を受け止める事は出来ず。
シールドは砕かれて行く。

「ブチ抜けー!!」

シグナムとヴィータの声が重なり。

シールドは砕け。

666は地面に叩きつけられる。

しかし、シオンと。そして、彼を兄と仰ぐ二人が更に動く。

「サンダー・レイジ!!」

「神覇・弐ノ太刀。剣牙雷刃」

放たれる。2連の雷光。

666をその雷光が襲う。

先の一撃で動けない666は直撃する。

「クロス・ミラージュ!!」

3rdモード!!

「フリード!!」

「G A a a a !!」

だがまだ攻撃は止まない。

ティアナが砲撃を。

キャラがフリードに一撃を命ずる。

「ファントム・ブレイザー!!!!」

「ブラスト・レイ!!」

「ファイヤー!!」

瞬間。光と炎が666に突き刺さり。
その爆発的な威力が光の飽和現象を起こす。
だが、その爆発も次の一撃の前には霞む。

「レイジング・ハート!!」

オーライ。マスター!

「バルデッシュ!」

イエッサー。ザンバーモード。

さらにカートリッジ・ロード。

なのは。フェイトの連携空間攻撃。

「全力全開!!」

「疾風迅雷!!」

「「カラミティ・ブラスト!!」」

放たれる一撃。

それは空間を軋ませ。弾かせ。光は飽和を起こし。
爆砕する。

「……これで」

「いや、と言うか……これは……」

流石に一同。言葉が無い。

極大威力に次ぐ極大威力の連撃。

どう考えてもオーバー・キルである。

《凄い……》

シャーリーも純粹に驚いている。
しかし、隊長陣。そして、なによりシオンが一切の戦闘体制を解かない。

「なのはさん？」

「皆さん……？」

エリオ、スバルが不思議そうに見る。

しかし、次の瞬間。

例の気配が未だ止まず。

現れた事を知り。

即座に戦闘体制を整える。

ザリッ。

地面を踏み。歩く音が響く。

未だ止まぬ煙りの中から現れたのは……

《嘘……》

未だ、倒れぬ。666だった。



「……アレを受けて、あの程度、か……」

シグナムが冷や汗を流しながらレヴァンティンを構え直す。

666は煤だらけになりながらも。未だ、ダメージをさほど受けて

ないようなそぶりだ。
歩みを止める。
見るのはシオンだ。

「……………」
「……………」

シオンは666が起き上がる事を前提として、既にある技を溜めて
いる。

しかし、666はそれに気付いたのだろう。
シオンを見ている。

その、感情の無い瞳で。
精霊融合終了まで後、30秒。
ならば。

「おお……」
「シオン!!」

666に向かって飛んでいくシオンに制止の言葉を放つスバル。
しかし、シオンは止まらない。
瞬間でシオンは666を間合いに入れる。

「神覇・漆ノ太刀。奥義」
「……………」

振るうは奥義。絶対回避不能斬撃。
しかし、666は逆に間合いを詰めた。

「白虎っ」

放たれる無数の斬撃。

雷撃を纏いて、更なる乱撃を放つ技。

しかし、666はその一撃を前に、ただ拳を振上げた。

天破疾風

最速対最速。

乱撃対一撃。

しかし、一撃は無数に放たれる乱撃を全て碎き。

そして、シオンに叩き込まれた。

その一撃にゆっくりと宙を舞うシオン。

地面に叩きつけられて。

漸く敗北を悟る。

「ぐ……………っ!!」

「……………」

精霊融合も同時に解けたのか既に、精霊の気配が無い。

そして、シオンは立ち上がる事が出来ない。

「シオン君!!」

なのは達がシオンを助けようと、また666を退けようと向かう。

しかし、既に666は新たな技を放つ。

右手には雷。

左手には風

足には地。

三つの属性を、組み合わせる。

ミッドは疎か、ベルカにも。ましてやカバラにすらない術式。

なのは達も異変を感じ。踏み止まる。
しかし、遅い。

666は三つの属性を組み合わせ。両手に収束。圧縮し。さらに加速させる。

そして自身が横に回転する。

「だめ、だ!!」

皆、もっと遠くに!!」

シオンの直感が叫ぶ。

この一撃は防御も回避も無意味だと。

しかし、忠告は間に合わず。

その一撃は放たれた。

天破疾風迅雷撃。

後にそう名付けられる技は放たれた。

666を中心として雷を巻く極大の竜巻が発生。

その大きさ。全長500m。

なのは達は範囲攻撃とプロテクションを張るが、しかしプロテクションは碎かれ。

一同は暴虐の雷竜巻に巻き込まれた。



風が吹く。無情に。

一同は倒れ、雷の影響か立ち上がれない。

エリオ、フェイトは影響が低いのか何とか膝をついているだけ。

だが、そこまでだ。

動けない。

そして666はシオンの襟首を左手で掴み。

掲げるように釣り上がっている。

シオンも先程のダメージ故か精霊融合の影響か。

動く事がない。

そして煌めく666の魔法陣。

刻印。それが放たれようとする。

「だめ……やめて……」

声が響く。スバルの声だ。

しかし、666は止まらない。

なのは達も何とか止めようと力を身体に入れるが皆、身体が麻痺して動けない。

「お願い……やめて、やめて！」

スバルの声にしかし、666は聞かない。止まらない。

そして、腹に右手が叩き込まれ。

「シオンー！ー！」

虹の光がシオンを貫いた。

ビクンツと一つだけ、シオンは痙攣し。

そして、再び刻印は刻まれた。

「……………」

ひよい。とシオンを放る666。

その刻印を見て。一同は深くうなだれる。

その中を666は悠々と踵を返し。歩く。
まるで無人の荒野のごとく。
他のアースラメンバーを見る事なく。

「ま、てよ……」

声が響いた。

たった今刻印を刻まれ。

そして融合の反動で意識が無い筈のシオンが膝立ちとは言え。
起きていた。

「シ、オン……?」

「待て、つつってんだよ」

一同が呆然と見守る中。シオンの声が響く。
しかし、暴走している666は止まらない、歩く。

「アンタは、何で、こんな事をする……?」

聞かない。止まらない。歩く。

「アンタは、何で俺に刻印を刻む……」

止まらない。振り返らない。

「アンタは、俺に何をしたいんだ。……何をさせたいんだ。」

歩く。歩く。

「答えろ……」

歩く。

「答えろよ……」

歩く。

「タカ兄いー！ー！！」

声が響く。どこまでも遠く。
そして……

「強くなれ」

新たな声が響いた。



「……………え？」

なのはが目を見張る。

他のメンバーもだ。

シオンの叫び。

タカ兄い。

その声と、そして。

振り向き。シオンを見る666に。

「タ、カ、兄い……？」

「強くなれ」

シオンが信じられないものを見る。
しかし、そのまま666は続ける。

「強くなれ、誰より強く。誰より高く」

「タカ兄い……？」

何、言って……？」

呆然と呟くシオン。しかし、666は・・・いや。
伊織タカトと言う存在は続ける。

「全ての希望を喰らい。全ての絶望を飲み込み。」

タカトは続ける。

他の誰でも無いシオンを見据えながら。

「強くなれ、シオン。」

そして……」

「何……言ってるんだよ……タカ兄い……」

ただただ呆然と呟くシオン。しかし、タカトは止めない。

「俺を殺してみせろ」

「タ、カ、兄い……」

そして、そのままタカトは消えた。

シオンは吠える。もう、そこにいない存在に。

「タカ兄いーーーーー！」

悲哀。絶望。

その全てが込められた叫びが空高く響いた。

(第十五話に続く)

◆◆◆◆◆
ぱらぱらぱらぱら

ア

「皆さんお待ちかね♪
アリサ。」

す

「すずかの」
ア、す

「「アリサ道場」♪」

ア

「おはよう、こんにちは、今晚は
当、道場の主アリサです♪」

す

「弟子のすずかです♪」

シ

「そんでもって何でまだ呼ばれているのか解らないシオンです」

ア

「て、またアンタなの？
何て言うか芸がないわね」
す

「今回も作者代行？」
シ

「そうなんすよね。」

あ、いきなりですが作者からお手紙です。」

ア

「また〜?」

シ

「はい(汗)」

では読み上げます

『すみませんでした!』」

ア

「……いきなり謝るかあの作者は……」

す

「なんか、恒例だね〜」

シ

「『一週間の更新遅れ、誠に申し訳ありません。体調を崩し、執筆がままならず(汗)」

メッセージをくれた方も申し訳ありません。

すぐに返信をお返しします。

これからも更新頑張りますのでどうか、よろしくお願いします』。だ、そうです」

ア

「ま、次出た時にでもとっちめるとしましょう」

「まあ、責任は取らせないとね♪」

シ

「それでは。今回の他作品のオリキャラを召喚したいと思います♪。今回の召喚されたキャラはこの三人♪」

ヴ

「こんにちは♪」

祐

「よろしく」

カ 「……俺もか？」

ア 「……き、来たわね？祐希奈！！」

裕

「来てやったわよ？ありがたく思いなさい！」

ヴ

「すずかさんお久しぶりです♪……なんて言うか、その……若返って」

す

「格好についてはツツコまないでね？」

祐

「私は容赦しないわよ？……？あれ？二人共若返ってる？」

シ

「ああ、アリサ師匠もすずかさんも今の年齢は二十歳だから」

ヴ

「そうなんですか？

なのはママが聞いたら羨ましがるかも……」

ア

「ふ……私達は永久の二十歳だから♪」

シ

「いえいえ。お二人はあくまでEX内の年齢になるので（笑）EXで十年後の話しになると……」

ア、す

「「……嘘……」」

カ

「三十路の……」

ア、す

「「ん？何言ったかな？」」

カ 「い、いえ何でも!」

ア、す

「次、その単語聞こえたらクロスから」

カ

「りよ、了解しました!」

シ

「カナン君。あれは駄目だぜ?

あの二人。道場内じゃ無敵なんだから……」

カ

「き、肝に命じるよ……あ、俺は呼び捨てでいいぜ?」

シ

「まあ、年下だしな。俺もシオンで構わない」

ヴ

「私達も?」

シ

「ああ、呼び捨てでいいぜ?」

裕

「それじゃあ。そうさせて貰うわ」

シ

「了解♪さて、今回の話なんだけど……」

ア

「いや、バグキャラにも程、てのがあると思うんだけど……」

裕

「てか、倒せるの?アレ?」

す

「しかも、実は暴走してなかったしね」

ヴ

「タカ……じゃなかった666。弱点とかあるのかな?」

裕

「……ん？ ヴィヴィオ。アンタ、何か知ってんの？」

ヴ

「う……。」

その、実は……」

シ

「ヴィヴィオはオリキャラであってオリキャラでなし。
当然EXでも出るからな」

一同

「そうなんだ!？」

シ

「ユーノさんとヴィヴィオは666関連でかなり重要な役だから」

ア

「……待ちなさい。ユーノ。出番あるの？」

シ

「ありますよ？ 下手したらなのは先生並らしいと」

す

「私達はあまり出番無いのに？」

シ

「はい」

ア

「あんの、作者……!」

す

「差別だよね。これ……」

シ

「まあ、当分先の話しですからまだ出ないとの事ですし」

裕

「ふ……不様ね」

ヴ

「祐希ちゃん。言い過ぎだよ……」

カ

「いや、本当こいつ口悪くてすみません（汗）」

シ
「君も苦勞してるな？」

カ
「……慣れてますから……（遠い瞳）」

裕
「何に？」

カ
「いや、乱暴な女とか男より強い女とか……は!？」

裕
「覚悟? いいわね？」

カ
「ま、待った待った!! 祐希奈さん? ここは他作者ですよ? そんな拳を振り上げて何をしようと……!」

裕
「……問答。無用!!」

カ
「だああ!!」

ヴ
「祐希ちゃん! カナン君。あんま暴れちゃ駄目だよ!」

シ
「え……。実況中継してもいいんですかね？」

ア
「いいんじゃない？」

お、いいアッパーね。
顎を的確に打ち抜いてるわ」

す
「あ、マウント取ったね? カナン君。ピンチかも」

シ
「筋いいな……。タカ兄いに弟子入りしたら二代目666になれる

ぞ。あの娘」

ヴ

「……二人共……」

裕、カ

「「は!?!? 殺気!?!」」

ヴ

「ちよっと、頭冷やそっか? (ニツコリと満面の笑顔)」

裕

「ちょ! 何でヴィヴィオがその台詞!?!」

カ

「待て! ヴィヴィオ! その光はなんだ!

そんな物食らわされたら……!」

ヴ

「問答、無用!!」

全力全開! 一撃必殺!

スターライト・ブレイカー!?!?!」

裕、カ

「ぎゃあああああ!?!?!?!」

シ

「……え〜いい感じでオチが着いた所で今回はこの辺で。

次回もこの三人でお送りしたいと思います。

……今回。完全にどつき漫才で終わったし」

ア

「私達。完全に置いてきぼりよ?」

す

「道場因子でのキャラ変質。て馬鹿にできないね……」

シ

「ではではこの辺で♪改めて三人の召喚に同意して頂いたヨシユア
さんにお礼を♪

本当、ありがとうございます♪

次回も三人を召喚したままになっちゃいますが。

よろしく願います♪

では♪」

一同

「また次回〜♪」

シ

「……復活、早いな。お前等二人……」

第十四話「その真意」(後書き)

「その意思を現したタカトに敗北したアースラメンバー」

「タカトの意思に絶望し憎悪するシオンは再び暴走する」

「スバルとティアナはシオンを取り戻す為、アースラを……」

「そして、タカトは時の名を持つ青年と対峙する」

「次回。第十五話『届く願い』」

「君、想う声が届くように」

第十五話「届く願い」(前編)(前書き)

「兄さんが敵になる。と言うのはどんなに辛いだろう」

「ギン姉と戦わなきゃいけなかった時、私は辛かった」

「でも、彼は自分で決めた。兄と戦う事を、■■■事を
「でも、そんな事は絶対にさせない。て決めた。
を」

だからー」
「魔法少女リリカルなのはS t S，EX。

始まります」

第十五話「届く願い」(前編)

二年前。

管理外世界第97世界。

地球。日本。

出雲。と名前の着いた道場でシオンはある人物と対峙していた。

シオンにとっての異母兄。

長兄。叶トウヤである。

その手に握るのは白い。ただひたすらに白い槍だ。

シオンはイクスを構えたまま汗を流す。

打ち込めない。

隙がない訳ではないが、それは誘いだ。

それに乗れば確実に、・・・三日は痛むぐらいの一撃を叩き込まれる。

とは言っても、このまま硬直したままでも同じくらい痛い目に合うだろうが。

トウヤが半歩を踏み込む。

瞬間、シオンはおもいきり後退した。

瞬動すらも使った後退。

しかし、トウヤは構わず槍を突き出す。

アヘッド・レディ。

キー・スペルが音を介さず響く。

キー・スペルは文字通り。魔法を放つ際に使う。

・・・カラバ式のものが、だが。

自己暗示を兼ねたキーだ。

固有スペルであり、そのスペルは個人個人で違う。

「捻れ穿つ螺旋」

瞬間。空気を、空間を、世界を捻れ、引き裂き。

螺旋を刻む槍が放たれる。

シオンはその一撃にイクスの刃を横にして受ける、が。

直後。その螺旋に巻き込まれシオンの視界が180°回転する。
捻れ穿つ螺旋の威力に耐え切れずシオン自身が回転した為だ。

「っの！」

叫び、空間に足場を形成。

どうにか空中に止まる。

しかし、次にシオンの視界に入ったのは、十の螺旋、
一息に同時に放った捻れ穿つ螺旋だ。

「……って!!。」

待った待った!!。」

無論。そんな泣き言は通らず螺旋は余す事なくシオンに叩き込まれる。

S+ランクの槍を合計十発。

大人気ないと言いたいような連撃を受けてシオンは吹っ飛ぶ。
非殺傷設定だからいいもののそうでなければ確実に放たれた数の分だけ死ねる。

「……きゅう……」

「……二十。数えるまでに立ち上がりましたまえ。
でなければ即座に追撃を掛けさせてもらおう」

んな、無茶な。

と思いつつシオンは立ち上がらない。(立ち上がれない)。
カウントが始まり。九を数えた瞬間。

「長いな。やはり十秒にしよう」

そんな事を大人気ない異母兄は呟いた。

「後、一秒じゃん！。ぶっ！！」

「……気付いてるではないか。ならさっさと立ち上がたまえ」

問答無用。

その言葉がよく似合う人である。

「くくく。顎痛い……」

「さっさと起き上がらないからそうなる。」

三度はないと思いたまえ？」

慌てて起き上がり、イクスを構える。

トウヤはそれを見て槍を構える。

シオンとトウヤのレベルには格段の差がある。

ランクAAとEXでは、はつきり言って。象と蟻の対峙に等しい。

……優しい目に言ってだが。

対峙する二人はしかし、槍と剣を交えない。

ガンガンガン！

音が鳴る。

鍋とお玉を打ち鳴らす音だ。

その音がした方に目を向けると黒髪黒瞳の目つきがひたすら悪い青年がいる。

だが、その身に付けるのは二人のようにバリア・ジャケットではない。

黒のジーンズにまた黒いカッターシャツ。

そして、その上に付ける。・・・やたらと似合いまくった。青いエプロンだ。

青年の名は伊織タカト。シオンにとって、もう一人の異母兄だ。

「二人共、飯。・・・いらんなら構わんけど」

「「食べる」」

異口同音。トウヤとシオンは即座にイクスと檜を待機モードに戻す。

「今日のご飯は何だね？」

「今日はインドカレーだな」

「・・・タカ兄い。贅沢言うのはアレ何だけど。」

俺、そろそろ日本が恋しくなってきたんだけど・・・？」

「文句があるなら食べるな」

三人、揃って歩く。

この三人にそしてシオンにとっての姉がわりの人。

ルシア・ラージネス。

彼女を含めた四人と、そしてシオンの母。神庭アサギ。

その五人がシオンにとって家族であった。

「遅い〜〜！」

居間に着くといきなり女性から声が掛けられる。

髪はロングで色は青に近い紺。

ルシア・ラージネスその人だった。

シオンとトウヤは即座にため息を付き。

「……ルシア。女の子として、それはどうかと思うんだ。俺」

「……せめて、女性としての尊厳として、料理を手伝うべきではないのかね？」

「う……！」

仕方ないじゃない。タカトの作るご飯の方が美味しいんだもん……」

ぶーと。膨れるルシア。

しかし、料理をタカトに一切任せ。そして居間の主と化したその姿を見れば、シオンとトウヤのため息の理由も解る。

「タカトはルシアに甘い……」

「そっか？」

「そうだよ」

トウヤの呟きにタカトが疑問を浮かべるが即座にシオンがトウヤの言を肯定する。

「なによ。なら私にご飯作れっての？」

「「それは是非遠慮して欲しい」」

三兄弟が見事にハモる。

ルシアの料理は料理にあらず。

タカトいわく。

「これは、料理と言う物にたいしての挑戦だ」

と、いわしめた程だ。

しかし、二人としてはせめて料理の修業くらいはして欲しいと願わざるを得ない。

特にシオンは色々な意味でルシアに幻想を抱いているのでその気持ちが一潮である。

そこで気付いた。

家族が一人足りない。

「あれ？母さんは？」

「アサギちゃんならさっき、呼び出し、喰らってたわよ？」

シオンの疑問にルシアが答える。

ここでの呼び出しとはつまり、

「グノーシス」の方で何かあったと、言う事だ。

「へえ……」

「ほれ。二人共。食卓空けろ。」

ルシア。俺としてはせめて料理を運ぶくらいはして欲しいんだが……？」

「解ったわよう……」

慌ただしくも食卓に料理が並んでいく。

二つの大皿にはそれぞれナンと、こんがり焼けたタンドリーチキン（ヨーグルトに各種スパイスを加えたソースに漬けた鶏肉を焼いた料理）。サラダが載っている。

そして、次に出てきたのはカレーのルーだ。

「カレーは辛口のマトンとキーマ。

それと辛みを抑えた野菜カレーの三種類だ。

ナンは普通のとレーズン入りのがある。

手でそれぞれルーを付けて食べてくれ」

「……相変わらず。むやみに本格的な……」

「流石♪現代に蘇りしブラウニーね♪」

「……誰がブラウニーだ。誰が……」

「お前だ」

「アンタよ」

「タカ兄いだよ」

「……………」

今度はタカトに対しての意見が一致する。

タカトは全力で否定しているが、タカトの家事に対しての情熱（執念）は最早趣味の域を越え。生き甲斐とまで化している、というのが家族の共通認識であった。

「……まあ、いいや。」

「そんじゃあ食べようぜ？」

「うん♪早く食べよ♪」

「それでは」

「」「頂きます」「」

四人の手がそれぞれナンに伸びる。

各々インドカレーとタンドリーチキンを存分に味わう。

「うわ。このチキン美味しい〜。」

タカトがたしか朝から仕込んでたやつよね？」

「辛い！！だが美味しい……！！」

「兄者。辛いカレーで口の中がやばくなったら今度は野菜カレーでレーズン入りのナンで食べるんだ。そしたらいい具合に辛さが和らぐ」

「確かに……。」

流石、ブラウニー。手拔かりないね」

「……ブラウニーはよせ。ブラウニーは……」

和気あいあいとご飯は進む。

額に汗が浮かぶのはお約束だ。

「……そう言えばさ？」

タカ兄いのキー・スペル、て何だっけ？」

あらかた食卓が片付き。洗い物をしているタカトにシオンが尋ねる。

「?。」

何だいきなり？」

「いや、さっきさ……」

先程のトウヤとの模擬戦をタカトに説明する。

「……ふむ。」

俺の場合はコレだな」

トリガー・セット。

タカトが言葉を返すと同時、居間にキー・スペルが響く。

「……いいな。」

俺、まだ見つけて無いんだよね」

「修業が足りないからだ。」

……やれやれ、その分だと何時になったらオリジナル・スペルが紡げるのやら」

タカトがため息交じりに呟く。

シオンがそれを見てブーと膨らむ。

「……ルシアの真似は止しとけ」

「だってさ。オリジナル・スペルなんて、グノーシスでも使えるの第三位以上だろ？」

俺がまだ使える訳ないじゃん」

シオンは遠回しにこう言っているのだ。
タカ兄いもトウヤ兄いもどうしたらオリジナル・スペルなんて見つ
けられたのさ？と。

「……こればかりはキツカケだからな。
そもそも、お前の歳でキー・スペルを見つけれないのが問題
なんだ。

位階も第五位のくせに」

「……まあ、逆を言えば。キー・スペルも得ずにどうしたら第五位
に至れるのか。と思わなくもないね」

居間の襖が開き。タカトの言を引き取る。
トウヤだ。

風呂上がりなのか、首にタオルを巻いている。

「う……。やっぱり珍しいんだ？」

「普通は無いな？」

「普通はね」

シオンが疑問系のままタカトに尋ね、タカトは苦笑いを浮かべたま
まトウヤに聞き直す。

トウヤは

「風呂は空いている。どちらか入りたまえ」と、言いながら冷蔵庫
に向かう。

取り出すのは牛乳だ。

「……それ以上、背が高くなってどうすんのさ？」
「つか、嫌みか兄者？」

それを横目で見ながら二人は呟く。
トウヤの身長は190は下らない。
タカトは182。と言った所か。
シオンはかなり低く、165である。

「ひがみは止めたまえ。みっともない」

しかし、そんな視線もトウヤは意に介さない。
ぐびぐびと牛乳を飲んで行く。

「……話しは戻すけど、実際キー・スペルは重要だぞ？自己暗示を
もって深く集中する為には必須だからな」

「……て、言ってもなー」

シオンはうだーとテーブルに突っ伏しながら呟く。それにトウヤは
フム。と頷く。

「シオン。魔力とは結局の所、何かね？」

「は……？」

えっと。魔力は意思を世界に具現化する為の媒介。だよな」

いきなり問い掛けられ、シオンは少しうろたえる。

しかし、カラバ式を使う者ならば基本となるものなので淀みなく答
える。

「ふむ。ならば魔法とは？」

「えっと。個人ならず集団の意思でもって世界を1時的に、自分の
法則、の物理現象を起こす業。だよな」

シオンはまた応える。

そう、詰まる所、魔法とは新たな、概念、を意思によって顕す業とも言える。

「故にこそ、キー・スペルによる自己暗示で自らの心象心理を取り出すのは必須だ。

それは、覚えておきたまえよ？」

「……解ってるよー……」

トウヤに口を尖らせるシオン。

直後にルシアが

「咽渴いた〜」と居間に入ってきて、その話しは終わった。

結局の所。これがシオンが思い出せる最後の家族の光景だった。



時は戻り。現代。

666こと、伊織タカトとの戦いが終わり、アースラは本局に1時帰投となった。

タカトとの戦いは惨敗。N2Rの面々はフレームにダメージを受けている。という事もあり、本局でのメンテナンスを余儀なくされた。本局の会議室の一室に今、アースラの主要メンバーと後見人でもあるクロノ・ハラオウンが集まっている。

しかし、一人足りない。

シオンが、ここにはいないのだ。

「……666を追って、か……」

「うん……」

クロノが空席を眺めながら呟き、なのはが肯定する。

そう。あの時――。

「タカ兄い――！！！！！！！！！！」

シオンが叫び。しかし、最早タカトはそこにはいない。
ただただ叫びが空虚に響く。

そのまま膝を着き。うなだれるシオン。

「シオン……」

スバルを始めとして、皆。シオンを痛ましい気に見る。

タカ兄い。その言葉が示す物は実の兄という意味なのかは不明だ。
だが、事実として、シオンにとって兄と呼べる程に親しかったのは
間違いない。

風が吹く。寒い風が。

ややあってシオンが立ち上がる。

精霊融合の影響と刻印の影響。その二つ共のせい、足取りは危う
い。

しかし、その足元に広がるのはカラバ式の魔法陣。

転移魔法だ。

それに気付き、慌てて皆立ち上がろうとするが、しかし。未だ麻痺
は続いているのか足は言う事を聞かない。

「「シオン！！」」

《「シオン君！」》

響く皆の声。しかし、シオンは構わない。

ただ一言。

その一言が辺りに響く。

「……許さねえ……」

それは眩きだ。

声も小さい。

しかし、その声に込められた怨嗟、憤怒、憎悪。

その感情の凄まじさに一同総毛立つ。

「……シ、オ……」

「……必ず。追いついて、やる。どこまでも追いつけてやる……」

声は響く。哀しく。哀しく。

「……それが、望みだってんなら。俺が、アンタを……」

殺してやる

「……………っ!!」

その言葉のまがまがしさ。

そこに込められた意味に今度は別の意味で皆に衝撃が走る。

「だ、駄目だよ!!」

「……………うるせえよ……」

止めようとするスバルに、しかしシオンは振り向かない。

「シオン!!」

「……………」

返事はない。

既にシオンは決めていた。

666をいや、タカトをその手に掛ける事を。

そう、どんな手段を用いても。

転移魔法が発動する。

「シオン！！」

無理矢理麻痺から脱ったスバルがシオンに追い縋るが、間に合わない。

そして、シオンはまた姿を消した。

「……シオンが居なくなったのも問題だが。

……はやて？」

「……………解ってる。

解ってるよ。クロノ君」

クロノははやてを見ながら問い掛けるように名前を呼ぶ。はやても

また何故呼ばれたか理解していた。

今、シオンの居場所は解っている。

‘残念’な事に。

「暴走……か」

「666が暴走していないで、シオン君が暴走している。てのは、皮肉。やな」

会議室の中央にボール状のモニターが映る。
そこにはシオンが映っていた。

‘瓦礫’の中に。

シオンはまた感染者狩りを行っていた。

しかし、今度は前と明確に違う所がある。

シオンは周辺の被害に一切構わず感染者を狩っていた。

例え、そこに人が居ようと。だ。

実際、シオンの攻撃に巻き込まれた人もいる。

今のシオンはあまりにも見境がないのだ。

「……このままではシオンは罪に問われる事になる」

「……やっぱり、ね」

クロノの言葉にはやてはため息を付きながらも納得する。それ程に
今のシオンの所業は酷かった。

「……ハラオウン提督……」

クロノを呼ぶ声が響く。

スバルだ。

その顔は青白い。

「これ、シオンがやったんですか……?」

「……正確には感染者との戦いで、だ。」

だが、彼が周囲の被害に気を配っていないのは明白。

……今は大した被害が出てないから罪にこそなっていないが。

……このままでは……」

言葉を切るクロノ。

その続きは聞くまでもない。

「……居場所は解っているんでしょ？
なら、私達が……！」

「それも、許可は出来ないんよ……」

いきり立つティアナに、しかし。はやては首を横に振る。

「何ですか！？」

「……ティア。解るやろ？」

はやてはただそれだけを呟く。

それにティアナもぐっと息を詰まらせる。

感染者の異常発生。

それがまた起き始めていた。

ただでさえ。アースラメンバーの内三分の一は動けない状態なのだ。
事態の対処に追われて、シオンを止めに行く事が出来ない。

一同、それに歯噛みする。

もどかしいとしか言いようがなかった。

「……シオンについてはしばらく保留と……」

「その必要はないね」

声が響く。

その声に、クロノ以外のメンバーは聞き覚えがあった。

声のした方。扉の方に視線が集まる。

そこに何時から居たのか、その人物がいた。

叶トウヤ。

彼が。

「トウヤ、さん……」

「……フム。色々、説明せねばならない事。
聞かなければならない事が出来たみたいだね？」

トウヤは勝手知ったる他人の家とばかりに椅子に座る。

「キミ、は？」

「そちらの御仁ははじめましてになるのだね。
叶トウヤ。」

グノーシスの代表者みたいな者だ。

……そして、愚弟二人の兄でもある」

トウヤの言葉、その後半に一同トウヤを見る。

愚弟，二人，

それが指し示す物は。

「じゃあ、やっぱり……？」

「……ああ。伊織タカトは私の一つ年下の異母弟。そして、当然。
シオンにとっても異母兄に当たる」

呟くスバルにトウヤは頷く。

「……少々、長い話しになるが、聞かかね？」

「……はい」

トウヤの言葉にスバルを始めとして、一同頷いた。



最初にその少年に会った時。トウヤの抱いた感想は恐怖だった。

自分より一つ年下の少年。タカト。

彼はあまりに異質だった。

まず、喜び、と言う物がなかった。

次に怒り、を知らなかった。

そして哀しむ、と言う事を理解していなかった。

最後に楽しみ、が何かを認識できなかった。

そう、タカトと言う少年は、'ヒト'が、'ヒト'、たらしめる感情の全てを欠落していた。

それをタカトと共に居た少女はこう述懐した。

「ずっと、ずっと、地獄、に居たから、タカトはその感情を持つ前から、ずっと」

そう、タカトはヒトとして扱われた事、そのものがなかった。

「……私がタカトと会ったのは相当昔でね。

私が七歳。あいつが六歳になった頃だった。

……詳しく話すのは避けるがタカトはずっと、地獄、に居たらしい。もの心つく前から。ずっと」

「……地獄？」

トウヤの発した単語になのはが尋ねる。

それにトウヤは頷く。

「……タカトと近接戦をやったものは居るかね？」

「……私と、他数名が」

一同を代表してシグナムが頷く。

トウヤはそれを見遣って次の一言を放った。

「……あいつは魔法を頼らない近接戦に於けるその戦闘技術をその時には、完成、させていた」

「……………は？」

トウヤの言葉に一同ア然とする。

聞いた話しだと、タカトは当時六歳。

どう考えてもおかしい。

「つまりは、その年齢でその戦闘技術を完成させなければならない場にずっと居た、と言う事だね」

「……………」

さらに追い討ちとなる言葉をトウヤは紡ぐ。

それがどんな状況なのかを想像してしまったからだ。

わずか六歳の少年がそんな状況に追いやられている。という事を。

「そして、私があいつと会った時。あいつはヒトらしい感情を持っていたよ。」

……感情を持つ前に地獄に置かれたのだろうね」

その言葉と共にトウヤは思いを馳せる。

始めて会った弟の事を。

無感情にして無邪気。

そして無知。

タカトは本当に何も出来なかった。

当初は言葉も解らず。

ただただ生きているだけの人形。

それがタカトだった。だが。

「……そんな、タカトとずっと一緒に居てくれた少女が居てね。」

その少女をルシアと言う」

「ルシ、ア？」

スバルが呆然と聞き返す。

その名前に覚えがあったからだ。

そう。いつかシオンが呟いた名前だ。

「ルシアはタカトを地獄から救ってくれた娘だね。

母親のように、姉弟のようにタカトにいろんな事を教えていったよ。

……元々は賢かったのだろうな。タカトはすぐに知識を身につけ。

感情を、人格を形成できた。

……少々、歪ではあったが、ね」

そこでトウヤは少しばかり苦笑いを浮かべた。

どこまでも無邪気だったタカトとそして、自分が知る最後のタカトの変わりっぷりを思い出してしまったからだ。

「そうこう言っている内に二年程経ってね。

そして、私達はシオンと会った」

一同がトウヤの言葉に耳を傾ける。

トウヤはそのまま続けた。

「あいつはもの凄い人見知りでね？

いつもびくびくおどおどしていた」

「シオンが……？」

スバルが意外そうな顔をする。ティアナもだ。

それに苦笑いをする。

「ああ、あいつは内気でね。私達も色々あって中々打ち解けられなかったよ」

『ハアーーー』

意外なシオンの過去に一同ハモる。

今とは違い過ぎるシオンの話しは興味深かった。

「最初に打ち解けたのはルシアとだった。

ルシア姉。ルシア姉。といつも後ろをくつついていたよ。

そして、次に打ち解けたのはタカトとだった」

思い出す。あの日を。

あの日は記録的な豪雨が降って。川が増水していた。

激流。まさしくその川は激流だった。

それにシオンが流された。

いきなり発生した鉄砲水に流されたのだ。

「シオン！！」と叫ぶ自分達を尻目にタカトはいきなり川に飛び込んだ。

そこに迷いはなかった。

結局。シオンとタカトは母。神庭アサギによって助けられた。

助けられた直後、タカトに抱き着いてわんわん泣くシオンにアサギも苦笑いを浮かべていたのを今も思い出す。

タカトは笑わず。怒らず。まだ感情の上手い表し方を知らなかったのか無表情にずっとシオンの頭を撫でていた。

「で、私共色々あって。漸く兄と呼んでくれるようになった」

「……色々あったんやな」

はやても思わずコクコクと頷く。

ただトウヤは一つ話さなかった。父と母の事を。

タカトもルシアについても言える事だが、家族関係は色々あったよ
うだ。

「で、何事もなく。数年が過ぎた。

だが、中学に私が上がる頃、事件が起きた」

「……事件？」

それに

「ああ」と頷く。

「詳しくはグノーシスの特秘事項になるので話せないがね。

私達はそれに巻き込まれ、そしてタカトはその事件でリンカーコア
に致命的なダメージを受ける事になった」

「……リンカーコアに？」

「ああ。

……タカトのリンカーコアは今は八卦太極炉になっているのは知っ
ているね？

あれは好きでやった訳では無い。必要にかられたのが理由だ」

そうでなければ既に完成していた魔法技術を失ってまで、新たな魔
法を見出だす事などしなかっただろう。

しかし事件はそれを許さなかった。それだけの事。

「……結局。その事件は色々確執を残しつつ解決してね。

そして、その確執がまた新たな事件を呼んだ」

「それに着いても詳しくは話せないが」と言いながら続ける。

「高校を私が卒業する頃かな？

漸く事後処理も含めて事件は終わった。

私はまあ、色々あってグノーシスの第一位となつてね。そして、タカトは第二位。ルシアも第三位となった。……ちなみにシオンはパート扱いで第五位だったか」

「そして」と続ける。

「ある宝具。……君達の概念だとロストロギアだったか。その調査を行う事になった。

……もう、解るね。それが魔王の紋章だ」

「それが……」

「ああ。

私も現場に立ち会ってはいないので詳しくは解らないが。そこで、何か’が起きたのだろうか。

結果から言うと、タカトは魔王の紋章を盗み。

……そして、ルシアに刻印を刻んで、逃走した。

……現場を見たのはただ一人。シオンだけだった」

「……………」

そして現在に繋がる。

シオンがあそこまで感情を顕にする理由が解った気がした。

大好きだった兄が大好きだった姉を意識不明にした。

それは、裏切られたと思うには十分過ぎるだろう。

「以上が、シオン。そして私達の半生だね」

「……そ、か」

スバルやティアナも席に着いたまま、ため息をつく。

シオンが何で666を、タカトの執着する理由を知ったからだ。

だが、これで解った事がある。

シオンにタカトを殺させてはいけない。と言う事だ。

それは、何も生まない。見出だせない。
ただ後悔だけがシオンを支配するだろう。
それが解ってしまった。

「……さて、先程の話しの続きをしようか？」
「さっきの？」

トウヤの言葉にはやては疑問を浮かべる。
トウヤはフム、と一つ頷き。

「シオンが暴走している、が。止める為の人を向かわせられない。
という話だよ」

「あ、と。はい。それが……？」

はやてに促され、トウヤは次の一言を放った。

「止める為の人員を向かわせたまえ」
「え、と。ですからそれは……」

人手不足の事を話そうとするはやてにトウヤはその言葉を遮る。

「だからこそ、私が今、ここに居るのだよ」
「……は？」

トウヤの言に、またもや聞き返すはやて。
トウヤはそれに苦笑いを浮かべる。

「私がシオンに向かわせる人員の変わりにアースラに入ろう」
と、トウヤはのたもうた。

「……え？」

ええええ!!」

「何かね？そんなに驚く事かね？」

十分驚く事である。

トウヤは曲がりなりにも一組織のトップだ。

そのトウヤが勝手にアースラに入っているものだろうか？

「ああ、安心したまえ。

シオンが帰ってくるまでの交換条件だ」

「いや、でも……！」

うろたえるはやてに、トウヤはクロノに視線を向ける。

クロノは苦笑いを浮かべつつ。

「……多少の問題はあるだろうが、しかし。シオンの事を放っておくのは釈だな

……シオンの搜索に宛てる人員を制限するなら構わない」

「クロノ君。大丈夫なん？」

流石にはやても聞き返す。

仮にも一組織のトップをいきなり入れるのは色々問題があると思うのだが。

「まあ、文句や問題は色々出るだろうが。

それについては僕が何とかするさ」

「クロノ君……」

なのはが不安そうにクロノを呼ぶ。

フェイトもはやてもだ。
ただでさえ。アースラは規格外の戦力を保有している事もあり。叩
かれ放題なのだ。

「ふむ。ならば、八神二佐？」

「……了解しました。
ちょっと釈然とせんけどな」

肩を竦めるはやてに、クロノも苦笑する。

いつもは振り回される側のクロノであるのに今回は、はやてが振り
回されていた。色々な意味でこのトウヤと言う人物は油断ならない。

「で、シオン君に向かわせる人員なんやけど……」

「「はい!!」」

即座に席を立ち、手を挙げるのはスバルとティアナだ。

「ん。スターズから二名も出すんはちょい問題やけど……なのはち
ゃん？」

「うん。何とかフォローするよ。」

トウヤさんとヴィータちゃんとスリーマンセルになっちゃうけど…
…」

「任せてくれたまえ」

はやてはなのはに了承の意を受け。そしてトウヤもまた頷く。
そして、トウヤはそのままスバルとティアナを見た。

「……済まない、ね。
どうしようもない愚弟だが。
よろしく頼むよ」

ただ優しい声で二人に頭を下げた。
二人共、それに少し、慌て。
だが、しっかりと。

「「はい！」」

そう、頷いた。

（後半に続く）

第十五話「届く願い」(前編)(後書き)

すみません汗。

文字数等の関係状。前後編に分けます。

後編は早めに投稿したいと思います汗。

どうか、

よろしく願います汗

第十五話「届く願い」(後編)(前書き)

後編です♪とんでもない長さになってしまい申し訳ありません汗
次回は短くなるといいな~~~~(笑)

第十五話「届く願い」（後編）

シオンは思い出す。その日、何があったのかを。

「やめろおおおおおおおおっ！！」

シオンは声を限界まで振り絞り叫ぶ。

だが、彼は止まらない。振り返らない。自分の存在を黙殺したまま目の前の女性に手を掲げる。

その右手に煌めくのは666の文字。

そして、虹が放たれる。

「あああああああああ」

虹が女性を貫いた。

それをシオンは拒否することも出来ずに見せつけられる。

大好きだった。初恋の相手だった女性、ルシアが虹に体を貫かれ、その意識を奪われるのを。

「あああああああああああああ」

何も出来なかった。ルシアを救う事はおろか、身代わりになる事さえも。何も為せず。何ひとつとして成せずに、ルシアを奪われた。目の前の兄に。

「あああああああああああああああ」

そんなシオンにただ一言だけルシアの声が漏れた。

「ごめん、ね……」

ただ、その一言だけが。

そしてルシアは意識を失った。シオンは直感で理解する。

ルシアはもう目を覚ます事は無いと。

「ああああああああああああああああああああ」

シオンはただただ涙を流す事しか出来ない。無力に子供のように、ただただ。

そこで、漸く兄が、いや、兄の姿をした何かが、シオンを向く。

シオンは我知らず、名を呼ぶ。兄の名を。

「タカ兄い……」

だが、兄はシオンを見ず。そのまま去っていく。全てを置き去りにして。

シオンは吠える。兄をルシアを奪った物の名を

それはロスト・ロギア。魔王の紋章。しかし、正しい名前は違う。

故に叫んだ。シオンはあらん限りの怨嗟の思いを込めて。

「ナンバー・オブ・ザ・ビーストオオオオオオオオ！！」

二年後、シオンは知る事になる。全ては兄が自らの意思で行った事だと。その時、執念は憎悪へと姿を変え、シオンは復讐者となった。



咆哮が響く。

強く。

激しく。

だが、その咆哮は威嚇の為でも、ましてや自己を知らしめる為の物ではない。

断末魔。

長く響くその咆哮は断末魔だった。

断末魔を上げた獣。

二足で立つ。熊にも似た獣は因子に感染している。

だが、既に再生は叶わず。

ただ、身体はボロボロと崩れる。

それを見ているのは少年。

シオンだ。

だがその戦場は戦場に非ず。

そこは、正しくは処刑場だった。

感染者は激しく抵抗し、周りの施設や建物を激しく破壊したが。

シオンは一切それに構う事はなく。

また、自分の魔法の余波が周囲に被害を与えている事にすら目を向けなかった。

故に、そこは感染者の処刑場であり。同時に同じく近隣の住人にとつては正しく戦場だった。

そして、シオンは感染者にとっては処刑執行者。

住人にとっては正しく厄災である。

周りにはケガをして泣き叫ぶ子供が居る。

自らの子を探す親がいる。

壊れた住宅を呆然と見ている男がいる。

しかし、シオンはそれに目を向けない。

「斬」。

感染者を最早用無しと縦に断つ。

はずれか、とただシオンはそれだけを思う。

感染者にも周辺の被害者達にも何の感情も浮かべない。

・・・表面上は。

【……シオン。いや、マスター。いい加減に……！】

「黙れよ」

【ッ……!!】

イクスがシオンを諫めるもシオンは聞く耳を持たない。そもそもイクスは今、シオンに、逆らえない、のだ。

融合事故。

それは何もマスターが乗つとられる事だけを意味しない。

その逆も、また有り得るのだ。

今と同じように。

イクスはシオンに対していかなる抵抗も出来ない。

シオンの、憎悪、と言う意思がイクスの制御を完全に奪っているからだ。

「666の反応は有っても、本人がいないのなら意味は、無い。か……」

ブラフ。

タカトは転位反応の全てにブラフを仕掛けていた。

しかもご丁寧に、感染者のおまけ付き。

狙ったものかどうかは不明だが。

シオンはタカトの狙い為何であるかをこの前、漸く理解した。

タカトは人間の感染者のみを狙っているのだ。

他の感染者はスルーしている節がある。

それ故か、管理局側は今感染者対策に掛かりつきりになっている。

よく考えたもんだな。とシオンは一人ごちる。

管理局の目を逸らし、そして自分は悠々と獲物を狙える。

逃亡と狩り。まさに一石二鳥である。

ギリッとシオンは奥歯を噛み締める。

ふざけやがって、と。

「どこに居ようが、必ず見つけ出してやる。」

そして……」

倒せるか否かは問題ではない。
必ず倒す。

それしか、今のシオンは考えてはいない。

「……次だ」

そう言いながら転移魔法を展開し。

そしてシオンは消えた。

周りの全てから目を逸らして。



ティアナとスバルがアースラを出て早三日になる。

シオンの反応がある度にアースラから転移ポイントを教えて貰い。

追っていたが、シオンにはついぞ会えなかった。

彼女達が目にしたのは瓦礫の山。

そして、傷付いた人達だった。

これで五度。

スバル達がシオンを追って見た光景である。

まだ死者が出ていないのは幸いだ。

シオンが起こした惨状にスバル達は最初は戸惑いを、そして次には
怒りを感じ始めていた。

「……ティア」

「今、連絡したわ。

もうすぐ救援部隊が来る、て」

通信を終えてティアナがスバルと合流する。
スバルはただティアナが通信している間に救える人を救助していた。
スバルがポツリと呟く。

「シオン……何でここまでしたんだろ……？」

「さあね。……でも、一つだけ言えるわ。

あの馬鹿は許せない」

ティアナはきっぱりと言った。

その目は怒りに染まっている。

スバルもまたシオンの行状に怒りを覚えていたが、まだ戸惑いが勝っていた。

どうしてもイメージが結び付かないのだ。

スバルが知るシオンと今のシオンの。

ティアナはと言うと、怒りの方が勝っている。

失望とも言えるが。

「そっちはどう？」

皆、救助出来た？」

「うん。何とか皆無事に。応急処置も済んだよ」

流石は救助は専門分野のスバルである。

そして、ティアナもまた 災害担当部署にいた経験を活かし、スバルとコンビで救助に当たっている。

……こんな事でそんな経験を生かす場面が来るとは思わなかったが。

「……アースラの皆は元気かな？」

「私達がアースラを出て三日よ？」

心配要らないわよ」

そんな事を言っていたらクロス・ミラージュが点滅し、コールを鳴らす。

アースラからの定期通信だ。

ティアナとスバルは通信に出た。アルトと情報交換。

そして、シオンの次の予測転移ポイントを教えて貰っていた。

「……トウヤさん、て……」

「よく、考えたらあの人。666より位階、上なのよね……」

通信でアルトから聞いたのはスターズに臨時加入したトウヤの戦闘についての事だった。

アルトがやや興奮気味で話していたので、あまり状況が解らなかったが。

どうにも色々、やらかした、らしい。

いわく。感染者を槍で少しずつ櫛削った。

いわく。感染者が第2段階に危うくなりかけた瞬間に。超広範囲殲滅型の一撃をブチ込んで、周囲1Kmを底の見えないクレーターと化したとか。

……だけどちょっと納得した。あの、弟達、にしてあの、兄、である。

三兄弟とも。はた迷惑ぶりによく似ていた。

……スターズ分隊長。副隊長のなのは、ヴィータには気の毒だったが。

「とりあえず。救助隊に申し送り終えたら次、行くわよ？」

「うん。……今度こそ、見つけなくっちゃね」

スバルとティアナは頷き合う。

数分後に漸く救助隊が来た。



ティアナ達は基本的に次元転移魔法はまだ使えない。
それ故、本局のトランスポートで、シオンの行く先に出向く。
今回はシオンではなく。直接666の転移反応を追う事になった。
トウヤから八極八卦太極図の転移構成術式のデータを貰い。解析した為である。

シオンが666を追っているのなら追いつける可能性がある。

「よし、転移座標。入力完了、と。
行くわよ。スバル」

「うん！」

ティアナとスバルがポートに入り。
そして、ポートが起動する。

「……間違って666と遭遇しないわよね……?」
「ア、アハハハハ……」

可能性は0ではない。

しかし、もし遭遇した場合は即座に二人共逃げ出す積もりだ。
はつきり言って二人だけでは勝算なぞ限りなく0に近い。

ポートが転移座標を解析し、スバルとティアナの姿がぼやけていく。
直後。ポート内のスバル、ティアナは次元転移を完了した。

スバルとティアナが着いた世界は管理外世界の一つ。

だが、その世界の行き着いた先には小数ではあるが、人が居る事が解った。

やはりと言うべきか、666は居ない。

居たら居たらで大問題だが。

「とりあえず666は居ないわね……?」

「うん。シオンも居ないね」

二人はそれぞれデバイスから各情報を受け取りながらがっかりとした顔になる。

はずれかもしれない。と
だがー。

ー爆発ー。

スバルとティアナは同時にそれを見た。

天高く燃え上がる炎の柱を、直後。二人のデバイスから次の情報が出た。

感染者発生。

「……っ!!」

ティアナ!!」

「解ってる!

行くわよ!!」

鋭くティアナを呼び。またティアナもスバルに答える。

二人は同時にデバイスを取り出す。

「マツハ・キャリバー!」

「クロス・ミラージュ！」

「「セーット・アップ！！」」

スタンバイ、レディ。セット・アップ。

瞬時に組み上がるデバイス。

そして、それぞれバリア・ジャケットが二人を包み込んで行く。
次の瞬間には既に二人は戦闘準備を完了していた。

「ティア！！」

「待って！」

距離は……。近い！

しかも人里がある！！」

その言葉にスバルが唇を噛み締める。

思い出すのはアリサの事だ。

彼女は未だ、ベットの中で意識を取り戻せていない。

「スバル！」

「うん！！」

一気に行く。乗って！！」

ティアナはスバルの背中に乗る、おんぶ。少々情けない姿だが。今はスピードが命だ。

そしてスバルは叫ぶ。

彼女の空へと繋がる道の名をー！

「ウイング・ロード！！」

青い道が空へと走る。

そして、マッハ・キャリバーが後ろのマフラーから煙を吹き出す。

「マッハ・キャリバー!!」
はい。相棒!

次の瞬間。スバルとティアナは空へと猛烈なスピードで駆けた。



二人が着いた時、そこに暴れるのは巨大な人型だった。
トロール種。

その巨大な体躯と、そして怪力のかのオーガ種とタメを張る。
それが二体。

複数発生。それがまた起きていた。

そして、それを見て。ティアナがぽつりと呟く。

「ここでも……」

「?どうしたの。ティアナ?」

ウイング・ロードを駆けながらスバルがティアナの呟きに疑問を浮かべる。

それに、ティアナも答える。

「妙だと思わない?

ここでもあんなトロール種なんているはずなのに……」

「そう言えば……」

ティアナの問いにスバルも頷く。

地球でもクラナガンでも居るはずの無い種が感染者となり襲ってきた。

考えてみればここ三日程の間に行った世界の全てもまた、そうだった。

「……ひょっとしたら、だけど。誰かが感染者を転送しているかも……」

「そんな……そんな事、誰がするの？」

スバルの問いに

「それが解れば苦労しないわよ」。とティアナは返す。
だが、その推理には問題がある。

そこに動機がない。感染者を送る事に何の意味があると言うのだ。
暫く、考えこみそうになったが、時は待たない。
そう、時は待たないのだ。

「まず、降りるね？」

「了解……」

相棒！／マスター！

急に叫ぶ。マッハ・キャリバーとクロス・ミラージュ。
何事か、と聞こうとした瞬間。

‘それ’は現れた。

いきなり叩きつけるは、飛ぶ斬撃。

それを二人はよく知っている。

神覇・弍ノ太刀。剣牙。

その一撃は迷う事なく、感染者と、その近くに居た。民間人を吹き飛ばす。

「な……!!!!」

「ティア！アレ！！」

地面に降りたスバルはティアナを降ろし、空を指す。
そこに、彼が居た。

（誰……アレ？）

二人はしかし、同時にそう思ってしまった。
だが、現実には待たない。

吹き飛ばされた人が苦し気に呻く。

二人はハツとして、その人を助けに向かう。

しかし、彼は容赦しない。

倒れた人の近くの感染者に止めを刺すべく剣を振り上げる。

「駄目……！」

「あの……馬鹿……！」

二人が駆け出すより先に剣が振り下ろされる方が速い。

このままでは間に合わない。

しかし。

「R O O O O ! !」

倒れていた感染者が起き上がり、回避行動を取る。

既に再生したのかその身体には傷一つ無い。

照準を変え、回避行動を取る感染者に向かう。

その間にスバル達は民間人を助けられた。

「スバル！取り敢えず！」

「……うん！」

倒れた民間人を抱え、二人は戦線を離脱する。

周囲の人は他には誰も居ない。
とつくに逃げ出したのだろう。

「アイツ……っ！」

何考えてんのよ!!」

「……………」

苛立ち紛れに怒りを言葉に乗せるティアナにスバルは何も答える事が出来ない。

チラリと後ろを向く。

そこには新たに加わった感染者と合わせて戦う、彼、あまりにも変わり果てた神庭シオンが居た。
変わったと言えど姿が変わった訳では無い。
しかし、別人と言える程にシオンは変貌していた。

(……シオン……)

今は離れる事しか出来ず。
スバルは唇を噛んだ。



神庭シオンは一体目の感染者にイクスをたたき付け。
さらに顎を蹴り上げる。

「K R o o o o o ! !」

吠える感染者。しかしシオンはそれに構わない。
後ろにのけ反る感染者の胸を足場にそのまま180°回転する。

そこに居るのは二体目の異業。
感染者だ。

だが、シオンは慌てない。
既にイクスには光が灯る。

「式ノ太刀。剣牙」

裁断。シオンの憎悪に反応してなのか、通常の剣牙とは威力の桁が違う。

しかし、それは同時に余波を周囲にブチまける。

剣牙の余波はそのまま建物を碎き、破壊する。

しかし、シオンは止まらない。

足場を蹴って、縦に回転。

向かうは裁断された感染者の頭頂部だ。

感染者は再生を行いながらも、しかしその一撃を止められない。

―斬―

シオンはそのままイクスを回転を保ったまま。感染者の頭頂部に叩き付け。

頭を切り裂く。

しかし、そこで終わりでは無かった。

「一壺ノ太刀。絶影」

斬断。

一気に縦一文字に感染者を斬って捨てる。

再生途中なのに十文字に斬り捨てられた感染者は悲鳴しかあげられない。

だが、ただその腕を振り上げる。

しかし、そこまで。

シオンはそのまま死刑執行を始める。

「イクス」

トランスファア。

瞬時にブレイズ・フォームに変化したシオンは乱撃を放つ。

感染者はその乱撃に身体を細切れにされる。

神覇・壱ノ太刀。絶影連牙。

感染者はそのまま塵と消えた。

最初の感染者に目を向ける。

ひたすらに感情の無いー。

いや、ただ一つの感情を宿した瞳を。

「セレクト。ウィズダム」

トランスファア。

イクスとシオンは更なる変化を遂げる。

ウィズダム・フォーム。

そして、瞬時に構えるは槍の一撃。

「神覇・弐ノ太刀。剣牙、裂」

突撃槍と化したイクスが内部から弾ける。

エネルギー内蔵型の槍。

それがウィズダムの姿だった。

伸びる穂先は迷いなく感染者の右腕を貫き。消し飛ばす。

しかし、穂先はそこで止まらない。

そのまま突き進み。

家をまとめて四軒破壊。

漸く止まる。

感染者は右腕を失ったまま。しかし、シオンに向かって走る。だが、シオンはそこから動かない。

穂先がイクスに戻る。

迫る感染者は構わず走る。

シオンは体勢を低く取り、そしてその一撃を放った。

「一伍ノ太刀。剣魔、裂」

次の瞬間。石突きが弾け、地面に突き刺さる。

それを推進力に変え。

シオンは魔力を纏いながら感染者に突っ込む。
チャージ突撃。

放たれた一撃に感染者は反応出来ず。

胴体に直撃を受ける。

瞬秒も持たず。感染者は頭と左手。そして両足。

それ以外の部品を消し飛ばされ。塵へと還っていく。

しかし、シオンの一撃は半壊したその人里に止めを刺す。

突撃は止まらず。

そのまま村を横断した。

縦一直線に断たれる村。

しかし、漸く止まったシオンはそれを興味なさ気に見ていた。



スバルとティアナはケガを追った民間人を安心できる所まで連れて行き、そしてまた全力で村に戻って来ていた。

しかし、そこにあるのは村であって、村ではない。

崩れさった家達。

無事な家の方が少ないだろう。

そして、何より。

村を縦一直線に刻んだ傷跡。

そう、既に村は人が住める環境では無くなっていた。

「これをシオンが……？」

スバルが呆然と呟くのも当然と言えた。

いくら感染者との戦いとはいえ、やり過ぎである。

そして暫く歩くと二人は見つける。

この惨状を起こした元凶に。

「……シオン……」

「……スバルか」

呼びかけるスバルにしかし、シオンは感情の籠らない瞳で応じる。

「……なんで？」

なんでこんな事を！？」

「……強くなりたいから」

キツク問うスバルに、しかしシオンはきっぱりと言い放つ。

「強く、なりたい。て……」

「現状、666を殺すのに全然力が足りないんだよ。

だから修業がわりに感染者を狩っている。

常に全力を出せるようにして魔力量や最大瞬間発生魔力を上げるのが目的だな」

シオンは淡々と告げる。

感情は、どこまでも籠らない。

「でも、村とかこんな風にして!!
どうするつもり!?!」

「知らない」

スバルが怒鳴り付けるように問うが、シオンはしきっぱりと言
い放つ。

「誰に迷惑が掛かろうが、誰が悲しもうが。
誰が死のうが。」

そんなモンに興味はない。

「俺はただ、666を殺せる力が手に入ればいいだけだ」

「そんな……そんなの!?!」

スバルは叫ぶ。そんな事は間違っている。と。

絶対違うと。

だが、シオンは応えない。

どこまでも感情は籠らない。

「……もし、666を殺すのに感染者が邪魔するのなら感染者を殺
す。」

管理局が邪魔するのなら管理局を潰す」

「シ、オー」

「スバル」

シオンのあんまりな言葉にスバルはシオンの名を呼ぼうとするが、
しかしそれすらも遮られる。

初めて、感情が生まれる。

殺意と言う名の。

「俺の、邪魔をするな」

「……シ、オン」

「二度は言わない」

シオンはそう言ってスバルを拒絶する。
もう、何を言っても届かないのか。

スバルの瞳に涙が浮かぶ！。

「……呆れたわ」

しかし、たった一言が場をぶち破った。
ティアナだ。

彼女はただ一人。腕を組み。そして、シオンを、見下している、

「何、だと？」

「ティアナ……？」

シオンが苛立ちながら聞き返し。
スバルもまた信じられない物を見るようにティアナを見る。
しかし、ティアナは動じない。

「呆れたつつたのよ。

無様過ぎて、ね」

「……無様……？」

シオンの問い掛けにティアナは

「ええ」と頷く。

「別に復讐なんて、好きにすればいい。

でも、アンタがやってるのは何？

666に牙を剥く訳でも無い。

ただ人に迷惑を掛けてるだけ。

しかも、それが、強くなりたい、から？

笑わせるわ」

「……黙れ」

ティアナの言にシオンが明確に苛立つ。

しかし、ティアナはそれを鼻で笑う。

そう、シオンが苛立つ以上にティアナは苛立っていた。

無様過ぎて、カッコ悪過ぎて。

尋常ではない不快感を今、ティアナは感じている。

今のシオンを視界に入れる事すら不快だった。

だが、あえてティアナはシオンをよく見る。

感情（憎悪）が意思を増幅し、シオンの魔力量は凄まじい事になっている。

しかし、ティアナは恐れない。

そんな物は恐れるような物ですらない、と。

そう、こんなシオンはー

（■■■■のシオンなんかじゃないー！）

「時空管理局執務官補佐として、言うわ。

神庭シオン。アンタを逮捕するわ」

「俺の邪魔をする、て？」

シオンの問い掛け。

それはつまり戦うのか？と、いう問い掛けだ。

そして、ティアナは堂々と受けてたった。

故にティアナは言葉の代わりに一発クロス・ミラージュからマルチ・

ショットを叩き込んだ。

シオンはその一撃をイクスで弾く。

「そう、か。」

なら、まずお前からー」

ー殺してやるー

瞬間、シオンから爆発的に魔力が広がり、殺意がティアナに襲い掛かる。

それに、ティアナが返すはただ不敵。

「上等ーー！」

シオンが駆け出し。ティアナは引き金を引く。

銃と剣が今ここに交差するーー！。



放たれるマルチショット。

しかし、今のシオンには無意味な代物だ。

魔力放出と対魔力効果でたいていの純魔力攻撃はシオンにとって意味を成さない。

瞬動。

シオンは瞬間でティアナの眼前に移動する。

そのままイクスを叩き付ける。

しかし。

「クロス・ミラージュ！」
ダガー・モード。

2ndモードに移行したクロス・ミラージュの刃を交差し、受け止める。が。

「ーっ！」

「その程度か？」

シオンが構わずイクスを振抜く。

堪らず吹っ飛ぶティアナにシオンはさらに追撃を掛ける。

イクスを更に振り上げ、一撃を叩き込もうとして。

「……クロス・ファイアー！」

しかし、ティアナの周りに集まるスファイア達。

その数20。

だが、シオンは構わない。

イクスの一撃でティアナを落とす為に更に踏み込む。

どちらにしろ射撃は効かないと、タカをくくり。

そして、一撃は放たれた。

「シュート!!」

「っー！なあ!？」

放たれたスファイアは一つに収束し、シオンに叩きつけられる。

AAは下らない。砲撃がカウンターとなりシオンに直撃する、が。

「……この、程度。か!？」

「ー！」

しかし、シオンはそのままティアナに一撃を叩きつけた。

「あう！！」

その一撃に盛大にすっ飛ぶティアナ。

直撃の衝撃で煙がブチまけられる。

そのまま数m跳び、地面に転がる。

よく、見るとバリア・ジャケットの一部が弾けている。

「くー！」

「多少。驚かされけどな」

ティアナはすぐに起き上がろうとするが、しかしシオンのイクスが首筋に突き付けられ、身動きが取れなくなる。

「ー終わりだ」

既に勝負は着いた。

そうシオンは言う。

しかし、ティアナが浮かべるのは笑み。

そして、思いつきアカンベーとする

「アンタが、ね」

その声はシオンの後ろから響いた。

脇腹に当たる硬い感触。

そこにはブレイズ・モードのクロス・ミラージュを構えるティアナが居た。

「幻影!？」

いつの間に？」

「さっき吹き飛ばされた時。

煙が立ったからその一瞬で、ね」

そう言いながら笑いを浮かべるティアナ。

そして、引き金が引かれた。

「ファントム・ブレイザー!!」

光が0距離でシオンに叩き付けられる。

シオンはそのまま吹き飛び。そして爆発。

ティアナは爆発で起きた煙の中を油断せずクロス・ミラージュを構える。0距離射撃。あの状態なら魔力放出の恩恵は受けられない。

(勝った……?)

一瞬だけそう思うティアナ。

だが、煙の中には未だ倒れぬ影。

シオンだ。

「……流石に効いた。

でも、ここまでだ」

シオンが一步を踏み込むながら言ってくる。

だがティアナはハンッと鼻をツンと上げて笑う。

「ボケた事言ってるじゃ、ないわよ。

アンタの方がダメージは上よ?」

「……そうだな。」

俺も少々甘く見ていた。

だから。今からは。

「ー本気でいこう」

トランスファァー。

イクスから快音が響くと同時にバリア・ジャケットが変化する。

ブレイズ・フォームだ。

ティアナもそれに合わせて2ndモードにクロス・ミラージュを設定する。

「構えろ、死にたくなかったらな」

「ーっ！」

瞬動。

一瞬でまたティアナと間合いを詰めたシオンはその双刃を振りかぶる。

ティアナは辛うじて反応し、イクスを受け止める。

しかし、ナイフを使った戦い同士だ。

どうやってもシオンに分がある。

シオンの左のイクスが複製された方のクロス・ミラージュを斬り裂く。

「ーくっ！」

「ーフッー！！」

後退するティアナに合わせるようにシオンは更に一步を踏み込み。

ティアナの胴に振り込むように直蹴りを放つ。

「あうっ！！」

直撃。

ティアナはその場に倒れる。

そして、シオンは右のイクスが無感情にティアナにたたき付けようとする、が。

「うりゃああああ！」

突如、乱入したスバルにリボルバー・キャノンを叩き付けられ。シオンは数m後退した。

「ティア！大丈夫？」

「……っう。うん。」

問題ないわ」

ティアナが蹴られた腹部を押さえながら立ち上がる。
バリア・ジャケット越しに衝撃が叩き込まれたのか。
まだ顔をしかめる。

「それより、スバル。」

アンタ……」

「……うん。」

……シオン」

スバルはシオンに呼びかける。

シオンは既に戦闘体勢を整えている。

シオンにとって、スバルも最早敵と言う認識。と言う事なのか。

「最後に聞くね？」

……シオンはどうしても今の行動を改めないの？」

「……………」

沈黙。

だが、それはそれ以上無い肯定である。

「……そっか」

「さっきも言ったな？」

……俺の邪魔をするな」

シオンはただそれだけを繰り返す。

「……言葉じゃ、もう止まらないんだね？」

「……いつかの焼き直しだな。」

……俺を止めたきや」

ー戦えー

シオンの言葉にスバルはゆっくりと、だがしっかりと頷く。
リボルバー・ナックルが回転する。

そして、スバルはいつか聞いた台詞をシオンに叩きつける。

「シオン。」

……少し、頭を冷やそうか……？」

「スバル……」

「いいだろう。冷やさせて見せろ」

風が一阵吹く。

瞬間。

スバルのマッハ・キャリバーが唸り。

シオンは瞬動に入る。

リボルバー・ナックルとイクスが交差し、至近で互いに睨み合う。
拳と剣は、今ここにぶつかり合う。



シオンの一撃にスバルは右の拳を放つ。
今までの模擬戦でもスバルはシオンと何度か戦った。
三戦して、一本取れたらいい方だったが。
しかも今のシオンは一切の手加減なしである。
だが、スバルにもまだ勝ち目はある。
シオンよりスバルの方が単純に力が上だ。
故に、真っ正面からのぶつかり合いならばシオンより有利と言う認識がスバルにはあった。

だが、その認識はいきなり裏切られる。

「フッ！」

シオンが一息と共にイクスを振るう。
その一撃はスバルの放った拳を弾く。
単純な力押しでスバルは今、シオンに敗北していた。

「く、う……！」

「凌ぐ、か」

十の拳と剣の交差の後、シオンがいきなり後退する。
スバルもまた体勢を整えようとするが。
しかし、シオンはそれを許さない。

「イクス」
トランスファ―。

右の手に掲げるは突撃槍。
ウィズダム・フォームだ。
スバルはそれで理解する。シオンが後退したのは誘いだったと。

「一式ノ太刀。」

「ーっ！。マッハ・キャリバー！！」
プロテクション。トライシールド。

二重防御。今スバルが行える。最大の防御方である。
しかし、シオンは構わない。

「剣牙、裂」

イクスが弾ける。

その穂先がトライシールドの真ん中に突き立つ。
押される。

その場に踏み留まれず。
ゆっくりと。

だが、シオンの攻勢はそこで終わらない。

「一伍ノ太刀」

その言葉にスバルは絶句する。
シオンは体勢を低く取っていた。
穂先はトライシールドに食い込んだままだ。
回避のしようがない。

「剣魔、れー」

「ファントム・ブレイザー!!!」

しかし、横から放たれた砲撃がシオンを吹き飛ばす。
ティアナの砲撃だ。

「ティア!」

「……まったく。」

これ、私が売った喧嘩よ?
アンタ一人で戦ってどうすんの?」

クロス・ミラージュを下ろし、スバルに駆け寄る。

「これは、私の喧嘩。

アンタは引っ込んでなさい」

「そんなの駄目だよ!

私だってー」

「面倒だ」

二人の言葉を遮るようにシオンから声が掛かる。
砲撃を凌いだのか。
ゆっくりと歩いて来た。

「二人同時に来い」

シオンはそれだけを言い放つ。
それに、ティアナもスバルもムカつと来る。

「ーずいぶん余裕ね?

二対一よ?」

「たいした問題じゃない。
……お前等のレベルじゃな」

余裕。

挑発でも何でもない。シオンは真実。二対一で勝てるつもりなのだ。

「……いいわ。

やったろうじゃない！」

「……後悔しても、知らないよ……？」

「……さっきも言ったな？

させてみる」

瞬動。

シオンは瞬間で間合いを詰める。

狙うはティアナ。

しかし、スバルがそれを許さない。

再度放たれる。右の拳。

しかし、シオンはノーマルに戻したイクスで正面からぶつかる。

「く……！」

「邪魔だ」

一步を踏み込む。

単純な力押し。

シオンはそれを持ってスバルを押しやる。

「クロス・ファイアー！」

だが、スバルとの押し合いの間にティアナの魔法は完成する。
先程と同じく二十の弾丸。

「シュート!!」

一斉に放たれる。弾丸達。
同時にスバルが後退する。
無防備なシオンに弾丸は殺到し・・・。

「一四ノ太刀。裂波」

しかし、シオンはたった一つの技でそれを防ぐ。
シオンを中心に広がる衝撃波。
それが弾丸の勢いを削る。
シオンは更に動く。

「セレクト。ブレイズ」
トランスファァー。

瞬間でブレイズ・フォームに変化し、一気に瞬動を開始。
スバルがまた立ち塞がろうとするが、
しかし、シオンは構わない。

「参ノ太刀。双牙連牙」

放たれるは大地を疾る、四条、の刃。
スバルは慌ててプロテクションを張る。
しかし、シオンは止まらない。
一気に空へ駆けると、足場を設置し、直角の動きを持ってティアナ
へと向かう。

「く!!」

クロス・ミラージュ！」

再び2ndモードへと変化。先程の焼き直しである。クロスレンジではシオンの方がティアナより技巧的に上だ。瞬く間に押されて行く。

「ティアア!!」

そこにスバルが駆け付けた。
四条の刃を防ぎきり。

すぐにフォローに来たのだろう。

これにティアナはチャンスと思う。

位置的にシオンを挟み撃ちに出来るからだ。

スバルは疾りながら右の拳を放つ。

シオンは左手をイクス事掲げ、シールドを展開。

シールドの真ん中にスバルの拳が刺さる。

拮抗。

しかし、当然。ティアナはこのチャンスを逃さない。

シオンはスバルの一撃を防ぎながら右のイクスを振るい、ティアナと斬り合うが、手が足りない。

シオンは防戦一方となる。

(いけるー!!)

しかし、ティアナがそう思った瞬間。シオンは驚く行動に出る。
シールドを消したのだ。

当然。スバルの拳はシオンへと向かう。

しかし、シオンが次に放つ一手の方が速かった。

イクスの両の切っ先をスバル、ティアナにそれぞれ向け。

「四ノ太刀。裂波連牙」

その技が放たれる。

両のイクスを中心に二人に衝撃波が襲う。

だが、この技に威力は無い。

あるのは数秒のみの拘束力。

しかし、今このタイミングでは最高の効果を発揮する。

スバルもティアナも動けない。

シオンは瞬動を持って後退。

「セレクト、ウィズダム」

トランスファア。

ウィズダム・フォームへと変化。

そう、二人が一カ所に固まり。

そして身動きが取れない。この状態故に次に放つ一撃は最大の効果を発揮する。

（まずい！！）

ティアナは内心悲鳴を揚げ、全力で拘束から逃れようとするが、解けない。

スバルもまた同じく。

動けない。

「ーっっ」

「……終わりだ。」

神覇伍ノ太刀。剣魔、裂」

イクスの石突きが弾け。

地面に突き立つ。

そして、最大威力の突撃が放たれる。

―裂―

その一撃を受けて、スバルとティアナは盛大に吹き飛んだ。



スバルとティアナを吹き飛ばし、シオンは技を解く。
完全に捉えた一撃は二人を倒した。
だが・・・

（情けねえ……）

シオンはそう、思う。

シオンの頭を過ぎったのは僅かながらの後悔。

二人に対しての一撃。

殺すつもりで放った一撃だ。

それを、少し後悔してしまった。

（未練か。……本当に情けないな）

そしてシオンは視線を巡らせる。

視線の先にはスバルとティアナが重なり合うように倒れていた。
ぴくりとも動かない二人。

死んではいないだろうが、それでも重傷には違いない。

シオンは一瞬だが迷う。

二人を治療するべきか否かを。

だが、首を振る。

そして、その場を後にする。

シオンは決めたのだ。

先程の宣言通り。

誰が死のうと。

それは二人も例外ではない。

邪魔をするなら潰す。

だがー！。

「……何て、顔してんのよ。アンタ？」

聞こえない筈の声が聞こえた。

「何、だと……？」

「アタタタ……」

驚愕するシオンを尻目に二人が立ち上がる。

二人はたいしたケガを負っているようには見えない。

バリア・ジャケットさえボロボロだが！。

（バリア・ジャケットだけ、が？）

「……ずいぶんと優しいのね？」

わざわざ、非殺傷、設定で攻撃するなんて」

「……馬鹿、な」

ティアナのいつそ優しげとも取れる言葉に今度こそシオン混乱する。
非殺傷設定に等、した覚えは……

「……シオン……」

《どうやら間に合った、か……》

声が響く、イクスの声。

「イクス……お前がやったのか!？」

《その通りだ。シオン》

イクスが肯定する。

それにシオンは馬鹿など再度思う。

イクスは完全に支配下に置いていた筈だ。

それが、何故――？

《解らないのか？

お前はさっきの一撃の前に――》

「っ――！ 黙れ!!」

シオンは叫ぶ。それは命令ではなく。既に懇願だった。

それを聞けば自分は――。

《――二人を失いたくないと、自分で支配を解いたのだぞ?》

「……………」

力が抜ける。何も考えられなくなる。

有り得なかった。認められなかった。

666への復讐。

それ以外を考えないようにした自分が。

‘二人を失う事を恐れた’等。

「……シオン……」

「……………」

スバルもティアナも、何も言えない。

シオンは復讐を存在意義にしていた。

それを、恐らくは無意識だろうが自分で破る等。
考えられないに違いない。

唇を噛み締める。

そして、シオンは再び、二人に向き合う。

「もう一度、だ……」

《シオン、まだ……!!》

「黙れっ!」

イクスはまた再びシオンの支配下におかれる。
二人をシオンは睨みつける。

「……もう、迷わない。

今度こそは、お前等を」

「シオン!

もう、いいよ!!」

スバルが叫ぶ。

拳を振るわせながら。

「そんなに、無理しなくていいんだよ……!!」

「俺は、無理なんかーっ!」

「……なら、何でアンタ。そんな顔してんのよ……?」

スバルの言葉をティアナが引き継ぐ。

二人がシオンに向ける感情は憐憫。

「……そんな、顔……?」

「……シオン。今にも……」

泣きそうな顔してるよ?

スバルの言葉に、シオンは漸く自分の感情に気付く。

二人が起き上がった時、自分は何を思った?

安心してはいなかったか?

「俺は……俺は!!」

シオンは自分の中で揺れる二つの心に混乱する。

復讐と。

そして友愛と。

二人を見る。スバルとティアナこそ泣き出しそうな顔だ。

それを見て、シオンはまたどうしようも無い感情が沸き上がるのを
感じる。

自覚した。

本当に泣きそうだと。

「シオン……」

「……解ったわ。」

もう一度、戦ってあげる」

「ティアア!」

ティアナの言にスバルが驚く。

今のシオンは混乱している。

今、また自分達と戦えばシオンがどうなるか解らない。

「……シオン。」

アンタを一度、コテンパンに負かせてあげるわ……そして……」

言葉を紡ぐ、優しく。ただ優しく。

「アンタを救ってあげる」

「ティア……」

「……俺を救う？」

……いらねえよ……」

しかし、シオンはティアナを否定する。

千々に乱れた心で。

未だ、自分の復讐心にしがみ付く。

「……お前達を叩き伏せて、俺は、俺を取り戻す……」

シオンの宣言にスバルもまた向き合う。
考える。

シオンに今、必要なのは何なのか、を。

ティアナを見る。

ティアナもまたスバルを見ていた。

言葉を交わさずに瞳で意思を交換する。

シオンを取り戻すわよ？と。

スバルは頷き、そしてシオンにまた向き合う。
拳を握る。

そう、シオンを取り戻せるのは恐らくこれが最後。
今の迷いを持つシオンでなければならぬ。

「……シオン。……」

取り戻すよ？ シオンを」

「……俺は、……俺は！？」

吠えるシオン。

そしてイクスを構える。

スバルとティアナもまたそれぞれの相棒を構えた。

「相棒？」

はい。私はいつでも行けます。

スバルはマツハ・キャリバーに呼びかける。

マツハ・キャリバーもまた応えた。

そう、決めたからシオンを力づくで、取り戻すと。

だから、その為の力を引き出すー！。

「ティア？」

「うん。……やるわよ？」

互いに頷き合った。

シオンに視線を向ける。

その顔は泣きそうな道に迷った子供を彷彿とさせた。

スバルは拳を握りしめる。

「マツハ・キャリバー。」

「……ギア・エクセリオンー！！」

瞬間。翼が広がった。

マツハ・キャリバーから。

ファイナル・リミッター解除のフル・ドライブ。

それがマツハ・キャリバーのギア・エクセリオンだった。

ACS。スタンバイ・レディ
マッハ・キャリバーの声を聞く。

「……行くよ。シオン!!」

「……来い!!」

スバルとシオンは同時に駆け。

ティアナはスフィアを展開する。

迷える少年と少年を救おうとする少女達の戦いは最終局面を迎えた。



「ハアーーーーっ!」

スバルは裂帛の叫びと共に一撃を放つ。

リボルバー・キャノン。

シオンはそれを真っ向からの斬撃で向かえ撃つ。
しかし、

「ああーーーーっ!」

咆哮一斉。

スバルの一撃はシオンごと、斬撃を潰す。

「なーーーーっ!?!」

「……こんな事で驚かないで!」

驚愕するシオンにスバルはしかし、怒鳴る。

こんな事で驚愕なんてしてもらいたくはなかった。

回転しながら右の蹴りを放つ。

キャリバー・シュート、ライト!!

放たれる蹴撃をプロテクションで防ぐ。

しかし、スバルの蹴撃は一撃では止まらない!!

ショットガン・キャリバー・シュート!!

連続蹴り。

回転を速めながらスバルはプロテクションを削っていく。

シオンは堪らず、後ろへ後退。

しかし、次に来るのはティアナの・・・いや、乱撃!!

「クロス・ファイアー!!!!」

ロード・カートリッジ!!

5連カートリッジ・ロード。

それは今のティアナの限界ロード数である。

生み出されたスフィアの数なのはのシューターを越える。

その数、60発。

そして、ティアナは後退するシオンに一斉射撃を放つ。

「シュート!!!!」

光の軍勢がシオンへと殺到する。

しかし、ティアナはまだ止まらない。

左右のクロス・ミラージュの残りカートリッジ。一発をロード。

クロス・ミラージュから直接マルチ・ショットを放ちまくる。

「うおおおおおおお！」

「が、ああああああ！」

光の乱舞を浴びてシオンが苦悶の叫びを挙げる。

対魔力は衝撃までは消せないのだ。

百に値する乱撃を浴び、シオンは衝撃だけでダメージを受ける。

（強い……！）

シオンは思う。心の底から。

さつきとは別人だ。

それに較べて自分はどうか。

迷いが剣にまで現れている。

集中が全く出来ない。

「くっそーっ！」

四ノ太刀。裂波を使い。

シュートを半減させる。

だが、その隙を。彼女は……スバルは待っていた。

「やあああああああ！！！」

真っ正面。

光の乱舞の中を縫って来たスバルはノーマル・フォームのイクスが振れない。超至近距離にシオンを捉える。

リボルバーキャノン。

スバルの一撃がシオンの腹に直撃。
シオンは水平にすっ飛ぶ。

「くっーっ！」

「まだまだっ！」

スバルはすっ飛ぶシオンにマツハ・キャリバーの速度を活かし、すぐに追い付く。

シオンは空間に足場を形勢。

踏み止まり。

逆にイクスの一撃を叩き込む。

しかし、スバルは体を下にして避ける。

「マツハ・キャリバー!!！」

ウインググロード!

キャリバー・シュート、レフト!

サマーソルト。

スバルのその一撃にシオンは胸を蹴られ空中に上げられる。
また空間に足場を作ろうとして……。

「ファントム・ブレイザー!!！」

しかし、出来ない。

ティアナの一撃でシオンは更に吹き飛ぶ。

「くっーっ！」

「スバル！」

クロス・シフト。行くわよ!」

「うん!!」

未だ、吹き飛んだままのシオンにスバルは駆ける。

螺旋軌道を描きながらウィングロードでシオンへと近付き、リボルバー・キャノンの一撃を放つ。

シオンはそれに対して、絶影を放ち、拮抗。

だがスバルを掠めるように、ティアナのクロス・ファイアー・シュートがシオンに殺到する。

凄まじいコントロールである。

シオンは衝撃を殺せずにくらついた所でスバルの一撃でまた吹き飛ぶ。

「あああああっ！」

咆哮一斉。

シオンが魔力を放出する。

こんな所で負けてなんていらなかった。

666はまだ、遥か遠い高みに居るのだから。

「負けられ、ないんだよ！」

俺は!!」

「負かす、つってんのよ！」

私達が!!」

シオンが振り向くと至近距離にティアナが居る。

スバルのウィングロードに乗って、空に上がって来たのだ。

クロス・ミラージュ。2ndモード。

シオンも、またブレイズ・フォームへと変換。

二人は双刃を煌めかせ、斬り合う。

しかし、驚く事にティアナはシオンに押し勝つ。

「……っ！」

「さっきのお返し!!」

ティアナは左右のイクスを上へと跳ね上げるとその空いた腹に膝を叩き込む。

そして後ろへ跳躍。

新たに作り出したスフィアをシオンに叩き込む。

「くっー!!」

「やあああああ!!」

衝撃にのけ反るシオンに再度2ndモードを起動したティアナは突っ込む。

「調子に、乗んなあっ！」

叫び、カウンターで斬撃を放つ。

しかし、斬られたティアナはそのまま姿を消す。
幻影だ。

「くっー！」

シオンは上を見る。

降りてくるのは体を逆さにしてクロス・ミラージュを突き出すティアナ。

だが、シオンはまだ止まらない。

「神覇・壱ノ太刀。絶影!!」

上から降ってきたティアナに再び斬撃を放つ。
しかし、また姿が消える。

「二重、シルエットだとー！」

「振り返りなさい」

声が響く。真後ろから。

完全に背中を取られた事に齒噛みしながら振り返る。

「噛あ、食いしばりなさい！！」

直後、右の頬に衝撃。

腰の入った綺麗なストレートがシオンの顔面に叩き込まれる。
しかし。

（何、で。パンチー！？）

「スツキリしたわ。」

後任せるわね？

「ー行きなさい！スバル！！」

パンチの一撃で空に体が泳いだシオンが見たのは鮮やかな青。
スバルのウイングロードだ。

そして、スバルの左手に灯るのは光。

何度も見た、その光を。その度に魅了された。

目が離せなかった。

その輝きに。

シオンはそれに苦笑いする。

漸く気付いた。

あの時も言ったではないか。

そう、俺の負けだと。

初っから勝てる訳がなかった。
だって、俺は――。

「シオン――！」

目、覚ましなさいっ――！」

ディバイン・ブレイカー――！！

放たれる光を纏いし拳。

とりあえず、シオンは心の中だけでツツコム。

（いや、そんなの直撃したら目を醒ます所か、永眠すると思うんだ
けど――）

そんな思考を浮かべながらシオンはその一撃を受け。

地面に盛大に叩き着けられた。



風が優しく風ぐ。

その中で一撃をシオンに叩き込んだスバルは冷や汗をかく。

やばい……やり過ぎた。

シオンは地面に叩きつけられた直後。クレータをその勢いのまま作り。

さらに大量の土砂を浴びて地面に半ば埋まっていた。
ピクリとも動かない。

「……シ、シオン……？」

返事は無い。当たり前だが。

「ス、スバル。アンタまさかーっ!」
「ち、違うよ!!生きてるよ!!」

パートナーの疑惑の目を両手をブンブンと振りながら釈明する。
だが、どう見ても完全なオーバーキル。
死んでない。と言う方が寧ろどうよ?
と、問いたくなる状態である。

「と、とりあえず。
……降りましょ」
「う、うん……」

二人揃って、コソコソ、と言う感じ地面に降りる。
まさか防御行動を一切取らないとはスバルも想像出来ず。
最大威力の一撃を叩き込んでしまったのだがー。

「シ、シオン……。
その、生きてる?」

返事はない。当然だが。

「取り敢えず掘り起こしましょ……」
「う、うん……」

なんか、墓場泥棒みたいな感じの二人である。
だが、次の瞬間。
シオンが地面からはい出て。
立ち上がる。

「「シオン！」」

二人はホッと一瞬喜ぶが、同時に喜んでばかりも入られない事に気付く。

このままではまた戦いが再開される。

・・・しかし、シオンからは闘志も例の殺気も感じられない。
絞りカスのような空虚な存在感だ。

「ーシオンー」

シオンにはもはや戦う力も残っていないと二人共判断してシオンに近寄る。
が、その瞬間。

「ーなっ？」

「ーへっ？」

シオンが間近に接近していた。
気配すらも感じさせない程に鮮やかな歩法。
二人共まったく反応出来なかった。

ースパンー

気付いた時には二人揃って宙を舞っていた。

足を払われたと気付いた時には二人共背中から地面落ちる。

「あたっ！」

「いっつ！」

ブレイズ・フォーム。

悲鳴を挙げる間もなくシオンはブレイズ・フォームへと変換。
両手のイクスをスバルとティアナに投げる。

だが、イクスは二人に当たる事はない。

二人の耳元に突き立っていた。

「え？」

「あれ？」

二人共混乱する。

しかし、シオンは、アースラに居た時、のようにフツと笑うと。

「取り敢えず、借りはさっさと返して置かないとな？」

そんな事をのたもいながら二人を見下ろしていた。

「「シオン……？」」

「おう。……なんだよ？」

二人揃って狐に摘まれたような顔は？」

呆れたような顔をする。

しかし、スバルもティアナもそれに構わない。

あまりにもあの時のシオン過ぎる顔に啞然としていたからだ。

・・・しかし。

「「シゝオゝンゝ」」

「……待った。二人共、何故そんなダークオーラーを立ち上がらせる？」

しかし、二人は当然聞かない。

「十倍返しだ／よ！」

「そりゃちよつと多過ぎ、イタイイタイイタイ!!」

二人から報復を受けるシオン。
だが、三人共笑顔であつた。

「……普通。ここまでするか？」

「アンタが悪いんでしようが、アンタが！」

「そうだよ！シオンが悪い！」

ボロボロなのにさらにボロボロになったシオンの文句を二人は叩き潰す。

シオンは

「やれやれ」と呟き。起き上がる。

「それで、アンタ。

もう、良いの？」

「……何がだ？」

ティアナの疑問に、しかし、シオンはそのまま疑問で返す。

「その、復讐、は……？」

「……忘れた訳じゃねえさ。

必ず。666には、

……タカ兄いには報復する。これは、絶対だ」

「シオン……」

二人共、心配そうにシオンを見る。シオンは二人に笑って見せた。

「……でも、もう馬鹿な真似はしねえよ。

……今度やったら命なさそうだし」

「そっか」

笑いながら答えるシオンに二人は頷き返す。

今はそれでいい、と。

まだシオンは不安定な所がある。復讐も忘れていない。

だが、今のシオンはさっきのシオンのように後ろを向いている訳ではない。しっかりと前を向いているから。

「……それじゃあ、アースラに戻るかー！

あ、シオン。アンタ、今回の騒動の分の反省文。

たっぷり、書いてもらうからね？」

「な、なぬ！？

待った、聞いてねえ！！」

「そりゃそうよ。

アンタ、あんだだけの事しとお咎めナシとか思ってたんじゃないわよね？」

「うーっ！！」

「ほら、二人共。そろそろ転送する、て」

わいわいと騒ぎながら三人は帰路につく。

そして、シオンは漸くアースラへと戻った。



三人が本局経由でアースラへと向かう。

それにシオンは柄にも無く緊張していた。

命令無視を始めとして、目茶苦茶したのだ。

しかも黙って勝手に退艦した。

普通なら、復隊など出来まい。

罵倒他は覚悟しているが、いざアースラに戻るとなると少し怖くなる。

アースラの方にはもう、連絡はいってるのだがー。

転送が完了する。

そしてシオンはアースラへと帰還した。

「あ……」

シオンはアースラに着いた途端、懐かしさが胸に湧いたのを感じる。たった数ヶ月しかいなかったのに、何故か懐かしい。

「……シオン。艦長から、取り敢えず。食堂に集合だって」

「……ああ」

スバルに頷き返す。

しかし、気分は晴れない。

今更嫌われる事を恐れるとは、と苦笑いを浮かべる。

「……大丈夫。

艦長もなのはさん達も嫌ってなんか、無いわよ。

……しっかり怒られなさい」

「ああ」

ティアナの言葉に励まされる。

しっかり怒られなさい。

その事に有り難いと思う。

そして、食堂に着いた。

「……開けるよ？」

「おう」

そして、シオンが食堂で目にしたのは……

『お帰りなさい!!』

アースラ・フルメンバー勢揃い状態なのと。
皆からのお帰りなさい、だった。

「あ、えっと。その……」

「シオン君。何か言う事あるやろ？」

お帰りなさい、て言われたら？」

はやてが笑いながら先を促す。
そして。

「ただいまー」

『お帰りなさい!』

再度響く。皆からのお帰りなさいにシオンは卑怯だと思った。
ちよっと泣きそうになってしまったではないか。

「さて、お説教とかしたい所やけど。
……スバルとティアが盛大にやってくれたみたいやからそれは置いとこ。

でも、シオン君がやったのは犯罪や。
やから罰を受けなアカン」

「……………はい」

はやての言葉に頷く。

覚悟はしていた。

果たして、どんな罰を受ける事になるのか！。

「と、言う訳でトウヤさん。カモン♪」

「ウム！」

はやての呼びかけに応えて有り得ない人物が表れた。
叶トウヤその人である。

「え、え、ええー！！！」

突然の闖入者にシオンの目が丸くなる。

「何でトウヤ兄いここに居るのさ！？、…………てあ…………」

「フム。聞いてないかね？ナカジマ君とランスター君の交替人員として来ていたのだよ。」

「……それと、私達が兄弟だと言うのはすっかりバレテいるので心配しなくても大丈夫だよ？」

「何か、いろいろツツコミ所があるんだけど！？」

「気にするな。気にしたら負けだよ？」

さて、ではシオンの罰ゲーム！！！」

やたら高いノリでトウヤは何かを取り出す。

・・・紙芝居だ。

しかし、その表紙にはこう書いてあった。

「シオンの恥ずかしい秘密。100選」と。

「な、な、なななな!？」

「高町君。よろしく頼む」

「……はい」

なのはが苦笑いを浮かべながらシオンにレイジング・ハートを向ける。

バインド。

シオンに無数のバインドが かけられる。

「ちょ、何。何が起きようとしてるのさ!？」

「ずばり、シオン君への罰はこれや♪」

本人の目の前で恥ずかしい話し大暴露♪」

「何じゃ、そりゃあああああああつ!！」

叫ぶ。しかし、誰も聞き届けてくれそうにない。

「プライバシーの侵害でしょっ!

コレは!!!」

「フ、ある人はこう言ったモノだよ?

犯罪者に人権はない!」

「いろんな意味で問題発言じゃねえか!！」

「うるさいね。誰か、シオンにさるぐつわを」

「シオン。ごめんね?」

「スバル!?! お前まで」

「大丈夫。多分30を越えた当たりで悟りの境地に辿りつけるらしいわよ?」

「そんなモン辿り付きたくもないわ!？」

ちょ、マジ勘弁!

勘べー。

モゴモゴモゴモゴ!」

さるぐつわをされて喋れないシオンを尻目に
トウヤが紙芝居の始まりを宣言する。

「では始めよう!!」

まずは第一章~~~~!!」

「モッゴ!モゴゴ~~~~!!?」

かくしてシオンはアースラに戻って来た。
もう、家ともよんでも差し支えないココに。

「モゴモゴモゴモゴ~~~~!!!!」

「さあ、次は中学生編だ!!」

性を覚え始めた少年の恥ずかしい過去とは~~~~!!!!!!」

「モゴ~~~~!!!!!!!!!!」

大絶賛で精神的にピンチではあったが。



時間は進む。

どれだけ、嫌だろうと。

それは自然の摂理。

どうしようも無い事。

「666。いや、こう呼ぶべきなのだろうな。

……伊織タカト」

故に人の出会い、と言うのもまた必然なのだろう。

それは決められていた事なのか？
もしくは――。

「伊織タカト。君を逮捕する」
「……やってみせろ」

クロノ・ハラウンと伊織タカト。
二人の出会いには必然であるのか？

（第十六話に続く）

◆◆◆◆◆
パラリヤパラリヤパラリヤ――！

ア
「はい♪今回も始まりました♪アリサ道場です♪」
す

シ
「弟子のすずかです♪」

「作者代行の割りに作者より出ているシオンです♪
そして、前回から続けて来ている三人組です♪」

ヴ
「はい♪ヴィヴィオです♪」

祐
「祐希奈よ。よろしく♪」

カ
「カナんだ。」

ア
「さて、三人組も楽屋裏でいろいろあったみたいだけど……」

カ

「いや、アンタ当事者じゃないか！

祐希奈と組んでフルボッコなんてマジ鬼か！」

シ

「……寧ろ、そのタフさに驚異を覚えるけどな……」

裕

「そうよね。あんなだけボコったのに。

……おかげで出番が減っちゃうじゃない」

カ

「それが狙いか！？」

ヴ

「……二人共、また喧嘩？」

裕、カ

「「（ビクウ！）そんな事ない！仲良しだよ？」」

ヴ

「……本当かなあ？」

裕、カ

「「本当だよ！」」

ア

「さて、このままだと話しが進みそうに無いので今回のお話……、
で、そのヘタレ！」

シ

「誰がヘタレですか！？」

す

「……今回は否定出来ないと思うなあ」

シ

「……う」

ヴ

「確かに、今回のシオン君はちょっと酷いね？」

シ

「うう……」

裕

「そうよね〜」。

ヘタレシオン。略してヘタレオン爆誕。て感じだもんね」

シ

「へ、ヘタレオン……」

カ

「シオン。気をしっかり持て!!」

てか、ここで俺を一人にしないでくれ!!」

す

「あ、なんかシオン君が真っ白な灰に……」

ア

「風情があるわね……」

シ

「……本当に鬼ですか、アンタら……」

ヴ

「でも、これでシオン君の過去話しも終わって鬱展開じゃ、なくなるんだよね?」

シ

「当分ね」

ア

「……ん? て事はまだある、て事?」

シ

「勿論です。まあ、でも当分は無いらしいです?」

裕

「へえ……でも私が気になるのはあの紙芝居ね♪

アレ、欲しいな〜♪」

シ

「……あんな物が世に蔓延ってたまるか……っ!」

カ

「確かに、アレはキツイだろうな。

アリサと祐希奈の二人には渡らない事を祈るばかりだ……」

ア

「……甘いわね。弟子すずかよ！

アレを……」

す

「うん♪コレだね♪」

シ

「その紙芝居は……もしや!?!」

カ

「待った!?! なんで二つあるんだ!?!

しかもカナン用、て書いてあるし!?!」

ア

「ええ♪二人の予想通りの代物よ♪

『シオンの恥ずかしい話し300選』に

『カナンの恥ずかしい話し300選』よ♪」

シ

「ぎゃああああああ!?!

しかも増えてるー!?!」

カ

「待った!?!

なんで俺のまである!?!」

ア

「提供は祐希奈さんから頂いております♪」

カ

「お前かあああ!?!」

裕

「私の手書きよ?

光栄に思いなさい?」

カ

「思ってたまるか!?!」

シ

「カナン! 何としてでも奪い取るぞ!!
アレを読まれたら俺達に未来は無い!!」

カ

「そこまでヤバイのか!?!」

……ああ!!

俺達は未来を手に入れる!!」

ア、裕

「「フフン♪来くなさい♪」」

す

「ああ、乱闘が始まっちゃった」

ヴ

「もう……何で皆仲良く出来ないのかな」

シ

「喰らえ! 壺の太刀!!」

ア

「無駄よ!! 無駄無駄!!」

カ

「お前を倒して俺は自由になるんだああああ!!」

裕

「無駄よ!!」

アంతの人生は私の物!! 私的人生は私のもの!!」

カ

「どこまでジャイアニズムだよ!?!」

す

「……では、ヴィヴィオちゃん。恒例のアレをどうぞ♪」

ヴ

「……皆。少しお話し、しょうか?」

一同

「…………げ……」

ヴ

「……全力全開……」

シ

「待て、ヴィヴィオ!

そんなこの前より遥かに巨大な……!!」

ヴ

「……一撃必倒……」

ア

「待って!落ち着いて!!

ほら、紙芝居。カナンのあげるからー!」

ヴ

「……問答無用……」

裕

「ほら、お願いだから落ち着いてヴィヴィオ!このままじゃあ私達
お星さまになっちゃう!!」

ヴ

「……容赦なし……」

カ

「増えてるし!?

てか、俺は悪くないと思うんだ!!」

ヴ

「連帯責任だよ!!」

スターライト・ブレイカーEX!!」

一同

「ぎゃああああああ!?!」

す

「……さて、これが恒例的な締めになるのも問題だけど、ヨシユア
さん。キャラ召喚本当にありがとうございました!!
またいつかこの三人との出演が叶えられたらいいな♪

とか思います♪」

ヴ

「本当、楽しかったです♪

すずかさん。またいつかお会いしましょう♪
では、シオン君がアレなので私が代わりに♪
ではでは♪

今日はこの辺でー!!」

一同

「また次回ー!!」

ヴ

「すごい。もう皆。復活したんだー」

第十五話「届く願い」(後編)(後書き)

「漸くシオンはアースラへと戻る」

「しかし、時を同

じくして、クロノの乗艦クラウディアにタカトが潜入する。」

「クロノとタカト。クロノは最強の一角の彼を相手に挑む」

「果たしてクロノの策とは――」

「次回第十六話「時と天」

ぶつかり合うは

運命。

第十六話「時と天」(前書き)

「その姿を見て、人は畏怖するだろう」
「それ。何者にも傷つける事が出来ない」

「何者にも止められ
「だけど、

そんな存在はいない。有り得ない」
「そう、この身に賭けて」

「だから僕が彼を倒そう。」
「魔法少女リリカルな

のはStS, EX始まります」

第十六話「時と天」

シオンがアースラに戻り三日が経った。

その間始末書に追われたり、偉い人に事情聴取（の名前を借りた世間話し）

をされたり、そして異母兄、トウヤからの訓練の名を借りたリンチを受けたりしていた。
そして。

「……何も帰るのにここまで盛大に見送る必要は無いのだがね？」

アースラポート内で苦笑いを浮かべる男性、トウヤはその笑みのまま皆に向き合う。

そこには今、待機中の人間を除くアースラ主要メンバーが集っていた。

「何、言うてるんよ。」

もう、トウヤさんもバッチリアースラメンバーなんよ？」

微笑みながらそう言うのは艦長であるはやてだ。

その言葉に皆、一斉に頷く。

実際トウヤはアースラに馴染みまくっていた。

たかだか一週間程の期間しかアースラに居なかったのにそれが当たり前のような感覚を皆、覚えていたのだ。

基本、アースラメンバーは皆歳若い。ヴォルケン・リッターと言う例外はある物の、それを差っ引いてもなお、若い。

そんな中でトウヤは兄貴的な存在と相成りつつあった。

はやてやなのは、フェイトでさえ、トウヤをそんな風に捉えていた節がある。

そんなトウヤだが、彼は曲がり成りにもグノーシスのトップ。長くアースラに居る事も出来ずにこうして戻っている訳だ。

「そう言ってくれるのはありがたいね。

私としてはもう少し此処に居て、シオン達に訓練を施したかったのだが……」

「……心底、結構だよ。

このドS」

シオンが半眼にてトウヤを睨む。

横でスバル達が苦笑いと共にそれを見ていた。

実際、もっともトウヤの‘訓練’と言う名のリンチを1番受けたのはシオンだからだ、次点はエリオ。

二人共、得物が槍。

シオンはウィズダムだが。

で、ある為。最強に近い槍術士であるトウヤにはもう徹底的に扱われたのだ。

いや、実際。技能で言えば三日前とは比べ物にならないくらい上がっているのだが。

「早く行きなよ。

ユウオ姉さんも待ってるんだろ？」

「ウム。……しかし、こう何だね。一週間もお尻と離れていたかと思うと……」

「……頼む、頼むからそう言った発言。慎んでよ。マジに」

ナチュラルにセクハラ話しを開始しようとするトウヤにシオンが色んな物を諦めた表情でツツコミを入れる。

それに一同が浮かべるのは笑みだ。

実際この二人のやり取りは微笑ましい。

シオンは気付く者は気付くが、トウヤに少し甘えている口調なのだ。それが普段とのギャップとなり、アースラの一同はその光景をほのぼのとしている。

「……そうかね？」

私としてはユウオのあの魅力を小一時間は語りたいのだが……」

「うん♪

とりあえず大却下♪

……仕事があんだろ？

ボケた事言わんでさっさと帰んなよ？」

「……何で我が家の弟達はこう兄を蔑ろにするのかね？

……まあ、仕事があるのは事実だ。帰るとしよう。

ではユウオのあのマロさについては次の機会に……」

「いらねえ……、て!!

……じゃあね。トウヤ兄い」

マロさって何よ？

と、言うツツコミは許されず、一同もそれぞれトウヤに挨拶する。トウヤはそれに逐一頷く。

「うむ。……では、さらばだ。アースラ諸君。

そして、シオン。

……また、いつか時と運命が交差する日に会おう」

そして、トウヤは地球に帰った。

一同最後の言葉にしんみりとする。

「……なんちゅうか。

最後にえらい気障な台詞を残すなー」

「ちよっとだけだけど寂しいね」

「ちょっとだけね？」

「……俺はとっても安心してます」

「……あ、僕も……」

最後のシオンとエリオの言葉に笑いが飛ぶ。

ややあつてはやてから解散を告げられる。

しかし、アースラ一同もトウヤでさえも知らなかった。
今、この時点で知人が危地にいると。

この一週間。まったく姿を現さなかった666。

いや、伊織タカトが再び現れた事を。

そして。

鳴り響くエマージェンシーコール。

それにシオン達は身構える。

「……感染者か!？」

「ブリッジ!! どうしたんや？」

再び、起きるのは、こんな筈じゃない、……

《き、救難信号です!!》

相手は……

……嘘……》

「シャーリー？」

どないしたんや? シャーリー!!」

結果が生まれる。

《……次元航行艦。クラウドディアから救難信号です。……

……内部に、666が出現……!!」

「な……なん、やて……?」

「クロ、ノ……君の……?」

「クロノが……?」

シャーリの報告に一同。絶句する。

かくして、アースラは一路クラウドディアへと急ぐ事になった。



少しばかり時間は遡る。

次元航行艦クラウドディアの艦長。クロノはブリッジにてあるデーターを見ていた。

666こと伊織タカトのアースラメンバーとの戦闘データーである。それを見ているクロノは頭の中でタカトと架空戦闘を想像する。

結果は惨敗。

そもそもタカトの持つアビリティー・スキルからして反則レベルなのだ。

射撃魔法の殆どは対魔力で効果を望めず。

近接戦に於いては勝てる要素が一切ない。

しかし、クロノはタカトにたいしていくらかのアドバンテージを有しているのを発見した。

上手くいけば……。

「……あれ?」

しかし、クロノの思考はオペレーター的一声で中断される。

オペレーターは困惑の表情でクラウドディアの官制システムを呼び出してチェックしている。

何故か、クロノはその時。奇妙な予感を覚えた。
嫌な予感がする。

「……どうした？何かあったのか？」

「いえ……。少しシステムが不調を。
たいした事は無いと思うんですが」

そう言いながらオペレーターは再度システムをチェックする。
嫌な予感は止まらない。

「……どのような不調だ？」

「いえ……。転送システムに妙な形跡があるんです」

転送システムに？

そう、疑問を浮かべるクロノにオペレーターは告げる。

「はい。……そんな反応は全然無いのにまるで誰か、
'転送して来た' かのよう……」

瞬間。ブリッジに小規模の振動が走る。
オペレーター陣が軽く悲鳴をあげる。

「……っ！何があった!？」

「は、はい！。ちょっと待って下さい……嘘……」

クロノの叫びに伝えてオペレーターがコンソールを操作し、艦内の
チェックを行う。

そして浮かべるのは驚愕だった。

「どうした？報告を!!」

「……っ！はい！」

現在艦内に侵入者がいます！！」

オペレーターの報告にクロノも一瞬。絶句する。

此処は次元航行艦。

しかも最新鋭の、である。

どうやったら侵入出来ると言うのだ。

「侵入者は武装隊と接触後、戦闘を開始した模様。

現在B区画で戦闘中！」

「……嘘！？武装隊から援護要請！！

侵入者、押さえきれません！！！」

「落ち着け！。艦内カメラをスクリーンに。

侵入者の姿を！！！」

混乱するオペレーター陣を一言でクロノは落ち着かせる。

オペレーターもクロノの命令に従い艦内カメラの映像を出す。

しかし、スクリーンに現れた侵入者の姿を見て、クロノは今度こそ完全に絶句した。

「……666、だと……っ！」

そこに映るのは武装隊を一蹴する異端。

黒の王。伊織タカトがそこに居た。



クラウディアの艦内通路は広い。

そして天井もまた、高い。

それはクルーにとっては便利かつ、情動的に安心出来る空間だ。しかし、それは艦内に侵入者が入ってきた場合。逆に守りにくくなる。

それをクラウドディア常駐の武装隊、隊長は痛感していた。

水系が疾る。悲鳴があがる。

天破水迅。

その一撃は艦内と言う限られた空間にあって尚、驚異であった。

既に半分の隊員は戦闘不能となっている。

その惨状を作りあげた異端。

伊織タカトはこちらが放つ射撃魔法も砲撃魔法も意に介さずただ歩く。

障害となる者はただ潰す。

そこにあるのはもはやヒトとも思えぬ化生の類であった。

疾る疾る。

水の糸が、拳が。

その度に隊員は一人ならずまとめて倒れて行く。

「何が、目的だってんだ……っ！」

苛立ちながら叫ぶ隊長は既に戦える者が殆どいないのを悟る。

たった一人にこの損害。

有り得ない事だった。

周りの隊員達はまだ戦おうと呻くが、しかし。

‘身体の構造’上。絶対に動けない怪我をそれぞれ負っているのだ。

立ち上がれる筈がない。

隊長の目の前に異端が立つ。

その目はただただ無感情。

激昂する。隊員達を傷付けておいて、そんな瞳を浮かべるこの男に。

「このっ！」

……クソツタレがあああ!!!!」

デバイスを構え砲撃を放とうとして、しかし。砲撃は左の掌にかき消され。

そして隊長の腹に拳が当てられる。

異端なる者。伊織タカトはそのまま一步を踏み込んだ。瞬間。

隊長は身体を衝撃が貫いたのを確信する。

バリア・ジャケット越しに叩き込まれた衝撃。

その一撃で自分の身体から力が抜ける事を自覚。

(駄目だ……強すぎる……!!!)

しかし、隊長はそれすらも声に出せず。意識を失った。

意識を失った隊長をタカトはぼんやりと見遣る。

「見事」

タカトはただそれだけを呟いた。

目の前の隊長と隊員達にたいしての一言である。

そして、タカト歩く。

ただただ歩いていく。

しかし、その歩みが止まった。

ある一室の前で、だ。

タカトは扉を確かめて、ロックされているのを確認した瞬間。扉に直蹴りを叩き込んだ。

快音。

扉は盛大に部屋の中へとすっ飛ぶ。

タカトはすっ飛んだ扉の行方には目も暮れず。
部屋へと入った。

扉が部屋の奥にぶつかり、そして落ちる。

タカトはゆっくりと歩く。

歩く先には一人の女性。

恐らくは局員だろう。

本局の制服に身を包んでいる。

タカトは歩く。

そして、女性の目の前に立った。

「う…… gu……」

「……よく、頑張った」

タカトは女性を見ながらただそれだけを呟いた。

女性は因子に感染していた。



「……武装隊。全員、戦闘不能……」

「666。今はレイナ官制官の部屋に入って動いていません……」

矢継ぎ早に飛ぶ報告。

それにクロノはたった一つだけ嘆息した。

目を閉じる。

短いながらも共に過ごしたこの艦の事を。

「……全クルーに告げる。ただ今を持って、全員退艦用意。

動ける者は、武装隊、隊員他を回収後、脱出艇で脱出」

「……艦長……」

退艦用意。それはつまりこの艦を諦める、と言う事か……？

「復唱はどうした？」

「……はい……」

クロノに促され、復唱する。

次いで艦内に退艦命令を放送する。

それを聞きながらクロノは席を立った。

「艦長。どちらへ？」

「……レイナ士官の下へな。

見捨てる事など出来ない」

それを聞いた官制官達も着いて行こうと席を立つ。

しかし、クロノはそれを片手で制した。

「君達にはまだ、役目がある。

近場に来ているのはアースラだな？」

「はい。……先程救難信号を出しましたが……」

クロノはそれを聞いて頷く。

アースラが着くまでの時間30分程。

666をその時間まで足止めする必要がある。

「レイナ士官を救出後、僕は666を足止めする。

君達はアースラと合流後、僕が時間稼ぎをしているのを知らせてく

れ」

「……艦長……」

タカトの侵入。

しかし、逆に言えばこれはチャンスとも言える。

何せ普段は探すのにも苦勞する相手だ。

ならば、今ここで捕らえる。

「レイナ士官は見つけ次第、脱出艇付近に轉移させる。

いいな？」

「……解りました。

艦長、御武運を！」

ブリッジ要員達が敬礼する。

クロノもまたそれを返し、そしてブリッジを出た。



クロノは進む。

自らの乗艦を。

戦闘の後か、周囲はボロボロだ。

それ程激しい戦闘があつた事を意味する。

既に武装隊員はいない。

全員短距離転送で脱出艇付近に居るはずだ。

後はレイナ士官のみ。

基本、本人かその付近の局員の認証がなければ短距離転送は出来ない事になっている。

意識がない人間に短距離転送はかなり危険だからだ。

しかし、こう言った時には必要だな。

と、クロノは考える。

・・・こんな事がそう起きると思えないが。

レイナ士官の部屋が見える。

扉が盛大に破壊されていた。

クロノは飛び込もうとして、しかし出来ない。

空を飛んでいたクロノはその場に止まる。

異端が、現れた。

扉から。

その手に抱えるのは、刻印、を刻まれた女性だ。

伊織タカト、彼がそこに居た。

それを見てクロノは歯噛みする。

意識不明者となった部下を、そしてそれを出してしまった自らの失態に。

「……彼女から離れてもらおう……」

「……………」

意外にもタカトはあっさりと従った。

彼女を下ろし、自分は三步下がる。

クロノは即座に短距離転送を開始。

官制に伝え、後を任せる。

ややあって彼女は転送された。

「……君は何故、この艦に侵入した？」

彼女が目的だったのか？」

「……答える義務は無い」

クロノの問い、しかしタカトはそれに答えない。

「……なら、力づくでも答えて貰う」

「どうやって？」

クロノの宣言にタカトはただ尋ねる。

その一言は挑発だ。

乗る必要は、無い。

クロノはタカトの疑問を黙殺する。

そして懷から黒と白銀のカードを取り出す。

「……666。いや、伊織タカト、と呼ぶべきだろうな」

二つのカードはクロノの意思に応え、起動する。

右に持つのは氷結の杖。デュランダル。

左に持つのは漆黒の杖。

S2U。

しかし、二つの杖は少し改造されている。

デュランダルはオートマチック型のカートリッジ・システムを。

S2Uはリボルバー型のカートリッジ・システムをそれぞれ装備していた。

二つの杖が撃鉄を下ろし、カートリッジ・ロードを行う。

クロノは杖を左右に広げながら構える。

「クロノ・ハラオウンの名に於いて、君を大規模騒乱罪を始めとした容疑で逮捕する」

クロノは堂々と宣言する。

しかし、それにたいするタカトの反応はただ無感情。

しかし、たった一言でクロノに応えた。

「……やってみせてみる」

瞬間。クロノのS2Uが吠え。
砲撃を放ち。

タカトは一步を踏み込みながら砲撃を殴り飛ばす。
戦いが始まった。



クロノは後退しながらS2Uをタカトへ向ける。
カートリッジ・ロード。

ブレイズ・キャノン。

S2Uから淡々とした声が漏れる。
砲撃。

カートリッジ・ロードで威力が増幅された砲撃がタカトへ向かう。

クロノはこの一撃でのダメージを期待していない。

タカトの対魔力は絶大だ。

純魔力砲撃であれを抜くのはかなり無理に近い。

だが対魔力では砲撃の衝撃までは消せない。

クロノの狙いはそこにあった。

だが、タカトはその砲撃に対して一步を踏み込む。

放つは左の拳。

着弾。

砲撃を真っ正面から跳ね返す。

タカトはその勢いのままクロノにスルスルと近寄る。

両者の距離6m。

クロノはさらに後退する。

今度はデュランダルをタカトに向ける。

アイシクル・カノン。

放たれるは氷の砲撃。

クロノは魔力変換資質を持たない。

しかしその手に握るのは氷結の杖。

カートリッジ・ロードを行う事により。

擬似的に魔力変換を行える訳だ。

当然カートリッジの使用量は増える為。

従来の変換資質保持者と比べてロスが多い。

だがタカト相手にそんな物は気にしていない。

放たれた氷の砲撃は迷いなくタカトへと迫り。

しかし、タカトはその砲撃に対して一つのアクションを取る。

身体を投げ出すように宙へと駆け。

身体を横に一回転。

右のソバット。

その脚には紅蓮の輝きが灯る。

「天破紅蓮」

爆音。

余波である衝撃が辺りにぶちまけられる。

さらに氷と炎の激突で大量の水蒸気が発生する。

だが、クロノは慌てない。

デュランダルを掲げる。

カートリッジ・ロード。

「凍てつけ!!」

アイシクル・ケージ!

瞬間。周囲の水蒸気が纏めて凍り付く。

氷牢。

それはまさしく氷でできた牢屋であった。
しかし。

「天破疾風」

一陣の風が氷牢を薙ぎ払う。
タカトだ。

疾風の一撃は氷の牢を完膚なきまでに破壊する。
破壊された氷が結晶となって降り注ぐ。

幻想的な光景だが、今此処に居るのは二人の戦士。
そんな物になど構わなかった。

さらに距離を詰めるタカト。

クロノは後退を止めない。

両者の距離、4 m。

カートリッジ・ロード。

ステインガー・スナイプ。

掲げるはS2U。

この魔法はその操作性からクロノが最も信頼する魔法だ。

「ショット！」

光が放たれる。

その光はクロノの意思に従い、クロノに迫り。

タカトは砲撃と同じく拳を叩きこもうとして、しかし。
拳が空を切る。

クロノの操作だ。

スナイプは右の拳をスルリと抜けながらタカトの胸に向かう。

クロノの目的はタカトの足止めだ。

いちいちタカトの距離で戦うのは自殺行為。ならば後退しながらダメージを与えていく。

幸いにもタカトの遠距離攻撃は少ない。

少なくとも、艦内で使える物など水迅くらいだろう。

光の帯はタカトの胸に向かう。

当然ダメージは無いだろうが。

足止めだけでも充分効果がある。

そう、当たれば。

瞬間。クロノの視界からタカトの姿が消える。

「なーっ！」

直後、クロノの背筋に悪寒が走る。

クロノは感に従い。背をイナヴァアーよく背ける。

直後、クロノの顔があった部分に何かが通り過ぎる。

拳。

いつの間にかタカトはクロノの真横に移動しており、顎を撃ち抜くように横からアップターの要領で拳が放たれたのだ。

拳を避け。

後退しようとするクロノだが、

視界が回転した。

「なーっ!!」

足払い。

タカトは真横に移動すると同時に右の足をクロノの左足へと掛けていたのだ。

当然後退しようとするればひっくり返る。

しかし、そこはクロノ。

日頃の鍛練の賜物が、転倒を免れ、くるりと一回転。
両の足を揃えて空中に制止。

が。この時に限っていえば素直に転倒するべきだった。
正面。

密着せんばかりに踏み込むタカトが居た。

拳がバリア・ジャケット越しにクロノへ当てられる。

衝撃が走った。

「ぐっ……………!!」

っう……………」

「…………ぬ…………」

叩き込まれた衝撃にクロノの意識は飛びかける。だが、ギリギリで
踏み留まった。

次いで放たれるは円の軌道を描くデュランダル。

タカトはその一撃を屈む事でやり過す。

振るった一撃に体が泳ぐクロノ。

その表情は苦虫を噛み潰したがごとく歪む。

クロス・レンジでのタカトの技量はクロノの数段上だ。

このままではじり貧処か、即座に潰されかねない。

タカトが身を起こすと同時にクロノは打撃を警戒して、後退。

だが、タカトはクロノを逃さず、その襟首を掴む。

（!! 打撃じゃない!?!）

瞬間。再度クロノの視界が回転する。

変形の内股だ。

180°回転する。

そのままタカトは止まらない。

空いた左手でクロノの顎に掌を当てると一気に押し込む。

瞬間。クロノの脳天に衝撃が走る。

頭頂部から床に叩き込まれたと理解する時にはクロノの身体は仰向けに倒れた。

(く……っう!!)

視界が歪み。意識が飛びそうになるが、次に視界に飛び込んだ光景を見て、一気に意識が元に戻る。

視界に映るのは踵を振り上げたタカトの姿だった。

足には炎。

クロノは殆ど無意識のままラウンド・シールドを前方に展開。

「天破紅蓮」

―爆―

クロノの意識が今度こそ間違いなくすっ飛ぶ。

が、あまりの痛みに意識が直後に戻る。

身体が冗談のように撥ねたのを自覚する。

クルクルと回り落下するクロノに下からタカトが落下地点に踏み込む。

両の手には雷の輝き。

それを見ながら、クロノはしかし諦めない。

カートリッジ・ロード。

デュランダルとS2Uが同時に撃鉄を下ろす。

空で何とか体勢を整えるクロノに、タカトはそれを待たない。

止めとなる一撃を放とうとする。

「させるかっ！」

吠える。

それがキーとなり。

二つのデバイスがその咆哮に応える。

雷撃と双発の砲撃が交わる！

「天破震雷」

ブレイズ・キャノン。

アイシクル・カノン。

―爆―

―煌―

光の飽和現象が起きる。

続いて起きるのは衝撃が音速を越えて発生するソニックブーム。

そして、熱と共に舞い上がるは爆炎だ。

同時に煙が一斉に立ち込める。

クロノはその煙を突っ切るように水平にすっ飛び壁に衝突する。

「ぐっ……！」

衝撃が身体を貫く。

バリア・ジャケット越しでも尚、衝撃は殺せなかった。

コホコホと咳込みつつも、クロノは切り札を用意する。

自身は満身創痍だが。

まだ戦闘は可能なレベルだ。

思わず頑丈に産んでくれた母と父に感謝しつつクロノは思考する。

この状況。

もし、クロノがタカトならば追撃に使うのは、あの技、の筈だ。

視界は煙で0。

ならば最も範囲が広く。また、搜索に向いたあの技を。

カートリッジ・ロード。

デュランダルから空薬莖が飛び出す。

そして、クロノはその一声を聞いた。

トリガー・セット。

「天破水迅」

放たれるは緻密極まる水の糸。

その精密攻撃とも呼べる技はしかし、クロノにとっては待ちに待ち望んでいた技だった。

水系が疾る。

しかし、クロノは倒れたままデュランダルを水系に叩き付けた。

アイシクル・インパルス！

―爆―

「っ……く……っ！」

響くは、タカト、の声。

クロノはそれを聞いて自分の策が上手くいったのを確信する。

煙が晴れた。

そこには身体の致る所に切り傷を受けているタカトがいた。



クロノはゆっくりと身体を起こす。

自らの状態を確認。

骨折等はないが、紅蓮を始めとした各攻撃によるダメージで少々不調。

しかし、戦闘の続行に支障は無い。

マグチェンジ。

デバイスにカートリッジを装填する。

そして、前方を見た。

タカトだ。

その身体は全身切り傷だらけ。

当たり前だ。

何しろ、自分の攻撃、なのだ。多少のダメージは無くても困る。

「……驚いたものだ。

まさか、水迅の特性を利用するとは、な」

タカトが無感情のまま言う。

それにクロノは頷く。

「君の戦闘データは見ていたからな。

……あの技。天破水迅と言ったな、高密度に圧縮した水、を糸のように振れ合わせて操作する代物。

だがあの水系は必ず君の手に大元の水がある。

ならば凍りつかせてはどうかと思ったんだが」

「……見事、だな。

まさか俺の制御を奪い。水を凍りつかせるとは……な」

そう、クロノが行ったのは放たれた水系を凍り付かせて、タカトの大元の水も凍り付かせる。

水は凍ると体積が増える。

タカトの水系は相当の量の水を高密度の水系として圧縮して操作する技である。

故に凍り付かせて制御を奪われた水系はそのままその莫大な量の水が氷となり体積を増やしてタカトを襲ったのだ。

これがクロノが考えたタカトに対してのアドバンテージ。’ その一’ である。

「だが、二度同じ手は通じないぞ？」

「……ああ、そこまで期待してはいない」

クロノは再び愛杖を構える。

タカトは 相変わらぬの自然体。

数秒。睨みあい、そして。

カートリッジ・ロード。

タカトは駆け出し。

クロノは右のデュランダルからアイシクル・カノンを放つ。

第2局面が始まる。

クロノは今度は後退せずに前へと前進する。

それにタカトは訝しみながらも、しかし歩を止めない。

アイシクル・ランサー。

クロノの周りに、氷の槍が形成される。

その数30。

「ショット！」

氷の槍が放たれる。

タカトは前進を止めない。

左右の拳が風を巻く。

「天破疾風」

右の疾風が氷の槍を半分消し去り。
直後。

タカトは瞬動でクロノの眼前に移動する。
クロノは慌てて後退。

遅い。

ータンー

「なっー?」

クロノは目を見張る。

自分は後退した筈だ。

なのに何故、タカトはさっきと変わらぬ位置にいるー?
縮地。

その一步に届かぬ所なし。

そう言われる技法だ。

その実態は仙技。'空間移動術'だ。

タカトは未だ兄以外には開陳していないこの技をクロノに見せる。

「上手く防げ?死ぬぞ?」

「っー!」?

しかし、クロノは左のS2Uをタカトに向ける。

カートリッジ・ロード。

それに対するタカトの動きは一つ。

順手での突き。

S2Uはタカトに叩き込まれるもタカトにダメージを与えられず。

クロノはその突きを受けて数メートル後退。
クロノはそこで異変に気付く。

タカトの突きは風を纏っていた筈だ。

‘この程度’の威力な訳が無い！。

瞬間。タカトが突きを放った拳を折り曲げ。
左手は肘に沿えられる。

風が動いた。

そして、タカトはその一撃の名を呼ぶ。

「天破疾風。’改式’」

集う、集う。風が集う。

クロノは気付く。

この周囲の風が今、クロノに向けて疾っていると。

「……先程の礼だ。

受け取れ、クロノ・ハラオン」

「く、あ！！」

逃れようとするが、しかし。さっきの一撃に纏った風がクロノを縛っていた。

避せない。

ならば、

クロノの魔法の発動とタカトの技の発動は全く同じタイミングであった。

「天破乱曲」

「ストラグルー……！」

二人の魔法は交差し。
そして互いのその効果を発動した。

(第十七話に続く)



カッコーン。

ア

「風情があるわね〜」

す

「だね〜」

シ

「あの、お二人共？」

何故にそんなにまったり？」

ア

「いろんな所に出ずっぱりだったから疲れてね〜」

す

「平行世界移動は魔法の中でも凄い事なんだよ？」

シ

「……何気に恐ろしい事言わんで下さい。

はい。こんにちは♪

今回もやって来ましたアリサ道場の時間ですよ？」

ア

「あう〜〜だるい〜」

す

「疲れたよ〜〜〜」

シ

「た、……弛んでる……アリサ師匠もさすがさんも起きて下さいよ

「！」

ア

「仕方ないわね〜」

……はい♪こんにちは♪

貴方の心のオアシス♪

アリサ道場です♪」

す

「弟子のすずかです♪」

シ

「か、……変わり身はやあ!!」

ア

「ONとOFFの切り替えが上手く出来てこそプロよ?」

す

「シオン君はまだまだだね?」

シ

「……まだまだで充分っすよ。俺。

さて、今回のオリキャラ召喚ゲストはあー!!」

ア

「な、何!いきなりテンションあげて!!」

シ

「当然です!!」

ああ、いつあの人が出てくれるか待ち侘びた事か!!。

今回のゲスト・キャラはこの人♪

クロイツ・ストーリーの<剣聖>不知火晶さんです!!

わああ!!パチパチっ!!」

晶

「何かいきなりのハイテンションっぷりに引き気味なんだが……

不知火晶だ。よろしく」

シ

「早速ですが、晶さん!!」

晶

「……どうしたんだ？」

シ

「サイン下さい!!」

ずるうー!

ア

「開口1番それ!？」

思わずドリフのようにコケたわよ!？」

シ

「シャラップッス。

これに宜しくお願いします♪」

す

「……色紙まで……」

晶

「……これでいいか？」

シ

「わぁ♪

ありがとうございます♪

末代までの宝物にしちやいますね♪」

ア

「……シ、シオンがかってない程に壊れてるわね……」

す

「凄いね〜」

晶

「俺的には、全力でこう言いたい。

……二人共、助けてくれ」

ア

「……うん。今回はまあ……」

す

「引いちゃうしね。

読書の皆さん……」

シ

「うほほ……い♪。」

……て、あれ二人共、何故に注射器なんか……うつ！」

ア

「……かってない強敵だったわ……」

す

「精神的に相当ダメージ受けちゃったね……」

晶

「いや、本当にな。」

他の所じゃシオン。マシだったのに……」

ア

「……これが道場因子よ？」

アンタも覚悟しときなさい？」

晶

「全力で遠慮したいんだが……」

す

「無理だね♪」

ア

「無理ね♪」

晶

「そ、即答なのか……無理なのか……」

ア

「さて、グダグダになりつつ今回のお話、て……また続きかい！

！」

す

「戦闘シーンに入るとノリノリになるから作者さん……」

晶

「ある意味、希少な技ではあるけどな。」

しかし、タカトは打撃だけじゃなかったんだな」

ア

「クロス・レンジの鬼だからね……」

す

「でも、クロノ君もなかなか凄かったね。

……地味だけど」

ア

「そうね。……地味だけど」

晶

「俺としては結構高い評価なんだが……確かに地味だが」

ア

「晶としてはどう？クロノと戦って勝てる？」

晶

「一戦目では少々苦戦するかもな。

二戦目以降なら殺れる自信があるが……」

す

「殺れる、て……」

ア

「えらく、物騒ね……」

晶

「は？何故だ？

だって死合だろ？」

ア

「……ああ、理解したわ。これが晶のキャラ変質だと」

す

「……だね〜」

晶

「……待て。今の口ぶりだと、俺、感染してるみたい……」

ア、す

「「バッチリ」」

晶

「……………マジで？」

シ

「……………ぐっ……………」

ア

「え！？？」

もう復活した！！」

す

「そんな！？？」

象も二秒でポツクリなお菓なのに！？」

晶

「……………お、お前等、て……………」

シ

「……………痛たた。

あゝゝまだ頭がぼう、と」

晶

「……………大丈夫か？」

俺が頼んだとは言え、済まない」

シ

「な、何で俺は謝られてるんスカ！？？」

先までの記憶が俺、ちよつとなんスけど！？」

晶

「き、記憶まで……………」

シ

「え……………？」

待った。何で晶さんがここまで引いてるんですか！？？」

俺、何かまされたんですか！？」

晶

「気にするな？？」

……………強く生きるんだぞ？」

シ

「某ウチの兄みたいな事を言わんで下さい！

アリサ師匠！すずかさん！？

て、二人共いないし！？」

晶

「な、……凄まじい逃げ足だな……」

シ

「何されたかわからない、て怖いすね……」

晶

「いや、本当にな……」

シ

「さて、では今回はここまで♪

大和さん。晶さんの召喚ありがとうございます♪

恒例なんで次の話でも召喚したままで行かせて頂きます♪

それから大和さんヨシユアさんn a o n a oさんクロス企画ありがとうございます♪

とうございます♪

めっちゃ楽しませて頂いてます♪

俺を始めとしたオリキャラはどうぞ使ってあげて下さい♪

それでは♪

ア、す

「「また次回……♪」」

晶

「……二人共、気配を全く感じなかったぞ……？」

第十六話「時と天」(後書き)

「タカトとクロノの戦いは佳境に」
方は……？」

「二人の決着の行
「そして少女は出会う、運命に、」

「そして、アースラメンバーは……？」 「次

回、第十七話『出会うは運命』」 少女は出会う。兄であ

り、父でもある人に

第十七話「出会うは運命」(前書き)

「師匠からはこう言われた」

「お前に才能は無

い」 「一流には絶対に至れない」

「そう、言

われ続けた。だけど、僕は一つの信念を抱いている」

「魔

法戦闘に於いて、大事なものは

「状況に合わせた応用

力」

「そして的確に使用出来る判断力だと」

「だけど、最近。それ以上のものがあると知った」

「信念、それはロジックでは絶対解明出来ない。

しかし、何よりも強い力」

「そして、僕は出会

った。その、信念、の固まりのような男に」

「絶対の、強

さ、を持つ男に」

「だけど、僕も、信念、で負け

る訳には行かない」

「だけど、多分気付いて

いたんだ。僕達は心の何処かで……」

「正反対の癖に鏡

に映ったようにそっくりな自分達に」

「魔法少女

リリカルなのはStS，EX。始まります」

第十七話「出会うは運命」

クロノ・ハラオンは床に倒れていた。

天破乱曲。

その技を受けて、

天破乱曲は疾風のように拳に纏った風を叩き込む技ではない。

風を周囲から捻れ合わせて全身に万遍なく叩き込む技だ。

言うなれば絶対回避不能攻撃。

しかも座標特定の為に振るわれた拳による風の拘束付き。

普通ならば風圧でミンチになるか、最低でも全身骨折は免れまい。

―普通ならば―

クロノはゆっくりと立ち上がる。

身体の様子をチェック。

全身打撲。

しかし、軽い方だろう。

クロノはフツと笑う。

策が上手くいったと。

「……成る程、な」

声が聞こえてきた。

666こと、伊織タカトの声だ。声には純粹に驚きの響きが交じっていた。

「これが、貴様の本来の戦い方な訳だ？」

「……ああ。僕は元来まともな戦い方には向いていなくてね……」

タカトは左手を振るう。

そこにはリング状の拘束具が嵌められていた。

「しかし、純正の代物でもない。

これには、拘束、能力が一切ないな？」

「その通りだ。伊織タカト。

それは拘束能力を一切廃してある能力を付与した魔法だ。
名を」

ストラグル・リング・バインド。

そう、呼ぶとクロノは告げる。

この魔法はかのストラグル・バインドの派生・・・いや、変型、
だ。

この魔法に拘束された対象は強化魔法、変身魔法、そして、魔力減
衰、の三つの効果を付与される。

つまり、今のタカトは身体能力も魔力も弱体化している状況。と、
言う訳だ。

「……だが、これではまだ、ハンデには届かないぞ？

せいぜい、俺の力の五分の一度度の弱体化では、な」

「……寧ろ、それを受けてその程度、と言う事に僕は脅威を覚える
がな」

クロノは苦笑いを浮かべる。

なのはでさえ、これをうければ最大瞬間発生魔力を三分の一まで抑
えられるのだ。

実質目の前の男はクロノが今まで出合った中でも最大の瞬間発生魔
力量を誇っている事になる。
だが。

「それはあくまでリング・バインド。

四肢に取り付けられれば君とて、取り押さえられる」

「……それを俺が許容すると?」

タカトが笑いながら尋ねる。

当然クロノとて、そんな事は考えていない。

「もう一度、しかし違う言葉で言おう。

伊織タカト、君を、無効化、する」

「……出来るものならば、な」

そして互いに浮かべるのは不敵な笑顔。

瞬間、クロノの二つの愛杖はカートリッジ・ロードを行い、タカトは踏み込む。

放たれる一撃。

爆音が辺りへと響き渡った。



「クラウドディアからの脱出艇。

収納確認出来ました」

「うん。脱出艇には医療班を向かわせてな?」

「はい。シャマル先生に連絡を取ります」

報告を聞きながらはやてはふうっと息を吐く。

アースラは現在、クラウドディアからの救難信号を受けて向かっている最中だった。

その途上で、脱出艇を発見したのである。
脱出艇の収容が、たった今。完了した所だ。

「クロノ……いるかな？」

「……正直、おるとは思えんけど、な」

「クロノ君、だもんね」

フェイト、はやて、なのは、は一樣に暗い顔になる。

クロノとは付き合いは長い。フェイトに至っては兄である。

故にこんな事態にクロノが艦を見捨てる、と言う選択肢を取らない
事が解ってしまったのだ。

「……艦長、クロノ提督ですが……」

「うん……」

シャーリーからの報告。クロノが脱出艇に乗っているかどうか、そ
れを調べて貰ったのだが。

結果は予想通りの代物だった。

「時間稼ぎ、か……」

「クロノ君らしい。て、言えばそうなんだけど」

「クロノ……」

三人はやっぱりと溜息をつく。

クロノは昔からそう言う所がある。

誰よりも現実主義者のくせに率先して自分を犠牲にしようとする所
が。

結婚し、子供を設けてからはそんな所が消えたように思えたのだが、
人間そう簡単には変わらない、と言う事か。

「艦長。脱出艇に乗っていた。クラウドディアの官制官からクラウドディアのカメラへの直結許可を貰ったのですが……」

「っ！ホンマ！？」

シャーリー、すぐに繋いでや！」

了解とシャーリーは返し、コンソールを操作する。

しかし、カメラに映る映像はザーと言う音の馴染み深い代物だった。

「す、すみません。」

ちよつとカメラとのリンク。暫く時間掛かるみたいです……」

「じゃあない、な」

シャーリーが済まなそうな顔をするが、これはシャーリーの咎と言
う訳でもないのだ。

《……はやて先生》

「シオン君か？どないしたん？」

シオンからの通信にはやては訝し気な表情をする。
さらに警戒も。

何せ、666絡みの事件だ。シオンの動きにも警戒しなければなら
ない。

シオンの復讐は、何も終わっていないのだから。

《アースラの転送システムは使えないんですか？》

「最初に試した通りや。」

クラウドディアの転送システムに不具合があるんやろうな。繋がらな
いんよ」

そう、最初はクラウドディアに直接前線メンバーを送ろうとしたのだ。

しかし、転送システムが壊れているのか、転送不可能であった。実際はタカトが侵入した際に転送ポートの重要部品を天破水迅で破壊していたのだが。

《クラウドディアの現在座標は解っているんですよね？

なら、転送ポートを使った転移じゃなく、通常転送なら？》

「あかん、却下や。

今の艦内がどないなってるか解らん以上、不用意な転送は許可出来ん」

シオンの提案をはやてはスッパリと却下する。

そもそも、アースラにはクラウドディアの設計図なぞ無いのだ。下手に転移すると壁とかにはまり込む事になる。

最悪二人の戦闘の真ん中に出現する事になる。

そんな危険な状態での転移なぞ認められる筈もなかった。

「……シオン君、気持ちちは解る。

でも、焦ったらアカンよ？」

《俺は、焦ってなんか……》

《焦ってんでしようが、この馬鹿》

《そうだよ。シオン》

否定しようとするシオンに二つの声が重なる。

ティアナとスバルだ。

さらに続く。

《まったく……もう一発殴られないと解んないのかしら、この馬鹿》

《……馬鹿馬鹿連発してんな。暴力娘》

《何ですって？スバルはともかく、私はそんな事、言われる筋合いがないわよ！》

《ちよっ……ティア!!》

私が、て。そんな事ないよ!?!》

《……いや、スバル。お前は否定出来ないだろ?

俺、真剣にあの世に行く覚悟決めたぞ? あの一撃》

《ああ、やっぱり?》

《ええ!! て、ティアも納得したように頷かないでよ!!》

「……ああ、なんか青春しとるな……」

「……緊張してないのは良い事なんだけど……」

はやてを始めとしてブリッジに苦笑いが広がる。

シオンはあの二人がいる限り大丈夫だろう。

もう、自分を見失う事は無い。

そう、思わせる会話だった。

「取り敢えず、三人共。出撃前なんやからもうちょっと静かに、な?」

《《《……すみません……》》》

「でも、元気があるのは良い事だよ?

三人共、そのままの気持ちでね?」

《《《はい!》》》

はやてが流石に窘める。

なのはが続けてフォローする。

実際666を相手にしようと言うのに気負いが無い、と言うのは良い事だ。

「艦長。クラウドディアまであと10分です」

「了解や。前線メンバーはヘリに待機してや。

ヴァイス君、アルト。よろしくな?」

《了解! 任せてくださいや!》

《はい！！こちら準備完了です！》

ヴァイス、アルトからの返答にはやては頷く。

「艦長。カメラ繋がります！」

「うん。ならスクリーンに出してや」

はやてが頷き、スクリーンが呼び出される。

クラウドディアのカメラが一つ、一つ映され、そしてスクリーンは映す。

その光景を。

はやて達はその画面を見て、一斉に驚愕した。



時間は遡る。

クロノは左のS2Uを掲げる。

カートリッジ・ロード

ブレイズ・セイバー。

S2Uの先端から魔力刃が発生する。

カートリッジ・ロードの恩恵もあり、その刃はほぼ2M程。

クロノはそれをタカトに向けて真上から振り下ろす。

しかし、タカトは半身でその一撃を避け、同時に一步をクロノに踏み込む。

振るうは左の拳。

風巻く一撃だ。

トリガー・セット。

「天破疾風」

放たれる拳。

クロノはそれにデュランダルを向ける。

ラウンド・シールド。

受ける。同時にシールドは軋む。が、破壊されない。

これだけでもストラグル・リング・バインドが効果を発揮しているのが解る。

だが。

（長期戦は不利、か）

クロノはそう、思考する。

タカトの術制御、構成能力は一見無造作に見える。

しかし、実際は緻密かつ精密。

クロノにさえ真似出来ない程の精緻な構成能力なのだ。

そんな彼が、S・R・バインドを解呪デイスベルしない訳がない。

そう思考しクロノはタカトに砲撃を叩き込もうとして、しかしタカトの姿を見失った。

「……っ！」

先程と同じだ。瞬間移動にも等しい、歩法。

クロノは左右を瞬時に見る、が居ない。

「何処を見ている？」

（っーーーーー！）

声が聞こえた。後ろから、

同時に感じるのは背に背が触れた感触。

クロノは溜めていた砲撃を敢えて、暴発させる。

（間に合え！！）

「天破紅蓮，改式，」

タカトの声が響く。

それと同時にクロノの砲撃が暴発した。

「天破爆煌」

アイシクル・カノン。

ー爆ー

クロノの意識は一瞬刈り取られそうになる。

しかし、助かった。

砲撃の暴発がタカトの爆発技を防いだのだ。

密着状態で放つ技。

それにクロノは戦慄する。

吹き飛ばされた勢いのまま身体を回転させる。

続いてすぐに両のデバイスをカートリッジ・ロード。

タカトに向き直る、が。

ートスー

そんな音が響いた。

クロノは呆然と右肩を見る。

そこには5センチ程の、穴、が開いていた。
次に来たのは激痛だ。

しかし、それすらも次の言葉に掻き消される。

「天破水迅，改式，」

「っーっー！！」

クロノは激痛を無視してシールドを張る。

しかし、視線の先にいるタカトは構わない。

指に纏うのは水。

だが水系では、ない。

タカトはまるで矢のようにそれを纏める。

「天破鏡矢」

衝撃。

シールドに重い衝撃が走る。

クロノはそれに歯噛みする。

タカトには射撃系の魔法は無いと踏んでいたのだが、とんでもない。

今、タカトは少量の水を弾丸として放っている。

これでは先程のような真似は出来ない。

そして、連発。

クロノはシールド越しの衝撃に手が痺れるのを自覚する。

そして、水矢を放ち終えたタカトが瞬時にクロノに向かい駆ける。

疾い。

クロノはそれに、両のデバイスをカートリッジ・ロードする。

向けるのは右、デュランダルだ。

アイシクル・セイバー

現れたのは氷の刃。

長さはブレイズ・セイバーと同等だ。

クロノはそれを腰溜に放つ。
しかし、タカトは止まらない。
そして避わす事も、タカトは左の拳を氷刃に叩き付ける。

「天破疾風」

―砕―

アイシクル・セイバーが砕かれる。
その勢いのままタカトは左足でクロノに踏み込む。

「くっ!!」

右の回し蹴り。予備動作すらも廃いしたその一撃に纏うは炎。

「天破紅蓮」

―爆―

クロノはその一撃を叩き込まれる。しかし―

「ちっ」

タカトが短く舌打ちする。

紅蓮の威力は相応に下がっていた。

タカトの右足に灯るはリング・バインド。

S・R・バインドだ。

それを見てクロノは転がりながら笑みを浮かべる。

紅蓮の一撃を回避も防御も不可能と悟ったクロノが行ったのはS2
Uを紅蓮が来るかも、しれない、方向に放ち、そして永唱完了した

S・R・バインドを仕掛ける事だった。

結果は成功。基本、こう言った博打を嫌うクロノだが、悪くない。と口元を歪ませる。

そして、転がる勢いを利用して立ち上がる、が。

居ない、タカトが。

(どこ、だ……っ！)

瞬間。クロノの意識が飛ぶ。

顎を蹴りで撃ち抜かれて。

タカトはクロノが起き上がるタイミングを見計らい縮地。

そして顎を蹴り抜いたのだ。

盛大に脳を揺さぶられ、瞬間だけ、クロノの意識がカットされる。

そしてタカトはそんな隙を逃さない。

クロノの首を捕まえると、同時。駆け出す。

向かう先はクラウディアの壁。

そのままの勢いでタカトはクロノを壁に叩きつける。

「ぐっ……っ！！」

「ひゅっ！」

壁に叩きつけられた衝撃で息を詰まらせたクロノに聞こえたのは短い呼気。

そして放たれる拳と蹴りの乱撃。

今のタカトの身体能力や魔力はおよそ半分程。

ならば魔力攻撃や単発攻撃に頼らない攻撃方法に切り替えた訳だ。

幸い速度は殺されていない為、即座に実行したのだ。

放たれる乱撃に、クロノは全身をズタボロにされていく。

そして止めとばかりに顎を右の拳で撃ち抜かれた。

「か……う……」

「天破……」

乱撃に加え、再度顎を撃ち抜かれた事によりクロノの意識はほぼ完全に絶たれる。

そして振るわれるのはタカトの疾風の一撃。

クロノはそれをぼんやりと見る。

胸中に浮かぶのはやはり、勝てないのか？ と思ういだ。

かつて、クロノはこう言った事がある。

魔法戦闘で大事なものは状況判断力とそれに応じた魔法行使だと。

だが、目の前の男を見てその考えは揺らぐ。

なのは達もそうだった。

万全の策を、あらゆる不利な条件も踏み潰す。戦いに置ける、天才

目の前に居る男はまさにその具現だ。

しかし、

頭に過ぎるのは母。

しかし、

次に過ぎるのは仲間達。

しかし、

そして妹。

しかし、

そして最愛の……

「ウオオオオオオオ！！」

「っ……！！」

その顔が、妻と子供達が映った瞬間。クロノは意識を取り戻す。

そう、死ぬ訳にはいかない。

こんな所で終わる訳には行かない。

カートリッジ・ロード。
そして、クロノは放つ。
三つめの切り札を！

「疾風！」

ブレイク・インパルス

交差する拳と杖。

しかし、勝利したのは杖だった。

タカトのグローブ状のバリア・ジャケットが引き裂かれ、左手に裂傷が走る。

同時にS2Uに輝が入る。

ブレイク・インパルス。固有振動を対象にぶつけ、破碎する技だ。

クロノはタカトの戦闘データーを見ていて、唯一完全に防げない攻撃があるのを発見していた。

スバルの振動破碎だ。

故に自分の固有振動波が通じるのではないかと予想した。

しかし、ただでは通じないとも。

タカトにダメージを与える為には通常の数倍に匹敵する威力が求められた。

故にこれは切り札。

S2Uを損傷させる程の振動波を起こさせる様に、魔法を事前に改造していたのだ。

使いたくは無かった。クロノはそう思い、しかし迷わない。

振動波で今度は逆にすっ飛ばすタカト。

千載一遇のチャンス。

これを逃すクロノではない。

マグチェンジ。

そしてカートリッジ・ロード。

使用するカートリッジはそれぞれ一発を残して全弾。

それはクロノの限界ロード数を越えた数だ。

クロノは体内に渦巻く魔力に体が耐え切れず。内臓が傷付けられる。吐血。

クロノの口から血が溢れ出す。

しかし、クロノはその膨大な魔力を制御しきった。

アイシクル・ブレイド

ステインガー・ブレイド

二つのデバイスもその魔力に耐え切れない。

微細な輝が入る。

しかし、デバイスもまた主人の思いに応えるかのようにその魔力に耐え切った。

タカトは吹き飛ばされながらもしかし、体勢を整える。

床を削りながらも両の足で滑りながら制止。

だが、次に見たのはタカトを持ってしても信じられない光景だった。

一刃一

[illegible]

3Mを越す刃の葬列。

その数は軽く四百を越える。

通路中に現れた氷と光の刃。

その切っ先の全てはタカトに向けられている。

そしてクロノは叫ぶ。

処刑を意味する断罪の一撃の名を！

「エグゼキューション・シフトっっっ！！！」

刃の葬列は放たれた。

―砕―

砕、砕、砕、砕、砕、砕。

放たれた刃の余りの数に煙りが立ち込める。

衝撃がクラウディアを振るわせる。

威力はSを超えてSSに確実に届く。

あるいは超えている。

クロノは放たれ続ける刃の群れの中で血を吐き続ける。デバイスの輝も広がっていく。

放たれる。放たれ続ける。

刃が全てを蹂躪し、消し飛ばす。

一人に向かって放つ量では無い。

完全なオーバー・キルだ。

しかし。

クロノは予測する。あの男は倒れない、と。

この程度で倒れるのなら既になのは達には倒されている。

故にクロノはさらに永唱する。

そして、見る。母から贈られた杖。

ずっと共にいた愛杖を。

「S2……いや」

クロノはなれ親しんだ愛称ではない。本当の名を呼ぶ。

「ソング・トゥ・ユー。……済まない。そして、……ありがとう」
お気になさらず。

S2Uは……意思を持たない筈のストレージ・デバイスは、しかし確かにクロノに応えた。
それにクロノは微笑み。

そして、眼前を睨み。

‘それ’を仕掛ける。

S2Uの最後のカートリッジをロード。

そして、後退する。

煙りの中に彼は立っていた。

そう、まだ立っていた。

伊織タカトだ。

彼は全ての刃を防ぎきっていた。

疾風を纏い。紅蓮を放ち。震雷で滅ぼし。

そして、最後の刃を消し飛ばすと同時に駆ける。

向かうはクロノだ。

右に風を纏う。

影が見えた。クロノだ。

それにタカトは決着となる一撃を放つ。

「天破……疾風！」

砕いた。

確かに砕いた。‘漆黒の杖’を。

タカトはそれに驚き、しかし、驚愕はそこで止まらない。
杖がたった一言を砕ききれぬ前に呟いたからだ。

ストラグル・バインド

「っ……………!!」

失策に気付き、後退するタカト。
だが、間に合わない。

杖を基点として光が彼を拘束していく。

普通なら意に返さないそれも今の弱体化したタカトには十分な拘束力を持つ。

そして眼前に見えるのはクロノだ。

カートリッジ・ロード。

右の白の杖から氷刃が出る。

それを抱えるようにクロノは走る。

タカトに魔力ダメージでのKOは望めない。

ならば、致命的なダメージを与えて、KOする。

走る。走る。タカトはそれを見るしか出来ない。

しかし、右の拘束が破られる。

だが、遅い。

（勝った………！！）

クロノは勝利を確信して走る。

そんなクロノにタカトが浮かべたのは一つの笑み。

そして一言だ。

「見事だ。クロノ・ハラオウン」

自分を褒め讃える声。

そして次の言葉が世界に響いた――

神の子は主の右の座に着かれた。

そして二つの影は互いにぶつかった。



アースラ、ブリッジ。

そこに居る全ての人はそれを見ていた。
同時に響くのは叫びだ。

「クロノローっ！」

フェイトの切ない、切ない叫び。

スクリーンに映るのはクロノと666こと伊織タカトだ。

二人は重なる様にして立っている。

しかし、異様な点が一つだけあった。

手、だ。

クロノの、背中より飛び出た、手。

左の肩を貫いて手が飛び出していた。

致命傷。

あるいは即死しているかもしれない傷だ。

そして響くのは一言だ。

タカトの一言。

《見事だった。クロノ・ハラオウン。

敬意を表し、その名を俺は生涯、忘れない》

次の瞬間。映像が途切れた。

「っー！シャーリー！」

「すみません！カメラが！何で！こんな時にっ！！」

悲鳴をあげるシャーリー。

コンソールを必死に操作し、繋げようとする。しかし、カメラは繋がらない。

ザーと、言う音を立てるだけ。

「ルキノ！！後、何分でクラウドディアに着く！？」

「後、5分。いえ、2分下さい！！」

叫び。続いて前線メンバーにへりに待機するように指示を出す。はやて。

アースラメンバーが慌ただしく動く。

あの傷。

そして、出血量と時間。

どう考えてもギリギリだった。

「私達も！……フェイトちゃん！！」

「……っ！うん！！」

なのは、フェイトも駆け出す。

今は嘆いている場合ではない。一刻も早く助けなければならない。はやては我知らずと呟いた。

「クロノ君……どうか。どうか……！」

そしてアースラはクラウドに着いた。



「……ごっ……ふ……」

クロノは既に痛みを感じていなかった。

口の中にあるのは血だ。

尋常な量では、ない。

そして悪寒。

ただ、ただ。寒い。

「絶・天衝」

タカトは呟く。

それはタカトが放てる最強の技の名だった。

クロノは息をしようとして。

しかし、出来ない。

ただただ血を吐き続けるだけ。

片方の肺が潰されているのだ。

呼吸はともかく、気道に血が溜まっている。

そして、タカトの声が響いた。

「見事だった。クロノ・ハラオウン。

敬意を表し、その名を俺は生涯、忘れない」

クロノはその声を聞きながら、自らが生んだ、血の海に沈んだ。

タカトはクロノを見遣る。
そして、自身も片膝を立てた。
口に浮かぶのは笑いだ。
ただただ苦い笑い。

「まさか……、相打ち、とは、な……」

そして押さえるのは左の腹。
そこからは血が溢れていた。
あの時、タカトは右の拘束を破り、そして。オリジナル・スペルを
紡ぎ、技を放った、
絶・天衝を。

しかし、タカトの目論みはクロノに潰された。
タカトは絶・天衝でデバイスごと貫こうとしたのだが。

「……まさか、デバイスを持ち替える、とはな」

クロノは瞬時に、抱えていたデバイスを右手のみで持ち、突き出したのだ。

意識的かどうかはさておくが。

見事、としか言いようが無い。

タカトはクロノを見る。

この出血量ではあと数分もしないうちに死ぬ。

しかし、タカトはそれを見て。

クロノのデバイス。

デュランダルを手を取った。

「……上手く、いくか、な……」

デバイスに魔力を流し、ハッキング。
無理やり繋がった。



クラウドディアに着いた一同、しかし誰よりも先に疾走する存在がいる。

フェイトだ。

その顔に浮かぶのは焦燥。

あれから5分程立っている。

あの距離を本当に2分で駆け抜けたルキノもそうだが、さらに一分弱でアースラからクラウドディアに辿り着いたヴァイスの腕も驚嘆に値する。

しかし、それでも、足りなかった、時間が。

例え、生きていたとしても間に合わない。

それほどの傷だったのだ。クロノの傷は。

（クロノ……クロノ……）

フェイトの胸中にあるのは兄の姿だ。優しくも厳しい兄の。

もう、家族を失いたくは無かった。

それなのに……

（間に合って！！死なないで！！）

胸中は張り裂けそうだ。

叫ぶ叫ぶ。

一分一秒があまりに惜しい。

《そこを、右です!!》

「了解……!!」

シャーリーの指示に従い疾るフェイト。

そして……

「!……クロノ……っ!!」

そこに在るのは……

「これ……」

‘こんな筈じゃない’ 結果のもう一つの……

「どういう、事、なの……?」

姿があった。

「フェイトちゃん!!……っ!……これ……」

追いついたなのは始めとした一同が一斉に固まる。
そこに居たのは。

「氷、漬け……?」

全身を氷漬けにされ、氷柱の中に居る、クロノ・ハラオウンだった。



高町ヴィヴィオは聖王教会付属の魔法学校に通っている。

まだ幼年ながらもしっかりとした考えを持ち、そして、成績もまた良い。

そして、今は放課後だ。子供にとっては待ちに待ち望んだ時間だろう。

しかし。

ヴィヴィオは少々元気が無い。

何故か？

答えは簡単。

最近、最愛のママ達に会っていないのだ。

ユーノの家に厄介になって二ヶ月経つ。

なのはもフェイトも最初の一ヶ月は頻繁に会いに来ていた。

しかし、最近会いに来ない。

解っている。ママ達が最近凄い忙しい事くらいは。

しかし、それでも納得出来ないのが子供と言うものだ。

加えて、最近ユーノまで忙しくなっている。

いろいろ調べなくてはいけない事が急に増えたらしい。

それでも夜には帰ってくるのが流石とは言えた。

ヴィヴィオは歩きながら溜息をつく。

彼女は人当たりもよく。その容姿故に結構評判がある。

ぶっちゃけモテるのだ。本人はひたすら無自覚だが。

そんなヴィヴィオに懂れている連中も、悩んでいる内容をすれば多少は評価が変わるかも知れない。

ヴィヴィオは歩く。

今、居るのはまだ学校内だ。

帰路には学校内のポートを使って、クラナガンに帰る必要がある。

そして、ポートは本校舎から少し遠い場所にあった。

ヴィヴィオはポートへと続く道を歩く、校舎の横には結構な茂みがあった。

いっそ林や森といっても構わないだろう。

しかも結構深い。

そこを見ながら歩くのがヴィヴィオの日課な訳だが・・・

妙な、気配がした。

予感、とも呼ぶべきか。

ヴィヴィオは立ち止まり、もう一度、茂みをじっと見る。

茂み自体は代わった所はない。

しかし、確かに、違う。

何が？と、言われれば非常に困るのだが。

結局ヴィヴィオは好奇心に負けた。

茂みに入っていく。

ゆつくりと草を掻き分けて茂みへと入る。

そうして10分程、真っ直ぐに進んだ時だろうか？

いきなり草が揺れた。

「~~~~っ。」

何……………？」

ガサカザ、と揺れる草。

それにヴィヴィオは若干恐がりつつ。

しかし、果敢にも進んで行く。

そして、それ、は現れた。

「……………わぁ……………♪」

そう、白いウサギが。

ヴィヴィオが目を輝かせる。

そんなヴィヴィオを見て不穏な気配を感じたのだろう。

ウサギが少し、後ろに下がる。

ヴィヴィオが少し前に進む。
ウサギがさらに下がる。

ヴィヴィオがさらに前進する。
しばしの沈黙。

瞬間。

ウサギは回れ右をして茂みの奥へと駆け込んだ。

「ウサギさん♪待って〜♪」

当然。ヴィヴィオも追っかける

しかし、ヴィヴィオは気付かなかった。

学校内に野良とは言え、ウサギはいない。と言う事実。
そして・・・

「ウサギさん〜♪……？」

少女は・・・

「……ウサギさん？」

出会う。

「……誰？」

運命に。

ヴィヴィオのしている先にはボロボロになって尚、巨竜の如き存在
感を醸しだし。眠りこける。

伊織タカトが居た。

(第十八話へと続く)



ア

「はい♪今回もやって来ました♪
アリサ道場です♪

道場主は私、アリサと……」

「弟子のすずかです♪」

シ

「……………」

ア

「あら？シオン、どうしたの？自己紹介しなさいよ？」

晶

「いや……前回、自分達がした事、覚えてるか？」

ア

「ム。あんな細かい事根に持つなんて……」

シ

「……アレを細かい事と言いますか、アンタは……」

ア

「当然じゃない？だって打たれたの私じゃないもの」

晶

「……驚異のジャイアニズムだな……」

シ

「ああ、もういいっす。話し進まないし。
はい、皆さんこんにちは♪

道場の司会を勤める神庭シオンです♪

そしてこちらは前回に引き続いてのゲスト♪」

晶

「クロイツ・ストーリーの不知火晶だ。よろしくな」
す

「……シオン君もようやくプロの段階になれたね♪」

シ

「その言葉には断固として反対させていただきます♪
さて、今回のお話ですが……」

ア

「……クロノ、かつこ良過ぎない？
てか、アースラメンバーがあんなに惨敗したのになんでクロノがあんなに戦えるのよ？」

す

「では、そこら辺を解説の晶さん。
よろしく願います♪」

晶

「はい……て、俺!？」

シ

「え……だって晶さん解説でしょ？」

晶

「シオン。お前もか!

俺はそんなものになった記憶は一切無いぞ？」

ア

「またまた……」

晶

「いや、だからな？」

す

「そんな事言っ……」

晶

「俺はそんなものになった記憶は……!」

シ

「このこの……」

晶

「……そうか。そうか。俺が間違ってたな。ウン。多作品だからと遠慮なんて……」

シ

「いやいや、晶さん？刀なんて握りしめないで下さいよ。ほらほら解説、よろしくお願いします」

晶

「……三人共、後で覚えておけよ？」

ア

「いいから、早く解説してよ？」

す

「そうだよ？我が儘あんまり言っちゃあ。駄目だよ？」

晶

「くっ……！」

何故に俺が悪いみたいなの……。

もう、いいや。

さて、今回の話して何故クロノがあんなにも666を追いつめられたのか？

だったな？」

ア、す、シ

「「「うん」「」」」

晶

「まず、一つは情報を元にした作戦のおかげだな」

ア

「そうなの？」

晶

「ああ、作中でも描写があったろ？」

クロノは前回のアースメンバーとの戦いのデータをよく研究していたようだからな。

その上で切り札を用意し、作戦を組み立てた訳だな」

す

「……わあゝ。」

「凄いんだね？クロノさん」

晶

「ああ、はつきり言って1番敵に回したくは無いタイプだな。情報が向こうに回れば回る程、厄介になる」

シ

「へゝゝ。」

でも、それだけでも無いような……」

晶

「ああ。クロノは自分の限界を突き破って戦ったからな。まさに捨て身。」

本当、こう言ったタイプこそ、敵に回すのは嫌だな。

こう言った信念の男は嫌いなタイプじゃないし」

ア

「へゝゝ。」

そういや、前回は一度目は苦戦するかもだけど、二回目からは確実なんだっけ？」

晶

「アレはこちらの手が向こうに知られていない、と言うのが前提だな。」

666のように、手がある程度知られていて、俺はクロノの情報が無い。となるとかなり厄介だな」

す

「やっぱり、結構情報は重要なんだね？」

晶

「当たり前だな。」

かの策士も、敵ヲ知り、己ヲ、知レバ百戦、危ウカラズ、と、言っているし」

シ

「う……俺、それに全然当て嵌まらない……」

晶

「……ま、経験の差もあるんだろうが、何よりクロノも666も戦闘に於ける感……’センス’とも言えるな。

これが凄い。

このセンスはなのは達には無いものだな。

以上、解説。終わり」

ア、す、シ

「「は……い」」

晶

「……さて、三人共……?」

ア

「あ……!!」

あんな所に某アテナが!？」

晶

「何い……て、通じるかあ!？」

ア

「ちい!そこまで単純じゃ無いか……!」

晶

「……フ、フフ。」

今こそ確認した。お前は敵だ……」

ア

「上等……アンタを倒して、SS最強キャラの名乗りをあげてやるわ……!!」

シ

「……えへへ。」

今回は関わりになりたくないので傍観させて頂きます」

「右に同じく」

ア

「てやあー！」

晶

「ヒュウウウー！」

シ

「……こんな訳解らない道場で見るとは勿体なさ過ぎな戦いが……」

す

「何気にアリサちゃんはこの道場じゃあ神だから。……最上位の」

シ

「ああ……納得です」

ア

「この……さっさと落ちろ……っ！」

晶

「平行世界の神とは言え、戦う以上は負けん!!」

す

「……ん？何でシオン君、背中を向けてるの？」

シ

「……いや、とんでもなく嫌な予感がするんですよ。俺の、直感、が告げてます」

す

「……そんなスキルがあったね。そう言えば……」

晶

「これで、終わりだ!! 焰技…飛燕刃!!」

ア

「く……！」

「……っ!!……」

す

「あ。アリサちゃん……」

晶

「まあ、こんなものか。

いいか、次、は……」

ア

「……………」

す

「アリサちゃん。袴、取り敢えず上げたほうが……」

シ

「え？何がどうなったんですか？」

す

「あ、シオン君は見えないんだね？」

シオン君。よかったよ？

直感当たったよ？」

シ

「……その口ぶりだと何かえらい事があったのだけは解りますが……」

す

「うん。晶君の決め技、焰技…飛燕刃がアリサちゃんの竹刀を弾き飛ばすと同時に袴の紐まで切っちゃったの。

それで、こうパサリと……」

シ

「……この上なく解りやすい解説ですね。

晶さん。

短い間ですがお世話になりました」

晶

「待て！待つんだシオン！お前、自分で言うのはアレなんだが、俺の事。尊敬してるんじゃないのか！？」

シ

「ええ。尊敬してますよ？

でも、それとコレとは別です。

ぶっちゃけ。命は惜しいんで、自分」

晶

「ぶっちゃけ過ぎだろう！？」

待て、待つんだ。アリサ。

人間、誰しも間違いはあるんだ。神だって同じだ。そう、猿も木から落ちる。河童の川流れ、て言うじゃ無いか、な?」

ア

「……それが、遺言で、いいのね?」

す

「こっぼうの筆にも、を使わない辺りが悲惨だね……」

シ

「てか、遺言で……」

晶

「あゝゝじゃあ何だ。

一つだけ……」

ア

「……聞こうじゃ、ない。何?」

晶

「その歳でくまさんパンツは……」

ア

「天誅ウウウウウウウ!……!……!」

晶

「ぎゃああああああああ……!……!……!」

シ

「晶さん? 晶さゝん!!」

す

「シオン君。見ちゃ駄目!!」

未成年が見たらトラウマになっちゃうよ!!」

シ

「どんだけ、ドエライ事になってんですか!?」

ア

「ハアっ!……ハアっ!!……あんのエロ河童があ……!……!」

す

「あ、お帰り。アリサちゃん。はいお茶♪」

ア

「うん。グビグビグヒつぷはあ。上手いわね〜♪」

シ

「ちなみに晶さんは……？」

ア

「さあ？そこらで野垂れ死にしてるんじゃないかしら？」

晶

「……勝手に殺すな。勝手に……」

す

「あ、生きてたんだ？」

シ

「凄いですね？俺、確実に死んだと思ってましたよ？」

晶

「お前等……」

ア

「ちっ……！」

晶

「舌打ちすんなよ！？お前は！？」

ア

「……悪いのは、誰かしら？」

晶

「……う……」

シ

「いや、晶さんが心底ビビってますよ？」

す

「そりゃあ女の子だもの。パンツまで見せられたら怒るよ？」

晶

「……女の子？」

ア、す

「「何？」」

晶

「……何でも、ございません……」

シ

「はい。ではグタグタになりつつ今回はここまで♪
では、晶さん。宣伝をどうぞ〜♪」

晶

「……いろいろツツコミを入れたくはあるが……。ま、いいか。
では。」

クロイツ・ストーリーで、『晶相談所』を開設した。

内容は相談所なのに、来た奴、来た奴と何故か模擬戦をする事にな
ってしまった。

……いや、本当。なんでだろう？」

シ

「まあまあ、人間。いろんな間違いはあります、て♪」

晶

「……半分以上はお前のせいだった記憶があるんだが……？」

シ

「気のせいですよ♪」

晶

「……………まあ、いいや。」

てな、訳で晶相談所では随時挑戦者を募集中だ。

我は、と言う奴はかかって来い」

シ

「取り敢えず、俺は参加予定っす♪」

晶

「ん？……お前だけ？」

シ

「……………え？」

晶

「いや、いいんだ。

成る程……シオンには情報はいつていないと……」

シ

「待って下さい！

誰ですか！？

他に誰が出る、て言うんですか！？」

晶

「その質問は却下する」

シ

「なんで……！？」

ア

「はいはい。いい加減にしなさい！

ただでさえページ数。今回の道場多いんだから」

晶

「……半分以上、お前のせいだろう？」

ア

「うるさいわよ！

ほら、シオン。締め言葉！」

シ

「うう……気になるな……」

す

「ほらほら、シオン君？」

シ

「うう……はい。

では今回のアリサ道場はここまで♪

そして、大和さん二話続けての晶さん召喚。ありがとうございます♪

おかげでアリサ道場はある意味、新境地に辿り着けました♪」

晶

「……本当にな」

シ

「そして、今回でオリキャラ召喚は終わりになります♪」
ア

「え？ そうなの？
つまんないな〜。」

裕希菜とまた遊びたかったのに……」
す

「だね〜」

シ
「とは、言っても。他作者からのオフアー次第ではまだまだ続きます♪」

晶

「……えらい適当だなオイ……」

シ

「そこがアリサ道場クオリティ♪
ノープランが売りです♪」

ア

「計画性は本当、無いわよね……」
す

「だね。オリキャラ召喚もいきなりだったし……」
シ

「はい。そこグダグタ言わないように♪
てな、訳で次の話しまでにまた新たな作者さん。

そして、今まで出て頂いたキャラの作者さんにもお願いしに行かせてもらいます♪」

ア

「ま、期待はしてないけどね」
シ

「では、本当。晶さんありがとうございました♪
過去最高の身体を張ったギャグは見事でしたよ？」
晶

「……お前、後で本当。覚えておくように」

シ

「はっはっは。」

俺には何も聞こえませんか？

それでは皆さん。本当、読んで頂いて幸いです♪

感想、評価を頂いている皆さん♪

本当、ありがとうございます。

作者も涙を流す程、喜んでいきます♪

それからクロス作品を作って頂いてる皆さん♪

本当、もう足を向けて眠れません♪

ありがとうございます♪

ではでは今回はこの辺で~~~~♪」

ア、す、晶、

「「「また次回~~~~♪／。」」」

シ

「……いや、晶さん。ここはノリ良く♪を付けて……」

晶

「俺には無理」

第十七話「出会うは運命」（後書き）

「タカトとの戦いで、破れるクロノ」 「その生死は……」

「？」 「そして、重傷を負ったタカトは少女と共に安らかなる日を過ごす」 「それは、例え、正しく。しかし、タカトには、不相応、な幸せで……」 「次回、第十八話。 『幸せの意味』」

「魔王は幸せを知る事が出来ない」

第十八話「幸せの意味」(前書き)

「いろいろなモノを背負ってきた」

「背負って、背負

って……」

「それは俺の意味。歪んで壊れた俺、

という存在を、ヒト、たらしめる意味」

「地

獄、に居た俺の役目」

「だからこそ、俺には幸

せはー」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX始

まります」

第十八話「幸せの意味」

少女、高町ヴィヴィオは、それ、を見た時。
感じたのは純粋な、感動、だった。

巨きい巨きい竜の如き存在感を醸し出す黒ずくめの男を見た時に抱いた感情は感動だった。

人間、あまりに巨きな存在を見た時に感じるのは恐怖では無く、感動と言う。ヴィヴィオが男に感じているのも正しくそれであった。男はあまりに無防備だった。

そして、ただひたすらにひたむきに純粋だった。

先程のウサギが彼の足に纏わり付いている。小鳥が彼の肩で羽休めをしている。

傍らには犬種だろう。かなり大きい、が。傍らで待っている。

その巨きさに比べてあまりに無防備。

竜。いや、大樹。とんでもなく大きいそれを感じさせる。

まるで万物の父であるかのような、そんな感覚だった。

ヴィヴィオはゆっくりと近付く。

回りの獣達はちらりとヴィヴィオを見るが、しかし。警戒すらもしない。

ヴィヴィオは男の傍らにいつの間にか座っていた。

男はまだ無防備に眠っていた。

無意識に手を男の顔に当て、そしてなぞる。

「ん……」

男が少し、声を漏らす。

だが起きない。むしろヴィヴィオの行為に気持ち良さそうにしている。

面白くなってさらに触る。

チチチつと小鳥が囀る。

他の獣達も男に身を寄せる。

まるでここ以上の安全な所などないかのように。

そして、ヴィヴィオもまたそれを感じている。

そこで、はたと気付いた。

男の服はボロボロだった。

穴だらけとも言う。

そして服には血の跡があった。

ヴィヴィオは流石に慌てた。

相手はケガ人だと言うのに自分は何をしていたのだろう？と。

慌てるヴィヴィオの気配に獣達は一斉散って行く。

同時に、男もまた目を覚ました。

「……こ、こ……は？」

「あ、あの、だいじょうぶ？」

起きる男に思わずヴィヴィオは尋ねる。

漸く、男はヴィヴィオの存在に気付いたようだった。

「……心配は、要らない。ケガ自体は、修復、してるし、な」

「しゅ……？」

男は変な言い回しをする。

治療でもなく。回復でもなく。修復、と。

まるで自分をヒトじゃない。人形のように扱っているようだった。

「……それより、お前は……？」

「あ！……えっと、その……」

尋ねられ、しかし。何と答えたら言いのか解らずアタフタとするヴ

イヴィオにしかし、男は左手を頭に乗せる。
優しく、優しく撫でられた。

そんな撫で方をヴィヴィオは初めて受けた。
ママ達のように、髪を撫でるのでは無く。無骨に、頭を撫でる。
そんな撫で方を。暫く男はそうやって撫でる。
ヴィヴィオもまた。その撫で方が気に入る、されるがままとなる。
ややあって男は自ら名乗った。

「……伊織、タカトだ」

「え……？」

「俺の名前だ。君の名は？よかったら聞かせてくれ」

男、タカトは微笑みながら名前を聞いてくる。
そして、彼女もそれに応えた。

「ヴィヴィオ。高町ヴィヴィオ……」

「ヴィヴィオ……鮮やかな……か」

そして、男はヴィヴィオのオッド・アイと金の髪を見て、優しく微笑む。

「……ん。よく、君に似合う。良い名だ」

「……………」

男、タカトの言葉に少しばかりヴィヴィオは顔を赤らめる。
タカトとヴィヴィオ。

これが、この二人の初めての邂逅だった。



「じゃあ、クロノ君は……」

「うん。一命は取り留めた、て……」

アースラのブリッジ。

その艦長席で集うのは三人。なのは、フェイト、はやてだ。はやての傍らにはグリフィスもいる。

クラウドディアへのタカト襲撃から三日程経つ。

タカトとの戦いで敗れたと思わしきクロノ。……氷漬けのクロノを見た時一同は少し、混乱した。

取り敢えず、氷の中からクロノを掘り出そうとした訳だが、シャマルから

「絶対に駄目！」と、強い口調で嗜められ、氷漬けのままアースラに搬送。

そのまま本局に転送し、そこで氷漬けを解除し、手術を受ける事になった。

結果は成功。

クロノは一命を取り留めた。

しかし、当然まだ意識は取り戻しておらず。

何があったのかを聞く事は出来ない。

上層部の人間はクロノが最後に自爆覚悟でデュランダルに登録されている永久の棺エターナル・コフィンを発動し、しかし666には逃げられたのでは無いか？という結論でまとめられている。

しかしー。

「どう、思う？」

フェイトちゃん」

「……予想でいいなら。

多分。永久の棺を使ったのはクロノじゃない。

……666だと思う……」

「……やっぱ、そうなるな……」

一同、溜息をつく。

クロノが助かってホッとしたのはいいのだが。問題が一つ出て来たのだ。

666こと、タカトの行動だ。

何故、タカトが永久の棺を使ってクロノを助けたとフェイト達が推理したか？

簡単である。推理ですら無い。

デュランダルは氷漬けにされたクロノより少し離れた所にあったからだ。

クロノが使用したのならば、クロノの手に握られていなくてはおかしい。

だが、ここで一つ疑問が生まれる。

何故に敵である筈のクロノをタカトは助けたのか？と、言う疑問だ。

「……結局、よくわからんのやな。

666の行動……」

「うん。……こちらでもいろいろ調べてはいるけど、何て言うか。行動がちぐはぐしてる」

「……最初に会った時からそうだしね」

最初にタカトがアースラメンバーの前に現れた時、彼はただシオンの前に顔を出しただけのように思える。

しかし、実際はなのは達を助けているのだ。

だが次に現れた時は敵対していた。

一体何がしたいのか全然解らない。

味方な訳でも無い。確実に敵対すべき存在なのだが。

「666の目的捜査はこっちでもやるよ」

「うん。フェイトちゃん、よろしくな？」

「フェイトちゃん、あんまり無茶はしないようにね？」

「フェイトちゃん、ライトニングの隊長でもあるんだから」

「うん……でも、なのはもね？」

三人は笑いながら頷く。

三人共、結構無茶を通すタイプなので、お互い様。と、言う事でもある。

「艦長。N2Rとの合流まであと一日ありますが……」

「うん。ちよつとばかりはやく戻ってきてもらうたし……」。

あ、そや。なら、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「え？何？はやてちゃん？」

「どうしたの？」

「うん、あんな？」

はやてが提案したのは二人に休暇を、と言う事だった。
しかし、流石に二人は慌てる。

「で、出来ないよ！はやてちゃん」

「そうだよ。感染者がいつ出るかも解らないんだよ？」

「その為の本局、地上本部との直接転送許可やん？」

二人とも、いい加減働きすぎやよ？」

うろたえる二人に、はやてはスッパリ言い放つ。

しかし、横でグリフィスがポツリと呟く。

「……それを言うなら艦長もですね？
有給休暇。いくら溜まっていると？」

「うっ……！」

い、痛い所、突くなー。

グリフィス君……」

冷や汗まじりに眩くはやてを横目で見て、グリフィスはふむ。一つ頷く。

「シャーリー？」

艦長の出勤状況は？」

「うん。これだよ？」

「ちょっ！……シャーリー！」

はやては二人のやり取りに流石に叫ぶ。
何がまずいと言うか、このままでは……。

「……見事に休んでませんね」

「うっ……」

グリフィスが苦笑い混じりに眩く。

実際はやては休暇を取らない。

と、言うより隊長陣三人共だ。

「この際ですから三人共、休みを取られたら如何でしょう？」

「いや、あんな？グリフィス君。私は艦長やし……」

「そうだよ？私も皆の戦技教導とかあるし……」

「私も666の捜査が……」

三者三様の言い訳をする三人。

しかし、グリフィスはたった一言を眩いた。

「シャーリー？」と。

そして、幼なじみはあっさりと

「は〜い」と応えた。

そして、現れたのは・・・

《あらあら。

ここが新しいアースラのブリッジなのね〜》

「「「な……」」」

哑然とする。

スクリーンに顔を大にして現れたのはアースラ後見人の一人でもある。

リンディ・ハラオンであった。



時間は三日前。

ヴィヴィオとタカトの邂逅後まで遡る。

ヴィヴィオは緊張していた。

そろそろユーノが帰ってくるからだ。

しかし、何故にヴィヴィオはこんなに緊張しているのか？

それは今、ヴィヴィオの部屋のベットで眠る一人の男、タカトの存在故であった。

あの時、名を交換した後、病院へ向かわなくていいの？とヴィヴィオは問うたのだが、タカトはそれを拒否。

ケガは治っているの、後は血がちょっと足りないくらいらしい。寝てれば大丈夫。とタカトは言うのだが、ヴィヴィオは納得しなかった。

血がどれだけ足りないのかは知らないが、青を越えて、真っ白な顔をして、説得力がまるで無い。

人を呼びに行ってもいいのだが、ヴィヴィオの直感は告げていた。

確実にタカトは居なくなると。

何故、ヴィヴィオ自身ここまでタカトに固執するのは解らないのだが、一人にさせてはいけない気がした。

そして、結局。最終兵器（乙女の涙）の存在にタカトは敗れた。

ヴィヴィオの提案により、今の住居。ユーノ宅で休むと約束してしまった訳だ。

ある意味誇ってもいい。

タカトに言う事を聞かせられる存在なぞ、三人と居ない。

で、そのままポートを使い、クラナガンまで移動。

そしてユーノ宅に着いて、初めてヴィヴィオは気が付いた。

そう、ユーノへの説明をどうするかを、だ。

結局何も考えつかなかったのだが。

タカトを自分の部屋のベットに寝かせ。（瞬時に寝た）

ヴィヴィオは居間でああでもない。こうでもない。と悩みに悩み抜いていた。

そして、今に至る。

「ただいま〜」

「……っ！

お、おかえりなさ〜い」

声がした。ユーノの声だ。

そして、ヴィヴィオは決める。

タカトの存在を隠し通そう、と。

一人、決意を固め。

拳をヴィヴィオは握る。

ユーノが居間へと入って来た。

「ゆ、ユーノさん。きょうは、はやかったんだね〜？」

「え、そうかな？」

いつもと変わらないと思うけど?」

ユーノは笑いながらそう指摘する。
ヴィヴィオもまた

「そうだっけ〜?」と、笑う。
思いつきり、ごまかし笑いだが。
そして少しホツとする。どうやらバレてはいないようだ。

「うん。ところでヴィヴィオ?」
「う?」

再度ユーノに向き直る。
そして、ユーノは笑顔で爆弾を落とした。

「お客さん。誰か来てるのかな?」
「……っ!」
え、え〜? なんのこと?」

ヴィヴィオは白を切ろうとするが、しかし。

「え?」
だって、靴。大きいやつが玄関にあったから」
「……………」

ヴィヴィオ。痛恨のミスである。
さらに、

「……っ。ヴィヴィオ。すまん。少々寝過ぎ、た……」
居間に入って来る人物がいる。

言うまでも無く、タカトだ。

居間のソファーと入口で固まる二人。
そして二人はそろって口を開いた。

「「……どなた？」」

ヴィヴィオは二人の言葉に

「はうっ」と、だけ声を漏らした。



「ヴィヴィオが……」

「ええ。おかげで助かりました」

あれから10分程経つ。

居間にユーノ、ヴィヴィオ。そしてタカトが集まっている。タカトは既にバリア・ジャケットは解除しており、服は黒のシャツにジーンズと簡素な服装である。何より、異質なのは片目。右目が常に閉じられている事か。

結局ヴィヴィオは洗いざらいユーノに自白した。

てつきり大目玉かと思っただが、ユーノが浮かべるのはただ笑みであった。

「……ユーノさん。おこってない……?」

「怒ってないよ」

ヴィヴィオはびくびくしながらユーノに聞くがユーノは首を横に降る。

「人助け、だったんだよね？」

ヴィヴィオがやった事は立派な事だよ。

だから怒ってない。

……でも、一言は言って欲しかったかな？」

「……うん。ユーノさん。ごめんなさい」

ヴィヴィオの謝りにユーノはただうんと答えた。

それをタカトは眩しそうに見て、席を立つ。

「?どうしたんですか?」

「いや、時間も遅いし、そろそろ御暇乞しようと思ひましてね」

そう言うタカトはしかし、ヴィヴィオを見て、

「うっ!」と唸る。

ヴィヴィオの瞳には再度最終兵器が装填されようとしていた。

そんな様子にユーノはただ笑い。

「……よかったら、今日は泊まっていきませんか?」

「いや、しかし……」

「う~~~~~」

ヴィヴィオの声に再度タカトの肩は揺れる。

そして、溜息を一つ、ついた。

「……すみません。なら今日のご厄介になります……」

「いえ、いいですよ。」

あ、僕の事は呼び捨てで大丈夫ですよ?

敬語もいりません」

タカトの答えにユーノは朗らかに笑う。
タカトもまた微笑んだ。

「……なら、俺も呼び捨てで。ユーノ」
「ああ。タカト」

二人は互いに頷き合う。

こうして、ユーノ宅に、タカトは滞在する事になった。

……しかし、誰が予想しただろう。

この滞在が長期に渡ろうなどとは。

そして、ユーノとヴィヴィオもまた知らない。

目の前の男が、第一級の次元犯罪者である事を。

ヴィヴィオにとってのママ達と戦ってる存在である事を。

そして、タカトもまた知らない。

目の前の男が敵対している存在と親友である事に、そして少女が娘である事に。

皮肉に、運命は針を進めた。



夜、ユーノ宅の食卓はかつて無い程の料理が並べられていた。

啞然として、席に座るのはユーノだ。

その隣ではヴィヴィオがにこにこ笑っている。

そして、肝心のタカトはと言うと……

「よし、と。お待っどさん」

エプロンを付け、台所に立っていた。

問答無用に立っていた。

タカトが身に付けるのはユーノが台所に立つ時用の淡い翠のエプロンである。

もつとも、ユーノはあまり料理が得意な方では無く。

現在、絶賛修業中だった訳だが。

食卓には大皿に盛られたミートソースとクリームソースのスパゲティがある。

かなりの量だ。

だが、さらにヴィヴィオ。ユーノの前にあるのはオムレツだ。ヴィヴィオのに至ってはケチャップで似顔絵まで書いてある。

おまけとばかりにあるのはシーフードサラダ。

これまた見事な盛り付けだ。

これら全てを作りし男は鼻歌を歌いながら調理器具を片付けている。ユーノはその手際を見て、なのはの世界のある家事妖精の伝説を思い出していた。

ブラウニー。

まさに今、目の前の男は現代に蘇りしブラウニーであった。

「よし、と。さあ、食べてくれ。久々に作ったから味は少々保証出来るが」

「あ、ああ。うん戴きます……」

「いただきます……」

ブラウニー（タカト）に奨められ、早速スプーンを手取る。

オムレツを一切れ、スプーンで掬い口に入れる。ユーノの顔が瞬間、真顔になった。

まずい訳では無い。

と、言うより……

「おいしい……♪」

そう、美味しいのだ。とんでもなく。
正直に言おう。

レベルはかの八神はやてと同等。あるいは上回る。

「……え、と。これ作ったのタカトだよね？」

「？目の前で作ってただろうが？」

「いや、まあ。そうなんだけど……」

激しく納得いかない。

目の前のこの無骨然とした男がこの料理を作った事に……！

「……ユーノ。何か、ひたすら失礼な事考えとるだろ？」

「い、いや！そんな事ないよ！！」

そ、そう！このケチャップも市販の物じゃ無いよね？」

「ああ、ちよっとタバスコを利かせて見たんだが。どうよ？」

「……うん。甘くなくてオムレツによく合うよ」

和気あいあいと夕食は進む。

事は少し遡り、そろそろ夕食にしよう。という所で、タカトから

「世話になるだけなのは性に合わん」と、言われ。

夕食を作らせてくれ、と言われたのだ。

実際、ユーノは前述の通り、料理はあまり上手くない。

ヴィヴィオはあまり文句を言わないが、それでもなのはやフェイト。
はやての作る料理とは表情が明らかに違う。

その為、最近。料理を修業していた訳だが、結果はまだまだであつた。

真剣に料理教室に通おうか、と考えていた程である。

……ここに、また一人親バカ在り。

結局は仕事が増えた為、料理教室へは行けなくなった訳だが。

……ユーノは知らない。その仕事を増やした原因が、今、まさに

目の前で料理を振る舞っている事に。
偶然、と言うよりはもはや必然か。

「ああ、ヴィヴィオ。そのクリームソースのパスタだが……」
「う？」

タカトが今、まさにクリームソースのスパゲティを食べようとする
ヴィヴィオに何かを言いかけるが若干遅い。
器用にフォークとスプーンを使ってヴィヴィオの口にパスタが入る。
瞬間。ヴィヴィオは固まった。

タカトは最後まで見て、続きの言葉を放つ。

「……もの凄く熱いからキツチリ冷ますように。
……もう、遅いか」

「にやあああああああ！！！！！」

一拍遅れてヴィヴィオが悲鳴をあげる。

ありし日（9歳）の母を思わせる悲鳴である。

慌てて水を飲むヴィヴィオを笑うタカトにユーノは半眼で告げる。

「……わざとだろ？」

「まさかな？」

全然説得力の無いタカトの弁明であった。



何だかんだで、夕食は終わり。

ヴィヴィオはお風呂に入り、その後ベットに入ると即座に寝た。

寝付きが良いのは良い事である。

たくさん遊んで、たくさん学んで、たくさん寝る。

世の子供の鏡である。

そんな中、ユーノは書斎に居た。

その顔は夕食時に無かった程に暗い。

ヴィヴィオには臥せたのだが、悪い報せがユーノの元に来ていた。

クロノ・ハラオウンの事である。

生死不明状態で本局に担ぎ込まれ、手術を受けた。

どうにか手術自体は成功したが、未だ、危篤状態には変わりはない。

夕方まで、本局の医療施設にハラオウン家の皆と居たのだが、

「今日はもう遅いから」と言われ、帰された。

ヴィヴィオも待っているので、渋々帰ってきた訳だが。

ユーノは後悔していた。

クロノに情報を与える事が出来なくて、だ。

16661

クロノに依頼されていたのはこの次元犯罪者が使う術式の構成となる。

カラバ式と、仙術、なる異端の術の情報だ。

しかし、カラバ式はある程度グノーシスからの協力者により術式の情報を得られていたのだが、もう一つの仙術はからっきしであった。元々、仙人。と言う存在そのものが希少らしく。

手掛かりは0。

グノーシスの協力者も首を横に降る始末であった。

ユーノは思う。

正しく情報があればクロノはそんな事にならなかっただろうか？と。なのはの時にも思った。

その時の後悔も後押ししていた。

自分が正しく情報を見つけられたら、なのはやクロノは怪我なんて

負わなかったのではないか？

有り得ないIF。

ユーノとて、解っている。

情報があつたからと言って、それだけで事態は回避出来ない事くらいには。

しかし、それでもどうしても考えてしまう。

溜息をまた一つ着いた時、ユーノの書斎にノックが鳴る。

思わず飛び上がりそうだったが、悲鳴は押さえ込んだ。

扉が開く。

「……よう」

そこにはコーヒーカップを片手に持つ。タカトが居た。

ユーノは瞬時に笑顔を作る。

一夜のみの客人だが、辛い顔は見せなくなかった。

「タカト？ どうしたの？」

「いや、昼間寝たせいだな。どうにも寝られんで、ちょっと出てみたら。ここから光が漏れていたんでな？」

タカトはそう答えながら、カップを差し出す。

当然コーヒーが入っていた。

「……これは？」

「何、まだ寝る気配が無いんで煎れてきた」

仕事か？と尋ねられたのでそのまま頷き、カップを受け取る。

コーヒーを飲む。

随分美味しかった。

「……これも、君が？」

「ああ、執事経験がこんな所で役に立つとは思わなかったがな」

この男の経歴を聞いてみたくなる言葉である。

執事経験なんて普通は積むまい。

それを言えば、料理もだが。

「執事、て昔。何してたのさ？」

あの、料理もそうだけど」

「料理はいろいろあってな。」

俺の出身世界を色々と回らなくっちゃあならない時があつて。その時に。

食いつぱぐれがないから主に飲食店で働いてたんだよ。

……執事は、まあ、アレだ。

バイト、て奴だな」

バイトで執事なんてあるんだ？と、新たな事実によりユーノは笑う。

「……漸く、まともに笑ったな？」

「へ？」

タカトの言葉に流石にユーノは驚く。

それにタカトは笑う。

「お前、何があったかは知らんが、結構暗い顔してたぞ？」

「……」

「ヴィヴィオも気付いていた」

タカトの追撃の言葉に流石にユーノは笑う。自嘲気味に。

「……どうにも、僕は演技が下手らしいね」

「だろうな。初対面の俺に気付かれるようじゃあな」

タカトがおどけた様に笑う。

ユーノもまた笑った。

「……何があったのかは聞かない方がいいか？」

「うん……ごめん」

タカトにユーノは謝る。

時空管理局の事件なのだ。一般人に語れる内容ではない。

タカトは

「そうか」と、だけ答える。

「……そう言えば、礼がまだだったな。

ユーノ。今日は済まない」

「そんな事ないよ。

こっちこそ、我が儘に付き合わせてごめん」

礼を述べるタカトにユーノは首を振る。

言ってみれば、こちらの我が儘に付き合わせた様な物だからだ。

「……でも、体調。本当に大丈夫？」

「ああ。流石に全快とはいかんがな」

尋ねるユーノにタカトも苦笑いを浮かべて答える。しかし、ユーノは逆に眉を額に寄せる。

「やっぱり、まだ全快してないんじゃないか」

「……いや、確かにそうだが、あまり一所にいられる人間でも、な

いんでな。

それに……」

「……それに？」

一所にいられない。

と、言うタカトの言葉も気になったが、先が気になった。
ユーノに促され、タカトは続ける。

「俺には色々勿体ない」

そんな事をタカトは言う。

その表情はユーノから見ても哀しかった。

そして、何が勿体ないと、言うのか。

「……何が勿体ないのさ？」

「済まない。気を悪くしたのなら……」

「違うよ」

ユーノの言をタカトはやんわりと遮ろうとして、しかし出来なかった。

「僕は、勿体ない」と、言う言葉の意味を聞きたいんだよ。タカト」

「……お前も、大概」

お人良しだな。とタカトは続け、微笑む。

だが、その微笑みすらもどこか哀しい。

「……勿体ない、て言うのはそのままの意味だ。

、伊織タカト、と言う人間にこんな、幸せ、は勿体ない」

「……何でだい？」

あくまでユーノは続きを促す。
タカトはそのまま答えた。

「ユーノ。俺にはなー」

瞬間。扉が開いた。
ヴィヴィオだ。

眠そうに、目をしょぼしょぼしている。
しかし、この場に漂う空気に気付いたのだろう。
首を傾げる。

「……どうしたの？」

「……ふん。」

何でも、ないさ。それより、ヴィヴィオ。どうしたんだ？こんな夜に？」

疑問に疑問で答えるタカトにヴィヴィオは笑顔で

「おトイレ」と返す。

それにタカトも苦笑いする。

「そか。ならベットに戻って眠りな？」

俺も、寝るとしよう……ユーノ？」

「あ、ああ。うん」

タカトに呼ばれ、ユーノはうろたえる。

それにヴィヴィオは首を傾げるが、タカトに背を押されて書斎を出る。

タカトも共に出ながら、しかし。ユーノに声を掛けた。

「あまり、気にしない事だ。ユーノ」

「……タカト」

「俺のような人間も居る。ただそれだけの話しさ。じゃあおやすみ」
「……うん。おやすみ」

「なんのはなし」と、聞くヴィヴィオに

「子供には解らん話しさ」とタカトは答えながら書斎を出ていく。

ユーノは椅子に深く座り直す。

ショックだった。

タカトの一言はそれだけの衝撃をユーノに与えていた。

「……タカト。君は……」

そして、タカトの言葉の続きを思いだす。

「幸せ、ていうのが何か解らないんだ」

空虚な瞳で、あまりに空虚な答え。

ユーノは夜空を見上げた。

夜空はまだ深く。

朝の到来にはまだ長かった。

（第十九話に続く）

◆◆◆◆◆
チュッドア~~~~ン!!

カ

「666はどこだ〜!!」

祐

「666出て来なさい!!」

ヴ

「ふ、二人共落ち着いて〜!!」

ア

「……え、と。

とりあえず、皆さんこんにちは♪

今回もやって来ました。アリサ道場の時間です♪
当道場の主。アリサです♪」

カ

「666〜!!」

す

「弟子のすずかです♪」

祐

「出てきなさい!!」

シ

「そんでもって。司会のシオンです♪」

ヴ

「カ、カナン君!祐希ちゃん!落ち着いてよ〜!!」

ア

「……二人共、うっさい!!」

カ

「あたっ!」

祐

「いたっ!」

ヴ

「あ、やっと止まってくれた〜」

シ

「……で、今回。特別出演の『魔法少女リリカルヴィヴィオ』からヴィヴィオ。祐希菜。カナンを召喚してます……で、いきなり暴れだして何してんだ。お前等……」

す

「……シオン君、意外と冷静だよね……」

カ

「そうだ！シオン！！」

祐

「そうだわ！アンタがいたわ！！シオン！！」

シ

「……なんだよ？」

カ、祐

「「666はどこだ（よ）！！」」

シ

「……とりあえず、落ち着け。」

……何でお前等が666捜してんだよ？」

ア

「そうよ！！」

いきなり暴れ出すなんて！」

ヴ

「そ、それは……」

す

「あ、もしかしてヴィヴィオちゃん関連？」

カ

「おう！……あの、ロリコンがあ……っ！」

ア

「……ああ、この話しの最初の」

祐

「そうよ！！何が『君に合う良い名だ』よ！！幼児を口説くなんて、万死に値するわ！！」

シ 「……あの人のアレは天然だからな……」

す 「アレを天然でやれる、て結構凄いよ……?」

シ 「まあ。そこはタカ兄いですから」

カ 「で、奴は何処だ!」

祐 「とっと吐かないといろいろ後悔するわよ!」

シ 「攻撃対象俺に変わってんじゃねえか!」

ア 「……まあ、二人共落ち着きなさい。

……どうせ、二人共。まだ666に勝てないんだし」 ヴ
「そうだよ。」

それに小さい時の話だよ? タカトもそんな意識して無かったと思
うし……」

カ、祐
「「呼び捨て!」」

ヴ
「あ、あう……」

ア 「ヴィヴィオが呼び捨てにするの男だとエリオくらい、て思ってた
わ」

す 「何で、ヴィヴィオは666を呼び捨てにしてるのかな?」

シ 「次の話しまで内緒だそうです」

カ 「次の話しまで内緒だそうです」

「く……っ！なんて親密さだ……やはり斬る！」

祐

「手伝うわよ。カナン！」

ヴ

「ふ、二人共……」

シ

「……ああ、その前に二人共？」

カ、祐

「「何だ（よ）！」」

シ

「……666は俺の敵なんで一切の手出しは許さんからな？」

カ

「な、何……！！」

祐

「そんなもの知った事じゃあないわ！！」

シ

「……ほう」

ア

「うっ！シ、シオンからダークオーラが！？」

す

「こ、怖いね……」

ヴ

「シオン君。怒らせると怖そうだもんね……」

シ

「……二人共、そこにちよい座れや」

カ

「ま、待て、シオン！」

祐

「そ、そうよ！そんなダークオーラなんて、出さないで！！」

シ

「……三度は無いぞ？そこに座れ」

カ、祐

「「は、はい……」」

ア

「せ、正座……」

す

「本当、怒らせると怖いね……」

ヴ

「気をつけなくちゃね……」

シ

「……さて、二人共。解ったな？

アレは俺の獲物だ。

……手え出そうものなら……」

カ、祐

「「だ、出したら？」」

シ

「擦り削る」

カ

「な、何を……？」

シ

「聞きたいか？」

祐

「え、遠慮するわ……」

シ

「そうか……残念だなあ」

カ

「うう、まさかシオン。怒らせるところまで怖いとは……」

祐

「誤算よね……」

ア

「話しは着いたみたいね？」

さて、じゃあ今回の話し。……強いて言えば666の休日編？」

「だね。と言うかユーノ君が何か重要な役みたいな……」

「前も言った通り、ヴィヴィオ。ユーノさんは666で重要な役柄らしいんで」

「……うう、ヴィヴィオが……」

祐

「魔王の毒牙に……」

ヴ

「……何もされてないからね？」

ア

「そうなの？」

シ

「……てか、あのヴィヴィオに手を出したら俺はタカ兄いの人格を真剣に軽蔑してますよ」

す

「劇中だと7歳だよね……と、言うか。7歳の割りには思考が大人のような……」

シ

「……9歳で将来のビジョンなんて会話をした二人よりマシかと」

ア、す

「「うっ！」」

シ

「さてさて、では今回はここまで。」

……珍しくヴィヴィオが爆発しなかったな？」

ヴ

「わ、私。爆弾!？」

ア

「……ああ、それでね？何かもの足りないと……」

ヴ

「え〜〜！」

す

「ヴィヴィオちゃんと言えば、締めの一撃だもんね〜」

ヴ

「ま、待って。私そんな評価！？」

カ

「……確かに肉体的には平和だったな。

精神的にはアレだが……」

祐

「そうよね。よく考えたら道場で私達がすっ飛ばされて無いの今回が初めてよ？」

ヴ

「ふ、二人まで……」

シ

「まあまあ。

ではでは。今回の道場の三人組召喚にオッケーを出して頂いたヨシユアさん♪

ありがとうございます♪

次の話しても召喚したままで行かせて頂きます♪」

カ

「次こそ、何も無いと良いな〜」

祐

「はかない願いよね……」

シ

「ではでは♪今回はこの辺で〜〜♪」

一同（ヴ除く）

「」「」「また次回〜〜♪」「」「」

ヴ

「うう……私、そんなキャラじゃないもん……」

第十八話「幸せの意味」(後書き)

「ユーノ宅にて、一日を過ごすタカト」

「でも、それは哀

しみを伴って」

「タカトの歪みをかいま見た、ユー

ノはある事を決意する」

「そして、ついにあの三人が

ヴィヴィオの元に帰ってくる」

「その時、タカトは」

「次回第十九話『すれ違う者達』」

「運命はどこまで

も皮肉に」

第十九話「すれ違う者達」(前編)(前書き)

「その男を見た時、僕は懐かしい感じを受けたんだ」

「その自己を省みないような生き方は彼女に」 「そして、

真面目で。一途な、そんな生き方は彼女に」 「そ

して、――あまりにも生き急ぐような生き方は彼女に」

「あの三人にそれぞれ似ていて、しかし。絶対に似ていない」

「決定的に違う事。それを僕が確信した時には、もう全て

が……」 「魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まりま
す」

第十九話「すれ違う者達」(前編)

P M.. 4時。

早朝。まだ朝日すらも昇っていない。

そんな朝早くにヴィヴィオは目が醒めた。

蒲団から上半身を起こし、まだ眠たそうに左目をこしこしする。

そして、右手を挙げ。伸びを一つ。

完全に目が醒めた。

まだ起きるには早過ぎるが、たまにはいいかな？と、顔を洗いに洗面所へと向かう。

洗面所へと向かう最中。

庭から妙な気配がした。

ちよつとばかりの好奇心も含めて、庭に出て見る。

ユーノ宅は一軒家であり、そしてその庭はかなり大きい。

流石、無限書庫の司書長である。

そんな庭に、闖入者がいた。

一夜のみの客。伊織タカトだ。

彼は背を延ばし、足を広げ。合掌し、鋭く長い呼吸をしている。

―独特の呼吸法である―

少なくとも普通の呼吸法では無い。

ヴィヴィオは息を飲む。タカトの威圧感に、巨き過ぎて全体が見えない。そんな気配に。

瞬間。タカトが動く。

右の拳が放たれ、さらに踏み込み。

―閃―

その動きのまま左の順手突き。

―鋭―

動きは止まらない。勢いを殺さず。左の膝から右の上段蹴り。さらにそこからの動きにヴィヴィオは目を見張る。

―断―

蹴りは止まらず、タカトは空中に回転しながら昇っていく。左の膝から右の回転脚。最後にくると一回転しながら踵落とし。全て、一連の流れに組み込まれた技だ。そして空中に留まったまま左の掌を突き出す。

―拍―

‘何かが’地面に叩きつけられる。ヴィヴィオは知るよしもないが、それは純粹に魔力を行使しない、突き出した掌からの衝撃だと。タカトは地面についてからも止まらない。そのままアンバをイメージさせる下段回転脚。立ち上がり、振り込むように右の肘。位置からすれば相手が人だった場合、鳩尾にめり込んでいる。そこから双掌打、放つと同時に、身を伸べる、技法により、その場から2 m程離れた所で回転。踏み込み、背をたたき付ける。さらに回転しながら肘。ヴィヴィオはその動きに圧倒される。魔法を使っている訳でも無いのにとんでも無い動きだ。さらに驚嘆すべきなのはこの一連のシャドーは一对一を前提とした物では無く、多対一をイメージとしている事だ。

つまり、タカトのイメージでは敵は最低でも三人以上。

あるいはそれ以上居る事になる。

最後に拳を突き出すと、漸く止まる。

ヒュウウウウウウと、長く息を吐く。

だがタカトの鍛練はそこで終わりでは無かった。

今度は妙な踊りをしている。

ねっとりとした粘つく動きだ。

しかし、いかな鍛練法なのか、タカトの額には汗が浮かぶ。

そこでヴィヴィオは気付いた。

魔力だ。

今、タカトの身には魔力が覆っている。

タカトは先程と同じく鋭く、長いストロークの呼吸をする。

その度に魔力が変化する。

天から火。水。風。地。雷。山。最後に月へと魔力は変わる――

少なくとも、ヴィヴィオはそうのように感じられた。

ややあってその踊りも止まる。

また長く長く。息を吐く。

同時に身体を覆う魔力も霧散していくようだった。タカトが目を開

け、ヴィヴィオに向き直る。

「おはよう。ヴィヴィオ。朝、早いな？」

「うん。おはよう」

挨拶し、タカトがこちらへと向かってくる。

流石に汗が凄い。

「……タカトさん、て。いつもこんなこと、してるの？」

「いつも、と言う訳でも無いな。」

ま、出来るだけやってはいるけどな。

それよりヴィヴィオ。さん付けは止めてくれ、無性に背中がむず痒

くなる」

タカトの言葉にヴィヴィオは少し迷う。年上の人を呼び捨てにしてはいけないと教わっていたからだ。

だが――

「そうだな。俺はヴィヴィオに昨日助けて貰っただろう？だからヴィヴィオは俺の恩人だしな？」

その恩人に、さん、なんて呼んで欲しく無いんだよ」

そう言いながらにっと笑う。

その笑顔に邪気は無く。あるのはただ純粋な笑顔だ。

その笑顔に押されるようにヴィヴィオはコクリと頷く。

「……タカト？」

「おう、それでいい。やっぱり可愛い子には呼び捨てで呼んで欲しいしな？」

そう言いながらタカトはヴィヴィオの頭に手を乗せ、撫でる。

タカトの台詞――

可愛いのに辺りに若干顔を赤らめながらもヴィヴィオはそれを嬉しいように受ける。

この撫で方をするのは現在タカトだけなのだ。

「さて、もうしばらく時間あるし、鍛練の続きでも――」

「あ、タ、タカト？」

「うん？」

ヴィヴィオがタカトを呼ぶ。

それにタカトも？マークを付けながら、向き直る。

ヴィヴィオはタカトの瞳を見ながら、しっかりとその言葉を言った。

「わたしに、けんぽー。おしえて！」

「……はい？」

ヴィヴィオのお願いにタカトは更なる？マークを連ねた。



「……つまりだ。俺に格闘術を教えて欲しい、と？」

タカトの質問にヴィヴィオはコクコクと頷く。

しかし、タカトの反応は芳しく無い、何故ならば。

「あのな？ヴィヴィオ。判ってるとは思うが俺は一夜のみの客なんだぞ？」

「うー」

そう、タカトがユーノ宅にいるのは一夜のみ。

それ以上はユーノに迷惑になる。

なにより、タカト自身一所にはあまり、居れない。

「……だから、まあ。

こればかりは駄目だ」

タカトの言葉にヴィヴィオの最終兵器が発動しそうになるが、しかし今度はタカトは動じない。

腕を組み、ただ首を横に降る。

「……ま、機会があれば少し、教えてやるさ」
「ーっほんと？」

瞬間でヴィヴィオの顔が明るくなる。

タカトはそれに苦笑いを浮かべながら

「ああ」と答えた。

何のかんのとタカト。ヴィヴィオには甘々であった。

「さて、飯でも作るか」

「タカトのごはんおいしいからすき〜♪」

ヴィヴィオご機嫌である。

何より、タカトのご飯が美味しかったからだろう。

だが、タカトはニヤリと邪悪な笑顔を浮かべる。

その笑顔はアースラに居る、異母弟と同質のーっつまりは悪戯っ子の笑顔であった。

本局で某異母弟がでかいクシャミをしたのは余談である。

「う？タカト？」

「カカ。何でもないさ。さて、朝食の仕度をするからヴィヴィオ。顔洗ってきな？」

「ーうん……？」

ヴィヴィオはその時、正直とっても変な予感を覚えていた。

結論から言うと、その予感はあたってしまふのだが。

その事に気付けないヴィヴィオはそのまま洗面所に駆けていった。後に残るのはタカトの不吉な笑みだけであった。

「……タカト。聞いていいかい？」

「構わんよ。ユーノ。何だ？」

「これは、何？」

P M…6時30分。

ユーノ宅の食卓には妙な物が乗っていた。

ユーノ、ヴィヴィオの前には箱膳があった。

白粥が大きめの碗に入っており、おかずは粉をまぶして焼いた白身魚。それに乾海老入りの吸い物がついている。

「……タカト、て和食系も出来たんだ？」

「さあな？俺は和食を作ったとは言ってないぜ？」

「？」

タカトの言にユーノは疑問を浮かべる。

ミッドでも和食は結構流行っており、店も結構ある。

故にユーノはタカトの作った朝食を和食と判断したのだが・・・

「まあ、食べてみる。……きっと驚くから」

「朝食に驚きなんてあるんだ……？」

ある意味新事実である。

とりあえず、

「いただきます」をして、ユーノとヴィヴィオは白粥を口に入れる。
瞬間。

二人揃って思いきりむせ返った。

「こ、こ、こ、このお粥。甘いんだけど!？」

「にやあああああ!」

「……それはミルク粥と言うものだ。オートミールとも少し違うな？」

「聞いてないよ!!」

「言っていないからな」

タカトはニヤリと笑いながらお粥を食べていく。

二人はタカトを睨む。

何せ、普通のお粥と思いきや、いきなり甘かったのだ。そのギャップは凄まじい。

「……後で覚えてなよ……?」

「ううううう!」

二人はタカトを睨みながらそれでも箸を朝食へと伸ばす。

ユーノもそうだが、ヴィヴィオの箸使いも大した物である。

二人は今度は慎重に白身魚を器用に切り分け、少しだけかじる。

香辛料の複雑な風味が口の中に広がり、甘いミルク粥との相性はバツチリだった。

「へえ……最初は思ってた味と全然違うからびっくりしたけど、意外といけるね。和食?それとも洋食?」

「おいしい〜♪」

元々甘いのが大好きなヴィヴィオはすぐに慣れ。

ユーノも美味しいそうに食べながら、タカトへと聞く。

だが、ユーノとヴィヴィオは気付くべきだった。

未だタカトの笑みは悪戯っ子のままだと。

「当ててみな?」

「どっちか、と言うと洋食系なのかなー」

口直しに二人は吸い物を無造作に飲み――
そして二人揃って激しく咳き込んだ。
その様子をニヤニヤと笑いながらタカトは一人。平然と吸い物を啜る。

ややあって二人は涙目のままタカトに詰め寄る。

「これ、何!?、酸っぱ辛い、んだけど!?!」

「にやあああああ!!」

「……それはトムヤムクンというトウガラシ入りのスープだ。誰も洋食と、も、言っていないだろう?」

早朝ドッキリに成功したタカトはニンマリと笑う。

ユーノは知るよしもないが、これはなのは達の故郷。地球のタイ料理であった。

朝食はかくも騒がしく過ぎていった。



PM7時。

朝食の片付けも終わり、三人は居間に居た。

しかし、空気がちよつと重い。

タカトが難しい顔をしている。

対照的なのはヴィヴィオだ。

目がキラキラ輝いている。

「……駄目かな? タカト」

「……」

ユーノの疑問にしかし、タカトは無言。
何故にこんな状況になったのか？

それはユーノの一言から始まった。
言わく。

「タカト。暫く、ここに留まらない？」

その一言だ。

何でも、ユーノがご飯を作るよりもタカトの方が美味しい。

それに、ユーノ自身忙しい為、家事が覚束なくなっている事。

昨日の段階でタカトは根無し草なのを聞いていたユーノはそう提案したのだ。

最初タカトは速攻で断った。

しかし、ユーノが忙しくなる事でヴィヴィオが一人ぼっちで留守番をしなくてはならない事や、それに伴う、生活環境の悪化等を話す事でタカトは沈黙していったのだ。

ユーノは確信する。タカトは前代稀に見る、お人良し、だと。

そこに付け入るような形にはなるが、ユーノ自身思う所はあった。
昨日のタカトの言である。

「俺には幸せ、て言うのが何か解らないんだ」

その一言をユーノは許せ無かった。

見て見ぬ振りが出来なかった。

ユーノ自身。それが何故かは解らないのだが。

「……ユーノ。昨日の、アレ、を気にしてる。と、言うのなら。俺は」

「違うよ、タカト。僕は純粋に、ヴィヴィオを案じてるんだよ。

僕も最近忙しいからね。ヴィヴィオを一人で夜までお留守番をさせ

ている状況は良くないだろう？」

「それは、そうだが……」

タカトはユーノの言葉に二の句を告げない。
最早、タカトは理解している。

感情は納得しているのだ。

最後にタカトはヴィヴィオに目を遣りー

そのキラキラを目にして嘆息。

退路は、無い。

「……解った。条件付きでここに留まろう」

「やった！」

ヴィヴィオが喝采を上げる。

ユーノもまた微笑んだ。

そして、タカトから出された条件は三つ。

・一つ…逗留する期間

はユーノが忙

しく無くなる

まで。

・二つ…タカト自身用

事がある為、

昼夜を問わず

出掛ける事が

ある事。

・三つ…出掛ける時に

無断外泊をす

るが、それを

許す事。

最後の条件は必ず帰って来る。
と、言う条件を組み合わせる事でユーノも合意した。
かくて、ユーノ宅には新たな居候が住む事になった。

「あ、それならタカト〜」
「う……！」

ヴィヴィオがニコリ笑う。
そう、タカトがここに留まるならば、早朝の件が問題無くなるのだ。
ユーノもまたヴィヴィオの弟子入りを頼み込む。

「解った。解った。
……ここに居る間だけだぞ？」
「うん!!」

タカトの言にヴィヴィオは喜ぶ。
ユーノもまた微笑んだ。
かくて、ついでとばかりにヴィヴィオの弟子入りまでもがここに決定してしまったのであった。



PM…7時30分。
ユーノ。ヴィヴィオはそれぞれ、出かける用意をする。
ユーノは無限書庫に。
ヴィヴィオは聖王教会付属の魔法学校に、だ。

「それじゃあ。行ってくるよ」

「いってきまゝす」

「……待て、二人共。
これ、持っていけ」

玄関先でタカトは二人に包みを渡す。
小さい箱だ。
ユーノのは弱冠大きめではあるが。

「これ、弁当……？」
「わぁ……！」

二人は一瞬喜ぶが、しかし。
瞬時に顔を曇らせる。

「「ま、まさかこれもー」」
「……流石にそれは普通のだ」

朝の件が二人揃って結構なトラウマになったらしい。
明らかに警戒している。
確かに美味しかったのだが。

いかんせん目の前のブラウニー（タカト）は悪戯好きの伏がある。
タカトの言に二人はじーと半眼で睨むが、

「天に誓って」の一言に漸く納得した。
・・・二人は知らぬ事だが、魔王が天に誓うのはアリなのかとも思
わなくも無い。

「ああ、それから。ユーノ。家の中、掃除しとくが構わんか？」
「ああ。うん、宜しく頼めるかな？」
「無論だ。承知した。家主様？」

タカトの言にユーノが

「止してよ」と苦笑いを浮かべる。

ついでにタカトは洗濯物も頼まれてくれた。

「……ごめんね。タカト。なんか、いろいろ任せちゃって」

「何、元々はそれが理由なのだろう？」

ユーノの言にタカトは気にするな、と続ける。

やはりタカトは理解している。

ユーノの本心を。

だからこそ、ユーノは何も言わなかった。

「それじゃあ。今度こそ、行って来ます」

「いつてきまゝゝす」

「ああ、二人共。通行には気をつけて。

行ってらっしゃい。

――頑張ってきて来い」

主夫ばりの気の使い様を見せながらタカトは二人を見送る。

そんなタカトにユーノと、ヴィヴィオは久しぶりの行ってらっしゃいに頬を緩ませた。



AM3時。

タカトは一仕事、終え。お茶をしていた。

実際、掃除については細かな所以外やる必要が無かった。

流石は無限書庫の整理をやり遂げた男、ユーノである。

料理はともかく、掃除は見事であった。

故にタカトは普段掃除しない場所―

窓拭きや、雑巾掛け。

庭掃除、草刈り等を行ったのだ。

洗濯物は朝の内に干してしまっている。

ユ―ノ宅にも乾燥機は勿論あるのだが、タカトはそれを使うのは最終手段と決めていた。

太陽の光で乾かすのと、乾燥機では前者の方が遥かにふっくらとして、気持ちがいいからだ。

洗濯物を干し、各掃除等を終わらしてみれば昼過ぎ。

昼食を取り、そしてお茶を楽しんでいた訳なのだが・・・

「ただいまー」

「ん。帰ってきたか」

誰が帰って来たのか確かめる必要も無い。

タカトは淡々とある準備をこなす。

「タカト、ただいまー」

「お帰り、ヴィヴィオ」

その言葉に一瞬キョトンとしながらもヴィヴィオはえへへと笑う。実際、お帰りなさいと言われたのは久しぶりだからだ。

「さて、ヴィヴィオ。帰ってきたらまずは何？」

「えっと……おてあらいとうがい？」

ヴィヴィオの答えにタカトは頷く。

それでいて準備はちゃんと行っているのだが。

ヴィヴィオはタカトが準備している物を見て、目を輝かせる。

「おやつ〜?」

「ああ、おはぎだ。」

手を洗ってきたら3時のおやつにしよう」

タカトの言にヴィヴィオは頷き、洗面所に駆けていく。

タカトはそれに苦笑いをしながら緑茶の用意を忘れない。

何せ、昼ご飯と一緒に作ったお手製のおはぎである。

ヴィヴィオにはすっかり楽しんで欲しかった。

「あらってきた〜♪」

「よし。ならそこに座りな? お茶の準備も終わった所だ」

そうしてタカト手製のおやつを楽しみながら時間は過ぎていった。

AM…4時。

おやつの時間が過ぎ、30分程の食休みを挟み、ヴィヴィオはタカトと庭に出ていた。

タカトの纏う空気は先程とは全然違う。

それにヴィヴィオは圧倒される。

「……今からヴィヴィオを弟子として扱う。

それについてちょっと注意事項がある」

「う?」

タカトの言にヴィヴィオは首を傾げる。

それにしかし、タカトは苦笑いも浮かべない。

「……鍛練において、俺は一切の容赦をしない。」

ヴィヴィオ、そこだけは肝に命じろ。

‘情’を持って鍛練するのは一番危険だからな。

……だからヴィヴィオ。辛いと思っても俺は容赦をしない。いいな？」

「……うん」

ヴィヴィオはタカトの言に少し圧倒される。

それだけの圧力がタカトの言にはあったからだ。

「……とは、言っても安心しろ。筋肉トレーニングを中心に組んだりはしない」

タカトの言にヴィヴィオはほっと一息つく。

ヴィヴィオのイメージでは、腕立て伏せ100回とかそんな事をするかと思ったからだ。

しかし、タカトは続ける。

「まずは目をつぶらない練習からだ。

これはどんな攻撃がきても必須だからな。

次は受け身だな」

「う？」

？マークを浮かべるヴィヴィオにしかし、タカトは笑みを浮かべる。

「俺がこれから繰り返す’寸止め’を目をつぶらず見続けろ。

……相当怖いだろうが、頑張れ」

「……っ！」

直後、ヴィヴィオから声無き悲鳴が上がった。

旋風のごとくヴィヴィオに対して振るわれた’若干’本気目の寸止

めを30分に渡って見続けたからだ。
怖いなんてものではなからう。

ちなみに最初の頃はヴィヴィオも目をつぶりまくりだったのだが、一回目をつぶる毎に一デコピン。と、言う子供にとって一番嫌な罰ゲームを取り入れる事により、早めにつぶらなくなったのは余談である。

続いて受け身。

これもタカトは容赦をしなかった。

タカトはひたすら投げるので、それに対して、必ず受け身を取ると、言う物である。

流石に危険な状態だと判断すると、タカトは助けるのだが、それ以外はノータッチ。

ヴィヴィオは何回も庭にたたき付けられる羽目になった。



AM5時30分

タカトはヴィヴィオを見遣り、その一言を放つ。

「――今日はここまで。……よく、頑張ったな？ヴィヴィオ」
「――」

返事をしようとして、しかしヴィヴィオは声を出せない。

実際。それほど、ヴィヴィオの身体に痛みは無い。

だが、心が悲鳴を挙げていた。

回転し、地面にたたき付けられる。

それを繰り返したからだ。

「……さっき風呂を涌かしておいた。」

しっかり入って身体を解せ」

「ーう、ん」

漸く返事が出来る。

そんなヴィヴィオにタカトは近づき、頭に手を乗せる。

そして、ゆっくり撫でながら呟いた。

「本当によく、頑張ったな」

ヴィヴィオは今一度呟かれた言葉に漸く微笑む。

その一言でいろんなものが報われた気がしたからだ。

「タカトは、おふろ、はいらないの……?」

「今から晩飯の支度があるしな。そもそも風呂の順番は俺が最後でいい」

そう、言いながらタカトは居間へと戻る。

ヴィヴィオは青色吐息になりつつ、風呂へと向かっていった。

AM…7時。

ユーノも帰宅し、夕食の時間である。

ヴィヴィオもお風呂で大分さっぱりとしたのか、随分元気を取り戻していた。

そして、今夜の夕食はー。

「……タカト。君と居ると本当、ご飯に絶対飽きないよね?
で、これは何?」

「フレンチでチーズフォンデュと言う」

「う?」

「いや、ごめん。ヴィヴィオ。僕も解んない……」

ユーノ達の目の前、食卓にはどでかいコンロが載せられ、その上には土鍋が据え付けられていた。

タカトは土鍋にニンニクのかけらをこすりつけ、予め、擦り下ろしておいたチーズにコーンスタッチ（小麦粉）を塗り、これまた予め熱した白ワインとキルシュ（注。どっちもお酒）と共に鍋に入れ、煮溶かす。

そして、ユーノ達の前に一口大に切ったフランスパンとソーセージを置いていった。

「……正確にはフォンデュ・ヌシャテロワーズ、て言うんだが。

……郷土料理だし、知らんわな」

「……うん。でも美味しいそうなのは解るよ」

「ああ、後はサラダもある。……ソーセージとパンだけじゃアバランスが悪いしな」

チーズフォンデュはパンやソーセージ以外にも温野菜を入れたりするが、あえてタカトは元来のチーズフォンデュで行く事にした。

……ブラウニーもここまで来れば、あっぱれである。

「……ちよつと、アルコールがあるからヴィヴィオは気をつけてな？」

「う？」

未成年を飛び越えて幼年のヴィヴィオにはさすがに気を回す。タカト。

それにヴィヴィオも不思議そうな顔で返す。

「それじゃあ。いただきます」

「いただきます」

ユーノの号令により、それぞれ、タカトに食べ方を教わりながら食べる。

熱々のチーズにフランスパンやソーセージを絡めて食べるこの料理をユーノ達は堪能する。

「熱っ！……でも、チーズがとろとろで……！」

「おいしい」

「そうか、喜んでいただけて何よりだ。家主殿？」

タカトは畏まりながら笑う。

ユーノは真剣にタカト以外の料理を今後舌が受け付けるか心配になったと言う。



AM10時。

夕食が終わり、ヴィヴィオが寝入った頃。

ユーノは風呂から上がり、久しぶりにワインを舌に傾けていた。

チーズフォンデュは好評で後でヴィヴィオが酔った以外は楽しめた。

今度もリクエストしようかなと、一人ごちながらワインを飲む。

一人で飲むのは寂しいが、後でもう一人、加わる予定だ。

タカトである。

今は庭で個人の鍛練を行っているらしい。

それにユーノは少しばかり考える。

考えてみれば自分はタカトの事を何も知らない、と。

当たり前の事ではある。

だって何も聞いていないのだから。

ヴィヴィオが弟子入りを懇願する程の体術を使うかと思えば、家事は完璧。

料理は拔群と、来ている。

ここまで来ると憧れよりも経歴の方が気になって来る。

だが・・・

扉を叩く音に思考が中断される。

誰が来たのかは解っている。

タカトだ。

ユーノが

「どうぞ」と、言う男が入ってくる。

当然、タカトだ。

手にはツマミまで持参している。

「……ワインと、言えばチーズだろ？」

「さっき食べたばかりなんだけど？」

「……なんだ。要らないのか、なら俺がー」

「勿論、そんな事は無い」

数瞬。見合わせ、互いに吹き出す。

チーズフォンデュのアルコールのせいだろうか？

互いにいつもより、明るい。

「……ほら、タカト」

「家主殿からの酌か、受けぬ訳にはいかんよな？」

ユーノからの酌でタカトもグラスを傾ける。

そこからは酒の勢いのまま色々話した。

日常の事、仕事の事、親友の事。色々だ。

タカトからも色々聞いた。

何より驚いたのは第97管理外世界出身である事か。

名前の響きからもしかしてとは思っていたのだが。まさか、と言った感じである。

それからタカトから変な異母兄弟の話を聞き。

ユーノは親友の少女達との幼少期の話をしたりした。

タカトは

「その親友と是非会ってみたいもんだ」とうそぶき。

ユーノも

「それならタカトの兄弟にも会ってみたいよ」と話した。
互いに

「いつかな?」と言ったが。

ユーノは思う。たまには男同士で飲むのも悪くない、と。

実際ユーノが飲む時は大概が女性と一緒にだ。

それをタカトに言う

「お前、それは凄い我が儘だぞ?」と、苦笑いで返される。

しかし、ユーノも黙っていない。

実際、飲みに行く時は何かの悩み事を打ち明けられたりする時であるからだ。

しかし、タカトは

「お前は俗に言う、良い奴、だからな?」と笑いながら返され、ユーノは無然としながらワインを煽る。

本当に、純粹にユーノはお酒を飲んでいた。

気付けば二瓶空けている。

「たらし〜ぼくはおもうんらよ?」

「……ろれつがまわつとらんぞ?へべれけ司書長」

タカトが苦笑いする。

そう言うタカトはケロッとしている。

飲んだ量で言えば、ユーノより上なのだが。

「なんれ、たらとはよっぱらってないんらよ？」

「多少は酔ってるぞ？」

「ただ、この程度でへべれけになってたら毒物にも対抗出来んなからな」

タカトが苦笑い混じりに語る。

しかし、へべれけになったユーノは止まらない。

「たらと〜。たらとはすろいね〜？」

「……俺からすればお前の方が凄いだかな？」

そう言いながら絡んで……物理的にも。来るユーノを引きはがす。

「俺にその趣味は無い」

「ろんなしゅひらん？」

「いいから、寝てろ。へべれけ」

タカトに引きはがされ、ユーノは床に俯せになる。

タカトは一つ嘆息するとユーノを抱え上げ……俵のように小脇に抱え。

ベッドへと連れて行く。

その間にもへべれけユーノのろれつが回らない言は止まらない。

「らいらい、しらわせがわからない、てなんらよ〜」

「……」

タカトは止まらない。

……止まれる筈も無い。

「そんならからひいこれいうらないよ〜」

「……ああ。そうだな」

タカトは嘆息する。

やはり迂闊だったなど。

今日のユーノの提案と言い態度と言い。昨日の事が原因なのは明白だからだ。

「らしいな。たとはかろじよらちににれるんらよ？そんならとがそんならからひいころいうとかろじよらちまでそんなふうなころいいそうらないら」

「それは、無いな」

タカトはろれつが全然回ってないユーノの言葉にしっかり返答する。確かな感謝を込めて。

ユーノの自室に着く。

ベッドに寝かせた。

「たらし？」

「どした？」

ユーノがタカトを呼ぶ。

それにユーノは完全に寝入る直前なのか目は完全に閉じている。

「ろろ、でしらせ、みるけられればりな」

「……そうだな」

ろれつの回らないユーノの言葉を聞きながら、しかし。タカトの胸中は、有り得ない、と叫ぶ。

お前は、■■■■なのだから！、と。

後悔は無い。既に決定された道。

自分で決めた道だ。

タカトは月を見上げる。

そして、一言だけを呟いた。

「……シオン。早く強くなってくれ。そして、俺を――」

最後の言葉は言葉にすらならなかった。

夜はまだ深い。

限り無い程に。

（第十九話。後編に続く）

第十九話「すれ違う者達」(前編)(後書き)

すみません。ああ！またかなんて、言わないで汗本当、すみません。
文字数が明らかなに異常になりそうだったので前後編になりました
汗 本当、ご迷惑をおかけします汗 後編。
楽しみに待っていて下さい♪では〜。

第十九話「すれ違う者達」 (後編) (前書き)

いやあ、お待たせしました♪後編をお届けします♪

第十九話「すれ違う者達」(後編)

タカトがユーノ宅で居候してから三日目。

つまりクラウディアへの666襲撃から三日目である。

時空管理局・本局に予定より早く戻ってしまった、・・・クラウディアの本局への牽引等で、だ。

アースラの訓練室に少年2人が向かい合う。神庭シオンとエリオ・モンディアルの2人である。

シオンはウィズダムへと戦技変換している。

互いに構えるは槍。

しかし、シオンのデバイスでもあるU・Aユニゾン・アームドデバイス。イクス・ウィズダムは短槍。だがエリオが構える槍、Aアームドデバイス。ストラーダは

長槍であった。

また2人の槍は形状も違う。

シオンのイクス・ウィズダムが突撃槍ランスならばエリオの槍は突き、薙ぎ、どちらにも対応可能なパルチザンである。

両者の槍の違いは至極簡単。

戦い方の違いである。

ランスは突き。・・・身体事ぶつかっていく突撃の為の代物であり、パルチザンはその形状通り、斬撃に特化した性能を有している。

同じ槍・・・しかし、その性能はレイピアと刀程にも違う。

シオンは右半身でイクスを上から斜め下へと構える。

対してエリオも右半身。しかし、シオンとは逆に槍を掲げるように刃を背に回す構えだ。

これは互いの槍の特性上の構えである。

シオンはあくまで突きに。

エリオは斬撃に。

互いの戦い方の差異から生まれた構えの変化である。

シオンとエリオ。二人はたまにこうやって槍同士での模擬戦を行っ

ていた。

これは二人の師匠。・・・たった一週間程だが。の叶トウヤの影響である。

いわく、同じ槍使い同士、模擬戦を多数行え、だ。

シオンは厳密には剣士なのだが、使う得物が槍な以上、そこに意味は無い。

二人がトウヤの影響をバッチリ受けたのには理由がある。

トウヤの罰ゲームが怖かったからだ。

ヌットリコース（三時間でトラウマになります）

爽やかコース（ヒトとしてのアイデンティティを見つめ直せます）

と、多種多様な罰ゲーム、その最多被害者二人。

そこまで言えば解るだろうが、この二人はトウヤの罰ゲームが見事にトラウマと化していた。

だが、それ故に二人は技量の伸びもまた凄まじかった。

恐怖。それはかくもヒトを成長させうる者なのか。

構えを取って、数秒。

瞬間。二人は同時に動いた。

シオンは瞬動を、エリオはソニック・ムーブを発動。

互いに瞬速のスピードで駆ける。

初手はシオンからだった。

瞬動の勢いのまま左足を地面に叩き込み、身体ごと突き出しながらの突き。

対してエリオは、ソニック・ムーブを右足の踏み込みを持って、停止。身体ごと、右に回転する。

――発――

エリオのバリア・ジャケットを掠めるように、シオンのイクスの先端が通り過ぎる。

エリオは回転による回避運動のまま、さらに斬撃を放つ。

孤を描くストラーダはシオンの首筋に吸い込まれるように進み。しかし、シオンの動きの方が早い。

超短距離瞬動。

その距離、後方50cm。

エリオのストラーダが通り過ぎ、未だ左手側にあるイクスに金属特有の音を響かせ、停止。

二人の距離、1m。

互いにその距離で軽く笑い。

二人は互いに至近距離での超短距離の高速移動術を持って、間合いから外れ。

だが、止まらない。

今度は互いに間合いを詰める。

次はエリオからの先手だった。

シオンの間合いに入る前にストラーダを振るう。

イクス・ウィズダムよりもストラーダの方が長い為だ。つまりはエリオの方が間合いは遠い。

しかし、シオンはこの斬撃を身を屈める事で回避。

さらにその動きのまま突き。

狙うは斬撃で開いたエリオの胴。

イクスの穂先は迷う事なく、エリオへと突き進み・・・しかし、ストラーダの石突きが、その進行を留めていた。

「ーっ！」

「ストラーダ!!!」

エクスプロージョン!

一瞬、呆然とし。しかし、即座にシオンは後退する。が、エリオがその隙を逃さない。

ストラーダのブースターが両側から迫り出す。

2ndフォルム。テューゼン・フォルム。

その特性は両のブースターを使つての攻撃速度強化。
エリオが右手一つで、ストラーダを回転。

今度は突きの構えを取る。

対して、シオンはイクスを斜め縦へと構える。

それは防御の構えだ。

エリオは構わない。

チャージ（突撃）を愛槍に命じる。

「撃ち抜けーっ！」

メッサー・アングリフ！

突貫。

エリオの足元が爆裂し、シオンへと駆ける。

その速度はソニック・ムーブより或いは疾い。

一気にシオンへと向かい、切っ先がシオンの構えるイクスの長柄へと接触。

瞬間。エリオは重力を失った。

「……な」

エリオの目の前には回転する槍がある。

それに合わせるようにシオンが左へと重心を移動。

エリオの右側へと抜ける。

エリオは悟った。

自分の一撃があゝの回転エネルギーへと転換されたのだと。

合気。

未だ、完成しえぬ。シオンの近接戦に於ける切り札の一つだ。

一撃の威力を抜かれたエリオは隙だらけだ。

当然、シオンはその回転エネルギーを転換した斬撃を持ってエリオを攻撃しようとして。

しかし、背中を走る悪寒に瞬動を持って、一気に後退する。直後にシオンの顎先を過ぎるのはストラダーの石突き。

あのまま攻撃しようとすれば顎を打ち貫かれていただろう。

エリオは突きの一撃の後、重心を後ろに移し。右後方にいるシオンの顎を狙い、石突きを跳ね上げた訳だ。

エリオは思い出す。

トウヤの言葉を。

長柄の武器の真骨頂とは何だね？

これに対して、エリオはその長さを活かした突きや斬撃です。と答えた。

しかし、トウヤは笑いながら否定。

実践で試してあげよう。そう言われ。

そして、存分に試され、思い知らされた。

トウヤは言った。

長柄の武器の真骨頂は円運動による変幻自在の連続攻撃にあると。穂先と柄。この両端を攻撃に使える為に剣のように切り返す必要が無く。同じベクトルを保ったまま攻撃を繰り返し行えると。

エリオはまだトウヤの技量には追い付けない。

当代最強の槍術士だ。

当たり前ではある。

しかし、トウヤから教わった技は確かにエリオを劇的に成長させていた。

そしてまたシオンも。

シオンは槍を扱うには経験不足。

故にトウヤは徹底的に異母弟に槍を使わせた。

エリオとの模擬戦もその一貫である。

未だ、シオンはエリオには槍の技量では追い付けないが、しかし。まともに戦えるようにまでは為っていた。

「……驚きました。確か、合気。ですよ？」

「ああ、成功率はまだ五割がいい所だけど、上手くいってよかったよ」

「て、シオン兄さん。そんな成功率の技を使っただけですか？、また、なのはさんに怒られますよ？」

「……ま、まあ。大丈夫だろ？多分、いやきつと」

シオンの言葉にエリオはちょっとだけ笑う。

シオンはスバル達に連れ戻され、例の紙芝居のショックも覚めやらぬままなのはに訓練室に叩き込まれ、たつぷりと、お話し、をしたそうである。

その間、絶え間無い悲鳴が響いたそうなの。

ティアナがトラウマ爆発で震えたりもしたとか。

そんな事もあり、シオンはなのはに、ある意味666以上の恐怖を植え付けられていた。

だが、そこは若さ溢れる十七歳の男子。

訓練中の無茶はしょっちゅうなのである。

そのたんびに、なのはは信念でもある

「模擬戦で徹底的にきっちり打ちのめした方が、教えられる側は学ぶことが多い」を、シオンに居残り授業として実践していた。

後にシオンは語る。

「いや666ともやり合えますて、マジに」

その言に約二人がウンウンと頷いたそうだが。

閑話休題。

エリオの笑いにシオンは懽然とする。

「オラ。続き、行くぞ」

「あ、はい」

瞬時に気を引き締めて、再び構える。

だが、二人の槍は交差する事は無かった。

訓練室のドアが開く。

そちらへと目を向けると、居たのはフォワードメンバー三人娘。つまり、スバル・ナカジマ。ティアナ・ランスター。キャロル・ル・ルシェの三人であった。

「あ、いたいた。シオン、探したよ」

「探した？何でまた？」

スバルがこちらへと近づきながらシオンへと話し掛けてくる。

それに、シオンは構えを解く。

少なくとも、模擬戦は続けられない。

エリオも構えを解き、シオンの側へと歩いてくる。

「八神艦長がアンタ探してたわよ？通信か何か無かったの？」

「？……通信？知らねえけど」

「僕も知りませんね」

シオンの言をエリオが補足する。

二人揃って？顔である。

それにキャロが苦笑いを浮かべる。

「最初は通信で呼び出そうとしたみたいですけど、エリオ君もシオンお兄さんも忙しいかったみたいですから」

「忙しい？……ああ、そう言うことな……」

「納得です」

キャロの言に二人は苦笑いを浮かべる。

多分模擬戦の最中だったので、通信で邪魔をするのを無粋と感じたのだろう。

どちらにしろ模擬戦は中止になったのだから意味は無かったが。

「で、シオン。今度は何したの？」

「……うおい……」

スバルのあんまりな言葉にシオンは半眼で睨む。

その視線を笑いでごまかそうとするがシオンは視線を緩めない。
だが、スバルの横から援護口撃が走る。

「そうよ。アンタ、今度は何やらかしたのよ？」

「待て、コラ」

ティアナだ。シオンは否定しようとして、しかし。さらに自分の横のちびっ子達からも口撃が来る。

「シオン兄さん。早めに謝った方が……」

「わ、私も一緒に謝りますから……」

「……お前等もかい」

流石にシオンはげんなりとする。

そんなに問題行動を起こしたろうかと、少しばかり思いを馳せ。
しかし、瞬時に戻って来た。

問題行動のオンパレードである。

ここまで多いといっそ清々しい。

シオンは一つ、溜息をつく。

「……とりあえず、俺は何もしてねえよ」

「」「本当……？（（ですか？））」「」「」

「四人揃ってハモンな」

シオン。ジト目である。

しかし、四人はだって。とかねえ。とかですよね。とかウンだとか。主語を省いた会話を行う。内容は大きい丸判りだが。

「ま、いいや。はやて先生は艦長室に？」

「うん。なのはさんやフェイト隊長も一緒だったよ？」

「……マジに？」

「大マジに」

スバル、ティアナの答えに再度溜息をつく。

真剣に何かやらかしたかな？と、考えてしまう自分が情けない。

「シオン兄さん。怒られたって大丈夫です。頑張ってください！」

「少しも嬉しくない応援ありがとう♪お前、後で真剣に覚えとくよ
うに♪」

あくまで怒られると判断するエリオにシオンは満面の笑顔を向ける。
とっても引き攣った笑顔が帰ってきた。

・・・容赦をしてやる積もりはないが。

「……とりあえず行ってくるわ」

「「「いってらっしゃーい」」」

「たっぷり怒られて来なさい」

「そのネタはもういらんわ！」

最後にティアナにツツコミを入れつつ、訓練室を出る。
ちよつとぼっかり怯えが入ったのは内緒であった。



《なら、明日帰ってくるんだ？》

「うん。久しぶりにね。ヴィヴィオ、元気にしてるかな？」

《元気だよ。最近は特にね》

アースラ艦長室。正確には執務室が正しいだろう、そこに居るのはアースラが誇る。隊長三人娘。

高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやてである。

そして、三人の前にはウィンドウが展開しており、ある男性が映っている。

三人の幼なじみであり、親友。時空管理局が誇る無限書庫司書長。ユーノ・スクライアである。

三人が彼と通信をしているのは訳がある。

それは朝方、三人がブリッジの艦長席での話しまで遡る。

突然、モニターに表れたリンディ・ハラオウンはにこやかな笑顔のままでは達には告げる。

「休み……ですか？」

《ええ♪三人揃って♪》

そうリンディは告げた。

三人は副長であるグリフィスに言った様に三者三様の反論を展開するも、歳のこ……

……経験の賜物か、三人共。意見を封殺され、気付けば頷かされていた。

驚異の交渉能力である。

と、言う訳で三人の休みが急遽決まった訳だ。

《……流石、リンディさんだね……》

「……母さん。こう言った事での手の回しよう、凄いから……」

「本当や。気付いたら休暇申請も全部通っとたからな……」

「にやは……」

ユーノの苦笑まじりの言に、三人は力無い笑いを返す。

絶対にリンディには敵わないと再認識させられた一幕であった。

未だ、クロノが頭が上がらないのも無理は無い。

《明日なら大丈夫だね。ヴィヴィオも学校、休みだし。彼も……》

「？ユーノ君。彼、て？」

《あ、そう言えば、まだなのは達に知らせてなかったね。実は……》

そして、ユーノは家に居る居候について話す。

自分の勤務状況や、それについての事まで言は及んだ。

「へえ……私と同レベルの……それは、是非確かめてみな、アカンね」

「はやてちゃん目が光ってる光ってる」

なのはがはやての目の色にツツコミを入れる。

フェイトとモニター越しのユーノが浮かべるのは苦笑いだ。

《家政夫、みたいなものかな。結構、面白い奴だね。三人共、気が合うんじゃないかな？》

「そっか……あ、そう言えばユーノ君に会わせたい人が居るんだけど……彼も連れて行っても大丈夫かな？」

《彼？》

「ほら、今ウチに居る囑託の……」

《ああ！》

モニター越しのユーノがポンと手を打つ。
なかなか古いリアクションを取るものである。
ユーノはそのまま笑顔で続ける。

《確か、アースラの最大級問題児だっけ？
名前は確か……神庭シオン》

「……まあ、反論は出来んわな」

ツツコミたいけどな。とはやてはぼそりと呟く。
実際シオンが行った事。行ってきた事はその二つ名に誤た無い経歴
なのだ。

いわく、

管理局史上最大のトラブル・メイカー。

アースラの最大級問題児。

そう言った二つ名が付けられる程にはシオンの名前は知れ渡っていた。
た。

《そっか……。うん、大丈夫だよ》

「うん。それなら、あ。ヴィヴィオ。居るかな？」

もし、居るなら通信を変わって貰おうと思い、なのはが聞く。しかし、ユーノが浮かべるのはただ苦笑い。

《……今は庭でちょっとね》

「？どうかしたの、ヴィヴィオ？」

尋ねるフェイトにユーノは

「まあ、ちょっと」と曖昧に言及を避ける。

ちなみに今、現在。ヴィヴィオは、彼、により、投げ飛ばされている真っ最中だったりする。

流石にそんな姿を見れば、基本。過保護なフェイトだけでは無く、なのはもすっ飛んで来るだろう。

最初はユーノも止めた程だ。

「まあ、明日になったら会えるからいいかな？」

《うん、ゴメンね。なのは》

「気にしてないよ。それじゃあユーノ君。また明日」

「ユーノ。またね」

「明日、楽しみにしとるな？」

《うん。なのはもフェイトもはやても。また明日ね。じゃあ》

最後に手を振りながら通信が切れる。

それに三人は顔を見合わせて笑う。

「ユーノ君が、奴、なんて使う人。ちょっと見てみたいね」

「だね。クロノ以外じゃあ初めてかな？」

「まあそもそも私達の面子に男性陣があまりおらんのやけどな？」

そう言いながら苦笑いを浮かべる。

実際、アースラ関係者は女性陣が多い。

これは結構、珍しい事である。

大体はどこでも男性陣がある程度は多い物なのだが。

そんな事を言っていたら扉がノックされた。

次いでインターフォンが鳴らされる。

《失礼します。神庭シオン。来ましたっすけど……？》

「うん。入ってええで」

はやての許しを貰い、艦長室の自動扉が開く。
そこに神庭シオンがいた。

「ども。……で、何の用なんでしょう？」

「うん。あんな？」

ちょっと、おっかなびつくりと艦長室に入って来たシオンにはやては苦笑いを浮かべながら説明を始めた。



首都クラナガン。

ミッドチルダの首都にして、時空管理局地上本部がある街である。
この街は一度炎に包まれた。

JS事件。ミッド全域を震撼させた事件である。

あの事件により齎された被害はそれこそ馬鹿にならない。

しかし、あの事件から一年。

クラナガンは見事に再興していた。

事件の爪痕は勿論残っているのだが、それを感じさせない程にクラナガンは活気を取り戻していたのだ。

そんな、クラナガン。

本日は見事な日本晴れである。

現在の時刻。PM、10…30。

そんな空の下のショッピング・モールの一面に見目麗しい三人の女性と、これまた女性的な顔立ちの少年が居た。

女性三人に少年一人。

姉弟に見えるこの一団である。しかし、少年は汗を流す。

そりゃあもう流す。

何故か？

単純に手の荷物が重い。

少年の両手の紙袋。

総計で十を超えている。

中身は服からお菓子まで多種多様である。

そんな少年をよそに三人の女性の手荷物はバックくらいのものだ。
第三者から見てもよく解る荷物持ち。

それが少年。神庭シオンの役目であった。

シオンは思いを馳せる。

俺、何かしたか？と。しかし心辺りがあり過ぎるので嘆息するしかない。

金髪の女性、フェイト・T・ハラオウンが店を眺め見る。

その光景にシオンは冷や汗をだらだら流す。

その表情はこう、語る。

まだ、何かを買うつもりですか？と。

しかし、声は逆方向から挙がった。

「なのはちゃん。これ、ヴィヴィオに似合うと思わんか？」

「うん♪いいね♪」

「……マジですか……」

しまったとシオンは嘆息する。

見ると、そこには我らが艦長八神はやたとスターズ少隊、隊長高町なのはが子供用の服を見ながらキヤイキヤイと騒ぐ。

女性が三人寄れば姦しいとはよく言う。

それがショッピングともなればさらなるパワーを発揮する、と言うのをシオンは初めて知った。

……出来れば知りたくは無い事実であったが。

「ハハ。なのはも久しぶりにヴィヴィオに会えるからね。ちょっとくらい大目に見てあげてくれるかな？」

「……言いながら荷物を追加するのは止めて欲しいんスけど、マジに」

フェイトが笑いながら……いつの間に購入したのか、更に服が入った紙袋をシオンに手渡す。

シオンは拒否する事も許されずその荷物を左の手に追加する。

「仕方ないよ。これ、シオンに対する罰の一種だから……私達、個人からの」

「く……っ!」

職権乱用!と叫びたいが、そうも行かない。

実際、シオンがやらかした色んな事を実質、助けてくれたのはこの三人だからだ。

頭が上がらない所か、足を向けて眠れない。

それ程の恩義が三人にあった。

故にシオンは黙って、今回の三人の帰宅に付き合い。

こうして荷物持ちに甘んじている訳だが……

「シオン君、ゴメンね? これもお願いするね」

「流石、男の子やな? これならまだいけそうやな〜」

「……勘弁して下さい。マジに」

「「無理」」」

「……」

三人の満面の笑顔。

それを心の底から恨めし気に見遣りつつ、シオンは再度嘆息する。

なのはの娘を預けている親友の元に行くのが昼頃、それまでお土産を物色するらしい。

後、一時間半。

長い、一時間になる。

シオンはそれを確信しながら三人について行った。



P M、11時30分。ユーノ宅。

伊織タカトは台所に立っていた。

家主の言によれば本日はお客さんが来るらしい。

なんでも弟子ヴィヴィオの母二人と、親友。そして、その生徒だとか。

詳しくは聞いていないが結構な、人数である。

故に昼食（本日のメニューは酢豚、春雨サラダ。中華風つみれ汁の中華料理）の下拵えを行っている訳だ。

家主であるユーノ・スクライアとヴィヴィオはにこしながら居間でくつろいでいる。

特にヴィヴィオは朝からずっとご機嫌であった。

久しぶりのお母さんと会えるのだから当たり前か。とタカトは少々苦笑いを浮かべながら思う。

タカトに母の思い出は無い。

母代わりだった人の思い出はあるが。

タカトは最後まで彼女を母とは呼ばなかった。

理由は何個があるが、最大の理由は気兼ねしたからである。

異母弟とその母の間に入る事はあってはならない、とタカトは考えていた。

それは異母兄も、彼女、でもある。

その事をずっと寂しいがってはいたようなのだが・・・

「……ん？」

昼食の下拵えが終わり、ついでに3時のおやつ。

クイニアマンの生地・・・昨日の間に仕込んだ。

を最後の工程、焼成しようとして、タカトラしくないミスに気付く。
生地を入れるべきアルミホイルが無い。

見事に切らしている。

生地は既に完成しており、後はアルミホイルに砂糖とバターを敷いて焼成するだけなのだが、

肝心のアルミホイルが無い。

「……やれやれ」

タカトは嘆息し、居間に向かう。

ユーノ、ヴィヴィオはテレビ・・・ウィンドウだが、を見ながら、
ゆったりとしていた。

「ユーノ。悪いけど少し、出てくる」

「へ？どうしたの？」

「う？」

タカトの言に二人が振り向く。

「いや、3時のおやつを作ろうとしたんだが、器がなくてな？」

「お皿ならあるよ？」

「いや、いるのは小さい型なんだ。アルミホイルがベストなんだが、
見事に切らしているな？」

ユーノの疑問にタカトは苦笑いを浮かべながら答える。

「そうなんだ？ゴメンね。なら、僕が……」

「こう言うのは居候の仕事だ。家主殿？ゆっくりしてな」

席を立とうとするユーノにタカトは片手で制する。
そのまま居間を出る。

「すぐに帰ってくるが、客人が来たら、遠慮なく昼飯食べてくれ。
飯は炊けてるし、酢豚以外は温めれば大丈夫だから」

「うん。わかったよ」

「タカト、いつてらっしゃい」

玄関に向かう、タカトに二人から声が掛かる。
それに微笑みながらタカトは玄関の扉を開ける。

「おう、行ってきます」

タカトは玄関から出て、近場のショッピング・モールへと向かった。

742



ピ~~~~ンポ~~~~ン♪

タカトが出てすぐにユーノ宅のチャイムが鳴る。

インターフォンに出たユーノは昨日聞いた声をまた聞く。

《ユーノ君。来たよ~~》

「ママ!!」

なのはの声だ。それにヴィヴィオの目が輝く。

居間のソファーから飛び出し、玄関へと走っていく。

それにユーノは苦笑いをしながら

「どうぞ、開いてるよ?」、とインターフォンに返し、自らも玄関

に向かう。

「ママ〜♪」

「ヴィ〜ヴィオ♪」

飛び付いて来たヴィヴィオを抱き上げるなのは。

それを若干羨ましい気にフェイトが見る。

二人の後ろに見えるのははやてと少年だ。

しかし、三人が涼しい顔をしているのに対して、少年は汗をびっしり掻いていた。

ユーノが玄関に到着し、まずはなのはに片手を上げる。

それを見て、なのはもヴィヴィオを抱えたまま。片手をあげる。

「ユーノ君。昨日ぶり♪」

「うん。なのは♪」

ハイタッチ。

二人の挨拶である。

続いてユーノはフェイトとはやて、少年に向き直る。

「はやても、フェイトも昨日ぶり♪その彼が？」

「うん。そうや♪ほら、シオン君。挨拶」

「あ、と。すみません。はじめまして。神庭シオンです。

……えっと……」

「ユーノ。ユーノ・スクライア、だよ。はじめまして。ユーノでいいよ」

「それならユーノさんで。と……」

ユーノに手を差し出し、握手をしようとして、両の手が紙袋で埋まっているのを思い出す。

ユーノは苦笑いを浮かべながらシオンを制する。

「いいよ。……それにしても凄い量だね？何買ってきたの？」

「……それは、その先生S' に聞いて下さい」

「「「あ、あははは……」」」

半眼のシオンに三人は笑ってごまかす。

その態度でユーノは理解する。

この紙袋の中身を誰が買ったのかを。

だが、あえてツツコまなかった。

「それじゃあ、玄関で話すのもアレだし、上がってよ？」

「「「お邪魔しま〜す」」」

ユーノに促され、一同は居間へと移動する。

ただシオンが靴を脱ぎにくそうにしていたのは余談であった。

かくて、なのは。フェイト。はやて。そして、シオンはユーノ宅へと来た。

そこに誰が住んでいるのかを知らないまま。

運命は回る。

悪戯のように、皮肉に。



「よつとー!」

ユーノ宅、台所。

そこで中華鍋を振るうのは、エプロンを掛けたはやてだ。

元来、彼女は家事が大好きである。

料理に至っては幼少時から作っていただけあり、和、洋、中。なんでもござれなのだ。

現在、AM・12時10分。

居間で談笑していたのだが、昼を回り、流石に皆お腹が空いたので、居候が用意していた昼食を仕上げ、食べる事にしたのだ。

幸い、下拵えは完璧だったのですぐに出来る。

つみれ汁と春雨サラダは完成していたのだ。

後は酢豚だけである。

それを聞いたはやてはなら私が作る。と、中華鍋を片手に持った訳だ。

再度、中華鍋の中で、野菜が踊る。

その中に下拵えが済んである豚の角切りを放り込み、さらにこれまた予め作られていた。甘酢餡を加えて手早く全体にからませる。

「よし、おまっとさん♪」

「わあ……はやてちゃん。いつ見ても料理、上手いよね？」

「うん♪美味しいそうだね♪」

「てか、はやて先生。料理出来たんスね……、て危なっ！」

何気に失礼な事を言うシオンにげんこつが飛ぶが、シオンは頭を下げて、それを避わす。

「乙女に対して、失礼な事言うなあ……シオン君は」

「いや、だってキャリアウーマン。て、イメージがあったんですよ
！」

追撃を構えるはやてにシオンは若干距離を取る。

一同はそれを笑う。

「ちょっと、一人足りないけど、先に食べちゃおうか？」

「ああ、例の居候君やね？」

「うん、昼の下拵えをしたのも彼だよ。」

何でも3時のおやつを焼こうとしたらしいけど、型が無かったんだって」

大皿へと盛られた本格風の酢豚を食卓へと運びながら、ユーノも答える。

食卓には既に、料理が所狭しと並んでいた。

「すぐ戻る、て言っていたけど、まだ戻らないし。それに本人からも間に合わなかったら先に食べててくれ、てさ」

「そうなんだ？なら、お言葉に甘えようかな？」

「そうやね。中華は熱々が1番やし」

そう言いながらそれぞれ食卓へと付く。

余談ではあるが、ユーノ宅の食卓は大きく、また椅子も多数ある。これは元来、ユーノ宅にはお客・・・全員アースラ関係者だが。

が多い為だ。故に、食卓は大きい物を。そして椅子も多数用意してある訳だ。

皆が席に着いたのを確認してユーノが音頭を取る。

「それじゃあ。いただきます」

『いただきます』

一同、手を合わせる。

そして、思い思いの料理に箸を伸ばす。

「あ、熱っ！」

出来立てをいきなり頬張った為か、一同その熱さにびっくりする。だが、その顔はすぐに笑顔へと変わった。

「ん〜♪美味しい♪」

「はやて、また腕を上げた？これ、とっても美味しいよ♪」

「ん〜。今回の例の居候君が下拵えしてくれてたから〜。あまり、自慢出来んな」

二人の評価にちょっと複雑そうな顔をする、はやて。

しかし、中華は火力が命だ。

それを仕上げたはやてはまごう事なく、一級の料理人である。

ユーノ、ヴィヴィオもまた。美味しい♪と喜ぶ。

だが、一人だけ、複雑そうな顔をしている人間がいる。

シオンだ。

酢豚を頬張った後、何かを考え込んでいる。

「？。どうかしたんか？シオン君。……ひょっとして舌に合わなかった？」

「え？……いや！凄い、美味しいです。……でも……」

「？。でも？」

シオンの反応に一同、不思議そうな反応をする。

はやてが続きを促すが、それにシオンは居心地の悪そうな顔をする。

「……言いたくない事、なんか？」

「いや、そう言う訳じゃあ無いんですけど……これ、言ったら確実にからかわれるなど」

シオンの発言に今度こそ、一同……女性陣が身を乗り出すが、シ

オンはただ苦笑いのみを浮かべていた。

「もう、教えてくれたってええやん」

「はは。すみません」

はやてが拗ねたように腕を組み、頬を膨らませるが、シオンはただ謝るだけで答えない。

それにはやては

「ええよ」と返し、そして別の話題に移る。

皆が、思い思いの談笑を交わしながら昼食を楽しむ中、シオンは酢豚を頬張る。

口の中に広がるのはあまりにも懐かしい味。

そして、有り得ない味だった。

「まさか、な……」

その味は異母兄、タカトの料理の味だった。



管理局地上本部。

そこで、今。混乱が起きていた。

クラナガンのショッピング・モール。

そこで、火災が起きた。

急な出来事である。

すぐに近場の災害担当部に連絡。

救助部隊がショッピング・モールに向かった。

しかし、その救助部隊が目にしたのは救助すべき人達と、そして・

異業

スバルを襲い、アースラ初出動の時にも現れた存在がそこにいた。そう、オーガ種の、感染者、が。

それも複数だ。

管理局のシステムを抜けて、どうやって現れたのかまったく解らず。また、感染者に対して、まともに対抗出来る部隊がない。

至急感染者対策部隊であるアースラに連絡するも、その到着には時間が掛かる。

だが・・・

「高町一等空尉に、ハラOWN執務官。八神艦長までここに来ているのか!?!」

「はい、先程、確認しました!」

地上本部の司令室で、地上本部勤務の准将が、官制を担当していた女性士官に叫ぶ。

今、クラナガンの地上陸士部隊に複数の感染者を相手取る事は出来ない。

その中で、その情報はまさしく朗報だった。

「すぐに連絡を取れ!」

「は、はい!!」

だが准将はこの時、知らなかった。

今、その場に感染者にとっての天敵。

そして、第一級の次元犯罪者である666。

つまり、伊織タカトが居よう事を。

そして、再び彼女達は彼と邂逅する。
炎の中で、互いに解り合えない気持ちを抱えたまま。

(第二十話に続く)



ア 「……はい。いきなりの急展開な物語なんて知った事じゃあない。
と、ばかりに始まるアリサ道場です♪そして、当道場の主であるア
リサです♪」
す

シ 「弟子のすずかです♪」

「……」

ア 「そして、ゲストはこの三人♪どうぞ〜」
ヴ

「はい♪魔法少女リリカルヴィヴィオの、ヒロイン。ヴィヴィオで
す♪」

裕 「もう一人のヒロイン裕希菜よ♪」

カ 「カナんだ。……て、アレ？今回シオンは？」

シ 「……」

ヴ 「そう言えないね？」

裕

「そうね。どこに行ったの？アイツ？」

シ

「……」

ア

「アンタら……足元、足元」

ヴ、裕、カ

「「へ？、てうわあ！？」」

シ

「……」

カ

「シ、シオン！どうしたんだ！？アリサか！アリサにやられたのか！？」

ア

「アンタ……」

す

「違うよ、カナン君。シオン君の鳩尾を拳で撃ち抜いて、気絶させたのはアリサちゃんじゃないよ？」

ヴ

「……なんか、すごい具体的だね。一体誰が……」

裕

「そうね。そんなの出来るの、て……」

タ

「……………」

裕、カ

「「て、うわあ！？666……！？」」

ヴ

「あ、タカトだっ」

タ

「……（シュタッ！）」

ア

「おくく来たわね？我が道場の執事。伊織タカト」

タ

「……（コクコク）」

す

「じゃあ、早速お茶の準備、お願い出来るかな？」

タ

「……（コクコクコク）」

ア

「ほら、アンタらも座りなさい」

す

「そうだよ？」

カ

「待った！？ツツコミ所が山程あるんだけど！

なんでここに666が居るんだよ！？」

ア

「なんで、て。ここに召喚したからよ？」

カ

「事もなげに言うなよ！」

す

「あ、タカト君、私とアリサちゃんはダージリン・ティーを煎れて
ね？」

ヴ

「あ、私も」

裕

「……じゃあ、私も」

タ

「……（コクコク）」

カ

「て、適応し過ぎだよ！お前ら！？」

裕

「だって、正直慌ててるの、て私達だけじゃない？ な〜んか釈だわ」

カ

「そんだけ？ そんだけで対応できるのかよ!？」

裕

「出来るわ」

カ

「……マジで？」

タ

「……（紅茶を煎れている最中）」

ア

「ほら、さっさと座りなさい」

す

「そうだよ？」

ヴ

「カナン君。タカトの煎れてくれるお茶、美味しいんだよ」

裕

「あ、私も皆と同じでいいわ」

タ

「……（コクコク）」

カ

「う、じ、じゃあ」

ア

「はぁ〜お茶、美味しいわね〜」

す

「道場内にテーブル設置してるから違和感が少しあるけどね」

カ

「ち、ちよっとか？」

タ

「……」

ヴ

「そう言えば、タカト。さっきから何で無言なの……?」
裕

「そう言えば、そうよね?」

タ

「……（スラスラスラ、と紙に筆を走らせる）」

カ

「ん? ええっと何々?」

この道場じゃあ一切の発言を許可されてないんでな?

ヴ

「そうなんだ?」

「なんでだろ……?」

タ

「……」

知らんな、作者に聞いてくれ。

ア

「……書くスピード速いわね。アンタ……」

す

「特殊能力だね?」

カ

「そんな特殊能力、ありなのか……」

タ

「……」

それより、アリサ殿?
お茶菓子を持って来た。

ヴ

「あ、これ♪」

裕

「確か、クイニーアマンだっけ？」

ア

「作品内で誰も食べれて無い、これを食べれる……これが道場内の特権ね♪」

す

「んっ美味いねっ♪」

ヴ

「本当♪タカトのお菓子は美味しいから好きっ♪」

裕

「本当、アンタ甘いのが好きね。いや、美味しいけど……。カナン。アンタは食べないの？」

カ

「……知ってるだろ？俺、甘いのが苦手なんだよ」

タ

「……」

裕

「ん？何？この封筒？、て……こ、コレは……！？」

ヴ

「何々っ？、て。あ……」

カ

「どうしたんだ？……て、何っ！？」

タ

「……………」

K D G 入団志願願

カ

「な、ななな何、で……？」

タ

「……」

聞きたいか？

カ

「う、何か聞いたら後戻りがきかなさそうな……」

ア

「てか、もうきかないでしょ？」

す

「タカト君、頑固そうだもんね……」

タ

「……」

いくら、平行世界のヴィヴィオとは言え、弟子は弟子。
悪い虫は放っては置けなくてな？

カ

「………」

ヴ

「カナン君？カナン君……」

裕

「フ、フフフのフ。……やったわ。ついに最強キャラをK D G クラ
ブはゲットしたわよ！？」

ア

「あ……。カナン。ご愁傷様」

す

「カナン君？頑張ってね？」

カ

「燃え尽きたよ……今度こそ間違いなく。真っ〇にな……」

シ

「う……!」

カ

「シオン! 目が覚めたのか! いいタイミング……」

ーズドガアっ!ー

シ

「く……ふう……」

タ

「……」

これで、邪魔者はナシだ

カ

「シオ……ン!」

ア

「見事ね。寝転んでいるシオンの鳩尾に再び拳を叩き込むのと一緒に筆談するなんて……」

す

「凄いね……」

裕

「フフフ……観念なさい? カナン?」

カ

「く……まだだ。俺はまだ諦めない!

666! いや、伊織タカト!」

タ

「……」

ほう。来るか？

カ

「勘弁して下さい！！」

裕

「……アンタね……」

ヴ

「カナン君。そんな凄い勢いで謝らなくても……」

タ

「……」

・・・まあ、許してやらん事も無いが・・・

カ

「マジっすか！？」

裕

「な！」

ヴ

「タカトが納得するなんてカナン君凄くいい」

ア

「……やるわね」

す

「でも、何か条件があるんじゃない？」

タ

「……」

その通り、条件。飲めるか？

カ

タ

「……」

ちっ！避したか・・・

カ

「舌打ちまで筆談！？いや、その前に死ね、て！？」

タ

「……」

気のせいだ。忘れろ・・・それより、避したな？

カ

「あ……」

裕

「フ、フフフ。これはやはり決定事項だったようね……」

ヴ

「あゝカナン君。頑張ってたね？」

カ

「……うそん……」

シ

「……くっ……さつきから誰が……」

カ

「おお！やっぱりシオン。お前しか……」

「徹！」

シ

「ぐっふう……」

タ

「……」

寝てろ。

カ

「わあああ！！シオン……！！？」

ア

「完全なるシオンキラー。ね？」

す

「シオン君。大丈夫かな？」

タ

「……」

大丈夫です、我が主。

せいぜい一週間程、まともに飯が食えなくなるくらいで済むかと

ア

「……まあ、なら安心ね」

カ

「どこがだよ！致命的だろ！？」

裕

「まあ、でもこれで666のKDG入りは確定ね♪」

カ

「くっ……！！」

タ

「……」

そう言う訳だ。裕希菜殿？よろしく頼む。

ヴ

「あんまりカナン君いじめちゃ駄目だよ？タカト？」

タ

「……」

心配するな。世の中こう言う言葉がある。
生かさず、殺さず。と言うな？

カ

「もっとヒデーよ！！」

ア

「と、まあぐだぐだになりつつ今回はここまで♪ヨシユアさんオリ
キャラ召喚ありがとうございます♪
一部のボスキャラがK D Gクラブ入りしましたがよろしく願います♪」

カ

「う、うう……道場に居た中で1番ショックだよ……」

裕

「フッフ。いい戦力が手に入ったわ……」

ヴ

「裕希ちゃんもタカトに手加減させてあげてね？」

す

「タカト君が果たして手加減するかなあ……」

タ

「……」

そこは保証の限りじゃないな？

カ

「保証してくれよ！頼むから！？」

ア

「期待はしない方がいいわよ？
ではではみなさん♪」

ヴ、裕、す

「「「また、次回くく♪」」」

タ

「……」

お楽しみ、あれ

カ

「うう……生き残れるかな、俺……」

シ

「……誰か、俺助けろよ……」

第十九話「すれ違う者達」(後編)(後書き)

「久しぶりのヴィヴィオとの再開。それは、確かになのは達を笑顔にする」

「しかし、その平穏は炎に消える」

「複数体現れた感染者により街は燃えていく」

「そして、シオンの中で、三人と、666は邂逅する」

「次回、第二十話。『邂逅』」

「似て否なるが故に認める事なぞ出来ない」

第二十話「邂逅」（前書き）

「久々の再会。そして休日」

「楽しい昼下がりに」

「はでも炎の中へと消える」

「誓った思い。そして約束」

「こんな筈じゃない結果を起こさせない為に」

「魔」

「法少女リリカルなのはStS, EX。始まります」

第二十話「邂逅」

AM、13時05分。ユーノ宅

昼ご飯を食べ終え、お茶を楽しみながら談話を楽しんでいた。一同。だがそんな団欒も一つの報せと共に破られてしまった。

一同はユーノ宅の居間でくつろいでいたのだが、その居間の中央にはウィンドウが展開している。

そこに映るのは時空管理局、地上本部の官制士官と、准将だ。

はやてを始めとした、一同はその報告を聞いて顔を青ざめさせていた。

こここの近くにある、クラナガンのショッピング・モール。

そこで感染者が複数表れたとの報告に。

しかも、その数が半端では無い。

その総計12体。

それがショッピング・モールを蹂躪していたのだ。

通信と一緒に聞いていた、シオンは流石に息を飲む。

とんでも無い数だ。

それこそ、アースラ前線メンバーがフルで揃っていなくては対処が完全には出来ない。

しかも、肝心のアースラは本局だ。

前線メンバーをこちらに転送してもらうにも、時間が掛かり過ぎる。故に准将はタイミング良くクラナガンに来ているはやて達に出動要請を頼んだのだ。

《済まない。君達が休暇中だとは解っているのだが……》

「そんな……気にせんでも大丈夫ですよ。

むしろ教えて頂いてありがとうございます」

頭を下げる准将。

それにはやては済まなそうな顔をする。

感染者対策はアースラの管轄だ。

頭を下げられると申し訳なく感じてしまう。

そして、はやては一緒に来ていた。

なのは、フェイト、そしてシオンを見る。

三人ははやてに頷き返し、そしてはやても頷いた。

「では、今から八神はやて部隊長、高町なのは一等空尉、フェイト・T・ハラオウン執務官。そして、神庭シオン囑託魔導士。現場に向かいます。飛行許可をお願いします」

《ああ。……頼む!》

その一言と同時に通信が切れ、ウィンドウが閉じる。

はやては一息だけ、ため息をつく。

いつかと同じやな、と。

それは飛行場で起きた、火災。

その時はなのはとフェイトが休みで自分に会いに来てくれてたのだが。

「はやて先生」

声が掛かる。シオンだ。この中で恐らく1番感染者との戦闘経験を持つ。故に今がどれだけ危険な状態なのか、解ったのだろう。

最悪、人がまた感染する。

止めなあかん。

その思いのまま、三人に向き直る。

「……皆、通信は聞いたやろ？現状は最悪や、街中で感染者が複数。……それもかってない程の数や、時間もない。戦力も無い……でも、やるしかない」

「……」

はやての言葉に一同、黙ったまま。しかし、頷く。そう、やるしかないのだ。

二度とこんな筈じゃない、結果を生まないように。

「皆、私が聞くんはこれだけや……いけるな？」

「うん、もちろん」

「当然だよ」

「はい。いつでも」

三人の答えにはやては頷く。

そして、ユーノに、ヴィヴィオに向き直った。

「ゴメンな？ユーノ君。せっかく遊びに来たのに……」

「気にしないで大丈夫だよ。それより、四人共、気をつけてね？」

「うん。ありがとう、ユーノ君。……ヴィヴィオ、ゴメンね？ママ行かなくちゃいけなくなっちゃった」

「……うん。だいじょうぶだよ？でも……」

「うん？」

ヴィヴィオが二人の母に抱き着く。

キュツと。

それになのはもフェイトも微笑む。

「ケガしないで、かえってきてね……？」

「ヴィヴィオ……うん。大丈夫。約束するよ」

「ちゃんと帰ってくるからね？」

「ウンっ！」

二人の母にヴィヴィオは満面の笑顔で頷く。
そして、四人は玄関から出て、ユーノ宅の庭に出る。

「よし、行くよ！」

「「了解!!」」」

スタンバイ・レディ!。

「「セッーート、アップ!!」」」

スタンバイ、レディ。セットアップ!

「イクス!」

【ああ!!】

セット・レディ!

光が輝く。

そして、次の瞬間にはバリア・ジャケットに身を包む、一同がそこに揃っていた。

「「GO!!」」」

掛け声と共に一気に飛び立つ。

向かう先は炎が燃え盛り、感染者が徘徊する現実に顛れた地獄。
しかし、彼女達もまた知らなかった。

そこには、感染者以外の驚異が居る事を。

666がそこに居る事を知る筈が無かった。



クラナガンのショッピング・モール。

つい、数時間前までは何の変哲もない、休日で人が賑わう場所だった。

そんなショッピング・モールはまさしく今、地獄となっている。炎が当たりを包み、店が崩壊している。

周りには人はいない。殆どの人は救助隊の必死の救助。そして、出動した陸士部隊により、人以外のモノ……つまり、感染者達の足止めが成功し、避難が完了している。しかし、そこまで。

陸士部隊は結局の所、感染者に対抗出来ず、また火災に巻き込まれる危険もあり撤退。

今は、周辺に感染者が散らばらないように、強装結界を展開している。

元々、このショッピング・モールはかなり広大だ。

故に、その被害もせいぜい半分、といった所である。

しかし、それは十分に過ぎる被害である。

そう、JS事件からこの街を復興させてきた人々を絶望させるのは、あまりに十分だった。

結界の中を徘徊する影がある。

感染者だ。

十を越えている感染者が、結界を認識しているのか、結界に何体か向かってきているのだ。

そんな中、炎の中で幼い少女と少年が震えていた。

姉弟だろうか。二人、寄り添う様に互いを抱きしめている。その顔には汗が浮かぶ。

この火事だ。相当、熱いのだろう。

しかし、二人共。騒ぎ立てたりはしない。

いや、出来ない。

今、周りにはもっと怖い存在が居たからだ。

それは異形。

身体を黒の点に侵され、そして生きているとは思えない表情で、徘徊する化け物。

それに対する恐怖で二人共騒がなかったのだ。

二人の互いを抱く力が強くなる。

足音。

巨大な足音が近づいてきているのだ。

ゆっくりと、ゆっくりと。

息すらも殺して、異形が通り過ぎるのを待つ。

近付いて、近付いて。

しかし、気付かなかったのか、関心が無かったのか。

そのまま通り過ぎる。

それに漸く、手から力が抜け。

―異形の首が180度回転し、二人を見ていた―

凍りついた。

その視線にさらされて。二人は凍りついた。異形は構わない。そして、振り向き、二人に近付く、ゆっくりと。

それを恐怖で震えながら二人は見る。

声が出ない。動けない。

本能が叫んでいる。

もう、終わりだ。と。

そして、次の瞬間。

異形が咆哮し、二人に襲い掛かろうとして手を伸ばした所で。

―真っ二つになった―

「神覇、弐ノ太刀。剣牙」

その声を二人は聞く。

そして、背後に表れたのは黒ずくめの少年だった。

手に持つのは大剣。

その剣を肩に担ぎながら、少年は歩く。

「もう。大丈夫だ」

そう言い、二人の横を通り過ぎる。
その後ろからは金の髪の女性が、これまた黒ずくめで歩いて来ている。

少年は二人の横を抜ける。
そして。

「よく、頑張った」

それだけを呟き、二人の頭をそれぞれ撫でて、少年は二人の前に出た。

直後、金の髪の女性に抱きしめられる。

「フェイト先生はその二人を」

「うん。シオン。無理しないようにね？」

「大丈夫です。無理は苦手ですから。……無茶は得意ですけど」

少年は……シオンは大剣。イクスを正眼に構えながらそんな事を言う。

その姿を、その背中を。救助された少年は目に焼き付ける。
フェイトは苦笑いを一つし。

「それ、同じ意味に聞こえるよ？」

「いや。意味はまったく違いますよ」

シオンが笑う。

フェイトは二人を抱え上げ、空に浮かぶ。
二人を安全な所に連れていく為だ。

「どんな風に違うの？」

「簡単です」

そこで異形が・・・感染者は再生を完了する。

咆哮が辺りに響いた。

少年はシオンの背中を見ながら、最後の言葉を聞いた。

「無理は嫌々やるものですけど、無茶は好んでやるものですよ」

「……成る程、ね」

シオンの言葉にフェイトは微笑む。

瞬間、感染者と、シオンは互いに駆け。

フェイトは空高く舞い上がった。

蓮獄の炎の中で、感染者達との戦いの幕が上がった。



接近する感染者をシオンは駆けながらひたすら、冷静に見る。

怒りが過ぎて、逆にシオンの頭は澄み渡っていた。

右、いきなり感染者の腕が伸びてシオンに突っ込む。

シオンはそれに欠片ほども驚かない。

驚異にすら感じない。

「壺ノ太刀。絶影」

「斬」

一刀。ただ、それを持って、感染者の腕を叩き斬る。
感染者はその勢いのまま後退しようとして、しかし。間に合わない。

「絶影」

―斬断―

瞬動をもってシオンは斬撃を放つ。
一瞬の間を置いて、首が落ちた。
そのまま、シオンは止まらない。
振り向き様に更なる一撃を放つ！

「参ノ太刀。双牙！」

―撃！―

斬断。

二条の斬線が感染者を三枚に下ろした。
そのまま感染者は塵へと還る。

「次だ」

一体目撃破。

そのままシオンは空へと上がる。
空にはなのはがいる。

ショート・バスターを連射し、三体の感染者を釘付けにしている。
そして響くは朗々たる永唱。
はやてだ。

手にある夜天の書のページが次々とめくられる。

「……遠き地にて、闇に沈め……」

「はやてちゃん！」

なのはからの声にはやては力強く頷く。
永唱完了！

「広域魔法。行くよ！
デアボリック・エミッション！！」

はやてがアームド・デバイス。シュベルト・クロイツを感染者に振り下ろす。

瞬間。

感染者、三体の中央の空間が軋んだ。

―煌―

空間攻撃。

漆黒の球が三体の中央を基点として一気に三体を飲み込み、そして消える。

しかし、感染者三体は未だ再生を行おうとする。

―そんな隙を逃す筈が無かった。

「ディバイーン・バスターーア！」

―閃！―

なのはが最も得意とする砲撃魔法だ。

感染者三体を巻き込んで爆裂。

二体が塵へと還る。

一体は耐え。無理やり上半身のみ状態で再生を行おうとして、そのまま一刀の元に臥された。

「逃がすかよ」

シオンだ。

首を断たれ。今度こそ、感染者は塵へと還った。
これで四体。

「残り八体、ですね」

「うん。まだ多いね」

「この火災もはよ消したいんやけど……」

三人は一旦合流する。

ちやうどフェイトも戻って来た。

「感染者は、それぞれ散らばってる、ね」

「はやてちゃん。どうする？」

「ーそやね、一個。考えてる事、あるんやけど。結界の中の救助が
完全に完了せな……」

《艦長！良いニュースと悪いニュースがあるんですが！》

はやての元に通信が入る。

シャーリーだ。

今。アースラはグリフィスの指揮でミッドに向かっている。

地上本部の許可を貰い、アースラ官制ではやて達は戦っていた。ー
主理由は、はやてのサポートな為である。

はやては細かい制御、狙いをつける事が苦手だ。

故に今、はやてのシュベルト・クロイツはアースラの方で、照準の
サポートを行っていた。

その為、アースラの方で官制を行っているのである。

「なら、まずは良いニュースから聞こか」

《はい。広域スキャンの結果。今、結界展開区域の救助。完全に完

了したそうです!」

その報告に、はやての顔が若干綻ぶ。
これで消火、敵殲滅を同時に行える策が使える。

《で、悪い報告の方なんですけどー》

「うん。何があったん？」

はやての問いにシャーリーの声は若干硬くなりながらもそれを告げる。

《……先ほど、転移反応を確認しました。……結界展開完了区域に十体。オーガ種の感染者が転移されました》

「……」

一同、絶句する。

一体何があったと言うのか。

異常発生とかそんな問題では無い。

はやては頬を一筋、汗が流れていくのを自覚する。
だが。

「シャーリー。転移してきた感染者の現在位置を」
《了解です。すぐに送ります》

程なくして、はやての前にウィンドウが展開。
だが、その結果にはやての表情が少し陰る。

「この2体はほっとくしかない、ね……」

「?はやて先生?」

「ん?どうしたん?シオン君」

「え、と。策。て何なのかな」と

シオンの疑問にはやても苦笑いを浮かべる。
そう言えば、まだ伝えていなかった。なのは、フェイトも不思議そうな顔をしている。

「うん、あんな？」

そして、はやては自分の考えを一同に伝える。
それに、なのは、フェイトを始めとした一同は納得。
シオンは冷や汗を流して驚いた。

「……はやて先生もトンデモ人間だったん、て。わぁ！」

「……シオン君？次、そんな事聞こえたら殲滅砲撃叩き込むからな」
♪

失礼な事をほざくシオンにシュベルト・クロイツでぶん殴ろうとして、しかし避けられる。

シオンははやての台詞に首を縦に激し振り、頷いた。
なのは、フェイトは、'も'の部分が気にはなったがあえて触れない方向でいく。・・・後でゆっくりと、お話し、する時間はあるのだし。

「……この2体が結界に近すぎるのが問題なんですよね？……何とかなるかもしれません」

「ホンマに？」

シオンがニヤリと笑う。
そして、イクスを振り。肩に乗せる。

「俺の精霊融合以外の、切り札、忘れました？」
「あ……！」

シオンのその一言で三人は思い出した。
もう一つの切り札を。

「成る程、な……。よし、なら問題は無くなるな。条件はクリアーや。」

作戦、開始といこうか！」

「「了解！」」

一同、頷き、そして。それぞれバラバラに飛んでいった。



シオンは結界の中を横断して行く。

目指すのは結界の端である。

隊長三人娘はシオンとは真逆の方向へと飛んでいた。

互いに結界の両端につくまで時間がある。

その中で、シオンは自分の親指に口を当てる。

皮膚を噛み、切る。

血が流れた。

溢れた血ごとイクスを握り込む。

同時、展開するのは、カラバの象徴。

そのままシオンは永唱を開始する。

「契約の元。我が名、我が血を持って。

今、汝の顕現を求めん。

汝、世界をたゆたう者

汝、世界に遍く意思を広げる者。

汝、常に我と共に在る隣人

今、此処に汝を召喚する。

汝が枝属は、水、

汝が柱名は、ウンディーネ、」

そこまで永唱を完了した所で一旦永唱停止。
保存する。

そして、もう一つの準備を開始する。

「セレクト・ウィズダム」

トランスファー。

ウィズダム・フォームへと戦技変換

結界の端が見えた。

そのまま突き進み、そして、結界端に到着。

結界の境界を背にする。

シオンははやてに通信をする。

「はやて先生。こっちは準備完了です！」

《了解や！こっちはもうちょい掛かる。待ってな！》

「了解！」

通信を終え。

シオンは前へと目を向ける。

準備は完了。

後は待つだけだ。

はやてはその頃、ある魔法を永唱しながらシオンとは逆の方に突き進んでいた。

到着まで後少し。

何かを感じ取ったのか、はやての前には感染者が2体程、襲い掛かっていた。

迎撃しているのは、親友。

なのはとフェイトだ。

なのはのレイジング・ハートからカートリッジが射出される。

カートリッジ・ロード。

アクセル・シューター。

「シューート！」

ー射！ー

放たれる光条は総計30。

迷いなく。精密なコントロールでもって放たれたシューターは2体の感染者へと叩き込まれ、さらに爆砕。

感染者は身体の所々にダメージを負いながら、それでもとはやてへと向かう。

だが、その前に立ち塞がるは雷の閃光。

フェイトだ。

「バルデッシュ」

イエッサ。ロード、カートリッジ。ハーケンフォーム。

フェイトが手に持つ、インテリジェント・デバイス。バルデッシュが変型。

斧の部分が上にスライドし、その刃を縦にズラす。

そこから生まれるのは雷の刃。

大鎌となったバルデッシュを横に構える。

ソニック・ムーブ。

瞬間。フェイトの姿が消えた。

次に現れたのは感染者の真っ正面。

―砕―

孤を描いて振るわれた鎌が感染者を逆袈裟に薙ぐ。

もう片方の感染者もフェイトに気付き、手を伸ばすが、そこには既にフェイトはいない。

―斬―

フェイトが感染者の後ろに背を向けた状態で現れた。

そして、同時に感染者が上下にズレる。

フェイトがすれ違い様に真っ二つにしたのだ。

そして、駄目押しとばかりに奮われる。

アクセル・シューター。

光芒が輝き、感染者が悲鳴をあげる。

フェイトは再度、ソニック・ムーブを使用して、後退。

カートリッジ、ロード。

「ハーケン・セイバー！」

ハーケン・セイバー。ゲット、セット。

大鎌を振りかぶる。

裂帛の気合いと共に振り下ろされた。

「ハアっっ!!」

―裂!―

刃が放たれる。

回転を伴ったその一撃は二体とも断ち切る。

そして更に桜色の砲撃。

ディバイン・バスターが 叩き込まれ。

2体の感染者は塵へと消えた。

「よし!」

それを見て、はやては結界の端へと飛行する。

なのは、フェイトもはやてに追従していく。

今度こそは妨害無く、結界の端に辿り着いた。

同時に永唱も完了する。

なのは、フェイトははやての前に留まる。

そして、広域防御魔法を展開する。

「シオン君! こっちも準備は完了や!!」

《了解! こちらもいつでもいけます!》

シオンの通信にはやては頷き、なのは。フェイトを見る。二人は同時に頷いた。

「皆! 作戦開始。行くよー!」

《「了解!」》

はやての号令に一同は一言で応えた。

はやての通信を聞いたシオンは、イクスを掲げ。
そして最後の永唱を完了する。

「来たれ！ 汝、水の精霊。’ ウンディーネ，！！」

精霊召喚。

顕れたのは水の精霊、ウンディーネだ。

水で構成された。しかし、あまりにも美しい人魚姫。

召喚され、シオンにウィンクしながら微笑む。

シオンもまた強く頷き。そして、呼ぶ。自らの相棒の名を。

「イクス！！」

【了解。イクスカリバー

フル：バレル
全兵装

フル：オープン
全開放

フル：ドライブ
超過駆動

スタート
開始】

瞬間。

ウンディーネが像をブラした。

イクスへと吸い込まれていく。

精霊と所有デバイスの融合により、最強クラスの一撃を放てるスキル。
ル。

故にこのスキルの名をこう呼ぶ。

その名はー

「精霊・装填!!!」

スピリット・ローディング!!

これこそが精霊召喚をもって使えるスキル。

融合とは違い、一撃。もしくは武器強化にしか使えないスキルだが。その反動の低さといい

使い勝手は遥かに上であった。

シオンが精霊装填を完了したイクスを頭上に掲げる。

そして、使うは超広域防御魔法。

イクスが煌めく。

煌々と、その一撃が放たれる事を待ち侘びるが如く。

そして、シオンはイクスを振り下ろす。

同時にその魔法が発動された。

「神覇・八ノ太刀、奥義!玄武!!!!」

フル・ドライブ!フル・インパクト!!

シオンが掲げるイクスを中心として、亀の甲羅の形をした光の防御陣が展開していく。

広がる。広がる。

その大きさは結界の境界線の半分程にもなった。

「イクス!シールド、ビット、展開!!!」

【了解】

イクスが応えると同時に防御陣が弾け、分解する。

シールド・ビットが向かうのは結界の全境界線。

程なくして、全てのシールド・ビットが配置完了する。

「はやて先生!」

《うん!!! 行くよー!!》

そして、結界の中心で光が生まれた。

《はやて先生!!》

「うん!!! 行くよー!!」

シオンの玄武が展開完了した事を知り、はやてもシュベルト・クロイツを振り上げる。

はやての魔力が氷のスクウェアと成る。

その数は二十。

かつての空港火災の時よりも遥かに多い数を制御する。

その魔法は凍結能力を有する着弾広域魔法。

はやての狙いはこの結界の中、全て、だ。

殲滅と消火。同時に行う魔法を持って、一気にこの地獄を終わらせる。

それがはやての策であった。

はやては叫ぶ。その策のトリをなす、最後の魔法を!

「アーテム・デス・アイセス!」

はやての叫びに応え、スクウェアは結界の中心に顕れ。そして、地面へと振り落ちる。

ー音が消えたー

着弾した場所から一気に結界を凍結していく。

凍結領域は結界を超えようとするが、シオンの玄武により。境界線上から凍結領域は進まない。

シヨッピング・モールも、そして感染者達も、丸ごと凍りついた。それは一つの世界。

氷結した世界だ。

「よし、うまくいった。ね」

息も絶え絶えになりながらもはやては満面の笑顔を浮かべる。そして、シャーリーからの通信が氷の世界で響く。

《動体反応、ありません！やりました〜！》

その通信に、漸く三人は息をホッと着いた。

ー何も終わってはいないのにー



ー軋ー

そんな音がなのは達の耳に。

そして反対側にいるシオンの耳に届いた。

《ーーえ？うそ……》

シャーリーが通信越しに呆然と呟く。

それを聞きながら、なのは達は再び、気を引き締めた。

音が響いた先には黒の点が溢れていた。

それは感染者の氷の彫像だった。

溢れる。

溢れる。

瞬間。感染者が爆裂した。

「「「ーっ!」」」

瞬間でその感染者を中心とした一角の凍結が碎かれ、そして再び炎が走る。

地獄が再現された。

「あれは……っ!」

「感染、者?」

「あれが、か?」

三者三様に眩く。

そこには精霊、イフリートを彷彿とさせる炎の巨人が立っていた。

シオンは見る、今、生み出た存在を。

それは氷の巨人。

恐らくははやての魔法を、因子、が吸収して、奇妙な進化を遂げたのだろう。

未だ第二段階に到達していないのは救いだが。

瞬間。

氷の感染者が消えた。

「――っ！」

背中に走る悪寒。

それを感じ、直感で感じるままシオンはただ左後ろに斬撃を放つ。

――緊――

斬撃が弾かれた。

そこに居るのは確認するまでも無い。

感染者、だ。

シオンは憎々し気に感染者を睨む。

「瞬動、だと……っ！」

「KOUuuuu！」

吠える、感染者が。

今、感染者がしてみせたのは間違い無く自分の瞬動だった。

「……さっきの戦いで取り込んだのか。――だが」

シオンが浮かべるのは、不敵。

そして笑いだ。

「猿まねで俺に勝てるつもりじゃあ、ねえよな？」

シオンの問い。それに応えるが如く、感染者は咆哮を上げる。
そして互いに瞬動を発動。

剣と感染者の腕がぶつかりあった。

炎の大地。

その上空でなのはレイジング・ハートを構える。
カートリッジをロード。

「シューート！」

放たれるのはアクセル・シューターだ。
向かう先は炎の巨人。

感染者、だ。

シューターが着弾、しない。
感染者の姿が消える。

「っー！また！」

そして現れるのはなのはの頭上だ。
振るわれるのは炎の腕。
しかし、高速機動はなのはも出来る。

フラッシュ・ムーブ

レイジング・ハートの声と共になのはの姿が消える。
空を切る感染者の腕。
その隙を逃さない。

ソニック・ムーブ。

腕が過ぎ去った位置にフェイトが現れる。
振るうのはハーケン・フォームのバルデッシュだ。

「斬」

上段から振るわれたた一撃は感染者の腕を切り裂く。
瞬間で再生した。

「――っ！」

ソニック・ムーブで後退する。

しかし、感染者の一撃はフェイトの予想を越えていた。
まるで鞭のように形状を変化してフェイトへと向かう。

ソニック・ムーブの停止点を狙われた一撃。

いかな最速を誇るフェイトでも、これは回避不可能だった。

プロテクション。

バルデッシュが、主を守る為に自律でプロテクションを発動。
炎となった腕を防御する。

しかし、堪える事が出来ない。

そのまま地面へとたたき付けられた。

マスター。

「う……大丈夫、だよ。防御、ありがとうね。バルデッシュ」
いえ……っ！

主従の会話すら許されない。

感染者がフェイト目掛けて落下してくる。

フェイトも立ち上がろうとするが、叩き付けられた衝撃のせいか、身体が上手く動かない。

「フェイトちゃん！」
フラッシュ・ムーブ

なのはも感染者を追い掛ける。
ショート・バスターを放ち。感染者の落下コースを逸らそうとするも、上手くいかない。

「く……っ！」

「フェイトちゃん!!」

「私に任せてや!!」

スレイプニルを使用してはやてが感染者の眼前に踊り出る。
振るう右の手には高密度の魔力塊があった。

「G A a a a!」

「シュヴァルツェ・ヴィルクングっ！」

構わず突進する感染者の顔面にその一撃が着弾する。

魔力が炸裂して、感染者共々、はやては吹き飛ぶ。

元来はやては近接戦闘が苦手だ。

基本は足を止めて、展開射出がその戦い方の基本である。

だが、はやてには蒐集能力、と言うレアスキルがある。

その中にも近接戦闘魔法は介在するのだ。……使った事は一度も無いが。

吹き飛んだはやてを復帰したフェイトがソニック・ムーブで追い付き、抱き留める。

はやては右の肩を左手で抑えていた。

普段使わない全力パンチそして一撃の反動。それにより、はやて自身の身体を痛めてしまったのだ。

「ありがとう、はやて。……大丈夫？」

「うん。何とか、な。それよりなのはちゃんを援護せな……」

二人が向ける視線の先にはなのはがいる。

高速機動を繰り返す感染者に的確に射撃を当てるも、しかし再生能力の方が早く。すぐに再生する。

瞬動。

感染者が再び、なのはの眼前に現れる。

右の手が再度鞭のように振るわれる。

それになのはレイジング・ハートの先端に向けた。

ラウンド・シールド。

受け止める。

シールドは感染者の腕の進行を許さない。

そのままバリア・バーストを行い、距離を取ろうとして。

―爆裂した―

今、受け止めていた、感染者の腕が、だ。

「きゃっ……!？」

爆発自体はシールドで防げたものの至近距離の爆発になのはが体を崩す。

感染者は右の腕を無くしながら今度は左の腕を振るう。

「なのはっ!!」

「なのはちゃんっ!!」

フェイトとはやても叫ぶ。

しかし、間に合わない、防御も回避も。

なのはは来る衝撃を覚悟して。

その一言を聞いた。

トリガー・セット。

そして、なのはは自分の真横を過ぎて疾る背中を見た。

その背中の主は右の拳を振るう。

拳に巻くは台風に匹敵する風。

感染者の奮う左手と風巻く拳がぶつかる。

瞬間。

今度こそなのはは肉声を聞いた。

「天破疾風」

ー砕ー

感染者の左手は寸秒も持たずに砕かれた。

その勢いのまま感染者は吹き飛んでいく。

背中の主は、瞬間。

視界から消えた。

ふと気付けばなのはは抱え上げられている。

俗に言うお姫様抱っこだ。

普通ならば恥ずかしいがって顔を赤く染めるであろうなのはも、しかし。

驚愕に絶句する。

何で？

なのはの頭を過ぎるのはその疑問だ。

今、自分を抱えるこの男が自分を助ける筈が、無い。

敵なのだ。なのはからすれば、彼は。

アリサを意識不明にして、クロノを殺しかけた人。

憎むべき人。

「嘘、やろ……？」

「何で……？」

なのはを助けようとして、接近していたはやてもフェイトも呆然と
呟く。

それを聞きながら、なのはは彼の、コードネームでは無い。本名を
呟く。

「伊織、タカト……」

666そう呼ばれたなのは達の仇敵は、しかし。

その名に視線をただちらりとしか送らなかった。

邂逅。

こうして、腐れ縁とも言える。この青年と三人は再び邂逅した。

（第二十一話に続く）



ア

「はーい♪またいい所で終わりやがって!と言われそんな空気をあえてブチ破るアリサ道場です♪」

道場主は相変わらぬ私の。アリサです♪」

す

「弟子のすずかです♪」

シ

「司会の神庭シオンです……うう……まだ痛い」

ア

「出張道場で存分に痛め付けられたようね?おもしろかったわよ?」

シ

「面白かったで片付けないで下さい!くっそう。タカ兄いめ……」

す

「でも、向こうじゃ、いろいろタカト君話してたよね」

シ

「あー。こっちじゃ、筆談ですしね」

ア

「まあ、それはそれとして。今回はオリキャラ召喚は無し?」

シ

「今回は無いですね。」

「変わりにEXのキャラの詳しいプロフィールを載せるとの事です」

す

「そうなんだ?このお話、伏線も相俟って。まともにプロフィール

紹介しなかったもんね……」

シ

「そうなんですよね……作者め……」

ア

「ほらほら、黒い炎を出さない。早く出しなさい?」

シ

「黒い炎、て……。まあ。いいか。ではこれがEXオリキャラのプロフィールです♪どうぞ」

神庭紫苑 かんばしおん

年齢／17歳。

誕生日／10月20日。

利き腕／両利き（元は左）

出身／第97管理外世界（現地惑星名称

「地球」）極東地区日本・出雲

所属／時空管理局

役職／囑託魔導士

趣味／絵を描く事（人物画）

好きな物／タカトの料理。

嫌いな物／伊織タカト。感染者。

シ

「俺はこんな感じですね♪」

ア

「……いや、一番知りたい所とか全然解らないんだけど……？」

シ

「そこら辺は秘密です♪」

す

「適当だね……」

「シャラップ、す。では、次はタカ兄いのプロフィールです♪」

伊織天斗 いおりたかと

年齢／21歳

誕生日／4月12日

利き腕／右利き

出身／不明（「地球」の出身と、言う以外は何もわかっていない）

所属／フリー

役職／無し。

趣味／家事全般（特に料理）

好きな物／????

嫌いな物／????

シ

「こんな感じになってます♪」

ア

「何も解らないわよ!？」

す

「不明とか？が多過ぎだよ？」

シ

「これはボスキャラの宿命です。特に最後の二つは問題有りすぎな
んで……」

ア

「……仕方ないわね。じゃあ次に行くわよ!」

シ

「了解です♪最後はトウヤ兄いです♪」

かのうとうや
叶統夜

年齢／22歳

誕生日／6月25日

利き腕／左利き

出身／第97管理外世界。

「地球」欧州地区バチカン。

所属／グノーシス

役職／位階第

「一位」（管理局だと

「元帥」クラス）

趣味／ピアノ

好きな物／恋人ユウオ・A・アタナシア、（セクハラ含む）兄弟弄

り。

嫌いな物／老人（一部のみ）

シ

「こんな感じです♪」

ア

「解ったような。解らなかったような」

す

「この人も謎が多いよね？」

シ

「では、今回のお話ですが、戦いオンリーですね……」

ア

「今までなかった分まとめて来たみたいな感じね」

す

「シオン君が最近にしては、珍しい、く活躍してるよね？」

シ

「……た、確かに最近は影が薄かったですけど……」

ア

「アンタはいいわよ……私達地の文でたまに名前が出るだけよ？」

す

「私に至っては名前も出ないし……」

ア、す、シ

「「「ハア~~~~」」」

シ

「ま、ぐだぐだになりつつ今回はここまで♪

ヨシユアさん。出張道場本当、面白かったです♪

バンバン道場出張しますんで一つよろしくお願いします♪」

ア

「私達も祐希菜やヴィヴィオ。カナンと遊びたいものだけどね〜」
す

「機会があったらまたここに召喚お願いしよう？」

ア

「そうね♪」

シ

「続いて、四半期評価めっちゃ高くて作者驚きです♪本当いつもありがとうございます♪」

感謝感謝です♪

いつでも評価、感想待ってます♪」

ア

「流石にあの得点はびっくりしたわ……」

す

「そうだね〜」

シ

「更にもう一丁♪」

今回プロフィールなんて出しましたが。

まだ何か知りたい、て方はバンバン質問して下さい♪待ってますよ

〜♪」

ア

「道場で質問には答えるからよろしくね♪」

す

「……ところでコレパクリなんじゃあ……」

シ

「確かに……」

ア

「作者が後で謝りに行くそうよ」

シ、す

「「当然ですね（だね）」

シ

「と、言う訳で今回はこれで♪ではでは♪」

ア、す

「「また次回〜」」

第二十話「邂逅」（後書き）

「炎の中での戦いは熾烈を極めて」

「その炎の中でな

のは達はタカトと向き合う」

「それは問い掛け、力を行使しない、

もう一つの戦い」

「語られるタカトの目的に彼女

達は……」

「そして、ただ一人で感染者と戦うシオンに変化

が訪れる」

「次回第二十一話

『問い、そして答

え』」「それは答えにならない答え」

第二十一話「問い、そして答え」（前書き）

「その人と最初にあった時、私は怒った。アリサちゃんを意識不明にされて、シオン君を傷付けられて」

「でも、ずっと思ってた。家族を裏切ってまで、憎まれてまで、彼は何をしようとしているのだろうか?、と」

「そして思い出すのはあの瞳。孤独も哀しみも全部、受け入れ、てしまったあの瞳」

「それは強くて、それと同じくらい弱い」

「だから私は戸惑う。彼との最初の会話に」

「魔法少女リリカルなのは S t S , E X 。 始まります」

第二十一話「問い、そして答え」

炎の中、高町なのは未だ自分を抱えている男を見る。

男の名は伊織タカト。

彼女にとってみれば仇敵である。

初めて会った時はただ救われた。

次に会った時は親友を意識不明にされ、教え子とも呼べる存在を痛めつけられ、自分は一顧だにされなかった。

三度目は戦いの中、視線を交わし。しかし、言葉は交わさず戦った。そして、今。

伊織タカトはなのはを、助けた。

有り得ない。

そうなのはは思う。

しかし、これは現実だ。

お姫様抱っこをされ、見上げる先の顔はなのはを見ていない。見るのはただ一つ。

先程、吹き飛ばした敵。感染者が吹っ飛ばされた場所だ。

瞬間。いきなりタカトは動く。

なのはを抱えたまま前に重心を倒す。

同時に繰り出されたのは後ろへの直蹴り。

なのはは思わず、タカトに掴まり、肩越しにその光景を見る。

―撃！―

タカトの後ろには先程吹き飛んだ感染者がいた。

その顔には足が・・・タカトが叩き込んだ、足がある。

瞬動。

それを持って、タカトの後ろに回り込んだのだろう。

しかし、タカトには意味を成さなかった。

現れる場所に蹴りを叩き込む事でカウンター気味に蹴りが入ったのだろう。

さらにタカトはそこから身を捻る。

同時に魔力放出。

まるで鉄骨が叩き付けられるが如き音が響く。

顔面に蹴りが突き刺さったままの感染者は再度吹き飛び、瓦礫に埋もれる事となった。

「……すごい……」

思わずなのはは呟く。

この男の出鱈目さはよく知っている積もりだったのだが、いつ見ても見事としか言いようがない。

感染者の行動や高速機動の見切り。

そして、身体の運用方。

どれも自分の身体を完全にコントロールしなければ出来ない芸当だ。

「……呟くのは結構だが……」

「え？」

思わずなのははタカトを見て聞き返してしまった。

タカトはなのはを見ている。

信じられなかった。

この男に、話し掛けられている、と、言う事が。

そんななのはの驚愕にタカトは構わない。

「さっさと降りてくれるか？……とっても邪魔だ」

なのはを未だ抱えながらそんな事を言ってきた。思わずなのはの頭に血が上る。

「な……！勝手に抱えた貴方がそんな事言うの！？」

「……どこぞの誰かが自由落下なんて気軽な事やってなければそんな事をせんでもすんだ訳なんだが？」

「その原因も貴方が出て来たから驚いたの！」

「それこそ俺の知った事じゃあない」

「勝手過ぎだよ……っ！」

「知らんと言ってる。……さっさと下りろ」

タカトはどこまでも取り合わない。

なのはは懔然としながらタカトの腕から下りた。

タカトはそのままなのはの前に出る。

「……成る程。しぶとい」

「え……？」

瞬間。タカトは右の肘を虚空に打ち込む。

そこに感染者が再度顕れた。

腹部に打ち込まれた肘に感染者が前のめりになる。

そこからさらに顎をタカトは左の拳で打ち抜く。

―徹―

快音が響き。感染者は盛大に上空へと飛ぶ。

―まだタカトは止まらない。

回転しながら後ろ回し蹴りを感染者の腹に撃ち放つ。

「天破紅蓮」

「爆！」

感染者の腹で起きた爆発がタカトを二歩分だけ。
感染者を瓦礫へと弾き飛ばした。

「……その、女」

そのままの体勢でタカトはなのはを呼ぶ。
・・・失礼極まりない呼び方で。
それになのははタカトを睨む。

「……なのは、だよ」

「ん？」

「高町なのは。……ちゃんとそう呼んでよ」

「……高町？」

なのはの姓の部分に引っ掛かるものがあったのか。
タカトは一度姓のみを呼ぶ。
そして、

「偶然か」と呟くと。タカトはなのはへと向き直る。

「高町なのは、か。戦場に合う名とは思えんが……ふむ。良い名だな。君に良く、似合ってる」

そう言いながらタカトは少し微笑んだ。
それが、高町なのはと伊織タカト。
まったく対極の存在の最初の会話であった。



タカトはそのままなのはに背を向けた。

・・・敵であるはずの彼女に。

なのはは、さっきの件も含めて問おうとするが、出来なかった。
瞬動。

再び、炎の巨人。感染者が現れたのだ。

今度はカウンターを恐れてか、タカトの前方5m程に。

「なのはちゃん！」

「なのは！」

そこで、離れていた。八神はやたとフェイト・T・ハラオウンがなのはの横に合流した。

「なのは……大丈夫？」

「うん。大丈夫だよ」

「そか。なら、よかったわ。……で」

なのはの安否が確認出来て、二人はホッとし。

そして、そのまま前方へと目を向けた。

そこには背を向け続ける伊織タカトが居る。

そこで、気付いた。

今、タカトは世界を軋ませるような威圧感が無い。

あの圧倒的なまでの気配が嘘のように消え去っている。

そこにあるのはただ一つ。

風のような飄々とした気配だけだ。

「……666」

フエイトが絞り出すように声を挙げる。

そこにあるのは激情、だ。

義兄、クロノを殺されかけ、親友アリサを意識不明にした忌むべき
仇敵である。

いきなり斬りかからないだけマシとも言えた。

はやてもシュベルト・クロイツを握る手に力が籠る。

その目にはありありと警戒が浮かんでる。

だが、肝心のタカトはその二つの視線を一顧だにしない。

彼が見るのはただ一つ。

感染者だけだ。

突如、感染者の口が開く。その中に灯るのは光。

「っ！散って！」

なのはが叫ぶと同時に、弾けるように一同は離れる。

・・・否。

ただ一人。一步も離れない人間がいた。

タカトだ。

「何してるの！」

思わずなのはが叫ぶ。

しかし、タカトは無視。

瞬間。

光が放たれた。炎の砲撃だ。

迷わず、真っ直ぐにタカトへと向かう。

それに対するタカトの動きはただ一つ。

右の拳を持ち上げた。

左の足で一步を踏み込んだ。

そう、その動作は拳を放つ動作。

そして、響くは鍵となる言葉。

トリガー・セット。

「天破疾風」

ー轟ー

風巻く拳が放たれる。

そして、砲撃と衝突。

砲撃は微塵も保てずにその一撃で消し飛ばされた。

ータカトは止まらない。

三人の視界からタカトが消える。

「天破紅蓮」

声が響いた。

同時に起きるのは爆発だ。

タカトが再び、感染者に天破紅蓮を叩き込んだのだ。

・・・視認すらも不可能な速度をもって、感染者の懷に飛び込んで。
吹き飛ぶ感染者。

それに、タカトはさらに追従する。

「天破紅蓮」

爆発。追従する。

「天破紅蓮」

爆発。ーまだ止まらない。

「天破紅蓮」

爆発。最後の一撃で、感染者は炎を残して、ばらばらに散る。そのまま瓦礫へと叩き込まれた。

タカトは蹴りの動作で残心し。

手や足をプラプラと動かす。

―まるで、久々に手足を動かすかのような動作だ。

瞬間。感染者が跳ね起きた。

再生しつつ、怒りの視線をタカトに叩き付ける。

・・・タカトは目も向けない。

まだ自分の身体のチェックをしている。

「G A B A a a a !」

咆哮。

衝撃を伴う程のそれを叫び。

感染者は再び、タカトへと向かう。

タカトは感染者に対してたった一言を告げた。

「……飽きた」

そして、左手を頭上に掲げる。
なのは達も吊られて見上げた。

―声を失った―

そこにあるのは水の塊。
その量。

いかなる量なのか、頭上いっぱい広がっている。

それに気付かなかった事。

そして、そんなものを維持したまま平然と戦っていたタカトに、絶句する。

しかし、感染者は構わない。

そのままタカトへと突っ込む。

タカトは掲げていた左手を振下ろした。

「天破水迅改式」

感染者が走る、走る。

・・・間に合わない。

「天破瀑布」

頭上の水が滝となり、感染者を襲い。

地面にたたき付けた。

そのまま滝は流れ落ちる。

感染者をその重量で潰すと同時に周りの火事ごと消火する。

・・・そのまま感染者は塵へと還った。

火事もその滝により、全て消え去る。

「……終わりだ」

振下ろしたままの左手を真横に振るい、タカトは終わりを告げた。

なのは達はただそれを茫然と見ている事しか出来なかった。



「さて……」

その声になのは達は我に帰る。

タカトの声だ。

・・・しかし、まだ違和感がある。

今のタカトはあまりに、人間、過ぎた。

今までとまるで別人。

全然違う人だと言われても恐らく信じられるだろう。

そのタカトがなのは達を見て、そのまま左へと視線を送る。

そこにフェイトがいた。

ソニック・ムーブで一気にタカトの真横に移動したのだ。

フェイトはタカトの首筋にアサルト・フォームのバルデッシュを突き付ける。

タカトはしかし、何もしない。

ただ見ているだけ。

「動かないで」

その激情を押さえ込むように低い声でフェイトは告げる。

はやてもシュベルト・クロイツをタカトに向けていた。

一瞬だけ戸惑い、しかしなのはもレイジング・ハートをタカトへと向ける。

タカトはそれに笑いを一つだけ送る。

「俺に戦う意思は無いのだな？」

「……第一級広域次元犯罪者として、貴方を逮捕します」

フェイトは聞く耳を一切持たない。

タカトはますます笑いを上げる。

フェイトはその笑いに苛立つ。

「何がおかしいの！」

「いや、済まない。どうしても笑いが止まらなくてな？」

右の目は垂れ下がったフードで解らないが、左の目は涙すら浮かべていた。

そして笑いを止めたタカトは告げる。

「お前達のあまりの脳天気さに、な」

次の瞬間。フェイトの視界は180度、回転した。

「――っ！」

回る視界でフェイトが見たのはバルデッシュの斧の部分で、掴む、タカトの指であった。

それにフェイトは理解する。

いかな方法でかは解らないが、自分は今投げ飛ばされているのだと。

ブリッツ・アクション。

フェイトの身体能力が加速される。

回転を制御して、一回転。

その動きを持って、体勢を整える。

――遅い。

――徹――

フェイトの眼前にはタカトが既に居た。
バルデッシュごと、蹴飛ばされる。

衝撃が走り。

フェイトはそのまま虚空へと吹き飛ばされる。

「フェイトちゃんっ！」

「こんのっ！」

なのは、はやてはそれぞれ叫び。

なのははアクセル・シューターを。

はやてはブラッディ・ダガーを放つ。

タカトはそれに対して両の腕を振るう。

その腕にはそれぞれ風を巻いていた。

「天破疾風」

一撃がシューターを消し去り。

「天破疾風」

更なる一撃がダガーを消し去る。

「バルデッシュ！3rdフォーム！」

イエッサ。ロード・カートリッジ。ザンバー・フォーム。

吹き飛んでいた。フェイトだが、数m程でどうにか体勢を持ち直す。

そして、ザンバーを起動。

ザンバーから雷の刃が伸びる。

その長さ、約3m。

ソニック・ムーブ！

瞬間でフェイトの姿が消える。

向かう先はシューターとダガーを叩き落としたタカトだ。間合いに入ると同時に斬撃を放つ。

しかし、タカトは、逆、に踏み込んで来た。

―斬撃の間合い。その内側に―

「っー！」

今まで行われた事さえない回避方法にフェイトは息を飲む。

既にタカトは左の手でザンバーの鰐の部分に甲を当てて、斬撃を止めている。

技後硬直。

フェイトは動けない。

タカトはそれに笑いながら右の手をフェイトの顔へと繰り出す。

もはやタカトが振るう一撃を回避も防御も出来ない。

来るべき衝撃に思わず目をつむる。

一秒、何も来ない。

二秒、まだ来ない。

三秒、ここでフェイトは片目を開ける。

そこにはニンマリと笑いながら自分の額に中指を親指に番えるタカトが居た。

「……え？」

「デコ~~~~ピン、と」

衝撃。

カッン！と額に衝撃が走った。

「あうっ！」

予想よりも遥かに弱い。

しかし、それでも確かな衝撃がフェイトの額を貫く。

タカトがデコピンを持って、フェイトの額に中指を叩き込んだのだ。

「フ、フェイトちゃん？」

「な、何や？」

なのは、はやても横に並んで、何があったか？と驚きの声を上げ。
しかし、いきなり眼前に現れたタカトに絶句させられる。

タカトはやはりニンマリと悪戯っ子の如き笑いを浮かべ、二人の額に両の中指を親指に番えている。

「へ？」

「え？」

「お前等も、と」

スコン！、と快音が鳴り。

二人の額にも中指が叩き込まれる。

「はうっ！」

「きゃっ！」

二人共、悲鳴を挙げる。

デコピンを受けた三人は、空に浮かんだまま、しゃがみ込み。額を押さえた。

ただ一人立つのはタカトのみだ。

「……さて。頭は冷えたか？」

三人を睥睨しながらタカトは告げる。
その言葉に三人共立ち上がる。・・・未だ、目尻には涙が浮かんでいたが。

「もう一度、告げるぞ？俺に戦う意思は無い。……危害を加えられん限りは、な」

「ふざけないで！」

フェイトが叫ぶ。タカトはそれに苦笑いを一つ浮かべる。

「別にふざけている訳じゃないさ……えっと、キツネ娘」
「き、キツ……っ！」

タカトのあんまりな名付けにフェイトががっくりと肩を落とす。
それを見て、はやてがぼつりと呟く。

「フェイトちゃん、キツネなら私は……？」

「む？……タヌキ娘？」

「タヌキ……ここでもそう呼ばれるんか……」

フェイト同様はやても肩を落とす。

特にはやてはしょっちゅうタヌキ呼ばわりされているのだ。
初対面でタヌキ呼ばわりはいろんな意味でショックだろう。
なのは、自分の精神的な意味での安寧の為にあって自分がどう呼ばれそうなのかは聞かない事にした。

「……フェイト・T・ハラオウンです」

「八神、はやてや……」

「む？別にキツネ娘でもタヌキ娘でも……」

「「嫌」」

フェイト、はやて。魂からの拒絶である。

タカトは

「了解」と、片手を挙げた。

「フェイト……。運命、か。そして、はやて、ね。フム。良い名だな？」

「褒めてくれて、ありがとう。……。あんま嬉しくないけどな」

名を褒めるタカトに先程のやり取りもあり、半眼ではやては睨む。

フェイトも同様であった。

タカトはその睨みを見無視し、先程の言葉を続ける。

「三度も言うのも何だが……。俺に戦闘の意思は無い。聞きたい事があるだけなんでな？」

「……。アンタは犯罪者や。それを逃せ言うんか？」

タカトの言にはやてが反論する。

当たり前だ。目の前の男は犯罪者であり、何より意識不明者を大量に出した人間だ。

ここで逃すなんて事は論外だろう。

しかし、タカトは笑いを一層、濃くする。

「……さっき証明したばかりだと思うがな？……この距離だとお前等がどうあがこうが、俺には勝てん」

「「「……っ！」」」

三人はその言に顔を強張らせて……。しかし、反論出来ない。先程、証明されてしまっているからだ。

この距離で三人掛かりであろうと、未だタカトには届かない、と言う事を。

つまり、戦おうと戦わまいと結果は同じ。タカトは三人を倒し、この場から離れるだろう。

「理解は出来たようだな？何よりだ」

「……何が目的？」

フェイトがやはり声を低くして、問う。

タカトはニヤリと笑う。

「せっかくの美人がそんなツラしてると勿体ないぞ？」

「茶化さないで！」

本題に入らず、そんな事を言うタカトにフェイトが怒鳴る。

・・・若干の気恥ずかしさもまぎわらす為に。

「まあ、いい。俺が聞きたい事はただ一つだ」

「私達がそれに答えると思うの？」

「ああ」

なのはの問い掛けにタカトはあっさりと頷く。

それに三人共、訝し気にタカトを見る。

ややあって告げた。

「俺の質問に答えてくれたら、そちらの質問にも答えよう……何でも、な」

「な……！」

交換条件。

しかし、それは彼女からすれば降って湧いたチャンスでもある。
今まで、その目的もまったく解らなかった男が自ら何にでも答える。
と言っているのだ。

これ以上のチャンスは無いだろう。

「……解った……何が聞きたいんや？」

「はやてちゃん!？」

「はやて!？」

はやてがあまりにも素直にタカトの提案を受け入れた事なのは、
フェイトは驚く。

それに、タカトは苦笑いを浮かべる。

「決断を感謝しよう。……八神はやて。では、質問しよう……?」

タカトは言を最後まで続けられなかった。
ある一点を見ると、そのまま笑う。

「……何？」

質問が来るとばかり思っていたなのは達はいきなり笑い出したタカ
トにちよつと驚く、それにタカトは笑いを一旦止めた。

「いや、済まない。……質問は後回しで構わないか？」

「……何で？」

フェイトが尋ねる。

それにタカトは肩を竦めた。

「いや、何。ちょうどシオンが戦っているのでは?……その決着を

‘見て’からでもいいだろう？」

「……シオン君？まさか！シオン君戦つとるんか！？」

タカトの言にはやてが驚き、シャーリーを呼び出す。

そして三人とタカトの前にウィンドウが展開される。

そこに映っているのは氷の巨人・・・感染者と戦うシオンであった。

「シオン君……！」

「くっ……！今すぐ援護に……！」

「行くな」

なのは、フェイトがシオンの援護に翔けようとするが、タカトがそれを止める。

「悪いが、あいつの援護には行かさん」

「なんで！」

なのはが叫ぶ。それに対するタカトの答えは一つ。

「あいつの成長が見たい。お前達と共に居る事でどれだけ成長したのかを、な。それでも行くと言うならばこの場で俺が貴様達を打倒しよう」

「……貴方は……っ！」

フェイトがタカトを睨む。その考え方に、あまりの傲慢さに。なのはもまたタカトを睨む。

「弟、なんでしょ？心配じゃないの？」

「心配？……まさかな？必要ないだろう？あいつは……」

タカトは言葉を切るとニツと笑った。

「俺の弟だぞ？」

「……………」

タカトの言に三人共絶句させられる。

そこにあるのは、信頼。タカトはシオンが負ける等とは一切考えていないのだ。

「さて……」

そしてタカトは再び、ウィンドウを眺める。

そこに移るシオンは剣尖を振るう。

「見せてくれ。シオン。お前がどこまで成長したのかを……」

その一言を三人はまるで祈りのようだと思った。



（何だ……？）

振るわれる感染者の左の氷手。

それをシオンはイクスで斬り流しながら自分に猛烈な違和感を感じていた。

不調な訳では無い。むしろ、絶好調だ。

魔力の流れは2倍3倍増しとも取れる程、淀みなく流れている。そして何より。

認識できる。

世界が。空間が。

感染者の一撃が瓦礫を吹き飛ばす。

その瓦礫がいくつ地面に落ちたのか理解出来る。

凍っていく大地。それがどのくらいの範囲か、どれ程の冷たさかを解析出来る。

あまりにも異常だ。

何より、それだけの情報を自分の頭が捌ききっている事が、何より異常だ。

右、感染者がまた腕を振り上げる。

それを大きく避けようとして。

身体が動かなかった。

（な……？）

一撃が放たれる。

しかし、シオンの身体は勝手に動く。

今のシオンは感染者の一撃を完全に把握しきれている。

放たれた一撃をミリ単位の見切りで避らす。

同時、踏み込んだ。

瞬間。シオンは――有り得ない事だが、吐いた息と吸った息が衝突するような幻覚を覚えた。

身体を動かすタイミングが今までと全然違う。

肺が激烈な痛みを訴え。

一瞬で収まる。

――斬――

一閃。

気付けば感染者の右腕を斬り落としていた。

感染者が悲鳴を挙げる。

それを冷ややかな目で見ながら、シオンは何となく理解した。

（これか……？）

胸中。そう思いながらイクスを左手で持ち直した。

先程の幻覚の後から違和感は無くなっている。頭はどこまでも澄み切っていた。

イクスを構える。

（これが、アンタが見ていた世界なのか？）

感染者が再生を完了する。

再び、瞬動に入る。

無駄だった。シオンには、感染者がどの位置に現れるか、もう、理解している、ー！

ー撃！ー

イクスを振り下ろした先に感染者は居た。

シオンから見て左だ。

そのまま感染者は吹き飛ぶ。

（ータカ兄い）

シオンは異母兄の位階に近付けた事に喜びと、そして寂しさを覚えながら、吹き飛んだ感染者へと駆けていく。

感染者は吠え、またもや左の手を掲げる。

放たれた。

それをシオンはイクスを右手に持ち替え、左手で身体を巻くように右横に回転。

一撃を避わず。

そこからシオンは前方に跳躍。

向かう先は感染者の懐だ。

地面を背にした形で、シオンは空間に足場を形成して、踏み抜く。その体勢でイクスを感染者の顎に叩き付けた。

「契約の元。我が名、我が血を持って」

一撃を叩き付けたシオンはしかし止まらない。

再度足場を形成。

右足で足場を蹴り上げ、左足で踏み込む。

体勢は低く、ただ空中に留まったままなので向かうのは感染者の胴だ。

―閃―

イクスを右から斬り戻し、感染者の胴を薙ぐ。

同時に魔力放出。

感染者はそのままさらに体を崩す。

「今、汝の顕現を求めん。

汝、世界をたゆたう者

汝、世界に遍く意思を広げる者。」

―止まらない。

追撃。

さらに逆袈裟にイクスを斬り上げる。

感染者から悲鳴が挙がった。

「汝、常に我と共に在る隣人」

シオンは止まらない。

魔力放出。それが今、完全に操作出来る。

シオンはそのまま斬撃の勢いのまま立ち上がり、そして魔力放出。螺旋を描く魔力がイクスに流れ込む。

ー轟ー

イクスが上段から感染者の頭に叩き付けられた。

その威力は頭を割るだけでは済まず。

感染者を地面に叩き付ける。

シオンは最後の一撃を放った体勢を解き地面に降り立つ。

「セレクト・ブレイズ」

トランスファー

ブレイズ・フォームへと変化。

同時に感染者が変化する。

背中から新しい上半身が、生えた、のだ。

奇怪極まる姿となった感染者をシオンは、驚かない、。

ー何故か、予測できてしまった。

新たな上半身から両の腕をシオンに叩き付けようとして・・・出来ない。

ー斬断ー

一瞬で感染者の両の腕が肩から滑り落ちる。

神覇・式の太刀。剣牙・連牙

二条のみ放たれた刃が感染者の肩を絶ち斬ったのだ。

「今、此処に汝を召喚する。

汝が枝属は、雷、

汝が柱名は、ヴォルト、」

さらにシオンは予測、いや、予知、する。

次の感染者の行動を把握する。

口が開いた。砲撃だ。

それに対するシオンの行動は右のイクスを目の前に横回転を伴いながら投げ、さらに左のイクスを投げたイクスに叩き付けながら絡め取り。再度、横に時計回りに回転。

砲撃が、放たれた。

それは正しく氷の息吹^{ブレス}

当たればたちまち凍り付くだろう。

・・・そう、当たれば。

横回転で息吹を避したシオンは息吹の余波でその身体に霜を降らせる。

・・・それだけで終わった。

回転しながら再度息吹が通り過ぎた位置に戻る。

「セレクト・ウィズダム」

トランスファー

ウィズダム・フォームへと戦技変換する。

右手に構えるイクスは変換と同時に展開。

シオンとイクスは同時に、それ、を唱える。

「来たれ！汝、雷の精霊、ヴォルト、！！」

【イクスカリバー】

フル・バレル
全兵装

フル・オーブン
全開放

フル・ドライブ

超過駆動

スタート
開始】

同時、感染者が震える。

その身体から溢れるのはアポカリプス因子だ。

これは、感染者第2段階へと成る予兆だ。

このままではここら一帯は感染者そのものと成る。

・・・このままならば。

既にシオンはこの展開までを読み切っていた。

故にこそその精霊召喚永唱。

故にこそそのウィズダム・フォーム。超過駆動。

感染者が第2段階と成る前にそれは完了する。

雷の精霊。ヴォルトが顕れる。

と、同時に展開したイクスへと吸い込まれた。

「精霊・装填！」

スピリット・ローディング！

精霊装填するはヴォルト。

纏うは雷。

シオンは第2段階へと至ろうとする感染者にイクスを突き付ける！

「神覇・九の太刀！奥義！！青龍っ！！！！」

フル・ドライブ！フル・バースト！！

ゴー・アヘッド！！

ー轟！ー

「裂！」

放たれた。雷光纏う荒ぶる竜が。

それは放たれた勢いのまま、感染者をその顎で喰らう。

シオンは竜と繋がったままのイクスを頭上高く振り上げた。

竜も感染者を喰らったまま天へと昇っていく。

それは正しく天へと昇る竜だ。

竜は結界の頂上まで昇る。

同時、シオンはイクスから竜を切り離す。

そのまま竜は結界の頂上部に身体を丸める。

シオンはそれを見ず。

ただ空いている左手で聖印を切るように、首前で手を横に薙ぐ。

「……終わりだ」

「雷！」

奇しくもそれは異母兄と同じ台詞。

頭上で凄まじい雷が結界上部を疾る。

感染者は塵すらも残らず消え去った。



シオンの戦闘を見ていたなのは達は一様に凍りついていた。

あまりに違い過ぎるシオンに。

あの戦い方は。

あの在り方は。

あまりにも、似過ぎ、ている。
今、目の前に居る男に。

その男、タカトはふむ。と頷いた。

その顔に浮かぶは微笑み。

あまりにも優しい微笑みだった。

「上出来、だな。このまま行けば第3の封印もじき。破れるだろう」

満足気にタカトは頷く。

そして、再度なのは達に向き直った。

「さて、では質問といこうか？」

そこでなのは達も我に帰る。

三人はタカトを囲む様に、ポジションを取る。

・・・意味が無い事を重々承知の上で。

それを苦笑いを浮かべながら、しかしタカトは何も言わなかった。

「質問。構わんか？」

「……いいよ」

二人と顔を見合わせ、なのはが頷く。

なのはの頷きをタカトは確認し、そして、それを問うた。

「……聞きたいのはたった一つだ。クロノ・ハラオウンを知っているな？彼の安否を確認したい」

「……な、んやて？」

思わずはやては問い返す。

それにタカトは再び、繰り返す。

「クロノ・ハラオウンの安否だ。解らん訳じゃあ、あるまい？」

「……何で貴方がそんな事を気にするの？」

フェイトが、再び膨れ上がる激情を抑え込むように問い掛ける。

それにタカトはふむ。と一つ頷く。

「……それはそちらの質問と受け取っていいのか？……言っておくが、俺が知りたいのは一つだけ。そちらの質問も一つしか受け付けんぞ？」

「……」

その言葉にフェイトはバルデッシュを掴む手に力を入れる。

だが、堪える。

フェイトはぐつと奥歯を噛み締めた。

その表情はまるで泣き出す一歩手前。

それを見たタカトはたった一つだけ嘆息した。

「……気になったからだ」

「え……？」

いきなりタカトはそんな事をフェイトに向かって放つ。

一瞬、何を言われたか解らないフェイトは呆然とする。

再度タカトは嘆息。

「気になったからだ。……彼の安否が」

「何、で？」

思わずフェイトはまた問い掛ける。
それは2重の意味。

何故、気になったのか？

何故、答えてくれたのか？

タカトはフェイトを睨む。

判れ、と言わんばかりに。

「……サービスは一度だけだ。後は知らん」

タカトはその二つの疑問を黙殺した。

その態度はまるで、ふて腐れた子供の様だった。

はやてはそれに少し笑う。

どうやら、彼は相当の‘お人良し’らしい。フェイトのあの顔を見て、サービスで質問に答える程に。

あまりに、前とギャップがあるが。

タカトは舌打ちを一つ放った。

「早く質問に答えてくれるか？」

「あ、うん。ゴメンね？」

思わず、フェイトが普段の調子で謝ってしまう。

いつの間にか空気が和らいでいた。

「彼は……、お兄ちゃん’は、無事だよ」

「そうか。……て、何？兄？」

答えるフェイトにタカトは頷き、しかし。フェイトの発言について問い直してしまった。

それにフェイトはちよつと微笑む。

「いいの？質問。もう一回して？」

「……性格悪いぞ。キツネ娘」

半眼でタカトはフェイトを睨み、悪態をつく。

フェイトは微笑む。

「サービス。さっきして貰ったしね。こっちもサービス。……クロノは私の義理のお兄ちゃんだよ」

「……そうかい」

フェイトの態度にタカトは嘆息する。

がらりと立場が入れ代わってしまった。

フェイトは余裕を、タカトはそれを無くしている。

主導権をフェイト側に持って行かれている形だ。

タカトは咳ばらいを一つし、フェイトからはやてに視線を移す。

「さて、では今度はそちらの番だ。……何を知りたい？」

空気が再び固くなった。

はやては息を一つ飲む。

知りたい事は沢山ある。

だが、答えられるのはたった一つだ。

はやては思考する。

何を問うと良いのか、と。

目的は？

これは駄目だ。恐らくは

「感染者を狩る事」ぐらいしか言うまい。

ならば何故、感染者を狩るのか？

これも微妙だ。最悪

「必要だから」としか答えまい。

ならば固有名詞を交えて曖昧な解答を避ける必要がある。

はやては思考する。

思い出すのは予言、だ。

カリム・グラシアの予言。

希少技能。プロフェーティン・シューリフテンの。

黒い遺思。

これは恐らくアポカリプス因子の事だろう。

却下。

666の獣。

言うまでもなく目の前のタカト自身の事だ。

却下。

亡者達。

感染者の事だと思われる。

却下。

そして、はやての頭にはある単語が浮かんだ。

それはよく意味の解らない単語であり、恐らくは予言の最も大事な部分。

知らずはやての口はその単語をタカトに問うていた。

「創誕。て何や？」

瞬間。

空気が、世界が軋んだ。

タカトがはやてに殺気をぶつけたからだ。

なのは、フェイトも即座に愛杖をタカトに向ける。

タカトは構わない。はやてを睨み付けるだけ。

また、はやてもタカトを見ていた。

「……それを、何処で知った？」

「秘密や。今回はサービスは無しやよ？」

あくまで解答を避けようとするタカトにはやてはしかし、動じない。暫く、はやてをタカトは睨み。・・・殺気を放つ事を止めた。

「俺が出した条件だからな。……仕方あるまい」

そう嘆息し。

はやてを見る。真っ正面から。

はやてもまた言葉を一つも逃すまいとタカトから目を逸らさない。タカトが口を開いた。

「創誕とは俺の最大の目的であり、そして。世界最初にして、最後の魔法だ」

「最初にして、最後。の？」

なのはが横からその言葉を反芻する。

タカトは頷く。

「そう、人の意思により。、世界を創り出し、創り直す魔法、だ」

ー言葉が出ないー

その答えの衝撃で。

世界を創る？創り直す？

どうやったらそんな事が可能なのだと言うのだ。

絶句する三人に、タカトはそのまま続ける。

「魔法とは……」

「え……?」

タカトの言に、なのは思わず聞き直す。

タカトはしかし、構わない。

「魔法とは詰まる所、意思を持って世界の法則を。概念を組み換える事を指す。貴様等のミッドやベルカ。グノーシスが使うカラバ。俺の使う八極八卦太極図も例外じゃない」

何を? そう問おうとして、しかしタカトの言葉に恐るべき可能性を悟り、はやては絶句する。

「どの魔法にも共通する事だが、魔法と言うプログラムに意思媒介となる魔力を変換する事で魔法は発動する」

そこでフェイトもなのはも気付いた。

三人は思わず、タカトの右腕を注視する。

タカトは構わない。続ける。

「もし、世界を創り直せる魔法と言う名のプログラムがあるのならば? ……そして、それに相応の、意思、が必要ならば? さて、どうなる?」

「あ、アンタは!」

思わずはやては叫ぶ。

なのはもフェイトも先程の空気は吹き飛んでいた。

この男はこう言っているのだ。

刻印を刻んだ意識不明者達の意味を持って世界を創り直す、と。危険過ぎる。

この男の考えはまさしく危険に過ぎた。
タカトはそれにニヤリと笑う。

「さて、質問には答えた。帰るとするか」
「待って！」

なのはが叫び、レイジング・ハートをタカトに向ける。
フェイトもはやても、だ。
しかし、タカトは構わない。

「先程の焼き直しだな？ 邪魔するのならば潰すが？」
「ーっ！」

タカトの言に三人共何も言えない。
一撃を叩き込めば、タカトは容赦はすまい。
今度はデコピンでは済まない。
タカトは三人を潰しに掛かるだろう。
時間が止まったかのように、四人は動きを止める。
しかし。

「……行かせると思ってたのかよ？」
「ーっ！」

声が響いた。
なのは達は思わず、その声が出た方に向く。
そこには……

「随分と遅い到着だな？ シオン」
「拔かせよ。……タカ兄い」

神庭シオンが居た。

シオンとタカト。

敵対するべき異母兄弟はここに四度目となる対峙を果たした。



三人が見ている中、二人の異母兄弟は対峙する。

言葉は交わさず。

しかし、視線は交わして。

そこでのなは達は気付いた。

シオンは精霊装填技を既に2発使用している。

ならば、シオンの魔力はもう・・・

「シオン君!」

「邪魔しないで下さい。なのは先生」

声を上げるなのはにしかし、シオンは即座に拒絶する。

邪魔をしないで欲しい。と。

イクスを構える正眼に。

タカトはしかし、構えない。

・・・いや、これこそがタカトの構えなのだ。

自然体。

構えない事こそが最大の構え。

数秒。

間が空く。

風が吹く。辺りが凍っていたり水びたしのせいか冷たい。

―閃―

―破―

瞬間。

二人は交差した。

互いに一撃を・・・タカトは右の拳を、シオンは真っ正面からの斬撃を放った姿で固まる。

―豪―

互いの中心で空気が渦を巻く。

同時に中心点から地面が砕け、小さいクレーターが作られた。衝撃。

二人の一撃に逃げ場を求めた衝撃が地面に伝達し、クレーターを作りだしたのだ。

直後、シオンがガクリと膝を着いた。

その胸は拳の跡が残っていた。

「シオン君！」

なのはを始めとして、三人がシオンに駆け寄る。

しかし、笑いが辺りに響いた。

シオンの笑いだ。

「……どうだよ？クソ兄貴？一矢。報いた、ぜ？」

息も絶え絶えになりながらシオンは笑う。

それにタカトもまた笑った。

「たわけ。この程度で一矢とは言わんわ。……しかし」

振り返る。その左の頬には・・・

「多少は出来るように、なったみたいだな？」

赤い線が走っていた。

そこから血が流れ出す。

斬り傷。

シオンが成した結果だ。

シオンがタカトの言にケツと悪態をつく。

あのタカトに傷を。

その事になのは達は驚く。

魔力枯渇状態でそれを成したシオンに。

なのは達ですら未だまともなダメージを与えた事は無いのに。

タカトはシオンを満足気に見て、そして口を開いた。

「この一撃に免じて、お前等に二つ程情報をくれてやろう？」

「……何、だと？」

聞き捨てならないタカトの台詞にシオンまた立ち上がり、振り向く。
なのは、フェイト、はやてもシオンの横に着く。

「一つ。次の俺の標的だ。貴様等の船に襲撃を掛ける」

「ーッ！何やて！？」

タカトの言にはやてが叫ぶ。

なのは、フェイトも信じられ無い物を見る目でタカトを見る。

タカトはしかし、構わない。

「前にお前達と戦った時に一人、感染者の気配を感じたので、な？」

「「「ーっ！」」」

今度こそ、一同は絶句した。
感染者がアースラに・・・前線メンバーの中に居る、と言うタカトに。

タカトは続ける。

「シオン。心辺りがあるんじゃないか？……そう、例えば感染者では無く、アポカリプス因子その物に触れていた人間の事とか、な？」
「そんなの、ある筈……」
「シオン君……？」

シオンは否定しようとして出来なかった。
顔から血の気が引く。
シオンはそのまま硬直した。
タカトは構わない。

「二つ目だ。今回、感染者は転送されて来た。さて、何故だ？」
「そんなの私達が解る筈ないやろ！？」

叫ぶはやて、だがタカトは笑う。

「よく、考えろよ？今回。貴様等は感染者の転送を事前に察知していたか？」

「……してない、よ。それが……」

なのははそこまで言って。しかし、ここが何処だか思い出した。
一気に血の気が引く。

ここはクラナガンなのだ。

まかりなりにも、時空管理局地上本部のある。

JS事件の後、特に転送系の監視はしっかりしていた筈だ。
それをまるで感知させずに感染者を転送させる。

そんな真似。出来る筈が、無い。
そう、' 同じ時空管理局、局員' で無い限りは！

「この情報。生かすも殺すもお前達次第だ。ではな？」
「待っー！」

なのはは引き留めようとして、しかし。瞬間でタカトは消える。
あの認識出来ない高速機動を行ったのだろう。
タカトの姿は何処にも無かった。

「はやてちゃん……」

「はやて……」

「……戻ろう。情報、整理せなアカンし。……シオン君？」
「嘘、だ……」

シオンを見たはやては驚く。
シオンは震えていた。
細かく。しかし、確かに。

「シオン君！どうしたの？」

「シオン……？」

《八神艦長！》

そこでいきなり通信が入った。
シャーリーだ。
酷く慌てている。

「シャーリー？どないしたんや？」
《スバルが！……スバルが！》

その言葉になのは達の顔から血の気が引く。
シオンはその言葉にビクツと大きく震えた。

そう、1番最初にスバルと会った時。彼女は、因子、に足首を拘束
されていたー！

《スバルが急に倒れて！……身体から因子が！！》

その報告をはやては、なのはは、フェイトは、そして。シオンは絶
望と共に聞いた。

(第二十二話に続く)



ア

「はい！アリサ！！」

す

「すずかのー！！」

ア、す

「「アリサ道場ー！！」」

シ

「はい♪皆さんこんにちは♪今日もやってきましたよー。アリサ
道場のお時間が♪司会は毎度お馴染みのシオンです♪」

ア

「道場主のアリサよ♪」

す

「弟子のすずかです♪」

シ

「いやー本編がえらい事になっている中、ここは相変わらずのテ
ンションで走ります♪」

ア

「本当、急展開よね？タカトの最大の目的は明らかになるは、スバルはやばい事になるは」

す

「そうだよね？ここからどうなるんだろ？」

シ

「勿論内緒です♪」

ア、す

「「ケチ」」

シ

「きっちり無視していきます♪はい質問解答コーナー♪」

ア

「ああ、言ってたわね。そう言えば。で、どんなの？」

シ

「俺の今のスペックはどんだけですか？との事です。後、身長と体重」

す

「シオン君の事、気にしてくれる人、結構いるんだね？」

「有り難い事です♪ではこちらです♪」

神庭シオン。

魔力ランク…S（全戦技変換込み）

身長…169。

体重…58。

各アビリティ・スキルランク。

魔力放出…AA+

対魔力…AAA

直感…S

戦技変換… A A

精霊召喚… S +

精霊融合… S S S + + +

精霊装填… S S S +

シ

「こんな風になってます♪」

ア

「……随分パワー・アップしたもんね？」

シ

「まあ、俺も成長したんですよ♪ちなみにこれは全戦技変換時のアブリティー・スキル最大発現状態なので、それぞれのフォーム次第で、スキルランクは上下します」

す

「……細かいね」

シ

「全くです。さて、質問はとりあえず以上です♪

まだまだ質問がある人はバンバン送って下さいね」

ア

「……それにしても召喚しないと静かね……」

す

「確かに、ね」

シ

「召喚も募集していますのでバンバン立候補宜しくです♪次で喚んじょうかもしれません」

ア

「相変わらずの、ノープランね。ウチは」

シ

「そこがウリですよ♪ついでに作者が何か企んでいるとの情報が入りました……」

す

「また何かするの？」

シ

「らしいですよ？決まり次第道場で公表するらしいですが……」

ア

「勿体ぶるわね……」

シ

「まあ、てな訳で今回はここまで♪感想、評価。いつも有難うございます♪すごい励みになってます♪本当、皆様あつての作品です♪これからも応援。何とぞ宜しくお願いします♪では……♪」

ア、す

「「また次回……♪」」

第二十一話「問い、そして答え」（後書き）

「明かされたタカトの目的。そして、次の目標」「スバルは感染して、その意識を閉ざしてしまう」「今度こそ

は守る為に、失わない為に」「不可能、と言われたそれに、

シオン達、は挑む」「そして、シオン達を

守る為に彼が現れ、タカトと戦う」「果たして、シ

オン達は……?」「次回、第二十二話。『ダイ

ブ』」「シオン。スバルの世界へ」

第二十二話「ダイブ」(前書き)

「一度目は何も出来ずにただ奪われた」

「二度目はズタボ

ロにされ、俺まで刻印を刻まれた」

「だけど、

三度目は無い。させない」

「必ず、守ると誓った。だから

ら」

「俺は必ず取り戻す」

「魔法少女リリカルな

のはStS，EX。始まります」

どうも♪テストメントです

♪今回のアリサ道場はえらい事になってます♪そして、ある企画発表です♪是非お楽しみに♪

第二十二話「ダイブ」

AM14時30分。

感染者の転送事件により、アースラはミッドに向かっていた。

その中で、ヘリ1に乗るスバル・ナカジマは言いようの無い不安を抱えていた。

「気分が悪いー

とある理由により、スバルはあまり病気になる事は無い。

それなのにも関わらず、妙な具合の悪さを感じていた。

身体の内側から、何かがうごめいているような感覚。

虫か何かが徘徊しているような感覚だ。

この感覚は前から少しだけあった。

最近になって、急にこの感覚は強くなっている。

本局で検査を受けた際には何も無かったのだが・・・。

「スバル？」

「え……？」

呼ばれ、顔を上げると間近にティアナの顔があった。

「……いや、ティアナだけでは無い。エリオもキャロもティアナの後ろに居た。

皆、一様に心配そうな顔をしている。

「アンタ。今日の朝もしんどそうだったけど……大丈夫なの？」

「大丈夫だよ♪ティアも知ってるでしょ？ 私病気とかあんまりした事無いし」

笑い、そう言う。

だけど、ティアナも、エリオもキャロも納得した顔はしていない。

「これから出撃なのよ？体調が悪いなら正直にそう言いなさい？」

「そうですよ。スバルさん」

「あんまり無理したら良く無い、て思います……」

皆、一様にスバルを留める。

それだけスバルの様子はおかしかった。

いつもの元気もどこと無く、無理矢理出している感じだ。

「大丈夫だって、それより出撃準備しなくちゃ……っ！？」

瞬間。

身体の内側を、何かが、突き破る感覚をスバルは覚えた。

同時に例の虫が徘徊る感覚が今までの比ではない強さで襲ってくる。

「あ、あ……！」

「スバル？スバル！？」

「スバルさん！？」

「どうしたんですか！スバルさん！？」

三人共、スバルの尋常じゃない状態を見てスバルに寄る。

しかし、スバルは手を大きく振り、それを拒絶した。

「スバル……！」

「駄目……駄目！」

それでも近づくティアナにスバルは首をブンブンと横に振る。
そして。

「……っ！スバル、さん？それ……」

こんな筈じゃない。

「スバル……さん……」

結果が再び。

「う……そ……」

訪れる。

「駄目……皆……っ！離れて……！」

スバルはガクリと倒れ。そして、その身体からは黒い点が……、死の象徴。アポカリプス因子が溢れていた。

「……っ！シャーリーさん！」

最初に立ち直ったのはエリオだった。

即座にブリッジに通信を送る。

シャーリーが通信に出る。

《エリオ？どうしたの？慌てて……》

「……スバルさんが！」

「スバル……」

そこで弾かれたようにティアナがスバルに手を伸ばす。しかし、傍らのキャロがそれを留めた。

「駄目です！今、ティアさんが触ったらティアさんまで……！」
「っ……！」

その言葉に手を伸ばしながらもティアナはそれをギリギリで留まった。

シャーリーも、ウィンドウでその光景を見たのだろう。通信している顔からは血の気が引いている。

「とりあえず、シャル先生を！」

《うん！すぐに呼び出す！》

エリオに頷き返し、シャーリーは通信を切る。

その間、ティアナは何も……スバルを抱き抱えてあげる事さえ出来なかった。

「スバル……」

ティアナはただ呟く。

だがスバルは身体から因子を溢れさしたままピクリとも動かない。ティアナ達はそんなスバルをただ見ている事しか出来なかった。



AM15時。

スクライア邸で、ユーノ・スクライアと高町ヴィヴィオはウィンドウを介して、ヴィヴィオの母でもある。高町なのはと話していた。彼女と、もう一人の母フェイト・T・ハラオウンと、二人の親友であり上司、八神はやて。そして、部下であり。今回三人に着いて来

た、神庭シオンは感染者の転送事件の後、スクライア邸に戻る予定だったのだが、急遽アースラに戻る事になったらしい。

約束は違うが、ユーノもそしてヴィヴィオも何も言わない。・・・いや、言えない’。

それほどまでになのは達の表情は陰っていた。

シオンに至っては顔を上げる事すらしない。

スバル・ナカジマが感染者となった。

部下であり、大切な教え子がそうなってしまったのだ。

表情に陰が射さない訳が無い。

「……うん。わかったよ。こっちの事は大丈夫だから」

《……ありがとう。ユーノ君。……ヴィヴィオ。ゴメンね？ママ達行かなくちゃいけなくなっちゃった》

「だいじょうぶだよ？だからなのはママもフェイトママもがんばって？」

《……うん。ヴィヴィオ。ありがとう》

それを最後に通信は切れた。

ユーノは同時にため息をつく。

なのはの性格からして、どれだけ辛いのかは想像出来ない。

元々、自分より人の事を考えてしまう彼女だ。

故に声にこそ出さないが、相当辛いだろう。

見ると、ヴィヴィオも顔を伏せている。

ヴィヴィオにとっても彼女は姉のような存在だ。

その彼女が感染した。

無論ヴィヴィオは因子の事も感染者の事も知らない。

その彼女でさえ、母達の顔色でスバルがどれだけ危険な状態か解ったのだろう。

そう考えていると、玄関が開く音が鳴った。
廊下を歩き、居間のドアが開く。
そこに居たのは居候。伊織タカトであった。

「ただいま」

「あ、うん。タカトお帰り。……随分遅かったね？」
「……おかえりなさい」

ユーノとヴィヴィオがタカトを迎える。
だが、タカトは一瞬だけ閉じられていないほうの目。
つまり左目の眉をピクリと動かした。
居間に漂う重い空気を感じたのだろう。
しかし、あえてそれには触れない。

「ああ、済まない。ちょっと、知人、に会っていてな？ 久しぶりに話したからつつい話し込んでしまった」

「そっか……」

「……ユーノ。客人はどうした？」

頷くユーノに、今度はタカトが問う。
それに、ユーノは少し微笑んで見せた。……無理な笑顔は引き攣った顔にしかならなかった。

「帰ったよ。……用事が出来たんだって」

「そうか……なら、仕方ないな」

ユーノの答えにタカトは頷きながら手に下げていた袋を台所に置く。
買ってくる積もりだったアルミホイルや、野菜や肉、調味料と言った物を手早く袋から出して。
冷蔵庫や、戸棚に仕舞っていく。

「ヴィヴィオ」

「……う？」

タカトの呼び掛けにヴィヴィオが答えるが、その声にはあまり力が無い。

それにタカトはフツと笑う。

「時間は遅いから夕食の後になるが、焼きたてのクイーンアマン食べるか？」

「……たべる」

ヴィヴィオは暫く迷い。しかし、タカトの言に頷いた。
タカトもそれに頷く。

「よし。なら夕食の準備をするか。……ああ、ヴィヴィオ。今日は修業はナシだ」

「う？」

ヴィヴィオが可愛らしく首を傾げる。

タカトは再度苦笑いを浮かべた。

「今日はちょっと疲れててな？」

「うん。わかった」

頷く。

それにタカトも頷くと、今度はユーノの方を向く。

「それからユーノ。悪いが明日はちょっと出掛ける」

「そうなんだ？ いいよ」

「済まないな。家事はなるべく終わらしていく」

そう言うタカトにユーノは

「気にしなくてもいいのに」と笑うが。タカトは納得しない。

・・・流石はブラニーである。

そんなタカトについてユーノもヴィヴィオも笑う。

スバルの事を忘れた訳では無い。

だが、確かにさっきまでの重い空気は消えていた。



アースラ。ブリーフィング・ルーム。

普段は作戦会議等に使われる部屋である。

その中に今現在のアースラ前線メンバーを始めとした主要メンバーが集まっている。

先程合流したN2Rのメンバーもそこに居る。

この会議の主題である。スバル・ナカジマのアポカリプス因子による感染。

シオンの話しによれば、1番最初にスバルと出会った時、彼女は足首を因子により拘束されていたらしい。

シオンが剣牙で両腕ごと消し去ったのだが・・・

「そんな時に・・・な」

はやてが呟く。

皆、一様にその表情は曇っている。

まず、そんな状態での因子感染がある。と言う事がもはや異例であった。

シオンも見ただ事聞いた事も無いらしい。

それを正しく認識していたのはただ一人。

仇敵である666。伊織タカトただ一人だけであった。

そして、最大の問題は対処方法が無い事。であった。

感染者の末路は三つ。

一つは因子に飲み込まれて死ぬ。

一つは第二段階状態の感染者に至り、そして全てを飲み込む事。

そして、最後の一つ。

伊織タカトによる。‘刻印’による意識剥奪。である。

どれも最悪の結果であった。

死か、意識不明となるか。

その二つしか道は残されていないのだから。

それを再認識して、また一同は沈む。

特に、スバルの姉。ギンガはそれが酷い。

最初、シオンにつかみ掛かりそうになったくらいだ。

・・・皆が止めなければ一撃くらいは殴っていたかも知れない。

そして、シオンも甘んじてそれを受けただろう。

何しろ抵抗らしい抵抗をしなかったのだから。

ギンガも半ば八つ当たりに近い事は認識したのだろう。

シオンに謝ったのだが。

そのシオンの方が辛そうな顔をしていた。

謝らないでくれと。その顔は言っていたのだから。

そして、今。対策は上がらず。会議は進展しなかった。

・・・そもそも会議を開ける程の余裕がある事が異例であった。

因子に感染した者は、例外無く暴走し、破壊活動を行う。

しかし、スバルは因子が顕れ。

そのまま気絶していた。

まず、有り得ない事である。

だが、これにはシオンを除くアースラメンバーは検討が着いていた。

スバルの特異性である。

戦闘機人。

彼女の身体の何割かは機械で・・・つまりは無機物で構成されている。

それが恐らくは完全な感染を防いでいるのだろう。だが、第二段階に成ってしまえばそれも意味が無くなる。

そもそも生身の部分が持つかどうか不明なのだ。

現在彼女は医務室で寝かされている。

フロアターで、身体を浮かし、医務室に連れて行ったのだ。

だが、それに意味があるのか。

彼女を救う手段が無いのに・・・。

「……一つだけ」

暗い空気の中、シオンが口を開けた。

皆が注視する。

シオンは一度手元に視線を落とし・・・そして顔を上げる。

「一つだけ、手があります」

「何やて……？」

一同が顔を上げる。

はやてが代表して、シオンに問い直す。

「一つだけ……いや、一例だけ心当たりがあります。……スバルを救う方法が」

「そんな方法があるの!？」

ギンガが立ち上がり、叫ぶ。

それにシオンはゆっくりとだが頷いた。

「はやて先生。覚えてますか？最初に俺が言った事？」

シオンがはやてに向き直る。

はやてはその言葉を吟味して、そして思い出した。

「一人だけ、の治療例やったね？」

「……はい」

シオンが頷く。

そしてそのまま告げた。

「成功確率0・0000000001%の治療法が」

シオンが告げた成功確率。

それはあまりにも絶望的な数字であった。
しかし。

「……でも、成功例はあるのね？」

ティアナがシオンに確認するように聞く。

シオンはティアナに視線を向けながら頷く。

「その成功した人は誰なの？」

「なのは先生も会った事がありますよ」

なのはの問いに。シオンは答える。

そして、その名を出した。

「治療が確認された人はユウオ・A・アタナシア。治療した人は、
叶トウヤ。……トウヤ兄いです」



アースラ・ブリッジ。

その艦長席で、はやて達隊長陣と、シオンは目の前のウインドウを眺めていた。

そこに映るのはトウヤの秘書であり、恋人。

そして、唯一感染から治療された存在。

ユウオ・A・アタナシアがそこに映っていた。

「それじゃあトウヤ兄いは……」

《うん。少し席を外してるよ》

画面の彼女はゴメンね、と謝る。

何でも一週間ばかりの留守で溜まっていた仕事を片していた真っ最中らしい。

それにシオンの方こそ謝りたくなる。

その一週間はシオンの為に空けたも同じだからだ。

《……そっか。でもシオン君もそんな年頃になったんだね》

「……そんな年頃、てどんなさ」

ユウオがあらあら、と元某艦長のような事を言っている。

シオンは若干の頭痛を抑える。

しかし……

「うむ。それはこう若さ溢れる……何と、言うのかね？ 強いて言え
ば。青春？」

「いやいや……、て。へ？」

妙に古い事を。と言おうとして、そんな事をほざく人物が自分の真

後ろに居る事に驚愕する。

振り向くと皆一様に驚いた顔をしてその人物を見ていた。

「と、トウヤ兄い！」

「……騒々しいね。何を叫んでいるのかね？お前は」

そこに居る筈が無い存在。叶トウヤがそこに居た。

《……トウヤ！》

「ぬ？ユウオ、君もかね？叫ばずとも……」

《叫ぶに決まってるよ！仕事は！？》

問い質すユウオにトウヤはただフツと笑う。

そして、親指をビシツと立てた。

「後は任せたよ？」

《ちょ！ちよつと待って、ちよつと待って！》

「待たん。フィニーノ君。通信を切ってくれたまえ」

「え、ええ？」

「早く」

ポカンとする一同を前にトウヤはただシャーリーに通信を切るように求める。

シャーリーはその声に押され、通信を切る操作をしてしまった。

《ちよつと！トウヤ！》

「何、今回はすぐに戻る。心配する事はない。帰ったら存分に愛でてあげよう」

《そんな事を公衆の面前でー》

ーブツー

そこで通信が切れた。

啞然とする一同を前にトウヤはやれやれと肩を竦める。

「どちらにしろ来る予定だったろうに」

「……どう言う意味さ？」

シオンが思わず呟く。

それにトウヤはフムと一つ頷く。

「何。どこかの末期到達型の馬鹿がアースラに攻め入る。と向こうで盛大に教えてくれてね？」

「……それって……」

そんな事を事前にトウヤ達に教えられる存在等、一人しか居ない。
伊織タカト。彼しか。

「それで？ 奴がアースラを襲う必要がある。と言う事は、誰かが感染した。と、言う事だが……」

「……うん。それでトウヤ兄いに聞きたい事があるんだ」

シオンが真っ正面からトウヤの瞳を見る。

それにトウヤもまた頷いた。

「ふむ……で、何が聞きたいのかね？」

「……トウヤ兄い。俺に、'ダイブ'を教えてくれ」

瞬間。ブリッジに言い知れぬ気配が走る。

それは殺気と同義にして、しかし違うもの。

プレッシャーが一番近いだろうか。

「……ここで話す物でもないね。八神君。申し訳無いがブリーフィング・ルームに移動して構わないかね？」

「はい。大丈夫ですよ。なら、また皆を集めんと……シャーリー？」
「は、はい」

プレッシャーに押される形でシャーリーは頷く。
一同は再び、ブリーフィング・ルームに向かった。



「さて……」

ブリッジでの一幕の後、再びブリーフィング・ルームにはアースラの主要メンバーが集まっていた。

その中で新たな参入者、トウヤが立ち上がっている。
そして、データ・チップをシャーリーに渡していた。
ウインドウが皆の前に大きく展開される。

「ダイブの事を知りたいのだったね？」

「……ああ」

シオンが頷き、一同もまた頷く。

トウヤはウインドウに指を走らせ。感染者の映像を出した。

「アポカリプス因子とは精神生命体。これは皆、知っているね？」

確認の意味を込めてトウヤは皆に聞く。
それに頷き。トウヤもフムと頷く。

「それとダイブ、て言うのに何の関係があるんだよ？」

「いや、大事な事なのだよヴィータ君？ 因子は生命体。その大前提を理解していなくてはね」

「どういう事なのですか？」

シグナムからも疑問が上がる。

それを慌てるな、とトウヤは両の手を挙げた。

「生命体。と、言う事は因子は生きてる。と言う事だ。……ならば殺す事も可能なのだよ。私達は普段これを感じ者を滅す事で、間接的に因子を殺している訳だ。……ここまでは理解できるね？」

一同を眺め、そして頷く。

これは前提条件なのだ。理解してもらわねば困る。

「だが、因子は直接的に滅す事が出来ない。……厳密には、生きて、はいるが、生命活動を行っている訳では無いからね。ましてや因子は精神的な生き物だ。……その感覚で言うところと精霊に近い存在とも言えるね？」

話しがどんどん難しくなっていく。

その中で

「は……い」と腕があがった。

N2Rの一人。ウエンディである。

「……ナカジマ君では皆と混同してしまうね？ ウエンディ君で構わないかね？」

「いっすよ。で質問があるんすけど」

「ああ。どうぞ？」

トウヤに促され、ウエンディも頷く。

「ならなんで感染者を倒すと間接的に因子も消せるんすか？話し聞いていると物理的な意味合いじゃあどうにもなんないと思うんすけど？」

「よい質問だね？ウエンディ君」

ウエンディの問いにトウヤも頷く。

コンソールを操作し、出すのは感染者のアップ画像だ。

「因子は他生命体に感染する際。一種の精神融合現象を起こしている。……つまり、因子は感染すると同時に感染者の精神と融合している訳だ。これにより、感染者を滅ぼすと、その精神も滅び、そして融合している因子も消える訳だ」

「ハア~~~~」

「……なら第二段階の場合はどうなるんですか？」

今度はなのはからだ。

質問しながらコンソールを操作する。

ウインドウに映るのは最初の出撃で現れた感染者だ。

「第二段階に至った感染者の場合には有機体の感染者をコアとして、その回りを無機物で覆っている訳だね。第二段階の感染者は無機物に感染する。これは、非常におかしな現象だね？何しろ精神なんて無い筈の無機物に感染する訳なのだから。だが、感染者は第二段階になる際に無機物を精神的に支配出来る様になるようなのだよ……」

そこでトウヤはつまりと続ける。

「感染者は原理はさておき無機物にすらも精神干渉を起こせるようになる訳だ。……進化によってね。これが第三、第四となると、ほとんど精神支配する幅が広がる。……まあ、とことん因子、と言うのはとんでもない存在な訳だ」

解ったかね?と、トウヤは聞くが一同。哑然としている。今まで、何となくとしか把握していなかった因子の本質に驚いているのだ。その反応で大体理解できたと、トウヤは判断する。

「では本題に入ろう。

ダイブとは他者の精神世界に入る特殊魔法術式の事を指す。これで感染者を治療出来る理由はたった一つだ」

「一つ、ですか?」

聞き返すフェイトにトウヤは肯定する。

「ああ。先程も言っていた通り、因子は感染する際に感染者と精神融合を起こす。これを逆手に取ったのがダイブな訳だ。ダイブした術者は精神が肉体から乖離して、被術者の中に入る。この時、術者は精神存在になるのだよ。これにより、術者は直接因子にダメージを与えられる存在になる訳だ。精神体と精神体だからね?これにより、ダイブした術者が感染者の精神世界の因子を消す事が可能となり、因子感染を治療出来る訳だ」

「……簡単な話しに聞こえるけど、シオン君に聞いた成功率やとそうや無いんやね?」

はやての問いにトウヤもまた頷く。

「そう言う事だ。因子は先程言った通り精霊に近い存在でね？その精神的な巨大さもまた精霊並なのだよ。……それで済めばいいのだが、最悪な事に感染者の精神世界と融合してしまっている。つまりはダイブした術者にとって、世界そのものが敵となりうるのだよ。……実際は因子と融合しているのは一部で感染者の精神世界の中で色んな姿となって存在している訳だが……ここら辺は実際ダイブしないと解らないので割愛といこう」

ここで、トウヤは話しを切り、皆を見渡す。
そこで今度はフェイトが手を挙げた。

「……もし、ダイブに失敗して感染者の中で因子に取り込まれたらどうなるんですか？」

「簡単な事だよ？ハラオウン君？感染者が増えるだけの話しだ」

つまり失敗は感染を意味する、と言う事だ。

一同、それに暗い顔になる。

どう考えても現実的じゃない成功率だからだ。

だが・・・

「で、ダイブの術式は？」

シオンは構わなかった。

トウヤはそれに嘆息する。何だかんがいつでも兄弟だ、こう言う時。弟が止まらないのも理解している。

「……待って下さい。シオン君がダイブするんですか？」

二人のやり取りを見て、今度はギンガから声が挙がる。
だが確かにその通りだろう。一度でも成功した者と、やった事すら

無い者。

信頼するのは当然前者だ。

だがトウヤは首を横に降る。

「……残念だが、私ではスバル君にはダイブ出来ない」

「……何ですか？」

別方向からも声が挙がる。ティアナからだ。

それにトウヤも頷く。

「単純に私では彼女と縁が薄い。……ダイブには条件があってね？
一つはカラバ式を使う者。もう一つは対象者と縁がある事だ。故に
私では使えない。シオンはスバル君と仲が良かったようだしね？」

だが、その直後。トウヤは顎に手を当てて考え込む。

そして、ギンガに向き直った。

「この中で一番スバル君と付き合いが長い者は誰かね？」

「私と……」

「私かな？」

ギンガとティアナが手を挙げる。

それにトウヤは頷き、今度はシオンへと視線を向けた。

「この二人と征きたまえ」

「……ギンガさんとティアナと？」

シオンの問いにトウヤはやはり頷く。

「シオンはまだスバル君とは付き合いは浅い。……成功率を上げる

為に、彼女と付き合いが長い二人を連れて行くのが妥当だろう」

「……でも」

トウヤの言に、しかしシオンは難色を見せる。

何しろ成功確率ほぼ0だ。

そんな事に二人を巻き込むのは・・・

「行くわ」

「……ティアナ」

あっさりと決めるティアナにシオンは驚き、そして非難の瞳を向ける。

「お前、解ってんのか？失敗したら……」

「何回も説明しなくても解ってるわよ」

そんなシオンをティアナは一蹴する。

親友なのだ。スバルは。それをこんな形で失いたくなんて無かった。手があるのならば行う。

それに思い出すのは先程の自分だ。

パートナーが倒れて、しかし何も出来ない自分。

それが辛かった。

だから今度こそは助けるのだ。

あの優しい我が儘な相棒を。

「止めても無駄よ。無理矢理でもくつついて行くわ」

「……はあ……」

そんなティアナにシオンは嘆息する。

何と無く解る。彼女に説得は無意味だと。

そして、次にギンガを見る。

すると、真っ直ぐに瞳を覗き込まれた。

・・・それだけで理解してしまった。

彼女にも説得は無意味だと。

嘆息し、今度ははやてを始めとした隊長陣を見る。

はやて、なのは、フェイトは苦笑いを。シグナムは嘆息を。ヴィー
タも

「やれやれ」なんて言っていた。

「……私達としては止めなアカンのやろうね」

「はやて先生」

「解ってるよ。……三人共止まんよね。やから約束してや。……
必ず、スバルを連れて皆、無事に帰ってくる事。……ええか？」

はやての台詞にシオンはティアナを見、次にギンガを見る。

二人共しっかりと頷いた。

「「「はい！」」」

「……よし。ならダイブ組はこれで決定や。なのはちゃん。フェイ
トも異論無いな？」

シオン達の返事を聞いてなのは、フェイトへと振り向く。

二人は苦笑い混じりに頷いた。

「よし。なら後はここに攻め入ってくる伊織タカトについてやけど
……」

「ああ、それに関しては大丈夫だ」

あっさりとトウヤはそう言い切る。

それに、はやて達は？顔を浮かべる。

「大丈夫、てどう言う事なんや？」

「あの愚弟は私が抑えるからだ」

「……え？」

思わず問い返してしまった。

しかし、トウヤは構わない。

「他の者は万が一に備えて待機していて欲しい。

それから結界の準備がいるね？」

「い、いやいやいや！トウヤさん。何を……！」

「何を、と言われてもね？私がタカトと戦うと言っているのだが？」

「えっと……」

そんな事を言うトウヤにはやてはつい、たじろぐ。

そんなはやてにトウヤは嘆息する。

「……忘れがちかも知れないがね？私もあいつと同じ。EXランク
なのだよ？」

『あ……』

そこで漸く皆思い出した。

目の前に居るこの青年は666と同等の存在だったと。

「奴は任せてくれたまえ。……ただ強装結界を多重に張って貰える
と助かるがね？」

「うん。了解や。……トウヤさんもあんま無茶せんようにな？」

はやての気遣いにトウヤは気にしないでくれたまえと返す。

そして、はやては立ち上がった。

「……ダイブ作戦開始は明日とします。……シオン君の魔力の関係もあるしな？」

はやての言にシオンは少し視線を逸らす。

今のシオンは先の戦いの後でもあり、魔力は大して残ってはいないのだ。

最低でも一夜の休息は必要である。

「先程、スバル君の様子を見たが、まだ小康状態のようだしね？ 寧ろ動き出すとマズイ」

トウヤがはやての言を引き継ぐ。

実際、トウヤの見立てではスバルはかなり安定している方だ。

彼女の体の事は解らないが、ただの身体ではあるまい。

そしてそれを支える意思力が、おそらくは未だ因子を抑え込んでいる。

ならば、こちらは万全の状態を整えるのみ、だ。

「うん。ほんなら皆。1時解散や。集合は明朝。0600時。……ええな？」

『了解！』

そして、皆。1時解散となった。

席を立つ皆と共に、シオンもブリーフィング・ルームを出る。

部屋に戻るべきだが、気付けば医務室の前に居た。

少し、躊躇いながらも入る。

シャマルは何故か居なかった。

暗い室内の中明かりを点る。

中を歩くと程無くして、彼女が、スバルが眠るベットに着いた。

スバルはよく眠っていた。その顔だけみれば、普通と変わらない。
・・・スバルの身体を這う因子さえ無ければ。

ーギリッー

気付かぬ内に掌から血が滴る。
拳を強く握りしめ過ぎたらしい。
それに苦笑いする。
直後、医務室のドアが開いた。
そこに居たのは・・・

「シオン？」

ティアナ・ランスターがそこに居た。



「……どうしたよ？ お前もスバルの見舞いか？」
「うん。そんな所。……？ あんた、それ！」

ティアナがこちらの左の掌を指差し、怒鳴る。
・・・まあ、結構な血が流れているし、気付いて当たり前か。
そんな事を苦笑いと一緒に思う。
ティアナはずかずかとこちらに向かい、掌を取る。
掌を見てティアナは思いつきり嘆息する。

「バカ。ケガ増やしてどうすんのよ……っ！」
「……わざとじゃないぞ？」

これは本当。

無意識に力を込め過ぎたのだ。決してわざとでは無い。

「……好んでケガする奴なんていないでしょ。ちよっと待ってなさい」

そう言うとティアナはシャルルのディスクに向かう。
ややあつて持って来たのは救急箱であった。

「……そんなのあったんだな」

「確かに、ね。少しの傷ならシャルルさん。治療魔法で治すし」

救急箱から消毒スプレーを取り出す。

「滲みるわよ？」と一言言ってきて、傷口にスプレーを振り掛けていく。

「……ッ」

「あ、ゴメン」

滲みて少し息を飲んだ事が解ったのだろう。
ちよつとだけ申し訳ない顔をする。

「いや、気にしなくて大丈夫だぞ？」
「……うん」

消毒が終わり、傷が穿たれた部分にガーゼを当てる。
これで治療は終わりだ。

ティアナは立ち上がり、救急箱にスプレーやガーゼを戻す。
そのまま話して来た。

「……スバルの事だけど……」
「ん？」

突如として出されたスバルの名にシオンはちよつと声を挙げる。
ティアナはそれを見ない。
続ける。

「本当は私から話す事じゃあ無いんだけど……」
「スバルの身体の事ならいい」

しかし、シオンはあっさりとそう言ってきた。
それにティアナは少し驚く。

「いいの……？」
「……いいさ。いつかスバルから話してくれるだろ」

そう言いながら微笑む。
それは、とても優しい笑みだった。

「そう、なら何も言わないでおくわ……」
「ああ」

ティアナは救急箱を片付け。スバルをチラリと見た後、そのまま医務室を出ようとする。

「ティアナ！」

呼び止める。
それにティアナは振り向かず留まった。

「左手。ありがとうな。……それから、お前。いい奴だな」
「……何よ。いきなり。それに私。女よ？ 奴は無いでしょ？」

そこで漸く振り向いてくれた。
シオンはティアナの言に笑う。

「なら言い換えてやんよ。……お前、良い女だよ」
「っ…………！」

シオンの突然の発言にティアナの顔が赤く染まる。
「…………意識せずに…………」
とか。

「…………天然…………」
とか聞こえた気がするが？

「どしたよ？」
「なんでもないわよ！ ばか！！」

そう叫び、今度こそは医務室を出る。
それにシオンは片手をあげる。
……ティアナは背を向けているから見えないとは思えないが。

「また。明日な？ ティアナ。おやすみ」

返事は期待していなかった。そのままスバルへと顔を戻した。

「アンタも早く寝なさい…………おやすみ」

そう声が返ってきた。

振り向くが、既にティアナはいない。

それにシオンは微笑む。

スバルを見遣り。

右の拳を握った。

「大切な奴等……」

そう呟く。

もう二度とこんな筈じゃない結果なんて起こさせない。
そう決めたのだから。

「必ず、守り切ってみせる。そして……」

取り戻してみせる。必ず。

それを呟き。シオンはスバルにもう一度、目を向けて医務室の扉へと向かう。

医務室を出る前に再び、スバルを見る。彼女は何も変わっていない。
ただ眠るだけ。それでもシオンはスバルに声を掛けた。

「スバル。……おやすみ」

その一言を呟き、医務室を出た。



次の日。

P M…6時。

アースラのブリーフィング・ルームに、シオンを始めとした一同が

集まっていた。

スバルも既に運ばれている。

その中で、トウヤがシオンとイクスにダイブの術式の構成を教える。

「ダイブの永唱は覚えたのかね？」

「そっちは何とかね」

【俺もサポートする。問題は無い】

シオンの肩に腕組みをして立つのはイクスだ。

二人はトウヤに頷いてみせる。

そして、後ろのティアナ。ギンガもシオンの横に並ぶ。

「……いいかね？最後の注意事項だ。ダイブすると同時に精神世界に君達は突入する訳だが、その世界はあくまでスバル君の世界だ。

従来の世界では有り得ない。そこを必ず心に留めていてくれたまえ」

「はい！」

「うん」

三人はトウヤに頷き、そして今度は隊長陣に顔を向ける。

はやて達はシオン達に頷いてみせた。

「昨日、言った通りや。必ず、スバルを連れて三人共戻って来るんやよ？」

「気を付けてね？」

「無理すんじゃないぞ」

「頑張ってきて」

「……三人共、しっかりね？」

それぞれの言葉で送り出してくれる。

三人共、それぞれ頷く。

そして、そのままスバルに近付く。

三人の顔を見て、トウヤは頷き、厳かに告げる。

「では始めよう。……シオン。永唱開始」

「了解。……アイン・ソフ・オウル……」

カラバに置ける。

無からカラバ式は基本永唱される。

アイン（無）からアイン・ソフ（無限）へ。

そしてアイン・ソフ・オウル（無限光）へと。唱えられる。

これはカラバに置ける世界創造の理念だ。

これを永唱する事で、まず自分の自己暗示を施す。……キー・ス
ペルがあれば一言で済む永唱だが。シオンは未だキー・スペルを見
出だしていない。

故にこの永唱が必要なのだ。

さらにシオンは唱える。

「ケテル（王冠）からコクマー（智慧）へ、コクマーからビナー（
理解）へ、ビナーからケセド（慈悲）へ、ケセドからゲブラー（峻
厳）へ、ゲブラーからティフェレト（美）へ。其は落ちて落ちて。
内へ内へ。ティフェレトからネツアク（勝利）へ、ネツアクからホ
ド（栄光）へ、そしてホドからイエソド（基礎）へ。流れ流れて。
其が表すは裸の男。其が守護天使はガブリエル。其が神名はシャダ
イ・エル・カイ」

そこまで唱えると同時にシオンの足元に魔法陣が展開される。

セフィロトの樹だ。

その中の円、セフィラの一つが一際輝く。

それは第9のセフィラ。イエソドの位置だ。

シオンは更に永唱する。

「其が象徴するはアストラル界（精神世界）。我は求む。その世界への到達を。勝利、栄光、基礎の象徴を持って、我が道と成れ！」
【永唱完了！各自、精神の乖離を開始。魔法式、ダイブ、起動確認。被術者。スバル・ナカジマ。……シオン！】

後はただ一言を叫ぶだけだ。

シオンは共に征く、ティアナの手を握る。そして、ティアナはギンガの手を。

そして後ろを見た。

『いってらっしゃい！』

その場に居る全員からのいってらっしゃいであった。

それに三人は笑いながら頷いた。

返すはたったの一言だ。

「「行ってきます！」」「」

再び、スバルに振り向くと同時。シオンは叫んだ。
その魔法の名を！

「ダイブ！！」

【ダイブ。発動！】

シオンの叫びとイクスの叫びが交わり。

そしてシオン達の精神はスバルの中へと翔んだ。

シオン達は最後の叫びを挙げた後。その場で倒れる。
同時に一気に三人に因子が纏わり付いた。

「ッー！」

「大丈夫。ダイブ、成功したようだね」

三人を見て叫びかける一同をトウヤが抑える。
これは感染者にダイブすると必ず起こる現象らしい。
感染している訳では無いとトウヤは念を押す。

「さて、こちら準備を整えよう。八神君？強装結界の展開。
宜しく頼む」

「了解です。なら皆は第一警戒体制で待機や」

はやての指示でそれぞれ散っていく。

その中でトウヤが目指すのは訓練室だ。

空間シュミレーターでもあるあそこならば、多少は頑丈だろうとトウヤは予測を付けたのだ。

ブリーフィング・ルームを出て歩きながらトウヤはぽつりと呟いた。

「……二年ぶりの再開がこんな形とは、ね。……つくづく私達は殺し合う運命にあるようだね？……タカト」

そう言いながら纏うは白の装甲服だ。中は軽鎧。さらにそれを羽織るような白の上着。脚部は足首に向かって膨らむズボンだ。

それがトウヤのバリア・ジャケットであった。

さらに手にするのは白の槍だ。

非人格型のアームド・デバイスであり。ロスト・ロギア。世界最強の破壊槍だ。

かの破壊神シヴァが持っていたと言われる神槍。

’破壊’の概念を秘めし槍だ。

その名をこう呼ぶ。

神槍ピナカ、と。

ピナカを携えたままトウヤは進む。

己の異母弟との決戦場へー！。

(第二十三話へ続く)



ア

「アリサ♪」

す

「すずかの〜♪」

ア、す

「「アリサ道場〜♪」」

シ

「じゃ、無いんですよね♪今回は♪」

ア、す

「「え………？」」

シ

「では、皆さん。御唱和下さい♪せ〜♪の♪」
オリキャラ一同

「クロスリレー企画記念会場〜♪」

ア、す

「「え〜〜〜!!!!」」

シ

「てな、訳でEXから俺、神庭シオン♪」
タ

「……」

伊織タカトだ

イ

「シオンのデバイスのイクスだ」

ヴ

「続いていきます♪リリカルヴィヴィオより、高町ヴィヴィオです♪」

裕

「KDG隊長の一之瀬裕希菜よ♪」

カ

「そのネタやめい！風間カナンド」

メ

「流石のツツコミだ。マスター。メイデンだ。宜しく」

銀

「続くとするか。Silver friendの神代銀杏だ」

零

「お兄ちゃんの妹の神代零よ♪」

ク

「クラウンです♪宜しくです♪」

晶

「続くでしょう。クロイツ・ストーリーの【剣聖】不知火晶だ」

・
・
・
・
・
・
・

シ

「あ、あれ！？まだ少ない！」

銀

「いや、十分多いと思うぞ？」

晶

「……いや、皆。あそこを見ろ」

カ

「あ、あれは!？」

道場の一部が迫り出す。

そこから現れる二つの影。どこからともなくスポットライトが二人に当たる……

フ

「ふはははは! リリカルなのは P H O E N I X のフェニックスだ!」

ト

「私はここで友と出会った!! 叶トウヤだ!」

が、現れる影がトウヤを無視して、一撃を叩き込む!

飛

「調子に乗ってんなー!」

ー閃ー

閃くは一振りのハリセン!

フ

「く! 飛鳥、貴様もここに!？」

飛

「一緒に来ただろうが!？…… P H O E N I X の鳳飛鳥だ。宜しく」

ト

「友よ。今助けに!」

シ

「行かんでいい!! 降りて来てよ! トウヤ兄い!」

タ

「……」

たわけ。こう言う手合いにはこうするが1番だ。

シ

「へ？、て。うおっ！」

銀

「て、おいおい！そんな砲撃かましたら……！」

タ

「……」

知らん。天破光破弾

ト

「ふ……当たらん。当たらんよ！」

タ

「……」

ちっ！やはり避されるか……

銀

「……無茶苦茶だな……」

メ

「また会えたな♪クラウン♪」

ク

「はいです♪私達の友情がまたここで結ばれたです♪」

カ

「あれ？イクスは二人に交じらなくていいのか？」

イ

「俺はあの二人と違って無愛想だからな……」

裕

「……一応自覚してるのね」

ヴ

「タカト……。喧嘩しないでよ」

タ

「……」

ちっ！命拾いしたな。

ト

「フ……負け惜しみかね？」

シ

「トウヤ兄い。もういいから！」

零

「あ、飛鳥……」

飛

「お、零か。元気そうだな……」

フ

「ほほう、この空気は……」

ト

「いいね。はやくも二人の世界を作っていて」

タ

「……」

ム？そう言えば剣聖は？

晶

「ああ、こっちだ。こっち」

シ

「……何で一人で離れて酒飲んでるんですか？ 晶さん」

晶

「……騒がしいのは苦手なんだな。タカト。酒の肴、何か無いか？」

タ

「……」

……まあ、あるのだが。

シ

「あるのかよ！？ アンタはどんだけブラウニー！？」

タ

「……」

ブラウニーと呼ぶな。ブラウニーと。剣聖、これでいいか？

晶

「ほう。イカ刺か。これは重畳」

フ

「どれどれ？」

ト

「頂くでしょうかね？」

晶

「フェニックス！ 人のツマミをまた！！ トウヤ！ お前も人の酒を勝手に飲むな！！」

ア

「……何、このスーパーカオス空間……」

す

「もう何がなんだか……」

シ

「はいはい皆さん注目！そこかしこで遊ばない！勝手な行動してたら、ヴィヴィオ、が爆発しますよ！？」

ヴ

「わ、私！？」

一同

『は～～い』

ヴ

「え～～！皆。素直に従うの！？」

一同

『だって怖いし』

ヴ

「がぁ～～ん……」

シ

「ほらほらヴィヴィオ。後でタカ兄いが、とっておき、を出すって

さ」

タ

「……」

至高のおやつを出すでしょう……

ヴ

「本当！ならいいや♪」

裕

「アンタ、本当に甘いのが好きね……」

カ

「あっさりと丸め込まれたぞ」

シ

「ほらほらいい加減話し、進めるぞ。……で。EX、ヴィヴィオ、クロイツ、PHOENIXのオリキャラが集った訳なんです、が、これには訳があります♪それこそが作者が企み、各作者さん達にお願い

いした企画。クロスリレー企画が発動するからです♪」

ア、す

「「クロスリレー企画!？」」

シ

「はい。その名も……!」

一同

『風雲!! 海鳴温泉く!!』

ア

「……はっ! ツツコミ所が多過ぎて思考停止してしまったわ!? ……
…て、何よそれ!？」

す

「初耳だよ!!」

シ

「そりゃそうです。言っていないですから」

ア、す

「「言おうよ!？」」

シ

「過ぎた事なんで諦めて下さい♪で、テストメント作者から手紙が来てます♪この手紙にあるのがクロスリレー企画の概要です♪」

私、テストメント。ヨシユアさん。naonaoさん。大和さん。

suzukamiさんで行うクロスリレー小説企画です。

舞台は温泉♪

既存キャラと各作者さんのオリキャラを自由に使い、小説を書いていきます。

一つのイベントが終わったら次の作者さんにバトンタッチします♪
その際、その話を書いた人が次の人を指名出来ます♪

シ

「こんな所です♪」

銀

「凄いおおざっぱな説明だな……」

ヴ

「でも道場らしさが出てていいかも♪」

シ

「基本、フリーダムが売りらしいからな」

晶

「む……この手紙。末尾に何か書いてあるぞ？」

飛

「本当だ。で、何、が……」

ポロリもあるよ♪

………

シ

「イクス！」

イ

「応！」

シ、イ

「精霊装填……！青龍……！！！」

手紙が道場を突き破り消え去る。

メ

「……マスター。ポロリとは……？」

カ

「だぁ！聞こえ無い聞こえ無い……！」

ク

「メイデン♪ポロリ、て言うのはですね……♪」

銀

「クラウン！いたらん事教えるな！！」

零

「それは流石に駄目よ！？」

ヴ

「タカト？ポロリ、て……？」

タ

「……」

黙秘権を行使させて頂く……

ヴ

「裕希ちゃん？」

裕

「そんな事知らなくていいの！！」

フ、ト

「その質問には我等が！！」

飛、シ

「答えんでいい！！」

ヴ、メ

「教えてくれるの？／か？」

フ

「勿論だとも……」

ト

「さあ、こちらに……」

シ、カ、銀、飛

「「「待て待て待てえ〜〜い！！」」」

裕、ア、零、

「「「そんな事させる訳無いでしょう！？」」」

フ、ト

「ぬ！邪魔をするか／かね！？」

一同

『あたり前だ～～～！！』

フ

「ならば……！」

ト

「強引に教え込むまで！」

フ、ト

「我等、悪役をー」

タ

「……」

いや、危険だからな？そのネタ。……光破弾！

フ、ト

「ふ……！まだ落ちん！まだ落ちんよ！！」

タ

「……」

俺だけならばな？

晶

「開眼せよ。【無明神威】！」

フ、ト

「な、何～～！！」

ー斬ー

晶

「……神クラスが二人もいるんだ。手加減無しでいかせて貰った…

…」

フ

「く……」

ト

「まだまだ！まだ我等は……！」

ヴ

「え、え……と」

メ

「これはどう言う状況なんだ？」

ク

「だから……」

カ、銀、シ、飛

「「「だから教えるな、て言ってるだろ！？」」「」」

す

「すごいツツコミだね……」

ア

「オリキャラ男連中のツツコミ弄られ役が勢揃いだからね」

銀

「待て。俺もその中に入るのか？」

ア、す

「「当然」」

銀

「……」

飛

「……俺も？」

ア、す

「「当たり前」」

零

「だ、大丈夫だよ？飛鳥、カッコいいから……」

飛

「いや、それ俺が弄られ役、て否定にならないぞ？」

零

「……………」

飛

「ひ、否定出来ないのか……」

零

「……………うん。ごめん」

飛

「マジで……」

銀

「カナンとシオンは割と大丈夫なんだな？」

シ

「俺達は、公式、に認められてますからね……」

カ

「……………今更否定出来ない……」

タ

「……………」

さて一息出来た所で、おやつタイムだ。

ヴ

「本当♪」

メ

「楽しみにしていたぞ♪」

ク

「わっわいです♪」

シ

（タカ兄い。ナイスだ。！）

飛

（上手くごまかせたな）

カ

(よかった。本当、よかった……!)

タ

「……」

今日は趣向を凝らして、イチゴのタルトを作ってみた。

ヴ

「わぁ……♪」

裕

「これは、凄いわね……」

メ

「凄く、美味しそうだな……♪」

ク

「はやく食べるです♪」

零

「……くっ！お兄ちゃんといい、666と言い。なんで男なのにこんなに美味しそうに……!」

ア

「流石、我が道場の執事ね♪」

す

「だね♪この苺も美味しいそうだよ？」

銀

「……」

零

「て、アレ？お兄ちゃん？」

ク

「マイロード？」

銀

「俺が作ってきたバウンドケーキだ。タカト。食べてみてくれ」

タ

「……」

ほう。コレは……

二人共、互いのケーキを食べる。
直後。がしりと握手を交わす。

銀

「……見事な味だ」

タ

「……」

いや、銀杏。お前のバウンドケーキこそ見事だった。

シ

「す、スポーツマンシップ？」

カ

「……何か相通じる物があつたんだ……」

飛

「俺も料理は出来るが、あの二人のように生き甲斐にまではなっていないしな……」

ト

「ふむ。しかし我等アダルト組は非常に口寂しい物だね？」

フ

「然りだな……何か食べたいもんだ」

晶

「いつ復活したんだお前等……て、あ！？」

シ

「晶さん？どうしたんですか？」

晶

「イカ刺しがもう無い……」

ト、フ

「「ご馳走様でした」」

晶

「お前等な……酒まで無いし」

タ

「……」

フム。ならば秘蔵の一瓶と、最高のツマミを用意しよう

晶

「……ほう、これは……！」

タ

「……」

幻の清酒。、銀河鉄道、

そして、やはり日本酒ならばこれだろうか？

晶

「ほう、焼鳥か？」

フ

「………」

ト

「どうしたね！我が友！そんなに震えて……！」

フ

「これは……」

タ

「……」

かかか。フェニックス、か……

びくうっ！

フ

「……………」

タ

「……………」

例え、どんな食材だろうが美味に仕上げる……それが一流の料理人とは思わんか？フェニックス？

フ

（ね、狙われている！？）

シ

「……大丈夫なんですか？飛鳥さん。タカ兄いは、やる、と言ったら、やる、人間ですよ？」

飛

「……フェニックス。お前と過ごした時間を俺は忘れ無いよ……」

フ

「コラコラ！契約者を売るな！！」

タ

「……………」

かかか……

フ

「怖っ！」

ト

「……させんよ。タカト」

タ

「……」

兄者か……

フ

「我が友よ！」

ト

「友よ！今が駆け抜ける時！」

フ

「承知！」

一同

『限り無くまずいだろそのネタ~~~~~！』

タ

「……」

争覇の先に真道（食材）があると信じて……

一同

『そっちもかあああ！？』

ア

「いやぁツツコミが多いと楽ね」

す

「本当にね〜♪」

シ

「あ、もう時間が……」

銀

「もう、こんな時間か……早いな」

ヴ

「モグモグ♪本当こんなに美味しいの食べてると時間ドンドン経っちゃうよ♪」

晶

「……確かに。この続きは温泉で、て事になるのか？」

飛

「この面子で温泉か……どうなるんだか……」

シ

「なるようになりますよ♪では今回はこの辺で♪ヨシュアさん♪naonaoさん♪大和さん♪suzukamiさん♪今回のキヤラ召喚♪承認ありがとうございます♪」

続きは風雲！海鳴温泉でやりましょう！！

リレー頑張りましょう♪」

ア

「前祝いでコレだからね。本編はどうなるのか……」

す

「クロイツからは、さらに蓮次君に、アテナさん、レイスさんが参加予定だしね♪」

シ

「シルフレはさらに多いですからね……♪楽しみですよ♪では♪皆さん♪次は風雲！海鳴温泉で会いましょう♪」

ではでは♪皆さま♪」

一同

『また次回~~~~~~~~♪♪♪』

第二十二話「ダイブ」(後書き)

「スバルの精神世界に入ったシオン達」

「その世界はテイ

アナ。ギンガにとって、いつか見覚えのある。しかし……違う光景」

「そして、トウヤとタカト。二人のEXがついにぶつかり合う」

「次回。第二十三話

『極めし者』」

「嘆き、軋み、歓喜する。それは有り得ぬ世界」

はい♪今回の超豪華版アリサ道場

♪如何でしたでしょうか？キ、キャラが上手く、皆使えなかったかも？と少し思ってます♪しかし、フェニックスとトウヤは組ませるとトンデモないです(笑)……すごい書きやすいです(笑)

ではでは♪

『風雲！海鳴温泉！！』は近日

公開です♪トップバッターは言い出しっぺの俺が行きます♪宜しく
お願いします♪EXもちゃんと書きますよ♪(笑)

第二十三話「極めしもの」(前編) (前書き)

「私はいつも見ていた」「それは弟。しかし、その弟はいつだって強かった」

「私は常に劣等感を抱いていた。兄

なのに、弟に勝てない。と」

「だから鍛え抜いた。肉が裂

け、骨が腐る程に」「そして私は手に入れた。弟と互角に渡り合えるだけの力を。……、私だけの一’を」

「魔法少女リリ

カルなのはStS，EX。始まります」

第二十三話「極めしもの」(前編)

「ダイブ!」

【ダイブ。発動!】

シオンとイクスは同時に叫び。

そして、シオン、スバル、ギンガ、そして。イクスも精神が乖離して、スバルの中へと翔んだ。

スバルの中へと入った四人が見たのは、クラナガン。ミッドチルダの首都クラナガン'の遥か上空であった。

「oooooooooo!」

突然上空に投げ出されたシオン達は驚きに目を見張り、しかし。同時に叫んでいた。

「クロス・ミラージュ!」

「ブリッツ・キャリバー!」

「イクス!」

「セooooooooooット・アップ!!」

スタンバイ・レディ!

セット・レディ!

瞬間でバリア・ジャケットを纏う三人。

さらにギンガがウイング・ロードを展開して、ティアナを抱き留める。

「すみません。ギンガさん……」

「ううん、シオン君？」

「こっちは大丈夫。このまま下に降りましょう」

シオンは自前で飛行し、そのままギンガと平行して地上に降りる。
着地してギンガはティアナを降ろす。

「にしても何でクラナガン？」

「さあな……、イクス。何か解らないか？」

【いや、流石に解らない。ただ言えるのはここは既にスバル・ナカ
ジマの世界と言うだけだ】

「ここが……」

辺りを見回すが、どこもクラナガンと変わりは……いや、最大の
変化はあった。

少し歩くとそれを理解した。

「人がいないわね……」

「だな」

「スバルの世界だからなのかしら……」

一同疑問を抱きつつ歩く。大きなビルに掛かった時計を見て、今が
夕方だと理解する……。しかし、同時にティアナ、ギンガは声を上
げた。

「この日付、て……」

「確か……」

「？。二人共、この日付がどうかしたのか？。一年前の日付みたい
だけど……」

シオンは不思議そうに聞くが二人はそれ所では無い。

この日付が正しいものならば――！

―爆！―

―煌！―

突如として爆音が響き、地面を揺るがす。

「何だ！？」

【爆発、のようだな】

突然の爆音に二人は驚きを浮かべるが、ティアナ、ギンガは驚かない。二人が知る日付ならば爆発は起こるべくして、起こったのだから。

ティアナとギンガは額に汗を浮かべながらその日に何があったのかを知らず口にした。

「ジェル・スカリエッティ事件……」

「地上本部、襲撃の日。ね……」

「……何？」

呟く二人にシオンは思わず問い直してしまった。

「……この日はね？ 私達が関わったある事件あった日付なのよ」

「成る程、な。なら、あそこに何かある、て思ふべきか……」

「そう考える方が妥当ね……」

三人は頷き合い、そしてビルの向こうにあるはずの施設。ミッドチルダ地上本部に目を向けた。

「なら行ってみるか」

「そうね」

「行きましょう」

三人は頷き合々と歩き出す。

向かう先は地上本部。

ガジェット達が暴れまわり、そしてナンバーズが暗躍する激戦区であった。



アースラ。ブリーフィング・ルーム。

そこでは今、スバルと並ぶ様にシオン、ティアナ、ギンガが並べられて横たえられている。

そして、少し離れた所に、はやて、なのは、フェイトがいる。

副隊長。及び、各少隊メンバーはそれぞれ待機中だ。

そして、叶トウヤ。彼は一人。訓練室に居た。

そこで対峙する積もりなのだ。異母弟、伊織タカトと。

（伊織、タカト……）

なのははその名とその男を思い出す。

寡黙にして冷徹。傲慢な青年。

妙にお人良しで、悪戯好きで、人をからかうのを好む青年。

どれが本当の彼なんだろう？

そう、思う。

どれもがタカトであり。そして違う気がする。

考えれば考える程に解らない存在だった。

彼は犯罪者だ。それも第一級の。

しかも親友を意識不明にし、先輩でもあり、頼れるお兄さんだったクロノを殺し掛けた人物でもある。
なのに。

(……高町なのは、か。戦場に合う名とは思えんが……ふむ。良い名だな。君に良く、似合ってる)

なのに。

(……見せてくれ。シオン。お前がどこまで成長したのかを……)

なのに。

(……サービスは一度だけだ。後は知らん)

なのに、どうして彼の事が気に掛かるんだろう。

しかし、急に鳴りだしたアラートになのはの思考は断ち切られた。
ブリーフィング・ルームに響くアラート。

そして、官制陣が通信を介して隊長陣に叫ぶ。

《……アースラ、転送システムに異常発生！……嘘！。転送システムをハッキングされてます！》

《転送システムのデータ凍結。……駄目です！ハッキング速度が早過ぎる……！》

《転送システム起動！……転送ポートに侵入してきます……！》

このタイミングでアースラへの侵入者。

そんな事をする人物等、一人しかない。

はやて、フェイトは頷き合う。

なのはも監視システムに映る転送ポートを見詰める。

転送ポートは既に、官制陣達の制御を離れて起動している。

いかな方法を使ったかは定かでは無いが、来る人間は解っている。
それはつい昨日会った人。

話し、戦い、問い掛け、応えた人。

そして、その人物は現れた。

全身黒づくめのバリア・ジャケット。

半袖でありながら左右非対照の肩口。

拘束具を思わせる黒のグローブ。

背中は奇妙な形のマントのような広がり。

そして、最大の特徴。

頭をすっぽりと覆う、フード。その前の部分が垂れ下がり、まるで封じるが如く、右の顔を隠している。

666の獣。黒の魔王。

伊織タカトがそこに居た。

「伊織、タカト……」

「来た、ね……」

「うん」

三人はそれぞれ呟く。

そして、伊織タカトが最初の一步を歩くと同時、アースラ艦内の短距離転送システムが起動する。

元来は転送される本人の同意が必要なシステムだが、あえてそれは切っていた。

タカトを送る先はただ一つ。

彼の異母兄。叶トウヤの待つ訓練室だ。

タカトは数瞬の間を待って、訓練室に転移された。

「よし。シャーリー？訓練室に外側から多重強装結界や。……何が

起こるか解らん。結界は最大数を展開してや？」

《了解です！》

シャーリーの返事に頷き、三人は訓練室にカメラを切り替える。そこでは白の異母兄が、黒の異母弟と対峙していた。

「始まる、な……」

はやてが思わず呟く。

フェイト、なのはもまた、ウィンドウを注視している。

そして、なのははもう一度だけ呟いた。

「伊織、タカト……」

画面の中の二人は対峙を続ける。

白と黒。

二人のEXはただ。互いのみを見続けた。



伊織タカトはその時、奇妙な浮遊感と共にそこに降り立った。

アースラに転移すると同時に転送されたのだ。

抵抗しようと思えば出来た。

解呪しようと思えば出来た。

なら、何故行わなかったのか？

答えは単純。アースラに転移すると同時に懐かしい声が念話を送って来たからだ。

これにタカトは抵抗を諦めた。

あの声の主と向き合うには真っ正面からが1番である。

下手に無視すると、後ろからプッスリと心臓を刺されかね無い。そして、転送された先はかなり広大だった。

いかな技術か、空間を弄り街を再現している。

タカトが歩くと同時に、外側に結界が展開された事を悟る。正しい判断だ。

それだけをタカトは思った。

もし、何の準備も無く。自分とあの人があいつかり合えば、確実にこの艦は落ちる。

歩く、歩く。

そして、タカトは目当ての人物と対峙した。

「……兄者」

「久しぶりだね？元氣そうで何よりだ。タカト」

二人の異母兄弟はこうして二年振りの邂逅を果たした。

互いに5mの距離を挟んで対峙する。

二人にあるのは殺気でも何でも無い。

威圧する訳でも無い。

ただ見合うだけ。

数分の間を持って、トウヤが口を開いた。

「……しかし、まあ貴様も、変わらん、ね？」

「……そうか？」

「ああ」

疑問で返すタカトにトウヤはクッと笑う。

その笑いに慥然とする。

この異母兄は恋人であるユウオの事を除くとある趣味がある。

「……アンタこそ何も変わらない」

「それはそうさ。この歳になってまで性格が変わるものかね」

笑い、そう返される。

この異母兄は何より弟である自分達をからかう事を生き甲斐にしていた。

タカトは嘆息。

だが、そのまま警戒を解かない。

何故か？

答えは単純。トウヤの手に握られた槍だ。

神槍ピナカ。

グノーシスにある武装の中で恐らくは最強の装備だ。

‘破壊’の概念を秘したこの槍をトウヤは今、手にしていた。それは一つの事を意味する。

則ち、戦うつもりなのだ、最初っから。

この異母兄は自分と。

「……本題に入ろうか。兄者。シオンに、教えた、か？」

「ああ。勿論」

その答えにタカトは漸く笑う。

それを見てトウヤは片目をつぶる。

「楽しそうだね？」

「ああ。……これで俺の目的は半分は成った」

それにトウヤも苦笑いをする。

「早いね……その目的をここで話していくつもりは無いのかね？」

「阿保言え。1番危険な男にそんな事教える馬鹿がいるか」

その返答に、しかしトウヤはまだ笑いを止めない。

「まあ、いくらか想像はつくがね？」

「……だろうよ」

やはり、か。タカトは片手で額を抑える。

しかし、瞬時にトウヤの顔からは笑みが消えた。

「……一応は聞いておく。本気かね？」

「その積もりだ」

笑みを消したトウヤはタカトの返答にどんどん無表情になっていく。

「……貴様は本当にどこまでも変わらない」

「……そうかい」

そこでトウヤは左の手に握る槍をくるりと回す。

一動作で槍はその穂先を下に向けた。

タカトはそれを見て、ただ重心を下に落とした。

トウヤは笑みを消したまま続ける。

「……私達ではどうにもならないのかね……？」

「……どうなんだろうな。……でも、結局の所。俺はこれしか思い
つかなかった」

どうしても、それ以外の結末をタカトは思いつかなかった。
ただそれだけの事。

トウヤは……彼にしては珍しく重いため息をつく。

「……私は貴様を止める」

「……俺は止まる積もりは無い」

平行線。

二人の考えはまさしく平行線であった。

意見が合わないならば、後は力をぶつけるだけだ。

かたや止めたいと。

かたや止まらないと。

そう考える二人は互いの力を構える。

槍を。

拳を。

「ならば、力付くで止めてやろう」

「なら、力付くで押し通るだけだ」

ーギシリー

二人の気配に空間が、世界が軋みだす。

睨み合いだけで、二人の間の空間が悲鳴をあげているのだ。

「叶、トウヤ」

「伊織、タカト」

二人は名乗る。

そして同時に告げた。

「「推して、参る」」

瞬間。

二人は魔力を吹き上げ、互いに爆発したが如く駆け出した。



時空管理局地上本部。

シオン達がそこに辿り着いた時。

見たのは異様な機械兵器が横行する場所だった。

ガジェット1型

ガジェット2型

ガジェット3型

それらがそこら中にゴロゴロ居る。

しかし、そこでもやはり人が・・・ガジェット達と戦っている筈の管理局員は居なかった。

ビルの裏路地に隠れたシオン達はそれを見ながら頭を抱えていた。

「……何々だ？あの変なロボットは……」

「ガジェット。JS事件で猛威を奮った機械兵器よ」

事件を知らないシオン達にティアナとギンカが事のあらましを教える。

「……成る程。て事はどちらにしろ中に入らないと駄目、て事か……」

【広域スキャンを完了したが、どこもかしこもあのあのジャマーフイールドが展開されている、な】

イクスの言に一同頭を抱える。

スバル達FW陣やギンガはこの時、地上本部の中に居たのだ。

ならば、一同が居た地上本部の中でアポカリプス因子が関与してい

る可能性が高い。

「一点突破で突っ込むか……？」

「馬鹿。あの数よ？そんな真似、自殺行為よ」

「でも、このままこうしている訳にも行かないわね……」

実際ここで話していて、事態が進むとは思わない。

ティアナが暫く考え込む。

そこでふと気付いた。

地下ライフライン。

そこはまだ生きている筈だ。

ギンガも同時に気付いた。

「……？。二人共どうした？」

「……何とかなるかも」

「ええ……」

そして三人はそこから離れる。

向かう先はマンホールだ。

そこから地下に入り、下水道へと降りる。

中に降りると同時にティアナがなのは直伝のエリアサーチを行う。

……しかし。

「……駄目だわ。AMFでエリアサーチが消される」

「さっきのジャマーか」

「ならここにもガジェットが居る、て事に……」

三人は同時に頷く。

地下にガジェットが配置されていると言う事は守らねばならない何かがあると言う事だ。

当たり。シオンの直感もそう告げる。

「方向は解るんだよね？」

「そっちは任せて」

「なら行きましょう。ポジションは私がF A。シオン君がG A。ティアナさんがC G。いい？」

二人共、ギンガに頷く。

そして三人は向かう方向に目を向けた。

「「GO!!」」

声を挙げ、三人は一気に駆け出した。



シオン達が地下を走る。

向かう先は地上本部だ。

だが、その方向にはあの敵が居る。

ガジェット、と言う敵が。

暫く走っているとティアナのクロス・ミラージュが警戒を告げる。

動体反応感知。ガジェット・ドローン1型と思われます。

「っ！二人共！」

「了解！」

「こっちも大丈夫！」

即座にポジションを取り、接敵に備える。

直後、光がシオン達に放たれた。

ギンガが前進し、プロトクシオンで光を弾く。

同時、楕円形の機械群が5機現れる。

シオンはギンガの脇を抜けると同時に瞬動を発動。
一気にガジェットの前に出る。

―閃―

横に薙ぎ払われたイクスがガジェットを斬断する。
続けて二体目を斬ろうとして。

―身体が重くなった―

(な……っ！)

「シオン！！」

ヴァリアブル・シュート！

直後、シオンの脇を抜ける様にティアナの放った弾丸がガジェットに叩き込まれる。

弾丸をガジェットのAMFは一瞬だけ抵抗するが、対フィールド弾であるこの一撃に、AMFは持たない。

即座に貫かれ、ガジェットが爆発する。

同時、駆け出すのはギンガだ。

ブリッツ・キャリバーが唸り、ギンガが疾る。

「ハアっ……！」

リボルバー・ナックルが回転すると同時にカートリッジ・ロード。

―撃―

ギンガのナックル・バンカーが、ガジェットに叩き込まれ、さらにウイング・ロードを発動。

ギンガはスバルと違い砲撃系の技を持たない代わりにシューティング・アーツの完成度ではスバルを上回る。

単純な動作や機動がスバルよりも疾く。鋭いのだ。

向かう先はもう一体のガジェット。

ブリッツ・キャリバーが唸りを挙げる。

キャリバー・シュート！ライト！

「ヤアっ！」

ー激！ー

蹴り飛ばされ、ガジェットが床に叩き付けられる。

ヴァリアブル・シュート！

更に放たれたティアナの射撃がガジェットに止めを刺す。

残り一体。

向かうのはシオンだ。

サイドのカバーが開いて五本の触手が伸びる。

シオンは目を閉じ、ただガジェットを待つ。

（今、俺の身体は重くなった）

考える。考える。

ティアナから聞いた、AMFの特性。

魔力が結合出来なくさせるジャマー・フィールド。

これは魔法の効果を打ち消すフィールドだ。

それは射撃等の魔法だけで無く。身体強化の魔法も例外では無い。

シオンの身体が重くなったのもそのせいだ。
シオンが無意識に使ってる身体強化を打ち消したのだ。
だが・・・

「うぜえっ!!」

咆哮。

同時、目を見開き。吹き出すのは魔力だ。

魔法が無効化される？

魔力が結合出来ない？

関係ない。

魔法とは意思によって世界を組み替える力だ。

魔力が結合出来ないならば、意思によって、無理やり、結合させる。

ー閃！ー

AMFをシオンは、無視、して一撃をガジェットに叩き込む。
ガジェットの機械の身体は真っ二つに上下に分かたれた。

「ふう……」

残心を解く。

後ろからティアナとギンガも追い付いて来た。

「全く。だから気をつけなさい。て言ったでしょうが！」

ティアナが、がーっ！とシオンに怒る。

それにシオンが浮かべるのは苦笑いだ。

アヘッド・レディ？

トリガー・セット！

「捻れ穿つ螺旋」

「天破疾風」

―砕！―

―裂！―

互いの風を巻く一撃がぶつかり、その余波が空間シュミレータのビ
ルを破壊して回る。

二人は動かない。

タカトはハイ・リスクを覚悟でトウヤの槍をかい潜り、インファイ
ト。超接近戦を挑む。

トウヤもまたそれに応え、足を止めて、槍を放つ。

軋み、軋む。

槍が拳が撃ち放たれる度に空間が弾け、余波はたやすく瓦礫の山を
作り出す。

タカトは再度、ピナカをかい潜り、トウヤの懐に潜り込むが、トウ
ヤは突きから直後石突きを回す用にタカトに叩き込む。

あえて鋭利さを捨てた一撃にタカトの身体が泳ぐ。

―トウヤは止まらない。

そのままの動作で槍を回し、穂先をタカトに向ける。

風が巻き、捻れる刃が撃ち放たれる。

その一撃は放たれると同時に音速超過。

ソニック・ブームを起こしながらタカトへと突き穿たれる。

タカトもまた止まらない。

横殴りに叩きつけられた勢いを利用して、足場を空間に形成。その
まま右の回し蹴りを放つ！

「天破紅蓮！」

「捻れ穿つ螺旋」

ー激！ー

ー爆！ー

爆発が、風が巻き起こる。

しかし、タカトの足場はその一撃に持たず、タカトは空に身体が泳ぐ。

瞬間。タカトは背に走る悪寒のままに両腕を突き出し、シールドを発動。

五連で展開する。

ートウヤは構わない。

再び、くるりとピナカを回転させると逆手に持ち替えた。

アヘッド・レディ？

再び空間に響くはキー・スperl。

そして、トウヤはそのままピナカを投槍する！

ー閃ー

空間を軋ませながら放たれたピナカは展開されたシールドの真ん中に突き立つ。

同時、響くはトウヤの朗々たる一声だった。

「焦がれ尽くす天空」

ー爆！ー

―煌！―

爆炎！

ピナカを中心として巻き起こった火柱にシールドは刹那の抵抗も許されず碎かれ、タカトは弾け飛ばされる。

トウヤもまた駆け出し、ピナカを引っ掴む。

槍を構え、タカトに瞬動。

「捻れ穿つ螺旋」

「――っ！」

タカトの中心に突き放たれるピナカ。

タカトはしかし、足場を形成して逆に踏み込む。

―閃！―

タカトの脇を削りながらだがピナカは通り過ぎる。

さらにタカトは右の拳をトウヤの顔面に向かい放つ。

「天破疾風！」

「――凍え鎖せし大河」

―破！―

―氷―

タカトの一撃は確かに、トウヤに叩き込まれる。

しかし、トウヤが拳を受けたのは額。

弾き飛ばしながらも、トウヤに決定的なダメージを与えられなかった事にタカトは歯噛みする。

――それに。

トウヤが放った技はタカトに効果を与えていた。
タカトの身体が氷で覆われる。

ただの氷ならば問題無いが、これはトウヤの意思で使われた封印用の術だ。

簡単には解けない。

「――我が手へ」

その一声にタカトと共に凍っていた、ピナカがトウヤの手に戻る。
それを見て、タカトは必死に解呪しようとあがく、が。

トウヤはそれを嘲笑うかのように床にピナカを突き立てた。
同時に広がるのはセフィロトの樹。

カラバの魔法陣だ。

「震えと猛る鳴山」

次に起きた現象をキャロが見れば、絶句した事だろう。

それは召喚魔法。

召喚されるのはただの土。だが、量が半端では無い。

その量は一つの山に匹敵する。

土はタカトを押し包み。

更なる封印となった。

土が天井へと上がる。

トウヤはピナカを引き抜くと再び回転。

今度は順手にピナカを持ち。穂先を土へと向ける。

再び展開される魔法陣。

そこから魔力粒子が生まれ、トウヤの身体を照らす。

そして呟かれるは、たった一言の、トウヤ、だけ、に許された呪文。

―時すらも我を縛る事なぞ出来ず―

そして、トウヤはピナカを突き出した！

「輝き軋み壊れし幻想！」

―煌！―

―輝！―

砲撃。あまりに強力に過ぎる砲撃が放たれた。

その一撃は正しく必殺。

このまま土の中に居るタカトに叩き込まれれば確実に倒せる一撃だ。
・・・直撃すれば。

―神の子は主の右の座に着かれた―

「絶・天衝！」

砲撃が放たれると同時に、土の封印、氷の封印を碎き。タカトが突っ込んでくる。

その右手には闇が灯る。

闇の煌めき。

そう表現するが正しい代物だ。

―閃！―

―斬！―

タカトの絶・天衝はトウヤの輝き軋み壊れし幻想を斬り裂きながら進む。

それを見て、トウヤは更なる一言を呟いた。

「――砕かれしは貴き幻想」

追加スペル。

砲撃がそれに応え、ピナカから切り離され、タカトに収束する。

――爆！――

そのまま砲撃はタカトを中心として爆砕した。

爆煙が空に広がる。

トウヤはそれを見て、しかし。構えを解かない。

直後、煙が尾を引くようにして、何かが地面へと落ちる。

タカトだった。

まるで猫を思わせる動きで空中を回転すると、両足で綺麗に着地した。

「……相変わらず、とんでもないバケモノだな」

「……人の事が言えるのかね？SS＋級の砲撃を叩き斬っておいて」

二人は笑い、そしてまた構える。

この二人、あれほどの戦いを繰り広げて置いて、息を荒げていない。互いにダメージが残るが、しかし致命的には程遠い。

「第2Rと行こうか？」

「そうするでしょう」

再び、二人は駆け出す。互いに必殺の一撃を掲げて。



「よつと……」

二人の兄が激戦を繰り広げている頃。

シオンは漸く地上本部へと……正確にはその地下施設へと辿り着いていた。

「つ、疲れたわ……」

「大丈夫？ ティアナさん」

ギンガ、ティアナもまたマンホールから這い出る。

シオンは流石に苦笑いを浮かべる。

とにかくガジェットの量が半端無かった。

シオン達が撃破した数だけでも50を超える。

三人共、マンホールから出て。

辺りを見渡す。

ガジェットはとり合えずはいないようだ。

そう、ガジェットは。

「おやあ……？」

「ーっ！。この声は……」

シオン達は背後に響いた声に振り向く。

そこには見覚えのある二人が並んで立っていた。

ウエンディ・ナカジマ。

ノーヴェ・ナカジマ。

この二人が。

ノーヴェが

「チッ！」と鋭く舌打ちする。

……相変わらずの不機嫌、ぷりであった。

ティアナ、ギンガがやつぱりと言う顔をする。

だが、同じなのはここまで。

ウェンディ、ノーヴェの身体から黒い点が、アポカリプス因子が溢れ出した。

「ーッ！シオン君！？」

「……まさか、本当に当たりとはな……」

「だとしたらこの二人が……？」

しかし、その三人に笑う二人。

その笑みは確実に二人の物ではない。

「さあ？どうっすかね？」

「ハズレかもしれねーぜ？」

嘲笑。

ニタニタと笑う二人は自らの固有武装を構える。

「……どっちにしろ。やるしか無いんだろうが……」

「ハン！当たり前聞いてんじゃねえよ！」

「シオン！、ギンガさん！取り合えず、ここはこの二人を倒すわよ！」

「「了解！」」

「やれるもんなら……やってみろ、す！！」

瞬間。

ウェンディがライディングボードを構え、砲撃が撃ち込まれる。

戦いが始まった。

(後編へ続く)

第二十三話「極めしもの」(前編) (後書き)

すみません(汗) またもや前後編に分けます。予定していた
プロットを遥かに超える分量に……いや、本当。すみません。(汗)
後編。なるべく早くお届けします。

第二十三話「極めしもの」(後編)(前書き)

お待たせです♪後編をお届けします♪今回もちよつと時間が掛かり
申し訳ありません(汗)

第二十三話「極めしもの」(後編)

「喰らえっす！」

管理局地上本部の地下施設。

そこでシオン達は因子が複製した？と思われるウエンディとノーヴェと戦っていた。

従来でも中々に厄介な手合いだが、この二人はさらに変化していた。砲撃。

ウエンディのライディング・ボードからはAAA級の砲撃が放たれたのだ。

本人はこんな砲撃は持っていないのに、だ。

シオンはギンガ、ティアナの前に出ると片手にシールドを発生。受け止める。

「貰ったあー！」

砲撃を受け止めているシオンにノーヴェが襲い掛かる。

両足のジェット・エッジが回転する。

さらに背中からブースターが展開し、加速。

・・・これも本人には無い代物だ。

「チィ……ッ！」

上下から襲いくる凶気。

シオンはそれに対して、シールドにイクスを叩き付ける。

「神覇・四ノ太刀、裂波！」

ー波ー

シールドが碎けると同時。空間振動が碎けたシールドを中心に放たれる。

それに砲撃は減衰され、ノーヴェはその加速を留められる。さらに。

「はあっ……！」

ウイング・ロード！

シオンの背よりウイング・ロードが伸び、疾駆するのはギンガだ。左手のリボルバー・ナックルが激烈な回転を刻む。

向かうはノーヴェ。

しかし、ノーヴェもそのままでは無い。

ジェット・エッジと背中ของブースターを吹かし、回転。

裂波の拘束を破る。

しかもその回転を利用してギンガの一撃を向かい撃つ。

ー破ー

ー撃ー

互いの拳と蹴りが交差する。

回転する二つのリボルバー。鏢ぜり合いのまま、互いに硬直状態になる。

それにウエンディから援護のエアリアル・ショットが放たれる。

ノーヴェの身体を掠めて、ギンガに向かう光。

だが全弾、ギンガの後ろから放たれた射撃が撃墜する。

「ーッ！このへっぽこガンナー！」

「へっぽこで悪かったわね！」

ティアナへと罵倒を飛ばすウエンディ。

だが、その暇は彼女には無い。

瞬動でシオンがウエンディに突っ込む。

ウエンディはそれに対して迎撃のエアリアル・ショットを放つ。

・・・が、その射撃は全てシオンを通り過ぎる。

シオンの姿はそのまま消えた。

「幻影！！」

「遅え！！」

驚愕するウエンディの左横からシオンが突如として現れる。

ティアナの幻影を囫として、シオンは瞬動でウエンディの真横に回り込んだのだ。

ウエンディはライディング・ボードを構え、防御しようとする。

――遅い！

「壱ノ太刀！絶影！」

――閃！――

振るわれた刃は盾をかい潜り、ウエンディの胴を薙ぐ。

だが、ウエンディはそれに笑う。

瞬間、ウエンディの胴体から因子が溢れ再生する。

「――な！」

「呆けてる場合っすか！」

――弾――

至近距離で砲撃。

シオンはそれを辛うじて、プロテクションを張り。ガード。しかし、弾き飛ばされる。

そこに、ギンガと接近戦を行っていたノーヴェエが、突如。ギンガに背を向けてシオンに疾る。

「止めーっ！」

その顔に悪意をべったりと張り付かせてノーヴェエが襲い来る。

ギンガも追うが、追いつけ無い。

放たれる蹴り。

それに対して、シオンは叫ぶ。

「セレクト・ブレイズ！」

トランスファー！

ブレイズ・フォームに戦技変換。

軽くなったイクスを振るい、左のイクスで蹴りを受け止める。

そこからシオンはノーヴェエへと踏み込む事で蹴りの威力を殺す。

合気。

ノーヴェエの蹴りの威力を伝導して、右のイクスをカウンターで、ノーヴェエへと叩き込む！

ー激ー

鎖骨に食い込んだイクスにノーヴェエは下へと叩き落とされる。

さらにギンガのリボルバー・バンカーが追撃を叩き込み。

ノーヴェエは弾け飛ぶ。

・・・だが、ノーヴェエの顔に浮かぶは笑み。

身体から因子が溢れ、やはり再生する。

シオンはそのままギンガと合流してウェンディと射撃戦を行っていたティアナの前へと降り立つ。

ノーヴェもウェンディと合流。体勢を整える。

その身体を覆う因子を見て、シオンは舌打ちする。

「……あれで再生まですんのかよ」

「とんでも無く厄介ね……」

「それにあの子達。さらに、機能、が追加されてる……」

恐らくは因子が改造した物なのだろうが、どちらにせよ厄介な事に変わりは無い。

【シオン】

突如としてシオンが手にするイクスから声を掛けられる。

シオンは目線を落とさない。

「イクス？ どうした？」

【……気になる事がある。ここは1時撤退を】

イクスの提案に三人は顔を見合わせる。

しかし、この二人は確実に因子と関わりがある。

そこに迷う。

この二人を倒せば、ひょっとしたらスバルを治せる可能性があるのだ。

【……先に言うておく。あの二人を倒しても恐らくはスバル・ナカジマを治療する事は出来ない】

「何……?」

「どう言う事?」

【それも含めて後で話そう。今は撤退を】

一瞬だけ、三人は躊躇い。

だが、そのまま脱兎の如く二人に背を向け、駆け出す。

「逃がすと思っーっ!」

「参ノ太刀・双牙、連牙!」

シオンがいきなり振り返りつつ双刃を振るう。

放たれるは四条の牙。

それはシオンを包み込む様に、放たれ。二人に対して壁と成る。

「このっ!」

「小賢しい真似、するっす!!」

二人の悪態を無視して再びシオンは駆け出す。

同時にティアナが幻影を作り、四方八方に散らす。

これで暫くは時間が稼げる筈だ。

「説明してもらどうぞ。イクス」

【無論、その積もりだ。今は撤退に集中しろ】

三人は駆け出す。

奇しくも、それは一年前にティアナ達が、二人を相手に撤退を選んだ方向と同じだった。



三人は暫く駆けて、二人が追って来ない事を確認すると、漸く足を止めた。

シオンはイクスを眼前へと持ち上げる。

「ここまで来りゃあ、大丈夫だろう?……イクス」

【解っている。その前にギンガ・ナカジマ、ティアナ・ランスター。二人に聞きたい事がある】

「?……私達に?」

「何かしら?」

二人はイクスに疑問をあげる。

【この事件の顛末と、スバル・ナカジマにこの事件で起こった事、だ】

「……それは」

イクスの言にティアナは迷う、ちらりと見るのはシオンだ。そのティアナを見て、ギンガ前へと進み出る。

「……私から話すわ」

「ギンガさん……」

心配そうな顔をするティアナに少し微笑み掛け、そのままイクスとシオンに向き直る。

「まずこの事件の顛末だけど……」

そうして、ギンガから二人に説明が行われた。この時、自分がどうなったのかを。

スバルがどのようなになったのかを。
二人はそれを聞き、暫く黙り込む。

「……イクス？」

【ああ。やはり、と言うべきか……】

「?……やはり？」

聞き返すティアナ。シオンやギンガもまた疑問を浮かべる。

イクスはそれに構わなかった。

【……あくまでこれは推測だ。トウヤに聞いた話しと統合しただけなのでな。しかし、恐らくは間違いあるまい】

「トウヤ兄いから？」

シオンの疑問にイクスは肯定する。

そしてそのまま三人に告げた。

【恐らくは因子はスバル・ナカジマの記憶の改竄を行い、負の感情を増幅させようとしている】

「……記憶の改竄？」

「それに負の感情？」

聞き返す、ギンガとティアナ。

イクスは【そう】と肯定する。

【トウヤは告げた。因子は精神生命体だと、その性質は精霊に近い物だとな】

「それが……？」

【ああ、ならばアレは精霊の類と判断する方が正しい。そしてトウヤが過去にダイブした話しを統合するならば、アレは負の、悪意

’の精霊と判断するのが妥当だ】

「「「……は？」」」

イクスの推測に三人の目が丸くなる。

そのままギンガとティアナはシオンに目を向けるが、シオンも初耳な話しなのだ。

解る訳が無い。

【まあ、詳しい話しは後にしよう。重要なのは、因子がこの事件に置けるスバル・ナカジマの記憶を改竄し、トラウマと成す事で負の感情で満たし。完全に感染しようとしている、と言う事だ】

「……つまりはこの後のギンガさんが掠られる所か」

【そうなる】

イクスの言にシオンは頷く。

そして、ティアナを見る、が。そのティアナは顔を青ざめさせている。

「?……どした？」

「やっぱ……! もう時間が無いわ!」

「!……そうだわ!」

そう、あの事件では、なのは達と合流している頃にギンガと通信が取れなくなり、そしてスバルが単身で突っ込んだ先で彼女は半殺しの目にあって掠られたのだ。

……つまり、もう時間が無い!

「ティアナさん! ごめんね!」

「きゃっ!」

「イクス! セレクト、ブレイズ!」

トランスファ―!

時間が無い事を知ると同時にギンガがティアナを抱え上げ、ブリッツ・キャリバーを最大戦速で疾り出す。

シオンもまた速度に優れるブレイズに戦技変換し、空を翔けた。

向かうのはギンガが、チンクと戦っていた場所。

スバルが絶望と共に泣き叫んだ場所であった。



―閃―

―破―

アースラの訓練室。

そこで戦う二人、トウヤとタカトの激闘は未だ決着を見る事無く、続いていた。

ピナカが唸り、振れながら空気を纏めて引きちぎり放たれ。

風巻く拳は空気を破り、それとぶつかり合う。

その度に周囲に展開している空間シュミレーターのビルが砕け、落ちる。

互いの技の余波がそれ等を引き起こしているのだ。

トウヤは突きを放った姿勢からピナカを回転し、石突きによる三連突きを敢行。

魔力放出の恩恵もあり、それは打撃となって、タカトへと向かう。それをタカトは両の腕で捌き、弾く。

トウヤは構わない。そのままさらにピナカを回転。今度は穂先がタカトへと向かう。

アヘッド・レディ？

既に幾度も唱えられたキー・スペルが響く。

それに対するタカトもやはりキー・スペルを唱える。

トリガー・セット！

この瞬間。二人の脳裡に、ガチリと鍵が開かれるイメージが展開される。

開かれた扉から放たれるは互いの魔法術式構成だ。

その術式に魔力を乗せる。

「振れ穿つ螺旋」

「天破疾風」

―裂―

―破―

互いの一撃はやはりぶつかり合い。

―そこから止まらない。

一閃から十撃へ、そこから百裂、千轟と槍と拳、蹴りが叩きつけ合う。

風を纏い、炎が弾け、水が凍り、雷が疾り、土が跳ねる。

この時、二人は至近に留まりながら戦っている。

元来、魔法戦に於ける近接戦闘というのは、要は体当たりみたいなものだ。

高速で相手に向かって飛びかかり、魔力と勢いを乗せた渾身の一撃を叩き込む。

つまり、一撃、ならず攻撃を放った後は勢いを付ける為に距離を取るのだ。

これは、空戦や地上戦でも一致する事だ。

射撃魔法や砲撃等がある為、それを交える戦闘に近接して、離れない、戦闘法は廃れている、と言っても過言では無い。

古代ベルカ式ならともかく、近代ベルカ式は特にこの傾向が強い。しかし、巨大生物等を相手に近接での戦闘法を突き詰めたカラバ式はこの限りでは無い。

むしろ、離れないのだ。

これは、巨大生物の懐に飛び込む事を最前提としているからである。懐に飛び込む事により、敵の間合いから外れる。

ミッド式では離れてこれを外すが、カラバは近付く事で外す訳だ。故に二人は離れない。

至近距離こそが、互いの必殺の間合いなのだ。

離れる馬鹿はいない。

放たれる槍を潜り抜け、放たれる拳をそのまま槍を回す事で防御する。

二人は一進一退の攻防をずっと繰り返していた。

・・・しかし。

突如として、トウヤが離れる。

タカトは追撃をかけようとして。

トウヤの目を見て、追撃を止めた。

トウヤは左脇にピナカを通し、掴んだままタカトを見る。

・・・空気が変わった。

タカトはそう感じる。

頬を冷や汗が一筋流れ落ちた。

「……そのままでもいいのかね？」

突如、そんな事をトウヤは言い放つ。

タカトはそれに疑問の言葉を放った。

「……何の事だ？」

「惚ける気かね？ 貴様と私が至近戦で、互角、？……舐めているの
かね。貴様は」

トウヤは片目をつむり、不機嫌そうにタカトに言い放つ。
それにタカトは知らない、フリ、をする。

「何の事を言っているか解らんな」

「……そうか。あくまで見せたくは無い、と言う訳か。……良いだ
ろう。ならば貴様はここで終わりだ」

トウヤはそう告げると虚空に、風、と文字を描いた。
タカトの冷や汗はさらに流れる。

「……ここで、そんな物を使う気か？」

「その通りだ。……せいぜいあげ」

瞬間。

風が集い、巨大な太っちょの男が現れる。
しかし、それは人間では無い。

精霊。

トウヤは永唱すらもせずそれを呼んだのだ。

……たったの一動作で。

それを見たタカトが我知らず呟く。

「精霊王……誓約者」

異母兄の、トウヤの二つ名を。

その二つ名はトウヤが行った、ある事が由来だ。
いわく。

全ての精霊と契約せし者。

それは未だ、成し得ないとまで言われた偉業だ。
それを成した者。

トウヤは、故に生ける伝説とまで呼ばれたのだ。

トウヤはそのままピナカに風の精霊、ジンを装填する。
精霊装填。

それをトウヤは事もなげに使いこなす。

「……上手く防ぐ事だ」

「ーっ！」

瞬間、トウヤは瞬動を持って、タカトの眼前に現れる。

まずい、既に回避は不可能だ。

タカトは再びシールドを展開する。

・・・無駄だと知りながらも。

トウヤはそんなタカトを冷ややかに見ながらピナカを突き出した。

アヘッド・レディ？

「真・振れ穿つ螺旋」

ー閃！ー

ー裂！ー

ー砕！ー

・・・まず、空気が切り裂かれた。

次に空間が振れ、光が歪曲して見えた。

音は遅い。

既にそんな物は超えている。

突き放たれたピナカはタカトの防御を紙屑のように砕き、その胸へ

と突き立とうとして。

しかし、タカトは仙技、縮地を持ってギリギリ回避。だが、その余波はたやすくタカトを吹き飛ばす。

近くのビルにタカトは叩きつけられ、そのまま貫通。ビルを二つ程貫通して漸く止まった。

「ぐ……っ!!」

タカトはすぐに身を起こそうとして。

しかし、目の前に突き立つピナカに絶句する。

予備動作無しの投擲。

そして、ピナカが纏う赤より朱い紅に。

「真・焦れ尽くす天空」

―煌―

タカトはその瞬間。

確かに、意識を失った。

世界から音が消えた事を確信する。

―爆!―

火柱。

あまりにも巨大な火柱が上がる。

それはたやすく訓練室の床と天井をぶち抜き、巨大なクレーターを作り出す。

火柱が消えた後にはタカトが身体の所々から煙を上げて倒れ伏していた。

周りにあったビル群は瓦礫すらも残っていない。

そもそもタカトが原形を保っていたら驚きであつた。
トウヤはそんなタカトに向かい歩く。

手には既にピナカを構えている。

圧倒的過ぎる攻撃力をタカトにぶつけたトウヤは無表情のままだ。
そして、クレーターの縁に立ち。タカトを冷ややかに見詰める。

「……もう一度言おう。タカト、そのまま、で良いのかね？」

「ぐっ……うっ！」

タカトが身体を引きずる様にして無理やり立ち上がる。
しかし、その顔に浮かべるのは笑みだった。

「そんなにまでして見たいのか……？」

「そんなにまでして見たいのだよ」

タカトの疑問にトウヤはただ笑う。

立ち上がったタカトはそのまま右手首を左手で押さえる。
強く。

「……いいだろう。なら、見せてやる……！」

「そうしてくれたまえ」

光が集う。集う。

闇が集う。集う。

タカトの右手の、拘束に具、にー！

そしてタカトが浮かべるは獰猛な、獣が如き笑み。

「よく、見ろ……これがっ！」

魔力が集う。集う。

いつそ強奪と言って良い程に空間の魔力を奪いさる。

「アンタが望み、欲した力だっ！」

―煌―

その一言と共に、タカトの拘束具が滑り落ちた。
更に頭と右の顔を隠していたフードが弾け飛ぶ。
その開かれた’右の瞳’は照らす。

―煌々と灯る紅を―



カメラが急に何も映さなくなった。

ブリーフィング・ルームに詰めている三人、なのは、フェイト、はやては慌てる官制陣の声を聞きながら、背を流れる冷や汗を自覚する。

トウヤの異常過ぎる戦闘能力に恐怖すら覚えたからだ。

正直、トウヤを知らない過ぎたと言いたいようが無い。

あのタカトと互角に渡り合い。

さらに、最後は圧倒すらしていたのだ。

同時に精霊召喚と精霊装填。

それを瞬時に行う技量。

さらに、SS級の攻撃を連続で叩き込みさえした。

「……まさかやね。これ程とは思わなかった、ね」

はやてが呟く。

なのは、フェイトもそれに頷く。
ランクEX。

評価規格外。その意味を改めて実感させられた。

《すみません、艦長。モニター、先程のトウヤさんの一撃で完全に破壊されてしまったみたいで……》

「……そか。ん、しゃあないよ」

《それから後もう一つ、今の一撃で多重強装結界、五つ破壊されました》

その報告にはやて達はトウヤの一撃がどれ程の物だったのかを悟った。

今、訓練室には二十の強装結界が展開されている。

それが五つ。

なのはのブラスター・モードを使用したスターライト・ブレイカーに匹敵する威力を叩き出した事になる。

しかし、

《……いい……う。なら、見せ……る……！

「？……何？」

急に聞こえた声になのはがモニターを注視する。

モニターは画像こそ映さなくなったが集音はまだ壊れて無かったらしい。

はやて、フェイトもなのはに倣い、モニターに顔を寄せる。

《よく……ろ……これが……！》

「上手く聞き取れん……シャーリー？」

《はい、最大集音を行ってみます……》

はやての指示に従いシャーリーがカメラの集音を操作したのだろう。音が大きくなる。

そしてタカトの一声を、叫びをなのは達は聞いた。

《アンタが望み、欲した力だっ!》

瞬間、アースラに激震が走った。

三人は机にしがみ付く事で耐える。

「な、何?」

「どないしたんや!」

「シャーリー!!」

なのは、はやてが疑問を浮かべ、フェイトがシャーリーに事の子細を頼む。

しかし……。

《……何、……コレ?……》

三人が聞いたのはそんな声だった。

「シャーリー?」

「どないしたんや、シャーリー?」

《……艦内に、異常発生……訓練室を中心に少規模ですが……次元震が発生しました》

シャーリーからの報告。

それに、今度こそ三人は絶句させられた。

次元震。次元災厄でも最悪に近い代物である。

それが少規模とは言え、どうやったら発生させられると言うのだ。

しかし、彼女達の驚愕は止まらない。

ー轟！ー

先程よりもさらに激しい揺れがアースラを襲う。

なのは達も危険を察知し、デバイスを起動。

それぞれバリア・ジャケットと騎士甲冑を纏う。

「っー！シャーリー！？」

《……次元震。少規模から中規模になりました……嘘……じ、次元断層が引き起こりかけてます！！》

《多重強装結界！今の次元震で二層、破壊！再展開まであの一分です！》

矢継ぎ早に飛ぶ報告に、はやて達は顔を苦しめに歪ませ、しかし各部署に指示を出す。

「強装結界の再展開を最優先！各部署はこれに全力を持って当たってや！強装結界が破れたら一卷のおしまいや！お願いするな！？」
《了解！！》

そこでまた激震が走る。

再び、次元震が起こったのだ。

はやて達は苦々しく今は何も映さなくなり、集音すら出来なくなったモニターを睨み付ける。

「……何が、……中で何が起こってる言うんや……」

はやての呟き、それになのは達も答える事が出来ずに沈黙する。
三度の激震が再びアースラを揺らした。



スバル・ナカジマは、ある光景を見る。
その光景は・・・あまりにも異様だった。

「う、うあ……」

スバルが呻く。

その視線の先には多種多様の人達が居た。
ボロボロの死体で。

なのはが居た。

フェイトが居た。

はやてが居た。

エリオが居た。

キャロが居た。

シグナムが居た。

ヴィータが居た。

シャルが居た。

ザフィーラが居た。

リインフォース2が居た。

さらに官制陣や、スバルの父ゲンヤの姿もある。

山と積まれ、並ぶ死体達。

それにスバルは涙を流す。。

ここには、死、が溢れている。

まさに地獄。

その表現が正しかった。

スバル自身もボロボロだ。立ち上がれ無い程に痛め付けられている。
そして、更に目の前にはティアナを抱えるノーヴェ。

ギンガを抱えるウエンディ。

そして、その二人にステインガーを突き付けるチンクが居た。ややあってチンクが口を開く。

その顔はあまりに醜悪だった。

絶対に本人では有り得ぬ顔。

それはチンクと同じ顔だが、しかし本人とは決定的に違う顔であった。

ノーヴェ、ウエンディもまた悪意を顔に張り付け、笑っていた。

「、また、助けられなかったな？」

「あ、あ……」

そしてチンクは辺りを見渡す。
死体の山を。

「お前の力が足りないからこんな事になった」

「アンタの力が足りないからお姉さんは死んじゃったんすよ？」

「手前が弱いから友達も死ぬんだぜ？」

「う、あ……」

スバルは両目を見開いて、涙を流す。

弱かったから。弱かったから。

だから助けられなかった。

三人はただそれだけを繰り返す。

スバルがその言葉に耳を塞ぎ、頭を抱える。

何も聞きたく無いと、何も見たく無いと。

そんなスバルを満足気に見たチンクもどきは手のステインガーをスバルへと向ける。

「だから力をあげよう」

「全部、殺して守れる力を」

「殺して殺して殺して、そうすれば守れるっすよ？最後に自分だけは」

「う、うあ……」

そんな三人にスバルは目を開く。

守る為に殺す。それをまるで呪詛の様にスバルに刻み込んでゆく。

「さあ、これを受けろ。そうすればお前は新しい■■■■■になれるー！」

そうして、チンクがステインガーをスバルに放つ。

守れる。

それが呪詛となり、スバルはステインガーを避けない。

そして、ステインガーがスバルの胸へとー

突き立た無い。

突如として現れた刃、その持ち主が刃を振るい、ステインガーを弾いたのだ。

刃の持ち主は少年だった。

スバルはその少年を見る。

その背中を。

銀の髪に整っている。と言うよりはもはや女の子の様な顔。

纏うは黒のバリア・ジャケツト。

赤のシャツにフード付きの黒い半袖の上着。

そして、膝下までのふっくらとした黒の半ズボン。

スバルは知っている。

その少年の名を、彼は・・・

「シ、オン？」

「ああ。……何とか間に合ったか」

その少年。神庭シオンは肩にイクスを担ぐとスバルに向き直る。

「……助けに来たぜ？……スバル！」

シオンはスバルの名を呼び、そして満面の笑みで笑った。



「貴様――！」

叫び、更なるスティンガーを放とうとするチンク・・・恐らくはこれも因子による複製だ。が叫ぶ。

しかし、それすらもチンクは出来ない。

ギンガとティアナがシオン達の後ろから追い付いて来たのだ。

そして、ティアナはギンガに抱えられたまま周囲に展開したスフィアを放つ！

「クロス・ファイアー！シュート！！」

ー散！ー

放たれたシュートはあます事なく、チンクへて向かう。

それにチンクは舌打ちして、後ろへ下がり。ハードシエルを発動。全弾、防ぎ切る。

「……シオン！またアンタは勝手に先行してっ！」

「あのな……それでもギリギリだったんだぞ？」

ガーーーーッ！と怒るティアナにシオンが半眼で告げる。

最初は平行して三人一緒に進んでいた訳だが、いきなりシオンが「嫌な予感がする」と呟き、最大速度で一人で先行してしまったのだ。

ブレイズの速度と、シオンの空間に足場を作る能力。

そして、その身体性能により、シオンの速度は結果としてギンガを上回った。

そして二人を置き去りにしたシオンが見た光景は今まさにスバルへと投げられんとするステインガーだった。

「ティア……それに、ギン姉……よかった。生きてて……」

「は？アンタ何言って……」

「ティアナ。あれあれ」

スバルの台詞に疑問を浮かべるティアナ。

だが、シオンが指した先を見て飛び上がる。

ギンガも嫌そうな顔をしていた。

二人が見たのは自身の死体であった。

非常に嫌な物であろう。

誰も好き好んで自分の死体など見たくは無い。

うつ、と青ざめるティアナだが。スバルがここに居る意味を悟り、スバルに向き直る。

「……で。そうじゃない！スバル。アンタ大丈夫なの？」

「……………ん……………」

「スバル？」

スバルの返答に疑問を挙げるティアナとギンガ。

スバルの声はあまりにもか細い。

・・・いや、声だけでは無い。

スバルの身体はスウッと透けているのだ。

それを見て、慌てそうになるティアナとギンガ。

しかし、シオンはここに来るまでにイクスから聞いたトウヤのダイブ体験談を聞いた為、焦らない。

二人を留める。

「シオン！このままじゃ、スバルが！」

「これでいいんだ。二人共、落ち着け。…………スバル。…………最後に言
つとく」

二人を押し止めたシオンが。しかし、スバルに向き直る。

スバルもまた消える身体でシオンを見た。

「必ず、助ける。…………次のお前の世界でも、その次の世界でも」

「う、ん……………待ってる……………信じてる……………よ。シオン……………」

そして、ニツコリと笑ってスバルは消えた。

「スバル！…………シオン。アンタ！」

「いいから聞け！スバルは……………」この世界、のスバルは助けられた
んだよ！」

「……………どう言う事なの？」

シオンは事情を話そうとして、しかし。たたき付けられた殺気に口

を閉じる。

チンク、ノーヴェ、ウエンディの三人だ。

三人共、その顔は噴怒に染め上げられている。

「よくも、よくもやってくれたな!？」

「……そりゃあ、こっちの台詞だろうが」

シオンはその殺気を全く意に解さない。

三人に向き直る。

手に握るイクスに力が籠った。

「……好き勝手やりやがって。……覚悟は出来てんだろうな？」

シオンは怒っていた。

あからさまに。

ティアナ、ギンガもそれぞれのデバイスを構える。

それに三人もまた固有武装を構えた。

「この世界でのスバルの借り、まとめて返してやるよ!」

瞬間。六人は一気に駆け出した。

ここに。この世界での結界決戦の幕が上がった。

(第二十四話に続く)



ア

「はい♪またもや良い所で終わりやがって!との声を華麗に無視するアリサ道場です♪」

す

「もうこれ、定番だね。何のかんのと決着ついていないし」

「作者は、そこはテストメントクオリティ、と、銀河○風ブ○イガ
ーのオープニングを口ずさむのみでしたけどね。さて、EXはあの
展開で風雲！海鳴温泉の笑える展開にウキウキしつつ、今回もオリ
キャラ召喚しちゃいます♪」

ル

「Strikers Another Stageから来た。ルミ
オだ。よろしくな」

ア

「これまた……生意気そうなのが来たわね……」

ル

「生意気？アンタには負けるさ」

ア

「ムッ……」

シ

「はいはい、いきなり喧嘩にならない。……少し予想出来てたけど
な」

ル

「なんだ？お前が仕切るのか……よ……？」

シ

「ん？なんだい？ルミオ君？もっと大きな声ではっきり言ってみよ
うか？……首から上が惜しくなければな……」

す

「シ、シオン君！駄目だよ！？いきなり問答無用で潰そうとしちゃ
あ！……せめて道場の終わりかけじゃ無いと……」

ル

「怖っ！終わりかけなら許されるのかよ！？」

ア、す、シ

「「当たり前」」

ル

「……来る場所間違えたか……」

ア

「まあ、基本。道場で生意気発言した奴は粛正される運命にあるから♪」

シ

「……まあ、そのカテゴリーに俺とカナンが入ってますしね……」

「前例がある分ルミオ君は割と、ね」

ル

「……て、言うか三人共、初対面の俺にそんな強気な態度取れるよな……」

シ

「ああ、お前。面がエリオだからな。そのエリオが敬語抜きで生意気発言してんだ。……ムカつくぞ……」

ル

「くっ……！こんな所にまでオリジナルが……」

ア

「はいはい！そこまで、じゃあ早速前後編を振り返るわよ？」

す、シ、ル

「「は……い」」

ア

「感じとしてはトウヤ全開、て感じね？漸くまともにトウヤが戦ってるシーンが出たわね……」

シ

「トウヤ兄いはバグキャラならず生ける伝説キャラですからね……戦闘能力じゃあ確実にトップランクです。……あれで性格さえな……」

す

「まあまあ、でルミオ君？感想は？」

ル

「……いや、そもそもあの二人と比べる事事態が間違っ
て無いか？」

シ

「それはとっても正しい指摘なんだけどな？……弟とし
ちゃあ。いろいろ劣等感に苛まれたよ……」

ル

「……お前も大変だな……」

ア

「まあ、トウヤはボケにセクハラ発言の連発で完全に
キャラが確立したしね。……改めて思うと美味しい
キャラね……」

す

「オリキャラでボケキャラは結構難しいからね？」

シ

「ルミオん所は？誰かボケ担当はいるのか？」

ル

「……キャラル・ル・ルシエなんかがそうなるのか？」

シ

「何故に疑問形だよ？しかもキャラは全SSに共通のボケ
キャラだろ？」

ア

「EXではその頻度少ないけどね」

す

「でもたまにやるよね？休日編とかで」

シ

「ですね……さて。話題のキリが良い所でこの編で♪
いや、オリキャラ召喚したのに、素晴らしく普通に終わ
りましたね♪」

ル

「……1番最初のアレで普通なのか？」

す

「普通だよ？いつもなら収束砲撃が飛んだり、乱戦になったり、薬を打たれたり、執事が現れたり、て大変なんだから♪」

ル

「……本当、よく大丈夫だな。この道場……」

ア

「そこがアリサ道場クオリティよ♪」

シ

「ですね♪さて、今回のオリキャラ召喚承認して下さった白河シンジさん♪ありがとうございます♪次も召喚したままでいくので♪何とぞよろしくです♪」

ル

「……次も平穏無事に終われる事を祈るしか無いか」

ア

「まあ、その願いは基本叶わないんだけどね♪」

ル

「鬼か……」

す

「今さらだよ♪」

シ

「ハイハイ。締め、行きますよ〜。それでは皆さん♪ではでは♪」

ア、す

「「また次回〜♪」」

ル

「よろしくな？」

シ

「……合わせろよ」

ル

「……キャラ的に無理を言わないでくれ……」

第二十三話「極めしもの」(後編) (後書き)

「タカトとトウヤ、二人のEXが全力を尽くし戦う」

「そして、シオン達はスバルの負の感情を引き出そうとする因子が作りだした者達と戦う」 「渡り歩くスバルの世界。

そして、彼女の正負、どちらの感情を見ていくシオンは……」

「次回、第二十四話 『スバルのココロ』」 「少年は鍵をその手にココロを受け入れる」

第二十四話「スバルのココロ」(前編)(前書き)

「最初会った時は鬱陶しいと思った」 「やけに煩くて、

でも優しくて」

「だんだんとその優しさに引かれて、

でも否定したりした」

「それでも彼女は俺を見捨て無

かった。どこまでも優しく。そして間違った時は力付くで正した」

「俺は彼女に救われた。だから、今度は俺が……」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まります」

第二十四話「スバルのココロ」(前編)

スバルの世界の中。

そこで決戦の火蓋は切られた。

シオンは怒りにどんどん思考が、感覚がシャープになっていく事を自覚する。

これは、前にも・・・クラナガンのショッピング・モールでの戦いと同じ感覚だ。

向かい来るはチンク・・・チンク本人に悪いので仮にチンク・オルタと勝手に名付ける。は、五指にステインガーを挟み、シオンに突っ込んで来る。

ウェンディ・オルタ、ノーヴェ・オルタ(こっちも勝手に名付けた)はコンビでティアナ、ギンガと戦う積もりらしく、二人に向かう。・

・好都合である。

シオンは未だ連携戦闘は得意と言え無い。

故に個人戦闘は逆に有り難かった。

「イーヒュッ！」

一息。

振るわれる両手からステインガーが放たれる。

その狙いは正確無比。

回避しようと、1、2発は受けざるを得ないだろう。

しかも、チンク・オルタには厄介なISがある。

そこまでシオンは思考して、この状況に最も適した技を自身から引きずり出す！

「神覇・四ノ太刀、裂波！」

ー波ー

空間振動。

イクスから放たれたそれはステインガーを巻き込み、弾く。
さらにシオンはその場で足を止めて、シールドを最大数展開する。
チンク・オルタが指をパチリと弾いた音が響く。

ー爆！ー

爆音。

ステインガーが一本も余す事なく爆発した。

ISランブル・デトネーター。

固有武装ステインガーを爆発させる事が出来るISだ。

これの屋内での爆砕能力は凄まじいの一言に尽きる。

下手をすればS級に匹敵する攻撃力を生むからだ。

シオンはその爆風にシールドごと押され、数m下がる。

ーー背に悪寒が走った。

「っーっー！」

ー閃！ー

悪寒に、直感、に従うまま背後へとイクスを振るう。

そこに居る筈の無い存在。

チンク・オルタが居た。

「ほう……」

シオンの一撃を手につつステインガーで受け、後退しながらチンク・

オルタはしかしニヤリと笑う。

――悪寒は止まらない。

次の瞬間。チンク・オルタの姿をシオンは見失った。

悪寒に突き動かされるまま、シオンはその場で前転する。

直後、シオンが居た場所を数本のステインガーが通過する。

シオンは直感の命じるままにプロテクションを張った。

――爆！――

爆碎。

直後に再び起きた爆発にシオンは顔を歪め、そして理解した。

これがチンク・オルタの追加能力。

超高速移動。

シオンは知らないが、それはナンバーズの一人、トーレのIS。ライド・インパルスに酷似していた。

「どうした？ 借りを返すんじゃないのか？」

抜かせー！。

ランブル・デトネイターで引き起きた煙の中でシオンは胸中、悪態を付く。

視界は煙で0。

向こうはいかな手段か、こちらの位置を完全に掴んでいる。

厄介極まりなかった。

まずは向こうの位置を知らなければならない。

シオンは再度刃を振るう。

「神覇・参ノ太刀、双牙！」

ー轟ー

振るわれたイクスを中心に二条の牙が疾る。
牙は煙を散らし、シオンは視界を取り戻し。

ーそのまま絶句したー

「な……………」

開けた視界に映るステインガー。

その数、数十本。

その切っ先をシオンへと向け、取り囲む様に展開している。

ステインガーの包囲の向こうにチンク・オルタが嘲笑を浮かべて立っている。

シオンはそこで失態に気付いた。

チンクはステインガーをアポート（転送）して配置する能力を有していた……………」

次の瞬間。全てのステインガーが、シオンへと向けて殺到した。



ティアナ、ギンガはシオンと離れウェンディ・オルタとノーヴェ・オルタと対峙していた。

「……………シュート！」

「……………ショット！」

ティアナとウェンディ・オルタの射撃が絶え間無くぶつかり、辺り

に光の花と為り照らす。

その中をギンガとノーヴェ・オルタはウィング・ロードとエアライナーを形成して、疾駆する。

互いにリボルバー・ナックルとジェット・エッジを回転させながらぶつけ合い、拳と蹴りを炸裂し合う。

「コンのー！」

ノーヴェ・オルタが右腕を掲げる。

そこに現れるは六つのスフィアだ。

固有武装。ガンナックル。

ノーヴェが有する射撃攻撃だ。

オルタの方も問題無く使えるらしい。

ガンナックルから放たれる光条。

それは迷い無くギンガへと向かうがギンガはそれに対して右手を掲げる。

「トライ・シールド！」

瞬間。ギンガの右手に形成されるはベルカ式魔法陣のシールドだ。

そのシールドはガンナックルから放たれた射撃を弾く。

ノーヴェ・オルタは構わない。

連射しながら更に背中とジェット・エッジのブースターを吹かす。

直後、猛烈な速度を持ってギンガへと直進。

ギンガもシールドを解除して、ノーヴェ・オルタへと疾駆する。

再度ぶつかり合う拳と蹴り。

それにノーヴェ・オルタは今度は笑う。

右の蹴りと左拳。

ぶつかり合ったままノーヴェ・オルタは背のブースターを吹かし、更にエアライナーを解除。

身体を捻らせ、ギンガの懷へと入る。

左の足が再度エアライナーを形成。

そのままギンガの顎を狙い、左のジェット・エッジが放たれる。

「ーっ！」

ノーヴェ・オルタの予想外の動きに、しかしギンガのブリッツ・キヤリバーは自己の判断で主を守る為に後ろに疾駆。

ギンガを後ろへと下がらせる。

結果、ギンガの顎を掠める様にノーヴェ・オルタの蹴りは通過し、距離が離れる。

ギンガは自身のデバイスに感謝しつつ、リボルバー・ナックルのカトリッジをロード。

追撃を掛けんとするノーヴェ・オルタに突き出す。

「リボルバー！シュート！！」

ー豪ー

ギンガが放つ拳に合わせる様に空気を渦巻いて衝撃波が放たれる。

この魔法は威力はともかく、その範囲が広い。

ノーヴェ・オルタはその一撃を回避出来ず、その場に釘付けになる。

ーその隙をギンガは逃さない。

ウィング・ロードを形成し、ブリッツ・キヤリバーが唸る。

最大加速で動きを止められたノーヴェ・オルタの懷に飛び込む。

（強化されていても、そんなの関係無い）

カトリッジ・ロード。

左手のリボルバー・ナックルが刻むは激烈な回転。

（狙うはただ一撃。相手の急所への正確な一撃）

ノーヴェ・オルタが、ギンガの接近に気付き、左の蹴りを放つ。

――遅い！

（狙うのはただそれだけ！）

――轟！――

ノーヴェ・オルタの蹴りをかい潜り、ギンガのリボルバー・バンカ
ーがその鳩尾に吸い込まれる様に突き刺さる。

――ギンガは止まらない。

そのままノーヴェ・オルタの鳩尾を左手が突き刺したまま疾駆する。

0 距離でカートリッジ・ロード。

リボルバー・シュートを放つ。

1。

2。

3。

0 距離で叩き付けられたそれにノーヴェ・オルタが苦悶の標準を浮かべる。

ギンガはそれに、本人の・・・妹の顔を浮かべ。しかし、迷わない。
ラストのカートリッジをロード。

そのままウィング・ロードを下へと向け、ノーヴェ・オルタごと床
へと激突する！

――砕！――

――轟！――

同時、爆発したがごとき煙が二人を中心にぶちまけられる。

その煙が晴れた後には、床に倒れ伏すノーヴェ・オルタとその鳩尾に未だ拳を突き刺したままのギンガが居る。

ノーヴェ・オルタはただ口の端を歪め、笑うと同時。無数の黒のバブルとなって消え去った。

後に残るのは残心したままのギンガのみだった。



ノーヴェ・オルタが倒された時、しかしウエンディ・オルタが浮かべるのは姉を倒された事による悔しさでも、ましてや悲しみでも無い。

使え無い。

自身の姉に対してそんな侮蔑の表情を浮かべていた。

それを射撃戦を演じていたティアナは見て、本人では無い事を再確認する。

彼女等の姉妹の絆の強さを知っているからだ。

彼女等と戦った身として。

だからこそティアナは迷わない。

スフィアを再展開。

同時、カートリッジ・ロード。

「クロス・ファイアー！」

そう、こんな、まがい物、を、スバルを傷つけ姉に対してさえ侮蔑の表情を浮かべる存在を許す訳には行かないー！

「シュート！」

「馬鹿の一つ覚えっすか！」

放たれるシュート。

だが、ウェンディ・オルタが放つエリアル・ショットが、それ等全てを迎撃する。

さらにティアナに向けられるライデング・ボード。

ー轟ー

砲撃。

AA級の砲撃がティアナへと撃ち放たれる。

それは迷い無く、ティアナへと突き進みー。

そしてあっさりと通過して、ティアナの姿は消えた。

「また幻影!？」

「ーそこっ！」

同時、右横から突っ込んでくるティアナ。

右の手には2ndモード。

ダガーと成ったクロス・ミラージュ。

左の手には1stモード。

銃のままのクロス・ミラージュが握られている。

さらに周囲に纏うは四つのスフィア。

ウェンディ・オルタが気付くと同時、ティアナは即座にスフィアを放つ。

それに即座にウェンディ・オルタは反応。

抜き撃ちでエリアル・ショットを放ち、迎撃。

さらにライデング・ボードの先端には光が灯る。

ティアナとウェンディ・オルタの距離は未だ離れている。

それにウエンディ・オルタが浮かべるのは笑み。
嘲笑だ。

「これで！終わりっす！」

ー弾！ー

放たれる砲撃。

ティアナはそれに避すそぶりも見せず突っ込みー。

そして、あっさりと通過して、ティアナの姿は再度消えた。

「な……っ！」

デュアル・イリュージョン

二重幻影

幻影を複数作り出すのでは無く。

時間差で二つ目の幻影を作り出す事で相手の心理すらも利用した幻影術だ。

シオンとの戦いでも活躍したそれをティアナは使いこなす。

ー斬！ー

ウエンディ・オルタは背に疾った衝撃に呆然としながら振り向く。
その先には2ndモードのクロス・ミラージュの両刃を、その名の通り十字にウエンディ・オルタに刻み付けたティアナが居た。

「ごーのっ！」

「113rdモード！」

怒りの声を上げるウエンディ・オルタにティアナは構わない。
クロス・ミラージュを一つに戻し、ブレイズ・モードへと移行。
そのまま構える。

「ウエンディ・オルタは動け無い。」

再生が始まるが、完治は未だ成らず。また斬撃の衝撃は抜け無い。
クロス・ミラージュの先端にターゲット・サイトが展開。そして怒
りの視線を向けるウエンディ・オルタの額にレーザー・サイトが当
たる。

さらにターゲット・サイトに展開する環状魔法陣。

そして放たれるは激発音声！

「ファントム！！！」

ティアナは叫び、そして容赦無く放つ！

「ブレイザー！！！！」

「破！！」

「閃！！」

その一撃はウエンディ・オルタを飲み込み。そのまま突き進む。
そして壁にウエンディ・オルタごと叩き付けられた。

ウエンディ・オルタは光の中で。

しかしその嘲笑は止めず。そのままバブルと成り消えた。



「時が止まった」

シオンは向かい来るステインガーを見て、そんな感想を抱いた。
何だ、これは？

ステインガーが、チンクが、'止まって、・・・いや、正確には止まって見える程にゆっくりに見える。

それだけでは無い。

感覚が広がる。

世界が感知出来る。

ステインガーが何本あって、それが何時、自分に当たるかを理解出来る。

それだけでは無い。

今、離れて戦うギンガを。ティアナを感じる事が出来る。

それらを感じながらシオンは一つの声を聞く。

それは風。

それは世界。

それは友。

それは隣人。

その声を聞きながらシオンは知らず呟く。

「セレクト・ブレイズ」

トランスファア。

瞬間でブレイズ・フォームへと戦技変換を行う。・・・行える。

通常では有り得ぬ速度で。

そして、いよいよ自分へと突き立たんとするステインガーを左右のイクス・ブレイズで弾く。

'全て'のステインガーを一瞬で。

さらに爆発の気配を感じて、シオンは弾き飛ばしたステインガーの隙間から飛び出る。

―そこでシオンの加速現象は止まった―

―爆！―

爆音が響く。

それにチンク・オルタは笑みを浮かべ・・・
しかし、今度は逆に背に走る悪寒に超高速移動を発動。

―閃―

チンク・オルタが居た場所を刃が通り過ぎる。
ブレイズ・フォームのシオンだ。

それを見てチンク・オルタが浮かべるのは驚愕。
一体、どうしたらあの状況から抜けられる！？
理解出来ないそれに、しかしシオンはその思考すら許さない。

「……我は共に歩く隣人にして友人。汝が枝族は、風。汝が柱名は、ジン、」

「な……に？」

それは、その詔は、契約、の、誓約、の聖句。
チンク・オルタはそれに悪寒が止まらない。

こんな土壇場で新たな契約を成す等、知らない。
彼女の・・・、因子、の情報にそんな物は無い。在っては成らない！

「契約を……何の準備も無しに契約を行うだと！貴様は……一体何者だ！？」

「……何者でも無えよ」

そう、シオンは未だ。何者でも無い。

だからこそ何者にでも成れる!!

「我が血と名を持って、ここに契約を結ばん! 来たれ! ジン、!」
「さ、させー!」

シオンの叫びにチンク・オルタはそれを防がんとする。・・・間に
合わ無い。間に合う筈が無い!

「精霊契約! ジン!!」
スピリット・エデット!

風が吹き、チンクが放つスティンガーを添く跳ね返した。
現れるのは風で構成された太っちょの巨漢。

しかし、その眼光は鋭い。

精霊契約。

今、シオンは新たな精霊。風の精霊と契約を成したのだ。
そこで終わらない。

ジンは姿をぶらし、シオンへとその姿を重ねる。

それはシオンの切り札。軽々しく使う事は許されない業。^{わざ}

しかし、シオンは躊躇い無く。それを使った。

チンク・オルタはそれに絶望する。

シオンはその表情を冷ややかに見ながら、その切り札の名を呟いた。

「精霊・融合」

スピリット・ユニゾン!

纏うは風。

今、シオンは全ての風と共にあった。

「く……………!」

チンク・オルタは顔を歪ませて、シオンにステインガーを放つと同じ時。

超高速移動を開始。

撤退を選ぶ。

そんなチンク・オルタにシオンは両のイクス・ブレイズを腰溜めに構える。

ステインガー。

チンク・オルタ。

その二つを同時に打倒しうる業をシオンはその身から引き出す！

「神覇・漆ノ太刀。奥義――」

纏う。纏う。

風をその身体に纏う。

それはシオンを核と成し、白き虎とその形を成した。

「――白虎――」

――閃――

――斬――

瞬間で全てのステインガーは斬り裂かれ。

そして逃走するチンク・オルタのその身に幾百、幾千の斬撃を刻まれた。

「か……………っ！」

シオンがその身に纏った白虎を解除すると共にジンを送還する。
同時、反動がシオンを襲った。

融合を使用したのは一瞬なれど、その反動はシオンを苛む。
しかし、シオンは立ち上がる。

我慢出来ない程でも無い。

そして、シオンのその背中を見ながらチンク・オルタはバブルへと成り、消えていく。

「――」

最後に一言、シオンに向かい放ち、そしてチンク・オルタは消えた。
それを見ながらシオンが浮かべるのは苦笑い、だ。

「……アホか」

チンク・オルタが最後にシオンに放った言葉。

「お前達は決して許さない」

それにシオンは苦笑いしたのだ。

許さないのは誰か。

シオンはそう思う。

「俺こそ、許すつもりは無えよ」

そして、シオンは振り向く。

そこにはギンガ、ティアナがこちらへと走って来ていた。



「シオン！」

「……おう、そっちも無事みたいだな」

「何とかね」

シオンはブレイズ・フォームを解除し、ギンガ、ティアナと合流する。

ジンと契約を結ぶ瞬間、それに融合している最中は風そのものが知覚範囲となっていたらしくシオンは二人の決着も知っていた。

それがジンを融合した時の特化能力であるらしい。

シオンは少し目眩がする頭をどうにか二人に悟られない様にしながらそう思う。

「で？」

「？、で、て？」

ティアナがいきなり問い掛けるがシオンは？マークを浮かべる。

それにティアナは半眼になる。

ギンガも苦笑していた。

「さっきのアレよ。この世界のスバルは救えたと言う話」

「おお！それな」

ギンガのフォローにシオンはポンっと手を打つ。

そんなシオンにティアナは白い視線を向ける。

「アンタね……」

「いや、だってあの戦いの後だぞ？」

「まあ、そこは良いとして、どう言う事なのかな？」

二人が口喧嘩になりそうな空気を察してギンガが留める。

どうにもティアナはシオン相手だと善きにしろ悪しきにしろ感情的になる傾向がある。

まあ、本人達はあまり気付いて無いが。

「そうですね……イクス？」

【ああ、もうすぐ始まるぞ？】

シオンとイクスのやり取りを不思議そうな顔で二人は見る。
直後、天井が……いや、世界の空が割れた。

「「え……！！」」

「……これ、怖いな？」

【俺も初体験だから何とも言えんが……確かなな】

説明を未だ受けてない二人は見るからに動揺し、シオン自身も少しばかり驚く。
そうしている間にも割れは酷くなり、そして天井だけで無く、床にもひび割れは広がる。

「ちよっ！これ何！？」

「シオン君！？」

「えっと、確か手を繋いだ方がいいんだよね？」

【向こうで逸れる可能性もあるからな】

慌てる二人を余所にシオンとイクスは確認し、そしてティアナ、ギンガの手を握る。

「て、こんな時に何を……！」

「いいから黙って見てる……百聞は一見に如かず、て言うだろ？」

「……それ。こう言う場合に使う言葉かしら……？」

思わず呆れ顔になるギンガ。

そうこうしている内に床はひび割れ、空は完全に割れていた。

直後。床が砕け、三人は真逆さまに落ちていく。

シオンは飛行魔法を使わず、さらにギンガがウィング・ロードを発動しようとするのを留める。

下が見えない程の奈落。

そのままそこに三人は落ちて行った。



落ちて行く。

落ちて行く。

三人はそのまま落ちて・・・。

次の瞬間。

いきなり炎の中に居た。

「「「はい?」」」

【む……これは……】

思わず目が点となる三人。イクスも行き着いた先がいきなりのコレだったので流石に動揺している。

「イクス? これは……」

【フム。確認してみらんとな……ギンガ・ナカジマ。ティアナ・ランスター。二人共、スバル・ナカジマとこの景色の関連、何か分からないか?】

「え? この火災、て……」

「……間違い無いわ……」

ギンガがイクスの言に周りを見て。

そして呆然とする。

ティアナはそのギングの反応を見て、やはりかと確信した。

「じゃあ、ココが？」

「……ええ。5年前の空港火災……」

【つまりは関連性はあるのだな？】

イクスの問いにギングは頷く。

そして二人はシオンとイクスに向き直った。

「……どう言う事なのか、今度こそ説明してくれるんでしょうね？」

「分かってる。取りあえず歩きながら話すさ。……、この世界、のスバルも見つけなきゃだしな？」

そう言いながらシオンは歩き、二人もそれに並び歩いて行く。

「……深層心理、て知ってるか？」

「？。確かあれよね？人の心が階層状になってて無意識に近い部分程。無意識的な領域になってる、て言う？」

「ああ、で、だ。今俺達はそのスバルの世界の……下層に向かってる訳だ」

「下層？」

ティアナの答に頷き、ギングの問いに向き直る。

深層意識と言うのはつまり、人の心には意識の下層において、更に深い層が存在し、無意識的なプロセスがこれらの層にあって進行しており、日常生活の心理に対し大きな影響を及ぼしていると言うものだ。

「イクス？」

【ああ。ここからは俺が話そう。俺達が居るのはスバル・ナカジマの精神世界だ。この世界は顕在意識と深層意識のレベルを反映して階層構造となっている訳だな】

「け、顕在意識？」

「……俺もそこら辺の説明がいまいち解らなくてな……」

【……解り易い解釈でいいなら氷山をイメージしろ。海より上の部分が顕在意識。下が深層意識だ】

つまりは顕在意識が通常の日常生活に於ける意識を担当し、深層意識が無意識層を担当する訳である。

これ等の説明を聞いて、漸くティアナはピンと来たらしい。イクスに目を向ける。

「つまり、深層意識に潜る程にスバルの世界が在って、さらに同じ数だけスバルが居る、て事？」

【どこぞの馬鹿弟子と違って察しが良くて助かる】

「悪かったな！馬鹿で！」

イクスに比喻され、流石にシオンも怒鳴る。

確かに三回くらい聞き直していたからあまり否定は出来ない。

「と言う事は私達はスバルの世界の数だけスバルを因子の干渉から助けなければいけないと言う事なの？」

【いや、そう言う訳でも無い。因子は彼女のトラウマ……負の感情をもっとも引き出せる世界を選んで記憶の改竄を行おうとしている節がある。そこを足掛かりに彼女の記憶全てを改竄する為に、な】

ギンガの問いにイクスが答える。

つまり、今すべきは因子が関与していると思しき世界に向かい、その世界の因子の干渉から彼女を守りきる事である。

それを三人に向けてイクスは説明する。

「成る程、ね……」

「うん。大体の事情は飲み込めたわ」

【ならば何より、だ。それより気をつけろよ？】

「分かってる。因子は……」

【違う】

シオンの肯定をしかし、イクスはあつさりと否定する。それにギンガ、ティアナもイクスを怪訝そうに見る。

「……何が違うんだ？」

【……言っただろう、無意識、の部分に向かっていると。無意識とはつまり彼女が潜在的に抱いている、想い、でもある。それは綺麗な事なんかじゃあ無い】

「……どう言う事？」

流石に解らなかったのかティアナが疑問をイクスにぶつける。
ギンガもまだ怪訝そうである。

【人はその選択。その意思に対して、肯定的な想いがあると同時、必ず否定的な想いが浮かぶものだ】

「……つまり？」

シオンが先を促す。

イクスもまた、それに答える。

【これより先に存在する彼女は我々が知る彼女では無い可能性もある、と言う事だ。……シオン。覚悟した方がいいぞ？】

「……俺達が知らないスバル、か……」

「……ちょっと、怖いわね」

「そうね……」

イクスの言に三人は少し考え込み、しかし。三人は足を止める。
シオンが周りへと目を向けた。

「……ギンガさん」

「ええ。ティアナさん？」

「はい。こちらでも、確認出来ました」
肯定です。

ティアナにクロス・ミラージュが肯定する。

そして突如、炎の中からそれは現れた。

ガジェット。

そう、この空港火災はガジェットとあるロスト・ロギアが関連して
いる、と言う報告があったー！

「……とにかく、こいつ等潰してさっさとスバルの元に行こうぜ！」

「そうね！」

「ええ！」

三人は共に頷き合い。

そしてガジェットに向かい一気に駆け出した。

第二十四話「スバルのココロ」(前編)(後書き)

はい。今回もかよ！て怒鳴られそうですね……すみません(汗)。

どう考えても一話だけでは済まないので分けます。

今回は多分、前中後に分かれて投稿する事に……ああ！ごめんなさい！石を投げないで！(汗)。大事な話なんで分量もその分多くなる、て事で勘弁して下さい(汗)。ではでは♪次は中編でお会いしましょう♪

第二十四話「スバルのココロ」(中編)(前書き)

ども、テストメントです♪中編をお届けします。今回のEX。いろいろやばいので覚悟していただきたいです。では、本編をどうぞ♪

第二十四話「スバルのココロ」(中編)

ガジェットが張るAMF。しかし、シオンにはそれは意味を成さない。

その身に纏うは自身の魔力。

シオンは己の身体に魔力を流し、AMFに対抗する。

さらに吹き上がる魔力が推進力と成り、シオンは加速。
ガジェットに一気に突っ込む！

「神覇・伍ノ太刀、剣魔！」

ー轟！ー

吹き上がる魔力をシオンは纏い、突貫する。
突撃。

イクスを突き出しながらの突貫は、その進行方向に居るガジェットを纏めて碎き切る。

シオンはそのままガジェットの集団の真ん中まで進み、剣魔を解除。
両の靴を地面にたたき付け、地面を削りながら止まる。

しかし、壊したガジェットはシオンの進行方向に居たガジェットだけだ。

それを免れたガジェットが今度はシオンを包囲して殲滅せんとシオンを包み込みー

ー散！ー

さらに追撃で走ったクロスファイアー・シュートがガジェットを貫き、爆砕していく。

爆砕したガジェットの後ろからティアナの姿が現れた。

オプテックハイド。

光学迷彩を掛ける魔法だ。

これをもってティアナはその姿を隠したのだ。

そして後一人。

「はぁ……っ！」

シオンの周りのガジェットが次々に破壊されていく。

周りのガジェットが全て破壊された直後、唐突に現れた人が居る。
ギンガだ。

彼女もまた、ティアナにより透明化をかけられたのだった。

シオンの突貫にティアナ、ギンガの追撃で陣形を崩されたガジェットは散り散りに撤退を開始。

・・・許す筈が無かった。

「神覇・参ノ太刀……」

「クロス・ファイアー……」

シオンからは魔力が吹き上がり、ティアナはカートリッジ・ロード。
その周囲にはスフィアが二十、展開する。

そして、二人は同時に叫ぶ！

「双牙！！」

「シュート！！」

ー破！ー

ー閃！ー

振り下ろすイクスから二条。地を疾る斬撃が放たれ、それを追う様に二十のシュートがガジェットに向かう。

それは過たず撤退するガジェットを破碎した。

シオンは残心を解き、立ち上がる。

そのシオンにギンガがウィンクして見せた。

二人にティアナも合流する。

「……よく。こんな作戦思い付くよな―」

そう言いながらシオンが見るのはティアナだ。

彼女は

「まあね」と答えながらカートリッジの残弾を確認する。

ギンガもまたカートリッジの確認を行う。

「うーん。まだカートリッジに余裕はあるけど……」

「補給が期待出来ないのはきついわね……」

「大変だな―」

ぼやく二人にシオンは他人事の様に呟く。

二人と違い、カートリッジ・システムが無い為、シオン自身は気楽であった。

そんなシオンを二人は恨めし気に睨む。

「何。他人事なのよ……」

「シオン君？ 私達の残弾が無くなったら自動的に援護は出来なくなるのよ？」

「う……！」

二人の言にシオンが呻く。

実際、シオンは連携戦闘は苦手であり、ティアナ、ギンガがシオンを援護する形で連携戦闘を行っているのだ。

「ま、まあ。それは置いて置くとしてだ」

「逃げたわね……？」

「逃げたね……？」

「それは置いて置くとして！」

半眼の二人にシオンはあくまで繰り返す。
決してごまかそう等とは考えてはいない。

・・・多分。

「ティアナ。スバルの位置、掴めたか？」

「もうちょっと待って。エリアサーチが今、六割済んだ所だから」

【ふむ。その間にギンガ・ナカジマ。この時のスバル・ナカジマはどうなったのか教えて欲しいのだが？】

イクスがギンガに向かって問う。

この時の事情をスバル自身から聞いているティアナはエリア・サーチに集中し、事情を知らない二人はギンガに向き直る。

ギンガは頷き、シオンの眼を見ながら口を開いたた。

「ええ。この日、私達は……」

自分の目を見て話すギンガにこの姉妹は眼をジッと見て話すよな。
と思いつつシオンは耳を傾けた。



「……ええっ！」

ちょうどギンガから事情を聞き終えたタイミングでティアナから声が挙がった。

それにシオンとギンガがティアナを訝し気に見る。

「……どしたよ？いきなり叫んで？」

「その……スバル。見つけたんだけど……」

言い難そうにティアナが話す。それにシオン、ギンガは？顔となる。

「見つかったなら、さっさと行こうぜ？」

「そう、なんだけど……」

「……何かあったの？ティアナさん」

真剣な顔持ちで話すティアナにただ事では無いとシオン、ギンガも居住まいを正す。

ティアナも息を一つ飲んでエリアサーチが感知した、存在、を話す。それにシオン、ギンガは流石に絶句した。

「……イクス？」

【……十分有り得る話だろう。寧ろ、スバル・ナカジマのこの時の印象の度合いからすると、彼女、が出ない方がおかしな話しだらうな】

イクスの言にそれぞれ冷や汗を流す。

確かに、聞いた話しによればこの時のスバルは、彼女、に助けられた事により、魔導士を志したらしい。

ならば、彼女、の姿を因子が取るのは至極当然と言えた。

「……だからと言って此処でまごまごもしてられないな」

「そうね……気は進まないけど、やるしかないし」

「行きましょう！」

三人は一斉に頷き、駆けようとする。

しかし、突如として周りの炎が巻き上がった。

「！！！！！！」

「二人共、散って!!」

ギンガの叫びに1番前に居たシオンは前転し、ティアナは右後ろへとジャンプ。

ギンガも左後方へと飛びのく。

瞬間、シオンと二人を分断するかの様に巻き上がった炎が振落ち、そのまま炎の壁となった。

「……っ！二人共！」

《こっちは大丈夫!》

シオンの叫びにティアナが念話を返す。

ギンガも即座に念話で話し掛けて来た。

炎が邪魔で声がこちらまで届かないらしく、念話を使ったらしい。

《今すぐそつちに……！》

《馬鹿！目的が違うでしょ！アンタはスバルの所に行きなさい！》

《そうよ。シオン君!》

シオンの念話にティアナが、ガーーーーっ!と返し。ギンガもティア

ナを肯定する。

二人の言にシオンは若干考え込み。しかし、振り返ると即座に駆け出した。

《……悪い。なら先に行く!》

《すぐ追いつくから!》

《シオン君! スバルをお願いね!》

二人の念話にシオンは頷きながらそのまま走って行った。

「……行きましたね……」

「ええ……」

二人はシオンがスバルの方に向かったのを感じホッと息を吐き、そして眼前の‘敵’を見る。

それは炎の巨人だった。

形状としてはなのは達がタカトと会った時の感染者に酷似している。

「このタイミングで出て来た、て事は……」

「間違い無く。私達の足止め、ね」

二人に応えるが如く炎の巨人は吠える。

それに二人はそれぞれのデバイスを構えた。

「すぐに突破しましょう!」

「ええ! シオン君を追いつけないと!」

向かい来る巨人に二人は同時にカートリッジをロードした。



「お父さん……」

声が響く。子供の声だ。

辺りは炎に包まれている。

その中を弱々しく少女が歩いていた。

少女の名はスバル・ナカジマ。

11歳のスバルがそこに居た。

「お姉ちゃん……」

歩く、歩く。

父と姉を呼びながら。

だが、その声に応える者はいない。

スバルがホールを歩いていると、突如として振動が走る。

それにスバルが振り向く、瞬間。

「爆！」

「わぁっ！」

近くで爆発が起きた。

その爆風にスバルの身体は軽々と吹き飛ばされる。

「くう……痛っ！」

軽い身体は地面を跳ね。空港のエントランスの女神像の下まで飛ばされる。

「ううつ……う」

泣きながらスバルは両手をついて膝立ちになる。
ポロポロと涙が頬を伝う。

「痛いよ……」

スバルは涙を流す。
それでも助けは来ない。

「熱いよ……」

炎は容赦をしない。
スバルの小さい身体を情け容赦なく、痛めつける。

「こんなの……やだよお……！」

嫌だと。こんな現実嫌だとスバルは泣き続ける。
それすらも炎に包まれた世界は許さない。

「帰りたいよお……！」

スバルの切なる願い。
だがそれを嘲笑うかの様に後ろの女神像の台座の部分に輝が入る。

「助けて……！」

輝は徐々に拡大し、そして・・・

「誰か……助けてっ！」

崩れた。

女神像はゆっくりと、だが確実にスバルへと落ちていく。

影がスバルに射し、そこで漸くスバルは異変に気付き、後ろを振り向く。

そこにはスバル目掛けて落ちる女神の顔がある！

「ーっ！」

スバルはしかし、逃げる事も出来ず。目を閉じ、顔を両手で覆う。
・・・そんな事で、逃れられる筈も無いのに。

そして、

「神覇！」

像が、

「壺ノ太刀！」

落ちて、

「絶影……！」

「破……」

一撃の元に碎け、吹き飛ばされた。

「きゃうっ！」

その衝撃に、スバルは悲鳴を上げる。

だが、衝撃が巻き起こした風がスバルの頬を撫でる。

それは、この炎で熱く、スバルを焼く筈の風。

しかし、何故かスバルはその風を優しいと感じた。

その風に誘われる様に目を開く。

そこには少年が居る。

銀の髪に、黒の服を着ている少年が。

「ぎりぎり、だな。また今度も……」

少年は嘆息する。

しかし、そのまま頭上を睨み付けた。

「……。本当なら助けるのはアンタの役目でしょう？」

その睨み付ける先に、黒の少女が居た。

しかし、少年は知っている。元来のそのバリア・ジャケットは純白であつた事を。

そして、少女は笑う。嘲笑う。

それは本人では……高町なのは、では無い証。
彼女は絶対にそんな表情はしない。

断言出来る。

この存在はカタチだけの偽物だと。

それを少年は……シオンは確信する。

「……もうちょっとだったのになぁー。」

なのは・・・ややこしいので彼女もなのは・オルタとでも名付ける、は。

残念そうに言う。

それにシオンは明確に苛立つ。

何がもうちょっとだったと言うのか。

「もうちょっとで、その子。プチって潰れたのに」
「ひっ……!」

なのは・オルタのその一言にスバルは怯える。
そのスバルを見て、なのは・オルタはニツコリ笑う。
それは、・・・天使の様な慈愛の笑み。

「スバル？今すぐ死んでくれない？ほら、あの炎に飛び込んだら一瞬だよ？」

「あ……あっ！」

怖い。

その慈愛に満ちた笑みがただひたすらに恐ろしい。

なのは・オルタは続ける。

‘悪魔’の慈愛の笑みを浮かべながら。

「大丈夫だよ。死んじゃっても大丈夫な様に、力、を上げるかー」
「黙れ」

なのは・オルタの台詞をシオンが遮る。
たった一言。

だが、その一言はあまりに重く。そして力があつた。

「それ以上。スバルの思い出を、そしてなのは先生を、汚すな、ゴミ」

「……ゴミ？」

シオンの言に今度はなのは・オルタが怒りの視線を向ける。
シオンは構わない。

「これ以上、ゴミと話す積もりも無い。……汚れるからな」
「言ってくれるね……！」

シオンはイクスを。
なのは・オルタはレイジング・ハートを構える。

「誰がゴミか……！」
「黙れと言ったぞ」

シオンの静かな怒り。
それに呼応するかのように炎がシオンを中心に避けていく。
まるで、シオンを恐れるかの様に。
それを見ていたスバルも恐怖に固まる。
……しかし。

「スバル」

一言。

その一言がスバルの恐怖を取り払った。
それはあまりにも優しい声。

「お前の思い出を、取り戻すから」

スバルは彼が何を言っているか解らない。
だが・・・

「うん」

スバルは確かに頷いた。

直後、シオンは駆け出し、なのは・オルタは魔法を放つ！

いつかの戦いの続きが始まった。



シオンの頭はまた怒りで澄み渡っていく。

心はまるで、機械の様に静かに、冷たくなっていた。

心の何処で、カチリと歯車が嵌まる様な感覚をシオンは覚える。

「アクセル・シューター！」

アクセル・シューター！

なのは・オルタのレイジング・ハートから空葉莢が飛び出る。

カートリッジ・ロードだ。

そして、そのままレイジング・ハートをシオンへと向ける。

「シューーート！」

瞬間。なのは・オルタが放つのは40の光。

それが過たず、シオンを、そしてその、後ろ、を狙う。

シオンは回避を選ばない。

距離を狭める事を諦め、イクスを振り上げる。

「セレクト・ブレイズ」

トランスファー！

ブレイズ・フォームに戦技変換。

そのまま両のイクスを振るい、全て、のシューターを迎撃していく。

それを見てなのは・オルタが浮かべるのは嘲笑だ。

「クスクス。……律儀だね？、スバル、を守る為、あえて全部防ぐなんて」

「……」

シオンは答えない。

そもそもなのは・オルタと話す積もりも無い。

だが、なのは・オルタはそのままスバルへと視線を向ける。

「スバル？解る？自分が足手まといになってる、て」

「……っ！」

スバルがなのは・オルタの言葉に呆然となり、シオンへと目を向ける。

シオンは未だ降り注ぐシューターを切り払っていた。

なのは・オルタは追撃のシューターを放ちながらスバルへとさらに言葉（凶器）を放つ。

「守って貰ってばかりで。だから大切なモノも失う、守れない」

「う……うっ！」

それは呪詛、それは呪い。

守れない。

なのは・オルタは次々とスバルにそれを刻み込んでいく。

「だから力をあげる。誰かに守られない力を、自分、は守れる力を」

「あ、ああ」

再び、慈愛の笑みを浮かべる。なのは・オルタにスバルは目を離せない。そのまま・・・

――閃――

なのは・オルタの肩を一条の斬撃が斬り裂いた。

「な………！」

なのは・オルタの顔が驚愕に歪む。

それをシオンは冷ややかに見ていた。

既に全てのシューターは消えている。

シオンが全て斬り裂いたからだ。

「……やっぱりゴミか、なのは先生より、遥かに弱いよ。お前」
「き、貴様………！」

既に外面を取り繕う余裕も無いのか言葉遣いも既に真似ていない。さらに。

―疾―

「あ………！」

背後から襲い来たダメージになのは・オルタは驚愕する。

その背中にはいつ投じられたのか、二振りのイクスが突き立っていた。

「い、いつ………！」

「お前がお喋りに夢中になっている時に、だ。魔力、だけ、は、なのは先生でも他が全部劣化品。しかも質の悪い、な」

シオンがいつそ侮蔑すら、いや、哀れみ、さえも浮かべてなのは・オルタを眺める。

あからさまな侮蔑に、なのは・オルタは二の句が告げない。

シオンからしてみればこの劣化品はあまりにも弱すぎた。

いくら優位に立っていても敵を前にして他者とお喋りする等、三流を飛び越えて五流にすら劣る。

なのは・オルタの身体からバブルが……因子が溢れる。再生。

身体の傷が治ろうとして、しかし。シオンは両の手をなのは・オルタへと突き出す。

「イクス」

リターン。

―撤―

「あっぐ………！」

シオンの呼び掛けに応じ、イクスが、なのは・オルタの胸、を突き破り、シオンの手元へと舞い戻った。

シオンはイクスを掴み、そのままなのは・オルタを眺める。
なのは・オルタはダメージの深刻さ故か、再生にかかりきりで何も出来ない。

シオンはイクスをノーマルへと戻す。

「ま、待って！」

「……………」

止めを刺そうとするシオンになのは・オルタは再び、本物を真似る。

「助けて！お願い！シオン君！」

「……………」

命請い。

それにシオンが止まった事を確認して、なのは・オルタは笑みを嘲笑を浮かべる。

やはり、人間は愚かだと。

ーシオンが止まった理由を履き違えているのにー

「ははは！死いー」

ー斬ー

・・・最後まで言葉を紡ぐ事さえ出来なかった。

なのは・オルタは自分の胸に突き立つ、イクスを見て呆然とする。
シオンは一步も動いてはいない。

射刀術。

シオンはイクスを目にも留まらぬ速度で投げ放ち、なのは・オルタへと突き立てたのだった。

「な、ん……」

「いい加減舐めすぎだ。せめて本物の万分の一でも、らしい、所があればよかったのにな」

シオンは命請いに止まった訳では無い。

ただ呆れたのだ。

あの薄っぺらい演技に。

結局。このなのは・オルタは本物のなのはの力を片欠すらも使う事が出来なかったと言うだけの事。

「……呪ってやる！呪ってやる！呪ってやる！」

「ウゼエ。いいからさっさとくたばれ」

呪詛を撒き散らす醜惡な姿を曝すなのは・オルタをシオンはこれ以上見る気になれなかった。

一刻、一刻事になのは先生を汚されている
そんな気持ちにさせられたから。

結局。なのは・オルタは最後まで呪詛を撒き散らしながらバブルへと変わっていき、消えていった。



シオンはなのは・オルタが消えた事を確認すると漸く息を一つ吐いた。

もし、あれが本物並の能力と知性を合わせ持っていたならばと考えると恐ろしくなる。

実際、本物のなのはと戦ってもシオンに勝てる自信は寸分も無い。切り札を連発して勝てるかどうかなのである。

蓋を開けてみれば本物と比べる事すらおこがましい偽物だった訳だが。

そして、もう一つ。

いくら何でも知人の顔をしている存在を、殺す、事にシオンの精神は参り始めていた。

今なら解る。

これは地獄だ。

そのままシオンはスバルの元へと降り立つ。

・・・そしてシオンは失敗に気付いた。

自分は、スバルの眼前で何をやった？

頭を抱える。

普通に怖がられるだろう。

暴言の連発に、情け容赦ない攻撃。

おまけに止めも刺した。

【……後悔後先立たず、だな】

「……うるさいよ……」

呻く様にイクスにツツコミを放つ、が。

それにも力はない。

とりあえず、怖がられる事を覚悟の上でスバルに近付く。

・・・が、意外にもスバルは表情を変えなかった。

「……スバル？」

「うん。何？、シオン？」

スバルの言葉にシオンは絶句する。

今、このスバルはシオンの名を呼ばなかったか？
呆然とするシオンにスバルが笑いを浮かべる。

「大丈夫だよ。……全部、思い出してるから」

「あ、ああ。そうか……」

シオンはスバルの言に絞り出す様に出す。

「どうやら、基点、とも言える感染者を倒すとスバルは記憶を取り戻すらしい。」

シオンは漸く安堵のため息をつく。

「安心した？」

「まあな。……て、事は……」

スバルが頷く。

その姿はうつすら透けていた。

「そっか……」

「うん。……ねえ、シオン。一つだけ教えておかなきゃいけない事があるんだ」

薄れゆくスバル。

それにシオンも頷く。

声を聞き漏らさない様にスバルへと顔を近付けた。

「……ここから先の私は、多分。私で、そして私じゃないと思う……」

「……それ、て……」

【フム……】

シオンがちらりとイクスを見て、イクスもまた声を挙げる。
薄れゆくスバルはしかし、シオンの袖を掴み、真摯な目で訴える。

「でも、これだけは覚えてて。それも含めて、私、だから！どんな、
どんな、私、でも、それも、私、だから！、だから……」

「嫌いにならないで」

スバルの声にならない声にシオンは一瞬だけ呆然とし、しかし頷く。

「……解った」

「信じてるから、きつと、信じてるから……」

声が掠れる。

姿が薄くなる。

それでもスバルはそれを繰り返す。

シオンはスバルの瞳を見て、しっかりと頷いた。

「きつとだよ」

スバルの言葉は、しかし声にならず。けど、シオンには確かに聞こえた。

そして、スバルの姿は消えた。

「……イクス。」

【感づいたか？今のスバル・ナカジマは情緒不安定だったろう？だが、彼女は彼女、だ。……紛れも無い本人だ】

「……うん」

シオンは思う。

そう、自分が知るスバルも、今の情緒不安定なスバルも同一人物なのだ。

同じココロ。

だけど、それでも。

「……どんなスバルでもスバル、か……」

【そうだ】

一人ごちるシオンの背後からローラーが地を走る音が鳴る。

振り返るとティアナを抱えるギンガが居た。

二人に手を降る。

・・・・不安を、スバルのココロの奥底に向かう不安を振り払う様に手を降った。



私、守ったよ。

世界が割れ、次の世界に落ちた時、唐突にシオンはそんな言葉を聞いた。

次の世界はどう言う訳か暗い施設の様な場所だった。

辺りには研究用の機材等が置かれている。

「なん、だ……?」

「どうしたの? シオン?」

いきなり疑問の声を挙げるシオンにティアナが問い掛ける。

二人に先程の声が聞こえなかったかを聞こうとして。

私、頑張って守ったんだよ。

また、声が響いた。

今度は聞こえたのだろう。ティアナ、ギンガもまた驚きに顔が固まっている。

それにこの声は・・・

「スバルの、声？」

瞬間。

シオン達の前にスバルが現れた。
だが・・・

「ス、バル……？」

スバルの身体は因子に覆われていた。
その瞳は暗い。
暗く、闇い。

私、頑張って守ったんだよ？

声を介さない声。

それを目の前のスバルは放つ。

「スバル。……どうしたの？」

「スバル？」

ティアナ、ギンガが立て続けに問い、近付こうとする。

そのまま二人は呆然とした。
近付けなかったのだ。

まるで足がその場に縫い留められた様に動け無い。

でも、助けられなかった、

瞬間。

シオンに、ティアナに、ギンガに、イクスに。
あるイメージが脳裏に叩き付けられる。

それはある光景。

燃える火災現場。

守れなかった人。

子供の死体を前に呆然と、涙すら流せずに呆然とするスバルの姿――
！。

「これ、は……！」

「スバルの……！」

「……っ！」

ティアナが目を見開き、ギンガが呻く。

シオンは顔を歪める。

スバルの、闇。

それをほんの僅かだが見てしまったからだ。

守りたかったよ。私、守りたかったんだよ……

「スバル……っ！」

眼前に立つスバルに手を伸ばすシオン。
しかし、その手は届かず。

スバルは因子に飲み込まれる様にその姿を消した。
同時。三人に自由が戻る。
思わず転倒しそうになりながら、しかし体勢を立て直す。

「……イクス……」

【シオン。そして、ティアナ・ランスター。ギンガ・ナカジマ。今の光景を受け止める】

今見たモノが嘘であって欲しいと、そう思いながらイクスに問い掛ける。

しかし、返って来た返答は無情であった。

「……でも……!」

「信じ、られない……」

ティアナも、ギンガも首を横に振る。

そんな筈が無いと。

シオンもそう思いたかった。

しかし、思い出すのは先程のスバルとの会話。

どんな私でも私だからー。

「そう、なんだな。……イクス……」

【ああ】

イクスは迷わない。

シオンはそれに顔を歪める。

解っているのだ。

そう、答えは解っている。

ただ、

「そう、か……」

ただ。

「……認めるよ。この世界のスバルは――」

ただ認めたくなかっただけ。

「因子」を、受け入れたんだな……」

シオンは認めたく無い事実を、しかし。声に出す事で認めようとした。

そんな事は意味が無いと解っているのに。

この、暗い、闇い世界でシオンはスバルの言葉の意味を漸く痛みを伴う実感としてココロに刻み込んだ。

（後編に続く）

第二十四話「スバルのココロ」(中編)(後書き)

はい。まずなのはファンの方々申し訳ありません(汗。オルタのなのは徹底的に嫌な人物にしようとしたらアソコまでになってしまいました……。そして、スバルのココロや最後の場面も「こんなスバルと違う!」と、言われそうですが……。あのスバルはあくまでEXでのスバルです。もっと言えば、テストメントが見たスバルです。だから、読者様方とは違うスバルとなってしまうているかも知れません。「こんなスバルは許せねえ!」と、言う方もいらっしゃると思います。でも、EXではあくまでこのスタイルでいきます。ご容赦下さい。さて、「スバルのココロ」も次回決着です。初の三部作。是非、楽しんで頂けると幸いです。では♪後編でお会いしましょう♪

第二十四話「スバルのココロ」(後編)(前書き)

はい♪漸く後編をお届けします♪……しかし、書いても書いても終わらない不思議。……最大文字数とページ数となってしまうました

(汗) いや、本当。申し訳ありません(汗) 是非楽しんで頂けると幸いです♪では、どうぞ〜

第二十四話「スバルのココロ」(後編)

暗い施設で三人は沈黙する。

先程のスバルの言葉で、だ。

それを振り払う様にシオンは漸く一步を刻んだ。

「……シオン……」

「……いつまでも、こうしていられねえだろ?……行こうぜ」

シオンはそのまま歩きだす。

それを見て、ティアナとギンガは顔を見合わせ、そしてシオンを追い掛けた。

次の部屋へと入る。

「……ギンガさん。この場所に見覚えは?」

「ううん。無いわ……」

シオンは気になった事をギンガに問う。

だが、ギンガは首を横に振るのみであった。

だが……

【……ひょっとして、ではあるが過去の記憶へと遡っている可能性がある
がある】

「過去?」

突然のイクスの言に、三人は訝し気にイクスを見る。

次の部屋へと入る。

【ああ、心の深層に近付けば近付く程、それは無意識の領域だから

な。ならば過去の記憶もまた深層へとあると考えられはしないか？」
「……かも、な。ギンガさん。何か心辺りは……？」

再び、ギンガへと視線を送るシオンだが、その顔が青ざめている事に二の句が告げなくなる。

ギンガは目を見開き、驚愕していた。

「ギンガ、さん？」

「ギンガさん！どうしたんですか？」

シオン、ティアナの呼び掛けに漸くギンガは反応する。
息を飲み、ゆっくりと周りを見渡す。
そしてぼそりと呟いた。

「まさか……戦闘……機人、の」

「戦闘、機人？それって……」

ティアナはギンガの呟きで即座に理解したのだろう。
こちらにも固まる。

ただシオンだけは解らない。

そんなシオンにギンガは瞳を覗き込む様にして見詰める。
その瞳にシオンは一瞬だがたじろぐ。

聞く覚悟はあるのか？

そう、その瞳は語っていたのだから。
そして三人は次の部屋にたどり着く。
そこには……

「これ、て……」

無数の、

「やっぱり……」

見覚えのある。

「何、だよ。此処は……」

スバル、ギンガと同じ顔の少女達が居た。

そこは広大な部屋だった。

広く、広い。

だが、その両横に立ち並ぶ円筒型の物体が異様であった。

生体ポッド。

それが無数に立ち並んでいたのである。

そこに居るのは、いずれもスバルやギンガと同じ顔の少女達。
いや、中には半身しか無い者や首だけしか無い者まで居た。
呆然とそれを見るシオンに後ろから声が掛かる。

「……戦闘機人、て言うのはね」

その声に振り向く。

話しているのはギンガだった。

有無を言わせぬ瞳でティアナを、そしてシオンを見る。
続ける。

「人と機械の融合、て言えば解るかな。……元々、これ自体は存在した技術なの」

人口骨格とか人口臓器とか、と例を挙げる。

「でも、足りない機能を補う事が目的だったから戦闘機械としては程遠い物で、強化や拒絶反応なんて問題もあった……」

「ギンガさん……」

ギンガの独白。

それをシオン達は聞く。

ぽつりぽつりと語られる内容。

それは、つまり。

「でも、ね。戦闘機械はそれをベースとなる、人、の方を機械に合わせる事で解決したの」

「それ、て……」

シオンが呆然と呟く。

今話している内容が、スバルの身体に関する事をなんとなくしに理解したのだ。

ギンガは続ける。

「誕生の段階で機械の身体を受け入れられる様に、遺伝子的に改造されて生まれて来た子供達。……そして」

そこでギンガは周りを見る。

そこにある。ひょっとしたら自分達の、姉妹、の姿を。

「兵器、として私達は作られ、そして改造された」

私達は。

それはつまり、スバルとギンガは・・・

固まるシオンにギンガは最後の言葉を放つ。

「そう、私達は戦闘機人よ」

そう、ギンガは締め括った。

ギンガの最後の言葉にシオンは何も言えない。
言う事など出来ようものか。
だが・・・

「そっか……」

「シオン……」

シオンはただそれだけを呟いた。
ティアナが不安気に見る。
それには苦笑を返す。
そして再びギンガを見た。

「……ありがとうございます。話して頂いて……」

「……ううん。きっといつか知る事になったと思うわ」

気にしないで、とギンガは返す。
シオンもまた微笑した。

【シオン】

「……ああ。解ってる。此処で立ち止まってなんてられねえからな」

そして再び二人を見る。

二人もまたシオンに頷いた。

「行こう」

「ええ」

「そうね」

そして、三人は次の部屋へと扉を潜った。



それから二つ部屋に入った。

そこには全て、例の生体ポッドがあった。
進む。

その先にスバルが居ると信じて。

「……ここ、広いな……」

「そうね……」

さらに扉を潜るシオンにティアナもまた同意する。

此処。

恐らくは実験施設なのだろうが、此処は恐ろしく広かった。

よく考えれば一階だけでも限らない・・・と、言うか有り得ないだろう。

【それに、だ。この世界のスバル・ナカジマが因子を受け入れたにしてはあまりにも静か過ぎる】

「イクス……！」

シオンがイクスに非難の声を挙げる。
だがイクスは構わない。

【事実だ。シオン。……その上でだが、あまりにも静か過ぎる。世界、そのものが敵とも考えられるんだが……】

瞬間。

いきなりシオン達の足元に魔法陣が展開する。

「な！これは！？」

「……転送魔法陣！？」

「二人共！魔法陣の上から離れ！」

ギンガがシオン達に離れる様に叫ぶ、が。
間に合わない。

光がシオン達を包み、そして消えた。

ギンガを残して。

シオン達だけが消えた。

「ティアナさん！シオン君！」

叫ぶ、が届く筈も無い。

すぐに念話を繋げようとして。

「……二人なら、別の場所に行ってもらったよ」

声が聞こえた。

あまりにも懐かしい声が。

それにギンガは絶句する。

声は後ろから聞こえた。

だからギンガはゆっくりと振り向く。

そこには。

「ん？どうしたのかな？ギンガ。そんな顔して」

紫色の長い髪をポニーテールにしてリボンで結んでいる。

そして、ギンガと良く似たバリア・ジャケットを纏っている。

両の足にはローラー・ブーツ。

そして、両手に嵌められたリボルバー・ナックル。

ギンガは知っている。

その人を。

その人は・・・

「おかあ、さん……？」

「ええ。貴女が知っている、私、かどうかは保証の限りじゃないけど」

クイント・ナカジマ。

スバルとギンガの母がそこに居た。

その身に、因子、を纏わり付かせて。



「くっ……！イクス！？」

シオンは転送後に空中に投げ出された。
恐らくは別の部屋なのだろう。

その空中に投げ出されたのだ。

シオンは即座に宙に浮かび、同時、イクスに叫ぶ。

【……現在位置。不明。少なくともギンガ・ナカジマもティアナ・ランスターも近くには居ない】

イクスの返答に奥歯を噛み締める。

油断した。

てつきり来るとしても攻撃か何かだと思ったのだが。

まさか、転送魔法で分断させられるとは。

シオンは舌打ちを一つ打つとそのまま飛び出す。

―斬撃が降って来た！―

シオンは反射でイクスを頭上に掲げてその斬撃を受ける。
しかし。

「ぬうあああああ！」

―撃！―

「なっ……！」

轟撃！

シオンは受けたイクスごと、その一撃に吹き飛ばされる。
シオンはそのまま床にたたき付けられた。

バウンドし。

しかし、その勢いを利用して立ち上がる。

「ぐ……！」

【シオン！無事か？】

呻きながらもイクスを振るい、正眼に構える。

シオンに一撃を叩き込んだ人物は男だった。

壮年の男性であり、手には槍。

恐らくはデバイスだろう、形状は薙刀に似ている。

突きより、斬撃を主眼とした形状だ。

それを右手に携え、シオンを見下ろしている。

その身体に溢れるのは、やはり因子、だ。

「手前えが、ここの基点の感染者か！？」

「違うな」

男は淡々とシオンに答える。

そのままシオンと同じく床に降り立つ。

・・・隙が無い。

前の世界のなのは・オルタと違い、一分の隙が無い。

「俺は、主、の命により造り出されたモノだ」

「主、だと……？」

シオンは呻く様に聞き返す。

しかし、男は答えない。

それに、シオンは舌打ちを再度打つ。

【……スバル・ナカジマか？】

「ー！。なん、だと……！」

イクスの問い掛け、それにシオンが驚愕を挙げる。
しかし、それでも男は答え無かった。

「イクス！」

【……議論は後だ。今は奴に集中しろ】

イクスはいにも無い。

シオンは顔を歪めながら再び男に剣を構える。

「……ゼストだ」

「何だと……？」

男。ゼストの名乗りにシオンが思わず疑問を挙げる。

「騎士ならば名乗りを上げるのが礼儀だ」

「そうかよ……」

ゼストは槍を構える。

右半身になり、槍を下へと向ける。

「神庭、シオンだ」

「そうか」

男も頷く。

互いの眼を見合い、一瞬だけ間が空く。
瞬間。

二人は同時に駆け出した。

「「参る！」」

互いに宣戦を告げ、槍とイクスは正面からぶつかり合った。



ティアナは走っていた。

突如として転送された場所。

そこに居た女性に襲われたのだ。

女性は召喚術士らしく、小型の蟲を周りに配置していた。

その蟲から放たれた射撃を走りながら避けていく。

その女性もまた因子を身体に纏わり付かせていた。

そして、ティアナはその女性に見覚えがあった。

・・・正確にはその面影に。

（あの召喚術士の娘にそっくり……！）

さらに向かい来る蟲にクロス・ミラージュを向ける。

シュート・バレット。

ー弾ー

ー弾ー

ー弾ー

三連で放たれたマルチ・ショットが蟲を迎撃。

しかし、女性は構わない。

クスリと笑う。

「……いつまで逃げてる積もりなのかな？」

そうして右の手をティアナに差し向ける。

その手にはブースト・デバイスであるグローブが嵌められている。

「アスクレピオス」

女性の呼び掛けにデバイス。アスクレピオスが光を放つ。

直後、四角の魔法陣が展開。

召喚用の魔法陣だ。

そこから現れたのは小型の蟲達。

「インゼクト。舞いなさい」

女性の声にその蟲達。

インゼクトが応え。ティアナへと疾る。

「くっ……！」

それにティアナは射撃で対抗。

片っ端から迎撃してゆく。

「楽しんでただけてるかしら？」

「ーっ！。誰が！」

叫び、撃ち続けるが、撃ち漏らした数匹がティアナへと向かって来る。

それにティアナは左のクロス・ミラージュを2ndモードに移行。
インゼクトを切り払う。

「よく頑張りますね」

そう笑う女性にティアナは顔を歪める。

その女性をティアナは知っている。

スカリエツテイのラボに実験材料として眠らされた女性。

JS事件の時に戦った、召喚術士の女の子、ルーテシア・アルピーノの母。

名をメガーヌ・アルピーノ。

それをティアナは執務管補佐としての仕事。ルーテシアの裁判等の補佐で知っていた。

(……感染者、て事はアイツを倒したらこの世界のスバルを助けられる、て事?)

「残念だけど、そう簡単な話じゃないの」

女性、メガーヌの言にティアナは驚愕する。

それはまるで、自分の考えを読んだが如きの言葉だからだ。

メガーヌはクスクスと笑う。

「この世界は言ってしまうえば精神の世界だもの。やろうと思えば簡単な思考なら少し集中すれば読めるのよ」

「ーっ。このっ!」

再び、左のクロス・ミラージュを1stモードに切り替え、二丁拳銃状態でメガーヌにバレットを打ち放つ。

しかし、あっさりとプロテクションで防がれた。

「くっ……!」

「貴女には先に教えて置くわね? 私達は、主、に生み出された存在

なの。主の心に、ね」

主。

それは誰だと言うのか。

メガーヌは続ける。

「貴女も良く知ってる娘よ？あの娘はこれ以上貴女達に、入って、来て欲しく無いのよ」

「スバル……」

メガーヌの言を信じるならばその主とやらはスバルになる。
因子を受け入れた、スバルに。
ならばこの世界の基点となるべき感染者とは……。

「スバルが……そうなの？」

「さあ？私にはそれに答える義務は無いもの」

答えるべき事は答えたと、そうメガーヌは宣告し。
再び、アスクレピオスをティアナへと差し向ける。

「インゼクトだけだと厳しいみたいね？なら、彼、を使わせて貰うわ」

「彼、？。――っ！」

瞬間。

ティアナは背に走る悪寒に従い、前に前転。
その首があつた地点を銀の輝きが通り過ぎる。
ティアナは前に転げながらシュート・バレットを背後に放つ。

――激！――

放たれた射撃は、彼、

黒い人型に直撃した。

それを見て、ティアナは顔を歪める。

予想すべきだった。

彼女がルーテシアの母ならば当然。彼はメガーヌに付き従っている筈だと。

ティアナはそのまま一回転。メガーヌ、そしてその彼とも距離を取る。

「その顔を見ると知っているみたいだけど一応、紹介しておきましょう。彼はガリユウ。私が最も信頼する戦友よ」

「……………」

ガリユウは喋らない。

だが、その両の腕から刃が突き出す。

ティアナの頬には汗が伝う。

2対1。

状況がかなりまずくなってしまった。

彼我の戦力差がかなり傾いてしまっている。

メガーヌはさらに笑う。

そして掲げるアスクレピオス。

「ガリユウ。スピード、パワー。ツイン・ブースト」

「ーっ！」

メガーヌから放たれた光がガリユウへと向かう。

そう、今のは強化魔法。

ただでさえ強力なガリユウをさらに強化したのだ。

「さあ。第2幕と行きましょう？」

「……………」

瞬間。

ガリユウは駆け出し、ティアナはカートリッジをロードする。
あまりにも不利な戦いが始まった。



光が走る。疾る。

それは互いに紫色の光。

ウイング・ロードだ。

ギンガはその上を走りながら背後を見る。

そこには母。

クイントが居る。

その身に因子を纏わり付かせて。

「いつまで、逃げてる積もりかな？」

「ーっ！」

解っている。

解ってはいるのだ。あの母はただの偽物だと。

しかし、それでも・・・！。

「仕方ないなあ……………」

瞬間。

クイントの両手のリボルバー・ナックルが同時にカートリッジ・ロード。

回転を刻む。

それにギンガは嫌な予感を覚えて、振り返り。
右手を突き出す。

掌に展開するは三角形のシールド。

トライ・シールドだ。

クイントは構わない。

「ダブル・リボルバー・シュート」

一発・撃一

左右の拳を順に連続で突き出す。
衝撃波が二連で放たれた。

「く……っ！」

トライ・シールドでそれを受け止める、が。

衝撃が右手を震わせる。

双発で放たれたリボルバー・シュートは倍かそれ以上の威力を誇っていた。

押され、しかし耐え抜く。
だが。

「駄目だね……」

「ーっ！」

既にクイントはギンガの眼前に迫っていた。
振るわれる右の拳。

ギンガはそれを後退する事で回避。
が。

「遅いよ」

「破！」

「あっ……く！」

右の頭に衝撃。

クイントは後退するギンガにさらにローラー・ブーツを回転させ、間合いに飛び込み。

蹴りを叩き込んだのだ。

ギンガはウイング・ロードから転げ落ち、床へと向かう。

しかし、クイントは容赦しない。

ローラー・ブーツが唸り、疾駆。

その先にウイング・ロードを形成。

両のリボルバー・ナックルが三連でカートリッジ・ロード。

「ギンガ、良く見なさい。これがS・Aのシューティング・ブーツコンビネーション・フィニッシュ」

「ーっ！」

クイントの言葉。

それに背に走る悪寒にギンガはウイング・ロードを足元に形成して体勢を整える。

ーっ遅い。

一拍でクイントはギンガを間合いに捕らえる。

ギンガは両の腕を折り畳むようにしてガード。

しかし、クイントは右の拳を叩き付けて、そのガードを弾く。

……そこから止まらない。

「徹！」

左の拳がギンガの腹へと突き刺さり、その身をくの字に曲げる。同時、リボルバー・シュート。

弾け飛ぶギンガを追い、そのままクイントはロー・キック。ハイ・キック。ミドル・キックをギンガに叩き込み、さらに右拳を顎にぶつけ、着弾した直後、リボルバー・シュート。

全弾、直撃したギンガに再び唸る左右のリボルバー・ナックル。激烈な回転が風を巻き起こし、クイントは双掌でそれを放つ！

「アヴァランチ・テンペスト」

「轟！」

最後の一撃をギンガは悲鳴さえ挙げられずに撃ち込まれ。今度こそ床へと激突した。



「あああつ！」

「おおおつ！」

「閃」

「撃」

二条の刃が煌めき、互いを斬断せんと振り落ち、ぶつかり合う。シオンとゼストは鏝ぜり合いのまま睨み合う。直後、ゼストはカートリッジ・ロード。

シオンは魔力放出。

ー拍ー

衝撃が疾り、互いに吹き飛ぶ。

シオンは足場を形成し、空中に踏み止まる。

しかし、シオンが次に見たのは槍を再度カートリッジ・ロードする、ゼストだった。

槍を振り上げる。

「ー迅雷」

ー激ー

衝撃が疾る。

シオンはそれに対してシールドを張る。

激突。

純粹に物理的な衝撃波は対魔力では防げない。

それ故の選択であったが、頭上に舞い上がるゼストを見てシオンは唸る。

今の一撃もこの為の繋ぎ。

「せいやあああああ！」

「ーっ。四ノ太刀。裂波！」

シールドにイクスを叩き付け、内部からシールドを破壊。

同時、波紋となって空間振動が放たれる。

それはゼストの動きを止めーー。

「りやああああ！」

「なっ―――！」

一瞬でその拘束を破られた。

シオンは再び、イクスを頭上に掲げ、その一撃を受ける。

―轟！―

足場すら形成したが、その一撃に膝が碎けそうになる。
重い。

とんでもなく。

（アリか！まるでタカ兄いとー！）

歯軋りするシオンに、しかしゼストは止まらない。
そのまま身体を回し、今度は下からシオンを狙う。

「このー！」

シオンも背中までイクスを振り上げる。

魔力放出。

螺旋を描くそれは一撃の威力を跳ね上げる。

―裂！―

―波！―

再びぶつかるイクスと槍。

上段と下段の打ち合い。

だが、ゼストはそこから更にカートリッジ・ロード。

―爆！―

シオンに激烈な衝撃が疾り、打ち負かされる。
シオンは弾き飛ばされ、床に叩き付けられた。

「ぐっ……！」

身体を走る衝撃にシオンはしかめっ面になりながらしかし、立ち上がる。

ゼストもそれを槍を構えながら見ている。

【シオン。奴は接近型だ。ウィズダムをー】

「断る」

イクスがシオンに助言する、がシオンはそれをきっぱりと断った。

【……何故だ？】

「あのオッサンは真っ正面から剣だけで戦いたいんだ」

息は荒く、シオンの肩は上下する。

だが、その意思は硬い。

その瞳は屈してなどいなかった。

「……悪い、イクス。我が儘だったのは解ってる。……でも、それでも……」

まるで訴えかける様にイクスにシオンは懇願する。

それにデバイスたるイクスはこれ見よがしに嘆息する。

息なぞしてもいないだろうに。

【……まったく。我が儘な弟子を……マスターを持ったものだな】

「……悪い、イクス」

【構わんよ】

再び謝るシオンにしかしイクスはあっさりと言う。

【そんな所も含めてお前だからな。……存分にやれ。マスター】
「……応！」

イクスの言に笑い、シオンの身体から再び魔力が吹き出す。
ゼストは最後まで仕掛け無かった。
それを見て、シオンは思う。このオッサンは――。

「征くぞ」

「ああ！」

ゼストの宣言。

それにシオンは応え、再び両者は激突した。



――閃――

「くっ……！」

ティアナは2ndモードのクロス・ミラージュを振るい、ガリユウの猛撃をギリギリで凌ぐ。

疾く、そして鋭い。

エリオはよくこんな奴相手に一騎打ちで戦ってたわね。

と、心中唸りながらさらに振るわれる一撃を受け流す。

「……よく、耐えますね。てっきり射撃だけで近接はお飾りと思っ
てました」

「とある馬鹿に少し鍛えられてね！」

叫び、さらに左のクロス・ミラージュを下から跳ね上げる。

―閃―

ガリユウの顎を掠めてその一撃は過ぎる。

同時、ティアナは後方に短くジャンプ。

ティアナが居た場所に紫の短剣が無数突き立った。

メガースが放った魔法だ。

ティアナは着地と同時に周りにスフィアを展開する。

その数二十。

「クロス・ファイアー！」

それに反応したガリユウが放たせんと一気にティアナへと駆ける。

ティアナは構わない。

「シューーーーーー！！」

―豪！―

「……………！」

周りのスフィアがティアナの前方に集中。

それをティアナは放つ。

A A A級の砲撃となったシュートがガリユウに近接で叩き込まれ、爆煙を上げる。

ティアナとガリユウは真逆に吹き飛ぶ。

だが、メガーヌもまた構わない。

再び、自身の身体の周囲に短剣が浮かぶ。

「終わりにしましょう。……トードス・ドルヒ」

ー閃ー

放たれる無数の短剣。

しかし、ティアナに刺さる筈のそれは刺さる事無く、ティアナを通過。

そしてその姿は消える。

「幻影？ なかなかやるわね。……けど……」

瞬間。メガーヌの周りのインゼクトが反応する。

煙の中、再びシュートを撃たんとするティアナを感知。

インゼクトが一気に突っ込む。

しかし、それもまたあっさりと通過した。

「これも？」

「そこ！」

驚きの顔を浮かべるメガーヌに、今度こそティアナが現れる。メガーヌの右横だ。

クロス・ミラージュは3rdモードに移行。

環状魔法陣が展開し、さらにターゲット・サイトも展開。

後は引き金を引くだけー。

「ファントムっ！」

「ふふ。……もう一人お忘れよ？」

―激―

瞬間。ティアナは右腹に走った衝撃に顔を歪めた。

そこには先程吹き飛ばしたガリユウが蹴りをティアナに叩き込んでいた。

そのままティアナを吹き飛ばす。

ティアナは抵抗も出来ず、床を転げた。

「く……っ！ゴホっ！」

呻き、咳込むティアナ。

蹴りの一撃はティアナに相応のダメージを与えていた。
それをメガーヌはクスクスと笑う。

「いい線行ってたけど詰めが甘かったわね。……ガリユウはそこま
で脆くないわ」

「……………」

ガリユウはメガーヌの横に控える。

その身は先程のティアナの一撃で甲殻に輝が所々入り、割れてしま
っている、が。まだまだ平気そうである。

ティアナは咳込みながらも立ち上がった。

「へえ……まだ立ち上がるの？そんな事に意味なんて無いのに」
「な……んです、て……！」

喘ぐ様にティアナはメガーヌを睨む。
しかし、メガーヌは構わない。

「解らない？、私達’が生み出された理由は彼女が貴女達をここに
入れたくなかったから。つまり貴女達は拒まれてるのよ。彼女に」
「ーっ！」

ティアナはその言葉に俯く。
拒絶してる。

あの娘が私を。

改めて言葉にされた事実はティアナに少なからずショックを与えて
いた。
だが、

「それでも！」

だが。

「私は……！」

、だから、！

「諦めない！」

スバルを、ずっと、ずっと自分を信じてくれた。馬鹿みたいに優し
いあの娘を信じてる。
だから！

「私はあの娘を取り戻す事を諦めない！！！」

ティアナの宣言。

それにメガーヌは微笑を浮かべる。

「そう。……いいわ。お互い、譲れないわね。……なら、そろそろ決着をつけましょう」

「……いいわ……」

ガリユウがメガーヌの前に出て、ティアナが両のクロス・ミラージュを構える。

二人は最後の交差を交え様としていた。



「……っあ……」

一瞬だが、ギンガは確かに意識を失っていた。

母、クイントに叩き込まれた連携技により、床にたたき付けられて、めり込んだ床から身体を起こす。

同時、激しく咳込んだ。

「どう？ギンガ。これでもまだその気になれない？」

「ーっ！」

見上げる先にクイントがいる。

その顔は微笑みのままだ。

あの頃と同じ母の笑み。

それに懐かしくなると同時切なくなる。

これは偽物なのにと。

「お母さん……」

「ええ。何かな？」

ギンガは身を起こす。

そして、構えた。

そして、問うた。確認、する為に。

「お母さんを、作った、のは……スバルなの？」

「ええ。あの娘が私達の主。あの娘はね？、守護者、として私達を作った」

それに、その返答にギンガは奥歯を噛み締める。

似ていて当然だった。

何故ならスバルのイメージによって作られたのだから。

この母は。

それは取りも直さず一つの事を意味する。

この世界のスバルは！。

「私達を拒絶しているのね……」

ギンガはそれを声に出しながら呟く。

クイントはその呟きに頷いた。

「そうだよ。あの娘はこれ以上貴女達に踏み込んで欲しく無いの。

……、心、に、ね」

「そう……」

ギンガは少しだけ目を閉じ、そして開けた。

イクスが言っていた。

『どんなスバルでもスバルだと、』

そう、ならば自分を、自分達を否定するスバルもまた居る。
それをギンガは自覚し、そして受け入れる。

「……私ね。JS事件の時にね。スバルに助けて貰ったの」
「そう」

クイントは頷く。
微笑みを、未だ絶やさずに。
ギンガは続ける。

「だから、今度は私の番よ」
「あの娘はそれを望んで無いよ？」

そう、あの娘は。
この因子を受け入れたスバルはそれを望んでいない。

「だから何？」

ギンガはそう思い、拳を構える。
クイントもまた構えた。

「あの時、スカリエッティに操られた私はあの娘を拒絶したの」
「そう」

クイントは頷く、頷くだけ。
そう、ギンガは届かせねばならない。

妹に、スバルに。
思いを。

「でも、それでもあの娘は私を諦め無かったわ」

だからー。

「だから、私もあの娘を諦めない」

必ず、取り戻すと。

助けるとギンガは宣言する。

その思いが、クイントの向こうのスバルに届く様に。

「お母さん。……いくわ」

「ええ」

母は頷き。

そして、互いにウイング・ロードを発動。

ブリッツ・キャリバーが唸り。

ローラー・ブーツもまた唸る。

疾駆しながらカートリッジ・ロード。

ギンガは左のリボルバー・ナックルを。

クイントは右のリボルバー・ナックルを。

両者のリボルバー・ナックルは激烈な回転を刻み、互いに叩き付けられた。



―閃―

―破―

刃が交錯し、ぶつかり合う。

それは衝撃となり周りを震わせる。

シオンとゼストだ。

二人は互いにただ刃のみを頼りに戦っていた。

真っ正面から放たれた槍にイクスを横薙ぎに叩き込む。

―戟！―

轟音が響き、再び衝撃が走った。

そのまま鏝ぜり合いとなる。

互いの刃が壁となり。その壁を挟んで睨み合う。

「……貴様は何故戦う」

「……何だと？」

そのままゼストは問うて来た。

思わずシオンは問い直す。

―激―

そのままゼストは槍を押し込み、シオンを弾く。

シオンは足場を形成し、空中に踏み止まった。

イクスを正眼に構える。

ゼストも槍を右半身に構えた。

「何故、貴様は戦う」

「今さら問う事かよ、それ？」

シオンはゼストの問いにそう返す。
そう、戦う理由等、一つしか無い。
スバルを助ける為だ。

「……主がそれを望んでいないのに、か？」
「……何だと？」

シオンが問いに問いで返す。
ゼストは構わない。

「少なくとも、この世界の主は貴様達を拒んでいる。……それを救い出すのは傲慢とは言えないのか？」
「ーはっ！」

ゼストの問い。
しかしシオンが返したのは肩を竦め、笑う事だけだった。

「傲慢？ そうだな。確かにスバルの気持ちを無視してるんだもんな。確かに助けようとするのは筋違いかもしれねえ、な」
「ならば……」

ゼストが何かを言いかける。
しかし、シオンはきっぱりとその言を斬って捨てた。

「だから何だ？」
「……何？」

ゼストが疑問を返す。
シオンは構わない。

「だから何だ？スバルの気持ち？’知った事か’。……俺は、アイツを助けたいから助けるんだよ。理由なんざ、どうでもいい」
「……傲慢、だな。助けられる側の気持ちは一切無視か」

ゼストが責める口調でシオンに問い直す。
シオンは構わない。

「ああ。例えこの世界のスバルが俺達を拒絶しようが構う積もりはねえ。いいか？よく聞けよ。ゼスト。そして’スバル’！。俺は諦めない。例えぶん殴ってでも連れ帰る！……お前がそうした様にな？」

シオンはゼストに。

そしてスバルにきっぱりと宣言した。

そう、通すのは我のみ。

傲慢？我が儘？

知った事じゃあ無い。

’俺はお前を失いたく無い’

と、ただそれだけを’スバル’に向かい放つ。

それにゼストの顔がたった一つの動きを見せた。
笑みだ。

ゼストは確かに笑っていた。

シオンもまた笑う。

まるで告白みたいだな、とただそれだけと思う。

互いに笑い。

しかし構えは解かない。

ゼストはカートリッジ・ロード。

シオンは魔力を吹き上げた。
そう、何となしにに理解する。
これが最後の一撃になると。
両者共に笑いを止め、一瞬だけ視線を交錯する。
そして――。

「「参る」」

――轟・破！――

互いに爆発したが速度で駆け出す！
ゼストは真っ正面から唐竹割りを。
シオンは胴薙ぎの一閃を。
ぶつかり合い、碎き合う！
そして、

「おおおおお！！」

「あああああ！！」

決着が訪れた。

――轟！――

轟撃一閃！

ゼストの槍は砕け、シオンのイクスはそのまま吸い込まれる様にゼストの胴へと叩き込まれた。
シオンはそのまま迷わない。
振り抜く。

「斬！」

シオンはそのままゼストを薙ぎながら横を通り過ぎた。
そしてゼストはそのまま前のめりに倒れ、地面へと落ちた。

【勝った、か？】

「ああ」

シオンは残心を解くと、そのままゼストへと向かう。
やっぱり。

シオンはそう思う。

ゼストは、再生しなかった。

「……やっぱり、アンタ。感染者じゃ無かったんだな……」

「今となってはどうでもいい事だ。……俺は主に作り出された存在。
それだけでいい」

「……そうかい」

シオンはゼストにただそうとだけ答える。

ゼストはそれに一つだけ笑みを浮かべ、そして扉を指差す。

「……そこを抜ければ主の元に行けるだろう」

「……いいのか？」

シオンの問い掛けにゼストは

「ああ」とだけ答えた。

そして目をつぶる。

もう、その身体は風景に溶ける様に消えかけていた。
しかし、ゼストは口を開いた。

「先程の貴様の言。見事だった」

「……ああ」

ゼストの言。そして、シオンは消えていくその姿を目に焼き付ける。

「本当に守りたいモノを守る。それは何とも難しい。……神庭、シオン」

ゼストはシオンを呼び、そして目を開いてシオンを見る。
シオンもまた見返した。

「貴様は、守れるか？」

問い。

その言葉の重さをシオンは胸に刻み付ける。
一瞬だけ目をつぶり、そして開いた。

「ああ」

短い、しかし力ある言葉としてシオンはそれを放つ。
ゼストはシオンの答えを聞き、そして満足そうに消えていった。
シオンは暫くその残滓を噛み締める様に立ち尽くす。

【……シオン】

「ああ。……解ってる。行こう」

シオンは頷き、そして踵を返して扉へと向かう。
後には何も残らなかった。
何も。



―閃―

―破―

―裂―

振るわれ、放たれる銀光をティアナは2ndモードのクロス・ミラージュで弾き、受け止め、逸らす。

ガリュウの猛攻だ。

右、真っ正面から振り下ろされた一撃をティアナは身体ごと回転しながら右のダガーを合わす。

回転運動を伴ったそれはガリュウの一撃を受け止める。

―そこで止まらない。

「―はっ!」

―閃―

カウンター。

ティアナは身体を捻る様にして今度は左のダガーをガリュウに叩き込んだのだ。

距離を取るガリュウ。

しかし、即座にティアナに突っ込んで来る。

ティアナはそれに対し、再度カートリッジ・ロード。

今、ティアナの周囲には十五のスフィアが浮いている。

さらに五つ追加。

だが、まだ放たない。

突っ込むガリュウは左右の刃を振るい、ティアナにスフィアを放た

せまいと襲い掛かる。

振るわれる刃。

しかし、ティアナのダガーはそれをガードしきる。

ティアナの脳裏に浮かぶのは双剣の、一応、の師匠だ。

その言葉を思い出す。

（いいか？小太刀、てのは元来は防御の技だ。小太刀は普通の剣より軽いからその分迅い。だから防御に向くんだ）

振るわれる刃を身体ごと回転。体重をダガーに乗せて、受け止める。

（ええつと……何て言ったかな？何処かの流派でそんなのがあるんだよ。小太刀二刀流だっけかな？詳しくは知らんけど、俺に双剣の基礎を教えてくれた人がいてな。基礎だけだったけど。……で、だ）

振るわれ、振るわれる刃。

ティアナは構わない。

防御に徹する。

（さっきも言ったけど小太刀、てのは守りの為の刀剣だ。熟練者が使うと鉄壁の防御を誇る。で、だ。お前に教えるのはその防御だ。……あん？アンタ、双剣で防御してないじゃない？、て？……気にすんな。人間、向き不向きがある……続けんぞ）

弾く、弾く、弾き返す。

解る。

ガリユウが攻めあぐねているのが、焦れているのが解る。

（で、射撃が持ち味のお前だから俺の技を十盗めると思うな。五でも盗めりゃあマシと思え）

ティアナは焦らない。
ひたすら防御に徹する。

あの馬鹿に、シオンに教えて貰ったのはただ一つだ。
故に狙いもただ一つ。

（2ndの状態でお前が狙うのは一つだけだ。ただひたすらに防御して、向こうの隙を作りだせ。そして狙うのは――）

焦れたガリユウが大振りの一撃を放つ。

――それを待っていた。

（カウンターだ）

――閃！――

振るわれる右手。

しかし、ティアナは迷わず踏み込み、ダガーの切っ先をガリユウに突き立てた。

――突――

ダガーの刃はガリユウの甲殻を突き破り、内部に到達する。

同時、ティアナはダガーをバースト。

互いに弾き飛ばされる。

「ガリユウ！？」

メガーヌから悲鳴が上がる。
構わない。

内部から叩き込まれた衝撃にガリユウが膝を屈する。
チャンスはここだけ！

それにティアナはクロス・ミラージュを1stモードに変化。
カートリッジ・ロード。

二十五となったスフィアを放つ！

「クロス・ファイアー！」

「ガリユウ！起きて！」

メガーヌの叫び。

しかし、ガリユウは立ち上がれない。

そしてティアナは叫んだ。

「シューーーー！ト！」

ー爆ー

ー爆ー

ー爆ー

散弾。

放たれた二十五の光球は迷う事なくガリユウに直撃。

爆煙を上げた。

「ガリユウ！……よくも！」

叫ぶ、メガーヌにティアナは構わない。

煙の中で右のクロス・ミラージュを2ndに移行。同時、メガーヌ
がインゼクトをトードス・ドルヒを放とうとする。

させない！

ティアナは胸中、叫び。

左のクロス・ミラージュをメガーヌに向ける。

ー発！ー

放たれたそれは、しかしメガーヌの顔を逸れて、壁に当たった。

「ふふ……外したわね……？」

そこでメガーヌは異変に気付いた。

この射撃は何だ？

光の帯がまるで銃口と繋がっている様な……。

「いっけー！」

叫ぶティアナ。

同時、帯がその身体ごとティアナを巻き取る！

「ー！。しまっ！」

失態に気付くメガーヌ。だが、遅い。

大ダメージを受けたガリユウは間に合わず、インゼクト、トードス・ドルヒは間に合わない。

ティアナは一瞬でメガーヌまで辿り着き、右のダガーをメガーヌの胸に突き立てた。

「まさか、こんな接近の方法があるなんて、ね」

メガーヌがその胸に刃を突き立てられたまま自嘲気味に笑う。
そこでティアナは気付いた。

最後までメガーヌは自分を嘲笑う事はしなかったと。

ウェンディ・オルタの様な感覚を彼女からは覚えないのだ。

メガーヌは笑う。

その笑みはあまりに優しくて。

「……私は、あの娘に作られたんだもの。だから私はあの娘の心の欠片」

「なら……！」

ティアナが倒した彼女は……。

しかし、メガーヌは首を横に振る。

「大丈夫よ。所詮、私は因子の力を借りて作られた複製だから」

そう言うてにっこりと笑った。

ティアナはそれにいたたまれなくなる。

そんなティアナにメガーヌは扉を指差す。

「……行きなさい。向こうでは主が待ってるわ」

「……でも」

迷うティアナに、しかしメガーヌは笑いを止めない。

「貴女は勝者よ。だったら先に進むべきだわ」

「……はい」

メガーヌの言葉にティアナは少し、逡巡。
しかし、即座に踵を返して扉に向かった。

「……あの娘をよろしくね」

ティアナは振り向かない。

だけどそれでいい。

メガーヌは満足気に目を閉じ、そして周りの召喚した友と共に消えた。



―走る―

―裂―

―疾る―

―豪―

―迅る！―

―破！―

複雑な軌道を描き、ウィングロードが部屋を所狭しと走る。
その上を走るのはギンガとクイントだ。

互いの拳をぶつけ合い。

離れ、勢いを付けて叩き付け合い。

その回転を利用して蹴りを放つ！

二人が交差する度に風が動き、割れる。

「はあああああ！」

「やあああああ！」

―閃―

―裂―

拳が再び、交差。

背中を互いに合わせた状態でローラーのグリップ力に任せ、ベクトル変換。

回し蹴りがぶつかり合う。

―砕！―

衝撃！

走る衝撃が二人の髪を靡かせる。

そのまま二人は離れ、再度拳を叩き付ける。

今度はそこから交差しない。

互いのプロテクションを破る様に拳が食い込んで行く。

カートリッジ・ロードを二連。

互いに行い、さらに食い込んで行く。

―砕！―

プロテクションが砕けた。

―そこから二人の動きが変わる―

クイントは左のリボルバーナックルを引き、カートリッジ・ロード。

一気に放つ。

それに対するギンガはそのまま回転。
右の蹴りを放つ。

「リボルバー」

「キャリバー」

拳と蹴りがぶつかり合ったまま鏝ぜり合う。

そして、同じ言葉が放たれた。

「「シュート！」」

「爆！」

衝撃が再度二人を叩く。

そして、そのまま二人を弾き飛ばした。

クイント、ギンガは後ろへと吹き飛び、しかし、既に展開してある
ウイング・ロードに乗り、踏み止まる。

間が開いた。

二人は十mを挟んで対峙。

クイントは両の拳を引いて、腰を落として構える。

ギンガは逆に左半身に構えていた。

ギンガの頬を汗が一筋流れる。

あの構え。

あれは先程の連携を放つ構えだ。

アヴァランチ・テンペスト。

両腕のリボルバー・ナックルが在る事が前提の技だ。

・・・しかし。

（本当にそう？）

ギンガは考える。

クイントは両のリボルバー・ナックル。

そして、ローラー・ブーツ。

そして自分は左手にリボルバー・ナックル。

そして、ブリッツ・キャリバー。

両のリボルバー・ナックルが無いならばフィニッシュ技や繋ぎは違うものとなる。

しかし。

（出来る！）

ギンガはそれだけを確認する。

ずっと、ずっと鍛えに鍛えてきたS・A。

その経験が語る。

今の自分ならあの技を放てる、と。

目を閉じ、息をスウッと吸い、そして吐いた。

目を開く。

そして焼き付ける。

母の姿を。

そして・・・

カートリッジ・ロード。

クイントは両のリボルバー・ナックルを三連でカートリッジ・ロードする。

そして、ギンガもまた左のリボルバー・ナックルをカートリッジ・ロード。

こちらも三連だ。

魔法陣が、ベルカ式の魔法陣が足元に展開する。

「行くよ……お母さん」

「来なさい。ギンガ」

瞬間。

二人は一気に駆け出した。

互いの足元の空気を炸裂させ、一気に疾駆。

両者のリボルバー・ナックルが激烈な回転を刻む。

―激！―

右と左の拳が炸裂する。

ぶつかり合い。

そこから0距離でリボルバー・シュート！

衝撃が、風が爆裂し合う。

そのまま二人は止まらない。

右のハイから左のロー、そしてミドル。またハイと蹴りを叩き付け合う。

一合。

五合。

十合。

と、合わせ鏡の如くぶつかり合う蹴りの乱打。

そして、クイントの左のリボルバー・ナックルが今までの回転エネルギーを乗せて放たれる！

対すギンガも止まらない。

蹴りをその回転のまま放つ。

同時、0距離シュート。

「轟！」

激烈な衝撃が走り、両者吹き飛ぶ。

だが、クイントの両のリボルバー・ナックルはそのままラストのカートリッジ・ロード。

刻まれる回転が風を巻き起こし、それを振れ合わす様に掌から放つ。

「アヴァランチ……！」

その一撃が放たれんとした瞬間。

クイントは見る。

ギンガの姿を。

ギンガもラストのカートリッジ・ロード。

そして、頭上、に向け、放たれるリボルバー・シュート。

その一撃を推進力に変え、ギンガは螺旋軌道を描きながらクイントに突貫。

ブリッツ・キャリバーが光る！

アヴァランチ・ドリル・ブレイク！

「やああああっ！！」

「っ！。テンペスト！」

同時、クイントが突き出した掌とギンガの螺旋を描く両足が0距離で炸裂し合う！

「裂！」

「砕！」

刹那の瞬間。

クイントのテンペストをギンガのブレイクが貫き、そしてその両足が左右の掌を弾き飛ばし。

そして、クイントの胴体に振れながら刺さったー。

ー爆！ー

そのままクイントを巻き込んだままギンガは豪裂に回転しつつクイントにそのインパクトを全て叩き込んだ。

そして、クイントは回転しながら床へと叩き付けられた。

「勝っ……たの？」

ウィング・ロードの上で倒れ込んだギンガはクイントを見ながら呆然と呟く。

正直に言うとは最後の方は何をしたのか自分でも覚えていない。ただただ無我夢中で。

そして、ギンガはゆっくりと立ち上がった。

ウィング・ロードを走り、母の元へと向かう。

「はは……負けちゃったね」

クイントはまだ意識を保っていた。

その事に驚き、ギンガは即座に構える。

しかし、クイントは倒れているだけ。

すると、その姿が薄らぎ始める。

「ー！。お、お母さん！？」

「……ふふ。負けちゃったからね」

しかし、クイントは満足そうな顔をしている。
悔いは無いとばかりに。

「なんで！なんで消えるの！」

「……私達はスバルに作られた存在だからね。負ければ消えるだけなんだよ。……だから気にしないで……」

気にしないでいられる訳が無い。

解っている。

解ってはいるのだ。

もう母は……母の姿をした彼女は消える。
でも、それでも！

「お母さん！」

「……こんな私でも、お母さん、て呼んでくれるのね」

縋り付かんとするギンガをしかし、クイントは留める。
そして扉を指差した。

「あそこを通れば、スバルの元に行ける。……行きなさい」
「でも、お母さん！！！」

気付けば涙を流していた。

母が消える姿を見るなんて嫌だった。
クイントはそれに困った顔をする。そして、告げた。

「……ギンガはお姉ちゃんなんだぞ？」

だからスバルを、助けなくっちゃ。

そう、クイントは微笑みながら呟く。

ギンガは奥歯を噛み締める。

数秒の間を置いて、漸く頷いた。

「うん。それでこそギンガだ」

「お母さん……」

最後まで、最後まで母らしく笑う。

そして、クイントは安心した顔を浮かべて、そして消えた。

ギンガは暫く立ち尽くす。

その姿を、残滓を目に焼き付けて。

そして、ギンガは扉へと進んだ。

妹を、スバルを救い出す為に。



ーそこは白い、ただただ白い空間だったー

シオンは扉を開けるとそんな所に立っていた。

気付くと後ろの扉すらなくなっている。

「……何だ？ここは……」

【真っ白い空間、か。ここが最奥、か……？】

シオンは足元を確認する。

どうやらここは一応床がある様だ。

少しホッとしてとりあえず歩く。

ーどいてー！ー

急にそんな声が響いた。

「な、何だ？」

【むう、声がしたな？】

ーどきなさいってば！ー

声はまだ聞こえる。

いかん幻聴か、最近いろいろあったしな。

とかシオンが自分の精神に若干の不安を覚える。

「どきなさいって言うてるでしょおおおおお！」

「へっ？。て、うおおおおお！？」

今度こそは間違い無く肉声が聞こえ、上を見た時、シオンは驚愕する。

そこにはこちらへと真っ逆さまに落ちるティアナが居た！

「あ、阿保かあああ！」

「きやあああああ！」

両者叫び、しかしシオンは持ち前の反応速度でティアナを両腕でキヤッチ。

お姫様抱っこ状態で受け止める。

「ギ、ギリギリセーフ……」

「し、心臓に悪いわ……」

互いにびっくりした為か息が荒い。
とりあえずティアナを下ろす。

「……んで？何をとち狂ってノーロープバンジーなんて真似してんだお前は……」

「したくてやったんじゃないわよ！！」

シオンをキツと睨み、

ガーーーーー！と、吠えるティアナ。

当社比にして三割増しの吠えっぷりである。

その後、ティアナからシオンは事情を聞く。

なんでも、扉に入るといきなり落っこちたそうだ。

「……アンタは落ちなかったの？」

「俺は最初っから足場があったぞ？」

シオンの答えに

「ズルイ」と睨まれるが、そんな物、どうしろと言うのだ。
嘆息するシオン。

だが、頭上を走る紫色の道を見て、ホッと息をつく。

ウィング・ロードだ。

走って来たのは当然。ギンガだった。

「ティアナさん！シオン君！二人共、無事！？」

「ええ。こちらは何とか、ティアナは？」

「一応、大きな怪我とかは無いわね」

これで何とか三人合流である。

とりあえず離れた時の情報を交換しようとシオンは口を開き。

守りたかったんだよ。

響く声にしかし、その口を閉じた。

「……おい。今の……」

「ええ、私にも聞こえた」

「確かに、今は……」

スバルの声だった。

瞬間。

白一色のこの空間を汚す様に黒が走る。

黒のバブル。因子だ。

それはある形となった。

五歳程のスバルの姿に。

「スバ、ル？」

「スバル！」

ティアナが呆然と呟き、ギンガが近付こうとする。

しかし、シオンに留められた。

「っー！。シオン君！？」

「……落ち着いて下さい。ギンガさん」

【ギンガ・ナカジマ。気持ち解るが、しばし待て】

非難の声を上げるギンガにシオンとイクスは一緒に制止する。

私、守ったよ。

再び、声が響く。

シオン達は再び、スバルへと視線を向けた。

しかし、その瞳はいつもの碧では無い。

金色の瞳をしていた。

守ったよ。守ったよ。でもー。

スバルの声が響き続ける。

だがシオンは何故かこの声にある感情を覚えていた。

恐怖と、苛立ちを。

いつまで守らなきゃいけないの？

「「「っー！」「」」

三人はその一言に絶句した。

スバルからそんな一言が放たれるとは思わなかったからだ。

スバルは続ける。

ずっと、ずっと助けて、助けて、……でも助けられない命がいっぱいあって……

「スバル……」

ギンガが呆然と呟く。

ティアナもだ。

シオンはただ一人、イクスを、構えた。

守りたかったよ。助けたかったよ。でも、でも……！

スバルの感情のうねりが大きくなる。

同時、その身体から因子が大量に溢れ出した。

守れなくて、守れなくて、こんな、こんな辛い思いをするのならもう……

そして、因子はスバルの全身を覆い尽くし、そのまま大人大に膨れ上がる。

誰も助けない。

因子が晴れる。

そこには、白だった部分が全て黒へと変わり、しかし金色の瞳だけは変わらないスバルが居た。



「ス、スバル……？」

目の前に立つスバルの異様にギンガは目を見開いて立ち尽くす。
瞬間。

スバルのマッハ・キャリバーが唸り、ギンガへと駆ける！

シオンは即座にギンガの前に出た。

スバルは構わない。右手のリボルバー・ナックルをカートリッジ・ロード。

一撃が放たれた。

―砕!―

「が……っ!」

瞬間。シオンに言い知れぬ、未知の衝撃が走り、全身が震わされる。そんなシオンにスバルは構わない。足元に複雑な軌道を描く二重螺旋が展開する。

―波!―

リボルバー・シュート。

シオンは苦悶の叫びすらも上げられず吹き飛んだ。

「シオン!?!」

「シオン君!?!」

「ぐ……うつぐ……」

倒れ、しかし起き上がろうとするシオンだが、身体中が痺れて動けない。

まるでミキサ―でシェイクされた感覚だ。

身体中の骨が軋nder。

ティアナ、ギンガはスバルから1時退避して、シオンと合流する。

「大丈夫?」

「あ、ああ。しかし、何だこりゃあ……」

シオンが呻く。

身体はまだ痺れていた。

そんなシオンにギンガがぽつりと呟く。

「振動破碎……」

「?……何ですか?それ……」

シオンの問い掛けにギンガはぽつりぽつりと話して行く。

「スバルのISよ。N2Rの皆、知ってるでしょ?あの娘達が使え
る様にスバルもまたISが使えるの」

先天固有技能。

戦闘機人に備わった魔力を行使せずに使える力だ。

特にスバルのISはかなり強力である。

接触した物を超振動で破碎、粉碎する能力。

対人。対物に於いても優れた威力を誇り、また身体に精密機器があ
る戦闘機人はこれを喰らうと致命的なダメージを負う事になる。

「また、厄介なモンを……」

「気を付けて。スバルと接触したら必ず振動破碎をぶつけられるわ」

漸く、シオンは立ち上がる。

しかし、今の説明だと1番危ういのはギンガだと言う事になる。

「……ギンガさん……」

「大丈夫。触れずに戦う方法もあるから」

そこでスバルが腰を落とし、構えた。

それを見て三人もまた構える。

「……イクス?」

【……我々は彼女からすればただの侵入者だ。故に排除するつもりなのだろうな……】

「スバル……」

ティアナがスバルに呼び掛ける。
しかし、スバルは応えない。

【腹を決めろ。皆。ここで倒されればお前達が感染者になる】
「ーっ解ってる。……けど……」

瞬間。スバルが突っ込んで来た。
それに対し、ギンガはカートリッジ・ロード。

「リボルバー・シュート！」

ー波ー

衝撃波が走る。
とにかく足を止めようと放った一撃。
スバルはそれをたやすく切り裂いた。

「「「なっ……！」」」

スバルは止まらない。
それを見て、三人は一斉に散る。
しかし、スバルの狙いはただ一人であった。
シオンだ。
放たれた右の拳を体を横にして避わす。
そこからバック・ステップ。

しかし、スバルは止まらない。
マッハ・キャリバーが唸る！

もう大切な人なんて要らない。

「な……！」

キャリバー・シュート、ライト。

「がっ！」

ー爆！ー

突如として聞こえたスバルの声に一瞬シオンが呆ける。
瞬間。右の蹴りがシオンにたたき付けられた。
振動破碎が走り、そのままシオンは吹き飛ばされた。
床をバウンドし、数回跳ねて漸く止まる。

「ぐ……ごぶっ！」

シオンは床に手をつき、しかし、ひざまずく。
口から血が溢れ、吐き出す。

内臓をいくらか振動破碎で傷付けたらしい。

「シオン！」

「シオン君！」

さらにシオンへと駆けるスバルにティアナ、ギンガはそれぞれクロス・ファイアー・シュート。リボルバー・シュートを放つ。
しかし、全く意に返さない。

そのままシオンを蹴り上げる。

直後にウィング・ロードが伸び、空中でシオンを捕まえる。
連打。

蹴りが拳が、シオンをズタボロに変える。

「が……っう……」

大切な人も誰もいなくなれば。

再び響く、スバルの声。

そしてスバルは左手を伸ばす。

その掌には光球が灯る。

続いて環状魔法陣が左手に、そして右手に展開する。

「あれは！」

「――スバル！駄目え！！」

ティアナの叫び。

しかし、スバルは構わない。

もう、私は傷付かない。

――ブチ切れた――

「さっきから鬱陶しいんじゃない、ボケがあああああ！」

――激――

瞬間。

シオンは容赦なくスバルの、顔面、をぶん殴った。

スバルが用意していたバスターも同時に消える。
スバルはそのまま床に落ちた。

「へ……シ、シオン？」

「シ、シオン君？」

あんまりの出来事にティアナ、ギンガはキョトンとする。
シオンは構わない。

そのまま床に降り立つとイクスを放り投げた。

【は！？おい、シオン！シオン！？】

「……切れた。もうブチ切れた」

そのままスバルへと歩く。

スバルもまた立ち上がり、シオンにリボルバー・ナックルの一撃を
向ける。

そうすれば私は傷付かない！

「煩いっつてんだろが！ちったあ黙ってろ！！」

クロス・カウンター。

スバルの一撃を顔面に受けながら、しかしシオンも右の拳を叩き込
む。

ー豪ー

スバルは吹き飛び、しかしシオンは2歩で立ち直る。
どう考えてもシオンの方が弱い筈の威力。
しかし、何故かシオンは立ったままだ。

有り得ない。

あらゆる意味で理不尽なシオンはそのままスバルへと歩く。
スバルは即座に立ち上がった。

誰も私の苦しみを解ってくれない！

「ーーーーっ！」

左右の拳の連打。

しかし、シオンは構わない。

殴られながらスバルへと近付き、至近まで移動する。

「……終わりか？」

「ーーーーっ！」

スバルが、どうしようも無く狼狽する。

シオンは構わない。

そのまま右の拳をスバルに叩き込んだ。

快音一発。

スバルは軽快に回転しながら吹き飛ぶ。

シオンはそのままスバルに近付く。

「終わりか？ お前の愚痴はよ？」

「ーーーーっ！」

「ぐ、愚痴？」

「え、えええええええ？」

ティアナ、ギンガもア然である。

スバルの独白を聞いて、シオンはきっぱりと言ったのだ。
単なる愚痴だと。

――わあああああ！

スバルは立ち上がり、再びシオンを殴りまくる。

その度にシオンの顔は腫れ上がり、骨が折れるような音すら響く。
シオンは構わない。

そのまま殴られ続け、そのままスバルを至近に捕らえる。

あ、ああ……

次第にスバルはシオンを殴れなくなっていた。

手が止み、上げられなくなる。

シオンは構わない。

何で！何で！？

スバルが叫ぶ、しかしシオンは構わない。

右の手を振り上げた。

「あの時の台詞、返すぞ。少し頭冷やしてこい」

まったく力が入らない。

そんな拳がしかし、スバルの心に確かに突き立った。

同時。

世界が割れた。



シオンは落ちる。落ちる。

そして、そこ、に着いた。

、底、であり、そこ、に。

同時、シオンの目の前に立つ存在が居る。

スバルだ。

その身体を包むバリア・ジャケットは既に黒くはない。その瞳も碧へと戻っていた。

しかし、その身には未だ因子が纏わり付く。

真っ直ぐにシオンを睨む。

入って来ないで！

叫ぶ。

必死に全力で。

シオンはしかし、その歩みを止めない。

入ってこないでよ！

叫び、そして拳が振るわれる。

シオンは再び殴られた。

そして気付く、スバルが何かを隠していると。

その背後に何かを隠している。

見ないで、見ないで！

叫ぶ叫ぶ。

そしてシオンを怒りの形相で睨み付けた。

ここは私の場所だよ！私だけの場所！
私が私でいられる大切なトコロなんだよ！

だから入って来ないでと見ないでとスバルは叫ぶ。
そしてシオンもまた理解した。

ここはスバル自身すらも理解出来ない底。
此処にあるのは清濁まとめてある混沌だ。

見ないでよ……中途半端に優しくしたりしないで。
助けようなんて思わないでよ。
帰ってよ……

スバルの叫び。

それにシオンは漸く声を出した。

「嫌だ」

きっぱりと、きっぱりと言った。
それにスバルがシオンを睨む。
シオンは構わない。

「俺は、お前を失いたくない。中途半端な気持ちなんかじゃねえ」

だけどスバルは首を振る。

フルフルと、

今ならシオンにも解る。

スバルの深奥、'そこ'に因子が'居る'と。

シオンは歩く、しかしスバルはその歩みを許さない。

やだっ！

また殴る。

しかし、それはあまりに力が入っていない拳。

シオンは殴られたままスバルに近付く。

同時にシオンに因子が侵食しに掛かる。

それを見てスバルは叫ぶ。

シオンっ！

こちらを案ずるように、それにシオンは目を閉じる。

言葉を紡いだ。

「お前見てるとムカつく」

……っ！だ、だったら！

帰ってよ。と、しかしスバルは続けられない。

シオンは侵食されながら微笑んでいたから。

「鏡、見てるようで痛いんだよ。俺もお前と同じだったから」

守りたいモノを守れなかったからと、シオンは言葉を紡ぐ。

スバルは理不尽な思いをしてる人を助けたかった。守りたかった。

シオンは身内を、初恋の女性を、そして誰よりも尊敬した兄を守りたかった。

違うようで、しかし根っこは同じ。

シオンはそのままスバルを抱きしめた。

シオン……。

「お前のココロを見せてくれ、そして俺のココロを見てくれ」

因子が纏わり付く。

まるで邪魔をせんばかりに。

シオンは構わない。

自分のココロの扉は閉まっている。

錠が掛かっているのだ。

なら錠を開ければいい。

そしてシオンはその鍵を自然と、持っていた。

鍵をシオンは、呟く。

それはシオンにだけ許された言葉。

「ブレイド」

そして、シオンのココロを開く言葉。

「オン」

瞬間。

スバルの奥底の世界はシオンの開かれた扉の向こうの世界と連結した。



見る。

シオンはそれを見る、視る、観る。

スバルの過去を、その時抱いた感情を。

喜びを、怒りを、哀しみを、楽しみを。

力を振るう恐怖を。

自分の力に対する忌避を。

そして憧れた女性が居た。

誰よりも信頼している親友が居た。

一緒に駆け抜けた戦友が居た。

ぶっきらぼうなのに、しかし優しい父が居た。

救ってくれて、子供としてくれた母が居た。

そして、優しい眼差しの姉が居た。

新しい所にはシオンが居た。トウヤが居た。

夢を見た。

それは憧れた人のように真っ直ぐに誰かを助ける事。

希望を見た。

ずっと、ずっと一緒に居たいと願う想い。そして守りたいと願う想い。

諦めを見た。

助けたくても助けられなくて、行きたくても行けなくて。

絶望を見た。

それは大切な人達が傷付けられた記憶。守れなかった哀しみ。

全て、見た。

見る。

スバルはそれを見る、視る、観る。

シオンの過去を、その時抱いた感情を。
喜びを、怒りを、哀しみを、楽しみを。
力に対する渴望を。

どこまでも続く飢えのような渴望を。

誰よりも憧れた兄達が居た。

誰よりも好きだった姉が居た。

そして数多くの戦友が居た。

そして優しく厳しい母がいた。

新しい所には、

スバルが居た。ティアナが居た。エリオが居た。キャロが居た。な

のは達が居た。

夢を見た。

それはシオンの目標。

子供の頃からの憧れ。

希望を見た。

それはシオンがずっと抱いてきたモノ。ただずっと求めてたモノ。

諦めを見た。

それは哀しみ、追いつけないと、叫び苦しんだ記憶。

絶望を見た。

初恋の姉を誰より憧れた兄が、奪う、瞬間を。

全て、見た。

二人は互いの記憶をココロを見ながら落ちていった。

気付けばココに居た。

草原。

草原だ。

青々と繁る草原にシオンとスバルは居た。

空は雲一つ無い青空。

その下に二人は居る。

シオンは大の字になって寝そべっている。

スバルはシオンの上で抱き着くように乗っていた。

「見たよ」

「ああ」

スバルの声に、シオンは応える。

互いの記憶を、ココロを見合った。

色々な想いを。お互いに。

「……ルシアを助けたかった」

「……」

シオンの独白。

それをスバルは抱き着いたまま聞く。

「2年間。全部かなぐり捨ててやってきた」

「うん、……少し解るよ」

スバルは頷く。

そして顔をシオンに向ける。鼻先がくつつくような距離だ。
しかし二人は構わない。

「……見えたから。シオンの記憶。シオンのココロ」
「ああ。俺も見えたよ。お前のココロ」

そしてシオンは手を伸ばす。
スバルの頬に手は当てられた。

「守りたかった」
「ああ」

それは苦い記憶。
助けられなかった人達を前にしたスバルの記憶だ。

「解るよ」
「うん」

二人は頷く。
そしてシオンは呟いた。

「こんな……俺でも」
「うん」

スバルは頷く。
それはシオンがずっと抱いてきたモノ。
それをスバルは知っている。

「初めて、誰かを救う事が出来たのかな？」
「出来たよ。だって、シオンは……」

スバルもまたシオンの頬に手を当てる。

まるでお互いの体温を確認し合うかのように二人は互いの頬に手を当てる。

「私を……助けてくれた」

そうスバルは微笑んだ。

それにシオンもまた微笑み――

【ウオッホン!!!】

――いきなりの咳ばらいが聞こえた――

「わ、わぁ!」

「うおおお!」

二人は神速の勢いで飛びのく。

そして見遣る先には、いい所で咳ばらいなんぞをした奴……成人モードのイクスが居た。

【……二人共、いい所を邪魔するのは忍び無いが……】

「だ、だぁ! だぁぁ!」

「イ、イクス!」

二人共、顔を真っ赤に染めて咳ばらいをした当人。
イクスを睨みつける。

「……何でお前が此処に居るんだよ!」

【そもそも、お前は此処が何処だか知っているのか?】

イクスの問い。しかし、シオンはそれが解らない。

「……アレ？ 此処、どこだ？」

【……そんな事だろうと思ったよ。このアホ弟子】

イクスは嘆息。

されにシオンはムツとし、スバルがシオンを宥める。

イクスはそのまま説明した。

【……お前の世界だよ。ココは】

「……俺の？」

問い直すシオンにイクスは微笑みながら頷く。

【そう、お前のココロの原風景。お前の心象世界。つまり、お前のココロの世界だ】

風が吹く。

草原を風ぐように、優しく風が吹いた。

(第二十五話に続く)



ア

「はい♪アリサ♪」

す

「すずかの〜♪」

ア、す

「「アリサ道場〜♪」」

シ

「はい、皆さんこんにちは♪暫くぶりのアリサ道場です」

ア

「いや、もう本当にね」

す

「いきなりの三部構成、長かったよね」

シ

「さて、ではでは今回もオリキャラどうぞ♪」

ル

「てな訳で再び登場のルミオだ」

ア

「さて、今回は文字数が半端なく多いからちゃっちゃと行くわよ」

す、シ

「「おお」」

ル

「……え？。待った！俺無視！？ゲスト出演なのに俺無視かよ！」

ア

「うっさいわね。仕方ないでしょ？EX史上最大の文字数だから出来るだけ早く終わらせたいのよ」

ル

「ひどくねえ！？」

シ

「ま、タイミングが悪かったと思って諦める。ルミオ」

ル

「鬼か！」

す

「本編が内容濃いし、そこは諦めて貰わないと……この後眠って貰わなきゃいけなくなっちゃうよ？」

ル

「……ごめん。前言撤回。鬼の方がマシだ……」

ア 「今さら気付いたの？」

シ 「ルミオ。諦めろ。この二人にはこの道場内じゃあどうあがこうと勝てん」

ル 「お前等悪魔だ……」

ア 「さて、ぼやくゲストは放っておいて……」

ル 「せめて名前で呼んでくれよ！」

シ 「まあまあ。で今回の内容ですが」

ア す、ル

「「長い」」

シ 「ま、それに尽きますね」

ア 「というか何？この文字数。半端じゃないんだけど？」

す 「こんなことなら中編を二つくらいにして分ければよかったのに……」

ル 「二万文字越えの20ページは流石にな……」

シ 「書いても書いても終わらんかったそうですね。しかもまだ終わって無いと言っ」

ア 「この精神世界編。いつまで続くのやら……」

シ

「後一話は確定だそうです。次話が前後編にならない事を祈るしかないですね」

「作者さんはプロットではそこその文字数なのに書き出すと一気に増えるからね……」

「ある意味では致命的な欠点だよな……」

「さて、今回はここまで♪しかし本当ルミオは平和に終わったな」

「いや、だから。最初にあんだけ弄つといて平和、て言わないから」

「平和な方よ？お陰で私達、楽しね」

「……つくづくこの道場は異常なんだと理解したよ……」

「さて、次回は作者さんは温泉の執筆に入るから少し更新が遅れるかな？」

「ああ、あのオリジナルがラッキー・スケベな所な」

「いや、エリオにはいつも犠牲になって貰って助かるよ」

「……初めてオリジナルに同情の念を抱いたんだが……」

「しょっちゅう私達にお風呂に連行されてるしね♪」

「あの反応が楽しいんだよね♪」

「……ここで言うのはアレだけど……エリオ。強く生きてくれ……」

シ

「ではでは。白河シンジさん♪ルミオ君のキャラ召喚♪ありがとうございます♪」

ア

「最初に弄られて後は平和なルミオクオリティが素晴らしかったわね……」

ル

「何だよ！ルミオクオリティ、て！？」

シ

「気にしたら負けだぞ？それじゃな。ルミオ。また会おうぜ」

ル

「ああ、……出来たら、道場以外でな……」

す

「無理だと思うけど……」

シ

「はかない夢だな……」

ル

「そこまで！？」

シ

「そこまでだ。……さて、ではこの辺で♪初の三部構成でしたがよかったら感想お待ちしております♪どうぞ、よろしくお願いします♪では……♪」

ア、す

「「また次回……♪」」

ル

「まったな……」

シ

「ルミオ。こう、新境地に挑戦して♪をだな？」

ル

「無理だって！」

第二十四話「スバルのココロ」(後編)(後書き)

「スバルのココロと連結したシオンのココロ」 「その心象世界は優しい世界で」 「そして、シオンは対峙する、繋が

れた、刀を」 「封印された刀と」 「それが解かれる時、シオン

は新たな力を手にする」 「そして、スバルと切

り離された因子は……」 「次回、第二十五話 『黄金の剣』」

「それは新たな姿」

第二十五話「黄金の剣」(前編)(前書き)

「その風景を俺は忘れない」

「優しい風が吹く

中」 「青い空の下で」

「草原にポツンと突き立った刀を忘

れない」

「どこまでも孤高に突き立つ刃

「哀

しく。切なく。そして尊いあの姿を忘れない」

「あの少女と見たあの姿を」

「魔法少女リリ

カルなのはStS，EX。始まります」

第二十五話「黄金の剣」(前編)

風が吹く。

どこまでも優しく、草原に。

その風はシオンを、スバルを、そしてイクスの頬を撫で、髪を揺らす。

そんな中でシオンはたった一言を上げた。

「はい？」

もの凄く間の抜けた一言、疑問を。

先程のイクスの言に対しての疑問である。

【つまりお前のココロの世界だ】

その言葉にシオンは疑問を上げた。

イクスはそのまま嘆息。

それはまあ、とっても疲れたような溜息であった。

【馬鹿だ。馬鹿だとは思ってはいたが……】

「て、おい！何気にとんでもない事言ってないか！？」

シオンの抗弁に、しかしイクスは構わない。

もう一度、きっぱりと言い放つ。

【此処はお前のココロの世界だ】

「いや、そう言う意味じゃなくて、何で俺もスバルも此処に居るんだよ」

シオンのココロの世界と聞いたスバルは物珍しそうに草原を眺めている。

・・・正直に言うとは此処が自分の世界だと言うのなら恥ずかしいのでジロジロ見るのは止めて欲しい。

そうシオンは思うが、先程互いにココロを見合ったのに何を今更と思わなくも無い。

と、そこで気付いた。

「…………まさか、それで？」

【…………漸くか。…………まあ良い。その通りだ。お前がキー・スペルを唱えてスバル・ナカジマとココロを見合った時に、同時にお前達の世界は連結。そのままお前達は此処に来了。と、言う訳だ】

イクスの言にシオンは成る程と頷く。

だがもう一つ疑問があった。

イクスは何故此処に居るのか？

それをイクスに尋ねると何故か眉を潜められた。

「…………イクス？」

【…………最近忘れられがちだが、俺はユニゾンタイプのデバイスだ】
「ああ、うん」

何を今更？

だが、その疑問をシオンは口に出そうとする。

それにイクスは再度嘆息。

【…………。一応、お前とはユニゾン状態な訳なんだが…………】
「え。…………あ、そうか」

ポムツと手を打ち、納得する。

イクスは一部のみだが、シオンとユニゾンしている状態で起動しているのだ。

つまり、イクスの精神もシオンに引っ張られる形で連れて来られたのだろう。

そんなシオンの様子をイクスはジト目で見ながら諦めた表情になり、そのまま歩き出す。

「……イクス？」

【シオン。それにスバル・ナカジマ。ついて来い】

そのままイクスはさっさと歩き出す。

何があると言うのか。

取り敢えずシオンはスバルに呼び掛ける。

「スバル。……何やってんだお前？」

「え？……えへへ。此処がシオンの世界だと思いとちよつと嬉しくて」

笑いながらスバルはスウツと深呼吸をする。

優しい風を感じながらその風景を仰ぎ見る。

「……此処、綺麗だね」

「……そうか？」

スバルの言葉にシオンは若干気恥ずかしくなる。

此処が自分のココロの世界で。

それを綺麗だと言われれば誰だって照れる。

そんなシオンにスバルは笑う。

「うん。優しい世界だよ」

「……そうかい」

顔が赤くなりそうなのを自覚し、返事がぶっきらぼうになる。
スバルから顔を逸らす。そんなシオンにスバルは笑いながらシオンの手を握る。

「ねえ、シオン……」

「……何だよ……」

いきなり手を握られ、シオンは戸惑う。

しかしスバルは構わない。

手を握ったまま続ける。

「ありがとうね。色々」

「……まだ、全部片付いた訳じゃないんだぞ？」

実際、スバルの世界の因子がどうなったかは解らない。
だから返事はいいとシオンは思う。
しかし、スバルはそれに首を振る。

「……シオンのココロ。見せて貰ったよ」

「……俺だってお前のココロを見たぜ？」

「うん。……でも……」

そしてまた振り返り、シオンのココロの風景をスバルは見て、微笑む。

「こんな優しい風景を見せて貰ったから」

「……………」

シオンはそんなスバルに何も言えなくなる。
その微笑みが優し過ぎて。

その笑顔が、何か。とっても尊いものに思えて。
シオンは思う。

優しくて綺麗なのはどっちだよ、と。

青空と草原をバックに微笑むスバルはそれだけ綺麗だった。

そんなシオンを見ながらスバルはシオンのココロの風景を楽しむ。

シオンのココロの余韻を楽しみながら・・・

「……あれ？」

唐突にスバルは固まった。

シオンのココロの記憶。

それに見逃せないものがあった。

ティアナを抱きしめてる光景があった。

お姫様だっこをしている光景があった。

そしてその時のシオンの、心情、をスバルは知る。

「……シオン……」

「……ん？ どうした、……よ」

瞬間。シオンは何故か寒気を覚えた。

目の前のスバルから。

何故だろう？ 直感は叫んでいる。

今のスバルはまずい、と。

「ス、スバル！ 何で急に怒ってるんだよ！？」

「……ううん。怒ってなんかないよ？……ただシオンと詳しく、お
話、しなきゃいけない事が出来ただけだよ……」

、お話、。その単語にシオンは総毛立つ。

思い出すはダークオーラを発生させつつ。最高の笑顔を浮かべてい

た先生の一人。

今のスバルはその先生に勝るとも劣らぬ気配を発生させていた。

「ま、待った、待った！何でさ！？」

「理由は……自分の胸に聞くと良いよ……」

取り付く島もない。

ガシャンツと甲高い音と共にいつの間に起動したのか、右手に纏うリボルバー・ナックルがカートリッジをロードする。

シオンの直感は告げる。

最早、回避は不可能。

何故か怒るスバルの驚異からはもはや逃れえぬ、と。

「取り敢えず落ち着こう！、お話、にデバイスは要らないんじゃないかな！？」

「……必要だよ？尋問するのに最適だから……」

「今尋問、て言ったーっ！」

叫び。

しかし、今のスバルには届かない。

何故かスバルが黒く見える。

翡翠の瞳は何故か前髪が陰となっていて見えない。それが尚の事、恐怖を誘った。

因子の影響が残っているのか！？

そんな事を思うシオンだが勿論そんなわきゃあない。

「と、取り敢えず何に対して怒ってるかぐらい聞かせろ！？」

「……問答……」

そこでスバルの口がパツクリと開いた。

それにシオンは心底恐怖する。

「た、助けー!」

「無用!」

甲高い声がシオンのココロの風景に響いた。



【……やっと来たか。遅いぞ、シオン……? どうしたんだ? 心無しか先程よりボロボロだが……?】

漸く追い付いて来たシオンに文句を言おうとするイクスだが、そのボロボロの様子を見て、思わず尋ねる。

「……知るか」

イクスの疑問にしかし、シオンはふて腐れるようにして答えた。
シオンとしては自分の方こそ知りのだ。

しかし、シオンに折檻を加えた張本人であるスバルは先程とは打って変わって、これまた不機嫌そうにソップを向いていた。

いくらシオンが尋ねてもスバルは答えず。ただ

「自分の胸に聞きなよ!」としか答えなかったのだ。

シオンとしては真剣に

「俺が何をした!？」と叫びたくもあるのだが。

そんなシオンとスバルを見てイクスは【……ハアッ】と頷きつつ溜息をつき、シオンを哀れみの目で見える。

我が主ながら見事なまでの鈍感さであった。

「……それはもう良いんだよ。……で？ 一体此処に何があるんだ？」

シオンとしてはこれ以上この話題を続ける積もりは無い。

……またスバルが怒り出すとも限らない訳だし。

【ああ。そうだった。お前に見せたい物があったな。ほら、あれだ】

そんなシオンに苦笑いを浮かべながらイクスは頷き、前方を指差す。

そこには。

「……刀？」

たった一振りの古ぼけた刀が地面に突き立っていた。

黒の柄に、黒の鍔。

だが、その中にある。ただ刀身だけが白銀の光を反射して輝いている。

刀身には見事な乱れ刃紋。

無骨な筈の刀なのに、それはあまりにも見る者を惹きつける美しさがあった。

ただひたすらに。

ただただ一途に。

たった一つの事を成す為の存在。

それ故にこそ、この刀は美しかった。

だが……

「……鎖？」

シオンが呟く。

そう。地面に突き立てられたこの刀はまるでその身を封じられるが如く。

一重の鎖に巻き付けられていた。

鎖は刀の刀身に、鏢に、柄にと絡み合うように巻き付き、その行く先は地面へと繋がっていた。

何故だろう。

シオンはその刀を見て、涙を流したくなる程に切ない感情を覚えた。不機嫌そうにしていたスバルもまた、その刀に魅入っていた。

「イクス。この刀は？」

【お前の刀だ】

尋ねるシオンにイクスは即答する。

だが、その答えにシオンは少し惑う。

「……俺の、刀？」

【そう。いずれお前がその手に握る事になる。お前のココロの一欠片より生み出された、お前の為だけの刀だ】

イクスはまるで詞うように言葉を重ねる。

シオンは再びその刀を見る。

そして気付いた。

この刀はいつか、ウィズダムを発現した時に脳裡に浮かんだ刀では無かったか。

そしてあの時、自分は鎖を断ち切った。

そして、今。

再びシオンの眼前にはその刀がある。

鎖に繋がれた刀が。

それが意味するのはつまり。

「……この鎖を俺は外せるの、か？」

【ああ。そしてその時。お前は新しい力を手に入れられる。、黄金の剣、を、な】

イクスはスツと体を避け、シオンに刀への道を開ける。

それはいつか読んだある伝説の王に剣へと導く魔法使いのようだった。

しかし、そんなイクスにシオンは少し躊躇う。

何故か怖かった。

あの鎖を断ち切る事が。

・・・あの刀に触れる事が。

力を手にする事。

以前は躊躇わなかったそれにシオンは躊躇していた。

脳裡に浮かぶのはスバルの記憶。

力を手にし、振るう事の恐怖だ。

しかし。

「……大丈夫だよ。シオン」

「……スバル……」

そんなシオンにスバルが微笑む。

さっきまでの不機嫌さが嘘のような朗らかな笑顔で。

「シオンは大丈夫だよ。だってシオンはもう力を振るう、て言うのがどんな事か解ってるもん」

「……そうかな」

スバルの言葉にシオンは苦笑いを浮かべる。
思いたすのはアースラを飛び出していた時の事だ。
今なら、スバルのココロを見た今なら良く解る。

あの時の自分がどれ程愚かだったのかを。

そして、そんな自分が力をしてまた同じ愚行を繰り返しはしないかと。

シオンはそう思う。

そんなシオンにスバルはにぱつと笑う。

まるで太陽だな、とスバルの笑顔にそんな感想をシオンは覚えた。

「うん。シオンは大丈夫。だってシオン、強い、もん」
「……」

強い。

その意味をシオンは噛み締める。

そして笑った。

そう。この少女が信じてくれるのならば。

自分は強く在ろう。

そう、思いながらスバルに向き合い笑った。

「うん。ありがとう、スバル」

心からの感謝をシオンはスバルに告げる。

それにスバルは照れたように笑った。

そしてシオンは向かう。

自分の刀に。

歩きながらシオンは歌うようにして聖句を口ずさむ。

「……我、力を手にする事を恐れ、しかし。振るう事を恐れない……」

」

歩く、歩く。

刀までは後、三步。

すると自然にシオンの口からは自身の鍵たるキー・スペルが滑り出ていた。

ブレイズ・オン。

刃に入る。

その意味を持つ、言葉を。

そしてシオンは刀と対峙した。

「……お前は銘が在るのか？」

刀に問い掛ける。

しかし、当然刀は話す筈が無い。

だが、シオンはそれに頷く。

「いつかお前の銘を俺がやる。――だから」

左手を伸ばす。

ゆっくりと。

そして柄をはっきりと握った。

「お前の力を俺にくれ」

瞬間。

乾いた音を立てて鎖が弾け飛んだ。

連続して鎖が地に落ちる音が草原に響く。

優しく風が吹く中でシオンは刀の封を解き放った。

【封印、解除確認。イクスカリバー。モードリリース。……シオン。良く覚えて置け。お前が手にする力を。剣の名を。その名前はー】

シオンがその名を聞くと同時。

シオンのココロの風景が光の中へと消えていき。

シオン達はココロの世界から弾き出された。



衝撃が走る。

重く、限り無く。

アースラのブリーフィング・ルームでなのは達はその振動に顔を歪める。

最初の次元震が発生してから30分程経つ。

その間、アースラのスタッフ達は良くやってくれた。

破壊された結界を修復し、再展開する。

それをずっと続けていた。

間断無く破壊されて往く結界。

その中で、よく此処まで耐えてくれたと言える。

……しかし。

《……強装結界、今の次元震で二つ破壊。……後一層です。……再展開。間に合いません……》

無念そうに通信の向こうのシャーリーが顔を伏せる。

この間にも、結界は再展開を開始している。

……それでも間に合わないのだ。

今、訓練室で戦う二人、叶トウヤと伊織タカトの異母兄弟が何をやって
っているのかは解らない。

しかし、確実に言える事は次の次元震には残り一つの強装結界では
間に合わない事は確定である、と言う事だ。

次元震は強装結界を破壊して、そのままアースラも破壊。

そして次元断層を作りあげ、近隣の各次元世界をも飲み込むだろう。
最悪の状況だった。

何より最悪なのは、この状況において尚、彼女達は彼等の戦いに介
入出来ない事だった。

止められるものならば止めている。

しかし、次元震をも生み出すような戦いにどう介入しろと言うのか。
最悪の状況に備えて、各クルーには脱出をはやて命じていた。

しかし、クルー全員はそれを拒否。

結界を張り続ける事を選んだ。

既に本局には次元震の発生を伝え、各世界を守る為に動いている。
一秒でも長く保たせる事で人々を救えるのなら、と彼等は笑った。
それにシオン達が帰ってきたらこの戦いも意味が無くなる。

戦いは中止へと向かうだろう。
だが・・・

「……皆、ごめんな……」

「はやて……」

「はやてちゃん……」

はやてが通信を介し、そして直接、なのは達に謝る。

そんな必要なぞ、どこにも無いのに。

だからなのは達はそんなはやてに笑い掛けた。

「はやてちゃん。私達は自分の意思で此処に残る事を決めたんだよ
？」

「そうだよ。……だから謝る必要なんて無いよ」

なのはからフェイトから、そして通信を介して各部署からはやてに言葉が掛かる。

《そうだよ。はやてが謝る必要なんて無えーって》

《それに私達は主はやてと共に生きる者です。主を置いて行くなど有り得ません》

「……ヴィータ、シグナム……」

《そうですよ。はやてちゃん。それに諦めるのはまだ早いです!》

《そうだよ! アタシ達も手伝ってんだ! 結界の一つや二つ、何とかしてみせらあ!》

シグナムとヴィータの横からリインとアギトが顔を出す。

二人もまた自分の前に展開したコンソールを激しく操作している。

そして、前線メンバーから。

シャマルから、ザファイラから、機関部から。

ありとあらゆる所から声はやてに掛かる。

その目は誰も諦めてなんて居なかった。

「……皆。……そやね。私が最初に諦めたらアカンね……」

「うん。そうだよ」

「それにさっきから次元震が起きるタイミングがズレて来てる。……もしかしたら再展開の方が早いかも知れない」

なのは、フェイトもまた頷く。

気休めにしかないかもしれない。

しかし、簡単に投げ出す事だけはしない。

それにはやては頷く。

そして……

《……っ！。く、訓練室内の魔力値、増大！来ます！！》

「総員！対ショック姿勢！！。……アースラ。耐えてや……」

叫び、はやては愛艦へと呼びかける。

結界の再展開は間に合わ無い。

ならば、後はアースラの強度に頼るしか無い。

祈るような心地ではやて達も身を屈め、ショックに備える。

そして、次元震の証たる。激烈な振動が・・・

来ない。

何秒か経って、はやては恐る恐る目を開く。

しかし、次元震は来ない。

アースラが耐えた訳でも、ましてや強装結界が再展開された訳でも無い。

次元震。そのものが起きなかったのだ。

「……来ない、ね……」

「うん。……？」

なのはの言葉にフェイトが頷き、同時に訝しい気な顔になる。

少し遅れて二人もフェイトと同じ感覚を得た。

それは。

「……歌？」

「二人も聞こえた？」

「うん。……私も聞こえたよ……」

そう、確かな旋律を伴い歌が響いていた。

《……えっ!?!》

続けてシャーリーから驚きの声上がる。
何に驚いたと言うのか。

「シャーリー? どないした?」

《……艦長。これを……》

シャーリーは返答代わりにはやて達にデーターを転送する。
それは訓練室前の映像だった。
普通なら何と言う事も無い映像。
しかし、それを見た時。はやて達もまた、疑問を覚えた。

「……何やろ? これ……?」

ぼつりとはやてが呟く。

訓練室前には見た事も無い魔法陣。

それも、訓練室をすっぽり覆い隠す、程のそれが展開されていた。
だが、一つだけ言える事がある。

この魔法陣が次元震を止めた。

それは間違い無かった。

《フェイトさん!》

突如としてキャロから通信がフェイトに入る。
それをフェイトが即座に出た。

「キャロ。どうかした?」

《はい。ええつと。此処に、無断侵入者の人が……》

キャロのその言葉に今度こそはフェイト達は絶句する。

此処に至り、侵入者。

トウヤといい、タカトといい。

どうやって艦内に侵入しているのか。

頭を抱えそうになる三人にキャロは侵入者の映像をウィンドウに映し出す。

そこには。

「……ユウオ、さん……？」

背中に羽のような物を展開する。トウヤの恋人にして、彼の秘書。

そして、最初の感染者からの治療者。

ユウオ・A・アタナシアが居た。



アースラ訓練室。

空間シュミレーターでもあるそこは、しかし。

最早その機能を使う事は出来なくなっていた。

トウヤとタカト。

二人の衝突の、余波、が起こした衝撃によって、だ。

そもそも刹那の瞬間にSS以上の威力を、数十。数百とぶつけ合う事自体が最早異常なのだ。

そんな状態に空間が、次元が、世界が保つ筈も無い。

結果として次元震が発生した訳だが、実際の所。この二人にとって、そんなモノは、どうでも、よかった。

トウヤもタカトも今は互いしか見ていない。

他の事は全て余分に過ぎない。

EX同士の戦いとはつまる所。こう言う事なのだ。互いの技が、周りに、世界に、ありとあらゆる存在にとって害となる。

しかも致命的に、だ。

しかし、トウヤもタカトも一切躊躇しない。

彼等には一つの共通認識がある。

人に構わず、世界にすら構わない。

‘ただ我意あるのみ’

通すべきは己のみ。

傲慢としか言えない共通の認識が。

さらに叩きつけ合うピナカと、漆黒の魔力を纏う拳。ぶつかり合い、軋む世界に、やはり二人は構わない。

アヘッド・レディ？

トリガー・セット！

時すらも我を縛る事なぞ出来ず！
神の子は主の右の座に着かれた！

「――あ――」

異口同音。

二人の異母兄弟は互いにう音からなる声を上げ。
そして、それは叫びへと変化する。

「「あああああああああああああつ！……！！！」」

――撃！・爆！・裂！――

世界が、軋み、壊れ、嘆き、そして歓喜する。

世界が悲鳴をあげる。

どうしようも無く。

世界が歓声をあげる。

どうしようも無く。

ギシッと甲高い音を立てて、二人が炸裂し合う一撃の空間が他者から見て解る程に歪み。

それはたやすく次元交錯線を不安定にさせ。

同時に世界をぶち抜く。

次元震が起こる前兆だ。

その中で二人はそれに全く、構わない’。

そのままの動作で槍を、拳をたたき付け合う。

幾重にも、幾度にも。

一撃事に世界が割れ、前兆はさらに進む。

―割れた―

遂に二人の戦いに耐えられず、世界が。

揺れる。揺れる。

どこまでも激しく。

割れる。割れる。

世界の全てを引き裂いて。

それはこう呼ばれる。

次元断層、と。

マール色の、あらゆる色を詰め込んだ。その空間は、一気に世界を侵食。

二人すらも飲み込もうとして。

即座に叩き込まれた石突と、蹴りに空間ごとぶち抜かれる。

「「邪魔だあっ！！！」」

再び重なる二人の叫び。

直後に石突きから、'漆黒'の何かが放たれ。

蹴りからも漆黒の爆炎が叩き込まれた。

空間に叩き込まれたそれは容赦なく空間を喰らい。抹殺する。

そうして、生まれた次元断層はあっさりと世界から消えた。

魔法が意思によって成ると言うならば、世界を組み換える力と言うならば。

この二人の意思力とは、どれ程のモノなのか。

一度、二人を指してある字名を与えた人がいる。

まったく同じ銘を。

―神殺し―

世界を殺しながら戦う二人に。

世界を殺す世界を更に殺す二人に。

それは神様を殺しているようなものだ。

そう、その字名を与えた者は言ったものだった。

そして、それは酷く正しい。

世界が神だと言うのならば。

その世界を殺しながら戦う二人は正しく神殺しである。

更に数十合、打ち合う二人だったが、唐突に弾かれたように離れる。

そして、互いにフツと笑った。

「……この歌は……。来たのかね？ ユウオ……」

「姉者もまた律儀だな」

互いに苦笑いを浮かべる。

瞬間、訓練室が変化した。

いや、'消滅'した。

しかし、タカトもトウヤも構わない。
直後、更なる世界が展開する。

それは薄暗い夜が広がる空間だった。

ただ、地平線の如く光が横一直線から光っている。

その中央にはまるで太陽の如く光る球があった。

タカトもトウヤも知っている。

この世界に果ては無く。

何処までも広がっている事に。

「姉者の歌唱術、無限なる幻想世界、か……」

「いつ見ても見事なものだね……」

二人は感嘆する。

歌唱術、と呼ばれる魔法がある。

元々歌とは力があるとされていた。

故に永唱を歌として魔法をプログラミングする技法が編み出されたのだった。

これの特徴は、普通では考えられない程の大規模な魔法を行使する事が出来る事だ。

今のように、'架空'の世界を作り出す事すらも。

この世界は、ユウオがEX同士の戦いの為、'だけ'に考案したバトル・フィールドであり、世界だ。

上下の別は無く。

ただ広がる無限の世界。

それをユウオは二人の為に作り上げたのである。

《二人共、聞こえる?》

唐突に声が響いた。

ユウオの声だ。

それに二人は頷く。驚きもしない。

「うむ。聞こえるよ。ユウオ」

「……久しぶり、と言った所か。姉者」

二人の言葉にユウオが頷く気配がする。

《……うん。二人には色々言いたい事、あるけど。……特にタカトには。まあ、後回しにするよ。……取り合えず。私はこの世界を維持するから、存分に戦っていいよ》

ユウオの言葉に二人は口笛を上げる。

正直、次元震だの、次元断層等、' 鬱陶しい ' 現象がいちいち続いたので二人は苛々しっぱなしであった。
そこにユウオの助力は大助かりであった。

「だと、さ？」

「ちように良いね」

片や肩を竦め、片や笑って見せる。

そしてそのまま互いに構えた。

タカトは腰を落とした自然体。

トウヤは相変わらずの左半身に。

二人の視線が交錯する。

そして、互いに言葉も無く、一気にぶつかった。

' 無限なる幻想世界 ' に爆音が轟いた。



世界が割れた。

それを確信しながらシオンは、そしてスバルは、そこに降り立つ。そこは真っ白の空間。

黒のスバルと戦った空間だった。

「……イクス？」

【フム。連結は途切れたようだ。戻って来たな。ここはスバル・ナカジマの世界だ】

「シオン！スバル！」

「二人共！！」

イクスと頷き合うシオンに声が掛かる。

ティアナとギンガだった。

二人はそのままシオン達へと駆ける。

「アンタ達二人、どこに行ってたのよ!？」

「いきなり二人共消えたからびっくりしたわ……」

二人の姿を確認してシオンこそホツとする。

スバルのココロの最心部。

そこから二人の姿を見ていなかったのだ。

そんなシオンを見た後、次にティアナ達はスバルへと視線を映した。

「スバル……」

「うん。……あのね。ティア。ギン姉。……ごめん」

スバルが二人に頭を下げる。

だが、ティアナもギンガも二人してそれには肩を竦めた。

「……別に、謝る必要はないわよ。アンタが悪い訳じゃ無いんだし」
「でも……。この私は……」

「スバル。それは違うわ」

顔を上げて、尚も謝るスバルに、ティアナもギンガめ首を振る。

「人間、なんだもの。……どんなに好きな人でも、否定的な感情と
言うのはあるわ」

「……………」

【補足だが、因子によって更に感情の揺れ幅が大きくなっていたと、
言うのも有る。……気にしない事だ】

「……でも……」

それでも三人を危機に陥れた事に変わりはないと、スバルは思う。
そんなスバルにシオンが近付く。

「シオン……………」

「俺達はな？別に謝って欲しい訳じゃ無いんだよ。スバル」

笑いながらスバルの頭に手を置く。

そう、シオンはスバルのココロを見た。

故にこそ、シオンはスバルの謝罪を受け入れない。

謝られたくて此処まで来た訳じゃ無いからだ。

だからシオンは別の事をスバルに言う。

「スバル。こう言う時は、俺達はこう言って欲しいんだよ。ありが
とう、てな？」

「……………」

頷くスバルにシオンは笑い手を離す。

そしてスバルはギンガとティアナに向き直った。

「ギン姉、ティア。此処まで来てくれて。……助けてくれて、ありがとう」

「……別に、ありがとうも要らないけどね。……でも、それなら、うん。て答えるわ」

「そうね。それに、色々嬉しい事もあったし、ね」

笑い、頷く二人に漸くスバルに笑顔が戻る。

そしてワイワイと話す三人に、シオンは男一人、てこう言う時は寂しいもんだな。と、呟きつつ。

しかし、嫌な予感を覚えていた。

「……イクス？」

【……ああ。来る】

瞬間。

この空間を汚すように因子が溢れ出して来た。

「「「ーーーーっ!」」」

それに気付いた三人が疑問の声を上げる。

「……因子!？」

「どうして? スバルは此処にいるのに……!」

【簡単な話した。因子はスバル・ナカジマから切り離された。ならば次に行うのは邪魔になった宿主の破壊、と言う訳だ】

イクスの言葉に一同絶句する。

同時に因子が山と溢れ、一気に膨れ上がり、巨大な姿へと変わった。

しかし、イクスは構わない。

【よく覚えておけ。何故、第二段階に至らぬ感染者が必ず死ぬのか？つまりはこう言う事だ。奴らは不要な感染者をこうして中から殺そうとしている訳だ】

その答えに絶句する。

何故感染者が普通死ぬのか？その明確な解答に背筋が寒くなる。そして、それ、は現れた。

「G Y a a a a ! !」

因子が一気に小さくなりその姿があらわになる。

それは半透明なスライムのような形状をしていた。

形的は蜘蛛だが、その胴体から人の上半身が出ていた。

頭はざんばらに伸ばした髪がある

問題なのはその巨大さ。

どう見てもその全長は30mを越えている。

「でっかいな……」

【スバル・ナカジマの負の感情を糧に成長したのだろう】
「私の……！」

何処までも自信のココロを利用する因子に、スバルが怒りを向ける。
ギンガ、ティアナもまたデバイスをそれぞれ構える。

「こいつを倒せば、終わりなんだな？」

【ああ。だが、油断するなよ？、あれ、は因子そのもの。言わば精霊と同位の存在だ】

忠告を飛ばすイクスにシオンは頷き、スバル、ギンガ、ティアナを見る。

三人もまた頷いた。

「こいつでラストだ。……ギンガさん、ティアナ、スバル！……行くぞ！！」

「ええ！終わりにしましょう！」

「コイツ倒して戻るわよ！」

「うん。……ギン姉、ティア、シオン。行こう！帰る為に！！」

そして四人は誰ともなく頷き、駆け出した。

「」「GO！！」「」

ここに。スバルの世界での最後の戦いが幕を開けた。

（後半に続く）

第二十五話「黄金の剣」(前編)(後書き)

はい。あんのじょう一話で終わらんと言うね。……また前後編です。

…長いなー(汗) いや、本当すみません。今度こそ次話

で精神世界編終わります。……多分(汗) 同時に

第二部「666編」も終わりとなります。 第二部ラスト。ぜひ

ぜひ楽しんでいって下さい♪ではでは、後編はすぐにお届けします

♪ではでは♪

第二十五話「黄金の剣」(後編)(前書き)

すみませんでした！更新遅れ、誠に申し訳ありません(汗)

漸く書き終えました。次は出来るだけ早く更新します。

本当、申し訳ありません。

では、後編をどうぞ。

では

第二十五話「黄金の剣」(後編)

純白の世界。

その世界に咆哮が響く。

因子が作り上げた異形の土蜘蛛。

それによってだ。

同時、その胴体から伸びる半透明のヒトガタのざんばらに伸びた髪が触手となって降り落ちる。

触手が向かう先には疾駆する四人が居た。

シオン達だ。

降り落ちる無数の触手に、シオンが前に出る。

ノーマルのイクスを背中まで降り上げ、そして一気に振り下ろす！

「神覇・四ノ太刀！ 裂波！」

ー波ー

空間振動。

それが触手の先端へと叩き込まれ、道を開く。

同時、鮮やかな青と紫の”道”が疾る。

スバルとギンガだ。

二人は同時にカートリッジ・ロード。

「ダブル！ リボルバー……！」

疾駆しながら拳を突き出す。

二つのリボルバー・ナックルが激烈な回転を刻む。

そんな二人を土蜘蛛は許さない。

触手が軌道を変化し、二人を包み込むように、襲い掛かる。
……そんな事を許す筈が無い。

「クロス・ファイアー！ シュート！！」

ー弾！ー

放たれる二十のスフィア。

ティアナだ。

ティアナが放ったシュートが寸分変わらず触手を迎撃していく。
そして姉妹の声が響く！

「「シュート！！」」

ー轟！ー

突き出した拳から放たれた衝撃波は相乗効果で倍々の威力となり、
壁となる触手を引きちぎっていく。

道が開いた。

そこを二条のウィング・ロードが突き進み、二人はそのまま疾駆し、
壁を抜けた。

土蜘蛛はそんな二人に対して、八つある足の内、二つを持ち上げた。

ー閃・裂ー

「わっ！」

「くっ！」

斬撃。

巨大な、それでいてあまりにも早い斬撃となった前足が振るわれる。

それを二人はぎりぎり回避。

しかし、さらに振るわれていく斬撃にこれ以上、懷に飛び込め無い。

「スバル！　ギンガさん！　一旦下がって！」

「ティア！」

「……了解！」

ティアナから飛ぶ指示に一瞬だけ迷い、だが即座に従う。

そんな二人に追撃で叩き込まれる斬撃。

それに一陣の斬撃が放たれた。

シオンの剣牙だ。

さらにティアナから放たれたクロス・ファイアー・シュートが二人を阻む触手を叩き落とし、反対側から再度放たれたダブル・リボルバー・シュートで壁を開き、四人は合流した。

「シオン！」

「応！　神覇・参ノ太刀！　双牙！！」

「激！！」

ティアナの指示にシオンは即座に頷き、二条の斬撃を放つ。
地を走るそれは壁となって追撃で伸びる触手を防いだ。

「一旦。距離を開けるわよ！　いい？」

ティアナの指示に三人は頷き、距離を開け。

しかし、シオンが突如ギョッと目を見開いて踏み止まる。

「シーー」

「スバル！　ギンガさん！！　俺にシールド合わせて！！」

シオンがその場で三連でシールドを展開。
さらにギンガ、スバルがプロテクションとシールドを重ねて張る。
そして、シオンに問い掛けようとして。

「轟！」

漆黒の煌めきがシールドにぶつかった。

「「「っー！」」」

砲撃。

土蜘蛛の背より伸びたヒトガタの口から漆黒の砲撃が放たれたのだ。
その衝撃に、威力に三人歯を食いしばる。

実になのはのエクセリオン・バスターに匹敵しかねない威力だ。
三人は更に魔力をシールドに注ぎ込む。

「クロス・ミラージュ！」

ブレイズ・モード。

未だ放たれ続ける砲撃。

ティアナはそれを見て、クロス・ミラージュを変化。
構える。

「皆！ 荒っぽくいくわよ！！」

「任せた！」

「うん！」

「お願いするわ！」

三人にティアナは首を縦に振り、そして眼前の砲撃を睨み据える！

「ファントム！」

「散れ！！」

ティアナが構えるクロス・ミラージュの銃口に三連で環状魔法陣が展開。

さらにターゲット・サイトがその先に展開する。

ティアナの叫びに合わせるように三人はシールドを解除して飛び避けた。

「ブレイザーっ！！」

ー轟！ー

クロス・ミラージュから放たれる閃光。それは迷い無く、黒の砲撃と衝突する。拮抗。

しかし、ティアナは顔を歪める。

威力も砲撃の持続時間も向こうが上だ。

このままではいずれ押し負ける。

そう、”このままならば”。

「スバルっ！」

ティアナが左に目を向ける。

その先にスバルが居た。

両手に展開する環状魔法陣。

そして、左手に束ねられるは光球。

「ディバインっ！」

スバルは迷い無く、それを右手で撃ち抜いた！

「バスターー！ー！！」

ー豪！ー

砲撃。

しかもロングレンジ・バスターだ。

なのはに六課卒業までの課題とされたその一撃をスバルは放つ。

青の光は横から砲撃を放っているヒトガタの頭に直撃。

その頭を半分程消し飛ばし、黒の砲撃がカットされる。

しかし、そこで終わらない。

「あああああっ！！」

咆哮一声！

ティアナだ。

そのままカートリッジをロード。

一気に魔力を注ぎ込み、黒の砲撃を蹴散らす。

さらに向かう先はヒトガタだ。

先のデイベイン・バスターで動けないヒトガタはそれを見る事しか出来ない。

ー煌ー

ファントム・ブレイザーがヒトガタに直撃し、爆発。

その半身が消え去る。

……しかし。

まるでビデオの巻き戻しを見るかの如く、即座に再生していく。

それを見ながらシオン達は顔を歪めた。

「……やっぱり再生すんのかよ……」

「厄介ね……」

感染者が再生する事からこの因子そのものである土蜘蛛が再生能力を有している事は想像はしていた。

しかし、実際に目の前で再生されるとやはりショックである。

「っ……く……」

「ティア……」

ファントム・ブレイザーを放ったティアナが膝に手を着き、息を荒げる。

それをスバルが心配そうに名を呼ぶ。

実際、ティアナ、ギンガの消耗はかなり激しい。

カートリッジの残数も僅かだ。

スバル、シオンはさほどでも無い。

消耗度で言えばシオンも相当なのだが、シオンはけろりとしていた。スバルの声にティアナは深呼吸をし、氣息を整える。

「大丈夫よ。心配無いわ」

「でも、ティア……」

「……ティアナ、ギンガさん。魔力と残弾。どれくらい残ってる？」

そんな二人を見つつ、シオンがティアナとギンガに問う。

それに二人は手に残弾を乗せて見せた。

残りティアナ、8発。

ギンガ、6発。

「……ギリギリ、だな……」

「私の残弾、少し分けるよ」

スバルが自分の残弾を少しティアナ、ギンガに渡す。
しかし、それでもカツカツだ。

「ティアナ、正直な所どうだ？」

「……厳しいわね。魔力もカートリッジもギリギリよ」

「私は戦闘機人モードなら魔力を使わないで済むからまだマシだけ
ど……」

そう言うギンガも顔は晴れない。

そのままシオンは土蜘蛛へと顔を向ける。

既に再生を終えている土蜘蛛はまるで待ち受けるかのようにその場
から動かない。

こちらは余力が無いのに対して向こうは再生能力も含めて余力を十
分に有している。

余りにも不利な状況であった。

「……とりあえず、俺はまだ大丈夫だから俺が前に……」

瞬間。

土蜘蛛が消えた。

「……な！ ……っ！」

「え……？」

驚愕を上げ。

しかし、シオンは即座に後ろを振り返る。

三人はシオンの行動に呆気にとられた。

そんな三人にシオンは全力で叫ぶ。

「逃げろー！ー！っ！！！！！」
「ー！っー！！」

そしてシオンに遅れながら三人は自分達の後ろに居る存在を悟る。
土蜘蛛。

先程まで、確かに正面に離れていたそれが今、自分達の真後ろに居るー！

離れるべきと頭では思いながら三人は振り向く。

既に土蜘蛛は攻撃体勢。

前足を振り上げ、斬撃を放とうとしていた。

驚愕に目を見開く三人を嘲笑うかのように前足は振り落ちた。

狙いは、ティアナ。

「ーあーー」
「ティーー！」

既に防御も回避も間に合わない。

驚愕から覚めたスバルが声を上げるが、それすらも最後まで放たれず、ティアナに斬撃がー！。

「さっせるかー！ー！！」

ー豪！ー

スバルとギンガの真ん中を巨大な斬撃が通り過ぎた。

その通過点にはティアナが居た。

……斬撃が通り過ぎる直前まで、は。

「シ、シオン……？」
「ぐ……っ」

ティアナは土蜘蛛から離れた所に居た。
シオンに押し倒されながら。

斬撃がティアナへと叩き込まれる寸前。

シオンが瞬動で横からティアナに抱き着き様に掻っ攫ったのだ。

「……大丈夫かよ？」

「え？ う、うん。……？ シオン！ その背中！？」

ティアナがシオンの肩越しに背中を見て青ざめる。

その背中は大きく切り裂かれていた。

ぱっくりと開いた傷口からとめどなく血が溢れ出し、白い床を汚す。

シオンはだが、それを一顧だにしない。

「ちよっ！ 待ちなさい！」

「心配無えよ。こんくらいただのかすり傷だ」

「そんな訳無いでしょうが！」

「

起き上がり再び土蜘蛛に向かおうとするシオンにティアナが、ガ
ーっ！ と吠える。

しかし、やはりシオンはそれを見無視。

「シオン！」

「うるせえ。喧しい。黙ってろ」

一方的にティアナにそう言い放ち。

だが、またいきなりティアナを抱え上げた。

「ーって！ アンタ、何を！？」

「黙れって言うてんだろうが！」

ー轟！ー

怒鳴りながらシオンは再び横っ飛びに瞬動。
そこをまた前足からなる斬撃が通り過ぎた。

「ーま、また？」

「……ちっ！ あの巨体で瞬動まで使いやがんのか……！」

舌打ちしながら二度、三度と振るわれる斬撃を避す。

三度の斬撃を避けた直後、巨大な衝撃波が土蜘蛛に直撃。
スバルとギンガだ。

四人は再び合流する。

「ティア！ シオン！」

「二人共、大丈夫？」

「私は大丈夫。けど……」

下ろされたティアナはシオンを見る。

それにスバル、ギンガも見えて顔色を失う。

シオンの背中から落ちる血を見たからだ。

「シオン……それ……」

「……大した事は無えよ。心配すんな」

シオンはあっさりと笑って見せる。

そのまま再び、土蜘蛛へと視線を戻した。
そんなシオンに少しだけ迷い。

だが、スバル達も土蜘蛛へと視線を向ける。
ここで勝たなければ結果は同じだ。

そのまま四人はそれぞれのデバイスを構える。
いつ瞬動で間合いを詰めるか解らない相手だ。
距離を開けても気を休める事は出来ない。

一時の間を置いて、土蜘蛛から因子が溢れる。

「今度は何だよ……」

シオンが舌打ちしながら土蜘蛛を睨む。

ここに来て更なる異変。

四人はすぐに動けるように構えを崩さない。

因子が土蜘蛛より切り離され、宙を漂う。

やがてそこからぽこりと”何”かが這い出した。

クラゲ。

シオンはそれを見てクラゲのようだと思う。

半透明の身体の中は赤い球が明滅している。

それが七体程顕れたのだ。

「……あれ、何だろ？」

「クラゲのようだけど……」

疑問をそれぞれ上げる。

その中でシオンは嫌な予感に顔を歪めていた。

”あれ”は何かまずい気がする。

何かは解らないが直感は叫んでいた。

危険だと。

漂うクラゲモドキはふわふわと宙を漂い、シオン達を囲む。

そして、瞬間。

その身体から砲台のようなものが迫り出した。

シオン達はぞくりと言う感覚を覚え、一気に散る！

―煌―

閃光。

黒の砲撃がクラゲモドキから放たれ、シオン達が居た場所に突き刺さる。

さらにクラゲモドキは一気に動き出した。

「コイツ等……っ！」

【移動砲台、のようなものか……】

ここに来ての物量作戦。

最悪の展開であった。

今のシオン達にとって最も厄介なのは消耗戦だ。

シオンは怪我を。

ティアナ、ギンガは魔力やカートリッジが底を尽きつつある。

このクラゲモドキを何体作り出せるかは定かでは無いが、どちらにせよ一体一体相手にしては確実に倒される。

「シオン！」

スバルが叫び、近くのクラゲモドキに一撃を叩き込む。

同時、クラゲモドキは軽い炸裂音と共に消え去る。

スバルの横ではギンガが蹴りを放ち、ティアナがカートリッジを浪費しないように気をつけながらマルチ・シヨットで二人を援護する。

三人は散った場所が近かった為、即座に合流できたが、その中でシオンだけが離れた場所に居た為、合流出来なかったのだ。

シオンに合流しようとする三人だが、更に生み出されたクラゲモドキの砲撃に近寄れない。

「セレクト・ブレイズ！」
トランスファー！

ブレイズ・フォームへと変化。

今の一撃で解ったが、このクラゲモドキに防御力は皆無だ。

ただ砲撃を放つ為だけの存在なのは間違い無い。

ならば最も手数が多いブレイズがこの場では正しい。

さらに生み出され、囲もうとするクラゲモドキにシオンは両のイクスを腰溜めに構え、一気に放つ！

「神覇・壱ノ太刀！ 絶影連牙！！」

ー斬ー

ー斬・斬・斬・斬・斬ー

縦横無尽。

放たれる連牙がクラゲモドキを斬り伏せる。

……しかし。

「く……っ！」

ー閃ー

砲撃。

それにシオンは足場を展開し、後退する。

次々と生み出されていくクラゲモドキによる砲撃だ。

無尽蔵に生まれるそれにシオンは歯噛みする。

スバル達も上手く凌いでいるが、あまりの量に疲弊していく。

特にティアナの疲労が激しい。

今、ティアナはカートリッジ温存の為、ダガー・モードで戦っているが、それも含めて、ティアナの消耗は酷い。

スバル、ギンガもティアナに近付かせ無いように戦うが、何しろ数が違う。

このままではじり貧もいい所であった。

そんな三人を見てシオンは腹を決める。

このままでは確実に負ける。

ならば、分が悪かろうが、賭けに出るしか無い。

両のイクスを再度振るい、四体のクラゲモドキを斬り捨てた。

同時、叫ぶ。

「セレクト・ウィズダム！」

トランスファー！

直後、シオンは戦技変換。

その右手に握るのはランスである。

そのままシオンは姿勢を低くとった。

「あれ、は……！」

「シオン、まさかー！」

その構えに見覚えのある二人。

スバルとティアナが絶句する。

シオンの目的を。

その”無謀”さを悟ったからだ。

「シオン！ 止めなさい！！」

「シオン！！」

二人から制止の声が掛かるが、シオンは構わない。

そのまま土蜘蛛本体を睨みつける。

止まらない。

それを悟り、ティアナ、スバルは何かしてシオンへと向かうが、それをクラゲモドキが邪魔をする。

まるで、シオンの行動が解っているが如く。

「く！！」

「このー！！」

片やダガーで、片や拳で。クラゲモドキを潰すが、次々と現れる援軍に二人はそれ以上進め無い。

そしてシオンは一気に魔力を放出する。

吹き出した魔力がシオンを包み込み、イクス・ウィズダム of 石突きが弾け、地面に叩き込まれる。

その反動を利用してシオンが一気に突貫を開始する。

精霊の力を借りないならば、これがシオンが放てる最大威力の技。

シオンは叫ぶ。

その一撃の名を！

「神覇・伍ノ太刀！ 剣魔！ 裂！！」

ー破！ー

瞬間。

シオンは爆発したが音と共に宙へと駆けた。
一本の槍へとその身は化し、一気に土蜘蛛へと、迷い無く突き進む。
途上に壁の如く立ち塞がるクラゲモドキを紙のように引き裂きながら突き進んで行く。
激烈な音を立て、シオンは土蜘蛛に肉薄。
そのまま突き破らんと突貫し。

「緊」

シオンはそれを見た。
自分の放った一撃の結果を。
剣魔・裂は土蜘蛛の身体に”触れる事無く”、受け止められていた。
シオンは一瞬呆気に取りられ、そのまま顔を歪めた。
苦痛に。

「……が、あ……」

その背中に叩き付けられたのだ。
砲撃を。
新たに生み出されたクラゲモドキに。
そのままシオンは崩れ落ち、さらに前足が振るわれる。

「激！」

斬撃にひっかけられるようにしてシオンは吹き飛ばされる。
そのまま床に叩き付けられ、十数m転がった。

「シ、シオ……ン？」

スバルがその姿に呆然としながらシオンに呼び掛ける。

しかし、シオンは答え無い。
ピクリともしなかった。



「シオン！ シオン！！」

声がする。

しかし、シオンは答える事が出来ない。

ただ、ただ眠い。

眠らせてくれ。

心の奥底からそう思う。

しかし、シオンを呼ぶ声は続く。

「このー！ 立ちなさい！！ バカシオン！！」

誰がバカか誰が。

遠くからの声に反論したくなる。

そもそも最近バカ扱いが酷い。

自分でもバカだと思ってしまうだろうが。

シオンはまどろむ。

どんどん意識が闇へと落ちていって事を自覚する。

「シオン君！ 起きなさい！ ここで貴方が倒れたら何も、何も意味が無くなるでしょう！？」

そうかも知れない。

だけど、さっきの突貫には意味がある。

土蜘蛛の弱点。

そして、剣魔・裂を受け止めた何か。

それが解ったからだ。

ああ、そうだ。

それを、伝え無いと……。

しかし、身体は重い。

意思に反してろくに身体は動かない。

「やだよ……。シオン……。シオンが居なくなっちゃ、嫌だよ……
！」

また泣かした、か？

その声は泣き声。

それにシオンは心中苦笑する。

俺は、アイツを泣かしてばかりだな。

ああ、そうだよ。本当は泣かしたくなんて無い。

笑った顔を見たい。

そう、自分の為じゃなく。

アイツの為に。

さっきも思った筈だ。

思い出す。

皆を。

そう、アイツ等が幸せであってくれるなら、

”ここ”に居てもよかったと、

やっと胸を張れるじゃないか。

思いが結実する。

その中で思い出すのは異母兄の言葉だ。

（強くなれ）

強く、なる。

（強くなれ、誰より強く。誰より高く）

強く、なってやる……！

（全ての希望を喰らい。全ての絶望を飲み込み）

希望も絶望も、今この瞬間の為に。

（強くなれ、シオン。そして……）

強くなる。

そう、まだ自分は”見せていない”。

切り札を。

黄金の剣を――。

（俺を――）

俺は、アンタを――！

そう、ここで倒れている場合じゃない。

歯を食いしばり、血に塗れながら、それでもと叫ぶ。

そして、シオンは叫んだ。

ココロの草原で聞いた。

たった一つの言葉を。

もう一つの姿を。



「……イクス」

シオンから呟かれるように声が上がる。

溢れる血がしとどにバリア・ジャケットを濡らす。
構わなかった。

無理やり立ち上がる。

「シオン！」

「よかった……」

「心配させないでよ……バカ……」

三者三様の声にシオンは苦笑いを浮かべた。

身体は重い。

血が流れ過ぎて、意識がもうろうとする。

それが、どうした？

【……シオン、”使うか”？】

「ああ」

即座に頷く。

そしてイクスを真っ直ぐに構えた。

瞬間。

土蜘蛛が消えた。

瞬動。

それにより、一気にシオンへと向かう。

「っー！ またっ！」

「シオン！！」

叫び。

三人はシオンへと向かおうとするが。

しかし、周りにいる大量のクラゲモドキに再度邪魔される。

土蜘蛛が現れた。

その巨軀をシオンの眼前に表し、前足を斬撃として放つ。

振り落ちる斬撃。

それにシオンは構わない。

そして、叫んだ。

「イクス！ モードセレクト！ ー”カリバー”！ ー」
トランスフアー！！

ー豪・轟！ー

光が溢れた。

黄金の光が。

同時、固い音が鳴り響く。

土蜘蛛が放った斬撃が受け止められたのだ。

光が収まり、シオンがその姿を表す。

袖までのジャケットに、黒のシャツ。

下は長ズボンだ。膝から下は甲冑に覆われている。

さらに両の手には手甲が嵌められていた。

そのバリア・ジャケットは金色。

背に伸びるのは六枚の剣翼。

そして、両手。

右手に握るのはウィズダムのランスを更に短かくした姿だ。

左手には片刃の剣。

細く、しかし。力強い長剣が握られていた。

シオンはそのまま魔力を放出。
土蜘蛛を弾き飛ばした。

そして、両のイクスを掲げ、構えた。

新たな姿。

新しい力。

その名は――。

「……カリバー・フォーム」

シオンは名乗りを上げ、そのまま後ろを、スバル達を振り返る。
左手の長剣を振るう。

「神覇・壺ノ太刀！ 絶影・連牙！」

瞬間。シオンの姿が消える。

――斬――

――斬・斬・斬・斬――

スバル達を囲んでいたクラゲモドキ達が横にズレた。

斬り裂かれ、斬り裂かれる。

縦横無尽。

一気にシオンは三人に合流した。

その周りのクラゲモドキを殲滅して。

「シ、シオ――」

「三人共、しゃがめ！！」

叫び、振るうのは右のランスだ。

三人はその動作に嫌な予感を覚え、地面にへとしゃがみこむ。同時、シオンはランスを振りかぶった。

「神覇・弐ノ太刀！ 剣牙・裂！！」

弾けた。

ランスが、ウィズダムと同じく。

それはまだ残っているクラゲモドキを貫き、5mの長さでその刃を停止した。

そのままシオンは回転開始。

空気が唸る音と共に伸びた刃も回転する。

ー豪！ー

回転しながら放たれた斬撃はまとめてクラゲモドキを薙ぎ倒していく。

シオンが三回の回転を刻む頃には全てのクラゲモドキは消え去っていた。



三人は見る。シオンのその姿を。黄金の姿を。

シオンは右のイクスを一振りし、伸びた穂先を元に戻した。そのまま三人に視線を向ける。

「大丈夫かよ？」

「う、うん。……て、違う！ シオンこそ大丈夫なの！？」

頷き、しかしシオンに突っ込みを入れるスバル。

シオンはそれに笑うが、血は流れ続けている。

金のバリア・ジャケットは早々と紅に染まりつつあった。

「シオン……」

「俺はいい。絶好調なんぞな。……それより、三人共。聞いて欲しい事がある」

「？ ……何？」

ティアナが訝し気に聞く。

シオンはそれに笑い、土蜘蛛から伸びるヒトガタの胸の部分を指差した。

「あそこ。球みたいなのが見えないか？」

「え……？ ……あ」

三人はシオンが指差した部分を注視し、声を上げた。

胸の部分に確かに球がうっすらと見える。

しかもあの形状には、三人共。

一度見覚えがあった。

「……コア？」

スバルが想像した物を声に出す。

シオンはそれに頷いた。

「半透明になってるから見え難いけど……。似てるだろ？」

三人は頷く。

それは感染者が第2段階になった際になるコアに確かに酷似していた。

「罨、て可能性は？」

「さあな。……だけどこのままじり貧よりマシじゃあ無いか？」

ティアナはシオンの言に暫く考え込む。

断定は出来ない。しかし、もしあれが弱点となりうるならば狙う価値は確かにあった。

「……確かに、このままじゃあこっちは消耗するだけだしね……」

「ああ。ただ、問題は……剣牙・裂！」

瞬間。いきなりシオンは右のイクスを腰溜めに構え、一撃を放つ。

穂先が弾け、土蜘蛛の真っ正面の”空間”に突き立った。

土蜘蛛が再び、瞬動を行おうとしたのだろう。

その出鼻をくじかれて、土蜘蛛は後退する。

シオンはイクスを振るい、穂先を戻した。

「……見たか？」

「うん。何あれ？」

まるで壁のように土蜘蛛の正面に張られた防御障壁。

それが今の一撃も、先程の剣魔も止めたのだ。

「イクス。どうだ？」

【……厄介だな。耐魔力、耐物理の障壁が四重に張られている】

シオンはイクスの返答に嘆息する。

先程の一撃で解ってはいたが、とんでもなく硬い防御障壁であった。そして、ティアナを見る。

「……正直に言うと。あの防御障壁は何か出来る。……けど、そこまでだ」

「あれ、何とか出来るの？」

考え込んでいたティアナがシオンの言に顔を上げる。それにシオンは頷く。

「……相当な無茶を覚悟しなきゃだけど、な？」

【……封印開放から即座に使う羽目になるとは思わなかったがな】

二人の答えにティアナは頷き、そしてスバルを見る。
スバルもまた頷く。

「……あの防御障壁が何とか出来るなら大丈夫。私達も”切り札”があるわ」

「切り札？」

「うん。……ちょっと時間掛かるけど、私とティアの切り札」

その答えにシオンもまた笑い。

次にギンガを見る。

ギンガもまたシオンに頷いて見せた。

「私は二人を守り抜く役、ね？」

「はい。アイツは俺が引き受けます。でも例のクラゲモドキまでは対処が厳しいですから……」

任せて、と笑うギンガにシオンもまた頷く。

そして、再び土蜘蛛に視線を向けた。

「作戦は前、アンタがエリオとキャロとやった時と同じよ」

「ああ。……スバル」

「うん、何？ シオン」

頷き、スバルに視線は贈らず声のみを掛けた。
そのままで続ける。

「止め。任せるな？ ……お前が決着を着けろ」

「……うん！」

シオンの言葉にスバルは一瞬だけ呆然として、しかし。綻ぶように満面の笑みで頷いた。

そんなスバルに、シオンはニツと笑う。

そして、右の親指を口元に持ってくる。

カリッと言う音と共に、血がポタリと落ちる。

精霊召喚。

だが、土蜘蛛がそんなものを許す筈も無い。

再び、瞬動に入ろうとする。

そんな土蜘蛛にシオンは獰猛な笑みを浮かべた。

そのまま空中に血で文字を描いた。

風、と。

シオンは描いた手を頭上へと掲げ、叫んだ。

「来い！ ジン！！」

瞬間。

風が颯れた。

極小の竜巻を伴って小太りの男が颯れる。

風の精霊、ジンだ。

しかし、それよりもスバル達は驚愕すべき事があった。
無永唱。

シオンは”一切の永唱”無しに精霊を召喚してのけたのだ。

スバル達は知らぬ事だが、それはシオンの異母兄、トウヤに”しか
”出来ないと言われた技術の一つであった。

文字召喚。

柱名を描く事によって永唱無しに召喚出来る技能だ。

それがカリバー・フォームによって追加されたスキルの”一つ”で
あった。

瞬動に入りかけた土蜘蛛が慌てたが如く、急停止する。

そしてクラゲモドキを生み出す。

……そんなモノ。壁にもならないと言うのに。

ジンはその姿をぶれさせ、シオンと融合していく。

そして、シオンとイクスは再び、叫んだ。

「精霊・融合」

スピリット・ユニゾン！

風が鳴る。

それはシオンを優しく包む。

瞬間。

シオンが消えた。

ー斬ー

音も無く。

全てのクラゲモドキが切り裂かれた。

シオンだ。

風を纏うシオンが一瞬にして全てのクラゲモドキを斬り捨てたのだ。

しかもそのまま止まらない。

右のイクスを振るう。

同時、全方向から風の刃が土蜘蛛を襲う。

剣牙・風刃。

土蜘蛛本体には防御障壁でダメージは通らないが、髪で構成された触手や、斬撃の為の前足はその範囲外であるのか切り裂かれ、あるいは傷だらけとなる。

吠える。苦痛に。

土蜘蛛が。

そして即座に再生しつつ、触手を、前足をシオンへと向け、放つ。

” 鈍い ”

今のシオンにはそれが全て止まっているかのように思えた。

超感覚。

これこそがジンとの融合で得られた特化能力だ。

そしてもう一つ。

前足が切り落とされた。

音も無く。

触手が全て、細切れにされた。

静かに。

シオンはただ両のイクスを振るっただけだ。

それだけで攻撃を成したのだ。

これがジンとの融合で得られる最大の能力。

風が、つまり大気” 全て ” を攻撃として使用可能とする能力。

その攻撃範囲はシオンの認識範囲の全てだ。

そして今のシオンはジンとの融合による超感覚で、十数K mに渡る事象を認識出来ていた。

則ち。

その距離は全て、シオンの攻撃範囲。

土蜘蛛が動く。

瞬動だ。

向かう先はスバル達。

しかし、シオンはそれを許さない。

動かず、左のイクスを振るう。

次の瞬間。

地から走る風の刃が土蜘蛛の足を全て切り裂いた。

参ノ太刀。双牙、風刃。

瞬動には必ず足を使う。

故にシオンは容赦無く、足を狙う。

しかし、この融合にも欠点がある。

軽いのだ、攻撃が。

今の一撃も足を傷付ける事は出来ても、斬り断つまでは至らない。

故にシオンはあえて自分の脇を抜けて、スバル達へと向かうクラゲ

モドキを見逃す。

今、シオンがすべきはこの土蜘蛛を何もさせずにその場に留める事だ。

則ち、時間稼ぎ。

さらに風刃を放ちながらシオンはクラゲモドキをことごとく潰していくギンガに頼る。

そして、待つ。

ティアナ、スバルの準備が整う事を。

それまで、あの防御を潰すのはお預けだ。

シオンはただただ、風の刃を放ち続けた。



「……凄い……」

スバルがぽつりと呟く。

シオンの能力を見て、だ。

ティアナも、驚きに目を見開き。

しかし、首を一振りして気持ちを切り替える。

今すべきは。

一刻も早く準備を整える事、だ。

「……スバル！　いくわよ！！」

「ティア……。うん！！」

そして二人は準備に入る。

ティアナはクロス・ミラージュをブレイズ・モードに。

スバルはギア・エクセリオンを発動する。

そのままティアナは銃口を土蜘蛛へと向けた。

そして、ぽつりと呟く。

「……星の光よ……」

同時、銃口の先に魔法陣が展開。

そして、ティアナの周囲にオレンジ色の輝きが次々と現れ、魔法陣の中央に集束してゆく。

集う。

集っていく。

魔力が、光となって。

ティアナに集っていく。

それは、スバルが、ギンガが、シオンが、ティアナ自身が放った魔力の残滓だ。

星空から流星が落ちるように、それは集っていく。

銃口へと集う光は次に集まる光を吸収し、次第に巨大に。そしてそ

の輝きを増していった。

「スターライト星の光」

その名はその光景から由来している。

ティアナが尊敬し続ける。

なのは直伝の魔法。

「スターライト・ブレイカー」

これこそがティアナの切り札であった。

そして、スバル。

彼女はティアナから少し離れた場所に居る。

目を閉じ。両の手をパンツと柏手を打つように重ねた。

そして深く長い呼吸を一つする。

その呼吸に合わせるように両手に環状魔法陣が展開。

しかもそれぞれ三連での展開だ。

そして両の掌をゆっくりと離す。

そこには光の光球がある。

”二つ”の光球が。

スバルは両の手をそのままゆっくりと回転。

同時にカートリッジ・ロード。

回転が収まる時、同時にそれは一つの構えと成った。

デイベイン・バスターの。

しかし、違う点がある。

一つは両の手に展開する環状魔法陣の数。

そして、左の掌と右の拳の前にある二つの光球だ。

そしてベルカ式の魔法陣がスバルの足元に展開する。

そしてさらにカートリッジ・ロード。

光球がさらに輝きを増す。

そして、スバルはティアナを見る。

ティアナもまたスバルを見ていた。

二人は同時に頷く。

準備は完了。

後は……。

「「シオン!!」」

二人は同時に叫ぶ。

普通だったらシオンまではその声はほとんど届かないだろう。

しかし、今のシオンには。

はつきりと聞こえる。

そしてシオンは両のイクスを掲げた。

「ジン、ユニゾン・アウト」

シオンとジンの像がブレ。そして両者は離れる。

そのままシオンは今度は左の親指を噛み、血を流させる。

そして描く文字は”火”。

同時、シオンは叫んだ。

「来いよ! イフリート!!」

ー業ー

炎が走る。疾る。

それは一瞬にして形を成した。

炎の巨人へと。

火の精霊。イフリートだ。

しかも、ジンは未だ送還されていない。

シオンは両のイクス振るう。

右、ランスのイクスをイフリートに。

左、長剣のイクスをジンに。

そしてそのまま叫んだ。

「”双重”精霊装填！」

デュアル！ スピリット・ローディング！！

イフリートが、ジンが、その姿をぶらし。

両のイクスに吸い込まれる。

これが、更なるカリバー・フォームの新たなスキル。その”二”であつた。

そしてシオンは最後の”三”切り札を切る。

「イクスうっ！」

【応！ イクスカリバー。

フル・バレル
全兵装

フル・オープン
全開放

オーバー・ドライブ
凌駕駆動

スタート
開始！」

右のイクスを、左のイクスに重ねる。

それは合わさり。

形状を変化。

たった一振りの剣と成った。

黄金の剣に。

形状は普通の両刃の剣だ。

バスター・ソードと呼ばれる剣に酷似している。それはシオンの手を離れ、しかし。シオンの眼前に浮かぶ。

それは金色の輝き。

二つの精霊を同時に有する黄金の剣だ。

シオンはそれを恭しく再び手に取った。

そして頭上に掲げ、その剣の名を祈るような心地で呟いた。

「精霊剣。カリバーン」

名乗りを受け、剣が。

カリバーンが光り輝く。

その光りに土蜘蛛がまるで恐れるかのように後ずさる。

シオンは構わない。

真っ直ぐに、そして一気に土蜘蛛へと翔け征く！

土蜘蛛はそんなシオンに狂ったように再生した触手を、全ての足を使った斬撃を放つ。

シオンは襲い掛かるそれらに、カリバーンを振りかぶった。

「神覇・陸、漆ノ太刀。”合神剣技”」

シオンは纏う。

炎を、風を。

それは炎を猛らせ、風を荒れさせる。

朱雀と、白虎。

二つの奥義を”重ねた”。

「紅蓮、天昇！！」

―輝―

シオンはその瞬間。
光となった。

―爆―

―爆・爆・爆・爆・爆・爆・爆・爆・爆・爆！―

数十、数百、数千の爆裂が全ての触手を、足を、そして防御障壁を叩く。

白虎の速度に朱雀の爆炎を乗せて乱撃が放たれているのだ。

SS相当の威力にSS+の速度で放たれるそれは途方も無い破壊力となり、土蜘蛛を一気に蹂躪する。

一枚目の障壁があっさりと砕かれ。

二枚目が耐えるが、しかし。

最後まで持たず、砕かれた。

しかし。紅蓮天昇もそこで終わる。

シオンはそのまま地面へと着地した。

息が荒い。

もう、体力も魔力も限界だった。

無茶のツケ。それがシオンの意識を揺さぶる。

だが、今のシオンは限界をも越える！

「ジン、イフリート。装填解除！ 送還！」

カリバーンからジンとイフリートが離れ、送還される。

シオンはそのまま血文字を両の手で描いた。

”雷”と”水”を。

「来い……ヴォルト、ウンディーネ！！」

シオンの呼び掛けに応え、ヴォルトが、ウンディーネが、召喚され

る。

シオンはそのままカリバーンを再度掲げる。

時間が無い。

後、二つ。

障壁が修復される前に後二つの障壁を突破せねばならない。

そしてヴォルト、ウンディーネがカリバーンに装填された。

【シオン！ 俺もお前も限界が近い！ ……次でラストだ。叩き込め！！】

「応っ！！」

イクスに返答しながら再び黄金に輝くカリバーンを振りかぶる。

土蜘蛛は障壁は修復しようと吠える。

一気に修復されゆく障壁。

そんな事を許さない！

「ああああっ！ 神覇・八、九ノ太刀！ 合神剣技！！」

振りかぶられたカリバーンを背中まで反らし、そして一気に振り下ろす！！

「逆鱗！ 龍降！！」

一閃！一

一閃。

それが振り下ろされたカリバーンより、光となって放たれる。

それが障壁にぶち当たる瞬間。

いくつも枝分かれして、

土蜘蛛を包围。

光は甲羅を模したシールド・ビットであった。

八つに分かれたそれは、しかし次の瞬間。

光の龍と成り、障壁に喰らいついた。

それは、まるで八又の龍を思わせる一撃。

噛み付き、砕き、壊し、喰らい尽くす。

障壁を喰らい征く、八又の龍は三枚目の障壁を喰らい、さらにそのまま四枚目も喰らい尽くした。

それでは飽き足らず、土蜘蛛を喰らう。

その足を全て喰らわれて、漸く龍は消えた。

「……後は任せたぜ……ティアナ、スバル……」

モード・リリース

全ての力を使い切ったシオンとイクスは逆鱗龍降を放った姿勢から、前に崩れ落ちた。

「シオン。……任せなさい！」

ティアナはシオンに応えた。

シオンの眩きが聞こえた訳では無い。

ただそう、言いたかったのだ。

そしてティアナは睨みつける。

星の光は放たれる瞬間を待つように光り輝く。

銃口は土蜘蛛に向けられている。

後は、トリガーを引くだけ。

そして、ティアナは迷い無く。

叫び、トリガーを引く！

「スターライトっ！！ ブレイカーっっっ！！！！」
スターライト・ブレイカー！！

―煌―

星の光。

それが一気に放たれた。

激烈な破壊力を持って。

音は光に遅れて響く。

轟音だ。

オレンジ色の輝きが巨大過ぎる柱となって土蜘蛛を襲う。

純白のこの世界を持って、尚まばゆい閃光。

その一撃は土蜘蛛にぶつかると同時にその破壊力を遺憾無く発揮。

その全身を容赦無く碎き、弾かせ、滅ぼす。

土蜘蛛は一瞬にして、その全身を失った。

ただ一つ。

コアだけを除いて。

ティアナがその場で膝を着く。

魔力切れだ。

息は荒く、意識を失いそうになる。

それでも彼女は叫んだ。

「やりなさい！ スバル！！」

「うんっ！！」

ティアナの叫びにスバルは頷く。

「スバル！ いってっ！！」

クラゲモドキを蹴散らしながらギンガも叫ぶ。

そして……。

「スバルっ！ やっちまえー！ー！ー！ー！！！！！！」

シオンが倒れたまま、叫ぶ。
そしてスバルもまた吠えた。

「一撃！ 必倒！！」

右の拳を放つ。

それは拳の前にある光球を撃ち抜き、そして拳はその光を纏ったまま左の掌の光球に突き刺さった。

「デイベインっっ！ バスターー！ー！ー！ー！！！！！！」
「デイベイン・バスター。」 ティタン・ブレイク！！」

ー轟！ー

光が放たれた。
極大の輝きが。

それは、迷い無く、コアへと突き進む。
しかし、その途上でその形状を変化する。

集束し、光が束ねられた。
半ば物質化した、その光は一筋の。
しかし、貫通の意思を具現した姿だ。

巨大な槍。

”巨人破り” そう、名付けられたその一撃はスバルの思い。
一直線をただただ突き詰めた一撃だ。

貫通力だけならば、スターライト・ブレイカーすらも凌駕しかねない一撃。

これこそがスバルの切り札であった。

巨人破りは寸分の狂いも無く、コアを撃ち抜き。

何の抵抗すらも無く、貫通した。

そしてそこで止まらない。

スバルの瞳が金色へと変化。

巨人破りの後端。

つまり石突きに拳を叩き込む！

同時にIS発動。

振動破碎。

それが槍へと放たれる！

「ハウリング！ ブレイクっ！！」

―砕―

直後、石突きから槍が砕かれた。

―砕・砕・砕・砕・砕―

砕かれながら槍はそれを確かに伝播して征く。

そして、それはコアに叩き込まれた。

振動破碎による超振動。

それによりコアはビクンツと震え。

次の瞬間。

微細な塵へと変わり、消えていった。

超振動によって完全に分解されたのだ。

「……終わった……?」

スバルが残心のまま呟く。

「……終わったわ、ね……」

ティアナが膝を着いたまま呟く。

「……うん。終わったね……」

ギンガもまたその場に座り込みながら呟く。

「……ああ。俺達の勝ちだ……」

指一本も動かせないシオンが、しかし倒れたまま笑った。
瞬間。

スバルが、ティアナが、ギンガが。

笑いながら抱き合った。

やったと、やり遂げたと。

それをシオンは笑いながら見て、そのまま意識が消えていくのを感じた。

やがて、世界が割れる音が響いた。



無限なる幻想世界。

それがいきなり解除された。

タカトとトウヤはいきなり戻ってきた重力に、しかし。一步で耐えた。

「……術を解除したか」

「ユウオ？」

《トウヤ。タカト。聞こえる？ シオン君。”帰って来たよ”》

それはつまり、ダイブを成功させたと言う事に他ならない。

スバルはこれで史上二人目の帰還者と成った訳だ。

二人はそれを聞き、揃って肩を竦めた。

これ以上戦う理由が無くなってしまったのだ。

「……また、決着とはならなかったね？」

「いっそ。運命と思って諦める方がいいかも知れんぞ？ 兄者」

タカトはフードを再び被り直し。

”拘束具”を右手に取り付けた。

それにトウヤはフツと笑う。

「ユウオ。シオン達はどうしているかね？」

《ぐっすり寝てるらしいよ。……さて、ボクもこれから八神さんの所に行くよ。……怒られるかなー》

それは聞くだけ野暮である。

普通、無断侵入をすれば怒られる程度では済まない。

そんな二人のやり取りに笑い声上がる。

タカトだ。

「何か面白い事でもあるのかね？」

「いや、本当。二人は変わらない、て思ったただけだな」

そうタカトは笑う。

この二人はいつもこんな調子であった。

再び二人に会う事があるとは思わなかっただけにどうしようも無く笑ってしまった。

ひとしきり笑い切り。

タカトはそのままトウヤに背中を向けた。

「……行くのかね？」

「ああ。此処にはもう用は無い」

タカトはそのまま歩き出した。

向かうのはボロボロになり辛うじて、その形状”だけ”を保った扉だ。

トウヤはそんなタカトの背中を忘れまいと見る。

「……タカト……」

「……………」

トウヤの呼び掛けに、しかしタカトは応えない。

そう言葉で止まるのならば。

初から戦う意味は無い。

二人の道は二年前に分かたれた。

それが、ただ唯一の真実だ。

それでも、トウヤはタカトへと声を掛けた。

「……いつでも待ってる」

「……………」

タカトはその言葉に止まり、しかし再び歩き出した。

そして訓練室を出る。

そこまで見遣って、トウヤはゆっくりと寝転ぶ。

久しぶりに全力で戦ったのだ。

行儀については考えない事にする。

大の字になり寝転びながらトウヤはその意識を手放した。



アースラ艦内を一人の女性が翔けてゆく。

なのはだ。

彼女は今、訓練室に向かっていた。

先程スバルが治療された。

突如としてスバルを始めとした四人に纏わり付いていた因子が奇怪な断末魔を上げて消え去ったのだ。

シオンを始めとした四人はそのまま静かに寝ている。

そして同時に訓練室に展開していた魔法も解除された。

その魔法を展開していたユウオは先程、ブリーフィング・ルームに向かったそうである。

そしてなのはは今、アースラに侵入してきたもう一人の存在を拿捕する為に翔けていた。

則ち、伊織タカトを。

正直、なのはとしても疲労している彼と戦うというのは気は進まない。

しかし、それとこれとは話しが別であった。

私情を交えてはならない。

それを自分に言い聞かせる。

そして次の角を曲がる。

先程のシャーリーの報告通りなら……

なのははそのまま空中に静止。

前方を睨む。

そこに彼が居た。

伊織タカトが。

彼はなのはを見遣り、しかし一顧だにせずに歩く。
それになのははレイジング・ハートを向けた。

「動かないで」

「……」

なのはの言葉を聞いた訳では無いだろうが、タカトはその場で歩みを止めた。

二人は再び互いを見遣る。

タカトはボロボロだった。

バリア・ジャケットは所々穴が開いており、血も流れている。
しかし、そんな状態にあって尚、彼は。

凜。と世界の全てに抗うようにそこに立っていた。

そんなタカトになのはは苦く顔を歪め、しかし。声を出す。

「伊織、タカト。貴方を逮捕します。武装を……」

「どうやって、だ？」

なのはが驚愕する。

それにタカトが詰まらなそうな瞳を向けた。

彼はこう言った。

「どうやって、と。」

それは則ち。

この状態にあつて尚、彼はなのはに勝てる。

……いや、勝負にすらならないと断言しているのに等しかった。

「……君、は……」

「これ以上の戦闘を俺は望んでいなくてな？ 邪魔をするなら叩き潰すだけだが……。どうする？」

なのはの喉が鳴る。

目の前のタカトは満身創痍だ。

だが、その状態にあつて尚、彼はなのはを圧倒していた。

そんな、なのはの様子に肩を竦め、タカトが歩き始めようとし。

しかし、顔を歪める。

胸を押さえ、キッと齒を食いしばった。

それを見て、なのはは。

「ーっ！ 大丈夫!？」

感情のままに尋ねてしまった。

言葉を放った後でハツとする。

タカトはしばし呆然とし、しかしすぐにある表情になった。

微笑みに。

そしてタカトはなのはに向かい口を開く。

「……君は無用心だな？」

「え……？」

そんな事をタカトは言う。

その言葉を聞き、呆然となるなのはに、しかしタカトは構わない。

「……俺は敵だぞ？　しかもすこぶるつきの、な」

「……それは……」

惑うなのは。しかしタカトは構わない。

そのまま続ける。

「君は誰に対してもそうなのか？　だったら一つ忠告だ。優しさを持つのはいい。しかし、それを向ける相手を考えろ。……少なくとも、俺のような敵に向けるな」

忠告。

そうタカトは言う。

それになのははくすりと笑ってしまった。

可笑しくなってしまったからだ。

優しさを向ける相手を選べとタカトは言った。

彼にとってすれば、なのはの方こそが敵であるのに、だ。

お人良し。

人の事は何も言えないと、なのはは笑う。

タカトはそんな、なのはに慚然とした表情を向ける。

「……何が可笑しい？」

「ご、ゴメンっ。……でも、ちよつと可笑しくて……っ」

未だ笑うなのはに、しかしタカトは立ち去るような真似をしない。
そして漸くなのはは笑いを止めた。
でも、その顔は微笑みのまま。

「……随分と余裕だな？」

「……余裕なんかじゃないよ」

でも、先程の緊張は無くなった。

それは間違いなかった。

そんな、なのはにタカトはすつと前に出る。

気配を一切感じさせない。

滑るような歩み。

余りに自然過ぎて、なのはの反応が遅れた。

驚きに目を見張るなのはに、タカトはレイジング・ハートを握る。

余りに近い距離。

息のかかる程の距離で互いに見合った。

「……本当に無用心だな。君は……」

「……あなたは……」

先程と同じ言葉。

しかし、今度は何かが違った。

冷たい。

タカトの一言、一言があまりにも。

そのままタカトは続ける。

「……たとえば」

たとえば。

そう、たとえば――。

「――ヒトとして生きる事すらもおこがましい奴が。赤子の時からその手を血に濡らして来た外道が。”幸せ”なんてものを理解出来る、君は思ふか？」

「――っ」

瞬間。

なのはトウヤの話しを思い出していた。

地獄に居た。ヒトとして扱われなかった、少年の話しを。

絶句し、固まるなのはに。

タカトは笑いかける。

それは余りにも優しい微笑みで。

「そら？ 解るだろう？ そんな”化け物”にあまり気安くするな」

そう言い放ち、タカトはなのはから離れる。

肩を竦め、呆然とするなのはを今度こそは無視して歩き出した。

擦れ違う。

瞬間。

「……思ふよ」

その言葉にタカトの歩みが止まった。

なのははそのままタカトへと向き直る。

「理解できる、て私は思ふよ。……だって、その人は、誰よりも幸せを望んでると思うから」

真っ直ぐにタカトの黒瞳を見据え、はっきりとなのはは告げた。
タカトは、すぐに答えない。

互いに見詰め合い。

一呼吸の間が流れる。

タカトはそのまま何も告げずになのはの横を抜けた。

同時。

八角の魔法陣がその足元に展開した。

空間転移。

それになのはが慌ててレイジング・ハートを向けようとして。

しかし、振り返ったタカトの表情に絶句する。

先程までの優しい微笑みが嘘のような無表情。

感情の無い、瞳。

感情の無い、顔。

そのまま、タカトは口を開いた。

「だったら、俺はお前が嫌いだ」

拒絶。

あまりにはっきりとした。

完全なる拒絶がなのはの心に突き刺さる。

タカトは次の瞬間。

アースラから消え去った。

何も言えず、何も出来ないまま。

なのははその姿を見送る事しか出来なかった。

(第二十六話に続く)



どうも、こんにちは。

テストメントです。

今回はちょっとアリサ道場を休止してお送りしています。
と、言うのも、

第二部『666編』が終わったので、次話に拡大版アリサ道場を行う予定で参ろうと思います。

さて、まずは一言。

すみませんでした。

いや、もう後編をお送りするの、ここまで遅くなってしまい申し訳ありません。

言い訳をさせて貰えるなら、GWが忙しかった（涙）

いや、本当、申し訳ありません（汗）

帰省から帰って来て。

カリカリと書いて漸くお届けして出来ました。

いや、長かった……。

さて、第二部。鬱展開で始まり、ああ言った展開で終わりましたが如何でしたでしょうか？

楽しんで頂けたならば幸いです♪

EXはテーマとして、シオンの成長を挙げています。

基本。皆出来た子達ばかりなんで、駄目駄目からの成長を書くとなんてかなーと、書いていつてる訳なんですけどね（笑）

第二部はそんな経緯で生まれました。

うん。伏線が回収できねえ（笑）

第三部で、大体の伏線は回収出来る予定です。

楽しみに待って下さいね♪

第三部の名称は『創誕編』です。

名前だけ聞くとやはり鬱展開しか有り得ない感じですが（笑）
では皆さん。付き合って頂いてありがとうございます♪

第三部も是非是非お付き合いお願いします♪

では~~~~♪

PS。質問等があればどんどんどうぞ♪

PSの2。祝150000PV突破♪

これも皆さまのお陰です♪

ありがとうございます♪

PSの3。第二部終了と150000PV越えを記念して、第三部からアースラに出向となるグノーシスのオリキャラを募集する、かも、（笑）

しません（笑）

まだ決めてはいませんが、次の拡大版アリサ道場までには決めます♪

第二十五話「黄金の剣」(後編)(後書き)

「スバルのココロの世界から帰ってきたシオン達」

「しかし、シオンは無茶のツケから人生初のある事態に陥ってしまふ」 「シヤマルから言われたその事態。それにシオンは：

：

何故かエリオ、キャロまで巻き込まれてゆく」 「次回。第二十六

話 『シオンの憂鬱』」 「それは初めてであるが故に」

番外話「アリス道場EX!!」 (前書き)

はい♪お待たせしました♪アリス道場EX始まりますよ~~~~♪

番外話「アリサ道場EX!!」

ぱらら〜ぱら〜♪

ア

「アリサ！」

す

「すずかの〜」

ア、す

「「アリサ道場〜」。E!X!!」

ーぴっしゃーん!!ー

ア

「はい♪皆さん。お久しぶり♪当道場の主。アリサです♪」

シ

「……」

す

「弟子のすずかです♪」

カ

「……」

ア

「そして！再びのゲスト!!二度ある事は三度ある!!魔法少女リカルヴィヴィオより召喚しました♪ゲスト、どうぞ〜♪」

ヴ

「はい♪ヴィヴィオだよ〜♪」

裕

「裕希奈よ♪EXには久しぶりね♪」

メ

「メイデンだ。ここは二度目だな」

シ

「……………」

カ

「……………」

ア

「そして、新ゲスト〜♪」

カナ

「はい♪鷹月カナメです♪皆さま。よろしくお願いします♪」

カ

「……っ！」

シ

「……（フルフルとカナンの肩を掴み首を振る。）」

カ

「……っー！」

ア

「さて、ところでキリのいい所で、その二人？さっさと修理終わらせてくれないかしら？」

シ

「……もう、もう無理だ……」

カ

「……シオン……」

シ

「なんで俺が道場を修理しなきゃいけないんだーっ！！」

カ

「シオン！落ち着け！！」

ア

「そんな事、言ってもいいのかしら？（胸元から取り出す『秘密…』と書かれた紙芝居）」

シ

「う、うう……（涙）」

カ

「シオン。泣くな……気持ちには解る……」

シ

「……誰のせいだよ。誰の……」

カ

「うぐっ！ いや、だって……。あ！ てかお前はなんでそこでお茶なんか飲んでんだよっ！」

カナ

「……人を指差すのは止めた方がいいですよ？」

カ

「くっ……。アリサさん！！」

ア

「何よ？」

カ

「なんで。奴は修理させないんだよ！？」

ア、裕

「「デストロイ！！」」

ーガスっ！ー

カ

「ぐはっ！。な、何故いきなり蹴りを！？」

裕

「女の子に向かって奴なんか言うからよ！」

カ

「いや、でも！」

ア

「でも、何も無いわよ？ で、何でカナメを修理に回してないかと言うと……」

カ

「言うとは……？」

ア

「女の子だからよ？」

カ

「……………。理不尽だ……（涙）」

カナ

「風間さん。頑張ってくださいね♪」

カ

「苗字で呼ぶな——っ！」

す

「それより二人共、早く修理終わらせてね？」

シ

「……とりあえず、なんで俺まで……？」

ア

「それはおと——」

シ

「いいっす。もう解りました」

ヴ

「大変だね——？。やっぱり私も手伝うよ？」

裕

「駄目よ。ヴィヴィオ。甘やかしちゃ」

カ、シ

「……（涙）」

ア

「さて、修理に専念する二人は放っておいて。改めまして♪今回のアリサ道場は拡大版♪丸一話使ってお送りします♪」

す

「豪華版だね——♪」

ア

「さて、その前に。……カモン！我が家の執事！」

タ

「……」

御呼びで？我が主

裕

「はやっ！」

ヴ

「タカト、いつから居たの！？」

カナ

「全然見えなかったですね……」

タ

「……」

何。縮地を使えば何程でも無い。

シ

「……と、言うか俺達が道場修理している間。どこに居たんだよ？」

カ

「そうだよ！タカトさんだけずるいぞ！」

タ

「……」

フム？ならお前達が代わりにやってくれるか？

召喚用の魔法陣の設置から、ティーセットの準備。そして、ケーキの準備。

後は……

カ、シ

「「すみませんでしたっ！」」

メ
「ここでも謝るのか……マスター」

カ
「いや、だって。そんな忙しいとか思わないだろ！」

シ
「すんげー。便利扱いされてるね。タカ兄い……」

タ
「……」

何、慣れてるよ……、お前等、でな……

シ

「な、何の事かな〜」

ア

「アンタ……」

す

「シオン君……」

ヴ

「シオン君。それはちょっと……」

裕

「最低ね。ヘタレオン」

カナ

「酷いです」

メ

「シオンさん……」

カ

「シオン。それは俺もどうかと思うんだ……」

シ

「ま、待った、待った！俺は別にタカ兄いを便利扱いとかしてねえ

よ!？」

ア

「……で、本音は？」

シ

「……だって、タカ兄いが家事他する方が上手いんですよ……」

す

「流石♪パーフェクト・ブラウニーだね♪」

タ

「……」

ブラウニーとは呼ばないで欲しいですがね?
で、修理はこんな所か。

カ

「え……?。しゅ、修理が全部終わってる!？」

シ

「嘘やん!？」

ヴ

「シオン君が関西弁になったよ!？」

裕

「アンタ。いつから関西人になったのよ……」

シ

「いや、驚きのあまり、つい……」

メ

「……マスター。関西弁とは何だ？」

カ

「ああ。方言だよ。方言」

メ

「成る程……」

タ

「……」

さて、次はお茶とケーキだ。

カナ

「わくく。本当、早いですね……?」

タ

「……」

何、慣れれば誰でも出来るさ。

一同

「無理だから!？」

タ

「……」

まあ、それはさておき。ケーキを食しつつ。シオン?

シ

「え?。ああっとそうだった。俺、司会だっけ。さて、今回の何故EX版のアリサ道場なのかと言うと、一つは各設定の公表。そして、質問コーナーを行う為です♪」

タ

「……」

シオンのカリバー・フォームや、兄者の設定。

そして、原作キャラのオリジナル魔法等がそれに当たる。

ア

「……それで終わりじゃ無いけどね……」

シ

「へ……?」

す

「気にしない、気にしない♪」

シ

「いや、めっちゃ気になるんですけど!」?

ア

「聞こえ無いわ♪ではまずはシオンから♪どうぞ〜♪」

シ

「気になります、て〜!」?

神庭シオン。

(カリバー・フォーム)

推定魔導士ランク…S+

各アビリティー・スキルランク。

対魔力…AA。

魔力放出…AA+。

直感…S。

戦技変換SS+。

精霊召喚SSS。

精霊融合SSS+++。

精霊装填SSS+。

新アビリティー・スキル。

文字召喚。

ランク…SSS+。

文字による無永唱召喚術。

シオンの場合。血文字で、各柱名を書く事で召喚出来る。

精霊を無永唱で召喚出来る術はトウヤにしか使えない筈の技法であったが。カリバー・フォームにより、使えるようになった。はつきりと反則技。

1アクションで精霊を召喚出来る為、永唱のスキが無い。

双重精霊装填。

ランク…SSS+。

カリバー・フォームでのみ使用可能なアビリティ・スキル。

二つのイクスにそれぞれ別種の精霊を装填出来る。

これにより、精霊装填技を連続で放つ事も可能となっている。

しかし。このスキルの最大の利点はイクスの凌駕駆動状態である『精霊剣…カリバーン』で真の力を発揮する。

二つの精霊を、組み合わせる’。

これにより、合神剣技が使えるようになっていく。

ちなみに合神剣技はシオン。オリジナルの技であり、正統の神覇ノ太刀では無い。

イクス。凌駕駆動『精霊剣…カリバーン』

こちらはアビリティ・スキルでは無い。

正式名は『イクス・カリバーン』

イクスの凌駕駆動形態であり、その能力は、双重精霊装填により、二つのイクスにそれぞれ装填された精霊を組み合わせる事が出来る事である。

ちなみにシオンは使っていないが、双重精霊装填に双重精霊装填をさらに上乗せする事も実は可能。

その場合は二回にわけて装填せねばならない。

シオン新技威力検証。

神覇・漆ノ太刀。奥義。白虎。

威力。A A A +。

速度。S S +。

範囲。一〇百名。

四神奥義。ヴォルトとの融合で一度使ったが、本来はジンとの融合で使用するのが正しい。

自身に高密度の風を纏い。虎のカタチをとり、何千もの斬撃となす技。

絶対回避不能技。

しかし、対象を三次元的に座標を知る必要がある為。術者は空間感知の能力が必須となる。

合神剣技。『紅蓮天昇』

威力。S S。

速度。S S +

範囲。一〇千名。

シオン、オリジナル技。

朱雀、白虎の合神剣技。

シオン自身を、炎、風、化し、対象に超速度での爆乱撃を叩き込む。

合神剣技『逆鱗龍降』

威力。SS+。

速度。AA。

範囲。一〇千名。

シオンのオリジナル技、その2。

玄武。青龍の合神剣技。

玄武のシールド・ビットから八つの青龍を放つ。

ちなみにEXでは出ていないが、防御にも使用可能。対象の攻撃を受け止めた上で青龍を放つ事も出来る。

合神剣技『麒麟』

威力。SSS。

速度。S。

範囲。一名。

シオン、オリジナル技。EXではまだ出ていない。

四神全合神剣技。

朱雀、白虎、玄武、青龍。

全てを合わせ、黄金の巨龍を砲撃として放つ技。

シオンが現在使える技としては最強。

シ

「こんな所ですかね」

カ

「いいのか、EXで出て来てない技出して？」

ア

「あゝ。いいの、いいの。私が出すように言ったのよ」

シ、カ

「「……何で？」」

ア

「後で解るわよ♪」

シ

「……気になるなー」

す

「それは気にしちゃ駄目だよ♪」

裕

「にしても、ヘタレオンも随分とハイスpekになったもんね？」

ヴ

「本当。カリバー・フォームだっけ？スピードに防御、砲撃。全部揃ってるもんねゝゝ」

シ

「……まだヘタレオンと呼ぶか……。ちなみにカリバー・フォームは最大の欠点がある」

メ

「そうなのか？」

カナ

「そうは見えませんでしたけど……」

シ

「ああ。確かに速くて、防御力もある。砲撃も可能だ。……だけど、どれも特化はしていないんだよ」

カ

「……どういう事だ？」

シ

「速度はブレイズ程じゃないし、防御力も砲撃の威力。射程もウィズダム程じゃあ無い。確かに全般的に強化されてるけど、そこ、止まりなのがカリバー・フォームの最大の欠点だな」

ヴ、裕、カ

「「へくくく」」

ア

「さて、次は生きる伝説。トウヤよ♪」

「どのようになるのかなくく♪」

タ

「……」

このようになってる。

叶トウヤ。

推定魔導士ランク…EX

魔法形式…カラバ式。

デバイス…神槍ピナカ。

各アビリティー・スキル。

対魔力。S+

魔力放出。S。

心眼。AA。

精霊召喚。EX。

精霊装填。SSS+++。

文字召喚。SSS+++。

トウヤ概要。

生きる伝説。

グノースス内ではタカトと並び恐れられている。
誓約者。とも呼ばれ、全ての精霊と契約している。

（精霊召喚がランクEXなのはこれが原因）

これらの能力をただタカトへの劣等感から手に入れたという経緯を持つ。

性格は冷静で義に厚く。頭の回転も早い。

しかし、普段が普段なので何かと埋もれがちだったりもする。ただタカトとの戦いでは唯一持ち前の冷静さを失う時がある。

トウヤの各技威力検証。

ちなみに精霊装填し、真となった場合は威力。速度。範囲が1～2
ランク跳ね上がる。

捻れ穿つ螺旋。

威力。S＋。

速度。S＋。

範囲。一名。

風の属性変化技。

槍に纏った風を捻りながら放つ事で、突き、としては最強クラスの破壊力を叩き出す。

その威力は空間すらも歪める事が可能。

焦がれ尽くす天空。

威力。SS。

速度。S。

範囲。一～百名。

炎の属性変化技。投槍術。

槍に炎を内蔵させ放ち、指定の場所で爆発させる。

ランブル・デトネイターに似ているが、威力が桁違い。

そして射程だが、トウヤが槍投げで届く距離までである。

その距離四Km。

凍え鎖せし大河。

威力。AA。

速度。AA+。

範囲。一〇千名。

水。あるいは氷の属性変化技。

封印術。

トウヤが槍で突き刺した（あるいは触れた）場所から凍らせる技。物質化したバインドのようなもので、その拘束力はかなり強く。

ほとんどの対象はまずこれで無力化される。

震えと猛る鳴山。

威力。SS。

速度。AA。

範囲。一〇千名。

土の属性変化技。

召喚術。

しかし、召喚するのはただの土。しかし、その量が尋常では無く。一つの山に匹敵する。

その土を操作し、攻撃としても封印としても使える技。

質量だけでも凶悪なのに、それを操作するこの技に死角は無い。

輝き軋み壊れし幻想。

威力。SS+

速度。S。

範囲。一〇百名。

光の属性変化技。砲撃。

槍内で、魔力を集束、圧縮、加速させ、放つ。

その威力は実にスターライトブレイカーに匹敵する。

さらにトウヤの指示である指定の場所で爆発させる事も可能。

トウヤが最も信頼する技でもある。

凶り歪み果てる理想。

威力。SS+

速度。A。

範囲。一〇万名。

闇の属性変化技。

召喚術。

槍を指定座標に叩き込み発動する。

召喚するのは重力特異点。

さらに指定された座標をグレート・アトラクター（異常重力場）に送る。

数値以上の威力があり、まず対象はこの世界から消え去る。

この技を逃れようと思うならば最初っから攻撃範囲にいないか、最

強クラスの防御で防ぐか、これを上回る威力の技で重力特異点を消し去るしかない。

タ

「……」

兄者はこんな所か。

カ

「……流石、タカトさんと互角なだけあるな……」

裕

「て、言うか最後のなんて防ぎよう無いじゃない！」

ヴ

「タカト。よくまともに戦えたね……？」

タ

「……」

なに、俺にしろ兄者にしろ互いの技の対処方は確立してある。まあ、だからこそ決着はつかない訳だが……

シ

「ちなみにこの二人の、喧嘩、で国家予算一年分の費用を結界維持費として使わせたという経緯の伝説があります」

カ

「……おいおい……」

メ

「二人共、凄いな……」

カナ

「まさしく歩く災害ですね……」

ア

「さて、次は原作キャラのオリジナル魔法ね♪」
す

「基本はスバルちゃんが多いよね〜」

シ

「ですね。では、どうぞ〜♪」

原作キャラのオリジナル魔法。

スバル編。

ショットガン・キャリバー・シュート。

威力。AA

速度。A。

範囲。一〜五名。

S・Aによる、乱撃技。

蹴りを回転運動により、叩き込んでいく技である。

リボルバー・マグナム

威力。AA。

速度。AA。

範囲。一名。

ショットガンから放つ連携技。

ショットガンで生まれた回転運動を伴って、リボルバーキャノンを叩き込む。

その威力は従来のリボルバーキャノンを凌ぐ。

ディバイン・ブレイカー。

威力。S。

速度。B B。

範囲。一名。

ディバイン・バスターのバリエーション技。

砲撃として放つのは無く、拳撃として放つのが特徴。
威力としてはかなり高い。

ディバイン・バスター・ティタン・ブレイク。

威力。S S。

速度。C。

範囲。一名。

ディバイン・バスターのバリエーション技。その2。

ディバイン・バスターにさらにディバイン・バスターを叩き付ける
事により威力を増している。

その質量により半物質化しており、集束。圧縮により、
' 巨大な槍
' として放たれる。

貫通力だけならばアースラ・メンバーの技の中でも最強クラス。

と、言うのも。振動破砕による、超振動を槍を介して叩き込める、
と言う特徴を持っており。殺傷設定ならば（非殺傷設定にはそもそも
出来ない）

対象をほぼ確実に滅ぼせる。

元々は救助専門の技である。

（瓦礫等を貫通し、超振動で瓦礫を塵にまで分解する事により、一

直線に道と成せる為)

シグナム編。

火竜乱閃。

威力。S。

速度。AA。

範囲。一〇百名。

アギトとのユニゾンで可能となる乱撃技。

シュランゲ・フォルムで対象を包囲して一気に火炎と共に乱撃を叩き込む。

エリオ編。

雷光一閃。ライトニング・スラッシュ。

威力。AA。

速度。A+。

範囲。一名。

スタラーダでの雷斬撃技。対象を斬ると同時に雷撃が叩き込まれ、対象に追加ダメージを与えると共に拘束する技。

ドラゴン・ストライク。

威力。AAA+。

速度。S。

範囲。一名。

フリードとの連携技。

フリードから放たれたブラスト・レイにストラーダに纏わり付かせ、共に突貫する技。

ギンガ・クイント編。

アヴァランチ・テンペスト。

威力。A A A+。

速度。A A A。

範囲。一名。

S Aに置ける乱撃技。

リボルバーナックル。シュート。

そして蹴りを連続で叩き込み、最後に両の掌からダブル・リボルバー・シュートを束ねた。テンペストを叩き込む。

アヴァランチ・ドリル・ブレイク。

威力。S。

速度。A A A。

範囲。一名。

基本はアヴァランチ・テンペストと同じ。

しかし、最後の決め技が。

ドリル・ドロップキックとなっている。

貫通力はテンペストを上回る。

クロノ編。

ストラグル・リング・バインド。

威力。I。

速度。A。

範囲。一名。

ストラグル・バインドのバリエーション。
拘束力を無くす代わりに、対象の最大発生魔力を減少させる。
タカトを苦しめた技である。

シ

「こんな所ですかね」

カ

「意外にオリ魔法。多いよな」

シ

「まあ、これからも増えると思うけどな。その時は温かく見守って下さい♪」

ア

「さて、じゃあ次は質問コーナーね。2件来たわ♪」

す

「うれしいよね〜♪」

ヴ

「でも、EXて来る質問少ないよね〜」

裕

「そうよね。こまめに設定を出しているからかしらね〜」

シ

「と、言う訳でまず最初の質問です♪カナメ。宜しく♪」

カナ

「え？私ですか？」

シ

「おう、リリカルヴィヴィオで俺読んだから今回は逆にな？」

カナ

「成る程、わかりました。では最初の質問。『カラバ式とありますが、生命の樹ならカラバ式では無いのでしょうか？』です」

タ

「……」

これについては俺から答えよう。

本当は作者もカバラにしようと思ったんだが、カバラでは精霊の概念が無い。

（数秘学。守護天使。各惑星の並びや、それに伴う階級表。そういった概念はある）

その為、あえてカラバとした訳だ。

いっそ。完璧に別の魔法式にするのも悪くは無いが、あえて、カバラの形を残す方向でいったみたいだな。

ア

「……その答えより、よくそんなの一瞬で書けるわね……」

「早いね〜」

タ

「……」

ふ。やろうと思えば誰でも出来ますよ。

シ、カ

「「重ねて言うけど無理だから!？」」

裕

「使えたらとか思わなくも無いわね……」

ヴ

「それじゃあ次の質問。いくよ〜♪」

シ

「次は皆さまのアイドル。メイデンにお願いしましょう♪」

メ

「ア、アイドルなんかじゃないぞ!」

シ

「またまた〜。タカ兄い?」

タ

「……」

ふむ。金の髪に、凜とした君にメイデンの名はよく似合っている。
謙遜する必要はない。

メ

「あ、あう、あう……」

ア

「……さすが鈍感天然兄弟ね……」

ヴ

「懐かしいな〜」

カ

「メイデン? 戻って来〜い」

メ

「あう、あう〜」

裕

「あっちゃあ。戻ってくるまで時間掛かるわよ。コレ……」

カナ

「なら私が読みましょうか？」

す

「しばらく待ってみようよ？」

タ

「……」

その必要はありませんな。

シ

「タカ兄い。今度は何を作ってきたのさ？」

タ

「……」

何。タマゴ料理が好きと聞いたのでな？

卵焼きを作ってきた。

ヴィヴィオ、これをメイデンに。

ヴ

「うん。メ〜イデン♪あ〜〜ん♪」

メ

「あう、あう、……う？」

ヴ

「あ〜〜ん♪」

メ

「あ、あ〜〜ん。……はむはむ……」

カ

「……」

シ

「……………」

裕

「？。何でアンタ達。顔背けてんのよ？」

カ

「いや、何て言うか……」

シ

「こう、なあ？」

カナ

「ふふふ……」

タ

「……」

若いな……

裕、ア、す

「「「???」」」

メ

「はむはむ……。甘くて美味しかったぞ♪」

タ

「……」

ふむ。帰ってきたようだな。

ヴ

「……………」

裕

「あれ？ ヴィヴィオ。どうしたの黙り込んで……」

カ

「本当だ。どうしたんだ？ ヴィヴィオ？」

ヴ

「タカト……」

タ

「……………」

ム？

ヴ

「……さっきの卵焼き。甘かったんだ？」

タ

「……………」

ヴ

「……………」

タ

「……………」

……解った。後で作ってこよう……

ヴ

「わ〜い♪」

シ

「タカ兄いを屈服させたよ、オイ……」

カ

「ある意味。すごい光景だな……」

裕

「本当。甘いの前になると別人ね……」

す

「プレッシャーすら感じたよ……？」

ア

「さて、じゃあメイデン。質問宜しくね？」

メ

「ああ。解った。アリサさん。質問は『バトルが多いEXですが、もしリリカルヴィヴィオみたいにトウヤ、タカト、シオンが学校に入ったらどうなりそうか？だ』」

カナ

「クロス質問？みたいな感じですね？」

ア

「それじゃあミニドラマでお送りしましょう」

す

「製作。提供はバニングス家と月村家の共同でお送りします♪」

シ

「えらく本格的ですね！」

カ

「流石、豪華版だな……」

タ

「……」

こんな風になったぞ。



「さて。タカト。君に来てもらったのは他でも無い」

EX学園、校長室。

そこで一人の男がマホガニーの机に両肘を着いている。

叶トウヤ、その人だ。

彼のこの学校での役職は校長だ。

サングラスを掛け、オールバックにした髪。そして仕立ての良い白

のスーツが良く似合っていた。
対して。

その正面には黒の青年がいる。
伊織タカトである。

トウヤの恰好に反して、タカトの恰好は異様であった。

黒のアーミー・パンツに、グレーのTシャツ。その上には、これまた黒のフライトジャケットを着ている。

そして、ごっつい編み上げの登山用ブーツを履いており、いかにも動き易さ、だけ、を考えた恰好であった。

「ああ。用件とは？」

「何、やってもらいたい事があるだけだよ」

ふふふ。と妙な笑いを浮かべるトウヤにタカトは異様な気配を覚える。

こういう時の兄は、必ずろくでも無い事を考えているからだ。
もはや直感で予測出来る。

いや、直感のスキルなんて持つてはいないが。

「君に、教員をやってもらいたいのだよ。あるクラスの担任を受け持つて欲しい」

「……俺がやる必要があるのか？」

一応、抵抗らしい事はしてみる。

・・・恐らくは無駄な抵抗だろうが。

その考えを、まるで読んだが如くトウヤが笑いを浮かべる。

元々トウヤの顔は造形がいい。

この笑いを見たら大体の女性は見惚れるだろう。

・・・タカトには寒気しか与えない笑みだが。

「……。一兆飛んで七百八十五円……」

「ぐっふうっ！」

やはりか。やはりそれで来るか。

タカトは告げられた金額に、頭を抱える。

それをトウヤはにこにこを見る。

「お前が前回出した、施設の被害総額だ。……全て、ウチで立て替えた訳だが……。さて、何か言いたい事はあるかね？」

「……悪魔め……」

それはある、'任務'の最中であつた。

ウチと共同で任務に当たっていた組織が突如謎の離反。

そして一人取り残されたタカトは持ち前の超人パワーを発揮し、その組織を叩き潰したのだ。

……。一緒に取り返す筈の施設を丸ごと消し飛ばして。

確かに、施設は消し飛ばした。ああ、消し去ったとも。

施設があつた場所はペンペン草すらも生えない荒れ地にした。

しかし。こちらは命の危機だったのだ。

たかが一兆、くらい'の施設が消えてもいいじゃあ無いか!？

……。払えと言われたら全力で逃げるが。

「……………」

「黙っていては何も解らんよ?で、答えは?」

「……慎んでやらせて頂きます」

結局。タカトはこう言つた事に関して、兄に勝てる訳が無いと言う事を再認識しながら心の中の勝敗表に、黒丸をつけながら了承した。

朝は苦手だ。

それを毎朝再認識しつつ彼は歩く。

髪は銀。顔は中性的を飛び越えて女性的。

神庭シオン。その人だった。

しかし、その身に纏うのは制服。

紺のブレザーは、ネクタイを絞めておらず、カッターシャツの裾は出しっぱなしであった。

基本的にきっちりした服を嫌うシオンらしい恰好とも言える。

「眠い。……今日は一日昼寝でもするかな……」

欠伸をかきつつ、非常に怠惰な台詞を放つ。

基本的に朝が弱いシオンの毎度お決まりの台詞とも言えた。そして。

「だめですよ。シン君」

‘彼女’がその台詞を放つのも毎度お決まりと言える。

神庭家のちょうどお隣りさんの娘。

平たく言うとおとなじみ。

姫野みもり。

それが彼女の名であった。

華やかでは無い。

だが、そのたおやかさは他にない魅力を醸しだしていた。

髪はロングで、薄く茶が掛かっている。

先の方には緑色のリボンで纏められていた。

性格を考えると髪を染めるはずもないので恐らくは元からだ。見る者を和ませる。

それが姫野みもりと言う女性であつた。

「……みもり。世の中にはどうしても抗えないモノ、てのが人には一つはあるんだ。俺にとつてはそれが睡眠。てだけなんだよ……」
「でも、授業はちゃんと受けないとだめですよ？」

にっこりと笑いながみもりは告げる。

駄目押し。

正論であるだけにシオンは何も言えない。

二人は毎朝繰り広げるたわいも無い会話をしながら校舎に入り、そのまま教室の扉の前に立つ。

扉を開けようとするみもりに、しかし。シオンがそれを遮る。

首をしゃくり、みもりに後ろへ下がるように指示する。

みもりもまた苦笑いと共に従った。

シオンは扉の前に立ち、スウッと深呼吸を一つ。

取っ手に掴み、一気に開ける。

瞬間。

「みもりちゃーん！わいの腕の中でグッドモーニンググっ！」

男が抱き着いて来た。

見事な奇襲。

しかし、その場に居るのはみもりでは無く、シオンであつた。
抱き着かれ様。レバーに腰の入った拳を叩き込む！

ー弾！ー

「ぐっほっ！！」

腹に受けた一撃に男の身体が一瞬だけ宙に浮く。

そしてシオンに抱き着いたままピクピクと痙攣する。

「よお」

「……シオン。わいの無念の中でバッドモーニング……」

二人は剣呑な気配のまま朝の挨拶を交わした。

本田ウイル。

クォーター。の男である。

髪は長く、肩に掛かる程。そして眼鏡を掛けていた。

そしてその顔は、恐らく道行く女性に尋ねれば十人中十人が美形と断言出来る程整っていた。

しかし、天はヒトに、二物を与えず。

彼の性格はいろんな意味で危険であった。

自称。『全ての女性に愛を与える男』

他称。『呼吸をするようにセクハラする男』

つまりはそう言った人物であった。

「女性は神。男は死ね」と言う名言を残した男でもある。

そしてシオンとみもりの幼なじみでもあった。

三人はそのまま教室へと入る。

自分の机へと移動する。そこに女生徒がいた。

これまた美少女である。

髪はロングの黒。

まるで巫女さんのように切り揃えられている。

そしてその目にはウイルと同じく眼鏡。

腕を組む姿が恐ろしく様になっていた。

可愛い、と言うよりはカッコイイと表現するべきか。

ウイルが彼女を見てうげつと声を漏らした。

御剣かすみ。

それが彼女の名前である。

そしてシオンと幼なじみでもあった。

「よっす」

「おはよ。シオン君、ウイル」

「……おはようさんも何も、わいとは一緒に来たやろうが……」

呻くようにウイルがぼやく。

ウイルとかすみ。

この二人は謎の間柄である。

いや、シオンと幼なじみである以上、二人も幼なじみなのだが、仲が良いのか悪いのかはつきりしないのだ。

この二人は。

この二人、しょっちゅういがみ合うのだが、しかし。朝は自転車に二人乗りで登校してきているのだ。

当然ウイルが前で、かすみは後ろで、足を横にして、ウイルの腰に手を回す恋人スタイルだ。

これで付き合っていないと言うのだから最早謎以外の何物でも無い。そのまま三人で話していると、さらにみもりも加わり四人で談笑する。

これがシオンの学校風景であった。

予鈴が鳴る。

そして廊下側の曇り硝子に映る影。

教師だ。

それにクラスメート達がパタパタと席に戻った。

シオンは席に突っ伏しながらそれを待つ。

シオン達のクラスの担任は鳴かず飛ばずの老教師であった。あえて言うなら普通。

そんな表現がぴったりの教師である。

かったるい。

そんな事を思いつつ。

扉が開いたのをシオンは見て、……そのまま驚愕した。

「あ、あ、ああああああつ!!」

椅子を蹴倒し、入って来た教師を指差す。
見覚えがある、と言うよりは毎日見てる。

何しろ兄弟だ。

いや、異母兄弟だけど。

そんな、シオンに頬を一つかいて、男は苦笑いを浮かべる。

「まあ、驚くか。……俺もまさかとは思ってたんだがな」

ぽつりて呟くとそのまま教壇へと向かう。

そしてそのまま自己紹介を行う。

「……何の因果か、今日からこのクラスの担任をやる羽目になった。
まあ経緯はどうあれ、やるからには全力を尽くす。先生の名前は……」

振り返り、黒板に横書きで漢字の名前を書き、さらにその下に流麗な筆記体で読みを加えた。

「伊織タカトだ。宜しくたのむ」

「なんでさ……」

頭を抱えつつシオンが呻く。
異母兄、タカトの教師赴任。

それが何を意味するか解らず、シオンはぼやいた。



ア

「以上。ミニドラマでした〜」

カ

「待った、待った！何だ？新キャラ？新キャラなのか！？」

シ

「いや〜。懐かしいな〜」

カ

「懐かしがってる場合か〜！」

す

「あの三人については第三部で明らかになるよ♪宜しくね〜♪」

カ

「宣伝かよっ！」

裕

「……すごい先が気になる内容なんだけど……」

ヴ

「続編とかあるのかな？」

メ

「是非見たいぞ」

カナ

「作者次第なのでしょうか……」

シ

「ちなみにこれはEXの前身となった『エンブレム』と言う小説が原点だったりします。完全なオリ小説だったんですが、EXへと設定が変わったという妙な経緯があります♪」

タ

「……」

俺達の立ち位置もかなり違う小説だったからな。

ア

「作者の黒歴史的作品な訳ね……。さて、じゃあ次いつてみましょう♪次のコーナーは、

『シオンVSカナン。宿命の対決！in。EX!!』ね?』

シ、カ

「「……は?」」

す

「いや〜。楽しみにしてたよ〜♪」

シ、カ

「「ま、待った、待った〜!?!」」

ア

「何よ?」

シ

「なんすか!その企画は!?!」

カ

「聞いてねえぞ!?!」

す

「うん。教えて無いからね?」

シ、カ

「「教えろよオオオオっ!」」

裕

「うるさいわよ!!もう決まったんだからやりなさい!!」

カ

「アホか!納得出来るかいっ!」

シ

「そうだ!それにそんな事したらまたヴィヴィオが……っ!」

ヴ

「ドキドキ♪ワクワク♪」

シ、カ

「「めっちゃめっちゃ楽しみにしてるっ!」」

タ

「……」

二人共。もはやこれは決定事項だ。諦めろ。

ア

「そうよ。やらないんなら二人共に罰ゲームよ?」

シ

「ば、罰ゲーム?」

カ

「この期に及んで何を……」

ア

「弟子、すずかよ。アレを……!」

す

「うん。これだね〜」

シ、カ

「「……何だ、それ……」」

ア

「え? 見て解んない? メイド服よ?」

シ

「それは見たら解りますよ!?」

カ

「大体検討はつくけど、現実を認めたくないんだよ!」

す

「なら問題無いね? 負けた方にはメイド服を着てもらうよ〜」

シ

「……やっぱり……」

カ

「待った。いや、マジに。何でもするんで、それだけは勘弁! 危険

だから!？」

裕

「やけに必死ね」

ヴ

「本当だね〜。カナン君、どうしたの？」

カ

「ぐ……っ！それは……！」

タ

「……」

何を心配しているのか解らんが、安心しろ。女装をする訳では無い。

シ

「そ、そうなんだ……」

カ

「よ、よかった〜」

タ

「……」

うむ。ただメイド服を来てもらって写真を撮り。町や学校、アースラまで引き回すだけだ。

シ、カ

「「ウオオオオオオオオオいつっ!？」」

ア

「安心なさい。写真もネットにアップする予定よ！」

シ、カ

「「鬼かアンタラっ!!」」

す

「勝てばいいんだよ♪勝てば♪……それとも二人共着る?」

シ

「そ、それは……」

カ

「くっ……!」

裕

「ほらほら、もう観念しなさい♪」

メ

「マスター。時には諦めも肝心だ」

カナ

「そうですよ。それに前れー」

カ

「わーーーーっ!」

裕

「うるさいっ!」

ーガスっ!ー

カ

「ぐっはあっ!」

タ

「……………」

二人共、諦めろ。潔くな?

シ

「うう……」

カ

「本当、理不尽だ……」

ア

「てな訳でユウオ召喚♪」

ユ

「はい。やっと私の出番だね♪」

タ

「……」

では、姉者。一つよろしく。

ユ

「了解♪じゃあ二人共。行くよ～～？」

シ

「ちよっ……！」

カ

「まだ覚悟が……！」

ユ

「♪♪～～～～♪♪～～～～♪♪～～～～♪♪～～～～♪♪」

シ、カ

「「ああ～～～～～～あ」」

タ

「……」

では、我が主。俺は審判と言う事で行ってきます。

ア

「うん。じゃあよろしくね～～」



「と……っ！」

「うお……っ！」

シオンとカナン。二人は唐突に地面へと投げ出された。

ユウオの歌唱術によって作られた空間に投げ出されたのだ。
いきなり目の前に迫る大地。

それに二人共即座に反応し、大地に足を叩き付けて止まる。

「ここは……」

「ユウオ姉さんの魔法だな。確か名前は『風吹く荒野』だったかな
……？」

「……」

その通りだ。

シオン達が上空を見る。

そこにはタカト。それに共に来たのだろうか。メイデンがいた。

「……」

この世界は姉者が作りあげたバトルフィールドだ。

これで存分にやりあえるだろう？

書いて差し出され紙に二人は無然の表情となる。

解っているのだ。二人としては。

この模擬戦を断る訳にはいかないと。

しかし、それでも踏ん切りがつかない。

そんな二人にタカトはフツと笑う。

「……」

迷っているな？

「そりゃあ……」

「当たり前だろ？」

二人共頷く。

しかし、タカトは笑いを止めない。

「……」

二人共。深く考え過ぎだ。

この模擬戦。やる価値はある。

それに二人共。実際は戦ってみたいだろう？

「……まあね」

「……」

シオン、カナンは押し黙り、あるいは肯定する。

凶星であつたからだ。

「……」

なら、それだけで言いんだよ。

戦う理由なんてものは、な。

罰ゲームはこの際忘れろ。

存分にやり合え。

二人はタカトが差し出した紙に呆氣に取られ、しかし。笑い出した。

そう、理由なんてその程度でいいのだ。
そして二人は向かい合う。

「イクス」

「メイデン」

呼び合う。互いの剣たる存在を。

そして即座にバリア・ジャケットと甲冑を着込んだ。
同時に構える。

「……」

では、始めよう。

ルールは簡単。相手を気絶させればそれで終わりだ。

「単純だな」

「だけど、解りやすいな」

二人共、頷く。

そしてタカトが左手を空中に上げた。

その手を一気に振り下ろす！

「……」

始め！

同時、開始の合図と共にタカトが放った掌から快音が鳴った。

それを合図に二人は一気に駆け出す。

イクスとエクスカリバーが激音と共に叩きつけ合った。

「ひゅうつ！」

「ーっ！」

互いに放たれた一撃に鏝ぜり合い、そこから距離を開き、回転しながら斬撃を放つ。

踏み込み。

地を蹴る音と共に、互いに放ち合う斬撃。

それを制したのはシオンだった。

「どうした？カナン！手を抜いてんじゃねえぞっ！」

「誰がっ！」

とは言うものの、実際にカナンは鏝ぜり合いでシオンに押し負けている。

これは力の差と、もう一つシオンに分がある。

技術の差だ。

単純な斬撃に、シオンは踏み込み、刃の角度。

もつとも力の入る斬撃を選択しているのだ。

これは年期の差が如実に出た結果だ。

十数年。剣を振るい続けたものと。

ここ数ヶ月振るったもの。

むしろシオンに剣撃戦闘でここまで追従出来るカナンの成長速度を

褒めるべきだろう。

十合の打ち合い。

さらに弾かれるカナンは悟る。

単純な斬撃勝負では負けは見えている。

ならば勝てる戦いをする。

カナンは空間突破を行い、シオンから距離を取る。

鞘を出し、エクスカリバーを納める。

「壹式拔刀剣術……」

「来るか……！」

カナンの狙いを悟り、しかしシオンはその場に留まる。

下手な瞬動は命取り。

それを察したからだ。

そしてカナンは動く。

身体がブレたかと思うと、その姿が消えた。

「暗夜一閃！」

「斬！」

「ぐっ……！」

「はぁあっ！」

直感でシオンはイクスを振るうが、それより尚早い。

辛うじて防御するも、速度の乗った一撃にシオンは堪らず後退。しかし、カナンはそれを許さない。

「貳式拔刀剣術……」

「早えっ！」

後退が、失策だった事をシオンは悟る。

そしてカナンはエクスカリバーを振り放つ！

「虚空閃！」

「剣牙！」

「閃」

「破」

空間斬撃と、放出斬撃が空中でぶつかり合い、爆音と共に互いを蹴散らす。

残心するシオン。

しかし、その眼前には既にカナンが居る！

空間突破での接近。

驚愕に固まるシオンに、しかしカナンは容赦しない。

「暗夜一閃っ！」

「斬！」

今度は防御も間に合わなかった。

袈裟にたたき付けられた一撃。

それにシオンは盛大に吹き飛び、地面に叩き付けられた。

「……これで……っ！」

勝った。

しかし、その台詞をカナンは飲み込む。

シオンから光が溢れていたからだ。

そしてシオンは呟く。

鍵となる自身の言葉を。

ブレイズ・オン。

「イクス。セレクト……カリバーっ！」
トランスファー！

瞬間。

シオンは跳ね起きた。

その顔にはニヤリと言う笑み。

即座にその身はカリバー・フォームへと戦技変換される。
それを見て、カナンは冷や汗を流す。

「効いてないのか？」

「効いたさ。激烈に痛かったぞ？」

だが、とシオンは呟く。

その顔は不敵そのものであった。

「今までの技なら見切った。次は通用しねえぜ？」

「……なら、試してやる」

再び鞘へと納まるエクスカリバー。

それにシオンは右と左のイクスを構える。

互いに流れる風。

そしてカナンが疾る！

「壱式拔刀剣術……」

「来い……」

そしてその身が消えた。

「暗夜一閃！」

「絶影・連牙！」

一閃！

一破！

放たれる抜刀剣術。

シオンへと一瞬で駆けつけたカナンはしかし、自身が放った斬撃に驚愕する。

受け取められたのだ。

いともたやすく。

そんなカナンにシオンは笑う。

「俺の直感、てのは一種の予知能力に近くてな？」

「ーっ！」

その言葉に悟る。

シオンはこう言っているのだ。

予め、来る場所が解っていたと。

そして、シオンは笑いのまま、右のイクスを振りかぶる！

「受けるよ。カナンっ！」

「ちいっ！！！」

即座に空間突破で後退。

しかし、その発動よりシオンの一撃は尚疾い！

「絶影・裂！」

「ーっ！」

そう、これこそがシオンが黙っていたカリバー・フォームの利点。

二刀流故に、防御と攻撃を同時に成せる技法。

自身の胸元へとひた走るシオンに、カナンは瞬間で鞘へとエクスカリバーを納める。

回避は既に不能。

ならば防御で弾き返す！

「参式拔刀剣術・絶空！」

ー轟！ー

カナンを中心として形勢される竜巻。

その中でカナンは有り得ない声を聞いた。

「神覇・伍ノ太刀……」

「なっー！」

そしてカナンは失策に気付く。

直感是一種の予知能力に等しい。

ならば自分が、こうする事、も知っていたのでは無いか？

自分の予測に、カナンは絶句し、しかし身体だけは自然に動く。

空間突破。それで一気に後ろへと下がる。

次の瞬間。シオンが空気すらぶち破り、一気に突っ込んで来た。

「剣魔・裂・連牙！！」

ー轟！ー

突貫。

絶空を破り、シオンがカナンへと駆ける。

しかし、直後にカナンの姿は消えた。

空間突破で退避したのだ。

十mを挟み。カナンは息を荒げた。

【マスター。大丈夫か？】

「ああ。心配ない」

実際は無傷だ。

だが、今の攻防はカナンが一本取られた。

シオンはその言葉通り、壹、貳、そして参までの抜刀剣術を破って見せたのだ。

それにカナンは驚き、しかしその顔には笑みが浮かぶ。

【マスター？】

「……やっべえな。癖になりそうだ」

シオンとの戦いに、だ。

何の気負いも無く全力が出せる。

そして向こうはそれを受け止めて見せたのだ。

これが楽しく無い訳が無い。

カナンの視線の先でシオンがゆっくりと歩く。

カナンはそのまま鞘へと再度エクスカリバーを納めた。

「メイデン。六式以上。使うぞ」

【……分かった】

カナンの覚悟。

それに魔力が充実していく。

シオンはそれを見てフツと笑うと同時に、両の手を口元へと持つてくる。

カリツと言う音ともに、血が流れた。

同時。描くのは風と雷の文字。

カナンはそれをさせまいと動く。

「させるかっ！ 五式抜刀剣術。虚空破碎断！！」

―絶―

放たれる空間斬撃。

しかし、シオンはそれに構わない。

腕を振るい、精霊を召喚する。

「来いっ！ジンっ！ヴォルトっ！！」

デュアル・スピリット・ローディング！！

顕れ、即座に両のイクスに納まる二柱の精霊。

シオンはそのまま前へとイクスを突き出し、空間斬撃を受け止めた。
しかし、カナンはそこで止まらない。

再び鞘へと納まる刃。

そして放つのは自身の最速！！

「四式抜刀剣術！光刃二閃！！」

―閃―

再び、消えるカナンの姿。

直後にシオンへと放たれる斬撃！

それを今度は辛うじての防御でシオンは防ぐ。

しかし、この技は最初っから二段構えの技だ。

瞬間でカナンはシオンの背後へと回る。

防御も回避も不可能。

そして刃が放たれ。

「白虎っ！」

「双龍青雷陣！！」

ー豪・轟ー

音が消えた。

玄武が一気に蹴散らされる。

X字に描かれる雷を纏う斬撃がそれを成したのだ。

シオンは残った玄武でその一撃を防ごうとするが、持たない。
弾かれ、壊される玄武。

最後の一枚で漸く拮抗する。

二人は薄い壁を挟み、睨み合い。叫ぶ。

この一撃で終わらせようと。

この一撃を防ぎきってみせようと。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

ー激・激・激・激！ー

ー豪・豪・豪・豪！ー

弾き、紫電が走り、空気が焼ける。

そして、最後の玄武がパンっと言う音と共に割れ。

X字を描く斬撃がシオンへと叩き込まれた。

静寂。

カナンは残心したまま、しかし。固まる。

斬撃は、たしかにシオンへと叩き込まれた。

その筈なのに。

シオンは未だ、その意識を保っていた。

そして、振り上げられる左のイクス。

それが纏うのは風！

「神覇・漆ノ太刀……」

「――っ！六式抜刀剣術！！」

互いに零距离。

そこで今度はシオンは攻撃を。

カナンは防御の技を放つ！！

「白虎オっ！！」

「絶空旋龍破！！」

放たれる乱撃。

それを留めるべき防御。

カナンから放たれた衝撃がシオンの白虎を防ぐ。

AAA+の技を無効化する防御だ。

そして白虎もまたAAA+。

再び、拮抗し合う両者。

しかし、ここでシオンはさらに右のイクスを振るう。

同時。後方に足場を形成。

それを見たカナンはシオンの意図を悟る。

そう、最初っからカナンの足止めが目的だったのだ。シオンは。

狙うのは、四神奥義を除くならば、最強の一撃。

カナンは未だ放たれ続ける乱撃に、旋龍破を解除出来ない。

「くっ……！！」

「貰うぞ！カナンっ！剣魔・裂！！」

――轟――

爆音。

空気をぶち抜き、シオンが零距离でそれを放つ。

カナンは旋龍破はそれを確かに減衰し。

しかし防ぐ事までは叶わず弾け飛ばされる。

「がっ、あ……」

【マスター！？】

吹き飛び、地面を転がるカナンをシオンは剣魔を解除して、残心したまま見下ろす。

その視線はこう言っていた。

これで終わりじゃないだろう？と。

カナンはその視線を受け、歯を食いしばりながら立ち上がった。両者共に息が荒い。

シオンは精霊装填技の連発。

カナンも六、七の抜刀剣術の連発で魔力は底を尽きつつあった。

だが、二人は止まらない。

シオンは血文字を描き、カナンは腰溜めにエクスカリバーを構える。

二人は既に解っている。

次の一撃がラストだと。

ならば、選択するのは最強の一撃。

カナンはエクスカリバーのチャージを開始。

シオンは四つの精霊を同時に召喚。

そのまままず、イフリートと、ウンディーネをデュアル・スピリット・ローディング。

さらに、ジン。ヴォルトわ装填する。

「イクス！」

【応！】

フル・バレル
全兵装

フル・オープン
全解放
オーバー・ドライブ
凌駕駆動
スタート
開始】

イクスの宣言。

それを聞きつつ、シオンは両のイクスを重ね合わせる。

二つのイクスは混じり合い。

形を変え、たった一つの剣と為った。

精霊剣。カリバーンへと。

全ての準備が終わる頃には、カナンのエクスカリバーも全チャージを完了している。

二人が放つ黄金の極光。

エクスカリバー。

カリバーン。

ぶつかる筈の無い、二つの聖剣が、今。ここにぶつかり合う!!

「エクス……っ！」

「四神……っ！」

輝く二つの聖剣。

その輝きは、まるで太陽を思わせた。

そして二人は距離を挟んで笑い。

一気に互いの聖剣を振り放った!!

「カリバー……っ！」

「合神剣技っ！麒麟っ！」

―瞬―

瞬間。全ての音が消えた。
二つの極光。
そのぶつかり合いによって。
そして。

―轟！―

―裂！―

―閃！―

光が、ただただ光だけが、世界をぶち破り、空間を破碎させ、喰らい尽くす。
ユウオが作りあげた世界はあっさりと消え去った。



タ

「……」

ただ今戻りました、我が主。

ア

「お。帰って来たわね？で、二人は？」

タ

「……」

この通りです。両者ノックアウト。引き分けて終わりました。

裕

「引き分けかー」

ヴ

「でも、凄い戦いだっただよ？ユウオさんの魔法。壊しちゃうし」

す

「タカト君を審判で向こうにやってて正解だったね？」

タ

「……」

世界が割れる直前に間に合いましたな。

メ

「……わ、私も疲れたぞ……」

ヴ

「メイデンもお疲れ様〜」

裕

「流石に疲れたでしょ？」

メ

「もう魔力も全然残ってないぞ……」

カナ

「本当、お疲れ様です♪」

ア

「さて、本当は後一つ企画が残ってたんだけど、流石に長いし。次のアリサ道場にまで持ち越すわ」

裕

「え？何があったの？」

す

「題して♪『時を越えた師弟対決！。裕希奈、ヴィヴィオVSタカト！教導模擬戦！！』だよ♪」

裕、ヴ

「「え〜〜〜〜っ！！」」

ア

「いや〜〜。これも楽しみよね〜〜♪」

ヴ

「待って、待って！もう決定事項なの！？」

ア、す

「「うん♪」

裕

「聞いてないわよっ！」

ア

「だって言っていないし」

ヴ、裕

「「言ってよ〜〜！！」」

カ

「ふ、ふふふ……」

シ

「く、くっくっく」

タ

「「……」

二人共起きたか。なかなか早い復活だな。

カ

「ふっふっふ。裕希奈。年貢の納め時だな……」

裕

「く……っ」

ヴ

「タカト。タカトは手加減してくれる？」

タ

「……」

ヴィヴィオ。

俺が手加減すると思うか？

ヴ

「……」

裕

「ちよっ……本気でやり合うの!？」

タ

「……」

そう言う事だ。罰ゲームも用意してある。
覚悟するように。

裕、ヴ

「……」

カ

「はっはっは……。あの、アリサさん。何故にメイド服を片手に俺達ににじり寄るんだ？」

シ

「ま、まさか……？」

ア

「決まってるじゃない？引き分けなんだから二人共罰ゲームよ？」

す

「ちゃんと、二人用にオーダーメイドで作ったんだよ♪」

裕

「……フフ。そうね。先の事は置いておいて、まずこっちを楽しま

なきやあね……」

カ

「ちょっ！待て待て！！」

ヴ

「裕希ちゃん。私も今回は手伝うよ……」

シ

「ヴ、ヴィヴィオが黒い、黒い！！」

カナ

「大丈夫です♪辛いのは最初だけです♪」

カ、シ

「「んな訳あるかーっ！！」」

ア

「観念、しなさいっ！」

す

「GO~~~~♪」

シ、カ

「「いいやああ~~~~~~~~っ」」

タ

「……」

さて、後ろで二人が脱がされている間に告知を。

前回の‘かも’企画である所の、オリキャラ募集を行おうと思う。

まず、

募集は五人まで。

グノーシスの位階で第三位を一人。

第四位を四人募集する。

設定としてはグノーシスからのアースラ出向組と言う設定。

名前。

性別。

使用術式。

デバイス。

キャラ概要。

を感想等で送って頂きたい。
是非、よろしく頼む。

シ

「う、う、う（涙）」

カ

「シクシク……（涙）」

ア

「ふう、改心の出来ね♪」

す

「二人共、可愛いよ〜♪」

裕

「写真、写真っ」と

シ、カ

「「やめてーっ！撮らないでーっ！！」」

ヴ

「でも何か見覚えがあるような……」

カナ

「気のせいですよ♪」

ア

「さあ、次は散歩に行くわよ♪さっきも言った通り、町から学校、
アースラも回るわ〜♪」

シ、カ

「「ギャアアアアアっ！！いつそ殺せーっ！！！！」」
す

「と、言う訳で今回はここまで♪キャラ召喚をオツケーをして頂いた
ヨシュアさん♪いつもありがとうございます♪そして読者の皆さん♪
いつもEXを読んで頂いてありがとうございます♪感想、疑問。

バシバシ待ってます♪ではでは~~~~♪」

女性陣一同

「また次回~~~~♪」

ア

「さ~~~~あ。二人共行くわよ~~~~♪」

シ

「た、助けて！助けて~~~~っ！」

裕

「パシヤリ、パシヤリ」

カ

「写真撮んなあぁっ！」

ヴ

「大丈夫♪カナン君もシオン君も可愛いよ♪」

シ、カ

「「褒め言葉じゃねえだろっ！それ~~~~っ！」」

カナ

「……哀れですね」

シ、カ

「「ちくしょ~~~~う！（涙）」

タ

「……」

さて、では行くか。メイデン。力が入らんのなら肩に乗れ。

メ

「タカトさん。済まない」

タ

「……」

構わん。では行くか。

シ、カ

「「こ、こんなオチは嫌だあああああつ！」」

終劇。



第三部予告。

「シオン。俺は成すよ。創誕を……」

「おっちゃん！何でっ！何でアンタがっ！！」

「坊主。人間。譲れねえもの、てのがあるものなんだよ」

「さあっ！裁こう！世界の全てを！！そして私にひざまずかせるのだ！！！」

「アンタはっ！そんな下らない理由でこんな真似した言うんかった？」

「こんなのっ……こんなのっ。無えよっ！」

「ヴィータ……」

「タカト、君……」

「……っ！貴様はバカかっ！こんな身体でそんな真似を……！」

「これがっ……これが……真実……俺が……俺がっ！」

「シオン！駄目だよ！目を逸らしちゃ駄目だよ！」

「タカ兄い……」

「強くなったな……シオン」

「イクス」

【ああ。共に行こう。我が主】

喜びも、悲しみも、愛も、憎しみも、希望も、絶望も！！

「成したか。シオン。’到達者’に……」

「成るさ。アンタに追い付く為にっ！」

「ブレイズ・オン」

【ユニゾン・イン】

【「最終戦技変換！」】

「この、……この胸に、抱きしはー」

「神の子は主の右の座に着かれたー」

第三部『創誕編』 始まります。

「それでも、俺はアンタと一緒に居たかった。居たかったよ……」

「タカ兄い……」

番外話「アリサ道場EX!!」(後書き)

はい♪如何だったでしょうか？アリサ道場EX！楽しんで頂けたならば幸いです♪質問。感想等バシバシお待ちしておりますね♪オリキヤラもどんどん送って下さい♪ 是非是非♪お待ちしております♪では♪次は創誕編でお会いしましょう♪

第二十六話「シオンの憂鬱」(前書き)

「俺はそれになった事が無い」

「て、言うか家族

全員がそうだったと思う」

「人並外れて、頑丈に過ぎる家族だ

ったから」 「だから思わなかったんだ。俺がそれになるなんて」

「そしてそれぞれの初めてがー」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まります」

第二十六話「シオンの憂鬱」

時空管理局本局。

スバルの治療が確認された後。

アースラは再び本局に戻って来ていた。

何故か？

答えは単純。'時空揺るがす兄弟喧嘩'（はやて命名）

により、アースラがボロボロになったからだ。

訓練室は完全に廃墟寸前。駆動炉は結界を維持する為に、限界ギリギリまでその出力を使った為、オーバーヒート。

この為、またもに次元航行できる状態では無く。

本局に戻り修理する事になった訳だ。

そして、そんな本局の一角。

医療室に一人の男がベットに寝そべっていた。

叶トウヤ、その人である。

水色と白のシマシマのパジャマを着ている。

その傍らに居るのはユウオ、そしてアースラ艦長であるはやてだった。

さて、何故にトウヤがこんな格好で、医療室に居るのかと言うと・・・。

「……全身打撲に、骨折数ヶ所。内出血数知れず。……本当、無茶し過ぎだよ……」

ユウオが呆れたように呟く。

タカトとの一戦。

それでトウヤが被った怪我であった。

元来ならばこのくらいの怪我ならば、どうにかなる、のだが、いかんせん精霊召喚、装填を繰り返した為か、トウヤは現在、魔力枯渇

状態に陥っていた。

こんな状態では、グノーシスのトップだろうが、EXランクだろうが関係ない。寝込むだけしか出来ない。溜息をつくユウオにトウヤは薄く笑う。

「……久しぶりに戦ったのでね。まあ、向こうも似たような目に合ってるだろうが」

「はあ……」

トウヤのベットの横に立つはやてが苦笑いを浮かべながら曖昧に頷く。

はやてはアースラの修理や義装に立ち会っていたのだが、突如。病室で寝込むトウヤに呼ばれたのだ。

容態はすでに聞いていたので後で顔を出そうとは思っていたのだが。

「はい。トウヤ」

「うむ。ア〜ン」

「……あの〜。ラブラブさんは結構なんやけど、そろそろ何の用なんか聞いてもいいん？」

ユウオが皮を剥いたリングを切り分け、トウヤに差し出す。

それをトウヤが口を開き、納め。食べる。

はやてはそれを見つつ尋ねる。

このままではいつ話が始まるのか、解ったものではない。

トウヤは顎を上下に動かし、リングを最後まで咀嚼すると、漸く口を開いた。

「む。そうだった。すまないね。……ユウオ」

「あ、うん」

トウヤに促されるままユウオがカーテンを閉め。簡単な防音魔法をかける。

それにはやては幾分緊張する。

誰にも聞かせられない話し、と言う事なのだろうか。

トウヤは上半身を起こして、はやてと向き直る。

ユウオもまたその傍らに立った。

「悪いね。本来ならばこんな無粋な真似はしなくても良いのだろうが」

「いえ」

首を振る。

トウヤの言わんとする事を察した為だ。

今の時空管理局は完全には信用出来ない。

これが二人の共通認識だった。

クラナガンで起きた、感染者の大量転移事件。

タカトの言葉を信じるならば、それに管理局の人間が関わっている可能性はある。

タカトの言葉を完全に信じる訳では無いが、可能性は否定出来ない。その為、トウヤが施した処置は当然と言えた。

「さて、八神君。率直に言う。グノーシスからアースラにメンバーを出向したいと思うのだが？」

「ウチに、ですか？」

はやてが問い直す。それにトウヤは頷く。

「うむ。私の予想が正しいならば、近い内に大きな動きがある」

「それはナンバーっ……いえ、伊織タカトが……？」

666と言いそうになって、訂正しながらトウヤに聞く。
それに微笑みをトウヤは浮かべる。

「呼び易い方がいい。……一つはそれだ。だがもう一つある。……
君も、何かしら気付いているのでは無いかね？」

鋭い。

はやてはそれだけを思う。

最近の感染者絡みの事件は何かおかしい。

それにタカトからの情報。

それらは決して無視出来るものでは無かった。

「心当たりはあるようだね？結構だ。……さて、ユウオ。頼みがあるのだが」

「うん。何？」

今度はユウオへと視線を流す。

それにユウオも頷く。

「グノーシスに戻って、出向メンバーを選抜して欲しい。選定は君に任せるよ」

「うん。……でも、いいの？」

ユウオは頷きつつも尋ねる。

元来秘書であり、位階位を持たない彼女にはその権限は無い。

人事はトウヤが基本行うのが常だ。

だが……。

「私はこの通り動けないのでね？それに君ならば任せられる。他も文句は言うまい。リストは通信で送ってくれたまえ」

トウヤは構わない。

自分の身体を見下ろしつつ言う。

ユウオは今度は疑問を挟まず頷いた。

そしてそのままはやてへと視線を戻す。

「こうなったが。……構わないかね？ 八神君」

「あ、はい。……大丈夫です。出向の件。確かに承りましたわ」

頷くはやてにトウヤは微笑む。

そして、ユウオは防音魔法を解き、カーテンを開いた。

「さて、ところで八神君。シオンはどうしてるかね？ ダイブから戻って来たと言う話しは聞いたが……」

「あゝ。シオン君ですか……」

トウヤの問い。それにははやては少し苦笑する。
そんなはやてにトウヤ達は訝し気な顔をする。

「……？。どうかしたのかね？」

「いえ、シオン君は今……」

はやてが口を開きシオンの現状を教えた。



（な、何だ？）

時間ははやとトウヤの会話から少し戻る。

シオンの朝は早い。

基本、朝4時に起きるのが常だ。

しかし、今日のシオンは違った。

既に朝5時。

普通ならば、イクスがシオンを叩き起こすのだが、何故か起こしに
来ない。

そして、今。シオンは謎の、頭痛、を抱えていた。

それだけでは無い。

もの凄い寒気がして、ぞくぞく、と言った感覚がシオンを走り抜ける。

さらに、喉がやたらと痛い。

頭はボーとして、思考がまとめられない。

そんな、初めて、の感覚にシオンは戦慄する。

（双重精霊装填？ いや、融合の連発？ いやいやカリバーンの反動？）

取り敢えず心当たりを探るが、どれも違う気がする。

一体自分に何が起こっているのか？

それがシオンには解らない。

「あ、頭痛い……」

眩き、自分の声にまた違和感を覚える。

もの凄い掠れている。

シオンは未だに声変わりをしておらず、それを実はコンプレックス
にしていた訳だが……

（こ、声変わり、てこんな早くなるもんだっけ？）

んなわきやあ無いが、シオンには解らない。
ベットから起き上がるのもしんどく、シオンはただ転がる。
そんな時、シオンの部屋のチャイムが鳴る。
同時に部屋内に、声が響いた。

《シ〜〜オン。起きてる〜〜？》

声からするとスバルだ。

出来れば起き上がりたくも無いが、そう言う訳にも行かない。
無理やり立ち上がり、部屋の入口に向かう。
ふらつく頭を何とか押さえて到着。

手元のコンソールを操作し、ロックを解除。
ドアを開いた。

「おはよ、シオン。……てアレ？どうしたの？」

「……おはよう。いや、ちょっとな……」

ドアを開いた先にはスバル、ティアナ、エリオ、キャロが居た。
皆、シオンの様子を見て驚く。

「どうしたのよ？何か辛そうだけど……？」

「ん、ティアナもエリオもキャロもおはよう。いや、何か身体がしんどくてな……」

「大丈夫ですか？」

「シオンお兄さん。顔色も……」

ティアナに続き、エリオ、キャロが心配そうにシオンを見る。
次の瞬間。

シオンは喉からはい上がる息を感じ両手で口元を押さえる。
咳だ。

ゴホゴホと咳をして、喉の痛みに顔を歪める。

「……さっきからこれなんだよ。なんか、頭と喉は痛いし、寒気はするし、妙に頭は熱っぽいし……」

「……アンタ。それ……」

眉を潜めるティアナにシオンは目を向ける。

「……コレ。心当たりあんのか？」

「え？。心当たり、て言うか……解るでしょ？」

ティアナの言葉にしかしシオンは首を傾げる。
本当に解らないらしい。

「シオン……」

「シオン兄さん……」

「シオンお兄さん……」

「え？。待った。何この反応？皆わかるのか？」

スバルを始めとした一同の反応にシオンが聞き直す。
その反応を見て、スバル達は確信する。

「あゝ」と、それぞれ頷く。

「……取り敢えずシャル先生に診て貰いましょう」
「だね」

「え？シャル先生に診て貰うようなもんなのか？」

シオンの反応に一同は苦笑いを浮かべる。
それはまあ、何と言うかとても生温かい笑みであった。

「さて、それじゃあ行くわよ？」

「待て待て待て！一体何々だよ、コレ！」

「いいから、いいから」

「て、背中押すなスバル！」

「いいですから、いいですから」

「……エリオ。何かおざなりな扱いを受けてるような気がするんだが……」

「大丈夫です。怖くないですよ？ シオンお兄さん」

「……もういいや……」

シオンは身体のたるさも手伝い、諦める。

そのまま医務室へと向かった。



「風邪ね♪」

開口一番。

シャルはシオンを診た後。即座にそれを告げた。

「か、風邪？」

「ええ、風邪」

「あの万病の元とか何とか言われる？」

「……まあ、間違いじゃないわね」

後ろから付き添ったティアナがポソリと呟く。

エリオ、キャロも少し苦笑い気味だ。

ただスバルだけが少し考え込んでいる。

「あの一度喰らったら最後。頭痛のあまり、あたりを転げ回ったり、腹が痛くて飯が食えなくなったり、身体中が痛くなるって言う!？」

「……それ、誰から聞いたのよ……?」

「……トウヤ兄いから……」

一同。シオンのその返答に溜息をつく。

そしてシャルが最後に念の為、シオンに確認する。

「風邪とか病気になった事とか、あるかしら？」

「……初めてです」

シオンは今まで風邪を始めとした病気に罹った事が無かった。元々、人並み以上に頑丈な身体である。

たいていのウイルスには負けないだけの頑丈さはあった。シャルがシオンの返答に苦笑いしつつ話す。

「多分。今までの無茶でいろいろ身体が参っちゃったのね」

「ハア……」

そう言われると心当たりはある。と、言うか多過ぎる。

封印解除や、融合の連発。多重精霊装填やカリバーン。ダイブの中のシオンの無茶は、よく死ななかったな、と、言う分類に入る。その中には……

「「あ……」」

「?。どうしたんですか? ティアさん。スバルさん?」

「う、ううん。何でも無いよ……」

「うん。何でも無いわ……」

(……気付くよな。やっぱり)

二人の反応にシオンはそう思う。

ダイブ内での怪我。それは現実のシオンには反映されなかった。

しかし、実際に何も無いなんて事は有り得ない。

結局的所、シオンにはそれが免疫効果や、体力。精神力をこっそりと奪いさったと言う事だろう。

「あの、さ。シオン……」

「スバル。……それにティアナ。こうなったのは俺の責任だ」

きっぱりとシオンは言う。

出来たら二人には気にして欲しくは無い。

無理な話ではあるだろうが。

シオンの言葉に、しかしスバル、ティアナは少し悲し気な顔をする。そういった顔を見たく無いから言ったのに逆効果。

それにシオンはやれやれと溜息を着いた。

「取り敢えず、今日は一日安静にして寝てる事。お薬出すわね」

「はい」

シャルに頷き、立ち上がるが、フラつく。

そんなシオンを両横からスバル、ティアナが支える。

「シオン。大丈夫？」

「風邪引いてるんだから無茶するんじゃないわよ……」

「あ、ああ。悪い……」

ぐっと息を飲み、ふらつく身体で何とか立ち直る。

そしてシャルから薬を受け取った。

「それじゃあ。お大事に〜♪」

「「ありがとうございます」」

「……俺じゃなくて、何でお前等が言うんだ……」

シオンのぼやきにしかし、礼を言った二人。

スバルとティアナは構わない。

シオンの手を取り引っ張っていく。

「……て、おい？」

「ごめん。エリオ、キャロ。今日私休む、て言って貰えるかな？」

「私もお願いね？」

「「はあ……」」

シオンを引っ張りながら二人はエリオとキャロにお願いする。

その妙な気迫に押されたのか曖昧にも二人は頷いた。

「……休みなんか取って二人共何する気だ……？」

「「決まってるよ／でしょ！」」

ふらつく頭を堪えながら聞くシオンに二人はぱっと振り向く。
そしてそのまま告げた。

「「看病だよ／よ！」」

つまりはそういう事になった。



そこで家の主。ユーノ・スクライア。そして高町ヴィヴィオは眼前の光景に呆気にとられていた。

伊織タカトである。

そしてその前に積み上げられた皿、皿、皿、皿。

自分で作った料理をタカトは片っ端から胃袋に収めているのだ。

その速度。そしてその量。どれも尋常では無い。

「え〜と。タカト……？」

[illegible]

ちなみに今的一幕だけで皿にドンつと乗ったロースト・チキンが消えた。

そのあんまりな食欲に一步も二歩も引きつつユーノは尋ねるべき事を尋ねる。

「きよ、今日はやけに食べるね……？」

「……まあ。いろいろあつてな……」

さらに皿いっぱいに盛られたチャーハンをかつ喰らいながらタカトは答える。

取り敢えず、ヴィヴィオに真似はしないようにと教えるが。

ヴィヴィオからしてもそんな真似は出来よう筈も無い。

ちなみに、食卓に乗る料理は和・洋・中にこだわら無い。

詰まる所、めちやめちやに料理が置いてあつた。

冷蔵庫を底ざらいしたような量だが、これは全てタカトが帰って来る際に持って帰って来た食材であった。

最初、その量を見た時。二人は何のギャグかと疑ったものだが……

○

「あの食材。全部、個人用、だったんだね……」

[illegible]

「タカト、すごいね……」

流石に呆れたようにヴィヴィオが呟く。

ちなみにトウヤの言通りならばタカトも相応の怪我を負っている筈なのだが、今のタカトは、無傷であつた。

勿論、これには訳がある。

タカトにあつてトウヤに無いもの。

つまり究極の肉体コントロールたる、仙術の有無であつた。

超回復の秘技。

新陳代謝を加速させて怪我を治す術だ。

ぶっちゃけると細胞分裂を促進させる突貫工事な訳だが、勿論デメリットがある。

今のタカトの食欲がそれだ。

つまり今のタカトは見事なまでの、エネルギー、切れ状態なのであった。

勿論トウヤにしてもタカトにしてもこのデメリツが無く、また即座に怪我を治す方法はあるにはある。

しかし、今のタカトには使えないし、魔力枯渇状態のトウヤにもまた使えない。

その為、タカトは大量の飯を食べ。トウヤは怪我を回復出来ずに寝込んでいる訳だ。

閑話休題。

「ふうふう。食らった、食らった……」

「本当に、全部食べるなんて……」

流石にユーノが呆れる。

殆どタカト一人で食べてのけたのだ。
呆れもする。

「さて、片すか……。ああ、ヴィヴィオ。食休めが終わったら腹ごなしも兼ねて稽古をしよう。準備するようにな？」

「うん。わかった」

にぽつと笑うとヴィヴィオは自室へと戻った。

それをユーノは見ながら微笑む。

タカトは皿を洗いに席を立った。

「でも、本当。今日は凄い食べたね？いつも食べ足りなかったりする？」

「いや、そんな訳じゃあ無いが……。さっきも言った通りいろいろあつてな……」

苦笑する。

そんなタカトを見て、ユーノは尋ねる事を止めた。

これ以上は何を聞いても答えない。

それを悟ったからだ。

だからその代わりにユーノは微笑んだ。

「そっか……。あ、よかったら今日付き合ってよ」

そう言いつつ、手を口元に傾ける動作をする。

それにタカトもまた笑う。

ユーノはこう言っているのだ。また飲もう、と。

「お前も好きだね……。了解だ。家主殿？」

手を上げて答えた。

それに互いに笑う。

結局。ユーノは怖かったのかも知れない。

この気持ちいい時間を壊す事が。

だから何も聞かない。

だが……

「タカト〜」

「ああ。それじゃあ。ユーノ。また、後でな？」

「うん。待ってるよ」

リビングを出ていくタカトを見送るユーノ。

だが、ユーノはずっと先。この事を後悔する事になる。
聞けばこんな事にならなかったと。

そう、ずっと後悔する事に。

友を失う事になんてならなかったと。



場面は再び変わり。

アースラ。シオンの部屋。

その中でシオンはベットに居ながら。

非常に、居心地が悪そう、にしていた。

何故か？

答えは単純。部屋の中を慌ただしく動く四人が原因である。

「……………」

「と、冷えシート。もう使えないわね……」

「シオン。布団足りる？ 寒くない？」

「……………」

ティアナが額に張っている冷えシートを取り替える。

そしてスバルが自分の部屋の布団を持って来た。

「……おい」

「シオンお兄さん。汗かいてないですか？」

「……まあ、そこそこ」

「なら汗拭かないと……」

「て、待て待て！ 自分で拭く！ 自分で拭けるから！？」

パジャマの上着を脱がし汗を拭こうとするキャロをどうにか止める。
……余談だが、キャロには羞恥心を持って欲しいと心の奥底から思う。

そして、スバルとティアナもタオルを持ってスタンバイするのは止めて欲しい。

「シオン兄さん。スポーツドリンク持って来ましたが、飲みます？」

「んあ。助かる……」

「大変ですね」とシオンにだけ聞こえるように呟きながらエリオはスポーツドリンクを手渡してくれる。

それに感謝しながら心の中だけで同意する。

スバルとティアナの看病。

それにエリオとキャロも協力するとの事でFW四人は休みを取り。今、シオンの部屋に詰めている。

その看病にシオンは感謝しつつ、しかし。

「ほら、シオン。プリン貰って来たよー」

「桃缶もあるわよ？」

「……いや、そんなに……」

「「……食べられない？」」

「……頂きます」

と、まあ終始こんな状況であった。

シオンは思う。

この二人。飼い猫を構い過ぎて嫌われるタイプだと。

取り敢えず、布団五枚（シオン、スバル、ティアナ、エリオ、キャロの布団）は暑すぎるからどけたいのだが。

重いし。

「シオン。汗凄いね……」

「そろそろパジャマとか……とか、変えなきゃいけないわね……」

……の部分に何が入るのかは察して頂けると助かる。

取り敢えず顔を赤らめてそんな事は言わないで欲しい。

「えっと、代えのパジャマと、……は……」

「ま、待った。……着替えを捜すのは待った……」

いろんな意味で気力をこっそりと持っていかれつつ着替えを捜す三人を止める。

「エリオ。悪いが頼む……?」

「はい。……て、シオン兄さん。どうしたんですか?」

頷き。しかし?顔を浮かべるエリオ。

シオンが思案気な顔になったからだ。

エリオの問いにシオンは口を開く。

「イクスはどした?そう言えば朝から顔見らんけど」

「あれ?シオン知らないんだっけ?」

柵から離れつつスバルが答える。

それにティアナもまた頷く。

「ほら、イクス。いろいろ変わったじゃない?それに凌駕駆動なんて無茶もやったから、今はシャーリーさんの所でメンテ中よ」

「……俺、聞いて無いんだが……?」

「そうだよ?だってシオン。一人起きなかったもん」

そう、シオンはダイブしたメンバーの中で一人。なかなか起きなかったのだ。

一度は起きたものの、やはり融合やらの反動からか、スバルの顔を見た後、即座に自分の部屋に戻り一日中寝ていたのだ。

イクスの事を説明する暇が無かったのは言うまでも無い。

「道理で顔見らんと思ったら……」

「明日には戻るそうよ?だから看病は私達に任せなさい」

「そうだよー」

ティアナ、スバルの言葉に見えないように嘆息する。
時計を見る。

もうすぐ昼だ。

と、なると・・・

「あ、もうお昼だね？」

「お粥貰って来なきゃね」

「僕、行ってきます」

「あ、エリオ君。私も行くよー」

こうなるわな？

予想通りの展開に、シオンは息をつく。

「なあ？お前等は昼飯。どうするんだ？」

「ここで食べるわよ？」

「うん。シオンの事、心配だしね」

これもまた想像通り。

多分、エリオ、キャロも同じ事を言うだろう。

だが、シオンは布団の中で苦笑する。

初めての風邪。

多分一人だけだったならばきっと不安だったに違いない。

だけど、一緒に居てくれる奴らが居る。

それは何て、安心出来るんだろうと。

そう、シオンは思った。

「お粥、持って来ましたよー」

「皆さんの分も持って来ました♪」

エリオとキャロがその手に、お粥を持ってくる。

その数、5皿。

まずは昼飯だな。

そう思いつつ、シオンは上半身を起こした。

・・・お約束として、
'四人'から

「あゝくん」があつた事を追記しておく。



昼ご飯が終わり一時間。

ティアナは椅子に座り、傍らのベットで眠るシオンの顔を見る。

スバルはなのはに。エリオ、キャロはフェイトに呼ばれ、席を外している。

スバルは感染していたと言う事もあり、ここ毎日、検査を受けていた。

今日もそれと呼ばれたのだ。

何せ、史上二人目の治療者だ。念を押して検査するのに越した事は無い。

エリオ、キャロはフェイトと共に本局のトウヤの元に行ったそうだが、何でもトウヤ、ユウオが二人に用事があるらしく、二人を呼んだのだ。フェイトはその付き添いである。

静かな時間。

さっきまでがかなり賑やかだった事に、ティアナは今更気付いた。でも、こんな時間も悪くない。そう思う。

椅子から下りて、その下の床に膝を付ける。そして、ベットに肘をついて、シオンの顔を覗き込んだ。

綺麗な顔してるわねー。

そう思いながら、思わず、肌に触れてみる。

キメ細やかな肌。

その感触を楽しむ。

「ん……にゅ……」

「プツ……、にゅ……、だって♪」

シオンのその寝言？が楽しくてさらに肌に指を滑らす。鼻先をくすぐるとシオンはさらに寝言を呟く。

「ん、ぬ。にゅ、にゅ、にゅ、にゅ……」

「ん……♪面白い寝言ね……♪」

結構可愛いかも。

シオンに悪戯しながらティアナはそう思う。

元々シオンは女の子のような顔立ちだ。

普段の言動が言動だから隠れているが、こうして大人しくしていると、妙に可愛いらしい。

さらにその寝言だ。

これがティアナの心をくすぐりまくっていた。

暫くそうやって遊んでいるとシオンが寝苦しかったのだろう、顔を横に背ける。

ティアナ側に。

すると、知らず知らずの内に顔を近付け過ぎていたのだろう。ティアナの鼻先とシオンの鼻先が触れる。

「ひゃっ……！」

「ん、ぬ……にゅ……」

その距離にびっくりして、ティアナは声を上げ、少し背を立てる。結果としてシオンと顔が離れた。

ドキドキとする鼓動を押さえシオンの顔を眺め見る。

シオンは相変わらず

「ん、にゅ〜」と寝こける。

取り敢えずシオンが起きない事にティアナはホッとする。

そして、驚かされたシオンにちよつとムツとして再度、指で鼻先をつつく。

すると、またシオンが顔を動かした。

上へと。

すると自然、ティアナの指はシオンの唇に触れる。

「……あっ……」

「ん、にゅ……」

一瞬指を引こうとして、でもその感触にティアナは指を引けなくなる。

色素の薄い、しかし朱い唇。

プニプニしたその感触に指が引けない。

（気持ち、いい……？）

「む、にゅ〜」

相変わらずシオンは妙な寝言を上げて眠るだけだ。

唇の感触にティアナは鼓動が早くなるのを自覚する。

もし、唇と唇で触れたらどうなるんだろう？

そう思ってしまうと止まらなかった。

ゆっくりと顔を近付けていく。

（だめ、こんな……）

頭では解っている。

でも、止められない。

止まらない。

ティアナは顔を近付ける。既に吐息がお互いの唇に掛かる距離だ。

(ごめん……)

誰に謝ってるのかも分からない。

だけど、何故か謝罪の言葉が頭に浮かんだ。

そして唇が……

触れかける瞬間。

いきなりシオンの目が開いた。

「……っ！……！！！」

「ん、にゅ……何だぁ……？」

瞬間でティアナは飛びのき、悲鳴をあげかける口を両手で押さえる。シオンはそんなティアナの事情は露知らず、半眼で目を指で擦り、上半身を起き上がらせる。

同時に伸びを一発。

片手を上にあげる。

「くぁ……。寝ちゃった。……よ。ティー」

「ち、違うのよっ！」

「ーアアナ？」

いきなりまくし立てられてシオンが？マークを頭に浮かべる。しかし、ティアナは気付かない。

「ちょ、ちょっと熱を計ろうとしただけよ！こう額をつけて！でも興味が無い訳じゃなくて、その、シオンの唇柔らかいなくとか、思った訳じゃなくてっ！！」

「……オ……イ？」

シオンが呼び掛けるがティアナにはまるで届かない。顔を真っ赤にしてさらにまくし立てる。

「その唇に触ったのも故意じゃない、て言うか！指で触ってたら気持ちよくて、ついでにアンタが『にゅゅ』とか言うから面白くて！」

「~~~~。待った。ティアナ落ち着け、落ち着け」

両手を前に出して、取り敢えずティアナを落ち着かせる。そうして漸くティアナの言い訳だか、白状だかは泊まった。

「取り敢えず、言わせてくれ。何が何だか解んねえ……」

「……えっと、……アンタ。覚えて無いの？」

「だから、何の事だよ？」

改めて尋ねるシオンにティアナはホッと息をつく。

安心した。したけど、妙に残念な気もする。

そんなティアナに相変わらず？顔を浮かべるシオン。

その顔を見て、ティアナは再度嘆息する。

「で、結局何だったんだよ？」

「いいの。……気にしないで」

「???」

訳が解らんと首を拵るシオンにティアナは微苦笑を浮かべる。

そう、何も無かった。

ならばそれでいい。

そう思い、床から立ち上がろうとする。

もし、神様とやらが居るとしたならば思いっきり悪戯好きだろう。

ついでに一発ブン殴る。

後にシオンはそう言う。

ティアナは立ち上がろうとして、しかし。床に膝を付けたままの状態だったのがまずかったのか。足に痺れを覚える。

そして前方に、シオンの方へと体勢を崩した。

「キャッ！」

「て、わ。ばかー」

即座にティアナを支えようとするシオン。

しかし、彼の体調は完全に復活出来て居なかった。

つまり、力が入らない。

倒れて来るティアナを支えられずそのまま一緒に倒れ込む。

そしてー。

「ただいまー。ごめん。ティアー。遅くなっちゃー」

扉を開きスバルがシオンの部屋に入って来た。

そして、その視界に映ったのは。

ベットの上に倒れ込み。

唇を重ねて硬直する二人だった。



「んっ……」

「むっ……」

一瞬何があったか、互いに理解出来ない。

しかし、二人共目を見開き、お互いを見る。

唇はこの上無い程重なっていた。

柔らかな。あまりにも抗いがたい感触。

それを認識した瞬間。

一気に血が頭に昇る。

だが――。

「ティ、ア？ シオン……？」

声が響いた。

それに二人は弾かれたように離れる。

そして声がした方を見ると、そこにはスバルが居た。

呆然と、目を見開いて。

「ス、スバル！？」

「今の……っ！」

二人、声を上げる。

瞬間。スバルは耳を両手で塞いで、そのまま開きっぱなしだった扉から駆け出した。

「スバルっ!!」

「ちょっ……! 待ちなさい!!」

慌てて追う二人。

しかし、自動ドアは二人を遮るように閉まった。

「くっそ……っ!」

扉から抜けようとして、しかし。ガクンと後ろに後方に体が泳ぐ。裾を掴む感触に気付いた。それを掴むのは、ティアナ。

「ティアナ……」

「ーっ! ご、ごめん。何でも無い! 早く、追わなくちゃ!!」

ぱっと手を離し。ティアナが扉へ向かう。
だけどシオンはそんなティアナに声を掛ける。

「その……、さっきの事なんだけどよ」

「……大丈夫よ、気にして無いわ」

あくまで背を向けたままティアナは言う。

「だけどー」

「気にしてない、て言ってるでしょう!!!!!!」

叫ぶ。

まるでその先を言わせ無いように。

それにシオンは口を閉じ。

変わりに背中からティアナを抱きしめた。

「ーっ！ちよっ！シーっ！！」

「……悪い。けど、せめて謝らせてくれ」

そのまま告げる。

それにティアナから力が抜ける。

そのまま体重を、シオンに預ける。

「……今度。私の言う事、何でも聞く事」

「……ん？」

「それで許してあげる。そう言ってるのよ……」

ティアナの言葉。

それにシオンは一瞬呆気にとられ。

だが笑う。

「了解。お安い御用だ」

「言ったわね？安くはないわよ？……（一応、私の初めてだったんだし）」

ティアナが最後にポソリと呟いた事だけが解らず？マークを浮かべるシオンに『あーっ！！』と唸り、腕を振りほどき、振り向き様にシオンにビシッと指を突き付ける。

「うお……っ！」

「いいから、早くスバルの所に行きなさい！！誤解しちゃってるみたいだしっ！」

突き付けられた指に若干ビビりつつ、シオンはティアナにコクコクと頷く。

それにティアナは笑う。

「ほらっ！ならさっさと行く！！」

「おうっ！解った！！」

背中を叩かれてそのままシオンは走り出す。

だが、扉を出る直前でそのままティアナへと振り向いた。

「？。どうしたのよ？」

「言い忘れてた。……ありがとな、許してくれて。やっぱりお前。良い女だよ」

「ーっ！！このバカっ！！変な事言わないでさっさと行きなさいっ！！！！」

叫び、傍らの枕を投げ付ける。

それをシオンは走り出して避け、そのままスバルを追い掛けた。ティアナは枕を投げた体勢で息を荒くして。

そのままペタンと床に座り込む。

そして指で唇をなぞった。

「本当、バカなんだから……」



「スバルっ！！」

アースラの中を走り回る。

スバルの姿はどこにも無かった。
いっそ、官制に聞くか？と、若干危険な思考にシオンはなりつつも走る。

その時、見覚えのある後ろ姿が見えた。
ずっと、走っていたのだろう。
まだ耳を押さえてる。

「にやろっ！おおっい。待てっっ！」
「ーっ！着いて来ないでっ！！」

叫ぶスバル。

しかし、そんな訳にも行かない。

走る。

走る、走る。

走る、走る、走る。

アースラ中を走り尽くす。
既に何周したかも解らない。

「あ、シオン君、元気にー」
「すいません。また後でー！」

「シオン。風邪治ったの？あんまり走り回ったら駄目だよー！」
「今度は気を付けます！！」

「ありゃ？シオン君やん。あんな？聞きたい事が……」
「すんません。また後で！！」

いろいろすれ違いつつもシオンはスバルを追う。
と、言うか。何故に会う面々は前線メンバーばかり？
妙な事を疑問に思いつつシオンはスバルを追う。

「あれ？シオン兄さん？」

「シオンお兄さん。もう大丈夫なんですか？」

「すまん！二人共、また後でな！」

擦れ違い様に返事だけを返す。

追う、追い続ける。

そして・・・

「あっ……！」

「っ……て、このアホっ！」

耳を押さえて走るなんて真似をしていたからか、スバルがつまづく。
崩れる体勢。

それにシオンは軋む体を無視して瞬動を発動。

その体をひっ掴む。

しかし、一緒に倒れ込んだ。スバルはその場で膝をつき。シオンは
寝転がる。

「シーっ」

「漸く捕まえたっ！艦内中走り回りやがって……」

荒い息で、フラつく頭を押さえながらスバルを見る。しかし、スバルはその視線を拒むように目を合わせない。
シオンはそれに苛つく。

「取り敢えず、話そう？」

「やだ」

「て、うおい！やだじゃねえよ」

そうは言うがスバルは取り合わない。

それにシオンはデカデカとため息をつく。

「……解った。ならこっからは俺の一人言だ。勝手に喋る」

「聞かないから」

「別に良いって。……あれは事故だ。ちょっとティアナが転んでな。それでまあ、支えようとしたんだけど。……俺、まだ力入らなくてさ。ティアナ、支えきれなくて。それで一緒にベットに倒れちまったんだ。そしたら偶然。……その、唇が、な」

「……」

一気にまくし立てるシオンだがスバルはまだシオンを見ない。

プイっと顔を背けている。

シオンもまたスバルを見らずに続ける。

「わざとじゃないし。アレは事故だけど、さ。……でもしたのは事実だ」

「……っ！」

漸く、ちらりとスバルがシオンを見る。

シオンはそれを感じながらしかし。立ち上がり、横を向いて、スバルに視線を合わさない。

頭をかいて、ちょっと罰が悪そうにする。

そしてそのまま口を開いた。

「……だから、その……ごめん……」

「……何でシオンが謝るの？」

スバルが固く閉じていた口を開く。
シオンもまたスバルに視線を戻した。

「……何でだろうな？けど、お前に謝らなきゃいけない気がしたんだ」

「そっか……」

「そうだ」

シオンの答えにスバルが笑顔を見せる。

それにホッと安心する。

スバルもまた立ち上がった。

だが何故かその顔に浮かぶのは悪戯をしかけるような顔。
それにシオンは少し面食らう。

「でも、シオン。ティアとキスしてどうだった？」

「いや、どうだった、て何が？」

「気持ちよかったです？」

「バツ！答えられるか！つうか、一瞬だったし解んねえよ！！」

何と言う質問をするのか。

スバルの問いにシオンは顔が真っ赤になっている事を自覚する。
そんなシオンをスバルは近付きなが質問の手を緩めない。

「ふう〜ん。本当かな〜」

「本当だっつうの！！」

さらに近付くスバル。

その距離はいつの間にか互いの吐息が届く距離だ。

しかし、スバルは止まらない。

「本当に。覚えてない？」

「お、おう。てか近っー」

「ならー」

今度はちゃんと覚えてね？

その最後の言葉と共にスバルは最後の距離を詰めた。
そのままシオンの唇に自分の唇を重ねる。

「んっ……」

「！！ん、……！！」

自分の唇に重なる感触。

本日二度目にして、人生二度目の感触にシオンは目を白黒させる。

驚きで声が出ない。

そして、その感触に。抗えない。

数秒の間を持って、スバルは漸く離れた。

えへへと笑う。

顔を、紅潮させながら。

「ちゃんと、覚えてくれた？」

「あう、あうあうあう」

スバルの問いに、しかしシオンは答える事が出来ない。
だがコックリ、コックリと壊れた機械のように頷いた。

「うん♪なら、よかった♪じゃ私。行くね？」

「あ、う。あうううう」

「じゃっ！またっ！」

壊れているシオンを置いて『恥ずかしーい』と言いながらスバルは駆けていく。

スバルが曲がり角を曲がって、通路の向こうからエリオとキャロが出て来た。

「あ、いたいた。シオン兄さん。スバルさんが何か嬉しいそうでしたけど。何かありました？」

「あうあうあうあうあ」

「シオンお兄さん？」

直後。

シオンは

「きゅう……」と、変な声を上げ、パタリとその場に倒れた。

「き、きゃっ！シオンお兄さ〜ん！」

「うわっ！凄い熱だ！！キャロ！シャル先生呼んで！！」

エリオとキャロが慌てる最中。

シオンは目をナルトにして

「あうあうあうあう」と呟き続けていた。



アースラ艦内女風呂。

そこにティアナは一人でお風呂に入っていた。
リボンは解いて、今はその髪を結い上げている。

「まったく。アイツは〜」

シャワーを浴びて湯舟に浸かる。

その中で思い出すのはシオンだ。

先程から数時間しか経っていない。

思い出すのも当然と言えた。

ティアナは軽く唇に指で触れ、しかし首をブンブンと振る。

「何を意識してんのよ。私っ！これじゃあ、まるで……っ！」

アイツが好きみたいじゃない。そう思い。しかし、再度首を振る。

そんな事無いと。

そう、思う。

「だいたい、口は悪いし」

思い出すのは最初のお会い。いきなり戦った。あの出会いだ。
相当口が悪かった事を覚えてる。

「猪突猛進だし。すぐに怒鳴るし。考え無しだし。口ばかり上手いし」

思い出す。思い出す。

シグナムとの模擬戦。

最初の感染者との戦い。

自分をモデルに絵を描いて貰った事。

666との戦いの最中でのぶつかり合い。

暴走する彼と戦ってアースラに戻って来た時。

ダイブ前日の会話。

そして、スバルのココロの世界での戦い。

助けた事。助けられた事。

それ等がティアナの頭に浮かんでは消える。

そう、これでは。

まるでー。

(ティアナ)

「ーっ」

顔を湯舟につける。

そして、ゆっくりと顔を上げた。

自覚する。

顔が紅潮している事を。

そして、ティアナはぽつりと呟いた。

「……好きかも」

ポチャーンと。水滴が湯舟に落ちた。

午後8時。

時空管理局本局医療室。

そこに通信と共にあるデーターがトウヤの元に届けられた。

「これが、出向メンバーか」

《うん。見て貰ったら解ると思うけど……》

「ふむ。精鋭だね？第三位と第四位で固めるとは……」

そのままトウヤはリスト内の名前を読んでいく。

第三位。出雲はやと。

第三位。凧ちひろ。

第三位。小此木コルト。

第四位。黒鋼刃。

第四位。真藤リク。

第四位。一条悠一。

・
・
・
・

「そして、彼等、か。彼等は立候補かね？」

《うん。……シオン君に会いたい、て。特に彼女は》

出向メンバーのリストの末尾にはその名前が書いてあった、

第四位。本田ウィル。

官制補佐。

御剣かすみ。

そして。

「幼なじみ、か」

医療補佐。

姫野みもり。

そう、リストの末尾には記されてあった。

（第二十七話に続く）



ア

「はい♪アリサ〜」

す

「すずかの〜」

ア、す

「「アリサ道場!」」

タ

「……」

皆。こんにちは。今回、司会代理の司会代理をするタカトだ。

ア

「……て、あれ？ シオンは？」

す

「本当だね？ どうしたの？」

タ

「……」

……シオンはあそこにいます。

シ

「ぼーーーーー」

ア

「うわ、何あれ？」

す

「どうしたの？ シオン君？」

タ

「……」

詳しくはまた後で。

さて、では今回のゲストは、前回から召喚しっぱなしのこの四人だ。

ヴ

「はい……ヴィヴィオです……」

祐

「祐希奈よ……」

カ

「カナンだ♪宜しくな♪」

メ

「メイデンだ……しかし」

カナ

「カナメです♪……ええ、二人共。どうしたんですか？」

ヴ

「だって……」

祐

「今回は……」

タ

「……」

例の教導模擬戦だな。期待も相当高まっている事だし、当然やるぞ？

ヴ、祐

「「やっぱり……」」

カ

「……まあ、前回俺もシオンと戦ったし。胸を借りる思いでやれよ」

祐

「人ごとだと思って……」

ヴ

「うう……」

メ

「ヴィヴィオ。祐希奈。大丈夫だ。例えばタカトさんが相手でも諦めなければ勝機はある」

カナ

「そうですよ♪二人共ファイトです♪」

ア

「さて、話しは着いたみたいね♪じゃあまずは今回の話しのおさらいね♪……え〜と。何処のラブコメ？」

す

「あ、ひょっとしてシオン君があんなになってるの、て……」

タ

「……」

ええ。その通りです。

1stと2ndを立て続けに失い。

さらに二人の女性にキスした（された？）がどうにもショックらしく。まあ、あんな感じに。

シ

「ぼーーーーー」

カ

「シ、シオン……」

メ

「マスター。よく見て置くん。今後の参考の為に」

カ

「何の参考だよっ!!」

ヴ、祐

「何？何の話し？」

カ

「ーっ！いや、何でも無い！何でも無いぞっ！」

メ

「……マスター……」

カナ

「ヘタレですね♪」

カ

「ぐ、くっ！何故だ。反論出来ないっ!!」

ヴ、祐

「「だから、何の話し？」」

カ

「いや、本当。何でも無いから。な？」

ア

「さて、場が温まった所でお次は質問コーナー♪」

「では、読ませて頂きます。『設定はいいんだけど、主人公がしょぼい』です♪」

カ

「……しょぼいか……？」

タ

「……」

へタレなのは否めんがな。

シ

「ぼーーーーー」

ア

「それと最初に主人公の説明が無い事。いきなり第三話から弱気になった事。第四話で口調が変わった事があげられてるわね？」

タ

「……」

それに関して。作者から手紙が来てます。

では、書き上げます。

まず、主人公の説明。何が目的なのか？

こう言うのを何故最初に説明しないのか、ですが。これは意図的にシオンの情報を第一部では隠す事が狙いです。

結果として第二部でそれらの過去を一気に出して、物語に引き込む事が目的でした。（さらに伏線も張っていた）

解りにくくてすみません。

で、次。あの弱気シオンは内心ではシオンはああ思ってたんです。ただ隠してただけなんですよね。

それが疲労も重なって噴出しただけなんです。
三つ目。……年上に、敬語を使っただけなんですよ。アレは。シオンはそこら辺。徹底的にしつけられてるんですよ。
以上です。
解りにくくて、すみませんでした。

との事です。

ア

「長いわね〜」

す

「ま、仕方なくはあるかな？」

タ

「……」

では、次。これは祐希奈殿からか。

祐

「正確にはウチに来た質問のシオンバージョンなんだけど……」

シ

「ボーーーーー」

ヴ

「シオン君。あれじゃあ、答えられないよ……」

カ

「……俺は、ああはならない。ああはならない……」

メ

「どうだろうな？」

カナ

「もっと凄い事になるかもですよ♪」

タ

「……」

それは謎だな。

まあ、代わりに俺が答えよう。

質問はシオンVSカナンで、カナンは何処で勝負を着けたかった、のシオンバージョンだったな。

これに対する答えは簡単。

シオンは最初っからラストの砲撃対決を狙っていた。だ。

カ

「……そうなのか？」

タ

「……」

ああ。剣撃対決ならともかく。シオンの精霊技には数限りがあったからな。他の技では勝負にならないし。

メ

「四式以上の抜刀剣術だな？」

タ

「……」

その通り。精霊の力を借りないとそれ等に対抗できないと判断したシオンは徹底的にカナンに技を使わせて魔力を削る作戦に出た訳だ。そして最後の砲撃対決を制する。

まあ、結局は相打ちだから意味は無かったがな。

一同

「成る程……」

シ
「ぼーーーーー」

ア
「さて、質問は以上ね♪じゃあ、早速……！」
す

「始めよっか♪」
ヴ

「ああ、始まっちゃうんだ……」

祐
「取り敢えず、ルールと罰ゲーム教えてよ？」

タ
「……」

ルールは簡単だ。
ヴィヴィオ。祐希奈殿の二人がかりで俺に一撃あてれば勝ち。
その前にKOされれば負けだ。

ヴ
「え？一撃でいいの？」

祐
「ホッ。心配させないでよ……」

タ
「……」

ただし。俺は手加減なし。容赦なし。一切の手心なしでいくので覚悟するように。

ヴ
「……………」

祐

「……………」

タ

「……」

さて、次は罰ゲームだったな。
罰ゲームはこれだ。

タカトが取り出す特大のショートケーキ。（1ホール）。

ヴ、祐

「…………へ？」

タ

「……」

これを丸一つ食してもらおう。

ヴ

「何だ……」

祐

「1ホールはちょっときついけど、それくらいなら……」

タ

「……」

さて？それはどうかな？俺がただのケーキを出すだけでも？

ヴ

「え…………？」

祐

「まさか、辛子がいっぱいとか、ピーマンケーキとか……」
ヴ

「ええええっ!？」

夕

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

ふむ、違うな。そんな
'軽い'ものでは無い。

カナン。このケーキ切り分けて貰っていいか？

力

「え……いいけど。よつと。……ん!？」

ア

「え！何これ！？」

す

「きやああああ！」

x

「こ、これは……」

力ナ

「……凄いですね……」

ヴ

[.....]

祐

.....

一同が見たものは。
切れ目から溢れでる。

一
油
一

油、油、油、油、油、油、油、油、油、油、油、油、油、油、油、油。

既に皿から溢れ、テーブルからも零れ落ちる。油。

カ

「……何だ、これ？」

メ

「ま、マスター。こ、これ怖いぞっ！」

カナ

「もう一種のホラーですよ！？この光景！！」

ア

「で、タカト！これ何！？」

す

「こ、怖いよ～～！！」

ヴ

「……………」

祐

「……………」

タ

「…………」

これこそが対女性陣用最終兵器い。

メタボ対策がなあんぼのもんじゃあいい。

超不健康食品っ。

これを食べればあ君もメタボに一直線っ。

超うファトン・ケーキィ（B y若本）だ。

ヴ、祐

「……………」

カ

「…………いい？」

ヴ、
祐

「いいやあああああああああああああああああああああ
あああつつつつつ！……！！！！！！！！」

ア

「凄い、
叫びね……」

す

「気持ちにはよくわかるよ……」

X

「あれは私も怖いぞ……」

力ナ

「……實際、これどれくらい太るんです？」

夕

⋮

計算では約32%から46%の体重増が見込める筈だ。

ア

「……リアルな数字がひたすら怖いわ……」

す

「うん、うん……」

ヴ

「祐希ちゃんっ！」

祐

「ヴィヴィオっ！」

ヴ、
祐

「この勝負、負けられないっ!!!」

夕

⋮

頑張ってくれ。手は抜かんがな……

ア

「えっと。盛り上がってる所悪いけど、この教導模擬戦。次話の番外話に持ち越すわよ?」

ヴ、祐

「「ええええ~~~~っ!?!」」

タ

「……」

む。文字数か?

す

「うん。本編が思った以上に肥大化しちゃったから……」

カ

「こ、ここまで盛り上げてぶった切るのか……」

メ

「ウチ以上だな……」

ヴ

「大丈夫!! 祐希ちゃん!」

祐

「うん!! 今の内に作戦練るわよっ!」

ア

「と、言う訳で次話は緊急番外話になります♪」

す

「本編を楽しみにしてくれた方。申し訳ありません。すぐにお送りするのでちょっと待って下さいね♪」

タ

「……」

では、今回はここまで。

番外話すぐにお送りするので待っていてくれると助かる。

そして、いつも感想。評価ありがとう。

大層作者の励みになってる。

これからも送ってくれると俺も嬉しい。

最後になるが、オリキャラ投稿ありがとう。皆いいキャラで。とてもイメーজしやすい。最高のタイピングで出すので刮目あれ♪では。

一
同

『また次回』
~~~~~♪

シ

「ぼーろーろーろーろーろー」

## 第二十六話「シオンの憂鬱」(後書き)

「いろんな意味で自分を見失うシオン」 「彼は激情のまま

にアースラから家出する」 「雨が降る中での出会い。それはシ

オンに何を齎すのか？」 「次回第二十七話「逃避行」

「出会うと言う事は別れると言う事と同義」

**番外話「時を越えた師弟対決!。裕希奈、ヴィヴィオVSタカト!教導模擬戦」**

てな、訳でまたまた番外話です♪本編を楽しみにしていただいた皆様、申し訳ありません(汗)でも、かつて無い程のバトルとなっておりますので、許し下されると嬉しいですよ♪では~~~~どうぞ~~~~♪



番外話「時を越えた師弟対決!。裕希奈、ヴィヴィオVSタカト!教導模擬戦」

ア

「はい♪ついにやってきました♪教導模擬戦♪」

す

「解説はアリサ道場形式でお送りします♪」

カ

「今回はシオンもタカトさんもないから代理×3だそうだ。てな訳で司会代理の風間カナんだ」

メ

「メイデンだ。よろしく」

カナ

「鷹月カナメです♪」

ア

「……に、しても多作品のキャラが司会代理になるなんて……」

す

「まあ、シオン君は相変わらずだし、タカト君はもう準備してるし

♪」

カ

「実際はどうなんだ?あの二人に勝ち目あると思うか?」

カナ

「私は結構いい所までいくと思いますよ♪ひよっとしたら勝つかもしれませんかね♪」

カ

「あの、バグキャラに?むっ、今回は無理っぽいと思うけどな……」

カナ

「なら賭けます?」

カ

「……いや、賭け事なんて……」

カナ

「あら？怖いんですか？」

カ

「……………ハッハッハ。面白い事言うな〜？」

カナ

「カナン君程じゃないですよ〜？」

カ

「……上等だ……」

カナ

「後で後悔しなければいいですけどね〜？」

メ

「二人共、そこまでにしておけ」

ア

「そうよ。仲悪いわね〜」

す

「あ、そろそろ始まるみたいだよ？」

ア

「ではでは♪『時を越えた師弟対決！。裕希奈、ヴィヴィオVSタカト！教導模擬戦！！』」

一同

「「「「「始まります♪」」」」」



風が吹く。

穏やかに。

ユウオが作りだした異界『風吹く荒野』だ。

そこに一人の青年と、二人の少女の姿が空にある。

少女の名は、

高町ヴィヴィオ

一之瀬祐希奈。

青年の名は、  
伊織タカト。

少女達と青年は向かい合っている。

「……」

さて、そろそろ始めるか。  
二人共、準備はいいか？

「うん!!」

「いつでもいいわよ!!」

気合いは十分。  
二人共、気負いや緊張はさほど無い。  
それにタカトは微笑みを浮かべる。  
その歳で、その精神力。  
それを見事だと、そう思う。

「……」

では、ルールの確認をしよう。  
ルールは簡単。  
そちらは俺に一撃でも当てれば合格。  
勝ちだ。

KOされたら負けだ。

時間、戦闘方法に制限は無し。  
以上だ。

「うん、解った！」

「いいから始めましょう!!」

ルールの確認をするタカトに少々焦れながら祐希奈が答える。  
それにタカトは苦笑いを一つだけ浮かべ。

「……」

それじゃあ。

そう描かれた右手のメモ帳を見て、二人はすぐにデバイスを構える。  
そして。

始めよう。

そのメモ帳が、  
'二人の後ろから、差し出された。

「――っっっ!!」

「徹!!」

同時。左の掌底が、祐希奈の背中に叩きつけられた。  
悲鳴すらあげられず。吹き飛ぶ。

「祐希ちゃん!?!」

人の心配をしている場合か？

「徹！ー」

蹴撃。

さらに放たれる右の蹴り。

予備動作抜きで放たれたそれにヴィヴィオはフェアリーを縦にして防ぎー堪えられない。

「……つく！」

弾き飛ばされる。

その距離3m。

一瞬にして立ち位置が逆転した。

タカトは蹴りを放った動作を停止。

そのまま二人を眺め見る。

祐希奈はコホコホと咳込みながらタカトを睨み、ヴィヴィオもまた手に走る痺れに顔を歪める。

終わりか？

「ーっ！！」

差し出されるメモ帳。

その内容に二人はタカトを睨む視線を強くした。

「ヴィヴィオ……」

「うん……」

二人は一瞬だけ視線を交差。

頷き合う。

同時にヴィヴィオはフェアリーを2ndモードに。  
祐希奈はブレードを展開する。

「タカト……行くわよ？」

「覚悟してね？」

させてみな？

タカトがそうメモ帳を出すと同時に二人は翔る！  
振るわれるアシェルとフェアリー。

しかし、タカトは動じない。

その場で足場を形成し、二人を向かい撃つ。

「やあああ！」

「はあああ！」

同時攻撃。

左右から挟み込むように振るわれるそれに、タカトはそれぞれ拳と蹴りで応えた。

ー弾・弾ー

振るわれる刃を拳が弾き、蹴りが跳ね返す。

ヴィヴィオ、祐希奈の二人はそれに顔をしかめつつも、回り込むように斬撃を放っていく。

放つ、

放つ。

放たれていく。

それでも、タカトに届か無い。

「くっ……！」

「このっ……！」

受け流し、弾き、反らし、跳ね返す。

まるでループだ。

しかも、タカトは右の手でメモ帳を持ったまま。

つまり、右手は腕で反らす以外の防御を取っていないのだ。

隔絶した技量の差。

それを二人は改めて突き付けられる。

だが。

「これなら！どう！」

祐希奈はタカトの背後に回り、アシエルを突き出す。

狙いはただ一つ。

防御不可の一撃だ。

ブレード・エクスプロージョン。

ヴィヴィオもその意図を汲み取り、あえてタカトの眼前にソニック・

ムーブで移動。

振るうフェアリーの刃に纏うは風！

「ウィンド・スラッシュー！！」

腰溜めに放つ一撃。

タカトはそれに左の拳をぶつける！

ー激ー

炸裂する風。

その中で弾き飛ばされたのはヴィヴィオ。

だが、タカトは拳を振り抜いている。

つまり背中からの攻撃に対処出来ない。

「これでっ！」

叫び、放たれる刃。

もし防御が間に合ったとしても刃の部分が爆発し、それがダメージとなる。

つまりは勝ちだ。

刃がタカトの背に迫る。

しかし、タカトは振り向かない。

‘そのまま前方に上半身を倒した’。

「えっ……！」

タカトの動きに驚き、思考が停止する。

・・・それが致命的だった。

タカトはその姿勢から左の足を後ろへ跳ね上げ、アシエルのブレードを叩く。

衝撃。

腕に走る痺れを覚える祐希奈にタカトはまだ止まらない。そのまま足を回転。

さらに右足を跳ね上げ、ブレードを挟みこむ。

そのまま左手に足場を形成し、そこを手掛かりにして回転開始。

祐希奈の視界がぐると180。回転し、前方に投げ出される。

その先に居るのはヴィヴィオ！。

「わっ！祐希ちゃん！！」



「痛っ……!!」

衝突。

二人は空中でぶつかり合い。

息が詰まるのを自覚する。

だが――。

「――っ！祐希ちゃん！」

「っ！アシエル!!」

<Reflect feather!>

瞬間。二人を包むように祐希奈の希少技能。リフレクション・フェザーが展開した。

そして、その翼に突き立つのは糸だ。

水糸。

天破水迅。

暴虐なる精密攻撃。

それが今、発動されていた。

さて、二人共？、そろそろ本気で行くぞ？、

「――っっっ!!」

そのメモの内容に二人は同時にある事に気付き、総毛立つ。

タカトは、今まで、技を使っていない。

純粹な、体術だけで自分達の攻撃を対処していた。

タカトが左手をスッと前に差し出す。

同時に数百。数千の水糸が翼に突き立つ。

「くっ！……これ、跳ね返せない！！」

翼の中で祐希奈が顔を歪める。

そう、水迅は射撃魔法では無い。

大別してしまえば、' 斬撃魔法' だ。

範囲が馬鹿みたいに広く。

また、その精密性の為、忘れがちではあるが。

つまりは反射出来ない。

さらに突き立っていく水糸。

威力が目茶苦茶に高く無い事が、まだ救いとは言えた。

「ヴィヴィオ。これ、何とか出来る？」

「うゝゝん。完全に無くすのは無理かも……」

大威力の砲撃で蹴散らすのは可能だろうが、それで全部消し去れるかと言うと微妙だった。

だが。

「でも、今ならタカト。隙だらけだよ？」

「……っ！。そう言えばそうね……」

今、タカトは離れた位置から水糸を操作している。  
確かに今のタカトは隙だらけだった。

「ヴィヴィオ。砲撃。いける？」

「うん。いけるよ。ね？フェアリー？」

<はい>

フェアリーの返答に微笑む。

そしてタカトへと視線を向けた。

相変わらずタカトは水系の操作に専念している。

今なら行ける。

それにヴィヴィオ、祐希奈は頷き合う。

「よし。なら、一瞬だけフェザー、解除するから砲撃を……」

俺はそこまで間抜けかね？祐希奈殿。

瞬間。

二人は言葉を失った。

眼前に居る筈の無い存在が居る。

今も水系を操作していたタカトが目の前。

翼の前に。

左手は相変わらず水を纏い、水系を操作中だ。

だが、その右足に纏う高密度の炎に二人は絶句する。

そこで二人は思い出す。

タカトは同時に大威力術式を発動出来るのだと。

八極八卦太極図。

その出鱈目さを、改めて二人は認識する。

さて、邪魔な翼は破壊するとしてー。

後は頑張れ。

「ーっ、フェー」

「アシエー」

二人は同時に自らのデバイスに呼び掛け。

しかし、最後までその名を呼ぶ前に炎を纏う直蹴りが翼に叩きつけ

られた。

同時、メモ帳に文字が書かれる。

天破紅蓮。

と。

ー爆！ー

瞬間。

リフレクション・フェザーを飲み込んで、炎の柱が天地に築かれた。



天に伸びた炎の柱。

そこから二つの影が左右に真逆方向に飛び出た。

ヴィヴィオと祐希奈だ。

二人とも煙りを身体からあげている。

そしてその表情はまた苦い。

今の一撃のダメージによってだ。

しかもタカトの技はまだ止んでいない。

炎の柱が消え、タカトが現れると同時に。二人に向かって放たれるものがある。水糸だ。

追撃で放たれたそれは、緻密に精密に、そして執拗に二人を追う。

「真・ソニック・フォーム！」

ヴィヴィオの姿が変わる。

より、速度に特化した姿に。

そのままソニック・ムーブを発動。

高速機動で襲いくる水系を縦横無尽に避していく。

そして、祐希奈。

高速機動状態を持たない自分では水系を避しきれないと判断して、その場でリフレクション・フェザーより魔力消費の少ないプロテクションを発動。

再度、水系を防ぐ。

そして、ブレードを解除。

その手に握るのは弓だ。

そして選択する矢はブルーゲイル。

必中の矢であった。

プロテクションの中で見るのは水系を操るタカトとそれを避しているヴィヴィオだ。

（ヴィヴィオ……）

水系によって動けない自分。

それに歯噛みして、その光景を見る。

今はただ待つ。

ヴィヴィオが作り出してくれる筈の一瞬を。

ただただ祐希奈はその一瞬を待ち続けた。

「……っ！」

ヴィヴィオは水系を潜り抜け、潜り抜け。

タカトの元へと向かう。

未だタカトは悠然と立つのみだ。

タカトに近付けば近付く程に、水系の量が増えていく。

真・ソニック・フォームの装甲の薄さを考えれば致命的とも言える

一撃だ。

だがヴィヴィオは臆さない。

「アクセル・ランサー！」

放たれる十五の光の槍。

タカトの集中を乱す為に放った一撃は迷い無く、タカトへと向かい。

―閃―

その全てが、一瞬で水系に貫かれ、相殺した。

「くっ……！」

これも駄目。

生半可な射撃では水系の迎撃を崩せない。

さらに増えていく水系が肌を掠める。

それに、痛みを覚えつつ、しかし。ヴィヴィオは止まらない。

止まれば即撃墜される。

それが解ってしまう。

（射撃じゃ、駄目。砲撃じゃなきゃ……！）

自分が持つ射撃魔法で水迅の迎撃を破る魔法は無い。

ならば！

「フェアリー！フルドライブ！行くよっ！！」

<Full Drive! Stand by Ready?>

フルドライブ起動と同時に1stモードにフェアリーを戻す。

隠されたりボルバー・カートリッジシステムが起動。  
同時にフル・リロード。

フェアリー内の全カートリッジを消費する。

そのまま真・ソニック・フォームの速度を生かして水系を切り抜ける！

「ああああっ！」

視界内は全て水系だ。

それが身体を掠るのを自覚しながら突き進み、一気に後退。  
抜けた。

水系の巣とも言えるそれを。

風を利用して急停止。

さらに今の今まで、溜めに溜めた魔力を振り向きざまにタカトに、  
そして水系に向ける！

「デストラクション・ブレイカーーっ！！」

―煌―

―砕―

―破―

破滅の光。

超威力の砲撃が、フェアリーより、放たれた。

その進路上にあるものの全てを消し飛ばし、蹂躪し尽くしながら突き進む。

向かう先はタカト。

水系は何の防御にもならない。

ただ消え去るのみ。

防御は無理。

ならば、タカトに残された選択肢は一つしか無い。

水迅をカット。

同時に足場を形成し、縮地を発動。

光がタカトを飲み込む瞬間。タカトはその場から消えた。

ー轟ー

破滅の光はそれでも突き進み、天へと消えた。

それを50m程離れた位置からタカトは見る。

そしてヴィヴィオへと視線を移そうとして、

「フェアリー！3rdモード！！」

そんな声を聞いた。

その声の発信元は頭上。

クロー・モードを発動したヴィヴィオがそこに居る。

「やあああっ！」

ほう。

感心した顔と共に右手のメモ帳にも一文が書き出される。

ー閃ー

完全なタイミングでの奇襲。

しかし、それもタカトは僅かな後退で回避。

だが、ヴィヴィオは止まらない。



その姿が消える。

ソニック・ムーブ。

ヴィヴィオの姿はタカトの真後ろにあった。

（これでっ！！）

振るわれる虹色の爪。

今の無防備のタカトならばー。

ートンっー

今日何度目になるだろう。

驚きで絶句するのは。

ヴィヴィオはそう思う。

爪が振るわれる事は無かった。

振るわれる前に止められたのだ。、タカトが無造作に突き出した足によって、！

肘の部分に押し当てられた足。

それが爪の進行を止めていた。

呆けていて、いいのか？

「ーーーっ！」

再び、ソニック・ムーブ。

正面だ。

今度は爪を振るえた。

しかし、タカトはその一撃を左手で捌く。

「たああーーーっ！」

連撃。

立て続けに爪を振るう。が、タカトはただ左手で、足で爪を捌き続ける。

何で自分の方が速いのに攻撃が当たらないのか、疑問に思っているか？

「ーっ！」

凶星。

それを表情に出すまいと思ったが、駄目だった。最初っから気になってはいたのだ。

タカトは縮地を除けば特別速い訳じゃあない。

なのに、何故自分の動きに着いてこれるのか？

そんなヴィヴィオにタカトなフツと微笑し、メモを、攻撃を捌きながら、書き出す。

ただ、単純な話した。ヴィヴィオ。

お前達は数値の罠に嵌まっているだけと言うな？

数値の罠？

その単語に疑問を覚えるヴィヴィオ。

爪を下方から振るう、しかし。またもや足で捌かれる。

タカトはメモを書き出す。

確かに、俺はお前より遅い。

、全体的には、な？

攻撃の速度もお前の方が上だ。

だが、最初の動作が丸分かり、で、そんなものに意味があると思

うか？

「ーーーーっっ！！！」

衝撃がヴィヴィオの全身を走る。

メモ帳に書かれた内容で、だ。

タカトは構わない。続ける。

攻撃予備動作。

機動予備動作。

魔法予備動作。

その全てがお前達は、解り易過ぎる、。

さらに言うのと鈍い。

いくら攻撃速度が速かろうが。

いくら機動速度が速かろうが。

俺からすれば止まって見えているようなものだ。

今度こそ。

今度こそ。

ヴィヴィオは何も言えなくなった。

何も出来なくなった。

最初はその技量を凄いと思った。

隔絶した差だと。

だが、違う。

そんな、生易しい、技量差では、決して無い。

致命的。

あえて、表現するならば致命的に差がつきすぎている。

こんなの、勝てる筈がー！。

勝てる筈が無い。そう思っているか？

「ーっ！」

再び書き出されたメモ。

それに身体が震える。

そんなヴィヴィオにタカトは構わない。

諦める事は簡単だ。

誰でも出来る。

お前も諦めるんだな？

「だ、だって！！」

叫び、反論しようとするヴィヴィオにしかし。タカトは笑い。後ろを振り向く。

そこには数十の矢が空気を切り裂いて疾る。

絶対必中の矢。

ブルーゲイルだ。

「ヴィヴィオーっ！」

「祐希、ちゃん……」

水糸が消えた為だろう。

祐希奈がタカトとヴィヴィオに向かって突っ走ってくる。

矢を連射しながら。

それ等全てが絶対必中。

故にタカトも回避行動を取らない。

その場に留まり、手刀であるいは叩き落とし、あるいは蹴り落とす。そしてヴィヴィオに新たなメモ書きを見せた。

多分だが、な。ヴィヴィオ。

苦笑い。それを浮かべタカトはメモのページをめくった。

彼女は諦めないぞ？

そして、祐希奈が突っ込んで来た。

「アシエルっ！」

<Full Drive! Stand by Ready?>

フルドライブ起動。

クリムゾンアロー。装填。

ほう、これは……

タカトがその祐希奈の選択に笑いを浮かべる。

連射では埒が開かないと判断したのだろう。

ならば狙うのは大威力技！

「喰らえェっ！インフェルノ・バスター……っ！」

ー轟ー

ー閃ー

10mも無い距離から爆炎を纏う矢が放たれる。

それは一極集中の矢だ。

迷い無く突き進む矢をタカトはしかし、回避しない。

左手を持ち上げる。

その手には纏い。圧縮されるのは台風に匹敵する暴風！

天破疾風

真っ正面。

爆炎と、疾風が炸裂し合った。

ー轟・撃！ー

空間が軋むかのような音が響き、同時に爆煙がぶあつと広がる。その隙を突いて、祐希奈がヴィヴィオと合流する。

「大丈夫？ヴィヴィオ？」

「う、うん。大丈夫」

頷き。

しかし、まだヴィヴィオは迷う。

タカトは言った。

多分彼女は諦めないぞ、と。

「あの、ね？祐希ちゃん……」

「何よ？」

そしてヴィヴィオは話す。

さっきタカトが教えた、自分達の攻撃を防げる理由を。

それに祐希奈が浮かべたのは諦めでも何でも無い。

強いて言うならば、呆れ、であった。

「……バグキャラ、バグキャラとか言ってたけど納得だわ。……で、あんたはそれ聞いて勝てない、と思った訳？」

「うん……。だってこっちの攻撃。全部読まれちゃってるんだよ？ そんなの……かひえひゃいー」

「そんな事言うのはこの口か、この口かー！」

「柔らかいわね」とか呟きながらヴィヴィオの頬つぺたを摘み、左右に伸ばし、弄ぶ。

暫くその感触を堪能し、漸く祐希奈がその指を離す。

「痛いよ……。何するのー」

「あんたが馬鹿な事言うからでしょ。何が勝ち目が無いよ。そんなの諦めたらもっと無くなるわよ」

腰に手を当てて、きっぱりと断言する。

そんな祐希奈に、ヴィヴィオは目を見開いて驚く。

「いい？ 諦めたらそこで負けなのよ。逆に言っちゃば諦めなきゃ、まだ勝てるチャンスはある、て事よ」

そして、だからと続ける。

「だから、私は諦め無い。最後の一瞬まで勝負を投げ出したりなんかしない！……これ、カナンとあんたから習ったのよ？」

「あ……」

思い出すのは祐希奈が掠われかけた時だ。

あの時、諦めかけた祐希奈を自分達は決して諦めるなど言っていたのは無かったか。

「……目、覚めた？」

「……うん。ありがとう。祐希ちゃん」

頷く。

先程とは目の輝きが違う。

その目は決意に溢れていた。

そして二人はまだ上がり続ける煙へと視線を向ける。  
直後。

――轟！――

風が、煙を巻き上げた。

全ての煙を払い退けて、現れる。

タカトだ。

その顔には笑みが浮かぶ。

迷いは晴れたみたいだな？

タカトが差し出すメモ帳。

それにヴィヴィオはこくりと頷く。

「うん。もう、私は諦めたりなんかしないよ」

「勿論、私もね？」

二人の返答に満足気にタカトは頷く。

そしてメモに再度書き出す。

なら、これが俺の最初にして最後の教導だ。  
二人共。



俺のような手合いとやり合う時。

自分より格上と真っ向から戦おうなんて思うな。

出し抜け、隙を見つける。

隙が無いなら作りだせ。

奇襲、奇策。上等だ。

そうして一分の勝機を見付けたならば全力でしがみつけ。  
以上だ。

二人はそのメモを見て。

ゆっくりと頷く。

そして、デバイスを構える。

では、決着をつけるとしよう。

風が吹く。

一瞬の間を持って、祐希奈、ヴィヴィオは翔出した。



飛翔する二人に、相変わらずタカトはどっしりとその場に留まった  
ままだ。

ヴィヴィオは負担の大きい3rdから2ndモードに変化。

祐希奈も弓からブレードに切り替える。

それを見て、タカトは薄く笑う。

先程と同じでは、俺には永劫届かんぞ？

「それはー！」

「見てのお楽しみ、てねっ！」

左右に別れる。祐希奈は右から突きを。  
ヴィヴィオは左から斬撃を放つ。

それにタカトは右は捌きを、左は拳撃で応える。  
ここまででは先程と同じだ。  
だが、

「行くわよ！カートリッジ・ロード！！」

ブレード・エクスプロージョン。

しかし、タカトはこの一撃は受けない。  
身体を横に捌き、刃を避らす。

しかし、祐希奈の狙いは元々これでは無い。  
右に泳ぐ身体をその場でくるりと回転。

そして左手を腰溜めに構える。

同時、ボンツと炎が拳に纏う！

タカトはそれを見て、祐希奈に踏み込もうとして、しかしソニック・  
ムーブでヴィヴィオが正面に回り込み、斬撃を放つ。

それにタカトは一步を踏み込めず、そして祐希奈が振りかぶった炎  
を纏う拳を叩き付ける！！

「烈破紅蓮爆碎撃――っ！！」

天破疾風

ー轟・破！ー

再び、ぶつかり合う一撃。

拳から放たれ炎が疾風と互いの威力を喰い合う。  
だが、祐希奈の真の狙いはそこじゃない。

自らが放った炎に敢えて飛び込む。

その先には疾風を放ち終えたタカトの姿がある！

「これなら読めないでしょっ！！」

そう来るか！！

寧ろ楽しそうに祐希奈を見るタカト。

そして、タカトは見る祐希奈の足に纏わり付く炎を。

しかも、これは――。

炎を圧縮！？この技は――

「見様見真似！！」

自らが放った炎を脚部がさらに吸い込み、圧縮していく。

それは正しく、‘タカト’の技！！

タカトも右の足に炎を圧縮。

同時に放ち、ぶつかり合う！！

「天破紅蓮！！」

天破紅蓮！！

回し蹴りと回し蹴りがぶつかり合い、圧縮した炎が同時に着火！

――瞬――

音が一瞬だけ、消え。

ー！爆！ー

天地に炎の柱が築かれた。

「あ、くうっ！」

吹き飛ばされる両者。

だが、本家には未だ及ばなかったのか、祐希奈は押し負け。盛大に吹き飛んでいく。

流石に肝を冷やした。見事だったぞ？祐希奈殿。

称賛を贈るタカト。

しかし、その祐希奈は吹き飛ばされながら浮かべるのは笑い。そして叫んだ。

「行きなさいっ！、ヴィヴィオっっ！！」

「やあああつつっ！！！！」

！？

タカトの背後。

ソニック・ムーブで現れたヴィヴィオがいる。

2ndのフェアリーが纏うは巨大な風！！

「ウインドザンバーっ！！ブレイカーーーーーっっっ！！！！」

ー轟！ー

至近距離からの巨大斬撃。

それをヴィヴィオは迷い無く放つ！  
回避は不可能。防御も不可能。  
故に、タカトが採る選択は一つしか無い！

天破疾風！！

ー撃！ー

放たれるは圧縮し、暴風を詰め込んだ風の拳！！

風の刃と、風の拳は正面からぶつかり合い。  
しかし。

「カットっ！！」

突如。ザンバーが、解除された。

それは同時に一つの事を意味する。

空振り。

放たれた拳は、刃にぶつかる事なく、空を切る。

同時。技を放った直後で隙だらけとなったタカトにヴィヴィオが一気にフェアリーのザンバーに使った方とは逆の刃を跳ね上げる！

その位置から狙うのはタカトの顔だ。

迫る刃。

しかし、タカトは渾身のスウェーで、背中を反らした。

結果、ギリギリで刃はタカトの鼻先を掠める軌道を描く。

タカトの鼻先を通り過ぎようとする刃。

それに、しかしヴィヴィオは叫んだ。

「フェアリーっ！！」

<Brake Windo!!>

ー弾ー

フェアリーの逆。

ザンバーの消失と共に刃を失った筈の場所から風が噴射機のように吹き出した。

まるで、ロケットのように、フェアリーがすっ飛ぶ！！

これにタカトは驚愕を浮かべる。鼻先で避した刃が突っ込んで来たのだ。

驚きもする。

だが、タカトはそこは常人では無い。

ほぼ無意識に、瞬時に真横に作り出した足場を蹴り飛ばす！さらに眼前に突っ込む刃に、顔を横に反らすようにした。

結果、フェアリーはタカトの顔を通り過ぎた。

恐らく。全ての動作が0・1秒でも遅ければ間に合わなかった。

顔の横を通り過ぎるフェアリーに、タカトはそう思う。

しかし。

そう、しかし。

ヴィヴィオは言った。

諦め無い、と。

ヴィヴィオはフェアリーを投げた体制からタカトに踏み込む。

震脚。

全ての前進の力を踏み込みの一步に込める。

そして振りかぶる左の拳！！

ザンバーに使っていた風がその拳に圧縮される！

「見様見真似っ！」

「……っ！」

左の拳は疾風を放ち、引き戻せず。

足は足場を蹴り飛ばして使えず。

さらに体勢まで崩れている。

そう。

今こそが、千載一遇のチャンス！

ヴィヴィオは迷わず、暴風を詰め込んだ左の拳をタカトへと撃ち放つ！！

「天破疾風つつっ！！！！」

ー轟！ー

ー破！ー

爆裂する風が周囲にブチ撒けられ、衝撃が異界を揺るがした。

ヴィヴィオはそれを見る。自身の拳の行方を。

その拳はタカトの、右の掌、に包まれていた。

その手の、メモ帳をズタズタに引き裂いて。

「あ、……う……」

見事。

タカトが左の腰から、予備、と書かれた手帳を出す。

同時に左手で文字を書き込む。

よく、俺に右手を使わせた。

問題はそこじゃない。

そう、ルールにタカトが右手を使わないと言うルールは無かった。タカトが勝手にやっていただけだ。

つまり、もう。

「う……」

さて……

同時。

左手が凄まじい握力で握られる。

そして、タカトが手帳を放り出し。

左手を振るう！

それに今度こそヴィヴィオは観念して目を閉じ。

頭を撫でる感触に、その目を開けた。

「……合格。俺の負けだ」

「え……あ……！」

そして久しぶりに聞いたタカトの言葉と共に、優しく微笑むその左頬に流れる朱い血を、ヴィヴィオは見た。

「おめでとう。よく、頑張った」



その一言にヴィヴィオの顔がパァッと綻んだ。



ヴ

「ただいま〜♪」

裕

「勝ったわよ〜♪」

タ

「……」

ただいま戻りました。  
我が主。

ア

「お帰り〜♪」

す

「ヴィヴィオちゃん、祐希奈ちゃん。おめでとう♪」

裕

「えっへっへ。勝〜利よ〜♪」

ヴ

「すつごくうれしいよ〜♪」

カ

「すっげーな。……勝ったよ。オイ……」

カナ

「ほら、私が言った通りですね♪」

カ

「ぐっ！」

メ

「ヴィヴィオ、祐希奈。凄かったぞ♪よく頑張ったな♪」

「メイデンありがとう〜♪」

裕

「いや、本当。苦労したわ〜。一撃当てるのがこんなに遠かったの、初めてよ?」

タ

「……」

さて、罰ゲームか……

ア

「う!?! そっか、そのケーキか……」

す

「タカト君が太っちゃうと、いろいろ仕事か……」

タ

「……」

いや、大丈夫なんですがね。俺にとって、これは、罰ゲーム、に成り得ない。

一同

『はあっ?』

タ

「……」

説明があったと思うが、八極八卦太極図の元になった仙技は究極の肉体コントロール。

それには食した物を、完全に魔力化したりも出来る。

ア

「……目茶苦茶ね……」

す

「……つまり、ダイエットいらす？」

タ

「……」

平たく言う。

裕

「むゝ。それだと面白くないわねゝゝ」

ヴ

「んゝ。なら当分の間、私達の言う事、何でも聞く、て言うのどうかな？」

カ

「元々、そんな感じじゃないか？」

タ

「……」

まあ、なら当分の間は祐希奈殿とヴィヴィオは御主人様、て事だな。年齢を考えると、お嬢様、か……

ヴ

「……タカト。それ、一度口に出して言ってみて？」

裕

「……うん。ちょっと。お願い」

タ

「……」

ム?ならば……

タ

「かしこまりました。ヴィヴィオお嬢様。祐希奈お嬢様」

ヴ

「……」

裕

「……」

タ

「む?」

ヴ

「も、もう一度、もう一度!」

裕

「Repeat、Repeat!」

カ

「何で英語!?」

ア

「どうやら、相当のツボだったみたいね?」

す

「私達は言われ慣れてるんだけどね〜♪」

メ

「そんなに、いいのか?」

ヴ

「何と言うか、こう……」

裕

「普通なら、お嬢様、なんて呼ばれるの嫌なんだけどねー」

カナ

「とりあえず、なら罰ゲームはこれで決定ですね♪タカトさんは当分ヴィヴィオちゃん、祐希奈ちゃんの執事で、口調も執事状態で♪そして筆談禁止で♪」

タ

「致し方、ありませんな……」

メ

「あ、マスター。そう言えば賭けは……」

カ

「わー!!馬鹿っ!シっっ!!」

裕

「賭け……?」

ヴ

「カナン君、まさか……」

カ

「いや、違う……」

カナ

「違いますよ♪どっちが勝つかで賭けてたんです♪私が勝ちましたけど♪」

裕

「へえ……」

ヴ

「カナン君……」

カ

「ま、待て。違う……!」

カナ

「私が勝ったんですし、こんな格好をカナン君にして貰いたいと思うんですけど……♪」

裕

「そうね。こんくらいの目にはあって貰いましょうか……」

ヴ

「カナン君。頭、冷やしてね……」

カ

「待てっ!落ち着け!て、言うか俺は何の格好をさせられようとし

てるんだ!？」

裕

「後で解るわよ……。写真写真、と」

カ

「くっ!ここは逃げるが……!」

裕

「タカト……」

タ

「御意に。祐希奈お嬢様」

カ

「は、離せ!離せ……!」

ヴ

「こんな格好、カナン君にして貰えるかな?」

タ

「……可能です。カナン……」

カ

「な、何だ?」

タ

「強く、生きてくれ」

カ

「だから俺は何の格好をさせられようとしてるんだ……」

カナ

「問答……♪」

裕、ヴ

「「無用!!タカト!!宜しくっ!!」」

タ

「御意に。お嬢様」

カ

「いいやあああああああああつっつっつっつ!!!またこれか

あああああつつつつつつつ！！！！！！」

ア

「ええ。てな訳で今の内に謝辞を♪

番外話、いつも読んで頂けてありがとうございます♪

ヨシユアさん。毎度のオリキャラ召喚と、そしてクロス対決。承認して下さってありがとうございます♪

おかげで熱いバトルとなりました♪

部活や学校も頑張って下さい♪これからもお互いに小説頑張ってくださいませう♪」

す

「そして、告知2nd♪

オリキャラ募集。ついにラスト一名となりました。

あまりに早くオリキャラ投稿して頂けたので、作者が1番驚いてます♪

ラスト一名♪どなたか出したいと言う方がいましたらよろしく願いします♪」

ア

「さて、着替え終わったみたいね、……て……」

「……わぁ………」

カ

「シクシクシクシクシクシクシクシクシクシクシクシクシクシクシク……（涙）」

そこに居たのはア

ミニスカメイド服のオ

ウサミミイ、肉球ハンドウ、肉球ブーツウ、シマシマ尻尾にイ、首元の鈴がチャーミングう。（by若本）

タ

「題名は……」

裕、ヴ、カナ

「「爆誕♪風間はーまいおにー♪」」

カ

「……死にてえ……」

裕

「パシヤリ、パシヤリ」

カ

「だから写真撮んなあああああああああああああああ  
つつつつつつつつ……！！！！！！！！」

ア

「あゝ。このままだと收拾着なくなりそうだから今日はここま  
で♪ではでゝゝ」

カ

「え！？待った、俺このまま！？」

裕

「ククク。当たり前でしょうが……！」

カ

「待ってえ！それだけは許して下さい！！祐希奈さん！！ヴィヴィ  
オさん……！！」

ヴ

「……今日は駄目だよ……」

カ

「ギヤアアアアア！！ヴィヴィオの怒りが深エエエエつつつ  
……！！」

カナ

「往生際が悪いですよ♪風間はーまいおにー♪」

カ

「いやあああああああああああああ。その名で呼ばないでエエ  
エエエ」

タ

「……強く、生きてくれ……」



カ

「なら助けてくれよっ！」

タ

「無理だ」

カ

「ノウっ！」

ア

「カナンうっさいわよっ！！……それでは皆さん♪」

女性陣一同

『また次回~~~~♪』

カ

「シクシクシクシクシク」

タ

「……まあ、なんだ。ケーキでも食べるか？」

カ

「あんなケーキが食えるかあああああああああ  
あああああああああああつつつつつつつ！！！！！！」

「！！」

（終劇）

**番外話「時を越えた師弟対決!。裕希奈、ヴィヴィオVSタカト!教導模擬戦」**

はい♪こんな感じになりました♪いや〜タカト初敗北です(笑)。  
ヴィヴィオ。祐希奈の潜在パワー恐るべし。(笑) 書いていて  
非常に楽しかったです♪では♪次はEXでお会いしましょう♪  
……シオン復帰させねえと(笑)

## 第二十七話「逃避行」（前書き）

「俺にとって、それは神聖なもので」      「それは誓い。それは契約」      「ずっとずっと、そう思ってきたから」

「だから俺はその時、うろたえて、訳が解らなくなつて」      「……そして、逃げ出して」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まります」

## 第二十七話「逃避行」

ヴィヴィオはその時、荒野の真ん中に居た。

いつから居たのか。

いつここに來たのか。

それは解らない。

ただここに、居た、

それだけを確信する。

そしてもう一つ。

・・・これは夢。

それだけをヴィヴィオは確信する。

何故か？

何度も見た夢だからだ。

何度も、何度も。

ここには沢山の人が居た。

沢山の、沢山の。

数える事さえ嫌になりそうな人達がここには居る。

その中で、ヴィヴィオがいつも見るのは一人の青年の姿だ。

知っている青年の姿。

いつも見ている、青年だ。

彼はいつもここに居た。

そして、何も言わず。

ここに居る人、全員、に殴られていた。

帰して！

そう叫び、殴る女性が居た。

ふざけるな！

そう叫び、殴る男性が居た。

貴方は、自分が何をしているか、解っているの！？

・・・そう、叫び。殴る人達が居た。  
そして。

止めなさい！アンタは、アンタがこんな事して、一体ダレが救われる、て言うの！？

彼を、1番殴る人が居た。

他の人と違い、彼を案じて、殴る人が。

ヴィヴィオはその光景を見るたびに止めようとした。

でも、身体は動かない。

なら、声を出そうとした。

でも、声が出せない。

ただ、見続ける事しか、出来ない。

やがて、彼を殴っていた彼女は、諦めたように。彼の首元を掴んでいた手を放り出した。

そして、彼の横に座る。

・・・それも、いつもの事だった。

「ねえ……」

彼女は呼び掛ける。

いつものように。

しかし、彼はそれに応えない。

ただ、ただ虚ろな瞳を空に浮かべたまま。

「ルシア。泣いてたわよ？」

「ーっ！」

その時。

初めて彼の瞳が揺らいだ。

感情に。

彼女は構わない。

「泣いてた。アンタを救えない、て。救えなかった、て」  
「……そうか」

その言葉に、漸く彼は応えた。

そして、彼女も振り向く。

「まったく。……女の子泣かせるなんて大罪よ？」

「そうなんだろうな。……でも、いい加減。愛想も尽かされたと思  
ったがな。……最近、殴りに来ないし」

「淋しい？」

「阿保言え。……人並以上にぶん殴る女がいるんでな。それとは無  
縁だよ」

肩を竦める。

だが、そんな彼の態度に彼女は悲し気に目を伏せた。

「……考え直す気、無いの？」

「そればかりだな。……答えはいつもと変わらない」

彼の答え。

それに、彼女は何も言わない。  
言えない。

彼は続ける。

「恐らくはこれが最善。誰も彼をも失わずに済む。最善だ」

「……結果が、どうなっても？」

「結果がどうなっても、だ」

笑う。

だけど、それはあまりに悲しい笑みで。

彼はそのまま空を見上げた。

「……弟が、さ」

「うん？」

いきなり変わった話題に彼女が疑問をあげる。

彼は少しだけ微笑んだ。

「俺を睨んでた。憎んで、くれた、よ」

「……そう」

憎んで、くれた、。

何で、そんな言い方をするのか。

「ずっと、ずっと。俺の後ろを歩いて、前に進もうと、しなかった  
'。アイツが、漸く前を歩いてくれる気になったらしい」

「……」

彼女はついに黙り込んだ。

だけど、言葉の変わりに溢れるものがある。

涙。

彼女は泣いていた。

彼は構わない。

続ける。

「これで、俺は漸く成せる」

「……大切な人に、家族に憎まれたまま？」

泣きながら、彼女が尋ねた。

それに彼は苦笑する。

「俺がついた。’嘘’。それを、あいつは信じてくれた。本当。そ

んな所だけは変わらないもんだ」

「……」

だから。

そう言って立ち上がる。

「もう、おそらくは長くない。残り僅かな時間」

一歩を踏む。

歩く、歩く。

そして三步を刻んで、空を仰いだ。

「最後まで、この嘘を吐き通そう、て決めたよ」

そして、そのまま優しくいく笑う。



「怒るんだろうな」

それが本当におかしいと。

彼は優しいまま笑う。

彼女が立ち上がった。

そして彼に近付き真っ正面から彼の瞳を覗き込んだ。

そして泣きながら、言葉を紡ぐ。

「泣くと思うわよ？」

「……そ、か」

その言葉に。

その返答に。

彼は薄く笑った。

淋し気に。

悲し気に。

そして、何より。

懐かしそうに。

「あいつの泣き虫は治ってると思ってたけどな」

そう笑って。

また空を見た。

すると、光が差し込んだ、荒野に。

そして彼は笑った。

「さて、じゃあ。そろそろ起きるか。それじゃあな。’アリサ・バニングス’。……ルシアの事。ありがとう」

「……いいわよ。好きでやった事だしね。じゃあ、またね。’伊織タカト’」

そう言って、互いに笑い。  
世界が晴れた。



「ん……む………」

「おお……いい。いい加減。起きろ、ヴィヴィオ」

声がする。

頭上から、それに、ゆっくりとヴィヴィオは目を開いた。  
そこには月を仰いで、自分を見下ろす青年が居る。

伊織タカトだ。

彼は微笑みながらヴィヴィオを見下ろしていた。

まだ頭がぼーと、する。

そう思いながら身体を起こした。

「……おにわ………」

「おう、昼寝ならぬ、夕寝だな」

苦笑いを浮かべる。

どうも、鍛練をした後、眠ってしまったらしい。

そして、あの夢。

気付けばヴィヴィオはその瞳から涙を流していた。  
タカトが微笑み、涙を拭う。

「……どした？怖い夢でも見たか？」

優しく、優しく。

そう問うてくれた。

そんなタカトにヴィヴィオは首を横に振り、そしてポツリと呟いた。

「タカト……」

「ん？」

「うそ、てなに？」

瞬間。

タカトは目を見開いて驚いた。

それは、彼にとって、1番大事な事だったから。

だから、タカトは少しの間を持って驚愕を飲み込んだ。

笑い顔を、必死で作った。

「……俺はヴィヴィオには嘘はついてないが？」

「でも……」

まだ納得しないヴィヴィオにタカトは右手をその頭に乗せる。

そして、優しく撫でた。

「……そうだな。これは、ユーノにも内緒だぞ？」

「……うん！」

ニツと笑うタカトに漸くヴィヴィオは笑顔を見せる。

そして、タカトは月を仰いでゆっくりとその言葉を紡いだ。

「俺にとって、大事なー。そう、大事な事さ」

「だいじ？」

「ああ。きっと、な？」

曖昧な表現。

曖昧な言葉。

だけど、ヴィヴィオはそれ以上は聞かなかった。

何となく、聞くのが怖い気がしたから。

聞いてしまえば、この青年がいなくなってしまう気がしてー。

そんなヴィヴィオにタカトは頭に乗せていた手を離す。

そして立ち上がった。

「さて、風呂に入ってきたな？汗も掻いてるし、ゆつくりと浸かってこい」

「うん。わかった！」

タカトに手を引かれてヴィヴィオは立ち上がり、そしてお風呂に向かい。そのまま、ひょっこりと窓から顔を出した。

「……タカトは？」

「俺はこれから個人用の鍛練だ。いいから気にせず入ってきた？」

タカトの返答に頷くとそのまま今度こそ風呂へと駆けていった。

それを苦笑いを浮かべながら見て、タカトは再び月を仰ぐ。

クラナガンの二つの月の内の一つが穏やかにタカトを照らす。

そして、タカトはポツリと呟いた。

嘘を、吐いた。

そして信じてくれた。異母弟の名前を。

「シオン……。俺は成すよ。創誕を」

どこまでも穏やかな光。

しかし、月に掛かる雲はゆつくりと増えていく。

雨の、気配がした。



「えーと。ゴメン。エリオ、もう一回言ってくれるか？」

アースラ、ブリッジ。

その艦長席ではやてはその報告に頭を抱えていた。

目の前に展開するウィンドウにはエリオとキャロが並んで映っている。

二人がいるのはシオンの部屋だ。

そして、その手には紙が握られていた。

エリオが再び、紙に書かれた文章を読む。

《え、えーと。『探さないで下さい。神庭シオン』て、書いた書き置きがシオン兄さんの机の上にあります……》

「……シャーリー？」

「あ、あはは。シオン君の反応、艦内にありません……」

シャーリーが冷や汗混じりで報告する。

それにはやては深々と、ため息を吐いた。

「……またかい」

神庭シオン。

‘家出’再び。

そんなテロップが思わず頭に浮かぶ。

はやてはまた、ため息をついた。

「……またどこかで暴れとるんちゃうやろな……」

《「……………」》

「……せめて、否定してや。皆……」

神庭シオン。

彼のこう言った事に関しての信頼は限り無く低かった。

微妙な空気が流れるブリッジに通信が入る。

エリオ達が映るウィンドウの横に、今度は別の人物が映った。

アースラ医療班担当。シャマルであった。

《はやてちゃん。シオン君がどこか行った、て聞いたんだけど……》

「ああ、そうなんよ。どこに行っただのやら……」

ぼやくはやてに、しかし。シャマルは苦笑いを浮かべた。

《こっちに来た時に大分熱は下がったけど、まだ完璧に治ったとは思えなかったから気をつけて、とは言ったんだけど……》

「ああ。なんや、いきなりもの凄い熱出してたんやろ？そこも心配なんよ……」

実際、その熱は、恐らく風邪とは無関係なものなのだが、当事者では無い彼女達にそれが解ろう筈も無い。

「とりあえず、シオン君に通信送ってみてや」

「はい。あ、そう言えばイクスが……」

「？。どうしたんや？シャーリー？」

尋ねる。

それにシャーリーは振り向きつつ答えた。

「いえ。そう言えば夕方頃からメンテしてたイクスが居なくなってます……」

「神庭が持ち出したのか？」

今まで沈黙していたグリフィスが聞き返す。  
それにシャーリーは頷く。

「多分。そうだと思うんだけど……」

「それや！。シャーリー。イクスに通信、繋いでや！」

はやてが喝采をあげて、シャーリーに呼び掛ける。  
それに頷き、シャーリーがコンソールを操作する。  
程無くして、ウィンドウが展開した。

そこに居たのは……

《俺は……っ！俺はっ！！最低な男なんだくくくく！！！！》  
「……………は？」

居酒屋？と思しき店で酒をラッパ飲みするシオンと、それを嘆息混じりに眺めるイクスの姿があった。



時間は少しだけ遡る。

シオンはクラナガンのある街をトボトボと歩いていた。  
そして何歩か歩くと顔がボンッと赤らみ。  
さらに直後に、頭を抱えて唸り出すのだ。  
……どう考えてもおかしい行動だった。

むしろ、よく警察呼ばれないな。

的な感じである。

勿論。

これには訳がある。

昼間の出来事だ。

ティアナとスバルとのキス。

それが今のシオンの奇態の理由であった。

実は、シオン。

こう見えて、かなり身持ちが硬い。

がっちりと硬い。

今どき、男女七歳にして・・・と、言うアレを頑なに守るような人間であった。

そして取り分けキスと言うものに、シオンは一種の思い入れがある。キスとは誓約。

誓い。

それがシオンのキスに対するイメージだ。

易々とするものじゃない。

そう常々思っていた。

だが、それを日に二回。

しかも違う少女達。

事故とか、不意打ちだとかは言い訳にもならない。

好きか嫌いかで言えば、確実に好きなのだが、そんな問題じゃあ無いのである。

シオンとしては不実を行ったと言う感覚の方が強い。

「…………お、俺は、俺は…………」

【…………どうでもいいんだが、なんで俺まで…………】

ぶつぶつと呟くシオンの肩に腰掛けてため息を吐くのはイクスだ。彼はメンテ中だったのだが、いきなり現れたシオンに叩き起こされ、



無理矢理連れて来られたのであった。

理由は？と聞いたが聞こえていないらしくぶつぶつと呟くだけなのでそれについては諦めている。

【……ルシアと、アサギの影響がここに出るとは……】

額に手を当てながらイクスがぼやく。

そう、何を隠そう。

シオンのこの身持ちの硬さは母、アサギと、姉のような存在。ルシアの影響によってであった。

厳しかった訳では無い。

むしろ、緩かった。

アサギは『彼女！？彼女なのね！？お赤飯炊かなくっちゃ♪』と、何か勘違いも混ざっちゃったような女性であったし。

ルシアも『シオンも色を覚えたんだね』と、微笑ましい笑みを浮かべる女性であった。

ただ、この二人。

シオンに対してある事を徹底的に教えこんでいた。

つまり、『キス、て言うのは誓いのようなものなの。乙女にとって大切なもの。だからもし、するなら覚悟と誠意を持ってしなさい』そう、教え込んだのだ。

ちなみに、誓い。と言うのは、カラバにおいて重要な意味を持つ。

精霊がそうであるように、基本。

契約、と言うものを神聖視しているのだ。

故にキスは誓い、と言うのを教えられたシオンにとって、キスはある種。

神聖なものになってしまったのだ。

尚、某セクハラ兄と、ブラウニー兄には、この教育は為されなかった事を追記する。

暫く歩き続けていると、ポツッポツッと水滴が二人に当たる。シオンは相変わらずだった為、イクスが上を見上げる。直後。

雨が本格的に降り出した。

【……ちっ、雨か……シオン。雨宿りを……】

「……誓い、いや、でも……」

【……聞いた俺が阿保だったな……】

フツと諦めた表情になるイクス。

成人モードでどこかに引きずるのも手だが……と、突如。

雨が二人を当たらなくなった。

シオンも気付いたのだろう。イクスと一緒にその原因を見る。そこには……

「どうしたい。坊主？風邪引くぜ？」

こちらへと傘を差し出す。

壮年の男がいた。



「ううっ……俺は、俺って奴はア、最低なんスよ……っ！」

「そうかい。まあ、男ならそういう過ちの一つや二つあらあな！……飲みな！」

【……とりあえず。そいつ未成年なんだが……】

「馬っ鹿。坊主。お前もうすぐ18なんだろう？」

「……後一週間程で……」

「なら問題ねえ！お酒は15からだ！」

【……二十歳の間違いだろ……】

居酒屋。

そこにシオン達は居た。

目の前の、壮年の男に連れられて。

男は肩まで伸ばした赤い髪に、これまた見事に手入れされた赤い髭。そして顔は美形といって差し支えない顔立ちをしていた。

名前を、アルセイオ・ハーデンと言うらしい。

奇妙な男であった。

気付けば懷にズカズカと入り込んでいるような。

そんな男。

そして、そんな男の気風に押されたのか、シオンは普段飲まない酒をかつ喰らうように飲んでいた。

そこでイクスは気付く。

通信が入っていると。

まだアルセイオと飲み続けるシオンをちょっと置いて店の外に出る。と、言っても軒先である。

雨も降ってる事ではあるし。

開けたウィンドウには見覚えのあるブリッジが広がっていた。

アースラのブリッジである。

【……八神艦長か？】

《あ、ああ。イクスカ？どないなってるんよ。シオン君？》

若干、面喰らったのだろう。

声に動揺を交えつつもはやてが聞いてくる。

それにイクスは嘆息する。

【……ああ。どうせ、シオンの事だから外出許可なんて取ってないんだな……。済まない】

《うん。まあそれはしゃあないとしてや。……シオン君。また、家出、なんて何があったんや？》

【……それは、だな……】

流石にイクスも言葉に詰まる。

キスした（された）事がショックで出たとは流石に言いづらい。だが、言わぬ訳にも行かないだろう。

通信を秘匿回線に切り替え、艦長のみ聞こえるようにしてもらおう。

《……秘匿回線使うような理由なんか……？》

【……いや、酷く。プライベートな理由なんで……】

そして事の成り行きを話し終え。

イクスは即座に後悔した。

話すべきでは無かったと。

ウィンドウの映す先。

そこには目をキラキラと輝かせて、身内の恋バナに期待しまくるタヌキ娘がいた。

《あの二人が、いつの間に！イ、イクス！もっと詳しく教えてやっ  
！！》

【……い、いや。俺も直接見た訳では無いし。……それに、主のプライベートの問題ではあるし】

《そんなの、関係ありません！リンも知りたいです！》

【……リンフォース。気持ちは分かるが、同じ主持ちとしての気持ちは察してくれ】

と言うか秘匿回線にした意味があまり無いような気がする。  
手遅れだろうが。

【……とりあえず。そう言う訳だ。シオンは暫くしたら必ず帰す。

……そちらはティアナ・ランスターと、スバル・ナカジマの相談に  
でも乗ってやってくれ。……こう言うのは女性同士が1番だろうし】

《了解や！》

《ラジャーです！》

ビシッとサムズアップする二人に、しかし。イクスはひたすら不安  
を覚えた。

通信が切れると同時に。

ガラーッ！と、扉が開く。

シオンとアルセイオだ。

肩を組み、そして互いに手を高く掲げる。

「「次行くぞーっ！！」」

【……飲み過ぎだろ……】

イクスは頭を抱えつつ。

しかし、先行く二人を追わない訳にもいかず、追い掛ける事となっ  
た。



「ええっと。それで、ですね。なのはさんの意見を聞きたいな〜。  
て」

「う、うん。そうだね〜……」

所変わって、こちらアースラ、高町なのはの部屋。

ここで、なのはは目の前の少女。

スバルの相談に乗っていた。

・・・乗っていたのだが。

「それで、あの……。そう言った場合。どう言う風な顔して会えばいいのかな……。て」

「う、うん……」

顔を赤くして聞いてくるスバルになのはは顔が引き攣っている事を自覚する。

相談内容は。

「キスした相手に、次。どういう風に接したらよいのか？」

で、あった。

だが……

（わ、私、経験無いのに……）

「なのはさん？」

「わ！。うん、ゴメン……」

詰まり、そういう事であった。

なのははそういった恋愛絡みの経験が無い。

何せ、1番異性で仲の良いユーノを未だ、仲の良い幼なじみ、と公言しているのだ。

そんな、なのは。

キスの経験がある訳が無い。

スバル。完全な人選ミスであった。

（ふ、ふえええ……。フェイトちゃん。はやてちゃん助けて……！

?)

「え、と。なのはさん？」

「あ、うん。聞いている。聞いているよ？」

思わず、昔の口癖を頭の中で零しながら幼なじみへと助けを求めた。  
だが。

少なくとも、もう一人はその助けに応える事は出来なかった。  
今、まさに同じ目にあっていただけのだから。

「それで、私。どうしたらいいのかな、て。……フェイトさん？」  
「あ、ゴメン。ちょっとボーッと、しちゃってて……」

アースラ、フェイト・T・ハラOWN部屋。

そこで、フェイトは自分の執務官補佐である少女の相談に乗っていた。

・・・相談の内容は。

「偶然キスしてしまった相手と、次。どのように上手く話せるのか」  
で、ある。

つまり、スバルと変わらない。  
だが……

(う、私も経験無いんだけど……)

奇しくも、なのはと全く同じ感情を抱いていた。  
フェイトの場合は、さらに特殊だ。

彼女の場合。

身近な男性に興味が無かった。

エリオの場合は、歳が離れているし、何より。息子や弟のような感覚なのだ。

クロノは義兄だし、何より。彼女が15の時に結婚している。

ユーノは幼なじみであるし、何よりなのはと・・・と、思っていたと、言うのもある。

つまり、ある意味において、なのは以上に男っ気が無かったのだ。スバルもそうなのだが、ティアナも人選を盛大に間違えていた。

「で、えっと。フェイトさんの意見を聞きたいと……」

「う、うん……」

（なのは。はやて。助けて……）

まったく同じ事をなのはが思っているとは露知らず。

フェイトは内心。助けを呼び続けた。

・・・結論として、この日の、相談、は夜遅くまで続く事になった。



雨の中で踊る。

酔っ払っているシオンは、雨にあたる、という事を心地よく思っていた。



火照った身体に、雨の冷たさが気持ちいい。

「どうよ。坊主？雨にあたるのも気持ちいいだろうが？」

「ああ。結構気持ちいいや……」

だろ？と、笑いアルセイオが笑う。

このおっちゃんの笑顔は心地良いな。

そう、シオンは思う。

【二人共、せめて傘をさせ。風邪を引くぞ……】

後ろからイクスが歩いて来た。

手には傘を持っている。

だけど、シオン達はそれを拒む。

「いらねーよ。今、めっちゃ気持ちいいんだぜ？」

「おうよ！この程度で風邪なんぞ引く程、柔じゃねえしな」

【……知らんぞ。風邪引いても……】

今日何回目になるだろうか。

イクスがため息をつく。

ちなみにイクスは知らない事だが、まだシオンは風邪を引きっぱなしである。

「……本当、たまにはいいもんだな。傘もささないで歩くのも……」

まるで、洗い流すように。

しがらみや、悩みが雨で流されるような。

そんな心地良さをシオンは覚えていた。

アルセイオもまた笑う。

「……俺が好きな言葉に、こんな言葉がある。

『雨の中で笑って踊る人がいてもいい』て言うな?」

「どう言う意味さ?」

思わずシオンが尋ね返す。

それにアルセイオはフツと笑う。

「自由、て意味だろ。雨の中で傘をさすのも雨の中で笑って踊るのも、どっちでも自由、て言うな」

「へ~~~~」

曖昧にシオンは相槌をうつ。

それに頭をクシャクシャと撫でられた。

「おら、もう店開いてねえな……。しゃあねえ!俺の部屋で飲むぞ  
!!」

「おお~~~~」

【……好きにしろ。もう、知らん……】

雨の中で喝采をあげる二人にイクスが呆れ気味にため息をついた。  
しかし、歩き出すと同時。

アルセイオが虚空を睨む。

「?。どうしたんだ?。おっちゃん?」

「おう、悪い。通信だわ。ちょっと待っててな?」

笑い、離れていく。

それをシオンとイクスは言われるままに眺めた。

「……どうしたんすか？提督？」

《どうしたもこうしたも無い。仕事だ》

シオン達から離れた所で通信による会話を行う。

しかし、'仕事'という単語にアルセイオは眉を潜める。

「そいつは構いませんがね。……で、今度のターゲットは……？」

《ああ。詳しいデータは後で送る。だが、ターゲットはお前も知ってる奴らだ》

「ほう？」

《ターゲットはアースラだ》

告げられた名前。

告げられた存在。

それにアルセイオは一瞬だけ目を見開き。

しかし、次の瞬間には笑っていた。

「上等な獲物じゃねえですか！」

《貴様ならそう言うと思った。……追って詳細は送る。では、な、無尽刀'》

通信が切れた。

だが、暫くの間。

アルセイオはその場で笑った。

神庭シオン。

アルセイオ・ハーデン。

二人はこうして出会った。

(第二十八話に続く)



ア

「はい♪今日も今日とてやってきました♪アリサ道場〜♪」

す

「久しぶりの普通の道場です♪」

シ

「そして復活のシオンです♪」

ア

「来たわね？二話も道場スッ飛ばした司会代理」

シ

「う……。ま、まあ。それについては触れない方向で……」

す

「でも、やっぱり色々初めてだったんだね〜？」

シ

「まあ……」

ア

「だめよ？ああいうのは男の子からリードしてあげないと」

シ

「いや、リード、てほぼ偶然の産物だったんですが。……に、しても今日はやけに優しいっスね？」

ア

「そう？私はいつでも優しいわよ？」

す

「……ほら、アリサちゃん。本編に出たから。……しかも、かなり重要な感じで……」

シ

「ああ。今回の1番最初ですね？」

ア

「フ……私の時代が来たわ……」

す

「……ずるいよ。アリサちゃん……」

ア

「だ、大丈夫よ。すずかも出番ある、て。多分……」

シ

「さて、脱線しつつある内容を戻して、今回のおさらいを♪……未成年の飲酒は法律で禁止されています♪」

ア、す

「「今更!？」」

シ

「まあ。今更です。で、今回の話の内容は……まあ、休みの話しですね」

ア

「でも、重要な所は結構あったわよね？私とか、私とか……」

シ

「まだ言いますか……」

す

「そんなにうれしかったんだね……」

ア

「そこ二人。うるさいわよ」

シ

「後はおっちゃんこと、アルセイオの登場です♪」

す

「新キャラだね♪」

ア

「このおっちゃん。シオンとどういう関係なの？」

シ

「勿論、内緒です♪」

ア、す

「「……ケチ……」」

シ

「聞こえませんよ♪さて、次に設定の公開。位階、てどんな風にな  
ってるのかを、ここで表します」

ア

「すごい、今更ね……」

す

「まあ、まあ」

シ

「こんな風になってます♪」

第一位…叶トウヤ。（一名）

第二位…空位（元は伊織タカト。尚、一名）

第三位…出雲はやと。凧ちひろ。小此木コルト。空位。（最後の一人はルシア・ラージネス。現在は意識不明合わせて四名）

第四位…黒鋼刃。真藤リク。一条悠一。獅童楓。聖徳アスカ。本田  
ウィル。残り2人。（合わせて八名）

シ

「と、まあ。こんな感じになってます♪本当は第二位から二人に増  
えていくんですが、トウヤ兄いの考えから第二位はタカ兄い。一人  
となっています。タカ兄いが出ていってからは空位のままです」

ア

「そして、第三位から四人。第四位は八人、て感じで倍々ゲームに  
なる訳ね？」

シ

「その通りです。ちなみに位階は第十位まであります。位階に入れ

ない人は一般の魔導士です。解りやすく言うと、

第一位がラスボス。

第二位が中ボス。

第三位が四天王。

第四位が幹部級。

第五位がさらにその下。

そんな感じです♪」

す

「なんでボスキャラ風味？」

シ

「気にしちゃ駄目です♪さて、では今日はここまで♪」

ア

「意外と早かったわね……」

す

「位階の設定が長かったからね……」

シ

「そうですね。ではまずは謝辞を。いつも読んで頂いてありがとうございます♪オリキャラ募集ですが、規定人数に達したので締め切らせて頂きます♪

めっちゃ、早く投稿して頂いたので作者もめっちゃ喜んでます♪

そして、今度、白河シンジさんのリリカル・オムニバスの聖王喫茶グラシアスに出演させて頂く事になりました♪ありがとうございます♪

す♪

そして、ついにPV200000アクセスを突破しちゃいました♪

いや〜。作者。超驚きです♪本当、読者様に感謝、感謝です♪」

ア

「本当、びっくりよね〜」

す

「ついこの間150000越えたと思ったら200000越えだもんね〜♪」

シ

「ええ♪ではでは♪皆さま、また次回お会いしましょう♪感想、いつでもお待ちします♪よかったら是非、よろしくお願いします♪では〜」

ア、す

「「また次回〜♪」」



## 第二十七話「逃避行」（後書き）

「出会いは別れと同義」「アースラは修理を完了して、そして新たな任務に出る」

「そして、その先で出会う者達。それは……」

「遅れて合流するシオンは再び出会い。……そして対峙する」

「その男と」

「次回。第二十八話『聖剣と魔剣』」

「魔剣は、聖剣を許さない」

## 第二十八話「聖剣と魔剣」 (前編) (前書き)

「いつか、聞いた事がある」

「人は皆、出会い。

そして別れていくのだと」

「だとすれば。俺とあの人の出会いは

どうなんだろう？」

「それを、俺は聞きたくて……」

「魔法少女リリカルなのはS t S, E X。始まります」

## 第二十八話「聖剣と魔剣」(前編)

シオンが家出した翌日。

本局内をアースラ艦長である八神はやては歩いていた。

その前にはウインドウが展開し、通信でアースラの官制官。シャリオ・フィニーノ。通称シャーリーと話している。

《艦内の主要設備の修理完了確認しました。アースラ、いつでも出航出来ます》

「ん。了解や。……ところでシオン君と、イクスは？」

報告に頷き、もう一つ気になっている事を聞く。

それにシャーリーは『あはは……』と、弱々しく笑った。

《……朝から通信は送っているんですけど……》

「出ない訳やね……」

苦笑する。

イクスが定期連絡を送ってくれていたのだが、途中で知り合ったと言う男性とシオンに、通信の真っ最中に横から無理矢理飲まされたらしい。

二人に気付かれる前に通信を閉じたようだが、あの様子ではイクスもダウンしているだろう。

《どうします？》

「一先ず、アースラは先に出航や。二人には後で合流してもらお」

幸いにも、アースラと本局間で直接転送が出来る。

二人の合流には何も問題は無かった。

「……やあ。八神部隊長」

いきなり、はやてに声が掛かった。

取り敢えず、通信を終了してウィンドウを閉じる。

そして声を掛けた人物に目を向けた。

「……グリム・アーチル提督」

「かの有名な八神艦長に名を覚えられるとは、光栄の極みだな」

忘れる筈も無い。

はやては笑顔を、作った、ままで、そう思う。

グリム・アーチル。

最初にグノースとの交渉を受け持った人物であり。

危うく両者を激突させかねないマネをした人物であった。

「それにしても、新造の次元航行艦を早々とオーバーホールですか。貴女もヤキが回って来ましたかな？」

やっぱり来たか。

笑顔の裏で、はやては嘆息する。

グリムお得意の、いびり、である。

六課時代も、散々に聞いてきた訳だが……。

だからと言って腹が立たない訳でも無い。

今もグリムは『こんな歳の……』に始まり、『元犯罪者……』やら、

『あれほどの戦力があって一個人にどうやって……』だの饒舌にはやてに言ってくる。

それに対してはやては笑うだけだ。

歳や過去の件については言われる事は覚悟しているし、正直。思いたくは無いが言われ慣れている。

タカト  
一個人に負けた事についても言われる事はある程度、予想はしていた。

「第一、次元航行部隊が一個人に敗走させられると言う事がどれだけの意味を持つのか、解っているのかね？」

「どういう意味でしょう？」

あえて、聞き直す。

それにグリムは途端に苛々を顔に塗り付け、歪ませる。

「決まっているだろう？次元世界の、代表者、たる我々の威信に関わる問題なのだよ！」

(……そう言う、て思った……)

グリムに見えないように、しかし。

はやては嘆息する。

グリムのような、勘違い、をしている人物。

実は管理局には少なからずいるのだ。

・・・自分達が、次元世界の、統一者、のような考え方をしている人達が。

元来、管理局の定義とは、法の守護者、だ。

そして、それ以上でも以下でも無い。

あつてはならないのだ。

「聞いているのか！？八神艦長！！」

「勿論です。提督」

怒鳴るグリムに、しかしはやては動じない。

そんなはやての態度にグリムは露骨に舌打ちする。

そして、再び声を張り上げようと息を吸い――

《艦長！》

いきなり開いたウィンドウと、響く声に、声を出すタイミングを見失い、沈黙した。

そんなグリムを、少しおかしくは思うが、相変わらず顔には出さな  
いまま声の主。シャーリーに答える。

「シャーリー。どないしたん？ 大声を上げて……」

《あ、と。すいません。お話し中でしたか？》

「ええよ。その様子やと、緊急の用件やろ？……宜しいですね？  
ーチル提督？」

「う、む……」

何かを言いた気な顔ではあったが、はやてはあえてそれを無視。  
そのまま再度シャーリーな向き直る。

「……で、何があったんや？」

《はい。本局から連絡。新たな感染者が現れたそうで、至急アース  
ラに出動命令が出されました》

シャーリーの報告。

それにはやては頷いた。

幸いアースラの修理は完了している。

「了解や。詳しい話しは艦に戻ってから聞くな？」

《はい。了解です！》

シャーリーが頷き、通信終了。  
ウィンドウが閉じた。

そして、はやてはそのままグリムに向き直る。

「そう言う訳なので、提督。お話しはまた今度と言う事で……」  
「……まあ、いいだろう」

グリムの返答。

それにははやては、おや？。と思う。

いつもの反応だと、それはそれは嫌そうな顔をするものなのだ。  
ついでに文句も付いてくる。

だが、今日はやけに大人しい。

しかし、はやてとしてもそんな事に思考を割いている時間は無い。  
グリムに一礼すると、そのままアースラが係留しているドックに向かった。

そんなはやての後ろ姿を見送って、グリムはチツと舌打ちする。  
相変わらずいいけ好かない小娘だと、そう思う。

ウィンドウを展開。

操作し、通信を行う。

そして、通信の相手に一言を放った。

「……仕事だ。’ 無尽刀’」

そして、ウィンドウの向こう側で、その相手が笑いを上げた。



「……頭痛え……」

【……あれだけ飲めば流石にな……】

開口一番。

ホテルの一室で起きぬけにシオンは頭を抱えてぼやいた。

それにミニサイズとなったイクスが、また額を押さえて答える。

二人共、完璧に二日酔いであった。

「……おっちゃんは？」

【朝方出て行ったみたいだぞ？チェックアウトもしてあるようだ】

テーブルの上にある紙をシオンの前に持ってくる。

書き置きだ。

それをシオンは読み。

最後の一文。『坊主、またな』と言う部分に苦笑する。

「……面白い、人だったよな……」

【そうだな……】

イクスもまた苦笑する。

アルセイオ。

不思議な男であった。

懐がでかいと言うべきか。

彼との出会いによって、少なからず、シオンの悩みは晴れてもいた。と、言うより。初めて尽くしのシオンに答えが出せる筈も無かったのだが。

「……よっし。アースラに帰るか！」

【その前に通信だな。……、お話し、も待ってるだろうしな】



お話し。

その単語を聞き、先程の勢いをシオンは無くした。もし、その頭に犬のような耳があれば、ペタンと倒れていただろう。弱々しく笑う。

「……やっぱ。もうちょっと帰るの、待つか？」

【……結果は変わらんのだから、引き延ばすだけ無駄だろ。ついでにさらに時間が増える可能性もあるしな】

何の時間かは、もはや問うまでも無い。

シオンは重い、重い、（自業自得）ため息を着いて、アースラに通信を繋げる。

【……シオン君？】

「ども。シャーリーさん。はやて先生います？」

シオンの問いにシャーリーは苦笑する。

そして、そのままウィンドウの向こうでコンソールを操作する。すると、ウィンドウの画面が変わった。

そこは……

「ブリーフィングルーム？」

《お、シオン君。起きたんやな〜》

シオンが疑問をあげると同時。はやてがウィンドウの向こう側に現れた。

なのはや、ヴィータ。

その向こう側に、……スバルとティアナの姿も見える。

「あ、と。その……。すみませんでした……」

《ええよ♪後でゆっくり、じっくり、ねっぷり三人の先生とお話しような〜♪》

「……………はい」

《その後は訓練室でお話し、しようね?》

「……………はい」

《……………ま、頑張れよ。シオン》

「……………そう言ってくれるのはヴィータさんだけっス」

先生、Sのお言葉に、未来に待つ強烈なお話し。（何故かなのはの迫力五割増し）

を予想してしまい。シオンは心の中で涙を流した。

「……………あ、と。それとスバル、ティアナ」

《え！えっと……………！》

《あ、と……………その……………》

シオンに声を掛けられ、慌てる二人にシオンは苦笑する。  
昨日は俺もこうだったんだよな、と。  
そのまま二人に告げる。

「俺は、もう大丈夫だから。……………だから、二人共。いつも通り、よろしくな?」

《あ、……………うん！》

《……………うん。分かったわ》

その言葉に、スバル、ティアナ。二人揃って安心した顔になった。  
二人もまた怖かったのだ。シオンとの関係性が壊れる事が。  
それをシオンは大丈夫と言った。  
壊すなんて事は無いと。だから、二人もまた安心したのだ。

でも、二人の顔には若干の寂しさもあった。

《……話し。進めてもいいやろか?》

「あ、と。すみません。俺もすぐにアースラに……」

自分の登場で、話しが脱線している事を感じて、シオンが謝る。  
それにはやては首を横に振る。

《いや、それは大丈夫やよ?……それより。シオン君。体調は大丈夫なん?》

「あ、はい。何とか……」

【……体調?】

それまで、無言を貫いていたイクスが声を上げる。  
それに、シオンは苦笑する。

「あ、と。そういや、イクス知らないんだっけか。俺、昨日風邪でぶっ倒れてさ」

【……お前と言う奴は……】

流石にイクスは呆れ返る。

昨日、シオンは酒を飲み。さらに、雨にまで打たれていたのだ。  
とても大丈夫とは思えない。

【……シオン。ちょっと動くな】

「ん……?」

イクスがミニサイズのままシオンの額に自分の額を当てる。  
熱を計っているのだ。  
暫くして、額を離す。

【……37℃きっかりか……】

「な？ 大丈夫だろう？」

微熱ではあるが、確かにこの程度ならば大丈夫だろう。  
イクスは漸く頷いた。

【すまないな。八神艦長……？】

《いや、うん。大丈夫やよ？》

何故か顔を紅くするブリーフィングルームの面々。  
シオンとイクスは、そんな皆の反応に？マークを浮かべる。

《と、取り敢えずは大丈夫なんやね？》

「あ、はい。大丈夫です」

若干の動揺が混じったはやての言葉にシオンは頷く。  
はやて達も氣息を整え。  
改めて向き直る。

《……シオン君には、アースラに戻らんと、直接転移してもお、か》  
「……？。何の話です？」

はやての言葉に、シオンが更に疑問を上げる。  
それにはやても頷いた。

《……シオン君。止めても聞かんやろうしな。……新しい感染者が  
出たんよ》

「……成る程、ね」

シオンも頷く。

確かに、今からアースラに戻るより、直接転移許可を貰って、自分で次元転移する方が早い。

「それで、どんな状況なんです？」

《うん。……出現した感染者は一体。ゴーレムタイプや。出撃するんはスターズ少隊。……問題は、場所なんや》

「……場所？」

シオンの疑問にはやては頷く。

そしてコンソールを操作。

シオンの元にデータを転送する。

そのデータを見て、シオンが思わず目を見張る。

「聖、域……」

その場所は。

その世界は。

聖域。

聖なる領域。

そう、名付けられる場所だった。



聖域。

それは無人世界の一つである。

管理内外どちらの区分にも含まれ無い世界だ。

一見。

普通の惑星である。

だが、問題はその惑星のある場所であった。  
山を二つ重ねたより巨きな樹がそびえ立ち。  
それを中心に森が広がる。

その広大さは一つの島に匹敵する。

そして、何よりの問題点。

聖域では魔法が発動しないのだ。

使え無いではない。

使わないでもない。

そもそもとして、発動しないのだ。

A M Fが張られている訳でも無い。なのに、魔法は発動しない。  
理由については諸説あるものの、未だ解明されていない。

故に管理局としても、この聖域を不可侵領域としている訳だ。

そんな聖域の近くに感染者が現れた。

しかも、存在する筈の無いゴーレムの感染者だ。

またもや、不可解な転移によって現れた可能性も捨てきれ無い。

聖域のある場所では雪が降っていた。

おそらく、ここでは冬なのだろう。

しんしんと降る雪の中を、アルトが操るヘリが飛んでいく。

スターズ分隊だ。

アースラは、聖域に到着後、ヘリにてスターズ分隊を出撃させた。

アースラ自身は聖域に下手に近寄ると、墜ちる可能性がある為、離れた所で待機している。

ヘリの中。

その中で、ティアナとスバルは互いにそわそわしていた。

気まずい。

もの凄く気まずい。

同じヘリに乗るなのは、ヴィータ、リインもそんな二人の空気を察知していたが、気にするなとも言えず。沈黙していた。

「あの……っ」

互いに意を決して。

向き直るものの、普段の呼吸の合い方が逆に災いした。重なる声に、二人はタイミングを逸して、また黙り込む。それを見て、嘆息するなのは達。なんとかしてはやりたいのだが・・・

「なのは隊長。降下ポイントに着きましたけど……」  
「あ、うん」

頷き、なのははスバル、ティアナに向き直る。そして二人の肩に手を置いた。

「二人共。解ってると思うけど……」  
「はい！」  
「大丈夫です！」

なのはの言葉に頷く二人。  
しかし、それでもどこかギクシャクした感じは否めない。

「なのは。先行くぞ？」  
「あ、うん。……二人共。最後の確認だよ。……行ける？」  
「「はい!!」」

迷い無く頷く二人に、なのははしかし、まだ不安な顔になる。だが、時間は待たない。  
なのはも頷き、二人から離れる。  
そして、ヘリのハッチが開いた。

「行くよ。皆。スターズ1。高町なのは」

「スターズ2。ヴィータ」

「スターズ3。スバル・ナカジマ」

「スターズ4。ティアナ・ランスター」

「ブルー。リインフォース2」

「「「「行きますっ！／出るぞっ！」「」「」」

一気に全員ハッチから飛び降りた。

直後、四色の光が空に灯る。

そして、五人は一気に降下した。

聖域の、近くへと。



聖域を見下ろす崖。

そこに、それ、はいた。

石で出来た身体。

その身体はおよそ7m程か。

そして、その身体には当然。

アポカリプス因子が纏わり付いていた。

感染者だ。

ゴーレムの感染者は、その自重で辺りを振動させながら進む。

向かう先はただ一つ。

聖域であった。

進む、進む。

迷わずに、進む。

そこに意思の介在の余地があるかは解らない。

ただ、ただ進んでいた。

崖の下には広大な森が広がる。



雪化粧をされた、美しい森が。

そこに感染者は下りようとするが如く、進み。

「ディバイン！！バスターーアア！！」

ー轟！ー

突如として放たれた光の砲撃に背中を叩かれ、そのまま雪が敷き詰められた地面に叩き付けられた。

石で出来た身体は砕け。

しかし、即座に再生を開始する。

それを、なのはは感染者の背後に飛んだままみる。

同時。

感染者の足が凍りついた。

リインのフリーレン・フェッセルン。

凍結型拘束魔法だ。

リインはなのはの頭上に浮かんでいた。

同時。

叫ぶ。

「ヴィータちゃん！スバル！！」

その声に応えるように赤と青が疾る。

ヴィータとスバルだ。

片や飛行魔法で。

片やウイングロードで。

疾駆していく。

それを感じたのだろう。

いきなり感染者が自らの足に拳を叩き込む。

鈍い音と共に膝が砕けた。

同時、地面へと倒れこみ。すぐに再生。  
拘束から逃れる。  
しかし、遅い。

「突っ込め！スバル！！」  
「うおおおおおっ！！」

ヴィータはその場で急停止。  
スバルはそのまま突っ込む。  
同時。

ヴィータは自らのデバイス。  
グラーフ・アイゼンを振るう。  
カートリッジ・ロード。

ギカント・フォルム！

グラーフ・アイゼンの先端部分が変化。  
巨大なハンマーへと姿を変えた。  
さらにヴィータが頭上に手を掲げる。  
そこにあるのはこれまた巨大な鉄球だ。  
ヴィータはその鉄球に向かい。その巨大な鎚を振り上げる。

コメット・フリーゲン！！  
「ぶち抜けーっ！！」

ー激ー

一気に叩き付け。  
鉄球を打ち放つ。  
それは急速度で感染者に向かい。

立ち上がろうと、手を地面に着く感染者の右肘を打ち抜く。  
着弾。

鉄球の一撃は感染者の肘をヴィータの宣言通りぶち抜き。  
その右肘を碎き断った。

・・・そこで終わらない。

「クロス・ファイアー！シュート！！」

ー閃！ー

感染者の左側。

そこにオプテック・ハイドで隠れていたティアナが現れる。  
同時に撃ち放たれる20の光弾。

それは精密なコントロールを持って、感染者の全身を叩く。

光芒が閃き、全身を叩かれ苦悶の叫びを上げる感染者。

そこに、一気にスバルが突っ込む。

構え、左手に浮かぶ光球。

それを右のリボルバー・ナックルが撃ち抜き。

スバルはそのまま突貫する！

「デイベインっ！ブレイカーっ！！」

光を纏った拳をそのまま感染者の胸部に叩き込み。

そのままスバルはその前進力を余す事無く、注ぎ込む。

瞬間。

ー轟！ー

スバルは感染者をぶち抜き。

その背中へと突き抜けた。

衝撃でのけ反る感染者。

因子が再生しようとするが、それをなのはとティアナが許さない。

「デイベイン……バスターーっっ!!」

「ファントム・ブレイザーーっっ!!」

感染者の右側に回ったなのはと、左側のティアナ。

両側から放たれた砲撃が、感染者をさらに破碎していく。  
そして。

「うおおおおおおおっっ!!」

感染者の頭上から降る存在がいる。

ヴィータだ。

両側の砲撃が同時にカット。

だが、感染者の全身には輝が入り。

動けない。

その感染者に、ヴィータは容赦無く。

その巨大な鎚を、頭に叩き込んだ。

ー轟!ー

轟天爆碎。

その名の通り、鎚はその威力を発揮。

感染の頭と言わず、その全身を完全に碎いた。

そして、感染者は。

そのまま塵へと還っていった。



塵へと還った感染者。

それを確認してなのはは息をつく。

懸念した事態。

つまり感染者の聖域への侵入を止められて安心したのだ。

そして、スバル。ティアナが変わらず息の合った連携を出来た事にホッとしていた。

手を振るスバルに、ティアナが微笑む。

その様子に、ヴィータもフツと笑う。

どうやら、自分達の心配事は大丈夫だと。

そして五人は雪の上。

地面に降り立ち。

集合する。

「なんとか、無事に終わったね」

「だな。二人共。心配してたような事にはならなかったみてーだしな？」

「あはは……」

「心配かけて、すみません……」

苦笑するスバル、ティアナ。

その中間にリインが浮かぶ。

「そう言えば。肝心のシオン。来ませんですね……」

「そういや、そーだな……」

クラナガンから直接転移した筈のシオンだが。

未だに到着していなかった。

それにスバル、ティアナが複雑そうな顔になる。

会いたいけど、会うとどう言う風な顔をしていいのか解らない。  
そんな顔だ。

「取り敢えず。ヘリに戻ってアースラに戻ろ……」  
「ところが、そうはいかねえんだな」。これが

瞬間。

「激！」

「激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・  
激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・  
激・激！」

剣が、大剣が、巨剣が。

幾千。幾万の剣が五人の回りに降り注ぎ、突き立った。

「きゃ……っ！」

「っ……なんだ。これっ！！」

雪煙が立ち込める。

そして一同が見たのは信じ難い光景であった。

雪が広がる崖。

そのほぼ全域に剣が突き立っていた。

やろうと思えば。

自分達を殲滅する事すらも簡単に出来た筈だ。

絶句する一同に、進み出てくる一団がある。

五人組の男女だ。

そのどれもが、フードを被り、その顔を覆っている。  
その中で唯一。

フードを被らない男が居た。

壮年の男である。

背はスラリと高く。

その顔は美形で通るだろう。

髪は赤。

そして、顎の髭もまた赤だった。

さらに。

その全身は赤のバリア・ジャケットである。

まさに赤尽くしの男であった。

「悪いけど。アンタらを帰す訳にはいかねえんだわ。クライアアントからの依頼でね？」

「何モンだ？ テメー……」

問うヴィータに。

しかし、その男は笑う。

「答えるとも思ってたのか？」

「……なら、後でじっくりと聞きます」

なのはが宣告すると同時。

ヴィータが、スバルが、ティアナが一斉に構える。

それをみて男は口笛を吹いた。

「いいね。いいね！！そうでなくっちゃあ。いけねえよ！！」

カカと哄笑し。

同時。その背後に無数の剣群が現れる。

先程と同じだ。

その光景に、なのは達は背中に暑くも無いのに汗が背を伝う感覚を

得た。

悪寒だ。

「名前は名乗れねえが。だが、字名は名乗るとしようか。', 無尽刀', そう呼びな!」

尽くせ無い刀。

その二つ名を持つ男は。

アルセイオ・ハーデンは。

その名乗りを上げた。

(後編に続く)



## 第二十八話「聖剣と魔剣」(前編) (後書き)

ども、テストメントです♪

まずは謝辞を。

一週間もの更新遅れ。まことに申し訳ありません。

風邪を引いてしまいました(汗)

実は、

まだ治ってはいないんですが、なんとか前編だけ書き上げました。  
文字数も大分少なくてすみません(汗)

熱が下がり次第。

後編も書き上げます。

ではでは、また後編で〜♪

## 第二十八話「聖剣と魔剣」 (後編) (前書き)

はい♪皆さん。心配をおかけしました♪テストメント完・全・復・活です♪そして後編をお届けです♪では~~~~どうぞ~~~~♪

## 第二十八話「聖剣と魔剣」(後編)

「激!」

降り注ぐ大剣達。

それをなのは達は回避していく。

無尽刀。

そう名乗った男。アルセイオ・ハーデンが放った剣群だ。

轟音と共に次々に地面へと叩き付けられていく。

「きゃっ……!」

「ティアナ!!」

降り落ちる刀がティアナの足元に突き立つ。

それでバランスを崩すティアナに容赦無く、更なる刀が降り注ぐ。

回避も防御も不可能のタイミング。

なのはもヴィータも慌ててティアナの元に引き返そうとするが、降る刀がそれを許さない。

間に合わない。

ティアナが迫る刀をその目に焼き付け。

「ティアナ……っ!!」

しかし、叫ぶスバルがシールドを展開したままティアナの前に突っ込む。

「軋」

間一髪。

ティアナに迫る刀をスバルのシールドが受け止める。

「おら、よ!!」

それをアルセイオは逃さない。

次々とシールドに刀が突き立つ。

「っう……!!」

「スバル。もう大丈夫!」

シールドを維持するスバルが苦悶の喘ぎをあげ。

同時にティアナがスバルに呼び掛ける。

それにスバルは頷き、シールドを解除。

ティアナと一緒に後ろへと下がる。

直後。

その場に突き立つ数十の刀達。

それを持って漸く剣群は停止した。

「……止まった?」

「……漸く、だな」

なのは、ヴィータも漸く止まった刀に安堵する。

しかし、肝心のその攻撃を成した人物。

アルセイオはニヤニヤと笑っていた。

未だ余力があるのは明白だ。

それにスターズの一同は顔を歪める。

「こいつ……っ!」

「へっ……。?」

ヴィータの悪態に、無尽刀は笑いを浮かべ。  
しかし、スターズの面々を見て、訝し気な顔となる。  
まずなのは見て、次にヴィータを見る。  
続いてスバル、ティアナと続けて見て。  
リインを見た段階で首を横に振る。

「なんですか！その反応！？」

「いや……。別に嬢ちゃんを見て首を振った訳と違うから安心しな」  
リインがアルセイオの態度に過敏に反応するが、アルセイオはそれに笑いを浮かべて流す。  
そして、再びなのは達へと視線を巡らせた。

「あゝ。聞くがよ？この中で、剣使う奴。いるか？」

「……居ませんけど……？」

アルセイオのあまりにも親し気な態度に、思わずなのはが答える。  
つい先程、とんでも無い攻撃をしかけた男とはとても思え無い言動である。

そのなのはの解答に、アルセイオは露骨にため息を吐いた。

「……おい。ソラ？」

「……おかしいですね？」

アルセイオが隣のフードを被る男性に声をかける。  
ソラと呼ばれた男も不思議顔だ。  
それなのは達も訝し気な顔となる。  
それをアルセイオは見て再度ため息を吐くと、左手をスッと上げた。  
同時。崖に突き立った無数の刀達が、全て糸を解くようにして分解。

消え去った。

(……何？今の？)

てっきり転送系の魔法だと思っていたのはは今の現象に呆然とする。

あれは転送では無い。

分解だ。

つまり、あの大量の剣群はこの場で作り出した事になる……！

「……聖剣がいねえんじゃあ。やる気も起きねえな……。ソラ、後任すぞー」

「ハア……隊長は相変わらずですね。了解です」

アルセイオの態度に、ソラは呆れたような声を出し。しかし、頷く。

「副隊長……。もう、これ。取っていいですか？」

「……布。邪魔」

「ああ。いいぞ」

フードを被る二人から声が掛かり、それにソラが頷く。

それに、ソラを含めた四人はフードを取っ払った。

ソラと呼ばれた男性は青年だった。

恐らくはなのは達とさほど年齢は変わらない。

黒髪黒瞳であり、白のバリア・ジャケットを着ている。

そして、その手には鞘に収まった両刃の大剣を片手に持っていた。

続いて、次。

未だ無言を貫く。金髪の老人だ。

彼もまた白のバリア・ジャケットを着ている。

老人ではあるが。その身体は強靱そのもの。  
その身体からは一切の老いを感じさせない。  
そしてその手に握るのは両手用の大斧だった。  
そして次は最初にソラに声を掛けた少女だった。  
スバル達より幼く、キャラよりは年上だろう。  
闊達そうな少女である。

黒の髪を両側で結んでいる。

彼女は赤のバリア・ジャケットを着ていて、何より異様なのはその両手。

肩から拳までにかけてまで広がる巨大な手だ。

デバイスにしても異様なその巨大な手を。

少女は事もなげに振り回している。

その次の少女は静かげな娘であった。

スバルやティアナと同じ歳くらいに見える。

彼女は青のバリア・ジャケットを着ていて。

その手には二重螺旋を描く妙な杖を持っていた。

「悪いが。貴女達には聖剣をおびき出す餌になって貰う」

「……君達は……」

ソラの言葉になのはが息を飲む。

アルセイオに目を向けるが、肝心の彼はやる気ありませんとばかりに空に浮かび、寝転がるだけだ。

「待てよ！話をー」

「する必要は無い」

「て、事で。ゴメンねー？」

「……攻撃開始」

停戦を呼び掛けるヴィータに、しかし。四人は構わない。

一斉にスターズの一同に向けて駆け出した。



なのは達へと疾駆する四人。

それにヴィータがまず反応した。

即座にリインとユニゾン。その姿が赤から白へと変わり、同時なのは達の前に出る。

だが、その眼前に大斧を構える老人が瞬時に現れる。

「ーっ！なっ！」

「ヌっ！ん！」

横溜めに構えた大斧を踏み込みと同時にヴィータに放つ。

大斧は放たれると同時に、その背よりブースターが展開。

激烈な加速を持って、ヴィータへと襲い掛かる。

ヴィータは一瞬で現れた老人に驚いたものの、即座に我に戻る。

グラフ・アイゼンを縦に構え、大斧を受けた。

・・・しかし。

「ヌウアアアアアッ！！」

「っー！」

咆哮一声！

大斧を叩き付けたまま老人は叫び。大斧を振り抜いた。

その一撃にヴィータは堪える事が出来ず、盛大に空高くへと弾き飛ばされた。

「ヴィータちゃんっ！」



「バデスさん。あの赤い騎士は任せます」

「……委細承知」

上空へと吹き飛んだヴィータになのはが声を上げ。同時にソラが老人。

バデスへと声を掛け、老人は即座に頷き。

直後にヴィータへと向かい、上空へと舞い上がる。

それをさせまいとなのははレイジング・ハートをバデスに向ける。

「残念だが……」

「っ……！」

――閃――

いつの間に現れたのか、ソラがなのはの眼前に居た。

同時に振るわれる大剣。

それをなのははレイジング・ハートを突き出し、シールドを展開して防ぐ。

「……リズ、リゼ」

「はぁ……い」

「……了解」

直後、ソラの後ろから現れる二つの陰。

二人の少女達だ。

既にデバイスだろう。

その巨拳と、杖をなのはへと向けている。

「最大戦力をここで潰させて貰う」

「ゴメンね……」

「……謝罪」

既にシールドを展開しているこの状況では後ろの二人の攻撃にまでは対処出来ない。

なのははその状況に顔を歪め。

「クロス・ファイアー！シュートっ！」

ー輝！ー

なのはを掠めるように二十の光弾が放たれた。

それは迷い無く少女達に直撃。

二人を吹き飛ばす。

同時にスバルがなのはの脇を抜けて、突っ切る。

カートリッジ・ロード。

リボルバー・ナックルが激烈な回転を刻み。

それをソラへと叩き付ける。

ー激！ー

だが、ソラはその一撃を斬撃で向かい討った。

シールドから反らすように大剣を滑らせ、そのまま直進するリボルバー・ナックルへと叩き付ける。

しかし、勢いがあるスバルの一撃には打ち勝てず、そのまま後退した。

「この人達……」

「なのはさんっ！大丈夫ですか？」

完璧に捉えたと思った一撃をいなされて驚くスバル。

そしてティアナがなのはの横に並び、無事を確かめる。  
なのははそれに声を出さずに首肯した。  
同時に油断なくレイジング・ハートを構える。

「ヴィータ副隊長……」

「スバル。集中して。ヴィータちゃんなら大丈夫だよ」

空を見上げそうになるスバルをなのはが留める。

敵を前に視線を逸らすのはそれほどリスクがあるからだ。  
特にそれが、実力者、ならば。

そんななのは達にはソラはその場で剣を構える。  
横に、リズ、リゼと呼ばれた少女達も並んだ。

「むっ。痛ったかった」

「……油断大敵」

それぞれティアナを睨む。

そんな二人にソラは視線を動かさない。

「リズ、リゼ。連携組ませると厄介だ。分断するぞ。お前達はあの  
格闘士モドキと、ガンナーを頼む」

「はあ……い」

「……了解」

二人の返事にソラは頷く。

同時にその足元に魔法陣が展開する。

その魔法陣は……

「嘘……」

「カラバ式!？」

なのは、ティアナが驚きの声をあげる。  
それはシオンと同様の魔法式。

カラバ式のセフィロトを象った魔法陣であった。  
ソラはそんななのは達の反応を無視。  
その大剣を振り上げる。

「魔人撃っ」

ー爆！ー

振り下ろす一撃から広範囲に広がり、斬線が撃ち放たれた。  
雪を蹴散らし、向かい来る斬撃。

それになのは達は後退する事で回避する。

しかし、その一撃は別の効果を齎した。

雪煙だ。

舞い上がるそれになのは達の視界が塞がれる。

「ーっ。レイジング・ハート！」

オーライ！

なのはが塞がれた視界でソラ達を見失わないようにサーチャーをばらまき、しかし、直後に驚愕する。

「スバルっ！ティアナっ！」

「え……。っ！？」

「っ……。！？」

なのはの声に反応する二人。

しかし、その眼前にそれぞれリズ、リゼが現れる。

「どっかゝんっ!!」

「……攻撃開始」

スバルにはリズが。

ティアナにはリゼが。

それぞれ現れ、リズがスバルに巨拳の一撃を叩き込み。

リゼがティアナに至近からの射撃を叩き込む。

「つくうー!」

「きゃあー!」

それぞれぎりぎりでプロテクションを発動してその一撃を防御するも、しかしその威力に堪える事が出来ず、二人共吹き飛ばされる。それをサーチャーで感じてなのは二人の元に向かおうとするが、しかし。瞬間で眼前に現れたソラが放つ斬撃にタイミングを逸し、向かえない。

雪煙が晴れる頃にはそれぞれ一対一×4という図式になってしまっていた。

ヴィータはバデスと上空に。

吹き飛ばされたスバルはリズと対峙して。

同じく吹き飛ばされたティアナはリゼと向かい合っていた。

そして、なのははソラと空中でそれぞれデバイスを鰐ぜり合ったまま硬直する。

「さて……。連携は封じた。一対一だ」

「くっ……!!」

分断された状況。

そしてそれぞれの戦いが開始された。



【「ーヴィータちゃんっ！」】

「ーっく！アイゼン！！」

エクспロージョン！

ギガント・フォルム！

上空へと弾き飛ばされていたヴィータだが、リインの声と、何より下方より迫り来る気配を察知し、グラーフ・アイゼンをギガント・フォルムに変化させる。

そのまま弾き飛ばされた勢いを利用して一回転。

下より迫り来る存在。

バデスに一撃を叩き込む！

「轟天爆砕っ！」

ー轟！ー

振るわれる一撃。

回転運動を伴った、その一撃は同時にバデスの振るう大斧と真っ向からぶつかり合う。

それは衝撃となって聖域の空に響いた。

「いっっ……っ」

「……………」

鏝ぜり合い。

真っ向からヴィータが睨む。

直後に互いにアイゼンと大斧を離し、同時にぶつけ合う。

ー軋ー

その一撃に、両者は弾き飛ばされ距離が開く。

そして同時に魔法陣が展開。

それは二人共、全く同じ形の魔法陣であった。

「やっぱり、テメー。ベルカの騎士か！」

「答える義務を感じぬ」

ヴィータの言葉を見つめる。バデスはその場で大斧を振るう。

「ーっ！このーっ！」

それに対して、ヴィータは真っ正面からの激突を選択。

横殴りにギガントを叩き込む。

バデスは真上からの一撃だ。

ブースターが再度火を吹く！

ー轟！ー

一撃がぶつかり合い。

ー軋！ー

さらに返す一撃が更なる衝撃を生む。

その衝撃に二人は再度吹き飛ばされ、しかし、そのまま止まらない。

「ウオオオオオオっ！」

交差する。

ぶつかり合いと言う、力を持って。

上から突っ込み、下から跳ね上がり。

弾き合い。

吹き飛ばし合う。

その衝撃は聖域の空に響き、轟音となって辺りへと鳴り響く。

既に何合目か、ぶつかり合いからの鏖ぜり合いと成り、両者はそのまま互いの一撃を叩き込まんと正面から睨み合う。

「くっ……！」

このままでは埒があかない。

それにヴィータは顔を歪める。

目の前のバデスとか言ったか。

相当の騎士だ。

実力が半端では無い。

一刻も早く、下のなのは達の援護に向かいたいのに……っ！

ヴィータは歯噛みし。

そのままこれも何度目になるか、両者距離を開く。

同時にカートリッジ・ロード。

薬莖が互いのデバイスより排出される。

（リミット・ブレイク。使うか……！）

【でも……！】

リミット・ブレイク。

ツェアシュテールングスフォーム。

ヴィータの切り札だ。



今、互いに決め手を欠く現状を打破する為に使う必要がある。  
だが……

（バデスつつたか。あいつが切り札を持ってない、て保証が無え……）

【……はいです】

そう、ツェアシュテールングス・ハンマーの一撃で決められるのなら問題無い。

しかし、あの老騎士が他の切り札を持っていないとも限らないのだ。その場合、更なる事態の硬直か、もしくはこちらがやられかねない。

「……迷っているか」

「……っ」

いきなりかけられた声にヴィータが目を見開く。

この老騎士から声がかけられたのは初めてだからだ。

しかし、バデスは構わない。

大斧を縦に構える。

「切り札を切るかどうかを迷っているか」

「……テメー」

凶星。

バデスの言葉にヴィータは思考を見透かされていた事に怒りを覚える。

バデスは構わない。

「そちらが切り札を使わぬと言うならば、先に切らせて貰おう」  
エクスプロージョン！

吠える。

大斧が。

同時にその形状を変化していく、  
グレート・アックス ハルヴァード  
それは大斧から、槍斧のようなあまりにも長い柄となってその姿を形成。

しかし、その斧の部分。

それがとんでもなかった。

巨大。

あまりにも巨大に過ぎる斧だ。

その刃の部分だけでバデスの姿が隠れる。

さらにその背にはこれまた巨大なブースターが取り付けられていた。  
あまりにも巨大な巨斧をバデスは一振りで肩に担ぐ。

「銘。タイラント」

巨人。

そう名付けられた巨斧はその声に応えるように鈍く光る。

その巨斧を見て、ヴィータは呻く。

やはり持っていた切り札の存在に。

どちらにせよ、ギガント・フォルムのままでは戦えない。

向こうが先に切り札を切ったと言う事は、その巨斧に相当の自信があると言う事だ。

ヴィータはアイゼンを横溜めに構え、しかし、この状況で笑って見せた。

「上等だよ……っ！」

エクスプロージョン！

ツェアシュテールングス・フォルム！

カートリッジ・ロード。  
そして、アイゼンの先端。ハンマーの部分が変化する。  
先端には巨大なドリルが。  
後端にはこれまた巨大なブースターが取り付けられる。  
これこそがツェアシュテルングス・フォルム。  
聖王のゆりかごの駆動炉すらもぶち抜いた形態であった。  
頭上高くへと振り上げられるアイゼン。  
それにバデスも己の巨斧を左肩に担いだ状態で両の手を持って構える。  
直後に互いにその足元に魔法陣が展開。

「行っくぞ……っ！」

「参る……」

同時にその背のブースターが火を吹き、一気に駆け出した。  
疾駆し、真っ正面からその一撃を叩き込む！

「ツェアシュテルングスっ！ハンマーー！！  
ぶち抜けー！っ！！！」

「タイラント・オーバー・ブレイク！！」

ー轟！ー

ー破！ー

ー裂！ー

空気を引き裂き。

音すらもその衝撃でぶち破り、互いの一撃はその力を相手へと叩き込まんとその破壊力を発揮した。



「レイジング・ハートっ！」  
アクセル・シューター。

「……無駄だ」

ヴィータとバデスの戦いより下方の空域。  
そこではなのはとソラが戦いを繰り広げていた。  
既になのははエクシード・モードとなっている。  
何故か？

単純に強いのだ。ソラが。

彼は自らの術式。

カラバ式での戦い方を熟知していた。

ある意味において、シオンよりも。

レイジング・ハートから放たれる光弾。

総計四十。

しかし、ソラはそれに対して、あえて前に出る。

同時にそれぞれバラバラの空間に足場を設置。

その数二十。

それを見てなのはは顔を歪める。

(また……っ！)

なのはの思考に、まるで合わせるかのようにソラは瞬動をかける。  
それはまず近場の足場に。

さらにそれを足掛かりに次の足場に瞬動を。

直角に瞬動をかけ、迫り来るシューターをことごとく回避する。

同時になのはへの距離を潰し、その眼前に迫る。

対して、なのはは即座に瞬動をかけるソラにレイジング・ハートを向ける。

狙うはカウンターでの砲撃。  
しかし。

「エクセリオン……！」  
マスター！

即座に飛ぶレイジング・ハートからの警告。  
それにソラが笑う。

「遅い」  
「っ……！」

ソラは正しく砲撃が叩き込まれる瞬間。

なのは、眼前、に足場を設置。

それを足掛かりになのはの頭上を飛び越えた。

なのははレイジング・ハートにバスターのカットを任せ。

即座に左手でシールドを形成。感のままに背後に突き出す。

「――魔人撃」

――撃！――

「っくう……！」

至近からの一撃。

それがなのはの左手を痺れさせ。

同時にその身体を弾き飛ばす。

先程からこれの繰り返しだ。

シューターもバスターも、完全にタイミングが見切られている。

距離を離そうにも瞬動と足場の設置を利用した移動により。すぐに距離が潰されてしまうのだ。

戦い難い。

とんでも無く。

ある意味において完全になのはの天敵たる存在であった。

なのはも接近戦用の戦い方が無い訳では無い。

フェイトや、シグナム。ヴィータとの戦いでもあったように、接近戦に対する戦い方は心得ている。

だが、それすらも出来ない程の技量を眼前の存在は誇っていたのだ。

「……ヒュッ！」

「くっ……！」

吹き飛んだ勢いのまま距離を離さんとするなのはに、しかしソラはそれを許さない。

瞬動で即座に距離を潰す。

同時に鋭い呼気と共に放たれる大剣。

それをなのははレイジング・ハートを盾にして防ぐ。

だが、なのはもただ吹き飛ばされ続けた訳では無い。

ソラに避されたシューターに意識を集中。

全弾を緻密にコントロール。

ソラに向ける。

「……む!？」

即座に異変に気付いたのだろう。

初めてソラの方から距離を離す。

一気に後退。

その眼前を回避された筈の四十の光弾が通り過ぎる。  
・・・これを待っていた。

「エクセリオンっ！」

「っな!？」

抜き撃ち。

なのはの挙動にソラが驚愕し、目を見開く。  
当然である。

何せ、今しがたソラの眼前を、操作された、光弾が通り過ぎたばかりだ。

直後に砲撃を放つ等、無茶が過ぎると言うものである。

・・・しかし。目の前の、エース・オブ・エースはその無茶をあえて行う。

勝つ為の、最善、として！

「バスターーっ！っ！！」

ー煌！ー

なのはの叫びに呼応して、レイジング・ハートの先端から莫大な魔力の光の奔流が放たれた。

その一撃は10mと離れていないソラとの距離を瞬時に潰し、その破壊力を存分に叩き付けんとする。

既に回避は不可能。

ソラはそれを悟ると左手を突き出しシールドを形成。

エクセリオン・バスターを受け止める。

「ぐっ……！」

シールドを削りながら、その奔流はソラを通り過ぎていく。  
削って、削って。

だが、エクセリオン・バスターはそのシールドを破壊するまでには  
至らなかった。

その激流が弱くなっていく事にソラは笑いを浮かべ、しかし。

‘信じられない’言葉が響く。

「ブラスター・システム！リミット1つ！リリースっ！！」

ブラスター・セット！

「……おい……？」

その言葉と同時に光の奔流の向こう側のなのはの身体が光り輝く。  
それは一つの事実を意味する。

‘魔力増加’と言う事実を！

「……っ。馬鹿な……！」

「ブースト……シューーートっっ！」

ー轟！ー

光の奔流が一瞬でその勢いを取り戻し。

さらにその勢いを倍加させてソラに襲い掛かる。

驚愕すらもその光が飲み込み。

シールドを砕き、ソラはその光の奔流に飲み込まれた。

「ハァっ……ハァっ……」

マスター……



「大丈夫……」

バスターを放ち終えたなのは息を荒げながら、眼前を睨む。  
なのはの切り札たるバスター・システム。

自身の限界を超えた威力を叩き出すこのスキルは、しかし。術者であるなのはに酷く負担を掛ける。

特にゆりかごでの戦いの傷は未だ、なのはの身体を蝕み続けているのだ。

そんな状態でのバスター・モードの使用はなのはにとっても禁忌手であった。

しかし。あの瞬間を持ってしか、なのははソラに勝てる機会を見出だせ無かった。

それ程までの相手であったのだ。

エクセリオン・バスターBSが直撃したソラがいた場所からは未だ煙が立ち込めている。

それを油断なくなのはは睨み。

‘その声’を聞いた。

「……凄まじいな……」

「……っ」

瞬間。

煙が吹き飛ばされた。

その中央にいた存在。

ソラの‘魔力放出’によって。

その身体は所々、ススだらけとなり、ダメージを受けてはいる。

しかし、未だKOとまではいかない様子であった。

なのはは即座にレイジング・ハートを構える。

ソラもまた、自身の大剣を構えた。

「オリジナル・スペルに、魔皇撃、まで使わされるとは思わなかった」

「……」

魔皇撃。

それがソラの切り札なのか。

なのははブラスターを使ってすら倒せなかったソラを睨む。

あれで決めたかった。

そう、思う。

そんな、なのはの考えを知ってか知らずか、ソラはフツと呼気を整えた。

「……続きだ」

「……」

なのはは答えない。

しかし、その身体から魔力が再びほとばしる。

再び、ブラスター・モードを使ったのだ。

そして二人は同時に空を駆け、ぶつかり合う。

雪が降る空に魔力の光が煌めいた。



「撃！」

「裂！」

「どっか〜ん！」

「っ。この！」

なのはとヴィータが空中戦を演じている頃、スバルはリズムと拳を叩き付け合っていた。  
迫る巨拳に、リボルバー・ナックルを叩き込む。

ー拍！ー

「わぁー」

「くうっ！」

間延びした声だが、それに反してその巨拳の威力は絶大だった。  
打ち合った拳。  
右手に痺れを感じて、スバルが顔をしかめる。

「スバルっ！」

そんなスバルの反応を感じて、ティアナが援護の射撃をリズムに撃ち放つ。  
しかし。

「……駄目」

ー射・閃ー

放たれ射撃。

その全てがリゼの放つ射撃により迎撃される。

「つく……。この娘……！」

「……姉さんの邪魔させない」

その言葉と同時に広がる魔法陣。  
ミッド式だ。

くるとデバイスであろう。  
その杖を回す。

「……カドケイス」  
はい。

同時。

その周囲に生まれる光球。

その総数。二十五。

それを見て、ティアナも両のクロス・ミラージュをカートリッジ・  
ロード。

その周りに生み出される光弾。

その数同じく二十五。

リゼはカドケイスを振るい。

ティアナもクロス・ミラージュを左右に振るう。

「……ホーリーズ……」

「クロス・ファイアーっ！」

互いの光球と光弾が光り輝く。

撃ち放たれる事を待ち受けるが如く。

そして二人は撃発音を同時に叫んだ。

「……レイ」

「シューーーーっ！」

ー弾ー

光球が放たれ。

ー弾！ー

光弾が放たれた。

縦横無尽。

互いの二十五の光球と光弾が、ぶつかり合い、絡み合うように疾つて花となり、宙に咲く。

空に咲く光の花。

それを縫うように痺れを無理矢理堪えたスバルが疾る。

唸る、マッハ・キャリバー。

同時。カートリッジをロード。

向かう先はリズ。

リズもまたニッコニコと笑いながらその巨拳を構え、スバルへとひた走る。

「リボルバーっ！」

「ゴルデアス〜」

疾駆。

光球と光弾が二人の眼前で激しくぶつかり合い。

弾け合う。

それは互いの相棒の為の援護とそれを阻止する為に起きた光花。しかし、スバルもリズも止まらない。

互いの相棒を信じているからだ。

だからこそ止まらない。

そして、総計二十五の花が咲き。

そして散った瞬間。

スバルとリズはその拳を振るう。  
眼前の敵を打破する為に。  
踏み込み。

そして拳を一気に撃ち放つ！

「キャノンっ！！」

「インパクトっ」

ー撃！ー

ー裂！ー

宙空でぶつかり合う拳。

それは拮抗し。

その衝撃を叩き付け合う。

逃げ場を失った衝撃は真下に落ちた。

ー拍！ー

雪煙が盛大に巻き上がり、一気に視界が阻まれる。  
それに両者は後退。

離れ、互いの相棒の元に下がる。

「スバル。大丈夫？」

「うん。でも、あの娘。凄いパワーだよ……」

右手を振るい、痺れを治めようとするスバル。

それを見て、ティアナは唇を噛む。

スバルと互角。あるいは凌駕するパワーを持つ少女。  
さらに自分と同等レベルの射撃能力を持つ少女。

リゼの言葉を信じるならばリズの方が、姉らしいが・・・。

「……ティア？」

「スバル。クロス・シフト。行くわよ」

ティアナの提案。

スバルはそれに即座に頷く。

ティアナの考えは、まずリゼを連携で打ち崩し。  
後にリズへと向かう。

幸い。リズは機動力は低めだ。

スバルとの拳の打ち合いでもパワーで押していたものの、スピードはスバルの方が勝っていた。

それならば、まずリズをスピードで引っ掻き回し。

二人を分断した上でリゼを連携で攻撃出来る。

「よし。じゃあ……」

雪煙が晴れる。

スバルがマッハ・キャリバーを唸らせ、疾駆しようとした。  
瞬間。

「えっ……」

「なっ……」

スバルとティアナは同時に目を見開き、声を上げた。  
驚愕に。

そこには、リズとリゼの姿がある。

、無数、に。

それこそ十や二十や効くまい。

そのあまりの数に、二人そろって絶句する。

「これって……」

「幻、影……」

ティアナのお株を奪う見事な幻影であった。  
その数二人揃って五十。

ティアナはそれに唇を噛む。

（やられた……っ！）

自分と同等？

確かに射撃ではそうだったかも知れない。

しかし、リゼはティアナ以上の幻術使いだった。

先程から術式を逆算して、幻影と本物を探るが、全く分からない。

『へへへ。驚いた？驚いた？』

『……切り札……』

幻影全員から声上がる。

それにスバル、ティアナは顔をしかめた。

本物と幻影の区別がつかないこの状況。

一斉に来られると対処がどうしても遅れる。

それは隙となる。

そんな自分達を仕留める事など簡単だろう。

『じゃあ……』

『……攻撃、開ー』



五十のリズとりゼがが一斉に動き出そうとして。

「神覇・九ノ太刀っ！青龍う！！」

暴虐たる雷龍が、その五十のリズ、リゼの中央に突き立った。



雷龍はリズ、リゼの中央に突き立つと同時に更にその身をくねらせ、残った幻影達を喰らい尽くす。

ー轟ー

「これって……」

「青龍……？」

見覚えのある雷龍に、二人は呆然となる。  
瞬間。

二人の目の前に見覚えのある背中が現れた。

そのバリア・ジャケットは金色。

そして両手に携える短槍と長剣。

二人は知っている。

その後ろ姿を。

その後ろ姿の少年を。

「「シオン……」」

ティアナ、スバルは久しぶりのようで、たった一日しか離れていなかった少年の名を呼んだ。

シオンの息は荒い。

実はシオン。

感染者とスターズの面々が戦っている真っ最中に、漸くこの世界に転移出来た。

しかし、何の因果か。

シオンが現れたのはなのは達と真逆側。

つまり聖域を挟んだ場所だったのだ。

聖域はこの惑星の、およそ三分の一を占める。

その反対側だ。

この時点でシオンはスターズとの合流を諦めた。

しかし。

急に嫌な予感がシオンの背中に疾った。

シオンはこの類の嫌な予感を余程の事が無い限りは信じる事にして  
いる。

大体、嫌な予感がする時は外れた試しが無いからだ。

・・・回避も出来た試しも無いが。

そして、大慌てで反対側まで来てみれば、凄まじい戦闘があちらこ  
ちらで行われていたのだ。

・・・しかも殆ど、感じ覚えの、ある魔力が。

そしてスバルとティアナの姿と、それに襲い掛かる集団を見た時。

即座に精霊装填。

青龍を叩き込んだ訳だ。

「いたたっ」

「……作戦失敗」

雷龍が消えた後、リズとリゼが二人揃って現れた。その身体のバリア・ジャケットは所々焦げ付いているが、ダメージはさほどでもなさそうである。

幻影を囫に逃げまくったのだろう。

しかし、その余波はしっかり二人のバリア・ジャケットを焦がした訳だ。

そんな二人を見てシオンは顔を歪める。

それはまるで、信じたく無いものを見る顔だった。

「……シオン？」

「……どうしたの？」

スバルとティアナは気まずさも忘れて、思わずシオンに問い掛ける。しかし、シオンはそれを聞こえていないのか、無視する。

二人はそんなシオンの態度にムッとなって、思わず問い掛けようとするが、しかし。それより早くシオンが口を開いた。

「なんでだ……」

「……え？」

「シオン……？」

ムッとなった事も忘れて、二人はシオンを見る。

その顔は、怒りと。悲しみと。懐かしさ、をない混ぜにした顔。まるで泣き顔のような、そんな顔だった。

「なんで……お前等がここに居る……っ！」

「えっへへへ」

「……回答不要」

リズは笑い、リゼはそっけ無い。  
シオンは構わない。  
そのまま叫んだ。

「こんな所で何をしてるか聞いてんだっ！リズ！！リゼ！！」  
「……それが任務だからだ」

瞬間。

シオンの頭上から大剣を持ってしての斬撃が降り落ちた。  
シオンはそれに対して、両のイクスを挟み込むように掲げ、斬撃を  
受け止める。

「激！！」

衝撃が走り、雪が二人を中心にして一瞬。  
舞い上がる。

「「シオンっ！」」  
「シオン君っ！」

スバルとティアナが叫び、同時に相手を追っ掛けて来たのはも叫ぶ。

だがシオンは構わない。  
眼前の相手を。  
ソラを睨み付ける。

「……ソラさん……！」  
「久しぶりだな、神庭。随分強くなったな」

笑う。

まるで旧友に会うような表情で。

その笑顔にシオンはさらに苛立つ。

「ふざけんなっ!!……アンタが居なくなっただけで、リクが、コルトさんが……!。どれだけ二人が探し回ったと思ってる!!」

叫び、同時に魔力放出。

ソラを弾き飛ばす。

ソラは空中に足場を設置して、そこに立った。

「……悪いが。真藤の姓は捨てたんでな。二人共縁はとうの昔に切った」

「くっ……!」

ソラの台詞にシオンは明確に苛立つ。

そして剣先でリズ、リゼを指す。

「あの二人は!?!」

「私達は副隊長に着いて行きたかったただだよ」

「……姉さんと同じく」

二人の答えを聞いて、シオンは歯軋りを鳴らす。

怒りで。

苛立ちで。

……悲しみで。

そんなシオンにソラは構わない。  
そのまま頭上を仰ぐ。

「……バデスさんも、だ……」

「あのじいさんまでもかよ……っ」

感じ覚えのある魔力だったからそんな気はしていた。

……信じたくは無かったが。

二人が問答を繰り返している間になのははスバル達と合流。  
そのままシオンへと問い掛ける。

「シオン君。……知り合い？」

「……………はい」

苦々し気にシオンが答える。

そして改めてソラとリズ、リゼを睨み付ける。

「……元、グノーシスのメンバーです……。元第三位、真藤ソラ。  
元第六位、獅童リズ、獅童リゼ。元第四位、バデス・ヴォデフォー  
ル……」

息を吸い。

そして吐く。

ゆっくりと、感情を吐き出すように。

そして続けた。

「……俺の、仲間だった人達です……」

そう、言い切り、しかし。

「……それにもう一人加えなきゃあな？」

声が響いた。

あまりにも聞き覚えが。つい、数時間前に聞いた声が。

それはソラ達の後ろからゆっくり歩いて現れる。その背中に剣群を引き連れて。

「……なん、で……？」

その姿を見て、声を聞いて、シオンは怒りも忘れて呆然とする。

それはシオンの悩みを晴らした人。

酒を酌み交わし。

笑いを共にあげ。雨に打たれた人。

楽しかった、人。

「……おっちゃん……？」

「……偶然、て奴なんだかな。坊主。お前が聖剣とはな」

そう言っ、彼は、アルセイオ・ハーデンはシオンの前に姿を現した。

『坊主、またな』

そう掛かれたメモの内容通りに二人は、また、出会った。

敵として。



剣群が襲い来る。

姿を表すなりアルセイオがその背に展開していた剣群を放ったのだ。

シオンに対して。

「……まっ……！。おっちゃんっ！」

「起きろ」

シオンがアルセイオに呼び掛けるが、アルセイオはそれに答えもしない。

初めて、その手にデバイスらしきものを表す。

真紅の長剣だ。

鍔は無い。

両刃の、まるで血を流したような柄も刃も赤い長剣。

瞬間。アルセイオの足元に魔法陣が展開する。

セフィロトを象った魔法陣が。

「……カラバ式！？」

シオンが驚きの声をあげる。

アルセイオはどこまでも構わない。

「ソラ。聖剣は俺が貰うぜ？」

「……了解です」

直後。アルセイオの姿が消える。

瞬動だ。

シオンは直感に従い右に、ノーマルに戻したイクスを振るう。

「撃！」

魔力が爆裂する。

そこには紅い剣を振るう。



アルセイオの姿があった。

イクスと鏢ぜり合い、真っ正面から互いに睨み合う。

「おっちゃん！何でっ！何でアンタがつっ！」

「坊主。人間。譲れねえもの、てのがあるものなんだよ」

叫ぶシオンに、しかしアルセイオは淡々としていた。

そのまま鏢ぜり合いのまま魔力放出。

爆音と共に、両者吹き飛ぶ。

「つく……！」

「ふ、ん……」

アルセイオが詰まらなさそうに鼻を鳴らす。

同時。

その身体の周囲に

剣が。

大剣が。

巨剣が。

生み出されていく。

「なん、だ？この能力……？」

「無尽刀。そう呼びな」

【無尽刀、だと……？】

呆然とアルセイオの能力を垣間見て、シオンが呟く。

それにアルセイオが二つ名ともなる自身の能力の呼び名を教え。それに、今まで黙っていたイクスが反応した。アルセイオは漸くその反応に笑う。

「漸く、思い出したか。聖剣？」

【……馬鹿な……】

「イクス、おっちゃんの事。知ってんのか？」

尋ねるシオンに、イクスは一拍だけ黙り、しかし。喋り始めた。

【……元グノーシス。第二位、だ……】

「第、二位……？」

「そう、お前達に負けるまではな」

一息。

そこまで言って、アルセイオは一つ笑みを浮かべた。

「お前の前マスター。’伊織タカト’に負けるまでは、な……」

アルセイオは笑いながら、言葉を放つ。

そして同時に数百の剣群がシオンに襲い掛かった。

(第二十九話に続く)



ア

「はい♪超シリアスな空気をぶち壊すアリサ道場〜♪」

す  
「久しぶりだね〜」

シ  
「いや〜。全くだす。では、まず始めに……」

ア、す、シ

「「すみませんでした」」

ア

「いや〜作者が風邪なんぞ引いたおかげで更新が長引く、長引く」  
す

「まあ、朦朧とした頭で書くよりはマシなんだけど……」

シ

「とりあえず、作者も完全復活したので、これからもよろしく願  
いします♪」

ア

「さて、では復活宣言終了♪てな、訳で今回は〜」

シ

「リリカルなのは、クロイツ・ストーリーから、晶さんを……!」

蓮

「ども」

す

「あれ？晶君じゃないね……？」

シ

「て、あれ!？蓮次さん!？」

ア

「ああ、今回は晶じゃなくて蓮次に来てもらったのよ」  
蓮

「ええ。……面倒臭かったんですが……まあ、多作品に出るのも面  
白かろうと言う事で来ました」

シ

「へ〜。て、事は晶さんは？」

蓮

「ああ、隊長なら『酒とつまみをせびりに行くわ』と、666の元に向かいましたよ?」

シ

「……まあ、あのブラウニーだし」

ア

「む。……私の執事を勝手に……!」

す

「駄目だよアリサちゃん。’ 脱げない’ と晶君に勝てないよ?」

蓮

「……うらやましいのだから、どうなのか微妙な感染結果ですね、隊長は」

シ

「そんな事言っ……蓮次さんも感染するんですよ?」

蓮

「はっはっは。愚かですね。シオン君。流石、本編で馬鹿と呼ばれるだけあります」

シ

「……………」

ア

「いや、蓮次。そうは言うけど、晶だって……」

蓮

「嫌ですね……。歳のせいでボケたんですか?アリサさん」

ア

「……………」

す

「……蓮次君。ちよつと言い過ぎだよ?」

蓮

「いい歳した、ブルマ娘には言われたくありません。……ああ。目の保養にはバッチリですよ?エロくて」

す  
「……………」

蓮  
「おや？三人共どうしました？ダークオーラーなんて漂わせて……」  
ア、す、シ

「「……………殺すっ!!」「」」

蓮  
「はっはっは。それははご遠慮です♪」

シ  
「待てコラアっっ!!」

ア  
「駄目よっ！あたしに殺させなさいっ!!」  
す

「言っちゃあ駄目な事があるんだよっ!!」

蓮  
「いやあ、捕まる訳には……」

晶  
「…………やめい…………」

ーゴンっ!!ー

蓮  
「あだっ!!」

ア  
「あ。晶だ」

シ  
「どうしたんスか？晶さん」

晶  
「…………いや、見るに見兼ねてな。蓮次のペースに付き合ってたら、絶対に終わらなくなるぞ…………」

す  
「……でも……」

晶  
「……まあ、蓮次は後でしっかり、お話し、するからそれで許せ」  
ア

「う……ん……」

シ  
「……まあ、それなら」  
す

晶  
「……ちゃんと、言い聞かせてね？」

「……そこは期待しないでくれ。……言って聞く奴なら苦労は要らないしな」

蓮  
「……隊長。人聞きが悪いですよ？」

晶  
「反論なら聞くぞ？ 聞くだけならな」

シ  
「あ……。とりあえずそのお話しは置いときましょう。では、まずは今回のおさらいを……」

ア  
「新キャラ・ラッシュユね？」

す  
「アルセイオさんが率いる元グノーシスメンバーだね……？」  
シ

「はい。ちなみにおっちゃん以外のメンバーは投稿オリキャラと全員因縁持ちと言う設定です♪」

蓮  
「成る程。ただ出すだけでは面白く無い。この際だから因縁あるオリキャラを出して、投稿オリキャラ達とぶつけよう、て訳ですね？」

シ

「そう言う事です♪それ故に、敵オリキャラはまだ増えます♪」

ア

「ま、それは良いとして……アルセイオ。強いんだか、強く無いんだか……。晶と蓮次はどう思う？」

晶

「……またか。……まあいいけど。今は何とも言えないな」

蓮

「ですね。情報が少な過ぎます。どれだけ威力があるのか。どれ程の量が出せるのか。どのような工程で作り出せるのか。それが解らない限りは何とも……。と、言った所ですか」

ア、す、シ

「「「おお~~~~」」」

晶

「……まあ、相当な実力があるのは間違い無いだろ。元第二位らしいしな」

蓮

「666との因縁。イクスとの因縁が気になる所ではありますか。

……所で、因縁好きなんですか？ここの作者は？」

シ

「らしいですよ？」

ア

「因縁があってなんぼじゃい、てのがテストAMENT・クオリティ♪とか、アホな事言ってたからね」

す

「……本当、重病だね……」

シ

「さて、キリの良い所で今回はここまで♪大和さん。蓮次さん。そして晶さんの二人を同時に召喚させて頂きました♪ありがとうございます  
います♪次話もこのままで行くのでどうか、よろしくお願いします

♪

蓮

「またですか？……いいですけど」

晶

「と、言うか次はタカトも呼んでくれ」

ア

「……お酒と、ツマミ目当てでしょ？」

晶、蓮

「「当たり前だ／です」」

す

「まあ、タカト君ならすぐに喜んで用意してくれるよ」

シ

「……タカ兄いですしね……。勿論、感想。評価。質問。バリバリ受け付けてます♪どうかよろしくお願いします♪さて、では今回はここまで♪では……♪」

ア、す

「「また次回……♪」」

晶

「お楽しみにな？」

蓮

「ではでは、僕は一旦戻ります。馬鹿君と年増さんとブルマさん。また今度……♪」

ア、す、シ

「「「……今度は許さんっ！！」」」

蓮

「逃げ切ってみせましょう」

ア、す、シ

「「「待て……っ！……っ！……っ！」」」

晶

「……やっぱりこう言うオチなのな」



## 第二十八話「聖剣と魔剣」(後編)(後書き)

「アルセイオVSシオン」「二人の戦いは、しかし。意外な方向に進む」「シオンを分析するアルセイオ。次々と指摘されるそれにシオンは……」「そして、魔剣が、聖剣をついに捉える」「その時、彼女は……」「時を同じくして彼も聖域に現れる」

「666の異名を持つ彼が」「次回、第二十九話。『落ちてゆく思い』」「落ちて、落ちて。冬の世界に二人は落ちる」

## 第二十九話「落ちてゆく想い」(前書き)

「最初会った時から不思議な感じがしてた」 「大きい人だな、  
て思ったんだ」 「だから信じられなかった。信じた

く無かった」 「でも、戦いは。……おっちゃんは待たなくて」 「魔  
法少女リリカルなのはS t S, E X。始まります」

## 第二十九話「落ちてゆく想い」

十年前。

「ぐっ……！。……く……」

アルセイオは地面に這いつくばり、苦悶の声を絞り出しながら、顔だけを上に上げた。

そこには多種多用の剣に体を串刺しにされ、夥しい量の血を流す、子供、が立っていた。

恐らくは十歳前後。

黒髪黒瞳の少年だ。

怪我の酷さで言えば、間違いなく子供の方が酷い。

だが、負けたのはアルセイオの方だった。

自らのデバイスを破壊され、そして、眼前に聖剣を突き付けられて、アルセイオは敗北を悟った。

「……俺の勝ちだ……」

少年が呟いた。

それにアルセイオが歯噛みする。

「なんでだ……」

「……？」

アルセイオの疑問。

それに少年は訝し気な顔と成る。

だが、アルセイオは構わなかった。

「小僧。……お前程の力がありゃあ、その力だけで、何でも手に入らんだろ。……何で、あの小娘を守る？」

アルセイオが自らの組織。グノーシスに命じられた任務。

それが、咎人、と言う名を付けられた、僅か十歳の少女を殺す事だった。

アルセイオとしても拒否したい任務であったが、少女の持つ特殊な魔法がそれを許さなかった。

殺害是最悪の手段として、封印だけでも行おうとしたのだが。眼前の少年に阻まれてしまった。

少年の技、魔力。ありとあらゆるそれは、絶大であり。グノーシス第二位の自分ですらも敗北してのけたのだ。

僅か十歳の子供が。

だからこそ聞いて置きたかった。

身体中を貫かれ、ボロボロになってまで、この少年が少女を守る理由を。

少年は、アルセイオの疑問に、少しだけ笑った。

「……昔。ある所に、ある赤子が産まれた」

「……?……」

昔話。

少年のそれにアルセイオは逆に訝し気な顔となるが、しかし少年は構わない。

話を続ける。

「その赤子は、古くから伝わる予言により、『決して産まれてはいけない』『産まれ落ちれば、万物を殺し尽くす滅鬼』と、断じられた赤子だった」

少年は剣を下ろした。

己のデバイス。

聖剣・イクスカリバーを。

「その予言を恐れた者達は、その父親を追放し、その母親を子供が産まれる前に殺した」

だが。と、続ける。

「そんなものに意味は無かった。赤子は殺された母の胎内から産まれ落ち。そのまま、母を殺した奴らを皆殺しにした」

少年の独白。

だが、その昔話にアルセイオは聴き入ってしまった。

「赤子は予言通りヒトでありながら凄まじい神気を有し、不滅の肉体と魂を持っていた。予言を恐れた奴らはその赤子を殺そうと、毎日のように暗殺者を送りこんだ。……でも、そんなものは、ただのオモチャでしかなかった」

苦笑する、少年。

それにアルセイオは絶句する。

それは、まるで……。

「赤子は毎日暗殺者、で、遊んだ。……殺して、殺して、殺し尽くして。……そんな毎日が二年程過ぎたある日。予言を恐れた奴らはある一計を謀った」

また下がる。

一步。一步と。

アルセイオから少年は離れていく。

「最高位の魔法を持って、奴らは赤子の魂と肉体を切り離して、別々に封印したんだ。……肉体は生き仏として、魂はある鎧に。赤子は眠ることも食べる事も、何もかもを失った」

紡ぐ、紡がれていく。

紡がれていく少年の話しにアルセイオは聴き入っていく。

「奴らはそのままその鎧を、地獄に送った。そこは四六時中、魔物や、仙人。魔神や天使といった超者のモノが現れる場所で、奴らはその赤子を利用したんだ。……地獄に現れるモノとずっとずっと戦わせるように」

少年は苦笑する。

……それは、まるで、懐かしい話しのようで。

「戦った。殺した。滅ぼした。24時間。ずっとずっと戦った。食べる事も眠る事も、感情すらも覚えずにただ戦った。……そんな毎日を四年間、過ごした」

でも、と。少年は笑った。

嬉しそうに。

本当に、本当に嬉しそうに、笑った。

「彼女は、ルシアはそんな俺を救ってくれた。身体を返してくれて、そして俺にいろんな事を教えてくれた」

アルセイオは呆然となる。

少年の過去に、少年の言葉に。

なら、自分の組織はそんな彼等を・・・。

「言葉を、美味しいものを、眠れる事を、……感情を教えてくれた。……俺が知るべきものを、知らなきゃいけなかったものを教えてくれた。……世界がこんなに広い事を教えてくれた」

嬉しそうに、本当に嬉しそうに少年は笑った。  
その笑顔は、あまりに柔らかくて。

「こんな、俺に。産まれてきちゃ、いけなかった俺に。存在しては  
いけなかった俺に。……思わせてくれたんだ。生きてきて、よかった、て。存在し続けていい、て……」

だから、と。少年はアルセイオを見る。

そこには願いが込められていた。  
想いが込められていた。

‘奪わないでくれ’と。いう少年の、願いが。

少年は、そこで背中を向けた。

もう、語るべき事はないと。

そう、その背中は語っていた。

そして、歩き出そうとして。

「待て……っ！」

アルセイオの叫びに、その歩みを止めた。  
だが、振り向かない。

……それでも構わなかった。

「小僧、名前は……？」

聞きたかった。

この少年の名前を。

強く、弱い少年の名前を。

少年は振り向いた。

笑顔を浮かべて。

「伊織、伊織タカトだ」

そして一気に駆け出した。

己の、守るべき、'家族達'の元に。

「伊織、タカト……」

アルセイオはその名前を繰り返す。

忘れないように。

自らに刻み込むように。

そして、仰向けにひっくり返って笑い出した。

敗北を噛み締めて。

この時から、アルセイオは定めた。

己の目標に。

いつか、あの少年。

タカトに追い付く事を、自らに定めた。

翌日。

アルセイオはグノーシスを脱退した。

それから八年後。

アルセイオは聞く事になる。

かつての少年が、少女をその手に掛けた事を。





―激―

十の剣が。

―激！―

百の大剣が。

―激っ！―

千の巨剣が。

雪が降る空を飛ぶアルセイオ・ハーデンから撃ち放たれる。  
たった一人の存在。

聖剣の主。

神庭シオンに。

シオンは放たれたそれを回避し、あるいは弾く。  
・・・しかし。

「…………ぐっ！」

―轟―

巨剣をイクスで受け止めたシオンはその一撃の重さに顔を歪める。  
重い。あまりにも重い。  
しかも、それが。

―激・激・激・激・激・激・激・激・激・激！―

「がっあ……！」

数十と降り注ぐのだ。

恐ろしく反則な技だった。

スキル…無尽刀。

まさしく、尽くす事が無い刀であった。

「四ノ太刀、裂波！」

ー波ー

盾にしていたイクスから空間振動が放たれる。

それに振り落ちる剣群が、軌道を逸らされ、弾かれる。

続いて瞬動をかけて、一気にアルセイオの懷に飛び込もうとして。

シオンは、絶句した。

誰もいない。

同時に。

「よっと」

そんな声が真後ろより響き。

悪寒がシオンの背中を突き抜ける。

ー戟！ー

殆ど反射的に背後に放った一撃。

それは真紅の剣とぶつかり合う。

そこに居る人物は、もはや確認する必要も無い。  
アルセイオであった。

「……ぐ……」

「成る程な」

アルセイオは呟くと、同時にシオンに鏢ぜり合いのまま足場を形成。  
一步を踏み込み、同時に魔力放出。

「破！」

真上から放たれた一撃をシオンは堪えられず、真下。  
地面に叩き落とされた。

「あっぐ……！」

【シオン！】

呻くシオンにイクスが叫ぶ。

アルセイオを相手に、立ち止まる、という行為は自殺行為でしかない。

今のシオンはまさしく死に体であった。

・・・しかし。

アルセイオは肩に、その真紅の剣を担ぎ、シオンをただ見るだけであつた。

その目はただ語る。

、詰まらない、と。

それにシオンは歯ぎしりを鳴らし。

瞬動で一気に突っ込む。

アルセイオは今度は無尽刀を使わない。  
ただ剣を構えるだけ。

「戟！」

再び、ぶつかり合う。

イクスと剣。

シオンは至近からアルセイオを睨みつける。

だが、アルセイオはそんなシオンの視線をただ流すだけであった。

「……坊主。いい加減。身の丈に合わねえ、戦い方はやめろ」

「……ッ！」

その言葉に、シオンは目を見開いて驚愕する。

それは、ずっと、ずっと隠してきた事。

それをあつさとアルセイオは看破したのだ。

そんなシオンにアルセイオは構わない。

剣を翻し、イクスを跳ね上げる。

同時に踏み込み、シオンの腹に直蹴りを叩き込んだ。

「激」

「ぐっ……！」

「おら、よ！」

鳩尾に叩き込まれた蹴りで息が詰まるシオンにアルセイオはさらに上に跳ね上げた剣を叩きこむ。

それにシオンは無理矢理、イクスを盾にする。

だが、そんな状態で堪えられる筈も無い。

シオンは再び、雪が敷き詰められた地面に埋没する羽目となった。

「かつ……あ。ぐっ……ゴホッ！ゴホッ！」

【シオン？】

再び、呻き。

さらに咳込むシオンにイクスは疑問の声をあげる。

先程からシオンの様子が何かおかしい。

まるで、身体に力が入らないような、

「……坊主。自分でも解ってんだろ？」

「……」

何が、とはアルセイオは言わない。

だが、シオンは黙り込む。

それを見てアルセイオはため息を吐く。

「お前の戦い方は、剣の使い方は、斬り裂く、やり方だ。決して、叩き切る、戦い方じゃねえ」

「……黙れ……」

アルセイオは黙らない。

そのまま続ける。

「坊主。お前の本来の戦い方は、刀術だ」

「黙れよ！」

【シオン！】

一気呵成。

吠えながら、シオンはアルセイオに向かうが。

今度はアルセイオも容赦無く、無数の剣群を形成。

シオンへと飛ばす。

だが、シオンは構わない。

「神覇・伍ノ太刀……！」

纏う、魔力。

それを持ってしての突貫。

シオンは宙を翔け、一気に突っ込む。

「剣魔！」

ー翔ー

向かい来る剣群を弾き飛ばしながらシオンは突き進む。

だが、アルセイオはそれに慌てる事も無い。

そして、一本の巨剣を左手に形成。

それを、シオンへとブン投げる！

「そら、よっ！」

ー裂！ー

無造作に放り投げられたそれは、しかし。

いかな効果を有していたのか、アルセイオに投げられた瞬間に一気に加速。

音速超過し、空気をブチ抜きながら、シオンの魔と衝突する。

ー戟！ー

「……な、あ……」

剣魔の中で、シオンは今日何度目になるか、解らない驚愕をあげた。

拮抗。

ただ、投げられた剣と、剣魔が、拮抗していたのだ。  
剣魔はSクラスに匹敵する攻撃力を有している。

奥義を除けば最強の技。

それが、拮抗。

しかも、そこで終わらない。

アルセイオは自分の真横に足場を形成すると、真紅の長剣をそこに置く。

続いて、両の手に。

今、自分と拮抗している巨剣を作り出す。

両手に。

そして背後に。

その数、十数本。

「オラオラオラオラっ！」

投げる。投げる。投げる。投げる。投げる。投げる。投げる！

次々と投げられたその巨剣に、剣魔は持たない。

拮抗状態から押され。

剣魔が消され。

さらに、巨剣達がシオンに叩き込まれる。

「ぐっ！……うっ……」

巨剣に弾かれたシオンは、そのまま後ろへと吹き飛ぶ。

だが、今度は雪の中に埋もれる事は無かった。

無理矢理、体勢を整え。

地面に着地する。

「ハアっ……ハアっ……ぐっ！。ゴホッ！ゴホッ！」

息を切らせ。

さらに咳込むシオンに、イクスは悟る。

シオンがおかしい理由に。

風邪。

一時は治りかけていた風邪が再び振り返したのだ。

……だが、何故このタイミングで？

イクスが、そう思考すると同時に、アルセイオが横に置いていた真紅の剣を手取る。

……そこで思い出した。

あの剣の正体に。

【無尽刀。……まさか、それは……】

「おっ！流石に気付いたか、ある意味で同類だしな」

ニヤリと笑い。

アルセイオが剣を振るう。

赤の軌跡を描くその剣を見て、イクスが苦々し気に呟いた。

【魔剣。ダインスレイフ……】

「正解だ」

最悪。

まさに、最悪の展開だった。

今のシオンには、あの剣はまずい。

魔剣。ダインスレイフ。

その能力は、'吸収'。



魔力を、体力を、精神力を、打ち合うだけで吸収する能力を有しているのだ。

これで合点がいった。

何故、シオンの風邪がブリ返したのかを。

体力を奪われ続けたのだ。なら代謝機能も弱まる事になる。

【……シオン。あの剣は……】

「解ってる。ツゴホッ。……心配すんな……」

シオンはあえて笑ってみせる。そしてイクスを構えた。

「……おっちゃん……」

「続きだ」

笑い、再びその背後に形成される剣群達。  
そして、シオンに向けて一気に降り注いだ。



「っ………！シオン君！」

「よそ見をしている暇があるのか？」

アルセイオと戦うシオンを見て、なのはが声をあげ、しかし。  
目の前に現れたソラに視線を戻される。

同時に放たれる斬撃をレイジング・ハートで受け止める。

「……っ！。貴方達は何が目的なのっ！？」

「答える義務は無い」

ソラはただそれだけを繰り返す。

罅ぜり合う二人の周りで光の花が咲く。

ティアナとリゼの射撃魔法だ。

さらに空中でウィング・ロードが伸び、空を翔るリズとスバルがその拳を打ち付け合う。

今、なのははスバル、ティアと合流して、ソラ、リズ、リゼと戦っていた。

しかし、その戦いは硬直している。

ソラ達がまともに戦おうとしないのだ。

まるで、時間稼ぎをしているような・・・

《……っ！ヴィータちゃん！》

《悪い。こっちもシオンの援護に行けそうにねえ……！》

ヴィータに通信するが、返答は無理。と言う事だった。

ソラ達の行動からして、アルセイオとシオンの戦いを邪魔させないようにしたのは明白だ。

ならば、彼等の目的は・・・！

「シューートっ！」

「フンっ！」

放たれるアクセル・シューターを、回避せずにあえて防ぐ。

先程のような真似をさせない為だろう。

追撃を放とうとするなのはに、しかし。

ソラの魔人撃が飛ぶ。

それをギリギリでシールドで防ぐ。

「……っ」

衝撃に顔を歪めるなのは。

しかし、ソラは敢えて追撃をかけない。

それになのはは確信する。

やはり彼等は時間稼ぎをしている。

なら、その目的は。

「シオン君が、目的……?」

「答える義務は無いと言ったぞ」

ソラの答えはどこまでも変わらない。

大剣を構える。

それになのはもまた、レイジング・ハートを構えた。

(……駄目。やっぱり繋がらない……っ!)

もう一つ。

実は、アルセイオ達が現れた時からなのははアースラに通信を入れている。

だが、妨害されているのか、通じないのだ。

これでは援軍も期待出来ない。

(フェイトちゃん……。はやてちゃん……)

心の中で、親友達に呼び掛ける。

それでも、アースラに通信は届かない。

ソラが動き、なのはも宙を翔る。

決着は、未だ着きそうにも無かった。



所変わって、アースラ。

ここでも、異変は起こっていた。

待機していたアースラの周辺に突如として、転移して来たのだ。

アースラメンバーにとって馴染み深い存在が。

ガジェット。

1型と2型。

そして3型の混成群が突如として現れたのだ。

同時に感染者の殲滅に向かったスターズ少隊とも通信が繋がらなくなってしまうた。

ライトニング少隊とN2R少隊を緊急発進させ。

ガジェット達には対応しているものの、その数は多く。

未だにスターズの援護にも向かえなかった。

ブリッジで、矢継ぎ早に飛ぶシャーリー達の報告を聞きながらは yet は唇を噛む。

まるで見計らったかのようなタイミングでの襲撃。  
しかもガジェットだ。

殆どのガジェットは廃棄された筈なのだが……。

「……艦長！。アースラ上空に転移反応です！」

「っ……また、ガジェットなんか？」

ここに来ての転移反応。

それにはやては呻く。

一刻も早くスターズと合流したいのに……！

「いえ。転移反応1。……え……。この魔力値……」

瞬間。

一寸っ！

アースラの周りに居た、ガジェットが。

数百のそれらが、一瞬にして攻撃を停止する。

一拍の間を持って、停止したガジェットが爆発。  
撃墜された。

「……な、何が……？」

「艦長。……転移者の魔力値。規格外です……」

規格外。

つまりはEX。

そんな馬鹿げた魔力値の持ち主等、はやての知る限りではたった二人しかない。

しかもその内の一人は本局で入院中だ。

つまり転移したきた者は……。

「伊織、タカト……」

ウィンドウに映された人物。伊織タカトを見て、はやては呻くように声を上げた。

この状況下でのタカトの出現。

それが何を意味するかを分からず。

はやてはしばし呆然とした。



「……天破水迅」

一寸っ！

振るわれるは暴虐たる精密攻撃。

しかも物理攻撃でもあるこれはガジェット達にとってもまた、天敵であった。

何せAMFが効かない。

一瞬だけ、その効果を現そうとするが、凄まじい水圧で束ねられた水系にそんなものは意味を成さない。

アースラの上空に浮かぶタカトを中心に2Km。

その空域に居るガジェット達は、全て。

何も出来ずにただ殲滅されていく。

まるでガジェットの処刑場だ。

「……君は……」

「キツ……。じゃあ無かったな。フェイト・T・ハラオウンか」

タカトはいつの間にか現れたフェイトに、しかし。寸毫の驚愕も覚えずにただ水系の操作に集中する。

そんなタカトに、少しだけ顔を歪め、だが、フェイトは向ける。

己のデバイス。バルデッシュを。

「止まって」

「聞けない相談だ」

苦笑する。

そんなタカトにフェイトはしかし、構わない。

「……何で、この期に及んで私達を……」

「たまたま、見掛けたんでな。それに聞きたい事もある」

フェイトの疑問。

何故助けたのかを最後までタカトは言わせない。

そして、漸く振り向いた。

殆どのガジェットを壊し尽くして。

「……シオンは何処に居る？」

「シオン？」

その質問にフェイトは驚く。

シオンが追い駆けるならともかくタカトがシオンの居場所を聞く等有り得ないと思っていたからだ。

あくまで、タカトはシオンに追われる側というイメージがある。だが、タカトはそんなフェイトに構わない。

「……答える気が無いなら構わない。自分で探す」

あっさりと踵を返す。

離れるつもりだ。

「待って！」

「？。何だ？答える気になったか？」

そんなタカトの疑問に、しかしフェイトは首を振る。

どうしても聞いて置かねばならない。

タカトがシオンを捜す理由を。

何故か、そんな気がした。

「……なんで、シオンを……？」  
「……………」

フェイトの疑問。

それにタカトは一瞬だけ、とても寂し気な顔を見せた。  
それは、まるで……。

「……嘘を、守る為に」  
「……嘘？」

その答えに、フェイトは訝し気持な顔になる。  
嘘とは一体何なのか。  
だが、タカトは構わない。  
フェイトから視線を反らした。

「……もう、時間が無いんだ……」  
「……………。待って！」

待たなかった。  
タカトが一瞬で消える。  
手を伸ばしたままフェイトは呆然と、タカト居た空間を見ていた。

◆◆◆◆◆  
聖域を見下ろす崖。

そこでアルセイオはダインスレイフを振るう。

「戟！」



叩き込まれたその一撃に、シオンはイクスで受けるが、持たない。力が、入らないのだ。

崖の先端まで吹き飛ばされる。

後、何歩か下がれば、聖域に落ちるだろう。

シオンは何とか立ち上がろうとして、しかし。

激しく咳込む。

ダインスレイフによる吸収で、風邪が悪化しているのだ。

「……まさか、風邪たあな。意図した事じゃあねえが……」

「ぐっ……！」

息を飲み、何とか立ち上がろうとするも、足が言う事を聞かない。

シオンは膝を着いたまま。

アルセイオを睨むだけであった。

「……坊主。聖剣を渡せ」

【なん、だと……】

アルセイオの突然の要求に、イクスが呆然と答える。

アルセイオは構わない。

続ける。

「クライアントがお前を欲しいらしいんだよ。俺は坊主を気に入ってる。殺してまでは奪いたかねえ」

アルセイオの提案。

それにイクスは迷う。

自分が目的だった事にも驚いた。

そして、これ以上自らの主を危機に陥れる事にイクスは迷う。

しかし。

その主は迷わなかった。

イクスを左手で握りしめ。

顔をあげる。

そして、右手で、目元を下げ。

舌を、んべ。と出した。

アツカンベー。と。

「やなこった」

【シオン……】

そんなシオンの回答に。

アルセイオは少しだけ微笑む。

そしてその背後に再び剣群が生まれた。

「……なら、仕方ねえな」

【シオン！今ならまだ間に合う！俺を渡せ！】

「嫌だね」

シオンは笑う。

立ち上がれぬ身でありながら、屈しないと。

そして、剣群が。

「ファントム・ブレイザー……っ！！」

ー輝！ー

放たれる直前に、砲撃が横殴りにアルセイオに叩き込まれた。

「うおっ！」

砲撃が直撃する直前に、剣群がアルセイオを守り。  
しかし、盛大に吹き飛ばされる。

ティアナだ。

ソラ達との戦いの合間にいつの間に仕込んだのか、幻影とすり替っていたのだ。

オプティック・ハイドも駆使したそれに、漸くソラ達も気付く。  
だが。

「ここから先は……」

「行かせない！」

ソラ達の眼前に、なのは、スバルが立ち塞がる。

逆の立場となったそれに、ソラは顔を歪める。

「やられたな……！」

「むうっ」

「……油断」

三者三様の反応を見せて、なのは達を突破しようとする。

だが。

ー轟ー

「ぬっぐ……」

「バデスさん！」

両者のちょうど中間にバデスが降ってきた。

吹き飛ばされて。

さらに続いてヴィータが降りてくる。

「ヴィータちゃん／副隊長！」

「おう。待たせたな」

二人の呼び掛けにニツと笑う。

いかな激戦だったのか、そのバリア・ジャケットはボロボロだ。

だが、どうやらバデスを1時的に下したらしい。

バデスは立ち上がるようにするが、足が言う事を聞かないのか、立ち上がれ無い。

「ティアナ！ シオン君を連れて逃げて！ ここは私達が殿になるからっ！」

「はいっ！」

即座に頷く。

向こうの狙いがシオンならば、今。シオンを此処に置いておく事は出来ない。

ただでさえ。

その実力が半端では無い集団なのだ。

真っ正直に戦う必要は無い。

彼我戦力差から言っても撤退する事が正しい。

「シオン！ 立てる？」

「……ゴホッ。……ぐ。大丈夫……」

【咳込んで立ち上がれ無い人間を大丈夫とは言わん】

シオンに肩を貸してティアナがその場から離れようとする。だが。

「悪いが、そうはいかねえ」

「……………っ!!」

瞬間。

ティアナは、シオンは同時に絶句する。

吹き飛ばされたアルセイオが立ち上がって、それ、を担いでいた。  
刃渡り30mはあろうかと言う。  
極剣を。

「あんなの……!!」

「ぐっ……………」

顔を青ざめるティアナに、しかし。

シオンは諦め無い。

親指を噛む。

だが、遅い。

「そおら、よっ!!」

ー轟!ー

槍投げの要領で、その極剣を持ち上げ、一気に投げる。

音速超過。

空気をぶち抜き。

迷い無く一直線にシオン達に突き進む。

何とか、避けようとティアナはもがくが、シオンに肩を貸している  
状況では何も出来ない。

一瞬で迫る極剣に、ティアナは目を閉じ。

「エクセリオンっ！！バスターーーっ！！」

ー煌！ー

極大の光の奔流が、横殴りに極剣に叩き付けられた。  
なのはが、抜き撃ちでエクセリオン・バスターを放ったのだ。  
その一撃に、極剣は碎かれ。

しかし、その重量と破壊力は完全には消えなかった。  
シオン達が居る崖の先端。  
その、前方に全威力を叩き込んだ。

「あっ……！！」

「ぐっ……」

ー激！ー

崖が崩れた。

その威力により。

シオンとティアナは眼下の聖域に落ちていく。  
しかし。

「ここで聖域なんぞに逃がすかよっ！」

ー轟！ー

第二撃。

再び極剣をアルセイオは投げ放つ。

音速超過で二人に再度迫る一撃。

なのはは今度はソラに阻まれ。

ヴィータもスバルも間に合わない。

しかし、今度は間に合った。

シオンが叫ぶ。己が切り札を！

「来いっ！ヴォルトっ！！」

トランスファー！！。スピリット・ローディング！！

ティアナに担がれたまま、カリバーに戦技変換。

同時に、ヴォルトを装填する。

そのまま右のイクスを突き出した。

「青龍っ！！」

ゴー・アヘッド！！

ー轟！ー

イクスから放たれた雷龍が、極剣とぶつかる。

そして同時に宙空で爆砕した。

シオン達の真っ正面で。

ー砕！ー

「きゃああああっ！！」

「くうううううっ！」

シオンとティアナはその衝撃で盛大に吹き飛ぶ。

そして、そのまま聖域へと落ちていった。

「ティアーっ！！。シオンっー！！」

スバルが叫ぶ。

しかし、もはや二人は居ない。

その場には、ただ青龍と極剣の残滓が残るのみだった。

(第三十話に続く)



ア

「はい！今日も今日とて、アリサ道場くく♪当道場の主♪アリサです♪」

シ

「……………」

す

「弟子のすずかです♪」

晶

「前回からゲストで呼ばれているクロイツ・ストーリーの晶だ」

蓮

「同じく蓮次です。……さて、ところでシオン君。屋根に張り付いて何をやってるんですか？」

シ

「……屋根の修理です……」

晶

「また何で？」

ア

「あゝ。気にしないで。あれが今回のシオンの仕事だから」

す

「LVの侵略と言う名の座談会で、屋根が壊れちゃってね？シオン



君に、修理を厳命したんだよ♪」

晶

「……EXの誇るブラウニーはどうした？」

ア

「あゝ。それなら。タカトゝ」

―瞬―

タ

「……御呼びで？」

晶

「お、何だ普通に話してるな。どうしたんだ？」

蓮

「本当ですね。どうしたんですか？」

タ

「……現在。罰ゲームの真っ最中なんだな。……ああ、シオン？それじゃあ雨漏りするから修理、やり直し」

シ

「シクシクシクシク……」

晶

「容赦無いな……」

タ

「事、家事に関して、妥協は許さん」

ア

「流石、我が執事ね♪」

タ

「お褒めに預かり恐悦至極」

蓮

「戦闘よりもある意味恐ろしいですね。……ところで、今日は……」

タ

「……本日は『島乙女』そして、焼鳥だ」  
晶

「流石。解ってるな……。それじゃあかんぱー」

ア

「人の道場で呑み出すなーっ！」

晶

「っと！危ねえな！」

す

「タカト君も普通に用意しないでね？」

タ

「申し訳ありません。……どうも、身体が勝手に……」

ア

「条件反射のレベルなのね……」

す

「条件反射で、焼鳥なんて用意出来るんだ……」

シ

「……よし。これで完璧ー」

タ

「ああ。それじゃあ結界が張れん。やり直し」

シ

「ち、ちくしょう……」

蓮

「本当、容赦無いですね……」

ア

「さて、じゃあ今回のおさらいコーナー♪」

す

「今回はアルセイオさん。全開だね♪」

蓮

「確かに。よく、子供時代にあんなのに勝てましたね？」

タ

「と、言っても、半ば偶然みたいな勝利だったんだがな」  
晶

「実力的には向こうが上だったのか？」

タ

「そんなレベルじゃあ無かった。無尽刀のスキルは反則もいい所だからな」

ア

「……そんなに、強かったんだ？」

タ

「実際は俺は無尽刀のデバイスを破壊するので精一杯でしたな」  
晶

「そして、何気に語られたなお前の過去話し。……重いし」

タ

「容赦無く人の過去を重いつか言うな」

蓮

「いや、重いですよ。あれ」

タ

「うーむ。作者いわく。『全なのはSS史上最も重い過去を！』  
と、力説してたしな」

ア

「……あの作者は……」

シ

「……よし！これで!!」

タ

「ああ。シオン。勿論きちんと天井の模様との統合性。考えてるんだろうな？……考えて無いな。やり直し」

シ

「……う、うう……。普通に弄られるより辛い……」  
す

「……かってない程、ひどい目にあってるね……」

晶

「……話しにすら、加われないからな」

蓮

「川に送られるか、日陰キャラとなるか。ある意味において究極の選択ですね♪」

タ

「さて、では今日はここまで」

シ

「よしっ！最後の最後でっっっ！」

タ

「……釘打ちが甘い。やり直し」

シ

「わっっん！」

晶

「……本当。徹底してるな」

蓮

「でも、なんか今日の６６６はシオン君に、非常に厳しい気がしますが……」

タ

「……次話が次話なんでな」

ア

「え？何かあるの？」

タ

「ええ。まあ、だからちよつとばかり折檻も兼ねて。……天井の掃除も完璧に行うように」

シ

「ひっっっっん！」

す

「本当。家事に関しては妥協無しだねっ」

タ

「それが俺のポリシーなので。では、まず謝辞を。いつも読んでくれている読者様達。ありがとうございます。作者も感謝している。感想も送って頂いて。毎日の励みになっている。そして、今回のキャラ召喚を許可して頂いた大和さん。ありがとうございます。久々に剣聖や、人形使いと話せて楽しかった。そして、ヨシユアさん。侵略版アリサ道場ありがとう。作者も大爆笑したそう。これからもよろしく。ではでは。皆」

ア、す

「「また次回〜〜♪」」

晶

「……さて、終わった、終わった。酒、酒……」

蓮

「やっと吞めますね〜〜」

ア

「だから吞むなって言ってるでしょうが〜〜〜〜!!」

す

「……シオン君。まだ終わらないのかな？」

シ

「シクシクシクシクシクシクシク」

タ

「……埃が端に残っている。やり直し」

シ

「わ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ん!!!!」

## 第二十九話「落ちてゆく想い」（後書き）

「聖域に落ちたシオンとティアナ」

「魔法も使えない。

バリア・ジャケットすらも纏えない冬の世界で。シオンの体調は悪くなってゆく」

「そんなシオンに、ティアナは

……」

「そんな二人に、ガジェットと、そしてアルセイ

オ達が迫る」

「そして、シオンはついに対面する」

「嘘と」

「次回。第三十話『嘘と真実』」

「知りたくなんて無かった。しかし、真実は明かされる」

第三十話「嘘と真実」(前編)(前書き)

「ー嘘。俺はそれを知ってー」  
れを知ってー」

「ー真実。俺はそ  
「そして、俺はー」 「絶望する」

「自分に」

「世界に」

「魔法

少女リリカルなのはStS, EX。始まります」

### 第三十話「嘘と真実」(前編)

「ティアー……っ!! シオンっ……!!」

虚空に響くスバルの声。

しかし、それはもはや届かない。

シオンとティアナが居た崖の先端は無尽刀。アルセイオの極剣と青龍のぶつかり合いで、完全に崩れ落ちていた。

二人はその余波をともに喰らい、どこかに吹き飛ばされてしまったのだ。

恐らくは聖域に落ちたと思うのだが。

「チッ……。リゼ!」

「……探知不可」

アルセイオが二重螺旋の杖を持つ少女リゼに呼び掛けるが。

答えはそっけ無い。

聖域に落ちたのだ。

もはやいかなる魔法も届かない。  
しかも。

「吹雪か……!」

ソラが宙空を睨み唸る。

先程からチラホラと雪は降っていたが。

その勢いは増していった。

恐らくは吹雪になる事だろう。

即座にアルセイオとアイコンタクトを交わし。



アルセイオが瞬動でソラ達に合流する。  
同時にリゼから広がる広大な魔法陣。  
それは・・・

「転送魔法!?!」

「逃げるつもりかよっ!」

なのは、ヴィータがその術式を読み取り、させじとアルセイオ達の  
元に翔けようとする。

「……悪いな」

ソード・メイカー・ラハブ

アルセイオが苦笑いを浮かべ。  
同時に鍵となる言葉が響く。  
瞬間。

剣が、万を越す数の剣群が辺りに一帯に降り注いだ。

―激―

―破―

―軋―

「っ……!」

「くぅ……!」

激音と共に降り注ぐ剣群達。

それになのは達はアルセイオに近付け無い。

「リゼ。転送を」

「……了解」

「ーっ。待って！」

なのはが叫ぶ。

だが、その願いは聞かれなかった。

「そう言う訳にもいかねえんだわ。じゃあな！」

「まったね〜」

アルセイオが答え。

リズがその背後でぴょんぴょん跳びはねる。  
直後。

アルセイオ達の姿はその場から消え去った。

「ちつくしょう……っ！」

ヴィータが悔しいそうに呻き。

なのはも顔をしかめる。

だが、二人は同時にハッとする。

背後を振り向く。

そこには、今。

まさに眼下の聖域に飛び降りようとする、スバルが居た。

「っ……！。スバル。駄目っ……！」

フラッシュ・ムーブ！

なのはが即座に高速移動でスバルに取り付き、抱き止める。

それにスバルは抵抗する。

「離して下さい！！ティアが！シオンが！」

「……スバル！落ち着いて！落ち着きなさいっ！！」

なのはが耳元で叫ぶが、スバルは構わない。

その腕の中でもがく。

瞬間。

ーパシンっー

渴いた音が響いた。

その音はスバルの頬から鳴った。

頬が張られたのだ。

スバルが呆然とする。

その頬を張ったのは、目の前に移動した、ヴィータだった。

「いー、加減にしろ。あんま駄々こねんな」

「……でも……」

「ヴィータちゃん……」

多少は落ち着いたのか、スバルの抵抗が止まる。

ヴィータはそのまま背後を振り向く。

「レスキューだったお前が1番わかってんだろ？一人で遭難した二人を捜すのなんて無理な事くらい」

「……………はい……………」

そう、こんな深い森の中。

しかも吹雪が起きようとしているのだ。

それも魔法が使えない聖域で。

こんな状況で一人で捜しに行っても、遭難者が一人増えるだけであつた。

悔し気に沈むスバル。

なのはが肩に手を置いた。

「大丈夫。ティアナもシオン君も強いから。こんな所でどうにかなつたりしないよ」

「なのはさん……」

「そう言うこつた。……まずアースラに戻るぞ。救助隊をはやてに頼まねーとな」

「……はい」

なのは、ヴィータの言葉に漸くスバルは頷く。

そして、離れた空域に待機していたアルトを呼び出した。アルセイオ達が撤退すると同時に通信が可能になったのだ。なのは、ヴィータはアースラのブリッジに通信を入れる。

スバルは眼下に広がる聖域を見る。  
吹雪で視界も危うい。

「……ティア………シオン………」

どうか、無事で。

言葉に出さず。スバルはそう思う。

そして、祈るように、聖域を見続けた。



聖域の森は深い。

そして、尚且つ吹雪となりつつある。

その森の中をシオンはティアナを背負ったまま歩く。

先の一撃で気を失ったのだろう。ティアナはシオンが起こしても起きなかった。幸い息はしていたし、大した外傷も無いので、こうして背負っている訳だが。

既に自分達がいた崖は何処にあるか解らない。

相当な距離を吹き飛ばされたらしく、気付けば森の中だった。

・・・しかし。

「っゴホ！……運が良いんだか、悪いんだかな……」

咳込みながら苦笑する。

相当な距離で吹き飛ばされ、さらにかなりの高さがあった筈だ。

しかもここは聖域である。

魔法は一切発動しない。

バリア・ジャケットすらも消えるのだ。

実際、今のシオンは私服、黒のパーカーに、白いズボンだし。

ティアナは本局局員用の制服に戻っていた。

これだけの状況で、それだけの高さから吹き飛ばされたのだ。

生きてるだけでも奇跡に近い。

実際は森の木々で大半の衝撃を吸収され、ついでに雪がクッションとなったからこそその奇跡だった訳だが。

「……ゴホッ！ゴホッ！……っ……イクス……」

【……………】

問い掛け。

しかしイクスは答えない。

答える事は出来ない。

クロス・ミラージュも同じく、だ。

魔法関連はとことん無効としてしまう聖域ならばこそその状況ではある。

今は、頼れるのは己のみ。

そんな状況を心細いと思ってしまう自分にシオンは苦笑する。

つい、何ヶ月前まではそんな事を心細いなんて感じなかったのに。

「……弱くなったかな……」

違う気がする。

多分、弱くなった訳では無い。

……知っただけだ。

孤独というのが寂しい事だと。

そんな事を考えているうちにも、吹雪は激しくなっていく。

シオンの息は荒い。

目も霞んできていた。

だが。

「……あつ、た……」

一本の木。

それはシオンにとって、見覚えのある木であった。

木の表面の雪を手で払い落とす。

そこには、懐かしい傷跡があった。

数年前に自分がつけた傷跡が。

「……何事も、経験、か……」

呟く。

懐かしそうに。

シオンはこの聖域に何度か来た事がある。  
もっぱら修業で。

魔法が使えない場所での鍛練。

それを母から、そして兄達から課せられた事があるのだ。

そんな経験。

そして、自分が何日ここに居たのかを目印とした傷跡が役に立つ事があるとは。

苦笑する。

だが直後に激しく咳込んだ。

「……ぐっ……。まだ、だ」

霞む視界。

そして朦朧とする頭を振り。

ティアナを背負って立ち上がる。

ここより暫く行った所に、セーフハウス。

と、言うより自分達が勝手に作った山小屋がある。

そこならば、毛布もある。吹雪も凌げる筈だ。

歩く。歩く。

その度に、体力が削れていくのを認識し。

それでも歩く。

そう、こんな所で死ぬ訳には行かない。

ティアナも死なせたりしない。

帰るのだ。

アースラに。

皆の元に。

――へえ。随分と殊勝になったモンだな？――

「――っ。だ、れだ？」

声が聞こえた。

聞き覚えの無い声だ。

辺りを見回す。

だが、誰もいない。

気配も無い。

「……気のせい、か？」

訝し気に、シオンは顔を歪める。

そして、また歩き出した。

――カカカカカカカカカカカカカカカ……――

そんな、そんな笑い声が、聖域に音を介さず響いた気がした。



《……失態だな。無尽刀》

アルセイオは聖域近くに待機させてあった、自分達の次元航行艦で、その言葉を聞いていた。

既に何世代も前の艦である。

管理局からの横流し品だ。

ウィンドウの向こう側の人物。

グリム・アーチル提督は苛立たし気に顔を歪めていた。



《聖剣を取り逃し、渡したガジェットの五割を失ったか》  
「はい」

アルセイオは躊躇わない。

即座に頷く。

グリムの苛立ちが更に強くなる。

《……まあ、これまでの君の働きもある。’ あの方’ の推薦もある  
しな。……次こそは必ず聖剣を持ち帰るように》

「ご期待に添えるように努力します」

《……フン。口だけならばなんとでも言える。結果を出して貰おう》  
「ハイ」

それから数分。

グリムはアルセイオに嫌みを散々言った後。  
漸く通信を切った。

「……ふう、疲れんな。こりゃあよ」

「……お疲れ様です」

嫌みから介抱されたアルセイオがため息を吐くと、同時に横に控えていたソラが労いの言葉を送る。

その真横にはリズ、リゼも居た。

「あのおじさん嫌々い」

「……同意」

プンスカ怒るリズに、相変わらずのリゼ。

そんな二人の頭を撫でて、アルセイオはブリッジから出る。

ソラ達もそれに付き従った。

「……じい様はどうだ？」

「暫くは出れませんね」

ヴィータと戦っていたバデスは今は自室で安静中だ。  
墜されたと言う事もある。

当分は出撃させられそうも無かった。

「ガジェット達は聖域に入れてんな？」

「はい。こう言う時に魔法に頼らない機械は便利ですね」

アルセイオ達の艦に搭載してあったガジェットはその全てを現在聖域に入れている。

魔法が使えない聖域で、吹雪も関係無いガジェットはまさに今の状況にうってつけであった。

「よし。吹雪が止み次第俺達も聖域に入んぞ」

「……ガジェットに任せても宜しいのでは？」

ソラが疑問を上げ、アルセイオはそれに笑う。

指先で自分のコメカミを突く。

「いゝや。機械だけに任せるのは氣に入らねえし。何より、俺の感が告げてるんだわ。坊主を追っかけろ、てな？」

「……成る程」

アルセイオの言葉に、ソラは頷く。

実際。その、感、に幾度も救われた事があるのだ。

アルセイオがそう言うならば、自分としても是非は無い。

「了解しました。では防寒着を用意しておきます」

「おう」

「それから、ナインや飛達<sup>フエイ</sup>から報告が。合流は暫く遅れるそうです」  
「……しゃあねえな」

苦笑する。

元グノーシスメンバーである彼等の部隊に名前は無い。

一種の傭兵団でもある為だ。

一応アルセイオ隊とは名乗ってはいるが。

「……よし。なら吹雪が止むまで各自待機。しっかり休めよ？」

「了解です」

「はっはい」

「……了解」

三人共頷き、それぞれ自室へと戻った。

それを見送りながらアルセイオは思いを馳せる。

坊主と呼ぶ聖剣の主である少年。

神庭シオンに。

（……坊主、お前なら道は拓けるか？）

それはアルセイオがずっと考えていた事。

十年前の敗北から考えていた事だ。

予感がする。

シオンならば、自分は奴に対抗しうる剣となれるのでは無いかと。

「それも、坊主次第、か」

生きていろよ？

そう、アルセイオは思いつつ。  
自室へと戻った。



ティアナは夢を見ていた。  
自分が幼い頃の夢だ。  
兄に背負われて自宅に帰ってる。  
夕暮れの朱い空が印象的だった。

(あったかいな……)

兄の大きな背中とその体温を感じながら、兄に笑い掛ける。  
それに兄もまた笑う。  
何気ない会話。

もう失ってしまったやり取りだ。  
二度と戻れない過去。  
夢だなあと、ティアナは苦笑する。  
でも、たまにはいいかな？  
そうとも思う。

「……お兄ちゃん？」

「ん？どうした？ティアナ」

ティアナの呼び声に兄。ティーダが答える。  
兄の声にティアナは嬉しくなり。  
ただその背中に抱き着いた。  
だが。

「へへへ。お前でも、そんな顔すんのな？」  
「え？」

瞬間。

ティアナは目を見開く。

いつの間にやらティーダはシオンに変わっていた。  
と、言うか、自分も現在と同じ年齢、十八歳にまで戻ってる・・・！

「な、ななななな・・・っ！」

「はっはっは。案外可愛いかったぜ？お兄ちゃん♪、てよ？」

ボンッと音がするくらい顔が真っ赤になった事を認識する。

そして、ギロリと自分をおぶさるシオンを睨む。

夢の中まで、何て憎たらしい奴だろう。

「うっさいっ！この、バカ！バカ！大バカーーーっ！！」

「はっはっは。きかねーぞー」

とりあえず後ろ頭を殴るが、シオンは笑うばかりだ。

そんなシオンにさらに拳を降らせようとして。

（……………きろ……………）

「へ？」

唐突に声が響いた。

それにティアナが目をシロクロさせる。

（……………もう、す……………）

声が響く。

響いてゆく。

ティアナは回りを見渡すが、誰もいない。

「……誰?……」

呼びかける。

同時に夕暮れの世界に光が差し込んだ。

「……うつ……?」

「つ……。漸く起きたかよ……?」

掠れるような声がティアナの耳朵を打つ。

それに目を見開くと、間近にシオンの横顔と、雪景色が見えた。  
辺りは吹雪が降り。

視界は悪い。

シオンに背負われている。

それを認識すると、また夢かとティアナは嘆息。  
とりあえず。

先程の続きを行う事とする。

「このっ! バカっ!」

「……っぐ……」

ーカパンー

小気味の良い音が鳴り、シオンの頭が揺れる。

あ、なんか気持ち良かったかも？

と、思った直後。

シオンが盛大に前にぶっ倒れた。

「へ……？あれ？シオン？……て、寒っ！……寒い？」  
「っゴホ……。テメー……」

呻くシオンにティアナが回りをキョロキョロと見回す。  
寒い。

めっちゃめっちゃ寒い。

と、言う事は……？

「夢、じゃない？」  
「……………」

ティアナの疑問。  
しかし、ぐったりとしたシオンはそれに答えられなかった。



「…………つまり、私達は…………」  
「……聖域に、っゴホッゲホっ！…………っ。落っこちたんだ…………」

吹雪の中を歩く。

今度はシオンにティアナが肩を貸している状態だ。

どうやら先のティアナの一撃で、シオンの最後の気力やら何やらを盛大に削り取ったらしく。  
もはや歩くのもままならないシオンに、ティアナが肩を貸す格好となった訳だ。

「ジャケットも纏え無いなんて……」  
「……聖域、だからな……」

シオンが答える。

その絞り出すような声に流石に心配になる。  
ただでさえ風邪を引いてる上に、魔剣の効果でシオンの体力はごっそり無くなっているのだ。

「……シオン。その、……大丈夫？」  
「……グッゲホっ……。さっき一発ブン殴ったやつ台詞じゃねえよな……」

あえて、ふざけた返答を返すシオンに、しかしティアナは黙り込む。  
シオンの声にあまりに力がなくて。

「……シオン……」  
「……ほら、着いたぜ？」

シオンが弱々しく。しかし、笑う。  
ティアナも顔を上げる。  
そこには、木造の小屋があった。  
小さな、小さな山小屋が。

「本当に、あったわね……」  
「う……。……。言った通りだろうが……？」



偉そうに言うシオン。

しかし、不可侵領域である聖域に勝手に小屋を作るのはキツパリと犯罪だったりするが。

「えっと。とりあえず中に入るわよ？」

「……おう……」

とりあえずシオンに了承を得て、小屋の中に入る。

鍵が掛かってないのは幸いだった。

中は電気も何も無い。

暖炉すら無い小屋であり。

ただ毛布が一組置かれていただけだった、

「……何も無いわね……」

「もう、暫く使って無いし、よ……」

そこまで言って、いきなりシオンから完全に力が抜ける。

それにティアナは支えきれない。

完全に脱力した人間は想像以上に重いのだ。

一緒に埃が積もる床に倒れこむ。

「つきゃ……。っ！」

「……………」

シオンの上に乗る格好となり、顔を赤らめるティアナだが。

シオンの顔色を見て絶句する。

その顔色は青を通り越して、真っ白い。

明らかに顔色が悪かった。

このままだと、シオンの生死に関わる事をティアナは察知して、起

き上がり、置かれていた毛布を手取る。  
そしてシオンへと掛けた。  
・・・しかし。

「駄目っ！これじゃ、足りない……！」  
「ぐっ……！」

苦し気に呻くシオン。

寒いのか、その体は小刻みに震えていた。  
そこで気付く。

吹雪の中を歩いて来た自分達は雪で服が濡れてしまっている。  
小屋の中は外よりは遥かにマシとは言え。  
寒い事に変わりは無い。

この中で、濡れた服を着ているほうが問題だろう。  
脱がすべきだ。  
・・・しかし。

「うゝゝゝ……」

流石に躊躇する。

シオンの服を脱がすべきだとは解るが。  
恥ずかしさが先に立ってしまう。

だが、シオンが再び苦し気に呻くのを見て。  
ティアナはぐっと息を呑んだ。  
命には換えられない。

「……感謝しなさいよね。男の子の服、脱がすのなんて初めてなんだから……」  
「う………」

気を失っているシオンは答える事は無い。

とりあえず毛布の中に手を入れて服を脱がそうとするが、服が濡れている事もあり上手くいかない。

嘆息して、毛布を剥ぎ。

服を脱がす事にする。

しかし、そこでもやはり服が濡れている事がネックとなった。

しかもシオンは気を失っているのだ。

苦勞して、パーカーを脱がし。

続いてそのシャツも剥ぎ取る。

「……へへへ。思ったより、筋肉ついて……て、違う！」

ブンブン頭を振り回すティアナ。

細身ながらもしっかりとした身体付きのシオンを見て、ただでさえ赤い顔がさらに赤くなる。

・・・しかし。

「……こっちも、なのよね……？」

「……………」

一応聞くが、今のシオンが答えられる筈も無い。

ティアナが見ているのは、シオンの白のズボンであった。

「み、見てないからね？」

「……………」

目を閉じ、ズボンを脱がして行く。

ホックを外し。チャックを脱がす段階で、目を閉じている事もあり。まあいろいろ触れた気もするが、あえて気にしない方向でいく。

そして、脱がし終わると傍らの毛布を掛けてあげる。

「……お、終わった……」

「う……………」

いろいろな意味で気力を消耗して、息を荒くするティアナ。

・…何か後戻りがきかないと言うか、もうお嫁にいけないとか、そんなフリーズが頭を過ぎるが。

再度頭を振り。思考を追い出す。

「……うつ……」

「シオン……」

シオンの方を見ると未だ震えている。

・…いや、先程より震えは酷くなっていた。

身体が冷えているのだ。相対的にシオンの体調は酷くなる。

このままでは風邪をこじらせて肺炎にも成り兼ねない。

シオンの様子を見て、ティアナは考える。

シオンを温めるには、火を起こすのがベストだが、魔法も使えない。火元になりそうな物も無い事もあり、出来ない。

せめて、シオンを温める事が出来れば……。

「……あー」

唐突に思い出した。

そう、

あるでは無いか。

シオンを温める事ができるモノが。

「で、でも……!」

流石に躊躇する。

そう、シオンを温める事が出来るモノ。  
つまりはティアナ自身だ。

漫画とかでも良くあるでは無いか。

遭難した男女が裸で抱きしめ合い、お互いを温めあう場面が。  
だが、そこは思春期の乙女。

想像して、赤い顔が、さらに赤くなる。

「……でも……」

「……うつ……」

シオンを見る。

そう、恥ずかしがっている場合では無い。

このままではシオンは……。

「あー！ー！。もう！女は度胸よっ！！」

叫び、制服に手を掛け。チラリとシオンを見る。

流石に服を脱ぐ所は見られるのは恥ずかしい。

シオンは、目を閉じ。

息が荒いまま、毛布の中で、うなされていた。

何か悪夢でも見ているかもしれない。

額に、びっしり汗をかき、歯を食いしばっている。

それを見て、ティアナは決意を固めた。

少し躊躇いがちに、制服を脱いでいく。

上着を脱ぎ。シャツを脱ぐ。

スカートの段階で、また手が止まるが。

ティアナの制服もまた、濡れているのだ。

スカートも脱ぐ必要がある。

かなり悩み。

しかし、スカートのホックも外す。

オレンジ色の下着と、白のニーソックスだけの姿となった。

「恥ずかしいけど、今……温めてあげるから」

「あ、う……うう……」

ティアナの声に答えるように、シオンは呻く。

そして、ティアナはごそごと毛布に体を滑り込ませた。

瞬間。

がばっと、シオンがティアナに抱きついてきた。

「ちよっ！ちよつとあんた！まさか起きてるんじゃないでしょうね  
！？」

叫び、うろたえつつ。

しかし、ティアナはシオンを突き放したりしない。

シオンの体が冷え切っているのは、肌を重ね合わせればすぐにわかったからだ。

「う……っあ。……行かないで……。どこにも行かないでくれよ……  
…っ」

「……え？」

呻く。

弱々しく。シオンが。

意識は無いのだろう。だがシオンは必死にティアナに抱きつき。膽<sup>うわ</sup>言<sup>ご</sup>を呟く。

「だ、大丈夫よ。どこにも行ったりしないから。安心して、ね？」  
そう言って抱き返すと、漸く安心したのか、シオンの腕から力が抜ける。  
譫言は続く。

「……ずっと、一緒に。一緒に居てよ……。居てくれよ……」  
「うん。……一緒に居てあげる」

あまりに弱々しいシオン。  
その姿に、思わずティアナは胸がきゅっとなった。  
締め付けるような切なさや愛しさが、津波のようにティアナを襲う。  
それは、ティアナにとって初めての感覚だった。  
その感情のままに、シオンを優しく抱きしめる。  
一枚の布さえ隔てず、伝わってくる体温。  
そして、シオンの鼓動。  
ここに居ると。  
俺はここに居ると叫び続ける。  
生命の音。  
それをティアナは聞く。

「シオン……」

お互いの息さえ届く距離で、ティアナはじっと、シオンの顔を見つめる。

「うん。……ありがとう……」

シオンはティアナの胸に顔をうずめ、小さく震える。  
そんなシオンさえも愛おしくティアナは感じ。

さらに抱きしめる。

「……タカ兄い……」

「……………は?……………」

しかし、シオンの口から出たのは、ティアナの名前ではなかった。  
と、言うか。男の名前だった。

「シオン……。あんた……」

ティアナのこめかみがひきつる。

先程の愛しさや切なさはどこかに吹き飛んでしまった。  
かわりに、どうしようも無い怒りがティアナの体を渦巻く。

「よりによって……。なんで男の名前なのよーーっ!……!」

がーっっつと、久しぶりにティアナは吠えた。

……よく考えると、女の名前よりはマシなのだが……。  
そう考えられるほど、ティアナは冷静になれなかった。



「……ツクシヨイ!……。ぬ?」

聖域を臨む崖。

シオン達とアルセイオ達が戦った場所だ。  
そこに黒の青年が立っていた。

伊織タカトだ。



ずずっと鼻をすする。

「……誰か人の噂話でもしてる、か？」

そこで風邪かも？という思考に行き着かないのがこの異母兄弟、Sの特徴でもあった。

先程まで降っていた吹雪は、漸く鎮静化し始めていた。そんな聖域を見下ろし、タカトは目を閉じる。

呼び掛ける。

(……俺の声が……)

呼び掛ける。

(……俺の声が聞こえているか？)

呼び掛ける。

(俺の声が聞こえているか？)

ーこの世界にー

(ばあちゃん……)

その、象徴、にー！

そして。

《おや？懐かしい声がすると思ったら……。懐かしいわね？<sup>アナイアレイター</sup>殲滅者

？  
《》

殲滅者。

虚無と化さしめる者。

その名で呼ばれ。

タカトが笑う。

神殺し。魔王。666。滅鬼。

タカトの二つ名は数多くあれど、この二つ名を呼ぶのは、彼女、だけだ。

(……頼みたい事がある)

《あらあら？、孫、に頼まれる事ほど嬉しい事はありませんね？、いいでしょう。何がお望み？》

嬉しそうに、彼女、が笑う。

その声にタカト自身も笑い。

そして、彼女、を見る。

彼女はタカトの視線の先に居た。

聖域に立つ巨木。

世界樹と呼ばれる樹。

それこそが、彼女、だった。

(……神界の解除を……)

《おや？それはまた穏やかではありませんね？……何故に？》

問い掛け。

それにタカトの顔から笑みが消えた。

先程も聞かれたからだ。

何故シオンを？と。

思い出し苦笑する。

(……嘘を、守るために)

《……成る程。……いいでしょう。神界の解除には暫く時間が掛かります。宜しくて?》

(……はい……)

彼女の答えにタカトが笑う。

優し気に。

そして嬉しそうに。

そんなタカトに、彼女、は微笑み。

そしてタカトの、眼前、に姿を現した。

《……どうかしら? 久しぶりにヒトの姿をとってみたのだけど》

「……いつまで経っても、ばあちゃんは変わらないよな」

彼女は白い髪の少女の姿で現れた。

そして、タカトに纏わり付く。

《お話ししましょ? 神界の解除まででいいから》

「……ああ」

タカトもまた微笑み。

、彼女、に視線を合わすように、座り込んだ。



気付けばシオンは此処に居た。

青い空の下にある草原に。

シオンの世界に。

「……また此処か……」

苦笑する。

最近、どうにも夢を見る度に此処に来る。

だからと言って、何をするでも無い。

ただただ、此処に突っ立ってただけだ。

「……夢の中で眠る、てのもどうだろうな……」

苦笑して、しかし。他にする事も無い。

草原に寝っ転がる。

「……はぁ……」

ため息を吐く。

そして、空を見上げた。

そこで気付いた。

雲。

漆黒の雲が空に浮かんでいた。

それにシオンが眉を潜める。

この世界は雲一つない青空だった筈だ。

それなのに、雲。

「なん、だぁ？」

瞬間。

ーカカカカカカカカカカカカカカカカカッー

笑い声が。

あまりにも純粹で、汚れている。矛盾しているような笑い声が響いた。

同時に雲が、堕ちてきた。

シオンの真っ正面に。

「なん、なんだ……?」

いきなりの事態にシオンが疑問をあげる。

しかし、その声に応えるものはない。

そして、雲もまたシオンに構わなかった。

ーよう。久しぶりい。兄弟?ー

そんな声を上げ、雲が一塊になり、そして立ち上がる。

それはヒト型だった。

ただ、真っ黒の。

影、だけ、をくり抜いたようなヒト型。

「兄、弟……?」

シオンが呻くように、聞き返す。

それにヒト型が笑う。

顔の一部が切り裂かれてばっくりと口を開いて笑う。

ーああ?……何だ?忘れたのか?ー

「忘、れ……?」

何だ?

こいつは何を言おうとしている?

気付けばシオンは震えていた。

ガクガクと、恐怖に。

「そうかあ、カカカ……。どうりで。復讐なんて、無駄、をやつて  
ると思った……」

わからない。

わからない。

コイツの言ってる意味がわからない。

だが……。

「無駄、だと……?」

シオンが呻く。

それに影も笑う。

「ああ。お兄ちゃんを追っ掛けてたんだよな? お姉ちゃんを奪われて?  
」

カカと笑う。

「お前さあ、お兄ちゃんがお姉ちゃんに刻印を刻む、直前、の事、  
覚えてるかよ?」

「そんなの当たりまー」

そこまで言って、シオンは愕然とした。

覚えて無い。

何も、覚えて無い。

タカトがルシアに刻印を刻んだ前の記憶が。  
教会に行った後からの記憶が、全く無い。

ーカカカ……。やっぱな……。ー

歩く。

歩く。

影が歩いてくる。

そしてシオンの顔にくつつかんばかりに顔を寄せ。

ー見せてやるよ。、真実、を……。ー

そして、シオンは見た。

見せられた。、真実、を。

「う、そだ……」

ー本当だ。お前がお姉ちゃんをー

「うそだ、うそだ、うそだ、うそだ……うそだ！

影がニタリと笑った。

口が裂けるように、笑った。

そして。

ーお前がお姉ちゃんをお兄ちゃんから、奪った、んだよー

「うそだあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああつつつ！！！！！！」

ココロの世界に、シオンの叫びが響く。

嘘を知り。真実を知って。

絶望の叫びが響き渡った。

（後編に続く）



第三十話「嘘と真実」(前編)(後書き)

……はい。文字数の関係上。またもや前後編に分けました♪……あ  
あ！石を投げないでっ！！      で、まあ。後編ですが、海鳴温泉の  
プロットが完成したので、その執筆後と言う事で……。      ああ  
っ！本当、すみません！石は！石はー！！てな、訳で。後編。暫  
くお待ち下さい。温泉執筆後に速攻で書くので、お許しを。(汗  
ではは〜♪

第三十話「嘘と真実」 (後編) (前書き)

はい♪お待たせしました♪……いや、本当に（汗。漸く後編をお届けします♪楽しんでいて下されば幸いです♪では、どうぞ～♪  
P S…アリサ道場でちよつとした発表があります♪  
よければ、どうぞ宜しくお願いします♪

### 第三十話「嘘と真実」(後編)

見せてやるよ。’ 真実’ を……。

その言葉と共に、シオンの脳裏に瞬間でイメージが送られた。

それは二年前の光景。

シオンがルシアを失い。

そして、同時にタカトが去ったあの運命の日だ。

その場所は教会だった。

重い音と共に、大きな扉が開く。

そこからひょっこり現れたのは自分だった。

今より若い。

十五歳のシオン。

「へえ……。案外、普通の教会だね……」

キョロキョロと見回しながらシオンが歩く。

その背後から二人の男女が教会に入った。

異母兄。伊織タカトと。

姉のような人。ルシア・ラージネスであった。

「シオン。あんまり歩きまわるなよ?」

「大丈夫だよ。普通だぜ? この教会」

「こゝら。油断しないの」

ゴチっとシオンの頭にげんこつが落とされた。

それにシオンが頭を押さえる。

「一応、ここにあるのは第一級の危険物なんだからね？」

「う、……いや、でも……」

「言い訳をするな。……ほら、行くぞ」

タカトが苦笑いと共にシオンの後頭を押す。

それにブーと、言いながらもシオンも歩く。  
ルシアも二人に続いた。

三人が目指すのは、祭壇。

その上に飾られた十字架であった。

「……あれか？」

「そうみたいだね」

「……十字架に666、て何か皮肉な……」

苦笑する。

三人が見る十字架。

その中央に、666と刻まれた紋様がある。

まるで吊されたよう聖人のようだ。

そしてそれはある意味正しい。

十字架はこの666を封印する為のものであった。

ルシアが十字架に近付く。

十字架を触って軽く探査。

直後にその顔を歪める。

「……うーん。やっぱり、封印が解けかけてる……」

「前にこれが封印されたのが相当に前と言う話しだからな。……封印が解けてもおかしくは無い、な」

タカトもまた答える。

そして、ルシアに視線を戻した。

「ルシア、真名支配で、再封印出来るか？」

「……うん。いける。ちよーと、解明にてこずると思うけど、問題無いわ」

タカトの言葉にルシアが頷く。

同時に右の人差し指をぴっと上にあげた。

さらに足元にカラバ式の魔法陣を展開する。

そして、ルシアは目を閉じた。

「真名支配か……。これ、ランクEXスキルだね？」

「……何を今さら……」

そんなルシアの後に控える二人、シオンとタカトは平和そうに会話を始めた。

ぶっちゃけ、何もする事がなくて、暇なのである。

シオンの問いにタカトが苦笑する。

「万物の事象全てにある真名。それを解明し、その名前をもつての絶対命令だからな。言わば事象支配。……つくづく出鱈目だな。ルシアは」

「いやいや、タカ兄いは人の事言えないから！間違っても言えないから！？」

自分の事を棚に上げて人様の事を出鱈目扱いする異母兄に容赦無く、シオンはツツコミを入れる。

直後、ルシアが二人に振り向いた。

「そこ！五月蠅いっ！真名で拘束するわよ！？」

「……御免なさい」

即座に謝る異母兄弟二人。

「まったく……！」と、ぶつぶつ呟くルシアに、今度は聞こえないように、念話で話す事にする。

《……つくづく、ルシアにこの能力、似合ってるよね……》

《……女王様気質だからな……》

深く、タカトが頷く。

シオンも話しの断片としか知らないが。

タカトにとってはとことんルシアは暴君らしい。

……最初に会った時の蹴りを未だにシオンは忘れてはいない。

《……だが……》

《……だが？》

タカトが笑い。

シオンはそれに疑問を上げる。

それにタカトはフツと笑った。

《ルシアがこの能力の使い手で、俺はよかったと思う》

《………》

タカトは優しく微笑み、真名を解明しようとするルシアを見る。  
その瞳はとても穏やかで。

シオンはそれを見て、複雑な思いに囚われる。

解っていた。

解っていたのに。  
タカトにとって、ルシアがかけがえの無い存在だと。  
解っていた。  
だけど。

ああ、だけど。

《……どうした？》

《え？。いや……。何でも、無いよ……》

タカトの問い掛け。

それに、シオンは答えをはぐらかす。  
と。

「……ん〜」

そんな声をルシアが上げた。  
二人は意識をルシアに戻す。

「……どうした？ルシア」

「あ、うん。真名、解明出来ただけど、……めっちゃ長いのよ……」

「……長い？どれくらいなのさ？」

シオンが疑問の声を上げる。

それにルシアがため息を吐き、答える。

「……216文字」

「長っ！」

流石にシオンが速攻でツツコミを入れる。

半端では無い長さであった。  
タカトも苦笑する。

「……確か、ユダヤ教の神の名がそれと同じだったな」  
「そうなの？」

シオンの問いにタカトは頷く。

「……6の3乗か……」  
「……皮肉だねー」

6を3乗すると216となる。つまりは666だ。  
皮肉もここまで続くと、笑いが出てくる。

「だぁー！平和そうに言ってるけど、これ唱えるの、私よ！？」  
「……頑張ってくれ。俺とシオンは外で飯でも食べて来るからー」  
「行・か・せ・る・わ・け・が・無・い・で・しょ・う・が・っ・つ・！」  
「！」

一字一句ごとに区切りつつ、ルシアがタカトの襟首を捕まえる。  
そして、耳元でお説教を始めた。

「だいたい、あんたはねー！て、聞いてる？聞きなさいっ！！」

怒鳴り、怒鳴られるルシアとタカト。

しかし、そんな二人をシオンは見て、複雑な気持ちになる。  
言わなくても伝わる思いと言うのはある。

それが、昔馴染みで。

そして、……好意を持つならば、尚更。

シオンはルシアの瞳に、タカトへの家族に向ける以外の気持ちに気



付いていた。

ずっと、ずっと前から。

正直、お似合いだと思う。

敵わないとも思った。

だから諦めようと思った。

思ったのに――。

（……簡単に、忘れちゃいけないんだよな……）

苦笑する。

そして未だ怒鳴るルシアと怒鳴られるタカトを見る。

羨ましいと思うってしまう自分がいる。

嫉妬している自分にも気付く。

……兄を。タカトを憎いと思ってしまう自分がいる。

自分にとって。タカトだって、かけがえの無い存在なのに。

――だったら――

瞬間。

声が聞こえた。

（え……？）

疑問を上げ。周囲を見渡す。  
いない。

自分達の他には、誰もいない。  
だけど。

――だったら――

また、聞こえた。

ルシアとタカトを見る。

二人では無い。

未だにじゃれつく（シオンにはそう見えた）二人はそもそも声に氣付いていない。

ーだったら奪えばいいー

（う、ばう……？）

何を馬鹿な。

そう思う自分が居て。

・・・そして、抗え無い自分が居た。

ー何だ。乗り気じゃないか？ー

乗り気？

誰が？

そう思い。

しかし、同時に絶句する。

他でも無い。

自分がだ。

ー認めちまえよ？欲しいんだろ？あの女が？ー

違う。

違う。

否定し、しかし。

肯定する自分が居る・・・！

—カカカカカカカ—

一認めろよ一

―好きなら奪えよ―

「望めよ。汝の欲する所を、てな？」

違ふ。違ふ。違ふ。違ふ。違ふ。違ふ。違ふ。違ふ。違ふ。違ふ。

「違う！」

「そうだ」

否定して、否定して、否定しても。

頷く。自分が居た。

認めてしまう自分が居た。

・ ・ ・ 望んでしまう自分が居た。

「さあ、こつちだ……」

歩く。

シオンの意思に反して、身体が勝手に。

歩く。

シオンの望みのままに、身体が命じるままに。

「解った、ルシア、解ったからー!?。……シオン?」  
「え?」

そこで漸く、二人も気付いた。  
祭壇に向かって歩くシオンに。

シオンは歩く、歩く。

そして、十字架に手を伸ばし、666の紋様に手をー。

「ーっ! シオン!! そこから離れろっ!!!!」  
「……え?」

タカトの怒声。

それにシオンは漸く正気に戻った。  
ハッと、気付き。

しかし、間に合わなかった。

手は、十字架を触り。

そして解けかけた封印を完全に破った。

ーありがとう。兄弟。ー



相反する思いがシオンを渦巻き、対立し。  
叫び合う。

――だが。

――認めちまえよ――

――欲しいんだろ？――

――あの女が――

――憎いんだろ？――

――あの男が――

「ちが、う。ちがう……」

何も違わない。

そして。

「あああああああああああああああああああああ  
っ！」

叫ぶと同時にシオンから無数の数の漆黒の手が伸び。

それはタカトを、無視して、彼女に向かった。

「ーっ！ルシア！逃げっー！」

「ーえ？」

ーいただきますー

そして。

「きゃあああああああああああああああああああ  
っ！」

シオンはタカトから彼女を奪った。

何も無かった少年が。

漸く手にしたモノを、少年が全て奪った。

それは、ただそれだけの話し。



アースラブリッジ。

そこで、アースラの艦長である。

八神はやては難しい顔をしていた。

何故か？

理由は簡単。

今、目の前に居る少女。

スバル・ナカジマが原因であった。

「……あんな、スバル。さっきも言うたと思うけど、スターズ少隊は待機や。シオン君とティアナの搜索にはN2R少隊を向かわせるよ」

はやての言葉に、しかしスバルは頷かない。

シオン達が落ちたのは聖域だ。

魔導士では話しにならない。

そもそも魔法が使えないのだから。

その為に、全員戦闘機人であるN2Rに搜索に出てもらうつもりだったのである。

だが、それにスバルもまた志願したのだ。

そこで話しが拗れてしまった。

「……私も戦闘機人です」

「……そう言う意味とちゃうやろ？ スターズは感染者、謎の魔導士部隊と連戦したやろ？ そんな疲労が激しい者を搜索に出す訳にはいかんへんやん」

「……でもっ」

俯き、しかし。スバルは納得しない。

これにははやてもホトホト困ってしまった。  
気持ちわかる。

ティアナはスバルにとって、親友だし。

シオンは……。

「……お願いします。八神艦長……」

「うーん」

頭を下げるスバルに、はやては頭を抑える。



正直に言えば、スバルを搜索に向かわせるのは許可を躊躇う。連戦の疲労は馬鹿には出来ないからだ。

しかも、搜索するのは聖域内である。

魔法を使えないこの世界での二重遭難は流石にマズすぎる。

今は吹雪も止んでいるので、搜索するなら今しか無いのだが。

「……はやてちゃん。行かせてあげて」

「え？」

「なのはちゃん!？」

はやてが驚きの声を上げる。

誰が行かせてやれと言っても、なのはだけは反対すると思っていたからだ。

基本、彼女はこう言った無茶を人にさせたがらない。

自分もしないように気を付けている。

それは、かって彼女自身が無茶を押し通した結果を身を持って知ったからだ。

二度と歩け無いとまで言われた程の怪我と共に。

だからこそ、彼女がそれを言い出すとは誰も予想していなかった。

なのははそんな皆に微笑む。

「このままじゃあスバル。勝手に出ていっちゃうかもしれないよ？……そうなった時の方が私は怖いと思うな……」

「うーん」

なのはのその言葉に、はやても考え込む。

確かにその通りだ。

チラリとスバルを見る。

瞬間で悟る。

スバルの瞳は決意で溢れていたからだ。

はやてはハァー、とため息を深く吐いた。

「……わかった。でも、何か身体に異変があったり疲労が目立ったらそこで終わりや？ええな？」

「ー、はいっ！ありがとうございますっ！」

ぱあっと瞳を輝かして、スバルが笑い、そして頭を下げる。

それにはやては頷き、シャーリーに頼み、ギンガを呼び出した。

その間にスバルはなのはの元に駆ける。

「なのはさんっ。その、ありがとうございます！」

「うん。……でも、本当に気をつけてね？無理は絶対にしちゃ駄目だよ？」

「はいっ！」

頷き。

「失礼します」と声を掛けてスバルがブリッジを出る。

それを、はやてとなのはは見送る。

「……なのはちゃんが、まさかああ言うとは思わなかったな〜？」

「にやはは。ごめんね？はやてちゃん」

「ええよ」とはやても笑った。そして、ずっと視線を聖域を映すウインドウに向けた。

「……気持ちはわかる。あんま、許可は出したなかったけどな？」

「……うん。……それに……」

はやてに頷き、なのはも視線をウインドウに移す。

その瞳は何故か不安気に揺れていた。

「……何か、とっても嫌な予感がするの」  
「嫌な予感……？」

問うはやてに視線を向けずなのはが頷く。  
気付けば、くっと握りしめる指に力を入れていた。

「何か、何かが起きようとしてるような……」

そんなのはにはやては答えられず、またウィンドウの先の聖域に  
視線を向けた。

吹雪が止んだ聖域は、静かに佇んでいた。  
嵐の前触れのように。  
ただ穏やかに。



「……ん……」

暗い小屋の中。  
ティアナは呻く。  
その瞼は閉じられていた。  
つまりは寝ていた。  
だが、眠りが浅かったのか。  
その目がゆっくりと開き。  
半分程開いた所で、パッと完全に開く。

「ーっ。シオンっ！」

叫び、胸元を見る。

シオンはちゃんとそこに居た。

未だ、顔は朱いが。

シオンがちゃんと居た事にティアナはホツとする。  
しかし。

「う、あ……。ゴメン、なさい」

「……え？」

シオンの寝言。

それに、ティアナは疑問の声を上げた。

シオンはしかし、構わない。

「ゴメンなさい。ゴメンなさい。ゴメン、なさい……！」

ただひたすらに謝る。

再び悪夢を見ているのか、その閉じられた瞼から一筋の涙が流れた。

「……シオン」

それを見て、ティアナはシオンを抱きしめた。

涙を流しながら悪夢にうなされるシオンの背中をポンっポンっと叩いてやる。

シオンはそれに落ち着いたのか、漸く寝言を止めた。

「……何の夢を見てたのかしら？」

尋常な様子では無かった。

謝り、涙を流したシオンにティアナはそう思う。

謝らなきゃいけない程、辛い夢だったのか。

スツと顔にかかった髪を退かしてやる。

そして、毛布を共に包むように被り直した。

「……シオン」

ティアナはシオンの顔をじっと覗き込む。

ここに、聖域に来ていろんなシオンを見た。

あまりにも弱々しく。

一緒に居てくれと寝言で言う程、淋しがりやなシオンを見た。

弱いシオン。

しかし、それを見てティアナはシオンの事を幻滅したりなんてしなかった。

ただ一つシオンの事を知れた事が嬉しかった。

同時、そんな自分にちよつとだけ呆れた。

「……好きかも、か」

自分で言って、顔が朱くなった事を自覚する。

それはもう一つの自覚も促す。

もう、'かも'では無いと。

でも、それは・・・

(……スバル……)

脳裏に描かれるのは相棒であり、親友でもある一つ年下の少女だ。

言わなくても、気付く事はある。

ティアナはスバルの想いにもまた、気付いていた。

(……どうなるんだろ?)

まさか一緒の男の子を好きになるなんて思わなかった。

スバルもそうだろう。

だから迷う。

スバルにこれからどう接したら良いのかを。

だが。

<聞こえるかー?>

大音声が小屋に響いた。

それにティアナがぎよっとなる。

今の声はー!

<3分だけ待つ。その間に外に出なー!。もし時間が過ぎても出ない場合は強行突入と行くぜ?>

3分。

それにティアナは顔を歪めた。

魔法も使えない、今の状況。

それに時間制限のおまけ付きだ。

はつきり言ってどうしようも無い。

<ああ。遭難のお約束をやってんなら、早く服を着な?。そんなものは関係無く突入すんぜ? ソラなんかが、喜ぶだけだそー!?>  
<誰がですか!?!>

<副隊長くく?>

<……えっち>

<冤罪だ!>

その後もぎゃいぎゃいと声がおそらくは機械式のスピーカーだろう。  
それを介して響く。

そんな漫才に構わずティアナは考え込む。

どうやって、自分達を捜しあてたのかも謎だが。

それ以上にこの状況をどうするのかを考える。

(……とりあえず)

服だけは着る事にした。



「リボルバー! シュートっ!」

ー轟ー

放たれる衝撃波。

それに三機のカジエツトが纏めて粉碎される。

それを放ったスバルは、そのまま止まらずに疾駆する。

この雪原ではマツハ・キャリバーの機動が上手く使えない。

ウィング・ロードが使えない現状では仕方なくもあるが。

そんなスバルに上空から2型が三機急降下、ミサイルを放とうとして。

ー轟！ー

光の渦に纏めて飲み込まれた。

「IS、ヘヴィ・バレル」

その砲撃を放ったディエチがぼそりと呟く。

そして、更に群れをなして飛んでくるガジェットに殺到する投げナイフ。

ステインガーと、光弾。

光弾は先頭のガジェットにぶつかると同時に、その威力を発揮。

数台纏めて破壊し、さらにその奥のガジェットにステインガーが突き刺さる。

ーパチリー

同時、指を鳴らす音が響いた。

瞬間。

ー爆！ー

ステインガーが、一斉に爆発。

迫るガジェット群が纏めてその爆発に飲み込まれた。

「チンク姉え、ディエチ、ウェンディ、ありがとー」

スバルが笑い。

同時に、N2Rが集合する。

「それにしてもガジェットがこんなに居るなんて……」

「考えてみれば、当たり前っすけどねー♪」



唸るギンガ、そしてウェンディの言葉に皆頷く。

そう、何しろ魔法が使えないのだ。

ならばガジェット等の機械群はかなり有効であった。

「急がなくなっちゃ……っ」

「慌てるな、スバル。……ノーヴェ。どうだった？」

「駄目だ。森が深すぎて空からじゃあちよつと無理だ」

空からエアライナーでシオン達を探していたノーヴェの声にスバルがくつと唇を噛む。

そんなスバルに、ギンガが頭を撫でてやる。

「スバル。二人が心配なのは、分かるけど。焦っちゃ駄目。それは解る？」

「……解ってる。解ってる、けど。でも……」

それでもどうしようも無い。

スバルはそう思う。

ティア、そしてシオン。

二人の事を考えて。

もし。

もし。

と、考え込んでしまう。

よく無い傾向だと、そう思いつつ。

でも止まらない。

一時の間が、流れた。

「……ねえ、これ何だろ？」

「え……？」

沈黙を破るようにディエチから声上がる。

彼女は木を背にしてもたれ掛かっていたのだが、今はその木に向かい合っている。

それにスバル達も疑問を浮かべつつ。

向かった。

「これ……」

「何かの、目印か……?」

ギンガが驚き、チンクが首肯する。

それはナイフのような鋭利なものでそれで傷が付けられてあった。  
同時。

「うん?」

チリリリリと音が鳴り、ノーヴェエの五感が強化される。

戦闘機人ならではの機能ではあった。

「どうした?ノーヴェエ?」

「いや……。声、聞こえないか?」

チンクの問いにノーヴェエが答え、それに他のメンバーも感覚、特に聴覚を強化する。

「……うん。聞こえるわね」

「これは、声か?」

ギンガ、チンクも首肯し。

同時にスバルも気付く。

この声はー！。

「確か無尽刀、て人の……！」

「無尽刀？それって確か例の魔導士部隊だよな？」

驚くスバルにノーヴェが尋ねる。

しかし、聞こえていないのか、スバルは答えず。

そしてそのまま駆け出した。

「スバル！？」

「ゴメン！ギン姉え、先行くね！」

「待て！スバル！」

ギンガ、チンクから制止の声が掛かるが、スバルは止まらない。  
そのまま声の方に突き進んだ。



山小屋の中。

ティアナが着替え終え、立っている。

シオンは相変わらず寝たままだ。

時々うなされている。

だが、シオンを連れていく訳には行かない。

<そろそろ、三分だぜー！！>

その声にティアナは顔を上げる。

結局、何も思いつかなかった。

この状況を打破する方法は。

三分で思いつけと言うのが、そもそも無理ではあるが。

「……シオン。ごめん。借りるわね？」

謝り、シオンの服のポケットに手を伸ばす。

程なくして、それは出て来た。

待機状態のイクスだ。

今は聖域の影響か、何も話せず、何も出来ない。

「……イクスもごめんね」

イクスにも謝る。

おそらくではあるが、無尽刀達の目的はイクスだ。

最悪の手段として、イクスを渡す事も頭に入れて置かなくてはならない。

イクスを手に握ると、そのまま小屋の出口に向かう。

扉を開く前に、一瞬だけシオンを見た。

「……シオン。行ってくるわね？」

シオンは答え無い。

ただ呻くだけだ。

そんなシオンに、少しだけ微笑み。

ティアナは小屋を出る。

敵が待つ、冬の世界に。

だが、ティアナは気付けなかった。

直後に呻くシオンからぽこりと少し溢れるものがあつたと。

それは黒の点。

黒の泡。

アポカリプス因子が、シオンの身体から溢れ始めていた。

「よう、遅かったじゃねえか？」

「……………」

外に出るなり、無尽刀。アルセイオから声が掛かる。

外には、アルセイオを始めとして、ソラ、リズ、リゼが居た。

全員、防寒服を着用している。

魔法が使えない為。

バリア・ジャケットが纏えないから当たり前ではあるが。

そして、四人の周りにはティアナにとって非常に見覚えのあるものが居た。

ガジェットだ。

楕円形の1型のガジェット達がおよそ二十程宙に浮いていた。

それにティアナは合点がいった。

なんで魔法も使えないこの聖域で自分達を捜せたのか。

ガジェットを数任せで出して、そのセンサーで捜し出したに違い無い。

魔法を使え無い聖域では非常に有効な方法だと言えた。

「……坊主がいねえな？中か？」

「……知らないわ」

答え。

しかし、ティアナは齒噛みする。

ガジェットセンサーがあるのだ。

生体反応を調べる事など、楽勝だろう。

当然、ソラ達もガジェットを操作。

センサー類で小屋を探查し、アルセイオに頷く。

「やっぱ、あの小屋か」

「……………」

ティアナはその言葉に頷かない。

強がりのようなとは解っていても、それでも頷かなかった。

そんなティアナにアルセイオは笑い。

右手を差し出す。

「さて、嬢ちゃん。俺の目的は何か解るよな？」

「……………」

答えない。

そんなティアナに、しかしアルセイオは笑う。

「持ってきてるんだろ？ 聖剣」

やはりそれが目的。

先の戦闘の最中で、アルセイオがシオンにイクスを差し出すように  
言うてはいたが。

「イクスを手に入れて、どうするの？」

「そいつは俺も知らねえ。クライアントにでも聞きな」

肩を竦める。

そんなアルセイオにティアナは唇を噛む。

時間稼ぎもろくに出来ない。

厄介な男であった。

イクスを渡そうとしないティアナにアルセイオはフツと笑い。

ガジェットを前進させる。

向かわせるのは小屋。

「ーっ！待って！」

脅しだとはティアナにも解る。

だが、それでも止めずにはいられなかった。

そんな自分にティアナは顔を歪め、アルセイオは笑う。

「止めて欲しかったら、解るわな？」

「……っ」

その言葉に目を伏せ、ティアナは黙り込む。

だが、再び前進しかけるガジェットにティアナはついにそのポケットからそれを取り出した。

待機状態のイクスを。

「そう、それだ。それを渡してくれるなら、この場から引くどころか、聖域の外まで連れて行ってやるぜ？」

ここに来て、もう一つの提案。

それにティアナは呻く。

今のシオンの様子を鑑みれば、一刻も早く治療する必要がある。

ジャケットも纏えないこの聖域から連れ出してくれるという提案はあまりに魅力的過ぎた。

「く……っ」

「悪い話しじゃ無えだろうよ？で、どうする？」

迫られる、選択。

しかし、それはあまりに選択の余地が無い選択でもあった。

ティアナは手の中にあるイクスを握る。

くっとな力を込め、瞳を閉じた。

（シオン。イクス。……ごめー）

【……再起動開始。……ここは？】

瞬間。

聞こえない筈の音がティアナの掌から聞こえた。

は？と疑問を上げつつイクスを見る。

すると、イクスは待機状態から人型へと変わった。

【ティアナ・ランスターに、……無尽刀！？何だ、この状況は！？】

「ーっ！クロス・ミラージュ！」

はい、マスター？

はっと気付き、懐の相棒に声を掛ける。

直後に応える声に、ティアナは即座にクロス・ミラージュを取り出した。

「セット・アップ！」

「ーっ。ちい！」

漸く、驚愕からアルセイオが立ち直る。

しかし、遅い！

バリア・ジャケットを纏うと同時に、カートリッジ・ロード。



「クロス・ファイアー！シューーーーー！っ！！」

ー散！ー

ティアナの叫びと共に放たれる二十の光弾。

それは、アルセイオ達に、そしてガジェット達へと突き進む。

アルセイオ達は即座に反応。

後退する事で回避する。

しかし、ガジェット達はそうも行かずに光弾を叩き込まれ、一瞬間を持って、盛大に爆発した。

「……ちい。何だ、何で魔法が使える！？」

アルセイオから上がる声。

しかし、それにティアナは答えない。

向こうはデバイスを起動すらしていないのだ。

ならば今が絶好のチャンス。

「クロスファイアー……！！」

【待て！ティアナ・ランスター！この状況は何だ？シオンは？ここは何処だ？】

叫ぶイクス。

しかし、そんなものに構う暇は無い。

ティアナはイクスを無視する事に決めた。

「シューーーーー！っ！！」

ー散！ー

再び、放たれる光弾達。  
迷い無く、アルセイオ達へと突き進む。  
だが。

「ふうっ！」

鋭い呼気。

同時に、アルセイオの背後に剣群が生まれた。  
直後に、アルセイオ達の前方に剣群が展開。  
盾となって光弾を防いだ。

「くっ……！」

「……流石に焦ったぜ」

ニツとアルセイオが笑う。

それにティアナは顔をしかめる。

出来れば、今の内に決めて置きたかった。

戦力差が大き過ぎるのだ。

最悪でも、今ので一人か二人は倒しておきたかった。

そんなティアナをよそにアルセイオ達もバリア・ジャケットを纏った。

「……理由は分からねえが……。魔法が使えるようになったらしいな」

「くっ……」

呻くティアナ。

ここに来て、再び不利。

流石にこの四人を相手どって勝てる要素はどこにも無い。

歯噛みし、もう一つを選択。

ここからの離脱をティアナは決める。  
だが。

（目眩ましは可能としても幻術を併用して、小屋のシオンを回収して、それから……）

難しい。

離脱すらも相当に難しい。

だが、やらなければならない。

何故魔法が使えるようになったかは解らない。

だが、今が千載一遇のチャンスである事に変わりは無いのだ。  
両手にクロス・ミラージュを握り、ティアナは離脱のきっかけを待つ。

アルセイオ達もそれを察しているのか、動かない。  
しかし。

【……シオン？】

「え……？」

「何？」

イクスから上がる声。

それにティアアナも、アルセイオも振り向く。

そこには、半裸で歩くシオンが居た。

「シオンっ！そんな格好で……！」

怒鳴り、イクスに起動を頼もうとして、しかし。

その表情を見て、ティアナは固まる。

イクスの瞳は驚愕に見開かれていたからだ。

尋常な驚き方では無い。

「……イクス？」

【馬鹿な。……そんな、馬鹿な！まだ、早過ぎる、！】

叫ぶイクス。

それにティアナは疑問を浮かべる。

シオンは構わない。

歩く。歩く。

そして。

「ぐ、る、あ……」

「……シオン？」

シオンの様子にティアナは声を上げ、そして。

、それ、を見た。

「シ、オン……？それ、なに……？」

ポコリポコリとシオンから溢れるもの、それをティアナは信じられない。

それは黒の点。

黒の泡。

ティアナは知っている。

それを、その名を。

それは――。

「――因子、だと……！」

アルセイオからも声が上がる。  
それもまた驚きに彩られていた。  
ティアナはそれでも信じられ無い。  
さっきまで普通だったでは無いか。  
なのに、何故。

【……ぐ、あ……】

「……っ！イクス！？」

イクスからいきなり上がる苦悶の声。  
それにティアナがハツとなり、イクスへと視線を移す。  
だが、イクスは既にそこに居ない。  
いつの間にか、シオンの胸の先に居た。

【駄目、だ……！やめろ、シオン……！】

「る、う、あ、あ、」

シオンは答えない。

そのままイクスを捕まえ、自分の胸に押し当てる！  
ずぶずぶとシオンの中へと沈み込むイクス。

必死に抵抗するが、その抵抗も敵わず、シオンの中に入っていく。  
これは、まるでー！。

「イクスっ！」

【ティアナ……ランスター、逃げ、ろ……】  
ユニゾン・イン

イクスの意思に反して、マスターに強制融合させられる。  
そして。

「あ、が、あ……。あああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああつつつつつつつつ！……！！」  
トランスファー。コード、アンラ・マンユ。  
アヴェンジャー・フォーム。起動。

瞬間。

ー煌ー

闇が。

とてつもなく大きな闇がシオンを包み込んだ。

「っー！。シオンっ！」

叫び、シオンへと駆け寄ろうとするティアナ。  
しかし、その意思に反して、身体は動かない。  
何故か？

震えているからだ。

、恐怖に、

「何、で……。っ！」

その闇が怖い。

その光景が怖い。

そして。

闇が晴れた。

そこに居るのはシオンであって、シオンでは無い。  
その全身を覆うのは漆黒の甲冑。刺々しいデザインであり、肩から



シオンは答える事が出来ない。  
だが、かわりに顔をあげた。

「……お前は……。お前は何なんだ……。？アポカリプス因子、なの  
か？」

尋ねる。

どうしても聞きたかった。

自分を誘い。

自分を喰らい。

そして、自分に真実を見せたこいつの事を。

その問いにそいつは笑った。

「ああ、それね？それ、俺の名前じゃないぜ？」

違う？

そうシオンが疑問を上げようとして、だが。

それより早くそいつが答えた。

「俺はカミさー」

「カ、ミ……？」

その答えをシオンは問い返す。

そのままそいつは笑う。

「そう、お前達が因子と呼ぶ。あれの全ての元になったもんだ。元々アレは全て俺から分化したものだからな」



「そん、な……」

その答えに、シオンは二の句が告げなくなる。  
そうだとするならば、こいつが全ての因子の元凶と言う事だ。  
カミ。そう、うそぶくそいつは、そんなシオンに構わない。  
続ける。

「この世全ての悪やら、何やら異名はあるがよ。俺の名前はたった一つだけだ。」 アンラ・マンユ、それが俺の名だ」

アンラ・マンユ。

拝火教における、最悪の神の名だ。

こいつが言う事が本当ならば、因子は全て、アポカリプス因子ではなく、アンラ・マンユと言う存在と言う事になる。

「それより、俺も聞きたい事があるんだわ？」

「……聞きたい、事？」

「ああ」

シオンの問い返しにアンラ・マンユはにたりと笑う。  
そして、シオンの間近に顔を持って来た。

「お兄ちゃんからお姉ちゃんを奪って、どうだった？」

「な、に？……」

アンラ・マンユの問い。

それをシオンは呆然と聞く。

なんだ、それは。

質問の意味が解らない。

「感想だよ、か・ん・そ・う。どうだった？」

「……知らない」

シオンは呻くように答える。

アンラ・マンユが何をしたいのか解らなくて、知りたくもなくて、  
だけど、アンラ・マンユは追及の手を緩めない。

「楽しかっただろ？」

「……違う……」

問い、それを否定する。

アンラ・マンユは構わない。

「嬉しかっただろ？」

「……違う、違う！」

叫ぶ。

「だけど、アンラ・マンユは止まらない。」

「悦んだだろ？」

「違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う！」

「違う！」

否定する。

それは、それだけは認めない。  
シオンはそう思い、しかし。

ー認めろよー

アンラ・マンユはただ笑った。

ーお前は、あの時ー

「違う、そんな事は、ない、そんな筈、ない……」

シオンは必死に否定する。

それにアンラ・マンユは最後の言葉を告げた。

ー本当に、嬉しそうに笑っただろう？ー

「あ……、う……」

脳裏に浮かぶのはたった一つの瞬間だった。

ルシアに伸びた手達。

そして奪った瞬間。

自分は、笑っていた。

「あ、う、やめてくれ……」

もう嫌だ。

こんなの見たくない。  
こんの違う。

シオンは呻く。

そして絶望する。

罪を突き付けられて。  
罪を見せられて。

だが。

―嫌だね―

アンラ・マンユは否定と共にただ笑った・・・。

―カカカカカカカカカカ―

ただ、ただ、笑った。

(第三十一話に続く)



ア

「はい♪アリサ〜」  
す

「すずかの〜」

ア、す

「「アリサ道場〜」」

ア

「はい♪皆様こんにちは♪当道場の主、アリサです♪」

「すずかです♪」

シ

「んでもってシオンです♪」

ア

「……今回はテンション上げていくわよ〜！」

「本編がすごい鬱だからね？」

シ

「ええ。……まあ、それは後の今回のおさらいで。まずはー」

「祝♪三十万PV突破〜」

シ

「いやあ、早くも三十万突破です♪……正確には三十一万ですけど」

「確かに早かったわね〜」

す

「これも読者さん達のお陰だね♪」

「ですね♪という訳で……」

ア、す、シ

「「皆様、ありがとうございます♪」」

「さて、ここで作者から連絡が」

ア

「作者から？」

す

「と、言う事は……」

シ

「はい。三十万突破記念として、人気投票をしたいと思います♪」

ア

「……またいきなりね……」

す

「……事前に連絡の一つも欲しいかな？」

シ

「まあ、思い付きがここの特徴ですから♪てな、訳で。改めまして、人気投票を行いたいと思います♪基本はEX登場キャラのみとさせて頂きます♪メッセージや感想で送って下さい♪是非是非、よろしくお願いします♪」

ア

「私の投票待ってるわね♪」

す

「アリサちゃん。そんなあからさまな……」

シ

「では、今回の内容について♪……作者、ぶっ殺〜す!!」

す

「わっ!？」

ア

「ちょっと、いきなりキレないでよ……」

シ

「だって、だって、……悲惨過ぎでしょ!？何すか、アレは!」

す

「う〜ん。まさかのシオン君、感染者化だもんね……」

ア

「まあ、多分読者の半分はこの展開、予想していたと思うけどね。」

「……ま、でも悲惨ね」

シ

「はっきりと俺は言えますよ。なのはSSの中で、もっとも鬱な主人公だと……」

ア

「……でも、おいしい思いもしてるでしょ?」

シ

「へ?」

す

「今回、遭難のお約束イベントもしっかりこなすしね♪」

シ

「うぐは!……いや、俺。意識なかったんですけど……」

ア

「関係無いわ」

す

「関係無いね?」

シ

「ううつ……」

ア

「さて、じゃあ今回はここまで♪ちなみに人気投票の受け付けは七月末までやるわ♪よろしくね♪」

す

「皆様の一票を心よりお待ちしております♪」

シ

「そして、いつも見て下さってる読者様。三十万PVも突破出来たのは皆様のお陰です♪本当にありがとうございます♪拙い小説ですが、これからもご愛顧の程、よろしく願います♪ではでは♪」

ア、す

「「また次回……♪」」

第三十話「嘘と真実」(後編)(後書き)

「ついに明かされた真実」

「真実に絶望する

シオンは感染者と化して、アルセイオ達に。そしてティアナ達にその牙を向ける」

「暴走するシオンに、スバル、

そしてティアナはー」

「そして、彼もまた現れ

る」

「次回。第三十一話

『アヴェンジャー』

」 「復讐者。しかしそれは誰に対しての復讐なのか」



### 第三十一話「アヴェンジャー」(前書き)

「此処に来て、いろんなあいつを見た」

「行かないでと、

一緒に居てと叫ぶあいつを見た」

「ひどく弱

くて。でもそんなあいつが見れて何故か嬉しくて」

「で

も、ゴメンなさいとあいつが何故謝るのか、私は知らなかった」

「知らないままにあいつは……」

「魔法少女リリ

カルなのはStS，EX。始まります」

### 第三十一話「アヴェンジャー」

叫び。

天を衝く大音声を上げて、感染者と化したシオンが吠える。音は衝撃となって、辺りを打ち。

それは盛大に雪煙を舞い上がらせた。

そんな中、ティアナはただ呆然とそんなシオンを見ていた。

まだ信じられなくて。

まだ信じたくなくて。

だが何度目を擦ろうが。

何度疑おうが、結果は変わらない。

シオンが因子に感染したという。

感染していたという事実是不変ならない。

「……なん……で……」

なんでなのかと、どうしてなのかとティアナは思う。

だけど答える人間は誰もいない。

ティアナは涙が頬を伝った事を自覚した。

変わってアルセイオ達。

彼は舌打ち一つと共に現状を認識。

意識を切り替える。

「……坊主……」

「神庭が、まさか……」

ソラが呻くように呟く。

そして、アルセイオをちらりと見る。

「……隊長。如何しますか？」

「……決まってるだろう？、感染者’を放って置く訳にゃあいかねえし、クライアントの依頼は聖剣の奪取だ。……潰すぞ」

アルセイオは即断する。

やる事は変わらない。

シオンを打ち倒し、イクスを奪うだけだ。  
ただ。

(……こんな形で、か……)

どうやらシオンに期待していた結果は得られなくなりそうだった。  
シオンならば、道が拓けるとも思ったのだが。

「見込み違いだったな。……悪いな、坊主」

苦笑し、佇むシオンをアルセイオを見る。

同時に剣群がその背に生まれた。

「リズ、俺とお前が前だ。リゼは隊長を援護。足を止めろ」

「了々解々」

「……了承」

即座に飛ぶ、ソラの指示。  
それにリズ、リゼも頷く。

同時。

劍群がシオンに劍先を向け。

「――行け」

――撃――

一斉に放たれた。

劍の絨毯爆撃。

シオンへと迷い無く突き進むそれに、しかしシオンは動かない。

ただ、口から白い吐息と共にる、と唸るだけ。

さらにリズ、ソラが劍群の後ろから突っ込む。

止めとばかりにその後ろにはリゼがその周囲に光球を生み出していた。

三段構えの攻撃。

劍群、近接、射撃。

例え、劍群を避してもソラ、リズの攻撃が。さらにリゼの射撃が待つ理想的な連携攻撃。

対感染者用とも言えるそれは正しく必殺。

だがシオンはそもそも動かない。

ただ佇むだけだ。

そして劍群がシオンへと突っ込み。

――撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・――

叩き込まれ。

硬い音と共に弾かれた。

「はぁっ!?!」

流石にその結果にアルセイオが驚愕の声をあげる。  
だが、未だに叩き込まれている剣群はシオンに刺さる事は無い。  
ただその身体を揺らすのみ。  
それを見て、ソラとリズも止まり。

「るる……！」

「「っーっ！」」

「豪！ー」

瞬間で、爆発したが速度で弾き飛ばされた。  
剣群を受けている筈のシオンがそのまま瞬動をかけて、突っ込んだ  
のだ。

立ち止まった二人に。

くねる三本の尻尾に、アルセイオは呻く。

ソラ達を打撃したと思われる尻尾。

その一撃がまったく見えなかった。

「ソラ！リズ！」

「ぐっ……」

「うゝゝ」

弾き飛ばされた二人は雪が敷き詰められた地面に叩きつけられて呻く。

「るー」

「っーっ！」

直後、シオンが空を舞った。  
まるで獣のような動き。  
そして、振りかぶる両の鈎爪。  
狙いは、リズ。

「あ……」

「リズっ！」

「……させない」

「発」

ソラから飛ぶ警告。

だがリズは身体が痺れているのか、動けない。

そんな姉を助ける為に、リズから放たれる二十の光球。  
それはシオンへと突き進み。

「かあっっ！！」

「波！！」

ただの一吠えで、消し飛ばされた。

振動波が発生したのだ。

裂帛の咆哮、だけ、で！

その結果にリゼが目を見開き、同時叫ぶ。

「……姉さん！」

逃げて。

だが、その言葉すら間に合わなかった。

―撃―

「あ……」

「ぐる、る……」

空中で回転して、その勢いのままに振るわれた右の鈎爪。  
それが、華奢なリズの身体に撃ち込まれた。

「……ねえ、さん……」

「リー」

直後。

盛大に血飛沫が上がった。

「――姉さんっ！」

「――リズっ！」

「ひ……、あ……」

リゼとソラからあがる声。

それに、しかし。リズは答えられない。

そして、シオンもまた止まらない。

「が、ああああああああああああああっ!!!!」

―激・激・激・激!―

連撃。

撃ち込まれていく左右の鈎爪に。

リズは悲鳴すらあげられず、ただ蹂躪されていく。

ブレイク・インセプト

ただ空へと我は向かう

「魔皇撃っ!!」

ー突!ー

ソラが裂帛の声と共に突きを繰り出す。

それは束ねられ、空気を引き裂き、空間すらも歪め、振れた衝撃と  
なって一点の矢となって、放たれた。

その一撃はリズを蹂躪するシオンの背中に吸い込まれ。

ー破!ー

その威力を遺憾無く発生。

シオンは盛大に横に振れ回転と共にすっ飛んだ。

「ー。リゼ、リズを!」

「ーはい」

直後にアルセイオから出される指示。

リゼは即座に従い。

アルセイオもまた止まらない。

ソードメイカー・ラハブ

響くはキー・スペル。

同時に生み出されしは万を超える剣群。  
それも全てが10mオーバーの巨剣だ。



剣群は生み出されたと同時に吹き飛んだシオンに撃ち込まれる！

「轟！」

放たれていく万を超える剣群はあたかも剣の激流だ。

そのあまりの量。

そして破壊力にシオンは周りの地面ごと、穿たれ、叩かれ、蹂殺される。

それでも剣群は止む事が無く、辺りに雪煙を舞い上がらせた。

「……やりましたか？」

「……どうだろうな。……リゼ。リズを連れて帰還しとけ。今なら――」

「破！」

瞬間。

漆黒の魔力が爆裂したが如く広がる。

同時に剣群達が、跳ね飛ばされた。

辺りの地面に突き刺さる剣群達。

その中央に立つシオンは……無傷だった。

「……あれを、喰らって……」

「……チ……」

流石に絶句するソラにアルセイオは舌打ちを一つ打ち。

右の手を掲げる。

しゅるりしゅるりと形勢される、されていく剣。

スキル…無尽刀。

その実態は辺りの微粒子に魔力を走らせ、剣を作り出す能力だ。近い感覚だと、ヴィータのシュワルベ・フリーゲンや、コメット・フリーゲンが近いだろう。

あれもまた周囲の微粒子をもって鉄球を作り撃ち出す魔法だ。規模や、威力は似ても似つかないが。

その無尽刀のスキルを持って、アルセイオは一つの剣を作り出した。刃渡り50mは下らない、極剣を超える。極剣を。

それをアルセイオは担ぎ、同時に足元にカラバの魔法陣が展開。アルセイオの身体が強化される。

「お、ら、よっっ!!」

ー轟!ー

ー撃!ー

叫び。

同時に投げ撃たれる極剣。

それは空気をブチ破り、音速超過。

ソニック・ブームを発生させつつ、シオンへと向かう。

大量の剣群が効かぬのならば、一つの極剣を持ってして倒す。

アルセイオの考えはひどくシンプルだ。

だがそれが故に、その一撃は強力。

それはシオンを打破し、打ち倒すに充分に足る威力を有していた。

しかし。

シオンは向かい来る極剣に、前のめりの体勢と成り。

四肢を地面に着けて、顔を極剣へと突き出した。  
同時にがばりと開く口顎。

直後にシオンへと叩き込まれる極剣。

アルセイオは、ソラは、リゼは、そしてティアナは、それ、を見た。

ーがぶりー

そんな、そんな音と共に極剣が、シオンの口顎に。

、飲み込まれた、。

50mを超す極剣が。

シオンの口に、その勢いのまま飛び込み。  
食らわれ、喰らわれ尽くす。

信じがたい光景に、流石のアルセイオすらも絶句する。  
他は言わずもがな、だ。

最後まで、シオンは極剣を喰らい。  
しかし、その体積だけは何故かわ変わらない。

直後。

さらに信じがたい光景が展開する。  
しゅるり、しゅるりと。

生み出され、展開される剣群達。

、シオンの背後、に、生み出された剣群達だ。

「おい。……なんだ、そりゃあよ……」

「まさか、無尽刀を……」

スキルを喰らい、自分のモノとした――。

有り得ない事だ。

有り得ない事だが、今の現状ではそう判断するしか無い。

動揺を無理矢理押さえ付け、アルセイオもまた剣群を形勢。生み出されし剣群と剣群。

同時に、アルセイオは叫び。シオンは吠えた。

「――行けっ！」

「が、あああっ!!」

――激――

剣群がぶつかり合い。

――裂――

互いを喰らい合い。

――破――

互いを碎き合う！

ぶつかる、ぶつかり合う剣群達。

金属がぶつかり合う甲高い音と共に無尽刀同士という有り得ない衝突は成された。

「く……っ！……坊主……」

「はあああああ……っ！」

自らの能力を喰らわれ。

そして向けられ、アルセイオが苦々しく顔を歪める。

シオンは構わず獣のような呼気を吐いた。



放たれ、撃ち込まれ合う剣群同士のぶつかり合いは未だ止まない。  
シオンの攻撃で瀕死に追いやられたリズはリゼが転移魔法で連れ帰った。

そんな状況の中で、アルセイオは次々と剣群を作り出し、放つ。  
しかしその息はもはや荒い。

「……ぐっ……」

「隊長。もう、魔力が……」

ソラがアルセイオに警告を飛ばす。

そもそも二連戦なのだ。

しかも、大量の剣群を何度も作り出して戦っている。

いい加減、魔力も底を尽きかけていた。

いかな、無尽、刀だろうと、魔力が無ければ尽くせ無い刀とは成り得ない。

「……隊長。ここは撤退しましょう」

「馬鹿言え。……て、言いたいとこだが……。流石に限界か」

苦笑するアルセイオ。

しかし、その胸の内はどれほどの屈辱を感じているのか。  
自身の能力を喰らわれ。

部下の一人は瀕死だ。

だが。

現状を認識出来ない男でも無い。

アルセイオはその全ての感情をたった一つの溜息で吐き出した。

「……しゃくだが……。ここは撤退だな。《……嬢ちゃん》」

「え……?」

アルセイオ達から放れ、未だ呆然となっていたティアナにアルセイオが念話を掛ける。

それにティアナは漸く反応した。

《……流石にここに置いといて見殺し、てのも気が進まねえ……。一緒に来い》

《……っ!》

その内容にティアナは顔を歪める。

誰が。と思う気持ちと、……。今のシオンに恐怖を抱いている感情。そして、その末路を見たくないという気持ちがぶつかる。

感染者と化したシオンはもはや理性なんてどこにも無い。

ならただ暴れるだけだろう。それにティアナが巻き込まれるのは間違いない。トウヤが居れば、ダイブに賭けると言う手段も在ったが、ここに居る筈も無い。

そして感染者の末路は二つしか無い。

その途上で死か、意識不明となるかのどちらかしか。

そして、ティアナはそんなシオンの末路なんて見たくなかった。

《……私は……》

ティアナは未だに剣群を生み出し続けるシオンに視線を向ける。

漸く、気付けた想い。

漸く、気付けたのに。なのに。

瞬間。ぶつかり合った剣群が、弾き合い。

その軌道を変更した。

ティアナの真っ正面へと。

「しまっ……！。嬢ちゃんっ！！」

「あ……」

失態に叫ぶアルセイオ。

だが、ティアナは咄嗟の事で動けない。

既に回避も防御も不可能。

ティアナはまるで魅入られるように自身に迫る死の具現を見て――。

――撃！――

瞬間。

甲冑に覆われた拳がそれを撃ち抜いた。

碎き、壊された剣はティアナを避け、辺りの地面にバラバラに落ちる。

そして、ティアナは見る。

自身を助けた。

その存在を。

「……シオン……」

「う、あ、あ……」

感染者と成り。

暴走したシオンはしかし、まるで抗うかのように声を上げて、ティアナを守った。

「……ティ、ア、ナ……」

「……っ！。シオンっ！？」

呻くようにあげられた声。自身の名前にティアナは反応した。シオンの瞳。

それに意思が戻っていた。だが。

「あ、う、ああっ！。駄目、だ。逃げろ。……逃げろっ！！」

叫び、ティアナに逃避を促す。

その瞳は揺らぐ。

殺したくなんて無いと。

奪いたくなんて無いと。

「シオン……！」

その瞳を見て、その声を聞いて、ティアナは声をあげる。

そう、シオンもまた戦っている。

自身と、その身体を侵す因子と。なら。

「……嬢ちゃん」



アルセイオからの声。

シオンの意を汲み取った事もある。

それ故に来いと、促すそれに、しかしティアナは首を横に振った。

「……私は、行かない。ここでシオンを助ける……！」

「……嬢ちゃん。自分が何言ってるかー！」

「解ってるわ」

アルセイオに最後まで言わずに、ティアナは頷いた。  
解ってる。

手段なんて、無いかもしれない。  
どうにもならないかもしれない。  
だけど、それがどうした？

「……私は、シオンを助ける！絶対に……！」

「嬢ちゃんー」

「う、ああっ！あああああああああっ！」

瞬間。

吠えるシオンと共にくねる尻尾が大きくたわむ。  
そしてそれは身近な存在に、唸りを上げて疾る！

「っー！」

ティアナがその一撃に目を見開き。

咄嗟のそれに、反応が追い付かない。

だが！

「ティアー……っっ！！」

プロテクション!!

―激!―

青の道が走る。

それはティアナの眼前に突き立つと同時にその術者も連れて来た。  
ティアナの相棒。

長らくコンビを組んで居た娘。

親友であり、そして恋仇。

スバル・ナカジマがティアナの眼前に。

尻尾の一撃をプロテクションで受け止めてそこに居た。



「……スバル……」

「ティア。大丈夫?」

振り向き。

いつもの笑顔を浮かべるスバル。

その笑顔に、ティアナは堪らない程の安堵を覚えた。

そう、この笑顔にいつも励まされてきた。

奮いたたされてきた。

そう、だからこそ。

自分とスバルは――。

「る、ううう……」

「……え?」

瞬間。

聞こえてきた声にスバルは疑問の声をあげる。

それはあまりにも聞き覚えのある声。

そこで漸く、スバルは眼前の存在が誰であるかを知った。

目が驚きで見開かれる。

「シオン……？」

「ぐ、う、う」

唸り、同時にその身体から溢れる因子を見て、スバルも現状を認識した。

シオンが感染者と化している事に。

「嘘……」

「スバル！プロテクション解除して！！」

「え？」

声は疑問をあげ。

しかし、その身体はその声に瞬時に動く。

プロテクションを解除。

同時に後ろに下がる。

直後にティアナが3rdモードのクロス・ミラージュを構え、シオンへと突き付けた！

「フアントム！ブレイザー……アア！！」

ー撃！ー

光が溢れた。

砲撃だ。

クロス・ミラージュより放たれた光の奔流は迷い無くシオンへと叩き付けられ、その身体を盛大に吹き飛ばした。

「ティア……。あのシオンは……」

「因子に感染してるわ」

スバルの問いに即座に答えつつ、クロス・ミラージュを1stモードに移行し、複製を作り両手に持つ。

「いつからなんてわからない。……少なくともさっきまでは普通だったのよ。でも、今は感染してるわ」

「そんな……」

スバルもまた呆然となる。

さっきのティアナと同じ反応だから。

「スバル。シオン助けるわよ」

「……え？」

ティアナはスバルに言い放った。  
シオンを助けると。

その言葉にスバルが驚きと疑問の声をあげる。

でも、ティアナは構わない。

その瞳を真っ直ぐ見る。

いつも、スバルがそうするように。

「……さっき、イクスが言ってたわ。‘まだ早い’、て。……推測だけど。多分、シオンはずっと前から感染してたんだと思う」

だからと続ける。

同時、吹き飛ばされたシオンがのそりと起き上がるのが見えた。

「封印か何かは知らないけど、一度封印出来てたんだもの。再封印出来ない筈は無いわ。」

「ティア……」

咆哮。

それを再びあげるシオンに二人は視線を向ける。  
互いのデバイスを構えた。

「私とあんたなら絶対出来る。……私は自信あるけど、あんたはどう？」

「私は……」

瞬間。

シオンの姿が消える。

瞬動だ。

一瞬で眼前へと迫るシオンに、しかし。スバルはマッハ・キャリバーを唸らせ同時に前に出た。

カートリッジ・ロード。

「はぁあっつ!!」

「ぐ、る、おっ！」

交差するスバルとシオン。

だが、スバルのリボルバー・ナックルは、シオンが放つ右の鉤爪をかい潜り、その胴に叩き込まれた。

「撃！」

轟音と共にシオンが水平にすっ飛ぶ。  
カウンターでリボルバー・キャノンが叩き込まれたのだ。  
その威力は一撃必倒に等しい。  
シオンを殴り飛ばしたスバルはそのままティアナへと振り向く。  
その目に迷いは無い。  
あるのはただ決意のみ。

「うん！やろう、ティアナ！！」

頷くスバルにティアナもまた頷く。  
そして、共に前を向いた。  
今の一撃を物ともせず立ち上がるシオンへと。  
助ける為に。  
取り戻す為に。



「るる……」

「シオン……」

四肢を地面へと着け、唸るシオンはまるで獣だ。  
そんなシオンにスバルは名を呼ぶ。  
だが、反応は無い、  
ただ呻くだけ。

「……スバル、いい？シオンをまず拘束するわ。そして、なのはさん達にケージ系で封印してもらう。……後は本局でトウヤさんにダ

イブを頼む。いいわね？」

「うん！」

方針を話すティアナにスバルも頷く。

シオンは相対する二人に、ぐる、と呻きを放ち。

瞬間。

その背に剣群が生まれた。

「な！？」

「くっ……！」

スバルが驚愕の声を上げ、ティアナが苦々し気に声をまた上げた。  
無尽刀。

アルセイオから先程奪ったスキルだ。

いかな方法かは不明だが、今のシオンに無尽刀は厄介としか言いようが無い。

そんな二人にシオンはまた構わない。

剣群が、二人に剣先を向け。

― 激・激・激・激・激 ―

横合いに放たれた同じ剣群に碎かれた。

「え……？」

「あんた達……」

二人はその剣群を放った人物に目を向ける。

笑いを浮かべ。

ダインスレイフを構える男。

アルセイオに。

「くく、く。はははは……」

アルセイオは笑っていた。

シオンを見てでは無い。

スバルとティアナを見て、だ。

ひとしきり笑うと、後ろのソラに目を向ける。

ソラはそれにただ嘆息した。

「……ソラ。ダイブの術式、覚えてんな？」

「……はあ、了解です……」

そんな嘆息混じりの返答にアルセイオは笑い。

そしてスバル、ティアナに目を向けた。

「そう言うこった。嬢ちゃん達。協力してやんぜ？」

「ええ!？」

スバルが驚きの声を上げ。

ティアナもまた軽く目を見開く。

それにアルセイオは笑い。

同時に剣群を展開する。

「ソラがダイブの術式を展開すつからよ。後は嬢ちゃん達が坊主の中に入んな」

「「……………」」

アルセイオの提案。

思ってもみなかったそれに、スバル、ティアナはしばし呆然とする。しかし、その提案は渡りに舟だ。



さらに。

「時間稼ぎはこっちでやってやる。後は任せて行ってきな」

そんな事を言う。

至れり尽くせりではある。

ある、が。

「……何が目的よ……？」

呻くようにティアナが問う。

そう、自分達は敵同士なのだ。

協力がありがたいが、何か裏があると思うのが普通だ。

ティアナの問い。

しかし、それにアルセイオは笑う。

「別に？強いて言うなら気まぐれ、て所だな」

「「は？」」

アルセイオの答えに、スバル、ティアナの二人は疑問の声をあげる。

アルセイオの後ろでは再びソラが嘆息。

いろいろな意味で呆れを多分に含んだ嘆息ではあった。

「どういう意味よ？」

「気まぐれの意味分かんねえか？事典的な意味で言うなら……」

「そうじゃなくて！」

ツツコミを入れる必要はまったく無いのだが、ティアナは殆ど反射的にツツコミを入れた。

アルセイオはそれに笑顔を浮かべる。

「深い意味なんぞはかけらもねえよ。言っただろ？ 気まぐれ、てな？」

「……本当に無いから困る訳ですが……」

後ろから半眼と共にソラがツッコミをこれまた放つ。

そこには慣れた者特有の脱力感があった。

「ソラ、いちいち細けえ事気にすんなよ。万事、塞翁が馬。て言うだろうがよ？」

「……上手くいけば、そう言えますがね。……まあ、いいです。どちらにせよ。このままじゃあ任務失敗ですしね」

肩を竦め。

しかし、ソラの足元にはカラバの魔法陣が展開する。

ブレイク・インセプト

同時に響くは鍵となる言葉だ。

どうやら本気で協力するつもりらしい。

そんなアルセイオに、少しだけティアナは微笑み、スバルと頷き合う。

「……シオンを助けるまでの協力だけど……」

「おう。仲良くしようや？」

互いに笑い合う。

ここに呉越同舟の協力体勢は成った。

「さて、じゃあ……」

「スバルーーーー」

アルセイオがシオンと相対しようとする直前。  
声がした。

呼ばれたスバルとティアナが声のした方向、上空を見る。  
そこにはN2Rの面々が、それぞれの方法で空を翔けていた。  
それを見て、スバルもまた笑顔を浮かべ。

「ギンねー」

「っ！。スバル！！」

答えようとした時。

空気が動いた。

シオンだ。

アルセイオすらも反応出来ない速度での瞬動。  
それを持ってして移動したのだ。  
スバルの眼前に。

「あ……」

「が、ああ」

既に右の鉤爪は振り上げられ。

鈍い黒色の光を放つ。

それをスバルは、ティアナは、アルセイオすらも何も出来ずに、ただ振り下ろされんとする鉤爪を見て。

トリガー・セット。

空間に響く声を聞いた。

「轟！」

スバルが、次に感じたのは風。  
激烈な風であり、怒涛たる風。  
だが、その風はどこか優しくかった。

「……おいおい……」

アルセイオが目を見開き驚愕の声をあげる。

「……これはまた……」

ソラが苦笑を伴い、もはや呆れとなった声をあげた。

「……嘘でしょ……？」

ティアナも信じられないと言葉を放つ。

そして、スバルは見る。

その背中を。

その背中のはかって、シオンのココロを見た時。

最も印象的だった姿だ。

シオンが憧れた背中。

その背中の主の名を、スバルは呆然と呟いた。

「タカト、さん……？」

「……」

思わずさん付けで呼んでしまったスバルに、しかし視線を向けず。

その場に現れたタカトは己の異母弟と相対した。

奪った少年と。

奪われた青年。

二人はいつかの教会の再現とばかりに再びここに相対した。  
アウエンジャール  
復讐者。

しかし、それは果たして。

どちらの事を指すと言うのか。

(第三十二話に続く)



ア

「はい♪急展開に次ぐ急展開に負けないアリサ道～～場～～♪」

す

「今日はまた、ずいぶんとハイテンションだね～～♪」

シ

「……自己紹介くらいしましょうよ……」

ア

「そうね～～。二話程ここでしか話してない主人公？」

シ

「うぐはっ！」

す

「しかも、ヒロイン二人に問答無用とばかりに攻撃しかけちゃうし  
ね♪」

シ

「あぐうつ！」

ア

「まあ、今回あんたの何が1番悪いかというと、リズちゃんを獣よろしく襲っちゃった事ね。……この鬼畜」

シ

「そ、それは俺の意思じゃ……。て、言うか誤解を招きそうな事言わないで下さい！」

す

「シオン君。言い訳、カッコ悪いよ？」

シ

「わあゝゝん（泣）」

ア

「本当、よく泣くわね。あんた」

シ

「……普通泣くでしょ、そりゃあ……」

す

「各読者さんからのS呼ばわりに作者さんも高笑いを上げてたそうだからねゝゝ♪」

ア

「て、喜んだの？」

す

「作者さんはSらしいから♪」

シ

「……うう、その被害に今まさに遭ってます」

ア

「さて、今さらながらの今回のおさらい♪シオンどうぞ♪」

シ

「うう……。はい。えゝゝ。剣は食べ物じゃあ、ありません♪良い子はマネしないようにしましょう♪お兄さんとの約束だっ！」

ア

「……心配しなくても、誰も食べやしないわよ。てか、お兄さん、  
て……」

す

「……シオン君のキャラは弟キャラだと思うな〜」

シ

「いいんです。エリオとキャロには兄で、呼ばれてますし」

ア

「……まあ、いいわ。それよりあんたもチートキャラに名乗りをあげたわね。スキルを食べるなんて……ケダモノ」

シ

「だからさつきからすっごい嫌な呼び名ですよ!？」

す

「まあ、シオン君は元からそんな感じだよね♪」

シ

「いやいやいや! 鬼畜やらケダモノやらじゃあ決して無いですよ!」

?

ア、す

「「今回は?」」

シ

「ぐっふう……」

す

「あ、潰れちゃった」

ア

「寝てんじゃないわよ。起きなさい」

シ

「シクシクシクシク……」

ア

「あ、起きないの? 上等ね♪……エオルー・スーヌ・フィール・ヤル  
ンサクサ……」

シ

「て、待った待った！そのネタ危険ですよ！？」

ア

「呪文だけなら分らないわ♪」

シ

「コアなファンがいたらどうするんすか！？」

ア

「もちろん知らないわ♪てな訳でエク○プローション♪」

シ

「もうバレバレですっ……！ぎゃあああああ……！！！！」

ー煌！ー

す

「いい感じに吹き飛んだね〜」

ア

「今回は祐希奈風に行ってみたからね♪」

す

「普段もそんな感じじゃ……、うん。何でもないから呪文唱えないでね？」

シ

「うう、痛かった……」

ア

「またアツサリ蘇ったわね……」

シ

「カナンのおかげですよ……。あの三人がいない時に不死身講座が役に立つとは……」

す

「これで立派な不死身君だね♪」

シ

「……それには断じて名乗りを上げません」



ア 「ピッタリなのに……。そう言えば、この鬱状態はいつまで続くの？」

シ 「ピッタリ、て……。いや、なんでも無いです。どうなんですかね？少しは明るくなって欲しいんですけど……。ん？」

す 「あ、手紙が落ちてきたね？」

ア

「シオン。読み上げなさい」

シ

「はぁ〜い。え〜と、次の話しの話名ですね。 何々……」

次話タイトル『向き合うココロ』

ア

「……次も、鬱決定ね……」

す

「でも、ほら。少し明るくなりそうだよ」

シ

「……作者の場合、その前が怖いんですが……」

ア

「Sだからね」

す

「Sだしね」

シ

「Sですしね」

ア、す、シ

「はぁー……」

シ

「さて、気持ちを切り替えて今回はここまで♪てな訳で謝辞を♪人氣投票に投票頂いてありがとうございます♪現在はなんと見事に横一直線です♪」

ア

「均等、て言えいいのか、シオンが陰が薄いのか……」

シ

「シャラップ、す！。まだまだ投票受け付けているのでバンバン投票して下さい♪待ってます♪では……」

ア、す

「「また次回……♪」」

### 第三十一話「アヴェンジャー」(後書き)

「ついに現れたタカト」「シオンと相對するタカト達。呉越同舟の状況に、しかしシオンは構わない」「そんな中

でシオンのココロにスバルとティアナは向かう」「そこで知る真実と、シオンのココロに二人は……」

「次回、第三十二話。『向き合うココロ』」「せめて歩ませ

よ。我が購いの道を……」

第三十二話「向き合うココロ」(前編)(前書き)

「忘れようとしていた、過去」  
いた、過ち」

「封じようとして」  
「……取り返しの、つかない事」

「でも、……だから。俺はー!」  
「魔  
法少女リリカルなのはS t S, E X。始まります」

## 第三十二話「向き合うココロ」(前編)

冬の世界。

雪が敷き詰められた聖域の土の上で彼等は五度目となる対峙を果たした。

それをスバルとティアナは彼の後ろから見る。

敵である筈の存在。

神庭シオンの異母兄。

伊織タカトの後ろから。

「……シオン……」

「ぐ、うる、る……」

タカトの呼びかけ。

それにシオンは明白に反応する。

・・・いや、'怯える'が正しいのか。

その反応を見てタカトはギシリと齒ぎしりを鳴らした。

「……タカト、さん？」

「ちょっ、スバル……」

再びタカトの名前を呼ぶスバルに、ティアナは制止をかける。

しかし、肝心のタカト自身はそんな二人に構わなかった。

「……イクス」

今度はシオンとユニゾンしたイクスに声をかける。

だが、反応は当然無い。

だが、別の反応は起きた。

シオンの周りに。

「あ、ぐ、が、あ……っ！」

「「シオンっ！」」

急に苦し気に呻くシオン。

そして周囲にポコリポコリと溢れていた因子が激しく動き。  
溢れ出した。

それにスバル、ティアナが声をかけ。

消えた。

シオンが。

ートンー

「へ……？」

「え……？」

同時。

スバルとティアナの身体が泳ぐ。

優しく突き飛ばされ、左右に分かれるようにだ。

それを成したのはタカト。

いつの間にやら、自分達の真横に移動したタカトが二人を突き飛ばしたのだ。

直後。

タカトの眼前に現れるシオン！

右手の鉤爪は既に掲げられ、数瞬も待たずにタカトへと叩き付けるべく動く。

ー徹！ー

瞬間。

上空に跳ね飛んだ。

‘シオン’が。

タカトがカウンターで、シオンの顎を蹴りで撃ち貫いたのだ。

しかし、シオンはそのダメージにも構わない。

タカトの真上でくると回転。

そのまま空中に足場を展開し、それを足掛かりにタカトへと急降下する。

しかし、タカトはそれに構えを取る事さえ無い。

再び振るわれる鉤爪。

振り下ろされるそれに、しかしタカトは頭を一つ分下げる事で対応した、

―閃―

鉤爪がタカトの頭があった部分を通り過ぎ。

瞬間。

シオンはタカトの、背後に、現れた。

「る、る……」

「っ……！」

今度こそ、自身の反応を越えたその動きにタカトは目を見開いて驚き。

―戟！―

振るわれた左の鉤爪と、振り返ったタカトの左腕が交差する。

何とか防御するも体勢が悪かったのか、力負けし後退させられるタカト。

それに、再びシオンの姿は消失し。

「天破紅蓮」

―爆!―

吹き飛ばされた勢いを利用して放った胴回し蹴りと、同時に叩き込まれた紅蓮がタカトの背後に現れたシオンに叩き込まれる。  
直後。

―轟!―

蹴りが叩き込まれたシオンを中心に、天を衝く火柱が建つ。  
同時に、シオンとタカトがその火柱に断たれるように、反対に吹き飛び。

「ぐう、る……!」

「ふうっ!」

止まらない。

両者ともその姿が消える。

火柱が漸く消えた、その場に再び対峙する。

―戟―

―戟―

―戟!―

―撃―



―撃―

―撃！―

至近で、左右の鈎爪と両の拳が叩き付けられ合う！  
振るわれる左の鈎爪。

それをタカトは今度は拳で迎撃せずに逆に踏み込む。

―閃―

左右の腕を使った踏み込み。

同時にシオンの左の腕を捌き。

そのまま腹へと両の掌が当てられる。

「ひゅっ！」

「がっ！」

―破！―

鋭い息吹がタカトの口より吐き出され。

同時、シオンがすっ飛んだ。

双纏掌。

八極拳の一手である。

転がるシオンにさらにタカトは踏み込む。

シオンはそのまま獣のような勢いで立ち上がる。

「天破震雷！」

―破―

再び、叩き込まれる両掌！。

雷を纏うそれに、シオンの身体は一瞬だけ浮き。

「雷！ー」

直後。

凄まじい雷が、シオンを疾った。

「る、う……」

身体のかかしこから煙を上げてシオンは前のめりに崩れ落ちた。

「……シ、シオン……？」

あまりの戦いに呆然となっていたスバルが漸く口を開く。  
しかし、シオンは動かない。

「……あんた……！」

ティアナも動かないシオンを見て、それを成したタカトを睨む。  
瞬間。

「戟！ー」

「ぐ……っ！」

タカトが吹き飛んだ。

「「え……？」」

いきなり吹き飛ばされたタカトに二人は声を上げ。  
同時にそれを見る。

シオンの背後にくねる尻尾を。

同時。

因子がシオンの身体に激しく沸き立つ。

再生しているのだ。

普通の感染者と同じく。

「その二人。死にたくなければ下がれ」

タカトから始めてスバルとティアナに声がかかった。

だが、スバルもティアナもそれには気付かない。

目の前で再生し、立ち上がるシオンを見るだけ。

「ほら！何してんだ！」

「スバル！」

いきなり二人の身体が引かれる。

ノーヴェとギンガだ。

スバルとティアナが気付いた時には、その周りにN2Rの面々が居た。

二人の手に引かれ、そのまま下げられる。

同時にのそりと立ち上がるシオンに再びタカトが立ち塞がった。

「ぐ、うるる……」

「ちっ……」

軽く舌打ちし、そのまま眼前のシオンを睨む。

シオンは構わない。

四肢を着け、獣のような体勢でタカトと対峙するのみである。

「……裏コードALICE入力。前マスター、伊織タカトの名の元に。イクスカリバー官制人格再起動」

ぽつりとタカトが呟く。

それにシオンがぴくりと反応した。

苦し気に呻く。

だが、タカトはシオンの様子に構わない。

「イクス。話せるか？」

【……再……起動……開始……タカト、か……】

ノイズ混じりの声が響く。

それはスバル、ティアナ達にとっても聞き覚えのある声だった。

「イクス……」

「大丈夫なの？」

【……あまり、無事では無いな……】

スバルとティアナからかけられる声に答えるも力が無い。

二人には構わずにタカトは一歩前が出る。

「……イクス。何でシオンが感染者化している？封印をかけて二週間しか経っていない筈だ」

【……俺にも、解らん、だが、一つだけ言える事がある……】

響くイクスの言葉。

それを聞き逃すまいとさらにタカトは前に出る。

そして、それ、を聞いた。

【……シオンは真実を知った……】

「……………なに？」

イクスに問い直すタカト。

それはまるで聞きたく無いものを聞いてしまった者の声であった。

【……事実は変わらない。シオンは、真実を……】

「……っ」

再び鳴る歯ぎしり。

悔し気に、そして哀し気にタカトは顔を歪める。

そんなタカトの様子に、スバルやティアナ、N2Rの面々はそんな人間らしい感情を浮かべるタカトに驚いていた。

今までのタカトは基本至って無表情であり、まともに話したのもシオンを他とするならばなのは達しからない。

それが今、感情を表に出していた。

「う、ぐ、う……！」

【っ……、済まない。俺は、……】

「イクス……」

【タカト。シオンを……】

最後まで言えなかった。

イクスの声が途絶える。

同時に、シオンの背後に生まれ出る、無数の剣群。

それを見て、タカトから表情が消えた。

このスキルは――。

「人様のスキル。使いまくってんじゃねえ、て」

ソードメイカー・ラハブ

「豪！」

響く鍵となる言葉と共に、無数の剣群がシオンが生み出していた剣群にぶつかる。

そしてそれは再び相殺。

金属が碎き合う音と共に剣群は地面に落ちた。

それを見遣って、そしてそれを成した人物にタカトは目を向ける。  
その人物はタカトに生まれて初めて、  
「死ぬかも」と思わせた男であった。

「……無尽刀の……」

「おう。覚えていたみたいで光栄だぜ？伊織？」

笑い、再び剣群を背中に従えながら無尽刀。

アルセイオは歩いた。

シオンとタカトから対角線になる位置へと。

こうして、十年ぶりにアルセイオとタカトは出会った。



三角を描く位置で三者は対峙する。

シオンへの警戒は緩めぬままにタカトはその男を見ていた。

十年前には髭を生やしていなかったので、今の今まで解らなかったのだが。

「……なんであんたがここに居る？何をしていた？」

疑問をアルセイオへと向ける。

それに、少しだけアルセイオは笑う。

「どっちも秘密だ。……まあ、坊主に関係ある事さ」

「……今さらですがね」

「……真藤ソラ。……お前まで……」

そこで漸く気付いた。

かつての同僚の存在に。

そして、その足元に展開する魔法陣と魔法式にも同時に気付く。

「……ダイブか」

「ご明察。たった今、永唱完了した所だ。……相変わらず見ただけで魔法式を読み取るんだな……」

タカトの言葉にため息混じりでソラが答えた。

アルセイオもニヤリと笑う。

「そのこの嬢ちゃん達が、ダイブで坊主を助けに行きたいんだと。で、まあ俺達はその協力だな」

「一銭の得にもならない気まぐれですがね」

「……………」

その言葉に、タカトはスバル達へと視線を向ける。

視線にスバル、ティアナは少しだけたじろいだ。

「……お前達が、シオンの中に？」

「うん」

「そうよ」

問いに二人は即座に答える。

それにタカトはスッと視線を強めた。

「……無理だ。ダイブだけではシオンの感染者化は解けない」

「そんなの……!」

「解る」

きっぱりとタカトは言う。

あまりにもはつきりと言うそれに、ティアナも二の口が告げない。

「だけでは、な。……そう言うからには確証がある、て事だ。

……伊織。お前は何を知ってんだ?」

「……………」

横合いからアルセイオが口を挟む。

しかし、タカトはそれに沈黙。

答えない。

「……お前が咎人の嬢ちゃんを手につけた事と関係すんのか?」

「……答えるつもりは無い」

それに、と続ける。

「……その二人がダイブするのだろうか?……なら、一緒に真実も見る筈だ。……後で聞け」

「……真実?」

スバルから上がる声に、しかしタカトはぷいっと顔を背けるようにシオンへと視線を移す。



同時にその右手に展開する魔法陣。  
666の幾何学模様の魔法陣であった。

「……ダイブだけではシオンの感染者化は解けない。……だけでは、  
な。シオンの外から刻印を刻んで封印を施す」  
『ーーーーっ!』

その言葉に、スバル、ティアナはタカトを睨む。  
二人の視線にタカトはフツと苦笑した。

「……心配する必要は無い。シオンは意識不明にならない。……、  
出来ない、と言ったほうが正しいか」

「それ、どう言う……」

「答える義務は無い」

相変わらずタカトの返事は素っ気無い。  
そのまま今度はアルセイオを見る。

「無尽刀。何故協力するのは聞かないが、協力するからには信頼  
させてもらう」

「心配すんな。こっちとしてもその積もりだ」

フツと、かつての敵は笑う。

続いてアルセイオは話しの内容に今一つ着いて来れなかったN2R  
の面々に目を向ける。

「その嬢ちゃん達はどうすんだ？」

「……どうする、て言われても……」

「……話しが今一解らなくて……」

そもそも来てみたらシオンが感染者となっていて暴走しているわ、  
なのは達の報告にあった魔導士は居るわ、666こと伊織タカトは  
居るわで少し混乱していたのだ。

「……事情の説明の暇は無い。手伝うなら手伝え」

「……とりあえず、シオン君を足止めすればいいんですか？」

「そう言うこったな」

アルセイオの答えに少しだけN2Rの面々は目配せ。そして頷き合  
う。

「……現場の判断と言う事で今は貴方達に協力します」

「おーらい」

「頼む」

ギンガの言葉に、アルセイオ、タカトが頷く。

そしてそのままシオンへと視線を向けた。

シオンは動かない。

まるで機を狙うが如く、四肢を獣よろしく地面につけたまま唸るだ  
けであった。

「俺達二人は」

「あの二人がダイブでシオンを起こすまでの時間稼ぎを俺達が前に  
出で行う。……出来るか？」

「ああ？誰に聞いている積もりだ？」

肩にダインスレイフを担ぎ、アルセイオが答える。

それに漸くタカトが苦笑する。

そして、再度スバル、ティアナに視線を向けた。

「……何？」

「いや、名前を聞いていなかったと思ったただけだ。……聞いても？」

タカトの問いに二人は少したじろぎ。

だが、共に頷き合った。

「スバル・ナカジマです」

「ティアナ・ランスターよ」

「スバルにティアナか……。良い名だ。気に入った」

二人に向けてニッと笑う。

その笑いは、二人にとって見覚えのある笑顔であった。  
シオンに良く似た笑顔。

「……シオンを頼む」

呟くような一言。

それをスバル、ティアナは聞き。

同時、タカトはシオンに向けて駆け出した。

そんなタカトの背中を見て。

二人は再度頷き合った。

「「はい」」

そして、二人はソラに向かう。

シオンにダイブする為に。

シオンを取り戻す為に。



タカトが飛び出すと同時にシオンも一気に駆け出した。  
同時に背後に生まれる剣群。

しかし、それは生まれると同時に、全て破碎された。

タカトの後ろからやはり駆けるアルセイオがやはり剣群を生み出し、  
全て迎撃したのだ。

「アレは任せろや」

「……スキルを喰らわれた人間が良く言う」

アルセイオの言葉にタカトが愚痴りながらも駆ける速度を緩め無い。  
シオンもまた、その速度を殺さなかった。

「ひゅっ！」

「が、あっ！」

「戟！ー」

再びぶつかる拳と鉤爪。

だが、そこで二人は止まらない。

シオンが振るう左の鉤爪。

それをタカトはやはり左手で捌き。

そのまま右拳を振りかぶる。

震脚。

踏み込みと同時に放たれる拳。

「破ー」

「ーっ」

「ぐう、る」

タカトは目を再び見開いた。  
自身の拳がシオンの掌に止められたのだ。  
ごくあっさりと。

タカトの打撃は魔法を介さずとも、A A＋相当の威力を叩き出す。  
それをあっさりと止められたのだ。  
驚きもする。

さらに、シオンの背後から首を擡げる三本の尻尾。  
直後、タカトに向けて放たれる！

だが。

「I S。ヘヴィ・バレル」

その声がタカトの後ろから聞こえた。  
同時。タカトは力を抜き、背後に倒れ込む。  
そのままシオンの腹へと右足を叩き付け。  
そのままシオンを背後に投げ飛ばした。  
巴投げ。  
くるとシオンは空中で回転し、直後。  
光の一撃がその背中を打撃した。

ー撃！ー

轟音が聖域に響く。  
同時に煙がぶあつと広がった。  
その煙を突っ切るように吹き飛ばすシオン。  
しかし、空中で回転。  
そのまま宙に足場を展開して、四肢を踏み止まる。

「が、う……」

「どこ見てんだっ！」

叫び。

それと共に、シオンの背後に影が注す。

ノーヴェだ。

エアライナーで一気に駆け、シオンへと突っ込んで来たノーヴェはその場でくると回転。

同時、脚のジェット・エッジも回転。さらにブースターが火を吹く！

「おらあっ！」

咆哮と共に打ち放つ一撃。

それに対してシオンはただ左手を突き出した。

ー激！ー

激突。

しかし、ノーヴェは自身の蹴りの結果に目を見開いて硬直した。片手。

鉤爪が備えられたそれが、あっさりとその一撃を受け止めたのだ。

「離れてろ！たわけ！」

同時に放たれる叫び。

タカトだ。

煙を突っ切って、一気に空へと駆ける。

突っ込んで来るタカトにシオンもまた止まらない。

左手に掴んだ脚をそのまま振り回す。

それはつまり、ノーヴェを振り回す、と言う事だ。

こん棒よろしく振り回されるノーヴェ。  
だが、タカトは踏み止まら無い。  
両手でノーヴェを受け止め。その勢いを前進で受け流す。

ー撃！ー

吹き飛んだ。

シオンが。

顔面を蹴り飛ばされて。

ノーヴェを受け止め、その勢いを受け流し様にシオンの顔面に蹴りを叩き込んだのだ。

蹴り飛ばされ、しかし。再び宙に留まるシオン。

タカトはそれを見遣りつつ、受け止めたノーヴェを傍らのエアライナーに下ろした。

「あ……」

「……手伝うのはいいが、せめて邪魔をするな」

「……ご、ごめん……」

普段なら反発するノーヴェだが、何故かこの時は素直に頷いた。  
タカトはもうノーヴェに視線を向けず、シオンへと視線を戻し。  
直後に目を見開いた。

シオンが口をがばりと開いていたのだ。

さらに、その口の前に収束する光球。

「ちいっ！」

それを見て、タカトも即座に両手を腰溜に構える。  
同時にその両掌に生まれ、収束する光球。

それは、シオンが生み出したものと同じであった。

「が、あああ!!」

「天破、光覇弾っ!!」

口から。

そして突き出した掌から。

光球が螺旋を描き、回転と共に放たれる。

それは放たれると同時に特大の光弾へと変化。

それは迷い無く互いの標的へと突き進み、そしてぶつかり合う!

ー轟!ー

光がぶつかり合い、逆回転の螺旋を叩きつけ合い、そして。

ー裂!ー

弾け合い、喰らい合う!

直後、激烈な音と共に衝撃と爆音。そして爆煙を発生させた。

「今の……」

「……………」

よく似てる。

を飛び越えて、全く同じ砲撃。

それに苦い顔を浮かべるタカト。  
だが。

ー閃・閃・閃・閃ー



煙を引き裂き、現れる大剣群！

それにタカトはくつと唸り。

だが、直後に真下から無数の剣群がその剣群を襲い。  
相殺し合った。

「……礼は言わない」

「期待してねえよ」

それを成した人物。アルセイオに、しかしタカトは視線を向けずに  
言葉だけを放った。

アルセイオはそんなタカトに苦笑しつつ、その横に並ぶ。

「……今の砲撃だよ」

「聞く必要は無いだろう？あんと同じだ」

やっぱり。

自分の想像が当たっていた事にアルセイオは額を押さえた。

先程の砲撃。

おそらくはタカトの砲撃技だったのだろうが、これもまた、  
喰われた、のだろう。

厄介に、厄介な能力であった。

「……何だ。ありやあよ？スキルを喰らう能力なんぞ聞いた事もね  
えぞ」

「奇遇だな。俺もアレ以外には知らん」

タカトの答えにアルセイオは嘆息する。

それにタカトは視線を向けない。

「一応、俺は暴食と名付けているがな」  
グラトニー

「七ツの大罪の一つか……」

七ツの大罪、暴食。

ある意味ぴったりの名前ではある。

「……聞いた話したが、魔法だけでは無く、魔法に関連したあらゆるものを喰らう事が出来るそうだ。……レア・スキルや、アビリティー・スキルも例外では無いらしい」

「……どんな反則技だ？ そりゃあよ……」

再度ため息を吐き出し、しかしふと気付く。

「……おい。聞いた、てのは……」

「……ダイブ準備完了したようだな」

アルセイオからの問いに、タカトは構わない。

そのまま下に目を向ける。

ソラが展開する魔法陣。

そこにスバル、ティアナが待機し、こちらを見ていた。

準備は完了。

後は……

「どうやって坊主にダイブさせるか。か……」

そう、そこが唯一の問題点。

ダイブの術式をシオンに打ち込まなくてはならない。

今のシオンが素直にそれを打ち込ませる訳も無い訳だが。

「案じる必要は無い。俺に手がある」

ぽつりと呟くタカト。

そのまま下に降りて行く。

アルセイオもそれに続く。

だが、同時に煙を突っ切り突進する影がある。  
シオンだ。

シオンは下降する二人に向けて、一気に駆け。

「IS……」

瞬間。

その眼前に現れた無数の投げナイフ。

ステインガーに踏み止まった。

だが、ステインガーは止まらない。

そのままシオンへと突き進む！

「ランブル・デトネイター」

ー爆！ー

シオンへと殺到し、爆裂するステインガー達。

聖域に爆音が響いた。

「早く行け！それとそこの髭は行く必要は無いだろう！」

「……ダンディの象徴を……」

地面から響く声。

チンクだ。

それにアルセイオは苦笑し。

そのまま下降を止める。

タカトは構わずそのまま下降を続けた。

アルセイオの横にウィングロードが走り、ギンガが並ぶ。  
後ろにはウェンディも居た。

「……私達も援護します」

「足を引っ張らないように頼むっスよ？」

「こいつは手厳しい」

二人に苦笑し、アルセイオは視線を煙が立ち上る場所に向ける。

直後。漆黒の魔力が疾り、煙を吹き散らした。

その中央に居るのは、黒の甲冑。

シオンだ。

「……来るぞ、嬢ちゃん達。構えろ」

「が、ああああああああああああああっ!!」

直後、雄叫びを上げてシオンが駆け出した。



上空で再び響く爆音。

それに構わずタカトをソラの、そしてスバル、ティアナの眼前に立った。

「……伊織」

「後は任せろ」

右手を突き出す。

そこに展開するのは666の魔法陣だ。

それをソラと自分達に向けられ、スバル、ティアナは流石に焦る。

「ーっ。ちよっ！」

「何を!？」

「……」

慌てる二人にタカトは構わない。

そのまま右手から虹色の光が疾った。

光はスバル、ティアナを避け、ソラに。

いや、その大剣に突き立った。

「ーっ!これは……」

驚きの声をあげるソラに、しかしタカトは構わない。

そのまま大剣から、何か、を引きずり出す。

それはそのままタカトの右手に吸い込まれた。

「……ま、さか。術式を……?」

「説明している暇は無い」

目を見開くソラに、やはりタカトは構わない。

そのままスバル、ティアナへと視線を向ける。

「……今からダイブで君達の精神を、撃ち放つ、……準備はいいか?」

「撃ち……?」

タカトの妙な言い回しにスバル、ティアナは訝し気に首を傾げる。

だが、タカトは構わない。

再び、その右手を掲げる。

同時に展開するのは666の魔法陣だ。

それを今度は上空のシオンへと向ける。

「二人共、俺の近くに」

「「？」」

？顔を浮かべつつも二人はタカトの真後ろまで歩く。

同時にタカトの足元に八角の魔法陣が展開した。

それはスバル、ティアナの足元にまで広がる。

「……二人共、目を閉じろ」

タカトからの指示。

それに二人は従い、目を閉じる。

「深呼吸しろ。続いて、自身の内へと心に向けて集中」

スウッと深呼吸を行い、それを繰り返す。

深呼吸を繰り返す度に自身の意識が内に向かう事を二人は認識した。

「……よし。精神の乖離を確認。……二人共。準備はいいな？」

「うん」

「いつでも大丈夫よ」

頷く。

それをタカトは確認。

そして、右手をシオンに向け、呼吸を合わせるように深呼吸を開始。動き回るシオンにまるで繋がるように、掌が動く。

そしてアルセイオが放つ大剣群。

それに足止めを喰らい、シオンが立ち止まる。

タカトはくつと息を飲んだ。

「ドライブ発動！行って来い！！」

ー煌ー

直後。

スバル、ティアナの精神はタカトの右手より先程の言葉通りに、撃ち放たれた’。

虹の光となり。一気にシオンへと突き進む！

それにシオンは光を喰らわんと口を開きー。

（（シオン……））

「っーが！」

だが、いきなり硬直した。

そのまま虹色の光がシオンに突き刺さる！

スバル、ティアナはそのままシオンの中へと入っていった。

「……………伊織。お前……………」

「ここからだ。あの二人がシオンを起こせるか、どうか。…………賭けだな」

倒れそうになったスバル、ティアナを抱き止め、そのまま雪の上に寝かせる。そのままそして、と呟いた。

「…………俺達が、持つ、かどうか、か……………」

その言葉に応えるかのように、シオンがムクリと立ち上がる。そして、天に向けて再び咆哮を上げた。

(後編に続く)



第三十二話「向き合うココロ」(前編)(後書き)

はい。よ、漸くお届け出来ました……。でも、また前後編(涙)。  
うう、すみません。      いっちょ前にスランプとなっ  
てしま  
い、更新が延び延びになってしまいました(汗)。      い  
つも  
ならイメージ通りに文章を打てる訳なんです  
が、今回は全然(涙)。  
です  
ので、色々おかしいかもです。うう、すみません(涙)。

後編。なるべく早めにお届け出来るように頑張ります。

ではでは、また後編で〜♪

### 第三十二話「向き合うココロ」(中編)(前書き)

はい♪テストタメントです♪スランプなりました♪いやふう〜  
♪。で、早速なのですが。すみませんでした(汗) いやあ〜文字  
数が増える事増える事(汗) 文字数の関係上。急遽、前中後編とし  
ました(汗) 本当、申し訳ありません。では、中編。どうぞです♪

### 第三十二話「向き合うココロ」(中編)

「ん……!」

「ここは……?」

ダイブでシオンの精神世界。

つまりココロの中に入った二人は周りの光景を見る。  
水の中。

その表現が1番正しいだろう。

底の見えない水の中に二人は居た。

ぷくぷくと底にゆつくりと堕ちていく。

そこでふと気付く。

水の中なのに、自分達が息をしている事に。

「ティア。これ……?」

「うん。分かってる。ココロの中だからなのかしら……?」

とりあえず、現状を確認してみる。

バリア・ジャケットはちゃんと着ているし。

デバイスもそのままだ。

どうやらダイブ直前と自身達の状況は変わっていないらしい。  
だが。

「……これ、どこまで沈むのかしら」

「だね……」

ぷくぷくと沈んでいる状況に嘆息する。

試しに上に浮き上がろうと、水を掻くが。

まったく水は掻けなかった。  
どうやら沈む事しか出来ないらしい。

「……これがシオンの世界なの……?」  
「……でも……」

ティアナの疑問に、スバルは少し惑う。

スバルが見たシオンのココロの世界は青空を仰ぐ悠久の草原だった筈だ。

優しく、綺麗な世界。

だが、この世界は違う。

まるで暗闇に誘われるかのように底に行けば、行く程に暗くなる水の中だ。

まるで光が届かなくなるように、段々と周りも暗くなる。

だが、同時に底から浮かんで来たものがあった。

「?。ティア。……アレ何だろ?」

「ん?……泡?」

スバルの視線の先をティアナも見る。

そこにはゆっくりと浮き上がって来る泡があった。

大小様々な泡である。

まるで二人に合わせるかのように、ゆっくりと浮き上がって来ていた。

「ん……?」

「ちよっと、スバル。下手に触っちゃ駄目よ?」

「あ、うん……?」

思わず泡に触ろうとしたスバルに飛ぶティアナの注意。

それに頷き、スバルが振り返る、と。

ーパンー

肩が泡に触れ、あっさりと割れた。

「あ……」

「『あ……』じゃ無いでしょ！。『あ』じゃ！あんた、て娘は……」

ジト目で睨むティアナに『あはは』と笑って事無きを得ようとして。

ー嫌だー

声が聞こえた。

「……え？」

「？。どうしたの？スバルー」

いきなり疑問の声をあげるスバルに、ティアナも訝し気に首を傾げ。  
直後に足が泡に触れる。

ーパンー

軽い音と共に泡が割れる。

同時。

ーもう止めてくれー

再び声が響いた。

「……え？」

「ティアも？」

自身と同じ反応に、スバルは問い掛ける。  
ティアナも首肯する。

「えっと……」

「とりあえず……」

二人頷き合い。

同時に指で目の前の泡を突いてみた。  
直後。

「こんなの、違う」

「俺は、俺は」

声が二度響く。

自分達の予想が当たっていた事に、二人は頷く。  
どうやらこの泡に触れると声が聞こえるらしい。  
それに、この声は――。

「シオンの声、だね……」

「うん……」

それは二人にとっても聞き覚えのある声だった。  
シオンの声。

さらに浮き上がる泡が、二人の身体に触れ、割れていく。

「なんで、なんで」

―見たくない。見たく、ない―

―ごめん、なさい。ごめんなさい―

―俺が奪った。俺が―

―タカ兄いの、全てを―

―ルシアを―

―俺が、全ての―

―元凶―

「……………」

響く声に、二人は沈黙する。

悲しみに。

哀しみに。

何より後悔に。

塗れた声。

それに二人の顔が強張る。

何をこんなに後悔していると言うのか。

聞いているだけで辛くなる程の。

悲しくなる程の。

声。

「シオン……」

「何で、こんなに……」

二人は俯きながら疑問を口にする。  
ダイブする前。

確かにタカトは言った。

‘真実’を見ると。

イクスも言っていた筈だ。

‘真実’を見た。

なら、このシオンの後悔は、その、真実、とやらが関係しているのか。

ーおやあ？ー

瞬間。

スバルに、ティアナに。

シオンとは全く違う声が響いた。

同時に泡が全て消失する。

「「……誰!？」」

即座にデバイスを構える。

この沈むばかりの世界で役に立つかは疑問ではあったが。  
無いより有る方がやはり心強い。

ー何だ。お客さんかー

そんな声と共に二人の眼前が沸き立つ。

ボコボコと。

それに二人は見覚えがあった。

因子。



それが沸き立っていた。

「ーっ！スバル！」

「うんっ！」

叫び、デバイスを沸き立つ因子に向ける。

程無くして、因子は一つの姿をとった。

ヒトガタの形を。

ー歓迎するぜ？ー

ニタリと笑う影。

それに二人は構わなかった。

デバイスを握る力が強くなる。

「あんた、何？」

ーん？俺か？……お前達に分かり易く言うとカミサマだよー

「カミ……？」

スバルがその声に繰り返し問う。

それにヒトガタは笑う。

ーそう、アンラ・マンユ、て言うんだけどな？ー

「アン……？」

「何、それ？」

二人してあがる疑問の声。

それにカカカカカと笑い声が響く。

「拝火教なんぞは知らねえわな?。なら、そうだな」

ニヤリと影が笑う。

そして口を開いた。

「全ての因子の元になった存在。て、言ったら分かるか?」

「な……」

そのあまりの答えに、二人は目を見開いて驚く。

かつてイクスはこう言った。

因子は精霊のようなものだ。

そして精霊とは神。つまり世界統合意思存在の端末だ。

その元、と言うのならばこいつは……。

「……神様、て訳?」

「さっきもそう言ったぜ?」

「……………」

即答するアンラ・マンユに二人共黙り込む。

こいつが全ての元凶。

だが。

「……なんで、シオンの中に居るの……?」

スバルがぼつりと呟く。

それが聞こえたのか、アンラ・マンユが再びニタリと笑う。

「何も知らないんだな？ お前達？」

「……………」

「いいぜ？ なら」

凶星に沈黙する二人にアンラ・マンユが両手を広げる。  
ぱっくりと広がる口が、鮮烈な赤を彩った。

「お前達にも、見せてやるよ。兄弟の真実を」

「——っ！」

瞬間。

水の中の世界は割れ。

二人は世界の割れ目に飲み込まれた。



「轟！」

響く轟音。

同時に高い木々が数本まとめて薙ぎ倒された。  
倒れていく木。

それを避けながら、黒と赤の男が現れる。  
タカトと、アルセイオだ。

さらにそれを追う黒。

アヴェンジャー・フォームと化したシオンが二人を追いかけているのだ。

踏み込みと共にシオンの姿が消える。

同時にタカトはその場で急停止。

くると身体を横回転させ、肘を右横に突き出す。

―徹―

そこにシオンがいた。

タカトの肘がその鳩尾に刺さっている。

カウンターで合わせられた肘。

しかし、シオンは構わない。

右の鈎爪を振るう。

孤を描く右腕。

タカトはそれに一步を踏み込んだ。

同時に両手の掌がシオンの腹に添えられる。

「天破震雷！」

―破！―

轟音。

莫大な威力の雷撃がシオンの身体を突き抜けた。

辺りにパチパチと雷の余波が疾る。

動きを止めるシオンに、しかしタカトは一切気を抜かない。  
瞬間。

タカトは一気に後退した。

―閃！―

直後にタカトが場所に突き立つ尻尾。  
交差するように地面に突き立つ。  
さらに追撃せんと生まれる剣群。  
だが、タカトの後ろにはアルセイオが居た。

「ぐ、うる、がああ……！」

「だからさせねえ、て！」

―激―

―激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・  
激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・激・  
激・激！―

シオンとアルセイオから放たれる剣群の激流。

絡み合い。

弾き合い。

喰らい合い。

軋み合い。

碎け合う！

最後の一本すらも残らずに剣群は碎け合った。

「ぐ、うる、る……」

「しんどいな。流石によ……」

肩で息をしながらアルセイオは呟く。

魔力も体力もいい加減、限界だった。

タカトはと言うと平然とした顔である。

「……歳か？無尽刀」

「うるせえよ」

ちつと舌打ちし、答える。

ちよつと歳の事は気にしていたのかもしれない。

そのまま再度シオンへと目を向ける。

「あの坊主は……」

「魔力や体力切れを期待するな。……恐らくそんなものは無い」

やれやれと嘆息する。

これがタカトが懸念していた事である。

今、シオンはまさに無尽蔵である。

ぶつちやけ消耗戦では絶対に勝てない。

・・・カミと融合しているも同然なのだから当たり前ではあるが。

「隊長！」

「お。追い付いたな……」

後方からソラとN2Rの面々が追い付いて来た。

それにアルセイオが少しだけ緊張を緩める。

ソラは前衛で戦えるし、N2Rも援護として相当な戦力だ。

これで少しは消耗が抑えられる。

「る……」

「……？。ーっ！」

シオンがスツと自分達から視線を外す。

それにタカトは訝し気に眉を潜め。

しかし、同時に気付く。

今、シオンが狙いを自分達から、変えた事を、  
アルセイオも少し遅れて気付いた。  
シオンは構わない。

瞬間。シオンの姿が消失する。

「ちいっ！」

「くそっ！」

タカト、アルセイオが同時に悪態をつく。瞬動を発動して、シオンに追い付こうとして。

ー激・激・激・激・激ー

無数の剣群がその眼前に突き立った。

「っー！」

「しまっー！」

出鼻をくじかれ、二人がその場に踏み止まる。  
完全にしてやられた。

剣群をいつ潜ませていたのかも分からない。  
だが、今重要なのは。

「ソラ！」

アルセイオが叫ぶ。  
それにソラは気付き。

ー戟！ー

瞬間で弾き飛ばされた。

「くっー」

「る、る……」

シオンだ。

瞬動での完全な不意打ち。

大剣でぎりぎり防御できたものの、少し遅れれば確実に一撃貫つていた。

ソラを吹き飛ばしたシオンはその場で三本の尻尾をくねらせた。  
N2Rのフォーメーションの中心点で。

「逃げろ！」

ソラから飛ぶ警告。

それに漸く皆はハッと我に返る。  
しかし、遅い！

「戟！ー」

「く、ああ！」

「っー！」

「つてえ！」

響く三重奏。

ウェンディ、ギンガ、ノーヴェの悲鳴である。  
三本の尻尾がそれぞれ三人を打撃したのだ。

防御には成功するも、ソラ同様吹き飛ばす三人。  
そんな三人に、シオンは構わない。

再度、瞬動。



向かう先は後衛の二人。  
チンクとディエチだ。

「ちっ……！皆……」

舌打ちと同時にチンクが両手にスティングガーを構える。  
流石に、強襲を受けた面々よりは、まだ体勢を整えられる。  
ディエチも、既にチャージが完了している砲口を構える。  
そして、シオンは現れた。

チンク達の直上に。

「な……」

真上でシオンが空中に形成した足場に着地した音を聞き。チンク、  
ディエチもそれに気付く。  
まさか真上に来ると思わなかったのだ。  
先程もそうだったが、真っ正面。もしくは背後に大体シオンは現れる。

それが今回は違った。  
今までと違うシオンの瞬動に、チンク達の反応が遅れる。  
直後、振るわれるシオンの両腕。  
それにチンクが我に返る。

「ーっ！」

ー撃！ー

瞬間の判断でチンクは迎撃を諦めた。

ハードシエルを展開し、シオンの一撃を受け止める。  
ぎりぎりとしエルを滑るシオンの鈎爪。

それにチンクはくつと唸る。

「……IS」

同時。

一つの声が響く。

チンクがそれにフツと笑う。

「やれ！ディエチ！」

「ヘヴィ・バレルっ！」

「煌！」

横合いから放たれる砲撃。

ディエチだ。

チンクからちようど近くに居たディエチはシオンがシエルに張り付くと同時に迷い無くシオンに砲を向けたのだ。

至近距離で放たれた一撃。

回避も防御も不可能なそれに、直撃を予想する二人。  
しかし。

シオンはぱっくりと口を開き、迫る砲撃に向けた。

その口内に見える。

光球！

「「ーっ！」」

「かあっ！！」

ー轟！ー

驚愕する二人にシオンは構わない。

口の中に圧縮、加速していたそれを砲撃に撃ち放つ！

タカトから奪いし、砲撃。

天破光覇弾を。

ー轟ー

二つの砲撃は真っ正面からぶつかり合い。  
そして。

ー裂！ー

あっさりとヘヴィ・バレルを引き裂いた。

同時に、光覇弾の一撃はまっすぐにヘヴィ・バレルを放ったディエチへと突き進む！

「っーうあー」

ー煌ー

光覇弾はディエチを飲み込み。

ー爆！ー

爆裂した。

衝撃を辺りにぶち撒き、煙が上がる。

そして同時に煙を突っ切って跳ね飛ぶディエチ。  
その身体は、冗談のように吹き飛び、雪が敷き詰められた聖域に転がった。

「ディエチー！」

叫ぶチンク。

それにディエチは少しだけ反応した。

すぐにスキャンする。

どうやら命に別状は無いらしい。

しかし、チンクにホッとする暇は無かった。

ー軋ー

「ーっ！なー」

チンクはそれを見て声をあげる。

自身が展開していたハードシェル。

それに亀裂が生じていた。

亀裂には既に両の鉤爪が侵入している。

そしてシオンはさらにその亀裂を押し広げる。

ギリギリと。

軋む音と共に。

「が、ああ、あ……」

「あ、う……」

チンクはその光景に自分が恐怖している事を自覚する。

シェルを引き裂き、侵入しようとするシオンの顔はとてもヒトの顔とは思えなかった。

さらに押し広げられる亀裂。  
そして、両腕が完全に広がった。  
それは亀裂の広がりも意味する。  
その亀裂に半身を突っ込むシオン。  
再びその口がぱっくりと広がる。  
そこに灯る光球。

「あ……」

防御も回避も既に不可能。  
さらにハードシェル内で叩き込まれる爆発の威力予想にチンクは青ざめる。  
自身の耐久力を遥かに超えている。  
それはつまり。

ー死ー

「させるか」

ー爆！ー

瞬間。

いきなりシオンの背後が爆発した。  
その爆発にシオンが盛大に吹き飛ぶ。  
ハードシェルも既に限界だったのか、碎けた。

「天破紅蓮改式。天破爆煌」

その声にチンクは視線を向ける。  
声の主は、一撃を叩き込んだ体勢を解いた。

タカトだ。

チンクに視線を向ける。

「……すまん。遅くなった」

短い謝罪。

それのみを告げる。

直後に、アルセイオも現れた。  
その腕にディエチを抱えて。

「こっちの嬢ちゃんも無事だ」  
「そうか」

そのままディエチを下ろす。  
即座にチンクが駆け寄った。  
身体中、所々焦げている、が。  
大した怪我もしていない。  
ただ気絶しているだけのようだった。

「ディエチ……」

ホッとするチンク。

しかし、直後に気付く。

あの砲撃。

軽くSS相当の一撃が直撃して、ほぼ無傷？

「やはり、か……」

「……どう言う事だ。ナン……いや、伊織タカト？」

チンクの問い。

それにタカトは少しだけ俯く。  
だが、即座に顔をあげた。

「非、殺傷設定だ」

「……何だと……？」

タカトの言葉に、チンクが問い直す。

タカトは視線を向けない。

しかし、言葉は紡がれた。

「……砲撃を放つ直前。設定変更していたのだろう」

「……あの、シオンがか？」

チンクがるつと唸り、再び立ち上がるシオンに視線を向けて聞く。

タカトはそれにただ頷いた。

「シオンは……。シオンの意識はまだ消えていない」

そう、自分の砲撃を直前に設定を変更する事が出来ると言う事はつまりそう言う事。

シオンもまた、抗っている。

あの時と、同じように。

拳を握る力が強くなる。

同時、ソラ達もまた合流した。

「すみません。隊長」

「おう。無事で何より、て所だな」

「チンク姉え！ディエチは……！？」

「大丈夫。気絶しているだけだ」

合流し、互いの状況を確認し合う。  
だが。

「ーー来るぞ」

タカトの一言に、ぱっとシオンに視線を向ける。  
それぞれの武装を構えた。

「がああああああつ……」

四肢をつけ、獣のように唸るシオン。  
そして。

「があっ！！」

短く、咆声をあげ。  
再び駆け出した。



気付けば、スバルとティアナはそこに居た。  
薄暗い教会に。

「……ここは……」



ティアナが辺りを見回す。

特に、何かがあるとは思え無い教会だ。

スバルに声を掛けようとして。

その表情に留まる。

スバルは目を見開いて驚いていた。

そう、シオンのココロを見た時。

スバルはここも見ていた。

タカトが、シオンの思い人。

ルシアに刻印を刻んだ場所だ。

「スバル……？」

「あ。……ゴメン。ティア」

「いいけど。……知ってるの？この場所？」

ティアナの問い。

それにスバルは少し黙り込み、俯く。

教えるべきか少しだけ迷ったからだ。

「スバル……。話したく無い事なら……」

「えっと。そうじゃないんだ。……うん。やっぱりティアにも……」

一人頷く。

そしてティアナに向き合った。

ティアナになれば、教えても大丈夫だと。

そう、思ったから。

「あのね。ティア。実は――」

そしてスバルはティアナに教えていく。

自分が感染者化した時の事をだ。

シオンとココロを見合った事を。

そして、ここで何が起きたのかを。

スバルは最後まで話し。

そして気付いた。

何故かティアナの目が細められている事に。

「えっと。ティアナ？」

「……何よ？」

その声に若干の不機嫌さを感じ、ちよつとだけたじろぐ。

自分は何か、ティアナを怒らせるような真似をしただろうか？  
そんなスバルの反応にティアナは嘆息する。

「それで？ここがその場所なの？」

「あ、うん。そうだと思う」

スバルの返事にティアナは頷く。

さっきの話し。

色々、'気になる'事はあるにせよ。

まあ、そこは後で当人と'お話し'すればいいだけだ。  
後に置いておく。

ただ。

「……スバル。この場所で見たのは、それだけ？」

「え？……うん。それだけだよ」

スバルの答えに、ティアナは俯き、思考に没頭する。

今の話し。

あまりにおかしい。

「……伊織タカトが、この場所でルシア、て人に刻印を刻む場面を見たのよね？」

「うん。そうだよ」

「その前は？」

「え？」

スバルが小首を傾げる。

それにティアナは別の言葉で繰り返す。

「だから、その前よ。……その事件が起きる、直前、の事」

「……あれ？」

言われて気付いた。

あの場面が強烈だった事もあり、スバルも気付かなかった。

直前の記憶が一切無い事に。

「おかしいでしょ？」

「……うん」

頷く。

確かにおかしい。

あつて然るべき場面が無い。

まるで、そこだけ切り取られたようだ。

ーギーー

「え……？」

「扉が……？」

突如、教会の扉が開く。

それに声をあげる二人。

そしてぴょっこりと扉から顔を出す少年に、二人は目を見開く。  
それは二年前の、神庭シオンであった。

「へえ……。案外、普通の教会だね……」

てくてくと歩くシオン。

さらに後ろから二人の男女も教会に入ってきた。

伊織タカト。そして……。

「あの人が？」

「うん。そうだと思う」

ティアナの問いにスバルが頷く。彼女がシオンの思い人。ルシア・  
ラージネス。

ならば、やはりここは――

「シオン。あんまり歩きまわるなよ？」

「大丈夫だよ。普通だぜ？この教会」

「こゝら。油断しないの」

ゴチつとげんこつされるシオン。

それにタカトは苦笑し、シオンも笑顔を浮かべていた。

まるで今から起こる惨劇が、嘘のような。

そんな、光景。

「私達は……」

「見えていないみたいね」

先程、シオンが教会をぐるりと見た時。

スバル、ティアナもその視界に映った筈だが、シオンは何の反応も示さなかった。

タカトもルシアも同様だ。

つまり、自分達はただの傍観者であり。

映画を見せられているようなものなのだろう。

場面は変わる。

名前が長いと愚痴るルシアにふざけるタカト。

その首根っこを捕まえて説教を始める。

それをシオンがちよつとだけ羨ましいそうに見ていた。

そんな場面に。

だが。

「……シオンの様子が……？」

「うん。変わったわね……？」

いきなりだ。

二人の様子を眺めていたシオンが急にボーと、なっていた。

その瞳は虚。

そして……。

「あ……」

歩き出した。

ゆっくりと。

まるで誘われるかのように。

祭壇に。

「解った、ルシア、解ったからー？。……シオン？」

「え？」

そこで漸くタカト達も気付いた。  
シオンの様子がおかしい事に。  
だが、シオンは止まらない。

既に祭壇の手前だ。

ゆっくりと手を十字架に伸ばす――。

「――っ！シオン！！そこから離れろっ！！！」

「……え？」

タカトから飛ぶ怒声。

それに漸くシオンは正気に戻る。

しかし、指は封印に触れて、そして封印は解かれてしまっていた。

瞬間。

666の紋様から伸びる手、手、手、手――！

生まれた漆黒の手達が呆然とするシオンに突き刺さる！

「「シオンっ！？」」

スバル、ティアナが叫び。

「「シオン――っ！！！」」

タカト、ルシアもまた叫んだ。

同時、駆け出す。

スバルもティアナもまた駆け出した。

意味が無いと分かっている。

それでも駆け出さずにはいられなかった。

「あ、ああああ、あああああああああああああああああああ



スバルとティアナは理解した。

シオンが何故、感染者となったのかを。

そしてあの後悔の声の意味を。

これが真実。

そして同時に理解する。

何故、タカトがルシアに刻印を刻んだのかを。

何の事は無い。

‘刻まざるを得なかった’のだ。

そうしなければ感染者となったルシアに待つのはただ死の運命のみ。

「こんなの……」

「……………」

スバルとティアナは眼前の真実に、顔を歪める。

なんて悲しい真実。

嘘であって欲しい光景がそこには広がっていた。

二人はそのままシオンへと目を向ける。

シオンは笑っていた。

嬉しそうに。

本当に嬉しそうに笑って。

その瞳からは絶え間無い涙が流れ落ちていた。



―何も無かった少年が。漸く手にしたモノを、少年が全て奪った。それは、ただそれだけの話し―

再び、あの声が響いた。

アンラ・マンユの声が。

二人はそれにキッと顔をあげる。

二人共。

その瞳には涙を湛えていた。

真実を見て。

こんな悲しい真実を見て。

その元凶が許せる存在はいない。

だが。

―どうだ？面白かっただろ？―

アンラ・マンユは本当に、本当に楽しそうに、愉しそうにそんな事を言ってきた。

感情が爆発した。

「「ふざけるなっ！」」

叫ぶ。

二人一緒に。

こんな、こんなものが楽しい訳がある筈が無い。

許せなかった。

これを演出し、これを引き起こし、あまつさえ愉しいと言い放つこ

の存在が――！

「おお、おお、おっかない。どうやらあまりお気に召さなかったらしい――

しかし、その存在。

アンラ・マンユはおどけるような声をあげるだけだ。

それに二人はくつと呻く。

目を擦り、涙を拭った。

「シオンに会わせて」

スバルが感情を交えない声で呟く。

怒りが過ぎて、逆にスバルの心は冷え切っていた。

ティアナも同様だ。

そんな二人に。

アンラ・マンユはただただ笑う。

「心地いいなあ。いい憎悪だ――

「「っ――！」」

その言葉に二人は悟る。

憎しみも。

悲しみも。

怒りも。

全て、こいつの糧になっていると。

二人は顔を歪めた。

「心地いい憎悪をありがとう。……お礼に会わせてやるよ。兄弟に――

「……………」

二人は無言。

礼を言う事なんて、とてもじゃないが、出来る筈も無い。  
そんな二人にアンラ・マンユはただ笑う。

「後悔するかもだぜ？」

「黙って」

「黙りなさい」

二人は同時に言葉を放つ。

それが糧になると分かっている駄目だった。  
憎しみが止められない。

「カカカカカカカカカカ」

笑い声が響く。

聞いているだけで。

不快になる笑いが。

直後。

世界が割れた。

二人は割れた世界を見ながら、思いを馳せる。  
シオンに。

（シオン。今行くから……）

（だから、待ってなさい……）

そして二人は割れた世界に飲み込まれた。



「が、あああああっつ！」

「っー！」

叫ぶ、シオン。

同時に繰り出される両腕の鈎爪をタカトは至近距離でダッキングして避す。

踏み込み。

震脚と共に、左の腕を振り上げる。

「天破疾風っ！」

ー撃！ー

着弾。

同時に、暴風を詰め込んだ拳からその暴風が解き放たれる！

ー碎！ー

爆音。

顎に叩き込まれた拳にシオンの頭が真後ろに弾かれる。だが、そこ止まりだ。

そのままシオンはぐると頭を戻した。

「ちっ……」

やはり効果無し。

いくらダメージを与えても殆ど効果を見込め無いのだ。  
それどころか、因子が沸きだすと同時に傷は再生する。

「伊織！下がってろ！」

ー激・激・激・激・激ー

アルセイオの叫び。

同時に撃ち放たれるは剣群だ。

放たれるそれに、タカトは後退。

掠めるように、剣群が疾る。

それをシオンは獣のような動きでバク転。

剣群を避す。

「……今度は礼を言ってもいいんじゃないか？」

「……………」

軽口を飛ばすアルセイオ。

しかし、その息は荒い。

この呉越同舟の状況から既に2時間が経過している。  
傍らに控えるソラもまた息が荒い。

N2Rの面々もだ。

むしろ、このシオンと相対して2時間持たせられているだけでも驚愕に値する。

だが、アルセイオとソラは既に魔力の底が見え。

N2Rの全員も疲労が酷い。

何より、精神的に疲労が来ていた。

当然とも言える。

何しろ肝心のシオンはダメージが見当たらない。

どんなダメージも再生するのだ。  
もう数えるのも嫌な程の攻撃を浴びせているのだが。

「るる……っ」

がばりと再びシオンの口が開く。

その口内に再び灯る光球。

それを見てタカトが舌打ちする。

元は自分の技だ。

それを連発されて、腹が立たない筈も無い。  
だが。

「……」

「……何だあ？」

タカトが？顔を浮かべ。

アルセイオもまた疑問の声をあげる。

口内の光球がいつまでも放たれ無いのだ。

だが、その光球が加速しながら回転している。

元々、天破光覇弾は魔力を光の属性変化を起こし圧縮、加速を行いながらその威力を跳ね上げる技だ。

だが、今。シオンの口内の光覇弾は放たれる事無く、ただただその速度が上がる。

術式を解析していたタカトはその現象に眉を潜め。

直後に目を見開く。

一瞬にして顔から血の気が引いた。

「……伊織？」

「……馬鹿、な」

アルセイオがそんなタカトの様子に、問い掛け。  
だがタカトは答える事が出来ない。  
そのまま絶句し。

しかし、直後に我に帰る。

ギリッと歯を噛み締め、自身の切り札を発動する。  
空間移動術たる縮地を。

フツとタカトが消え。

直後に、シオンの眼前に現れた。

「間に合えーっ！」

叫び。

その右腕に展開されるのは666の魔法陣。

シオンの口内の光球にそれを突き出す！

虹色の光が疾り光球に突き刺さった。

「……ばあちゃん。すまん」

《仕方ありませんね》

タカトが謝罪の声をあげると同時に苦笑が辺りに響く。  
瞬間。

光球が消えた。

直後にタカトが背後の皆に叫ぶ。

「全員プロテクションを張れ！！」

「なんー」

「急げ！！」

タカトのあまりの剣幕に皆訝しみながらも従う。

タカト自身もプロテクションを展開した。  
そして。

―滅―

光が。

ただただ光が皆の遥か後ろに発生した。

巨大な、巨大過ぎる光が。

その全長はどれくらいあるのか、光の発生元から自分達が数百Km単位で離れているにも関わらずにその光が見えた。

天を衝き、貫く光が。

「なん、だ。ありゃあよ……?」

「う、そだ……」

疑問の声をあげるアルセイオに、呆然とした声が響く。  
ノーヴェだ。

気付けばN2Rの面々全員が同じ反応を示していた。  
信じられないと。  
ただそれだけを。



「……おい。あれ、解るのか？」

「物質の対消滅を確認。……質量の完全エネルギー化も同様に確認した。」

同時に大量の $\gamma$ 線の発生も確認。……何故かこっちはすぐに消えたけど」

「…… $\gamma$ 線？」

その言葉にアルセイオは絶句する。

ノーヴェはこう言ってるのだ。

放射線が放出されたと。

何故か消えたようだが。

つまりあれは……

「核爆発……？」

「違う」

その疑問を即座にタカトが否定した。

そのまま口を開く。

「反物質、だ」

「………は？」

タカトの答えに、アルセイオは絶句する。

地球の出身ならば、それを聞いた事が無い人間はそういないだろう。あまりに致命的過ぎるその単語を。

「反物質、て。、あの、反物質か……？」

「反物質は物質毎に必ず存在するが……。まあ、その反物質だ」

反物質。

質量とスピンが全く同じで、構成する素粒子の電荷などが全く逆の性質を持つ反粒子によって組成される物質の事を指す。

この存在が有名なのはその性質と破壊力だ。

物質と反物質が衝突すると対消滅を起こし、質量がエネルギーとなって放出される。

これは反応前の物質・反物質そのものが完全になくなってしまい、消滅したそれらの質量に相当するエネルギーがそこに残るといふことである。1gの質量は約  $9 \times 10^{13}$  (90兆) ジュールのエネルギーに相当する。ただし発生するニュートリノが一部のエネルギーを持ち去るため、実際に反物質の対消滅で発生するエネルギーは、これより少なくなると言われる。

だが、いくら少なくなるとは言えその破壊力は絶大だ。

何せ、500Kgの反物質を生成出来た場合。

地球程の惑星ならば消滅が可能なのだから。

「……坊主……」

「……シオン……」

アルセイオが呆然と。

タカトが歯を噛み締めながら呻く。

「が、あああああああああああああつつつつつ！！！！！！」

吠える。

破壊の権化となりつつある。

存在、シオンは。

天を仰いで。

だが、その姿は。  
まるで泣き叫んでいるようだった。

（後編に続く）

第三十二話「向き合うココロ」(中編)(後書き)

はい♪「向き合うココロ」(中編)をお届けしました♪後編もすぐにお届けします♪……大丈夫かな(汗)では♪今度こそ後編でお会いしましょう♪また次回……♪

### 第三十二話「向き合うココロ」(後編)(前書き)

はい♪テストタメントです。漸く更新出来ました。……いや、すみません(汗)書いても書いても終わらない(笑)そして三万文字突破……。洒落になってないです(笑)ええ。凄まじく長いですがどうかお付き合い宜しくです♪(笑)

### 第三十二話「向き合うココロ」(後編)

割れた世界。

そこにスバル、ティアナは落ちて。

そして再び、そこに戻った。

薄暗い水の中へと。

「……戻って来た、ね」

「そうね」

二人共、頷く。

そして。

「さあ、この奥だ。」

奴もまた現れた。

ぼこぼこと黒泡バブルが沸き立ち。

ヒトガタになる。

その口のみ赤い、ヒトガタが。

アンラ・マンユが。

「……………」

「どうした？この底に兄弟はいるんだぜ？」

現れたアンラ・マンユに少しだけ、たじろぎ。

だが、二人はそのまま水の底へと向かう。

暗い、暗い。光も届かない奥底へと。

「……やっぱり。ここ、シオンの世界なのかな……?」  
「……さあね。でも……」

納得は出来る。

ココロの世界が、心象風景だと言うならば。

この光景はシオンの今のココロ、そのものだろう。

真実を知って、絶望して。

後悔に押し潰されて。

哀しみに沈んで。

そして、この世界となったのだろう。

なら、この奥底にいるシオンは――。

―着いたぜ?―

「「……っ」」

アンラ・マンユの声にハッと二人は我に返った。

気付けば、目の前には水底が広がっていた。

海草だろうか。

それが一面に広がっている。

「……嘘、……。ここ……」

「スバル?」

急にスバルから上がった声。

それにティアナは振り向く。

スバルは教会の時と同じく目を見開いて驚いていた。

だが、その顔は真っ青になっている。

血の気が完全に引いていた。

「ちよっ……スバル!どうしたの?」

「ここ、は……」

ーそうさー

再び響くアンラ・マンユの声。

それに二人は目を向ける。

笑っていた。

この上無く、嬉しそうにアンラ・マンユは笑っていた。

ーここはかつて青空を仰ぐ悠久の草原。何も知らない、無垢な乙女  
のようだった兄弟の世界さ。ー

だが、とアンラ・マンユは、にたりと口端を吊り上げた。  
その表情は愉悦に歪む。

ー真実を知ってからはこんな感じさ。全て水の中。何もかんもを諦  
め、と言う感情で兄弟はこの世界を閉ざしたのさー

「……シオン……」

「……………」

アンラ・マンユのその言葉に二人は俯く。

諦め。

絶望と後悔で押し潰されたシオンが、得た。

ただ一つの感情。

それが、そうだと言うのか。

ー愉しかったなあ。まるで汚される前の乙女の純潔をゆっくりと犯  
して奪うような感じだったー



「「……………っ！」」

その言葉に二人はかあつと顔を赤らめながら、同時にアンラ・マンユを睨む。

それにアンラ・マンユは輪郭のみの手でやれやれと肩を竦めた。

「解らないかなあ。この快感――」

「解らないよ」

「解りたくも無いわ」

即答する。

そんな二人にアンラ・マンユはただ笑うだけだ。  
嫌悪。

それすらもコレにとっては糧となるのか。

「無駄話しが過ぎたな。……………こっちだ。――」

漸く歩き出す。

アレに案内されるのはひたすら癪だが、シオンがどこに居るのか、解るのもアレだけだ。

二人は悔しそうに顔を歪め。

だが、それでもと首を振り。アンラ・マンユについて歩いて行った。  
シオンに会う為に。



ーここが終点さー

暫く歩き、アンラ・マンユが立ち止まる。

そこにはただ一本の刀が地面に突き立っていた。

古ぼけた、刀が。

だが。

「終点、て……」

「シオン、どこにもいないじゃない……」

呆然と二人共辺りを見渡す。

だが、シオンの姿は影も形も無かった。

ーふ、ククク。ははは。カカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカ！ー

その言葉を聞いた瞬間。

アンラ・マンユは突如として大笑いし始めた。

何がそんなに愉しいと言うのか。

ーいやあ、兄弟？お前はとことん不幸だなあ。あの二人に、気付いて貰え無い、らしいぜ？ー

「「……え？」」

その言葉に慥然となっていた二人が目丸くする。

それはまるでーー。

ー、此処、に居るぜ？兄弟はよ？ー

そのアンラ・マンユの言葉に二人は絶句する。  
何故、自分達には見えずにアレには見えるのか。

「解らないかなあ？ 存外鈍い。じゃあ大ヒント。……もし、お前達が兄弟の立場なら、お前達に兄弟が会いたがると思うか？」

「……………っ！」

その言葉に、否応なしに二人は理解させられる。  
シオン自身が拒否しているのだ。

二人に会う事を。

「…………シオン」

スバルがぼつりと呟き、辺りを見渡す。

それでもシオンの姿は何処にも見当たらなかった。

そしてティアナはアンラ・マンユを睨みつけた。

「…………一つだけ聞きたい事があるわ」

「いいぜ？ 何でも答えてやるよ」

ティアナのその視線を愉しそうに見遣りながらアンラ・マンユは首肯する。

それに少し顔を歪めながらもティアナは口を開いた。

「…………あんだ。さっきからやけに協力的だけど、それはなんで？」

そう、アンラ・マンユは先程からやけに協力的なのだ。

シオンの過去を見せたり、シオンの元に案内したり、果てはシオン

が自分達に見えない原因までもを教える。

ここまでくれば嫌でも疑う。

だが、アンラ・マンユはティアナの疑問にただ笑った。

「そんなの決まってるだろう？その方が兄弟が感情を得るからさ」

「感、情……？」

スバルが訝しみながら聞き直す。

アンラ・マンユは笑いを止めない。

「ああ。お前達が兄弟に近付けば近付く程、その過去や真実を、暴く、程、兄弟は絶望を味わう。悲しむ。気付いてないのか？お前達は、今」。

「兄弟の傷を晒そうとしてるんだぜ？」

「……………」

その言葉にスバルは、ティアナは、自分達がどれ程の事をしているのかを漸く理解した。

勝手に人の過去を見て。

勝手に人のココロに踏み込む。

それは、どう言い訳しようと、プライベートを侵す行為だ。

スバルは、ティアナは何故アンラ・マンユがこうも協力するのかを理解した。

こいつは喰らっているのだ。

自分達が、シオンのココロに近付くにつれ、おこるシオンの負の感情を。

二人は唇を噛み締めて俯く。

自分達の行為が酷く恥ずかしいものに思えて。

醜い事をしているように思えて。

だが。

「ん？……やれやれ、やり過ぎ、たかー」

いきなりアンラ・マンユがそんな事を言い出した。

それに？顔を浮かべて、スバルはティアナは顔を上げた。

そして同時に目を見開いた。

二人の視線の先。

そこには――。

「シオン……」

虚な目で、体育座りをしたまま呆けるシオンが居た。



シオンはずっと、ずっと此処に居た。

そして、何度も何度も見せられた。

アンラ・マンユに。

自身の罪を。

ルシアを奪った瞬間を。

そして願った。

もう見せないでくれと。

何も見たく無い、と。

それにアンラ・マンユは笑った。

―いいぜ？なら何も見えなくしてやるよ―

それからだ。

シオンは何も見えなくなった。

ただ、その視界が埋めるのは黒のみ。

自分のココロの中で、盲目となったのだ。

でも、それでよかった。

あの日の

あの光景の

あの瞬間など。

もう、見たく無かったから。

そうこうしている内に声が聞こえた。

どうやら視覚は消えても聴覚は残っているらしい。

どうせならこれも消して欲しかった。

でも、響く声に。

それを踏み止まった。

聞こえてきた声はスバルとティアナのものだったから。

ダイブか何かで自分のココロに入ったのかも知れない。

それを嬉しいと思う反面。

シオンは怖くなった。

もし、あの二人があの日的事を見たら。

真実を知ったら。

そう思うとたまらなく恐怖した。

知られたく無かった。

識ってほしくなんて無かった。

でも、声はただ響いて。

結局二人には知られてしまった。

あの日、あの時の事を。

そして、二人は自分の前まで来た。

会いたく無かった。

どうせならこのまま帰って欲しかった。

二人と顔を合わせたくなんて無かった。

だから、ひたすら見えないでくれと願った。

でも、だけど。

二人の声とアンラ・マンユの声はただ聞こえて。

そしてアンラ・マンユが二人に放った一言。

それは許せなかった。

ただ、それだけ。

自分を罵倒するのは構わない。

何を言われるのも、自分のせいだから。

だけど、自分を助けに来たスバルを、ティアナを傷付ける事は許せなかった。

汚す事を許せなかった。

そう思った。

それが、結局の所全て。

拡散していた意識は収束し。

再び、シオン' と言うカタチを取った。

そう、何の事は無い。

シオンは自身のカタチを失いココロの世界に散らばっていたのだ。  
そして。

シオンはスバルとティアナ。そしてアンラ・マンユの眼前に現れた。  
未だ、その視覚を失ったままに。

「シオン……」

二人の視線の先。

そこにシオンは居る。

刀に背をもたれ掛かるように体育座りで。

そして、スバルの呼び掛けに、ぴくりと反応した。

スバルはその反応に少しだけホッと息をついた。

どうやら、声はちゃんと聞こえているらしい。  
ならば。

「シオン。帰ろう？」

そう言いシオンに向かい歩く。

だが、シオンはスバルのその言葉にただただ首を振る。

「駄目だ。……俺は行けない」

「……なんで？」

シオンの言葉に、今度はティアナが反応する。

しかし、その問いにもただシオンは首を振るだけ。

「……アレ。見ただろ？」

「……うん……」



少し迷い、しかし二人共頷く。  
アレ。

間違い無くシオンの過去だろう。  
だが。

「でも、あれはアンラ・マンユが原因だよ？……シオンはただ……」  
「違う……！」

スバルの言葉をシオンは否定する。強く、ただ強く。

「……どう言う事よ？」  
「……………」

ティアナが再度問う。  
それにシオンはただ歯を食いしほる。  
ギリっと言う音がココロの世界に響いた。

「……シオン」  
「……違う、違うんだ。アレを、アレを望んだのは……」

首を振り、顔を上げる。  
その瞳はただ虚だ。  
だが、その瞳からは涙が溢れ出ていた。

「……俺なんだ……」

絞り出すように、苦しそうに、シオンはそれを二人に告げた。



聖域の空。厚い雲がその空を覆っていた筈だが、今は一部分だけ穴が空いていた。

シオンが放った反物質による影響である。

流石にその一撃に、アルセイオを含めたメンバーは肝を冷やしていた。

もし、この場で放たれていたかと思うとゾツとする。

ほぼ間違い無く、自分達は助からなかっただろう。

それは同時にシオン自身の死も意味するが、そんなものは関係が無い。

死。

それを否応なく実感させられた。

そして、それを成したシオンに恐怖する。

ると唸り、再び反物質を生成しかねないシオンに。

だが。

「……………」

ただ一人だけ、恐怖していかない存在がいた。

タカトだ。

その眼前に立ち塞がる。

「……伊織」

「……………」

アルセイオからかけられる声。

しかし、それにも反応しない。

ただ、タカトはその瞼を下ろした。

破壊の権化となりつつあるシオンを前にして。  
タカトは目を閉じたのだ。

「伊織！何で目を閉じてなんか……！」  
「……そうだよな」

チンクから飛ぶ声。  
だが、タカトはただ一言を呟いた。  
自嘲気味に口端を吊り上げる。

「……伊織？」  
「……？」

その様子に、ソラも、アルセイオも訝し気な顔となる。  
しかし、タカトは構わない。

その脳裏に浮かべるのはかつての教会での出来事。  
そして、もう居なくなってしまった。  
その時限りの相棒の声。

右手を開き、ジッと見詰める。

「殺したくなんて、無い。誰も奪いたくなんて無いよー」

そう涙を流して訴える異母弟が居た。

「殺すつもりで戦え。それで、やっと、だー」

そう、自分に助言する相棒が居た。

開いた手を、握った。  
固い拳と成す。

「……そう、それでやっと、だよな」

フツと笑う。

そして一步を、ただただ一步を前に刻んだ。  
瞬間。

―軋―

世界が悲鳴を上げた。  
聖域が、震える。  
タカトは構わない。  
もう一步を刻む。

―軋―

軋む、その気配に。  
その存在に。  
世界が、震える。  
タカトは漸く立ち止まった。

「……伊、織？」

アルセイオがその気配に、ぞくりと身体を震わせる。  
ソラも同様だ。  
N2Rの面々も目を見開いている。  
だが、ギンガがぼつりと口を開いた。

「……あの時と同じだわ」

「あの時？」

即座に問うアルセイオに、こくりと頷く。

「最初にあの人が、……伊織タカトが現れた時。やっぱりこんな風に世界は軋んだの」

「……おい、ならまさかあの馬鹿は……」

その言葉に、アルセイオは目を見開く。

バツとタカトに振り向いた。

タカトは構わない。

その異様な気配は、いや、殺気は止まらない。

「今の今まで、手加減、してやがったの、か？」

瞬間。

タカトの姿が消えた。

ー撃！ー

シオンが盛大に吹き飛ぶ。

その身体はくると縦に回転。

まるで重機に跳ね飛ばされたが如く、くると回り。

森へとその身体は飛びー！。

ー激！ー

そのまま木々をまとめて数十本倒しながらその奥底に消え。

―轟―

木々をぶち抜きながら、遙か、彼方へとその姿を消した。  
それを成した人物。  
タカトは拳を振り抜いた姿勢で、残心。  
ポツリと呟いた。

「天破疾風」

スツと残心を解く。  
そしてシオンが消えた方向に目を向けた。

「シオン。今からは、殺す、つもりでやってやる」

その瞳は余計な感情が削ぎ落ち。  
無感情へと変わっていった。  
だが、その拳には今まで籠められていなかったある明確な意思が籠められていた。

殺気

その存在を殺すと、今の今までまったく籠められていなかったそれが籠められていた。

「ぐう、るる、る」

森の奥からシオンが現れた。  
今の一撃に、まるで堪える様子は無い。  
だが。

「るる……っ」

「……………」

明確にタカトに警戒を飛ばす。  
しかし、タカトは構わない。

いつもの自然体。

そのままでシオンと相対した。

感情が消えた顔で。

しかし、明確な意思はその瞳に湛えて。

「があっ!!」

シオンの姿が消え。

「……………」

タカトの姿が消える。

瞬間。

聖域に爆音が響いた。

異母兄弟のぶつかり合いで、世界が激しく軋んだ。



「……シオン。それは……」

スバルはシオンの言葉に、戸惑う。

ティアナもまた、だ。

ただ一柱。

アンラ・マンユだけがただただ笑っていた。

「……アンラ・マンユは関係無い。……俺が望んだんだ。ルシアが欲しいって。……タカ兄いから奪いたい、て……」  
「……でもっ！」

シオンの言葉にスバルは納得しない。  
アレがシオンの望みだなんて信じられなかった。  
そんなスバルにシオンはただ首を振る。

「……ずっと、ずっと思ってた。ルシアが欲しい、て。……タカ兄いが憎い、て。誰より、誰よりも懂れたから。だから、誰よりもあの人を憎んだ」  
「……………」

シオンの独白。

それに遂にスバルは黙り込んだ。  
ティアナもまた同じく。

ただ、ただシオンの言葉を聞く。

「アンラ・マンユが俺の中に入ったのは。……感染者になったのは単なるキツカケ。……そいつは、ただ俺の望みを叶えたに過ぎないんだよ」

「……そんなの」

そんな事はないと、スバルは言いたくて。  
でも、出来なかった。  
言えなかった。



シオンの記憶を、スバルも見ただから。

ルシアを見ていた。

タカトを見ていた。

シオンを知っていたから。

だから。

「……俺は、咎人だ」

「シオン……」

悲し気に、ただただ哀し気にシオンは呟く。

そんなシオンに、スバルはかける声を見出だせなかった。  
俯く。

シオンを、助けたいのに。

何も出来ない自分が情けなくて。

「……もう、お前達も……」

「ふざけんじゃないわよ」

突如。

声が飛んだ。

その声に、スバルは。そしてシオンは、顔を上げる。

アンラ・マンユでさえもへえ、と感心したような声を漏らした。  
その言葉を紡いだ主は。

ティアナは、真っ直ぐにその碧眼でシオンを見据えた。

「何、を……?」

「聞こえなかった? なら、もう一回言っただげる。ふざけんじやないわよ。あんた」

きっぱりと、ティアナは言葉を吐く。

そこには明確な苛立ちが込められていた。  
かつて、シオンに向けられた時以上の苛立ち。  
まだ呆然とするシオンに、ティアナは構わない。  
ヅカヅカとその傍まで歩き、シオンの胸倉を掴む。  
無理矢理立ち上がらせた。

「ティー」

「あんたね。いつまでこうしてる積もりよ？」

胸倉を掴む力が強くなる  
ぐいっとシオンを引き寄せた。

「ぐじぐじぐじぐじ、うじうじうじうじ。見てるだけで腹立つわ。  
もう一回聞くわよ？あんた、いつまでこうしてる積もりよ。私、い  
つまでもあんたの中になんて居たくないのよ。さっさと帰りたいの。  
解る？いや、解りなさい！」

「ティ、ティア？」

流石にスバルが冷や汗をかく。  
言ってる事が目茶苦茶である。

だが、ティアナは構わない。

シオンが呆然としているが、一切躊躇しなかった。

「大体、あんたがそんな風にうじうじしてるからこんな事になった  
んでしょうが。好きなら好きでさっさと告白するなり、なんなりす  
れば良かったじゃない！」

「て、テメっ……」

「何？何か文句あんの？優柔不断の半端モンが文句あんの！？」  
「ーっ」

流石に抗弁しようとするシオンだが、ティアナの剣幕に何も言えなくなる。

ティアナは漸く、その手の力を緩めた。  
しかしシオンはもう、座り込む事は無かった。

「……もう、全部。起こっちゃった事でしょ？これからどうするかを考えなさいよ」

「……でも」

「何？まだぐじぐじする積もりなの？」

未だ踏ん切りがつかないシオンに、ティアナが更にその形のいい眉を吊り上げる。

シオンはしかし、俯くだけ。

「カカカ。そりゃ無理だろ。なあ、兄弟？」

唐突に、アンラ・マンユが笑う。

同時に、シオンのその瞳が虚から戻った。

視覚が戻ったのだ。

さらにアンラ・マンユのその背後に、映像が映る。

ルシアをシオンが奪った映像が。

「なあ、兄弟。お前、お兄ちゃんにどう申し開きする積もりだよ。

これから頑張るから、罪を償うから許して下さいとでも言う気か？

なあ、これだけの事をしといて、それだけで済ますつもりかよ？」

そして、流れる映像。

それにシオンは顔を歪める。

見たく無かった真実を。

そこに晒されて、見せられて、俯く。

「なあ、兄弟？　どうなんだ？　それとも、この真実をまだ疑ってんのか？　」

「俺は……」

顔を上げる。

その映像を、幾度も見せられた己の罪を再び見て、シオンは顔を歪めた。

「これが……これが……真実……俺が……俺が」

「そう、お前がこれをやったんだ。だから」

齒を食いしばる。

そんなシオンにアンラ・マンユは更に言葉を紡ごうとして。

「撃」

いきなり拳を叩き込まれた。

「うおっ！」

始めて、その声に動揺が混じる。

アンラ・マンユをいきなり殴りつけたのは、スバルだった。  
キッと睨む。

「あなたは黙ってて」

「おいおい」

苦笑を伴う声が響く。

しかしスバルは構わない。後ろに、シオンに振り向いた。

「ね、シオン。タカトさん、聖域に来てたよ」

「……え？」

その言葉に、シオンの目が見開かれる。

スバルはそんなシオンに優しく微笑んだ。

「聖域に来てた。シオンを助けようとしてたよ。今も外でシオンと戦ってる」

「タカ兄い、が……」

スバルの言葉に、シオンは呆然と呟く。

何故、タカトが自分を助けようとしてくれているのか。

それが解らなくて。

そんなシオンにスバルは後ろを振り向いた。

アンラ・マンユに。

「ずっと、気になってる事があったんだ」

「何がだ？」

「この、続き、」

スバルのその言葉に、今度こそシオンは固まった。

そう、続きがある筈だ。

真実はこれだけじゃない。

ルシアを手が貫いた。

その後の記憶が、シオンには無い。

シオンの記憶を見たスバルもまた知らなかった。  
スバルは今度はシオンに振り向く。

「シオン。続きを見よう。多分、シオンが見ようと思えばこの続きは見れると思う」

「お前……。なんでそんな事……」

「私は、治療者、だから」

元感染者だからと、スバルは笑う。  
そんなスバルに、シオンは呆然とする。

「シオン。もう一度、真実を見よう？ 目を背けないで、ちゃんと向き合おう？」

スバルのその言葉に、まるで応えるかのように、映像に、3、の文字が入った。

「視線、逸らさないで」

、2、という文字が入る。

「私も、私達もココに居るから、だから……！」

、1、の文字が入る。

「一緒に。本当の真実に、向き合おう？」

そして、0、になった。



―軋―

震える。

―軋―

壊れる。

―軋！―

悲鳴が上がる！

轟音が聖域に響き、揺るがせる。  
地響き。

まるで、世界そのものが鳴動しているかのような音である。  
その音の発生源は宙空でぶつかり合う。  
鉤爪を掲げて。

拳を叩きつけて。

シオンは、タカトは辺りにその衝撃を。  
余波をぶち撒けながら衝突し合った。

「あれが……！」

二人の戦いをプロテクションを張りながら一同が見る。  
その中で、アルセイオが目を見開いていた。

その視線はただ一人。

伊織タカトに向けられていた。

自分が十年前に、目標とした存在に。

冷や汗を流しながら、それでもアルセイオは口端を吊り上げた。

「そう、そうでなくっちゃあいけねえよ……！」

笑い。

アルセイオは気付けば哄笑をあげていた。

再び、見る事が出来たから。

自身が超えると誓った存在の、その力を。

「もつとだ。……もつと、見せろ。伊織タカト！」

叫びを上げながら、アルセイオはただ二人の戦いを見続けた。

そんなアルセイオに構わずにシオンとタカトは至近距離で互いの一撃をぶつけ合う。

激音！

衝撃が辺りを震わせ。

そのまま二人は止まらない。

鉤爪を放ち。

拳を撃つ。

シオンの尾が振るわれる。

それを、タカトは後退と共に回避。

そのまま地上へと降り立つ。

シオンもまた、真っ直ぐにタカトを見据え、急降下する。

同時に生み出される剣群！

アルセイオの援護が無くなったタカトはしかし。



ただ無表情のままだ。左手をスツと掲げる。同時にシオンから剣群が射出された。

「天破水迅」

一  
碎  
一

一本の大剣が砕けた。  
そして。

[illegible]

それを皮切りに一斉に碎け散る劍群達。

水系が群がる全ての剣を砕いたのだ。

降り落ちる剣の破片。

きらりきらりと光を反射して光る。

砕かれた劍群。

それにシオンは構わない。

元よりそれはただの**囿**。

シオンの本命はその両の腕から繰り出される鉤爪だ。

もはや人を越えた臂力から繰り出される斬撃。

振りかぶり、背中に隠れた右の鉤爪が、鈍く光る。

「閃！」

鈎爪が振り下ろされた。

人の身体など豆腐も同然に斬り割く一撃をタカトは斜め前に踏み出す事で避わす。

同時に振り下ろされる右手の甲にそつと手を添え、その軌道を僅か

に変える。

それは一つの結果を生んだ。

ベクトルを狂わされ、シオンの身体が僅かに傾いたのだ。重心を崩して着地するシオン。

しかし、至近にいるタカトは更に一步を踏み込み、膝をかち上げる！

―撃！―

肝臓<sup>レバー</sup>に叩き込まれた膝が黒の甲冑をいともたやすく砕く。

全身のバネを使った一撃。同時に膝が焰を点した。

―爆！―

爆裂！

打撃と爆発が膝の一点で炸裂する！

シオンの身体がくの字に曲がって宙に浮いた。

タカトは止まらない。

更に踏み込む。

浮き上がった身体が地面に触れる前に、シオンの顎を風纏う肘でかち上げる。

―破！―

激音と共にシオンの首が後ろが見える程にのけ反った。

タカトが放った技は全て必殺。

並の、いや、一流の魔導士であろうが、十回は死んでお釣りがくる程の攻撃であった。

タカトはその宣言通り、シオンを、殺し、にいている。

一撃、一撃に込められた技は全て疾風や紅蓮。震雷の亜種だ。

純粹な生命体ならば確実に死んでいる。

だが、今のシオンは純粹な生命体では無かった。

シオンは宙に浮いた勢いを利用し、タカトの顎を狙って右の膝を跳ね上げる。

完全に死角となる攻撃。

だが、心眼でシオンの攻撃予測を立てていたタカトには死角となる一撃すらも意味は無い。

これだけ長い時間戦っているのだ。

いくら理性を無くし、破壊衝動に支配されたシオンだとしても行動データーは充分過ぎる程に取れる。

タカトは左前方に更に踏み出す。

体捌きのみで、あっさりと膝は空を切った。

だが、タカトは止まらない。

そのままシオンの胸倉を引っ掴むと同時に、残る左足を刈った。

スパンと、いっそ小気味よい音と共にシオンの身体が上下に反転する。

柔道で言うところの大内刈りが近いだろうか。

そのまま頭から落ちるシオンの顎に、タカトは掌底を打ち下ろす。打撃より押し込む事を目的とした一撃。

さらに腰を落として振り抜く。

同時、その掌に煌めく雷光！

頭頂から地面に叩きつける。

下が雪の為、シオンの頭はその中にすっぽりと埋まった。そして。

「天破震雷改式。天破轟天」

ー雷！ー

爆雷！

シオンの身体を雷が走り、一気に辺りにもその余波が叩きつけられた。

ー轟！ー

雷鳴閃光！

一気に周囲数mに渡って走る雷が、一瞬で雪を溶かし、気化させる。タカトはそのまま周りより一段低くなり地肌が見えた地面に立ち上がる。

シオンはそのまま仰向けに倒れる。

だが、タカトは容赦しない。

さらに振り上げる踵。

頭上高くに孤を描くそれは頂上に達すると同時にボンツと焰を纏った。

振り下ろす！

だが、しかし。シオンの身体は直撃の瞬間に一挙動で跳ね起きた。人体の構造を完全に無視した、映画のキョンシーのような動き。

それにタカトの踵は空を切る。

同時にシオンはその背後に剣群を展開。

射出と同時にそれを追い抜くような速度でタカトに迫る。

剣群と左の鉤爪が同時にタカトを襲う。

しかし。

タカトはたった一步を踏み込んだ。

そこからいきなり放たれる拳。

予備動作を一切廃したそれは武術に於ける秘奥だ。

いわく、無拍子。

その動きは物理的速度を超えと言う。

放たれた拳に纏う暴風。

震脚と共に放たれた一撃は進路上の剣群を纏めて砕き、シオンの顔面に叩き込まれる！

「戟」

シオンは拳が顔面に突き刺さった勢いで身体が泳ぎ。

「撃」

暴風がその牙を剥き、爆裂する！

「破」

シオンはまるで人形のように跳ね飛んだ。  
くるりくると舞うシオン。

少しは堪えたか、ぐるると呻く。

だが、そのまま空中で姿勢を制御すると、足場を展開。  
ガシャツとそこに着地し、そのまま1時離脱を計る。  
とにかく距離を取ろうとしたのだろう。  
だが、タカトはその隙を見逃さない。

「天破水迅改式」

スッと天に掲げる左手。

その先には頭上いっばいに広がる水塊があった。

何せあたり一面雪である。

水の補給には事欠かない。

使わない手は無かった。

「ぐ、うる……」

「――天破瀑布」

――轟――

莫大な、莫大な量の水が滝となって降り落ちた。

シオンの頭上から叩きつけられた水塊。

その重量に押し負け、シオンが墜落する。

かろうじて足から着地したものの、その圧倒的重量に縛られ、地面に這いつくばった。

動きを止めたシオンに向かってタカトは即座に突っ込む。

縮地。

空間移動術たるそれをもって、一気にシオンに接近。

同時に瀑布を解除する。

あたりに散る水。

そして、タカトはその姿をシオンの眼前に現す。

だが、シオンはそのまま跳ね起きた。

たわんだ膝を戻す勢いを利用し、目のタカトに鉤爪を突き上げる！  
縮地をもって接近したタカトの喉元に、カウンターで襲いかかる狂

気の一閃。

しかし、タカトは構わない。

むしろ前に踏み込む。

思い切り深く腰を落とした。

――閃！――

喉を切り裂く筈の一撃。

しかし、それはタカトの頭上を通り過ぎた。

タカトは頭上を黒光りする鉤爪が駆け抜けていくのを意識の端で確認し、掌をシオンの下腹。

丹田に当てる。

「ヒュッー」

鋭い呼気が響いた。

タカトの息吹だ。

同時、ぐっと両足で大地を踏み締める。

その反発力を膝から腰、腰から肩へと、螺旋を描き増幅しながら伝達していく。

肩から腕の先へ、全身の運動エネルギーを収束し、掌から前方へと解き放つ。

同時に身体から溢れる程に練り上げた魔力を八卦太極炉に注ぎ込み、雷の門に流し込む。

それは収束された運動エネルギーに合わさる。

掌から雷がほとばしり、シオンを貫く様子を明確にイメージした。

「天破震雷っ！」

ー発っ！ー

寸っと雷がシオンを貫く。

ぶあぁっとシオンの身体が浮き上がり、そして。

ー雷！ー

ー爆！ー

莫大な威力の雷が丹田に炸裂！

シオンの身体に雷が通り、走り抜け、そして爆破されたように吹っ飛んだ。そのまま音速超過し、森に再度突っ込む。

―激・激・激・激・激―

再び木々を折りながらシオンは数百m先に吹き飛ばされた。

最後の木を叩き折ってシオンは漸く止まる。

「ぐ、う、る……」

その身体はまさに満身創痍。

ボロボロであった。

だが、即座に因子が湧き立つ。

その身体が急速に再生される。

・・・だが。

―煌―

シオンが突っ込んで来た方向。

そこからいきなり巨大な光の弾が走ってきた。

横回転と共に走るその一撃。

天破光覇弾。

シオンはろくに動かない身体では回避も叶わずに、あっさりと光に飲み込まれた。

―轟!―

シオンを飲み込んだ光覇弾はそのまま爆裂。

光の柱となって天地に突き立った。

それをタカトは光覇弾を放った姿勢のまま見る。



まさに、一切の容赦を捨てた攻撃。

タカトは正しくシオンを殺しにかかっていた。

(……シオンが起きるまでは封印は出来ない)

スツと残心を解きながらタカトはそう思考する。

ようは意思の支配権の問題だ。

因子が。・・・アンラ・マンユがシオンの意思を支配している状態では封印は不可能だ。

先程のように非殺傷設定に術式を組み替えた瞬間ならば、シオン自身に支配権は戻っているだろうが。

(スバルとティアナとか言ったか)

再び腰を落とす。

そしてシオンが吹き飛んだ方向から視線は変わらない。

ぐっと拳を握る。

(……シオンを早くー！)

瞬間。

シオンの姿がタカトの眼前に現れる。

同時に放たれる右の鈎爪。しかし、タカトはそのまま一步を踏み込んだ。

(……俺がシオンをー！)

「天破疾風」

ー撃！ー



顔を歪め、タカトはシオンを見た。  
泣いていた。

笑いを顔に張り付け、そして同時にシオンは泣いていた。  
そしてその身体に沸き立つ因子。

チラリとタカトはルシアに視線を移す。

ルシアの身体からもまた、因子が溢れ出していた。  
それにタカトはギリリと歯を軋ませる。

シオンとルシアが感染した。

その事実には、顔を歪める。

【ぐっううっ！】

突如声が響いた。

それはシオンの胸元からの声。

タカトがシオンに譲り渡したデバイス。

聖剣。イクスカリバーがそこに居た。

「……イクス！？」

【タカト……。駄目だ、逃げー】  
ユニゾン・イン。

その声にタカトは呆然となる。

イクスのユニゾン形態は戦技変換の最終形態だ。  
今のシオンに使える筈も無いもの。

かって、タカトですら起動できなかった代物だ。

【ちが、う。これは、イレギュラーな……】

「イクス……！」

【タカト……！】

コード・アンラ・マンユ確認。

アヴェンジャー・フォーム起動。

瞬間。

イクスがシオンの中へと取り込まれた。

同時。

漆黒の闇がほとばしる！

ー煌ー

「つく……！」

辺りにぶち撒けられる衝撃波。

それにタカトは防御を展開し、凌ぐ。

そして、闇が晴れた先には。

「……シオン……」

「う、るるるっ……」

漆黒の、まるで剣竜を反芻させる甲冑を纏い、三本の尻尾をくねらせるシオンが居た。

そのシオンにタカトはぐつと息を飲む。

瞬間。

「るー」

シオンの姿が消えた。

「ーっ！」

同時に背筋を走る悪寒。

タカトは本能的にそれに従い、再び床を蹴る。空中で半回転し、上下逆さまの状態になった。直後。

「閃！」

タカトが居た位置に、刻まれる八の斬撃痕。そこにシオンが居た。そのまま顔を上げ、こちらを視認する。

「天破紅蓮！」

上下逆さまの状態で身をくねらせ、真横に直蹴りを叩き込む。そこには、まさに今。瞬間で現れたシオンが居た。

「爆！」

蹴りの先で爆発が起こった。

同時、吹き飛ぶシオン。殆ど感に任せた一撃ではあったが。上手く当たってくれた。

爆発の勢いを利用して、床に両足を揃えて着地する。

吹き飛んだシオンはそのまま祭壇に突っ込み、十字架を破壊。埋もれる事となった。

「……何が、どうなってる……！？」

「う……」

「っー。ルシアっ！」

響く呻き声にタカトは即座に反応した。ルシアへと駆け寄り、その身体を抱き留めた。

「ルシア……！」

「タカ、ト……？」

ゆっくりとルシアの目が開く。

それにタカトはホッとして。

「あっ！ううっ！」

「ーールシアっ！」

その身体から因子が激しく湧き出す。

タカトはルシアの名を叫び、同時に何も出来ない自分に歯を噛み締めた。

タカトの魔法術式は既に八極八卦太極図へと変わってしまった。つまり、ダイブが使え無いのだ。

ダイブは前提条件として、カラバ式の使用でなければ行使出来ない。

「くっそ……っ！。ルシア、少し待ってろ。今、兄者をー」

「駄目、だよ……」

タカトの言葉に、しかしルシアは首を振る。

そしてシオンが埋もれた祭壇に視線を向けた。

「……シオンを、助けてあげなくっちゃ……」

「解ってる！すぐにシオンにもダイブでー」

「違うの」

再度首を振る。

その仕種はあまりにもはかなげで、まるで消え入ってしまいそうな

印象を受けた。

「……シオンの、あれは特別。ダイブじゃ、どうにもならない。…  
…それを受けた私も……っ！」

「ルシアっ！」

苦し気に呻くルシアにタカトが叫ぶ。

ルシアの周りに湧き立つ因子はいよいよその激しさを増す。

それを今、抑え込んでいるルシアの意思は超人的とも言えた。

ルシアはゆっくりと微笑む。

そしてタカトの頬に手を当てた。

「タカトは、お兄ちゃん、でしょ……？ シオンを助けてあげなくち  
や……、ね？」

「ルシ、ア……」

ルシアの手を掴む。

そしてタカトはゆっくりと頷いた、

「うん……。それでこそお兄ちゃんだね……」

「ルシア……」

「ごめん。少し眠る、ね」

「……ああ。すぐにシオンを助けて、兄者の元に連れていく」

タカトの返事にルシアは微笑む。

ゆっくりと頷いた。

「待ってるから」

そして、その瞳を閉じた。

「……ルシア……」

名を呟き、タカトは佇む。  
祭壇の方から音が鳴った。  
シオンだ。

十字架の瓦礫を払いのけ、立ち上がる。  
それに合わせるようにタカトもルシアを優しく床に寝せ、立ち上がる。

そして、シオンへと向き直った。

「シオン……」

「る、るる……」

唸る。

そんなシオンにタカトは拳を突き出した。  
そつと腕に手を添える。

「シオン、ルシア。……待ってろ。必ず助けるっ」  
「が、ああああああああああああっ！」

タカトのその声がまるで聞こえているかのように、シオンは吠え。  
瞬間。

同時に駆け出した。



互いに駆け出す二人。

シオンの目前でタカトは立ち止まる。  
じゅつと地を蹴る音と共に右足が孤を描く。



上段蹴り。

シオンの顔面に着弾し、しかし、シオンは止まらない。  
そのまま突っ込む。

「っー！」

「が、う、あああっ！」

咆哮と同時に鈍い色を反射して光る鉤爪を振り上げた。  
それにタカトは蹴りを放った右足の前に足場を形成。  
それを蹴り後退する。

「閃」

放たれる一閃。

だが、タカトは捉えられ無かった。

タカトは足場を蹴った勢いを利用したまま背後にバク転。  
その勢いで左足を跳ね上げ、シオンの顎を蹴り抜く。

「徹」

小気味よい音と共にシオンの顔が跳ね上がった。  
タカトはそのまま足を回転させ、体勢を整える。  
くると回り、一回転を回り切る。

その眼前にシオンが居た。

「っー！」

「が、あああああっ！」

完全に虚をついた動きにタカトは驚愕し。

しかし、身体だけは勝手に動く。  
振るわれる鉤爪をくると腕をコマのように回し捌く。  
化勁と呼ばれる技だ。

そのままの動きで身体を深く沈める。

「天破震雷っ！」

叫び、同時に両の掌を突き出す！

雷光を纏うそれは腹部に押し当てられると同時にその威力をシオンの体内で炸裂。

爆裂したかのような音が鳴り。シオンの身体が盛大に跳ねた。  
だが。

「戟」

突如としてタカトの身体が吹き飛ぶ。

シオンの尻尾による打撃だ。

腹に直接受けた打撃で空へとタカトの身体が浮く。

「つくー！」

「が、あああああああああああっ！」

咆哮。

同時に繰り出される一閃！

体勢を崩したタカトにそれを避らす術は無い。

鈍く光る鉤爪がタカトを串刺しにせんと走りー！。

「……シオン……？」

「あ、あ、あ、あ、あ」

止まった。

タカトの眼前で。

ふるふると手が震える。

その瞳に、明確に灯る意思の光。

それを見てタカトは目を見開いた。

シオンの自我が戻っている。

「シオン……」

「……殺したくなんて、無いっ！誰も奪いたくなんて無いよ……！」

まるで自身に訴えるようにシオンは叫ぶ。

だけど鉤爪は下りない。

震えながら突き出されるだけ。

そして、シオンはタカト涙を流しながらタカトを見た。

「ゴ、メン……。タカ兄いっ。ゴメン、なさい……。！ゴメンなさいっ！」

謝る。

必死に、ただただタカトに。

タカトも悟る。

シオンもまた、戦っている。

自身の中で。

因子と。

「タカ兄い。……。助けて……」

涙はただ流れ落ち、そしてシオンは訴える。

叫びと共に。

タカトに。

「助けてっ！、ルシア、をっ」  
「……………」

その叫びに、タカトは息を飲み、そして、少しだけ微笑した。  
ルシアはシオンを助けてと訴え。  
シオンはルシアを助けてと訴え。  
因子に感染しながらも、そう言う二人に。  
自身より、相手を助けてと言える二人に。  
タカトは頷いた。

「……お前もだ」  
「っー！」

シオンが目を見開く。  
タカトはそれを見て再度頷いた。

「お前もだ。ルシアも、お前も、俺は諦めない」  
「タカ兄い……」

ぐっと拳を握る。  
そして突き出した。

「必ず助ける」  
「……う、ん。あ、あ、あ、あああああっ！」

タカトの言葉に頷き。  
瞬間。

シオンの身体を因子が再度湧き立つ。  
再び、シオンの自我が消えた。

同時、振るわれる一閃。

それをタカトは床を蹴り、再度宙に跳ぶ事で回避。

シオンを飛び越えて、反対側。

壊れた十字架の傍に降り立った。

（……問題は方法だ）

即座に突っ込んでくるシオン。

振るわれる鉤爪を両の手で捌く。

いかな臂力か、化勁で受け流した筈の手が僅かな痺れを残した。

（今の俺にはダイブは使えない）

捌く、捌く。

至近距離でシオンが振るう鉤爪の事如くを捌く。

（考えろ。何か、手段がある筈だ。……ルシアは言った。ダイブじゃ駄目だと。それでもシオンを助けられると信じていた）

振るわれ、放たれた鉤爪を捌き続ける。

それは恐ろしく精密な作業だ。

タイミングが、角度が、少しでもずれれば即座に腕は弾かれ、タカトは鉤爪に貫かれただろう。

それでもタカトはそれを成す。

（考えろ、考えろ。何かを見落としていないか、考えろっ！）

「我を望むか？」

「……っ！」

瞬間。

声が聞こえた。

シオンの攻撃を捌いていたタカトは、その声に声にならない声を上げ。

同時にシオンの鉤爪を捌いて、後退する。

シオンも何故か追撃して来なかった。

辺りを見渡す。

しかし、誰もいない。

「我を望むか？」

また声が聞こえた。

誰もいないのに。

しかし、タカトはその声に応えた。

「……誰だ？」

「我はアレを、カミを封じせし器。汝等が666と呼ぶものだ」

「……何？」

その答えにタカトは思わず足元を見る。

そこにはちょうど十字架の中央部分があった。

666と刻まれた、それが。

「我を望むか？」

再び響く声。

それにタカトはスッと目を細めた。

「二人を助けられるのか？」

問う。

二人を助ける方法があるのかと。

666が僅かな光を放った。

「今、この場であの者等が命を落とさない方法ならば提示出来る――

「……引っ掛かる言い方だな？」

――事実だ――

にべも無い。

それにタカトは俯き。

しかし、ぐっと拳を握りしめた。

「いいだろう。乗ってやる」

――我を望むのだな？――

「ああ」

――ならば――

瞬間。

666の紋章が十字架から跳ね上がった。  
そのままタカトの右手に食らい付く！

「っ――！。が、あああっ！」

――力をくれてやる！――

食らう、喰らい尽くす！

タカトの右手に侵入し、飲み込み。

細胞から、霊的にから、融合を果たす！

「ぐっう……！」

そして、タカトの右手の甲に、666の紋様が描かれた。

ー融合、完了。情報を共有化、開始するー

「っ……！が、あああああああああっ！」

瞬間。

タカトの脳裏に莫大の情報が送られた。

カミ。

アンラ・マンユ。

666。

紋章。

■ ■ ■ ■ ■ ■  
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

送られる。

送られる。

ありとあらゆる情報が。

タカトに。

そして。



## 創誕

「情報共有化、完了。気分はどうだ？マスター？」

「……いいと思うか？」

呻くように言葉を吐く。

そのまま、自身の右手を見詰めた。

「……これしか、無いんだな？」

「二人を救いたいのならば。……いや、取り戻したいのならばな？  
‘創誕’を成す以外に手段は無い」

フウツと息を吐く。

そして、眼前のシオンに目を向けた。

シオンは、まるでおののくように唸るだけ。

タカトはぐっと右の拳を握り締めた。

「……なら、成して、やる。例え――」

世界を敵に回そうとも。

瞬間。

シオンが駆け出した。



突っ込んで来るシオンにタカトはその場を動かさず向かえ撃つ。

シオンが振るう左の鉤爪とタカトの右腕が交差。

同時、化勁で捌く。

先程の再現だ。

振るわれ、振るわれ続ける鉤爪をタカトは捌き続ける。

「っがあ！」

それに業を煮やしたのか、シオンが背中に大きく右の鉤爪を振り上げた。

だが、それをタカトは待っていた。

合わせるように踏み込む。

右の順手突きを鳩尾に叩き込んだ。

「戟」

カウンターとなる一撃。

しかし、シオンの甲冑を破壊するには至らない。

そのまま数歩分弾かれるが、両足を地面に付けたまま堪える。

だが、タカトは構わない。

そのまま右腕を肘から曲げ上に突き出し、左手をそつと添えた。

「天破疾風改式」

風が、シオンの周りにある風が全てシオンに収束する。

集まる風はそのままシオンを押し包んだ。

「天破乱曲」

「轟」

風が纏めて収束し、シオンを押し潰さんと叩き込まれる！  
シオンはそれに苦悶の悲鳴をあげ。

しかし、両の腕を突き出した。

「が、あああああああああああつっ！」

「戟」

引き裂く。

風の拘束を。

そのまま、タカトに向き合い。

「天破光覇弾！」

直後、巨大な光弾がシオンに叩き込まれた。

光弾の一撃を放ったタカトは残心を解く。

回避、防御不可能のタイミングでの一撃。

これでシオンを行動不能に出来たならば。

だが、次の瞬間。

タカトは信じられないものを見た。

光弾を前にしてシオンはがばりと口を開く。

そして、光弾はシオンの顔面に突き進み。

そのまま口顎に飲み込まれた。

「な………！」

タカトがそれを見て短い驚愕を上げ。

しかし、ぞくりと再度走る悪寒に再び両掌を構える。  
灯る光球。

そしてシオンを見る。

光弾を飲み込んだシオンの口は未だ開かれたまま。

その口内にタカト両掌と同じく光球が灯る！

「天破光覇弾っ！」

「っーがあっ！」

光弾が放たれ。

また光弾が放たれる！

二つの光弾は互いにぶつかり、その威力を喰らい合う。  
そして相殺した。

「……俺の技を喰った、のか……？」

ー大罪の内の一つが現顕したかー

呆然と呟くタカトに、666があっさりと答える。

それにキッと視線を向けた。

「どう言う事だ！？」

ーわざわざ聞くな。私の知識は既に汝にある。検索しろー

666の答えはにべも無い。だが、確かにその通りだ。即座に自身  
の中の情報に検索をかけ。

その出鱈目さに少し、絶句した。

「魔法ならば、何でも喰らう事が出来てさらにそれを使用可能？」

「そう言う事だ」

無茶苦茶にも程と言うものがある。

取り合えず自分の事は棚上げて、タカトはそう思う。

さらに突っ込むシオン。

再度振るわれる鉤爪を捌く。

「何を手加減しているのだ。マスター。」

「っ」

見透かされている。

知識を共有化したから当たり前ではあるが。

タカトはそれに顔を歪める。

「殺すつもりで戦え。それで、やっと、だ」

「黙ってる……！」

呻き、さらに振るわれる鉤爪を捌く。

瞬間。

タカトの視界が180°回転した。

「……な……っ！」

何が起きたか一瞬解らず。

しかし、タカトはそれを見る。  
足首。

それにシオンの三本ある尻尾の内の一本が絡まっていた。

―戟！―

床に叩き付けられた。

背中から落ちて。

肺の空気が口から吐き出される。

そして。

―戟！

―戟！

―戟！―

何度も叩き付けられる！

床に、壁に、天井に。

そして、そのままシオンの目の前に引きずられ。

同時。

閃く右の鉤爪！

迷い無く、タカトに向けて放たれ。

―戟！

捌かれた。

タカトの左手に。

そのままタカトは右の拳を顔面に叩き込む！

―撃！―

「シオンっっ!!」

止まらない。

左拳で逆側を殴り飛ばし、右側を再度殴る。

続け様に叩き込まれる拳にシオンの顔が左右に跳ね回る。

「助かりたいんだろう!」

タカトが叫ぶ。

そして拳は止まらない。

「助けたいんだろう!」

続けて叫ぶ。

拳は止まらない。

連撃となって次々にシオンの顔面に叩き込まれる。

「だったらっ!」

「ぐ、う、うあああああああっ!」

互いに至近で吠える!

タカトが次に振るった拳をシオンの左手が弾く。

だが、それすらも化勁で捌かれ、返す右がシオンの顔面に叩き込まれた。

「さっさと起きろ!このたわけがっ!」

―戦―

いかな威力がその拳に込められていたのか。

シオンの身体がぐるりと回転し、床に叩きつけられた。それを最後まで見遣り、ぺっとタカトが口から血を吐く。あちこちに叩きつけられた時に、口の中でも切ったのか。ぐいっと手で拭う。

「い、てえよ。……タカ兄い……」

シオンから声が漏れた。

意識を回復したのだ。

それにタカトはたわけと呟く。

そして右手を突き出した。

同時、発生する幾何学模様の魔法陣。

666の魔法陣だ。

「タカ兄い……」

「お前は、何も心配する必要は無い。……この記憶は全て、俺が持っていく」

呻くシオンに。

タカトはぼつりと呟く。

666。

その能力は、略奪、。

ありとあらゆるモノを奪い、自身に封印する力であった。

「俺がお前を助ける」

「タカ兄い……?」

シオンがその言葉に問い直す。

タカトは構わない。



「俺がお前の前を歩く」

「タカ兄い……。何、言って……。？」

呆然とするシオン。

だが、タカトは一切構わない。  
口を開く。

「お前に恨まれながらだとしても」

「……え？」

その言葉に、シオンの目が見開かれる。

タカトの唇が歪む。

微笑みの形に。

「俺がお前の標となってやる」

そして、と続ける。

666の魔法陣が一際激しい光を放った。

「ルシアとお前を、取り戻す。……例え、世界の全てを、時間を、やり直し、でも」

「タ、カ、兄い……。？」

「だから、シオン」

俺を憎み続けてくれ

―煌！―

瞬間。

666の魔法陣から虹の光りがほとばしり、シオンの身体を貫いた。

同時、黒の甲冑が碎かれ。因子は消えて。  
シオンは元の姿へと戻り、その場に倒れ伏した。



「タカ兄い……」

過去の再生が終わり、シオンは映像の前にただただ立ち尽くしていた。

本当の真実を知って。

タカトが何をしたのかを知って。

それをスバルとティアナが後ろから心配そうに見る。

シオンの過去、それを見て。

だが。

「やれやれ、余計な事をしてくれる」

声が響いた。

それにスバルとティアナが振り向く。

声の主は当然、アンラ・マンユであった。

肩を竦め、こちらへと歩いて来る。

「せっかく兄弟からいろいろ引き出せたのに、終わりにしなきゃいけないなっちまったじゃないか」

「終わり……?」

「それ、どういう意味よ……?」

「知る必要は無い。そもそもお前達をここに案内したのが間違いだったよ。お帰りはあちらだー」

「「ーーーっ！」」

瞬間。

いきなり水の底に光りが照らされた。

それはスバルとティアナを照らし。

二人はまるで光に引きずられるように上へと連れて行かれる。

「ーっ!?!。スバル!ティアナ!」

「「シオンっ!」」

シオンが叫び、二人に駆け寄る。

しかし、同時に伸ばした手は空を切って。

一気に二人は上へと連れて行かれた。

シオンはそれを追い掛けようとするが、何故か上に浮かべ無い。足は地に着いたままだ。

「っーっ!」

「さて、邪魔な二人にはお帰り願った所でー」

「手前え……!。二人を何処にやったっ!」

シオンはアンラ・マンユに振り向き、怒鳴る。

しかし、アンラ・マンユはそれにただ首を振った。

「あの二人はただ自分の身体に帰っただけだ。それより……人の心配より、自分の心配をしろよー」

瞬間。

いきなりアンラ・マンユがそのヒトガタを解いた。  
いつかのように、その身体が無数の手と成る。

「ーっ！」

ー本当、惜しいよな。もっと兄弟の感情を楽しみたかったのに。これで終わりなんてなー

本当に、本当に残念そうな声が響き、そして。

ーそれじゃあ、終わりにしようかー

一気にシオンへと襲い掛かった！

「ーっっっ！」

襲い来る。無数の手。

それをシオンは避けそうとする。

しかし、足が動かない。

まるで地面に接着されたかのように、固定されていた。

動けない！

そして。

ーいただきますー

いつかの再現のように、シオンにアンラ・マンユが突き立った。

「う、ぐ、あああああああああああああああああああああ

っ！  
」

侵食されるココロ。

シオンの意識が、アンラ・マンユにより、一気に押しやられる。  
霞む、霞む。

あらゆる感覚が。

食らわれ、喰らわれる。

‘シオン’と言う存在、そのものが！

シオンは自分を抱きしめるように、その両腕をきつく回す。  
そして、必死に抗う。

アンラ・マンユと言う存在、そのものに！

―抵抗するなよ。兄弟―

―そもそも、お前にそんな権利なんてないだろう？―

「っー！  
」

響く声に、シオンは愕然となる。

アンラ・マンユの声は止まらない。

シオンの内側から声はただ、響いた。

―あれだけの事をしておいて、まだ赦されるつもりか？―

―お兄ちゃんが、本当にお前を憾んでないとも思ってたのか？―

―全てを奪ったお前を―

―今も、奪い続けてるお前を！―



だから。

「……それでも、俺は、前に、進むよ……」

「お前ね……」

シオンのその解答。

それに、アンラ・マンユが嘆息する。

「おこがましいんだよ」

「そうやって、また罪から逃げんのか？」

「謝ればお兄ちゃんが赦すとも思ってたんのか？」

「そもそも、赦されるとでも思ってたんのかよ」

「赦されたいのかよ？」

響く声。

それにシオンの精神が揺さぶられる。

ココロが壊される。

だけど。

「そんなの……っ！解るかよ！解るもんか！……解らないさ！」

叫ぶ！

拳を地面に打ち付ける。

ぐっと立ち上がった。

気付けば涙を流していた。

頬を伝う涙を自覚しながら、目を閉じる。

思い浮かべるのは、憎んでくれと、訴えた。

異母兄の顔。

「それでも……」

全てを悟って。

全てを覚悟した、そんな顔。

そして、呟かれた最後の言葉。

「タカ兄いは……」

シオン。どうか、お前自身を恨まないでくれ、……赦して、やってくれ。

「優しかったんだ」

瞬間。

アンラ・マンユを成す因子はシオンの身体からバラバラになって吹き飛んだ。

「なっ!?」



驚愕の音が響く。

アンラ・マンユの声だ。

そのまま、弾かれた因子はズルズルと集まり、再びヒトガタへと戻った。

ー馬鹿、なー

呆然と声をあげるアンラ・マンユ。

しかし、そこで異変は止まらない。

水が流れる。

渦を巻き、地面に吸い込まれるように。

シオンとアンラ・マンユを無視する形でどんどん水は無くなり。

そして、青空が現れた。

水に覆われた筈の草原も青々と茂り。

悠久なる世界は、シオンのココロの世界はその姿を取り戻した。

シオンはその草原の中央に立つ。

閉じていた目を開いた。

ー兄弟、お前ー

「だから、俺はお前を、受け入れない」

歩く。

アンラ・マンユに向かって、ゆっくりと。

それにアンラ・マンユは後退しようとして。

ー……っ！ー

足がまったく動かない事に気付いた。

先程のシオンとまったく逆。

シオンとアンラ・マンユの立場はここに完全に逆転した。

さらにシオンは歩く。

アンラ・マンユの目前までそのまま歩き、左の腕を振り上げた。

「だから、俺は――」

拳を握りしめる。

最後の一步を踏み、そして。

「――前に歩き始めるよ」

拳を振り下ろした。

――撃――

拳は迷い無く、アンラ・マンユの顔面に突き刺さる。

同時、そのヒトガタが崩れた。

バラバラの因子となった、アンラ・マンユはそのまま現れた時と同じく、暗雲へとその姿を変え、空へと昇っていく。

「カカカ、いや、こいつはたまげたよ。まさか俺を否定出来るなんてな? ……いや、流石。と言うべきなのかな? 」

そのヒトガタを崩されてもアンラ・マンユの軽口は無くならなかった。

その声は笑いのまま。

「今回はここまでだな」

「……一つ聞かせろ」

「うん？」

かけられる声にアンラ・マンユが疑問の声をあげる。  
シオンはアンラ・マンユを真っ直ぐに見据えた。

「……なんで。俺を兄弟、て呼ぶんだ？」

シオンはずっと、ずっと疑問に思っていた事を聞く。  
こいつは、アンラ・マンユは最初に会った時からずっと自分の事を  
そう呼んでいた。

「ふ、ククク、カカカカカカカカカカカカ！」

唐突に笑い声が響いた。

アンラ・マンユが大笑いしたのだ。

ひとしきり笑い声が響くと。

これまた唐突に笑いが消えた。

「お前、自分の、真名、知ってるか？」

「……？」

逆に問われて、シオンは訝し気な顔となった。

それが何の関係があると言うのか。

そんなシオンの反応に、アンラ・マンユの笑いはただ響く。

「知らねえみたいだな。なら、俺の真名を教えよう」

「……何？」

アンラ・マンユの言葉にシオンは眉を潜めた。

だが、アンラ・マンユはそんなシオンに構わない。

「カイン」。

カイン・アンラ・マンユ。

それが俺の真名だ。よく覚えておけよ？ 兄弟。……いや

自身の真名を告げたアンラ・マンユは、一拍の間を置き。

そして言い直した。

「アベル・スプタ・マンユ」？

「……何、だと……？」

告げられたその名に、自分をそう呼んだアンラ・マンユにシオンは疑問の声をあげた。

その名は――。

「じゃあな。兄弟、またな？」

「――っ。待て！」

「嫌だね」

アンラ・マンユは、あっさりとシオンを拒絶すると、そのまま空へ

と消えた。

同時、世界が硝子を割るような音と共に割れ、シオンはその割れ目に飲み込まれた。



聖域に響く音は止む事が無い。

空間に軋みと歪みが走り、そしてそれを引き起こした当人、伊織タカトはただ拳を振るう。

―戟！―

無拍子の理をもって放たれた風巻く拳は容赦無くシオンの腹部に叩きつけられる。

再び響く軋み。

同時、風が爆裂した。

―轟―

シオンが景気よく飛ぶ。  
くるりくるりと回転し、そのまま森へと再度突っ込んだ。

「……これで、もう何度目かしら……」

「さあ？ 途中から数えるの、止めちゃったっすからねー」

その光景を広域に張ったプロテクション内で見ていたギンガが呟き、ウェンディが律儀に答える。

実際、タカトが、本気を出してから手伝える事が無くなってしまい……と、言うより下手な手出しは余計な邪魔になってしまう

可能性があった。

彼女等は戦闘の余波に巻き込まれる事を懸念して、こうしてプロテクション内でただタカトとシオンの戦闘を見ていたのだ。

無尽刀は未だ食い入るかのようにタカトを見て、ソラもまた同様に二人の戦闘を見ていた。

既にタカトが、本気'を出して結構な時間が立っていた。

、殺し'にかかっているタカトの一撃一撃は正しく必殺であり、一撃が叩き込まれる度にシオンは常人ならば確実に死亡確実なダメージを与えられていた。

その度に因子が身体を修復するのだが、それよりも尚タカトが一撃を加えるほうが早い。

必然、シオンの再生は間に合わず、その身体は次第にダメージが蓄積していった。

「……伊織タカトはシオンを殺す積もりなのか？このままではシオンは……」

「そうだった時は私達が彼を止めるしか無いわ」

「、あれ'をか？」

チンクの視線の先のタカトを見て、ギンガも顔を歪める。実際止める手立てがあるかと言えぱきっぱりと否である。

勝てる要素がこの状況では無い。

だが、それでも止めねばならない。

チラリと傍に眠る二人を見てギンガは思う。

シオンの中には未だにスバルとティアナが居る。

そしてシオン自身もまた見捨てたくは無かった。

だから。

「んっ……」

「え？」

スバルが呻いた。

それにギンガが目を見開く。

ティアナも同様だ。

そして二人はゆっくりとその目を開いた。

「ギン……姉……？」

「スバル！？」

ギンガが驚きの声をあげて、スバルの傍に膝をつき、手を添えて抱き起こした。

「スバル。大丈夫？どこも変わった所とか、無い？」

「……うん。大丈夫だよ……っ！」

「ティアナ。お前は大丈夫なのかよ？」

「うん……。心配無いわ……っ！」

それぞれ異変は無いかと聞くギンガ、ノーヴェに答え。

瞬間、二人して目を見開いた。

即座に互いを見て、シオンへと視線を向ける。

タカトと乱戦を繰り広げるシオンへと。

「「シオンっ！」」

「スバル？ティアナさん？」

叫び、がばりと立ち上がる二人にギンガが目を丸くする。

しかし、二人は構わなかった。

プロテクションの外に無理矢理出ようとする。

流石にその二人の行動にN2Rの面々は顔を青ざめ、即座に止める。

「だめよ！スバル！？」

「今外がどうなってんのか解ってんのか！？」

「離して！ギン姉！」

「シオンの中にまた戻らないと……！」

「……それはどう言うこった？嬢ちゃん達？」

組み付くギンガ達を振り解こうともがくスバルとティアナ。

その二人に、今の今まで黙っていたアルセイオが口を開く。

そもそもこの二人が起きて、シオンが未だに感染者状態だというのがもはや異常なのである。

基本、ダイブで対象の精神世界に入った場合。

その対象とは一蓮托生の状態になる。

共に戻るか。

共に戻れなくなるか。

それしか無いのだ。

だが、二人は現実として、今。自身の身体に戻り、そしてシオンは未だ感染者状態のままなのだ。

気にもなると言うものだ。

そんなアルセイオに、しかし二人は構わない。

組み付かれたままシオンに叫ぶ。

「「シオンっ！」」

同時。

シオンが地面に叩き付けられた。

タカトが頭をひっ掴み、真下に放ったのだ。

――豪――



雪が敷き詰められた地面に叩き付けられ、一気にあたりに雪が舞い上がる。

直後にタカトが急降下する。

足を下に向け、地面に俯せで倒れるシオンに。

「戟！」

踏み抜き。

背中に叩き込まれたタカトの足にシオンがくの字に曲がる。

直後、タカトがぽつりと口を開いた。

「天破紅蓮」

「爆」

シオンを中心に天地に火柱が突き立つ。

周りの雪は一気に気化。

水蒸気へと変わる。

火柱が消えた後には底の見えない穴が開いていた。

辺りにクレーターが出来ていないのは全ての威力を一点に集中させた結果である。

火柱は雪だけでは無く、地面すらも蒸発させたのだ。

その熱量はいかほどのものというのか。

「ぐ、う、る……」

穴からシオンが這い出して来た。

再生途中の身体はボロボロ。

よく四肢が繋がっているものである。

そのシオンに落ちる影。

「……………」

タカトであった。

感情の消えた顔でシオンを見下ろす。

シオンはただ呻くだけ。

そして、タカトは足を振り上げる。

シオンに止めを刺すかのように。

「ーっ！シオンっ！」

叫ぶ。

タカトは構わない。

振り上げた足をシオンの顔面に叩き込まんと振り下ろしー！。

「タ、カ兄い……」

「……………」

シオンの口から漏れた言葉に驚愕する。

しかし、足は振り下ろされた後だ。

そのまま止まらず直進し。

ー戟！ー

「シオン……」

しかし、無理矢理軌道を曲げて、シオンの顔の傍に突き立った。

「う、く……タカ……」

「……もういい。口を開くな」

シオンの意識が戻った。

それのみをタカトは確認すると右手をシオンに向けて突き出す。  
同時、666の魔法陣が展開した。

「……ごめ、ん。なさい……」

「……謝る必要は無い。ただお前は……」

最後の最後まで謝ろうとするシオンに、タカトは二年前と同じように微笑した。

「ココに戻ってくるだけでいい」

―煌―

瞬間。

666の魔法陣から虹の光が放たれ、シオンに突き刺さる。

光が突き立ったシオンの身体からイクスが強制排除されて吹き飛ぶ。

同時、アヴェンジャー・フォームを成す黒の甲冑は碎け。

周囲を覆う因子は弾け飛んだ。

後にはただ、半裸のシオンのみが残された。



「う……つく……」

光が差し込む。

そんな感覚と共にシオンは目を開いた。  
聖域の空。曇り空が目最初についた。

「あ！シオン！……やっとう起きた……！」

「この……っ！心配させて……何もなっていない？」

直後、スバルとティアナがしがみつく。

余程心配したのだろう。目尻には涙が浮かんでいた。

そんな二人にシオンはただ頷くと、自分の身体を見下ろした。  
毛布がかけられている。

そして周りにはスバルやティアナだけでは無い。

N2Rの面々も心配そうに見ていた。

「……みんな。その、ごめん……」

「本当だぜ……」

「こらっ。ノーヴェ！」

「この借りは大きいっスよー？」

ノーヴェとウェンディの言葉にシオンは、ん。とだけ返し頷く。  
そして、みんなに向き直った。

「……本当に、みんな。ごめん。……ありがとう」

「……あー、その。解ったらいんだよ。解ったら」

「そっスねー」

思ったより素直なシオンの反応に、逆に二人はどぎまぎする。  
一同に少しだけ笑みが戻る。

緊張した場が和らいだ。

シオンはそのままキョロキョロと辺りを見渡す。  
礼を言わなければいけない人がもう一組いたからだ。

だが。

「……無尽刀と、あの太剣使いならいないわよ」

ティアナの声に振り向く。

そんなシオンにティアナはただ頷いた。

「……帰った、のか？」

「うん。またな、てだけ伝えてくれ、て」

スバルが言葉を引き継ぐ。

その伝言にシオンは苦笑した。

格好をつけるのも程があるだろう、と。

「イクスは……？」

【ここだ】

声は間近で響いた。

シオンの顔の真横。

そこにイクスは居た。

どうやら無事な相棒にシオンはホッと息をつく。

そして、向き直った。

最後の一人に。

「……タカ兄い」

「……………」

シオンの視線の先。

皆より離れて5 m先にタカトは居た。

シオンをただ見て。

不意に振り返り、背を向けると歩き始めた。

「待ってよ。タカ兄い」

「……………」

シオンより響く声。

それにタカトは立ち止まった。

しかし、振り返らない、

背はただ向けたままだ。

シオンは毛布を身体に巻くとそのまま立ち上がった。

「聞きたい事があるんだ」

タカトの背中を真っ直ぐに見据える。

もう、迷わないとばかりに。

そして口を開く。

「アンタは結局。何がしたいんだ？……創誕、て何さ？」

シオンはタカトを見据えたまま問う。

どうしてもそれだけは聞いて起きたかった。

聞かねばならなかった。

ココロの世界で聞いたタカトの言葉が気になっていたから。

タカトのフツと笑う声が響いた。

「創誕。世界最初の魔法であり、世界最後の魔法だ。創造魔法と呼ばれる魔法でもある。……お前に解りやすく言っただろう。事象創造魔法、そう言えば解るだろう？」

「……」

その言葉にシオンは沈黙する。  
事象創造魔法。

いわば世界を作り直す魔法だ。  
それをタカトが求める理由は・・・。

「……タカ兄いは、二年前に、世界、そのものを戻すつもりなのか  
……?」  
『ーっ!』

シオンより放たれた言葉に一同は絶句した。  
特に、スバルとティアナはそれが顕著だ。

二人はシオンのココロの中でタカトの言葉をシオンと一緒に見ていたから。

だからシオンの言葉を理解した。  
タカトはこう言ったのだから。

とり戻す、と。

「……答える義務は無い」  
「やめろよ」

シオンは即座に告げる。

答える義務は無い、と言う言葉には無い。  
創誕そのものをそれは指していた。

沈黙するタカトにシオンは構わない。  
続ける。

「やめろよ。そんな事。……世界を戻すなんて、個人の感情で今の  
世界を否定なんてするなよ!」

「ならどうする？」

叫ぶシオンに、タカトの疑問が飛ぶ。

それにシオンは言葉に詰まり、そしてタカトは構わない。

「それで、お前の中に在るアンラ・マンユをどうするんだ？……ルシアを、どう治すつもりだ？」

「それ、は……」

「シオン」

立て続けに出されるタカトの言葉に、シオンはぐっと詰まる。そんなシオンに、タカトは視線のみをシオンに向けた。

「もう、言葉を尽くすという段階はとうに過ぎている。俺は止まらない。創誕を、成す、し。成さないという選択肢は、無い、」

「タカ兄い……」

「止めたければ力ずくで止めるんだな」

それだけをタカトは告げると、シオンから視線を外し、再び歩き始めた。

もう、話す事は無い、と。

その背中をシオンはただ見る。

視線を逸らさずに。

ただ真っ直ぐに。

そして呟くように口を開いた。

「……止めてみせるさ。絶対に、アンタに、やり直し、なんてさせない」

そう、タカトの背を見ながら宣言する。



タカトは何も答えずに、森の中へと消えた。

互いを想う異母兄弟は、互いを想う故に再び離別した。

分かり合える気持ちを抱えたままに。

(第三十三話に続く)



.....。

シ

「あ、あれ？アリサ道場、だよな？あれ？なんで誰もいないんだ…  
…？」

ヒュルルルル……………

シ

「ん？何だ、この音？」

―煌！―

―アホな事は言わない事ね―

―爆！―



「あら？LVで人気爆発中の最強執事の朱皇千春ことハルト、身体は大人（一部分）を地で行く白姫クレアことクレアじゃない。とりあえずは初めまして♪ようこそアリサ道場に♪」

す

「随分説明的な台詞だね……。初めまして♪ハル君と、クレアちゃんでいいかな？」

ク

「一部、気になる所はあったですけど。……はいですの♪宜しくですの♪」

ハ

「宜しく願います」

ア

「にしてもまた、何で貴方達が？」

ク

「今回のゲストキャラとして喚ばれたんですの」

す

「え！？聞いてないよ？」

ハ

「何でもそちらの作者さまが、『ネタが思いついたぜー！』と叫び。それをウチの作者さまが『マジっすか！？』と電波を受信したそうです♪」

一同

「「「ええっ！？」」」

ハ

「まあ、勿論嘘ですが」

ア

「こ、こんにゃろう……」

す

「蓮次君に負けず劣らずのキャラだね……」

ク

「ハル〜。……あれ？カナンも一緒に来た筈なのにいないのです？」

ハ

「カナン君ならあそこにいますよ？」

一同

「「「え？」」」

カ

「シオンっ！いや、先輩！こんな所で寝るな！そして俺に乙女心を教えてくれ！」

シ

「……俺、たった今。川から戻って来たばかりなんだけど……？」

カ

「そんなもの、根性で何とかなるっ！」

シ

「なるかっ！？」

ア

「……何やってんだか……。おお〜いタカト〜」

ハ

「ム……？」

タ

「御呼びで？我が主？」

ク

「い、いつの間に現れたんですの！？この人！」

す

「タカト君は呼べば何処でも二秒以内に駆け付けてくれるから♪」

ハ

「……やりますね。貴方……」

タ

「……ほう、君達は……」

ク

「あ、自己紹介がまだでしたの。LVの白姫クレアといいますの♪」

ハ

「執事の朱皇千春、と申します」

タ

「伊織タカトだ。宜しく。……しかし、朱皇千春、と言ったか……」

ハ

「ハル、で結構ですよ」

タ

「ならばそのように。……その身に溢れる執事オーラ。……ただ者では無いな……」

ハ

「貴方こそ。相当な執事レヴェルとお見受け致します」

タ

「ふ……」

ハ

「フ……」

ア

「……執事オーラ、て何？」

す

「（え？ 私に聞かれても……）」

ク

「（私も解らないのです……）」

タ

「さて、本題からずれてしまいましたな。して、我が主。如何様で？」

ア

「ああ。あそこのフラーズ二人を頼んでもいいかしら？」

シ

「……いやな？ぶっちゃけ、俺に聞かれてもな……。俺、アウアウ言っただけだぜ？」

カ

「大丈夫だ。二人とキス出来て蘇れたんだ。……そこら辺の事を詳しく教えてくれたら……」

シ

「自棄酒した後の大暴走が参考になるか……？」

カ

「……相談相手、間違えたかも……」

タ

「天破光覇弾」

―煌―

シ、カ

「「んぎゃああああああああああああああああっ！」」

ヒュルルル。ドスンっ

タ

「……落着点よし。我が主。これで宜しいでしょうか？」

ア

「バッチリよ♪……じゃあ次はお茶の用意を宜しくね♪」

タ

「御意に」

ハ 「なら私がお茶を煎れましょう」

タ 「ならば俺はお茶受けを。……そうだ。これを渡しておく」

ハ 「……ほう。これは……」

タ 「FTGFOP。……最高級のダージリンだ。なんなら葉を土産に持って帰るか？」

ハ 「是非に。ありがたい事です」

ア 「……なんか、意気投合してるわね。あの二人」

す 「執事同士、気が合うのかも♪」

ク 「ハルが初対面であれだけ気が合う人は初めてですの……」

ア 「……さて、そのの二人？早く起きなさい？」

シ、カ 「「……はっ！」」

す 「あ、漸く起きたね♪」

ク 「カナン並の耐久力……。噂以上ですの……」

シ 「いやいやいやっ！色々ツツコミ処がありまくりですが……。

タカ兄い！いきなり砲撃はやめてよ！」

タ

「我が主の命だ。文句を言うな」

カ

「文句もかよ!?」

ハ

「ここではお二方は人権は無いと聞きましたが?」

シ、カ

「「黙れコンニャクーーーー!」」

タ

「天破疾風」

カ

「だぷっ!」

ハ

「しっ……!」

シ

「ぶごはっ!」

ア

「おお!見事な執事コンボね……」

す

「互いの目を見ることさえ無く互いの相手をスイッチ……。あの二人、本当に初対面なのかな……?」

ク

「カナンとシオンが綺麗に舞いましたの」

シ

「くっ……!この二人……!」

カ

「くっそー。嫌なコンビだな……!」

ア

「ほらほら、さっさと起きる!今回のおさらい。いくわよ?」

シ

「ぶーぶー!」



タ

「……シオン。、爽やか、コースと、、しっとり、コース。……ど  
っちがいい？」

シ

「……さて。今回のおさらいですね！？張り切っていきましょう！」

カ

「お、おい。何だ、今のさわー！」

シ

「馬鹿ー！」

カ

「たわっ！……何で殴る！？」

シ

「……いいか？その単語を金輪際出すな。……一生モノのトラウマ  
背負いたくなけりゃあな……？」

カ

「……おいおい。そんなヤバイものなのか……？」

シ

「ヤバイ。ヤバイヤバイヤバイ……」

カ

「……おい？シオン……？」

シ

「い、いやあー！？そこは、そこは爽やかになんてなんないから  
ー！ー！？」

カ

「な、なんだっ！？そこ、て何処だ！？」

ハ

「どうやら触れてはならないトラウマに触れてしまったようですね

……」

タ

「カカカカカ……」

カ  
「怖っ!？」

ハ  
「大丈夫ですよ。苦痛はいつか終わりが来ます。さあ、カナン君。爽やかコースの実体験を……」

カ  
「死んでもゴメン被るわっ!」

ア  
「コラコラ。話しが脱線したでしょうが……」

す  
「でも、爽やかコース、て気になるね……」

ク  
「しっとりコースもですの……」

シ  
「う、うう……その単語はもう勘弁を……。えー。では、今回のおさらい。人は鬱を乗り越えてこそ、一人前です♪」

ア  
「……身も蓋も無いわね……」

す  
「今回のお話を一言で説明しちゃったよ……?」

シ  
「なら次を。カナン、宜しく!」

カ  
「て、俺かよ!?!。えーと。……反物質を作る時は危ないので大人と一緒に作りましょう?」

.....。

カ  
「あれ……?」

ア

「……次のボ○ンジャンプ攻撃先。決まったわね……」

カ

「えー」と

す

「道場なら持つかな？」

カ

「あの一ー」

ク

「カナンは誰も心配しないんですの？」

カ

「いや、ちょっと……？」

ハ

「あの頑丈さですからね……」

カ

「てか、何の話し……」

シ

「サイボーグ、てもっぱらの噂だしな……」

カ

「て、お前に言われたくねえ一ーよ！？」

タ

「……お茶受けのチェリーパイを持って来ました」

カ

「か、完全無視。……これが1番キツイ……」

ハ

「お茶も煎れ終わりました。お嬢様達。どうぞ♪」

シ

「……よく。あの騒ぎの中煎れられるよな……」

ア

「じゃあ、戴きましようか？」

す

「うん♪」

ク

「ですよ♪」

ア、す、ク

「「戴きまーす♪（ですよ♪）」」

カ

「……俺、放置かよ……」

シ

「……まあ、何だ。今世紀、稀に見るすべりっぷりだったからな……。ヴィヴィオかメイデンに匹敵すんぞ？」

カ

「ぐっさー！ー！。い、今のが1番効いたぜ……」

ハ

「……フムフム……」

カ

「……つかぬ事を聞くけど。……そのメモ帳。なんだよ……？」

ハ

「いえ。後で有効に使えそうな台詞だったので」

カ

「そのメモ帳渡せっ！」

ハ

「御免こうむります♪」

タ

「天破紅蓮」

ー爆！ー

カ

「ぎゃああああああっす！」

ハ

「いやあ、助かりました。ありがとうございます」

タ

「礼には及ばん。……お茶中に、埃を立てる輩を成敗したに過ぎん  
しな」

カ

「……そ、それだけで……？」

タ

「……忘れてるかもしれんが、俺もK D Gだ」

カ

「そ、そういやそうだった……。ガクっ」

シ

「カナーーーーン！」

ア

「……あっちはほっというて。チェリーパイも、紅茶も美味しいわね  
♪」

す

「二人共流石だね♪」

ク

「これ凄い美味しいですよー♪」

タ

「出来ればヴィヴィオお嬢様（未だ罰ゲーム継続中）には内密に頼  
む」

ハ

「ああ、甘いものには目が無いんでしたね？」

タ

「ああ。……それから土産のFTG FOPの葉だ」

ハ

「どうも♪では、ありがたく♪」

ア

「さて、キリが良い所でこの辺で♪まずは謝辞を。今回も更新が延び延びになって申し訳ありませんでした。これからも見捨てず宜しくお願いします♪そして、シオン。告知があるんでしょ？」

シ

「はい♪。えー。

人気キャラ投票ですが、見事に横一直線のままなので投票形式を少し変えようと思います。シルフレ方式のように。

一位…3ポイント

二位…2ポイント

三位…1ポイント

の形式にします♪

マイナスポイントは無いので安心を♪では、投票お待ちしております♪」

タ

「では、この辺で。ヨシユアさん。今回の突然のキャラ召喚ありがとうございました。これかもお互い頑張りましょう」

シ

「さて、では、今日はこの辺で♪ではでは♪」

一同

『また次回〜♪（ですの♪）』

タ

「刮目、あれ」

ハ

「サービス♪サービスですよ♪」

シ

「……ところでカナン？生きてる？」

カ

「……ハッ！最後に間に合ー」

(終幕)

第三十二話「向き合うココロ」(後編)(後書き)

「互いを想う異母兄弟は互いを想うが故に離別した」

「そしてアースラは本局に戻る」

「ついにイ

クスから語られるシオンの秘密」

「それにはやて達は……」

「本局に戻った事もあり、なのはは前の休日の  
埋め合わせの為にユーノ宅に戻る」

「だが、そこに

はー」 「次回。第三十三話

『再邂』」

「ついに

彼は知る。友の事を」



第三十三話「再選」(前編)(前書き)

「彼の言葉がずっと引っ掛かってた」 「真っ正面から『

嫌い』と私を否定した彼が」 「その言葉を紡いだ彼の瞳が、ずっ

と。ずっと気になってて」 「その瞳はどこか哀しくて、

辛そうで」 「だから今度会ったなら必ず聞こうと思った」

「ちゃんと話そうと思ったんだ」 「彼と向き合う

為に」 「魔法少女リリカルなのはS t S, E X。始まります」

### 第三十三話「再選」(前編)

聖域での戦い。

シオンが感染者化した戦いから一日経つ。

アースラは時空管理局本局に戻っていた。

そしてシオンはある場所に居た。

本局の一室。

医療部の検査室だ。

まるでカプセルを思わせる寝台に上半身裸で横たわり目を閉じている。

そのシオンがいる部屋を二階の窓から見ている女性達が居た。

八神はやて。フェイト・T・ハラオウン。高町なのは。そして、技

術部のマリーことマリエル・アテンザである。

マリーがコンソールを操作し、ウィンドウと睨めっこする。

そして、ウィンドウを閉じ、眼鏡を外してフウと息をついた。

「マリーさん。お疲れ様です」

「あーうん。なのはちゃんありがとうー」

なのはが差し出す珈琲を受け取りちびりちびりと飲む。

半分程飲むとカップを机の上に置いた。

「それでマリーさん。シオンの検査結果は……」

機を見計らってフェイトが尋ねる。

それにマリーは少しだけうんーと、唸った。

「……検査結果、芳しく無かったんですか？」

「あ、いや。そうじゃないの。検査結果は問題なし」

「そうなんですか？」

「うん。ただ……」

マリーが言い淀む。

眼鏡を再びかけた。

「この子。本当に人間？」

「……え？に、人間かって……？」

マリーから告げられた疑問に戸惑うのは。

フェイトもはやても同様に目を白黒させている。

三人の反応に、マリーは頷きコンソールを操作。ウィンドウを展開する。

そこにはシオンの身体データがこと細かに記されていた。

「……彼を精密検査する為に身体データを細かく取って見たんだけど。……もう、メチャクチャなの」

「……それ、てシオン君が感染者だったのと……」

「ううん。それとはまた別」

なのはの言葉にマリーは首を振る。

さらにコンソールを叩き、ウィンドウにデータが記された。

「呼吸数、心拍数。……すべてのバイタルがメチャクチャなの。低い、異様に。……結論から先に言っちゃうと……。こんな数値を出すくせに動けたり……。まして戦闘なんて出来る人は、人類とは言えないの。……少なくとも私が学んだ医学じゃあ」

「は、はあ……？」

一気にまくし立てられる。

しかし、なのはとしてもマリーが言わんとしている事が今一分から  
ない。

だが、彼女は知らない。自分の家族である。父、高町士郎や、兄、  
高町恭也がシオンと同じような身体データをしている事を。  
マリーはそのまま続ける。

「……この子。いつもどんな事やってるの？」

「と、言う……？」

「特殊な訓練とか、何かおかしな武術とか」

「あ……。そう言えばシオン君、とんでもない訓練やつとったな……」

「修練？はやてちゃん。よかったら詳しく教えて？」

はやては頷くと、いつか見たシオンの異様過ぎる修練を説明する。  
今の今までシオンの修練を知らなかったのはやフェイトも説明を  
聞いて顔を引き攣らせた。

‘あの’修練である。聞いた方は絶句して然りとも言える。

しかし、マリーは至ってフムフムと頷くだけである。

はやての説明を聞き終えると、マリーは少しだけ考え込み。再びウ  
インドウに目を向けた。

「うーん。だとしたらやっぱり……」

「あの、マリーさん？」

「あ、ごめん、ごめん。つまりね？呼吸法なんだと思う」

「「……？」」

マリーの指摘になのは達は首を傾げる。

マリーはチャツと眼鏡の位置を直した。

だが、それにより部屋の光りを眼鏡が反射して、やけにマッドぽく  
見えてしまったが、あえて三人はそれを指摘する事をやめた。

「人間の体なんて、所詮は蛋白質分子機械の集合体なの。新陳代謝と言う一種の化学反応と、ホルモンと言う名前のドラッグで動いてる。……だから呼吸数や心拍数がメチャクチャでもエネルギー総量が同じなら死ぬことなんて無い……。極論だけどね」

「「……は、はぁ……？」」「」

マリーが再びまくし立てるが、先程と同じくなのは達は？マークを頭上に浮かべるだけだ。  
ぶっちゃけ分からない。

だがマリーは構わずウィンドウに、そしてシオンに視線を向け、フフと笑った。

「興味深い……。ある意味、用い方が近代的だし……。詳しく調べれば……」

「……あの……」

なのはが声をかけるが既に遠い世界にいつてしまったマリーには声が届かない。

三人は顔を見合わせると盛大に溜息を吐いた。

「……とりあえずシオン君は心配いらん、て事やな……」

「うん。……多分」

「にゃははは……」

笑い声にまで力が無い。

再び深い溜息を吐くと、そのままマリーの脇を抜け、コンソールを操作する。

「シオン君。お疲れ様。もういいよ」

《……やつと、スカ……》

パチリと下でシオンが目を見開く。  
そのまま寝台を下りた。

「うん。お疲れ様。……また後で呼ぶ事になるけど……」  
《大丈夫っス。了解です》

頷くとテキパキと上着を着ていく。

ちなみにシオンは囑託魔導士である為、基本管理局の制服を持たない。

だが私服で艦内や本局をうろちよろとさせていられないので、武装隊の上着をはやてが貸与していた。

黒の武装隊上着である。

それを着終わると、そのまま部屋を出ていった。

「……さて、この後はカリムン所で、やな」

「イクスから話があるんだよね？」

「うん。……シオン君について色々聞かなきゃいけない、ね」

三人共互いの顔を見遣り頷く。

ちなみにイクスも現在検査の真っ最中であつたりもする。

何せ、イレギュラーなユニゾンであつたのだ。

念には念を押すのに越した事は無い。

昨日、各員からの報告を受けた後で、いきなりイクスから話したい事があると提案されたのである。

なのは達としても聞きたい事。聞かねばならない事が山積みだったので、渡りに舟であつた。

「うん。それじゃあ、準備しよか〜」

「そうだね」

「うん」

はやての言葉に頷くなのはとフェイト。

そして、ちらりと三人はマリーに目を向ける。

だが、マリーは未だにブツブツと何かを呟いていた。

それに三人は声をかける事の無意味さを悟り、そのまま部屋から出る。

一応礼儀として扉から出る直前に頭は下げた。

しかし・・・

「……むしろ身体的能力のピークラインは常人より……」

それをマリーが視認出来たかどうかは謎であった。



検査が終わり、シオンは本局内を歩く。

目指すのは本局のピロティ（休憩所）である。

少し検査に時間がかかった事もあり、喉が渴いていたのだ。てくてくと歩きつつ、シオンは思いを馳せる。

つい、昨日の事に。

（……色々あったよな）

おっちゃんことアルセイオとの邂逅。

そして戦い。

聖域に落ちて、風邪でぶっ倒れて。

真実を知って、感染者化して。

知った事、知らなきゃいけなかった事。  
本当に色々あった。  
そして。

(タカ兄い……)

異母兄の事を。

その目的を、そして何故あんな事をしたのか、知った。  
ただ一人で、世界に喧嘩を売った異母兄の事を。

(……止める、か)

出来るか？

それを、それだけをシオンは思う。

実力が離れているとかそんな事では無い。

シオン自身。タカトに負い目を感じているのだ。

……止めていいのか、迷っているのだ。

自分達を取り戻す。

そんな、優しいエゴの為に全てを無くして、全てを手放した、異母兄の事を。

「シオン……」

「ん？」

呼ばれる声にシオンは顔をあげる。

考え事をしている間にピロティに着いていたらしい。

そして先客に声をかけられたのだ。

シオンを呼んだのはスバルであった。ティアナも横に居て、エリオやキャロ。そして官制官兼ヘリパイロットのアルトもそこに居た。



「シオン。検査終わったの？」

「まあな」

「そっか。結果は？」

「問題ナシ。……ま、あったらあったで問題だけどな」

「そりゃあ、ね」

シオンの返答にティアナが苦笑する。  
そのままシオンは自販機の前に移動。  
ドリンクを選ぶ。

「……おしるこドリンク、おしるこドリンク、と……」

「……あんだ。それ、甘すぎない？」

「……そっか？」

「そうよ、スバル。どう思う？」

「う……ん。……私は気分次第、かな？」

「あ、私。大丈夫です」

「あ……。流石に僕はちよつと……」

「アルトさんは？」

「私もスバルと同じかな……？」

ボタンを押し、カップが下に落ちる。

そのままおしるこドリンクがカップに入る間にシオンはティアナに  
振り返る。

「ほうれ、見ろ。結構好評じゃんか」

「……なんつか、納得いかない」

無然とするティアナにはっはっはとシオンは笑う。

おしるこドリンクが入り終わったカップを取り出し、皆が座るテーブルについた。

「……はあゝ。甘くて上手い……」

「でも、意外だね？ シオン、甘いのが結構大丈夫なんだ？」

ほのぼのとおしるこドリンクを飲むシオンにスバルが声をかける。  
それにシオンは、あゝと苦笑する。

「……なんつうかな。ぶっちゃけると、タカ兄の影響だよ」

「あ、ごめん……」

「謝る事じゃねえよ」

謝るスバルにシオンは苦笑を強める。  
そのまま続ける。

「……あの人。ああ見えて家事好きでな？ 特に料理やら菓子作りが  
大好きなんだよ」

「「「「……あ？」「」「」」」

シオンの言葉に一同目を見開く。

何と言うか、あまりにも意外過ぎる答えであるからだ。  
皆の反応にシオンは苦笑しながら続ける。

「もう食事時とか、3時のおやつ時とかタカ兄いのオン・ステージ  
だったぞ？ ……よく、みもりやカスミやらがタカ兄い謹製のおやつ  
食べてはショックに膝を着いてたっけな……」

懐かしそうにシオンは昔に思いを馳せる。

母。アサギでさえも屈服させ、数々の料理やら菓子作り対決を制し  
たタカトを。

特にグノーシス時代の同僚。黒鋼刃との菓子対決は歓声と悲鳴を上

げさせた程だ。

・・・主に、歓声はそのお味に。後者は翌日の体重計に乗ったグノ―シス女性陣の悲鳴と言われる。

いや、実際シオンはルシアとアサギ。お隣りさんのみもりの悲鳴を聞いているのだが。

「「じーーーーーーーーー」」

「ん？……どしたよ？お前等……」

ふと気付くとスバルとティアナがじーーーーーーーーとシオンを見ていた。そのまま二人は全く同じタイミングで口を開いた。

「「……その二人。誰？」」

「へ？あ、ああ。みもりとカスミな。……幼なじみ、だけど？」

やたらとプレッシャーを感じてシオンはのけ反りながら答える。  
二人は『幼なじみ、ねえ』だとか、『シオンだしな〜』とか、呟く。

いきなり非っ常に居心地が悪くなってしまいシオンの頬に汗が一筋流れた。

「……何なんだ」

「「別に」」

二人はプイと顔を背ける。そんな二人に、こんな所まで息が合わなくてもいいだろうよ。とシオンは嘆息する。

「ま、まあ。そういう理由でだな。甘いのも、結構好きなんだよ。俺」  
「へへへ。そうなんだ」

「そんなに美味しいなら一度食べてみたいね。エリオ君」

「うん。そうだね」

「……そうだな」

一度、食べてみたい。

キャラの言葉にシオンは苦笑する。

・・・苦笑しながら必死に隠した。

もう一度、食べたい。

そう思ってしまったから。

迷いが深くなる。

それを自覚した。

「……シオン」

「?。どした?」

先程から顔を背けていたスバルから声があがる。

それにシオンは視線を向けて。

同時に、驚いた。

スバルはシオンの顔を心配そうに見ていた。

気付けばティアナも同様の顔を自分に向けている。

「……どうしたんだ? 二人共……」

「うん。……えっと。その、シオン……」

シオンの言葉を受けて、スバルがあたふたとする。

どうにも上手く言葉に出来ないらしい。

そんなスバルにティアナはハアッと嘆息。

そのままシオンをきろりと睨んだ。

「……あんた。また何抱えこんでんのよ」

「……何の事だ?」

ティアナの言葉にギクリとなる。

しかし、必死に抑え込んだ。

何の事か分からないと言いごまかす。  
だが。

「シオン。……あの時、みたいな顔になってるよ……?」  
「ーっ」

スバルの言葉にシオンは目を見開き、絶句した。

ティアナは相変わらぬ視線のままだ。

エリオやキャロ、アルトは何の事か分からない事もあり? 顔のまま  
だが。

シオンはそんな二人に敵わないと思う。

苦笑した。

「……俺、そんなに顔に出やすいか?」

「さあ、ね」

ティアナが曖昧に答える。スバルは珍しく苦笑していた。

シオンもやれやれと息を一つ吐いた。

「……ちよつと、迷ってる」

「何を?」

「タカ兄いを、止めていいもんか、どうか」

その言葉に一同、目を見開く。

シオンは椅子にもたれ掛かり、天井を見上げた。

そんなシオンにティアナが口を開いた。

「……あの時は止める、て言ってたじゃない」

「ああ。……今でもその気持ちは変わらねえよ。タカ兄いがやろうとしてんのは最悪だ。……今の世界を否定して、消して、二年前に戻そう、てしてんだからな。止めなきゃならない。……理屈じゃ、分かってんだよ」

だけど、と続ける。

苦笑が強まった。

「……でも、それを。タカ兄いがあなった原因の俺が止める権利なんてあるのかな、とも思うんだよ」

「……それは……」

「違うよ。シオン」

突如としてスバルから声が上がった。

真っ直ぐにシオンに視線向け、射抜く。

「それ、違うと思う」

「……何でた？」

スバルの答えにシオンが問い直す。苦笑は消えていた。スバルはそのまま口を開いた。

「シオン。それは、ただ逃げてるだけだよ」

「スバルさん!？」

「……………」

流石にエリオが声をあげる。

しかしスバルは構わない。

シオンもまた沈黙を保ったままだ。

「止める権利だとか、そんなの関係ないよ。……大事なものは止めた  
いと思うかかどうかだけだと思う。……シオンは、どうしたいの、  
？」

「……………」

シオンはその言葉に黙り込む。

そう。

その通りだ。

どんなに言葉を重ねても。

どんなに理由を。

言い訳を重ねても。

結局の所はそれが全て。

この迷いすらも。

ただの甘えに過ぎない。

シオンはスバルを見据え、口を開く――。

《呼び出しです。セイヴァー、神庭シオン囑託魔導士。スターズ3、  
スバル・ナカジマー等陸士。スターズ4、ティアナ・ランスター執  
務官補佐。アースラ艦長オフィスに集合して下さい。繰り返します  
――》

突如として響く局内放送に声が出せなかった。

シオンは苦笑し、立ち上がる。

「呼び出し、だ。……行こうぜ」

「あ、と。……うん」

「……そうね」

二人は若干迷いいつも頷く。

シオンは苦笑して、二人の頭に手を乗せた。

「……ありがとよ。……ちょっと、気分がスツとした」

そしてと呟く。

そのままシオンは笑った。

「……俺はタカ兄いを止めたい。これが全てで、……それでいいんだよな」

「シオン……」

「ほれ、行こうぜ。……ああ。エリオ、キャロ、クラエッタ。悪いな。なんか場、暗くして」

「あ、いえ……」

「そんな。気にしないで下さい」

「そうだよ。それにいろいろ聞けたし」

「そっか。……ありがとう」

微笑み。礼を言いながらシオンは二人から手を放す。  
そのまま歩き出した。

「？。……スバル。ティアナ。置いてくぞ？」

「あ、と！」

「て、こら。一人で行かないで待ちなさい！」

「だから待ってるだろうがよ……」

シオンの言葉に我に帰り、スバルとティアナもシオンの元に駆けつけた。  
そのまま慌ただしく三人はアースラに向かった。





「へ~~~~~」

青空の元。

シオンはその建物を見て声をあげた。

ミッドチルダ極北地区ベルカ自治領。

そこにそれはあった。

聖王教会。

そう、呼ばれる建物が。

「でっか」

「……そりゃあね」

シオンのお上りさんよろしくな反応に一緒に聖王教会に来た一同。

なのは、フェイト、はやて、ティアナ、スバルは苦笑する。

聖王教会は歴史もあり、巨大な宗教だ。

その総本山である。

大きくない訳が無かった。

「へ~~~~~」

「……あんたね。せっかく人が説明してやってんのに……」

「あはは……」

ティアナがかい摘まんて聖王教会の事やらを説明したのだが。

シオンの反応は非常に適当だった。

流石にスバルも乾いた笑いを浮かべる。

「ほら〜。その三人。中入るよ〜?」

「あ、すみません!……ほら、行くわよ!」

「あいよ」

「うん！」

はやての呼び声に三人は走り、はやて達に合流する。  
いつの間にやら、はやてはローブのようなものを着ていた。

「……あれ、はやて先生。コスプ、おわっ！」

「……曲がりなりにも聖王教の正装をコスプレ扱いせんように」

口は災いの元を地で行きまくるシオンにはやてから制裁の拳が飛ぶ。  
シオンはそれを間一髪で避けた。

そんなシオンをはやてがじと目で睨む。

その視線をシオンは目を明後日の方向を見る事で避らす。あははゝ  
ゝと。空笑いを浮かべる。

笑いでごまかしに入ったのだ。

そんなシオンの背後からぼそりと声が飛んだ。

「あんた。……だんだんスバルに似て来たわよ？」

瞬間。

シオンはピシリと硬直した。

「ちょっと待て……そりゃどう言う意味だ!？」

「別に」

「そうだよ、ティア! 私、こんな風な変なごまかし、しないよ!？」

「……ごまかす事は否定しないのね」

二人の口撃をティアナはあっさりと捌く。

この二人の口撃を捌けぬようでは執務官。……今は補佐だが。は  
務まらないのだ。

「ほくくら。三人共、静かにしてね？これ以上喧嘩するなら、お話し、しよ？」

その言葉はありとあらゆるものを駆逐する。三人は一斉に声の主。なのはに向き直り、背筋を正した。

「「「すいませんでしたっ！！」」」

「うん。分かってくれたら良いんだよ？」

満面の笑顔を浮かべるなのは逆にシオン達は身震いする。背筋を冷たい、ナニカが通り抜けたからだ。

「えくくと。そろそろいいでしょうか？」

「「「「「あ」」」」」

そんな騒々しい一同に声がかかる。

教会の扉が開いており。

その真ん前にヒクリと顔を引き攣らせる。しすたーさん。もといシヤツハ・ヌエラがそこに居た。



「どうぞ。こちらです」

シヤツハに促されるままに一同は歩く。

たまにシオンがきよろきよろと周りをももの珍しそうに見るが、それは皆。

とりあえずはスルーする事にした。

そのまま歩き教会の奥の一室に着く。

シャツハがそのままドアの取っ手を拵り、ドアを開いた。  
促されるままに、室内に入る。

そこには。

「いらっしやい。お久しぶりね。はやて、なのはさん、フェイトさん……？。どうしたの？」

聖王教会騎士カリム・グラシアがにっこりと笑い一同を出迎え。  
部屋に入るなり啞然とする一同に、疑問の声をあげた。

「いや、そのやな。……そこに居るのは本物？」

「え？ ええ……？」

「いきなり酷い言い草だな。とりあえず人は指を差さない方がいい」

苦笑が響く。

その苦笑の主は黒髪であり、身長は高い。

そして妻からも、似合わない、と評された管理局制服を着ていた。  
そう、そこに居たのは。

「久しぶりだな。はやて。フェイト。なのは」

重傷を負って、未だ入院中の意識が戻って無い、筈、のクロノ・ハラウンが居た。

「あ、うん。久しぶり。……やなくて！」

「おお、ノリツツコミかね？ 流石本場は違う」

「いや、そう言った問題や無くて……、て。ええっ!？」

いきなり後方より聞こえてきた声に再度ツツコミを入れそうになりながらさらに驚く。

そこにはシオンのもう一人の異母兄。こちらも入院している筈の叶トウヤが居た。

「と、トウヤ兄い!？」

「なんだね。騒々しい。少しは静かにしたまえよ」

叫ぶシオンに肩を竦める。

そのまま呆然とする一同の脇を抜け、カリムやクロノが座るテーブルに向かい、椅子に腰掛けた。

「あ、あかん。訳解らんくなってきた……。カリム。どう言うことなん?」

「……ハラオウン提督?もしかしてはやて達には……」

「……そう言えば。伝えていなかったかも知れませんか」

珍しいミスにクロノ自身苦笑する。

基本真面目なクロノがこういったミスをするのは非常に珍しい。

「つい、三日前か。意識が戻ってな」

「三日前、と言うと……」

「ああ。たしかアースラの修理ではやて達が忙しいと聞いていたから僕の事は後で報告しようとしたんだが……」

そのまま忘れていたらしい。

クロノの答えにはやてはあとため息を吐いた。

「まったく。……うん?」

「フェイトちゃん?」

はやて、なのはが声をあげる。  
フェイトがつかつかとクロノに歩み寄っていたからだ。  
フェイトは二人の声に構わない。  
そのままクロノの真っ正面に立つ。  
同時に右手をブンと振りかぶった。

ーパンっー

乾いた音が響く。  
フェイトが思いつきクロノの頬を張ったのだ。  
半ば予想していたのだろう。  
クロノは張られた頬に苦笑する。  
そんなクロノにフェイトは思いつき怒鳴る。

「バカ！」

「……否定は出来ないな……」

クロノは自嘲気味に笑う。  
そんなクロノにフェイトはさらに怒る。

「みんなを心配させて……！リンディ母さんや、エイミィがどれだけ心配してたか……！」

「……すまん」

「ごめんですんだら管理局は要らないの！大体クロノは……！」

ガミガミと説教を始めるフェイトにクロノはなのは、はやてに助けを求める視線を向ける、が。  
二人の視線を見ると同時に頬がヒクリと引き攣った。  
二人は笑っていた。

この上なくイイ笑顔で笑っていた。  
止める積もりが無いのは勿論の事、その笑いは如実にある事を語っていたからだ。

『次、私達の番だから』と。

それを皆より後ろで見ていたシオン、スバル、ティアナは苦笑する。  
ティアナはそのままシオンの肩を叩く。

「どう？身に摘まれる思いでしょ？」

「……そうな」

「昨日も凄かったもんね〜」

思い出すのは昨日。

シオン達が帰還し、状況を説明した後だ。

当然シオンに待っていたのは、なのは達先生、Sによる、お話し、であったのだ。

シオンの悲鳴が本局に戻るアースラに三時間程響き渡ったのは言うまでも無い。

「聞いた話しによるとだが。その程度で済んだのなら寧ろ幸運だったのでは無いのかね？」

「いや、まあ……」

トウヤの言葉に苦笑する。

体調が回復していないにも関わらずの出勤。

それに伴う様々な事をこれでもかと説教されたのだ。  
三時間の説教ならば軽い方であろう。

なのは達基準、ではあるが。

「まあ、とりあえず……」

「話しが始まるまでには暫くかかる、だろうね」

未だ終わる気配を見せないフェイトの説教。そして後に控えるのは達を見て、シオン達は少しだけ溜息を吐いた。



カリムの執務室。

そこでフェイト達三人による説教は一時間程続いた。

その間にカリムの義弟であり管理局査察官であるヴェロッサ・アコースと、共に来たシオンとは初対面のはやての守護獣。ザフィーラが入って来ていた。

それを尻目にクロノはガツクリとうなだれている。

何故か？

答えは単純。説教がいきなり3倍になったからだ。

原因は順番待ちで説教をしていたなのは達に。シオンが。

「時間も無いし、纏めてすればいいんじゃない……」

と、呟いてしまったのが聞こえたらしく。

いきなり三人は顔を見合わせて頷くと三人一緒になってクロノに説教を始めたのだ。

どうも3倍どころか、3乗くらいになったらしく。クロノはちよつとやつれたようにすら見えた。

《神庭シオン……恨むぞ……》

なんか念話が聞こえたような気もしたが、シオンはあえて聞こえないフリをする。

誰だって巻き添えは嫌だからだ。

「ふむ。高町君。八神君。テストロッサ君。……ハラオウン提督も



この通り反省している。……そろそろこの辺で勘弁してあげてくれないかね？」

機を見計らったのか、トウヤが三人を制止にかかる。それにはやてがスツとトウヤに視線を向ける。

「……私としては、トウヤさんにも話を聞きたいんやけどなあ……」

「私は今日の朝方に魔力が戻ったのでね。ケガを、復元、して。すぐこちらに来たのだよ。だから連絡を取る暇は無かったね」

しれっと答える。

確かにシオンの検査やらなんやらで朝はバタバタしていたのでこう言われるとはやて達も何も言えない。

「それに時間も押している。……既に夕方だがね」

「「う……」」

確かに執務室の窓の向こうでは日が傾いている。

その前でカリムも冷や汗を流しつつ笑顔を浮かべているのを見て。漸く三人は引き下がった。

「いや、済まない。助かったよ。叶」

「構わんよ。……それに謝られても困るのでね」

トウヤの言葉に『は?』と訝し気な顔となるクロノ。

トウヤは構わずなのは達に向き直る。

「イクスの話しが終わったら存分に彼と、お話し、してくれたまえ」  
「「は……い」」

トウヤの言葉に三人は同時に返事をする。

それを見て。んがっと口を半開きにするクロノにトウヤは構わない。いつの間にやらテーブルにつき、お茶をするロツサに向き直る。

「君は、はじめましてだね。叶トウヤと言うものだ。よろしく」

「これはご丁寧に。ヴェロツサ・アコースと言います」

二人は握手を交わし、ロツサはそのままシオンに目を向けた。

「君もはじめまして、だね。噂はよく聞くよ」

「あ、はい。はじめまして。神庭シオン、て言います」

こちらも握手を交わす。

そしてロツサの足元からザファイラもまた進み出た。

「……ザファイラだ」

「あ、これはご丁寧に……て、ええ!？」

いきなり喋り出したザファイラにシオンが仰天する。

一同はそんなシオンの反応に笑みを浮かべた。

「い、犬が喋った……」

「……狼だ」

ぼそりと訂正が入るが、シオンは構わずにザファイラを上へ下へと眺める。

ある意味エリオやキャロ以上の反応だ。

「ザファイラはヴォルケン・リッター。最後の一人なんだよ?」

「ああ。そういや、そんな話し聞いてたっけ……」

スバルの話しに頷き、直後に一人？と疑問を浮かべるシオンに苦笑しながらはやてがザフィーラの元まで歩くとその頭を撫でた。

「おかえりな。ザフィーラ。……ごめんなあゝ。クロノ君との、お話し、で遅れてもうて……。ロッサのお手伝い。ご苦労様や♪」

「いえ。主。お気になさらず」

頭を撫でられ、気持ちよさそうにするザフィーラにはやても笑顔を浮かべる。

「さて、じゃあ……」

一同が揃い自己紹介も終わった所でカリムから声があがる。それに一同カリムに向き直った。

「始めましょうか」

『はい』

一同頷く。

そしてシオンはズボンのポケットから待機フォルムのままのイクスを取り出した。

実はイクス。なのは達に話しがあると言った後。ずっとだんまりを決め込んでいた。

シオンがいくら話そうとも何も答えなかったのだ。

シオンはそのままイクスを持ち上げた。

「イクス」

【……解っている】

漸くイクスから声が漏れた。

そのままシオンの手から離れるとカリム達が座るテーブルの真ん中に進む。

直後。人型となった。

銀の短髪に銀の装束を纏った姿に。

そのまま口を開く。

【……では、語ろうか。シオンについて。タカトについて。俺が知る。全てを】

そう、言葉を紡いだ。

（後編に続く）

第三十三話「再選」(前編)(後書き)

はい。前編終了です♪……いや、すみませんでした。石は勘弁を(汗) 日常話しに飢えていたのか、えらい分量と化したのでやはり前後編に(汗) ……いっそ、全部前後辺にしたほうがいいんじゃない? とダチに言われてます(笑) 後編。なるべく早くお届け出来るよう頑張ります♪ではでは後編でまたお会いしましょう♪

第三十三話「再選」(後編)(前書き)

はい♪今回頑張って早くお届けします♪いや♪頑張れました♪では♪後編どうぞ~~~~♪

### 第三十三話「再選」（後編）

【……では、語ろうか。シオンについて。タカトについて。俺が知る。全てを】

イクスの言葉に皆が少し息を飲む。  
それぞれ席に着いた。

【まずはおさらいからいこう。タカトの目的について、だ】

「……そやね。伊織タカトの目的は事象創造魔法である創誕の発動。それを持ってしての2年前への世界のやり直し、や……。それで間違いないん？」

「……はい」

イクスの言葉を引き継ぎ、はやてがシオンに確認する。

シオンはそれに頷き、過去と一緒に見たスバル、ティアナもまた頷いた。

はやてはそのままイクスに向き直る。

「それで、彼が感染者を狩る理由もそこにあるんやな？」

【創誕に関しては俺も情報が全く無いので断言は出来ないが……。タカトはそう言っていたのだろう？】

「あ、うん」

イクスに問われ、なのはが頷く。

確かタカトはそう言っていた。

もし、世界をやり直す魔法があって、それに相応の意思が必要だとするならば、と。

「……でも、それなら感染者にこだわる必要、て無いんじゃないかな……？」

フェイトから疑問が発つせられた。

確かにその通りである。

ただ意思が足りないならばそこらの一般人を襲えばいいだけだ。

「……タカトの右手に融合した666の能力は、略奪、だったね？」

【……確かな。ならそこら辺が関係しているとみるべき、か？】

「……そもそも、さ」

シオンが声をあげ、イクスに向き直る。

それにイクスはシオンに視線を向けた。

「何で、俺は意識を保ってるんだよ。……普通に考えたら俺も、略奪、されてるだろ？」

シオンは自身の胸を親指で突きながら問う。

そう、シオンは計三回も刻印が刻まれていた。

普通なら略奪でその意思を奪うのが普通と言える。

その言葉に、イクスが唸る。

そしてトウヤに視線を巡らせた。

トウヤはそれを見て暫く逡巡。

しかし、イクスに頷いた。

「……何だよ？」

【……それに関しては色々事情があるんだが。……そうだな。先に言っておこう。お前自身の秘密について】

「……俺の？」



【ああ。……グノーシスでも封印指定。つまりトップシークレットの情報となる。……ここにいる者は決して口外しないで欲しい】

イクスが一同の顔をずらりと見回す。

急に大きくなる話しに一同は息を飲み。

しかし、しっかりと頷いた。

イクスはそれを確認して頷く。

【シオン。今現在、お前には真名支配で封印が施されている】  
「……は？」

いきなり告げられた言葉にシオンは目を丸くする。  
イクスはその反応に構わず続ける。

【これはお前が産まれてすぐに施されたものだ。そしてタカトが  
前の意思を略奪、出来ない、のもそれが原因だろう。……シオン。  
お前はな】

少しだけ言葉を止める。

そしてシオンの瞳を真っ直ぐに見据え言葉を紡いだ。

【タカトと同類。……生まれながらの滅鬼、なんだよ】

イクスはきっぱりと言い放つ。

それにシオンは頭を押さえ、こめかみを指でぐりぐりする。

いきなり過ぎる話しで全然ついていけないのだ。

そんなシオンに苦笑し、トウヤがイクスの言葉を引き継ぐ。

「この世界の意味を持つ存在。つまりは生命体だが、これには必ず  
'霊格' と言うものが存在するのだよ。一種の格付けみたいなもの

だね」

そう言いながらトウヤは手元にコンソールを展開。  
データを打ち込む。  
直後にウィンドウがテーブルの中央に表示された。

「大体、ではあるが霊格に比例して意思はその大きさが上がるとき  
れる。まあ、例外は山ほどあるのだがね。それで霊格の順位はこん  
なものだ」

ウィンドウにデータが表示された。  
そこには上から。

神

精霊・龍

竜

幻想種

人

と、書かれていた。

「まあ、これはおおざっぱな分け方だがね。大体はこんな格付けと  
なっている。……さて。我々は当然、人だ。故に当然霊格は人にな  
る訳だが。……時にこれに例外が発生する。人でありながら人以上  
の霊格を持って産まれてしまう場合が、ね。その例外がタカトであ  
り、シオン。お前だ」

「……えっと」

【詰まる所、お前は人以上の霊格を持って産まれてしまった、と言  
うだけの話した。……数が多い訳では無いが人以上の霊格を持つ者  
はいない訳ではない。竜並の霊格の持ち主は当然居るしな。……た  
だ、お前とタカトは例外の中の例外だった】

イクスは宙に浮かびウィンドウの前まで移動する。  
そしてウィンドウのある部分を指差した。

【お前と、タカトの霊格は此処だ】

「……は？」

もう何度目となるか解らない疑問をシオンはあげる。  
イクスが指差した部分は順位の最上段だったからだ。

神の部分にイクスは指を差していた。

【お前やタカトは産まれながらに霊格が神と同レベルだったんだ。  
故に因子。……いや、アンラ・マンユと言い直そう。神クラスの霊  
格二つをタカトは自身には取り込めなかった訳だな】

一旦感染すると思えば因子と融合する。  
これと同じ現象がシオンの中で生じたのだろう、とイクスは告げる。  
つまりシオンは今、神二つ分の霊格となってしまう事になる。

「……でも、何で俺に封印なんて？」

【……封印を決断したのはお前の母。アサギだ】  
「母さん、が？」

その答えにシオンは目を丸くする。  
そしてイクスは腕組みをした。

【ああ。……霊格が巨大と言う事はそれに比例して、絶大な魔力量  
を所有したりする。だが、お前の身体はそれに耐えられなかったん  
だ。……聞いた事は無いか？お前が赤子の頃、身体が弱かった事を】

「あ……」

イクスの言葉にシオンは昔、母に聞いた事を思い出した。  
いわく。よく熱を出しては病院に行っていたらしい。

【……そして、封印せねばならない理由はもう一つあった。……下手に周りにお前の事が知られると厄介な事になりかねなかったのだ】  
「……厄介？」

イクスはああと頷く。

そのままテーブルの上へと降り立った。

【お前の事が知られるとお前を生体兵器や実験動物扱いする輩が出ないとも限らなかった】

「いや、そんな大袈裟な……」

【前例がある。……伊織タカトというな】

その言葉に、今度こそシオンは完全に絶句した。

タカトは幼少期。まだ感情すらも芽生えていない時期から命を狙われ、揚句の果てに地獄に送られている。

シオンがタカトと同類と言うならば、それこそ同様の事が起きたことだろう。

【タカトの話はアサギも聞いていたからな。だから危機感を覚えたのだろう。タカト自身を探しがてらお前の霊格を封印し、ある程度霊格を落としたんだ】

「そっか……」

イクスの言葉にシオンは黙り込む。あまりに実感が湧かない事だ。だが、合点がいく事もある。各戦技変換を習得したとき、イクスが

封印が解けたと言った意味を。つまりあれは自身にかけられた封印だった訳だ。

「ああ……。こっちも質問ええか？イクス」

【ああ。構わない】

はやてが拳手と共にイクスに声をかける。  
イクスも頷き、はやてに向き直った。

「シオン君に封印をかけた意味は解ったんやけど……。伊織タカトにはなんで封印をかけてないんや？」

【かけてるぞ？】

即答する。

は？と一同その答えに唾然とするが、イクスは構わない。  
続ける。

【これも後で話そうと思った事だが、現状タカトにも封印は施されている。タカトの右手の手甲。まるで拘束具のようだろう？あれは真名を織り込んだ封印具でな。あれで普段の霊格を二つ程下げている。あれがなければタカトは霊格が神化してしまい、あたりに災害を撒き散らすからな】

「ええつと……具体的にはどんな？」

冷や汗が一筋頬を流れていく事を自覚しつつ、なのはが問う。  
それにイクスはフムと頷く。

【うっかり視線を合わすだけで相手を呪ったり、世界が軋みを上げたり。戦闘行動を取るとさらに被害は拡大するな。……例えば次元震だとか】

「「「あ」」」

その言葉を聞きなのは、フェイト、はやてが声をあげる。  
そしてそのままトウヤへと目を向けた。  
トウヤはフウと嘆息する。

「アースラにタカトが攻め込んで来て、私と戦った時に、あいつは封印を解いている。……あの時の次元震はまあ、それが原因だね」

あっさりと答える。

それに一同はハアと溜息を吐いた。

なんともスケールの大きい話である。

【現状、出力だけならばタカトはその能力の一割も出ていない。……これはシオンにも共通する事だな】

「て、ちょっと待て！なら俺の封印。完全に解けたらタカ兄いに……！」

【死ぬぞ】

シオンに皆まで言わせずにイクスは断言する。  
あまりにきっぱりと言われシオンは呆然とした。

【何の為に、封印を多重に施したと思ってる。お前が死なない為にだぞ？】

「いや、でも……。そうだ。ならなんでタカ兄いは大丈夫なんだよ？」

一瞬だけ気圧され、しかしシオンは立ち直るとそのまま問い直した。  
イクスはそれにフムと頷く。

【タカトにあつてお前に足りないものがある。……つまり、神化した霊格をほぼ完全に制御しうるだけの莫大な意思力だ】  
「ーっ」

イクスの言葉にシオンは再び絶句する。  
しかしイクスは構わない。

【何故あいつが幼少期に自分の霊格に潰されなかったか解るか？あいつは自身の霊格を、力を、ほぼ完全に制御出来ていたからだ。封印は漏れ出す、余波、を押さえるために使っているに過ぎない】  
「俺の意思力が弱い、て事か……？」  
【タカトに比べれば、な】

イクスの答えにシオンは視線を下に落とし、うなだれた。  
唇を噛む。

「「……シオン」」  
「……大丈夫」

スバル、ティアナから声がかかるが、それにシオンは少しだけ微笑む。  
顔をあげた。

「……もう一つ聞きたい事がある」  
【何だ？】

尋ねるイクスに、シオンは頷く。  
そして口を開いた。

「……俺の真名について、だ。……イクスやトウヤ兄いは知ってん

のか？」

【……一応は、な】

「ああ。知っているとも」

シオンの問いに二人は頷く。  
ならばとシオンは続ける。

「アンラ・マンユの真名については？」

【……何？】

ここで初めてイクスが驚きの声をあげる。  
トウヤもまた目を軽く見開いていた。

「……知らないみたい、だな」

【どう言う事だ？シオン】

逆にシオンにイクスは問う。

シオンはそれに頷く。

「ココロの中で、アンラ・マンユと対峙して、あいつが消える時、あいつは自分の事をこう言ったんだ。カイン・アンラ・マンユ、て。そして俺の事を、アベル・スプタ・マンユ、て呼んだんだ」

【……………】

今度はイクスが黙り込んだ。

驚きに、目を見張って。

トウヤはまだ若干冷静だったらしい。

フムと頷く。

「……カインとアベル。旧約聖書に於ける、アダムとイヴの最初の



子供だね？」

「……そうなん？」

はやてが問い直し、トウヤは頷く。

そのまま続ける。

「そしてアンラ・マンユとスプタ・マンユはゾロアスター神話。または拝火教とも呼ばれる神話に於ける二律神だ。前者は悪を。後者は善を表わしていた筈だね？イクス」

【あ、ああ……】

頷く。

しかし声には動揺が混ざったままだ。

そのまま考え込む。

【……七ツの大罪。そして原罪……。アヴェンジャーとの符合点があり過ぎる……】

「……イクス？」

【……っ。あ、ああ。済まない】

シオンに声をかけられ、ハツとイクスは我を取り戻した。

居住まいを直す。

【……シオンとアンラ・マンユの関係性。特に真名に関する事は俺も解らない。……トウヤ。調査を頼めるか？】

「ああ。任せよう」

トウヤが頷く。

それを確認してイクスは皆に向き直った。

【シオンとタカトに関して、これが俺の知る全て、だ。……他に何か聞きたい事はあるか？】

「あ、ならいいかな？」

なのはが挙手する。

それにイクスは頷く。

【ああ。何だ？】

「うん。彼……。伊織タカトの事なんだけど。……どうして、シオン君に憎まれるような行動を取ったのかな？。記憶まで奪って……」

【ああ、成る程な。……それに関してはシオン。既に過去の記憶を取り戻したお前の方が良く解るだろう？】

「まあ、な」

イクスの言葉に頷く。

同時にシオンは顔を歪めた。

「シオン君？」

「……はい。タカ兄いは、根本的に馬鹿、てだけの話し、なんですよ。……馬鹿のお人よし、てだけの」

苦笑いを浮かべる。

思い出すのはタカトの言葉だ。

「俺がお前の前を歩く」

「俺がお前の標になってやる」

この二つの言葉。

「……タカ兄いは、俺に俺自身を憎ませない為に。……罪悪感に押し潰されないように、あんな行動をしたんだと思います。……俺はあのままだと確実にアンラ・マンユに取り込まれてましたから」

「……あ……」

シオンの答えになのはは言葉を失う。  
自身を憎ませる事で、タカトはシオンに生きる力を持たせたのだ。  
標となったのだ。

だからシオンはがむしゃらにタカトを追い掛ける事が出来た。

・・・自分を失う事が無かった。

言葉を失うなのはにシオンは苦笑いを浮かべたまま頷く。

「多分、ですけどね。俺はタカ兄じゃないですから本当にそうなのは解らないですけど」

「……そっか」

「はい」

シオンの言葉になのはは頷く。

それを確認して再びイクスは皆を見る。が。

他には誰も声を上げなかった。

【なら、俺の話しはこれで終わりだ】

「うん。イクス。ありがとうな？」

はやてがイクスに労いの言葉をかけ、イクスはそれに頷くと宙に浮き、シオンの肩までいくとそこに腰かけた。

「さて。イクスの話しは以上や。これとはまた別の事なんやけど……。ロッサ？」

「ああ、はやて」

はやての言葉にロッサが頷く。

そしてコンソールを操作し、ウィンドウを展開した。

そこには彼の管理局での本業。  
査察官として知り得た情報が表示されていた。

「実は感染者対策としてアースラを立ち上げた時からロッサにはある事をお願いしてあったんや」

「ある事？」

「うん。最初の感染者との接触。……つまりスバルが襲われた事件なんやけど、色々怪しい部分があったやろ？」

はやてが皆を見遣りながら聞く。

それに皆頷いた。

突如として現れたオーガ種の感染者。

曲がりなりにもミッド地上だ。

オーガがいる訳が無い。

しかも、あの場所には結界が張られてあり、スバルが閉じ込められてさえたのだ。

「あの事件はどう考えても人為的やった。やからロッサに色々調べて貰ってたんよ」

「まあ、色々深い所まで探らなきゃいけなかったからね。はやてにザフィーラを借りてまで調べたんだけど」

苦笑する。

そのままピッとコンソールを指が叩き、データをウィンドウに表示させた。

「あの事件。……そして感染者を巡る一連の騒動に管理局の人間が関わってる。それは間違い無いね」

「やはり、か……」

クロノが呻くように答える。

半ば予想はしていたが、信じたくは無い結論ではあった。  
ロッサも苦笑する。

「……まあ、見事に情報封鎖されててね。中々苦勞したよ」

「ごめん……。ロッサ」

「いや、これは元々僕の仕事だからね。寧ろ、こちらが謝らなきゃいけないくらいだよ。……その上での結論なんだけど、陸は確実に白。これは間違いない」

一同を見遣る。

陸。つまりはミッド地上だ。  
なら残るのは一つしか無い。

「海……。つまりは本局、か……」

クロノが呟く。

本局の人間として、信じたくは無い結論だろう。  
フェイトも目を伏せている。

「……証拠は何も出てはいないけどね。……多分間違い無い」

「そか……」

「ああ。後、気になる点として。物資がどうも、どこかに流出してる」

さらにウィンドウに新たなデータが表示された。

そこには紛失したり、廃棄扱いと、された、物資のデータが並ぶ。

「関係があるかどうかは別として、少し気になってね……。何せ、状況がスカリエッテイの時と同じだ」

『ーっ』

ロッサの言葉にシオンやトウヤ、イクスを除く一同に緊張が走る。それを見遣り、シオンが隣のスバルとティアナに問う。

「……なあなあ？ スカリエッテイ、て？」

「あ、ええとね？」

「……後で話してあげるから、今は黙ってなさい」

きっぱりと言うティアナに恨めし気に半眼でシオンは睨むが、ティアナは平然と視線を受け流す。

そんな三人に一同は笑みを浮かべた。

緊張が少し和らいだ。

「さて、僕からの報告は以上だ。はやて。借りていたザファイラを返すよ。……ザファイラ、手伝いご苦労様だったね。ありがとう」

「ああ。問題ない」

皆が座るテーブルの後ろで控えていたザファイラが頷いた。

「……さて。今日はこんなもんやな。カリム、今日はありがとな」

「ううん。私もいろいろ興味深い話しも聞けたし大丈夫よ」

笑顔でカリムが頷く。

はやては立ち上がり、そのまま一同に向き直った。

「じゃあ、今日はこれで解散や。……いつもならこの辺で何か起きたりするんやけどな？」

「はやて……。縁起でも無い事言わないの」

「そうだよ」

はやての言葉にフェイトとなのはが笑いながらツツコミを入れる。  
一同少し笑い。

場が明るくなった。

「……さて。じゃあ僕はこの辺で……」

「いかさへんよ？クロノ君？」

「まだまだ言い足りない事が山ほどあるんだ」

「じゃあ、スバル、ティアナ、シオン君は先にアースラに戻っててくれるかな？私達はもうちょっとクロノ君とお話しがあるから」

にこやかに笑みを浮かべるなのはシオン達は即座に頷く。

まだまだ説教をしたり無いのだろう。

クロノがものすごい助けを求める視線を送ってきていたが、一同は全力で見ないフリをした。

「じゃあ私もシオン達と行くかね」

「あ。それならアースラに泊まって行くとええよ？トウヤさんが使ってた部屋、そのままやし」

それはありがたいことだね？とトウヤは頷く。

そして、一同は解散した。

クロノをいずこかに連行するなのは達を除いて。



「遅くなっちゃったなあ〜」

午後7時。

ミッド首都クラナガンをなのはが一人で歩く。

聖王教会での話してから2時間経っていた。

クロノに、お話し、を続けていた訳だが、途中でどこから来たのかクロノの母であるリンディ・ハラウンが加わったのだ。

そのままハラウンプチ家族会議。（実質クロノへの説教）が始まり。

なのはやはてはその場を辞する事にしたのだ。

どうも、三人よりもリンディ一人の方が怖いらしくクロノは真っ白に燃え尽きていたが。

そしてはやてもカリムやロッサと話しがあるらしく、なのはと別かれたのだ。

そして、なのは。

折角ミッド地上に下りたこともあり、はやての勧めもあったのでユーノ宅に向かっていた。

前日の埋め合わせという意味合いもある。

何せ前来た時は感染者が出現したり、スバルが感染者化したりしたのではんのちよっとしかヴィヴィオやユーノと会えなかったのだ。

もう夜だから一日ゆっくり出来る訳では無いが。

「ヴィヴィオとユーノ君驚くかなあ〜」

フフとなのはが笑う。

実は今回。

サプライズと言う事もあり、ユーノには何も連絡を入れていない。

二人がどんな風に驚くのかちよっとだけ楽しみであった。

そんな風に考えながら歩いている内に、閑静な住宅街に着く。

ユーノ宅がある街であった。



そのまま進む。

そして、ユーノ宅の門の前に着いた。

なのはは腕時計を確認する現在午後7時半。

「よ～～し」

門の呼び鈴を鳴らす。

暫くしてインターフォンから声が出た。

《もしもし?》

(ん?)

その声になのはは疑問符をあげる。

ヴィヴィオでもユーノの声でも無かった。

しかし・・・。

(どこかで聞いた事あるような……?)

その声に聞き覚えがあり、なのはは?マークを浮かべる。

《もしもし?》

「あ、すみません。ユーノ君の友人でヴィヴィオの母なんですけど……」

《ああ。噂はかねがね。今、開けるので玄関まで来ていただいて大丈夫ですよ?》

「は～～い」

インターフォンが切れる。

同時に門が開錠された。

なのはは、そのまま門を抜け、玄関へと向かう。

直後、ガチャリと扉が開いた。

「いらっしゃー………いい？」

「え……？」

玄関から現れた人物はなのはの顔を見るなり目を見開き呆然とする。なのはもまたその人物を見て唾然としてしまった。

その人物はなのはも知る人物であり。

今日の聖王教会での話しにも出ていた人物であった。

短い黒髪であり、その瞳もまた黒。

切れ長の目である。

身長も高くなのはより頭一つ半くらい高いだろうか。

いつも着ている黒のバリア・ジャケットでは無く私服。

黒のシャツに、ジーパンという軽装である。

しかし、そこに。

間違ってもユーノ宅にいる筈の無い人物である。

自分達と敵対し。

自分達と戦った人。

自分を嫌いだと真っ正面から否定した人。

「……伊織……タカ、ト？」

「高町……なのは……？」

二人は玄関先で互いに呆然と名前を呼び合い。そのまま硬直した。

「タカト。どうしたのさ？……あれ？なのは？」

「タカト……？なのはママ……？」

数秒後に、ユーノとヴィヴィオが奥から出て来た。そして呆然とする二人を見て、声をかける。が。二人は互いに見合ったまま硬直し続けた。



ユーノ宅、食卓。

そこでなのは再び呆然と目の前の光景を見ていた。そこにとっても信じられない光景があったからだ。キッチンに立つエプロンをつけたタカトの背中である。タカトは機敏にキッチンを動く。美味そうな香りが漂い、食欲をそそる。しかし。

「……すごい意外だな……」

「なのはママ……?」

「あ。ごめんね、ヴィヴィオ。何かな?」

どうも眩きが聞こえたらしい。ヴィヴィオがなのはを見上げ、疑問符を浮かべる。なのはは慌てて向き直った。

「タカトとおしりあい?」

「えっと。その……うん……」

「へへへ意外だね。タカトも知ってたなら教えてくれたらいいのに」  
「……俺もお前達を知り合いとは……。ましてやヴィヴィオの母とは思わなかったんでな」

タカトの言葉になのはも乾いた笑いを浮かべる。

それはそうだろう。

自分達が会った場は必ず戦場。

しかも大半は敵同士として、だ。

知っているほうが問題である。

「えっとね。ユーノ君。この間言ってた新しい居候、て……」

「うん。彼の事だよ？」

やはり。

その答えを半ば予想していたとはいえ、なのはは少し頭を抱える。

何の因果で彼がユーノ宅の居候になったというのか。

「ほい。おまっ子さん」

ドンッと大皿が食卓の中央に置かれる。

その上にはまるで、巨大なパンケーキのような物が乗せられていた。

「……今日もまた、変わった物が来たね」

「えっと……。この今川焼きの親玉みたいな物。なにかな？」

「何の変哲もないスパニッシュ・オムレツだが？」

そう言われても、なのはに分かる筈も無い。

タカトは分厚いオムレツにナイフを入れると扇状に切り分けた。

断面には薄切りのジャガイモと玉葱がきれいな層になっている。

湯気とともに広がるオリブオイルの香りが鼻腔をくすぐった。

更にタカトは各小皿を人数分並べていく。

他にはシーフード・リゾットと冷たいミネストローネスープが並んだ。

「ちなみに今日のは何処の料理？」

「イタリア風だな」

「わぁ〜♪」

「……………」

目を輝かせるヴィヴィオ。

なのはも食卓に乗る料理を見て呆然とする。

ちなみにユーノ家の住人はタカトにどんな料理を出されても基本的に文句一つ言わずに食べる。

日替わりで様々（一日足りとも同じ料理は出ない）な料理が出てくるのだが、チャレンジ精神が旺盛なのか、はたまた食生活には無頓着というべきなのか。

美味しいので文句が一切出ないとも言えるが。

「さて、それでは」

「「いただきます〜す」」

「……………い、いただきます」

ユーノ、ヴィヴィオが元気よく。なのはがおずおずと手を合わせた。タカトはオムレツに手製のトマトソースをかける。それぞれオムレツを小皿に取り分けた。それを各人ナイフとフォークで口に運ぶ。

「どうだ？」

「うん。美味しいよ」

「タカトのりょうり。おいしいからすき〜♪」

「……………美味しい……………」

ユーノ、ヴィヴィオがそれぞれ感想を述べる。なのはは口に広がる豊潤な味に感動を覚えつつ。ショックを受ける。

女の子としてのプライドやら何やらが音を立てて崩れたのだ。

いや、本当に美味しいのだが。

ちらりとタカトを見ると。

嬉しそうに微笑んでいた。

一同の反応が嬉しいのだろう。

そして自分も食べ始める。

フムフムと頷き。

同時、なのはへと視線を向ける。

ちょうど、視線が合った。

「……どうだ？ 味の方は？」

「え？ あ、うん。……美味しいよ。凄く……」

「そうか」

満足気にタカトは頷く。

その顔に、なのはは少しだけ呆然となる。

初めて見る笑顔に、少しだけ見惚れてしまったのだ。

「ユーノ」

「うん？ どうしたの？」

いきなりタカトがユーノに声をかける。

それにユーノは顔を上げた。

「後で、彼女と一緒に大事な話がある。……時間取れるか？」

「大丈夫だけど。……どうしたの？」

タカトの言葉にユーノが疑問を浮かべる。

それにタカトはただ笑う。

少しだけ、寂しいそうに笑った。

「あの……」

「……高町」

思わず声をあげそうになるのはに、しかし、タカトは首を振る。  
何も言うなど、その顔は語っていた。

「？。どうしたの？二人共……」

「……後で話す」

ユーノにタカトはそれだけを言う。  
なのははそんなタカトに何も言えなくなった。  
何も言えないままにオムレツを口に入れる。

美味しいタカト手製のオムレツを。



「さて……」

夕食が終わり、1時程立つ。

既にヴィヴィオは就寝していた。

そしてリビングに、ユーノ、なのは、タカトは集まっていた。  
それぞれソファアに腰かける。

「で。タカト。話し、て何？」

「……ああ。ユーノ。単刀直入に言おう。……俺の素性についてだ」  
「……え？」

タカトの言葉にユーノは目を見開く。  
今までそれとなく聞いた事だが、タカトは頑として話さなかった事だ。

ユーノの隣に座るなのはが居心地悪そうに身を縮める。

「ユーノ。俺はな？第一級の次元犯罪者だ」

「……………え……………？」

「666と呼ばれる、な」

タカトの言葉にユーノは目を見開いて呆然とする。  
666。

クロノを半殺しにし、アリサを意識不明とした犯罪者の名前だ。  
そして、なのはの、いやアースラの敵でもある存在の名前であった。

「い、いやだなー。タカト。悪い冗談はやめてよ」

「…………冗談じゃ無い。本当だ」

「そんな、ねえ。…………なのは…………？」

「…………ユーノ君…………。ゴメンね…………」

ユーノはなのはに問う、が。その返答は期待を裏切るものだった。  
それにユーノは硬直する。

「……………すまない。ユーノ」

「…………じゃあ。本当に？」

「ああ」

タカトの最後の返答。

それにユーノはがくりと肩を落とした。  
顔を伏せる。



「……ユーノ」

「なんで、だい……？」

疑問をユーノはあげる。

タカトはそれを聞いて目を伏せた。

「ここに来たのは偶然だ。……意図しての事じゃない」

「そうじゃないよ……！」

顔をあげる。声が荒げた。

ユーノは真っ直ぐにタカトを見据える。

「僕が言いたいのはそうじゃ無い……！。なんで君がそんな事をしたのかを聞いてるんだ……！」

「必要だからだ」

タカトもまた逃げない。

真っ直ぐにユーノを見据える。

「俺の目的に、必要だからやった……」

「そんな……」

タカトの言葉にユーノが悲痛の声をあげる。

タカトはぐつと息を飲んだ。

だけど視線を逸らさない。

ユーノもまた視線を逸らさなかった。

「自首しなよ……。今ならまだ何とかなる！。管理局はキッチンとした理由があるならちゃんと話を聞く！……僕も、……僕も手伝う

から……！」

「駄目だ」

「何で!？」

ついにユーノは立ち上がる。

手を振り叫んでいた。

タカトは立ち上がらない。

そのままユーノを見続ける。

「……俺には、俺の目的がある。……成さなきゃならない事がある」

「でも……！」

「ユーノ」

叫ぶユーノにタカトはただ首を振り名前を呼ぶ。

それにユーノは顔を歪めた。気付いたからだ。タカトは自分の言葉では止まらない事が。

「……済まない。俺はこれしか言えない」

「タカ、ト」

「せめて、今晚中に此処を出る。……ヴィヴィオには上手く言っておいてくれ」

そこまで言うのとタカトは立ち上がった。

変わりにユーノはソファアに沈む。

「……僕は、君に何も出来ないのか……? 君を……友達を……」

「そんな事は無い」

一人ごちるユーノに、タカトは首を振る。

そして言葉を紡いだ。

「お前のおかげで、お前とヴィヴィオのおかげで、俺は随分救われた。……忘れてたモノを取り戻せた」

「タカト……」

「ユーノ。ありがとう」

そうユーノに言うのとタカトはそのままリビングを出た。そしてユーノ宅の宛がわれていた部屋に戻る。

どちらにせよ部屋にあるのは必要最低限の荷物だけだ。ぱっぱと荷物を纏めると、部屋を出る。

そしてそのまま玄関へと向かう。

途中でなのはが立っていた。

真っ直ぐにタカトを見続ける。

しかし、タカトは彼女には視線を合わせない。

横を抜ける。

玄関に着くと、靴。

黒のスニーカーに足を通した。

「タカト……」

直後に声がかかる。

ユーノだ。

リビングから出て来たのだろう。

タカトを見続ける。

「……君の事を、僕はまだ友達だと思っててる」  
「俺もだ」

靴を履き終わるとくるとタカトは振り向く。  
ユーノに微笑んだ。

「じゃあな」

別れを告げ、扉を開く。

そのままタカトはユーノ宅を出た。

パタンと扉が閉まる。

それを最後まで見る。そして。

「いつてらっしゃい。……君が帰って来るのを。僕は待ってるから」

そう呟いた。

そしてなのはに向き直る。

「タカトを追うんだろ？」

「……でも……」

なのははユーノの言葉に戸惑う。  
しかし、ユーノは首を振った。

「……僕は大丈夫。だからなのは。タカトを追って」

「でも……」

「なのは」

迷うなのはをユーノは真っ直ぐに見詰めた。  
口を開く。

「お願い。タカトを追って」

その言葉になのははぐっと息を飲む。

そしてコクリと頷くと靴を履き、玄関から出た。

「タカト……」

ユーノはそう呟き。

うなだれる。

玄関のたたきの上に数滴、涙が落ちた。



なのはユーノ宅から出るとそのまま走った。

既にタカトの姿は無い。

どこに居るのかわからない。

それでも走る。

走って、走って、走って、走って。

そして。

「見つ、けた……!」

息を荒げながら前を見る。

そこにはテクテクとただ歩くタカトが居た。

気付いていないのか、なのはに目もくれずにただ歩いていた。

とにかく近付こうとなのはは駆け寄る。

角を曲がり、タカトまで残り数m。

「何をしに来た？」

「……!」

突如として声がタカトから放たれた。

タカトは一度も振り向いていないのにも関わらず、だ。

なのはは一瞬だけ息を飲み。

しかし、ぐっとタカトを見据えた。

「あなたと、キチンとお話し、したくて」

「俺はお前と話したく無い」

取り付く島も無い。

堅く自分を拒絶するタカトになのはくつと目を伏せる。

タカトは構わない。

振り向きもしない。

「……ゴメン、ね」

なのははいきなり謝る。

それにタカトの歩みが止まる。

しかし振り向く事はしない。

「何故、君が謝る？」

「だって、私が来たせいで……」

「関係ない。遅かれ早かれ、こうなるのは必然だった」

きっぱりとタカトは言い放つ。

それは言外に君は悪く無いと言っているも同然であった。

そんなタカトになのははぐつと唇を噛む。

そのままタカトの背中を見据えた。

「あなたはいつもそうなの？」

「……何の事だ？」

「シオン君の、ユーノ君の事だよ。……いつもあなたは自分を犠牲にしてる」

なのはの言葉が響く。

タカトはしかし、振り向かない。

「あなたは、自分を大切にしよう、て思わないの？ あなたは……！」  
「黙れ」

タカトは最後までその言葉を言わせなかった。  
なのはの言葉を切る。

「言った筈だ。俺は幸せとやらが理解出来ない。そんな俺が何かを、ましてや自分を大切にしようなど、考えるとでも？」

「私も言ったよ？ あなたは幸せをキチンと理解出来る、て。それにあなたはちゃんと大切にしている。シオン君を。ユーノ君やヴィヴィオだって……」

「シオンに話しても聞いたか？」

いきなりの問い。

それになのはは言葉を失い。

しかしコクリと頷く。

背を向けているタカトはそれが見えている訳でも無いだろうに、笑いをあげた。

「君は何を勘違いしている？ ……俺はただ、俺のエゴの為に動いているに過ぎん。創誕を成すと言う目的の為に」

「それだって、シオン君の為に……！」

「違うな。俺は俺の為に創誕を成す。その結果がどうあれ、な」

タカトはなのはに全く取り合わない。  
なのははタカトの言葉に首を振る。

「違う……違うよ。そんなのただの言い訳だよ」

そのままタカトに歩み寄る。

その背中をただ見詰めた。

「あなたは……。タカト、君、は、ただ逃げてるだけだよ」

その言葉に、タカトは漸く振り向いた。

いつか見た、感情の無い瞳で自分を見据える。

タカトはそのまま口を開いた。

「やはり、俺はお前が嫌いだ」

「タカト君……」

「勝手に下の名前で、君呼ばわりするな」

再度の否定。

それになのはは顔を歪める。

悲痛に。

それにタカトはぐっと眉根を寄せた。

瞳に感情が戻る。

「俺は君が解らない」

「タカト君……？」

「名前で呼ぶなど言っている。……まったく。何度も言うが敵だぞ、俺は？何で君はそんなにも馴れ馴れしいんだ？」

ハアっとため息を吐く。



悲痛な、なのはを見ていられなくなったのだろう。タカトは素に戻っていた。

そんなタカトになのはは少しだけ微笑む。

「あなたが、気になるから」

「……そう言った事を男に言うのは止すんだな。勘違いされるぞ」

タカトの言葉になのはは？と疑問符を浮かべる。

それにタカトは再度嘆息した。

「……結局の所、君は俺に何を望むんだ？」

「え？」

「『え？』じゃない。俺としては今現在、全力で君に下の名前で呼ぶ事と君付けを止めて欲しい。変わりに君は何を望むかと聞いているんだ。……余程無理じゃない願いなら聞いてやる」

「私が君に……？」

呆然となのははタカトの言葉を繰り返す。

思ってもいなかった事態だからだ。

なのははしばし悩み。

そして答えを出した。

「名前を呼んで？」

「……何だと？」

「あなたに私の名前を呼んで欲しいの」

「いや、さっきから高町と呼んでるだろう？」

「ちゃんと、下の名前で呼んで？」

きっぱりとなのはは言う。

それにタカトはうっと唸る。

しばし考え込み、本日3度目のため息を吐いた。

「……解った。なのは。これでいいか？」

「うん。タカト君」

「……おい」

名前で呼んだにも関わらず下の名前で君呼びするなのはをタカトは睨みつける。

だが、なのはは微笑むだけ。

「私。一度も止めるなんて言ってないよ」

「……そう言うのを詐欺士の論理と言うんだ……。悪女め」

唸り、再度の嘆息を吐く。

そしてタカトはなのはに背を向けた。

「……あ……」

「止めるなよ？……まあもつとも。君個人では俺には勝てんがな」

フツと笑うとタカトはそのまま歩き出した。

それをなのは見詰め。

「なら賭ける……？」

そんな事を言い出した。

タカトはそれに顔だけをなのはに向ける。

「……君は何を言っている？」

「勝負しようよ、タカト君。負けた方は必ず相手の言う事をなんでも聞くの」

疑問符をあげるタカトになのはは構わない。  
真っ直ぐにタカトを見据える。

「受ける義務は無いな。俺にメリットが無い」

「……あるよ。私、とか」

「興味のカケラも無いな」

きっぱりと言うタカトになのはがムツとなる。  
思わず怒鳴ろうとして。

「……だが、君に下の名前と君付け呼ばわりを無くさすにはそれが  
一番手っ取り早い、か」

「え……？」

「何を意外そうな顔をしている？受けてやると言ったんだ」

タカトの返事にしばしなのはは呆然とする。  
まさかすんなり受けるとは思わなかったからだ。

「どうした？やはり取り消すか？」

「う、ううん！やろう！なら今から……」

「今からここでやろうなんて馬鹿な事は言うなよ？近所迷惑にも程  
がある」

既に夜中だ。

確かに相当な迷惑となるだろう。  
うっと怯むなのはにタカトは嘆息する。

「……どうせ。この先も敵同士として戦場で会う事もあるんだ。そ  
の時にでも戦えばいい。……いちいち焦るな」

「あ、うん……」

頷くなのはを確認すると、再びタカトは歩き出した。  
今度こそは止まるつもりは無いのだろう。  
迷い無く歩いて行く。  
そして。

「じゃあ、またな。なのは」

そう言って夜の闇に消えた。  
なのははしばし呆然として。

「うん……うん！またね。タカト君！」

満面の笑みを浮かべて頷いた。

（第三十四話に続く）



ア

「はい♪今日も始まります。アリサ道場……♪当道場の主、アリサ  
です♪」

す

「弟子のすずかです♪」

シ

「司会のシオンです♪」

ア

「さてさて。じゃあ今日のゲストを召喚しましょうか。今日のゲストはこちら♪」

美

「こんにちは。魔法少女リリカルなのは〜FANTASY A C L I S T E R〜から。麻井美緒だ」

玲

「綾瀬玲奈です♪」

遥

「御影遥よ♪」

ア

「おお〜。来たわね。初めまして。アリサよ」

す

「すずかです♪」

シ

「シオンだ。よろしく」

美

「ああ。よろしくな。シオン」

遥

「よろしくね♪」

玲

「よろしくお願いします」

ア

「さて。三人と遊ぶ（美緒を弄る）のは後にして……」

美

「ち、ちょっと待った！今、変な伏せ字があったよな！？」

ア

「気のせいよ♪」

遥

「そうそう♪」

美

「遙！何でお前まで何でそこに居るんだよ！？」

遙

「え？面白そうだから？」

美

「えらい理不尽な！？」

シ

「いや、これが普通なんだって。……少なくとも道場じゃな」

美

「……お前も苦労してるんだな……」

シ

「今更だよ。……カナンとどれだけの苦難を共にしたか」

美

「いや、本当。ご苦労様……」

シ

「まあ、お前ももうすぐこっち側だけだな」

美

「なんで！？」

ア、遙

「二人共うっさいっ！」

―煌―

シ、美

「「あべしっ！？」」

す

「わぁ〜。綺麗にシオン君飛んだね〜」

玲

「美緒君。大丈夫〜？」

美

「ぐっ……。んなアホな。俺が反応出来ないなんて……」

シ 「あの人はここじゃあ神だからな……」

ア 「シオン……。2秒以内に起きないとKFC式。ハッキリコース。行くわよ？」

シ 「さて、じゃあ今日のおさらいですが」

美 「復活早いな、オイ!？」

シ 「……フフフ。軽いもんだよ……」

美 「いや、ゴメン。お前怖い。カナンも相当だったけど」

ア 「シ……オン♪」

遥 「美……緒♪」

シ、美 「「さて、じゃあ今日のおさらいを」」

す 「……何て言うか、早くも道場因子に感染してるね……」

玲 「そう言えばそんなのもあったんだよね……」

ア 「はいはい。その二人も静かにね♪じゃあシオン宜しく♪」

シ 「了解っス。ええ……今日のおさらい。説明は簡潔に。立つ鳥後を濁さず♪」

ア 「う……ん。まあ、説明オンリーな序盤がね……」

す

「それとタカト君がついにユーノ君の家から出ていったね…」

ア

「と、言うか。なのはどのバトルフラグ？が立っちゃったわね」

シ

「なのは先生とタカ兄いは立ち位置から何から何まで正反対ですからね……。いつかは必ず白黒つけなきゃいけない二人なんですよね」

美

「それにしても……。出力一割以下、て。お前等……」

玲

「そう言えばトウヤさんの霊格については触れられなかったですね？どれくらいなのでしょう？」

シ

「そちらはまた後日説明があるそうです」

遥

「むう。スツキリしないわね」

ア

「さて、ならおさらいはここまで♪じゃあ次♪『果たして麻井美緒はロリ好きか、幼なじみ好きか、お姉さん好きか、聞いてみましょう♪』企画」

美

「……………は？」

シ

「いや……。これは中々楽しみな……」

ア

「アンタの分もあるわよ？」

シ

「……………うそん」



す

「ドキドキだね〜」

遙

「（ソワソワ）」

玲

「（ドキドキ）」

ア

「さあ！美緒。シオン！キリキリ吐いてーで、アレ？」

シーン

す

「あ、いつの間にか二人がいない」

ア

「……逃げたわね」

玲

「大丈夫です！」

遙

「すぐに捕まえてくるわ！」

ア

「了解♪待ってるわね〜♪」

玲、遙

「「GO!!」」

ドキューーーーーン！！

す

「わあ〜。すごい速度で駆けて行ったね……」

ア

「そうね……、で。ん？何々？『今回文字数多いからこの辺で終わ

つとけ?』」

す

「そのお手紙。どこから来たの……?」

ア

「知らないわよ。……ちっ! 作者のヘタレめ! 仕方ないわ」

す

「それじゃあ皆さん。今日はここまでです♪」

ア

「いつも読んでくれてる皆♪本当ありがとうね♪感想、評価もすごい作者の励みになってるそうよ♪これから宜しくね♪」

す

「そして人気投票。まだまだ投票お待ちしてます♪皆様、奮って投票して下さい♪宜しく願います♪」

ア

「そして告知2nd♪今度、海鳴温泉で重要企画を発表するわ♪是非宜しくね♪」

す

「それじゃあ皆さん♪今日はこの辺で♪」

ア、す

「「また次回……♪」」

美

「は、離せ! 離してくれ……!」

玲

「ごめんね。美緒君。今回は離す訳には行かないよ」

遥

「そうそう。その通り! 今日はキッチンと聞かせて貰うからね?」

シ

「なんで俺まで!?!」

玲、遥

「「……ついで?」」

シ

「おまけかい！扱い酷っ！？」

美

「た、助けてくれ〜！」

その後、二人がどうなったかは読者の想像にお任せします♪

第三十三話「再選」(後編)(後書き)

「タカトとなのはの再選は終わり」 「それぞれの思いを抱えたまま明日を向かえる」 「しかし、運命は待たない」

「ついに管理局の闇が動きだす」 「次

回。第三十四話。 「反乱」 「自らの正義が正しい

とただ叫ぶ。それはただの傲慢」

### 第三十四話「反乱」(前編)(前書き)

「……いろいろ疎まれてる事は知った」 「六課ん時も、今

回のアースラン時も」 「やけど、それでも必死にやってき

た」 「大事な親友や家族。そして仲間達と共に」 「で

も、それが全ての人に分かって貰えるとは限らんくて」

「魔法少女リリカルなのはS t S， E X。始まります」

## 第三十四話「反乱」(前編)

XX級次元航行艦レスタナーシア。

その艦長である。グリム・アーチル提督は傲慢で知られている。自分が正しいと思えば、皆全て正しいと思う傾向にあるのだ。その思考を肯定できないものをグリムは認めない。

これがはやてやアースラ隊を認めない原因でもあるのだが。つまり所は傲顔不遜なのである。しかし。

「……………」

《……面を上げよ》

「は、ハハっ！」

レスタナーシアのブリッジに映るモニター。

その中の男にグリムは膝をつき、頭を垂れていた。

グリムが、である。

彼は心底モニターに映る男に敬服していた。

故に管理局すらも裏切ったのだ。

いや、管理局内部にすらもこの男の影響は及んでいる。

その一人がグリムでもある。

それだけの話だ。

グリムは言われた通りに顔を上げ、モニターの男に向き直る。

四十前半くらいの男だろうか。

かなり大柄な男である。

おそらくは2mを越えている。

そして分厚い筋肉の装甲で覆われたその体には黒と各部を銀の縁で彩った服装を着ている。

間違いなくバリア・ジャケットだ。

その男はグリムに鋭い視線を送りながら口を開く。

《『実験』は順調か?》

「ハ。既に『因子兵』の実験は成功しております。こちらの制御も96%の状態を維持出来ております」

《100では無いのか?》

「……い、いえ。何分、因子を使ったモノ達。少しばかりコントロールが……」

一気に強まる男の圧力にグリムは冷や汗を滝のように流しながら答える。

機嫌を損ねれば何を起こすか分からないからだ。  
グリムの言葉を聞き。

男は鷹揚に頷いた。

《……よい。後は新型の機械兵が補おう》

「ハ。ではー」

男の声にグリムは顔をあげる。

再び男は頷いた。

《……うむ。今日、この時をもって、我等は管理局に宣戦を告げる》

「お、おお。……ついに……」

グリムは顔を綻ばせながら答える。

それはグリムが待ちに待っていた言葉だからだ。

《うむ。その上でグリムよ。貴様に命を下す》

「ハ。なんなりとお申しつけを」

《因子兵一万。機械兵群二万を与える。ミッドチルダを攻め落とし

てみせい》

「……ハ！」

つまり1番槍が自分に与えられた訳だ。

グリムの笑みはさらに深くなる。

《貴様が地上を攻めておる間に、我等は本局を落とす。例の部隊を地上に引き付ける事。それが貴様の役目だ》

「――落としても構わないので？」

それが不遜であると理解していながらグリムはあえて問う。

男はそれに笑った。

《構わん。好きにせよ》

「ハッ！」

その答えにグリムは笑いをあげる事を必死に堪えた。

これで漸く、あの小娘を。

そしてあの部隊を潰せると言うものであった。

男は更に続ける。

《……こちらからは無尽刀を送る。好きに使え》

「……奴を、ですか？。しかし……」

その言葉にグリムは少し迷う。

無尽刀。つまりアルセイオは、先日任務を失敗したばかりである。いくらイレギュラーがあつたとしても、二度の失敗は許しがたかつたのだが。

《……奴と私はそれなりに付き合いが深い。心配する必要は無い》



「……ハッ。承知しました」

《うむ。ではな。グリム・アーチル。戦果を期待している》

その言葉と共に画面がブラックアウトする。  
通信が切れたのだ。

それ確認するとグリムは立ち上がる。

「進路をミッドチルダに向けろ」

「了解です。……いよいよですね。提督」

「ああ……。漸く、だ」

官制官の言葉にグリムは頷く。

そしてククと笑った。

「……裁きの時だ。愚か者達のな」

そしてレスターナーシアはミッドチルダに向かった。  
数多の災厄を満載して。

反乱の狼煙を上げる為に。



「……さて」

次元航行艦。アースラ。

その転送ポートに入るトウヤをシオンは見る。

聖王教会での話し合いから一泊し、次の日の朝。

体が回復した事もありトウヤが地球に戻るの事にしたのだ。

シオン。そしてFW陣はその見送りだ。

「ではな、シオン。それからスバル君、ティアナ君、エリオ君、キヤロ君」

「うん。トウヤ兄いも、向こうで調べ物頑張つてな。ユウオ姉さんによろしく」

「うむ。……ああ、漸くユウオに逢えるよ……。あの尻とこれ以上離れると禁断症状が……！」

「……セクハラは程々にね」

くねくねと嫌な動きをかますトウヤに蹴りを入れたい衝動を必死に堪えつつシオンはため息を吐く。

・・・帰ったそうそうユウオに降り懸かる災難を予想してしまい思わず合掌した。

「ふっふっふ。ユウオもさぞかし、私を待っているだろうとも！」

「……仕事の意味でね」

「……まあ、それは置いておくとしてだ。……エリオ君、例のアレだが……」

「あ、はい」

半眼でツツコミを入れるシオンをさらりとかわし、エリオに向き直った。

エリオも返事をかえす。

「一応はアレで合格だ。よく鍛練したものだね？」

「あ、はい。トウヤさんに教えられた通り頑張りました！」

エリオがトウヤの言葉に頷き、笑顔で答える。

実はエリオ。トウヤがアースラに来る度に宿題を与えられていた。

それが今回及第点を与えられた形である。  
そんな二人にシオンが疑問符を浮かべる。

「?。何の話し?」

「フ。気になるかね?」

「……まあ。少しは」

トウヤの返事にシオンは答える。

‘この’兄がエリオに何かを教えたのか非常に気になる。  
・・・フェイトが泣くような有害図書指定的な事でなければいいのだが。

トウヤはそんなシオンの考えに構わずキラッと笑う。

「何せ、例を見ぬ程のフラグの天才だったのでね?……女性の扱い等をこう、ね?」

「……え、エリオ。お前。まさかー」

「え?。ち、違いますよ、シオン兄さん!。トウヤさんも何を言ってるんですか!?」

「ふ。言い訳かね?」

「エリオ……」

「エリオ。あんた……」

「スバルさん!? ティアさん!?!」

エリオは自分を見てぽそぽそと。

「最近の子は……」だの。

「エリオだしね……」とか話し合うスバル、ティアナに悲鳴を上げる。

と、言うか。そういった事は聞こえないように話して欲しい。  
まる聞こえなのは本当だろうか?。

エリオはトウヤをキッと睨む。

「トウヤさん！。嘘だって皆に言って下さい！」

「何！？。どこまでが嘘だと言うのかね！？」

「最っ初、から、最後までだあああああああああああ！  
」

エリオにしては珍しく敬語が外れたマジなツッコミが入る。

そんなエリオにキャラが正面に回りニコッと微笑んだ。

「大丈夫だよ？エリオ君！」

「キャラ。ああ、やっぱり君だけが……」

「エリオ君は最初から私の扱い上手だったから！」

「ぐっふう！？」

フォロー入れてくれるかと思いきや、止めだった。

キャラの言葉にエリオは膝から崩れ落ちる。

悲鳴を上げるキャラを尻目にトウヤはハッハと爽やかな笑みを浮かべた。

「いやあ。……ここまでのリアクションが取れるとは……。からかいがいのある子達だね？」

「あ、やっぱし嘘なんだ？」

「ずっとそう言ってるじゃないですかあああああああああ！」

「第一、嘘だと分かってたならんで言ってくれないんですか！。  
トウヤさんだって嘘だって言ってくれたら……！」

シオン、トウヤに叫ぶエリオ。

その目尻には涙が浮かんでいた。

そんなエリオに、この異母兄弟達はグッと親指をおっ立てた。

「いや〜。楽しくて、つい♪」

「控え目な言葉で言いますけど最っ低ですよ、アンタら兄弟!!」

叫びながら。この二人を揃ってノせるとろくな事にならないと言う事をエリオは学んだ。

余談だが、最近エリオはツツコミが上手くなるのと同時に言葉遣いがちよつと悪くなってきておりフェイトを悩ませているのだが・・・。

それはまた別の話である。

「……さて。では楽しんだ事だし、そろそろ帰るとしようかね」

「うん、じゃあね。トウヤ兄い」

「フォローは無しですか!？」

エリオが叫ぶが、二人は華麗にスルーする。

見ればスバルとティアナも既に話し合いを止めていた。

二人も最初から分かっていた証拠である。

そんな一同の反応に拗ねるエリオにトウヤが苦笑する。

「……まあ。真剣な話し。後は実戦での応用だからね?。シオンは先輩にあたるし、いろいろと教えて貰うといい」

「……はあ」

「む。なんだね?。その生返事は?。私が信じられないのかね?」

「……さっきまでは信じてました」

これまたエリオには珍しく半眼で睨む。

その視線を流しながらトウヤはコンソールを操作する。

「では、な、皆。また会おう。……シオン。あまり迷惑をかけぬようにね?」

「……了解。んじゃあね」

「うむ」

頷き。

そして転送ポートが起動。

直後、トウヤの姿が消えた。

「……さって。トウヤ兄いも帰ったし。部屋にでも戻るかな……」

「アンタも私達も待機でしょうが」

「ピロティに行こうよ。喉渴いちゃったし」

「……エリオ君。大丈夫？」

「う、うん。……大丈夫だよ。ちょっと疲れたけど」

「なんだ。エリオ。だらしねえなー」

「……半分はシオン兄さんのせいです……」

「気のせいだ」

「断言した！？。いやいや、何々ですか。その自信！」

「気のせいだ」

「……もういいです」

わいわいと騒がしい一同はピロティに向かう。  
だが。

突如。

その騒がしい声すらも切り裂いて、音が響いた。

それは、決して聞き慣れたく無い音であり、しかし。聞き慣れてしまった音であった。

つまり、アラート。

それが艦内に激しく響いた。



時間は少し遡る。

ミッドチルダ地上。

閑静な住宅街にあるユーノ宅。

その食卓にユーノ、ヴィヴィオ、なのはがついていた。

だが、いつものような賑やかさは無い。

それどころか静まり返っていた。

誰も話さない。

ユーノ、なのはがちらりと視線を合かし、そして同時にヴィヴィオを見る。

ヴィヴィオは黙々と朝食を摂っていた。

トーストにハムエッグ。サラダというシンプルメニュー。

それを食しながら、しかし。

話さない。

いつもならヴィヴィオは誰よりも話す。

それを昨日まで居た同居人は笑いながら

「飯を食べてる時はあまり口を開かないようにな？」と、窘めていたものだが。

そこまで考えてユーノは苦笑する。

まだ、自分も相当に引きずっている事を自覚した。

ヴィヴィオは朝起きるなりタカトが居ない事に気付いた。

どうやらタカトが使っていた部屋に入ったらしい。

朝練の為に庭に居たのだが、いつまで経っても来ないタカトを起こそうと部屋に入ったのだろう。

そして、見た。

綺麗に荷物がなくなり、ガランとした部屋を。

確かに元々タカトは荷物を部屋に殆ど置いていなかった。

だが、いくらなんでも全部無くなっていれば嫌でも気付く。ヴィヴィオもまた、悟ったのだ。

いつもの外出では無く、ユーノ宅から本当に出ていったタカトの事を。

結局。ユーノはタカトに言われたような嘘を吐けなかった。なのはと敵対していた、と言う部分は何とかぼかしたが、それ以外は知られてしまった。

だが。ヴィヴィオは話を聞くなり飛び出した。

タカトを追い掛ける、と。

それをなんとか、なのはとユーノの二人掛かりで止め、説得したのだが。

「……ごちそうさま……」

（納得してないよね……）

ヴィヴィオの様子にユーノは嘆息する。

当然とも言える。

ユーノとしても認めたく無い事なのだ。

タカトが犯罪者だった事など。

だが、ユーノ自身は本人から聞かされている。

タカト自身が第一級の次元犯罪者だと。

それもあり、ユーノは無理矢理に自分を納得させていたが、ヴィヴィオはそんな事は出来まい。

ましてや、何故家を出なければならぬのか。

それをヴィヴィオに納得させられる自信はユーノには無かった。

「……いつてきます」

「あ！。うん。……ヴィヴィオ。いつてらっしゃい」

いつの間にか半時間経っていたらしい事にユーノは気付く。

ヴィヴィオの登校時間であった。

本来ならユーノも本局の無限書庫に出勤する時間なのだが。



タイミングがいいのか悪いのか、ユーノは本日休みであった。  
長い間。溜めに溜めていた有給休暇を使ったのである。

予定では、タカトと色々クラナガンあたりを回る予定だったのだが・  
・

「……ユーノ君？」

「わっ!？。なのは?。どうしたの？」

いきなり目の前になのはが顔を出してきてユーノは背を反らす。  
そんなユーノになのはは首を傾げ、しかし。視線を落とした。

「……やっぱり、ヴィヴィオ……」

「あ、うん。……全然納得してない、ね」

頷く。

それになのはの顔も少し暗くなる。

ユーノは苦笑した。

「……タカトが出ていったのは、なのはのせいじゃないよ。……タ  
カトだってそんな事言わなかっただろ？」

「……うん。いつか、こうなる事は必然だった、て……」

「……そっか」

「あのね、ユーノ君」

なのはが顔をあげる。

そして、話し出した。

昨日、タカトと話した会話の内容を。

そして、'賭け'の事を。

それを聞いてユーノは目を丸くする。

「なのは。タカトと戦うの？」  
「……うん。……タカト君とは戦わなきゃいけない。そんな気がするの」

ユーノはその答えを聞いて、そっかと呟いた。  
そして思い出すのは、二人のなのはの親友だ。  
フェイトとヴィータ。

二人とも、なのはと本気で戦って。そして分かり合った事に。  
ひよっとしたらなのはなら。

そう、ユーノは思う、が。  
気が進まない。

「……ユーノ君？」

「……なのは。タカトは……」

そこまで言いかけて口をつむぐ。

なのはの強さはユーノもよく知っている。

知っていて、なお。不安だった。

タカトは666。

たった一人で管理局に真っ正面から喧嘩を売り、なのは達と戦い。

それに勝利したような出鱈目な強さらしい。

そんなタカトになのはが戦うと言うのなら必然、無茶をやるのが目に見えていた。

その結果を想像してしまいユーノは顔を歪める。

いつかのような大怪我を負わないとも限らないのだ。

そんなユーノになのはは微笑んだ。

「大丈夫だよ。ユーノ君」

「……なのは……」

「絶対、大丈夫」

そう、にっこりと笑う。

ユーノはそれにしばし呆然とし。  
そして、ゆっくりと微笑んだ。

「……うん。……でもあんまり無茶は駄目だからね？。またヴィヴィオが泣いちゃうよ？」

「う……。うん。気をつけるよ」

ユーノの言葉になのははそれを想像してしまい、頬が引き攣る。  
そんななのはにユーノは微笑み。

席を立った。

うーん、と伸びをする。

「さて、タカトがいないんだし僕が家事をやんなきゃね」

「あ。ユーノ君。手伝うよ」

「うん、なのはありがとう。……でも、大丈夫？。アースラに戻らなくて」

「うん。昼頃にはやてちゃん、フェイトちゃんと合流して、戻るからー」

そう言ってなのはは立ち上がろうとする。

しかし。

いきなり目の前にウィンドウが展開する。

通信だ。

なのははウィンドウ横のコンソールを指で操作し、通信を繋げる。  
通信を送ってきたのは、シャーリーであった。

相当に慌てている。

《あ！。なのはさん！。よかったー。通信に出てくれて……》

「シャーリー？。どうしたの？」

《はい。実は……》

そしてシャーリーから告げられる。

今、ミッドで何が起きているのかを。

それを聞いて、なのはは顔を強張らせ。

「……地上本部にすぐに飛行許可を貰って。後、詳しい情報を。八神艦長やフェイト隊長には？」

《既に知らせてあります！》

「うん。なら私は二人と合流するよ。アースラはすぐこっちに？」

《はい。もうすぐ到着予定です》

「うん。ならスターズの指揮はヴィータ副隊長に一任。ライトニングの方は……」

《フェイトさんからシグナムさんに、と》

「うん。了解。ならそっちは任せるね？」

《はい！》

通信が切れる。

そしてなのははユーノに向き直る。

ユーノもまた頷いた。

「僕はすぐにヴィヴィオの元に向かうよ」

「うん……。ごめんね。ユーノ君」

「大丈夫。……なのはこそ、気をつけて」

なのはは頷き、すぐに玄関に向かう。

その途中で飛行許可が来た。

靴を履き。

玄関から飛び出る。

そのまま胸元からレイジング・ハートを取り出した。

「行くよ。レイジング・ハート」

オーライ。マスター。

「うん。レイジング・ハート。セット・アップ！」

スタンバイ・レディ。セット・アップ。

直後。

なのはは光りに包まれ。

一瞬にして白のバリア・ジャケットを身に纏った。

そして、左手にレイジング・ハートを握る。

そのまま空へと翔けた。

急速度で空に舞い上がり、一気にクラナガンに向かいながら。

なのははキュッと奥歯を噛み締める。

さっきのシャーリーの通信を思い出したからだ。

それはこう言う内容だった。

大量の感染者反応と、見た事も無い‘ヒトガタ’を模したガジェツトがクラナガンに突如として出現した。

どれ程の数なのか、把握しきれない程の数が居る。と。

（何が、起きてるの……？）

漠然と胸の内に嫌な予感を覚えながら。

しかし、くつと前を見る。

自身が出せる最高の速度でなのははクラナガンへと翔けた。



ミッドチルダ。首都クラナガン。  
朝、である。

本来ならばそこは多数の人が行き交う場所だ。  
賑やかに、しかし、平和に。

だが、そこは静かだった。

行き交う人達の姿は何処にも無く。

また、車も一台も通っていない。

普通ならば有り得ない事だ。

だが、クラナガンにヒトと呼べる存在は何処にもいなかった。

そう。'ヒト'は。

ビルの影でぴちゃぴちゃという音が鳴る。

もし、そこに人がいたとして、そこを覗き込んだりしたら驚愕に腰を抜かしていただろう。

あるいは、胃の中身を全てぶちまけているか、だ。

音の発生源はスーツ姿の男性だった。

四十くらいか。

ビルの影に仰向けで倒れており。そして、身体が、半分になっていた。'。'

下半身が、無い。

何故か。

それは男の周辺にいるヒトガタの仕業だった。

ヒトでは無い。

有り得ない。

何故ならばそのヒトガタは二つの目が無く。

顔の中央に大きな目が一つあるだけだったからだ。亜人でもこんな種族はいない。

服も着ていない。

いや、着る必要がそもそも無いのか。

隠すものがそもそも無いのだから。

そして何よりヒトガタをヒトでは無いと断言出来る所があった。

食べていた。

そのヒトガタはスーツ姿の男を、クチャクチャ、と食べていたのだ。内臓を引きずり出し。

その血を吸っている。

気付けば至る所でそんな音が響いていた。

そしてヒトガタの上空を今度は機械のヒトガタが通り過ぎる。

ここにもし。JS事件の当事者が居れば目を見張った事だろう。

そのヒトガタは、まるでガジェット2型に手足をくつつけたような不細工は造形をしていたのだから。

ヒトは無く。

ヒトガタが席卷する世界。

そう、クラナガンは静かに地獄と化していた。

「……こっちも、か」

瞬間。

声が響いた。

それに男を喰らっていたヒトガタが顔を向ける。

その後ろのガジェットもどきもだ。

そこ居たのは銀の髪に紅の瞳。

黒のバリア・ジャケットに身を包み、大剣を肩に担ぐ少年だった。

その顔は悲痛に歪んでいた。

視線の先に居るのはヒトガタに喰われていたスーツの男性。

その顔には恐怖が、そして苦痛が張り付いていた。

‘生きながらにして’喰われたのだ。

その苦痛はいかほどのものなのか。

少年は、神庭シオンは一瞬だけ目を閉じる。

黙祷だ。

それを好機と見たか二つのヒトガタが一斉に動く。  
片やシオンを喰らわんと、片や敵対者を殺すべく。  
しかし。

「神覇、壺ノ太刀」

声が響く。

その声には後悔。悲哀が込められていた。  
そして、何より。

「絶影」

憤怒が。

「閃！ 閃！」

二つのヒトガタの動きが止まる。

シオンの姿は既にその前には無い。

その後ろにあった。

大剣。イクスを振り下ろした姿で残心している。

そして、数瞬の間をもって、落ちた。

二つのヒトガタの半身が。

ごとりとコンクリートの地面に落ち。

遅れて残りの部分が倒れた。

それをシオンは見て、残心を解いた。

「……ごめん」

しゃがみ込む。

目の前にはヒトガタに喰らわれていた男がいた。



瞼に手を当て、閉じさせた。  
できれば然るべき所に埋葬してやりたい。  
だが。

「そうも、いかない。か」

キロリとシオンは視線を巡らせる。

そこには、先程叩き斬ったヒトガタが居た。

半身を斬った筈なのに、五体満足である。

何故か。

それはヒトガタの周囲のものが物語っていた。

アポカリプス因子。

いや、アンラ・マンユが。

ヒトガタは感染者だった。

そして。

ビルの影から。

路地から。

まるでシオンを囲むようにヒトガタが現れる。

さらに上空には機械のヒトガタ達が。

総数30程の2種類のヒトガタ達。

それを前にしてシオンは。

笑った。

凄絶に、怒りに燃えた瞳で笑う。

「悪いが、よ。俺。今凄まじく機嫌が悪くてよ……」

イクスを構える。

同時にヒトガタ達も前に、シオンに進んだ。

「ただで帰れるなんざ、思うなよ？」

瞬間。

30のヒトガタが一斉にシオンに突っ込んだ。



突っ込んでくるヒトガタ達。

それをシオンは冷ややかに見詰めながら前進する。

「セレクト・ブレイズ」

トランスファァー。

ー閃ー

悲鳴があがる。

感染者のヒトガタ達からだ。

シオンの前に居た三体のヒトガタ達は片腕を失っていた。

シオンがブレイズに変換と同時に両のイクスで伸びてきた手を斬り落としたのだ。

さらに前進して、囲みを突破しようとする。  
だが。

「……っ」

ー弾・弾・弾・弾・弾ー

響く、銃声。

ガジェットもどきから放たれた銃弾達だ。  
質量兵器は禁止の筈だが、敵にとっては関係あるまい。  
それに。

（今の状況なら逆に助かんな？）

それだけをシオンは思う。

身体を横に回す事で追撃の銃撃を回避。  
そのまま、障害物、の後ろに回る。

悲鳴が上がった。

感染者のヒトガタ達から。

背中を銃弾で貫かれたのだ。

しかし、ガジェットもどきは止まらない。

そのまま左手の銃。マシンガンを撃ち続ける。  
が。

「双牙・連牙」

一閃一

地を走る四条の剣閃。

それが銃弾を受け続ける感染者のヒトガタごと、ガジェットもどきに叩き込まれる。

感染者のヒトガタはともかく、ガジェットもどきに再生能力など無い。

銃撃を浴びせていたガジェットもどきは、剣閃を受け、そのまま崩れ落ちた。

シオンは止まらない。

「セレクト・ノーマル」  
トランスファー。

ノーマルに変換。

大剣となったイクスを銃撃を受け続けていたヒトガタ群に真下から叩き込む。

魔力放出。

「ヒュウッー！」

鋭い呼気と共に一気に振り上げる！

ー轟！ー

激烈な一撃。

それを受けて三体のヒトガタがシオンの真上に吹き飛ばされる。

それは同時に一つの結果を齎した。

シオンの背後。上から襲い掛からんとしたヒトガタに吹き飛んだヒトガタがぶつかったのだ。

ちようど三体ずつ。

合わせて六体。

「セレクト・ウィズダム」  
トランスファー。

ウィズダムに変換。

同時にシオンは突撃槍と化したイクスを振り向き様に突き出す！  
イクス・ウィズダムは内部から展開した。

「剣牙・裂！」

ー轟！ー

叫び。

同時に展開したイクスの先端がロケット噴射よろしく、内部の魔力を開放し、宙に留まる六体のヒトガタを一気に串刺す！  
シオンは止まらない。

「ああああああっ！」

フル・ドライブ！

ー破！ー

魔力開放。

イクスの内側の魔力が勢いよく放出された。  
いっそ、砲撃と見間違う一撃に、貫かれていたヒトガタ達は内側から弾けた。

ー爆！ー

爆発の如く内部から弾けるヒトガタ達。  
そのまま塵と化した。

（ヒトガタ六体。ガジェットもどき三体！）

合わせて九体。

それを確認しながらシオンは空いた左手を背後に振るう。

「セレクト・カリバー」  
トランスファ―。

カリバーに変換。

右の突撃槍は短槍となり、しかし展開したまま。  
左手には片刃の長剣が握られ。

―閃―

‘背後’のヒトガタ2体を腰から両断する。  
だが、ヒトガタが、にい。と笑うのをシオンは確かに見た。  
ヒトガタは両の手を広げる。  
シオンに五指を向け。

「―っ！。ちいっ！」

―閃―

伸びた、指、が！  
五本の指が余すことなく伸びる。  
2体だから合わせて20の指が。  
シオンは無理な体勢になる事を承知で身体を捻る。  
そこを指が通過。  
薄皮一枚を指が裂いていく事をシオンは自覚する。  
指は一つ足りともシオンに刺さる事は無かった。  
だが。

シオンに指を伸ばしたヒトガタの更に後ろから三体のヒトガタが現れる。

空中に飛び、その指を伸ばさんとシオンに向ける。  
シオンは動こうとして。しかし、通り過ぎた指が自分の身体を固定

している事を知った。  
動けない。  
だが。

「……間に合った、な」

シオンはそのままで笑う。  
直後。

「クロス・ファイアー……！シュー……トっ！」

ー発！ー

オレンジ色の十五の光弾が、シオンを攻撃せんとしたヒトガタと指を伸ばしたヒトガタに纏めて叩き込まれる。  
響く悲鳴。

同時にシオンの拘束が緩む。

それを確認したシオンは一気に上空に舞い上がり、拘束から抜け出した。

それを見たヒトガタが許さじとシオンを見上げ。

「デイバイン・バスター……！！」

その背後から更に叩き込まれた蒼の砲撃に飲み込まれた。  
ヒトガタは今度は悲鳴すら上げられず、光砲により全身を消し飛ばされる。

光砲は勢いを減衰せず。  
さらにシオンのそのまた後ろに居たヒトガタ2体とガジェットもどき三体を飲み込み。

ー轟！ー

そのまま破壊を撒き散らしながら突き進んだ。さらにヒトガタ7体。ガジェットもどき2体。先程シオンが潰した奴らと合わせて、十八体。しかも、ヒトガタはこれで全部消えた。

後は頭上を飛び交うガジェットもどきのみだ。

シオンは空へと翔けながら、残り十二体のガジェットもどきを視認する。

向こうもシオンを確認し、その左手のマシガンでシオンに向けるが。

ソニック・ムーブ！

ー閃ー

雷の光りが一直線に走った。

それは空間をジグザグに飛びながらガジェットもどきを3体、すっ飛ばした。

雷光の主は高速機動を止めると、空中に足場、を展開。空に留まる。

エリオ・モンデアルだ。

これがトウヤからのエリオへの宿題。

空中への足場の展開である。

これにより、エリオは空での高速機動が可能となり、今みたいなマネが出来るようになったという訳だ。

空中に止まるエリオに、五体のガジェットもどき右の手を向ける。

そこがパカンと開いた。

二つ程のミサイルだ。

それは空中に解き放たれると同時にその尻から火を吹く。



一気に走りだした。

合計六のミサイル群が。

しかし、エリオは動かない。

動く必要が無いからだ。

そう、空中にはもう一人。シオンが居る。

「剣牙・裂・連牙！」

―裂！―

―閃！―

短槍のイクスの先端が真ん中のガジェットもどきを貫き、そのまま突き進みがてらミサイル群を二つ破壊。

さらに長剣のイクスから放たれた剣閃が、左右のガジェットもどきを両断。

これまたその勢いを殺さず、ミサイル群を破壊する。  
直後。

―爆―

ミサイルが爆発。

空に火の塊が現出する。

それは残り六体のガジェットもどきの足を止めた。

爆発に巻き込まれる事を避けたのだ。

そして、それが致命的だった。

「フリードっ！」

「G A a a a a a !」

声が響く。

少女の声が。

六体のガジェットは同時に振り向き。  
しかし。

「ブラスト・レイ。ファイアっ!!」

遅かった。

ガジェットもどきのさらに上。  
そこから焰の奔流が放たれ。

ー轟!ー

足を止めてしまったガジェットもどきは纏めて飲み込まれ。  
爆砕した。

地獄と化したクラナガンに、たった少しだけの静寂が戻った。



「ふう……」

ヒトガタ群とガジェットもどきが消えた場所。  
そこでシオンが空から戻る。

エリオとキャロも、だ。

更に、スバル。ティアナが駆けてくる。

二人にシオンは片手を上げた。

「悪い。助かったわ……。て、うお……」

「アンタ、て人はいつつも、いつつも一人で突っ込んで……!」

駆け寄って来たティアナに胸倉を掴まれ、引き寄せられる。  
相当お怒りのようである。

いや、いきなり一人で突っ込んだシオンが悪いのだが。

「悪い。いや、マジに」

「アンタがそう言って、今まで反省した事があるかー!」

ガーーーー。と、吠えるティアナをスバル達がまあまあと宥める。  
それにティアナは嘆息。漸くシオンを離す。

「……今度から単独行動は絶対禁止!。分かった!?」

「お、おう……」

ティアナの剣幕に押され、シオンがガクガクと頷く。  
漸く人ごちついた。

「……に、しても、千、を越える感染者のよくわからんヒトガタに、  
ガジェットもどき、か……」

「……それなんだけど、シオン……」

「ん?」

スバルがシオンに呼び掛ける。  
それに? マークを浮かべる。  
シオンに、スバルは口を開いた。

「……また、増えたみたい。……千体くらい……」

「……マジ？」

「残念ながらね」

「……はい」

スバルが告げた事を更にティアナとキャロが肯定する。  
それにシオンは頭を抱えた。

「……何が、本当。何が起きてんだかな……」

「ですね……」

シオンの言葉にエリオも頷く。

クラナガン一体はまさしく感染者のヒトガタとガジェットもどきが  
うようよする魔窟と化していた。

「……地上部隊も総員を動員して何とか持ち堪えてるみたいですが  
ど……」

「……対感染者戦に、慣れてない部隊じゃあ対応が遅れる、か……」

そう。

今までシオン達が戦って来た感染者達との戦闘記録はあるものの、  
未だに対感染者と戦いに地上部隊は慣れていなかった。

必然。

その再生能力や、異様な能力に押される事になる。  
しかも。

「……今回の感染者。何か、おかしいしな……」

「シオン。アレに見覚えとか無い？」

「全、然」

ハアっとため息を吐く。

確かに感染者が集団発生する場合はある事にはある。

だが、その動きは決して集団戦闘を行うようなものでは無かった。しかし、今回の感染者達は、まるで群体のように動くのだ。

まるで誰かに操られているような・・・。

「……なのは先生達は？」

「なのはさん達、隊長陣は空隊の指揮しながら、空を押さえてくれるよ。ギン姉達は私達と同じ地上の遊撃」

「……。成る程ね」

ミッド地上部隊は対感染者戦闘に慣れてない。

必然。

慣れている自分達が主力となる訳だ。

「とりあえず、ここら一帯はどうにか出来たな」

「……そうね」

「……うん」

シオンの言葉に頷きながらも一同の顔は暗い。

それは民間人の犠牲者が少なからず出てしまっている事にあった。

ここら一帯だけでも数十人単位で犠牲者が出ている。

しかもアレ、だ。

最初、スバルやティアナ。キャロは全く動けなくなる程だった。（

シオンやエリオは、辛うじて耐えた）

何とか、三人が戦線に復帰出来たのは、実はついさっきの事なのだ。

「……とにかく動くぞ。どんだけ感染者やらガジェットもどきが居るか知らんけど。……これ以上、犠牲者出してたまるか」

「うん！」

「そうね」

「はい」

「頑張ります！」

一同頷く。

そして次の場所に向かった。  
戦場へと。

（後編に続く）

第三十四話「反乱」(前編)(後書き)

……はい。もう開き直るしかありません(涙)。今回も前後編です。  
いや、本当。なんで一話に纏められないかな俺(汗)

むう……。後編。すぐにお届け出来るよう

に頑張ります。ではでは、また後編でお会いしましょう♪

第三十四話「反乱」 (後編) (前書き)

はい♪どうにかこうにか書けました♪テストメントです♪……ぶっ  
ちゃけ事件は解決してませんが(汗)。いや、本当。なんでこんな  
に文字数増えるんだろう(汗)。ではでは、後編。どうぞ〜♪



### 第三十四話「反乱」(後編)

ミッドチルダ首都クラナガン。

そこで悲鳴が上がる。

少女である。

顔を真っ青にして必死に走る。

それを追うのはヒトガタだ。

よだれを垂らしながら少女を追う。

避難勧告や転送ポートによる避難はあった筈だが、少女は逃げ遅れたのだろう。

走る。走る。

それでも振り切れない。

それどころか、距離をドンドン詰められている。

さらに言うが増えていた。

もう、どのくらい居るのか、わからない程の数に。

その半分以上が、何かを、食べた証に口元に赤い何かがべったりくっついている。

(なんで……なんで!?)

少女は心の中で叫ぶ。

何故こうなったのか、と。

昨日までは普通だったでは無いか。

退屈だが、普通の日々。

なのに、何故こうなったのか。

何故。

何故

何故、何故。

何故！

「っ………！」

瞬間。

少女は悲鳴を上げて前に転がる。  
急に履いていたローファーが裂けたのだ。  
ヒトガタから伸びた指の一閃によって。

「っ………あ。何で………！」

早く起き上がらなくては。

そう思い。

しかし、上手く立てない。  
十数分全力で走り続けていたのだ。  
体力は既に限界だった。

「いやあ………やだ………」

それでも逃げようと腕だけで少女は前に向かう。  
だが。

それを嘲笑うかのように、ヒトガタが少女の周囲を囲んだ。

「やだ………やだ………」

涙を流して嫌々をするように首を振る。

ヒトガタはそれにニイと笑い。

そして。

一斉にバクンと口を開いた。

「！！！！」

少女は声にならない悲鳴を上げた。

もう、ダメだと。

目をきつく閉じる。

一秒。

来ない。

二秒。

まだ来ない。

三秒。

何も来ない。

流石におかしいと少女は思い、そおつと目を開く。  
そこには。

剗

劍。劍。劍。劍。劍。劍。劍。劍。劍。劍。劍。劍。

無数の剣の群れが地面に突き立っていた。

ヒトガタの姿はどこにも無い。

居なくなっていた。

ーソードメイカー・ラハブー

少女は声を聞いた。

音を一切介さない、声を。

そして少女は見た。

振り落ちる剣の群れ達を。

千ではきくまい。

何せ、自分が見る空いっぱいには剣があるのだから。

そして剣群達は、一時の間をもって全て。

振り落ちた。



クラナガンの空に赤の壮年の男の姿があった。

無尽刀。

アルセイオ・ハーデンの姿が。

その視線の先には先程己が成した結果があった。

クラナガンの街の一带の至る所に突き立つ巨剣群だ。

その全てが、感染者のヒトガタや新型の人型ガジェット。

ガジェット5型達’のみ’を正確に射抜き殺し、もしくは破壊していた。

今の一撃だけで五百以上のそれを潰した事になる。

アルセイオはそれを詰まらなそうに見遣り。

「待たれよ」

背後から刃を突き付けられた。

背中に触れる刃の感触に苦笑しながらアルセイオは目を向ける。

そこには、白の装束を纏う三人の姿があった。

一見して見分けがつかない。

背格好が似ているという事もあるが、何より見分けをつかなくさせている部分があった。

鼻までマスクのよなもので隠してあったのである。

そして、アルセイオに三人共が刃。短剣を突き付けていた。

「今のは」

「どういう」

「つもりか？」

三人が一つの事を順に話す。

まるで三人で一人のようだ。

「何がよ？」

いけしゃあしゃあと言い放つアルセイオに、三人の目元が全く同時にピクリと動く。

そんな所まで一緒になくてもいいだろうに。

と、アルセイオは内心で苦笑する。

「惚ける」

「おつもり」

「か？」

「今」

「貴方が」

「倒した者達」

「の事」

「だ」

・・・色々面倒くさい奴らだな。  
話すのもそうだが、この三人が送られてきた理由も解っている。  
つまり、自分の監視であろう。

アルセイオは嘆息しながら三人を無視。  
コンソールを空中に展開、操作する。

「我等の」

「問いに」

「答えて貰おう」

「……うっせえな。気分だ、気分。文句あるか」

アルセイオのあんまりの答えに三人は絶句する。  
この作戦は管理局と対立する上でも大事な作戦だ。  
それを気分で妨害するなぞ。

「貴方は自分が」

「何を言っているか」

「解っていらっしゃるのか？」

「……俺の言葉が聞こえなかったか？。うっせえ、つったろうがよ？」

アルセイオが三人にちらりと目を向けた。  
瞬間。

三人は足元からぞわりという感覚を得た。  
悪寒である。

アルセイオの視線に、恐怖したのだ。  
殺気を放たれた訳でも無いのに！

「「……………」」

「そうそう。静かにしてりゃあいんだよ。静かにな」

三人が黙り込んだ事に頷き、アルセイオはそのままコンソールを操作する。

通信だ。

しばらくの間を持って漸く繋がった。

通信の相手はグリムだった。

《……無尽刀か。どうしたのだ？》

「いやぁ。提督に一つ聞きたい事がありました」

へらへらと笑うアルセイオにグリムも目を細める。

しかし、そのまま口を開いた。

《……聞こう。何だ？》

「いえね。因子兵や新型のガジェットなんですけど、管理局局員ならともかく何故に一般人を襲ってんですかい？」

《何だ。そんな事か》

詰まらなそうに、グリムが笑い。

それにアルセイオの目元がピクリと動くが、グリムはそれに気付かなかった。

《あんな低脳共、生きていても仕方あるまい？。だから私が襲うように指令を出したのだよ。こう言った時に自我を持たない存在は役に立つ》

「……それは上の指示で？」

《いや、私の独断だが？。問題あるまい》

ことも無げにグリムは言う。

つまり自分が気にいらなから一般人も殺そうとしている訳だ。自分が何をしているか、自覚はあるのかね？。

そうアルセイオは内心思う。

だが、恐らくはあるまい。

この男はそう言った男だ。

《どうだね？。’害虫退治’は見ていてスツとするだろう》

「……今すぐ、止めていただけませんかね？」

《……何？》

得意げに笑っていたグリムはアルセイオのその言葉に表情を一転させる。

訝し気な表情に。

「止めていただけませんかね？」

《……何故だ？》

「俺が気に食わねえからです」

きっぱりと言うアルセイオにグリムはしばしア然とする。しかし、怒りに顔を染めるとすぐに吠えた。

《……貴様。現場の指揮官は誰だと思ってる！？》

「提督ですね」

《そう。私だ！。その私に意見するか、貴様——！》

「もし、止めていただけない場合は」

グリムに最後まで言わせず、アルセイオは言葉を放つ。タイミングを逸してグリムが口をつぐんだ。



「俺等の隊はまるごと敵にまわらせてもらいますわ」

《な……！。貴様。自分が何言ってるか……！》

「勿論。そして俺らがいないと提督の作戦が成り立たない事も、ね」

グリムが絶句する。

アルセイオはそれを冷ややかに見ながら最後の言葉を放った。

「提督も解っているでしょうが？。俺の能力。こう言った場にはうつてつけど」

《ま、待て。待ってくれ……》

「ならば止めていただけるので？」

アルセイオの最後の言葉にグリムはしばらく、あ、や。ぐ、と悩み。暫くして漸く口を開いた。

《……いいだろう。今すぐ一般人への攻撃は止めよう》

「解っていただけて何よりですわ。それでは」

《……ああ》

通信が切れる。

それを確認してアルセイオは背を振り返り肩を竦めた。

「ま、こう言う訳だ」

「「「ぬ、う……」」」

三人が呻くように声をあげる。

それに冷ややかな視線を送りつつ、アルセイオはゆっくりと移動を開始した。

「何処へ」

「行く」

「おつもりか？」

「決まってるだろうがよ。ポイントだ。もうすぐだし、な」

三人に返しながら手を振り、アルセイオは移動する。  
振り返らずに三人に声を放つ。

「手前えらも、さっさとポイントに行けや」

「言われずとも」

「そうさせて」

「貰う」

「そうかい。じゃあな」

三人の返事にアルセイオは頷くと、そのまま速度をあげる。  
その進行方向は、海であった。



ー弾・弾・弾・弾・弾ー

光弾が疾る。

それは迷いなく突き進み、ヒトガタの集団にぶち込まれた。  
あがる悲鳴。

だが、それを無視するかのように二つの影が走る。

シオンとスバルだ。

シオンが先頭でスバルがそれに続く形で走る。

「フォロー。頼む！」

「うん！。任せて！」

叫び、頷く。

そのままシオンは魔力放出。  
その魔力を全身に纏う。

「神覇、伍ノ太刀ー」

イクスを突きของ構えにして、ぐっと一步を踏み込む。  
地面を踏む反発力をそのまま利用し、前に突き出た。  
イクスを突き出す。

「剣魔！」

ー轟！ー

直後。

空氣が割れた。

剣魔による突撃が空氣をぶち抜いたのだ。

渦を巻く空氣を斬り裂き、一氣にシオンが駆ける。

突貫だ。

それに気付いたヒトガタ達が指をシオンに一斉に伸ばす。  
この指。

どうにも槍のようであり、指先はかなり硬質化している。  
人など軽々と貫くだろう。

だが、今の。

剣魔を展開したシオンにはその一撃は無意味だった。  
伸び来る指。

そのことごとくが剣魔に弾かれる。

進行を止める事すら出来ない。

そのままシオンは真っ直ぐヒトガタの集団に突き進む。

ー轟ー

一切の停滞無く、突き抜けた。

ヒトガタの集団を全て蹴散らしながらシオンはカウントする。

(これで、二)

「ーースバル!」

背後に叫ぶ。

スバルはそれに一つだけ頷き、マッハ・キャリバーをもって疾走。

再生し、立ち上がらんとする集団の中央まで移動。

その前進力を回転力に変換しながら、蹴りを放つ。

ショットガン・キャリバー・シュート。

「やあああああつ!」

吠える。

同時に放たれる回転蹴りがヒトガタに直撃。

ーー止まらない。

そのまま、回転を続行しながら蹴りを連発。

集団を纏めて蹴り飛ばす。

(3!)

「シオン!」

「合わせろ!。スバル!」

トランスファー

ブレイズへと変換。

さらに瞬動で一気にスバルの真横にシオンは移動する。

ヒトガタは宙に浮いたままだ。

同時。

スバルのリボルバー・ナックルがカートリッジをロードする。

「神覇、壱ノ太刀ー」

「リボルバーー」

シオンが地を蹴り、空へと翔け。スバルが右手を空に突き出す。そして二人は同時に吠えた。

「絶影・連牙っ！」

「シューートっ！」

ー閃・閃・閃・閃・閃ー

ー轟ー

無数の剣閃が近場のヒトガタを細切れにし、剣閃が届かないヒトガタを渦を巻く衝撃波が容赦なく巻き込む。

（（これで、4！））

「「エリオ！」」

「ああああああっ！」

叫びが響く。

シオンの真上から！

エリオが上から降ってきたのだ。

ストラーダは2ndフォルム。

デューゼン・フォルムだ。

檣から火が吹き出し、エリオは地面に突き進む。

そのままシオンと交差し、3rdフォルム。

ウンヴェッター・フォルムへと変換。

さらに足場を空中に形成。

ヒトガタがばらばらに散る中央に着地する。

同時、ストラーダが雷光を纏った。

「雷光一閃！」

ライトニング・スラッシャー！

―斬―

雷を纏う斬撃を回転と共に放つ！

横に一周し、ぶぁっと空気が広がった。

瞬間。

―雷！―

宙に浮く、全てのヒトガタに雷が疾った。

それは纏めてヒトガタを焼き尽くす。

(……これで、5)

直後、宙に浮く、全てのヒトガタは塵となり消えた。



シオンは空を一回転しながら地面に下りる。

エリオは既に地面に下りており、ティアナ、キャロが少しの間をもつて合流した。

「キャロ。ブーストありがとな」

「いえ。シオンお兄さんもエリオ君もスバルさんも大丈夫ですか？」

「うん。問題ナシ♪」

「僕も大丈夫だよ」

頷き、互いの状況を同時に把握する。

ここまで殆ど無傷だ。

基本的に感染者との戦闘では、連携戦闘で再生させる前に止めを刺すか、絶え間無く攻撃し続け。

再生数を限界まで追いやるのが、セオリーである。

故に感染者と戦う者は無傷で済むか、大怪我。もしくは死ぬかしかなしい。

無傷で済む場合は、連携戦闘で反撃をさせないままに倒した場合で、大怪我、もしくは死ぬ場合は、その連携攻撃が凌がれた場合である。この場合は感染者は再生能力を持ったため、連携攻撃をしかけた者は必ず隙だらけとなるからだ。

「で、やっぱり5回だったな。……ティアナ？」

「うん。今、ギンガさんとも連絡取ったわ。……向こうでもやっぱり5回以上は再生しなかったみたいね」

「そっか……」

一同ティアナの言葉に頷く。

クラナガンに蔓延するヒトガタだが、どうも再生回数に限度があるようなのだ。

その数5回。

今の戦闘も砲撃等の技で消し飛ばさず、斬撃や射撃であえて再生回

数を調べたのだ。  
結果は正解だった訳だが。

「キャロ。お手柄ね」

「いえ……。ひよっとしたら、て思っただけですし、ティアさんが試してみよう、て言い出したんですし」

にっこりと微笑むティアナにキャロが照れる。

事の起こりはキャロが。

「……また5回……」

と、呟いたのをティアナが聞き。

さっそく現れたヒトガタでカウントしてみたら案の定だった訳だ。  
その後、N2Rに連絡を取って、今の戦闘に至る。

「さっそく。対策本部に報せないとね」

「おう」

ティアナがクロス・ミラージュに呼び掛け、本部に通信する。

手持ち無沙汰になった他は、とりあえずカートリッジの残弾や、魔力の残りを確認する。

「……三人共、魔力まだ大丈夫か？」

「うん。私はまだ大丈夫だよ。後六割くらいかな」

「僕も問題ありません。後五割程です」

「私もエリオ君と同じくらいです」

「そか……」

「シオンは？」

皆の残魔力を確認し、頷くシオンに逆にスバルが聞く。  
シオンは左手を開きその真ん中に三つ指を置いた。



「後、八割半。て、所だな」

「……前から思ってたけどシオン。魔力量多いね？」

「そか？」

「そうよ」

首を傾げるシオンに後ろから声が掛かる。

通信を終えたティアナだ。

「ちなみに私は後六割ね。……にしても1番魔力使ってる筈なのに、  
アンタどんだけよ」

「……そんなに使ったか？」

「」「使ってるよ／わよ／ますよ／いますよ」「」

四人から断言されて肩を竦める。

アビリティー・スキル。

特に魔力放出は完全に魔力消費型のスキルなので、反論は出来ない。

「……俺の事はいいや。で、本部は？」

「ええ。やっぱり掴んでなかったみたい。『重要な情報感謝する』  
だって」

「……そか。なのは先生達や、N2Rの皆はどうしてる？」

シオンの問いに頷くと、ティアナは空中にウィンドウを展開する。  
コンソールを叩き、クラナガンの地図を出す。

自分達の現在位置やなのは達、N2R達の現在位置を打ち込む。

「私達は今、ここね」

そう言って、赤点が点滅するのはクラナガンの東側だ。

「続いて、N2Rがここ」

「……反対側か」

シオンがフムと頷く。

地図の反対側。

つまり西側で赤点は点滅した。

「最後になのはさん達が、と」

「……随分散らばってるね？」

「空隊の指揮もそれぞれ任せられてるみたいだからね。八神艦長も出てるみたい」

「……はやて先生も、か」

最後に点滅する赤点は地図のそこかしこに散らばっていた。空隊の指揮をそれぞれ取りながら戦っているであろう。ならばそれぞれ散らばる訳である。

「……後、北側でいきなり五百くらいヒトガタとガジェットもどきが破壊された、て話しだけど……」

「……タカ兄いじゃねえだろうな……」

とりあえず、いきなり、五百体も潰せそんな人間を挙げてみる。暴虐たる精密攻撃たる天破水迅など、今回の迎撃にうってつけであろう。

しかも感染者がらみだ。

出て来る可能性はある。

しかし、ティアナは首を振った。

そのまま告げる。

「……現場には大量の剣群が地面に突き立っていたそうよ」  
「ーっ！」

シオンが絶句する。  
大量の剣群。

そんな真似が出来る心当たりがシオンにもただ一人だけ居た。

「……おっちゃん……」

「間違いないと思うわ」

呆然とするシオンにティアナが頷く。

シオンはしばし啞然とし、しかし。頭を振った。

「……そか」

「シオン。大丈夫？」

「心配すんな。……大丈夫だよ」

口端を少し歪め、シオンは笑う。

「おっちゃんには、まだいろいろと礼をしてねえからな。……全部  
ひっくるめて纏めて返すさ」

「……そう。でも、解ってるわね？。こっちに協力してくれてる分  
には……」

「解ってる、て」

苦笑しながらも頷く。

それを確認して、ティアナも頷き、一同を見回す。

「よし。それじゃあ次にー」

行くわよ。と、言おうとして。

《やあ、ミッドチルダ。クラナガンの諸君》

声が響いた。



《やあ、ミッドチルダ。クラナガンの諸君》

「ーーーーっ！」

クラナガンの空。

そこに八神はやてはいた。

今は守護獣ザフィーラにガードされつつ、空隊を指揮。

さらに広域魔法や支援魔法でガジェット5型を蹴散らしていたのだが。

「この声……。グリム・アーチル提督!？」

《その声は八神はやて二佐か》

はやての名を呼ぶ声が響くと同時。

空に巨大なモニターが映った。

そこに、痩せぎすな男の姿が映る。

グリム・アーチルの姿が。

《おとついぶりか。八神二佐》

「……アーチル提督。これはどう言うことでしょう？」

問う。

半ば予想出来ている答と共に。

グリムはそんなはやてに鼻をフンと鳴らした。

《見てわからんかね？》

「……援軍、てわけやないみたいですね」

《勿論だとも。今、そこにある兵。因子兵と新型のガジェット達は、私、が指揮しているのだから》

やはり。

はやては分かっていた事とはいえ、顔を歪ませる。

「……何でこんな事を？」

《ん？》

「何でこんな事をしたのか、て聞いてるんや！」

叫ぶ。

敬語は既に無い。

感情のままにはやては叫んでいた。

それにグリムはククッと笑う。

はやての姿が滑稽だと。

《何が目的か、か？。そうだな。身の程を教えに来てやったのさ》

「……何やて？」

問い直す。

グリムの言っている意味が分からなくて。

しかし、グリムは構わず笑う。

《身の程を教えてやろうと思った、と言っただろう？。君に。そして、管理局の低脳どもに。さらに言うならただ漫然と平和を貪る愚民達にな！》

「……」

この男は何を言ってるんだろう？

真剣に、はやてはそう思う。

グリムはそんなはやてに目もくれず、ただ、己に悦る。

《どいつもこいつも低脳ばかり！。法の守護者？。何だ、それは？。まどろっこしいだけでは無いか。最初っから我らが全ての世界を支配して、管理、運営してしまえば済む話では無いか！》

人はそれを傲慢と言う。

全てを支配して、全てを自分のモノにしてしまえ管理する。

それはつまり、他の文化や体制を滅ぼすに等しい。

管理局の唯一の誇りは、守護者たりえども支配せず、にある。並び立てるように。

決してどの世界も下に見ないように。

だが、それをこの男はあっさりと否定した。

無駄だと。

さらにグリムは続ける。

《管理内世界の者も、ミッドの住人どももだ！。全てを管理局任せにして、何かあれば我らが悪い、我らが悪い！。……権利のみを主張する。守らればかりの貴様らが何かを言う権利なぞあるものか！。貴様らは大人しく守られていればいいのだ！》

管理局はあくまで一組織に過ぎない。

巨大な組織であり、超法規的な組織である事も確かだが、そこまで、なのだ。

そして、政事を預かるものがそうであるように、管理局には相応の責任を負う義務がある。

ましてや、管理局は軍としても警察としての側面も持つ組織だ。

何かあれば責められるのは当然である。

・・・支配者でも無い限りは。

《故に我らは決めたのだ！。管理局と敵対し、これを打破せん！。そして、全ての世界を我らが、管理、運営する事を！。そう我ら――》

叫ぶ。

手を広げ、全てを掴むかのように。

グリムは自ら達の組織の名を告げた。

《ツアラ・トウ・ストラは、ここに時空管理局に宣戦を布告する！。さあ――》

吠える。

グリムは今度こそはやてを見据えて。

はやてもまたグリムを睨みつける。

《さあっ！裁こう！世界の全てを！！そして我らにひざまずかせるのだ――！》

「アンタはっ！そんな下らない理由でこんな真似した言うんかつ！？」

はやてがクラナガンに左手を広げ、指し示す。  
グリムに見えるように。

今、クラナガンで何が起きてるか、見せるために。

「ここで、……今やって！。何人の人が傷ついたと思ってるんや！  
？。悲しんだと！。……死んでいったと！」

《些細な事だ》

叫ぶはやてにグリムは事もなげに言う。  
本当に、どうでもいいとばかりに。

「なん、やて……？」

《君もよくよく低脳だな。些細な事だ。……愚民がいくら死のうが、  
知った事か。むしろ、人員整理が出来て良い事だろう？》

コノオトコハホントウニナニヲイツテルンダロウ？

はやてはウィンドウの向こうの男が全く理解出来ない。

人が死んで、知った事で無い？

むしろ良い事？

理解出来ない。

理解出来ない、が。

許せなかった。

この男の言い分も、何もかもが、はやては許せなかった。

「……あんたは、あんただけは許せへん……っ！」

《フン。いくらでも吠えたまえ。私には届かんがな。さて、八神二  
佐。手土産がわりに、君達に良いモノを贈ろうと思う》

「あんたからの贈り物なんていらんわ……！」

《そう言ってくれるな。ではー！》

瞬間。

はやての足元に光が灯る。



魔法陣だ。ミッド式の。

だが。はてはこんなモノを展開なぞしてはいない。

《ーはやてちゃん！》

「え……っ！？」

瞬間。

なのはから通信が届く。

目の前にウィンドウが展開。

そこに映るなのは足元にもまた、魔法陣が展開していた。

いや、違う。

周りを見る。

ザフィーラの足元にも、それは展開していた。

つまりは。’アースラ隊全ての者に！’

しかもこの魔法はー！

（転移、魔法ー！）

《存分に受け取ってくれ。……絶望と、そして。地獄への切符を》

瞬間。

はやての視界いっぱい光が広がり。

転移魔法が発動した。



「くーっ！」

いきなり空中に投げ出されてシオンが呻く。

真下は海だった。

とりあえず、落ちるのは嫌なので飛行魔法を発動し、空を飛んだ。

「ー海、だと？」

【アースラとリンク。現在位置判明。ーっ！】

イクスの驚愕の声が響く。

それにシオンは目を向けた。

「……イクス？。どうした？。ここ、何処だ？」

【……現在位置、判明。クラナガンよりおよそ十八Km離れた海、だ】

「ーっ！」

イクスより齎された情報に、シオンは顔を歪める。

あの瞬間。

いきなり自分達の足元に展開した魔法陣。

あれは転移魔法だったのだ。

それぞれを孤立させる為の。

シオンは海まで飛ばされたみたいだが。

「……最悪だ……！」

呻く。

あの状況での孤立など、あまりにも危険過ぎる。

もし、あのヒトガタの群れに一人で囲まれたら。

スバルが、ティアナが。

エリオが、キャロが。

仲間達がそんな状況に陥っていないとも限らない。

と、言うより十中八九そうだろう。

シオンは顔を歪める。  
齒がギリと軋んだ。

「……イクス！。今すぐ皆の元にー！」

「……ところがギッチョン、てな？」

ソードメイカー・ラハブ。

瞬間。

ー剣ー

巨劍が。

ー剣・剣・剣・剣・剣・剣・剣・剣・剣・剣・剣・剣・剣・  
剣ー

巨劍の群れが。

シオンの上空に展開した。

「……これ、は……！」

「よう。また会ったな」

声がする。

聞き覚えのある声が。

それに、シオンはゆっくり振り返る。

そこには、見覚えのある。

赤の男が居た。

シオンを見てニッと笑う。

そこに、無尽なる刀の二つ名をもつ者がいた。

アルセイオ・ハーデンが。

「……おっちゃん……」

「おう。坊主」

シオンに片手を挙げる。

まるで朝の挨拶を交わすように軽く。

そして、その手をシオンに向けて。

下ろす。

瞬間。

―撃！―

万を越す剣群が、一斉にシオンに向けて放たれた。

（第三十五話に続く）



ア

「はい♪今日も来ましたアリサ道場〜♪」

ドンドンパフパフ♪

ア

「はい♪当道場の主。アリサです♪」

「弟子のすずかです♪」

シ

「そんでもって司会のシオンです♪」

ア

「いやあ〜。緊迫の事態が本編で続く中、ここでは相変わらずの  
テンションで行きます♪」

す

「また今回も長そうだよね……」

シ

「今回はいろんな意味でターニング・ポイントらしいんで♪。必然。  
話しはどんどん濃ゆくなっていきます」

ア

「……にしても、今回も長かったわね」

す

「しかも、まだ反乱編全然終わってないし」

シ

「ですね。起承転結で言うなら、まだ、起、ですし」

ア

「……本当、気が長い話しね」

す

「第三部。思った以上に長くなるのかな？」

シ

「そうですね〜。まだ○○やら、■■■■■やら、★★★★★  
やら、▲▲▲▲▲やらありますしー。他にも……」

ア

「エロい！」

ー撃！ー

シ

「ぶけはっ!。な、何故……?」

ア

「伏せ字ばっかでなんか卑猥なのよ!」

シ

「んな、理不尽な!?。そもそも変な事言ってますよ!」

ア

「うるさい、うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい!」

シ

「そのネタは危険!」

ーズガメキグシャボググチャプチャー

す

「ああ!。シオン君が文字で表すには十八歳未満お断りな状態にー!」

ア

「ふん!。天誅よ。……さて、では今回のおさらい!」

シ

「はい♪。今回のお話♪。妄想に人を巻き込むボケ♪。です♪」

ア

「……最近。復活早くなってない?。アンタ?」

シ

「え?。そんな事はないっすよ?」

す

「絶対、早くなってると思うよ?」

シ

「ええ……?。そうかなあ……。まあ、些細な事は置いときましょう♪」

ア、す

「「……些細？」」

シ

「些細です！」

ア

「……まあいいわ。で、グリムだけど……。何？。この痛キャラ？」

す

「見てて、きついよね……」

シ

「グリムは悪役と馬鹿成文を集めて作られたキャラなんで♪。なのはSS史上最強の痛キャラです♪」

ア

「史上最強の痛キャラ、て……」

す

「まあ、スリエッティよりも痛いけど……」

シ

「まあ、作者はぶっちゃけガウ○ンタイプの悪役が好きなんだけど、どうせなら痛キャラを書いてみよう。と、思い至ったのがグリムです♪」

ア

「……何気にひどいわね」

す

「本編でどんな目にあっちゃうのか、凄い気になるね……」

シ

「さて。では次♪。EX人気投票、途中経過発表くく♪」

ドンドンパフパフ。

シ

「はい♪既に忘れられてるんじゃないかと心配な人気投票です。途中経過を3位まで発表しちゃいます♪」

ア

「やっと途中経過発表か……」

す

「長いよね……」

シ

「そこ、シャラップです♪では、まず第3位♪。最強兄貴or執事。本当にアンタはボスキャラか？。伊織タカト……♪」

ア

「お〜。流石、我が執事ね。3位に入ったか……♪」

す

「海鳴温泉でも大人気だもんね……♪」

シ

「では、次行きます♪。第2位♪。鬱系主人公と言われつつ。それでも頑張らせていただきます♪第2位♪。神庭シオンです♪」

ア

「……あれ？。2位？」

す

「主人公なのに？」

シ

「……うっさいです……」

ア

「やっぱ、ちょっとダメージ受けてるのね」

シ

「シャラップ、す！。ではでは晴れある第1位♪。あれ？。一応サブキャラだよな？。第三部から大人気♪。スーパ〜おっちゃん。第1位♪。

アルセイオ・ハーデン……」

ア、す

「「うええええ……！！！」」

シ



「いやあ、驚きです♪。恐るべきおっちゃん」

ア

「……いや、本当。びっくりだわ……」

す

「……凄いね……」

シ

「いや、本当に。さて、人気投票ですが、まだまだ受け付けております♪。投票形式はシルフレや海鳴温泉形式です♪1位、2位、3位をそれぞれ選んで下さいね♪。是非是非、宜しく願います♪。いや、マジに。……実は投票数が少なくて作者マジ泣きしかけたと言う(汗)」

ア

「なっさけないわね〜」

す

「まあまあ」

シ

「さて、では今回はこの辺で♪。ではまず謝辞を♪。いつもEXを読んで下さってる皆様♪。本当ありがとうございました♪。これからも頑張らせて頂きますので、これからもお付き合いの程、宜しく願います♪。ではでは〜♪」

ア、す

「「また次回〜♪」」

第三十四話「反乱」(後編)(後書き)

「グリムの策により孤立するアースラメンバー達」

「ヒトガタや、ガジェットもどき。謎の魔導士や、アルセイ  
オ隊が孤立するメンバーに襲い掛かる」 「そ

れにアースラメンバー達は……！」

「世界を斬る一刀が放

たれたる時。彼等がついに現れる」

「次回。第三十

五話。

『グノーシス』」

「知識の名を持つ者達がクラナガ

ンの空に舞い降りる」

### 第三十五話「グノーシス」(前編)(前書き)

「我ら全ての戦いを終えるための力なり」

「我ら全ての未来を照らし行く意気なり」

「我ら全ての遺恨を知りて進む者達なり」

「我ら全ての悪意を躊躇わず進む者なり！」

「我ら知識の名を冠せし蛇なり！」

「我らが名は――」

「魔法少女リリカルなのはS t S, E X。始まります」

### 第三十五話「グノーシス」(前編)

―撃!―

「っー!」

放たれた剣群。

それにシオンは内心悲鳴を上げながら、空中に足場を展開。瞬動で縦横無尽に、駆け回りながら回避に努める。

・・・否。

‘回避に努めざるを得ない’のだ。  
剣群の量が、あまりに多過ぎて。

「どうしたあ! 坊主!」

「ーおっちゃんっ!」

叫び。

更に放たれ行く剣群。

今か今かと放たれる事を待つ剣群に、シオンは顔を青ざめさせ。しかし。

「ーっ!」

前進する。

時に足場を踏み。

時に放たれた剣を踏み。

前へ、前へと。

進んで行く。

「はは。やるじゃあねえかよ？　なら……」

笑い、アルセイオが右手を掲げる。

瞬間。

辺りの微粒子を魔力が束ね。

一本の剣を形成した。

50 m超の極剣を。

「ぐ……っ！」

「これならどうよ!？」

吠え、極剣を振りかぶると同時に前に踏み出す。

ー轟ー

投擲。

同時に極剣が音速超過。

空気をぶち抜き、シオンへと迷い無く突き進む。

「こ……っの……!」

それにシオンは顔を歪める。

回避しようにも周りには大剣の軍勢。

一撃一撃が剣魔に匹敵するという。冗談のような攻撃だ。

そして向かい来る極剣。一見無造作に思わせつつ、完全に計算し尽くされた攻撃だ。シオンの回避性能を鑑みて放たれている。

今のままでは回避は不可能だ。  
直撃を貰う事になる。

そう、' 今のまま、' ならば。

「セレクト、ブレイズっ！」  
トランスファー！

シオンとイクスが同時に吠える。  
瞬間でブレイズへと戦技変換。  
近場の大剣を足場に身を捻り、瞬動開始。  
同時、極剣がシオンの眼前に迫る！

「っおら！」

踏み込み。

大剣がそれだけで碎けた。

それは同時に一つの事を意味する。

則ち、シオンは極剣に対して踏み込んだのだ。

既に、目の前にある極剣に踏み込みながら身体を背ける！

「お……」

アルセイオが感心の声をあげる。

その時点でシオンは極剣を回避していた。

「ぐ……う！」

自らの脇を掠める極剣に、シオンが顔をしかめる。

だが、極剣は回避出来た。

槍に対して地を丸太橋と思え、とよく言われる。

反復横飛びを連想して欲しい。

いくら早く見えようとも必ず左右に避け続けようとするならば、  
,

溜め’が必要になる。

一方向に回避し続けようとするならばさらに致命的だ。動きを見極められたら、その時点でアウトだ。ならばどうすればよいか。

それはシオンが証明している。

踏み込むのだ、前に。

だが、これは並大抵の事では無い。

なにせ、向かって来る槍（この場合は極剣）に対して、自分から、踏み込むのだから。

ここに必要なのは技術でも何でもない。

要るのは向かい来る攻撃に自分から踏み込む勇気であった。

アルセイオが感心の声を上げたのはこの為だ。

シオンが、真上を。アルセイオを睨む。

極剣をギリギリで避けた事はここでも一つの意味を得た。

つまり、極剣が通り過ぎた後の空間はアルセイオまで剣群が、無い。

道が出来ていたのだ。

シオンがぐっと、歯を噛み締め。

アルセイオが薄く笑う。

ーソードメイカー・ラハブー

ーブレイド・オンー

響く二つのキー・スペル。

二人は同時に動いた。

アルセイオは、その背に再び剣群を。

シオンは瞬動で一気に踏み込みを。

ー轟！ー

瞬間。

アルセイオは剣群を放ち、シオンは踏み込みと共に駆け出した。迫り来る、剣群の第2斉射。それを眼に収めながらも、シオンは愚直に前進する。

「お……」

声をあげる。

迫り来る剣群を前に。同時、足場を踏む力を更に込め、前へと身体を倒す。

「おおおっ！」

吠える。

同時に剣群が来た。

シオンは構わない。

剣群の真っ只中に突っ込む。

ー轟！ー

前進する。

前進する。

剣群をくぐり抜け、逆に足場へと利用して。それでも向かい来る剣群達は止まらない。

視界を埋め尽くす剣群を、シオンはくぐり抜けて行く。そして。

「っ……しゃあっ！」

抜けた。



視界を剣群が消え、アルセイオの姿を捕らえた。その距離、僅か5m。

シオンは歓声を上げ。そして、止まらない。そのままアルセイオに突っ込む。

アルセイオもまた応えるかのように右手に赤の長剣を握る。魔剣、ダインスレイフを。

シオンはそのままブレイズを維持。

双剣を構える。

突っ込むシオンにアルセイオはダインスレイフを構え。

そして宙空で長剣と双剣がぶつかり合う！

―戟！―

クラナガンより離れた海で、魔剣と聖剣は再びぶつかり合った。



「っー！」

―撃―

クラナガンの細い路地。

スバルはマッハ・キャリバーを唸らせ疾っていた。

迫り来る光球と巨拳を避けながら。

「待て待てー」

「……逃がさない」

疾るスバルを追うのは、アルセイオ隊の二人だった。

獅童リズと獅童リゼの姉妹。

そして、ガジェット5型と、例のヒトガタ群。

それらに追われながらスバルは時に反撃を放ちつつ、疾っていた。たった一人で。

「リボルバー……！！」

右のリボルバー・ナックルを突き出す。

同時にカートリッジ・ロード。

風を巻き、ナックルが回転を刻む。

「シュートっ！！」

ー轟ー

ナックルから放たれる衝撃波。

広範囲に渡って放たれたそれに一同纏めて足を止められる。

「むう……。またこんな技……」

「……足止め。悪くない」

両極端な姉妹の声をスバルはとりあえず無視。

踵を返すと、即座に疾走する。

（こんな状況で一人なんて……！）

ぐっと奥歯を噛み締める。

あの時。

グリムの演説の直後にスバル達はいきなり転送され、気付けば一人だった。

孤立されたと気付き、ティアナ達に通信を送ろうとしたのだが、直後に彼女達が現れたのである。

リズとリゼの二人が。さらにガジェットやらヒトガタが現れた段階でスバルは逃げを打った。

状況を見極めた結果である。

たった一人。

しかも、魔力も半分程では全部相手に出来ないと判断したのだ。なのはにしっかりと叩き込まれた状況判断の賜物である。

（ティア達に合流しないと……！）

ぐっとスバルは奥歯を噛み締める。

分かっている、

今心配しても意味が無いと言う事は。

それに、皆も強い。

こんな状況でも乗り切れると信じてる。

でも、それでも。

スバルの心は波打つ。不安に。

（皆、お願い。無事で……）

そして。

「シオン……」

この状況でおそらくは1番無茶をしそうな人の名を呼ぶ。

アースラメンバーの中でシオンだけが居場所が判明しなかったのだ。

・・・嫌な予感がする。

（お願い。無事でいて）

声に出さずに心の中で呼び掛ける。  
瞬間。

「ばあゝゝ！」

「……追い付いた」

リズとリゼが眼前にいきなり現れる。  
スバルは内心悲鳴をあげながら急停止した。

（もう、追い付かれたの！？）

「へっへゝゝん」

「……そう簡単に逃がさない」

「くっ！」

呻くスバルの背後から更に物音が響く。  
ガジェットとヒトガタだ。  
つまり前後を挟まれた。

「チェック・メゝゝイトゝゝ」

「……終わり」

「ーっ」

前にはリズ、リゼの姉妹。

後ろにはガジェットとヒトガタの群れ。  
前門の虎、後門の狼である。

それにスバルはぐっと息を飲み。  
しかし、構えた。

「……ここ。無理矢理でも突破するよ。マッハ・キャリバー」

了解です。相棒。

己が相棒デバイスの声にスバルは微笑み。  
そして。

「フルドライブ！ ギアっ！ エクセリオンっ！！」  
イグニッション！ ACS。スタンバイ、レディ。

吠え、同時にマッハ・キャリバーもその声に応える。

瞬間、マッハ・キャリバーから一対の光翼が生まれた。

同時にスバルの足元より三角に剣十字を象ったベルカ式の魔法陣が  
展開。

直後にリズ達が一斉にスバルに突っ込み。

スバルも、一気に駆け出した。



スバルから離れて10kmの地点。

そこにあるビルの中で、ティアナは身を潜めていた。

周囲をうろつくのは例のヒトガタ。

そして、ガジェット群だ。

これだけならばティアナはまだ突破出来る自信があった。  
だが。

「……いつまで逃げるおつもりですか？」  
「っー！」

響く声にティアナは顔を強める。

声の主は老人だった。

例のアルセイオ隊のバデスと同じくらいか。

細身の身体に軍服のようなデザインの服を着ている。

恐らくはバリア・ジャケットだろう。

老人はヒトガタやガジェットの群れの中心点にあって、しかしヒトガタもガジェットも老人を害そうとしない。

それが意味する事はただ一つである。

敵だ。

「……あまり手間をかけさせないで欲しいですな」

エクスプロージョン

老人が右手を掲げる。

その右手に持つのは銃型のデバイスだった。

ティアナは知らない事だが、その銃は地球でワルサーと呼ばれる銃に酷似していた。

「猟犬の勤めを果たしましょう。フライツツェ」  
はい。

老人の声が響き、同時。

ー弾ー

乾いた音が鳴る。

銃声だ。

瞬間。

ー轟！ー

崩壊した。

ティアナが潜むビルの隣にあるビルが。

「ーっ！」

それにティアナは顔を歪める。

ビルは粉微塵になり崩れていった。

まるで、分解、されたように。

先程、老人と接敵した時もそうだった。

こちらが放つ操作弾も砲撃も、例外なく分解されるのだ。

ただ一発の銃弾で。

フェイク・シルエットに、オプティック・ハイドまで駆使してどうにか逃げられたのだが。

（何か、手を打たないと……）

考える。

それだけを己に言い聞かせる。

今は自分一人だけ。

おそらく皆そうだろう。

一刻も早く合流する必要があるのだが……。

（あの銃弾に触れたら魔力でも物質でも関係無く分解される……）

出鱈目な能力である。

だが。

（絶対的、て程でもないわね）

それだけをティアナは思う。

先程の戦闘で分かった事だが、老人はベルカ式。銃弾はヴィータと

同じく微細な粒子を魔力で繋ぎ合わせて形成しているらしい。  
ならばあの攻撃はスフィアのように複数展開など出来ないと言う事  
である。

（付け込むならそこしか無い！）

老人に対しての方策は決まった。  
後は回りのヒトガタとガジェットだ。  
これをどうするか・・・。

「そう言えばまだ名乗っておりませんでしたな」

再び老人の声が響き、ティアナは思考から戻された。

「ベルマルク、と申します。以後お見知りおきを」

ー弾ー

老人の名乗りと共に、銃声が鳴る。  
直後、ティアナの居るビルが鳴動を始めた。

「っー！ しまっ……！」

「名乗って早々申し訳ありませんが、貴女には消えていただきまし  
よう」

老人、ベルマルクのその言葉と共に、ティアナの居るビルが崩壊を  
始めた。





「っ！ ストラード」  
エクスプロージョン！

クラナガンの街中でエリオが叫ぶ。

同時に愛槍であるストラードもまた吠えた。

カートリッジ・ロード。

同時に刃に雷光を纏う。

「その程度で」

「我らは」

「止められぬ」

声が響いた。

白装束の三人組だ。

その手には一様に奇怪な形の短剣が握られている。

おそらくはデバイスだ。

向かい来る三人にエリオは容赦無くストラードを振り下ろす。

「サンダーっ！ レイジっ！！」

槍を振り下ろす。

同時に周囲に雷が疾る！

ー雷！ー

雷はエリオを中心に広範囲に渡り疾り、白装束の三人に叩き込まれる。

しかし。

「止められぬ」

「そう言った」

「筈だ」

「く……っ！」

「閃！」

三人は雷に構わずエリオに突っ込む。

同時。突き、薙ぎ、振り下ろされる短剣達。

エリオはそれらを屈み、あるいはストラーダで弾きながら避す。

最後に突き込まれた短剣を弾く反動を利用してエリオは後方に飛んだ。

「アルケミック・チェーン！」

直後、エリオの後ろ。

5 m程から声が響いた。

キャロだ。

左手を突き出し、足元には四角の魔法陣が展開している。

そしてキャロの声に応えるように三人組の足元にも魔法陣が展開。

そこから銀色の鎖が飛び出す。

三人組を拘束せんとその身体に巻き付き。

「「散！」」

瞬間。

その姿が消えた。

鎖は標的を見失い。力無く、地面に落ちた。

「っー！ キャロ！」

ソニック・ムーブ！

「きゃっ……！」

エリオが高速で疾り、キャラを抱きかかえて空に疾る。足場を形成し、それを蹴りながら空に上がる。

直後、キャラが居た場所を三つの影が疾った。

確認するまでも無い。

白装束の三人組だ。

「「フリードっ！」」

「G A a a a a a a a a ツ！！」

エリオとキャラの声に応えるように咆哮が響く。

既にその真の姿を現したフリードだ。

口を開くと同時に、口顎に火球が灯る。

さらにキャラのケリュケイオンから光が火球に走る。

ブーストが掛けられたのだ。

「ファイアっ！」

ー轟！ー

直後、キャラの叫びと共に轟火が放たれた。

フリードより放たれた轟火は迷い無く三人に突き進む。  
だが。

「「「疾っ！」」」

再び、直撃の手前で三人の姿が消えた。

「まただ……！」

「速くて捉らえきれない……！」

「G U u u……」

三者三様の唸りをあげる。

エリオはキャロを抱えたまま、地面に降り立つ。  
フリードが横に並んだ。

それに合わせるように、三人組もエリオの前に再び姿を現す。

「……貴方達の目的は何ですか！？ 何でこんな真似をするんです！」

「答える」

「意味が」

「無い」

にべも無い。

先程からエリオやキャロが問い掛けてもこの調子であった。

「それに」

「聞いた所で」

「意味は無い」

「お前達は」

「ここで」

「死ぬのだから」

「くっー！」

三人の言葉に、エリオは顔を強め、一気に飛び出そうとして。

膝がカクンと落ちた。

「な……っ！」

「エリオ君！」

愕然とし、そのまま崩れそうになるエリオをキャロが支えようとし。しかし、キャロも同様に力が入らないのか。

膝から崩れ落ち。

二人して地面に倒れ込んだ。

よく見るとフリードも地面に伏している。

「これ……は……！」

「漸く」

「効いて」

「来たか」

その言葉にエリオはぐっと唸る。

しかし、身体に力が入らない。

キャロもフリードも同様であるらしかった。

「微量とは」

「言えど」

「この毒を受けて」

「あそこまで」

「動けるとは」

「恐るべき幼子よ」

・・・やっぱり・・・！

エリオは三人の言葉に卒然と理解した。

おそらくではあるが、ここら一带に、薄く毒霧を流していたのだろ

う。

バリア・ジャケットで防げぬ程度の微量で。  
それを知らずにエリオ達は吸い続け、結果。  
毒にやられてしまったのだ。

「「さて……」」

「くっ……！」

まずい。

身体は全く動かない。

そしてこの状況をこの三人が逃すとは思えない。  
どうにかしないと……！

「エリオ君……」

「くっ……」

「G U u u……」

「では」

「さらばだ」

「小さき騎士よ」

その言葉と共に三人組は倒れ伏すエリオ達に殺到した。



クラナガン上空。

そこにアースラのエースたる。なのはの姿はあった。  
既にその姿はエクシード・モードだ。

そして、彼女と対峙するのは黒の魔女だった。

つばの広いトンガリ帽子に、身体に纏うローブ。

緑の髪をツインテールにして纏めている。

もし、箒があれば完璧な魔女の完成である。  
しかし、彼女が手にするのは箒ではなかった。  
鎌。

大きい鎌である。

死神を思わせる鎌だ。

魔女になのはは右手を向ける。

「アクセルっ！」

ー射ー

なのはの言葉と共に魔女へと上空から光球が振り落ちる。

魔女との戦闘で放った操作弾であった。

それに、魔女は手に持つ鎌を掲げ、鎌を回転した。

「私の声に応えなさい！ レークイエム・ゼンゼ」  
はい。

瞬間。

魔女の足元にベルカ式の魔法陣が展開。

鎌が描いた円の軌道に漆黒が生まれた。

なのはが放った操作弾はそこに突っ込み。

そして消えた。

だが。

「エクセリオンっ！」

なのはの狙いはそこにあった。

操作弾があのように防がれるのは魔女との戦闘で知っていた。  
故に狙いは操作弾を囷にした抜き撃ち。

防げぬタイミングでの砲撃にあった。

「バスターーーっ！」

叫び。

同時に、光砲が放たれた。

その一撃は迷い無く魔女へと一直線に突き進む。

しかし、魔女はその一撃に、くすり。と、笑った。

「開きなさい。冥界の扉よ」

ー斬ー

鎌が振り下ろされ、斬られた。

魔女の前の空間が。

そこから現れるのは3m超の騎士鎧であった。

「現れなさい。騎士の剣の担い手よ」

騎士鎧は現れるのと同時に、光砲にぶつかる。

瞬間。

ー煌ー

ー爆ー

騎士鎧は爆発した。

同時に光砲も消える。

しかし、魔女は無傷であった。



「ふふ……。抜き打ちでこの威力。恐ろしい方ですわね？」

「貴女はー」

楽しげに笑う魔女になのはが呻く。

ベルカ式の使い手なのは間違いない。

しかも召喚術の類だ。

だが。

「私の魔法を召喚術だと思ってるっしょいますのね？」

「っー！」

その言葉になのはくっと思齒を噛み締める。

まるでこちらの思考を読んでいるかの如くのタイミングでの問い掛けであった。

なのはの顔色を見て魔女はクスクスと笑う。

「安心なさいな。私、読心術の心得は在りませんの」

その言葉に、しかしなのはは頷かない。

無言のままレイジング・ハートを向ける。

それに魔女は再びクスリと笑う。

同時に右手の大鎌を回した。

「少し脱線しましたわね。私の魔法ですけど。召喚術は召喚術ですけど。’ただの’召喚術とは一味違いますのよ？」

「ただの……？」

魔女の言葉になのはが訝し気な顔となり、それに魔女が、ええと頷いた。

「それを今、ここで証明いたしましょう。レークイエム・ゼンゼ」  
はい。

「っー」

なのはは即座に身構える。

しかし、魔女は構わない。

大鎌を振るい、前方の空間を切り裂く。

「轟弓の射手よ。私の声に答えなさい！」

直後、それが現れた。

帽子を眼深にかぶり、手に大きな弓を抱える、2 m超の射手が。

「お気づきになりました？ 私の召喚術が他の召喚術と違う点に」

「……え？」

魔女の言葉になのはは疑問符を浮かべ。

直後にそれに気付いた。

あの弓の射手は、人間だ。

恐らくは魔導士。

しかも……。

「生きて、ない？」

「正解ですわ」

その答えに満足したように魔女が笑う。

同時、その右手の大鎌を振るった。

「この鎌。レークイエム・ゼンゼは冥界の扉を開けるんですの。そして、各担い手達にお手伝いを頼めるのですわ」

「っー!」

つまりは亡霊。

もしくはそれに近い存在を使役出来ると言う事だ。

あの鎌を振るうだけで!

「お気をつけ下さいませね」

言葉と共に魔女が鎌をなのはに差し向ける。

同時、射手が大弓の弦を引き絞った。

直後に巨大な矢が形成される。

それになるのはもレイジング・ハートを構える。

「私。一条エリカは恋敵には厳しいんですの」

「え?」

突如として告げられた言葉になのはが思わず硬直する。

魔女、エリカはそんな、なのはの反応に微笑し。

「元、とは言えタカトの、御主人様、として言いますわ。……彼は、私のモノです」

「っー! そんな事ー!」

自分には関係ない。

誤解だよ。

言いたい事は山程あった。

そもそも彼と自分にそんな接点など無い。

あるのは賭けと戦うと言う約束だけだ。

だが、その約束がなのはの頭を過ぎり。

なのはは自分でも分からないまま、違う言葉を放った。

「勝手に決めつけないで!!」  
「そうですもの。なら……」

大鎌を振り上げる。

同時になのはもチャージを開始する。

宙空で対峙する二人に魔力が集まっていく。

エリカはそのまま言葉を放った。

「貴女を倒して、言わせて頂きますわ」

直後、エリカは鎌を振り下ろし。

同時に巨矢が放たれ。

なのはは光砲をぶっ放した。

巨矢と光砲はちょうど二人の中心点でぶつかり、互いにその威力を遺憾無く発揮。

―煌!―

―爆!―

二人の中心点で太陽を思わせる光爆が起きた。

そしてなのはは止まらない。

そのまま上空へと翔け、エリカも同じく上空に向かった事を視認する。

そして再び互いに己のデバイスを構え。

・・・負けられない。

負けたく無い!

何故、自分がそんな想いを抱いているかも分からずに。  
その想いと共に再び砲撃をエリカへと叩き込んだ。



なのはとエリカが戦う空よりかなり離れた空。  
そこに雷がほとぼしる。

フェイトだ。

ハーケン・フォームのバルデッシュを身体を振り回すかのような動作で振るう。

・・・しかし。

「甘いで御座る！」

ー撃！ー

バルデッシュの魔力刃を蹴りが弾き飛ばす。  
その反動でフェイトは後退する。

ブリッツアクションで動作を加速。

体勢を整え、眼前の敵を睨む。

奇妙な男である。

バリア・ジャケットなのだろうが、恐ろしく軽装だ。

なにせ、タンクトップと膝までの半ズボンという恰好なのである。

膝から足の指までは装甲に覆われている。

足の甲の部分にクリスタルが付けられていた。

間違いなく、この足甲がデバイスだ。

何故指抜きなのかは分からないが。

そして、一番おかしい部分がこの男にはあった。

目深に被った帽子に口元を完全に隠すマフラーである。

鼻だけが唯一、顔の部分で露出している。

フェイトは真剣にその恰好は何なのか聞きたかったが、男は「秘密で御座る！」などと言い放って教えてくれなかった。

まあ、それはいい。

問題なのは。

「行くで御座るよ！」

一瞬！一

「っー！」

その叫びが聞こえると同時に、フェイトは背後に振り向いた。そこには既に男が居た。

疾い！

「ひゅっ！」

一発っ！一

再び放たれる蹴り。

それをフェイトはバルデッシュで切り払おうとして。

一撃！一

逆に弾かれた。

さらに男は踏み込み、身体をクルリと半回転。

回し蹴りを放つ。

弾かれているバルデッシュは間に合わない。

故にフェイトは左手のガントレットを突き出した。

デフェンサー・プラス。

「むーっ！」

「破！」

男の驚きの声が響く。

フェイトの反応速度に驚いたのだ。

突き出した左手に展開するデフェンサー。それに回し蹴りが叩き込まれ。

フェイトが弾き飛ばされた。

「くっ……！」

弾かれた慣性を利用して、距離を離す。

フェイトはそのまま男を睨んだ。

「ウム。見事な反応速度で御座った。完全に捉らえたと思ったので御座るが……」

フムフムと頷く男にフェイトはくつと顔をしかめる。

正直に言っ、今の蹴りに反応出来たのは偶然に近い。

それは前例を知っているからだ。

タカトと言う当代最強の格闘士の蹴りを。

一度、あれを受けた経験がフェイトの身体を反応させたのだった。かと言ってタカトに感謝の念など抱かないが。

それに……。

このままじゃあ、勝てない……！

それだけをフェイトは思う。

早過ぎるのだ。

男のスピードが。

‘今’の自分の速度では追い付け無い。

距離を離して砲撃や射撃戦に持ち込めば、まだ可能性はあるが。

多分、させてくれない。

フェイトは確信する。

おそらく男はこれ以上の距離から離れてはくれまい。

一息で零距离の間合いに踏み込めるこの距離を。

ならば、男より疾く動かねばならない。

その手段は。

「……何を考えいで御座るか、当てて見せるで御座るか？」

「っ……！」

フェイトは男の言葉に我に返った。

男を睨みつける。

しかし男は構わず言葉を続ける。

「まだ上があるので御座ろう？ そなたの速力には。故にそれを行

おうとしているで御座るな？」

「……………」

フェイトはその言葉に答えない。

沈黙を守る。

だが、その頬には冷や汗が一筋伝う。

男が言う事は完全に合っていたからだ。



だが、それを表に出してはならない。  
もし悟られれば、確実に邪魔が入る。  
自分なら間違い無くさせないからだ。  
しかし……。

「ささ。早くやって見せるで御座るよ」  
「……え？」

いきなり男はこちらにそれを勧めた。  
あんまりな男の言動にフェイトの目が見開かれ、呆然とする。  
それに男はムウと唸る。

「どうしたで御座るか？ 変身っぽいのがあ​るのでは御座らぬか？  
早く変身したらどうで御座らぬか？」  
「えっと……」

フェイトは迷う。  
何故に男がそれを自分に勧めているかを理解出来なくて。  
男はそんなフェイトにフツと笑った。（正解には鼻を鳴らす音だけが聞こえた）

「フフフ、自分。これでも最速を自負して御座る。故に管理局最速  
と言われる貴女と戦ってみとう御座った。全力の貴女と」

故に、と男は続ける。

「そう、故にこそ全力を出されよ。……力半ばで倒れる事を良しと  
せぬで御座れば」  
「……………」

男の言葉にフェイトはしばし呆然として。  
しかしすぐに頷いた。

「バルデッシュ。オーバー・ドライブ」  
イエッサ。ロード・カートリッジ。  
ライオット・フォーム。ゲット・セット。  
「真・ソニック・フォーム！」

瞬間。

光がフェイトを中心に溢れた。  
同時、バリア・ジャケットが解け、まるでレオタードのような薄い  
ジャケットとなる。  
更にバルデッシュが変形。

さらに分離し、フェイトの両手に握られた。  
光が収まり、フェイトが踊るように回転する。  
回転が終わるとそれは一つの構えとなった。  
上下に左右のバルデッシュを構える。  
二刀流の構えに。

「お待ちせしました。……？」

真・ソニックフォームとなり。  
早速、男に向き直るが、肝心の男は何故か膝を付き。（ご丁寧に空  
間に足場まで展開して。  
ここで漸くフェイトは男がカラバ式だと気付いた）  
手を組み、まるでお祈りをするが如く上に突き出していた。  
そして何より。

男は泣いていた。  
もう、マフラーをつけていてさえ分かる程に泣いていたのだ。

「あ、あの……？」

思わず心配してしまいフェイトが声をかける。  
それに男は一切構わず何故か右手で十字を切った。

「神様は……。本当に居たで御座るな。まさか、かような奇跡に出  
会えようとは。……自分、飛・王は今日ほど生きていて良かったと  
思った日は無いで御座る……っ！」

「え？ え？ あの……」

そんなに自分と速力を競いたかったのだろうか？

だが、自分はまだ真・ソニックフォームになっただけで速度を見せ  
た訳では無い。

ならばこの男。飛・王は何に、こんなにも感激していると言うのか。  
飛はスクツと立ち上がる。

それにフェイトは戦いの途中だったと構えを再び取り。

そして飛が動いた。

「金！ 髪！ 巨！ 乳！ よもや、これ程のお宝に出会えようと  
は……！ 最っ高で御座る！ 自分。今、最高に輝いて御座るよ！  
！」

何故か一字ごとに身構えながらポーズを取る。

そしてフェイトにさあつと、向き直った。

「お宝も見れたで御座るし、自分。もはや一片も悔いは御座らぬっ  
！ 存分に速力を競い合うで御座るよ！ ……ちなみに揺れる乳が  
見たい訳では……。ご、御座らぬよ？」

「……………」

とりあえず、フェイトは今まで真面目にやった事をいきなり台なしにされた事や、ただでさえ気にしてる真・ソニックフォームの露出を改めて指摘された恥ずかしさだとかを詰め込んで、飛にトライデント・スマッシュを叩き込んだ。

ちなみに過去最高の速さを持って放たれたのは言うまでも無い。



「っらあ！」

「戟！ー」

「くううっ！」

放たれた赤の斬撃に防御に使ったイクス・ブレイズごとシオンが弾き飛ばされる。

それに、シオンは顔をしかめ。

そのまま足場を空に展開。

足場を削りながら空に留まる。

同時にノーマル・フォームに戻った。

それにアルセイオはへつと笑う。

「言った筈だぜ？ 坊主。元来の戦い方じゃねえ、お前じゃ俺には届かねえよ」

「ぐっー！」

アルセイオの指摘にシオンが顔を歪める。

分かっていた。

分かっていたのだ。

今の自分ではアルセイオに届かない事は。  
だがー！。

「まだ、だ……！」

「ほう……」

シオンはそれでも前に踏み出した。  
敵わない。

だからと言って、逃げる訳には行かない。

アルセイオが居る向こうには、仲間達が居るクラナガンがあるのだ。  
引けない。

引く訳には行かない。

だからー！

「イクス」

【ああ】

シオンは呼ぶ。

師匠であり、相棒たる己のデバイスを。  
そしてぐいっと口端を吊り上げた。

笑みだ。

「ちいっとばかり無茶すんぜ？」

【……無茶はお前の専売特許だからな。……いいだろう。やってみ  
せろ】

イクスの応えにシオンは薄く笑う。  
直後。

ーブレイド・オンー

鍵となる言葉が放たれた。

「切り札でもあんのか？ 坊主？」

「見てのお楽しみさ。おっちゃん。……セレクト・カリバー！」  
トランスファー！

カリバー・フォームに変換。

しかしアルセイオは動かない。

まずはこちらの出方を見ようとしているのだろう。

彼我の戦力差をキチンと把握しているからこそ出来る余裕だ。  
しかし。

・・・その余裕が命取りだ！

シオンはそのまま両の親指を噛む。

そして宙に描く。

血の文字を。

まずは雷。

そして火。

最後に風、と。

それを見て初めてアルセイオから笑みが消えた。

「……おい？ まさか、坊主——」

「その、まさかだ」

ニイっと笑う。

同時にヴォルトが。

イフリートが。

ジンが。

シオンの背後に顕現する。

そしてシオンは両の腕を胸の前に組んだ。

「イクスっ！」

【応っ！】

フル・バレル  
全兵装

フル・オーバーン

全開放

オーバー・ドライブ

凌駕駆動

開始するー！】

同時、三柱の精霊が両のイクス。

そして、シオンに、吸い込まれるように入り込む。

「やめろ！ 死ぬぞ、坊主ー！」

それを見てアルセイオは叫ぶ。

しかし、シオンはニヤリと笑った。

「死なねえよ」

眩くような声でシオンは笑い。

そして叫んだ。

己の無茶を。

アルセイオに剣を届かせる切り札の名を！

その名はー！。

「精霊、融合！ or 双重、精霊装填っ！」

スピリット・ユニゾン。

デュアル・スピリット・ローディング！！

ー煌ー

そして、シオンから光が溢れた。  
二つの切り札を持って。

（後編に続く）



第三十五話「グノーシス」(前編) (後書き)

ども、テストメントです。

いや、もう言い訳も何ありません。

今回も前後編です……。

わ、分かってはいたんだけど。

やっぱりこうなったかと言う。

プロットの段階で三万文字越えそうだったもんな…… (汗)

で、今回も更新遅れすみません (汗)

ついに携帯がご臨終を向かえまして。

今話も旧携帯(四年前の代物)でお送りしています。

……使い難いったらありゃあしねえ…… (涙)

推敲は重ねてますが。おかしい部分が出ると思います (汗)

どうか、ご容赦を (汗)

さて、後編。

携帯が戻って来てから書きたいですが、そんな事言ったらまた更

新遅れそうなので地道に書いていきます。

少し更新遅れるかもですが、平にご容赦を。

では。後編でまた会いましょう♪

それでは。

第三十五話「グノーシス」(中編) (前書き)

……ええ。まずは最初に一言。……すんません。か、書いても書いても終わらない(涙)      とりあえずキリが良い所で中編です。  
ではどうぞ。)

### 第三十五話「グノーシス」(中編)

光が溢れる。

シオンを中心として。

それに相對していたアルセイオは息を飲み。

そして、それを見た。

炎を纏う右のイクスを。

風を纏う左のイクスを。

そして。

「……精霊、融合……」

雷を纏い。

膨大な魔力を放出するシオンを。

ずっとシオンは閉じていた目を開く。

同時に構えた。

右のイクスを上に、下に左のイクスを持つてくる。

更に、背の6枚の剣翼が展開した。

「神庭シオン」

「っ……!!」

声に引きずられるようにアルセイオはダインスレイフを構える。

シオンはそれを見遣りながらぼつりと呟いた。

「推して、参る」

宣戦を。

瞬間、アルセイオはシオンの姿を見失った。  
シオンが居た位置にあるのは雷光の残滓のみ――。

「っ――！ ちい！」

「戟！――」

アルセイオは殆ど感任せに真後ろにダインスレイフを突き出した。  
そこにシオンは居た。  
右、短槍のイクスを突き出しダインスレイフと鏢ぜり合っている。  
肩越しにシオンを見遣りながらアルセイオは胸中驚愕の叫びをあげ  
ていた。

……何も、見え無かったぞ……！

冷や汗が頬を伝う。

体温が2度程下がった気がした。

「神覇、陸ノ太刀」

「っ……！」

ぽつりと呟かれるその言葉にアルセイオは反射的に瞬動を持って後  
ろに下がった。

だが。

「な……！」

動かない。

否、距離が離れないのだ。

シオンとの距離が。

それにアルセイオはしばし呆然とし、直後に気付いた。

シオンはアルセイオに合わせて距離を詰めたのだ。

”アルセイオの方が早く瞬動を掛けたと言うのに！”

シオンはアルセイオの動揺に構わない。

一步を踏み込み、右のイクスを突き出す！

アルセイオはそれに空いていた右手を突き出した。

同時に爆炎が吹き出し、シオンを中心に不死鳥が産まれる！

「奥義、朱雀！」

―煌―

瞬間、朱雀は至近距離でアルセイオに襲い掛かり、その身体を飲み込んだ。

―爆！―

轟炎！

朱雀はその威力を完全にアルセイオに叩き込み、その身体を真上に突き上げた。

「ぐっ、う！ 野郎……！」

真上に吹き飛ばされながらアルセイオは口から悪態を漏らす。

正直危なかった。

直撃の瞬間。

無理矢理に形成した巨剣を叩きつけ、僅かとは言え威力を削いだからよかったものの、それが成功しなければシールドごと消し炭になる所だった。



数十。  
数百。  
数千。  
数万！

超高速斬撃がアルセイオを襲う！

プロテクションは数秒しか持たなかった。  
パリンと硝子を割るような音が響き、そして。

「――っ――！」

―哮！―

暴虐たる虎の牙がアルセイオに容赦無く叩き込まれた。



―戟！―

クラナガンの空に甲高い剣音が鳴り響く。  
片や、片刃の長剣を持つ者。  
シグナム。

片や、両刃の大剣を持つ者。  
ソラ。

二人は高空に於いて剣撃戦を繰り広げていた。

「戟！」

再び響く剣が打ち合う音。

そして結果もまた同じだった。

”必ずシグナムが打ち負ける”。

「ふっ……！」

「く……！」

鋭く響く、息吹。

そして放たれる連撃にシグナムは顔をしかめる。

重く、鋭く、そして何より疾い。

（……なのはが苦戦する訳だな！）

胸中、そう思い。

放たれる一撃を受ける。

近接戦の、それも剣の技術に於いてこれ程の者がいるとは。

グノーシス。元、第三位。

”これ”で、第三位。である。

上には上が居るとはよく聞く言葉ではあるが。

ソラから放たれる上段からの斬撃を受ける勢いを利用して離れる。

同時、カートリッジ・ロード。

「レヴァンティン」

エクスプロージョン！

名を呼ぶと共に、愛剣たるレヴァンティンが炎を纏う。

同時、シュランゲ・フォルム。



連結刃へとレヴァンティンがその姿を変える。

対して、ソラは剣を持ち上げた。

同時、煌。と、魔力がその身体から溢れた。

ブレイク・インセプト。

鍵となる声が音を介さず空間に響く。

シグナムはそれを見ながらレヴァンティンを上段に持ち上げた。

ソラは剣を顔の横に持ち上げ、突き出す。

同時に二人は動いた。

「飛竜、一閃っ！」

「魔人撃！」

大上段から炎を纏う連結刃が放たれ。

横からの斬撃で魔力斬撃が放たれた。

ー轟！ー

二つの技は二人の中間点で炸裂。

その威力を互いにぶつけ合い。

ー砕ー

相殺した。

だが、ソラはそのままシグナムへと突っ込んだ。

「っ！ ちい！」

それを見て、シグナムはそのままレヴァンティンを振るう。

連結刃のままのレヴァンティンは主の意向に従いその首を擡げた。

「陣・風・烈・火！」

―閃！―

ギュラァ！ と空気を斬り裂きながらレヴァンティンが踊る。

その様はまさに縦横無尽。

シグナムの周囲を刃が囲み、近付く者。

則ち、ソラに踊りかかる！

それをしかしソラは一顧だにしない。

空間に足場を無数に展開。

同時に瞬動を開始する。

だんっ！ 音が響き、ソラもまた縦横無尽に駆ける。

向かい来る刃を避け、シグナムへと確実に接近する。

「く……！」

シグナムはレヴァンティンを振るい、ソラを近付けさせまいとするが、ソラはその刃のこと如くを避す。

そして、ついにソラはシグナムを手につつ大剣の間合いに入れる。

踏み込み。

深い踏み込みだ。

ソラは足場にその踏み込みを叩きつけ、同時に大剣を振るう。

対してシグナムはレヴァンティンをシュベルト・フォルムに戻す事を諦め、”真横”にシールドを展開。

蹴りつける。

―閃―

ソラから放たれた一撃。

しかし、それはあっさりと空を斬った。

シグナムが避けたのだ。

シールドを足場代わりにして。

「っ……」

「おお……！」

カートリッジ・ロード。

一気にボーゲン・フォルムへと変化させる。  
即座にその弦を引き絞った。

「翔けよ、隼」

魔力により、矢を形成。

更にカートリッジ・ロード。

シグナムは止まらず。

そのまま矢を解き放つ！

シュツルム・ファルケン！

「豪！」

レヴァンティンから高らかに声が響き。

同時に、一撃が撃ち放たれた。

必殺たる一撃が。

対してソラは動かない。

大剣を顔の前に持って来る奇妙な構えを取る。

我はただ空へと向かう。

響く、オリジナル・スペル。

ソラはそのまま大剣を突き放った。

「魔皇撃」

―裂！―

斬り裂いた。

空気を、空間すらも螺旋を描く魔力斬撃が。

二つの一撃は良く似ている。

どちらも極一点という一撃だ。

故にその結果もまた同じ。

二つの一撃は互いにぶつかり、そして。

―轟！―

互いに、その威力を持って互いを喰らい、螺旋を描く衝撃波を持って消えた。

だが。

「煌牙」

その声にはソラは驚愕を顔に貼付ける。

シグナムが居る。

”ソラの目の前に”。

その身体は斬り傷だらけだ。

さもありなん。

何せ、シグナム。

未だ消えぬ衝撃波の渦を真っ正面から突破して来たのだから。

これは一種の賭け。

ソラがこちらの戦法に気付けば確実にカウンターを叩き込まれるだろう。

だが、うまくいけばこちらが最高の一撃を叩き込める。

そして賭けにシグナムは勝った。

もはやソラは目の前。

回避も防御も不可能なタイミングだ。

故にシグナムは自身の持てる最強の一撃をソラに放つ！

「一閃！」

「煌！」

煌炎一閃！

炎剣が疾り、ソラへと容赦無く迫る。

それにソラは目を見開いたまま回避も防御も出来ず。

「起きろ」

ただ、その言葉だけを放った。

「斬」

そして決着は着いた。  
”シグナムの敗北”で。

「あ……………」

シグナムは呆然と見る。

”背中から自身の胸の中央に突き出した刃”を。

「神剣、フラガラック」

ぽつりと呟かれる声。

それにシグナムは顔をあげる。

ソラが持つ大剣。

その刀身が”消えていた”。

半ばから綺麗に。

そしてそれはシグナムの背中から突き立っていた。

「…………出来れば使いたくは無かったがな。”ロスト・ウェポン”なぞ」

ぶん、とソラが大剣を”引き抜く”。

同時にシグナムから刀身が抜けた。

直後、シグナムの口から抗いようも無い程の血が溢れた。

「ぐ……………」

吐血。

大量の血がシグナムの口から、そして胸から流れる。  
常人ならば、本来は死んでいる。

何せ位置からすると心臓を貫いているからだ。

シグナムが死んでいないのは、守護騎士と言う存在故だ。  
しかも、今のシグナムは限り無く人に近付いている。

このままでは待つのは確実に死だ。

そしてソラがそれを待つ筈も無い。

ソラはフラガラックを振り上げる。

「楽にしてやる」

「ぐ……っう……」

声を出そうとするが、それすらも出来ない。

そして刃は振り下ろされ――。

「阿保か」

スマッシュ・インセプト。

――戟！――

振り下ろされた刃が”鍵となる声”と共に放たれた朱色の槍にぶつかり止まった。

それにソラは目を見開く。

シグナムは傷を押さえながら顔をあげた。  
そして。

「殺しに来たぜ。兄貴」

「何だ。貴様か」

シグナムは見た。

戦場で何故かヘッドホンなぞをつけている。

”少年”の姿を。

朱槍を肩に担ぐ、その背中をシグナムは見た。



シグナムと反対側の空。

そこでヴィータは自身の愛鎧。

グラーフアイゼンを振るう。

既にその姿はツェアシュテールングス・フォルムだ。

何故か？

答えは単純。

目の前の敵がそれでしか倒せない事を知っているからだ。

ヴィータの眼前で巨斧を振るう老騎士、バデスには。

―戦！―

「ぶち貫け―――！」

「ぬうんっ！」

裂帛の叫びが両者より放たれ、アイゼンとタイラントが真っ向からぶつかり合う！

―轟！―

辺りに衝撃波がぶち撒けられ、両者共に吹き飛ぶ。

二人は互いに数mを吹き飛び、同時に体勢を整えた。



「くっそ……！」

【ヴィータちゃん。あんまり焦っちゃ駄目です！】  
(……わぁってる)

ユニゾンしているリインの言葉にギシリと奥歯を噛み締める。  
あの転送。

あれで孤立させられたのは自分だけでは無い筈だ。  
必然。

それはアースラメンバー全員が含まれる。

(……嫌な予感がするんだ)

【……はいです】

リインもまた頷く。

嫌な予感が止まらない。

この状況での孤立など、いくらなんでも危険過ぎる。

もし、自分と同じく孤立させられた状況で襲われたら……。

「……さっさとこいつ、ぶっ潰すぞ」

【……ヴィータちゃん】

ヴィータの焦りが伝わり、リインが心配そうに名を呼ぶ。それに心配すんなと声をかけようとして。

「侮られたものだな」

「【……っ！】」

突如かけられた声に中断された。

声の主であるバデスをヴィータは睨む。

直後にへっと笑った。

「一度負かしてんだ。舐められんのは当たり前だろ」  
「……確かに、聖域で私は貴様に負けた」

だが、と続ける。

タイラントを肩に担いだ。

「今の貴様には負ける気がせぬ」

「……言ってくれるじゃんか」

あからさまな挑発だ。

いつものヴィータなら乗る筈も無いそれに。

しかし、ヴィータは乗ってしまった。

仲間を案じる気持ちと焦りから。

【ヴィータちゃん！ 駄目です！】

リンから飛ぶ警戒に、しかしヴィータは耳を傾け無い。  
ぐるとアイゼンを構える。

「行くぜ？」

「来るがー」

よい。とまでヴィータは言わせなかった。

ツェアシュテールングス・フォルムの後端から炎が吹き出す。  
その推進力に任せて一気にバデスに突っ込む！

「ぶち貫ー！」

【ヴィータちゃん！ 駄目っ！！】

ラインが叫ぶ。

それにヴィータはハツとなり。  
しかし。

「タイラント・オーバー・ブレイク」

ー轟！ー

間に合わなかった。

タイラントがアイゼンの”柄”にぶつかる。

そう、これこそがバデスの狙い。

彼は最初から真っ向勝負など考えていなかったのだ。

挑発し、威力はあるが軌道が読み易い攻撃を誘発させ、カウンターの一撃を叩き込む。

ヴィータはそれにまんまと引っ掛かってしまったのだ。

「アイゼー」

【ヴィータちゃん！ 離脱を！】

ブースターをカット。

後退しようとする。

しかし。

ー断！ー

全てが遅すぎた。

「が……っ！」

【あ、くっ……！】

アイゼンの柄は半ばから断たれ。  
巨斧の刃がヴィータの腹部にめり込んでいた。  
ヴィータの小さな口から血が吐き出される。  
バデスはそれを顔に受け、そのままぐりと旋回。  
地面に向けてヴィータをタイラントで投げ飛ばす！

「豪！」

ヴィータは下のビルに叩きつけられ、ビルの上から二階までを纏めて潰し、漸く止まった。

「あ、う……。リイン……！」

【大、丈夫です。ヴィータちゃんは……？】

「何、とか……な」

リインに答えながらヴィータは顔をしかめる。  
何と言う失態。

焦りとは言え、あんな見え透いた手に引っ掛かるなんて。  
潰れたビルの部屋にうずくまるヴィータに止めを刺さんとバデスが突っ込んで来る。

それを迎撃しようとヴィータは身体を起こそうとするが、立てない。  
身体が先の一撃でろくに動かないのだ。

「終わりだ」

バデスのそんな言葉が先にヴィータに届く。  
そしてその巨斧が叩きつけられようと放たれ。

「はいはい。ストップ、ストップ！」

―轟―

横合いからいきなり光砲がバデスに叩き込まれた。

「ぬっお……！」

なのはのディバイン・バスターを思わせる一撃にバデスは呻きの声をあげ。

しかし、耐え切った。

吹き飛ばされながら体勢を整える。

「いい歳したじい様が子供いじめ？ 随分といい趣味ね」

誰が子供だ。と叫びたいが、先の一撃のダメージで上手く声が出ない。

光砲を放った主は女だった。

手に持つは白い槍だ。

セミロングの髪に、ゴーグルをかけている。

なのはと同じ歳ぐらいだろうか。

勝ち気そうな女性である。

「……何故、貴様がここに居る？」

「さあ、て。なんでかしらね？ でも、そうねー」

くすりと笑う。

そして手の白槍をくるりと回した。

「アンタ達を止めるため……。てのはかつこ付けすぎね。だからこう言うわ」

その言葉と共に白槍が回転を停止。

女性の右手に順手で収まる。

同時にそれは構えとなった。

「アンタ達を纏めてぶっ飛ばしてやる為に、てね」

微笑む。

その笑顔だけ見れば、可愛い女性は、しかし。  
言っている事は物騒窮まりなかった。



「くっー!」

はやての側を弾丸が走る。

それをはやてはシールドを張り防御。

直後に、その弾丸を放った存在。

ガジェット五型がはやての脇を抜けた。

「ブラッディ・ダガー!」

一寸っ!一寸

放たれる紅の短剣群。

それは瞬時にガジェット五型へと疾り、数機を纏めて破壊した。

「……ハアっ、ハアっ!」

息が荒い。

先程からずっと、はやては襲い来るガジェット五型相手に戦っていた。

いつもなら訳も無く倒せる相手である。

だが、”此処”では、はやては本領たる広域魔法が使え無かった。

そして尚且つ逃げる事も出来なかった。

何故ならば。

「シャーリー。どない？」

《もう少しです！》

はやてが通信でシャーリーと話す。

そして視線をちらりと後に向けた。

そこには、無数のガジェット達に虫のようにたかられ、攻撃を受けているアースラの姿があったからだ。

アースラは速度や積載性に装備のほとんどを費やしている。

故に装甲やフィールド等の防御が弱い。

そんなアースラがもし自慢でもある足を止められたらどうなるか？

答えは現状である。

つまりはタコ殴りだ。

ザフィーラも駆け付け、シャルやシグナムの融合騎。アギト（別々に飛ばされた）も協力して次々とガジェットを墜しているが、それよりガジェットが増える方が早い。

そもそも何故アースラが足を止められたのか。

確認する必要すら無い。

グリムの仕業であった。

予めウィルスでも仕込んであったらしく。

はやてがアースラの近くに転送されると同時にアースラの推進系が

纏めてストップしたのだ。

今や、アースラは空に浮かぶ飛行船である。

何せ動けず、風船よろしく浮かぶだけなのだから。

さらにアースラに突っ込むガジェットにダガーを叩き込みつつはやはり顔をしかめる。

……これが狙いなんか……？

グリムはこう言った。

絶望への片道切符、と。

だが、現状。

アースラへの攻撃は続いているものの、到底撃沈には程遠い。こちらの戦力を読み切っていなかった訳でもないだろう。ならば、絶望とは一体？

果たして、その答えはすぐに訪れた。

……っ！？……

瞬間。

はやてを寒気と嫌な予感が貫いた。

それはかつて覚えのある感覚。

JS事件の祭に、ザフィーラを。

そしてシャマルが死にかけた時に覚えた感覚だ。

……シグナム……！？

一人はヴォルケン・リッター烈火の将。

……ヴィータ！ リイン！？……



そして鉄槌の騎士と、融合騎たる存在。

三人の気配が、急速に弱くなりつつある・・・！

「シャーリー！ シグナムやヴィータ、リインの状況、分かるか！？」

《え……？ ちょ、ちょっと待って下さい……》

アースラに通信を繋げる。

はやてのあんまりの剣幕にシャーリーは戸惑いの声をあげ。  
直後に《嘘……！？》と叫んだ。

「シャーリー……！？」

《……ライトニング2。及びスターズ2。そしてブルーのバイタル。危険域です……！ そ、それだけじゃありません！ ライトニング3、4も！ 他の皆も……！》

……やっぱり……！？

はやては叫び出す一歩手前で、そう思う。

グリムは最初っからこの積もりだったのだ。

他のメンバー達を孤立させ。

各個撃破に持ち込む。

そしてそれを他でも無い。

自分に味あわせようとしているのだ。

仲間達や、家族を失う絶望を！

はやては唇を血が出る程に噛み締める。

「ザフィーラ！ シヤマル！ 皆を助けに……！」

《はやてちゃん!?!》

瞬間。

シャル達に通信を繋げようとして逆にシャルから通信が入る。  
それにえ? と疑問符をはやては浮かべ。

瞬間。

その身体を影が差した。

はやての直上。

ガジェットが居る。

” 右の手にナイフらしき物を装備して ”

しまったと思った時には既に遅かった。

伊達にヒトの形をしていなかったのだ。

このガジェットは。

既にナイフは突き出され、こちらに正確に放たれている。

いやにゆっくりと迫る刃。

それを、はやては呆然と見る事しか出来ずに。

― 斬! ―

ガジェットが、上下に真つ二つに斬られる瞬間を見た。

……え?……

再び、はやては疑問符を頭に浮かべる。

だが、驚きはまだ止まらない。

「撃！」

瞬間。

はやての周りにいた他のガジェットも先のガジェット同様にぶった斬られる。

五体程のガジェットが一瞬で撃墜された。

「やれやれ……」

そして気付けば、それはそこに居た。

大柄な男である。

多分、身長は190を下らない。

そして右手には2m超の大剣を持っており。

それを肩に担いでいた。

左手で頭をポリポリとかきながら空を”歩く”。

そしてはやてを見てあゝと、唸った。

「仲間達が気になるのは分かるけどよ。戦場でぼろりと、してんなよ。危ねえから」

「は、はい……」

頷くはやてに男はウンウンと頷き、そして言葉を続ける。

「それにあんたの仲間も大丈夫だろうよ。俺の仲間が向かってるし」

その言葉にははやては今度こそ戸惑う。

この男は一体何者なのか。

それに仲間とは。

そこまで考えた段階で思い出した。

彼等は……！

男はそんなはやてに構わない。  
大剣を肩から下ろして横に構える。

「さあて、と。一丁いつてみようか！」

笑みと共に吠える。

同時、大剣が上下にスライド。

合わせ目から光が漏れた。



クラナガンより離れた海域。

その海の上で、アルセイオは息を荒げながら眼前の存在を睨む。  
神庭シオンを。

「耐えたか。おっちゃん」

「あたぼうよ。中年舐めんなよ？ 坊主」

とは、言うもののアルセイオの息は荒い。  
実際、かなりまずかった。

まさか、”盾”まで作らされるとは。

無尽刀の能力は何も剣にのみに限定しない。

盾や、必要とあれば鎧も作りうるのだ。

だが、そうは言うものの久しぶりに盾を作らされた。  
最後に作ったのは十年前になる。

則ち、伊織タカトとの戦い以来であった。

「皮肉なもんだな」

「？」

「いや、何でもねえ。……さて、坊主。続きと行こうか？」

ソードメイカー・ラハブ

再び鳴り響く鍵となる声。

同時、その背に剣群を展開する。

シオンは何も言わない。

イフリートとジンを再召喚。

再び双重精霊装填で左右のイクスにそれを収めた。

「行くぜ。坊主」

「……おう」

スッと手を掲げる。

シオンもまた、両のイクスを構えた。

そこまでアルセイオは見えて。

一気に剣群を解き放つ！

ー轟！ー

数万の剣群から成る剣の激流。

しかし、シオンはそれを見ても動かない。

アルセイオはそれに眉をピクリと上げる。

……動かず、防ぐ積もりか？……

そう思い。

しかし、次の瞬間にその考えは否定された。

”目の前”のシオンに。

「っ!?!」

―閃―

……いつの間に!?!

その叫びを放つ前にアルセイオはダインスレイフを振るう。  
だが、シオンの姿は既にそこには無い。  
あるのは雷の残滓だけ。

「ちい!」

短く叫び、背側に逆を向けて剣群を形成。  
放つ!

―弾・弾・弾・弾・弾―

僅か数本の剣。  
しかし、それは確かにそこに”居た”存在に放たれた。  
つまりシオンに。  
しかし。

「そこかあ!」

アルセイオは次に真上に顔を上げた。

そこに、居た。

雷を纏うシオンが。  
右のイクスを既に振り上げている。

それにアルセイオはダインスレイフを真上に突き上げた。

―戟！―

轟音裂破！

聖剣と魔剣が再びぶつかる。

しかし、いつもと違いアルセイオはシオンを吹き飛ばせない。

拮抗する。

・・・否。

寧ろ押される。

「ちい……」

呻く。

そんなアルセイオにシオンは構わない。  
更に踏み込み、左右のイクスを振るう。

―戟―

―閃―

―裂―

―破―

疾風連撃。

次々と放たれる左右のイクスにアルセイオはついていけない。

直撃は盾まで形成して無理矢理避けるが、それでも身体の致る所にダメージを受ける。

そもそも精霊融合状態のシオンは反応速度からしてヒトを超えてし

まっているのだ。

ヒトのままで反応が追い付ける筈も無い。

「おおっ！」

「ちいっ！」

ダインスレイフを無理矢理シオンに放つ。

それすらも簡単に左のイクスに弾かれた。

力ですらも負けている。

弾かれ痺れる右の手。

それにアルセイオは顔をしかめながら、それを見た。

紫雷を纏う右のイクスを突き出すシオンを。

「神覇九ノ太刀」

「っ……！」

告げられる言葉にアルセイオは無意識の内に左手を突き出した。

盾を。相当の魔力を注ぎ込み、盾を形成した。

そこまでしなければその一撃は防げないと、本能が告げていたのだ。

シオンは構わない。

盾の中央にイクスを突き立てる！

「奥義、青龍！」

ー轟！ー

そしてそれは産み落とされた。

荒れ狂う雷龍が、突き立てたられたイクスから。

産み落とされると同時にその顎を開き、アルセイオの盾に食いつく。



―咆―

―哮―

雷龍に盾は耐えた。

しかし、アルセイオ自体が持たなかった。

足場を形成したにも関わらず、雷龍に押されその身体を持っていける。

「ち、いい……！」

雷龍に引きずられながらアルセイオは呻く。

暴虐たる雷龍を真っ正面から睨みながら。

しかし、へっと笑う。

……まだ。まだ堪えられる。

盾はまだ持つ。

それに精霊融合には時間制限もある筈だ。

ならばこの一撃を受けければ、まだどうにかなる！  
そう、”このままならば”。

「精霊剣。カリバーン」

声が聞こえた。

アルセイオの”真後ろ”から。

……嘘だろ。オイ。

早過ぎるとかそんな問題では無い。

今、アルセイオはシオンが放った青龍を防いでいるのだ。  
なのに、何故そのシオンが自分の後ろに居る――!??

シオンはそんなアルセイオに構わない。  
カリバーンと化したイクスを振り上げる。

「陸、漆ノ太刀。合神剣技」

……ま、ず!

その言葉すらも放てない。  
そして。

「紅蓮っ……天昇ォ!」

―爆!―

―煌!―

―雷!―

数百の光爆と雷龍を前後からアルセイオは受け。  
直後にアルセイオが居た場所が太陽を思わせる巨大な爆発を起こした。

(後編に続く)

### 第三十五話「グノーシス」(中編) (後書き)

てな、訳で中編をお届けしました。……いや、本当、すみません(汗) 文字数が半端じゃないです(涙)。 合計で3万とかまだ甘かったです(汗) すぐに後編をお届けしますの  
でどうか宜しくです。それではまた後編で。ではでは(´▽｀)

### 第三十五話「グノーシス」(後編)(前書き)

はい♪ テスタメントです。いやあ、お待たせしました。漸く後編をお届け出来ます♪ 楽しんでいただけると幸いです♪ ではでは♪ どうぞ〜♪

### 第三十五話「グノーシス」(後編)

「リボルバー……っ！」

「ゴルディアス……！」

クラナガン市街地。

そこで、スバルは高速で疾走していた。

相対する敵はリズとりゼ。

アルセイオ隊の二人である。

向かい来るスバルにリズもりゼの前に出て、その巨拳を振るう。

「キャノンっ！」

「インパクト……！」

ー撃！ー

ぶつかり合う拳と拳。

その威力により、衝撃波が巻き起こり、周囲を揺るがせる。

ー破ー

「っ！」

「わ……」

そして互いに弾き飛ばされる。

聖域での戦いと同じ。

ー否、違う。

前はスバルの方が吹き飛んでいたが、今回。

その距離は離されていない。

力負けしていないのだ。

フル・ドライブ。ギア・エクセリオンの効果故だ。

しかし、スバルの敵は彼女だけでは無い。

「……レイ」

ー発！ー

向かい来る光球。

リゼの射撃魔法だ。

総計二十五の弾幕。

それが、スバルに迷い無く突き進む。

「っのオ！」

キャリバーシユート・ライト！

スバルは弾き飛ばされた体勢から左に身を捻る。

そのまま右蹴りを宙空に向かい放った。

ー轟ー

蹴りから衝撃波が飛ぶ。

リゼから放たれた光球はそれに減衰させられた。

スバルはそのままウイングロードを発動し、空へと駆けようとする、  
が。

ー閃！ー

「くうっ！」

スバルは伸びてきた指槍にウィングロードの発動を中断。プロテクションで指槍を弾く。

そう、スバルの相手は獅童姉妹だけでは無い。感染者によるヒトガタ。

つまり因子兵もまたスバルの相対する存在であった。

スバルはプロテクションを発動したまま地面に着地。

そして、プロテクションを維持したまま因子兵に突っ込む。直後。

ー轟！ー

「むうー。避けられたー」

スバルが居た場所に巨拳が突き刺さった。

リズだ。

さらにリゼも新たな光球を放つ。

光球はまたもスバルを追うが、これはスバルも予想していた。

”だから” 因子兵に突っ込んだのだから。

ちよつと前にやけに集団戦闘は苦手な癖に、多数の敵を一人で相手をするのにやたらと長けていた少年から聞いた事がある。

多対一の時に最も重要な事は何かを。

少年はこう言った。

『多対一での戦いだと、1番重要なのは、如何にして一対一×？数にするかだな』

それに疑問符を浮かべる自分に少年は苦笑した。

『いいか？ 例を上げるとして、百人の敵が一斉にこちらに襲い掛かった場合。まともにぶつかりゃあ負けるだけだろ？ 数の暴力、てのはある意味絶対だ。……たまにそう言った常識を笑って蹴散らす非常識人間達もいるけど』

先生， Sやウチの兄貴， Sとかな？

と、少年はうそぶく。

『んで。そんな非常識人間じゃない場合、どうするか？ 答えがさっき言った一対一×？数。て、やつだ』

つまり、と少年は言う。

一対百が無理ならば。

一対一の状況を作り出せばいいだけだ、と。

『そうすりゃあ、後はそれを百回繰り返しさえいいだけだ。……あ？ そんな状況に持っていくのがまず無理？ なら負けるだけだな。……いいか？』

少年はニツと笑う。

そしてそのまま続きの言葉を紡いだ。

『そもそも百対一、て状況がほとんど絶望的なんだ。こっちに勝てる要素なんて無いんだからな。だから、死にものぐりで勝てる要素を”作り出せ”。どんだけ汚い手でもいい。使えるモノは猫の手だろうと犬の尻尾だろうと、”敵自身”だろうと構わない。使い倒せ。そうやって初めて絶望的な状況で勝機が見えて来るんだからな。以上』



スバルはその言葉をこの戦いの最中に思い出していた。

それをあっさりと常識扱いしていた少年。シオンは絶対に非常識人間の側だとは思ったが。

だから。

まずはその状況作りから、である。

……使えるモノは何でも！

そう思い、スバルは突っ込む。

因子兵の集団の中に。

攻撃はしない。

因子兵の攻撃を防御するだけ、だ。

何せ因子兵には。

「むうー！」

「……邪魔」

直後、因子兵がぶっ飛ばされ始めた。

獅童姉妹の仕業である。

それにスバルはホッとする。

正直。上手くいくか分からなかったのだ。

この作戦が。

そう、因子兵には盾になって貰っているのだ。

これならばリゼの射撃魔法は、因子兵が盾になって意味がなくなるし、リズも自慢の巨拳を振るう事が出来なくなる。

容赦無く因子兵をぶっ飛ばすとは、スバルも予想してはいなかったが。

……これで！

スバルは未だ指槍や因子兵自体を弾いてるプロテクションを維持したままUターン。

マツハ・キャリバーが唸り、疾走開始！  
向かう先は。

「……っ！」

「リゼちゃんっ！」

気付かれた。

しかし、遅い！

ショットガン・キャリバー・シュート！

高らかにマツハ・キャリバーから声が鳴る。  
同時にスバルは因子兵の群れから飛び出し。  
そのまま身体を横回転させる。

ー撃！ー

右の蹴りがリゼに叩き込まれる。

しかし、リゼはプロテクションでそれを止めた。  
スバルは構わない。  
回転を続行する。

ー撃ー

ー撃、撃、撃、撃、撃ー

ー撃！ー

回転と共に連続で放たれていく蹴りがリゼのプロテクションを削っていく。

リズがそれを見てリゼを助けんと駆け出し。

因子兵もスバルに突っ込んで来る。

しかし、スバルはそれら”全て”を意識から外す。

今、やらねばならない事は。

「リボルバーー！ー！」

カートリッジ・ロード。

リボルバー・ナックルから空葉莢が飛び出す。

そう、今やらねばならない事はリゼの打倒。他は全て後回し！

そしてスバルはショットガンの回転エネルギー全てを乗せた拳をリゼに叩き込む！

「マグナムっ！」

ー轟！ー

従来のキャノンより遥かに激烈な威力を持って放たれる一撃に、リゼのプロテクションが悲鳴をあげる。  
そして。

ー壊！ー

砕けた。

硝子が割れるかのような音と共にプロテクションが。

リゼが驚きに目を見開き。

スバルは止まらない。

プロテクションを砕いた右のナックルをそのままリゼに叩きつける！

ー撃ー

一撃をもろに受けたリゼが吹き飛ぶ。

地面と平行に飛び。

瓦礫の中に突っ込んだ。

「リゼちゃん!？」

リズが悲鳴を挙げ。

「ああああ……っ！」

スバルは止まらない。

マグナムを放った姿勢から地面に着地と同時に一気にリズに突っ込む。

リズもそれに気付き巨拳を構える。

スバルはそれを見て、しかし構わない。

左の掌を掲げた。

その中央に生まれる光球。

スバルは止まらない。

リズに真っ直ぐ突っ込む。

「ディバインっ！」

カートリッジ・ロード。

そしてナツクルを左の光球に叩きこみ。  
光がナツクルを中心としてスバルの全身を覆う！

「え〜〜……っ！」

「ブレイカー……！！！」

ー轟！ー

魔法の形式から砲撃と判断していたリズが驚きの声と共にシールドを張る。

スバルはその中央に光を纏い、突き出した拳をそのまま叩きつけた。

ー撃！ー

シールドに突き立つ光拳。

マツハ・キャリバーが唸りを上げる。

「ううりゃああああ……っ！」

「んうううう……！！！」

拮抗する両者。

辺りに光が弾け、紫雷が踊る。  
そして。

ー壊！ー

決着は訪れた。

砕けたのだ。シールドが。

リズも妹と同じく目を見開き。

スバルは先程と同じく止まらない。

そのままリズに突っ込む！

ー撃！ー

光を纏うスバルはリズを轢き飛ばした。

轢かれたリズはそのまま上空に回転しながら弾き飛び、地面に叩きつけられる。

ー激！ー

およそ人が地面にぶつかったとは、到底思えない音が響いた。

スバルは思わず、うわっちゃあ……！ と、呻く。

一応、非殺傷設定ではある、が。

……やり過ぎたかも……。

内心そう思う。

かも、では無く完全にやり過ぎではあるが、スバルも止まる訳には行かない。

何せまだ因子兵がゴマンと居て、スバルに向かって来ているのだ。折角、獅童姉妹をKOしたのに死んでは元も子も無くなる。

ウイング・ロード！

故にスバルは即座に撤退を選んだ。

光の道が空に走り、スバルはその上を駆ける。

一旦空に逃げられたら姉妹が気付いても大丈夫な筈であった。

スバルはあの二人が空を飛んでいた事を見た事が無い。

故に飛べ無いと判断したのだ。

今なら距離も稼げる。

因子兵も空は飛べないのだろう。

地上にはわらわら居るくせに空には一匹もない。

……これならいける！

スバルはそのままウイング・ロードの上を駆けた。

これなら逃げられる、と。

そして。

「……リゼちゃん。起きてる……？」

「……起きてる」

「あの娘、行っちゃったね……？」

「……うん」

「怒られるかな？」

「……多分」

「怒られるの嫌だね……？」

「……嫌」

「なら……」

「……うん」

「「」本気」を出そうよ」

瞬間。

スバルの脇を、背後から何かが駆け抜けた。

……え？

スバルはそれに疑問符を抱き。  
そして、それを見た。  
人。

二人の人だ。

獅童リズと、獅童リゼの二人。  
しかし、二人は先程とは全然違っていた。

鎧。

そう、鎧だ。

傍から見るとそれは明らかな鎧だった。

リズが朱。

リゼが蒼。

その鎧は二人の胸や腰、肩等にバリア・ジャケット越しに装備されていた。

そして、何より。

その背中からは”翼”が生まれていた。

鎧から出ている翼だ。

当然金属で出来ている。

だが、二人は今、明らかに空を飛んでいた。

「来てよね。朱嬢ツイノーバ・フローレン」  
「……来なさい。蒼嬢ブラウ・フローレン」



朱嬢と蒼嬢。

それがその鎧の名前なのか。

驚いたまま固まっていたスバルはハッと我を取り戻し、慌てて下に  
ウイング・ロードを向ける。

理由は簡単。

空を飛べる者に、空に道を作って走る者では絶対に勝てないのだ。

機動性と動きの自由度。

その全てで劣っているのだから。

そんなスバルに二人は、くると上空を旋回。

直後に猛烈な速度を持ってスバルに襲い掛かる。

「逃がさな〜い」

「……今度こそ、終わり」

「くっ……！」

一気に追い付かれた。

しかも挟み討ちだ。

スバルは呻く。

いっそ飛び降りる事も考え。

それを実行する前に二人は動いた。

リゼから螺旋を描く杖。

カドケウスをスバルに向ける。

「……インパルス」

「っ……！」

響く声。

そして差し向けられた杖の先端に集う光にスバルは左手を突き出す。

トライ・シールド。

しかし、リゼはそんな防御に構わなかった。

「ブラスト」

ー轟！ー

直後に光砲がシールドに叩きつけられた。  
光の奔流にスバルは呻く。  
そして。

「じゃじゃーん。行つくよーん！」  
「くっ……！」

響くリズの声に振り向く。  
リズは右の拳をスバルに向けていた。  
だが、今スバルは砲撃を受けている真っ最中である。  
下手に近付けばリズも巻き込まれるだけだ。  
ならば果たしてどうすると言うのか。

そう思った直後。  
答えが来た。

「ロケット、パッーンチ。なんちて！」

ー破！ー

飛んで来た。

”拳だけ”が！  
スバルはそれに驚きの声すらも上げられず。

ただ、目を見開き。  
直後。

「そりゃ、ロケット○ンチやのうて、ブラウクン・○グナムやろく  
くくく!!」

「へぶっ!?!」

ハリセンがリズの頭を盛大にはたきのめした。

「……へ?」

「……嘘……」

スバルがあんまりな出来事にポカンとなり。

リゼは何故かうろたえている。

ハリセンを右手に持つのは少女だった。

栗色の髪をセミロングにしている。

活発そうな少女である。

スバルと同じ年か、ちょっと年上か。

少女はニンマリと笑うとハリセンを掲げた。

「全く。……三年も経ってこの程度のボケしかでけへんなんて。…

…お姉ちゃんは悲しいで!」

「お笑いの修業に出てたんじゃないもんくく!」

「……同意」

獅童姉妹が、ブウブウと文句を言うが、少女は『やっかましいわ!  
?』と一喝。

それだけで姉妹の文句は止まった。

「……取り敢えずははたきのめして二人共連れ帰るで? ……全く。

一から修業し直さんと……」

「「だから」」」

「文句があるなら聞くで？ 勿論、これでな？」

そう告げ少女は姉妹にハリセンを突き付ける。

姉妹がそれに表情が険しくなる。

少女はそんな姉妹に構わない。

笑う。

「さあ……。行くで？」

直後、少女は姉妹に突っ込んだ。



崩れ落ちるビル。

それをフライツェの担い手。

ベルマルク・ナインは冷ややかな目で見る。

……この程度で終わりでしょうか？

自分の想像に。

しかし自分自身で否、と結論付ける。

この程度で終わりの筈が無い。

そしてその証明はすぐに来た。

「シューーーーっ！」

ー発！ー

二十の光弾が真っ直ぐにこちらに向かい来る。  
それにベルマルクは後退を選択。

さらにその前に因子兵が立ち、盾になる。

弾、弾、弾、弾、弾

因子兵から悲鳴が上がる。

ベルマルクはそれを一顧だにしない。

右手のフライツェを光弾が来た方向に差し向ける。

弾

銃弾は一発のみ放たれた。

それはビルの瓦礫に直撃。

分解された瓦礫をさらに分解。

粉末にまでそれを変える。

しかし。

そこにティアナの姿は無かった。

「……隠れんぼがお上手ですな」

「それでも無いわよ？」

「む……？」

直後、声がした。

真上から。

それにベルマルクは顔を上にあげる。

ティアナはそこに居た。

クロス・ミラージュから光のロープが伸び、ベルマルクの背後のビ

ルにくつついている。

そして振り子の要領でティアナはベルマルクに真っ直ぐ突っ込んで来ていた。

ベルマルクはそんなティアナにフツと微笑する。

「確かに、そのようすな。自ら声を出すとは……」

ー弾！ー

即座に発砲し。

直後に気付いた。

そう、ティアナが自分に声をかける必要は一切無い。  
と、言う事は……。

答えは即座に示された。

ベルマルクの放った銃弾は迷いなくティアナに突き刺さり。  
あっさりと向こう側に抜け、同時にティアナの姿が消えた。

「幻術……！？」

「ファントム……っ！」

「！？」

直後に響く声にベルマルクはぎよつとする。

声はベルマルクの真っ正面から響いた。

そこにティアナが居た。

彼女は3rd、ブレイズ・モードのクロス・ミラージュを真っ直ぐにベルマルクに向ける。

同時に3連で、カートリッジ・ロード。

ターゲット・サイトが銃口の先に展開する。

「ブレイザーーーっ！」

ー煌！ー

直後に光の奔流は放たれた。

巨大な光砲はベルマルクの前に居た因子兵をまとめて飲み込み。

ー轟！ー

その身体を消し飛ばしながら一切の停滞無く、ベルマルクに突っ込む。

ベルマルクはその光砲にフライツツェを差し向け更に発砲した。

ー弾ー

銃弾が光砲にぶつかりと同時に光砲は消え去る。

しかし、ベルマルクは顔を歪める。

因子兵が全滅。

盾が無くなってしまった。

それは、則ち。

「クロス・ファイアーーー！」

「ぬうつ……！？」

やはり。

それだけをベルマルクは思う。

盾が無いベルマルクのフライツツェでは複数の対象を消し去る事は出来ない。

そして、それこそがティアナの狙い。

故にティアナは一切の躊躇無く、それを放った。

「シューーーーーッ!」

ー発!ー

放たれる二十五の光弾。

ティアナより放たれたそれは迷い無くベルマルクに突き進む。

ベルマルクにそれを防ぐ手立ては無い。

向かい来る光弾群にベルマルクはただフライッツェを突き出すだけ。  
そして。

「フライッツェ。リミット・ブレイク」

はい。

そんな声だけがベルマルクより放たれた。

ー弾ー

……え?

そして、ティアナはそれを見た。

見てしまった。

自分が放った光弾が”全て”一瞬で消え去る光景を。

呆然とするティアナにベルマルクが肩を竦める。

「いや、お見それしました。まさか、リミット・ブレイクまで使わ  
されるとは、ね」

「っー!?!」

苦笑するベルマルクにティアナは我を取り戻し、クロス・ミラージ



ユを構える。

そんなティアナにベルマルクは苦笑を深くし。

「では、いい加減終わりにしましょう」

一寸っ

瞬間。

ティアナはいきなり拘束され、地面に転がった。  
悲鳴をあげる暇も無く、ティアナはただ転がる。

……何が!?

口元まで拘束されながら視線のみをティアナは巡らし、そして絶句した。

因子兵。

たった五体程ではあるが、因子兵がティアナの背後に居た。  
そして指を伸ばし、ティアナの全身を拘束している。

……まさか、伏兵!?

しまった。

それだけをティアナは思う。

考えてみれば、至極当然の戦術であった。

確実に勝とうとするならば当然の策。

「私は貴女を過小評価する積もりはありません。貴女は自分が思っている以上に強い」

故に。そう、ベルマルクは続ける。

「故に、です。貴女はここで確実に仕留めさせて頂きます」  
「んーんーっ！」

ベルマルクの言葉にティアナは暴れる。

しかし、因子兵の拘束は思った以上にきつく。

少しも緩まない。

ベルマルクは転がるティアナに銃口を差し向ける。

そこに、一切の迷いは無かった。

「では、おさらばです」

そして引き金が引かれようとして。

「ガバメント。ジャッジメント断罪者装填。滅罪LEVEL3。いっとくか」  
はい。

そんな声が聞こえた。

ー轟！ー

瞬間。

ティアナを拘束していた全ての因子兵が、その上半身を消し飛ばされた。

……え？

緩む拘束に、しかしティアナは抜け出さず、ただ呆然とする。ベルマルクもまた呆然と声を漏らした。

「……何と。貴方が来るとは……！」

「上からの命令だ。ひたすら面倒臭えが、やるしかねえだろうがよ」

ティアナはその声が響いた方向に目を向ける。

男、である。

恐らくは20代前半。

身に纏うバリア・ジャケットは派手さを嫌ったが如く、迷彩柄のズボンにタンクトップ。

そして黒のジャケットに、これまた迷彩柄のバンダナを金髪の頭に巻いていた。

何より異質窮まり無いのは手に持つ銃だ。

巨きい。

おそらくはデバイスなのだろうが。

本当にハンドガンのサイズなのか？ と、疑いたくなる程の巨大さである。

まるで、レンガのようなゴツさであった。

銃口の先にはクロスの一ポイント。

そんな異質な銃を持つ男はタバコを吸い、紫煙を燻らせる。

一気にフィルターまで吸い、フウーーーー！ と、煙を肺から吐き出した。

指でタバコの吸い殻を弾く。

そして。

「……かー！ ヤニが美味え……」

そんな事をティアナに、ベルマルクにのたもうた。



毒を受けて倒れ伏すエリオ、そしてキャロに白装束の三人組は駆ける。

まず召喚士たる少女から殺す積もりだった。

三人で、決して逃れえぬように一斉に留めを刺す。殺せる時に確実に殺す。

それが彼等、” 肅清士 ” の在り方であった。

彼等に固有の名前は無い。

三人で、肅清士。

ただそうとだけ呼ばれる存在である。

これまでも。

そしてこれからも。

故に子供といえど容赦は無い。

その証明の為に、まずは少女からあの世に送ろうと刃を振りかぶり。

「ーふっざけるなあああああああっ！」

怒号と共に振りかぶられた槍に三人揃って吹き飛ばされた。

「ぬ、う」

「なんと」

「まさか」

肅清士は揃って驚愕の声を上げ、自分達を弾き飛ばした存在を見る。それは毒で倒れている筈の存在だった。

エリオ・モンディアルである。

息を荒げながら真っ青な顔でキャロの前に立つ。

そして、三人組を真っ向から睨み据えた。

「ふざけるなよ……！ 誰が貴方達にキャロを殺させたりするものか……！」

エクスプロージョン！

ストラーダもまた主と共に吠える。

そしてエリオはストラーダを構えた。

「馬鹿な」

「致死レベルの」

「毒の筈だぞ」

「何故」

「動けるのだ？」

揃って驚きの声をあげる肅清士にエリオはギツと歯を食いしばり三人を睨んだ。

「……貴方達には絶対に解りっこ無い！ 僕はキャロを守る、て決めたんだ」

「成る程」

エリオのその言葉に三人組は頷いた。  
そのまま三人共刃を構える。

「絆の強さと」

「言うやつか」

「しかし」

「我等程強くは」

「無い」

「……何だって？」

エリオが問う。

三人はその問いに頷いてみせた。

「我等は」

「三人で一人」

「それぞれ固等は」

「無い」

「固にして全」

「それが」

「我等肅清士」

「絶対の」

「絆だ」

三人組は告げる。

それが誇りだとばかりに。

しかし、エリオはそれにむしろ哀しい顔を三人に向けた。

「……それは違うよ」

「何」

「だ」

「と？」

エリオの言葉が聞き捨てならなかったのか、三人組が一斉に聞き返す。

それに、エリオは首を振った。

「貴方達は逃げたんだ。他者、て言う存在から。他の人が、怖くて」「……黙れ」「」

三人は咄嗟にその言葉を留めんとする。

しかし、エリオは頭を振るい。

止めない。

「何度でも言うよ。貴方達はただの弱虫だ！ そんな、他人を認められない逃げ場を絆のように感じているだけだ！」

「「黙れと言ったぞ！ 小僧！」「」

叫び続けるエリオに三人が殺到する。

それ以上この言葉を吐かせてはいけない。

もし、それを聞けば自分達は……。

一斉に襲い掛かる三人にエリオはストラーダを横に構え、振るおうと力を入れる。

しかし。

カクンッと力が抜けた。

前に転げそうになりながら、しかし堪える。

ここで肅清士に負ける訳には行かない。

自分の後ろにはフリードが。

そしてキャロが居る。

ここで負ければ二人もまた殺される。

そんなことは認められない。

だから。

ぐっと、膝に力を入れ直す。

無理矢理にストラーダを全力で振るった。

「弱虫の貴方達なんかに――！」  
「「ぬうあああ！」」

三人組もまた吠える。

しかし、エリオの叫びはその咆哮をも駆逐した。

「負つけるもんかあああああああああつ！」

ストラダーが振るわれる。

三人組の刃が放たれる。

四つの刃が重なり合わんとした。  
その瞬間。

「よく言った」

――轟！――

巨大な竜巻が起きた。  
それも一つでは無い。  
数本だ。

竜巻は辺りに散る毒を纏めて吹き飛ばす。

「馬鹿な」

「こんな」

「こんな事が」

粛清士が驚愕の声を上げる。

そして竜巻が消えた時。

エリオの前には背中が在った。



男性だ。

180くらいの身長に黒尽くめの恰好である。

額当てすらも髪の色までも黒。

まさに全身黒尽くめである。

ただ、その手に握る。

鞘に納められた刀だけが鈍い銀の色を放っていた。

かなり長い刀である。

少なくとも普通の刀よりは長い。

柄頭に龍の頭がこしらえられており。

それが、酷く印象的だった。

「よく、頑張ったな。毒は消した。後は俺に任せろ」

「貴様」

「一体」

「何者だ？」

ポンッとエリオの頭に手が乗せられる。

そして黒尽くめの男は粛清士の言葉に向き直った。

「……誰でも構わねえだろ？　ただ一つ言える事は」

そして男は一步を踏み込む。

同時、刀の柄に手を掛けた。

「お前等は俺を怒らせた」

静かな、静かな言葉。

しかし、そこに込められた殺気が尋常では無かった。

大気がそれだけで震える。

粛清士は身体が震えることを自覚した。



「エクセリオン・バスターーっ！」

「撃ち抜きなさいっ！ 轟弓の担い手よーっ！っ！」

ー爆ー

ー煌ー

光砲と光矢の一撃がぶつかり合い。

そして巨大な爆発が起きる。

最早、幾度と無くこの攻防は繰り返されていた。

さらになのはから放たれる四十の光弾を、エリカが騎士を召喚して防ぐ。

そのまま放たれる矢を、今度はなのはが高速機動で回避。

そして両者から放たれる砲撃。

おおざっぱに見えて緻密極まりない綱渡りを二人は繰り返す。

ー煌！ー

十数回に及ぶ巨大な光爆を持って。

漸く両者は止まった。

「っーっー。っー、っー。い、いい加減、しつこいですわね。

貴女も」

「それは、っー、こっちの、っー、台詞だよ」

互いに荒い息を抑えながらデバイスを構える。

二人の実力は実際かなり拮抗していた。

エース・オブ・エースのなのはに、ここまで着いてくるエリカの実力も尋常では無い。

だが。

……ブラスター・モードを使えば……。

そう考え。

しかし首を振る。

ブラスターの反動は正直馬鹿に出来ない。

ただでさえ、この間使ったばかりだ。

下手な乱用はそれこそ、なのはにとって致命的な事に成り兼ね無い。

「……何かを迷っていらっしやるようですね？」

「っー！」

その言葉に目を見開く。

エリカはそんな、なのはにフツと笑う。

「馬鹿にされたものですわ」

エリカが挑発的に笑う。

切り札があるならば使えと。

そう、その表情が物語っていた。

しかし、なのははただ、ぐっと息を飲むだけ。

エリカはそんな、なのはに溜息を吐く。

「……宜しいですわ。なら、こちらからジョーカーを切りましょう」

先に切り札を出すのは趣味じゃないのですけど、と笑う。  
そして何十度目かの冥界を切り開いた。

「お出で下さいませね」

そう、エリカが呟いた瞬間。

”それ”は来た。

手。

巨大過ぎる手だ。

それがエリカが切り開いた空間を割くようにのっそりとはい出していた。

「冥界の盟主。死を司る神よ！」

エリカがそう叫んだ。

瞬間。

”それ”はその空間を両手で引き裂き、顕れた。

それは一見、巨大な骸骨だ。100mは下らない。

しかし、なのはは理解する。

これは死者であり冥界の住人だと。

骸骨が放つ膨大な魔力に、戦慄と共にそれだけを理解した。

「冥界の女王、ヘル。……と、言ってもこれはその亡き骸ですけれどもね。……さて、私は先にジョーカーを切りましたわよ？」

その言葉になのはは呻く。

そしてヘルを見上げた。

ヘルはなのはを待ち構えるかのようにその巨大な身体を立ち上がらせている。

ぐっと思を飲み。

そしてなのはは決意する。

ヘルを打倒せしめる己の切り札を切る事を――！

「ブラスター……！」

「いやあ。それは困ります」

エクスプロージョン！

いきなり響く声に両者共に固まる。

直後。

ーポォンー

まるで音叉のような音が響く。

ヘルを中心として。

その音にエリカが目を見開く。

「この音……まさか」

「僕の声が聞こえますか？　この世界に満ちる四万六千二百の音群達よ」

そして、と告げる。

「聞こえるならば、僕と共に一つの音楽を奏でなさい！」

なのははそれを聞いた。

まるで踊舞するかのように鳴り響く音楽達を。

それはヘルを中心として響く。

そして。

「曲名は、『運命』。冥界の女王ヘルよ。その運命に従い安寧の眠りにつきなさい」

瞬間。

ヘルの身体がいきなり砕けた。

「え……!？」

「っーーーー!」

なのはが驚愕し、エリカが唇を噛み締める。

同時、空から少年が顕れた。

細身な少年だ。

メガネをかけていて、黒い髪、黒い瞳の純和風な少年。

それだけを見ると少し暗い感じを覚える。

しかし、口元に浮かぶ笑みがそれを打ち消していた。

「……全く。まさか、その術式。完成させていたなんて。……」固  
有魔法術式”なんてよく完成させられましたわね？」

「いや、相当に苦労しましたよ。それに僕だって”前例”が無ければ途中で投げ出していたかもしれません」

ひょい、と少年は肩を竦める。

それにエリカが笑う。

優雅に。

しかし、確かな警戒を込めて。

そんなエリカに少年もまた笑った。

「久しぶりです。当主、エリカ様」

「……それは、何かの嫌味ですか？」

「いえいえ。勿論、心からの言葉ですよ」

くすりと少年は笑い同時に右手をスッと差し出す。

そこに握られていたのは大鎌だった。

エリカのレークイエム・ゼンゼとよく似て。

しかし、確かに違う曲刃。

それをぐるりと手の中で弄びながら少年はエリカと視線を合わせ続けていた。



クラナガンの空に雷光が二条疾る。

それはぶつかり合い。

離れ、またぶつかり合う。

ー撃！ー

再びの交差。

それを交えて両者漸く止まる。

二条の雷光。

片方は真・ソニックフォームとなったフェイト。

片方は飛・王だ。

二人は10mの距離を挟んで対峙する。

「いやあ。速いで御座るよなあ。流石で御座る」

「……貴方も速いよ」

謙遜では無くフェイトは純粹にそう思う。

単純な速度ではフェイトの方が上だ。

だが、旋回、及び機動速度では飛の方が上であった。  
それを成しているのは。

……あの、”足場”。

飛の足元に展開している足場にフェイトは心中唸る。

そう、飛の旋回、機動速度の理由はまさにそこにあった。

足場があれば、そこに足を置き、自らの体重を機転として回転。旋回が出来る。

対して通常飛行の場合、どうしても踏ん張る場所が無い為に、大きくぐると遠回りに旋回する事になる。

それは同時に、自らの速度による慣性の影響も受る、と言う事でもあった。

……足場のある無しで、こんなに違うなんて。

胸中、フェイトはそう思う。

そして両のバルデッシュを再び構え直した。

直後に飛が駆け出す。

フェイトも合わせるかのように動いた。

一戟！一

再びの交差。

フェイトはライオットとなった右のバルデッシュを叩きつけ。飛は左の足甲を叩きつける。

二つの一撃は激しくぶつかり。

飛はそこから更に回転。



軸足を交代させ、魔力を纏う左足を重心移動を行いながらフェイトに向ける。

「聖鳳拳技」

「っー!」

フェイトは咄嗟の判断で後退。

単純な速度で言えばフェイトは飛より上だ。

避けられる。

しかし、飛はそんなフェイトの思考をあっさりと裏切った。

足場を踏んでいる軸足を蹴ったのだ。

蹴りの動作の最中に。

それは一つの結果を生む。

前へと蹴り出す事により、更に蹴りの射程が伸びたのだ。

フェイトは驚愕しながら、身体だけは勝手に動く。

左のバルデッシュを半ば無意識のまま突き出し。

「飛翔裂脚」

ー撃ー

蹴りを叩きつけられてフェイトは盛大に吹き飛んだ。

「っくー!」

呻きを一つあげながらフェイトはしかし、空中でぐるりと回転。体勢を整える。

飛はそれを見ておおっと賞賛の声を上げた。

「あのタイミングでの飛翔裂脚を防ぐで御座るか……!」

飛の賞賛の声を受けながらフェイトはしかし、にこりもしない。防御出来ただけでは何も意味が無いからだ。そんなフェイトに飛は笑い。ならば、と構える。

「これは、どうで御座ろうな」

両手を飛は突き出す。

その構えにフェイトは一瞬だけ疑問符を浮かべ。直後に気付いた。

飛がやろうとしている事に。

フェイトは二つのバルデッシュを組み合わせ、ライオットザンバー・カラミティを発動。

振りかぶる。

飛はそれに一切構わず突き出した両手に魔力を集中。その掌に光球が生まれた。

「翔星閃光弾！」

ー轟！ー

裂帛の叫びと共に、放たれる光弾。

2 m弱のそれに、しかしフェイトは回避を選ばない。振りかぶったバルデッシュをぐるりと大きく振るう！

「ハアッ！」

ー轟ー

短い呼吸と共に放たれる気合い。  
振るわれたバルデッシュは迷いなく光弾に叩き付けられ。

「撃！」

それを盛大に打ち返した。

”飛本人に！”

「何と！？」

思わぬピッチャー・ライナーに飛が驚愕し、閃光弾を放った体勢から無理矢理身体を捻り、打ち返されたライナー、もとい光弾を避す。  
直後。

「ハアッ……！」

「っー！」

フェイトの声を真後ろで聞いた。

飛は最早、後ろを確認なぞしない。

足場を瞬時に形成するとそれを蹴り、空中で横回転。

同時に魔力を纏った蹴りを放つ！

そこにフェイトが居た。

ぐるとバルデッシュを振りかぶっている。

蹴りと雷剣が激しくぶつかり合う！

「ジェット……！ ザンバー……！」

「魁星……！ 裂光脚！」

「戟」

宙空で激しくぶつかり合う一撃。  
紫雷が疾り、衝撃波を撒き散らす。  
そして。

「翔星……!!」

「な……っ!?!」

飛の放つ言葉にフェイトは目を見開く。

同時に蹴りから魔力が失われ、飛の脚がバルデッシュに弾かれる。  
そしてバルデッシュは飛自身にも叩き込まれんとそのまま進み。

「閃光弾っ!」

直後に突き出した飛の掌から光弾が放たれ、フェイトの”真後ろ”  
に叩きつけられた。

……え?

―爆―

バルデッシュ自身は飛に迷い無く叩き込まれる。

飛は閃光弾を放った体勢のまま盛大に吹き飛んだ。

そして、フェイトの真後ろで起きる光爆。

それにそろりと目を向けると、バラバラに落ちていく機械群があった。

破壊されたガジェットのパーツである。

そして漸くフェイトは気付いた。

先の光弾はフェイトでは無く、その後ろの今、まさに襲い掛からんとしたガジェットを狙ったのだと。

「な、何で……?」

疑問符を浮かべ、うろたえるフェイトにカカと笑う声が届く。

飛だ。

彼は吹き飛んだ状態から足場を形成して、無理矢理体勢を整えていた。

「いや……。詰まらぬ邪魔が入ったで御座るな」

「……何で、ですか」

「む?」

笑う飛にフェイトは率直に問う。

何で助けたのかと。

今の自分の装甲は無いに等しい。

ガジェットのアタックだろうと致命的なのだ。

それを何で自分の一撃を受けてまで助けたのかと。

フェイトは一言、何でと言う言葉に込めて問うた。

それに飛が笑みを苦笑に変える。

「言ったで御座るよ? 詰まらぬ邪魔だと。あんな機械如きに貴女を討たせるなぞ自分、許せぬで御座るよ」

「……………」

飛は肩を竦める。

そして黙り込むフェイトに向けてフツ笑う。

「貴女を倒すのは自分で御座る。他の誰にも譲る積もりは御座らん」

「貴方は……」

「さあ……」

フェイトの言葉を飛は途中で切る。  
そのまま構えた。

「相対の、続きを」  
「……………」

あくまで相対を望む飛にフェイトは微笑を浮かべる。

「馬鹿ですね」と一言呟き、フェイトもバルデッシュを掲げた。  
瞬間。

「ほんと。飛兄は相変わらずだよね」

新たな声が響いた。

「え……………」  
「な、なぬ!？」

その声にフェイトは疑問符を。

飛は驚きの声をあげる。

声の主は二人の頭上に居た。

少女だ。

快活そうな少女である。ポニーテールにした黒髪が元気そうな少女によく似合っていた。

少女は飛にヤッホーと手を振る。

「ひっさしぶり♪ 飛兄♪」  
「あ、ああああ……………」

そんな少女を見て飛はがっくりと膝を着く。

……………どうでもいい事だが、何故足場まで展開してそんな真似をする

のだろうとフェイトはちよつと思う。

「さ、最悪で御座る。……よりも。よりもよって、こんなタイミングで……」

「え、えつと……」

そんなに自分との相対を楽しんでいたのだろうか？ と、ちよつと可哀相になり、飛にフェイトは声をかけようとして。

「折角……！ 折つつつ角っ！ 金髪巨乳の美女とフラグが立たんとしていたのに……い！」  
「……………」

その一言にフェイトは言葉を放つ事を止め、バルデッシュを持ち上げた。

それに、ん？ と飛が顔を上げ。

瞬間。

「ジェット……。ザンバー……！」

「飛兄の浮気者……！」

フェイトと、何故か少女にまで光弾を叩き込まれ、飛は盛大に吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた。



「ヒュー………」

紅蓮天昇と青龍のぶつかり合いによって生まれた光爆が収まり。  
静けさを取り戻した海の上でシオンは深く長い呼吸を吐いていた。  
二つの一撃をまともに喰らったアルセイオは海の中に落ちた。  
完全に紅蓮天昇も青龍も入った手応えをシオンは感じ。  
しかし。

「……なん、だ……？」

どうしようも無い寒気を覚えていた。  
身体を思わず震わせる。

【……？ シオン。どうした？】

「いや……」

イクスの声にシオンはちらりとアルセイオが落ちた海を見て。  
しかし、何も起きない事にホッとする。

「……気のせいだろ」

【何の事だ？】

「いや……」

先程感じた寒気をイクスに話そうとした。  
瞬間。

「……俺は、お前を甘くみてたよーだ」

【っー！？】

響く声にイクスと二人して驚愕する。  
直後、海からそれが出て来た。  
無尽刀。



アルセイオ・ハーデンが。

彼は呆然とするシオンに苦笑する。

「いや。死ぬかと思ったぜ。マジに」

「何……で……?」

シオンが目を見開いたまま問う。

それにアルセイオは苦笑する。

「教えてやんねえよ。……さて」

「っ……!」

その言葉にシオンは即座に反応。

カリバーンとなったイクスを構える。

未だシオンの精霊融合状態は継続中だ。

……まだ、まだ。行ける……!

そう思い。

しかし。

ソード・メイカー・ラハブ。

響くキー・スペル。

そして。

「ダインスレイフ。オーバー・ドライブ 凌駕駆動」

アルセイオの声にシオンは息を飲んだ。

ードクンー

やけに自分の心臓の音が大きく聞こえる。

アルセイオはシオンに笑い。

右手に持つ紅の長剣を振り掲げた。

苦笑する。

「……対、伊織用の代物なんだがよ。坊主。いや、”神庭シオン”。  
お前にこの技をくれてやる」

ードクンー

心臓の音が聞こえる。

始めてアルセイオに名前を呼ばれたにも関わらずシオンはその音を  
聞いていた。

そして。

我は、無尽の剣に意味を見出だせず。

聞こえる。

その声がシオンに聞こえる。

それはアルセイオだけの呪文。

アルセイオにだけ許された呪文だ。

ードクンー

心臓の音が大きく響く。

シオンはただただ呆然とアルセイオの姿を見ていた。  
身体が震える。

寒気に。

故に我はたった一振りの剣を鍛ち上げる。

そして、その剣はこの世界に生まれ落ちた。

異質な剣だった。

その剣は。

アルセイオの手に握られた3 m程度の大剣。

50 mもの極剣を創り出せるアルセイオからしてみれば万すらも創  
れうる筈の剣。

しかし、それが。

酷く、酷く。

怖かった。

ードクン

シオンの心音が再び大きく響く。

そして気付いた。

この音は、寒気は。  
全て。

ただ、恐怖していたのだ。

アルセイオに。

あの剣に！

「銘。”斬界刀”」

震える。

震える、震える！

あの剣が怖くて。

怖くて、怖くて！

そんなシオンにアルセイオはただ笑い。

「じゃあな。坊主」

「斬」

……それがいつ振り下ろされたのかシオンは分からなかった。ただ、分かるのは自分の背後。海が真つ二つに”割れていた”。

否、”斬られていた”、だ。

斬られた海は、海底を晒し。

さらに海底には巨大な海溝があった。

しかし、その海溝すらも。

あの剣によって斬られた斬痕である。

それらを背後にシオンはただただ、立ち尽くす。

アルセイオは斬界刀を肩に担いだ。

「……上手くいったようだな。下手に斬る角度を間違えるとよ。この星を”斬りかねなくてよ?” いや、実際難しいんだぜ? マジに」

アルセイオの言葉。

しかしそれはシオンには聞こえない。

ただただ。

ただただ、ただただ。

寒い。

そして。

「……………っ！」

次の瞬間。

シオンは軀中から大量の血を撒き散らしながら海の底へと落ちていった。



「ーっ！ ーっ！」

【シオン！ シオン！】

響くイクスの声に、しかしシオンは応えられない。  
息すらも難しい。

軀からは未だに夥しい量の血が流れている。  
だが、そんな状態にあってもシオンはまだ。

……生きて、る……？

自分の身体をシオンはまさぐる。  
どこも真っ二つになんてなってない。

”斬られてない”。

そんなシオンに感心したような口笛が届いた。  
アルセイオだ。

「おゝ。斬れてない。て、事はよ。坊主、アレを避けたんだな。  
いやゝゝ大したもんだぜ」  
「っー！」

声が出せない。  
変わりに睨みつける。

そんなシオンの視線をアルセイオは笑い、受け流す。

「“直感”の。しかも、かなり高ランクだな。無意識にアレを避す  
なんぞ。……ただまあ、”余波”までは避せなかった、て事か」

アルセイオの言葉にシオンは言い返せない。  
目を見開いて呆然とアルセイオを見るだけだ。

つまり、シオンは無意識とはいえ斬撃を”完全に避していた”のだ。  
この軀中の傷は余波によって刻まれただけ。  
しかし、それにこそシオンは震撼する。

一体、どれほどの威力があれば余波だけで融合状態の自分を瀕死に  
追いやれるというのだ。

直撃を受けたらと考えると背筋が寒くなる。  
それは確実な”死”を意味しているからだ。  
そして。

「それじゃあ……」

「っー！　っー！」

アルセイオが再びあの剣を掲げる。

世界を斬り裂きし剣。

斬界刀を。

それにシオンはしかし。

身じろぎすらも出来ない。

声すらも出来ず。

ただ、ヒュー、ヒュー！と息を漏らす事しか出来ない。

そんなシオンにアルセイオはゆっくりと斬界刀を振り上げ。

「今度こそ、じゃあな。坊主。迷うなよ？」

身動きが出来ないシオンに振り下ろされ。

ー轟！ー

直後に碎けた。

”斬界刀”が！

「ああ！？」

いきなり碎けた斬界刀にアルセイオは眉を潜め。

次の瞬間。

ー撃ー

自分目掛けて真っ直ぐに音速超過で突っ込む”剣”を見た！



「な、ん。ちいっ！」

アルセイオも負けじと剣を創り出しぶつけるが、あっさりと碎かれる。

それにアルセイオは舌打ちし、更に向かい来る剣達にその場を離れた。

……何だ？ 俺と同じ能力持ちでもないやがるのか？

更に突っ込んで来る剣達にアルセイオはそう思い。

剣群を形成してそれらの迎撃を開始した。

「やれやれ。あのアホは、ほんま手が掛かるなあ……」

海を仰ぐクラナガンのビル。

その屋上に少年の姿があった。

髪はかなり長い。

セミロングくらいか。

眼鏡をかけていて、それをチャツと直す。

そして左手を前に差し出し、右手を肩に並べると言う奇妙な格好でいた。

弓を持っているならば、正しい構えなのだろうが、現状。少年は何も持っていない。

【……仕方ないでしょう。敵はアレでも元2位。寧ろシオンはよく持った方です。……悪いのはあの、馬鹿です】

いきなり女性の声が響いた。

少年以外、そこには誰も居ないのに。

少年はその声に笑う。

「ほんま、お前はイクスと相性悪いな？」

【当たり前です。自らの主に”本当の名前”を告げない融合騎なんて、融合騎の風上にも置けません】

まあ、そらそうやけど、と少年は苦笑し海を見た。  
正確には海の遥か向こう。

”アルセイオ達が居る18km先の場所を”。  
少年にはその姿が今、はっきりと見えていた。

「それじゃあ、あのアホ。助けるで？ フェイル」

【あの馬鹿を助けるのは釈ですが……。了解です。マイマスター】

瞬間。

少年の左手に光の線が走る。

それは、左手を中心として一つの形を取った。

弓の形に。

「刻印弓。”無駄無しの弓”フェイル・ノボザアイゼン。発動」

【はい。魔剣殺しの剣、剣製。ソードバレル。オープン】

瞬間。

少年の手に一本の剣が握られた。

魔剣殺しの概念を秘めし、剣が。

その剣を弓に少年は番える。

狙う先は、ただ一つ。

”幼なじみ”と相対している敵。アルセイオである。

その敵の姿を”ハッキリと視認”して少年は笑う。

弓から伸びた弦を引き絞る。

そして。

「本田ウィル」！ 狙い撃つでえ！」

叫び、弦を手放した。

瞬間。

ー轟ー

番えられた剣は直後に音速超過。

空気をぶち抜いて、真っ直ぐに海の向こうへとひた疾った。



ミッドチルダ、大気圏上空域。

衛星軌道の高度にその艦の姿があった。

XX級次元航行艦。レスターシアの姿が。

そのブリッジでクラナガンの状況を見ていたグリム・アーチルは啞然としていた。

突然の事に、驚愕して。

アースラのメンバーを孤立させ。各個撃破し、その様を八神はやてに見せ付ける。

最初はその目論みは上手くいっていた。  
しかし。

急に現れた謎の魔導士達によってその目論みは瓦解した。

魔導士達はアルセイオ隊やガジェット。因子兵達を相手取り戦い出したのだから。

アースラメンバーは誰一人欠ける事もなく。

今も全員無事であった。

「何なんだ……。何なんだ！？ あいつ等は！？」

「すみません……。所属不明です。いつ転移して来たのかも……」

「く……。！」

……こんな馬鹿な事があるか！？

そう思い。

歯を食いしばる。

これでは何も変わらない。

”あの人”や、”あいつ”に顔向け出来ない。

グリムはぐつと再びモニターを見る。

クラナガンの致る所で起きている激戦を。

瞬間。

《――諸君》

聞き覚えのある声が響いた。

「この声、は……」

呆然とモニターを見る。  
モニターはザザッと波打ち、そして切り替わった。  
ある一人の男の姿を映したのだ。  
その姿をグリムは知っている。  
その男の名は……。

「叶、トウヤ、だと……！」

そんなグリムの呻きに合わせるかのようにモニターのトウヤは再び声を放った。

《ー諸君。私の声が聞こえているか？》



《さて、諸君。我等は今。それぞれ相對すべき者達と向き合っている》

その声はクラナガンの全域に広がっていた。

それはアースラ・メンバー達に。

そして救援に來た者達にも聞こえていた。

《諸君。我等はこれから戦おうと思う。どこかの馬鹿の思い上がり  
を正してやろうとね？》

トウヤはモニターの中でスッと手を上げる。  
そして微笑して見せた。

《その上で問う。我等はこれから何を成す?》

その声に朱槍の少年が槍を掲げた。

「家出なんぞをした馬鹿兄貴をはっ倒す」

白槍の女性が肩を竦めた。

「目の前の年甲斐の無いじい様を叩きのめすわ」

大剣の青年が肩にそれを担ぐ。

「取り敢えず。うじゃうじゃいる、こいつ等を全部ぶっ壊すとするか」

ハリセンを姉妹に向けていた少女がハリセンをレイピアへと変換する。

「お笑いの基礎を鍛え直す為に、目の前の二人をはたくわ」

ゴツイ銃を持つ青年がタバコを吹かす。

「……面倒臭いから一抜けー」

《却下だ》

「ちっ! ……取り敢えず、眼前の敵を断罪するか」

銀の刀を持つ黒尽くめが、鞘ごと地面に刀を突き立てる。

「俺の前に居る奴らをぶっ殺す」

大鎌を持つ少年が眼鏡の位置を直す。

「実験も兼ねて遊ばせて頂きます」

ドシヤグシヤとか余計か音を鳴らせながら少女が快活に答える。

「取り敢えず。浮気者を成敗します！」

そして、最後。

刻印弓を持つ少年がニヤリと笑う。

「腐れ縁のアホダチに借しを作りに行きますわ」

《上等だ》

それぞれの答えを聞きトウヤは笑う。

そして手を振り上げた。

《答えろ。我等――》

『我ら全ての戦いを終えるための力なり』

《我等――》

『我ら全ての未来を照らし行く意気なり』

《我等――》

『我ら全ての遺恨を知りて進む者達なり』

《我等は！》

『我ら全ての悪意を躊躇わず進む者なり！』

《我等は！》

『我ら知識の名を冠せし蛇なり！』

叫びが響く。

クラナガンに。

ミッドチルダに。

それを受け。

トウヤが手を振り下ろす。

《ならば答えろ！　そして相対すべき者達に教えてやれ！　我等が  
名は――！》

『グノーシスだ！！』

大音声の叫びが響き。

彼等は己が名を叫んだ。

”最強の個人戦闘能力者集団”グノーシスは。  
ここに、こうしてツアラ・トウ・ストラに宣戦を告げた。



(第三十六話に続く)

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆  
バラララ〜〜パラ〜〜。

ア

「はい♪ 本日もやって来ました。アリサ道〜〜場〜〜♪ 当道場主。アリサです♪」

す

「弟子のすずかです♪」

Jシ

「……………」

ア

「そして、今回召喚しますは♪ 魔法少女リリカルなのは B r a v e から、主人公、日比野未来〜〜♪」

未

「おっす。アリサ、すずか久しぶり。日比野未来だ。よろしくな」

ア

「久しぶり〜〜。アンタも記憶無くしたりなんなり、忙しいわよね」

未

「まあな。……しっかし。本当に俺の事も知ってるんだな……」

す

「それがここ、アリサ道場だから♪」

未

「……まあ。ここも大概だよな。で、EXの主人公のシオンはどこだ？ 挨拶しときたいんだが」

Jシ

「……はい」

未

「……ん？ いや、女子高生に用は……。てか、EXに女子高生なんて出てたか？」

ア

「それ、シオンよ？」

未

「……は……？」

Jシ

「……ども。神庭シオンです」

未

「………」

Jシ

「………」

ーカッコーー

未

「……オッケー。うん、落ち着いた。……ちよつと意識が飛びかけたけど。……アリサ。”これが”シオンだと？」

ア

「そうよ？」

未

「髪が長いぞ？ 確かに銀髪だが」

ア

「今は女の子だからね」

未

「……胸がしっかりあるように思えるんだが。しかも、結構でかい」

ア

「……見る所。しっかり見てるわね、アンタ。まあ、女の子だからね」

未

「……プロフィールより、身長が低くなってないか？」

ア

「女の子だからね」

未

「……女装でなく？」

ア

「まあ、一種女装みたいなもんだけど。身体はしっかり女の子よ？」

未

「何でだよ!？」

Jシ

「……俺から説明ー」

す

「シオンちゃん。今は女の子だから私、て言わなきゃ♪」

Jシ

「……全力で無視しますが。まあ、平たく言うと。LVの裕希奈からのプレゼントシリーズが原因です」

未

「ああ、アレな。コスプレ衣装の詰め合わせ」

Jシ

「……ええ。それが、よりもよって。アリサ師匠に届きまして」

未

「……もう、オチは見えたな。……詰まりは、着せ替え人形？」

Jシ

「……素早い理解。感謝します」

未

「……大変だな」

Jシ

「……三着目で、全てを諦めたんで」

ア

「いやあ〜♪ 楽しかったわよ？ 嫌がる年下の娘を脱がして着せ替えるの♪」

未

「……痴女め」

ア

「何か言った？ ちなみに未来のも用意は万全だから♪」

未

「アイアイマム！ 何も言っていないであります！」

ア

「そうよね〜♪」

Ｊシ

「……しくしく」

未

「シオン……。強く生きろよ。……て、アレ？ じゃあ、なんでシオンが女性化してんだ？」

Ｊシ

「……なのはワールドには高等変身魔法に質量までも変化出来る変身魔法があります」

未

「あ〜。ユーノがよく使ってたやつな？」

Ｊシ

「……ええ。で、人をフェレットもどきに出来るなら男から女に変えるのもわりかし簡単な訳で」

未

「……………」

Ｊシ

「……アリサ師匠が、どうせなら完璧を期したい、と」

未

「分かった。シオン。もう分かったから。お前、もう真っ白に燃え尽きそうだから。思い出さなくていいんだ……」

Jシ

「しかも、これ。アリサ師匠以外解けないオマケ付き……」

未

「……もう、もう何も言わなくていいんだ……」

Jシ

「未来さん。ありがとうございます……」

未

「ああ」

す

「感動の光景だね〜♪」

ア

「そうね。ところで未来？ アンタそれ、セクハラよ？」

未、Jシ

「「……は……？」」

ア

「今のシオンは女の子だから、抱き合おうと胸、当たるでしょ？」

未

「ちょー！？ アホかお前！ 誰が女の子化したとは言え、男と抱き合ってそんなやましい気持ちになるか！？」

ア

「ああ。……哀れシオン。ゲストに辱められるなんて……」

未

「聞いてねえ上に話しがでかくなってるし！？」

す

「これは訴訟だね？」

未

「既にそこまで！？」

ア

「弁護士呼んどきなさいよ？ 検事は私がやるから」

未

「い、いやいやいや！ 待った、待った！ 何だこの急展開！  
？ 何で俺、ゲストで召喚されたのに訴訟起こされそうになってん  
の！？」

す

「……ほら、カツ丼だよ？」

未

「は？ え？」

ア

「食いなさい」

未

「あ、ああ。うん……」

ア

「……どう？ 美味しい？」

未

「う、うう……。お袋オ……」

ア

「自分の罪を認める気になった？」

未

「俺が、……俺が悪かったっス……」

ア

「そうね。……これも時代が起こした事件なのね……」

未

「て、ちっが~~~~う！！」

す

「わ！？」

ア

「ちょっと！ 急に怒鳴らないでよ！」

未

「怒鳴りもするわ!?! 何だ今のコント! そしてなんで俺、こんなにノリツツコミかましまくってんだ!?!」

Jシ

「あゝゝ。未来さんも道場因子にすっかり感染しちゃったんですね」

未  
「こ、これか!?! これが元祖道場因子……! くっ! 侮れねえ……!」

ア

「さて、脱線に脱線しまくったけど、今回のおさらい♪ シオン? いつも通りよろしく♪」

Jシ

「了ゝゝ解です。えゝゝ。止めを刺す時は余裕を見せんな♪ です♪」

未

「……まあ、アースラメンバーのほとんどが止めのタイミングで介入されてるからな。……恐るべし、ご都合主義」

「まあ、でもピンチにならないとグノーシスメンバー入る意味ないしね♪」

Jシ

「……何気にキツツイ事、言いますね」

ア

「まあ、でも真理よね。さて、んじゃあおさらいはここまで♪ ……未来ゝゝ?」

未

「ん? どした?」

ア

「てい」

ーぺっかーー

未

「はう!？」

Jシ

「あ、まさか……」

ア

「ふっふっふ。そのまさかよ? さあ、目覚めなさい! 女の子バ  
ージョン未来よ!」

未

「て、待て……い! うわっ! もう、変わってるし!？」

ア

「ふっふっふ。さて、それじゃあ……。すずか?」

す

「うん♪ ちゃんと用意してあるよ? 巫女服♪」

未

「ちよっ、ちよっちよっちよっちよっ……!」

ア、す

「「さあ、綺麗になりましたようね……♪」」

未

「きゃあああああああああ!?! いいやあああああああ

……!」

Jシ

「……こっちの方がよっぽどセクハラとして訴訟出来そうな気がしますけど。さて、では未来さんが犠牲になってる間に告知を♪ E  
Xもこの間。無事50万PVを突破しました♪ ありがとうございます  
ます♪ ……正確には8月入ってすぐですけど。三部作化で報告が  
遅れて申し訳ありません。さて、50万突破を記念して、作者がち  
よっとした企画を考えてます。

題して、『クロスリレー企画第二段♪ クロス学園編。  
なのはランブル……』です。



まあ、分かりやすく言うと今やってる海鳴温泉の学園バージョンみたいなものです。で、このクロスリレー企画。参加したい人を是非募りたいと思います♪ クロス学園でオリキャラ達で遊びたい人。クロスリレーに興味がおありの人。是非是非、ご参加下さい♪ よろしくお願いします。さて、では未来さんはー」

ア

「完成だわ……」

す

「いい仕事したね……」

そこに居たのはあ。清らかなる白衣に身体を包みい。朱い袴が清純さを醸しだしたあ。白い足袋にわらじが和を象徴するう。

立っつつつ派な巫女さん~~~~っ (B y若本(の、声真似したタカト))

ア

「風間はーまいおにー。そしてJ K (女子高生) シオンに続く女性化シリーズ第三段!」

Jシ

「……カナンのアレは最早女性化なんすね。てか、変な名前付けないで下さい。……よく見たら最初からJシに名前なってるし」

ア

「聞かないわ♪ てな訳で第三段! みっこみこ未来~~~~♪」

み未

「……死にたい。マジに……」

す

「第三段の写真撮るよ~~~~♪」

み未

「写真撮んなぁーっ!」

Jシ

「と、言うか待って下さい！ 第一段がカナンなのは分かりますが、俺のまで!？」

す

「うん。JKシオンちゃん1st写真集〜♪」

Jシ

「ぎゃあああああああー！っ！ いつの間にそんなものをー！ー!？」

ア、す

「「さつき」」

Jシ

「ハモった!？ くうっ！ これだからっ！ これだから金持ちは……!」

ア

「さて、暴れる二人を華麗に無視して今日はこれまで♪ 読者の皆様。いつも読んで頂いてありがとうございます♪ 50万PV突破出来たのは皆様の応援のお陰です。本当にありがとうございます♪ これからもどうか応援よろしくお願いしますね♪ そしてmebiusさん。未来の召喚ありがとうございます♪ こんな風になっちゃいましたが、お許しいただけると幸いです♪ 笑ってくれるとなお、うれしいです♪ ではでは♪」

す

「また次回〜♪」

み未

「しくしくしくしくしくしく……」

Jシ

「……未来さん。今日は飲みましょう。付き合いますよ。カナンも呼んで一杯やりましょう……」

ア

「ちなみに女の子化。解かないから♪ 頑張ってね〜♪」

Jシ、み未

「しくしくしくしく……」

（終幕）

### 第三十五話「グノーシス」(後編) (後書き)

「ついに宣戦を告げるグノーシス・メンバー達」 「それぞれの相対者。そして、それぞれ戦場で戦いを開始する」 「そんな中、

ウィルはアルセイオと相対する。腐れ縁の友達を守るために」

「そんなウィルに、シオンは」

「次回。第三十六話。『背中合わせの相棒』」 「少年は少年と背中を合わせる。かつてと、同じように……」

### 第三十六話「背中合わせの相棒」(前編)(前書き)

「ワイはあのアホと幼なじみやった」

「俺はあのボケと

幼なじみだった」

「あのアホはどこまでも鈍うて、天

然で、無茶ばかりする真性のアホで」

「あ

のボケはどこまでもエラソーで、色ボケで、臆病なばっかの真性のボケで」

「でも、多分」

「でも、多分」

「ワイはあいつ以上の相棒はおらん」

「俺はあ

いつ以上の相棒を知らない」

「「ワイと俺は最悪にして、

最高の相棒だから」」

「魔法少女リリカルな

のはStS，EX。始まります」

### 第三十六話「背中合わせの相棒」(前編)

「ちい……!!」

―撃!―

次から次へと放たれて来る剣にアルセイオは舌打ちを一つ打ちながら、さらに剣を生み出し迎撃する。

そして、そのまま剣が向かってくる方向に目を向ける、が。その方向には何もなかった。

少なくともアルセイオの見える範囲には。

……俺に見えねえ、分からねえ範囲、て事は2kmや3kmじゃあ。きかねえか……!

どうやらこの剣の射手は超長距離からの射撃を得意としているらしい。

それをアルセイオは思い、再度舌打ちする。

このタイプは例えば、はやてが1番当て嵌まる。

はやての場合はさらに射程が伸びるが。

何せ、ミッドの地表全てにその射程は届くのだから。

精密性が少しばかり足りないが、それは炸裂型の術式等でカバーしている。

だが、この射手は違う。

この射手は”正確にアルセイオを狙い撃っている”

しかも物理法則に束縛されてしまう物質型の”剣”で、だ。

例え音速超過しようと。

……否。

速度が速ければ速い程、空気抵抗、その他諸々の影響を受けてしまうのが、物質型の攻撃だ。

しかも、例え音速超過だろうと。……これはアルセイオの知らぬ事だが、18kmもの超長距離を翔けるには放たれてから数秒のタイムラグが起きる。

則ち、この剣の射手は未来予知にも等しい弾道計算、そしてアルセイオの数秒先の回避先を読み切っているのだ。

最早、一種の神業と言っても過言では無い。

……一体何モンだ？

アルセイオはこの異常とも言える神業を成し遂げている敵にそう思  
い。

しかし、その口元は確かに。

笑っていた。

「笑つとるなあ……。あのおっちゃん」

【はい。……まさか見えているのでしょうか？ 私達が】

そう言葉を交わすのは、ウィルと、彼のユニゾン・アームド・デバ

イスたるフェイル・ノートだ。

二人は超長距離での”目測”を可能とするアビリティー・スキル・鷹の目でアルセイオが笑みを浮かべているのを見ていた。

「まさかなあ……。フェイル。あのおっちゃんが鷹の目を持つてるなんて情報はなかったで？」

【ええ。私も過去の無尽刀の情報を検索してみました。……間違いない、彼のアビリティー・スキルに鷹の目はありません】

なら、なんでやろ？

と、ウィルは首を傾げる。

更にもう一矢放ち、止まらず更にもう一矢放つ。

数秒の時間を置いてアルセイオに剣矢は到達し、あっさりと迎撃された。

「くああ……。っ！ こっちの放つ剣をあっさり弾きやがるわ。ムカつくわあ……」

【流石は元第二位、ですか。簡単には仕留めさせてくれませんか。……これだけこちらに有利な状況なのに……】

ウィルが呻き、フェイルが溜息交じりの言葉を吐く。

だが、このまま消耗戦に持ち込めば、勝ちはこちらのものだった。何せ、向こうはシオンと戦った後だ。

しかも、切り札まで切っている。

いくら何でもこちらより先に魔力が尽きる。

その筈だった。

そう、”このままならば”。

《うっし。見つけたぜ？》



「【……………!】」

響く声に二人は身を固くし、即座に振り向く。  
そこには、”ガジェット”が居た。  
モノアイをキュイキュイ鳴らしながらウィルを見ている。

【……マスター!】

「……ちい!」

呻き、即座に刻印弓を収納。

即座に剣製開始。

フェイルからの情報呼び出しにて、その剣を生み出す。

白と黒の長刀。

二刀一対の刀を!

「斬!」

×字に描かれる白と黒の斬線。

ガジェットはそのままガランと崩れ落ちた。

【……やられました……………!】

「ああ……………! こっちの居場所が掴まれた。……………最悪や……………」

二度目の呻きを漏らし、即座にアルセイオへと再び視線を向ける。

アルセイオは足元に魔法陣を形勢していた。

カラバ式の魔法陣である。

あれから読み取れる魔法は……………。

【転移魔法! ……マスター!】

「分かっとなるわ! 逃げるで!」

叫び、ウィルは即座にビルを蹴る。

そのまま隣のビルに乗り移り、逃げようとして。

ー弾・弾・弾・弾・弾ー

突如として放たれた弾丸に、それを阻害された。

「ちっ……。なんや!？」

苛立たし気に周りを見回す。

そこには先程と同じガジェット達が居た。

その数、五体。

銃口をウィルへと向け、その周りを囲んでいる。

【……先程と同じタイプ……!】

「ガジェット言うたか……。確かAMF持ちやったな」

道理でと、ウィルは唸る。

ウィルも狙撃の最中に邪魔が入る可能性は認識していた。

故に、探査術式を念入りに周りに張り巡らせたのだから。

ウィルのミスはただ一つ。

探査術式を動体反応では無く、魔力反応に限定していた事だ。

これは”魔力を感知”する事で反応するタイプの術式である。

則ち、魔力を使用しないものには意味が無いのだ。

ガジェットは機械であり、あくまで魔力を使用しない。

アルセイオ隊を始めとした、強力な魔導士を強く警戒していた事が

逆に裏目と出てしまったのだ。

ウィルは自分のミスに舌打ちし、そのまま手を掲げる。

「フェイル。ソード・バレル・フルオープンや」  
【はい。マスター】

連続剣製鍛造。

無数の剣がウィルの周りに立ち並ぶ。

ウィルはそれを即座に解き放った。

「ぶちかますで！」

ー撃・撃・撃・撃・撃ー

瞬間。

総数にして五つの爆発が起きた。

造り出された剣がガジェットに飛来し、貫通。

撃破したのだ。

ウィルはふうと、溜息を吐くとそのまま飛ぶ。

今はただ。

ここから離れねばならない。

アルセイオと自分の戦力差は、ただその射程だけである。

一つの剣ならば魔剣殺しで無効化する事が出来ても、万を越す剣群など、どうあがいても無効化など出来ない。

つまり、真っ正面からアルセイオと対峙した場合、ウィルにはアルセイオに勝てる可能性は万に一つも無いのだ。

故にここから離れねばならないのだ、が。

「おうおう。お元気なこって」

「【っー！】」

響く声に、ウィルはぐつと歯を噛み締める。

ウィルの背後。

そこから声がかけられたのだ。  
赤の長髪に、赤の髭。

赤尽くしの男がそこに居た。  
アルセイオ・ハーデンが。

「さって。借りは返さねえとな？ ええ？」  
「……最悪や。ホンマに……」

呻き、後ずさる。

ウィル。

アルセイオを見ながら、くつと呻き。  
そして。

「……まさか、アホシオンに助けられるやなんて……」  
「……誰が、アホだ！ ボケウィル……！」  
「っ……！」

今度はアルセイオが目を見開く番であった。  
その声が響いた方向。  
自分の真後ろに振り向く。

見えたのはイクス・カリバーンを左手一本で振るうシオンの姿！

「戟！」

無意識に振るったダインスレイフとカリバーンが重なり、しかし。  
体勢が悪かったのかアルセイオが剣勢に押され、数m後退した。

「ちい……！」  
「へっ……！」

呻くアルセイオに未だに血だらけのシオンが笑う。  
そして、カリバーンを左手一本で構えた。

「借りは返さねえと、だっけ？ おっちゃん」

「……坊主……」

呆然とアルセイオはシオンを見て。

しかし、直後に笑い出した。

くくっと言う笑みから。

やがて、大爆笑に。

そしてシオンに、ウィルに向き合う。

「……上等だ、ガキ共。二人纏めてかかって来いや!!」

叫び。

瞬間でその背中に生まれる剣群。

シオンはそれを見ぬままに駆け出し、ウィルは刻印弓を展開する。  
同時に剣群は二人に振り落ち。

ー轟!ー

海を仰ぐクラナガンに轟音を響かせた。



「はああ……っ!」

「フッ……!」

クラナガンの空に剣と槍が踊る。

激音と共に放たれたいくは必殺たる一撃達、それを二人。

ソラと突如として現れた少年が放っていくのをシグナムは見ていた。

「撃！」

「やろ……！」

少年がソラの一撃を槍の半ばで受け止め。

しかし、耐え切れず吹き飛ばされた。

そのまま少年は後退し、ソラはしかし。追撃をかけない。  
じろりと少年を見る。

「……くだらないな、リク。お前はその程度か？」

「あんたに言われる筋合いは無いね……！」

少年。リクもソラを負けじと睨みながら言い返す。

ソラはそれに嘆息し、再び大剣。

フラガラックを構える。

「何の気の迷いかは知らないが、剣の道は諦めたか。……しかし、  
槍とはな」

「誰が諦めた、て？」

ソラの言葉にリクが返す。

それにソラはぴくりと反応する。

リクは構わない。

槍の後端を掴む。

「見せてやるよ……！ 俺の剣を……！」

セレクト、バスター！

瞬間。

リクの持つ朱槍が組み替わり、その姿を変化した。  
槍から大剣へと。

それを見て、ソラが目を見開く。

「……それは……」

「そう、あんたのフラガラックと兄弟機、て奴らしいぜ？」 伊織  
タカト謹製のロスト・ウェポン」

そう呟き、変換を完了した大剣を肩に担ぐ。

その剣はソラが持つフラガラックに似通っていた。

「銘は、ブリューナク。元は神槍だ」

どうよ？ と、笑うリクにソラは寧ろ冷ややかな視線を向ける。

そして自らの持つフラガラックを構えた。

「……尚更下らん。武器が上等になれば勝てると？」

「……武器に頼るつもりなんて最初っからねえさ。……ただ、あん  
たのフラガラックと打ち合える剣ならなんでもいい」

リクもまたブリューナクを構える。

両者、睨みながらぐっと形成した足場を踏む。  
まるで力を溜め込むようだ。

「……ぶちのめすぜ？ クソ兄貴」

「……ガキだな。その程度の挑発には乗らんさ。……愚かな弟よ」

直後に二人は同時に動く。

瞬動を持って、その距離を潰し、互いに剣を掲げる。  
そして、一気にそれを振り放つ！

「「魔人撃！！」」

ー撃！ー

叩きつけられた一撃同士が周囲に衝撃波をぶち撒け。

ー轟！ー

クラナガンの空に轟音となり、響き渡った。



ヴィータはリンと共に、目の前の光景を見ていた。  
……正確には、見る事しか出来なかった、だが。

「ぬう……！！」

「ほらほら！ 逃げてんじゃないわよ！」

ー轟！ー

再び放たれる光砲。

それが老人バデスを追い。

バデスはそれをギリギリで回避。

光砲は容赦無く、ビルに突き刺さり問答無用にそれを叩き倒した。  
ビルがあっさりと倒壊し。



ヴィータはそれを見ながらどっちが敵なんだろうな、とぼんやりと思った。

「ああ……！ またビルが！ ……こんの、逃げるんじゃないわよ！  
じい様の癖に！」

「……無茶を言う……！」

「無茶でも何でもいいのよ！ あんた、老い先短いんだから、とつととくたばりなさい！」

問題発言だろ。

と、内心だけでヴィータはツツコミを入れる。

何故か声に出して言えば、こちらにまで光砲が来そうな、そんな予感を覚えたからだ。

そんな女性に、突如として声がかかる。

トウヤだ。

《あゝ。 風、千尋君？ 聞きたい事があるのだが、この被害は何だね？》

響く声に女性。千尋はキロリと視線を巡らせ、そのまま言葉を放つ。

「あのじい様がこっちの砲撃を回避しまくってるせいよ」

人のせいだよ。

と、千尋以外の人間はツツコミを入れそうになりつつも、なんとか堪える。

トウヤはその言葉にフムと頷く。

《……まあ、好きにしたまえ。……どっちにせよ。復興費用は管理局持ちだ。人的被害以外は無視して構わん》

「あっそ。なら”遠慮無く”行くわよ？」

問題発言のオンパレードに、ヴィータは頭を抱えつつ、しかし。リンと目を合わせる。

一瞬のアイ・コンタクト。

二人は無言のままに、痛む傷を無視して全力で空へと駆けた。

そう、千尋は言った。”遠慮なく”、と。

則ち今までは寧ろ遠慮していたのだろう。

……遠慮、と言う言葉を盛大に間違えているような気もするが。見ればバデスも全力で反対側に離れていく。

その中で千尋だけが動かない。

舌で唇をぺろりと舐めると、白槍をくるりと回す。

「ガングニール。2ndフォームまで持っていて」

了々解。

ガングニールと呼ばれたその槍が間延びした声と共に変化を開始。ガチリと刃が消失する。

刃があった部分に生まれたのは砲口だった。

なんとも巨大な砲口である。

それを千尋は逃走中のバデスに向ける。

額のゴーグルを下ろした。

「最近、全力出して無かったからね。遠慮無くぶっ放すわよ!!」  
周りは大迷惑々々。

うっさいと、自分の槍を叩く。

そして、両の手でしっかりとガングニールを握りしめる。

「神槍、ガングニール。その威光を叫びなさい」

光が集まる。  
集まる。

ガングニールの砲口にゆつくりと。

そして、その光が溢れんばかりとなった。  
瞬間。

「大・神・宣・言！ 神の宣言を受けなさいっ！」  
オーデイン・カノーネン！！

―煌！―

直後。

ガングニールから、莫大な光が放たれた。

それはバデスに一直線に向かい。  
瞬間。

街の一区画がドームを思わせる光に包まれたのをヴィータは見た。



「おっらよ！」

―戟！―

横に大振りで振るわれ大剣。

それにガジェットが一機引っ掛けられ、そのまま振り回される。

2 m超の大剣を振るう大男は笑みを顔に張り付け、ぐるんと一回転。

足場を形成し、踏み止まる。

大剣はそこで回転を停止。

その先には別のガジェットが居た。

引っ掛けられたガジェットが、大剣が停止した事により慣性に従って大剣から離れる。

その向かう先は剣先が指し示すガジェットが居た。

―撃―

盛大な音が鳴る。

ガジェット同士がぶつかり合った音だ。

二つのガジェットは絡まりながら落ち。

やがて落ちた場所から煙りが上がった。

「……センター。て、どこか。……ホームラン王のこの俺が」

「いやいやいやいや。何を遊んでるんよ。自分？」

ムウと唸る男にツツコミが入る。

八神はやてだ。

今、現在においてもアースラは動かず、大量のガジェットの攻撃を受けており、それを相変わらずザフィーラやシャマル。はやてが迎撃していた訳だが。

この男。

何故か途中でガジェットを引っ掛け、他のガジェットにぶつけ飛距離を計り出したのだ。

それが十を越えたのが今だ。

いい加減に我慢の限界を向かえ、はやてが苛立ち交じりでツツコミを入れたのだが。

「出雲ハヤトだ」

「へ？」

「俺の名前だよ、名前。流石に自分呼ばわりをずっとは嫌だろ」

あっさりとそう言うハヤトに、しばしはやてはポカンとなる。  
名前がちよつと似ているのも驚いた。

「さってと……。そろそろマジメにやるかね」

《おお。やっとマジメにやる気になったかね？ ウドの大木》

いきなり響く声にはやてが周りを見渡す。  
通信だ。

ハヤトはそれにハッ！ と笑う。

「な〜にがウドの大木だ？ 年中無休のむつつり」

《他より暇だからとバッティングセンターのノリで遊ぶノッポを、  
ウドの大木と呼ばずに何と呼ぶのかね？》

その言葉にうっと呻く。

トウヤは構わず言葉を紡いだ。

《いいからさっさとやってくれたまえ。……じゃんけんで決めた役  
回りとは言え、自分の仕事は果たしたまえよ》

「いいぜ？ なら、俺の事を”様”をつけてお願いしてみろよ。喜  
ぶぞー！。俺が」

《馬鹿か貴”様”》

言った直後。数秒だけハヤトもはやても硬直した。

そんな二人に、暫くして、漸くトウヤの頷く声が聞こえる。

《はて……。喜んでいないようだが？》

「もういい……。アンタに期待した俺が馬鹿だった。替わりと言っちゃあなんだが。アンタに言っておきたい。大切な言葉がある」  
《何だね？ 言ってみたまえよ。ちなみに私は並の称賛では動じぬよ？》

「地獄に落ちろ」

ぶつっと言った直後にハヤトは通信を切った。  
ふう、ヤレヤレとハヤトは肩を竦める。

一連の行動を見ていた、はやてからしてみれば異様過ぎる行動だった。

と、言うか通信は切っていてもいいのか？

「さつてと、前言通りマジメにいつてみるか。……フツノ」  
了解。

ハヤトが自らの大剣に声をかける。

それにその大剣。フツノが応えた。

唸りを上げて、大剣の上下がスライドする。

イグニッション。

ガッコン！ と激烈な音と共に上下にスライドした刃が再び合わさる。

直後に剣の合わせ目から光が漏れた。

「フツノ。2ndフォームで上等だろ」  
勿論。

フツノの答えにハヤトは笑う。  
そしてフツノを振り上げる。

大上段だ。

「……何をするつもりなん？」

「いいから黙って見とけ。面白え事になるからよ」

フツノを振り上げた姿勢のままでハヤトは答える。  
そして。

「断」

踏み込みと共に。

「星」

一刀を。

「剣」

振り放った。

瞬間。

「斬！」

ただフツノを振り下ろした。

はやてはそれだけしか分からなかった。

ただ、それだけ。

それだけなのに。

アースラの周りに居たガジェットが、”全て”が。

両断されていた。

二つに上下を別たれて、下へと落ちていく。

アースラや、ザフィーラ。シャマルには傷一つつける事なく！

呆然とするはやてにハヤトはしかし構わない。

ふいふいと、息を吐く。

「……これで俺の分は終わりだな」

そう呟きながらフツノを肩に担ぎ、眠そうにあくびをかいた。



クラナガン市街地。

そこに彼女達の姿があった。



N2Rの面々だ。

彼女達は”フルメンバー”揃った状態で市街地に居た。  
孤立せずに。

何故彼女達はそれぞれ孤立せずにフルメンバー揃っているのか。  
それは彼女達の状態が示している。  
彼女達はまるでススを被ったがごとくの状態だったのだ。

「……ケホ、ケホっス……」

「……チンク姉も無茶するよな」

「仕方ないだろう。あれしか姉も思い浮かばなかったのだ」

ウエンディ。ノーヴェからの言葉にチンクはたじろぎながらも反論する。

それにギンガが笑う。

「確かに助かったんだけど……ね」

「いくら何でもアレは無茶だよ。チンク姉」

「う……」

さらに畳み掛けるようにギンガとディエチが笑う。

それにチンクも言葉に詰まった。

さて、何故彼女達はアーチルの策略による転移魔法により孤立させられなかったのか。

実は、転移魔法が発生した瞬間。

N2Rは固まって移動しており、その真下に魔法陣が展開したのだ。  
普通ならばここで飛ばされる。

だが、ここで行動を取ったものが居た。

チンクだ。

彼女はいきなり、スティンガーを真下に投げると同時にデトネイターを発動したのだ。

爆発は全員の足元で起き、当然その爆風で全員すっ飛ぶ。

結果として魔法陣から転移される瞬間に全員その上から退避出来た訳だ。

……多少のダメージをそれぞれ受けながら、ではあるが。

「まあ、孤立するよりはマシなんだし、二人とも共その辺で、ね？」

「……了解っス」

「ああ……」

ウエンディとノーヴェがギンガの言葉に頷き、それにチンクがほっとする。

これでネチネチやられずに済むかと思い。安堵したのだ。

そんなチンクに苦笑いを浮かべながらディエチがコンソールを展開し、ウィンドウを表示する。

「……やっぱり他の皆は孤立してるみたいだ」

「そう……。ならそれぞれ孤立しているメンバーと合流しなきゃね」

ちなみにこの時点でグノーシス組がそれぞれのメンバーに介入して、宣戦まで告げているのだが。

当のグノーシスメンバーと合流していないN2Rはその状況を一切知らなかった。

瞬間。

カラン、と音が鳴る。

直後に彼女等はそれぞれの武装を構えた。

「……いつの間に？」

「私は分からなかったよ、チンク姉。……ウエンディはどうだ？」

「……おかしいっスね……」

「私にも分からなかった」

「……どう言う事かしら？」

それぞれ確認し合う。

そう、音が鳴った瞬間。

現れたのは例のヒトガタだった。

アーチルの言葉を借りるならば因子兵、か。

それが今。

彼女達が見るビルの上にうじゃうじゃと。

それこそ、何体居るのかわからない程に大量に居た。

こんなに居たのに分からなかったなんて……！

それぞれ冷や汗を流す。

流石にこれだけ因子兵が居て、分からない筈が無い。

何かからくりがあると判断するのが当たり前であった。

だが、今必要なのは何故か？ では無い。

”どうやってここを抜け出すか”で、あった。

「どうする……？ この数。千は確実に居るよ？」

「何とか、ここから離脱しなきゃ。……あの数を全部相手になんて出来ないわ」

しかも、因子兵は五回は再生する。

単純計算で五千もの数と戦わなければならないことになる。

一気に襲い掛かれたら当たり前に蹴散らされる。

ゆっくりとビルからこちらを見る因子兵に彼女達はぐっと息を飲み。  
瞬間。

「ストップだ」

「凍！」

一瞬。

一瞬だった。

その一瞬で因子兵が居たビルが全て。

凍っていた。

見た目的には巨大な氷山な立ち並んでいるかのようにだ。

だが、その氷山はビルとその中に居る者達を纏めて凍り付けにしていた。

則ち、因子兵を。

「切っても焼いても再生するのならば、凍らせてしまえばいい。単  
純な理論だな」

言葉と共に男がN2Rの元に降りて来た。

全身黒尽くめの男。

彼女達はその男を知っている。

彼の名は。

『……クロノ・ハラOWN提督？』

「ああ、済まない。これを受け取るのに時間が掛かって、ね」

苦笑する。

そして、その杖のデバイスをクロノは右手で掲げた。

白の杖であり、それはクロノが愛用していたデバイスである。  
名をデュランダル。

しかし、それは前のデュランダルと酷く違った。

カートリッジ・システムは取り外されているが、形はまったく一緒。  
しかし、何故かそのデュランダルは前のデュランダルとは別物の印  
象を受ける。

クロノが持つデュランダルをギンガ達が見ているのに気づき、クロ  
ノは再度苦笑する。

「なんでも、グノーシス側で修理と”改造”を施したらしくてね。

……得体の知れない物を使いたくはないが、この際仕方ない」

「じゃあ、それは……」

「ああ」

肩を竦めてクロノは自らが生み出した氷山を見る。

N2Rの面々も同じく、だ。

氷山を見ながらクロノは続きを告げる。

”ロスト・ウェポン”。そう言うらしいんだが……な」

ロスト・ウェポン、真・デュランダル。

新たな力を持ってクロノは再び戦線に復帰した。

しかし、彼は知らない。ロスト・ウェポンの意味と、それを誰が設計、考案したのかを。

彼は、まだ知らなかった。



放たれる。

放たれいく剣群。

それにシオンとウィルは舌打ちを同時に打つ。

そして、目すらも合わさずに二人は同時に動く。

シオンが前、ウィルが後ろだ。

「しくじんなよ？ ボケウィル！」

「お前と一緒にすなや！ アホシオン！」

両者、共に叫び。

シオンは左手一本でカリバーンを振るい、向かい来る剣群を叩き落とす。

ウィルはシオンが迎撃出来そうに無い剣を、剣矢を持って迎撃していた。

シオンはウィルに向かう剣を優先的に叩き落とし、ウィルはシオンに直撃しそうな剣を優先的に撃墜する。

その二人の動きは、二人が全く預かり知らぬ所で合い。剣群を確実に迎撃していく。

二人は互いに、二年前に失った感覚に懐かしさを覚えながら剣を振るい、剣矢を放つ。

「そもそも！ お前！ 右手！ どないしたん！ や！」

「さっきの！ おっちゃんの一撃で！ 折れた！」

「何〜！ アホか！ お前！ そんなんで！ こっちに！ 来んなや！」

「誰が！ アホだ！ 手前こそ！ 何ださっきの！ あっさり！ 居場所！ バレ！ やがって！ この！ ボケ！」

「誰が！ ボケや！ この！ アホ！」

「手前だ！ ボケ！ 人の事！ アホ呼ばわり！ しやがって！」

「なんやと！ この！ アホ！ アホ！ アホ！」

「あんだと！ この！ ボケ！ ボケ！ ボケ！」

二人とも互いを罵倒しながら剣群を迎撃し合う。

それは罵倒を繰り返す程に正確性を増す。

まるで、かつての感覚を取り戻すかのように。

死角が無くなっていく。

……こいつはあ、参ったな。

罵倒し合う二人にアルセイオは苦笑する。

実はシオンが復帰してもアルセイオは敵では無いと判断していた。

何せ、精霊融合や装填の同時使用。

そして斬界刀による一撃で殆ど戦闘不能だと思っていたからだ。

ウィルもまた同じく、だ。

近寄って無尽刀の数で攻めれば勝てる。  
そう思っていた。  
しかし。

「まあ、仲のいいこって……」

苦笑する。

その視線の先では未だに二人共互いに。

アホ！ アホ！ アホ！

ボケ！ ボケ！ ボケ！

と、叫び続ける。

はたから見ればガキの喧嘩以外の何物でもない。

まあ、アルセイオとしてみても微笑ましい？ 二人を見ていたくもある、が。

……そうも、いかねえわな？

そう思いながらニヤリと笑う。

同時に右手をスッと突き出した。  
瞬間。

「「……………！？」」

シオンとウィルは同時に目を見開く。  
剣群が現れたからだ。

” 自分達の真後ろから ” ！



「悪いな。俺の無尽刀は、別に俺の周囲以外にも創れるんだわ？」

俺の認識出来る範囲ならどこでもな？

そうアルセイオが続ける。

直後に剣群が放たれた。

二人の真後ろから。

それにシオンとウィルはしかし、迷わない。

「アホ！」

「ボケ！」

互いに叫ぶ。

同時にシオンのカリバーンが光を放ち、ウィルが刻印弓を収納する。  
その手に持つのは白と黒。

二刀一対の長刀だ。

二人は更に同時に動く！

「神覇、参ノ太刀！ 双牙！！」

まずはシオンからそれを放った。

地を疾る二条の斬撃だ。

それが壁となり剣群を防ぐ。

ー撃・撃・撃・撃・撃ー

しかし、それも数秒しか持たない。

斬撃の壁を数振りの剣が貫通し。

技を放ち、動かないシオンへと殺到。

襲い掛かろうとして。

―閃―

―閃―

閃く、黒と白に全て弾かれた。

ウィルだ。

手に持つ白と黒の双剣で全てを弾いたのだ。

「……アレ、防ぐかよ？　なら……」

眩き、しかしアルセイオは笑いながら右手を突き出し、同時に左手を掲げた。

直後。シオンが見る先に大量の剣群が生まれ。

ウィルが見る先のアルセイオの左手に十m超の巨剣が生まれた。

同時攻撃。

シオンは片手しか使えず、剣群が捌ききれない。

ウィルは巨剣をあのだ双剣では防げぬ筈であった。

互いの弱点を衝いた攻撃。

それにアルセイオは笑い。

直後。

剣群と巨剣は同時に放たれた。

―轟！―

シオンに、そしてウィルに前後から向かい来る剣群と、巨剣。

互いに背にしたそれが見える筈も無く。

向かい来るそれに舌打ちし。

しかし。

「「!!」」

互いに、互いの背中を支点として。

まるでコマのようにくるりと位置を入れ替えた。

言葉を交わした訳では無い。

視線すらも合わせてはいない。

それにも係わらず、二人は互いの位置を全く同時に入れ替えたのだ。

「神覇、弐・伍ノ太刀。合神剣技――!」

「我流、双剣技――!」

シオンは向かい来る巨剣にカリバーンの先端を突き付け。

ウィルは向かい来る剣群に白と黒の双剣を振るう。

そして同時に吠えた。

「魔閃牙!!」

「裂花!!」

「煌!!」

螺旋を描く、光突が巨剣とぶつかり。

「閃!!」

縦横無尽に疾る刃が、剣群を弾き返す!

結果。

巨剣と剣群は生み出された時と同じく同時に世界から消えた。

「……くっ。くくく……」

しばし啞然としていたアルセイオだが、背中を合わせて残心する二人を見て笑いだした。

恐れ入る。これほどの連携技。見た事が無い。

「いいぜ？ ガキども。なら”手加減抜き”だ」

ソードメイカー・ラハブ。

響く鍵となる言葉。

それにシオンとウィルは視線を向けた。

その目に映る大量の剣群達。

しかし、二人はそれを見ながら同時に吠える！

「「上等だぁ！ 来いやコラァっ！！」」

クラナガンの空に二人の咆哮が響く。

直後に万を超える大量の剣群が二人に振り落ちた。

（後編に続く）

第三十六話「背中合わせの相棒」 (前編) (後書き)

……はい。毎度済みません。前後編です。                      わかってたさ！

わかってたんだもん！      と、ツンデレ風に言ってみる♪      ……あ

あ、すみません。石を投げないで！ (笑)                      さて、

前話でクロスリレーの参加者を募りましたが凄いいっぱい参加者が  
来ました♪      めっちゃ。うれしいです♪      後編のアリサ道場で参加  
者さんと作品を発表しますのでよろしく願います♪ではでは♪

後編でお会いしましょう♪                      ではでは〜♪

第三十六話「背中合わせの相棒」 (後編) (前書き)

ども〜♪ テスタメントです。お待たせしました (汗) 後編をお  
届けします♪ では、どうぞ〜♪

### 第三十六話「背中合わせの相棒」(後編)

「ほらほら〜。どないしたんや？ 二人揃ってこの程度かいな？」

「むう〜」

「……ムカ」

クラナガンの空を交差する三条の光。

スバルはその光を街中から見上げていた。

朱は獅童リズ。

蒼は獅童リゼ。

そして、二人に対峙するは銀。

なのはと同じ。

栗色の髪をセミロングにした少女が、レイピア片手に獅童姉妹を手玉に取っていた。

「まったく……。リズもリゼも戦い方全然変わってへんやん？ 天井が許されるんわ、二回までやで？」

やれやれと少女が肩を竦める。

ちなみに天井とはお笑い用語で同じネタを二回繰り返す事を言う。

「……楓お姉ちゃんみたいにお笑いばかりよりマシだよ〜」

「……同意」

二人はそんな少女。

楓の言葉に半眼になりながら反論する。

確かにさつきからお笑いのネタがやけに多いような気は、スバルもする。

そんな二人に楓は嘆息。

再度、肩を竦めた。

「ふ……。誰がお笑いばかりや。どこかのアホヘタレあ〜んど色ボケと一緒にするんやない。……お姉ちゃんは他にも考えてる事はちゃんとあるんや……。！」

「「……っ！」」

まさかの返答に姉妹は息を飲む。

それってまさか自分達を心配して……？

二人はそんな風に思う。

ちなみに余談だが、アホヘタレあ〜んど色ボケとは、現在無尽刀と掛け合いを行いながら戦う二人組の事である。

本気で余談だが。

楓がぐっと拳を握りしめた。

姉妹が。

スバルまでもが、その答えに息を飲む。

そして。

楓が口を開く！

「……日々！ 新作のお好み焼きと。……そしてタコ焼きの事も考えとるんやで！？」



「「知るか――！！！！」」

あまりにアホな回答にそれぞれ敵味方の枠を越え、口調すらも関係無く。スバルすらも含んで、三人からツツコミが楓に入った。

まさかの三方向からのツツコミに楓が思わず

「ぬおっ」と、呻くがそんな事は本気でどうでもいい。

「期待させといて〜」

「……激しく失望」

「それは無いですよ〜！」

姉妹はともかく普段はボケ(?)のスバルからのツツコミも珍しい。あまりの三人の反応に、思わず楓はいたたまれずに頬を一つかく。

「……もしかしてウチ。スベった？」

三人共即座に首肯。

スバルなど、二回も頷いていた。

それにマジか……！ と楓は戦く。

そして、重い。重い溜息を吐いた。

「……ウチの芸人としてのプライドが……」

いや、あんた魔導士でしょ？ と言うツツコミは三人が三人共避けた。

なんか、怖い答えが返って来そうだったのが、その理由である。

楓はハアっ……と、再度の嘆息。

そのままの姿勢で、右手をちゃきりと立てる。

つまりはデバイスたるレイピアを。

「……まあ、ええか。……十分経ったし」  
「「……あ！」」

楓の台詞に姉妹な声をあげる。  
そんな二人に楓はニンマリと笑った。

「二人共、油断し過ぎや♪」  
「ひ、卑怯！ 卑怯だよ～～！」  
「……同意！」

楓のニンマリ笑顔にリズも、珍しくリゼも声をあげる。  
しかし楓は得意気な顔のままだ。

……一体、あの二人は何をあんなに動揺してるんだろう？  
スバルはそう思う。

「な～～にが、卑怯や。二人共騙されるんが悪いんや」  
「う～～！ させない！」

ー轟！ー

瞬間。  
リズが朱嬢の翼を広げ、一気に飛び出す！  
瞬間で楓の元まで駆け。  
右の巨拳を構える。  
そんなリズに楓はただ笑う。

「無駄やって。……シャドウ？ 2nd。いって見よっか！」

トランスファ―！

―！撃！―

音が鳴る。

拳が叩き付け”合う”音が。

そしてスバルは”それ”を見た。

リズと楓を。

二人が放つ。

全く同じ形の”巨拳”を！

巨拳と巨拳は互いに、その拳を打ち付け合った体勢で停止。

その結果にリズは呻き。

楓はウイंकを投げる。

「アームド・デバイス。ヘカトンケイル。70%までパクリ完了、  
や♪」

「うゝゝ！」

リズが悔し気に楓を睨む。

楓はそれに構わない。

ぐっと巨拳に力を込める。

「撃！」

「わあゝゝ！」

「ととっ！ 危ないなゝゝ」

楓のその動作で、二人同時に吹き飛ぶ。

数mの距離を持って、互いに停止。

だが、楓の相対者はリズだけでは無い。

「……ホーリズ」

リゼの声が高らかに響く。

その身に纏うかのように二十の光球が現れる。

しかし、楓はそれに初めて苦笑を見せる。

「やから無駄やって」

トランスファー！

シャドウの声が再び響く。

同時にその姿が変わった。

リゼの持つ”カードケースと全く同じ姿に！”

更にその足元に展開するのは……。

「嘘……」

スバルも思わず呻いてしまった。

それはそうだろう。

何せ、今。

楓が展開しているのは”ミッドチルダ式”の魔法陣である。

”先程までは、確かにカラバ式の魔法だったのに！”

よくよく考えてみれば先程のリズの一撃。

あれはベルカ式では無かったか？

それと全く同じ一撃と言う事は取りも直さず楓もベルカ式を使ったと言う事である。

カラバ式、ミッド式、ベルカ式。

楓はその三種を使用していた。

「ホーリーズ」

「……っ！　レイ！」

楓が呟くその一言に、リゼはくつと奥歯を噛み締め。

先んじて光球を撃ち放つ！

楓に向かい来る光球。

しかし、彼女はそれに。

寧ろ笑顔を浮かべながらカドケイスとなったシャドウを差し向ける。

「レイ、と」

ー弾、弾、弾、弾、弾ー

光の花が咲く。

楓の近くで。

それは二十の光球が、同じ二十の光球とぶつかる事によって作られた花であった。

その結果にリゼも姉と同じく歯を噛み締める。

光の花が消えた後には、楓が悠然と立っていた。

「〜ん♪ 二人のパクリすんのも久しぶりやけど。上々やな♪」

ニパツと笑う楓に二人共、齒を噛み締める

そんな二人に楓はさあ、と告げる。

シャドウを更に変化させた。

”スバルのリボルバー・ナツクルに”。

「へ!？」

いきなり楓の右手に顕れたリボルバー・ナツクルに、スバルはつい自分のナツクルを確認。

そこにある母の形見の感触に思わずホッと息を吐く。

「いや〜。これ、使い易そうやから、つい。パクらせて貰ったわ。

まあ、パクリはお笑いの基本やし、許してな♪」

「え、あ。はい」

スバルの様子に苦笑して告げる楓の一言に、スバルは告げられるままにガクガク頷く。

楓はそんなスバルにクスリと笑い。

つい、と視線を正した。

リズとリゼに。

二人は、楓の視線に少し身じろぐ。

彼女の視線にはそれほどの力があった。

「……リズ、リゼ。そろそろ、おイタの時間は終わりや。……きつ  
つい説教、行くで?」

「「……楓お姉ちゃん」」

二人は楓の言葉に声を出し。  
しかし、ぐっと構えた。

己がデバイスを。

二人のそんな姿に楓は寧ろ。

微笑んだ。

もう、言葉は無い。

楓は動き。

リズ、リゼも同じく動く。

そして。

ー撃！ー

スバルが見る先で、互いに衝撃波を撒き散らし、  
衝突した。



声が出ない。

ティアナは初めて、そんな感情を得た。  
震えている事を、自覚する。

身体が。

そして、心が。





ガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラ。

ガランと。

大量の葉莢が。

まるで雨のように降る。

葉莢の雨の中を悠然と立つ男は相変わらず、紫煙を燻らせる。

葉莢の雨の中に因子兵の姿は影も形も、文字通りに無い。

大量の銃弾でもって。

全て身体を削られ、消滅させられたのだ。

男はティアナの驚愕に構わない。

スパーー、と煙を吐き出した。

「断罪LEVEL1で、リミテッド・リリース。二十パー程度だぜ？  
おい。こいつ等、脆過ぎやしねえか？」

「……貴方が出鱈目過ぎるだけですよ。……小此木コルト様」

ティアナと相對していた老人。

ベルマルクが苦笑いと共に肩を竦める。

小此木コルト。

それが男の名前だと言うのか。

そうティアナは思う。

そんなティアナを余所にベルマルクはヤレヤレと、首を振った。

「……まさか、貴方が来るとは思いませんでした。もし、来るのなら我々の仲間になるとばりに思っていましたからな。アルセイオ様や、ソラ様がいらっしゃる。我々の元にー」

「俺の動揺を誘いたいんなら止めとけ、ジジイ。時間の無駄だ」

ベルマルクの言葉をコルトは煙草をスパスパ吹かしながらぶった切る。

そしてゴツイ銃。

正確には銃型のデバイスを、ベルマルクに向けた。

「俺が求めるのはゴメンなさいと土下座して降伏を告げる言葉か、殺して下さいとフライツツェを構えるお前の姿だ。どっちでもいいからさっさと選べ」

「……嫌な二者択一ですな」

「それ以外に無い」のはお前もよく知ってる筈だぜ？ まあ、無抵抗のままに死にたい、つうなら。止めやしねーよ」

面倒臭いしな。

と、コルトの表情は語る。

それにこそティアナは総毛立った。

コルトは降伏などベルマルクに求めているない。

彼はこう言っているのだ。

殺してやるからさっさと構えろ、と。

ベルマルクもコルトの意図を明確に理解する。

その上で。

笑った。

「……我がフライツツェのリミット・ブレイクならば、貴方に敵わずとも逃げる事は可能ですか？」

「やってみろよ。さっきも言った筈だぜ？ 止めやしねーと、な」

コルトはまったくベルマルクに取り合わない。  
その姿勢に、初めてベルマルクの顔から笑顔が消えた。  
直後にフライツツェを構えー。

「リミテッド・リリース四十%、開放」

その言葉を、ベルマルクは”背後から聞いた”。

「……じゃあな」

ー弾！ー

銃声が響く。  
直後。

ベルマルクの身体が吹っ飛んだ。  
まるでダンプに轢かれたかのように、撥ね跳ぶ。  
くるりくるとベルマルクの身体は空中で回転し、短い滞空時間を  
経てその身体が地面に落ちた。

「か、あ……！」

「……お。ドテっ腹をぶち抜かれたのに、まだ大丈夫か。頑丈に出  
来てんな」

感心したような声がコルトから漏れる。

あまりの光景にティアナはへタっと膝をついた。

”撃った。”

非殺傷設定でも、魔力弾ですらも、無い。  
魔力で形成したとは言え、物理弾で。

”殺す積もりで” コルトはベルマルクを撃った。

その事実にはティアナの思考は真っ白になる。

「な……ん、で……?」

「……あん?」

いきなりのティアナからの言葉にコルトが疑問符を浮かべる。  
ティアナは構わない。  
コルトをキツと睨む。

「こ、ここまでの事ないじゃない! 殺すなんて……!」

「……何を言ってるんだ。お前? 敵だぞ? そいつは」

「で、でも……!」

あくまで抗論しようとするティアナに、呆れたようにコルトは溜息を吐く。

煙草をフィルターまで吸い切った。  
肺から煙を吐き出す。

「神庭と同じタイプだな。お前」

「……え?」

「ツメを誤って早死にするタイプだってんだよ」

―弾!―

銃声が響いた。

同時。

”何かが” 背後で動いた音がした。

……え？

「ちっ……！ 意外に早えな……」

「……まさか、あっさり気付かれるとは思いませんでしたよ」

ベルマルクの声がする。

” ティアナの後ろから ”。

そろりそろりと背後に目を向ける。

そこに、ベルマルクは居た。

” 身体を撃ち抜かれたのに、血の一滴も流さずに ”。

「……ベルマルク・” ナイン ”。確か” 九番目 ”だったか？」

「ええ。その通りです」

ベルマルクは微笑する。

” 機械じみた動作で ”。

それにティアナは卒然と理解した。

” 目の前の存在は人間では無い ”、と

ザイン・フラウ

「自動人形。噂だけは聞いてたが、まさか実在するたあな」

「よく言われます。……さて」

ベルマルクがフライツェを構える。

コルトもまた、己のデバイス。ガバメントを構えた。

「こちらも全ての機能を全開とさせて頂きます。……お覚悟を」

「構わねえさ。人間の死体が、人形に変わるだけだ」  
「っー！ 待っ……！」

瞬間。

ティアナの脳裏に浮かんだのは親友の笑顔。  
ベルマルクが彼女と同じ存在だとするならば……！

ー轟！ー

そんなティアナの想いを全く無視して、二つの銃が互いに交差。  
銃弾を吐き出した。



ー閃ー

一閃が疾る。  
それをエリオは見ていた。  
速く、鋭く。

そして、なにより。

ー斬ー

美しく。

孤を描き振るわれる刀。  
それが襲い来る肅正士を纏めて弾き返し。

止まらない。

ーしゃらんー

それは酷く、遠回りな斬撃だった。  
シオンが振るう剣や自分が放つ槍。

最短となす斬撃とは全く別物。

強いて言うならば自分達の斬撃は”線”である。

だが、その刀が描く軌跡は”円”であった。

当然、遠回りの斬撃たる円の斬撃の方が遅い。

その筈なのに。

黒の男が放つ円の斬線は最短より、速い。

全てを遠回りに、斬撃を放っている筈なのに、だ。

……こんな技も、あるんだ。

エリオは素直にそう思う。

気の遠くなる程に、全ての動作を最速で遠回りにする事によって、  
初めてその斬撃は成り立っていた。

「……どうした。この程度か？」

「ほ！」

「ざ！」

「け！」

雅たる一刀を、次々と放つ黒の男に肅正士は声を荒げる。

直後。

「「散！」」

その姿が消えた。

エリオとの戦いにも使用していた高速移動だ。

黒の男を囲むかのように、分かれ。

短剣を構える。

一気に踊り掛かった。

だが。

「……甘いんだよ」

「閃！」

銀の剣が閃く。

真ん中の肅正士に踏み込みながら斬撃を放ったのだ。

刀は迫り来る肅正士に叩きこまれ、肅正士は短剣でそれを受けるも、

その威力に耐えられず、吹き飛ばされた。

だが、これでは左右から迫る肅正士に対して無防備になる。

迫り来る肅正士。

それを前にして、直後。

黒の男は驚くべき行動に出た。

踏み込んだのだ。

”弾き飛ばした相手を追って”！



「……………！」

踏み込みの速度は迅雷。

二人の肅正士は男の姿を見失い。

弾き飛ばされた肅正士は驚愕に目を見張る。

目の前に黒の男が突如として現れたのだ、驚くのも当然と言える。

―閃―

三度、刀が閃いた。

「が……………！」

響く悲鳴に、漸く残りの二人も背後を振り向く。

その視界に映るのは、同じ振り向きの動作の黒の男だ。

否、一つ違う。

黒の男は振り向きの動作を持って、刀を振り上げていた。

「っ―！」

「遅え」

―斬！―

「……………が！」

「……………ぐ！」

悲鳴が再び響く。

同時に肅正士も血を吹き上げながら吹き飛んだ。

振り抜いた刀に血が踊る。

ぴびっと地面に紅い染みとなってそれは落ちた。

それらを酷く、詰まらなそうに見遣り男が刀を肩に担ぐ。

「……暗殺者。背後から脾臓を一突きするくらいしか能が無いお前等が、真っ正面から俺とやり合って勝てるつもりだったのか？」

「ぐっぬ……！」

「貴様……！」

「我等を侮辱するか……！」

男の言葉に怒りの声を三人共あげる。

無理矢理に立ち上がる、その身体からは血が流れ出していた。

男は構わない。

冷たい視線で三人を見下す。

「侮辱？ 当たり前だ。ガキ相手に毒なんぞ使う輩が尊ばれるとでも思ったかよ」

「それが」

「我等の」

「戦術ならば」

即答する肅正士に男はくつと、顔を歪める。

ああ、そうかい、と笑いに。

「なら、俺は、己が名。黒鋼刃の名を持ってこう言うぜ？ 寝言を

昼間から言ってるじゃねえよ」

それでも、と彼は告げる。

瞬間。

男。黒鋼、刃の身体くろがね やいばから溢れ出すものがあつた。魔力だ。

同時、その足元に二重螺旋の、まるで互いを喰らい合うかのような形の魔法陣が展開した。

その螺旋の中央に五芒星が描かれている。

……どこの魔法なんだ？

エリオはそう思う。

見た事も無い魔法陣である。

そんなエリオの疑問と視線に刃は構わない。ちきり、と刀を振り上げた。

「寝言を言いたいなら眠らせてやる。――永遠にな」

「――！――！――」

突然吹き上げた魔力と、展開する魔法陣に啞然としていた肅正士が、刃の言葉に漸く、正気を取り戻す。

直後に、三人は背を向けた。

視線を合わせる事すらもしない。

「――疾っ！――」

再び、その姿が消える。

瞬間移動じみた高速移動だ。

それを持って、三人は即座に撤退を選択したのだった。

その、選択自体は正しい。

ただ、それを選ぶのはあまりに遅すぎた。

「起きろ。銀龍」

ぽつりと呟かれる、刃の言葉。  
それを契機に、”それ”は目覚めた。

咆哮。

エリオは確かに、銀の刀。

銀龍が、咆哮を叫んだと感じた。

声がした訳では無い。

ただ、何かが、目覚めた。

それだけを、エリオは感じたのだ。

刃は目覚めた銀龍を振り上げ、大上段の姿勢から一気に。

「燃え盛れ、銀龍。焰龍・煉、獄、陣」

銀龍を振り下ろした。

瞬間。

―業―

焰が疾った。

刃の先から。

―轟―

その焰は、産まれると同時に大地を駆けける！

寸っと焰は炎線となって一瞬でクラナガンの街を駆け抜け。

瞬間。

「煌！」

炎線から立ち上る幾重もの炎柱！

それは1Km先にまで、その柱を顕現させた。

「……終わったな」

ぽつりと呟かれる刃の言葉と共に炎柱は全てあっさりと消える。

炎線が通り抜けた後には、立ち並んでいた建物全てが焼失し。

ただ、瓦礫のみが列を成していた。

その向こう。

500m程先に、肅正士達は倒れ伏していた。

非殺傷設定に魔法を組み換えたていたのか、胸が上下している所を見ると三人共、生きているらしい。

刃はそれを確認して、地面に突き刺した鞘へと、手に持つ銀龍を納めた。



クラナガンの空に音が響く。

鋼が重なる音が。

それをなのはは聞いていた。

その音を高らかに鳴らしているのは二つの大鎌だ。

死神を思わせるそれらを振るうのは、片や魔女然とした女性。

緑の髪をツインテールとし、トンガリ帽子を被る女性。

一条エリカだ。

それに対峙するは少年。

黒の肩まで伸ばした髪に、眼鏡を掛けた少年だ。

二つの鎌は、互いに円運動の動きを持って互いに放たれる。

それは一つの円舞を連想させる。

互いにぶつかり合う刃が、その威力を持って互いに跳ね返る。

―戟―

十合のぶつかり合いの果てにそれを制したのは少年だった。

エリカはくつと顔を歪めながら後退する。

「おやおや？ 忘れましたか？ 僕は冥界降誕の儀を使えなかった

為に、かつては近接戦の技量に特化していた事を」

「ええ、ええ！ 忘れてましたわよ！ このイヤミ！」

いゝゝ！ とエリカが舌を出す。

その態度に少年はハアッと嘆息した。

「何で貴女はそうお転婆なんです？ 一応は僕の姉でしょう？」

「一応とは何ですの！？ 一応とは！」

噛み付くエリカに少年は嘆息する。

その言葉に脇にぼつんと追いやられていたのははえ？ と、思う。

よくよく見ると、二人は髪の色や性別こそ違えど、その顔立ちはよく似ていた。

「大体、なんで貴方がここにいますの？ 悠一？」

エリカが初めて少年の名を呼ぶ。

悠一。それがこの少年の名前だと言うのか。

悠一はそんなエリカに微笑する。

「じゃんけー。……いやいや、一条家の跡取りの貴女を向かえに  
来たに決まってるじゃあ無いですか」

「……今、そこはかとなく。とんでも無い事を言おうともしませんでしたの？」

「気のせいです♪ じゃんけんで行き先を決めたあげく、『行き先  
が姉さん？ ちっ！』なんて事は言ってせんでしたとも」

「……まあ、信じましょう」

半眼でジトーと、見るエリカにはっはっはと彼は笑う。

そして、手に持つ鎌を一振りした。

「で、まだ続けますか？」

「当たり前ですわ。姉として弟が作り上げた固有魔法。確かめさせて  
いただきますわよ？」

エリカもまたその鎌。レークイエム・ゼンゼを構える。

悠一はそれに苦笑した。

「では……。月詠<sup>げっえい</sup>？」

エクスプロージョン！

瞬間。

その鎌。月詠の後端がスライド。

そこから空葉莢が跳ね跳んだ。

対するエリカは再び、レークイエム・ゼンゼで空間を切り裂く。

「私の声に応えなさい！ 騎士の剣の担い手よ！」

直後、空間の裂け目から再び3m超の鎧が現れた。  
冥界の騎士だ。

それに悠一は笑う。

そして、鎌を振るい声をあげた。

「聞こえますか？ ”十八万四千八百”の音群達よ。僕の声が聞こえたならば、この声に応えなさい」

ーぽおんー

悠一の声と共に再び鳴り響くは音叉のような音。

そして、悠一が告げた言葉になのは目は丸くする。

先程。ヘルを打倒せし、『運命』を奏でた時は、四万六千二百の音群と悠一は言っていた筈だ。

しかし、彼は今。

確かにこう言った。十八万四千八百の音群達、と。

詰まり、それはー！。

「……先程は様子見、という訳でしたの？」

エリカが冷や汗交じりに呟く。

悠一はそれに、いえいえと首を振った。

「先の音素式は『運命』を奏でる為だけのものではしたから。今、僕が呼び掛けた音素達は多様性重視。強いて言うならば、四重奏。と言う所ですか」

さて。

と、呟くと悠一は月詠を差し向ける。



エリカに。

その前に立ちはだかる騎士に。

「演奏を始めるとしましょう。姉さん」

「上等ですわ」

エリカもまたレークイエム・ゼンゼを悠一に差し向けた。  
同時、騎士がガチャリと鎧を鳴らし、動く。

二人の視線が交差し。

そして姉弟は同時に叫んだ。

「集え音素。我が声に応え、音群となりて旋律を奏でよ！  
チェルト奏曲！」  
ウインドコン烈風協

「冥界の騎士よ！ 我が声に応え、眼前の敵を討ち果たしなさい！」

直後、高らかに空間が音を鳴らし、烈風を生み。

それに抗うかのように騎士が動く。

ー轟！ー

二つの力のぶつかり合いは激烈な衝撃波をぶち撒け、クラナガンの  
空を揺るがせた。



ー撃ー

音が響く。

クラナガンの空に。

それは互いに蹴りの一打。

互いに空間に形成した足場を踏み締めて放つ蹴りが、ぶつかり合ったのだ。

飛・王と。

ポニーテールの少女が放つ蹴りが。

直後に互いに距離を取り、離れる。

少女はフェイトの隣に。

飛は反対側だ。

そして、互いに構えを持続したままで見合った。

「どう？ 飛兄。私、強くなったでしょ！」

「……まあ、それで御座るな。出来れば、今月今日今時でさえなければ存分に確かめたく御座ったよ。アスカ」

飛の言葉にアスカと呼ばれた少女がへへ〜と、嬉しそうに笑う。

飛自身は未だフラグ立てを邪魔された怨みが視線に籠ってはいたが。

そんな二人の様子に、つい見入っていたフェイトがええっと、と唸る。

先程の宣戦で、少女がグノーシスの人間だとは分かった。

しかし、ツアラ・トウ・ストラの一員と思わしき飛と何故こんなに親しげなのか？

それが分からなかった。

「……えっと。貴女は……？」

「あ、そうだ。自己紹介しなきゃ。私、グノーシス第四位。聖徳アスカ、ていいます。よろしく願いします♪」  
「あ、うん。よろしくね」

フェイトに、にぱっと笑って自己紹介するアスカにフェイトは若干気圧されながら頷く。  
随分と人懐こい少女であった。  
そんな二人を見て。

飛がぬう……！ と呻いた。

「ちちい……！ 先を越されるとは。これはイカン！ 再びフラグを立てる為にも自分も……！」

もう、十分です。

と、フェイトは思う。

ついでにフラグなんて立ちませんよ、とも。

そんな飛にアスカがニマッと笑う。

そして、取り出したるは。

マイク、であった。

『飛兄は私のね……？』

大音声が辺りに響く。

マイクで持って増幅された声が、フェイトどころかクラナガン中に響いた。

何を？

と、疑問に思うフェイト。

同時、飛がハワワと慌てる。

「ちよっ！ アスカお前、まさかー！」

アスカはそんな飛を見て。

笑った。

にぱっと太陽のように。

だが、何故だろう。

フェイトはそんなアスカの笑顔に、何故か一物を覚え。

同時、飛がその名の通り飛び出した。

アスカの言葉が続けさせない為に！

「さっせるかあああー！……！」

『翔星閃光弾くくん！』

ー煌ー

「ぶぐるふあああー！」

突っ込んで来た飛に、容赦無くカウンターで叩き込まれる光弾。

飛は直撃を受け、綺麗に煙を上げて吹き飛んだ。

『駄目だよ。飛兄？ 今から私と飛兄の関係を話すんだから』

♪』

「いやあああああ！ やっぱー！ 後生で御座るっ！ アス

カ、せめてフェイト殿の聞こえない所でー！ー！」

「？」

何をそんなに慌てているのか？

飛の様子に、寧ろフェイトは興味を覚えた。

何の関係も無いが、さっきから自分のザンバーやら、砲撃やらを受けてピンピンしている飛の頑丈さは、ある意味凄いと思う。

アスカは飛の慌てふためく様子にんふふ♪と満足そうに笑う。  
取り敢えず、彼女はSだとフェイトは思った。  
そして、アスカはすうっと息を吸い。  
マイクに一気に言葉を叩きつける。

『私と飛兄は〜』

「お願い！　すとっぷぷりーず！」

飛の悲鳴が響き、しかしアスカは寧ろ止まらない。  
続きの言葉を容赦無く放った。

『将来を誓い合った許婚で〜〜す♪』

許婚。

その言葉にフェイトはへ〜〜と、思う。  
アスカはそれにおや？　という顔をする。

『あんまり驚かないんですね〜〜？』

「え？　ううん。驚いてるよ？　ただ、あんまり顔に出て無いだけだよ。あ、もうマイクは止めてね？」

は〜い。とアスカは頷くとマイクをしまう。

そして、飛に視線を向けた。

フェイトもそちらに視線を送る。

そこではイヤアアア…と、崩れ落ちる。飛の姿があった。  
取り敢えずはフェイトは飛に声をかける。

「……ええっと、よかったですね。カワイイ娘が許婚で」

「ち、違うで御座るよー！」

飛が復活。

立ち上がると同時に、叫びをあげる。

そんな飛にフェイトはアスカに尋ねる。

「ああ、言ってるけど？」

「ちゃんと許婚ですよ♪ 飛兄がああ言ってるだけです♪ お父さんもお母さんも認めてますし♪」

「いやいやいや！ それ、幼稚園時代の話して御座ろうが！」

「あの時の飛兄の言葉、思い出すなあ〜。ちょっと照れちゃう♪」

アスカの台詞にやーめーてーと飛が叫ぶ。

そして、アスカをぐつと睨みつけた。

「……それ以上は喋らさんで御座る！」

「ん〜♪ まだまだ喋り足りないけど。でも私も飛兄を連れ帰らなきゃいけないもんね♪」

そして、二人は同時に構えを取った。

半身に。

それは全く同じ構えだった。

「飛兄。いっくよ〜♪」

「自分はここで帰る訳にはいかぬで御座る！ 真実の愛を掴む為！  
何より、金髪巨乳とフラグを立てる為に！」

マジな顔でそんな事を堂々と飛が叫び。

直後。

二人は同時に駆け出した。



「轟！」

海を仰ぐクラナガンの街。

そこに剣群が突き刺さる。

万を越える剣群が。

それはビルを纏めて倒壊させ、街中に突き刺さっていた。

まるで、剣の山である。

それを成した張本人。

アルセイオ・ハーデンは下を眺める。

正確には、そこに居る二人組に。

シオンと、ウィル。

幼なじみの相棒たる二人はそこでぐったりとしていた。

だが、その身に剣は一本たりとも刺さってはいない。

キー・スペルを持って放たれし、剣群全てを二人は凌いで見せたのだ。

シオンはイクス・カリバーンを左手一本で振るい。

ウィルは時に剣矢を放ち、時に双剣を振るい。

剣群を凌いだのだ。

だが。

「……ま、こんなもんだろ」

「「ーっ！」」

アルセイオの声に二人はぐっと睨みつける。

しかし、その瞳にはあまりにも力が無かった。

「お前達はよく頑張ったさ。坊主。寧ろ、今まで魔力やら体力が持っただけ大したもんだぜ？」

「……うるせえよ」

シオンが悪態を吐きながら立ち上がる。  
ウィルもそれに続く。

しかし二人共、先の剣群を凌ぎ切る事でほとんど全力を使い果たしてしまっていた。

特にウィルの消耗が激しい。

これは片手しか使えないシオンのフォローをした為だ。

ウィルは息を荒げる。

シオンも同じくらい息が上がっていた。

「……で、立ち上がったはええけど、どないするんや？　アホシオン」

「……知るか。ボケウィル」

互いを罵倒する言葉にさえ、力が無い。

それをアルセイオは見遣り。

さて、と笑う。

直後。

ソードメイカー・ラハブ

鍵となる言葉が再び響いた。

「いい加減。終わりにしようや、坊主」

直後に、その背に展開する剣。



剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣  
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣

「剣」

万を越える剣の軍勢を再び生まれた。  
それを見て、シオンは小さく舌打ち。  
ウィルに視線を送る。

「……一応、聞いとくけどよ。お前、後どんくらい行ける？」

「……剣矢が一矢放てりゃいいほうやな」

ウィルから返ってきた返答は実に無情だった。

つまりはお手上げ。

完全に詰み、であった。

「……くそ。何か、何か無いか……？」

考える。

考えろ、考えろ、考えろ！

シオンは己に繰り返し問う。

この盤上を覆すだけの何かを考えろ、と。

王手を防ぐ。

いや、盤をひっくり返すだけの何かを。

考える。

考える。

そして。

「……あ」

一つだけ閃いた。

かつて、アルセイオを退け、追い詰めた。

”あれ”ならば。

しかし、あれは――。

「相談は終わったかよ？」

「――っ！」

アルセイオの声に顔を上げる。

そこには今、まさに剣群を放たんと片手を上げるアルセイオが居る。

迷っている暇は、無い！

「来い……」

「？ シオン？」

ウィルがシオンの様子に疑問符を浮かべる。

しかし、それに構う。

その暇すら惜しい。

来い。

それだけをシオンは繰り返す。

「来い……。来い、来い、来い、来い、来い、来い、来い、来い……！」





「はい♪ 緊迫の次回を地で行きまくるアリサ道場です♪ 毎回の道場主のアリサです♪」

す

「前後編なのに全然前後編じゃないよね？ 弟子のすずかです♪」

ア

「そして、今回のゲスト♪ どぞ〜♪」

翔

「よっ。魔法少女リリカルなのは Brave Saversから主人公の草薙 翔だ。宜しくな」

ア

「お〜。チート主人公来たわね？」

翔

「……人をチート呼ばわりすんなよ。そっちも大概だぞ？ ……そういやこっちの主人公でこの間女体化したシオンは？」

「あそこだよ？」

翔

「？」

キャアアアアアアアアアアアアアアアアア  
いいやああああああああああああ……

翔

「……なんだ？ この切ない悲鳴は？」

ア

「シオンよ？」

翔

「は？」

そこは！ そこはサッパリなんかならない！ てか無理無理無理無

理無理無理無理無理無理……！　　いいやああああああああ  
ああ……！

翔

「いやいやいやいや！　あそこで何が起きてんだよ！？」

ア

「……詳しく言おうと拷問？」

翔

「ぐ……！　何でまたそんな事に？」

す

「ん……？　何て言うか、LVでヴィヴィオちゃん怒らせちゃったから、タカト君が、ね……」

翔

「……あ……。何か、師匠バカ、て話しはよく聞い、ブっ！」

――撃――

タ

「……誰が師匠バカか、誰が」

ア

「お、タカト。折檻終わったの？」

タ

「ええ。まあ、そろそろ精神的にアウトな状態になりそうだったの  
で今は放置を」

す

「精神的にアウト、てまたどんな目に……？」

タ

「……苦痛と言うのは長く、甘くやっていくと快楽に変わるそう  
で」

ア、す

「「はあ……」」

タ

「それを十時間程、繰り返してみました」

ア

「うわぁ……」

す

「それは、凄いね……」

翔

「いやいや！ 凄いどころじゃないだろ！？ てか、登場してからいきなり殴んな！」

タ

「そう言うな。同級生の翔よ。こんなもの、日常茶飯事のツツコミだろう？」

翔

「は？ 何だそれ？ 何でいきなり同級生？」

タ

「クロスリレー企画。学園編で、俺はお前と同級生だからだ」

翔

「さらりとネタばらしした！？ いやいや！ それ、今言ってもいいのかよ？」

ア

「別にいいんじゃない？」

す

「そうだね〜」

翔

「……恐ろしく適当な。お前等……」

タ

「さて、唐突だが、前回告知したクロスリレー参加者をここに発表する。それにあたり作者からの手紙が来ているので読み上げる。

ども♪ テスタメントです。

いつも、EX読んでいただいております♪  
さて。クロスリレー学園編。  
なのはランブル♪

参加者が決まったのでお知らせしておきます♪

東吾さん。

mebiusさん。

樟葉權さん。

白姫 彼方さん。

クロックさん。

なのライスさん。

そして、俺、テストメントと、naonaoさんの合計八名です♪  
ではでは、皆さん♪

是非楽しみましょう♪

よろしく願います♪

クロスリレーのトップバッターは俺からいきます♪  
では〜♪

との事だ」

翔

「ついに決まったか。しかし、お前も高校生なんだな？」

タ

「歳はあまり関係ないらしいぞ？」

ア

「私達も道場バージョンならいいんだけどね〜♪」

翔

「……無敵キャラを出すのは無理くないか？」

す

「大丈夫だよ〜」

翔



「いやいや、絶対大丈夫じゃないだろ！ てか、俺一人じゃこの二人捌ききれん！ シオンは！？」

タ

「精神崩壊寸前のアレでいいならば連れてくるが？」

翔

「……チッ！ 使えねえ……！」

ア

「……また黒いわね。アンタ」

す

「道場因子があるからねっ♪」

タ

「……さて。では今回のおさらいを一言で。翔頼む」

翔

「は？ 何でまた俺？」

ア

「シオンがアレだから♪」

翔

「……激しく納得したよ。あっ。漫才はバトル中に行うな、かな……？」

ア

「……当たり障りの無わね。詰まらないわっ」

翔

「うお……！ お前、酷くないか!？」

す

「んっ。ここではボケないと、干されちゃうよ？」

翔

「いやいやいやいや！ 俺、芸人じゃねえし！」

ア、す

「「え？ そうなの？」」

翔

「今、初めて知ったみたいに言うなよ！ あゝ。もう！」

タ

「まあ、そう怒るな。これでも食べる」

翔

「ん？ 何だ、これ？」

タ

「マグロの心臓の刺身だ。釣り上げてすぐでないと出来ないが、なかなかの珍味だぞ？ 外人（ここで言う外人とは次元外の人間も含まれる）に好かれんが」

翔

「……まあ、刺身自体が駄目な国もあるしな。ありがたく食べるか……ふむふむ。なかなかの珍味だな」

タ

「だろう？ 滅多に出来んがな。主達もどうぞ」

ア

「う……。これ、見た目がグロいわね……」

す

「うゝゝん。でも翔君は美味しそうに食べてるよ？」

ア

「じ、じゃあ。いただきます」

す

「いただきますゝゝす」

タ

「さて、皆が食べているので、今日はここまで。EXいつも読んで下さってる読者の皆様、ありがとう。これからも応援宜しく頼みたい。そして東吾さん。キャラ召喚ありがとう。お土産にマグロのカブト焼きを翔に持たせるので皆で美味しく頂いてくれ。ではでは」

「」

翔

「……箸が進むな、これ」

ア

「ん〜。見た目はヤバかったけど、これはこれで……」

「美味しいね〜♪」

タ

「三人共。挨拶、挨拶」

ア

「あ、とそうだったわね。それじゃ皆様」

す

「また次回〜♪」

タ

「刮目、あれ」

翔

「クロスリレーや、Brave Saversも宜しくな」

JKシ

「……女体化してまで俺、こんな目に合うのかよ……」

タ

「正気を取り戻したか。では、続きといこうか？」

JKシ

「ドヒイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ……」

「…!？」

終幕

第三十六話「背中合わせの相棒」(後編)(後書き)

「アルセイオとの戦いで追い詰められるシオン」「そして、シオンは反則を繰り返す。アヴェンジャーと言う反則を」「揺れ動き、

侵される意思の中。シオンの中で第三と第四の”大罪”が目覚める」

「そのチカラとは……」「そしてSt, ヒルデ学校

でユーノと共に避難するヴィヴィオに迫る者達」「その時。去って

いった筈の彼が現れる」「次回、第三十七話『それぞれ

の再会』」「会いたかった。そう少女は彼に告げる」

第三十七話「それぞれの再会」(前編)(前書き)

「会いたかった」

「会いたかったんだよ」「ずっと、ずっと、

そう思ってた」

「でも、貴方は帰って来なかった」

「だから、私から貴方に」

「会い

にいくよ」

「魔法少女リリカルなのはS t S, E X。始まり

ます」



シオンはあえて、アンラ・マンユを略称で呼んだ。  
それに、カインはくくと笑う。

「で？ 今度は何が望みだい？」

笑いながら問う。

そんなもの、分かっているくせに。

シオンは一つ嘆息。

そしてカインを睨んだ。

「……おっちゃんに勝ちたい。だから力を寄越せ」

単刀直入に答える。

己が望みを。

カインはそれにニタア……と、笑う。

嬉しそうに。愉しそうに。

悦びと、共に。

「カカカカ。いいぜ？ なら、俺に任せろよ。無尽刀だろうが、何だろうが、俺が蹂躪し尽くしてやるよ」

笑い、カインは手を伸ばす。  
それにシオンも手を伸ばし。

「パン！」

思いつきり、跳ね退けた。

「兄弟？」

カインの戸惑うかのような声が響く。  
それにシオンはニヤリと笑った。

「何勘違いしてやがんだ、手前え？ 俺は力を寄越せ、つつたんだ。  
”力だけを”、な」

「何？」

「わかんねえか？ ”お前はいらねえんだよ”。俺は力が欲しいだけであって、お前なんぞ望んでねえ。……力だけ寄越してさっさと帰れ」

きっぱりとシオンは言い放った。

”傲慢”に。

そして。

”強欲”に。

そんなシオンにカインはしばし呆然とし。  
次の瞬間。

「ク。……はは。あはははははははははははははは……！」  
笑った。



心の奥底から、カインは爆笑した。

いつもの人を馬鹿にしたような笑いとは違う。  
純粋な。

あまりにも純粋な笑いだった。

「まさか、お前からそんな台詞を聞くとは、な。……アベル・スプ  
タ・マンユー

あえて真名。善神としての名でカインはシオンを呼ぶ。  
それにこそシオンは明確に笑った。

「……はっ！ 俺を善神とやらだとも思ったかよ？ 俺はそんな  
存在じゃねえ。汚れもすれば、いくらだって欲も持つ。」ただの人  
間”だぜ？”

言い切り。

シオンは笑みを消す。

そしてカインを真っ正面から見据えた。

「俺は俺だ。” 神庭シオン” という存在であってもアベルなん  
て存在じゃねえんだよ」

断言する。

そう、真名が何だ？

それが善神だから何だよ？ と。

俺はたった一人の人間であって神様なんかじゃない。

そんな大それた存在なんかにはなりたくも無い。

シオンはそう言ったのだ。

たった一人の、”人間”として。

そんなシオンにカインはやはり笑う。

―いいぜ？　なら、力をくれてやる。だが、忘れんな？―

ぐいっとカインはシオンの顔に自らの顔を引っ付けんばかりに近付け、先の笑いが嘘のように、笑った。

いつものように。

汚れた笑みで。

―お前に隙があれば、俺はいつだってお前を乗っ取る。奪う。喰らいつくす。いつだって俺はお前を狙っている。それを忘れるな―

まるで脅すかのような宣言。

力はやる。

だが、シオンがその力に吞まれるようならば、カインはシオンを喰らう。

そう、カインは言っているのだ。

それにシオンもまた笑った。

「……上等だ。いつでもかかってこいよ。いくらでも叩き潰してやる」

―カカカカ……―

そんなシオンにカインは再び笑いをあげる。

そして跳ね退けられた手を再び上げた。

―第三と第四の御印を譲渡する。さあ、受け取れ兄弟―

上げた手から”何”かが沸き立つ。

それはシオンにも馴染みのモノだ。

因子。

つまりは、カインそのもの。

沸き立つ因子が一瞬だけその動きを止めた。

直後。

―大罪を―

一気に因子はカインの掌から飛び出し、シオンのその身に喰らいつ  
いた。



St, ヒルデ魔法学院。

ヴィヴィオが通う聖王教会直轄の魔法学校である。

普段ならば、子供達の元気な声が聞こえる場所である。

しかし、今は違った。

学院のグラウンド。

広いグラウンドである。

そこでヴィヴィオは”捕縛”されていた。

正確には、学院に避難していたほぼ、全員が捕縛されていたのだが。

……なんで、こんなことに……

そう、ヴィヴィオは思い、俯いた。

時間は少し遡る。

朝。

もう一人の同居人がなくなった事をユーノと最愛のママ。なのはに当たってしまった事にヴィヴィオは自己嫌悪を覚えながら、とぼとぼと歩いていた。

そして、タカト自身がなくなった事に。  
どうしようも無い寂しさを覚えていた。

……タカト。

師であり、同居人であった青年の事を思い出し、さらにズーーンと沈む。

ユーノから聞いたのはタカトが犯罪者だった事だけ。  
しかし、ヴィヴィオは同時に悟っていた。

なのはとタカトが敵対している事を。

犯罪者なのだから敵対している事は当たり前ではあるのだが。  
ヴィヴィオが思っている事はそれとは違う。  
おそらく二人は、”直接的”な意味で敵対している。

ヴィヴィオは子供ながらの感の良さでそれを悟っていた。

なのはと、タカト。

二人が戦うなんて、ヴィヴィオは嫌だった。

大好きな人達が戦い合うなんて。

傷付け合うなんて想像もしたくない。

でも、タカトは出て行ってしまった。

母達と、戦う為に。

……やっぱり、イヤ。

そう、ヴィヴィオは自分の思いを再確認する。

だから、もう一度。

もう一度でいい。

タカトに会おう。

そう、ヴィヴィオは決めた。

「うん……。ちゃんと、はなそう。タカトと」

決めてしまえば、心は晴れる。

ヴィヴィオは顔を上げた。

まずは、ユーノさんとなのはママに謝ろう。

そう、ヴィヴィオは一人頷く。

そして、St, ヒルデ学院の道を急ごうとして。

「ヴィヴィオー！」

背後から声がした。

ユーノの声である。

ヴィヴィオはそれに疑問符を浮かべて振り向く。

ユーノが走って来ていた。

ヴィヴィオの元まで走り、ほっと息を吐いた。

「ヴィヴィオ。よかった……！ 結構遠くにいたから心配したよ…

…」

「ユーノさん？ どうしたの？」

安堵するユーノにヴィヴィオは首を傾げる。

何故、ユーノが自分を追い掛けて来たのか分からなかったのだ。

ユーノはそんなヴィヴィオに向き直り、その手を握ると、歩き出す。

「……ごめん。今は説明してる暇は無いんだ。……ここからだと家に戻るのも危ない。……学院に避難しよう」

「ユーノさん？」

再び、ヴィヴィオがあげる疑問符。

だが、ユーノは構わない。

ヴィヴィオの手を引いて、学院までの転送ポートに向けて足を速めた。

結局の所。

ヴィヴィオがクラナガンで起きている”地獄”を知ったのは、学院

に避難した後だった。

学院に着くと、そこには避難して来た人でごった返していた。  
当然とも言える。

何せ、クラナガンにいた住人のほんの一部とは言えど、その人数は千では効かない。

それだけの人数が学院へと避難して来たのだ。

しかし、ごった返しているとは言えど、St，ヒルデ学院は広大だ。それこそ場所さえ問わなければ、避難して来た人達は入る事が出来たのだ。

その中でユーノとヴィヴィオは手を繋いで歩いていた。

教室も、廊下も人でいっぱいである。

怪我人が床に敷き詰められた毛布の上に居る光景などがよく目についた。

その中を魔法医療士や、医者。看護師が所狭しと駆け巡る。

何せ、怪我人の数も尋常では無いのだ。

そして、彼等の数はそれこそ有限。

しかも、怪我人に対しての絶対数があまりに少な過ぎていた。

その現状に、ヴィヴィオは身震いする。

クラナガンでどのような地獄が起きているのか。

想像してしまい。

また、その中を暢気に歩いていた事に、漸くどれだけ危険な状況に居たのかを、理解したのだ。

「ヴィヴィオ？」

はっとする。

気付けばユーノが立ち止まり、こちらの顔を覗き込んでいた。  
いけない、と。

ヴィヴィオは頭を振った。

「……ユーノさん、ごめんなさい」

「いや、いいよ。ちよつと考え込んでたみたいだから声を掛けただけだしね。……それでね？ ヴィヴィオ」

ユーノが屈み、ヴィヴィオに視線を合わせる。  
肩にポン、と手を置いた。

「僕。治療魔法を使えるから怪我人の治療を手伝おうと思うんだけど。……その間。一人でも大丈夫かい？」

「あ……」

一瞬だけ、ヴィヴィオは迷う。

正直に言おうと、怖かった。

一人になるのが。  
だが。

「……………」

周りを見渡す。

そこには、苦し気に呻く人達や、痛みに喘ぐ人達が居る。

それを見て、ヴィヴィオはきゅっと目を閉じる。

怖いなんて言ってられない。

今まさに苦しんでいる人が居るのだ。



ユーノはその助けになる。

それを自分が怖いから。

なんて事で立ち止まらせてはいけない。

ヴィヴィオは目を開き、こくりとユーノに頷く、せめて笑顔でと、笑った。

「うん。ユーノさん。がんばって」

「ヴィヴィオ。……ありがとう。……出来るだけ、すぐに戻るね？  
待ち合わせ場所はヴィヴィオのクラスでいいかな？ 初等科一年  
のAクラス、だよね？」

「うん！」

頷く。

そして、今の今まで繋いでいた手を離れた。

ユーノが立ち上がる。

繋いでいた手で頭を撫でた。

「……タカトの事。ちゃんと後で話そう」

「ユーノさん」

その言葉に、ヴィヴィオは目を見開く。

ユーノはそんなヴィヴィオの反応にただ微笑む。

「……やっぱり。ちゃんと話しておこうと思うんだ。……後になっ  
ちゃうけど、いいかな？」

ユーノの微笑み。

それにヴィヴィオはしばし呆然となり。

一時の間を持って、微笑んだ。

「うん。……ありがとう、ユーノさん」

「うん。それじゃあ、行ってきます」

ヴィヴィオの頭を軽く撫で、ユーノは背を向けて歩き出す。  
ヴィヴィオは、そんなユーノの背に向けて、大きく手を振った。

「いってらっしゃい！」

叫ぶ。

ユーノは微笑み、軽く手を上げて。  
歩いて行った。



一年A組の教室。

いつもなら子供達と、教師しかない筈のこの空間でも、やはり人でいっぱいであった。

机や椅子は、どこかに退かされたのか、何処にも無い。

そして、ここでも床一面に、シートが敷かれていた。

その教室にヴィヴィオは入り。

「ヴィヴィオ……！」

呼び掛けられた声に、目を丸くし。

しかし、パアっ……！ と花が咲くように笑った。

「コロナ！」

教室に入ると同時に、ヴィヴィオはその名を呼ぶ。

ヴィヴィオを呼んだのは少女だった。  
コロナ。

この学院に入って以来の親友である。  
ヴィヴィオはそのまま駆け寄ると、その手を握った。

「コロナよかった……！　ぶじだよね？」

「うん。ヴィヴィオもだいじょうぶ？　どこもけがとかない？」

「わたしはだいじょうぶ！　ユーノさんがいてくれたし」

そっかーと、頷き合う。

そんなコロナにヴィヴィオはホッとした。

正直、一人では心細かったのだ。

特に、こんな風到大勢の人が周りにいる時には。

そんなヴィヴィオの手を引き、コロナは自分が座って居たシートの上まで行く。

そこには彼女の両親だろう。

人の良さそうな、男性と女性が居た。

「何処行ってたんだ？　コロナ？」

「おともだちをみつけたから、つれてきたの」

コロナの父親だろう。

男性がコロナの言葉に頷き、ヴィヴィオを見る。

それに、ヴィヴィオは戸惑いながらもぺこりと頭を下げた。

「は、はじめまして。たかまちヴィヴィオ、ていいます！」

出来るだけ大きな声で自己紹介する。

それに、コロナの父親は微笑む。

「初めまして、ヴィヴィオさん。コロナがお世話になってます」  
「あ、……こ、こちらこそ」

再びぺこりと頭を下げるヴィヴィオに促し、自分達のシートへと迎え入れる。

すると、傍らの女性からも挨拶された。

どきまぎしながらも、同様の挨拶をする。

そして、コロナと一緒に座った。

「そう言えば、ヴィヴィオさんのご両親はいらっしゃらないのかな？」

「あ……。その、ママはかんりきよくのひとで……」

「……そうだったか。ならまだクラナガンに？」

ヴィヴィオが頷いたのを見て、コロナの父がこちらにすまなそうに、眉を潜めた。

ヴィヴィオはそんなコロナの父の様子に慌てる。

「あ、でも。ここには、しりあいの……。ほごしゃのひとときてます」

「そうかい……？ その人は……」

ヴィヴィオは手短にユーノの事を話す。

それに、コロナの父は頷いた。

「……そうか。この怪我人の数だものな」

「……はい」

ヴィヴィオが頷いたのを見て、今度はその脇。コロナの母から声が掛かった。

「なら、しばらくここにいらっしやいな。ユーノさん？　だったかしら。その人も帰って来たら、ここに居ていいし」

「あ、その……」

そんな事を言われて、しばらくヴィヴィオはあたふたとする。

だが、自分を見る、四つの暖かい瞳に力を抜いた。  
安心したのだ。

そして、頭をまた下げた。

「あ、ありがとうございます」

「「はい♪　どういたしまして♪」」

夫婦は、そんなヴィヴィオの礼に暖かく微笑んだ。



「……ユーノさん。おそいね」

「うん……」

コロナの台詞にヴィヴィオは頷く。

教室に入って来て、かれこれ一時間経つ。

だが、ユーノは未だ帰って来なかった。

「……ユーノさん。がんばってるんだよ」

「うん……」

制服の袖をきゅっと握りながらヴィヴィオが頷く。

そんな様子をコロナの両親も心配そうに見ていた。

その間にも人はひっきり無しに教室に入ってくる。

避難して来た人が、更に増えたのだ。

さっきまではまだ多少の余裕があったのだが。

今は、互いに肩やらが触れる程に密着しなければならない程に余裕が無くなっていた。

そんな状況で、コロナの両親も、コロナも、ヴィヴィオを励ましてくれた。

それを嬉しく思いながらも今の教室の状態にヴィヴィオは参り始めていた。

人が集団でぎゅうぎゅう詰めになると言うのは思った以上のストレスを人に与える。

ヴィヴィオは体力的にはともかくとして、精神的に参り始めていたのだ。

「流石に人が多くなってきたな……」

「そうね……」

コロナの両親もこの状況に眉を潜める。

自分達はともかく子供達が持たないと、思ったからだ。

とにかく、少しでもスペースを作るために身を寄せ合うようにしようとして。

《あゝ。テストテスト》

いきなり声が聞こえた。

校内放送だ。

それに皆、ざわつく。

《こんにちは。皆様。クラナガンで起きた惨状、大変心苦しく思います。それを踏まえた上で、このような状況の中。大変申し訳ありませんが》

瞬間。

突如として、廊下から悲鳴があがった。

群集の悲鳴だ。

いきなり響く悲鳴に、教室の皆も息を飲み。  
そして。

《今より、このSt, ヒルデ学院は我等ツアラ・トウ・ストラが占拠します》

声と共に、教室に”それ”が現れた。

クラナガンを地獄に変えし、ヒトガタ達。

因子兵と、ガジェットが。

教室は、いや。

学院は一瞬でパニックに陥った。

パニックはすぐに治まった。  
少なからずの”犠牲”によって。

《申し遅れましたが、我等は抗議その他を一切受け付けません。その上で、無用な騒ぎを起こした場合。”相応の処置”を取らせていただくので、あしからず》

その言葉に誰も答えない。

今、目の前で見せられた”相応の処置”。

それに心底、恐怖したからだ。

教室で、処置を取られたのは三人。

すでに、彼等は喋る事は無い。

永遠に。

《さて、では皆様。校舎から出て頂きましょう。幸い、広いグラウンドがありますので、そこに集まって頂きます。よろしいですね。では》

校内放送は切れ。

そして、教室に居た皆は歩き出した。

誰も、何も言えないままに。

それはヴィヴィオも含めて。

鈍い諦観の念が、避難して来た者達を包みつつあった。



グラウンドに集められた群集達。

その中でヴィヴィオは縮こまっていた。



傍にはコロナとその両親も居る。

それぞれ、両の手にはリングバインドを掛けられて、拘束されていた。

さらに、まるで群集を取り囲むように配置された因子兵とガジェツト達が居る。

そして。

「おっお。随分集まったもんだ」

「そうね」

それを統率するように一組の男女が居た。

男は、筋肉質の大男だ。

まるで、ゴリラのような男である。

筋肉で覆われた肉の装甲を黒のスーツで包んでいる。

そして女。

こちらは細身の女性だ。

短い髪をツンツンに立てている、気の強そうな女性である。

彼女もまた、黒のスーツを着込んでいた。

「さて、で？ どれなんだ？」

「さあて……。外見的な特徴は教えられてるけど、数が数だからね」

面倒臭そうに、女性が肩を竦める。

そしてぽそりと呟く。

「聖王のコピーか。そんなもの必要なのかね？」

「!？」

女性の呟き。

それをヴィヴィオは聞いてしまった。

驚きに目を見張る。

彼女は確かにこう言った。

聖王、と。

その単語を、ヴィヴィオが忘れる訳が無い。

それは、忌むべき言葉であり、同時に大切な言葉でもある。

ヴィヴィオを母と結び付けた言葉なのだから。

だが……。

”また”。

そんな思いをヴィヴィオは抱く。

一体これで何度目だろう。

自分の所為で周りを巻き込むのは。

じんわりと目に涙が浮かぶ。

この騒ぎですらも自分が居たせい。

もう、自分の所為で誰も傷付いて欲しくなんて、ないのに。

「……おや？」

「ーっ!？」

声が頭上から聞こえた。

それに顔をあげると、先程ね大男がこちらを見下ろしていた。

男はヴィヴィオを見て、一人呟く。

「紅と翠のオッドアイ。ブロンドの髪……」

ヴィヴィオの特徴を一つ一つあげる。

そしてニタッと笑った。

「見付けた」

即座に手を伸ばす。

それに、しかしバインドで拘束されているヴィヴィオは身じろぎし  
か出来ない。

ヤだ……。。

そう思い、しかし何も出来ない。

男は泣くヴィヴィオを無理矢理に抱えようとして。

「……ヴィヴィオに触れないでくれ」

――撃――

その身体が宙を舞った。

……え？

ヴィヴィオは目を見開く。

男は既にいない。

群集の上を飛び越え、グラウンドに転がっていた。  
それを成したのは、ヴィヴィオのよく知る人。  
戦ってる姿なんて見た事も無い人だ。

その名をユーノ・スクライア。

無限書庫司書長にして、かつてのなのはの相棒。  
ヴィヴィオの同居人がそこに居た。

眼鏡を外し、掌を突き出した体勢で。

守る為に。

戦う為に。



「……シオン……」

ウィルは呆然と、目の前の存在を見ていた。

そこに居るのは黒の全身甲冑に身を包んだ、幼なじみにして相棒。  
神庭シオンがそこに立っていた。

身体中から、因子を溢れさせて。  
だが。

「……ウ……イル……」

シオンは呼ぶ。

己が相棒の名を。

それにこそ、ウィルは驚愕する。

「お前……！ 意識あるんか！？」

「当たり前、前だろうが……！」

【楽観は出来んな。……せめて、事前に教えて欲しかったが】

苦し気に呻きながらもシオン。イクスが答える。

そしてキツと頭上のアルセイオを睨んだ。

アヴェンジャー・フォーム。

再び現れたそれに、アルセイオは目を見開き、驚いていた。

何より。

シオンが己の意識を保っている事に。

啞然としていたアルセイオは、しかし。

驚きから笑いへと、表情を変えた。

「いいぜ……！ 坊主！ そうでなくちゃあなあ！」

叫び、手を掲げる。

そこには未だ、形成されたまま置かれた方を越える剣群がある。  
それにアルセイオは再び、魔力を流し込む。

直後、剣群が巨大化した。

一本一本。

全ての剣が十mを越える巨剣へと変貌する。  
そして。

「これ全部、迎撃出来るかよ！ 坊主！」

一気に手を振り下ろした。

同時に、全ての剣群が真っ逆さまに落ちて来た。

一本一本がちよつとしたビルに匹敵する巨大さを有する万を越える  
剣群。

それは、まさに人を断罪せんとするギロチンだ。

だが。

「迎撃？ 違うね。俺はその剣群を、全て――」

シオンがその身に有する”大罪”は。

「受け止め切ってやる！」

”その程度”では裁けない！

「我！ 弱き心を抱え、しかし其を固き傲慢で守らん！」

聖句を叫び。

同時に、左手を頭上に掲げる！

「全てを拒絶するは傲慢！ 第三大罪、顕・現……！」

掲げた左手から先が歪む。

空間が歪んだのだ。

それは一瞬にして、シオンを。ウイルを。

いや、” シオンが認識する全域” に広がる。

[illegible]

一轟！

そして、アルセイオは、ウィルは、”それ”を見た。

巨剣群が、止まっていた。

落下を、シオンが掲げた左手の先から停止していたのだ。

全ての剣群が、である。

「これ、は……」

アルセイオがシオンの目前で停まった剣群に、戦く。

よく見れば、シオンの左手がアルセイオからは歪んで見えた。

光すらもが振曲げられているのだ。

シオンが形成せし、傲慢によつて。

「っ……………！」

”絶対拒絶防御”……………。

これこそが第三大罪、傲慢だ

……………！」

シオンが呻きながらも呟く。

その身体の因子が激しく沸きだしていた。

「て、おい！ 暢気に説明してんなや！ お前ー」

「ぐ……う……！ いやかましい！ 今、俺の心配なんざすんな！  
今は……」

ウィルが駆け寄ろうとして、しかしシオンが留める。  
そして。

「……なら」

我は、無尽の剣に意味を見出だせず。

二つの声が響く。

一つはアルセイオ自身の肉声。  
もう一つは。

「これならどうよ！？」

故に我はたった一振りの剣を鍛ち上げる。

アルセイオだけに許されし、音を介さぬオリジナル・スペル。

そのスペルが意味するのはたった一つだ。

世界を斬り得る最強の剣。

ダインスレイフを中心として、斬界刀を再び、アルセイオは形成したのだ。



既に巨剣群は無い。

斬界刀を形成したからだ。

そしてアルセイオは一気に斬界刀を振り上げる！

「その傲慢ごと叩き斬ってやらあ！」

そう、この剣は世界を斬り得る一刀。

例え、空間すらも歪める防御障壁だろうと斬り得る！

だが、シオンはその一刀を前にして。

「それを――」

笑った。

「待ってた！」

叫んだ直後に傲慢は消えた。

それにアルセイオは目を見開き。

そして。

「我は欲っする。尽くせぬ”強欲”を持って！」

傲慢とは違う聖句を聞いた。

別の聖句。

それが意味するのは。

「奪い、望み、手に入れる！ 第四大罪、顕・現……！」

新たなる大罪！

⋮  
!

そして、アルセイオは”それ”を目にした。

(後編に続く)

第三十七話「それぞれの再会」(前編)(後書き)

……はい。                    てな訳で前編をお届けしてしました♪

……一話で終わらせられねえ……(涙)                    むう、プロ

ットだと一話の予定だったのですが(汗)                    後編、

すぐお届けできるように頑張ります♪                    ではでは♪

PS…人気投票結果、後編でお知らせします♪                    そして。つ

いに動きだしたクロスリレー小説第二段!                    私立聖

祥大附属学校日常録。N a n o h a R u m b l e !

も、よろしく♪                    ではでは♪

第三十七話「それぞれの再会」(中編)(前書き)

……何故だろう。後編の筈なのに、中編ですよ？ ……か、書いても書いても。お、終わらねえ……！ (涙) そんなこんな、中編です。……本当、何でだろう？ てな訳でどうぞ〜♪

### 第三十七話「それぞれの再会」(中編)

「グリイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイドっ……  
……」

シオンが叫び。

直後に斬界刀を振り下ろさんとしていたアルセイオは”それ”を見た。

ーパンー

砕けた。

砕けた、砕けた。

”斬界刀”が。

「……な……!？」

砕け散り、塵へと還った斬界刀を見て、アルセイオは呆然となる。

だが、異変はそれだけで終わらなかった。

モード・リリース。

「……っ!」

まず、ダンスレイフが待機状態にまで戻った。  
更に。

カクンっとアルセイオの視線が、下がる。

……否。

違う。

落ちているのだ。”アルセイオ自身が”！

「……これがっ！、第四大罪、強欲……！　　ここら一帯の魔力は……！」

にいと笑う。激しく湧き出す因子に、しかしシオンは構わない。  
叫ぶ！

”俺のモンだっ！”

「っー！？」

その言葉に漸くアルセイオは気付いた。

魔力が、自分のものも含めて”全く反応しない”！

魔法とは詰まる所、意思によって、世界の法則を”書き換える”事である。

しかし、それも意思媒介となる”魔力”があつてこそそのモノ。

ならば、その魔力が根こそぎ”支配”されてしまえばどうなるか？

答えはアルセイオ自身が出している。

つまり、”一切の魔法が使えなくなる”のだ。

それこそ飛行魔法でさえも。  
しかし。

「はは……。確かにとんでもねえ、代物だ。……だが、坊主。」守  
つてばかり”じゃあ、俺には勝てねえぜ?”

落下しながらアルセイオは笑う。

自分の下にはビルもある。

この高度では死にはしない。

しかも、シオン自身は強欲の維持で精一杯。

更に因子が湧き出し、シオンの自我は危うい境界線をさ迷っている。  
つまり、現状では時間稼ぎ程度にしか、使えない。

だが、シオンは。アルセイオのその言葉に。

「そう、それが……!」

再び笑った。

「俺一人”なら”なあっ!」

「そう言う事や」

「っーーーー!」

その言葉にこそ、アルセイオは目を剥く。

しゃがみ込み、ビルに手を着くシオンの真後ろ。

そこにシオンの幼なじみにして相棒。

ウィルが居た。

”刻印弓を発動した状態で!”

魔法は使え無い筈だろ……!?

そこまで考えて、しかし。

アルセイオは気付いた。

シオンはこう言った筈だ。

”ここら一帯の魔力は俺のモンだ”、と。

つまりは、今。

魔法が使え無いのは……！

「俺だけ、か……！」

アルセイオの悔し気な声に二人は同時に凄絶な笑みを浮かべた。

何より、アルセイオを驚かせたのはウィルはシオンに指示を一切受けてはいなかった事だ。

にも関わらず、刻印弓を発動し、剣矢を形成していた。

それはつまり、ウィルはシオンが”何をするのかを分からない”にも関わらず、シオンが”何かを成す事が分かっていた”と言う事だ。

二人の姿に、アルセイオはフツと目を細める。

互いが互いを完全に理解し、そして完全に信頼し合う事によって初めて、成し得る事である。

だから、アルセイオは悟った。

……己の

「「俺達の／ワイ達の……！」」

敗北を。

「「勝ちだあっ！」」



「貫！」

直後。

アルセイオを剣矢が一閃。

その身体を、貫いた。



ヴィヴィオは見ていた。

その背中を。

たった今、自分を捕らえようとしていた男を吹き飛ばした青年。  
いつもは眼鏡を掛けた、柔らかい笑みの青年だ。

ユーノ・スクライア。

柔らかい笑みの青年は、しかし。

その柔らかさは鳴りを潜め、変わりに鋭さを秘めた表情となっていた。

「ユーノさん……」

「ヴィヴィオ、ごめん。話しは後で」

ヴィヴィオを見ぬままにユーノは答え。

そのまま、両の指を組み合わせる。  
指は三角の印を組んだ。

「我祈りて。此処に請い願わん。其は悠久にして蒼古なりし盾、不  
破なりし神苑の鎧。来たれー」

「ーっ！ いけないっ！」

男と共に居た女性が叫ぶ。

そして、デリンジャー式の銃。

正確にはデバイスをユーノに向ける。

銃口に集う光。

更に足元にミッド式の魔法陣が展開する。

だが。

「エクストリーム・フィールド！」

「ちい！」

ユーノの方が一歩、早かった。

ー緊！ー

その身体を中心として、半透明のドームが広がる。  
結界だ。

それは女性が放った光弾を弾き。

止まらない。

一気に広がると、捕われた避難民全てを囲み。  
展開を停止した。

「ちいっ！　いつまで寝てんだい！？　唐変木！」  
「うるせいっ！」

女性の声に、今度は吹き飛ばされた筈の男が突っ込んでくる。  
そして結界に拳を叩き込む、が。  
結界はビクともしなかった。

「……無駄だよ。これは僕が持つ魔法の中では1番防御力がある魔法だ。君達の攻撃力じゃ役不足だよ」

「何を……！」

ユーノの言葉に男が猛る。

そして結界に拳を打ちまくる。

だが、結界は何の痛痒も受けていないとばかりに揺るぎもしない。

「畜生……！　正々堂々と勝負しやがれ……！」

「……人質をとった人間の言葉じゃないね」

フツと肩を竦めるユーノに男が更に目を吊り上げる。  
そして拳を叩き込もうと振り上げ。

「馬鹿かいっ！？　アンタは……！　こう言う時の為のこいつ等だろうが！？」

「お、おう……。すまん」

女性の怒鳴りに、ビクつと止まった。  
ちつと舌打ちをしながら女性は手を振り上げる。

「そら、行きな！　お前等！」

「参！」

女性の言葉にまるで応えるかのように、ガジェットとついでとばかりに因子兵が進み出る。

そう、ガジェットにはAMFがある。

こう言った結界ならば数体近付けてやれば、硝子のように割れる筈であった。

因子兵も結界が壊れた後で人質を脅すのに役立つ。

そう、”何もなければ”。

「……千の封縛。いかなりし訃音を告げる者か。其は凄惨にして紫苑なる鎖！」

「「な！？」」

朗々と響く永唱。

ユーノだ。

その指は高速で印を組む。

その姿に二人は驚きの声をあげる。

ユーノはその反応に一切構わず永唱の最後を唱えた。

「サウザウンド・チェー——ン！」

ばっ！ と、印を組んでいた手を振り上げる。

瞬間。

一寸っ

接近する全てのガジェット、そして因子兵。その足元からチェーン・

バインドが伸び、その機械とヒトガタの身体を一瞬で絡み取った。

そのまま拘束された、”全てのガジェットと因子兵”が。

「馬鹿な……！ A M Fはどうしたんだよ！？」

男が唸るようにして、怒鳴る。

女性はそれに再び舌打ちした。

「アンタは馬鹿かい！？ よく見な……！」

怒鳴られ、男はユーノが施したバインドを見る。

それは、光の鎖でありながら、しかし。

確かな”質量”を伴っていた。

「……馬鹿な。半物質型のバインド……！？」

「対A M F用の、ね……」

ぎりっと、歯を軋ませながら女性はこれを成した存在、ユーノを睨む。

ユーノは二人の存在を無視してヴィヴィオと話していた。その態度すら釈に触る。

「一体何者なんだい……」

放たれる疑問。

しかし、それには、まだ答える者はいなかった。



ヴィヴィオの目前で結界を形成し、さらにガジェットと因子兵を、  
全て封縛したユーノはふうと息を吐く。

そしてヴィヴィオに向き直った。

「ヴィヴィオ。……遅れて、ごめんね。怪我とか無い？」

「う、ううん。そんなことないよ……。だいじょうぶだよ」

ユーノの言葉にヴィヴィオが首を横に振る。

そんなヴィヴィオの頭を軽く撫で、ユーノは再び立ち上がった。

「そか。ならよかった。……貴方達がヴィヴィオを預かってくれた  
のですね？　ありがとうございます」

ユーノは次に、ヴィヴィオと一緒に捕われていた、コロナとその両  
親に向き直る。

そして頭を下げた。

「……いえ。私達は、何も……」

しかし、コロナの両親はユーノの礼に、首を振る。

何も、本当に何も出来なかったのだ。

ヴィヴィオを男達が連れ去ろうとした時にさえ、何も。

しかし、それにこそユーノは首を振った。

「そんな事はありません。ヴィヴィオと一緒に居てくれた。励まし  
てくれた。……傍に居なかった僕には出来ませんでした。……ヴィ  
ヴィオに取って、それはどれだけ救いになったか……。だから」

本当にありがとうございます。

そう締め括り、ユーノは振り返る。  
結界の外に居る、二人に。

「ユーノさん？」

「……ごめん。ヴィヴィオ。ちょっと行ってくるね？ 彼等を捕まえないと」

それだけを言い、再び歩こうとする。

それにヴィヴィオは目を見開く。

戦おうとしているのだ、ユーノは。

デバイスも、持っていないのに。

「なんで？ ユーノさん!？」

「……ガジェットの援軍を呼ばれると結界の維持が難しくなる。この結界は絶対に解いちゃ駄目なんだ。……だから」

この場の司令塔である。二人を捕らえると、ユーノは告げる。  
首だけをヴィヴィオに向け、にこりと笑った。

「大丈夫。僕はこれでも一時期。なのはの相棒だった事もあるんだよ。……任せて」

「ユーノさん……」

その言葉にヴィヴィオはしばし迷い。  
暫くして漸くコクリと頷いた。

ユーノはそんなヴィヴィオに再び微笑み、そして歩き出した。

「ありがとう。ヴィヴィオ。……行ってくるよ」

「うん。……ユーノさん。きをつけて、いってらっしゃい」

そう言葉を交わして、ユーノは飛行魔法を発動。  
結界の外。

捕縛すべき二人の元まで翔けた。



あっさりと結界の外に出たユーノに二人は拍子抜けの表情となっていた。

どうやってこの結界を破壊しようかと思案していた時に、肝心の結界を張った当人が結界の外に出て来たのだ。  
肩透かしにもなる。

「……へ。何のつもりだあ？ 結界を張るぐらいしか能が無い輩がよ？」

「……君達を捕縛する」

男の言葉にしかし、ユーノは淡々と答える。  
それに女性はデリンジャー型のデバイスを差し向ける。

「あたし達に勝てるつもりがある、てのかい？」  
「ああ」

きっぱりと断言するユーノに、男は見るからに怒気を漲らせ、女性  
は逆に冷ややかな顔となる。

そう、忘れてはいけない。

この男は自分達でさえ、破壊不能な結界を張り。



あまつさえガジェットと因子兵を封縛してのけたのだ。

その能力は侮れない。

「……一応聞いておくよ。アンタ、何者だい？」

「僕は……」

「じゃらくせえ！」

瞬間。

ただでさえ大きい男の身体が、まるで二回りは大きくなったように膨らむ。

筋肉だ。

恐らくは身体強化の一瞬なのだろう。

直後にユーノに突進する！

ー激！ー

ユーノはその突進を避けなかった。

だが、男の身体はユーノに一切触れていない。

止められたからだ。

ユーノが張ったシールドで。

「ぬう……！」と、呻く男をユーノは見上げ、そして告げる。

「……ただのしがない書庫の司書長さ」

ぽつりと眩き、後退。

ユーノの姿があった場所を光弾が通過する。

戦いが始まった。

「ぬうあ……！」

叫び、再び突進を開始する男にユーノはしかし、今度はシールドを張らない。  
印を組む。

「チェーン・バインド！」

瞬間で展開するミッド式の魔法陣。  
そこから翡翠色の光鎖が飛び出す。  
それは狙い違わずに男を封縛する。  
しかし。

「こんなちやちいモンが効くかよ！」

「散！」

男が力を込めると同時に鎖がちぎれる。  
バインドはあっさりと解けた。  
しかも。

「シュート！」

「弾・弾・弾・弾・弾」

男の後方より放たれる光弾。  
それにユーノはくつと呻く。  
意外にもよく出来た連携だ。  
正攻法だと崩すのに時間が掛かる。  
しかも、自分はまともな攻撃力を持つ魔法が無い。  
だが。

” まとも ” では無い方法ならばある！

ぱつとユーノは手を振り上げる。  
直後に、” それ ” は動き出した。  
ガジェットを封縛せし、光鎖が。  
当然、ガジェットを引き連れて、  
だ。  
そして。

「はああああっ………！」

ユーノは手を振り下ろす。  
その手に合わさるかのように光鎖はガジェットを引きずり、男に向  
かって放り投げた。

「ぬお………！？」

驚愕の声を男はあげ、後退。  
そこに光鎖に引きずられたガジェットが振り落ち、直後。

―爆！―

一拍の間を持って爆発した。  
爆風により、舞い上がる砂埃。

それに男は腕を顔の前にやり、やり過ごす。

そして砂埃が収まった時。

”それ”を見た。

光鎖に吊り上げられ、ユーノの元に引きずられた自分達が連れて来た、全てのガジェットと、因子兵を。

「……僕と”暇潰し”と言う名の”八つ当たり”に模擬戦をよくやった何処かの元執務官に、よく言われたよ。『君にはまともな攻撃方法が無いのだから、真っ正面から戦おうとするな』、てね」

そして、と続ける。

同時に手を振り上げる。

その動作に合わさるかのように、ガジェットが、ヒトガタが、光鎖により持ち上がる。

「『使えるモノは何でもいいから徹底して使え』ともね。だから、恨むのならその元執務官によろしく。なんなら名前くらいは教えるよ?」

その言葉に、男も女性も答える事は出来ない。

呆気にとられたからだ。

目の前の光景に。

そして。

「それじゃあ、行くよ」

瞬間。

ユーノは手を振り下ろし、ガジェットと因子兵でなされた砲弾が二人に向かい。

「轟！」

振り落ちた。

「「ーっ!？」」

自分達に向かい来るそれに二人は総毛立ち、一気に散る。

その場所に、容赦無く。

ガジェットと因子兵は突き刺さり。

或いは爆発し。

或いは地面に突き刺さり、しかし。壊れなかったモノは容赦無く次弾へと使われた。

まるで、ガジェットと因子兵の雨だ。

狙いが甘く直線的だからまだ避せるが……？

そこで気付いた。

やけに狙いはしっかりしている癖に、狙いが甘い。

それに鈍重な相方がこんなにも避せる訳が……。

そこで気付いた。

自分達が、ある一点に吸い込まれるように集められている事に。  
これはー！

「しまっ……!」

「どうし……っ!」

男も気付いたのだろう。  
顔から血の気が引く。

しかし遅い！

「ストラグル・バインド！」

一寸っ

瞬間で伸びる光紐。

それは瞬く間に二人を拘束する。

「ちっ……！」

「こんなもの……っ!？」

男が力を込め、再びバインドを破らんとする、が。

ストラグル・バインドの効果は、正に彼のようなタイプにこそ天敵であった。

膨らんでいた筋肉が瞬く間に萎む。

強化魔法が無効化されたのだ。

ストラグル・バインドによって。

さらに。

「クリスタル・ケージ！」

壁！

ストラグル・バインドにより拘束された二人を三角錐を思わせる半透明の光壁が覆う。

クリスタル・ケージ。

その名の通り、檻<sup>ケージ</sup>系の魔法である。

強度に主なりソースを置いたこの魔法は破るのが困難とも言われる。

少なくとも、二人には破れない筈であった。

二人を拘束し終えたユーノは一拍の間を置いて、漸く息を吐く。

そして上げていた手を降ろした。

「……僕の勝ちだ」

そう二人に言い放つ。

しかし。

「残念だね」

女性はそんなユーノにくすりと笑う。

そして、次の言葉を放った。

「アタイ達の勝ちさ」

瞬間。

ーパリンー

そんな、そんな音と共に、ユーノの背後で避難民を守っていた結界が破壊された。

「……な!？」

突然の出来事にユーノは目を見開き、振り向く。

その目に映ったのは。

”地面からはい出た”ガジェットと因子兵。

左の銃口と、指槍を避難民へと向ける。

ヒトガタ達であった。



目の前の光景に唾然となっていたユーノは。

しかし、ギリっと歯を食いしぼると一気に駆け出そうとする。

しかし。

「やめておきな。聖王のコピーならともかく、”その他”を殺すのに、アタイ達は躊躇しないよ?」

「く……!」

女性の言葉にユーノは止まった。

悔し気に自分達を睨むユーノに女性は勝ち誇った笑みを浮かべる。

「流石に伏兵には気付かなかったね。いきなりガジェットや因子兵を投げだした時には気付かれたかとヒヤヒヤしたけどねえ……」

「くっそ……!」



呻き、ユーノは目を伏せる。

まさか、今の今まで伏兵を置いていたとは。  
気付くべきだったのだ。

最初にガジェットと因子兵を拘束した時に、この二人は開放しよう  
と”しなかった”事に。

今思えば、あれは開放する必要が無かったからであろう。

「さて。……分かってるよね？ さつさとこれを解きな」

「……………分かったよ」

彼にしては長考の末、クリスタル・ケージとストラグル・バインド  
を解く。

開放された二人は肩やらを回し、そして。

「……へへ。やられた事はやり返さねえと、な！」

「激！」

「ぐ……………」

男が容赦無く、無抵抗のユーノの腹に拳を叩きつけた。  
浮き上がる、その身体にさらに拳を打ち放つ！

「撃！」

顔をぶん殴られ、ユーノは吹き飛ぶ。

5 m程吹き飛んだ所で、漸く地面に落ちた。

「ぐっ！ ……う……」

「おいおい、あんまりやり過ぎるんじゃないよ？」

「分かってるよ。……ただ、今までの礼くらいはさせろや」

ユーノの元まで歩くと、その背中を踏み付ける。

そして、何度も、何度も、踏み付けた。

「が、あ……！」

「おらおら！ さっきの威勢はどうしたよ！？」

苦し気に喘ぐユーノに男は喜悦を浮かべながら更なるスタンピングを繰り返す。  
それに。

「やめてー！」

声が響いた。

声の主は当然、ヴィヴィオだった。

「ヴィ……ヴィ……オ……！」

「へっ……」

その声に男は笑い、ヴィヴィオの元まで歩く。

そして、その首根っこを引っ捕まえた。

「う……く……！」

「へへ。これで任務完了、だな」

苦し気に呻くヴィヴィオに、男は一切構わない。  
そんな男の足元につかみ掛かる少女が居た。

コロナだ。

「ヴィヴィオをはなして！」

「あん……。チっ、邪魔だな」

男は舌打ちを一つ。

そして容赦無くその身体を蹴飛ばした。

「あつく……。！」

「「「コロナ！」」」

蹴飛ばされて転がるコロナにヴィヴィオが、そしてその両親が声をあげる。

コロナは痛がり、涙を浮かべる。

即座に両親が彼女を抱き抱えた。

そしてキッと男を睨む。

しかし、男はそんな視線にあからさまな嘲笑を浮かべた。

「なあ……。こいつ等どうするよ？」

「聖王のコピー以外はいらねえからね。予定通り、”食べさせたら” いいさ」

事もなげに言う。

それはつまり、避難民全てを因子兵の”食事”にするつもりなのだ。彼等は。

その言葉に、避難民は総毛立ち。青ざめる。

そして。

「さあ、たーんと、お上がり」

その言葉を待っていましたとばかりに全ての因子兵が避難民達に殺到し。

一瞬にして、塵殺された。

”因子兵とガジェット”が、”全て”。

「「は……？」」

いきなり目の前で起きた光景に、二人の目が点になる。  
そして、倒れ伏すユーノはそれを見た。

突如として顕れた、周囲を覆う。

全天の”水系”。

瞬間。

ヴィヴィオは彼に抱き抱えられていた。  
俗に言うお姫様だっこの状態で。

いつの間にか、顕れた”彼”に。

「は？ ……あれ？ あれ!？」

ヴィヴィオの首根っこを掴んでいた男は戸惑いの声をあげる。  
消えたヴィヴィオに。

そして何より。

肘から先が落ちた、自分の右手に。

それを成した存在は歩く。

歩く。

そしてユーノの元まで歩くと、しゃがみ込んだ。

「大丈夫か？ ユーノ」

告げられる己の名。

そして、一日も経っていない離別からの再会にユーノは微笑む。

「大、丈夫。だよ……。 ”タカト”」

そして万感の想いを込めて彼の名を呼んだ。

親友の、名前を。



「か……あ……」

落ちる。

落ちる、落ちる。

その身体を剣矢で貫かれてアルセイオが。

着地点であったビルは剣矢により、進行方向から外れてしまった。  
このままでは地面に頭から落ちて、死ぬ。

……こいつはあ、死ぬなあ。

苦笑する。

まさかの敗北に。

そして肩を見る。

そこは剣矢が”通り抜けた”場所であった。

肩を螺旋を描く剣創が穴となって形成されていた。

剣矢に貫かれる瞬間。

無理矢理に、身体を振ったのが幸を奏したらしい。

自分の悪運の強さに流石に呆れる。

しかし、その悪運もここまでのようだった。

流石に魔力無しで、地面に落ちれば死は免れまい。

およそ、考え得る。

悪あがきの末の、もっとも惨めな死に方に苦笑したのだ。

アルセイオは。

そして、ゆっくりと目を閉じ。

「何を諦めてるんですか！？ 貴方は……！」

その声に目を見開いた。

落下は停止していた。

いつの間にか。

それを成したのは自分の副官。

ソラであった。

アルセイオの身体を抱き留め、空に浮かんでいる。

「ソラ……。お前……。どうして……？」

「私のフラガラックの能力は”空間接続”です。その力を使いました。……それから、貴方にはここで死んで貰っては困ります……！撤退しましょう」

一方的にそう言い放つなり、ソラは再びフラガラックを掲げる。

空間接続による転移。

それを用いて逃げようとして。

「御大将を、ここで逃がすと思うか？」

「――っ!？」

――斬!――

声と共に振り落ちた銀の斬撃に、ソラは空間接続を停止。フラガラックを頭上に横にして構え、斬撃を受け止める。

――撃!――

ぶつかる、剣と刀。

斬撃を放ったのは、黒の男だった。

その名を。

「黒鋼か……！」

「軽々に俺の名前を呼んでんじゃねえよ……！」

呻くようなソラの声を刃は無視。

鏢ぜり合いから刀を滑らせ、横。

胴を狙う！

しかし。

「ばっきゅーん！」

「……させない」

ー轟！ー

ー射！ー

いきなり飛んで来た巨拳と光球に、不意をつかれた。

光球を銀龍で斬り裂き、巨拳を弾く。

しかし、ソラには逃げられた。

そして、それ等を放った二人は刃の前に立ち塞がった。

「チビ姉と、根暗女か……！」

「むう……！ またクロたん。そんな事言う……！」

「……クロたんにそんな事、言われたくない」

「煩い……！ と言うか、誰がクロたんか！？」

流石にその呼び名は看過出来ないのか、刃が銀龍を姉妹に突き付けながら叫ぶ。

しかし、二人は同時にベーーと、して聞こうとしない。



「……こんの、クソ姉妹……!」

「……リズ、リゼ。どうしてここに?」

「嫌な予感がしたんで、リゼちゃんの転移で来ちゃいました」  
「……後、楓姉さんが来たので」

ソラの問いに、二人は淀み無く答える。

そんな三人に、刃は舌打ちを一つ打ち、再び銀龍を構えて。

「……させん」

背後からその声を聞き。  
しかし。

「それこそさせねえって」

同時に頭上からその声を聞いた。

「斬!」

直後に鳴り響くは斬撃の音。

それは刃の背後の存在を弾き飛ばした。

刃に強襲を掛けようとしたのはバデスだった。

その身体のバリア・ジャケットは所々、黒くなっては居たが。

千尋の砲撃をどうやら潜り抜けたらしい。

そして、それを防いだ存在が、弾き飛んだバデスを追う。

出雲ハヤト。

大剣、フツノを担ぐ。  
青年が。

「出雲さんか……！」

「奴あ、俺に任せろ」

バデスを追う通過点に居た、刃に軽く声を掛けて、ハヤトはバデスを追う。

更に。

「ああー！ あたしの獲物！？」

「いやいや、千尋ハン。野性の本能に目覚めたらアカンて」

姦しい声が響く。

凧千尋と、獅童楓だ。

どうやら互いに標的を追って来たらしい。

そんな二人に。

「……申し訳ありませんが、主の邪魔はご遠慮して頂きましょう」

「そうですわね。私達としてもここで終わる訳にはいきませんもの」

そんな声が響く。

ベルマルクと、エリカだ。

互いに顕れた四人は即座にデバイスを構え、対峙する。

「……皆。これは……」

「ちい、厄介な事に……！」

乱戦へと変貌していく一帯にソラと刃が呻く。  
だが。

「隙アリ過ぎだぜ！　クソ兄貴！」

「――っ！？」

その言葉に慌てて頭上を仰ぎ見る。

そこには一直線にこちらへと、舞い降りるリクの姿！

ブリューナクを真っ直ぐにソラに放とうとして。

「させぬで御座る！」

―撃！―

横腹に蹴りを受けた。

カハッと息を吐き、リクは吹き飛ぶ。

そのまま近場のビルに突っ込んだ。

「ふう。……リク殿。周囲の気配りが足りぬで御座るな？」

前方の空間に足場を展開し、そこに立つのは飛だった。

自分が蹴り飛ばしたリクへと視線を向けて。

「それは貴方にも言えますね？」

瞬間。

―煌！―

その背後に光爆が起きた。

「ぬ、ぐあ……！」

盛大に吹き飛んだ。

飛の背後に現れ、光爆を放ったのは悠一だった。  
その横にはアスカも居る。

「やれやれ。これはどう言う事ですか……？」

「うわあ……。凄い乱戦だね！」

新たに現れた二人にソラは舌打ちする。

この現状はマズすぎる。

一刻も早く撤退をしなければ……！

「そうそう、思った事にはさせねえよ」

「……！」

瞬間。

響いた声に啞然となる。

その声の主は……！

「……コルト」

「よう、ソラ。そこで、じゃあな」

ー弾ー

次の瞬間。

コルトは容赦無く、ソラに向かい。  
ガバメントによる。ジャッジメントをぶっ放した。



乱戦による乱戦で破壊される。  
海を仰ぐクラナガンの街。

その乱戦を下に、苦しむ存在が居た。  
二つの大罪を放ったシオンである。

「ぐっ……！ あ、あがああああ……！！」

「おい、シオン！ シオン！！」

ウィルの声に応える事すら出来ない。  
その身体の因子は激しく湧き立ち、シオンを侵す。

「シオン！ アカン……。このままやったら……！！」  
「が、ああああ……！！」

そして、一気に因子はその身体を包み。  
シオンは再び暴走しかけようとして。

「シオン！」

その言葉に留まった。

そして、一気にシオン達の居るビルに青い半透明で形成された道が  
突き立つ。

その道の主は。

「スバルっ！ 一気に行くわよ！？」  
「うん！」

オレンジ色のツインテールの少女を背負い、こちらに真っ直ぐ突っ込む青が掛かった紫色の短髪の少女。

名を。

スバル・ナカジマ。

ティアナ・ランスター。

そう言った。

「な、何や？ あの姉ちゃん達？」

「お、れの……仲間、だ」

ウィルが突如として現れた二人に驚き、シオンは苦しみながら微笑む。

そして。

「シオン。ちょっと痛いけど我慢なさい！」

「行くよ。シオン！」

二人はビルへと降り立ちながらも止まらない。

ティアナはスバルに背負われたまま、カートリッジ・ロード。スフィアを二十生み出す。

「クロス・ファイアー……！ シュ……ートっ！」

ー閃！ー

叫びと共に二十の光弾は容赦無くシオンへと向かう。それに傍にいたウィルは慌てて飛び退き。

そしてシオンへと叩き付けられた。

[illegible]

二十の光弾は迷い無く、シオンへと叩き込まれ、その身体を跳ね飛ばす。

そして、ティアナはスバルから飛び降りた。

「スバル！ 容赦は無しよ！？」  
「うん！ 任せて！」

思いつきり殴り飛ばしなさい！」

スバルは一気に疾走。

シオンの間近まで迫ると同時に飛び上がる。

その左手には光球。

そして、両手には環状魔法陣！

スバルはその光球を思いつきり。

「デイベイン……！」

ぶん殴った。

「ブレイカー！」

煌

ディバイン・バスターのスバル、オリジナル。

バスターのエネルギーを拳を基点に全身へと纏い、相手に叩き付ける技だ。

それをスバルは一切の躊躇無く、シオンに。

「やあああああ……っ！」

叩き付けた。

ー撃！ー

拳がシオンの腹にめり込み、そこを中心に、クレーターを形成。

止まらない。

スバルとシオンはそのまま屋上を貫通。

真下に向かって落ちて行った。

「い、痛った……！」

結局、一階まで貫通してしまい。

ビルのエントランスに転がるスバルは身体を押さえて痛がる。

しかし、地上何十階というビルの屋上から一階まで貫通。  
落ちたのだ。

”痛い”で済む辺り、スバルも大概、頑丈である。

「て、あ！ シオン！？」

「……ここに居んよ」



声は下から響いた。  
スバルの真下から。

そつと視線を向けると、そこにはシオンが居た。  
アヴェンジャーでは無い。  
普通のシオンが。

「シオン！ よかった……。無事！？」

「……危うく永眠する所だったけどな……」

毎回、毎回、手加減は出来ないのか？ と、シオンは嘆息する。

そしてスバルの頬に手を伸ばした。

「……無事で良かった」

「え……。あ、うん……」

いきなりのシオンの行動に思わずスバルの顔が赤らむ。  
暫く、シオンにされるがままになるスバル。

見つめ合う二人に、穏やかな空気が流れ。

「ところでスバル。いい加減、どいてくれるか？ ちょっと、重いつて言うかだな……」

「……………」

そんな甘い空気を全てぶち壊す余計な一言に、スバルは右のリボルバー・ナックルを握り締める。

「シオンの……！」

「？　どうした、て。うおおおおおおおっ！」

「バカあああああああああああつ！」

乙女にとって、致命的な一言をほざいた馬鹿は顔面に叩き付けられた一撃に、地面へとめり込められ、その意識を手放した。



「ユーノ、済まなかったな。……遅れた」

「ううん。……大丈夫だよ」

目の前で自分を心配そうに見るタカトにユーノは安心したように微笑む。

タカトの姿は、ユーノが知らない姿だ。

黒のバリア・ジャケット。

フードが垂れ下がり。

右目を隠しているのが、特徴か。

そして右手の拘束具。

そこに描かれた666の文字にユーノは目を細める。

漸く、実感を伴って理解したのだ。

タカトが666だと。

「ユーノ。ヴィヴィオを頼む」

「え、うん……っ！」

「タカト……っ！」

ユーノとヴィヴィオは互いに戸惑いの声をあげ。しかし、背後に現れた存在に驚愕する。

それはタカトにより？ 腕を切断された男であった。残った左腕を振り上げている。

「大丈夫だ。ヴィヴィオ。俺は……」

「ちがうの！ タカト、うし……！」

ろ。と、最後まで言い終わる前に拳は振り落ちた。

男は痛みと右腕を失った現実から発狂しかけていた。

そして、タカトを殺さんと殴りかかり。

「……邪魔だ」

ーパンっー

瞬間。

男の左腕が肘から”消失”した。

いつ振り放たれたのか、タカトの左拳が、そこを通り過ぎている。気付けば、辺りに赤い煙が漂っていた。

そう、タカトの一撃は腕を粉碎するだけでは飽き足らず、完全に肉を、骨を、血煙へと変えてしまったのだ。

「お、俺の……！ オデのてがあああああああああああああ！  
！！！！！！！！」

「”腕の一本や二本”で、がたがた騒ぐな。黙っている」

声が響く。

全く感情を交えない。  
酷く冷たい声が。

そんなタカトの声を。

ユーノは、ヴィヴィオは、初めて聞いた。

そして。

「何を逃げている？　その女？」

「ひ……！」

タカトの声にびくつと肩を跳ね上げ、女性は悲鳴をあげる。

今さらながらに女性は理解したのだ。

自分達が、何か。

触れてはいけない、何かに触れた事に。

「振り向け」

その言葉に、女性はそれが致命的な事だと理解していながらも振り返らざるを得なかった。

それほどまでに恐ろしかったのだ。

タカトの存在が。

そして振り返り。

やはり後悔した。

そこに居たのは、極北の風を纏う男。

”死” そのものの、体現者がそこに居た。

（後編に続く）

### 第三十七話「それぞれの再会」(中編)(後書き)

はい♪ 中編終わりました。……うん。文字数がプロットより増えてしまった原因は分かっています♪ ……ユーノを活躍させ過ぎた。

……いや、ユーノ好きなんですよ、俺(笑) ……言い訳になってないですね(汗) すみません。後編なるべく早くお届けします♪  
ではでは♪ P S…今回のP

Vには是非ティ○ズ・オブ・○エスペリアのオープニング。『鐘を鳴らして』をお勧めします(笑) ……そして、人気投票。……こ、今度こそ必ず後編の、筈で発表します(汗) お待たせして、すみません。ではでは♪

第三十七話「それぞれの再会」 (後編) (前書き)

……いやあ、漸く更新出来ました。長らくお待たせしてすみません  
(汗) 今回、かなり残酷なシーンがあるので、皆様気をつけて読んで下さい (笑) ではでは♪ 後編、どうぞ〜♪

### 第三十七話「それぞれの再会」(後編)

時間は少し遡る。

クラナガンの空。

ツアラ・トウ・ストラの襲撃があったと言うのに、この空だけは青を保ち続けていた。

その空を一条の光が翔る。  
なのはだ。

彼女は一路、空を翔けながら目の前にウィンドウを展開させていた。

ウィンドウは複数展開しており、その画面に映るのは、アースラメンバーである。

「そう……。こっちも、ストラのメンバーと交戦してたけど、グノースの……。悠一君だったかな？ 彼と交戦して暫くして転移したよ」

《そか……。なのはちゃんとこもか……》

ウィンドウ越しに、はやてが頷く。

右横に展開するウィンドウにはスバルやティアナの顔もあった。

その左にはフェイトが映っている。

更にその横には、助太刀として現れ、今はN2Rと行動を共にするクロノの顔がある。

はやて達としてもつい、この間まで怪我人だったクロノを現場に居させるのは抵抗があったが、本人が頑として聞かず、結局押し通されてしまった。



《はやて。エリオやキャロ。それにシグナムとヴィータは……？》  
《うん。エリオとキャロは大丈夫や。二人を助けたグノーシスの黒  
鋼君やったかな？ 解毒してくれてたみたいでな。……ただ、シグ  
ナムとヴィータが、な……》

二人の名を出してはやての顔が若干沈む。  
それはウィンドウに映る皆。同じく、だ。  
ストラのメンバーにより、それぞれ致命傷を負わされた二人は現  
在、アースラに運び込まれ、治療中である。  
命には別状は無いとの事ではあるが……。

「ヴィータちゃん、シグナムさん……」

《……はやて。その……》

《大丈夫やよ。フェイトちゃん。……二人が頑張ってくれたんや。  
落ち込んでなんていられへん》

二人の言葉に、はやては頷き、微笑む。  
その顔を見て、二人もまた微笑み、頷いた。

《……後はもう一人、やな》

《……シオン……》

はやての言葉に、スバルの表情が沈む。  
ティアナもくつと奥歯に力を込めた。  
そう、シオンだけが未だに居場所が分からないのだ。  
どこかに転移された事だけは確かなのだが。

《割り込み失礼します！》

直後、そんな一同の空気を測ったように、割り込み通信が入った。

アースラ官制担当のシャーリーである。

いきなりの割り込み通信にそれぞれ怪訝な表情となる、なのは達にシャーリーは、しかし構わない。

《シャーリー？ どないしたん？》

《すみません。緊急の報告が2件ありまして……》

《緊急の……？》

《はい！》

シャーリーの言葉にそれぞれ疑問符を抱くのは達。

そんな一同の前に、新たなウィンドウが展開する。

それは海に面したクラナガンの街だ。

そこに映っていたのは。

「ストラのメンバー……！」

《それだけやない！ グノーシスのメンバーも居る……！》

そう、クラナガンの街を縦横無尽に翔けるのは、それぞれの戦場から離脱したグノーシスとストラのメンバー達であった。

どこに行ったのかと思いきや、こんな所に集っていたのだ。

集った両者の戦いは、既に乱戦の呈をようしており。

周りの建物等が戦闘の余波を受けて容赦無く破壊されていた。

《まさか、一箇所に集まってるなんてな。……何かあったんか……？》

《それなんです、皆さん。此処を見て頂けますか？》

直後にウィンドウがズームし、ある一画を映す。

ズームした場所はビルの上であった。

そこには二人の人影がある。

一人は、見知らぬ少年だ。

恐らくはグノーシスのメンバーだろう。

そしてもう一人は。

《《シオン……！》》

「《え……？》」

直後、スバルとティアナから声が上がる。

その声に、なのはとフェイトは同時に目を見開いた。

……これが、シオン？／シオン君？

二人はそう、思う。

とてもでは無いが、画面に映る存在がシオンだとは思えなかったのだ。

黒の全身甲冑を身に纏い、更に、その身体から溢れ出る因子。明らかに感染者である。

そこまで考えて、漸く思い至った。

シオンは、再び感染者化したのだ、と

《《シオン。またアヴェンジャーに……》》

《《あのバカっ……！》》

スバルの悲し気な声と、ティアナの怒りの声が重なる。

それを聞きながら、なのは、フェイトも顔を強めた。

現状でも手一杯の状況なのに、更にシオンの暴走まで加われば、

それこそ現場は混乱する。

シオンを助ける事すら難しいかも知れないのだ。  
最悪、殲滅せねばなくなる。

そんな最悪の状況を想像して、表情が陰る一同であったが、その中に例外達がいた。

はやてと、今まで黙り込んでいたクロノである。

二人は思案しながら、見合い。  
同時に頷き合う。

《……クロノ君。どう思う？》

《……明らかにおかしいな》

そんな二人の会話に、なのは達は疑問符を浮かべる。

何がおかしいと言うのか。

そんな、一同に再びシャーリーから声が掛かる。

《見ていただければ分かりますけど、シオン君の居場所が漸く特定出来ました。……ですが》

《特定出来た時には、既に感染者化してた、て訳やね？》

《……はい。でも、シオン君は……》

《”暴走していない”のだろうか？》

『え……！？』

驚きの声が四重する。

事情が掴め無いなのは達が、思わず上げた声だ。

その声に応えるかのように、シャーリーがクロノに頷く。

《はい。ハラオウン提督のおっしゃる通りです。シオン君は感染者

化しているものの、まだ自意識を保っているそうです。》

《……やろうね。シオン君が暴走してるなら、あんな所でいつまでもうずくまってへん。何より、もう一人の男の子がシオン君の近くにいるんが、その証拠や……》

《あ……》

スバルが思わず声を上げる。

そう、シオンはずっとうずくまったままであった。

立ち上がる気配すら無い。

必然、シオンはまだ暴走していない事になる。

《でも、これを見る限りでは、シオン。ギリギリそうだね。……暴走しかけてるのかな……？》

《そうだな》

フェイトの声にクロノが頷く。

シャーリーがそれに応えるかのように、遅れて頷いた。

《はい。シオン君と一緒に居る、グノーシスメンバーの男の子によると、暴走直前らしくて。……今はシオン君が、抑えているみたいですけど……》

《そか……》

シャーリーの声にはやてが頷く。

スバル、ティアナが画面のシオンをそれぞれ違った形で心配そうに見ていた。

《それと、もう一つの報告なんですけど》  
《そやったね。聞こか》

その言葉に、はやてが頷く。

シャーリーはそれを見て、ちらりとなのは、フェイトの顔を見た上で、口を開いた。

《先程入った情報なんです、クラナガン市民の避難場所の一つが、ツアラ・トウ・ストラのメンバーにより、占拠されたそうなんです……》

「……占拠？　避難場所を……？」

その報告に、なのはを始めとして、一同怪訝そうな表情となる。なぜ、わざわざ避難場所を襲撃して、占拠なんてする必要があるか、分からなかったのだ。

一同の表情を見て、シャーリーが視線を落とし、しかし。その上で告げる。

《占拠された避難場所は”ST，ヒルデ魔法学院”です》

「え……！」

《それって……！》

あまりにも聞き覚えのある場所の名になのはとフェイトが声を上げる。

シャーリーは二人の表情を見て、目を伏せながらも、頷く。

《はい。……現在確認中ですが、ユーノ・スクライア司書長や、……ヴィヴィオが避難していた場所だと予想されてます……》

「《……っ！》」

やはり。

当たって欲しく無い予想が当たってしまい、なのはとフェイトが顔を歪める。

シャーリーを始めとした一同はそんな二人に何も言えず、黙り込んだ。

いや。

一人だけ、黙っていない者がいた。

クロノだ。

《……だとするとストラの狙いはヴィヴィオの可能性がある、か……》

《クロノ君……！》

坦々と告げるクロノにはやてが咎めるかのように声を上げる。  
しかし、それにこそクロノは首を横に振った。

《……今、必要なのは、現状を正しく認識する事。……そして、それ等への対策だ。はやて》

《……分かっとる》

クロノの言葉にウィンドウ越しに、はやては目を伏せ、歯を噛み締める。

一時の間を持って、彼女は顔を上げた。

《……ええか、皆。これから私達の方針を話すよ？》

はやての言葉にそれぞれ頷く。  
はやて自身もまた、頷いた。

《まず、シオン君。……暴走しかけてる、あの子をどうにか止めなあかん……》

《《……私達が行きます》》

即座にスバルとティアナが立候補する。

はやてはそれに目を向ける。

《……止められる方法、あるか……？》

《……まだ、暴走してないなら。なんとかなると思います。……ちよつと乱暴かもですけど》

その言葉にティアナが頷く。

はやては、少しだけ考え、頷いた。

《そやね。今のシオン君を1番知つとるのはスバルとティアナや……頼めるか……？》

《《はい！》》

二人は、はやての言葉に即座に頷き、声を上げた。

《うん。よろしくな。……次、占拠された学院なんやけど……》

言いながら、はやてはちらりと視線をなのはとフェイトに向ける。正直に言う、現状。

ガジェットと因子兵が暴れ回るクラナガンで、指揮も出来るこの二人をどちらも、学院に向かわせるのは抵抗がある。

しかし、市民が人質に取られているも同然なのだ。放っておく事も出来ない。



《はやて。学院には、なのはとフェイトを向かわてはどうだろう？》  
《クロノ君？》

掛けられた言葉にはやてが、目を見開く。

誰より、クロノは二人を向かわせたがらないと思っていたからだ。  
クロノはフツと笑う。

《二人の変わりに僕が指揮を取る。……海の僕では少し、反発もあるかも知れないが、なんとかなるだろう》

「……クロノ君」

《……お兄ちゃん》

《……フェイト。お兄ちゃんは、止めてくれ》

なのはとフェイトが思わず上げた声にクロノは苦笑しながらも、  
頷く。

はやては、それを見ながら微笑んだ。

《……うん、そやね。なのはちゃんとフェイトちゃんには、学院に向かつてもらうな。……ええかな？》

「《うん！》」

二人の返事にはやては再び微笑み、そしてクロノと視線を合わす。  
クロノは無言で頷いた。

《私はザフィーラと、空隊の指揮を取る……！ クロノ君は……》  
《N2Rと共に、陸隊の援護。及びに指揮だな。任せてくれ》

クロノの返事にはやては頷き、一同の顔を見遣る。

そして。

《それじゃあ、それぞれ作戦開始や！ 皆、行くよー！》  
『了解！』

応える声が重なり、ウィンドウ一斉に閉じる  
かくして、アースラメンバー＋1も再び動き出した。

それぞれの、大切なモノを守るために。



S t, ヒルデ学院。

そのグラウンドは、酷く重い静寂に包まれていた。  
その静寂を作り出したのはたった一人の青年である。

伊織 タカト。

またの名を666と呼ばれる青年はただ静かに佇む。  
それに学院を占拠していた女性は震えていた。

怖くて。

怖くて、怖くて。

女性を眺めるタカトの目は、既に”ヒト”に向けられるような目  
では無い。

それは害虫を眺めるかのような目であった。

いかな方法で殺そうかと、吟味するような視線。

この時点で、女性は理解していた。

己の命運が、尽きた事を。

だが。

「があああああああああああつ！！」

咆哮がグラウンドに響く。

それはタカトに両の手を失わされた男の咆哮であった。

彼はタカトを見下ろし、怒りの形相で睨みつける。

そのまま口を開くと、一気に襲い掛かった。

せめて、一矢報いんと、あるいは仲間である女性の為か。

男はタカトの視線にも係わらず踊り掛かる。

「……………」

そんな男にタカトはただ無言。

ゆっくりと右手を上げ。

一閃一

右手が閃いた。

指は拳を作らず貫手。それが、男の口に”突っ込まれる”。

さらにタカトは貫手を掌を上にして”口の中で指を折り曲げる”。

「ひ、ぎ……」

一息、男から声が漏れ。

瞬間。

「ひぎやああああああああああっっ!!」

悲鳴が辺りに響き渡った。

それは、自分の”右の下眼瞼したまぶたから突き出た指”による激痛と、嫌

悪から出た悲鳴である。

それを成したタカトは、そんな悲鳴に一切構わず、”指を一気に引き下ろした”。

男の右の顔を”引き裂きながら”。

「……………っ!!!!」

声に。

声にならない悲鳴が響き渡る。

男の右半分の顔が”無くなっていた”。

タカトが、持っていたのだ。

右の眼球が落ち、その下にはピンク色の肉が覗く。

それを見遣りながら、タカトはぽいっと”何かを捨てる”。

「……………？ ひっ！！」

一連の事態を見ていたヴィヴィオがその何かが分からずに目を凝らし。

直後に短く悲鳴を上げた。

タカトが投げ捨てたものは、”男の右半分の顔”であった。  
下眼瞼から、上顎までの肉が骨ごとくっついている。

ヴィヴィオは勿論。ユーノも、遠巻きに見ていた人達も声が出せなかった。

怖かったのである。

襲撃犯より、自分達を助けてくれた筈の、タカトが。

そんな一同の中で、唯一動く存在が居た。

男の相方たる女性である。

これが好機とばかりに、タカトに背を向け一気に走りだそうとして。

前のめりにスッ転んだ。

「ーっ！」

何でこんな時に！？

そう思い、必死に立ち上がろうとして。  
しかし。

立ち上がれない。

転ぶ。

転ぶ、転ぶ。

「あれ……？ あれ……！ あれえ……！？」

何度も、何度も。

立ち上がろうとするが、立ち上がる事が出来無い。  
その度に転ぶ。

当然である。

彼女は”膝から下が既に無い”のだから。

水系が踊る、タカトの周りを。

その光景が齎すのは一つの結論。

タカトは女性が走り出すと同時にその足を”膝から切り落とした”のだ。

惨劇の連続に、周りの人達も、ヴィヴィオも、ユーノでさえも凍り付いていた。

響くのは、ただ二人の悲鳴のみ。

……否。

動く存在は居た。

当の惨劇を起こしたタカト自身である。

すっ……。と、手を上げると同時に、水系が未だ悲鳴を上げる二人に向かう。

水系は二人の切り落とした部位に絡み付くとキュツとその部分を固く締め付ける。

止血だ。

しかし、それは二人の身を案じての行動では決して無い。

他でも無い。タカトの視線が何より、それを明確に示していた。

次に水系は二人の肌に突き刺さる。

「「ぎっ！」」と、それによる痛みで、二人が上げる悲鳴にもタカトは構わない。

無言のままに、水系を手繰り寄せ、二人を引きずる。

ずるっずるっと、寧ろゆっくりと引きずられるそれに、二人は何とか逆らおうとするものの、既に男は両手が無く、女性は足が無い。つまり、力が込められないのだ。

そんな状態で水系に逆らえる筈も無い。

タカトはただただ、無表情に二人を手繰り寄せる。

そして、自分の前まで引きずると、二人の身体を”吊り上げた”。

肌に刺した水系を奥。骨にまで突き刺した上で、だ。

これで水系が吊り上げた二人の体重で引き抜ける事はない。

それと引き換えとなるのは、二人の激痛であったが。

「ひっ……ひ、ひ、ひ……」

「はっあ、あ、あ……」

二人はタカトの前に吊り上げられた事により、嫌が応にも、その視線を真っ向から見る事になった。

不幸にも。

タカトの視線は変わらない。

純粹なまでの殺意に彩られた瞳で二人を眺める。

「選べ」

二人にタカトが告げる。

狂いそうな痛みに絶望していた二人はその言葉を理解出来ない。

ただ、タカトに恐怖しながら喘ぐだけである。

だが、タカトはそんな二人に一切構わない。

続ける。

「1。細胞レベルで肌から生皮を一枚一枚、内臓まで剥いでいく」

まず、人差し指を持ち上げる。

「2。足元から1mm感覚で順に頭まで輪切りにする」

次に中指を持ち上げた。

そして二人は漸くタカトが何を言っているのか理解した。

理解して絶望する。

タカトは二人の”処刑方法”を語っているのだ。



”二人に自分の死に方を決めさせる為に”。

「3。全身の穴と言う穴に、異物を突き刺して身体中を侵し尽くす。自分の最後だ。好きな死に方を選べ」

最後の薬指が持ち上げられた。

その三つ。どれを選んでも地獄の激痛と苦しみを味わい尽くす事が確定の、拷問処刑法である。

それを認識した時、二人は恥も外面も無く泣き出した。

子供のように、涙を流す。

それにタカトは微笑む。

優しく、優しく。

「絶望するな。”そんなものは後でゆっくりと味わえる”。”生まれて来た事を後悔する程にな”」

世にも恐ろしい程の言葉と共に。

そして、二人を引きずり、周りの人間達に処刑を見せないように、校舎まで引きずろうとして。

「エクセリオン……！」

凄惨たる処刑場となっていた、グラウンドに清廉なる声が響いた。その声を、ユーノは、ヴィヴィオは、そしてタカトは知っている。

直後。

「バスター————っ！」

—轟！—

空から桃色の、極大光砲がタカトへと放たれた。それにタカトは手に保持していた水迅をカット。その場所から離れる。

—撃！—

直後に光砲がその場所に突き刺さった。それをタカトは眺めていると。

ハーケン・フォーム。ゲットセット。

無機質な、でも確かな感情を秘めた声がその耳に届く。同時、黒の影がタカトに差す。頭上から舞い降りる。黒と金の姿をタカトは確かに見た。

「ハァっ！」

—閃！—

雷の斬撃が放たれる。

しかし、タカトはただ右手を掲げるだけで、それに対応した。

—撃！—

右手と斬撃が交差。

しかし、右手は傷一つ負わない。

これこそが、魔神闘仙術に於ける『山』の属性変化奥義。

『金剛体』であった。

文字通り、その身体をダイヤモンド金剛並。

否、それ以上の頑健さと化す秘奥である。

しかも、それはタカトが望んだ部位のみ可能。

つまり、硬くなる事による。

身体の不具合を無くす事にも成功しているのであった。

タカトと金の乱入者は、しばし睨み合い。

しかし、乱入者はあっさりと後退した。

そして、もう一方の光砲を放った白の乱入者と合流する。

タカトの処刑を邪魔した、乱入者。

その名は。

「なのはママ……！ フェイトママ……！」

ヴィヴィオが名を呼ぶ。

それに二人は応えるかのように、頷き。

そして向き合った。

親友と、娘を助けてくれた筈の存在。

伊織タカトと。

タカトはただ無言。

なのはとフェイトの二人を、酷く詰まらなさそうに眺め見るだけであった。



なのはとフェイトは同時に息を飲む。  
目の前の、存在に。

伊織タカト。

つい、昨日の夜に話したその存在は、”酷く違っていた”。  
当人とは信じられない程だ。

昨日話したタカトと、今、襲撃犯を拷問に掛けようとしたタカト。  
果たして、どちらが彼の本当の姿だと言うのか。

なのはがくつと顔を歪め。

そのままユーノに声を掛ける。

「ユーノ君、ごめん。襲撃犯の二人、止血頼めるかな？」  
「あ……」

突然の、なのはとフェイトの登場に面喰らっていたユーノがハツとなる。

襲撃犯の二人は、水迅がカットされた事もあり、傷口から血が激しく流れ出していた。

このままでは出血多量で死ぬ事になる。

ユーノは、すぐに頷くと二人の元に駆ける。

途中、タカトとすれ違う時に、何かを言おうとするも言葉が見つからず、ユーノはそのまま二人の元へと向かった。

なのはとフェイトは、タカトにそれぞれの愛機を構えたまま、目を逸らさない。

否、逸らせない、か。

それ程の圧力が、今のタカトにはあった。

「ユーノ。止血するのは構わんが、”痛覚をカット”はするなよ？  
後がやり難くなる」

「「「「「っ！」「」」」」」

突如として、タカトから告げられる言葉に、ユーノを始めとした三人は総毛立つ。

タカトはまだ、拷問処刑を行う気でいるのだ。

「……何で……？」

「何で？」 疑問に思う事か？ なのは

問う言葉にタカトは冷たい目のままで答える。  
それに、なのははキツとタカトを睨み据えた。

「ここまで……！ ここまでする必要があるの！？」

「ここまで？」 手や足を切り落とした事か？ それとも顔を剥いだ事か？ ”そんなものは前座だ”。”これから”、行うんだよ。そいつ等への罰をな」

なのはの問い掛けをあっさりとタカトは否定する。  
これから、二人に対してナニかを行おうとしていたらしい。

横でそれを聞いていたフェイトがふと気付く。  
ガチガチと言う音を。

二人がタカトの言葉に恐怖し、噛み合わせ歯を鳴らしているのだ。  
酷く、震えながら。

一体、どうやったらこんな風に人を恐怖のどん底へと突き落とせ  
ると言うのか。

「……伊織タカト、ここまでだ。例え、犯罪者でも拷問は禁止だ」  
「そんなものは、お前達の都合だろう？ フェイト・T・ハラオウ  
ン？ 俺の知った事じゃ無い」

タカトはあっさりと、そう告げると一步を踏み出す。  
同時に軋つと言う音と共に”世界”が揺れた。  
圧力が強まっているのだ。

「さあ、そこをどけ」

タカトの恐ろしく冷たい視線。  
それに、押されながらもなのは、首を横に振る。

「駄目だよ。……そんな事、させない」

「……ほお」

なのはの言葉に、タカトはスッと目を細める。  
温度が、軽く2度は下がった感覚をなのはとフェイトは覚えた。

「何故、断る？ その二人はユーノを傷付けたんだぞ？ ヴィヴィ  
オを苦しめたんだぞ？ ここに居る全ての人間を殺して捨てようと

したんだぞ？ そんな外道、生きていても仕方が無いだろう？ せめて、今までの人生を悔やみ抜かせて殺すのが道理じゃないのか？」  
「……違う……！ そんな方法、違うよ！」

なのはが、タカトの言葉に叫ぶ。

抗うかのように。

しかし、タカトの目は変わらない。

どこまでも冷たいままに、なのは達を見る。

「逆に聞かせて欲しい。何故、貴方はこの二人をそこまでしようとするのかを……！」

今度はフェイトが問うた。今、必要なのは、タカトを止める事、だ。

その説得の為にどうしても判断材料が欲しかった。  
しかし、フェイトの言葉にタカトはクスリと笑い。

瞬間。

激しいまでの感情を顕にした。

噴怒である。

歯を軋む程に食いしぼり、二人をその視線だけで殺さんばかりに睨み付ける。

「何故、だと……？ 決まっている。そいつ等はユーノを傷付けた……。ヴィヴィオを苦しめた……っ。」俺の大切なモノを奪おうとした……！」  
「充分だ。生き地獄を味あわせるには充分過ぎる理由だ」

「「っ——っ！」」

その怒りをぶち撒けるような言葉に、フェイトは絶句する。  
今まで彼女は、タカトを静かな人だと。  
感情に左右されない人間だと思っていたからだ。

なのははと言うと、タカトの言葉に悲し気に目を伏せていた。  
そう、昨日の夜に話した時に、タカトが意外にも激情家だと言う  
事を知っていたのだ。

だからこそ、異母弟を想い、世界全てを敵に回す決意をした。  
だからこそ、一度友誼を交わしたユーノを、ヴィヴィオを、傷付  
けられて酷く怒っているのだ。

「……最後だ。そこを退け。……それとも、俺と此処で戦い合うか  
……？」

「く……っ！」

「タカト君……」

タカトの最後通告。同時に、世界が軋む。

それに、フェイトは顔を強め、なのはは悲しそうに顔を歪める。

膨れ上がる戦意。

いつぶつかり合ってもおかしく無い程に気配が高まり、そして。

「だめ————————っ！」

声が響いた。

その声に、高まっていた気配が霧散する。



睨み合っていた三人は、呆然とし、そのまま声の主へと顔を向ける。

声の主は、ヴィヴィオだった。  
頬を涙が零れ落ちる。

それに、タカトが目を見開き、息を飲んだ。  
そんなタカトの反応にこそ、なのはとフェイトは驚く。

「ヴィヴィオ……」

「やだよ……！ いまのタカト、やだよ！ ママたちとけんかなん  
てしないで……！」

泣きながら、ヴィヴィオは必死に訴える。  
それにタカトの顔が悲痛に歪む。

「やっと、あえたのに……。こわいタカト、やだよ。おねがい……。  
”きのうまでのタカト”にもどってよ！」

「俺、は……」

ヴィヴィオの言葉にタカトが立ちすくむ。  
何を言ったらいいのか分からなくて。

やがて、タカトはゆっくりと天を仰いだ。

「……俺は、いつも大切な人達を傷付ける」

瞬間。

一閃！一

水系が閃いた。

それは、真っ直ぐにユーノが治療魔法で止血する二人のちょうど真ん中に突き立つ。

あまりにも早く。

何の挙動も見せずに成したその早業に、なのは達は凍りつく。

「その二人」

「――――！」

タカトから掛けられた言葉に襲撃犯の二人の肩が跳ね上がる。

タカトはその反応に一切構わずに、二人を睨み据えた。

「……今後、ユーノやヴィヴィオに近付いてみる……！ 俺の大切な者達に近付いてみる……！」

その瞳が再び、怒りに染まる。

世界が軋む。

タカトが怒りのままに放つ殺気と圧力に。

それに二人はガタガタと震え、タカトを恐怖に彩られた瞳で見る。タカトはその二人の目を見た上で口を開いた。

「幾千、幾万の生き地獄を味あわせて、この世に生まれて来た事、そのものを後悔させてやる……！」

殺気を持って放たれる言葉はどこまでも凄絶に響く。

それに二人はガクガクと何度も頷く。

タカトの言葉が混じり気無しの”本気”だと言う事を理解したからだ。

タカトは、そんな二人の反応に一度だけ目を閉じ、そして全ての感情を押し込めると、歩き出した。

ヴィヴィオに背を向けて。

それにヴィヴィオは追い縋ろうとして。

「来るな」

たった一言。たったの一言で、その歩みが止められた。

タカトは後ろを見ないままで告げる。

「ヴィヴィオ。俺はお前の母の敵だ。ひいては、”お前の敵だ”」

「そん、な……」

ヴィヴィオはそれに首を振る。

違うと、敵なんかじゃ無いと。

だが、タカトは止まらない。

「ヴィヴィオ。さっきの俺は怖かっただろう？ アレが俺だ。他で

も無い、伊織タカトと言う壊れた人間の本性だ」

「ちがう、よ……」

必死に否定するヴィヴィオに、しかしタカトは構わない。

「俺を怖がる者は、須らく俺の敵だ。今までも、そしてこれからも。ヴィヴィオ。それはお前も例外じゃ無い」

「あ……う……」

泣きながら首を振るヴィヴィオをタカトは絶対に振り返らない。  
そのまま歩き出す。

このままだとタカトがいつちゃう。

そして二度と帰って来ない。それを、ヴィヴィオは本能的に察した。

そんなのは嫌だった。

だから声を張り上げた。自分がタカトの敵なんかじゃないと伝える為に！

「こわくなんてなかったよ！！！！」

思いつきり。

心の奥底からの声。

タカトに届けと響く声に、彼はゆっくりと振り向く。

そして。

「嘘を吐く娘は嫌いだよ」

「……あ」

優しく微笑みながら、きっぱりと言った。  
その言葉にヴィヴィオは膝を着く。

それは優しい否定。

それは優しい拒絶。

故にこそ、タカトは止まらない。

タカトはそのまま、ヴィヴィオに背を向けたまま歩き出す。

途中、なのは、フェイト、ユーノとすれ違う瞬間。

苦笑した。

泣きそうな、顔で。

「すまん。泣かせちゃった」

「タカト……」

ぽんっとユーノの肩を一つ叩き、しかし言葉は無いままにタカトは微笑み。

そしてなのはとフェイトへ顔を向ける。

「ありがとう」

「「え……？」」

何を告げられのか分からずに二人は目を見開く。

タカトは微笑み、再び告げる。

「ありがとう。停めてくれて。……ヴィヴィオの前で人を殺さずに済んだ」

「「あ……」」

タカトの言葉に何と言ったらいいか分からず、二人は固まり。そして。

タカトはそのまま消えた。

縮地。

空間移動術たるそれを持って消えたのである。

なのはとフェイトはタカトに、告げる言葉を見出だせ無いままに固まる。

風がそんな二人の前を、一陣だけ吹いた。



—轟!—

クラナガンの空に、激烈な音が鳴り響く。  
グノーシスとストラのメンバーによる乱戦は、激しさを増して。  
辺りを灰燼へと帰していた。

その中で、銃撃と剣撃を交差させ続ける存在が居た。  
ソラとコルトだ。

「ひゅっ……!」

—撃!—

コルトは鋭い息吹と共に足元に魔法陣を形成する。

剣十字の、三角を象った魔法陣、ベルカ式の魔法陣だ。

そして、両の手の銃型デバイス。

ガバメントを真っ直ぐにソラへと構えた。

「ジャッジメント、LEVEL2装填。リミテッド・リリース50%」

「くっーくっー！」

響く声にソラは顔を強める。

肩に担ぐアルセイオをちらりと見て。

直後。

その眼前に、コルトがいきなり現れた。

「ゼロ・イン……」

「くっ！ コルト、お前……！？」

呻き、しかしフラガラックをソラは振るう。

コルトは構わない。

銃口を突き出し、それを持つての”打撃”を放つ！

「バスター」

—豪！—

銃口がフラガラックとぶつかり合った、直後。そこから弾が飛び出した。

一撃！一

響き渡る銃声と、金属がぶつかる音。

フラガラックが真上に跳ね、ガバメントとが下に弾かれる。

しかし、二人は止まらない。

一步を前へと踏み込みがてら、互いのデバイスを振るう。

一撃一

一閃一

一烈一

一破一

銃撃と打撃の同時攻撃と、剣撃が重なり合う。

コルトが行っている戦闘法は、射撃型の根本を覆す戦い方であった。

なにせ、打撃と射撃を同時に行っているのだから。

銃口を持って放たれる打撃が、直撃の瞬間に銃弾を吐き出すのである。

それをコルトは高速で、”カートリッジ・ロードや、弾丸形成”までも含めて行っていた。



これがコルトの零距离銃撃格闘戦闘法。

通称、”ゼロ・アーツ”であった。

「ぐ……！ 隊長も居るんだぞ……っ！ お前は隊長も殺すつもりか……！？」

「当たり前だ。お前も、”教官”も、今は俺の敵だ。殺す事を躊躇すると思うか？」

きっぱりとソラに向かい言い放ち、コルトは至近から銃打撃を繰り放つ。

ソラはフラガラックでそれを弾きながら呻く。  
現状、片手しか使え無いのだ。

どうしても、速度で負ける。

ギリ貧状態に呻くソラに、獅童姉妹が援護に向かおうと空を翔け。

「……残念ですが、そうはさせません」

後方に居た、悠一が放った新たな光爆に阻まれる。

更に二人に突っ込む存在が居た。

アスカだ。

「ここで、皆捕まえるよー！」

「う~~~~~！」

「……副隊長」

そのまま、姉妹はアスカと交戦する。

その後ろでは、ソラの援護に向かわんとする他のストラメンバー

と、妨害する他のグノーシスメンバーが激しく魔法を撃ち合っていた。

《っー！ リゼ。転移魔法で、皆を纏めて撤退出来るか！？》

《……現状だと、厳しいです。術式自体は永唱完了》

念話でリゼに問うソラだが、返って来た無情の答えに歯噛みする。

まず、皆を集め。

その上で漸く転移出来る。

だが、現状のバラけた状態では、全員撤退なぞ敵わない。

そもそも、集合以前に転移出来るかどうかも怪しいのだ。

切れ目の無い、グノーシスメンバーの攻撃を止めなければなら無い。

だが、そんな方法など、ある筈も……！

《……俺に任せろや……！》

瞬間。

突如として響く念話にソラは目を見開く。

その念話は……。

「たい……っ！」

ーソードメイカー・ラハブー

ソラが止めんと声を掛ける前に、鍵となる言葉が放たれた。

直後、一同の上空に、大量の剣群が生まれる。

「――っ！　ちい！」

それを見て、ソラと戦っていたコルトは舌打ちを放ち、未だソラに担がれるアルセイオにガバメントを向ける。

止めを差さんと、引き金を弾こうとして。

一撃！――

降り落ちる剣群に、それを阻まれた。

見れば、他のグノーシスメンバーにも剣群は降り落ちていた。

「隊長……！」

「何をポケットとしてんだソラ！　フラガラックで全員を集めろ！」

リゼは全員集まったら転移だ……！」

「……了解！」

アルセイオの言葉に押されるように、それぞれ動き出す。

まず、ソラがフラガラックの空間接続を持って、皆の空間を接続。自らの周りに集め、リゼが転移魔法を発動する。

「ソラ！　教官！　逃げるかよ……！」

「おう。……コルト、お前が指揮官か。随分立派になったみてえだが。……ツメが甘かったな」

アルセイオの言葉に、コルトが悔し気に睨む。

しかし、それだけ。

未だ降り落ちる剣群に、グノーシスメンバーは手一杯で、転移魔法を妨害出来ない。

「じゃあな！ あばよ！」

「コルト。それに、リク。決着は持ち越した」

「一一っ！ 手前え！」

「クソ兄貴が……！」

ソラの言葉に、コルトとリクが叫ぶ。  
だが、それだけしか出来ない。

瞬間。

アルセイオ達の足元に、ミッド式の魔法陣が展開。  
その姿が消えた。

「……くそが……！」

まんまと逃げられたコルトが苛立ちを隠さずに吠える。

ストラの撤退。

それは同時に、クラナガンの戦闘全ての終了を意味していた。



「一一体、ウィルは一一！」

「一一に、文句言うても一一！」

「……？」

響く声に、シオンは頭を抑える。  
妙に聞き覚えのある声で、妙に聞き覚えのあるやり取りが聞こえた。

同時、ズキリと頭が痛む。  
それで思い出した。

確か、スバルに思いっきりぶん殴られたのである。  
どうやらそれからずっと気を失っていたらしい。

「ぐ………！」  
「あ………」

呻く自分の声に反応するような声が響く。  
女性の声だ。

だが、スバルやティアナの声では無い。  
しかし、確かに聞き覚えのある声にシオンは痛む頭を堪えながら  
目を見開く。

そして、見た。

”彼女”を。

「……シン君……」  
「……え？」

一瞬、誰だか分からなかった。

起きた自分の顔を覗き込む少女が、誰なのかを。

茶が混ざった長い髪をツインテールにして、微笑むその少女。場違いにも、シオンは彼女を綺麗だと思った。

しかし、自分を”シン君”と呼ぶ少女をシオンは一人しか知らない。

幼なじみの少女しか。

「……み、もりか……?」

「――はい」

ポロリと。

ポロリと少女。みもりの瞳から涙が零れ落ちる。

微笑みながら流れる涙が、頬から落ちてシオンの顔に降った。

そこで気付いた。

自分達が、どのような体勢なのかを。

シオンはみもりに膝枕されていた。

後頭部に太腿の感触がある。

シオンはその感触に急に気恥ずかしくなり、身体を起こそうとして。

みもりにその頭を抱き抱えられた。

「ちょ……! みもり! ?」

「会いたかった、です」

いきなりの事態に顔を耳まで赤くするシオンにみもりの泣き声が響く。

それにシオンは何も言えなくなった。

嗚咽を上げるみもりにされるがままにされる。

「ずっと……。ずっと、待てました……」

「……ごめん……」

謝る。

それに意味が無い事だと分かっているながら。

そして、手を伸ばし。みもりの頭を撫でようとして。

「「じくくく……」」

「？ て、うお……！？」

みもりの後ろの視線に気づき、悲鳴を上げた。

視線の主は言うまでも無い。

スバルとティアナであった。

人は、ここまで冷たい視線を放てるものなのか。

シオンは二人の視線に冷や汗をだらだらと流す。

「あ、あの……。スバルさん？ ティアナさん？ いつからそこに

？」

「「最初っから」」

返事はあまりにも素っ気ない。

にも関わらず、異常なまでの殺気が込められていた。

まずい……！ 何故かは分からないけど、このままだと生命の危機にまで発展しそうな気がする……！ 何故かは分からないけど、そんな気がする！

シオンの直感は危難にしか、発揮されないが。

それが全力で警鐘を鳴らしていると言う事態に、シオンは悲鳴を上げそうになる。

取り敢えず、みもりに声を掛けてみた。

「その、みもり？ この体勢はヤバイって言うか、胸が……で。ち、違うぞ？ 後ろの二人！ デバイスを構えんな！？」

「嫌、です。……離れたくありません」

「そうでなくて！ このままだと永別しかね無いつて言うか――  
――！？」

数分後。

騒動に気付いた、ウィルともう一人が来て。

なんとかシオンは一命を取り留めた。

「……おっちゃんの斬界刀より、怖かった……」

「天罰やろ」

「今回は、そうかもね」

横になったまま青ざめた顔となるシオンにウィルが笑い。  
その横の少女が笑う。



シオンは横目でその少女を見る。

黒の髪を、ポニーテールにし、前髪は綺麗に切り揃えられている。そして、頭には眼鏡が掛けられていた。

「……よ。久しぶり、カスミも元気そうだな」

「ん、久しぶり。シオン君、相変わらず無茶やってるみたいね？」

その言葉にシオンは苦笑し、そしてウィルに視線を向ける。

ウィルはそれに、ただ頷いた。

「……安心せい。つい、ちょっと前に奴等は撤退したわ。……あのロボットもどきと、因子兵も纏めて、な」

「そか……。皆、アースラの皆は……？」

「みんな、無事だよ。……怪我したり、毒を受けたりしたけど命に別状無い、て」

ウィルとスバルがシオンにそれぞれ教えてくれる。

皆、無事。

それに、シオンは心底安心したように微笑んだ。

「そか……。よかった……」

「よかったじゃないわよ。……まったく。またアヴェンジャーになんてなるなんてアンタは……」

「あ。……そう言えば、イクスは？」

「大丈夫。此処に居るよ」

シオンの疑問にスバルが微笑み、掌をシオンに見せる。

そこには、待機モードとなったイクスが鎮座していた。

シオンに何も言葉を掛け無いと言う事は、どうやら眠ってるらしい。

それにヤレヤレとシオンは笑う。

「……無茶させちゃったからな。後で謝らねえと……」  
「そうだね……」

シオンの言葉にスバルも頷く。  
それにシオンは微笑む。

「……さて、そろそろアースラに戻らないと……」

よっこいしょ、とシオンはややじい様臭い事を呟きながら、立ち上がろうとして。

「……あれ？」

立ち上がれなかった。  
もう一度足に力を込め――。

「……なん、だと……？」

「……？ どうしたのよ？」

「シオン？」

「シン君？」

絶句し、固まるシオンにそれぞれから声が掛かる。  
だが、シオンはそれが聞こえていない。  
顔から血の気が引いていた。  
自分の足を触る。



道場です♪ 当道場の主、アリサです♪」

す

「弟子のすずかです♪」

シ

「久しぶりに、男に戻れました♪ やっはい♪ 司会のシオンです♪」

ア

「……えらい、喜びようね。元に戻すべきじゃなかったかしら？」

シ

「……怖い事言わないで下さい。ただでさえ、Evolution Of Sword Emperorや、Braveで酷い目に合わされてんですから……」

す

「そう言えばター○星人にタール像にされたんだよね？ ター○星人が送られてなかったかな？」

シ

「ああ、あれならタカ兄いが、解術してくれました。何でも道場を汚されたくない。ター○星人も即座にタカ兄いが抹殺しました♪」

ア

「ま、抹殺、て……」

す

「タカト君だしね〜」

シ

「さて。では♪ 今回の召喚キャラを♪ 今回はEvolution Of Sword Emperorから、レン・テストロッサさんです♪」

レ

「おう。レン・テストロッサだ。よろしくな。……ところでタカトは？」

シ

「……タカ兄いなら道場の外です」

レ

「？　なんで道場の外？」

ア

「ああ、アレね」

す

「タカト君、熱心だよね」

レ

「は？　何の話だよ？」

シ

「詳しくは音声をどうぞ♪」

タ

「お手……」

犬

「ぐるる……！」

タ

「……言う事を聞けないのか？　ならばその鷹と同じ目に合わせ  
るが？」

鷹

「ピッピッピ……」

犬

「るる……っ！」

タ

「動物を躑るのは久しぶりだ。うれしいなあ。さて、”お前はどんな  
風に屈服する”？」

きやいんきやいんきやいん………！

レ

「……まあ、騾だよな。騾。うん。虐待なんかじゃない筈だ。……  
そう、信じよう」

シ

「……あれを、丸一日繰り返してんですよ……」

ア

「私も犬、飼ってるから騾だったんだけど、タカトが譲らなかつたのよね……」

す

「……タカト君、嬉しそうだったよね〜」

レ

「まあ、いいんだ。あいつの事はこの際。深く追求するのはヤバイ  
気もするしな。……と、言うか犬、てサイズか？ アレは……」

シ

「タカ兄いにサイズは関係無いですよ。ぶん殴ると決めたら神様で  
もぶん殴るような人ですし」

ア

「さて、んじゃあまずは今回のおさらい♪ シオン宜しく〜♪」

シ

「……不用意な言動は控えましょう。いや、マジに……」

レ

「……まあ、重い発言はな……。シオン、ありゃあ禁句だぜ……」

シ

「……思い知りましたよ。思い知りましたとも……。具体的な詳細

を思い出せ無い程に……！ い、いやあああ……！！？ し、真  
爽やかコースは————っ！」

「落ち着けシオン！ 自分を取り戻せ！」

「はあっ！ はあっ……！ あ、危なくココロが壊れてアヴェン  
ジャーになる所だった……」

「……なるなよ？ そんな時は俺、容赦無くお前潰すぞ？」

「……流石、他作品でも容赦無くキレまくる所謂キレキャラね♪」

「人を勝手なカテゴリーに括らないでくれるかな！？」

「でも、LVでもキレてたよね？」

「う……！」

「ほ……ら。否定出来ないじゃない♪ 決定アンタはキレキャラ。  
……否、キレ王と名付けましょう♪」

「そんな二つ名はいらないな！ てか、それなら今回のタカトはど  
うなる！？」

「……あれは、あえて触れない方向で行ってたんですよ。……怖い  
から」

「……まあ、確かに怖かったが……」

「ちなみに今回のタカ兄いが”やらかした”描写、少し大人し目で

行ってます♪」

レ

「……アレで？」

シ

「はい。例えば顔を剥いだ場面。眼球が落ちて、ぶらぶら揺れて、その激痛でのた打ちまわって。でも手が無いから痛みは永遠に続く、て描写があったんですけどね……」

レ

「……うん。それ以上言うな。飯がまずくなる……」

ア

「……アレはね〜。本当に怒らせるとタカトはヤバイわ……」

す

「……全年齢で大丈夫だったのかな？」

シ

「大丈夫でしょう……。多分♪」

レ

「……また適当だな……」

シ

「さてさて、それはさて置いて、次は人気投票結果発表です♪」

ア

「漸くね〜」

す

「もの凄く長かったよね……」

シ

「まあ、全ては作者がズボラだったせいなんですけど……。さてさて。では下の順位から発表します♪ StS，EX第6位は……」

風間カナン♪ 投票数二票♪」

一同

「「「え〜〜〜!」」」



シ 「いや〜。驚きです♪ いきなりLVキャラ。と、言うかカナンが6位を取りました♪」

ア 「まあ、アンタも向こうで8位になったしね……」

す 「納得だね〜」

レ 「しかし、シオンといいカナンといい。よく、別作品で票がくるな……」

シ 「細かい所はツツコミ無しで♪ では、次に行きます♪  
第5位♪ あまり出番無いのに、バカップルぷりは既に周知の事実  
(笑)

ユウオ・A・アタナシア♪ 投票数三票〜♪」

ア 「おお、ユウオが来たわね……♪」

シ 「あまり出番は無いんですけどね……。ユウオ姉さんは何気に人気です♪ さて、次々行きましょう♪ 第四位♪ 生きる伝説。スーパーセクハラ兄貴。……出番が欲しい今日この頃♪

叶トウヤ♪ 投票数七票〜♪」

レ 「お、トウヤ来たな。ユウオと並んで四位か……」

す 「一位取るより、喜びそうだね♪」

シ 「はい♪ ではここからはトップ3〜♪

まずは、第三位♪

やはり強い、一応ボスキャラ♪  
最近料理を作ってたね？

伊織タカト♪ 投票数十票♪」  
す

「やっぱりタカト君、トップスリーに入ったね♪」

ア

「まあ、ウチの執事だしね♪」

レ

「それは関係無くないか……」

シ

「さて、では一位と二位は一緒に発表します♪  
StS, EX晴れある人気投票第一位は♪」

シ

「第一位、ありがとうございます♪ 神庭シオン！ 同率第一位、  
アルセイオ・ハーデン♪！ 投票数十四票♪」  
一同

「「「どえ~~~~~!!」」」

シ

「驚きの声、ありがとうございます♪ いやあ……。ギリギリ、主  
役の面目を保てました……。てか、おっちゃん強すぎです……」

レ

「……確かに……。第三部から登場したのに、この人気は凄いな…  
」

シ

「はい♪ さて皆様♪ 多数の投票ありがとうございました♪ 作者大喜びです♪ 今後共、宜しく願います♪」

ア  
「さて、人気投票長すぎだし、今日はここまでにしますか」  
す

「そうだね〜♪」

シ

「はい♪ ではレンさん。キャラ召喚ありがとうございました♪ また来て下さいね♪」

レ

「ああ。割りと平和に終わったから安心したよ」

す

「EXは平和な時がたまにあるからね〜♪」

シ

「はい♪ では皆様いつも読んで下さってありがとうございます♪ 今後共、宜しく願います♪ では〜♪」

ア、す

「「また次回〜♪」」

レ

「またな〜」

タ

「……おっと、レン先輩が帰る前に間に合ったな。先輩。お土産だ」  
レ

「よ。タカト……。て、何だコレ？ 金色のバケツ？」

タ

「バケツプリンです。総計9Kgの巨大プリン。楽しんで下さい」  
レ

「……それは、またデカイな……。ありがたく貰うよ」  
タ

「はい。では」

終幕。

### 第三十七話「それぞれの再会」(後編)(後書き)

「クラナガンで起きた、ツアラ・トゥ・ストラの反乱」

「数多の傷跡を残しながらも戦いは終わり、グノーシスメン  
バーは、アースラメンバーに合流する」 「そ

の中でシオンは己が成した、大罪の反動を受ける」

「そんなシオンに三人の少女達は……」 「そして、ツア

ラ・トゥ・ストラが次の動きを見せる」 「次回、

第三十八話。『交差する想い』」 「躓いたって、痂が剥がれ

たら。今よりきつと、強くなれる筈」

第三十八話「交差する想い」(前編)(前書き)

「結局、俺は何も成長してなかったんじゃないかと、たまに思う」

「タカ兄いには追いつけなくて」 「スバルや

ティアナに助けて貰って」 「無茶ばかりやって、イクス

にも無茶ばかり押し付けて」 「……イクスの、本当

の名前も俺は知らないのに」 「だから、俺は」

「刀を握ることすら怖くて」 「魔法少女

リリカルなのはStS，EX。始まります」

### 第三十八話「交差する想い」(前編)

赤。

赤がただ、広がる。

世界に赤が。

それを、まだ十二歳の神庭シオンは呆然と見ていた。

赤を垂れ流すのは見知らぬ男達。

辺りにいろんな”部品”をばら撒いて”小さく”なった男達だ。

なんで？

男達が倒れ伏す向こうに少女がうずくまって泣いている。  
身体中を赤で汚して。

そして、自分を見る瞳に恐怖を宿して。

なんで？

呆然としていたシオンはふと気付く。

ああ、なんだ。自分も汚れているじゃないか。

赤に。

[illegible]

赤に！

ああ、そうだ。これは赤なんかじゃない。

血だ。

手に持つ”刀”が血で汚れ。  
服も何もかもが血で汚れて。

シオン自身をも血でずぶ濡れになって。

「……バカが……」

「あ……」

響く声に、震える。

声の主は異母兄だった。

伊織タカト。

彼は、左腕を右手で押さえて、自分を顔を歪めながら見ていた。

「あ……」

気付く。

タカトの足元に落ちているモノに。

それは、  
”肘から先が落ちた左腕”  
だった。

そう、それは――



「俺、が……？」

自分がやった。

幼なじみを襲った悪漢達を、手に持つ刀のデバイスで事如く斬り捨てたのだ。

幼なじみ、みもりを襲おうとした悪漢達。

その光景を見た時、シオンの中で”何かが”、吹き飛んだ。  
そして、生み出されたのは赤の光景。

追い付き、自分を止めようとしたタカトをも斬ってしまった。

「み、もり……」

「……っ！」

呼び掛けに、みもりの身体はビクンと跳ね。  
そして、ガタガタと震える。  
その瞳に映るのは、血で赤く染まった自分。

「あ……」

そんなみもりに、シオンは声を掛けられなくて。  
そして、自分が左手に握る刀を見る。

血で染まった刀。

自分が十年以上振るい続けた刀が、酷く、酷く。  
汚れて見えた。

「あ、あ、あああああああああああつ！」

叫ぶ。刀が嫌なモノに見えて。  
自分が、酷く醜く見えて。

シオンはただ叫んだ。

その日を境に、シオンは刀を握る事を辞めた。



「あああああああああああああ………！  
………あ？」

暗い室内で、シオンは叫びながら目を見開く。  
息は荒く、汗をびっしょりかいて。  
暫く呆然とする。

俺は……。

真っ青な顔で辺りを見渡し、そして息を吐いた。

どうやら、夢だったらしい。

しかし、何と言う夢を見るのか。

あんな日の夢を見るなんて。

苦笑する。

既に忘れたと思った過去、刀を捨てたあの日。  
そんな日の事を夢で見るなんて。

……久しぶりに見たな。

そう、シオンは思う。

随分、久しぶりに見た。

五年前は、毎日のように夢に出ていたのだが。

「……何でまた、こんな夢を見るかな……」

一人呟く。

理由は分かっている。みもりとの再会だ。

幼なじみ、姫野みもり。

二年ぶりの再会で、少し、いろいろ思い出してしまったのだ。

「……それに、俺。足がな……？」

呟き、気付く。

何故か隣。左手側の布団が”膨らんでいる”。

ちようど人が、潜り込んでいるように。

と、言うか左腕に”柔らかな”感触がある。

「……………」

無言ではらり、と布団を剥ぐ。

そこに見えるのは、茶が混じった髪。

そして、自分の左腕に抱き着いて眠る少女であった。

みもりだ。

「……………なんでさ」

思わず唸る。

そこで漸く気付く。

ここは、自室じゃない。アースラの医療部であった。

「……………ああ……。そういや、あの後、医療部に突っ込まれたんだっけ……………」

そう、クラナガンで起きた、ツアラ・トウ・ストラとの戦いでいろいろ”あり、シオンは急な検査を受けた。

しかし、検査は途中までしか受けた記憶が無い。

途中で寝ちまったか…………。

苦笑する。

その前にあんだだけ寝ておいて、さらに寝たらしい。

しかし、何故にみもりと自分が一緒に寝てるのかが、分からない。

「ん…………。シン君……………」

「…………シン君じゃ、ねえだろ……………」

頭を右手でかきながら、シオンはため息を吐く。

子供時代じゃねえ、てのに…………。

自分達は、幼なじみだ。

子供の時に一緒に寝た事くらいはある。

しかし、それを十八にもなろうと言う男女でやってはならんだらう。

とりあえず。

みもりを起こそうとして。

「……………っ!？」

ぞくり、と言う感覚が背中を襲う。

悪寒だ。

直感が、危機の到来を告げている。

と、言うか最近味わったような悪寒なのだが。

プシュっと言う音と共に、扉が自動で開く音がする。

そして、がやがやと人が入って来た。

「シオン、もう起きたかな〜」

「さあね。でも、アイツ。寝過ぎじゃない……………」

「げ……………!」

響く声に、思わず唸る。

よりにもよってこの二人の声。

スバル・ナカジマとティアナ・ランスターの声であった。

ヤバイ……………! こんな、状態を見られたら……………。

思い出すのは、みもりと再会した時の二人の姿。

軽く斬界刀よりも遥かに怖かった、二人の視線である。

今はカーテンに仕切られて、こちらの姿は見えない筈だが。

と――。

「ん？ シオンの声が……？」

うげ……！？

スバルの声に、シオンはまた呻き声を上げそうになる。  
「どうやらさっきの『げ……！』が聞こえたらしい。  
大した聴力である。」

今の状況ではあまりに嫌過ぎる聴力であったが。

「本当？ シオン起きてんの？」

問われる声に、シオンはハッと我に戻る。  
「イカン、みもりを起こさなければ。  
とりあえず、時間を稼ぐ事にする。」

起き抜けのフリ、寝ぼけのフリ、二日酔いのフリ（？）……！

問われている……！

己の演技力を今、問われている……！

全く何の関係も無い事象が入っているあたりシオン自身混乱して  
いるが、今は構わない。

さあ、ここは俺の腕の見せ所……！

「あ、ああ……。悪い、今はちょっと……」

そう、声を掛けようとして。

「……シン君。そんな所触っちゃダメですよ〜」

全てを台なしにする声が響いた。

「「「……………」」」

痛すぎる沈黙が医療部を支配する。

無言でカーテンが引かれた。

当然。

そこに在るのは、諸事情で身体を起こせないシオンと、横で眠る  
みもりの姿。

「「……何してんの？」」

「いや、その、あの……………！」

この間の再現が、今まさに現出しようとしていた。  
スバルとティアナの視線が凄まじく冷たい。

シオンの直感は、ガンガンと警報を打ち鳴らしていた。  
つまりは、それ程の危機、と言う事である。

「お、落ち着いて聞いてくれ。俺も起きたらこんな状況でだな……………」

必死に弁解しようとするが、効果は見られないような気がする。

二人は無言でシオンを睨み据えるのみ。

夢でかいた時以上の汗をシオンはかいて。

「シン君。そんなコトしちゃ、ダメですよ〜」  
「……………」

みもりのそんな声に、二人は無言で己のデバイスを起動した。

「「遺言は？」」

「……………もうちょっと、長く生きたかったな……………」

ふっ、とシオンは遠くを見詰める。

ああ、俺の人生、まともなコト無かったな…………。

走馬灯に、思いを馳せるシオンはとりあえず、横のみもりを巻き込まぬ為にベットから落とそうと抱かれている腕を抜こうとして。

「ん…………！ あ…………！」

それに、何やら反応したみもりの声が響いて。

「「シオンのおお…………！」」

「…………うん。今のは、しゃあ無いよな、うん」

全てを諦めたシオンは既に涙さえも流しながら肯定する。

さあ、終わりにしよう。グッバイ…………俺の人生！

とりあえず、みもりを押しやり、ベットの下に落とす事に成功したのまでは確認して。

「「バカアアアアアアアアアアアア……………」」



！  
」

一煌！

蒼と、茜色の光砲を叩き込まれ、医療部の壁ごとブチ貫かれて。  
シオンは景気良く意識を手放した。



「……で、こんな事になったんだね？」

「「はい……」」

一時間後。

医療部になのは、フェイト、はやての三人がスバル、ティアナ、  
みもりの三人に向き合っていた。

その後ろでシオンが。

「うゝゝん、うゝゝん」と、呻きながらベットに寝かされ、シャマ  
ルの手当を受けている。

先程の砲撃の直後、いきなりの砲撃に慌てて医療部に駆けつけたのは  
達が見たのは、砲撃にすっ飛ばされて意識を失ったシオンを罵倒  
するスバル、ティアナであり、そして寝ぼけ眼のみもりであった。  
とりあえず、シオンをベットに戻して、三人に事情を聞いたのだ  
が。

「そっかゝ。なら、仕方ないね。シオン君が悪い！」  
「なんでっスカアアアアーーーー！？」

頷くなのはに、シオンが全力で叫ぶ。  
見ればフェイトや、はやても頷いていた。

「だって、シオン。起きたの、二人に見つかる前だったんだよね？  
ならすぐに起こせばよかったんだよ」

「そ、それはそうなんスけど……」

「てか、いろいろ楽しんどったんやろ？ 感触とか、感触とか。やつぱシオン君も男の子やな〜？ 分かるで？ 女の子の胸には夢が詰まっるとか言うもんな♪ ……このスケベ♪」

「え、冤罪っスよー！ー！」

ああ、女性陣の目が痛い。

特に、スバル、ティアナの目が痛い。

何故に、この場に男がいないのか。

味方が誰もいない、この状況にシオンは思わずハラハラと泣く。

て、言うか、俺がいったい何をした……？

何も悪い事をしていないのに、責められていると言う理不尽にこそシオンは泣きそうだった。

「そ、その話は置いて、俺の足の状況について聞きたいんスけど……」

「逃げたね？／逃げた？／逃げたな〜？」

うっさいですと、心の中だけで、三人に言いつつ。

シオンは言葉の続きを待つ。

はやてが、それに嘆息しながら苦笑した。

「ま、ええやろ。後で四人でゆっくりと話せばええんやし、シオン君のリクエストに応えようか〜」

「……前半無視して聞きます。で、俺の足、どうなったんですか？」

思わず半眼となるシオンではあったが、はやてはそれを無視して続ける。

「ん、単刀直入に行こか。今、シオン君の身体は、半身不随状態や」「……足の感覚が無いからそうかな、とは思ってましたけどね……」

はやての言葉に嘆息する。

半ば、覚悟していたとは言え、これは中々堪える。

半身が動かない、と言うのはいろんな意味で辛かった。

「で、や。シオン君の半身不随やけど。原因は、はっきりしとるんや。……シオン君も分かっとるかもやけど」

「……リンカー・コアの影響でしよう？」

シオンは即座に答える。

はやては、それに少し複雑そうな顔で頷いた。

つまり、シオンの半身不随状態は小学生時代。『闇の書事件』の、はやての状況と酷似しているのだ。

はやては、当時。闇の書の影響により、リンカー・コアを介して足が麻痺していた。

それと同じ状態がシオンにも起きているのだ。

つまりは、これが大罪スキルの反動、と言う事だ。

「……シオン君のリンカー・コアは急激な圧縮による、損壊状態になってるらしいんよ。……その心当たりはあるか？」

「まあ……。多分、スけど……。大罪スキル、アヴェンジャーになったせいっスよね……」

大した、置き土産を置いていってくれるものである。

自身の中に潜むカインを想像の中でボッコボッコにしつつ、シオンは頷いた。

そんなシオンに、はやては一つ頷く。

「うん。技術部でも同じ結論を出しとる。ただ、安心し。リンカー・コアの修復は始まっとるそうや。じきに半身不随も治るそうや。で、それも踏まえて、シオン君に一つ言っとかなアカン」

「？ 何です？」

半身不随がじきに治ると言う言葉に内心喜びつつ、しかし。神妙な面持ちで告げるはやてにシオンは疑問符を抱く。

一体、何を言おうとしているのか。

はやてはシオンの目を真っ直ぐに見たままで告げる。

「……今後、アヴェンジャーの使用は絶対に禁止。これは決定や」  
「……それは」

「何言ってもこればっかはダメや。理由は言わんでも分かるな？」

はやての言葉にシオンは顔を歪める。

そう、アヴェンジャーはリスクが高過ぎる。

暴走の危険は言うまでも無く、シオン自身の身体にまで問題が出て来た。

これで使用を認める方がおかしい。

シオンは暫く沈黙し、そしてゆっくりと頷いた。

「……分かりました」

「ん。なら私の話しはここまでや。……さて、ならブリッジに戻るな」

「はい。……あ、そう言えば、ウィルは……？」

「あ、ウィル君達だね？ 今、アースラに乗ってるよ？」

シオンの問いに、なのはが頷く。

しかし、シオンはその言葉に、再度の問いを上げた。

「……達？」

「うん。……そう言えば、シオン君、知らなかったんだっけ？ 今、アースラにはグノーシスメンバーがいっぱい居るんだよ？」

「いっぱい……？」

シオンが更なる疑問符を上げた。

瞬間。

プシッと、再度医療部の扉が開いた。

そして、ぞろぞろと人が入って来た。

「お、何だ神庭。起きてるじゃねえか。折角マジック用意したのに無駄になっちまったな」

「ヘタ君、おはようさんやな〜」

「先輩、弱いんだから無茶すんなよな」

「ヘタレオンだから、仕方ないだろ。ヘタレオンだから」

「……シオン。貴方はただでさえ無茶をしょっちゅう、やるんですから、たまには控えて下さい」

「みんな、酷いよ〜。シオンもこれでも頑張ったかもじゃん。弱いなりに。ヘタレなりに」

「まあ、いいんじゃないの？ こいつらの家系で無茶すんな、てのが無理だろ」

「そうかもね。全く、あのバカブリトニーと言い、このヘタレと言いい、無茶ばかりだしね」

「お、スバルちゃんに、ティアナちゃんやん〜。ワイとお茶でも、ふぐっ!？」

「……ウィル。アンタは黙ってなさい」

「……ええっと……」

ワイワイガヤガヤと入って来た見覚えのある大人数に、シオンは思わず頭を抱えつつ、とりあえずはある一点を指差して、言葉を告げる事にする。

「……皆、多分だけど、すごい邪魔だぜ？」  
『は……?』

シオンが指差す先には、ブリッジに戻ろうとしたのに、進めなく

なって困り果てている、はやてが居た。



「……で？ 何事ですか、このグノーシス上位メンバー大集合状態は……？」

先の状態からなのは、フェイト、はやてが医療部を退室し。

代わりに、グノーシス・メンバーがシオンの周りをぐるりと囲んでいた。

シオンの言葉にコルトが煙草をぷかーと、吹かす。

「……コルト教官。ここ、普通に禁煙なんすけど……？」

「あん？ 知るか。俺が居る場所は自動的に喫煙部屋になるんだ。問題は無え」

「ただだけフリーダム！？ 変わってねー」

コルトのあんまりな返答に、シオンは頭を抱える。  
相変わらず、禁煙と言うのが頭に無い男であった。

「もう、いいっす。教官に禁煙を促そうとした俺が馬鹿でした」

「分かりやあいなんだ、分かりやあ。なら、神庭。お前、ひとつ走りしてタバコ買ってこいや。銘柄は覚えてんな？ 3分以内だ」

「足が動かないのに、走れるかー！？ てか、アースラでそもそも煙草売って無いし！」

「あん？ なら次元転移で地球まで買ってこいや。制限時間5分にまけてやんよ」

「もっと、無理だろ！？ 大概にしろよアンタ！」

あ、頭が痛い。

久しぶりの、コルトとの会話にシオンは頭を抱える。

小此木コルト。

グノーシス第三位、二十三歳の青年である。

近代ベルカ式の使い手であり、唯一。ロスト・ウェポンを所持しない第三位であった。

所持するデバイスはガバメント。

銃型のデバイスである。

ベルカ式で銃式のデバイス、と言うのは珍しいを通り越して、コルトしか使い手がないのだが、その戦闘法もまた、射撃タイプの常識を外れまくっていた。

ゼロ・アーツ。

言ってしまうと、ゼロ距離による、射撃格闘術である。

ただ、それを弾丸形成までも含めて行う彼は異常としか言えないが。

希少技能はリミテッド・リリース。

これは肉体強化のスキルだ。

ただ、従来の肉体強化よりも遥かに強力なものである。

思考速度や、反射、筋力、骨強度の強化。

それをただの肉体強化よりも遥かに強力なレベルで強化するのである。

ありふれているように見えて、しかし。コルト固有のスキルと化



しているのだ。

反動の問題もまたあるが。

そして、本人の嗜好は見ての通り。

「……ヤニが無えと、イライラすんだよな……」

「……この際、禁煙に挑戦とかしません？」

「殺すぞ？」

「何で!？」

この通り、大のヘビー・スモーカーであった。

いつ、いかなる場合においても煙草を手放さないのは、ある意味見事とも言える。

「まあ、まあ、ヘタ君。このニコチン狂いに何言っても無駄やって……ところでニコチン、てちょっと卑猥な響きやね。ボケに使えんかな？」

「……アンタも変わんないっすね。てか、下ネタに走らないで下さい。そしてヘタ君言うな」

ニコリ笑いながらとんでも無い事を言う女性に、シオンは嘆息する。

獅童楓。グノーシス第四位の女性である。  
十九歳の女性で、もはや言うまでも無い。

- 1に、お笑いが好き。
- 2に、可愛いくて小さいものが好き。
- 3、4が無くて。

5に、お好み焼きと、たこ焼きが好きと言う。 テンプレもいい所な関西人であった。

ここまで来ると、寧ろ珍しい。

ただ、彼女の能力もまた、特異としか言いようの無い能力であった。

コピー能力。

時間をかければ、一部限定的なものを除いて、殆どの魔法をコピーする能力を彼女は有していた。

術式に関係あらず、である。

これほど、出鱈目な能力も無い。

しかも、彼女のデバイス。シャドウは戦技変換を行う事により、ロスト・ウェポンを除く、ほぼ全てのデバイスへと変型出来る。

術者といい、デバイスといい、極めて強力な使い手である。  
ただ……。

「ふふふ。しかし、ウチはごつつええ相方を見付けたんや♪ なく。スバルちゃん♪ いや、師匠ちゃん♪」

「ええ！ わたし！？ てか、師匠！？」

「ふ……。あのツツコミ。そして、普段はボケ……。ウチの相方に相応しいで……」

「あ……。無理っスよ。スバルは横のティアナと十年來の相方だそうですし」

「そんなに長くないわよ！？ せいぜい5年よ！」

相方は否定しないんだ？　と思ったもののあえて放置する。

横で『そんな、ティア〜』とスバルが抱き着き、『あ〜もう、抱き着くなく〜！』と、まさに伝統芸を見せる二人に楓はくつと呻く。

「あかん！　完璧や……！　あの二人、ウチが入り込む隙間が無いで！　くうー！　このままやとM○グランプリが……」

「いや、てかマジに変わりませんねアンタ……」

悔し気に唸る楓に、シオンは嘆息する。

どこまでもお笑いを求める魔導師。  
それが楓と言う女性であった。

「……で？　先輩。足はどうなんだよ。これ以上弱くなれると困るんだよな、実際」

「そうだな。リク。そしてお前はいい加減、敬語使えるようになろうなー」

「無理」

「断言した！？　いやいや、人間努力が肝要であって……」

「無理」

「最後まで言わせろよ！」

真藤リク。グノーシス第四位、十六歳の少年である。

戦い方としてはカラバ式の使い手で、極めてオーソドックス。こと、剣技に置いてシオンを凌駕する天才少年である。

ロスト・ウェポン。ブリューナクを持つ少年でもあるのだが。見て分かる通り、恐ろしく無愛想な少年であった。

何より、彼は。

「てか、教官も獅童さんも煩い。ここ、病室なんだし。大人だろう？  
少しは落ち着けよアンタら」

「……ほ、ほう……」

「……リク君。アンタ、ええ度胸やね……」

とんでもなく、暴虐無尽であるのだ。

1番分かりやすいのが、どんなに立場が上の人間だろうが一切の敬語を使わない事か。

ここまで来ると、いつそ清々しい。

たまに、皆。殺意を覚えるが。

容赦無く、ズルズルと二人に連行されるリクにシオンは思わず合掌した。

「で、実際どうなんだ？ ヘタレオン」

「うん、刃。それが久しぶりに会ったダチへの言葉かそれ？」

「前からこんなんだ。気にすんな。お前は前からヘタレオンだ」

「ちっげえよ！？ シオン、て呼んでたじゃん！」

「……で、ヘタレオン。どうなんだ？」

「スルーした上に、直ってねえし！？ いいよもう、お前！」

黒鋼刃。グノーシス第四位の少年である。

風貌から二十代に間違えられること、しばしばだが。立派なシオンと同じ年の十八歳であった。

彼の使用する魔法は特別を通り越して、もはや異常である。

古代魔法、言霊式。

刃以外に使う者がいない。刃専用の術式とも言える。

その特性は世界への語りかけ、だ。  
文字通り、世界へ言霊を用いて語りかけ。その力を行使するのが、特徴であった。

それ以外にも謎が多い術式だが、今は割愛する。

そして、彼が持つ刀はロスト・ロギア。

ロスト・ウェポンでは無い。真正のロスト・ロギアである。

その名は『銀龍』

そう、龍である。

龍と言うのは、精霊存在とも言える存在で、既に生物としての概念から外れてしまった存在である。

竜は、半精霊存在ではあるが、物質としての理に縛られているが、龍はそれに当て嵌まらない。

物質としての束縛を受けないと言う精神存在であり、自然霊としての側面も持つ。

場合によっては神扱いされる事も珍しくない存在であった。

さて、何故『銀龍』がロスト・ロギアなのか？ 答えは、単純。

”龍がその刀に宿っているのだ”。

世界意志端末たる精霊並の力を持つ固体意志が。

これが解き放たれた場合は、それこそ一つの世界が滅んでもおかしくないのであった。

さて、そんな謎術式と、危険極まり無い刀を持つ彼の性格はと言うと。

「む……？ シーツが歪んでる！ ヘタレオン。ちゃんと、ピシッ

としないか!？」

「……相変わらずな。お前……」

「お、そうだ。お前、クッキーいるか? わざわざ作って来たんだ」

「……つくづく変わらねえよな。お前……」

そう、彼。黒鋼刃は大の家事好きであった。

某異母兄とは、家事においてライバル関係であり、常に雌雄を競い合った仲であったのだ。

……殆どの場合は、兄が勝っていたのだが。

「まあ、頂くよ。……美味いな」

「美味そうですね。僕も貰っていいでしょうか?」

「私も……」

「んじゃ、俺も」

「私も食べよっと」

「ワイにも食べさせてや……」

「私も頂いていいかしら……?」

ボリボリとクッキーを食うシオンの周りに、他のグノーシス・メンバーもまた群がる。

そして、クッキーをぱくぱくと食べるグノーシス・メンバーを見遣りながらシオンはふむと頷く。

「キャラ紹介! 後編に続く!」

『マジ!?!』

そう言う事になった。

(後編に続く)

第三十八話 「交差する想い」  
（前編）  
（後書き）

……ええ、キャラ紹介に文字数をひたすらに取られてまたもや、前後編です。なんだ、こりゃ……。今回は、ひ

たすらおちやらけて行くのでお覚悟を（笑）  
では

では～～♪  
質問、感想、受け付けております♪

よかったです♪



第三十八話「交差する想い」 (後編) (前書き)

いよっし。何とか書き上げた……！ ども……♪ テスタメントで  
す♪ いや……。頑張っつて、早目に書けました♪ 次もこんくらい  
早く書ければ良いのですが♪ ではでは後編。どうぞ……♪

### 第三十八話「交差する想い」(後編)

「ふいふい。食った、食った。相変わらず刃のお菓子は美味しいよな」  
「そうか。……目標は伊織さん超えなんだがな」

アースラ医療部。

そこで、見舞い(?)に來たグノーシス・メンバーの一人、黒鋼刃手製のクッキーを食べていた一同は皿に乗っていた全てのクッキーを食べて一息吐いていた。

「でも、本当。これ美味しいわね……」

「だね」。お店のクッキーよりよっぽと美味しいよ」

シオンに釣られて一緒にクッキーを食べたスバル、ティアナが笑顔を浮かべる。

それに刃はふっと笑う。

「これは俺の持論だが……基本的にクッキーとかの焼き菓子は店で売っているものより、手製の方が美味しい。フワフワ感も出せるしな」  
「へへへへ」

刃の言葉に、二人揃ってコクコク頷く。

刃は、それを見遣りながら皿を片付けようとして。

「じゃあ、次。飯を楽しみにしてるな」

「は？」

そんな、有り得ない声を横になりっぱなしのシオンから聞く。

シオンは朗らかに刃に笑い。

「作ってくれるんだろ？ 今日の飯」

「待て。俺、そんな事は一言も言っていないんだが」

「いやゝゝ。楽しみだなゝゝ」

「聞けよヒトの話し！？」

「ああ、勿論聞いてるぜ？」

「そ、そうか？ ならいいんだが……」

「あ、ちなみに親子丼希望な？」

「全然聞いてねえじゃねえか！」

「僕はフレンチのフルコースを宜しくお願いします♪」

「私は、お肉がいいなゝゝ」

「俺は鯖な？ 最近魚が美味いんだよな」

「あ、私も肉が食べたいわね」

「ワイは牡蠣が食べたいで、刃」

「お、お前等……」

シオンに乗っかり料理を希望するグノーシス・メンバー一同に、刃はがつくうと膝を付く。

そんな刃を、スバルが気の毒そうに見遣り。

「……ええつと。……私もいいかな？」

「……て、スバル。あんた……」

「ふ。もういいさ。何でも来い。いくらでも作り上げてやる……！」

逆に燃えたのか、背中に炎を背負って刃が立ち上がる。

そんな、刃にみもりと、ウィルの横に立つカスミが、手伝いを申し出るが、『いや、いい。……今から仕込みか……』と、時計を見ながら医療部を出ていく。

「さつて。これで晩飯は楽しみだな、と」

「ええっと。よかったのかな？ シオンに言われた通りに、言っただけど……？」

スバルがシオンの顔を覗き込むように言う。

そう、シオンは先程。念話で、スバルに希望料理を言うように仕向けたのであった。

どうでもいいのだが、リンカー・コアを損壊しているくせに、そんな無駄な事をして治るのが遅くはないのだろうか？

「いいんですよ。彼はああ言った事が大好きですからね」

「だよな〜。にしても悠も酷いよな。フレンチのフルコースとか今から作れんのかよ？」

「心配無いでしょう。彼かタカト以外ではあんな事言いませんよ」

眼鏡を直しながらそんな事を言う。

シオンはこいつも変わらん、と内心で苦笑する。

一条悠一。

グノーシス・第四位の少年であり、シオンと同じ十八歳の少年である。

ただ、彼の場合は刃と真逆に歳より幼く見えたが。

眼鏡を掛けていることもあり、歳より若く見えるのである。

そんな彼の使う魔法は、ある意味に於いて刃並に特殊だ。

フォニム式。

悠一が”自ら組み上げた”新たな術式である。

一条家は代々冥界と対話する能力を有していた。  
その代表例が悠一の姉。エリカ嬢の冥界降誕であろう。  
彼女は冥界そのものとの対話が出来る。

だが、悠一は冥界と対話する事が叶わなかった。

故に、近接戦に於けるカラバ式を一時期極めんとしていたのだが。  
悠一には、冥界とは別の存在と対話する能力があった。

世界の音界、である。

と、言っても悠一自身。それが何の役に立つのか分からずに魔法  
として使う積もりも無かったのだが、ある存在により、その考えが  
劇的に変えられてしまった。

それが、当時。エリカの下で執事バイトをしていたシオンの異母兄。伊  
織タカトである。

彼の使う八極八卦太極図を見た時、悠一の中で閃いたのだ。

今までの魔法でこの能力を使え無いなら、新しく術を創ればいい  
じゃないか、と。

普通ならば、そんな考えに至らないのだが、悠一は至ってしまった。  
た。

そうなった以上、悠一の行動は早かった。

術式の組み上げ、数式の計算、音界の組み込み。

それ等を二年半の歳月を掛けて、漸く完成したのが、フォニム式  
なる術式であった。

だが、この術式は音界との対話が可能と言うのが前提条件となっ  
ている。

つまり、悠一以外に使用出来る者がいないのだ。

結局の所、フォニム式は固有魔法術式としてグノーシスに登録さ  
れてしまった訳だが。

そして彼の使うデバイスも、また変わり種である。大鎌型のデバイス、月詠。

カラバ式での使用を前提として造られたデバイスなのだが、悠一自身の考えにより、ベルカ式のカートリッジ・システムを搭載している。

これは、魔法行使に於ける、瞬間的な爆発力を悠一が求めた結果であった。

結局、術者である悠一も、そのデバイスたる月詠も一風変わった存在となったのであった。

さて、そんな彼の性格はと言うと。

「そう言えば悠。お前、朝一でトランペット吹く悪癖直ってねえの？」

「おや、悪癖とは失礼ですね。優雅な趣味と言って下さい♪」

「……それが、朝も早くの4時くらいから吹かんかったらな……」

「いいじゃないですか♪ 朝から爽やかな目覚しになって」

「……つまり、止めるつもりは無いと？」

「はい♪」

朗らかに、告げる悠一にシオンは嘆息。

これからアースラでも朝一にアレで起こされるんだなと遠い目になる。

嗚呼、戻らぬ日々（目覚まし時計の音）よ……。

そんな事を思いつつ、しかし目覚めし時計の音では起きれないシ

オンにはちょうどいいかもしれない。

……他の者にとってはひたすら迷惑だが。

詰まりは、これが悠一の性格である。

礼儀正しく、根暗なイメージがあるだろうが、その本質はリクに負けず劣らずの暴虐さんなのであった。

礼儀正しい以上、尚更厄介とも言える。

「まあ、悠ちゃんだし。仕方ないよ。シオン」

「……そうな。で、アスカ。お前も肉好きは変わらんよな」

何気に刃にお肉がいと、リクエストしていた黒髪のポニーテールを見て、シオンは嘆息する。

それに、アスカはにぱつと笑う。

「でも、シオン。足動かないなんて、可哀相だね」

「……そうな」

いつだ？ いつ来る？

ニコニコ笑うアスカに、シオンは内心怯えながら、返事をする。

聖徳アスカ。グノーシス第四位。リクと同じく十六歳の少女である。

彼女は、グノーシスの中では割りと珍しい、父親からの継承という形でグノーシス・メンバー入りをした少女であった。

尤、親の七光りなんぞでは無く、下からの叩き上げで第四位まで上り詰めた少女である。

使用術式はカラバ式。

タカト以外では比較的になり手が珍しいとされる格闘士であった。

その流派は聖鳳拳技。

シオンが使う神覇ノ太刀と並んで、歴史が割りと深い流派である。故に、こと拳技に於いては現在。

グノーシス・メンバーの中では最高クラスの使い手であった。

ただ、彼女は一つ問題点がある。  
それは。

「シオンさあ。おトイレとかどうするのかな〜？」

「……何とかする。気にする必要無えだろ？」

来たか……！

シオンは彼女の笑顔が、ただの無邪気の表れで無い事を存分に知っている。

背を汗が伝う感触を自覚しながらも、シオンはアスカに目を向ける。

それにアスカはニパツと笑い。

「でも、それならこれ。入れた方がいいよね♪」

そう、言いながらアスカが手に持つのは透明な管である。  
スバルやティアナは後ろで？と疑問符を浮かべているが、シオンはそれが何かを知っている。

カテーテル。



医療器具の一種であり、詳しい説明は避けるが、用はトイレを自力で出来ない”男。少用”の代物であった。

何をどうするのかは詳しく聞いてはいけない。

お父さんやお母さんに聞くと殴られるので気をつけよう。

なお、”装着”に凄まじい激痛を伴うのだが、ここでは割愛する。

シオンはそんなモノを手にとって朗らかうに笑うアスカを怯えを隠しながら睨む。

「……尿瓶があんだろ。尿瓶がよ……」

「うん♪ ベットの下にね。下半身が動かないシオンがこれ取れるかな〜♪ ……もし、お漏らしなんかしちゃったら……。一生、漏らしへタレって呼ぶからね♪」

「ぐ……っ！」

そう呼ばれる自分を想像して、シオンは悔し気に歯を噛み締める。そんなシオンにアスカは恍惚な笑顔を浮かべる。

そう、彼女は真性のドSなのだった。

「……ウィル。悪いけど、尿瓶。上にあげてくれるか？ 絶対にアスカはやらないし。寧ろ、遠ざけて喜ぶタイプだし」

「……今だけは、素直に手伝ったるで……」

シオンに同情の視線を送りつつ、ウィルが尿瓶を上にあげる。それを見遣りホッとしがら（アスカは残念そうに）シオンは横に立つ2人を見る。

出雲ハヤト。風千尋の二人を。

「……ども、ス。ハヤトさん。千尋さんも……」

「おう。シオンも元気そうで何よりだな。しかし、下半身が使えねえってのは辛いよな……」

まあ……、と苦笑しながら頷くシオンにハヤトが顔をくつつけば  
ばかりに近付ける。

それに怪訝な表情を浮かべるシオンへハヤトはニンマリと笑う。

「だよなあ。で？ 夜とか寂しいだろ？」

「は？ 何で夜なんスか？」

「決まってるじゃねえか。この女の園！ お前もいろいろ夜なんか  
大忙しだ……」

一戟！一

ハヤトの言葉は最後まで告げられなかった。

190cmはあろうかと言う巨体が、盛大にすっ飛ぶ。

一破！一

その身体は医療部の壁を突き抜けて、上半身がめり込んだ状態で  
停止した。

「……………千尋さん？」

「何かしら？ シオン？」

ロストウェポン。ガングニールを横に振り放った姿勢で千尋はニ  
ツコリと笑う。

それにシオンは顔を青ざめながら首を振った。

出雲ハヤト。風千尋。

グノーシス第三位の二人である。

二人共、ロストウェポンの持ち主であり、相応の実力を持つ。  
尚、二人共使用術式はカラバ式である。

性格については、もはや言うまでも無い。

ハヤトと千尋でドツキ漫才が当たり前であった。

ちなみに二人共21歳である。

「ち、千尋。お前！ 最近ツツコミ厳しすぎやしねえか！？」

むくりと起き上がるハヤトに絶対零度の視線を千尋は送る。

「あんた。人より数倍、頑丈なんだから大丈夫でしょ？」

「あのな……。 GANG ニールでぶん殴られたらタンコブが出来るじやねえか」

タンコブで済むあたりハヤトも大概、常人では無い。

そんなハヤトに千尋ははあと嘆息する。

「あんたね。十八歳未満のお子様にならない事吹き込んでんじやないわよ」

「……後三日で十八ですけどね」

## 一閃一

シオンがギギッと視線だけを横に向ける。

そこには、何の予備動作も無く突き放たれたGANGニールの穂先

がベットに突き立っていた。

「ごめんね、シオン。お姉さん。今の聞こえなくて。……で？ 何か言ったかしら？」

「何でもございません」

即座にシオンは屈服する。

誰だって、下手な反抗をして蜂の巣のように穴だらけにはなりたくは無い。

「ならいいのよ。……さて、ハヤト。行くわよ」

「千尋がだんだんと凶暴になっていく……ふぐお！」

鳩尾に踵を叩き込まれ、ハヤトが息を詰まらせる。

千尋は崩れ落ちるハヤトの襟首を引っ掴むと、ズンズンと大腿で医療部を出て行った。

『……………』

一同、そんな二人を見遣りながら少し沈黙し。

「あー」と。スバル、ティアナ。皆の紹介してなかったよな？ 大半出て行っちまったけど……」

「あ、大丈夫。シオンが寝てる時に自己紹介して貰ってるよ」

スバルの返答に、シオンは、そかと頷く。

そのままティアナへと視線を向けた。

「今、どうなってるのか、聞いてもいいか？」

「……そうね。て、言うか。それを伝えに本当は来たんだけど」

苦笑する。

そんなティアナにシオンは半眼になる。

「……なのに、俺をぶっ飛ばしたのかよ？」

「「あれは、シオン／アンタが悪い」」

逆に怒られる。

シオンはそれにむうと呻き。

みもりが隣で申し訳無さそうに縮こまる。

「……まあ、いいわ。あれで気も済んだし。話してあげるわよ」

「……おう」

内心ホツとしながらシオンは頷く。

ティアナはそれのため息を吐き。

「まず、アースラだけど。まだクラナガン上空で待機中よ。クラナガンは半壊。……下手したらJS事件並の被害らしいけど」

『はははははは……』

最後の被害の所で居残ったグノーシスメンバーが渴いた笑いを浮かべる。

建築物等の被害の一翼を彼等が担っていたのは言うまでも無い。

「死傷者は現在調査中。管理局地上本部は復旧・救助作業に追われているわ。……私達もさっきまで手伝ってたんだけど」

「……災害担当課やレスキューが来て、交替させられちゃった」

スバルが少し悲し気に呟く。

彼女からすれば、救助に手を貸したかっただろうが、災害担当課やレスキューからすれば、今は所属が違う。

しかも先程まで戦っていたスバルを使う訳にもいかなかったのだろう。

ティアナが、そんなスバルをちらりと見て続ける。

「一応、明日から八神艦長が救助補助の許可を取る、て。現場検証も含めてアースラは救助部隊に加わるわ」

「そか。……悪い」

シオンが目を細めて、二人に謝る。

既に修復が始まっているとはいえ、明日でリンカーコアが修復出来るとは思え無い。

そんなシオンに二人は微笑む。

「アンタの場合は仕方無いでしょ？ ……無茶し過ぎなのよ。アンタ」

「そうだよ。これで少しは懲りないとダメだよ？ シオン」

「……そうな」

苦笑する。

確かに、こんなギリギリの綱渡り。そうそう成功するものではない。

今回は運が良かったに過ぎないのだ。

「……ん。マジにごめん。……それにありがとうな。アヴェンジャーから戻してくれて」

「……礼を言うくらいなら反省しなさいよ」

「……うん」

素直に頷く。

実際、二人が来なければまた暴走していたのは確実なのだ。謝っても、謝りきれない。

思い出すのはさつき見た夢。刀を捨てた記憶だ。

「……強く、ならなきゃな。アヴェンジャーに頼らないくらいに」  
「……大丈夫だよ」

一人ごちるシオンにスバルが微笑む。

それは、いつかココロの世界で見た笑顔だ。  
微笑みながらスバルは続ける。

「シオンは絶対強くなれるよ。だってシオンだもん」  
「……何の根拠もナシかよ」

苦笑する。

根拠が無い、断言。

しかし、スバルに言われると、少しやれそうな気になる。  
強くなれそうな気がするのだ。

「ん。……強くなろうぜ」  
「うん！」

えへへと笑うスバルにシオンは微笑む。

この少女が信じるなら自分は強くなれると自分も信じようと。  
そう、思う。

と――

「痛たた……！」

「シオン？」

いきなり顔を歪めるシオンにスバルがキョトンとなる。  
シオンの左手が抓られていた。  
抓っている手の主は、みもり。

「な、何するんだよ、みもり……？」

「知りません……！」

ぷいと、そっぽを向かれる。

「抓られたくらいで大袈裟なのよ、アンタ」

「ティ、ティアナ？」

更にティアナからも冷ややかな目を向けられ、シオンは冷や汗をかく。

何で二人共、いきなり不機嫌になったのかしらん？

そんな風に冷や汗をかきながら疑問符を浮かべるシオンに、幼なじみたるウィルとカスミを始めとした一同は。

駄目だ、こいつ。と肩を竦めた。



その後、雑談等に花を咲かせていたシオン達は、刃からの念話で晩ご飯が出来た事を知ると、食堂に向かった。  
ちなみに、シオンは車椅子である。



車椅子の後ろを誰が押すかで、ちょっとした騒ぎになりかけたものの、シオンがウィルに平身低頭頼み込み、事無きを得たのは余談である。

「……つ、疲れる……」

「……羨ましい悩みやな」

車椅子で心底ぐったりと疲れ果てていたシオンの声にウィルが若干の哀れみを視線に込めて、笑う。

その後ろで、スバル、ティアナ、みもり、カスミが早くも打ち解けたように軽く笑い合いながら歩く様を見て、シオンは再度ため息を吐く。

みもりがシオンの世話を焼きたがるのは昔っからで、今もそうだ。故に、車椅子の後ろを押すのも、最初はみもりが立候補した。それに待ったをかけたのが、スバル、ティアナである。

シオンは、女の子の笑いながら放つプレッシャーがどれだけ恐ろしいのかを再認識する羽目になったのは言うまでも無い。

なら仲が悪いのかと思いきや、そうでは無く。早々と友達となっていた。

「……ウィル……」

「ん」

気軽な返事をするウィル。……何故か楽しそうなのは気のせいなのか。

に、シオンはふ……。と、視線を遠くに遣る。

「……女の子、て謎だよな」

「お前にとっちゃ永遠の謎なんやろな〜」

間延びした声で答えるウィルに、シオンは再度ため息を吐き。  
ウィルに押されて食堂へと入った。



美味しそうな匂いが辺りに漂う。

食堂は今、様々な料理が所狭しと並んでいた。

そんな、食堂にアースラ前線メンバーと、グノーシス・メンバーが一部を除いて勢揃いしていた。

「俺が端正こめて作った料理だよく味わって……」

『おかわり!』

「だから聞けよ人の話し!　そして、なんぼなんぼでも早過ぎるわ!?!」

即座におかわりを告げる、スバルとエリオ。そしてノーヴェ。ギンガにシオン。グノーシスメンバー一同。

周りが、あまりにも旺盛過ぎる一同の食欲に引き攣った笑いを浮かべている。

『お母さ〜ん。おかわり早く〜』

「……誰がお母さんか、誰が……」

『刃が』

「断言すんなよ!?!　間違ってるだろ!　いろいろと!」

しかし、文句を言いながらもご飯をよそい、おかずを新しく盛りつけるその姿は、まさによりよきお袋さんのだが。

気付いていないのは本人だけであった。

「いやゝゝ。黒鋼君、悪いなゝゝ。お客人に料理作らせてまうやなんて」

はやてが苦笑する。

アースラにも、勿論コックと呼べる存在は居るのだが、今回は刃一人でこの料理を作り上げたのだった。

刃は、そんなはやての言葉にハハ……。と、いろいろ燃え尽きたような笑みを浮かべる。

「……好きでやってる事だし、問題ない……」  
「そ、そか……」

その笑顔に何やら感じ入るものがあつたのか、はやてはそれ以上言葉を掛ける事を止めた。

「……に、……しても……エリオも……キャロも……良かったよな。……すぐに治って」

もりもりと親子丼を頬張る合間に（シオンは飯を噛んでいる時は絶対に話さない）話すシオンに、二人は笑いながら頷く。

「実際刃さんが解毒してくれなかったら結構危なかったそうです」

「そかゝゝ。……刃には感謝、感謝だな。あ、刃。おかわり」

「あ、僕もお願いします」

「……今、目茶苦茶理不尽な事されている気がするんだが、気のせ

いか……?」

嘆息しながらもシオンの親子丼を再度盛りつけ、エリオにもグラタンを差し出す。

二人はそれぞれ丼と、深皿を受け取るとぱくぱく食べる。

……キャロの横でフェイトが『シオンの影響かなあ……』と、エリオの変化に戸惑っているが、二人は気にせず食事続ける。

「あれ? そう言えば、シグナム副隊長とヴィータ副隊長は……?」

ふと、前線メンバーの人員が足りない事に、シオンが気付く。

シグナムとヴィータの姿が食堂には無かった。

シオンの疑問に、はやてが少し目を伏せる。

「ん。……ちょっと二人共、昼間の戦いで怪我してな? 今は地上

本部で治療を受け取るんよ」

「……そうスカ。いや、すみません……」

箸を止めて、シオンが頭を下げる。

はやては、それに微笑む。

「大丈夫や。二人共、命に別状は無いんやて。今は検査の為に、本部におるだけや」

実際、シグナムとヴィータはもう意識を回復しており、検査も残ろうとした八神一家を、『そんな事してる場合か』と、二人に帰されたのであった。

意外にも傷は浅かったり、致命的では無かったらしい。

「てな訳で、二人共大丈夫や。二、三日はベットに括りつけるけどな♪」

茶目っ気のあるウィンクで答えるはやてに、シオンはホッしながら笑う。

この分ならば、二人共。心配無いらしい。

安心して、再度親子丼にありつこうとして。

《……今回の管理局から反乱劇に、市民からは批難の声が叫ばれて……》

そんな、ニュースに箸を止める。

食堂のウィンドウには今日のストラとの戦いの報道が映っていた。いや、どのチャンネルでもこの報道しかやってはいないのだが。

そして映る、壊れた町並みに少しだけ、アースラメンバーの表情が陰る。

グノーシス・メンバーも少しだけバツが悪そうな表情となっていた。

「……いろいろ、壊れてもうたな〜」

「……うん」

「……そうだね」

隊長三人が、少し目を伏せる。

被害を最小限に食い止めようと、努力はした。

しかし、それで納得出来ないのは被害者達である。

彼等が望んでいるのは、努力では無く、結果なのだから。

故に、批難もまた。当たり前であつた。

とー。

ザザッと、ウィンドウの画面が乱れる。

それに気付いた一同が、怪訝な表情となり。

瞬間。

画面が完全に変わった。

ニュースの画面では無い。

そもそも、その画面に映っているのは。

《やあ、親愛なるミッドチルダの諸君》

「グリム・アーチル!？」

はやてが叫ぶ。

そう、そこに映っていたのは、昼間に退けたツアラ・トウ・ストラの一員。

グリム・アーチルに、他ならなかった。



《さて、私達ツアラ・トウ・ストラは時空管理局に宣戦を告げ。その意思を数時間前に示した訳だが。ミッドチルダの諸君も我等の本気を分かって貰えたと思う》

「……いけしゃあしゃあと……!」

平然と報道ジャックして、画像に映るグリムに、はやてが歯を食いしばりながら呻く。

怒りに拳を握り絞めていた。

《その上で我々は、ある人物を紹介したいと思う。我々の、指導者を》

「指導者……！？」

いきなり告げられるその言葉に、アースラ・メンバーだけで無く、グノーシス・メンバーも興味を示した。

何せ、元グノーシス・メンバーを引き抜いた人物であり。ストラの指導者と呼ばれる人物だ。  
気にもなる。

食堂に集まる全員が、ウィンドウに視線を集中していた。  
これから現れると言う存在に。  
そして。

《紹介しよう。我等の指導者。我等の主。そして、いつか全時空にその覇名を轟かせる者を》

恭しく、グリムが手を指し示す。

画面が移動し、暗闇を映す。

そこにあるのは、ただの暗闇だった。

『……？』

疑問を抱く一同だったが、次の瞬間。パツとスポットライトが灯った。

そして、その男を照らし出す。

『なーーーーー！？』

大音声が響く。

”シオンも含めた、グノーシス・メンバー”から。  
それに、アースラ・メンバーは怪訝な表情を浮かべる。

画面に映るのは壮年の大男だった。

2mを越える体格に、服の上からでも分かる程に筋骨隆々の男である。

逆立てた黒髪に、意外にも理知的な顔が特徴と言えば特徴か。

《紹介に与った。私がツアラ・トゥ・ストラの現指導者。ベナレス・龍だ》

一戟！一

轟音が響く。

それは、食堂のテーブルが砕けた音だった。

刃が、テーブルに拳を叩き付けた姿で固まる。

その視線は、ただ画面の男に注がれている。

シオンも、他のグノーシス・メンバーも、それに沈痛な表情を浮かべる。

一体。何が……？

そう思うアースラ・メンバーだが、その思考は中断された。  
”それ所では無くなったのだ”。



《まず最初に告げよう。時空管理局本局。これは今日、先程。”我等が占拠した”》

一瞬、その言葉をはやて達は理解出来なかった。

本局を占拠した……？

まさかとは思う。思う、が。

男が嘘を言っているとは思えない。

冷たい汗が一同の背を伝う。

《その上で告げよう。この映像を見ている全ての管理内世界の者達よ。……決めよ。我等の軍門に下るか、我等に滅ぼされるか。二つの内、一つを》

「……勝手な事を……！」

ぐっと、フェイトが歯を噛み締めながら呟く。

あまりにも勝手過ぎる言い分であった。

しかし、本局を占拠したと言う話しが本当ならば、その言葉も力を持って、通す事が出来る。

《我等に従う世界は共に覇道を歩む事を約束しよう。刻限は一週間だ。それが成されぬ場合、我等は全ての世界の制覇に乗り出す》

『……っ！？』

その言葉に、一同が震撼する。

一週間。

その後に、世界制覇を成し遂げると事もなげに言い放つ、ベナレ

スの言葉に。

つまりは、それ程の自信があると言う事なのか。

《返答を待つ。以上だ》

最後に、そう締め括り、画面はブラック・アウトする。

それに、一同沈黙した。

「黒鋼！」

コルトが叫ぶ。

しかし、刃はそれを無視して食堂から走り去った。

そのやり取りを見ながらも、一同はただ沈黙する。  
衝撃的。

そうとしか言えない宣言だったからだ。

アースラ・メンバーにとっても。

グノーシス・メンバーにとっても。

「……ベナレス……。あの人とは、な……」

「……知つとる人なんです、か……?」

コルトが顔を歪めて吐き捨てるように一人ごちるのを聞いて、はやては声を掛ける。

何せ、ストラの指導者である。

情報は少しでも欲しい。

コルトは一瞬だけ迷い。しかし、ため息と共に言葉を吐き出した。

「……グノーシス。元、第一位、だ」  
「グノーシスの……!？」

はやてを始めとして、一同が驚愕の視線をコルトに向ける。  
コルトは一同に頷き。

「通称、龍王。十年前までの第一位だった男であり、そして……」  
ちらりと刃が出ていった食堂の入口を見る。  
再度嘆息しながら、続きの言葉を紡いだ。

「……黒鋼の父親、だ」  
『……………え?』

はやてを始めとしたアースラ・メンバーは、告げられたそれに、  
言葉を詰まらせた。



日が沈んだ、クラナガン。  
それを、アースラから眺める者が居た。

シオンの相棒にして師匠。  
イクスだ。

その横に居るのは、銀の髪に、紅の瞳と、紅の装束を身に纏う女性であった。

彼女こそは、ウィルの愛機。

フェイル・ノート。通称フェイルであつた。

【いいのですか？ シオンについていなくて？】

フェイルから告げられる声にイクスは苦笑する。

それは分かっている癖にとの感情が込められていた。

彼のそんな表情に、フェイルはイクスを睨み据える。

【不完全なユニゾン。シオンが最終戦技変換たる完全なユニゾンを成し遂げられないのは、貴方の真名を知らないせいです。……それを分かっているのですか？ 貴方は？】

【……ああ】

理解している、と。短い言葉でイクスは告げる。

フェイルはなら、と声をあげようとして。

イクスに手で制された。

【フェイル。理解しろとは言わない。しかし、俺の口からそれは告げられない】

【……しかし！】

【フェイル】

声を荒げるフェイルに、イクスは再度首を振る。

フェイルはそれに悔し気に顔を歪める。

【……貴方は、いつもそうだ。そんな事だから”国に裏切られた”のに】

【……そうだな。だが、フェイルよ。俺は一切、後悔してはいない。お前達と戦い抜いた事を、俺は一切恥じてはいない】

【……っ！ ”アーサー・ペンドラゴン”！】

叫ぶフェイル。

しかし、イクスはただ首を振り続ける。

【かつての我が剣。”円卓の騎士が一人。トリスタン”。……お前の今の名前はフェイルだろう？ 俺もそうだ。今の名はイクスだ。その名で呼ぶな】

【……貴方は一体何がしたいのですか！ 名を告げず、完全なユニゾンも出来ない未熟な主を嘲笑うのが貴方の本望とでも言う積もりですか……！？】

ならば、とフェイルはイクスを睨む。

それは、かつての尊敬と信望があったからこそ生まれる怒りの表情であった。

【私は貴方を軽蔑し続けます……！】

【フェイル。俺を信じなくていい。……だが、シオンは信じてやってくれないか】

【何を……！】

怒り覚めやらぬ声を上げるフェイルに、イクスは顔を向ける。

それは優しい笑みで。

【……シオンは必ず、俺の真名に辿り着く。俺は信じている】

【……貴方は……】

【頼む】

イクスはフェイルに向き合ったまま頭を下げた。

それに、フェイルは言葉に詰まる。

かつての王が自分に頭を下げている、と言う事に。

【……わかりました。しかし、私は貴方を信じた訳ではありません……！】

【ああ、それでいい。シオンを信じてくれるのならば、それでいい】  
フェイルの返答に、イクスは頭を上げる。

そして、再びアースラの外へと視線を向けた。

【信じている。あいつが俺の真名に辿り着き、己の”刀”を抜き放つ日を】

【……イクス】

【俺は信じ続ける】

クラナガンに下りた夜の帳は深く、日の出にはまだ遠かった。

(第三十九話に続く)



パラリヤパラリヤパラリヤ~~~~~♪

ア

「はい♪ いろいろ動き出しまくる中、ここは相変わらずのアリサ道場~~~~♪」  
す

「前編と、後編で全然違うよね〜♪」

シ  
「そうっスね〜。に、しても俺。下半身不随、て」

ア

「……そうね。変態」

シ

「い、いやいや!? 何故に変態呼ばわり!?」

ア

「決まってるじゃない。みもりを喘がせたからよ」

シ

「ーて! いろいろ言いたいですけど、取り敢えず。EXは全年齢対象ー!」

美

「てい♪」

シ

「ぶくはっ!？」

す

「あ、美緒ちゃんだ♪」

ア

「久しぶりね〜♪ 女の子になってからは初めて？」

美

「うん、そうだよ。久しぶりだね〜。今日のゲスト。

魔法少女リリカルなのは〜FANTASY A CLUSTER〜  
ヒロイン、麻井美緒です♪」

シ

「ところで俺に砲撃を……?」

美

「……なんとなく、かな〜♪」

シ

「……でしょうね……。まあ、取り敢えず」

ア、す、シ

「「「完結おめでとうございます♪」「」」

美

「うん♪ ありがとう〜♪」

シ

「FACが終わってしまい、少しばかり寂しですが、なのランではまだまだ悪女っぷりを発揮してくれる事を祈ってます♪」

美

「……とう♪」

— 煌 —

シ

「ぐっはぁ……！ 次元具象は反則のような……」

美

「シオン君が何か言ったような気がしたけど、気のせいだね？  
で、シオン君は何を言いたかったのかな？」

シ

「美緒先輩は見目麗しく、内外共に比類無い完璧な女性でー」

美

「やぁ♪」

— 滅 —

シ

「ぎゃああああっす！？ 七つの美德は反則ーーー！ ガクっ」

ア

「あ、シオンの口から魂が……」

す

「ちなみに、今のは何で？」



美

「逆にウザくて♪」

シ

「なんじゃそりゃあああああああああああ  
!?!?」

ア

「はいはい。相変わらず復活が早いわね、と」

シ

「扱いが何だか、だんだん酷くなってないっすか!?!」

「慣れちゃったかな〜?」

シ

「……慣れた、て……」

美

「大丈夫だよ? 私は楽しいよ♪」

シ

「……吹き飛ばす当人なら、そりゃ楽しいでしょうよ……」

ア

「さて、では今回のおさらい♪ シオン宜しく♪」

シ

「完璧スルー、スね……。え〜。女性の胸は魔物です♪ 気をつけましょう♪」

ア

「……あんたね……」

す

「でも、確かにね〜」

美

「シオン君も男の子だね〜♪」

シ

「てか、わざとじゃない、と言っているのに、何で誰も信じてくれ

ないんだろう……?」

美

「で、どんな感触だったのかな?」

シ

「そうっスね〜。大きさは普通だったけど、こっポヨンポヨン、  
て言うか……」

ア

「……」

す

「……」

美

「……ふふ♪」

シ

「ち、違んスよオオ〜〜〜!」?

ア

「うん、変態はみんな、そう言うのよね。変態」  
す

「くじけちゃダメだよ? シオン君。変態だからってめげちゃ駄目  
だよ〜?」

シ

「……既に話を聞いて貰える気配も無いし」

美

「ふふ♪」

シ

「……やっぱり悪女だ……」

美

「シ〜オンく〜ん♪」

シ

「へ? て、ヴァルキリーいっぱいー!」?

ゴキ、メキ、グシャツ、ボキ、プチ、ズリユリユリユリユリ  
……！

ア

「……シオン。死んだかしら……？」

す

「でも、すぐ生き返るよ。シオン君だし♪」

シ

「とんでも無く嫌な信頼のされ方っスね！？」

美

「そこそこ本気でやったんだけど……。本当に不死身だね♪」

ア

「さて。シオンも蘇ったし、質問解答コーナー♪」

す

「久しぶりだね〜♪」

シ

「……嫌な予感がめっちゃするんですけど……？」

美

「楽しみだよね〜♪」

ア

「はい♪ では今回の質問♪ 『シオンの好みの胸のサイズはいくらですか？』」

シ

「ーー来いっ！ ヴォルーー」

美

「遅いよ♪」

がしっ

シ

「ぎゃああああ。嫌じゃあああああつ！　この質問！　どう答えても地獄確定じゃんかー！ー！？」

美

「ふふ♪　諦めちゃいなよ♪　アリサちゃん？」

ア

「さあ。特注の自白剤よ？　お注射しましょうね〜♪」

シ

「クスリは駄目！　絶対ダメエエエエエエエエエエ……！」  
うぐっ！」

す

「ああ、シオン君の静脈に直接注射を……！」

美

「さあ、シオン君♪　吐っき、吐っきしましょうね〜♪」

シ

「うう……」

ア

「さあ、シオン♪　答えなさい？　アンタの好きな胸は？」

シ

「……お、俺の好きな胸の大きさは……」

ア、す、美

「「うんうん♪」」

シ

「……ちよつと大きめが好きです……」

ア

「あ、やっぱり？　なのランで出たアサギちゃんが子供っぽそうだったからね。……で、具体的には？」

シ

「……で、Dくらい……」

す

「あ、結構大きめが好きなんだね〜」

美

「EとかFじゃなくて、あえてDな辺りがシオン君らしいね？」

シ

「ぐふう」

ア

「あ、潰れた。……まあ、かなり強い葉だったし、仕方ないわね」

す

「そうだねえ〜」

美

「参考になったな〜」

ア

「さて、では今日はここまで♪ ではでは謝辞を♪ 皆様いつも愛読ありがとうございます♪ ついにEXのPV数。80万を越えました♪ 100万越えも、もうすぐです♪」

す

「本当、早いよね〜♪」

美

「長寿小説は凄いいね」

ア

「て、言っても半年だけどね。これから頑張ってくださいるので、応援宜しくお願いします♪ ではでは」

す、美

「「また次回〜♪」」

シ

「クスリは……。クスリは絶対、ダメ……。ガクリ」

（終幕）

第三十八話「交差する想い」(後編) (後書き)

「本局を占拠し、次元進攻の準備を行うツアラ・トウ・ストラ」

「それを食い止める為に、そして本局を取り戻す為に。アースラは次元航行艦隊と合流する」

「そしてシオンの誕生日に、本局直前での決戦が行われる」

「初めての無重量空間戦闘に、アースラ・メンバーは……」

「そしてシオンは、果たして出撃出来るのか」

「次回。第三十九話。『最悪の誕生日』」

「忘れられし巨神が目覚める」

### 第三十九話「最悪の誕生日」 (前編) (前書き)

「誕生日。それに、俺はあまりいい思い出が無い」

「何かとあっちゃあ忙しい家だったし、それに誕生日に限って事件が頻発したから」

「だから俺は、あまり自分の誕生日が好きになれなくて」

「……でも、嫌いにもなれなくて」

「魔法少女リリカルなのはS t S', E X。始まります」

### 第三十九話「最悪の誕生日」(前編)

時間はクラナガンでの反乱まで遡る。

時空管理局本局。

そこで、十数隻からなる次元航行艦隊が出撃しようとしていた。

向かう先はミッドチルダ。

反乱者たるグリム・アーチルを捕らえる為に、本局の次元航行艦隊は出撃したのである。

ミッドチルダ地上本部と何かと摩擦が多い、本局側からの次元航行艦隊の派遣は。

それこそ両者の溝を深める事にも成り兼ね無いのだが、今回はそうも言っではいられなかった。

何故ならば、グリム・アーチルは本局の人間であり、そして。次元航行艦。レスターシアの提督なのだから。

本局から出航し、ミッドチルダへ向かう艦隊を見ながら、リンディ・ハラOWN総務統括官は深くため息を吐いた。

「どうしたの？ 貴女がため息なんて？」

背後から声がリンディへと掛かる。

細い眼鏡を掛けた女性だ。

名をレティ・ロウラン。



アースラ副艦長である、グリフィス・ロウランの母であった。

リンディは、背後のレティに微笑すると、またモニターに目を向ける。

「……今回のミッドでの反乱。既にアースラ・メンバーは戦ってるんですってね……」

「ええ。……それに。さっきの宣戦を告げた人が、ね……」

レティに頷きながらリンディは目を伏せる。

グリム・アーチル

その名はリンディにとって特別な意味を持つ名であった。

「……グリム・アーチル。……クライド君の元部下だった人よね？」

「……っ。レティ。知っていたの……!？」

驚きに目を見張るリンディに、レティが苦笑する。

彼女がそれを知っているとは、リンディも知らなかったのだ。

「当たり前でしょう？ 彼の事は私も覚えてるわ。……クライド君の後ろにいつも着いて来てた子なもの」

「そう、よね……」

そう、グリムはよくクライドに懐いていた。  
心酔していたと言っても過言では無い。

だが……。

「……彼が今回の反乱の一翼を担ってるだなんて、ね……」  
「ええ……。あの事件から姿をあまり見なくはなっていたのだけ  
ど」

あの事件。

つまりは闇の書と共に、クライドが逝ってしまった事件の事だ。

あの後。本局の考え方に絶望した彼は本局を離れ、ミッドチルダ  
地上勤務になり。

五年程前に、本局に再び戻って来たのだが……。

「……少し、彼の経歴ついて調べたのだけど、ね……」  
「？ レティ……？」

レティの表情が陰ったのを見て、リンディが疑問符を浮かべる。

その彼女に、レティはポンッと軽く、何かを放る。

それは、情報端末であった。

「これは？」

「いいから、見てみなさい」

怪訝な顔になるリンディに、レティは情報端末を見るように促す。  
それに、訝しみながらもリンディは情報端末を開けて、表情され  
る情報を読み。

その顔から血の気が引いた。

「……これは、本当なの……？」

「……ええ、本当よ」

頷くレティに、リンディは顔を歪める。

情報端末には、グリムの経歴の一つが記されていた。

ミッドチルダ地上航空部隊、分隊長。

”ティード・ランスターの直接の上司”。

そう、書かれていた。

「……彼の宣言。管理局の人間や、ミッドチルダの住人全てを憎むような発言は……」

「……多分、ね……」

頷くレティに、リンディは目を細める。

繋がった。

他の人間はともかく、グリムの反乱の動機が見えてしまった。

つまりは……。

瞬間。

モニターが激しく輝いた。

「え……!？」

「なに……?」

モニターから目を離していた、二人も突如として起きた、事態にモニターへと目を向ける。

—爆—

その直後、二人がモニターで見た先が”爆碎”した。激しい輝きと共に、空間が巨大な爆発に包まれる。それは一つの結果を齎した。

即ち。

出航した、次元航行艦隊の消滅である。

中に居た搭乗員と共に、全ての次元航行艦は消滅していた。

「うそ……!？」

「つ……。官制室! 状況は……!？」

いきなりの事態に、本局に居る人間全てがざわつく中で、リンデイは即座に官制へと通信を繋げる。

状況の把握の為に、だ。  
返答はすぐに返って来た。

《は、はい……！ 出航した次元航行艦隊は完全に消滅！ 原因は不明です！》

「なんてこと……！ 生存者は……？」  
《絶望的、です……》

くっ……！ と、リンディは呻く。

いきなりの次元航行艦隊の消滅。

しかも、何が起きたのか原因は不明と来ている。

ここまで馬鹿な話しも無い。

「取り敢えず、私とレティは官制室にー」  
《は、はい……？ え？ て、転移反応！？ 本局直前に転移反応が……！》

続けられる言葉に、リンディは何も言わずに駆け出す。  
レティもだ。

分かっていた事だ。次元航行艦隊が消滅したのは事故なんかでは無い。

明らかに、何処からかの攻撃である。

ミッドチルダへと向かう艦隊への不意打ち。

いくら絶大な戦闘能力を持つ次元航行艦隊であろうと、咄嗟の不意打ちには対応仕切れない。

それを狙った誰かが、居る。

直後、” 声が響いた”。

《時空管理局本局の人員に告げる。我はツアラ・トウ・ストラが指導者。ベナレス・龍なり》

「「っー!」」

響く声に、リンディとレティは同時に絶句する。

声は当然、そんな二人に構わない。  
話しを続ける。

《現時点を持って、汝等の次元航行艦隊は消滅した。我が消滅させた》

「何です、て……!？」

次元航行艦隊を消滅。

そんな事が個人に出来る筈が無い。

しかし、個人ならずとしても。

それが出来るのならば、それ程の驚異も無い。

《その上で、本局の者に告げる。……投降せよ。我等に従わぬ場合は、” 本局そのものが、次元航行艦隊と同様の結末” を辿る事となる》

「何を馬鹿な……!」

「いえ、レティ。多分、彼等は本気よ……!」

叫ぶレティに、リンディは首を横に振る。  
恐らく。

いや、間違い無く彼等は本気だ。

でなければ、本局へと攻撃なぞ仕掛けては来まい。

《なお、本局を中心として次元封鎖を行わせて貰った。次元転移で逃げようなどとは思わない事だ。残り、5分以内に我等は本局内に突入、占拠を開始する。それまでに結論を纏める事だ》

「5分、て……！」

「交渉も何も受け付けない、て事……！？」

逃げ場も封じられ、対抗すべき戦力である、次元航行艦隊は消滅。本局の魔導師も、そのほとんどが次元航行艦隊と運命を共にした。つまり、今。

本局に彼等と対抗する力はどこにも無い、と言う事である。

「……リンディ。どうするの……？」

「……………」

その言葉に、リンディは何も答えられ無い。  
答えられる筈も無い。

そして、約束の5分は過ぎ。

時空管理局本局は、ツアラ・トゥ・ストラへ、降伏。  
占拠される事となった。



二日後。

ミッドチルダ上空に待機するアースラ。

その、ブリーフィング・ルームにて。

アースラ・メンバーと、グノーシス・メンバーは集まっていた。

「……皆、集まったな」

「うん」

「大丈夫だよ、はやて」

はやての言葉に、なのは、フェイトが頷く。

しかし、その中にはたった一人だけ人員が欠けていた。  
シオンである。

しかし、それには誰も、何も言わずに、話しは続けられた。

「先のツアラ・トゥ・ストラの宣言。本局の占拠はほぼ、確実にな  
つてもうた」

「……何故、それが分かる？」

声をあげるのは、グノーシス・メンバーの指揮官である、コルト  
だ。

珍しく煙草を控えている。

そんなコルトにははやては頷く。

「……この間の放送ジャック後、本局に次元航行艦が三隻程、本局  
に向かったんや。……で、その時の映像が”残されて”こちらに届  
けられたんや。……シャーリー？」

「はい」

はやてに促され、シャーリーが手元のコンソールを操作する。  
暫くして、ウィンドウが各人に展開する。



そして、映像が流れ始めた。

「これ……！ 人型のガジェット……！？」

「それだけじゃないわよ。例の因子兵も居る……！」

映像は、航行艦がガジェットと因子兵に襲われる所から始まっていた。

人型のガジェットは、クラナガンでの戦いの時の物より、より人型に近い形の物や、頭に巨大な砲塔をくっつけた物等、様々なバリエーションがあった。

それより一同を驚かせたのは因子兵である。

因子兵は全て、何かしらの鎧のような物を身に纏っていた。

「これ……。何か見覚えが……」

「デヴァイス・アーマーか。第二世代型を惜しみ無くとはな」

へ……？

と、アースラ・メンバーが疑問符を浮かべるが、グノーシス・メンバーは全員揃ってフムフムと頷いていた。

誰も説明しようとしなない。

「えーとやな。ゴメンやけど、そのデヴァイス・アーマー、て何やろか？」

「ん？ ああ、悪い。そうか、こっちには馴染みは無いな。簡単に説明すると、鎧型のデバイスだ」

凄まじく、簡潔にコルトが説明する。

それに、シャーリーと共に座っていたカスミがため息を吐き、コ

ンソールを操作。

情報を新たにウィンドウへと展開する。

「おう、これだ。これ」

「アンタ……。どんだけ適当なん……」

はやてが思わず額に手を当てる。

二日程しか、一緒にいないが、はやては一つ。コルトの性格を掴んでいた。

そう、コルトはともなく、面倒臭がりなのであった。

「まあ、固い事言うなよ。……で、これがデヴァイス・アーマー。通称、D Aな訳だが」

D A。

正式名称『デヴァイス・アーマー』

これは、宇宙空間等の、無重力、真空間での活動を想定されてグノーシスで作られたマルチ・フォーム・スーツである。

ぶっちゃけると、飛行型のパワードスーツであった。

デバイスの情報処理能力を併せ持った鎧、と考えると解りやすい。

この特性は、重力、慣性の操作を可能、バリア・ジャケットの特性を利用した、スキン・バリア・ジャケット皮膜魔導装甲を装備。

更に、真空間での活動を想定している事もあり、各種循環系。

特に、呼吸等の配慮も成されている。

等の無重力間での活動を前提としている事にある。

これは、第三段階に至ったの対感染者用の代物である。

何故ならば、第三段階の感染者は、空間にすら、感染する為だ。

故に、感染元の星で殲滅など望めず、その外。

つまり、宇宙空間での戦いを想定した装備がグノーシスで開発された訳だ。

第二段階ですら、空戦が最前提となる為、グノーシスの人間で空を飛べない者は必然。

これを着ける事になる。

「まあ、バリア・ジャケットの応用だから、俺等にはあまり関係ないんだけどな。俺等、全員空飛べるし」

「へ……？　なら、皆はこれ……」

「ウチ等は持っていないよ。バリア・ジャケットの設定やらを弄くったら済む話しやねん」

あつさりとコルト、楓がそう告げる。

だが、そうも行かないのが、アースラ・メンバーだ。

なのはを始めとした、隊長陣。そしてヴォルケン、Sはまだどうにかなる。

彼等のバリア・ジャケットの設定を応用して、循環器系の設定をしっかりとすれば済む話した。

しかし、そうも行かないのが、FW陣と、N2Rの面々である。

彼女達は須らく、空戦が出来ないのだから。

「うーん。どうしたもんか……」

「それについては問題ねえよ。カスミ」

「はい」

コルトに促され、カスミが頷くと、データチップをシャーリーに渡す。

「それは……？」

「ウチのボスからの『お土産』だと。陸戦用に、足裏に重力を発生させる概念魔法と、常時足裏に、足場を形成出来るバリア・ジャケツト設定を組んで来たそうだ」

コルトが事も無げに言う、が。

はやてはそれに黙り込む。

非常に用意が良い。

否、良過ぎる。

これでは、まるで。

「ウチのボスだが、……ほぼ間違い無く、今回の事を予見していた」  
「……やっぱりか……？」

はやての言葉にあっさりとコルトは頷く。

そうで無ければ、これだけの用意はしない事だろう。

詰まり、グノーシス第一位。叶トウヤは、最初っからこの事態になる事を想定していた事になる。

「……まあ、そこを今、追求しても仕方ないな。……全員戦闘可能、  
て事で話しをするで？」

はやてが一同を見回して、告げる。

それに皆、頷き。

はやては、隣の席に座る男に目を向ける。

クロノ・ハラオウンに。

「クロノ君。説明宜しく頼めるか……？」  
「ああ」

端的に答えて、クロノが席を立つ。  
同時にウィンドウに新たな画像が表示された。

「今回の件にあたり、各管理内世界に駐留していた次元航行艦が集結する運びとなった。その上でアースラもこの艦隊に組み込まれる。ここまではいいか？」

「……これは、管理局の次元航行艦全てなの……？」

なのはから質問が告げられる。  
それに、クロノは首を横に振る。

「答えは否、だ。……現在、本局を中心に次元封鎖が行われていて、それより向こう側”の座標にある各次元世界には、連絡も取れないんだ」

「……どうりでウチにも連絡が取れ無くなったと思ったら……」

コルトがそれを聞き嘆息する。  
それに、クロノも頷く。

「……そう言う訳で、現状。かき集められる戦力はこれだけしか無い。増援等は一切望め無いから、その積もりで居てくれ」

クロノの言葉に、各人頷く。  
それを見遣り、クロノは更にコンソールを操作する。

「今回の作戦は、フェイズ1として、向こうが次元封鎖領域ギリギリに展開した次元航行艦隊と、こちらの次元航行艦隊の艦隊戦だ。」

ただ、”アースラはこれに参加しない”」

「? どう言う事なの?」

クロノの言葉に、フェイトが怪訝な表情で尋ねる。

他の者も疑問符を浮かべる。

それにクロノは苦笑する。

「……アースラは、基本。アルカンシエル以外の武装は積んでおらず、装甲も薄い。艦隊戦にそもそも向いていないんだ。……その点も踏まえて、アースラには別命がある」

「別命……?」

スバルからあがる声にクロノは再度、頷く。

「ああ、フェイズ2だな。アースラは艦隊戦が始まった直後、その側面から速度を活かして。その向こう、本局に突入する」

「……て、おいおい。簡単に言っただけよ。これは……」

「……無謀もいい所、ですね……」

クロノの言葉に、ハヤトと悠一が苦笑交じりに告げる。

ようは、特攻しろと言っているようなものであった。

「アースラの最大速度と、機動戦力。つまりは、君達の力を買っての作戦だね。……確かに無謀だが、こちらの方が僕達に向いているだろう?」

「……まあ、否定は出来んなあ……」

はやてが苦笑する。

JS事件を始めとして、アースラ・メンバーはそんな傾向にあるのは否めなかった。

グノーシス・メンバーについては言わずもなが、だ。

「幸い、ストラは本局前には、艦隊を配備していない。全て、次元封鎖領域前に展開している。これは、次元転移による奇襲が無いと言う判断だろう。……その隙を突く」

「成る程、何も考えて無い、て訳じゃあ無いか」

コルトが苦笑し、頷く。

それに、クロノもまた頷いた。

「そして、フェイズ3。アースラは、本局到達後、敵機動部隊を撃破。その後、本局内に突入。ストラ・メンバー全員を拘束せよとの事だ。……なお、これについて。”生死は問わない” そうだ」

『……っ!』

アースラ・メンバーがクロノの最後の言葉に息を飲む。

生死問わず。その言葉に。

グノーシス・メンバーはと言うと、当たり前と言う顔をしていた。

「それを聞いて安心したぜ……」

「黒鋼」

突如として、刃が立ち上がる。

それに、コルトが諫めの言葉を吐くが、コルトは構わない。

「……どうしても殺したい奴がいるんでな。……提督さん。その言葉、信じるぜ?」

「……ああ」

刃の言葉に、クロノは無表情に頷く。

それを確認すると、刃は踵を返して、歩き出した。

「何処行くつもりや、刃」

「……これ以上、聞く事も無い。部屋で休ませて貰う」

そう、告げて刃はブリーフィング・ルームを出る。

コルトがそれにため息を吐いた。

「……すまん。奴も普段はあじゃないんだが……」

「いや、構わない。……彼については君達に任せるよ」

コルトの言葉に、クロノが頷き、そして一同を見渡す。

「……これで、作戦内容は終わりだ。……何か質問は？」

クロノの言葉に、各人挙手し、それぞれ質問を投げかける。

真空間戦闘におけるフォメーションや、各自の配置。

突入タイミング等の細々とした質問に、クロノは全て答え。

質問が尽きた後、頷いた。

「もう、質問は無いな。では、これで解散とする」

「あの……！ もう一つ、いいですか……？」

クロノの言葉に、スバルが立ち上がる。

それに、クロノは頷く。

「ああ。構わない。何かあるか？」

「その、シオンは今回、連れて行くんですか……？」



「それか……。はやて」

「……うん」

スバルの質問に、クロノがはやての名を呼ぶ。

それに、はやては嘆息して、スバルを見た。

「……シオン君は、今回連れていかん。クラナガンに残す。……いくら回復しとる言うても魔法が使えん、足も動かんあの子を連れてはいけん」

断言する。

そう、それがシオンがここにいない理由。

シオンは未だに、完全には回復していなかった。

簡単な魔法ならいざ知らず、戦闘用の魔法など、使える筈も無く。そして、半身不随も回復しているとは言え、未だに足はろくに動かないのだ。

そんな者を戦闘領域に連れていく方がどうかしている。

「……これは、決定や。シオン君にも伝えてある……」

「そう、ですか」

はやての答えに、スバルを始めとした一同は、複雑な面持ちとなる。

はやての言葉に安心して、しかし。同時に、シオンが居ない状況で戦う、と言う事態に少なからず不安を覚えたからだ。

なんだかんだ言って、アースラの面々にとって、シオンは精神的な支えともなっていたのである。

「さて。質問はもう無いな？　じゃあ解散や。アースラ発進は4時間後、それまで半舷休息にするな？」

一同の顔を見ながら、はやては告げる。

そして、それぞれブリーフィング・ルームを出て、解散となった。



「ああ、さっき聞いた」

開口1番。

見舞いに来たスバル達に、シオンは嘆息しながら、そう言い放った。

ミッドチルダ、地上本部。

その医療部に、シオンは移されていた。

「……シオン」

「……分かってたさ。今の俺がアースラに居ても、何の役にも立たない、て事くらい。……寧ろ、足出纏いだしな。……でも……」

シートを掴む、シオンの指が震える。

悔しさと、自身への怒りがないまぜとなって。

「……なんで、俺はこんな大事な時に……」

「……そうね。私達、大迷惑よ」

「ティア……!？」

呟く、シオンにティアナから容赦無い一言が飛ぶ。

それに、スバルが批難の声をあげる。  
しかし、ティアナは構わない。  
続ける。

「今回は諦めなさい。散々言っただけど、自業自得よ」  
「……ああ」

ティアナの言葉にシオンが力無く頷く。  
それをティアナは半眼で見遣り、言葉を紡ぐ。

「だから、今回はここに居なさい。……必ず、帰って来るから」  
「……ティアナ」  
「絶対に、皆で帰って来る。……だからアンタはここで待ってなさい。……いい？」

ティアナの言葉。  
それをシオンは反芻し、微笑笑する。

不器用な、その言葉に。

「ん……。悪い。……ありがとう……」  
「……っ！　　れ、礼を言われるような事なんてしてないわよ！」

笑いながら礼を言うシオンに、ティアナは若干焦りながら答える。  
それに、シオンは再度笑う。

「はは。うん。……今回はティアナの言う通り、ここで待つ。……俺の分まで頼むな？」

「うん……。頑張るよ」  
「任せときなさい。明日には帰って来るわよ」

「そか……。なら誕生日にはいい報告聞けるかな？」

シオンの言葉に、一同。疑問符を浮かべる。

それに、一緒に来ていた。ウィルや、カスミ。みもりが苦笑する。

「……そやったな。お前、明日が誕生日やったな」

「ああ。だから、誕生日に嫌な報告聞かせてなんかくれるなよ？  
ウィル」

ウィルの言葉に、シオンが頷く。

それに、一同頷く。

「任せて！ 必ず、シオンの誕生日に帰って来るなら！」

「……おう。期待して待ってる」

スバルの言葉に、シオンが頷き、来ていた皆の顔を眺める。

「……今回は、俺。何も出来ないけどよ。……皆。頑張って、必ず  
帰って来いよな」

「うん！」

「アンタに言われるまでも無いわ」

「シオン兄さんの分まで頑張ります！」

「シオンお兄さん、大人しくしてて下さいね」

「……ま。お前に言われんでも帰ってくるわい」

「……シン君。必ず、帰って来ますから……」

「ま、ゆっくりしてなさい」

一同がシオンの言葉に、頷く。

それに、シオンは顔を綻ばせ。

「ああ、約束だぜ？」

満面の笑顔を浮かべ、皆を送り出した。



アースラ、ブリッジ。

そこでは、各ブリッジ要員の声が飛び交う。  
出航間近の為だ。

魔導炉のチェックに始まり、気密のチェック等々の各チェックに、  
それぞれ追われる。

「……アースラ、最終チェック完了。全乗組員の乗船確認完了です。  
艦長」

「ん……。ありがとうな。グリフィス君」

「いえ……」

はやての言葉に、グリフィスは頷き。後ろに下がる。  
その表情は若干陰っていた。  
当然とも言える。

彼の母親であるレティは、本局に居る筈なのだから。

その安否が気にならない筈は無い。

「クロノ君、こっちは準備完了や」

「ああ。了解だ」

はやての言葉に、ブリッジに詰めていたクロノは簡潔に答える。

クロノもまた顔には一切出さないが、リンディの事を心配している筈であった。

それに、リンディだけでは無い。

本局には、クロノの乗艦。クラウディアの乗組員も居る筈であった。

心配にならない筈も無い。

だが、彼はそれを一切表情に出さない。

出しても意味が無い事を承知しているのだ。

「……強情っ張りやなあ……」

「? 何か言ったか?」

呟くはやての声が聞こえたのか、クロノが不思議そうな顔で問う。それに、はやては『何もあらへんよ』とだけ答えた。

下手に何かを言うのも野暮である。

そうはやては思い、一人頷く。

「……よし。シャーリー? 艦隊の集結地点の確認は大丈夫かな?」

「はい。集結時間の確認もオッケーです」

「ん。ルキノ。アースラ、いつでも行けるな?」

「はい! 大丈夫です!」

官制担当のシャーリー。操舵担当のルキノからの返答に、はやては頷く。

そして、副官のグリフィスとクロノを見遣り。

二人が頷いたのを確認する。

「よし……。準備はオッケーやな。シャーリー。艦内放送をこっちに」

「はい」

頷き、コンソールを操作。はやてへと回線を回す。  
それをはやては確認して、マイクをOnにした。

《八神はやてからアースラ搭乗員の皆さんへ、放送です。……今からアースラは、発進。そのまま集結艦隊に合流して、本局に向かいます》

予定を告げるはやて。

それを、皆黙って聞く。

《恐らくは時空管理局創設以来、初めての艦隊戦であり。そして、戦いとなります。……かつてない厳しい戦いになる。それは、間違いありません。でも》

一旦、そこで言葉を切る。

ぐつと息を飲み、続きの言葉を告げる。

《でも、皆。必ず、この戦いも乗り切られる。そう、私は確信しています。……皆、強いんや。自信を持っていこうや》

はやては微笑む。

そう、JS事件も、感染者を始めとした事件も乗り切る事が出来たのだ。

今回も乗り切れない筈が無い。

《皆を私は信じてます。やから、皆も私を信じて下さい。……そして、必ず本局を、大事な人達を取り戻そう。……以上!》

そこまで言っではやてはマイクを切る。

そして、ブリッジの各員に向かい、声を放った。

「アースラ、発進!」

『了解!』

一同、一斉に頷く。

かくして、アースラは集結艦隊へと合流を果たすべく、ミッドチルダから飛び立った。

大切なモノを取り戻す為に。

だが、彼等は知らない。

本局に何が待ち受けているかを。

この時点で知る筈も無かった。



時空管理局地上本部、医療部。

その一室で横になるシオンは暗闇の中で窓の外を見ていた。

既にアースラは発進し、集結艦隊へと合流している筈である。



そして、数時間後には戦いが繰り広げられる筈だ。  
それを想像し、シオンは顔を歪める。

その戦いで、皆がどうかなってしまったら、どうしよう。  
そう、思う。

そして、そんな時にやはり動けない自分がどうしようも無く、腹  
立たしい。

自分が居れば、どうにかなる場面があるのでは無いか？  
アースラ・メンバーや、グノーシス・メンバーの実力を疑っては  
いない。

しかし、それでも――。

「嫌な予感がする、か？」  
「っー！？」

いきなり掛けられた声に、シオンの身体が跳ね起きる。  
腰までは感覚が復活している為、上半身が起こせたのだ。  
しかし、この声は……！

「……何でアンタがココに居るっ！ タカ兄い……！」  
「昼間に来る訳にはいかんだろう？ 俺がここに来るのはな」

そう、声の主はシオンの異母兄。  
そして、敵でもある存在。  
伊織タカトだった。

彼は、シオンの元に近づき、隠されていない左目でじろりと見据

える。

「ド阿呆が。過ぎた力を使おうとするからそんな目に合う」  
「ぐ……っ！」

きっぱりと断言するタカトに厭味か！　と言いつ返し返そうとして。  
煌めく右手の666の魔法陣に気付いた。

「て、何す……！？」  
「黙っている。阿呆」

—煌—

瞬間、シオンに虹色の光が放たれ、その胸に吸い込まれた。

「っー！」

シオンは思わず、目を閉じ。  
しかし、何も起きない事に目を見開いた。

「……これで良し。足を動かしてみろ」  
「へ……？　て、アレ！？　動く！」

言われた通りに足に力を込めると、あっさりと動いた。  
感覚も元に戻っている。

「な、何で……？」  
「お前の足の麻痺を”略奪”した。……そこまでだがな」

事も無気にタカトは呟く。

それに、シオンは呆然とし、しかし胸に手を当てた。

「じゃあ、リンカー・コアは……」

「そっちは俺の力ではどうにもならん。……魔法は使えるだろうが、使うのならば、相応に覚悟しろ。……最悪、アサギさんと同じ事になる」

リンカー・コアは治っていない。

それに、シオンはくつと顔を歪める。

思い出すのは、母アサギだ。

彼女は、リンカー・コアを破損し、魔法が使え無くなってしまった。

「……それでも行くか？」

「……俺は……」

迷う。

皆を追って、行くべきか、否か。

しかし、数秒の迷いを持って、シオンは決めた。

タカトに頷く。

「……行くよ。皆を守りたいから」

「そうか。なら、急ぐ事だ。最悪、”間に合わなくなる”」

タカトの言い回しに、シオンは疑問符を浮かべる。

何が、間に合わなくなると言うのか。

「今回の戦い。確実に、管理局側が負ける」

「な、に……？」

一瞬、タカトの言葉が理解出来ずに、シオンは言葉に詰まる。  
それに、タカトは構わない。  
続ける。

「ストラとか言ったか？ 奴等は、少々厄介なモノを手にしている」  
「……何をだよ」

シオンはタカトを睨みながら問う。  
それに、タカトは無表情のままに、告げる。

「“巨神”だ」  
「？ 巨……？ ……っ！」

一瞬、放たれた単語を理解出来ずに、シオンは疑問符を浮かべ。  
しかし、瞬時にその単語の意味する所を察知し。  
凍りついた。

巨神。  
それを彼が意味する所は一つしか無い。  
それは……！

「対界神器……！」  
「そう言う事だ。ではな」  
「っ……！ 待てよ！」

あっさりと帰ろうとするタカトをシオンは留める。  
どうしても問わねばならない事が一つだけあるのだ。

「何で、アンタが俺を、アースラを助けるようなマネをする……！」

そう、それを問うて置きたかった。

タカトはあくまで敵の筈だ。

今回、シオンやアースラを助ける意味は無い。

なのに、シオンの足を治した。

それは、あまりに不可解な事である。

タカトはシオンの問いに少しだけ視線を巡らせ、そして。

「借りがある」

それだけを言い放った。

「借り……？」

「なのはとフェイト・T・ハラオウンにな」

「は……？」

またもや、シオンの頭の上で疑問符が踊る。

あの二人に一体何の借りがあると言うのか。

それに――。

「……なのは先生、呼び捨て？」

「気にするな。いつか、呼び捨てでは無くなる予定だ」

「は？」

タカトが何を言ってるか、全く理解出来ずにシオンは目を丸くする。

それにタカトは嘆息する。

「……ではな」

「て、ちょっ！ 待っ……！」

待たなかった。

タカトの姿が一瞬で消える。

縮地を使い、消えたのだ。

「……訳分からん……。けど……！」

シオンはぐつと眉根を寄せる。

そう、タカトが寄越した情報はあまりに大きい。  
今すぐにでもアースラに伝えねばならない。

とりあえずは。

「……イクス、何処行っただ、アイツ……」

昼間は居たくせに、今はいない相棒を探すべく、シオンは病室を出た。

（中編に続く）

### 第三十九話「最悪の誕生日」 (前編) (後書き)

はい♪

テストメントです♪

第三十九話 (前編) をお届けします♪

で、プロットの段階で文字数が笑える事になったので (汗)

今回は最初っから3部作構成です (笑)

……いや、本当すみません (汗)

次の更新も早めに頑張ります♪

では♪

第三十九話「最悪の誕生日」 (中編) (前書き)

……はい♪

いろいろありながらも、漸く中編をお届けです♪

取り敢えず、一言。

艦隊戦で、難しいって……。

アースラ参加して無いし……。

では、どうぞ……♪



### 第三十九話「最悪の誕生日」(中編)

アースラブリッジ。

そのモニターで、八神はやては、モニターに映る存在を見ていた。

次元航行艦隊。

JS事件時とほぼ同数の数が、モニターに展開している。

「八神艦長。艦隊との合流、完了しました」

官制のシャーリーからの報告にはやては『そか』と頷く。  
その胸中にあるのは、これから起きる戦いについて、だ。

戦争。

言葉に出さなくても、そう思わざるを得ない。

皆も分かっている。

これから起きるのは、”人同士”の殺し合いである戦争だと。

それである艦隊戦には、直接参加しないとは言え。はやてからしてみても他の皆からしてみても、拒否反応が出る。

当たり前と言えば、当たり前である。

多数の事件を解決した事はあれど、彼女達は直接人を殺すような真似はしたことは無いのだから。

だが。

「……戦争、か……」

「艦長？」

「いや、なんでもあらへんよ。……シャーリー。旗艦に通信、繋げてくれるか？」

「はい、了解です」

シャーリーの指がコンソールの上を躍る。

数秒の間を持って、ウィンドウがブリッジに展開する。

それに映るのは、壮年の男だった。

《艦隊司令のカール・グラマンだ。……アースラが合流したか。……

……久しいな。八神》

「はい。アースラ艦長の八神はやてです。……お久しぶりです。カール提督」

はやては微笑しながらカールに頷く。

カール・グラマン。

時空管理局の古株であり、リンディよりも年上の提督である。

はやても懇意にしている提督であった。

《……君達のような若い娘達までこのような戦いに駆り出さねばならないとは、な。嫌な世の中になったものだ》

「……カール提督」

苦い声で吐き捨てるように呟くカールに、はやては苦笑する。  
それにカールは嘆息する。

《いや、すまん。忘れてくれ。アースラは、艦隊の後方に配置。君達の出番は後だ。艦隊戦はこちらの仕事だ》

「……はい」

はやてはカールの指示に頷く。

カールはそのまま、はやてを見据える。

《……怖いか？》

「……いえ……」

《自分を取り繕う必要は、さほど無い。正直に言え。可愛いげの無い》

カールの言い回しに、はやては苦笑する。

ぶつきらぼうだが、暖かみのある言葉である。

はやてもカールを見詰める。

「恐怖は感じて無いですよ。……でも……」

《躊躇いはある、か》

頷く。

そう、何せ本当の意味での殺し合いが始まろうとしているのだから。

しかも、元は同じ時空管理局の人間だ。

躊躇わない筈も無い。

《……そうだな。しかし八神よ。今はそれを忘れろ》

「やけど……」

《そうでなければ死ぬだけだ。お前も、その仲間も》

きっぱりと告げられる言葉にはやては顔を歪める。

そんな事は分かっている。

しかし、だからと言って割り切れるものでも無い。

《迷いは即、死に繋がる。しかも、お前のじゃ無い。お前の部下の、だ。八神。それは忘れるな》

その言葉に、はやては暫く沈黙する。  
しかし、ややあってコクリと頷いた。

「……はい」

《よし。ではまた後ほど通信を送る。作戦開始は一二〇〇時だ。今から艦隊は進行する。いいな？》

「了解です」

《うむ。ではな》

それだけ言い終わると、通信が切れる。

はやてはフウと息を吐きながら再度モニターを見る。

今、まさに本局、次元封鎖領域に進まんとする航行艦隊を。

「……」

はやては、ただ見詰め続けた。

これより。時空管理局史上、初の艦隊戦が始まる。



アースラが後方に配置され、そのまま艦隊は次元航行を開始する。

しかし、本局には直接向かわ無い。  
次元封鎖されている為だ。

故に、まず次元封鎖領域外に艦隊は向かう。

一二〇〇時。

艦隊は次元封鎖領域直前に、次元転移でその姿を現した。  
ストラが用意した次元航行艦隊の目前に、である。  
直後、艦隊司令であるカールの声がストラ側の艦隊に響き渡る。

《ツアラ・トウ・ストラの面々に告げる！ 君達を大規模次元争乱  
罪で逮捕する。君達には――》

ストラ側の艦隊はこの言葉に声”以外”の返答を返した。

一煌一

艦砲の一斉射、と言う返答を。  
それが管理局側の次元航行艦に真っ直ぐに突っ込み。  
しかし。

一軋一

その全ての艦砲は、全て各艦の防御障壁にて凌がれた。

《それが答え、か。……既に宣告はした。攻撃を開始する！》

一撃一

宣戦の言葉と共に、管理局側の艦隊から艦砲が一斉に放たれる。

ストラ側も負けじと次々と艦砲を撃ち放つ。

ここに、時空管理局初の艦隊戦が勃発した。

艦隊戦が始まって、すぐにストラ側の艦隊は鶴翼陣形となり、管理局側の艦隊を包囲せんとしようとする。

それに対し、管理局側の艦隊は鋒矢陣形となる。

矢印のような管理局側の艦隊に対し、ストラ側の艦隊がそれを包囲するような陣形である。

管理局側の陣形は突破、突撃を目的とした陣形であり、ストラ側の陣形は包囲、殲滅を目的とした陣形だ。

これだと、管理局側は横からの攻撃に弱い為、ストラ側に包囲されてしまう。

しかし、管理局側の艦隊の目的は最初っから”道”を作る事にある。

故に、管理局側の艦隊は鋒矢陣形を維持。

真っ直ぐにストラ側の艦隊に突っ込む。

当然、ストラ側はそれに包囲を開始。

横に回り込む。

だが、包囲する為に鶴翼に陣形を展開すると言う事はつまり所。艦隊の層が全体的に薄くなる事に他ならない。

故に管理局側は不利となる鋒矢陣形を選んだのだから。  
たった一艦の道を作る為に。

光爆が宙域に灯る。

また、一つの次元航行艦が墜ちたのだ。

光爆は絶え間無く起きる。

その度に、数十、数百といった人は死んでいく。

放たれる艦砲を管理局側は一艦に集中。

確実にストラ側の艦を墜とす。

ストラ側は鶴翼陣形と言う事もあり、それぞれ別々の艦に狙いを定める。

ストラ側の鶴翼陣形の真ん中に管理局側の艦隊はあくまでも攻撃を集中させる。

放たれる光砲に互いに切り札たるアルカンシエルは無い。  
使え無いのだ。

理由は互いの艦隊が近すぎるが故、である。

元来アルカンシエルとは、着弾と同時に空間を歪曲させ。空間ごと、反応、消滅させる砲である。

しかし、その攻撃範囲は百Kmでは利かない。  
何せ、惑星上での使用を躊躇う程なのだ。

だが、今。互いの艦隊は数十Kmと離れていない。  
近すぎるのだ。

これは、管理局側が次元封鎖領域ギリギリに位置するストラ側の艦隊に最接近する形で次元転移した為である。

これにより、互いにアルカンシエルは使用不能。  
それ以外の武装で戦わざるを得なくなった訳だ。

当然、管理局側はそれを狙っていた訳だが。

そして。

開いた。

鶴翼陣形のド真ん中が。

瞬間、艦隊司令のカールが声をあげる。

「よし！ 作戦はフェイズ2へ移行！ アースラへ打診しろ！」  
「既に動きだしています！ 速い……！？」

鋒矢陣形の最後尾にいた、アースラが一直線に艦隊を駆け抜ける。  
その速度は流石、管理局内最速の艦と言う事か。

「突入タイミングを見極めていたか。流石だな、八神」

ふっとカールは笑い。

そのまま前方を睨み据える。

「アースラが敵陣形を抜けたら、そのまま各艦は敵陣を突破！ その位置から車輪陣を構成する……！」  
何があってもアースラを追わ



せるな！」

了解！ と、官制からが応じ、直後。  
各艦が動き出した。

それを確認しながら、カールが見るのは既に管理局側の艦隊を抜け、一直線にストラ側の艦隊を抜けようとするアースラであった。

「こつから先はお前の仕事だ。八神、任せるぞ」

直後、アースラはストラの艦隊を抜け、その速度を一切緩めずに本局へと、ひた走った。



「ストラ艦隊、抜けました！」

「第一段階は何とかなったね……」

シャーリーの声に、はやては頷く。

そして操舵手のルキノへと通信を繋ぐ。

「アースラは現状の速度を維持。一気に本局まで行く。頼めるか？」  
《はい！ お任せ下さい！》

ルキノは即座に頷く。

続いて、はやては格納庫に要る、アースラ、グノーシスメンバーに通信を繋げる。

「後、十分程でアースラは本局前に着く。皆、準備はええか？」

《うん。皆、大丈夫だよ?》

返って来た、なのはの言葉にはやては笑顔を返す。

「ん。よろしくな、なのはちゃん。それじゃあ、皆……」

そこではやては一度言葉を切り、ぐっと前を見る。  
そのまま叫んだ。

「一丁、行ってみよか!」

『了解!』

はやての叫びに、皆応え。

一斉に吠え、頷いた。

アースラ格納庫。そこに集うアースラ前線メンバー各少隊とグノ  
ーシスメンバー達。

それを見遣りながら、なのはは傍らの二人に目を向ける。

その視線の先にはヴォルケン・リッターにして、スターズ、ライ  
トニング各少隊の副隊長である、二人が居た。

シグナムとヴィータである。

彼女達はなのはの視線に気付き、苦笑する。

「なんだよ、なのは。そんな顔して」

「そうだぞ? 隊長たるもの、もっとしっかりとだな……」

「そんな顔がどんなのかは置いておくけど、二人に言われたくは無  
いかな?」

ジト目で睨むなのはに二人は若干頬を引き攣らせる。  
なのはの横ではフェイトもまた頷いていた。

「二人共、ケガ治りきってないのに……」

嘆息混じりの言葉に、シグナムとヴィータが、うっと呻いた。  
そう、この二人はクラナガンの戦闘で大ケガを負っていた。  
なのに、ここに要るのだ。

「はやても散々止めたのに……」

「いや、だがなテストロッサ」

「だが、じゃありません」

「でもな？」

「でも、でもないよ、ヴィータちゃん」

取り付く島も無い。

フェイトとなのはが、お説教モードに入りかけ、シグナムとヴィータが慌てる。

「……もう来ちゃってるから何も言わないけど。二人共、無茶しちや駄目だよ？ ケガ治り切って無いんだから」

「ああ。てか、なのはの方こそ無茶はすんなよ？ ブラスターは絶対ダメだかな？」

あくまで、自分を氣遣うヴィータになのはは微笑む。  
手を伸ばしその頭を撫でた。

「大丈夫だよ。皆も居るし、よっぽどの事が無いと無茶なんかしないよ」

「……よっぽどの事があったら無茶すんじゃないか」

撫でられながらもブスッと頬を膨らませてヴィータがなのはを睨む。

それには、なのはも苦笑しか返さなかったが。

「なのはの言葉じゃないですけど。シグナムもあまり無茶しないようにお願いします」

「分かっている。心配性め」

ジトっと睨むフェイトにシグナムは肩を竦めて答える。

そしてフェイトに笑って見せた。

「無理と無茶の判別くらいはやる。……簡単に命を投げ出すような真似はせんから安心しろ」

「……信じてますよ？」

再度の問いに、シグナムは首肯だけで答えた。

《本局直前領域まで、後3分！ 各前線メンバーは出撃体制に入って下さい！ 繰り返します——》

そんなやり取りの最中に、シャーリーから艦内放送が告げられる。それに、なのは達は顔を見合わせる。

いよいよフェイズ2、作戦開始であった。

「それじゃあ、皆。集合——」

なのはの言葉に、格納庫でバラけていた各メンバーが集合する。

それ等を確認した後、なのはは頷いた。

「それじゃあ、今から本局奪還作戦フェイズ2の作戦内容を確認するね？　まずは、グノーシス・メンバーの人達？」

「ああ」

代表として、コルトが頷く。

そのまま、自分達の配置を告げた。

「俺達は、最前線。当然だな」

「……出向で来た貴方達に、1番危ない配置は心苦しいのですけど……」

「俺達が望んだ事だ。気にすんな。大体、俺達の殆どは近接型ばかりだしな。後方に配置されると、何も出来やしねえよ」

まあ、任せろや。と、答えるコルトに、なのは達は逡巡しながらも頷く。

彼等の言う通り、その能力は酷く攻撃性能に傾倒しており。下手に後方に配置出来ない。

故に、彼等は自ら最前線に立つ事にしたのだ。

ある意味に於いて、凄まじく潔い。

「……それじゃあ次。スターズ、ライトニングの隊長、副隊長だけど。私達は……」

「グノーシス・メンバーのすぐ後方だな。前線にも後方にもすぐに援護に行ける距離だ」

なのはの言葉をシグナムが継ぐ。

そう、なのは達の配置はグノーシス・メンバーのすぐ後ろである。これにより、前線の真後ろにて隊長陣達による防衛線が張られる

予定であつた。

「グノーシス・メンバーから抜けた各敵機動戦力をここで更に迎撃します」

「……ま、討ち漏らしは任せるぜ。こっちは高確率で向こうのメンバー、Sとの戦いになる可能性が高い。そうなると、こっちはガジェットとか言うあのロボットやら、因子兵には対応出来ねえしな」

コルトがなのはの言葉に頷く。

実際、アルセイオ達が出て来た場合。

彼等はまず、ガジェットや因子兵には対応出来ない。

それ程、アルセイオ隊が驚異、と言う事でもあるのだが。

コルトの言葉に、隊長陣達もまた頷く。

「次、スターズ、ライトニング、FW陣とN2R少隊。配置は私達の更に後ろだよ」

なのはの言葉に、スバル達もまた頷く。

元来FWよりである彼女達が後方に下げられた理由は勿論ある。

単に機動性の問題であつた。

いくら、足裏に重力を発生させつつ、更にその足元に足場が常時展開した状態と言えど、全天戦闘に於ける機動性としては相当に低い。

あまり気にせずに戦えるのは、スバル、ギンガ、そしてノーヴェくらいのものである。

それでも機動性の自由度、と言う面では不安が残るのだが。

「これは最終防衛線になるから、皆。宜しくね」  
『はい!』

なのはの言葉に、一斉に頷く。  
それに頷き返ししながら、なのはは今まで一言も話さなかった存在。  
クロノを見る。

クロノはその視線に片手のみを挙げる。

「僕はグノーシス・メンバーと同じ最前線に……」  
「……そう言うと思ったよ。でも、クロノ君は駄々目」

なのはの言葉にクロノはピクリと片目を上げる。  
しかし、なのはは構わない、続ける。

「クロノ君はスバル達と同じ配置に居てもらいます」

「待て、なのは」  
「待ちません。……デュランダル。まだ、いろいろと分かってない部分があるんだよね?」

なのはの言葉に、クロノは無表情のままで、何も応え無い。  
そう、返って来たクロノのデュランダルは、グノーシス側で何やら色々改造されたらしく。その姿形は別として、殆ど別物と化していたのだ。

ロスト・ウェポン。真・デュランダルとして。

そして、その全容をクロノは把握仕切れてはいないのだ。

「だがな……」

「……それに、リンディさんが心配なのは分かるけど。クロノ君。ちょっとピリピリしてるよ？ 気付いてた？」

反論しようとしていたクロノであるが、なのはの言葉にぐっと踏み止まる。

実際、クロノは心中は普段通りでは無かった。

外面は取り繕っていても、完全な意味で冷静では無かったのだ。それは、母を思うが故に。

クロノは自分でも気付かぬ程に焦っていた。

クロノはなのはの視線に肩を竦めて嘆息する。

……情けないな。

そう思い、苦笑した。

「……そうだな。分かった。なのはの言う通りにしよう」

「うん。……ゴメンね？ クロノ君」

「気にするな。恐らく僕がなのはでも、同じ判断をするさ」

クロノはそう言うと、笑ってみせた。

それに、なのはも笑顔を返す。

流石に十一年前と違い、それに顔を朱くする事は無かったが。

「……最後にザフィーラさんなんだけど」

「心得ている」

人型となったザフィーラがなのはの言葉に頷く。

同時、格納庫の扉が開き、一人の女性が現れた。



八神はやて。

アースラの艦長である彼女が。

「遅れてゴメンな。皆、ブリーフィングの最中やった？」

「大丈夫。ちょうど、はやてちゃんの所だから」

なのはが、はやての言葉に笑みを返す。

それに『そか』と、短く頷き、はやてもなのはの隣に並んだ。

「八神艦長はアースラの前へ出て貰い、超長距離砲撃を敢行して、各部隊の援護をして貰います。ザフィーラさんは、はやてちゃんの護衛をお願いします」

「了解や」

はやてが朗らかに頷き、その傍らではやての融合騎であるリインが『頑張ります！』と、ガッツポーズを取る。

それに、シグナムの傍らに居るアギトが腕組みをしながら冷やかに。二人は即座に口喧嘩状態になる。

「ほらほら、リイン。作戦前なんやから大人しゅうな？」

「アギト。あまり暴れ過ぎるな」

「……うう……。はいです」

【けっ。分かったよ】

それぞれの主<sup>ロード</sup>に嗜められ、リインは若干悔し気に、アギトは相変わらずの腕組みの状態で互いにフンっ！ と同時にそっぽを向く。

本人達は気付いていないが、ト○とジ○リーの関係にそっくりで、そのやり取りで周りが和んでいるのだが。

ちなみに余談だが、約一名。

『やっぱ！ やっぱ融合騎は可愛ええなっ！』と、悶えてる関西人が居たのには、皆、気付かないフリを通す事にした。

「うん。ならブリーフィングは終了しよ。フェイトちゃん、はやてちゃんは何か言う事あるかな？」

「私からは無いかな……？」

「私もや。言いたい事は出航前に言うたしな」

なのはの言葉に、それぞれ頷く。

それを確認して、なのはも頷いた。

《本局直前領域に到達！ 各前線メンバーは出撃して下さい！》

「……時間もちょうどいいね。なら皆！ 頑張って行こう！」

なのはが片手をグーにして頭上に挙げ、それぞれ各員。己の示し方でそれに応えた。

時空管理局、本局。

その奪還作戦の第2段階が始まる。



ストラ側の次元航行艦隊を抜けたアースラ。

その前方、二十Km地点にそれはある。

法を守る舟であり、アースラが所属する場所。  
帰るべき場所がそこにはあった。

時空管理局本局の姿が。

アースラから出撃し、本局前で浮遊するなのは達はそれを感慨深そうに見る。

ここを出航して一週間も経ってはいないのに、妙に懐かしい感覚を覚えたからだ。

しかし、それに首を振り思考を入れ替える。

《スバル、ティアナ。どう？　ちゃんと、”立ててる？”》

真空間。

ようは宇宙空間のようなこの場所には空気は無い。

自分達はバリア・ジャケットのスキン・フィールドにより、循環器。つまり、呼吸のリサイクルが常時行われている。

その為、真空状態でも呼吸が出来るのだが、だからと言って会話は普通には出来なかった。

故に念話通信で会話するしか無い訳だが。

それは、余談である。

なのはの通信に、スバルとティアナは少し戸惑いの声をあげる。

《その、何と言うか……》

《ちょっと、心元無い、と言うか。そんな感じです》

《うん。だよね……》

二人の返答に、なのはは苦笑する。

見えない足場に立っている事を想像すると分かりやすい。  
足元には真っ暗な、果ての無い暗闇が広がっているのだ。

落ち着かなくなるのも無理は無い。

しかも、スバルはウィング・ロードによる空戦の経験はあれど、ティアナにはそれが無い。

全方向を常に意識せねばならない空間戦闘は初めてなのだ。  
緊張しないほうがおかしい。

《フエイトちゃん。エリオとキャロはどうかかな？》

《エリオはともかく、キャロが戸惑っているみたい……》

フエイトから若干弱々しい解答が返って来る。

二人が心配なのだろう。

当然とも言えるが。

キャロが戸惑っているのに対して、エリオが平気なのは一つの理由がある。

トウヤ直伝の空間への足場の設置、だ。

それによるクラナガンでの戦闘の経験もあり、案外落ち着いている。

と、言っても経験不足は否めないが。

《N2Rメンバーも、結構手間取ってるね。……やっぱり、少しでも空間戦闘の教導。しておきたかったな……》

なのはが若干悔しそうに、通信する。

実際、ストラの宣戦から三日での戦いである。

空間戦闘の教導を行っている時間は無かったのだ。

悔やむなのはに、はやてから念話が掛かる。

《まあ、今回はしゃあ無い。次にいかそ。さて、各員。配置に着こ

うや！

# 了解！

はやての号令に、**頷**き。

わらわらとそれぞれの配置に着く。

そして。

「……！ 本局から動体反応多数……！ 敵、人型ガジェット群、

及びD A装着型の因子兵！

《来たね……！》

シャーリーの通信に皆、息を飲む。

そして本局に目を向けると、そこからわらわらとガジェットと因子兵が出て来た。

わらわらと。

わらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわ  
らわらわらわらわらわと。

続々と出て来る。

皆の視界いっぱい。

それに、なのは冷や汗が一つ頬を伝うのを認識し。

《シャーリー。……今、一体何体くらい出たかな?》

《……軽く、五十万を超えてます》

その言葉に思わず、くらりと目眩を起こしそうになる。

どれだけの数が果たしていると言うのか。

《……やる事は変わらねえだろ。全部潰せば済む》

《……まあ、結論から言えばそうなんやけど……》

身も蓋も無いコルトの言葉に、はやては思わず呻く。

ややあつて、嘆息しながら自らのデバイス。

シュベルト・クロイツを振るい、その手に持つ夜天の書を展開した。

《取り敢えず、向こうと距離がある内にバンバン撃って、なるべく数を減らすわ》

《お、そりゃあいい。楽が出来る。なら、俺達と奴等が接敵するまで頼むぜ》

あくまで気楽なコルトの通信に、はやては再度の嘆息を吐き、しかし。キツと前を向く。

《行くよ！ リイン》

【はいです！】

直後、はやての足元にベルカ式の魔法陣が展開する。

夜天の書のページがペラペラ一人でめくれた。

夜天の書からの魔法の読み込み開始。

読み込み魔法は、超長距離着弾炸裂型砲撃。

【敵座標確認！ 距離算出、オッケーです！】

《了解！ ありがとうな。リイン！》

【はいです！】

シュベルト・クロイツを前方に突き出す。

同時、シュベルト・クロイツを中心として、ベルカ式の魔法陣が更に展開。

それぞれの頂点に描かれし、円の部分。

そして、魔法陣の中央に光球が灯る。

はやては、息を一つ吸い。

そのまま、一気に吠える！

《超長距離砲撃！ 行くよー！》

《了解！》

一斉に皆が叫ぶ。

それに呼応するかのように、魔法陣に灯る光球はその輝きを増して。

その輝きが限界まで到達。

チャージが完了したのを見計らって、はやては叫んだ。

己が魔法の名を。

宣戦を告げる一撃の名を！

《【フレイーーース！ ヴェルグッ！！】》

一輝！一

一輝！一

一輝！一

それぞれの頂点から激烈な光砲が放たれ、そして最後にその中央から。

一撃！一

特大の光砲が、ぶっ放された。

それ等は、真っすぐにガジェット、因子兵群に突き進み。そして。

一轟！一

光砲がそれぞれ炸裂！

ガジェットと因子兵群の一部を丸ごと消滅させた。

それを契機に、ガジェット、因子兵群はこちらに突撃を開始。呼応するかのように、グノーシス・メンバーが動き出し、アース・メンバーがそれに続く。

戦いの火蓋はこうして、切って落とされた。



「……アースラに行けない、て。どう言う事だよ？」

【そのままの意味だ。転移出来ん】

時空管理局地上本部。



その中の転送ポート前にに彼等の姿はあった。  
神庭シオンと、その相棒たるユニゾン・アームド・デバイス。イクスの姿が。

既に真夜中である。

周りは真っ暗であり、辺りはやたらと静かだ。

その一角。

転送ポートの脇で、シオンとイクスはひそひそ話しを続けていた。

【次元封鎖領域に入ったのだろうか。この、転送ポートでも、お前の次元転移でもアースラには行けん】

きっぱりと言うイクス。

その前には転送ポートの操作コンソールがある。しかし、そこに表示された文字はエラー。

転送出来ませんと、表示されていた。

その文字に、シオンは頭を抱える。

絶対に告げねならない事があるのに、ここに来て足止めである。

何か呪われてるんじゃないだろうかと真剣に思えた。

【……そもそもお前、自分の状況が分かっているのか？ 下手に魔法を使えばお前のリンカー・コアは今度こそ完全に破壊される。魔法が使え無くなるんだぞ？】

「……そんな事は分かっている。……でも」

シオンはイクスに真っ直ぐ目を合わせる。

そして、きっぱりと言い切った。

「……ここで行かないと、絶対に後悔する。……そんな気がするんだ」

【……この大馬鹿弟子が……】

イクスはそんなシオンの答えに、思いつ切り嘆息。  
額を押さえる。

この弟子は何を言ってもきかない。  
それが分かってしまったからだ。

「……次元封鎖されていると言う事は、念話、通信も届かん、か……」

「そっちはもう試した」

その返答に、イクスは再び嘆息する。  
念話通信は通じず、転送、転移も不可能。  
ここまでくれば最早、運命かと諦めるが。  
それで諦め無いのが、この弟子であった。

「何か無いか……！ 知らせるだけでも言いんだ。グノーシスの間ならアレを知ってる……！」

【確かに、な。しかし……】

その知らせる手段が事ごとく潰されたのだ。  
こんな遅くに来た、タカトを恨むより他無い。

「くそ……！ 次元封鎖領域なんて面倒臭いもの形成しやがって！」  
【それは当然の戦略だ】

理不尽な事を吐くシオンに、イクスが半眼で呟く。  
そのまま二人して嘆息して。

「【……次元封鎖領域……？】」

二人の声が重なり、そのまま互いの顔を見る。  
そして、全く同時に互いを指差した。

「【それだ!】」

異口同音に二人は叫ぶ。

そのまま転送ポートに飛び付いた。

「イクス! 次元封鎖領域”ギリギリ外”の次元座標覚えてるか!」  
?

【ああ。確か、ストラとか言った連中の艦隊が集まっている所だな】

シオンに答えながらイクスはコンソールを操作する。

次元座標を打ち込む。

転送ポートが起動した。

エラー表示は出ない。

「よし……! それじゃあ……」

【待て、シオン! 最後の確認だ。絶対に行くんだな?】

早速と、転送ポートに入ろうとするシオンにイクスが再度の問い  
掛けを放つ。

それにシオンは振り向き様に吠えた。

その顔には明確な苛立ちが浮かぶ。

「うるっせえ! 時間が無いんだよ!? 何度も聞き返すな!」

【……いいんだな?】

「”もう、決めたんだよ!” 分かったか!?”

早く早くとせつつくシオンとその答えにイクスはまたも嘆息する。  
そして、ふっと笑った。

【いいだろう。フォローは任せろ】

「い、い、か、ら、早つく！」

師匠の心、弟子知らずか。とイクスはシオンに笑う。  
そして、シオンのその手に握られた。

セツト・レディ？

瞬間、シオンのその身体が、光に包まれ。  
バリア・ジャケットを纏った。

「よし。行くぜ！」

【ああ】

シオンはそのまま転送ポートに飛び込む。  
直後に、転送ポートは起動。  
シオンは一気に次元封鎖領域ギリギリ外へと転移した。

そして。

「て、何だこりやああああああっ！」

転移したシオンが見たのは、光砲飛び交う次元空間であった。

分かりやすく言うと、シオンは今。

激戦区たる、管理局、ストラ、両者の艦隊戦のド真ん中に転移したのであった。

シオンの脇を光砲が通り過ぎる。

それに、冷や汗を浮かべながらシオンは慌てて、飛行魔法を使用。取り敢えず、動く事にする。

【艦隊戦のド真ん中に転移した、か。つくづくツイて無いな……】  
「うるさいよ！？」　「ーっ！」

イクスに吠えた、瞬間。

シオンは胸の奥深くに痛みを覚えた。

……今のは……。

【……シオン？】  
「……何でも無え……。アースラに追い付くぞ！」

それだけをシオンは言い放つと、直後。

急加速を開始。

一気に、本局に向かい。飛び出した。

リンカー・コアからの、痛みによる訴えを聞ききながら。

（後編に続く）

第三十九話「最悪の誕生日」 (中編) (後書き)

はい♪

中編終了です♪

まだ戦い始まったばかりで後一話で終わるのか？

が、頑張ります (汗)

と、言うか艦隊戦にてこずり過ぎました (汗)

しかも、あまり上手く無い (涙)

次までの課題だなあ……。

では♪

後編をお楽しみにです♪

### 第三十九話「最悪の誕生日」(中編2)(前書き)

……ええ。最初に一言。

すみません(汗)

うう、まさかの四部構成になるなんて(汗)

久しぶりの魔導師戦をやると恐ろしく難しかったです(涙)

基本、一対一ばかり書いてたから、多対多を書くためっさボロが出ました(汗)

ぬぬう。課題が増えるな〜。

てな訳で中編2です。

どうぞ〜♪

### 第三十九話「最悪の誕生日」(中編2)

一撃一

一撃一

一撃！一

時空管理局、本局。

その直前で、激烈な光が弾ける。

アースラ艦長である。八神はやてが放つフレスヴェルグだ。

光は視界いっぱい広がる存在の中央で弾け、その破壊力をぶち撒ける。

破壊の光は容赦無く、敵。

人型ガジェットと、D A装備の因子兵を喰らい尽くす。

だが。

……く……っ！

はやては、息を荒げながら眼前に広がる敵を見る。

一向に減らない。

いや、はやての魔法は一撃で五百から千ものガジェットと因子兵を消滅させているのだが。



向こうは、数が違い過ぎた。

総数五十万強。

いつ、こんなにガジェットやら因子兵を用意したのか。  
とんでも無い兵力差であった。

対するこちらは、グノーシス、アースラ含めて二十人弱。  
文字通り、桁が違う兵力である。  
いくら一騎当千の部隊とはいえ、限度と言う物がある。

《主！》

っー！？

—爆！—

声が出た、と思った瞬間に、はやての間近で爆発が巻き起こる。  
しかし、それは白のシールドにより防がれた。

トライシールド。

はやてが誇る盾の守護獣、ザファイラがそれを掲げてはやての前に立ち塞がっていた。

《ご無事で？ 主》

《ん。ありがとう。ザファイラ》

念話でザファイラに礼を言いながら、はやては視線を巡らせる。  
すぐに爆発の原因は分かった。

人型のガジェットが2機、はやての下方に居た。

頭上から、すれ違いざまにはやてにミサイルを叩き込んだのだらう。

それを、はやての護衛に当たっていたザファイラが防いだのだ。

《主は、支援砲撃を。周りは私が》

《うん。ザファイラ。頼りにしとるよ》

コクリと頷き、再び魔力を集中。

フレスヴェルグを放とうと、チャージを開始しようとした、直後。タイミングを見計らったように下方に居たガジェットがはやてに突っ込む。

その手に握られるのはナイフ。

確実に、はやてを仕留めんと、真っ直ぐに突き進む。

《ぬあああああつ！》

突如として、ガジェットの前にザファイラが現れる。

既に右の拳を構えた姿で！

一撃一

咆哮と共に放たれた拳が、ガジェットの顔面に突き刺さる。

ザファイラは止まらない。

拳を顔面から抜くと同時に、蹴りを脇腹部分にさらに叩き込み、その細い身体を真っ二つにする。

一爆一

そのまま、真っ二つになったガジェットは爆発し、次元空間の藻屑となる。

それを見て、人工知能がザフィーラをはやてよりも優先順位を繰り上げて、ザフィーラに右の銃を差し向ける。

ガジェット2型と同じ、エネルギー式の銃なのか、銃口にエネルギーが集中して。

《縛れ！ 鋼の軛い！ つあああおお！》

一撃・撃・撃！一

それよりも早く、ザフィーラより放たれた鋼の軛。魔力で編まれた杭に、顔面、胴体、背中をブチ貫かれる。

杭が抜かれると、同時に爆発し、前のガジェットと同じ末路を辿った。

それを視界の端に収めながらはやてはフレスヴェルグを続いて放つ。

くつと奥歯を噛み締めた顔で。

ガジェットが自分に攻撃を仕掛けて来た。

それはつまり、各防衛線を抜けられた、と言う事である。

”こんなにも早く”。

まだ戦いが始まって、十数分も経っていないにも関わらずに、既にガジェットがここまで突破出来た、と言う事実にはやては悔し

気に顔を歪めたのであった。

……皆。

前線で戦う仲間達や家族を思う。

しかし、今。自分が成さねばならない事は、支援砲撃だ。  
数を減らせば減らす程、前線は楽になるのだから。

故に、はやては叫ぶ。

散発的に、襲い来るガジェットや因子兵をザフィーラに任せ、己が成さねばならない事を。

《次、行くよ！ リインっ！》

【はいです！ はやてちゃん！】

自身と共にあるリインの声に頷きながら、はやては次弾のフレスヴェルグを撃ち放った。



《ガバメント、ジャッジメント装填。滅罪LEVEL3、リミテッド三十%で固定》

【ラジャー】

真空間故に、煙草も吸えないコルトが若干イライラしながらも、  
念話で自らのデバイス、ガバメントに命じる。

視線は動かさない。前を向いたままだ。

否。動かせない、が正しいか。

コルトの視線の先には、ガジェットと因子兵が、三百六十度、  
万遍なく存在”したのだから。

……よく、こんなに作ったモンだ。

流石に、コルトは呆れたようにそう思う。

何せ、推定五十万強である。

この数を作りあげる設備もそうだが、待機させて置くスペースも  
馬鹿にならない。

《ゼロ・イン》

【インパクト・フアング】

ガバメントの機械音を耳に残しながら、コルトは目の前のガジ  
エットにするり、と踏み込んだ。

一切の挙動を見せぬままに、だ。

そのまま、左のガバメントをガジェットの腹に叩き込み、直後。

一撃！一

”腹部が消え失せた”。

打撃と共に叩き込まれた弾丸がそれを成したのだ。

上と下が分かれたガジェットを眼前に残したまま、コルトはス  
っと腰を落とす。

両手のガバメントを同時カートリッジ・ロード。

【ライオット・フアング】

《ーートバすぜ》

一轟！一

直後、ソレは生まれた。

壁。

”銃弾”で作られた壁である。

数万と言う弾丸で弾幕を作り上げたのだ。

破壊の壁は、容赦無くガジェットと因子兵群を喰らい、蹴散らし、屠る。

弾丸が通り過ぎた後には何も残らなかった。

全て、薄く弾丸で削り取られて消え去ってしまったのだ。

コルトは前にガバメントを突き出した格好で残心。

煙草を吹かそうとして、口元に何もくわえていない事に気付いた。

《ちっ……》

一撃一

舌打ちしながら、コルトは真横にガバメントを向け、一発撃ち放つ。

それは、今まさにコルトに襲い掛かろうとした因子兵であった。弾丸を顔面に叩き込まれた因子兵はそのまま上半身がすっぽりと消える。

だが、次の瞬間、因子が沸き立ち始めた。

再生しようとしているのだ。

コルトはそれに再度の舌打ちを放ち、止めを差さんとして。

一裂！一

直後に走る”炎線”に気付き、後退する。

炎線は一瞬で、再生しようとしていた因子兵を灰に変え。  
そのまま止まらない。

真っ直ぐにその後ろにまだ控えるガジェット、因子兵群に突っ走り、そして。

一爆！一

一轟！一

莫大な熱量へと変換。

1 Km四方に、炎線が拡大し、その破壊力をブチ撒けた。

それを見て、コルトは三度目の舌打ちを放つ。

後方に振り返り、炎線の一撃を叩き込んだ奴を見た。

《オイ》

《……………》

念話の問い掛けに、しかし刃は何も答え無い。  
視線すら合わさずに、コルトを追い越す。

《馬鹿が。オイ、今あいつ。何発言靈式撃った？》

《今ので四発目です。おかげで多少楽にはなってますが》

肩を竦めるような仕草でコルト達より、若干離れた位置にいる悠一が答える。

その返答に、コルトは深くため息を吐いた。

《”本命”とやり合う前に潰れる気か、あの馬鹿タレは。……一条、出雲。奴のフォローに行ってやれ》

《はい、了解です》

《手が掛かりやがるな、全くよ》

悠一と、ハヤトがコルトの命令に頷き、刃を追う。

それを確認した後、コルトは再び前を向いた。

刃が滅ぼし、1時的に出来ていた敵陣の穴が、既に埋まっていた。

それはそうだろう。

何せ、向こうは数が有り余っているのだから。

……こいつはあ、キッツイかもな。

倒せど倒せど現れる敵陣にコルトは嘆息する。

残り魔力七割半。

未だ余裕はあれど、決して楽観視出来ない。

……まあ、やるしかねえわな？

《ガバメント。滅罪LEVEL、リミテッド現状維持》



【イエス、サー！】

苦笑と共に、コルトは再びガバメントを構える。  
瞬間、コルトの前に行く三人に。

そして、コルト自身に視界いっぱい広がるガジェット、因子兵が雪崩掛かった。



雪崩をうち、迫り来るガジェットと、因子兵。

それを目前にして、悠一は己がデバイス。月詠をくるりと回す。

同時、カートリッジ・ロード。

朗々と、己がチカラを唄う。

《ーこの世界に満ちる、”四百万”の音素達！ 次元空間故に空  
気は有らず、しかし起き行く雄叫びと戦場の重唱達よ！ 届いてい  
ますか？ 僕の声が！》

【レディ？】

届けと叫ぶ声。

それに一瞬だけ、しかし。確かに、戦場にポオンと言う応える声  
を悠一に返す。

悠一はそれに笑みと頷きを持って応えた。

《聞こえているのならば、僕と共に一つの演奏を鳴り響きかせなさ  
い！ 曲名はー！》

ー轟！ー

直後、”ソレ”は生まれた。  
炎の身体を持ち、雄々しく羽ばたく翼が。

魔力と音素で編まれたその姿が戦場にピィィ！ と吠えた。

## 《ーー皇帝》

### 【カイザー・フェニックス】

重低なる演奏と共に生まれた不死鳥は、燃える翼をはためかせる。  
それだけで、ガジェットが煙りを上げ、因子兵の身体が燃え出す。

先の刃の一撃もそうだが、何故真空間に炎が生まれるのかには無  
論、訳がある。

魔法とは、意思によって世界の法則を組み替える事を指す。  
故に、ある程度の術者は酸素が無くてもモノを燃やせるのだ。

そして、悠一は真空間内で空気を介さずに音を打った。  
空気では無く、空間を振動させて音を生んだのだ。  
一般の物理現象に縛られぬ者達。

故にこそ、彼等は位階の上位に在るのだ。

煌めき、輝く不死鳥による熱波にガジェットも因子兵も近付け無  
い。

頃合いを見計らって悠一はスツと月詠を前に差し向ける。  
それに応えて、不死鳥が翼を一打ち。

前進する。

《皇帝とは》

【常に前を見据える覇者の名なり】

瞬間、不死鳥は敵陣の真ん中に真っ直ぐ突っ込み、その莫大な熱量を全て開放した。

一煌一

一輝一

一瞬だけ、視界全てを白が覆い、そして。

一爆！一

一裂！一

一轟！一

激烈な爆発となって、巨大な炎球を顕現させた。

生み出された炎球は、即座に周囲に在るガジェットを、因子兵を喰らい、消えた。

それを確認して、悠一は溜息を吐く。

四百万もの音素を使うフォニム式は相応の負担を悠一に与えたのだ。

そして。

《後は宜しく。出雲先輩》  
《オウ！》

悠一の眼前に、ハヤトがその巨体を現す。

手に握る大剣。フツノが上下にスライドし、激烈な勢いと共に重なり合った。

《行くぜ、フツノ》

【承知】

フツノの短い返答に、ハヤトは笑い、一気にフツノを振りかぶる。

同時、足場を形成。すり足で一步を踏み込む！

《星断ちの一撃を受けるかよ！》

【断星剣】

一斬！一

叫びと共に横薙ぎへと、フツノを一閃、振り抜く。

直後、その直線上にあった、ガジェット、因子兵群が全て。

一刀両断にされた。

これこそが、ロストウェポン、フツノの力であった。

選択斬撃。

己が斬る、と決めたモノのみを、”必ず断ち斬る”力である。

勿論、ハヤトの魔力次第なので。断ち斬れるモノと断ち斬れないモノが在る訳だが。

今、ハヤトが斬ったのはハヤトが視認した空間そのものであった。

《相変わらず、出鱈目で》

《……あんまり、お前等には言われたく無えな》

後ろでパムパムと拍手する悠一にハヤトは苦笑。  
手に持つフツノを肩に担ぐ。

《それより、さっさとあの馬鹿追うぞ》

《ですね》

頷き、二人はさらに前進する刃を見る。

刃は、周りが見えていないとばかりにただ前進を続けていた。

それを二人は溜息を吐きがてら追う。

ガジェットと因子兵群が襲い来る、最前線に。

二人は刃を追って向かった。



【クロス・ファイア】

レイジング・ハートの静かな声と共に、既にエクシードとなった。  
なのはが、腰溜にレイジング・ハートを突き出す。

直後。

一煌一

先端から光砲と、それに付き従うように光射が総計三条放たれた。

中央の砲撃がまず、真ん中のガジェット群に叩き込まれ、容赦無く吹き飛ばし。

それを避わした2体の因子兵に直撃する。

因子兵は、腹に直撃した光射に、しかし構わない。  
そのまま、なのはに突っ込もうと前進する。

だが、なのはは動かない。

それを好機と見たか、因子兵が更に速度を上げ。

《バルデッシュ。ランサー。セット》

【プラズマ・ランサー、ゲットセット】

直後に、頭上に広がる雷光に気付いた。

なのはの頭上に、フェイトが周囲に雷の槍を形成して立っていた。

スツとバルデッシュを掲げると同時、カートリッジ・ロード。

一気に振り下ろす！

《ファイア！》

一閃・閃・閃・閃一

フェイトの叫びと共に、雷槍が降り落ちる。

なのはへと急接近しようとしていた因子兵は、それに速度を殺そうとする。

だが、一旦速度に乗ってしまった慣性は簡単に止まる事を許さない。

結果、因子兵は降り落ちる雷槍を何の抵抗も無く、受ける羽目となった。

直撃し、そのまま走る雷撃が因子兵の全身を強く打つ。

しかし、そこは因子兵。

その一撃を受けながらも倒れない。

次の一撃さえ、無ければ。

【エクセリオン・バスター。スタンバイ、レディ？】

響く機械音声。

同時、なのはが因子兵にレイジング・ハートの先端を差し向ける。

因子兵は、それに必死に動かんとするが、雷撃を受けている、その身体は動かない。  
そして。

《バスタァアーーーーっ!》

—煌—

光の奔流がレイジング・ハートの先端より生み出された。  
その奔流は因子兵2体を飲み込み。

止まらない。

—轟!—

光砲がそのまま真っ直ぐに伸び行く。

それは、因子兵の直線上に居た、更なる因子兵群を飲み込み。

その群を抹消した。

《ふう……》

《なのは、大丈夫?》

一つ息を吐くなのはに、フェイトが心配そうな顔となる。

この防衛線では、砲撃、射撃に特化したなのはに最も負担が掛かっていた。

砲撃、射撃を絶え間無く放ち続けているのだ。

魔力消費も馬鹿にならない。

しかし、なのはは、そんなフェイトに笑顔で応えた。

《うん。大丈夫。ありがとう、フェイトちゃん》



その返答に、フェイトはそつかと応える。  
なのはの頑固さは、フェイトも骨身に染みている。  
ここで辛そうな顔をする筈が無かった。

《……でも、なのは》

あんまり無理しないように、と告げようとして。  
しかし、再び最前線を抜けた、因子兵とガジェットが現れる。

それに二人は各々のデバイスを構えようとして。

《アイゼン！》

《レヴァンティン！》

名を告げる叫びを聞いた。

直後に、なのは達の頭上から赤とピンクの二人が舞い降りた。

ヴィータとシグナムだ。

二人は同時にカートリッジ・ロード。

まず、ヴィータが前に出た。

《轟天爆碎！》

【ギガント・フォルム！】

ヴィータの叫びに応え、愛機グラフ・アイゼンが変形を開始する。

ハンマーヘッドが巨大化。

それをヴィータが振りかぶると同時に巨大化する。

それは、ヴィータ本人の大きさを遥かに超え、さらに巨大化。十mを超える巨大鉄鎚となった。

それをヴィータは真っ直ぐ上段に振りかぶり、間を置かずに振り下ろす！

《ギガント・ハンマァァァー！》

一轟！一

激烈極まる鎚撃が、先頭の因子兵に激突。

その破壊力を遺憾無く発揮し、その身体を粉々にして。止まらない。

巨鎚は停滞せずに振り抜かれる。

その途上の全てを言葉通りに爆砕しながら。

巨鎚が、最前線を抜けて来た敵陣の一部をこそぎとるようにして殴殺し。

その敵陣には、更なる一撃が下される。

【猛れ！ 炎熱！ 烈火刃！】

【シュランゲ・フォルム！】

二つの声を聞きながらヴィータの後方に居たシグナムが前に出る。連結刃となったレヴァンティンに一気に炎が走り、それをシグナムは伸ばす。

シュランゲ・バイゼン。

延びたレヴァンティンが、ガジェットを縦に叩き割り、その首を擡げ。

敵陣を縦横無尽に駆け抜ける。  
それは次々と敵を叩き墜とし。

そこでシグナムは止まらない。

レヴァンティンを引き戻しがてら、左手をすつと差し出す。  
そこに、ボツと炎が灯った。

《剣閃！》

【烈火！】

放たれる声に従うように、炎が剣身を走っていく。

炎は切っ先まで、走り。

レヴァンティンは真っ直ぐに伸び切る。

それはあたかも、巨大な一本の剣を思わせた。

そしてシグナムは、一気に横薙ぎへと炎剣を振り放つ！

《【火竜！ 一閃！】》

一閃！ 一

炎刃一閃！

巨大化した炎剣は、一気に、敵陣を駆け抜ける。

一時の間が空いた、直後。

—煌！—

小規模の爆発が重なり合うようにして起き。

炎斬撃の軌道上の全ての敵陣を殲滅した。

ヴィータとシグナムはそれ等を見届けて、フウと息を吐き。

それぞれのデバイスを基本形態に戻した。

《なのは、無事かー？》

《油断だな、テストロッサ》

振り向き、ニツと笑うヴィータと微笑するシグナムに、なのはとフェイトも微笑む。

《うん。ありがとう、ヴィータちゃん》

《助かりました、シグナム》

その返答に、二人はそれぞれ頷く。

そして、再び本局側へと視線を巡らせた。

《……最前線、結構抜けて来たね》

《数が数だしな。しゃーねーよ》

《だが、そうも言ってられん。私達を遠回りに避して後方に結構回った奴等もいる》

《FWの皆、大丈夫かな……はやても……》

フェイトの言葉に、三人は苦い表情となる。

後方のFW部隊は空間戦闘に慣れておらず、はやては、近距離に弱い。

あまり敵に防衛線を抜けさせたくは無いのだが、敵群はそれを読んだが如く、後方へとひた走る。

はつきり言ってタチが悪かった。

しかも、問題はそれだけでは無い。

四人は視線の先を見て、そう思う。

その視線は未だ減ったように見え無い、敵に向けられていた。

例の魔導師部隊。

アルセイオ隊が出ていないにも係わらず、この事態だ。

既に魔力も7割を切った。

これ以上消耗して、例の部隊に出られると致命的な事に成り兼ねない。

《……とにかく、今はそれぞれの防衛範囲を広げよ？》

《そーだな。二手に分かれようぜ。消耗が増えるけど、その方が防衛範囲が広げられるしな》

《うん。なら、それぞれ少隊で分かれよう。なのははヴィータと、私はシグナムと行くから》

《ああ、では行くか》

四人はコクリと頷き合うと、一気に駆け出した。

しかし、未だに敵はその総数を十分に保ち。

そして、なのは達を疲労が襲い始めていた。



一撃・撃・撃・撃！一

因子兵がぐるりと回転しながらD Aの腕に装備されたエネルギー弾を撃ち放つ。

それをスバルは、ウィング・ロードを展開し、駆け抜けながら避わす。

直後。

《クロス！ ファイアー！ シュート！》

一射！一

二十の光弾が、スバルの前から突っ込んで来た。

それは、スバルの脇をすれ違う軌道で駆け抜け、スバルを追っていた因子兵へと殺到する。

一撃、撃、撃、撃、撃一

因子兵は、それを回避する術を持たず、全身に光弾を叩き込まれる。

ぐらり、とそのダメージで崩れるその身体が再び、因子により再生しようとして。

一煌一

突如として撃ち放たれた光の奔流に全身を飲み込まれ、消え去っ

た。

見れば、スバルの前方にクロス・ミラージュと、イノーマス・キヤノンを構えるティアナと、デイエチが居る。

《スバル！ 一旦こっちまで戻って！》  
《うん！》

合流を呼び掛けるティアナにスバルは応じ、そのまま二人に合流しようとして。

迫るガジェットと因子兵に気付いた。

ティアナ達はそれに気付かない。……否、”気付けない”。

《ーっ！ ティア！ デイエチ！ ”下”！》

《え……？ っ！？》

《しまった……！？》

スバルの念話に、二人は下を見て、顔を強張らせる。

そう、敵群は”真下”から二人に迫っていた。

因子兵が腕を差し向け、ガジェットがミサイルハッチを開放する。  
一気に二人にそれを撃ち放とうとして。

《させるかよ！》

《二人とも！ そのまま！》

更なる念話が一同に叩きつけられた。

ノーヴェとギンガである。

二人は、エアライナーとウィング・ロードを展開しながら一気に駆け。

ティアナ達のちょうど真下を通り過ぎる軌道で走り抜ける。

ギンガのリボルバー・ナックルが、ノーヴェのジェット・エッジが激烈な回転を刻み、それを二人は駆け抜けるざまに、先頭の敵へと叩き付ける！

《リボルバー！ スパイク！》

《リボルバー！ バンカー！》

一撃！一

蹴りと、拳がそれぞれガジェットと因子兵に直撃。

ガジェットは顔に、因子兵は腹に叩き込まれ、二人はそのままフライバイしながら敵陣を抜ける。

先頭が一撃を受けた事により、敵陣はティアナ達へと向かう動きを止められ、奇襲が失敗に終わったと見るや、そのまま回頭して。その背中に、短剣がそれぞれ突き立った。

チンクだ。

彼女はウエンディのライデング・ボードに相乗りして、共に敵陣を抜ける。

瞬間、チンクが指を弾く。

《IS、ランブルデトネイター》

一爆！一



直撃、因子兵やガジェットが一斉に爆発。

因子兵は再生する事さえ出来ずに、塵へと消えた。

危機から脱った事に、ティアナとディエチがホッと息を吐く。  
同時に、スバルが一同に合流した。

《ティア、ディエチ。大丈夫？》

《何とかね。……助かったわ……》

《……感謝……》

スバルの言葉に、二人共頷く。

それにギンガ、ノーヴェ、チンク、ウエンディも笑いながら頷いた。

《でも、やっぱり上も下も無いって言うのは、あまり落ち着かないわね……》

《確かにな》

ティアナの言葉に、チンク、ディエチが頷く。

それに、スバル達は苦笑する。

いくら、無重力空間で動けるようになったとはいえ、機動力で分が悪すぎるのだ。

因子兵やガジェットに追い回されるような状態である。

まともに戦えているのは、スバル、ノーヴェ、ギンガ、ウエンディくらいであり。

チンクにいたってはウエンディのライディングボードに相乗りしている状態である。

あまりにも戦場の分が悪すぎた。

《そう言えば、ハラオウン提督とエリオとキャロは？》

《ああ、あの三人なら二手にあっちにいるぜ》

そうノーヴェが答え、右に指を差し向けた。

直後。

一凍！一

その指が指し示す方角、数百mの空間が凍り付いた。

《……は……？》

いきなりの事態に、一同が目を丸くする。

何の脈絡も無く、何百mも凍り付いたのだ。

驚きもする。

すると、そちらの方向から白銀の竜が翼を羽ばたかせて、こちらに向かって来た。

キャロの相棒である、フリードだ。

その背中には、キャロとエリオ。そして、何やら息を荒げているクロノの姿があった。

《皆さん〜》

《キャロ！ エリオも、大丈夫？》

《はい。クロノ提督のおかげで……》

一同に合流した、三人をスバル達が出迎える。

しかし、ティアナがフリードを見て疑問符を浮かべた。

《……？ あれ？ て、言うかチビ竜。何で真空間なのに、大丈夫なの？》

《えっと……。フリードが”竜”だから、らしいんですけど……》

キャロの返答に、更に一同は疑問符を浮かべる。

それに、エリオとキャロは苦笑した。

実際、二人も詳しく分かっている事柄では無いからだ。

二人は一度、トウヤに竜の事について、いろいろ聞かされた事がある。

それは次のような事だった。

竜とは、半精神存在であり従来の生命体では無い。

龍がほぼ完全な精神存在なのに対して、竜は肉体を持つ。

しかし、その在り方は精神存在寄りなのだ。

故に竜種は、根本的に呼吸を必要としないのだ。

空気が無いのに、真空間を飛ぶのも同じ理由である。

竜は翼に風を受けて空を飛んでいる訳では無い。

そもそも、フリードのような巨大な竜の飛び方は、物理法則に従うのならばハングライダーのような滑空の飛び方が正しい。

分かりやすいのが、プテラノドン辺りの恐竜である。

つまり、翼を羽ばたかせて飛ぶ事は、このサイズの生物では不可能なのだ。

しかし、フリードを始めとした竜種はこれが出る。

理由については様々だが、竜種は重力や慣性を制御していると考えられるのだ。

このような竜のレクチャーと、竜の可能性についてトウヤが入院している時に二人は二時間に渡り聞かされた訳だ。

当然、このような長い話を完全に覚えられる筈も無い。

結局二人はフリードはいろいろ凄い、と言う事くらいしか分からなかったのだ。

《ええっと、詳しいお話しは後でトウヤさんとじっくりとして頂ければ……》

《うーん。そうね、今は戦ってる真っ最中だし。そうするわ》

キャロの言葉に、一同は頷く。

そのまま視線をまだ息を荒げているクロノへと向けた。

《えと……。ハラOWN提督。大丈夫ですか……？》

《ああ、問題は……っ！》

荒い息で、しかし頷こうとするクロノだが、突如。真上を仰ぐ。

そこには、一気に自分達へと向かい来る敵群が居た。

《また……!》  
《く……!》

クロノに釣られて上をみた一同も顔を強めながら己の愛機を構える。

しかし、それよりも早くクロノが手に持つ。真・デュランダルを敵へと差し向けた。

《今度は、”やり過ぎる”なよ! デュランダル!》  
【OK、Boss】

クロノの声に、デュランダルは確かに応え。  
直後、自身に登録されていた魔法を引きずり出した。

【エクスキューション、ソード。スタンバイ】  
《て、ちょっと待て!?!》

告げられる魔法名にクロノは慌てて、魔法を中断しようとする。  
しかし、間に合わなかった。

真・デュランダルの先端から”冷氣”で形成された刃が生まれた。

”氷”では無く、”冷氣”である。

しかも目に見える程の、だ。

それは、周囲と遥かに隔絶した冷氣が刃となっている証拠であった。

その刃が、真っ直ぐに伸びる。

そして、敵群の先頭を走るガジェットを貫き、瞬間。

一凍！一

”冷気の刃が爆裂した”。

熱の急上昇では無く、急下降による爆裂である。

そのガジェットを中心として、一気に周囲が凍り付き。

それは敵群をまとめて凍り付かせてなお、続いた。

《……………》

《……………》

エリオとキャロを除く一同が、あまりの事態にポカンとなる中。

クロノが苦しげに喘ぐ。

そして、ギロリと手に持つ真・デュランダルを睨んだ。

《……………くそ。”近接型の魔法”で、これが……………！？》

睨みながらクロノはぐっと奥歯を噛み締める。

そう、ロスト・ウェポンとなったデュランダルの最大の問題点が

そこにあった。

登録魔法の殆どが、殲滅型の魔法なのである。

先のエクスキューション・ソードも、”近接殲滅型魔法”であつた。

当然、魔力消費が馬鹿にならない。

今、クロノの魔力消費は五割を切ろうとしていた。

真・デュランダルは、術者の魔力消費を”一切”考え無いと言う。  
ある意味で、致命的な欠点を抱えていたのだ。

作成者が、魔力消費を気にしない人間故に起きてしまったミスとも言える。

《く……！ 誰だ。こんな使いづらいにも程がある改造をした奴は……！》

毒づきながらクロノは嘆息。  
一同に向き合う。

《……すまない。さっきからこんな調子でね……》

《あ、いえ……》

《ええと、大丈夫ですか？》

それぞれから掛けられる念話に、クロノは首肯する。  
そして、周りを見渡して一同に向き直った。

《今、現状では僕はこんな状態だ。でも、さっきからなのは達の防衛線を抜ける敵も増えてる》

《はい》

一同がクロノの念話に頷く。

先程からこちらへと向かい来るガジェットや因子兵が増え始めているのだ。

こちらの防衛線を突破する敵も増えている。

《そこで、僕達もそれぞれ分かれて防衛線を張ろう。チーム分けは……》

《少隊で分かれてはどうだろうか？ 基本はN2Rが前<sup>ウチ</sup>で。その後方にスターズとライトニングを配置すれば》

チンクがクロノに提案する。

元々、N2Rがこの防衛線では主力となっているのだ。  
N2Rを中心とするのは当然とも言える。

クロノがチンクの提案に少し思案。  
数秒後にフムと頷いた。

《よし。ならそれで行こう。僕もN2Rと一緒に中央に陣取る。今の僕は大きい魔法”しか”撃てないが、中央ならまだ多少は効果的だろうしな》

一同を見遣りながらクロノは話す。  
続いて、スバル達に視線を向ける。

《僕達が撃ち漏らした敵は君達に任せる。頼めるかい？》  
《はい！》

スバル達はクロノの言葉に一斉に頷く。  
それに、クロノもよしと再度頷いた。

《それじゃあさっそく、配置につこう。……行くぞ！》

その言葉に、一同は皆頷く。直後に、それぞれ動き出した。

（後編に続く）



### 第三十九話「最悪の誕生日」 (中編2) (後書き)

……はい。決着どころか話しが進まないままに中編2終了です……。

すみません (汗)

つ、次こそは三十九話終了です♪

た、多分…… (汗)

う……。頑張って次話、すぐにお届けいたしますので、ひらにご容赦を (涙)

ではでは、また後編で……♪

第三十九話「最悪の誕生日」(後編)(前書き)

ども〜♪

テストメントです。

お待たせしました(汗)

第三十九話(後編)をお届けします♪

漸く、風邪も治りました♪

ご心配かけて申し訳ありません(汗)

では、どうぞ〜♪

### 第三十九話「最悪の誕生日」(後編)

—轟!—

次元空間に炎が走る。

それは、一直線に向かい来るガジェットと因子兵群の中央を走り、次の瞬間。

—爆!—

爆裂閃光!

炎の柱として顕現し、まとめてそれ等を焼滅せしめた。

その一撃を放った人物。

黒鋼刃は、自らの愛刀。銀龍を振り下ろした姿で残心。間を置かず、即座に前進を続ける。

《っー! っー!》

前に、時空管理局本局へと進む刃の息は荒い。

既に言霊式を六発も使用している為だ。

それに、他の誰よりも前へと行く刃はその分ガジェットや、因子兵に1番多く襲われているのだ。

それを撃滅し続けて疲労が無い筈も無い。

間断無く襲い掛かる敵を容赦無く、手に持つ銀龍で断ち切り続け

る。

機械の身体を断ち、ヒトガタの身体を斬り裂く。

刃の顔には一切の余裕は無い。

それでも、前に進む。

憎しみを糧に。

怒りを胸に。

ただ前進を続ける。

《……じい……！》

少しだけ、口から言葉が零れる。

それを隠すように、眼前の因子兵を斬り刻み、ガジェットを真つ二つにする。

その刃の胸中にあるのは、ただ一つの記憶だ。

ベナレス・龍。

その男の記憶。

そして、その男に結果として殺されてしまった母の記憶。

優しく、厳しかった母。

自分に優しく笑いかけてくれた母。

それを殺した男。

”自分の父親”。

《……親父い……!》

吠える。

その呼び方をする事すらも嫌悪し続けたのに。  
でも、その呼び方以外の呼び方を知らなくて。

斬る、斬る、斬り裂く。

十を、百を、千を、万を!

眼前の因子兵に、ガジェットにベナレスの顔を重ね、滅ぼし続ける。

そんなものに意味は無いのに。

意味なんて無いと知っていたのに。

それでも刃は前進を続ける。

ベナレスへと、母の仇へと、憎いあの男へと、続くその道を走り続ける。

父親へと続く道をガジェットと因子兵で塗装された道を走る。

一斬! 一

真上から振り下ろした一刀でガジェットを断ち斬り、そのまま横に銀龍を構える。

《目覚めろ……銀龍!》

一哮！一

刃の思念による叫びに、銀龍は再度の咆哮をあげる。

瞬間、刃の足元に二重な円が組み合わさった特殊な魔法陣が展開し、同時に銀龍に風が卷く。

真空間だろうと、炎と同じく高位の術者は風を生み出せる。

それは、まるで刃の怒りを具現したが如くに勢いを増し、銀龍だけで無く刃自身すらも包む。

その刃に、上下、左右、前から襲い掛かるガジェットと因子兵。

それに、刃は一気に風卷く一刀を振り放つ！

《風、逆巻け！ 銀龍！ 風龍・暴風陣！》

一裂！一

瞬間、確かに刃を中心として空間が”歪んだ”。

風が捻れ、引き裂き、空間を歪めたのだ。

そしてそれは、一つの結果となって世界に顕現する。

一轟！一

竜卷。

次元空間に全てを巻き上げ、碎き、噛みちぎる顎が、風の柱となつて解き放たれた。

それが五本。

問答無用に、ガジェットと因子兵を喰らってゆく。

数千もの数を纏めて滅碎せしめたその一撃が通り過ぎた後には、刃ただ一人しか残っていなかった。

銀龍を振り下ろした姿で刃は残心する。

そして、ギロツと前を、本局を見据えた。

そこに居る筈の存在を、本局を通して睨み据える。  
自らの父親を、怒りと憎しみを籠めて。

叫ぶ！

《出て来い……！ クソ親父iiiiiiiiっ！》

次元空間に、ただその思いの叫びが響き渡った。



管理局、本局。

既に占拠されたそこには管理局局員の姿は無い。

その殆どは捕虜として拘束されているからだ。

今、管理局の官制室には占拠を行った組織。

ツアラ・トウ・ストラの指導者であるベナレス・龍。

そして側近たるグリム・アーチル。

そして、グリムと同じく管理局を裏切り、ストラに下った管理局員と、傭兵部隊であるアルセイオ隊の面々がそれぞれ詰めていた。

その一同が見るのは官制室のモニターに移る本局前で行われているガジェット、因子兵とアースラ隊による激戦であった。

「……因子兵、並びにガジェット。既に総数の二十％が撃破されま

した」

「……流石、と言った所ですか……」

官制官からの声に、グリムが若干の苦さを伴う声で答える。  
五十万強の兵群が、既に二十%も撃破されている。  
いくらグノーシス・メンバーがいるとは言え。  
それは凄まじい戦果と言えた。

「……だが足りぬ」

そんなグリムの後方から声が掛かる。

ベナレスだ。

腕を組みながらその顔に浮かぶのは笑み、であった。

「よく戦ってはいる。しかし、”この程度”に苦戦するようではな  
「……は！」

ベナレスの声に、グリムは恭しく頷く。

それに、ベナレスはくっただけ口元を歪めた。

「話しにならん。……そうは思わんか？ アル」

「……その話しにならん連中に負けた俺に聞きますかね……」

視線を移し問う声に、苦笑が続く。

その視線の先に居る人物は無尽刀、アルセイオだった。  
彼は苦笑しながらもその傍らに立つ。



「甘く見てると後悔するかもしれませんぜ？」

「構わん。寧ろ、”その位”で無ければな。……それとその妙な敬語はやめろ。貴様にソレは似合わん」

「んじゃ、そのように」

ベナレスの言葉に、アルセイオは肩を竦める。

そのまま、アルセイオは横目でベナレスを見る。

「……行くのか？」

「愚問、だな。”アレ”はテストもデータ取りも必要であろう？  
その相手に奴らは打ってつけた」

間髪入れずに答えるベナレスに、アルセイオは嘆息。  
額を抑える。

「……俺がアンタに一つだけ尊敬出来る所がある」  
「ほう、初耳だな。聞かせてみる」

意外そうな顔でベナレスは顔を向ける。

アルセイオは再度の苦笑。

ニツと笑う。

「何聞いても自信ありげに聞こえる事だ」

「何だ。当たり前だな。私はいつでも自分に自信を持っている」

いっそ傲慢とも取れるその発言にやはりアルセイオは苦笑。

アンタにや勝てねえよとばかりに首を振った。

そしてベナレスは立ち上がる。

巨軀を真っすぐに延ばして、モニターを見据えながら。

間を置かずに踵を返した。

「グリム。」片付けて来る”。兵を下げよ」  
「ハッ……！」

グリムはあくまでも柔順に答える。

アルセイオと親しげに話そうと、グリムは何も言わない。  
それは彼に対する不敬にもなるからだ。

……アルセイオを決して認めた訳では無いにしろ、だ。

グリムの返答に、ベナレスは無言。  
そのまま扉に進もうとして。

「……いいのか？ あそこにはアンタの息子も居た筈だが？」

その背中にアルセイオから声が突き付けられた。

アンタに息子を撃てるのか？ と。

そう、問う声が。

しかし、ベナレスはそんなアルセイオに振り返る。

その顔に浮かぶのはやはり笑み、だ。

「ああ、いたな、そう言えば。”そんなモノ”が。だが、それがどうかしたのか？」

きっぱりとベナレスは言い放つ。

その顔は、その目は、どこまでも混じり気無しの無感情、であった。

本当に、そんなコトはどうでもいいと。  
そう、告げる声。

それにこそ、アルセイオは嘆息した。

「……そうだな」

「ああ。では後詰めは任せるぞ。アル」

「あいよ」

アルセイオの返答をしっかりと確認した上でベナレスは官制室を出た。

ベナレスが出て行き、既に閉まった扉を見遣りながらアルセイオは盛大にため息を吐いた。

「……相変わらずだよ。お前は。……十年前と何も変わりやしない」

そう零しながら口元を歪める。

懐かしむように、アルセイオは笑う。

十年前。自分に、ルシア・ラージネス抹殺を命じたベナレス。  
それを思い出したのだ。

自分がグノーシスを抜ける一件となった事件。

それが結果として、またあの男の下に着く事になった事に。

あまりにも皮肉過ぎるそれに苦笑したのだ。

「……面倒臭い親父だよ。お前は」

その声は、あまりに小さく、口の中だけで呟かれ、他の誰にも聞

かれなかった。

そう、誰にも。



—煌！—

—破！—

—裂！—

次元空間に、光砲の一撃が。

剣矢の一矢が放たれる。

光砲は数体の敵を纏めて屠り、剣矢は確実に一体一体を仕留めていく。

それを放つのは最前線の援護砲撃、射撃組。

凧千尋と、本田ウィルであった。

千尋は溜め無しで、2ndフォームのガングニールをぶっ放し、ウィルは真空空間故に纏めて敵を屠る事を選択せず、確実にフェイル・ノートの一撃を持って敵を倒す。

それを自分達の前に居るメンバーの援護の為に撃ち続けていた。

《……むう。もっと景気良くバーン！ て撃ちたいわね……》

千尋が若干うんざりした顔でため息を吐く。  
それに隣のウィルも苦笑する。

《まあまあ、姐さんの気持ちは分かりますけど、もうちょい待ちやしょうや》

《……ストレス溜まるわね……》

《え！？ 性よー》

一煌！一

千尋はウィルに最後まで念話を許さず、ガングニールの砲口を差し向け、容赦無くぶっ放す。

それをウィルは獣じみた反応速度で避けてみせた。

《こ、殺す気ですかい！》

《……イライラしてる時にアホな事言うからよ。大体こんなの、ハヤトなら日頃受けてるから大丈夫よ》

《いや、ワイ。あの人のように無駄な頑丈さしてないんで》

無理無理とウィルは首を横に振る。

千尋はそれに嘆息で応え、また援護砲撃に戻る。

ウィルも援護射撃に戻った。

と、直後。二人の砲撃と射撃、そして最前線の四人をスリ抜けてガジェットと因子兵が現れた。

それらは即座に二人へと向かう。

二人の内、どちらかを殺せば、援護砲射撃の片方が止まる。それを見越したのだろう。

しかし。

《リク、出番やで？》

《楓、アレ任せるわ》

一斬！一

一閃！一

まるで二人の声に合わせるかのように、突破して来たガジェットと因子兵が真っ二つにされ、全身を穴だらけにされる。その後ろから二人の人影が現れた。

真藤リクと、獅童楓。

朱槍と、銀に光るレイピアを手に持った二人が。

二人はそのまま嘆息すると、申し合わせたように前に出る。

《さっきから大忙しやー。お姉さん、ネタ考えとる暇も無いで》  
《……そう言うのは戦いの真っ最中に考える事じゃ無いと思うんだよ。マジに》

一斬一

二人は、ぼやきながらも己が勤めを果たす。

それは援護組の護衛だ。

千尋とウィルが、何の気兼ねも無く、最前線の援護が出来るのはこの二人のおかげであった。

《感謝してるわよ。ほくくら。しっかり働きなさいな》

千尋が二人に笑い掛けながら光砲をぶっ放す。

ウィルもそんな千尋に苦笑しながらも、剣矢を撃ち放つ。

当然、楓もリクも何かを言い返してくると思い、だが。

《まあ、なあ〜》

《……………》

片や、曖昧に。

片や、無言で返答する。

そんな二人の態度にこそ千尋とウィルは眉を潜めた。

《……ちよつと。どうしたのよ？ アンタら二人》

《いつもならぎゃあぎゃあ喧しい楓姐さんや、先輩を先輩と思わん  
リクがどうしたんや？》

《……ウィル。後でちよつと、お姉さんと話し、しような？》

ニッコリと笑う楓に、ウィルは顔を引き攣らせる。

リクはそんな二人に嘆息。

朱槍でまた一体。抜けて来たガジェットをブチ抜く。

《……イヤな予感がするんだよ》

《……何やて？》

リクの念話に、一瞬。ウィルが訝し気な顔となる。

楓もリクの念話に頷く。

《……何ちゆうか、ここに居ると、マズイ気がしてならんや。感、  
やけどな》

《て、ちよつと待ちなさい。アンタら確か……………！》

千尋が目を見開く。

二人は、そんな千尋に頷いて見せた。

真藤リク。獅童楓。

二人はアビリティ・スキル・直感の、しかもかなりの高ランクである。

リクがS。

楓に至ってはSSS＋＋＋である。

そんな二人が揃って嫌な予感を覚える。

これほど怖いモノも無い。

何かが起きるのが確定してるも同然だからだ。

《コルト隊長には……？》

《さっき知らせた。……苦い顔してたな》

《今は現状維持するしかあらへんやて。……当たり前やけどな》

ウィルの問いに、二人は肩を竦める。

当たり前とも言える。

例え、何かが起きるのが確定と言っても、ソレだけで撤退を選べる筈も無い。

既に自分達はストラの懷に飛び込んでいるのだから。

《とりあえず、気をつけとくしか……？》

無い、と千尋は続けようとして。

しかし、出来なかった。

いきなり起きた現象に、驚いたからだ。  
他の三人も目を丸くする。

それは。

《敵が……》



《撤退していく?》

ウィルと、リクの声が重なる。

そう、今の今までこちらへと突っ込んで来ていた因子兵が、ガジエツトが。

いきなり本局に撤退し始めたのだ。

自分達の周りだけでは無い。

自分達を抜け、後ろへと向かった敵兵達すらもが、ぞろぞろと撤退していた。

しかし、驚きの事態はまだ続く。

一軋! 一

空間が確かに、一瞬。

硝子を割るような音が響いた。

その瞬間、今までずっと此処ら一帯を覆っていた結界が解けた。つまり、次元封鎖が。

《……どう言う事や、コレ……?》

《隊長……?》

千尋がいきなりの事態の連続に、コルトへと念話を飛ばす。しかし、それに対するコルトの返事は無かった。

《隊長?》

《……相変わらず。派手好きな野郎だ》

？

コルトからいきなり告げられる言葉に千尋やウィルは疑問符を浮かべる。

しかし、前の二人はそれにぐっと奥歯を噛む。

コルトの言わんとしている意味を察したからだ。

《っー。あれ、かよ》

《……やね》

《二人共……？》

怪訝そうな表情となる千尋に、二人は指を伸ばす。思わず、その視線を辿り。

そして、千尋は、ウィルは二人の反応を理解した。

人

人がいつの間にか、本局の真ん前に立っていた。

2mはある巨体を漆黒の甲冑で覆い、鎧によく合う短い黒髪は全て逆立てている。

手に持つのは大剣だ。

そして全てを睥睨せんが如く見下ろす釣り上がった目。

グノーシスの人間なら。

否、今この場にいる人間で彼の事を知らない者はいない。  
男の名は。

《……ベナレス・龍》

誰かが、その名を呼び。

男。ベナレスはそれに応えるかのように口の端を吊り上げて。

笑った。



本局を背にして、その男は立つ。

ベナレス・龍。

ツアラ・トウ・ストラの指導者たる彼が。

暫くベナレスは辺りを睥睨すると、ゆつくりと笑った。

《貴様達が現状、管理局最大戦力たるアースラ隊、か。見知った顔も何人かいるようだな》

突如として、アースラ隊全員に思念通話が響く。

ベナレスからの念話である。

それに皆は、それぞれの反応を示す。

一番後方に居た八神はやてが一同を見渡し、ウィンドウを展開。  
ベナレスに繋げる。

《……時空管理局、本局所属。アースラ艦長、八神はやて言います。

……アンタが、ツアラ・トウ・ストラ指導者。ベナレス・龍で間違  
い無いんやな?》

《いかにも》

ベナレスはその問いに、大仰に頷く。

はやては、ベナレスに続いて罪状を述べようとして。

しかし、突き出された手にそれを止められた。

《……逮捕するだの何だの言うのであろうが、時間の無駄だ。どちらにせよ。戦う事は決まっている》

《ーっ！》

きっぱりと告げて来るベナレスに、はやてはぐつと呻く。

ベナレスはどこまでも構わない。

大剣を杖のように、空間に形勢した足場に突き立てる。

《……貴様達の戦い、見せて貰ったのだが。正直失望を禁じ得なかった》

《何、だと……！》

誰かから怒りの声が上がる。

恐らくはリクか。

それもまたベナレスは無視。

くつと笑う。

《貴様達ならば、と思ったのだが。落胆させられた。これならば私だけで打倒出来てしまう》

《……言ってくれるな……。試して見るかよ？》

コルトが逆に挑発するかのように言い放つ。

それにベナレスは笑い。

《いいだろう。来るがー》

よい、と告げようとして。

—轟！—

いきなり、ベナレスまで一直線に炎線が走る。  
一瞬でベナレスへとそれは到達し、次の瞬間。

—煌！—

激烈な爆発となって顕現。

ベナレスを中心として、巨大な爆炎をぶち撒けた。

それを成したのは言うまでも無い。

ベナレスの息子たる存在。

刃であった。

《っー！ 黒……！》

《……》

コルトが刃に制止を呼び掛けようとして、しかし。

刃はそれに耳を貸さない。

続いてさらにもう一発言霊式による爆炎技を叩き込む。

それは、先の炎と相乗効果を生み、あたかも太陽のように顕現した。

《……っ！ 馬鹿が！》

コルトが発生した爆炎に、呻きながら舌打ちする。

ベナレスは元とは言え第一位だった人間である。

並の実力では無い事は間違い無い。

ああいった手合いは、包囲した上でタイミングを合わせて一撃でケリを付けるのが正しい。

しかし、刃が先走った事によりコルトの策はあっさりと潰えた。

《くそ……！ 奴に続くぞ。全員、全力の攻撃を奴に……！》

とにかく、今の内にベナレスを討とうとして、しかし。

コルトは立ち止まる。

他の皆も、だ。

爆炎が消える。

そこに立つのは今だ無傷のベナレス、であった。

《アレを受けて……！》

《っー！》

悠一の驚きの声に、呆然としていた刃がハッと我に返る。

直後、再び言霊式を放とうとして。

《見せてやろう。……絶望を》

一軋！一

瞬間、世界が軋んだ。

キシキシと歪み、悲鳴をあげる。

同時、ベナレスの足元に魔法陣が展開した。

カラバ式の魔法陣だ。

それは一気に拡大し、百数十mもの巨大な魔法陣となった。

《何……？ 何をしようとしているの……？》

《アレ、まさか……》

《キャラ？》

突如として響くキャラの声に一同、視線を彼女へと向ける。

キャラはそんな皆の視線に気付かぬ程に呆然とし。

しかし、ぽつりと呟いた。

《召喚、術……？》

《な、に……？》

告げられた念話に、コルトが目を見開く。

しかし、あんな巨大な魔法陣を必要とする召喚術とは一体……？

瞬間、コルトは思い出した。

一度だけ”それ”を見た事がある。

百数十mもの魔法陣を必要とする召喚術を。

ソレは――。

《しまっー！》

《もう、遅い》

失策に気付いたコルトにベナレスが笑いを浮かべる。

直後、ベナレスは片手を掲げた。

《巨神降誕……！》

一際、激しい輝きを魔法陣は放つ。

そして、ベナレスは叫ぶ。  
己が”デバイス”の名前を。

《来い……！ ギガンテイスっ……！》

瞬間、コルト達に、なのは達に、そしてスバル達の眼前にソレは現れた。



それは、機械で出来ていた。

本局の前に、ベナレスの真後ろに突如として現れたソレは。

巨大なヒトガタ。

そう呼ぶのが正しいだろう。  
ずんぐりとした姿である。

しかし、鋼で出来たその身体は圧巻、と呼ぶのが正しい。  
その偉容。

実に六十mは超えるその巨体は正しく巨神ギガンテイスと呼ぶに相応しき姿であつた。

そして何より。

アレは絶望的なものだと、この場に居る全ての者が悟った。  
ただ在るだけでそれを悟らされたのだ。



《ギガンティス……！ 対界、神器……！》

コルトが目を剥いて、それを見ながらぼそりと念話で告げた。  
それになのはが目を向ける。

《コルトさん。……アレは……？》

《……グノーシスに在る。……” 在った” 兵器の中でも最悪のモン  
だ》

ぐっと奥歯を噛み締めながらコルトが呻く。

そのまま、続きの言葉を放った。

《” 第3、第4段階到達型感染者用兵器”。つまり、感染した世界  
をブチ壊すための代物だ……！》

《世、界、を……？》

一瞬、告げられた意味を理解出来ずに、なのはを始めとしたアー  
スラ・メンバーは呆然とし。

しかし、その言葉の意味を理解して総毛立つ。

それが文字通り、” 世界を滅ぼすモノ” であると理解したからで  
ある。

そんなモノをよりにもよって、ベナレスが手にしているという事  
態に一同は言葉を失う。

そして。

《フュージョン》

その言葉が辺りに響いた。

直後、ベナレスの姿が消える。

それを見て、コルトが真っ青になった顔で後ろに振り向く！

《逃げろ！ 八神、撤退だ！》

《え……。で、でも……》

《早く！》

《逃がすとしても？》

声はギガンティスの中から響いた。

巨神がその巨軀を動かし始める。

そのまま、ギガンティスの両腕が持ち上げられた。

《次元震、と言うものがあるな？ それを例えば、”完全に攻撃に転化出来た”場合。果たしてどうなると思う？》

《っー！》

告げられるベナレスからの念話にはやて達はゾクリとする。

そんなモノ、想像すらも超越する破壊力になるに決まっていた。

はやては、即座に撤退を告げようとして。

しかし。

《では、さらばだ》

全て、遅かった。

《アーマーゲドン》

滅

光が、ただただ膨大な光が波に、津波となって押し寄せる。それは最初にグノーシス・メンバーを飲み込んだ。更になのは達を飲み込もうとして。

《神覇、八ノ太刀イイイイイイ……！》

”絶対聞こえない筈の聲が一同に響いた”。

シ  
オ  
ー  
ー  
。

《玄武》  
一  
一一  
一一  
一一  
一一  
一一  
！  
！

光の波が届く、瞬間。

確かに、一同の眼前に、亀の甲羅のようなシールドが展開した。



《 》  
 ？  
 ……  
 ？  
 《 》

痛む頭を振るい、なのはは目を覚ます。

何がー？

そう、思い。瞬間、全てを思い出した。

自分達は確か、あの光の波に……！

《皆！　っー！？》

念話を辺りに飛ばして、なのはは起き上がり、そして、それに気付いた。

まるで自分を庇うかのように眼前に立ち塞がった存在に。

紅の鉄騎、ヴィータ。

彼女はなのはの前に立ち塞がり、両手を掲げた恰好で身動きを止めていた。

《ヴィータ、ちゃん……？》

《……へ》

なのはの呼び掛けに少しだけ口の端をヴィータは持ち上げ。

瞬間、その小さな身体が崩れた。

なのはは、そんなヴィータに慌てて縋り付く。

《ヴィータちゃん！？》

抱き留めて、ゾクリとした。

”軽い”。

存在が消えんとせんばかりにヴィータの身体は軽かった。

そこでなのは気付いた。

ヴィータは自分を守る為に、あえてなのはを押し飛ばし、その前に立ち塞がったのだ。

盾になるように。

《何で……！？　ヴィータちゃん……！》

涙を浮かべながら、なのははヴィータに問う。

しかし、彼女はそれに答えられない。

ただただ、なのはの腕の中でぐったりとし続けていた。

キャロとエリオは光の波が迫った時。

確かに死を覚悟した。

迫り来るソレは小さな身体を滅ぼすのに十分過ぎるチカラで押し寄せ。

エリオはせめてキャロだけでもと必死に抱きしめ背中を光の波に向けた。

しかし、その直後。

《大丈夫》

そんな声が聞こえ、そして。

《なんで……？》

エリオは腕に抱えた二人を見て涙を流す。  
二人はフェイトとシグナムだった。

光の波が通り過ぎた後、振り返ったエリオの目に映ったのは自分を抱き留め、ずたぼろとなったフェイト。

そして、更にその前に立ち塞がり、フェイト以上にボロボロになったシグナムであった。

二人共、意識は既に無い。

だが、エリオは確信していた。

フェイトもシグナムも、自分達を守る為に、身を犠牲にしたのだと。

キャラも意識を失っていた。

一人だけ無事。

それが尚更、エリオのココロをえぐる。

エリオは腕の中で意識を失ったフェイトとシグナムを抱え、涙を流す。

それは、少年にとって守れなかったと言う傷。

守られたと言う痛み。

エリオは悔しさと悲しさのままに泣き続けた。

何で？

光の波が通り過ぎた後、スバルとティアナは一緒にそう思う。

何で、こうなったのか。

何で、皆倒れているのか。

何で、何で。

いくつもの何で。

そして。

何で、”彼”がそこに居るのか。

スバルとティアナの眼前には、左手を突き出した姿で顔が歪める、シオンが居た。

《シオン、何でここに……？》

《ーに、合わなかった……！》

《え……？》

響く声に、二人は思わず声をあげる。

しかし、シオンはそれに気付かず、俯く。

《ちつくしょう……！ 間に、合わなかった……！》  
《シオン……》

歯が軋む程に、シオンは奥歯を噛み締め、そのまま顔を上げた。

《アースラ。聞こえてるか……？ アースラ！》  
《……シ、……ン……？》

途切れ途切れながら声がシオン達に届く。

カスミの声だ。

暫くして、声は普通になった。

《シオン！ 何でここに……！？》  
《説明は後だ！ 他の皆の状態は！？》

語気も荒くシオンが問う。

それにカスミが通信の向こう側で動揺したような吐息が零れ。  
しかし、次にヒツと息を詰まらせた。

《カスミ……！》  
《……あ、アースラ・メンバーの過半数が身体<sup>レッドゾーン</sup>重傷警告。ウ、ウィ  
ル……。グノーシス・メンバー全員が、生命維持限界警告………！  
シ、シオン！》  
《っー！》

告げられる内容に、シオンだけで無く、スバルもティアナも真っ  
青になる。

レッドならまだしもデッド。



死ぬ一歩手前の状態をそれは意味していた。

《カスミ。アースラの短距離任意転送システムは生きてるな？》

《……ええ。今は次元封鎖も無いから使えるわ》

《なら、全員を回収。頼む。シャル先生とみもりにも連絡を……！》

了解、とカスミが通信の向こうで頷く。

暫くして、シオン、スバル、ティアナの足元転移魔法陣が展開。

三人の姿が消えた。



アースラ格納庫にシオン達は投げ出された。

転送システムに不具合が生じているのだろう。

まともな転移では無い。

しかし。

「っー！ 皆……！」

起き上がりソレを見たシオンは絶句した。

スバルとティアナもだ。

格納庫に転がるグノーシス・メンバーは正しく虫の息、と呼ぶに相応しい状態だった。

五体が付いてるだけ、マシと言う状態だ。

それはアースラメンバー也大差無い。

N2Rメンバーはクロノも含めて全員意識を失っており、はやて。そしてザフィーラまでもが意識が無かった。

特に、ヴィータとシグナムが酷い。

元々怪我をした身であるとは言え、怪我の状況はグノーシス・メ  
ンバーと同じく、デッドラインの状態であった。

現状、意識を保っているのはシオン、なのは、エリオ、スバル、  
ティアナだけだ。

「……なのは先生……」

「……ヴィータちゃんが……」

腕に抱く力をキュツと込める。

そして、ゆっくりとヴィータを床に下ろし、立ち上がる。

今、やらねばならない事は泣く事では無い。

現状をどうにかする事、であった。

周りを見渡し、なのはは顔を歪める。

そしてシオンに向き直った。

「シオン君、どうして此処に……」

「……ちよつといろいろありまして。説明はまた今度に。今は――」

「はやてちゃん！ 皆――！」

直後、声が格納庫を駆け巡る。

シャルと、それに付き従ったみもりであった。

シャルは一瞬だけ取り乱しそうになり。

しかし、一つ深呼吸して落ち着きを取り戻す。

そのまま、みもりに向き直った。

「みもりちゃん。回復魔法は使える？」

「はい！ 何とか……」

即座に頷くみもりに、シャルは頷く。

そして、クラールヴィントを起動させ、旅の鏡を使用。  
意識が無い者達を纏めて医療室に転移させる。  
それを確認すると、そのままなのは向き直る。

「怪我をした皆は、私達に任せて、なのはちゃん」  
「はい。……シャルさん。皆の事、お願いします」

なのはの言葉に、シャルはコクンと頷く。  
その傍らのみもりも、またシオンに視線を向けるが、シオンはただ頷きのみを送った。

「それじゃあ、みもりちゃん。行くわよ？」

「あ、はい！」

「みもり！」

転移魔法で医療室に向かおうとするシャルとみもりにシオンが  
声を掛ける。

みもりはそれに振り返った。

「……皆を、頼む」

「……はい。大丈夫です。シン君も気をつけて」

シオンの言葉に、みもりは笑顔を見せる。

直後、そのままシャルと転移魔法で消えた。

それを見遣って、シオンは再びなのはと向き直る。  
なのはもまた頷いた。

「シオン君、これからどうするの？」

「それなんですけど……カスミ」

《うん》

シオンの呼び掛けに、即座にカスミが通信で応えた。  
シオンは一つ頷く。

「今、アースラと、敵はどんな状況だ？」

《……ええ。現状、アースラは三十%の機能がダウン。次元航行機能と、各ライフラインはどうにか確保したわ。……で敵なんだけど……》

カスミの声に続いて、ウィンドウが展開する。

そこには現在の敵の展開状況が記されていた。

「向こうは動かず、こちらを様子見、か」

「そうだね」

ウィンドウを操作して、シオンは閉じる。

そのままなのは視線を戻した。

「……どうしますか。なのは先生」

「撤退、しか無いよね」

撤退。つまりは敗走である。

なのはが俯きながらそう答え。

それにスバルとティアナもまた視線を落とした。

悔し気に拳を握る。

「……今なら次元封鎖もされて無い。次元転移で逃げられます」  
「うん。……でも」

シオンに頷きながらも、なのはは俯いたままだ。  
それにシオンも視線を落とす。

「今の、アースラだと次元航行に入ってもすぐに追い付かれます。  
殿がいますね……」

シオンの言葉に、少しの間を持ってなのはは頷く。

そう、アースラが次元航行に入り、暫くするまであの数と、そして”ギガンティス”相手に時間を稼がなければならぬ。

しかし、それは文字通り不可能に等しいものであった。

それに、時間稼ぎに成功したとしても殿に残った人間は置いて行かれる事になる。

「……でも、仕方ないです。これしか撤退の方法はありません」

苦々し気に告げるシオンになのはも呻く。

何か方法はないのか、そう思い。

しかし、何も思いつかない。

一同に重い空気が漂い、シオンは息を一つだけ吐き、歩き出した。

「……シオン君？ 何処に……？」

「皆が残る必要はありません。俺、一人だけ残ります」

間髪入れずに、なのはにシオンが答える。

それになのはは慌てて、シオンを追い、肩を掴んだ。

「一人、てどうやって……！」

「アヴェンジャーを使います」

きっぱりとシオンは告げる。

それに、スバルやティアナも首を振る。

「シオン、駄目だよ！」

「そうよ！ アンタ、またー」

そこまで言って、三人は気付いた。

シオンの目的に。

シオンは。

「アンタ最初っから暴走する気……？」

「……………」

ティアナから告げられるそれに、しかしシオンは答えられない。  
黙り込む。

シオンがアヴェンジャーとなって暴走する。

確かに、それは敵に取っても驚異となる。

時間は確実に稼げるだろう。

しかし。

「……シオン。でも、それだと……」

「……一を取るか九を取るか、だ。なら九だろ」

「「っー！」」

まるで絞り出すようにして吐き出した言葉に、スバルとティアナが硬直する。

シオンは死ぬ気なのだ。

暴走して、そのまま。

「だ、駄目だよシオン！」

「なら他に方法あんのかよ！？」

キツとスバルを睨む。

それにスバルはたじろぐ。

ティアナも、顔を歪めていた。

しかし、シオンはそれに構わない。

そのまま、再度歩き出す。

そして。

「シオン君」

—パシン—

渴いた音が格納庫に響いた。

シオンの目が見開かれる。

スバルやティアナも、だ。

理由は簡単、なのはがシオンの正面に回り、その頬を張ったのだ。

呆然とするシオンに、なのはは構わない。

真っ正面から見据える。

「シオン君。死に行く積もりのような人に行かせられないよ」

厳しい眼光でそう言い放つ。

なのはのプレッシャーに、シオンは一瞬たじろぎ。

しかし、負けじと睨み返した。

「……けど！　なら、どうするんですか……！？」  
「私が行くよ」

間髪入れずに、なのはは答える。  
あまりにもスッパリと言われた言葉に、一瞬だけ三人共ポカンとなる。

しかし、シオンはそんな、なのはを睨みつける。

「ふざけないで下さい……！　今、アースラで1番階級が高いのは貴女だ……！　なのは先生が指揮しないでどうするんですか！　俺が行けば、まだー」

「シオン君。理由付けたりしないで。いい加減、自分の無茶に甘えるの止めよう」

なのはは、シオンに最後まで言わせなかった。  
告げられた言葉に、シオンは絶句する。

しかし、なのはは構わない。

続ける。

「……自分が無茶すれば、自分がどうにかすれば、誰かが助かる。  
自分はそのために犠牲になってもいい。……そんな事は、ただの甘えだよ。シオン君」

「……でも……」

「私は自分を犠牲にしようなんて思わないよ」

きっぱりと告げるなのはに迷いは無い。

シオンを、そして後ろのスバルとティアナを見据えたまま続ける。

「皆も守って、そして私も、ちゃんと此処に帰って来る。……私は



その積もりだよ？」

「なのは、先生」

「大丈夫。絶対に、大丈夫だよ」

だから皆も信じて。

そう締め括る、なのはにシオンは俯く。

改めて、思う。

この人は強い、と。

魔力とかそんなモノでは無い。

ヒトとして、彼女はどこまでも強かった。

「指揮はグリフィス君がいるし、大丈夫。……シオン君や、スバル、ティアナ達にはアースラと皆を守って貰いたいんだ。……お願い、出来るかな？」

なのはは笑顔で続ける。

それに、シオンは黙ったままコクリと頷く。

スバルとティアナも同様に、頷いた。

「うん。それじゃあ、行って来るね？」

「……なのは先生。貴女の帰って来る場所は必ず守ります。……だから」

必ず、帰って来て下さい。

シオンのその言葉に、なのはは満面の笑顔で頷き。  
そして。

ただ一人、数十万の敵兵と、ギガンティスの待ち受ける次元空間に飛び出した。



なのはがアースラから飛び出した、直後。

アースラは転舵。

そのまま、次元航行に入る。

それをギガンティス内のベナレスは見遣り、動き始める。  
周りに居るガジェットと、因子兵と共に。

《撤退か。それを許す積もりもー》

—煌！—

ベナレスは最後まで言えなかった。

ギガンティスの胴体に光砲がいきなり叩き込まれたのである。  
激烈な威力の光砲は、しかし。

ギガンティスに直撃する寸前に、歪んだ空間により減衰させられ、  
その装甲を傷付ける事は無かった。

《ーほう》

関心したような念話をベナレスが漏らし、光砲が飛んで来た位置  
に、視覚素子を向ける。

そこには、レイジングハートを構えるのが居た。

《個人にしては中々の威力だ。ギガンティスには通じんがな。……

で？ 一人で私達を止める積もりか？》

問われる声に、なのはは無言。

その身体に光球が複数展開していく。

《殿、か。数十万を越える兵と、このギガンティス相手に一人で戦おうとする。その意気や結構。必死の覚悟、とやらか》

《違うよ》

初めて、なのはがベナレスに答える。

レイジングハートを構える、なのはは。

しっかりとギガンティスを。その周囲にある兵群を見据え、口を開く。

《必死の覚悟なんかじゃない。私は貴方達を止めて、アースラに戻る。死ぬ積もりなんか無いよ》

ギガンティスを見据えるなのはの目は、どこまでも澄んでいた。死を覚悟した者の目では無い。

それは、最後まで生きあがく事を止めない目であった。

《約束があるの。一つはヴィヴィオとの約束》

必ず帰って来ると。

そう、娘と交わした約束。

敵を見据えるなのはは静かに、話す。

想いを、力とする為に。

《一つは教え子達との約束》

シオンや、スバル。ティアナとの約束。

生きて帰ると、そう信じてくれた三人との約束だ。  
なのはの身体が淡く光る。

魔力光だ。

それは、ゆっくりとその光量を増していく。

《そして、一つは……》

黒の青年との約束。

戦うと、そう決めた夜の約束。

それは言葉に出さず、そっと胸にしまう。

なのはを覆う魔力光は光量を増し続け、そして。

《だからっ！》

— 煌！ —

一気に吹き上がった。

天地に突き立つ柱の如く、魔力がなのはの身体から溢れ出す。

《私は死なない！ 必ず、アースラに帰るよ！》

《成る程、な。いい気迫だ。だが——》

それらを見遣りながら、ギガンティスが動き始める。  
その周囲の兵群も共に。

それに、なのははレイジングハートを差し向ける。

《その約束。軽々に叶うと思うな》

《叶えてみせるよ》

断言するなのはに、ベナレスは笑い声を念話に乗せる。

《やってみせてみる！》

直後。数十万の兵群がなのはただ一人に向かって雪崩かった。自分、一人に向かって襲い来るガジェットと因子兵群。それに、なのはは瞳を逸らさず。

そして。

《行くよ。レイジングハート》

【オーライ。マイ、マスター】

いつもと変わらぬ愛機の言葉に、なのはうんと頷く。握り締めるレイジングハートを前に、構えた。

叫ぶ！

己の力を！

《ブラスターーーー！ 2ーーー！》

【ブラスター、2nd。リリース】

一煌！一

瞬間、なのはを中心として、膨大な魔力が光となって顕現。  
本局前の次元空間を桜色に染め上げた。

なのはの、たった一人きりの、しかし。確かに違う戦いが始まる  
――！

（第四十話に続く）



ええ……。作者のテストメントです。

ども……。♪

今回はちょっとアリサ道場をお休みしてお送りします♪

と、言うのも今回、ページ数が多くて……。 （汗）

申し訳ありません （汗）

次はアリサ道場、やるので平にご容赦を （汗）

なのはは果たしてどうなるのか？

アースラは無事逃げられるのか？

次回までのお楽しみです♪

ではでは♪ 次話でまたお会いしましょう♪

では……。♪

第三十九話「最悪の誕生日」 (後編) (後書き)

「襲い来るストラ軍勢にただ一人、立ち向かうなのは」

「ブラスタ―2までも解放し戦う彼女に、ガジェットが、因子兵が、そしてギガンティスが襲い掛かる」

「激しい抵抗を続けるなのはに、アルセイオ隊まで現れ、そして」

「”彼”が彼女の前に現れる」

「次回、第四十話。」

『星の想い、天の意思』」

「EX。真なる名が、世界に響く」

第四十話「星の想い、天の意思」(前編)(前書き)

「約束が、ありました」

「必ず、帰ると言う約束」

「その約束を守る為に、私は絶対に生きる事を諦めたりなんてしない」

「皆と一緒に生きて行きたいから」

「だから、私は。絶対に諦めない」

「それが、例え」

「どんなに絶望的な状況だろうと」

「私は諦めない」

「魔法少女リリカルなのはS t S, E X。始まります」



## 第四十話「星の想い、天の意思」(前編)

時空管理局、本局前。次元空間。

そこに、光が瞬く。

爆発と、魔法による光だ。

—爆—

再び、巻き起こる爆発。

同時に爆煙がブアッと広がり、そこから白が飛び出した。

ただ一人、本局前に残り戦う高町なのはある。

煙を突っ切りながらカートリッジ・ロード。

レイジングハートを正面に構える。

【アクセル・シューター】

《シューーーート!》

—閃!—

レイジングハートより放たれた、数十の光が、次元空間を切り裂いて走る。

それは、なのはへと突っ込んで来るガジェット、因子兵群に叩き込まれ貫く。

一瞬の間を持って、ガジェットは爆発した。

しかし、因子兵群は止まらない。

すぐさま再生し、なのはへと走る。

なのはは、それを見ても慌てない。

ただ見据えるけど。

直後。

—煌！—

因子兵群を”真横”から閃光が薙いだ。

それは、幾重も放たれ、因子兵を纏めて消滅させる。

なのはは、それを視界の端に納めながらも止まらない。

次元空間を翔る。

その、なのはに追従する六つの影があった。

それは、レイジングハートの先端にも似た形のモノであり、それぞれ後端のスラスターで自律的に飛んでいる。

これこそが、なのはがブラスターシステムを発動した時に発生する機動攻撃システムであった。

ブラスター・ビット。

計六つのそれは、なのはの意のままに動く。

次元空間を翔るなのは。

しかし、そこには大量の。

それこそ三百六十度、全天にガジェットと因子兵が居た。

直後、二つの敵群がそれぞれエネルギー型の機銃を放つ。

それはまるで驟雨しゅううの如くなのはへとひた走り、しかし。

【プロテクション】

即座に、なのはが展開した全天を覆うプロテクションに防がれた。ガジェットと因子兵群は、障壁を張るなのはに、止まらず光弾を叩き込む。

放たれ続ける光弾は弾幕となる。

しかし、それはなのはの障壁を抜く事が出来ない。

そして、その光弾を避けしながらガジェット、因子兵群に到来するモノがあった。

ブラスター・ビットだ。

ビットは、光弾を潜り抜けると、そのまま光砲を連射。敵群を確実に減らす。

そして、弾幕に切れ目が出来た。

なのはは、それを見逃さない。

即座にプロテクションを解除し、弾幕の切れ目に踊り出た。

さらに、カートリッジ・ロードを四連。

ブラスター・ビットも周囲に戻し。

レイジング・ハートを。

ビットを、襲い来る敵群に差し向けた。

《エクセリオン・バスター。フル、バースト！》

【オーライ！】

なのはの思念による叫びにレイジングハートが高々と応える。

させじと、ガジェットと因子兵が反転し迎撃を開始するが、既に遅い。

なのはは、既に攻撃準備を整えているー！

《ブレイク……！ シューーーーー！》

—煌！—

光が生まれ。

—輝！—

光が放たれ。

—裂！—

光が爆進する！

レイジングハートから放たれモノを含めて、計七ツの極大光砲は、容赦無く、ガジェット、因子兵を飲み込み。

全てを光の彼方へと放逐した。

未だ、遠目には大量の敵群がいる。

しかし、眼前の敵群を倒せた事に少し安堵した。  
瞬間。

《見事》

っーーーーー！

そんな念話が真後ろより放たれ、慌ててなのはは振り返る。  
それにまるで合わせるかのように、十m超の巨拳が降り落ちた。

一撃！一

頭上から放たれた拳に、なのはは、防御を行わず。フラッシュ・ムーブで後退。

所詮は、質量が違い過ぎるのだ。  
防御するのは下策と言える。

十mを一気に後退し、なのはは眼前の存在を見ながら、くつと呻いた。

ギガンティス。

60m超の機械で出来た巨人が、そこに居た。

いつの間にー！？

内心驚愕しながら、なのははギガンティスにレイジングハートを向ける。

瞬間、ギガンティスの姿が消失した。

《っー！？》

【マスター！ 後ろです！】

一撃！一

レイジングハートから飛ぶ警告に、なのはは後ろを振り向かず、バレルロール。

直後に、巨拳が後ろか飛んで来た。

すれ違う軌道を描き、なのはと巨拳が交差する。

それを視界の端に納めながら、なのはは再び、巨拳を放った存在を見る。

そこには当然とばかりにギガンティスが居た。

どうやって、後ろへと回ったのか？ そう思いながらも、なのはは止まらない。

レイジングハートとブラスター・ビットを全て眼前のギガンティスに差し向け。

《シューーーート！》

一輝！一

七方向からの一斉砲撃。

迷い無く、それは突き進み。  
しかし。

突如、空間が歪んだ。

《っー！》

《無駄だ》

放たれた光砲は、全て空間の歪みにより、受け止められ。  
減衰させられた。

ベナレスの念話の声を聞きながら、なのはは後退。

やはり、十m程の距離を取り。

再びギガンティスと対峙した。

《上手く逃げるものだな。捉えられん。いかに対界神器と言えど、

対人に向かん、か》

《……………》

ベナレスの嘆息する念話を聞きながら、なのはは呻く。

先程からベナレスはギガンティスによる格闘のみでこちらへと攻撃している。

故に、まだ回避出来ているに過ぎないのだ。

サイズが違い過ぎる。

人と虫くらいのサイズ差だと考えると分かりやすい。  
飛ぶ虫を、人は中々捉えられないようなモノだ。

《やはり、ここはコイツ達を上手く使わせてもらうか》

ベナレスがそう、念話を飛ばすと同時、その周囲に再び因子兵とガジェットが集まった。

それに、なのはは呻く。

包囲された所でギガンティスの一撃を受ければそこで終わる。

たった一人に対して、ベナレスは一切の油断が無い。

また、容赦も無かった。

《では、いい加減終わらせるとしよう》

直後、その念話に応えるかのように、大量の敵群がなのはに向かい、雪崩となって攻め込んだ。



全天から襲い来る、敵群。

それ等を、なのはは視界に納めながらアクセル・シューターと、ブラスター・ビットからの光砲を連射。

こちらに近付かせまいと、叩き落としていく。

しかし、敵群は損害には一切構わずになのはへと直進する。先の戦いと合わせてもまだ、三十万以上もの数が居るのだ。少しの損害は全く気にしない。

直後。ガジェット、因子兵群からミサイルが放たれた。

総数にして、数百。

それは真っ直ぐに、なのはにひた走る。

なのはは、それに対して、シューターで迎撃。

次々と叩き落とす、が。

全てを落とす事は出来ずに、何発かはシューターを免れて、なのはに突き進んだ。

### 【プロテクション】

一壁！一

レイジングハートはそれを確認。

迎撃が何発かは不可能だと判断すると、プロテクションを展開する。

なのはのプロテクションは、AA+相当の防御力があり、ブラスタ―2を発動している今ならば、S相当の防御力を発揮する。

対して、迎撃を抜けたミサイルは二十を下らない。

今のなのはの障壁を抜けられる筈は無かった。

そう、”ミサイルに何も仕込まれていなければ”。



—  
爆  
！  
—

ミサイルが、障壁にぶつかる、直前。  
いきなり”弾けた”。

ミサイルが途中で、内部から爆ぜたのだ。その内部から飛び出る幾千もの鉄杭！

【――マスター！ 弾頭警告！】

《对障壁用弹头！？》

レイジングハートからの警告に、なのはは目を見開く。  
しかし、既に遅い！

二十のミサイルはその全てが対障壁弾頭であつた。二十のミサイルが全て内部から爆ぜ、幾万もの鉄杭となる。それは、全方位から障壁に叩き込まれた。

— 擊手！ —

[illegible]

— 擊手！ —

数万もの鉄杭により、なのはのプロテクションが次第に削られる。いくら強固な障壁でも、何度も何度も攻撃を受け続ければ持たない。

それをこの弾頭は、数万の鉄杭を瞬時に叩き込む事により、実現

させていた。

アーマールブレイカー。

そう呼ばれる弾頭は、なのはの障壁を削っていく。  
そして。

《第二陣、第三陣。仕掛けろ。フォーメーション。薙鎌》

ベナレスの声に、ガジェット、因子兵がなのはを囲むような機動  
を行い。

エネルギー機銃を全方位から浴びせる。

それは、障壁を張り続けていたなのはを襲い、障壁を解除出来ない  
ように、また同時になのはをその場に釘付けにする。

ビットが光砲を放ち、敵を迎撃するも、追いつかない。

駄目！

そう、思うなのはの思考を読んでいたが如く、ベナレスが更なる  
指令を出す。

《フォーメーション。鳥籠。……蹴散らせ》

一射！一

直後、一斉になのはを包围する敵群からミサイルが放たれた。  
その数、数百。

ミサイルの後端から尾を引く煙が、まるで鳥籠のように、なのはを囲み。

―爆！―

―煌！―

―裂！―

全弾直撃。

激烈な爆発となって、なのはを飲み込んだ。

《……少し、やり過ぎたか？ 塵になって……》

周囲に因子兵とガジェットを油断無く、従えるベナレスが、ギガ  
ンティス内でぼそりと呟く。

障壁を削った上での一斉攻撃だ。

並の、いや例えエース級だろうと耐えられはしまい。

未だ煙は消えず、なのはがどうなったのか分からない。

ガジェット、因子兵に確認させようとして。

《ブラスター……！ 3……！》

そんな、念話による叫びが響いた。

―煌！―

直後、激烈極まり無い光が魔力放射となって煙を晴らす。

そこに居たのは、ズタボロとなったバリア・ジャケットで、身体中の至る所から血が玉となって流れる、なのはであった。

全てのビットと共に、レイジングハートをギガンティスに差し向けている。

ボロボロになった状態でなお、こちらにレイジングハートを向けるなのはに、一瞬だけベナレスは硬直。

しかし、直ぐさま我を取り戻すと、ガジェット、因子兵群をなのはに差し向ける。

しかし、もう遅い！

八連カートリッジ・ロード。

マガジン内全てをフル・ロードし、そのままマガジンを取り替える。

足元にはミッド式の魔法陣が展開し、レイジングハートの側面からは、光の翼が展開する。

レイジングハートの先端部分から、そして各ビットからの先端にも光球が灯り、それは全てギガンティスへと向けられた。

《ディバイン……！》

轟、と魔力が更に噴射。

光球がその輝きと、大きさを更に増す。

ガジェットと因子兵がミサイルを放つが、それすらも関係無い。

吠える！

かって、聖王のゆりかご内部すらも撃ち抜いた一撃を！

！  
≫

《バスタアアアアアアアア  
丨丨丨丨丨丨丨丨丨丨丨丨丨丨丨

—  
煌  
—

瞬間、莫大にして極大。

激烈極まる光がレイジングハートから、全ブラスター・ビットから容赦無く放たれ。

それは、一直線に進路上の全てを徹貫した。

ミサイルも、因子兵も、ガジェットも、纏めて消し飛ばし。

それは迷い無く、ギガンティスへと叩き込まれる。

ギガンティスはそれに対して、先と同じく空間を歪める防御障壁を展開する。

デイメイション・フィールド。

一種の空間歪曲障壁である。

空間を歪曲させる事による絶大な防御障壁であり、ありとあらゆる攻撃を防ぎ切る強固極まり無い代物であった。

しかし、それは、イコール絶対、という事では無い。

何事にも例外はある。

例えば、”空間歪曲すらも撃ち抜く攻撃”ならば、当然、デイメ  
イション・フィールドは撃ち抜かれる。

そう、**撃ち抜く事は可能なのだ。**

《ぬう……！！》

《ああああああああああ……！！》

そして、貫く事が可能ならば。

それを”彼女”が出来ない筈が無い！

一軋！一

瞬間。

デイメイション・フィールドが確かに軋む音をたて、直後。

一貫！一

一撃！一

歪曲された空間を易々と撃ち抜き、ギガンティスを極大の光砲が  
徹貫した。



《ハア……！！ ハア……！！》

息も荒く、なのはが顔をしかめる。

身体中に負った怪我による痛み。

そして、ブラスタ―3の反動による激痛だ。

無重力故に、血が球状となって辺りに散る。

出血により頭がくらりとする。

それをどうにか立て直して、なのはは前を見る。

そして顔を歪めた。

《……まさか、これ程たあな。恐ろしい嬢ちゃんだ》

そう、なのはに笑いかけるのは全身赤の男であった。  
髪も、髭も、バリア・ジャケットすらも赤の男。  
なのはは知っている。  
その男を。

一度戦い、しかし圧倒的な攻撃を見せつけた男だ。  
その名を。

《アルセイオ・ハーデン……》

《おう。名を覚えられるたあ、光栄だな》

そう、なのはへと念話を飛ばしニツとアルセイオは笑う。  
そして己の傍らに視線を送った。

《大丈夫かよ、ベナレス？》

《……うむ。すまん、アル。助かった》

”右腕を肩から失ったギガンティス”から念話が発せられた。

ベナレスである。

それに、なのはは顔を歪めたのであった。

あの瞬間。

空間歪曲障壁を撃ち抜き、ギガンティスすらも貫かんと進む光砲。それがギガンティスを徹貫せんとした瞬間。突如、ギガンティスが横にすっ飛んだのだ。

横から叩き込まれた五十mを超す極剣によって。

結果、なのはの一撃は、ギガンティスの右腕を消滅させるに留まったのであった。

《さて、ベナレス。お前は下がっとけや。……この嬢ちゃんの相手は……》

瞬間、アルセイオの周囲に、ミッド式の魔法陣が展開する。

同時、一人、二人と人が魔法陣より現れた。

一騎当千たる、元グノーシス・メンバー。

クラナガン戦に於いて、アースラメンバーを追い込み、現グノーシス・メンバーと互角に戦ってみせた者達。

アルセイオ隊。

彼等が、全員揃った状態で、なのはの眼前に現れた。

《俺達がやるぜ》

《くっ……!!》

まずい。

ただでさえ、今のギガンティスとの戦いで魔力を大分使ってしま



った。

しかも、彼等は一人一人が、エース級の実力の持ち主だ。  
アルセイオに至っては一騎打ちだろうと勝てる自信が無い。

《逃げよう、てのはやめとけよ？ 後ろを見せたらぶっすりだぜ？》

アルセイオの言葉に、なのはは顔をしかめる。

選択の一つとして、撤退があったのだが、今で潰えてしまった。  
彼等なのはに、次元転移を許さないだろう。

もし、その隙があれば容赦無く止めを刺しに来る。

ならば、選べる選択肢は一つしか無い。

つまり、戦うしか無い。

なのはは、こんな所で死ぬ積もりは無い。

最後まで戦う必要は無いのだ。

全員の隙を作り、撤退する。

勝てないのは分かっているのだ。

それしか無い。

《それじゃあ》

《っー！》

アルセイオの念話に、なのははレイジングハートを強く握り締め  
る。

そして。

《おっばじめようか！》

直後、アルセイオ隊の者達が一斉になのはへと襲い掛かった。



《レイジングハート！》

【オーライ！】

向かい来る、アルセイオ隊。

それに対し、なのははレイジングハートを差し向け、ブラスター・ビットを放つ。

最初になのはに突っ込んだのは飛・王だった。

メンバー最速の男が真っ直ぐになのはへと駆ける！

《恨みは無いで御座るがー！》

ブラスター・ビットからの光砲。

なのはからのシューターを次々と避けしながら飛が足場を展開。それを足掛かりに、瞬動でなのはの背後に回り込む！

《主君の命で御座る！ その首頂くで御座るよ！》

《くー！》

一撃！一

回り込まれた為に、飛を見失ったなのはは、ほとんど感任せに背後へと右手を振るう！

同時、シールドを形成。真ん中に衝撃がはしった。

飛の蹴りがそこに突き刺さっている。

なのはが動く前に飛は更なる追撃を開始。  
魔力を拳に纏わせ、シールドに連撃を開始。

《閃華裂光連撃！》

一撃！一

右の拳がシールドに叩き込まれ、間を置かずに左拳が放たれる。  
両の拳が放つ連撃がスタッカートを刻む。

一撃一撃が尋常では無い重さだ。

それに、なのはは顔をしかめながらも動く。  
ブラスター・ビットがなのはの後方から迫るアルセイオ隊の各メンバーに、光砲を放ち足を止める。

その隙を突く！

【バリア・バースト】

一爆一

突如、なのはの右手から形成されついたシールドが爆裂した。  
なのはのバリアバーストだ。  
それに両者吹き飛ばされる。

《ぬー！》

【アクセル・シューター】

吹き飛ばされた事により、呻きをあげる飛にレイジングハートからの機械音声が響く。

それに飛はさせじと踏み込もうとして。

”それ”を見た。

光球がなのはの周りを囲む。

その数、数千。

あまりの量に、飛が一瞬呆然とし。  
しかし、即座に後退する。

なのはは構わない。  
レイジングハートを後退する飛に差し向けた。

《シューーーート！》

一輝！一

数千の光球が一齐に、飛に放たれる。  
それに飛は足場を展開しながら瞬動をもって回避をするも、千も  
の数のシューターを回避出来る筈も無い。  
途中でプロテクションを張る。

だが、それこそがなのはの狙いであった。

《マニユバーSーSーAッ！》

【ACS、スタンバイレディ。ストライクフレーム。オープン。イ  
グニッション！】

直後、レイジングハートの先端から光の刃が形成。

さらに、六枚の光翼が側面から伸び、一気になのはが飛び出した。狙いは、プロテクションを張り、シューターを防御し続ける飛！なのはは爆発したように、飛へと駆ける！

《な！？ それは流石にー！》

反則で御座ろう！ とは、叫べ無かった。

その前に、なのはが飛に到達したからだ。

光刃は、プロテクションをあっさりと貫き。

飛は無防備な姿をなのはに晒す。

なのはは、間を置かずに飛に零距离からの光射を叩き込む！

《ストライク・スターズッ！ ファイアーーーーーッ！》

一撃！一

一裂！一

一煌！一

直後、光砲と光射。

更に、シューターの残りを余す事無く、飛は叩き込まれた。

爆光が次元空間を照らし、飛が人形のようにすっ飛んだ。

《飛！》

《……嘘！》

なのはの後方に居た一同が驚きの声をあげる。

いくら何でも、今の一撃は無茶苦茶過ぎた。

ソラの呼び掛けに飛は応じられない。

今の一撃で意識を容赦無く刈り取られたからだ。

そんな一同に、更なる驚愕が走る。

それは、己の一撃で作り上げた爆煙を切り裂いて皆の上に現れた  
なのはと、そのレイジングハートの先端に灯る光球を見たからだ。

巨きい。

あまりに巨大な光球をなのはは作り上げていた。

それだけでは無い。

一同に、ブラスター・ビットが光の帯を引いて駆け抜ける。

それは一同を瞬く間に拘束した。

《これは……！》

《バインド……！？》

まさかビットからバインドが放たれるとは予想していなかった一  
同はあっさりと拘束された。

そんな一同になのはの念話が響く！

《星よーッ！》

それに、一同がなのはへと振り向き、見たのはレイジングハート。

そして、各ビットからなる巨大極まる光球達であった。

ブラスター3からなる三方向からのスターライトブレイカー。

なのはの切り札であり、絶対なる一撃必倒と言える一撃だ。

それを見て、アルセイオ隊一同の顔から血の気が引く。

まさか、ここに来てこんな一撃を放とうとするとは。

今までの戦いの消耗度からしても普通は考えられない。  
しかし、それこそがなのはの狙いであった。

魔力も既に尽きつつあるのだ。

下手に出し惜しみしても、消耗戦では必ず負ける。

ならば、短時間決戦に全てを賭ける。

時間は既に十分稼いだのだ。

後は、追撃出来ないようにして自分が撤退するだけである。

故に、ここで余力など残さない。

スターライト・ブレイカーで全員を一時行動不能にして逃げる。

まだストラにはギガンティスも、ガジェットも因子兵もあるのだ。

長居は無用。

故にこそその選択であった。

光球が更なる輝きを増し巨大化する。

チャージを終え、後は解き放つだけー！

バインドから逃れようと、もがくアルセイオ隊に一気にそれを撃ち放たんと、レイジングハートを振り上げる！

そして。

《……悪いな。嬢ちゃん》

レイジングハートが振り下ろされる前に、なのはの左肩から腰にかけて”赤”が走った……。



次元空間を、アースラが進む。  
その姿は、ギガンティスのアーマーゲドンにより、損傷がいたる所で発生していた。

装甲がめくれ、中から火花が散る。  
しかし、アースラは止まらない。  
止まる事は出来なかった。

そのアースラ内の一室に、神庭シオンは居た。

自室である。

シオンは自室の明かりを消して。窓際に立ち、ゆっくりと過ぎて行く次元空間をただ見ていた。

その顔に、感情はどこにも無い。

ただ、ただ。虚ろに過ぎ行く風景を見据え続ける。  
暫くして、部屋の扉が開いた。

「……シオン」



「スバルか」

自分と呼ぶ声に、シオンは淡々と返事をする。  
部屋の扉を開いたのは、スバルだった。

「何してるの？」

「外を見てる」

問い掛けにも感情を交えずに返事をする。

スバルは中に入り、ゆっくりとシオンに向かい歩いた。

「エリオ、疲れて寝ちゃった」

「泣ける元気があるなら訓練室で走って来いと言ったけどな。眠る程に走ったのか」

先程、エリオが一人泣いているのを見て、シオンが訓練室に叩き込んだのだ。

荒療治に近かったが、泣かせ続けるよりいくらかマシと言えた。  
結果はどうやら上手くいったみたいだが。

シオンの声を聞きながら、スバルは歩く。

「負けちゃったね」

「向こうにあんなモンがあったんだ。対抗策も無かったし、仕方無えよ」

アースラが敗走すると同時に、次元封鎖領域内で戦っていた艦隊も撤退した。

当然とも言える。

何せ、現状。ギガンティスの対抗策が無いのだから。損害が多くなる前に撤退は正しいと言えた。

スバルは歩く。

しかし、シオンは振り返らない。

「……皆、怪我しちゃったね」

「誰も死んで無い。問題無えよ」

アースラ・メンバーも、グノーシス・メンバーも皆、少なからず怪我をしていた。

ほとんどがまだ意識不明の状態である。

だが、どうやら峠は越えたらしく。

皆、容態は安定していた。

戦う事は、当分出来ないだろうが、

スバルは歩き続け、シオンの真後ろに立つ。

シオンは振り返らない。

ただ、外を見続ける。

そして。

「……………なのはさん。帰って来なかったね」

声と共に、スバルはシオンの背中に額を押し付けた。シオンは背中に湿り気を感じる。

涙だ。

スバルは、シオンの背中に顔を押し付け、泣いていた。しかし、シオンは振り返らない。窓の外を感情の無い瞳で見続ける。

暫くして、口を開いた。

「お前が」

響く言葉に、スバルが少し震える。しかし、シオンは構わない。

続ける。

「そんな顔をしてると、皆。不安がる。外では笑ってろ。……そう言うのは、ここで済ませて行け」

「……シオンはいいんだ？」

そんな顔を見ても？

そう、泣き声が混ざった声でスバルは問う。シオンはそれに、一つの反応を示す。

ゆっくりと、頷いた。

「俺は、構わない。……ここで、泣いて行け」

「……………うん」

その言葉に、スバルは泣きながら少しだけ微笑み。

シオンの正面に腕を回して抱き着く。

声を出さないようにして、泣いた。

暫くして、キリキリと音が鳴る。

ポタリ、ポタリ、と地面に何かが落ちた。

血だ。

シオンの両拳が硬く握り締められて震える。

そこから、血が落ちていた。

きつく、握り締められたが為に、爪が皮膚を貫いてそこから血が流れているのだ。

シオンはあくまで無表情のまま。

しかし、その瞳には確かに、抑え切れ無い激情が渦巻いていた。

「……このままでは、済まさない」

どこまでも静かな。

しかし、確かな激情を湛えた声が部屋の中に響いた。

こうして、シオンの短い人生の中で史上最悪の誕生日は過ぎ去っていった。

痛みと喪失の記憶を残したまま。



………あ。

次元空間を、なのはの身体が泳ぐ。  
冗談のように自分から吹き出した血を。  
まるで、他人事のように見ていた。

左肩から右の腰にかけて一直線に斬痕が走る。  
それを成したのは吹き出した血よりも赤い剣であった。

魔剣、ダインスレイフ。

いつの間にバインドを抜け出したのか、アルセイオがダインスレイフを、袈裟になのはへと斬り付けたのである。

直後、例えようも無い寒気がなのはを襲う。

何かを言おうとして、口から血が溢れた。

《………本当に大した嬢ちゃんだよ。お前は》

アルセイオからなのはに念話で語り掛けられる。  
それを聞きながらも、なのはは返答出来ない。  
血が口内に溢れていた。

………また、傷増えちゃった。お嫁にいけなくなっちゃうなあ………。

場違いにも、そう思う。  
目が霞みだした。

《……楽にしてやるよ》

ぽつりと呟かれ、アルセイオがダンススレイフを振り上げる。  
そして、振り下ろされんとして。

《……待て、アル》

突如として、アルセイオに念話が届いた。  
ベナレスからの念話だ。  
それに、アルセイオは振り向く。

《どうしたよ？ ベナレス》

返答するアルセイオの目に映るのはギガンティスだ。  
修復能力でもあったのか、既に右腕が復活している。

《彼女の戦い、見事だった。敬意を示したい。……最上の一撃を彼女に送り、それを弔いにしよう》

ベナレスがそう言うなり、ギガンティスの両腕が持ち上げられた。  
アルセイオはそれに無表情のまま、視線を送り。  
ややあって、その場から離れた。

《……じゃあな。嬢ちゃん》

たった一言のみを、なのはに送って。

直後、ギガンティスの両腕から膨大なエネルギーが胸の中心に集中する。

それを、霞む目で見ていたなのは、しかし。

左手に握る、レイジングハートを持ち上げた。

《……ほう》

ベナレスから感心したかのような念話があがる。  
なのはは、それに構わない。

既に感覚が無くなった身体を動かしていた。

……死ねない。

そう、思う。

約束がある。ヴィヴィオや、スバル、ティアナ。シオンとの約束が。

……死にたくない。

口から溢れる血を吐き出しながら、なのはは無理矢理起き上がる。

レイジングハートが、僅かな魔力を宿す。

こんな所で死ぬ訳にはいかなかった。

……死にたく、無かった。

約束があり、帰る場所がある。

そこに帰ると、そう誓ったから。

だから。

そして。

《まだ、戦おうとする。その意気は良し。だが、貴様はここで終わっていい。……さらばだ》

ギガンティスの胸がバクンと開き、両腕から集められたエネルギーと融合した。  
直後。

《デモリッション》

一轟一

極大の砲撃が二重螺旋を描き、なのはへと放たれた。  
それは、迷い無くなのはを滅っさんと突き進む。

眼前に迫り来る光砲。

それを、なのはは見据え、レイジングハートを構える。  
だが、そこに灯る魔力はあまりに、小さい。

死にたくない！

そう、心中で叫ぶなのはをまるで嘲笑うかのように、光砲がなのはの眼前まで走り。



そして。

《絶・天衝》

一斬一

黒が、ただただ純粋な漆黒が光砲を斬り裂いた。

《……なに？》

いきなり斬り裂かれた光砲にベナレスが驚きの声をあげ。

《おいおい……！》

光砲をなのはの眼前で斬り裂いた存在に、アルセイオが目を見開く。

なのはもまた見ていた。

自分を助けてくれた、その人を。

その、背中を。

彼は敵。

自分を嫌いだと初めて真っ正面から言った人。

戦うと、あの夜に約束した人。

黒のバリア・ジャケットを纏う、青年。

《……いつも、こういう時には、必ず、来てくれるんだね……》

クラナガンで感染者が現れた時も、シオンが暴走した時も、ヴィ  
ヴィオとユーノが危険だった時も。

この青年は、いつも駆け付けてくれた。

敵、なのに。

《偶然だ。ただの、な。それから黙っている。傷に触る》

相変わず、ぶっきらぼうに愛想が無い。その言葉に、寧ろ。な  
のはは微笑む。

それは。どこまでも、この青年らしい言葉だったから。

伊織タカトラしい、言葉だったから。



タカトは、なのはに振り返ると即座に傷を見る。

こちらに念話を飛ばそうとする、なのはの唇に指を当てて、無理矢理黙らせた。

……深い。

チツと舌打ちする。

斬痕は想像以上に深かった。

それに、外以上に中也酷い。

軽く探査したが、少なくとも全身の至る所の骨に、微細なひびが入っていた。

どのような無茶をしたと言うのか。

《……タカト、君》

《黙っていると言ったぞ》

呼び掛ける声にも、タカトはにべも無い。

懷に手を突っ込むと、何やら札らしきモノを数枚取り出した。それは宙に放られると同時に、なのはの身体に張り付く。

《っ……！ ？》

傷に直接張り付いた札に、思わずなのはは眉を潜める。

見れば、斬痕の上に。

まるで包帯のように札が張り付いていた。

《治療札だ。この程度では止血程度にしかならんが、現状それで充分だろう》

タカトはそう、なのはに語り掛けると同時。

指を組み合わせ、印を切った。

直後、なのはの足元に八角の魔法陣が展開。  
同時に、周囲が半透明の壁で包まれる。

《仙術、絶界陣。これで”余波”程度は防げるだろう。……そこで  
大人しくしてろ》

タカトはそう、なのはに念話を飛ばし、そのまま背を向けた。

そのまま、進む。

警戒し、備えるストラの軍勢に。

《タカト、君……》

《……勘違いするな。お前の変わりをするだけだ》

あくまでタカトは振り返らず、進む。

それになのはは苦笑した。

相変わらず、素直じゃないなあと、そう思う。

そして。

《寝ている。その間に全てを終らせよう》

その念話に、なのははうんと頷く。

そして、ゆっくりと目を閉じた。

安堵の為か、意識はすぐに遠のき、途絶えた。

……寝たか。

なのはが眠った事を気配で感じながらタカトは進む。  
暫くして、止まった。

そこは、ストラ軍勢全てを見据えられる位置であった。

《……まさか、貴様が来るとはな。伊織タカト》  
《……ベナレスか》

正面。

数百m先に居るギガンティスを見て、タカトは答える。  
その顔はただただ、無表情であった。

《まあ、いいだろう。貴様も打倒せねばならない事に変わりは無い。  
……ここでー》

《黙れ》

告げられる念話をタカトはスッパリと切る。  
右手を、持ち上げた。

《ベナレス・龍。ツアラ・トゥ・ストラ。貴様達は……》

瞬間、光が集る。闇が集う。

持ち上げられた右手に。

それを見て、ギガンティスが僅かな震えを放った。

……確か、あれは――！

光が集う、光が集う、光が集う！

暗い、暗い、光が集う！

闇が集う、闇が集う、闇が集う！

輝く、輝く、闇が集う！

タカトが持ち上げた右手、その拘束具に――！

《いかん！ 誰か奴を――！》

ベナレスが叫ぶ。

だが、もう遅い！

既に”開放”は始まっている――！

《やり過ぎた》

直後、タカトが右腕を下に振るう。

それに合わせるように、拘束具がタカトの右手から滑り落ちた。

《真名、開放》

我が、真名は――！

直後。

本局前の次元空間が確かに、震えた。

世界が歓喜する。

世界が悲鳴を上げる。

顕れたその存在に、”次元震”と言う名の叫びを上げた。

(後編に続く)



ぱらららら〜♪ ぱら〜♪

ア

「はい♪ 何やら久しぶりのアリサ道場〜♪」

シ

「いや、本当。久しぶりですね(汗)」

す

「三十九話でしなかったからね〜」

シ

「さて、では早速今回のゲストを召喚しましょう♪ 今回は……げ  
!……」

ア

す

シ

ゼ

したかね！ 皆々あるは！

ア

ぜ

「んは……？」

す

$$\vdots$$

シ

ぜ

シア、す

ゼ

フ……。総ツツコミとは……。ツンデレだね？



次はデレだ！ 存分にデレてくれたまえ！」

シ、ア、す

「「「いやいや、ねーから」」」

ゼ

「ちい……！ まだツン期か……！ だが、そこがいい……！」

ア

「うわぁ……。は、話しを通じないわ……」

シ

「根本的に、トウヤ兄いと同じタイプなんスよね……」

す

「手強いタイプだね……」

ゼ

「さぁ、どんなツンを見せてくれるのかね？ カモン、ツン！ その後のデレを忘れてはいけないよ？」

ア

「あ、アンタの後ろにツンを見せる奴が居るわよ？」

ゼ

「何！？ 一体、ダレが……！」

タ

「……コーフー……。コーフー……」

ゼ

「て、怖あ！？ 何だねタカト！ もはや、ツンでは無く、ヤンでは無いか！ どうしたのだね！」

シ

「……ああ、あれですよ。LVのG事件」

ア

「ああ、あれね？ で、何でタカトがあんな状態に？」

シ

「タカ兄いが世界で最も忌み嫌うものが二つあるんですが……。その一つがGな訳で……」

す  
「そうなんだ？ でも苦手、て感じでも無いよね？」

シ  
「いやあ、苦手では無いんですよ。でも、大嫌いな訳で。見掛ければ殲滅せねば気が済まないくらいなんですよね……。で、あの事件な訳で……」

ア  
「成る程ねー」

ゼ  
「納得してないで、助けようとは思わないのかね!？」

シ、ア、す  
「「「……………」」」

タ  
「……コーフ……。コーフ……」

シ、ア、す  
「「「うん。無理!」」」

ゼ  
「いくら何でも諦め早過ぎ無いかね!？ し、仕方無い。……こうなれば草薙をー」

タ  
「……真名、開放……」

ゼ  
「真名開放したあー! ま、待ちたまえ、タカト。こんな所で……!」

— 轟! —

シ  
「……さて、いろいろ静かに(?) なった所で。話し、進めましようか……」

ア

「……そうね。さっきから後ろですんごい音が鳴ってるけど気にしない方向で行きましょうか」

す

「そうだねー」

ア

「さて、じゃあ今回……は。次に置いといて、前回のおさらい行きましょうか。シオン宜しく」

シ

「了解です♪ え〜。もっとトンデモ兵器も大概にしやがれコンチクショー♪ です♪」

ア

「あー。ギガンティスね？ あれ、大概よねー」

す

「対界神器だもんね〜」

ゼ

「今、まさに私はそれが欲しい……！ うお！？ タカト落ち着きたまえ！ そんな一撃！ 世界がー！」

タ

「……知るか」

— 煌！ —

シ

「……まあ、後ろは置いといて。……俺は作者に言いたい事があるんスよ……」

ア

「え？ 何よ？」

シ

「俺は主人公ちゃうんかい！？ もっと活躍させろー！」

す

「……あゝ」

ア

「……成る程ね。あ、そうだ。てい」

一撃！

シ

「いだあ！ 何するんスカ！？」

ア

「アンタが無茶するからヴィヴィオが泣いちゃったのよ。まったく。お母さんを心配させちゃダメでしょ？」

シ

「いや、だからヴィヴィオと俺は他人ー」

ヴ

「ぐす……。ぐす……。またシオン君が否定するよ……」

祐

「……つくづく、いい度胸ね。シオン……」

カ

「……頑張れよー。シオン」

シ

「どこからともなく三人が出て来たー！？」

ア

「まあ、あの三人はここ、顔パスだしね」

シ

「え？ 何か、すっげえ。初耳なんスけど、ソレ……」

す

「今更だね♪」

シ

「い、いつからそんな事に……？」

— 煌！ —

シ

「どわあ！？ どこからとも無く漆黒の砲撃がー！？」

タ

「……お前は何度、ヴィヴィオを泣かせれば気が済むのだ……？」

シ

「ぎゃああああああああああああああああああ……」

「っ！？ ま、待った、待った！ 今のタカ兄いにブン殴られたら普

通に死ぬ、て！ てか、ゼロさんは！？」

タ

「……一足先に涅槃へと旅だった。……貴様も後を追え……」

ゼ

「人を勝手に殺さないでくれるかね！？」

ア

「あ、生きてたの？ お疲れー」

す

「よく生きてたねー？」

ゼ

「……大概、ここもゲストの扱いが酷いね……」

シ

「さ、さて。文字数も多いし、今回はここまで！」

タ 「……話を逸らしたな？」

シ 「もういいから！ 俺、川に毎度逝きたくないし！ で、ここで一つ告知があります♪ アリサししょー。宜しくー」

ア 「了解♪ さて、今回無事百万PVを突破したわ♪ これも読者の皆さんのおかげよ♪ 本当にありがとう♪ それを記念して、一つクイズを企画したわ。その名も……！」

シ、ア、す

「「タカト兄い／タカト／タカト君の真名当てクイズー！」

タ

「……む？」

ゼ

「ほう……。それはまた面白そうだね……」

シ

「はい♪ てな訳で今話後編で登場の。タカ兄い、封印開放状態の真名を当てようと言うクイズです♪ このクイズに正解すると、ある特典が得られます♪」

ア

「特典は第三部終了まで、作者様ならば、その作品のアリサ道場レギュラーキャラとして召喚させて貰うわ♪」

ゼ

「それは、また。大層なモノだが、後何話あるのだね？ 第三部？」

「後、十五話は固いらしいよ？」

ゼ

「……えらく、長いね……」

シ

「さて、タカ兄いの真名のヒントをあげます。

では……。

ヒント1、最初にEXがつきます。

ヒント2、タカトの真名は、神（悪魔含む）の名前をそれぞれ三つ組み合わせたモノ。

ヒント3、全部、男名。

ここからは、重要ヒント♪

ヒント4、最初に、西洋、次に、日本、最後に中国の神の名前。

ヒント5、全部蛇（竜含む）に関連する神の名前。

以上です♪」

ア

「ほうほう、意外に難しいわね……」

す

「つまり、EX、？・？・？ になる訳だね？」

シ

「その通りです♪ ではでは、皆様、ご回答お待ちしております♪  
我こそは！ という方はご回答宜しくです♪  
ちなみに、二個まで解答出来ます♪」

ア

「……タカトとしてはどう？ 難しいと思う？」

タ

「かなり難しいでしょうな」

す

「でも、それはそれで答えがいがあるよね♪」

シ

「期限は次話投稿するまで♪ ドシドシ解答して下さい♪ では、今日はこんな所で♪ ゼロさんも、今日はありがとうございました♪」

ゼ

「……何か、ズタボロされまくりだった気がするがね（汗）まあ、次はクードと来るとしよう」

シ

「了解です♪ そして、アルファルドさん。ゼロの召喚ありがとうございます♪ では、今日はこんな所で♪ ではでは♪」

ア、す

「「また次回〜♪」」

タ

「では」

ゼ

「また会おう！ フハハハハハハハハハハハハ！」

終幕。



第四十話「星の想い、天の意思」 (前編) (後書き)

……はい♪

前編終了しました♪

なのはがめっさ凄いです (笑)

楽しんでいただけたなら幸いです♪

クイズも解答お待ちしておりますね♪

では♪ また次回に♪

第四十話「星の想い、天の意思」 (後編) (前書き)

一我が、真名は一

#### 第四十話「星の想い、天の意思」(後編)

一神の子は主が右の座に着かれ――

激震し、荒れ狂う”世界”にたった一つの言葉が響く。

どこまでも、どこまでも。

静謐に響いていく。

――太極は万象を生ず――

響く言葉は、真実の言葉。

伊織タカトの持つ、たった一つの、”己だけの言葉”だ。

それは、今まで放たれていたオリジナル・スperlと違い、一文が追加されている。

この一文が追加されたモノこそが、タカトの本来のオリジナル・スperlであった。

真実の言葉を、本局前に居る全ての者は聞き。

そして、”ソレ”を見た。

拘束具が外れ、フードが弾け飛んだ。

伊織タカトの、本当の姿を。

まず、目を引いたのは肌の色だ。

全身、まるで墨を流したが如く、黒に染まっている。  
その体をまるで伝うかのような紋様が全身に走っていた。  
まるで、ヒトの身体に直接描かれた魔法陣のようである。  
紋様は、顔にも例外無く走っていた。  
額に日輪のようなシンボルを刻んでいる。

次に目を引いたのは髪。

元来、短髪であったその髪が、腰にまで到達する程の長髪となっていた。

何より、驚くのがその色。

全ての色素を失ったが如く、白とその髪は変わっていた。

黒の肌と、白の長髪。

それに負けじと存在を主張している部位があった。

眼だ。

一同を見据える瞳。

左は、黒のままだが、晒された右の瞳が別の色を放っている。

赤より、朱い、紅を。

紅眼。

その瞳は、良く見ると普通の紅眼とは違うものであった。

瞳に、白と黒の勾玉をくっつけたような紋様が刻まれ、それを囲むようにして、八角からなる陣が刻まれていた。

八門遁甲。

そう呼ばれる陣である。

それ等、全て晒したタカトは一同を睥睨する。

その身体にゆらりと立ち上る、黒のオーラと共に。

ややあって、口を開いた。

重々しく、紡ぐ。

己の、真名を。

《EX、666・猛速凄乃王命・伏羲（イクス、ナンバーオブザビースト・タケハヤスサノオノミコト・フツキ）》

そう、呟いた。

そのタカトを見た、全ての者達は、震えていた。

紅の瞳に見据えられて。

その存在に、圧迫されて。

タカトが一步を刻む。

それだけで世界が震えた。

痛みと、喜悦。悲哀からなる咆哮を上げる。

次元震と言う咆哮を。

ソレを見て、一同は。

アルセイオ隊の者、全員が凍り付く。

近寄るなど。

止まってくれと、心底願った。

あまりの重圧に、自分達を悟らないでくれと。  
心臓ですらも止まってくれと願った。

怖くて。

ただただ、怖くて！

だが、タカトは止まらない。  
歩みを止めようとしない。

直後、凍り付く一同から飛び出る陰が出た。

この重圧の、恐怖の中。

タカトに向かい行くのは。

《ば、バデス！ ベルマルク！》

飛び出した二人に、解凍されたアルセイオが吠える。

そう。凍り付いた一同から飛び出したのは、巨斧の担い手、バデスと。銃式デバイスを操るベルマルクであった。

二人は、真っ直ぐに歩いて来るタカトに突き進む！

まず、ベルマルクからタカトへと銃を、フライッツェを差し向ける。

《フライッツェ。リミット・ブレイク！ 彼の者を分かれ、割かれ尽くさない！》

【はい】

ベルマルクの咆声に応え、フライッツェが鈍く光る。

直後、マガジン内全てのカートリッジをロードし、その数だけの銃弾を吐き出す！

《我が魔弾は、全てを分解し尽くす！ 貴方にそれが堪えられてか！》

《……………》

ベルマルクの念話にタカトはただ、無言。  
歩みもまた止めない。

そして。

一弾、弾、弾、弾、弾、弾――

その身体に、八発からなる分解魔弾が叩き込まれた。  
胸や腹、腕や足に弾は食い込み。

ポロリと落ちた。

《な……………！》

流石のベルマルクも目を見開き、呆然とする。

いかな方法を用いれば、何の防御もせずに弾を受け止められると  
言うのか。

よく見れば、全ての銃弾は完全に潰れていた。

《ぬうあああああ……！！》

【タイラント・フォルム！】

眼前に展開された状況をタカトに変わらず突っ込むバデスもまた  
見ていた。

しかし、止まらない。タカトまで翔ける！

そして、背より火を吹く巨斧を振りかぶり、一気に振り放った。

狙うのはタカトの首！

一撃で叩き落とす！

その想いと共に断罪の刃がタカトの首筋へと叩き込まれ。

その刃が、あっさりと碎けた。

タカトは何の防御も取っていない。

タイラントはタカトの首筋に叩き込まれている。  
なのに――！

《……馬鹿、な》

《終わりか？》

驚愕し、呆然となるバデスにタカトはたった一つの言葉を送る。



そして。

《……下らない、な》

# 一撃一

本当に詰まらなそうに、タカトは呟き。

直後、バデスの背が爆裂した。

《バデス殿!?!》

ベルマルクの念話が響く。

しかし、バデスは答える事が出来ない。ピクピクと、細かく痙攣するだけ。

見れば、いつの間にかタカトの右の拳がバデスの腹に食い込んでいた。

その一撃が腹では無く、背を爆裂させたのは全ての衝撃を腹では無く、背中で炸裂させた証拠であった。

浸透勁、そう呼ばれる技法がある。

空手にもまた秘奥として伝わる技法だが。

ようは、相手の身体の内部に打撃による衝撃を浸透させ、好きな部位で炸裂させる技だ。

タカトはそれを、無造作に放ったのである。

しかし、この威力。

いかな破壊力が、その拳にあったと言うのか。

タカトは自分に引っ掛かり、もたれ掛かるバデスを押しやり、突き放す。

そのまま、指をスツと差し出した。

### 《虚空水迅》

一斬！一

瞬間、ベルマルクの肩に”漆黒”の水糸が食い込む。  
それをベルマルクは呆然と見遣る。

……馬鹿な。彼は水など集めては……！

そして、水糸の出先を辿り。

ベルマルクは完全に硬直した。

水糸は”虚空”から突如として発生していた。  
タカトの指先から伸びている訳ですら無い。

全然、別の空間から発生していたのだ。

《貴方、は……！》

《……まだ話せるか、タフだな》

《何を……。っ！？》

直後、ベルマルクをどうしようも無い悪寒が走った。  
同時に身体が自由が効かなくなる。

……これ、は……！

もはや、念話すら飛ばせなくなったベルマルクがタカトを畏怖と恐怖が混ざった瞳で見る。

タカトはその視線に構わない。

歩く。

《次は誰だ？》

そして、今まで硬直して動けなくなったアルセイオ隊とギガンテイスを見遣り。

ポソリと呟いた。



バデスとベルマルクをあっさりと打倒したタカトを見て、一同に重々しい沈黙が降りる。

たった一人に恐怖し、沈黙させられているのだ。

アルセイオでさえ、倒れた部下を助けに行けない。

眼前の、タカトから眼が反らせないのだ。

それ程までに、今のタカトは圧倒的過ぎた。

《事象概念超越未知存在、か……》

《？ ベナレス。何だ、そりゃあよ……？？》

突如として、ギガンテイス内のベナレスから放たれた言葉に、ア

ルセイオが問う。

その長い名称が、何か妙に引っ掛かった。

《ランクEXの、元来の呼び名だ。EXと言うのは通称に過ぎん》  
《EXの……！》

告げられた言葉に、アルセイオは目を剥く。

いつか言われた事がある。

例え、どれ程。極大威力の魔法を得ようと、無敵の身体を手に入  
れようと。

希少過ぎる能力を身に付けようと。

EXには届かないと、そう言われた事が。

アルセイオは斬界刀と言う極めて絶大な破壊力を持つ魔法を所有  
しているが、それすらもランクで表すと、SSS++と  
言う数値に留まる。

威力だけでは決してEXに届かないと言われた由縁だ。

ならば、EXとは――！

《神が定めし、事象法則。絶対の理由、概念と言う名の事象。それ  
すらを超越し得る存在。絶対未知存在をEXと、そう呼ぶのだ》

ベナレスの念話に、アルセイオは沈黙する。

明かされたEXと言う存在を、漸く理解して。

そして、己が目標とした、タカトと言う存在を正しく知って。

沈黙した。

《話は終わりか？》  
《っー！？》

ベナレスの説明に聴き入っていた一同が硬直から抜け出す。  
眼前の異常なる異質存在へと目を向けた。  
つまり、EX化したタカトへと。

《長い話。ご苦勞な事だ。……さて》

そう呟きながらタカトは一度下ろした手を上げた。

直後、全天に。それこそ本局をまるごと包み込む程の威圧感が放たれた。

《……終わりにしようか》

一斬！一

直後、全天全てから水系が降り落ちる！

ギガンテイスに。

アルセイオ隊に。

ガジェットに。

因子兵に。

それは本局をまるごと飲み込む程の水系となり。  
一同に降り落ちた。



《っー！？》

《ちなみに、だが。この虚空水迅。ランクにしてみればSS+相当程度の破壊力がある。頑張れ》

《な……！？》

タカトから響く念話にソラを始めとした一同が目を見開く。  
そして、理解した。アルセイオが、何故にあれほど血相を変えたのかと。

これほどの範囲で、これほどの精度を持つ攻撃が、SS+。  
理不尽としか、言いようが無い。

幾万、幾億の水糸が跳ね回る。

それをアルセイオ隊の一同は、それぞれ無茶苦茶な軌道を描き飛び回りながら回避し続ける。

ガジェットや、因子兵は動きについていけないのか、次々と水糸に貫かれ、行動不能に陥れられていた。

そして。

《きやう！》

《……っ！》

二人分の悲鳴が上がった。

リズとリゼの姉妹の悲鳴だ。

リズは右腕に、リゼは太腿に水糸が刺さっていた。

直後、顔色が真っ青に変わり二人がぐったりとなった。

そのまま力無く、意識を失う。

《リズ！ リゼ！ くそ……！ 何々だ……！ この水糸は……！  
？》

倒れた二人に、ソラが呻く。

しかし、近寄る事も出来ない。

未だ、襲い来る水糸の為だ。

しかし、ベルマルクもそうだったが、リズもリゼもたった一撃。

しかも、急所ですら無い場所に刺さっただけで倒れた。

この水糸。

一体、いかな効果を持つと言うのか。

《副隊長！ このままでは全員総崩れですわ！ フラガラックでタ

カトに接近しなければ……！》

《く……！ それしか無いか……！》

残るは、アルセイオとソラ、そしてエリカ。ギガンティスだけである。

飛は、なのはにより気絶させられ、バデスは生死不明。

ベルマルクと、リズ、リゼは謎の効果により、意識を奪われた。

このままではジリ貧で終わる。

ならば、空間接続で全員タカトに飛び込み、一気に倒すしか無い。

ーソードメイカー・ラハブー

ー我は、無尽の剣に意味を見出だせず、故に我はたった一振りの剣を鍛ち上げるー

直後、ソラの耳にアルセイオのキー、及びオリジナル・スペルが響く。



視線を向けてみれば、アルセイオが斬界刀を現顕させている所だった。

アルセイオは、ソラに頷く。

故に、ソラも決めた。

タカトの懷に飛び込む事を――！

――ブレイク・インセプター――

――我は、ただ空へと向かう――

ソラも、己の言葉を解き放つ。

エリカもそれに合わせるように手に持つ大鎌を構えた。

《《行きます！ 隊長！ エリカ！》》

《《おう！》》

《《お任せしますわ！》》

二人からの叫びに、ソラは頷く。

フラガラツクの空間接続を開始。

座標は、タカトの眼前――！

《《跳べ！》》

直後、三人の姿が消えた。



空間接続で、一気に三人はタカトの眼前に現れる。

アルセイオは斬界刀を。

ソラは魔皇撃を。

エリカはヘルを召喚しようとして。

しかし、攻撃の途中でピタリと停止した。

いない。

空間接続するまでは、確かに居た筈のタカトがどこにも。

《どこを見ている？》

《《っー！？》》

告げられた念話に、アルセイオとソラだけが振り返った。  
しかし、エリカは振り返る事は出来ない。

何故なら。

《何故、お前がここに居るのかは知らない。……だがー》

タカトが空間接続で現れたエリカの真後ろに居たからだ。

エリカは呆然と目を見開いたまま硬直。

しかしタカトは構わない、右手を掲げる。

《戦場に出て来た。ならば、相応の覚悟があると判断するぞ？》  
《っ……》

届いた念話に、エリカは唇を噛み、振り向きざまにレークイエム・ゼンゼを振り放つ。

しかし、それはタカトの左手の人差し指と中指に挟まれあっさり止められ。

《終わりだ。エリカ》

そのまま、水系がエリカの肩に突き刺さった。  
三人同様エリカにも強烈な悪寒が襲い掛かる。

そして。

《……》

《……む？》

何事かをタカトに呟いた。

それにタカトは眉を潜める。そのまま軽く嘆息した。

《……馬鹿が》

ぐったりとしたエリカを抱くと、そのまま次元空間に放る。

それは、ただ自分へと向かい来る二人の攻撃の余波に、エリカを巻き込ませまいとする、元主人に対する気遣いだったが。

当然、アルセイオとソラは構わない。

改めて、斬界刀を、魔王撃を放つ。

しかし。

《……な、に……？》

再び、二人はタカトの姿を見失った。

いきなりその姿が消えたのだ。

縮地や、ましてや瞬動を使うような暇は無かった筈なのに――！

《ベナレスの説明を正しく聞いて無かったのか？ お前達は》

《《っー！》》

再び響く念話。

それに、二人が背後を振り向く。

そこには、腕を組んで二人を見下ろすタカトが居た。

《ベナレスは言った筈だ。EXは事象概念超越未知存在だと。ならば、世界の概念に、全く縛られない存在とは考えられないか？》

それは、つまり。

二人は、タカトの言に構わず己の最強の一撃を繰り放ち続ける。

しかし、タカトは斬界刀を体捌きだけで避け、魔皇撃はただの拳で迎撃する。

そして、また消えた。

《そう、例えば”時間の流れを無視する”程度の事が出来ないとは思えないか……？》

タカトから告げられる念話に、二人が固まり絶句する。

それは、つまり――！

《時間を、止めた、だと……？》

《正確には違う。時間の流れを無視しただけだ。止めた訳では無い》

例えば、時間を川の流れだと考えれば分かりやすい。

絶えず流れるその流れに、普通ならば流されるままだが、タカトはその流れを無視して立ち止まったのだ。

しかし、そんなもの。時間を止めたのと、どこが違うと言うのか。

《くそ……！》

タカトのあまりの出鱈目さに、ソラは齒軋りを一つ鳴らす。

そして、フラガラックを突き出した。

《空間接続開始！ 座標は……》

《空間跳躍斬撃。フラガラックの特性を利用した攻撃か。……止めておけ。”俺にそれは通じない”》

黙れと、内心ソラは吠える。

構わず、フラガラックを発動。

タカトを内からぶち貫こうとして。

一斬一

《あ……？》

目を見開き、ソラが硬直する。

それは、”自分の胸から突き出した刃”を見ていた。

タカトの心臓を貫く筈の刃が、自分を貫いていたのだ。

な、ぜ……？

《ソラ！？》

血を吐き出し、崩れ落ちるソラにアルセイオが念話で呼び掛ける。しかし、ソラはそれに応える事が出来ないまま、意識を失った。

グツタリと意識を失い、倒れたソラに、アルセイオは苦し気に顔を歪める。

ギロリと、タカトを睨んだ。

《……何を、ソラにしゃがった……！？》

《俺がやった訳では無い。そいつの自爆だ》

タカトは嘆息。

アルセイオの視線を真っ向から受ける。

右手を持ち上げ、指で己を指した。

《言った筈だな？ 俺は世界の概念を無視出来る。それは、己への世界からの干渉を跳ね返すと言う事と同義だ》

《………っ》

その言葉に、アルセイオは悟った。

ソラが自爆した理由を。

つまり、今のタカトには……。

《……一切の、介入系能力が通じねえのか……！？》

《正解だ》

あっさりとタカトは頷く。

つまり、今のタカトは他者からの介入を全てかき消してしまうのだ。

それこそ、神（世界）の力であったとしても。

それが分かったとしても何も出来はしないのだが。

アルセイオはその事実にも、舌打ちする。

しかし、へっと笑った。

《だが、お前は完璧じゃねえ……》

《……》

笑いながらアルセイオは手に持つ世界を斬る得る一刀、斬界刀を掲げる。

タカトに差し向けた。

《……お前、さっきから斬界刀は、きっちり避わしてやがったな……？  
つまり、コイツは効くって事じゃねえのか？》

《……フム》

告げられるアルセイオの言葉に、タカトは目を細める。

そして、頷いた。

《……正解だ。今の俺は八極八卦太極図による八卦太極炉が全開状態だな。つまり、常時八属性技を発動しているようなモノなのだが、その中の一つ。山の属性変化奥技。『金剛体・闇』が常に発動している》

《……つまり、だ。その技をブチ抜ける破壊力を叩き込める技があれば、ダメージはきっちり通る、て訳だ？》

笑いながら斬界刀を担ぎ、タカトを見据える。  
そんなアルセイオに、タカトはただ首肯した。

《その通りだ。威力にしてみれば、SSSランク以上の攻撃ならば、  
『金剛体・闇』の防御を抜ける事が出来る》  
《……へっ。ならー》

斬界刀を握るグリップが強くなる。  
アルセイオはタカトを見据えたまま、一步を踏み出した。

《一丁、勝負に付き合って貰おうかい！》  
《……止めておけ、とは貴様には言わんぞ？》

直後、タカトが”構えた”。  
半身に体をずらし、左手を顔の前に持ち上げる。右手は拳を作り、  
腰溜めに構えられた。

タカトが構えた。

その事に、アルセイオは眉を潜める。  
タカトは自然体を常とし続けていた筈だ。それは、いついかな状態に於いても自然体こそが、あらゆる状況に対応出来る構えとなっていたのだ。

それが構えたと言う事に、アルセイオは眉を潜めたのだ。

つまり、それはー。

《”拳を放つ”。ただ、それだけに特化した構え、か》



へと笑う。

恐らく、タカトがこの構えを取ったと言う事は、時間停止を使わずに真つ正面から斬界刀とぶつかる積もりなのだろう。

そうでなければ、ただ止まった時間の中で斬界刀を避けせば、済むだけの話なのだから。

真っ向からのぶつかり合い。

その事に、アルセイオは震える。

破壊力だけならば、最強と言われた斬界刀。

その一撃でタカトを打倒し得るのか、そう考えただけで震えたのだ。

笑う、そして肩に担ぐ斬界刀を背が反るまで振りかぶり、そして。

《《いざー》》

直後、アルセイオは、タカトは、同時に駆け出す！

刹那に、互いの必殺の間合いに飛び込んだ。

《チイイエイエイエイエイエイエイエイエイエイエ  
ストオオオオツ!》

——  
車轟！  
——

振りかぶりから一直線に放たれる轟撃！

星を、いや世界すら斬り得る一刀が真つ逆さまにタカトに降り落ちる！

対して、タカトはただ前進あるのみ、そして右の拳が僅かに引かれ――。

《無尽刀、アルセイオ・ハーデン。貴様の一撃に敬意を表し、俺も見せてやる。これがー》

直後、一步の踏み込みと共に拳が放たれた。

《EXだ》

降り落ちる轟撃に、タカトは何の魔力すら纏わない拳を叩き込む。それに、アルセイオは目を見開く。

死ぬ気か？

そう、思い。そしてー。

一破一

降り落ちる斬界刀が、拳を叩き込まれた所を中心として、碎けた。

《な、に……？》

アルセイオは驚愕に目を見開く。

己の最強の一撃が、何の抵抗も無く破壊されたのだ。驚きもする。

アルセイオは、呆然としたまま、半ばから碎かれた斬界刀を最後まで振り下ろし、当然空振りした。

タカトは、拳を繰り出した動作のまま、残心し続ける。そして、ポツリと呟いく。

《神無》

ただ、その一言だけを呟いた。

アルセイオはそれを聞きながら振り下ろした斬界刀を漸く留める。  
タカトに、それは何かを問おうとして。

《早く、その刀。解除した方がいいぞ？ ”崩壊”に巻き込まれる  
事になる》

《な、に……。っ!？》

直後、半ばから砕かれた斬界刀が、折れた部位からさらさらと砂  
に変わっていく。

それは一瞬にして、広がり。  
アルセイオは慌てて、斬界刀を解除。  
ダインスレイフを斬界刀から抜いた。

タカトが言う”崩壊”は止まらない。結局、斬界刀を最後までそ  
れは喰らい、消えていった。

《今のは……？》

己の最強を打ち砕き、あまつさえ完全に滅ぼした一撃に、アルセ  
イオは呆然とタカトに問う。  
しかし、タカトは無言。  
そのまま、踵を返した。

《オイ……？》

《そこまで教える義理は無い。それに幕引き、だ》

一散一

直後、アルセイオの背後で今の今まで展開していた水系が事如く消えた。

その中で動けるものはデイメンション・フィールドをただ張り続けるギガンティスただ一体のみ。

アルセイオ隊も、三十万を超すガジェット、因子兵群も動く事が出来ずに、ただ沈黙し続ける。

《……貴様達の戦力の大半を奪った。なのはの代わりは果たしたと判断する》

そう、念話を飛ばし右手を伸ばす。

そこには、滑り落ち虚空へと消えた拘束具が握られていた。それを掴んだまま、タカトは次元空間を歩こうとして。

《このまま、逃がすとも思つか!?》

突如、今まで身動きすらも出来なかったギガンティスが動き出す。両手を広げ、胸がバクンと開く。

そこから合わさるエネルギーが極大の光球となり、そして。

《デモリッション!》

一煌!一

二重螺旋を描く、極大の光砲となり、放たれた。

向かう先は他でも無い。悠々と、ただ進むタカトだ。視線すら向けない。

その背に叩き込まれんと光砲がタカトに接近し。  
そして、半身だけを振り返り、タカトはただ左手の指を持ち上げた。

### 《虚空光覇弾》

一閃一

直後、漆黒の極光が走った。

それは、あっさりと光砲を斬り裂き、一気にその大元まで走る。  
則ち、ギガンティスへと。

ギガンティスは、迫り来る漆黒の極光に何も出来ず、そして。

一轟！一

右の肩をえぐり取りながら虚空の狭間へと極光は消えた。

《ぐ、おお……！》

なのはの時に続き、右肩を失ったギガンティスからベナレスの声が漏れる。

それに、タカトは冷たい視線を向けた。

《勘違いするなよ、ベナレス。お前達を生かすのは、ただ俺がなのはの代わりだからと言うだけだ。……向かって来るのならば、容赦はしない》

《ぐ、うあ……》

タカトの言に、ベナレスはただ呻きのみを上げる。  
そんな、ベナレスをタカトはただ見下ろす。

《それに……。忘れたか？ グノーシスに在った五体のギガンティス。その全てを、”誰が破壊したか”。他でも無い。俺だぞ？》  
《ぐ……》

ベナレスの悔し気な声がただ響く。  
タカトは、それに笑いを浮かべた。

《……忘れる訳が無い、か。貴様がグノーシスを追われた事件だ》  
《ぬ、うあ、貴様》  
《……不様だな》

そう、タカトはベナレスに吐き捨てると、右手に拘束具を取り付ける。

直後、肌は白くなり、髪は短く黒を取り戻した。  
同時に、フードが頭をすっぽり覆った。

そのまま歩いていき、眠り続けるなのはの前まで進んだ。  
同時に、絶界が碎ける。

《ゆめ、忘れるな？ 貴様達を潰すのはたやすい。いつでも出来る。  
それをしないのは、貴様達にも利用価値があるからに過ぎない》

そのまま歩き進み、なのはをお姫様抱っこで抱える。  
そして、アルセイオを、ギガンティスを振り返った。

《俺の大切なモノ達。それを奪うような事があれば、いつでも俺は  
貴様達を滅ぼしに来る。それを、忘れるな》

八角の魔法陣が展開。

直後に、その姿が消えた。

次元転送だ。

それを、アルセイオもベナレスも、ただ見ている事しか出来なかった。

《完敗、だな。こりゃあ……》

《……ああ》

アルセイオの苦笑に、ベナレスが応える。

本局前次元空間に、冷たい静寂が戻った。

(第四十一話に続く)

◆◆◆◆◆  
ぱらららら〜♪ ぱら〜♪

ア

「はい♪ 今回は後編もやります♪ アリサ道場〜♪」

シ

「2話連続も久しぶりだね〜♪」

「ここ最近は前後編ばかりやってましたからねえ……」

未

「そうだよな〜。てか、文字数が多いんだよな。EX、て……。あ、魔法少女リリカルなのは Braveから来た、日比野未来だ。久しぶりー」

「その分、活躍が増えるんだよな……。俺の所も一万だか、二万文字くらい活躍させてくれねえかな。魔法少女リリカルなのは Evolution Of Sword Emperorからレン・テスタロッサだ。よろしくな」

「……て。ちょっと、そのチート二人組。何、突如として出て来てんのよ……?」

「すごい自然に出て来たよね……」

「へ? いや、いきなり呼ばれたんだけど?」

「俺もだ。いきなり呼ばれたからえらい驚いたんだが……?」

「それに関してはこちらから♪ タカ兄い♪ よろしくー♪」

「……ふむ。真名、開放!」

一神の子は主が右の座に着かれ、太極は、万象を生ずー

「EX、666・猛速凄乃王命・伏羲……」

「おお……! タカトがEX化して……、て。何をいきなりEX化してんのよ。タカト……」



す

「すごい、威圧感だけど。ここでそれなの、て凄い無駄なような……」

シ

「それがそうではありません♪ そして、これこそが、未来とレン先輩を呼んだ理由です♪」

未

「……てーと」

レ

「……もしかして」

シ

「はい♪ タカ兄いの真名当てクイズ♪ M e b i u sさん♪ 樟葉權さん♪ 正解おめでとうございます♪」

ドンドンドンドン♪ パフパフ♪

ア

「成る程ねー」

す

「よく、あの少ないヒントで二人も当てられたね？」

シ

「そこはある意味凄いですけどね♪ さて、解答下さった皆さん♪ 本当、ありがとうございます♪ 思った以上に解答が来たので作者、狂喜乱舞状態だったらしいですが♪ 答えは本編と、さっき出た通りとなっています♪ 間違った方、申し訳ありません」

未

「ともあれ、これで第三部までは俺達レギュラーな訳だ」

レ

「よしよし、なら俺がここを……」

ア

「てい！」

— 撃 —

レ

「ぶぐはっ！ 手前え……。何しやがる……！」

ア

「ふ……。甘いわね、二人共。ここをどうにか出来る訳無いじゃない。私が居る限り、ね……」

レ

「ふ……。なら試してみるか……？」

ア

「ううん。その必要なんて無いわよ？ ほくくら、あんたの後ろ♪」

レ

「へ……。？」

タ

「……………」

— 轟！ —

レ

「て、ちょっと待てタカト！？ お前、何魔力吹き出してんだ！？」

タ

「我が主に仇なす者を俺が許すでも？ テスタロッサ先輩？」

レ

「……思わない、な……」

タ

「では、お覚悟を……」

レ

「ちょっと待て！ せめて普通に戻れ！ 今のお前じゃ洒落になら

ん！」

ア

「さあ、いきなさい！ EXタカト！ パンチよ！」タ

「マ！」

レ

「ジャ○アントロボか、お前達はー！ー！？」

一撃！一

未

「……………」

シ

「まあ、この通り、レギュラー化したからには、俺と同じレベルの弄られキャラと化すから。未来も覚悟しとけよー。次、多分お前だから」

未

「待てい！ 弄られキャラは確定なのか！？」

す

「今さらだね♪」

未

「いやいやいやいや、待とうぜ。流石に弄られキャラはちよつと…  
…！」

シ

「諦めろよ、未来。元の作品だと完璧無敵超絶キャラのレン先輩がアレだぜ……？」

ア

「タカト！ ビームよ！ 黒いけど！」

タ

「まー！ （虚空光覇弾！）」

レ  
「ビームと違うだろそれー！　くそっ！　こうなったら本気出して……！」

ア

「タカト！　何か凄そうなアレよ！」

タ

「まー！（神無！）」

レ

「待て、てー！？　それ斬界刀を消滅させた奴だよな！？　そんなモン人にぶつけてー！」

一滅！一

未

「……生きて、出られるといいな……」

す

「早くも諦めに入っただね♪」

シ

「いや、死も覚悟しますって……。恐るべし。道場因子……。さて、タカ兄いの真名について、ちょっと解説します♪　タカ兄いは過去二度真名が変わってます。一つは、リンカー・コアを損傷して、コアを八卦太極炉に変えた時に。もう一つが例の教会の時の事件で、666と融合した時です♪　詳しく話すと……。

0歳から十一歳。

タカトの真名は猛速凄乃王命だけ。

しかし、当時アルセイオを始めとしたグノーシスの者達と戦う事になり、最終的にリンカーコアを損傷する。

十一歳〜十九歳。

リンカーコアを損傷し、魔法が使えなくなったタカトは、何とかコアを回復しようと、研究。その時、仙術を知り、中国に向かう。そして偶然にも酒飲み仙人と出会い、仙術を修業。後に、コアのダメージが霊格レベルで損傷している事が判明。師匠に真名を刻まれ、霊格、コアを回復する。この真名が伏羲。半人半蛇の神の名であり、再生、創造を意味する神の名をあえて刻む事により回復を促した訳である。この時にタカトの真名は猛速凄乃王命・伏羲に変貌。さらにタカトの独自の研究でカラバ式と仙術式を組み合わせた新たな術式、八極八卦太極図を開発した。この時に、コアを八卦太極炉へと改造した。

十九歳〜二十一歳。

アンラ・マンユが開放される事件が発生。この時に、タカトは666と言う謎のロスト・ログアと霊的に融合。この事件により、タカトの真名に666が組み合わさり、666・猛速凄乃王命・伏羲となってしまったのである。

こんな所です♪

ちなみに666は獣の数字で、サタンを表します。蛇の伝承と、竜の伝承、さらに悪魔の伝承があります。

猛速凄乃王命は言うまでも無く、八又大蛇退治の伝承からです♪

こちらは蛇と竜ですね♪

伏羲は半人半蛇の創造神の所から♪

こちらも蛇の伝承があります♪

以上♪」

未、レ

「長っ！」

シ

「おりよ？ レン先輩お疲れ様っス。 ……よく生きてましたね？ あいだっ！」

レ

「……一言多いんだよ、お前は。そこに正座しろ！ 説教してやる ……！」

シ

「え〜」

レ

「えーじゃねえ！」

未

（よし！ 今回は逃げ切れた……！）

レ

「……何ボケつとしてんだ！ お前もだよ！」

未

「え……。何で!？」

レ

「タカトを押さえようとしなかったじゃねえか！ おかげで後で、タカトの代わりにアリサの執事やる羽目になってんだぞ!？」

シ

「ああ……。それで、タカ兄いから逃げられたんですね……」

未

「てか、俺関係無いじゃん!? すっげえ、理不尽!？」

レ

「やかましい!」

ア

「え〜。カオスがカオスと呼びまくりな状態なんで、今回はここまで♪ 皆さん♪ 本当、解答ありがとうね♪ 楽しんでいただけたら幸いよ♪」

す

「すごい難しかったもんね〜」

ア

「そうね。それじゃあMebiusさん。樟葉權さん。第三部終了まで未来と、レンを借りるわね♪ よろしく〜♪ ではでは♪」

す

「また次回〜♪」

レ

「いいか？ 俺は曲がりなりにもゲストなんだ。それを……」

シ

「ここに来た時点で関係無いと思うんですけど。道場因子あるし」

レ

「うるさいな。一応抵抗らしい事ぐらいしたいんだよ。……せめて、弄られからタカト並の地位までは上がりたいもんだ……」

未

「いやあ。無理でしょソレ。絶対無理だっぶ!？」

レ

「うるさいんだよ。お前達は……。今の説教の続きだって忘れんな」

タ

「まあ、何だ。全員、頑張ってくれ。テストロッサ先輩は、執事の件。お忘れ無きように」

レ

「ぐぬ……!」

シ

「この説教、いつまで続くのかなあ……」

未

「さあ……？ あ、足だり。崩そー」

レ

「手前えらあ……! マジメに聞きやがれ!」

終幕。



第四十話「星の想い、天の意思」(後編)(後書き)

「本局からの離脱したアースラ。しかし、転移出来たのは、ミッドとは全然違う場所で」

「主力メンバーを欠いたアースラを、更なる戦いが待ち受ける。それはー」

「一方、本局から離脱したタカトとなのはもアースラを追い、二人での逃避行を始める」

「それは、あまりにも危機感と離れた旅路で、タカトを困惑させていく」

「そして、なのは……」

「次回、第四十一話

『危機と惑いの逃避行』」

「向かう先は、少年にとっての故郷」

第四十一話「危機と惑いの逃避行」 (前編) (前書き)

「壊れて、壊れて、壊れて、壊れて、壊れて―」

「俺は大切なモノをいつも傷付けて」

「擦り抜けて、零れたのはヒトであった証。……二度と戻らない、感情」と言う名のヒトの証明」

「EXであったが故に、心は壊れて。魂は”傷”を負って」

「俺は幸せを理解出来なくて」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まります」

## 第四十一話「危機と惑いの逃避行」(前編)

時空管理局、本局。

元来なら管理局局員が駐留するこの場所は、現在その敵対者により占拠され使用されていた。

つまり、ツアラ・トウ・ストラにより。

次元世界の法と秩序を守るべき組織の象徴が占拠されていると言う事態は皮肉以外の何物でも無いだろう。

しかも、それが次元世界全ての制覇を掲げる組織によって。

本局はストラの本拠地と化し、秩序を護る象徴では無く。

乱世へと導く象徴と成り果てていたのだった。

その本局の一角。

元来ならば、次元航行艦があるべきドッグにあるモノが鎮座していた。

ストラ側最強の切り札たる、対界神器。ギガンティスが。

その名の通り、世界を破壊しうる巨神は、しかし。

現在、全ての兵装を眠らせて待機状態となっていた。

そのギガンティスを足下から見上げている人物が居る。

2mを越す、筋骨隆々たる大男だ。

彼こそは、ストラの指導者にして最高司令官。名をベナレス・龍。

龍王とも呼ばれる彼は、ただ黙々と己がデバイスでもある巨神を見上げていた。

「……………」

無表情に、無感情にただただ見上げる。  
そのまま暫く見ている。

「ずっと見上げていて、よく首痛くならねえな？」

突如として声が掛けられた。

その声に、ベナレスは振り向く。そこには、髪も髭も、纏う装束までも赤と言う壮年の男が居る。

アルセイオ・ハーデン。その男が。

「アルか、……何か用か？」

「いんや、たまたま見掛けたんでな」

暇だったしよ。と笑いながらアルセイオはタラップを下りて、ベナレスへと歩く。

その横に並びギガンティスを見て、笑いを苦いモノへと変えた。

「……全く、してやられたモンだな」

「ああ。奴のおかげでこちらは戦力の半分も削られた。各世界に送る戦力も考え直さねばならない、な」

アルセイオの台詞に、ベナレスは無然としながら答える。

現在、ストラは戦力の大半を新型のガジェットと因子兵に頼っている。

しかし、その50%までもが、ある存在により、破壊されていた。  
つまり、EX化したタカトに。

「……奴の転移先は突き止められたか？」

「無理だろう。転移反応もフェイク塗れ、だ。それに下手に戦力を送っても返り討ちにしかならん」

そうかい、とアルセイオは答える。元々期待してはいなかったの  
だろう。返事はあっさりとしたものだった。

そんなアルセイオに、今度はベナレスが問う。

「貴様の部隊はどうだ？」

「リズ、リゼ、ベルマルク、飛、エリカはどうにかなった。……ソ  
ラとバデスの爺さまは現在、絶賛再生ポッドの中、だ」

肩を竦めながらアルセイオは答える。

飛・王は、なのはに倒されたものの非殺傷設定だったのが幸いし  
たか。傷一つ無く、復帰している。

女性陣三人と、ベルマルクも虚空水迅による、謎の効果により、  
寝込んでいたものの、命に別状は無かった。

しかし、背中を爆裂されたバデスと、胸、正確には肺を貫かれた  
ソラはそうもいかない。

ナノ・リアクターと言うグノーシスの再生治療ポッドを使用し、  
現在再生治療の真っ只中だった。

このナノ・リアクターは治療用ナノマシンによる、分子レベルで  
中に居る使用者を再生出来る優れ物だが、実は管理局に元来あった  
物では無い。

実は、クロノ・ハラオウンが伊織タカトと戦い負傷した際に、グ

ノースから本局に寄贈されたものだったりする。

肺がブチ貫かれていたクロノが一週間も経たずに復活したのは、これのおかげであるのだ。

……最も、現在敵側であるストラに使用されているのは、やはり皮肉な話であるが。

アルセイオの台詞に、フムとベナレスは頷く。

「……そうか。隊員が完全に動かせない以上。貴様達に奴達の追撃を命じる訳にもいかん、か」

「……奴達？」

「アースラと言ったな？ 奴達の事だ」

ああ、とベナレスの言葉にアルセイオが相槌を打つ。

後から来たタカトの印象が強すぎて、すっかりアースラの事を忘れていたのだ。

そんな、アルセイオにベナレスは代わらぬ無表情の視線を向ける。

「……幸い、各世界に派遣していた次元航行艦隊の消耗は避けられた。あれらに次元封鎖を行わせつつ、追撃を掛ける」

「俺達はどうするよ？」

これからの行動を決定するベナレスにアルセイオが更に問う。

それにもやはり、眉一つ動かさず、ベナレスは頷いた。

「貴様達は、傷が癒え次第、ある所に攻め込んで貰おう。次元航行艦を一隻渡す」

「あいよ。りょーかい。んで？ その場所は？」

気安く、了承するアルセイオ。

それに、ベナレスは背を向け、歩く。

おいおい無視かよ？ と、アルセイオは笑いながら問おうとして。それより早く、ベナレスから問いに対する答えが告げられた。

「第97管理外世界。地球。……攻撃目標はグノーシス、だ」

それだけが、告げられた。



一弾、弾、弾、弾、弾――

星が瞬く宇宙に光が灯る。

それは、弾丸と化して縦横無尽に宇宙を駆けていた。

その中、弾丸が行き交う場所の遙か後方に、一つの巨影があった。それは、全体の所々が故障しているのか、一部が欠落している。

その影の名前は、次元航行艦アースラ。

本局決戦に於いて、敗退、離脱し。現在撤退中の艦であった。

アースラブリッジ。

各報告が行き来する中で、頭に包帯を巻き、他にも本局制服から包帯が覗く八神はやてが、艦長席に座って口元を組んだ指で覆い。展開したウィンドウを見て、難しい表情のまま唸っていた。

その横で立ったまま、指揮をしていた副官のグリフィスははやて

を見る。

「……追撃部隊に捕まりましたか？」

どやろ？ とグリフィスの問いに、はやては答える。

管制官のシャーリーを呼び出し、現在の敵対している機動部隊のデーターを寄越して貰った。

機動部隊は、ガジェット、D A装備の因子兵で固められており、それが約五十体、と言った所であった。

「……いや、それにしたら部隊規模が小さいわ。偶発的なエンカウントやないやろか？」

「……それは、また運が悪い話ですね……。今のアースラの状況で……」

「……そやね」

グリフィスの台詞に、はやても嘆息する。

今のはやての状況から解る通り、現状のアースラは最悪の状況だった。

人的被害が酷すぎる。

各部署の人員も、怪我人が多発しているような状況なのだ。

特に酷いのが、機動部隊。

つまり、前線メンバーである訳なのだが。

「現状で動かせる機動部隊が、クロノ提督、スターズ3、スターズ4。ライトニング3、ライトニング4。N2R3とN2R4二人と、セイヴァーと、アーチャーだけ、ですか」

「……厄介やね。いくら敵部隊規模が小数やから、て……」



グリフィスの言葉に、はやては嘆息する。

グノーシス・メンバーは言うに及ばず、隊長陣はヴィータ、シグナムが大怪我の為、出撃は不可能。

そして、フェイトや別のN2Rメンバーも少なからず怪我と、何よりデバイスの破損が酷く、出撃は不可能だった。

「……シャーリー。皆のデバイスの状況は？」

「まだ、大丈夫です。でも、そう長くは持ちません」

シャーリーの申し訳なさそうな返答が、はやてに返る。

はやては再度嘆息した。

「デバイス、身体共に大丈夫なんですが、シオン君と、スバル、ティアナしかおらん、か……」

「流石に厳しいですね……」

はやてに引き続き、グリフィスも苦々しく答える。

それに、はやてはモニターを見上げた。

「この艦の現状で単に運が悪い、ても救いようが無いけど。……それに甘んじる訳にもいかへんね」

そう、呟くと。はやては再び、シャーリーへと顔を向ける。

「シャーリー。光学索敵を頼むわ。機動部隊単独での作戦行動は無いやろし。……後方に航行艦が居る、て思った方がええ」

「はい！ 了解です！」

その言葉に、シャーリーは頷くと、コンソールを叩き、索敵を開

始する。

はやては、シャーリーから視線を外すと、再びモニターへと視線を向けた。

「グリフィス君。前線メンバーに現状維持の指示を。……無理はあかん、て言い含めてや」

「了解しました」

はやての指示に、グリフィスが頷く。

それに頷きながら、はやての視線はモニターから動かない。宇宙空間で戦う、一同をジッと見ていた。

それは、まるで祈るかのような視線であった。

……もう、失いたく無いと、そう告げる、視線だった。



宇宙空間に、光の道が走る。

その上を駆けるのは、N2R3。ノーヴェだ。

向かう先には、人型モドキのガジェットが三体居り、ノーヴェに對して機銃を連射、弾幕を形成する。

とー。

一撃！一

突如、中央のガジェットの一体に光射が一閃。

頭部を貫き、一瞬の沈黙の後、火の球となり宇宙空間の藻屑と化

した。

それに、残り二体のガジェットの身体が少しだけ流れる。  
弾幕に一瞬だけ切れ目が出来た。それをノーヴェが見逃す筈も無い。

一気に、ガジェットまで走り抜ける！

《っおらぁ！》

一撃！一

轟撃一蹴！

回るジェット・エッジのスピナー。後部が火を吹き。  
連射される弾丸を抜けながらガジェットの胴体を蹴り貫く。

一撃は、あっさりとガジェットを二つに叩き折った。

ノーヴェは止まらず、右手のガンナックルを持ち上げ、光弾を連射。

残るガジェットに撃ち放つ。

負けじと、ガジェットも光弾を抜けながら機銃を放とうとして。

【ステインガー・スナイプ。トリプル・バースト】

一貫一

その胴体を光閃が貫いた。

ガジェットはそれに動きを縫われ、硬直する。

しかし一撃で撃破は成らず、まだ動こうとして。

一貫一

続く、二つの光閃が頭部と下胸部を更に貫く。

ガジェットは、今度こそ沈黙。遅れて爆発、四散した。

眼前の敵が沈黙した事に、ノーヴェは一つ息を吐き。直後に念話が脳裏に響いた。

《無事か？ ノーヴェ》

届く、念話にノーヴェは苦笑、頷く。

《ああ。ハラOWN提督も援護サンキュー》

《おいしい、礼を言うのは旦那だけかよ？》

続いて、届けられる念話にノーヴェはああ、そうだったと笑う。  
そして、もう一人。最初にガジェットを撃ち落とした青年にも礼を言う。

《ああ、あんたも良い腕だったよ。サンキューなヴァイス》  
《おう》

ノーヴェの礼に、頷きの念話が届く。

そして、ノーヴェは左手側に視線を向ける。

未だ、光が瞬く戦場へと。

その表情は若干、苦かった。

《この状況、まずくねーか？ 向こうが突っ込んで来ねーからいいけど。……一気に攻め込まれたら……》

《一気に押し込まれる可能性は大、だな》

クロノがノーヴェに応じて、答える。  
それに、ノーヴェは眉を潜める。

《だったらこっちも前出て一機でも多く……》

《だが、やはりアースラの直援は必要だ。性質上、僕達が直援に向  
いてるしな》

きっぱりと嗜められ、ノーヴェは舌打ちする。

現状、アースラはまともな防御フィールドを形成出来ない。  
それこそ、これ以上攻撃を受ければ墜ちかねなかった。

《お二人さん。話しの途中、悪いけど敵影が四、来たぜ？》

《そうか。……ノーヴェは前に。ヴァイス陸曹は後方から援護狙撃  
を頼む。……行くぞ》

《……了解！》

若干、苛々しながらもノーヴェは頷く。

そして、エアライナーを再度展開。再び走り出した。



一弾、弾、弾、弾、弾――

絶え無い弾幕が宇宙に灯る。それ等を形成するのは総計三十のガ  
ジェット、因子兵だ。

撃ち放ち続けられる機銃からなる弾幕は敵対者を近付けさせない。

” 筈 ”、だった。

《おおおおお……！！》

一斬！一

突如、ガジェットの一体が縦に分かたれる。

高速斬撃による一撃で、両断されたのだ。

神覇壺ノ太刀・絶影。その一撃によって。

それを放った存在、シオンはノーマル・フォームのまま更に駆ける。

近くの因子兵の首を一撃で落とし、そのまま反転。

もう一体の因子兵をぶった斬る。

しかし。

一撃、撃、撃、撃、撃一

《ぐっ……！！》

シオンの強襲から体勢を立て直したガジェット、因子兵群が、反転してシオンに対して射撃を開始する。

それに、シールドを発動して、射撃からなる弾幕を受け止めるシオンだが、そのあまりの数に顔を歪める。

いくら何でも、数が違い過ぎた。

しかも、戦い方を限定出来る地上では無く宇宙空間。

障害物も無く、上下も関係無いこの戦場で、一人突っ込むのは無謀に過ぎる。

そう、”一人ならば”。

—煌！—

—轟！—

—撃！—

シオンに総攻撃を行う敵群に対して、走る三条の光砲。

それは、動きを止めていた敵群の大半を飲み込み、喰らいながら突き進んだ。

一撃により、二十もの数を失ったガジェット、因子兵がバラバラに散り、その場所より離脱した。

《……っ。ちっとヤバかったか……》

《ちっとじゃないわよバカ！》

攻撃が止んだ事により、一息吐く。

そんな、シオンに怒声が響いた。

誰かを確かめるまでも無い。ティアナ・ランスター、その人であった。

直後に、蒼からなる道がシオンの元まで走り、砲撃を撃ち放った三人が駆けて来る。

スバル・ナカジマと、ティアナ。そして、ディエチ・ナカジマだ。

三人はシオンに合流すると、ジト目で睨む。

《……シオン、ちょっと突っ込み過ぎだよ？ 今のだって……》  
《……分かってる。無理はしてねえよ。怪我もして無いし、問題ない》

《そう言う意味じゃ無いでしょバカ！ アンタはいつも……！》

まなじり  
眦を上げて睨むティアナに、シオンは片手を上げて制止する。  
そして、三人のデバイスと、固有武装に目を向けた。

《……数が違い過ぎんだよ。それに、アイツ等の機動性にまともに追従出来るのが、俺とエリオ、クロノ提督しかいねえ。……多少、強引に引っ掻き回さねえと、主導権も取り返せねえよ。……それに、今の段階だと突出出来るのは俺しかいねえし。だろ？》  
《それは……》

シオンの台詞に、ティアナが顔を歪め、スバルも表情を強張らせる。

現在、前線メンバーの中で、デバイス、固有武装がともに起動出来ているのは、シオンとスバル、ティアナ、クロノしかない。  
しかし、スバルとティアナは無重力、真空間では機動性に難があり。クロノは近接戦が苦手では無いが、現状に於ける前線メンバーの指揮を任されている身であり。ついでとばかりにアースラの直援の為、艦に張り付いていた。

前に出られる筈も無い。故に、突出する事が出来るのは、現状シオンしか居なかった。

二人は、シオンの言い分に息を飲み、しかし。シオンに言い返そうとして。

《三人共、話しは後にしよう。今は……》  
《ああ、そうだな。三人共、援護を頼む。……エリオ達は？》  
《……後でキッチリ話しつけるからね！》



《……シオン……》

ディエチに答えるシオンに、話を逸らされたと思った二人がそれぞれのシオンを睨み、悲しそうな顔をする。

シオンは構わない、エリオ達の現在位置を確認して、飛翔を開始しようとして。

《……ゴメンな、二人共。大丈夫、分かってんだよ。……なのは先生に言われた事、ちゃんと理解してるから》  
《《っ……！》》

振り向かないままに告げられた念話に二人は目を見開く。  
シオンはやはり振り向かない、そのまま駆け出した。

《……やっぱり、気にしてるんだね。シオン……》  
《……やっぱバカよ。アイツ……》

二人がぐつと息を飲みながらもシオンに呟く。  
それに、一人。ディエチがため息を吐いた。



「……来ました！ 光学索敵に感あり！」

アースラブリッジに、シャーリーの声が響く。  
同時に、戦場を映し出すモニターの横に、更にウィンドウが展開。  
そこには、XX級次元航行艦の一隻が映っていた。

「……当たり、やね。距離は？」

「アースラより、5000（約五十Km）の位置で静止してます」

シャーリーの報告に、はやては頷く。

そのまま、横のグリフィスへと視線を向けた。

「……距離が近いから向こうのアルカンシエルは警戒せんでもええね」

「はい。そこは助かりますね。こちらは攻撃オプションがアルカンシエルしか在りませんが、現状では使用不可能ですし」

はやての言葉に頷きながらグリフィスも手元のコンソールを操作する。

そして、更にモニターの右横に新たなウィンドウが展開した。

「現在、敵機動部隊は総計十。ガジェットが三、因子兵が七です。

……こちらは何とかなりそうですね」

「そやね。後は敵艦の拿捕だけやけど……？」

そこまで言い、しかし。モニターに映る敵艦が動き出した事に、はやては眉を潜める。

既に機動部隊の勝敗は決したにも関わらず、ここに来て艦を動かす。

それに、眉を潜めたのだ。

ここで、ストラ側が選ぶ戦略は……。

直後、敵艦の前方に”穴”が開いた。

穴の向こうに広がるのは、次元空間！

つまり、敵艦が選んだのは次元航行による撤退だった。

「そんな……！ まだ機動部隊が残っているのに……」

シャーリーが悲鳴じみた声をあげる。  
それに、はやては顔を歪めた。

「……いや、向こうの機動部隊はガジェットと因子兵だけや。人的被害は0。……殿としては最適やね……」

「そんな……」

しかも、ガジェット、因子兵共にストラ側は大量に数を用意している。

消耗を恐れる筈も無かった。

実際は、タカトにより戦力を削られてストラ側もカツカツなのが。それを、はやて達が知る筈も無い。

「……如何なさいますか？ 艦長。追撃は……」

「やめとこ。今のアースラの状況で藪に手を突っ込むような真似して、蛇どころか鬼を出したら、ただじゃすまんしね。……それにガジェットや、因子兵も放ってはおけんし」

そこまで言うと、はやては再び正面へと向き直る。  
続いてシャーリーへと指示を出す。

「各機動部隊は、敵機動部隊を殲滅。敵艦は放って置いてええから、そっちを優先させてや。それが終わったら各員帰投。確認が終わったら次元航行で現世界より、離脱しよ」

「はい。……で、次元航行の行き先は……？」

告げられた指示を、前線メンバーに通信で伝えた後。シャーリーがはやてに振り返る。

それに、はやては小さくため息を吐いた。

艦長席のコンソールを操作し、電算を任していたもう一人の管制官。御剣カスミを呼び出す。

カスミは、すぐに通信に出た。

《はい。八神艦長》

「ああ、カスミちゃんか？ もうちょっとしたら次元航行に入りたいんやけど……。どないやろ？ ミッドチルダへの次元航行経路は見つかったか？」

はやての問いに、しかしカスミは目を伏せる。

それだけで、はやては理解した。

ミッドまでの次元航路座標が特定出来ていないと。

実は、アースラ。本来ならば、ミッド方面へと次元航行する筈だったのだが、例の次元震攻撃の影響か、次元航行座標が狂ってしまったらしい。

現在、アースラはストラに占拠された本局を挟んで、ミッドの反対側の世界へと次元転送してしまっているのだ。

当然、本局は再び次元封鎖されている状況であり。

この本局を再び、通常航行で抜けない限りはミッド方面には次元航行出来ない状況なのだ。

だが、それは今のアースラでは、単なる自殺行為でしか無い。

一応、遠回りに本局を迂回する形で、カスミにミッドまでの次元航路座標を算出して貰っていたのだが。

結果は散々に終わった、と言う訳だ。

《……申し訳ありません。私が至らないばかりに……》

「そんな事あらへんよ。カスミちゃんもシャーリーも、しっかりやってくれた。……そもそも、無理言うたんはこっちゃやし、な？」

《……はい》

もう一度、すみません。と、カスミは謝り、通信は切れた。  
はやては再度ため息を吐く。

問題が山積み過ぎて、頭が痛い。

実際、ミッドに戻れ無いのは相当の痛手である。

何故ならば、現状アースラで意識不明の者達。グノーシス・メン  
バーと、シグナム、ヴィータはどうにか延命出来ている”だけ”で  
あり。完全な治癒は出来ていない状況なのだ。

更に言うなら各デバイスや、固有武装。

これ等も、本体までダメージがいたりしているので、専門の  
ラボで修理する必要がある。

怪我人と、デバイス。その両方共、艦の設備では回復も修理も不  
可能な状況であった。

それに……。

「……皆のココロの問題もあるし、な」

そう呟き、はやては自嘲する。

高町なのは。

幼なじみであり、親友、戦友だった彼女が、今。アースラに居な  
い。

……最悪の状況は十分過ぎる程に考えられたが、はやてはそれは  
考え無いようにしていた。

しかし、それでも彼女が居ないだけで、艦は重い空気に包まれている。

それが特に顕著なのはフェイトであった。

目覚めた時に、なのはの事を聞いて半狂乱で本局に向かおうとしたくらいだ。

今は、部屋に閉じこもりっきりの状態である。

はやては、しかし。そんなフェイトを責めなかった。

……責められなかった。

多分、ソレは普通の反応なのだから。

つくづく、艦長と言うのが因果な役職だと思い知らされた。

そして、それを当然だと、艦長職をこなす自分も。

先の自嘲は親友を失って、しかし悲しむそぶりすら見せずに仕事をする自分を嘲笑ったのだ。

必要だと分かっているけど悲しめない自分を。

「艦長……？」

「っ……。どしたんかな？　グリフィス君？」

つい、考えに没頭してしまった自分を恥じながら、はやてはグリフィスに問う。

それにグリフィスは若干目を伏せた。

「……いえ。敵機動部隊、殲滅完了です。前線メンバーは、各員、アースラに帰投完了。……いつでも次元航行に入れます」

「そ、そか。ゴメンな。ちょっとボーしてしてたわ。……いややね。

歳かな？」

「……艦長。やはり……」

「……ん？ 何かな？」

気付かれるな。

それだけを自分に言い聞かせ、はやては笑顔でグリフィスに問う。  
……それが、無理矢理作った笑顔だとしても。

今は、それが必要なのだから。

グリフィスは、はやての顔を少しの間眺め、しかし。  
「いえ……」と短く答えて、前を向いた。

「何でもありません、艦長。次元航行準備、完了です」

「ん。なら次元航行開始しよか。次元座標は……」

「既に算出完了です。敵艦から最も発見されないであろうルートで  
第72管理外世界までの次元航行可能です」

その言葉に、はやては頷く。

そして、全ての悲しみをただ胸に押し込めて指示を出す。

今は、それが必要だから。

そう、自分に言い聞かせて。

「よし。なら次元航行開始！ 転移反応は最小限に。ストラに悟られんようにな？」

『了解！』

はやての号令に、ロングアーチ一同もしつかりと応える。

……不器用にも、泣いている事に気付かないまま、指示を気丈に飛ばす。

己達の艦長に報える為に、大きな声で声に応えた。



ふと、気付くと。彼女は荒野に居た。

……え？

いきなりだ。

本当にいきなり、何の脈絡も無く、彼女は……。高町なのはは一人、荒野に突っ立っていた。

……ここ、どこだろう？

見渡す限りの荒野。それ以外、何も無い。とりあえず、歩いてみる事にする。

てくてくてくてく、歩く。

しかし、本当に何も無い。

まるで、意図的に物を無くしたかのような空っぽさが、この荒野にはあった。

十分程歩き、なのはは息を吐く。

何処まで歩いても果てが無い。



何処まで歩いてても何も無い。

いつそループしてるんじゃないかと錯覚してしまいそうである。  
何せ、景色も何も変わらないのだから。

とー！。

……？

歩いていたら、何やら大きな影を見付けた。

まだ遠くてよく分からないが、人。のようにも見える。  
人なら道も聞ける。此処が何処だかも分かる。

そう、思い。なのはは影へと走りだした。

走り、走り。

影に近付いて。

それが、ヒトなんかでは無い事に気付いた。

……鎧？

思わずポカンと見上げてしまう。

近くまで来てみると、その鎧の大きさは更に際立って見えた。

2 mは確実にあるだろう。

しかも、その鎧は西洋の鎧では無く、武者鎧であった。  
こちらに背を向けているが、その独特の形は間違い無い。

……誰か、鎧を着込んでるのかな？

こんな荒野で一人、鎧を着ている理由が分からなくて、なのはは首を傾げる。

しかし、このままと言う訳にもいかない。  
とりあえず、話し掛けようとして。

「あんたにからだをかえしてあげる」

別の、声が響いた。

それに、一瞬虚を突かれて、なのはは呆然となる。  
どう言う事かと鎧を回り込んで。

少女を、見た。

紫の長い髪の少女だ。恐らくは6歳くらい。

しかし、その少女の瞳は何かに挑まんとせんばかりに爛々と輝いていた。

とてもでは無いが、このような年頃の少女がする目では無い。  
それに、なのはは一瞬だけ息を飲む。しかし、頭を振ると、思いついて少女に声を掛けてみる。

「こんにちは。どうかしたのかな？」

笑顔と共に語りかける、が。少女はなのはを見もしない。  
真っ直ぐに鎧を睨み続ける。

それに、なのはは少女にもう一度、真っ正面から声を掛けた。  
だが、結果は同じ。

少女は、なのはを無視し続ける。

どうしたものかと、なのははうゝん。と、頭を悩ませて。  
突如、少女が歩き出した。  
なのはに向かつて。

ぶつかると思い、少女をなのはは抱き留めようと手を伸ばす、が。

その手は少女を通り抜けた。

「え……!？」

いきなりの事態に、思わずなのはは目を見開く。

しかし、驚きはまだ止まらない。

少女は止まらず歩き、”なのはを完全に通り抜けた”。

……どう言う事……？

呆然として、自問する。

そして気付いた。

少女は、自分を無視していたのでは無くて”見えていなかった”  
のでは無いかと。

だとするならば、これは――。

「夢？ でも――」

夢にしてはリアリティがあり過ぎる。

まるで、映画の中に入れられたかのような錯覚を、なのはは覚えた。

しかし、そんなのは少女は構わない。

少女は鎧の足元まで歩くと見上げながら更に声を重ねる。

「あんたにからだをかえしてあげる。……で、もうひとつ。あずかりものがあるの。あんたのなまえ」

舌足らずの声が響く中、なのはは奇妙な奇視感を覚えた。

何処でこんな光景を見たような、聞いたような。

そんな気が。

そして。

「あんたのなまえは、いおりタカト。……あんたのおとうさんからもらってきてあげたんだからね？　かんしやしなさい！」

っー！

少女が告げた名前に、なのはは呆然と目を見開く。

つまり、これはー！

「タカト、君の……？」

……じゃあ、あの娘は？

そう思うと同時に、少女が右手を胸に当て、エヘンと張りながら得意気に笑って見せた。

「わたしのなまえはルシア。ルシア・ラージネス、ていうの。ちゃんとおぼえなさい？」

……ルシア、ちゃん？

その名にも、またなのは覚えがある。

タカトを”地獄”から救い、そしてシオンの初恋の女性の名前だった筈だ。

目の前の少女がルシアならば、この光景は。

「いいこと？　ちゃんとおぼえなさいね！　これ、めいれいだから！」

にっこりと笑う少女、ルシア。

自分より遥かに大きい鎧に恐れずビシッと指を突き付ける。

恐怖は無いのかと、疑いたくなる光景だが、何と鎧はあっさりと頷いた。

少女は、それに満面の笑みのままで。

「じゃあ、いっくよ？　あなたの”まな”はー」

瞬間、なのは手を強く引っ張られる感覚を覚える。

直後に、その光景全てが遠ざかった。



「ーっ」

軽く光が射す感覚。

そして、手が強く握られている感覚に、なのははゆっくりと目を開いた。

視線の先には見知らぬ天井が広がり、電灯が部屋を照らしていた。その明るさに、思わず目を細めながら、なのは身を起こそうとして。

握られている手に気付いた。

左手が誰かに握られている。

それに視線を向けて、なのはは目を完全に見開いた。なのはの手を握っているのが、他でも無い。

伊織タカト、その人だったから。

いつものバリア・ジャケットでは無く、ユーノの家で着ていた。

黒のシャツに、ジーパンと言うラフな格好であり。

眠っているのか、目は閉じられたままだった。

意外にも可愛い寝顔である。

そして、拘束具に包まれている右手が、なのはの左手をしつかりと握りしめていた。

……え〜と。

寝起きと言うのも手伝い。突然の事態に、なのはは頭が回らない事を自覚する。

此処は何処なのか？

あの後、どうなったのか？

アースラは？

そう言った数々の疑問が頭に浮かび。

しかし、最大の疑問が頭の大半を占めていた。

つまり。

……何で、手を繋いでるんだろ？

そんな、当たり前過ぎる疑問である。

嫌な訳では無い。しかし、どうにも気恥ずかしさを、なのはは覚えていた。

とりあえず、タカトを起こそうと身を起こす。

同時、タカトの目が開いた。

「っー。寝ていた、か。随分と懐かしい夢をー」

そこまで言い、上半身を起こした、なのはに気付いたのかタカトが目を見開く。

手は繋がれたまま、だ。

えーと、と悩み。取り敢えずは挨拶だけはしておく。

「えっと。その……。おはよ。タカト君」

「あ、ああ。……おはよう」

珍しく言い淀みながらタカトがなのはに挨拶を返す。  
視線も逸らしていた。

そんなタカトの反応を、なのはは奇妙に思う。

一体、どうしたと言うのか？

「？ どうしたの？ さっきからこっち見ないようにして……？」  
「い、いや。まあ、何だ。……俺も男なんぞな。それ、隠したほうがいい」  
「え……？」

タカトが左手の人差し指でなのはの胸の辺りを差す。  
その行き先を、なのはは視線で辿り。

ピシリ、と硬直した。

その先には、肩から斜めに例の治療符が張られている。  
しかし、それ以外には”何もつけていなかった”。

ぶっちゃけると、全裸。

1秒、2秒、となのはは硬直する。  
それにタカトはあくまで視線を反らせたままに、声を掛けた。

「……おい？ なのは？」

「き……」

「き？」

あくまで、なのはを見ないようにしているタカトは、オウムのように、なのはの声をトレースする。  
そう見えてはいない。



下からゆっくりと顔に朱が差す、なのはの顔も。

そして、それが臨界に達した時。

全ての感情は爆発した。つまり、叫び声へと。

「きやああああああああああああああああああああああ  
あああああああああたたあああああああああああああああ  
ああ……つ!!!!!!!!!!!!」

「

「て、さけ……ぶっ！」

いきなり叫び出した、なのはに思わず振り返るタカトだが、直後に。

……凄まじく珍しい事にだが、顎に綺麗なアツパーカットを食らう。

正確には、羞恥のあまりに混乱して振り回す手がぶつかっただけだが。

なのは、ある意味誇っていい。

そのまま、ジタバタと暴れるのはに、今度はタカトが血相を変えた。

「……て、たわけ！ 傷口を開かせる気か！？」

「や、やだ！ やだあ！」

「ええい……！ 暴れるなと……！」

ジタバタと暴れるのはをタカトが顔面やらをポカポカと叩かれながら両の手を押さえる。

左手は繋ぎっぱなしだったのが幸いしたか、すぐに右手も掴んだ。そのまま、なのはをベッドに押し倒す。

「っー。アホか、お前は。折角傷一つ無くなりそうなの、に……」  
「うーー！」

取り押さえる事に成功して、一つ嘆息。  
そのまま、なのはに説教を開始しようとして。

自分達の状況に気付き、タカトが固まる。

全裸のなのはを下に組み伏せる。タカト。  
端から見れば、暴漢以外の何ものでも無い。  
涙目で自分を睨む、なのはの視線が、凄まじく痛かった。

「……何だ、まあ、その。……済まん」

直後。力が緩んだタカトの左手を振り解いた、なのはの右手が一閃。

タカトの頬に盛大なビンタを食らわせた。

……なお、女性にしてはルシアを除いて、タカトにクリティカル・ヒットを二回も成功させたのは、なのはが初であるのだが。

まあ、余談であつた。

（後半に続く）



第四十一話「危機と惑いの逃避行」 (前編) (後書き)

……はい♪ 前編終了です♪  
ところで、これはマジな話なんですが……。

ラブコメ、て。難しい……。

まあ、こんな戯言は置いといて (笑)  
続く、後編もお楽しみに♪  
では〜〜♪

第四十一話「危機と惑いの逃避行」 (後編) (前書き)

ふう。漸く書き終わりましたぜ……！

しかし、日常編は本当に常習性があるとつくづく思います (笑)

では♪ 後編をどうぞー♪

## 第四十一話「危機と惑いの逃避行」(後編)

### 第五十一管理内世界

「ナルガ」

その世界の代表惑星、ユグノー。それが、タカト。そして、なのはが逃げ込んだ世界の名前であった。

この惑星は全体の三割が砂漠化しており、各街はオアシスを中心として建てられている。

かつてはこの砂漠化に頭を悩ませていたのだが、管理局の環境整備により、砂漠化は抑えられ。今ではこの砂漠も立派に、観光名所と化していた。

ユグノーの街の一つ。

首都、メツテのホテルに、男女が背中向かいとなって、慚然としていた。

片方は自分の身体に掛かっていた、シーツを身体に巻き付けて頬っぺを膨らませている、高町なのは。

片方は左頬に盛大な紅葉をつくり、やはり慚然としている伊織タカトだ。

二人は背中向かいに慚然として、黙り込む。

なのはからして見れば、裸を見られた憤りがあり。羞恥がある。タカトからして見れば、治療して、傷口が広がらないように心配したのに二度も殴られたと言う思いがある。

端から見ればどっちも相応の言い分があるが、それで納得出来ないのが人間と言う存在である。

……平たく言うと、どちらも頑固なので折れないのだ。

黙り込んだまま、十分程経ち。ややあって、なのはが口を開く。

「せ、責任。取ってよ……？」

「……何の責任だ、何の……」

絞り出すようにして、放たれた言葉にタカトは嘆息する。

それに顔を赤らめながら、なのはが背を向けるタカトに振り返った。

「だ、だって。み、見たんだし……」

「治療行為をする度にいちいちそんなモノ気にしていられるかダアホ！？」

タカトも若干の気恥ずかしさがあるのか、こちらは振り向かないままに吠える。しかも、息継ぎ無しで。

それに、なのはもムっとなり反論を開始する。

「私だって女の子なんだよ！？ そんなモノ、て……！」

「そんなモノはそんなモノだ！ 大体貴様、何で服を着せられ無かったか理解しとるのか！？」

「ひ、ひど……！ そんなモノ、て。……訂正してよ！」

「してたまるか！ したらどうなる！？」

「せ、責任取ってもらう……！」

「治療行為と言っとなるだろうが！？ それ相応のマネをしたのならともかく、治療で責任問題持ち出されてたまるか！」

「そ、それ相応、て……！」

「が……」

「う……」

両者とも、白熱し過ぎて思いっきり自爆し、顔が真っ赤になる。なのははともかく、タカトがここまで感情的になるのは、結構珍しくはある。

暫く、二人共真っ赤になったまま、黙り込み。気まずい雰囲気が漂う中で、タカトが髪を右手でかき上げた。

「……と、とりあえずだ。何でお前の服を脱がせていたのかだけは説明しておく」

「う、うん」

タカトの言葉に、なのはが頷く。

気になってはいたのだ。何故に服を脱がせていたのかを。

……裸を見られた事で頭がいっぱいだった為。聞けなかったのだ  
が。

タカトは、コホンと咳ばらいして、なのはに向き直った。

「……お前に服を着せなかったのは治療の為だ。今、お前に付けている符だが。再生能力を高める為のものでな。それで傷口を縫合せずに、傷を合わせて上から符を貼っている。……これで、傷痕は残らない筈だ。……ただ」

「……ただ？」

タカトの長い説明を聞きながら、なのはがタカトの言葉を繰り返



す。

それに、つい、と目を横にタカトは向ける。

「……服の上からでは止血程度の効果しかなくてな。一度、服を全  
て脱がせる必要があった」

「……えっと。一応、聞くね？ 服を脱がせたのは？」

「俺だぶっ？」

最後まで言う前に、なのははタカトに枕を投げ付ける。  
それを顔に受け、タカトの言葉が止まるが。  
少しの間を置いたのち、枕が落ちた。

「ぬ、脱がせたのもタカト君なの！？」

再度、真っ赤になりながら、なのはが吠える。  
それには、枕を投げ付けられたタカトも流石に目を逸らせた。

「……仕方無かったんだ。他に……。女性の手を借りられるなら借  
りとするさ」

「な、なんで……？」

「理由は、種々様々あるが――」

呟くなり、手をポケットに突っ込む。  
そこから紙を取り出し、なのはに渡す。

「それが、最大の原因だ」

「……………」

その紙を見て、なのはは絶句した。  
そこには、なのはの顔写真が貼られ、下には賞金らしき額が書か

れている。

ぶっちゃけてしまうと、手配書であった。

「……ちなみに、タカト君のは？」

「俺のは無い。バリア・ジャケットのフードに、直視でなければ識別不可能な概念魔法をかけていてな？ おかげで、手配書の類は一切無い」

考えて見れば、彼が666として、第一級次元犯罪者と手配した時も、写真の類を一切見た事が無い。

ユーノが全くタカトを666だと分からなかったのは、この辺の事情もあった訳だ。

自分だけ、手配されていると言う事に、なのはタカトを恨めし気に見る。

それに苦笑しながらタカトは話しを続ける。

「まあ、そう言う訳だな？ 病院等にはお前を連れて行けなかった訳だ」

「え？ でも……」

この世界なら関係無いのでは、と。なのはは思い。タカトを見る。それに、再度苦笑をタカトは放った。

「……そこから話すべきだったな。まあ、ぶっちゃけると、だ」

そう言い、タカトは窓際に歩く。カーテンに手を掛け、一気に引いた。

「……既にこの世界。ストラに占拠されている」

「……………」

タカトの言葉。そして、窓の向こうに在る存在に、なのはは再び絶句する。

そこには、十艇程の次元航行艦が空に浮かんでいた。

「……いつから……？」

「ここに来て、暫くしてからだ。次元転移する間も無く次元封鎖されてな？　まあ、お前も危ない状況だったからな。仕方無く、放置した」

タカトの言葉に、なのはは愕然となる。

つまり、それは逃げられない、と言う事であった。  
絶句している、なのはにタカトが苦笑する。

「……まあ、この世界を脱出する方法については後で考えて置くで、だ。病院に連れていけなかった理由は理解できたな？」

「あ、うん。……でも、何で脱がしっぱなしだったの？」

もう一つ気になる事を、なのはは問う。

いくら、何でも脱がしっぱなしにする必要は無い筈だ。

その問いに、タカトはやはり目を逸らす。

「……お前の服だが……。まあ、血だらけでな」

「へ！？」

その言葉に、なのはは目を見開く。

同時に、脇に置かれた教導官用の白い本局用制服を見て。再度絶句する羽目になった。

制服は血で真っ赤に染まっていた。

白より、赤い部分が多いくらいである。

更にタカトは目を逸らしながら続ける。

「……もう一つ、付け加えるなら、脱がす時はそれこそ、そう言った事を気にしてられる状況じゃなかったが。……お前。一回、心臓止まったし」

「え!？」

いきなりの新事実に、なのはの目が再び見開かれる。

まさか、心臓まで止まっていたとは思わなかったのだ。

タカトは続ける。

「まあ、そっちは処置が早かったおかげでどうにかなった。……心臓に直接、震雷を撃ち込むのは、中々神経を使ったが」

「……え」と

何やら色々あったらしい。自分の身体に、どんな事があったのか、知りたいような、知りたくないような感じになり、なのはがちよつと複雑な表情となる。

「話を戻すぞ? で、だ。傷口に符を貼り、血を全部拭き取った上で、汚れているとは言え、服を着せようと思っただが。……血やら何やらが無くなった状態のお前に、服を着せられる筈も無くてな……」

「……え? 何で?」

「そこら辺は察しろ。知りたくとも教えてなぞ、やらん」

プイ、と顔を逸らしてタカトはぶっきらぼうに答える。

いざ裸の状態の、なのはを着せ替え人形宜しく服を、……下着も含めて。着けるのは、タカトには不可能だった訳だ。

いわく、それとこれとは別。

よく裸見られて『減るもんじゃない』とか言う人間が居るが、タカトからしてみると、とんでもない誤解であった。大いなる勘違いである。

減る。女の子の尊厳が。

そして、男の理性が。

タカトは、意外に古いタイプの人間であった。

仕方無く、上からシーツを被せ、なのはが起きるのをひたすら待つていたと言う訳だ。

「さて、理解したな？ お前が裸だった理由」

「……うん。何とか」

なのはが頷く。それに、タカトもうんうんと頷き返した。

「……よし、なら——」

「仕方無かったのは、理解したよ？ ……でも、裸。見たんだよね？」

その言葉に、タカトが見事に硬直した。

なのはは構わない。続ける。

「しかも、脱がせたのもタカト君なんだよね？」

「……………」

なのはの言葉に、あゝやら、うゝやら唸るタカト。  
ややあって、ドカッと椅子に座り直した。

「……分かった。責任とやらを取る事にする。……今、俺に出来る範囲で何でも言う事を聞いてやる……」

恐ろしく真っ白になりながら、タカトが絞り出すようにそう言い、頷く。

それに、なのははにっこり笑った。

「うん♪ じゃあ、一つお願いしようかな♪」

「……手柔らかに」

人助けをした、筈なのに。何故に助けた対象に言う事を聞かされなければ成らないのか、激しく自問しながらタカトは一応、そう言っておく。

そして、なのはが口を開く――。

……先に、結論から述べて置こう。なのはが出した条件は、タカトに取って一生、トラウマと成り兼ねない事だった。



「……も、戻ったぞ……」

息も絶え絶えになりながら、それこそ先より真っ白に燃え尽きたようなタカトが、部屋に入る。

なのはとのやり取りから二時間程経つ。

タカトは大量の紙袋を抱えて、外から戻って来ていた。

「あ、おかえり〜。ちゃんと、買って来てくれたんだ？」

「……ああ……」

朗らかに笑うなのはに、燃え尽きたタカトが非常に対照的だ。そして、タカトがなのはへと目をやり。

再び、硬直した。

「……オイ。それは何だ……？」

震える指で、なのはを指す。

それに、なのはは疑問符を頭に浮かべ、自分の身体を見て。ポンツと手を合わせた。

「バスローブだよ？ そのクローゼットの中に入って……。タカト君？」

「……ば、バスローブ……。そんなモノがあったのか……」

ガックウとタカトは膝を着く。

そのまま、うなだれた。

そう、タカトはなのはの治療やら看病に集中していたと言う事もあり。

部屋の探索を一切行っていなかったのだ。

つまり、バスローブの存在を今の今まで知らなかったのである。

「……それがあると知っていれば、こんな目に合わなくて済んだモノを……」

「え〜と。そんなに辛かったんだ？」

苦笑し、紙袋の一つを手取る。

そこには、女性用の服が所狭しと入っていた。

これがタカトが出された、なのはの条件。

自分の服を買って来て貰う事、であった。

何だそんな事、と思う事なかれ。服は、当然下着も含まれている。男が、女物の服（下着含む）を買う。

これほど男にとって、拷問に等しい作業は無い。  
……他の客（全員女性）からは、白い目で見られるは、店員からは『ご自分で着られるの？』と生暖かい目で聞かれるは。

それは、タカトにとって十分にトラウマと化す程の苦行であった。

「……こいつも、余計な事しか、話さんしな……」

【心外です。私のおかげで助かった部分もあった筈では？】

胸元に手をやり、タカトが赤玉を取り出す。

言わずと知れた、なのはの相棒。レイジング・ハートであった。

【マスターの各サイズが分からなくて、困り果てていた貴方をサポートしたのは私です。礼の一つくらいはあっても良いのでは？】

「……それが、三十分も店でうろうろした俺を、見た後でなければ、素直に礼も言えたんだがな……！」

確信出来る。マスターと同じで、このデバイスもSだと。

的確に心をえぐる手段を講じる辺り、まさに似た者同士であった。



盛大にため息を吐き、タカトはなのはに向き直りレイジング・ハートを返す。

「これで、責任とやらは果たしたぞ……！」

「うん♪ ありがとう♪」

睨み付けるタカトに、なのはが朗らかに笑う。

そんな、なのはにタカトは再度ため息を吐いた。

「……まあ、いいか。ところで、なのは。シャワーでも浴びたのか？」

「うん、汗もかいてたし。お風呂、入りたくて」

そうか、とタカトは頷く。

ちなみに、なのはに貼ってある治療符は高い防水性があるため。そのままお湯に浸かっても大丈夫な作りになっていた。

「……じゃあ、俺もシャワーを浴びさせてもらうか」

汗もかいたし、この世界は砂も吹き上がる。

身体や、髪も砂が多分に張り付いていた。

そのまま、風呂場に向かい。浴槽を見ると、既に湯が張られていた。

「ほう、既に湯が張ってあるならすぐに入れぐぴ!？」

タカトは最後まで言えなかった。突如、襟首を引っ張られ首が締まった為だ。

見れば、顔を真っ赤にしたなのはがタカトの襟首を掴んでいた。

「……何をする？」

「絶対お湯に入っちゃ駄目！」

問うタカトに、なのはが吠える。

実は、この湯。なのはが入ったものだったりする。  
ついつい、湯を抜き忘れていたのだ。

……私の後に、タカト君が入るなんて！

小学生時代はユーノ（フェレットもどき♂）と平然と入っていた、  
なのはだが。そこら辺は流石に成長したか。

自分の後に、湯に浸かるタカトを想像して、  
気恥ずかしさやら、  
何やらが込み上げたのだ。

「せめて、お湯を一度抜いてから入ってよ！」

「……あんな。それは、流石に勿体ないだろう？　この世界で水は  
案外貴重品扱いなんだぞ？」

主夫としての観念でタカトは話す。この朴念仁が、そう言った乙  
女の感性に気付く筈も無かった。

「そもそも、何で俺が入るのが駄目なのか、そこら辺をちゃんと教  
えてくれ」

「うっ！」

タカトの言葉に、なのはの顔が引き攣る。

そんな事、出来る筈が無い。

顔を赤くしながら唸るなのはタカトは嘆息。  
襟首を掴んでいる、なのは指を外した。

「……言えないなら理由は無いと判断するぞ？　じゃあ、風呂に入る」

「あ、待っ……！」

待たなかった。タカトとしては、汗やら砂をさっさと流したいのだ。

制止を振り切り、脱衣所に入る。

そうされてしまうと。なのは何も出来ない。

そのまま、タカトが消えた脱衣所の扉をうくと睨む事しか、出来なかった。



所変わって、アースラ。

次元空間を航行し、管理外世界に向かう艦は、今の所、襲撃も無く。少しの平穩に包まれていた。

そのアースラの医療室で、上半身裸のシオンが、シャルルの診療を受けている。

ペンライトに似た器具とクラールヴィントを同時駆動し、シオンのリンカー・コアの状態を診察しているのだ。

「……どうですかね？」

「うーん。そうね……」

シオンのコアは白の魔力光を放ち、シャルルの目に映る。  
損壊も、大きさも修復しているように見えた。

「うん。コアはもう、大丈夫。……漸く完治よ」  
「そうですか」

シャマルの診断に、シオンはホツとする。

本局決戦以来、無理に駆動し続けていたコアだが、二日程の襲撃も無く休ませていたのが、幸いしたか。

漸く、完治していた。

「どうも。ありがとうございます。シャマル先生」

「ええ。でも、あまり無茶はしない事。……次、同じ事があった場合。コアが修復するか分からないから」

シャマルの言葉に、シオンは頷く。

そして、右の頬を押さえた。なのはに張られた頬を。

「……なのは先生との約束もあります。……大丈夫ですよ」

「……そうね」

シオンの言葉に、シャマルが寂し気に頷く。

それに、シオンは視線を逸らせた。

「……シグナムや、ヴィータさんは……?」

「……まだ、寝てるわ」

本当に寝ぼすけなんだから、とシャマルは苦笑するが、それは無理をして出した言葉のようにシオンは思える。

本局を出て、早3日。

しかし、シグナムやヴィータ。そして、グノーシス・メンバーは

未だ、意識不明のままだった。

「……治癒魔法は、ずっと私とみもりちゃんて掛け続けてるの。でも――」

「……そうですか」

シャマルの言葉に、シオンは視線を落とす。

それは、最初に説明を受けた時と何ら変わらない状況が続いている、と言う事であった。

「……艦の設備だと、皆を治してあげられない。……情けないわね。こう言った事しか、私。出来ないのに」

「……いえ、それは」

シャマルに、シオンは抗弁しようとするが、しかし。止める。

今、いるのは慰める言葉なぞでは無い。

……皆を、治す事が出来る設備であった。

せめて、本局にあるような、ナノ・リアクターがあれば――。

「……あ」

「? シオン君?」

いきなり声を出すシオンに、シャマルが疑問符を浮かべる。

しかし、シオンはそれに構わない。

そう、ナノ・リアクターを管理局に提供したのは、どこだった?

「すみません、シャマル先生! ちょっと急用を思い出しました!

失礼します！」

「え？ あ、お大事にねー」

掛けられる言葉に、シオンは振り返らずに上着を引っつかみ外に出る。

とー。

「わ！？」

「ちよっ！ スバル押さないで！」

「きゃー！」

扉を開けた瞬間、スバル、ティアナ、みもりが雪崩込んで来た。シオンは、は？ と疑問符を浮かべつつ。体を横にして避わす。三人が、ずべつと医療室の床に転がった。

「……何してんの、お前達？」

「いたた……！」

「ちよっ、スバル早くどいて！」

「えっと……」

上から順に、スバル、ティアナ、みもりと重なって床に倒れている。

それを見ながら、シオンは取り敢えず三人を引っ張り起こす事にした。

「……よし、と。ラスト」

「う、シン君。ごめんなさい……」

シオンに引き起こされたみもりが申し訳なさそうに謝る。それに、頷きながらシオンは三人に向き直った。

「……で？ 何してたんだ。お前達？」

「えっと、その……」

「……ちよつとね」

「アハハ……」

シオンの問いに、三人とも愛想笑いを浮かべる。

シオンのコアの状況が気になって三人共、医療室のドアに聞き耳を立てていたのだ。

シオンの事である。もし、治ってなくても治ったと言い出しかね無い事もあり、そんな真似をした訳だが。

そんな心配を、当然。シオンが察する訳が無い。

「……ま、いいけどよ。……て！ こんな事してる場合じゃ無かった！」

「「「こんな事！？」」」

再び地雷を踏むシオンであつたが、構わない。三人に、背を向けて走り出す。

シオンの剣幕に、びっくりしていた三人だが。  
走って行くシオンが気になり追いつけ始めた。

「シオン！ 走ると危ないよ！」

「今はそれどころじゃないんだよ！ はやて先生に教えねえと……！」

「て、何をよ！」

走りながら叫ぶシオン達。行き交う他の乗員が珍しそうに四人を見る。

ティアナの言葉に、シオンは顔だけを向けた。

「うまく行けば、今のアースラの問題が全部解決する……！ 次の行き場所だ！」

「は！？ そんなの——」

どこにあんのよ、と続ける前に。シオンは叫んだ。  
今の現状を、何とか出来るかもしれない。

そんな場所を。

「地球……！ グノーシスだよ！」

そう、叫んだ。



「わぁ〜〜！」

次の日。メッテのホテルで1夜を明かした、なのはとタカトは街に出ていた。

二人とも、昨夜とは違う格好である。

なのはは、青と紺。ツートンのシャツに、白の上着。下は青のタイトスカートに白のニーソックス。靴は茶色のローファーを履いて。非常に、カジュアルな格好をしている。

タカトは珍しく白を基調としたTシャツに、中に青のロングTシャツを着ていて、下は青のGパン。靴は黒のスニーカーであった。

しかし、二人共違うのはそこだけでは無い。



なのはの髪は、ヴィータを思わせる赤となっており。左に結っていたサイドポニーも、右に変わっている。

タカトは髪の色こそ変わらないものの、目には黒いサングラスを架けていた。

タカトはともかく、なのはは髪の色すら変わっている。

これは、先の手配書を鑑みて、変装した結果であった。

髪を、簡易の光学魔法で色を変えたのである。

基本的に幻術を使えない、なのはにも。このくらいの芸当は出来た。

タカトは特に変装する必要は無かったが、常に右目を閉じている為。サングラスでごまかしているのであった。

#### 閑話休題。

「人、多いんだね」

人通りの多い、メッテの街を二人は連れ立って歩く。

前を歩く、なのはを見て。

タカトは深く、嘆息した。

「……なのは。やはり、俺一人で聞き込みをするからお前は――」

「だーめ。タカト君ばかりに負担掛けてるもん。私も手伝うよ。」

……これ、四回目だよ？」

最後まで言わせず、なのはは答える。

そう、二人は先程から同じ問答をしていた。

つまり。

『お前は怪我をしとるんだから、ホテルで大人しくしておけ』

そう言うタカトに。

『情報聞き込むだけなら手伝えるよ。だから手伝わせて』

そう返す、なのはやり取りである。

二人の問答は、平行線であり、交わる気配が無かった。

その二人が何を聞き込みしようとしているかと言うと。  
話しは昨夜まで遡る――。

「侵入？」

風呂から上がったタカトから発せられた言葉を、なのははキョトンと聞き返す。

それに、上はシャツ一枚。下はGパンで頭をゴシゴシとバスタオルで拭くタカトが頷いた。

「ああ。ストラの次元航行艦に侵入して、転送ポートを利用する」

冷蔵庫から先を買っておいた、スポーツドリンクを取り出し。一口あおる。

そして、ソファーに腰掛け。なのはに向き直った。

「……お前達の艦だが、どうにも念話が通じない。お前はどうかだっ  
た？」

「アースラだね？ ……うん。次元封鎖されてるせいか、念話出  
来なかったよ」

タカトの言葉に、なのはも頷く。

例の”見られちゃった事件”の後。なのはも即座にアースラに連  
絡しようとしたのだが、念話は一切通じなかった。

「だろうな。まあ、次元封鎖されてるんだ。通じなくて当たり前だ  
がな。……やはりストラ側の転送ポートを使わなくては駄目だな」

ふむふむと頷きながらタカトが呟く。

現在、ユグノーは次元封鎖されている状況であり。次元転移も、  
思念通話も出来ない。

個人では、この世界から移動も出来ない状況なのだ。

そう、個人では。

「だからストラの艦の転送ポートを使うの？」

「そう言う事だな」

なのはの言葉をタカトは首肯。再びスポーツドリンクを飲む。

実際、次元封鎖されていても、ストラ側の転送システムは使用出  
来る筈であった。

いや、使用出来ない筈が無いのだ。

そうでなければ、他の次元航行艦はこの世界を通り抜けられない  
のだから。

「……明日から聞き込みだな。ストラの人間も、街には降りているだろうし。運が良ければ事を荒立てずに、転送ポートを使えるかもしれない」

まあ、無理だろうが。と、思いつつタカトは苦笑する。  
ほぼ間違い無く、侵入する際には荒事になる。

タカト一人ならば、いかようにも切り抜けられるのだが。

「……怪我人がいるしな」

「……う……」

タカトの言葉に、なのはは呻く。

実際。今、戦闘をやれと言われても、出来る筈も無かった。

「決行するなら三日後だな。そのくらいあれば、お前の怪我也治ってる。……それまでは街で情報収集だな。ストラ側の状況も聞いて置きたい」

「そっかぁ……」

タカトの言葉に、なのはも頷いた。

実際、その案以上の案は出そうに無かった。

このままでは、この世界から出る事も叶わないのだ。

アースラとの合流など、もっての他である。

「……よし。なら、なのは。俺は明日から情報収集に街を出歩く。  
お前は――」

「あ、私も手伝うよ」

「ここで、て何？」

途中で放たれた、なのはの言葉に、タカトは思わず聞き返す。

それに、なのははニツコリと笑った。

「こんな身体でも聞き込みくらい出来るよ？ だから――」

「却下だ」

「て、何で？」

今度は、なのはは言葉が切られる。

タカトは顔をしかめながら、なのはに目線を合わせた。

「……お前は怪我人だ。怪我人は大人しくしておけ。……常識だぞ？」

「でも、一人でここに籠ってるのもあまり良く無いよ？」

「それは……」

そう言われては二ノ句が告げなくなる。

実際、暴れたり等の激しい運動をしなければ、なのはは問題無い。  
一人でホテルに缶詰と言うのも――。

「いや、やはり駄目だ。手配書の件を忘れたか？」

「大丈夫♪ そっちに関しては少し考えがあるんだ」

「だが、しかしだな。万が一。念には念とも言ってたな」

「心配無いよ。ちゃんと考えてるから」

「いや、だから……！ ええい、この頑固者め！ 人が心配してやつてるんだ！ 大人しく寝ていろ！」

「む……！ そんな事頼んで無いよ！ 私だって手伝えるってば！」

「そう言う問題じゃ無いと言っているだろうが、分らず屋！」

「そう言う問題だよ！ タカト君の聞かん坊！」

「ぼ、坊？ こら待て！ 二十歳も過ぎた男に坊は無かるうが！  
訂正しろ！」

「しないよ！ タカト君、シオン君と同じだよ！ 人の話し全然聞かないじゃ無い！」

「アレと一緒にするな、たわけ！ 大体話しを聞かんと言う意味ではお前もアレと変わらんだろうが！？」

「ムカっ！ たわけ、たわけ、て……！ そんな事言う人の方がたわけだよ！？」

「貴様の方がたわけに決まっとううが、たわけたわけたわけ！」

「三回も言った！？ タカト君の方がたわけ――。バカだよ！ バカバカバカバカ！」

「バカと言ひ直したな、この――！ たわけ、たわけたわけたわけたわけたわけ」

「バカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカー！」

「たわけたわけたわけたわけたわけたわけたわけたわけ――！」

そんな、あまりに無駄なやり取りをきっちり一時間程かまし。  
レイジングハートに。

【お二人共。いい加減にしましょう。本当に】  
と、言われるまで。その罵り合いは続いた。

「……も、もう、いい。お互いにアホだったという事でこの話しは  
終わりだ……」

「……そうだね。つ、疲れちゃった……」

両者、肩で息をしながら同意する。

二人共、『何でこんな事になったんだっけ?』と、頭を悩ませる  
が、最初の原因は既に事象の彼方であった。

「……取り敢えず。もう、寝るか」

「そうだね。……タカト君は自分の部屋に?」

頷きながら、なのはは聞いてみる。

それに、タカトはあっさりと首を振った。

「ここで寝る。ベッドはお前が使え。俺はソファで十分だ」

「ここで寝るの!?!」

タカトの言葉に、なのはが疲れもどこへやら、問い直す。

それに、タカトは当たり前と言わんばかり顔を向けた。

「一部屋しかとって無いんだ。当たり前だ」

「な、何で……?」

「何かあった場合。一人に対応出来ない場合があったらどうする?  
それに、”ここは二人で入るホテル”だったみたいだったしな」

その言葉に、なのはが凍り付く。  
今、彼は何と言ったか？

「えっと。一応、聞くね？　ここ、従業員さんは？」

「そう言えば受付も誰も居なかったな。何でも”自動会計”だとか。便利な世の中になったもんだな」

うんうんと、タカトは頷く。

なのはは続ける。

「……えっと。ここ、どんな形のホテルなのかな？」

「”城みたいな形”だったぞ？　入口が”ハート型”で、入る時やたらと恥ずかしかったが」

タカトの言葉に、なのはは冷や汗を流しながら枕元をちらりと見る。

何故かそこには、箱詰めのティッシュがあり。

そして”袋に入ったナニ”かがあった。

「……ここ。普通のホテルじゃ無いよね？」

「？　そうなのか？」

キョトンと聞き直すタカトに、なのはは顔を赤らめてベッドに突っ伏した。

……薄々、気付いてはいたが。

タカト、中々にポケポケさんであった。

今、なのはとタカトが居るのは、”そう言ったホテル”であったと言う事だ。



おかしいとは思っていたのだ。

手配書が出回っているのに、よくホテルに泊まれたものだ。

……気付いてしまうと、非常に恥ずかしい。

なのはも、こう言ったホテルに入るのは初であった。

うーうと、唸るのはをタカトは不思議そうに見遣り。やがて、あっさりとソファ―に横になる。

「もう寝ろ。明日は早いぞ？」

「う、うん……。その、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

タカトに促され、なのはも頷く。

そして二人は寝入り、随分と騒がしい一日が終わった。

(第四十二話に続く)

◆◆◆◆◆  
パラララ〜パラ〜。

ア

「……ふう。今日もお茶が美味しいわね。……ああ、新入り。おかわり」

レ

「……………はい」

す

「あ、私もおかわり貰えるかな？」

レ  
「……………かしこまりました」

ア  
「ん？ 何？ アンタ凄い不満そうだけど？」

レ  
「……………そんな、事は、無い、さあ……………！」

ア  
「そう？ ならこれ終わったら道場の掃除よろしく。…………手を抜い  
ちゃ駄目よ？」

レ  
「こ、この……………！」

ア  
「…………何か言ったかしら？ 現執事レン？ それともメイドの方が  
よかった？ 私もそう思っ——」

レ  
「そんな事はありませんよおお……………！ くそ……………！」

タ  
「…………レン先輩。こちらを」

レ  
「タカトか…………。雑巾？」

タ  
「埃一つ。落とさぬようにお願いします」

レ  
「…………お前、厳しく無いか？」

タ  
「家事に於いて、手を抜く事など…………。有り得ません」

レ  
「そうだな。お前はそう言う人間だったよ、ちくしょう……………！」

す  
「それじゃあ、よろしくね♪」

ア

「さて、前フリが長くなったわね。今日も始まるアリサ道場よ♪」

す 「……あれ、そう言えば司会のシオン君は？ それに、未来君も？」

ア

「ああ、あれよ？」

5シ

「……何で俺達はこんな目に合ってたんだろうな……？」

5未

「……俺に聞くなよ。泣きたくなるから」

す

「え〜と。あの、小さい子達。可愛いけど。ひょっとしてー」

ア

「シオンと未来よ？ ちょっと子供になって貰っちゃった♪」

5シ、5未

「♪ じゃなーい!!」

ア

「もー。煩いわね。何よ？」

5シ

「何で俺達いきなり5歳児になってんスカ!？」

5未

「って言うか俺もかよ!？ 何で!？」

ア

「理由はー」

ヴ

「わああああ……!!」



シ

「祐希奈ああああああ……！　お、お前、て奴は……！」

「ふっふっふ。だてに二ヶ月もネタを仕込んでたわけじゃないのよ♪　さあ、ヴィヴィオ♪　絵本を読んであげなさい♪」

5シ

「くそ……！　やはりそのネタの前フリかこんちくしょう！」

ヴ

「うん♪　ほら、シオン君♪　白雪姫に人魚姫。シンデレラ”ぽい”の絵本だよ♪」

5シ

「よりもよって、全部乙女チヨイス！　てか、一個間違ってるよな！？」

ヴ

「ほくくら、シオン君♪　読むよくく♪」

5シ

「だ、誰か、助っ……！」

カ

「し、シオン……」

5未

「……いや、アレに比べたら俺はマシだったのか……？」

? 1

「あ……。お兄ちゃんが話しに聞いた通り、小っちゃくなってる♪」

? 2

「お、本当ね♪」

5未

「って、何iiiiiiiiiiiiiiiiiiii……！？」

? 1

「お兄ちゃん可愛いよー♪」

? 2

「いやー。懐かしいわね〜」

5未

「何故だ!? 何故この二人がここにー!」

ア、祐

「ふふ……」

5未

「お前達二人かああああああ……!」

ア

「さあねー♪ さて、二人共♪ 今の未来。ティクアウト?」  
? 1、? 2

「「おもちかえりい〜〜〜」」

5未

「そ、そのネタは危っ……! て、誰か助けてええええー!」

カ

「み、未来さんまで……!」

ア

「……さて、残るのは”後一人”ね♪」

祐

「そうね♪」

カ

「ま、まさか……! 待とう。俺はゲストー。……道場だと関係無いや……。え、えっと。落ち着きましょう? アリサさん、祐希奈さん!」

ア

「そうもいかないわ♪ だってお手紙が来ててね? 『小さい頃のカナン君とまた遊びたいな♪ 出来たらお風呂も♪』、て言う手紙がね♪」

カ

「母さああああん!? それ、母さんだよな!」

祐

「名前についてはプライバシーの関係上、黙秘するわ♪」

カ

「今更！？ 紙芝居やら何やらやったくせに……！」

ア、祐

「「だってアンタ達人権無いじゃない♪」」

カ

「そう言えばそんな事言われてた！ くっ。仕方ない！ メイー」

ア、祐

「「W神化！」」

—轟！—

カ

「えー！ 何でWで神化する必要が……！ メイデンはまだか！  
ユニゾンして時を——」

メ

「ハムハム……。タカトさんの卵焼きは絶品だな……。！」

タ

「おかわりはいっぱいある。ゆっくり食べろ」

レ

「このカニ……。すごい美味しいです……。！」

タ

「当然だ。何せ、アマゾンの奥地にしか存在しない、世界で一番美味と言われる川蟹だからな。二人共、心行くまで堪能してくれ。…  
…：具体的には1時間くらい」

メ、レ

「「は~~~~い♪」」

カ

「め、メイデン……！ レナス……！」

ア、祐

「「さて、もういいわね？」」

カ

「いや、落ち、落ち着い……！」

ア

「問答♪」

祐

「無用、と♪」

ア、祐

「「さあ……！ カナン小さくなりましたよね〜♪ 具体的には5歳くらい」」

カ

「に、逃げ——！」

タ

「……さて、あっちも静かになったし。今日のおさらいといくつか…  
…。ハル」

ハ

「はい♪ いやあ、ここに召喚も久しぶりですね……」

ク

「本当ですの。3ヶ月も待つのは久しぶりですの」

タ

「うむ。で、今回のおさらいだが——。主と、祐希奈お嬢様がいなくて助かったなど」

ハ

「いやあ。貴方に年齢詐称薬（高等変身魔法薬）を頼まれた時は何



に使うかと思いましたが……」

レ

「……あくどいな。お前……」

タ

「……レン先輩。掃除は終わったので？」

レ

「まだだ。で、今回のおさらいとやらは？」

タ

「ええ。ま、一言で言う……。後先考えずに行動するな、ですね。……人助けをした筈。……なんですが……」

ハ

「ラブコメ化しましたね♪」

レ

「春か……」

タ

「……二人共、五月蠅い。大体、何で俺はあんなに感情的になってしまうんだ……？」

ハ、レ

「「タカト。気付いていないので？／＼ないのか？」

タ

「む……？」

ハ

「……重傷が、ここにも居ましたね……」

レ

「まあ、本編が、本編だから……」

ク

「そう言えば、あのホテル何だったんですの？　初めて見たですの……」

タ

「いや、あのホテルは助かった。自動会計とは……」

レ  
「……まあ、あえて教え無いでおくか……」

ハ  
「お嬢様は知らなくてもいい事ですよ♪」

ク  
「そうですの？」

タ  
「気になるな。あのホテルが一体何だと……」  
レ、ハ

「「気にすんな／しないで下さい」

タ  
「む……」

ク  
「ですの……」

ハ  
「さて、では主要キャラがごとくアレなので、今回は私が♪  
今回はここまでだそうですよ♪ 次回もLVキャラを召喚するそう  
なので皆様、ごゆるりとお楽しみ下さい」

レ  
「それでは」

タ、レ、ハ

「「「いってらっしゃいませ。ご主人様」」」

ク  
「行ってきますですの♪」

ハ  
「いえ。お嬢様は行かないで下さい」

ク  
「ですの？」

タ  
「さて、向こうの様子は……」

ア

「出来たわ……！」

祐

「ふふ……！　ようやくと完成ね……！」

5カ

「うう……！　俺まで子供に……！」

祐

「アンタね……。ほらほら。泣かないの」

5カ

「祐希奈のせいなのに祐希奈に頭を撫でられてるよ……。く、悔しい……」

涙目、上目づかいで睨む5歳時のカナンを想像しましょう♪

祐

「く……！　こ、これは……」

5カ

「うう……！」

祐

「この可愛いらしさは。そ、想像以上の破壊力……！」

ア

「祐希奈ダメ！　帰ってきなさい！　素数数えて素数！　ハイ1、

2……」

祐

「ハっ！　私は何を……！　く！　これは最終兵器だわ……！」

ヴ

「……で、シンデレラはガラスの靴を王子様に投げ付けて……♪」  
シ

「うん、ごめん。ヴィヴィオ。それシンデレラじゃないから。間違ってもシンデレラじゃねえから」

「……ママだもん。ヴィヴィオママ。ほら、呼んでみて……？」

「……これ、終わりねえだろ？　なあ……」

「うーっ！　シオン君がまた……！」

「ヴィ、ヴィヴィオママあああああああああああああ  
っ！」

「……うん。放って置こう。すげーカオスだ……」

「では、このままで次回と言う事で♪」

「続かせるのか……？　あのカオスを……？」

「ですの……？」

「ええ♪　それでは♪」

す

「うう……。司会までハル君に持っていかれちゃった……」  
タ、レ、ハ

「 「 「 あ …… 」 」 」

（終わっとけ）

第四十一話「危機と惑いの逃避行」(後編)(後書き)

「シオンの提案、それに悩む、はやて」

「それは自分達の都合に、地球を巻き込む事だから」

「そんな時。地球に向かうストラ艦をアースラは発見する」

「艦の安全を考えるか、地球を巻き込まぬ為に戦うか、その選択に。はやては――」

「一方。メッテで情報収集を開始するタカトと、なのははしかし」

「思わぬ事態に巻き込まれる事になる」

「そして――」

「次回第四十二話

『二極の強襲戦』」

”信用”では無く、”信賴”。それは、異母兄弟の絆」

## 第四十二話「二極の強襲戦」(前編) (前書き)

「俺はトウヤ兄いが言っていた言葉で気にいってるモノがある」

「その言葉は、俺に。そしてタカ兄いに向けて、トウヤ兄いが示した大切な言葉だから」

「『信用』では無いよ。”信頼”、だよ』その言葉を、俺達は一  
生忘れ無い」

「俺達を、”信じて頼る”そう言ってくれたトウヤ兄いを」

「俺も、俺達も”信頼”したいから」

「魔法少女リリカルなのはStS, EX。始まります」

## 第四十二話「二極の強襲戦」(前編)

暗い、暗い暗い底に堕ちていく。

そんな感覚を、高町なのはは得ていた。

現実では有り得ない。

ただ、ただ暗い暗い闇が堕ち行く、なのはの前にある。

……ここは？

疑問符を浮かべながらも、頭の中では何と無しにここが何かを理解していた。

……これは、夢だと。

この前の夢といい、今回の夢といい。何か最近、不思議な夢ばかりみるなーと。人事のように思う。

しかし、今回の夢は何なのだろうか。  
深い闇にただ堕ちるだけの夢なんて。

……縁起でも無いなー。

と、そんな風に思った。

直後。

EX。



唐突に、”声”が響いた。

いきなり響いた声に、なのはは目を見開く。

……この声は？

まるで頭に直接送られたような声。

感覚としては、念話に近いか。

訝しむように、そう思うと同時。

”声”が雪崩で、なのはに降り注いだ。

其は事象概念超越未知存在。 ■■■■■ 結晶。 ■のエネルギー  
ー化。禁忌のシステム。 ■■が生み出せし最悪の矛盾。壊せ壊せ壊  
せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ壊せ！ ■■システム。概念破壊。有  
り得ない有り得ない有り得ない！ ■■■。精霊。 ■の封印。真  
名。殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ！ ■を滅ぼ  
すモノ。最悪の存在。禁忌の研究。始まりの人。ヒトの可能性。エ  
ウロペアの十賢者。ラジエルの樹。善意を知る樹。生命の樹。起源。  
根源。原始。畏怖。戦争。死。悲しみ。憎しみ。復讐。殺戮。欲望！

……っ！ こ、れ……！

いきなり襲い掛かれた声の羅列に、なのはが顔をしかめる。

未だに、降り注がれる”声”。それによる頭痛の為だ。

マルチタスク。情報処理に長けた、なのはの高速思考が与えられ  
る情報に追い付かない。

……こんな、の！

ズキリと痛む頭。

耳を塞げど、直接頭に響く”声”は防げ無い。  
あまりの頭痛に、なのはが頭を抱え。

《……頑張って！》

直後。別の声が響いた。

……え？

霞む思考の中で、思わずなのはが問い直す。  
声はそれに応えるかのように響いた。

《なんでか分かんないけど、貴女と私の”ライン”が繋がってる……！  
それを利用して、■■■■の情報を貴女に送ってるの！■■■  
の情報は送れ無いかも知れないけど。■■■■の”本当の目的”につ  
いては教えられるかも知れない……！》

……響く声は、ただただ。なのはに語り掛ける。  
何の情報だと言うのか。

《■■■■は■■■を……！ て、これも検閲対象！？ あの、バカ！  
きっちりし過ぎよ！ もうちょつと適当にやんなさいよ！》

……え、えーと。

いきなり怒り出す声に、なのはは言葉を返せなくなる。  
しかし、気付けば。頭痛は無くなっていた。

《……まったく。あのバカは……！ ま、いいわ。とりあえず、今、  
貴女に■■■■の、……ややこしいわね。あのバカの情報を出来るだ

け送るわ。検閲対象にされちゃうけど。そこら辺は自分で調べて。情報は整理して送るけど。……我慢してね》

それはどう言う事か。そう、問う前に。再び”声”が来た。先程の声の羅列とは違う形で。

## EXシステム

事象概念超越未知存在。通称、『EX』理論。

これは、禁忌の研究。『』のエネルギー化を押し進める事によって、発見された。■が生み出した『自身を殺す』為のシステムだと考えられる。一種、『殲滅者（魔王）システム』と、『調律者（勇者）システム』と混同される場合が多々あるが、全くの別物だ。そもそも『』とは■■そのものである為に、全知全能にして、零知零能。つまり、強大な意思はあれど。指向性たる■■を有し得ないのが当たり前である。

故に、自身を滅ぼす存在に対してすらも平等に扱い。扱わない。その存在の”筈”だった。

しかし、これに指向性たる■■を与えてしまった存在がいる。……他でも無い。我々、”ヒト”である。

■は■■そのものであるが故に、自身に内在した存在に強く影響を受ける。

故に、輪廻転生を可能とする無限波動エネルギー。『』を持つヒトの影響を強く受けてしまったのだ。

ヒトは霊格としては、他生命体に対しては優位に立つが。幻想種を始めとした数々の存在に対しては下位に属する。

だが、『』を持つと言う一点下に於いて、ヒトはその存在達より上位に属する可能性を有し得るのだ。

この無限波動エネルギーたる『』をエネルギー化した存在を、『■■■■■■■■』と呼ぶ訳だが。

これは従来の魔力を初めとした。いかなるエネルギーよりも強力な力であり。ヒト一人分の『■』を”完全”にエネルギー化した実験では、一つの宇宙に匹敵しかねないエネルギーを抽出し得た。

この『■』は細分化された■の波動意思であると推定され。

■はそれ故にヒトから受ける■■の影響を強く受けた。

そして、■は自ら真なる名を受けて。強大な意思総体存在として現出してしまったのだ。

正と、負の■。二律なる■として。

これを、始まりのヒトと呼ばれる存在は、ある”二人の赤子”に霊的融合を施したと言われるが詳細は不明である。

話を戻すが、この■と■の研究を進める上で発見された存在がEXと呼ばれる存在である。

このEXは■と同位レベルの霊格を有するいわゆる規格外存在であり、その力の総体は宇宙どころか、■（■■）に匹敵するものだった。

その使用エネルギーが■■■■■■である。

元来、無限波動エネルギーである筈の『■』であるが。

その総量は決して無限では無い。

輪廻転生が一種の永久機関である為、無限と言う名が与えられているに過ぎ無かった。

しかし、EXの『■』は違った。

EXの■は、■■■■■■■■■■を高速無限増殖可能とする。

つまりは、本当に無限のエネルギーを生み出せるのだ。

それによってEXが行える力が、『事象概念超越』である。

概念とは、全ての物理法則を指し。■の法則そのものである。

EXは無限のエネルギーにより、自己に対する概念を破壊可能としてしまうのだ。

つまり、■に対して絶対の優位性を持っていると言う事になる。

EXはこの概念超越現象を起こす際に、自身の存在すらをも物理法則から組み直す。

彼等は、物質としての力を現出させる肉体を持ち得るが、その存在は純粹なエネルギー体である■そのものであった。

つまりは、肉体の破壊にさしたる意味が無い。

心臓が破壊されようが、脳を消滅させようが。存在そのものを滅殺しようが。■がその存在の本質である為に、力の行使に使用する端末である肉体は”復元”してしまうのである。

無論、肉体が破壊されれば■にも影響を受けるが、その影響は微々たるモノであった。

これら能力は、全て対■用の能力であると推定され。

■を破壊する為に、必要な力と考えられる。

しかし、これ程の力を使用するには、当然。反動がある。

つまりは■だ。これを、■と呼び。EXにとって、それは致命的な欠陥とも言えた。

■が進めば、EXは代償として、■を失って行く。

これらが指し示す事実は、ただ一つ。

EXは無限のエネルギーを有してはいても。それは、■に存在する一つの生命体にしか過ぎず。

その力の行使を限界まで使用すれば。

確実な存在の消滅が待っただけ、と言う事実であった。

これに対し、”アルハザード”と呼ばれる■は、■の完全解析による人工EXプロジェクトを発案した。

”擬似EXシステム”と言うプロジェクトを。

それが、■の逆鱗に触れるとも、知らずに――。



「おい。なのは」

明かりが射す感覚と、自分と呼ぶ声。

それに、なのはは目を薄っすらと開いた。

寝起きでボーとした意識のまままで自分と呼んだ人間を見る。

伊織タカトだ。

彼は半眼で、なのはを見下ろしていた。

「漸く起きたか。……おい？　なのは？」

「ふえー？」

半分だけ見開いた目で、なのはは辺りを見渡す。

上半身だけ起こして。そのままボーとしていた。

それを見て、タカトが盛大に嘆息する。

どう言う寝起きが悪さだと。

「顔を洗って来い。スッキリして目を覚ませ」

「……うん……」

タカトに言われるがままに、洗面所へと。なのはは向かう。

歯を磨く規則正しい音と、バシャバシャと水で顔を洗う音が響いた。

「タオルは横に置いてあるからそれを使え」

「……うん……」

まだ、眠そうな声が響く。  
きっかり十五分後。なのはが洗面所より戻ってきた。

「戻ったか。目は覚め――」

「……ふえー？」

「――て、無いか……」

顔を抑えて嘆息する。まさか、ここまでなのはが朝に弱いとは。実際は、”とある事情”により。脳がまともに働いていないだけであり。なのははさほど朝に弱い訳では無いのだが。

事情や、普通のなのはを知らないタカトがそんな事を知る筈が無い。  
い。

未だボーとしている、なのはを見て、タカトは苦笑する。

そして、眉がピクリと動いた。

視線は、寝起きの為に、サイドポニーを解かれ。若干乱れた長い栗色の髪に固定されていた。

「……なのは。ちょっとこっち来い」

「ふえー？」

手招きするタカトに、なのはは素直に従う。  
ソファ―に座るタカトの横に並んで座った。

そしてタカトが取り出したるは、櫛。

「ほれ、後ろを向け。髪を梳かしてやる」

「ふえー……」

くるりとなのはに背を向けさせる。

そして髪に櫛入れ始めた。

サラサラとした感触に顔を綻ぼせながらタカトが笑う。

「……ふむ。綺麗な髪だな。良い感触だ」

「……………」

髪に指を差し入れながら感触を楽しむ。

そのまま丁寧に髪を梳いて行き。

「よし。終わりだ」

最後に、髪を束ねてサイドポニーにしてやり、終わる。

満足気に笑うタカトに、しかし。なのはは振り向かない。

……また『ふえー』とか言いながら、こちらを向くとタカトは  
思っただが。

「……おい？」

「……………」

呼ぶ、が。なのはは振り向かない。

それにタカトは不思議そうな顔となり、なのはの前へと。回り込  
んだ。

そして。

「何だ。目が覚めてるじゃないか」

「……………」



真っ赤になった顔で硬直する、なのはに笑った。

……何で、髪梳かれてるんだろ？

それが、寝起きのなのはが最初に抱いた思考だった。

靄が掛かっていたような。ぼんやりとしていた意識が完全に覚めた時。既に髪を梳かれていたのだ。

恥ずかしいとは思いつつ、気持ちがいいと言う事もあり、ついっ  
い。そのままされるがままになっていた訳だが。

『……ふむ。綺麗な髪だな。良い感触だ』

いきなり、そんな事を言われた。

全くの不意打ちの攻撃に、恥ずかしい気持ちやら何やらが湧いて  
来て。

しかし、動く事も出来ずに、結局。全部して貰ったのだが。

「……おい。なのは？」

「ふ、ふえ！？ な、何？」

真っ正面に回ったタカトがなのはを半眼で呼び掛けた。

それに過剰な反応をするなのはに、タカトは不思議そうな顔をし  
た。

「……何を大声を出しとるんだ、お前は……」

「あ、ええと……」

何を言っけらしいのか分からずに、なのはの目が泳ぐ。

タカトは苦笑して、立ち上がった。

「ま、いい。それより、さっさと着替えよう。……朝飯は街に出てからだな。……聞いているか？」

「え？ う、うん聞いているよ？」

「……なら、いいが」

若干疑うような視線でタカトは、なのはを見て。再度の嘆息の後に、風呂場に向かう。

「？ どこ行くの？」

「脱衣所だ。いくら何でも同じ部屋で着替える訳にもいくまい？」

あっさりと答えて、適当な服を手に脱衣所に向かおうとして。

その前に、なのはが声を掛けた。

「えっと。……いいよ。わざわざ脱衣所で着替えなくても。後ろ向いて着替えれば……」

「？ そうか？」

なのはの言葉に、タカトが答える。

確かに、服を着替える度に脱衣所を行ったり来たりするのは面倒ではある。

「……そう言うなら。言葉に甘えましょう。……覗くなよ？」

「そんな事しないよ！」

タカトの言葉に、なのはが吠える。

それに笑いながらタカトはなのはに背を向けた。  
なのはもそれを見て、背を向ける。

ちなみに、なのはが今着ているのはタカトに前日買いに行っ  
った（行かせた）パジャマであつた。

上着を脱ぐ。そして、下も脱ごうとして。

……ふとタカトが気になり、ちらりと見た。

タカトは上着を脱ぎ、シャツを手に取りようとしている所で――。

「……おい？　なのは。こっちを見て無いか？」

「ふえ！　み、見て無いよ！？」

こちらを全く見ないままに、声を掛けて来た。  
跳び跳ねる程に驚き。思わず大声を出してしまう。  
すぐに、視線を前に戻した。

「そうか？　ならいいが。……視線を感じたものでな」

「そ、そうなんだ……？」

「ああ」

頷きながらタカトは着替えを再開する。

ホツとしながら、なのはも着替えを再開。

ツートンのシャツを着込み。ミニのデニムスカートに足を通して。

……背後のタカトが再び気になってしまった。

ゆっくりと背後に首を回そうとして。

「……覗きは駄目だぞ？」  
「ふえ！？」

気配でも察知しているのか、振り向く前に釘を指された。  
慌てて、首を戻す。

変な事、考えないようにしよう。

そう、思いながら。なのはは着替えを再開した。

……夢の事を、忘れてしまったままに。



アースラ訓練室。

そこで神庭シオンは剣を振るう。と、言っても自身のデバイスで  
あるイクスでは無い。

柔らかいウレタンで作られた模擬刀である。

一步をすり足で踏み込みながら上から振り落とす。

だが、それは同じくウレタンで作られた模擬槍で防がれた。

模擬槍を持つのは、エリオ・モンディアルであった。

模擬槍の半ばで防いだ模擬刀を中心にして、回転。

石突きをシオンの横面に跳ね上げる、が。

その一撃は、屈んだシオンの真上を通り過ぎた。

「……結局、ダメだったんです、か！」

直後、真下から振り上げられる模擬刀を後ろに短くジャンプして、回避。

シオンはそれを追い、低い体勢のままエリオへと駆ける。

「ああ。まあ言われてみたら、確かに無理があるよな、と！」

狙いはエリオの足。刈るように、低い体勢から模擬刀を横に振る。

が、それはあっさりと空を斬った。

「地球ですか……。一度行った事がありますけど」

模擬刀は、エリオの足下を通り過ぎる。

空中に足場を形成してやり過ぎたのだ。

デバイスも無しに形成するのは相応の修練を必要とするのだが。師が良かったのか、エリオは既に使いこなしつつあった。

「ああ、なんか。そんな話しも聞いたな。……でも、地球は管理外世界だからな。一般には魔法も知られて無いし、て危ね！」

体勢が低いままに、振り抜いた模擬刀は、用意には止まらない。

その隙をエリオが逃す筈も無かった。

真上から振り上げた模擬槍を振り放つ！

だが、シオンは模擬刀を振り抜いた勢いを利用。

回転ベクトルを縦に変え、手を床に着きその場で側転。

上から振り落ちた模擬槍を回避して、さらに一回転。

距離を取った。

「……僕達が地球に行けば、ストラに地球侵攻の口実を与える、ですか……」

「……言われてみたら、確かなんだよな。一応、保留って形で考えて置くらしいけどな」

距離を取ったまま、二人は体勢を整える。

シオンは正眼に模擬刀を構え、エリオは半身に模擬槍を構えた。

二人が話しているのは、シオンが艦長である、八神はやてに提案した事であった。

アースラの現状を好転させる方法。つまりは地球に転移し、グノーススを頼る事。それを、シオンは、はやてに提案したのである。これならば、現在も意識不明の者達も怪我人も、デバイス・固有武装も修理出来る。

何よりアースラの修理も出来るのだが……。

「……管理局の人間が、管理外世界の人達を巻き込むような真似はすべきじゃない、か……」

「……はい」

シオンの言葉にエリオも頷く。

それを確認した上で、シオンは一步を踏み込む。

真上から、模擬刀を一閃。エリオを衝撃で後退させながら、更に踏み込んだ。



「……それは、難しいな……」

シオンの言葉を聞き、はやては絞り出すように、そう言った。

話しは、昨夜まで遡る。

アースラ・ブリッジで、はやてはシオンと向き合っていた。  
いきなりブリッジに、シオンが尋ねて来たのだ。

どうしたのかを聞く前に、シオンはある事を提案して来た。

次の転移先を第97管理外世界。地球にする事を。

そして、シオンがかって属していた組織。グノーシスを頼る事を。  
それに、はやては顔をしかめたのであった。

「……何で、ですか……？」

まさか、渋い顔をされるとは思わなかったシオンが尋ねる。  
はやては苦笑した。

「……確かに、グノーシスを頼ったらアースラにとって状況を改善  
出来るかもしれへん」

「……だったらー！」

「でもな、シオン君。私達は”時空管理局”なんや」

一言一言を噛み締めるようにして、はやてはシオンに話す。

台詞を切られたシオンは、それに黙った。

「……地球はあくまでも管理外世界。私達の都合に巻き込む訳には  
いかへんやろ？」

「……それは……」

「まだ、問題はあるよ？」

言葉が見つから無いシオンに、はやては更に畳み込む。

シオンの眼を見ながら、言葉を続けた。

「グノーシスがどんぐらいの組織なんかは、詳しく私達も知らんよ？　けど、地球に居る。魔法も管理局も知らん一般人を、”私達が地球に向かう”事で、私達の都合に巻き込む事も有り得る。ストラが地球に攻め込む口実になるかもしれないのや。……それは、そう言った人達を巻き込む事になるんよ？」

「……………」

つまり、自分達は絶好の口実に成り兼ね無いのだ。

ストラが地球に攻め込む口実に。

ミッド、クラナガンで起きた戦いを鑑みる限り、ストラが一般市民に対してその戦力を向けないとは考えられ無い。

それは、地球を戦場にすると言う事と同義であった。

何も知らない人達を巻き込む事と。

故に、はやてもシオンの提案に首を縦に振らないのであった。

「……ですが、ストラの目的は全次元世界の制覇です。地球に攻め込まれるのは……」

「時間の問題、やろね。それも分かってるんよ。でも、私達がその理由になるのはアカン」

シオンの言葉を肯定しながらも、はやては首を横に振る。

それは、管理局の人間としての誇りとも言えた。

あくまで管理局は、法の守護者である。故に自分達の都合で外の世界を巻き込む訳には行かない。

そう言う誇りだ。

「……ごめんな、シオン君。キツツイ事言うて。でも、それだけは



譲れんのか……」

「……シグナム達やヴィータさんの事があってもですか……？」

シオンはそう言い。そして、即座に後悔した。

はやての顔が歪んだからだ。

泣きそうな、そんな表情へと。

何せ、はやてに取っては家族だ。

助けられるのなら、すぐに助けたいのだろう。

シオンは悟った。

はやてが今。どれだけ心を押し殺しているのかを。

その片鱗だけとは言え、確かに。

「……すみ、ませんでした……」

「……ええよ」

頭を下げるシオンに、はやてはただ一言だけそう言った。

何がいいのかは、言わずに。それだけを。

「今の段階やと、アースラは地球には行かん。それでええか？」

「……はい」

頷きながらシオンは一礼する。

そのまま、後ろで控えていたスバル、ティアナ、みもりと共にブリッジを出ようとして。

「……そう言えば、フェイト先生はまだ……？」

シオンがぼつりと尋ねる。

それに、はやては無言で頷きだけを返した。

「そう、ですか。……失礼します」

目でそれを確認すると、シオンはブリッジを完全に出た。

後には、はやてとロングアーチ一同。

そして重い空気だけが残った。



「……流石に軽率過ぎたよな」

訓練室で座り込みながらシオンが一人ごちる。

エリオもそれに倣って床に直接座り込んでいた。

「……そうですね。やっぱり僕達は管理局員ですから。何も知らない人達を巻き込むのは……」

「ああ。アウトだよな」

嘆息しながら頷く。思い出すのは、はやての表情だ。

泣きそうな、あの顔。

「……傷付けちゃったし、な」

はやて自身もひよつとしたら地球に向かう事を考えたのかも知れない。

だが、それを選択せずに逃げる事を選んだのだ。  
家族が意識不明の状況でも。

それがどれだけ、はやての心を苛んだのかは推測するしかない。  
シオンは、それを知らずと晒してしまったのだ。  
心の傷を。

「……フェイト先生もずっと、みたいだしな」

「……はい……」

シオンの言葉に、エリオが重々しく頷く。

フェイトはもう四日も自室に籠りっぱなしであった。

「フェイトさん。あれからろくに食事もして無いんです。キャロが  
ご飯届けてるんですけど。殆ど手を付けて無いみたいで……」

「……そか……」

頷くしか無く、シオンは片目を閉じて頷いた。

重い空気が二人の間を漂う。今のアースラ艦内に漂う、暗い空気  
に――。

「て、やめやめ。俺達まで暗くなってどうするよ!」

「そうですね」

シオンの言葉に、エリオは苦笑。  
二人して立ち上がった。

「シャワーでも浴びて来ようぜ。このままじゃ、俺達まで参っちな  
う」

「……ですね」

暗い空気をあえて吹き飛ばす為か、二人は笑い合い、訓練室を出た。

そして、シャワー室に向かおうとして。

《エリオ君……》

「「キャロ？」」

二人に念話が響いた。キャロル・ルシェからの念話である。どうかしたのかと、顔を見合わせる二人にキャロの念話は続く。

《フェイトさんにご飯持って行ったんだけど。……いない、て。

朝のも食べて無くて……》

「「……………」」

《このままじゃ、フェイトさんが……》

もう、かれこれ四日である。このままでは本当にフェイトは倒れかね無かった。

「……エリオ。予定変更だ」

「シオン兄さん？」

掛けられた声に、エリオは思わずシオンを見上げる。

シオンはぎりっと歯を食いしばっていた。

その表情は、ただただ怒り。

「引きこもり先生の目を覚ます」

「え？ て、シオン兄さん!？」

疑問符を浮かべるエリオにシオンは構わない。

走り出した。

向かう先はフェイトの部屋。

「……履き違えてんだよ……！ 誰も彼も！」

速度は即座にトップスピード。魔力すらも放出しながら駆ける。

苛立ちと怒りのままに。

思い出すのは、なのはの顔。自分達にアースラを託して、一人残った先生の顔だ。

あの人は、何と自分に約束したか？

「……なのは先生が死んだとか、誰が決めたよ！」

必ず生きて帰ると、あの人は約束したのだ。

それは、はやてにも伝えた。フェイトにも伝えた。  
なのにー！

シオンは一気に駆ける。

そのまま、フェイトの部屋まで二十秒足らずで着いた。  
フェイトの部屋の前で、キャロがじっと扉を見詰めていたのだが。  
走って来たシオンに、目を見開いて驚いた。

「シ、シオンお兄さん！？」

「退いとけ。キャロ」

やんわりとキャロを押しのける。  
眼前に立ち塞がる扉を思いつき睨んだ。

「……フェイト先生をここから出す」  
「え？」

シオンの言葉に、キャロは思わずキョトンとする。  
出すと言う選択肢は無かったのだろう。

彼女や、エリオは優し過ぎるから。

だが――。

「俺は違う」

そう言うなり、シオンは扉横にあるインターフォンを無視。  
扉をブン殴り呼び出す事にした。

頑、頑、頑！ と。

そして、息を吸い。一言を叫んだ。

思いつきり。届けと叫ぶ為に。



暗い自室。

フェイトはそこで体育座りでうずくまっていた。  
明かりを点ける気にはなかった。

……否。何もする気になれなかった、か。

ご飯も食べていない。眠る事すらしなかった。

ただ、ずっと考えていた。

なのはの事を。

フェイトの胸中にあるのは深い後悔と悲しみ。  
なのはを失った喪失感だけであった。

《フェイトさん……》

念話が響く。キャロだ。しかし、フェイトは返事をしない。  
ただただ無言だ。

キャロはそのまま話し掛けて来る。

《お昼ご飯、持って来ました……》

《……いない》

それだけをフェイトは返した。

……そんな事を言いたい訳じゃないのに。

《……でも、朝も食べて無いですし。……もう四日も食べてません。  
フェイトさん身体、壊しちゃいます……》

キャロの心配そうな声がフェイトの胸に突き刺さった。  
何をしてるんだと自分でも思う。

立って、部屋を出て。キャロに顔を見せる。

それが、何故、何故。

出来ないのか。

情けなさにまた涙が出た。もう、出尽くしたと思ったのに。

《……ゴメン。今は何も食べたく無いんだ……》

それだけを、漸く返す。だが、それは本当だった。今は、何も食べられる気がしない。

《……でも……》

《ゴメンね……ゴメン、ゴメン》

ゴメンね。それだけをフェイトは繰り返す。  
それ以外に何を言ったらいいか分からなかった。

《……分かり、ました。その、お昼。置いて行きますから。……夜も持って来ます……》

少し涙が混ざった念話を聞き、フェイトはまた泣きなくなった。  
キャロを泣かしてしまった。

何をしてるんだと自分でそう思う。  
それでも足は動かない。声は、出ない。



《……失礼します》

そうして、念話は切れた。

情けなさで悲しさで、フェイトはまた泣いた。

泣いて、泣いて。

いきなりガンガンと情け容赦無い音が盛大に響いて、びくつ！とする。

誰かが、扉を殴りつけてるらしい。

……一体、誰が？

そう思った直後だった。

その言葉が届いたのは。

「フェイト先生！　なのは先生が帰って来ました！」  
「ッ……！？」

響いた声はシオンのものだった。いや、それより問題は内容である。

……なのはが、帰って来た？

いつ？　どうやって？　幾つもの疑問が頭を過ぎる。  
シオンは更に叫ぶ。

「今、医療室です！　フェイト先生を呼んでいます！」

……なのはが呼んでる！

何かあったのだろうか？

でも、そんな事はどうでもいい。

あれほど重く、動かなかった身体が嘘のように動いた。  
立ち上がり、部屋の扉に向かう。

行かなきゃ！ その思いのままに開錠し、扉を開けた。

目の前に、仏頂面のシオンが居た。

真っ直ぐにフェイトを見据えている。

「なのはは……！」

「嘘です」

きっぱりとシオンは言い放った。

フェイトの目を見据えながら。

何を言われたのか、フェイトは理解出来ずに棒立ちになる。

目を見開き、シオンを見詰める。

シオンは更に畳み掛ける。

「最初から最後まで嘘です。なのは先生は帰って来てません」

「……っ。……ッ！」

——張！——

反射的に、フェイトはシオンの頬を平手で張った。  
涙を流しながら。

何で、そんな嘘を!?

そう、叫ぼうとして。

一張!一

逆に、シオンに頬を張られた。

「っ……!?!」

勢いが良すぎたのか、フェイトが部屋に倒れ込む。

シオンは感情の無くなった瞳で、倒れたフェイトを睨んだ。

「……入ります」

ぽつりとそれだけを言うと、シオンは部屋に入る。

そして、張られた頬に手を当てて、呆然とするフェイトを真っ直ぐに見据えた。

「な、んで……?」

「俺以外。多分、誰もこれをしませんから」

呆然と問うフェイトに、シオンは答える。

そのまま、フェイトを見下ろす。

無表情なのに、その目だけは激情を湛えていた。

怒りと、悲しみと言う激情を。

「そして、これも誰も言わないでしょうから。俺が言います。……フェイト先生」

シオンは一度だけ、言葉を切る。

くっと思を吸い、心を決めると。続きの言葉をフェイトに放った。

「いい加減、甘えるのは止めて下さい。鬱陶しいです」  
「っ……！」

言われた言葉に、フェイトは目を見開く。

しかし、そのままシオンを怒りのままに睨み据えた。

シオンは構わない。フェイトを相変わらず無表情に睨む。

教え子と先生。暗い部屋で、静かな対決が始まった。

（中編に続く）

第四十二話「二極の強襲戦」(前編) (後書き)

——はい♪ ここで終わりかよ!？ と言う叫びが聞こえそうな気がバリバリしますが(笑)

前編終わりです♪

今回はバリバリ鬱全開で行ってます(笑)

漸く、シオンが主人公らしい行動を開始します。

……最近、タカトが突っ走ってましたからなー(笑)

尚、今回、なのはの夢の検閲部分。(■) ↑これですが。

全て読み解くと、EX設定については8割理解出来ます(笑)

頑張ってみましょう♪

前後の文章で、あらかた分かるように書いているので、読み解いてみると楽しいかも(笑)

ではでは♪ また中編で会いましょう♪

**第四十二話「二極の強襲戦」(中編)(前書き)**

……はい♪

今回はめっちゃ早い更新です(笑)

他でも無い。俺が1番驚いてます(笑)

では、中編♪ どうぞ〜♪

## 第四十二話「二極の強襲戦」(中編)

暗い、暗い。室内。

明かりが消えた世界で、先生と教え子は無言で対峙する。

フェイトとシオンだ。

二人は互いに睨み合いながら、真っ直ぐに互いを見ていた。

しばらくして、フェイトが立ち上がる。

そうして見ると、シオンより若干背が低いフェイトだが。

目線はあまり変わらない。

二人は同じ高さとなった目線で互いを見据えた。  
とー。

《《シオン!》》

外から念話が、シオンに届けられた。スバルとティアナだ。

恐らくはエリオかキャロが呼んだか。

シオンは視線をフェイトに固定したまま、念話を繋ぐ。

《……スバルと、ティアナか。エリオとキャロも扉の前に居んのか?  
?》

《そうだけど……! シオン。いきなりフェイトさんの部屋に押しかけるなんて……》

《そうよ! キャロがめっちゃめっちゃ慌てて念話寄越して来たわよ。》

何やってんのよアンタは……!》

呼んだのはキャラカ。

それだけをシオンは確認。頷く。

《……ちようどいいや。お前達も入れ。……フェイト先生に話しをするから》

《いや、だから。今のフェイトさんは――》

《いいから入れよ。……お前達にも関係ある事だから》

そこまで告げると、シオンは一方的に念話を切った。  
扉の前で、少しざわつく気配がして。

少しの間をもって、四人もフェイトの部屋に入って来た。

「お、お邪魔します……」

「……すみません、失礼します」

それぞれ、一言フェイトに言葉を掛ける。

同時、フェイトを見て言葉を失った。

正確には、シオンを睨むフェイトを見て、だ。

彼女は、シオンを殺気すら交えて睨んでいた。

「……役者も揃いましたし、続けましようか。フェイト先生」

「……何を続ける。て言うの……?」

「貴女への、説教です」

きっぱりとシオンは言う。



フェイトは、それに顔を歪めた。  
キャラやエリオ。スバルやティアナの前で説教をされる。  
それ程、屈辱的な事も無いだろう。

シオンも、それは分かっている。

しかし、どうしても”今”の四人が必要であった。

”今”のフェイトには。

「……俺の話はさっきも言った通りです。いつまで引き籠っているつもりですか？ ……甘えるのもいい加減にして下さい」

「シオン!？」

「ちよつとアンタ！ 言い過ぎよ!？」

あまりに辛辣な物言いに、スバルとティアナが悲鳴のようにシオンへと叫ぶ。

しかし、シオンは構わない。

「恥ずかしく無いんですか？ スバルやティアナ。エリオやキャラだって、今のアースラの状況でちゃんと仕事してます。……戦ってます。なのに、貴女はこんな所で引き籠ってる。……知ってますか？」

フェイトはシオンの言葉に、背後の四人を見て悲しそうな、申し訳なさそうな表情となった。

それにすら構わない。

シオンは更に畳み掛け始めた。

「はやて先生は、シグナムやヴィータさんの事があっても。……なのは先生の事があっても。ほとんど休まずに艦長の仕事をしています。

……泣く事も許され――。いや、自分に許さないで、艦長席に座っています。……何故だが分かりますか？」

「……………」

シオンの言葉に、フェイトは無言で視線を戻す。  
再び、視線が交差した。

「泣いても無駄だって、分かってるからですよ。……四人もそうです。嘆いて、悲しんでも。なのは先生は帰って来ない、て分かてるんです。……何で、それが貴女に出来ないんですか……！」

語尾が若干荒くなる。怒りで、だ。  
そんなシオンに、しかしフェイトは負けじと睨み返した。

「……シオンには、分からないよ。大切な人を失った事が無いから……」

フェイトだって分かっているのだ。  
今、必要な事は何々のかくらいは。  
でも、駄目なのだ。

「シオンに分かる！？ 悲しくて、悲しくて、悲しくて！ どうしようも無いんだよ。私だって、泣きたくなんて無いよ。部屋に引き籠っていたくなんてないよ！ でも、それでも。動けないんだ。足は動いてくれないんだ！ 皆に迷惑掛けてるのも分かってる！ エリオやキャロや、皆、皆が心配してくれてるのも……！ それでも……。それ、でも……」

一気に、シオンへと感情をぶち撒ける。  
涙を流しながら叫ぶ。

だが、シオンはそれに対してすら。真っ向から見据えた。

「……知りませんよ。分かりたくなんて、ありません。そんな泣き言なんかは」

「……っ！」

フェイトはシオンの言葉に、涙を浮かべたままに再び睨む。背後の四人も批難の目をシオンに向ける。

何で、そんな事を言うのかと。

「……その上で、貴女に俺はこう言いますよ。何で貴女は、なのは先生を信じられないんですか？」

「え……？」

シオンの言葉に、フェイトは呆然となる。

それは、あまりにも予想外の言葉だったから。

そんなフェイトを、シオンは睨み続ける。

「……なのは先生とフェイト先生の話しは、少しだけですけど。聞いた事があります。幼なじみ、だそうですね？」

「……うん」

訝しみながらフェイトは頷く。

そう、大切な幼なじみで親友だ。

ずっと一緒に居続けた大切な。

だから、こんなにも――。

「その貴女が、どうしてなのは先生が死んだとか思うんですか？  
どうして、あの人を信じられないんですか？」

「っ……！？」

シオンの言葉に、フェイトは殴りつけられたような衝撃を受けた。  
まるで、ハンマーで頭を殴られたような。

シオンの言葉は、それ程のショックをフェイトに与えていた。

「前も言いましたよね？　なのは先生は必ず帰って来る。そう約束  
したと。それまでアースラを俺やスバル、ティアナに守って欲しい  
と。……俺も勘違いしてました。なのは先生は、皆を守って欲しい  
と言ったんであって、それは外敵だけを指してる訳じゃ無かったん  
だ」

そう、今にして思えば。最初っから、なのははこの事をシオン達  
に託したのかも知れない。

私は大丈夫だから、あまり心配しないように、そう伝えて欲しい  
と。

……信じて欲しいと。

その事を。

だから。

「フェイト先生。少なくとも後ろの四人は、なのは先生の生存を信  
じてましたよ」

「……………」

フェイトは呆然としたまま、シオンから背後の四人に視線を移す。それに、スバルやティアナ、エリオやキャロは。少しの間を持って、同時に頷いた。

「……フェイト先生。俺は、なのは先生に会ってから二ヶ月しか経ってません。スバルやティアナ、エリオやキャロだって貴女程、あの人と付き合いが長い訳じゃない。……でも、信じてるんです。あの人を、”信頼”してるんです。生きてる、て」

気付けば、シオンはもうフェイトを睨んでなんかいなかった。真摯に、真っ直ぐに見続けるだけである。

シオンに視線を戻したフェイトを。

「だから、あの人を信じてあげられませんか？ 生きてる、て」

「……なのはが、生きてる……？」

呆然と、ただただ呆然とフェイトはシオンの言葉を繰り返す。それに、シオンはしっかりと頷いた。

「……確証も何也没有ません。でも、俺は断言します。あの人は生きてる」

なのはが生きてる。

そう思った直後、フェイトは糸が切れたように崩れ落ちた。

「「フェイトさん!？」」

エリオとキャロが、それに驚きの声を上げると共にシオンの脇を抜け、駆ける。

フェイトを横から支えた。

「フェイトさん。大丈夫ですか……？」

「……生き、てる。生きて、くれてるの……？」

「……はい。俺は、俺達は。そう、信じてます」

エリオからの声すら聞こえずに呟くフェイトに、シオンはもう一度頷く。

直後、フェイトが唸りと共に再び泣き始めた。

エリオや、キャロを抱きしめながら。

「信じる……！ 信じる、よ。なのはは、絶対生きてる、て。私も……！」

「……はい。俺達も、信じ続けます」

フェイトの泣声と共に呟かれる言葉に、シオンは漸く笑う。

そして、後ろに視線をやると。

スバルはうるうると貰い泣きし。ティアナは腰に手を当てて、シオンに微笑む。

そんな二人に、シオンも笑って見せた。

暗い、暗い室内に響く泣き声は。

しかし、悲しみを湛えない。

確かな喜びを、そこに湛えていた。



一時間後。

泣き続けたフェイトが、泣き止むまでシオン達は待った。

そして、落ち着いたフェイトが本来の柔らかな笑顔を取り戻した事に、それぞれ笑顔を浮かべた。

「もう、大丈夫。ですよね？」

「……うん」

その問いに意味が無いと分かりつつ尋ねてくるシオンに、フェイトは頷く。

そして、万感の想いを込めてシオンに微笑んだ。

「……ありがとう。シオン。それに、エリオ、キャロ。スバル、ティアナ」

「い、いえ……。僕は……」

「そんなお礼なんて……」

フェイトの礼に、二人はそう言うが。彼女はそれに首を横に振った。

「そんな事無いよ。二人共、ずっと私よりしっかりしてたよ」

「え。その、ありがとうございます……」

「……はい」

その言葉に、二人は漸く頷く。

それを見て、シオン達も微笑んだ。

「……まあ、確証は無いとか言いながら一つだけ、なのは先生が生きてる、て根拠はあるんですけどね」

「「「「……へ?」」」」」

シオンがふと漏らした言葉に、疑問の声が五重した。  
いきなり、何を言い出すのか。

「根拠、て……?」

フェイトが皆を代表して問う。シオンはそれに悪戯っ子のように、片目を閉じて見せた。

「……タカ兄いですよ。あの人、俺の下半身不随を略奪する前に、こんな事言ったんです。なのは先生とフェイト先生に借りがある、て。何の事だか分からなかったんですけど。……フェイト先生。何か知ってるんじゃないですか?」

「え……? あ!？」

そう問われて、即座に思い出した。

タカトに、『ありがとう』と言われた、あの日の事を。

「やっぱり何か覚えがあるんスね?」

「う、うん。でも、それがどうしたの?」

確かに、あの時。タカトには礼を言われた。  
借りと言ってしまったばそうかも知れないが。  
続けて問うフェイトに、シオンは朗らかに笑う。

「いや、あの人は借りを作る事が死ぬ程嫌いな人でして。で、あれ



で借りを返したとか思う筈が無いんですよ。……他人からして見れば賭けになるかもですけど。俺からして見れば十割当てられる自信があります。……なのは先生が危機だったならば、間違いなくタカ兄いが助けてますよ」

「タカトが……」

シオンの言葉にフェイトは呆然となる。

その予想はしっかりと当たってたりするので馬鹿に出来ない。

「多分、フェイト先生がやばい状態だったら、次はフェイト先生を助けに来るんじゃないですかね？ あの人はその言う人ですよ」

「……何て言うか、すごい義理堅いのね……」

「負けず嫌い、て言うんだよ。アレは」

ティアナに笑いながらそう返す。

そんなシオンに、フェイトはそっかと呟いた。

シオンは、なのは他にも信じている人が居たのだ。  
だから、これ程までなのはの生存を疑わないのである。

シオンの、自分で恐らくは分かっている人であろう。タカトへの想いの片鱗を見て、フェイトは微笑む。

少しだけ、うらやましいと思った。

「……信用してるんだ？ タカトの事」  
「信用？」

フェイトの言葉に思わずシオンは疑問符を浮かべ、だが。ふっと笑う。

こう言う時に使うのは、それじゃ無い。

それは、トウヤがかって自分達に言ってくれた言葉だ。

大切な、言葉。

それは――。

「違いますよ。フェイト先生。”信用”じゃありません」  
「え……?」

シオンの言葉に、フェイトは不思議そうな顔となる。  
スバルやティアナ、エリオとキャロもだ。

そんな一同に、シオンは微笑みながら人差し指を立てて、笑う。

大切な言葉が口から滑り出た。

「”信頼”です」

にっこりと微笑むシオンに一同呆然となる。

”信じて頼る”。その言葉が、あまりに綺麗なものに思えて。

一同にもその言葉は深く刻まれた。

フェイト達は、そっかと頷く。

「信頼、か。いい言葉だね」  
「はい」

即座に頷くシオンに、フェイトもまた微笑む。

ややあつて立ち上がろうとして。

「痛っ……」

頬を押さえた。シオンが張った頬だ。

それを見て、シオンの顔から血の気が引く。

「……自分でやっというて何ですけど。……大丈夫ですか？」

「あ、うん——」

大丈夫だよ、と言おうとして。

しかし、フェイトはくすりと笑った。

それは真面目なフェイトにしては珍しく悪戯っ子的な笑みである。

「……そう言えば、シオンに頬を張られたんだっけ」

「……シオン……」

「……アンタ……」

「て、ちよつと待て！？ アレは止むに止まれぬ事情がだな。それに俺もビンタされてんだぞ！」

フェイトの言葉に、スバル、ティアナが半眼となる。

シオンは慌てて弁解した。

こう言つた事で女性陣を敵に回すところくな事にならない。

そんなシオンに、フェイトは更に笑う。

「それは、シオンが嘔吐いたからだよ。だから、私が張られた分がまだだよね？」

「うぐ……！」

嘔を吐いたのは全くの事実なので、シオンとしても何も言えない。そんなシオンに、スバルとティアナは更に視線の温度を下げる。

「嘘なんて吐いたんだ？　なら仕方ないよね？」

「諦めて一発喰らうときなさい」

「……ぐぬ……。ええい！　もう！」

二人の言葉にやけっぱちになったのかシオンが前に出る。そして頬をフェイトに向けた。

「……一発は、一発です。……どうぞ」

「じゃあ。お言葉に甘えようかな」

にっこりと笑い、フェイトがぐると右腕を回す。そして一步を踏み込みがてら右手を振りかぶる！

シオンはそれに、来たるべき痛みに、きゅっと両目を閉じ。

頬に柔らかな感触を得た。

「……は？」

思わず、閉じていた目を見開く。

視界いっぱいフェイトの顔があり、その唇はシオンの頬に触れていた。

少しの間を持って、ニッコリと笑ったままフェイトは離れた。

「……一発は、一発。だよな？」

「は？ え？ あの？」

いろんな意味で混乱したシオンが疑問符を全開で頭に飛ばしまくる。

なんで？ どうして？

そんな風に。

さっきまで自分に堂々と向き合った少年の態度とは思えず。フェイトはくすりと笑う。

固まったままのシオン。そして、同じく固まったスバル、ティアナの脇を抜けて扉に歩いた。

「それじゃあ、ありがとうね。シオン。エリオ、キャロ。行こ？ お腹空いちゃった」

「「え？ あ……。はい！」」

フェイトの台詞。お腹空いたと言う言葉に、呆気にとられていた二人が笑顔になり、フェイトの後を追う。

部屋を出て、食堂に向かう。  
直後。

『シーーーーン……！』

『アンタ、て人は――！』

『……ハ！ ちょっと待て！ 俺は悪く無い！ てか、被害者の立場だと思っんだ！』

『『シオンが悪いに決まってるよ！／アンタが悪いに決まってるでしょうが！』』

『断言かよ！？ ふ、二人共落ち着っ……！』

『『天！ 誅！』』

ごがん！ と、叫び声と共に強烈な音がフェイトの部屋より響く。それに食堂に向かうフェイトはくすりと笑った。

「……ひょっとして、フェイトさん。狙ってましたか？」

「……どうかな♪」

エリオの問いに、フェイトは微笑みながら歩く。

考えてみれば、男の子に頬とは言え、キスしたのは初めてだなと思いつながら、フェイトはエリオとキャロと連れだって食堂へと歩き――。

突如、艦内が赤く染まり。低重音が鳴り響いた。

それは、フェイト、エリオ、キャロにとって聞き慣れた音であり。しかし、絶対に聞き慣れたくは無い音だった。

つまりは、アラート。

それがアースラ艦内に鳴り響き続けた。



朝。日が昇り、街に光が降り注ぐ。

その中で、メッテの街路を男女が二人連れだって歩いていた。

タカトとなのはだ。

二人はホテルを出た後、朝食と街の下見を兼ねて出歩いていた。

なのはもタカトも例の如くの変装をして、だ。

街は朝も早くから賑わいを見せ、至る所で各店舗が開店している。

そして何より、人通りの多さだ。

息詰まる、と言う程でも無いが。首都に相應しい程には人が多い。

その中で二人は街を見て回っていた。

「……まだ8時くらいだよな？ もうこんなに賑わってるんだ……」

「ここら辺は大概こんなもんだ。ここの連中は商魂逞しいからな」

なのはの言葉に、タカトが頷く。

その目は街の至る所に居る者達の配置を素早く確認していた。

なのはは、タカトの台詞に妙な引っ掛かりを覚える。

まるで、ここに來た事があるかのような言い回しである。

「この世界に來た事あるの？」

「と、言うより。地球を出てから一年くらいはここを拠点に行動していたんでな」

「そうなの！？」

驚きの事実、なのはが目を見開く。  
タカトはそれに、ふ。と笑った。

「ま、昔の話しだ。それよりいい加減、飯にしよう。朝食は一日のエネルギーだからな」  
「あ、うん」

タカトに促されて、なのはも歩く。  
ややあって、一軒の店に入った。ファースト・フード店のようなもののだろう。

朝食を食べる人で店は賑わっていた。

「ここは……」  
「ケバブ……。ドネルケバブの店だな。串じゃなくてパンに挟んで食べるタイプの」  
「へ……?」

さらりと告げたタカトの台詞に、なのはがキョトンとなる。  
それに苦笑しながらタカトは席に着いた。  
なのはもタカトの正面に座る。

「どうする? 何か食べたい食べ方とかあるか?」  
「えっと。よく分からないし。タカト君に任せるよ」

なのはの言葉に、タカトは短く了承し。ウェイターを呼び出し手短かに注文する。

ウェイターはお冷を二人の前に差し出し注文をメモして一礼して下がった。



「何か、手慣れてるねー？」

「さっきも言っただろう？　ここはある程度知っている。……まあ、それは置いておくとして、だ」

苦笑し、そのままタカトは顔は向けずに横に瞳を動かす。なのほもその方向に目を向けた。

「……ストラの連中。……管理局本局の制服だったが。奴等、かなりの数を街に下ろしてるな。あちこちで警備についてる」

「……うん」

タカトの言葉に、なのほも頷く。

まだ朝だと言うのに、本局制服を着た警備の者達がメッテのあちこちで目に着く。

本局制服を着ていると言う事は元管理局員か。

「……上がまるめ込まれたか、下の奴達も最初から乗り気だったかで対応を考えねばならんな……」

「？　どう言う事？」

ストラ側に管理局員が居る事に、目を伏せていたなのほだが。タカトの言葉を聞いて疑問符を浮かべる。

それにタカトはスッと目を細める。

「上の連中に付き従っているだけならば、別に対応には困らん。頭を潰して瓦解させてやればいいだけだ。……しかし、下の連中もストラに完全に従っているのならば、相応の行動をする必要がある」

「相応の行動？」

「ああ」

頷きながらタカトは席に置いてある紙ナプキンを手取る。

ポケットからペンを取り出すと三角形をそこに描き、さらにピラミッド状に段差を描く。

「これが組織の概要図とする。頂点が上役で、一番下の段が下っ端だ」

言いながら、タカトは1番上と下を指す。

当然1番数が多いのが下段の下っ端で、頂点、1番数が少ないのが上役である。

「当然、1番上は組織で最強だ。下は組織では最弱。さて、なのは。お前ならば、この組織に対してどのように戦う？」

「……そうだね……」

紙ナプキンに描かれた三角形を見て。なのはは考え込む。

そして、指を1番上に指した。

「……頭を最初に潰して、指揮系統を混乱させる、かな？」

最初に頭を潰して下を混乱させる。定石とも言える手であった。何より、これならば互いの損害を最小に抑えられる。

タカトもそれに頷く。

「……成る程な、悪くない。だが、俺は違う」  
「え？」

その言葉に、なのはが顔を上げる。タカトは構わずに、指を三角形の底辺に這わせた。

「俺が叩くのは”ここ”だ。組織の1番弱い所。下を徹底的に叩く」

タカトの答えに、なのはが目を丸くする。

タカトはそれに一つ笑いながら続けた。

「こいつらは組織を形勢する上でもっとも主力となる連中だ。数こそ多いが、一人一人だと問題無いレベル。つまり一対一ならば絶対に負けない連中でしか無い。故に、一対一をただ繰り返していけば、組織は支えを失って下から順に崩れ落ちる」

「……。でも、数が違い過ぎないかな？ 下から順に潰すなんてキリが無いような……」

内心とんでも無い事をタカトが言っている事を、なのはは察する。つまり、タカトは一対一をずっと、ずっと繰り返すと言っているのだ。

その組織の上役が出て来るまで。

キリが無い。その言葉こそをタカトは一笑した。

「キリが無い？ そんなものは言葉のアヤだ。”キリは必ずある”。それが数百回、数千回単位であろうと必ず、な。……それに俺はそう言った手間を惜しまない」

「えっと、つまり？」

内心、こんな出鱈目な考えを持っているタカトが本来は敵である事に背筋が寒くなりながら、一応なのはは問う。その話しが今の状況と何が合致するのかを聞く為に。

タカトはそれに一つ頷いた。

「……一人、一人。この世界に居るストラの連中”全員”を潰す積

もりだが、時間があまり無いな、とな」

「……………」

半ば分かっていた回答だけに、なのはは頭を抱える。

タカトも苦笑した。

「まあ、今回はその手段は使わん。目的は次元転送だしな。出来得るなら荒事は徹底して避ける積もりだ」

タカトの言葉に、なのははホッとする。

内心、タカトならば行いかね無いと思い苦笑した。

恐らくは質の悪い冗談のようなものだったのだろう。タカトも笑っている。

そんなタカトを見て、一緒に席に座って笑い合ってる。

それを楽しく思いながら、しかし。なのはの頭にどうしても離れない思いがあった。

どうしても問わなければいけない事が。

ちらりとタカトを見上げる。

そして。

「……タカト君は、どこまで着いて来てくれるのかな……？」

ずっと、ずっと思っていた事を、なのははタカトに問う。

いつまで、一緒に居られるのだろうか。

彼は元来、敵である。

管理局にとって、第一級広域次元犯罪者だ。

今は、こうして一緒でも。いつかは必ず離れ、そして敵に戻る。今回はあくまで。タカトの性格上、なのはを助けたに過ぎないのだ。

……こんなに仲良くなったのに。

また彼と戦わねばならないかと思うと、正直気が重かった。

……戦いたくなかった。

なのはの問いに、しかしタカトは苦笑する。

「一応、俺はお前を助けたと言う義務があるからな。安全な場所に送るまでは付き合う積もりだ」

「……その後は……？」

「決まっている」

即答する。苦笑を止めて、真っ直ぐになのはを見据えた。

「……賭けを俺は忘れていない。お前はどうか？」

それは詰まり、再び敵対すると言う事であった。

その言葉に、なのはは頷く。

「……忘れて、無いよ」

「ならいい。約束は、約束だからな。……俺を止めたければ俺に勝つ以外に方法は無い」

そう言いながらタカトはなのはに微笑む。

それはシオンに向けたものと同じ優しい笑みだった。

「……だから、気兼ねなぞしてくれるな。お前は止めたいと願う。  
俺は止まらんと誓う。……戦う理由なぞ、それだけでいいだろう？」  
「……………うん」

その言葉に、なのはも頷く。

それでも、まだ戦いたく無いと思いながら。

しばらくの沈黙を挟んで、漸くケバブが来た。

牛肉を挟んだコッペパンに、チリソースとヨーグルトソースがある。

それらを掛けて食べながら、しかし。なのははずっと、ケバブを意識しなかった。

いつの間にか、おかわりをしていたが。  
全く味は覚えていなかった。



朝食を終えて、二人はケバブの店を出る。

若干の空気の重さを感じながら歩く二人はしかし、当初の目的を忘れない。

街をぐるりと一回りしながらストラの警備状況を確認。

次に次元航行艦の配置状況と位置。これも、警備状況を確認する。  
その際に店に入り。買い物がてら店員達にストラの人間達がどのような街の人達に接しているかを聞き込む。

それらが終わる頃には、既に昼を回っており。いつの間にか、空気の重さは払拭されていた。

「……警備状況と、艦の配置状況は何回か確認せんといかん。毎日同じとは限らん。……出来るならば警備シフトも知っておきたい」「そうだね。……レイジングハート。記録、お願い出来るかな?」

【はい】

そんな会話をしながら二人は街を歩く。

それにしても、驚いたのはストラの者達の市民に対する態度であった。

確かに市民に高圧的には接しているようだが、クラナガンの時のように無差別的な攻撃は行っていないし、むやみな搾取もしていない。

力で支配下に置いている割りには、意外な程に紳士的に振る舞っているとも言えた。

なのは達からすれば、力で占拠などと言う暴挙に出たストラは、もっと好き放題していると思っていたのだが。

「……どう思う? タカト君」

「……さて、な。市民に対する行動をある程度制限されているか、下の者達が紳士なのか……。前者だと俺は思うが」

実際、タカトは警備についていたストラの者と話したのだが、小突かれて追い払われはしたが、それ以上の真似はされていない。

結構しつこく絡んだのに、だ。

あの態度は、何かを我慢させられていると、タカトは踏んでいた。

そして、最大の疑問点。

因子兵もガジェットも姿が見えないのだ。

いくらタカトがストラが所有する戦力の半分を殲滅させたとは言え、これは異常に過ぎる。

「……考えてみると、警備も本来は因子兵やガジェットに任せた方がいいよね……？」

「ああ」

そう、疲れも知らずに動かせるガジェットや因子兵はこう言った警備にも力を発揮する。

それが、機械に頼らず人に頼っていると言うのもおかしな話であった。

「使え無い事情があると踏むべきか。温存していると見るべきか……」

「どちらにしても、楽観視は出来ないよね」

「ああ」

ちなみに、二人は結構堂々と会話しながら歩いている。

これは、タカトが遮音結界を自分達を中心に張っているのが原因である。

傍から見れば、二人の会話は酷く普通の世間話をしているように見える筈であった。

これは術者を中心として、結界を組んでいるので術者が歩けば結界も同時に動くようになっていた。

ただ一つ難点があるとするならば、術者からさほど結界を広げる訳にはいかない為、なのはとタカトがくつつくようにして歩いている点か。

平たく言うと、手を繋いだ状態で二人は歩いていた。



念話は盗聴の恐れもあるので、こちらの手段を使った訳だが。

「……カモフラージュにはなる、か」

「……そうだね」

傍から見れば、観光に来て占拠に巻き込まれた恋人のようにしか見え無いだろう。

ストラが市民に対して過激な行動を取っていない事が、思わぬ所で助けとなった訳だ。

実際、そのようなカップルもちらほら見受けられる。

二人は苦笑しながらメインストリートに出る。

店が立ち並ぶ、大きな街路だ。

いい加減、昼ご飯にしようと思ったのである。

さて、何にするかを二人は決めようとした。

瞬間。

「きゃあ!?!」

悲鳴が街路に響いた。

結構、大きめの声である。何事かと、二人は顔を見合わせ、声が出た方へと駆ける。

そこには、四人程の本局制服を着たストラの男達と、地面に倒れ込む少女が居た。

「……おい、これ。どうしてくれんだよ」

「す、すみません……!」

少女へと詰め寄る、男の制服にはアイスであろう。

それがべつとりと着いていた。

恐らくはぶつかったのだろう。典型的な状況と言えば、そうなのだろうが。当事者にとってはそのうちではあるまい。

少女は顔を真っ青にして謝っていた。

だが、男達はニヤニヤと笑いながらそんな謝罪に応える積もりは無いように見える。

「謝ったらこの汚れ、落ちんのかよ？ ああ！？」

「ひいっ……！」

男の一人が怒鳴り、少女はそれに酷く怯える。

そんな状況を見て、なのはは歯を食いしばった。

あんな人達が元管理局員だなんて。

「おい、なのは。分かってるか？」

「……分かってるよ。助けなきゃ……」

「…………やはり、そうなるか。俺が言いたいのはそうじゃない。少しだけ待て」

「？」

怒りに声のトーンが落ちる、なのははにタカトは嘆息。

小声で何やら呟き始めた。

それに、なのはは疑問符を浮かべる。

何をしようと言うのか。

その間にも、事態は進んでいた。

男が少女を引き起こし、顎に手を掛ける。

「クリーニング代として、お嬢ちゃんには俺達に付き合って貰おうか。なあ？」

「や、やだ……」

怯える少女に下卑た笑いを浮かべる男に、なのはの我慢の尾が切れる。

レイジングハートを使うまでも無い。

ディバイン・シューターを発動しようとして。

「……結界。絶念陣、展開完了。さて」

そんな声がタカトから漏れたと思った直後。

## 一撃一

男の一人が盛大に空を舞った。

綺麗に、2 m程。

『……は？』

野次馬も、男達も、少女ですら、ポカンとしてしまった。  
いきなり人が垂直に飛べば誰でも驚く。

当人にとって、それが”撫でる”程度だとしても、だ。

垂直に飛んだ男は、重力に従い真っ直ぐに下に落ちる。  
そこには、やけにいい笑顔を浮かべている青年が居た。

詰まりは伊織タカトが。

落ちて来た男に右の拳を持ち上げて。

「ぬ、ん！」

一撃！一

落ちて来た男の顔面に拳が迷い無く突き刺った。

いかな威力がその拳にあったのか。男はその打点を中心にして激しく縦回転。

くるくるスピンしながら地面と水平に飛んで行き。

向かう先には、煉瓦の壁があった。男は勢いが止まらないまま突っ込んでいき。

一びしゃり一

生肉を壁に叩きつけたかのような、生々しい音が響いた。

男は壁にしばらく張り付き、数秒の間を待って。

漸く地面に落ちた。

『……………』

いきなり引き起きた惨劇に、一同無言。

驚きが過ぎて、反応出来無いのだ。

だが、全く固まらない存在が居た。

惨劇を起こした当人。タカトである。

彼はいい笑顔を続行。

男達へと歩く。

「よくやってくれたよ、お前達。いや、最近色々あって、ちょうどストレスを発散したくてな？ タイミングがよかったと言うか。これも天の思し召しか……」

『はぁ……』

思わず頷く。そんな男達に、タカトは笑顔を止めない。ストレス発散先が他でも無い”自分達”と言う事にも気付いていなかった。

「ああ、先に言っておくが、ここら一帯に對念話。對魔力反应用到結界を張ってある。応援も何も呼べんし、来ない。詰まりは逃げられないからその積もりでな？ ……その上で、だ」

どっちが悪役なのか全く分からない台詞を吐きながらタカトは歩く。

そして、一応の礼儀としてお決まりの台詞だけは吐いた。

「やや。止めないか。女の子が嫌がってるでは無いか。どうしても言うならば俺が相手だー！。……さて」

物凄い棒読みの台詞を吐き、にっこりと笑う。  
拳を、持ち上げた。

「死なない程度には手加減してやる。……命の他は、諦めろ」

一撃！一

直後、男の一人が今度は垂直に十mは飛んだ。

しばらく滞空し、地面に叩き付けられる。

ごぎり、と鈍い音が鳴って、ぴくりとも動かなくなる。

数秒の沈黙の後、二人の男は即座に逃げ出そうとする。  
しかし、タカトが放って置く訳が無かった。

「逃げられんと言わなかったか？ 天破水迅」

一寸！一

直後、男達が全く動かなくなった。逃げ出そうとした体勢のまま  
で固まっている。

タカトはくすくすと笑っていた。

見れば、男達の背中に水系が突き刺っていた。

脊髄に水系を打ち込んだのだ。

ゆっくりとタカトは歩き、男達の肩をポンッと叩く。

その上で告げた。

「……お前達には聞きたい事が山とある。しばらく付き合って貰おう。ああ、隠すと”死なないだけマシ”から”死んだ方がマシ”な目にクラスチェンジするから気をつけろ？ ……なのは」

「……ハ！ て、な、何！？」

あまりの状況の進み方に、完全に固まっていた、なのはが漸く我  
に帰る。

タカトは、なのはや一同と同じく固まっている少女を顎で指し示  
す。

「あの子、頼む。俺はこいつらと少し、”話し”がある」

「……本当に話しするだけ？」

「ああ、勿論」

俺流だがな、とこれは声に出さずにタカトは頷く。  
そして、倒れた二人にも水系を巻き付けると四人とも引っ張り始めた。

「さあ、行こうか？ 楽しい楽しい”お話し”の始まりだ。……ああ、お前達。ドラ○エモンは好きか？」

何気に自分達の”処理方法”を話し。引っ張るタカトに、男達は自分達が最悪の男に捕まったと漸く理解した。

……自分達の人生はここで終わりだと。

男達を引っ張りながらタカトは街外れに向かった。

（後編に続く）

第四十二話「二極の強襲戦」(中編)(後書き)

はい♪ いろんな意味で気になる状況で中編終わりです(笑)

……タカトが……(笑)

まあ、最近いろいろストレスが溜まっていたと言う事で(笑)

次回でタカトが言っていたドラ○もんの意味は分かります(笑)

ええ……(笑)

では♪ 後編でまた会いましょう♪



第四十二話「二極の強襲戦」(後編) (前書き)

さあ……！

ついに解けるドラ○もんの謎！ (笑)

てか、今回の俺はどうしたんだろ……？

異様に更新ペースが早い…… (笑)

てな、訳で♪

後編♪ どうぞ……♪

## 第四十二話「二極の強襲戦」（後編）

首都メッテ。

ユグノーの誇る、この街は惑星の中で、1番広大な運河である。ナウル川が街の真ん中を横断する形で流れている。

その河幅は20 Km。河の長さは6000 kmにも達する。

河の長さに比べて、河幅が異常に狭くはある（例として出すが、アマゾン川が河の長さがおよそ7000 Km。1番狭い上流でも河幅が中洲を入れると100 Km程もある）が、その広大さを含めて、メッテの重要な観光資源であり、特に環境整備が行われてからは、水害に悩まされる事も無くなった為。

まさに、メッテの中心とも言える存在となっていた。

そんなナウル川を仰ぐ街外れのビル。

そこに伊織タカトと、先の騒動を起こした四人。……否、”三人”が居た。

二人はまだ意識があり、一人は気絶している。

しかし、もう一人はどこにもいない。

どこに行ったと言うのか。

「……さて、質問を続けよう。答えなければ、続けて”先程の奴”と同じ目に合わせる。……知らない、分からないは、聞く積もりは一切無いからその積もりでな？」

ひっ、ひっ、と泣きながら声にならない声で泣く二人の男に、タカトは”全く笑っていない目”で笑う。

その上で、男達に質問を続けた。

「さて、さっきも聞いたが、お前達は本来”管理局員では無い”訳だな？　元はこの世界のゴロツキだったと？」

「そうだよお……！　俺達はただストラとか言う連中にこの服を来て手伝わされただけなんだ……！　だから……！」

「言い訳はいい。それに手伝わされた訳で無く自分から志願したんだろう？」

タカトは男の弁解を一切聞かない。  
容赦無く切り捨てる。

それに、男達は顔を引き攣らせた。

「い、いや。でも……！」

「好き放題して生きて来たんだろうな。そんな顔だ。もうこの世に未練もあるまい？　さぞ安らかな死に顔を見せるだろうな……」

淡々とした口調で、言うタカトに男達の顔は真っ青になる。  
タカトは構わない。むしろ微笑む。

「次に行こうか？　ストラ側は何故、志願兵を募ってまで自分の戦力を使わない？」

「そ、そんなの……！」

「知る訳が無い、か。それは聞かんと言った筈だがな？」

男達の答えに、タカトは頷くと、気絶している男に近寄る。  
そして、縄で縛り始めた。

「そ……らを、自由に♪　飛……びたい”か”……♪」

何故か一字だけが違う有名過ぎるアニメの歌を唄う。  
やがて縛り終わると、男の両足をよいしょと抱えた。

「さて、素直になれない”お前達のせい”で友人が一人。また空を  
飛ぶ事になった。……さぞや怨まれる事だろうな？」

「あ、ああ……！」

男達は泣きながら首を横に振る。

しかし、タカトは微笑するとそれ等を一切無視。

足を掴んだままジャイアントスイングの要領で回転を開始する。

その速度はまさに豪烈。

足元の床を盛大に削りながら高速回転する。

そして。

「そうら、飛んで行け！」 ヒトコプターーーーーー！！」

一轟！一

回転が最高速度となると同時に、タカトは掴んでいた手を離し、  
男を窓から放り投げた。

男は投げられると同時に音速超過。

空気をぶち貫く音が盛大に響く。

男はまるでロケットのように、ナウル川の上を飛んで行った。

しかし高度を欲張り過ぎたか、川の中程で徐々に失速。

相当の速度を保ったまま、堤防沿いに水面へと頭から落ちて行き。

一破！一

まるで、砲弾を水に叩き付けたかのような音と共に水面が爆発した。

男がどうなったのかは、不明である。

普通に考えれば、水面に音速超過で叩き込まれた時点で肉片と化しているが。

それ等を全て見届けたタカトはチツと舌打ちした。

「……今度も届かなかったか。川を横断するのが目標なんだが」

ぽそりと呟くタカトだが、川幅は先にも言ったが20Kmはある。それを魔力行使抜きで届かせようとしているのだ。

人間には無理なように思えるが、実際。もう少しで届きそうではある。

「さて、と。続けようか？」

「……助けて、助けて……」

「ああ、そう言いたくなる気持ちは分からないでも無いが、俺には通じん。せいぜい後悔しておけ」

につこりと笑うタカトはにべも無い。

巻き込まれたか何かは知らないが、ストラに加担していた時点でタカトは彼等に死刑判決の判を押していた。

「……さて。……ん？」

「へ、へへへ……」

よく見ると男の一人が笑っていた。

視線が定まらないままに笑い続ける。

どうにも、あまりの恐怖で精神に異常をきたしたらしい。

タカトはそれに嘆息。

役に立たないと判断して、男を縄で縛り上げ始めた。

「そ〜〜らを自由に♪ 飛〜〜びたいか〜♪」

「ねえ？ ドラ○もん？ ヒトコプターで何処まで行けるのー？」  
「遠い所さ……。専門用語で、地獄」

一文字しか変わらない筈なのに、あまりにバイオレンスな歌詞と化した歌を唄いながら疑問にタカトはそろそろ恐ろしい事を言う。

そしてタカトは再び、高速回転開始。

再び、空気がぶち貫かれる音が鳴り響き。

男はヒトコプターで空を飛んだ。

今度は高度、飛距離、共に申し分無かったか、綺麗な放物線を描き、川を横断してのけた。

当然、行く先には堤防がある。

男は土で出来た堤防に、容赦無く突き刺さり。

堤防がこちらも砲弾を叩き込まれたが如く、爆裂した。

男の末路については聞いてはいけない。

……ご飯が、まずくなるから。

「さ、て。残るはお前一人か……」

「は、ああ……！」

”壊れ無かった”彼は、いつそ不幸と言えた。

何故ならタカトの尋問と対象は彼に絞られるから。

「……知っている事、全て話して貰おうか？」

「……あ、あ……」

鬼のようなタカトの言動に、放心状態となった男は呆然と呟く。  
それにタカトはフムと頷くと、縄で縛り上げ始めた。

「そ……らを自由に……♪……」

「待ってくれエエエエエエエ……！ 話す！ 何でも話すから！ ヒトコプターは止めてくれエエエエ……！」

遂には号泣し、悲鳴を上げる男に、タカトは漸く微笑した。

「そうそう、最初から素直になればいいんだ。……ヒトコプターは勘弁してやろう。さて、聞かせて貰おうか？」

男の反応に、タカトはニツコリと微笑む。

そして、聞きたい事全てを聞き出した。

警備状況。

ストラ側が何故自前の戦力を使わないかの理由。

警備シフト。

次元航行艦の待機位置。

ストラメンバーの人数。etc……。

男が本当に分からない事もあったが、タカトはおおよその事は聞き出した。

仕入れた情報は、街で聞き込みするよりも遥かに多い情報量である。

タカトの狙いは、まさにそこにあった。

長々と、情報収集するのでは無く、鮮度と正確さ、量に長けた情報を仕入れるのはこれが1番であった。

……リスクを考えないのであれば、だが。

だがタカトは、なのはに降り懸かるリスクを考えればいいだけである。

それ以外を考えなくてもいい。

そう考えれば下手に日数を掛けるよりも、こちらの方が手早いと言えた。

「……ふむ。協力感謝しよう。お陰である程度方針が決まった」

「じゃ、じゃあ……!」

助かるのか？

一縷の希望を見出だし、綻ぶ男に、タカトは”ニッコリ”と笑い。

—ゴギリ—

鈍い音が室内に鳴り響いた。

「へ……? へえええええええ……!……!……!」



一瞬、何が起きたか分からなかった男だが、音が鳴った方を見てけたたましい悲鳴を上げた。

左足の膝が、本来有り得ない方向に曲がっていた。  
関節を外されたのだ。タカトによって。

タカトは笑ったまま、男の身体を掴んで、全身の関節をバキバキと外し、”コンパクトに折り畳んで行く”。

……その際に断裂される筋肉や筋。神経等には一切目を向けずに。  
絶え間無い悲鳴が響く中、タカトは容赦無く男を折り畳み切った。

その結果、男はボール大の大きさへと変貌された。  
頭を中心に全身を丸めて畳んだのである。

グロテスクなボールと化した男に満足そうにタカトは頷くと、そのボールを片手にビルのダストシュートへと歩いた。

「先にも言った通り、ヒトコプター”は”。勘弁してやろう。と、  
言う訳で秘○道具式処刑第二段」

「ムグムグムグムグ……！！！！！！」

何かを言おうとしても、肝心の声が出せない。

口元にすらも身体の一部が覆われているからだ。

そして、タカトはダストシュートを開き。

グロテスクボールを振りかぶった。

「四次元ダストシューーーーーート！！」

叫びと共に一気に叩き込まれたグロテスクボールは、やはり音速超過。

ダストシュートの入口を破壊し、引っ掛かりながらも、そこに肉の一部を削られながら中を突き進む。

やがて、グシヤリと”何かが”潰れた音が響いた。  
下層に無事(?)、達したらしい。

タカトは満足気にウンウンと頷くと、踵を返しビルの一室から出た。

「仕置き終了、と。……なのはと合流するか」

これからの事をいろいろ話さねばならない。

場合によっては、次元航行艦への侵入も早める必要がある。

そんな事を思いながらタカトはビルを出た。

なお、これは余談だが。男達は全員、生きていたが。

これは、タカトが”最低限”のフィールド系の魔法を仕置き直前に張った為である。

しかし、文字通り”生きているだけ”の状態であり、ダストシュートより見つけられた男など、これからの余生を考えると寧ろ生きている方が不幸だと言う話であったが。

それ等を行った犯人を含めて、詳細は不明との事である。



所変わってアースラ。

ブリーフィング・ルームに、各前線メンバーが集まっていた。

勿論、現在意識不明の者達を除いて、だが。

部屋から出たフェイトの姿もそこには在り。はやては若干頬を綻ばせていた。

……シオン達も居るが、何故かシオンは頬に赤い紅葉を作っており。ついでに頭を痛そうに押さえていた。

その横で、スバルとティアナが無然としている所を見ると、また何かやらかしたらしい。

それに、はやては苦笑。

今の状況で不謹慎ながら、シオン達を見て。少しホッとしたのである。

そして、皆が集まった事を確認し、気持ちを切り替え、真顔となった。

話しを始める。

「……みんな集まったな？　話し、始めようか……。呼び出した理由は先のアラートについてのお話しや。シャーリー？」  
「はい」

はやての呼び掛けに、管制のシャーリーは一つ頷く。

コンソールを操作し、ウィンドウを呼び出した。

細長いテーブルの中央と、各メンバーの前にも画像が表示される。

そこには、3隻の次元航行艦が映っていた。

「これは、先程。私達が居る。第78管理外世界にさっき転移して来た次元航行艦や。……ストラの艦やと思われるんやけど。偶然にもこっちのリーダーが捉えてな？ ……向こうはこっちを捉えて無いようやけど……」

ウィンドウの横にはアースラと3隻の艦との距離が示されていた。その距離、約50000(500Km)。相当の距離はある、が。アルカンシエルの射程内には十分に入っている。

しかし、向こうはこちらに何もせず。ただ悠々と航行するだけであつた。

だが。

「……この艦隊が、転移すると同時に、この世界は次元封鎖されたんや。……つまり、私達はもうこの世界から転移出来ん」

『……っ!』

一同、その言葉に顔を歪める。

いくら捕捉されていないと言えど。次元封鎖された状況では見付かるのも時間の問題である。

状況はかなりマズイ状態になっている、と言う事であつた。

「……その上で、や。アースラの誇る盗聴魔――」

「八神艦長!？」

「――もとい、優秀な管制官である、シャーリーが向こうの念話通信を傍受出来たんや。……それが、この内容や」

はやての言葉に、慌てるシャーリーに、一同白い目を向ける。  
……なお、シャーリーは六課時代にも盗聴事件をやらかしているのだが。

それは余談である。

そして、ブリーフィング・ルームに傍受した、通信が響いた。

《こちらはツアラ・トゥ・ストラ。艦隊指揮ビスマルク提督である。地球、グノースに告げる。貴君は我等が追う、次元航行艦アースラを匿っていると言う情報を得ている。単刀直入に言おう、アースラを乗員を含めて引き渡して貰おう。もし、この要求を無視すれば、我等艦隊は地球に進攻。全兵力を持って、殲滅戦を開始する。――繰り返す――》

そこまでで、シャーリーは傍受した通信を切る。

通信内容に、ある者は呆れ、ある者は怒りの表情を浮かべていた。

つまり、彼等は――。

「……言い掛かり、しかもアースラをダシにして、地球に攻め込む算段、ですか」

「……そうなるな――」

呆れていた一人。シオンが嘆息混じりに苦笑する。

はやても釣られて苦笑し、すぐに真顔に戻った。

「……完璧、言い掛かりで向こうは適当な事を言うだけなんは確かなんやけど。実際、私達は潜伏中やしな。……姿が見えんのや、グノースには何とでも言える」

「最っ低……！」

こちらは怒っていた一人。ティアナが吐き捨てるようにして呟く。しかも提督と名乗っていると言う事は、元は管理局の人間か。恥が無いのかと、前線メンバー一同は、呆れと怒りを浮かべたのである。

基本的にストラに寝返った管理局の人間は、現行の管理局の在り方では無く全次元世界の支配を目論んでいる連中である。

恥も外聞も無くて、当たり前とは言えた。

「その上で、私達の対応なんやけど。……選択肢は二つあるんや」

言葉と同時に、ウィンドウが切り替わる。

そこには『A案』と『B案』と大きく文字が表示されてあった。

「まずは、A案。……こっちは『見逃し案』や」

「見逃し案、て……。まさか……！」

スバルが目を見開き、はやてを見る。

それに、はやては頷く。

「そう、そのままの意味や。向こうはその内、地球に向かうんは分かっている。……こっちはそれを待つ、て案や」

「そんな……！」

あんまりな内容に、スバルだけでは無く、ノーヴェや、ディエチ。エリオも目を見開く。

しかし、それに溜息を吐き者達が居た。

ティアナを始めとして、クロノやフェイト。

デバイスの故障で出撃出来ないギンガ。固有武装の破壊で出られ

ないウエンディ。そして、足の怪我があるチンク。  
最後にシオンである。

シオンが一同を代表して、はやてに答えた。

「……今のアースラだから、ですか……？」

「そう言う事や」

『……ッ！』

その言葉に、驚いていた一同は冷水を浴びせられたような感覚を得た。

今のアースラは損壊が激しく。とてもでは無いが戦闘が出来る状態では無い。

しかも、前線メンバーで出られる人員も限られている。

先程、怪我がある程度治ったと判断されたザフィーラを含めても八人。

戦力がこれだけでは、戦いに向かうだけ自殺行為と言えた。

故に、このA案は至極真つ当な案と言える。

一同が黙ったのを、はやては見て、次にB案を表示した。

「次行こうか。B案は、『強襲案』や」

『え……？』

次に表示された内容に、それぞれ目を白黒させる。  
はやては構わず説明を続けた。

「この強襲案は、向こうがこっちが同じ世界に居るって知らん事を利用した案や。内容は機動部隊での至近からの敵艦への強襲戦や」

「……て、待って下さい。真っ向からそんな事したら……！」

「真っ向」からならね」

エリオの叫びを、横合いからフェイトが遮る。

そして、はやてへと視線を向けた。

「はやて、この案は普通に考えたら無謀だ。でも、何か考えているんだよね？」

「流石やね、フェイトちゃん。復活して、すぐに気付くなんて。…その通りや」

フェイトの言葉に、はやては微笑し、コンソールを指で叩く。  
直後、ウィンドウが切り替わった。

「……幸いにも向こうはこっちに気付いてないんや。やったら魔力反応にさえ気をつければ、接近の方法はある。……ティアナが鍵やね」

「私、ですか……？」

思わぬご指名に、ティアナが驚き、はやてに目を向ける。  
それに、はやては頷いた。

「そうや。ティアナの幻術とタイミング。それで全て決まる筈や。  
詳しくは、採択を取ってから教えるけど、な。……さて」

そこまで言い切り、はやてが一同に目を向ける。

そして、再びA案とB案をウィンドウに表示した。

「本来なら私が決めるべきなんかも知れんけど。……A案もB案も問題はある。そこで採択を取ろうと思うんや。皆の前のウィンドウにも表示されとるやろうけど。これでどちらの案を取るか決めよう



や。……ちなみに、これはブリーフィング・ルームにもおらん。全乗組員にも表示してる。……ええか？　よく考えて決めてや？」

そこまで言い、はやてはブリーフィング・ルームに居る一同を見渡す。

全員、その言葉にしっかりと頷く。

それを確認して、はやてもまた頷いた。

「よし。ならそれぞれ、どっちかの表示を押してや。……ほなら、行くよ」

はやての言葉に従い、皆が。アースラに乗っている意識不明の者達を除く、全員が表示を押した。

そして、出た結果は。

満場一致の『B案』であった。  
誰一人として、A案を押していない。

その結果に、はやては微笑む。

「……決まり、やね。まさか満場一致とは思わなかったわ」  
「はやてもB案を押してるくせに」

フェイトが、はやてに微笑する。  
はやてもきっちりB案を押していた。

それに、はやても苦笑する。  
立ち上がった。

「逃げてばかりなんも、もう飽きた。……いい加減、ここらで反撃と行こうや！ 皆！」

『了解！』

はやての言葉に、皆。一様に頷く。

ここに、アースラの強襲作戦が決定された。



「と、言う訳だ」

「そうなんだ……」

メツテのホテル。

既に夕方である。

そこに戻って来た、タカトの話しを、なのはは聞いていた。

……仕置きの部分は伏せたままに、タカトは聞き出した情報を並べる。

そんなタカトを、なのははじいっと半眼で見た。

「……本当に、お話しただけ？ 他に何もしてないの？」  
「当然だ」

「……それだけで、こんなに教えてくれたの？」

「人間、” お話し” すれば分かりあえるモノだな。スラスラ教えてくれた」

俺流の” お話し” だがな、とタカトは心中で呟く。

実際は通常の拷問が生温いと言わんばかりのマネをやらかしているのだが、そこまでは流石になのはも分らない。

暫くじい……と、見ていたが。ポーカーフェイスを崩さないタカトに嘆息。

追求を諦めた。

「……激しく納得出来ないけど、納得した事にするよ……」  
「そうか。それは、何よりだ。……で、だ」

なのはの言葉に、タカトはウンウンと頷く。

そして、聞き出した情報から今夜の警備交代時間。警備状況。次元航行艦の待機位置をウィンドウに表示した。

「……これが、今夜の警備状況だそうだ。……しかし、実際にはもう少し増えると思った方がいい」

「……何で？」

「そんな気がすると言うだけだ」

実際は四名も警備していた者がいなくなり、かつ昼間の騒動の件もある為、必ず警備人員の他に搜索人員を増やすとタカトは踏んだのだが。……それを話した場合、先の『惨劇のドラ○もん』（命名タカト）事件を話さねばならない。

またもやじいっと睨む、なのはにタカトは苦笑。話しを変える。

「……だが、逆に言えば艦内の人員が少なくなる、と言う事に他な

らない。そこで、だ」

ウィンドウに表示した地図でタカトは街の中心を指差す。そこにタの一字が描かれた。

「俺が街の中心で一騒動を起こす。その隙に、なのは。お前は艦の待機位置近くに移動してくれ」

「……一緒に居ちゃダメなの……？」

何となく、タカトの策を予想していたのだろう。

なのはは慌てず、タカトに問う。

それにタカトは微笑する。

「……お前の事だ。どうせ、俺を一人に出来ないなどと思ってるんだろうが――」

「う……」

凶星だったのか、なのはがギクリとなる。

タカトは肩を竦め、苦笑した。

「――お前に心配される程、柔じゃ無い。俺一人ならばどうとでも突破出来る。……俺が心配なのはお前だ」

「……私……？」

タカトの言葉に、疑問符を浮かべる。

そんな、なのはにタカトは頷いた。

「昼間の件もある、向こうはその騒動の中心であった”俺”を捜そうとする筈だ。こうなっては長々と隠れている事は寧ろ、危険なんぞでな。決行は今夜にする」

「今夜!？」

流星に予想外だったのか、なのはがその言葉に目を見開く。  
タカトは再度頷きながら、続けた。

「ああ。故に、まだ怪我が治りきっていない、お前の方が危険だと俺は思う。……まあ、敵は俺が引き付けるし、普通に潜入するよりはいくらか危険は少ないだろうがな」

「……そっか」

その台詞に、なのはは治療符を貼られた肩口に指を這わす。  
最初はこの怪我が治るまで待つと言う話であったのだが……。  
この怪我が原因で、タカトを一人つきりにするのか。  
そう思うと、やはり悔しかった。

そんな、なのはの表情にタカトは目を背けた。

「……なのは。分かってると思うが、お前は戦闘を極力避ける。  
そして、”俺と合流”するまで艦の近くで待機だ」

「……え……?」

タカトの台詞に、なのは再び目を見開いた。

今、彼は何と言ったか?

”俺と合流”と言わなかったか?

「……何を驚いているんだお前は? 俺もこの世界を脱出するんだ。  
当然、お前と一緒に侵入する」

「……そっか、そっかあ……」

タカトの台詞に、なのははホッとする。

先程のタカトの台詞だと、ここでタカト一人を置き去りにさせて、  
なのはだけを転送させる積もりだと思っていたからだ。

……まだ、一緒に居られるんだ。

何よりその事に、なのははホッとする。

タカトは、逸らしていた視線をなのはに戻した。

「大体、こんな所だな、作戦は分かったか……？」

「うん。……あ、でも行き先とか決めなくても——」

「それは、もう決まっている」

——いいの？ と、問う前にタカトは言葉を重ねた。  
そして、なのはの目を見ながら行き先を告げる。

その、場所は——。

「地球。あそこなら、” 確実に” 安全な筈だ。お前の艦とも連絡が  
取れるだろう」

「確実に……？」

タカトがあまりに断言するのに、なのはは疑問符を浮かべる。  
何故にここまで断言出来るのか。

キョトンとする、なのはにタカトは嘆息する。

「……地球には、兄者が居る。この時点であそこは完全な安全地帯  
のようなモノだ」

「……そうなんだ」

きっぱりと言い切るタカトに、なのは寧ろ微笑んだ。

敵対していても、タカトが兄であるトウヤを信じている事に。  
それが、何故かなのはにとっても嬉しい事だと思えたから。  
タカトは自身の台詞に憮然となる。

そんな反応も、何故か可愛いと思えた。

「……信用、してるんだね？」

「――信用、ね」

苦笑する。

思い出すのは四年前。

自分達を襲った、”アルハザード”という存在が生み出した最悪の罪。

『天使事件』の際に、トウヤが自分達に言ってくれた、大切な一言であった。

それは――。

「信用”じゃ無い”

「？」

タカトの言葉に、なのはが疑問符を浮かべる。

それに、タカトは微笑する。

……大切な一言が自然に滑り出た。

「信用”だよ。なのは」

奇しくも、この時。

遙か、遠方の世界でシオンが全く同じ事をフェイト達に話してい

た。

二人の兄弟は。

同じ時で。

同じ意味の。

同じ言葉を紡いだ。

……たった一人の長兄への信頼と、尊敬と共に。

第78管理外世界。

第51管理内世界『ナルガ』代表惑星ユグノー首都、メツテ。

二つの世界で、ストラに対し。

二極の強襲戦が始まる。



「く、く、くぬ……！」

「……どうしたの？ トウヤ？」

第97管理外世界。

叶トウヤは唸りながら顔をしかめた。

それを呆れながら見るのは、トウヤの秘書であり恋人。ユウオ・



A・アタナシアである。

トウヤは、ユウオの問いに苦笑。  
鼻を押さえながら執務席に座る。

「くしゃみをしたくなったのだが……。何故だか。ここでくしゃみをするとか負けるとかな、そんな気分になってね……」

「……そうなんだ」

内心、くしゃみで負けたような気分になると言うのはどんな気分だろう？ と、思いユウオも苦笑する。

そして煎れたての紅茶をトウヤの前に差し出した。

「どうぞ。熱いから気をつけてね？」

「うむ。しかし、これもまたオツだね。この光景を見ながら紅茶とは……」

そう呟き、トウヤが見るのは窓の外である。

しかし、そこに映るものを見たならば、大概の人は仰天したかもしれない。

そこに映るのは宇宙に浮かぶ大きな、大きな”地球”であったからだ。

ユウオはトウヤの台詞に苦笑する。

「……”月”に居住可能な、人工基地を作ってる、て知ったら皆、どう思うだろうね……」

「少なくとも各国のトップは知っている筈だよ？ その程度の根回しは終えているさ」

ユウオの台詞にも、トウヤは気軽に答える。  
……言っている内容は決して気軽に話せる内容では無いのであるが。

グノーシス”月”本部。モント・ナハト『月夜』

それが、トウヤが四年余りの月日を持って漸く作り上げた。  
魔導基地の名前であった。

元々、地球の人達で魔法の存在を知る者はごく僅かである。  
その為に、地球上で魔法関連の施設はおいそれと作れなかった訳であるが。

それ故に、トウヤは月に魔導施設を作り上げたのであった。

……使われた費用が天文学的な金額となったのは言うまでも無い。

それ等の事情を知る、ユウオはトウヤに苦笑する。

そんなユウオにトウヤは微笑した。

カイザー・ブルグ「皇帝城の試験運用は上手くいったようだね？」

「うん。流石にレヴァイアタン級の”次元戦闘艦”は大き過ぎるけど。……概ね、順調だよ。……でも……」

そこでユウオは一度言葉を切る。

遠くを見詰めるように、窓の向こうに目を向けた。

「……あのバハムート級、次元戦闘艦は、どうするの……？」

「どうするも何も、持ち主不在ではね……。タカトに文句を言ってくれたまえ」

肩を竦めながら、トウヤは笑う。

異母弟である、タカト専用艦として作られた艦なのだが。そのタカトがない状態では、何の意味も無かった。

「他の者に譲ろうにも、あの艦のシステムは特殊だからね。IFFM S（イメージ・フィードバック・マギリング・システム）は高位の魔導師にしか使えない。まさしく宝の持ち腐れ、だね」

「――だよね」

トウヤは専用艦の皇帝城を持っているし、他の者では若干の力不足と言える。

使いこなせれば、ほぼ最強に近い艦なのだが。

「……何処かに、”長距離射撃魔法が得意で、支援魔法も十分。歩く魔法図書”的なチートキャラは居ないモノかね……」

「そんな都合の良い人が居たら、何処も苦勞しないよ！」

ユウオが最もな事を言うが、現在。地球近郊の世界でまさしくそんな艦長が居たりするのだが……。

神ならぬ、ユウオにそんな事が分かる筈も無かった。

「……まあ、それは置いておくとして、だ」

「……え？」

そんな事を、トウヤは言い放つと執務席から立ち上がる。

ユウオの正面に向き合うと、いきなりその身体を抱き竦めた。

「ちよっ……！ また仕事中にセクハラを……！」

「心配は要らない。仕事は三十秒前に終わったよ」

「え……？」

時計を見ると、既にトウヤの勤務時間は終わっていた。  
ユウオの勤務時間も一緒に、だが。

「ここからは、恋人達の時間、さ♪」

「て、ちよっ！ 待って！ そう言うのはお部屋で……！」

「残念、私は待てない」

「ちよー！ ふむっ！」

ユウオの抵抗は、トウヤの唇に塞がれた。

そのまま、深い意味でのキスを交わし、トウヤはユウオを押し倒す。

同時、執務机の上にある紙が舞い、床に散らばった。

そこにはこう、書いてあった。

『アースラメンバー、各デバイス。ロストウェポン化による強化計画。及び、ロストウェポン製作設計図。並びに、第二代DA、第三世代ロストウェポンDA開発設計図。BY伊織タカト』

そう、書かれていた。

（第四十三話に続く）

◆◆◆◆◆  
ぱらら〜ぱら〜♪

ア

「はい♪ 今日もやって来ました♪ アリサ道場♪」  
す

「今回はすごい早かったよね〜♪」

5シ

「……そうっスね……」

ア

「……あら？ 最近幼児化したシオン。どうしたの？ えらく不機嫌そうで……」

5シ

「不機嫌じゃないですけど……。アレが……」

5未

「……ここどこ……？ お姉ちゃん達、誰？」

5カ

「お姉ちゃん、僕の新しい友達だよー♪」

祐

「ん〜♪ 可愛いわね〜♪ ほら、未来。カナン。祐希奈お姉ちゃんよ〜♪」

5未、5カ

「「祐希奈お姉ちゃん？」」

祐

「ん〜♪ そうよ〜♪」

奈

「あ〜。祐希奈ちゃん、ズルイわよ。私も甘えられたいわ♪」  
カ

「あ。お母さん〜♪」

奈

「そうよ♪ お母さんよ〜♪」

5シ

「……どうするんスカ……？ あの状態……？」

ア

「……あ、遅くなったわね。今回も召喚はLVからいっぱいよ♪」

「多いよね♪」

5シ

「そこ！？ いやいや、皆知ってますよそんな事は！？」

ア

「……てか、アンタ。さっき薬飲ませて幼児化してたわよね？ 何、速攻で復活してんのよ！」

レ

「……俺が解毒薬を飲ませたからだ」

5シ

「レン先輩！」

ア

「な、何ですって！？ アンタ……」

レ

「何せ、5歳の精神状態の子供を折檻する訳には行かないからなあ……！」

5シ

「……え？ アレ？」

ア

「……何だ。その事か……」

レ

「……フェイトの唇を奪った罪。死すら生温いと知れ……！」

5シ

「……て！ ええええええええええ……！」

レ

「タカトオオオオ！」

タ

「既に用意万端です」

5シ

「え？ え？ 何？ その粗縄？ まさか……」

レ、タ

「「そくくらを、自由に♪ 飛くくびたくくいかくく♪」」

5シ

「やっばしイイイイイイイイイイイー……！」

レ

「無明の彼方へと散れ……！ 飛んで逝けー！ ヒトコプターー

ー……！」

5シ

「“行け”が“逝け”になってるウウウウウウウウウウウウウウウウウウ……！」

ア

「……細かい所、ツツコンで行くわねー」

タ

「まあ、シオンですしな。ああ、ヴィヴィオ。回収頼む。その際にこの葉を」

ヴ

「う、うん。でも、いいのかな……？ シオン君。凄い内気だよ……？」

タ

「そこはそれ。上手く懐かせれば自然にママと呼んで貰える上に、奴もべったりだ」

ヴ

「……そっかー。べったりなんだー♪ うん♪ 分かったよ♪ 私行ってくる♪」

タ

「頑張ってきて」

ヴ

「うん♪」

ア

「……ふふふ。やるわね、タカト……」

す

「あくどいね〜?」

タ

「さて、何の事でしょうな? ……ハル」

ハ

「はい♪ お待ちどうさます♪ 皆様、紅茶で宜しかったですよね?」

ア

「……い、いつの間に……!」

す

「タカト君並の早業だよ……!」

ハ

「いえいえ……。僕も、まだ修行中の身ですから♪」

ア、す、レ

「「それでかよ!」「」」

ハ

「はい♪」

タ

「さて、おさらいの前に向こうの様子を……」

5  
シ

「……うう……」

ヴ



「あ、ほら。シオン君♪ 隠れちゃ駄目だよ？ 前に出て出て♪」

5シ

「……でも、怖いよ……」

ヴ

「大丈夫♪ ママがついてるから♪」

5シ

「うん……。でも怖いから手、繋いでていい……。？」

ヴ

「え〜♪ シオン君は甘えん坊さんだね〜♪」

5カ

「お姉ちゃんもお母さんも、喧嘩しちゃダメだよ……。？」

祐

「勿論よ♪ 喧嘩したりなんかしないわよ♪」

奈

「お姉ちゃんとお母さんは仲良しさんなんだから♪」

祐、奈

「ね〜♪」

5未

「……ハ！ お、俺は一体何を……。！ か、カナン！ シオン！

目を覚ま……。！」

? 1

「はいはい♪ アンタはこっちでまた菓を飲みなさい♪」

? 2

「ごめんなさい。お兄ちゃん……。でも、やっぱりもう少し、お兄ちゃんに甘えられたくて……」

5未

「て、お前達ー！？ 何で気軽に来れるんだよ！」

? 1

「気にしちゃダメよ♪」

? 2

「さあ♪ お兄ちゃん……♪」

5未

「待ってー！ー！ 嫌ああああ……！」

………

レ

「うん。触らぬ神に祟り無し。近寄らないでおこう……」

タ

「……ですな……」

ハ

「怖いですね〜♪」

ア

「あ、でもアンタらが幼児化するのも面白そうよね♪」

レ、タ、ハ

「「無理だ／ですな／です♪」「」」

す

「そんなに異口同音に言わなくても……」

タ

「と、言うより。俺が5歳時の頃は地獄に要るころなので……」

ア

「そいつはあ、やばいわね……」

す

「ちょっと危険だね……」

タ

「さて、話しは元に戻して、今回のおさらい。レン先輩。お願いします」

レ

「て、俺か？ 仕方無いな……。あー！。総括してしまえば『運が悪かった』か」

ハ

「……正しく、今話の全てを一言で表してますね……」

ア

「てか、ドラ○もんシリーズはかなりヤバく無い？」

す

「他にはどんなのが、あるのかな？」

タ

「……ふむ。ではLV繋がりモノを。……メイデンにはちと見せない方がいいかも知れんが……」

ア

「大丈夫。今は5歳時カナンを可愛いがってるから」

メ

「マスター♪ 可愛いぞ……♪」

レ

「こんな主も悪くないですね……♪」

5カ

「わぁ……♪ 妖精さんだぁ……♪ 綺麗だね♪」

タ

「の、ようすな。では、今の内に。」

『アイアンメイデンの刑』」

高校時代のタカト。

教室に入つて来るなりタカトは男子学生の一人の襟首を引つ掴み、片手で吊り上げた。

「おい……。アイアンメイデンは好きか？」

「は？ 何だよ？ それ……？」

戸惑いの声を男子はあげるが、タカトは構わない。

後ろまで、ズンズンと歩き。

ロッカーに到着。

掃除用具を全部出した上で男子を中に叩き込む。

そして――

「ドリアっ！」

— 擊！ —

ロッカーに右拳が突き刺さる。

たやすくそれは口ッカーを突き抜け、中の男子に突き刺さり。

止まらない。

「ドヲドヲドヲドヲドヲドヲドヲドヲドヲドヲドヲ  
ヲドヲドヲドヲドヲドヲドヲドヲドヲドヲドヲド  
ヲドヲあ……！」

中に男を叩き込んで僅か十秒。

ロッカーは完全に變形し、鉄製の蓑虫へと見事に變化した。

タカトはそれを抱えると窓際まで歩く。

そして、一気に放り投げた。

「……終わりだ」

それは、中に居る男子学生ごと、プールの中に叩き落とされた。

鉄製の蓑虫と化したロッカーから抜け出せる筈も無く。

やがて、プールから出る気泡が少なくなり、そして。哀れ、男子学生は――。

一同

『いやいやいやいや!?!』

タ

「……む?」

レ

「完璧、死んでるよな!? アレ!」

タ

「いえ、一応。死ぬ直前では助けてます。しかし脳に結構なダメージがあったらしく。余生は……」

ハ

「……これは、カナン君達にも見せないようにしなければ……」

ア

「……流石、ボスキャラね……」

す

「敵に回したら怖いタイプだね……?」

タ

「?」

ア

「ま、いいわ。じゃあ、今回はここまで♪ ヨシユアさん、二回連

続の召喚ありがとうね♪ 楽しかったわ♪」

タ

「しかし、アリサ道場はやる度にカオス度が跳ね上がってりますな」

レ

「……元凶の一人が言っちゃあダメだろ……」

ハ

「……ですね……」

タ

「ム……？」

す

「タカト君は気にしなくてもいいの♪ ではでは♪」

ア

「また次回~~~~♪」

レ

「宜しくな」

タ

「刮目あれ」

ハ

「お楽しみを♪」

ア

「……さて。じゃあ、今の5歳児達の写真でも取りましようかね…

…」

す

「楽しみだね~~~~♪」

タ

「では、俺達も行くか」

ハ

「はい♪」

レ

「だな」

（珍しく、綺麗に終わる？）

ク

「……私、忘れられますの……」

一同

『あ……』

（筈が無い♪ 終わっとけ！）

## 第四十二話「二極の強襲戦」（後編）（後書き）

「つい始まる二極の強襲戦」

「戦力で劣るアースラチームは、策を巡らし作戦を展開する」

「だが、ストラ側は最新のDAを装備した魔導師を戦線に投入する」

「それに、シオン達は――」

「一方、タカト、なのも強襲戦を開始」

「圧倒的な戦闘力で敵を叩き潰すタカトに、ストラは――」

「そして、タカトの”傷”に気付いた、なののは一つの決意を固める」

「それは――」

「次回、第四十三話

『幸せにしてあげる』』

「幸せ、それは彼が最初に諦めた事。故に、その決意は二人を完全な対立へと――」



第四十三話「幸せにしてあげる」（前編）（前書き）

「無くなったもの、失ったもの。その全ては、ヒトであるならば大切な事なんだろう」

「でも、あの時の俺はそれが致命的な事なんて知らなかった」

「親父は、そんな俺を救う為に俺に喰われた」

「二つの下らないシステムを破壊する為に、——かってアサギさんと、自分を引き裂いた魔王と勇者と言うシステムを破壊する為に」

「俺と兄者を殺し合い続ける運命から開放する為に、自分から俺に殺される運命を選んだ」

「そんな親父を殺してしまった俺を。俺自身が決して赦さないと、そう決めた」

「——幸せを知る事を赦さないと、そう決めた」

「決めた、のに——」

「魔法少女リリカルなのはS t S, E X 始まります」

#### 第四十三話「幸せにしてあげる」(前編)

首都メッテの夜は、明るい。

それが、この世界。ナルガに暮らす人達の共通認識である。  
夜になっても、繁華街近くは昼間の如く光を照らし続けている。

その街を巨大な川が通っており。豊かな水源を象徴する為か。  
街の一角に広場には、豪勢な噴水が設えてあった。

何かの記念に作られたものだろう。巨大な馬に、騎士が跨がっている像が、噴水の中央にそびえ立っている。

この噴水は絶えず照明で照らされており、また街のシンボルともなっているのか。

人通りがやけに多い。

目立つモノでもある為か、待ち合わせにはピッタリとも言えた。

そんな噴水の麓に、黒衣の青年が一人で、座り込んでいた。

伊織タカトである。

しかし、その姿は昼間のような私服では無い。

戦闘用のバリアジャケットを、既に着込んでいた。  
その姿が表すのはただ一つの意味。

則ち、戦闘の意味であった。

……さて……。

そんな意思を欠片程も表さず、タカトはボーと噴水の下に佇む。そして、ナウル川の方に目を向けた。

広大なナウル川の上には、巨大な影が街の光に照らされて映っている。

ストラ側の次元航行艦だ。

そこに今、向かっている筈の女性の事がふと頭に浮かび苦笑した。何故、このタイミングで思い出すのか、そんな自嘲である。

理由は分かってる。ホテルを出る前に約束”させられた”事が原因だ。

……面倒な事を約束させられたものだ。

そう、思う。

しかし、タカトの顔は呆れたようでありながら、その実。何故か楽しそうな表情であった。

話しはつい、30分程前にまで遡る。

「……よし、では行くか」

ホテルの一室。

そこで、タカトは黒のバリアジャケットを身に纏う。

時間は既に、夜の8時。

タカトが街で一騒動を起こすと決めた時間まで、あと僅かであった。

私服から黒のバリアジャケットへと装束を変えたタカトは、既に表情から感情が抜け落ち始めていた。

それは余計な感情を削ぎ落とし、意思そのものを戦闘用へと切り替えている証拠である。

そんなタカトを、なのはが固い表情で眺めていた。

……なのはは、タカトのこの表情があまり好きでは無かった。

——否、嫌いと言っても過言では無い。

視線に気付いたタカトが苦笑する。

「何か、言いたい事がありそうだな？」

「……そんな事、無いよ」

そっぽを向いて、ぽそりと答える。

——少しして、ちらりとタカトに視線を戻した。

タカトはストロークの長い呼吸を繰り返し、繰り返し続ける。

——その度に感情が削げ落ち、戦意が研ぎ澄まされて。まるで刀のように呼吸をする度に打ち、鍛えられて行く。

……まるで違う人格に切り替るようであった。

それを、たった二日とは言え。”普段”のタカトを知った、なのはは複雑な感情を覚える。

……何故か、それが凄く嫌な事だと思った。  
それが、タカトの”本来の在り方”なのだとしても。

「……無理、しないでね？」

タカトを見ていると、自然にそんな言葉が滑り出た。  
タカトはその言葉にキョトンとなる。

そんな表情に、なのははホツとする。

……まだタカトの心は此处（日常）にあると、そう思えたから。

そんな、なのははにタカトは微笑する。

「さっき言ったと思うが。怪我人のお前に心配される程、落ちぶれてはない」

「……でも……」

一人、だし。

そう言おうとして。しかし、彼が元々一人で戦い続けていた事に気付く。

彼にとってはこれが”当たり前”なのだ。

一人で戦い抜く事が。

「……まあ、確かに。俺一人ならば”向こう”が心配と言うのも分からないでも無いがな」

「？ どう言う事？」

小さく呟いたタカトの一言。

全くの検討違いの一言ではある、が。

内容は決して聞き逃せるようなものでは無かった。

タカトも、疑問符を浮かべる。

「む？ てっきり向こうの命の心配をしてるんでも思ったんだが…  
…」

「それって……」

その台詞にタカトが何を言おうとしているかを、なのはは悟った。  
目を細めて、タカトを睨む。

「……ダメだからね？ 誰も、その。殺したりなんかしたら……」

殺したり、の部分で言葉に詰まりそうになる、なのははにタカトは  
溜息を吐く。

……何となく、そう言われそうな。そんな気はしていたのだろう。

視線を、逸らした。

「――俺の戦い方は、”見敵必殺”が信条なのだがな」

見れば即ち死ぬ。

つまり、相手に全力を出させずに――否。戦う事すら許さずに確  
実に殺す。

それがタカトの元来の戦い方である。

なのはの”全力全開”とは正に真逆方向の信条であった。

戦場で、相手の命を奪わないで置く。

言うは易かろうが、その行為、そのものこそが。”そこ”に置いては致命的な弱点と成り兼ねなかった。

――だが。

「それでも、ダメ」

なのはは、あくまでも首を頑と横に振る。

……人死に出したくは無い。

それは当然に在る。

しかし、それ以上に。タカトに人殺しをさせたくなかった。

……人殺しなんかを、してほしくなかった。

例え、それが。

タカトの本質なのだとしても。

暫く両者の瞳は沈黙と共にぶつかり合う。

無言での、互いの意思のぶつかり合いである。

睨むでも無く、ただ見る。

そんなぶつかり合いの果てに、折れたのはタカトであった。

深く嘆息し、両手を参ったと上げる。

「このままでは行けそうもないな。……殺さなければいいんだな？」

「あ……。その、出来たらあまり酷い事もしないで欲しいな。――拷問とか」

「……俺は、そんなにしょっちゅう拷問しているように思われとる

のか……」

内心、なのはの言葉にショックを覚えるタカトだが、今更である。

St, ヒルデ学園でタカトがやらかした行為を思えば、なのはの心配は当たり前と言えた。

苦笑し、ややあって頷く。

そんなタカトに、なのはが左手の小指を差し出した。

「――なんだ……？」

「指切り。ちゃんと、約束しょ？」

「……俺はそこまで信用無いか」

カクツと肩を落とすタカトに、なのははクスクス笑う。

今のタカトは、明らかに普段通りのタカトへと戻っていた。

ヴィヴィオが懐き、ユーノが友と想い。シオンが兄と願う。

そして、なのはが――。

タカトが、なのはへと歩み寄る。

二人の左の小指が絡まった。

「ゆ〜びき〜りげ〜んま〜ん、う〜そつ〜いた〜ら、は〜り、せー」。じゃ、タカト君には少ないよね……」

「コラ待て」

歌の途中に挟まれた、なのはの台詞にタカトが半眼でツツコむ。

しかし、なのはは構わず。指切りを再開した。

「うん。じゃあ、う〜そつ〜いた〜らは〜りお〜く（億



ほくくんのくくす♪」

「……億か。……それは、流石に死ねるな……」

万を飛び越えて、億な辺りが非常になのはらしい。

苦笑するタカトに、なのはは微笑み。指切りの最後を告げる。

「「ゆくくび切った！」」

なのはの声に、タカトの声も重なる。

不殺の約束。

それが、ここに交わされた。

二人は小指を互いに差し向ける。

「……俺は誰も殺さんと誓おう。だからなのは、お前は戦うな。これを誓えるか？」

タカトは誰も殺さないと誓い。

なのはは戦わないと誓う。

それは、神聖な儀式のように思えた。

タカトの言葉をゆっくりと反芻し、やがてコクリと頷く。

タカトはヨシと微笑して頷いた。

「約束だ。忘れるな？」

「そっちも約束。忘れないでね？」

迷い無く互いに頷く。

直後、一気にタカトの顔から表情が消えた。

「――時間だ」

眩くなり、立ち上がる。

そのまま、真っ直ぐに歩くと部屋のドアをキィッと開いた。

なのはは、それを見送り。

そして。

「また、後でな。なのは」

「うん。タカト君も、頑張って」

気をつけて、では無い。

頑張って。

それは、心配では無く、応援であつた。

タカトは左手の小指を立てつつ、腕を振るう。

そのままドアを出て、迷う事無く歩き始めた。

戦いを開始する為に――。

噴水前で自分の小指を見て、タカトが苦笑する。

よくもまあ、あんな約束を取り付けられるものだ。

——よくよく考えればヴィヴィオの願いも、ほとんど無条件に聞いていた気もする。

自分は案外、女性の頼み事に弱いのかも知れない。そんな、今更の事をタカトが思っていると。

「漸く、お出ましか」

広場の入口から、ぞろぞろと物々しい男達が入って来る。

20人くらいか。男達は、揃って管理局の標準的なバリアジャケットを纏っていた。

そんな物々しい連中に、憩いの場が慄然となる。

カップルや、家族連れの市民が一斉に広場を離れ始め。

噴水を中心とした広場は一気に静寂を生んだ。

バリアジャケットを着込んだ一団は、それにも一切構わずタカトまで歩く。

やがて、座り込むタカトを見下ろす形で男達はタカトを囲んだ。

「ツアラ・トウ・ストラ警備課の者だ。昼間、市街で騒動を起こしたのは貴様だな？」

「人違いだ。と、言ったならばどうする？」

「これより、貴様を我等の反逆者として連行する」

無視か。そうタカトは苦笑する。

男達は最初から会話をする積もりは無いらしい。つまりこちらの言い分は全て通らない。

クスリとタカトは微笑する。男達の態度は、寧ろ好都合であった。

「重ねて言うぞ。貴様を連行する」

「――じゃあ、俺からも言おうか？」　それ”が出来ると本当に思っているのか？」

問いと同時にタカトは不意に立ち上がった。

……何の挙動も見せずに、だ。どうやって立ち上がったのかも分からないのだろう。

男達は揃って目を丸くする。

タカトは構わず、一步を前に進み出た。

目の前に立っていた男――こちらに先程から何やらを言っている男だ。の、前に立ち。正面から軽く胸を指で突く。

それは、心臓の部位だった。

「理解しているか？　この指が刃物ならば、ここでお前の人生は終わっている。――終わり、終わりなんだ。こんなにもアツサリとな。”その様”で、俺を捕らえられると？」

「――ッ！？　だ、黙れ！」

タカトの言葉を理解したのだろう。

男達は一斉に、デバイスをタカトへと構える。

抵抗したのだ。少々痛い目に合わせても問題無い！

それが男達の考えだった。

一撃！――

——直後に、十人程が空を舞わなければ。

「……は……？」

ポカンとする。

一体、何が起きたのか理解出来なかったのだ。

……気付けば仲間が空を舞っている等、理解出来る筈が無い。

タカトは拳をアッパーカットのように、突き上げていた。

男達をその体勢のまま、睥睨する。

「——離れていた方がいいぞ？ 無理にとは、言わんが」

直後、その姿が消えた。

それにも、男達は訳が分からず目を白黒させる。

あの一瞬で、どこに行ったと言うのか？

「こっちだ、こっち」

そんな男達に、頭上から呆れたような声が降ってきた。

他でも無い、タカトだ。

彼は噴水の像の上に立っていた。

苦笑し、上を見る。

男達も釣られて、そちらを見ると。

ちょうど空を舞った男達が落ちて来る頃だった。

何秒かの滞空の末、重力に従い男達は地面に叩きつけられる。

痛みに絶叫した。

だが、叫ぶ事が出来ると言う事は生きているし、意識もちゃんと  
してあると言う事である。

タカトは、なのはとの約束を律儀に守っていた。

針億本は、怖いしな？

そう、苦笑する。

「――さて、では。こっちは盛大に派手な花火を上げるとしようか  
！」

叫びと共に、タカトが振り上げた右足が綺麗な半月を描き、頭上  
に持ち上げられた。

直後、ボンっ！ と炎を纏う。

瞬間で収束、圧縮された炎はその威力を蹴りの一打に凝縮する。

タカトは、それを一気に振り下ろした。

足下の噴水の像、それへと。

「天破紅蓮」

――轟！――

噴水を中心に、炎の柱が天地に突き立つ。  
それは、噴水をまるごと”焼滅”させた。

”爆碎”では無い。”焼滅”である。

天破紅蓮は、噴水をその下、地下数K mの地面ごと”蒸発”させたのである。

その”余波”に煽られ、男達が纏めて薙ぎ倒される。

そして見た。

炎の柱を物ともせず悠々と歩くタカトの姿を。

彼は、倒れ伏す男達を睥睨し、やがて一言を呟いた。

「――少し、派手過ぎたか？」

そんな、そんな一言を。

圧倒的な破壊力をぶち撒けたタカトは、微笑と共に呟く。

メッテでの戦いは、こうして始まった。



## 第78管理外世界。

ツアラ・トゥ・ストラに寝返った元管理局提督、ビスマルク・ロレンツは自身の次元航行艦『シュバイン』の艦長席に座り、3隻からなる艦隊を指揮していた。

目指すのは第97管理外『地球』である。

この世界に留まっているのは、地球にある『グノーシス』と言う組織に、要求を打診している為だ。

自分達が追う、管理局の次元航行艦、アースラを引き渡すようにと。

当然、グノーシスがアースラを匿ってあるなどと言う情報は何処にも無い。

ただのでっちあげである。

ビスマルクは、しかし。あえてこの策を使った。

——ストラの指導者たる、ベナレスに報告もせずに。その理由は至極簡単であった。

同じ提督でありながら自分よりもグリムをベナレスは重用している。

ただ、それだけ。

つまり、彼は功を焦ったのである。

グリムに対する妬み、ただそれだけで。

つまり、ビスマルク・ロレンツと言う男は、野心家であるにも関わらず、それに見合わない小物であった。

ただ、それだけの話である。

……そんな事で狙われる地球や他世界からすれば大迷惑だが。こう言った小物が、他人の迷惑を省みる筈も無かった。

「——提督。三度目の通告ですが、依然、向こうは沈黙を続けています」

「だろーな」



フン、と鼻息も荒く。笑いながらビスマルクは頷く。

実際、アースラはいないのだろうが。こちらは居ると決めつけて、引き渡しを要求しているのである。

引き渡そうにも、その物自体が無ければどうしようも無かった。

——実際は、トウヤが、『ああ、無視しておくように。こちらに転送してくるなら潰すだけだよ。……と、言うか”忙しい”から1時間程はこちらに通信を寄越さないでくれたまえ』等と言っている訳なのだが。

そんな事、ビスマルクが知る筈も無かった。

「よし、グノーシスは再三に渡るこちらの要求を無視した。故にこれを敵対行動と見なす。——各員、次元航行用意！ 地球に進攻する！」

《了解！》

管制官並びに、他の艦からも答えが返って来る。

それに満足気な笑いをビスマルクは浮かべ、しかし。

「——これは……？」

管制官の一言に、眉を潜めた。

これから地球に向かおうと言うのに、何か異常でもあるのか。

「どうした？ 何かのトラブルか？」

「いえ……。ただ艦にクロスする軌道で2 m程の岩塊がこちらに来ていまして。スクリーンに出します」

その言葉と同時に、ウィンドウが展開する。  
そこには確かに2 m程の岩塊が三つ。艦隊に向かってきていた。  
それも、かなりの速度で。

艦との相対距離は300 (3 Km) 程か。

今、艦隊が居るのは無重力の宇宙空間である。

近くには、少惑星群帯もあるのだ。多少の岩塊が飛んで来ても別におかしくは無い。……速度は早過ぎるが。

「如何しましょう？ フィールドがあるので、衝突しても大した損害は無いと思われますが……？」

「なら放っておけ！ このような瑣事に構わず、次元航行準備を開始しろ！」

「了解です！」

下らぬ事で報告してくるなど苛付きながらビスマルクは答える。  
せっかくの気分には水を差された感覚である。

艦長席に座り直したビスマルクは、そのまま準備完了の報告を待とうとして。

「あ、あれ……？」

またもや管制官から上がった声を聞いた。  
苛立ちを更に強めながら立ち上がる。

次も下らぬ報告ならば更迭してくれる。

そう、思いながら。

「今度は何だ！」

「エネルギー反応！　大きい……。推定Sランク！」  
「――は？」

今度こそ予想外な答えに、ビスマルクが呆然となる。  
何が、どうやって？

そんな風に混乱している間にも、管制は報告を続ける。

「エネルギー反応は、先程の”岩塊”の一つからです！　……岩塊の一つ”停止”！？」

「ど、どう言う事だ……？　岩塊が一人でに停止する筈が……」  
「分かりませ――」

――轟！――

直後。激しい光の一打が、艦に突き刺さった。

それは、艦の中腹に直撃しアルカンシエルを破壊。衝撃が艦を盛大に襲う。

立ち上がっていたビスマルクは堪らず転げた。

「な、何が……？」

「攻撃です！　エネルギー砲撃が直撃！　アルカンシエル。主砲。沈黙！　艦の主兵装、四割が使用不能です！」

「……こ、攻撃……？」

馬鹿な……？　一体、誰が……？

混乱の極みに陥ったビスマルクは疑問符を飛ばす。

しかし、今必要なのは混乱する事では無く、毅然とした指揮である。

だが、予想外の攻撃に混乱するビスマルクを始めとしたブリッジクルーにそれは無理な話であった。

「岩塊二つが更に”加速”！？ 何だこの岩塊は！？」

「エネルギー反応、更に増大！ 岩塊を再びスクリーンに出します！」

管制官が混乱しつつも、己の仕事を全うする。

ウィンドウが再び展開し、岩塊が映って――。

いなかった。

そこには、岩塊はどこにも無く。茶の髪の少女が巨大な砲塔を構えていた。

砲塔の砲口には、既に光が収束し、今か今かと放たれる事を待っているとはかりに光り輝いている。

漸く立ち上がったビスマルクは、その少女を見て愕然とする。

あの少女は――！

「データー照合！ アースラ所属、N2R4！ ディエチ・ナカジマです！」

「……元、ナンバーズ！？ いや、待て。アースラ所属と言う事は……！」

「エネルギー反応増大！ 第2射、来ます！」  
「……ッー！」

ビスマルクが最後まで言う前に、ウィンドウに映る少女。ディエチの口がポソリと何かを呟き。

直後、光砲の第2射が放たれた。



《IS、ヘヴィ・バレル》

一轟！一

虚空中で巨大な砲塔。イノームス・カノンを構えるディエチがぽつりと呟くと同時に、砲口に収束していた莫大なエネルギーが放たれた。

それは宇宙空間を一気に突き進み、先に光砲を叩き込んだ艦から向かって右の艦に直撃する。

今度も、中腹。……アルカンシエルを狙い違わずに直撃。同時に、主砲も沈黙させた。

《……ッ！ ……ッ！ ……いいわよ、ディエチ。後もう一つの艦もお願い。……アルカンシエルと、主兵装を黙らせて……》  
《うん、了解。……ティアナ。キャロ。大丈夫……？》

響く念話に、ディエチは答える。

ティアナはそれに、息も絶え絶えに返事を返した。

《……アンタの分は解いたし、クロノ提督とエリオの分も、もう少しで解くしね。大丈夫よ》

《……はい。ディエチさんも気をつけて……》

キャロからも、念話が返って来る。

それに頷くと、ディエチは再びチャージ開始する。

今、ティアナはシルエットを五人分も維持していた。

ブーストを掛けているキャロと共に。

ただでさえ、魔力消費の激しいフェイク・シルエットである。

それをブーストしているとは言え、五人分。しかも、遠距離からで行っていた。

ティアナ、キャロの消耗は推して計るべき、であった。

だが……。

《……ここまで、簡単に接近出来るなんて……。凄いね、ティアナ》

《……向こうが間抜け過ぎるのよ……》

ディエチの念話に、ティアナが苦笑の混じった答えを返す。

ディエチと艦の距離は、約150（1.5 Km）と言った所まで狭まっていた。

いくら、ディエチの限界射程距離とは言え、これ程接近出来たのは、やはりティアナの力量に依る所が大きい。

この強襲作戦で、最大の障害は、いかに艦に接近するかにあった。下手に近寄ってもアルカンシエルで一撃である。

もし、ある程度接近出来たとしても。各種、艦の主兵装が黙っていない。

所詮は射程が違い過ぎるのだ。

機動部隊が艦隊戦に使用されないのは、この辺の事情がある。

故に、ティアナのシルエットでこちらの攻撃が届く範囲まで接近し、最初に艦の兵装を沈黙させる。

これが今回の強襲作戦に於ける最優先事項であった。

《艦の兵装を黙らせたなら、向こうは機動戦力を出して来る筈よ。デイエチはクロノ提督と、エリオの援護射撃を宜しくね》

《……了解》

コクリと念話に頷く。

そして、イノームス・カノンのチャージが完了する。

狙いは、向かって左の艦。その中腹にあるアルカンシエルと、主砲！

普通ならば1.5 Kmもの狙撃は大気等の障害となる物が、ほとんど無い真空間であれば不可能である。

しかし、戦闘機人であるデイエチにはそれを可能とする性能、機能があった。

射角計算……よし。

エネルギー減衰率計算……よし。

弾道予測……よし。

それ等全てを、”視て”計算し尽くす。

緻密な計算、情報処理していく。

その間、たったの1秒弱。高速思考を得意とする、なのはにすらこれは出来ない。

まさに戦闘機人としての面目躍如であった。

《全状況よし。IS、ヘヴィ・バレル。……発射》

—轟!—

三度、イノームス・カノンが光砲を轟かせる!

激烈な一撃は、迷う事無く宇宙空間を突き進み。今度も狙い違わず、目標を撃ち抜いた。

——これにより、三隻の次元航行艦隊は事実上。その兵装を沈黙させられた。

これより、アースラの強襲作戦は、第2段階。

フェイズ2。

機動部隊戦に移行する——。



所変わって、メッテの街。

そこでタカトは暢気に歩いていた。

左手に対流する水系を弄びながら。

それだけを見れば、タカトが戦闘の真っ只中に居る等、誰も分からないだろう。

しかし、事実としてタカトは戦闘中であった。だが誰も近寄れないだけ、である。



タカトの天破水迅。

それによってストラの者達は、全く近寄れ無いのだ。

この天破水迅は激烈な水圧によって束ねられた水系を操作し、敵対者を切り裂く技である。

射程はおよそタカトの認識限界距離であるとされており、”2年前の段階”でおおよそ2Kmとされている。

威力はA A +相当であり、強固な防御障壁で無ければ防ぐ事すらも敵わない。

だが、この技の恐ろしさはそこには無い。

その範囲に置いて、細胞剥離等の緻密作業を行える精密操作に、その恐ろしさはあった。

水系の一本一本が、タカトの指のようなモノである。

その技には、一般市民と敵の区別なぞ造作も無く。また、市民を盾にしようなどと言う輩は、真っ先に水系の餌食となった。

そんな技を展開された時点で、ストラの者達はまともな攻撃も出来ず、隠れる事すら出来なかった。

ただ射程範囲外まで逃げて、応援を呼び人海戦術を行うしか無かったのである。――が。

肝心の水系の数に、限り。と言うモノが無かった。

この射程内に於いて、量はともかく、水系の数は無尽蔵のようなものである。

数を頼りにする者達にとって、これ程厄介な技も無い。

静謐に。ただただ静かに、ストラの魔導師達は壊滅に追いやられつつあった。

……これで二百程度、か。

戦闘不能に追いやった魔導師を数えて、タカトはフムと頷く。

この時点で、この世界に於ける。ストラ側の魔導師部隊は壊滅したも同然であった。

ガジェットや、因子兵は出て来ていない。

——当然である、この世界には”一体足りとも無いのだから”。

タカトが昼間に四次元ダストシュートに叩き込んだ男の情報によれば。ストラはこの世界に、ガジェットや因子兵を持ってきていない。

艦に駐留している魔導師。そして、現地調達した志願兵でその戦力を補っていたのである。

……理由は不明だが、どうにも本局前でタカトがガジェットと因子兵を壊滅させたのが原因らしい。

つまり、支配した世界に機動戦力を配置出来る程、ストラの戦力には余裕が無いのである。

ストラの目的は全次元世界の制覇にある。

それ故に、ガジェットや因子兵は抗戦を続ける世界に投入されていたのだ。

原因であるタカト自身、これは予想外であったが。

ガジェットや因子兵であろうとも水迅とは相性が悪い為、タカトにとってはあまり意味が無いとも言えた。

……さて、向こうの戦力も削りに削った。そろそろ、なのはと合流するか……？

そう、思い水迅を解除しようとした。

瞬間。

タカトの全身に刺さるような殺氣が叩き付けられた。  
それに、タカトは一瞬の判断で水迅を解除、更に縮地。……一種の空間転移で後退する。

— 擊手！ —

一擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊

擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊、擊

— 擊手！ —

転移した直後、タカトが居た地点に豪雨の如く、銃弾の雨が降り注ぐ。

——そう、銃弾である。鉛の、魔法文化では禁止とされた質量兵器。

辺りに漂う硝煙の臭いといい、魔法反応が無かった事と言い。間違いない、この攻撃は火薬を使用した銃であった。

「H  
O、  
H  
O、  
H  
O  
|  
|  
|  
|  
|  
!」

「む……？」

叫びが頭上より聞こえ、タカトが視線を上に向ける。

そこには、街灯による光に照らされながら空より舞い降りる2 m程の巨軀の男が居た。

筋骨隆々の体に、黒の全身タイツ。

頭をすっぽりと覆うようなバイザーを頭に付け、両腕の手首から肘までには、何故かドラムのようなモノがついていた。

タカトはそれを見ただけで正体を見切った。

あれが、先の銃弾を吐き散らしたモノだと。

重機関散弾銃。

高連射性の機関銃をベースに、使用弾薬を全て散弾銃のものへと換装した特殊な銃である。

ドラムのように見えたのは、全てマガジン。――ドラムマガジンと呼ばれる物――。で、あった。

成人の男性でも、まともに扱えきれるようなモノでは無い。

反動に耐え切れる筈が無いからだ。

それを両手に装着して使っている臂力も凄まじいが。何より、タカトを驚かしている事がある。

自分にここまで接近してのけた事であった。

それは、取りも直さず水迅を潜り抜けたと言う事である。

……何者？

そう思うタカトを他所に、男は地面に着地。

バイザーで覆われた目をタカトに向けた。

「手前か？ たった一人でウチの連中を壊滅させたとか言う化け物はよ？」

「……さて、な？ だが。そうだとしたならば、どうする？」

あえて挑発するかのようなタカトの台詞に、男は獣じみた笑いを浮かべる。

両手をタカトに差し向けた。

「ブっ散れ」

—轟!—

両の手から戦車ですらも紙葛のように撃ち抜く散弾が再び雨の如く放たれた。

それは迷い無くタカトへと突き進み——。

「——お前には無理だ」

—撃!—

天破疾風。

暴風を詰め込んだ拳の一打が散弾の全てを粉碎。  
丸ごと彼方へと消し飛ばした。

だが、男はそれを見ても笑う。  
くつくつく、と楽しそうに、楽しそうに。

そんな男に、タカトは右手を差し向けた。

「……礼儀として、一応は聞いておこうか。名は？」

問い掛ける。それに、やはり男は笑いを顔に張り付ける。  
両手をタカトに向け続けながら。

「ゲイル・ザ・ファントム。——”第二世代型の戦闘機人”。そう  
言や、分かるか？」

おどけたように、そう答えた。  
だが、タカトは全くの無表情のまま。しかし、一步を踏み込む。

「知らんな。興味も無い」

「ケッ……！ 世間知らずが。なら、その身体に単語を”直接”刻んでやんよー！」

咆哮と共に、男――ゲイルが、一気に飛び出す。

両手の重機関散弾銃をタカトに撃ち放とうとして。

「何度も言わせるな。貴様には無理だ」

――撃！――

それより速く、タカトが懷に飛び込んでいた。

同時にゲイルの鳩尾へと肘を埋め込みながら。

だが、ゲイルは未だ止まぬ笑いを顔に張り続ける。

メッテでの戦いも、ここに第2局面を向かえた。

（中編に続く）

第四十三話「幸せにしてあげる」(前編)(後書き)

——はい♪ 今回はここで終わりです♪

次は中編です♪(笑)

……もう、俺は開き直ったぜ!(笑)

……いえ、嘘です。すみません(汗)

久しぶりのバトルは楽しいなと言う(笑)

やはりEXはバトル在りきなんだなとつくづく思います(笑)

恐らく三部で終わる、と思います(汗)

いや、自分でもちよつと分かんなくて……(汗)

プロットでは三部で終了予定なんです(汗)

では♪

中編でまたお会いしましょう♪

では~~~~♪

#### 第四十三話「幸せにしてあげる」(中編1)(前書き)

……最初に謝っておきます。

すみません！ 更新遅れまして……(汗)

いやあ、自分が設定魔だと言う事も忘れてた理論を考えていたら。  
ハッ！ 小説！ と(笑)

つい、うっかり書き始めるの忘れてました(汗)

危ねエ、危ねエ……。

そして、もう一つ。

どう考えても、三部分では終わらないと言う事実が判明しまして(汗)

急遽、四部分に分けました。

申し訳ありません(汗)

……プロットだけで一万文字越えたのには流石にビビりました……

(笑)

ではでは中編1♪ どうぞ〜♪



## 第四十三話「幸せにしてあげる」（中編1）

一撃！一

撃ち込んだ肘。しかし、その感覚にタカトは眉を潜める。

メッテでの戦い、タカトは襲い掛かって来た巨漢に、肘を叩き込んだ。

肘は、巨漢——ゲイルと言ったか、にめり込んでいる”筈”である。

だが、いつものような打撃を”徹した”。感覚が、無い。これは——？

「ハァー！」

「……ちっ」

叫び、共に振るわれた両手に短く舌打ち。

撃ち込んだ肘を支点に、押し返すようにして、ぐらりと重心を変化。

腕を摺り抜けると同時にタカトの足が空を滑る。

展開した足場を利用した歩法。一切のロスを生じさせぬ、すり足の極致であった。

それを持って、ゲイルの後背に回り込む。——ゲイルからすれば、それは消失にも等しかった。

視界からタカトが完全に消えたのだから。

一破！一

「ぎっ！？」

直後、ゲイルが吹き飛ぶ。

空中から叩き落とされ地面へと突っ込んだ。

タカトはフムと突き出した掌を見る。

——誰が、知るだろう。その突き出した掌がゲイルを吹き飛ばしたのだ。

……また、”徹った”感触が、無い。

タカトはそう、思う。

タカトの打撃は基本として、内部に衝撃を撃ち込む。俗に裏打ち。浸透勁。そう呼ばれる技法を持って放たれる。

この技法はバリア・ジャケット等のフィールド系魔法を無力化する。

フィールドを逆に利用。腕の延長のように扱い、衝撃を内部に撃ち込むのだ。

だが、いつものように打撃を撃ち抜いた感触が無い。

打撃の瞬間。まるで、分厚い真綿のような感触が返って来たのである。

全ての衝撃を分散させられたような、そんな感触が。

「へへへ……」

「……」

案の定、あっさりとゲイルは起き上がる。

タカトは無言で再び地上に降り立ち、ゲイルを見据えた。

「……容赦がねえな。ISが無けりゃあ、今ので肉塊になってる所だぜ……?」

「IS……？」

ゲイルの台詞。――正確にはその単語に眉を潜める。それは、一体何だと言うのか。

タカトはそれを知らなかった。だが、目の前の男がかって対峙し、一時は共に戦ったN2Rと同じ存在だと分かっていたら、単語は知らずとも納得していただろう。

魔力を使用しない、先天性固有技能。

戦闘機人、特有の機能。それが彼等の力の名であった。

「IS、ポイントアクション」

「ポイント……？ 地点、いや座標、か――」

一撃！――

突如、タカトが後ろのめりに吹き飛んだ。

――！！？

いきなり顔面に受けた衝撃に、タカトが目を見開く。

何らかの一撃、打撃にも似た”何”かを受けたのである。それは、間違い無い。

だが、それは一体何だと言うのか。

”男は、何の挙動も両手の重機関散弾銃も使っていないのに――！”

「――ちっ」

再びの舌打ちを放ち、タカトは後転宙返り。体勢を立て直す。  
見る先にはゲイルが居る。

ニタニタとタカトを嘲笑うが如く、嫌な笑いを顔に貼付けていた。

それは、余裕。という笑みであった。

「……りい　い　い　い　い……ひゅううううう……」

呼吸法にのっとり、氣息を整える。

そして、一気にゲイルへと駆け出そうとして――。

「な、に……?」

身体が、動かなかった。

否、正確には腕を始めとして、胴、足が何かに捕まえられている  
ような感覚。

バインドにも似て、しかしそれは絶対に違う。

何せ、タカトの目にはバインドのようなものは、何も映っていない  
のだから。

まるで透明な、巨大な手に握られているような――?

そこまで考えて、タカトは”それ”に漸く気付く。  
それは”歪み”。で、あった。

そうか。ポイント・アクションとは――。

「今度こそ、ぶっ散れ」

一轟！一

直後、男より放たれた見えない”何か”。”それ”がタカトに襲い掛かる。

ポイント・アクションに捕らえられたタカトは何も出来ずに、全身に”それ”を受け。

盛大に、吹き飛んだ。



第78管理外世界。宇宙空間。

次元航行艦『シュバイン』ブリッジは、混乱の極みの中に居た。建前上はアースラ追撃の為。

本音は地球、グノーシス侵略の為に集めた次元航行艦隊だが、突如の強襲により。三隻共、主兵装を破壊。沈黙させられたのだ。しかも、建前として追っていたアースラ。そのメンバーの一人によって。

これで混乱せぬ筈も無い。

「……こ、こんな筈じゃ……」

「提督！」

艦の現状に、顔を真っ青にしたビスマルクに管制官から叫びが飛ぶ。

ウィンドウには、更に加速しながら艦隊に突っ込む岩塊が――否、既に岩塊は別の姿へと変わっている。

黒髪の青年と、赤髪の少年へと。

クロノ・ハラウン、そしてエリオ・モンディアルの両名が艦隊へと真っ直ぐに突っ込んで来ていた。

「敵、魔導師2名。接近中！ 距離100を切りました！」

「迎撃部隊を出さないと……」

口々にビスマルクに放たれたる報告。

そして、指示を仰ぐ声にしかし。ビスマルクは首を振るだけだった。

……何だ、この状況は……。

ビスマルクは、現状が信じられなかった。

彼の予定では地球に進攻後、アルカンシエルで即座に地球を蹂躪し尽くし。

そして本局に凱旋している未来があった筈なのだ。

それが、今。地球にすら進攻出来ず、しかも建前として追っていた半壊の部隊により。艦隊は兵装を沈黙させられたのだ。

悪夢としか言いようがなかった。

「提督！」

「……こんな、こんな。私の輝かしい未来が……」

ブツブツと頭を抱えて呟き続けるビスマルクに、管制官も顔を青くする。

指揮官は錯乱し。現場は混乱の渦。

こんな状況では、迫り来る敵機動戦力に対して、こちらの機動戦力。――ガジェットやDA装備の因子兵だ――を、出撃させる事も出来ない。

上が混乱する、とは。つまりこう言った事であった。

頭（指揮官）が指令を出さねば、手足（部下）は動けない。

このまま行けば、機動戦にもならずクロノ、エリオだけでも艦内を制圧出来ただろう。

アースラの予定とは違うが、あるいはその方が良かったかも知れない。

だが――。

「どうしました？」

凜、とした声がブリッジに響く。

その声に管制官だけでは無く錯乱していたビスマルクすら身体を震わせた。

それは、少年の声だった。

十代前半の、声変わりすらしていない声。

だが、その声はあまりにも冷たかった。

「――ああ、強襲ですか。これは、失態ですね……」

「いや、あの……」

「何をボケっとしてるんです？」

少年は笑顔だった。

笑顔のままに、ビスマルクに疑問を投げ掛ける。

敵が迫っているのに、何故機動戦力を配置もしていないのか、と。

にっこりと冷たい笑顔のままに。そう、問うたのであった。

「……困りますね。役立たずは、とても困ります」

「あ、あ……」

「”処理”されたいのですか？」

処理。その単語を聞いた瞬間、ビスマルクを始めとしてブリッジ一同の顔が青から白へと変わる。

恐怖によって血の気が更に引いたのだ。

ブンブンと、首を横に振る。

少年がその反応に再びくすりと笑い、踵を返す。

あっさりと扉から出た。

「――止まっていて、いいのですか？」

そんな、台詞を残して。

残された声に押されるように、ビスマルクが指示を出し。ブリッジが正常に動き出す。

少年は、それらを背に受けながら廊下を歩く。

その顔は変わらぬ笑顔のままであった。

「――アースラかあ。こんなに早く遭遇するなんてね。”彼”にも会えるかな？」

そう、一人ごちながら歩く。

そして右の手に握る。鞘に納められた刀の柄を、愛おし気に撫でた。



「なんで、彼はこんな素敵なモノを捨てたのかなあ？　これだけの  
”力”があれば彼に敵なんて居なくなるのにね」

柄を撫でながら少年は歩く、歩く。

その歩みの向かう先は、格納庫であった。

通路を歩く、と。通路の途中に、鏡のようなモノがあった。

恐らくは純正の鏡ではあるまい。

その鏡に映る自分を見て、クスリと微笑した。

「――僕を見たら、彼はどんな表情かおをするんだろうね？」

そう、笑う。

少年は、――”銀の髪”の少年は、ただ笑い続けた。



《敵、次元航行艦隊まで距離70（700m）です》

《ああ、目と鼻の先まで来れたか》

宇宙空間を駆ける二人、エリオとクロノはアースラ管制官。シャ  
ーリーの通信に頷く。

向かう先は、次元航行艦隊であった。何故か。未だに機動戦力も  
配置していない。

これにクロノは訝しんだが。しばらくして艦隊からバラバラとま  
るで蜂の巣から出てくる働き蜂のように、現れたモノがあった。

ガジェットと因子兵である。

《敵、機動部隊出撃。数――250!》

《本局決戦よりは少ないですけど……》

《ああ、油断出来ない数だな》

シャーリーの通信を聞いた、エリオの念話にクロノも頷く。

本局決戦時と比べる事自体間違っているが、戦力差を考えると、あながち間違ってもいない。

何せ、作戦上。あの数を自分達二人。――ディエチを入れても三人で相手取らなければならぬのだから。

普通に考えれば、無謀である。  
だが――。

《敵、機動部隊。それぞれ50ずつ。三隊に分かれました》

《前衛、後衛、そして艦の直援か。無難な配置だな》

無難ではある、が。それ故に。この配置は正しい。

数で勝る以上、向こうが余裕を持った配置をする事は予想内であった。

《――どうしますか？ クロノさん》

《フェイズ2の目的は機動部隊と艦隊の”引きはがし”だ。……その為にも、直援には前に来て貰う必要がある》

言うなり、クロノはその場に急停止。エリオもそれに続く。

その視線は自分達に向かい来る、ガジェット、因子兵群に向けられていた。

《――まずは、向こうの数の優勢から来る余裕を崩して、あの陣形

を崩さなければね》

《え？ どうするんですか？》

《決まってる》

す、と右手に持つ真・デュランダルを掲げる。

そのコアが青白い光を放っていた。

真・デュランダル

グノーシスにより改造されロスト・ウェポンと化したクロノのデバイスだ。

クロノは本局決戦後、怪我で痛む身体に鞭を打って。このロスト・ウェポンを分析した。

そして分かったのは。これが、出鱈目な代物である、と言う事だった。

構造としては簡単極まり無く、デュランダル本体に、あるモノを組み込んだだけである。

しかし、このあるモノが大問題であった。

取り敢えずクロノは、これを前に3時間は頭を抱えた。

それは、莫大なエネルギー体であった。

断言出来る。

管理局に持って行けば、ロスト・ロギア指定間違い無しの代物である。

いわく、ロスト・ロギア。デュランダル。

奇しくもクロノのデバイスと同じ名前の霊具であった。

このロスト・ロギア。元は剣だったらしいのだが。元々物質であるかどうかは、かなり疑問であった。

と、言うのも。シャーリーと調べた結果だが。

この剣。最初から”エネルギー剣”であった可能性が高い。

つまり、純粹かつ莫大極まりないエネルギー塊だったと思われるのだ。

このデュランダルと言う剣は、フランスの英雄ローランが所持していた聖剣として名高い。

伝承によれば。この英雄の最後のエピソードに、岩に叩きつけても折れなかったとされているが。

純粹なエネルギー剣ならば”折れる”という概念すらなかっただろう。

おそらくは、莫大なエネルギー量により、半物質化していたと思われるのだが。

話を戻すが作製者がどのような意図があったかは分からないが。デバイスの方のデュランダル本体に、直結する形でロストロギアのデュランダルを組み込んであるのだ。

故に、登録魔法の殆どがそのエネルギーを汲み出し、利用する形として組まれている。

つまり、莫大なエネルギーをクロノの魔法に変換する様式とされているのだ。

これで、クロノは漸く合点がいった。

このデュランダルは元々凍結と何の関係も無い代物である。

言わば、無色のエネルギーだからだ。

しかし、そこにデュランダルDの特性。

つまりは凍結だが――が、加わったが故に。あのような殲滅型凍

結魔法が登録魔法の殆どと化したのだ。

……製作者が、本当に使用する者の事を考えていない、と言うのはよく分かった。

シャーリーも苦笑していた程である。

結果として、クロノは出力に掛かる魔力リソースを抑える形で魔力消費を3分の1に留めるように、術式を組み直した。

当然。攻撃範囲、威力等は下がる。

しかし、クロノに言わせれば、それでも過分に過ぎる程であった。

そう、威力も範囲も大き過ぎるのだ。

何せ、これを完全にエネルギーとして開放した場合。  
試算した結果、大規模次元震確定とされた程なのだから。

だから、それを攻撃として使うならば。それは――。

《――悠久なる凍土。永久なる氷河。遍く魔を封じせし、ジュデツカ最終地獄。  
全ての命は等しく凍り、全ての魂は等しく安らぎを得ん。我はここに、神意を代行せん！》

例えば、永久なる棺エターナル・コフィンと言う凍結封印魔法が元々デュランダルにはあった。

広範囲に渡り、対象を凍結せしめる魔法であり。その効果、範囲、威力は絶大である。

それを、”真・デュランダル”の出力で放ったならば？  
クロノはそれを考えた時、身震いすらした。

だが、もしそれを完全に制御出来たのなら、それはかねがね出力に悩まされて来たクロノにとって、最大級の武器となる――！

永唱完了。

同時にクロノは前を見据えた。

自分達に突っ込んでくる前衛のガジェット、因子兵群を。

真・デュランダルから溢れるエネルギーを魔力によって方向性を決めてやる。

それだけでいいのだ。元よりこのロスト・ウェポンは、それを目指して創られたモノなのだから！

《凍てつけ！》

【永久氷結地獄】  
コキユートス

一凍！一

瞬間、確かに空間が軋んだ。

それは、タカトやトウヤのように存在からなる軋轢によって生まれる軋みでは無い。

”凍りつかされ、空間そのものが縮んだ”事による軋みだった。

《……これ程、とはね……》

《……………》

ぜいぜいと息を荒げながら自身が成した結果にクロノは苦笑する。  
エリオはそれをどこか遠くで聞いた感覚で聞いていた。

エリオとクロノが見るさき、敵前衛が居た空間。”そのものが”

凍りついていた。

場所では無い。”空間”が、である。

威力にしてみれば、どのくらいのレベルと化すと言うのか。  
前衛のガジェット、因子兵群は纏めて凍りついていた。

直後。びきびき、と凍りついた空間に輝ひびが入る。

世界は、常に在るべき姿に戻ろうとする特性がある。

凍結された空間は、その対象となっているのだ。

その結果は――。

一  
砕

砕けた。

砕けた、砕けた、砕けた砕けた砕けた砕けた！

凍結された空間が容赦なく砕ける。

その中に居たモノ達と共に。

それは完全に砕け散り、そして消失した。

まるで、最初から何も無かったが如くに。

クロノはそれを見て、ヒト相手にこれは絶対に使うまいと心に誓った。

容赦無く、殺してしまいかねない。

こうして、敵前衛は完全に消滅し、ストラ側の次元航行艦隊は後衛のガジェット、因子兵群。そして、直援部隊も前に出して来た。

今の一撃を見て、クロノを真っ先に潰すべきだと判断したのだろ

う。

……上手く、いったな。

荒い息をどにか収める。

そして横で硬直するエリオの肩を叩いてやった。

《――エリオ、僕達の役目はここからだ。……固まってる暇なんてないぞ》

《は、はい！》

びくう、とエリオが飛び上がり、クロノに慌てて頷く。  
先の一撃の直後である。その反応は無理も無い。  
苦笑し、向かい来る敵機動部隊に視線を移した。

《後はシオン達次第だ。僕達の役目は――》

《敵を引き付ける事。陽動です》

はっきりと答えるエリオに、クロノは再び頷く。  
そして。

《エリオ、君が前衛で僕が後衛だ。ディエチは――》

《援護、だね。分かってる》

返ってくる念話にクロノは微笑する。  
そして、真・デュランドルを握りしめた。

《――いくぞ》

《はい！》

《了解》



短い返答と共に、エリオが前に。クロノが後ろからそれを追い掛ける。

フェイズ2、継続中。フェイズ3。艦内突入まであと僅か――。



――豪！――

全身に見えない何かを叩きつけられ、吹き飛んだタカトが舗装された地面へとめり込む。

呻きと共にケホと一つ咳をして、タカトが顔をしかめた。

「ぐ……っう……」

「H A H A H a H a H a ! どうしたよベイビー? 『貴様には無理だ』じゃあなかったかあ! ?」

そんなタカトを見て、ゲイルがカカと豪笑する。

笑う目には明らかな嘲りが含まれていた。

タカトはそれに、悔し気に舌打ちする。

「ポイント・アクション。……そういった能力とはな」

「おお? もう気付いたのかよ。まあ、気付いたとしてもこの能力の前には無意味だがなあ! 」

タカトの台詞に、更に笑う。

それを見て、タカトは顔を歪めた。

ISポイント・アクション。

空間操作能力。それがこの能力の全容であった。

そもそも、おかしくはあったのだ。タカトの認識範囲は2Kmまで広げてあった。

いわばこの範囲だけ、全てタカトの触覚が広げられているようなモノである。

例え、光速でこの中に侵入しようと。入った瞬間にタカトは気付く。

それが、全く気付かずに侵入されたのだ。

恐らくゲイルは空間操作能力で、空間転移か接続かで直接その場に現れたのだろう。

先の真綿のような感触もそうである。

あれは空間を任意に遮断し、防御障壁へと変えたのだ。

いかなAA+相当の打撃であろうと、空間を遮断されてしまえば衝撃が徹る筈が無い。

例の见えない砲撃や束縛も、空間操作能力より派生した攻撃である。

见えない砲撃は、空間を圧縮する事により生じた余剰エネルギーを衝撃へと変換し、空間衝撃砲を形成したのだろう。

见えない束縛も、空間を固定化する事により強制的にタカトの動きを止めたのだ。

ポイント・アクション。

厄介に、厄介な能力であった。

「……空間操作能力か。先程言った第2世代とやらは、こう言った

意味か？」

「いや、違うね。これはあくまで俺の能力だ。第2世代、て意味は別にある。……戦闘機人、て知ってるか？」

「いや、先も言った通りだ。露程も知らん」

あつさりとタカトは否定する。本当に知らないのだろう。  
ゲイルがフンと鼻を鳴らす。

「ケッ……。田舎モンがよ」

「そう言うな。貴様の空間操作能力の前では俺は手も足も出ん。冥土の土産程度には教えて欲しいものだ」

タカトの降参宣言とも取れる言葉に、ゲイルがふふんと調子づく。  
余程、自慢したいのだろう。得意気に語り出した。

「そもそも戦闘機人、てのは先天的に遺伝子やらに手を加えて機械をインプラントしたサイボーグ兵のこった」

「先天的に？　——そうか。拒否反応やら、か」

ゲイルの台詞に、タカトはフムと頷く。

同時、思い当たる者達が居た。アースラに居るN2Rの面々である。

彼女達の骨格フレームをタカトは水迅で切り断った事があった。

確かに、彼女達は魔力を使用せずに魔法じみた戦闘を行っていたが。

「……なる程、な」

合点がいき、タカトはフムフムと頷く。

しかし、第1世代と第2世代の違いがよく分からない。  
ISとやらと言い、性別の違い以外では大した違いは見受けられないのだが。

「……で？ 第2世代の意味は？」

「あん？ てか、お前。さっきからなんか、根掘り葉掘り——」

「くっ……！ ここまで俺を追いつめた第2世代戦闘機人の事を死ぬ前に一度聞きたいモノだが……」

「し、仕方ねえなあ……」

タカトの台詞にゲイルはまんざらでも無い笑いを浮かべる。

……普通ならば、ここでタカトの様子がおかしいと気付くのであるが。

悲しいかな、ゲイルは超が付く程のお調子者であった。

「戦闘機人、てのはさっきも言った通り。先天的に遺伝子を弄られて作られる。——だが、これだと。どうしても一体一体作るのに、時間が掛かる。大量生産にそもそも向いてねえんだ。……だが」

「……だが？」

ゲイルの台詞に、タカトが首を傾げながら言葉を重ねる。

ゲイルは、ニタツと笑い続けた。

「ストラの指導者。ベナレス・龍は”後天的”に遺伝子配列を弄り、戦闘機人を生み出すシステムを確立させたんだよ。これなら生まれてすぐなんかじゃなく、処置をうけりゃあ誰でも戦闘機人になれる。つまり大量生産可能、て訳だ」

「後天的に？ ——いや、そうか」

いかにして、後天的に遺伝子进行操作する術があるか、タカトはそ

れに即座に思いついた。

それは、グノーシスで封印指定に処された二つの技術であった。分子レベルでの遺伝子操作を可能とする技術。極端に倫理感を問われる技術の為に、封印された技術であった。その名を――。

「ナノ・テクノロジー……」

「お？ 何でお前がそれ知ってんだ……？」

ゲイルが不思議そうに、タカトに尋ねるが。それに、タカトは肩を竦めた。めり込まされた地面から、身体を引き抜き立ち上がる。

「――成る程な。いや、期せずして面白い話を聞いた。感謝しよう、ゲイル・ザ・ファントム」

「お、おう」

「礼として、だが――」

そこでタカトはにっこりと笑った。

ゲイルは何故かその笑いに、不気味な予感を覚える。

まるで、巨大な台風に一人立たされているような。そんな予感を。

「お前の能力の弱点、及び破り方について教示してやろう。ついでに精一杯”手加減”してやる」

「は……？」

一瞬、何を言われているか分からずにゲイルの目が点になる。

しかし、その言葉の意味を理解しだすと、血管が破れんばかりに顔を怒りに染めた。

「てめえ……！」

「行くぞ？ 構えろ」

優しく言うなり、タカトは再びゲイルの懷に、刹那で飛び込んだ。持ち上げ、振り上げるのは右の拳。

馬鹿が！

内心タカトを悪し様に罵倒し、ポイント・アクションを発動。自分と周囲の空間を遮断する。

これで、自分はもはや鉄壁となった。  
どんな攻撃も通じない――。

「天破疾風」

一撃！――

直後、遮断された空間がパリンと言う”可愛い音をたてて割れた”。

暴風を詰め込んだ拳はそのまま、ゲイルの鳩尾に突き刺さる！

「が、ぎ、ぐ、げ……」

「ご？」

鳩尾にまともに刺さった拳にゲイルが奇妙な悲鳴を上げる。

タカトはそれを楽しそうに続けた。

「――空間に対するエネルギー理論、と言うモノがあるのを知ってるか？」

「が、があ！」

一轟！一

空間衝撃砲を即座に展開。何やら言ってくるタカトに対して撃ち放つ。

だが、タカトはひょいとそれをあっさり避した。

「難しい理論になるが——そうだな。簡単に言うと、空間や次元と言った概念は。その許容量を越えたエネルギーを注ぎ込むと、簡単に砕けると言う理論な訳だがな。——空間のスペースやら、次元の高低差によって必要とされるエネルギー量が決まるから一概にどれ程のエネルギーがいるかは決められん訳だが——」

一撃一

一撃一

一撃一

一撃！一

放つ、放つ、放ち続ける！

ゲイルは空間衝撃砲を撃ち続ける！

しかし、タカトは軽いステップを踏むだけ。

それだけで全ての衝撃砲を避してのけた。

狂ったように放たれる衝撃砲をタカトはひょいひょいと避け続ける。

「——と、まあ。簡単に纏めるとそんな理屈な訳だ。ぶっちゃけると、極大エネルギーを瞬時に開放すると。任意の空間を打ち破れる訳だな。さて、理解出来——」

「がああああああああ————！」

「——る、状況じゃ無いか」

苦笑する。

どうにも自分は、理論とかそう言ったのを説明し出すと止まらなくなるらしい。

シオン辺りが何度も呆れていた事を思い出す。  
更に放たれた衝撃砲をあっさりと避け。

「があっ！」

咆哮一声。

右の掌を突き出す。

同時に、タカトの動きがピタリと止まった。

「……空間束縛、か」

「へえっへへへ……。捕まえたぜ。うろちよろ逃げ回りやがって。これでもう——」

「む、ん！」

——轟！——

魔力放出。

魔法を介さず魔力を噴射するスキルである。



タカトはそれを無造作に放ち、直後。

一破一

空間束縛が、あっさりと弾け飛んだ。

固定化した空間が許容量を越えるエネルギー。つまり、魔力を注ぎ込まれる事により。あっさりと砕け散ったのであった。

平然とそれを行ったタカトを見て、ゲイルは呆然とする。

俺が戦っているのは本当に人間。――いや、生物なのか？

そんな、そんな思考に捕われたからだ。

空間遮断をあっさりとブチ抜き。空間束縛を弾き飛ばす。

そんな真似をやらかしたタカトに、心底恐怖を覚えたのであった。

「さて、と」

「ひっ！」

やたらと緊張感の無い声を出しながらタカトはゲイルを見据える。  
ゆっくりと歩き出した。

「あ、あ、あ……」

「ジっとしてろよ？ 何、すぐ済む。手加減はきっちりするしな。」

……針億本は俺も怖いし」

意味不明な事を呟きながら歩いて来る。

そんなタカトが、ゲイルは怖くて怖くて、仕方が無かった。

本当に、自分と同じ人間なのか分からなくて。

本当に、自分と同じ生物なのか分からなくて。

だから。

「ああああああああああああああああああああああ……っ！」

近寄るタカトに、錯乱したゲイルは再び衝撃砲を撃ち込む。  
ただ怖くて。ただただ怖くて！

幾度と無く撃ち込まれた衝撃砲。その中でも一際巨大で。威力のある一撃である。

人間がまともに受ければ、挽き肉になるだろう。  
そんな一撃を前に、タカトは。

ひゅっ。と、息を吸い込んだ。

「喝アッ！」

轟咆一閃！

タカトは迫り来る衝撃砲に咆哮しただけである。  
だが、それだけで。それだけで。

衝撃砲は跡形も無く吹き飛んだ。

「あ……」

自分の渾身の一撃。その結末に、ゲイルはただただ呆然となるしか無かった。

そうでなければ、笑い出していたか。

どうやれば、兵器である衝撃砲を、咆哮だけで消し去れると言うのか。

「さて、……手品はこれで終わりか？」

何も無かったかのように、タカトは笑う。

自分のISを手品扱い。しかし、ゲイルはそれを怒る気にもならなかった。

手品扱いにしよう。

この男と自分はあまりにも次元が違い過ぎた。

ただ、それだけの事。

呆然とするゲイルに、タカトはフムと頷く。

そして、右手を伸ばした。

「終わりのようだな。では、暫く寝てろ」

直後。

頭に衝撃が走った感覚を残して、ゲイルの意識は闇に飲まれた。

（中編2に続く）

第四十三話「幸せにしてあげる」(中編1)(後書き)

——はい♪ 中編1。終了です♪

タカトやらクロノがエライ事になってますが(笑)

まあ、こう言った連中ですんで(笑)

ちなみに空間に対するエネルギー理論はテストメントが勝手に考えた代物です(笑)

実際にあるかどうか分かりませんので、EX理論と同じくStS, EXオリジナル理論なので適当に考えて貰えると幸いです(笑)

いや、深く考えると楽し過ぎて執筆作業が遅れると言う事実が判明したので(笑)

ではでは♪ 中編2でまたお会いしましょう♪

ではでは〜♪

第四十三話「幸せにしてあげる」(中編2)(前書き)

……ふい。漸くお届け出来ます！

中編2です♪

いや、苦戦しました(汗)

奴のまともな所が久しぶり過ぎて……。

一ヶ月近く書いてなかったもんなー(汗)

ではでは♪ どうぞー♪

## 第四十三話「幸せにしてあげる」（中編2）

次元航行艦『シュバイン』ブリッジ。

そこでは、提督であるビスマルクが酷く震えていた。

何故か？ 答えはモニターに映る青年にある。

つまり、クロノ・ハラオウンに。

……何だ……。なんなんだ、さっきの魔法は！？

これが、ブリッジ一同の偽らざる心境であった。

総数約百体。

それが、先の凍結魔法によって消えた。ガジェット・因子兵の被害総数であった。

あまりにも馬鹿げた一撃である。

何せ、空間ごと凍結。そのまま、消滅させられたのだから。

あれが、もし。艦隊に放たれたなら。

そう思うだけで、ビスマルクは震えたのだ。

実際、クロノは人に向けて。この魔法を使用はしないだろうが。

そんなもの。ビスマルクには関係が無かった。

「て、提督……」

「……奴を潰せ……！」

低い声が響く。

それに管制官が振り向くと、ビスマルクは恐怖に固まった顔で大声を張り上げた。

「奴を、クロノ・ハラオウンを潰せ！ 展開した機動戦力を全て奴に向ける！」

「い、いえ。それでは艦の直援が――」

「貴様！ 私に意見するか！？ 先程の一撃を貴様達も見ただろう！ あんな……。あんなものを艦に直接撃ち込まれたらどうする気だ！？」

もはや、悲鳴のようにビスマルクは叫ぶ。

出来れば逃げ出したい。が、この艦に”アレ”が居る限り、それは叶わぬ願いであろう。

そんな真似をすれば処理されるだけだ。

引く事は叶わない。ならば前進するしか無い。

脅迫観念にも似たモノに突き動かされ、ビスマルクは吠えた。

「いいからやれ！ これは命令だ！」

「……はい……」

鈍い諦観に包まれながら、管制官はガジェット・因子兵に指示を出す。

二つのヒトガタ兵は、迷う事無く艦の周囲を離れクロノ達へと向かう。

先程より、さらに多い。150体程のヒトガタ達は一気にクロノ達に襲い掛かる。

クロノ・エリオのコンビは迎撃を開始。

先に艦の兵装を撃ち抜いたディエチの援護と共に。ヒトガタ達を墜としていく。

しかし、数が数なのか彼等は後退し始めた。

「は、ははははは！ さっきの魔法はどうやら、もう使えんらしいな！」

クロノ達の様子に、ビスマルクは笑いを上げる。

さっきの怯えも何処へやら。モニターを見ながらニタリと口元を歪める。

「ここまで私を虚仮こけにしたのだ……！ 相応の礼を払ってもらうぞ。小娘達が！ アースラの特定を急げ！」

「了解です」

管制官もすぐに返事。……若干の軽蔑も入っていたが。に、ビスマルクは笑う。

どうしてくれようか……！ あの小娘どもが……！

そう思い、アースラ艦長である。はやて達をどのような目に合わせようか考えて。ビスマルクがだらし無く笑う。

……それは、女性陣が見たならば嫌悪と軽蔑の気持ちを抱いたであらう笑みであった。

幸い、ブリッジには女性はい誰も居なかったが。

「……？ これは……？」

突如、再び管制官より疑念の声が響いた。それにビスマルクはまたかと、眉を潜める。



「何だ！ 今度は何が――」

「岩塊、です。距離ほぼ0……。艦の真後ろに。” さっきと同じような岩塊が” ……」

ビスマルクは管制から引き攣った声で告げられる報告に、声を失う。

さっきと同じ？ それは、つまり。つまり――。

「え、映像。来ます……」

モニターが切り替わる。

そこにあるのは当然、岩塊などでは無い。

三つの人影がそこには在った。

一人は赤の髪の少女。紺色を基調としたバリア・ジャケットに身を包み。右手にはガンナックル。両足にはジェットエッジの各固有武装を持つN2R3。

ノーヴェ・ナカジマ。

一人は薄い紫がかかった髪の少女。白を基調としたバリア・ジャケットに身を包み。右手にリボルバーナックル。両足にマッハ・キヤリバーを装備する。スターズ3。

スバル・ナカジマ。

そして、もう一人は銀の髪の少年。既にカリバー・フォームとなった。そのバリア・ジャケットは金色。背には六枚の剣翼が展開し。手に持つU・Aデバイスは、精霊剣。イクス・カリバーン。セイヴァー。囑託魔導師。

神庭シオン。

その三人が、艦の後ろ。フィールドを挟んだ、ほぼ0距離に居た。中央の少年。シオンが笑い、口を開いた。その口は、確かにこう言った。

遅まきながら、騎兵隊の到着だぜ？ と――。

艦の直援すらも前線に出した、シュバインを始めとした次元航行艦隊は丸裸。

シオン達を止めるモノはフィールドしか無い。

これが、アースラが立てた強襲作戦の最終段階であった。

陽動作戦を含めた強襲戦。

後は、フィールドを破り。次元航行艦隊内部へ突入。

”無血”にて、次元航行艦隊を占拠する。

アースラの真なる目的はそこにあつたのである。

ディエチの砲も。クロノの殲滅魔法も。後の後退ですらもが、全てその伏線。

強襲作戦最終段階。フェイズ3。

艦内へ、突入する――。



《よし。上手く行ったな》

目の前の次元航行艦を見ながら、シオンは笑う。

上手く、接近出来たと。  
それに、両隣の二人も頷いた。

《結構あっさりで行ったよね》  
《っつか。あいつ等、バカか？ 直援、全部連れて行くかよ。普通……》

スバルが朗らかに笑い、ノーヴェがあからさまに馬鹿にしたような瞳を目の前の次元航行艦に向けた。  
その台詞に、シオンも苦笑する。

《クロノ提督の魔法が、な》  
《うん……。そうだね》  
《ま、まあな……》

一同、先のコキュートスを思い出して顔を引き攣らせる。  
あの時。ちょうどシオン達は魔力反応で、ストラ側に悟られぬように。後側から、慣性飛行で次元航行艦隊に向かっていた。  
つまり、迫り来るコキュートスを真っ正面から見た訳だ。

想像して欲しい。空間を凍結させるような氷結魔法が、真っ正面から迫って来ていたのだ。

三人共、全力で逃げ出したかったのは言うまでも無い。

作戦上、そう言う訳にもいかなかったのだが。

《……あれは、怖えよ》  
《……だね》  
《……ああ》

三人揃って、うんうんと頷き合う。

……今回の件で、当分。氷は見たく無いと思う三人であった。

《……っ！ ……ちょ、……っ！ ちょっとアンタ等三人……！  
何、敵艦前で暢気に頷き合ってたのよ……！》

そんな風に頷き合っていると、三人の中央にウィンドウが展開。  
息も絶え絶えなティアナの顔が現れる。

シルエットを漸く全部解いたとは言え、その魔力消費は激しかったのだろう。

息を荒げながら三人を睨んでいた。

《ティアナか。シルエットの維持、お疲れさん。……で、突入はいつでも？》

《ティア。お疲れ様……やっぱ、ティアは凄いよ》

《ま、あたし達に勝ったんだ。これくらいやって貰わねえとな》

ウィンドウに映るティアナに、シオンは劳いの声を上げながら問い。スバルやノーヴェも続く。それにティアナは嘆息。

三人に今更緊張感を持つと言うのも馬鹿らしい。

「ありがと」と、だけ返し。ウィンドウに、データーを表示させた。

《敵、機動部隊の航行艦隊からの引き離しには成功したわ。後はアンタ達次第。……作戦を確認するわよ？ 三人は、敵フィールドを破ってそれぞれ艦内に突入。一気にブリッジまで突っ込んで占拠して》

ティアナから告げられる作戦にそれぞれ頷く。

酷く単純な作戦だが、それ故にこの三人にはピッタリな作戦とも

言えた。

三人の反応に、ウィンドウの向こうでティアナも頷く。

《それじゃあ、私とキャラはクロノ提督とエリオの援護に行くわ》  
《おう。……結構魔力使ってた。無理だけは、すんなよ？》

息は整い始めているが、それはⅡ魔力が回復した事にはならない。  
シオンの台詞に、ティアナはキョトンとなり。少しの間を持って  
微笑した。

《な〜くに？ 心配してくれてんの？》

《て、お前ね。人が折角――》

《大丈夫よ。……ありがと》

シオンに最後まで言わず、ティアナはそれだけ告げると念話を  
切った。

有無を言わさぬ早業である。

言葉の出し所を見失い、ついでに不意を突いた礼にシオンは少し  
呻く。

そんなシオンの肩を、スバルが叩いた。

《ほら、シオン。早く突入しよう》

《お、おう。てか、そんなに急がんでもよ……》

《……いや、案外急いだ方が良くねーか？》

ノーヴェの台詞にシオンは、は？ と疑問符を浮かべる。  
すると、ノーヴェはウィンドウを新しく展開。

シオンに見せた。

《どうやら気付かれたみたいだな。向こうのガジェットもどきやら

が戻って来てる》

《うげ……》

確かに、数体の動体反応が伸びた前線より戻って来ていた。  
それを見たシオンが呻き声を上げる。

《ほらね？ 急いだ方がいいよ。シオン》

《確かに》

スバルに苦笑を返しながらシオンは頷く。  
そして前。三隻の次元航行艦に向き直った。

《さて、んじゃあ邪魔なフィールド。ブチ貫きますか》

《おう。……で、どうすんだよ？ 航行艦レベルのフィールドだけ  
ど……》

カリバーンを前方へと差し向けたシオンにノーヴェが疑問符を浮かべる。

次元航行艦のフィールドは、およそSS相当レベルとされている。  
面積の都合上、もっと高いかもしれない。

スバルや、ノーヴェも航行艦レベルのフィールドを砕くには当然、  
時間がかかる。

故に、どうするかをシオンに聞いたのだ。

だが、シオンはその台詞に、ニヤリと笑った。

《何の為に、初っ端からカリバー・フォームになってると思っ  
た？》

《は……？》

シオンの台詞に、思わず問い返す。

それに変わらず笑いを浮かべたまま、シオンは左手の親指を口元に持って来て、皮膚を噛んだ。  
血が、しとどに溢れる。

《さーて。リンカー・コアも完全復活したんだ……。盛大に行くとしようか！ イクス！》

【派手好きめ。了解。

イクスカリバー。

フル・バレル  
全兵装

フル・オーブン  
全開放

オーバー・ドライブ  
凌駕駆動

スタート  
開始する】

イクスの呆れたような声に乗り、シオンが虚空に血で文字を刻んだ。

最初に火、次に水、風と続き。最後に雷の文字で結ぶ。

それが示すのは、文字召喚による。契約精霊の全召喚であった。

全ての血文字を描き終わり、シオンは叫ぶ！

《来いよ……！ イフリート！ ウンディーネ！ ジン！ ヴォルト！》

虚空に響く念の叫び。それに応えるようにして、炎が立ち上り。

水が対流するかのようにして顕れ。風が吹きすさび。雷が疾る。

刹那に、それらは形を持って世界に顕現した。

シオンの契約精霊達。その全てが。

顕れた精霊にシオンは感謝の念を込めて微笑む。

各精霊達は、それに頷くかのように動いた。

シオンはそれを見遣りながらカリバーンを振り上げる。

《久しぶりに行くぜ……！ 双重精霊装填×2！》

【適当に言うな！ デュアル・スピリット・ローディング！】

イクスがツツコミを放ちながらもシオンの令に従う。

まず、イフリートとウンディーネが装填され。その後に、ジンとヴォルトが装填された。

カリバーンが、四柱の精霊を装填され。金色に光り輝く。

《ふあゝゝ。シオンのそれ、久しぶりに見たよ……。綺麗だよね》

《あたしは始めてだな。で？ そっからどうすんだ？》

スバルとノーヴェが輝くカリバーンに魅入られながらもシオンへと問う。

シオンは、それに笑いながらイクスを背に振り上げた。

《言っただろ？ 盛大に行くってよ。イクス、全合神剣技。行くぜ？》

【……一撃で三艦共。フィールドを貫け。それが条件だ】

イクスが呆れたような声で告げる。

シオンは再度苦笑。『了解』と頷いた。

《んじゃ、一丁行ってみようか！ 四神合神剣技――》

カリバーンを背にやる形で振り上げる。

そのまま、シオンは一步を虚空に対し踏み込んだ。

一気に振り放つ！

《麒麟っ！！》



【オーバー・バースト】

一煌一

音は無かった。

ただただ、輝きだけが虚空を照らす。

朱雀、白虎、玄武、青龍。

四神全ての奥義が合わさり、そして。”ソレ”は生まれた。

スバルが、ノーヴェが最初に見たのは巨大な鱗であった。

は？ と疑問符を浮かべる二人に構わず。ソレはゆっくりと動き始めた。

暫くして、漸く二人は気付く。

自分達が、恐ろしく巨大な何かに囲まれている事に。

《これ……！ え、ええ……！？》

《……マジか……》

スバルが驚きの念を上げ、ノーヴェが呆れたように笑う。

二人を囲んでいるのは、とぐろを巻いた。巨大な身体であった。

見れば、頭上。その先端に頭があった。

黄金の巨龍。

その化身こそが、<sup>アヴァター</sup>麒麟と呼ばれる存在、そのものであったのだ。

威力ランクにしてSSS。

これこそが、現在のシオンが放てる最大威力の技の名であった。

《よし。発動成功、と。訓練でも出した事無かったから、出来るかどうかと不安だったけど。……問題無しだな》

【……いい加減。ぶっつけ本場は勘弁して欲しいがな】

麒麟がとぐろを巻く真ん中。

そこにシオンは居た。相も変わらないシオンの行動に、イクスが嘆息する。

《まあ、そう言うなって。これを訓練室で使う訳にもいかねえだろ？》

【それは、そうだが】

シオンの反論に、イクスはしぶしぶと言った念話を返す。  
心配性めとシオンは笑いを返す。

そして、前方。航行艦隊に視線を戻した。

見れば、三隻の艦はそれぞれ逃げるように移動を始めていたが。

シオン達がここに到達した時点で全てが遅い。

シオンは左手を頭上に掲げ、一気に振り下ろす。

同時、麒麟がその巨大な身体をくねらせた。

《もう、遅いんだよ……！ 行け！》

【ゴー・アヘッド！】

一轟一

シオンの叫びに応えるかのように、麒麟が飛び出す。  
迷い無く、航行艦隊へと轟速で向かい。

フィールドに対して巨大な顎を開く！

まるで、航行艦を喰らわんとするかのように。麒麟の牙がフィールドを上下から挟み。刹那の抵抗も許さずかみ砕いた。

だが、航行艦をそのまま喰らうような真似はせず、左の艦へと首を巡らせる。

身体をくねらせ。そちらのフィールドにも牙を突き立て、あっさりと破壊した。

当然、後一艦を残す筈も無く。先と同じようにフィールドに噛み付き。あっさりと破壊する。

まるで、風船を割るかのように航行艦レベルのフィールドを碎いた麒麟に、スバル、ノーヴェ。共に呆然となる。

シオンは二人に構わず、振り下ろしたカリバーンを持ち上げた。

《……この辺でいいだろ。イクス》

【ああ、術式を凍結。破棄する】

シオンの念話に、イクスが応える。すると、麒麟の姿がスウッと薄くなり、やがて消えた。

それを確認して、シオンがノーマル・フォームへと戻る。

《よし。んじゃ、二人共。行くぞ！》

《え？ あ、うん！》

《お、おう！》

麒麟の出鱈目さに呆然となっていた二人が、シオンの念話に我に帰る。

フィールドは破ったのだ。後は、突っ込むだけである。

スバルはウイング・ロードを発動。ノーヴェもエア・ライナーを

形成する。

蒼と赤の道は、左右の艦に突き進み。到達した。

《うん。準備完了だよ》

《こっちも完了だ》

《おう》

二人の返事にシオンは頷くと、振り返り。二人に向き直った。

《……機動戦力をヒトガタに頼ってるような連中だから問題ねえとは思うけど。多分魔導士は残ってる。……気をつけろよ?》

《うん! 大丈夫だよ》

《インドアなら、そうそう心配ねえよ》

シオンの念話に、スバルは素直に頷き。ノーヴェは不敵な笑いを浮かべる。

二人の返事に、シオンも頷く。

そのまま、三人は航行艦隊へと目を向けた。

《よっし。んじゃあ、強襲作戦のトリ! しっかり終わらせようぜ!》

《うん!》

《おう!》

一轟一

吠え。一気に飛び出す。

シオンは真ん中、スバルは右。ノーヴェは左の艦に向かう。大した距離でも無く、即座に到達した。

《神覇・壱ノ太刀――》  
《《リボルバー――》》

暢気に入口を探すなんて真似を三人はしない。  
眼前に迫る艦の装甲に、それぞれの相棒を振りかぶる！

《絶影！》  
《キャノン！》  
《スパイク！》

一撃！一

咆哮と共に放たれた一撃達が、艦の装甲をブチ抜き。勢いのままに、三人は艦内に突入する。

シオンは、通路のような場所にいきなり出ると同時。その場に居た武装隊のバリア・ジャケットを着た三人を視界に納める。  
壁をブチ抜いて現れたシオンに目を丸くする武装隊であるが、シオンは構わない。  
床に着地しながら、イクスを振りかぶる！

「神覇参ノ太刀！ 双牙！」

一轟一

気合いの一声と共に、イクスを放つとそこを中心として床に魔力が走る。

その技は、地面を走る斬撃であった。  
未だに啞然となったままの魔導士に床を削りながら襲い掛かる！

一撃一

双牙は、三人の身体に叩き付けられ非殺傷設定故か、衝撃のみを叩きつける。

だが、衝撃だけとは言え。その一撃は三人の意識を刈り取るのに充分な威力がある。

三人はまるで、枯れ葉のように吹き飛び。もんどり打って倒れた。

「……なんて言うか。ご愁傷様……」

【ぶっ飛ばした本人が言う台詞では無いな。それは】

苦笑混じりのイクスの台詞に、シオンは五月蠅いよと応える。  
そして、通路を真っ直ぐに見据えた。

「んじゃあ、ブリッジに突入と行こうか」

【道に迷うなよ？ お前は他にも方向音痴のきらいがあるしな】  
「やかましいわい」

心当たりが有りすぎるイクスの台詞にツツコミを入れつつ、シオンは走り出した。

この艦に、どんな存在が居るのかも知らずに――。

強襲作戦は、これより最終フェイズ。ブリッジの占拠へと移行する。



所変わり、首都メツテ。

街路の真ん中で昏倒した、敵――。ゲイルをタカトは見下ろす。頭に魔力を直接撃ち込み、脳震盪を起こした訳だが。

戦闘機人は、身体に機械をインプラントして改造されているらしい。

それ故に、脳震盪で意識を刈り取れたか分からなかったのだ。……意識があれば、水迅で骨格フレームを断ち切るだけだが。

「……ふむ。大丈夫そうだな」

暫くゲイルを観察していたが、問題無く意識を失っている。どうやら、戦闘機人とは言えど。脳震盪はきっちり起きるらしい。ふむふむと頷き。タカトはゲイルに背を向け、歩き出した。

「さて、こんな所か。なのはと合流して――」

余裕の表情で歩き、縮地を使おうとした、瞬間。

――ズグン――

そんな、そんな音をタカトは確かに聞いた。

「な、に……？」

呆然と目を見開く、まるで信じられ無いモノを聞いたように。

――ズグン――

再び鳴る、心音にも似た音。

それは、他でも無い。”タカトの内側”から響いていた。

そして、ちぎれるような痛みがタカトの内側を迸る！

「――っ！　　があああああああっ！！！」

自分が悲鳴を上げている、と気付いたのは。片膝をついて跪いた後だった。

視界がところどころ暗くなる。――あまりの苦痛に、一部の神経がシャットダウンしたのだ。

胸を必死にかき抱く。

しかし、それに意味は無い。

苦痛の根源は、” 肉体では無い ” のだから。

「ぐ……う、……ぐ」

ガチガチと、奥歯が鳴る。身体全体が、異常な程に震えていた。

街路にうずくまり、震え続けるタカトは、しかし。

笑っていた。

痛みに震えながら真っ青となった顔に、笑みが張り付く。それは、嘲りの笑み。

” 自分自身 ” を、タカトは嘲笑していた。

分かっていた事だ。

タカトは朦朧とする意識で、呟く。

……そう、分かっていた事なのだ。



”EX化”を行使し続けられ、こうなる事は。

この痛みは、十年前に受けたモノと全く同質の痛みであったから。

「……”傷”、か……」

震える唇で、苦笑する。

それは、EXと言う存在であるならば、決して逃れられないモノであった。

だが、その単語が示すのは身体の傷では無い。  
精神こころの傷ですら無かった。

その単語が示すものは、より根源の傷。

他でも無い。タカトがタカトたらしめるものが傷を負っていたのだ。

それは――。

「……ふ。ははは……」

笑う、笑う、笑う。

震えながらタカトは笑い立ち上がった。

そう、分かっていた事なのだ。それはつまり、覚悟が出来ていたと言う事に他ならない。

そう、全ては今更の事なのだから。

やがて、ふらつく身体で歩き始めた。

「……」

タカトは未だ己を激しく蝕む苦痛を、自身に全て押し込める。

これも、慣れた行為であった。

自分と身体とを、切り離せばいい。

遠くから自分を見るような感覚をタカトは強く幻視する。

その、遠くから見ている自分がホントウの自分で、この身体を動かしているのはニセモノの自分。

痛みは変わらなくても、少しはマシな気分にはなれる。

どうせ、自分にとって身体なんて。

——『魂』さえも——道具に過ぎない。

「……なのはと、合流、せんとな……」

歩く足に、全力を込める。そうしなければ、また崩れてしまいそうだった。

まだ、身体は動いてくれる。なら、問題無い。

笑いながら、歩く。酷く、弱々しい足取りで。

やがて、タカトは縮地を発動。

その姿は、戦場となった街路から消えた。



ここは——？

暗い、暗い闇に堕ちて行く。

彼女は、高町なのはは再びそんな感覚を得ていた。

それは、朝見た夢と同じであった、と。

そこで、なのはは気付いた。

そう、あの夢である。何で忘れていたのか。

「やっぱり夢だから、覚えて無かったのかな？　——あれ？」

つつい、呟いた言葉が”声”として現れた事に、なのはは驚く。

まさか、喋れるとは思わなかったのだ。

夢で話せて、それを不思議に思うなんて。

我が事ながら、とても間の抜けた事を思ってるなど、苦笑する。

そして、頭上——。堕ちている方向に目を向けた。

「前は、いきなり声が聞こえたんだっけ……」

朝方見た夢では、声が突如として響いたのだ。

頭に、直接響くような声であり。酷く頭痛を伴って聞こえていた訳だが。

「あれ？　あの声、なんて言ったんだっけ？」

思わず疑問符を浮かべる。

つい、忘れてしまったのだ。

何か、大事な事だったような気がするのに——。

「EXシステムに関する事だよ」

「あ、そうそう。確か、そんな——」

響く声に、同意しようとして。

だが、自分と違う声がしたと言う事に、なのはは凍り付く。

この、声はー？

「大丈夫。検閲で見れなくなってたけど。あれは貴女の知識にもうなってるから。……暫くしたらちゃんと、分かるよ」

響く、響く声。

それは、背後から聞こえていた。

と、そこで既に、自分は堕ちていない事に気付いた。  
闇に浮かぶようにして、なのはは止まっていた。

「……ここは、私と貴女のラインで繋がった意識野。厳密には違うけど、ココロの世界みたいなものかな？」

「ココロの世界？」

響く声に、なのはは目を丸くする。

ココロの世界と言う割りには真っ暗なのだが。

まさか、こんな闇が自分の世界なのか。

なのはがそんな疑問を抱いていると。

苦笑が響いた。

「……だから厳密には違うんだってば。確立した世界じゃないから真っ暗なんだよ」

「そ、そうなの？」

「うん」

返って来た声に、ホッとする。

この真っ暗な場所が自分のココロでは無い事に、安心したのだ。  
いくら何でも、一面闇の世界が自分のココロだとは思いたく無い。

そんな、なのはの様子にクスクスと笑い声が響いた。

「笑ってゴメンね。貴女の様子がちょっと楽しくて」

「う、うん。全然大丈夫だよ？」

「そう？　ならよかった。」アリサ”に聞いた通りだね。貴女は」  
「っー！？」

いきなり出た名前に、なのはは目を見開く。

それは、彼女の親友の名前であつたから。

……タカトに刻印を刻まれ、意識を奪われた親友の――。

「貴女、は――」

「ストップ。……ゴメンね。私の名前は明かせないんだ。言っちゃつたら、多分■■■■が気付くから。そしたら、このラインも切られちゃうからね」

最後まで言わずに、声は響く。

それに、なのはは暫く迷い。ややあつて頷いた。

「分かってくれて、ありがとう。……今回、貴女をまた呼んだのは理由があるんだ」

「……理由？」

なのはの返答に、うんと声が返って来る。

そのまま声は続けた。

「単刀直入に言うよ。■■■■をこれ以上、戦わせないで」

「え……？　だ、誰？」

誰かの名前を呼んだのだろう。しかし、その部分だけが上手く聞

き取れなかった。

「……自分の名前も検閲対象にするなんてね。徹底し過ぎなのよ、あのバカは」

「……え、えっと」

「あ、ゴメンゴメン。置いてきばりにしちゃったね。えーと、……666。うん、これなら大丈夫」

「666？ ■■■君？」

と。その名を口にして、なのはは目を見開き口許を押さえた。彼の名前。タカトが呼べない。

それで、検閲の意味を、なのはは漸く理解した。つまりは——。

「その単語だけ、聞こえ無くなるの？」

「そう言う事だね。——話を戻していいかな？」

「あ、うん」

問う声に、なのはは頷く。

それに、『ゴメンね』と再度の謝罪が響き、声は続きを話す。

「さっきも言った通り、666をもう戦わせ無いで欲しいの。あいつはEX化を短期間で二回も使っちゃってる。——もう、アイツの

■は限界なの」

「え、えっと……」

「ゴメン。今は黙って聞いて。後で分かるようになるから」

声は、なのはの戸惑いを遮る。後で分かるようになるとは、どう言う意味なのか？

聞いたかったが、声が何かを焦っている事に気付き。なのはは、

頷きだけを返した。

「ゴメンね、ありがとう。――話を続けるね。アイツの■は■を負ってしまってる。これ以上■が進むと、本当に取り返しのつかない事に成り兼ねないの。――このままじゃあ、きっとアイツは……」

破滅、しちゃう。

たった一言の単語。それは、なのはの心に刃のように突き立った。

破滅とは、どう言う意味なのか？

「アイツ。今、幸せが分からない。て、言ってるでしょ？ アレ、嘘じゃないの。666は”本当の意味”で幸せが分からないの」

「本当の、意味で……？」

声の内容を繰り返す。

それはどう言う意味なのか。

声は続ける。

「……■を負おうとね。■を失うの。まるでヒトである事を、無くしてしまうように。……アイツは幸せ、と言う■を失ってしまう」

それは、それは、それは。それは！

声が告げる内容に、なのはは震えていた。

……ヒトである事を無くす、と言う言葉が酷く生々しく響いたから。

それを知るのが、怖いと思ってしまったから。

声は続ける。

「それが進むと、アイツの■は破滅を向かえてしまうの！ ……アイツの存在が”終わってしまう”！」

「終わっ、て……？」

何を言ってるか分からない。

でも、それは絶対に知らなくてはいけないような気がした。知らなくては、後悔すると。

そう、なのはの直感が告げる。

そして、声が続きの言葉を紡ごうとした。瞬間。

なのはの身体が、急に浮上しだした。

「……っ！ 時間、だね」

「ま、待って！ まだ！」

思わず手を伸ばす。その時に至り、漸く。なのはは声の正体を見た。

それは、紫の髪の女性であった。

長い髪は、腰の辺りまで伸びている。

その、女性は――。

「大丈夫。最初の時に、全部貴女には知識を送ってあるから。すぐに分かるようになるよ」

「で、でも……！」



浮上しながら、なのはは叫ぶ。それに彼女は微笑した。

「悔しいけど。多分、貴女しかアイツは救えないと思うの。——私じゃ、アイツを救ってあげられなかった」

「っ……」ルシアちゃん！」

思わず、なのはは彼女の名を叫んだ。

何故か、彼女がそうだと。

なのはには分かったのだ。

それは、最初の夢で。彼女の幼少期の姿を見た為なのか。

声の女性は。——ルシア・ラージネスは、なのはの声に目を軽く見開き、しかし。優しく微笑んだ。

「なのは」。アイツを、お願い」

それだけ、それだけをルシアは、なのはに告げる。

直後、なのはの意識は完全に覚めた。

（後編に続く）

第四十三話「幸せにしてあげる」(中編2)(後書き)

はい♪ またもや、いい所で中編2終わりです♪

奴の戦闘シーン。始まったばかりじゃねえかと(笑)

……はい、全く持ってその通りです(汗)

……うみゅう、展開が遅い(汗)

タカ×なの組の強襲戦は、次で終わりです。

……アース組は……。

後、一話追加かな(汗)

展開遅くて、本当ゴメンなさい(汗)

ではでは、後編でお会いしましょう♪

ではでは〜♪

第四十三話「幸せにしてあげる」(後編1) (前書き)

ども〜。

テストメントです。

最初に謝罪を一、じゃないや。二つ(汗)

ええ……。すんませんでした(汗)

まさかの、二週間の更新遅れ(汗)

いや、もう謝り倒すしかありません。

申し訳ありませんでした(汗)

そして、もう一つ。

後編を二部構成へと変えています(汗)

……一部だけじゃちよつと終わらなかつたので分割しました(汗)  
重ねて申し訳ありませんでした。

では♪ 後編1♪ どうぞ〜♪

第四十三話「幸せにしてあげる」(後編1)

「――シア、ちゃん……!」

「……なのは？」

声が聞こえる。

自分の名を呼ぶ声だ。ぶっきらぼうで、無愛想な。でも、優しい声。

「……っ。なのは。おい」

「う……」

再び聞こえる声に、高町なのはは、意識が浮上した感覚を得た。視界にこちらを覗き込む青年が映る。

伊織タカトが、真っ直ぐに自分を見つめていた。

「わ、たし――っ!」

瞬間、完全に我に帰り身体を起こす。

ナウル川堤防沿い。

その上で、なのはは寝転んでいた。

タカトが街で戦っている時に、なのははここで待っていたのだ。

そして――。

起きたなのはは、タカトは安心したように息を吐く。

「……大丈夫か？　なのは」

「——えっと。私、寝てた？」

一応、聞いてみる。まさか、タカトが戦っている最中に寝るなんて。

いくら、”アレ”とは言え、流石に不謹慎である。

だが、タカトはその問いに首を横に振った。

「いや、確かに横にはなっていたが、寝てはいなかった。目が開いていたからな。……何かをブツブツ呟いてはいたが」

「……えっと」

告げられた内容に、なのはは汗を一つかく。

……何か危ない人のような、そんな状態だったらしい。

タカトが大丈夫かと聞いた意味を、なのはは漸く理解した。そして、自分が何故、そんな状態になっていたのかも。

……ルシアちゃん。

心の中で、その名を呟く。今、なのはは朝見た夢の内容も含めて。全て夢の事を覚えていた。

……検閲された場所の意味を除いてではあるが。

「……？ どうした？ やはり何か問題でもあったか？」

「っ！ ううん！ 何でも無いよ——？」

慌てて否定する。そこで、なのはは気付いた。

タカトの顔色が悪い。それだけでは無い。

いつもは規則正しい呼吸が、少しだが乱れていた。

666の■は――。

そんなタカトの様子に。何故か、なのはは夢の事を思い出した。

「……どうしたの？ タカト君。顔色、悪いよ……？」  
「……………そうか？」

なのはの疑問に、逆にタカトは問う。  
なのはは即座に頷いた。

「顔、真っ青だし。呼吸だって……」  
「……戦いの後だからな。魔力を使い過ぎたのかもしれない」

嘘だ。

即座に気付く。

タカトには八卦太極炉がある。  
呼吸するだけで、魔力を補給出来る彼が。魔力の消費でどうにか  
なる筈が無い。

嫌な、予感がした。

「タカト、君？」

「……心配いらん。それより、航行艦の侵入だ。援軍を他の世界か  
ら呼ばれるのも厄介だ。早く行こう」

無理矢理、話を切るようにしてタカトは立ち上がると、そのま  
ま歩き出した。  
やはり変だ。

「タカト君。ちょっと待って！」

すぐに、なのはも立ち上がる。  
そして、タカトの腕を引いた。

瞬間。

タカトの体勢が、崩れた。

「っー！」

倒れ込む体勢を即座に立ち直す。

が、その顔色は先に増して悪くなっていた。

顔色が青を通り越し、真っ白に変わっている。

「タカ、ト……君……？」

「……………行くぞ」

なのはから顔を背け、再び歩き出す。

タカトの様子に呆然となっていた、なのはだが。

ハッと我に帰ると袖を掴み、引き止めた。

「タカト君、どうしたの！ 怪我でもしたの……！？」

「何でもないと言っている。——少なくとも、お前に心配されるような事じゃない」

「そんな……！？」

袖を掴むなのはの指をそっと解き、タカトは再び歩き出す。  
その歩みは、酷く弱々しく見えた。

「タカト君！」

「……………」

無言のまま、タカトは歩く。暫く立ち尽くしていた、なのはだが。今のタカトを一人にも出来ない。少走りに追い付いた。

「……本当に。大丈夫なの……？」

「しつこいな。なら、俺が怪我をしているように見えると？」

「……それは……」

言われ、タカトの全身を見る。

どこも、怪我をしていそうには見えなかった。

「でも、調子が悪いなら――」

「例えそうだとしても、だ。もう事は起こしたんだ。……今さら止められる訳が無いだろう？」

「……………」

タカトの台詞に、なのはは何も返せなかった。

既に市街で強襲戦は行っているのだ。もう、後戻りは出来ない。

言葉を失う、なのはにタカトは苦笑する。

「……本当に、俺に問題は無いんだ。それにこの世界に於けるストウ側の戦力はほぼ壊滅させた。……後は、航行艦に乗り込んで次元転移するだけなんだ。俺の心配をしてくれるなら、さっさと転移して休ませてくれ」

「……本当に、大丈夫なの？」

「ああ」



即答する。

暫く、じつとなのははタカトを見詰め。  
やがて、ゆっくりと頷いた。

「……うん、分かったよ。でも、無理は――」

「無理はするな、か？　いらん心配だな。ならばお前も約束を守れよ？」

「え？」

告げられる言葉に、面食らう。

タカトはその反応に再度苦笑。左手の小指を差し出す。

「俺は約束を守った。……お前、忘れていた訳ではないだろうな？」  
「う、ううん！　大丈夫、忘れてないよ？」

慌てて首を横に振る。

タカトは疑わしげに目を細め苦笑していたが。すぐに真顔に戻る。  
そして、前を見た。

正確にはナウル川の上に浮かぶ、次元航行艦隊達を。

「では、侵入するとするか。なのは」

スッと手を差し出す。だが、それになのはは疑問符を浮かべた。

「えっと……」

「縮地で艦のフィールド内部に直接入る。だから掴まれ。……ああ、それとバリア・ジャケットは着ておけ」

「あ、うん」

タカトの言葉に頷く。先にセットアップし、バリア・ジャケットを纏う。

そして、差し出された手を握った。

「よし。では行こう。……ああ、なのは。最初に行っておくが、  
気をつけろ」

「え？」

告げられた台詞に、なのはは疑問符を浮かべる。  
タカトはそれに苦笑した。

「後で分かる。では、行くぞ」  
「うん——」

頷いた、直後。一瞬の浮遊感をなのはは、覚え。  
……いきなり景色が一変した。

空中。”目の前にいきなり次元航行艦が映る”。  
足元が消失していた。

「ふ、ふえー！？ わ、わ！？」  
「だから、覚悟しておけと言った」

重力に捕まり。落ちそうになる、なのはをタカトが片手で引っ張り上げる。タカトの足元には、いつの間にか、空間固定による足場が作られていた。  
そこに乗せられる。

「……言った通りだったろう？」  
「……先に言ってくれたらいいのに……」

その一言に、なのはが慥然となる。  
タカトはそれに目を細めながら、前。  
航行艦に向き直った。

一步を踏み出す。

「では、さっさと中に入るとしよう」  
「どうやって？」

思わず問うてみる。

目の前にあるのは、艦の壁である。当然、出入り口などは無い。  
半ば答えは分かっているとは言え、一応は聞いてみなくてはならない。

タカトはなのはの問いに構わず、壁へと歩く。既に右手が持ち上げられていた。

その拳が纏うは暴風。

「決まっている。こうやってだ」

一撃！一

なのはが止める間も無く、暴風を詰め込んだ拳が艦壁に叩き込まれ、同時に風が解き放たれた。

一轟一

一撃は、あっさりと艦壁を破壊。  
更に放たれた風が。その奥の障壁を螺旋状にえぐり取る。

「……………やっぱり」

「どうした？　行くぞ」

その結果に、ぐったりとするなのはにタカトはやはり構わない。  
あっさりと中に入る。

どうにも、この辺は。シオンと同じくアバウトに出来ている。

流石は兄弟と言った所か。

さっさと中に入り、通路に立ったタカトをなのはも追い。中に入  
って――。

タカトの背後に、異様なモノを見た。

「なのは？　どうし――」

「タカト君！　後ろ！」

「――っ！？」

一閃――

声を遮るかのように放たれた叫びに、タカトはその場から前方に  
身を投げ出す。

直後に銀の輝きが一閃。

ぎりぎりです。

体を捻り、一回転して体勢を整え。

そして、タカトはそれを見た。

「……………何？」

「い、お、るるる……」

それは異形だった。パンパンに膨らんだ身体に爬虫類のような肌。手が四本あり、足が六本。

目は八つある。まさに、出鱈目な形をした異形。

まだ、因子に感染された異形の方がまともな形をしていただろう。何より、タカトを。なのはを驚かせたのは。

服、であった。

その異形は、服を着ていた。

”管理局本局の制服”を。

所々破れているが、間違い無く。それは本局の制服であった。

「これ、どういう——」

「……バカ、な……」

「え？」

響く声に、思わず疑問符を浮かべる。タカトが呆然と上げた声にだ。

タカトは、目を見開き。異形をただ、ただ。見詰めていた。

「……」後天的なヒトの合成獣<sup>キメラ</sup>だと……？ そんな事、出来る奴は——」

君は、何を求めて——。

タカトは忘我の中でその言葉を反芻する。

金の髪をした、少年の笑顔と共に――。

「タカト君！」

「っー！？」

――閃――

再び閃く銀光。

呆然となったタカトに、爪の一撃が放たれる。

タカトは、なのはの呼ぶ声に我に返り。爪が届く寸前で避した。

「ちい……」

眼前を通り過ぎる爪を視界の端に納めながら、そっと手の甲に手を当て押し出す。

異形は、その動作により。振り放った一撃を加速され、体勢が崩れる。

タカトは前に踏み込みながら、異形の懷に飛び込み。重心を左足に移動。

右蹴りを異形に放とうとして。

――ズグン――

再び、自身の奥底から鈍い激痛が走った。

「が、あ……っ」

最短最速の軌道を描く筈だった蹴りは放たれる事すら無く。タカトは体勢を崩し、跪く。

「タカト君!?! つー!」

タカトの様子に、なのはも血相を変える。  
すぐに援護しようとレイジング・ハートを起動して――。

「……やめろ、なのは。約束を忘れたか？」  
「つー!」

タカトから制止が掛かる。  
しゃがみ込んでいた、タカトがその体勢のまま、なのはに視線を向けていた。

なのははタカトの台詞に首を横に振る。

「そんな事言ってる場合じゃないよ! 私も戦う!」

「やめろと言っている」

「でも――」

「なのは」

静かなその声は。通路に大きく響いた。

タカトが異形を前にして、ゆっくりと立ち上がる。

視線は、なのはをただ見詰めていた。

「俺は約束を守る。お前は、約束を破る気か」

「タカ、ト……君」

ただただ見詰めるタカトの視線。

それに、なのは有無を言わず止められた。

何も言えなくなったのだ。

タカトの、目に。

そんな二人に異形は止まらない。  
なのはを見続けるタカトに背後から爪を振り下ろす！

一閃！一

放たれる殺意の一撃。しかし、それはタカトがあっさりと持ち上げた左腕に受け止められた。

「……命までは取らない、約束だからな。——だが」  
「が、がが……！」

ゆっくりとタカトは振り返る。

その瞳は、どこまでも感情を映していなかった。

「今の俺は、上手く手加減出来る自信が無い。——死ぬなよ」

そこまで言い切ると同時に、異形の爪を受け止めていた腕を主軸に半回転。

肩が異形の腹部に、そっと触れられる。

「天破紅蓮改式」

「ぐ、る——」

そんなタカトをまるで両腕で抱きしめるかのように、左右から放たれる爪。

だが、懐に入られた時点で。全てが遅い！

タカトは構わず、一撃を放つ！

「天破爆煌」



—煌—

一瞬だけ、タカトの全身が炎を纏い。

それが、肩を中心として圧縮。

押し当てられた腹に、その威力を全て解き放つ！

—爆！—

異形の腹で圧縮された炎は開放され。それは爆砕と言う形で顕現した。

火柱が、一瞬だけ通路を埋め尽くす。

もし、なのはが通路に入っていたのなら炎に巻き込まれていたであろう。

タカトと異形の中心点で発生した大爆砕に、なのはは手で顔を覆う。

火柱は異形を吹き飛ばし、壁にその身を叩き付けて消えた。

火柱が上がった場所には、タカトのみが立っていた。

タカトは爆煌を放った体勢で残心。

異形を見据え、立ち上がらない事を確認した後、漸く肩から力を抜いた。

「……っふ。……は……ぐ……」

喘ぐような呼気は、あまりにも弱々しい。

いつものタカトとは明らかに違う。

なのははすぐにタカトへと駆け寄った。

「タカト君！」

「……」

呼ぶ声にもタカトは応え無い。なのがその身体を後ろから支えようと、崩れ落ちるかのように体重を預けて来た。

見た目よりもずっと重いタカトに、なののは体勢を崩しそうになるが。

何とか耐える。

タカトは何処も怪我などしてはいない。

にも関わらず。タカトは驚く程に消耗し切っていた。

「タカト君……」

「……もう大丈夫だ。それより、なののは。アレを見ろ。俺は約束は守っているだろう？」

「え？」

なののはに支えられながらタカトは前方を指差す。

釣られて見ると、壁に叩き付けられた異形が。ゆっくりと身じろぎしていた。

生きている。――だが。

「……タカト君。なんで、そんなにまでして……」

なののはタカトを支えながら問う。

自分を戦わせれば、もっと楽に勝てた筈だ。

体調が悪いにしても、こんなにまでは消耗しなかっただろう。

なのに、何故。こんなにまでして約束を守らせようとするのか。

タカトは、なのはの声に長い吐息を吐く。  
ややあって、ゆっくりとなのはから身体を離れた。

「俺の事は”どうでもいい”。実際、怪我もしていないのだからな。  
だが、お前はそうも行かない。万が一にでも傷が開いたらどうする  
気だ。……お前は女なんだ。傷痕なんて、残すな」

「……………」

なのはは呆然と、タカトを見る。

そんな事をずっと気にしていたのか。

自分が危ない時にさえ。

それに――。

「どうでもいい、て。何が……？」  
「？」

なのはより告げられる問い。しかし、タカトは意味が分からず首  
を傾げる。

そんなタカトを、なのはは真っ直ぐに見据えた。

「自分の事がどうでもいい、て。どう言う意味……？」

「……ああ、さっきのか。そのままの意味だ。”俺の事なぞ、どう  
でもいい”」

タカトはさも当然と答える。

自分の事なぞ、本気でどうでもいいと。

どうなってもいいと。

「それより、先に――」

「やめてよ」

行こう、と言えなかった。

それより先に、なのはの声が響く。

声が遮られたタカトは、目を見開きなのはを見た。  
なのはは構わない。タカトを見据え続ける。

「二度と、そんな事言わないで」

「何を――」

「お願い」

有無を言わず、なのはは告げる。

自分を蔑ろにし続けるタカトに。

それが、とてつもなく嫌だったから。

例え、それが――。

「――分かった」

あえてタカトは何も問わずに、それだけを言う。

なのはは漸く微笑んだ。

「ありがとう」

「礼を言われるような事じゃ無い」

それだけをタカトは告げると、なのはの手を取る。

目をなのはの首に掛かっているレイジング・ハートに向けた。

「……この艦の構造は、クロノ・ハラオウンの艦と同じか？」

【はい、共通の筈です。転送ポートも同じ位置にあるかと】  
「そうか」

答にタカトは頷きを一つ返し。そのまま前を見据える。

そこには先程吹き飛ばされた異形が起き上がりとしていた。

それだけでは無い。艦のあちこちから重い歩みの音が響いていた。

「長居は無用だな」

「タカト君、あの……」

いきなり繋がれた手にどぎまぎしながら、なのはも異形を見る。

タカトは先程こう言った筈だ。

約束を守った、と。

そして、後天的なヒトの合成獣だと。

その言葉が示すのはただ一つでしかない。

それは。

「……今は、聞くな。どちらにせよ。もう元には戻せん」

「……………」

タカトはそれだけを告げる。

それは、なのはの想像が当たっていたと言う事に他なら無い台詞であった。

あの異形が、元はヒトだったと言う事に。

なのはが長い時間を掛けて頷いた、直後。

二人の姿は、再びタカトが発動した縮地により消えた。  
向かう先は、転送ポート。

なのは達がこの世界を脱出する為の場所。

そして、逃避行の最後となる場所であった。



第78管理外世界、次元航行艦『シュバイン』。

その通路を艦内に侵入したシオンは飛行魔法で駆けていた。  
向かう先はブリッジ。

そこを占拠すれば、この作戦は大成功で終了の筈であった。

だが。

「……………うゝん」

【どうした？ 似合わん難しい顔などして】

飛行しながら眉根を寄せるシオンに、イクスから声が掛かる。  
シオンはそれにイクスへと目を落とした。

「いや、こう嫌な感じがしてよ。この艦に入ってからずっとなんだ  
けど……………」

【？ 嫌な感じ、だと……………？】

「ああ」

即座に頷く。

シオンは、高ランクの直感保持者である。  
そのシオンが嫌な感じを受けている。

この艦に何かあると感じているのだ。

シオンの直感が。

【それは嫌な予感か？】

「……いや、違うんだよ。何か、こう。気持ち悪い感覚、てのかな？」

【……何だ。その下手な説明は】

「いや、そうとしか言いようが無い――」

んだよ。と、までシオンは言えなかった。

一射一

突如、前方から放たれる光弾群。

見れば、通路の向こうで魔導士部隊が杖のデバイスをこちらに向け、射撃魔法を放っていた。

光弾群は、問答無用にシオンへと向かう。

が、シオンは向かい来る光弾群の前にニヤリと口元を歪めた。

「こんなちやちい攻撃が効くかよ！」

一轟一

魔力を一気に開放。放出する。

シオンの対魔力…A A。

そして魔力放出…A A+の効果により。

威力がAにも届かない光弾群はあっさりと消失した。

対魔力だけでは衝撃までは消せないが、魔力放出をフィールド魔法のように使う事により。

射撃魔法を完全に防いでのけたのであった。

これには射撃魔法を放っていたストラの魔導士達も驚き、怯む。

シオンはそれを逃さず瞬動を発動。

魔導士達の前へと、一気に駆ける！

「神覇、壺ノ太刀」

「ひ、退け——」

遅え、と心の中だけで叫びを上げ。シオンはイクスを振り上げる。

魔力をジェット噴射のように放出した。

「絶影！」

一斬一

放たれた頭上からの斬撃は過たず、目の前の魔導士に叩き込まれ。

そのまま横薙ぎへと変化。

数人を同時に吹き飛ばす。

反す刃で更に一閃。

非殺傷設定とはいえ。容赦無く、大剣であるイクスを振り回す。

全員を殴り倒すのに、二秒と掛からなかった。



「……なんか、なあ。一応、元管理局本局の魔導士だろ？ こいつら。……こんなに弱いのか……？」

【フム……】

殆ど一撃で片付けたシオンが呆れたように周りを見て呟く。

本局武装隊の魔導士の平均ランクはA相当だと言う。

だが、シオンの感想としてはエリオやキャロよりも弱い感覚を覚えたのだ。

シオンは知らない。自分が居た環境が、どれだけ強い者達に囲まれていたのかを。

グノーシス時代からそうだった為。

シオンとしてはAランク相当の魔導士（殆ど成人）だと、エリオクラスの敵を想定していたのである。

蓋を開けて見れば、グノーシスで言えば位階に入らないような者達だったのである。

拍子抜けもする。

「ま、いっか。楽には進めるし」

【そうだな。……ふむ？ スバル・ナカジマとノーヴェ・ナカジマから定期連絡だ】

「向こうはどうだって？」

【至って順調、だそうだ】

イクスの台詞に、シオンもそかと笑う。

どうやら考えていたよりも作戦は上手く行ったらしい。

このまま行けば。

「――!?」

瞬間。シオンの背に悪寒が走る。

ゾクリ、と言う感覚は背中を即座に突き抜けた。

この、感覚は――！

「ちいっ！」

【な!?!】

いきなりシオンがイクスを振り上げた事に、当のイクス自身が驚きの声を上げた。

シオンは構わない。イクスを床に振り放つ！

一轟！一

一撃！一

真上から落ちるイクスは真っ直ぐに床へと刃を向ける。  
床に叩き壊す筈だった刃は、しかし。

その直前に床をブチ抜いて現れた”モノ”に弾かれた。

【何……!】

「ちい！」

舌打ちを放ちながら、シオンは瞬動で二m程後退。  
残像を、青の光を纏う巨体が突き抜ける。

巨体は床を突き抜けると纏う光を消した。

シオンはそれを見て、目を見開く。

それは機械のヒトガタであった。

新型のガジェットやD A装備の因子兵と比べるとスマートかつ刺々しい感覚を覚える。

特徴は肩にある巨大な突起か。まるで、首が三本あるように見えた。

こいつ……！

【シオン。こいつは……】

「ああ。——っ!？」

一撃! —

イクスに頷きを返した直後。シオンの周りの床がぶち抜かれる。その数四。

全て、さっき現れたヒトガタと同じものであった。

「……ガジェット、じゃねえな……? けど因子兵でもねえ。お前達……」

「セツト」

シオンが言い終わる前に、目の前のヒトガタの一体から声が響いた。

シオンはそれに確信する。

こいつ達、” D Aを着込んだ魔導士……!?”

「ブレイク・チャーーーーーッジ！」  
「っ！？ この！」

—轟—

叫びが響くと同時、四体のヒトガタが光を纏う。  
シオンへと一気に突進して来た。

シオンは身体を捻り、壁を利用して三角跳び。

突撃を避す。

だが、突っ込んだの三体だけであつた。

あと一体は——！？

「チャーーーーーッジ！！」  
「な——！？ ぐっ！」

—撃！—

上へと逃げるシオンの行動を予測したが如く、最後の一体が突っ込む！

シオンはそれに回避は不可能と判断。イクスを盾にして突撃を受け止める、が。

いかな威力がその突撃にはあつたのか、シオンは堪えきれず押し上げられる。

向かう先は、艦の天井！

こいつ達の狙いは――！

一撃！一

シオンは一気に天井に叩きつけられ、更に押し込まれる。  
それに艦壁が破壊。シオンとヒトガタを着込んだ魔導士は天井を  
突き抜け、一緒に虚空へと再び投げ出された。



タカトが縮地を発動した、直後。  
再び周りの景色は一変した。

「ここ……」

なのはは辺りを見渡す。目の前には大きな装置があった。  
上下に分かれた機器と、横にコンソールが並んでいる。

転送ポート。

次元・空間転移システムが、そこにあった。

「転送ポート……。到着、だね」

「……………」

「？ タカト君？」

声を掛けたのはだが、無言のままのタカトに疑問符を浮かべる。  
タカトは無言のまま、ただただ歯を食いしばっていた。  
額を汗が一つ、流れて行く。

そして。

「やあ、タカト。久しぶりだね」

声が、響いた。

……え？

いきなり響いた声に、なのはは振り返る。

タカトも苦虫を噛み潰したような顔と共に。  
ゆっくりと振り返った。

タカトとなのはの真後ろ。

そこに、金髪白衣の青年がいた。

綺麗な。なのはから見ても綺麗な青年が。

女性じみた白い肌。怖気すら感じる程、整い過ぎた顔。

両の金眼が、二人を見詰める。

その容貌に映える金砂の長髪に、白い装束。

そして、天使のような綺麗過ぎる笑顔を浮かべていた。

タカトは青年を見て、搾り出すように声を上げた。

「…………メタトロン。やはり、お前か」

「君には、本名で呼んで欲しいのだけだね。でも、久しぶりの再会だし。別にいいかな」

くすり、と青年は笑う。無垢な、無邪気な光輝く笑顔。  
でも、なのははその笑顔に違和感を覚えた。

綺麗過ぎて、綺麗過ぎて綺麗過ぎて。

その笑顔は、悍おぞましさを醸し出していた。

彼は、一体……？

「高町なのは、さんだよね？」

「え？ あ、はい！」

急に声を掛けられ、なのはは思わず頷く。

あまりにも親し気な態度だ。

なのはの返事に、メタトロンは微笑む。

「初めまして、高名はかねがね聞いてるよ。エース・オブ・エースの二つ名は特にね」

「……あの、貴方は……？」

微笑み続けるメタトロンの、なのはは横のタカトをちらりと見て問う。

タカトは依然として、険しい目でメタトロンを睨み続けていた。

メタトロンはそんなタカトに微笑を送り、再びなのはに視線を送った。

「彼の親友さ。昔からのね……兄弟と言っても差し支え無いけど」

「親、友？」

「誰が、貴様と……！」

メタトロンの台詞に、タカトが苛立ちを隠さずに声を放つ。

メタトロンはそんなタカトにすら、絶えない笑顔を向け続けた。

「君が1番知っている筈だよ？」僕には君しかない”。……君以外。僕はこの世界に価値を見出だせ無い。それが僕の”傷”だ」  
「……………」

その言葉に、タカトはギシリと歯を噛み締める。  
胸を、抑えた。

「……一つ聞かせろ。この艦の乗員をどうした…………？」  
「僕は願いを叶えてあげただけだよ？ 君を前に彼達は力が欲しいと言った。だから、あげたんだ。強靱な身体をね」

それは、つまり。つまり、つまりつまり！

「艦の乗員、全員を合成獣化したのか…………！」  
「うん。その通りだよ」

ニコッと愛らしさすら感じる笑顔でメタトロンはタカトに答えた。  
なのはは、その答えに目を見開く。

こんな、笑顔を浮かべて。  
そんな真似を平然と行ったと言う、彼に。

「な、んで…………？」  
「さっきも言った通りだよ。僕は、彼達の望み通りに願いを叶えてあげただけ。実際、力を得ていた筈だよ？」

メタトロンは変わらない笑顔のままで、なのはに答える。  
その台詞に、なのはは漸く目の前の存在が、酷く危険な存在だと認識した。



何の邪気も抱かず、そんな真似を出来る存在に！

タカトが何故、彼をここまで敵視しているのかを、なのはは悟る。

この存在は、あまりに危険過ぎる。

「さて、本題に行こうか。タカト、実は僕。君に聞きたい事があってここに来たんだ」

「……聞きたい、事だと？」

「うん」

二人の敵意を込めた視線にも、メタトロンは構わない。

ただただ、笑顔のまま頷く。

そして、口を開く。

「君の”傷”はどこまで広がってるんだい？ トウヤとの戦い。本局での戦い。いずれも君はEX化してる。……君の事”だけ”は僕はよく視えないからね。直接聞いて置きたいんだ」

「……………」

タカトは問いに、しかし答えられない。

ただ、メタトロンの睨み続ける。

当の彼は、そんなタカトに肩を竦めた。

「君の魂の傷はどれ程深くなってるの？」

「……黙れ」

「駄目だね。大切な事だよ。——特に、僕にとっては」

そう言い切るなり、メタトロンは歩き始める。

タカトへと一歩、一歩ゆつくりと。

「君の魂はどれ程摩耗してるの？」

「俺は、お前とは違う……！」

「同じだよ。」同じEX”だ。絶対に理解し合え無い傷を抱えてい  
るとは言え、それでも僕と君は同類だ」

タカトの声にも、メタトロンは変わらぬ笑顔のまま。  
タカトへと至近にまで迫り、瞳を覗き込む。

「魂の傷。僕は、”希望”を失った。君が失ったものを僕は知って  
る。でも、その程度がわからないんだ。君は、今。どれだけヒトの  
ままなんだい……？」

「……………」

タカトは無言のまま、胸を抑え続ける。

その仕草に、メタトロンの目尻がピクリと動いた。

「成る程、ね。もう、そんな状態なんだ」

「傷、て……？」

メタトロンの台詞に、なのはが問いを発する。

その声に彼は、なのはへと視線を向け。

目が合った。

直後。

魂のエネルギー化。

なのはの脳裏に文字が踊った。

激しい頭痛と共に。

「っ！ あ、う！」

「！ なのは！？」

「へえ」

激しい痛みが走り抜け、なのはが頭を押さえながら崩れ落ちる。  
タカトはそんな、なのはに驚き、メタトロンは感心したような声を上げた。

その間にも、なのはを激しい痛みが苛む。  
立っていらなくなり、膝を着いた。

「漸く、検閲が外れ始めたかな？ ルシアも頑張るね」

「な、に……？」

メタトロンの台詞に、タカトは呆然と疑問の声を上げる。

メタトロンは、またくすりと笑った。

「気付かないかい？ 君と――。いや、君の中のルシアと彼女を繋ぐ。ラインに」

「っ――――！！」

タカトはメタトロンの台詞に、右手を呆然と見る。

ある。確かに、繋がっている。

なのはと、彼の右手に伸びるライン。

霊脈が。

「いつ、の間に……？」

「ずっと昔からさ。何せ、ルシアと彼女は”一度会った事がある”。

二人共、覚えてはいないだろうけどね。その時にさ」

メタトロンは、タカトが、ルシアやなのはですら知らない事をさ  
らりと口にする。

まるで、昨日の出来事のように。

そして、頭を抱えて苦しむなのはに微笑を送った。

「そうだね。僕が、君の苦痛を和らげてあげる。――ここで、” E  
Xの全てを教えてあげるよ”。そうすれば苦痛も和らぐ」

「貴様……！」

「君の相手は彼等さ」

一軋！一

瞬間、通路の艦壁を突き破り、現れる手、手、手、手、手、  
手、手、手！

そのどれもが異形の手であつた。

タカトに抵抗の暇すら与えずに、その身体を絡め取る。

見れば、突き破られた壁の向こうに数多の異形の姿があつた。

「こいつ達……！」

「分かっているとは思うけど、彼等は全員人間だよ。元だけど、殺さ  
ないよね？ 約束があるから」

「っ……！」

メタトロンの何気無い台詞。

それにタカトはギシリと齒軋りを上げる。

そんなタカトに無邪気な、あまりにも無邪気過ぎる笑みをメタト  
ロンは浮かべ、そして。

「さあ、語ろう。EXの真実を。――君が、更なる絶望を知る為に。決して救われない存在の話しを、始めよう」

なのはに、優しく、優しく。

「君の、望むモノをあげよう」

微笑んだ。

（後編2に続く）

**第四十三話「幸せにしてあげる」(後編1)(後書き)**

はい♪ 後編1終了です♪

後編2、できれば年が変わる前には更新出来るように頑張ります！  
では♪ また次回お会いしましょう♪

第四十三話「幸せにしてあげる」(後編2)(前書き)

今回は、アリサ道場抜きでお送りします♪

ああ、石投げないで！(笑)

す、すみません。

理由は、最後に。

ではでは、後編2。どうぞ〜♪

#### 第四十三話「幸せにしてあげる」(後編2)

「君の望むモノをあげよう」

微笑みと共に告げられる声。

それを間断無く襲い掛かる頭痛に喘ぎながら、なのはは聞く。  
それを告げた人物。メタトロンは、そんなのはを見下ろして膝を着く。

額のサークレットが、ちりんと通路の光を反射して煌めいた。

……私の望むモノ……。

痛みの中で、なのははメタトロンの言葉を反芻する。

メタトロンは絶えない微笑みのまま語り始めた。

「グノーシスには大きく分けて二つの封印指定研究がある。一つは、ナノマシン・テクノロジー。通称、ナノテク。そしてもう一つがソウルトロジー。魂学と呼ばれる研究さ」

ゆっくりと語るメタトロン。

なのはは痛みの中で、それを聞き続ける。

「この魂学は、『魂の實在』を証明した学問でね？ 比喩でもなんでもなく、文字通りの魂——ヒトをヒトたらしめる究極要素たる魂を解明する研究なんだ。この魂学によれば、二十六次元以上の高次元で検出される特殊波動を『魂』と呼ぶんだけどね」

メタトロンは語る、語り続ける。



その間にも、なのはの脳裏には文字が踊り続けた。

「この学問によれば『魂』は輪廻転生を可能とするシステムがあら  
かじめ組まれてる。つまり、『魂』自体が一種の永久機関な訳だね。  
それ故にか、この『魂』を称して”無限波動エネルギー”とも呼ぶ  
んだけど。……重要なのはそこじゃ無いんだ」

メタトロンの黄金の双眸はなのはをただ見続ける。

その瞳は、顔の微笑みとまるで正反対に感情を宿していなかった。  
と——。

「お、ああああ……！」

一轟一

メタトロンの背後から声が漏れる。

タカトだ。

合成獣化したストラのモノ達に、身体を拘束されていたタカトの  
身体から魔力が噴出する。

タカトの魔力放出はS+の高ランクである。

これは、もはやそれ自体を攻撃として使用出来るレベルであった。  
タカトはそれを無造作に放ち、自分を拘束する異形の手を引きち  
ぎる！

一裂一

瞬く間に、全ての手は粉微塵に引き裂かれる。

タカトは拘束から免れると一瞥も送らずに、駆け出す！

だが――。

一寸っ――

今度は足元から、頭上から背後からも手が湧き出て来た。その数は千を超える。

通路を埋め尽くす手は、出来の悪いホラーを彷彿させた。タカトはそれ等を容赦無く叩き潰して進む。

しかし、再生能力でもあるのかその数は一向に減らず。タカトの足や肩に絡み始めた。

「ち……」

「君の足止め用」に作ったからね。簡単には通れ無いよ？　タカト

メタトロンがタカトを見もせずに告げる。

最初からこの積もりだったのだろう。

そうで無くては、わざわざ足止めだけに合成獣なぞ作りはしない。タカトは舌打ちを放ちながら、湧き出る手を破壊し続ける。

異形の悲鳴が連続してあがる中、それを背にメタトロンは微笑み続けた。

言葉を紡ぐ。

「重要なのはそこじゃない。そこまで言ったよね？　魂は一種の永久機関であり――。それ故に、魂学ではある結論を導き出したんだ。この魂を”エネルギー化”したならば。通常の魔力を始めとしたあらゆるエネルギーを遥かに凌ぐエネルギーを取り出せる、とね。――

「この、魂をエネルギー化したモノを”霊子エネルギー”と呼ぶんだ。この霊子エネルギーは魂をエネルギー化、消費する事で生まれる。――その出力は膨大だね？ 何せ、ヒト一人分の魂を完全にエネルギー化した場合。まる一つの宇宙に匹敵するエネルギー量を叩き出したんだ。――被験者がどうなったのかは、想像に任せるよ」

魂をエネルギー化され、消耗させられたヒトがどうなったか。

それは、想像するだけしか出来ないが、聞いて楽しい話で無いのは間違い無い。

なのはは激しい痛みの中で漸く理解する。

この研究が、何故封印されたのかを。

倫理的な問題が大き過ぎる。

例えば”魂”を消耗させられたヒトは、果たしてヒトと呼べるのか。

例えば”ヒトの魂を宿らせたデバイス”は、ヒトであるのか？

「この魂学と、遺伝子操作技術を可能とするナノ・テクを生み出した世界は、かの伝説の世界。アルハザードなんだけど。今は関係無いから割愛するよ？ この霊子エネルギー理論を推し進めて行く内に、理論研究上。特異な魂の存在が浮かび上がったんだ。――もう、分かるよね？ その魂が”EX”だよ」

EX。

その単語に、なのはの身体が震える。

痛みと、そして予感に。

これを聞いてしまうと、もう”戻れ無い”と。そう、直感は告げていた。

メタトロンは、そんななのはの反応に。

くすり、と笑う。

「EX——正確には事象概念超越未知存在、て言うんだけど。この存在は、”神殺し”としての性質たる概念破壊能力を有していた。神——世界の究極の法則にして、理由たる。”概念”を破壊、超越する力をね。そして、このEXの力の根元は他でも無い。”魂”にあつたんだよ」

語る、優しく優しく語り続ける。

だけど。それが、酷く苦痛に感じられるのは何故なのか。

なのはは痛みの中、ルシアから与えられた情報の検閲が次々と外れていくのを理解しながら、メタトロンの声を聞き続ける。

「EXは霊格が神と同位の存在であり、当然。その魂は異質な存在だった。その意思力もさる事ながら、最大の特異点は魂のエネルギー化現象にあつたんだ。そう、霊子エネルギー理論だよ。EXの魂はこれを”自然発生”させられたんだ。君達魔導士が魔力を生み出せるようにね。しかも、その霊子エネルギーを高速無限増殖可能としていた。——つまり、本当にEXは理論上。無限のエネルギーを瞬間的かつ永久に生み出し続ける事が可能だったんだ」

「あ、う……！」

頭の痛みが酷くなる。EXの真実を告げられる度に頭痛は酷くなっていたが、それが一段と酷くなっていた。

それに、なのはは何とはなしに悟る。

これ以上知るなど、”なのは”自身が叫んでいるのだ。

EXの真実を知るなど。

メタトロンは、そんななのはに構わない。

続ける。

「その無限に発生させられるエネルギーを用いて行われるのが、さつき言った事象概念破壊、超越現象だよ。EXの本質は『魂』にあるからね。正しく神殺したる力を、EXは持っていた。外ならぬ神である『世界』がそのように生み出したんだから当然なんだけどね。――ただ、神は自身を殺すシステムたるEXを作って置きながら一つの保険をシステムに組み込んでいた。それが――『傷』だよ」

## 一傷一

その単語を、なのはは酷く生々しく聞く。

痛みによる忘我の中で、なのはは自身の中の検閲が外れた事を悟った。

傷、とは――。

「傷、と言うのはね。神が施したEXの魂に組み込んだ自壊プログラムとも言えるモノなんだ。これは無限発生させられる霊子エネルギーにより、EXがその力を顕す度にその『魂』は傷ついていく現象だね？ 自身のエネルギーに、魂自体が耐えられないのさ。そして、それが致命的なレベルと化した時。EXは魂に傷を負う」  
「……………」

もう、なのははメタトロンの話しなんて聞いていなかった。だって、その知識はもう自分の中に在るのだから。そう、もう。なのはは知っている。

傷、とは。

「その結果。引き起こるのが、”感情の欠落”さ。……もう、分かるよね？ 僕は『希望』と言う感情を喪失<sup>うしな</sup>った。そして、タカトは――」

一轟！一

瞬間、メタトロンの背後で空気がまるごと引き裂かれる音が鳴り響く！

タカトがその右手に漆黒の魔力を宿し、湧き出る手を引き裂きながら突っ込んで来ていた。

絶・天衝。

全てを一刀の元に斬り裂く一撃を持ってタカトがメタトロンの突っ込む！

そんな、タカトにメタトロンの胸元のペンダントを手を取った。

「起きなよ”エア”。君の力が必要だ」

【セツト】

直後、ペンダントが変化する。

片側から棒状の物体が顕れ、それをメタトロンは掴む。

そして、その逆側からは光が生まれた。

幾何学模様の光の文字が。

それは、複雑な形を描き。

一つの形へとその身を成した。

魔法陣で編まれた”剣”へと。

メタトロンはそれを優雅に振るい、振り返り様にタカトへと放つ！

「絶・天衝」

純粹な闇色の魔力を宿した一撃を。

一撃！一

二つの極闇は、全く同時に互いにぶつかり合う。

タカトの右手から放たれた絶・天衝と。メタトロンのエアから放たれた絶・天衝が、絡み合い。喰らい合う！

一裂！一

一閃！一

一破！一

二人は闇色の極刃を鏝ぜり合わせたまま、至近で互いを見る。

メタトロンは笑みのままに。

タカトは無表情のままに。

対象的な表情の二人は、闇の一撃で互いを滅ぼさんと魔力を汲み出し、注ぎ込む。

空間が、その余波で歪み破裂し始めた。

ただの余波で許容量以上のエネルギーを注ぎ込まれたのだ。

互いに一撃を放ち続ける中で、メタトロンは笑顔のまま、語り続ける。

どこまでも、笑顔のままに――

「――タカトが喪失<sup>うしな</sup>った感情は、『幸せ』だよ」

そう、言い切った。

それにタカトは真っ正面からメタトロンを睨み！ 叫ぶ！

「クロオオスっ！ ラアアアジイイネスウウウウウウウウウウ…  
…！！」

「あは」

タカトの咆哮に、メタトロンは――。否、クロス・ラージネス。  
ルシアと同じファミリーネームを持つ青年は、先の笑顔とは違う。  
嬉しそうな、本当に、本当に嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「漸く、本当の名前で呼んでくれたね」

一碎！一

瞬間、互いの絶・天衝が硝子が砕けたような音と共に破碎した。  
それこそ、世界に拒絶されたようにだ。  
そこから二人は互いに一步を踏み込み、すれ違いながら前に進む。  
互いに位置を入れ替え、二人は漸く止まった。

「これで僕の話しは終わりだよ。これが、EXと言う存在。もう、分  
かったよね？ EXと言う存在を。――決して救われ無い、存在の  
事を」

そう、クロスは最後になのはへと言う。  
なのははそれに答えられない。  
ただ、ただただ。



その目から涙が零れた。



転送ポートの前で、タカトはメタトロン……否、クロスと対峙する。

相も変わらぬ笑顔でこちらを見続けるクロスに、タカトは呻く。そして、ちらりと後ろを見た。

泣いていた。なのはが、顔を伏せて。

だが、タカトは何故なのはが泣いているかを”理解出来ない”。幸せが分からないとはそう言う事であった。

誰かと一緒に居る事を、幸せと思え無い。

ただ一人であろうとも、それを不幸だなんて思え無い。

誰かが、幸せであっても。それを共有出来ない！

人間として当たり前の感情を、タカトは欠いている。

脳神経だとか、精神的な問題ではなく、より根本的な『魂』から感情を欠落してしまっている。

だから、タカトは分からない。

なのはが泣いている理由が。だから。

「……」

「あは」

眼前の存在を、ただ睨み据えた。  
クロスはそれにさえも微笑む。  
タカトは、そつと右手を掲げた。

「クロス。お前、最初から」なのはに教える為にここに来たのか？」

「うん。だって、不公平だろう？ 彼女だけ何も知らないのは。これで君と彼女はイーブンだ」

何がイーブンだと、言うのか。

クロスの台詞に、タカトは睨み続ける。  
だが、クロスは微笑み続けるだけ。

「でも、意外だね。君はもっと怒ると思ったんだけど？」

「……今更だろう。そんな感情は」とうに死んでいる」

びくっ。とタカトの一言で、なのはの肩が震えたのが、空気で分かる。

何故、なのはが泣いているのか？

タカトには想像しか出来ない。

同情か、あるいは自分のようなバケモノと居た事を後悔しているのか。

どちらか。

タカトには、少なくともそうとしか思え無かった。

そして、それを”辛い”と思え無い。

”不幸”だと思え無いのだ。

それが、タカトの『傷』だから。

だが、少しだけ、寂しくはあった。

EXの真実を知った以上、前と同じようには接する事は出来まい。

なのはと共に居た。三日だけの逃避行にタカトは少しだけ思いを馳せ。

「クロス・ラージネス」

ゆっくりと、右手を翳す。

瞬間、その手の拘束具が音を立てた。

拘束具が開いたのだ。

封印を、解く為に。

「貴様は、ここで終われ」

「それでこそ。君だ」

タカトの言葉に、クロスは微笑み。

サークレットの中央に指を翳す。

片や、右手を掲げ。

片や、額に指を当てる。

そんな二人を前に、なのはは涙を流しながら顔を上げる。  
その瞳に映る、タカトの背中へ。

いつも、いつも。力強く。印象的だった背中が。  
ずっと、ずっと。

儚く見えた。

《……なのは》

タカトの背中を見ていたなのはに念話が届く。

当のタカトからだ。

こちらに背を向けたまま、タカトは念話を飛ばしていた。

《詰まらん話しを聞かせた。……すまん》

「そ……！」

そんな事無い！ そう告げようとして。

でも、出来なかった。

喉につつかえるようにして声は出なかった。

《なのは。地球の次元転移座標は分かるな？》

《う、うん。でも……？》

何で？ と告げようとして。

でも、出来なかった。

分かったからだ。タカトが何を言おうとしているかを。  
タカトは構わず続ける。

《そうか、なら。なのは。お前、一人で転移しろ》  
《……っ》

想像していた通りの一言が告げられる。  
タカトなら多分、こう言い出すと思った。  
だから、なのはは首を横に振った。

《やだ、よ……》

《なのは》

《タカト君だけを置いて行けるわけ無いよ!》

漸く、漸く。なのはは正しく話せた。  
今まで、つかえていたモノがまるで取れたかのように。  
なのはは感情のままに念話で叫ぶ。

《なんで、なの。なんでタカト君はいつも、いつも……!》

自分を、犠牲にしようとするのか。  
そう、続けようとして。

《幸せが、俺には分からないから》  
《……っ!》

その前に、明確な答えが帰って来た。  
分かっていた事である。  
他では無い。それがタカトの傷なのだから。

だから、彼はいつも自分を犠牲にする。  
幸せなんてものが、分らないから。

だから。

《……クロスは捨て置き無い。こいつは、危険過ぎる》

沈黙したなのはに、タカトは念話を続ける。  
なのはは無言でそれを聞いていた。

《ここで、奴と戦う。”真名を開放”して――》  
《――っ！ ダメ！》

タカトから告げられる念話に、なのはは否定の念話を被せた。  
今のなのはには、分かる。  
EX化が、どれほど危険なモノなのかを。  
それが、タカトをどれだけ苛むかを。

だが、タカトは構わない。

《必要な事だ。俺の事は気にするな》  
《っ……！》

《だから、なのは。お前は行け》  
《タカトく――》

それ以上、タカトは応じなかった。  
念話を切る。

「話しは終わったかい？」  
「……………ああ」

やっぱり察しられていた事に、タカトは目を細める。  
クロスは変わらぬ笑みのまま。

二人は視線を交差させ――。

光が、闇が集まり始めた。

光が集う、光が集う、光が集う！

暗い、暗い光が集う！

闇が集う、闇が集う、闇が集う！

輝く、輝く闇が集う！

タカトの右手の拘束具、そしてクロスのサークレットに――。

「「真名、開放」」

全く同時に二人は同じ言葉を呟く。  
無表情と笑みのままに。

「「我が、真名は――！」」

そこまで言った。直後、いきなりタカトの足が浮いた。

「な……？」

唐突に、突然に、何の前触れも無く。  
タカトは浮いていた。

”背中に抱き着くのはと一緒に”――！

二人は、そのまま後ろへ飛翔。

転送ポートに、なだれ込む。

タカトに出来たのは、転がり込む際に体勢を無理矢理変え。

なのはを前へ抱き抱えて、クッションになる事だけだった。

転送ポートの床に叩きつけられながらタカトは胸に抱くなのはを見る。

「なのは！　どういう積も――」

「レイジング・ハート！」

【オーライ！　マイ・マスター！】

瞬間、低い機械音と共に転送ポートが起動した。

タカトはそれに、なのはの意図を察した。

自分連れて無理矢理転移する積もりなのだ。

見れば、次元座標は第97管理外世界。地球を転送ポートは入力されていた。

「っ……！　どけ、なのは！　俺はあいつと――」

「絶対的にイヤ！」

タカトに覆いかぶさるなのはは、真っ正面。

タカトに抱き着きながら吐息が触れる距離で叫ぶ。

その目は、ただタカトを見据えていた。

「絶対的に、タカト君を置いて行ったりなんてしない……！」

「っ。たわけが……！」



なのは無理矢理突き飛ばすか、タカトは悩み。

なのはの肩越しに、クロスがサークレットから指を外す仕草を見た。

微笑み続けながら、クロスはタカト達をただ見ているだけ。

「お前……」

「彼女が、転移する”未来”までは視えていた。けど――」

そこで視線はなのはに移る。

クロスは嬉しそうに。本当に、本当に嬉しそうに笑った。

「彼女が、君を無理矢理連れて行く未来までは視えなかったな」

「クロス……」

「視えない、て事は。楽しいんだよ。タカト」

嬉しそうに、まるで子供のように無邪気に微笑む。

それは、一切の偽りが無いと言う証であった。

クロスの紛れも無い本当の笑顔。

「最初から、僕には全て視えていた。遥か遠い過去も。ずっと、ずっと遠い未来も。僕が死ぬ瞬間も、そこから続く未来も、世界の終演すらも僕は視えてた。――だから、嬉しいんだ。楽しいんだ。視えない、て事は。すごく、すごく、すごく、すごく。楽しいんだ。だから――」

そこまで話し、クロスは言葉を切る。

そして、タカトにいつものように微笑んだ。

「世界の全てが、夜に覆われ。全ての悪意が現れる時。大きな、大きな天使の輪の上で、輝く天使の輪の上で。僕は、君の答えを聞く」  
「答え、だと？」

「君は何を求めているの？」

まるで、不意打ち。

しかし、クロスはタカトにはつきりと問う。

その目を見ながら、真摯な瞳で。

「君は何の為に、生きてるの？」

「俺、は——」

「今はいいよ。どちらにせよ。そこまで行けば、僕は君の答えを聞ける。——そう、それだけが。全てを知ってしまった僕のただ一つの価値。『希望』だから」

そこまで言うと、クロスは背を向ける。

直後、転送ポートが駆動。光が上下に瞬く。

タカトの視界に映るクロスも歪んで見えた。

次元転送の前触れである。

「忘れないでね？ タカト。僕には、君しかない。いないんだ」

「クロ——」

「それじゃあ、またね」

瞬間、光がタカトとなのはを覆い。

二人は、この世界。ナルガから消えた。



月明かりが二人を照らす。

第97管理外世界、地球。海鳴市。

その山奥に、二人の姿はあった。

ナルガから転移してきたタカトと、なのはの姿が。

二人は転移して来た時と同じ格好。

つまり、タカトの上になのはが覆いかぶさる格好でいた。

「地球に着いた、か」

自分の胸に顔を埋める、なのはの柔らかな感触を覚えながらタカトは嘆息する。

上半身を起こす、が。なのははタカトから離れようとはしなかった。

それにタカトは苦笑する。

結果からすれば自分なのはに救われた事になる。

あの様子では、クロスもあの世界をどうこうはすまい。

今のタカトが真名を開放すれば。最悪、タカトの魂は破滅していた事だろう。

なのはが、それを知っていたかは分からない。

だが――。

「なのは、すまなかったな。――ありがとう」

なのはを胸に抱いたまま、タカトは礼を言う。

タカトは、なのはに救われたのだから。

また借りを作ったなど、タカトは苦笑して。

”それ”を見た。

涙目で、タカトを見据える。なのはの瞳を。

「？ なの――」

「もう、治らない、の？」

なのはは真っ直ぐにタカトを見ながら、そんな事を言い出した。  
指をタカトの胸に当てて。

それに、タカトは一瞬だけ息を飲み。  
そして目を細め。

「……二度と、治る事は無い」  
「っ」

ただ、事実のみを述べた。

なのはが何を指しているのか、既にタカトは知っている。

『傷』の事を、それは指していた。

「何、で……？」

なのはの瞳から、再び雫が零れる。

涙だ。

タカトはそれを見て、また嘆息する。

「魂の傷に、治療法などあると思うか？」

「それ、は……」

なのははタカトの言葉に、呻く。

そんなモノ、あるかどうかも分からなかった。

でも、ならタカトは――。

「俺は一生、幸せを理解する事は無い」

坦々と、坦々とタカトはそう言う。

その言葉は、なのはの胸に、深く突き刺さった。  
タカトはそんな、なのはに微笑む。

「いつか言っただろう？ そんなバケモノに優しくするな、と」  
「……………」

「だから、なのは」

俺と、もう関わるな。

そう、告げようとした。瞬間。

なのははキッとタカトを睨み据えた。  
真っ直ぐに。ただ、タカトを。

そして。

「決めた、よ」

「？ 何を――」

タカトがなのはの台詞に疑問符を浮かべた、直後。  
なのはは躊躇無く、タカトの顔に自身の顔を寄せ。  
その唇に、自分の唇を合わせた。

「っ……………！」

「ん……………」

唇から伝わる感触は、あまりに暖かくて。  
柔らかくて。

タカトが目を見開いて、驚愕する中で。  
なのはは、身を寄せる。  
唇が、さらに深く合わさった。

それはほんの一分にも満たない時間。  
月明かりに輝く中、星が瞬く瞬間。  
なのはは、タカトを感じた。  
ゆっくりと唇を離す。

タカトは、未だに呆然としていた。

「何、故……」

「決めたの」

なのははタカトを真っ直ぐに見たままに、またそう言う。  
その瞳は、ただ決意に満ちていた。  
まだ固まったままのタカトに、なのはは続ける。

「タカト君を、私が幸せにしてあげる」

「なん、で……」

「好きだから」

きっぱりと、なのはは告げる。  
それは告白と言うより、果たし合いを申し込むような感じであつた。

なのはは、呆然とするタカトに決意に満ちた目で続ける。

「タカト君の事が好きだから、だから。タカト君が幸せになれない事が、幸せを分らない事が納得いかない、イヤなの」

そう、それがなのはの結論。

伊織タカトに対しての、なのはのただ一つの想い。

同情なんかじゃ無い。なのははただ自分の想いのままに行動する。

だって好きだから。

それが、全ての。

「幸せが分からないなら、教えてあげる。一緒に幸せになって。それが幸せだって感じて欲しいの。——タカト君を幸せにしたいの」

まるで、プロポーズ。

だが、なのはは構わない。気恥ずかしさも覚えなかった。自分の想いを、自分の願いを。声にして、伝えたいから。

だから。

「一緒に、幸せになろう？」

最後の一言を、なのははタカトに伝えた。

「言いたい事は、それだけか？」

なのはが想いを伝えた、直後。

タカトが真っ直ぐに、なのはを睨みながら、声を絞り出す。

その目は、ただただ怒りに満ちていた。

けど、なのはは構わない。

きっと、彼はそう言うと思ったから。

「ふざけるなよ……。なのは、そんなモノを誰が頼んだ……！」

「誰も、頼んでなんか無いよ。私の、思い」

「そうか」

それだけを言い放つと、タカトは無理矢理立ち上がる。

なのはを自分の胸から下ろして。

そして目を閉じた。

「ハハ、俺は幸せモノだなー」

その言葉を、タカトは覚えている。

父の、自分が殺してしまった。父の末期の言葉を。

「俺は、俺が幸せを識る事を赦さない」

なのはに真っ直ぐ告げる。

同時に己にも。

それはタカトが自分に定めた事。

ずっと、ずっとそう思い続けてた。



だから。

「でも、私はタカト君が幸せになれない事も、幸せを理解しないのも納得出来ないよ」

「自分が、どれほど傲慢な事を言ってるか。理解してるか？」

タカトは、自分の幸せを祈る人を拒む。

それが誰であれ、だ。

なのはは、タカトの台詞にコクリと頷き。

そして。

「それでも、イヤなの」

タカトの瞳を見つめながら、そう言い切った。

タカトは、そんな、なのはを眩しそうに目を細める。

正しく、今のタカトにとって。なのはは眩しい存在だった。

だから、タカトは。

「なら、俺はお前が嫌いだ」

彼女を赦せなかった。

赦せる訳が無かった。

だって、それはタカトの決意を。想いを踏みにじる事だから。

ずっと、ずっと。願っていた想いを。

「でも、私はタカト君が好き」

だが、なのはは折れない。それが、タカトの想いを蔑ろにすると知っていても。分かっている。

例え、嫌いだと言われても。

なのはは、自分の想いを決して曲げたりしない。

だって、好きだから。

その、ただ一つの想いだけが確かなモノ。

なのはの想いを聞いて、でもタカトは視線を逸らさない。  
真っ直ぐに見つめる。

なのはも、タカトの瞳を見つめ続けた。

「平行線だな」

「平行線だね」

二人は、確かめるように呟く。

互いの意見は交わる事無く、ただ平行線を辿る。

二人は見つめ続けて、そして。

タカトは、ゆっくりと背を向けた。

「なら、後は一つしか無い。この間は、貴様からの挑戦だったな。  
今度は俺から言おう。――なのは、俺と戦え」

それは、いつかの約束。

賭けを交えた、戦うと言う約束だ。

大切な約束。

あの時は、なのはからだった。

そして、今度はタカトからの挑戦。

なのはは、視線を逸らさず。頷く。

タカトは、それを確認して、完全に背中を向けた。

「お前は、俺にとって赦せ無い事を言った。――だから、約束しろ。俺が勝ったらその想いを捨てると」

「私が勝ったら？」

「――受けてやる」

言い切ると同時にタカトは歩きだす。

山の奥。闇の中へと。

なのはは、それをずっと見続ける。

「お前の願いも、想いも」

タカトはそこで顔だけを、なのはへと向ける。

なのははずっと、ずっと。タカトを見続けていた。

二つの視線が絡み合う。

「忘れるな。お前とは、必ず決着を付ける」

タカトはそれだけを最後に言い放つと、同時。縮地を発動。

その場からあっさり消えた。

なのはは、タカトが消えた後も。タカトが居た場所を見続け。

もう一度、頷いた。

懐かしい、地球の月明かりの中。

二人は、互いの想いを伝え。

「さよなら」も言わずに、二人の逃避行は終わりを告げた。

(第四十四話に続く)



はい、テストメントです♪

今回はアリサ道場抜きでお送りしてます♪

と、言うのも次回でアリサ道場EX2を企画してまして(笑)

その時に、今話を振り返る方向で行きます♪(笑)

さて、今回。EX設定の全容、そしてなのはの告白。

いろいろ目白押しな話でしたが、いかがでしたでしょうか。

楽しんでいたただけたならば幸いです♪

今話をもって、漸く。第3部は折り返し地点です♪

……めっちゃめっちゃ長いな。第3部(笑)

年末、と言う事もあり。一つ皆様にお礼申し上げます♪

この作品に付き合っていたいただきありがとうございます。

皆様のおかげで、StS, EXはここまでできました。

あともう少しで一周年。

何かの企画も考えております♪

本当に読者の皆様に感謝で胸いっぱいです♪  
では、今回はこの辺で♪

皆様、よいお年を〜♪

第四十三話「幸せにしてあげる」(後編2)(後書き)

「タカトとなのはの逃避行は終わりを告げ」

「しかし、シオン達の戦いは激しさを増す」

「新型のD Aを纏う魔導士部隊を相手にシオンはただ一人戦う」

「だが、彼等の連携にシオンは追い詰められて」

「その時、”彼達”が再び立ち上がる」

「傷だらけの悪友達が」

「そして、”彼”も動きだす」

「次回、第四十四話

『過去の刃』」

「少年の過去が、”刀”と言う姿をもって現出する」

番外話「アリサ道場EX2!」 (前編) (前書き)

——ええっと。(汗)

いや、一話で終わらせようかとも思ってたんですが。

……ちよつと悪巧みをしまして (笑)

二話に分けます♪

グダグタですが、どうぞ〜♪

番外話「アリサ道場EX2!」(前編)

ぱらら〜ぱら〜♪

ア

「アリサ!」

す

「すずかの〜♪」

ア、す

「「アリサ! どう〜う〜じょ〜う〜♪」」

一同

『EX! 2!』

ピッ! シャアアアアアアアアアアア!

ア

「はい♪ やって参りました♪ アリサ道場EX2よ♪ 当道場主のアリサです♪ 今回は特別♪なのランバージョン。聖祥大付属高等学校制服よ♪」

す

「弟子のすずかです♪ 私もブルマから制服だよ♪」

レ

「何故につて、いや。ツツコまないでおこう。皆、もう自己紹介の必要は無いが……。一応は礼儀だな。レン・テストロッサだ」

しー

「……」

未

「そうですね、賢明な判断です。日比野未来だ。よろしくしー

「……………」



ア  
「いやゝゝ。何のかんのと、いろいろあったけど。一年続いたわね、この小説」

す  
「最初の方とか、目も当てられない状態だもんねゝゝ♪」  
しー

「……………あの」

ア

「さあ！ 本日はEXに相応しくゲストは他作品から1名ずつ呼んだわよ♪ では、ゲスト！ カモーーーン♪」

タ

「召喚器。発動」

レ

「て、お前居たのか！？ 自己紹介加われよ！」

タ

「…………いや、今回、あまり目立ちたくは…………」

未

「そんな事言うなよ。ほら、礼儀礼儀」  
しー

「……………あのゝゝ」

タ

「む……。伊織タカトだ」

レ

「…………まあ、いいか。さて、召喚されたのは…………」

— びっかああ！ —

? 1

「て、うお！」

? 2

「どわぁ！」

—めきっ—

? 1は何とか着地成功。? 2は顔から床に突っ込む。

レ

「て、おいおい……」

未

「だ、大丈夫か？」

ア

「その程度なら大丈夫でしょ？」

? 1

「……いや、今めっちゃヤバ気な音になりましたよ。アリサ先輩……」

? 2

「いってええエエエエ……！ 何だよ、ここ……！」

す

「ほら、ちゃんと立って？」

? 2

「あ、うん」

ア

「背筋も伸ばす！」

? 2

「お、おう！」

ア

「よし♪ じゃあ? 1から自己紹介しなさい♪」

? 1

「了解、と。『魔法少女リリカルなのはStrikerS Calendar&amp;Phantom』から、神藤昶だ。よろしく」

?  
2

「へ？ 俺も？ てか、ここ何処だよ……？」

ア

「いいから自己紹介しときなさい」

?  
2

「む……。さっきから命令ばかりしやがって。何様の積もりだよ  
お前？」

ア

「神様のつもりよ！」

?  
2

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオイっ！？ いっそ清々しい程に断  
言しやがったよ！ それはマジもんか！？」

す

「うん♪」

レ

「概ね間違っただけだな。……否定すると、エライ目に合うし、ここ  
だと。どうやっても勝てんし……」

未

「そうですねえ……。何回、涙を流しただろう……」

昶

「そ、そんなにヤバいのか……！？」

未

「ああ、……人生、て何だろう。て考えなくなるレベルで……。お  
前も今日から仲間入りだけど」

昶

「て、ちょっと待てい！ 何だその嫌過ぎる同族意識！？」  
しー

「……………いや、あの……」

未

「気にすんな。後になれば分かるさ。後になれば……」

昶

「嫌な予言残すなよ!？」

タ

「我が主であらせられる存在だ。口の聞き方には十分に気をつけろ」  
? 2

「いや、てかアンタもダレだよ……!」

レ

「……あれ? てか、アリサも知らないのか?」  
? 2

「あ、ああ。名前は聞いた事あるけど」

ア

「……アンタ等。そろそろ静かにしないと神化。行くわよ?」

一 軋っ一

一同

『すんませんっしたあ!』

ア

「分かればいいのよ、分かれば。ほら、いい加減自己紹介しなさい」  
? 2

「お、おう。塚本隼樹だ。よろしく——」

ア

「作品名を最初に!」

隼

「て、そっからかよ!」

ア

「——文句ある訳?」

隼

「『ナンバーズ』魔法が使えない男』から塚本隼樹です! よろしく  
お願いします!」

ア

「うん♪ よろしい♪」

隼

「……くう。力に屈してしまった……」

未

「いや、正しい選択だって」

しー

「ちよっとお！」

レ

「あ？」

未

「ん？」

昶

「お？」

隼

「は？」

一同、周りを見渡す、が。  
誰もいない。

しー

「下だ下！　つか作者も地の文で書くなや！」

やかましいわい。

さて、声に釣られて他作品主人公キャラ四人が見たのはあ。  
腰まである銀の髪のお。

男連中の腰までしか背丈が無い。

黒のゴシッククロリータファッションのお（黒のニーソックス＋ミニのスカートの為。絶対領域装備）。

人形じみたあ可愛いらしいお嬢さんつつつ！

しー

「……タカ兄い。久しぶりに言うけど。ウゼえ」

タ

「む。そうか」

レ

「タカトを兄呼ばわり、だと……？」

未

「て、事は……」

昶

「もしかして……」

隼

「え？ 何んだよ。三人とも……。可愛いらしい女の子じゃ……？」  
しー

「……お察しの通りです。昶は混沌鍋（魔法少女リリカルなのは  
SILVER FRIEND。参照）ぶり。そちらは、はじめまし  
て」

—ぺこり—

隼

「おおっ。あそこの女——」

ア

「ん？ 何かしら。隼樹？」

隼

「い、いや。何でもない。……まあとにかく。礼儀正しいお嬢ちゃ  
んだな」  
しー

「……神庭シオン、て言います。……ちなみに、男です」

隼

「……は？」

しー

「しかも、十八歳」

隼

「はぁ!？」

男三人集

「「「あ、やっぱし?」「」」」

隼

「いや! 何でアンタ達、そんなに冷静!？」

未

「……しよっちゅうある事だからな……」

隼

「あ、あんですと!？」

昶

「う、噂には聞いてたけど……。これが……」

隼

「いや、どんな噂だよ!？」

レ

「タカトお」

タ

「はい、テストロッサ先輩」

レ

「説明任せるわ」

タ

「了解。……発案は、祐希奈お嬢様でした」

未

「……やっぱしか」

隼

「いや! だから誰だよ!」

昶

「知りたけりゃ、今からリリカルヴィヴィオを全部読め」

隼

「は？ いや、ちょっと待った。文字数が半端無ねえんだけど!？」

レ

「なら、このStS，EXを読め」

隼

「同じだよ！ 文字数が殆ど変わんねえよ!？」

レ

「ちっ。我が儘な奴め。……後でちゃんと読んどけ」

隼

「お、おう」

レ

「さて、んじゃ説明の続きを――」

タ

「――と、まあ。こんな事情がありまして。シオンは『5歳時女体化ゴスロリしおんちゃん』略して、しーちゃんとなった訳ですな」

一同

『説明終わってるウウウウウウ!？』

タ

「む?」

レ

「早過ぎだろ……!」

未

「いや、でも名前が全てを物語ってますよ?」

昶

「た、確かに……! しかし、それはそれでちょっと。いや、かなり不憫な……」

隼

「いや、だから分かんねえんだけど俺……?」



男三人集

「「アリサ道場読め」」

しー

「……まあ、皆さんが察してくれた状態です」

タ

「よく似合ってて可愛いぞ？」

しー

「やかましいわい！ 嬉しかねえわ！？」

レ

「……成る程ねえ……」

ア

「……ねえ？ アンタ等？ アタシ達をいつまで待たせる気かしら？」

一軋っ

レ

「……いや、これはだな……」

す

「待ちくたびれちゃったよ？」

未

「いや、しーちゃんに気を取られてですね……」

ア

「……へえ……」

昶

「そうです。アリサ先輩。全てはしーちゃんが……」  
しー

「何か俺のせいになりつつある！？」

ア

「ああ、安心しなさい。今のアンタは幼児女体化してるから酷い目

には合わせないわよ」

しー

「え？　そうなんですか？」

ア

「ええ？　……酷い目に合うのは男、て決まってるんだから……」

— 軋っ！ —

男一同

『……………』

ア

「……さあ、どんな目に——」

昶

「アリサ先輩！」

ア

「ん？　昶。どうしたの？」

昶

「とりあえず、これを！」

そう言って昶が取り出したるは、バケットに入れられたフルーツ・タルト。

ア

「ふーん。……タカト」

タ

「YES, Master 御前に」

ア

「ちょっと味見して」

タ

「承知。……では、一つ。はむ……」

そう言って、タカトは一つフルーツタルトを手にとると、一口一口味わうように、吟味するように食べる。

そして、目がキラリと光った。

タ

「……フルーツの配置。スポンジの柔らかさ、タルトの甘味。申し分無い。しかし、一層と二層の間の生クリーム of 甘味を抑えた方が、より味わい深くなるだろう……」

昶

「……………」

タ

「俺やレン先輩に届かないながらも、十分に美味。我が主、如何でしょう？」

ア

「よし。タカトの鑑定付きなら問題無いわね。昶、アンタは許してあげる」

昶

「じゃあ！ いよっしゃああアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

レ・未

「「ちちい！」」

隼

「いや、なんなんだよこのノリ！？ どっかの料理番組か、なんか！？」

レ・未

「「事は命に関わるんだぞ！！！」」

隼

「「そこまで！？ いや、大袈裟——」」

「そ〜ら〜を自由に〜と〜びたあい”か”〜」

レ・未

「「……………」」

隼

「え？ 何だ今の歌……」

ア

「それとも……。ふふっ♪ 四次元ダストシュート、かな？」

タ

「最近では新しく”物理的式”スモール……」

レ・未

「「待ったあアアアアアアアアアアアアアアアアっ！」」

ア

「ん？ なにかしら？」

レ

「タカト！ キッチンだ！ キッチンを貸してくれ！」

ア

「ちなみに、貢ぎモノは”持ってきたもの”以外は認め無いわよ？」

レ・未

「「何イイイイイイイイイイイイ……！」」

隼

「いや、だから何が……」

しー

「ちなみに隼樹さんは何か持って来ました？」

隼

「いや、特にはなんにも……」

しー

「そうですか、では。ナンマイダナンマイダ……」

隼

「お経しでした！？ なんでいきなり！？」

しー

「後になれば分かりますよ」

隼

「……めっちゃ嫌な予感がするんだが」

しー

「きつと当たってますよ。それ」

隼

「……………帰っていいか？」

しー

「無理っスね」

隼

「断言かよ……………！」

しー

「ええ、まあ。先に言っておきますが、あそこに居るアリサししよーと、その執事のタカ兄いは聖王のゆりかご低度なら、一撃で叩き落とせるバケモノですから。逃げようなんて思わない方がいいです」

隼

「……………どんだけー」

しー

「ツツコミに力が無くなりましたねえ……………」

レ

「そこ！？　和んでんじゃねえぞ！　死刑確定者と裏切り者！」

隼

「死刑！？」

しー

「……………なんスか。裏切り者、て」

レ

「当たり前だ！　幼児女体化、てだけで助かりやがって……………！」

しー

「じゃあ、レン先輩もします？　男にとって死ぬより恥ずかしいこ

の格好を？ 女体化までさせられて……！ ミニスカートのゴスロリと黒のニーソックスによる絶対領域装備ですよ？ ほら、アリサししょー……」

レ

「額を地面に擦り付けて謝るから、それだけは許してくれ」

しー

「……分かっていただけましたか？ 俺は今現在進行系で死刑よりキッツイ地獄に居ることを……！」

レ

「よく、理解した。しかし、マズイ……。俺の今回のお土産は――」

レンの今回のお土産♪

2分で覚えられる料理の作り方♪

グウワアヴァラ茶試飲セット♪

しー

「……………」

レ

「ま、マズイ……。あ、アリサあ」

ア

「な……に♪」

レ

「ぐ、グウワアヴァラ茶。飲むか？」

ア

「――レンは飛ぶのが好き？ それともトマトピュールになりたいのかしら？ 物理的式スモール、てのも――」

レ

「スマン！」

しー

「……残るは『2分で覚えられる料理の作り方』ですか。……レン先輩。ちよつとの間でしたがお世話になりました」

「いや、待とう。落ち着こう。まだ、打開策は――。そうだ！ 未来の奴は――！」

未

「……どうです？ タカトさん……？」

タ

「……フム。流石、クレイだな。おせちもいい味を出してる。――欲を言えば、やはりたまご焼きは甘い方がいい。後、海老は殻を剥いてあった方が喜ばれる」

未

「う、く……」

タ

「しかも、貴様の手製で無いのが悔やまれるな。だが、味は文句無く合格だ。……主？」

ア

「未来も合格♪」

未

「っしやあアアアアアアアアアア！ オーライっ！」

ア

「けど、アンタの手製じゃないなら一つ――」

未

「へ？」

レ

「ちちい！ 未来までもが合格とは……！」

しー

「……俺としてはレン先輩がそのお土産で何をしようとしていたかが気になりますね……」

レ

「い、いや。たいした事じゃ……。？ いや、そうか！ アリサ！」

ア

「ん？ どうしたの？ 死ぬ覚悟が出来たの？」

レ

「いや、違う。……やはりキッチンを使わせてもらう」

ア

「？ 言った筈よ？ お土産を使わなきゃ——」

レ

「使うさ。——俺が使うのはこいつさ」

そう言って、レンが取り出したるは『2分で覚えられる料理の作り方』

ア

「……それがどうしたっての？ アンタがそれ使っても——」

レ

「いや、違うな。使うのは俺じゃ無い！ しーちゃんだ！！」

しー

「はい！？」

ア

「……まさか、アンタ……」

レ

「そう、この本は元々。シオンに持って来た本だ。故に、この本を使ってしーちゃんが料理を作る！ ——これが、俺のお土産だ！」

ア

「っ……！ 考えたわね。流石は執務官長、か」



しー

「いやいやいや！ 作るの俺ですか!？」

レ

「ああ。ちなみに作るのはコレだ」

そうやってレンが指差すページには満開全席がどんと載っていた！

しー

「て、アンタアホか!？ いきなりこんなモン作れるか!」

レ

「やかましい！ いいから作れ！ いいな……？ もし失敗してみろ……。その場で俺はお前にグウワアヴァラ茶を飲ませた後、俺もグウワアヴァラ茶を飲み。心中を謀る」

しー

「どんだけヤバい飲み物なんスカ!？」

レ

「いいから行け！ 主に俺の平和の為に!」

しー

「本音が出やがったよ……！ クソっ!」

隼

「ノーヴェもそうだけど。女の子がそんな事言うなよ……」

しー

「俺は元々男です!」

隼樹にツツコミ入れながら、しーちゃんは舌打ちする。

そして、キツと前を見据えるとタカトから戦闘装束（エプロン5歳時用）を受け取る。

目指すは、炎の戦場！

その名はキッチン！

しーちゃんは、ゴスロリの格好に白のエプロン（ふりふり付き）を上に着て、キッチンへと足を踏み入れる！

味鑑定はタカト。こと、家事に関しては……。

否、料理に対しては家事以上に厳しい男である。

あの男を唸らせる料理を作らねばならない！

そう、これもまた戦い！

タカトに対するしーちゃんの挑戦であった。

しー

「やってやるよ！」

そう叫ぶなり、しーちゃんはちみつこい背で材料を取り出した。

ここに、5歳時女体化ゴスロリしおんちゃんこと、しーちゃんのタカトへの挑戦が始まる――！

（後編に続く）

隼

「え？ 俺。どうなの？」

（死刑確定者はほっという後編に続くたら続く）

## 番外話「アリサ道場EX2！」（前編）（後書き）

### EX2後編予告

「しーちゃんの挑戦！ それによりレンの運命は決まる！ 果たして、レンは生き残れるのか！ そして、隼樹（死刑確定者）はどうなってしまうのか？」

ア

「ふ……っ！ ハーレムを目指す奴が、ナンバーズ以外に興味無いですって？」

隼

「……おう！」

ア

「ふ！ いいわ！ 見せて貰おうじゃ無い！ アンタの覚悟を！」

隼

「今こそ目覚めろ！ 俺のコスモオオオオオオオオオオオ……！」

隼樹の因子パワーが今、目覚める！

隼

「……俺は無力だった。だからこそ！ 道場因子に感染した結果。俺は力を手にした！ ……道場限定の力だけだな！」

ア

「何ですって！？」

隼

「見せてやる！ これが、俺の……！」

アリサ道場EX2（後編）

一周年の八日に更新！（予定）

隼

「伊織タカト。アンタは強い。認めるさ……けど」

タ

「……」

隼

「俺はアンタには負けない。——証明してやる。」 萌えはEXより強いと”！」

こう、お楽しみに♪

—この身体は、きっと無限の……—

—そう、無限の夢で出来ていた—

昶

「……ツツコミ入れるの、ひょっとして俺？」

番外話「アリサ道場EX2!」 (後編) (前書き)

お待たせしました♪

アリサ道場EX2! (後編)

解禁です♪

カオスグダグタですが (笑)

よろしく願います♪

では、どうぞ〜♪

番外話「アリサ道場EX2!」(後編)

ア

「はい♪ 作者の陰謀により二部化しちゃったけど後編始まりよ♪」  
す

「しーちゃんが材料を取り出した所で前編が終わっちゃたけど。今は、どうなってるかな?」

現在の状況。

広〜い。キッチンに立つちみっ子。しーちゃん。

各材料を手に取り、パタパタ”瞬動”を使って駆けてます♪

レ

「て、何故に瞬動!? こらしーちゃん!」

しー

「何スカ! 今忙しいんスけど!」

レ

「お前、なんで瞬動使ってたよ!? 高速移動の時に材料やら鍋やら引っ掛けたら料理がパーになるだろうが!」

しー

「そこは嘘でも俺の心配しようよ!?!」

レ

「やかましい! 不死身体質にんな心配いるか! いいからやめろ

!」

しー

「いや、このキッチン広すぎなんですよ。何個かの料理同時進行してるんで、瞬動やめると絶対手が足りなくて失敗するかと……」

レ

「なら同時進行やめろ！」

しー

「別にいいですけど……。それだと多分、完成するまでに二、三時間以上かかるかな……。て」

レ

「……………」

ア

「そろそろを、自由に……。と……。びた……。いか……。」

レ

「……何使ってもいいから出来る限り早く作ってくれ」

しー

「了解です。……グウワアヴァラ茶は俺も嫌ですし」

レ

「頼んだぞ」

ぶつん、と念話が切れる。

レ

「くっ……。！ まさか、あんな無茶してやがるとは……。タカト！」

タ

「なんでしよう」

レ

「何故にキッチンがあんなに広い？」

タ

「あれは俺専用と化しているので必然、俺が使い易いように設計してありますので……」

レ

「く、そう言えばアリサ道場だとともに料理作れるのはタカトしかいないのか……。！」

ア

「私達の家事スキルについては聞かないの？」

レ 「お嬢様二人が何言ってるやがる。どうせ、包丁も持った事無い口だろうが」

す

「私出来るよ？」

レ

「……何？」

ア

「ちなみにタカトレベルを期待されても困るけど、私も一応作れるわよ？」

レ

「んなアホな」

ア

「さて、レンにマイナスヘタレポイント1、換算つと♪」

レ

「……いろいろツツコミ所があるけどよ。それ、全部貯まるとどうなる？」

ア

「しーちゃんのレンバージョン。略して、れーちゃんが誕生するわ♪」

レ

「て、なんじゃそりゃあ!？」

ア

「ちなみに未来は結構貯まってるわよ？ みーちゃん化も近いわね」

未

「て、待った待った！ 後編始まって漸く話せたけど、俺そんなもん貯まってんの!？」

ア

「レギュラー化したから当たり前でしょ？ ちなみに首位はカナン



ね♪」

昶

「……れ、レギュラーでも無いのに首位か……」

隼

「いや、だからカナン、て誰だよ」

一同

『いいからLV見ろ』

未

「さて、しーちゃんだが。……何だ。思った以上に手際がいいな……」

タ

「奴には、中学時代まで俺が料理を教えていた事があるからな」

レ

「何だ。そうなのか？ 俺はてっきり料理完全にダメなタイプかと思ってたぞ……。なら、1安心——」

タ

「教えたのは基礎だけですがね」

レ

「て、オオオオオイ！」

タ

「む、なんでしよう？ レン先輩？」

レ

「何故に、どうして基礎だけしか教えて無いんだよ!？」

タ

「みもりに『これ以上教え無いで下さい!』と、頼まれました。なんでも、自分がシオンの分を作れなくなるからと……」

未

「あゝ。何て言うか。納得です……」

レ

「くっ……。元ネタがTV版限定でヤンデレなだけはありやがる……」

…！」

昶

「それは、関係あるんですか……」

レ

「知るか！」

ア

「さて、しーちゃんの料理もまだ時間が掛かりそうだし、道場らしい事しましょうか♪ ……そうね、神庭家異母三兄弟の性格面と、今現在の設定を公表しましょう♪」

昶

「無難ですね」

す

「アリサ道場とStS，EX初心者さんもいるしね♪」

隼

「う……。それって俺？」

一同

『その通り』

ア

「その後は、前話のおさらいを——」

タ

「……くっ！？ EX化の影響が……！ 申し訳ありませんが、俺はここで……」

ア

「昶、未来、レン。タカト捕まえといて♪」  
新フラーズ三人衆

「「「上の名前が気になるけど、了解！」」」

がっし

タ

「む！　しまった！」

昶

「すみません。しかし、アリサ先輩からの命令ですので……」

未

「俺達もこんな事はしたく無いんですが……」

レ

「……まあ、許せ」

タ

「その割りには、皆笑顔だな？」

新フ

『ソナコトナイヨ』

タ

「……カタコトで言っても説得力は皆無だぞ……」

隼

「……俺には全く指令飛ばさないのな……」

ア

「だってアンタ。魔法とか一切使えなくて、純粹肉体スキルが常人よりちよつとマシなだけじゃあ、役に立たないもの」

隼

「いや、俺だって捨てたモンじゃあ——」

す

「ちなみに、タカト君は一切の能力、魔法抜きでA A＋相当の打撃が出せるよ？」

隼

「て、オオオオオオオオイ！　どこまでチートなんだそりゃあ！？」

タ

「む……？」

レ

「まあ、改めて。チートだよなあ……」

未

「馴れたから普通に感じてましたけどねえ……」

昶

「魔法やら一切抜き、て。どうやってそこまで鍛えるんだよ……」

タ

「……地獄辺りに四年程居れば――」

一同

『分かった分かった』

タ

「む……」

ア

「さて、ちょっと長くなっちゃったけど。改めて、まずはしーちゃんこと、シオンからどうぞ〜♪」

神庭シオン（紫苑）

年齢…十八歳。

魔導士ランク…S+。

使用デバイス…イクス

StS，EXが誇る。不幸体質な主人公。

その不幸体質と地雷を踏む能力は並では無く、しょっちゅう酷い目に合っている。

そのレベルは天災を越え、神災レベル。

その不幸体質っぷりからろくな目に合っておらず数多くの事件の当事者となっており、多くのトラウマがある。（刀の件や、アンラ・マンユ事件がこれに該当）

しかしながら、根は純心。一つの事を決めたらそれに突っ走る傾

向があり、スバルと性格的に似ている所がある。

物語開始当初は復讐を志し、二年も放浪していた事から性格は荒みきっており、スバルやティアナに『ウゼエ』を連発していた程で、アースラ所属になってからも中々完全に心を開くと言う事をせず、タカトやトウヤの事も一切話さなかった。

それがタカトの登場で、暴走に繋がってしまう事になる。

だが、スバル、ティアナの『なのは式お話し合い』（笑）をキツカケに、少しづつ心を開いていき、スバルが感染した時には、自らの記憶を見せる程になった。

そして聖域での真実発覚から、内面を偽る事も無くなり、今では素直になっている。

が、同時にヘタレ分も前面に出て来た為。よい方向に性格が向かっていくのかは、不明。

アリサ道場や各前書き、後書きでは、本編が生ぬるいと言わんばかりに酷い目に合っており。

L Vのカナンと並ぶ程であり、二人は固い友情を交わしている。

なお、シオン自身は認めていないが、結構なバトルマニアで、模擬戦は楽しんでいるフシがある。

しかし、実戦になると生死が掛かっているからか、戦いを楽しむと言う事は一切しない。

なお、座右の銘は。

「無理も道理も無茶して蹴飛ばす！」

（無理が通れば道理引つ込むの改造バージョン）  
で、あり。シオンの無茶ぶりを物語っている。

St S，EX主人公であるためか、物語を通じて常に精神的にも肉体的にも成長を続ける。

特に精神面については目まぐるしい成長を遂げており。フェイトに説教をかます程にまでなった。

しかし、タカト×なのはの逃避行（と、言う名のラブコメ）にすっかり名台詞ごと食われてしまう不遇にあっている為。

やはり、そこら辺は不幸な主人公である。

現在は、強襲戦による最終段階に突入したものの、新型D Aを装備した一団により、艦から放出されてしまった。

ア

「はい♪ シオン編。終っ了っ了っ♪ やっぱ一年は長いわねー。  
シオンのこれまでを語るだけでここまで長くなるなんてねー」  
す

「ちなみに劇中経過時間は驚きの二ヶ月程だよ♪」  
レ

「短っ！」

ア

「元々S t S，EX自体が全編通して劇中経過時間は一年で決着する予定らしいからね」  
す

「アリサちゃんネタバレ！」

ア

「こんくらい大丈夫でしょ。さて、次はS t S，EXが誇るジョーカーキャラ。タカトよ♪」

タ

「む……」

ア

「では、どうぞっ♪」

伊織タカト（天斗）

年齢…二十一歳。

魔導士ランク…EX。

使用デバイス…ナシ（魔王の紋章である666と靈的融合してしまっており。この666がデバイスの変わりとなっている模様）

StS，EXが誇るジョーカーキャラ。

その性質からか、二人目の主人公としての地位を確立しつつある。初っ端の登場から数多くのチートっぷりを発揮しまくった。真性のジョーカーキャラ。

しかも家事万能、料理に至っては、押しも推されぬなのはSS最高の存在となっている。

あだ名はブラウニー（笑）

最初の登場では、いきなり第2段階到達型感染者を、ただの足踏み（正確には魔力放出）だけで触手を細切れにして、なのは達を救っており、二回目の登場では、因子に感染してしまったアリサに刻印を刻み、意識不明者とした上で逆上したシオンと対峙。

だが、殆ど魔法を使わずに撃退する無茶苦茶ぶりを見せた。

チートの活躍は更に続く。

その後、1武装隊と対峙するも一撃（天破水迅）で全員を撃破。その後で再び対峙するシオンもあつけ無く倒し。

止めとばかりに、アースラチーム全員をたった一人で相手取った上で。

何と勝利を納めている。

この時に、実は暴走しておらず全てタカト自身の意思でやった事が判明。

シオンの暴走へと繋がる。

そして、クロノとの戦いの後で、ヴィヴィオに拾われ。そのままなし崩し的にユーノ宅の居候となった。

ここで、その異様な調理スキルを発揮。

ユーノやヴィヴィオが毎日のご飯を楽しみにする料理を見せる事となる。

どうも、人の幸せな顔を見るのが好きらしく。グノーシスを出る前、神庭家に居た時もブラウニー化していた模様。

その理由については後述で。

その後、クラナガンでの感染者大量発生事件で、なのは達の前に現れ。なんと、協力。

しかし、即座に戦う事となった。

アースラでの異母兄であるトウヤとの戦いでは、まさに頂上決戦を繰り広げており。

その被害から、はやてに『次元揺るがす兄弟喧嘩』と名付けられた程。

次元震に次元断層まで引き起こした（しかも、ただの戦闘の余波だけで）のだから当然とも言えるが。

その後は、目立ってアースラチームと事を構える事は無く。むしろ協力している場面が目立つ。

特に聖域での真実発覚からは、それが顕著。

本局決戦時には、なのはを救い出すなど。殆ど味方と化しているようにも見えたが、これはなのはとフェイトに借りがあるからとは、タカトの言。

逃避行編では、普段見せなかったタカト本来の性格。

天然ぽけぽけさんっぷりを前面に発揮。

その天然ぷりには、なのはが頭を抱えた程である。

だが、これがタカトとなのはの距離を縮めた結果ともなっている。逃避行編ラストでクロスからEXの真実を伝えられたなのはの告白を受けるも、拒絶。

再び敵対する事を告げた。

性格面では、先に述べた通り。実はかなりの天然。

基本的に穏やかな性格であり。何より家事を好むと言う性質から



も、それが伺える。

しかし、一度戦闘に入ると全ての感情を戦闘用に切り替え。

その性格は、冷淡、冷徹、傲慢を地で行く。

特に完全にキレた場合は敵味方を（読者も）震え上がらせる程のキレっぷりを見せ。

”死ぬより辛い目に合わせ、この世に生まれて来た事。それ自体を後悔させる”程の目に合わせる。

その拷問方法は、どう考えても極悪であり。実は秘密道具式処刑は”優しい分類”に入っていたりする。

ジョーカーキャラと銘打ったように。作中、最強万能存在であり、題名であるStS，EXのEXの代表格となっている。

EX化したタカトの戦闘能力は、”どこの超野菜人ですか？”（笑）と、言わんばかりの戦闘力と化し。

その戦闘力は本気を出していないにも関わらず、ツアラ・トゥ・ストラを潰滅させかね無い程であった。

しかし、EXの真実。

”魂の傷”が後に判明。

「幸せ」と言う感情を欠落している事が、なのはに知られる事となる。

なお、これをシオンが知っているかは不明。

（トウヤはその性質上、知らないと言う事は有り得ない）

その為か、自分以外の人が幸せな顔となるのが、何より嬉しいらしい。だが、これは幸せを共有出来ていると言う訳では無く。タカトはどんな状況でも幸せを幸せと感ずる事は出来ない。

いわば、ただの自傷行為である。

（他者の幸せを見る事により、自分が幸せを分らないと言う事を再認識しているようなもの）

その生き方といい、在り方といい。悲劇的な存在であるのだが、本人は大して気にしていない。

なお、シオンもそうなのだがやたらと女性と縁があり。

ルシアを悩ませた過去がある。

それについてルシアいわく。

「誰かれ構わず優しいバカ。天性の八方美人で自分から仲良くしようとする事こそしないけど、一度心を開いて接すると、バカみたい義理固くなるし、徹底的に信頼するから。……これが同性に使われるのなら問題無いけど異性にまで発揮しちゃうから……」  
との事。

これはタカトだけで無く、三兄弟に共通しているらしく。

トウヤは別として、天然が入っているタカト。鈍感なシオンは、これを前面に発揮している。

なのはと別れた後。これからの展開が気になる存在である。

ア

「タカト編も終了したわね♪」

す

「長いね〜♪」

タ

「ちなみに作者いわく『これ、めちゃめちゃ削ってるから。シオンもだけど』との事です」

隼

「どんだけだよ!」

未

「まあ、実際。ノートに全設定を書き写すとえらい量になる、て前では感想にあったっけ」

レ

「しかし、まあ。タカトは……」

昶

「普通に鬱系キャラなんだけど……」

タ

「む？」

一同

『本人がこれじゃあなあ……』

ア

「そりゃあ、ルシアも悩むってモンよ」

す

「さて、次はトウヤさんだよ♪」

レ

「お、なのランでは親友のトウヤか……」

未

「1番性格面では謎なキャラですからね〜」

隼

「ちなみにどんなキャラなんだ？」

昶

「……なのはSS中。最強クラスの変態さん、かな？」

隼

「はい？」

未

「恋人には仕事中にセクハラしてるし」

隼

「な、なぬ！」

レ

「仕事が終わったら終わったらでオフィスラブ始めるし」

隼

「……それはひょっとして大人な？」

新フラーズ三人衆

「「「その通り」」」

隼

「くう……！ 何てうらやましい……！ その人どこに居るんだ！



ア

「ぶっちゃけるとアンタのハーレム計画を潰す為によ！」

隼

「ぶっちゃけ過ぎだボケエエエエエ！」

ア

「自覚的にハーレム作ろうなんて、……同じ女として、許せないのよ！」

隼

「それか！ さっきから妙に俺への風当たりが強いのはそれが理由か！？」

ア

「きっぱりとそうよ！」

隼

「だから少しはごまかせやアアアアア！」

ア

「正直に言ったんだから……。あ、アンタも許しなさいよね！」

隼

「ツンデレ風に言っても無駄じゃボケエエエ！ え？ なに？ 許されるとも思ってたの？」

ア

「当然よ！」

隼

「んな訳あるかアアアア！ よし、もう女とか関係ねえ！ 一度痛い目に……！」

ぴー

現在。神化したアリサさんの『アリサ無双』（無限コンボ攻撃）が発生中。

残虐な音が鳴り響いておりますので、川のせせらぎとそこで遊ぶ

アースラチームの絵を” 夢想 ” してお待ち下さい。

レ

「……夢想かよ。実際に絵が出る訳でもないのな」

未

「いろいろと最悪だよ！」

昶

「まあ、それはともかく。キャラ紹介トウヤさん編」  
す

「どうぞ〜♪」

叶トウヤ（総夜）

年齢…二十二歳。

魔導士ランク…EX。

使用デバイス…ピナカ。

神庭家三兄弟長男であり、グノーシス第一位の統領。

わずか二十二歳で組織のトップに立っている存在であり。

なのはSSにおける禁断のオリキャラ『初っ端から階級が高い』  
を地で行く男。

StS，EX内の活躍は、唯一。タカトとの『時空揺るがす兄弟喧嘩』だけであり。それ以外では指揮者や、バックアップキャラとしての面が目立つ。

他のグノーシスメンバーより、活躍の場が狭く。地味なイメージがあると思いきや、そのキャラ特性。

『セクハラ大好き野郎』から、出番無いのにキャラが濃いと言う異質さを見せる。

その戦闘力もさる事ながら、頭の回転が他兄弟を差し置いてめっちゃめちゃ早く。

タカトが『あれには勝てん』と断言する程。

だが、普段のセクハラ発言のせいもあり。頭が良いイメージをあまり持たれていないのが難である。

タカトと違い、幼少期は弱く。タカトに劣等感を抱く程だったが、『グノーシス事件』時に、ユウオに出会い。

そこから一変。努力だけで、タカトレベル（封印状態）の戦闘力を手に入れた。

精霊に関しては、アサギの協力で全精霊と契約している。

これにより、トウヤは史上初の精霊王となっている。

なお、擬似EX化がどんなものなのかはまだ内緒。

『天使事件』の際に当たり、グノーシスの第一位となった。（十七歳時）ちなみに、タカトも同時期に第二位となっている。

性格面ではその話し方も相俟ってか、限り無く掴み難い性格となっている。

しかし、家族や恋人への思い遣りが実はかなり深い。

タカトやシオンに対しては表面上にこそ出さないが、心配している模様。

タカトとの戦いの後に、『いつでも待っている』と言う言葉を残している事からもそれが伺える。

タカトやシオンが恋愛感情に疎いのと真逆に、わりと早熟だったらしいトウヤは、結構前からユウオと付き合っている。（遅くとも中学三年生時には）

そのせいか、タカトやシオンはユウオの事を姉と呼んでいたりする。

なお、ピアノが趣味で、その腕前はかなりのもの。

実はタカトの家事以外の芸術スキルはトウヤを真似たモノであり、

ピアノやドラム等がそれに当たる。

だが、その全てにおいてタカトは『兄者には勝てない』と断言もしている。

トウヤがタカトの戦闘力に劣等感を抱くのと同レベル。あるいは、上回る程にタカトはトウヤに劣等感を抱いていた模様である。

これまでは沈黙を続けるトウヤであるが、第三部の後半からの活躍が待たれるキャラでもある。

す

「はい♪ キャラ紹介。トウヤさん編♪ 終わったよ♪」

レ

「まあ、何だ。シオンやタカトと違って妙にキャラ紹介が短いな」

未

「普通に考えると十分に長いんですけどね」

昶

「しかし、……人に歴史アリと言いますか。結構、トウヤさんもいろいろあるんですね」

ア

「ただいまあ〜〜♪」

す

「あ。アリサちゃんお帰りなさい♪ 隼樹君は？」

ア

「ふふ……♪」

一同

『いや、怖えよ!』

ア

「もう、大丈夫よ。タカトに頼んどいたから」

レ

「何だ。それならそうと——」



ア

「物理的式スモールライトをね♪」

一同

『……………』

タ

「物理的式スモールライト……」（天破光覇弾十縮地による連撃）」

一轟一

隼

「ちよっ！ まっ！ ひ、光に潰されるウウウウウウウウ……  
……！」

タ

「すまん、これも我が主の命。せめて死なぬようにだけは祈ろう」

隼

「イヤアアア……！ ぜ、全方向からの光にイイイイ……！  
！そこは潰しちゃうメエエエエエエ……！」

タ

「そこは念入りに、と言われているのだ。……すまんが男である事は諦めて……」

隼

「い、イヤじゃあアアアアア……！ まだ一度も使って  
無いんだぞ！ こんな事で潰されて……！」

タ

「トイレでは使うだろう？」

隼

「そう言った意味じゃねえエエエエエエ！ この天然さんめエエ  
エエエエ……！」

.....

レ

「か、かつて無い程酷い目に合ってたな。アイツ」

未

「ぶ、物理的式スモールライト……。いや、確かに物理的にだけど  
……」

ア

「最終段階では、小さくなる予定よ？ 両腕と両足が無くなったら  
……」

一同

『怖いから。いいからやめろ』

ア

「むゝゝ。んじゃ、前話のおさらい行きましょうか♪ タカトは……  
まあ、後でゆっくり追求するとして。……レン？ 前話を一言  
でよろしく♪」

レ

「て、俺！？ んゝゝと。宿敵には気をつけろ、かな」

ア

「未来？」

未

「次俺！？ えゝゝと。か、陰が薄くならないように気をつけるべ  
し、かなあ……」

ア

「昶？」

昶

「う、やっぱり俺に来るんですね。……えゝゝと。フラグは自分で  
叩き折るべからず、かな？」

ア

「よし。昶にHMポイント1、追加っ♪」

昶

「え〜〜!?!? な、何で!?!?」

ア

「今のは『当たり』を引いた人にもれなくHMポイントが加算されるものだったのよ♪」

レ

「……なんか、嫌な予感はしてたんだよな……」

未

「右に同じく」

昶

「くっ……! これが経験の差か……!」

す

「その分、二人は結構貯まってるから♪」

レ、未

「「ハア〜〜〜……」」

昶

「成る程……」

ア

「さて、改めて前話のおさらい♪ 嫌なキャラが出て来たわね〜」

レ

「メタトロンのこと、クロスか……。何て、言うか敵にまわしたく無いキャラだよな」

未

「かと言って味方にもしたく無いですけど」

昶

「しかもEXらしいし。……そう言えばEXについて設定が公開されたっけ?」

レ

「感情の喪失、欠落か……。なんて言うか、またキツツイ代償だな」  
す

「うちの作者はSだから♪」

未

「度が過ぎてるだろ……」

ア

「ま、ハガ○ン並のダークさを目指してるらしいから、そこら辺は諦めたわ！ 次の見所は……！ う……。なのはに先越された……」

レ

「あ、何だ。お前、1stキスもまだ――」

ア

「死にたいのかしら？」

レ

「地面が減り込む程頭を叩きつけて謝るから、許してくれ」

ア

「ふん。いいわよ。事実だし……」

未

（あ、ちょっと拗ねたな）

昶

（でも、何もしねえのな）

す

（アリスちゃんは基本的にはいい子だから。……主に女の子には……）

未、昶

（（それって百……））

ア

「ちなみに聞こえてるわよ？ アンタ達」

未、昶

『ぎく！』

ア

「ま？ いいけど？ H Mポイント楽しみにしときなさい♪」

未

「ぐあ！ 藪蛇った……！」

昶

「うう、早くも2ポイント……」

ア

「さて、そろそろしーちゃんも料理出来た頃ね♪ しーちゃん？」

念話が繋がると同時にウィンドウ展開。

キッチンが映し出される。

そこには……。

しー

「ふふ。うふふふ……」

包丁を持って怪しい笑いを浮かべるしーちゃんが……！

一同

『て、怖いわああアアアアアアアアアア！』

しー

「うおっ！？ 何！？」

レ

「何じゃねえ！ お前。今、何しようとしてやがった！？」

しー

「へ？ いや、材料を包丁で切ろうとしてただけっスけど……」

未

「嘔吐け！ そんな風には見えんかったわ！？」

しー

「そう言われても……。俺、普通だったろ？」

昶

「全っ然！ めっちゃめっちゃ怪しかったぞ！ 何だあの怪しげな笑い！」

しー  
「へ？ ああ、俺。なんでか刃物持つと、こう笑いがこみ上げてくるんですよ」

一同

『なお、怖いわボケエエエエエエ……！』

ア

「……で？ しーちゃん。料理の進捗状況は？」  
しー

「……それ、もう固定なんスね。いや、いいスけど。今、8割、と言った所です」

す  
「ちょっと遅れてるね？」

しー

「すんません。この身体だと、ちょっと……」

ア

「まあ、いいわ。頑張んなさい？ ……別に失敗してもレンの命が消えるだけだし」

レ

「て、アホか！ 認められるか！ しーちゃん！ 気合い入れて作れ！ とにかく失敗だけは許さん！」

しー

「うゝゝす」

再び、念話切れる。

レ

「く……！ やはり難しいか……。このままでは……」

ア

「ふふ♪ ふふふふ♪」

タ

「……さて、新しい秘密道具式処刑はと……」

レ

「やめやめ！ 用意すんな！」

未

「てか、もう諦めた方がいいんじゃない？」

レ

「アホか！ 人事だと思いやがって……！」

昶

「まあ、人事ですし」

す

「ちなみに、二人が貢ぎ物失敗した時はどう思うかな？」

レ

「……犠牲は最小限が1番だ。……お前達の事は忘れない……！」

未・昶

「「……………」」

レ

「……………」

す

「ふふ♪」

未

「ほらやっぱし！ レン先輩は信用出来ねえ！」

昶

「俺は今、友情がひび割れる音を聞きましたよ！」

レ

「違うわ！ あれは俺風の絶対助ける、て意気込みだよ！」

未・昶

「「……………」嘘くせえ……………」」

レ

「なんだその信用ゼロな瞳は！ いいから俺を信じろ！ そう今こそ信頼の精神を……」

隼

「その時だった！ 塚本隼樹が地獄から舞い戻って来たのはアアアアアアアア……！」

レ

「やかましい！ 復活したのならそこら辺で静かにしてろ！」

隼

「あれ！？ 誰も驚いてくれない！？」

未

「今さら死人が戻って来たくらいで誰が驚くか！」

昶

「いや、俺は驚いてますよ……？」

レ・未

「「すぐ慣れる！」」

隼

「慣れるかアアアアアアアア！ て、言うか二度と御免だわ！

川と綺麗な御花畑が見えたんだぞ！」

レ

「そんなモン知ってるわ！」

未

「俺なんて体験済みだわ！」

隼

「ぐ……！ まさか体験済みまでいやがるとは。なんて強者揃いなんだ……」

昶

「つくづく、異常な場所なんだなあ。ここ」

隼

「そんな事はどうでもいい！ その女！」

ア



「アリサ様と呼びなさい？」

隼

「なら、アリサ様——て、違うわアアアア！  
！ どんだけ偉そうなんだよ！」  
なんで様付けだよ

ア

「だから神様だって。ほら、崇めなさい？」

隼

「ぐわ！ この女ムカつく……！」

レ

「今更だな」

未

「あゝゝ。確かに」

隼

「いや、そんな事はどうでもいい！ アリサ！  
！ あんたは俺が倒す  
！」

ア

「ふゝゝん？ 何でやる？ 喧嘩？」

隼

「ふっ。そんな野蛮な……。俺がやるのはこの花札だ！」

ア

「別にいいわよ？」

隼

「よっしゃ！ これでお前をぶっ倒す！」

ア

「それじゃあ。始めるわよ？」

花札開始。

20分後。

ア

「はい。五光」

隼

「……………」

ア

「さて、もう二十連チャンで私の勝ちだけど？　そこの負け組？」

隼

「……なんで二十連チャンで五光が来る……」

タ

「今更だが、我が主の神能力は”事象確率支配”だ」

隼

「はい！？」

タ

「ありとあらゆる事象確率を操作し、どんなに低い事象をも確率がある限りは可能にする能力だな。ちなみに、これは一つの能力なだけで。他の能力はちゃんとある」

レ

「……おいおい」

未

「……そら勝てんわ」

昶

「……は、反則過ぎじゃ……？」

隼

「て、立派な反則だろオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……」

！

ア

「あゝら。心外ね？　私はいかさまは何もしてないわよ？」

隼

「存在自体が十分いかさまだろうがアアアアアアアアア！」

タ

「まあ、今更だな」

ア

「ふ。負け犬の遠吠えね♪」

隼

「ぐっ……！　ちくしょう……！」

ア

「大体、ハーレムなんてマジに目指そうなんて奴が私と戦おうなんて一億年は早いのよ」

レ・未・昶

「「長いなオイ」」

ア

「そもそも、ハーレム気取ったときながらナンバーズ一筋的なこと言ってるけど。普通に考えたらアンタ浮気するわよね」

隼

「そんな事する訳ねえだろ！　俺は本当に皆の事が好きなんだ！　てか、少なくともお前だけには絶対しねえ！」

ア

「へっ？　そう？」

隼

「おう！　つか、女以前の生き物に興味出るかっての」

ア

「じゃあ、ぴろーん」

隼

「……！！」

瞬間、アリスはスカートの両端を摘み、持ち上げて見せる。そしてスカートが段々と上にあがり太腿が顕になり――。

隼

「お、おお！　み、見え――！」

隼樹が目を丸くして、見る中。  
スカートは更に上がっていった。

下着が見える直前。

アリサが指を離れた事により、パサリと空気を孕みながら元に戻った。

隼

「――ねえ！　ち、ちくしょう！　もうちょっとで見えたのに……  
！　ハッ！」

ア

「へえ……？　一筋、ねえ？　興味無い、ねえ？」

隼

「ば、馬……鹿。今のは、……アレだ。そう、お前の羞恥心がどのくらいなのかを確かめただけです？　次は無い――」

ア

「あっそ。ほら、ぴろーん」

隼

「フウオオオオオオオオオオオオオオ……！」

再び、上げられるスカートに悲しいかな。基本えっちな隼樹の目が釘付けになる。

しかし、当然の如く。スカートは下着が見える前に、またもや戻った。

ア

「ほ……から見なさい？　このムツツリスケベ。浮気の可能性大じゃない？　これでナンバーズ一筋とか笑わせるわ。このザマで私と勝

負なんて一億どころか、百億年早いわ！ 分かったならまず生物としてやり直して来なさい♪」

隼

「ぐ、ぐ、ぐぬう……！」

レ

「すっげー罵理雑言だな……」

未

「てか、生物って……」

昶

「鬼だなあ……」

す

「アリサちゃんだしね♪」

隼

「くっ……！ いや、まだだ……！」

アリサ

神の攻撃により、打ちひしがれていた隼樹だが。

その目にカッと光が灯る。

そして、ゆっくりと立ち上がった。

隼

「俺の皆への想いはこんな程度じゃ無い！ 次こそは耐えてやるっ！」

ア

「いい覚悟じゃない……！ いいわ！ 見せて貰おうじゃ無い！ アンタの覚悟を！」

そうして、再び持ち上げられる為に、アリサはスカートを掴む。それを前に隼樹はゴクリと息を飲み込むと、キッとアリサを見据えた。

隼

「来てみる！ 今度こそ見せてやる！ 俺の――俺達の想いの強さを！」

ア

「くっくく。アンタごときが私とやり合おうなんて兆の単位で早いつて事を思い知らせてやるわ！」

アリサが叫ぶと共に、一気にスカートを持ち上げる！  
それに対して、隼樹は全力で己へと叫んだ。

隼

「今こそ目覚めろ！ 俺のコスモオオオオオオオオオオオオオオ……！」

そう、叫んだ。瞬間、タカトがぴくりと眉を動かし、そっぽを向いた。

レンが頬を引き攣らせて背後へと首を向ける。

未来と昶は二人に、？と疑問符を浮かべ。

すずかは、あつと左手で口元に手を当てた。

アリサのスカートは勢いよく持ち上げられ。

前と同じくギリギリの場所で離される。

この時、偶然が起きた。

ただの偶然。そう、偶然である。

両の小指にスカートが引っ掛かったと言う偶然。

結果として、勢いよく上げられた腕により、引っ掛かっていたスカートは更に持ち上げられ。

それにより、隠されていたものを顕にした。

つまり、下着を。

意外にも可愛いらしいクマさんパンティであっただけだ。

そして隼樹は、敗北した。

隼

「卑怯だああああああああ！？ 何それ！ フェイント、フェイント、ガチの三拍子！？ しかも白のクマさんパンティかよ！？ どんな頭脳攻撃だよ！ そら見るわああああああああああああ……！！！」

タ

「……単なる偶然と思うがな」

レ

「……悪い。正直、声掛ける暇無かった」

未・昶

「「嘘だっ！？！？！？！？！……！！！」」

レ

「ひぐ○し風に言われても困るんだが、マジに」

ア

「……どっちでもいいわよ。で？ 見たの？」

未・昶

「「見てません！（嘘）」」

ア

「……本当に？ それが嘘だったら、私。アンタ達をこの世界から抹殺しなきゃ、いけなくなるんだけど？」

未・昶

「「魂込めて誓います！」」

ア

「……そう、なら。まず見た奴の処刑を行いましょうか……」

隼

「へ？ て、ま、待ったア！ 何故にどうして俺ににじり寄るよ！？」

ア

「……………」

隼

「無言！？ 今までで1番怖えよ！？」

ア

「……………すずか。さっきの場面」

す

「うん♪ 大丈夫だよ。スカートをガン見してる隼樹君の動画、ちゃんと撮って送ったから♪」

隼

「どこに！？」

す

「…………ふふ♪ ナンバーズの隊舎に♪」

隼

「て、嘘オオオオオオオオオ！？ 何で！ どうして！？」

す

「…………ふふ♪」

隼

「笑って無いで答えろオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

ア

「……………別に、大丈夫よ。だってアンタはこれから気にする事なんて無くなるんだから」

— 軋！ —

そう言うなり、歩み寄るアリサから莫大な魔力が吹き上がる！

ア



「超死になさい！ 塚本隼樹！ 転生して全ての記憶を失いなさい！」

隼

「心を打ちのめした上で体にまでとどめ刺す気か！？ ちょ、待っ  
アアアアアアアアアア————！！！！！！！！」

ぴー

現在、アリサの天技、「アリサ極死無双」が発動中。

無限攻撃による無限コンボで、残虐、凄惨窮まる音が鳴り響いて  
おりますので。

海のさざ波と、そこで戯れるアースラチームの絵を夢想してお待  
ち下さい。

レ

「……………またか」

未

「……………何回、放送事故をやればいいんでしょうか……………」

昶

「……………大人しくしてようぜ、一步間違えたら俺達も……………」

隼

「くっくくく……………！」

ア

「ん？ 何？」

タ

「主？」

いきなり上がる笑い声に、アリサの手が止まる。

それにタカトが怪訝な顔となる。

構わず、声の発生源は——。塚本隼樹は笑いを上げた。

隼

「いつまでも調子乗ってんなよ？　アリサアアアアアアア！」

ア

「きゃっ!？」

タ

「主！」

—轟—

瞬間。いきなり隼樹から発せられる莫大なエネルギー！  
それにより、アリサがよろめき。  
タカトが即座に後ろから支える。

ア

「と、ありがとう」

タ

「いえ。しかし、隼樹に何が……？」

隼

「くっくくくく……」

呆然と呟くタカトに、隼樹が笑う。

そして、前に一步を踏み出した。

隼

「……アリサあ。よくもやってくれやがって……！　覚悟は出来て  
るんだろおな……？」

ア

「ふんっ！　力が無いアンタに何が出来る、てのよ？」

隼

「さっきまではな？」

タ

「何？」

瞬間。

「身体は、夢で出来ている」

声が響いた。

どこまでも、どこまでも静謐に響く。声が。

隼

「さっきまでの俺には確かに力が無かった。アリサにフルボッコにされ。ナンバーズの隊舎にはエライモン送られ。肉体的にも、精神的にも、……魂すらも朽ち果てかけた」

レ、未、昶

「「大袈裟だなオイ！」」

隼

「だが！」

「血潮は愛で、心は希望」

「幾たびの妄想を越えて腐敗」

隼

「奴は、そんな俺に微笑んだ」

タ

「奴、だと？」

隼

「ああ。アンタもよく知ってる奴さ」

「ただの一度も諦めは無く」

「ただ、男は夢<sup>ハイレム</sup>を目指す」

隼

「それは、須らく原作キャラを、そしてゲストキャラに感染し。徹底的にギャグキャラへと化す。事象概念侵食存在。故に、神であるうとも感染し、己色に染め上げる。――そう、それに例外は無い」

タ

「まさか……」

「彼の者は常に独り、夢の丘で夢<sup>ハイレム</sup>に酔う」

隼

「その、まさかさ。俺も道場因子に感染したのさ」

一同

『……!!』

す

「皆、驚いてるけど。一応、皆。感染してるからね？」

「故に、現実に意味は無く」

隼

「……俺は無力だった。だからこそ！ 道場因子に感染した結果。俺は力を手にした！ ……道場限定の力だけだな！」

ア

「くっ!？」

タ

「馬鹿な……」

「見せてやる……！ たった一人の男が夢見た世界！ 現実ではまだ途上なれど、夢では可能な俺のハーレムを！」

叫ぶなり、隼樹は右手を勢いよく突き上げる。

そして、世界が一変した。

その世界は、——異質だった。

[illegible]

それも普通の女では無い。

隼

無限の妄想”

……この、世界は。須らく俺の妄想で出来ている」

ア

「く……！ な、なんてアホな能力……！」

隼

「何とでも言いやがれ！ この能力で俺はアンタを倒す！」

タ

「……………」

ア

「タカト？」

タ

「隼樹。我が主とやり合う前に、俺と戦って貰おう」

隼

「ふ……。いいぜ。アンタにも借りがある……。あの痛みを、俺は忘れていない！」

タ

「自業自得だったような気が……」

隼

「うるさい！ それに、この世界ではいくらアンタでも勝ち目は無い……！」

タ

「何……？」

隼

「不思議そうな顔するなよ。アンタは強い。——認めるさ、俺なんかじゃ敵わない。……だけど」

言うなり、隼樹は後ろ手でばつと己の世界を示して見せる。

己の、ハーレムを！

隼

「俺はアンタには負けない。――証明してやる。”萌えはEXより強いと”！」

タ

「いいだろう……！ 来い……！」

隼

「まずは、お前だ……！ 行け！」

羽の生えたランドセルのチビキャラ

「うぐう~~~~~！」

隼樹が指示を出した、瞬間。

羽ランドセル（略）は、刹那でタカトに頭から突っ込む！

瞬間移動にも等しいその突撃は、タカトの反応速度を越え、その胸に激突する！

一撃！一

羽（略）

「うぐう！」

タ

「がっ……！」

一轟一

突撃を喰らった、タカトは口から吐血し、盛大に吹き飛ぶ！  
倒れこそはしなかったが、数十mも弾き飛ばされてしまった。

タ

「何、だと……？ これは……」

隼

「これが、無限の妄想の能力だ」

隼樹がふっと笑うと同時に、一気に美女達がタカトへと突っ込む。そして数万の数からなる拳を浴びせ始めた。

その速度は轟速！

タカトはかろうじて反応し、防御するも。全弾防ぐ事は叶わず、至る所に打撃を喰らう。

その一撃、一撃に、いかな破壊力があるのか、タカトは再び吹き飛ばされた。

ア

「タカト！」

隼

「ふ……。言った筈だ。アンタでもここじゃあ、俺に勝てない、と。これが”無限の妄想”の能力。”妄想の具現化”だ！」

未

「妄想の具現化！？」

レ

「なんだそのアホらしいけど無茶苦茶な能力は！？」

隼

「妄想の具現化。つまり、俺が妄想した事は、この世界に限り現実となる！——そう、いきなりコスプレさせるも、何するのも自由。当然、強くするのも朝飯前！」

昶

「てかさ。ツツコミたくて仕方ないんだけど？　これ、無限の剣○のパクりだよな？　しかもウチの所バージョン」

隼

「そんなモンは気にしない！　さあ、タカト。アンタの終わりの時間が近づいて来たぜ？」



タ

「――それは、どうかな？」

― 一体は、塩で出来ている ―

隼

「な、何!？」

タ

「――宣言しよう、塚本隼樹。貴様は、貴様自身の”萌え”により敗北する、と」

― 血潮はお酢で、心は砂糖 ―

― 幾たびの食卓を越えて不敗 ―

― ただの一度も箸休めはなく ―

― ただの一度も完食されない ―

ア

「タカト、あんた……!」

タ

「お任せを、我が主。貴女の執事は誰にも負けません」

レ

「いや、そう言った問題じゃ無いだろ……」

未

「タカトさんも、か……」

昶

「なんで? なんでこんなに固○結界オンパレードされてんだよ!

?

一  
同

「知るか」

一彼の者は常に独り、味噌の丘で醤油に酔う一

一故に、デザートに意味はなく。その体は、きつと塩で出来ていた一

夕

UNLIMITED

(無限の)

COOKWORKS

（厨房）  
└

タカトがそう、**呟いた直後。**

世界は再び、一変した。

そこは異質な世界だった。

そこかしこにある、料理、料理、料理、料理、料理、料理料理料理料理料理料理料理料理料理料理料理料理料理料理料理料理料理料理料理……！

まるで、世界全てを覆い尽くさんばかりに料理が辺りを埋め尽くす。

そして、それ等全てを象徴するが如く。

空には、燦然と輝く笑顔のアン○ンマン（顔だけ）が浮いていた。

全てが料理で埋め尽くされた世界で、ブラウニーはただ独り、立つ。

タ

「この世界は、俺の心の具現。――ここには全ての食が在る。  
――征くぞ、ハーレム王。」

腹のこなしは充分か？」

隼

「いいだろう……！　なら、俺も宣言してやる！　萌えは食になん  
て負けないと！　今こそ名乗ろう！

俺は、このハーレムの兄であり、弟であり、父であり、夫であり、  
息子であり、伯父（叔父）であり、祖父であり、従兄弟であり、甥  
であり、許婚であり、恋人であり、友人であり、仇であり、先輩で  
あり、後輩であり、御主人様であり、下僕であり、教師であり、生  
徒であり、師匠であり、生徒であり、マスターである、英雄、塚本  
隼樹！」

一同

『要素多っ！？』

タ

「ふ……。ならば、見るがいい。貴様の夢が壊れる現実を！」

瞬間、料理が一人でに浮かび上がりタカトの周りへと集結する。  
隼樹の周りにも、ハーレム達が集まった。

タ、隼

「「行けっ！」」

二人の声に呼応するかのように、互いの軍勢が動き出す！

だが、隼樹が生んだ女性陣達はいきなり飛来する料理を掴むと、  
食べ始めた。

タ

「――俺の世界を食い尽くす気か」

隼

「その通り！ 何せ。こっちは大量にいるからな！ いくらでも食えるぜ！」

タ

「さて、それはどうかな？」

そう言った直後。タカトの指に一粒の豆が握られた。  
それは、緑色の豆であった。

タ

「——この世界には、全ての食がある。俺はそう言ったな？ それ  
は現実世界に留まらない。”空想食材”を作り出す事が出来る」  
レ

「ま、まさか。アレは！」

タ

「そう、これこそ。究極の食。一粒食べればいかな重傷でもたちどころに治し、体力も回復する。つまり——」

仙豆（せ〇ず）！

昶

「伏せ字の意味無いじゃん！」

タ

「そんな事はどうでもいい。——塚本隼樹。貴様は大きなミスをした」

隼

「なに！？」

タ

「分からないか？ 俺が現出させた料理に仙豆を入れていないとでも？」

隼

「ま、まさか……！」

ここで一つの例え話をしよう。

ヤジ○ベーと言う少年の話を。

彼は、孫○空と言う少年を背におぶり、カリン塔と言う。天高く伸びる柱をひたすら登った。

そして彼が頂上についた時。

空腹のあまり、そこにあった仙豆をたらふく食べたのだ。

一粒食べれば、十日は何も食べなくても大丈夫という。最強食を。

その結果、彼の腹は――。

タ

「さあ、よく見ろ。塚本隼樹。貴様のハーレムを！」

隼

「う、うう……！」

そして、隼樹は見た。

見てしまった。

仙豆入りの料理をたらふく食べ。

肥え、太りきった己のハーレム・メンバーを！

タ

「――この力は、対女性陣用。究極最終魔法。塚本隼樹。貴様の負けだ」

隼

「ま、まだだ！　今からどんなに食べても太らないと言う妄想を――！」

タ

「無駄だ。貴様は見てしまった。己の肥え太りきったハーレムメンバーを。……もはや、貴様は彼女達に萌える事は出来ない。――貴様の萌えは、死んでいる」

隼

「馬鹿な、馬鹿なアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア……！」

叫ぶ隼樹。しかし、それも届く事無く、”無限の妄想”は消えて行く。

後に残ったのは、タカトの世界。

”無限の厨房”だけだった。

タ

「終わりだ、塚本隼樹。貴様の敗北だ」

隼

「く、お、俺の……！」

タ

「最後に言い残す事はあるか？」

タカトの言葉に、うなだれる隼樹はコクリと頷く。  
タカトに顔を向けると、目を伏せた。

隼

「ごちそう、さまでした……！」

タ

「おそまつさまです」

そして、一つの戦いは終わった……。

完

一同

『完にすんな!!』

タ

「む……?」

ア

「さて、文字数もアレだし、今日はここまで♪ 皆一年ありがとうね♪」

す

「ここまでこの作品が続いたのも皆さんのお陰です♪」

ア、す

「「本当にありがとうございます♪」」

ア

「これからまだまだ続くけど、どうか見捨てずによりしく♪」

す

「そして、昶君、隼樹君の召喚許可していただいた二階堂さん、赤夜叉さん♪ ありがとうございます♪ また喚ぶかもしれませんが、その時はよろしくお願いします♪」

タ

「さて、一周年企画と言う事で。一つ、企画を起てた。LVと被るが……。『一周年企画♪ あなたの選ぶベストシーン』を行いたいと思う。」

本編で読者殿が選ぶお気に入りのシーンをトップ3まで投票して欲しい。迷惑をかけるが、是非振るって投票よろしく願います」

ア

「それじゃあ、皆さん♪」

一同

『また次回~~~~~♪』

タ

「刮目あれ」

（終わり）

しー

「よしっ！ 皆さん。完成しましたよ〜て、誰もいない！？ え  
？ 何で！？ 満開全席作ったのに！ 俺放置！？ いや、ちよつ  
と！？ 冗談抜きで終わり！？ 酷くねえ！？ 皆さん！？ おお  
い！ オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
つつつつつつつ…！！！！！！！！」

（しーちゃん伝統芸を見せようとも終わりは終わり♪）



番外話「アリサ道場EX2!」 (後編) (後書き)

はい♪

後編終わりました♪

いや〜。StS, EX始めて一年。  
めっちゃくちゃ早かったです。

この作品を書いて多くの友達も出来ました。

いや、本当。楽しかったです♪

まだまだ続くこの小説。

付き合っていたけると幸いです。

では♪

これからもよろしくお願いします♪

では、また次回に〜〜〜♪

#### 第四十四話「過去の刃」(前編)(前書き)

「気付けば、赤だった」

「あの時の俺は、そんな状態だった。みもりを襲おうとした奴達を見た後、俺は殆ど記憶してない」

「ただ、感触だけは残ってた」

「人を斬った感触」

「人を斬った手応え」

「それだけが残ってる」

「そして、忘れもしないみもりの目」

「純粹に恐怖に彩られた、あの目を俺は俺は忘れない」

「だから、俺は」

「刀を握る事が怖くて」

「そんな俺が刀を手にする事なんて、二度と無い」

「そう、思ってた」

「魔法少女リリカルなのはS t S, E X。始まります」

## 第四十四話「過去の刃」(前編)

「ぐっ……!　　っあ!」

【シオン!】

イクスの叫び。

そして、視界に広がる虚空を見てシオンは舌打ちを放つ。

危うく、慣性に任せて艦から離れてしまいそうになりながら、飛行魔法を発動。

艦壁へと着地し、現状を確認する。

強襲戦、最終段階。

艦内への侵入に成功し後はブリッジを占拠するだけだったシオンだが、突如として現れたDAを着込んだ魔導士達の一団により艦内から弾き出され、宇宙空間に投げ出されてしまったのだ。

艦壁に着地したのは、フィールドの外に出ない為である。

下手に離れると、フィールドを破る所からやり直さなければならぬ。

そんな魔力も、余裕もシオンには無かった。

何故なら――。

一弾・弾・弾・弾・弾――

現状を確認していたシオンに飛来する光弾。  
スフィアによる、誘導弾射撃魔法だ。

シオンはそれをイクスを振るい、切り払う。

敵がD Aを着込んだ魔導士ならば、本命は。

『っ！』

一撃一

光弾に混じって、別種の光弾が放たれたのをシオンは視認する。  
それは、”通常弾”。

魔法弾では無い、質量兵器による光弾であった。

シオンは慌てず横にステップ。

物質弾を回避する。

だが。

一轟！一

直後、回避中のシオンに向かって放たれる光砲！

シオンの行動を先読みしたが如くの精度で光砲は向かって来る。

それに対し、シオンは足場を展開。

着地しながらイクスを横薙ぎに振るう！

『式ノ太刀、剣牙！』

一戟！一

放たれるは、魔力斬撃！

シオンの斬撃を延長し、魔力が飛ぶ。

砲撃と斬撃がシオンの眼前で衝突した。

二つの一撃は一瞬だけ、互いに食い合い。

すぐに霧散、相殺した。

その砲撃の延長線上にシオンは目標を見付ける。

それは機械のヒトガタを着込んだ存在。

先程シオンを巻き込んで、一緒に艦から弾き出た魔導士であった。左手を翳し、砲撃を放った体勢で硬直している。

その隙をシオンは逃さない。

『壱ノ太刀――』

展開した足場に足裏を叩き付け、横薙ぎへと振ったイクスを振り上げる。

同時に瞬動を発動。刹那で敵魔導士の間合いに飛び込む！

『絶――。っ!?!?』

硬直したままの敵に放たれんとするイクス。

しかし、シオンは斬撃の途中でいきなり顔を強張らせる。

直後、無理矢理斬撃を止めて後退した。

『……………ちっ』

【動体反応多数、……シオン】

分かってる、とシオンは心の中だけでイクスに返す。

あのまま突っ込めば、恐らく……。

シオンの心中を察したが如く、新型DAを着込んだ魔導士を中心に、三体の同型のDAを着込んだ魔導士が艦壁をブチ貫いて現れた。ブレイク・チャージとか言ったか。

蒼の魔力をフィールドのように纏いながら、三体は現れたのだ。あのまま突っ込めば、確実にシオンは再びあの突進を食らってい

た事だろう。

しかも、今度は無防備な状態で。

四体に増えた敵魔導士をシオンは睨み据える。

『……アンタ達、この艦の魔導士か？』

『元第77武装隊魔導士だ。小僧、貴様のような子供が侵入者とはな』

恐らくは隊長なのだろう、シオンと先に戦っていた魔導士が念話を返す。

シオンはスツとイクスを正眼に構えた。

……敵は四体……。

彼我戦力を確認し、シオンはイクスを握る手に力を込める。

DAを着込んだ魔導士、と言うのはそれだけで厄介な存在であった。

オプションとして、質量兵器を装備し。

DA自体がデバイスとしての働きもするので、旧来のデバイスを持つ必要も無い。

加えて、あれはパワードスーツの役割も果たす。

A相当の魔導士があれを着込んだとすると。

【一体辺りAAA+相当の戦力か……】

『……聞きたくない、冷静な敵戦力を教えてくれてありがとさん』

ぽそりと呟くイクスに、シオンは嘆息混じりに皮肉を飛ばす。

AAA+相当の魔導士が四体。

アースラやらグノーシスで慣れ切っていたが、そう考えるとかなりの戦力である。

……通常状態で1人で戦っても勝ち目は薄い、か。

冷静にシオンは判断する。

ここに必要なのは、客観的判断であった。

四体もの高レベルと化した魔導士を相手に1人で戦えると思う程。シオンは自惚れてはいない。

1番いい方法は、スバル。ノーヴェと合流する事だが。

『シオン！』

『スバルか』

シオンも向こうも双方互いの出方を窺っている。

当のスバルから念話が来た。

随分慌てたような声に、シオンは訝しむ。

『……ひょっとしてと思うけどよ。こっちの状況、掴んでるか？』

『うん。イクスが教えてくれて……』

その一言で、何でスバルから念話が来たのかをシオンは悟った。

余計な事しやがってと、自分の相棒を睨む。

『で、シオン。大丈夫なのかよ？』

『……ノーヴェにも報せてやがったのか……』

【当たり前だ】

今度はノーヴェからの声に、シオンは呻く。

イクスはさも当然、と返して来るが、今回ばかりは余計だった。二人の事だから、この分だと――。

『すぐそっち行くから！ 無理しないで待ってて！』

『私達が行くまで耐えてろよ！』

『……やっぱりそうなんのな。——二人共、こっちはいいから来んな』

『『はあ！？』』

重なる大音声の念話に、ここらへんは姉妹だなあと、シオンは苦笑。

視線は変わらず敵を見据えながら、シオンは続ける。

『折角、敵艦に侵入出来たのに自分から出て来る馬鹿がどこにいるよ？ フィールドをまた破るのも面倒だしよ』

『でも……』

『大丈夫だって。——だからお前達は自分ん所に集中してろ』

スバルの迷うような声に、シオンは重ねて言う。

それにスバル達は迷いからか、暫く沈黙。

やがて念話が返って来た。

『——分かったよ！ こっち済ませたらすぐ行くから！』

『ソッコーで終わらせるから待ってるよ！』

『あいよ。……無理すんなよ』

二人の返答に、シオンは苦笑する。言葉は違えど、助けに来ると言ってくる二人に。

シオンの返答を最後に念話は切れた。

『さってと——』

念話が切れ、シオンは再び前方、四体の敵魔導士へと集中する。



彼達はシオンが念話が切れるのを待っていたかのように一斉に前へ出た。

シオンはそれに対し、一つの反応を示す。獣じみたニヤリと言う笑みを。

『始めようか』

一撃！一

その念話がまるで聞こえたが如く。

四人が手に持つアサルト・ライフルを一斉にシオンへと撃ち放ち。シオンは矢の如く走り出した。



一弾・弾・弾・弾・弾一

虚空に灯るマズル・フラッシュ。

それは取りも直さず物質弾が放たれた証である。

シオンは向かい来る弾丸を、体を横に向け避わす。と、同時に測転。

さらに放たれるアサルト・ライフルの弾丸を避ける。

『イクス！ セレクト・ブレイズ！』

【トランスファア】

横に回転しながら戦技変換。

シオンの動きが一気に加速。空中に足場を展開と同時に瞬動を発

動する。

それまでのシオンの体速度を遥かに上回る速度で、だ。必然、敵魔導士達はその速度に反応出来ない。

ノーマルのシオンとブレイズのシオンでは、そもその速度が違う。

DAを着込んでいるとはいえ、反応速度までは変わらない。シオンの速度に付いて来られる筈も無かった。

アサルト・ライフルを連射する魔導士の懷にシオンは飛び込み。両のイクス・ブレイズを振るう！

一撃！一

魔導士が気付いたのは、イクスの刃が通り過ぎた後だった。

DAの装甲をイクスの刃が”削った”後。

シオンはその結果に舌打ちする。

ブレイズは速度特化型の戦技変換状態である。

つまり、攻撃力はノーマルに比べるとかなり弱くなるのだ。

DAの装甲が、その一撃に耐えた。

それだけの事である。

突如、目の前に現れ一撃を叩き込んだシオンに、攻撃を受けた魔導士とシオンの後ろに居た魔導士が漸く動き出す。

左手にこれもオプシオン装備であろう。コンバット・ナイフを持ちシオンへと突き出す！

——だが、シオンの動きはそれより疾かった。

『遅え！』

一閃！

一戟！

突き出された二条の銀光に両のイクス・ブレイズが閃く！

突き出されたナイフはイクス・ブレイズに止められ、あろう事か絡み取られた”。

更にシオンは両手を跳ね上げる。

絡め取られたナイフは、それによりあっさりと虚空に舞った。自分の武器を失い硬直する魔導士2人を前にシオンの身体がぐりりと踊る。

横にスピンしながらシオンはイクス・ブレイズを振るい放つ！

『絶影・連牙！』

一戟！

一裂！

前後の魔導士2人に同時に放たれるイクス・ブレイズ。その軌跡は孤を描き、首へとひた走り。

一撃！

その装甲を叩き、2体を吹き飛ばすだけで終わった。

こいつ達……！

シオンは再びの舌打ちと共にスピンを停止。

新型DAの装甲に舌を巻く。

想像通りではあるが、やはりこの装甲は厄介であった。

少なくともブレイズ・フォームではまともなダメージを期待出来ない。

ノーマルかウィズダム。あるいは、カリバーならば……！

そう思い戦技変換しようとして。

一撃！一

間を置かず放たれた銃弾に気付いた。

先に吹き飛ばした魔導士以外の者達。

つまり、残された2人の魔導士が放ったアサルト・ライフルの弾丸である。

シオンは戦技変換を諦め横にステップ。

銃弾はシオンの身体を掠めて通り過ぎる。

が、当然一撃で終わる筈も無くアサルト・ライフルは更に銃弾を吐き出す。

シオンは2、3と続く銃撃を両のイクスで迎撃し、弾き飛ばし。

瞬動を発動しようとして。

いきなり突っ込んで来た騎体に目を見開いた。

残った2人の魔導士は一人が援護射撃を放ち、シオンをその場に釘付け。

もう一人は突っ込んで来たのだ。

シオンに迷い無く向かい来る騎体が纏うは蒼の魔力！

『ブレイク・チャージ!』

一轟一

撃発音声が念話によって放たれ、DAの尖った肩の部分が前へと倒れる。

その部分が展開すると同時に、纏う魔力が濃密さを増す。

直後、一気に加速。シオンへと突き進む。

対し、シオンは横に半歩進んだ。

同時に銃弾が途切れる。

敵騎体を壁にして銃弾から身を隠したのだ。

しかしそれは、同時に突っ込んで来る騎体の真っ正面に立つ事を意味する。

すでに回避出来るタイミングでも無い。

無防備なシオンへと、魔導士の騎体は迫り。

『セレクト・ウィズダム』

【トランスファ―】

突っ込まれる直前で、戦技変換。

ウィズダム・フォームへと変換する。

同時にシオンはその身を前方へと投げ出した。

まるで、迫り来る騎体に自ら挽かれるような動き。

防御もせずに、シオンは身体を倒し。

『神覇、伍ノ太刀――』

その一言が念話となって辺りに響いた。  
同時に艦壁へとイクス・ウィズダム of 石突きが飛び、叩き込まれる！

その動作により、倒れ込むシオンは反発力を利用して一気に前へと出た。

その穂先を展開。内部エネルギーを吐き出しながら。

『剣魔・裂！』

—轟！—

それは、四神奥義を別とするならばシオンが放てる最強の一撃の名である。

威力にしてSS相当の一撃を、シオンは穂先を中心に魔力を纏い、迫り来る騎体に突き放つ！

—戟！—

—軋！—

二つの貫通突撃は真っ正面からぶつかり合った。

周りを軋ませながら、ぶつかり合う一撃はしかし。より威力が高く、密度が高い方に押し負ける。

つまり、シオンの剣魔・裂が敵騎体のブレイク・チャージを破り始めていたのだ。

徐々に貫き、穂先が敵騎体へとじりじり突き進む。

これで1騎！

シオンはその様子に撃破を予測して――。

『『ブレイク・チャージ!!』』

左右からの念話による叫びにゾクリと悪寒を覚えた。

一轟!一

そんなシオンに左右から真っ直ぐ突っ込む二つの騎体!

それはシオンが絶影・連牙を持って弾き飛ばした2騎であった。

前方の騎体に剣魔・裂を放っているシオンにはそれを回避する術は無い。

回避する為には剣魔・裂を解除する他無いが、それは今、鰐ぜり合っている敵騎の突撃を受ける事に外ならない。

『まづー!』

【シオン!】

一戟!一

シオンとイクスの叫びを掻き消して2騎が左右からブレイク・チャージをシオンに叩き込む!

シオンはそれに更なる魔力を放出し、剣魔・裂の勢いを上げて防ぐ。

左右前の三方向からのブレイク・チャージと、剣魔・裂が拮抗し、シオンと敵魔導士は硬直状態へとなる。

それに、シオンは舌打ちして。

『ブレイク・チャージ!』

響いた撃発音声に愕然とした。

先程援護射撃を放っていた騎体が真上に回り込み、突撃を敢行したのだ。

拮抗している今の状態で、これが避わせる筈も無い！

こいつ達……！

真上から降り落ちる敵騎を仰ぎ見て、シオンはぐっと息を飲む。

共闘たたかい慣れてる……！？

一撃！一

シオンへと真上から叩き込まれたブレイク・チャージ。

それは拮抗状態を十分打破しうる一撃であった。

四方向からのブレイク・チャージは剣魔・裂の勢いに勝り、一気に押し流す！

一戟！一

直後、剣魔・裂はあっさりと破れ。四方向からのブレイク・チャージは、その威力を存分に発揮。

挟み込まれ、威力が逃せ無いシオンは爆裂したが如く弾け飛び。艦壁へと盛大に突っ込んだ。



「シオン！？／シオン君！？」



アースラブリッジ。

そこで、二つの叫びが木霊する。

艦長席に座る、八神はやたとバルデツシュの破損により出撃出来ないフェイト・T・ハラオウンの声であった。

二人が注視するのは、展開したウィンドウである。

そこに今映ったのは、新型DAを着込んだ4人の敵魔導士の突撃により、艦壁に叩き込まれ。未だに穴から出て来ないシオンだった。

映像を見て、はやてがくつと顔を歪める。

「シャーリー。シオン君のバイタルは……？」

「はい！ 少し待って下さい……！」

はやてに聞かれる前から既に調べていたのだろう。

シャーリーの指がコンソールを叩く。

短く、しかし。はやて達には長く感じられる時間が過ぎ。やがてシャーリーが声を上げる。

同時、艦壁に開いた穴が少し動いた。

「バイタル良好！ 大丈夫です！」

その声と共に、穴からシオンがはい出て来る。

シャーリーの報告と、映像に映るシオンに一同ホツとするが、そうも言ってられ無い事にすぐに気付いた。

敵魔導士である。

4騎の敵騎は迷い無くシオンへと襲い掛かる。

それに対し、シオンは戦技変換。カリバーへと変化し4騎を向かい討つ。

だが、先の一撃のダメージかシオンの動きは鈍い。  
ニアSランクの攻撃を4騎から同時に叩き込まれたのだ。  
寧ろ、今戦えている事の方が不思議であった。

銃弾、突撃が再びシオンを襲い。

シオンは間断無い連携に反撃もままならず。防戦一方となっていた。

「シオンが……！ はやて！」

「分かってる！ 何とかせな……！」

フェイトの声に、はやては頷く。

それにシャーリーが顔を歪めながら訝しんだ。

「でも、何でシオン君。精霊融合や精霊装填を使わないんでしょうか……？」

「——いえ、違います。使え無いんです」

シャーリーの疑問に隣の席から答えが来た。

グノーシスから来た管制官。シオンの幼なじみ、御剣カスミである。

彼女もまた、防戦一方のシオンに顔を歪めていた。

「精霊融合は反動の冬眠がありますし、精霊装填は……」  
「魔力消費が半端や無い。やろ？」

カスミの言葉を、はやてが引き継ぐ。  
その目はモニターを見たままに続ける。

「シオン君はさっきSSSランクの精霊装填技を使ってる。――アレで魔力を四割は使ってる筈や。精霊装填は使えて後、一、二発が限界やろ」

「あ……！」

その言葉に、シャーリーはシオンが出現させた黄金の巨龍を思い出した。

次元航行艦レベルの防御障壁を、三枚纏めて軽々と破ったあの技である。

四神合神剣技・麒麟。

シオンが放てる最大威力の技。それはつまり、魔力を最大消費する技と言う事に他ならない。

「それで決められるなら問題無いよ。でも、ブリッジの占拠が元々の目的だから。――ここで魔力を全部使っちゃう訳には行かないんだよ……」

フェイトが最後に締め括る。その目は苦戦を強いられるシオンを見続けていた。

映像に映るシオンは良く戦っていると言える。

精霊融合、装填抜きでAAA+。あるいはSに匹敵する敵魔導士4騎を相手取って、未だ落ちていないのだ。

だが、それも時間の問題である。このままでは、シオンは――。

やがて、フェイトがくつと歯を食いしばった。

そのままシャーリーへと視線を移す。

「やっぱり、私が出るよ！ シャーリー、バルデッシュは……！」  
「だ、ダメですダメです！ バルデッシュは本体が破損してるんで

すよ!?! 戦闘行動なんて出来ません!」

「っ! でも……!」

シャーリーが必死に首を振り、それにフェイトが悔し気に顔を歪める。

何も出来ない自分をフェイトは責める。

やっと立ち直り、この場に居ると言うのに。教え子を助けられない自分を。

それは、はやても同様であった。

未だ、リインはアギトと共に眠りについており、シュベルト・クロイツも破損している。

この場に居る者で、シオンの援護に行ける者は誰も居なかった。

ブリッジに暗い空気が流れて――。

『――はやてちゃん!』

突如、通信がブリッジに響いた。

モニターの脇にウィンドウが展開。

そこに映るのは、アースラの主任医療官。シャルであった。いきなりの通信に、はやてが目丸くする。

「シャル? どないかしたん?」

『はやてちゃん! 皆が! シグナムとヴィータも――!』

瞬間。

一撃! 一

震えた。アースラが、僅かに。  
同時、ブリッジにアラームが鳴り響く。

「っ！ シャーリー！？」

「は、はい！ ——格納庫の隔壁で爆発！ 敵の攻撃では無い見た  
いで……て、ええ！？」

「……シャーリー？」

報告の最中に、素っ頓狂な声上がり、フェイトが訝しむ。  
それにすら、反応出来ずシャーリーは硬直。

しばらくして。ゆっくり、はやてとフェイトに振り返る。

その顔は見て分かる程引き攣っていた。

「え、えーと。その、さっきの爆発。敵からの攻撃じゃない見た  
いです……」

「……どう言う意味なん？」

「その……」

しばらくシャーリーは迷い、ややあつて報告を告げた。  
その報告を聞いて。はやて、フェイトは数十秒近く沈黙。  
やがてそれぞれ頭を抱えた。



『ぐっ……！』

【マズイぞ、シオン……！】

分かっていると心の中で叫びながらシオンは両のイクスを振るう。  
それは、飛来する銃弾を防ぎ、弾く。

同時にシオンは虚空に足場を展開し、突っ込んでくる2騎の敵魔導士を向かい討つ。

2騎が持つは、オプションのコンバット・ナイフ。

『っら！』

一撃！一

一戟！一

両のイクスが、突き込まれるナイフの刃を弾き、受け止める。

接近戦の技術は、シオンの方が遥かに上である。

2騎同時であろうと、遅れは取らない。

だが、敵は2騎だけでは無い！

一撃・撃・撃・撃・撃一

2騎の隙間を縫うようにして、放たれるアサルト・ライフルの銃撃！

シオンはそれに顔を歪め、両のイクスを跳ね上げて二つのナイフを弾きながら動く。

銃弾を何とか回避。そのまま、1番近い敵騎に蹴りを叩き込み。

距離を取る。

止まるな――！

シオンは胸中、叫ぶ。

その目は見失うなった最後の1騎を捜し、さ迷う。  
動きは一切止めないままに、だ。何故なら。

止まれば、やられる――！

それは確信であった。さっきの突撃のぶつかり合いで悟った事。この4騎相手に動きを止めるのは自殺行為と同義であった。

放たれる火線がシオンを掠める、それは上からだった。

シオンが真上へと顔を上げる。

そこに映るのは、今まさにブレイク・チャージを発動せんとする敵騎の姿があった。

『ブレイク――』

『ちい……！』

舌打ちを放ち、シオンは右のイクス。短槍となったイクスを振り上げる。

同時、槍が展開。エネルギーを開放する。

『式ノ太刀！ 剣牙・裂！』

一撃！――

シオンの念話による叫びに応え、展開したイクスから穂先が一気に伸びる！

それは真っ直ぐに飛翔し、ブレイク・チャージを発動しかけた敵騎を捉えた。

その一撃をまともに受ける愚は避けたか、ブレイク・チャージを停止。

左手を翳し、シールドを展開した。

一軋――

穂先の中心は、迷い無くその中央に突き立つ。

出足をくじかれた敵騎はたたらを踏み。

突撃を止めた。

——それが狙いだった。

『神覇、伍の太刀！』

イクスの穂先により、動きを縫われた敵騎は硬直していた。

そんな敵騎にシオンは魔力を身体に纏い。一気に駆け出す！

左手の長剣を前へと差し向けたままに、シオンは敵騎に突っ込み。

そして。

『ブレイク・チャージ！』

再びのブレイク・チャージが突き進むシオンの横へと叩き込まれた。

それに技の発動を邪魔されたシオンはぐつと唸り。

再び、ブレイク・チャージにより吹き飛ぶ。

だが、今度は艦壁まで吹き飛ばされる事は無く。形成した足場へと着地する事で何とか堪えた。

同時に穂先を戻す。

『くっそ……！』

シオンは止まらずこちらへと襲い来る、4騎の魔導士に歯噛みする。



1騎、1騎は正直大した事は無い。

DAを装備していると言えど、1騎打ちならばすぐに撃破出来る程度の相手だ。

だが、彼達は当然1騎では無い。

4騎の彼達は、ガジェットや因子兵に出来ない。言ってしまうば”人間くさい”連携を組んでいたのだ。

1騎、1騎は大した事が無かろうが4騎を総体としてみれば、有り得ないレベルに跳ね上がっている。

これはアースラのFWチームと同じ事が言える。

1騎、1騎の戦闘力は普通より多少優秀な程度でも、それを重ね合わせる事により数倍になりかね無いレベルに押し上げているのだ。今の、”普通”のシオンでは、この連携は捌ききれない。

……使うか？

シオンは自問する。己の切り札たる精霊融合・装填を使うかを。

だが、シオンの直感はその拒み続けていた。

こいつ達で”終わりでは無い”と、そう訴え続けていたのだ。

だが、このままではじり貧で終わる。

詰め将棋と同じである。捌ききれない以上、いつかやられる。

後の事を考え余力を残して置いて、今やられる。

それほど馬鹿らしい事も無い。

シオンは迫り来る4騎に、ぎりつと歯を食いしばり。

『ちつくしょうが……！』

悔し気な声を漏らしながら、指を噛む。

血は玉となってぷっくりと出た。

それを人差し指で擦り合わせ、潰し。魔力を纏わした上で血文字を虚空に描く。

何せ、無重力空間だ。そうしなければ、血文字も描け無い。描く文字は――！

一撃！――

直後、シオンは背中に衝撃を受けた。

『か……！？』

【シオン！？】

誘導魔力弾。それによる攻撃である。

対魔力があるからこそ、衝撃を受けるだけで済んだが……。

いつ、そんなもの――！

前から迫る4騎は、そんなモノを放っていない。

それはシオンも確認済みだ。

ならば、誰が？

答えはシオンの真後ろにあった。

そこには、”前から接近して来る4騎の魔導士と同じ新型DAを装備した者達”が居た。

その数、8騎。

それは、一つの事実を意味している。

『増、援……！？』

愕然とするシオンは、馬鹿なと呟く。

だが、それは紛れも無い事実であった。

8の騎影が一気にシオンへと殺到する。

前の4騎と合わせて12騎。

新型DAを纏う彼達がシオンを囲む。

【シオン……】

『分かってる……！ 使うぞ……！』

シオンにもう迷いは無い。

後の事を気にしている状況では無くなったのだ。

今必要なのは、敵騎を纏めて倒す手段！

それは一つしか無かった。

手に赤く染める血を振るい、シオンは文字を描く。

その文字は『雷』。

『来い！ ヴォル——！』

念話による叫びが響く。

精霊召喚。シオンは切り札を発動する為に、友にして隣人たる精

霊を召喚する。

それを阻止せんと、アサルト・ライフルが火を吹き。誘導弾が放たれる。

しかし、シオンは一切構わず。最後まで名を呼ぼうとして――。

『切り札使うんは、まだ早いやろ。アホシオン』

念話がシオンに響いた。

この、声は……！

一射！一

瞬間、” 剣が矢となり” 飛来。

誘導弾の事如くを撃ち貫く。

それで終わりでは無かった。

『先輩は弱いんだからよ。無理すんなって言っただろ？』

一撃！一

聞き覚えのある先輩を先輩と思わない念話と共に放たれるのは魔力斬撃！

それは、アサルト・ライフルから放たれた銃弾を一部消し飛ばし。

『シオンだしね……。……この借りで後で何して貰おっかな♪』

一破！一

脳天気なくせに、やたらとSな念話と共に砲撃が放たれる。

光砲は更に銃弾を消し飛ばし。

これで敵騎が放った攻撃は全て消えた。

敵騎もシオンを見ていない。

顔まで隠れているDAのせいで判別出来ないが、その動きは動揺が混ざっているようにシオンは思った。

『ヘタ君には後で一発芸でもやってもらおか♪ 勿論、爆笑取れる

まで終わせんぞ?』

一轟一

相も変わらずお笑いの事を言ってくる関西弁の念話が響くと共に放たれるは渦を巻く衝撃波。

それは、今も敵艦のブリッジを目指す少女の一撃である。

ここに居ない彼女の一撃を再現したのだ。

衝撃波は、4騎のDAを纏めて束縛する。

『全くよ。この借りはでかいと思えよ?　ヘタレオン!』

一裂!一

その4騎に、ぶっきらぼうな念話と共に放たれるは、真空間に発生した竜巻。

それが容赦無く4騎を吹き飛ばす。

それを見た残る8の敵騎は即座に散解しようとして。

『貴方は毎回懲りないですね本当に。――まあ、そんな無茶するあたりが、シオンらしいですけど』

一閃!一

続く、烈風の一閃がやたらと慇懃な敬語と共に放たれ、残る敵騎を纏めて撃つ。

その一撃で倒れ無いまでも、相当な衝撃を叩き込まれたか。敵騎はその場で硬直する。

『あのブラウニーの真似事なんかするから、こう言う目にあうのよ。少しは反省しなさい』

一砲！一

明るい、しかし姐御的な言い回しと共に光砲が撃ち込まれ、硬直する2騎に直撃。

盛大に吹き飛ばし。

『まあ、今回は俺達が寝てたせいだが、でかいからよ。今度、飯奢る程度で許してやるよ。――あ、肉な肉。やっぱり怪我したら肉だよな――』

一斬！一

やたらと脳天気かつ、鷹揚な念話と共にシオンを”摺り抜け”て、斬撃が飛ぶ。

それは、残る6騎”のみ”を纏めて打撃し。軽快に吹き飛ばし。

『――いろいろあるがよ。ま、俺達が寝てる間に迷惑掛けちゃったな。……それは置いといてヤニねえかヤニ。吸えねえだろうが、くわえときてえ』

一弾！一

一弾・弾・弾・弾・弾一

劳いの言葉なのに、最後はやっぱり煙草を求める念話と共に6の銃撃が容赦無く敵騎に叩き込まれる。

弾かれたように、更に吹き飛ばされ。

『――済まんな。シオン。迷惑を掛けた』  
『それと、後でなのはの事聞かせろよ』

一烈！一

一戟！一

連結刃の一撃が、3騎を追撃。  
横薙ぎに、打撃し。  
同時に三つ鉄球が残る3騎に撃ち込まれる。

そして、シオンの周りにはあれほど居た敵騎は纏めて吹き飛ばされ。  
れ。

変わりに、見慣れた顔が出揃っていた。

アースラで寝ている筈のグノーシス・メンバー。  
そして、ライトニング2、シグナムとスターズ2、ヴィータ。

総計十一人の顔ぶれが。

皆、本来はまだ寝てなくては駄目なのだろう。

そこらに包帯は巻いてあるし、片腕や片足をギブスで固めている  
者も居る。

当然、まともに戦えるような状態では無い。

だが、それでも。無理矢理に駆け付けたのだ。

戦う為に。

シオンを助ける為にとは誰も言わない。

真実、誰もそうは思っていないだろう。  
だが、それでも。彼達は――。

しばし、呆然としていたシオンだが、やがて。へっと笑う。  
そして駆け付けた彼達に皮肉気に口端を吊り上げた。

『怪我人は大人しく寝てりゃあいいのに。皆揃って目立ちたがり屋  
だなあ……』

『言ってる。大ピンチだったじゃねえか』

『これから大逆転の予定だったんだよ。――ま、でも折角来たんだ  
し。一つ楽しんでいけよ』

そう念話を飛ばしながら、シオンはぐると首を巡らせる。

そこには、いくら本調子では無かったとは言え。

グノーシス・メンバーと、シグナム、ヴィータの一撃を受けて。  
尚も倒れない十二の騎影があった。

また随分、頑丈である。

だが。

『んじゃ、反撃開始と行こうか！』

『お前が仕切るな アホ』

シオンの念話にコルトのツツコミが入り。

直後、一気にシオン達は敵騎に踊り掛かる。

ここに反撃開始の幕が開いた。



(中編に続く)

第四十四話「過去の刃」(前編)(後書き)

はい♪

前編終了です♪

また三部作か!?

と、思われる方々。

いえいえ。四部作ですよ♪

……て、ああ! 石投げないで! (笑)

いや〜。なんで戦闘になると文字が進むのやら (笑)

ちなみにEXでは基本一万文字を目度にしてます♪

あまり当てには出来ませんが…… (笑)

ではでは、中編でまた会いましょう♪

ではでは〜♪

第四十四話「過去の刃」(中編1)(前書き)

よ、漸く中編1。書き終わりました……！  
むう、今回の戦闘はやたらと書くのが疲れました。  
な、何故だ……。

何と言うか、テストメント的にも色々実験的な今回(汗)  
生温い目で見て下さると、幸いです(笑)  
ではでは、どうぞ……♪



弾丸群を撃ち込まれるシオン達の真後ろで、シオンの幼なじみにしてイクスと同じU・Aデバイスであるフェイル・ノートを構える、本田ウイルの念話が響く。

直後、剣矢が連なり飛翔。

ちようど並びながらアサルト・ライフルを連射する敵陣の真ん中へと撃ち込まれた。

それに中央の敵騎達が撃ち落とさんと、剣矢にアサルト・ライフルの照準を向ける。

放たれた剣矢は四発。

敵騎達は、迷い無く発砲。

一撃・撃・撃・撃・撃一

アサルト・ライフルから放たれた弾丸は、剣矢に着弾。  
赤い火花のみを発したあっさりと弾かれた。

それに敵騎達は慌ててアサルト・ライフルを連射するも、結果は先程と同じ。

威力の桁が違い過ぎるのだ。

中央の敵騎は迎撃を諦め、上へと逃げる。四発の剣矢は、真っ直ぐに飛び。敵騎を通り過ぎて、虚空に消えた。

それが狙いだった。

《簡単に頭を出してくれちゃって♪ ガングニール!》

【ぶっ飛ばせ〜♪】

直後に叫びが響く！

射撃、砲撃を得意とするのは、ウィル一人では無い。

風千尋。

白き槍。ロスト・ウェポン、ガングニールを携える彼女が。  
上へと逃げた四騎にほくそ笑む。

ガングニールの穂先を迷い無く向けた。

ガングニールの姿は、既に2ndフォーム。砲撃形態！

《その威名を存分に叫びなさい！》

【真空間だから念話でね〜♪】

ーバースト・ベヴァイゼン！ー

同時、世界に鍵となる声が響き、それを契機にガングニールの砲口に光が収束する！

上へと逃げた敵騎達は漸く千尋に気付いたのか、慌てて離脱。散開しようとするが、砲撃上等な彼女がそんなものを許す筈も無い！

《大・神・宣・言！》

【オーディン！ カノーネン！】

ー煌！ー

叫びと共にガングニールの砲口から激烈な光が放射される！  
放たれた光砲は、一気に敵騎へと飛び。  
上に逃げた四騎の内、二騎に直撃。

何とかシールドを張ったり、一撃KOこそ避けたが。

あまりの威力にその場に留まる事も出来ず光砲に押し流される。

仲間が押し流されるのを脇目に見ていた残りの2騎は、一瞬だけ棒立ちになる。

しかし、すぐに我に返ったか。

下降し、仲間へと合流しようとして。

その一瞬が、命取りだった。

千尋の叫びが更に響く！

《連……！ 射あああああ——————！

！

【大、サービス〜♪】

一轟！一

叫びの念話が響き渡ると同時に、”2射目”の砲撃が放たれる！  
その光砲にぎょっ！ とする残りの2騎は、千尋の笑顔と、問答  
無用とばかりに煌めく光砲を目に焼き付け。

一撃！一

放たれた光砲は、防御すら忘れた敵騎に叩き込まれた。

光砲は、その威力を1騎目に全て注ぎ込む。

それは、爆砕と言う形をもって顕現した。

一爆！一

閃光爆裂！

光砲が着弾した敵騎を中心に爆発する。

それは残った1騎を押し退けながら広がる。

その光はまるで、太陽を思わせた。

光は直ぐに収束し、収まる。

後に残ったのはD Aを完全に破壊され、気絶した魔導士だけだった。

《まずは1騎！》

千尋は顔を綻ばせながら、高々に戦果を告げる。  
そして。

《んで、もう1騎。追加やな♪》

一射！一

一撃！一

上に残った最後の1騎。

千尋の砲撃に驚愕し、硬直していた敵騎の四肢に剣矢が8連で貫通していく！

いつ放たれたのか、敵騎が射られた事にすら気付かぬ早業であった。

四肢を穿たれ、苦しみ悶える魔導士が見たのは、最後の剣矢をフェイルに番えるウィルの姿。



その目はどこまでも、ひたむきであった。

口端がにい、と歪む。

《往生オ、しいやあ……》

【ソード・バレル、オープン。サンダー・ブレード、セット】

直後。

一閃一

静謐に、あまりに静かに剣弓が敵騎に突き立つ。

この剣矢は、先の剣矢と違い貫通する事は無かった。

肩の部分へと突き立った剣矢は、しかしその効果を發揮する。

一雷！一

一瞬、敵騎に容赦無く走る雷光！

いかな威力がその雷光にはあったのか、敵騎はびくつと痙攣し。雷光が収まった後は黒煙を辺りに吐き出した。

《2騎撃破、や》

煙を上げ続ける敵騎にウィルはフツと笑い。

隣の千尋と頷き合う。

そして、次なる標的と援護が必要な仲間を求めて視線を巡らせ始めた。



千尋とウィルがそれぞれ撃破を告げる。

それを後ろで聞きながら、シオンは前方。未だ艦壁に張り付き、アサルト・ライフルを連射する敵騎達を見る。

四騎の魔導士は後方に吹き飛ばされ、二騎は撃破され。

残った六騎の魔導士達は目に見えて分かる程にうろたえていた。当然とも言える。何せ、ウィル達が駆け付けてからまだ1分も経ってはいない。

その間に、二騎も墜されたのだ。

うろたえましょう。

だが、戦場においてその動揺は、付け入られる隙でしか無い！

《シ〜ン♪ 宜しく♪》

《リク。頼むで♪》

弾幕が緩んだ瞬間を見計らって後方から飛ぶ念話。

シオンとリクはそれに迷い無く頷き、ノーマルに戻したイクスと、バスターフォームへと戦技変換させたブリューナクを構える。

刃を横にして、まるで野球のバツテングのようにして二人は己のデバイスを振るった。

その前に、念話を掛けた二人。

聖徳アスカと、獅童楓が、ひょいと現れた。

女子二人はくると身体を回転。

シオン達に対して、足裏を向ける。

そこを目掛けて、シオンとリクが、刃を横にした大剣を振り放つ！

二つの大剣を足場にし、さらにシオン達が振るった大剣の勢いを  
利用して二人は一気にすっ飛ぶ。

向かう先は、アサルト・ライフルを連射する敵騎陣。

弾かれ飛び出した二人は真っ直ぐに敵陣へと突き進み。その最中  
に、ぐっと拳を握る。

その拳には、何故か血に塗れていた。

《《術式解凍!》》

ーアクセル・ブレイクー

ーサーキット・ロードー

二人の念話による叫びと共に鍵となる言葉が空間に響く。  
同時、二人は血に塗れた右手と左手を振るった。

《来てね♪ ジン!》

《来いや。セルシウス!》

二人が叫ぶと共に、背後に二つの影が顕現する。

アスカの背には風纏う、太っちょの男性が。

楓の背には、その肌すらも透き通り霜を纏う薄衣の女性が現れた。

風の精霊…ジン。

氷の精霊…セルシウス。

二人は、己の契約精霊を呼び出したのだ。  
そう、アスカも楓も使うのは、カラバ式。

その二人が精霊と契約していない筈も無い。  
永唱は、ここに来る最中に済ませて置いたのだろう。  
先の術式解凍は、これを意味していたのだ。

《さつき行くよ〜♪ 白煌<sup>びやくけい</sup>。精霊・装填》

【了解。全兵装、全開放。超過駆動、開始！】

アスカの叫びと共に、腕に装着した手甲。

白煌へとジンがその像をブラしながら吸い込まれる。  
完全にジンが白煌へと装填されると。

アスカは、にぱっと笑った。

【精霊・装填完了！】

《よし。”単一固有技能”（ワン・オフ・アビリティー）発動



【了解】

アスカの陽気な念話に白煌の淡々とした声が答える。

直後、アスカの姿が”ブレた”

その姿は、多重に”残像”となって世界に投影された。

【聖鳳流拳技、単一固有技能。『絢爛武闘』発動】

白煌がその残像現象の名を淡々と呼ぶ。

同時、アスカは足場を空中に展開。そこに足を乗せ、アスカ達へとアサルト・ライフルを連射する敵陣を見る。

にぱっと、再び笑った。

《行くよ〜〜〜！》

笑いと共に、間延びした叫びが響く。

瞬動発動。

一気にアスカは残像を残しながら敵陣へと駆ける！  
慌てたのは敵騎である。

何せ、残像を伴いながら疾走してくる少女など初めて見た事だろ  
う。

慌てて全騎、アスカへとアサルト・ライフルの照準を向け。フル  
オートで連射開始。

一撃・撃・撃・撃・撃一

放たれる幾百もの弾丸群。

それは隙間無くアスカへと殺到し、その華奢な身体へと襲い掛か  
る。

だが、そんなものに意味は無かった。

アスカに殺到する弾丸は、しかし。

全て、その身を通り過ぎる。

そう、弾丸が撃ち抜いたのはただの残像に過ぎない。

本物のアスカは、そんなもの、とうに抜けていた。

普通の瞬動を遥かに超える速度である。

アスカは真ん中でアサルト・ライフルを連射する敵騎の真ん前に  
移動すると、その眼前でにぱっと笑ってみせた。

その行為を挑発と受け取ったか、至近距離でアサルト・ライフル  
を魔導士は連射する。

弾丸は未だに笑うアスカへと吸い込まれ。

当然の如く、通り過ぎた。

残像だ。



続け様に叩き込まれた風の流星が、DAの装甲を問答無用に完全破壊。

尚も止まらず、その背中に流星は撃ち込まれ。魔導士は完全に意識をぶち切られ、気絶した。

これこそが絢爛武闘の真なる効果。

風で形成された残像による追加攻撃であった。

例えばSランクの攻撃を絢爛武闘で放った場合。

残像による追加攻撃が放たれた攻撃と”同じ威力”で発生するのである。

続け様に数十発もの攻撃が、である。

その威力たるや押して知るべし、であった。

風塵流星煌を放ち、残心するアスカ。

しかし、その笑顔が若干歪み、脇腹を手で押さえる。

《あたた……》

【……肋骨が骨折しているのですから当たり前です】

目立った怪我が無いように見えたアスカであったが、やはり相応に怪我をしていたらしい。

ん……と、唸りながらその場に膝を着く。

そんなアスカに我に返った敵騎達がすぐさまアサルト・ライフをアスカに向ける。

だが、それを見てもアスカは笑顔のままだった。

《えへへ……。ちょっと痛いから休憩するね？ 楓ちゃん。後、宜しく……》

《お任せや♪》

【全兵装、全開放。超過駆動開始！】

アスカの念話に、楓とシャドウの念話が応える。  
見ると、敵陣から少し離れた所にアスカは陣取っていた。  
構えるシャドウは1stモード。

レイピアの状態である。

そのシャドウに、セルシウスがその身を沈ませる。

【精霊・装填！】

《……パクる相手もおらんし、時間も無いから久々に行くで？  
お姉さんのオリジナル魔法！》  
楓

精霊装填が完了したシャドウがその刀身を鮮やかな蒼に染める。  
楓は迷い無く、シャドウをあちこちに振るった。

その動作に呼応するように、その眼前に氷の鏡が生まれる。

それも一枚では無い。多数に、だ。

氷鏡は楓の姿をそのまま映す。

その鏡を見て楓は笑みを浮かべ、視線を前へと戻す。

アスカを撃たんとする敵陣達に。

その時、うずくまるアスカへと今まさに弾丸を叩きこまんとする  
魔導士達であったが、その直前に信じられない事が起きた。

アスカの前にいきなり氷の鏡が発生したのだ。

一切、何の前触れも無く。

それも、アスカを囲むように氷鏡は現れる。

氷鏡は、DAを着込んだ魔導士達を言葉通り鏡映しとする。

それを何かの防御と思ったか。魔導士連中は即座にアサルト・ライフルを氷鏡に向け、破壊せんと即座に発砲して。

一撃・撃・撃・撃・撃一

全て、その弾丸を”己達”が喰らった。



氷鏡に弾丸が接触した瞬間に、だ。

跳弾でも、ましてや弾丸を返された訳でも無い。”氷鏡に映る”自分を撃ったと同時に。撃った箇所と”同じ”所に弾丸による衝撃を受けたのである。

何が起きたか分からずに混乱する敵騎達を見て、楓がくすりと笑う。

《ミラー・ファントム。上手くハマってくれたなあ》

レイピアを弄びながら、そんな念話を飛ばす。

ミラー・ファントム。それがその魔法の名前なのか。

未だに混乱する敵騎達に楓ニンマリと笑い。眼前の氷鏡へとレイピアを構え。

《よつと》

迷い無く突き入れた。

瞬間。

一閃！一

レイピアが氷鏡に”沈む”。

それと同時に、敵騎の眼前にある氷鏡からレイピアの剣先が一斉に”生えた”。

それは混乱する敵騎達に突き穿たれる。

DA自体は、相当な頑健さを誇る為。その一撃は、装甲を僅かに傷付けるのみであったが。

当然、いきなり生まれたレイピアに更に敵騎達は混乱する。

だが、異変はそこで終わらなかった。

レイピアが触れた箇所から、いきなり凍り始めたのだ。  
これは、精霊装填された武装による追加効果であるが、それは取りも直さず一つの事実を肯定する。

氷鏡から生まれたレイピアは、全て”本物”のシャドウであると  
言う事だ。

ミラー・ファントム。

氷鏡による多重転移魔法。

それが、この魔法の正体であった。

弾丸を返したのも、これによる現象である。

氷鏡に映った敵騎達に弾丸を転移して返したのだ。

シャドウが多重に現れたのも同様である。

鏡越しに剣先を転移させて、ついだとばかりに変形。

1stモードのシャドウは、形質変化能力を有する。

クラナガンでの戦いでハリセンに変形したのがこれにあたる。

これを氷鏡の転移空間内で行ったのだ。

剣先を多数生み出し。全ての氷鏡から出現させたのである。

結果、何が起こったのか分からない敵騎達は混乱したのだ。

装甲が精霊装填されたシャドウの追加効果で凍り始めた事に、魔導士達は慌てる。

氷鏡の前に居る事は危険と判断したか、慌てて上へと逃げ出した。

それに、楓とアスカが同時にクスリと笑う。

《《リク！／リク君♪》》

二人が同時に、同じ名を呼ぶ。

と、同時に二人の背後から艦壁を蹴り虚空へと駆ける一人の少年

が居た。

真藤リクである。

その手は、二人と同様”血に塗れている”。  
そう、リクもまた、カラバ式の使い手である。  
ならば、精霊と契約していない筈も無い！

《術式解凍！》

—スマッシュ・インセプター—

《来い……！ ノーム！》

虚空をひた走るリクの叫びに、どこからとも無く。  
岩塊が複数現れる。それはリクの背後で衝突。  
直後、髭を生やした。やけに背丈の小さな初老の男性が現れた。

地の精霊…ノーム。

それが、この初老の正体である。

リクは背後に現れたその存在に振り向きもせず、己のデバイス。  
ブリューナクを大上段に振りかぶる。

そこにノームが像をブラして、吸い込まれた。

《精霊装填！》

【全兵装、全開放、超過駆動開始！】

やがて、ブリューナクに完全にノームは融合した。  
リクはそのまま、虚空を駆け、直後。  
一気に下降を開始する。

そこには、今まさに楓の攻撃から逃げ出した敵騎が二騎居た。

そして。

一足を地に、我は恐れず前へと歩く――

空間に、リクだけの呪文が響く。

そう、リクは第四位でありながら唯一、オリジナル・スペルに開眼しているのであった。

それが意味するのはただ一つ。

”リクが放てる最大威力の技”

その呪文に応えるかのように、ブリューナクの色が変質する。

朱だったその色は、漆黒へと変わった。

光が歪められているのだ。

ブリューナクの”超重量”に。

それをリクは逃げ出す二騎に突き進みながら、一気に降り放つ！

《超重！ 魔神撃！》

――轟！――

剣先は、二騎に当たらず無かった。

いや、当て無かったのだ。直撃させれば、確実に即死させてしまう。

剣先は、二騎の隙間を通り過ぎる。  
それだけ、それだけで。

二騎はD Aを砕かれた。

超重量により、発生した超重力衝撃波でD Aのみを問答無用に破壊されたのだ。

D Aを砕かれた魔導士達も当然、ただでは済まない。

そのまま直重量の剣に引きずられ、リクと共に艦壁に叩き付けられる。

その衝撃で、彼達はあっさりと昏倒した。

艦壁にめり込んだリクは、ふうと息を吐き。ブリューナクを肩に担ぐ。

そしてアスカ、楓に振り向きながら、ニツと笑い。

《これで、五騎！》

撃破数を高々に告げた。

残り敵魔導士、七騎。



これで後、残りは七騎……！

シオンは戦果を告げるリクの念話に頷きながら現状を確認する。

楓の攻撃から逃げ出した五騎はそのまま、後退し続け。

千尋に吹き飛ばされた二騎も漸く砲撃から逃れたのか戻り始めていた。

二つに分かれていた敵騎はそのまま合流するつもりなのだろう。互いに合流する軌道で飛んで行く。

だが、そんなもの許してやる義理も無い。

シオンは”目標”。

自分を最初に艦内から叩き出した魔導士を見つける。

あの新型D Aを装備した第77武装隊の隊長である。

あれには最初にブレイク・チャージをかまされて以降、煮え湯を飲まされっぱなしであった。

いい加減、ここらで借りを纏めて返しておきたい。

神庭シオン。

タカトの事は何も言えない程、負けず嫌いであった。

《刃、あいつ達。分断出来るか？》

《あ？ 誰に聞いてるつもりだお前》

シオンの念話に、刃がニヤリと笑う。

そして、愛刀である銀龍を振るった。

《朝飯前だ、そんなの。……てか。そんな事する必要あるか？  
纏めてぶっ潰せば――》

《お前。その足で、あれ達と戦うつもりかよ？》

《……………》

刃の念話に、シオンがジト目で睨む。

刃の足は、両足とも見事にギプスで固められていた。

骨が折れているのは間違い無い、

少なくとも、歩法が重要な刀術で戦える状況ではあるまい。

無言で固まる刃に、シオンが苦笑して肩を竦めた。

《ま、無理せんところで援護してろよ怪我人》

《……治ったら覚えとけよ、ヘタレ》

その念話に聞こえませーんと、耳を塞ぐシオンに、刃はこめかみをピクピクさせつつ、銀龍を振るう。

《――目覚めろ、銀龍》

一哮喘――

瞬間、刃の持つ銀龍から確かに咆哮が響いた。

無音の咆哮である。

刃は、それに微笑し。ゆっくりと刀を振り上げた。

《分断するだけでいいぜ、刃》

《アホか。んなセコい戦果で納得出来るかよ。1騎墜としてやる……！》

《聞こえたで――――！ 刃――――！》

遠くから、精霊装填したのに1騎も墜として無い楓からの怒声が響く。

実際、敵騎を分断させたあげく。混乱にまで落とし入れたのだから、その戦果は撃破より高いと言えるのだが。

シオンと刃は揃って聞こえ無いフリを決め込んだ。

《こら！ 無視すな！ お笑いには無視が1番キツイんやで！？》

《――だ、そうだぞ？ ウイル》

《……ワイに振らんといってくれるか》

楓と同じ関西人（しかし、中身はクォーター）のウィルが諦めたような顔で首を振る。

それにも反応し、ぎゃあぎゃああと騒ぎ出した楓に、シオンと刃は標的が変わった事に安堵。

再び敵騎に視線を向ける。

同時、刃の足元に二重螺旋を織り込んだ魔法陣が展開した。

更に刀身を炎が伝う。

そして。

《――そこだ》

ぽつりと告げる念話と共に、激烈な踏み込みを艦壁に叩き付ける！  
直後に、円を描いて炎を巻く銀龍が振り下ろされた。

《燃え盛れ、銀龍。焰龍・煉獄陣》

一業！一

直後、振り下ろされた銀龍の軌跡を延長して、焰が疾る！

その軌跡は炎線となり、真っ直ぐに敵騎へと向かう。

敵騎も流石にこれには気付き。

プロテクションを発動。

その真下を炎線は通り過ぎ――。

一爆！一

一裂！一



一閃！一

炎線を中心に、炎の壁が立ち上がる！

プロテクションはあっさりと碎け散った。

ついでとばかりにDAも焼き尽くし、”中身”を景気良く吹っ飛ばす。炎壁は、そのまま百m近くも築きあげられ。

合流せんとした、敵陣を容赦無く分断。

合流を阻止してのけた。

《おお……。流っ石♪》

それを見て、シオンが喝采を上げる。

労おうと、刃に振り向き。

《ぐ、くくう……。！》

跪きながら足を押さえて悶える刃を見た。

一同、そんな刃に暫く沈黙し。

《何してんのお前？》

一応、シオンが代表して聞く事にする。

苦悶の声を上げる刃が、それに顔を上げた。

《お、思いっきり踏み込み過ぎた……。》

《……………》

刃の、あまりにアホなその念話に再び一同、沈黙。

やがてそれぞれ、うんと頷き合い。刃へと視線を向け、皆一斉に念話を飛ばす。

《アホ》

《喧しい！ とっと行けヘタレ！》

がーと、吠える刃に苦笑し、シオン達はそれぞれ動き出す。

視線を再度敵騎達に向けると、炎壁の上から抜けて合流しようとしてもしたのだろう。

炎壁を伝い、上昇しようとした所で。ウィル、千尋の二人から射砲撃が飛び。

頭を押さえつけ、合流出来ないようにしていた。

どうやら、一連の騒ぎの最中もずっと頭を押さえていたらしい。

二人共、ある意味器用であった。

そんな二人にシオンは微笑し。ちょうど三騎ずつ残った敵陣に目を向ける。

未だ合流せんとする敵騎達は、ウィルと千尋の射砲撃に動きを縫われ、まともに退避も出来ないようであった。

――つまり、殲滅するチャンスである。

ちょうど三騎ずつに分かれた敵陣達に、残るシオン達も三人ずつに分かれた。

シオンは、コルトとハヤトと共に。

シグナムとヴィータは悠一と共に。

ごくごく自然に、彼等はそのように分かれた。

シオンは、自分の背後に立つ二人に視線を巡らせ、再び敵騎へと視線を戻す。

念話を二人に飛ばした。

《俺は、あの隊長騎をやります》

シオンの念話に、背後のコルトは少しだけ考える。  
しかし、すぐに頷いた。

《……ま、いいだろ。だが、俺は左腕を骨折。出雲の野郎は——》  
《右腕をやっちまってる》

即座にハヤトはギプスで固められた右腕を振って見せる。  
コルトはそれに嘆息し、自分の左腕、……こちらもギプスで固められている。をシオンに見せる。

《そう言うこった。——つまり、援護を期待すんな。助けてなんぞやらん。……きっちり勝って見せろ》

コルトの、ある意味で乱暴とも言える台詞に、しかしシオンは、素直にはい。と、返事を返す。

それがコルトなりの、……こう言う本人は否定するだろうが、激励だと分かったからだ。

見れば、シグナム達も短いながら念話で話していた。

シグナム達もまた頷き合う。

何らかの作戦でも決まったのかと、シオンは思い。

そのまま、再び敵陣へと視線を戻した。

今は、まず自分の敵の事。

それだけに集中せねばならない。

二組に分かれた六人は、それぞれの敵騎を見据えると、コルトが念話で話しかけて来た。

《——いいか、野郎ども。俺あ、いい加減疲れた。ヤニも吸いてえしな。……だから、こちらでさっさと終わらせんぞ》

《……私とヴィータは一応、女だが？》

《気にすんな》

野郎どもの部分に、シグナムからツツコミが入るが、コルトはあっさりと流す。

苦笑しながら、続きを話す。

《いいか？ 容赦すんな。俺はニコチンが切れてイライラしてんだ。ばさばさしてっと、容赦無く尻に鉛弾撃ち込んでやっからその積もりでいろ》

《目茶苦茶ですなー》

《喧しい。——行くぞ、野郎ども！》

どっちが悪役だか、全然分からない台詞をコルトが景気良く叫ぶ！同時にシオンは瞬動発動。

真っ直ぐに目当ての敵騎へと駆け出した。

残り敵六騎。

半分にまで減った敵、武装隊達に、シオン達は一斉に襲い掛かった。



—ぴちゅん—

次元航行艦『シュバイン』ブリッジ。  
そこに滴が落ちる音が鳴り響く。

その音を背に、中年の男は震え上がっていた。  
ツアラ・トウ・ストラの提督。  
ビスマルクである。

彼は、ガタガタと震えながら眼前の少年を見る。  
銀の髪 of 少年だ。歳は十二、三歳程か。

一見すると女の子に間違いそうな顔立ちである。

ビスマルクは、この少年に震えていたのであった。

何故なら、今。このブリッジでは、その少年とビスマルク以外。  
動く者は誰一人として居なかったからである。

ブリッジ要員達は、既に動かない。

そのことごとくは、”文字通り”八つ裂きにされていたからだ。

先の滴は、壁に張り付き奇怪なヒトのオブジェと化した管制官か  
ら流れ出た血であった。

「な、何故……!？」

ビスマルクはいつそ哀れな程に震え、少年に問い掛ける。  
何故、皆を斬ったのかと。

そう、この惨劇を起こしたのは他でも無い。

この少年の仕業であった。

その左手に持つ”刀”がその証のように血で赤く濡れていた。  
ビスマルクの問いに少年はくすりと笑う。

「何故、て? そうだなあ。試し切り、かな」

あっけからんと答える。

そんな少年の様子と台詞にビスマルクは愕然となる。

ただ、それだけで。この少年は、これだけ人を惨殺したと言うのか。

少年は笑顔で続ける。

「ほら、やっぱり実際使ってみないと分からない事、あるじゃないか？ いきなり実戦で使うなんて愚の骨頂だしね」

肩を竦める。

その動作も愛らしい。

だが、人を斬っておいて、そんな動作が出来るこの少年はひどく恐ろしい。

暫く開いた口が塞がらなかったビスマルクだが、やがて怒りをあらわにする。

少年を睨み付けた。

「き、貴様……！ 私をこんな目に合わせてただで済むと……！」  
「思ってるよ」

ビスマルクの台詞に少年はあっさりと答える。

一枚の紙を投げて渡した。それは、ある命令書であった。

ビスマルクは受け取り、その命令書を読んで。  
顔から血の気が引いた。

そして、何度も、何度も何度も、読み返す。

だが、そんな事でその内容が変わる筈も無かった。  
その命令書には、ただ一つの言葉が書いてあった。

ビスマルクを始めとした命令違反者を処理せよ。

そう、書かれてあった。

「やり過ぎたね。地球への進攻、グノーシスの攻略はベナレスに取ってすれば綿密に作戦を立てて行う予定だったんだ。それを君は全部、ぶち壊したんだからこの結果は当たり前だよな？ ついでに新型DAの無断使用も効いたね」

「……………」

その言葉に、ビスマルクは何の返事も出来ない。  
ただ、震えるだけであった。

そんなビスマルクに、少年は再度笑う。

刀を掲げた。

「神覇ノ太刀”。単一固有技能『零落零無発動』れいらくれいな」

「ま、待ってくれ……！ 頼む！ 見逃してくれ……っ！」

漸く、ビスマルクは声を絞り出す。

その場で土下座し、血で汚れた床に額を擦り付けた。  
プライドなど、もうどうでもよかった。

死にたく無い！

それが、ビスマルクの心からの願い。

だが、少年はそんなビスマルクを見て。

「もう、そんな段階は過ぎてるんだ」

あっさりと死刑宣告を告げた。

刀がゆっくりと持ち上げられる。

ビスマルクは、その刀に映る銀光を目に焼き付け――。

「じゃあね」

## 一斬一

それがビスマルクが人生の最後に見た光景となった。

刀は容赦無く、ビスマルクを頭頂から真つ二つにしてのけた。

ただ、真上から降ったような刃が、である。

それは、あまりにも現実味の無い光景であった。

少年はその結果に満足すると、刀身にこびりついた血を紙で拭き取る。

そして、未だ艦の外を映すモニターを見て、薄く笑った。

「こちらの仕事も終わったし、そろそろ本命の仕事に移ろうかな。

”あの人” たつての願いだし、ね」

少年の紅い瞳。それは、モニターに映るある少年の姿を捉えていた。

少年と酷く”酷似”した少年。

おそらく五年経てば、二人は全く見分けがつかなかっただろう。少年は、クスクスと笑いモニターを見続ける。

その瞳は、どこまでもひたむきに真摯にモニター内の少年を見続



けていた。

「やっと会えるね。」オリジナルシオン。君に会える事を楽しみにしてたんだ」

一人、少年は呟く。

歌うように、唄うように、謡うように、詩うように。

続ける。

「どっちが、”あの人”の願いを叶えられる存在か、ずっと確かめたかったんだよ。――そう」

そこで一度言葉を切る。

そして、凄惨なブリッジの様子を仰ぎ見て。

少年は微笑んだ。

楽しそうに、告げる。

「僕が、”刀刃の後継”。紫苑<sup>しおん</sup>だ」

サクセサー・オブ・ブレイド・エッジ。

かつて、神庭シオンに与えられし、二つ名を少年は……。紫苑は呟き、ブリッジを出す。

会う為に。

もう一人の自分と”殺し合う”為に。

紫苑は、歩き出した。

（中編2に続く）

#### 第四十四話「過去の刃」(中編1)(後書き)

……はい、中編1終わりました♪

戦闘シーンオンリーで、しかも敵騎達との戦いも終わって無いのに、敵対フラグを立ててしまう愚か者です(笑)

……これ、本当に四部で終わるんだろうか……。

若干不安ですが、何とか頑張ります♪

ではでは、また次回に……♪

PS…ベストシーン投票ありがとうございます♪  
タカトメインのシーンがえらい人気でした(笑)  
凄いなあ……。

グノーシス事件前の、タカトや。

グノーシス時代のシオン書いて見ようかな？

PSの2…次はクロスリレーを書くので、更新が遅れる可能性も  
無きにしもあらずなのですが……(汗)

な、何とか頑張ります！

遅れた時はゴメンなさい！(汗)

第四十四話「過去の刃」(中編2)(前書き)

え〜。何と言いましょか(汗)

す、すんません(汗)

更新遅れに遅れてしまいました(汗)

ちよつとスランプ気味な状態に陥ってしましまして(汗)

何とか中編2を書き上げましたが……。

む、むう……。

てな訳で中編2。いろいろおかしい部分があるかと思いますが、どうぞです(汗)

## 第四十四話「過去の刃」(中編2)

ストラ次元航行艦『シュバイン』外壁部。

そこには今、盛大に炎の壁が立ち上がっていた。

かなりの大きさであり、相応の熱量を有している。

元来真空間である、宇宙でこんな炎が発生する訳が無いのだが、この炎壁は容赦無く燃え続けていた。

魔法の炎である。

魔法とは、意思を具現化し、世界の法則を書き換える方法に他ならない。

つまり、真空間だろうと術者が『燃えろ』と念じれば、燃え続けるのだ。

当然、相当の力量が無ければ出来ない芸当ではあるが。

そんな事はさておき、第77武装隊・隊長である彼にとって、今も燃え盛る炎壁は厄介な存在であった。

炎壁の向こう側の部隊と寸断されてしまったのである。

当然、炎壁の上から合流しようとは試みたものの、下手に頭を出せば(不用意に、上空にあがる事をこの場合は指す)、容赦無く砲撃と射撃が降り注ぐのである。

そう、今は戦闘の真っ最中であった。

管理局次元航行艦『アースラ』の部隊との。

最初は囑託魔導士である少年ただ一人と戦っていた。

恐ろしく腕が立つ少年ではあったが、所詮は多勢に無勢。徐々に追い詰め、後一步の所で撃破出来た筈であった。

しかし、それは叶わなかった。  
少年側に、援軍が現れたのだ。  
怪我人だらけの。

最初の方こそ、余裕を持って片付けられるとタカを括っていたのだが。

向こうの援軍が到着して一分足らずで、その展望はあっさり碎けた。

鮮やかな連携で2騎を撃破されたのである。

さらに、続いて3騎を墜とされ、止めとばかりに炎壁を形成されると同時に1騎墜とされた。

彼にとって悪夢に等しい現象が目の前で成されたのである。

もはや疑うまでも無い。彼達は明らかにSランクオーバーの者達であつた。

個別に戦つては結果も見え見えである。

せめて合流し、どうにかこの場を突破して離脱しようとしたのだが。合流の段階で阻止されてしまった。

悪夢に続く悪夢としか言いようが無い。

そして今、進退窮まった彼達に襲い掛かる者達が居た。

先程の少年と、援軍に來た男達である。

少年以外怪我をしているが、騙されてはならない。

先程、その怪我人に戦闘開始から3分程度でこちらの戦力が半数も墜とされたのだ。

本当に怪我人かどうか疑わしい。

《た、隊長！》

《っ……！》

念話で叫んで来る部下に、彼は漸く我を取り戻す。  
今は、どうにかこの三人を退けなければならない。  
そして、離脱しなければ。

彼は勝ち目の無い勝負はしない主義である。  
逃げたモン勝ち、であった。

故に部下にまず特攻させ、時間を稼がせようとして。

《吠えろ……！ フツノオオ……！》

【承知】

声が、聞こえた。念話による声である。

見れば最後尾の青年。

随分体格の良い青年が左手一本で身の丈はある、巨大な剣を振りかぶっていた。

同時、剣の合わせ目がスライド。

激しくぶつかり合う！

【エクスプロージョン。3rd、フォーム】

—マキシマム・インパクト—

一天に輝くは二つの凶星—

《片手しか使えねえんだ……！ 手加減してやれねえから、せいぜい生き残れ！》

恐ろしく目茶苦茶な事を青年は叫ぶ。

同時、その手に握る大剣に異変が起きた。

消えたのである。

刃先が、刀身ごと。

青年が握るのは、ただ柄と鐔のみとなった。

……否、異変はそこで終わらなかった。

刃先が消えた場所から少し離れた所。その部分が変化していたのだ。

空間がそこだけ裂けていた。

まるで剣が貫かれたように。

空間の裂け目は、宇宙の闇を無視するかのようになり、青白い闇が居座っていた。

……あれは、何だ？

そう、77部隊の者が思う前に答えは来た。

青年、出雲ハヤトの叫びを持って。

吠える！ その剣の名を！

《布都御魂……！ 覚えておけ！ 其は魂を斬る剣、”万物をぶつた斬る剣”の名だ！》

【我が名にかけ、主の望む全てを断ち斬らん】

フツノの真なる名を叫び、ハヤトが真っ向からフツノを振り下ろす！

同時に、裂け目が縦に広がる。

つまりは、敵対者たる自分達の所へ！



《次元一刀……!》

《ひっ!?!》

部下の悲鳴が聞こえたが、隊長である彼は構わなかった。  
振り落ちる裂け目から必死にD Aを操作し、身を逸らす!  
部下二人は、迫り来る一撃に臆しでもしたか固まっていた。  
そんな二人に断斬が迫り――。

《真っ向! 唐竹割いイイイイイイイイイイイイイイイイイ――  
――っ!》

――断!――

――撃!――

――閃!――

にやりと笑い、ハヤトは叫びながら断斬を完全に落とした。  
空間、いや”次元断斬”は、その進行方向にある全てを裂け目と  
して斬り裂く。

結果、”敵騎から上手く逸らした”断斬は逃げた隊長である彼と。  
その部下を完全に分かつ。

何故――!?!?

そう思うが、それより早く、彼に飛来する影があった。

先程戦った銀の髪の少年、神庭シオンである。

次元断斬を回避する際に、同じ方向を選んだのだろう。こちらへ  
と突っ込みながら、真っ直ぐに手にする大剣、イクスを容赦無く振

り落とす！

一撃！一

勢いを乗せた斬撃。

隊長は、その一撃を辛くもアサルト・ライフルを横にして受けた。当然、あっさりと曲がる。斬られ無かったただけマシだろうが、どちらにせよ、もうこれは使えない物にならない。

《ハヤト先輩。ナイスアシスト！》

《二度はやんねえからな》

アサルト・ライフルを半ばまで断ちながら鏢ぜり合うシオンは、振り向かないままに褒め。ハヤトは面倒臭そうに、欠伸をかく。

そのやり取りに、隊長は確信した。同時に慄然とする。

……こいつ達……！ 最初からこの状況狙ってやがったのか……！

《手前えには、散々突進やら何やら喰されまくったからなア……。借りは万倍にして返すぜ？》

《ぐ、ぬ……！》

不敵に笑うシオンに、隊長は呻き。部下に援護しろと呼びかけんとして。

……部下が、そんな真似を出来る状況じゃ無いと気付いた。

一弾！・弾！一

ハヤトの一撃に萎縮してしまった二騎に放たれる弾丸。

一発ずつ撃ち込まれたそれは、アサルト・ライフルに叩き込まれ、その威力を発揮する！

結果、あっさりとアサルト・ライフルは鉄屑へと姿を変えた。

弾丸が叩き込まれると同時にまるで、えぐるようにアサルト・ライフルをひしゃげさせてしまったのだ。

これに、二騎は目を丸くする。

手持ち火器をいきなり破壊されたのだ。誰でも驚くだろう。

それを成し遂げた男は、ハヤトの横で右手に持つ大型の銃。……正確にはデバイスであるガバメントを差し向けていた。

小此木コルト。

大のヘビー・スモーカーであり、異端の射撃格闘者が。冷たい眼差しで二騎を見据えて。

《……Jack、Spot》

一弾！一

ぽつり、と告げられた念話と共にガバメントとから二発銃弾が吐き出される。

それは、未だにうろたえる敵騎に真っ直ぐに飛翔。

その顔面に叩き込まれた。

敵魔導士が着ているDAは、フルプレート全身甲冑タイプの物である。

故に、顔面部もマスクがある訳だが。その部分をコルトは狙い撃

ったのだ。

マスク部分はひび割れている。あれでは、ろくに目も見えまい。

《さーて。後は、潰すだけだ》

《……外道だなあ……》

一弾！一

ぼそりとつぶやくハヤトの足元に問答無用とばかりにコルトは銃弾をぶっ放す。

慌てたのは、ハヤトであった。

下手をすれば足を撃ち抜かれている。

《何すんだアンタ！》

《やかましい！ こちとら身体中骨折と輝<sup>ひび</sup>だらけの上、内臓まで痛めてんだ！ まともに戦ってられるか！》

ちなみにこれはコルトだけで無く、グノーシス・メンバー全員とシグナム、ヴィータ、共に共通する状態だったりする。

ぶっちゃけ、立っていられるだけで。相当なものなのであった。

《あー。いらいらする。ヤニ吸いてえ……》

《アンタも大概な……》

苛立ちを隠そうとしないコルトに、ハヤトは口を引き攣らせる。

コルトはそれすら構わずに、ガバメントを構える。

ハヤトもフツノを担いだ。

《俺あ、右だ》

《なら俺は左な》

頷き合う。そして間髪入れずに視界を奪われ、あたふたとする敵騎に踊り掛かった。

互いの得物を携えて、一気に突っ込む。

《ガバメント、断罪LEVEL2で固定》

【ラジャー】

《フツノ、2nd。行けるな》

【承知】

互いの相棒に、指示を下し。それぞれの相手を間合いに入れる！  
無論、視界に頼らない状況にそもそも置かれた事が無い敵騎にこれがどうにか出来る筈も無い。

手持ち火器も失い、目も見えない彼達にコルトとハヤトは容赦無く、己のデバイスを振りかざした。

《インパクト・フアング》

《断、星、剣！》

一撃！一

一裂！一

零距离からの銃打撃が、暴れる敵騎の土手っ腹に叩き込まれ、その威力を余す事無く発揮。

敵騎を一撃の元に昏倒させ。

選択斬撃が、DAのみを断ち斬り。返す刀でぶん殴り、気絶させ

た。

そして、二人はあっさりと勝利した事に大した感慨も見せずにシオンに向き直る。

シオンは、鏢ぜり合っていたアサルト・ライフルを両断し。一目散に逃げた隊長騎を追い回している真っ最中であつた。

《……何やってんだ、アイツ……》

《知るか、クソツ。かったりい。ヤニ吸いてえー……》

《本当、そればっかなアンタ……》

敵騎をあっさりと片付けた、グノーシス第3位の男二人は、虚空に浮かびながら。シオンと、隣にある炎壁の向こう側の決着をのんびりと待つ事にした。



コルト達が、ほぼワン・アプローチで敵騎を叩き落とし傍観モードに入ってる時。

隣の炎壁の向こう側では残りの3騎の敵騎と、シグナム、ヴィータ、そして一条悠一が交戦していた。

DAを着込んだ敵騎が虚空を踊るように動き回りながらアサルト・ライフルをフルオートで連射する。

それをシグナム、ヴィータがかい潜りながら接近を試みる、が。弾幕がそれを中々許さなかった。

傍目には一進一退の状況が繰り広げられている事になる。

そう、”傍目”には。

さて、そろそろですか。

そうズレた眼鏡を直しながら黒髪の少年。一条悠一は思う。

悠一は、シグナム、ヴィータの遥か後方で待機していた。

元々、悠一は近接型だった事もあり近接戦闘は苦手では無い。

だが、今。それは出来なかった。

理由は左手である。

左手の指が3本、ギプスで固定されていた。

骨折して、使い物にならないのである。

そして大型の斬撃武器である鎌型のデバイス。月詠を操る悠一にとってすれば、この怪我で月詠を振るう事は、明らかに致命的であった。

故に、シグナムとヴィータに任せたのだ。

前線に出て貰う事を。

悠一はひたすらに待つ。敵騎が射撃で仕留められ無い事に焦れ、”例の”魔法を使う事を。

悠一が見てる先では、アサルト・ライフルから吐き出される弾丸群を、シグナムとヴィータの二人が回避し、あるいは己のデバイスで弾き返す。

先の相談で、二人にこの役に徹するように話しをしたのである。

”確実に”敵騎を撃破す為に必要だからと。

二人は案外あっさりと承諾してくれた。

元よりこちらは怪我人である。  
ワン・アプ・ローチ・ワン・ダウン

一撃必殺が出来ないのであれば、即座に地金を晒し敗退してしまうのは明々白々であった。

ならば、一撃必殺を可能な状況に持っていく。

その状況作りが肝要であった。

グノーシス・メンバーの殆どは、そんな複雑な事を考えてるとは悠一も思わないが。

そして、銃弾を避け続ける二人に業を煮やしたか、三騎はアサルト・ライフルを連射しながら前に出る。

肩の突起部分が前へと倒れた。

蒼のフィールドを3騎共纏い始める。

ブレイク・チャージ。推定威力、A A A + 相当の突撃魔法である。その特性は、シオンが使う剣魔とよく似ており、攻防一体を可能とする魔法であった。

シグナムとヴィータに一気に駆け出した。

弾丸を回避し続けていた二人は、向かい来る3騎を真っ向から見据える。

このままでは、ブレイク・チャージの一撃を正面から叩き込まれる事になるだろう。

そう、このままならば。

かかりましたね！



《この世界に満ちる、”三百万”の音素達！ 次元空間故に空気は有らず、しかし起き行く雄叫びと戦場の重唱達よ！ 届いていますか？ 僕の声が！》

【レディ？】

今まで沈黙を守り続けていた悠一が、月詠を右手一本で振り上げ朗々と謡い上げる。

それは、ここら一帯の空間に響き渡った。

《聞こえているのならば、僕と共に一つの演奏を鳴り響きかせなさい！ 曲名は、鎮魂歌！》

【クラスタ（房・塊・群）の光に吞まれ、災いとなる力を鎮めよ】

悠一の叫びと共に、今度は月詠が謡い始めた。

それは、空間が謡う音と混ざり合い、複雑な音を作り上げた。

重厚な、そして哀し気な音と。

悠一と月詠が謡う二種の音素が平行して謡が鳴り響く。

それは、悠一が編み出したフォニム式魔法の第二段階であった。

平行して謡う二種の音素を組み合わせ、重厚な謡とする事で莫大な威力を叩き出す魔法。

それは、通常の音素式魔法の二乗、三乗の効果を叩き出す！

その技法を悠一はこう、名付けている。

オブリガーズ  
併唱演奏、と。

消耗が激し過ぎる為に、滅多には使わないのだが。  
今回はただ一発のみ使えばよいだけである。

消耗の事は、この際忘れる事にした。

そして、曲が完成する。

その曲の、名は。

# 《煌きの鎮魂歌》

## 【シャインズ・レクイエム】

悠一と月詠が同時に、その謡の名を呟く。

その直後、光が悠一を中心にして広がった。

まるで波のように広がるそれは、一瞬にしてまず近いシグナムとヴィータを飲み込む。

当然、それでは終わらず。光の波は二人に突撃していた三騎にまで到達した。

慌てたのは敵騎である。どう考えても広範囲に効果が及ぶ魔法である。

まさか仲間を巻き込むとも思わなかったが、それを平然とやってのけられたのである。

どのような攻撃かは不明だが、喰らえばタダでは済むまい。

いっそブレイク・チャージの防御力に賭けて突っ込むかを迷い。迷ってる内に光の波は三騎を飲み込み。

” あっさりと通り過ぎた”。

……………？

来たるべき衝撃も、何も来ない事に三騎は訝しむ。

威力が無いとかそう言った問題では無い。

そもそも当たった感覚すら無かったのだから。

もしや不発？

そう、思った直後。

【【エクスプロージョン！】】

重なる機械的な声を聞いた。

見ると、前方。シグナムとヴィータがカートリッジ・ロードを行い。己のデバイスを変形させている所だった。

レヴァンティンはシュランゲフォルム、連結刃形態に変化させ、その刃には紫の魔力が走る。

グラーフアイゼンはギガントフォルム、巨大なハンマー形態へと変化し、その前には巨大な鉄球が浮かんでいた。

《飛竜……》

【コメット・フリーゲン！】

シグナムはぽそりと呟きながら、レヴァンティンの柄を振るい、同時に連結刃が踊る。

ヴィータは巨鎚を振るい、巨球に目掛けて身体ごと振り放つ。

その目は二人共、敵騎を真っ直ぐに見据えていた。

《一、閃！》

《でえい！》

一轟！一

一破！一

二人が同時に叫ぶと共に、連結刃が真っ直ぐに疾り、巨球が打ち出され飛翔する！

それを見た三騎達は放たれた瞬間こそ驚いたが、すぐに持ち直す。

彼達はブレイク・チャージを発動している。

あの程度の攻撃ならば、耐えられる。

そう、”ブレイク・チャージが発動している状態ならば”。

一撃！一

飛来する刃と、巨球が。それらを弾けるとタカを括っていた左右端の”無防備な”敵騎にそれぞれ叩き込まれる。

左右の二騎は何が起こったのかも分からずに一撃でDAを破壊されあまつさえ吹き飛ばされた。

それにただ一人残された敵騎が呆然と立ち往生した。

DAがある為、表情こそ分からないが、何故？と混乱しているのが傍目からも分かった。

それを遠目に悠一がくすりと笑う。

上手く行った、と。

煌きの鎮魂歌。

音素式魔法の”魔法無効化、あるいは減少魔法”の名前である。

これは、空間に音を響かせる、即ち振動させる魔法特性を利用し

た魔法であり、特定魔法の魔法結合を緩ませ、あるいは解除する魔法である。

A M Fの拡大版、と言えば分かりやすいだろう。

元来ならば、一度発生した魔法現象の完全解除は難しいが、その為に使ったのが併唱演奏であった。

シグナムとヴィータは先んじてこの魔法の仕様を聞いていた為、逃げるそぶりも見せずに煌きの鎮魂歌を受けたのである。

後は、煌きの鎮魂歌の効果が消えると同時に無防備な敵騎を墜とすだけであった。

さて……。

未だ混乱する敵騎を見て悠一は微笑する。

恐らくは魔法が何故消えたのか分からない為であろう。

煌きの鎮魂歌は、あの一瞬だけの効果だと言うのも当然分かる筈も無い。

そして、混乱して未だに無防備な敵騎をシグナムとヴィータが見逃す訳も無い。

二人はそれぞれのデバイスを基本形態に戻し、一気に最後の敵騎に迫る。

敵騎はそれに慌てふためいて魔法では無い質量兵器であるアサル・ライフルを連射する、が。たった一人で放たれたそれは、二人に掠りすらせず接近を許す。

その時点で悠一は背中を向けた。

結果など、もう見えている。ならば最後まで見る必要も無い。

《紫電一闪っ！》

《ラケーテン・ハンマー……！》

一闪！

一撃！一

二つの轟撃が敵騎へと放たれ、それにより激烈な音が鳴り響いたのを、空気を介してでは無く音素を介して悠一は聞きながら、艦壁に残った黒鋼刃に合流すべく飛んで行った。

残りは後一騎。

シオンが相手をする隊長騎だけであつた。



シオンは隊長騎を追い回しながら、ちらりと背後を振り返る。そこには、かなり苛々してるのが分かるコルトがハヤトと共に居た。

……ヤバイ。アレは相当に”キテる”……！

冗談抜きで下手したら後ろから撃たれかね無い事に背筋を震わせ、シオンは鬼ごっこを終わらせる為に瞬動を発動。

隊長騎の前に出た。

いきなり眼前に現れたシオンに、隊長騎がたたらを踏み、留まる。即座に方向転換しようとするが、シオンはそれを許さなかった。イクスを真っ向から振り下ろす！

一撃！一

隊長騎は、それを何とかD Aに包まれた腕で受け止めた。  
シオンは不敵な笑いを浮かべ、隊長騎に念話を飛ばす。

《いい加減鬼ごっこは終わりにしようぜ。……俺も怖い教官がいる  
んでね。あんま時間掛けたく無いんだわ。……それに分かってんだ  
ろ？ 逃げ場が無い事くらいよ》

《ぬ、うう……！》

隊長騎の呻き声が念話を通じてシオンに伝わる。

と、いきなり隊長騎のD Aの肩部分が前方に倒れ、突き出る。

これは……！

《ブレイク、チャージャーージ！》

《と！》

—轟！—

イクスと鏢ぜり合った状態でいきなり放たれた突撃に、シオンは  
足場を形成して上へと逃げる。

隊長騎はシオンが居た位置をブレイク・チャージで突き抜けた。  
そのまま逃げるつもりか、と思ったが。何と隊長騎はそのまま反  
転。

シオンに再度突っ込んで来た。

方針転換か、それとも自棄にでもなったか。

何れにせよ、シオンにとっては都合の良い話であった。

《神覇、式ノ太刀。剣牙！》

向かい来る隊長騎にシオンは試しに魔力斬撃を放ってみる。  
隊長騎は飛んで来る剣牙にそのまま飛び込み、あっさり蹴散らしてシオンに突っ込んだ。

《っとお！》

マタドールになった気分でシオンは突撃を寸前で避す。  
隊長騎はまたもや突っ切り、その場から遠ざかった。  
また反転して襲い掛かるのは明らかである。

シオンはイクスへと目を落とした。

《……で、どうよ？ お前に言われた通り剣牙かましてみたけど。  
あっさり弾かれたぞ？》

【ああ、これで大体あの魔法の正体が分かった】

シオンの念話にイクスから答えが返る。

先の剣牙は、イクスに頼まれたものであったのだ。  
シオンとしても剣魔と似た特性の魔法だったので興味があったので、イクスの頼まれ事をあっさり飲んだ訳だが。

【攻性斥力場フィールドの応用による圧力場だな。あれを展開している間は向こうも内側から攻撃は出来んみたいだが、ぶつけられればこちらが一方的に衝撃を被る。……やはり剣魔と似た仕様の魔法だな】

《んで、対抗策は？》

イクスの説明を聞きながら、シオンは隊長騎を見る。



ちょうど反転している所である。  
イクスを正眼に構えた。

【1つは何もせん事だ。あんな魔法、長時間持たせられる筈は無い】  
《却下。俺はコルト教官に殺されたくない》

シオンは即座に却下する。  
ただでさえ、コルトの機嫌がどんどん悪くなっているのが分かるのだ。

この上、時間稼ぎなぞすれば何をされるか分かったものでは無い。

【ならば、破る方針で行くか。……剣魔が適切だな】  
《……やっぱそうなるか》

イクスの返答に、シオンは苦い顔となる。  
突撃と突撃がぶつかり合った場合。より威力が高い方が勝つのが常識である。

ブレイク・チャージの推定威力はA A A +、と言った所か。  
ノーマルフォームの剣魔はS相当の威力がある。  
どちらが勝つか、自明の理であった。

だが。

面白く無い。

シオンの感想は、その一点にあった。  
散々煮え湯を飲まされた相手と言うのもあるが、通じる攻撃手段が剣魔しか無いと言うのが、非常に気に喰わないのであった。

あれ、正面から斬れないか？

シオンはそう思い、向かって来る隊長騎を見る。  
時間は無い。剣魔を使うべき状況なのは分かっている。  
だが……。

《悪い、イクス》

【は？ て、お前何を……！】

イクスが最後まで言う前に、シオンは動く。  
突撃して来る隊長騎に真っ直ぐ突っ込む。  
イクスを”振りかぶった”。

剣魔の構えでは無い。

【待てシオン！ 何をする気だ！？】

イクスが念話で叫ぶが、シオンには聞こえてはいない。  
シオンはただ隊長騎を見据え、駆ける！

真芯だ。

まるで世界が止まっているかのような感覚をシオンは覚えながら  
思う。

イクスを握る手に力を込めた。

インパクトの最大作用点を見極める。

忘我の境で、シオンはヒュッと鋭い呼気を吐く。

ブレイク・チャージで迫る隊長騎はもはや眼前。  
回避も防御も、もう間に合わない。

その中でシオンは足場を展開し、深く踏み込む！

《神覇、壱ノ太刀――》

引き出すは、己が最も信用する技。

眼前に迫り来る隊長騎に吠え、シオンは一気にイクスを振り下ろす！

《絶、影！》

叫びと共に放たれたイクスが真っ正面。

蒼の攻性斥力場フィールドたるブレイク・チャージとぶつかる！

叩き斬る！

無言の叫びをシオンは放ち。

そして。

一斬！一

一裂！一

シオンと隊長騎はすれ違い、停止した。

シオンはイクスを振り下ろした格好で。

隊長騎は、前へと突き進みながら。

まるで交差した事すら、無かったかのようにシオンと隊長騎は固まる。

否、一つだけ違う点があった。

隊長騎のフィールドが消えていたのだ。

シオンは残心した状態からスクツと足場に立つ。  
イクスを肩に担いだ。

眩く、己の。

《とった》

勝利を。

瞬間、隊長騎のD Aが縦に割れ、そこからひび割れが全身に広がる。

やがて、D Aは木っ端微塵に砕けた。

後に残ったのは気絶した第77武装隊、隊長だけであつた。



《ふういゝゝ》

気絶した隊長騎に、シオンは安堵の吐息を漏らす。

ぶっつけで絶影で勝負してみたが、案外上手く行った。

やれば出来るモンだなあと、シオンは一人ごち。

【お、まえはいつもいつもいつも……！】

……何やら怒っていらっしゃる己のデバイス兼師匠の声を聞いた。  
聞こえ無いフリをしようとも思ったがそうも行かずに、イクスに  
視線を落とす。

《え〜と、イクス怒ってたり?》

【当たり前だアホ弟子! 麒麟の時もそうだったが、貴様はぶっつけ本番しか出来んのか!?】

恐々と尋ねるシオンに盛大に雷が落ちた。

うおっとのけ反るシオンに、イクスは間髪入れずに説教モードに突入する。

まあ、確かになのはが居れば”お話”されたような事をやらかした訳だからイクスの説教だけマシである。

……砲撃も飛んで来ない事だし。拘束魔法で逆さにされる事も無いし。

そう思い、つくづくなのはのお話は異常だったんだあと、シオンは思いを馳せる。

【聞いているのか、シオン!?】

《つと。聞ってる、聞ってる。……けど、今は作戦中だし、な? コルト教官とハヤト先輩に合流しなきゃだし。説教はまた後で、て事で……》

【ぬ、う……!】

シオンの念話に、イクスが悔し気な声を漏らす。

よし、これで上手く話を反らせた。シオンはホッと安堵。そして、コルト、ハヤトに合流しようとして。

《いやあ、それは無理じゃないかな?》

声が、聞こえた。

どこかで聞いた事のあるような声が。

敵が残ってやがったか……！？

シオンは、全く気配を感じさせずに後ろに立たれた事に怖気を感じながら背後に振り向く。

イクスをそのまま、放とうとして。

そのまま、固まった。

声を失い、目を見開き、絶句する。

そこには、一人の少年が居た。

12歳くらいの少年であろうか、細身と言うよりは華奢な体格の少年である。

その身体を黒の、ボディースーツのような物で包んでいた。

シオンはそれに見覚えがある。

グノーシスの、戦闘用バリア・ジャケットの1形態である。

動き易さに定評のある一品であった。

だが、そんなモノはどうでもいい。

シオンを驚かせたのは、少年の顔であった。

少年の顔は、中性的を超え傍目からは少女のようにしか見えない顔立ちをしていた。

顔立ちに負けず劣らず存在を主張する銀の髪がたなびく。

そして、紅い目がシオンを微笑しながら見詰めていた。

シオンと同じ、紅い瞳が。

そう、目の前に居る少年は――。

《ば、かな……》

《驚いてくれたようだね、嬉しいよ。オリジナル・シオン》

茫然と呟くシオンに、少年はクスリと笑う。

いつの間にか、その左手にはあるモノが握られていた。

シオンが5年前に捨て去ったモノ。

ずっと、ずっとそばに居た、己の半身だったモノ。

大切、だったモノ。

日本刀が、握られていた。

鮮やかな反り美しい銀の光を反射し、シオンを照らす。

そして。

《”サクセサー・オブ・ブレイド・エッジ 刀刃の後継”……神庭シオン》

刀は迷い無く、美しい孤を描いてシオンへと振り落とされた。

シオンは、その美しさに魅入られるように茫然とし続け。

赤が、虚空に舞った。

血の、赤が鮮やかに。

そう、シオンの目の前に居る少年は、シオンの幼い頃にうり二つの姿をしていた。

（後編に続く）



## 第四十四話「過去の刃」(中編2)(後書き)

……はい♪

「またか!?! またこんな場面で終わるかお前は!?!」

と、読者様の怒りの声が聞こえてきそうなお中、中編2終了でございます。

てか、中編2が終わって漸くご対面かよと……。

む、むむう……(汗)

次は、なのランをMebiusさんの代わりに書く予定なのでちよつと遅れてしまうかと思いますが(汗)

その時はすみません。

ではでは、また次回に……。

第四十四話「過去の刃」(後編1)(前書き)

……こ、今回はめちゃめちゃ筆が進んでしまい徹夜で書き上げてしまいました……!

今話、何と一日で書き上げてます!(笑)

えらいこっちゃ、えらいこっちゃ……!(笑)

今話を見たら、何となく刀と剣の描写が違うもんだと分かると言う仕様になってます♪

日本刀を主人公にしている方の参考になれば幸いかな?(笑)

では、後編1。どうぞ……♪

## 第四十四話「過去の刃」(後編1)

アースラ艦内。

その通路を、姫野みもりは走っていた。

ブリッジに向かう為である。

先程までは医務室に居たのだが、前代未聞の怪我人大脱走(しかも全員、脱走する直前まで意識不明だった)により、ブリッジに向かっていけると言う訳である。

どうやら、皆。シオンが戦ってる敵次元航行艦へと飛んで行ったようであるのだ。医療魔法を専門とする、みもりの目からしても皆、戦えるような状態では無かったのだが……。

……皆さん、大人しくしてて下さい、て言っても聞きませんし……。

通路を走りながら嘆息する。

皆、シオンに負けず劣らずの無茶な方ばかりである。

目が覚めたら、こうなるのは自明の理であった。

……随分なタイミングで目が覚めたものではあるが。

そうこうしている内にブリッジに着く。

みもりは、自動ドアが開くのを待って中に入り『失礼します』と声を掛けようとして。

「……あれは、何や？」

そんな声を聞いた。

アースラ艦長である八神はやての声である。

見れば、その隣に居るフェイト・T・ハラOWNも、グリフィス・ロウランも。

否、ブリッジに居る全員が硬直していた。

みもりはその光景にキョトンとしながらも、皆が見ているブリッジ正面のモニターに目を移し。

……そのまま目を見開き、硬直した。

ブリッジの皆と、同様に。

その目は真っ直ぐに一点に注がれる。  
モニターの中央で対峙する少年達に。

一人は17、8歳くらいの少年である。

手に持つ大剣、イクスを持ち。振るおうとした体勢でブリッジの皆と同じように、固まっていた。

みもりの幼なじみである少年、神庭シオンである。

彼もまた、呆然として。

その目は信じられ無いものを見たかのように見開かれている。

対し、その前に居る少年は微笑していた。

こちらは、12、3歳くらいの少年か。

固まるシオンを見て、嬉しそうに微笑み続ける。

その少年を見て、ブリッジの皆は、そして恐らくシオンも硬直したのである。

少年は、外見年齢以外、対峙する少年。神庭シオンに恐ろしく酷似していたのだ。

《ば、かな……》

シオンの念話が響く。少年はそれを聞いて、微笑を深くした。そっと左手を差し延べる。その手には――。

《驚いてくれたようだね？　嬉しいよ。オリジナル・シオン》

みもりが、ひっ！　と声を詰まらせる。

少年の手に握られたモノを見たからだ。

その声を聞いて、ブリッジの皆が漸くみもりの存在に気付いた。

少年が握っていたモノは、刀であった。

日本刀である。銀の光と、鮮やかな反りが特徴的であった。

みもりはそれを見て、震え出す。

カスミから声が掛かったようだが、それすら聞こえなかった。

刀を握る少年を見て、みもりは過去を思い出す。

シオンが刀を捨てた、あの一件を。

”自分のせいで”シオンが刀を握れ無くなったあの日の事を。

「シ、ン、君……」

震えながら、みもりは我知らずに呟いた。

幼なじみの名を。

少年はゆっくりと刀を振り上げる。

シオンはそれに魅入られたが如く、呆然とし続け。

「や、めて……」

それを見て、みもりは首を振る。

震えながら、震えながらイヤイヤをするように。

当然、モニターの中にその声が聞こえる筈も無い。

少年は、嬉しそうに笑う。

「やめて……。やめて……。！」

声は、どこまでも届かない。

少年にも、固まり続けるシオンにも。

シン君がシン君に斬られる……。！

その光景を、一瞬。みもりは想像してしまう。

そして、その想像を実現するかのように、銀の光を反射しながら  
刀が孤を描いて振り落ちて。

「シン君！！」

赤が、虚空に散う。

鮮やかな血の色が、モニターに赤く華のように咲いた。



シン君！！

《っ————!?!?》

固まり続けていたシオンは、自分の名を呼ばれたかのような感覚を受けて、我に返った。

同時、振り落ちた刀に対して全力で後ろに退がる！

一閃！一

孤を描いた斬撃は、シオンの肩口を浅く斬り裂いただけで終わった。

血が辺りに飛び散るが、シオンは構わない。

イクスを眼前の少年へと横薙ぎに振り放つ！

少年は、それにも笑い続けながら一步を踏み込む。

刀が優雅に下方から上へと孤を描いた。

横にイクスと、縦に刀は交差して。

—っいん—

シオンが愕然とする。横薙ぎに放ったイクスが縦に斬り流されたのだ。

あまりにも、鮮やかに。

シオンの斬撃をそのまま、刀の反りで滑らせ。流したのである。

直刃である”剣”には決して出来ない芸当だ。

曲刃である”刀”でもってしか出来ない”業”<sup>わざ</sup>。

シオンのイクスは縦に斬り流された斬撃の勢いを殺せず、少年の刀は逆に斬り流した勢いを利用して刀を翻<sup>ひるがえ</sup>した。

その業を、シオンは知っている。

乱剣の型。

相手の武器を乱す事により、絶対の隙を生む業の名であった。

” 正統・神覇ノ太刀 ” の型の一つ！

ま、ず……！

刹那に、シオンは胸中叫ぶ。

体は不様に乱れ、イクスは頭上に跳ね上げられた。

瞬動で回避出来るようなタイミングでは既に無い。

後、出来る事と言えば。

【プロテクション】

跳ね上げられたイクスから念声が響く。

同時、シオンの身体を白のフィールドが覆った。

そう、回避も迎撃も出来ないのならば、後は防御しか無い。  
耐えられるかどうかは賭けである。

シオンは今にも振り落とされんとした、刃に苦い顔となり。

《単一固有技能、『零落零無』発動。壱ノ太刀、絶影》

な——！？

信じられ無い言葉を聞く。



絶対に有り得ない筈の言葉を。

シオンが驚愕する中で、刀は迅雷の如く振り落ちた。視認すらも霞む速度で。

”フィールドを何の抵抗も無く突き抜けながら!”

一斬! 一

シオンの身体を袈裟に刀は斬り裂き、通り過ぎる。

直後、少年はおや? と、一瞬だけ疑問符を浮かべた。

シオンは、斬られながら後ろに流され。

しかし、足場を展開。その場に留まる……が、すぐに片膝を足場に着く。

傷口から、血が噴き出した。

《あ、ぐ……!》

【シオン……! シオン!】

喘ぐように、息を荒げるシオンにイクスが叫ぶ。

シオンはそれに少しだけ頷き。少年へと目を向け、睨み付けた。

少年はそれすらも楽し気に見て微笑む。

《まさかあの一瞬で、無理矢理身体を”後ろに倒す”なんてね。お見それしたよ》

《……黙れ……!》

痛みに喘ぎながらシオンは少年に念話で叫ぶ。

そう、あの刃が迫る刹那。シオンは身体を後ろに倒す事で、無理

矢理傷を浅くしたのだった。

直感があるとは言え、驚異的な反射速度と言える。

素直にシオンを褒めた少年は、その叫びに肩を竦めた。

シオンはそれを苛立たし気に見る。

《……おまえは、一体何モンだ……！？》

《見ての通りだよ。僕は僕さ。神庭”紫苑”だよ》

《んなワケあるか！ 俺が神庭”シオン”だ！》

シオンの言葉に、シオンは頭を振り。親指で己を指しながら吠える。

少年、紫苑はそれに微笑み続ける。

シオンは更に叫ぶ。

《大体、何故お前が神覇ノ太刀を使える……！ アレは一子相伝の技だぞ！ しかも俺より数段上のレベルでだ……！》

《その表現はあまり適切じゃ無いなあ……》

余裕のある口調でシオンの言葉を紫苑が否定する。

どう言う意味かとシオンが訝しむ前に、紫苑は続けた。

《”貴方が、僕より弱いんだよ”。順番を間違えたら変な事になる》  
《……………？》

言葉の意味が分からずシオンは眉根を寄せる。その反応も楽しいのか、紫苑は笑い続けた。

訳が分からないシオンは、そのままの体勢でいる訳にもいかず、

立ち上がる。

いくら浅くしたとは言え、相応に深い斬痕からは血が噴き出し、無重力故に玉となって辺りに浮かんだ。

相当痛むのだろう、顔に苦渋を張り付けるながらもシオンはイクスを構える。

質問したい事は、まだあった。

《『零落零無』……なんでお前が使える……？》

息を荒げながらも、ゆっくりとシオンは聞く。

だが、紫苑は答えない。不透明な紅の眼差しで、余裕の笑いを浮かべながらシオンを見て押し黙っている。

シオンが、かっとなり叫ぶ！

《あれは……！ 神覇ノ太刀の中でも最秘奥の業だぞ！ 神覇ノ太刀を極める段階で漸く会得出来る業……。奥義に匹敵する業だ！ よしんば神覇ノ太刀を見様見真似で使えたとしてもアレだけは絶対に使える筈が無い……！ そう言った業なんだ！》

苦々しく紫苑の刀を見ながら、シオンは吠える。

認められる筈が無かった。

『零落零無』とは、……否。単一固有技能とはそう言った能力なのだ。

シオンの苛立ちながら放たれる殺気と、叫びを紫苑は軽い顔で受け流しながら微笑み続ける。

《……そう。単一固有技能『零落零無』神覇ノ太刀を極める段階で

得られる業、魔力放出の一つの異常変化形だね。”虚数魔力”を放出する事により、純魔力系魔法術式を擦り抜け、あるいは斬り裂いて無効とする業だ》

《————っ！》

淀み無く説明した紫苑に、シオンが驚きと声無き悲鳴を上げる。それはまごう事が無い、零落零無の正しい説明であったからだ。

虚数空間、と言うものがある。

次元断層により発生する異常空間であり、その中では術式を完全に虚数に分解されてしまう為に、一切の魔法が発動しなくなると言う空間である。

この中に落ちれば、一切の魔法が使えずに重力に従い永遠に落ち続けると言う。

これを限定的に再現したのが零落零無であった。

異常魔力変化により、虚数へと変化した魔力を用いて、術式を”直接”斬り裂く事により、魔法効果を無効としてしまうのである。

当然、全ての魔法を無効果出来る訳では無く。許容量を超える大魔法術式は無効果するのに時間が掛かる為。完全に無効とする事は出来ず、物質系魔法も同様に無効とするのに時間が掛かる。

だが、それでも尚、強力……。否、”強力過ぎる”能力であった。何せ、これを使用した場合。純魔力系防御は何の役にも立たないのだから。

そして、これは教えられたから。見たからと言って再現出来る能力では決して無い。

神覇ノ太刀を極める段階で漸く発現出来る能力なのだから。

驚きに固まるシオンに、紫苑が微笑む。

《五年前の貴方も使えたんだよね。奥義よりアレを先に使えたのは貴方以外前例が無いらしいけど》

言うなり、紫苑は刀の先端をシオンに差し向けた。  
剣先から魔力が陽炎のように沸き立つ。

《……まあ、今の貴方には。……”刀を使わない”貴方には発動出来ないんだし。比べようは無いけどね。例え今の貴方が使えたとしても、貴方よりは上手と思うよ？ ……あ、僕が間違えちゃったな。”貴方が僕より下手”なんだ》  
《訳の分からん事をさっきから……！》

いい加減、紫苑の言葉に苛立ちが限界に達していたのだろう。  
シオンが激昂する。

だが紫苑は、やはり微笑むばかり。

《うん。つまらないこだわりだよ。大切な事だけどね。……それより、もう一つやらなきゃいけない事があったんだ》  
《何、を……っ！？》

紫苑の台詞に、シオンが疑問の声を上げた瞬間。  
辺りにミッド式の魔法陣が複数程展開した。  
それらはシオンの周りでは無い。

こちらへと翔け寄ろうとしていたコルト、ハヤトを先頭としたグノーシス・メンバーと、炎壁が消えた為に悠一と共に翔けていたシグナム、ヴィータの周りに展開したのだ。

その数は、三十程。

そして、魔法陣から読み取れる術式は……！

《転移魔法……！ 増援か！？》

《折角の貴方との対決だしね、邪魔は欲しく無いんだよ》

楽し気な紫苑の言葉に、シオンは齒噛みする。

グノーシス・メンバーやシグナム、ヴィータは全員怪我人である。先程はあっさり敵騎を落としていたように見えたが、実際の所は余裕が無い為に、切り札を使いダメージを喰らわないように戦ったに過ぎないのだ。

つまり、余裕が無い。

そんな状態で増援と言う事態は最悪過ぎる展開であった。

シオンは視線を紫苑からコルトに向けた。

コルトはシオンの元に向かう事を諦め。既に停止し、ガバメントを構えている所であった。

魔法陣から見慣れたフォルムが現れる。

先の第77武装隊が着ていた新型DAである。

それを着込んだ魔導士と思しき者達がおよそ三十。

シオンは、コルトに念話で叫ぶ。

《コルト教官！》

《うるせえ！ 分かってる！ 手前えはよそ見してんな！ 手前えもどきから視線逸らしてんじゃねえ！》

シオンの叫びに、コルトは間髪入れずに吠えた。  
そのまま続ける。

《自分の面倒くらい自分で見れる。……手前は自分の相手にだけ集中してろ！》

《っ……！ はい！》

コルトの怒号に、シオンは少しだけ躊躇い。しかし、紫苑へと視線を戻した。

紫苑はそれに微笑む。

右手を、振り上げた。

《じゃあ、第2ラウンドと行こうか？》

《……上等だ……！》

シオンの叫びに、紫苑はクスリと笑い。一気に右手を振り下ろす！

同時に、シオンと紫苑は同じタイミングで弾かれたように飛び出し、増援として現れた敵騎達とコルト達も動き出す！

一撃！一

各所で激突の魔力がぶつかり合い。それが第2ラウンド。  
新たな局面に変わった事を告げる合図となった。



シオンは真っ正面から迫る紫苑に対し、イクスを肩越しに振りかぶる。

魔力放出。

その身体から轟、と白の魔力が放たれ、イクスの剣先に走る！  
対し、紫苑は横。腰溜めに刀を構えた。

《《神覇、壱ノ太刀――》》

異口同音に、技の名を呼ぶ念話が響く。

シオンはそれを憎々し気に、紫苑は楽しそうに聞きながら互いの刀を放った。

《絶！》

一閃！一

シオンが絶影を放つ前に、紫苑の刀はその身体を斬っていた。  
居合の要領で放たれた刀は、シオンを胴を薙ぐ。

が、これもシオンが無理矢理、後退した事により皮一枚を斬るだけで済んだ。

紫苑が感心したような表情で笑う。

《今のも、か。直感はかなりレベルだよね》

《――絶影！》

一閃！一

紫苑の言葉を黙殺し、シオンは振り上げていたイクスを放つ！  
轟速で放たれたイクスは、容赦無く紫苑に迫り。



《――遅いね。あまりにも》

ーしゃんー

更に一步を踏み込み、イクスを自分に引き寄せるようにして紫苑は刀を縦に当て、再び斬り流す！

シオンには既に驚きは無い。

この自分もどきは、明らかに自分より強いのだから。

無理に踏み留まらずに斬り流された方向に、シオンも身を踊らせた。

一裂一

シオンが居た位置を刀が通り過ぎる。

今ので踏み留まってしまえば、それだけで首が跳ねられていた所であった。

……ノーマルじゃ、速度で勝てない！

シオンはそれだけを悟る。

慣性に任せて体勢を整えざまに吠える！

《セレクト・ブレイズ！》

【トランスファー！】

シオンの叫びにイクスは忠実に従う。

ブレイズ・フォームになり、双剣を構えた。

紫苑はそれを見ても笑う。

……余裕かましてろ！

心の中で叫びながら、シオンはイクス・ブレイズを振り上げた。

《壺ノ太刀、絶影・連牙！》

一閃！一

一裂！一

一気にシオンの身体が加速。紫苑に踊り掛かる。  
縦横無尽に、イクス・ブレイズは踊り。

一閃一

刀が孤を描き、一閃。

ただそれだけで、シオンが放った絶影・連牙は反らされ、弾かれ、  
斬り流された。

馬鹿な！

その結果に目を見開き、驚愕するシオンに、紫苑はさっきとは打  
って変わり詰まらなそうな瞳を向けた。

《正統の神覇ノ太刀に近い形である剣ならともかく、付け焼き刃の  
双剣なんて通じると思ったのかい？ 舐められたものだね》

一斬一

シオンがイクス・ブレイズを戻す前に刀が更に一閃する。  
ブレイズ・フォーム故の速度で、どうにか身体を逸らしものの、  
今度は左の二の腕を斬られた。

《ぐっ……！》

血飛沫が再び噴き出す。

新たな痛みにも、シオンは歯噛みしながら瞬動で後退。  
そのままの動きでイクス・ブレイズを構えて、虚空に身を踊らせた。

《神覇、弐ノ太刀……！ 剣牙・連牙！》

《神覇、弐ノ太刀。剣牙》

一裂・裂・裂・裂・裂一

一閃！一

シオンから無数に魔力斬撃が放たれ、紫苑はそれに合わせるかのように、刀を横に薙ぎ。一閃のみ、魔力斬撃を飛ばす。

二つの魔力斬撃は真っ直ぐにぶつかり合い。

あっさりと無数の魔力斬撃の方が霧散した。

つまり、剣牙・連牙の方が。

《忘れたかい？ 僕は零落零無を発動してるんだよ？》

《っ——！ しまっ！》

紫苑の念話に、シオンが失策を悟る。

そのシオンに、剣牙が容赦無く名前の通りに剣の牙を向いた。

一撃！一

《が、あ……！》

オートで展開したフィールドも時間稼ぎにすらならない。  
何も無かったかのように突き抜け、シオンに剣牙が叩き込まれる！

直撃を受けたシオンは先に受けた斬痕と同じ箇所魔力斬撃を受けた。  
ただでさえ、噴き出していた血が更に溢れ出る。

口からも血を吐き出しながら、シオンはぐっと朦朧とする意識を繋ぎ止めた。

足場を虚空に形成して、踏み止まる！

【シオン！ 気持ちは分かるが、これ以上は……！】

《ぐ、っう……！ まだ、だ！ セレクト、ウィズダム！》

【シオン……！ くっ！ トランスファー！】

イクスを振り上げると同時に戦技変換。

ウィズダム・フォームへと変化する。

同時、足場に対して身を低く体勢を取る！

クロスレンジもミドルレンジも、技量や能力に差があり過ぎて勝負にすらならない。

ならば、シオンが出来るのは後一つしか無かった。

つまり、シオンが今放てる最大威力での突撃！

それを見て、紫苑が薄く笑った。

《今度は神風？ 芸が多いね？》  
《るせえ！》

紫苑の念話に、叫びながらシオンは魔力を一気に放出！  
イクス・ウィズダムの石突きが弾け、展開した足場に突き立つ。  
その反発力を利用して、イクス・ウィズダムを構えるシオンは矢  
となり弾けた！

《神覇、伍ノ太刀！ 剣魔・裂！》

一轟！一

シオンの身体を魔力が包み込み、同時にイクス・ウィズダムの刃  
が展開する！  
進行上の全ての存在を砕くようにして、シオンは迷う事無く紫苑  
へと疾り。

紫苑が、刀を突き出す構えを取るのを見た。

あれ、は……！？

《――神覇、伍ノ太刀。剣魔》

一破一

紫苑の身体が魔力を纏い、矢となって弾ける！

真っ向から剣魔・裂と剣魔がぶつかり合い。

《——バカだね。零落零無で放った剣魔だよ？ 威力の上下に意味なんて無い。……そして、攻撃と防御は同時には出来ないんだよ？》  
《っ——。まずっ！》

一斬！一

シオンがそれに気付いた時、全ては遅かった。剣魔・裂は剣魔によりあっさりと引き裂かれ。

紫苑の剣魔は、向かい来るイクスを容赦無く弾く。

後は、防御も回避も、何も出来ないまま、愕然とするシオンしかない。

無防備な状態で剣魔・裂を放った勢いのままシオンは自分から剣魔に飛び込む形になり。

一閃一

それでも身を無理矢理逸らせたシオンの中心を離れ、刀はシオンの腹に突き刺さった。

刀は腹部、正確には左脇腹を貫通。

更にシオンを剣魔の魔力衝撃が襲い掛かる！

一轟！一

身体中に衝撃が叩き込まれ、身体の致る所が破裂。一瞬で全身をスタボロに変えた。

紫苑はそのまま、ゆっくりと止まり、刀に貫かれたシオンを見つめながら吊り上げる。

【シオン？ シオン！】

イクスがシオンに呼び掛けると、シオンはそれに反応。左手に持つイクスを持ち上げ、紫苑に向けようとして。

《しぶといね》

紫苑はそれだけを言うと、刀を下に振り下ろす。

シオンも一緒に振り下ろされて、刀が下に落ちる時に、刃から身体が抜けた。

そのまま、シオンの身体は慣性に従い突き進み。

進行方向にあった『シュバイン』の艦壁に叩き付けられて停止する。

シオンの身体は艦壁に転がり、その身体からは血が激しく噴き出し続けた。

転がるシオンを追って紫苑が艦壁に着地する。

ゆっくりとシオンに歩みよりながら肩を竦めた。

血を噴き出し続けながら転がるシオンを見下ろし、意外そうな顔で告げる。

《驚いたね。こんなに差があるなんて思ってたよ。……”あの人”の頼みだったんだけど。こりゃ更正には苦労しそうだね》  
《っあ……ごぶっ……！》

艦壁に転げたままシオンは何かを話そうとして口を開き。だが血を大量に吐き出す。

紫苑はそれを見て、少し顔を引き攣らせた。

《やり過ぎちゃったかな？ 殺しちゃったら意味無いし》

《せ、……くと……》  
《うん？》

シオンが呟く念話に興味を引かれたか、紫苑が顔を寄せる。  
そんな事で聞こえる筈は無いが、気分の問題なのだろう。

そして、シオンがぎょろりと紫苑に目を剥いた。

《ぜ、レグド！ ガリバア！》  
《っ！？》

始めて紫苑の顔に驚愕が張り付く。  
シオンは構わずに、最初からカリバーンとなったイクスを倒れた  
まま振り放つ！

一戟！一

紫苑の刀は間一髪の所で放たれたカリバーンを防いだ。  
そのまま、刃を絡め取り弾く。  
イクス・カリバーンはあっさりと虚空に舞った。  
紫苑はそれに口元を緩め。

一激！一

《か……！》

油断したその顔に、跳ね起きたシオンからその勢いのままに頭突  
きを顔面に叩き込まれる！

痛みと言うよりは、驚きに身を引く紫苑にシオンは更に蹴りを腹  
に叩き込み、その小さい身体を撥ね飛ばした。



自分もその勢いを利用して、紫苑から間合いを取る。

《イ、クス……》

シオンがぽつりと呼ぶと、イクス・カリバーンはすぐにその手に戻った。

紫苑に真っ直ぐ差し向けた。

蹴られた紫苑も体勢を整え、艦壁に足を着く。

その顔には、苦笑が張り付いていた。

《貴方はゾンビか何かかい？ 普通、死んでるよその傷》  
《死、んで、たまる、か……！》

息も絶え絶えに、シオンが唸るようにして念話を放つ。

紫苑をギロリと見据えた。

《……結局、お前はなんなんだ……。どうにも、他人じゃ、無いみたいだしよ……》

《だから僕は僕だって。神庭紫苑さ。……貴方と違う、ね》

《な、に……？》

《——そうだなあ、なら一つ面白い話しをしてあげるよ。……プロジェクトF、て言うのを聞いた事はある？》

《プロジェクト、F……？》

一切の油断無く、紫苑の隙を探りながらシオンはその言葉を繰り返す。

紫苑はそれにゆっくりと微笑んだ。

《詳しくは貴方の仲間であるフェイト・T・ハラオウンや、エリオ・モンデアルに聞くといいよ。……ぶっちゃけると記憶転写クローニング技術の事なんだけどね。これを使えば、被験者の記憶を持ったクローン体が出来上がる、て寸法だよ》  
《——そ、れが、お前だってか……!》

シオンが顔を歪めながら紫苑を睨み付ける。  
それならば、紫苑の言葉も腑に落ちる。

自分の記憶を有したクローン体。  
ならば、確かに目の前に居る奴もシオンだと言う事になる。  
だが、シオンは浅く笑い。それに首を振った。

《さて、ね。……ところで魂学は流石に知ってるよね?》  
《………ああ》

はぐらかすような紫苑の言葉に内心、更に怒りながらシオンは頷く。

紫苑はそれを見て、鷹揚に笑った。

《そう、魂学。あれによれば人の魂は十七次元以上で波動として、その形を表すのだそうだね。——つまり、その精神を”波紋”として出る訳なんだけど。……もし、”ある特定の人物の魂の波紋を完全に複製出来た”としたら、果たしてどうなるかな?》  
《な、に……?》

シオンは、その説明に目を見開き呆然とする。  
紫苑は構わず続ける。

《例えば、”貴方の12歳時の魂の波紋データを完全に複製して魂の複製データを作り上げて、貴方の記憶転写クローンにその複製

魂を内装したなら”果たしてどうなるかな……?》

《お、ま、え……!》

《そう、それはプロジェクトFの完成形さ。まあ、僕が”ソレ”だとは言わないけどね》

愕然となるシオンに、紫苑は微笑む。

魂も記憶も遺伝子的な意味でも一緒。

それは、もう一人の自分で無くて果たして何だと言うのか。

シオンは漸く、紫苑の謎のこだわりを悟った。

つまりは――。

《お前は、俺が五年前の……!》

《そう、貴方がかつて誇っていたレベルで僕は貴方の技を振るえる。

……貴方のように殺人の忌避も無く、ね》

《な……?》

今、こいつは何と言った?

紫苑の言葉に、シオンは目を呆然と、そう思う。

そんなシオンに紫苑は微笑んだ。

《そう、僕は人を殺す事を忌避したりしないよ。貴方と違ってね。

この次元航行艦、やたらと静かだと思わないかい……?》

《……殺、したの、か……!? 俺の技で……!》

《うん。この艦の乗員全員をね。なかなか苦労したよ》

《っ――!》

ぎりっと、シオンが奥歯を噛み締める。

このシオンは刀を振るい、自分の技で人を殺したのだと言う。

シオンの脳裏に、ある光景が浮かび上がった。

血溜まりの、赤の光景が。

こいつは、あれを再現したのだ。

シオンは怒りに震える。

憤怒に彩られた瞳で紫苑を見据えた。

身体から溢れ出る血を指に塗れさせ、虚空に文字を描いた。

雷、と。

紫苑の目尻がピクリと動いた。

《まさか……。使う気？》

【シオン！ 止めろ！ これ以上は……！】

《やかましい！ あいつは……！ あいつだけは許しておけるかあ  
あああ！》

シオンが吠えると同時に拳を握りしめる！

左手を突き上げた。

《来い……！ ヴォルトオ！》

【く……！ シオン……！】

イクスの声もシオンは構わない、その背後に雷が疾り、ソレは顕れた。

雷の精霊、ヴォルトが。

シオンはそのまま叫ぶ！

《精霊……！ 融合！》

【くそ……！ シオン！ 死ぬなよ！ スピリット・ユニゾン！】

もはやシオンは止まらぬ事を察してイクスもシオンの命に従う。  
ヴォルトがシオンの身体に溶け込むように、像をシオンへと重ね、  
やがて完全に一体化した。

シオンの身体から紫電が走る！

精霊融合が完了したのだ。

そのまま律儀にも融合完了するまで待っていたシオンを怒りのま  
まに、見据えた。

紫苑はそれを見て微笑む。

刀を八相に構えた。

《漸く、切り札のお出ましか。どのくらいのものなのか、拝ませて  
もらうよ》

《ほざいてろ……！ お前はここで終われ！》

一轟！一

叫ぶなり、シオンが一気に紫苑へと向かい飛び出す！

カリバーンを左手一本で腰溜めに構えた。

それを見て、紫苑も構えを変える。

シオンと同様に、刀を腰溜めに構える！

そして、シオンと紫苑。二つの姿が交差する！

《神覇、壱ノ太刀！ 絶影・雷刃！》  
《神覇、壱ノ太刀！ 絶影！》

一閃！一

一裂！一

一斬！一

雷纏う斬撃がシオンより放たれ。  
零落零無を纏う斬撃が紫苑より放たれる！

二つの刃が擦れ合い、互いの身体を求めて火花を散らして。

シオンのカリバーンは、紫苑の身体を掠め。  
紫苑の刀は、シオンの左腕を肘から斬り捨てた。

《――残念、だったね》

刀を放ち、残心した状態で紫苑は笑う。

シオンは目を見開いていた。

二人のちょうど中間に、斬り飛ばされたシオンの左腕がカリバーンを握ったままくるくると舞う。

そして――。

笑う。

”シオン”が！

獣じみた表情で！

それを見て、紫苑が訝しむように眉を寄せ。

シオンはそれにも関わらず動いた。

” 斬り飛ばされた左腕に噛み付く！ ”

そのままの勢いで紫苑に体当たりをブチかまし。首を反らして紫苑に刃を振り放つ！

一撃！一

驚いたのは、紫苑である。

まさかそんな行動に出るとは思っていなかったのだ。

技後硬直と驚きで無防備となった紫苑にその一撃を避す事など出

来よう筈も無い。

立ち尽くす紫苑にカリバーンは、深々と突き立った。

《が、ぐ……。貴方は……。！ 最初から、コレを……。！》

《神覇、九ノ太刀、奥義》

シオンは紫苑の言葉を完全に黙殺する。

その目は爛々と紫苑を見据えながら輝いていた。

怒りに、憎しみに。

そして、シオンは密着しながらソレを放つ！

” 自爆覚悟 ” の大技を！

《青龍》

—轟！—

シオンがぼつりと眩くと同時に、カリバーンから暴虐たる雷龍が生まれ落ちる！

密着している二人を青龍は区別なく喰らい。

次の瞬間。”制御されなかった”青龍は問答無用に暴走した。

つまり——！

—轟！—

—雷！—

—爆！—

青龍がその形を瞬時に失い、激烈な威力となって爆裂する！

二人を飲み込んだままにその雷爆発は引き起こり、シオンはカリバーンごと左腕をくわえたまま吹き飛ぶ！

紫苑も逆側に盛大に弾け飛んだ。

《お前にだけは負けるかよお！ バカタレエエエエエエエエエ！》

シオンが全身を焼かれて、艦壁を盛大に転げながら叫ぶ。

やがて、雷爆発は収まり虚空に静寂が戻った。





《……は、あ、う……》

【シオン！ シオン！ 生きてるか！？ シオン！】

イクスからの声を虚空に浮かびながらシオンは聞く。

出血と、全身の火傷で身体の中は恐ろしく寒く、しかし。身体の外は異様な程に熱い。

もう、痛みなんて感じていなかった。

そんなもの、とうに超越してしまっている。

寒いなあ……。熱いなあ……。

朦朧とした意識でシオンはぼんやりと思う。

シオンはあまりにも酷い状態だった。

身体中を裂傷が走り、腹には大穴。片腕は斬り落とされ、全身は大火傷。

今も息をしているのが不思議な状態であった。

もう、指一本も動かせずにシオンは虚空をさ迷う。

眠いなあ……。

意識は途切れ途切れになり、いつ失ってもおかしく無い状態で、シオンはそう思う。

ここで寝たら、恐らくは死ぬ。

それが分かっているながら、その睡魔に抗え無い。

そして、まぶた瞼がゆっくりと閉じて行き。

《《シオン！》》

二人分の叫び声に、無理矢理叩き起こされた。

閉じかけた瞼を開ける。

正面にウィンドウが展開していた。  
そして映るのは、二人の少女の顔。

スバル・ナカジマ

ティアナ・ランスター

その二人の顔であつた。

二人は顔をくしゃくしゃにして、スバルは泣きながら、ティアナは泣きこそしないまでも顔を歪ませてシオンを見ていた。

《シオン……！ シオン……！！》

《アンタ……！ また、こんな……！！》

二人の声に、シオンは思わず微笑する。

大丈夫と言おうとするが、上手く念話が使え無い。

そんなシオンに、二人はすぐさま叫ぶ。

《今すぐ行くから……！ だからシオン！ 頑張って！ 死なないでっ！！》

《アンタ死ぬんじゃないわよ！ もし死んでみなさい……！！ 絶対許さないから……っ！！》

二人の声に、シオンは僅かに頷く。

シオンもこんな所で死ぬ積もりは無い。

やらなければならぬ事、成さねばならぬ事がある。  
こんな所で死んでいるような暇は、無い。

帰るのだ、アースラに！

だから。

《そうだね、貴方に今死なれると僕も困るしね》

……！？

聞こえた声に、シオンは鈍く反応する。

この念話は……！

見ればウィンドウの後ろに、いつの間にか彼が居た。

紫苑が。

”ほとんど傷一つ無く”。

な、んで……！？

そう問いたいが、シオンは今、上手く念話を飛ばせない。

そんなシオンに、彼は笑ってみせた。

《それは秘密だよ。にしてもまあ、貴方も恐ろしい真似をするね。  
死ぬかと思ったよ》

紫苑はひょいと、肩を竦めて見せる。

そして、シオンを楽し気に見つめた。

《まあ、今後気をつけてね？ ”あの人”は貴方の死を望んじやいないんだ。……僕に取っては甚だ不愉快だけどね》

また、”あの人”か……！

再び紫苑から漏れた単語に、シオンは朦朧とした意識で胸中叫ぶ。その”あの人”とやらが、この紫苑を作った存在だとも言うのか。

それにこいつは……！

《——そう、貴方が僕を許せないように、僕も貴方を許せないんだ。この手で殺してやりたいと思ってる。……でもあの人を怒らせる訳にも行かないからね。……誰にも邪魔出来ないようにして貴方を殺すつもりなんだ。けど、今は殺せない》

それが本当に悔しいと、紫苑はシオンを見据えながら告げる。

その目は、凄まじいまでの憎悪と殺意に彩られていた。

一瞬だけソレを見せた後、紫苑は肩を竦める。

ソレは、あっさりと紫苑の瞳から消えた。

そのまま、紫苑は虚空に目を向ける。

そして、ぽつりと呟いた。

《だから、今日の所は貴方の大切な人を殺して溜飲を下げておくよ。スバル・ナカジマと、ティアナ・ランスター、て言ったかな？ あ  
の二人がちょうどいいね》

……今、こいつは何と言った？

シオンは真っ白になった頭で、そう思う。  
そんなシオンを見て、紫苑は笑う。

《貴方の大切な人を、かつての貴方の技で殺す。……うん。なかなかいいね。楽しそうだ》

にこにこ笑いながら、紫苑は告げる。

……俺の技で、スバルとティアナを、殺す？

呆然とし続けるシオンに、紫苑は背を向けた。

刀を握り、歩を進める。

《それじゃあね。そこであの二人が斬り裂かれる姿を見てるといいよ。……楽しみだなあ》

そう、シオンに告げ。紫苑はその場から離れようとして。

《……今、何だった？》

—お前、ムカつくなあ—

声が聞こえた。二重に響く声。

空間に、世界に響く。

《……今あ、何だった？》

一カカカカカカカカ……！ お前、本当にムカつくな。楽しくなってきたよ。なあ、兄弟？ 一

声が響く、響く。

その場から離れようとしていた紫苑は、しかし。動けず、ゆつくりと振り向く。

そこにシオンが居た。

”身体中から因子を溢れさせて”  
！

目が煌々と朱を照らし、紫苑を見据える。

紫苑は漸く、悟った。自分が龍の逆鱗に触れた事を。

凄まじいまでの怖気と共に！

【シ、オン……！　ぐ……！　コード、アンラ・マンユ確認。だ、め、だ。抑えきれ……！】

《今あ……！ 何つたあああああああああああ！》

[illegible]

— 車 車 ! —

直後、シオンの身体から因子が柱のように宇宙空間に突き立つ！

アンラ・マンユが、再びシオンの身体を持って、その力を振るわんと、顕現せしめた。

憎しみに、喜悦して。

怒りに、愉悦して。

（後編2に続く）

第四十四話「過去の刃」(後編1)(後書き)

はい♪ もうこの終わり方が典型となり始めております(汗)

いや、中編の段階でもう4部分で終わるのは無理だと悟ってはいましたが○

やよりの5部化(汗)

いや、本当申し訳ありません(汗)

流石に、次で四十四話は終わります♪

ではでは♪ また次回にお会いしましょう♪  
ではでは〜♪



第四十四話「過去の刃」(後編2)(前書き)

……はい。ども……。テストメントです。

まずは、一言(汗)

いや、もう本当すみません(汗)

遅れに遅れてしまいました(汗)

今回もちとアリサ道場は抜きで行きます♪

いや、流れと言うか……(笑)

次回は必ずやるのでご容赦を(汗)

では、どうぞ……♪

## 第四十四話「過去の刃」(後編2)

ユニゾン・イン。

虚空に響き渡る、たった一つの言葉。

それをその世界に居る者達は余す事無く聞く。

そして沸き立つは、負の象徴。アンラ・マンユ因子。

自分の同一存在である紫苑と対峙するシオンから、それは溢れ出ていた。

紫苑を睨む爛々と光る紅玉の瞳。

それに紫苑は怖気と共に息を飲む。

《……やり過ぎた、かな？ まさか自分の事より他人の事で暴走するなんてね——》

《何を言ってるんだ？ お前》

一カカカカ。無知、てのは怖いなあ。兄弟—

《ツ——！？》

独り言のように呟いた念話を返されて、紫苑の瞳が揺れる。

まさか、返答されるとは露程も思わなかったのだ。

まさか——。

ひょっとしたら、と言う自分の考えに紫苑は総毛立つ。

”有り得ない事”だ。

少なくとも、紫苑が知る範囲では、そんな事は。  
だが。

《誰が暴走なんざするかよ。お前は俺が潰す》

一カカカカカカカカカカ。信じられねえよなあ。有り得ねえよなあ。分かる、分かるぜえ？　だが理不尽、てのは往々にして起きるモンなんだよー

眼前のシオンがそれをあっさり否定する。

その憎悪と言う名の冷徹過ぎる”理性”を持って紫苑を睨み据える。

【シ、オン……？】

イクスからも戸惑うような声が上がる。

それは、そうだろう。

シオンは因子を、カインを顕現しておきながら理性を保っていたのだから。

直後、シオンの断たれた左腕から血の代わりに因子が溢れ出た。

それは、真っ直ぐに虚空を進み。あるモノに繋がる。

則ち、未だ虚空を漂っていたシオンの肘から先のイクス・カリバーンを掴んだままの左腕である。

因子は傷口に繋がると、そのまま左腕を引き寄せる。

そして、断たれていた左腕が接続。

あっさりとくっついた。

感染者特有の現象、再生である。

シオンは左手に握っていたイクスを右手に持ち替える、と。

いきなり、くつついた左腕の肘の部分から更に因子が溢れた。  
それは一気にシオンの全身を包み込む。

そして。

一轟！一

因子が柱のように突き建ち、晴れた。

紫苑は身じろぎする事も出来ずにただただその光景を眺めていた。

有り得ない事の筈である。

だが、もし。仮に――。

”アンラ・マンユを完全に自身の制御下に置けたのならば？”

そして因子が晴れたその向こうで。

”それ”は、現れた。

異形である。それは間違い無い。

だが、その異形は今までと明らかに違っていた。

最初に目を引くのは左腕だ。

肩から手の先まで漆黒の甲冑に覆われている。

その指先は凶々しい鉤爪となっていた。

そして背中、まるで触手のようにのたうつ三本の尻尾。

どこか剣竜を思わせる尻尾である。

どれもアヴェンジャー・フォーム特有の甲冑である。

――否、”あつた筈”か。

甲冑はそこまでしかなかったのだから。

左腕と背中だけ。

後はカリバー・フォームを黒にしたバリア・ジャケットをシオンは纏っていた。

そして最大の特異点。

シオンの髪は、銀から染め上げられたように黒へと変わっていたのだ。

まるで、タカトやトウヤのように。

アンラ・マンユを象徴するが如く。

その髪は漆黒へと変貌していた。

シオンは、沸き立つ因子に理性を小揺るぎもさせないまま、左腕を掲げる。

鉤爪を備えた左手をバツと開いて見せた。

紫苑に掌を差し向けながら、ぽつりと呟く。

己の――。

《我は正しき怒りと、憎悪を持って眼前の存在を打ち砕かん》

一カカカカ。悪くねえ、悪くねえ！ ああ、兄弟。アベル・スプタ・マンユ。いい、憎悪だ。いい怒りだ！――

シオンの念話に応えるかのように、カインが吠える。

因子がそれに共鳴したが如く激しく沸き立つが。今のシオンは全く理性が揺るがない。

真っ直ぐに、紫苑を見据えままだに続ける。

《ハーフ・アヴェンジャー・フォーム》

新たな姿の名前を告げた。

それは、シオンが負の感情より引きずり出した新たな姿。  
自らの中にあるカインと同一の思考性を持った時のみ、顕現せしめる形態。

そして、それは取りも直さず一つの事実を意味する。

則ち、シオンは因子を自身の制御下に置いたと言う事を。  
その力を余す事なく振るえる、と言う事を。

他でも無い。紫苑を見据える瞳がそう語っていた。



言葉が出ない。

スバル・ナカジマは宇宙空間に伸ばしたウイング・ロードの上に立ち尽くしながら、そう思う。

先程、担当であったストラの次元航行艦のブリッジを占拠したスバルは、シオンと紫苑の戦いを見て。慌てて、艦の外に出てシオンの元に向かった。

紫苑と対峙するシオンは明らかに冷静では無かった。  
まるでそこに居るだけで、紫苑に精神的に追い込まれているかのようにスバルには思えたのだ。

嫌な予感をその時、スバルは抱え。シオンの元に急ぐ速度を上げたのだが。

その悪い予感は当たってしまった。

シオンは自分の命すらも省みないような無茶をし、瀕死の状態までになってしまったのだ。

当たって欲しく無い嫌な予感が的中してしまい、齒噛みしながらもスバルは最大速度でシオンの元に急いだ。

途中、ノーヴェとも合流。

そして、シオンを肉眼で見える距離まで近付いた時。

”それ”は起きた。

因子、アンラ・マンユが再びシオンの身体から溢れ出たのだ。

どういう原理か、シオンの命懸けの自爆技を受けて無傷な紫苑すらも、それには目を丸くしていた。

シオンはアヴェンジャーに近いような姿になり。

理性を保ったまま、紫苑を見据えていた。

”憎悪”と言う名の理性を持って。

そんなシオンを、スバルはかつて見た事がある。

タカトを追ってアースラを飛び出した時のシオンである。

あの時も、シオンは憎悪と怒りのままに動いていた。

そして、その結果は――。

《……まさか、アンラ・マンユを完全に制御しきるなんてね……!》

《そんな事、どうでもいい。俺は、お前をぶっ潰せたらそれでいい》

あくまで、シオンは静かなままに紫苑へと語りかける。

それは逆に、怒りが過ぎて冷静になってしまっている証拠であった。

そんなシオンに、スバルは想像が当たってしまった事を悟る。

シオンに念話を掛けようとして。

《――さっき、お前が言った台詞。忘れてねえよな……？》

《ああ、その彼女と、後こっちに來てるもう一人の娘を殺す、て話し？ うん。忘れて無いさ。なんなら今からでも――》

《もういい、黙れ……！》

楽し気な口調で言ってくる紫苑の念話をシオンは最後まで言わせ無い。

右手のカリバーンと、左腕の鈎爪を掲げる。

そして。

《スバル》

《っ――！？ シ、オン……？》

突如として、念話を掛けられてスバルは飛び上がりそうになる。最初からスバルがそこに居るのに気付いていたのか。

シオンは振り返らないまま、スバルに念話で話す。

《――守るから》

《え？》



《絶対に、お前も、ティアナも”俺の技”で、刀で、殺させたりなんかしないから……!》

《シオン……?》

その念話に、スバルはシオンの名を呼ぶ。

紫苑に語りかけた時とは、まるで違う口調である。

そこには、悲痛なまでの願いがあった。

スバルは何とは無しに悟る。

シオンは今、この瞬間までも追い詰められている。

因子に、では無い。

紫苑に、そして自分の過去にだ。

心が、押し潰されんばかりにシオンは精神的に追い詰められていた。

《シオン!》

スバルは、シオンの名を叫ぶ。

思っていた以上に、シオンの精神状況が良く無い事を悟ったのだ。嫌な予感がスバルの心に膨れ上がる。

《……”こいつを、殺してでも……!” 俺は、絶対に!》

《っ——!? シオン! 駄目!》

《て、スバル待て!?!》

シオンの台詞に、漸く嫌な予感がなんだったのかをスバルは悟る。シオンは紫苑を殺す積もりなのだ。ここで、確実に。

よく考えれば、先の戦いでもシオンはずっと殺傷設定で戦っていた。

思わず飛び出そうとするスバルを傍らのノーヴェか押さえる。  
そうしなければ、おそらくスバルは二人の間に割って入ろうとしたであろう。

スバルはノーヴェに押さえられながらも、シオンへと向かおうとする。

そして、シオンは振り向かない。

眼前の紫苑をただ見据えて。

《……ここで、お前は終われ……！》  
《やって見せなよ》

—轟！—

二人は弾けるように飛び出す！

星々が瞬く中で、白刃と怪手は漆黒の虚空で相打つ。

磁力で引かれたように、二人は至近で見合い。  
弾かれたように刀と鉤爪は跳ね上がった。

二人のシオンの戦いが再び始まる。



一戟！一

ぶつかり合う刀と、怪手。

そして、刃と鉤爪とが絡み合う。

シオンは、そのまま右に体を捌き、振り上げたカリバーンを紫苑へと放つ！

— ついん —

だが、それはあっさりと身体ごと孤を描く刀によって斬り流された。

乱剣の型。

先の焼き直しのように、シオンのカリバーンが頭上に跳ね上がる！

そのまま軌跡は延長し、シオンの首元に刃はひた走ろうとして。

一軋！一

シオンの左の鉤爪が、その刃を寸前で受け止めた。

火花を散らしながら刃と鉤爪は責めぎ合い、二人は再び至近で互いに視線を交わす。

《答えろ、紫苑！》 “あの人”、てのは一体誰だ！ 誰に何を頼まれた！？》

《僕が答えるとも思うのかい……！》 だとしたら相当にお気楽だ

ね！  
《》

一破！一

紫苑の刀が鉤爪とぶつかり合ったまま刃を上へと翻した。  
人差し指の鉤爪に刃は引っ掛かける。

紫苑は半歩をシオンへと踏み込みがてら刃を跳ね上げた。

一戟！一

すると、力点をずらされ、あたかも刀に弾かれるように怪手は先  
のカリバーンと同じくシオンの頭上へと跳ね上がる。

そして、刀はすでに紫苑の頭上で翻っていた。

両の手で刀の柄を紫苑は握り締め、真っ直ぐに体重をかけながら  
刀を振り落とす。

虎走りの型。

それがその型の名前であった。

《壺ノ太刀、絶影！》

一斬！一

無念無想。

紫苑より放たれた刀が、袈裟に迅雷の速度を持って振り落ちる！  
だが、今のシオンは鉤爪だけが武器では無い。

その右手にはカリバーンが握られている――！

《絶影！》

一戟！一

縦に放たれた刀は、横に放たれたカリバーンにシオンの頭を割る直前に防がれた。

二つの絶影の衝撃で、空間に振動が走る。

刀とカリバーンは真っ正面から鏝ぜり合い。

二人は刃の向こうに映る互いを見据える。

筋力は流石にシオンの方に分があるのだろう。

シオンは右手一本で紫苑の刀を受け止め切っていた。

そして相対する紫苑も流石である。

刀とは、その特性上。縦の衝撃に滅法強いが横の衝撃にはひたすら弱い。

『折れず、曲がらず、よく斬れる』とは言うが、それは持ち手の力量に多分に依存する武器が刀というものである。

デバイスである以上、刃の欠けや耐久性は相当に上がっているだろうが。普通に考えれば剣と真っ正面にぶつかり合ってたで済む筈が無い。

ならば、何故に折れる事も、刃が欠ける事も無く鏝ぜり合いが成立しているのかと言うと、それは紫苑の力量に依る所が多いのだ。

紫苑は力点をずらす事で鏝ぜり合った状態で力を流しているのだった。

力のシオンと、技の紫苑。

二人は今まさに拮抗していた。

シオンは鏢ぜり合いの状態から紫苑を真っ直ぐに見据える。  
紫苑も同じくだ。

やがて、シオンの口端が笑みの形に歪んだ。

《どうしても言う気は無えんだな……？》  
《当然だね》

紫苑はあっさりと答える。

シオンはそれに笑みを更に深くした。

まるで獣のような笑いである。

そして、跳ね上がられた左腕を高々と振りかぶられ――。

《言わねえんなら……！ その身体に聞いてやらああああ！》

一轟！――

横薙ぎに、鉤爪が振り放たれる！

紫苑はそれに半歩を振込みながら刀を振るい、カリバーンと放たれた鉤爪を同時に弾こうとして。

一戟！――

《ぐ――っ！？》

九割がてらその威力を斬り流したにも関わらず、鉤爪は刀を弾き飛ばした。

いかな威力がその鈎爪には秘められていたか、紫苑はそのまま後ろへと吹き飛ばされた。

すぐに体勢を整えようとするが、シオンの獣じみた動きはなお疾い！

紫苑が体勢を整える前に肉薄し、カリバーンを振り放つ！

一撃！一

辛うじてその一撃を紫苑は斬り流すも、完全とはいかず肩口に刃が掠め血が吹き出した。

一撃を放ったまま背後に抜けたシオンはまだ止まらない。

足場を展開し、着地。紫苑へと更に跳ぶ。

背後から迫るシオンに、紫苑は無理矢理背中へと刀を振り放つものの、そんな無理な体勢で放った刀にさほどの威力はある筈も無く、シオンはカリバーンであっさり刀を弾く。

そのまま鈎爪を翻して、紫苑の背中に叩き付ける！

一撃！一

《が……っあ……！》

紫苑から苦痛の喘ぎが零れる。

それに、シオンは当然構わない。

カリバーンと鈎爪を振り上げる！

《絶影、双刃！》

一閃！一

一裂！一

左右から挟み込まれるように放たれる二条の絶 影！

カリバーンと、鉤爪から放たれたそれは迷い無く、無防備な紫苑へと叩き込まれた。

一撃！一

突撃にも等しいその一撃を受けて、紫苑の身体が盛大に跳ね上がる。

虚空へと投げ出された紫苑の下を、絶影・双刃を放ったシオンは勢いのままに突き抜けた。

とった……！

シオンは今の一撃に確信する。

手応えからして、致命傷となるだけの一撃であった。  
これならば、奴も。

そう思った直後。

《調子に乗りすぎだよ……！ オリジナル・シオン！》

一閃！一

シオンの背中を袈裟に刀が一閃！

背の尾も、甲冑すらも易々と斬り裂いて刀は通り抜けた。



ばか、な……！

背に走る激痛と、再び沸き立つ因子すらも忘我して、シオンは驚愕する。

そして肩越しに紫苑へと振り返って紫苑を見る。

紫苑は、何と無傷であった。

バリア・ジャケットすらも傷付いていない。

”そんな筈は無い”のに。

いや、待て……。

シオンは斬撃で身体が虚空を泳ぐのも構わず、疑問符を浮かべる。そもそも、さっきカリバーンを紫苑に突き刺した筈である。鉤爪も、背中の肉を抉った筈だ。

なのに、”無傷？”

【シオン！】

一兄弟？ ポケットとしてる暇あるのかよ？ 何なら”代わろうか？

”

《っ————！？》

イクスと、カインの言葉に、シオンは我に返ると足場を展開。着地し、体勢を整える。

紫苑がそんなもの、悠長に待つ筈が無かった。

瞬動で、シオンの懷に飛び込み。下段から刀が振り上がる！

いわく、燕尾の型。

《絶影——》

一斬！一

逆袈裟にシオンを斬り裂いて天へと突き立った刀が鈍い光を反射する。

一拍遅れて、シオンの身体から血と因子が吹き出した。

《ぐっ！ ……っう！》

痛みと出血に喘ぎながらも、シオンはカリバーンを振り放つ！

だが、そんな状態で放たれた斬撃など、紫苑が斬り流せない筈が無い！

あっさりとカリバーンは跳ね上がられた。

そして、紫苑の身体が虚空に踊る。

ダンス・マカブル  
まるで死之舞踏。

刹那に放たれた数十もの斬撃は、視認すらも間に合わせずに、シオンの身体を斬り裂く！

血煙がたちどころに虚空に華となり咲いた。

《感染者だからといって、絶対不死と言う訳じゃ無いだろ？ 貴方は何回死ねば死ぬかな……！》

《ぐ……！》

紫苑の台詞に、シオンはぐつと呻く。

確かに、いくら何でも完全に不死と言う訳ではあるまい。

そうで無ければ聖域での戦いで、タカトが本気を出す事をあれ程躊躇う筈が無い。

このままでは、死ぬ。

そう、”このままならば”。

シオンの口端がにい、と吊り上がる。

《我は堕ちる。色と自らの本能に赴くままに、他者を汚しながら……！》

斬られながらシオンは聖句を呟く。

それは果たして、紫苑に聞こえたかどうか。

両の腕を交差させて斬撃を受け続けながら、シオンはひたすら紫苑を睨み据える。

開かれる口からは聖句が零れた。

”新たな罪”を顕現せしめる聖句を。

《侵し、犯し、冒し尽くす！ その、精神せいしんまでも！ 第五大罪。顕  
！ 現……！》

《させると思うかい！？》

シオンの聖句に気付いた紫苑が、させじと勝負に出る。  
刀を突き出し、その身体に魔力を纏いながらシオンへと突っ込んだ。

奇しくもそれは、同じ五の名を冠する技！

《伍ノ太刀！ 剣魔！》

一轟！一

叫びと共に紫苑は矢となり弾けた。

向かう先には未だ防御の体勢のまま動かないシオンが居る。

剣魔を持って突き出された刀はシオンの両手を弾き。

無慈悲にその身体の中央、心臓に突き立つ！

これで大罪スキルも使え無いと紫苑は勝利を確信して笑い。

《淫<sup>ルスト</sup>欲……！！》

その言葉を耳元で聞き、愕然とした。

シオンの目的は最初からそこにあった。

ルストを紫苑にかける事。ただ、それだけを。

故に、剣魔を避さなかったのだ。

つまりそれは、この大罪ならば紫苑を倒せると確信している事に  
他ならない。

次の瞬間、紫苑の視界は光に染まった。



《っ——！？》

紫苑の視界に光が広がり、瞬く間に消える。

その間に逃げたか、刀で突き刺した筈のシオンは何処にも居なかった。

それに、今の紫苑には他にも気にかかる事がある。

第五大罪、淫欲。

シオンが発動した大罪スキルである。

まさか、さっきの光による目眩しと言う訳もあるまい。

なら、一体……？

怪訝に思いながらも紫苑は視界を素早く巡らせようとして。その必要の無い事に気付く。

シオンは、真っ正面に居たのだから。

因子による効果か、すでに無傷。

紫苑と対峙する形で、薄ら笑いを浮かべている。

それに何らかの罠を警戒するも、シオンは何もしない。

ただ立ち尽くすだけである。

ならば……！

虎穴に入らずんば虎児を得ず。

紫苑は瞬動で、シオンの懷に飛び込む。

同時、孤を描く刃が頭上より振り落とされた。

一斬！一

袈裟に振られた刀は、迷い無くシオンを肩口から叩き斬る！  
そして、シオンは無抵抗のまま崩れ落ち、塵となって消えた。

死んだ……？

あまりにもあっさりと消えたシオンに紫苑は思わず疑問符を浮かべる。

あまりにもあっさり過ぎる。

一カカカカカカ……一

《っ！？》

突如響いた笑いに、紫苑は身を固くして振り向く。  
そこには、先程塵となって消えた筈のシオンが居た。  
薄ら笑いを浮かべて紫苑を見続ける。

……それが何故か凄まじく感に障った。

再び、瞬動発動。

再びシオンの眼前に現れ、今度は逆袈裟に刀を跳ね上げる！

一閃！一

今度も結果は同じだった。シオンはあっさりと斬り捨てられ、塵

となって消える。

すると、その後ろに斬り捨てた筈のシオンがまた現れた。

紫苑が愕然とする。

《――どう言う事なんだ……！？》

幻術では無い。そもそも手応えからして違う。

紫苑の手には、人を斬った感触がしっかりと残っている。  
幻術ではそんなもの、再現出来る筈も無い。

故に紫苑は混乱していたのだ。

取り敢えず、眼前のシオンを斬り捨てようとして。

《何処を見てる？　こっちだ》

《っ――！？》

念話が背後から掛けられた。

紫苑はそれに猛然と振り返る。

そこには、ニヤニヤと笑うシオンが居た。

前にも居るのに！

すると。

《こっちだ、こっち》

《どこ見てんだ？》

《お前の目はふし穴かなんかか？》

次々と念話が紫苑に掛けられていく。  
紫苑の周りには、いつの間にやら数十人のシオンで埋めつくされていた。

それも、その一人一人から念話が掛けられたのである。  
更にシオンはどんどん増えていく。

有り得る筈が無い光景である。  
だとするならば、やはり幻術か。

だが。

《っ！》

一斬！一

試しに眼前のシオンを斬り捨てる。

するとやはり。甲冑と肉、骨を斬った感触だけを残してシオンは塵となって消える。

紫苑の感覚は伝える。

あれは、”本物”だと。

なら、この無数のシオンは果たして何なのか。

《っ……！ あああああ……！》

一斬！一

斬る。



一閃！一

斬る。

一裂！一

斬り捨てて！

立ち並ぶシオン”達”のこと如くを斬り捨てて！

だが、シオンの数は一向に減らない。

寧ろ、増えていた。

これが、淫欲の効果……！？

胸中叫びながら紫苑は呻く。

いくら斬ってもシオンは減らなかった。

そして紫苑はシオンを斬り捨て続け。

《ああああああ……！ どこだ……！？ 本物は何処に居る……！》

その数が万に達しようとした時に吠えた。

いい加減おかしくなりそうだったのだろう。

先のような余裕は何処にも無い。

それでも眼前のシオンを逆袈裟に斬り捨てて。

《――3分、て所か》

《何、が……!?!?》

突如として聞いた声に、紫苑は問い掛けようとして。

## 一破一

頭上から世界が割れる光景を見た。

まるで硝子のように碎け散っていき。

《——いい夢は見れたかよ?》

《ま、さか……!?!?》

その時点で、漸く紫苑は今の状況を理解した。

やはりこの現象は幻術だったのだ。

しかし、分身を作るような物では無く。

” 幻世界を作り出し、対象の精神を取り込むタイプの!”

おそらく、幻術としては最高法の代物である。

第五大罪、淫欲。

その能力を、漸く紫苑は悟り。

直後。

割れ、現実世界へと戻った紫苑の眼前に、本物のシオンが映る。

シオンは至近で鈎爪を振りかぶり、今まさにそれが振り落とされんとしていた。

驚愕する紫苑にシオンは獣じみた笑いを浮かべる。

《満足したかよ？ ” 俺を散々殺せてよ……！”》  
《貴方は……！？》

一撃！一

眼前のシオンから繰り出される鉤爪の轟撃！

ルストで疲弊させられた紫苑にそれを避わすだけの力は無く。

鉤爪は容赦無く紫苑の胴を薙ぎ払った。

胴の肉を虚空に撒き散らし、紫苑が身体が跳ねる。

それを尻目にシオンは鉤爪を振り放った姿勢で通り過ぎ。

虚空を翔ける。

あの程度の傷では、倒せない事はさっき分かった。

再生か何かか。だが、そんなもの。” 肉片一つ残さず” に消し飛ばせばどうにもなるまい。

故にシオンは顕現させる。

紫苑を抹消せしめうる大罪を！

《我が怒りは世界を焼き尽くし、破壊し尽くし、殺し尽くす……！》

紫苑から離れる事、数十m。

シオンは振り返ると、左手の掌を突き出した。

すると、掌を中心に幾何学模様の紋章が生まれる。

それは、シオンの異母兄。

タカトの右腕にある666の魔法陣に酷似していた。

更に、紋章から前後に光の網が伸びた。

光の網はぐると左手を囲うと、掌を中心にして迫り出す。

それはまるで光で作られた砲身であった。

《眼を焼き、己を焼き、世界を焼き尽くす熾烈なる光！ 第二大罪、顕現……っ！》

光で構成された砲身は、真っ直ぐに紫苑へと向けられる。

紫苑は未だ鈎爪によるダメージからか、まともに動けないようだった。

ただ、シオンに憎悪の瞳を向ける！

《オリジナル・シオン！》

咆哮が響く。だが、シオンはそんなモノに一切構わない。

こちらにも激烈な憎悪からなる視線を紫苑へと浴びせる。

同時、砲身を中心に複数の魔法陣が展開した。

転移魔法陣である。

そう、第二大罪は反物質砲である。反物質はこの世界に生まれ落ち。

物質に触れた瞬間に対消滅を起こし。そのエネルギーを爆発として、顕現してしまう。

故に転移魔法による空間転移で、この世界に触れさせる前に対象空間まで転移させる必要があるのだ。

そして砲身に生まれたモノは凄まじい光を反射しながらも米粒以下のサイズしかなかった。

下手に質量の大きな反物質を生み出すと、後ろのスバルやノーヴエ。それに他の仲間をも消し飛ばしかねない。

シオンは紫苑をただ見据え、そして最後の聖句を紡ぐ。  
紫苑を抹殺する為に！

……！  
《——》  
「噴怒ア  
アアアアアアアアアアアアアアスッ」

ラース

——事——！

叫びを辺りに撒き散らしながらシオンは噴怒を撃ち放ち！  
それは、空間転移魔法陣を潜り抜け。紫苑へと刹那に迫り。

—ソードメイカー・ラハブ—

一我は無尽の剣に意味を見出だせず、故にただ一振りの剣を鍛ちあげる――

《な……! ?》

その直前、聞き覚えのあるキー・スペルとオリジナル・スペルが響いた。

この、スペルは……！？

《チイイイイイイイイイイイイイイイイ  
エストオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオオ……！》

一斬！一

直後、世界を揺るがせる咆哮が辺りに響き渡り。  
世界はその刀の名が示す通りに斬り裂かれた。

斬界刀。

その一撃を持って。

転移中の反物質を”世界”ごと斬り捨て。  
容赦無く消し飛ばし。

彼は現れた、

忘れもしない紅い壮年の男性。

無尽刀、アルセイオ・ハーデンが。

《お、っちゃん……！！》

《——いよう。坊主。随分楽しそうじゃねえか？》

シオンの頭上、斬界刀を担いで。  
アルセイオはニヤリとシオンに笑って見せた。

（第四十五話に続く）

第四十四話「過去の刃」(後編2)(後書き)

「紫苑とシオンの戦いに現れるアルセイオ」

「彼の目的は果たして」

「そして、憎悪と怒りを持ってして戦うシオンに容赦の無い言葉、  
事実を浴びせる」

「それにシオンは――」

「そして、”彼”が現れる」

「次回、第四十五話

『舞い降りる王』」

「其は契約者、其は精霊王。其はEXに達せし、ただ一振りの槍の  
銘」



第四十五話「舞い降りる王」 (前編) (前書き)

「あいつは容赦をしなかった」

「今にしてみれば凄まじい事に、私は手加減の概念がよく分かって無いあいつにしょっちゅう挑んでは、散々死にかけた」

「自分が吐いた血返吐と”内臓”の上で気絶した事がある」

「四肢を完全に破壊され。ナノ・リアクター抜きでは一生手足が動かぬような事になった事がある」

「……上半身と下半身が完全にちぎれた事もあった」

「それをやった、我が愚弟いわく。『死ぬような目にあえば、その分だけ強くなる』らしいが、それを実際にやったのは私で最初で最後だろう」

「そして、それでもアレに挑み続けた自分を我が事ながら、心の奥底からどうかと思う」

「だが、アイツから一本取った時」

「その時の恍惚と、満足さは堪らなかった」

「それからだ。互いが死ぬ程の喧嘩を繰り広げるようになったのは」  
「三百七十戦中、勝ち星四十八。負け星四十七。引き分け二百七十五」

「……今では堂々と言える。私は――」

「タカトより、強い」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まります」

## 第四十五話「舞い降りる王」(前編)

―我は無尽なる剣に意味を見出だせず―

その言葉と共に、こちらへと降りて来る男に、シオンは息を飲む。その肩に担がれた剣と一緒に。

そんな、シオンの反応に男は。

アルセイオ・ハーデンはシオンを見続ける。

―故に我はただ一振りの剣を鍛ち上げる―

そして、シオンと紫苑のちょうど中間点で止まると、ニッと笑って見せた。

初めてあった時と同じように。

ただ、笑う。

《よう、坊主。久しぶりだなあ。つってもクラナガン戦から一週間も経ってねえけどよ。元気してっか？ 歯あ磨いてるか？》  
《……磨いてるよ》

脳天気な挨拶をしてくるアルセイオにシオンはぐっと唸りながら答える。

カリバーンと怪手を構えたままに。

当たり前である。

どれだけ陽気に、脳天気に見えようとも相手は”あの”アルセイオなのだ。

無尽なる剣を造りだし。

世界を斬り得る一刀を鍛ち上げる事が出来る傑者。

シオンは彼と三度戦ったが、一人で勝利を納めた事は一度も無い。

緊張も警戒もして当然であった。

そんなシオンに、アルセイオはフンと鼻を鳴らして笑うと。視線を背後に向けた。

つまり、紫苑に。

《おめえがベナレスの言ってた回収物か。……しっかし本当に坊主に似てんなお前》

《——そう言われるのは釈だね。……で、貴方は何しに來たのさ？》  
《あん？ さっき言っただろうが。お前を回収にだよ。ベナレスから勅命だぜ？ まったく。俺達はあくまで傭兵だったの》

深々とため息を吐きながらアルセイオは紫苑に愚痴を言う。

それに紫苑は不快そうに眉を潜めた。

《……僕は、ここで帰る積もりは無いよ。あくまでも僕はストラの協力者に過ぎない。命令を聞く義理はあっても義務は無い筈さ。だから貴方はとっと帰って——》

《——”あの人”からの言伝があるんだとよ》

紫苑が拒否しようとする言葉を、アルセイオが遮る。

”あの人”。その単語に紫苑は目を見開き、硬直した。

《『勝手な行動を許した積もりは無い。許すのは今回限りだ。帰還しろ』だとさ、……あの人とやらは知らねえけどよ。命令、聞いた方がいいんじゃないか？》

《………》

暫く、紫苑は無言。目を閉じ、何かに耐えるように肩が少しだけ震える。

やがて、ゆっくりと目を見開いた。

《……了解。帰還します》

《っ——！？》

紫苑の返答に、二人の会話を聞いていたシオンは驚く。

紫苑とて、本心ではここで自分とケリをつけたいのだろう。

それを振曲げてまで命令をあっさりと聞いたのだ。

ここまで紫苑を従わせれる、あの人とは一体誰なのか。

シオンが疑問を巡らせている内に三人の遥か頭上に穴が開く。

次元航行艦の次元航行による転移だ。

穴からは、管理局で使われている標準的な航行艦。XX級次元航行艦が、出て来る。

間違い無く、ストラの。いや、アルセイオ隊の艦であった。

紫苑はもはや、シオンに一瞥もくれずに航行艦へと飛ぶ。

それを見て、シオンは漸く我に帰った。

紫苑に迫い縋ろうと瞬動を発動する。

《っ！ 逃がすかよ！》

《ところがギッチョン、てな？》

一斬！一

瞬間、シオンの鼻先を”何かが”通り抜けた。

シオンはそれに瞬動を停止。  
その場に留まる。

ゆっくりと横を振り返った。

確認するまでも無い。そこに居るのは斬界刀を振り下ろしたアルセイオであった。

《……おっちゃん……！ 邪魔するかよ……！》

《もちな。一応、今回はあいつを連れ戻すのが任務だしな。悪いな坊主。決着つけたいならまた今度にしろや》

凄まじい形相で、自分を睨むシオンにアルセイオはまったく動じず笑う。

シオンは歯を食いしばると、アルセイオに向き直った。

《俺が、嫌だ。て言ったらどうする……！》

《――やめとけ坊主。今のお前じゃ、俺には死んでも勝てねえよ。賭けてもいいぜ？》

シオンの台詞に、アルセイオから笑みが消える。

だが、それは戦いにより真剣になったと言う事では無かった。

アルセイオはただ、シオンに言い聞かせるような瞳で見続ける。

死んでも勝てない。

その台詞にシオンは激昂する。

《勝てねえ、……だと……！？ 今の俺にそれ言ってるのかよ！》

《今のお前だから言ってるんだバカタレ。さっきの戦い。ちよっと見

てたが――。前よりお前、寧ろ弱くなってんぜ?》

分かんねえのか?

そうアルセイオは、まるで哀れむかのような瞳をシオンに向ける。  
――その目にシオンは頭に血が上った。

《ふざけんなよ……! 俺が、弱くなった……? ふざけんなよ! 》

《……本当に分かってねえんだな……》

まだ言い続けるアルセイオに、シオンが怒りの視線を向ける。  
それでも、アルセイオは哀れむような視線を止めなかった。

シオンの堪忍袋もここまでだった。  
アルセイオに飛び掛かる!

《だったら……! アンタを倒して強くなったと! 証明してやら  
アアアアアアアアアア!》

《――忠告はしたぜ? 坊主》

勝てねえ、てよ?

一撃! 一

直後、シオンが振るったカリバーンをアルセイオが斬界刀を解除  
して、ダインスレイフに戻し。受け止める。

聖剣と魔剣は、ここに三度目の対決を果たす事になった。



《おお……！》

一戟！一

虚空にシオンの咆哮が響く。

同時弾かれたように、カリバーンとダインスレイフは跳ね上がった。

シオンはそこから体を回し、左の鉤爪をぐるりと廻らせる。  
狙うのはアルセイオの首！

《っらぁ！》

一閃！一

叫びと共に鉤爪は容赦無く、アルセイオへと放たれる。  
だが、アルセイオは少しも慌てる様子は無かった。  
ただただ、醒めた瞳でシオンを見続け――。

一撃！一

《がっ……！？》

突如、シオンの背中に激烈な一撃が叩き込まれた。  
その衝撃で放たれた鉤爪も無残な軌跡を描き、アルセイオに届かないまま通り過ぎる。

一体、何が……！？

何が自分の背中を痛打したか分からず確認の為首を巡らせ。  
シオンは硬直した。

シオンの背中には刃渡り十mはあろうかと言う巨剣が突き刺さっていたのだから。

シオンはその巨剣を見て思い出す。

アルセイオは離れた所からでも剣を作り出す事が出来たのだった……！

《―――相對してる敵を前にして視線逸らしてんじゃねえよ》  
《っー！？》

前方から響く念話にシオンは我に返る。  
前に振り向いて。

――轟！――

その目前に、剣先が迫っていた。  
アルセイオが投擲した巨剣である。  
自分が気を逸らした瞬間に投げたのか。

巨剣は既に回避も防御も出来るようなタイミングでは無かった。

シオンは迫り来る巨剣をただ見る事しか出来ず。  
その身体に巨剣が叩き込まれる！

――撃！――

《がっあアア……！》



胴体に直撃した巨剣はシオンの身体に食い込み。

容赦無くその身を吹き飛ばす。

景気良く吹き飛んだシオンの身体から血と因子が溢れた。

それでもシオンは虚空中で身体を翻し、体勢を整えて――。

その視界にとんでも無いモノを見た。

アルセイオが右手を振りかぶっている。

その手に握られているのは、刃渡り五十mはあろうかという極剣！

それを、アルセイオはまるで野球のピッチャーのように構える。

そして。

《そら、よお！》

一轟！一

咆哮一声！

叫び声と共に、極剣を容赦無くアルセイオは投擲した。

それは、放たれると同時に音速超過。

空間に衝撃を撒き散らしながらシオンに突き進む！

シオンはそれに、瞬動で回避しようとするも、既に遅い！

音速超過の極剣は、問答無用にシオンへと叩き込まれた。

シオンはそれでも身体を右に倒す事で直撃だけは避ける。

極剣に跳ね飛ばされ、右に吹き飛ばされながらもシオンは何とか踏み止まった。

連撃に次ぐ連撃で、シオンの息は荒い。  
心臓が跳ね上がるのを自覚する。

そして、アルセイオへと視線を戻した。

恐るべき連撃を放ったアルセイオはやはり詰まらなそうにシオンを見続ける。

《――どうだ？ 坊主。分かったか？ 今のお前が弱い理由が》  
《っー！？》

まだ言うか。

アンラ・マンユを制御し、大罪スキルをも放てるようになった自分の何処が弱いと言うのか。

シオンは齒軋りしながらアルセイオを睨みつける。  
だが、彼はそれにすら嘆息した。

《分かんねえか？ 坊主。さっきの攻撃……。クラナガン戦で、お前が全部”避け切った”攻撃だぜ？》  
《な、に……？》

告げられた言葉に、シオンが目を見開き呆然とする。  
そして思考を巡らせて、愕然とした。  
確かにその通りであった。

クラナガンでの戦いで、シオンはあの連撃を辛くもではあったが

回避してのけた筈であつた。

背後に生み出された剣群も、あの時はウィルと一緒にあつたとは言え気付いた筈だ。

それが、何故。今、まともに全部喰らつたのか。

漸く自身の言わんとしている事を察したシオンに、アルセイオが笑って見せた。

《怒り、憎しみ。確かにそれでお前は力を増したんだろうさ。感情、てのは意思に直結するからな。意思を現す法たる魔法の威力も上がる。……しかも大罪のオマケつきと来てらあ。けどな？ 言っちゃまえば、”それだけでしか”ねえんだよ》  
《……………》

アルセイオの言葉に、シオンは無言。

ただ、ただ。黙り込む。

否定しなかった。

そんな筈は無いと言いたかった。

けど、アルセイオの言葉を否定し切れなかった。

黙り続けるシオンに、アルセイオは更に続ける。

《今のお前は視野が狭まってんだよ。怒りや憎しみでな？ 集中してる、ていやあ聞こえはいいけどよ。逆にいやあ、それ以外は見えねえ、て事だぜ？ だからあんな攻撃を避けねえんだよ。しかも、動きにいつものキレがねえ。相手を倒す事しか考えてねえんだ。当たり前だな》

《——だ、まれ……》

震えながらシオンはアルセイオを睨む。  
認められる筈なんてなかった。  
自分が、弱くなってるなんて。

だが、アルセイオは黙らない。  
シオンを見据えて、最後にこう続けた。

《坊主、今のお前じゃあ絶対に俺には勝てねえよ》  
《黙れエエエエエエエエエエエエ！》

シオンの叫び木霊する。

そして、激情に駆られるままにシオンはアルセイオへと飛び掛かる。

その言葉を否定させるために！

《我は喰らう！ 万物全てを我が糧とせんと！》

アルセイオと駆けながら、シオンは聖句を叫ぶ。  
引き出すは第一の大罪！

シオンが最初に目覚めた大罪であり。それは眼前のアルセイオの能力も含まれる。

《我が肉に！ 血に！ 骨に！ 万物を我と成す！ 第一大罪、顕現！》

《その大罪スキル、な。そいつがいけねえんだ、坊主——》

向かい来るシオンの必死の形相に、アルセイオは目を伏した。

そして、その周囲から剣群が形成される。

シオンはそれに構わない！ 己が大罪を顕現する！

《<sup>グラトニー</sup>暴食 イイイイイイイイイイイイイイイイイ——！》

シオンが叫ぶ、と共にアルセイオと同じように周囲に剣群が形成された。

暴食の大罪スキル。それを持って、シオンはかつてアルセイオの無尽刀スキルを喰らった事がある——！

互いに生み出した剣群は互いにその切っ先を向け。  
今にも放たれんとする。

シオンはアルセイオを睨み、アルセイオは目を漸く開いた。  
シオンに哀れみの目を向けたままに。  
そして念話が響いた。

《坊主、”他人からの借り物”じゃあよ。俺は倒せんぜ？》

—轟！—

次の瞬間。

二つの剣群は迷い無く互いを蹂躪せんと、突撃を開始した。



—撃！—

飛来する先頭の剣が互いにぶつかり、砕け――。

それを皮切りに劍群が真っ向から衝突を始める！

[illegible]

— 擊手！ —

乱舞し、ぶつかり合い、砕け行く劍群！

砕けた剣の破片がまるで雪のように煌めいた。

その中をシオンは、破片で身体を切り裂かれながら突き進む！

シオンの本命はアルセイオから奪ったこの剣群では無い。

オリジナルはあちらである。勝てる見込みは何処にも無い。

だが暴食で奪った魔法は何も無尽刀だけでは無い。

そう、あと一つ暴食で奪った魔法がある！

シオンは破片の中で左手を、その向こう側に居る筈のアルセイオに向ける。

掌に光球が灯った。

それは、シオンの異母兄。タカトから奪いし魔法。

彼が唯一使う砲撃魔法！

シオンはそれを迷い無く解き放つ！

《天破！  
光霸彈！》

一轟！一

叫びと共に左掌から巨大な光球が放たれた。  
それは衝突する剣群を纏めて碎き、前へと突き進む！  
シオンはそれに勝利を確信して――。

《――違うな》

一撃！一

直後、光球が二つに”割れた”。  
その中央からは五十m超の刃先が生えていた。

《……な……》

あまりの事態にシオンは言葉を失う。

それはそうだろう。こうもあっさりと破られるなど誰が考えるものか。

硬直するシオンに、割れた光覇弾の向こう側で、アルセイオは肩を竦めて見せた。

《何を驚いてんだお前？ 伊織と同威力の技なんぞ。”本当に使えるとでも思った訳じゃねえだろ”？》

《――っ！？》

アルセイオの言葉に、シオンは我に返る。

そしてギリッと歯を噛み締め。再びアルセイオを睨み据えた。

ならば……！

《我は欲つする。尽くせぬ強欲を持って……！》

シオンは次の聖句を紡ぐ。

暴食が通じないならば、別の手段を使うまでである。

そして引き出すのは第四の大罪！

クラナガン戦でアルセイオを倒してのけた切り札が一つ！  
その名を強欲！

だが。

《奪い、望み、手に入れる――》

《悠長にそんなの待つ馬鹿が何処に居るよ！》

アルセイオが吠える！

瞬間、聖句を最後まで唱えようとしたシオンを容赦無く剣群が囲んだ。

《大罪スキル、てのはどうも特定の永唱を必要とするみてえだな？  
なら、それを中断させちまえば怖くも何ともねえ》

《っ……！ 第四大罪、顕・現！》

アルセイオが笑いながら手を掲げる。

それにシオンは歯噛みしながらも聖句を続けて唱えた。

強欲はシオンの認識範囲内の魔力を支配する能力である。

一度発動させれば、周りにどれだけ剣群があろうとも全部無力化  
出来る！

何発食らわされようと唱え切る！



そう、シオンは覚悟を決め。今にも放たれんとする剣群を睨んだまま、聖句の最後を紡がんと口を開き。

それを見て、アルセイオが笑った。

《人、てのは不便に出来てな？ 念話に口は必要としねえが。念話自体を中断する方法はいろいろあるんだよ。例えば、”念話を出すべき頭に強い衝撃を与える”とかな？》  
《な——！？ ぐっ！》

一撃！一

アルセイオの言葉に目を見開くシオンのコメカミをピンポイントで飛来した剣が叩き込まれる！

脳が激しく揺さぶられ、視界が震える。

脳震盪である。

下手に剣を突き刺さしても再生するだけだと見越して、頭を強く打つ事で念話を中断させたのだろう。

呻くシオンに、アルセイオは笑う。

そしてその身体を囲んでいた剣群が一斉にシオンへと突き進む！

一轟！一

シオンはそれを避けそうと瞬動を発動しようとするも、身体が上手く動かない。

脳震盪を起こしたシオンは飛来する剣群達をただ見る事しか出来ずに。

その身体に余す事無く劍群が突き立つ！

—擊—擊—擊—擊—擊—擊—擊—擊—擊—擊—擊—擊

— 擊手！ —

《かつ……あ……つ》

まるで針ネズミのように無数の剣が刺さったシオンの口から因子と血が溢れて零れた。

呻きを上げるシオンは、それでも片手を上げて、聖句を告げようとして。

一我は無尽なる剣に意味を見出だせず。故に我はただ一振りの剣を鍛ち上げる――

《——これで終わり、だ》

—斬！—

その身体に容赦無く、アルセイオは再び顕現せしめた斬界刀を振り下ろす。

次の瞬間、シオンの視界が漆黒に染まった。



斬界刀が振り下ろされた瞬間。シオンは目を閉じ、死を覚悟した。

こんな所で死ぬのかと、後悔より先に自嘲が頭を埋め尽くす。  
力を過信して、溺れて敗北した。

その結果として死ぬ。

それに自嘲したのである。

だが……。

《……………？》

いつまで経っても覚悟した斬撃は来なかった。  
死ぬ前に時間が遅く感じられると言うが、これは違う気がする。  
シオンは恐る恐る、目を開いて。

その、背中を見て愕然とした。

振り下ろされた斬界刀から、守るようにして。シオンの前で両手  
を広げて立つ一人の少女の背中を。

その少女の名を、スバル・ナカジマと言った。

スバルの顔の直前で、斬界刀は止まっていた。  
アルセイオは呆然とするシオンを一瞥した後、スバルに目を向け  
る。

スバルは真っ正面からアルセイオを見ていた。

その瞳から、視線を一切逸らさずに。

スバルの視線をアルセイオは、眩しそうに目を細める。

《……嬢ちゃん。何で出て来た？ 俺が” 最初から斬撃を止める” つもりじゃなきゃあ、諸共ぶった斬ってたぜ？ どう言う積もりだよ？》

《っ！？》

シオンはその言葉に驚愕する。

アルセイオは最初からシオンを殺す積もりは無かったのだ。

もしそうならば、シオンはスバルと一緒に斬界刀で斬られて死んでいる。

スバルはそれに首を横に振った。

《どう言うつもりとか、そんなの考えてなかった……。ただ、気付いたらこうしてたんだよ……》

アルセイオの問いに、スバルは淡々と答える。

いきなり始まった二人の戦いを、スバルはずっと間近でノーヴェと見ていた。

何とか介入しようとも思ったのが、シオンとアルセイオの戦いは、すでにスバルやノーヴェが割り込めるレベルを超えていたのである。故にただ見続ける事しか出来なかったのだが。

あの、瞬間。

シオンが無数の剣群に突き刺され。アルセイオが斬界刀を形成した瞬間に。

スバルはノーヴェの制止を振り切り飛び出していたのだ。

その身を持って防ごうとか、守れるとか、そんな考えはスバルの中には無かった。

ただ、あの光景を見た瞬間に飛び出していたのである。

そこに何の打算も考えも、介入する筈も無かった。

《そうかい》

スバルの一言に、アルセイオは納得したように頷く。  
そして、未だに呆然とするシオンに目を向けた。

《坊主、今のお前に足りねえのが。”これ”だよ》  
《……………》

シオンは答えない。ただ、黙り続ける。  
アルセイオはそんなシオンに苦笑する。

《お前とあいつの間に何があったかは知らねえけどよ。お前、動きに全部”迷い”があんだよ。……いや、”後悔”か？ だから動きにキレは無えし、行動思考は攻撃一辺倒になっちまうのさ。無理矢理吹っ切ろうとしてな。……自分でも気付いてたんじゃねえか？》  
《……………》

当たり前だ。

忘我の境で、シオンはそう思う。

十二歳の時の、”一番許せない”自分が刀を持って現れた。  
それに、シオン自身の忌まわしい記憶を呼び起こされたのである。

人を斬った、殺してしまった。あの記憶を。

剣に、それが現れ無い筈が無かった。

……当たり前、だ。

もう一度、そう一人ごち。

シオンは俯く。

そんなシオンにアルセイオは目を細めた。

《坊主、守破離<sup>しゅはり</sup>。て言葉知ってるか？》

突如告げられる言葉。

だが、先の言葉にうなだれたシオンは答えない。  
ただ首を横に振る。

アルセイオはシオンの反応に頷いてみせた。

《仏教だか何だかの教えで修業の段階を現す言葉だった気がすんだが……。まあ、大事なのはそこじゃねえ。この守破離、てのはな？

『守』。師に教えられたことを正しく守りつつ修行し、それをしつかりと身につけること。

次に。

『破』。師に教えられ、しっかり身につけた事を自らの特性に合うように修行し、自らの境地を見つけること。

最後に。

『離』。それらの段階を通過し、何物にもとらわれない境地。

……だったか、を言うんだが……。俺の無尽刀や、伊織の拳技は

これを。”自分”を学び尽くす事で出来てる。が、だ。……今のお前じゃ、それが無え。ただ借りてるだけだろ。”他人の持ち物をよ？”》

《………》

その言葉をシオンは黙したままに聞く。

その通りだった。ハーフ・アヴェンジャー・フォーム。大罪スキル。それらは、全てカインの力だ。シオンのモノでは無い。

そんなモノに守破離なぞ。……極める事なぞ、望むべくも無い。

アルセイオがずっと言っていた事を、漸くシオンは悟る。

弱くなったと言った意味を。

自分の力でも無いモノを振るうヤツが、極めた存在に敵う道理は何処にも、無い。

勝てる筈が無かった。

《……ま、他にも言いてえ事はあるけどよ。こんな所か。……坊主、最後に聞いとくわ。お前、”何の為に戦ってるんだ？”》

《な、んの……？》

絞り出すようにして出たシオンの言葉に、アルセイオは頷く。

《お前の最初の思いだよ。実際、最初にヤツと剣で戦り合ってるお前にはあった筈だぜ？》

《俺、は……》

俺の、想い……？

シオンは、それを自問する。

許せなかった。

紫苑の存在が、何処までも。

奴の容姿が過去を思い出させて。

奴の行動が過去を思い出させて。

奴の、在り方が。スバルやティアナを殺すと言った奴が許せなくて！

黙り込んだシオンに、アルセイオは苦笑する。

そんな彼に、一連のやり取りを聞いていたスバルは不思議な感じを覚えていた。

アルセイオはまるで、シオンに教えるかのように戦っていたのだ。

いや、実際に教えていた。

『守破離』や、今のシオンが、どれだけ危ういかを。

これでは、まるで――。

弟子と師匠みたい。

あえて声には出さずに、スバルはそう思う。

アルセイオはスバルの思考を読んだが如く肩を竦めた。

《ま、これは宿題な？ 次会う時に答えを聞こうじゃねえか》

《――宿題？》

スバルが小首を傾げて尋ねる。

アルセイオがその問いにニツと笑った。



《俺の任務は奴を回収する事だけだったしな。別に坊主を殺せとか、お前達を殲滅しろとか言われてねえし。この辺で終わりでもいいだろ。――坊主。次はもうちょつと楽しませろや》

《……おっちゃん》

未だにアルセイオに言われた事が分らずに自問し続けるシオンが、思わず呼び掛ける。

それに手を上げて、アルセイオはじゃあなと声を上げようとした。

瞬間。

《……神庭シオンを捕らえよ》

声が、辺りに響いた。

重く、そしてよく通る声である。

念話ではあるが。その声にシオン達は聞き覚えがあった。

――この、声は……。

《ベナレス、か。こんな所まで、わざわざご苦労なこった。……んで？ 今なんつった？》

《神庭シオンを捕らえよ、と言った》

《……命令の拒否権は？》

《無い》

その言葉に、アルセイオは深々と嘆息する。  
そして、シオンに視線を向けた。

同時、シオンの背中を悪寒が突き抜ける！

《スバル、離れろ！》

《え？》

突然のシオンの剣幕に、スバルは思わず不思議そうな顔をして。  
いきなりシオンに突き飛ばされる！

虚空を流れ、文句を言おうと、スバルは振り向き。

《……悪いな。坊主》

一斬！一

アルセイオの短い謝罪と、空間が悲鳴を上げるような音を聞いた。  
振り向いたスバルが見たのは。

《か、あ、ぐ……！》

その身体の半ばまで、斬界刀を埋め込まれたシオンであった。  
左の肩口から腹まで刃がめり込んでいる。

アルセイオはそんなシオンに黙ったまま斬界刀を引き抜く。

噴水のように血と、因子が吹き出した。

《シオン！》

《——ノーヴェっ！》

《……く！》

シオンの有様に駆け寄ろうとするスバルに、シオンが叫ぶ。すると、後ろからノーヴェがスバルを羽交い締めにする。

それにより、スバルはシオンの元へ行く事を制止させられた。

《シオン！ ……ノーヴェ、離して！》

《絶対、離すな！ 逃げろ！》

スバルの念話を遮るようにして、シオンの叫びがノーヴェに届く。それに、ノーヴェは一瞬だけ迷い。やがて、ジェット・エッジを駆動。

後退を始めた。

《ノーヴェ！》

《馬鹿ヤロ……！ 何の考えも無しにあんな奴と戦う気かよ！？》

自分を睨み付け、叫ぶスバルにノーヴェもまた叫ぶ。

二人は至近で睨み合った。

《……シオンの判断が正しんだよ。今のアイツはそうそうくたばらねえし。アタシ達だけで、無尽刀とやり合っても勝てる見込みなんてねえだろ！？》

《でも、シオンが……！！》

《でもかしこもねえ！ もうすぐティアナ達も来る！ それまで待てよ！》

ノーヴェとて、シオンを見捨てるつもりは無い。

だが現状に置いて、アルセイオに二人で立ち向かって勝てると思えなかったのだ。

勝ち気で負けず嫌いなノーヴェが現状では絶対に勝てないと認め

たのである。

それがどれだけ悔しい事か、ノーヴェの目が物語っていた。

……それでも。

スバルは頭を振るう。

そして、シオンに目を向ける。

シオンは因子で身体が急速に修復されているが、それもすぐでは無い。

アルセイオは、そんなシオンを拘束せんと手を伸ばす。

ちらりとその目がスバル達に向けられた。

《……んで、悪いな嬢ちゃん。坊主貰ってくわ》

《っ……！ ダメ！》

アルセイオの言葉にスバルが拒否の叫びを放つも、アルセイオは当然無視する。

そしてシオンに手が掛かろうとして。

《それは、困るね。どうしようも無い馬鹿かつ、阿保かつ、間抜けかつ、鈍感かつ、愚弟だが。……まあ弟に代わりは無いしね？》

一閃！一

声が、降って来た。

同時に、“槍”も。

“白い槍”はアルセイオの手を弾き、シオンとの間を分かちよう

に。何と、空間に突き刺さった。

その石突きに、ふわりと長身の男が立つ。

アルセイオは、それに愕然とする。

今、自分は何の気配も感じ無かった。

白の槍が手を弾くまで、全く分からなかったのである。

つまり、それは自分を殺そうと思えばあっさりと殺せたと言う事を意味する。

アルセイオに男は微笑すると、槍からひよいと降り立つ。

まるで重力があるように。

恐ろしく自然な動作だった。

シオンもまた見る。

幾度と無く見たその背中を。

白の軽鎧を纏う姿を。

それは、シオンのもう一人の異母兄。

グノーシスに現状ただ一人だけ存在するEXであった。

その存在の、名は。

《トウヤ、兄ィ……？》

啞然とするシオンに、男は。

叶トウヤは笑つて見せる。

そして、こう告げた。

《——諸君。王が来たぞ？ 挨拶はどうしたね？ ……特に女性陣は色っぽいポージングを忘れずに！ これ、重要だよ？》

[illegible]

グノーシス最強の男。

王たる男は、このように敵味方問わず。その場に居る全員の心を一つにしてのけた。

……ボケとツツコミと言う方向で。

かくして、王は舞い降りた。

(後編に続く)

第四十五話「舞い降りる王」(前編)(後書き)

……はい♪

すみませんでした！

いや、お待たせしまくりまして(汗)

書いてる内に、何故かプロットから外れる言動を取るおっちゃん  
(笑)。

……いや、おっちゃん恐るべし。

プロットからの練り直しを余儀なくされ、鬼のように時間を喰い  
ました(汗)

おっちゃんは、おっちゃん節を語らせるとヤバイキャラだと再認

識(笑)

……書きやすいくせに、何て恐ろしい……(笑)

さて、前編終了です♪

後編、どうなるのかお楽しみにですよ♪

そしてクイズの第2弾も用意してます(笑)

詳しくはアリサ道場にて♪

では……♪

第四十五話「舞い降りる王」 (後編) (前書き)

はい♪ 漸く更新出来ました♪  
テストメントです♪

いや〜。今回はあやつがノリノリですよ♪ (笑)  
楽しんでいただけると幸いです♪  
では、どうぞ〜♪

PS…今回、クイズ第2段を用意しました♪ 気が進めば解答よろしく願います♪



## 第四十五話「舞い降りる王」(後編)

虚空に斉唱するツツコミ。

それを満足そうに受け、王たる男、叶トウヤは微笑した。

脇の空間に突き刺さったままの白槍、ピナカを引き抜き、優雅に振るう。

それだけ。それだけで彼は戦闘体勢に入っただけ。

思わず裏手でツツコミを入れていたアルセイオは、その仕種を見てゾクリと背中に寒気を覚えた。

そう、今は戦闘の真っ最中。

しかも、この男は――。

《はじめまして、だね？ 無尽刀、アルセイオ・ハーデン。噂はかねがね聞いてるよ？》

《……何の噂か、聞きてえ所だな》

トウヤの台詞に肩を竦める。

強がりではあるが、ここで飲まれる訳には行かない。

この語りかけですらも、ペースの掴み合いだと即座に悟ったのである。

トウヤはアルセイオの言葉に、微笑し続ける。

ピナカをスツと差し向けた。

《そうだね……。君がペンタ・フォース時代からの大体の経歴等も含めると膨大な数になるが。いいかね？ この場で大声で語りが入ってしまっても？》

《俺がガキの時代からじゃねえか!? いつからの噂だよ!》

《何。敬意を払うべき人の事は最低限知って置くべきだと思ってるだけだよ。——そうだね。君が世話になっていた孤児院で最後に粗相をした辺りなぞ、なかなか面白いと思うよ?》

《あー、もういい。黙っとけ》

調子が狂う……。

トウヤに自分が珍しくペースを狂わされている事をアルセイオも自覚する。

だが、それでも。

《……………》

アルセイオは握る斬界刀の柄に力を込める。

目の前に居る男に、ぐっと息を飲んだ。

どれだけふざけたように見えようと、アルセイオは一切トウヤに對して油断しない。

先の投槍だけ見ても、並の技量では無いのが分かったからだ。

ここから大上段の一撃ぶっ放して、殺れるか……? ?

《やめておきたまえ》

《! ?》

いきなりの制止に、アルセイオは硬直する。

まるで心を読んでいるかのように、トウヤは話し掛けて来たのだ。

おそらくは、こちらの筋や身体の僅かな動きから”兆し”を見切

ったのだろうか。

それも、ごくごく僅かな挙動でしか無いのだ。  
それをいともあっさりと見破られた事にアルセイオは戦慄する。

そんな彼にトウヤは微笑し。

《少し待っていてくれるかね。何、時間はあまり取らせないさ》  
《……ああ、いいぜ》

アルセイオはトウヤの言葉に、鷹揚に頷く。  
……正確には、頷かされたが正解だが。

トウヤはアルセイオの答えに礼をすると、背後を振り返る。  
そこには、未だに呆然としたシオンが居た。

アルセイオにつけられた傷も再生が終わったようであった。  
トウヤはそれを素早く確認すると。  
シオンを冷たく見据えた。

《何をしているのだね？ 邪魔だ、負け犬。……さっさと立って失  
せたまえ》  
《っ!?!》

ビクッとシオンの肩が震える。

トウヤは構わない。シオンをただ見続ける。  
シオンは悔し気に唇を噛み締め、震えた。

それを見て、トウヤはシオンへと近付く。

《立てないのかね?》

《……………》

シオンはただ無言。俯き、トウヤと視線を合わせない。  
そんなシオンに、そうかと呟く、と。

《では、立たせてあげよう》

一撃一

《か……!?!?》

いきなり、シオンの顎をトウヤが蹴り抜く!

シオンの身体が、それだけで立たされた。

二人の目線がはじめて合う。

シオンの瞳が怯えるように震える。

トウヤの目は変わらない。

ただただ、冷たくシオンを見据える。

《立てるではないか》

《あ、あ……》

トウヤの言葉に、シオンは答えられない。

何かを言おうとするが、言葉は詰まり。声にならない。

トウヤはそんなシオンに、また近付く。

《それでは説教タイムといこう。――殴られるのは当然と聞いたまえ。反論は許さん》

一撃!一

言うなり、トウヤの右拳が唸りを上げて飛ぶ！  
シオンの顔をそれは痛打し、盛大に跳ね上げた。  
トウヤは更に踏み込む。

《お前は何をしているのだね？》

一撃！一

跳ね上がった顔に逆側の拳が容赦無く叩き込まれ、そこから続く連撃。

シオンは身体ごと、左右に跳ね飛んだ。

トウヤは冷たい眼差しのままに、シオンを殴り続ける。

《今の不様さは何だね、お前は？ 相変わらずのガキめ。力に振り回されて、それを指摘されて反省のポーズかね？》

《ぐう……っ……！》

更に続けざまに叩き込まれる拳。

それにシオンは抵抗しない。ただ、殴られ続ける。

《過去の貴様が現れたらしいね？ ”その程度”で情緒不安定になるのかね、お前は。少しは成長したかと思いきや、全然なっていないね》

《……っ！？ だったら……！》

その程度。

その言葉に、シオンは反応し。はじめてトウヤを睨む。  
そんな風に言われたくは無かった。  
言わせられる筈が無かった。

だって、奴は殺したんだぞ？

俺の技で、人を。

そして、殺そうとしたんだぞ？

仲間を、大切な奴達を！

それを……！

《何で、その程度なんて言われなきゃいけない！？　なら俺はどうすればよかった、て言うんだ！？》

《知るかね、そんな事。自分で考えたまえ》

一撃！一

吠えたシオンに、今までで1番強い威力を持って拳が打ち込まれる！

シオンの身体は軽々と吹き飛び。今や無人となった次元航行艦『シュバイン』に叩きつけられた。

トウヤは、それを見て漸く拳を納める。

《……今のお前は駄々をこねて立ち上がる事を拒否してるガキに過ぎんよ。そんなお前に何かを吠える権利は無いと思いたまえ。……力に振り回された？　それがどうしたね。それが原因で負けた？　それが”今のお前の不様さと”何か関係あるのかね？　シオン。違うだろう？》

シオンは艦に大の字で横たわったまま。それを聞く。

トウヤが何を言おうとしているのか、それが分からなくて。

トウヤはフツと嘆息すると、もう用は無いとシオンに背を向ける。

《……シオン。最後にこれだけは言おう。お前が刀で起こした事件。あの後、お前は半年程。自閉症に陥ったね？ ……今のお前はその時そっくりだよ？》

《……っ》

思い出したくも無い記憶を掘り起こされ、シオンの瞳が震える。それはシオンにとって、忌まわし過ぎる記憶であったから。

トウヤは構わない。続ける。

《思い出したまえ。あの時、部屋から無理矢理タカトに引きずり出された時の事を。そして、”イクスを引き継いだ”時の事を。あの時、再び力を手にする事を決めたお前は、タカトに何と言った？》

俺、がタカ兄いに言った事……？

あの時。確かに自分はタカトにイクスを渡され。何かを言った筈だ。

あれは、確か――。

《私は、覚えているよ。だから、お前がイクスを握る事にも何も言わなかった。だから、お前が家を出て二年間放浪しても何も言わなかった》

《トウ、ヤ兄い》

《――原点に戻りたまえ。迷ったのなら、最初にまで戻ればいい。そして、1番最初の、お前の”想い”を取り戻したまえよ。……以上だ》

それだけ、それだけを言うと。トウヤはぐると、視線を巡らせる。

ある一点でその視線は止まった。  
スバルと、ノーヴェに。  
微笑する。

《済まないが、愚弟を頼むよ》  
《あ……》

その言葉にスバルは一瞬、返事を忘れた。  
ノーヴェも同じく、だ。  
トウヤは二人の返事を待たない。  
相対すべき敵。アルセイオの元に向かい、肩を竦めた。

《いや、済まないね。時間を取らせた》  
《構わねえさ。——あれで、坊主が立ち直るんならな》

アルセイオも、また笑う。  
彼だけは、トウヤの意図を正しく理解していた。  
何のかんと言っても弟の事が心配だったのだろう。  
——態度には一切出さない為。分かりにくい為。  
その為の説教であり、そして”戦闘に巻き込まない為に”殴り飛ばしたのだ。

そうでなければ、ああも吹っ飛ばす必要は無い。

……俺の周り是不器用な奴達ばかりだな。

人知れず苦笑して、そう思う。  
それには当然、自分も含められる。

斬界刀を、トウヤに差し向けた。



《んじゃ、始めるとするかい？》

《そうだね。――ああ、そこで戦ってる負け犬諸君？》

《誰が負け犬か！？》

その言葉に、今も激しい戦鬨を繰り広げていた。グノーシス・メンバー達が一斉に叫ぶ。

トウヤはそれに心外とばかりに眉を潜めた。

《負け犬は負け犬だろう？ 本局決戦で敗退したのだから。もう少し使えると思ったのだがね？ いやゝゝ。これは私の失策だった。君達がこれ程までに使え無いとは……》

《野郎……！》

トウヤの台詞に、コルトを始めとした一同が盛大に唸る。

それを見て、トウヤは婉然と微笑んだ。

《まあ、そんな事はいいのだよ。今から彼と戦うのでね？ ……せいぜい巻き込まれ無いよう注意したまえ。今回、ピナカを使うよ？》  
《げえ！？》

その言葉に、グノーシス・メンバーは一斉に悲鳴を上げる。

アルセイオは、そんな一同の反応に怪訝そうな顔となり、その意味を探る。

ピナカ、だと？

《ああ、それと貴方にも一つ、忠告だね？》

一戦！――

《っ！？》

突如、放たれた白槍がアルセイオの握る斬界刀に突き込まれる！  
その一撃は斬界刀の切っ先に撃ち込まれ。

一破！一

直後、碎けた。

”斬界刀が”！

あまりの事態に硬直するアルセイオに、トウやはくすりと笑う。  
左手に握るピナカが円を描いて翻った。

口を、開く。

《ちなみに私は、”タカトより強い”から。その積もりで居てくれ  
たまえ》

《なあ！？》

言われたく台詞に、目を見開き驚愕するアルセイオに、トウやは  
変わらぬ笑いのままに踏み込む！

対し、アルセイオは碎かれた斬界刀からダインスレイフを引きず  
り出し、頭上から一閃！

一戟！一

虚空に、神槍と魔剣がぶつかり合い。  
衝撃が周りの空間を揺るがした。



《ちい！》

一閃！一

激突したダインスレイフと、ピナカは虚空に衝撃を撒き散らし。アルセイオとトウヤはその反動で僅かに後退。

そこからアルセイオはダインスレイフを横薙ぎに一閃する！

が、トウヤは構わず前に踏み込む！

槍がぐると回転。ダインスレイフを柄部分で受け止める、と。

そこからピナカが更に回転。

石突きが、アルセイオの顔に向けて跳ね上がる！

《っお！？》

一撃！一

反射的に、生み出した剣を顔の横に作りだし。アルセイオは石突きを防御しようとして――。

それを問答無用に破壊！

石突きは何もなかったかのようにアルセイオの顔面を痛打した。

《がっ……！》

横殴りに、思いっきり殴り飛ばされ。アルセイオの身体が流れる。

口を僅かに切り、アルセイオの口から血が流れる。  
アルセイオは構わず、トウヤを睨み。

愕然とした。

アルセイオが見たのは、ピナカを更に回転しながら踏み込むトウヤ！

今度差し向けられたのはピナカの風纏う穂先！

《――捻れ穿つ螺旋》

一閃！一

放たれる一閃！

空間をその名の如く捻切りながら、ピナカが撃ち込まれる！  
アルセイオに出来たのは、身体に無尽刀のスキルを持って、鎧を作り出す事だけだった。

一轟一

挟り込まれたピナカが、鎧を容赦無く碎き。アルセイオの腹に突き込まれんとする。

が、鎧を碎いたそれが僅かにアルセイオを後退させていた。  
アルセイオはそれを利用して、瞬動を発動！

無理矢理後退する。

結果、捻れ穿つ螺旋は、虚空を削るだけに留まった。

アルセイオは、後退し続けながら唸る。

言うだけの事は、ある。

恐らく、接近戦の技量だけを取るならば。タカトと十分に互する。はつきり言って自分では勝負にならないレベルであった。

そもそも近接で、属性変化系魔法を使える時点で異常と言えるのだから。

接近戦は勝負にならない。

ならば、別の手段を取る！

《こいつなら――。どうよ！？》

そう、叫んだアルセイオの周囲に大量の剣群が形成される。

万を遥かに超える数である。一個人に放つ量では無い。

それを一斉に放たんとして。

その前に、トウヤが動いた。

ピナカを虚空に突き刺さし、そこを中心にカラバ式魔法陣が展開する！

《震えと猛る鳴山》

瞬間、魔法陣から大量の土砂がどこからともなく出て来た。

召喚したのである、土砂を。

それは、トウヤを包み込み。巨大化する。

アルセイオは、それを見てトウヤに指を差し向けた。

剣群達に、突撃を命ずる！

《――行け！》



同時、ぞくりと言う悪寒をアルセイオは覚え。  
トウヤに背中を向けて全力で後ろに下がる！

直後、それは起きた。

### 《凶り歪み果てる理想》

#### 一 軋一

割れた。

空間が、捻れ、凶り、歪み、割れ尽くす！

それは、空間に出来た裂け目であった。

裂け目は万物全てを問答無用に飲み込み尽くす。

人は、それをこう言う。

重力特異点。”ブラック・ホール”と。

アルセイオは、それを離れた位置から見て冷や汗が止まらない事を自覚する。

もし、あの場に留まっていたならば？

もう少し離脱が遅かったら？

自分は恐らく、この世にいない。

やがて。ブラック・ホールは自分から勝手に蒸発し、消え去る。  
そこから、あっさりと彼が現れた。

当の、それを放った人物。

叶トウヤが。

彼は、アルセイオを見て微笑む。

《ふむ、上手く避けたようだね？ 安心したよ》

《よく、そんな事言えるぜ……。離脱が遅れてたら死んでるぞ、俺……》

軽口に、軽口で返しながらアルセイオは跳ね上がった心臓を押さえ続けていた。

軽い興奮状態である事を自覚する。

彼に取って、強者との戦いは望む所である。

それがアルセイオに取って、一つの願望であるからだ。

気付けば、アルセイオは笑っていた。

くっくくと笑い続ける。

タカトと言い、このトウヤと言い。自分を越える相手によくよく出会うモノである。

それも全員年下と来てる。

笑いの一つも出ようと言うモノであった。

何より、アルセイオは嬉しかった。彼は自分より強い相手と戦い。そして、それを超える事に何より、楽しみを覚える。

趣味、と言っても過言では無い。

彼もまた。戦闘<sup>バトル</sup>マニア<sup>マニア</sup>の一人であった。

奴にまともに通じる技は、あと……。



恐らく、巨剣や、極剣は無意味だ。

いくら数を作ったとしても。あのブラック・ホールを生み出す技には通じまい。

ならば、後はアレすらも斬り得る剣しか無い。

斬界刀。

それしか。

だが、最初にアレはいかな方法を持つか破壊されている。

何が起きたのか、最初分らない程であった。

試して見るか……。

何をされたか、その正体を見極める。

アルセイオはそう決めると、ダインスレイフをトウヤに構えた。

—ソードメイカー・ラハブ—

—我は無尽の剣に意味を見出だせず。故にただ一振りの剣を鍛え上げる—

虚空に再び響く、二つの言葉。

同時、ダインスレイフを中心にして剣が形成されていく。

斬界刀。世界を斬り得る一刀が。

トウヤはそれを見て苦笑した。

《思いきったね……。一度破壊されたそれを持ち出すかね?》

《おうよ……！ お前さんに通じそうなのが、これしか無くてなあ！》

アルセイオもまた笑う。

トウヤは苦笑しながら、自分の体内時計を確認する。

あれから、僅かに八分。ピナカを発動させるには後、二分と言った所かね。

凶り歪み果てる理想で時間を稼いだとは言え。”最初にピナカを発動してから”まだ八分しか経っていない。

後、二分。それまで、斬界刀相手にどう戦うか。

擬似EX化は……。却下だね。

こちらの最強の切り札を晒す事は、流石に憚られた。恐らく、向こうも見ている事だろう。

この戦いを。

真性のEXとは違い、凡人だった自分が成せたモノである。再現出来るとは思え無いが、万が一の可能性は否定出来ない。ならば、こちらは却下であった。

《――行くぜ》

《来たまえ》

なら、こちらで行こうかね！

トウヤが胸中、叫び。アルセイオが斬界刀を振り上げながら、瞬動でトウヤへと一気に突っ込む！

トウヤは動かず、指を虚空に滑らせた。

その指は雷、と虚空に一文字を描く！

瞬間。アルセイオが大上段から斬界刀を振り放つ！

一斬！一

斬界刀は、その軌跡にあるモノを。世界そのものを断ち斬りながらトウヤに突き進み。

トウヤはそれに笑って見せる！

世界を斬り裂いて、一撃はトウヤへと振り落ちた。



一斬！一

空間を、次元を、万物全てを断ち斬りながら斬界刀が通り過ぎる！アルセイオは、最後まで斬界刀を振り切った。

だが、その顔は苦渋に歪む。

手応えが、ねえ……！

振り切った斬界刀に、トウヤを断ち斬った手応えがどこにも無かったのだ。

それは、つまり――。

《……いや。恐ろしい、一撃だね？ 下手をすれば、概念破壊攻撃。EXに届くよ、貴方のその技は》  
《っ——！？》

念話は、後ろから聞こえた。

アルセイオは首だけを背後へと向ける。

そこには、雷をその”身体”に纏うトウヤが居た。

アルセイオを変わらぬ笑いで見据える。

そのトウヤの様子に、アルセイオは彼がどうしてあのタイミングで斬界刀を避けたられたかを悟った。

それは、カラバ式における秘奥。

己が魂を一時的に、ある存在と融合させる事により、絶大な戦闘能力を得る方法であった。

その名を。

《精霊……融合……！？》

《誇っていいよ？ アルセイオ・ハーデン。貴方を含めて、たった三人しかいないからね。私が精霊融合を行ったのは》

バカな……！

アルセイオは、トウヤの台詞に戦慄する。

精霊融合とは、神の端末。分化し、一つ概念存在と化した精霊と融合する魔法である。

強力な能力である。何せ、シオンは一度。これを使ってアルセイオを追い込んでいる程なのだ。

だが、当然それだけの能力には相応の反動がある。

あまりに巨きな霊的存在と融合する事は、同時に自我の崩壊を招

きかね無いのだ。

故に、カラバ式において禁術とされているのである。

だが、トウヤはそれをあっさりと使ったのである。

しかも、その言葉が確かならば……！

《反動に耐え切る事が出来る、て事か……！？》

《何、さほど難しい事では無いさ。たかが、1柱の精霊。この身に宿せずして、精霊王の二つ名は名乗れぬのでね？》

一斬！一

アルセイオは、最後までトウヤの台詞を聞かない。

斬界刀を横薙ぎに振り放つ！

その一撃は、トウヤの上半身と下半身を苦もなく割かち――。

あっさりとその身体は紫電へと変わり、消えた。

《――こちらだ》

《！？ ちい！》

再び念話は背後から聞こえる。

今、斬ったのはただの残像であったか。

雷の精霊、ヴォルトとの融合で得られる特化能力は雷に等しき超速度である。

それ故に、アルセイオを持ってしてもコレに追い付くのは難しい。

斬界刀とはいえ、当たらなければ意味は無いのだ。

だが。

とは、いえ。流石だね？

アルセイオが振り放ち続ける一刀を避け続けながら、トウヤは苦笑する。

精霊融合で、斬界刀を回避出来ているが、それとて完全では無い。

余波、である。

斬界刀からの一撃が放たれる度に、空間を、次元を容赦無く斬り裂く事により。歪みが生じ、それだけで下手な攻撃より強力なモノが放たれている。

その威力は恐らくSSに届く。

ただの余波が、である。

直撃を受けた場合を想像すると、ゾツとする。

防御は実質不可能。迎撃出来る魔法も、多くは無い。

もし目が無ければ、トウヤとて迷い無く擬似EX化している。

それだけの相手なのである。

このアルセイオ・ハーデンとは。

— 斬！ —

— 裂！ —

— 閃！ —

振るう、振るう。振り放たれた続ける！

それをトウヤは辛くも回避し続ける。

一度、攻撃に転じようとしたが。その隙を逃さずアルセイオは斬界刀をトウヤに放って見せたので、トウヤは下手な攻撃を放つ事を諦めた。

現状、どの攻撃を放ったとしても、斬界刀で斬られて無効化されるのは間違い無い。

ならば、待つ。

ピナカが発動出来る、十分の時間を。

《っおお………！》

《っ………！》

一斬！一

放たれる大上段からの轟撃！

それ自体は回避したものの、余波でトウヤの腕が軽く斬られた。

トウヤの顔が若干歪み、アルセイオが笑う。

そして、その一撃はトウヤの身体をぐらつかせ。体勢を乱す！

アルセイオは凄絶な笑みのままに、斬界刀を振りかぶった。

このタイミングからの回避は不可能！ アルセイオは勝利を確信し、吠える！

《捉えたぜ………！ 叶！》

叫び、斬界刀を放つ！

それを前にして、トウヤは――。

《いや、こちらが――。間に合ったさ！》

笑った。

直後。ピナカが激烈な光を放つ！

それに、アルセイオが斬界刀を振り放ったままに目を見開いた。

これは――！？

《ピナカ。破壊神の力を受け継ぎし、神槍よ。その名を持って。力を示したまえよ！》

トウヤは構わず、迫り来る斬界刀に向かい、ピナカを構える。技は使わない。

そうでなければ、”この世界を破壊してしまうから”。

ピナカは、トウヤの叫びに応えるが如く、更に光り輝き、トウヤは微笑む。

そのまま斬界刀に向かい、ピナカを放り投げた。

《受けたまえ……！！ 神鳴る破壊<sup>ピナカ</sup>ア！》

一閃！一

トウヤより放たれたピナカ。それは迷い無く、斬界刀に真っ正面



からぶつかり。

—壊！—

次の瞬間。斬界刀を容赦無く、木っ端微塵へと変えた。

先程は斬界刀だけで済んだが、今回はそれだけで終わらない。

斬界刀の中心であったダインスレイフすらをもひび割れさせ、碎き。

更に、アルセイオの両腕すらをも巻き込む！

《ぐっ！  
！？》  
おおおおおおおおおおおおお……

アルセイオの両腕が容赦無く破壊され、裂傷が走り。骨が碎かれる！

それを尻目に、トウヤは微笑した。

告げる、己の——。

《——終わりだ、ね》

勝利を。

それは、この世界。そして長く続いた強襲戦。全ての終わりを告げていた。



《ぐっう……!》

《――終わりだよ、アルセイオ・ハーデン。その腕では、もはや戦えまい?》

唸るアルセイオに、トウヤはピナカを回収しながら笑って見せる。アルセイオはそんなトウヤを、そしてピナカを睨み据えた。

《なんなんだ……。その槍は……。斬界刀どころか、俺も含めてこの有様かよ……。》

《ふむ。その魔剣と、君が喰らったのはあくまでも余波だがね?》

笑い、ピナカをすつと差し出す。

斬界刀と、ダインスレイフ。更にはアルセイオの両腕すらをも破壊し尽くした恐るべき槍を。

《神槍、神鳴る破壊<sup>ピナカ</sup>。十分間に一度。自身の攻撃力を”無限値”へと変える槍でね? 生憎、破壊力限定ならば。これより上の武器は存在しないのだよ》

《……おいおい。無限、てよ》

トウヤはあっさりと言ったのけるが、それだけにアルセイオは言葉を失う。

攻撃力を無限とする。簡単に言うが、下手をすれば。世界をあっさりと破壊しかね無い槍であった。

《さて。これ以上の戦いに意味は無いと思うがね? 大人しく帰るたまえ》

《――そうはいかねえ。生憎、俺は諦めが悪いんでね?》

デバイスたるダインスレイフは破壊され、両腕は碎けた。

それでも、なお。アルセイオは戦闘の続行を告げる。

それを、シュバインの艦壁に横になったままのシオンは聞き、不思議に思う。

一緒に居る、スバルとノーヴェが制止するのにも構わず。上半身を起こして、アルセイオへと視線を向けた。

シオンの疑念に気付かぬまま、アルセイオはへつと笑う。

そんな彼に、トウヤは苦笑した。

《そんなナリでまだ私と戦う。敗北は確定しているのに、だ。――何故かね?》

《は……。決まってるあ。誰が負けたなんぞ認めたよ? 少なくとも俺は認めちやいねえ。いいか? 何回負かされようと、何度地に這いつくばされようとだ……。俺が負けたと認めねえ限りは負けじゃねえんだよ!》

《何回、負けようと……。?》

その台詞を、シオンは聞いた事がある。

あれは、確か――!

《何回、転んでも……。》

《シオン?》

呟くシオンに、スバルが疑問符を浮かべる。

シオンは構わない。続ける。

《何回、躓<sup>つまず</sup>いてしまっても……。》

それは、雨の日。突き立てられたイクスを前に、タカトに吠えた

言葉であつた。

そう、それは。シオンが叫んだ言葉。

—あゝあ。今回も、兄弟はこっちの道を選ぶんだな。まあ、いいけどよ—

直後、シオンの身体から甲冑が碎ける。

ハーフ・アヴェンジャー・フォームが解除されたのだ。

同時、イクスも人型に戻る。

シオンは構わない。アルセイオを見ながら呟き、両手について足を艦に着ける。

《また、立ち上がって。……歩き出す事だけは。それだけは、やめない》

そして、立ち上がった。

なんで、忘れていたのか。思わずシオンは苦笑する。

最初の、思いを。こんな、大切な事を。

まさかアルセイオの台詞で思い出す事になろうとは思わず、シオンは笑う。

それに気付いたのだろう。

アルセイオとトウヤがこちらに目を向ける。

アルセイオは驚いたように、こちらを見て。

トウヤは逆に、してやったりの笑いを浮かべた。

シオンも苦笑する。あの兄はどこまで計算して動いていたのかと。アルセイオの言葉ですらも、彼が引き出したモノなのだから。

少しだけ、静寂がシオン達とアルセイオ達に流れ。

突如。いきなり、アルセイオの足元に魔法陣が展開した。

いや、アルセイオだけでは無い。

グノーシス・メンバーと戦いを繰り広げる新型DAを着込んだ魔導士部隊にもそれは広がる。

そして、再び声が落ちた。

先と同じ、ベナレスの声が。

《撤収せよ。アル》

《ああ！？ またお前……！ 勝手過ぎんだろ！ 俺はまだ……！》

《現状、叶トウヤに勝てる見込みは無い。そやつが来た時点で本来、撤収を命じる積もりだった。ここまで、待ったのはお前への義理だと思え》

《ちっ……！》

よく見れば、アルセイオの艦も次元航行を開始している。

恐らくは強制的だろう。

それに、アルセイオは盛大にため息を吐き、トウヤをじろりと見る。

《――叶。今度は俺が勝つぜ？》

《まあ、私に勝つより先に、タカトに勝ちたまえよ。一応、あいつの方が先約だろう？》

ああ、そうな。とアルセイオは呟く。

次に、シオンを見据える。

シオンも、もう瞳を逸らさない。

真っ直ぐに視線がぶつかり合い、アルセイオは笑った。

《——いい、答えを聞いたぜ？　またな。坊主。次は、容赦しねえぜ？》

《ああ、俺もだ。おっちゃん》

負け惜しみしかない筈の、シオンの答え。

だが、それにアルセイオは満足そうに笑う。

次の瞬間、足元の転移魔法陣が一際強い光を放つ！

《じゃあな！》

直後、アルセイオを始めとしたその場にある、ストラに連なるモノ。全てが消えた。

最初から無かったように。

トウヤはそれに肩を竦め、笑う。

グノーシス・メンバーや、シグナム、ヴィータもホッと安堵の息を吐いていた。

そして。

《っと。トウヤさん！》

《ふむ、八神君かね？　久しぶりと言う程、間は開いてないが無事で何よりだ》

ウインドウが、トウヤの眼前にいきなり展開。

はやての顔が映る。

《あゝ。めっちゃ聞きたい事とかあるんやけど。とりあえず、ありがとうございます》

《何、構わんさ。それより、八神君。今から地球に来たまえ。その

様子だと、怪我人も山と居るのだろう?」  
《え! いや。でも、それはなく……》

トウヤの言葉に、はやては言葉を濁す。  
だが、肝心のトウヤは見透かしてるとばかりに笑って見せた。

《君が懸念している事は、もはや無意味だ。八神君。地球は既に狙われている。――寧ろ、こちらに来て貰った方が何かと助かるよ。  
……それに、迷い人を一人預かってるのでね?》  
《へ? それって――》

迷い人?

それに、はやては目を白黒させる。  
一応、アースラには行方不明者は一人しか居ない。  
だが、彼女は――。

《ウチの愚弟1号と共に地球に来たようだね? 怪我もしていたし、  
こちらで治療中なのだね》  
《やっぱり! なのはちゃん!?!》  
《――なのはが!?!》

はやてが叫ぶと同時に、ウィンドウがもう一つ展開する。  
フェイトである。

それに苦笑しながらトウヤは頷き。直後、ウィンドウの向こうで  
爆発したが如く歓喜の声が響いた。  
それを聞きながら、トウヤは下に向かい。降りる。  
そこには、愚弟2号。シオンが居た。  
トウヤを見て、バツが悪そうな顔をする。

《その、トウヤ兄い。ごめん》

《構わんさ。弟共の面倒は1番上の兄が見るものだよ。――それより、シオン。先にも言った。過去のお前のクローン体の事だが?》

トウヤの問いに、シオンは僅かに顔をしかめる。  
が、すぐに気を取り戻す。

《……俺の肉体と魂を複製した存在、てあいつは言ってた。だから、あいつは過去の俺と同じ存在で――》  
《有り得んのだがね。そんな事は》

は? と、いきなりトウヤが告げた言葉に、シオンが疑問符を浮かべる。

トウヤはそれに笑って見せた。

《その言い分には、ある致命的な欠点がある。見落としても言うがね。これは魂学の欠陥とも言える事だが――。まあ、詳しくは向こうに着いて話そうか》  
《あ、うん》

トウヤの言葉に、シオンは素直に頷く。

かくして、アースラは地球に向かう事になり。  
それは、短く一時ではあるものの。  
平穏が漸く彼等にも訪れる事を意味していた。

(第三十六話に続く)



◆◆◆◆◆  
ドンドンドンドン♪ ぱふぱふ♪

ア

「はい♪ 皆さん。超、お久しぶり♪ 二ヶ月ぶりのアリサ道場♪  
♪」

す

「ほんと、お久しぶりだね♪」

.....

テヘ♪

ア

「テヘ♪ じゃねえわよー！ー！！ くら、作者！ 二ヶ月ぶり、  
てどう言う事よ！？」

す

「アリサちゃん。落ち着いて！」

タ i n な

「我が主。抹茶をたてました。どうか、これを飲んで落ち着いて下  
さい」

ア

「え？ あれ？ なんで、なのは？」

タ i n な

「気にせず。ぐぐいっと。礼儀は気にせずに」  
ア

「え、あ、うん」

タ i n な

「すずか殿も、どうぞ」

す

「うん。いただくね？」

ズズズー。

ア

「ふう。日本人はやっぱりお茶ね〜」

す

「アリサちゃん。一応、外国人じゃなかったけ？」

ア

「いいのよ。心は日本人だから。……で、なのはの姿だけど。――タカト？」

タ i n な

「はい。我が主」

ア

「う……。なのはでその口調は似合わないわね。……で？ 何でそんな事になってんのよ？」

タ i n な

「海鳴、温泉で……」

ア

「あ〜。もういいわ。それだけで全部わかったから」

「チェーーーーーインジ。だよね♪」

ア

「弟子1号。それはいろいろ危険よ。……そう言えば、しーちゃんと、レンと、未来は？ 何処に行ったの」

レ

「……俺はここに居るぞ」

ア

「あら、レン。あんたもここまで来たら、メイド服でも着てるかと

思っただけど？」

レ

「着ないから。魂込めて拒絶するから。……んで、タカトは」

タinな

「む？」

レ

「いや、もういい。色んな意味で今のお前は見てられん。で、しーちゃんは？」

タinな

「その前に今回のゲストを。来てもいいぞ。二人共」

隆

「……なのはの口調で言われると、すごい違和感あるんだけど？めっちゃあるんだけど！ ども〜♪ なのはSS・freedomから主人公のおいらはチートじゃないやい！ 阿部隆浩ですぜ！」

晶

「兄ちゃんがチートじゃなきゃ、誰がチートなのさ。ども♪ 弟の阿部晶彦です♪」

ア

「お〜。初登場ね♪ しょっちゅう感想欄では見てるけど♪」

隆

「ぐさっ！ 痛い所つくなよお前！ おいらの繊細な硝子のハートが砕けたらどうするつもりだよ！？」

タinな、レ

「「繊細……？」」

晶

「兄ちゃんは繊細なんかじゃないよ。心臓に毛が生えてるタイプだよ。しかも、超剛毛。僕のような弱いタイプならそれも当て嵌まるけど」

ア、す

「「か弱い……?」」

隆

「なんだと!?!」

晶

「なんだよ!」

?

「待ちたまえ……」

タン、タン、タン。タララタラタラ~~~~♪ タララタラタララ~~~~♪  
タタタタ~~~~♪ (クロノ○の逆襲、ロ○の登場テーマソン  
グ)

?

「兄と弟。時に喧嘩し……。と、言うより喧嘩してばかりのような  
気もしないでもないがね。……が、時に力を合わせて困難に立ち向  
かう。人、それを。兄弟愛と言う……」

隆

「な、この登場シーンは……!?!」

晶

「伝説のあの”兄さん”の登場シーン……!?!? これは、あれを言  
わなきゃね! 兄ちゃん!」

隆

「おう! ——な、なにい! 貴様、一体何者だ!?!」

?

「——貴様達に名乗る名前は、無い!」

シャキーン!

?

「トウ!」

説明しよう！

タ i n な

「いらん。長い」

— 煌！ —

？

「ぐっはああああ！？」

隆

「ああ！？」

晶

「〇ム兄さんが！？　なのはさんな、タカトさん！　貴方は何を…  
…！」

タ i n な

「……タカトでいい。と、言うより兄者。何をしてる？」

ト

「くっ……！　あっさりネタバレしたね……！」

レ

「いや、何やってんだ。お前は……？」

ト

「いや、アリサ道場は何かのネタ登場はしなければHMPとやらが  
増えると言う噂を聞いてね？」

レ

「は？　そんなの初耳——」

ア

「フフ……」

レ

「アリサあああああああああつ！？　またか！？　またお前、

勝手なルール作りやがったな!？」

ア

「私ルールを道場内で勝手に更新する。これが、アリサ・クオリティ……」

レ

「最近クオリティ流行り過ぎだな!？」

隆

「くっ……! このおいらが二人のボケとツツコミの間に入れないだど……!」

晶

「これがレギュラーメンバーとの差なんだね! 兄ちゃん!」

レ

「うるせえよ! お前達は!? ああゝゝ、で? しーちゃんと未来はどこ行った?」

tainな

「ふむ、現在。LVに居ましてな。……しーちゃんの状態で精神的に5歳ぐらいになった状態で」

レ

「おま、それ……」

隆

「ひ、悲惨な……」

晶

「そっかな?」

ト

「まあ、君じゃあね?」

す

「ちなみに未来君には、LVに潜入。しーちゃんの様子を撮影してるよ♪」

レ

「み、未来……」

ア

「じゃあ、ウインドウに出すわよ♪ 未来〜♪」

ヴン

未

《はい。こちら未来》

レ

「お、出たな。未来、久しぶり。で、しーちゃんの様子はどうか？」

未

《……ええ。まあ、これどうぞ》

直後、映像が移り。LVの前書きに変わる。  
そこに映ったものとは……！

ヴ

《しーちゃん。ママだよ〜♪ ほら、こっちおいで〜♪》

しー

《……うん》

トテトテ、ポス。

カ

《あ、相棒……！》

ヴ

《どうしたのかな？ しーちゃん。ママの所に隠れちゃって？》

しー

《……向こうが、怖かったの……》

ヴ

《そっかぁ〜。大丈夫だよ。ママが着いてるからね〜♪》  
しー

《……うん……》

祐

《ふむ♪》

カ

《……つかぬ事を聞きますが、祐希奈さん？ そのカメラで何を？》

祐

《記念撮影♪》

カ

《……そうな。そう来ると思ったよ……》

祐

《次はアンタだから♪ 準備しときなさい♪》

カ

《ああ、……嫌だよ！？ 思わず頷きかけたわ！？ 何、唐突にそんな事言っちゃてんの！？》

祐

《感想欄で♪》

カ

《具体的だなオイ！？ くっ！ すぐに逃げー！》

カメ

《振り向けば〜♪ いつもそこにカナメちゃん♪》

奈

《ア〜〜ンド♪ 奈津美ちゃん♪》

カ

《な！？》

祐

《二人共、カナンよろしくね♪》

カメ、奈



《《お任せ~~~~♪》》

カ

《ぎゃあああああ……！ 待ってエエエエエエエエエエ！  
お~~~~た~~~~す~~~~け~~~~！》

祐

《あは♪ さて、後はもう一人♪ ね、その未来♪》

未

《な!?!》

祐

《のぞみ~~~~♪ カコ~~~~♪》

の

《ふふ♪ 未来逃がさないわよ~~~~♪》

カ

《ゴメンね？ お兄ちゃん……。でも、どうしても見たくって……  
!》

未

《ぎゃあ~~~~す!? こ、これ以上は撮影を続けられません!  
てか、メーデー! メーデー! た~~~~す~~~~け~~~~て~~~~!》

ズルズルズルズルズル!

パタン♪

祐

《ふふ♪ アリサ。未来、こっち寄越してくれてありがとね♪ じ  
ゃ♪》

ぶつん!

.....

ア

「ま、未来の事は忘れましょう♪」

一同

『鬼!?!』

す

「今さらだね♪」

タ i n な

「さて、では今回のおさらいというこう。阿部隆浩?」

隆

「ふ、決まってる……! 変態兄貴の真骨頂を見よ! だ!」

ト

「ふ、照れるね♪」

レ

「褒めてねえだろ……」

隆

「何を言ってる! 最上級の賛辞だぜ!」

レ

「え~~~~!?!」

タ i n な

「ならば阿部晶彦?」

晶

「決まってます! 同じ弟キャラから! しーちゃんのバカアアア

ア! です!」

ア

「よし♪」

レ

「な!?! いいのか今ので!?!」

す

「一応、一言だし♪」

レ

「すっげー理不尽……」

タ i n な

「さて、今回はここまで。久しぶりだからアリサ道場文字数が爆発したが。一つ告知を。兄者？」

ト

「うむ。実はこの間、

200000PVを無事越えてね？ いやあ、作者も気付かぬ内にエライ事になったとびびったそうだよ？」

一同

「適当だなオイ！」

ト

「で、だね。今回、クイズ第二段を行おうと思う。クイズに正解すると、あるオリキャラの投稿権を得られるよ。」

そのオリキャラは、

『神覇ノ太刀』

『聖鳳拳技』

と、同じく四つの単一固有技能を持つ流派のオリキャラだそうだよ。条件は。

一つ、

『光』の槍技。『天』の弓技を使い。名前の性の部分に、それぞれ光と天の文字が入っている事。

二つ、

あくまで常識内の戦闘力をしている事。

三つ、

単一固有技能をそれぞれ持って行ける事。

以上だ。

そして、気になるクイズの内容と行こうかね！

今回のクイズは。私が言った台詞。

『魂学における致命的な欠陥、とはいかな事か?』

だよ!

ヒントは。

1。魂は普通、複製は不可能だと言う事。それは、何故か?

これが、最大のヒントさ!

わからない場合は、感想で出来るだけヒントと質問に答えよう……!

では、頑張ってくれたまえ!

ア

「これは、また……!」

す

「む、難しいね……!」

隆

「ふ……」

レ

「な!? お前もう解けたのか!?」

隆

「いや、全然」

ズル

レ

「じゃあ、今の態度は何だよ……」

タ i n な

「さて、では。今回はこんな所で。T O U D A さん。阿部隆浩と阿部晶彦の両名の召喚ありがとう。ある意味平和に終わったが、阿部兄弟のパワーに押されっぱなしだったそうだ」

ア

「そして、読者の皆さん♪ いつも読んでくれてありがとう♪ これからもよろしくね♪」

す

「ではでは♪ 皆さん♪」

一同

『また次回〜♪』

ト

「タカト。『なの♪』と、言ってみてくれるかね？」

タ i n な

「何故に？」

ト

「ファンが喜ぶからだよ♪」

タ i n な

「むう、ならば。な、なの♪」

ト

「違う！ 羞恥心を捨てたまえ！ そんな事では立派な、なのは君にはなれないよ！？」

タ i n な

「いや、最初っからなる気は無いのだが……。む、難しいな……」

ト

「さあ、もう一度！ さんはい！」

タ i n な

「な、なの♪」

ト

「ふむ、萌え……」

タ i n な

「――殴っていいな？ 兄者。いや、殴ると決めた……！」

ト

「ではでは！ 皆様！ ばっはは〜いつ！」

タ i n な

「逃がすかあああああああああああ！」

幕



**第四十五話「舞い降りる王」**（後編）（後書き）

「遂に終わる襲撃戦」

「様々な謎と、傷を残しアースラは地球に向かう」

「そこで彼女と再開する」

「そして、トウヤから告げられる真実へとヒントと、新たな力」

「それは、大き過ぎる力であり。示させたソレに彼女達は迷う」

「そんな中、シオンは二年ぶりに実家に帰る」

「そこで待つものは」

「次回、第三十六話

『帰郷』」

「母。その存在は、あまりにも懐かしくて、ただただ懐かしくて。  
少年の痛みをひたむきに包み込む」

第四十六話「帰郷」(前編)(前書き)

「前来た時は、近寄る事もしなかった」

「タカ兄いを追ってて、それ所じゃ無かったと言う事もある」

「……でも、本当は無意識的に俺は避けていたんだ」

「家を、俺が十五年間暮らした家に近付く事を」

「だって、合わせる顔が無い」

「二年間、俺は何も言わずに家を出ていたから」

「心配させてる。怒らせてる……」

「そして、きっと悲しんでる」

「そんな、母さんの顔を。見たくなくて」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まります」



## 第四十六話「帰郷」(前編)

一十年前一

無限に広がる幻想世界。遍く広がるユウオ・A・アタナシアが歌い、作り上げた世界に、震えが走った。

世界が軋む、軋み尽くして行く。

その中で、二人の少年は互いの”力”をぶつけ合う！

剣と槍を。

「「おおおおおおおおおおおおおおあああああああッ！  
」」

一撃！一

一裂！一

一閃！一

一破！一

一滅！一

互いがぶつかり合う度に、互いを傷付け、殺し、滅ぼして行く！

……それでも、二人は死なない。  
否、”死ねない”のだ。

”EXに達した存在”は肉体のダメージでは死ぬ事は無い。

数億回の殺し合いを重ねて、槍を振るう少年は剣を翳す少年に叫ぶ。

「タカトオ！ もう、止まりたまえ！」

「断るッ！」

一撃！一

槍と剣。

ピナカと、イクス・カリバーンが再びの激突！

その度に、世界が壊れんばかりに軋み尽くす！

二人の少年は――。

叶トウヤと伊織タカトの異母兄弟は、真っ正面から睨み合い。至近で吠え叫ぶ。

「アサギさんが……。俺達の母さんを、あいつらは……。あいつらは、あんな、あんな目に合わせたんだぞ！？ それを許せとでも言うのか！ トウヤ兄さん！」

一閃！一

「そうは言っていない！ だが、命令を下した長老部。エウロペアの十賢者は、お前が殺した。――魂ごと、殺し尽くした！ 転生すらをも叶わぬように！ なら、それでいいでは無いかね！？」

一裂！一

互いの言葉に乗せながら、互いに取って必殺の一撃が叩き込まれ続けていく！

その度に、二人は幾度も死に。しかし、即座に再生する。

互いに殺し、殺された回数。三億四千八百二十九万六千二百二十五回！

それでも足りないと、互いの槍が、剣が。互いを殺していく。

「だから、滅ぼすと言うのかね！？　グノーシスを……！　世界を！？」

「そうだ……！」  
「ッ……！　この――！」

一撃！一

タカトの答えに、トウヤは怒りをあらわにし。

ピナカをぐるりと回す。

それで、タカトは後退させられた。

トウヤは、その隙を逃さ無い。

直後、ピナカが激烈な光を放った。

「大馬鹿者があああああああああああああああああああつ  
……！」

叫びながら、ピナカをタカトに向かい轟速で投げる！

タカトはそれを、カリバーンで迎撃せんと上段からの一撃で叩き落とし――。

―壊！―

―爆！―

瞬間、ピナカを中心に極大の爆発が巻き起こる！

タカトは、それに悲鳴すらも上げられず飲み込まれた。

十分に一度、攻撃力を無限値へと変換する。

それがピナカ的能力であり、この爆発も、莫大なエネルギー量により引き起きた現象であった。

トウやは、それらを見ながら、タカトに向かい叫ぶ。

何より、タカトを救う為に！

「それで……！ そんな事をして誰が喜ぶ！？ アサギさんかね！？  
ルシアかね！？ シオンがかね！？ 違うだろう！ 誰も喜んだりはしない！ こんな事をして、何も得られたりはしない！  
目を醒ましたまえよ！ お前は、何の為に戦って来た！ ここまで来られた！？ 答えたまえよ！」

「――だったら……」

爆発が漸く止む、その中心点で消滅したタカトは時が巻き戻すように再生していく。

だが、トウヤへと話しかけるその言葉は、どこまでも悲哀に染まっていた。

「だったら、この憎しみをどこに持っていけばいい……？ 悲しみを誰にぶつければいい……！？ トウヤ兄さん。答えてくれ。俺は、

アサギさんを、母さんを守れ無かった俺は、何をすれば、いい……？」

「知るかね、そんな事」

タカトの独白。

だが、トウヤはそれを即座に切って捨てた。

その言葉に、タカトはまるで泣きだしそうな子供のような瞳をトウヤに向ける。

彼は、そんな異母弟に微笑んだ。

「お前の痛みも、憎しみも、悲しみも、全部お前のものだよ。まとめて全部お前が抱えたまえ。——それが辛いと言うなら、耐えられないと言うなら、私も背負おう。分かち合おう。少しは、私に荷を預けたまえよ。私は、お前の兄だよ？」

「ト、ウヤ兄さん……」

タカトは呆けたように、トウヤを見続ける。  
それに、トウヤはただ微笑み続ける。

「いいから、もう止まりたまえ。——皆が、お前を待ってる」  
「お、れは、おれは……！ 俺は！」

それでもと、タカトは顔を歪めながら叫ぶ。

カリバーンを握る指に力が籠った。

まだ、戦いは終わらない。

それを悟り、トウヤはピナカを構えて。

—ドクン—

空間を揺るがすような音と共に、まるで心臓の鼓動のような音が響いた。

その音に、トウヤが怪訝そうに眉を潜める。

この、音は……？

「あ……」

「？ タカト？」

対峙するタカトが目を見開き、呆然としながら声を出す。

その瞳は、身体は、まるで響いた音を恐れるかのように震えていた。

尋常な様子では無い。

トウヤは嫌な予感を覚え、タカトに近付く。

震え続ける異母弟は、攻撃も何もしない。

トウヤに触れられても、分からないようにただ震える。

「タカト……？ どうしたね！ タカト！？」

【……遅かった……】

「イクス……！？」

今の今まで、黙っていた――。否、黙らされていたイクスの声が響いた。

遅かったと言う、その言葉の意味をトウヤは問い質そうとして。

一破！一

タカトから。正確には、タカトの内から何かが弾けるような音が

郷音く！

同時、タカトが目を大きく見開いて悲鳴を上げた。

「あああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああああ  
ああ……！」 あ、

「ツ……！？　タカト！？」

悲鳴を上げたタカトの肩を思わず抱き、トウヤが叫ぶ。

だが、悲鳴を上げ終えたタカトは、焦点の合わない瞳でただ呆然と虚空を見ていた。

呼び掛けにも答え無いタカトに、トウヤは寒気を覚えた。

【リンカー・コア、破損。……同時に魂の損傷を、確認した……。つ  
「……なんだね、それは……。イクス！ タカトに何が起きた!？」

イクスから響く声に、トウヤは必死の形相で問う。

イクスは、それに認めたくないとばかりにしばし無言。

だが、  
ゆつくりと語り始めた。

【EXは無限の霊子エネルギーを瞬間的、かつ永続的に発生させられる。……だが、EXはあくまでもヒトでしか無い。個人で、そんなエネルギーを発生させたら、そのエネルギーを生み出している魂が持たない……】

「……待ちたまえ……」

何を、イクスは言おうとしている……？

トウヤは思わず、イクスに制止をかける。  
だが、イクスは構わない。  
続ける。

【……タカトは長時間EX化し過ぎたんだ。……魂が持つ筈が、無い。……タカトは、”傷”を負ってしまった……】

傷。

その、あまりにも生々しい響きにトウヤは固まる。  
目を見開いたまま、未だに呆然とし続けるタカトに視線を戻した。

タカトが、ゆっくりと口を開く。

「ト、ウヤ、兄さん……？ 俺は、何の為に戦っていたんだっけ……？  
分からないんだ。なんで、俺は……」  
「タ、カ、ト……？」

さっきまでの叫びが嘘のようなタカトの言葉。  
そこにあるのは、ただただ虚<sup>うつろ</sup>。

トウヤがタカトの肩を抱いたまま名を呼ぶ。  
それにすら、タカトの反応は鈍い。

イクスが最後の言葉を紡いだ。

【トウヤ、タカトは……。何の感情かは分からない。だが、タカトは、いずれかの”感情”を】

喪失<sup>うしな</sup>った。

イクスの言葉を聞き、トウヤの顔が歪む。





オオオオオオオオオオオオオオオオ………ツツ！！」

無限なる幻想世界に響く悲痛なる叫び。  
弟を救えなかった兄の咆哮が木霊する。

こうして後に。

『グノーシス事件』と呼ばれる事件は、最悪の終わりを迎えた。

救いが、何処にも無い。

ただただ無情な、結末を。

そして、全ては五年後の事件に続く。

『天使事件』へと。



第97管理外世界。

その宇宙空間に、穴が開いた。

次元航行艦による、次元穴である。

穴からは、半壊した次元航行艦が出て来る。

アースラである。

ツアラ・トゥ・ストラの追撃を振り切った艦は、漸くこの世界に  
来られたのである。

アースラの真下には、青い惑星が広がっていた。

地球である。

久しぶりに見た故郷である星をブリッジから眺めて。アースラ艦長である八神はやては、漸くホツとしたように息を吐いた。

「第97管理外世界、地球に次元航行完了しました」

「うん、了解や。……で、トウヤさん。このまま地球に降下すればええんかな？」

管制官、シャーリーからの報告に頷き、はやてはブリッジに立つ叶トウヤを見る。

彼は、はやての問いにフフンと笑った。

「いや、地球には降りないよ。フィニーノ君、悪いが、これから言う座標に艦を向けるように、リリエ君に言ってくれるかね？」

「了解です。ルキノ？ 行ける？」

《はい。大丈夫です》

トウヤの依頼に、シャーリーとルキノが短いやり取りを交わす。それを聞きながら、はやては疑問符を浮かべた。脇に立つグリフィスや、フェイトも同様である。地球に降りないで、何処に向かうと言うのか。

「え、とやな。トウヤさん、何処に行くんや？」

「ふっふっふ。見たら驚くよ？ だが……、そうだね。シオン？」

ニンマリと笑いながら、トウヤはブリッジの隅に視線を送る。そこには――。

「ごめんなさいごめんなさい、生まれて来てごめんなさいごめんなさい」

体育座りで、やたらと病んだ台詞をぶつぶつと呟く少年が居た。  
神庭シオンである。

トウヤの言葉も聞こえていないのか、ぶつぶつと呟き続ける、その姿は。かなり、怖いモノがあった。

トウヤはそれを見て、フウと嘆息する。

「やれやれ、『シオンの恥ずかしい秘密』改”、500選。紙芝居♪を晒された程度で、そんな有様とは。……修業が足りんね？」  
「て、やかましいわ!？」

トウヤのあんまりな台詞に、いろんな意味で見てもダメな状態に陥っていたシオンが瞬間で復帰する。

即座にツツコミを放ちつつ。涙をダラー、と流した。

「もう、毎度毎度毎度毎度……! 本人も忘れてたような事をなんで事細かに覚えやがるのさ……!」

「はっはっは。私に不可能は無い」

「才野の無駄使いだよキツパリと!」

朗らかに笑うトウヤに、シオンは本気で泣きが入る。

つい、先程。強襲戦にて、あまりにヘタレだったシオンに対して、もはや伝説となった罰。

『恥ずかしい話し大暴露、Part 2♪』が行われた訳である。

……およそ、3時間に渡って。

シオンも泣きも入ろうと言うものであった。

先程の、真面目なカッコイイ異母兄はどこに行ったのかとホロリ

と泣きつつ、シオンは立ち上がる。

そして、散々精神的にいたぶってくれたトウヤを睨む。

「んで？ 何さ？」

「うむ！ ユウオのヒップラインだが……。どの角度が、1番美しいと思うかね？」

「それは……。て、ち・が・う・だ・ろ！？ 何さらりと下手したら致死必死な質問してんだよ！？ さっきの話の流れと全然違うじゃんか！」

ガーンと、吠えるシオンに、トウヤはハッハッハと再度笑う。

こ、この兄貴は……！

本当……に、先程おっちゃんを退け、自分を立ち直らせた兄なのかと疑いたくなる。

だが、これもトウヤなのである。

彼は、ユウオと出会うまでルシアを含めた妹弟をからかう事を生き甲斐にしていた。

……当の弟として見れば厄介過ぎる性格であるが。

再度の嘆息。もう一度尋ねる。

「ん・で！？ な・に・を聞こうとしたのさ！？」

「うむ。胸のサイズだが――」

「な・に・を・聞・こ・う・と・し・た・の・さ・ッ！？ ……次はユウオ姉さんにチクるよ？」

流石にその名には弱いのか、トウヤは肩を竦める。

そして、漸く本題に入った。

「これから向かう所を八神君達は聞きたいようですね？ 教しえてやってくれたまえ」

「へ？ いや、俺も知らんけど？」

その台詞に、キョトンとシオンが答える。

トウヤは、シオンの答えに盛大に嘆息した。

「やれやれ。お前が居た時はまだ完成してはいなかったが、計画は知っていただろうに」

「てゝゝと、……”アレ”完成したの？」

漸くピンと来たのか、シオンが頭に電球のマークでも浮かべそうな表情で答える。

トウヤは、それに漸く頷いた。

「つい、この間ね」

「へゝゝ。たった四年でよく……」

「で？ 結局。向かう所は何処なんかな？」

兄弟の会話に、はやてが割り込む形で尋ねる。

それに、二人は笑った。

シオンがトウヤに代わり、答える。

「今は、多分グノース本部になってるのかな……？ 月です」

絶えず、地球の傍に寄り添う衛星の名をシオンは口にする。

グノース本部、モント・ナハト月夜。

それこそが、アースラが向かう場所の名であった。



月の公転に合わせるようにして。アースラは軌道を描き、月に降下して行く。

その降下した先には巨大なクレーターがあった。

ガレ。

月にあるクレーターの中でも一際有名なクレーターである。

その由緒正しいクレーターを見て、地球出身のはやて。そして中学時代まで地球に居たフェイトが愕然とする。

教科書にも載っている程、有名なクレーター。

その円の中部分が、”無くなっている”。

……正確には、何やら隔壁のようなモノがその部分を覆っていたのだ。

啞然とする二人に、トウヤが自慢気に笑う。

「ふ……。どうだね？ 驚いただろう？」

「……いや、トウヤ兄い。多分、先生達は全然、別の理由で驚いてると思うよ？」

自慢気な兄に、横でぼそりとシオンがツツコミを入れる。

だが、これはまだ序盤であった。

……驚くのは、これからである。

「さてと、フィニーノ君。回線を開いてくれるかね？ 今は自閉モ

ードだが私のアクセス・コードで念話回線が開く筈だ」

「は、はい」

クレーターを見ていたシャーリーが、トウヤの声に慌てて頷き。  
言われた通りに通信回線を開く。

数秒の沈黙の後、向こう側から声が来た。

《こちら、グノーシス本部。『月夜』です。……トウヤ、戻って来たの？》

「ユウオかね？ うむ。それで、アースラを月夜に入港させたいのでね。ゲートを出してくれるかね？」

《うん、了解。後、ナノ・リアクターの準備は要る？ 女の子用は1台埋まってるから、そっちは2台しか使えないけど》

「そちらも全機、稼動状態で頼むよ」

《了解》

ユウオの返答を契機にして、クレーターに収まっていた隔壁と思しきモノがゆっくりと横に開いて行く。

そこで変化は終わらない。

ぽっかりと開いたクレーターから、ドーム状の建造物がせり出て来た。

アースラが小さく見える程、冗談のように大きなドームである。

この、“変形”に。

はやてとフェイトは呆然を通り越し。既に笑っていた。

世に、それを現実当否と言う。

無理も無い、とシオンは地球出身者として二人に同情めいた感情を覚えながら苦笑した。

多分、自分も知らなければ同じような反応をした公算が高い。

……自分の横で、スバルが少年の如く目を輝かせているが、あえ



て見て無いフリをした。

……うん、気のせい。気のせい。ティアナが横で、ため息吐いてるけど気のせいだって。

そう、シオンが色んなモノから目を逸らしていると、トウヤの自慢そうな声が響いた。

「これが、月夜だよ。今地表に出ているのが、エレベーター形式の”ゲート部分”だね。月夜本体は地下にある。完全稼動時は地下の本体にゲート部分も隔壁に格納されて、外部からのアクセスをシャットアウトする仕様となっているのだよ」

『はぁ……』

そんな、秘密基地を自慢するみたいに言われても……。

全員（スバルと、シャーリー除く）揃って生返事する中、ゲートの一部が上に開いて行く。

そこに入れと言う意味だろう。

ルキノがアースラを前に進める。

やがて、アースラは完全にゲートの中に入港した。

アーム部分がアースラに伸び、係留する。

それを眺めながらトウヤは一同に振り返り、一礼した。

「アースラの諸君。グノーシスへようこそ。心から歓迎するよ?」

かくして、アースラは漸くグノーシスに到着。

その羽を休める事になった。



グノーシス本部、月夜。

そのゲート部分も出鱈目に大きかったが、本体はそれが可愛く見える程に、更に大きかった。

断言出来る、地図が無ければ100%迷う。

何せ、”月の中身”がそのまま月夜の本体であったのだから。

その大きさ、押して知るべし。であった。

そこを、トウヤの案内で一同は進む。

ちなみに、グノーシス・メンバー&シグナム、ヴィータはストレスチャーに乗せられ。殆ど強制的に医務室に連れて行かれた。

先の強襲戦を鑑みるまでも無く、重傷人ばかりである。

……本人達が嫌がろうと、無理矢理連れて行かれるのは至極当然と言えた。

「さて、まずは高町君の所へ。と行きたい所だが……。現在、彼女はナノ・リアクターで治療中だね？ 悪いが面会は出来ない」

「そう、ですか……」

トウヤの言葉に、フェイトが残念そうに、しゅんとなる。

余程、会いたかったのだろう。

はやてもその肩を叩いて苦笑するが、表情に少しばかり影が射していた。

そんな彼女達に、トウヤは微笑する。

「まあ、ある程度。治療はしてあったしね。後、1〰〰2時間程で完治して目を覚めます。それまで待てるかね？」

「「……はい」」

二人は揃って返事をする。

それを満足そうに受けて、トウヤは前へと再び歩き出した。  
やがて、ある部屋の前に辿り着く。

扉には、ブリーフィング・ルームと書かれてあった。

「さて、入りたまえ。今後と、……そして先程の話しをしよう」  
「……………」

シオンは、それに無言。

しかし、脳裏には先程刃を交えた存在。紫苑を思い出していた。

「シオン……………」

「と、悪い。ボーて、してたわ」

後ろからスバルの心配そうな声を聞き、我に帰る。

振り向き、やはりこちらを心配そうに見るスバルに苦笑して見せ。

シオンは中に入り、席に座る。

それに続き、はやて、フェイト、クロノ、スバル、ティアナ、エ  
リオ、キャロ、ギンガ、チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウエンディ  
の前線メンバーが席に座り。

最後にそれらを確認して、トウヤが席に着いた。

「さて、まずは——」

「トウヤ兄い」

話し出すトウヤに間髪入れずにシオンが名を呼ぶ。

言外に問うシオンの態度に、トウヤは苦笑した。

「分かってるよ。まずは先程の事、だね？」

「うん。”あいつ”、紫苑の事について。何か知ってるの？」

「いや、何も知らんさ。――落ち着きたまえ。まずは、情報を整理しよう。彼が言っていたプロジェクトFとやらの事だが。それは、”プロジェクトF A T E”の事でいいのかね？」

『ッ……！？』

トウヤの台詞に、一同が……。特に、フェイトとエリオが凍りつく。

それを見遣り、トウヤは一人頷いた。

「記憶転写クローニング技術。……成る程、その様子だと合っているようだね……」

「……何故、貴方がそれを……？」

フェイトが息を飲み、トウヤに問う。

彼はそれに、一つの苦笑を返した。

「何。こちらにも、同じような技術があってね。……先の名前はこちらのモノなんだが。偶然とは恐ろしいモノだね？」

本当に偶然か……？

一同はそう思うものの、トウヤは顔色一つ変えない。

疑問には思うものの、問いただせる筈も無かった。

何より、これは主題では無い。

「……俺からも、一つ。あいつは、俺の。……五年前の、”俺の刀術”を使って見せやがった……」

今度はシオンが挙手して紫苑の事を話す。

それにトウヤの眉がピクリと動いた。  
恐らく、俺の刀術の部分が引っ掛かったのだろう。  
だが、事はそれだけでは無い。

「それに、あいつ。零落零無を、神覇ノ太刀の単一固有技能を使っ  
て見せやがった」

「ほう……！ それはまた……」

シオンが話した内容にトウヤが唸る。  
それが、どれだけ有り得ない事か分かったのだろう。  
ニヤリと笑う。

神覇ノ太刀は一子相伝の技である。

いわく、神が覇を唱える為に生み出した剣技だとか。

神殺しの技として作り出されたのだとか。

ちなみに、いろいろ伝説があるらしいが、シオンは全部、信じて  
いない――

まあ、そう言った経緯により一子相伝になったのだとか。

だが。

「他の分家は別に一子相伝じゃないのにな……。どうして、うちだ  
け一子相伝なんだろう……？」

「『聖』の拳技、『光』の槍技、『天』の弓技、そして、『神』の  
刀技かね……。一応、神庭が本家だからね」

思わず嘆息するシオンに、トウヤが補足説明を付ける。

だが、今重要なのはそこでは無い。

重要なのは、一子相伝かつ、極めるレベルで無ければ修得出来な

い筈の零落零無を、紫苑が使って見せた事にあった。

それを考えると、紫苑が言った台詞。

『記憶、肉体、そして魂を複製した存在』と、いうのが、俄然真実味を増す。

だが、トウヤはこう言ったのだ。

『そんな事は不可能』だと。

故に、シオンはトウヤを見る。

それは何故かを聞く為に。

異母弟の責めるような視線に、彼は苦笑する。

「そう、睨むのはやめたまえ」

「トウヤ兄い。いい加減、聞かせてよ。……なんで、”そんな事は不可能”なのさ？」

「ならば、逆に聞こう。シオン、どうやって”魂”を複製するのだね？」

「へ？」

質問に質問で返されて、シオンの頭に疑問符が踊る。

それに、構わずトウヤは続ける。

「魂とは、十七次元で波動としてその形を現し、二十六次元以上でその波動情報を検出される。――で？ その魂とは、そもそも何で出来ているのかね？ 素材は？ エネルギーの塊だとしたら、どのようなエネルギーかね？ 正位置のエネルギーかね？ 負位置のエネルギーかね？」

「あ、え、えっと……」

矢継ぎ早に繰り出されるトウヤの質問に、シオンはアタフタとなる。

——分からないのだ、トウヤが出した質問の答えが。  
それに、トウヤは笑う。

「つまりはそう言う事だよ、シオン。魂の利用方も、それを検出する手段も、取り出す方法も、実際に複写した例も、ある。だが、その実。

”魂の正体は何なのかと言う事については、全くと言っていいほど分かっていない”

……本当、片手落ちどころじゃない話しだよ」

肩を竦めるトウヤに、シオンは呆然とする。

確かに、その通りである。

魂の、その本質が何も分かっていないのに。魂を作れる訳が無い。複製など、以っての外である。

「そもそも、お前のような霊格の魂を複製出来るなら誰も苦勞はしないさ」

『あ……!』

その言葉に、シオンを始めとして、はやて、フェイト、スバル、ティアナが同時に声を上げる。

そう、それは。聖王教会での話し合いで言われた事だった。

シオンの霊格値はタカトと同じ、神級だと。

そんなモノ、更に作れる筈が無い。

あの場に居たもう一人の人物、クロノはそこらの事に、半ば気付いていたのだろう。

ただ一人、苦笑していた。

「で、でも。アイツは実際に――」

「仮説で良ければ、それについても一つ答えが出せるがね？」

「はい!？」

事もなげにあっさりと言ってのけるトウヤに、シオンは飛び上がらんばかりに驚く。

他の皆もポカンとしていた。

たったあれだけの情報で、仮説とは言え答えをあっさり出せると言う事に。

その反応を楽しみながら、トウヤは話し出す。

「例えばだね。魂は波動、つまりは波形で、そのデーターを現す訳だ。感情や人格、つまりは精神的なモノをね？　ならば”全然別の魂に、お前の十二歳時の波形データーを複写してしまえば”。問題はクリアーされると思わないかね？」

『……………』

トウヤの仮説に、シオンはあんぐりと口を開き、他の者達も顔を引き攣らせる。

確かに、それならば魂を複製出来なかが問題は無い。

”複製”では無く、”複写”。

認めたくは無いが、それなら可能だろう。

「……トウヤ兄い、てさ。頭いいんだか、悪いんだか。分からないよね……」

「何を言うかと思えば……。私は天才だよ?。」



自分で言うか。

シオンがこめかみをぐりぐり押しながら、盛大にため息を吐いた。  
一同も、同じくだ。

トウヤは微笑して、それらを見遣る。

「まあ、あくまでも仮説だよ。魂の波形データーは、その情報量だけでも凄まじい量になるからね……。実際の所は、現実的では無い」  
「――でも、出来るんでしょ……?」

「ああ、これならばね?」

あっさりと頷いて見せるトウヤに、シオンは再び嘆息する。

もう、この兄が何を言っても驚くまいと思いながら。

「さて、これでシオンもどきの話しいいね? どちらにせよ、今の段階では仮定の話ししか出来ないしね。次に行こうか。……今後の君達の、行動について。話し合おうか」

そうトウヤは言い、ニヤリと笑った。

(後編に続く)



ドンドンドンドンドン♪

ぱふぱふ♪

ア

「アリサ♪」

す

「すずかの〜」

ア、す

「「アリサ道場〜」。ミニ！」

ピッシャーーン！

ア

「今回は、ゲストキャラ出演は無しよ♪ 道場主のアリサよ♪」

す

「弟子のすずかです」

ア

「今回は、クイズ解答編♪ 皆、正解したかしら？」

す

「今回のクイズは難しい、て凄いい言われてたよね〜」

ア

「あえて解答数制限してなかったんだけど……。凄い解答数が来て、ヒントが追い付かない程だったらしいわよ？」

す

「さて、今回のクイズはトウヤさんの台詞。

『魂の複製は不可能、魂学自体にある欠陥がある』

さあ、それは何だ、というのがクイズだよ」

ア

「そして、答えは本編を見た人ならもう分かるわよね？ 答えは。

『魂そのものが全く分かっていない』

よ♪ ……ヒントが無かったら誰も当てられなかったわよ、コレ……」

「そもそも引っ掛けの積もりだったらしいからね♪ 皆さん凄い理論で来たから逆に作者が滝汗だったらしいよ♪」

ア

「てな訳で正解者を発表するわ♪ 解答早い者順に名前を出すわね♪

1位『シャッフルさん』

2位『白河シンジさん』

3位『樟葉權さん』

4位『Mebiusさん』

よ♪」

ア、す

「「正解おめでとうございます♪」」

ドンドン、ぱふぱふ♪

す

「オリキャラ投稿権の優先順位は早い者順なので、シャッフルさんから投稿キャラ設定を優先して行きます♪ よろしくお願いしますね♪」

ア

「ちなみにオリキャラ出現タイミングは、何と第3部の地球編からよ♪ 宜しくね♪」

ア、す

「「それじゃあ♪ また次回〜♪」」

幕

第四十六話「帰郷」(前編)(後書き)

はい♪ 第四十六話。前編終了です♪

まだ、家にすら帰ってねえ……！(笑)

シオンは家に無事帰れるのか。

そして、なのはは”お話”されてしまうのか(笑)

何より、ブラウニーは何処行った？(笑)

後半をお楽しみにですよ……♪

そして、クイズ、たくさん解答ありがとうございます♪

いや……、ここまで解答下さるとは嬉しい限りです♪

次の、クイズはどんなモノにしようかしら(笑)

こちらもネタを作っておきますね(笑)

では♪

また次回……♪

第四十六話「帰郷」(中編)(前書き)

……はい♪

テストメントです♪

お前日常編で何で中編よ？

と、思われてる方々。

ええ、全くもってその通り。

最近シリアス話しばっかりだったから。その反動がもろに来ました

(汗)

よかったら笑ってやって下さい♪

——なお、注意事項として電車やバスで今話を見ると凄まじく危険  
だと言っておきます。

では、中編。どうぞ〜♪

## 第四十六話「帰郷」（中編）

「――今後の君達の行動について、話し合おうか」

『月夜』、ブリーフィング・ルーム。

そこに集まるアースラの面々はトウヤの話しに頷く。

それを確認してトウヤはウィンドウを展開した。

「まずは現状の確認と行こうかね。君達の艦、アースラだが……。おおざっぱな損壊状況について調べ終わったのだがね」

言うなり、ウィンドウが切り替わり。3Dで、損壊したアースラが表示された。

「左舷及び、艦壁半壊。魔導炉もかなりのダメージ。一部、転送システムも故障。……何より、竜骨外殻にクラックがある。……正直な感想を言おう。よく墜ちなかったものだと感じするよ」

「……アースラはただの艦とちやいますから」

はやてが一同を代表してトウヤへと頷く。

彼はそれにふむと笑いを返した。

「そうかね。……余程、信頼しているのだね。己の艦を」  
「はい」

はやては即答。迷い無く頷く。

二ヶ月強の短い間とは言え一緒に戦って来た仲間である。信頼していない筈が無かった。

トウヤは、はやての答えに苦笑する。

「そうかね……。だが……」

「分かってます。……アースラ、そう簡単には直らんのやろ？」

トウヤの言葉を切るようにしてはやては告げる。

その場に居る一同は、その言葉に視線を落とした。

今、トウヤが告げた艦体診断だけでも並の被害では無い。

その修理に一日や二日で効く筈も無かった。

「……月夜の設備を使って二ヶ月、と言った所かね」

「……………」

告げられた日数に一同閉口する。

二ヶ月。その間、アースラは修理に掛かり切りになるだろう。

そしてその間をツアラ・トゥ・ストラの面々が黙っている筈も無い。

着々と支配領域を広げる事だろう。下手をすると、その二ヶ月で管理内世界全てを手中に収めかねない。

「艦の修理を待てる状況では無い。そうだね？」

「……はい」

はやては素直に答える。

強がりを言っている場合では無いのだ。

アースラの修理を待てる状況では無い。

トウヤははやての返事に再度頷いた。

「艦に関してはこちらで代艦を用意しよう。そちらは後で詳しく話す。さて、次だ。……現状、君達は怪我人ばかりだが……。その怪



我が治ったらどうする積もりだね？　よもや、本局に突撃とは言うまいね？」

「……それは……」

トウヤの言葉に、はやては二の句を告げない。

何を言おうとしているかを察したからだ。

本局決戦の時。シオンが抜けていたとは言え、自分達はほぼ、フル・メンバー、かつほぼ全快で戦いを挑んだのだ。

……その状態で、尚且つ敗北した。

つまり、現状の戦力ではストラと戦っても負ける公算が高いと言う事を、それは意味する。

「……分かってくれたようだね？　今現在の戦力では、はっきり言うてどうにもならない。本局に向かってても玉砕がオチだよ」

「っ……！！　そんなの——！」

「ノーヴェ！」

トウヤの台詞に、ノーヴェが椅子を蹴倒して立ち上がり反論しようとするが、チンクにすぐに諫められ沈黙した。

この場ではトウヤの言葉が正しい。

ノーヴェが着席するのを見計らって、はやてがトウヤに向き直る。

「……トウヤさんが一緒に来てくれるんやったら。何とかなんですけど——」

「それは無理だね」

キッパリと告げる。

あまりの即答に、はやてが口ごもった程であった。  
トウヤは微笑しながら口を開く。

「確かに私が出ればすぐに終わる。今すぐにもね。……だが、私  
が此処を出た場合。タカトへのカウンターが誰も居なくなる事を意  
味するのだよ」

『……』

一同はその台詞に一斉に息を詰ませた。

思い出したのである。そう、タカトは敵なのだ。

そして、おそらくはトウヤ以外には戦いにすらならないレベルの。

ストラに目が行き過ぎていた事を全員自覚する。

「……分かってくれたようだね？ 何よりだ。つまり、君達は私を

アテにせずかつ、ストラに勝てる方策で行かねばならない」

「……それは」

そんな都合のいい選択肢があるのかと、はやては思う。

他のメンバーもだ。

だが、トウヤはそんな一同に笑って見せた。

「もちろんあるとも。何、簡単だよ？ つまり、”君達の戦力を上  
げる”。これだけで済む」

『………ハイ？』

この人は一体何を言っているんだろうと、全員が疑問符を浮かべ  
る。

トウヤは微笑して、ウィンドウを更に操作。  
別の画面を表示する。そこには――。

「『アースラメンバー、各デバイス。ロストウェポン化による強化計画。及び、ロストウェポン製作設計図。並びに、第二世代型専用D A、第三世代型専用ロストウェポン式D A開発設計図』……?」

はやてがウィンドウに表記された文字を代表して読み上げる。  
ゆっくりとその意味を理解し、顔が次第に強張っていった。  
他の者も同様である。

トウヤはそんな一同に笑いながら続ける。

「君達全員のレベルアップを短期間で行うのは、はっきり言うが無理がある。……ならば、武装を強化するのが妥当とは思えんかね?」  
「いや、でも、これは……」

各員の前に出されたウィンドウにはそれぞれのデバイスの強化案や、D Aの設計図が表示される。  
それに、はやては言葉に詰まった。

何せ、ロストウェポンとは文字通り。”ロスト・ログアをデバイスに組み込む”仕様なのである。  
いくら何でも管理局である彼女達がそれを使うのは迷いが生まれる。

ただ一人。現有でロストウェポンを所有するクロノ・ハラオウンは苦笑していたが。

「叶。これは、僕のデュランダルと同じ仕様だと思っていいいのか？」  
「大体はね？　まあ、君達が迷うのは当然と言える。……使うかどうかは君達に任せるさ」

「はあ……」

流石にこれは、はやても即答出来ない。

戦力アップは確かに必須だが。使うモノがモノである。

クロノやフェイト、そろそろ復帰する筈の、なのはとも話し合わなければならぬ。

この場で判断出来る事でも無かった。

「ねえねえ」

「あん？　どした？」

横からちよいちよいと肩を叩かれて、シオンが横に視線を移す。  
横に居るスバルである。彼女は、自分の所に表示されたウィンドウをシオンに見せた。

「……これ、何て読むの？　漢字の読みがわかんなくて……」

「ふむ、なにになに……」

まあ難しい漢字がミッドに出回ってるとも思えんし。と、一人ごちて。シオンはスバルの前に表示されたウィンドウを覗く。

そこにはこう書かれてあった。

「『第3世代型、ロストウェポン式DA、”せいてんたいせい齊天大聖”……。……て、なぬっ!？」

「わ!？」

ウィンドウに記されたそれを読み上げたと同時にシオンが叫ぶ。

いきなり間近で叫ばれて、スバルがびっくりして目を見開いた。  
だがシオンは構わない。トウヤを盛大に睨みつける。

「……トウヤ兄い……」

「ふむ？ どうしたね、シオン？」

自分を半眼で睨むシオンにトウヤは微笑する。

だが、シオンは睨みつけたままスバルのウィンドウを指差した。

「一応聞くな？ これ、マジもん？ てか、正気か？」

「当然だとも。ちなみにスバル君の物は。」世界最初の第3世代型  
DA”になる予定なのだよ。……ついでに言うと、ティアナ君の物  
は二つ目。ギンガ君の物は三つ目となる」

「……うわお……」

告げられた言葉にシオンはくらりと眩暈を覚え、頭を抱える。

そんなシオンの反応にティアナが訝しみ眉を潜めた。

「なんか、気になる反応ねアンタ……。何？ この第3世代って言  
うの。そんなに危険物なの？」

「いや……。確かに危険物は危険物だと思うんだけどな……」

危険物なのかよ！ と、一斉に内心ツツコミを入れるが、シオン  
はそれも分らないようにため息を吐く。

トウヤに視線を向け直し、確認の為に問い掛けた。

「それ以前の問題だよ。——世界初、て言ったよな。トウヤ兄い」

「ああ、その通りだよ。シオン」

微笑しながら答えるトウヤにシオンは狸めとジト目で睨む。

それもそよ風のようにトウヤは受け流した。

シオンは続ける。

「つまり、そのDAは前例が無いものなんだよ。ぶっちゃけると試作1号機。またの名を実験機」

「ええっ!？」

「……………なる程ね」

「そう言う事、ね」

シオンの台詞に、当事者3名。つまりは上からスバル、ティアナ、ギンガの順で。それぞれの反応を示す。

それらを見て、はやてはトウヤに視線を向けた。

「…………トウヤさん。どう言う事なんやろ？」

「何。こちらもただで戦力供給する訳にも行かないのだよ。相応にこちらにリターンが無いと。長老部が五月蠅いのでね？」

いけしゃあしゃあと答えるトウヤに、はやて達はシオンに倣いジト目で睨み――。

すぐにため息を吐いて視線を戻した。

言っている事は正論である。

確かにただで別の組織である自分達に装備を譲る、または作る事など。元来有り得ない事だろう。

ようは装備はやるから各種データは寄越せと言う事か。

「…………シオン。長老部、て。何？」

「ん？ ああ…………。そういや、お前達には説明してなかったっけ。

…………長くなるから一言で説明すると、グノーシスの幹部みたいなも

んだよ。詳しい説明は後な」

スバルがまた聞いてくるが、シオンはそちらの説明は簡潔に終わらせた。

……グノーシス自体、結構複雑な組織なのだ。  
この場で説明すると長くなる。

はやて達には説明もしてある。この場で説明する必要も無い。  
スバルもそれは理解したのだろう。あっさりと頷いた。  
シオンは再びトウヤに視線を向ける。

「……で？　こんな試作機がまともに動くの？　ロスト・ロギア内蔵式のDAなんて、まだタカ兄いが理論上だけで考えてただけのやつだろ？」

「うむ。問題はあるまい。なにせ、”その理論を出した本人が『問題無い』と言い張ったモノ”だしね？」

「ふうん。タカ兄いがね——て、待てい！」

あやうく自然に聞き流しそうだった自分に戦慄しながらシオンは大声で叫ぶ。

すぐさま、ウィンドウを再び指差した。

「これ、タカ兄いが考えたの！？　しかも全部！？」

「うむ。流石に最初に渡された時はびっくりしたよ？」

「そう言った問題じゃねえだろオオ——！？」

あまりに脳天気な答えを返すトウヤにシオンは全力で叫ぶ。

先ほど、この兄はタカトを敵だと言ったのに。その設計図を何故に、あっさりと採用するのか。

シオンの叫びに、トウヤは眉を潜める。

「騒がしい男だね、お前は」

「誰のせいだよ!? いや、そんな事はどうでももういいや。なん  
で、これを採用したのさ?」

「――トウヤさん? ゴメンやけど私達も知りたいわ。やないと、  
これは本格的に使えんよ?」

シオンに続いて、はやても問い掛ける。

一同も、トウヤに疑問の視線をぶつけた。

肝心のトウヤはそれにあっさりと肩を竦める。

「当然こちらでもチェックは入れたさ。なんなら、その検査結果の  
資料もある。後で渡そう。――その上で、問題無しと判断したのだ  
よ。これは信頼出来るモノだとね。……それに、だ」

そこまで言い切ると、トウヤはニヤリとシオン達に笑みを浮かべ  
る。

まるで、悪戯を仕掛ける子供のような笑みを。  
そのまま続ける。

「あの基本天然かつ生き方が不器用窮まる男が、そんな小細工をす  
ると思うかね?」

「う……………!」

シオンはトウヤの台詞に盛大に呻く。

はやてを始めとした一同も顔を引き攣らせた。

天然かどうかは、はやて達が知る所では無いが。あの男の生き方  
が不器用窮まるのは間違い無い。

小細工など考えつく事もしなさそうだった。



そうで無ければもうちょっと上手く人生を立ち回っていた事だろう。

一同の反応を見遣りトウヤは微笑する。

「その設計図自体は、スバル君が感染者化した時に渡された物だよ。その為か、八神君。ザフィーラ君。シャマル君については何も用意して無いようだね」

「あ、ほんまや……」

言われ、はやてがウィンドウ内の各設計図をチェックするが、確かに自分のものと、ザフィーラ、シャマルの分が無い。

タカトは恐らく、自らが戦った者のデータからこれを作ったのだろう。

と、言ってもあの時点でタカトと戦った者は、シオン以外では一度しか無いのだが。

「と、言う訳で。それについてはさほど問題は無かろうよ。先にも言った通り、使うかどうかの選定は君達に任せる。ただ、早めにとちらかを決めてくれると助かるね。何せ、組み上げすらしていないのだから」

「……うん。分かったわ。後で話し合って決めます」

トウヤの台詞に、はやてが頷く。

それに満足そうにトウヤが頷き返した。

「さて、私からはこれ以上、話す事は無いね。具体的にこれからどうするかは君達に任せよう。月夜には好きなだけ滞在しても構わない」

「うん、ありがとうございます」

「いや、私もアースラには世話になった。本局にもね？　お互い様と言う奴だよ」

頭を下げるはやてにトウヤは苦笑して手で制す。  
そして、壁に掛かっている時計に視線を向けた。

「――ふむ。そろそろ、なのは君の治療も終わる頃合いだが……」  
《トウヤ？》

タイミングぴったりにユウオから念話がブリーフィング・ルームに届く。

彼はそんなタイミングの良さに苦笑しながら、口を開いた。

「ユウオ。なのは君の治療が終わったのかね？」  
《うん。もうちょっとで終る所だよ。”女の子は”こっちに来る？》  
「？」

なのはの事と言う事もあり、二人の会話を聞いていた一同だが。  
ユウオの台詞に疑問符を浮かべる。

「なんで女の子限定？」と。

そんな皆にシオンが苦笑する。

「……ナノ・リアクターは余分なモノを身につけ無いで入るからな。  
……ぶっちゃけると裸で入ってるんだよ」  
「そうなんだ……」

シオンの言葉に、スバルが合点がいったのか感心したように頷く。  
他の皆も納得したのか頷いていた。

それらを見遣りながら、トウヤが微笑し。ユウオに返事を返す。

「ふむ、了解した。では、私が皆を案内するから――」

《あ、それはダメだよ。トウヤはそこに居て。確実に覗こうとするから》

問答無用に、ユウオはトウヤの台詞をぶった切る。

それに、トウヤは少しだけ硬直するが。すぐに立ち直った。

「いや、だが。お客を案内無しに――」

《そっちにカスミちゃんを向かわしたから問題無いね》

「……………そこまで、信用無いかね。私は……………」

まるで見透かしているかのように先手を打っていたユウオにトウヤが若干いじけたように呟くが。

ユウオは一切、容赦をしない。

《当たり前だよ。――例えばボクがナノ・リアクターに入っているとトウヤ。どうするの？》

「全力で覗くね！ それはもう舐めるように！ 網膜に焼き付けてくれよう！」

即座に拳を握って力説してのける！

その姿に、アースラ一同は深くユウオに同意した。

この男は女の敵だと。

「てな訳で、トウヤさんはここで残っててや？」

「――何故か、目が冷たいのだがね。八神君」

努めて優しく言うはやてだが、その視線は素晴らしく冷たい。  
——はやてだけで無く、女性陣全員だが。

間を置かずカスミが到着し、男達を置いてブリーフィング・ルームを出た。

立ち尽くすトウヤを見て、残されたシオン、エリオ、クロノは苦笑する。

「……まあ、トウヤ兄い。普段の行いが悪かったって事だよ。これに懲りたら——」

「ふ……。誰だね？　それは？」

「——はい？」

いきなりのトウヤの言葉に、シオンは声を上げる。

トウヤは構わず、鉢巻きっぱい物を懷から取り出すと頭に巻き付けた。

「今の私はただ一人のエロ・コマンド……。断じて、トウヤなどと言う名前では無い！」

「……て、ちょっと待て。待った。トウヤ兄い。扉に近付くな！」

まさか……！

シオンを始めとして、クロノ、エリオも戦慄する！

この男はまさか！

「このシチュエーション……！　覗かずに男にあらず！！　突撃イ  
イイイイイイイイ！！」

一撃！

叫ぶなり、何とトウヤはブリーフィング・ルームの扉をピナカで破壊！

……恐らくは、外から施錠されていたのだろう。  
何にしても、破壊されては役に立たない訳だが。  
そのまま走り出す！

衝撃映像を見た三人は暫く硬直し、我に返ったと同時に頭を抱えた。

「あ、あのエロ兄貴イイイイイ……！？」

「ちょっと待て……！ 本気か彼は！？」

「流石に冗談じゃ無いんですか！？」

寧ろ、そうであって欲しいとクロノ、エリオの両名はシオンに叫ぶ。

だが、シオンは重々しく首を振った。

「トウヤ兄いは、かって。グノーシス位階所有者女性陣、全員の着替えを覗いた事があります」

「「……………」」

「ちなみにそれがバレて女性陣に袋叩きにされた時の台詞は『反省も後悔もしていない。エロ万歳！』でした」

「追うぞ！」

シオンの言葉を聞いて、三人はトウヤを追い駆け出す！

ここにエロ暴走を繰り広げる第1位を止める為の戦いが、突如として勃発してしまった。



三人は直ぐさま廊下に出て疾走を開始する。  
だが既にトウヤの姿はどこにも無かった。とんでも無い疾さである。

追い掛ける側としては、たまったものではない。

更に、はやてや対トウヤ用最終兵器彼女たるユウオに念話で密告しようとしたのだが、念話は全然通じ無かった。

妨害されている！

「くそ……！ 念入りしてやがる！ まさかこんな時にまで普通に変態で来るとは思わなかった……！」

「シオン兄さん！ 普通に変態って意味分かりませんよ！？」

「気にしたら負けだ！」

ツッコミを放つエリオに容赦無く告げる。

更に速度を上げて三人は爆走するが、トウヤの姿は相変わらず無い。

クロノがチツと舌打ちする。

「まずいぞ……！ 彼はこの施設を知り尽くしている！ 僕達だけでは下手すると迷ってしまうぞ！ このままでは追い付け無い！」  
「そんな！？」

エリオの悲鳴じみた叫びにシオンも舌打ちしながら頷く。

全く持ってクロノの言う通りであった。

こちらら全員。『月夜』は初めての場所である。

対してトウヤはこの施設のトップだ。



怒号のように響き渡る叫びと共に、ドタバタと駆けて行く音が響いた。

これにシオンがよしとガッツポーズを取る。

「これでこの皆は俺達の味方です！ 全力でトウヤ兄いを殺りに行ってくれます！」

「「いやいやいやいや」」

そんなシオンにエリオとクロノが異口同音に首を横に振る。

いくら何でもこれはマズ過ぎないか？

と、言うか殺してはいかんだろうと。

「て、言うか何ですか皆さん！　すごい手慣れてますけど。何でですか！？」

「こんなの日常茶飯事だからだ！」

シオンのぶっ飛んだ発言に、二人はえくくくと。声は出さずに唸る。

こんなのが日常茶飯事の組織があるのか。

いや、実際目の当たりにしている訳だが。

「取り敢えず、俺達も追おう！　トウヤ兄い。あれ、平然と突破するし！」

「……あれだけ殺気だった連中をか……？」

再び駆け出したシオンに続き、クロノ、エリオも走り出しながら疑問符を浮かべる。

シオンはそれに悲し気に首を振った。

「エロが絡んだトウヤ兄いの戦闘能力を舐めちゃいけません……。」



通常の3倍は強いですから、相手はプロのエロですよ!？」

「……………」

シオンの発言に遂にクロノとエリオはツツコミを入れる事を諦めた。

……本当に気にしては負けな気がひしひしとして来たからである。

……と、言うか――。

「シオン兄さん。……ここ、変な組織ですね」

「頼む。言ってくれるなエリオ。薄々、感じいちゃあいたんだ。薄々」

「薄々かよ」

結局ツツコミを入れてしまうエリオとクロノを完全に無視して、シオンは更に走る速度を上げた。

……そこらで爆発音が響いているのは。気のせいな訳が無かった。



「とう!」

叶トウヤは通路を疾駆しながら頭の中に地図を思い浮かべる。

ここから自分の速度を持ってしておよそ3分程に約束された桃源郷<sup>ハラル</sup>がある。

トウヤの頭には隠れて覗こうなどと言う選択肢は無い。

真っ正面。扉をブチ抜いて――。……どうせ、施錠されている事だろうし。

堂々と、なのはの裸を網膜に焼き付ける！

その後の事はどうでもいい。輝ける一瞬こそが全てである。

その為に！

そう思った瞬間！

何と通路の床が開いた。

そこからサブ・マシンガンに銃型のデバイスを装備した黒衣の男が現れる。

デバイスの設定は当然の如く殺傷設定！

二つ武器を男はトウヤに差し向ける。サブ・マシンガンのレーザーポインターがトウヤの額をロックオンし――。

「甘い！」

トウヤの命を奪わんと、引き金が引かれる前にトウヤは動いた。

床から現れた男の顔面を迷い無く踏み潰し、跳躍する！

「お、俺を踏み台にしただと！？」

「ふ……。古今東西。白が黒を踏み台にするのは常識だよ？　喰らえ、必殺！」

くるりと空中で回転しながらトウヤが懷からスプレーのようなものを取り出す。

同時にその噴射口を男に向けた。

「痴漢撃退用新製品！　『俺の吐息・焼肉翌朝！』」

叫びとスプレーの噴出音が重なる。

スプレーから漂うエライ物は男の顔面に降り掛かる！ と、同時に悲鳴が上がった。

「ぎゃああああああああああ……！！ ニンニク臭さというんな臭いが——！！？ ガクッ」

あまりの臭いに男は数秒転げ回った後、意識を完全に手放す。男の反応が消えた後もトウヤは5秒程念入りに男にスプレーを降り掛けてから即座に駆け出した。

だが！

「つてエエエエエエエエエエエエエエ！」

一轟！一

向かう通路の先から叫びと共に。数百の砲撃に、大砲。ライフル弾。槍、剣、銃弾が雨霰とトウヤに降り注ぐ！

魔法は当然、全て殺傷設定である。

数十秒の間に数千と撃ち込まれていくそれが通路を問答無用に破壊して行く。

新品の筈の通路が速攻で瓦礫へと変わっていった。

暫く撃ち込み続け、爆煙が視界を完全に覆った所で隊長らしき男が手を上げて。漸く各種砲撃が止まった。

「奴だって人間だ……！！ これだけ撃ち込めば——」

殺った！



暫く人がのたうつかのような音が響いた後。  
通路はシーンと静まり返った。  
重なり合う死々累々たる人の群れ。

世にそれを死山血河と言う。

トウヤはそれを見遣り、許せよと一人ごちた。

何ごとにも犠牲は付き物である。それが、今回は彼等だったと言  
うだけの事。

ちよつとばっかしアンニュイな気持ちに浸っていると、通路から  
ドタバタと走る音が響く。

シオン達である。

彼等は到着するなり、顔を青くした。

「も、もうやられてるし……！」

「しっかりして下さい！ 大丈夫ですか!？」

「くっ……！ 叶！ 貴様……！」

三者三様の言葉を連ねる。

そんな三人にトウヤはフツと笑う。

「何しに来たね。シオン」

「あんたを止めにだ……！ 決まってるだろう！ てか、覗きは犯罪  
だって！」

ブンブンと首を横にして叫ぶシオン。

だが、トウヤは構わず笑う。

「ならここは治外法権だ！ 関係無いね！？」

「『治外法権云々以前に人としての常識だろうがアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア——  
————！』」

シオン、クロノ、エリオ、魂の叫びである。

だがトウヤには届かない。

工口に支配された彼にそんな言葉は見事に馬耳東風であつた。

「ふ……。分かった。ならこうしようでは無いかね！ 共に覗くでしょう！ 光栄に思いたまえ。私が覗きに仲間を作るなど、滅多に無いよ？」

「きっぱりといらん世話だ色ボケ兄貴！」

「普通にそんな誘いに乗る訳があるかっ!？」

「絶対にお断りします！」

これまた三者三様の言葉を連ねる。

だが、トウヤはそれに心外そうな顔を見せた。

「おや？　おかしいね……？　私が知った情報によれば、ハラオウ  
ン提督はメインヒロインに、義妹に、お姉ちゃんキャラ。更には獣  
娘にまで手を出せる。それ、どこのエロゲ？　的なキャラであり。  
モンディアル君は初対面からメインヒロインの胸を触り、あげくの  
果てには若干露出過多なゴスロリ娘ともフラグを立てるフラグマス  
ターと聞いたのだが……？」

「……殺す！」

トウヤ台詞に、クロノもエリオも普段言いそうに無い単語を全力で叫び、己がデバイスを構える！

シオンはあわてて二人を止めた。

「ちよっ！ 待った待った！？ 二人共事実を指摘されたからってトウヤ兄いの挑発に乗ったらマズイって！？」

「何が事実か！？／事実ですか！？」

「そうだよ、”エロノ・ハラオウン君”。”エロオ・モンディアル君”。少し落ち着きたまえ」

「「うがあああああああああああ——！！！」」

その呼び名に何かトラウマでもあるのかいよいよ二人揃って奇声を上げ始めた。

トウヤはそれに笑いを浮かべ、シオンを見る。

「で？ お前はどうかね？ 幼なじみを喘がせたり、ツンデレ娘と裸で抱き合ったとか言う”神庭エロン”よ！」

「アヴェン！ ジャー——」

「「わあああ！？」」

トウヤの台詞に迷う事無くアヴェンジャーになろうとするシオンを左右からエリオとクロノが羽交い締めにして止める。

だがシオンはじたばたとそれでも暴れ続けた。

「離せエエエエエエエエ……！ あの兄貴八つ裂きにしたるんじやアアアアアアアア！」

「さっき僕達を諭していた台詞はどこ言った！？」

「さっきはさっき！ 今は今！」

「挑発に乗ってはダメだと……！！」

「そんなものとうに忘れた！！」

そんな風にチームワークがたがたな三人に、トウヤはふふと笑う。

それはもはや、勝利を確信した笑みであった。

「ふっふっふ。やはり君達では私は止められんよ」

「言ってる色ボケ兄貴……！」

「必ず止めてみせます！」

「その傲慢……！ 正してやる！」

そんなトウヤにシオン達は更に闘志を燃やす！

トウヤをここで止める。

最初の理由は既に因果地平の彼方だが。そんなものはもうどうでもよかった。

皆の犠牲を無駄にしない為に、己が矜持を守る為に。

何より、一回この男は痛い目に合わせないと気が済まん！

三人は互いのデバイスを構えると、迷い無く一斉にトウヤへと襲い掛かった。

（後編に続く）



## 第四十六話「帰郷」(中編)(後書き)

はい♪ 中編終了でございます♪

……うん。変態が暴走しました(笑)

あかん、アレだけで文字数が爆発してしまふ。  
しかもまだ帰郷のきの字も出て無いよ……。

何とか、後編には終わるように頑張ります！  
では♪

**第四十六話「帰郷」**（後編1）（前書き）

……はい。テストメントです（汗）

三部で終わらず四部になってしまいました……（汗）

何故に（汗）

変態を暴走させたからに決まっているのですが（笑）  
では♪ 後編1。どうぞ〜♪

## 第四十六話「帰郷」（後編1）

「「「ウオオオオオオ——！！」」」

グノーシス本部、『月夜』ナノ・リアクター治療室前通路。

そこを転がるもはや物言わぬ同士達（死んでない）を踏み越え。

シオン、エリオ、クロノがトウヤに突っ込む。

そんな三人にトウヤはフツと笑う。

「戦いとはいつも残酷なものだね……。弟をこの手にかけてねばならないとはね！？」

「覗きの為だけに弟を倒そうとするのは全次元世界の中でトウヤ兄い一人だけだけどね！？」

大仰に手を掲げる一応異母兄に、シオンは吠える。

手に持つイクスを構えながらエリオとクロノを追い越し、それぞれ高速移動を開始しようとし――。

だが、トウヤが掲げた手を懷に突っ込んだ瞬間。シオンの直感が最大級の警報を鳴らした。

これは――！

「喰らいたまえ！ 必殺！ 『俺の吐息・焼肉翌朝！』 あくんど

『俺の靴下・三日間履きっぱな！』」

「さっせるかあ！ 四ノ太刀！ 裂破ア！！」

一波！――

噴射されるあからさまにヤバすぎる臭いの煙をシオンがイクスを縦に構えて放った空間振動波が完全にシャットアウトする！

——その臭い。どれ程のモノなのか、シオン達とトウヤの間に居た戦死者達（しつこいようだが死んでない）が、滞留したその煙に転がったままゾンビのようにのたうちまわる。

その光景を見て、三人の背筋にゾッと冷たい汗が流れた。

このスプレー。絶対！ 痴漢撃退用スプレーなんかでは収まるまい。

きっぱりとBC兵器に区分すべき代物であった。

「……なんっちゅう、おっそろしいモンをあんたは……」

「ふっふっふ。ちなみに臭いが移れば一週間は臭いは取れない。……その間、親しい者——。特に娘さんあたりに『お父さん臭い！』とか言われるようになる心理攻撃も兼ねているのだよ！」

それを聞いて、後ろのクロノの肩がビクッと跳ね上がる。

クロノには、最愛の妻と双子の子供が居る訳だが……。

もし、あのスプレーを喰らった場合。リアルにそれを言われる事だろう。

……嫌過ぎる未来である。

そして、シオン達もまた他人事では無い。

仲間達に——。アースラは女性が多いから特に気にするだろう。

——に、『臭い』とか言われた日には、再起不能なまでの精神ダメージを受ける事、必死であった。

三人はトウヤがシャキーンと構えるスプレーを苦々しく睨む。

「くっそ……！ 嫌らしい攻撃仕掛けて来やがる……！」

「とりあえず、あのスプレーを何とかするぞ！ あれがある限り近付け無い！」

「はい！」

クロノの指示にシオン、エリオは即座に従う。  
即座にこの距離で届く魔法を、己から引き出した。

「神覇、弐ノ太刀――」

「サンダー――」

「ふ……。無駄な事を」

二人がイクスとストラダーを構える姿を見てもトウヤはスプレーから手を離さない。

寧ろ何時でも吹き掛けられるように構える。

「――剣牙ア！」

「――レイジ！」

――閃！――

――雷！――

シオンとエリオはそんなトウヤに迷い無く魔力斬撃と、範囲雷撃を浴びせ掛ける！

魔力の刃と雷は迷う事無くトウヤへと突き進み。

「ト――ウ！」

奇妙な声を放ったトウヤがいきなり消えた。

当然、刃と雷はトウヤが居た空間を空しく通り過ぎるのみ。

瞬動だ！

「どこに!？」

「――ここだよ」

疑問に答える声は後ろから響いた。

気付けばトウヤは自分達の真後ろでスプレーを構え、既に発射体勢に入っている！

この距離、このタイミング。避かせない！

「では、さらばだ。安らかに眠るがいいシオン、モンディアル君」

「く、くそ――。せめて、俺の方が『焼肉翌朝』でありますように！」

「ちょっ!？ シオン兄さん何て事を!？」

やかましい。『三日履きっぱな』なんて、最悪通り越して絶望だろうがよ!？

可愛い弟分がそんなモノを浴びてもいいんですか!？

この間僅か0.2秒でシオンとエリオはアイコンタクトでやり取りを交わす。

そんな暇があるなら逃げろよと思わなくも無いが、二人にそんな余裕は無かった。

そして、トウヤの指がスプレーのボタンを押し込み。殺戮芳香を二人に撒き散らさんとして――。

「甘いな――! 叶!」

一閃!――

突如として閃いた三条の光線がトウヤの手からスプレーを叩き落とす！

それを成したのは、トウヤの更に後ろの人物。  
クロノ・ハラオウンであった。

右手に握られた真・デュランドルがきらりと光る、と。  
宙を舞うスプレーが一瞬で凍り付いた。

凍結型の封印である。

一瞬の早業に目を丸くしたトウヤは事態を把握すると、くつと呻いた。

「く……っ！　あまりの影の薄さに君の事を忘れていたよ……！」

大事な事だからもう一度言ううと、影の薄さのあまりに君の事を――」

「二度も言うな！」

【アイシクル・カノン】

一撃一

影の薄さを散々強調しまくるトウヤに、クロノは容赦無く真・デュランドルを突き出す！

刹那、先端から氷結砲撃が撃ち放たれた。

だが、二度も遅れを取るトウヤでは無い。

あっさりと身体を翻して砲撃を避わす。

だが、トウヤの相手はクロノ一人だけでは無い。

スプレーの驚異から逃れ得たシオンとエリオは即座に振り返り、動いていた。

「エリオ！ さっきの事は置いてくとして突貫かますぞ！」  
「了解です！ ……さっきの事は後でゆっくりと話し合いましょう！」

ちちい！ 簡単には忘れんか……！

絶対！ 忘れませんか……！

やはり即座のアイコンタクトでそこまで語り合おうと、二人はイクスとストラーダを真っ直ぐ構える。刺突の構えだ。

刹那にシオンは魔力を纏い。エリオは雷光を纏う！

「伍ノ太刀、剣魔ア！」

「サンダー・ストライクッ！」

一裂！一

一閃！一

一雷！一

一轟！一

咆哮と共に、二人は同時に突貫を開始！

同時に放たれた突貫攻撃は相乗効果を生み。激烈な破壊力となつて道行く全てを蹂躪せんと突き進む！

クロノの方を向いていたトウヤが漸く振り返るが、もう遅い！

少しやり過ぎ感もあるが、痛い目に合わせた方が今後の為である。





られた二人と衝突！

一撃！一

「げふっ！？」

「あだっ！」

「あうう！」

三者三様の悲鳴を上げて、情け無くも床に転がる羽目になった。それを見て、トウヤが勝利とばかりに腕を掲げる。

「ふ……。今日の私は阿修羅を……。否、EXを凌駕した存在と知りたまえ！」

「ぐっ……くぬ！　ち、ちくしょう！　しかもその台詞は何か危険な気がする……！」

「ば、バケモノめ……！」

「い、今のは有り得ないでしょ……！」

勝利宣言をかますトウヤに三人は床に転がったままでそれぞれ吠えるが。

今回は文字通り負け犬の遠吠えである。

三人をあっさりと撃破したトウヤの超常的な能力。

それが煩惱で引き起こされていると言うのだからタチが悪い。

「てか。そこまでして覗きをする事に意味があるのかよ……？」

部下を全員昏倒させて、自分達を倒してまで。

何故、そこまで覗きをするのか。今、初めてトウヤにシオンは聞く。

シオンの問いにトウヤはニツコリと笑い。

「オッ○イ」

「「……はい？」」

その口から想像もして無かった一言が飛び出た。

呆然とする三人にトウヤは構わず神を崇めるかの如く両腕を天に突き出す！

そして、更に吠えた。

「○○○○○▲▲▲■●●●□□△△○×××○○○○○  
！！！！」

「ぎゃあ——！！」

「エリオ！ 聞いちゃダメだ！ フェイトが泣く！」

「え？ え？」

あかさらまに全部を伏せ字にせねばならない事をトウヤは全力で叫ぶ！

シオンはそれに悲鳴を上げ、クロノは慌ててエリオの耳を塞いだ。

やがて叫び終わると満足したのかフウと汗を拭う仕種をして。

「つまりだね。私は女性の身体に並々ならぬ興味があり、そこに知らぬ女体の柔肌があるのならば、覗きたいと言う欲求を押さえられんのだよ！」

「「なら最初っからそう言え！！」」

シオンとクロノは羞恥で顔を真っ赤に染めて怒鳴る。  
だが、トウヤはふっふっふと笑うのみである。

「ふ。まあどちらにせよ私の勝ちだ。さあ、行くでしょうかヴァルハラへ！」

「く、くそ……！」

さっきの投げ。いかな威力で投げられたのか、まともに身体が動かなかった。

エリオ、クロノも同様なのか立ち上がれずに居る。

このままでは、なのはがトウヤに裸を見られてしまう。

それを成した瞬間。トウヤは涅槃へと旅立つだろうが、それは寧ろ彼に取っては望む所だろう。

……多分、すぐに蘇るだろうし。

つまり、その時点で自分達の負けである。

スキップしながらナノ・リアクター治療室へと向かうトウヤを憎々し気に睨みながらシオンは己に問い掛ける。

何か、逆転の目は無いかと。

あの変態王に負けるのだけは嫌だった。それはクロノもエリオも同様だろう。何とか立ち上がらんと、もがく。

だが、身体は未だ痺れ続けている。立ち上がる事すら覚束ない。

ここまでか――！

そう、諦めた。瞬間。

「ああ兄者。向こうで姉者が裸エプロンの格好をして手招きしているぞ？」

「はっはっは！ そんな見え見えの嘘に騙される私では無い！――だがしかしっ！ そこに0.000000001%でも可能性があるならば己が煩惱の赴くままに幻想でしか有り得ぬような映像を

我が目に焼き付けようという欲望に従うのが”漢”の生き様と言うモノだよ！」

……何やら、凄まじく聞き覚えのある声から発せられた台詞に活き活きとしながらトウヤはこちら側に勢いよく振り返る！

それと同時にトウヤの身体の向こう側に居る存在が迅雷の速度で踏み込み。

一撃！一

——凄まじい音と共に隙だらけの股間に容赦無く膝蹴りが叩き込まれた。

気のせいかな、魔力まで纏っている。

「……っ……！？ ……タ……っ……とお……っ……！？」

「……許せ、兄者。同じ男として、何より弟として。この攻撃だけはしたくなかったんだが——」

顔を真っ青にしながら声ならぬ声で悲鳴を上げつつ崩れ落ちるトウヤの向こうから敵である筈の、彼が現れる。

伊織タカト。シオンにとって、もう一人の異母兄が。

……なんで、こんな所に？ と、三人が同時に思っていると。ぱたりと倒れたトウヤが涙目でタカトを見上げる。  
そこに。

ならば、何故だね！？

と言う明確な思考をアイコンタクトで飛ばされ、タカトはふいと

視線を反らせた。

「いや、最初は少し”あいつ”の様子が気になったただけなんだが――。なんか、兄者に”あいつ”の裸を見られると思うと凄まじくムカついてな。……大丈夫だ。多分、”潰れてはいない”と、思う」

ふ、ふふ。つんでれだね……！？

「……アイコンタクトにも力が無いぞ。いいから寝ていろ」

そこまでタカトが言い切ると同時に、トウヤは糸が切れたが如く意識を失った。

それらを見遣り、タカトは長々とため息を吐くとトウヤを俵を持つようにして抱える。

そして、シオン達の視線に気付く。

「とりあえず、兄者は俺が運んでおく。後は心配するな。ああ、クロノ・ハラオウン、元気そうで何よりだ。全快したようだな。……では、さらばだ」

言いたい事だけを一方的に告げて、あっさりとその姿は消えた。恐らくは縮地であろうが――。

「……えっと。これは、どう解釈すれば……？」

「済まない。僕も許容範囲外だ。何が何やら……ここのセキュリティはどうなっているんだ……」

「て、言うかよ――」

三人が三人共頭を抱えながら周りを見る。

そこに並ぶはドエライ臭いを発して意識が無い男共の群れがある。

それを見て。

「この片付け。どーすんの……？」

「「……………」」

シオンの問い掛けに、当然二人は無言。答えの代わりにぱったりと横になる。

シオンもそれを見て、何やらどうでもよくなり、その場に大の字になって横になった。

すると、向こう側の扉。ナノ・リアクター治療室の扉が開き、ぞろぞろと人が出て来る。

……確認するまでも無い。アースラ女性陣＋ユウオやカスミ、みもりである。

その中に久しぶりに見る栗色の髪の女性をシオン達は見た。

彼女達は周りの死々累々たる有様に啞然としながらシオン達に近寄る。

「これ、どうしたの？ シオン……？」

「いろいろ、あってな。ほんっと、いろいろ」

「そ、そうなんだ……」

尋ねてみたスバルだが、シオンの返事に何があったかは分からずとも。何かを感じたのかそれ以上、聞いて来なかった。

ユウオ達、グノーシスの面々は何があったか悟ったのだろう。深々とため息を吐いていた。

そして。

「え、え〜と。シオン君、久しぶり。げ、元気だったかな？」  
「……う〜す。久しぶりです。今は、元気無いです」

久しぶりに見るなのはから声を掛けられるが、シオンの返事はやたらと力が無い。

クロノやエリオも。

「……元気だったか。そうか」  
「……お久しぶりです」

と、全然感動の再会とは程遠い挨拶をする。  
そんな三人の様子に、流石なのは戸惑ったのか困ったような顔となった。

「え、えっと。……何か全然想像してた感じじゃないって言うか。  
……何で、そんなにぐったりしてるの……？」

「……聞かないで下さい。ここであつた事を一刻も早く忘れたいんです」

「ええ!？」

まさかのシオンの返答にショックを受けたのか目を見開いて叫ぶのは。

だが、シオン達三人は全く構わず。その場で熟睡する事を選択した。

……結局、三人はそのまま翌日までぐっすり眠りこけたと言う。



尚、今回の騒動を。

『第、数えるもバカらしいからやめた。叶トウヤ暴走事件』  
と、呼称し。速やかにグノースス内の人員は忘れるようにと通達があったとか無かったとか言われたそう。



ぴぴぴと言う音が耳に聞こえる。

その音でシオンは珍しく目があつさと覚めた。

『月夜』についた翌日、早朝である。

寝起きでボーとした頭を二、三回振ると周囲を見渡す。

そこはまるで、病室のような部屋である。

馬鹿デカイこの施設である。医療室もそこらの病院並の設備があるようだった。

ぼけーと、周りを見渡すと未だ眠ったままのクロノとエリオが居る。

どうにも三人揃ってあのまま爆睡したらしい。

とりあえずベットから下りてスリッパに足を通し部屋から出ると。

「あ、シオン。おはよー」

「おはよ。アンタが自分から朝早くに起きるなんて珍しいわね？」

ちょうど顔でも洗って来たのだろう。スバルとティアナにばったり会った。

二人の顔を見て、シオンはとりあえず片手を上げる。

「おう、おはよーさん。……今、何時くらいだ？」

「ちょうど7時、て所ね」

「シオンもハラウン提督もエリオもよく寝たね〜」

ティアナが呆れたように、スバルは微笑みながら言ってくる。

昨日、エロ兄貴が暴走かましたのが夜の7、8時。つまり10時間以上寝ていた計算になる。

確かにそれは寝過ぎだなとシオンは一人ごち、そのまま欠伸をかけた。

それを見て、ティアナが苦笑する。

「……アンタ、あんだけ寝といてまだ眠いの？」

「んあ。なんか、寝足りん。……てな訳でもう一回寝直すわ——」

そう言うなり回れ右をして、スリッパをぺったらぺったら鳴らしながら部屋に戻ろうとする。

だが、その前に左右からスバルとティアナに腕を掴まれた。

「……ダメだよ、シオン。昨日、なのはさんとちゃんと話して無いよ？」

「そうよ。それに、アンタ。今日帰るんでしょう？」

「……はい？」

なのはときちんと話して無いのは置いといて。ティアナの台詞に、シオンは疑問符を浮かべる。

誰が、どこに帰ると言うのだ？

シオンの反応に、ティアナとスバルは二人揃って不思議そうな顔となる。

二人は顔を見合わせると、シオンに向き直った。

「トウヤさんから聞いたよ？ シオン。今日は実家に帰るんだよね？」

「……あの人の復活が何で俺達よか早いのかは気になるけど。……俺、そんな事聞いてないぞ……？」

スバルから告げられた言葉に、シオンは盛大に怪訝な顔となる。

多分、トウヤが勝手に決めたのだろうが。実家に帰る積もりなど、シオンにはさらさら無かった。

それなのに、何故——？

少し考え込みそうになるが、シオンはそれをすぐに諦めた。

トウヤに直接言えればいいだけである。

自分は帰らない、と。

とりあえずは——。

「なのは先生、どこに居るんだ？ 流石に昨日のアレだけじゃあ、どうよ？ て、感じだし。ちゃんと話さんと……」

「あゝ。なのはさんなら……」

シオンの問いにティアナが苦笑。スバルも横で引き攣った笑いを浮かべる。

二人のそんな笑いにシオンはきよとなるが。

次の一言で、二人のそんな笑いの意味を理解した。

「フェイトさんと、八神艦長と話してるわ。……昨日から、ずっと」「——つまり、”お話し”？」

ここに置けるお話しの意味を、ある意味に置いて1番受けたシオンが頬を引き攣らせながら問う。

二人は即座に頷いた。

それを見て、シオンは長々とため息を吐き。とりあえずは顔を洗って飯でも食べて来よと踵を返した。

……どうせ、暫くはお話し中のままだろうしと確信しながらシオンは洗面所はどこだったかなと。

まずはスバルとティアナにそれを尋ねる所から始めた。



1時間後、顔を洗い。『月夜』の食堂でスバル、ティアナと朝ご飯を食べた後。起きたエリオとキャロとも合流して、シオンは通路を歩いていた。

向かう先は、なのはやフェイト、はやてに宛がわれた部屋である。

流石にそろそろお話しも終わっているだろうと思っていたのだが――。

「……まだ朝飯にも来てないんだよね……」

一同の先頭を歩くシオンが肩を竦める。

その台詞に、スバル達も苦笑した。

「フェイトさんや、八神艦長もすごい心配してたしね」

「だよね。昨日、フェイトさん泣いてたんだよ？」

「へっ」

ティアナとスバルの言葉に、シオンは相槌を打つ。

確かに、フェイトやはやてはなのはが帰って来なくて相当哀しんでいた。

状況だけ考えれば、なのはの生存は絶望的だったのである。それが、無事に再会出来たのである。泣くのも無理は無い。

……自分や、エリオは、まあ。あの変態兄貴のせいで、そんな感動なぞ吹き飛んでしまった訳だが。

なのはとの再会を何気に心待ちにしていたシオンは、そう思い。ため息を吐く。

そして、目的の部屋に漸く着き、シオンは呼び鈴を鳴らした。

だが。

「……あれ……?」

呼び鈴を鳴らしたが、誰も出て来ないし。何も言っ来ない事に、シオンはキョトンとなる。

スバルやティアナ、エリオやキャロも同じくだ。

もう一度呼び鈴を鳴らすも、やはり反応は無い。

「? どうしたんだろ。寝てんのかな?」

一晩中、お話ししていたのなら。確かにいい加減寝ていてもおかしく無い。

そう思いながら、一応確かめてみようと思扉の脇にあるボタンを押

して、開いて見る。

扉は横に開いて行き――。

「あ、あのく。フェイトちゃん、はやてちゃん。このくらいで、もう……」

「「……で？」」

シオン達が見たのは正座させられた、なのはとその前に仁王立ちとなり。そんなのはを見据えるフェイトと、はやてであった。

なのはは一晩中正座でもさせられていたのか、足が痺れているのだろう。

顔を引き攣らせている。

対し、フェイト、はやては無表情でただなのはを見据える。

二人の簡潔極まり無い返事なのはの表情が更に強張る。  
二人に精神的に追い詰められている事は明らかであった。  
なのはは、更に付け加える。

「だ、だから。タカト君と一緒にいたのは確かだけど。ストラの封鎖領域にいたから連絡取れなくて……」

「「……で？」」

「そ、それだけだよ？ 特にタカト君と何かあった訳じゃ無くて……！」

「「……で？」」

「……え、え〜と、そ、その……」

「「……で？」」

「えっと。やっぱり怒ってる……？」

「「……で？」」

二人はずっと同じ事を、なのはに続ける。  
なのはは既に涙目となっていた。

そんな三人を見たシオンはあまりに異様な光景に暫く絶句。

更に続けられそうな問答にシオンは巻き込まれ――。……もとい、  
邪魔しないようにゆっくりと下がり。扉を閉じようとして。

「……？ あ！ シオン君！」

こちらに気付いた、なのはが大声を上げた。

フェイトとはやては、それでも。なのはから視線を逸らさない。

「ほ、ほら。シオン君達来たから、お話しはまた後で、ね……？」  
「「…………」」

どうにか、話しを終わらせんとするなのはに、二人は沈黙。  
暫くして、長々とため息を吐いた。

「……しゃあ無いな〜。お話しはまた後にしよか」

「……そうだね。……後で必ずまた聞くけど」

「う……」

二人の返答に、なのはが顔を引き攣らせる。

一体何を、そんなに聞いていると言うのか。

シオンは怪訝に思いながらも、こうなった以上。戻る訳にも行かず、部屋に入る。

後ろに着いて来た四人も同じくだ。

取り敢えず、挨拶する。

「……ども、おはようございます」

「うん。おはようさんや、て。もう朝なんや……」

「あ、本当だ……」

シオンの挨拶に、はやてとフェイトは軽く驚いて時計を確認する。どうも、時間を忘れてお話ししていたらしい。ちなみに現在、朝の8時である。

そんな二人に当のお話しされていたなのはは深々とため息を吐く。

シオンは流石に苦笑した。

「ども、なのは先生。おはようございます」

「うん、おはよ。シオン君。助かったよ〜」

後半のみ小声で、なのはが礼を言う。

さもありなん。10時間以上お話しなぞ、シオンの想像を超えている。

もし、自分なら迷う事無く脱出を企む所であった。



そう考えると、なのははよく頑張ったと言える。  
シオンはなのはの返答に苦笑し続ける。

「昨日はすみません、なのは先生。……無事で良かったです」  
「……うん。心配かけてゴメンね。……ありがとう」

シオンの台詞に、なのはは微笑みながら謝る。

そんな彼女に、シオンも漸く実感する。  
なのはが帰って来たと言う事を。

肩から力が抜け、シオンも笑った。

「……でも、なのは先生。よくあの状況で大丈夫だったですよね……」  
「あ、うん。タカト君が来てくれてね」

「……やっぱり」

なのはの返答に、シオンは思わずため息を吐く。  
昨日の侵入と、さっきのなのはの台詞を考えると、自分の想像通りにタカトが彼女を助けたのだろう。  
相変わらず変わらぬ異母兄の行動にシオンは再び苦笑した。

「その、シオン君……。タカト君の事、なんだけど……」  
「はい？」

なのはの言葉にキョトンとしながら首を傾げる。  
タカトの事で何を聞こうと言うのか。

なのはは少し迷った仕種をして、意を決したのか口を開き――。

「なのは君。”それ”は待ってくれるかね？」  
『っ————！？』

いきなり背後から掛けられた声にシオンを始めとして一同飛び上がらんばかりに驚く。

即座に後ろを振り向いた。

「……トウヤ兄い。生きてたんだ？」

そこに立つ異母兄をシオンはジト目で睨む。

エリオも同様であった。

昨日の騒動を詳しく聞いていない女性陣は疑問符を浮かべていたが。

シオンの台詞にトウヤはフツと笑う。

「いや、あの一撃は痛烈だったさ。……後でユウオにも責められたしね？ ……拳で」

「……つくづく、よく死ななかったね……」

まあ、あんな騒動はグノーシスで月に一度か二度は起きている。実際に見た訳で無くとも、状況をユウオが分からない筈が無かった。

トウヤはうんうんと、頷くと、なのはに向き直った。  
いつに無く真剣な表情で告げる。

「なのは君。それをシオンに問うのは待ってくれたまえ。……あれの事はシオンには教えていないのでね？」

「っ……!」

「へ？」

トウヤが告げた言葉に、なのはは目を大きく開いて。そのまま閉口する。

そんな二人のやり取りに、シオンは訳が分からず疑問符を浮かべた。

トウヤに視線を向ける。

「……何の話しさ？」

「お前には……。関係はあるが、教えられぬ事さ」

「て、何だよそれ」

トウヤの答えに、シオンは批難の視線を向ける。

だが、トウヤは肩を竦めるだけ。

変わりになるのはへ目を向けるが、ただ首を横に振られるだけで終わった。

「……何なんだ。二人して……」

「まあ気にしない事だよ。それより、シオン。帰る用意は出来たのかね？」

二人の態度に怪訝な表情のまま呻いていたシオンにトウヤが話を逸らすようにして、別の話題を振って来た。

それにシオンは嘆息し、二人に問う事を諦めた。

この兄が一度言わないと決めたのならば、絶対に言わない事を知っているからである。

なのはもそこまではいかなくとも、口は固い方だろう。

それに、その話しにも言いたい事がシオンにはあった。

トウヤをキロリと睨む。

「……その話しなただけどさ。俺、聞いて無いんだけど？ ついでに家に帰るつもりは無いから」

「そうなのかね？ では今。お前の兄として”命令しよう”。……シオン、帰りましたまえ」

「……………は？」

いきなりトウヤから告げられた言葉を理解出来ずに、シオンは暫くの沈黙を挟んで漸く疑問のみを放った。

トウヤはそんなシオンに構わず続ける。

「今の時間なら道場もやってはいまい。転送ポートもちょうど空があるそうだし——」

「いやちよつと待て！？ 何、話を勝手に進めてるんだよ！」

「では、逆に聞こう。何故そこまで帰りたく無いのだね？」

叫びにいきなりの問いを被せられてシオンは思わず絶句する。

何故、か？ そんなの決まっている。だって、俺は——。

「俺、は。まだ何にも決着つけて無い……。それなのに戻れる訳が無いだろうが！」

「そんな空っぽの”言い訳”はどうでもいいのだよ」  
「っ！」

シオンの言葉を容赦無くトウヤは切って捨てる。

そして絶句したシオンをいつものように見据えた。

「……お前が家を出て2年。アサギさんに合わせる顔が無いのも理解出来ないでは無いがね？ それでも、お前は一度帰るべきだね。」

アサギさんと、お前自身の為に」

「……………」

トウヤの台詞に、ついにシオンは俯いて黙り込んでしまう。  
ぐっと何かを堪えるように沈黙してしまったシオンに、トウヤは短くため息を吐いた。

「……アサギさんも表情には出さないが、心配していたよ？」  
「っ————」

トウヤの台詞に、シオンの肩が震えた。

分かっているけど、ショックだったのだ。

……自分が、ずっと心配させ続けていた事を。他でも無い、トウヤに言われて。

俯いたまま肩を震わせるシオンに、トウヤは最後の言葉を投げ掛ける。

「……帰って、アサギさんに元気な顔を見せてやりたまえ。シオン」

トウヤから告げられた言葉に、シオンは沈黙し続ける。

そして、数分の間を挟んで、その首が縦に動く。

「……………うん」

まるで、搾り出すような声と共に頷き。

トウヤはその返答に、漸く微笑した。

かくて、神庭シオンは2年ぶりに生家へと帰る事となった。

(後編2に続く)

第四十六話「帰郷」(後編1)(後書き)

はい。漸く帰郷の”文字”が出ました♪

……すみません。投石は勘弁を(汗)

いや、まさか帰郷するのにここまで文字を使わされるとは(汗)  
バトル描写もあまり無いのになー！。

ではでは、後編2で漸く帰郷です(笑)

お楽しみに♪

ではでは〜♪

第四十六話「帰郷」(後編2)(前書き)

はい♪

テストメントです♪

オフ会の後、若干燃え尽きてましたが(笑)  
復活です!

さあ、第四十六話「帰郷」も漸く終わり。

楽しんで頂ければ幸いです♪

では、どぞ〜♪



## 第四十六話「帰郷」(後編2)

グノーシス月本部。『月夜』

転送ポートに続く通路を実家に帰る為に、神庭シオン”達”はてくてく歩いていった。

そう、”達”。つまりシオン一人では無い。

スバルやティアナ、エリオ、キャロを始めとして。なのは、フェイト、はやての隊長3人娘。更にギンガ、チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ達N2Rの面々。

つまりは、シグナム、ヴィータ、アギト、リイン2、クロノ、ザフィーラを除いた全アースラ前線メンバーがシオンと一緒に歩いていたのだ。

それだけでは済まず、異母兄であるトウヤとその恋人兼秘書のユウオ。幼なじみのみもりまで一緒である。

総数十六名がぞろぞろと歩ける『月夜』、通路の広さは本当に大したものである。

それは、シオンも認める。

だがっ！　しかし！

「……あ、あの………」

『ん？』

わいわいと雑談しながら歩く一同にシオンは意を決して振り返る。そしてやや引き攣った笑いを浮かべた。

「見送り来てくれたのは嬉しいんだけど。ここまででいいかな〜」  
て」

「ああ、違うよ。見送りやないから」

……見送りでは無いなら果たして何故に着いて来ているのか？  
にっこりと笑って答えてくれたはやてに、シオンは更に引き攣つ  
た笑いのまま続ける。

「え〜と。ならなんで……」

「も〜。そんなん決まってるやん」

ややな〜。もう、と。はやては朗らかに笑う。

……シオンはそんなはやての笑いに――。

正解には、シオン以外全員が浮かべている笑みであったが。

――に、嫌な予感を覚えて後ずさる。

だが、すでに後ろはスバルとティアナが自然な動作で逃げ出せぬ  
ように移動していた。

それに気付き、シオンは戦慄する！

自分に気付かれずに、いかような手段を用いて移動したと言うの  
か。

そんなシオンの動揺に気付いていないのか、はたまた気付いてい  
ないフリなだけか。はやての笑いは変わら無い。

そしてきっぱりとシオンに告げた。

「――シオン君のお母さんに会いに行く為に決まってるやん♪」

「さらばっ！」

即座にシオンは横っ跳びに瞬動！

壁を蹴り、更に瞬動を発動して三角跳びの要領でスバルとティアナの頭上を越える！

後は転送ポートに逃げ込んですぐに転移すれば――！

「甘いよ！ シオンっ！」

「なぬっ！？」

一閃！

着地し、一気に駆け出そうとしたシオンだが。いきなり足ばらいを喰らって転倒する。

慌てて顔を上げると、そこにはにっこりと笑うスバルの顔があった。

どうやら、着地点を狙って足を払われたらしい。

「もぐ。なんで逃げ出そうとするの？」

「なんでもかんでもだっ！ てか、なんで皆着いて来る気だよ！？」

叫び、諦めの悪いシオンは立ち上がろうとして。

いきなり背中に誰かから乗っかかれた上。肘を振り上げられてそれを阻止させられる。

背に目を向けると、そこに居るのはやはりティアナであった。

「そんなに嫌がらなくてもいいじゃない？ ほら、アンタいろいろあったし。昨日はまた感染者なんかになったから一人だけにするのは心配だしね。――それに、アンタのお母さんって気になるし」

「だあああぁっ！ 前半、お前建前だろ！？ 後半が目的だな！？」

そんな事無いよ——と、一同笑うが、はっきりと説得力が無い。

そもそも彼女達からしてみれば気にならない筈が無いのだ。

あの、トウヤ、タカト、シオン。3兄弟の母親とも呼べる人。どんな人物か知りたいと思うのも当然であった。

それに——。

「まあ、私が許可したのだよ。家に行っていいとね」

「くっ……！ トウヤ兄い……！」

1番後ろに居たトウヤの台詞にシオンは顔のみ上げて睨む。  
だがトウヤはそんな視線すらも楽しそうに受けて笑う。

「まあ。多少人数が多めの家庭訪問だと思ったまえよ」

「違う！ こんな大人数の家庭訪問なんて存在しねえ！」

「ううん。シオン君。存在するよ？ 今ここに」

「そう言った意味で言ったんじゃないっすよ——！！！」

叫ぶシオンだが、もはや拒んでも意味が無い。

トウヤが許可した以上。シオンがどれだけ嫌がろうと、皆が来るのはもう確定事項であった。

「うう……。何故に家帰るのに、皆まで連れて行かなきゃならんのだ……」

「ま、いいでは無いかね？ こう言うのも。では、アサギさんに宜しく頼むよ？」

「……は……？」

嘆くシオンに笑うトウヤだが、その台詞に引っ掛かるモノがあり。

シオンは顔を上げる。

そんなシオンにトウヤは薄く笑った。

「私は今日は帰れんからね。アサギさんによろしく頼む」

「ちょっ!?! 待て! 人には帰れと言っておきながら……!」

てっきりトウヤも帰るものだと思っていたシオンはスバルとティアナに捕まったままジタバタと暴れる。

そんなシオンに構わず、トウヤはユウオを伴い一同に背を向けて歩き出した。

「多数の美しい女性に囲まれて羨ましいかぎりだね」

「なら、替わってくれよ!」

「だが、断る。……久しぶりの実家だ。ゆっくりして来たまえよ。ではね」

にべも無い。

容赦無く置き去りにされて、シオンはしくしくと泣きささぶ。

そんなシオンとは打って変わりアースラ一同は元気澁刺に転送ポイントに入った。

「よっしゃ。じゃあ、神秘に包まれた神庭家に突撃や~~~~~♪」

「いつからうちは秘境になったんすか……?」

『オオ~~~~~♪』

「皆のってるし!」

ツツコミまくるシオンを一同は完璧に無視する。

そして転送ポートが起動。アースラ一同は神庭家がある。

日本出雲市へと転移した。



日本。島根県、出雲市。

ビルが立ち並ぶ都市部から外れた。緑豊かな、のどかな郊外部にその家があった。

神庭家。

そう描かれた”門”を見て。アースラ一同は口をほえろと開き、  
啞然としていた。

さもありなん。

ずっと向こうの道まで続く塀。そしてドンッと立った門。

それらを見るだけで分かる巨大な屋敷がそこに在ったからである。

一同の反応にシオンはため息を、みもりは苦笑していた。

「……シオン家って。すごいね……」

「……まさか、ここまでとは思わなかったわ……」

門を見上げながら呟くスバルとティアナにシオンは同じように門を見上げた。

自分が育ち、暮らして来た家を。

こうして久しぶりに帰ると、自分の家ながら大きいと言う事が良  
く分かる。

昔はあまり分からなかったものだが。

だが。

懐かしいのかな？

門を見上げるシオンは胸中、自問する。  
胸を締め付けるような、いたたまれないような。そんな気持ちになり、シオンは苦笑した。

自分の家に帰るのに、なんで。そんな気持ちになっているのかと。  
……こんな、罪悪感を覚えるような気持ちになっているのだろうと。

「……シオン……？」

「……ん？ どした？」

暫くそうして見上げていると、スバルから声を掛けられる。  
それに出来るだけ笑って答えると、心配そうな顔が返って来た。  
横のティアナも、声にこそ出さないものの表情に出ている。

そんなに俺は顔に出やすいのかと自嘲しながらシオンは前に出た。  
これ以上。ここに居ても仕方あるまい。  
門に手を当てて、力を入れて押す。

……相変わらず重い門にまたもや泣きたくなるような気持ちとなり、苦笑でごまかしながら開いて行く。

そして。

開いた門からいきなり、眼前に木刀の先端が現れた。

……は？

あまりに唐突に現れたソレに訳が分からず呆けるシオン。  
そんなシオンに構わず木刀は突き進み、シオンの顔面へと放たれる！

「……て！ どおっ！？」

「「シオン！？／シン君！？」」

一閃！一

顔面直撃まで、後数ミリで我に帰ったシオンは。全力で顔を背ける事で木刀を回避する！

後ろから響くスバル、ティアナ、みもりの悲鳴にも今は構ってられ無い。

避けた体勢から後退しつつ、イクスを起動。

後退したシオンを追って現れた小柄な影に向かい、横薙ぎにイクスを放つ！

一閃！一

空気を引き裂いて放たれた斬撃。

だが、イクスが斬り払ったのはただその空気だけであった。  
なら、木刀を持った影は——！？

直後、ぞくりと背中を走る悪寒にシオンは戦慄。  
直感の赴くままに頭を下げる。

一閃！一

下げたと同時に、頭上を何かが通り過ぎる。



シオンはそれを確かめ無いままにイクスを上に振り上げた。  
が、やはりイクスは空を斬るのみ。

前を向いたままのシオンの視界にはおらず、振り上げたイクスも  
空を斬った。

ならば！

後ろだろ！

「式ノ太刀！ 剣牙あ！」

『シオン！？／シオン君！？』

一撃！一

魔力斬撃を放ったシオンに、アースラの面々が悲鳴のような叫び  
を上げる。

当然である。未だ姿さえ捉えさせない襲撃者は、魔法を使ってい  
ないのだから。

そんな相手に魔法を。

やり過ぎ以前の問題である。例え非殺傷設定だろうと、相手によ  
っては最悪の事態にすら成り兼ね無い。

……そう。それが、素人ならば。

「……やっ♪」

一閃一

軽快に響く高い声と共に、襲撃者は剣牙に対して前に踏み込む！同時に真ん中へ木刀を突き立て、振るような動作で木刀を回転。

それだけ、それだけで。

剣牙はあっさりと霧散した。

「ッ……！？」

『へ……？』

その結果に、シオンは悔し気に歯を食いしばり、他の面子は啞然とする。

それは、そうだろう。目の前の襲撃者は魔法を使っていないのだ。

一切、である。

にも関わらず、どうやったら魔力斬撃を霧散出来ると言うのか。

襲撃者は剣牙を無効化しながら、まだ止まらない。

シオンへと走る！

剣牙を放った直後で、動けぬシオンは刹那に迫った襲撃者に簡単に懷へと踏み込まれ――。

「絶影っ！！」

一閃！一

その直前に、居合の要領でイクスを横薙ぎへと放つ！

このタイミングでなら――！

必勝を期した一撃にシオンは勝利を確信して。

だが、イクスは再び空を斬るだけで終わった。

避けられた！

「な……！ うお！？」

一閃！――

再び襲撃者を見失った事に驚く暇無く。シオンは足元を払われて空へと舞う。

そして、シオンが見たものは。自分の額へと降って来る木刀！

一撃！――

「あだっ！？」

宙を舞うシオンの額に打ち降ろされた一撃は問答無用に地面へと、シオンを叩き落とす。

額と後頭部、背中を痛打し。悲鳴を上げるシオンにポカンとしてしまう一同。

そして、そんなシオンの前に襲撃者が立つ。

そこで初めて襲撃者の姿を、シオンを含めて皆が認識した。

襲撃者は小柄な体躯であった。おそらく、はやくよりも背が低い。

そして腰まで伸びた長い銀髪。

柔らかそうに微笑む笑顔に紅眼が印象的である。

どこかしら、否。シオンを女の子にしてみたら、こんな感じであろう。一見”少女のような”彼女は微笑し続けながらシオンを見下ろす。

「ほら、変に抵抗するから余計に痛い目に合うんだよ？ 大人しく一発殴られていればよかったのに♪」

「……木刀でブン殴られそうになったら誰でも避けるに決まってるだろ!?!」

まだジンジンと痛む額を右手で押さえながら、シオンが上半身を起こす。

そして、木刀を持ったまま微笑む彼女を睨みつけた。

……変わらぬ、その姿を見て。泣きそうになったのは痛みのせいだと己に言い聞かせて叫ぶ。

「……母さん!」

『……はい!?!』

シオンの叫びにアースラ一同が同時に疑問符を上げて叫び、その”母さん”をマジマジと見る。

彼女は、そんなシオンの台詞に微笑を続ける。

そして、一同を振り返り。ぺこりと頭を下げた。

「シオン君の母の神庭アサギです♪ ウチのシオン君がお世話になつてます♪」

『え? 嘘……?!』

「いや、マジ」

アサギの挨拶に、間髪入れず、異口同音に疑問の声をアースラ一同は上げるが、シオンが即座に否定する。

アースラ一同の疑問は当たり前であつた。

見た目、完全に十代の少女。

下手をすれば、ティアナやスバルよりも幼く見えるのである。

信じられ無いのも無理は無い。

……彼女と初めて会う人は必ず通る道なので、シオンとしては慣れっこである。

…この後の展開も。

シオンはため息交じりに、みもりも苦笑しながら耳を押さえる。

そして。

『ええええええええええええええええええええええええええええええ  
つ！？』

直後にアース一同から大きな、大きな叫び声が迸った。

こうして、シオンは懐かしの我が家に帰って来た。

額と後頭部、背中と――。

……そして、胸に痛みを覚えながら。

彼は歸つて來た。



シオンの母、アサギと驚きの初対面を果たしたアースラ一同と、再会したシオン、みもりは門を潜り神庭家敷地へと入る。

そこに広がるのは、見事な日本平屋であった。

大きな、大きな日本家屋。どれほど大きいのか、母屋だけでもかなりの大きさがあるのに、それに連なるように別棟があり。

更に向こうには道場らしき建物や、物置まであり、止めとばかりに庭に大きな池まである始末である。

外の塀や門から想像はしていたが、下手をするとそれ以上に大きな屋敷に一同呆然としながら中をアサギの先導で進む。

やがて、奥の一室にたどり着く。居間、と言うには大き過ぎる部屋である。

何とここに居る面子、全員が楽々に入れ、ゆったりと出来るスペースがあるのである。

その広さ、押して知るべしであった。

久しぶりの畳の感触と匂いにシオンは顔を綻ばせながら適当な場所胡座をかいて座る。

そんなシオンに一同、どこに座ったらいいものかと思案顔になるが、アサギが上座に座ったのを景気に、はやてを1番前にして皆が畳に座った。

「ようこそ、神庭家へ♪ 大したもてなしは出来ないけど、自分の家だと思って楽しんでね♪」

「いえ……。こちらこそお招き有り難うございます。シオン君には私達もお世話になってます」

ぺこりと一同、頭を下げる。それにアサギも頷き。続いて、シオンへと視線を向けた。

「さっきは言えなかったけど。シオン君も久しぶり♪ 元氣そうだよかった♪」

「ん……。母さんも元氣そうで安心したよ。——元氣過ぎるみたいだけど」

未だに痛む額にシオンは苦笑しながら、そう言う。

一同、そんなシオンに苦笑する。

帰って早々、襲撃を掛ける母など。おそらくは世界広しと言えど彼女しかいまい。

「いいじゃない♪ シオン君が2年でどれくらい強くなったのか知りたかったしね♪」

「……で？ 判定は？」

「×♪」

問答無用にそう言われ、流石のシオンも苦笑する。

アサギは絶えない微笑みのまま続ける。

「手を抜いていたのが分かったからね♪ もっと真面目に戦ってくれたら最低でも△は上げたんだけどね……♪」

「……初っ端から母さんだと分かったからね」

自分でも言い訳にしかないのではないと分かっている台詞を口にする。

アサギはそれに、ん……♪ と小首を傾げた。

……取り敢えず、これ以上。駄目出しをされる前に話しを変える。

「……取り敢えず。皆の紹介をしたいんだけど、いい？ 母さん？」  
「うん♪ いいよ♪」

にっこりと笑うアサギに取り敢えずシオンは安堵。  
そして、シオンはまず。はやてから紹介して行く。

「まず、俺が厄介になっている艦の艦長さん。八神はやて先生」  
「八神はやてです。今日は大人数で押しかけて、すみません。よろしくお願いします」

「うん♪ よろしくね♪」

シオンに紹介されて、はやてが頭を下げる。  
それを皮切りに皆をシオンは紹介していく。

自己紹介も兼ねた挨拶が終わった後。アサギは皆を見て微笑した。  
そして、シオンへと視線を向ける。

「可愛いらしいお嬢さんばかりだね♪ シオン君。ハーレムだ♪」  
「ないない。世界で1番有り得ないよ」

確かに女性が多いのは確かである。この場にいる男が自分とエリオしかないのだ。

何と9割が女性と言う事態にシオンは心底苦笑した。

「そうなんだ。でも、何とも無いて事は無いよね？」  
「いや、ないってば。皆、先生だったり仲間だけどさ……」

確かに、キスやら何やらはあるにはあったが。半ば事故みたいなものである。

そもそも、まともな恋愛など出来るような状況では無かったし。



シオン自身、する積もりも無かった。

シオンの台詞に、アサギはふうふうんと、生返事をする。そしておもむろにたった一言のみを呟いた。

「大変だね♪」

「なにが？ てか、誰に言ってるのさ？」

シオンは思わず問うが、アサギは取り合わない。

他の面々はそんなシオンに苦笑したり呆れたりしていたが。

さて、と。アサギはポンッと両手を合わせるようにして叩き。ニツコリと笑った。

「今日は皆、泊まって行ってね♪ さっそく、お部屋用意しなきゃ」

「え？ いや、それはな〜…」

「いいんすよ。はやて先生。部屋もありますし、泊まって行って下さい。——母さんも、その方が喜ぶし」

泊まるように言うアサギに若干困惑する、はやて達一同にシオンは苦笑。

アサギに合わせるようにして同意する。

それに、はやては隣のフェイト、なのはに目を向ける。

二人は苦笑まじりに頷き。

はやても二人に頷いた。

そして、アサギに向き直り、頭を再度ペコリと下げた。

「なら、お言葉に甘えさせて頂きます。よろしく願います」  
「は〜い♪」

はやての答えにアサギが嬉しそうに頷く。  
こうして、神庭家にアースラの面々は一泊する事となった。



居間での一幕の後。

シオンは2年ぶりの自室に戻って来ていた。  
小まめに掃除していたのか部屋は片付いており、埃っぽく無い。  
そこにスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、みもりも一緒に居る。  
四人はシオンの部屋を興味深そうに眺める。  
シオンは苦笑しながら、みもりに目を向けた。

「……みもりが掃除してくれたのか？」  
「はい。シン君がいつ戻って来てもいいように、お掃除しました」  
「そか。……悪い、サンキューな」

その返答に、シオンは大人しく頭を下げる。  
みもりは、首を横に振り。『趣味ですから』と、微笑した。  
改めて自室を眺める。

一人部屋にしてはかなり広い部屋である。  
窓際にベッドが設えてあり。本棚や机が置いてあった。  
……本棚にあるのが意外にも専門書だったりするのに、一同驚く。

「意外ね。アンタの事だから、てっきり漫画ばかりだと思ってた  
んだけど」  
「そら、どう意味だオイ」

ティアナの台詞に思わずツツコミを入れるシオンだが、言っている事は分かるので苦笑する。

そして、本棚から一冊本を取り出す。

その本は、デッサン用の参考書であった。

「……暇があったら。絵を描いてたからな」

「あ……。そう言えば、シオン。絵、描いてたんだよね」

随分久しぶりにシオンが絵を描く事を趣味としている事を思い出して、スバルが口到手を当てて驚く。

そんなスバルに、シオンは振り返りながら苦笑した。

「最近、描いて無かったしな。……ほら、お前の後ろにスケッチブックやら、何やら置いてるだろ？ あれ、全部が俺が描いたやつだよ」

言いながら、シオンはスケッチブックを一冊取り出して、スバル達に見せる。

そこには、いろいろな人が描かれていた。

アサギが居た。トウヤが居た。みもりが居た。カスミが居た。ウイルが居た。悠一が居た。刃が居た。

そして。

「――本当、描くの。止められなくて、さ」

ルシアが居た。

……タカトが、そこに居た。

懐かしそうにスケッチブックを見て、シオンは苦笑。やがてそれ

を閉じ、元に戻る。

そして黙ってしまった皆に笑って見せた。

「……どうせついでだ。俺は持って無いけど、アルバムでも見るか？  
母さんが持ってたと思うけど」

「あ、うん！」

シオンの台詞にスバルを始めとして皆、頷く。

それを確認して、部屋を出ると、再び居間に向かって歩き出した。



夕方。

あれから、しばらくアルバムを見たり。道場を案内しているうちに、一日は足早に過ぎていき、もう夕方である。

……アルバムを見た時も、まあ。シオンの恥ずかしい写真があったりで一悶着あったのだが。

まあ、それは別の話である。

シオンは湯に浸かり、ふいふいと。息を吐いていた。

風呂である。ただし、露天風呂であるが。

シオンが浸かっている風呂は、一見すると旅館にあるような広々  
しい風呂であった。

ちなみにこの風呂。なんと、温泉である。

神庭家には、なんと庭の林（そう言わざるを得ない）に温泉が湧  
いていた。

これは、元々あったらしいのだが。風呂好きなアサギが年中無休で使えるようにした結果。

屋根や洗い場も整備され。銭湯も真っ青の露天風呂が出来上がった、と言う訳である。

ちなみに某異母兄いわく、『風呂代が助かる』との事であった。

「あゝ。久しぶりの我が家の風呂は生き返るゝゝ」

ふにゃゝと、擬音が聞こえそうなシオンの緩み切った顔は見る者が見る人ならば、恐ろしく癒し効果満載である。

肩まで浸かりながら、シオンは久しぶりの湯を堪能する。目を閉じて、再び安堵の息を吐いた。

「……しかし、住んでた時は全然思わなかったけど、こんだけ広い温泉を一人占めるのは贅沢だよゝゝ」

「そうだねゝゝ♪ でも、気持ちいいでしょ♪」

「うんゝゝゝ……………待てい！」

思わず頷きかけてシオンは盛大に怒鳴る！

慌てて横を見ると、いつの間にかやら。そこには母。アサギが湯舟に浸かっていた。

……自分に全く気配を感じさせずに湯にまで浸かって見せた母に、シオンは戦慄しながらアサギを睨む。

「なに、自然に入ってやがるのさ！ 今は俺が入ってるだろ！？」

「たまにはいいじゃない♪ ほら、家族水入らずって言うし♪」

「こう言った時に使う言葉じゃない！」

シオンは頭を抱えて、アサギに叫ぶ。

だが、アサギは意にも解さず湯舟に浸かり続ける。

……そんなアサギにシオンは説得は無理だと悟った。  
こうなっては、梃子<sup>てし</sup>でも風呂から出まい。

ハアと、嘆息してシオンは再び肩まで湯舟に身体を沈めた。

「……まったくもう。母さんは……」

「ふふ♪」

呆れたように言うシオンに、アサギは嬉しそうに笑う。

そんな母を出来るだけ視界に納めないようにして、シオンは背を向けた。

そのままゆったりとした時間が流れる。

そして、シオンが唐突に口を開いた。

「……俺は、ここの敷居を二度と跨げないって思ってた」

ちやぷつと湯の音を聞きながら、シオンは呟く。

アサギは何も言って来ないが、シオンは苦笑しながら続けた。

「母さん。聞いたんだろ？　俺がタカ兄いが出ていった原因だって。

……ルシアの、事も」

「……………うん」

シオンの問いに、少しの沈黙を挟んでアサギの答えが返って来た。  
シオンは、どこか心を置いて来たような感覚を覚えながら続ける。

「しかも、母さんに何も言わずに2年間も、家を出てた。……本当、  
親不幸な息子だなんて我が事ながら思う。けど、さ」

そこで一度、言葉を切る。視線を落とすと、湯に自分の顔が映った。

眉を寄せたような顔の自分。

そんな顔に苦笑しようとして、失敗した。

「――なんで、母さんは俺を怒らないんだ？」

その言葉を、シオンは俯きながら紡いだ。

それを言うにはシオン自身、相当の覚悟が必要だったが。

その問いの後、暫くの沈黙が続く。

そして、アサギが立ち上がる音が響くと、自分へと近付いて来ている事をシオンは気付く。

やがて、アサギはシオンの真後ろに来ると――。

頭にポンッと手を置いた。

「シオン君、大きくなった、ね。背も、シオン君自身も」

「かあ、さん……？」

頭を撫でながら、アサギはシオンへと言葉を投げ掛ける。

その意図が分からずに、呆然とするシオンに。アサギは微笑みながら続ける。

「いろいろ、あったんだよね。シオン君の顔見たら分かった。……痛い事も、苦しい事も、――悲しい事も。いっぱい、あったんだよね？」

「……………」

シオンはその問いに答えず、ただ顔きのみを返す。

アサギは微笑みながら、シオンの頭を撫で続ける。

「でも、シオン君はちゃんと成長してて。ちゃんと、大きくなって帰って来てくれた。私はそれだけで充分なんだよ。だから、何も言わないって決めたの」

「……お、れは……」

ああ、こう言う時の事を言うんだな。

シオンはそう一人ごちる。

俯いて、アサギに決して顔を見せないままに。

その頬を、湯では無い。だが、暖かな滴が流れる。

そんなシオンに気付いているのだろう。でも、アサギは構わず頭を撫でる。

そして、一言のみをシオンへと呟いた。

「だから、これだけは言わせて。シオン君、お帰りなさい」

” 顔向け出来ない ” って言うのは。きっと。

「た、だいま。母さん」

シオンは、家に帰って来て。漸くその言葉を、アサギに言えた。

親子が浸かる湯舟に、優しい風が流れ、二人の髪を風いでいき。親子はしばし、優しい時間を過ごした。





夜風が気持ちいい。

シオンは、そう思いながら自室の前で寛いでいた。

綺麗な満月を見上げながらシオンは柱に身を預ける。

その隣では、珍しくイクスが待機形態から人型形態へと変化して、お茶を飲んでいた。

「……いい風だな」

【ああ。いい風だ】

今は秋。長湯していた事もあり、夜風が非常に気持ちいい。

だが、あまり当たり過ぎては風邪を引くだろうが。

暫く風に当たりながら、二人は無言のままゆったりとただ流れる時間と風を楽しむ。

ややあって、シオンが口を開いた。

「母さんが、さ。お帰りって。言ってくれたよ」

【……そうか】

「うん」

その会話の後、またもや沈黙。

風が流れ、その沈黙すらをも楽しみながら。二人は庭を眺め続ける。

そして、再び。シオンの口が言葉を紡いだ。

「俺は、ここに留まった方がいいのかな？」

【……何故、それを俺に聞く？】

問いに、イクスは悪戯めいた笑みを浮かべて。逆に問い返した。それに、シオンは憮然とする。

「なんとなくだよ。一応、俺の師匠だろうが」

【刀を持てば意味は無いがな】

「……オイ」

【冗談だ。今は、な】

タチの悪い冗談だと、シオンは呟いて。ふうと息を吐く。そして、何かを言おうとして――。

「――けど、貴方はきつと。それを選択しないのだろうか」

「【っ――！？】」

いきなり横合いから響いた声に、シオンとイクスは振り返る。そこに”彼”が居た。

幼きシオンと同じ姿の少年。  
神庭紫苑が。

「君は何も決着をつけてない。タカ兄いの事も。ストラの事も。……何より、僕の事も。だからここには留まれない。だろ？」

「何で、お前がここに居る！」

叫び、いつでもイクスを起動出来るように手に持つ。

そんなシオンに、紫苑はくすりと微笑んだ。

「僕は神庭紫苑だよ？　なら、僕がここに居て。何の不都合がある

のさ?」

「……ふざけてんなよ。言葉遊びは好きじゃねえんだ……!」

ぐっと息を飲み、紫苑を睨みつける。

その視線を意に介さず笑う紫苑に、シオンは憎々しげに歯を噛み締めた。

「……結局。お前はなんなんだ……?」

「だから、何度も言ってるいる通りさ。神庭紫苑だよ」

「ふざけんなって言ってるんだろ!？」 神庭シオンは俺だ!」

「うん。でも、よく見てよ」

言うなり、紫苑は一步を前に歩いて自分の身体を示すように両手を軽く広げて見せる。

その、五年前の自分に涼やかに見つめられて。シオンは我知らずに唾を飲み込んだ。

どこからどう見ても、彼の姿は五年前のシオンだった。それは、間違い無い。

今の自分とは背丈や、体格がかなり違うが。うり二つと言えなくも無い。

そんな紫苑に、シオンは五年前の。刀を振るっていた自分を思い出していた。

刀刃の後継。

その二つ名で呼ばれていた自分を。

刀刃の後継の名を持つ少年は、ただの少年であった。  
サクセサー・オブ・ブレイド・エッジ

外見もなにも、特に取り立てて言うほどのものではない。

だが、グノーシスにあって。僅か十歳にして、”最強”の名を冠した刀術士。

それが、かつてのシオンだった。

そして、今。目の前にその存在が居る。

……その時の自分と、変わらない姿で。

”誰が刀刃の後継か”と聞かれれば、それは確かにあいつの方だ……。

俺は、変わってしまった……。

刀すら、もう持たない――。

「そう」

胸中叫ぶシオンを嘲笑うかのように、紫苑はにっこりと笑うと。

広げた手を胸に当てて見せる。

そして、自慢気に言ってきた。

「僕が”刀刃の後継”さ。貴方は、何者でも無い。きっと刀を捨てた事で貴方はもう僕じゃなくなってしまったんだね」

「……お、前は……。俺の過去の亡霊だとしても言うつもりか……！」

身体が勝手に緊張している。戦闘体勢に入っている証拠であった。

そうやって睨み据え続けるシオンに。へえ、と気付いたように紫苑が笑って見せる。

「そうだね。それに近いよ。……でも、あんまり現実的じゃあ無いなあ……」

「現実的、だと？」

シオンはその単語を口に出して、思わず吹き出す。  
気が、狂いそうだった。

自制しろと、心の中で己に対して叫び。紫苑に対しては声に出して叫ぶ！

「現実的だど！？ どこをどうつついたら、そんな言葉が出て来やがる！ いきなり五年前の自分が目の前に現れて、そいつが俺を殺そうとしてる……！ どこに現実的なんて言葉が出て来るってんだ！」

「プロジェクトFの事は教えた筈だけど？」

「はン！ どうせ、お前にゃ当て嵌まらないんだろうが。——こいつは感だが。お前はソレとは無関係だろう？」

シオンの台詞に、紫苑は今度こそ感嘆の声を上げる。  
くすくすと笑いながらシオンを見た。

「へえ。よく分かったね。確かに、僕はプロジェクトFとは全く無関係の存在だよ」

「なら、なんだってんだ……！？」

「それを教える積もりはないよ。ただ、一つだけ言えるのは。今の貴方は誰にも望まれていない刀刃の後継だって事さ」

「っ————！？」

紫苑が紡いだ言葉は、まるで心臓に直接攻撃をくわえたように。  
シオンの身体を硬直させた。

ただ泣きわめく、と言った事まで含めれば数百以上の反論が頭に浮かぶ。

だが、硬直したまま何を思おうと、紫苑の顔を見つめる他。何も出来ない。

紫苑は、そんなシオンの様子に会心の揚げ足取りをしたというように、満足そうに笑っていた。

「最強の名を冠した。刀刃の後継。その欠点は何て事は無い。――誰も殺せなかった”。それだけに尽きる。何せ、刀を捨てた事件でさえも。貴方はギリギリで”誰も殺してなんかいない”」

「お、まえ……！」

心臓を鷲掴みにされたような痛みを胸に覚えて、ぐっと顔を歪める。

紫苑はくすりと笑うと自分の身体に手を当てた。

「だけど、僕は違う。いつでも人を殺せるし。殺す事に躊躇なんか、覚えない。だから、僕は”あの人”に望まれた存在なんだ。……”あの人”の為に僕は存在している」

「”あの人”？」

再び出た、その単語に。訝く思いシオンは聞き返すが、紫苑はにやりと笑ったまま笑顔を凍らせて答え無い。

「”あの人”は”あの人”さ。一人しかいない」

「……………」

「こんな所かな。じゃあね。……これ以上家に居ると、母さんに見付かりそうだから――」

「っ――！ 待てっ！」

凍りついていたシオンは弾かれたように、紫苑へと飛び出す！  
だが、突き出した左手が掠める瞬間、紫苑の姿がふっと消えた。

「空間？ いや、次元転移！？ こんな一瞬で……？」

短い舌打ちと同時にシオンは辺りを見渡す。

神庭家の一角は、いつもの静けさを取り戻していた。

シオンは肩を落として息を吐く。右手で額を押さえて、嘆息した。

「なんにしても、だ」

ぐっと息を飲むと顔を上げる。そして、独りごちた。

「今までの相手とは、ちょっとばかり勝手が違うみたいだ、な……」

おそらくは、そう遠くない対決の予感に。シオンは拳を握りしめる。

やがて、顔に笑みが浮かんだ。

「紫苑。——誰に喧嘩売ったか教えてやるよ」

それは、シオンらしい。在るがままのシオンの笑み。もう迷いは無い。アレと戦う事にいかほども。

後は——。

勝っただけだ。

そう、心の中だけで呟くと。シオンは自室に戻った。

こうして波乱に富んだ帰郷一日目が終わる。

それぞれの思いを、抱えたままに。

夜は更けていった。

(第四十七話に続く)



ぱらりやぱらりやぱらりや〜♪

ア

「今日も今日とて、アリサ道場〜♪」

す

「皆さん、お久しぶりです。もはや月1となったアリサ道場です♪」

ア

「いつもの自己紹介は――。まあ、いいわね。今回は必要無し！」

タ i n な

「まあ。今更ですからな……」

す

「あ、タカト君。まだ戻れて無いんだ？」

タ i n な

「しーちゃんと同じく、行ける所まで行くと、作者が……」

ア

「……アンタも大変ね」

タ i n な

「はあ……」

ア

「さて、では今回のゲストよ♪ いらっしや〜い♪」

慎

「ども。魔法少女リリカルなのはAnother Swordから。



主人公の夜十神慎吾です。よろしく！」

す

「慎吾君は、どちらかと言うとシオン君的なキャラかな？」

ア

「似たような系譜だと、昶とかいるわね〜」

タ i n な

「そうですね。さて、レン先輩？ 先程から何を黙っているの…  
…？」

レ

「……トウヤの野郎はどこだ」

ア

「トウヤ？ あのエロ魔神なら『あちらにエロの風が吹いている！』  
とか言って向こうに消えたわよ？」

レ

「ちちい！ 逃げられたか……！」

タ i n な

「兄者のこう言った時の危機回避能力はシオンより上ですからな」  
す

「あれ？ でもシオン君は危機を回避出来て無いよね？」

慎

「そうなんですか？ 具体的には？」

ア

「川に送られては2秒で帰って来る技能の保有者よ？」

慎

「……それだけで奴の苦勞が滲み出ますね」

タ i n な

「いや、それがカナンも含めた危機回避能力なのです」  
す

「え……？」

ア

「川に送られてるのに？」

タ i n な

「ええ。川から帰って来た後は誰も攻撃を加えませんか。基本的には一発かませば皆、気が済みますしな」

ア

「……成る程、ね……。ふふ、祐希奈。私達ってば、まだまだ甘かったみたいね……。？」

シ

（て、ちよっとちよっとちよっと！？ 何、タカ兄いの戯言なんか信じてんですか！）

「あの、アリサちゃん？ 幽霊なシオン君が、何かを言ってるようだけど……。？」

ア

「聞こえ無いわ！ だって幽霊だから！」

シ

（ウオオオオオ——————イツ！？）

タ i n な

「まあ、こうなった以上諦めろ。そう言えば未来は……。？ ついでに本体のしーちゃんも」

ア

「今は、L Vで絵本を読んで貰ったり。妹や幼なじみに弄られたりしてるから今回はお休みよ♪」

慎

「……む、むごい……」

レ

「ヘタレ達の事より早く終わらせてくれ。……。俺は一刻も早くトウヤとお話ししなきゃいけないんだ……。！」

ア

「切れてるわねっ」

す

「なのランで何かあったのかな……?」

タinな

「まあ。それは後のお楽しみと言う事で。では、本日のおさらい一言コーナー。夜十神慎吾。頼む」

慎

「で!?! ゲストが言うってのは聞いてたけど、マジなのか……。ん……。それじゃあ。『エロ暴走は大概に』で」

ア

「当たり引いたからヘタレポイント1ね?」

慎

「はい!?! ちょっと! 言わせといてそれは無いでしょ!?! ええい。そこに座りなさい! 今から説教します!」

~~~~~1時間後~~~~~

ア

「……で?」

慎

「いや、あの。その……。あまり暴虐的な事はよく無いと……」

ア

「……で?」

慎

「そ、その。だから……。てか、なんで俺が説教されてんだ!?! しかも伝説の『……で?』説教!」

ア

「……で?」

慎

「ぐふっ! いや、今のを流されるの。かなり辛……!」

ア

「……で？」

慎

「……………」

— ぱたっ —

タ i n な

「むう。おそろるべし、ですな気絶しましたか」

ア

「ふう。楽しかったわ〜♪」

す

「アリサちゃん。お疲れ様〜」

レ

「成る程……。説教の勉強になるな」

タ i n な

「さて、では。今回はここまで。いつに無く平和に終わった回だったが、楽しんでいただけたなら幸いだ。いつも読んでいただけて作者も感謝している。本当に皆、ありがとう」

ア

「そして、蒼天の騎士さん。夜十神慎吾の召喚ありがとうね♪ 若干精神に異常をきたすダメージを受けたみたいだけど。すぐに復活するわ」

レ

「……断言するのか」

ア

「多分♪」

レ

「変なオチがついた!？」

タ i n な

「ではでは、皆さん」

一同

『また次回くく♪』

慎

「ま、まだまだ。俺は……！」

ア

「……で？」

慎

「かはっ！」

一幕一

第四十六話「帰郷」 （後編2） （後書き）

「夜の邂逅から一日。シオンは現れた紫苑への対抗策を練り始める」
「そして、やはり行き着くのは選択。刀を再び手にするのかどうか
と言う選択だった」

「過ちを恐れ、しかし振るう事を恐れない少年は葛藤する」

「だが、時は待たない」

「紫苑が決着をつける為に、ついに動き出す。そして、彼女が――」

「次回、第四十七話。

『刀刃の後継』」

「真夜中の懐かしき母校で、少年の嘆きの咆哮が響く」

第四十七話「刀刃の後継」 (前編) (前書き)

「叫んでいた」

「叫んで、いた」

「叫んでいたんだ!」

「許せなくて、どうしようも無く許せなくて!」

「……だって、許せる訳が、無い」

「奪ったのは、誰だ?」

「傷つけたのは、誰だ?」

「なにかもを、壊してしまったのは誰だ!?」

「そんなの、決まっている」

「……だから、許せる筈が無い」

「許せる筈が無いんだ」

「俺を許せる筈が」

「魔法少女リリカルなのはS t S, E X。始まります」

第四十七話「刀刃の後継」(前編)

朝、5時。

まだ、日も上らぬ内の出雲市内を軽快に駆けていく影があった。

神庭シオンである。

例の如くタイヤにおもりを乗つけて、アウトフレイムと化したイクスを乗せたまま街を走り抜ける。

その速度は全力疾走に近い。彼等の修練にマラソンと言う概念はそもそも無いのだから。

一時間も走り、やがて神庭家に戻ると。次は庭先に出る。そこに用意してあるのは、先端が尖った三角錐の太い針であった。シオンはその周りに剣山を配置していく。

剣山を置き終わると、おもむろに針へと人差し指を置き。ひゅっと、口から鋭い呼気が発せられたと同時にシオンの身体が、上下逆さまに吊り上がる。

針に置いた人差し指を基点に逆立ちしたのだ。

よく見れば、人差し指が淡く光っている。

その輝きは、まごうこと無き魔力の光であった。止めとばかりにイクスがシオンの爪先に乗る。

——シオンの身体が僅かに揺れた。

【……落ちたら死ぬぞ】

「ぐ……っ！」

イクスのぼつりとした眩きにシオンは呻き一つで耐えた。
揺れが納まり、安定する。

【このままの状態で1時間だ。いいな？】
「おうっ……！」

答えを返しながら、シオンはただ指先に魔力を集中させる。

この修練は、主に魔力制御の為のものであった。

シオンはただでさえ、魔力制御が甘い。タカトやトウヤとは比べられない程に、だ。

属性変化系魔法である神覇ノ太刀、奥義を精霊の力を借りねば発動出来ないのは偏ひしえにこれに問題があるのだ。

十分程も、そのまま逆立ちでいると。シオンの身体から汗が吹き出し始めた。

下手に動くよりも、持続する事の方が難しい修練がある。

シオンが今行っているのはまさに、それであった。

ぽたぽたと庭に落ちて行く汗。だが、シオンはどれほど集中しているのか。一切、それに構わなかった。

その視線は、ただただ魔力を放出する人差し指にのみ集中し続ける。

この修練で最も大事なものは、魔力放出の量であった。

多過ぎれば、魔力はあつと言う間に枯渇する。もしくは、針が壊れて落下する。

少な過ぎれば、身体は支えられず。剣山に真っ逆さまと言う仕様であった。

つまり。魔力放出を適切に、一定の量で長時間持続する必要があるのだ。

これが、非常に難しい。

シオンはそのまま、1時間程、逆立ちしたままの姿勢を持続し続け。

時間を確認すると、イクスがフムと頷いた。

【よし、1時間だ。……が、まだ持ちそうだな。後三十分追加だ】
「ぐ……っ！」

イクスの台詞に、漸く終わりだと思っていたシオンが、追加された時間に呻いた。

終わりだと思っていた所から更に時間を増やされると言うのは、想像以上に堪えるものである。
終わりだと安心し、一度落ちた集中力を。もう一度、更に振り絞らなければならないからだ。

呻き、ぐらぐら揺れ始めたシオンの身体だが。
どうにか、落下を堪える。

やがて、三十分経つと。漸くイクスがシオンの足から下りた。

【よし。いいぞ、シオン】
「く……っ。ふうっ！」

一発！一

イクスの声に、漸く終わりだと悟り。シオンが指先で一気に魔力を炸裂させる。

すると、シオンの身体が空高くに舞い上がった。

そのまま剣山を避けて庭に着地する。
だが、立っただけで疲れ無いらに疲労したか。庭先にばかりと座り込んだ。

「つう……。久しぶりにやったけど。相変わらずきついなコレ……」

【針も剣山も向こうでは用意出来なんだから。この修練こそは、率先してやりたかったのだが……】

淡々とイクスは答え、シオンはそれに顔をしかめた。元々じっとしているような修練は、シオンは得意では無い。

ただでさえ、魔力制御には自信が無いのだから。

まあ、イクスもそれを考えて。この修練をさせている訳だが。

「……さて、と。どうする？ まだ修練やるか？」

【無論、と言いたい所だが。後、三十分もすれば朝食だな。続きは後にしよう】

「オーライ」

イクスの返事に、シオンは軽く答えて立ち上がり、自室へと向かう。

朝食を食べるにしても、まず汗を流しておこうと思ったのだ。

汗でべたついた服のままと言うのも気持ち悪い。

その為にも風呂に行く前に、着替えを取りに行こうとして――。

「……ん？」

自室へと歩くシオンが、ふと何かに気付き立ち止まる。
部屋へと向かう先に人影を見付けたからだ。

その人物は――。

「なのは先生？」

「ふえっ!？」

呼び掛けてみると、その人物。高町なのはは、飛び上がらんばかりに驚く。

慌てて、シオンへと振り返った。

「し、シオン君……! お、おはよう」

「はあ。おはようございます。……何してんすか？」

えらく慌てるなのはに、シオンは疑問符を浮かべる。
何を、そんなに慌てる事があると言うのか。

それに、なのはが今見ていた部屋の襖は――。

「? タカ兄いの部屋に何か用でも？」

「え、えっと。そう言った訳じゃ無いんだけど。……少し、気にな
って」

なのはにしては珍しくも小声での言葉である。

それに、鈍感極まるシオンは? マークを貼付けたまま。今度は部屋へと視線を向けた。

タカトの部屋。

シオンも結構入る事が多かった部屋である。

それには、まあ。ちよつとした理由がある訳だが。

しばし、部屋を見て。シオンはフムと頷くと、なのはへと視線を戻した。

「どうせだし。入ります?」

「ふえ!? で、でも人の部屋に勝手に入るのはあまり――」

「2年も放ってある部屋ですし、問題無いでしょ。掃除とかで母さんやらが入ってるだろうし。――どうしますか? なのは先生に任せますよ?」

悪戯めいた笑いでの問いに、しばし、なのはは宙に視線を巡らせる。

あゝやら、うゝやら唸りに唸り。

やがてコクンと頷いた。

そんな、なのはにシオンは苦笑する。

「んじゃ、入りましょう。――あまり、驚かないで下さいね」
「え?」

台詞の後半部分に、思わず、問い返す。

それには何も答えず。シオンは襖を開ける。

そして、”それ”が現れた。

本。

本が、ある。

だが、ただ本がある訳では無い。

開けられた、シオンの異母兄。タカトの部屋を見て。なのはがポカンと口を開いた。

シオンは苦笑する。

そして、”本”を見上げた。

本の、山を。

タカトの部屋は、まさに本だらけであったのだ。

と、言っても無造作に本が置いてある訳では無い。

ちゃんと、本棚に綺麗に整頓され。分類ごとに分けられてさえいる。

下手な図書館よりも綺麗に整理されているだろう。

だが、問題は”量”であった。

何せ、シオンの部屋より広い筈の部屋なのに、遥かに狭く感じる程に本棚が乱立していたのだから。

ここは相変わらずだなあと、呆れたように笑いながらシオンはタカトの部屋に踏み入った。

なのも続き。周りを見回しながら入って来る。

「タカ兄いは、家事の他に一つだけ趣味みたいなものがありました。それがこれです」

「えっと、本好きって事かな？」

「本人は乱読派とか言っていました」

肩を竦めて、シオンはそう、なのには言う。

世に、彼のような人間を蔵書狂と呼ぶ。
ビフリオ・マニア

タカト自身に自覚は無いが、彼は酷い本の収集家であったのだ。しかも、本であるならば基本なんでも楽しめると言う人間でもある。

それについて、タカトいわく。

『本の内容はとにかく、本の種類に貴賤は無い』

そう、断言するのだからタチが悪い。

「ちなみに、俺が世話になってたコーナーはそっちです」
「……そ、そうなんだ……」

言いながらシオンが指差す方向に目を向けて、なのはは苦笑した。そこにはこれでもかと漫画の単行本が収められていたのだから。シオンの部屋に漫画が無かった理由がここにある。つまり、タカトの部屋に山とあるので置く必要が無かったのだ。

タカトは本当に、本に貴賤をつけなかった。
学術書、技術書、民謡、神話、漫画、etc、etc……。

単に節操無しなだけなのか。個人で持つ蔵書量としてはかなりの量がある。

何せ、ここに置いてあるものでさえ。一部に過ぎない。

実は神庭家には地下室があり。そこにはこれに数倍する本の量があったりする。

「……やっぱり。驚きました？」

「う、うん。あ、でも。ちょっと納得かも……」

そう言い。なのはが思い出したのは、幼なじみであるユーノの事であった。

ユーノはタカトの事を友達と言っていたが。

それは、こういう共通点があったのだろう。

実際、タカトはユーノ家に居候中。酒を酌み交わしながら、ユーノの蔵書について朝まで熱く語り合った事があったりする。

「……よくここで、本をぼけっと読んでましたよ」

シオンは笑いながら、部屋に一つだけ設えてある机と椅子を見る。家事をしている時と、修練の時。そして、仕事の時以外だと。タカトはそこに座り、本を読み耽っていたものである。

……ルシアからは、しょっちゅう無理矢理遊びに連れ出されていたようでもあるが。

懐かし気に、そして寂し気に笑うシオンに、なのは少しでも表情を曇らせた。

トウヤの言葉を信じるならば、タカトの真実をシオンは知らない。

『幸せ』と言う感情を喪失ってしまっていると言う真実を。こんなに、タカトの事を想っている、シオンが。

それは何故か、とても悲しい事だと。なのはは思った。……理不尽な事だと、そう思った。

だが、口にしてしまいそうになる。それを、なのはは必死にしまい込む。

今、シオンに知らせるべきじゃない。そう思ったから。

「シオン君は――」
「はい？」

なのはの声に、シオンは振り返る。

きょとんと自分を見るシオンに、なのははくすりと笑った。

タカト君の事が、本当に好きなんだね。

そう言おうとして。でも、止める。
多分。彼は否定しか、しないだろうから。
だから、別の言葉を紡いだ。

「――もし、お姉さんがもう一人出来たらどう思うかな？」

「なんすか、それ。ユウオ姉さんの事っすか？」

「違うよ」

「なら、どう言う……？」

「内緒♪」

冗談めかすように、そう言い。

唇に、立てた人差し指を当てて、なのははウィンクする。
そのまま、タカトの部屋を出た。

取り残された形となったシオンは暫く啞然とする。

どう言う意味だろうと首を傾げて考えるも、鈍感なシオンに答え
は当然出せる筈もない。

取り敢えず、なのはを追い掛けて部屋を出て、再び聞く。

「なのは先生！ さっきのどう意味なんすか？」

「内緒、内緒……♪」

「気になりますって！ 教えて下さいよ！」

追いかけてこのように、二人は朝の神庭家を駆ける。
そうして、再び主が居なくなった部屋に静寂が戻った。



なのはとのやり取りから1時間後。

シオンの姿は神庭家にある道場にあった。

その後、皆で朝食を摂り。食休みを挟んで、ここに来たのだ。

朝食では……。スバル達が相変わらざる健啖っぷりを存分に発揮して、アサギを存分に驚かせていた。

それを思い出し、苦笑した後。シオンは道場の真ん中で起動したイクスを正眼に構える。

頭に浮かべるは、昨日突如として現れた5年前の自分と同じ存在。紫苑であった。

おとつい戦った感覚を思い出しながら、頭の中でシュミレーションを行う。

ノーマルでのパワーを活かした攻撃。

ブレイズの速度で翻弄し、放つ攻撃。

ウィズダム of 突撃、砲撃を持つての攻撃。

カリバーの奥義、合神剣技を主軸にした攻撃。

それらを次々と思い浮かべて、得られた結果は。

——全て、敗北だった。

パワー任せの剣は、刀であっさり斬り流され。

速度任せの双刃は、ことごとく迎撃され。

突撃、砲撃は零落零無で無効化。あるいはあっさり避けられ。

奥義は精霊召喚の際に生じる隙を突かれて、敗北した。

何せ、5年前の自分である。イメージはこれ以上無い程に克明に再現され——。

そして、完膚無きまでに敗北した。

あまりの結果に、シオンは落胆を通り越して呆れて苦笑した程である。

……奴は、遠からず必ず現れる。

それは、もはや確信。

自分との決着をつける為に。

自分を確立する為に。

唯一の自分である為に！

必ず、あいつは俺の前に現れる。

だが、だが――。

「――どうしようも無く勝てない、か……」

【どうする気だ】

シオンのシュミレーションをイクスも見ただろう。

いつもの淡々とした声に、僅かな震えがあった。

それにシオンは再び笑う。

正攻法では、どうあがいても勝てない。

それだけは理解した。

ならば。

「……」それ以外の方法で勝つだけだ」

にっと口端を歪めてシオンは笑う。
あまりにも散々な敗北しか脳裏に浮かばなかったくせに、その顔には何故か、自信が満ち溢れていた。

「俺は、あいつに勝てる要素がどこにも無い。あいつの力を誰よりも知ってるからな。けど、それは同時に誰よりもあいつの弱点を知っている事に他なら無いんだよ。……何せ、”俺”だ」

言うなり、シオンはイクスを待機状態に戻す。

そして、道場から足早に出た。

確か、トウヤ兄いが”あれ”を持ってた筈だけど――。

そう思い、母屋へと戻ると。心の中だけでトウヤに謝りつつ、トウヤの部屋に押し入る。

トウヤの部屋は、とても綺麗だった。

恐らく兄弟の中では、1番綺麗にしてあるだろう。

……ちなみにワースト1はルシア。次点はアサギだったりするが。

部屋に入るなり、シオンは迷わず筆筒を漁る。

綺麗に整頓され、畳まれた冬着に。いいの持ってたんなあと苦笑。

いつかパクったろうと思いつながら、今は関係無いので置いておく。

ごそごそと暫く筆筒を漁ると、”それ”が出て来た。

手に取り、シオンの顔が綻ぶ。

「まず1つ」

【”それ”がお前の切り札か？】

シオンの肩に座り、イクスが言って来る。
そちらに視線を移してシオンは笑った。

「あいつ専用の、な。他の奴には意味無いモンだけど。あいつだけには通じる」

【だが、それだけでは……】

「分かってる。言ったら？ ” 1つ ” ってよ」

ぐっと” それ ” を握りながらシオンは笑う。
そして、立ち上がろうとして。

「あ、いたいた。シオン？」

「アンタ、何してんの？」

シオンとイクス以外の声が響いた。
それに、シオンは振り返る。

開かれた襖の前に、スバル、ティアナ、エリオ、キャロが居た。
シオンを見ながら怪訝そうな顔をしている。
そんな四人にシオンは笑って見せた。

「別になんも。……で、どうかしたのか？」

「あ、うん。八神艦長達が海鳴市に行くらしいんだけど。シオンもどうかなくて」

シオンの問いに、スバルが笑顔で答えた。

海鳴市。

確か、なのは達の故郷だったか。

タカトと実質、最初に戦った因縁の場所でもある。

そういや、士郎さん。元気かな……。

アースラを下りると決めた時に、雨宿りで立ち寄った喫茶店のマスターの顔をシオンは思い出す。

優しく、父親と言うのは。こんな人なんだなあと考えた人だ。

士郎との会話を思い出し、シオンは思わず笑う。

……ちなみに彼が、なのはの父だと言う事をシオンはまだ知らなかったりする。

偶然とは奇なり、とはよく言ったものである。

会いたいと思う。

だが――。

「悪い。今回やめとくわ」

「？　そう？　何か用事とかあるの？」

苦笑しながら断るシオンに、スバルがきょとんと、問い返す。

シオンとしても、海鳴市に行くのは吝おしゆかでは無い。

だが、今はそうも行かなかった。

紫苑がいつ来るのか、分からないのだ。

スバルや、なのは達には。昨日、紫苑が告げた言葉も。ましてや、

紫苑が訪れた事すらも伝えてはいない。

あいつと決着をつけるのは、俺だけでいい。

そう、シオンは思っていた。

……それがエゴだと。

単なる我が儘に過ぎないと、シオンも分かっている。
だが、こればかりは譲れ無かった。

だから、誰にも紫苑の事を伝え無いと決めたのだ。

大概、我が儘が過ぎるよなあ……。

苦笑する。

スバル達に知られると、まず間違い無く”お話し”行きだろう。

それでも、誰も紫苑と自分の戦いに巻き込む積もりは無かった。

それに――。

「ま、ゆっくりして来いよ。……そういや、お前達のデバイス。メンテが終わるの、明日だっけ？」

「……そうね。明日中には、クロス・ミラージュも返って来るわ」

何気無い風を装って問うたシオンに、ティアナが頷く。

現在、アースラメンバーらのデバイスや固有武装は『月夜』に預け、フル・メンテの真っ最中であつたのだ。

時空管理局本局での決戦。そして地球までの逃避行で、皆のデバイスや固有武装は、かなりのダメージを負っていた。

ロスト・ウェポンにするにしてみないにしても。どちらにせよ、修理しなければ話しになら無い状況だったのだ。

その為のフル・メンテであり、アースラメンバーは誰もデバイスも固有武装も持っていない。

だから。

……一両日中に来る可能性大、か。

シオン以外にまともな戦力が無い状況。

紫苑がそれを見逃すとも思え無い。

おそらく、今日中には来る。それは、もはや確信であった。

「？ シオン兄さん。そんな事聞いて、どうしたんですか？」

「ちっと、気になったただけだって。今、ストラの襲撃があったら大変だなく。てな？」

エリオの問いも、はぐらかすようにしてシオンは笑う。

紫苑の名は出さないようにして、少しだけ関連性がある情報を混ぜておく。

下手な嘘より、こう言った嘘の方が安全だろう。

それでも、四人はジトーと、シオンを見続ける。

キャロでさえ、微妙に疑ってるような顔なのだ。

……こいつ達、俺専用の直感でもあるんじゃない無かろうかと。

内心シオンは苦笑する。

これ以上話していてボロを出すのもバカらしいので、とつと部屋を出て、四人から離れる事にした。

「んじゃ、楽しんで来いよ——。俺は部屋で、だらだらしてるわ」
「あ、はい」

ポンとキャロの頭に手を乗せてシオンは笑い。トウヤの部屋を足早に出る。

取り敢えず、自分の部屋に戻る事にした。

……切り札2は、準備とかもいらねえしな。

強いて言うならば、後で道場で試して見るだけである。

取り敢えず、悟られる事だけは避ける為にシオンは足早に自室に向かった。

だが……。

「シオン……」

「……あいつ、また何か隠してるわね……」

「はい。僕もそう思います」

「私입니다!」

「シオン。意外に嘘、分かりやすいよね……。ティア、どうしようか?」

「決まってるわ。なのはさん達には悪いけど、海鳴市行きは中止。あの馬鹿を張るわよ!」

「うん!」

「「はい!」」

四人が去って行くシオンを見ながら、頷き合う。

自分が思っている以上に、四人には自分の事を知られている事に

気付いていないシオンはそんな会話に当然気付ける筈も無い。

かくて、神庭家には。アサギ、シオン。そして、フォワード四人が残る事となった。



トウヤの部屋から目的の物を手に入れた後。
シオンは本当に部屋に籠った。

部屋から出たのは昼食の時くらいか。
スバル達が海鳴市に行かず、まだ家に居た時には驚いたものだが。
昼食を終えると、食休みを挟み。腹ごなしと”見せ掛けて”。
道場で切り札2を試してみる事にした。

スバル達も道場に付いて来て、シオンの動きを見ていたが。何を
やってるか分からなかったのだろう。

キョトンとシオンの動きを見ているだけだった。
暫くそうやって道場で身体を動かした後、スバルにシオンは聞い
てみる。

「……スバル。今のような動き。見た事あるか？」

「ううん……。無いよ。て、言うか今の、なんなの……？」

「そいつは内緒だ。……ありがとな」

他にも、ティアナやエリオ、キャロにも聞くが、首を横に振る。
それに、シオンは口端を歪めて笑った。

ミッドでも、否。

”一般の魔導士戦闘”でも、まずお目に掛かれ無いものだ。これで確信が持てた。

当然である。シオンも、これをまともに使っている人間なぞ、”タカト以外”には見た事も無い。

奴相手の切り札2に十分になり得る。

それを確認すると、それだけを行い続けるのも疑惑を持たれかね無いので、軽く四人と模擬刀等で手合わせする。

実際に、スバル相手に手合わせの最中。試して見るが、これが面白いように決まった。

結果は上々、と。

シオンは切り札2の仕上がり満足すると、修練を切り上げる事にする。

時間を確認すると、時計はお昼時を過ぎて夕方に差し掛かろうとしている所であった。

「うっし。んじゃ、ここまでにしとくか。風呂、お前達が先使うだろう?」

「あ、うん。いいの? 先使わせて貰って?」

もう秋とは言え、身体を動かせば汗も当然出る。

シオンも含めて、全員汗だくであった。

スバルの問いに、シオンは苦笑する。

「流石に女の子を差し置いて、俺達が先に入るのはアカンだろ。俺は、部屋にでも居るし。風呂上がったら呼んでくれ」

「うん、分かった。それじゃあ、後で呼ぶね？」
「おう」

スバル達に頷くと、シオンはそのまま道場を出た。
自室に戻ると、すぐにイクスに呼び掛ける。

「……で、どうよ。イクス？」

【確かに、奴にも通じるだろう。一回きりならな……】

ふむとイクスも頷く。だが、その表情はまだ晴れない。
つい、とシオンをイクスは見上げた。

【……だが、この二つの切り札はどちらも奇襲性のものだ。これだけでは、まだ勝ち目は薄いぞ？】

「……つつてもな。俺が考えつくのはこれしか無かったし……」

イクスの言葉に、シオンもそれは分かっているのだろう。

痛い所を突かれたため息を吐く。そんなシオンに、イクスは少しだけ目を伏せ。

やがて意を決すると顔を上げた。

真っ直ぐにシオンを見る。

【……後、一つだけ。切り札は用意出来る】

「お、本当か？ 一体どんな――」

【”刀を抜け”】

その言葉に、シオンが笑顔のままで凍り付く。

それを言われるとは思わ無かったのだろう。

……よりにもよって、イクスに。
固まってしまったシオンをイクスは痛まし気に見ながら。
しかし。言葉を連ねていく。

【……奴も今更、お前が刀を握るなんて思うまい。これは、十分に切り札に――】

「――嫌だ」

シオンは最後までイクスに言わせなかった。
きっぱりと拒絶を告げる。

一瞬だけ、イクスは口をつぐむ。だが、まだ止まらない。

【シオン。お前の気持ちは分からないでも無い。だが――】

「嫌だって言ってるだろ！」

【俺ではお前を活かせきれ無いんだ！】

堪らなくなり、叫ぶシオンにイクスも怒声を上げる。

二人は、真っ向から睨み合う形となった。

【いい加減に気付け！ お前の本質は刀だ！ この五年で神覇ノ太刀を剣式に変えてはみた……！ だが、やはり神覇ノ太刀は――。お前は！ 刀を使う者なんだ。だから！】

「だから何だってんだ……っ！ 俺の相棒はお前だろうが！ 俺の剣はお前だろ！？ お前を捨てて、刀に乗り換えろってか……！？」

シオンはイクスの言葉を拒絶し続ける。

そんな事を言って欲しくなんて無かった。

他でも無い、イクスだけには。

この五年を共に歩いた、師であり、友であり、相棒である。イクスだけには。

なのに――！

【それが――。それでお前が正しい成長を遂げられるなら。俺は、お前には必要無い……！】

「っ――！ 話しにならねえ！」

シオンはそう叫ぶなり、立ち上がると、部屋の襖へと向かう。イクスはそれに慌てて、追い駆けようとして。

「付いて来んな！」

【っ……！ シオン！】

振り向かないまま叫んだ声に動きを留められた。

再び自分の名を叫ぶイクスに、シオンは首を横に振る。

「お前には、……お前にだけは、そんな事言って欲しくなんて無かったのに――」

【シオン……】

「ッ……！」

もう、ここでイクスと話していたく無かった。

シオンは襖を開け放つと、真っ直ぐに玄関へと駆ける。

途中で様子を見に来たのだろう。

エリオとすれ違っても、それを無視して。玄関に向かう。

靴を履いて、家から飛び出す。

とにかく走りたい。

そう思い。家を出てからも、走り続けた。

イクスも、何もかもを置き去りにして。

ただ、走り続けた。



「——っ！ ——っ！」

家を出てからも全力で走り続け、シオンは川の土手で漸く止まる。
一つ、大きく息を吐くだけで呼吸を整えると、土手の草原に寝転がる。

言いようの無い苛立ちは、まだシオンの中で燻^{くすぶ}り続けていた。

「くそ……！ なんだよ。イクスの奴……！」

苛立ちのままに言葉を吐き出す。

シオンとて分かっている。

刀の問題とは、紫苑の事が無くても。

いつか、必ず向き合わねばならない事だったと言うことくらいには。

だが、だからと言って『はい、そうですか』
と、頷ける話しても無い。

だって、それはイクスと歩いたこの五年を否定する事になるのだから。

なのに、当のイクスからあんな事を言われたのだ。

シオンの怒りも当然と言える。

裏切られたような、そんな怒りがシオンの中に渦巻いていた。

「第一、俺が刀を捨ててどんくらい経ってると思ってたんだ……！五年だぞ！ 使い物になるわきゃ、無えだろうが……！」

次々と口に出る怒り。

誰に言って聞かせるでも無いそれをシオンは言い続け、やがてハアと大きくため息を吐いた。

腕で目元を隠して、ポツリと呟く。

「ばっか野郎が……」

――刀は抜かない。

シオンの中で、それは大前提であった。
ずっとずっと、決めた事。

イクスを継いだ時に自らに定めた事。

だって、もう。

”あんな目”で見られたく無い――。

あの事件での、自分を慕ってくれた幼なじみの少女。姫野みもりの恐怖に彩られた目を、シオンは思い出す。

それと、同時に苦笑した。

――なんだ、結局の所。それが全部じゃねえか。

そう、思いながら。

自分は怖いのだ。

刀で、人を斬る事よりも、また怖がられる事の方が。
あんな風に見られる事の方が！

……なんて、自分勝手な理由。

情けなくて、泣いてしまいそうだった。

だけど、だけどー。

「――シン君？」

「ッ……！？」

突如、響いた声に慌てて起き上がる。

上半身だけで振り返ると、土手の上に彼女がいた。

今、想っていた少女。

姫野みもりが。

みもりは、驚愕に固まるシオンに微笑むと土手を下りて来た。

「……ここ、いいですか？」

「……ん」

短い返事だけで、シオンは頷く。

それを確認して、みもりはシオンの横に体育座りで座った。

「どうしたんですか？ エリオ君が、シン君が飛び出したって騒い

でましたよ?」

「て——と。スバル達も?」

「はい。皆探してると思います」

しくった……。

盛大にため息を吐いて、シオンはそう思う。
もうごまかすのは不可能だろう。

あの、愛すべきお人よし達の事である。
何らかの手出しをして来る可能性が大であった。
ただでさえ、自分は紫苑との戦いの時に暴走に近い状態となっ
ている。

それを直に見ていた彼女達が、自分を放って置く事はまず有り得
無い。

そんな風に嘆息するシオンに、みもりはくすりと笑う。

「——みんな、良い人達ばかりですよね」

「良い人ってよりは、ありゃただのお節介だ」

ふて腐れたように、シオンはうそぶく。

みもりはもう一度微笑すると、シオンから視線を外して川に向け
る。

そして、ぽつりと呟いた。

「もう、自分を許してあげてもいいと思います」
「っ——」

その言葉に、シオンが息を飲む。

みもりへと視線を向けた。

彼女は構わない。シオンを見ないままに続ける。

「シン君は、ずっと、ずっと苦しんで来ましたよね。——人を傷付けた事をずっと」

「……………」

シオンは何も言えない。ただ、みもりを見続けるだけ。
そして、みもりも構わない。

続ける。

「私を助ける為に、シン君は人を傷付けて、……自分も、傷付けて。それ、なのに。私はシン君にひどい事をしました」

「——お前は何かしてねえだろ……」

呻くようにして、シオンは呟く。

だが、みもりは首を横に振った。

「シン君を、怖いって思っちゃいました」

「当たり前的事だろ」

幼なじみの少年が、目の前で人を斬ったのだ。

怖がらない人が居る訳が無い。

——みもりの、恐怖は至極当然の事だったのだ。

なのに、みもりは否定する。

「私は、私だけは。そんな風に思っちゃいけなかったんです」

「なんでだよ」

「だって、シン君が助けに来てくれた時。すごく嬉しかったんですから」

「ッー」

その言葉に、シオンが息を詰まらせる。

……嬉しかったと言う、みもりに。

みもりは、漸くシオンの方を向いた。

「シン君が来てくれた時、嬉しかったんです。……嬉しかったのに、シン君が怖いって思っちゃいました」

「……目の前で人が斬られたんだぞ？　嬉しかろうが、何だろうが怖いもんは怖いだろ」

「でも、助けてもらった私は。やっぱり、怖がっちゃいけなかったんだと思います」

それは違うと、シオンは思う。

みもりが気に病む事は何も無い。どう考えても、あれは自分が悪いのだ。

それなのに、みもりはそう言うのだ。

直接的には、言わないが。自分のせいだと。

自分が悪いのだと。

心の中でシオンは苦笑した。

自分が悪いと、互いに言い続ける自分達はなんて滑稽なんだろうと。

そう思った。

だから。

「――ならさ、お前も自分を許せよ」
「え……？」

突如として告げられた言葉に、みもりの目が丸くなる。
シオンはそんなみもりにニツと笑った。

「お前は、お前のせいで俺が刀を捨てたって思ってたんだろ？ それを許せて言ってるんだ」

「それは――。でも……」
「でももかしこも無えよ。……代わりに俺も、少しだけ自分を許すからよ」

自分を許す。……多分、これは綺麗ごとには過ぎない。
言葉でいくら言おうと、簡単に自分を許せる程。自分は出来た人間じゃない。

だけど。みもりにこんな思いを抱かせたままにしたくなかった。

……自分を許せ無いなんて、そんな事。納得出来なかった。

だから。

「刀を使うか、どうかはまだ分からない。――俺には、イクスがいるしな。でも、互いに許すのは別にいいだろ？」

「で、でも……！ シン君は五年間もフイにしたのに……！」

「それ言うならお前もだろ？　ずっと、あれこれ、世話してくれたんだ。同じようなもんだ」

「それは……！　私がシン君の世話をするのはそれが趣味ですから……」

「みもり」

シオンはただ名前を呼んでみもりに首を横に振る。

そして、みもりから顔を背け、川を見ながら続けた。

「——お前をお前自身が許してやれよ。俺を荷物にするような事はなくていいんだ」

「……でも。シン君……」

「俺もお前を許す。だから、お前も俺を許してくれ。そうしたら、俺も俺を少しは許せる気がするから」

「あ……」

笑って告げる言葉。

シオンはそれが嘘だと。

自分が自分を絶対に許せないと分かっているながら、それをつく。

……それで、みもりが自分を許せるなら。

そんな嘘もいいと思えたから。

だから。

「な？　みもり——」

そう言って、再び。みもりの方を向こうとして。

シオンの視界に映ったものは。

こちらを見つめる、みもりと――。

その、みもりを後ろから抱きしめるように手を広げる五年前の自分。

紫苑！

「――っ！ みもり！」

「え？ シンく――」

それ以上みもりは話せなかった。

紫苑に抱きしめられ、同時に口元をハンカチのようなもので塞がれる！

一瞬だけ、みもりの目が驚きに見開かれて。

だが、抵抗する暇も無く、意識を失い。四肢から力が抜けた。

菓をハンカチにでも染み込ませていたか。

「っ！ みもり！ 紫苑、てめえ……！」

「ハハハハハハ！ 大丈夫。寝てるだけだよ。――でも、それ以上近付くと、分かるよね？」

そう言っ、何処から取り出したか、みもりの首元に刀を押し当てる。

飛び出そうとした、シオンの動きが止まる。

キッと紫苑を睨みつけた。

「何のつもりだ……！」

「簡単だよ。貴方の周りには人が多いからね。僕としては邪魔は欲

しくないんだ。——みもりは、保険だよ。人質だね」

「っ——！ そんな事しなくても、俺は！」

「貴方はそれでも、貴方の周りはそうじゃないだろ？」

凶星を指されて、シオンが言葉を失う。

スバルやティアナは言うまでも無く。下手をすれば、トウヤが動く。

それを警戒したか。

黙り込んだシオンを満足そうに見て。紫苑は笑った。

「私立、秋尊^{あきたか}学園。中等部。知ってるよね？」

「……当たり前だ……！」

シオンのかったの母校である。

知らない筈が無かった。

シオンの返事に、紫苑は頷く。

「そこで待ってるよ。今日、決着をつけようじゃ無いか」

「っ……！」

やはり、今日中に決着をつけるつもりだったか。

シオンはぐっと息を飲み。

紫苑を睨む。

「……分かった。必ず行く。誰も連れて行かない。これでいいか……」

「……？」

「うん。十分だよ」

「なら、みもりを離せ！」

「それは、無理だよ。だって貴方以外への人質だからね」

クスクス笑うと、紫苑の周りがボウッと光る。

これは、昨日の時にも起きた現象。

つまり、転移魔法！

「必ず来てね。来なかった場合は――。分かるよね？ 殺すよ？」

「……てめえ……！」

ぎりっと歯が軋む音をたてる。

それでも、紫苑に飛び掛かれ無い。

みもりが人質に取られてる状況では下手に動け無いのだ。

ただ自分を睨む事しか出来ないシオンに紫苑はあからさまな嘲りの笑いを浮かべ、最後の言葉を紡いだ。

「じゃあ、また後でね」

そして、あっさりとその姿が消えた。みもりと、共に。

最後まで睨みつける事しか出来なかったシオンは、やがてぽつりと呟いた。

「……上等、じゃねえか……！」

拳が、肩が震える。

溢れそうな怒りで我を忘れそうになるのを、必死に自制しながら。紫苑が居た地点をずっと、シオンは睨み続けていた。

「俺の名を……！ 刀刃の後継の名を、思い出させてやるよ！ 紫

苑っ！」

夕日を映す川に、シオンの咆哮が響き渡った。
怒りと、悔しさを交えた叫び声が、どこまでも

切なく、切なく。

そして決着の予感を孕んで、響き渡った。

（中編に続く）

第四十七話「刀刃の後継」(前編)(後書き)

はい♪

急転直下でシリアスに一気に突っ込む♪

ども〜♪ テスタメントです♪

さあ、前話がオールでコメディだったのに対し、今話は初っ端から緊張感が漲っております♪

日常的な所まで、緊張感があるのが不思議(笑)
第四十七話(前編) 如何だったでしょうか♪

今話はテストメントノリノリな為(笑)
執筆速度が並では無く早いです(笑)
とりあえず三月までに第四十七話を全部書き終わる事を目標にしたいと思います♪

ではでは♪ 次回をお楽しみにです♪

第四十七話「刀刃の後継」(中編1)(前書き)

ども〜♪

テストメントです♪

ええ、三月中に第四十七話、更新を目指して頑張りました♪

——無理じゃあ！(笑)

どう考えても、後2部分も更新出来る気がしねえ……！？(汗)

うう……。何とか頑張って見ますが。

三月中に終わらなかった場合は、出来たら笑って許してやって下さい(汗)

では、中編1。どぞ〜♪

第四十七話「刀刃の後継」（中編1）

夜、シオンの部屋の前で。スバルとティアナは妙な居心地の悪さを感じながら。その背中をじっと、見ていた。

自室の中でごそごと動き回る。神庭シオンの背中を。

こちらに一切話し掛けようともせずに黙々と準備をするシオンに、二人は目を伏せ、先程の事を思い出していた。

夕方。

風呂から上がった後、慌てふためくエリオから、シオンが飛び出したと聞き。

すぐさま、スバル達は神庭家を出て、探しに行った。
朝のシオンの様子から、嫌な予感がしたのだ。

……だから、お隣りのみもりにも、連絡して探すのを手伝って貰って。

そして、シオンが出て行って一時間程のち。

その嫌な予感は的中する。

飛び出して行ったシオンがあっさりと帰って来たのだ。

……最悪の、ニュースと共に。

シオンが帰って来た事に安堵しつつ、何があったかを聞こうとして。

その前に、シオンが暗い瞳でぼりと言ってきた。

「みもりが拐われた」、と。

一瞬シオンが何を言ってるのか理解出来なかったが、徐々に理解して。スバル達は慌てて、シオンに詳しく話を聞こうとした。

だが、シオンはそれを容赦無く無視したのである。

ティアナがそれに、激怒しそうになったが。

それも、寸前で出来無くなった。

——シオンが、皆にまともな説明が出来ない程に怒っており、それを必死に自制している事が分かってしまったから。

だから、スバルもティアナも、キャロも。何も言えずにシオンの背中を見ている事しか出来なかった。

そう。その3人は何も言え無かった。

だが。

「……一人で行くんですか？」

誰もが口をつぐむ中で、唯一シオンへと問い掛ける存在が居た。

エリオである。

彼は、真っ直ぐにシオンを見据えながら問う。

シオンは大した反応を見せ無かったが、ちらりと横目でエリオを見遣る。

「ああ」

素っ気ない、しかし。意外にも冷静な声が頷きと共に響いた。すっと立ち上がる。

シオンは既にバリア・ジャケットを纏っていた。戦いは避けられない事を理解しているのだ。そんなシオンに、スバル達は顔を歪める。

シオンは静かにエリオへと視線を合わせた。

「みもりが人質に取られてる。俺一人で行かなきゃ。最悪、殺される。――それに、お前達はデバイスも無いしな」

「……でも、僕達だって何か出来るかも」

「そうやって、お前達のお守りをしろってか？　しかも奴相手に？」

シオンはあくまでも淡々と言う。

まるで、言い聞かせるように。

エリオはシオンの言葉に、ぐっと息を飲む。

そんなエリオにシオンは苦笑した。

「あいつは、『刀刃の後継』だった俺の力が使える。それが何でなのかは知らねえけど、な。……だが、これだけは言える。奴は俺より強い」

ふっと目を伏せて肩を竦める。

そのまま続きを告げた。

「そんな奴相手に、お前達にまで気を回せねえんだ」
「シオン兄さん……」

最後まで、シオンの言葉を聞いて。だが、エリオはまだ納得いかないと、シオンを睨む。

噛み締めるようにして、ゆっくりと聞いた。

「『刀刃の後継』っていうのは、誰なんです？ いや、なんなんですか？ つまり、昔のシオン兄さんがそう呼ばれていたって事ですか？ それが、何で今更——」

だんだんと語尾が強くなっている事をエリオは自覚する。

——それでも、問わずにはいられなかった。

エリオの問いを聞いて、シオンが目を細める。

しかし、答えてはくれなかった。

いや、少なくとも即答はせずに、エリオを見つめている。

答えられないんじゃないんだ。

エリオは——。否。ここに居る四人はシオンの表情を見て、それを悟った。

……同時に、答えてはくれない事も。

後ろ暗いような気分で、そう考えていると。

シオンは、こちらに。つまり、部屋の入口に歩いて来た。

問いに答えず、また四人の顔を見ないようにして、横を通り過ぎて部屋を出て行く。

——我慢出来なかった。

エリオはシオンの背中に振り返るなり、吠える！

「何も出来ない上に、何も知らないんじゃ、僕は、僕達は！ 本当に足手まといなままじゃ無いですか！」

吠えたその言葉に、ぴたり、と。シオンが足を止める。

エリオは真っ直ぐにシオンを睨み据えて更に叫ぶ。

「なんで、なにも話してくれないんですか……！ そんなに僕達が信用出来ないんですか！？」

「エリオ……」

叫んだエリオに、スバルがぼつりと名を呼ぶ。
それと共に、しばし沈黙が下りた。

エリオは、ずっとシオンの背中を睨み続ける。

言いたいことを全て言った訳では無い。

だが、後が続かなかった。

やがて、シオンが顔だけを四人に向けた。

「お前がさっき言ったとおり『今更』だよ。なんもかんも、今更の事だ……」

シオンは無表情だった。ただ、エリオを、スバル達を見据えている。

いつもは、どこか優しさを湛えた双眸に。今は、厳しいものが浮かんでいた。

「奴は今更、俺の前に現れた。奴は今更、俺を殺そうとしてる。俺は今更、この家に帰って来た。――俺は今更、迷ってる」

「……迷ってる？」

こちらは、エリオでは無くティアナだ。
が、怪訝そうに問い返した。
シオンは黙って頷く。

「いきなり現れた紫苑と俺。どちらが、本物の『刀刃の後継』なのか、な。……でも多分、奴のほうだろうな。本物の『刀刃の後継』は」

「シオン……？」

「俺は偽物だから、ただの『シオン』さ。タカ兄いを追っ掛けて、お前達と一緒に戦って。一人じゃ何にも出来ない。落ちこぼれの、何者でもない『シオン』、さ」

まるで、自嘲するような言葉。だが、シオンはそれを何故か自慢気に話す。

それで、良かったのだ、と言うように。

四人はそんなシオンに呆然となる。

シオンは苦笑した。

「大丈夫だよ」

そう言っ。シオンは、にやりと笑って見せた。

それは、あまりにもシオンらしい。当たり前前笑み。

スバル達がいつも知ってるシオンの顔だった。

その笑いのままに、シオンは続ける。

「みもりは必ず助ける。んで、お前らが知らない俺の事も、なんもかんもに決着をつけちまうさ。……イクス」

言い終わると同時に、シオンは自らの剣たる存在の名を呼ぶ。
イクスは、それに無言でシオンの前に現れた。

互いに真っ直ぐに見据える。

「……俺は、さっきの事を謝らない」

【……奇遇だな。俺もお前に謝るつもりは無い】

二人は互いに、そう告げる。と、同時に笑った。
シオンが手を差し出すと、イクスがそこに乗る。
またもや、互いにニツと笑った。

「行こうか」

【ああ】

どちらとも無く頷くと、シオンはさっさと歩き始めた。
そして、玄関に着くと。
ぽつりと、呟く。

そこに居た人物に。

「……母さん。ここに居る、みんなの事、頼めるか？」

「……うん。任せて♪」

アサギはシオンに、何も言って来ない。責める事もしなかった。
それで、許すつもりは無いと言う事である。
みもりを取り返して、帰って来る事。
それのみがアサギが求める事なのだから。

シオンはアサギに頷くと、足に靴のバリア・ジャケットを纏う。
玄関の引き戸を引いて、振り向かないままにぽつりと呟いた。

「必ず帰って来る。みもりと一緒に。だから……」

一息だけ、そこで止める。

そして、ゆっくりと言葉を紡いだ。

帰って来る為に。

「いって来ます」

家に残った、みんなに向けてそう言い。

シオンは返事を待たずに、家を出た。

そのまま、歩いて向かう。

私立秋尊学園。

かつての母校。

そして、決戦の場へと。

シオンは向かった。



丸い月が照らす、のどかな道をシオンは歩く。

考えてみると。こうやって、一人で夜の道を歩く事自体。久しぶりの事である。

——幼少の頃に、家を抜け出した。あの時以来か。

シオンは夜の町を一人歩きながら、ゆっくりと思い出していた。

刀刃の後継。——かつて最強の刀術士にして、”勇者”であった神庭アサギの刀術。神覇ノ太刀を唯一継承し。

僅か、十歳にして極めの段階に至り。

”最強”の二文字を冠した刀術士。……その唯一の欠点は、なんて事はない。

……人が、殺せなかったって事だ。

タカトや、トウヤとて躊躇ためらいはするだろう。

他のグノースメンバーだって、そうだ。

好んで人殺しをする奴なんて、誰もいない。

だが、いざとなった時。他者を殺す事を受け入れる事は出来た。

——シオンは、それがどうしても出来なかった。

受け入れられなかった。

それでも、なんとかしてしまえる技量はあったし、事実なんとかはして来た。

だが、欠点は。所詮、欠点に過ぎない。

考えてみると、誰だって欠点はあるのだから。

だが、シオンの欠点は。戦場においてはあまりにも致命的過ぎた。そして、シオンは刀を捨てるにいたって。いよいよ落ちこぼれた。よく、真藤リクがシオンを指して”弱い”と言うのはここに原因がある。

後輩の顔を思い出し、シオンはくすりと吹き出す。
あいつも強情だからなあと。

そして、次に思い出したのは異母兄。タカトだった。
敵対し、そしてシオンが追う兄。

彼が最強な秘密を、シオンは今では、なんとなく理解していた。
魔力でも技能にも、その理由は無い。

彼には欠点が無かったのだ。いや、あくまでも戦場においてと言う意味ではあるが。

その技能を抑制するような弱さを、なに一つ持っていなかった。

タカトは、その才能を全開にしていた。

『人と戦う時には、敵を超えようなどとは思わん事だ――。それでは自分よりも強い敵と出会った時にはひとたまりも無い。それよりも、敵の弱点を見付けろ』

タカトの事を思い出していると、つい彼がシオンに語ってくれた数多くの言葉から、そんな事を思い出す。

『弱点を見付けたならば、後は実行を恐れるな。それがなんであれ、たった一つでも弱点があれば打てる手は無限にある。――お前なら、出来るさ。シオン』

俺は――。

シオンは足を止め、苦く笑うと夜空を見上げた。

夜空では、星々が瞬いていた。

まるで、宝石をちりばめたようだの言うのだろうか。

シオンにはそうは思え無い。

ただ、綺麗だなと思うが。

あんたには、永遠に敵わないのかもしれないな、タカ兄い。もしくは、あいつ。『紫苑』なら何とかなるかも知れない。人を殺せる――。つまり欠点が無い、俺ならば。……俺が奴を憎いと思っているのは。……恐れているのはその事実だ。――まるで、俺が欠陥品だと客観的に証明されたみたいで、ね。

苦笑しながら、空を見上げるシオンの周囲は静まり返っている。

雲一つない、満天の星空の下。

風が涼やかに流れた。

そして、シオンは前を向く。

そこに、”それ”はあった。

私立秋尊学園、中等部。

シオンがかって通った学校だ。

門の向こうには、あからさまに分かりやす過ぎるように結界が張ってあった。

強装結界だ。紫苑が張ったのだろう。

シオンは門を一足で飛び越えると、同時に結界に入った。

多分、自分以外には出入りは出来ない仕様だろう。
つくづく、手が込んでいる。

門を越えて、見上げる校舎にシオンは一人、拳を固めて、呟いた。

自分に、言い聞かせるように。

「俺は、欠陥品かもしれねえが。……同時に未完成品でもあるんだ。
こいつは、過去への挑戦だぜ——。紫苑」

そしてシオンは、また歩き出した。

その中に居るであろう紫苑に、みもりへと向けて。

助ける為に。

……戦う、為に。



門から歩くと、すぐにシオンは下駄箱がある、生徒用の入口に。
殆ど、無意識に向かっていた。

かつての、習慣のままに。

それに気付いたのは、下駄箱の前に着いた後だった。

……忘れ無いもんだなあと、ちよつとの懐かしさと共に笑う。
どちらにせよ、中に入らねばならないのだから別にいいのだが。

下駄箱は当然閉められていた。

……施錠すらもされっぱなしと言うのは、流石に紫苑の性格を疑うが。

招き入れたいのならば、普通。鍵くらいは開けておくだろう。

苦笑して、アンロック系の魔法は。はて、どんな術式だったかな？と、思い――。

寸前で思い直し、止めた。

代わりにイクスへと問い掛ける。

「イクス。下駄箱に、みもり居るか？」

【いや、生命反応は無い。……ただ、一つだけお前に言っておく】

いきなりの問いにも、イクスはすんなりと答えた。

そのまま、一つの笑みを残して。シオンの掌の上に乗る。

【派手好きめ】

「褒め言葉として受け取っとくよ。……イクス！」

【セット・レディ！】

鋭く叫ぶシオンに、イクスが答え。直ぐさま起動する。

その姿は、イクス・ノーマル。シオンがもつとも使い慣れた大剣の姿であった。

起動したイクスを、シオンは直ぐさま振りかぶる！

同時に充実する魔力が一気に吹き上がり、そして。

「神覇式ノ太刀！ 剣牙あ！」

一撃！一

シオンは迷い無く、イクスを真っ正面に叩き下ろす！

放たれた放出斬撃、剣牙は軽快に下駄箱の扉を吹っ飛ばし、更にその向こうにある並んだ下駄箱を薙払った。

まるで、爆裂したかのような下駄箱にシオンは踏み入り。不敵な笑いを浮かべる。

イクスを肩に担いだ。

「せっかくの対決だ——」

言いながら、イクスを再度持ち上げる。

そして今度は頭上を見上げた。

イクスは何も言って来ない。

つまり、生命反応はシオンの頭上。天井等には無いと言う事だ。

ならば、遠慮は要らない。

「せいぜい派手にやってやろうじゃねえか！」

一撃！一

叫びと共に再び放たれた剣牙が、今度はシオンの頭上を穿つ！それは、2階、3階と突き抜け。屋上まで容赦無く貫通した。

シオンは即座に飛行魔法を発動。
2階に飛び移る。

とてもでは無いが、階段を使う気にはなれなかった。罨を仕掛けられている可能性は捨てられ無い。

自分が紫苑の立場ならば、入ってくる玄関と、階段に罨を仕掛ける。

ひょっとしたら仕掛けていないかもしれないが。安全よりは、危険の可能性を取りたかった。

紫苑との決着は、後だ――。

開けた穴から2階へと入りながらシオンは思考する。

静かに着地した。

まずは、みもりを救出する。とにかく、攪乱して――。

そうでなければ、自分達の戦闘に巻き込む恐れがあった。

紫苑との決着は二の次。

みもりの救出が最優先である。

だから。

「でも、そんなに時間を掛けるつもりは無いんだ」
「ッ――――！？」

突如として掛けられた声に、シオンは驚愕する。
慌てて振り向いた。

その前に広がるのは、漆黒の闇。

そして、それに同化するが如く闇の中に佇む五年前の自分。

神庭、紫苑。

黒い身体にぴったりと張り付くようなバリア・ジャケットを身に纏い。笑いを顔に張り付けて、少年はそこに居た。

思わず息を飲み、シオンは問い掛ける。

「お前、俺の行動を——」

「まあね。流石に貴方の事を全部分かる訳じゃないけど。……でも、このくらいの行動なら予測はつけられる。なんせ、貴方は僕だもの」

笑い、紫苑が一步をこちらに歩いた。

シオンは、油断無くイクスを差し向ける。

——同時に、紫苑が刀を取り出した。

夜の闇の中で、なおも煌めく刀を。

変わらぬ笑いのままに紫苑は刀を構える。

八相の構えだ。

そして、ゆっくりと告げた。

「さあ、始めようか。——互いの存在を賭けた。——戦いをッ！」

最後だけ叫び、紫苑が踊りかかる！

刀が緩やかな円を描いて、シオンへと降り落ちた。

対するシオンは真っ正面。横薙にイクスを放つ！

一戟！一

二つの刃がぶつかり、同時に、空間が僅かに震える。
二つの斬撃の余波で震えたのだ。

同時、両者が互いの一撃に僅かに後ろに流される。

紫苑はそれに構わず、シオンに追いつき、シオンは流された勢いのままに後退。

更にイクスを振る！

だが。

「馬鹿の一つ覚えかい？」

一ついんー

小馬鹿にするような言葉と共に、放たれた斬撃はあっさりと縦に斬り流された。

そのまま紫苑が踏み込んで来る！

イクスは頭上に跳ね上げられて、シオンは無防備。
紫苑は早々に決着をつけんと、刀を翻して。

「――セレクト、ブレイズ」

【トランスファ―】

そんな声を聞いた。

直後に、シオンが戦技変換。
ブレイズ・フォームへと変化する。

この形態の特性は、速度特化。つまり、身体速度の劇的な上昇と、
もう一つある。

シオンの空いた右手に光りが灯り、それが現れる！

大型のナイフ。つまり、短剣型のイクスが。

そう、ブレイズ・フォームには二つの剣がある――！

一撃！――

すかさず放たれた右からの斬撃。

流石にこれは予想出来なかった、紫苑は斬り流す事は叶わず。刀
で受け止めながらも、吹き飛ばされる。

横の教室に、紫苑の小柄な身体が突っ込んだ。

……否。自ら飛んで突っ込んだのだ。

逃すまいと、紫苑を追って教室に突っ込むシオン。

だが。その教室に入った彼を待っていたのは。

腰溜めに、刀を構える紫苑！

まっず……！！

「壱ノ太刀。絶影――」

一斬！――

胸中、失態に舌打ちするシオンに無情にも放たれる刃！

それは、迷い無くシオンの喉元に伸びて。

「死ぬ！ かよおおおっ！」

叫びながら、自分から後ろに転がったシオンの喉を浅く斬るに留まった。

そのまま転がり距離を取るシオンに、更なる声が響く。

「式ノ太刀、剣牙——」

「ちい！？」

一撃！一

響く更なる声に、シオンは転がった体勢から左へと横っ飛びに飛び出す！

直後、教室を斜めに切り裂き。剣牙は廊下も、その後ろの壁も貫通して、突き抜けた。

戦うな！

転がった体勢から無理矢理立ち上がりながら心の中で、シオンは自分に叫ぶ！

まだ、奴の弱点を見付けていない——！

第一！

「人質取るような、卑怯モンとまともに戦う必要が何処にある――！」
「言ってくれるね！」

一撃！――

更に追撃で放たれる剣牙。確認するまでも無く、零落零無。発動中である。

つまり、防御どころかバリア・ジャケットも紙と同然である。

シオンは追撃で放たれた剣牙を更に避けながら、瞬動発動。そのまま自分が開けた穴へと飛び込み。1階に下りた。

が、同時に背筋を凄まじい悪寒が突き抜ける！

直ぐさま後ろに飛び退いた。

「――四ノ太刀、裂波」

一燼！――

直後、シオンが下りた箇所空間振動波が放たれた。それは、何と。一階の床部分をまとめて塵へと変える。

四ノ太刀、裂波。

その真の姿は、振動波での拘束では無い。

空間ごと対象を振動させ、それを分解してしまう。破壊振動波が、その本当の姿であった。

刀を使わない自分には、出来ないそれをシオンは苦々しく思い。
だが、止まらない。

今度は穴から下りて来た紫苑へと刃を放つ！

「参ノ太刀！ 双牙、連牙！」

「式ノ太刀！ 剣牙！」

一裂！一

一撃！一

双刃のイクスから放たれる四条の地を走る魔力斬撃達。
だが、紫苑が放った剣牙には零落零無が纏っている。

当然、双牙は消える。

だが、双牙が”引き起こしたものは別だった。

双牙は地を走る斬撃である。

つまり、床を走る訳だが。この際に1階の床を吹き上げながら走ったのだ。

吹き上がられた、コンクリートの床。

元来ならば、そんなもの剣牙には大したものにはならない。

——だが、僅かに勢いを殺す程度の真似と、軌道は読める。
それだけあれば、シオンには十分だった。

剣牙の軌道を見切り、身体を逸らす。

——それだけで、剣牙はあっさりと脇を通り過ぎた。

そのまま剣牙は後ろの何処かに叩き込まれ、シオンの背後が爆裂する。

だが、シオンはそれに構わず。紫苑へとぴたりとイクス・ブレイズを差し向けた。

そんなシオンに、紫苑は感心したように笑う。

「この前戦った時とは、動きのキレが違うね。別人のようだよ。：いろいろと吹っ切れたようだね、嬉しいよ。あの人も喜ぶ——」
「そんな心にもねえ、褒め言葉はどうでもいいんだよ」

にこやかに微笑みながら、自分を褒めはやす紫苑の言葉を、シオンはあっさりと切って捨てた。

構えたイクス・ブレイズの向こうに紫苑を見る。

静かに問い掛けた。

「俺が聞きたいのは、一つだけだ。みもりは無事なんだろうな？」
「無事だよ。……でも、貴方には助け出せないけどね」

それは、自分が勝つと確信しての事か。

シオンがその台詞に笑う。

「大した自信じゃねえか。——俺はそこまで間抜けかね？」
「違うね。僕は貴方を恐れている——」

恐れている？

シオンは思わず怪訝な顔となった。

今までの紫苑の行動からは、自分を恐れるような言動は無かった筈だ。

……少なくとも、シオンには分からなかった。
なのに――。

戸惑うシオンに、同じ顔の少年は微笑する。
そのまま、刀を構えた。

「そう、僕は貴方を恐れている。――だからこそ、貴方を殺すんだよ！」

叫びと共に、刹那の速度で紫苑が迫る！
瞬動である。しかも、これは神覇ノ太刀、独自の歩法！

瞬動、湖蝶。

その名を、そう呼ぶ。

自らの懐に刹那で入った紫苑に、シオンはイクス・ブレイズを左右から放つ。だが――！

「――無駄だよ」

――閃！――

孤を描く刀が、今度こそは二つの刃を同時に斬り流す！
更に、その勢いでシオンの体勢は後ろに流された。
無防備な、胴が空く――！

「終わりだ」

一斬一

静かに、静かに、紫苑の声が響き。

胴薙へと刀は放たれ。シオンの腹へと食い込んだ。

零落零無を発動した、紫苑の刀に、当然。バリア・ジャケットは意味を成さない。

衝撃がシオンを襲い。苦悶くもんの息を漏らす。

——だが、紫苑の刀はそれ以上進まなかった。
シオンの胴体に食い込んだまま、停止する。

始めて、紫苑の表情に驚きが混じり。シオンが会心の笑いを浮かべた。

驚きに固まった紫苑へと、激痛と戦いながらシオンは踏み込み。
漸く我に帰った紫苑が慌てて後退する。

だが——！

「遅いっ！」

一斬！一

今度は紫苑を追って放たれたイクス・ブレイズが後退する紫苑の左手首を襲う！

一拍置いて、溢れかえるように血が噴き出した。

手首を斬ったのだ。傷口は腕の半ばまで達している。

「っ——！ この！」

それでも後ろに下がる紫苑が、右手に刀を持ち替えて横に振る。

だが、シオンはあえて追撃をせずに、その場に留まる事で刃を避けた。

鼻先を通り過ぎる刃に、にいつと笑い。

痛む脇腹を手で押さえながら、血の溢れる左手首を見下ろしている紫苑を見据えた。

「ざまあねえな。油断してっから。——何でか、再生出来るようだが、失った血液までは補充出来ねえだろ。暫くは左手の握力は回復しねえぜ？」

「そうだね……」

紫苑は苦々しく呻きながら、刀を持った右手で傷口をスツとなぞる。

それだけで手首の傷が、あっさりと塞がった。

シオンは再びイクス・ブレイズを身構えて、痛む脇腹を、埃を払^{ほごり}うかのように右手で叩いた。

その部分は、刀で斬られた筈——。

なのに出血していない。

バリア・ジャケットは斬られているのに、だ。

それを確認するなり、紫苑が苦笑する。

「ジャケットの下に何か着込んでいるね？」

「トウヤ兄いが耐刃繊維の肌着を持ってた事を思い出してな。わざわざジャケットを展開した後に、もう一度着直したんだぜ？」

ぴらり、とシャツ状のジャケットめくって紫苑に見せる。
そこには、もう一枚シャツがあった。

耐刃繊維とは、ある特殊な生地で作られている服である。
摩擦の強い特殊繊維で作られた服で、刃を滑らなくしてしまうのだ。

滑らない刃物は、切れ味をろくに発揮してくれない。
特に刀は、引かねば斬れないのが特徴である。

刀が他の刀剣類より、扱いが難しいと言われる由縁であった。
シオンはそれを利用したのだ。

これ自体は魔法と何ら関係の無い物である為、零落零無の影響を受けないと言う特典まである。

……ただ、刃物を滑らなくしてしまうと言う以外は普通の服の為、
防御力は皆無であり。

鉄の棒でブン殴られるのと大差無いダメージを受けはするのだが。

実際、神覇ノ太刀の斬方の一つ。”斬鉄”あたりを使われれば。

シオンの胴は二つに分かれていただろう。

だが、シオンは確信していたのだ。

あの勝利が確定したような状況ならば、紫苑はわざわざ斬鉄を使
っては来ないと。

なんせ、自分である。詰めめ甘さもまんま、自分と同じであった。

へっと笑うシオンに、感心したように紫苑が唸った。

「まともには戦わない。――そう言う意味か」

「お前がちくちくちくちく、くっだらねえ嫌みでもってこっちを虐めてる間に、俺はずっと考えていたのさ。――お前を出し抜く方法をよ。”三つ程”考えついたよ。今のが、まず一つ」

言いながら、シオンは前に進む。

紫苑は後ろに下がりながら、……恐らくは握力が回復していないのだろう。

左手を庇うように右半身へと構えた。

「二度は通用しないよ？」

「分かってるさ。だから、いくつも考えたのさ。そして――」

そんな紫苑に、薄っらとシオンは笑い。

いきなり無挙動で、両手のイクス・ブレイズを二つとも紫苑に投げ放つ！

不意をついたそれに、紫苑が目を見開き。しかし、動じずに刀を翻した。

一閃！――

一撃！――

回転しながら迫る、二つのイクスは、あっさりと弾き飛ばされる！

浅はかだね。

そう、紫苑が嘲笑を浮かべようとした。瞬間。

その笑いが固まる。

” 眼前、吐息が掛かる程の距離にいつの間にか詰め寄ったシオンに”。

驚愕に固まる紫苑に、シオンは獣じみた笑いを顔に張り付けて動く。

その手には、何も持っていない。

無手で何を――？

紫苑のそんな疑問の答えはすぐに来た。

硬く握りしめられた、拳と共に――！

一撃！――

「かっ……！！」

顔面を殴られ、紫苑が呻きを放つ。

打撃だと……！！

そう、胸中叫びながら。

殴られ、その衝撃で後ろに下がる紫苑に。今度こそは踏み止まらず、シオンが深く踏み込む！

そんなシオンに、紫苑は鋭く睨みなり。
右手の刀を横からシオンに放った。

「調子に……！」

乗るな！

そう、叫ぼうとして。だが、それも出来なかった。

シオンの身体が深く踏み込んだ分。

深く沈み込む。

紫苑が放った刀は、あっさりと、その頭上を通り過ぎ。

——そこで、シオンは止まらない。

通り過ぎる筈の刀。……正確にはそれを握る右手を掴むと同時に自分へと引つ張る。

その動作に、紫苑の体勢は崩れた。

更に、体勢が崩れ、がら空きとなった鳩尾みぞおちに左の肘を踏み込みながら突き放つ！

世にその技を、こう言う。

八極拳、六大開『頂』

豁打頂肘かつだちようちゅう、と。

人体急所の一つである、鳩尾に埋め込まれた肘に、紫苑が苦悶の息を吐いた。

それを聞いて、シオンが笑う。

「刀を捨てて五年間。俺も無為に過ごして来た訳じゃねえんだよ」

「こ、れが、二つ目、の……?」

喘ぐように、問う紫苑。

だが、シオンは更に笑みを深めた。

「いや。……二つ目は、ここからだ!」

吠えりと、同時に肘を打ち込んだ姿勢からシオンの身体が跳ね上がる!

掴んだ紫苑の右手を更に引きながら、肘に左手を押し当て。そこを支点に紫苑の小柄な身体を背中に担ぎ上げた。

肘に逆関節を極め、叩き折りながら紫苑がその背中を回転する――!

なんだ、これは!

折られた右肘に苦悶の喘ぎを上げながら。

見た事も無い、その動きに紫苑の目が大きく見開かれた。

それを気配で察して、シオンは叫ぶ。

「見た事無えだろ? なんせ――。タカ兄い直伝の、タカ兄だけの技だからなあっ!」

「なあ……っ!?」

その叫びに紫苑の驚愕の声が重なり、紫苑の身体が背中を回り切る!

シオンはそのまま前に倒れこみ、紫苑を頭から叩き落とした。

一撃！

「があっ……！」

脳天に凄まじい衝撃が走り、紫苑が悲鳴を上げる。

シオンは素早く立ち上がり、うずくまる紫苑を冷たく見下ろした。

「組み技――。投げ、締め、関節技の総称だ。これを魔導戦闘で、実際に使ったのはタカ兄しかない。……もしくは、それを教えられた俺以外にはな」

「く……！？」

五年。シオンは刀を捨ててから、それを埋めるように他の技を求めた。

剣技を、小太刀を。

そして、タカトの格闘術を。

タカトの格闘術は、他と一線を画するものだった。

従来ならば魔導士戦闘で使え無い技を、自らの格闘術に組み込んだのである。

それが、組み技であった。

空間に足場を展開する技能が、これを魔導士戦闘での使用を可能としたのだった。

痛みに喘ぐ紫苑の呻きが響き。

それを聞きながら、シオンは左手を前に突き出す。

「我が手へ！」

【リターン！】

即座に、離れた位置に落ちていたイクス・ブレイズがシオンの元へと返って来た。

紫苑の左手は出血で使えず、右手の肘は叩き折った。だが、再生する事が出来る紫苑は、すぐに復活するだろう。

その前に、倒す！

「終わりだ！ 紫苑！」

叫び、イクス・ブレイズを振り上げた。

瞬間。

紫苑が感情の失せた顔で、シオンを振り返る。ギョロリと剥いた目が、シオンを捉えた。

シオンの背中を先とは比べものにならない悪寒が突き抜ける！

「僕を舐めるな……！」

—轟！—

刹那、目の前に真っ白な光が溢れ——。

肩から斜めにかけて耐え難い痛みが走り抜けて。身体が跳ね上が
るような感触と共に、シオンの意識は、その光に飲み込まれた。

（中編 2 に続く）

第四十七話「刀刃の後継」(中編1) (後書き)

はい♪

ここで終わるかよ!?

と、言う皆さんの叫びが聞こえて来るようですが(笑)
中編1、終了です♪

組み技に関してはぶっちゃけ。なのは本編でも、数多い二次創作作品でも、まずお目に掛かれ無いので。魔導士戦闘では、タカト独自の技だと豪語してみました(笑)

まあ、普通は空戦だと投げも関節も使えません(笑)

カラバ式、もしくははその派生たる八極八卦太極図での空間に足場を設置する能力があるからこそ、組み技は使えます。

……本当は。打、剣技も含めて。クロスレンジ系は、足場がなければ本領を発揮出来ないんですけどね(笑)

では、続きは中編2をお楽しみにです♪
では~~~~♪

第四十七話「刀刃の後継」(中編2)(前書き)

ど、ども〜。

テストメントです……。

うう、すみません(汗)

後編どころか、中編2も3月中に更新出来ませんでした……(汗)

言い訳は沢山あるのですが、所詮。言い訳は言い訳……。

ただ、平身低頭するしか、ありません(涙)

すみませんでした！

遅れた分、内容は結構満足行く内容となっておりますので。ご容赦
いただければ、幸いです。

では、中編2。どぞ〜♪

第四十七話「刀刃の後継」（中編2）

シオンが、紫苑と戦闘を開始した頃。

神庭家、母屋ではうろうろとさまよう影があった。

スバル・ナカジマ、その人である。

シオンが向かった後、じっとしてもいられず。こうやってうろうろしていたのだ。

シオンの言う事は、分かるよ。

スバルは考え込みながら、歩く。

みもりが人質に取られているのだ。下手に手出しは出来ない。

しかも、今。自分達にはデバイスも無いのである。

同行を、シオンが許さないのは当然と言えた。

そう、理屈では納得している。

でも、感情はまた別であった。

みもりは友達だ。短い付き合いだが。少なくとも、スバルはそう思っている。

その友達が、人質に取られているのに。じっとなんかしていられない。

ましてや、シオンは自分より強いと断言した相手と一人で戦いに行ったのだ。

シオンの事は、スバルも信じている。
必ず帰って来ると、そう思ってる。

でも、だからと言ってここでじっと動かず、待っているのは違う気がした。

動きたいけど、動けない。

そんな、もどかしい気持ちのまま歩いていると。

曲がり角から、突然。親友であり、パートナーである。ティアナ・ランスターが現れた。

何やら、ぶつぶつと呟きながら歩いている。

……ひよつとして、ティアも？

その様子に自分と同じ感じをスバルは受ける。
取り敢えず、声を掛ける事にした。

「ティア……？」

「……ん？ あ、スバルか」

スバルの呼び掛けに、ティアナは俯いていた顔を上げる。
スバルはそのままティアナへと駆け寄った。

「どうしたの？ 考え込んでたみたいだけど……」

「うん。ちょっと、ね。あんたこそ、ここ。部屋じゃ無いでしょ？」
「……うん。私も、ちょっと」

考えている事は一緒。

二人は長年のパートナーだった事もあり。即座にそれを悟る。

互いに罰の悪そうな顔となりながら、肩を並べて歩き出した。

「シオン。大丈夫かな……?」

「さあね……」

スバルがぼつりと呟いた疑問に、ティアナも気の無い返事を返す。
そのまま、黙り込んでしまい。
歩いて行くと。

「「あ……」」

二人は思わず声をあげた。

行き着いた先は、玄関だったから。

……まるで、二人の心を表すように。二人はそこに辿り着いてしまった。

勿論、意識しての事では無い。

暫く二人は玄関を迷うように見る。

今すぐ、行きたい。

けど……。

来るなど言った、シオンの言葉が二人を止めていた。
恐らく、みもりが人質に取られて無くても。
シオンは一人で戦いに向かった事だろう。

つまり、そう言った相手なのだ。シオンにとって、あの紫苑は。シオンが一人で向き合い、戦わなければならない存在。だからこそ、シオンはスバル達に来るなと言ったのではないか。

そう思いながら、しかし。引き返す事も出来ずに、二人はじつと玄関を見つめ続ける。

すると。

「……スバルさん？ ティアさん？」

「二人共、どうしたんですか？」

突如、そんな声が背中から掛けられた。

二人は思わず振り向く。

そこには、エリオとキャロが居た。

「エリオ、キャロ……」

「あんた達こそ、どうしたの？」

いきなり現れた二人に驚きつつも、スバルとティアナは聞き返す。

それに、エリオも、キャロも罰が悪そうな顔となった。

「その……。シオン兄さんの事が気になって」

「部屋にじっと出来なくて、エリオ君と歩いてたら。ここに……」

視線を外すようにして答える二人に、スバルも、ティアナも思わずため息を吐いた。

考えている事は、皆一緒だと言う事である。

助けに行きたい。けど、行けない。

そんな気持ち。

ただ待つと言うのが、ここまで辛いものだ。四人は初めて知った。

暫く、向き合ったまま黙り込む四人だが。
やがて、ふっとスバルが不意に微笑した。
ティアナを、エリオを、キャラを見て。
そして、もう一度玄関を見る。

ぽつりと呟いた。

「……行こう」

「「「え……?」」」

その呟きに、三人は思わず目を見張る。
スバルは、そんな三人に微笑んで、告げる。

「行こう、みんな。シオンの所に」

「……スバル。あんた、自分が何言ってるか分かってる?」

その言葉に、ティアナが問い返す。
それが何を意味するか分かっているのかと。

彼女達が行くと言う事は、取りも直さずシオンの意思を無視する。
と、言う事であった。

エリオやキャラも不安気な表情でスバルを見つめる。

ティアナの問いに、しかし。スバルはすぐに頷いた。

「……うん。分かってる。私達が行くと、シオンが嫌がるって事も」

「じゃあ、なんで——」

「でもね。ティア。我が儘かも知れないけど、私。行きたいんだ」

ティアナに最後まで言わせず、スバルは告げる。

そのまま玄関へと視線を移した。

「……シオンが、今。一人で戦ってる。その結果が、ひよつとしたらって考えると、……怖いんだよ。……嫌なの」

「スバル……」

まるで、自分に言い聞かせるように呟くスバルの言葉。

それに、ティアナは呆然となる。

エリオや、キャロもだ。

スバルは構わず、続ける。

「シオンの戦いの邪魔なんて、多分。出来ない。……でも、待つてだけなのも、絶対出来ない」

だから。

最後だけ言葉にはせずに、スバルはティアナを、エリオを、キャロを振り返る。

スバルが告げた言葉は違う事が無い四人全員の気持ちであった。

しばし、スバルと三人は見つめ合い。

そして。

「……みもりを私達で助ければ、あいつも気兼ね無く戦えるかもね……」

「ティア！」

ぽつりとティアナが告げた言葉に、スバルが歓声を上げる。
それに、彼女は苦笑した。

「……どうせ、最後にはあんたの我が儘を聞く事になるんだから。言っても聞かないだろうし。——なら、出来る事を上げた方が無難よね？」

「ですね。これなら、シオン兄さんの戦いの邪魔にもなりません！」
「みもりさんが怪我してたら、ちよつとだけでも私が治せます！」

ティアナの言葉に、エリオやキャロも乗って来る。

スバルはそんな三人に、頷きながら満面の笑みを浮かべた。

よしっ、とティアナが大きく頷く。

「そうと決まったら、みもりを助け出す作戦練るわよ！　まずは——」
「その前に、一人は戦える人もいるよね♪」

意気込む四人に、やけに陽気な声が掛けられた。

その声に飛び上がりそうな程驚き。四人はそろりそろりと後ろを振り向く。

そこには、実年齢を思わず確かめたくなる少女のような外見の女性が居た。

にっこりと笑う、彼女が。

四人は、その人を見て。呆然と名を呼ぶ。

『アサギ、さん……？』

「うん♪」

シオンの母。アサギが、そこに居た。

似合わない刀を、その手に持って。

変わらない微笑みを浮かべて。

四人の、前に居た。



【……オン！ シオンっ！】

暗い。暗い、場所。

その中で、シオンは聞こえて来た声に意識を繋いだ。

数秒か、あるいは数分か。

気を失っていたらしい。

目を開く、と――。

「ぐっ！？ かは！ あっぐ……！！」

【シオン！？】

肩から胸にかけて凄まじい激痛が走り抜けた。

まるで、骨をボールで一本、一本、こじ開けるような。そんな痛い痛み。

暫く痛みに喘ぎながらも、シオンは床に手について立ち上がる。

シオンが倒れていた場所は、暗い教室の中だった。1階には教室は無かったので、2階か、3階まで吹き飛ばされたのか。先程から自分を呼ぶ相棒に目を向けた。

「……大、丈夫だ。イクス……」

【そうは見えんがな……】

イクスのそんな返答に、シオンは苦笑する。

イクスは、大剣形態。つまり、ノーマル・フォームに戻っていた。当然、自分も。

それを確認するなり、ぐっと息を飲みながら問う。

「何を俺はかまされた？」

【剣牙だ】

イクスは即答する。

だが、聞いた本人。シオンは、その答えに怪訝そうに眉を潜める。

「剣牙、だと？ あの状態で……。右腕は叩き折ってた筈だろ？」

いくら再生能力があるとは言え、骨折が治るにしては早過ぎであった。

その状況で剣牙など、使える筈も無い。

なのに。

【……違う。奴は”左手”に刀を持ち替えて剣牙を放ったのだ。俺に出来た事はノーマルに戻って、この身体で剣牙を防ぐ事だけだった】

「……それで、零落零無付きの剣牙を喰らっても俺、生きてたって訳か。……て。左手？ あいつの左手は――」

自分が生き残った理由に、シオンは納得。

どうやら、イクスが瞬間的に戦技変換する事で、ノーマルに戻り。大剣状態で剣牙を受けたらしい。

そうでなければ、自分の身体は真っ二つになっていただろう。

だが、ここに至り。もう一つの疑問が生まれた。

紫苑の左手は出血で、握力が戻っていない筈である。

……少なくとも、あの短い時間で刀を握れる程、握力が戻る筈が無い。

しかも少なからず反動がある剣牙すらも放ってみせたのだ。

これは、どういう事か――。

【……シオン。俺達は、そもそも思い違いをしていたのかも知れん。奴は――】

「そうだね。イクス。僕の正体は貴方の思っている通りだよ」

イクスの台詞を遮り、いきなり声が来た。

来たか……！

それだけを思い。シオンは痛む身体を押してイクスをひっ掴み。立ち上がる。

ぐっと前を見据える。そこに、彼が、紫苑が居た――。

すでに右腕の骨折すらも治ったのか。変わらない姿のまま。

実質切り札2枚は、無意味に終わった事をシオンは齒噛みしながら悟る。

そんなシオンに、紫苑は微笑み。周りを見渡した。

「懐かしい教室だろ？」

「……ああ」

シオンは静かに頷く。

今居るこの教室は、シオンがかって通っていた教室であったから。それを見越して、ここまで吹き飛ばしたのか。

あるいは、偶然か……。

答えの出ない疑問を、シオンは頭を振って追い出す。

微笑し続ける紫苑を見据えた。

「いい加減。はっきりしときたいんだけどよ。……お前、一体何なんだ？」

「それを聞かれるのも3回目だね。……イクスには気付かれたようだし。もう、いいかな？　――教えてあげるよ。僕の正体について」

言うなり、左手に刀を携たずさえたままシオンは両手で自らの胸に手を押し当てた。

にこりと笑う。

無邪気な、そんな笑みを。

「……とある世界。魂の研究や、神に近付こうとした世界があった。アルハザードって言う世界。貴方も知ってるよね？」

シオンは黙って頷く。

それを満足そうに見ながら、紫苑は笑う。

「その世界では不死の研究として、魂や遺伝子、魔法の研究。独自の学問が進められていた。……けど、アルハザードは当時、平和とは言い難い状況でね？ その為に、いろいろな兵器が生み出されたんだ——」

例えば、巨大なる戦舟。

例えば、様々な破壊力を誇る武器達。

例えば、魂をエネルギー結晶に変換した。

極大エネルギー装置。

「——その兵器の中に、対人としては最高傑作と謳われた暗殺兵器があったんだ。それは、特定人物の『魂』の波紋データを元に自らをその人物と全く同じ存在に変換し。オリジナルを殺す事で入れ代わり、敵対組織を内部から切り崩す事を目的として作られた”殺^{キリ}人^{シグ・ドール}人形”……もう、分かるよね？」

「……て、事は。お前は——」

紫苑の言葉を黙って聞いていたシオンの目が見開かれる。

紫苑は――。”シオンの姿を取った人形”は。こくりと頷いた。

「貴方達概念では、ロスト・ロギアって呼ぶんだったね。改めて自己紹介しよう。」

ロスト・ロギア。

”ドッペル・ゲンガー”。

……これが、僕の正体だ」

……人間じゃ無かった訳か――。

どうりで、今まで殺人に対する忌避も無かった訳である。

紫苑の、その正体に。シオンは静かに納得した。

だが、まだ疑問は尽きない。

シオンは紫苑の顔を見つめて、更に問う。

「……魂の波紋データを拾得して、お前は他の誰かの姿を取る、つったな？ ……いつ、誰が、何の為に。”わざわざ五年前の俺”の姿なんぞをお前に取らせた……？」

「質問ばかりだね？ でも、どうせ最後だし。いいかな。――貴方の姿を取ったのは僕の意味だ。最初は貴方の魂の情報を持ってた”彼”になろうとしたんだけどね」

「”彼”だと……？」

”あの人”。そう言われるとばかり思っていたシオンは新たに出了呼び名に思わず聞き返す。

わざわざ分けたと言う事は、”あの人”とは別人だと言う事か――。

紫苑はくすり、と頷いた。

「貴方の良く知ってる人だよ？ 分からないかい？ ”貴方の記憶を略奪”した彼さ……」

「っ……………！」

記憶を略奪した存在。

そんなもの。一人しかいない。
つまりは――。

「タ、カ兄い……」

「そう、彼さ」

何が楽しいのか、紫苑は嬉し気に笑いながら。再び頷く。

シオンはぐつと息を飲んだ。

タカトは、シオンの記憶を。忘れさせる為に、略奪した。
それに、”魂”の波紋データーがあつた訳だ。

つまり、こいつは――。

「タカ兄いに、作られたって訳か……！」

「ちよつと違うね。僕はたまたま遺跡に来た、彼から魂の波紋データーを手に入れて自分からこの姿を取ったのさ。……彼の魂は”傷”を負ってたから。彼にはなれなかったんだけどね」

「傷……？」

「貴方が知る必要は無い事さ」

新たに出た単語に聞き直すシオンだが、紫苑はそれもばっさりと切って捨てた。

ずっと目が細まる。

「彼から貴方を――。今までの貴方で最強であった五年前の、この姿を取って。僕は生まれた。……けどね？　彼は、伊織タカトはそんな僕を、生まれて来たばかりの僕を。」容赦無く殺したのさ。……壊したとも言うけど」

「タカ兄いが、お前を……？　そうか！」

一瞬。紫苑の台詞に疑問符を浮かべたシオンであったが、即座に悟る。

紫苑が先程言ったでは無いか。

ドッペル・ゲンガーは、その姿を取った本人を殺して成り代わる、オリジナルと――。

……自慢でも何でも無いが。

”あのタカト”が、それを知って。紫苑を生かして置く筈が無い。

紫苑は肩をひょい、と竦めた。

「容赦無かったよ。僕も抵抗したんだけどね。まるで、意味が無かった。――四肢は引きちぎって一つ、一つ、念入りに潰して。胴体と顔は八つ裂きにして、完全に破壊された。……あそこまでやると、もう破壊なんて言葉が可愛く見えるくらいだよ。――でもね。そんな破壊され尽くした僕を、”あの人”が救ってくれたのさ」

また、”あの人”か――。

シオンは苦々しく思う。

そのあの人とやらが、この紫苑を甦よみがえさせ。

自分に向かわせたのだ。

それは誰かと、シオンが問う前に。紫苑が、まるで歌うかのように呟き始めた。

「……黄金の仮面を被り、神の名。真名を持ち得た偉大なる人。――貴方は知ってる筈だよ？ 何せ、”天使事件”を起こした人物だからね」

……今、こいつは何と言った？

シオンは呆然と、声に出せない程の衝撃を受けて、問う。

黄金の、仮面。

神の名、真名を持ち得た存在。

何より、”天使事件”を。あの忌まわしい事件を起こした人物――。

そんな人物は、一人しか居なかった。

震える唇で、シオンはその名を呼ぶ。

「”シェピロ・アルカイド”……。生きて、やがったのか……！」
「そう！ 全世界にたった四人しか現存しない。”ランクEX”！」

それが、”あの人”さ！」

絶叫するように、紫苑が吠える！

それを聞きながら、シオンはぐつと息と共に、その意味を飲み込んだ。

天使事件を、ある存在と共に引き起こした人物。

それが、シェピロ・アルカイドと言う存在であった。

彼が生きていると言う事はつまり。

「――また、やろうってか？ ”俺を使って神の降誕とやらを！？”」

紫苑が、何故。最初に会った時に、シオンを殺せないと言った意味を。シオンは卒然と理解した。

シェピロが、再び神の降誕を自分を使って行おうとするならば。

殺す事を禁じる筈である。

シオンの叫びに、しかし。紫苑はただ笑う。

「さあね。ただ、貴方を殺す事を僕は禁じられただけだよ。後は、知らない。――だけど、僕はそれが納得いかないんだ。僕が居るのに、何故、貴方を必要とするのか……？」

――笑いが、消えた。

人形じみた無表情な顔となった紫苑に、シオンは押し黙る。

紫苑は構わず、無表情なままで続ける。

一步を、シオンに向かって前に踏み出した。

「僕が居る、僕が居るんだ。なのに何故、貴方をあの人は求めるのか？ ……僕はそれが納得出来ない。だから、あの人の命を裏切つて貴方を殺す事にしたのさ。……そうすれば、あの人は僕を見られる——」

「……………」

歌うように、唄うように、詩うように。

そう言いながら歩く紫苑に、シオンは気圧されたように、後退した。

あの人は僕を見てくれる——。

そう言う紫苑に、何かを。感じてしまつて……。

更に紫苑は、前に進む。

シオンはまた、後退した。

紫苑はそれを見ながら刀を構える。と、同時にくすりと笑い顔を
取り戻した。

ずっと刀を差し向ける。

「あんまり後退しないほうがいいんじゃないかな？ ……背後を見る
といいよ。時間を十秒だけあげるからさ」

「————!?!」

その台詞に、シオンは反射的に振り向いた。

その視界に、”彼女”が飛び込む。

教室の床に、仰向けになって転がされた、彼女――。

姫野、みもりが。

目を閉じて、ぐったりと動かない。

一瞬、最悪の事態を想像して悲鳴を上げかける、が。よく見れば、そんな事にはなっていなかった。

ゆっくりとだが、呼吸をしている。

それを確認して、シオンは安堵の息を吐いた。

薬か何かで眠らされているのか、起きる気配は無かった。

「十秒経ったよ」

紫苑の言葉に、シオンは後ろ髪を引かれる思いで。しかし、すぐに向き直った。

その先で、シオンは鈍く光る刀の切っ先を。シオンから背後のみもりへと、ずっと動かして突き付けていた。

「……貴方はみもりを見捨てて逃げたりしないよね……？ 多分、ただ。そうなら僕はみもりを貴方の刀技で殺すよ？ 少し楽しみだと思わない？ 何せ、貴方の姿をした僕に、みもりは貴方の技で殺されるんだ。――みもりはどう思うかな？ 泣くと思う？」
「――」

シオンは、答えなかった。

——答える気にもなかった。

代わりに。

—ブレイド—

自分だけの、鍵となる言葉を。

—オ—

解き放つ。

心が冷え冷えと冴えて行く。

怒りが過ぎて、逆に頭が澄み渡っているのだ。

……歯車が、噛み合う。

ゆっくりと目を閉じた。

その閉じられた^{まぶた}瞼の奥で広がるのは。

自分だけの、世界。

悠久の青空を仰ぐ草原。

シオンの心象風景であった。

その真ん中に古風に晒され、静かに地面へと突き立つ柄も鏢も黒塗りの日本刀。

ただ、刀身のみが鮮やか銀の光を放つ。

その刀に、シオンは歩いて行く。

歩いて行きながら、紫苑へと呟いた。

「お前を出し抜く方法なんだが……。あと一つだけあってよ……」
「……………」

シオンが呟くようにして、告げた台詞に。紫苑が怪訝そうに眉をひそめた、その瞬間！

一閃！一

なんの挙動も無しに、再びイクスが、紫苑へと真っ直ぐに投げられる！

射刀術。

まるで、ダーツを投げるかのように。真っ直ぐに投げられた技をそう呼ぶ。

いきなり投げられ、自分へと向かい来るイクスに、しかし紫苑は嘲るように笑った。

二度、同じ手は通じないと言った筈だよ——！

胸中叫びながら、紫苑は横に一步を踏み出して体を翻した。それだけで、イクスの進行方向から外れる。

下手に防御せずに、避ける事で隙を最小限にしたのだ。そして、紫苑の見る先でシオンがこちらに駆けて来る——！

終わりだ……。

静かに、そう思いながら左手に持つ刀を振り上げる。
無手での格闘術がシオンにあったとしても。

所詮は付け焼き刃である。

自分の刀術に敵う筈が無い。

そう、紫苑は確信していた。

そして、それは概ね間違おおむいでは無い。

だが――。

こちらへと刀を振り上げる紫苑を、醒めた目で見据えながらシオンは右手を開いた。

そして、心象風景の中で。シオンは突き立った刀に辿り着く。

……今だけでいい。

静かに、刀へと語りかける。

……今だけで、いい。だから。

ゆっくりと手を伸ばす。

柄を、握りしめた。

目を見開く！

お前を、抜かせてくれ――――！

ーブレイド（刀を）ー

ーオン（抜く）ー

叫びと共に、刀を引き抜いた――。

同時、開いた右手の掌から。”それ”が生えた。

刀の、柄頭が！

シオンは迷わず、それを左手で掴み、引き抜く！

一戟！ー

次の瞬間。紫苑が縦に振るった刀は、シオンが引き抜きざまに横に振るった刀とぶつかり。

シオンは更に前進しながら、”紫苑の刀を縦に斬り流す！”

一閃！ー

……な……。

斬り流され、体を崩された体勢で。紫苑は呆然となる。

視界に映るシオンは、手に持つ刀を翻している最中だった。

ひどく、その光景がゆっくりと映る。

柄も、鐔も、漆黒。

ただ、その刀身のみが銀。

刀身に浮かぶ鮮やかな乱れ刃紋が印象的だった。

それを、翻した姿勢でこちらを見据えるシオンの目が。

激烈極まる、殺気が。

紫苑に突き刺さる――！

「――うあああああ!？」

一斬!ー

魅入られたように固まった紫苑が、ついには悲鳴を上げて。その場から飛びすさった。

……それでも、完全には避せなかった。

肩口を浅く斬られ、鮮血が舞う。

後ろに退きながら、それでも信じられないと紫苑は目を見張った。

刀を緩やかに、引き戻し、構えるシオンを。

五年もの間、全く握らなかつたくせに。

刀を構えるシオンは、まるで一枚絵のように、美しく映っていた。

シオンは無言。刀を抜いた事も、振るった事にも、何も言わずに。ただ、紫苑に刀をすつと腰溜めに構え――。

迅雷の速度で、駆け出す！

視認すらも霞む速度で踏み込むシオンに、紫苑は漸く我に返った。

同じく前に踏み込み、横薙ぎへと刀を振るう――！

一閃！――

一裂！――

一戟！――

放たれた紫苑の斬撃は、同じように放たれたシオンの斬撃とぶつかり合った。

鋼が絡み合うような音が響き、ついんと言う音を最後に二つの刀は弾き合う。

――そのまま、二人は止まらなかった。

円を描くように踏み込みながら相手を斬り倒さんと再び放たれる斬撃！

それが、幾度も、幾度も重なり合う！

一閃！――

一撃。

一裂！一

十撃。

一斬！一

百撃！

互いの身体を求め合い放たれる刀は互いに弾き合う！
その中で、紫苑は最初こそ。まだ余裕の笑いを浮かべていた。

……いかな手段を用いたか、刀を手にしたようだが。
それでも向こうは、五年ものブランクがある。

自分には敵う筈が無い、と――。

だが、それが十を超えた辺りで笑顔は曇り。
百を超えた段階で、笑顔は完全に消え去り。
代わりに、焦燥が紫苑の顔を支配した。

五年、五年もの間。彼は、刀を握る事もしなかった筈である。

それが、何故。何故――！

「何故！？ 僕に追いつける！ オリジナル・シオン！？」

「――お前だからだ」

一戟！一

再び、互いに、互いの斬撃を斬り流し。紫苑の問いにシオンは答える。

……僕、だから……？　っ——！！？

一瞬言われている意味を理解出来なかった紫苑だが、すぐにその答えの意味に思い当たり、顔が強張る。

つまり、彼は——。

「僕から……！　僕からかつての自分の刀技を思い出したって言うのか！？」

「元々は、俺の技だ。それを何度も目の前で振るわれて、斬り付けられりゃあ、嫌でも思い出すに決まってんだろうが！」

有り得ない！

紫苑の胸中は、そう叫ぶ。

だが、目の前のシオンの技が。それを否定する——！

一戟！——

一破！——

再び放たれた刀は、再び互いを斬り流し。互いを傷付ける事無く、過ぎる。

紫苑がその結果に齒噛せん程に、凄絶にシオンを睨み、刀を振り。だが、シオンは変わらず無表情のまま刀を振る！

刀を振るう二人のシオン。

二人の間に、すでに溝は無い。

ここに至り、両者は完全に拮抗した。

——だが——。

一閃！—

振るわれ、重なり、再び斬り流される二人の刀。
しかし、そこに変化が起きていた。

紫苑の方が、僅かに遅れたのだ。

……？

それに、紫苑の顔が怪訝に染まる——。

——ただ、一つの違いがあった——

振るわれ、振るわれ続ける刀。

しかし、徐々に。だが確かに紫苑の方が僅かに遅れる。

その遅れは、段々と、しかし数を重ねる程に浮き彫りとなっていた。
った。

紫苑の斬撃が遅くなっているのか？

……否、違う！

——この時、神庭シオンは——

”速くなっているのだ” シオンの、斬撃が！

——十数年に渡って、自らに課していた。

”不殺”と言う名の枷を、完全に——

ひゅっと、シオンの口から鋭い呼気が放たれる。

同時に、手に持つ刀が翻り。肩に、その背が押し当てられた。

紫苑を静かに見据える。

直後、今までに無い程の悪寒が紫苑を突き抜けた。

それは、かつて自分を殺し尽くした存在と同種の殺気。

伊織タカトと同じ、他者を完全に殺し尽くすと言う決意の元に放たれる殺気！

激烈極まる殺気を叩き付けた、シオンの刀が僅かな震えを放った。

否、違う。そうでは、無い。

震えたのは刀では無い。

……空間が、世界が震えたのだ。

恐れるように、畏れるように、怖れるように！

シオンの、斬撃に――！

――外していたのである――

一斬一

その斬撃は、見る事が敵わなかった。

ただ、紫苑が見たのは。

刀を振り終えたシオンの姿だった。

一瞬だけ、間が空く。

そして。

紫苑の身体を、斜めに赤い線が走った。

血だ。

あまりにも早過ぎる斬撃が、遅れて傷を走らせたのである。

紫苑は何かを言おうとして、でも。それも叶わないままに、自らが生んだ血溜まりに沈んだ。

刀を振り終え、残心するシオンがゆっくりと身を起こす。

その息は、ただ荒い。

荒い息のまま、紫苑を見据えて、告げる。

「――お前を出し抜く三つめの手はな……」

紫苑の大きく見開かれた目を、しっかりとシオンは見る。

ぐっと息を飲み、荒げた息を整えた。

続きを、告げる。

「みもりを助けるためなら、刀を抜く事になろうとも。……いざとなりゃ、人ひとりくらい殺す覚悟をしてるって事だったんだけどよ。――相手が人形だってんなら、そんなに思い詰める事も無かったな……」

ふうと安堵の息を吐く。

そして、シオンは弾かれたように。みもりへと視線を移した。

みもりには、人型のアウト・フレームとなったイクスが脇にしゃがみ込んでいる――。

「イクス！ みもりは――！？」

【案じるな、無事だ。――ただ、眠らされているだけだろう】

イクスの答えに、シオンは漸く完全に安堵の息を吐き切った。

そんなシオンに苦笑し、イクスは視線をその手に持つ刀に移した。

……少しだけ、淋しそうな笑いが零れる。

【抜いたんだな。それを】

「……………ああ」

シオンは、こくりと頷く。

そして、左手に握る刀を見つめた。

シオンの右手から、突如として現れた。この刀。

これこそが、神庭家の至宝たる刀であった。

銘^なは、無い。

この刀を代々継いだ者が、自分で考えた銘を。

その時に与える事が決められているからであった。

……シオンは、それを決めていない。

と、言うより。つい先日、自分がこの刀を継いでいる事を知ったばかりなのだ。

初めて、自分の心象風景に入った。あの時に――。

じろりと、イクスを睨む。

「……………まさか、あの事件の後。勝手に継承されていたなんてな……………」

【……………そう睨むな。俺は殆ど無関係だ】

イクスが肩を竦める、

シオンは、それにため息を吐いた。

この刀。どうにも、五年前の事件の直後で。

意識を失ったシオンに、なんと勝手に継承させたらしい。

進めたのは、母。アサギとの事だが。
異母兄二人も、かなり怪しい所であった。

この刀を継承すると、刀と魂は融合し。継承者ならぬ、所有者は。
自らの中から、この刀を取り出せるのだ。

……あまりにも、不可思議な現象である。
この刀、そもその由来が不明と来てる。

神（世界）の魂が、そのまま刀となった代物らしいのだが……。

そう考えると、この刀も立派にロスト・ログアである。

何の能力も無い、ただ。絶対に壊れず、傷付かないと言うだけなのだが。

シオンは、もう一度息を吐きながら、笑顔を浮かべて――。

「まさか……。最後の手段が正攻法とは……ね……」

「【っ―――!?!?】」

響いた、そんな声にぎよつと固まる。
すぐに振り返ると、そこに彼は居た。

紫苑が、”立ち上がって!”

「しかも、刀を抜いて。……僕を、斬る、か……」
「お、前……。それは……!?!?」

苦々しく語り掛けてくる紫苑に、シオンが目を大きく見開きながら指を差す。

その指が示す、紫苑の身体には、”黒のバブル”が。ごぼごぼと溢れていた。

アンラ・マンユ。

因子が――！

シオンは、イクスは、漸く悟る。紫苑の再生能力の理由を。つまり、因子が理由だった訳だ。これで、あの再生能力にも納得がいった。

どうりで、いくら致命的なダメージを喰らわせようと復活する筈である。

シオンはぐっと息を飲んで、紫苑の台詞を思い出していた。

あの人に救って貰ったと。
つまり――。

「……そいつを、奴から感染させられたって訳か……！」
「……僕の身体は、……人間と一緒に……有機物で構成されているけど、ね。魂が無いから、第2段階に至らない限りは、意思を保ってられる訳さ――」

に、と紫苑の口端が吊り上がる。

ゆつくりと刀を構えた。

まだ、戦う積もりである。

シオンはそれを確認するなり、同じく刀を構え。
イクスに声を掛けた。

「イクス、悪い。みもりを連れて外に出ててくれ！」

【な……！　だがお前1人を置いて……！】
「イクスっ！」

シオンの台詞に、反論しようとするイクスだが。
シオンはそれを遮るように大声を上げる。

そして、一言を告げた。

「頼む。……こいつとの決着は、俺1人で付けさせてくれ……」

それは、懇願であった。

イクスはそれに、しばし黙り込む。

シオンの背中を見つめて――。

やがて、ふっと笑うと。その背中に、背を向けた。

みもりを担ぎ、ゆっくりと納得した。

そうか、こう言う気持ちなのだな。弟子に――。

【……死ぬなよ】

「誰に聞いている積もりだ？　アンタの弟子だぞ？」

一人立ちされる、と言う気持ちは。

納得と共に去来するのは、ひどく寂しい思いだった。

イクスはそれを、ゆっくりと噛み締めると、みもりを担いだまま
窓から外に出る。

飛行魔法で、結界の外に飛んで行った。

それを気配で察しながら、シオンは前を見続ける。

身体中から因子を溢れさせ、零し、それでも笑う紫苑を。

紫苑は、笑いながら刀を構えてシオンへと語り掛け来る。

前へと、歩を進めた。

「刀を使えるようになったとしても……。僕を殺せるようになったとしても。……これで、漸く、僕と互角に戦えるっていうだけの意味にしか、ならないよ……」

「本気でそう思ってやがるのか？」

シオンはそれに対し、心持ち後退りしながら問い掛ける。

紫苑は、無理矢理に笑みを浮かべた。

「勿論さ……。それで、僕が勝つんだ！ あの人のために！」

あの人のため。

そう言う紫苑に、シオンは目を細める。

あの人のため。

そんな、紫苑が、重なる。

かつての自分。ルシアのためと、タカトを追い掛け続けた自分――。

あの人のため。

最も愚かだった。かつての自分に！

苛立ちに任せて、床に足を叩き付ける！

教室の床を、ブチ壊した。

「あの人のため――。あの人のため、あの人のため……。あの人のためかあ！」

嘲るように繰り返し、叫ぶ！

そんな、紫苑を、見ていられなくて。

……そんな、”かつての自分”を、許せなくて！

紫苑が刀をシオンへと向けながら叫ぶ！

「そうさ！ 僕はあの人のために存在している！ あの人のための、あの人のだけの！ あの人が必要とする殺戮者だっ！」

そんな、紫苑が、自分と重なる！

シオンは凄まじい形相で、紫苑に。……かつての自分に吠えた。

「そう言った台詞を聞いてつと、ムカついてくるんだ……！ 来いよ！！！」

叫びと共に、二人は同時に前に出た。

刹那に、互いを間合いに入れる――！

「「壱ノ太刀――！」」

そして、引き出すのも。また互いに同じ技！

居合の構えから、刀を一気に振り放つ！

「「絶影！！」」

—裂！—

—破！—

真っ正面から、視認すら叶わぬ斬撃がぶつかり合う！

それは、互いの空間の中心点で。その威力を炸裂させ——。

場が、持たなかった。

行き場を無くした斬撃の余剰エネルギーが、真下に突き抜ける！
それにより、床に亀裂が走り。教室が完全に陥没し、落ちて行った。

ここに、二人のシオン。

『刀刃の後継』の戦いは、最終局面を迎える——！

（後編に続く）

第四十七話「刀刃の後継」(中編2)(後書き)

……はい♪

中編2、終わりでございます♪

紫苑の正体、シオンの決意。

そして抜き放たれる刀……。

次回、ついに二人に決着が付きます。

迎える決着、そして、シオンは――。

こう、お楽しみにです♪

漸く休みですし、明日か明後日には更新したいと思います♪

……今度こそは、守ればいいなあ……。

ではでは♪

第四十七話「刀刃の後継」(後編)(前書き)

……はい。

テストメントです♪

……く、くそう！ 一日更新予定がズレました……！
すんませんでした！(汗)

とりあえず、更新予定は。もうやめとこ……。
まず失敗するし(汗)

なお、今回。アリサ道場は抜きでございます。

……ええ。ちょっと。空氣的に、無理……。

これでやった日には俺は怒られる事請け合いです(笑)
さて、「刀刃の後継」完結です！

では、どぞ〜♪

第四十七話「刀刃の後継」(後編)

イクスが窓からみもりを担いで飛び出した、直後に。
その背後の教室から轟音が響いた。

おそらくは、二人がまた激突した余波で教室が崩れたか。
イクスは後ろ髪を引かれる思いで。だが、振り返らずに飛んで行く。

今、弟子であり、主でもあるシオンにとって。最も助けとなるのは、みもりを戦闘の巻き添えにしない事であった。

その為にも、イクスは意識の無いみもりをこの場から離すべく飛んで行く。

それに、何より。奴は――。

そう思いながら、イクスは結界の境界線に辿り着く。

――本来ならば、ここで結界をどう抜け出すか算段をつけねばならない。

だが、イクスは構わず結界へと飛んで行き――。

あっさりと突き抜けた。

それを確認して、イクスは息を吐く。

やはりか、と。

この結界。おそらくは、最初からシオンにだけ反応するように作られていたのだろう。

つまりは、イクスやみもりが”外に出る”分には、全く反応しないのだ。

……試す気にはならないが、中に入ろうとすれば、今度は阻まれるだろう。

それは則ち。もう中には入れ無いという事を意味する。

助けには行けない、という事だ。

シオンは、それを知っていながら――。否、だからこそ、イクスに出て行くように告げたのだろう。

一人で、戦う為に。

シオンのそんな答えに、少しの苦さを覚えながら地面に下りる。

それと、同時に声が来た。

「あ！ イクス！」

「本当……！ それに、みもりも！」

響いたのは、若い二人の少女の声。

その声は、当然イクスの知る所のものだった。

スバルとティアナである。

イクスは声に顔を上げると。

前方の道から、こちらへと駆けて来る五人の姿があった。

それを見てイクスは嘆息する。

彼女達が来るのを待ってイクスは声を漸く出した。

【――やはり来たか、お前達】

「へ？ やっぱりって……？」

イクスの嘆息混じりの声に一同は。――正確には、アサギを抜いた一同はキョトンと疑問符を浮かべる。

そんな一同の反応に、イクスは苦笑した。

【取り敢えず、最初に言っておくと、みもりは無事だ。寝ているだけだな。そして、さっきの事だが――。シオンとな。ああ言っても、お前達はここに来るだろうと話していたんだ】

「そうなんだ……」

「……あいつに行動読まれるなんて、なんか釈ね……」

みもりは無事だった事に安堵しつつ、スバルが感心したように、ティアナは何故か悔し気に声を漏らす。

エリオとキャロは、苦笑していたが。

イクスは四人を取り敢えず置いて、アサギに向き直る。

アサギはと言うとイクスの姿を見て。いつもの微笑を引っ込めていた。

いつになく、真剣な顔で。問う。

「イクス君。……イクス君がここに居るって事はシオン君は”抜いた”んだね？」

【……ああ】

イクスは簡潔に答える。

そこで四人は漸く気付いた。

シオンの姿が、ここに無い事を。

イクスに慌てて問い掛ける。

「ねえ、イクス！ シオンは……！？」

【奴は今、戦っている。一人だな】

こちらも即答。

イクスは事実のみを四人に告げた。

イクスも無しに、あの紫苑と。一人で……！？

イクスの言葉に、四人の顔が蒼白となる。

すぐに門へと向かおうとして。

【——悪いが、行せん】

その眼前に、立ちはだかるように。イクスは両手を広げて四人に言い放った。

そのまま、告げる。

【シオンが戦っているのは、自分の過去だ。過去の、最も許せない自分の記憶だ。——1人で、戦わせてやってくれ】

「——でも！？ イクスも……。デバイスも無いのに！」

【そちらについては問題無い……。俺は、もう用済みだ】
「用っ！？」

あんまりと言えば、あんまりなイクスの言葉に、スバル達は目を

大きく見開く。

イクスは、それに笑った。
嬉しそうに、嬉しそうに。

——寂し、そうに。

笑った。

そのまま、アサギに向き直る。

【アサギ。お前も、シオンの戦いに手を出すつもりは無いのだろう？】

「——そうだね。シオン君の戦いに手を出すつもりは無いよ」

こくりと、頷く。

アサギの返答に四人は驚愕したように振り返るが、彼女はただ、首を横に振った。

そして、結界に包まれた校舎を見上げる。

「シオン君は。今、必死なの。必死に、必死に過去と向き合おうとしてる。……戦おうと、してるの」

「でも、でも……!?!」

「——私がここに来たのはね、こうなった時にスバルちゃん達を止めるため、なんだよ」

そう言いながら、ゆっくりとアサギは刀に手を掛ける。

ここに至り、スバル達はアサギの真意を漸く理解した。
決して自分達の手助けの為に、彼女は来た訳では無い。

——自分達を、止めるために。彼女は来たのだ。

鞘から抜き放たれた訳でも無いのに、アサギから感じる圧力に、スバル達は沈黙させられてしまう。

そんな彼女達に、アサギは『ごめんね』と、告げた。

アサギの謝罪を聞いて、スバルが顔を歪め叫んだ。

「心配じゃ——！ 心配じゃないんですか!？」

「心配だよ。今でも、すぐに中に入りたくらいに、心配。——でも」

そんな叫びにも、アサギは動じない。ただ、スバルに同意しながら。——頷きながら、言葉を紡ぐ。

自分を睨むスバルを、スバル達を。優しく見つめた。

「——これは、シオン君の戦いなの。他の、誰も邪魔しちゃいけない。シオン君だけの……」

「アサギ、さん……」

「だから、信じて上げて。私を許せなくてもいいから、シオン君を、あの子を信じて上げて」

アサギの言葉に、スバル達は押し黙る。

……内心では、理解している。

シオンが、どれだけの覚悟を持って。一人で戦っているのか。

でも、でも。それでも――。

シオンを一人で戦わせるのはイヤだった。

……シオンがいなくなるのは、イヤだった。

どれだけ取り繕おうとも、どれだけ言葉を尽くそうとも。

それが、彼女達の思い。

だから――。

「シオン……」

どちらにせよ、デバイスも無い身では結界も通れ無い。

スバル達は、ただただシオンが戦っているであろう。校舎を、見る事しか出来なかった。

もどかしい気持ちを抱えながら。

切ない想いを抱きながら。

そうするしか、彼女達は出来なかった。



一戦！一

風が吹く。

一閃！一

剣風と言う名の風が。それと共に合唱するは、鋼の音色。

—裂！—

そして生まれるは、引き裂かれ、震える音。

世界が痛みと、歓喜と悲哀の絶叫を。確かな軋みとして生み出す
叫び！

—破！—

そんな合唱を鳴り響かせながら、シオンと紫苑は廊下を駆ける！

ただし、廊下の床を。では無い。

彼達は、重力を無視して壁を、窓を走っていた。

飛行魔法の応用である。

重力、慣性がある程度制御出来るならば、この程度の真似はたやす
い。

当然、二人はただ走っている訳では無い。

走りながら、”頭上”へと刀を振り翳していたのだ。

—裂！—

—閃！—

—戟！—

駆けながら放たれる刃は、しかし互いに互いを斬り流し続ける。

鋼が絡み合うような音が、それを証明していた。

やがて、互いに窓に足を叩き付け。踏み止まる。

震脚だ。

だが、そこで奇妙な事が起きた。

窓は、当然。ガラスである。

こんな風に足を叩きつければ――。

否、窓の上を走っているだけでも普通は窓は割れている筈である。しかも、二人は斬り合いながら走っていたのだ。

なのに、激烈に窓へと足裏を叩きつけた筈。

なのに！

割れない。

ただ、たわみ。反響するような音をたてただけで。

廊下側の窓も、教室側の窓も。二人の震脚に耐えてみせたのだった。

「――壺ノ太刀――」

同時に響くは、やはり同じ名称。

同じ名を持つ二人は、同じ技を同時に放つ――！

「「絶影っ！！」」

――斬！――

互いに放たれた技は、やはり互いの刃で、それを受けた。

直後、世界が絶叫を上げる！

一破！一

まるで、爆発したかのような音が。ぶつかり合い、互い剣先で起きた。

いや、違う。

”実際に爆発したのだ”。

互いの技がぶつかり合った余剰エネルギーで！

その衝撃で割れていなかった、二人が駆けた窓が残らず割れた。

足場が消えた事を悟るなり、二人はその場から飛びすさる。

床と、天井へと飛び――。

何と、そこからも止まらなかった。

床を、天井を蹴りながら、互いへと飛び掛かる！

一裂！一

一撃！一

――1瞬の交錯。

刃が交え、互いに至近へと己達を捉えながら、その体勢で二人は斬撃を放つ！

一破！一

割れるような音が響くと同時。交差した二人は、互いの居た場所を入れ替え――。

そこからも、止まらない。

床や、天井と言う概念を無視して。

互いの足場を蹴り！ 飛び！ 交差する！

二つの刀は、その数だけぶつかり合い。互いを斬り流し続けた。

この戦いを第3者が見た場合。

上下の感覚を忘れたかのように錯覚したかもしれない。

二人はまるで壁を蹴って、三角飛びをするように。互いへと飛びかかっていたのだから。

「おおおお――！」

「はああああ――！」

一斬！一

一裂！一

幾度も重なる交差。

無限に続くと思われた程の、それを両者は重ねる。

だが――。

――斬！――

「うぐ……っ！」

紫苑の口から苦悶の叫びが上がる。
見れば、肩口が浅く斬られていた。

まただ……！　また速くなった……！

苦々しく、そう思いながら紫苑は天井へと足を着地させたシオンを睨む。

シオンはぐると、身体を翻してこちらへと向かおうとしている所であった。

――先の交錯。

またシオンの速度が上がり、紫苑の刀を斬り流してシオンの刀が肩口を斬ったのである。

何故、まだ速度が上がる……！

かつての刀術を取り戻したとしても。これは、異常だった。
何せ、本来二人は互角の筈である。

シオンは、紫苑から。かつての刀術を取り返したのだ。

ならば、自分と互角でなければおかしい。

なのに、何故——！

胸中叫びながら、幾度も行われて来た交錯を繰り返そうとして。

——目の前に、シオンが着地した。

「な、ん——！？」

思わず、斬撃を放つ事すらも忘れて、降って来たシオンに呆然とする。

そんな紫苑を、シオンは静かに見据えて——。

「——遅え」

——斬！——

ぽつりと呟くと同時に、胴を一刀両断にした。

壱ノ太刀、絶影。

それが紫苑の認識速度を超えて、紫苑を真っ二つにしたのだった。最初に斬り伏せられた時と、同じように！

呆然とする紫苑。胴は、すぐに因子で再生する。だが、紫苑はそれにさえ構わずに戦慄していた。

まさか……。

呆然とする紫苑に、シオンの瞳が捉える。
その目には、ただ静かな殺意を湛えて――！

一斬！――

返しの刃が、更に紫苑を袈裟に斬り裂いた。

苦悶の喘ぎを上げながら紫苑は漸く確信する！

シオンは、強くなっているのだ。

自分と刀を重ねるだけで、かつての刀術を取り戻したように。
その刀術に、五年の。命懸けの戦いで手に入れた実戦での経験が
漸く結び付き始めたのだ。

血みどろの戦いを生き抜いて来た、紫苑が馬鹿にした五年の経験
が！

今、紫苑を再び追い詰める――！

「あの時の台詞を、そっくり返すぜ……！」
「っ――！？」

言われ、思い出すのは強襲戦での。最初の戦い。
ハーフ・アヴェンジャーとなったシオンに、紫苑はこう言ったの
である。

それは。

「感染者だからといって絶対不死と言う訳じゃ無えだろ……！」
お

前は何回殺せば死ぬ……！」

「うう！ ああああああ……！？」

一斬！一

声と共に、大上段から放たれる絶影！

それが、紫苑を頭頂から唐竹割りに斬り断つ！

瞬時に三回も殺された紫苑が目も口も開いた形で固まった。

どうだ……！

そんな紫苑の状態に、シオンは手応えを感じる。

紫苑と似た存在である因子兵は、五回殺せば滅びた。

つまり、従来の感染者と同様。再生、復活回数には限りがあったのだ。

ならば、紫苑も……！

そう思い、刀を引き戻しながら紫苑を見遣る。

唐竹割りにされた紫苑は、傷が治る様子も無く。

ただ、呆然と固まり――。

「は。はは、あははははハハハハハハハ！！」

いきなり、大声で笑い出した。

まだか……！ と、シオンは胸中叫び。更に紫苑へ斬り付けんと刀を翻した所で。

紫苑の笑いに舌打ちして、そんな事を思いながら立ち上がる。
直ぐさま刀を構えた。

教室に、紫苑が入って来る。

身体中から、因子を零しながら。ずるり、ずるり、と。

その動きは、ホラー映画で出て来た。テレビから出て来る女を彷彿とさせた。

ある意味では、夜の学校に果てしなく似合う光景ではある。

赤光を放つ双眸を、ぎょろりとシオンに向けた。

そんな紫苑に。やはりシオンは自分を重ねてしまう。

アヴェンジャーに。感染者である自分は、果たして”こう”ならなかったのだろうか。

……”こう”ならない理由なんて、何処にも無かったと。

そんな愚にもつかない想像を、頭を一振りして追い出した。

「ハ、ハハハ、ハハハ……！ コレデ……。コレデ、アナタヲケセバ、ボクハアノヒトニ、ミトメラレルカナ……？」

「――そこまでして……！ そこまでして！ 俺に成り代わりていいのか！？」

もはや、紫苑はヒトとは言えない程にまで変質してしまっている。そこまでして、自分になりたがろうとする紫苑が、シオンには理解出来なかった。

シオンの問いに、紫苑は首を傾げる仕種をした。

「アタリマエダロ……？ ソシテ、アノヒトニミトメラレルンダ……」

…！ アノヒトニ、アノヒトニイイイ！！」

一撃！一

最後の叫びを激発音声にして、剣牙を紫苑は放つ！

シオンはそれに舌打ちしながら、刀を振りかぶった！

「っの！ 双牙ア！」

一轟！一

叫びと共に、シオンが頭上に斬り上げた姿勢から放たれる地を走る双牙！

それは、迫る剣牙と真っ正面からぶつかり合う！

同時に、紫苑の哄笑が一際大きくなった。

「ハハハハハハハハハハハ！ バカダネ！ アナタハ！ レイ
ラクレイナヲワスレタカイ！？」

「――安心しろよ。忘れてねえ。何しろ……」

双牙の向こうで、シオンがニヤリと笑う。

直後、双牙が剣牙を押し返し始める！

「こちとら刀持ったと同時に使ってるんなあ！」
「ナ……！！？」

一撃！一

紫苑の驚愕は、声にならなかった。

その前に、劍牙を消し去って。双牙が紫苑を飲み込んだからである。

苦痛の叫びさえも、双牙に飲み込まれる紫苑へと。
更にシオンは瞬動で駆ける！

刹那に、双牙により身体中を喰らわれた紫苑の懷に飛び込んだ。

自分の間近に来たシオンに、紫苑は叫ぶ！

「オリジナル・シオオオオオオオオオオオン!？」

「——っ
おお
おお
おお！
絶影イ！」

—斬！—

紫苑の叫びに応えるように、シオンは叫び。

刀が下方から円を描いて、頭上へと突き立った。

——1拍遅れて、紫苑から血飛沫と因子が吹き出す。

シオンは、構わず前へと踏み込む！

—
斬
!

更に、袈裟へと降り落ちる絶影！

紫苑から絶叫が上がるが、シオンは構わずに前へと踏み込み続ける。

刀を、虚空へと半月を描くように振って見せた。

ぽつり、と呟く。

「――四ノ太刀。裂破」

一 燼 一

悲鳴は上がらなかった。

正確には、上げられなかった。が正解だろうが。

シオンが描いた半円を中心に空間を揺るがして、破壊振動破が紫苑に襲い掛かったのである。

紫苑の身体は、瞬く間に塵へと変わって行き――。
そのまま、即座に再生する。

紫苑が笑ったのが、空気でシオンに伝わった。

「コノ、テイド、カイ……?」

「いいや。まだだ……!」

答えるなり、シオンは刺突の構えを取る。
矢を引き絞るように、ぐっと足を開いた。

その構えに、過たず。それは弓を射るのと同じであった。
ただし、矢は自分自身!

紫苑は未だ、裂破の影響で動け無い。

そんな紫苑に。シオンは文字通り、矢の如く前へと踏み出した。

叫ぶ! その一撃の名を!

「神覇、伍ノ太刀……! 剣魔ア!」

一轟！一

咆哮と共に放たれた突撃。それは、まず紫苑の中心へと刀を突き立て、更にシオンの身体を包む魔力が突撃と共に、紫苑を轢き潰す！そのまま、容赦無く紫苑を轢き続けていった。

紫苑の身体は、剣魔で轢きずられ。衝撃で、身体中を引き裂かれて行き――。

止めとばかりに、シオンは剣魔で纏った魔力を突き放つ！

紫苑の小柄な身体は、教室という教室の壁を突き抜け。

最後の教室の壁をブチ抜いて廊下へと突き抜け、その壁に打ち付けられて、漸く止まった。

シオンは剣魔を放った体勢で残心。

じっと紫苑を見遣る。

紫苑の動きは無い。

動け無いのか、はたまた――。

シオンは残心を解くと、緩やかに呼気を吐き出し。前へと歩く。

すると、声が聞こえて来た。

紫苑の、笑い声。

シオンはそれにも構わず、紫苑へと近付くと刀を突き付けた。

「……終わりだ。紫苑。お前の、負けだ」

「……マダ、ダヨ……。マダ、ボクハマケテナイ……」

途切れ途切れに、紫苑が言ってくる。

まだ、まだ、と。

シオンはそれに頭^{かぶり}を振った。

こんな、紫苑の姿を見て。

何故、人は哀れに思うのだろうと。そう、思いながら。

……自分と重ねてしまうのだろうと。

自分がこうならなかったなんて、保証は何処にも無いのだ。

たまたま、運が良かったに過ぎない――。

「もう、いい。……もう、いいだろう？ だから……」

「……マダ、ダ。マダ、ダヨ……。ボクハ、ボクハ……！」

そんな、紫苑を見ていられなくて。

シオンは齒を噛み締める。

刀を振り上げた。

首を落として、紫苑の存在を終わらせる。

それが、せめてもの――。

そう思い。刀を降り落とそうとした、瞬間！

紫苑の瞳が、再び光を放った――！

「ボクハ、マダ……！ マダ！ マダ、オワツテナイ——！」

— 擊手！ —

絶叫と共に、縦横無尽に放たれる触手！

二度も同じ攻撃を喰らう積もりは、シオンにも無い。即座に、紫苑から距離を離そうとして。

それに、気付いた。

気付いてしまった。

紫苑の状態に――！

紫苑の身体は、触手に支えられるかのように宙に浮いていた。

そこから、滝のように溢れ出す因子が廊下の床を”染め上げる”！

これは――！

「これ、は……！ 第2段階、感染者の……！？」

[illegible]

驚きに目を見張るシオンに、紫苑の哄笑が響き渡る！

既に、紫苑は自意識を失っていた。

そう、紫苑は言っていたでは無いか。

第2段階感染者に至らない限りは自我を保てる、と。

シオンは吠え出すと、紫苑に向かい。一気に走り出した。計算があった訳では無い。

……そうしなければ、気が狂いそうだったのだ。破滅の道突き進む、紫苑が自分と重なって。

”自分自身にしか、見えなくて”！

そんなシオンに、紫苑から幾百、幾千と伸びる触手！

一撃！一

走る、その触手がシオンの身体を痛打する！

——構わなかった。そのまま、突き進む！

刀を、大上段に振り上げた。

紫苑に向かい、飛び上がる！

第2段階感染者に至ってしまった紫苑は。斬撃程度では死なない。意にも、介さない。

すぐに再生して、シオンを殺すだろう。

絶影も、剣牙も、双牙も、裂破も、剣魔も。

今の、紫苑には通じない。

第2段階に到達してしまった感染者を滅ぼすには殲滅攻撃級の一撃が必要であった。

だが、今のシオンにはそれが無い。

奥義は、使え無い。

精霊を召喚しても、融合も、装填も使え無い。

何故なら今、手にするのはイクスでは無く。

刀なのだから。

四神奥義は使え無い。

ならば！

一使える技を、引きずり出す！—

属性変化を必要としない、奥義。

それを、出す。

幸いにも、一つだけ。それに心当たりはあった。

ただ、問題は。

”1回も使った事が無いって程度の事だ……！”

制御は諦めた。必要無い。

”最初から暴走させるつもりで放つ！”

シオンは、身体中を斬り刻まれながら。核となろうとしている紫苑にまで飛び上がる。

目が、合った。

爛々と光る瞳が、シオンへと叫んで来た。

ボクガカツンダ！ と。

だから！

シオンは迷い無く、その技を解き放った。

” 神覇ノ太刀、最後の奥義たる。その技を！”

その、名は――！

「神覇！ 捨ノ太刀――！」

「オリジナル……！」

吠えながら、飛び掛かるシオンに、紫苑が吠える！

直後、シオンが頭上に掲げた刀が、煌めき――。

光が、膨れ上がった。

刀を中心に、シオンを一瞬で包み込む！

それは、一気にシオンを中心として。光の柱として高々と突き立った。

天高く、遥かな高みへと！

自らを剣として、究極の斬撃を放つ技。

その一撃は神も、その住み処たる天すらも斬ると言われる。故に、その名前が与えられた。

大爆発と言う名の、光に！

—轟！—

—爆！—

全てを消し去り、砕き、滅ぼす光に。まるで玩具のように中心点でシオンが跳ね回る！

全身をこれでもかと光に打ち付けられ、衝撃で身体中をバラバラにされるような激痛の中で。

上下も左右も分からない程にめちゃくちゃになりながらシオンは絶叫する！

その光の中心点。

紫苑へと！

「お前にだけは——！ 死んでも負けるかよオ！ 馬鹿たれエエ————！」

転がり、何かに身体が叩き付けられる。

既に、シオンはそれが何か分からないままに叫び続けた。

「ロスト・ログアの人形が化けた五年前の俺か——！ ハッ！ テメエには言ってやりたい事が山程あったんだ！ この自惚れ過ぎのマセガキが！ あの人のために存在しているだ！？ そんなおためごかしのために、テメエは何もかも捨てたのかよ！」

シオンの叫びは、既に紫苑のものでは無かった――。

分かっていた事である。シオンは最初から、紫苑を通して、かつての自分を見ていた。

今更である。

だからシオンは、今更叫ぶ。
かつての、自分へと。

許せ無い、自分へと！

吠え、叫ぶ！

「お前を必要としていた人は他に沢山いたのによ！　みもりを見ろよ！　ずっと俺を待っていてくれてた――！　俺への罪悪感を抱えながら！　母さんを見ろよ！　ずっと心配してくれたに違い無いんだ！　トウヤ兄いを見ろよ！　俺の助けだって、死ぬ程欲しかったに違い無いんだ！　それを……！　テメエ勝手な理由で家を出て！　人に迷惑掛けて！　タカ兄いや、ルシアの事だって、テメエのせいだろうが！　それを何勘違いしてやがったか知らねえが。よりによって復讐だど！？　テメエの面見てほざけ！　そんな事は！」

頭のすぐ横で光が炸裂する！

……鼓膜が、多分破れた。

構わない、叫び続ける。

「たかだか剣振るしか能のねえガキの分際でよ！　何様の積もりだったんだ！　そうやって何もかんもを傷付けてよ！　いい加減にしろよ！」

天碎きの余波は、空間どころか次元も歪めていた。
そんな空間では、視覚は勿論。聴覚も、触覚ですらも役に立たない。

それでも、ぐちゃぐちゃになりながらも。

シオンは立ち上がった。

叫び続けながら。

「だいたいだ！ あの人のために――！ ルシアのためにタカ兄いを追っ掛けてただけだ！？ 嘘だな！ お前は何にも分かつちやいないガキだったから、彼女を理由にただけだ……！ 何が初恋だ！ それもただの幻想だ！ 下らない……！ 下らない、幻想だ！」

ぱっと顔を上げる、

シオンの瞳からは、涙が零れていた。

子供のように泣き叫びながら、シオンは自分の初恋も否定する！
何もかも、自分の全てを否定したかった。

だから、そう、叫ぶ。

「彼女を理由にすんなよ！ 他人を理由にすんなあ！ そして、奪うなよ……。誰かに取って、大切なものを、奪うなよ……。」

叫びは、段々と普通の声へと変わっていた。

それでも泣きながら、シオンは立ち上がり、ただ言葉を紡ぐ。

自分を責める、言葉を。

「それでも、誰かを奪うしか出来ないなら……。誰かの、大切なものを奪うしか出来ないなら……。いつそ、死んでくれよ。居なくなれよ……。！」

泣きながら、涙を零しながらシオンはそれでも言葉を紡ぎ続ける。
ぐっと思を飲み、真っ直ぐに前を見る。

そのまま、
叫ぶ！

「消えて、なくなれ エエ エエ エエ エエ エエ エエ エエ エエ エエ エエ
エエ エエ エエ …………… つ！」

まるで全ての想いを絞り出すような叫びであつた。

それがまるで反響するように響き渡り。そして、漸くシオンは周りを認識した。

そこには、何にも無くなっていた。ただ、真つ平らに荒野が広がる。学校は既に跡形も無い。

この世界から、痕跡も残さず消滅していたのだ。

そして――。

叫び終えた、シオンが歩く。

それは、ひどく弱々しい歩きであつた。
だが、それでも確かに歩を進める。

やがて、シオンはそこに辿り着いた。

何も無い、無くなってしまったここに。
ただ、それだけはあった。

色素を失い、真っ白になった紫苑の顔が。

それだけしか、残っていない。
消し去られたのだ。

天砕きの一撃によって。

やがて、それも塵となり、風に溶けて消えた、

それを最後まで見遣り、シオンは小さく。
本当に小さく、つぶやいた。

「……哀れな……。俺……」

涙は、ずっと流れている。
でも、拭う気にもなれなかった。

ただ、ただただ。

シオンは、その場に立ち尽くし泣き続ける。

そして。

「シン、君……」

声が、聞こえた。



「シン君……」

「なん、で。みもりが、ここに……」

シオンは、思わず問い掛ける。

自分が何て阿保な質問をしているかも分からなかった。

みもりは答え無い。シオンにただただ近付き。

呆然としていたシオンはぞくりと気付く。

今の、自分の姿を。

全身、自分が出したものを含めて血だらけ。

そして、手には刀を持っている。

あまりにも、あの時と。

あの事件の時と酷似した状態だった。

シオンの心が何かを叫ぶ。

近寄る、みもりから慌てて刀を隠した。

今更、そんな事に意味なんて無いのに。

「ち、ちが……！ 違うんだ、みもり。これ、は違うくて……」

何が、違う……？

自分は、再び刀で人形だったとはいえ人の姿をしたものを斬った。
そして、また。あの赤い光景を再現した。

それに何の、違いがある……？

みもりは近付いて来る。

それに、シオンは目を逸らし続けた。

恐くて。

みもりの恐怖に彩られた、自分を見る目が恐くて！

だから……。だから……。

「お、れは……。おれは……」

「シン君」

みもりは、もうシオンの目の前に居た。

手を伸ばせば届く距離に。

確かに自分の名前を呼んで、すぐそこに居る。

シオンは、それが堪らなく恐かった。

みもりと向き直っている、この瞬間が堪らなく、恐かった。

そして。

「ごめんなさい」

みもりが、たった一言を呟いてシオンを抱きしめた。

……え？

それが、シオンには何故か分からなかった。

何故、怖がらないのか？

何故、逃げ出さないのか？

……何故、拒絶されないのか？

分からない。分からない。分から、ない。

ただ。

「ずっと、ずっと、謝りたかったんです……！」

みもりの声が。

「昔のことも」

優しい、この声が。

「今回の、ことも」

シオンの耳に、届いて、行く。

「謝り、たかったんです……！」

なんで？

「ごめん、なさい……！ ごめんなさい……！ ごめんなさいっ！」

なんで、俺は、謝られているんだ。

俺が、俺が、全部、悪いのに……！

「違う……！ 違う！ みもり！ 違う！ 俺が、俺が全部悪いんだ！ 謝るのは俺だ……！」

自分を抱きしめたまま離れ無いみもりに、そのまま告げる。

塞きを切ったように、言葉は溢れ出て来た。

「ずっと、ずっと謝りたかった！ 許して欲しかった！ 許され、たかったんだ……！ 俺は……！」

ああ、そうなんだと今更ながらにシオンは悟る。

きっと、俺は許されたかった。

自分で自分を許さないと置いて置きながら。

その実は、ずっと許されたかった。

だって、自分じゃ、自分を絶対に許せ無い。

自分と言う存在が、あまりにも許せなさ過ぎて。

殺してしまいたいくらいに、許せなくて！

……でも、きっと。許されたかった。

それが、シオンの本当の本心。

「ごめん……！」

自分では、自分を許せ無いくせに。

「ごめん……！」

他人には、自分を許して貰おうだなんて。

「ごめ、ん……！」

そんなの、虫が良すぎるじゃないか……！

「ごめん、な……！ みもり……」

「シン、君……」

シオンは泣きながら、みもりに謝り続ける。

その謝ると言う行為でさえも、シオンには罪に思えて。

そんな、自分が醜悪に思えて。

でも、シオンは謝り続けた。

まるで、子供のように謝り続けるシオンに、みもりはゆっくりと
身体を離す。

そして、泣きながら謝るシオンの顔を見つめて。

「ごめんなさい。シン君」

もう一度、謝り。
そして。

「……大好き、です」

大切な言葉をシオンに告げて、涙に濡れた唇に、自らの唇を重ねた。

——三回目のキスは、涙の味がした。



「うそ……」

そんな声を、スバルは遠くで聞いた気がした。
正確には真横から聞いたのだが。

真横——。つまりは、ティアナの声。

あるいは——。ひょっとしたらだが。自分が言ったのかも知れない。

それは、分からなかった。

ただ、スバルはただ呆然としていた。
横のティアナも、また。

あの激烈極まる一撃で、結界が壊れた後。
何故か居なくなっていた。みもりと、ここで戦っていたシオンを。
二人は探していたのだ。

そして、スバルとティアナは、二人を見付けた。

全く、同時に。

丸い、月と綺麗な星空の下。
何も無くなってしまった荒野の上で。

二人を見付けた。

キスする二人を、スバルと、ティアナは一緒に見付けていた――。

（第四十八話に続く）

第四十七話「刀刃の後継」 （後編） （後書き）

「紫苑との激闘から一日」

「シオンは、大怪我を負い入院する事になる」

「ぎくしゃくする一同。みもりの想い、スバルの想い、ティアナの想い」

「そして、シオンの想いは……」

「その頃、海鳴市のすずかの元に彼が現れる」

「すずかに取って、許せない人が」

「次回、第四十八話

『交錯する想い達』」

「少年は告げる。今の、精一杯の。自分の気持ちを」

第四十八話「交錯する想い達」(前編)(前書き)

「あの日、あの時、あの場所で起きた事を、私は一生忘れない」

「助けてくれた、少年の絶叫と。アリサちゃんの叫びを、忘れない」

「奪われた、この痛みを、忘れない」

「……絶望した、あの瞬間を忘れない」

「奪った彼の顔を、忘れない！」

「――無表情なのに、酷く自分の事のように。悲しそうだった、あの瞳を忘れない」

「絶対に、忘れない」

「魔法少女リリカルなのはS t S， E X。始まります」

第四十八話「交錯する想い達」(前編)

《……と、まあ。被害状況はこんな所だね》

アースラ艦長。

八神はやては、伝えられたその言葉に頭を抱える。

日本、海鳴市。月村家。

そこで、彼女はその報告を受けたのである。

神庭シオンが叩き出した被害の有様を。

隣にいる、高町なのはやフェイト・T・ハラOWNまでもが呆れたように苦笑している。

取り敢えず、一息吐いて落ち着くと。ゆっくりと展開したウィンドウの中に居る、叶トウヤと目を合わせた。

彼は、相変わらずの微笑を浮かべてはやての言葉を待っている。

一瞬、このまま黙ったまままで居たら彼がどんな表情をするか見たくなる衝動に駆られたが。

ぐっと我慢し。漸く、はやてはトウヤが話した報告の感想を告げた。

「……マジなんですか？」

《はっはっは。……マジだよ》

何故か『マジ』の部分だけ真顔でトウヤが疑問に答えてくれる。だからと言って、報告の内容が変わる訳では無いのだが。

トウヤは一つだけ苦笑すると、報告を繰り返した。

《昨日、夜だね。出雲市にある秋尊学園にて、シオンが単独で敵。――例の、紫苑だね――。と、無断で戦闘。その結果。秋尊学園は”完全に消滅”。結界は張られていたようだがね。それも完膚無きまでに破壊されていたので、意味が無い。……つまりは――》
「……修復は一切出来ない、て訳やね……」

自分で末尾を告げて、自分の頭が痛くなる事をはやては自覚する。何を、どうやったらそんな被害が出せるのだ。

……いや、Sランク以上の集束砲撃辺りならば、結界破壊も含めて不可能では無い。

――それが、瓦礫の山を作ると言う意味ならば。

はやて達が引っ掛かったのは”完全に消滅”と言う部分である。事件前と後の静止画を見せて貰ったが。

とてもでは無いが、そこに学園が建っていた等とは想像も出来ない破壊っぷりであった。

何せ、”本気で何も残っていない”。

ただ、すり鉢状に抉られた地面と、基礎だけが覗いているだけと言った状態なのだ。

瓦礫すらも消滅させたと言う事か。

まだ、消え去った学園跡地の静止画を見て考え込むはやて達に。トウヤは微笑する。

《まあ、今回は運が良かった方だね。……正直な所。魔力量を検知した時は、完全にアウトだと思ったモノだよ》
「……？ それは、どう言う事ですか……？」

トウヤの台詞に何か感じるものがあつたのかフェイトが怪訝そうな顔で尋ねる。

はやてや、なのはも似たような顔をしていた。

そんな一同の反応に、トウヤはまた苦笑して。

《まあ、百聞は一見に如かずだね。これが検知した魔力量から推定された、シオンが放った技のランクだよ》

そう、告げると同時にウィンドウ横に更に小さいウィンドウが展開。

当時発生した魔力量のデータと、推定される威力ランクがそこには載っており――。

三人は、それを見ると同時に硬直した。

これは――。なんだ？

はやてがそれを見ながら顔を強張らせつつも、トウヤに向き直った。

「……えっと、やな。何かの冗談？」

《はっはっは。……マジだよ》

そんなはやてに、先程と寸分違わぬ台詞が放たれる。それを聞くなり、三人の顔は尚の事引き變った。

三人が注視した、ウィンドウにはこう書かれてあつた。

推定威力ランク。

SSSS++++。

——と。

硬直する三人に、トウヤは更に説明を続ける。

《どうやら、あの大馬鹿は最初から制御を諦めて集束させなかったようですね？ 逆に言えばそれで助かったと言える。どうも、発生した破壊力が爆発と共に全て真上に向かったようだね。それが幸いしたよ。そうでなければ恐らくは”北半球が壊滅している”。……ちなみに、控え目な被害予測でがね》

「「「……………」」」

苦笑しながら告げるトウヤの説明に、三人は漸く硬直から脱出。

三人一緒に一つだけ息を吐いた。

そうして、苦笑し続けるトウヤへと姿勢を正す。

彼女達がショックから脱つたのを見計らってトウヤは説明を続けた。

《とにもかくにも、学園側にはウチの方で説明、補償、再築する事で事態は解決したので安心してくれたまえ。元々魔法にも理解のある学園だったし、グノーシスの資本で建てられた学園なのでそこは問題無い。後、大馬鹿については当分ナノ・リアクターの空が無いので『月夜』に入院させておくよ。……こんな所かね》

「……じゃあ、私達もシオン君のお見舞いに——」

《そうだね。君達のデバイス、武装もメンテ完了したので。そのの受け取りも兼ねて来るといい》

なのはが頷きながら、告げた言葉に。トウヤもまた頷く。

そして、三人に向かい微笑した。

《それと、代艦の用意も整えてある。見に来るといい。——ついでに例の件も解答をくれると助かるね》

「……そうですね。——了解や。なら後でそちらに行きます」
《うむ。……ではね》

はやての返答に頷いて、トウヤは微笑を浮かべたまま通信を切った。

ウィンドウが閉まるのと一緒に、三人は目を合わせて苦笑した。

「……トウヤさん。ちょっと怒ってたね？」

「そやなー。地球に来る前くらいに怒ったかもしれないね」

思わず、強襲戦の時にシオンを殴りまくったトウヤを思い出す。
あの時程では無いが、今話していただだけでも分かる程にトウヤは怒っていた。

……終始朗らかだったが。目が、全然笑っていなかった。

基本的には穏やかな性格故に怒らせると非常に怖いのがあの異母兄弟達の数少ない共通した部分とも言える。

三人は見合わせて、一つだけ息を吐くと座っていたソファアールから立ち上がる。

正面に立つ月村家メイドのノエル・K・エアリヒカイトと、フアリン・K・エアリヒカイトに一礼した。

「すみません。ノエルさん、ファリンさん。上がらせて貰ったのに、何も出来ないで……」

「いえ、こちらこそ。申し訳ありません。折角来て頂いたのですが――」

なのはが目を伏せるようにして告げた言葉に、ノエルも頭を下げる。

そして、視線を横に向ける。

その方向には、主である月村すずかの部屋があった。

ファリンも、なのはも、フェイトも、はやても、そちらを向くなり顔を曇らせる。

そこに閉じ籠っている、部屋の主を想って。

三人が月村家の屋敷に来たのは、彼女達の親友であるアリサ・バニングスが伊織タカトに意識不明にされて以来。塞ぎ込んでいるすずかに会いに来たのだ。

……結局。すずかが部屋から出て来る事は無く、会う事は叶わなかったのだが。

あれから一月程、すずかは殆ど引き籠りに近い状態であるらしい。なのは達が、家に来ても顔を出さない程である。

それがどれほどの事態なのか、分かろうと言うものだった。

ノエルが三人に向き直るのに従って、一同も視線を戻す。そして、メイド二人は改めて頭を下げた。

「なのは様、フェイト様、はやて様。お越し下さったのに申し訳ありませんでした。今日はこれで……」

「……ごめんね。なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん」

「いえ、こっちこそ。役に立てないですみません。……また、来ますね」

三人もまた頭を下げる。

そして、名残惜しそうに退室した。

……部屋に居る筈の、すずかを想って。

でも、どうしようもなくて。

月村家を後にした。



「私、思うんだ。シオン、ケガは本人が治すものだって」

……俺も、そうは思う。

「でね？ やっぱりケガを早く治したいなら体力つけなきゃって思うの」

……それについても、まあ同意しよう。

「と、言う訳で病院食じゃあ味気無いかもって思って。私、回復メニユーて言うの作って来たんだけど……」

納得いかんのは、そこだ……！

グノーシス月本部『月夜』

施設内の医療部にある。病室にミイラ男よろしく包帯でぐるぐる巻きにされた神庭シオンは激しく内心で叫ぶ。

紫苑との戦いの直後、眠るように意識を失ったシオンが次に目を覚ましたのは、この病室のベッドの上だった。

……まあ、怪我の内容は『よく死ななかったね?』と真剣な顔で聞かれる状態であり。

命に別状は無いものの、当分の間――。

――ナノ・リアクターの空が出るまでだが――。

――その間は、こうしてベッドから立ち上がる事も叶わ無い状態であった。

……特に、首のギプスと頬に貼られたシップが最悪だが。

それに輪を掛けて最悪なのが――。

……くそ……！ 一時的なショックで声が出せないだあ……！？

呻くようにそう思いながら、シオンはいらいらと歯噛みする。

あの大爆発のど真ん中に居たのが災いしたか。シオンは声が全く出せない状態であった。

……まあ、あの爆発の中に巻き込まれたのだ。紫苑と同じ運命を辿らなかつただけマシかもしれない。

それにプラスして、天砕きを無理矢理行使した代償か、魔力枯渇状態であり。

念話すらも出来ないのだが。

つまりそれは、他者に自分の意思を伝える方法が無い事を意味する。

それでも病室は快適だったし。細かい事は気にしなければ、さほど悪い環境では無い。

所詮はナノ・リアクターの空が出来るまでの療養生活である。前向きに休暇と考えればいい。

……シオンも、起きた時は、そう思っていた。

だが――。

目の前の現実から逃れるように、シオンは周りを見渡す。

一人部屋の病室にしては中々に広い病室である。

そして、今ベッドの横には。スバル・ナカジマとティアナ・ランスターが詰めるように座っていた。

ティアナは、ベッドの横に陣取り家から持って来たのか何やらごっつい本を読んでいる。

そして、スバルはと言うと――。

「で、だね？　これが作って来た回復メニューなんだけど……」

言いながら、スバルが深皿に入れられたスープ……”らしきものを差し出していた。

現実逃避はやめて、シオンは生唾を飲み、それを見遣る。

――ピンク色のスープを。

何をどうやったら、こんな毒々しい色合いのスープが出来るのか
真剣に考えるが、答えが出ない。

そんな風に差し出された深皿を受け取るのを躊躇うシオンに。
それだけを見るなら非常に可愛いらしく顔を赤らめ、おずおずと
スバルは更に説明を続ける。

「とりあえず、”一撃必倒”シチューって。名付けたよ」

……………し、シチュー、だったのか……。いや、それよりも一撃
必倒って回復の二文字は……………？

一撃必倒シチューなるものを前にして、シオンが細かく震える。
そんなシオンに気付いたのか、慌ててスバルは手を振った。

「ち、違うよ？ 悪い病気を一撃必倒って意味だよ！」

……俺は病人じゃなく、怪我人な訳だが……。

「試しにケガが治った黒鋼さんに飲ませてみたら、あつと言う間に
元気になって『これなら、どんなモノも一撃必倒だ』って。保証し
てくれたし」

……そのモノに、俺が含まれているか否かが、問題だな……。

ちなみに、シオンが知るよしも無いが。刃は味見の直後、痙攣を
起こしながら意識を失い。再び医療部に叩き込まれていたりする。

そんな事を露とも知らず、シオンは内心で悪友に呪いの言葉を吐
き続けた。

まあ、あまり意味は無いのだが。

シオンはとにかく助かりたい一心で隣のティアナに視線を向けるが、彼女は一切こちらを向かない。

視線に気付いていない筈は無いのに、だ。

あからさまな無視に、シオンはゲンナリとする。

何故か、朝来てからティアナは機嫌が悪い。

その割りには、ベッドから離れようともせずに張り付いたままなのだが。

それを言うなら、スバルもおかしい。

何故、いきなり料理なぞ作って来たのか。

その割りには、いつもの強引さが微妙に足りない。

遠慮と言うか、そう言ったものをシオンはスバルの態度に感じていた。

それでも頑なに、深皿を引っ込めずに差し出しているスバルに戦慄しつつ、まさか拒否する訳にもいかずに。シオンは深皿を受け取るうとして――。

「よ――――っすや！ シオン！ 元気しとるか――！」

突如、馬鹿が病室に突っ込んで来た。

本田ウィル。シオンの幼なじみである悪友が。

どうも、ナノ・リアクターで回復したらしく。怪我は治っているようだった。

呆れたように見るシオンへとびしっとサムズアップしてウィルは笑いながら近付いて来る。

「やー。ようやくワイ、復活したっちゅうのに。今度はお前が怪我するなんてな――。全く、間抜けやなあ。アホシオンは」

誰が、アホシオンか。誰が。

ウィルの台詞に、じと目で睨むシオン。

だが、声も念話も出せない状況では何の罵声も出せない。

つまり、言われっぱなしと言う事である。

ベッドの上で苛々と自分を睨むシオンに、ウィルが笑う。

更に、続けてシオンに何かを言おうとして。

「お？　なんやそれ？」

目敏く、シオンが手に持つ深皿に気付いた。
スバルがウィルのそんな台詞に若干慌てる。

「えっと。それ、私がシオンに作ってきた――」

「な、なぬ！？　ならこれ、スバルちゃんの手作り料理かい！？」

そんなスバルの様子にみなまで言わせずに、ウィルは大仰に驚いて見せる。

シオンは、こいつテンションやたらと高えなあ。と。変わらず呆れたように見る、と――。

いきなり、ウィルがシオンを睨んだかと思うと、深皿をさつと奪い去った。

「くう~~~~~！　手作り！　テヅクリ！　T e d u k u r i……

！？ ええい！ お前なんぞに飲ませてたまるかい！ ワイが飲んだる！」

あ……。

叫ぶなり、止める間も無く。

ウィルは一撃必倒シチューをぐいっと一気飲みして――。

――そのまま、豪快に顔からぶっ倒れた。

……………。

更に床を爪で引っ掻くように掻きむしり、小刻みに震える。

――暫く沈黙した後、ウィルはゆっくりと立ち上がり、
再びのサムズ・アップをスバルに向ける。

「……強い、強過ぎる味やったで。スバルちゃん……」
「本当？ いきなり倒れちゃったからビックリしたけど。なら、良かったよ！」

ウィルの台詞に無邪気に喜ぶスバルだが、シオンは顔を横に振る。

ウィルは、『美味い』ではなく『強い』と言ったのだ。
決して、料理に使う形容詞では無い。

……よくよく見れば、ウィルの瞳は虚ろになり全身がまだ震え続けている。

どう考えても、正常な状態では無い。

やがてウィルは、段々と青くなっていく顔色を悟られまいと隠すようにして、後ろに下がって行く。

「……ほ、ほんならワイはこの辺で。シオン、はよう元気になりや……」

「え？ 折角だし。ゆっくりすれば――」

「いや！ ええねん！ よく考えれば、まだトウヤさんに報告しとらんかったし！ そんなじゃあ！ お大事にな〜」

一方的に告げるだけ告げて、ウィルは即座に病室を出た。

扉が閉まり――。

『が、がはっ……！』

『きゃあああああ！？ ウィル！ あんた、どうしたの！？』

『か、カスミか……？ も、もうワイは駄目かもしれへん……！』

『そ、そんな……！ 何があつたの！？』

『ふ……。漢^{おとし}の責務を、果たただけやで……。ぐ、ぐふう！』

『う、ウィル！？』

『ふ……。こんな事になるんなら、もうちょっと。素直になれば良かったかもしれ、へ、ん、な……』

『だ、駄目！？ 死なないで！』

『スマンな……。カスミ……。ガク』

『ウィル~~~~~!?!?』

……何やら、扉の向こうでドラマが展開されていたような声と共に、ドタバタと音が鳴り。

やがて、シーンと静まり返る。

ここにまた一人、漠が散った。

シオンは亡き(?)友を思い、涙を流す。

ウィル……! お前の犠牲は無駄にはしない……! 俺は一人で
幸せになるからな……。

そんな友達甲斐が無い事をシオンが心の中で叫んでいると。

「……あれ、シオンのだったのになあ……」

スバルが若干不満そうに顔を曇らせて言う。

シオンの代わりにウィルが全部一撃必倒シチューを飲んだ為だ。

シオンからすれば、ウィルナイスと言った所だが。
スバルはそうもいかないだろう。

声が出せないので、慰める事も出来ないが。態度で示す必要はある。

そう、思い。スバルの肩に手を置こうとして――。

「でも、オカワリいっぱいあるから大丈夫だよね♪」

—ぴしり—

シオンはその言葉に、完全に凍り付いた。

ぎりっぎりっとう首を横に向ける。

そこには———。

「よいしょっと♪」

どすんっと凄まじい大きさの”寸胴鍋”が。そこには鎮座していた。

見るからに巨大な、ヒト一人が楽に入れるレベルの鍋である。

中身は……。

今更確認するまでも無い、一撃必倒シチューであろう。

一体、何十人前分の量を用意したと言うのか。

にこやかに笑うスバルに心底恐怖しながら、シオンは引き攣った笑いしか出来ない。

「シオン、結構食べる方だから一杯作って来たんだ♪ 多分、私が食べるくらいに用意したら大丈夫かなって思って」

……その優しい心遣いが、ニクイ……！

善意の悪行とは、よく言ったものである。

内心ひたすら涙を流すシオンに、新しく深皿を用意して一撃必倒

シチューを注いでいく。

そして、再び。シオンの前にそれが用意された。

何故か、貝殻（渦を巻いた、かなり大きな）が入っているのは。ツツコマ無い方がいいのだろう。

思わず、ウィルが倒れた光景が頭を過ぎる、

うう……。

自然に涙は瞳から零れ落ちた。

先に逝った（？）友に今すぐ俺も逝くよと告げ、しくしくと泣きながら、一撃必倒シチューをスプーンで掻き交ぜる。

……こう言う時に限って、いつもは患者に余計な食事を与えないで下さいと、小煩い事を言う看護人も現れ無い。

――すでに、退路も尽きた。

「泣く程喜んでくれるなんて、嬉しいな♪ 貝殻も食べてね？」

……こいつ。わざとやっとなるんじゃないな……。

内心そんな疑念が頭を過ぎるが、わざわざ作ってくれたものを捨てる訳にも行かない。

覚悟を決めて、スプーンで掬った一撃必倒シチューをシオンは口に運び――。

――数十分後、シオンはやたら綺麗な川がある野原（菊の花）で、

刃とウィルに再会したと言う。



「……すごかったわね〜」

病室で、初めてティアナが口を開く。

その横で、シオンはプルプル小鹿のように震えながら、聞いたその台詞にギロリと横を睨んだ。

「……なにが、すごいってんだ……!」

しゃがれ声で、苦悶の喘ぎを漏らしながらシオンがティアナに声を発する。

声は、一撃必倒シチューのあまりの威力――。

――そうとしか、表現のしようが無い。

で、しゃがれ声ではあるが、復活していた。

そんなシオンに、ティアナはため息を吐く。

「まさか白目剥いて倒れるとは思わなかったわね。すぐに復活した後も、部屋を二十周は駆け回ったでしょ?」

「……あまりの威力にな……。スバルは何処行った……。!?」

「あんたがベッドで痙攣した段階で長い用になるとか言って足早に出て行ったわよ」

「ぢ、ぢぐしょう……。!」

一言、文句を言おうと。

少なくとも嘘を吐くよりかはいい。

まあ、言おうとしたのだが、早々に逃げたらしい。
シオンはため息を吐いて、ベッドに突っ伏す。

ティアナはそんなシオンを見下ろしてぽつりと呟いた。

「ちなみに明日は全力全”壊”ミートローフだそうよ？」
「いらんわ！」

シオン。魂の叫びである。

そのままぐったりとベッドに寝そべるシオンに、相変わらず冷たい視線をティアナは送り、次にその横の”空”となった寸胴鍋へと視線を移した。

……文句言うくらいなら全部食べなきゃいいのに……。

ぽつりと胸中、そう思う。

まあ、残すよりかは大分マシなのだが。

そこら辺はシオンの性格故だろう。

きっぱりと正直に味に対して文句はつけるだろうが、残さず食べるのは。

そんな風にティアナに見られるシオンはもう一度ため息を吐くと、頬に張られた湿布をペリペリ剥がす。

そして自分をじっと見遣るティアナに視線を向けた。

「……何か、聞きたいって顔だな？」

「そうね。あんたの昔話とか、あの紫苑の事だとか聞きたいけど。

……今はもっと聞きたい事があるわね」

さらりと告げた台詞に、思わずシオンはきょとんと疑問符を浮かべる。

てつきり紫苑の事もあったので、昔の事を聞きたいと思っていたのだ。

ティアナや、スバル。エリオ、キャロも気にしていた筈だ。

それが、何故――？

そう、シオンが思っていると、ティアナは一つだけ大きく息を吐いた。

そうして、何かを言おうとして。
でも、やめる。

聞きたい、けど。聞きたくない。

そんな、矛盾した感覚をシオンはティアナに覚えた。

そして、もう一つだけ息を吸うと。

ティアナは、ゆっくりと爆弾を落とす。

聞きたかった事を、シオンを真っ直ぐに見据えて、告げた。

「あんた、みもりに何て返事するの？」

――空気が、先程とは全く違う意味で凍った。

目を大きく見開いて、硬直するシオンが我を取り戻す前に、ティアナは目を伏せて話を話す。

「……ごめん。盗み聞きするつもりなんて無かったけど、あの時。みもりの告白聞いちゃったわ……」

「……………」

「あんと、みもりの、キスも見た」

沈黙し続けるシオンに、ティアナは続けざまに言い放つ。

そのまま暫く二人は見つめ合ったまま固まり――。

やがて、シオンが息を大きく吐いた。

「……お前が見たって事は――。スバルもか？」

「……………」

ティアナの消え入りそうな小さな答えに。

そうか、と一つだけ答え。

シオンはベッドに身を再び倒した。

これで、漸く。シオンも合点がいった。

二人がおかしかった理由が分かったのだ。

くしゃりと頭をかいて、天井を見る。

そのままシオンはティアナへと口を開いた。

「……ん。俺は、みもとキスした。告白も、された」

「……………」

事実を確かめるように、シオンは告げる。

それに、ティアナの顔が歪む。

シオン自身が言った事に少なからずショックを受けたのだ。

そんなティアナを静かに見据えて、シオンは苦笑した。

「……まさか、好かれてるなんて思わなかった」
「……………あんた、それ本気で言ってるの？」

シオンの台詞に思わずティアナは呆れた声を出した。
シオンはそれに、さも心外そうな顔となる。

「恨まれこそすれ、好かれてるなんて思わなかったんだよ。……それ、相応の真似をしたんで……。仲良くしてくれてるのも、純粹に善意だと思ってたんだ」

「……まあ、あんたが何したのかはあえて聞かないけど、純粹な善意だけで、あそこまで慕うとか本気で思ってたの、あんた……？」
「ま、まあ……」

じと目で睨まれて、シオンはバツが悪そうに明後日の方向に視線を送る。

そんなシオンにティアナは再びため息を吐いた。

あそこまで想われておいて、全く気付かないなんてどれだけ鈍感なのかと。

この分じゃあ、直接言わない限り絶対気付かないわね、こいつ……。

いっそこで自分の気持ちを突き付けたくなる思いに捕われるが、頭を振ってそんな想いを追い出す。

こんな、勢いで告白したく無い。
ちゃんと、考えて想いを伝えたい。

そう、思ったから。

でも……。

シオンはどう、みもりに応えるのか。
それが気になって、気になって仕方無かった。

……シオンの想いが、気になって仕方が無かった。

だから、ティアナは再び問う。

それが、卑怯だと分かっているながら。

「――シオン。さっきの、答えてくれる？」

「俺は、まだ。みもりに自分の答えを言って無いんだぞ？」

「……それも、分かっている。自分がどんな事聞いているのか、知っている。――でも……」

聞きたい、の。

それが、たった一つの答え。
ティアナの違う事が無い想い。

だから、彼女は真っ直ぐにシオンを見つめて。それを告げた。

シオンは、ティアナの言葉に暫く黙り込む。

そのまま数分程、時間が経ち。

そして――。

「俺は、俺のみもりへの、答えは――」

シオンも真っ直ぐにティアナを見つめて。

自分の答えを、ティアナに告げる。

その答えに、ティアナの瞳が震えた。



自室でカーテンから射す光を、彼女は目を細めて静かに見る。

月村すずか。彼女が。

彼女は、一ヶ月近く前からこうして部屋に閉じこもっていた。

親友である、アリサ・バニングスが目の前で意識不明にされてから。ずっと。

こんな風に閉じこもっていても、彼女の意識は回復しない。
――でも、なら外に出たとして、何が出来ると言うのか。

アリサの意識を回復させる方法は、管理局の人にも分からないらしい。

生命反応等は、普通なのだ。

なのに、” 何かが無くなってしまった ” かのようにはアリサは意識を取り戻さないらしい。

——正確には、” 彼 ” に襲われた、皆が。

666

すずかも見た、あの黒づくめの青年。

何故、彼がアリサを襲ったのか、
何故、アリサを意識不明にしたのか。

分からない事は山ほどある。

だが、一つだけ確かな事があった。

自分は、彼を絶対に許せ無い、

それだけは確かだった。

生まれて二十年間。ここまで、人を憎く思った事は無い。

そんな自分が、嫌になって。すずかは部屋に閉じこもったのだ。

心配してくれる、姉や義兄。メイドの姉妹にも、極力顔を合わせ無いようにした。

こんな、顔を見せたく無い。
そう思ったから。

特に、なのは達には会いたく無かった。

——彼女達のせいじゃないと分かっているのに、彼女達に何を言ってしまうか自分でも分からなかったのである。

なんで、アリサがまだ意識を回復出来ないのか。それを問い詰めてしまいそうで。

そんな、自分が嫌で。

だから、彼女達が来てくれた時も、部屋に閉じこもり続けた。

そして、彼女達が帰ったと分かると。今度は、自己嫌悪で潰れそうになった。

友達が来てくれたのに、会うのも嫌がるなんて。そう、思ってしまった。

そんな自分が、また嫌になって。でも、でも——。

繰り返される悪循環。

これが、よく無い状況だと自分でも分かっている。それなのに、部屋から出る事に。凄まじい躊躇がある。

迷いが、あった。

今日も、このまま部屋に居続ける事になるのか。そう思うと、更に気が重くなっていく。

けど、どうしようも出来ない。
出来る気が、しない。

そんな風に、また気持ちが沈んで行く事を自覚して――。

「……ここか」

――声が、聞こえた。

ひどく、抑揚に欠けた男性の声である。

少なくとも、メイドのファリンや、ノエルの声では絶対に無い。

まさか、泥棒か何かか？

だが、その可能性は殆ど無い事にすずかは気付く。

この屋敷は、義兄である高町恭也監修のトラップが山と仕掛けられていた筈である。

一般人に、潜り抜けられるようなモノでは決して無い。

そう、一般人には！

一撃！――

すずかがそんな風に思っていると窓が――。

――確か、防弾性の硝子だった筈だ――。
が、叩き割られた。

窓を粉々に割りながら、突き出た拳。

それに、すずかは妙に見覚えがある事に気付く。
まるで、拘束具のように右手を縛りつけるそれに――。

「邪魔をする」

「……………!?!」

だが、そんな見覚えもすずかの中から吹き飛ぶ。

割れた硝子を踏み割って、部屋の中に入って来た人を見たから。

風が吹き、割れた窓から部屋の中に入る。

カーテンがはためき、暗い室内に光が完全に射し込んだ。

そして、彼を完全に映した。

すずかに取って、最も許せない青年を。

「――あ、あなたは……………!?!」

「月村、すずか。だな?」

そんなすずかの驚愕を知った事では無いとばかりに無視して彼は
聞いて来る。

666の名で呼ばれる青年。

伊織、タカトが。

すずかは目を大きく見開きながらも、無意識に割れた硝子を握っ
ていた。

手を僅かに切り、血が流れるも構わない。

震える手でタカトへと向ける。

何故、彼がここに居るのか？

何故、自分の名前を知っているのか？

何故、何故、何故――。

どうでもいい。

頭を過ぎって行く疑問が一瞬で霧散する。

聞きたいのは、言いたいのは、叫びたいのは！

伝えたいのはそんな事では無い。

彼に、すずかは言いたい事はたった一つだけ。

だから、すずかは迷い無くそれを告げた。

「――返して」

「……？」

告げた言葉に、無表情で彼は首を傾げる。

すずかは構わない。

彼の反応なんて、どうでもいい。

ただ、言いたい事をぶちまける！

「アリサちゃんを、返して……！」

「成る程、な」

タカトは、すずかの呻くようにして告げられた言葉に漸く合点がいったのか頷く。

そのまま、すずかを静かに見据えて。それに答えた。
無表情の、ままで。

「出来ん相談だ」
「っ————！」

直後、すずかの頭から何もかもが吹き飛んだ。
硝子の破片を掴んだままタカトへと駆け出す！

こんなもので、どうにかなるヒトでは無い。

彼は、すずかの目の前で。少年から振るわれた刃を素手で受け止めていたような人間である。

そんなヒトにこんなちっぽけな破片など、取るに足らないモノでしか無い。

勿論、それはすずか自身も含まれる。

でも、もう止まらなかった。

止まれる筈が無かった。

だって、彼は奪ったのだから。

アリサを、自分から！

だから！

そして、すずかはタカトへと突き進み――。

――あっさりと、タカトの腹に硝子の破片は突き刺さった。

……え……？

体当たりするかのように、抱き止められるかのような体勢となった格好ですずかは呆然とする。

だが、現実是不変。

自分が、タカトを刺したと言う現実。

「……満足したか？」

「っ！？ ひっ！」

頭の上から、声が降って来る。

変わらない、抑揚に欠けた声。

それに、自分がした事を悟ってすずかが悲鳴を上げる。

だが、声は続けてそのまま降って来た。

「この程度では俺は死なん。だが、まだ気が済まんと言うなら気が済むまで刺せ」

「あ、う……！」

手に持つ破片からは血が滴るようにして落ちる。

それに、すずかは震える。

そんな風に言われて、誰が続けて刺せると言うのか。

タカトは変わらず、すずかに刺されたまま続ける。

「……どうした？ 刺さんのか？ ならば、こちらの用件を告げるとしよう」

「よ、うけん……？」

呆然としたまま、震えながら、すずかはタカトの台詞を繰り返す。
彼は、それに頷き。

そして――。

「アリサ・バニングスからの伝言を、君に伝えに来た」

その言葉を、ひどく坦々とタカトはすずかに告げた。

風がカーテンを揺らす中で、二人は抱き合うような形で。
刺しながら、刺されながら。

すずかはその言葉を聞いた。

（後編に続く）

第四十八話「交錯する想い達」(前編) (後書き)

……はい♪

ども〜♪

長らくお待ちせしました(汗)

第三十八話(前編)をお送りします♪

いや、遅れてすみません。

ちよつと、ネット断ちして。PREXのプロットやら、本編のプロットを練り直してました。

燃え尽き状態だったのもありますが(笑)

次はなるたけ早く更新したいと思います♪

では♪

また次回に〜♪

PS…今話のアリサ道場で、ベストシーンのトップ3の発表を行います
たいと思います♪

第四十八話「交錯する想い達」(中編)(前書き)

……はい♪ テスタメントです♪

く、くう……！ 更新が遅れてしまいました(汗)

しかも中編(汗)

いや、すみません(汗)

文字数が増える増える(笑)

日常編の筈なんですけどね……(汗)

では、交錯する想い達。

どうぞ……♪

第四十八話「交錯する想い達」(中編)

『月夜』病室。

ティアナとなんやかんやあった後。

午後の陽気——なんてものは当然無いこの月にある病室で、シオンはくあああつと、あくびをかく。

今、病室には再び戻って来たスバルと、相変わらず読書が続けるティアナ。

そして、エリオとキャロが新しく居た。

なお、例の『一撃必倒シチュー』については、スバルにきつちりと文句を言っておいた。

——今の内に言っておく事は言っておかないと後々に恐ろしい事になりそうだと直感が最大警報を鳴らしたのだ。

結論は、『なら美味^{おい}くなるまで頑張るよ!』と、言うものであり。良かったのか、悪かったのかは分からないが。

その場に居たティアナには責任取りなさいよとか言われた。

が。

……うん。きつと、うららかな午後の陽気が生み出した幻聴だつて。

シオンは即座に、空耳だと勝手に決めつける事にした。

自分一人だけ地獄に堕ちてたまるものかと胸中思いながら。

と、まあ。そんな事がありながら、昼も過ぎて病室の中で暇を持て余している――。

「おじゃましまーす」

聞き覚えのある声が響きながら、扉が開いた。

現れたのは、シオンにとっての先生、S。

通称、アースラ隊長三人娘。

高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやての三人であった。

すぐに椅子に座っていた四人が立ち上がろうとするが、先頭なのはが手を差し出して制する。

今は、勤務外――。これが、どこまで通じるかはシオンも知らないが。の、筈である。

その為だろう、四人もあっさりと従って礼をするだけに留まった。

三人は頷きながら、シオンが寝そべるベットまで来る。

シオンは、上半身だけを起こした。

「ども、なのは先生、フェイト先生、はやて先生。すみません、こんな恰好で……」

「ううん、そんな大怪我だし。気にしなくても大丈夫だよ」

苦笑しながら、なのはが首を振る。

そして、三人はシオンを上から下まで眺めた。

青のパジャマを着たシオンの身体は見事に包帯だらけである。

足は骨折しているのだろう、ギプスで固定されて吊されている。

ぱつと見では、無事で無い箇所を探す方が難しいだろう。

……つまり、それは、それだけの怪我をする程の真似をしたと言う事だ。

「……ほんとなら、この後にちゃんと、”お話し”しなきゃダメなんだけど——」

びくつとシオンが僅かに震えて硬直する。

なのはの”お話し”とは、つまり言葉以外のモノが飛んで来ながらのお説教の事である。

この二ヶ月。誰よりも、それを受けて来たシオンが硬直するのは当たり前と言えた。

そんな硬直した、シオンになのはは微笑する。

「——言いたい事はたくさんあるけど、……シオン君にとって、今回の戦いは絶対に一人でやらなきゃいけない事だったんだよ、ね？」
「……………はい」

シオンは、神妙に頷く。

紫苑は、シオンが。一人で戦わなければならない存在だった。

自分や、周りの全てに向き合う為にも。

逃げ続けて来た、全てのものと向き合う為にも。

故に、シオンは迷わず頷く。

もし、百回同じ事を繰り返したとしても。シオンは百回とも、一人で紫苑と戦っていた。

その、確信がある。

例え、お話しされようと、そこは曲げられない。

そんなシオンの頷きに、なのはは奇妙な懐かしさを思い出していた。

それは、自分がフェイトと向き合い。一人で戦う事を決意した時と似ている。

違うのは、一つだけだ。

なのはは、フェイトと向き合う為に。

シオンは、自分と向き合う為に。

その程度の違いでしか無い。

その根底に流れるものは同じ『自分の為』だと言う事である。

なのはも、決して『フェイトの為』だとか押し付けがましい事は口にしなかった。

シオンも『みもりを助ける為に』なぞ、死んでも言わないだろう。

だから。

なのはは、たった一つだけ『そっか』と頷いた。

隣では、フェイトや、はやても苦笑している。

「でも、シオン。ちゃんと、色々な人には謝らなきゃダメだよ？
特に、トウヤさんには」

「うぐ……！」

フェイトが苦笑しながら、告げた言葉にシオンは僅かに呻く。

事情がどうあれ、自分が学校を消滅させた事には変わり無いのだ。

そして、一番迷惑をかけたのが誰かと言うと。間違い無く、異母長兄、トウヤである。

一瞬にして、バツが悪そうな顔となるシオンに、今度ははやてが悪戯めいた笑いを浮かべた。

「そやなあー。さっきも通信で話しとったんやけど、かなり怒ってたしなー」

「……ちなみに、どのくらいのレベルで？」

「この前、シオンが怒られたのと同じくらいに、かな？」

続けるようにフェイトが告げた言葉にシオンはうげつと呻いた。ぶん殴られまくった記憶はまだ新しい。

なんせ、三日前の出来事である。

……今度は、どんな風に怒られるのかを想像するだけでシオンは身体が震える事を自覚した。

その、瞬間！

一閃一

どこからともなく、一切の脈絡なく、何か細いものが飛来し……。それはそのまま、すこんつと小気味よい音を立てて、シオンの足のギプスに突き刺さった。

「……どおおおお！？」

あまりにもいきなり過ぎる事態に反応が後れたシオンだが、漸く気付いたかのように悲鳴を上げる。

それに、他の一同はゾツと後ろに下がる中。

ただ、一人。キャロがシオンに近付いていく。

「あ、あのあの、シオンお兄さん。矢が足に刺さってるみたいですよ？」

「気付いてないとも思ったか!？」

一応、心配はしてくれているが、妙にズレているキャロにシオンは喚く。

キャロの言う通り、ギプスに突き立っているのは一本の矢であった。

矢の尻に紐がついていて、何やら封筒なんぞがぶら下がっている。

窓も何も無い筈なのだが――。

何処から飛んで来たのか、悩みつつ。シオンは涙目になりながら、矢を引き抜いた。

「う・う・うゝゝ」

呆氣に取られる一同を置いて、引き抜かれた矢をシオンはベットの上に放り出す。

ちなみに、ちよっぴり鏃やじりに血がついていたりする。

完璧に引きまくった一同を気にせずにシオンは封筒を開けた。すると、中から一枚の紙が出て来た。

がさがさと乱暴な手つきでそれを広げ、シオンが呟く。

「……と、トウヤ兄いからだ……」

「あんたら、いつもそんな方法で連絡取ってたの……?」

顔を引き攣らせながら、ティアナが聞いてくるが。

もちろん、そんな訳が無い。

普通に念話通信が当たり前である。

トウヤ流のタチが悪いジョークと言う奴か。

……若干、殺意が込められているような気はするが。
あえて、シオンは気にしない事にした。

シオンの台詞に襲撃かと思っていた一同もほっと一息吐くと、周りに集まって来る。

手紙を、シオンと同じく覗き込んだ。

「えっ……と。『緊急特別指令』？」

「勝手に読むなよ。まあいいけど」

スバルが読み上げるのに、シオンがちよっと抗議の声を上げる。
が、それに構わず。今度は、横のティアナが読み上げる。

「『シオン。グノーシスを離れたお前と言えど、一応。まだグノーシスに籍はある。と、言う訳でお前になんか特別な指令を与える。しかも緊急だ』」

「……まだ、俺。籍あったのか……。てか、なんて出だしだよ。フランク過ぎるだろ……」

書いてあるままを読み進めるティアナに、シオンは呻き――。
そのまま、硬直した。

理由は言うまでも無い、続きの文である。
固まるシオンを置いて、ティアナは続ける。

「『えーと、最初に伝えておこう。お前に”地獄”を見せようと思う』」

……………。

そこで一旦読み上げるのをティアナは止めて、シオンを見遣る。
未だ、シオンは固まったままだった。

もしかしたら、そのまま気絶しているのかもしれない、が。

ティアナは構わずに先を続ける事にした。

「『あー、だが、ここでお前を生きるのに絶望する程の地獄を与えた所で、お前が社会に対して齎した並々ならぬ損害が弁済される訳でも無い。まずは、お前の罪をここにしたためようと思う。先程、長老部からの通達により今年度から経理部が『暴走弟損害弁済費』なるものを予算に入れる事を検討していると、部長自ら私に通達があった。この時点で私はアースラにあるお前のデスクとロッカーを通路に放り出した』」

「……………」

ちらり、と一同はシオンに目を向ける。

だが、シオンは動きを見せていない。

「『及び、我が』第一位直属位階所有者”の予算七十五%カットの旨が、書面で知らされた。この、管理局に、いろいろと、便宜を計ろうとして、いろいろ、入り用な、この、時期に、だ……！ 私はお前のデスクとロッカーを地球の出雲本社に持ち帰り、寒風吹きすさぶ屋上に運び出した』」

この辺りになると手紙に綴られた字がやけに歪んでいびつになっていた。

どうも、怒りで筆圧が異常に上がったようである。

腕も震えていたのか、字も揺れていた。

ティアナは淡々と続ける。

「『間もなくして、カットされた予算の中に、私への賞与^{ボーナス}と言う項目を発見した。つまり、私は最低、後一年はボーナスを貰え無いと言う事だ。――私が屋上から景気良く音速超過で放り投げたお前のデスクとロッカーが、たまたま視察に来ていた長老部の一人に直撃して、現在意識不明、生死の境をさ迷う程の重傷を負わせたからといって、誰が私を責められよう……!』」

ここで、派手にインクが飛び跳ねていた。
おそらく、ペンが折れたのだろう。

「『――と、言う訳で。私はお前に”ただ地獄を見せる”のでは無く、”じわじわと地獄に叩き込む”事にした。……楽しみにしていたまえ。今が天国だと言う事を噛み締めさせてあげよう。ちなみに今日中に復帰せねば、更なる地獄を用意するのでその積もりで、では』……、成る程ねー」

手紙を二つに折り畳み、ティアナはうんうんと頷く。

他の面々も同じく、だ。

ただ、硬直するシオンのみが残され――。

「至極、妥当な判断ね。頑張ってね、シオン。めげちゃダメよ？

現実是不変わらないわ」

「なんでじゃあああああああああああああああああああああああああああああああ――っ!」

何故か納得する一同にシオンの全力での絶叫が、白い病室に響き渡り――。

かくして、そういう運びに話しはなった。



喫茶、翠屋。

高町なのはの両親である、高町士郎と高町桃子が経営する町内で大人気の喫茶店である。

そのケーキの味は、パティシェの桃子の腕もあってか絶品であり。今日も、今日とて近場の婦女子の舌を満たしていく。

そんな翠屋で月村すずかは、呆れたような目を正面に居る青年に向けていた。

すずかにとって、もっとも許せない青年。伊織タカトに。だが、その視線は何故か妙に暖かみのあるものだった。

その理由はいくつかある。

まず一つは、タカトの前に置かれたケーキの量だろう。

恐らくは、翠屋のケーキ全種類がそこに並べられていた。

彼は、それを全部食べていたのである。

——食べる度に、ひどく”幸せそうな”顔をして。

二つ目の理由は、まさにそれである。

やたらと美味しそうに食べるのだ、これが。

見るだけで、やたらと幸せになるような顔で食べるので、ついっ
られてしまいそうになる。

だが、ここで一つの疑問点が生まれる。

タカトは、あくまでも幸せを感じる事は出来ない。
既にそういうものになってしまっているのだ。

それは、例え美味しい料理を食べようとも当然感じる事は出来ない。
世界一美味しい料理だろうが、何だろうがそれに例外は存在しない。
つまりは、この反応そのものがおかしいのだ。

なのに、すずかの前に居るタカトは幸せそうにケーキを頬張る。

見る人が見れば、自分の目を疑いそうな光景が繰り広げられ。

そして――。

「はー。美味しかったー。一度やってみたかった”のよね”。翠屋のケーキ全制覇。残すの勿体ないからやれなかったけど。”男の身体”ってこう言う時便利”よね”」

「そ、そうだね……」

タカトの違和感バリバリの台詞に、すずかは苦笑しながら答える。
それもそうだろう、今。

タカトは完全に女言葉で話したのだ。

苦笑の一つも出て、当然と言える。

そんなタカトの台詞や、仕草に”たった一ヶ月しか見なくなった

”のに、酷く懐かしい想いをすずかは抱く。

それは、いつもすずかの隣に居た存在の仕草だったから。
それをタカトがしているのに凄まじい違和感があるが、すずかはそれを振払った。

そして、タカトに――。

――”タカトの姿をした彼女”に微笑む。

そう、彼女は――。

「”アリサちゃん”、次はどこ行こうか？」

アリサ・バニングス、タカトの身体を借り受けた彼女は。
そんなすずかの問いに、にっこりと微笑んだ。

何故、こうなったのか。

話しはタカトの月村家、襲撃まで遡る――。



「アリサ・バニングスからの伝言を、君に伝えに来た」

その言葉に、すずかは目を見開いて硬直する。

今、彼は何と言ったのか。

思ってもみなかった言葉に彼女は完全に凍り付き、だがタカトは構わず続ける。

「あれには日頃。やたらと世話になっていてな。おかげでいろいろ助けられた。今回はその礼だ。――後は、本人に聞け」

？・？・？

彼女に構わず話しを続けるタカトに、すずかは疑問符を浮かべ続ける。

一体、彼は何を言っているのか。
全然、分からない。

そんなすずかの顔を見て、自分が言っている事を分かっていないとタカトも気付く。

「――後になれば全部分かる。取り敢えずは、だ」

「？」

「抜いてくれるか？」

「！？」

そう言われて、漸くすずかは自分がタカトを刺したままだと気付いた。

あまりにも自然に話すものだから、すっかり忘れていたのだ。
慌てて、ガラス片を抜く。

「そ、その……。ごめんなさい」

「――謝る必要は無い。君は、相応に俺に怒るだけの理由があった」

あつさりとタカトはそう言うと、傷口に手を当てる。

鍛え抜いた筋肉のおかげで皮一枚程度しか刺さっていない。

どちらにせよ、致命傷には程遠いものがある。

だが、このままと言う訳にもいかず。タカトは仙術で体内の細胞

を活性化させて、傷を癒した。

そして、すずかへと向き直る。と――。

「お嬢様……！」

切羽詰まった声が扉の向こうから響く。

メイドのノエルの声だ。

恐らくは、窓ガラスを割った音を聞き付けたか。

……このままでは無用の騒ぎになる、か。

タカトはそれを察するなり、いきなり前にいるすずかをひよいと抱えた。

驚いたのは当然、すずかである。

「え！？ え！？」

「暫く我慢しろ。取り敢えず逃げる」

そんな事をタカトは言うが、そうもいかないのがすずかである。そうでなくても、歳の近い男性に抱えられた経験などは無い。

と、言うよりこんなに近くに男性を見る経験そのものが無い訳だが。

気恥ずかしさやら、何やらで混乱し。じたばたと暴れるが、タカトは当然構わない。

そのまま窓の外へと目を向けて――。

直後。その姿がすずかごと消えた。

仙術歩法、縮地。

あるいは、縮地神功・神足通とも呼ばれる空間転移歩法である。それを持って、タカトはさすがごと、何処かに消えて――。

ノエルが、扉をブチ抜いて現れるのはそのすぐ後の事だった。

その見る先には、当然すずかはおらず。ただ割れたガラスが散乱するだけだった。

「ここならば、大丈夫か」

「え……!?!」

すずかは、その台詞を聞くなり周りを見て愕然とする。

先程まで、屋敷に居た筈なのに。

今、すずかが居るのは海鳴公園のど真ん中だったからだ。

縮地の存在を知らない彼女は、一瞬混乱するがタカトは構わない。すずかをあっさりと下ろした。

「さて、話しの続きだが」

「え? えっと、私。さっきまで屋敷に――」

「気にするな。どうせ聞いても分かん。話しを続けるぞ?」

これまた問答無用とばかりに、タカトはすずかの問いを切り捨てる。

そして、説明の続きを始めた。

「先にも言った通り、彼女が君に伝えたい事があるそうだな。で、礼も兼ねて、一日。俺の身体を貸す事にした」

「……えっと」

「そんな事が出来るのか、と言う質問ならば要らない、出来ん事など言わん。……つまり俺の身体ではあるが、彼女と話せるという事だ。——後は先にも言った通りだ。本人に聞け。ではな」

混乱する、すずかを置いてタカトは一方的に話すなり。いきなり崩れ落ちるようにして地面に倒れ込んだ。

それに、すずかは慌てて起こそうとする、が——。

それを制するように、彼は手を上げた。

そのまま、ゆっくりと立ち上がる。と、キョロキョロと周りを見渡した。

「……背の高さが変わるだけで、随分世界が変わって見える”わね”……。ちょっとびっくりした”わ”」

「え……？」

「久しぶり、元気にしてた？ すずか」

名を呼ぶなり、微笑んですずかを見遣る。

その視線に、すずかはひどく懐かしい感覚を覚えた。

腰に手を当てて笑う、その姿を何回も見た事があった。

それは——。

「アリ、サ、ちゃん……………?」

「うん。だからそうだってば。このバカの説明、聞いてたでしょ――」

「アリサちゃん!」

「きゃ!?!」

台詞の途中で、いきなり飛び掛かれて、タカトが――。否、タカトの身体を借り受けたアリサが悲鳴を上げる。

だが、すずかは構わず抱き付いた。

「アリサちゃん……! アリサちゃん! アリサちゃん!」

「ちょ……! ちよっと待って、落착着きなさいすずか! 私、今、男の身体! ご近所の噂になるわよ!?!」

抱き着かれ、転びながらタカトの身体でアリサが喚くが、すずかは聞く耳持たず、しがみつく。

アリサちゃんが今、ここに、居る……!

タカトの身体ではあるが。

今、まさにすずかが抱きしめているのはアリサであった。

だから、すずかは離れない。

あの日、失った彼女が。

ここに居るのだから。

鳴咽を漏らして抱き着くすずかに、アリサは苦笑して。観念したかのように背中を叩いてやる。

――結局、その後。すずかが離れるまでの間、二人らそうやって

抱き合っていた。



「はー。堪能したわ……。こんな事になって何が辛かったかって言うと、何も食べたりとか出来なかった事なのよねー」

「そうなんだ？」

翠屋から出て、二人は話しながら歩く。

ちなみに、すずかは裸足だったり部屋着のままだったりしたので適当な店で全部買い揃える事にした。

当然、タカトのお金で。

タカト本人が、『いたらん出費を……』だの途中で喚いていたが、アリサは勿論無視。

元はと言えば、部屋に突っ込んで誘拐同然にすずかを連れて来たタカトが悪い。

いくら何でも、あれは無いだろう。

……まあ、インターフォンを鳴らして正面から訪問しても、いきなら会わせてなぞ貰え無かっただろうが。

そんな風にタカトの失態を笑うアリサに、すずかは微妙な笑いを浮かべながらも頷く。

「まったく。基本、こいつってば深い考えがあるかと思ってたら行き当たりばったりなんだから。腕力でなんとか出来る事態以外はかきしよ？ 不器用なのは分かっているんだから治す努力しろってのよ。多分、一生治らないでしょうけど」

「……なんか、アリサちゃん。その人の事、いろいろ詳しいよね…

…」

微妙な表情のままで、すずかは呟く。

それに、アリサは『そりゃあね』と苦笑した。

「なんだかんだで一ヶ月はこいつの中に居るんだしね。……おかげで、いろいろ知ったわ。……なのはには先越されるし」

「え？」

「なんでもないわよ」

最後の部分の呟きに、すずかは疑問符を浮かべるが、アリサはそれに手を振ってごまかす。

まさか、親友のキスシーンをあんな形で見ることになるなど誰が分かるものか。

……ついでに、告白シーンも。

アリサは今のタカトの事情をおそらく一番知っていると言える。それは『傷』もそうだし、目的もそうだ。

……だからこそ、タカトの目的を誰よりも否定しているのだが。

アリサは頭に浮かんだそれらを頭を振って追い出した。

すずかの手を握る。

「ほら、次行くわよ。次！ こいつケチンぼだから、二回も身体貸してくれないだろうし！」

「あ、うん！」

『誰がケチか。誰が』と、再び喚く声が聞こえるが当たり前のように無視。

アリサは、すずかの手を握ったまま駆け出す。

今日は、一日。すずかと遊ぶつもりだった。
遊び倒すつもりだった。

これまで会えなかった分を取り戻すように。

……会えなくなる、これからの分も含めるように。

アリサは、すずかを伴って駆けて行った。



夕方の海鳴公園。

冬も間近に迫っている証拠のように日が早くも沈み、辺りには夜の帳が下りる。
とぼり

枯れ葉が足元を過ぎる中で、アリサとすずかはベンチに座っていた。

「はー。遊んだわ……。でも、映画二本は流石に無謀だったわねー」
「だから、止めたほうがいいよって言ったのに」

あの後、アリサとすずかは。これでもかと言わんばかりに遊びまくった。

ショッピング（タカトのお金で）に始まりゲームセンター（ここもタカトのお金で）をはしごして。

気になっていた映画を続けて二本も見た（更にタカトのお金で）。
もはや、中のタカトは『好きにしろ。もう知らん』と言っていたので、お言葉に存分に甘えた形である。

そして、夕食を食べて今に至ると言う訳だ。

もはや、殆どデートである。

まあ、女の子同士(?)で、そう呼ぶかどうかは分からないが。
二人は、存分に疲れ果てるまで遊んだ。

「……楽しかったね……」

「うん、そうね……」

すずかの言葉に、アリサは頷く。

若干、力の無いその声は遊び倒した事による疲れか、それとも――
。

――この後の事を、理解していたのか。

暫くして、アリサは立ち上がる。

数歩前に歩いて、くるとすずかに向き直った。

「……もう、時間だわ」

「……………」

アリサのそんな台詞に、すずかは無言。

だが、その無言こそが何よりの意思表示であった。

……もう、終わりなんて嫌だと。

また会えなくなるなんて嫌だと、そうそのすずかの態度は告げていた。

「あのね、すずか。私、ちゃんと伝えなきゃ行けない事があるの。
……元々は、この為に身体を借りたんだしね」

「……………」

すずかは変わらず無言、だが。こんどは動きを見せた。
首を振ったのだ。横へと。

だけど、アリサは構わない。

「私ね。当分、身体には戻れないわ。……今、戻る訳にはいかない」
「なんで」

漸く、漸く。すずかは声を出した。
なんでなのかと、問い掛ける声を。
アリサはそれに微笑する。

「理由はいろいろあるわ。……今、身体に戻っても感染者のままだとか。身体がある場所が厄介だとか。でも、それは一番大切な事じゃないの」

言いながら、アリサは自分の――。タカトの胸へと右手を当てる。
視線は変わらずに、すずかを見据えながら。

「このバカを。今、放って置けない。……大切なモノを守るために、何もかもを捨てようとしているこのバカを、見捨てる事なんて出来ない」

「アリサ、ちゃん……？」

「ごめんね、すずか。でも、もう決めたの。このバカの――タカトの決意を聞いた、あの時から――」

――もう、おそらくは長くない。残り僅かな時間――

アリサは、その言葉を覚えている。

大切な何かを守る為に何かを決めてしまった青年の言葉を。

——最後まで、この嘘を吐き通そう、て決めたよ——

その、優しい笑いを覚えている。

どこまでも、どこまでも。孤高に、空を見上げながら優しく笑う。

その、姿を。

——怒るんだろうな——

そして、自分の返答を。

——泣くと、思うわよ？——

アリサは覚えている。

だから、決めたのだ。最後まで諦めずにタカトを止める事を。だって、そうじゃないと悲し過ぎる。

他でも無い、それを悲しい事だと理解出来ないままのタカトが。

「だから、”今は”まだ戻れ無い。このバカの、世界をたった一人で背負った気でいるバカな考えをどうにかするまでは。だから——」

待ってて。

最後の言葉を聞いて、すずかは顔を上げる。

アリサは微笑んでいた。

どこまでも、清々しい表情で。

「必ず帰って来るから。絶対、帰って来るから！ だから！」

だから、待ってて。

アリサの、まるで懇願にも似た言葉を聞いて。すずかはただ、アリサを見続ける。

随分、長く時間が経ったように二人は黙ったまま見つめ合い。

「……うん」

すずかの口から、ゆっくりとそう返事が零れた。

そして、アリサを見つめる。

優しい、瞳で。

「うん。待ってる。待ってる、よ。アリサちゃん」

その瞳から涙も、共に零れ落ちながら。

すずかは頷く。

すずかもまた悟ったのだ、アリサが自分の意思でタカトの中に留まっている事に。

そして、それを止めるなんて事は出来ない事に。

アリサ自身が決めた事だ。

それを、何故。自分が止められるのか。

でも、でも。

それでも。

寂しさは、どうしようも無くて。

だけど、今にも口に出てしまいそうなそれを、すずかは必死に抑える。

「ずっと、待ってるから。ずっと、ずっと、待ってるから」
「……うん」

アリサもまた、何も言わない。
親友だ。ずっと、ずっと一緒に居た親友だ。
言いたい事なんて、分かってる。

だからこそ、アリサは何も言わない。
すずかが止めなかったようにアリサも何も言わない。

見つめ合う二人の間を、風が通り過ぎる。

アリサはゆっくりと目を閉じ。
やがて、開く。

「時間、だわ」
「……アリサ、ちゃん」

分かっていた、分かっていた。
もう、この時間は終わりだと。
それでも、溢れてくる感情はどうしようも無い。
悲しみと言う感情は、どうしようも。

アリサは微笑する。

すずかが安心出来るように。

「大丈夫よ。あっちは、思ったより過ごしやすいもの。……たまにこのバカ殴ってるし。だから、だから——」

声が、詰まる。

ぐっと、何もかも。弱音も悲しみも吐き出せてしまえば、どれだけ楽になるだろう。

でも、アリサはそれを選ばない。

きつと、すずかが悲しそうな顔をしてしまうから。
そんな顔を見たくないから。

「ほら、すずか。笑って？ 泣いて見送りなんて私は御免よ？」
「————っ」

その言葉に、すずかは一瞬だけ息を止め——。
何かを噛み締めるように頷くと。
ゆっくりと、笑って見せた。

不器用な、そんな笑いを。
アリサもまた笑顔を返す。

「うん。その顔が見たかったのよ。私が一番好きな、すずかの笑顔が」

「アリサちゃん……」

「ありがとう、すずか。————また、ね？」

そうして。

アリサは、告げる事を告げるなり目を閉じて――。
変わった時と同じく、その身体が崩れ落ちた。

が、完全に倒れる前にどうにか堪える。

ずっと立ち上がる、その佇まいは既に。

アリサのものでは無かった。

伊織タカト。

彼が、再び身体に戻っていた。

「……俺を恨め」

唐突にそんな事を、タカトはすずかに言う。

今までの事も、アリサとすずかの会話も当然タカトは聞いていた。

だから、彼はそう言う。

そう言う事しか、出来ないから。

「俺は、彼女をお前に返す事など出来ん。だから、恨め――」

「甘えないで」

ぴしゃりと、すずかはタカトの台詞を切って言い放った。

驚いたタカトが目を見開く。

すずかは真っ直ぐにそんなタカトを見据えた。

「誰かに恨まれる事でしか、貴方は許しを請えないの？」

「……俺は、別に許される積もりなぞ――」

「なんで一言『ごめんなさい』って謝れないの!？」

すずかの怒声が、公園に響く。
タカトはそれに、動きを止めた。
そんな彼にすずかはつかつか歩み寄り。

—ぱん！—

その頬を、思いっきり平手打ちにした。

「私は、貴方を絶対に許せない。何があろうとも、それは変わらない」

「……………」

「でも」

ごしっと袖口で涙を拭う。

そして、すずかは真っ直ぐにタカトを見据える。

「——許そうって。努力する事は出来るの……」
「……………」

すずかの台詞に、タカトは何かを言おうとして。
でも、言わない。

くっとうみを一つだけ漏らして留まった。

「……俺は謝るつもりは無い」

「……なんで？」

「俺は、俺が正しいと思う行動をしているからだ。——そんな、俺が。他者の犠牲を、必要とあるならばそれを認められる俺が、何故謝る事が出来る」

謝る。

タカトの選択肢にそれは無い。

選べ無い。

何故なら、それを容認すると言う事は。自分が間違っていると認める事になるから。

今、自分がやっている事。全てを否定する事になるから。

だから。

「俺は謝らない」

「そう。なら、私はずっと貴方を許さないよ？ 許す努力もしない」
「それでいい」

タカトはふっと笑う。

それでいいのだと言いながら。

すずかの言葉に、顔を綻ばせる。

「誰か一人くらいは、俺を許せない人間が居て欲しいと思っていた」

「……変わってるね？ そんな風に思うなんて」

「ああ、そうだな」

苦笑する。

そして、タカトはすずかに背を向けた。

もう、用は無いとばかりに。

笑いながら。

「では、さらばだ。絶対に俺を許せない女」

「うん、じゃあね。私が絶対に許せない人」

二人は、互いの名を絶対に呼ばない。

呼ばないままに二人はあっさりと別れた。

許さない女は、許せない男を黙って見送る。

そうして、男の姿は夜闇に消えた。

（後編に続く）

第四十八話「交錯する想い達」(中編)(後書き)

はい♪

中編終了でございます♪

とりあえずは、タカト(アリサ)とすずかの部分だけでも終わらしました(笑)

すずかは結局、タカトと和解しませんでした。

多分、これが一番正しいと思います。

タカトを許せない、嫌いなキャラが一人は居てもいいだろうと(笑)

ではでは、後編をお楽しみに♪

また次でお会いしましょう♪

ではははは♪

第四十八話「交錯する想い達」(後編)(前書き)

はい♪　どもー、テストメントです♪

今回、ちよつとアリサ道場はベストシーントップ3発表を行って
ますので、いつものどたばたギャグはありません(笑)

ですので、期待された方にちよつと申し訳無いですが……。

ではでは、後編。どうぞ……♪

第四十八話「交錯する想い達」(後編)

ごぼつと音が鳴り、神庭シオンは目を覚ます。
グノーシス『月夜』ナノ・リアクター治療室。

そこにシオンの姿はあった。

昼過ぎからナノ・リアクターが空いたので、遅まきながら治療を開始したと言う訳だ。

……シオンとしては後々の事を考えると、寧ろまだ入院して置きたかったのだが。

例の手紙に書かれていた内容が内容だったので引き延ばす事も出来なかったのである。

トウヤの事である。

更なる地獄を用意すると言えば必ず用意するだろう。

ナノ・リアクター内の溶液が排出され、これがナノ・マシン

シオンはやれやれと中からは出る。

と、声が掛けられた。

「うふふふ……。気分はどうかしらあ……」

「うーん。まあ、痛い所はどこも……。て、待てい！」

普通に受け答えしようとして、思わずシオンは叫ぶ。
慌てて、前を隠しがてら周りを見渡す。

そこには、異様に伸びた前髪に白衣の”女性”が居た。

そう、女性である。

ちなみにここは女人禁制の男性用ナノ・リアクター治療室である。
つまり、女性の立ち入りは厳禁の筈、なのだが――。

何故か、その女性は自然にここに居た。

シオンを見て、うふふと伸びた前髪の向こうで笑う。

某り○グの○子を彷彿とさせるその女性は、シオンに向けてビツ
とサムズ・アップして見せた。

「……うふふ。なかなか……」

「なかなか!? 　なかなか何だよ!? 　てか、何であんたがここに
いる!? 　それより何より着替え寄越せ!」

とりあえずはナノ・リアクターの後ろに隠れつつシオンが喚く。
それにもやはり彼女は答えず。うふふと笑うのみであった。

ふかみね
深海女史。

グノーシスにおける。封印指定研究である筈のナノ・テクノロジー
―研究をただ一人任されている女性である。

見た目はこんなだが。当然、頭の出来は人より遥か上である。

……性格が壊滅しているが。

とりあえず、深海女史が放ってくれた服をナノ・リアクターの後
ろでこそそこそ着替える。

「……うふふ。それで、どうかしらあ? 　痛む所とかある?」

「……いや、まあ。無いですけどね。で、なんであんたがここに――
――」

「そんな細かい事はどうでもいいのよお」

「細くないし！」

吠えるが、やはり深海女史は聞こえて無いとばかりにうふふと笑い続ける。

そんな彼女に、シオンはため息を吐き出す。

この二年間。グノーシスを離れていて漸く認識した事だが。この組織。

あまりにも、変人が多過ぎなのでは無いだろうか。

アースラに居た皆が、こうして見るとまともに思えてくるのだから不思議である。

とにかく、素早く服を――。管理局武装隊の服だ――。に、着替えるとシオンはナノ・リアクターの後ろから出た。

「……まったく。なんでこんな所に入って来るんだか……」

「うふふふ、強いて言うなら知的好奇心のなせる業よぉ」

「いや意味分からんし」

ツツコミつつ、シオンは軽く身体を動かして具合を確かめて見る。流石のナノ・リアクターであろうとも魔力枯渇はどうにもならないが。怪我は完治していた。

普通ならば、全治数カ月の怪我が僅か二時間足らずで快復している事に、シオンはちょっとした感動を覚えつつ。苦笑する。

「どう？ 何か問題ないかしらあ？」

「はい。大丈夫です」

「そう、……………おかしいわねえ」

「ですねー。……………て、待てい」

思わず流しそうだった深海女史の台詞にシオンは呻きながら留める。

おや？ と、首を傾げる彼女を睨みつけた。

「そら、どう言う意味だ」

「……うふふふ、何か聞こえたかしらあ」

「きっぱりと聞き逃せん事が聞こえたわ!？」

「そう？ まあ、気にしたら負けよお」

「……………もーいいや」

何故か、快復した筈なのにどっと疲れを覚えてシオンは肩を落とす。

だが、そのままこうしている訳にもいかずにシオンはナノ・リアクター治療室の外へと歩き出した。

「うふふふ、また怪我したらいらっしやいなあ。最短で治してあげるわあ」

「いや、だからここは男用だと……いいや。んじゃ、お世話様」

ツッコミを入れるのにも疲れを覚えて、シオンは開いた自動扉を潜って外に出る。

うーんと、伸びをして。

「おー。シオンじゃんか」

そんな風に横から声を掛けられた。

そちらに視線を向けると、そこには赤の髪を三編みにした一見すると小学生しみた女の子。ヴィータと、桃色の髪をポニーテールに

したすらりと背の高い女性。シグナムが居た。
笑いながら、こちらに歩いて来る。

シオンはぺこりと頭を下げた。

「ども。ヴィータさんとシグナムもナノ治療で？」

「ああ。つい先程、終わった所だ」

シオンの問いに、シグナムが微笑して頷く。

ヴィータも腕を組んで、ちらりと出て来たナノ治療室に視線を向けながら苦笑してくる。

「……お前。まーたやらかしたらしいよな。ほんと、飽きないって言うか何て言うか……」

「いや、まあ」

頬を指で搔いて、視線を泳がせる。

そんなシオンにヴィータはため息を吐いた。

「ま、いいけどよ。あんまし、はやて達に迷惑掛けんなよ。ただでさえ、お前トラブル・メイカーなんだから」

「いや、そんな好き好んでトラブルに首を突っ込んでるみたいな言い方せんでも」

「違うのか？」

こちらは、シグナム。彼女にしては珍しく悪戯めいた笑い顔で聞いて来る。

それに、シオンはげんなりと肩を落とした。

「勘弁してよ。俺は平和主義者なんだから」

「「……………」」

「せめてツツコんでお願い」

黙ってしまう二人に、シオンは懇願する。
そんな彼に、二人は顔を綻ばせた。

「ところでシオン。お前、刀を抜いたとか聞いたが？」
「？　そうだけど、それが？」

どこから聞いたんだろうと首を傾げつつ、シオンはシグナムに聞き返す。

それに、彼女はふふと笑った。
ぽんっとこちらの肩を掴んで来る。

……嫌な予感がした。この、パターンは――。

「よし。なら、話しは早い。早速――」
「だが断る」

笑う彼女に、シオンは即断で台詞を皆まで言わせずに切って捨てる。

ぴしりと固まったシグナムからきっかり三步下がると一礼した。

「じゃあ、俺はこれからトウヤ兄いの所に用事があるから――」
「待てシオン！　私は最後まで用件を言って無いぞ！？」
「聞かんでもわかるわ！　どうせ、模擬戦しようとかそんななんだろうが！？」

吠えながらシオンは、これまでのアースラでの彼女の実績を思い出していた。

始まりは、囑託魔導士試験に於ける模擬戦。

次は、初出動の後に散々模擬戦を挑まれた。

最後は聖域での戦いの後か。

その後は、ごたごたしていた事もあり、模擬戦どころでは無かったが。

どちらにせよ尋常な数では無い。

既にシオンもシグナムのバトルマニアっぷりはよく理解していた。

そんなシオンに構わず、シグナムは再び肩をぐわっしと掴んで来る。

こちらを真剣な顔で見つめた。

「いいかシオン。聞いた話だが、お前が刀を使っていたのは五年も前だそうだな？」

「うん、まあ」

「それでだ。もし、刀を実戦で使わざるを得ない状況に陥った時。そんなブランクを挟んだ状態では上手く使えないだろう？」

「いや、実戦のが先だったんだけど」

「だからだ。私と模擬戦をする事で刀を使う感覚を取り戻すと言うのは――」

「うん却下。じゃあ俺はこれで――」

「ああ！ 待つんだシオン！」

「……今度は何さ」

若干どころか、完全にぐったりとして。呻きすらをも上げながらシオンは聞き返す。

それに、シグナムは真っ直ぐにシオンを見据え――。

「細かい事は抜きにしよう。私とお前の仲だ。熱く、刃を交えた。いわば、好敵手。とも……だからこそ、私は刀を使うお前と戦ってみた
い」

いろいろツツコミ所満載な台詞を。熱く、熱くシグナムは語り掛けてくる。

肩を握る手にもやたらと力が入っていた。

そのまま続け――。

「だから、是非私と戦って欲しい。頼む」

そう、締めくくった。

その台詞に、シオンも感じ入ったかのように頷く。

「……熱い、熱いな。シグナム。――でもな？」

シオンは無念そうに首を振る。

横に、だ。

それに、シグナムは更に肩を握る手を強めた。

――かなり痛い。

「何故だ!?! 何故そうまでして断るんだ、シオン……!?!」

「何故か? そんなの決まってる。決まってるんだシグナム――」

ふつと頭上をシオンは見上げる。

その顔は傍目から見ても辛そうに見えた。

その瞳から涙が零れ落ち、そして。

「――模擬戦にかまけて、トウヤ兄いのおしおきをこれ以上増やしたく無いんだ」

「……………」

凄まじく真剣な顔で、情け無さ過ぎる台詞をシオンは吐く。

あまりにも、あれな理由にシグナムの肩が若干コケて――。

シオンの目がきらりと光った。

力が抜けた瞬間を見計らってシグナムの手から抜け出す。

「あ！　こらシオン！」

「てな訳で、俺がまだ生きてたらって事で――！　ヴィータさんもまた――！」

「おう。頑張って来いよー」

一連のやり取りを呆れ切った目で見ていたヴィータが頷くのを尻目にシオンは駆け出す。

気は進まないが、トウヤの部屋へと。時間を掛ければ掛けるほど、後の”地獄”とやらは洒落しゃれにならなくなるという事もある。

とにもかくにも、走って行った。



第一位。執務室。

そう表記された扉を見て、走って来たシオンはため息を吐く。

このまま回れ右して帰りたいと心の奥底から思う、が。

その後待つは真性の地獄であろう。

地獄、地獄と強調し過ぎな気がするが。

トウヤが繰り出す様々おしおきは、そう呼ぶのに何の過分も無い。

頭に過ぎる過去に受けたそれら――。

爽やかコース。

すっきりコース。

――を、思い出していく。シオンの顔色はどんどん悪くなっていった。

ほろり、と涙が零れる。

だが、そのままと言う訳にもいかない。

一応。思い付く限りの神様、仏様、もしくは悪魔に祈りを捧げつつ、シオンはインターフォンを押す。

《――誰だね？》

「あー。俺だけど……」

《俺？ 誰だね、それは？ 俺と言う名前の人間には全くもって心当たりはないのだがね？》

「……ごめんなさい。神庭シオンです」

やっぱり機嫌悪いや……。

トウヤの声を聞くなり、シオンはそれを直感する。
暫くの間を持って、扉が開いた。

入って来いと言う事だろう。

ちよっと躊躇いがちに、シオンは扉を潜り――。

「遅い」

一撃！――

「ぺぎゅる！？」

――何の脈絡無く殴られた。
盛大に吹っ飛び、通路の壁にぶち当たる。

そのまま崩れ落ちるシオンを冷たいく見下ろすのは当然。異母長
兄、叶トウヤであった。

顔を押さえながら、文句を言おうとしたシオンの顔が固まる。
トウヤの視線が並では無い程に冷たい。

これは、ヤバイ……！

直感で感じ取れるレベルでトウヤの怒りが分かる。
裸が粟立^{あわた}つのを感じながら、シオンは思わずあたふたと回れ右を
する。

「たーすけてー……！」

「何を逃げてるのだね？ お前は？」

あっさりと襟首を捕まえられて、シオンの逃亡は終わった。
ひよいと猫の首を摘む動作でシオンを吊り上げ執務室に入っている。

そして部屋の真ん中に用意された椅子に、どすんと落とされた。

――尾骨を派手に打ち、悶絶するシオンを余所にトウヤはマホガニーに向かい。

椅子に腰掛ける。

そして、シオンに向き直った。

「さて、シオン？」

「あ、ああああ、あ、あの……！ と、トウヤ兄い……？」

にっこりと笑う――。

――これは異母兄達共通の怒りのサインだ――。

――まあ、笑う。トウヤに、シオンは噛み合わない歯で名前を呼ぶ。

それに、トウヤは笑いながら見て。

「なんだね？ 我が愛すべき異母弟”だった”シオン？」

「過去形！？ 過去形になってるよトウヤ兄い！？」

「――これからは、家族”四人”になるのだね。頑張っていこうと思う」

「あ、ああああ……！」

トウヤは表情を変えずに続ける。

「先程、八神君達と話しをしてね。例の件。彼女達の、各デバイス、ロスト・ウェポン化が決定された」

「……へへへ。よくまあ……」

思わずシオンは感心して、頷く。

基本的に、管理局の人間である彼女達は古代遺失物――。つまりは、ロスト・ロギアの所有や使用を躊躇う面がある。

危険度を鑑みると、それは寧ろ当たり前の反応とも言えた。

個人で核兵器を持ち歩くようなものである。

いくら制御されていてようと、それに危険を覚えない方が寧ろ危なっかしい。

故に、シオンはあっさりとはやて達が決めた事が意外だったのだ。

トウヤもまた頷く。

「まあ、ここ暫くは悩み続けていたようだがね。――お前の独断先行、言語道断、無理無茶無謀な行動で腹を決めたようだ」

「……えっと、ごめんなさい」

「はっはっは。謝っても許すつもりは無いから、その積もりでいたまえ。――まあ、あの被害を考えれば寧ろ当然とも言えるがね」

トウヤの台詞に、聞こえないように舌打ちしつつ、シオンは天碎きの被害状況を脳裏に浮かべる。

学校消滅。

しかし、それは本来の威力が全て上へと向かった為らしい。

元来ならば北半球が壊滅していたと言うのだから、改めて天碎き

の威力を思い知らされる。

しかも、それでさえ。アルセイオの斬界刀や、ベナレスのギガンテイスが持つアーマーゲドンよりランクは低いのだ。

はやて達が、危機感を、力不足を感じるのは至極当然と言えた。

「まあ、そう言う訳だ。その上で、お前に任務を与える」
「へ……？ 任務？ 地獄じゃなくて？」

トウヤの台詞に、シオンはきょとんと聞き返す。
てっきり即座におしおきだべ〜とばかりに、ドエライ目に合う
と思ったのだが。

トウヤは、そんなシオンの返答にため息を吐く。

「手紙の題名には何と書いてあったね？」
「えっと、『緊急特別指令』だったけ？」

シオンはうろ覚えの題名を読みあげて――。
その顔がぱあっと明るくなる。
それを見遣りながら、トウヤは頷いた。

「つまりはそう言う事だよ」

「あ、ああ……！ まさか、トウヤ兄いが、こんなに簡単に許して
くれるなんて……！ ル〇タニ様ありがとうございます……。もし
くはオ〇シロ様」

「……危険極まり無い神様にお祈りを捧げるのはやめたまえ」

マホガニーに肘を着けながら、トウヤはため息を吐く。
その間にも、シオンはリンパ腺で交信出来ると言う謎神と、しゅ

くくりくむをこよなく愛する謎神にお祈りを捧げる。

そんなシオンを脇目に、トウヤは説明を続ける。

「お前にはEUIギリス支部に向いて貰う。そこで、『齊天大聖』『フラフナグド』『テュポーン』『バルムンク』『四龍玉』を受領。後に、同ドイツ支部に飛んで、各ロスト・ウエポン完成まで護衛。完成したそれらを受領して戻って来たまえ」

「ん。了解。……でも、それだと……」

「当然、持ち主も一緒に好ましいね。治療魔導士も一人は居た方がいい。つまり、ギンガ君、スバル君、ティアナ君、エリオ君、キャロ君、そして、みもりが適任か。彼女達と一緒に行ってくれたまえ」

……こら、また。

告げられた名前に、シオンは思わず。頬が引き攣る事を自覚する。

このタイミングで、この面子である。

偶然にしては出来過ぎとも言えた。

……どこまで知ってやがる……！

みもりに告白された事や、キスされた事まで。この異母兄が知っていると知らない――。

――思わない、が。

それでもなお、油断のならないのがトウヤと言う男であった。逆に言えば、何を知っていてもおかしくは無い。

じーっと、トウヤの顔を半眼で見るが、その面の皮には傷一つ付

けられそうも無い。

シオンは嘆息すると、無駄な事はやめて頷いた。

「ん。了解。三日後に皆と向こうに転移^とべばいいんだね？」
「ああ、それで構わない。……さて、では——」

—ぞくり—

その瞬間、シオンは特級の怖気を感じて総毛立った。
直感が最大警報を鳴らす。

ここは危険だ、速く逃げろ、速く、速く——！

だが、身体は動かない。

まるで椅子に固定されたかのように立ち上がれ無い！

そんなシオンに、トウヤは口端をゆっくりゆっくりと持ち上げる。

くすくす、と笑い声が口から漏れていた。

トウヤが立ち上がる。

「と、と、ととととととと、ト、ウヤ兄、い？」

「——”本題”に移ろうかね？」

呟くと同時に、ぱちりと指を鳴らす。と——。

まったく唐突に、トウヤの背後に”扉”が生まれた。
そこは、確かに壁だった筈なのに！

それを見て、シオンの恐怖はメーターを振り切った。

同時に、気付く。

トウヤは許してなんぞいなかったのだ。
全ては、油断させるための芝居——！

「もかもか室”。そう名付けて見た」

「も、もももも、かもか……？」

それは果たして何を意味するのか？

分からない。

分からない、が。直感はがんがんと警報を鳴らし続ける！

——この部屋は、危険なモノだと。

そう、直感は告げていた。

「そう、もかもか室だよ。——お前がこれから入る部屋の名前だ。

安心したまえ、命は大丈夫だ。……精神は一切保証しないが」

「っ——！！？」

トウヤの台詞に、シオンは目を剥いて震え上がる。

トウヤにそこまで言わせる。もかもか室とは、一体何なのか……。

異母長兄は、何故か威圧感漂う顔でニツコリと笑う。

「ヒントを上げよう。お前が入る部屋の前情報くらいは知りたいだろうからね」

シオンはがくがくと頷く。

どんな部屋なのか、名前だけでは全く分からない。

それを、ヒントだけでもくれると言うのだ。乗らない手は無い。

シオンの頷きを見て、トウヤは薄く笑う。

「では、ヒント。——グノーシスの胸毛ランキング一位から二十位

までが勢揃い♪」

「……………」

「しかも一つの部屋に♪」

それを、聞いてはならなかった。知ってはいけなかった事を聞いて、シオンは崩れ落ちた。

そんな部屋に、叩き込まれたら――。

あるのは精神の死、だけである……

「では、シオン」

「……………」

ついに間近に来てしまったトウヤをシオンは慈悲を懇うように見上げる。

それに、トウヤはニツコリと笑い――。

「お・し・お・き・だ・べえ〜」

それから数時間の間。

第一位執務室には途切れる事の無い悲鳴が響き渡ったとさ。

ちゃんちゃん♪



——闇が迫って来る。

もふもふとか、何故か弾力性に富んでいるとか。やたらと人肌な感じに温かいとか。

そんな感じの、闇が。

闇を人が本能的に恐れる理由とは、その奥に何があるのか分からないからだろう。

見えない、と言う事はそれだけで恐怖だ。

そんな闇が迫って来る。
蠢動しゅんどうしながら。それが何かを見せずに。

その闇の出口は何処だ？

——尋ねても答えてくれる者はいない。

回答者は何処に居る？

——それさえも絶望的に存在しない。

ただ、闇は在るだけだ。

存在して迫って来るだけなのだ。

もかもかと。

「もかもか……！ うう……！ もか……！ なんかほのかに暖かいよー。なんかごわごわしとるよー。う、うう……！ や、やめてくれ！ 迫ってくるなあああああ……！ ご、ごめんなさい

いいいいいいいい……！ トウヤ兄い許してえええええええええ……！
ここから出してくれえええええええええええええ……！
」

求めるように彼は手を伸ばす。

だが、なにも掴めないままに握りしめられた。

そんな事は分かっていたのだ。

闇には何も無い――。

寧ろ、ごわごわとしたものがあつては困る。

とにもかくにも、闇にはなにも在り得ないのだ。
だが……。

彼は、はっと目を見開いた。

闇しか無い？

否、否だ。断じて、否！

虚無しか掴めなかった手の隙間から、何かが漏れている。

――それは小さな光、だった。

大きな闇に対して、比べる事さえもおこがましい小さな光。

だが、それを彼は掴む事が出来たのだ。

何故、光を掴む事が出来たんだ……？

手の中にある光に驚き、戦きながら彼は自問する。おの

だが、闇を恐れる理由と同じくらいに、その答えは当然とばかり
に自分の中にあつた。

そうだ……！ 俺は手を伸ばした……。伸ばしたんだ！ 抗おう
と、手を伸ばした！ だったら出口なんて要らない。闇に対して逃

げる必要なんて無い！　だって俺はまだ戦える！　握りしめたこの
 光を胸に、一步を踏み出せる！　そして踏み出した、その一步が道
 になるんだ！　立ち上がりさえすれば、勝てる……！　そう、勝て
 るんだ！　何故なら闇の中に敵なんていない！　俺がいるだけなん
 だから！

そして――。

気付けば、彼は、シオンは、立ち上がっていた。

闇の中で誇り高く、胸を張りながら。

いつの間にか、泣いていたらしい。

涙を零しながら、闇の中で立ち尽くし、それでも闇に対して吠え叫ぶ！

己の――。信念に賭けて！

「もっ……かもつかなんぞに負けてたまるかあああああああ
あああああああああああああああつ！」

そうして、闇は消えた。

辺りに広がるは――。

椅子が立ち並ぶ、ピロティ（休憩室）であつた。

辺りには誰もいない――。

いや、小柄な人影が二つあった。

エリオとキヤロである。

こちらを啞然と見る二人に、シオンは漸く闇から――モカモカから、帰還した事を悟った。

「だ、大丈夫ですかシオンお兄さん！」

「すっごいいうなされてましたよ……！」

心配そうにこちらを見遣る二人に、シオンは涙を拭いながら頷く。
やがて天井を見上げながらぼつりと呟いた。

「恐ろしい体験だった……！」

「「はあ」」

「タカ兄いに顎を砕かれて、殺されかけた時の次くらいにやばかった」

引き合いに出すのが、間違っているような……。

思わず汗ジトになる二人にシオンは構わず。
べたべたする額の汗を拭いながら呻く。

「下手をすりゃあ、もかもかで力尽きて俺の人生終わる所だったぜ……！」

「えっと……」

「もかもかって何ですか？」

「聞いてくれるな！」

キャロのぼやぼやとした問いに、シオンは身体をくねらせて拒絶する。

そのまま、自らの身体を抱きしめるように腕を回し、がたがたと震えた。

「思い出したくもない……！ あ、あれはヒトの手に余るおしおき部屋だ！ 在ってはない部屋なんだ……！」

「「はあ……」」

なんだか、とても辛い目にあったよーである。

それを二人は悟り、聞かない事にした。

シオンは暫く震えて、漸く落ち着いたように二人に振り返り聞く。

「で。なんで俺、ピロティに？ トウヤ兄いの所に居た筈なんだけど——」

「そのトウヤさんが連れて来たんです。『壊してしまったかもしれないね』とか言っていましたけど……」

非常に恐い台詞である。

何を壊したと言うのか？

だが。聞かない方が精神衛生上、良さそうな気がした。

「最初はみもりさんが、介抱してたんですけど——」

「………みもり、居たのか？」

「はい。そこでうなされているシオンお兄さんをひざ枕してました」

……何やら、とても恥ずかしい状態だったらしい。

シオンまでもが、赤面しそうだったので顔を手で押さえて隠す。

——それで隠れる筈も無いのだが。

まあ、そうしていたかった。

「で？ そのみもりは？」

「カスミさんに呼ばれて向こうに行きました。それで、僕達に代わりに介抱お願いされまして——」

そこで今に至る、か。

何ともまあ、タイミングが合わない事である。

みもりには、いの一番に伝えたい事が——。

――返事が、あるのに。

なのに、何故か会えない。

病室に居た時も、見舞いには来なかった。

正確には、来れなかっただろうが。

なんにしろ。

「ままならないよなあ……」

「？ 何の事ですか？」

「いいんだよ。お前達にゃあ、まだ早い」

ぼやくシオンにキョトンと尋ねて来るキャロ。

それに苦笑しながら、シオンは二人の頭をぽんぽんと叩いた。



「ふういゝゝ……」

夕方。

すでに日も沈み、辺りには鈴虫の歌声が響き渡る。

そんな中で、シオンは神庭家の風呂。

――と、言う名の温泉に浸かっていた。

ふにゃーと、肩まで湯舟に沈めながら温泉を満喫する。

「いやー。相変わらず、癖になる湯だなあー」

はふうと、緩み切った顔でシオンは呟きながら、シオンはんーと思う。

結局、あの後みもりには会えなかった。

どうにも忙しいらしく、そんな中で呼び出すのも気が引けたので。結局、シオンは家に帰って来たのだ。

一応は護衛の名目で、スバル達。前線メンバー組とN2Rの面々と一緒に。

そして今に至ると言う訳である。

まあ、焦る事でも無し。何も今日いきなり返事をする必要も無いだろう。

……それに、どうせ明日は”必ず”会わなければならないのだから。

そんな風に思いながら、湯を堪能していると。

がらっと風呂のガラス扉が開く音がした。

……誰が入って来たか？ エリオか？

なんとなく、シオンはそう思う。

この風呂には当然、男女別などある訳が無いので、それぞれ入る際には看板を立てるのが決められている。

シオンも、入る前に。

『現在、男入浴中。入るべからず』と書いた看板を入口前に立てたので、女性陣が間違って入って来る事も無い。

……そう、思っていた。

「おー。エリオー。いい、湯だぞー」

言いながら、後ろを振り向こうとして。

そのまま、硬直した。

それは、そうだろう。シオンの目の前に居るのは――。

「し、シオン……!?!」

……なんで、スバルがここに？

呆然としながら、シオンの頭を、そんな疑問が過ぎる。

スバルはタオルで身体の前を隠して、こちらを見ていた。

思った以上にスタイルいいなあとか、愚にもつかない事を思っている。

「こ、こっち見ないで……っ!」

「て、どわああああっ!」

自分がひどく、いけない事をしていた事を悟り。悲鳴を上げながら、背を向ける。

ぱっくぱくと鳴る心臓をなだめて、すかせて、殴りつつ。シオンは背後に声を掛けた。

「な、なんで? どうして入って来るよスバルさん!?!」

「だ、だって看板立って無かったし、誰も入って無いって思ったから……！」

看板が立っていなかった……？

スバルの答えに、シオンは動揺を必死に抑え込みながら、疑問に思う。

自分は確実に、看板を立てた筈である。

まだ家を出る前は、それでえらい目に合った事もあるのだ。

忘れる筈が無い。

……この時、シオンが知るよしも無かったが。

温泉と言う特性上、この風呂は外にある。

当然、入口も外にある訳だが。

これが、今回は災いした。

風が吹いて、看板が飛んで倒れてしまったのである。

倒れただけならば、スバルも気付いたのだろうが。

飛んで、離れた所で倒れた事で気付かなかった訳である。

閑話休題。

そんな事を当然、知る訳が無いシオンは首を捻るが。

今は、それもどうでもいい。

とりあえずは、この状況をなんとかしなければならぬ。

シオンはあくまでも視線を向けないままスバルに声を掛ける。

「と、とりあえず。入るんだったら、もうちょっと待ってくれ。俺もすぐに出るし。着替えるまで外で――」

ぽちゃ。

口早にまくし立てるシオンの耳に、水音が響く。
湯の中に何かが、入ったような音が。

そして、次に響いたのはちゃぷちゃぷ、と言う音だった。

これは、つまり――。

「す、スバル？」

「……………」

スバルは何も答えない。

だが、声の代わりに別の行動を起こした。

湯舟に浸かったのだ。……シオンの真後ろに。

そして、向けられた背中に自分の背中を合わせて座った。

「ちよっ……！ おい！」

「こっち向かないで。……恥ずかしいから」

流石に文句を言おうとしたシオンに、機先を制するようにしてスバルが告げてくる。

それに、シオンは何も言えなくなってしまった。

暫くあーやら、うーやら唸り――。

――結局、黙り込んでしまう。

そのまま暫く、背中合わせで二人は湯に浸かり続けた。

……何なんだ、一体……。

流石にシオンも頭が冷えて来て。スバルの態度にそう思う。

……背中感触は出来るだけ無視して、シオンはスバルに尋ねようと思いを吸って。

「シオン」

「わひい!？」

またもやスバルに先に名を呼ばれ、変な声を上げる。
わたわたとしながらも無理矢理動悸を静めつつ、聞き直した。

「な、なんだ？」

「ごめんね。いきなり入って来ちゃったりして」

「あー、いやまあ……。で、何で湯舟に入って来たりしたんだ？」

曖昧に頷きながら、シオンは問う。
それに、スバルはこくんと頷いた。

「えっと、ね。シオンに聞きたい事があって……。でも二人っきりであんまりなれなかったら。今、ちょうどいいかなって思ったんだ……」

「ちょうど、てよ。お前……」

思わずツツコミを入れて、シオンは苦笑する。
いくら何でも湯に入ってくるのはやり過ぎと言うものだろう。
今言ってもせんない事なので、言わないが。

苦笑し続けて、シオンは先を促す。

「で？ 聞きたい事って何だよ？」

「……うん。昨日の事、なんだけど……」

……また、か。

スバルの台詞に思い出したのは、ティアナの問いだった。
昼過ぎの病室での、ティアナの問い。
そして、自分の答え。

それは――。

「その……」

「……みもりに、何て返事するか、か？」

躊躇いがちなスバルの問いを引き継いでやる。

それに、今度はスバルが固まった。

シオンは再び苦笑する。

「やっぱな。お前達、妙な所で似てるんだなあ……」

「……えっと。何で……」

「昼間にティアナに聞かれた。……お前達が見た事も、そんな時間いた」

笑いながら告げられる言葉に、スバルがうわあと唸る声が聞こえる。

それを聞きながら、シオンは湯に視線を落とした。

「……それで、その。シオン。……教えて、くれる？」

「ティアナにも言ったけど、俺はまだみもりに返事もしてないんだぞ。どうにも会えなくてなあ」

予想通りなスバルの問いに。シオンは笑いを浮かべながら、ティアナにも言った台詞を告げる。

それに、スバルも声を詰まらせた。

だが。

「それ、でも。それでも――」

聞きたい、の。

つい半日前に聞いたのとまったく同じ答え。

それに、シオンは苦笑を強めた。

無言のまま、上を見る。

屋根に覆われて空は見えない。

だが、何となくそうしたかった。

そのまま、告げる。

「……今は、そう言うの。考えられないんだ」

答えを。

スバルが硬直したのが、空気で分かる。

聞き方によっては、悪くにしか聞こえ無い答えだろう。

シオンは笑いを止めた。

続ける。

「俺は、なんにも決着をつけてない。カインの事も、ストラの事も、タカ兄いの事にも。……自分の初恋にすら、決着をつけてないんだ」
「……………」

シオンの言葉に、スバルは口を挟めない。

そんな空気があった。

シオンは、一つだけ苦笑すると続ける。

「……紫苑と戦って。一つだけ決めた事がある。俺は、もう逃げないって、そう決めた」

「逃げ、ない……？」

「ああ。全部に——。そう、今まで逃げて来た全部にだ。それに決着をつける。……ルシアの事にも、初恋にも、決着をつける」

紫苑と、過去の自分の象徴と戦って出した答えがそれであった。

……ずっと、ずっと逃げて来た事。

その全てに、向き合おうと。

決着をつけようと。

そう、決めたのだ。

だから。

「紫苑の事は――。皮肉だけど、ちょうどよかったんだ。俺は、あいつとの戦いをスタートラインにした」

「スタートライン……？」

「ああ。決着をつける為の、な。あいつを始まりにして、俺は前に進もうって決めた」

それが、本当の理由。

紫苑と、一人で戦う事に固執したわけ。

そして勝利した。

だからこそ、シオンは――。

「だから、今はそういうの考えられないんだ。――まずは全部ひっくるめて決着をつける。……全部にだ。初恋にもちゃんとケリをつける。……そっから考えようって思った」

「……でも、それって――」

返事を待ってくれ。

シオンが出した答えは言ってしまうえば、それである。
しかし、それでは。

みもりの、気持ちは――。

「……分かってる。みもりが待ってくれるなんて、俺も思っていない。……でも、もう決めたんだ。——だから、そう答える」

だから、答えを曲げない。

酷い答えだと思う。

これが、正しい答えだなんて到底言えない。

でも、もう決めたのだ。

決めた以上、シオンは答えを変えない。

だから——。

「それが、俺の答えだ」

そう、締め括った。

二人を穏やかな風が包む。

暫く、二人は黙り込んで。

スバルは一言だけ、声を出した。

「そっか」

「ん」

シオンも頷く。

そして互いの背中に体重を預け合いながら、互いの体温を感じながら、二人は無言で湯に浸かり続けた。

——と、いきなりシオンがくすりと笑った。

「そういや、今だから話せる事があるんだけどよ」

「へ？ なになに？」

きよとん、とスバルが聞いて来る。

それに笑いを苦笑いに変えながら、シオンは話し出す。

「最初、お前に会った時——。正確に言えば、助けられた時にだけだよ。俺、何を勘違いしてたか。お前に惚れたとか思ってたんだよな」

「……………え……………？」

あまりにも予想を超えた言葉だったのだろう。

先とは比べものにならないレベルでスバルは凍り付き——。

——やがて、ぼんつと顔を赤らめさせた。

「ほ、ほほほ……！ ほ、惚れ……！？」

「おー。まあ、勘違いだったんだけどよ」

「……………え……………」

今度は、先とは全く違う意味で凍り付いた。

しかし、シオンはそんなスバルに気付かず。

笑いながら続ける。

「いやー。全く持って恥ずかしい話しなんだけどな——」

「そ、そうなんだ……」

「て、どうしたオイ？ 急に声に元氣無くなったけど？」

「いいの、気にしないで」

「はあ……」と、重々しい溜息を吐くスバルに、シオンは首を傾げるが、まあいいかと話を続けた。

「……今から考えると、俺は憧れたんだな。お前に」

「……………」

「お前の、生き方に。お前達と——。アースラと一緒に戦ってさ。なんとなく、それが分かった」

言い切ると、シオンは天井を見上げながら笑った。

そんな彼の横顔を、スバルはちらりと覗き込む。

自分に憧れたと言うシオン。

その言葉が、何故か胸に突き刺さった。

……なんか、ヤだ……。

そう思う。

何故か、彼に憧れられるのが嫌だった。

何故かは分からない。でも、そう思ってしまったのだ。

自分でも理由の分からない痛みを胸に覚えながら、スバルは聞いてみる事にした。

彼が、自分に憧れた理由を。

「なんで、そう思ったの？ 私に憧れる、なんて——」

「……お前の生き方が、さ。真っ直ぐで、真っ直ぐで、真っ直ぐで。

——綺麗だって思ったんだ」

そんな生き方がしてみたいと思ったんだ。

そう、告げる。

そして笑うシオンに、スバルはついに俯いてしまった。

違う……。

スバルは、そう胸中で叫ぶ。

自分は、そんなに真っ直ぐじゃないと。

だって、いつも回り道をしてた。

そして、今も。

自分の気持ちを、シオンに伝えられ無いでいる……！

なのに、シオンはそう言うのだ。

そんなスバルに憧れたと言うのだ。

自分はそんなんじゃない、無いのに――！

「あの、シオン？」

「……………」

それは違うと、はっきり言おう。

そう思って、シオンに呼び掛ける。

だが、その返事は無かった。

疑問符を浮かべ、もう一度呼び掛けようとして。

「きゅう……」

「え……？　っ——！」

そんな、やけに可愛らしい声を上げながら。シオンがもたれ掛かって来た。

慌てたのはスバルであった。今は風呂に居るのである。
当然、裸。

そんな中で、もたれ掛かられるなんて——！

「し、シオン！　ダメだよ……っ！」

「……………」

「あ、あれ……？　シオン……？」

「……………」

あまりにも反応が無い。

ぐったりとしたシオンの様子に、スバルは首を傾げて。
顔を覗き込む、と——。

シオンは顔を真っ赤にして意識を失っていた。

これは——？

「……ひょっとして、のぼせた……？」

「……………」

かっぽーんと、遠くで間拔けな音が鳴ったような感覚を覚えて、
スバルはがっくりと肩を落とした。

まさか、まさかの事態に一気に肩から力が抜けたのである。

とりあえず、シオンを湯から出さなければならぬ……？

「えっと、ど、どうしよ……？」

よくよく考えれば、湯からシオンを上げると言う事は、シオンの裸を見る事になる。

だからと言って、このままなのもマズい。

一体、どうしたら……！

シオンを抱きしめながら、スバルはあたふたと悩み続け――。

結局、その後。

アサギが入って来るまでシオンは目を回し、スバルはあたふたシオンを抱きしめたままだったそうである。

（第四十九話に続く）



ぱらりやぱらりやぱらりや――。

ア

「はい、今日もお馴染み（？）アリサ道場のお時間です♪」

す

「今回も長かったね――。二ヶ月ぶりくらい、かな♪」

シ

「そうですねー。その割りにはやたらと二人共、機嫌いいですね？」

ア

「ふふ……。本編でメイン枠で出たからね！ あんたが無断で元に戻ってよーと、今日ばかりは許すわ！」

シ

「うっし！ ありがとうございます！」

9レ

「……俺は納得いかねーぞ……」

タinな

「……同感ですな……」

ア

「あ、九歳時に諸事情でなったレンに、未だに元に戻れて無いタカト」

す

「二人共、作者さんの陰謀でそれぞれこんな風になっちゃったんだよ？」

未

「詳しくは、それぞれの小説を参照に♪」

タinな、9レ

「「なんで、貴様／お前まで元に戻ってる!？」」

未

「えー？　なんて言うか。ノリ？」

シ

「疑問形じゃねえか……」

ア

「ま、どーでもいいわ。後で二人共どうにかなるのは確定だし♪」

シ、未

「「なんで!？」」

す

「約束された未来だね♪」

シ

「そんなもん約束せんで下さい……」

未

「うわ……。有り得そうで嫌だ……」

ア

「さて、今回のアリサ道場なんだけど。本来のアリサ道場は一先ずお休みして、今回は例のベストシークトップ3位をお届けするわ♪」

す

「よろしくね♪」

タinな

「では、早速……。第3位『俺とヴィヴィオの別れのシーン』ですな」

シ

「ああ、なんかここら辺から俺。空気化して来たんだよね……」

9レ

「もー、それはデフォだろ？」

シ

「嫌ですよ、そんなデフォ！」

ア

「今回は本編が長かったからちやっちやと行くわよ！ では次！
第2位！」

9レ

「え？ これ俺が読むのか？ 嫌だなあ……。えー第2位『タカト
となのはのキスシーン』」

タ i n な

「ぬぐ……！ これは……！？」

ア

「まあ、今更言うまでも無いあのシーンね」

す

「タカト君に『フラグブレイカー』の二つ名が付けられたシーンだね♪」

タ i n な

「いつ、そんなあだ名が……！」

シ

「まあまあ、タカ兄い、どーどー」

一撃！一

シ

「だぷ！？　なんで殴る！？」

タinな

「……………なんか、無性にムカついた」

シ

「言い訳にすらなっていない！？」

未

「今更だなあ…………」

ア

「さて、では第1位！　皆さんが選ぶベストシーンは…………。シオン？」

シ

「て、ここで俺に来ますか…………。えー第1位。『シオン、アヴェンジャー編での会話』です♪　鬱展開からの復活シーン。そして、タカ兄いとの会話シーンが好評でした♪」

ア

「意外ね…………。あんた関連の話しが1位取るなんて…………」

シ

「そらどう言う意味っすか……。ま、いいや。では、今回は大人しくここままで♪ 次話はきちんと召喚しますので、よろしく願います♪」

タ i n な

「では、今回はここまで。……たまには、こう言った平和な道場も良いものですな——」

？

「……そうもいかないのよ。そうも、ね」

タ i n な

「こ、この声は——!?!」

？

「アリサ♪ タカト借りるわね♪ 大丈夫、すぐ帰すから♪」

ア

「ま、いいでしょ。すぐ帰すのよー。祐……じゃなかった? ~ ~ ♪」

シ

「もーバレバレじゃん……」

ア、？

「「逝きたいの? あんた……」」

シ

「土下座するので許して下さい」

9
レ

「相変わらず弱えな―」

未

「これがデフォですしね―」

タ i n な

「く……！　このまま捕まっとなるものか……！」

？

「ふ。諦めなさい……」

ア

「さて、何やら戦いが起きそうな気配だけれども。今回はマジにここまで♪　皆、いつも読んでくれてありがとう♪　これから応援よろしくね♪　それじゃあ――」

一同

『また次回〜♪』

タ i n な

「ぬん！」

？

「とお！」

一撃！一

（仲良く喧嘩しつつ、終わっとけ♪）

第四十八話「交錯する想い達」(後編)(後書き)

「みもりに返事をしようとするシオン。だが、何故か彼女とすれ違
いが続く」

「迎えた翌日。その日は、彼等にとって大切な日で――」

「そして、シオンはみもとそこに向かう」

「そこには、果たして――」

「次回、第四十九話。

『墓前の再会』」

「父の墓前で、母の歌を聞きながら、兄弟が集う」

第四十九話「墓前の再会」 (前編) (前書き)

「ただ、それだけは覚えている」

「あの時、あの場所において、あの人は、敵であった」

「敵でしか、無かった」

「だから、全力を持って戦った」

「だが。いつか、気付いていた。あの人は、いつも何かに必死になつていた事に」

「何かを守るために必死になつていた事に」

「……何かを、救うために、必死になつていた事に」

「それに気付いた時は、全てが遅くて」

「そう、俺は、いつも、いつもだ」

「……いつも、大事な人を傷つける」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まります」

第四十九話「墓前の再会」(前編)

「神、無」

一撃一

眩かれた一言と共に、胴の真ん中を拳で撃ち抜かれて。男は笑った。

……決まったな。

そう、一人ごちる。

同時に自分の最も重要な何かが、砕けた事を理解した。

笑う、その男に拳を撃ち込んだ少年はただ呆然としている。

信じられないと、その大きく見開いた瞳は語っていた。

「親、父……。何故……。? なんで!？」

「そう、叫ぶんじゃないよ」

にっと笑い。拳を引く事を忘れた少年の頭を撫でてやる。

ああ、そういや息子の頭を撫でたのは初めてだな。

苦笑する。

何度も。何度も、何度も、何度も、何度も、何度も！

そうしてやりたいと思っていたのに。
それが叶うのが、こんな形でとは。

……皮肉、だよなア。

あるいは、これが罰なのか。
自分が犯した、罪の。

もしくは褒美なのか。

最後の最後に、それだけは叶えてくれた。
男が最後まで抗い続けた、カミの。

苦笑する男に、少年は泣きそうな程に顔を歪めた。

「避けられた筈だ……！ あんたなら、今の一撃を！
なのに……」

「……無理だろ。あれは、避せやしねえよ」

言いながら、男は崩れ落ちた。

地面に倒れる前に、少年がその身体を抱き留める。

「おや、じ……！ 親父！」

「……まだ、そう呼んでくれるんだな」

それが、たまらなく嬉しかった。
いつの間にか、自分を抱えられる程大きくなった息子が誇らしかった。

男は満足気に笑う。

だが、その顔には、あまりに生気が無い。

「父上……」

「おう、お前か」

ふらりと背後に現れた少年にも、彼は笑う。

もう一人の息子。一番上の子供だ。

彼もまた、泣きそうな顔で立ち尽くしていた。

男は、そんな彼に手招きする。

——それでさえも、全力を込めなければならなかった。

少年も、男に縋り付く。

「なんでだ、ね。なんで……！」

「……お前には、いつも辛い役を任せちまうなあ。悪い……」

彼の頭も撫でてやる。

その手を必死に彼もかき抱いた。

啜り泣くような彼に、男は笑う。

笑い、続ける。

「ここまで来たら、一番下の顔も見なかったもんだな……」

「シオン、だ」

男を抱き留める少年が、俯きながら告げる。

それに、男は尋ねる前に少年は続けた。

「神庭、シオン。それが、あんたの息子の、俺達の弟の、名前、だ」
ところどころ、詰まりながら少年は最後まで告げる。

それに一瞬だけ呆然として、やがて満面の笑いを浮かべた。

「そうか……。はは、そうか。そうか。シオン……。アサギは良い名前をつけた、な。顔見たかったもんだがなあ」

「まだ、見れる。このまま生き残れば――」

「そいつぁ、無理だな」

男は力無く、首を横へと振る。

そのまま、続けた。

「俺が生き残っちゃあ。矛盾は生まれねえ、魔王が魔王を滅ぼしたつっう、矛盾がな。殲滅者システムも、調律者システムも、そのま
ま、残っちゃまう」

「だからって！」

少年は、叫ぶ。

もうどうにもならないと分かっているが。
それでもと。

だが、男は構わず笑い続けた。

「終わらせなきゃ、ならねえんだ。誰かが、な。こんな、下らないシステムをお前達がしよい込む必要はねえさ」

「……もう、いい。もういいから……！」

これ以上喋るな。

そう言おうとして、だが男はそれにも首を振る。

「この矛盾を持って、殲滅者システムは完全に崩壊する。元々無理があるシステムだからな。壊れるのは、簡単、だ」

告げられる言葉に、少年二人は全く何も言えなかった。

全力を尽くして、男が何かを伝えようとしている事を理解したか。

全く、反論の余地も何も無い言葉。

それを、何と言うか。

妄言。

もう一つ、ある。

遺言。

男の言葉は、明らかに後者だった。

「これで、お前達が殺し合う事は、なく、なる。……はは、最後の最後に親父らしい事をしてやれたかなあ……？」

「最後、とか、言うな……！」

男の頬に落ちるものがある。

水滴、あるいはこう呼ぶ。

涙。

生まれて初めて、少年は涙を流していた。

母の腹から産み落ちた時でさえ、泣かずにヒトを虐殺していた、少年が。

それは、確かな感情の発露。

幸せを喪失ってしまった筈の少年が、未だ壊れきっていない確かな証であった。

男は、それにも微笑む。

直後、その身体がさらさらと塵へと化していった。

「親、父……！」

少年達が、男に縋り付く。

だが、男は構わず微笑み続けた。

「俺は、幸せものだな」

息子の腕で逝けるなんて思っていなかった。

最低最悪の死に様が自分を待っていると思っていた。

……野垂れ死にが正しい姿だと。

だが、終わってみれば。こうして息子達の腕の中にいる。

それが嬉しいと同時に、ひどく寂しかった。

ああ、そうだ。本当はこんな人生なんて嫌だった。

家族と一緒に居たかった。

息子達と共に暮らしたかった。

伝えたい事が、たくさんあった。

……愛していると、ずっと言いたかった。

今更、そんな事に気付くなんて。

だが、死は待たない。

男の身体は塵となって消えて逝く。

……カミさん、カミさんよ。ひどいじゃねえか。……今更、こんな事に気付かせるなんて。

今更、こんなに死にたくないなんて思わせるなんて！

もう、声に出す事もできない。

ただ、視界に映る息子達の泣き顔しか見れなくて。

息を、吐く。

まるで全ての人生を注ぎ込んだような、そんな長い息を。

……殺生、だなあ……。

眩き。

ぐっと息を、飲んだ。

最後で、いい。

これが、最後で、いい。

ただ、一つだけ。

一つだけ息子達に遺したい言葉がある。

だから。

男は声を、紡いだ。

「いつまでも、元気で、な。幸せで、な」

笑顔で、たった一つの言葉を遺して。

そうして。

そうして、男は完全に塵となり世界から消えて逝った。

少年達は、それでもしやがみ込み。

悲しみに打ち震える。

喪失ったものが、あまりに大きくて。

そして、二人は同時に絶叫を上げた。

痛みに震えながら、悲しみに涙しながら。

ただ、ただ。

その場で泣き叫んでいた。

伊織降魔。

魔王と恐れられ、運命に抗い続けた男の人生はこうして幕を閉じた。

そして、これより始まる。

『天使事件』と呼ばれた、事件の。

最後の戦いが。

静かに、幕を開けた。



一戦！一

神庭家、道場。

敷板を敷き詰められた、床を二条の影が疾る。

一つの影は模擬刀を。

もう一つの影は、模擬槍を握っていた。

神庭シオン。

エリオ・モンディアル。

おそらく、アースラの中では最も刃を重ねた二人が。
朝も早くから、模擬刀と模擬槍で模擬戦をしていた。

すつと擦り足でシオンが踏み込むのに合わせて、エリオが模擬槍
を横薙ぎに払う。

が、それをシオンは模擬刀で受けながら斬り上げる。

一閃一

「っ……！」

模擬槍があっさりとエリオの頭上に跳ね上げられた。
驚きに目を見張るエリオに構わず。

シオンは、そのままの流れで踏み込む。

斬り流した模擬刀を勢いのままに翻して、一気に降り落とす！

エリオは顔をしかめながら、模擬槍を回転。
石突きを跳ね上げ、模擬刀を受け止めようとして。

眼前のシオンの姿が、唐突に消失した。

「え……!？」

「――瞬動・湖蝶」

思わず驚きの声を上げるエリオの”背後”から、ぽつりと名を告げる声が響く。

一閃――

直後、エリオの足が綺麗に模擬刀で払われた。

一瞬の浮遊感を、エリオは感じて。

そのまま重力に捕まり、身体を横にしたまま落ちる。

……くっ!？

呻きと共に、エリオは空間に足場を展開しようとして。

その前に、更なる声が降って来た。

「ほい、終わり」

一撃――

同時に。額に模擬刀による一撃を受けて、エリオは敷板に叩き付けられた。

「あたたた……！」

床に座り込んで、額を押さえながら痛がるエリオを見遣りながら、シオンは模擬刀を肩に担いで苦笑した。

「――今のが”湖蝶”。そして、”空歩”の合わせ技だ。湖蝶は神覇ノ太刀、固有歩法の一つで、緩急方向転換自在の移動法。空歩は、カラバ式の使い手用の特殊歩法だな」

「……はあ」

生返事を返すエリオを半眼で見遣りながら、肩を竦めた。

そのまま続ける。

「空歩は踏み込みの反動を分散させる歩法だな。これで、地面を下手に踏み砕かずに踏み込んだり出来る」

元来、シオンを始めとする位階上位者達が近接戦を陸戦でやろうものならば、地面を数百m単位で踏み砕く。

トウヤやタカト辺りならば、その単位がKmにまで昇る事は確かだ。

だが。自ら足場を崩すと言う事は、それだけで近接戦を行う者にとっては致命的に成り兼ね無い。

踏み砕かれた足場では、打撃、斬撃問わずに。その威力を分散する事にしかないのだ。

その為に生まれたのが、この歩法であった。

「――ようは、踏み込み、蹴り出しの反動を単一から全体に変えるのがこの歩法のミソだな。上手く使えば、ガラス窓の上を走りながら戦うなんて真似も出来る」

「……ガラス窓って……」

「ついこの間、そんな戦いをしちゃったからな。まあ、この歩法は覚えという損はねえだろ」

そこまで言うと、シオンは言葉を切った。

そのまま苦笑すると、座り込む。

そして、悪戯めいた笑いを浮かべた。

「……どうだ？ お前の希望通り。刀術の戦い方で模擬戦してみたけど。感想は？」

「あ！ な、何というか……。シオン兄さん凄かったんだあって……」

「それは――。とどの詰まり、今までは凄くなかったって事か？」

あたふたと答えるエリオに、シオンは笑いながら続けて問う。

それに、エリオは更に慌てる。

「いえ！ そんな事はないですよ！」

「……本音は？ 怒らんから言うてみ」

「もっと早く使えば良かったのに、て思いまし――。痛い！ 痛い！」

思わず、真面目に答えるエリオにシオンはこめかみを拳で決る。通称ウメボシを敢行。

それに、エリオから悲鳴が上がった。

「これは、怒ってるんじゃないぞお。ただ虐めたくなっただけだ」
「もっとタチが悪いです!」

「聞こえない。聞こえないなあ」
「あああああああ!」

悲鳴を上げるエリオに、シオンは笑い。そのまま手を離す。

そして、涙目となり上目づかいでこちらを見るエリオに再度苦笑した。

やれやれ、だな。

肩を竦めて、苦笑する。

問うべき事を問う事にした。

「……で? なんでもた刀術での戦い方を見てみたいだなんて思ってたんだ?」

「えっと……」

シオンの問いに、エリオは戸惑う。

少しの間、迷い。

やがて、切り出した。

「……このままじゃ、ダメだって思ったんです」

「? 何がよ?」

「僕自身が、です」

怪訝そうな顔となるシオンに、エリオは続けて話す。

だが、シオンは変わらずに疑問符を浮かべる。

「……なんで?」

「その、シオン兄さん。最近人が変わったように強くなりましたし、だから、その……。置いていかれたような気になって……」

しどろもどろに、エリオは言う。

恐らく、自分の中で上手く言葉に出来ていないのだろう。

シオンはそれに苦笑すると、エリオの頭をぽんぽんと叩いてやった。

「急に人が変わったたりするかよ。俺は何も変わっちゃないさ。……強いて言うなら、取り戻したただけってなところか」

「取り戻した……？ 何を、ですか？」

「いろいろさ」

言いながら、様々な事が頭過ぎっていく。

思わず再び苦笑してしまった。

エリオの頭から手を離す。

「そう。いろいろ、さ」

そして立ち上がる。

エリオに手を貸して、立たせてやった。

「さて、もう一戦。……と、言いたい所だけど。俺、今から用事があるから今日はここまでだな」

「え？ 今から、ですか？」

立たせて貰いながら、エリオがその台詞に怪訝そうな顔となる。それは、そうだろう。現在、朝の五時半。

早朝も早朝である。

こんな朝っぱらから何の用事があると言うのか。
シオンは苦笑して、でも答えない。

「ちょっと、な。んじゃ、俺風呂入ってくっから」
「あ、僕も行きます！」

模擬刀を片付けるシオンに倣ってエリオも模擬槍をなおす。
そして、二人は並んで道場を後にした。

そこで、エリオはふと気付く。

いつもシオンの近くに居る筈の存在がない事に。

何気なく聞いてみる。

「シオン兄さん。イクス、どうしたんですか？」

瞬間。

シオンの足が止まった。

その分、エリオが先に進んでしまい。振り返る。

……その頃には、シオンは表情を戻していた。

「シオン兄さん……？」

「……何でもねえよ。俺も一昨日から姿を見てねえ」
「そうなんですか？」

その台詞に、ちょっと驚きながらエリオは聞く。
シオンは、それに肩を竦めた。

「まあ、あいつの事だからすぐ帰って来るだろ」
「そう、ですか……？」

その言葉に、何か引つ掛かるものを感じてエリオはシオンを見上げる。

シオンはエリオの頭を叩いてやりながら、先に進んだ。

「……大丈夫、だろ」

そう、エリオに言いながら。

……そう、自分に言い聞かせながら。

シオンは前へと歩いた。

あの、バカ師匠はどこほつつき歩いてやがんだ……！

そう、胸の中だけで叫びながら。

シオンは神庭家、温泉へと向かった。



つむじ風が落ち葉を舞い上げいく。

それにつられて視線を上に向けると、いわしぐも 鰯雲がたなびく秋の青空が広がっていた。

彼女――。姫野みもりは髪を軽く押さえながら、暫く穏やかな秋空を見上げる。

十一月に入って、やや朝は肌寒くなった頃合い。

みもりはそこに居た。

墓地に。

彼女の手にはピクニック用のバスケットを持っている。

しかし、中に入っているのはお弁当ではなかった。

ブラシや雑巾、小振りな園芸道具、煎茶を入れた魔法瓶、少量のお菓子、蝋燭ろうそく、マッチ、線香……。

それらが入ったバスケットを手に、みもりは美しく紅く染まる並木道を歩き出す。

暫く進むと、辺りの木々は常緑樹の榊さかきに変わる。

まるで季節を忘れてしまったかのような榊の並木道は緑色に染まっていた。

だが、吹き抜けていく風に舞い上がるのは、色とりどりの落ち葉達であった。

そうして歩いて行くと、山門が彼女を迎える。

抜けると、老齡の竹箒たけぼうきを持った住職が彼女を待つようにそこに居た。

「お久しぶりです」

みもりは足を止めて、頭を下げる。

住職は穏やか笑みを浮かべて無言で頷き返した。

茶封筒を差し出し、もう一度頭を下げて。みもりはぐりと回ると関伽桶あかおけや箒を借り受けに行く、と――。

そこに人影が差しているのに気付いた。片手を上げて、こちらに笑い掛けてくる。

みもりは、ぽつりと彼の名を呼んだ。

幼なじみの、名を。

「シン、君……」
「よ」

幼なじみの少年。

神庭シオンは、一昨日あった事を忘れたかのように軽い調子で、みもりに呼び掛けた。

シオンは、みもりと連れ立って手を合わせた。

姫野家と書かれたお墓に。

久しぶりに、このお墓の前に立つなあと一人ごちて、シオンは立ち上がり。持ってきた菊の花を手元で弄ぶ。

「……まずは掃除だっけ？」
「はい」

みもりは、シオンに微笑みながら頷く。

その、あまりにもいつもと変わらない彼女の調子に。シオンは若干肩透かしを喰らったような感覚を覚えながら頷き返す。

そして、二人でお墓の掃除を始めた。

「とりあえず、指示頼むわ。みもりのが得意だしな」
「はい。じゃあ、まず……」

みもりが出す指示に従い、てきぱきと掃除する。
丁寧な、少しずつ。

全てが終わったのは、二人が訪れてから一時間半程してからの事だった。

みもりはお墓にお菓子をお供えする。

シオンもそれに倣い、菊の花をお供えた。

最後に、みもりは蝋燭ろうそくを立て、線香をあげる。

それを見ながら。シオンは、持って来たビニール袋から小さな紙包みを取り出した。

みもりの目が、軽く驚きに見開かれる。

「それは……」

「ああ、好きだったろ？」

取り出したのは、草餅であつた。

シオン達が住む町から隣町にある老舗和菓子屋の草餅である。

このお墓の住人が好きだった事を思い出して、シオンは朝早くからその和菓子屋に向かった訳だ。

なにせ、毎日限られた数しか売っておらず、予約も受け付けていないと言う超人気商品の為、朝早くから並ばないと手に入らないのだ。

シオンが知る限りでも十数年前からそうなので、老舗のブランド力は侮れないものだあと、最初苦笑した程であつた。

シオンはそれをみもりに差し出す。

みもりは、はにかむような笑みを浮かべて受け取ると、包装を解いて、それをお墓に供えた。

そして、二人並んでお墓の前にしゃがみ、両手を合わせた。

五分程、互いに無言で手を合わせ続ける。

やがて、シオンがぽつりと呟いた。

「十年、か。おばさん。二年も来れなくて、ごめんな」

みもりは、そのシオンの言葉を黙って聞いていた。

姫野、綾音^{あやね}

それが、みもりの母親の名である。

十年前に亡くなった。

流行り病だったそうである。

シオンも、詳しくは知らない。

ただ、無性に悲しかったのだけは覚えていた。

優しい女性^{ひと}だった。

だが、ときたま、こう、天然な事を言う人でもあった。

アサギが、あれなので。それが良く際立っていた事を思い出す。

思わず苦笑する。

懐かしくて。

そして、ちょっとだけ寂しくて。

立ち上がる。

「みもり」

「はい」

みもりも頷きながら立ち上がった。

シオンに真っ直ぐに向き直る。

ちよっとだけ、シオンは罰の悪そうな顔となると鼻をかいいた。

だが、意を決すると。みもりに視線を合わせる。

口を開く。

「この間の、告白の事なんだけど、よ……」

言い淀みながら、しかし続ける。

もう決めた事を、伝えるために。

「返事なん——」

「返事は、いいんです」

「——だけ、ど……。はい？」

告げられた言葉に、思わずシオンの目が点となる。

そんなシオンに微笑みながら、みもりは続けた。

「返事はいいんです」

「え？ な、何で？」

「シン君の答え、分かっちゃいますから」

にっこりと笑う。

そんなみもりに、シオンは呆然となった。

あーと呻き、頭をかく。

「……一応、その、みもりが分かってるって言う俺の返事って……？」

「返事は待ってて欲しい、だと思います」

見事に大正解である。

あうつとまた呻いたシオンにみもりはクスクスと微笑んだ。

「シン君真面目ですから、多分。ルシアさんの事とか、全部終わってからじゃないと。そう言うの考えちゃいけないと思いますそうでしたから」

「……………あー」

それだけしか、言えない。

大正解と言うか、どこまで心の中を読まれているんだろうと。頭を抱えて、シオンは若干不安に襲われた。

そんな風に、頭を抱えるシオンに、みもりは微笑みながら前に進んだ。

つまり、シオンの真っ正面に。

吐息が掛かるような距離に、シオンが面喰らっていると。みもりがぽつりと呟く。

「今は、いいんです。——でも」

シオンの胸に手を当てた。

見上げる。大きく見開いた、シオンの目を。

言葉を、続ける。

「まだ、好きでいてもいいですか？」

「……………」

紡がれた言葉。

みもりの、その言葉にシオンは言葉を失う。

まだ好きでいていいのか、問うその言葉に。

自分なんかを、そんな風に想ってくれるみもりに。

やがて、シオンは苦笑すると。こちらを見上げる、みもりの頭に手を置いた。

「……こう言っているのかどうか分かんねえけど。俺が、こんな事を言っているのか分かんねえけど。——みもりが、そう想ってくれるなら。俺は嬉しいよ」

だから。

そう続け、シオンは笑いかける。
にっと。

そのまま、答えた。

「これから、よろしくな。みもり」

「——はい♪」

そんなシオンの、精一杯の答えに。

みもりは優しく、微笑んだ。

シオンが見惚れる程の、可愛い笑顔がそこにはあった。



蝋燭が短くなり、線香が燃え尽きる頃。

二人は道具類を片付ける。

そして、シオンはうーんと伸びをした。

みもりに振り返る。

「んじゃ、帰るとするか」

「え？ でもシン君。今日は——」

そんなシオンに、みもりは小首を傾げる。

その反応に、シオンは疑問符を浮かべて——。

歌が風に乗って響いた。

穏やかな歌が、この歌は。この声は——。

「母、さん……？ あ……！」

母。アサギの歌声に、シオンは一瞬だけ呆然となり。

しかし、すぐに思い出した。

母が、月に一度だけ。ここで、この歌を歌う日を。

シオンの反応に、みもりも頷く。

シオンの反応に、みもりも頷く。

「……はい。今日は——」

「……そっか」

続いて響く歌声に、シオンは苦笑した。
すっかり忘れていた。
今日の日付は――。

「父さんの、月命日だっけ」

「……はい」

みもりが、こくりと頷く。
シオンは肩を竦めた。

歌が風に溶けて流れていく。
それを聞きながら、シオンはまた頷いた。

「そっか……」

そう。頷いた。

シオンは父の顔を見た事が無い。
声も聞いた事は無い。

もっと言ってしまうと会った事すらなかった。
『天使事件』が終わった後に、異母兄達から。

……父が、死んだ事を。

頭をかいて、また苦笑いを浮かべる。

「こう言うのも、親不幸って言うのかなあ」

「どうなんでしょう？」

シオンの台詞に、みもりも珍しく苦笑した。
命日では無く、月命日。
だからだろう。あまり気にしなかったのは。

—この想い—

続いて響く歌に、シオンは聴き入り。
やがて、頷いた。

「……ちょうどいいか。どうせだし、父さんの墓参りもして行くか」

そう言うのと、みもりに振り返る。

みもりも微笑みながら、シオンをみつめていた。
それに笑い、シオンは続ける。

「一緒に来るか？」

「はい」

即座に頷く。

そして、二人は連れだって歩いて行った。

父の墓がある、区画へと。



シオンは手に持っていた関枷桶を取り落としそうになった。

その、光景を見て。

隣のみもりも言葉を失っている。

父のお墓は、何て事は無い墓であった。

墓地の一面にある、お墓。

そんな二人を、母の歌声だけが通り過ぎて行く。

それを、どこか遠くで聞いているような感覚でシオンは前を見続けた。

父の、墓を。

父の墓の前に、居る人を。

風が薙ぐ。

さわさわと、秋の風が。

その風の中を。一人の青年が、ただしやがみ込み。
父の墓を静かに見つめていた。

シオンの異母兄にして、追いついて掛けている人物。

世界にたった一人で喧嘩を売った青年が。

伊織タカト。

彼が、そこに居た。

まるで時間が凍結してしまったように誰も彼もが動かない中で、
アサギの歌声だけが響いて行く。

—そつと—

秋空の下。

ゆるりと吹く秋風の中で。

母の歌声に包まれながら、シオンはタカトと再会した。

（後編に続く）

第四十九話「墓前の再会」 (前編) (後書き)

……はい♪

ども〜♪ テスタメントです。

まず一言。

す、すみませんでした (汗)

いや、もう。いつの間にやら一週間過ぎてるよと (汗)
しかも、今回。ちよつと短めですし。

いや、キリが良かったので。

てな訳で、前編。いかがでしたでしょうか。

楽しんでいただけたならば、幸いです♪

ではでは♪ 次は後編にて♪

もうちよつと、早くお届け出来るように頑張ります♪

ではでは♪

第四十九話「墓前の再会」(中編)(前書き)

ども〜♪

テストメントです♪

お待たせしました♪ 第四十九話、”中編”をお送りします♪

……ええ、中編(汗)

いや〜。何故か長くなる長くなる(汗)
前編だと、わりと短めだったんですが……。

後編は長くなればいいなあ……(笑)

では、改めの中編。どうぞ〜♪

第四十九話「墓前の再会」(中編)

一胸の、痛みを一

秋空の下。

ゆるりと吹く風の中で。

銀髪の、少女と見まごう女性が丘の上で歌っていた。

目を閉じて、胸に手を当てて。

風を感じながら、風を楽奏にしながら。

彼女は歌い続ける。

優しく、切なく、歌い続ける。

一優しくなる、のね一

眼下に見えるはお墓。

そこには彼女の親友と。そして、彼女が生涯ただ一人愛したひとが眠っている。

だが、彼女は墓参りをしない。
ただ、歌い続けるだけである。

生前、彼が好きだったこの歌を。
彼がよく口ずさんでいたこの歌を。

月に一度。ここで歌う事が。彼女にとって当たり前となっていた。

歌は、佳境に入る。

—この想い—

—聞かせてね—

—そつと—

最後まで。

最後まで歌い終わり、彼女。

神庭アサギは、頬を撫でて行く風に歌の余韻を感じながら、そつと目を開けた。

その目に映るのは、眼下に広がる墓地では無い。

雲がたなびく、青空であった。

暫く、そうやってジっとして。

やがて、いつもの微笑を浮かべて後ろを振り向いた。

今の、今まで。ずっと、ただ一人で自分の歌を聞いていた観客へと。

「どう、だったかな？ イクス君？」

ニッコリと笑いながら、その”人物”に問い掛けた。

その人物。

彼女の息子たる、神庭シオンが融合騎剣。イクスカリバー。略称

イクスは、その問いに頷く。

【いい、歌だった。奴の好きな歌だったな】
「……うん♪」

はにかみながら、笑う。

それを、イクスは眩しそうに目を細めた。

苦笑する。

その笑いを顔に張り付けたまま立ち上がった。

【久しぶりに聞けて良かった。……これで、心置き無く行ける】

笑いながら、告げる言葉。

それに今度は、アサギの顔が曇る。

イクスが困ったように、再度苦笑した。

「どうしても、行っちゃうの？」

【……ああ】

簡潔な一言と共に、頷く。

そしてアサギの顔を見ないように空に視線を向けた。

感傷では、無い。

のどかな昼前の秋空は、気持ちのいい静寂を奏でる。

……感傷では、無い。

でも、泣きたくなった。

だから、その前に続ける。

【シオンは、刀を抜いた。そして決意したんだ。――今の、あいつならば、十二分に資格がある。俺の真なるマスターになり得る、資格が】

だから。

笑いながら、イクスは続ける。

アサギの顔を見ないようにしながら。

【……だから、俺はイクスと言う仮の名を捨てよう】

何処までも、何処までも、その言葉が響いて行く。

それが意味する事は、たった一つであった。

そして、それを。アサギは知っている。

あるいは、前マスターたるタカトも。

アサギは少しだけ俯くと、一つ頷き。顔を上げる。
イクスを真っ直ぐに見据えた。

「シオン君に、課すの？ ああ、”試練”を」

【……ああ。その為に、トウヤに頼み込んだのだから。あいつのE
U行きをな】

イクスは笑いながら、頷く。

アサギは一つだけ息を吐くと、笑った。

それは、珍しくも苦笑と言う名の笑いであった。

「……そっか」

【ああ、そうだ】

イクスもまた頷く。

二人の間に風が走り抜け、暫く二人はそのまま佇んだ。

やがて、イクスが踵を返す。

そのまま歩き出した。

【では、な。アサギ。次会えるかどうかは分からないが――。その時を楽しみにしててくれ】

「うん。……待ってるよ。あなたにまた会える日を」

イクスは、笑い。

ゆっくりと歩いて、その場を去った。

アサギは、その背が見えなくなるまで見送り。さてと、墓参りに来ている筈のシオンと合流しようと、眼下に視線を向けて――。

「え？」

これまた珍しく、疑問符をその顔に浮かべた。

アサギが見る先、そこに信じられ無い人物が居たから。

それは、二年前から姿をくらまし。

ずっと、ずっと、アサギに会おうとしなかったヒトだったから。

呆然とするアサギは、そのままにぼつりとその名を呼ぶ。

”彼”によく似た容姿の”息子”の名を――。

「タカト、君……？」

呆然と告げられた人物。

伊織タカトが、アサギの見る先に居た。

シオンと、真っ直ぐに対峙しながら。

そこに居た。



歌が響く中で、シオンはその人物を呆然と見ていた。

こちらに気付いていないかのように、全く視線を寄越さず。声も掛けて来ない、その人物を。

伊織タカトを、ただ見ていた。

隣のみもりも、呆然と見ている。

なんで？

そんな疑問が頭を過ぎる。

だが、そんなものは考えるまでも無かった。

墓参りに来たのだ。

恐らくは。

だが、その事実が酷くシオンには信じられなかった。

なんで？

もう一度、己の中で問う。

だが、答えは当然出ない。

誰もが身動きしないままに、歌は流れ続け――。

「シオン――――！」

どのくらい経ったか、いきなり響いた大音声に場の硬直が解けた。

……正確には、たった一人だけ。みもりの硬直が。

シオンは相変わらず、タカトを見続け。

タカトは墓から、一切視線を動かさない。

みもりは、あたふたと背後に振り返る。

そこには、こちらに駆けて来る彼女達。

スバル・ナカジマや、ティアナ・ランスター。

彼女達を始めとした、アースラ一同が向かって来ていた。

みもりは、彼女達を見て、隣のシオンに視線を移す。

だが、シオンは振り向きもしない。

ただ、前を見続ける。

やがて、スバルが最初にシオンの元に到着した。

「もー、シオン。何処行ったかと思った……」

「？　どうしたの？　スバー——」

台詞の途中で、スバルが硬直し。

次に、到着したティアナも続けて硬直する。

エリオ、キャロ、N2Rの面々。そして、隊長陣。と、シオンの元に来るなり固まっていく。

正確には、その視線の先に居るタカトを見て。

最後に、高町なのはが到着するなり。ぽつりと呟いた。

「タカ、ト、君……？」

その声は、静かな墓地において大きく響く。

だが、タカトは全く振り向かない。

振り返る事をしない。

真っ直ぐに。

ただ、ひたすらに、ひたむきに、真っ直ぐに。

墓を見続けた。

父の、墓を。

水を掛けたりしない。

お供え物もしない。

手も合わせない。

ただ、見つめるだけ。

秋風に揺られながら。それだけを、タカトはずっと続けて。

やがて、ゆっくりと立ち上がる。

そして、視線だけをこちらへ寄越した。

「……お前達か。——また、大層な人数だな？」

「あ、えつと。……シオン君が朝から見えなくて、トウヤさんに聞いたら、ここだって言われたから——」

なのはが、しどろもどろに答える。

だが、タカトは彼女に視線を合わせる事はしない。

シオンただ一人に、視線を合わせ続けた。

シオンも受けてたつように目を逸らさない。

ただ、沈黙の時間だけが過ぎて——。

「タカ兄い」

シオンがぽつりと呼び掛ける。

同時に一步を踏み出した。歩き出す。

タカトはそれを見ながら、答える。

「なんだ？」

「聞きたい事が、あるんだ」

歩く、歩く――。

ゆっくりと二人の距離が狭まる。

同時に、場に緊張が満ち始めた。

シオンもタカトも構わない。続ける。

「タカ兄いは、紫苑の事を知っていたのか？」

「それが、ドッペルゲンガーの事を指しているならば。答えは知っていただ」

頷く。

シオンは、歩きながら続ける。

場の緊張が二人の距離に比例するかのように高まっていく。

「なら、この間の。秋尊学園での戦いも？」

「ああ、近くで見っていた」

その答えに、スバル達は仰天しそうになった。

タカトが近くに居たなぞ、全く気付かなかったのだ。果たして、何処に居たと言うのか。

タカトも、シオンも周囲に構わ無い。

ただ、その距離が狭まり――。

3 mを切った。

最後の問いを、シオンは告げる――。

「なら、” みもりが掠われた時も、見ていたのか?”」
『っ……!?!?』

その問いに、二人を除く全員が目を見開いた。
まるで予期していなかった問いだったのである。
だが、タカトは全く顔色を変えない。
変えないまま、口を開いた。

「ああ、” 見ていた”」

――堪忍袋の緒をぶち切った。

―ブレイド・オン!―

―閃!―

響くは、鍵となる言葉。

それと同時に、右手から生えた刀をシオンは横薙に振るう!

――だが、タカトは少しも動かなかった。

ぴくりともせず、刀は吸い込まれるように首へとひた走って。

その首に、触れる直前に。

刀は止まった。

凄まじい形相で、自分を睨むシオンをタカトは涼しい顔で見遣る。

時が凍り付いたように、二人は硬直して。

シオンは怒りを一息に込めて吐き出した。

睨んだままに、叫んだ。

「なんで……！　なんで！　みもりを巻き込ませた！？」

「俺が、助ける必要性を感じ無かったのにな」

「っ……！」

刀が、震える。

押し込めた怒りが、再び表面化しそうだったからだ。

タカトは、それに構わず告げる。

「勘違いするな、シオン。」あれ”は”お前”のミスだ。みもりを

掠われた、お前のな」

「……ンなもんは分かってるんだよ……！」

誰が、勘違いなんかするか……！

胸の中だけで、シオンはそう叫ぶ。

みもりを巻き込んだのも、掠われたのも、全部自分のせい。

そんな事は、とうに分かっている。

だからと言って。

”それ”を黙って見ていたなんて言われて！

……納得出来る筈が、無い。

「……黙って見ている必要なんか無かっただろ……!?!? あんたが助ければ、みもりを巻き込むような事はせずに済んだ!」

「逆に言えば。それでお前は一つ、過去を乗り越える事が出来た」

タカトはあくまでも淡々と答える。

至近で。

刀を向け。

刀を向けられながら。

二人は互いを見続けた。

ぎりっと刀を握る手に力が籠る。

タカトを睨む視線が、嫌が応にもきつくなって行く。
そして――。

「そこまですておきたまえ」

一閃一

響く声と共に、シオンとタカトが睨む中間点に”槍”が突き刺さる!

二人の殺気めいた緊張が、まるで槍に吸い込まれるように霧散した。

二人は、そして場に飲まれていた一同は、ゆっくりと声が響いた方向に振り向いて。

「やれやれ……。父上の墓の前で、お前達は何をやっているのだね？」

そこには、ピナカを投げ放った姿勢で。ユウオを伴った礼服姿の彼が居た。

叶トウヤ。

神庭家の異母長兄が。

昼前の墓地。

静かな、静かな。この場所で。

異母兄弟達は、久しぶりに顔を合わせる事となった。



『兄者／トウヤ兄い』

二人の弟から、全く違う言葉を持って。

同じ意味の呼び名で、彼は呼ばれる。

トウヤは一つだけ肩を竦めると、苦笑しながら二人に歩み寄った。

そして――。

一撃！一

一撃！一

迷う事無く、二人の頭頂にげんこつを落とす！

……いかな威力がそれに込められていたか。

タカトは顔を僅かばかりに歪め。

シオンはと言うと、打ち据えられた頭を抱えてしゃがみ込む。

そんな二人へと、彼はこれ見よがしに、嘆息して見せた。

「墓前で喧嘩をするとはどう言う積もりだね？ 阿保共め。……父

上の墓前では一切の喧嘩をせぬ事と決めてあっただろうに」

「う……」

「む……」

シオンとタカトが同時に呻く。

トウヤはそのまま説教へと移行する。

指をぴんつと立てた。

「大体だね。お前達がいろいろしてくれたお陰で、『暴走弟損害弁
済費』なんぞが組まれたりしたのだよ？ こんな所で喧嘩なぞして、
また私の財布を軽くする積もりかねお前達は。墓を壊したりしたら
どうする積もりだね——」

「兄者、兄者」

「トウヤ兄い、トウヤ兄い」

二人に対して、長々と説教が続けられようとして。

だが、当の二人から呼び掛けられて遮られた。

トウヤはそれに、眉を寄せる。

「なんだね？　言い訳でもあるのかね？　あっても聞く積もりは無いよ？」

『これこれ』

そんなトウヤに、二人はびしっと指を父の墓に差し向ける。

そう。

”ピナカが突き刺さった墓”に。

二人を止めんと放たれたピナカは、見事に墓のド真ん中に突き立っていたのであった。

それを視認するなり、トウヤが固まる。

一秒、二秒、と、呼吸すらも忘れたかのように硬直して――。

「誰だね！？　父上の墓にこんなモノを突き刺したのは！？」

『あんただ！　あんたあ――！！』

ンな事をのたもい出したトウヤに一斉にツツコミが入った。

タカトも呆れたように頭を押さえる。

だがトウヤはそんな一同からのツツコミに構わずえへんと胸を張ってのけた。

「ふ……！ 甘いね君達。確かにこれは私のピナカだが、私が投げた証拠でもあるのかね！？」

「いや、それがあんだのだって時点でアウトだろ」

「無い筈だ！」

シオンの半眼でのツツコミも問答無用に無視する。
更に続けて高々と演説(?)を続ける。

「私が投げた現場も誰も見てはいまい！ つまり、私は無実！」
「言い切ったなあ」

一同の後方、八神はやてが苦笑しながら呟く。
ある意味感心に値する程の、言い切りっぷりであった。
興が乗って来たのか、固く拳を握りしめて。トウヤは締め括った。

「さあ！ 私がやったと言う証拠があるならば言ってみるがいい……！
だが、証拠が無く私を責める事なぞ出来無いと思っていたまえ！」
「うん。でもトウヤ。ボク、後ろで全部見てたから。トウヤが投げる瞬間も、ピナカがお墓に突き刺さる瞬間も」

そんな風に、熱く弁舌を奮うトウヤの肩にポンっと手を置いてユウオがニッコリと笑いながら告げる。

……直後、場が再び固まった。
ひゅるりと、風が吹いて。一同も含め、トウヤは再び硬直し――
。

やがて、ふっと空を見上げた。

感傷では、ない。

雲がたなびく青空は気持ちのいい風が吹いている。

……何故か、からすの『かぁー』と鳴く声が間抜けに響いた。

……感傷では、ない。

でも、泣きたくなった。

だから、トウヤはそのまま続けた。

「……認めたく無いものだ……。若さ故の過ちと言うものは」

一撃！

有名過ぎる名台詞を堂々と吐く馬鹿野郎に、ユウオの腰の入った綺麗な一撃が鳩尾に叩き込まれた。



「さ、さて……。では……」

ユウオの鉄拳……。もとい、愛の鞭でズタボロになった感があるトウヤが、汗ジトになった弟達に並ぶ。

一同は、若干コケた肩のままに、そんなトウヤに憐憫の目を向けた。

「兄者？ 無理はせぬ方が――」

「そ、そうそう。もう、何かいっぱいっばいっばいし」

「……まあ、いかにも崩れ落ちそうだがね。……フフ……。ユウオ

の愛はいつも過激だよ。どうだ？ うらやましいだろう？」
『いや、全然』

異口同音に、兄弟達だけでは無く、アースラ一同も一緒に告げた。だが、そんな彼達に構わずトウヤはしゃきつと背筋を伸ばす。それだけで、汚れた筈の礼服も綺麗に見えるから不思議である。

ともあれ、そうやってしゃんとしたトウヤを見て。

シオンは盛大にため息を一つ吐いた。

刀の切っ先を右手の掌に突き入れ――。

――そのまま、刀が埋没していく。

やがて鏝まで進むと『キンっ』と納刀し切った音が響いて、刀は消えた。

タカトをじろりと睨む。

「――タカ兄い」

「……皆まで言うな。分かっている」

結局の所、そうなのだ。

シオンは謝って欲しいだけなのである。

自分にはない。

もう一人に向かって――。

タカトはくるりと、みもりに向き直る。

そして、頭を下げた。

「……済まなかったな。みもり」
「え、え？」

突然、謝られてみもりは目を白黒させる。
だが、タカトは構わず続けた。

「いざと言う時は助ける積もりではあったが――。……それまで、
お前を利用した。済まない」

「あ……」

漸く。

漸く得心したように、みもりが声を漏らした。

タカトがずっと見ていたと言う事は、つまりみもりを助ける事は
いつでも出来たと言う事である。

それを、あえてせずにいたのは。シオンに過去を乗り切らせるキ
ツカケとして、みもりを利用したと言う事であった。

一同も、同じく納得する。

同時にもう一つ、みもりとスバル、ティアナ達は気付いた。

あの時。紫苑、そして過去の自分へと。気持ちをぶち撒けて泣き
続けていたシオンの元に、みもりが現れた理由に。

あれは、タカトが原因だったのだ。

恐らく、縮地あたりでみもりを運んだのか。

道理でいきなり姿が消えた筈である。

近くに居たアサギやイクスすらも欺いてみせたのだから大した物
であった。

納得すると同時に、謝ったままにいるタカトをみもりは見えて――。

「……はい」

ただ、大人しく頷いた。

いくら利用した等と言われても、みもりはタカトを恨む積もりは毛頭ない。

そのおかげで自分の気持ちを、シオンに伝える事が出来たのだから。

今までずっと。

そして、あの一件が無い限りは伝える事が出来なかったであろう。自分の気持ちを。

だから。

ただ、頷く。

タカトは、それを聞いて。

ゆっくりと頭を上げ、横のシオンを見る。

シオンは半眼で、そんなタカトを見ていた。

嘆息しながら、みもりに視線を移した。

「……いいのか？」

「はい」

みもりは即答。すぐに頷いた。

シオンは暫く、そんなみもりを見遣って。

やがてもう一度ため息を吐いた。

「みもりがいいなら、俺から言う事は無いよ。——でも」

ずっとタカトを静かに、真っ直ぐ見据える。
一瞬、先と同様の殺気めいた威圧を出して。

「次は、許さない」

そう、言い放った。

タカトに対して、真っ直ぐに。
そんなシオンに、タカトは目を細めて——。

口の端を僅かに歪めた。
笑ったのである。

少しだけ。

しかし、すぐにまた元の無愛想な顔に戻る——。
——戻りがてら、頷いた。

「その言葉、覚えておこう」

そう言うと、タカトは僅かに後ろに下がる。
そのまま、目はトウヤに向いた。

「兄者。墓参り、するのだろうか？」
「そうだね。では……」

頷き、トウヤはしゃがみ込む。

シオンもそれに倣い、その隣に、しゃがみ込んだ。
タカトは、立ったままである。

ただ、二人の横で父の墓を見るだけ。

そんな三人を見て、一同はふと気付く。

普通ならば、違和感しか無い筈の――。

――敵、味方に別れた三人が並ぶ姿が、ひどく自然に見えた。

今の、今まで気付かなかった程である。

異母兄弟達三人が並んでいるのが、ごく当たり前に思えてしまったのだ。

だが、これが本来の姿なのである。

三兄弟が、並ぶ姿が――。

五分程、シオンとトウヤは手を合わせて。
やがて立ち上がる。

トウヤはそのまま笑顔を浮かべて、後方に居る皆に目を向けた。

「よかったら、君達もどうかね？」

「え？ いや、でもな――」

思わぬ問いに、はやてが若干うろたえる。
それにトウヤは苦笑して、場所を開けた。

「……いいのだよ。父上も喜ぶ。出来たら、線香をあげてやって欲しいね」

そう言うトウヤに、一同は少しだけ逡巡を見せて。
だが、すぐに頷いた。

「……はい」

そして、一人、一人、墓の前にしゃがみ込む。

それを見遣りながら、タカトは踵を返そうとして――。

「タカト」

いきなり、振り向かないままにトウヤに呼び掛けられた。
タカトの動きが止まる――。

一同の視線も、自然に二人に集まる。

そして――。

「……戻って、来ないかね？」

そう、トウヤはタカトに告げた。
その言葉が何を意味するか。
分からぬ者は、ここにはいない。

――そして、それが無理な事も。

シオンが目を伏せた。

だが、トウヤは構わず続けた。

「……お前には、何もかもを背負わせ過ぎたよ。シオンの事も、ル

シアの事も。――父上の事ですらも」

だから。

そう、告げようとして。

だが、タカトは首を横に振った。

苦笑する。少しだけ、嬉しそうに笑った。

「……それも、俺の望んだ事だよ。兄者。あんたには、”俺”を、そしてグノーススを背負って貰っていた」

「弟達の事を背負うのは、長兄の役目だよ」

タカトの台詞に、トウヤはきっぱりと答える。

それが、自分の役目――。

……義務、だと。

だが、タカトは首を再び振る。

「……そうだな。確かに、そうかもしれない。兄は弟の事を背負うもの。その通りだよ。兄者。――だから」

言いながら、タカトはシオンを見る。

その目に、シオンは何も言え無かった。

――言いたい事は、あるのに。言葉に出来ない。
そんな、もどかしさを感じて顔を歪める。

タカトは一つだけ苦笑した。
そんな、シオンを見て。

そして、続きをトウヤに告げた。

「だから、俺は――。俺”が”背負うよ。シオンの事を」
「タカト……！」

珍しく。

珍しく、トウヤが叫ぶ。

その叫びには、切望する何かが込められていた。
たが、タカトはあくまでもそれを拒絶する。

首をまた振って。今度こそは、完全に背を向けた。

「……私は、お前の兄なのだよ？」

「そうだな。俺は、あんたの弟だ。――でも」

――今は、敵だ――

そう、告げてタカトは歩き出した。

振り向かないままに。

そんなタカトにシオンは追い縋ろうとして。

でも、出来なかった。

トウヤに手を差し出されて、遮られたから。

そんな二人に、タカトは振り向かないままに手を上げた。

「兄者。例の情報は何に見せろよ。でないと持って来た意味が無い。
――ではな。兄者、シオン」

最後にそう言いながら、タカトは歩いて行った。
そんな背中に、最後にトウヤは言葉を送る。

たった一つだけ。言葉を。

「……なら、私はお前を再び背負う覚悟を決めるよ。タカト」

その意味を、シオンは分からない。

分からないままに、タカトの背中を見続けた。



去って行くタカトを、見送るシオンとトウヤ。

そんな二人を見ながら、なのはは迷う。

——タカトを追うべきか、どうかを。

結局の所、自分には何も話さないでタカトは去ってしまった。

それが、何故か悲しかった。

そして、ちょっとだけ腹立たしかった。

でも、話しをしただけでタカトを追うべきなのか。

なのはは、迷う。

あの時——。ナルガから転移して、逃避行を終えた時。

言いたい事は、全部言った筈であつた。

伝える事は、全部伝えた筈であつた。

でも、だからと言って。こんな風に話もしないと言うのに、なのは嫌な感覚を覚えていた。

……シオン君や、トウヤさんとは、いっぱい話したのに――。

その感情を何と言うか。

なのはがそれに思い至る前に、トウヤがぐるりと振り返った。なのはへと。

その顔には、苦笑が浮かんでいた。

「行きたまえ」

「……え？」

いきなり言われた事に、なのはは疑問符を浮かべる。

他の皆も、だ。

だがトウヤは構わず告げる。

「あれと話したいのだろう？　ならば、追いたまえ。はっきり言って、次はこんな風に話しを出来る機会は無いだろう」

そんな風に、トウヤは笑いながら告げる。

少しだけ、寂しそうに。

そんな顔を、なのはは何処かで見た事があつた。

そう、それは、精神世界で会ったルシアの表情に何処か似ていた――。

「――早く行かねば、アレはさっさと帰ってしまおうよ？」
「あ……！」

その台詞に、なのははタカトが去って行った方向に目を向ける。
タカトの姿は、随分と小さくなっていた。

それを見て、なのはは意を決したか。
トウヤにぺこりと頭を下げる、と。
タカトを追って、一気に駆け出した。

「あ！　なのは！？」
「なのはちゃん！？」

後ろから、フェイトとはやての声が響く。
それに首だけ向けて、なのはは叫んだ。

「ごめんね！　ちょっと行ってくる！」

後ろから、また声が飛んで来るが、なのはは構わない。
そのまま、走ってタカトを追って行った。

「あ……。もう……。！」

駆け出した、なのはを見て。はやてが呻くような声を上げる。

そして、フェイトの方に視線を送ると頷き合い。一緒にトウヤに頭を下げる。

「あのままやったら、心配やし……。なのはちゃんを私達も追います！」

「すみません……！」

「構わぬよ。では、また後でね」

非礼を詫びるはやて達に、トウヤは苦笑を一つ漏らして頷く。そして、はやてとフェイトもなのはを追って走って行った。

それをしばし、見遣り――。

シオンはトウヤに目を向ける。

「……いいの？」

「構わないさ。タカトも今日は、彼女達と事を構える事もあるまい。

――それに……」

「それに？」

首を傾げて、シオンはトウヤを見上げる。

そんな彼に、トウヤはふっと笑いながら告げた。

「彼女なら、タカトを変えられるかも知れないのでね」

「……タカ兄い、を……？」

「ああ。前のあいつなら、あそこまで私達と一緒に居る事すらせぬ筈だよ。……あいつは変わって来ている」

自分達では、変えられなかったがね。と、トウヤは続けて肩を竦める。

シオンは思わず、タカトが去って行った方向に目を向けた。

そして。

「……シオン？　なんか、いきなり不機嫌になったけど。何で？」
「……別に」

——面白く無い。

スバルの台詞に、シオンはぶっきらぼうに答えながら。そう、思う。

その感情を何と言うか——。

それは、嫉妬と呼ばれる感情であった。

結局、後から、母。アサギが到着するまで、シオンはふて腐れていた。



なのはは、タカトの背中を追って走る。
走って、走って——。

その背中に追い付くまで、そんなには掛からなかった。
すぐに、たどり着く。

そして。

「……お前な」

なのはが、タカトに声を掛ける直前に。
タカトは嘆息しながら、振り返った。

呆れたように、なのはを見る。

それに、なのはは何かを言おうとして。

——盛大に咳込んだ。

走って追い掛けて来たので、息が切れていた所に話そうとした為である。

そんな、なのはにタカトは苦笑した。

「……大丈夫か？」

「けほっ……けほっ……！ う、うん、ちょっと、待って……！」

手を上げて、待ったを掛けながら、なのはは言う。
胸に手を当てて。深呼吸を一つ、二つ……。

そうやって息を整える。

落ち着くと。タカトへと向き直った。

「えとっ……。ひ、久しぶり……？」

「そこで疑問符を使うな。さほど久しぶりでも無い」

何と言ったらいいか分からないのはに、タカトから痛烈なダメ出しが来る。

思わず、『あうっ』と呻いたなのはに、タカトはため息を吐いた。

「それで、わざわざ何の用だ？」

「えっと、タカト君とさっき全然お話し出来なかったから、話したいなって思ってた……」

「……あのな」

今度は、タカトが額に手を当てて呻く。

そして、半眼でなのはを見遣った。

「——この間。俺は、お前に『嫌いだ』ときっぱり言った筈だが？

ついでに宣戦までした」

「うん」

「なのに、話しをしたくて追い掛けて来た、と？」

「うん」

こくり、こくり、と次々に大人しく頷くなのはに、タカトはもう一度嘆息する。

今度の嘆息は、先より大きい嘆息だった。

「……お前と話しをしていると、真面目にお前を避けていた自分がアホらしく感じる」

「えっと……。ダメ、だったかな？」

意図的に、自分を避けていたと言うタカトに、なのはは少したじろぎながら、聞く。

タカトは、それに暫く沈黙。

やがて、もう一度だけ嘆息して――。

「「なのは――――！／なのはちゃ――――ん！」」

答える前に、別の所から声が来た。

え？ と、なのはが振り返ると、そこにはフェイトとはやてが居た。

「フェイトちゃん？ はやてちゃん？」

「漸く追い付いた……！」

不思議そうな顔となる、なのはに。フェイトが息を荒げながら呟く。

そして、はやてと一緒に息を整えると、なのはに向き直った。

——なのはの、向こうに居るタカトにも。

そして、口を開こうとして。

「……ところでお前達。誰かに恨みを買った覚えはあるか？」

『……え？』

いきなり、そんな事を言われた。

三人は顔を見合わせる。

そして、同時にタカトへと目を向けた。

「……いや、そんな覚えは無いよ。あんたやあるまいし」

「……ふむ。なら、誰かに”待ち伏せ”されているならば、それは俺のせいかな？」

「そうなるね」

はやての問いに、タカトは答え。

フェイトがその答えに頷き——。

「「待ち伏せ!?!」」

一軋一

三人が叫んだと同時に、空間が確かな軋みを上げるような音を立てた。

それに、三人は顔色を変える。

これは―――。

「結界……!?!」

「それだけやない! 全然魔力が結合せえへん!」

ぐるりと見渡ししながら、叫ぶなのはに。はやても悲鳴じみた声を出す。

魔力が結合しないと言う事は、つまり――。

「AMF……! しかも、相当強力な……!」

フェイトが呻くように、その正体に呟いた。

アンチ・マギリング・フィールド。

これについては、今さら説明も要らない。

魔力結合を無効とする特殊フィールドが、今。この結界に展開していた。

それは、つまり――。

「敵、襲……！」

「さて、どうだな。——そこに居る奴に聞いてみれば、良いのでは無いか？」

「「「え？」」」

事もなげに答えるタカトに、三人は一緒に疑問符を上げる。
同時に、ぼつりと呟く声が辺りに響いた。

「……” I S ”。インビジブル・キャンセラー」

そんな、あまりにも聞き覚えのある単語が。

一同の耳に届いた——。

（後編に続く）

第四十九話「墓前の再会」(中編)(後書き)

はい♪ 中編。終了でございます♪

……またもや、『いい所で終わりやがって……!』と言う声が聞こえてきそうですが(笑)

まあ、テストメントクオリティだと言う事で、一つ(笑)

ちなみに、アサギが歌っていた歌は。

星方武夾アウトロースターのED。『昼の月』と言う曲です♪

神曲なので、一度聴いてみる事をお勧めしたり(笑)

ではでは、後編でお会いしましょう♪
ではでは♪

第四十九話「墓前の再会」(後編1)(前書き)

……はい、テストメントです♪

お待たせして、すみませんでした(汗)

後編”1”でございます♪

ああ！ 石を投げないで！

いや、言い訳はあるのです。

——戦闘シーンが楽しかった……。

いや、本当すみません(汗)

ブラウザの戻るボタンを押さないで！(汗)

で、では後編1。どぞ〜♪

第四十九話「墓前の再会」(後編1)

「IS、インビジブル・キャンセラー」

そんな。聞き覚えのある単語が、墓地に響く。

それに、なのはとフェイト、はやては警戒するように身を竦めた。

だが、その三人の前に立つタカトは全く気にもしないかのように突っ立っていた。

あくまでも、自然体。

それが、タカトの在り方である。

例え敵襲であろうとも、変わる事は当然無い。

やがて、そんな一同の前の景色が歪んで――。

――唐突に、三人の男達が現れた。

膝き、頭を垂れて。

「「「……え?」」」

そんな光景に、なのは達は思わず疑問符を踊らせた。

それは、そうだろう。

AMFは張られ。結界まで展開されて。

それなのに、何故彼等は主に対する臣下のように。膝を折って跪き、頭を下げているのか。

三人居る男達。

彼等を見ていたタカトがホウと息を吐いた。

向かって左端にいる男——かなりの大男だ——。に、笑いかける。

「……見た顔があるな。ゲイル・ファントム」

「……俺の名を覚えてやがったのか……？」

その大男。ゲイル・ファントムは呆然と顔を上げる。

それに、タカトは頷いた。

「それでも記憶力は良い方なんだ。一度見聞きしたものは、そうそう忘れ無い。……で？ 何をしに来た？」

ゲイルの問いにあっさりと答えながら、今度は単刀直入に問う。

それに、真ん中の男。——こちらは、長身瘦躯であり。ゲイルと違って全身タイツでは無いものの、逆立てた髪に額に巻いたバンダナ。口元を隠すマフラーが、特徴的か。

——が。頭を下げたままに頷いた。

「……申し遅れました。我等、ツアラ・トゥ・ストラ。第二世代型戦闘機人、特殊部隊『ドッペル・シュナイデ』が、末席にある者達でございます」

「ストラの……！？」

「いや、ちょい待ちい！」 第二世代戦闘機人！？」 なんや、それ！？」

フェイトが、そして、はやてが悲鳴じみた声を上げる。

管理局、本局を占拠したテロ組織。『ツアラ・トゥ・ストラ』の人間がここに居ると言うのも問題だが、彼等の語った『第二世代戦闘機人』と言うのも大問題であった。

戦闘機人とは、かのジェイル・スカリエッティが作り上げた。言わば、サイボーグの事である。

ナンバーズに代表される彼女達ではあるが、JS事件の終了と共に。その研究は全て破棄された筈であった。

少なくとも第二世代の戦闘機人など。はやて達は聞いた事も無い。

そんな彼女達に、タカトは面倒臭そうな目を向けた。

「その様子だと、兄者からは何も聞いてないな……」

「トウヤさんから？」

「ああ。兄者に情報は渡してあった筈なんだが、な……」

フッと、嘆息する。

例の『第、数えるもバカらしいからやめた。叶トウヤ暴走事件』の際に、トウヤに第二世代戦闘機人についての情報も”追加した”データーチップを渡して置いたのだが――。

恐らくは彼女達に、まだ見せていなかったのだろう。

当然とも言える。

紫苑の件と、その後始末も含めて。いろいろとあり過ぎた。

トウヤ自身。各部署との折衝やらで忙しい身であつたろうし。どうにか出来たとも思えない。

もう一度だけ嘆息する。

「詳しくは、後で兄者に聞け。今は説明出来る暇は無い」

一方的にそう告げると、男達に向き直る。

彼等はそれを待っていたかのように話し出した。

「――私の名は、ヘイルズ。以後、お見知り置きを」

「……ケケ。俺の名は、アルテム。よろしく頼みますよ」

真ん中の長身痩躯の男が、まず名乗り。

向かって右の男――。

――やたらと背の小さな、男である――。

が、名乗る。

タカトは、その名を反芻するかのように一人ごちて。
やがて、頷いた。

「……ゲイルに、ヘイルズ、アルテム、か。いいだろう。覚えるとする。さて、俺に二度も同じ質問をさせる積もりではあるまいな？」

二度同じ。

つまりは、先の質問『何をしに来た』、か。

それに、ヘイルズが頷く。

「では、単刀直入に。伊織タカト様。貴方に向かえに来ました」
「断る」

——場が、凍り付いた。

三人の男達だけでは無く、なのは達も思わず硬直する。

まだ、彼等は何も言っていない。

にも関わらず。タカトは容赦無く、切り捨てたのだ。
固まりもする。

凍り付いた場で。面倒臭そうに、タカトは更に告げた。

「用件はそれだけか？ では、さっさと帰れ」

「い、いやお待ち下さい……！ せめて話だけでも——」

「聞く意味が無い。俺は誰とも組まないし、特定の組織に所属する積もりも無い。失せろ」

取り付く島も無いとはこの事か。

全く聞く耳を持たずにタカトは冷たく告げる。

あんまりなタカトの対応に、ヘイルズは二の句を告げ無くなり――
！。

「……やっぱりな」

そんな野太い声と共に、ゲイルが立ち上がった。

その顔に浮かぶは不敵な笑いである。

両手の散弾機関銃をタカトに差し向けた。

「あんたなら、そう言うと思ったぜ。伊織、タカト……！！」
「待て、ゲイル……！！」

ヘイルズが慌てたように、ゲイルを止めようとする。
しかし、行動を起こそうとしているのは彼だけでは無かった。

「……IS、インビジブル・”セレクト”」
「アルテム!？」

瞬間。タカトは背後に羽虫のような音を聞く。

——嫌な、予感がした。

それに——。

タカトは、そう思うなり。何の前ぶれも無くしゃがみ込む。
そのまま、アンバを思わせる動きで足を広げて回転。

一閃一

”なのは達”の足を、素早く刈り取った。

「「「……え?」」」

一瞬の浮遊感を、なのは達は感じ。
当然、重力に捕まって下に落ちる。
つまり、石畳の上へと。

「ふえっ!？」
「あっっ!？」
「うあっ!？」

軽くとは言え、石畳に落とされて。三人は悲鳴を上げる。

——意図的だったのか、衝撃もさほど無かった。
すぐにタカトに文句を言おうとして——。

一閃！一

頭上を、何かが通り過ぎた音がした。

強いて言うならば、電動鋸てんどうのこぎのような高周波音か。

ぱちくりと、目を見開く彼女達を置いて。タカトは一人だけ立ち上がる。

その視線は、アルテムに固定された。

「……先程は”キャンセル”で。今回は”セレクト”だったか？
そしてインビジュアルと言う名。……成程、貴様の能力は——」
「ケケケケケケ！ あの一度でそれを見切りやがりますか！？ こ
れは噂に違わねえ！」

「アルテム！ 貴様あ……！」

「良いじゃねえか、ヘイルズ。——どうせ、交渉が失敗すればこう
なってたんだしよお」

激昂するヘイルズに、ゲイルが笑いながらアルテムを擁護する。
それに憎々し気に睨みながら、ヘイルズはマフラーの下で舌打ち
した。

そんな三人を見ながら、なのはは立ち上がりつつ。前に居るタカ
トに聞く。

「えっと……。つまりはどう言う事、なのかな……？」

「交渉不成立で、これから戦闘だ」

「……いや、一方的にアンタが話しを切ったように見えたんやけど

……」

「気のせいだ」

あっさりとそう告げるタカトに、なのは達も嘆息して。
しかし、立ち上がりながら三人を睨んだ。

確かに。

どちらにせよ、戦闘は免れ無かったのは明白である。
だからこそ、彼等もここまで周到な準備をして来たのだろうから。

だが、問題は――。

「もういい……。 なら、好きにしろ。俺は、もう知らない」

「ひょうっ！ そうでなくっちゃあな！ 折角の大物を”^{なぶ}捌り殺し

”に出来る機会はそうねえしよう！」

「「っ……！」」

ヘイルズの吐き捨てるような台詞にアルテムが歓声を上げる。

それを聞いて、なのは達は顔を歪めた。

そう、今この結界には高レベルのAMFが張られている。

AMFをある程度キャンセル出来る、なのは達が全く魔力が結合
出来ない程の、だ。

つまり、この結界に居る限りは魔法は使え無いのだ。

それは、タカトも例外では無い。

彼もまた、”魔法使い”なのだから。

いくら身体能力が化け物じみていたとは言え。そこは変わらない。

そして――。

「罅り殺しとは、また穏やかでは無いが。——つまり、魔法が使える
無い事が問題なのか？」

タカトがポケポケつと聞いて来る。

それに、なのはは肩を若干コカした。

果たして今、それは聞く事なのか。

見れば、フェイトも、はやても脱力したかのようにガックリとしている。

とりあえず、**頷**こうとして。

哄笑が響いた。

アルテムが、腹を押さえて高い笑いを上げていたのだ。

タカトはそれに、ふむと声を漏らす。

「何を笑つとるんだ、お前は？」

「ケケケケケケケケケケケケケケケケケケっ！　これが笑わずにいられるかってんですよお！　まさか、今の自分の立場も分かって無いとか言うんじゃないでしょうか？」

「ああ。全く分かつとらんが？」

平然と答えるタカトに、またアルテムの笑いが響く。

ひとしきり笑いきり、アルテムがタカトを指差した。

「分かってないんですかい!？」
それは傑作だ!
いいですかい?

今のアンタはAMFで魔法が使え無い！　そして、俺達戦闘機人にAMFなんて関係ねえ！　つまり、フル・ボ・ツ・コ。て、訳ですよ——っ！　ケケケケケケケケケケっ！」

「ああ、そう言う事か。ところでお前、その笑い方はおかしいから止めた方がいいぞ？」

どうでもいい事を、タカトは言ってる。

アルテムは、聞こえているのかいないのか。まだ笑い続けて——。

「で？」

——タカトの、そんな一言で笑いが止まった。

馬鹿にされたように感じたのだろう。

タカトを睨みつける。

だが、当の彼は全く構わず続けた。

「先のお前の攻撃だが。おそらくは三十cm程の円形の刃。チャクラムと言った所か。……それを”見えなく”させた訳だな。つまり、お前のISとやらは、”透明化”だ」

「な、ん……！？」

いきなりぺらぺらと自分の能力を語られて、アルテムの顔が驚愕に彩られる。

タカトは、構わずに続けた。

「ただの透明化と言う訳でも無いな。おそらくは各種レーダにも反応出来なくなる仕様だな。だが、飛来時における音まではどうにもならなかった、と言う所か。——つまりは、そう言う事だ。アルテ

ムとやら。魔法だろうが、ISだろうが、所詮は技術でしか無い。
そして、人の技術でしか無い以上、破れる手段なぞ無限にある。
…そんなもの、俺が恐れる理由は何処にも無い」

「ん、だと……！」

「そして、だ」

丁寧に欠点までも教えながら激昂するアルテムに、タカトは掌を差し出した。

指を三本だけ立てる。

それを、前の三人に向けて見せた。

「貴様達は三つ程誤解している」

「誤解、だと……！」

こちらはゲイルだ。

が、呻くように告げる声にタカトは頷き――。

「ああ、まず一つ目」

左手を背中に差し込んだ、と思った瞬間。

”何か”を取り出す。

それは、黒い球のような物体であった。

取り出すなり、タカトはそれを迷い無く地面に叩き付ける！

直後。

――爆！――

爆発的に煙が広がり。タカトを中心にして、その場に居る皆を、煙は一気に包み込んだ。



ぶあつと広がった煙幕は一気に視界を覆う。

近くのなのは達も、ヘイルズ達も全く差別無くに、だ。

一瞬にして視界を奪われて、アルテムが苛立ちの声を上げる。

「くそ……！ 煙幕なんてセコい真似しやがるじゃねえですか……！」

「だが、効果的だ」

隣からぼつりと漏れる声は、ヘイルズか。

もう一度くそつと毒づいて周囲をアルテムは警戒した。

この煙に紛れて、奇襲を掛けて来るとも限らない。

確かに、魔法が使え無い状況ならば。これも一つの手段と言える――。

暫く時間が立ち、煙幕が晴れた。

だが、そこに居たのは。もろに煙を浴びてけほけほと咳込む、なのは達だけであった。

タカトの姿が、どこにも無い――。

「ちい……！ どこに……！」

周囲を、目に内蔵してある各種光学レーダで探る。
しかし、タカトの姿は何処にも無かった。

……逃げたか？

そう思った、直後！

「まず、誤解その1。俺は魔法技術をそれ程信用も信頼もしていない」

な———！？

声は、真後ろから響いた。

アルテムの真後ろから——！

一弾！—

そして。悲鳴も、振り向く事すらも許さずに。アルテムの四肢を
何かが砕いた。

「あ、ああ、あああああああああ———！？」

今度こそは悲鳴を上げて、アルテムは倒れ込む。

その後ろに、彼は居た。

伊織タカトが。

冷然とアルテムを見下ろしながら、右手で”何か”を弄ぶ。

「……誤解されがちだが、俺は魔法を使った戦闘より、魔法を使わ

ない戦闘の方が経験が多くてな。魔法を使え無いと言うのは、あまりハンデにならない」

「ぐっ……うう……！」

呻きながら、首だけをタカトに向ける。

その目は何処に居た、そして何をしたかと彼に問うていた。

だから、と言う訳でもあるまいが。タカトは気前良く教える。

「気殺と指弾、と言っても分からんか」

「……なん、だ。そりゃ……？」

「最初のは隠形術の一種だ。対象の六感全てから外れる事で、身を隠す術でな？ その気になれば、貴様のIS程度以上の真似も出来る。ちなみに、ただの”体術”だ。……忍術とも言うがな」

事も無げに、そう告げる。

同時に右の方に視線を向けた。

そこには、今まさに襲い掛からんとしたゲイルが居て。

「そして、これが指弾だ」

一弾！一

直後、右手で弄んでいた物を親指で弾き飛ばす！

ゲイルはその瞬間。直感的に自身のIS。ポイント・アクションで前方の空間を遮断した。

一弾！・弾！・弾！・弾！・弾！・弾！一

同時に響くは、”着弾”の音。
ゲイルが遮断した空間に、それが浮かんでいた。
丸い、鉄の球が。

これは――？

「単なるパチンコ玉だ。……もっとも貴様達が、それを知ってるかどうかは知らんがな。だが……」

呆然としているゲイルに、タカトは無表情に告げる。

パチンコ玉を装填した右手をひょいと近くの墓に向けて。

親指でそれを弾き飛ばした。

一弾！――

右手から放たれたパチンコ玉は、墓のど真ん中に命中し。

”貫通”して、向こう側へと突き抜けた。

石の固まりである墓石を貫通して、である。

並大抵の威力では、無い。

愕然とする一同に、タカトは笑いながら続ける。

「――だが。達人級ならば一般の拳銃程度ハンドガンの破壊力を出せる。ちなみに、俺だとライフル並くらいか」

「……化け、物、め……！」

呻くようにアルテムがタカトへと呟く。

それにタカトは苦笑した。

「よく言われる。……さて、次は貴様か？　ゲイル？」
「ぐっ……！」

タカトの台詞に、ゲイルは冷や汗が額を流れて行くのを悟った。

恐れているのだ。

魔法が使え無い筈のタカトを。

戦闘機人となり、超人になりえた。

あまりにも有利過ぎる自分が。

だが――。

何を恐れる必要があるってんだ……！

ゲイルは自分に言い聞かせる。

今はAMF下にあるのだ。

前のように、ポイント・アクションを真っ正面から弾き返すなんて真似は出来ない。

そう、今。この瞬間においてタカトなど、自分の敵では無い――。

「どうした？　動かないのか？　なら、こちらから行こうか」

タカトはあくまでも平然としたままに告げる。

そのまま、一步を踏み出し――。

それが、限界だった。

ゲイルは奇声を上げながら、攻撃の為にポイント・アクションを

”解除”して。

一弾！一

——身体の至る所を、指弾で撃ち抜かれた。

その数、十二発。

ぽつり、とタカトが呟く。

「たわけ」

「がっ……！」

崩れ落ちる巨体を、ゲイルはどうにか持ちこたえる。

そして、タカトの右手を睨み付けた。

いつ、撃ちやがった……！？

僅か一瞬で十二発もの弾丸を撃ち放った、その右手を見ながら胸中叫ぶ。

そんな彼にタカトは嘆息した。

「あのまま空間遮断を展開していたならば、俺は攻撃を届かせられなかっただろうにな」

「な、なんだと……？」

「いや。それ以前に最初からポイント・アクションを攻撃に使っていたならば、お前にも勝ち目はあったんだよ。ゲイル。俺に、空間衝撃砲を防御する手段は無いのだから」

身体中から血を流しながら、ゲイルはタカトの言葉を聞く。

——確かに、その通りだ。

最初から衝撃砲を撃ち込んでいれば、こんな何も出来ないままに敗北はしなかっただろう。

最初に、何故防御なぞしたのか——。

タカトは、自問するゲイルに嘆息しながら告げる。

「答えは簡単だ。ゲイル。貴様は俺を恐れたんだ。——また自分のISを真っ正面から壊されたりしないか、とな」

「な、ん……！」

「お前は、自分の恐怖に負けた」

その答えに、ゲイルは愕然とした。

想像もしていなかった答え。

だが、どこかで納得する自分が居る。

何故、最初に防御した？

何故、その防御をずっと続け無かった？

何故、何故——？

答えは、一つだった。

自分はタカトでは無く、自分の恐怖に負けた。

ただ、それだけの事。

「――無様」

「っ!？」

ぽつりとタカトから呟かれるは、たった一言。
それは何より、ゲイルを嘲る言葉だった。

――認められない言葉だった。

だから！

「ふっざ、けるなああああ――っ!」

ゲイルはあらん限りの声を絞り出して吠える！
そして、渾身の一撃をタカトに叩き込もうとして――。

――それより疾く、タカトは動いていた。

何の挙動も、予備動作も無く。ゲイルの懷に飛び込む。
世に、それをこう呼ぶ。

武道に於ける一つの到達点。

無拍子、と。

一切の予備動作無し、故に事前の行動の察知は不可能。
その速度は、物理的限界を超えると一説には言われる――。

それを持ってして、タカトは懷に入りながら、右手をスッと伸ば
していた。

右掌が、ゲイルの頭を鷲掴みにして――。

ずぶり、と言う異音が辺りに響いた。

「ぎ……っ!？」

「誤解その2」

ゲイルの頭を鷲掴みにしたままに淡々とタカトは呟く。

五指を広げて掴んでいる掌の内、中指だけが消えていた。

それは、”左目に埋没していて”――!

「――俺は、なのは達のように優しくは無い」

「ぎいあああああああああああああ――――っ!？」
!?!?!?!」

絶叫が、響き渡る。

それは、左目を貫かれた激痛と違和感による恐怖により上げられた叫びであった。

あまりの光景に、なのは達も絶句して立ち尽くす。

が、なのははいち早く立ち直った。

タカトに制止を呼び掛けようとして。

それより早く、タカトは動いていた。

くんつと悲鳴を上げ続けるゲイルを、目に指を突っ込んだまま片手で持ち上げる。

そのまま、タカトは石畳の上にゲイルの身体を半回転させながら叩き付けた。

――裂!――

背中から石畳に叩き付けられ、石畳が碎け散る。
——そこで、漸く指は目から引き抜かれた。

血に塗れている中指をタカトはしばし見下ろし。

「いい加減に黙れ。鬱陶しい」

一撃一

「ぎっ!？」

悲鳴を上げ続けるゲイルの顔を踏み碎く。
ぐしゃりつと凄惨な音が辺りに響いた。

ゲイルの悲鳴が、止まった。

——正確には悲鳴も上げられなくなった、だろうが。

そこで漸く、なのはは声を上げる。

「タカト君!」

「……………」

タカトはちらりと、なのはの方を向いて——。
あっさりとそれを無視した。

なのはの顔が悲痛に歪む。

タカトが、まさかあんな行動に出ると思わなかったのだ。

——いや、考えて見れば。この三人が来た最初っからタカトはお

かしい。

やたらと口数は多く。

アルテムやゲイルを嘲るような言葉を吐いて。

そして、今のような非道な真似をする。

——これでは、まるで——。

そこまで思い至った時。

なのはは、フェイトは、卒然と気付く。

こんな彼の姿に見覚えがあった事に。

それは——。

「ヴィヴィオの時と、同じ……！」

「？ どう事なん？ なのはちゃん。フェイトちゃん」

一人だけ、それを知らない、はやてが二人を見て疑問符を上げる。
だが、なのはもフェイトもそれに答える事は出来ない。

漸く理解したのだ。

今のタカトは——。

「……どうやら、我々は間の悪い時に来たようだ」

ヘイルズの呻くような声が漏れる。

——タカトの殺気を余す事無く全身に受けて。

そう、今のタカトはミッド、クラナガン襲撃の際に引き起きた時のように。

その目は、憤怒に彩られていたのであった。



「一応、何故とお聞きしても？」

「……………」

タカトは無言。ただ、ヘイルズに一步を踏み出す。
答える必要も無いと言う事か。

しかし、なのはは何となくタカトの怒りに思い当たる事があった。

今日は彼の父の月命日なのだという。

そして、彼にとっては久しぶりの墓参りだった筈なのだ。
それを、いきなり現れて襲撃なんぞを掛けられて、台無しにさせられた。

そう、思ったのでは無いか。

あくまでも何となくではあるが。

タカトは無言のまま、ヘイルズへと歩く、が。

いきなりその歩みが止まる。

そして、ヘイルズを真っ直ぐに見据えた。

「……貴様も戦うか？　ここで逃げるならば、追わんが？」

そう、ヘイルズに告げる。

それにヘイルズは一瞬だけ呆然とする。

まさかここに来て、そう言われるとは思わなかったのだ。

あれほど怒っている彼が、譲歩するかのように自分達を見逃そうとするなど。

だが――。

「……いや、任務は任務だ」

――ヘイルズの口から敬語が外れる。

それはつまり、彼も戦うと言う事に他ならなかった。
タカトは無表情にそれを眺めて。

「……そうか」

ぽつり、と呟く。

と、同時に駆け出していた。

すると、滑るような歩法でヘイルズへの間合いを詰める。

刹那に、その懷に飛び込んだ。

一撃！一

ヘイルズの鳩尾に拳を撃ち込んで。

——タカトの眉が不可解そうに寄せられた。

鳩尾に突き込まれた拳から伝わる感触。

それが、あまりに異様であつたから。

なんだ？　これは？

「IS、インフィニット・トランス」

「！？」

一射！一

一閃！一

直後、ヘイルズがタカトに向けて差し出した指が”伸びた”。

五指全てが伸びながら、タカトへと突っ込んで来る！

疾い！

後ろに後退しながら、タカトは迫り来るそれらを化勁。

——腕を独楽こまのように回転させて、攻撃を受け流す技である。
の応用で、全て払い除ける。

五指全てを後ろに流すと、前に踏み込みがてら右の掌をヘイルズ

の腹に撃ち込む。

しかし、返って来るのは。やはり異様な手応え。
まるで、肉質のサンドバックを殴っているかのような感触だった。

これは——！！？

「ちっ」

短く舌打ちして、タカトは後ろに短く跳躍。

ポケットからパチンコ玉を取り出すと、指弾をヘイルズに撃ち込む。

一弾！・弾！・弾！—

三点バースト。

額、そして腹、肩へと指弾は放たれて。

——その全てが、ヘイルズを貫通した。

だが——！

「ひゅっ！」

ヘイルズは全く痛痒も見せずに突っ込んで来る。
いや、それ以前に血が流れていない！

今度は左であった。

視認も難しい程の速度を持って、五指が伸びて来る！

それも化勁で上手く逸らしがてら、タカトはヘイルズの能力を推測する。

指を伸ばす攻撃。

打撃の際の違和感、そしてダメージ無し。

指弾を額、胴、肩に撃ち込まれても、同じくダメージを受けた様子無し――。

そして、インフィニット・トランスと言う名前。

無限の変容を意味する、これは――。

……そう、か。

五発目の指槍を受け流すと同時に、タカトはある仮説を立てる。

攻撃を無効化しているようだとは最初は思ったのだが。
“そうでは無く、結果的に攻撃を”無効化されている”のだとしたら。

思い付くなり、タカトは試して見る事にした。

受け流し、通り過ぎた指槍を掴んで一気に引っ張る！

それにより、ヘイルズが引き寄せられた。

確認するなり、タカトは指槍から手を離して、地面を蹴りながら、その場でトンボを切る！

ぐるりと前宙回転しながら、降り落ちるは鉞斧ふえつを思わせる踵。
それは迷い無く、引き寄せられたヘイルズの頭頂に落とされ――。

一斬！――

その身体を一刀両断、真っ二つに斬り裂いた。

「「っ……！？」」

背後で声なき悲鳴が三人分上がる。
だが、タカトは構わ無い。

すぐに、肉の”断面”を見て。

己の推測が当たった事を理解した。

「気付かれたか」

「え……！？」

聞こえた声に、なのはが驚きを上げる。

それは、そうだろう。

聞こえた声は、”ヘイルズ”の声だったのだから。

一閃――

直後。タカトへと左右から指槍が放たれたる、が。
彼はそれを、後退する事で避わした。

綺麗に真っ二つになったヘイルズを見遣りながら、告げる。

「貴様のIS……。肉体変化の能力だな。——しかも並では無い。まさか、”内臓や脳”まで変質出来るとはな」

その内容を、なのは達が飲み込むまで暫く時間が掛かった。だが、理解すると顔色が青へと変わる。

それを見て、ヘイルズがマフラーの下で左右に分かれながら笑った。

「IS、無限の、変化。インフイニット トランス己が肉体を、名の通りに”無限に変化”させる事が出来る能力だ。……おかげで、殴られようが斬られようがダメージは無い」

タカトが最初放った打撃の違和感の正体が、これであった。内臓を変化させて、”無くして”しまったのだろう。

いかな、浸透勁を持ってしても破壊すべき内臓が無くては意味が無い。

指を伸ばす攻撃も、指弾を撃ち込まれて平気だった事も。

——身体を両断されてもダメージが無い事も。

これで、説明がつく。

そして——。

「これで分かった筈だ。貴方は、俺にここでは”絶対に”勝てない」
「……………」

その言葉に、タカトは沈黙する。

そう、打撃も斬撃も無意味ならば。”魔法が使え無い”タカトに勝ち目は無い。

指弾や、A A +相当の打撃であろうとも、ヘイルズには意味が無いのだから。

攻撃手段が無いのだ。勝ち目があるはずが無い。

いくらタカトが魔法を使わない戦闘法を持っているようと、こればかりはどうしようも無い事であった。

沈黙するタカトに、ヘイルズは言葉を続ける。

「どうだろう？　　ここらで手落ちにしては？　　ご同行願えないか？」

自らの勝利を確信して、ヘイルズは告げる。

この状況においては自分が負ける事は有り得ない。
じゃんけんと同じ事である。

ぐーは、ぱーには勝てない。

だが――。

「断る」

あくまでも、タカトはそれを拒絶する。

それに、左右に分断されたままヘイルズは嘆息した。

そして。

「ならば、嫌でもご同行願おう」

そう言うなり、ヘイルズに更なる変化が訪れる。
左右に分かれた身体が、それぞれ起き上がったのだ。

——変化は、そこから始まった。

分かれたれて、半分になった身体からそれぞれ無くなった部分が”
生えて”来たのだ。

服すらをも、含めて。まるで時間を逆転するかのように身体が生えて——。

その光景は、生まれた。

”二人のヘイルズ”が、同時にそこに居ると言う光景が。

「片方は、擬態だ。数十秒もあれば、すぐに死ぬ」

だが、と二人のヘイルズは続ける。
指槍を持ち上げ——。

「どちらが、本物か分かるか……」

一気に、タカトへと駆け出す。

二人、同時にだ。

タカトは後退せずに、まず自分から離れた位置に居るヘイルズの
懷に飛び込む。

一撃！

顔面に拳を撃ち込む。

すると、そのヘイルズはあっさりと崩れ落ちて塵に変じた。

こちらが擬態！

なら、もう片方は……？

その答えは、すぐに出了。

自分を”通り過ぎて、なのは達へと向かう”ヘイルズを認識する――！

魔法が使えず、戦闘手段の無い彼女達に！

「人質を取られて、なお断れるか……！」

吠えながら、なのはとはやてを守るように前に出たフェイトへと指槍を放つ！

ヘイルズの行動に意味は無い。

だって、タカトは彼女達とは敵なのだから。

人質に取られたとしても、タカトはあっさり見捨ててるだろう。

その筈。

その筈、なのに――！

――閃！――

次の瞬間。彼女達の目に映ったのは。

伸びた指槍に自分の左手を差し出して。

フェイトに届く筈だった指槍を自らの腕を盾にして、止めた。

敵である、タカトの姿だった――。

（後編2に続く）

第四十九話「墓前の再会」 (後編1) (後書き)

はい、後編1終了でございます♪

またいい所で終わってしまつてすみません (汗)

まあ、テストメントクオリティだと言う事で一つ (汗)

では、次こそは早目にお送りしたいと思います♪

では~~~~♪

第四十九話「墓前の再会」 （後編2） （前書き）

はい♪ ども〜♪

テストメントです♪

今回は筆がノリノリだったので、執筆がはかどりー。

……一万六千文字も書きちゃいました♪

てへ♪

……すみません。力入れて石を投げるのはマジで勘弁を（汗）

では♪ 記念すべき百部。シオンが哀れな今回♪

第四十九話完結！ どうぞ〜♪

第四十九話「墓前の再会」(後編2)

一閃一

その瞬間、その場にいた人間は一人残らず固まった。
フェイト・T・ハラウンに届く筈だった指槍。
それは、しかし。別の人間を貫いていた。

彼女を庇うかのように左手を盾にして、そこに五本の指槍を貫かせて止めていたタカトに。

なのはも、はやても、……フェイトも。
ヘイルズすらも、彼の予想外の行動に固まる中。
ただ一人全く固まっていないう人間が居た。

言うまでも無い。当の伊織タカト本人であった。
左手に五つの穴を穿たれているのに。
そこから、鮮血が溢れるように吹き出しているのに。

なのに！

タカトの表情はぴくりとも変わらない。
感情の変わらない無愛想な顔のまま、左手を貫いている指槍を一つ残らず、その左手で掴んで。

ぐいっと自らに引き寄せた。

——そこで、漸くヘイルズが我に帰る。

しかし、その時には既にタカトが前に踏み出して懷に飛び込んでいた。

ぽんつと軽く右の拳をへイルズの腹に押し当てて――。

— 擊手！ —

一擊・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃
撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃・撃

— 擊手！ —

直後。ヘイルズの身体中の至る所が、幾度も爆ぜる！

頭、耳、目、鼻、首、肩、胸、腹、腕、手、腿、膝、臍、足！

タカトはただ、拳を押し付けているだけ。

それだけの筈なのに、ヘイルズの身体中が”殴られたように”、弾けたのだ。

——浸透勁を極めると、このような真似も出来る。

” 衝撃の伝導を操る ” 事によって、ただ拳が触れているならば、身体を伝って衝撃のみを打ち込むといった真似が。

物理的に繋がっているならば、例えば地球の裏側だろうと衝撃を伝えられる打法。

それを持ってして、瞬間的にヘイルズへと撃ち込んだ打撃。

その数、総計。百五十七発！

全身に余す事無く、衝撃を打ち込んでタカトが理解した事はただ一つだけであった。

——今の状況では勝てない。
それだけ。

何故ならば、今放った衝撃全てが。”軟らかく”変化した身体により受け止められたから。

まるで、弾性の低いゴムを殴ったような感覚をタカトは強く受ける。

身体全てを”軟らかいように変化した”のだ。
これでは、衝撃をどこに打ち込んででも意味は無い。

「……無駄だ」

頭の上で、呟く声が聞こえる。

今度は、左手をヘイルズは伸ばした。

またもや、フェイト達へと。

指が伸びて、指槍へと変じようとして——。

「ふっ！」

鋭い息吹が、タカトの口から漏れる。

同時、押し当てていた拳が開いて、掌がヘイルズの腹に触れた。

一発！一

——直後、爆裂したようにヘイルズが吹き飛ぶ！

寸勁。密着状態から放つ発勁の一種を持って、タカトが彼を吹き飛ばしたのだ。

ヘイルズが伸ばさんとした指槍は、彼自身が吹き飛んだ事により再び空を切る。

——だが。

「……っ」

タカトの顔が、少し歪む。

左腕には未だ、ヘイルズの指槍が刺さったままであったから。

吹き飛んだ筈のヘイルズの、だ。

それは、彼が故意に指槍を伸ばした事を意味する。

何故、捕まる可能性を残してまでヘイルズは指槍をタカトの左腕に刺したままにしたのか。

タカトは、それを即座に悟った。

”腕の中を何かがいずり回る感覚を受けて”。

——故に、その判断もまた早かった。

タカトは右の貫手を作ると、迷い無く左の肩口に突き刺す！

そして。

一裂一

——太い繊維質を断ち切る音が鳴り響く。

同時にタカトの左手は、肩の付け根からちぎれ飛んだ。

「……あ……」

「タカト君！」

ゆっくりと、スローモーションで映る宙を舞うちぎれ飛んだタカトの左腕。

噴き出した血が、フェイトの顔を汚す。

なのはの悲鳴が響いて——。

——それら全てをタカトは無視した。

自分の左手をあっさり見捨てて駆け出す！

驚いたのはヘイルズである。

自分の左腕を、ああもたやすく捨てるなぞ想像の埒外だったのであろう。

未だに吹き飛ばされて、空にある身体にタカトが追い付くまで驚愕に固まる。

——再び我に帰るまでに、タカトは成すべき事を終わらせていた。地面を這うように駆けながら、右の貫手を手刀に変化。

身体を引き起こしながら、手刀を跳ね上げる！

一斬！一

手刀は、軌道上にあるものをあっさりと斬り捨てた。
つまり、ヘイルズの右腕を。

それに、彼は失策を悟った。

今ので、人質を取る機会を完全に逸したのである。

タカトの左腕に突き刺したままの右指槍。

それを斬り捨てられたのだ。

それで擬態を作ろうにも、もはや遅い。

既に指槍は完全に切り離されているのだから。

そして、それに気を取られている暇は更に無かった。

一撃！一

タカトが手刀を放った体勢から身体を起こしがてら突き蹴りを放
つ！

それは真っ直ぐに、ヘイルズの鳩尾に突き刺さった。

だが、当然帰って来るのは例の感触。

つまり、軟体化による打撃無効。

今の一撃も意味は無い。

——そんな事は、百も承知だった。

タカトの狙いは、ヘイルズを”吹き飛ばす”事にあっただから。

平行に飛んで行くヘイルズを尻目に、タカトは蹴りを放った体勢

から前へと重心を倒す。

——蹴りを真下、敷石に叩き付けた。

震脚。

それも空歩を一切使っていない、それをタカトは躊躇無く叩き付ける。

——そして、変化は起きた。

一轟一

瞬間。タカトの足元から、放射状に前へと地面が爆砕する！

それは、ヘイルズの着地点までも含んでいて。

そこから。後ろのなのは達は。

そしてヘイルズは驚くべきものを目にする。

爆砕した地面。

それが集まって、まるで津波のように波打っていたのだから。

タカトが震脚で引き起こした現象がまさにそれであったのだ。

魔法も使わずに、爆砕して吹き飛んだ、土や石の飛ぶ位置を全てコントロールしたのである。

驚くべき技術であった。

ヘイルズの頭上に高々と上がる土と石の津波。

その上に、タカトはサーファーよろしく波に乗りながらヘイルズ

を見下ろす。

ぽつり、と口を開いた。

「――打撃も斬撃も効かなくても、”窒息”はどうだろうな？」
「……………っ!？」

その言葉に、ヘイルズはタカトの目論みを悟り――。

――全てが遅かった。

津波が崩れ、その身体を飲み込む!

悲鳴すらも掻き消して――。

やがて、ヘイルズの身体は小高い山の下へと消えた。



敷石と土が混ざりあって出来た小高い丘を、タカトは見下ろす。

何とか、動きを封じる事は出来た。

それ”だけ”は。

だが――。

「タカト君!」
「……………」

いきなり響いた声に、思考が中断され。タカトが不機嫌そうに目を細める。

その眼差しを、振り返りながら声の主に向けた。声の主は当然、なのはだった。

後ろから、はやて、フェイトも駆けて来る。

——特に、フェイトの顔は真っ青になっていた。

「……いちいち叫ぶな。何だ？」

「そんな……！？」 何だじゃないよ！ 左腕！」

あまりに普通の反応を返すタカトに、なのはは怒声を上げる。

それは、そうだろう。左腕をちぎっておいて、そんな反応を返されては。

だが、タカトはそんなのはを煩そうに見る。

「……いちいち叫ぶな。たかだか腕一本落とした程度で騒ぐような事か」

「腕一本程度って……！」

そんなタカトの台詞に、なのはは絶句する。

まるで、何て事は無いとばかりなタカトの反応に。

そして、キッと彼を見据えた。

「……やめてって言ったよね？ 自分の事、そんな風に言うの……」

「……？ そんな事言われたか？」

その言葉に、タカトは心底不思議そうな顔となる。

それは、彼女の怒りに油を注ぐ反応でしか無かった。

タカトを睨みながら、叫ぶ！

「言ったよ！ タカト君が『俺の事なんてどうでもいい』って言った時！」

「……待て。それとこれとは話しが――」

「違うないよ！ タカト君は本当きかん坊なんだから！」

「……貴様。黙って聞いてやれば好き放題ほざきおって……！ 大
体貴様達がぼけらっとしていたからこんな目にあっただろうが！
たわけが！」

「ま、またたわけって言った！ そんな事言う方がバカだよ！ タ
カト君のバカ！」

「お前にだけは言われたく無いわ！ このたわけ！」

「私だってタカト君にだけは言われたく無いよ！ 大バカあ！」

「ついに大をつけおったな……！ この超たわけ！」

「大！ 大！ バカア！」

「超！ 超！ たわけ！」

売り言葉に買い言葉とは、この事か。

二人は顔を付き合わせて互いに吠えまくる。

タカトはひどく納得いかないような顔となる。
しかし、怒れるはやての勢いに黙り込む事となった。
更に、はやては説教を続けようとして。

「は、はやて、はやて！ もうこの辺で……！」

「ん？ そうか……？ 全然言い足りんけど。まあ、ええか。――
で、タカト君。その左腕やけど……」

「……もう好きに呼べ。左腕がどうした？」

いい加減諦めたのか、盛大にため息を吐いて続きを促す。
はやては頷くと、聞くべき事を聞く事にした。

「その左腕なんやけど……。大丈夫なんか？」

「それが、すぐに出血死するかどうかと言う意味ならば大丈夫だ」

問いに答えながら、タカトは肩の付け根。そこから先が無くなった、挟めたような傷口を見る。

どう考えても致命傷であり、時間を考えると出血量を心配しなければならぬのだが――。

肝心のそこからは血が流れていなかった。

傷口周辺の組織を筋肉で閉鎖する事で、強制的に出血を抑えたのである。

これで、すぐに出血死を心配する事は無い。

タカトの台詞に、はやては再び頷く。――後ろのなのはやフェイトは、それでも心配そうに見ていたが。

次いで、質問を続けた。

もう一つ、聞かねばならない事があったから。

それは――。

「――なんで左腕を自分で落としたんや？」

はやては、タカトの目を見て聞く。

あの時、後ろで見ていた限りではあるが。わざわざ腕を落とすような真似はする必要は無かった筈だ。

いくら指槍で貫かれているとはいえ。ちぎり落とすよりはマシな筈である。

なのに、どうして――。

タカトは、はやての問いに肩を竦めると敷石の上に落ちている自分の左腕に視線を移す。

右手でそれを指差した。

「見てみる、左腕の傷口の辺りを」

「――そんな、グロいもん見たくないんやけど……」

はやてが顔をしかめる。なのは、フェイトも同じくである。仮にも女の子に見せるものではない。

だがタカトはそんなデリカシーを気にする男では無かった。

仕方なく、三人は落ちた左腕に近づいて傷口を見る。

すると、すぐに異質なものに気付いた。

これは、何だ？

「タカト君。これ……？」

「奴の指先が変化したものだ。動脈を伝って中を這い回って来ていたからな。――腕を落とすのが、一番手っ取り早かった」

つまり、タカトの左腕を貫いた指槍から先を更に変化して動脈に侵入。

そこから遡って心臓に指先を伸ばされたのだろう。
想像するだけで、吐き気を催しそうになる。

一様に顔を歪めた三人にタカトは苦笑した。

「――まあ。腕一本であの事態をどうにか出来たのならば、安いものだろう」

「また……！」

その台詞に、またなのはが激昂する。

声を上げようとして。――しかし、横からそれを遮られた。

フェイトに。

彼女はなのはを手で制止させると、タカトを真っ直ぐに見据えた。

「――何で、私を助けたの……？」

ぐっと抑えるかのような声。

そんな、感情を抑えるような声でフェイトはタカトに問う。
そもそも、そこからおかしかったのだから。

タカトが身を呈^{てい}してまで、彼女を助ける理由はどこにも無い。

その筈である。なのに、何故――？

その問いに、タカトはぷいっと横を向いた。

「……さあ、何でだろうな？ 俺にも分からん」

「分からないって……。自分の事だよ！？ そんな筈無い！」

思わずフェイトは叫んでいた。

元々彼女のタカトに対する感情は複雑である。

――どちらかと言えば、否定的ですらあった。

ならば、自分を助けたのにも理由がある筈である。

そうで無くてはおかしいから。

フェイトはそう思う。

だが――。

「そう言われてもな。……気付いた時にはああしていたんだ。分からないとしか答えようが無かろう？」

あっけからんと、タカトは答える。

本当に、彼自身も気付いていないのだ。

何故、彼女を助けたのかを。

彼女達へとヘイルズが向かった事を認識した瞬間。

身体が勝手に動いていたのだから。

——我に返った時には、既に指槍が左腕を穿った後だった。
だから。

「——本当に、分からないんだ」

まるで途方にくれた。迷い子のような声。

タカトの台詞に、フェイトは、そして、なのは、はやても同じ感想を抱いた。

その中で唯一、なのはが顔を悲しそうに歪める。

少し、分かったからだ。

タカトが分からないと言う、その理由に。

『幸せ』と言う感情を喪失ってしまった。彼の状態をただ一人知る、彼女は。

タカト君は、多分——。

おそらくはタカト自身も。

否。タカト”だからこそ”気付かないそれに、なのはは気付く。

——彼が人一倍、何かを失うのを恐れている事に。

誰かが不幸になる事を。それも、顔見知りがそうなる事を彼は嫌がっているのだ。

だけど、それは何て皮肉。

彼自身はどこまでも『幸せ』が分からないのに。

『幸せ』を共有する事も理解する事も出来ないのに。

誰かの『幸せ』は必死に、無意識ですらも守ろうとするなんて。

……それすらも自覚出来ないなんて。

漸く、なのはは理解する。

かのクロス・ラージネスが語った『決して救われ無い存在』と言う意味を。

その感情を”喪失ってしまったているが故に”、それに固執しているのに。

その感情を”喪失ってしまったているからこそ”、それを手にする事も。

認識、理解する事すらも出来ない。

あまりにも救いが無い。

あまりにも報われ無い。

一傷一

その意味を、なのはは噛み締めた。

だけど――。

「……さっきからどうした？　なのは？」

「う、ううん！　何でも無いよ！」

ずっと彼の顔を見続けていた事に、今更ながらに気付く。

そんな彼女を不思議そうに見るタカトに、なのはは彼自身に言った言葉を思い出していた。

一幸せが分からないなら、教えてあげる。一緒に幸せになって。それが幸せだって感じて欲しいの。――タカト君を幸せにしたいの――

初めての告白と一緒に告げた言葉。それを、なのはは思い出して――。

うん、と頷いた。

傷の本質を理解した今でも、その気持ちは変わらない。

彼に『幸せ』を理解して欲しいと言う気持ちは。彼を『幸せ』にしたいと想うこの想いは。

変わらない。――むしろ、強くなっていた。

だから――。

「……タカト君」

「む？」

名前を呼んで見る。

それにタカトは疑問符付きで応えた。

そんな彼に、なのはは微笑む。

「何でも無いよ」

「……なんだ、それは」

なのはの答えに、タカトは不機嫌そうな顔となる。
それにもう一度だけ、なのは微笑んだ。

今はまだ言葉にしない。

一度告げた事とは言え、彼は否定しからないだろうから。

だから――。

――勝つよ。私、絶対に。

それは、いつかの約束。

戦うと言う約束であった。

勝者の言う事を、必ず聞くと言うそれ。

それに勝つ事を、なのはは再び固く決めた。

もう一度、彼に告げる為に。

『幸せ』になる事を認めさせる為に。

なのはは、再び決意した。



……何だ？

何故かいきなり機嫌が良くなったのか。微笑むのはを見て、タカトは首を捻る。

女心は秋の空、とは言うものの。この変わりっぷりは一体なんなのか。

暫く、彼女のそんな変わりっぷりを見て。

タカトはあっさりと匙さじを投げた。

……女と言う生き物は良く分らん。

結局、タカトはそう結論付ける事にした。

そして、こちらはこちらで未だに暗い顔の彼女。

フェイトを見遣る。

どうにも自身が原因でタカトが手を落とした事を気に病んでいる事だけは、タカトも理解した。

とりあえずは血で汚れた彼女の顔を右手で拭う。

——何と言うか、血で汚れたままなのは嫌だった。

「て、何を……!？」

「血を拭おうとしているだけだ。気にするな」

自分の血である。自分が拭うのが、常識であろう。

そう考えるタカトは、事もなげに言う。

それに、若干フェイトがぐっと息を飲んだ事をタカトは悟る。

どうやら任せてくれる気にはなったのだろう。

黙ったまま、なすがままになった。

……素直じゃないな。

タカトは、フェイトをそう評する。

それは彼限定だったりするのには当然気付かない。

拭いながら、告げる。

「計らずともだが、これでお前への貸しも返す事が出来た。――だから、そう気にするな」

「え？ ……あ」

タカトのそんな台詞に、フェイトは思わず彼の弟であるシオンの言葉を思い出していた。

—今度はフェイト先生を助けようとするんじゃないですかね？—

——まさしく、シオンの読みは大正解であった。

それを思い出しながら、フェイトはタカトへと視線を向けて。

「……終わりだ」

そして、タカトは血を拭い終わる。

そのまま離れようとして――。

「……それ、どうするの？」

——その前に、ぽつりと消え入るような声でフェイトは聞く。
視線はちぎれた左腕の肩口に移っていた。

彼女のそんな言葉に、まだ気にするかとタカトは嘆息する。

気苦労を背負い込むタイプだなと苦笑し、そして。

「……そうだな」

ふむと頷いて見せる。

確かに、不便ではある。

あるが、しかし。

正直に言ってしまうえば、それだけであった。

無理にどうこうする必要は無い。

それがタカトの感想である。

だが――。

まだ沈むフェイトの顔に、タカトは目を細めた。

こちらまで気が滅入りそうな顔である。

――はつきりと言うと鬱陶しい。

そんな顔でいられるかと思うと考えるだけでうんざりとした。

だから。

タカトは大きく嘆息した。

……割に合わないんだが、な。

そう思い苦笑する。そして、どうにかする事にした。

「貸し1だ。フェイト・T・ハラオウン」

「え……？」

いきなり言われた事に、フェイトが疑問符を浮かべる。
だが、タカトは構わずに続けた。

「割に合はん分は、後でメシでも奢れ。——これをやるとひどく腹
が減る上に、楽しみも出してしまおうしな」

「何を言ってるの……？」

彼が何を言っているのか分からずに、フェイトは問う。

それに、タカトは答え無い。

しかし、指をフェイトへと突き付けた。

「いいから。了承か否か、どっちだ？」

「え、えっと……？」

「早く」

いきなり過ぎる問いに、フェイトはうろたえる。

だが、当然タカトは構わない。

強引過ぎると言えば、強引なそれをフェイトに突き付ける。

しばし迷い。

やがて、フェイトは頷いた。

「うん。分かった。ご飯を奢るくらいなら……」

「言ったな？ 後で後悔しても知らんぞ？」

「え？」

悪戯めいた笑いを浮かべるタカトに、再びフェイトは疑問符を上げる、が。

タカトはもはや、その顔を見ていなかった。

目を閉じる。

りいりいりい……。

ひゅううううううううう……。

口から漏れるのは、ストロークの長い呼気。

長く、しかし鋭いそれをタカトは繰り返しながら、夢想する。

『天』

一其は、万物を照らす具象――

『火』

一其は、万物も滅つす具象――

『水』

一其は、万物に変わる具象――

『土』

一其は、万物を抱く具象一

『山』

一其は、万物へ聳える具象一

『雷』

一其は、万物に轟く具象一

『風』

一其は、万物に吹く具象一

『月』

一其は、万物を慈しむ具象一

呼気と共に、それらを夢想しながら”己に取り込む”。

『八極素』――世界を構成されるとされる、それをタカトは己に取り込む事により、”世界を己の中で構成”する。

そして。

”それ”は起きた。

肩から先が無い左腕。そこから、細いものが飛び出す。

それは、複雑な形を描いて無くなった左腕を構成し――。

そこからが、驚きだった。
まるで、時間を遡るかのように。

神経が。

骨が。

筋が。

皮膚が。

再生――。否、復元される――！

「えっ！？ ええ――――っ！」

「な、なんなのそれ！」

一連の事象を見ていたフェイトとなのはから、驚愕の声が響く。
だが、当然タカトは構わず無視して――。

やがて、完全に左腕を”復元”し終わり。
ふうっと、息を吐いた。

そこからは、八極の残滓が漏れる。

全てを終えると、タカトはゆっくりと目を開いた。

復元した左腕の調子確かめるように指を握ったり開いたりする。

「ま、こんなものか」

「こ、こんなものかって……」

流石に、なのほも呆れたような声を漏らした。

ちぎれた左腕を再生するような真似が出来るとは……。

どこまで、規格外なのかと真剣に思う。

そんななのは置いて、タカトはフェイトに視線を移した。
復元した左腕を見せる。

「これでいいか？」

「こ、これでいいかって……」

問われても困る。

頷く以外にどんな反応を示していいか分からずに、とりあえずフェイトは頷いた。

「なら、よしだな。——約束は守れよ？」

そう、フェイトに告げてタカトは笑う。

そして——。

「……”使える”んやん……」

ぼつりと今まで黙り込んでいた、はやてから声が漏れる。

え？ と、なのは達が疑問を声にして出す前にタカトは苦笑した。

「慧眼けいがんだな。よく気付いた」

「？ それって、どう言う——」

はやてとタカトの会話に。思わずそれはどう言う意味かを問おう

として。

「……馬鹿な」

全然別の方から声が来た。

三人娘は身を固くする。

この声は――。

「漸くか。予想より時間が掛かったな」

ただ一人。気軽に笑うタカトは振り返ると、それに対峙した。

小高い山から這い出るようにして、現れた彼。

ヘイルズへと。

タカトは笑いながら、向き合った。



「馬鹿な……」

もう一度、ヘイルズは呆然と呟く。

果たしてそれは、どういう意味なのか。

問う前に、タカトが前に出た。

「――やはり窒息もせんか。便利な身体だな」

「馬鹿な！ 何故、使える——！」

素直にヘイルズのISを褒めるタカトに、ヘイルズの叫びが響く。生き埋めにされようと脱出してのけた彼のISは非常に優秀と言える。

だが——。

タカトは右手を上げると、指を三本だけ立てた。最初に彼等へと突き付けたように。ヘイルズに再びそれを突き付ける。

「最初に言ったな？ 貴様達は”三つ程誤解している”と。——最後がまだだったな」

そう言いながら、タカトは復元した左腕をひょいと掲げる。そこには、”対流する水”が渦巻いていて——！

一寸！ —

瞬間。

ヘイルズの四肢が、容赦無く切り落とされた。辺りを駆け巡る水系によって！

更に水系は切り捨てた四肢も含めてヘイルズに巻き付き、一気にタカトへと引きずり寄せる。

同時に前へと出るタカトの身体からは、『風』『火』『雷』『天』の光が溢れていた。

「誤解その3」

「っ————！」

おおおおおおおおお！」

一閃！一

引き寄せられるヘイルズから放たれる裂帛の叫び。

それと共に、身体中の肉が尖り。槍に変じてタカトを襲い——！

——タカトは全く意に介する事無くぽつりと眩いた。

「”AMFだか、何だか知らんが。こんな物で俺が魔法を使え無くなる訳が無いだろう？”」

ぐーは、ぱーには勝てない。

——なら、ただちよきを出せばいいだけである。

そして。

全く構えもしない状態から、いきなりタカトは動いた。

溢れんばかりの魔力を放って——！

「天破無双闘舞」

一撃！一

一爆！一

一雷！一

——疾風が放たれた肉槍のこと如くを引き裂きがてらヘイルズの

腹に叩き込まれて。

そこから、暴虐の時間が始まった。

『天破水迅』で拘束したヘイルズに、好き放題『天破疾風』『天破紅蓮』『天破震雷』を叩き込む！

爆裂四散する筈のヘイルズの身体に、それを許さない程の轟速でだ。

残像現象すらも起こしながら、数百発ものそれを同時に叩き込んで行く。

『天破無双闘舞』

大威力魔法を複数同時発動出来る、『八極八卦太極図』ならではの技であった。

一瞬にして、ヘイルズの首から下が分子レベルで破壊。消滅される。

止めとばかりに、タカトはヘイルズの首――。

――理屈の上では、これでもヘイルズは死んでいない。を蹴り上げると、両の手を組み合わせた。

『天』の魔力が、渦を巻いてタカトの両掌に集束、加速していく。それは星雲を描くように渦巻いて――！

「――天破光覇弾」

一煌！一

特大の光弾が、頭上のヘイルズに放たれる！

それは一瞬にしてヘイルズの首を蒸発させて、この世から完全に消滅させた。

「ふう……」

溢れる魔力を呼気に乗せて吐き出す。

残心を解くと、ゆっくりと後ろのなのは達に向き直った。

「待たせたな。これで終わりだ」

「「「いやいやいやいや！！！」」」

暢気に終わりを告げるタカトに一斉にツツコミが入った。

『む？』と唸るタカトに、更に吠える。

「タカト君、魔法使えたの！？ 何で！？」

「いちいち叫ぶなど……。お前達、俺の魔法の仕組みについては聞いてるな？」

「うん、一応ね」

最初に叫んだ、なのはを煩そうに見遣りながら問う。

それに、こちらは若干落ち着いた声でフェイトが頷いた。

タカトは頷く。

「――では、おさらい。魔力とは、何だ？」

そんな問いに、彼女達は顔を向き合わせた。

何を今更な質問を、彼はしているのだろうと疑問符を浮かべる。

とにかく、はやてが最初に答える。

「魔力って言うのは大気中の魔力素子をリンカーコアで結合して生むエネルギーの事やる……？」

今やこれは常識的な解答であった。

この魔力素子――。魔素をどれくらい多く溜め込めるかが、そのまま魔力保有量の大小に繋がる訳だ。

更に、これを放出する事を出力と言う訳だが――。

今は関係無いので割愛する。

ともあれ、この魔力結合をジャミングで妨害する特殊なフィールドをAMFと呼ぶ訳である。

「そうだな。――グノーシスでは、それを意思媒介物質と位置付けているが。……まあ、今は置いて置こう。それで？ 俺の魔力の元は何だ？」

「それは――――」

そこまで言われて。三人は、あっと気付いた。

タカトの固有魔法術式『八極八卦太極図』。

これはリンカーコアを改造した『八卦太極炉』と言う特殊な器官を用いて使われる魔法である。

そして、その駆動には――。

「そう、八極素――。またの名前を『概念』だが。これを俺は魔力としている。……つまり、AMFとか言ったか？ あれは根本的に俺にとっては意味が無い」

AMFが妨害している魔力とはつまり、”魔素を結合して生まれたエネルギー”の事である。

八極八卦太極図が使う”八極素”とは、それとは全くの別物なのだ。

妨害が効く訳が無い。

言ってしまうえば、エネルギーの種類が違うのだから。

「……なら、どうして最初から魔法使わなかったの……？」

なのはが呻くように問う。

それはそうだろう。

最初っから魔法を使っていれば、楽勝だったろうに。

タカトはそんな、なのはの問いに肩を竦めた。

「いや、何と言うかだ。……勿体ないでは無いか。向こうがこう、必死にこちらに勝てる要素を持って来ているのに、乗らないのは」
「「「……………」」」

それが、理由なのか。

なのはを始めとして、三人は全く一緒に肩を落とした。

タカトは意外にも”こう言ったのが”好きだったのである。
相手を陥れる手段と言うか、ハメ技と言うか。

ぶっちゃけてしまうとセコい技が。

妙にクロノに肩入れしていたのも、これが原因の一つであった。

……そう言えば心無しか、ヘイルズを生き埋めにした辺りから彼の機嫌が良くなっていた。

どうもこれが原因だったらしい。

「……うう、何か詐欺にあった気分だ……」

「だから言ったんだ。後悔するなよと」

フェイトの呻くような台詞に、タカトは暢気に告げる。

確かに――。言ってしまったえば詐欺のようなものである。

魔法を使わなかっただけとは言え、自演に近いものだったのだから。

かかと笑うタカトを、三人は恨めし気に睨んだ。

「……ひどい……」

「……最低や……」

「……今度、お話ししよう……」

ぐんぐんと三人の中でタカトの評価が下がるが、当然タカトは構わない。

肩を竦めると、背後に目を向けた。

「まあ、そう言う事だ。」ヘイルズ。——もう、お前達は俺には勝てん」

「「!?!」」

そんな彼の台詞に、三人は驚愕に目を見開いて——。同時、タカトが作った山からそれは現れた。

ヘイルズが。

ずるずると這出しながらタカトを見る。

「いつ、気付いていた？」アレが擬態”だと」

「最初っからだ。わざわざ標的になりに来る馬鹿はおるまいよ」

つまりそう言う事であった。

タカトに消滅させられたあのヘイルズは擬態だったのだ。

本体はずっと地中に潜んでいたであろう。

大した用心深さと言えた。

だが。

「さっきも言った通りだが——。もう、お前に勝ち目は無い」

タカトがあっさりと告げる。

それに、ヘイルズは黙り込んだ。

その通りである。

そして、それは擬態を消滅させられる事で証明されてしまった。

ならば。

「……ここは退こう。幸いにもアルテムもゲイルも殺されて無いよ
うだし、な」

……え？

思わず、なのは達は先程タカトに叩きのめされた二人の戦闘機人
を見る。

——確かに、二人共息があるようだった。

そんな三人に構わず、タカトは右手の小指を立てて見せた。

「……約束があつてな？ 何処かの誰かが”戦わない限り”は、俺
は殺しはやらん」

「……あ……」

その言葉を聞いて。思わず、なのはは呆然となった。
それはナルガで交わした約束であったから。

確かに、あの約束以降。なのはは戦っていない——。

だから——。

「……………そうか」

そんなタカトに、ヘイルズは呟くように頷いて。

指を伸ばしてゲイルとアルテムを回収した。

直後に、三人を光の粒子が包む。

次元転移である。

近くに次元航行艦でもあるのか、彼等を回収しようとしているのだ。

そして、転移する前にヘイルズは、タカトに向かってぽつりと呟いた。

「……この借りはいずれ返す」

「楽しみにして待ってやろう。ではな」

そうして、三人は消えて。

同時に結界が割れ、四人は元の世界へと帰還した。



結界が消えた後には、戦いがあった事なぞ嘘のように、静寂な墓地が広がっていた。

ゴーンとなる鐘の音に、思わずなのは達は安堵する。

そして。

「……さっきの答えがまだだったな。――別にいいのでは無いか？」
「……え？」

きょとんと、なのはがタカトの台詞に疑問符を浮かべる。
それを面倒そうに見遣りながら、タカトは続けた。

「さっきの奴達が来る前に言っていた事だ。お前が話すのダメかどうか俺に聞いていただろう？」

「……あ」

思わずなのは、驚きの声を上げる。
自分でもすっかり忘れていたのだ。

そんな事を聞いた事を。

……覚えてて、くれたんだ……。

ナルガで交わした約束も、この事も。

彼は、ずっと。

思わず泣きそうになる。

そんな、なのはにタカトは顔を歪めた。

「いちいち泣くな。俺はそう思うと言うだけだ」
「……うん……」

でも、嬉しくて。

だからこそ、涙が出そうになる。
タカトは嘆息すると背を向けた。

「……では、俺は帰る」

「あ……」

「またな」

返事は待たなかった。

タカトは縮地で消え失せる。

あるいは、照れ隠しもあったのかも知れない。

少しの寂しさも含んで、なのはは微笑み。

そして――。

「……うん、また――」

「と、忘れていた」

「「わ!?!」」

居なくなったタカトにまたと告げる前に、当のタカトが戻って来た。

驚きの声を上げる彼女達の前に、タカトはやって来て。

「フェイト・T・ハラオウン」

「な、なに……?」

たじろぐフェイトの前に立つ。

果たして、何を忘れたと言うのか――。

そんな彼女に、タカトは手を差し出した。

「飯を奢ってもらう約束を忘れていた。奢ってくれ」

—ずてん—

その台詞を聞いた瞬間、なのもフェイトもはやても一様に、派手にすっ転んだ。

——なお、この後。

フェイトの持ち合わせを無くす程にタカトは飯をかつ喰らい——。

フェイトを財布の中身的な意味合いで泣かしたのは余談であった。

（第五十話に続く）



ぱんぱかぱんぱんぱんぱんぱんぱん。

ア

「はい！ アリサ！」

す

「すずかの！」

ア、す

「「アリサ道場——！」」

——どん！——

シ

「……タカ兄い。大太鼓なんてどこから調達したのさ……？ あ、司会のシオンです」

タ i n な

「時空Amazonで」

レ

「時空Amazonって！？ いつの間に時空の海に漕ぎ出したんだAmazon！ あ、レギュラーのレン・T・ハラオウンだ」

ア

「甘いわアンタら！ 最近では時空ファ○マ！ 時空マ○ドなんてのも出てるのよ？」

未

「地球の企業進出し過ぎじゃね！？ あ、レギュラーの日比野未来です」

す

「みんな、何気に自己紹介していくよね……。弟子の月村すずかです♪」

ア

「アンタも抜目ない無いわね、すずか……。ここの神であるアリサ・バニングスよ！」

シ

「はい、では——」

ア
「スルーするなああああああああ！」

— 撃！ —

シ、
「ぐっふう！」

レ、未
「殴るの早っ!？」

シ
「いや、待った。早いじゃなくて……。普通は殴らないんですよ…
…」

レ
「いや、だって今更だしなア」

未
「うんうん」

シ
「自分に飛び火したくないからって……。! で、アリサししょー何
でしょう?」

ア
「とりあえず、崇めなさい? 恐れなさい? そして讃えて、拝み
なさい?」

シ

「は——。（ぱんぱん）さて、拍手も打ったんで先行きます」

ア

「くっ……！ アンタ、今日はやけに冷たいわね……」

す

「ツツコミにも力が無いね？」

シ

「そこら辺は後でまとめて。さて、今回は……」

一同

『百部、達成！』

シ

「そー言うことです。読者の皆様がた」

一同

『ありがとうございます♪』

シ

「一周年といい、百部といい皆様方の応援でここまでできました♪」

ア

「これからもよろしくね♪」

す

「さて、じゃあ。タカト君♪」

tainな

「了解です。では、久しぶりの召喚。今回はこちら」

近

「……え？　ここ、何処でしょう？」

シ

「はい。今回のキャラ召喚は『魔法少女リリカルなのはStrike』はじまりの魔法』から主人公。近藤大輔さんです！」

近

「……？」

シ

「……あれ？　えっと近藤大輔さんですよ？」

近

「ああ、うん。そうだよ？」

シ

「えらく、言葉遣いと外見が合わない人ですね……。こう、『うっだらあ！　うっだらあ！　うっだらあ！』とか言ってみませんか？」

近

「どんなキャラだい！？　いや、そもそも此処は……？　あ、高町一尉！」

タインな

「……？　何だ？」

近

「な、何だって。どうしたんですか？ その言葉遣い？」

タ i n な

「元からこんなもんだ。俺はな？」

近

「な！？ そんなバカな！ 今まで猫を被っていたと……？」

？

「ご主人様。ご主人様」

近

「？ どうしたんだ、エレ……」

？

「ここで私の名前を出さないで下さいね♪」

近

「何故……？」

？

「道場因子に侵されますから♪」

一同

『な、なにいいいいいいいいいいいいいいいい————
！？』

レ

「ちょっと待て！？ 道場因子の感染条件はそれなのか！？」

ア

「いやいやいやいや!? あたしも初耳よ!?!」

タ i n な

「バカな……。この女何者……?」

?

「ふふ……。たとえアリサ道場だろうと私の万能っぷりは変わりません! 愛称は『チート』で、お願いします♪」

未

「ここだけでその名前を戴く奴、山ほどいるんだけど……」

す

「アリサ道場の常識だね♪」

近

「て、言う事は一般的なキャラは俺だけ……?」

シ

「近藤さんダウト」

近

「いやだから何がだい!?!」

?

「あ、そう言えばご主人様。アカシック・レコードから情報を得れば何とかかりますよ?」

近

「いや、でもあれはな——」

？

「大丈夫です！ もーご主人様はしっかり道場因子に感染してますから！ 副作用も気にせずオッケーです！」

近

「感染してるのか！？ いやいや、待とう。そもそも道場因子って……」

道場因子。

アリサ道場に踏み入れたキャラのこと如くに感染する事象概念侵食存在。

ほとんどの場合は、ヘタレ化とギャグキャラ化する。

たまに兇悪な能力持ちを生む事もある為。注意が必要（アリサ道場2を参照♪）

近

「くっ……！ これが道場因子……！？」

ア

「おお、便利ねアンタ……」

近

「ついでにアリサ道場についても把握したよ」

す

「つくづく便利な能力だね♪」

レ
「ありなのか？ あれ？」

タ i n な

「説明の暇が省けて、楽ですからいいのでは？」

近

「あ、その前に。レン・T・ハラOWNさんですよ？ フェイトさんの兄の」

レ

「ああ、一応はそうなって——」

近

「はじめまして。フェイトさんとこの度、” 婚約させていただきました” 近藤大輔と言います」

レ

「チイイイイイイイイイイイイエストオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

一撃！一

近

「て、いきなりなんで斬り付けて！？ 危ないじゃないですか！」

レ

「知った事かああ————————！」

タ i n な

っだらぁ！（訳…俺に聞いてんなぼけえ！）と……」

近

「君はそれしか知らないのかい！？」

？

「基本、アホの集まりですから♪」

未

「版權的にやばい台詞！」

近

「と言うか、すごい馴染んでるなエレ——」

？

「『チート』でお願いします♪」

近

「いや、だからそれに何の意味が？」

？

「『チート』でお願いします♪」

近

「そもそも、そう言った呼ばれ方は嫌いじゃなかったか？」

？

「『チート』で…お…願…い…し…ま…す！」

近

「……………『チート』さん」

？

「はい♪」

タ i n な

「このネタ分かる奴いるのか？」

シ

「ドラ○が買ってる人は分かるんじゃない？ さて、近藤さん。では答えを」

近

「ごまかしきれないか……。うゝゝん。『墓場では静かに』かなあ」

シ

「おお……。常識人な答えが……。！」

ア

「いや、違うわ！ あれの意味は『静かにたゝみねゝとしろ！』的な意味に違いないわ！ 顔的に！」

近

「まだ顔で攻めますか！？」

？

「ここは容赦なしがウリですから♪ 後アホですから♪」

近

「それ、ハマったのかお前……。それと馴染み過ぎだ」

シ

「まあ、何でも構わないんですが……。今回タカ兄い回かよ!? 記念すべき百部だよ!? 俺回じゃねえの!?」

祐

「自意識過剰ね。ヘタレオン! あんたは主役二号でしょ?」

カ

「違います! シオンは主役一号です!」

ア、祐

「祐希奈に／私に口答えすんなああああああ!」

一撃! 一

カ

「理不尽だああああああああああ!」

シ

「てか、俺も!? なんでじゃあああああああああ——!?」

—きら—ん—

ヴ

「お騒がせしました♪」

近

「……今の三人は……?」

タ i n な

「気にしてはダメです」

？

「アホですね♪」

未

「つくづくハマってるなあ」

タ i n な

「シオンがいなくなったので、最後は俺が。さて、今回はここまで。近藤さんありがとうございました」

近

「……今回。俺と言うよりはエレ——」

？

「『チート』で♪」

近

「……チートがメインだったんじゃない？」

タ i n な

「さて、それはどうでしょうな？」

す

「気にしちゃダメな事は世の中にたくさんあるんだよっ♪」

ア

「ついでに近藤さんは既に道場因子に感染してるしね♪」

近

「こ、これが俺の感染結果……！ がーん！」

未

「む、むごい……」

タinな

「さて、次は告知を。百部を記念して人気投票をやりようと思う。ルールは前と同じ、好きなキャラを上から三人上げてくれ。一位に三ポイント。

二位に二ポイント。

三位に一ポイント。

と、言った具合にポイントを振り分ける」

ア

「皆さん♪ 多くの投票をお待ちしてます♪ よろしくね♪」

す

「それじゃあ、後はタカト君♪」

タinな

「了解です。阪本葵さま、今回近藤さんの召喚ありがとうございます。また機会があれば、是非に」

近

「次こそは、エレー——」

？

「『チート』で♪」

近

「ち、チートよりいい扱いを！」

ア

「無理ね！ 何故ならチートは女の子だから！」

？

「わーい♪」

近

「ひどっ！」

タinな

「揉めている彼等はさておき。ではでは——」

一同

『また次回———♪』

レ

「くっ……！ 漸く起きれて……！」

シ

「漸く戻って来て……！」

ア

「タカト！ GO！」

第四十九話「墓前の再会」（後編2）（後書き）

「墓前の再会を終え、家に帰るシオン達」

「そして、神庭家でちょっとした宴会が開かれる」

「……けど、そこにはシオンの師匠であり、愛騎たる彼の姿は無く
て」

「そして――」

「次回、第五十話。

『だからさよなら』」

「まつろわぬ王は、自らの名前を取り戻す」

第五十話「だからさよなら」(前編)(前書き)

「最初にあいつを手を持った時、絶望から這い上がる為に俺はあいつを手を持った」

「それからは、ずっと一緒だった。」

あいつと一緒歩いて、

あいつと一緒寝て、

あいつと一緒食べて、

あいつと一緒旅をした」

「俺に取って、あいつは、父であり、師匠であり、友であり、――兄弟だった」

「ずっと一緒だったんだ。ずっと、ずっと」

「だから、そんな事想像もしていなかったんだ」

「あいつと――」

「――離れる時が来るだなんて」

「魔法少女リリカルなのはS t S, E X。始まります」

第五十話「だからさよなら」(前編)

夜の繁華街。

そこは、たとえ夜だろうが絶え間無く明かりが灯る。それを静かに見下ろしながら、彼は。

イクスカリバーは、懐かしさに浸っていた。

見れば、どこも彼等と見た場所ばかりである。

神庭家に来て、二十五年。

彼が今まで歩んだ人生からすれば、ごくごく僅かな時間。だが、ある意味において”家族”と過ごした時間と言う意味においては長い時間であった。

彼がまだ人間であった時でさえも、これ程長くは家族と共に居なかったのだから。

だが――。

「……何を見ている？」

唐突に背後から声を掛けられる。

一瞬前まで、確かに誰も居なかった筈なのにだ。しかし、彼は動じない。

何故ならば、動じる必要が無いのだ。

イクスは、彼を待っていたのだから。

【随分と遅かったな。そんなに彼女達との晩御飯は楽しかったか？】
「それをフェイト・T・ハラオウン辺りが聞くと泣くぞ」

肩を竦めて、彼は。

伊織タカトは苦笑しながら、腹をぽんぽんと叩く。

「他人の金で喰う飯程美味しいものは無いな」

【――まあ、否定はしないが】

彼は苦笑を漏らす。

そうしながら、タカトへと振り向いた。

苦笑を続けてこちらを見遣る彼に、タカトは肩を竦めた。

「こちとらする必要のない復元を使い。あまつさえ”見せた”んだ。
――飯の一つや二つ――。……百や二百食べたとしても、文句を付けられる言われはあるまい？」

【……どのくらい食べたんだ、お前は】

「店の食料を取り敢えず全部食べた。……出入り禁止にされた上に、
フェイト・T・ハラオウンは、なのは達に借金までしていたな。――
――生まれて初めて借金をしたそうだが。殺意満々の目で睨まれたぞ」

呆れたように聞く彼に、タカトは飄々と答える。

それに、彼はフェイトの顔を思い浮かべながら合掌した。

さぞや今ごろ涙を飲んでいる事だろう。

タカトの”目論み通りに”。

彼は再び苦笑した。

【この嘘付きめ】

「ひどい言われようだな」

さも心外とばかりにタカトは笑う。

だが、彼は構わず続けた。

【――事実だろう？ 何故、彼女達にあえて魔法が最初から使えた等と”嘘を吐いた”んだ？】

一瞬だけ、タカトの身体が固まった。

――それだけで十分だった。彼が反論する前に続ける。

【例のAMFと言ったか。あれは『八極八卦太極図』にも有効だったんだろう？ 魔力結合を阻害するジャマーフィールドだったか……。それが、”八極素の練り合わせも阻害していた”訳か……】
「……………」

タカトは無言。

惘然として、彼を睨み付ける。

――その通りであった。

AMF。魔力結合を無効とするこれは、呼吸法によって取り込んだ八極素の練り合わせも阻害してみせたのであった。

と、言っても元々の性質が違うものなので、完全とは行かなかった

たのだが。

——八極素の練り合わせが完了したのが、ちょうど左腕を復元した時であった。

……しかし。

いくら何でも状況に詳し過ぎる。

これは——。

「……見ていたのか？」

【タイミング良く、帰っている時に奴達を見掛けたんでな。——ま、意趣返し的一种だ。悪く思うな】

悪びれもせずに、彼は告げる。

つまり最初から見ていたのだ、彼は。

一部始終ならず、全てを。

意趣返しと言うのは、紫苑決戦の際ののぞき見の事か。

タカトはふて腐れたように横を向く。

それは、凶星の証であった。

彼は苦笑する。

【——不器用な奴だ。何故、嘘を吐いた？】

「別に、大した理由じゃない」

【はい、嘘】

即座に指摘される。

楽しげにそれを告げる彼に、タカトは見るからに嫌そうに顔を歪

めた。

——それすらも彼は楽し気に笑う。

【お前の嘘は分かりやすい。癖があるからな。——どうせ、フェイト・T・ハラオウンに気を使われまいとでもしたか？】

「そ……！」

【ちなみに俺に嘘は通じんからな？】

否定しようとして、しかし即座に、釘を指されてタカトが口ごもる。

——珍しいと言えば、珍しい図である。

彼はそんなタカトに苦笑を微笑みに変えた。

【——敵に気を使われまいとするか。……本当に不器用な奴だ】

ずっと。ずっと、こんな青年だった。

彼は懐かし気に思い出しながら、笑う。

伊織タカトとは、そんな青年。——否、少年だった。

自分のためには嘘を吐かない。

でも、他人のためならいくらでも嘘を吐く。

そんな。

だから、その嘘の見分け方もひどく簡単であった。

他人の事を指摘されて、タカトが抑揚の無い声になると。ほぼ百%嘘を吐いている。

おそらくはシオンと、本人以外は気付いているだろう。

タカトが苦虫を噛み潰した表情となった。

「……………いつか戦う奴達だ。同情を買うのも、恩義に思われるのも鬱陶しかっただけだ」

【それは本当の事なんだろうがな。——それだけではあるまい？】

苦笑が響く。

タカトは仏頂面で、そんな彼を睨み続けていた。

思えば、彼とこんな風に話すのはいつ以来だろうと。

……………もう、こんな風に話す事も無くなるのだろうか。

そう、思いながら。

ため息に全てを込めて吐き出した。

「……………もういいだろう。それで、”行くのか”？」

【……………ああ、決めたよ】

今度は逆に、彼の声から抑揚が消える。

その返答にタカトは一つだけ頷いた。

……………この会話が最後の語らになる、か。

それをなんとなしに悟った。

「……そうか。ならお前は——」

【”名を取り戻す”。その為に、お前を待っていた】

それが何を意味するのか。

タカトは知っている。

”彼”が、”彼”で無くなる事をそれは意味していた。

そうか、と頷き。彼に歩み寄る。

右手を上げた。

「……イクス」

【ああ】

短い呼び掛けに、短い返答。

それだけで二人は全てを終えた。

……最後の別れも含めて。

タカトの右手が、彼の額に触れる――。

「さよなら」

【ああ、さよなら】

そして。

彼は自らの名前を取り戻した。



神庭家、道場。

そこでは一つの緊張が満ち満ちていた。

道場を埋め尽くすのは大勢の人達。

それが円を組むように、道場に座り込んでいた。
円の中心にはたった一人の男がいる。

本田ウィル。

シオンの幼なじみにして、悪友の彼が。

緊張に彼は汗を一つ流して――。

「……行くで」

そう呟くと、足元に用意した玩具のピアノへと高々と跳び上がる！

着地。しかし、足の指は鍵盤を押し込んでいた。

指はそのまま次の鍵盤を叩く。

それは一つの音を奏でた。

則ち！

「曲芸……! 《足で猫踏んじやった♪ 演奏!》——どや!？」
『つまら……ん!』

ウィルの改心の叫びに、皿やらお盆やら酒の瓶やらがすっ飛んで来る!

「芸道なめんな!」

「つまらん! 関西芸おそるに足らず!」

「ちよっ!? 待ちいや! まだまだレパートリーはあるんやで!」
「?」

『知るか!』

叫びと共に投げられたものでウィルが山の下敷きになる。
それを頭痛と共に眺めながら、神庭シオンは頭を抱えた。

夕方の神庭家、道場で宴会が今現在進行系で行われている真っ最中であつた。

道場にはグノーシス連中にアースラチームの皆も含めて相当の人数が集まっている訳だが――。

……そういや、うちはこんなだったなあ。

今更ながらにそう思う。

横に視線を向けた。

「おじさん。いいの? おばさんの命日に」
「湿っぽいのは昼までと決めとるんじゃ♪ ほ……らオヒネリやるぞ……♪」

がははと笑いながら、ウィルにおひねりを投げる。恐面、四十代の男性。

何を隠そう。彼こそが、姫野みもりの父親。

ひめのあきと
姫野秋人、その人であった。

——ちなみに、現役日本警察の警視総監様である。
やくざの大親分にしか見えないが。

それは、言わぬが華であった。

はあとため息を吐きながら、シオンはグラスのビールを一気に煽る。

「おー。シオンよく飲むやないけ。ほーほー、もう一杯♪」

「……這って来んなよ、お前……。飲むけどよ」

背中の上に山と投げられた物を積んで、ウィルがビール瓶を差し出して来る。

これ、投げられたモンじゃないだろうなと疑いながらグラスを差し出した。

——なお、しつこいようだが。シオンの隣に居るお方は、警視総監様である。

がははと笑い、未成年の飲酒に何も言わなかりうが、そうと言ったらそうなのであった。

閑話休題。

神庭家で突如開かれた宴会。

しかし、実はこれは毎度の事なのである。

……シオンもしっかり忘れていたのだが。

命日や、歓迎会と称して宴会をだっ広い神庭家道場で開くのが。

今回は、二つが合わさった事になるのだろうか。

そして、もう一つ。

「ふ……。分かって無えな。ウィル！」

「何やと刃！　ならお前は万人に受ける一発芸をやるんかい！」

未だ埋もれたままの山に^{ウィル}進み出て来るのは黒鋼刃。

銀龍を抜きながら、前へと進み出て来る。

それを見ながら、シオンは嫌な予感を覚えた。

これは――。

「――当然！」

一斬！――

叫びと同時に下の敷板が円状に切り裂かれる！

刃はそれと一緒に落ちて行き――。

次の瞬間。ウィルの周りが円状に切り裂かれた。

「秘技――」

更に、ウィルと円に切り裂かれた敷板が持ち上がる！
その下に居るのは何を隠そう、刃であった。

敷板の真ん中に銀龍を当てて、持ち上げたか。
更に、それらをぶん回す！

「《人間皿回し！》」

『おお～～！』

敷板ごと上の人間を皿回し宜しく回す荒業に、周りがどよめいた。

これはこれで中々のものである。

だが――。

「――お前、それ直しとけよ？」

「あ～～～はっはっはっはっはあ！」

……壊れてやがる。

シオンは一目で看破した。刃は見事に酔っ払っている。

――キャラが壊れる程に。

抜き身の日本刀を堂々と振るう事も意に介さず『オヒネリやるぞ
～～♪』と投げるおっさんは、取り敢えず見て見ないフリをした。

ぐいっとグラスを煽る。

と――。

「ほくら、シオン。……ひつく……。飲みが足りないよ……。ひつく」

「……誰だ！？ スバルに飲ました野郎は！？」

顔を赤らめて、しゃつくりを上げながらこちらにビール瓶を差し出して来るスバル・ナカジマを見て、シオンが吠える。

さっと顔を背けた数人を見咎めると、シオンは手裏剣宜しくビール瓶をそいつらに投げて置く――。

――ストライク。

「……未成年に飲ませるなっつうの。あ、おかわり」

「……シン君、全然説得力無いですよ？」

こちらは、姫野みもり。

一切飲んでおらず、酒を出したりオツマミを作ったり、寿司を頼んだり、いろいろしてくれている。

それで逃れているとも言えなく無いが――。

取り敢えず、スバルの酌を受けて並々とビールが注がれて、注がれて――。

「こらこらこらこら！ 零れてる！ 零れてる！ 冷たっ！？」

「あははははっ！ ひつく……」

何が面白いのか、スバルはグラスから溢れさせ、更に注いでいく。
――被害を受けたのは当然シオンであった。

ビールで身体中が濡れる。

「うげ……っ。このアホたれ！　みもり、拭くもんくれ！」

「はい！」

「あははは！　シオンベとベと！」

「黙れ酔っ払い。こら、スバル担当！　何してやがる！」

「誰が担当よ！」

シオンが叫ぶと、間を置かずに返事が返って来た。
ティアナ・ランスターである。

彼女はこちらに”顔を赤らめ”て吠え――。

「ひっく」

「だから誰じゃあ！？　さっきから未成年に飲ませまくっとする奴！」

しゃっくりを上げたティアナに、シオンは喚く。

それに、やはり顔を背ける馬鹿共を発見。

今度は自らビール瓶を頭に叩き付けに向かった。

「待て！　落ち着くんだシオン！」

「そ、そうだそうだ！　これは宴会なんだぞ！？　飲ませて何が悪い！」

「あいつ達は未成年だっつうの！」

一撃！一

アホな事をほざく奴達を一撃で沈める。

はあとため息を吐いて。

「ほろろ、キャロちゃん？　ぐぐいつと飲みやろ♪」

「えっと、でもでも。ウィルさん、これお酒ですよ？」

「大丈夫やって♪　これを飲んだらキャロちゃんも大人に――」

「「ちえろろろすとろろろっ！」」

一撃！一

未成年どころか子供に飲ませようとする馬鹿野郎に、シオンと御剣カスミからビール瓶が投擲され、頭に直撃！

馬鹿野郎は、そのまま床に沈んだ。

「騒がせたわね、シオン」

「……お前も大変なカスミ」

そそくさとウィルを回収するウィル限定の相棒カスミにシオンは同情的な視線を向ける。

それに彼女は『慣れたわ』とだけ呟いて、道場を出た。

「あろ。ったくよ。ほら、キャロ。それ渡しな？」

「……………」

「キャロ？」

じろと、ビールが並々と注がれたグラスを見る少女に、シオン

は嫌な予感を覚える。

まさか――。

直後。キャロは、グラスを一気にぐいっと煽った。

「~~~~っ！」

「わ~~~~！ 馬鹿！ 何飲んでんだ！？」

ぽんっと言う擬音が聞こえたかのように、一瞬で真っ赤になったキャロに、シオンは慌てる。

そのままぐるんぐるんと目を回すキャロをシオンは抱き上げた。

「おい！ キャロ！ しっかりしろ！ 何で飲んだんだ！？」

「う……。だってこれ飲んだら大人になれるってウィルさんが……」

どうやら、ウィルの戯言を信じたらしい。

しかし、飲み慣れた人間ならともかく（国によっては子供でも飲む）。

キャロが酒を飲み慣れているとは思えない。

取り敢えず、キャロの相方を呼ぶ事にする。

「おい！ エリオ！ こら！ どこ居やがる！」

「エリオならあっちよ……。ひっく」

いつの間に近寄って来たのか、ティアナがしゃっくりを上げながら道場の一角を指差す。

そこには――。

「ちよっ……！ 離して下さい！」

「だ〜めや♪ エリオ君はかわええなあ。おもち帰りや〜♪」

「だめだよ、楓ちゃん♪ 私が持って帰るんだから〜♪」

「お持ち帰りって何ですか！？ 何で服脱がすんですか！？ 前もこんな事あったような……。て、違う！ 誰か助けて下さい―――
――！」

獅童楓と聖徳飛鳥を代表するグノーシス女性陣に、シャリオ・フイニーノを代表するアースラ女性陣に囲まれていた。

ある意味に置いて、断末魔の叫びが響く。

花とか置いてやると、散るイメージか。

「……何やっとなだあいつは……」

それを見て、シオンは呆れたように呟く。

見れば、全員顔を真っ赤にしている。

おそらくは酔っ払っているのだろう。

そう言った女性陣はほとくのが一番である。

そんな訳で、シオンはエリオをあっさりと見捨てた。

「ああ、見捨てた！？ シオン兄さんの鬼！ 悪魔―――！」

気のせい気のせい。俺は何も聞こえない。

そう一人ごちると、シオンはキャロを抱えて。一番医療の心得がある守護騎士シャルを発見し――。

「とくとくとくくく♪」

「あんたが犯人か!？」

誰かれ構わず旅の扉で酒を注ぐ彼女に、取り敢えずツツコミを入れた。



ぴんぽんんと、音が鳴る。

それをシャルにツツコミを入れたシオンは聞きとがめた。

誰か来たらしい。

道場内を見ても、まともに出れる人間もいなさそうなので、自分が向かう。

道場からサンダルを履いて、直接門に向かった。

「はいはーい」

定例の返事を返しながら、かんぬき門を外す。
ゆっくりと門が開き――。

――シオンは絶句した。

その来客に。

「……フェイト先生どうしたんですか？」

「……………」

「あはは……」

「まあ、いろいろあってなあ」

来客は高町なのは、八神はやて、そしてフェイト・T・ハラオウンであった。

しかし、シオンが絶句したのは彼女達が来たからでは無い。

先頭のずくくんとする擬音が聞こえかね無いくらいに沈んだフェイトを見て絶句したのであった。

取り敢えず、中に入れる。

「「おじゃましま〜す」」

「……………おじゃまします」

……本当に何があったんだろうか。

聞いてみたい気もするが、ひたすら嫌な予感がするため止めて置く。

そのまま、道場の方に向かおうとするシオンを見て、なのはが不思議そうな顔となった。

「？ シオン君。どこに行くの？」

「ああ、今道場で宴会やってまして。そっちに皆居るんでよかったら先生達もと——」

宴会？ と、疑問符を浮かべるのは達にシオンも苦笑する。

それはそうだろう。

昼間に墓参りに行って、何故に夜は宴会をするのか。

取り敢えず、シオンは道場まで三人を先導して歩く。

なのは達も、……フェイトも一応着いて来た事に安堵しながら、道場に辿り着いて。

「ふ……！ 甘いね！ 君達！ そんなものが一発芸だと！ ちゃ

んちゃらおかしいね！？」

「「なんだとう！」」

そんな声が聞こえた。

最初に聞こえた声は、シオンの異母兄。叶トウヤの声である。

後は刃と真藤リクか。

どうやら、リクも一発芸をやったらしいが――。

「なんやなんや？ えらい盛り上がつとるな―」

「ええ、まあ……」

嘆息まじりにシオンは頷く。

未成年飲酒しまくりなああの空間に三人を入れて大丈夫かどうか少しだけ思案する。

と言うか、エリオとキャロの状態を見せて。フェイトは卒倒しないかどうか、かなり心配であった。

まあ、もう入口なのでその心配も意味が無いのだが。

仕方無しにそのまま上がり――。

「真なる一発芸をお見せしよう……！」

瞬間、凄まじいどよめきが上がった。

果たして、何が起こったのか。

気になり、シオンは三人娘と駆け出し。

それを見た。

……なお、ここらはいろりと危険なものとなるので、詳しい名称等は伏せさせていただく。

シオン達が見る先に居るのは、道場のど真ん中に居るトウヤ。

彼は、一枚のティッシュをひらひらと摘み取ると。

一瞬の早業を持って、下を脱ぎさった。

そして某所をティッシュで隠し――。

「秘奥義……！ 《蘇る死体！》」

それはあたかも墓場から立ち上がる死体のごとく。

むくむくと立ち上がって見せた！

これぞ秘奥義《蘇る死体》

究極の一発芸と言われる奥義であった……！

「ふ……！ いったいかな状況においても立ち上がれる我が若さを持つて初めて成せる技……！ 真似出来るかね！？」

『誰がするかあああああああああああああああああああああああ

ああああ———！』

一部の例外を除いて、すっ転んだ全員が盛大にツツコミを入れる！
だが、そんな彼等、彼女達にトウヤは更に笑う。

「ならば、更に見せよう！ 変化秘奥義！ 《脱皮するか——》」

一撃！——

皆まで喋らせずに、空を踊って舞い降りたユウオがティツシュに
包まれた部分を踏み潰す！

凄まじい音が鳴り、男性陣は例外無く顔を引き攣らせた。

「このこのこのこのこのこのっ！」

「や、やめたまえユウオ！ 後で困るのは君だよっ！？」

「うるさあ~~~~い！」

そのままスタンピングに移行するユウオを脇の男性陣が必死に引
き離れた。

トウヤ、悶絶の為。退場。

完全にすっ転んで、立ち上がれ無いシオンに。

こちらはいち早く立ち直った、はやてがじと目を向けた。

「なんなん？ おげれつ大会？」

「……………」

否定したかったが、否定する材料が見付からずシオンは視線だけ

を逸らす。

完全に引きまくった三人をごまかすように中に入れた。

「ささっ。はやて先生ぐぐいっ」と

「……いろんなもんをごまかそうとしてへん？」

座った、はやてに酌をするシオンは。その問いに目を再び背けた。変わりに、なのはへと酌をする。

「なのは先生もどぞ〜！　いつもお疲れ様っす」

「あ、うん」

「ささ、フェイト先生も——」

「ぐびっぐびっ！」

「「「早っ!?!」」」

シオンが酌をする前に。

何と手酌で、いつの間にかグラスのビールを飲み干しているフェイトに、なのは、はやて、シオンは驚きの声を上げる。

更にもう一杯、一気で飲むと座った目でこちらを見据えだした。

「——はやて先生。ちなみにフェイト先生は、お酒が強い方？」

「いや、かなり弱かった筈や——」

「シオンっ！」

「「「はいっ!」」」

轟く咆哮に、思わずシオンどころか、はやてもなのはも返事をする。

そんなシオンに、フェイトはグラスを差し向けた。
慌てて注ぐ。

「シオン。……タカトって腹が立つよね……？」

「はぁ……」

「心配したのに、実は嘘だったり。女の子にあんなにいっぱい奢らせるし……」

タカ兄い、一体何をした……！？

この場に居ない我がもう一人の異母兄に問い掛けるが、当然通じる筈が無い。

そのままぶちぶちと言い募るフェイトに、シオンは顔を引き攣らせながら、なのはとはやてへと視線を向ける。

だが、二人は顔を横に振って見せる。

それは、言外にこう伝えて来ていた。

後は任せたよ！／後は任せたからな！

と。

鬼……！？

そう心中叫ぶシオンだが。

二人はそそくさと視線を外して、他の皆との談話に移っていった。

「聞いてる！？ シオン！？」
「はい！」

怒鳴られて、びくつと背筋を立てる。

そんなシオンに、フェイトは微笑むと、顔を撫でて来た。

「シオンの肌、つやつやだ」

「は、はぁ……？」

何？ 何が起きようとしている？

間近に迫られ、顔を撫でられて。シオンはどきまぎする
そんなシオンに、フェイトは構わず顔を撫でて――。

「――これなら、”化粧すると女の子”みたいになれるね」
「……………」

――血の気が、凍った。

凄まじいまでの悪寒がシオンを襲う。

それは、こう伝えていた。

一刻も早く逃げろ、と。

そんなシオンに構わず、フェイトはぱちりと指を鳴らした。

「ティアナ？ シャーリー？」

「「既に準備出来てます！」」

異口同音。

全くのズレなく答える二人。

その二人が用意したものを見て、シオンは声無き悲鳴を上げた。

女用のかつら。

各、化粧道具^{コスメ}。

そして、どこからともなく出て来たどこかの学校の制服（女物）。

——どっと、滝のように汗が流れる。

それを、フェイトは優しく手持ちのハンカチで拭いて——。

「……一発芸。《JKしおんちゃん》」

「明日への脱出っ！」

シオンは素早くフェイトから離れると、一気に瞬動で脱出を謀る

だが、しかしっ！

【シュランゲ・フォルム！】

「!？」

聞こえてきた声に瞬動を停止。その眼前を連結刃が薙いでいった。

おそらく、あのままならばシオンは拘束されていたに違い無い。
それをやったのは——。

「シグナムっ!？ お前……っ！」

「……悪いなシオン。我が主の命だ」

ブルー〇スよ、お前もかとはかりに驚愕の目を向けるシオンに、シグナムは仕方ないとばかりに首を振る。

しかし、シオンは気付いた。

いつもより、心無しかウキウキしている風情のシグナムに！

「く……！ てか、はやて先生！ どう言うつもりっすか！？」

「……ごめんなシオン君。でも、《JKしおんちゃん》を見てみたいと言う欲求には逆らえなかったんや……」

「味方はいないのか味方はア！」

あまりにも四面楚歌の状態にシオンが嘆きの悲鳴を上げる。

ああ、どうしてこんな目に……！

そんな風に世界を呪っていると……。

「ダメだよ皆！」

女装させんとにじり寄る悪魔達に、救いの救世主が現れた。

なのはである。

彼女は両手を広げて、皆を制止する。

「シオン君は男の子なんだよ？ それを女の子の格好をさせるだなんて……！」

「あ、ああ……！」

やっぱり最後に頼りになるのは、なのは先生か！
あまりの嬉しさにシオンは泣いて喜ぶ。

そんなシオンに、なのはは頷き――。

「そんな面白い事、皆でやらなきゃダメだよ……っ！」

――次の瞬間。シオンは、バインドで拘束された。

……へ？

何が起こったか分からずに目を白黒させるシオンに、なのはは改心の笑みを浮かべる。

そして、皆に振り返った。

「ダメだよ、皆？ こう言う時は味方のフリして騙さないとシオン君すばしっこいからすぐにげちゃうよ？」

『は~~~~~い』

「て、待てえええええええいっ!？」

漸く我に返ったシオンの叫びが響く。

それになのはは視線をシオンに向けた。

「どうしたの？ シオン君？」

「どうしたもこうしたもありますかい！ 最初っからこの積もりだったんすか!？」

喚くシオンに、なのははにっこりと微笑む。

それは見る人によっては極上の笑みだろうが、シオンからしてみれば悪魔の微笑みに他ならない。

キつと、なのはを睨んだ。

「この……。悪魔め……………！」

「悪魔でいいよ♪ シオン君を女装させられるなら♪」

「そこー。あたしの台詞だぞー」

すかさずヴィータからツツコミが入るが、二人は構わない。
そして、最後にスバルが進み出て――。

「大丈夫！ シオンならとびつきり可愛くなれるよっ！」

「何の慰めにもなっとらんじゃあああああ――！！ いや

あああああ！　せめて自由を！　さもなくば死を――！！」

『――GO♪』

そうして、シオンに女子達は一斉に踊り掛かった。

色とりどりの化粧道具や、かつら、制服を手――。

その悲鳴は、道場どころか出雲市内全域に響いたと言う。

（後編に続く）

第五十話「だからさよなら」(前編) (後書き)

はい♪ 前編終了です♪

タイトルから鬱回か！？ と思われた方々(笑)
ここでご覧の通り、今回はギャグ回です(笑)

石は投げないで(汗)
いや、悪気があった訳では無いんですが。
宴会部分が長引く長引く(汗)

なお、トウヤの一発芸については。周りに聞いちゃダメです(笑)
多分殴られます(笑)

では~~~~♪

P S・・活動報告のザ・オフ回の参加希望者の方々ありがとうございます♪
めっちゃ希望者が来てくれたんで、テストメント感激しました♪(笑)

希望者が出揃った所で、詳細を決めたいと思います♪
よろしく願います♪

第五十話「だからさよなら」(中編)(前書き)

ども〜♪

テストメントです♪

いやあ、かって無い程に筆が進みまして(笑)

中編書き上げました♪

……ええ。中編。

やはり、二部は無理だった……!

ち、ちくしょう! これもしーちゃんが原因か……!

なお、今回凄まじい程に落差があるので(笑)

お気をつけ下さい♪(笑)

では、どうぞ〜♪

第五十話「だからさよなら」（中編）

「……ひつく。シオン……。ううん、しおんちゃん動いたらダメだよ？」

あ—————っ！

響くは大音声の悲鳴。それが神庭家に断末魔の如く響く。
その切ない悲鳴の主は神庭シオンであった。

……バインドで拘束された。

そんな切ない悲鳴に構わず。まずフェイトが、シオンの顔に化粧を施し始めた。

「うーん。……ひつく。……もうちょっとナチュラルな方向のほう……ひつく。……がシオン君。……しおんちゃんには似合うんじゃないかな？」

次に動いたのは、なのは。

今度は薄くファンデーションを塗って行く。

シオンの元々白い肌が、更に薄く、白くなっていった。

あ—————っ！

シオンは叫び続けている。

が、周りの女性陣は聞こえていないがごとく。一切耳を貸さない。
次は、はやてが動いた。

「しおんちゃんは肌キメ細かいなあ。……ひつく。……なんや、腹立つなー。んじゃ、次は軽くアイシャドウを……」

あ—————っ！

シオンの悲鳴は途絶える事無く響く。

それはまるで、純潔を散らされる乙女の声にも似て――。

「グロスも薄くがいいわね。……ひつく。……ほら、動くんじゃないわよ？」

あ—————っ！

次々と、シオンの顔に化粧を施していく。

しかも本格的なものを、だ。

何が楽しいのか、皆一様に笑っていた。

……酔っ払っている証拠に。全員顔が赤い上、しゃっくりまで出ているが、気にしてはいけない。

ちなみに、シグナムとヴィータは化粧に参加せず後ろで見っていた。

「うーん。ここまで来たら髪にもこだわりたいですね。……ひつく。

……シヨート、セミロング、ロング。どれがいいですか？」

あ—————っ！

シャーリーが次々と取り出すかつらに、シオンの悲鳴が更に大きくなる。

が、女性陣は全く構わず自分の意見を声高に叫んだ。

「ロング！」

「セミロング！」

「ロング！」

「ロング！」

「セミロング！」

「ショート！」

「セミロング！」

「ロング！」

「……うーん。取り敢えず、全部試してみよう！」

にこにこ顔でそんな事を言う眼鏡っ娘に。周りから歓喜の声が上がる。

その間にも、シオンの叫びは響いていた。

だが、女性陣には届かない。

届かない以上、聞き入られる筈もなかった。

あ—————っ！

かつらを次から次へと被せられる。

あーでもない、こーでもない、と、真剣に論議が重ねられた。

長さ。色。髪型。

試行錯誤が繰り返される。

……本人の意思を全く無視して。

出た結論は、やはりロングのストレートと言うシンプル・イズ・ザ・ベストが1番似合うと言う事であった。
髪の色は、元々のシオンに合わせて銀。

これにも異論は多々あったが。

やはり銀が似合うと言う事で採用される運びとなった。

「さて、……ひつく……。じゃあ次はお待ちかねの服だよ」

あ—————っ！

嬉しそうに、どこぞの学校の制服（女子）を手に持つスバルに。
今度こそは、まごう事なき絶叫があがる。

だが、それに構わずうふふと笑う悪魔達はにじり寄り――。

「待って！ スバル！」

フェイトから制止が掛かる。

シオンはそれに一瞬だけ希望を見出だして。

「ニーソックスか、ストッキングか、普通のソックスか決めないと」

あ—————っ！

即座に希望がぶち破られた事に絶叫を上げた。
だが、当然構わず女性陣で話しは続けられる。

「やっぱニーソやろ！ 絶対領域は正義やで！？」
「ストッキングもいいと思います！」

「いや、ここはマニアックにルーズソックスとか……」

あ————っ！

既に死語に近い名称が上げられる。

上げた人間の歳を疑いたくなるが、あえて誰とは言わないのが華であろう。

ともかくも次々と出される案に、何故か議長の座に納まっているシャーリーがうんうんと頷く。

そして。

「じゃあ、全部試して見ましょう♪」

あ————っ！

先に倍する絶叫が出雲市内に響き渡った。

……余談だが、ソックスはニーソックスに決まったそうである。

本っ当に余談であったが。

とにもかくにも、こうして《JKしおんちゃん》は完成した。



「「おまたせや〜♪」」

神庭家道場。

女性陣が、みもりとアサギ以外ことごとくいなくなり。寂しげに男同士で酌をしていた連中に、二つの関西弁が響く。はやてと、獅童楓である。

二人を先頭に、何故か『いい仕事をした』風な感じの女性陣がぞろぞろ出て来た。

一様に笑顔でぞろぞろと現れた面々に、急降下していた男共のテンションが上がり始めた。

《長らくお待たせしました！》

「……ほんつとに長かったな……」

何故かまたもや、司会と化してマイクを握るシャーリーに、寿司をかつ喰らいながら出雲ハヤトがツツコミを入れる。

シオンをバインドで縛り上げて、ぞろぞろと女性陣が出ていったのが。何と一時間と半分程前。

その間中、男連中は一列にならんでにこにこ笑うアサギに酌をしたり。

男同士でたわいない話をしながら飲んだりしていたのである。

……テンションも下がろうと言うものであった。

そんなハヤトを中心とした男共の視線とツツコミを軽く『そおいつ！』とばかりに無視してシャーリーは続ける。

《これより、女性陣一同の一発芸！ 《JKしおんちゃん》を出し

たいと思います!」

『お～～～～』

ついに出るか。

シャーリーの宣言に、男連中は声を上げる。

しかし、その声にはハリが無い。

何故ならば、大体結末は読めていたのだから。

女装した男の辿る道は二つ。

爆笑出来るレベルの似合わない女装か。

女装がそこそこ見れるレベルで似合っているか。

それしか無い。

故に男共のテンションも中々上がりにくいのであった。

そもそも、女装した男なんぞ見て何が面白いのか。

似合わなければ、笑いを取った後は気持ち悪いだけだろうし。
似合っていれば、それはそれで腹が立つ。

そんな思いを男共は一人残らず抱いていた。

”その時まで”。

男共のテンションに、シャーリーは何故かくすりと笑い――。

《では、ティアナ♪ スバル♪ しおんちゃんを連れて来て～～♪》

「は……い！」

唯一まだ入って来なかったティアナとスバルが道場の前で元気良く返事をする。

何故か、どたばたとごたつく音が鳴り。

それは現れた。

女性にしてはやや高い背。

それに腰まで届く銀の髪が映える。

薄く化粧をされた顔は羞恥からか赤く染まり。

おそらくはパッドか。やたらと膨らんだ胸。

それに反比例するように、冬服の制服からも分かるほどに細い腰つき。

止めとばかりに、細い足を包むニーソックスとミニスカートが生み出す絶対領域から見える太腿の肌の白さが眩しかった。

もじもじと顔を赤らめて出て来た”彼女”に。

男共は唾然となった。

《……女として、ここまで敗北感を覚えた事はそうそうありません！ JKしおんちゃん！ 略して『しーちゃん』と御呼び下さい！

では、しーちゃん！ 一言、どうぞ……！》

「あ、う……！」

素早く隣のティアナからマイクを差し出されて、彼女は慌てる。注目を集めているのが恥ずかしいのか、目を伏せて。

《……み、見ないで……！》

『 ！ ？ 』

その場に居る一同へと衝撃が駆け巡る！

——その声を聞いて、嘩然としたままの男共から一人の男が立ち上がった。

先の一発芸で天に召された筈の彼、叶トウヤが。

生きていたのかという疑問を、当然のごとく無視して懷から何やら取り出す。

それはオーケストラの指揮者が使うタクトであった。

それを手に持ち、男達の前へと来る。

そして、音頭を取るようにタクトを大きく振った。

さん、はい！

『男の娘最っ高オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオ———
——つ！』

道場を文字通りに揺るがす咆哮が男共より放たれ、響き渡る！

……しーちゃんはそれを聞いて、グノーシスと言うのは変人集団では無く、変態集団が正しいと理解した。

絶叫する！
口笛を吹く！
踊り出す！

まあ、なんにしろここまでやる連中は正しく変態であるのは間違いない。

しーちゃんはそれに、真剣にストラに寝返る事を検討しようとして――。

「しーちゃん！」

「ぬお！」

いきなり眼前に現れた涅槃に旅立った筈の馬鹿野郎こと、ウィルに。しーちゃんは驚きの声を上げる。

そんな、しーちゃんの手をウィルは優しく掴んだ。

「シオン、いや、しーちゃん！　ワイらは幼なじみで親友や！」

「あ、ああ。まあ、親友かどうかはさておいて、幼なじみではあるな。……でも、しーちゃんはやめろ」

「いや！　あえてそう呼ばせてもらうで！」

やたらと熱苦しく語り掛けて来るウィルに、しーちゃんは一步下がる。

そんな、しーちゃんにウィルはずいっと進み出た。

「でや、しーちゃん。一つお願いがあるんやけど」

「……何だよ？」

その台詞に怪訝な顔となる、しーちゃんに。ウィルはさらに顔を寄せる。

そして――。

「ワイらの友情の為に、ちょーっつと、”モロッコ”に行つて。肉体改造して来てくれへん？」

「……………」

しーちゃんは無言。

ただ、少しだけ腰を落とし。

次の瞬間。落とした分の腰を使って一気に跳躍する！
同時に膝を跳ね上げた。

— 撃！ —

「おっふう……！」

跳ね上げた膝は迷う事無くウィルの股間を蹴り上げる！
そのまま崩れ落ちたウィルを、取り敢えずしーちゃんは踏ん付けた。

「……ぐ、ぐぬ！ や、やけど！ このアングルならスカートの中が——」

— 撃！・撃！・撃！・撃！・撃！・撃！ —

更に言い募る変態を迷う事無くしーちゃんは無言でスタンピングを連打。

馬鹿の意識を完全に断ち切った。

「う、ウィル！ スカートの中は！？ スカートの中はどうだったんだ！？」

「男物か！？ 女物か！？ それだけでも——！」

「やかましい！」

— 撃！ —

更に出て来た変態をアップercutで床に沈める。
そんなしーちゃんを満足気に見ながら、トウヤはひとしきり頷いた。

「我が弟ながら恐ろしい才能だね……！ お見それしたよ！」
「いやー。素質はあると思ってたんやけどな。ここまでとは思わなかったわー」

はやての台詞に、女性陣は皆一様に苦笑する。――正直な感想を言うと、やり過ぎた感が実は彼女達にもあったのだ。

まさかここまで似合うとは思わなかったのだから。
悪ノリで、本格的にやったのが効を奏したのか。

シオンならぬ、しーちゃんはモデルもかくやと言う絶世の美女と化してしまった訳である。

……いや、胸は詰め物だが。

とにもかくにも、その出来映えは女性陣を納得させるものであり。
同時に微妙な敗北感を味あわせるものとなった訳であった。

はやての台詞にトウヤはひとしきり頷くと。

まだ怒りのスタンピングをかます、しーちゃんの横に立ち、マイクを手を取った。

《諸君！ 私は間違っていた事をここに告げなければならない！》
いきなりマイクに向かい、並ぶ男共に演説を開始する。
それに、視線がトウヤへと向いた。

《私は常々こう思っていた……。可愛い女性は正義！ 可愛い女性是最強！ 可愛い女性は何でもあり！ 愛などいらぬ！ 可愛い女性が欲しいと！ つまり可愛い女性は国宝だと！ ——君達もそうだった筈だ》

腕を上げながら、熱く！ 熱く！ トウヤは語る。

ここだけでも十分に変態であると認識するに足る台詞である。

しかし、ほとんどの男共が即座に頷いているのを見て。しーちゃんは泣きたくなった。

色んな意味で情けなくなつて。

《だが、ここに一つ歴史は是正された。……。可愛い女性は国宝。それは今でも変わらない。だが、しかしっ！ あえてここに一つ加えよう！ 可愛い女性は国宝！ だが可愛い男の娘は——》

しゅぴつとしーちゃんに掲げた手を振り下ろす。

それはまるで、紳士が貴婦人をダンスに誘うかのような手つきで——。

《世界遺産だと……！》

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおっ！』

スタンディング・オベーション。

トウヤの宣言に、変態共が一斉に立ち上がりながら拍手を打ち。声を上げる。

……しーちゃんは鳥肌が全身に立った事を自覚した。

そんなしーちゃんに熱き視線を送りながら、トウヤはマイクに吠える！

《我々はこの素晴らしさに気付けなかった……！ 何故だ！？》
『坊やだからさあ——————！』

全く異口同音にヤバすぎる台詞を吐いた一同を、どう殺っちゃおうかしーちゃんは思案する。

だが、取り敢えずは——。

《故に私は宣言する！ 今この場において、男の娘の価値を！ あの意味において希少価値は可愛い女性よりも遥かに高いしね！ だからしーちゃん！ 君には、『名誉男の娘賞』を与え——》

「ちえ————すとお————！」

一撃！

引き返しようが無い程に場を盛り上げようとする変態長兄を盛大にビール瓶で殴り飛ばしておく事にした。



「ったく……！ 人を玩具にしゃがって！」
「「まあまあ」」

トウヤを殴り飛ばして数十分後。
神庭家道場はかってない盛り上がりを見せていた。

理由は言うまでも無く、どこかの変態長兄のせいである。
あの演説のおかげで、いらん視線をしーちゃんは集める羽目となったのだから。

わいわい騒ぎながらも視線が自分に向けられている事にぞっと悪寒を覚えつつ、しーちゃんは焼酎を一気に飲み干した。

ちなみにしーちゃん化は解けていない。

解こうとすると、その場に居る全員が気合を入れて止めに入るのがその理由であった。

……女性陣も含めて。

しーちゃんが真剣に泣きたくなったのは言うまでもあるまい。

「でも良いじゃん。可愛いよ？ しーちゃん♪」

「……その呼び名は変わらんのかな……」

隣のスバルに再びその名を呼ばれ、しーちゃんは深々とため息を吐く。

なお、しーちゃんは正座で座っている。

最初は胡座にしようとしたのだが、その場に居る女性陣全員に嗜められたのである。

舌打ちが聞こえた気がしたが、あえて聞こえていない事にした。

だって怖いし。

ともあれ、事態はようやく落ち着き。
しーちゃんはゆっくりと酒を飲んでいた。

なお細々と宴会を切り盛りしてくれたみもりは、しーちゃんが現れた直後こそショックを受けていたが。

今はさほど気になっていないのか。また皆の世話に戻っていた。

だが、何故にその手にデジカメが握られているのかは後で聞かねばなるまい。

……しーちゃんは、怖い答えが返って来ない事を切に祈った。

「まったく、どいつもこいつも……！」

「「まあまあ」」

まだ怒りの声を出すしーちゃんに、両隣から再度声が掛かる。
それにふんつとそっぽを向くとすぐにグラスを空けた。

「……ツンデレだ……！」

「——っ！」

ぼっと顔を赤らめながら、声がした方向に顔を向ける。
だが、その瞬間にぱしゃりとシャッターを切る音がした。

慌てて、振り返る。

「……みもり……！」

「はい？ 何でしょう？」

にっこりと笑う幼なじみ。

その顔は一点の曇りも無く、いつもの笑顔である。

——その手のデジカメさえ無ければ。

しーちゃんの顔が引き攣った。

「みもり、俺は撮影を許可した覚えは無いぞ!？」

「何を言ってるんですか？ シン——じゃなくて、しんちゃん。私は楽しく笑う皆さんを撮っているだけですよ?」

今年一番の大嘘である。

それは間違い無い。

だが、あのデジカメのメモリーには確実に宴会の様子が数点写されている事であろう。

それに、しーちゃんの写真が若干多いのは明白だが。

まず間違い無くシラを切り通されるのは目に見えていた。

何とかあのデジカメを奪ってメモリーを消去せねば……!

そう思うしーちゃんだが、それを実行しようとする度に両隣から邪魔が入る。

スバルとティアナから。

何やら約定でも交わしたのか、急造とは思えない息の合いっぷりで三人はしーちゃんの邪魔&撮影を行っていた。

「……おまえ達……!」

「何? どうかしたの? しーちゃん?」

三度、みもりのデジカメを奪おうと立ち上がるしーちゃんに機先を制するように、ティアナが酒を注ぐ。

一瞬にやりと笑った気がするのは、決して気のせいではあるまい。

果たして、この三人を結びつけているもの。
それは、なんなのか――。

「あ、みもり。今の焼き増しお願いね？」

「私もー」

「それかああああああああああああっ!？」

あっさりとネタが割れてしーちゃんが絶叫する。

どんな密約かと思いきや、ようは自分の写真が欲しかっただけらしい。

この！ 女装している！ しーちゃんと化した！ 自分の！

冗談では無い！

「ええい！ こうなったからには手段を選んでいられるか！ みもり！ そのデジカメ寄越せ！」

がばりと立ち上がるなり、みもりに詰め寄る！

それにみもりが何故か顔を赤らめた。

「ダメです、シンちゃん！ こんな所で……！ 出来たら人の居ない場所がいいです！」

「何を言っとなるんだお前は!？」

素っ頓狂な事を言う幼なじみに、しーちゃんも喚く。

本当に酒を飲んで無いのか果てなく疑問を抱くが、今はそれどころでは無い。

とにかく、胸に抱えたデジカメを取り上げようとして――。

「何やってんのアンタはア！」

一撃！

「あだっ!？」

瞬間で追い付いたティアナが神速のツツコミでしーちゃんをどつく!

それにしーちゃんが悲鳴を上げて――。

勢いが付きすぎたか。後ろからしーちゃんに覆い被さるような形になってティアナが抱き着く事になった。

……本来ならば、しーちゃんもここで堪える事が出来ただろう。しかし、残念ながら今のしーちゃんは若干飲み過ぎていた。

前へとふらつき、今度はみもりに抱き着く格好になる。

慌てて、離れようとして――。

「あー！ 皆くっついて楽しそうでズルイ！」

「だっ!？」

「きゃっ!？」

「ちょっ!？ スバル!？」

今度は何を思ったか、スバルが後ろからティアナごしにしーちゃんへと体当たり気味に抱き着く。

やはりスバルもまだ酔っ払っていたのだろう。

普通なら考えられない行動である。

そのまま奇妙なサンドイッチと化す四人に、ぎょくりつと唾を飲む音が響いた。

何せ、見た目だけならば美少女四人が押し合いへし合いしている
図である。

傍目から見れば、かなり刺激的な絵であつた。

そして、彼等も相当に酔っ払っている。

既に宴会は場の方向性と言うか、まとまりと言うべきか。――そう言ったものが損なわれて久しい。

まともに考えが回らない状態であるのだ。

そんな場合で、この状況。

何が起きるかなぞ、明白と言えた。

つまりは――。

『俺達も混ぜろ オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオ———！』

——暴走である。

男共どころか、女性陣まで突っ込んで来たのを見ると。すでに深酒どころでは無かったのだらう。

綺麗に理性がすっ飛んでいた。

調子に乗った酔っ払い共が、四人に折り重なるように組み付く！

「て……てめーら……！」

流石にしーちゃんのこめかみに怒りの血管が浮かび上がる。
だが、酔っ払って状況判断がまともに出来ない酔っ払い共は一向に構う事なく抱き着いて来た。

「そんな怖い顔しないで、しーちゃん！」

「もっと酔っ払っちゃいなYO！」

「一人だけ素面だなんて——！」

「私も酔うからしーちゃんも酔って————！」

もう、目茶苦茶である。

抱き着かれているのに、潰れるような圧迫感が無いのが奇跡的と言えた。

とにかく、この人間ダンゴ状態を脱出するために、しーちゃんは渾身の力を籠めようとした。

瞬間！

「……と、ゆーことでっ♪」

ひらりっ自分の肩に乗って来た存在に、しーちゃんは思わず絶句する。

そこにはいつの間にやら、神庭家のラスボス。

神庭アサギが居たのだから。

何の手品か。全く重さを感じない。

そんなアサギが手にするモノを見て、しーちゃんの顔色が真っ青に変わる。

その手に握られたモノとは――。

スピリタス（アルコール度数96%の世界最強酒）

そんな危険窮まり無い代物を、アサギは”赤らんだ顔”で開いた。

「母さぁん！？ 母さんも酔っ払ってる！？ ちょっ！ それはマズー」

「ママって呼んでくれなきゃ、イ・ヤ♪」

い。と、最後まで告げる前に、アサギはしーちゃんの口にスピリタスの瓶の口を嵌込んだ。

当然、極悪極まり無いアルコール度を誇るウォッカたる、この酒。スピリタスが一気にしーちゃんの臓腑に流し込まれる。

……なお、余談となるが。スピリタスを瓶一気飲みなんぞをした日にはアルコール中毒で死人が確実に出るので、決して真似をしないように。

これは……マズイ……！

尋常じゃない寒気が身体を襲い、快感すら覚える熱気が胃の中に広がる！

否、既に熱気なんぞと言う生温いモノでは無かった。

火を直接胃に突っ込んだ感覚。

これが正しい。

一瞬にして視界が歪む。

前、後ろ、上、下。

酔いと悪寒に脳みそを掻き回され、理性が溶けて行くのを感じる。
全ての感覚が一気にないまぜとなり――。

――そして。

「ぶうううううううううううううううわあああああああああああ

――！！」

しーちゃんはキレた。

有り得ない程の力を発揮して、周りに組み付く連中をすっ飛ばす！

……男達だけを。

壁まで吹き飛んだ連中も居たが、そこは鍛えられた男共。

そんな事では怪我一つせずに転ぶだけで済んだ。

それらを据わった目で見遣りながら適当な酒瓶を引っ掴みと、しーちゃんは大声で叫んだ。

「つらああああああああああ！ 来るなら来いっ！ スバルも
ティアナもみもりもしーちゃんもお前達なんぞに指一本触れさせん

！」

『いい度胸だ……！ 生きて帰れると思うなよボケがあああああああああああ————っ！』

しーちゃん自身、凄まじい台詞を口走っている事に——。と、言うか。しーちゃん自身が自分の事を言っていると言うすっちゃかめっちゃかな台詞に、周りの連中も当然構わない！

ここ、お前の家だろ？ とツツコミを入れる人間は誰もおらず。しーちゃんに——。

正確には、しーちゃんを中に挟んだサンドイッチに突っ込む！

「一番！ グノーシス第八位！ ファルク！ 二十八歳独身！ 趣味は庭いじり！ しーちゃんを嫁にするため行きます！」

よりによってしーちゃんかとツツコミを入れる暇もあらずんば。そう叫ぶなり、突っ込んで来た変態に、しーちゃんは迷い無く肘打ちを顔面に叩き込む！

一撃！一

鈍い音と共に、変態は床に沈んだ。

しーちゃんは中指をおっ立てて吠える。

「一昨日来やがれっ！」

——だが、酔っ払い共は臆する事なく、次々に飛び掛かって来た。

「二番！ グノーシス第十位！ 福村！ 愛してます！」

「その愛に死ねえっ！」

「三番！ アスカ！ お兄ちゃん居るけど百合ならおっけーだよねっ！？」

「相手の合意があるのならっ！」

「四番！ チャン！ 最初会った時から決めてました！」

「知った事か！ コズミック・44・マグナムっ！」

「五番！ 楓！ 師匠ちゃん！ 是非、ウチと相方をつ！」

「スバルの相棒は私よっ！」

「六番！ サマー！ 俺の漢気に惚れろおっ！」

「暑っ苦しいんじゃない！ ジェット・トウ・ジェット・アパカーっ！」

「七番！ 高井！ 俺に惚れると火傷するぜ……？」

「なら口説くな！ エンジェル冥王拳っ！」

「八番！ 内田！ 俺ア、死なない限りは君を決して諦めないっ！」

「なら死なすっ！ ビクトリー・ザ・ビクトリー・レインボーっ！」

「九番！ アニー！ お姉様と呼ばせて！」

「断固断るっ！ ギャラクシー・マグナムっ！」

「十番！ ウィル！ 四人の内の誰でもいいから結婚しようや！」

「オラァっ！」

————こうして。

神庭家道場で開かれた宴会は、争奪戦だか、ドツキ漫才戦だかよく分からないカオス空間を作り出し。

そのまま全員がぶっ倒れるまで行われていくのであった。



深夜。

宴会に集まった人間のほぼ全てが床にぶっ倒れている中で。

——半分は酔い潰れ、半分はしーちゃんが殴り倒した連中である——。

まあ、そんな中で。

しーちゃんこと、シオンはふらふらになりながら、神庭家温泉に入って行った。

ちなみに、女装は既に解いている。念のため。

酒を抜く為と、化粧を落とす為に、せめてシャワーだけでも思ったのであった。

……普通。深酔いした後に風呂など自殺行為も甚だしいのだが、シオンは構わない。

シャワーをのろのろと浴びて、風呂から出た。

「……もー二度と酒なんぞ飲まんぞ、俺は……」

はぁっと嘆息しながら、自室から出したパーカーとジーンズを身に着ける。

過去の経験の賜物か、酒はもう抜けていた。

だがそれでも、けだるさはどうしようも無い。

身体にのしかかる倦怠感を頭を振って追い出す。

柱にもたれ掛かった。

「なんだかなあ……」

苦笑する。

思い出すのは道場で潰れている連中であつた。
彼等、彼女達を思い出し苦笑したのである。

紫苑との戦いから二日。

”もう”、二日なのか。

”まだ”、二日なのか。

シオンには分からない。

だが――。

「どこ居るんだよ……。バカ師匠……」

月を見ながら、シオンはポツリと呟いた。

ずっと。ずっと、それが気になっていたのである。

あの事件以来、一切姿を見せない自らのデバイスにして師匠。イクスカリバーの行方が。

どうにかなるような奴じゃない。

そんな事は分かっている。

だが、それでも。

それでも隣に彼が居ないのは、酷く寂しかった。

もう一度ため息を吐く。

そして立ち上がった。

こうしていても仕方が無い。

取り敢えずは、道場に居る奴達の面倒を見なければと向かおうとして。

「ん……?」

庭に影が落ちているのに気付いた。

月明かりで照らされて、影が。

その影の主は、ゆつくりと進み出る。

シオンの前へと。

彼は――。

「イク、ス……？」

【ああ、シオン】

穏やかな月明かりに照らされて、シオンとイクスは漸く再会した。

シオンは一瞬だけ呆然として。やがて、我に返るなり笑いながら頭をかいた。

噂をすれば、影とやらか。

苦笑する。

そのまま、庭に下りて彼の元に向かった。

「……ったくよ。どこ行ってたんだ、バカ師匠？　ちっとだけ心配したぜ？」

【――そうか。心配してくれたか】

何気無く告げた軽口。だが、イクスから返って来たのは本当に嬉しそうな言葉だった。

——嬉しそうな、嬉しそうな。

——寂し、そうな。

そんな笑い。

シオンはそれを見て眉を潜めた。

何か、おかしい。

何がと言う訳では無い。目の前に居るのは間違いなくイクスである。

だが、何故、何故——。

こんなにも”違って見えるのか”。

「……どうしたんだ、イクス……？ 何かいつもと……」

【変わって見えるか？】

突如として告げられた言葉に、びくっとシオンの身体が跳ねる。

凶星をつかれた訳では無い。

だが、今の台詞に異様なものを感じたのであった。

なんだ……？

自らに問い掛ける。

だが、答えは出ない——。

それを見て、イクスはまた微笑んだ。

嬉しそうに、寂しそうに。

両手を広げると、月を向かえ入れるかのように仰いだ。

【昔の話をしようか、シオン】

「……？ 何、言って――」

【昔々、ある所に王様に憧れた少年が居ました】

訝しんでどう言う意味か聞こうとするシオンだが、イクスは全く無視した。

昔話とやらを話し出す。

シオンは黙って聞く事になった。

【その少年は故郷の国を守りたかった。だから王様に憧れました。――そんなある時、少年は王権を司るとされる選定の剣に出会いました。王様になる者にしか抜けない剣。それを前にした少年にある魔法使いは言います。『これを抜いてしまうと君はヒトでは無くなってしまうよ？ それでもいいのかい？』と、少年は頷きました。王様になれるなら、それもいいと思ったから。そして少年は剣を抜いてしまいます。それは、運命か何かか。それは、分かりません。けど、少年は剣を抜いてしまいました。その時から、少年は王様になりました】

懐かしい話しをするように、大切な宝物を見せるように。
イクスは話して行く。

それに、シオンは全く口を挟めなかった。

……だが、心の奥底で何かが叫ぶ。

これを止めさせろと、取り替えしの付かない何かが起きてると。
そう、叫んでいた。

話しは続く。

【王様になった少年は故国を守る為に頑張りました。仲間も次々に増えていきました。魂を預けあえる程の友が出来ました。……愛する女性が出来ました。少年は幸せでした。戦いに生きた人生だったけど、戦い続けた人生だったけど、少年は幸せでした。——でも、少年の幸せは終わりを告げます】

止めさせろ、止めさせろ、止めさせろ、止めさせろ！

痛い程に胸をつく不安。

それがイクスが昔話を進める度に膨れ上がる！

けど、シオンは何も出来なかった。

声も出せなかった。

まるで魔法にでもかけられたように。

そんなシオンを他所に、イクスは昔話を続ける。

【少年は、自分が信じたモノに裏切られました。……それでも、信じ続けました。少年は自分が信じたモノに裏切られました。——それでも、それでも信じ続けました。けど結局。少年は自分が最後まで信じ続けたモノに裏切られました。……守ろうと誓った、夢見た国に、裏切られて。……だけど、少年は満足でした。最後まで裏切られてた人生だったけど、最後まで辛い人生だったけど。それでも、悪く無い人生だったと。後悔しない、誇れる人生だったと。けど、少年は理解していませんでした。魔法使いの言葉を。『君はヒ

トでは無くなってしまうのだよ?』と言う言葉。それは、正しかったのです。”死した少年の魂は剣に引き寄せられ、融合してしまいました”。その時から少年は剣になってしまいました】

漸く、漸く全てを話し終えたのか、彼はゆっくりとシオンに振り向く。

嬉しそうな、寂しそうな笑みをたたえて。

そして――。

瞬間、世界が変容した。

「な……っ!？」

驚愕の叫びを、シオンは上げる。

いきなり世界が変容を始めたのだ、驚きもする。
が、当然世界の変容は変わる筈も無い。

やがて、シオンの前に広がったのは、凄絶過ぎる光景だった。

死山血河とはこのことか。

肌が見えた丘は余す事無く血の赤に染まり。

辺りには、死体が散乱していた。

向こうを見れば、赤い河が流れている。

それが血だと気付くのは、少しの時間が必要だった。

【これが、俺の最後の戦場。カムランの丘。仲間を死なせ、子を死なせ、国を死なせた。最後の場所だ】

「イ、ク、ス……？」

上手く振り向け無い。

身体が、心が、魂が。

振り向く事を拒否していた。
現実を拒否していた。

それでも、振り向かなければならない。

何故ならイクスが呼んでいるのだから。
だが――。

【もう、それは俺の名前じゃないよ。シオン】

悲し気に声が響く。

そして、シオンは見た。

銀の髪に銀の瞳を持つ筈の彼が。

”黒髪、蒼眼へと”変貌していく瞬間を。

【――これが、本当の俺……。いや、我だ】
「イ、ク……」

声が上手く出せ無い。

彼が、何を言っているのか理解出来ない。

全てが分からない……！

なのに！

彼は全く構わなかった。

ゆっくりと歩いて来るその身体が装束を纏う。

赤の衣に、銀の鎧を。

それこそが、彼の騎士甲冑であった。

同時に右手に握られるものがある。

それは、シオンが見慣れたモノであった。

黄金の剣。

精霊剣、カリバーン。

【シオン。刀を抜け】

「な、ん……！」

彼が何を言っているか分からない。

分からない、分からない、分からない、分からない、
分からない、分からない、分からない、分からない、
分からない。

分からない！

なのに、彼は一切構ってくれなかった。

カリバーンをゆっくりと持ち上げ。

【でなければ——。死ぬぞ？】

右へとただ、振り下ろした。
それだけ、それだけなのに！

一斬！一

世界が、彼自身が作り上げた世界が斬り裂かれる！

一瞬だけ、神庭家の庭が見え。すぐに消えた。

とんでも無い切断力である。

魔法を使った訳ですら無いのに、この威力。

下手をすれば、”通常斬撃だけでSSランクに届く”！

「イ、クス……イクス!?」

【我は本来の名を取り戻した。既にイクスカリバーでは無い】

告げながら、ゆっくりとカリバーを持ち上げる。

八相から剣先を突き出すような構えを取った。

それは、自然にシオンへと向けられる。

【アーサー……。否、違ったな】

一つだけ苦笑する。

懐かしむように、笑い――。

笑みが消えた。

同時に、凄絶な殺気がシオンに突き刺さる！

凄まじい悪寒がシオンの背中を突き抜け――！

【騎^{きしん}神。

”アルトス・ペンドラゴン”】

自らの、今の名を名乗った。
前が出る――っ！

【まかり通る】

一斬！一

直後。彼、アルトスがカリバーンを振り下ろし。
カムランの丘が迷い無く爆砕した。

（後編に続く）

第五十話「だからさよなら」(中編)(後書き)

はい♪ テスタメントです♪

中編終了でございます♪

後編は二部化しないだろうなど、今から戦々恐々ですが(笑)
なお、イクスことアルトスですが。

アーサーの呼び名の一つが確かアルトスらしいです。(アルトリ
アもその一つだとか)

ちとろろ覚えですが(笑)

アルトスの騎士甲冑のイメージは旧セイバーですね(笑)
これ、分かる人いるよね……？(笑)

では♪

後編でお会いしましょう♪

第五十話「だからさよなら」(後編) (前書き)

——はい♪ テスタメントです♪
まず最初に一言!

今回はアリサ道場はありません♪
いや、無理無理(汗)

あの空気でアリサ道場出来る程人間出来て無いですはい(汗)

つまりは、”そう言った”話しますので覚悟を。

……また、Sって呼ばれるだろうな♪(↑オイ!)

ではでは、第五十話♪

どぞ〜♪

第五十話「だからさよなら」(後編)

—轟!—

世界が割れる。

アルトスが振り落としたカリバーンの一撃が、カムランの丘を粉碎したのだ。

ただの一撃を持って。

粉碎された丘の一部たる岩盤や砂くれが、爆発したが如く空へと舞上がった。

その岩盤と共に空へと飛ぶ人影がある。

神庭シオン。彼が。

シオンは顔を歪め、跳ね飛ばされながら戦慄していた。

今の一撃。

辛うじてすんで回避出来たものの、そうでなければ確実に斬られていた。

寸止めでも、非殺傷設定でも当然無い。
確実に殺す為の一撃であったのだ。

そして、それを放ったのは――。

【考え込む暇があるのか、余裕だな】
「っ——!？」

一斬一

彼の声が聞こえたと思ったと同時に目の前の岩盤が静謐に断たれる。

真ん中から両断された岩盤から、彼が飛び出て来た。

イクスカリバー……。否、騎神アルトス・ペンドラゴンが。

膨大な魔力を噴出しながら、それを加速に用いて飛び掛かって来る。

その速度は、即座に音速を超過。

ソニック・ブームを撒き散らして、シオンに突っ込む！

「く……!」

シオンに出来たのは、横へと飛んで岩盤を乗り移り、その突撃を避わす事だけだった。

一撃！一

直後、シオンが先まで乗っていた十m超の岩盤が碎け散る！
アルトスの突撃を受けてだ。

それを見て、やはりシオンは一つだけ呻いた。

叫ぶ！

「イクス……！ いい加減にしろ！ 何考えてやがる！？」

【――何を、か。今はただ一つ。いかに貴様を斬るかを考えている】

返事は即座に返って来た。

――後ろから！

いつ回り込んだのか、アルトスはシオンの真後ろに居た。

そちらを振り向く事すら出来ずに、シオンは絶句する。

だが、当然アルトスは構わなかった。

【付け加えると、もう一つ。今はどう貴様に刀を抜かせるかを考えている――】

一斬！――

言葉が終わると同時に、カリバーンが振り放たれる！

シオンは直感と悪寒に突き動かされて、前へと飛んでそれを避わした。

別の岩盤に乗り移りがてら、体勢を整えた。

アルトスに向き直る。

彼は、シオンの視線もどこ吹く風とばかりにカリバーンを振った。

――それだけで剣風が唸り、別の岩盤が両断された。

「……本気、なんだな……」

消え入るような、シオンの声。

それは今の現実を否定して欲しいが為の声だった。
だが、現実はどこまでも変わらない。

彼の宣言も、また変わる事は無かった。

【先程からそう言っている。……シオン、刀を抜け。三度目は無い】
「っ———！」

ぎりつと歯が軋む音が鳴る。

なんで？

その問いは既に放った。

でも、彼は答えてくれない。

なんで？

その問いはどこまでもシオンを苛む。

でも、彼は応えてくれない。

なんで、なんだ……！

なんで、なんで、なんで、なんで、なんで、
なんでなんでなんでなんでなんで——。

なんで！

いくつもの、なんで。

でも、その全てを彼は口に出さなかった。

答えてくれない。

それだけは分かったから。

だから。

—ブレイド—

「……一つだけ約束しろ」

響くは鍵となす言葉。

シオンが刀を抜く為の言葉である。

それと同時に、シオンはアルトスへと告げる。

アルトスは変わらず冷たい目だけを向けて――。

「俺が勝ったら、全部……。全部だ！ なんもかんもを、話せ……！」

—オン—

キー・スペルが最後まで唱えられ、右手から刀の柄が生えた。
それを、アルトスは見て。

一つだけ頷く。

【いいだろう。もし、勝てたら全てを話してやる】

それを聞きながら、シオンは刀を掴む。
一気に抜き放った。

緩やかな弧を描いて、刀は剣先を彼に向ける。

アルトスへと。

彼もそれに合わせるように、カリバーンをシオンに向けた。

「……神庭、シオン」

【アルトス・ペンドラゴン】

名乗りを上げる。

シオンは、彼の名前に顔を一瞬だけ歪めた。
頭を一振り落として余計な思考を追い出す。

そして、真っ直ぐに二人は視線を交錯させた。

告げる――！

「推して……。参る！」

【まかり通る】

宣戦を！

同時に二人は真っ向から突撃する！

直後に彼等は正面に互いを捕らた。

下段から放たれた刀と。上段から放たれた剣が激しく衝突！

一戦！一

確かな軋みを咆哮として、カムランの丘が悲鳴を上げた。

師匠であつた剣と、弟子であつた主の戦いが始まる――。



「くあっ！」

振り落とされた一撃。たつぷりと魔力が乗り、加速がついたその一撃をシオンは翻した刀で斜めに斬り流す！

一閃一

カリバーンがその軌跡を変えた。

更にシオンはアルトスの斬撃を利用。

身体ごと横にスピンしながら、刀を放つ！

が、既にアルトスはそこには居なかった。

消えたアルトスに、一瞬だけシオンは呆然となり――。

瞬間、ぞくりと言う悪寒が再びシオンを突き抜け。確認もせずの前へと身を倒す。

――衝撃は、直後に来た。

一轟！一

寸前までシオンが立っていた岩盤が砕け散る！
頭上から降って来たアルトスの一撃によって。

……いつの間に！？

それを苦々しく思いながら、シオンは自問する。
が、答えは一つしかなかった。

シオンがカリバーンの一撃を斬り流した瞬間に、アルトスはその
場を離脱してのけたのだ。

” 斬撃を斬り流され、体勢を崩された状態で”。

凄まじい加速力と言える。

殆ど死に体からそんな離脱などできるものでは無いからだ。

アルトスが自分で砕いた岩盤から出て来る。

それを見て、シオンは呻いた。

考えて見れば初めてだったから。

彼が剣を握っている姿を見るのは。

……戦っている姿を見るのは。

つまり、シオンは初めて。

もうアルトス・ペンドラゴンへと名を変えた彼の实力を知る――！

—轟！—

三度、アルトスが魔力を噴出させて突っ込んで来る！
アルトスの戦闘スタイルはひどく単純であった。

つまり、その突破力を生かした正面突破。
騎士としての定石戦術と言える。

だが、アルトスのそれは普通の騎士とは比べものにならなかった。
異常なまでの加速と力に支えられた戦術であつたからだ。

その突破力は、シオンが知る内でも異母兄、叶トウヤとほぼ同等。
あるいは、凌駕しかねないものであつた。

——だが。

一撃！一

再び突っ込んで来たアルトスの斬撃を斬り流す。
再度、軌道を変えられたアルトスを見て。シオンは刀を握る手に
力を込めた。

……いける！

それを強く確信する。

アルトスの斬撃に反応出来る。
斬り流せている。

それはつまり、自分の技が通用していると言う事であつた。

故にこそシオンは確信する。

このままいけば——。

再度突っ込んで来るアルトス。
横から放たれたカリバーンを下段から刀を振り放ち、上へと斬り流す！

それでもあまりあまった斬撃の勢いはシオンを回転させる。
シオンはその勢いを利用して、刀を振り――。

――俺は、勝てる！ イクスを”斬って”――。

……放て、無かった。

刀はアルトスの首元で止まっている。
それを見て、シオンは愕然とした。

自分がやろうとした事に。

斬る……？ 俺が？ イクスを！？

有り得ない。

そんな事、出来る筈が無い。

今さら気付いたように自失したシオンをアルトスは静かに見据えた。

カリバーンを振る――。

【……馬鹿者が】

眩きと共に軽く振られたカリバーンは、刀を軽く弾く。
それに、シオンはハッと我に返り。

次の瞬間、アルトスから渾身の一撃が放たれる！

一轟！一

「がっあ！」

その一撃は刀の上からシオンを叩き、その身体を盛大に吹き飛ばした。

上がる悲鳴と共に、シオンが数百m単位で飛んで行く。
くつと呻き、シオンは足場を形成して止まろうとして。

【漸く、元の自分に慣れて来た】
「っ！？」

その声を真横から聞いた。
愕然としながら、横を見る。
そこには飛ぶシオンに追従し、”追い付いて並走する”アルトスが居た。

【そろそろ、”本気で行くぞ”】

一撃一

悲鳴は上げられなかった。
横合いから放たれた斬撃は、シオンの吹き飛ぶ角度を変更。
今度は真横に弾き飛ばされる！

シオンに出来たのは、刀で斬撃を受ける事だけだった。

一撃！一

「かはっ」

飛んだ方向にあった岩盤に背中から激突して、突き抜ける。
だが、それで勢いが若干死んだ。

シオンは今度こそは足場を形成して、空中に踏み止まる。

すぐに前を見る。

アルトスは真っ直ぐにこちらへと飛び掛かっている所だった。
シオンは迎撃せんと、刀を腰溜めに構える。

引き出すは、自身の最速斬撃。

あの紫苑でさえも斬り伏せた一撃！

「神覇、壺ノ太刀――」

捻るように抜刀術の応用で構える。

突っ込んで来るアルトスが、シオンの射程に入った。

放っ！

「絶影っ！」

一閃！一

叫びと共に放たれた一閃は、視認すら許さぬ速度で駆ける！
刹那にアルトスへとひた走り――。

それは、起きた。

つうんつと言う鋼が絡み合うような音が響く。

その音を聞きながら、シオンは呆然と”それ”を見た。

シオンが放った一閃。刀の上を、”カリバーンを当てながら回転する”アルトスを。

それはいつか、囑託魔導士試験のシグナムとの模擬戦の時に、シオン自身が使った技である。

合気。放たれた一撃の威力を全て受け流し利用する技法。

実戦では、まだ一度も成功していないその技を、アルトスはこともなげに使って見せていた――。

一撃！――

「がっ!？」

ならば、その結果も同じ。シオンは自身の絶影の威力と、アルトスの斬撃を合わせて喰らう羽目となる。

冗談のような速度で、それこそ音速にも匹敵しかねない速度で吹き飛ばされた。

――が、そこで終わらない。

アルトスはシオンを吹き飛ばした体勢から即座に追撃に走る。魔力を先の倍は噴き出し加速に用いて、爆発的な速度を生む。

初速からそれは、空気の壁をブチ破った。
つまりは音速超過。

一気に先に吹き飛んだシオンへと追走し、すぐに追い付いた。

カリバーンを大上段に持ち上げる。

狙いは当然、吹き飛んだままのシオン！

シオンは刀を持ち上げる事しか出来なかった。

カリバーンが振り落とされる――！

一撃！――

轟撃一閃！

刀越しとは言え、その一撃をもろに喰らってしまったシオンは、それこそ先の速度を遥かに上回る速度で地面に叩き落とされ――。

一轟！――

砕かれたカムランの丘を更に砕け散らせ、巨大なクレーターを生み。

地面の中へと埋没した。



シオンが叩き落とされたカムランの丘は、まるでカルデラのよう

な地形に成り果てていた。

それを空に浮かんだアルトスが静かに見下ろす。

と、その背後で重いものが連続して落ちる音が鳴った。

アルトスの一撃により上空へと吹き飛ばされた岩盤達が、重力を思い出したように漸く下に落ちたのだ。

どこまで舞い上がったと言うのか。

しかし、アルトスは構わず自身が作り出したクレーターを見下ろして。

やがて、その中心点から這って出て来る影があった。
確認するまでも無い。シオンである。

彼は穴から這い出ると盛大にむせ返り、咳を吐く。

やがて呻きと共に立ち上がった。
アルトスを見上げる。

それに、アルトスは応えるかのようにカリバーンを構えた。

再びの突撃を開始する――！

—轟—

「ちいっ！」

こちらに再び突貫して来るアルトスを見て、シオンは舌打ちを放った。

既にシオンは悟っている。

アルトスとの白兵戦はただの自殺行為である事を。

速度と力、そして技量。

その全てにおいて、シオンはたった今完敗したのだから。

魔力放出を最大利用した加速。

そしてカムランの丘を破碎してのけた一撃の力。

更には、絶影を斬り流して自身の斬撃に利用する合気。

そのどれもが桁違いのレベルを誇っている。

あるいは、トウヤやタカトに匹敵する戦闘能力であった。

白兵戦では、どうあがいても勝てない。

ならば！

「零落零無……。発動！」

呟くようにして告げた言葉と共に、シオンが噴き出す魔力が僅かに変質する。

擬似虚数魔力。

魔力放出の異常変化形の一種である。

神覇ノ太刀単一固有技能である、この技は純粹魔力能力に強い力を発揮する。

簡単に言ってしまうえば、魔力防御を無視。あるいは叩き斬れるのだ。

故に、莫大な魔力を放出しながら突っ込んで来るアルトスにも有効と言える。

引き付けろ……！

自身から引き出す技は神覇式ノ太刀、剣牙。

刀を構えながら、シオンは胸中叫ぶ。

下手に早く撃つと、かえって回避しやすくなる。

故にシオンは轟速で突っ込んで来るアルトスを待ち受ける。
時間がまるで延長したがごく長くなる感覚を覚え――。

アルトスがカリバーンを振り上げた。

その距離、僅かに3m！

アルトスの速度を考えれば、一瞬で到達されてしまう距離である。

ここだ――！

心の中だけで吠えながら、シオンは刀を振り放つ！
同時、溢れるようにして刀から魔力が解き放たれた。

「式ノ太刀、剣牙ア！」

一閃！――

咆哮と共に放たれた剣牙が、至近距離からアルトスを襲う！
零落零無の効果でプロテクションを始めとした魔力防御は無効。
防御手段の無いアルトスに、これを防ぐ手立ては無い。

――そう、思っていた。

【ぬんっ！】

—轟！—

その瞬間を見るまでは。
気合一閃。

アルトスは振り上げたカリバーンを一気に放つ。
ただし、シオンに向かってでは無い。

向かい来る剣牙に向かってだ。

剣牙とカリバーンは真っ直ぐに激突し――。

—撃！—

一瞬だけたわんで、あっさりと斬り払われた。

……嘘だろ！？

引き延ばされた感覚の中でシオンは叫ぶが、現実はどこまで現実
離れしていようと、現実であった。

振るったカリバーンの勢いを利用して、アルトスの身体が回る。
それはそのまま次の攻撃に繋がった。

則ち、蹴り。

今度はこちらが隙だらけとなった、シオンの横面に勢いの乗った

蹴りが叩き込まれる――！

一撃！

「かつ……は……っ！」

顔面に直撃した蹴りは、シオンを地面に叩き落とした。

ぎりぎりで芯を外したからいいものの、そうでなければこれだけで死んでいたかもしれない。

アルトスは地面をバウンドして跳ねるシオンを尻目に地面に着地。数mも足を滑らしながら、止まった。

その間にシオンも地面に落ちる。

ぐっと激痛を堪えながら立ち上がり――。

すぐに刀を振った。

この距離はまずい……！　まずは距離を稼ぐ！

とにかくアルトスと距離を取ること。シオンはそう思い、その為に必要な技を繰り出す。

刀を振り落ろした。

「参ノ太刀、双牙！」

裂帛の叫びと共に地面を走る二条の魔力放出斬撃。それは、シオンの目前で十字を描いて交差。

壁となりその前を覆った。

これなら――！

そう思いながら、後ろへと瞬動で飛び跳ねようとした。

直後！

一裂！一

「な……！？」

シオンが驚愕の叫びをあげる。

双牙を真ん中から両断されて！

壁を形成していた双牙を問答無用に断ち斬ったのは、やはり黄金の剣。カリバーンであった。

断ち斬られた双牙はあっさりと霧散する。

それを全く気にも止めずにカリバーンの主。ことも無げに双牙を粉碎したアルトスが悠々と歩いて来る。

シオンはそれを見て、全身に震えが走った事を自覚した。

「あ、う……！」

通、じない……！

それだけをシオンは強く確信する。
絶影も剣牙も双牙も！

何一つとして、アルトスには通じなかったのだ。

後、シオンが使えるのは四ノ太刀、裂波と伍ノ太刀、剣魔。
だがその二つを持ってしても通用しない。

そんな気がした。

なら、何が出来ると言うのだ。

震えながら、愕然とするシオンにアルトスは歩みを止める。
カリバーンを振り上げた。

【どうした？ 終わりか？】

問う声。

でもシオンは答えられ無い。
だが当然アルトスは構う筈も無かった。

【この程度か、お前も。お前の覚悟はそんなものか】

まるで歌うように告げられる言葉。

シオンはそれを黙って聞く。

震えながら。

アルトスは構わず続ける。

【お前の言う想いとやらも所詮はこんなものか。潰されるのを恐れ
て、放てない程度のものか。——滑稽だな。そんな程度の奴の為に

タカトは全てを投げ出したのか】

——呼吸が止まった。

同時に震えも止まるが、シオンは構わない。

アルトスに呆然と目を向ける。

【奴も哀れよな。いや、所詮は同類か。ならば奴もまた——】

「やめ——っ」

思わず叫ぶ。

その先を言わせたく無かった。

言って欲しく無かった。

彼にだけはどうしても。

だけど、アルトスはどこまでも構わない。

むしろ哀れむような口調で言葉の結尾を結ぶ。

シオンの制止すらも振り切って——。

【——滑稽よな】

「っ————！」

嘲るような一言。

それが、本当にアルトスの本心なのかはシオンにも分からない。

だが——、許せ無かった。

「——せいしろ……」

【ん？】

シオンが放った一言に、しかしアルトスは聞こえなかったか、疑

問符を上げる。

——我慢、ならなかった。

それこそ怒りに顔を染めて、シオンが言い直す。

「訂正、しろ……！ タカ兄いを、あの人を、侮辱すんな……！」
【——ハッ！】

シオンの必死に絞り出した言葉。

それをアルトスはあっさりと踏みにじった。

嘲るように鼻で笑う。

【お気に召さんか？ だが、我も意見を違えるつもりも無い。——
お前の兄は、伊織タカトは、どこまでも滑稽な、哀れな木偶人形だ】
「っ—————！」

その一言で、漸くシオンは悟る。

こいつは”イクスじゃない”。

記憶や人格は同じでも、全く違う存在だ。

元より彼自身もそう言っていた筈だ。

自分は今更ながらにシオンは無い。

騎神、アルトス・ペンドラゴンだと。

それを今更ながらにシオンは悟った。

だから！

「もう、いい……！ お前は――」

震える声で刀を構える。

そこに渾身を込めた。

一度目を閉じ――、開く。

そして一言だけを呟いた。

「ここで、終われ……！」

【ほう……】

それまで詰まらなそうにしていたアルトスが少しだけ表情を変えた。

シオンの、紛れも無い殺気を浴びて。

口端を少しだけ歪め、笑う。

こちらもカリバーンを構えた。

【いい気迫だ。ならば、見せてみる。その言葉通りに――】

ぐっと互いに踏み締めた足に力を込める。

互いに視線の圧力に場が軋み出した。

物理的な現象にまで昇華しかかっているのだ。互いの殺気が。

そして。

【――俺”を、殺してみせろオッ！】

前に、出る！

互いに必殺の意思を持って駆け出した。

刹那に互いを間合いに入れる。

シオンは孤を描くように刀を振った。

「四ノ太刀！ 裂波ア！」

一塵！――

吠える一言と共に放たれたるは空間振動破。

しかも元来の破壊振動破である。

これに触れば、ただでは済まない。

シオンの破壊的な意思を具現化したが如く破壊振動破は収束し――
――！

【ムンっ！】

一斬！――

真っ向からぶった斬られた。

先の剣牙、双牙同様一刀両断に伏せられる。

――だが、シオンの狙いは裂波では無かった。

裂波はただ一つ。

アルトスを一瞬だけでも硬直させるためのもの。
故に、シオンは止まらない。

身体を弓でも引き絞るかのような刺突の構えを取る。

同時、零落零無を発動した魔力を身に纏った。

放つ！ 矢を解き放つかのように、一気に前へと突き出た――！

その名は！

「伍ノ太刀――！」

【ぬうっ！？】

初めてアルトスの顔色が焦躁に染まる。

しかし、もう遅い！

ほぼ零距离から放たれたこの一撃を、回避も迎撃するにも時間が
足りない過ぎた。

そして、防御は意味を成さない！

シオンもまた迷わず、それを放った。

「剣魔アっ！」

――轟！――

――裂！――

神覇伍ノ太刀、劍魔。魔力を纏いて突撃するこの技は、防御と攻撃を両立させ、同時に凄まじい突破力を誇る。

アルトスの突撃にも負けず劣らずの、だ。

至近でそんなものを発動されては一たまりも無い。

至近距離で放たれたそれはアルトスを蹂躪せんと、一気に襲い掛かり――。

【ぬ、あ……！】

――それでも、やはりアルトスは凄まじかった。

無理矢理カリバーンを引き戻すと、刀の切っ先を受け止める！

しかし、肝心の魔力を纏った突撃はどうにもならなかった。

そのままアルトスは、劍魔を纏うシオンに押し切られる！

地面を足で削りながら一気に数百mも後ろに下がった。

このまま行けば、アルトスはカリバーンを弾かれ刀は彼を貫くだろう。

則ち、シオンの勝利である。

――そう。

”普通”ならば。

ぎりっぎりっとな押し合う刀とカリバーン。

既にアルトスの眼前まで迫った刀だが――。

それが押し返されていた。
ゆっくりと、だが確実に。

シオンの顔が本日何度目か分からない驚愕に染まる。
アルトスはその目を真っ直ぐに見据えた。

刀が、どんどん押しやられる。

シオンもどうにか踏ん張ろうとするが、もの凄い力でそれも出来なかった。

やがて、互いの中心まで刀は押し戻され――。

アルトスはいっと笑った。

【この程度か……！】

「う……！ うう……！」

シオンが呻きとも悲鳴とも取れない声を漏らす。
渾身の力を込めているのだろう。

だが、それでも。それでも――。

足りない。

どうしようも無い程に力が足りない――！

纏っていた魔力が消える！

同時にアルトスが吠えた。

カリバーンが一気に押し込まれる！

【ぬるいわぁっ！】

—轟!—

次の瞬間、シオンは押し込まれたカリバーンに一撃され。

地面に激突!

新たなクレーターを再び作り、そこに埋没した。



シオンを打ち倒し、アルトスは一つだけ息を吐いた。

長く、緩く。

嘆きのため息か——、それとも喜びのため息か。

それは分からない。

ただ、息を長く吐き切ると彼は鞘を現出させカリバーンを納めた。

【——終わりだな】

それは何を意味するものか、それすらも分からない。

ただ彼は一度だけ主であった少年を振り返った。

主、神庭シオンは先の一撃で気絶でもしたのかぴくりともしない。
アルトスは暫く黙ってそれを見ると、背を向けて歩き出した。

もう、用は無いとばかりに。

そして。

「……待、てよ」

か細い声が耳朶を打った。
アルトスの歩みが止まる。

その背中に声が届いて行く。

「待て……！ イクス……！」

【我はもう、イクスカリバーでは無いと何度も告げた筈だが？】

アルトスは嘆息しながら、しかし振り向かないままにそう言った。

それを地べたに這ったままシオンは聞く。

ぎりつとまた歯ぎしりが鳴った。

「うるっせえ……。俺にとっちゃあ、お前はイクスの、まま、なんだよ……」

呻くような、消え入るような声。

それをアルトスは黙って聞く。

シオンは更に続けた。

「どこ……行く気、だよ……？」

【――さあな。貴様に告げなければならない義務は無い】

あっさりと、アルトスはシオンに告げる。

それにシオンは身体を震わせながら立ち上がろうとして――。

――でも、失敗した。

再び地面に崩れ落ちる。

アルトスはそれを待っていたかのように歩き出した。

「待……て」

声は聞こえて来る。

でもアルトスは構わない。

「待て……よ……」

どんどん遠くなる声。

でも絶えず響くそれに、アルトスは構わない。

「待て……て、言っただろオ！」

遂には叫び声になった。

アルトスの歩みが――、止まる。

「……なんでだ？」

その背中に。

「なんで、……いつも、いつも、俺の憧れた、人は……」

シオンの声が、涙を流して訴える声が。

「みんな、俺を、置いて、行くんだ……？」

どこまでも、どこまでも切ない声が。

「なあ……！ イクスう——！！」

届いて、行く。

涙声に濡れた叫び声がアルトスに。イクスであった彼の耳を打って響く。

だけど彼は振り返らなくて。

「寂しく、ない、の、かよ……？」

でも歩みを止めたままの背中に、シオンの声は響き続けた。

「嫌じゃ、ないのか、よ……？」

問う声が重なる。

それは、最初の”なんで？”

シオンがずっと問い掛けていた事。

そしてアルトスが黙殺した事だった。

シオンは今、それを言葉に出して訴える。

けど、彼は振り向かなくて。

——そして。

「俺は……っ！ 寂しいよ……。嫌だよっ！ なぁ……。！ イクス
う！」

【寂しいさ】

叫びに答えが返って来た。
思わず呆然とするシオン。
それにどこまでも構わず、彼は。
アルトスは振り返った。
その顔に浮かぶのは、笑み。

寂しそうな、嬉しそうな。
そんな笑顔。

【寂しいし、嫌だと思う。——お前と離れるのを辛いと感じる。けど、それでいいんだよ】

呆然とし続けるシオンにアルトスは笑い掛け続けていた。
それは、ずっとシオンが見続けていた。彼の笑顔。
アルトスでは無く、イクスとしての笑み。

【そう思えるなら、いつかきつと。また会えるさ。そして、お前も
そう思うなら——、シオン。俺の真名を見つけれ】

「真、名……。？」

呆然とし続けるシオンは、言われた単語を繰り返す子供のように。
同じ言葉を繰り返して問う。
アルトスはそれに頷いた。

【仮名であるイクスカリバーでは無い。人であった頃の名であるアルトス・ペンドラゴンでも無い。——真に剣としての俺の名だ。……それが分かった時、俺はお前の前に立つ】

その時こそ——。

そう言おうとして、でもアルトスは首を振って止めた。

まだ呆然としたままのシオンに微笑む。

それは、本当にイクスであった彼の笑い。

そして——。

【だが、それでも言わないとな。——いや、違うな。だからこそか、けどでも、けどでも無く。また会えると祈りを込めて】

微笑みが苦笑に変わった。

一度だけ空を見上げて笑う。

そのまま、アルトスは告げた。

——別れの、言葉を。

【だから、さよなら】

そうして。

そうして、彼は消えた。

カムランの丘と共に。

神庭家の庭に戻って来たシオンはただただ、座り込んでいた。

そこに、アルトスの――、イクスの、姿は、無い。

ただ、シオン一人だけがそこに居て。

「なんでだ……?」

告げる問い。

しかし、もう答える存在はそこにはいない。

「なんで、だ……?」

繰り返される問いは意味が無い。

だって答えてくれる人はもうどこかに行ってしまったから。

それでも、それでも彼は続けた。

何度も、何度も。

泣き続けながら続ける。

でも、答える声は、どうしようも無い程に遠い。

距離的にも、精神的にも。

だから。

「なんでだあああああああああああああああ――――――
!?!」

シオンはありったけの全力を込めて吠えた。
空に浮かぶ月に届けよとばかりに。

そうして、ずっとその場で泣き続けた。

イクスカリバー、主。神庭シオンに謀反。
グノーシス及び、アースラを脱退。

まつろわぬ神に、認定。

その報は翌朝、グノーシスにもアースラにも衝撃を伴って伝えられる事となったのであった。

（第五十一話に続く）

第五十話「だからさよなら」(後編)(後書き)

「イクス、否、アルトスが去った事について話し合う一同」

「シオンの様子から彼のE.U.行きの延期をアースラチームは嘆願するが、トウヤは何故か聴き入れる事をしない」

「その理由とは――」

「一方、沈むシオンの前に彼が再び現れる」

「彼と交わす会話にシオンは――」

「次回第五十一話

『行き交う道筋』」

「少年と青年は向かう、それぞれの場所へ」

第五十一話「行き交う道筋」(前編)(前書き)

「そう言えば、いつ以来だろう。あの人と喧嘩をしたのは」

「トウヤ兄いとはしょっちゅう喧嘩していた――、……虐められていたとも言うけど、していたのに。あの人とは喧嘩らしきものを、俺はした覚えが無い」

「俺があの人に復讐しよう等と勘違いの末のボケた決意をした後は、喧嘩とは到底呼べないだろう」

「あれは殺し合いと言うべきである」

「……あの人が幼少期は一切手加減出来ない。喧嘩ですらも命賭けだった事もあるんだろうけど」

「――それでも、俺はあの人と喧嘩をした事が無い」

「無いんだ――」

「魔法少女リリカルなのはS t S，E X。始まります」

第五十一話「行き交う道筋」(前編)

第三十二管理外世界。

無人世界であるこの世界を航行する次元航行艦があった。
ツアラ・トウ・ストラの艦である。

だが、今この艦は一つの静寂に満ちていた。

搭乗員全員が意識を失っていると言う静寂に。

通路や部屋、機関室。そして、武装局員や一般局員。
魔導士、それら全ての区別を問わず、床に転がされていた。

誰一人として死んではない。

そう、”死んでは”。

全員、傍目からは生死の判断が付かない状態では生きているのも死んでいるのも大差はない。

少なくとも一生ものの後遺症を約束された程の目に合わされている人間は、死ぬよりマシから死んだ方がマシに区分されるべき存在であろう。

それを平然と成し遂げた襲撃者は、艦の中枢たるブリッジに居た。

そこに居た管制官や操舵士も当然のごとく叩き潰されている。

そして艦の責任者たる提督は、襟首を掴まれ右腕一本で吊し上げ

られていた。

どれほどの臂力がそこに込められているのか。

だが、襲撃者は――。

――伊織タカト。

彼は、男一人を吊り上げているにも関わらず平然とした顔をして
いた。

いや、むしろ面倒臭そうな顔か。

どちらにしろ、こんな状況でするような表情では無い。
だからか、提督は彼をぎょろりと見据えるなり吠えた。

「この……！ 悪魔め……！」

「よく言われる。まあ、そう褒めてくれるな」

決して賛辞ではあるまいそれを聞いたにも関わらず、タカトはそ
んな事を言う。

彼にとってみれば叩き潰す存在からの罵倒はむしろ賛辞に聞こえ
るらしい。

そんな彼に、唾を吐きかけようとして。

しかし襟首を掴まれ、顔を強制的に上へと向かされた状態ではそ
れすら出来ない。

忌ま忌ましそうに呻いた提督にタカトは笑った。

「こちらとしては、くだらん真似をされた意趣返しだ。貴様達に文
句を言われるような謂れは無い」

艦の乗組員を全員叩き潰しておいて言う台詞では無い。

が、その台詞に提督は苦々しく顔を歪めた。

そう、この艦は先ほどストラの特殊部隊『ドッペル・シュナイデ』の三人を回収した艦なのだから。

つまり、タカトを墓場で襲撃した第二世代戦闘機人達三人を。

まさか三人を回収した時の転位反応を辿られて、この艦に直接仕返しを掛けられるなぞ夢にも思っていなかったのだが。

提督の反応にタカトは笑いを消した。

「さて。では、いろいろ教えて貰おうか」

「ぐ……！ 拷問などされても私は何も知らん！」

「残念だが、それを判断するのは俺だ。貴様では無い」

聞く耳持たず。

タカトは提督の言い分をばっさりと切って捨てる。

そのまま吊り上げた腕の角度を上昇させ、冷たく聞いた。

「貴様達の目的は何だ？ ヴィヴィオを掠おうとしたかと思えば、シオンを掠おうとし。あげくは俺か？ わざと難易度上げているなら大したものだが――。俺達を掠って何をしようとしている？」

「知ら――」

ん、とは言えなかった。

その前に枯木がへし折れたような音が鳴り響く。

タカトが自分の左手の小指を掴んで折ったと気付いたのは数秒後の事だった。

悲鳴が上がる。

タカトは当然構わなかった。

「言い忘れていたが、『知らない』『分からない』は聞かんで、その積もりでいてくれ。後、無言も三秒以上続けると、その時点で指を折っていくのでその積もりでいろ」

「が……！ こんな事をして、貴様、ただで済むと……！？」

「拷問は犯罪か？ 別に構わん。俺は既に第一級の次元犯罪者らしいしな」

基本的にタカトは捕虜を取らない主義である。

生かして捕らえるような真似をあまりしないのだ。

それをする場合は、単純に聞きたい事をその場で聞く場合のみに限る。

つまりは、その場での拷問であった。

顔色が青く変わっていく提督を見て、タカトは薄く微笑んだ。

続ける。

「では、もう一度聞こう。俺達を掠おうとした理由は？」

「う……うう……！」

一秒待つ、答えない。

二秒待つ、答えない。指に手を掛けた。

三秒、――再び悲鳴が上がった。

「く、あ……！」

「余程その指、いらんと見える。——いつそ、切り落とすか」

それでも答えようとしないう提督に、タカトは混じり気無しの本気で呟く。

更に顔色が青くなる提督。

——だが、それでも答えようとはしなかった。

タカトの眉が訝しむように細められた。

本当に知らない。その可能性もあるだろう。

だが、ここまでされても黙秘を貫くものか？

それも、対拷問訓練を受けた事も無さそうな人間が？

ストラにここまでの忠臣がいるとは、意外であった。

それと同時に気になった。

拷問に耐える、その理由に。

「では、別の質問にしよう。——貴様達の目的は何だ？」

「私たち、の目的、だど？」

「そうだ、貴様達——。ツアラ・トゥ・ストラのだ」

ストラの目的は全次元世界の制覇にある——。

タカトはそんな世迷い言を信じるつもりは無かった。

はっきり言ってしまうは無理がある。

何故ならば、現在”見つかっていない”次元世界がごまんとあるのだから。

管理外世界と言う意味では無い。

そもそもとして見つかっていない世界だ。

そう言った世界が介在するのに、全次元世界の制覇が目的？

矛盾点を論じるまでも無く不可能である。

故に、ストラが声明で言い放った目的をタカトは頭から信じていなかったのだ。

「我々の、目的は、全ての世界を……！」

「制覇するつもりなぞ言うまいな？ そんな戯言、信じるつもりは無いぞ？」

管理内、管理外世界などの発見された世界限定ならまだ信じる余地はあったがな。

そうタカトは続けようとして。

でも、出来なかった。提督が笑いを浮かべたから。

タカトの目が細められる。

「――何がおかしい？」

「はっ、はっ、はぁ……！ これが、笑わずにいられるか！？ まさかそこまで知らなかったとはな！」

まるで一つ一つの笑いに渾身を込めるかのような笑い。
心底タカトを嘲るような笑いである。

吊り上げられた自分が勝者であるかのような。

タカトの目を見て、提督は笑い続けた。

「――言え。貴様達の目的は何だ？」

「ふ、くく……」

「殺すぞ？」

目が細められる。

混じりっ気無し、本気でそれを行うと言う証でもある。

同時に激烈な殺気――。

――それだけで、世界が軋みを上げるそれを提督は受ける。

だが、それでもこの男は笑って見せた。

あるいは、こちらの拷問に耐える事でこの男は快感を覚えているのかも知れない。

SとかMとか、そう言ったものでは無い。

こちらがそうまでして必死に聞き出そうとしている事を、例えば死のうが抵抗し続ける事で一矢報えると言う快感だ。

「……私には一人の娘がいる」

「……………」

「リリアナという。……可愛い娘だな。遅くに授かった娘だから、とても大切に出来た」

「貴様の身の上話なんぞに興味は無い」

タカトはあくまでも冷淡に答える。

だが、提督は構わず続けた。

いや、一人の父親は。

「……不安なのだよ。娘が不幸になったりしないか」

「……なんだと？」

「犯罪に巻き込まれたりしないか？ なんらかの事件に巻き込まれたりしないか？ 誰かに殺されたりしないか！？ ……不安、なのだ」

タカトは提督の言っている事が寸分も分からなかった。

だが、必死に何かを訴えている。

それだけは分かった。

「……だとするならば、皮肉だな。そんな心配をした父親がテロ行為か？ さぞ娘も悲しんでいる事だろう？」

「別にいい」

——その返事に、タカトは思わず呼吸を止めた。

今、この男はもっとも大事にしていると言う娘に忌み嫌われる事に対して、何と言ったのだ？

目を見開いたタカトに、提督は笑う。

「別に、いい」

「——何故だ？ 何故そう思える？」

「ははは……！ ならばこちらから聞こう。何故、そう思えない？」

逆に問われる。

提督の嘲笑うかのような表情がカンに触る。

タカトは表情を消して答えた。

「……質問しているのはこちらだ」

「答え、られないか！？ はははははあ！ 滑稽だな……！ 天下

のナンバー・オブ・ザ・ビーストがこんな事も分からないのか!？」

本当に滑稽だ。

そう提督は笑い続けた。

どこまでも、どこまでもタカトを嘲笑い続ける。

いい加減に苛立ちが頂点を迎えかけた。

襟首を掴んでいる指に更に力を込める。

嘲笑い続けた提督の呼吸が止まった。

それでも笑い続ける。

……タカトは指の力を緩めるしか無かった。

「……ふ、あ、あ、は、はは、ははは！ 殺せばよかったものを…

…！」

「……………」

タカトはやはり無言。まさか、約束があるから殺せ無いなどとは言えない。

それは、タカトにとって敗北を認めた事になるから。

提督は未だ吊されながらも笑いを止めなかった。

そして。

「我等の目的とは何かと貴様は聞いたな……」

「……………」

いきなり語り出した提督に、タカトはまたもや疑問符を浮かべた。ここに来て、いきなり自分達の目的を話し出した彼に。

命が惜しくなったか？

いや、違う。

この男はそんなタイプでは無い。
なら、どういう――。

思考を巡らせるタカトに提督は再び笑った。
どこまでも、どこまでも人を嘲る笑い。

それがタカトの目に焼き付いて――。

「我等の目的は――！」

直後、提督が動いた。右手がズボンのポケットに突っ込まれる。
そこから出たのは――。

――拳銃、だった。

グロック17。

第97管理外世界、地球において有名な自動少拳銃である。
当然、管理局の嫌う質量兵器にあたる訳だが当の管理局に争いを
吹っ掛けた彼等が、そんなものを気にする筈も無かった。

提督は引き抜いたそれを、迷う事無くタカトの額に突き付ける。
――が、タカトはそれに冷たい視線を向けるだけだった。

彼からすれば、拳銃など撃たれてから避わせる程度のものでしか無い。

もし避けなくても、ハンドガンならば金剛体でいくらでも弾ける。

そんなものをタカトが恐れる要因はどこにも無かった。

一弾！一

乾いた、軽い炸裂音が鳴る。

拳銃から響いた火薬式の銃声はわりと地味な音だった。

タカトはそれに対し、身体ごと逸らす。

右半身になるようにして、半歩を後退。

それにより、頭一つ分右にズラしたのだ。

結果、回転する銃弾が左の頬を掠めて通り過ぎる。

それを尻目で確認し、提督へと視線を戻して――。

――絶句した。

タカトに向けられていた筈の銃口。

それが移動していたから。

提督自身のコメカミに！

彼は自ら銃口をそこに押し付けていた。

その顔に浮かぶ表情に恐怖は無い。

ただ、嘲っていた。

タカトを誰よりも、世界中の誰よりも彼は嘲笑っていた。

その嘲笑のままに吠える！

「――」 全次元世界の人類から全ての争いを無くす事だ」！
「な……」

その言葉に、タカトは息を止め――。

――次の瞬間、引き金は引かれた。

一弾――

待てとも言えなかった。

ただ目の前で彼の頭が弾けた。

それだけ。本当に、それだけで。

彼は死んだ。

負傷の具合を見るまでも無く即死である。

タカトは呆然と、もはや肉塊と化した男を見る事しか出来なかった。
た。

やがて、彼を下ろす。

――悔しそうに呟いた。

「……勝ち逃げか、卑怯者め」

死んだ彼の口は、ただ嘲笑いの形のままであった。
最後の最後まで彼はタカトを嘲笑い続けて死んだ。

それは間違いなく、タカトにとって負けであり。

——そして、二度と勝てない。

もう、彼は死んだのだから。

そう言えば名前も聞いていなかったなど、タカトは一人ごちて。
やがて提督に背を向けた。

「全次元世界の人類から全ての争いを無くす……？　　どう言う意味だ？」

もう答える存在はいない。

それを分かっているが問う。

当然答えは返って来なかったが。

タカトは嘆息すると、近場の管制官を退かして端末を弄る。

ウィンドウが展開した。

端末を操作し、艦のデータベースから情報を探る。

しかし、ろくな情報は出なかった。

あるのは簡単な指令や、補給計画等々である。

片っ端からファイルを開くがどれも似たようなものだけ。

タカトは嘆息し、諦めようとして——。

妙なファイルを発見した。

一見なんてことは無いファイルに見えるが、これは――。

「一度、データが破棄されている？ ……そうか、俺が来た時点で漏洩を避ける為に破棄したのか……」

納得する。が、それはつまり、データを復元しない事には見れないと言う事である。

そしてタカトには、まともな方法で破棄されたデータを復元する事もサルベージする事も出来なかった。

そう、”まともな方法ならば”。

タカトは端末から離れると、いきなり右腕を上げた。掌を中心にして幾何学模様の魔法陣が展開する。

中央に浮かぶは666の紋章！

つまりは――。

一煌一

虹色の光が帯状に魔法陣から飛び出す！それは迷い無く、端末へと突き刺さった。

情報、強制略奪完了。

データベースから各情報をサルベージ。

復元、開始――。

この間、数秒足らず。

それだけでタカトは破棄されたデータを復元してのけた。

『重要案件項目』と表示されたデータを展開する。

そこにはずらりと情報が並んでいた。

現在のストラ次元航行部隊の展開状況。

現状における占拠完了した管理内、外世界。

各、次元世界の侵略計画――。

出るは出るは。

管理局の人間ならば、口から手が出る程に欲しがりそうな情報がそこには並ぶ。

――しかし、当のタカトが欲っしていた情報はどこにも無かった。ストラの目的は分からず仕舞い。

結局、骨折り損か――。

今度こそは諦めてタカトは嘆息して――。

そのまま息を止めた。

「……なんだと？」

思わず問い掛け、展開した情報に視線を釘づけにされる。

そこにはこう書いてあった。

『第一管理内世界、ミッドチルダ”殲滅”計画』

……そう、書いてあった。



第97管理外世界、地球。

グノーシス月本部『月夜』、ブリーフィング・ルームに集まる一同の姿があった。

アースラチームの一同。

そして、アースラへと出向されていたグノーシス・メンバーである。

それと後二人。

叶トウヤと、ユウオ・A・アタナシアが並んで座っていた。

その中で唯一いない人物が居る。

昨夜、デバイスであり師匠である存在。

イクスカリバーに離反された神庭シオンが。

彼だけが、この場に居なかった。

だが、トウヤは一切構わず場を進める。

「……以上が、君達に行ってもらう予定の各地域だ。そこで、アースラの皆のデバイスをロスト・ウェポンへと改造。N2Rの皆は専用D Aを受領してもらう。——何か質問はあるかね？」

トウヤは展開したウィンドウを背に、皆に聞く。
そこには以下の通りに各自の行き場所が記されていた。

月本部、『月夜』

八神はやて。

リンフォース2。

シャマル。

ザフィーラ。

クロノ・ハラオウン。

他、アースラチーム。各ロングアーチ、ならびにアースラスタッフ。
フ。

グノーシス出向組一同。

日本、極東支部。

高町なのは。

フェイト・T・ハラオウン

ヴィータ。

シグナム。

アギト。

中国、大連支部。

チンク・ナカジマ。

ノーヴェ・ナカジマ。

ディエチ・ナカジマ。

ウエンディ・ナカジマ。

EU、イギリス支部。

ギンガ・ナカジマ。

スバル・ナカジマ。

ティアナ・ランスター。

エリオ・モンディアル。

キャロル・ル・ルシエ。

姫野みもり。

……神庭、シオン。

——そう、書かれていた。

最後に書かれている名前を見て、一同は目を伏せる。
やがて、おずおずとスバルが手を上げた。

トウヤは頷き、質問を促す。

「どうぞ、スバル君？」

「……その、シオン、なんですけど……」

思わずしどろもどろになる。
だがそれだけでここに居る皆には通じた。

EU行きとなっているシオンだが。
果たして彼は行けるのか？

そう問うているのだ。スバルは。
さにあらん。今、出席していないシオンは部屋に閉じこもったままなのだから。

余程、イクスが離れたのがショックだったらしい。

しかもそれだけでは無かった。

「それに、イクスの事だって――」

「あれの事ならもう決定している筈だよ？ スバル君」

最後まで言わせずに、トウヤは質問を切って捨てた。
思わずたじろぐスバルにトウヤは冷たく告げる。

「イクスカリバー、否。『騎神、アルトス・ペンドラゴン』『まつろわぬ神』に認定。グノーシスはこれを”殲滅対象にする――”」
「納得出来ません！」

トウヤが淡々と話す台詞に、遂にはスバルが叫び声を上げる。
それは、アースラ・メンバー一同を代表する言葉であった。

イクスが離反したと言うのだけでも混乱しているのに、グノーシスは即座に彼を殲滅対象にしたのだ。

僅か二ヶ月程度とは言え仲間だった存在である。
到底、納得出来る筈は無かった。

「なんで、なんですか……!?!?　なんでそんな風に――!」

「『まつろわぬ神』

これがどう言った存在か、私は説明した筈だね?」

だが、そんな一同にトウヤは変わらぬ冷たさで答える。

それに、スバルがぐっと押し黙った。

『まつろわぬ神』

グノーシスにおいては、アンラ・マンユ因子感染者と同じくして殲滅対象とされる存在。

否、”次元災害”である。

それは、何故か――。

「先にも言ったように、『まつろわぬ神』とは世界が神話やおとぎ話を骨子にして偶発的に発生させる概念存在だ。――その霊格は当然、神位。しかも、大概是発生してから周囲に被害を撒き散らす存在ばかりでね?　彼等の出現で、次元世界がいくつ滅びたか教えられるかね?」

「そんなの……!」

スバルがトウヤを睨み付ける。

いくら『まつろわぬ神』と言う存在が危険だろうと、イクスがそんな存在だとは思え無かった。

少なくともアースラの面々は納得していない。

だが、”彼等”は違った。

トウヤと、……グノーシスの面々は。

「なんで、なんですか……！　なんでそんな風に、イクスを……！？」

「……私達は、『天使事件』を経験しているのでね」
『っ！？』

トウヤが告げた言葉――。それに、スバルを始めとした皆は一斉に身を固くした。

そんな彼女達を変わらぬ冷たい視線でトウヤは続ける。

「『天使事件』。かつて地球近隣の世界で『まつろわぬ神』、『カバラの天使』が大量発生した事件だ。まあ、これは自然発生したものでは無く、人為的に発生させられたものだがね。……何故、今、『第一位直属位階所有者』が十代から二十代で構成されているか、分かるかね？」

「……………」

スバルを始め、数人が告げられた問いに首を横に振る。

他の者達は目を伏せていた。

トウヤが何を言わんとしているか分かったからだ。

彼はそんなスバル達に頷き、答えを告げた。

「”当時の位階所有者の約半分。五百名余りがこの事件で死んだからだよ”。グノーシス全体で言えば万を超える人員が犠牲になっている。……最強の個人戦闘集団を名乗る我等がだ。彼等が身を呈して守ってくれたおかげで、世界は一つも消える事は無かったのだよ」
『……………』

今度こそ。

今度こそ、スバル達は沈黙した。

沈黙せざるを得なかった。

トウヤ達がどれほど『まつろわぬ神』と言う存在を危険視しているか理解したから――。

――せざるを、得なかったから。

だが、それでも。それでも、納得出来ない。

イクスが『まつろわぬ神』だと言う証拠など何も無いではないか。

なのに、何故――。

しかし、トウヤはそれらの疑問を全て切って捨てた。

「なに、君達に協力しろなどとは言わない。あくまで、グノーシスという一組織が決めた事だ。君達、管理局の人間が従わなければならない道理はないよ」

「……それはつまり、自分達のやり方に口出しするなって事やろ？」

今の今まで黙っていた、アースラ艦長。八神はやてが初めて口を開いた。

……相当に辛辣な物言いと共に。

納得出来ていないのは彼女も同様と言う事である。

トウヤはそれに肩を竦める。

「その変わり、我々も君達のやり方には口出ししないよ。後は君達が決めてくれ。……さて、話が随分と脱線してしまったね。で？今のシオンの状況がどうかしたのかね？」

強制的に話しの軌道修正をトウヤは図る。

それに、やはりアースラ一同は納得行かないような顔となった。だが、いつまでもそこに固執する訳にも行かない。

スバルは本題へと話を戻した。

「その、シオン。今、すごいショックだと思うんです。……落ち込んでると思うんです。だから――」

話しながら、スバルは思い出ししていた。

朝方のシオンの様子を。

神庭家の道場で酔っ払って寝ていた一同の耳に飛び込んだのは、まるで怒号のような泣き声だった。

絶叫と言った方が正しいだろう。

酔いも一発で醒め、慌てて庭に向かうと。

彼女達はそれを見る事になった。

庭に跪いたシオンが、空に向かって咆哮するように泣き叫ぶ姿を。

尋常では無い様子に、近寄れ無かった程である。

そんな一同を置いて、一人トウヤが進み出ると強制的にシオンを眠らせたのである。

結局、シオンはそのまま部屋に閉じこもり。

全ての事情はトウヤの口からしか聞いていない。

ただ一つだけ理解出来た。

今のシオンを、とてもでは無いがE.U.になど連れて行けないと言う事である。

……せめて、立ち直るだけの時間を上げて欲しかった。
なのに――。

「出発が”明日”だなんて……」

――そう言って、スバルは目を伏せた。

そう、明日なのである。

アースラ一同のデバイスを改造すべく各地に散るのは。

つまり、このブリーフィングは本来、最終確認の為のものだったのだ。

だがそれも、このような事態になってしまい最終確認の為のブリーフィングどころか、アースラとグノーシスで反目一步手前の状況になってしまったのである。

なんと皮肉なものか。

だが、今はそれを嘆いている場合では無い。
スバルはトウヤに再び視線を戻した。

「……せめて、数日だけでも延期を――」
「却下だ」

即答が来た。

皆まで話させない程のそれが。

あまりの即答にスバルが開いた口をぱくぱくさせる。
トウヤは反論される前に続けた。

「一個人の問題に、組織のスケジュールを左右されていい訳があるかね。シオンが立ち直れぬようならば、置いて行くまでだよ。幸い、向こうには安内人も居るし――」

「トウヤさんっ!」

遂に、スバルは激昂した。

身体を震わせながら彼を呆然と見開いた瞳で見遣る。

それにすら、トウヤは冷たい目を向け続けた。

「――シオンが、心配じゃ、無いんですか……?」

「言いたい事はそれだけかね? では、先の提案は却下する」

「――トウヤさんっ!」

今度はスバル一人だけでは無かった。

アースラメンバーが、皆一斉に立ち上がる。

だが、トウヤはどこまでも一切構わなかった。

「――ブリーフィングは以上。明日は、07…00時に集合とする。

では、解散」

『ッ……!?!?』

容赦無く解散を告げるトウヤに敵意にも似た視線が集まる。

それにトウヤは少しだけ微笑した。

思ったよりも人望のある異母弟に。

やがて、ぽつりと呟いた。

「――賽は投げられた」

『……………?』

小さな声だったが、静かになったブリーフィング・ルームにそれは大きく響く。

今度は視線が別の意味となるが、トウヤは構わない。
席を立ちながら、呟き続ける。

「後は奴次第。このまま腐るか。それとも――。アルトスの真意に、
気付くか」

「トウヤ、さん？」

「心配していないか？　そう、私に聞いたね？　スバル君」

出口に向かいながら、笑う。

それはあまりに当たり前の笑みで。

今日始めて、彼は明確に微笑んだ。

そのまま、扉から出る。

――たった一言だけを、その場に残した。

「心配？　まさかね。有り得ないよ。――アレを誰の弟だと思っ
てゐる？」

そんな、もう一人の異母弟と全く同じような一言を残して。

トウヤはブリーフィング・ルームから歩き去って行った。



さわさわと秋風が吹く空の下。

彼は一人で歩いていた。

神庭シオンは。

ぼけっとした顔で街中から外れた場所を歩いている。

——あるいは、それで良かったのかも知れない。

こんな表情で街中を歩くと、それだけで気味悪がられそうではある。

なにしろ、彼は歩いていた。

——先程までは部屋に閉じ籠っていたのだが。

「……………」

無言で歩くシオンの頬を優しく風が撫でて行く。

でも、シオンが欲しいのはそんなものじゃ無かった。

シオンが欲しいのは、横から響く。

厳しく、無愛想だが。確かな優しさを込められた声。

——相棒の、声だった。

でも、それはもう聞こえない。

彼は遠くに行ってしまったから。

「……………」

無言で歩く、歩く——。

やがて、シオンは表情の消えた顔でなんとなく横にあるものを見

上げた。

神社、である。

長い階段がシオンの目の前に聳えていた。

しばらくシオンはそれを黙って見つめて――。

――いきなり、階段めがけて駆け出した。

一気に駆け上がる！

何段か飛ばしながら、走ると境内にあっさり到着した。

「……………」

シオンは無言。

息を切らしてすらいない。

日頃の修練の賜物である。

――もっとも、今は欲しく無いものではあったが。

……俺、何してんだろ……。

思わず自分に聞いてみる。

傍から見ると凄まじくアホな事をしているような気がした。

……だが、それもすぐにどうでも良くなった。

1番上の段に座り込む。

そのまましていると、すっかり涼しくなった風が通り過ぎて行った。

気持ちのいい風である。

しかし、もう十一月である。

これも、すぐに寒くなる事だろう。

アレの事を考え無いように。そんなどうでもいい事を考えながら、シオンは階段の上に座り込み続けた。

……気晴らしに出て見たけど、意味無いか……。

そんな風に思いながら、こてんと石畳に横になる。

服が埃っぽくなるだろうが構う事は無かった。

階段は雑木林に囲まれていて、当然。シオンの真上にも枝を伸ばしている。

それが太陽を遮っているのをなんとなしに見遣り――。

――目を閉じた。

このまま寝て。

起きれば、全て夢だったなんて事は無いだろうか？

そう思い。でも、心の中ではあっさり否定する。

そんな都合のいい事なんて有り得ないと。

イクスが離れた事は、どこまでも現実だと。

そう、シオンは自覚している。

それでも、シオンは認めたくなかった。

だけど、何をしたらいいか分からなくて。

分からない、分からない、分からない。

分から、ない。

あの時と一緒にだな、と。

思わず苦笑が零れた。

――雫も、共に。

そして。

「本当に、お前の泣き虫は治らないな……」

声が、した。

どこまでも聞き覚えのある、声が。

声も出せない程に呆然とするシオン。

あるいは、本当に夢か？

そう思いながら目を開いた。

そこには声の主が居た。

こちらを相も変わらぬ無愛想な顔で眺め見る。

彼は――。

「タカ、兄ィ……？」

「いい加減、その泣き虫は治さないとな。シオン」

そう笑いながら、彼はいつかと同じ言葉をシオンに告げた。

伊織、タカトは。

——風が優しく凧ぐ中で、まるで幻のように彼はそこに居た——。

（後編に続く）

第五十一話「行き交う道筋」(前編)(後書き)

……はい♪

ども〜♪ テスタメントです♪
お久しぶりでございます♪

早速ですが――。更新遅れて申し訳ありません(汗)
いや、ちよつとスランプ気味なのか。
文章がすらすらと書けなくて(汗)

いや書けない事はないんですが、妙な所で筆が止まる事が多くて
(汗)

むう……。

しばらく執筆ペースが落ちるやもしれませんが(汗)
ご容赦下さい(汗)

では〜♪

第五十一話「行き交う道筋」(後編)(前書き)

……ど、ども――。

て、テストメントです♪

体調が未だ完調していませんが、漸く五十一話をお届けいたします。

本当はアリサ道場を書きたかったんですが。

うん、ギャグパートに頭が回らない(涙)

ですので、次にアリサ道場EX3を突っ込もうと思います。

人気投票もそこで、発表いたします♪

いや、本当はもっと途中発表とかしたかったんですが(汗)
流石に無理がありました(汗)

人気投票期日は一応、七月四日までと致します♪

まだ投票したい方は是非に♪

では、第五十一話。

どぞ〜♪

第五十一話「行き交う道筋」(後編)

さわさわと秋の風が枝を揺らす。

それを彼の背後に見ながら、神庭シオンは呆然としていた。

あまりに唐突に現れた彼、伊織タカトに。

タカトは薄く微笑みながら、シオンを見る。

その微笑みは、何故か妙に”優しく”て――。

タカ兄いが、”優しく”……？

思わず疑問符を浮かべるシオン。

その微笑みに、何故かぞくりと悪寒を感じて。

直後、その視界が黒く覆われた。

「っ!？」

一撃! 一

――身体が動いたのはまぐれだった。

慌てて身体を起こしたシオンの頭があった部分をタカトの足が打ち抜く。

その踏み付けは、容赦無く神社の敷石を踏み砕いていた。

「なん——!?」

何がなんだか分からずに、目を丸くしながら振り返るシオン。が、次の瞬間。シオンが見たものは踏み放った足を軸足にして突き蹴りを放ったタカトだった。

それは、迷う事無くシオンの鳩尾を打ち抜く!

一撃! —

「ぐっ、ふ……!」

胃袋をまるごとひっくり返すような衝撃が突き抜け、更にシオンの身体は後ろへと弾き飛ばされる。その後ろは、当然階段であった。

一瞬の浮遊感をシオンは覚え——。

——そんなシオンにタカトはその場でトンボを切った。宙にあるシオンへと前に回転しながら突っ込む! シオンが忘我の境で見たのは、頭上から振り落ちる踵——!

一破! —

打ち降ろされた踵は頭に直撃。シオンを真下に叩き落とした。

悲鳴を上げる間すら無く、石作りの階段に危険な音を立たせながらシオンは落とされ。

一回バウンドしながら、階段を転げ落ちた。

「あ、ぐ……！」

転げて、転げて――。

石畳の踊場にまでシオンは転げて、漸く止まった。
全身くまなく痛めつけられ、喘ぐ。

そんなシオンを階段に難無く着地したタカトは静かに見据えて、
ゆっくり下りて来た。

何も喋らずに。

シオンはやがて激しく咳込むと無理矢理立ち上がった。
全身痛くて、立ち上がるのも億劫おっくうだったが。
まさか、寝たままと言う訳にもいかない。

そして、ぎろりとタカトを睨みつけた。

「なにを、しやがんだ……！？ タカ兄い！？」

当然と言えば、当然の疑問をシオンはタカトに叩きつける。
いきなり踏み付けられ、蹴られ。転がされたのだ。
文句の一つも言いたくなくなるというものである。

タカトはそんな自分を睨みつけるシオンを変わらぬ目で見据えた。

口を開く――。

「八つ当たりだ」
「……………は？」

シオン自信が望み問うた答え。
しかし、それを聞いたシオンは思わず盛大に疑問符を浮かべていた。

タカトを怪訝そうに見る、が。彼は構わず続けた。

「昨日、少々ムカつく事があってな。で、苛々して当たれる対象が無いか探していた訳だが――。そしたらまあ、いかにも不様な顔をしたヘタレを見掛けたのでな。八つ当たりに肉質サンドバックにして殴ろうかと」

「……八つ当たり？」

「うむ」

何故か胸を張ってタカトは答える。

そんな彼を呆然と見ながら、シオンは震える指でタカトを差した。

「……その、俺に説教とかしに来た訳じゃなくて……？」

「何故俺がそんな真似をせねばならない？」

逆に聞かれた。

それに再びシオンは我を忘れる。

タカトは呆然としたシオンに歩み寄って――。

「ちなみに、まだ八つ当たりは終わっとらん訳だが」

「……………え？」

一撃！

なん、で……？

殴られながら、シオンは呆然とそう思う。

なんで、今。自分はぶん殴られているのか。
しかも凄まじく理不尽極まり無い理由で。

一撃！一

顔面に拳が叩き込まれる。

意識がそれで持っていかれそうになるが、続いて入った反対の拳
がそれを許さなかった。

あえて意識を刈り取らずに殴る。

そんな真似をタカトは続ける。

おそらくは、シオンを痛めつける。それだけで。

理不尽だった、理不尽過ぎた。

なんで、こんな目に合わなければならぬのか分からなかった。

イクスがいなくなって、辛いのに。

淋しいのに、なんで八つ当たり殴られなければならないのか。

分からない、分からない……。

が。

腹が立った。

目茶苦茶、腹が立った……！

だから！

「つぎけんなああああああああ！」
「む？」

殴られながら、タカトをギョロリと睨み。
渾身の力で殴り返す！

だが、それはタカトがただ後ろに下がるだけで空を切った。
拳を避したタカトは、しかし不満そうな顔でシオンを見る。

「こら。殴り返すな。肉質サンドバック。サンドバックはサンドバックらしく殴られろ」

「ふざけてろや……！ このクソ兄貴……！」

怒りで凄まじい形相になりながら、シオンはタカトに吠える。
唇を切ったか、ぺっと血を吐き出した。

「あー。キレた。キレました。クソツタレぼけ兄貴にボクキレました」

「口調がおかしくなっとるぞ？」
「どやかましいわ！？ 誰のせいだと思ってやがる！ ——取り敢えずは……！」

言いながら、踏み込む。
拳を持ち上げ、固く握り締めた。

……何故拳を構える？ 殴るために決まっている！

この、クソツタレ兄貴を！

「そのスカした面、殴らせろやああああ！」

叫びながら、拳を放った。

狙いは当然、顔面！

シオンの拳は真っ直ぐにタカトの顔、中心点に突き込まれ――。

しかし、当たる直前に顔を逸らされるだけで拳は再び空を切った。
更に今度はクロスカウンターで、シオンの顔面に拳が突き刺さる！

一撃！――

「――百年早い」

「っう……！！？ つせええ！」

カウンターを綺麗に決められ、一瞬だけ怯むもののシオンは諦めず
にタカトに襲い掛かる！

そんなシオンに、タカトは少しだけ笑い――。

「たわけ」

一撃！――

「がうっ！？」

その顔に再びカウンターを叩き込んだ。

それでも諦めずにシオンはタカトに突き進み。

しばし、打撃音が静寂な神社に木霊する事になった。



「あだだだ……！」

あれから1時間後、シオンの姿は再び石段の一番上にあった。

——ズタボロになった姿で。

あの後も悲惨だった。

殴り返した拳は全部空を切り。

変わりとばかりに顔面には好き放題拳を入れられた。

結局、シオンが気絶するまでその妙な殴り合いは続き、こうしている訳だが。

ちなみに気絶した後、速攻で起こされた。

——中指を手首まで反らすという気付け方で。下手に殴られるより遥かに痛い事は言うまでも無い。

ともあれ、これでシオンは跳ね起きた訳だ。

そして——。

「ふむ、すっきりした」

「……そりゃあ、あんだだけ殴りゃあすっきりもするだろうよ……！」

妙に清々しい笑顔なクソツタレ兄貴こと、タカトにシオンは無然とする。

結局、一発も殴り返せなかった。

それに腹が立ってしょうが無い。

そんな風にふて腐れるシオンにタカトは笑った。

「まあ、そう言うな。――ほら、これをやろう」

「ん？」

ひょいっと放られたものをシオンは思わず受け取る。

それはキンキンに冷えたコーラであった。

これで顔を冷やせと言う意味か。

取り敢えず、殴られまくった頬に缶を押し付けた。

「ああ……。ひやつこ……い」

思わずほお擦りしたくなる。

ふにゃふにゃと崩れた顔となるシオンにタカトは呆れたような顔となった。

「何に使ってもお前の自由だが――。温くなったコーラほどマズイものは無いぞ？」

「……………分かってますよーだ。へん」

ペーと、タカトに舌を出すと。シオンはブルトップを開けようとする。

それに、タカトが薄く笑った――。

「ちなみに、そのコーラだが――」
「うん？」

いきなりの台詞に、シオンはキョトンとなる。
タカトの笑いは深くなり、目が細められた。

嫌な予感がする。

シオンはその笑いに妙な悪寒を覚え――。

だが、既に遅かった。

無意識に、指はブルトップを開け。
それを完全に見て、タカトは続きを告げた。

「――」よく振ってある”。気をつけろ？」
「て、ぶわあ!？」

直後、どんだけ振られたのか。缶から噴水もかくやと言う量のコーラが吹き出す!

それはシオンの顔面に直撃した。

「ぐおおお! 冷たっ!? 染みる! ベとベとするう……!」
「カカカ……。八つ当たりが終わったなど、誰が言った?」

騒ぐシオンを自分はアクエリ阿斯を取り出して飲みながら愉快そうに笑う。

やがて、ぐっしょりとコーラで濡れたシオンはべたつく身体で立ち上がった。

「う、ふふ……！ お兄様あ……？ 素敵なコーラをありがとうございます
ございますコンチクショウ。ですので、お札に――」

「ぬ？」

ゆらりとオーラが漂いそうな顔でシオンはタカトに笑う。
それに、タカトは怪訝そうな顔となって。

「くらえ！ 愛の抱擁！ コーラ付き！」

「ぬお……！」

いきなりシオンが飛び掛かる！

タカトは珍しく焦りながら、それを避した。

脇を通り過ぎたシオンは階段に舌打ちしながら着地。
今度は上段になったタカトにじりじり近寄る。

「ふ、ふ、ふ……！ お兄様あ？ どうして愚弟めの愛の抱擁を避
すので……？」

「貴様……！ 血迷ったか……！」

不気味な笑いを浮かべながら近寄るシオンに、心底嫌そうな顔で
タカトは警戒しながら後退る。

流石に服がべた付くのは嫌なのだろう。
タカトにしてはこの逆襲を読めなかったのは珍しいミスと言える。

逆にアドバンテージを得たシオンはこれ以上ない程の笑顔でタカトに笑い掛けた。

「さあ、お兄様。一緒にべたべたになりましょうや。……死なばもろともに！」

「ちい……！」

叫びながら飛び掛かるシオンに、殴れず――。

――殴った手がべた付くからだ――。

――まあ、いかずにタカトは蹴りを放つ！

だが、シオンは異常な俊敏さでそれをかい潜りながらタカトの懷に飛び込んだ。

「とったあ！」

「ぬおおお……！ 貴様ああああ！？」

鳩尾目掛けてダイブを敢行し、見事成功。

ぐわしつと背中に手を回し抱き付く。

当然、シオンの身体に染み付いたコーラがタカトの服にも染み付いた。

「ぐおおおお……！ べたべたする！ 離れろたわけ！」

「はん！ 嫌なこった！ もっと染み付けてやる！ ぐりぐりい！」

「ぬうああああ……！ 気軽に洗濯出来ぬのに、貴重な私服があ……

……！」

こうしてささやかな復讐にシオンは成功しつつ、後できっちり殴られ。

兄弟喧嘩は終わったのであった。



「……この、たわけが……！」

「……元を正せばあんたのせいだろ！ 自業自得だ！」

恨めし気なタカトの言葉に、シオンは叫び返しながら桶に汲んだ水を頭から被った。

あの後、この神社の巫女さんに騒いでいる所を見付かる事となり。お説教を一発喰らった後で、裏の井戸を借りたのだ。

巫女さんは『風呂も沸かせますよ？ 入ります？』と、言ってきたが。流石にそれは憚られたので丁重に断ったのだが。

「にしても、タカ兄い。知り合い？」

代用としてはなんだがバリア・ジャケットを纏う。

取り敢えずはこれで、濡れた服のままでは無くなった。

B・Jを解くとまた濡れねずみだが。

ともあれ、気になった事を尋ねてみた。

先の巫女さんだが、タカトと顔見知りのような態度だったのだ。それが気になったのだが。

タカトはそんなシオンの問いに一瞬だけ疑問符を浮かべた。

「……？ ああ。そうか、お前はまだ――」
「？」

「いや、なんでも無い。まあ、知り合いだな」

何か妙に気になる態度で答える。

どんな知り合いなのか聞きたくなったが。タカトはそれを遮るかのように、井戸から離れた。

――当然、彼もB・Jを展開している。

そして、神社の裏手の縁側に座った。
ついて来たシオンに笑う。

「――まあ、何はともあれ。お前も大分すっきりしたろう？」
「は？ そりゃあ、コーラ塗れだったし……」
「そうじゃない」

苦笑する。

それに、シオンは疑問符を浮かべ――。
やがて、あっと声を上げた。

そう言えば、自分が落ち込んでいた事を今更思い出したのだ。

「あー。……タカ兄い？ これを狙ってたのか？」
「八つ当たりと言うのも本当だがな」

ばつが悪そうな顔となるシオンに、タカトは笑いを再び苦笑に変えた。

そのままシオンを見る目を細めた。

「負けたか。アルトスに」

「……何であいつの名前知ってるのとか、戦ってるの知ってるのやら、ツツコミ入れたいけど。……まあ、いいや。——うん。負けた」
「そうか」

素直にシオンは頷く。

——頷きながら、シオンは自分自身、思ったよりアルトスに敗北した事を受け入れている自分に気付いた。

その返答に、タカトは息を漏らす。

そのまま睨めつけるようにシオンを見遣りながら、頷いた。

「——何故負けたか、分かるか？ 技術的とかそう言ったものではないぞ？」

タカトからの突然の問い掛け。

今さっきの自分なら分からなかったろうそれに。

しかし、シオンはこくりと頷いた。

——今の自分なら分かる。

あの時、アルトスに完敗した理由に。

苦笑した。

「……俺は、ぐだぐだ考え過ぎていたんだな」

空を見上げる。

そして、昨日のアルトスとの戦いをシオンは反芻した。

なんで？

その想いだけが先立って、戦いに集中出来なかった。

なんで？

そう問うて、それに答えて欲しくて。

……戦いたくなくて。

それが自分から集中力を奪い、迷わせた。

迷った太刀筋ほど、鈍くなるものは無い。

俺は、誰よりそれを知っている筈なのに――。

そんな鈍った刀技で戦うなんて。

勝てる筈が無かった。負けるべくして、負ける戦いであつたのだ。

それが、今のシオンにはよく分かった。

タカトと何も考えずに喧嘩した、今ならば――。

憑き物が落ちたようにすっきりとした顔のシオンは苦笑する。

まさか喧嘩して、立ち直ると思わなかったのだ。

タカトはそんなシオンに鷹揚に頷いて見せた。

「まあ、そう言う事だな。考え無しもどうかと思うが、考え過ぎも良くない。特にお前のような単純思考な奴はな？　それが見つけれ

「それだけでも殴られた価値はあったろう？」

「かー！ よく言うよ。殴った本人が言うこっちゃねえ……」

しかも半分は本当に八つ当たりだと言うのだからタチが悪い。嘆息しながら、半眼でシオンはタカトを睨み――。

「取り敢えず、礼は言っとくよ。ありがとうさん」

「……なんだ、貴様。殴られて礼を言うなど気持ち悪い奴だな」

無然とした顔で頭をシオンは下げた。

一瞬だけ呆然として、しかしタカトもやり返すように悪態をつく。

そんなタカトにぬかせと呟き、シオンはタカトに笑ってみせた。

……なんとなく、今のがタカトの照れ隠しに近いものだど理解出来たから。

そして、しばらく風に吹かれて――。

「なあ、タカ兄い」

「なんだ？」

唐突に声を掛ける。

返答は即座に返って来た。

それに一瞬だけ気圧されたかのように、黙り込み。

だがシオンは意を決すると聞くべきことを聞く事にした。どうしても聞かねばならない事を。

今の彼なら答えてくれると思ったから。

だから。

「イクスをなんで、俺に預けたんだ？」

長年の疑問を、シオンは迷わずにタカトに放った。
それを聞いたタカトは、無表情にシオンの眼を真っ直ぐに居抜き
――。

やがて、ぽつりと呟いく。

たった一言を――。

「……俺では、ダメだったからだ」

それだけをタカトはシオンに告げた。



「ダメ、だった……？」

「ああ」

あまりに意外過ぎる答えに呆然となる。

そんな、シオンにタカトは頷いた。

苦笑しながら、上に視線を向ける。

懐かし気に、笑った。

「それ、どう言う――」

「あいつは自ら己の担い手を選ぶ」

遮るかのように、タカトはシオンの疑問に言葉を重ねる。

——まるで、いつかの自分のように。

苦笑した。

それすらも懐かしいと思いながら続ける。

「あいつの真名を、シオン。お前は知っているか？」

「いや、イク——。……アルトスにも言われたよ。『俺の真名を探せ』って……」

「俺は、その試練すら受けられなかった」

そう言ったタカトが何故か淋し気に見えたのは、気のせいかな——。
シオンはタカトの言葉を聞きながら、なんとなくそう思う。

タカトは続ける。

「当時、俺はカリバー・フォームまでは発動出来た」

「うん。なんとなく、覚えてる」

こくりと、シオンはタカトの言葉に頷く。

当時、シオンは八歳だったが。

それでも、タカトとトウヤが並んで黄金の剣と白銀の槍を手に持つ姿は目に焼き付けていた。

だが——。

「そこまで、だったんだ。俺は」

「……え？」

次に放たれたタカトの台詞に、シオンは今度こそ言葉を忘れてた。

果たして、それはどう意味なのか――。

シオンが問う前にタカトは苦笑し、続けた。

「EX。事象概念超越未知存在。俺が、兄者が、――クロスが、シエピロが辿り着いた領域。『神殺し』にして、『カミコロシ』。……この意味をシオン。お前は知ってるな？」

「……………」

タカトから紡がれた、まるで詩のような問い掛け。
それに、シオンは思わず思い出していた。

『天使事件』

その結末を。

カミを己が身に降誕させられ、タカトとトウヤの二人が自分を助け出してくれたあの事件を。

その時、シオンは見ていたから。

EXと化したタカトと。

擬似EXを発動させたトウヤを。

”二人を敵に回し、殺されたカミの目で見ていたから”。

それを、忘れる筈が、無い。

だから。

「……ああ」

長い沈黙を挟んで、シオンは頷いた。

タカトはそれを見て、笑う。

その返答に満足したのか、そのまま続けた。

「全てにして万物の理由。『概念』を破壊、無視、超越してしまえる存在。故にそれが神だろうと、カミだろうと。一切の介入を赦さず、逆に殺し尽くしてしまうチカラ——。だが、それは結局。孤独なチカラでしか無い。兄者の擬似EXは別にしてな」

「タカ兄い……？」

「俺が本来の意味でEXに目覚めたのは十年前。『グノーシス事件』の時だ」

懐かし気に語るタカトは、シオンが思わず上げた声にも構わず続けた。

——何故だろう？ そんな異母兄が、泣いているように見えるのは。

「あの時、俺はEXのチカラを手に入れて。リンカー・コアを破損し。”傷”を受け。——イクスを受け入れられなくなった」

「……どう、いう……？」

”傷”。再び出た、その言葉も気になるが。

その後の言葉の方を今は聞くべきだとシオンは思う。

タカトはシオンに笑って見せると、言葉にならなかった問いに答えた。

「あいつはユニゾン・デバイスだ。――だが、ユニゾンは”介入”にはならないか？」

「っ――！？」

そんな、あっさりと答えるタカトに、シオンは絶句した。

つまりは、そう言う事なのだ。

EX。事象概念超越未知存在。

その名の由来でもある事象概念超越現象。

”全て”の概念による介入を完全に”殺し尽くす”チカラ。そんなチカラに区別などあろう筈も無い。

ユニゾンなど、以っての外であった。

絶句し、固まるシオンにタカトは苦笑する。

「つまりは、そう言う事だ。完全なユニゾンなぞすると、イクス自体を滅ぼす事になる。発動出来て、ユニゾン・アームド形態くらいだが。――そんなもの、飼いきれに過ぎない。……俺はイクスを手放す外無かった」

「だ、だからって！ 他に方法も――！」

「ない。絶対にな。俺は、”お前のような存在じゃないんだ”」

タカトは容赦無く告げる。

その、最後の言葉に引っ掛かるものがあつたが。

シオンは首を横に振った。

「俺のようになって……！ そりゃ、俺はEXじゃないさ！ EXに

なれる訳が無い！ だからってイクスを押し付けるような真似をしなくたって——！」

「違うな、シオン。それには二つの間違いがある。一つは、イクス自身がお前を望んでいた事。——俺はあくまでも借り初めの主でしかなかった。そして、もう一つ。お前は必ず、”俺と兄者”に追い付く」

反論すらをも封殺して、タカトはシオンの言葉を切って捨てる。
シオンは訳が分からなくなり、頭を抱えた。

「……訳、分かんねえよ……」

「今は分からなくて、いい。いずれ知る事になるのだから。差し当たっては俺が聞く事は一つだけだ。シオン。”お前は どうする？”
”何が、したい？”」

弱々しく呟いたシオンの台詞を拾い上げてタカトは問う。

それに、シオンは一度だけ目を閉じた。

考えなくてはならない事がいっぱいある。

やらなくてはならない事は山程ある。

だが、今、”シオンがやりたい事は——”。

「……イクスを、アルトスを、ぶん殴る」

正直に、心の奥底からの欲求を。シオンはタカトに叩き付けた。
変わらぬタカトの表情に、挑むかのようにシオンは続ける。

「あの、バアツカには散々いいようにやられたからな。……取り敢えずは一発ぶん殴ってやらにゃあ気が済まない。その上で、あの馬

鹿を取り戻す！」

一発！一

最後の言葉を拳を放ちながら、シオンはタカトに告げる。
その拳をことも無げにタカトは受け止めつつ、笑った。

シオンも笑いながら続ける。

「そんで、おっちゃんや、アンタとの因縁も。全部、全部に決着付けてやる……！」

「潔い解答だ。……いいだろう、気に入った！」

拳を払い除けながら、タカトは吠える。

逆に拳を突き込んで来た。

それを、何とか両手で受けながらシオンは聞く。

「まずはアルトスだ。アレを超えて、ようやくお前は俺達の背中に追い付く。次は無尽刀。……そして、全てを超えたのならば、”貴様を俺の敵としてやる”」

それはどう言う意味か。

シオンはそれを悟るなり背筋にゾツとする感覚を受けた。

悪寒では無い。

それは、一種、快感に近い感情であった。

今、タカトはこう言ったのだ。

”シオンを認める”、と。

ずっと、ずっと、追い付きたかった背中の主が。

シオンを対等と認めると、そう言ったのだ。

身体が震える。恐怖か、あるいは、歓喜によるものか。

シオンにはそれは分からなかった。

だが――。

「――俺の前に立つ事が出来るか？ シオン」

言うなり、タカトは踵を返す。

そのまま、境内を下りる階段に歩いて行った。

シオンはしばし呆然としながら、口元に手で触れる。

笑っていた。

自分は、これ以上無い程笑っていた。

だから！

「前に、立てるか、だと？ ……上等じゃねえか……！ タカ兄い
！」

そんなタカトに、シオンは吠えた。

未だに背中しか見せない、そんな兄に。

シオンは親指をおっ立てて、それを下に向ける。

「アンタが言った道、全部、全部だ！ まとめて踏破してやる！
そして、アンタの前に立ってやる！ アンタを、超えてやるっ！」

その背中に並ぶ事を夢見た。
肩を並べて歩く事に憧れた。

でも、今は違う。

その背中を、肩を、追い越して、前を歩く！

それが、今の――。

「忘れんなよ！ タカ兄い！ 約束だ！ アンタを俺は必ず超えてやる！ 首洗って待ってろ！」

シオンの精一杯の宣言。

それを、タカトは聞こえたか――。

ただ、片手のみを上げて階段を下りた。

それを最後までシオンは見続ける。

もう、その瞳にはどこにも迷いなんて無く。
ただ誇らしさだけが、そこにはあった。



「――首洗って待ってろ！」

そんな、シオンの台詞にタカトは苦笑しながら階段を下りた。

小指を持ち上げる。

「……また、約束が増えたか」

最近、妙に約束ばかりをしているような気がする。

その筆頭は、なのはな訳だが。

苦笑し、そのまま小指を持ち上げたままタカトは階段を下り続けて――。

「む？」

階段が上がって来る一同と目が合った。

向こうも同時に気付いたのだろう。

半ば呆然としたまま、こちらを見上げている。

アースラ一同。

彼女達が、そこに居た。

おそらく、シオンを捜しにでも来たか。

つくづく彼女達とは縁があるなと苦笑して、タカトはそのまま階段を下りた。

「タカト、君……？」

なんで、ここに？ と問いたいのだろう。

先頭のなのはが目を丸くして名を呼ぶ。

タカトはそれに目を細めながら、階段の上を顎でしゃくった。

「シオンなら上に居る。まあ、一丁前に落ち込んでいたが、今は大丈夫だろう」

「え？ え？」

「やはり男は殴り合いで分かり合うものだな。……一方的に殴ったのは俺だが」

もう何が何だか分からない。

一同例外無く疑問符を浮かべる中でタカトは構わず上を指差した。

「行かんでいいのか？」

「え？ あ、はい！」

思わず、スバルが頷き。

ティアナ達と階段を駆け上がる。

それを見送って。タカトは続けて、残った一同に目を向けた。

なのはを始めとして、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータに。

「お前達は行かんのか？」

「ええと……。よく分からないんだけど、タカト君が、シオン君を立ち直らせてくれたんだよね？ ならもう大丈夫かな、て」

なのはが、こくりと頷いてそう言う。

それにタカトは答えず、残った四人にも目を向ける。

四人も同意見なのか、答えず頷きのみを返した。

「……まあ、いいか」

タカトはそんな一同の反応に肩を竦める。

階段を下り始め――。その前に、なのはが声を掛けて来た。

「あの、ね。タカト君。これからどこ行くの？」

ひょっとしたら、その問いには深い意味は無かったのかもしれない。

単純に根無し草なタカトを案じて出た問いだったのかもしれない。

だが、タカトは正直に答えた。

これから行く先を。

「ミッドチルダに向かう」

そう、あっさりと答えた。

一瞬、何を言われたのか分からずに呆然となのはがなるが。タカトは構わない。

そのまま続ける。

「昨日、ストラの航行艦に襲撃を掛けてな。その時に得た情報だが――。何やら、ミッドチルダを完全に殲滅する腹積もりらしいな。奴達は」

「な、ん……！？」

その言葉には、なのはだけでなくその場に居た一同全員が絶句した。

ミッドチルダを殲滅？ 不可能、可能かどうかは置いておいて、その行いはナンセンス極まり無い。

そんな事をする必要がどこにあると言うのか。

そんな、絶句してしまった一同に構わずタカトは続ける。

「あんな世界、滅びようがどうしようが、俺には関係無いがな。…あの世界にはユーノと、ヴィヴィオが居る」

「あ……」

「捨ては出来ん。何より、あの二人が悲しむ顔は見たく無いしな。——そう言う訳で、俺は地球から離れる。……そして、次こそは敵同士だ」

「っ———！」

まるで、なのは達にも何も告げさせないかのようにタカトは容赦無く告げる。

それに、なのは達は質問する事すら出来ずにただ聞く羽目となった。

最後の敵同士と言う言葉に、流石なのはは反論しようとして。しかし、タカトはそれを読んでいたようになのはに目を向けた。

「——なのは」

「は、はい！」

思わず、声に出して答える。

それに、タカトは鷹揚に頷いた。

「ユーノと、ヴィヴィオは俺が守ってやる。だから、お前はここでせいぜい強くなっておけ。……俺を追い掛けてミッドチルダに来ようなぞ、思わないよ？」

「で、でも……！」

「俺が信用出来んのは、分からんでも無いがな。——それでも、今

回はこう言おう。なのは。俺を信じろ」

「っ——！」

その言葉に、なのはは悲痛に顔を歪めた。
タカトにぽつりと呟く。

「ひきょう、だよ。こんな時に、そんな事言うなんて」

「卑怯だろうが、何だろうが、言わねばな。それで、どうだ？
俺を信じるか？」

それには、なのは自身凄まじい葛藤があった。

ユーノを、ヴィヴィオを人に託していいものか。
出来得るならば、自分で行きたい。

そう思う。

だが、目の前の存在はそれを許しはしない。

そもそも、なのは達にはミッドチルダへの渡航手段が無いのだ。

どうしようも、出来ない。

だから。

「——信じるよ」

その言葉を告げるには、なのは自身。血の吐くような思いが必要
だった。

顔を伏せて、ぐっと堪えるように頷く。

「ユーノ君を、ヴィヴィオを。……ミッドチルダの皆を、お願い」
「ミッドチルダの皆と付けたか。が、いいだろう。心得た。任せて
おけ」

そんな、なのはに苦笑しながらタカトも頷く。
そして、はやて達に視線を向けた。

「貴様達もそれでいいか？」

「まあ、私達には今、どうこう出来んしな。なのはちゃんが信じる
言うたんや。私が口を挟めるような問題ちゃうやろ」

「――私としては口惜しいがな。伊織。お前に任せよう」
「……ふん」

はやてが苦笑気味に、シグナムが悔しい気に。ヴィータに至って
はまともな返事をせずに答える。

だが、彼女達も一応の納得はしたのだろう。

反論は無かった。

ただ一人、彼女を除いて。

「私は、反対」

そう、フェイトだけはタカトに反対した。
彼を真っ直ぐに見据えながら告げる。

「あなたが、皆を守ってくれるなんて信用出来ない。……シオンみ
たいに”信頼”出来ない」

それは、いつかシオンに告げられた言葉。

”信じて頼る”。

その意味を持つ言葉を、フェイトはタカトに出来なかった。

「ならどうする？　ついて来る気か？　言っておくが、俺がミッドに行く方法は奪取したストラの艦を使っただ。——当然、お前を乗せて行くつもりは無い」

「なら、なんで私の意見なんて聞こうとするの？」

そのフェイトの台詞に、タカトは若干身を固くした。

思っても見なかった台詞なのだろう。

考えてみれば、タカトが彼女達にそれを聞く事事態おかしい事なのだから。

タカトは、嘆息してそっぽを向いた。

「——別に他意は無い。聞いてみたかっただけだ」

「そう」

フェイトも全く感情を見せずに頷く。

そして、そのままタカトに告げた。

「なら、勝手にしたらいい。私はあなたを信頼なんてしない。——でも」

「そこから先を言う必要は無い。お前は俺を信頼しないのだろう？　なら、俺には何も頼むな。——あの世界は俺が勝手に守る。それでいい」

フェイトの言葉を遮ってタカトは告げる。

それに、しばし迷い——。

フェイトは無言で頷いた。

タカトはそんなフェイトに微笑みながら踵を返す。

「ではな。お前達の娘の事は任せろ。――しかし、ミッドチルダの法整備は大したものだな。”まさか女同士で結婚出来るとは”」

「「……え？」」

「お前達、結婚しているんだろう？ 何を隠す必要がある？ 娘ま
でいるくせに」

「「……え？」」

タカトはなのはとフェイトに向かって、そんな事を言う。

何やら、大いなる誤解をタカトがしている事に一同は気付いた。

が、構わずタカトは続ける。

「流石第一管理内世界。進んでいるものだ」

「ちょー、ちょっと待って！ タカト君！」

「そ、そうだよ！ 待って！」

「む？」

本気で茫然自失としていた二人だが。はっと我に返ると同時に叫ぶ。

だが、タカトはそんな彼女達を無視した。

自分の体内時計を確認する。

「もう、こんな時間か。晩飯の用意もいるし。……アホのせいで洗濯もせねばならん。と、言う訳でさらばだ」

「わー！ ダメダメ！ 行かないで！」

「そうだよ！ ちゃんと！ 私達の話しを聞いて！」

がしつと必死に二人はタカトにしがみつく。
流石にこう、アレな関係と勘違いされたままのは――。
特に、なのは嫌なのか。
タカトでさえも怯むほどの圧力で袖を握り締めていた。

そんな彼女達に、タカトはむうと唸り。

「……と、言われても惚気話なんぞ聞かされるのも嫌なんだが――」
のろけばなし

「だから、そこから違うの!」

「ならば、八神も入れて三人でか? 凄まじい倒錯っぷりだな」

「ちよっ! 待った! 私も!? なんでそうなるんや!」

「むう。なら、その二人も含めてなのか――。む? しかし、お前達。幼女は犯罪にならんのか?」

「ま、待て伊織! 何故私達まで含める!」

「そうだそうだ! ――ん? てか、お前……。今、あたしの事、なんつった?」

「いや、幼女だろう?」

「だ、だだだだ、誰が幼女だてめえ!? グラーフアイゼンの落ちない汚れにすんぞ!」

「――いや、幼女だろう?」

「全く同じ台詞じゃねえかあああああ!？」

「タカト君! 話し逸らさないで! ちゃんと——」

「いや、だから——」

……結局、なのは達はタカトの誤解をこの場では解く事が叶わず。

何故か彼が占領したと言う、ストラの次元航行艦に上がり込み。
晩御飯までご馳走になりながら、タカトに続けて説明して。

その誤解が解けるまで、真夜中まで掛かってしまったそうであったとさ。

(第五十二話に続く)

第五十一話「行き交う道筋」(後編)(後書き)

「立ち直ったシオン。彼は、これまでと違う証としてある事を行う」
「それは――」

「そして、集結するアースラ一同。それぞれの行く先に転送される」
「シオン達が向かうのはEU、イギリス支部。そこには意外な人物
が待ち受けていて――」

「一方、ミッドチルダに向かうタカトは、途中の事故でとある場所
に出る」

「そこには懐かしい人物が居た」

「次回、第五十二話

『懐かしき者達』」

「少年は久しい少女に出会い。青年は久しい化学者に出会う」

番外話「アリサ道場EX3!」(前書き)

……はい♪ テスタメントです♪

ちよつと更新遅れてすみません(汗)

ちよつと扁桃炎がぶり返したりしまして(汗)

おかげでオフ会企画も、シンジさんに頼りっぱなしです(汗)
申し訳ないなあ……。

では、アリサ道場EX3!

第2回人気投票結果発表でございます!

楽しんでいただければ幸いです♪
では~~~~♪

番外話「アリサ道場EX3！」

ぱふ〜♪ ぱふぱふ〜♪

ア

「タカト。ラッパを吹くのはいいんだけど。……聞きようによっちゃあそれは危険な音色よ？」

タinな

「む。そうですか」

す

「アレな音色だよ♪」

レ

「あれって……」

未

「アレだよなあ、主にドラ○エやらD○やらの」

ア

「ま、そんな事はいいわ！ てな訳で皆さん久しぶり♪ アリサ道場の時間よ！ ……ほんと、久しぶりの……ね」

あは♪

ア

「あは♪ じゃねーわよ！ あは♪ じゃ！ 作者こら——！」

す

「もう慣れたよ……」

レ

「俺レギュラーなのにレギュラーの気がしねーし」

未

「右に同じくです」

タ i n な

「まあまあ。気にしても始まりますまい？ 取り敢えず、まずは――」

一同

『祝！ 三百万PV突破！』

タ i n な

「そう言う事だ。皆さん、読んでくれてありがとう。三百万PVも超えられたのも偏に読者の皆様のおかげ」

す

「ありがとうございます♪」

ア

「これからよろしくね♪」

レ

「三百万か……。ウチも更新があれば……」

未

「まだいいですよ。レン先輩……。俺ん所なんて……」

ア

「うわ……。アンタ達暗いわよ？」

レ、未

「「ほっとけ！」」

タinな

「大丈夫です。レン先輩、未来。今回のゲストは二人より悲惨ですので」

レ

「は？ 俺達より悲惨？」

未

「それってシオンかカナンですか？」

ア

「……何気にあの二人を出したわね、アンタ……」

す

「シオン君とカナン君が悲惨なのはデフォだよ♪」

レ

「音符マークまで付けて……」

未

「鬼や……。て、当のシオンは？」

しー

「……ここだよ」

一同

『ん？』

そこに居たのはあ。最近本編で出たあ。

JKしおんちゃん！ 略して、しーちゃん！

しー

「タカ兄い、久しぶりに言うけど。それ、ウゼエ」

タinな

「む、そうか」

レ

「て、何でもまたお前しーちゃん化？ この前は精神のみがしーちゃん化してたろ？」

しー

「あれからどんくらい経ってると思ってたんすか。戻りましたよなんとか。……その後で、ソッコーこれですけど」

ア

「あは♪」

レ

「またお前か!？」

未

「これもデフォだなあ」

しー

「もう何があろうとしーちゃんとされるのが目に見えたんで。諦めました」

レ

「……まあ、何だ。そう言う事もあるって。犬にでも噛まれたと思って諦めろ」

しー

「はあ……」

タinな

「さて、ではオチもついた所で今回の召喚者はこちらだ」

しー

「いやなんもオチてなんかねえよ!？ かってにオチをつけんな!」

タinな

「しつこい奴だな。諦めろ」

しー

「うわひど……。てか、司会は俺だって。てな訳で今回の召喚者はこちら〜♪」

？

「わふっ」

一同

『……………はい?』

?

「そっくなのかっ?」

レ

「あー。しーちゃんよ。これ、なんだ?」

しー

「今回のゲストです」

レ

「事もなげに答えんなよ! 人形じゃねえかあ!」

しー

「その通りです。今回召喚したのは、るみや人形です♪」

る

「わふっ」

ア

「こ、これはまた強烈なのが来たわね……」

す

「あ。でも、ちょっと可愛いかもだよ?」

未

「こ、これがゲスト……!」

しー

「おうよ。まあ、これはただのエサなんだけどな」

一同

『はい?』

タ i n な

「ふむ、来たか」

レ

「は? 何が――」

一轟!――

リ

「お持ち帰りiiiiiiiiiiiiiiiiiiii――!」

る

「そ〜〜なにか〜〜♪」

レ

「て、どわぁ!??」

未

「だ、誰か降って来た!??」

ア

「また道場が……」

す

「天井に大きな穴が開いちゃったね……」

リ

「はぐ~~~~~♪」

る

「わふ~~~~♪」

レ

「え~~~~と。……で、誰これ？」

しー

「はい。この人こそが今回の真なる召喚者。再誕の騎士・リターナさんです」

リ

「はぐはぐ~~~~♪」

しー

「て、リターナさーん？ 自己紹介自己紹介」

リ

「は！？ ごめんね、しーちゃん。るみや人形が可愛い過ぎて……。るみゃちゃんが！ るみゃちゃんがああああああああ……」

しー

「……自己紹介はもういいっすね。ようは、こーいう人です」

る
「そ〜なのか〜？」

リ
「ちがつ！？ ひどい！ ひどいよ！ しーちゃん！」

一同
『なる程』

リ
「えー！？ 皆納得しちゃうの！？ 待って！ 私はどっちかというとクールな方……」

タ i n な
「説得力は皆無だな」

リ
「がーん！」

る
「わふ〜〜♪」

しー
「まあ、冗談はここまでにして。彼女こそが今回のゲストです」

リ
「う、うう……！ 本当に冗談？」

しー
「……半分くらいは」

り
「が、がーん！」

レ
「で？ この娘のどこら辺が俺達より悲惨なんだ？」

未
「そーいや、そうだな。しーちゃん、どー言う事だ？」

しー
「ありゃ？ 気付きませんか？ リターナさんの紹介の時に作品名が無かった事に」

ア
「そう言えばそうね。どう言う事？」

しー
「答えは単純。リターナさんが出ていた作品は既に”消えていますんで”」

一同
『……………え？』

る
「そーいなのかー？」

リ
「しくしく……。るみゃちゃんだけだよ。私を慰めてくれるの……」

す

「えーと。て、言う事は……？」

しー

「既に”削除されてしまった作品”て事です」

ア

「そ、それは、何て言うか。まあ……」

タ i n な

「正確には召喚要請時、まだ連載していたのですが。アリサ道場に召喚するまでに作品が未完のままに消えてしまった訳ですな」

る

「そくくなのかくく？」

リ

「しくしくしく……。そうなんだよく」

す

「ま、まあ。そう言う事もあるかな？」

レ

「ねーよ。滅多に」

未

「な、成る程……。この人に比べれば。俺達はまだマシな方……！」

しー

「……この先も連載されりゃあな……？」

レ、未
「「ぐ、ぐさっ!？」」

ア
「あ、二人が全く一緒にダメージを。……レンと未来だから別にいいか」

レ、未
「「ひ、ひでえ……」」

タ i n な
「さて、ではしーちゃん？」

しー
「……お願い。タカ兄いは普通に呼んでマジに」

タ i n な
「そうは言われてもな」

しー
「なら、俺も今現在のタカ兄いをタカ姉兄オネニいとでも呼ぼうか？」

タ i n な
「……本名より二倍の長さの呼び方と言うのもアレだな。一步間違えて誤字ると、この作品は十八禁の道を歩むし」

しー
「だしょ？」

タ i n な

「だが断る」

しー

「て、今の流れでそれかい!? なぜ!?!」

タ i n な

「別に呼び方が長くなって困るのは俺じゃないからだ。誤字に関しては作者の仕事」

しー

「鬼か……」

タ i n な

「さて、脱線してしまったが。しーちゃんよ。そろそろ本題に入れ」

しー

「ういゝゝ。では、早速本題! お待たせしました! 魔法少女リリカルなのは S t S , E X 。人気投票結果発表ゝゝゝゝ!」

どんどんどん! ぱふぱふ♪

ア

「いやゝゝ。長かったわね……」

す

「投票期間一ヶ月掛かったもんね?」

しー

「はい♪ 身内ネタなんでレン先輩や、未来。リターナさんにはち

よつと厳しいかもですが――」

レ、未、リ

「「「ずーん……」」」

しー

「タイミング良く落ち込んでいますので、放置して進めさせていただきます♪」

ア

「あんた、何気に酷いわね……」

す

「しーちゃん。最近本編でも不幸な目に合いっぱなしだったから……」

しー

「そこー。うるさいっすよー。では、早速発表させて頂きます！まずは1pt獲得の12位から♪」

ア

「12位で……」

す

「また中途半端だね」

しー

「まあ、投票結果なんで。では。12位！

飛・王。

スバル・ナカジマ。

クロス・ラージネス。

イクス（アルトス・ペンドラゴン）。

ベナレス・龍。

以上です♪」

ア

「おー。意外な奴達に票が入ってるわね」

す

「原作からはスバルちゃんが入ってるよ♪」

しー

「ある意味大したもんです。今回原作キャラオツケーとはあえて言
ってなかったんですが」

タinな

「と、言うかクロスとベナレスに票が入るか……」

しー

「そこは作者びっくりだったそうです。何気に飛さんが入ってます
し」

ア

「そーいや、あの巨乳好きも一応、元グノーシスなのよね……？」

しー

「……え、ええ……」

タ i n な

「ま、まあ。そーなりますな……」

す

「……変態集団……？」

しー

「ま、全く俺には何が何だか分かりませんよ！？　だよなタカ兄い
！？」

タ i n な

「そうだとも！　では次だ！　しーちゃん！」

しー

「おうよ！」

ア

「ごまかしたわね？」

す

「現実当否は良くないよ？」

しー

「シャラップです！　では、次は9位！　2 p t 獲得！　行きます！

一条エリカ。

月村すずか。

ユーノ・スクライア。

アリサ・バニングス（道ア含）

以上となっております♪」

ア

「くくうくく！ 漸く人気投票で票が入ったわね♪ すずかも♪」

す

「うん♪ みんな、ありがとうくく♪」

しー

「他にもユーノさんが入ってますね。原作キャラ大活躍です」

ア

「そこはちょっと納得いかないけど……。まあいいわ♪」

しー

「ちなみに、すずかさんは投票時にコメントが一つ。タカ兄いとの会話が良かったとの事です♪」

す

「ありがとね♪ タカト君♪」

タ i n な

「いえ、こちらこそ」

ア

「ここだと普通に仲良いんだけどね……」

しー

「あくまでもここはアリサ道場ですから♪ 本編の影響は受けません♪ さて、ではどんどん行きましょう♪ 第8位♪ 獲得3pt♪

フェイト・T・ハラオウン！」

ア

「お〜♪ 流石フェイトね。8位まで上がって来たか……」

す

「StS, EXでは今一活躍してないけど、これからだよね♪」

しー

「はい♪ では次行きましょう♪ 第7位！ 獲得4pt♪ 誰が呼んだが最強お母さん♪

神庭アサギ！」

ア

「あー。やっぱりアサギちゃん来たわね」

す

「流石最強ママだね♪」

しー

「……て、ちょっと待って下さいな。なんで人ん家の母さん呼び捨

て？」

ア、す

「『似合うから』」

しー

「ひ、否定出来ねえ……！」

タ i n な

「見た目が見た目だからな」

しー

「き、気を取り直して、次は第6位！ 獲得5 p t ♪ 満を持して
登場の幼なじみ♪」

姫野みもり〜♪」

ア

「おー。ついに来たわね幼なじみ」

す

「St S，EXの良心だよ♪」

しー

「宴会でビミョーに壊れましたけどね。コメントでは、こんな幼なじみが欲しい♪ との事です♪ ……やりませんけど」

タ

「微妙に怖いぞ？」

ア 「……ん？　なんか今、おかしな所無かった？」

す 「？　さあ？」

しー

「さあて、ではどんどん行きます！　第5位！　獲得7pt♪　来た来た来た！　白い魔王！　最近恋する乙女に階級転位！　来

高町なのは〜♪」

ア

「うあ……！　第5位……！」

す

「流石なのはちゃん♪」

しー

「原作キャラとしては珍しくみもりや母さんの頭を押さえて第5位です♪　とんでもありません♪　コメントでは恋する乙女っぷりや、タカ兄いとの絡み。本局最終決戦での活躍が良かったとの事です♪」

ア

「一応、StS，EXでは主人公の一人らしいしね」

タ

「まあ、好敵手として上々ですな」

ア

「……やっぱり何か、変な気が……」

す

「……だよね……」

しー

「えー。では、本人にコメントを♪」

ア

「え？ て、事はなのはがタカトの身体で？」

す

「て、アリサちゃん本編で同じ事してたよ？」

ア

「う……。まあ……」

しー

「では、グノーシス極東支部の、なのは先生……？」

な

《は……い♪ あ、しーちゃんだ♪》

しー

「いえ、そこらは基本スルーの方向で……」

な

《うん。わかったよ。読者の皆さん♪ 投票ありがとうございます♪ これからもリリカルマジカル頑張ります♪》

タ

「その歳でそれを言うか。恥ずかしくないか？　なのは？」

な

《な、なんでタカト君がそこに！？》

タ

「アリサ道場に俺がおらん訳があるまい？」

な

《うう……。で、でもほら。乙女は何歳でも乙女って言うし》

タ

「それも限度と言うものがあるうよ」

な

《む、むか……。！　女の子にそんな事言うなんてひどいよ！　タカ

ト君のバカ！》

タ

「貴様……。またバカと！　俺はあくまでも正論を言っているだけだろうが、たわけが！」

な

《タカト君が女の子に対してひど過ぎるだけだよ！　タカト君の大バカあ！》

タ

「やかましい！　男女平等が俺の主義だ！　女だろうが男と同じに扱いをするに決まっておろうが！　超たわけが！」

な

《それは逆にひどいよ！ タカト君の大、大、バカあ》

タ

「大を二つもつけたな……！ この超、超、超たわけが！」

な

《タカト君の大、大、大、大バカあ！》

タ

「超、超、超、超たわけが！」

しー

「……えー。タカ兄いものは先生も、そこら辺で。仲良いのはよく分かりましたから」

タ

「誰が仲良いか!？」

な

《誰が仲良いの!？》

しー

「はいはい。……そういや、アリサししょー。えらい黙り込んでますが、どうしました？」

ア

「いや、漸く違和感の正体に気付いてね……。タカト！ あんた何をいきなり戻ってんのよ!？」

タ

「む？　おお、そう言えばいつの間に」

す

「気付いて無かったんだね……」

ア

「私もあんまり違和感無く戻られてるから、気付くのに時間掛かったわよ……。で、何で？」

タ

「いや、俺には何とも……」

しー

「あー。それは作者から伝言が『人気投票のコメントを入れ代わった状態でやらすの、どうよ？』との事です」

ア

「く……！　あいつにしては珍しく正論を……」

す

「ちょっと悔しいね？」

しー

「さて、では。なのは先生ありがとうございましたー」

な

《うー。まだ納得いかないけど……。タカト君！　後でちゃんとお話ししようね？》

タ

「上等だ。きっちり泣きを入れてやろう」

しー

「なのは先生のお話しにそこまでアグレッシブな解答出来るの、タカ兄いぐらいだよな……」

ア

「あ、それは同意」

す

「うんうん」

しー

「では、なのは先生♪ ありがとうございますた〜♪」

な

《は〜い♪》

画面、ブラックアウト。

しー

「さ〜って、次からは本命が立ち並んで行きます！ 誰が1位を取るか！ では、まずは第3位！ なんと、同票です！ 作者もびっくりです！

第3位！

エロ暴走と言えばこの人！ でもグノーシス第1位♪

最近作者までも思考を引っ張られつつあります♪

叶トウヤ~~~~♪

そして、やはり来た来た！ 最強中年！ 一応敵だね？ 無尽
刀！

アルセイオ・ハーデン！

投票ptも、何と他を大きく引き離しております！

15pt~~~~！

おおおおおお————！！

ア

「な、なのはの二倍……！！」

す

「す、すごいね……」

しー

「前回投票から大躍進のトウヤ兄いと、やはり根強い人気なおっちゃん！ 流石です♪ コメントでは。やはり暴走っぷりがたまらない♪ や、普段のエロボケからのギャップがいい♪ と言った声が大きいです♪ おっちゃんは、やはりあの敵なのに、気分次第で味方のようにも振る舞うふりーだむっぷり等の性格がかっこいいこの事です♪ では、本人らにもコメントを頂きましょう♪ まずはトウヤ兄いから♪ グノーシス月本部『月夜』に中継が繋がっております♪ てな訳でトウヤ兄い？」

ト

《うむ！ 私はここさ！ みなみなあろは！》

しー

「テンション高いなあ。なして？」

ト

《久しぶりにしーちゃんを見たからね！？ テンションも上がろうと——》

ぶつ。

しー

「……おや、いきなり中継が切れましたね」

ア

「いや、切れたもなにもあんだ……」

再び、中継繋がる。

ト

《……はい。こちらパーフェクツな兄。トウヤです》

しー

「はい、こちらら暴走兄貴のたわ言は聞く気になれない弟です。…
…反省した？」

ト

《……ついさっき、ユウオにきついヤキを入れられたからね……。

ふふ、ユウオの愛はいつも過激だよ……」

しー

「それ、既出だから」

ト

《ふ。手厳しいね……。では、早速コメントを。皆、投票ありがとう。これからも皆を引っ張れるようなエロな！ そう、エロな！ エロエロな！ 暴走をお見せしよう！ 待っていてくれたまえ！ 規制なんぞ知った事では――》

ぶつ。

しー

「はい♪ トウヤ兄いからでした〜♪」

ア

「またあんだ、いきなり切ったわね……」

す

「最後までやらさないで大丈夫なのかな？」

しー

「いいんです。……今頃ユウオ姉さんに愛の鉄拳を振るわれているだろうし」

ア

「あー、うん。想像に難くないわ」

す

「すんなりイメージ出来ちゃうね？」

タ

「では、次に行こうか？　しーちゃん」

しー

「ういゝゝ。んでは、次はおっちゃんにコメントを貰いたいと思います♪　てな訳で、時空管理局本局改め、ツアラ・トウ・ストラ本部に中継を繋げております♪　では、どぞゝゝ♪」

ア

《お……。こいつが、アリサ道場って奴か？　久しぶりだなあ！
坊主……。？　坊主、その格好は？》

しー

「一目で見破るんかい。いや、いいけどさ。とりあえずツツコミは無しでよろしく」

ア

《いや、いいけどよ。そーいうのも嫌いじゃないぜ？　お笑いな意味でな？》

しー

「まあ、性的とか言われただけマシだけでもさ。ウチの連中と来たらよ……。！」

ア

《あゝゝ。グノーシスは昔っから変人が集まる組織だったからなあ……。一応、個性的と言う事で許してやれや》

しー

「その懐のでかさは寧ろ怖いんだけど？　で、早速おっちゃん。コメントよろしく」

ア

《おうさ。あー、読者のみんなよ。応援サンキューな。俺は坊主の敵だが、みんなが興奮するような戦いをする事を約束するぜ？　まあ、坊主があっさりとやられた場合は保証の限りじゃねえが……》

しー

「言ってくれるじゃんか！　絶対あんたを超えてやるかな！」

ア

《ハっ！　やってみろや、坊主！　てな訳でこれからもよろしくな？　んじゃ、あばよ！》

しー

「全くとっちゃんは……。てな訳でおっちゃんからでした〜♪」

ア

「まー。なんと言うか、嵐のような人ね……」

す

「私達に話す暇さえ無く、終わったしね？」

タ

「やるな、無尽刀」

しー

「さて、では残るは2位と1位！　これは一気に行きましょう！

俺もタカ兄いもまだ来てません！ ではどちらが来るか……」

ア

「残ったのがあんた達二人か……。さて、どっちが勝つか」

す

「ときどきだね？」

タ

「まあ、弟に負けるのはしゃくではあるか」

しー

「ふうん。その言葉。多分、後悔する事になるよ？」

タ

「何？」

しー

「では行きます！ まず第2位！ 一応、俺、主人公だね？ ちくしょう！

神庭シオン！

投票ptは、22pt！」

おお……。

ア

「やるわね。あっここからさらに7ptも……」

す

「て、事は1位は……」

しー

「はい♪ では第1位！ やはり来たか天然魔王！ ランクEX代表！ 一応はボスなんだぜ？」

伊織タカト！

投票ptは、驚愕の………！ 42ptっ！」

う、うおおおおおおお——っ！？

ア

「よ、よんじゅうにぽいんと………！？」

す

「シオン君の二倍近い差だね？」

タ

「む、むう……」

しー

「ええ。ここまで来ると、むしろ清々しい……。でも、俺。主人公なのになぁ……」

ア

「まあまあ。いいじゃない？ あんたも一応2位よ？ トウヤさんや、おっちゃんの頭押さえて」

す

「そうだよ。元気出して？」

しー

「うう、ありがとうございます。では、皆さんからのコメントを。まずは俺。紫苑との決戦時の叫びがとても良かったです。しーちゃん可愛いから♪ て、やかましいわ！ ご、ごほんっ。まあそんな感じのコメントが多かったです」

す

「流石、熱血な主人公だね♪」

しー

「え？ 待った、俺熱血？」

ア

「あんだけ熱い台詞吐いといてあんた今更……」

しー

「うう……」

す

「じゃあ次はタカト君だね？」

しー

「はいな♪ ではタカ兄いへのコメント。いつもの天然から戦闘時のギャップがとても良いや。すずかさんとの会話が良かったや、なのは先生と絡むのが非常に楽しい♪ と言ったコメントが多かったです♪」

タ

「む、むう……」

ア

「あ、タカトが照れてる♪」

す

「ちょっと可愛いね？」

タ

「いや、お待ちを。二十歳も超えた男に可愛いわ……」

ア、す

「「嫌？」」

タ

「……。いえ、気の迷いでした」

しー

「さーて、ではまず俺から♪ はい♪ みんな！ 応援ありがとうな！
！ 負けたり勝ったり繰り返してるけど、おっちゃんもタカ兄いも
超えられるよう頑張るぜ！ これからも応援よろしく♪ んでは、
お次はタカ兄い、どぞ〜？」

タ

「む……。ああ、こう言った時、どんな事を言えればいいか分からないが……。応援ありがとう。1位と言う栄誉。忘れる事はしない。これからもよろしく頼む」

しー

「タカ兄いにしては珍しく心の籠ったコメントでした〜♪」

タ

「うるさいな」

ア

「うんうん。ウチの執事も成長したわ……。今回の人気投票は満足ね♪ 私やすずか、フェイトもなのはもランクインしたし♪」

す

「あれ？ でも、はやてちゃんは……？」

一同

『……………』

しー

「ま、まあ気にせず行きましょう♪」

ア

「そ、そうね！ 過去は振り返っちゃダメよ！？」

す

「後ろにはやてちゃんぽい人がいるかもだしね！？」

タ

「まあ。そう言う事があるやもしれませんな」

しー

「では、今回はここまで♪ 次回も特別編行きますよ〜♪ 次回も続く三百万PV記念&人気投票記念♪ その名も『第1位になっ

た人特別編♪ タカトのデート♪』です♪」

タ

「……なん……だと？」

しー

「あ、タカ兄いがオタクネタを。珍しいね？」

タ

「いや、ちょっと待て！ そんなのは聞いてないぞ！？」

しー

「そりゃあね。だからさっき言ったじゃんか。『後悔する事になるよ？』て、さ」

タ

「な、ん……！？」

しー

「ちなみ時代設定は最近更新が止まっている。

『なのラン』でいきます♪ そしてお相手は、こちらもあれなんで読者の皆さんのリクエストと言う事で♪ てな訳で感想やメッセー
ジでタカ兄いのデートの相手を指定して下さい♪ 投票♪ お待ち
してます♪」

タ

「待て待て待て待て！」

しー

「もう決定だから諦めなよ。さて、では皆さん♪ 人気投票ありが

とうございます♪ 沢山の応募に作者感激したそうです♪ これからも是非よろしく♪ そして、煌焰さん♪ リターナさん召喚ありがとうございました♪

ア

「……ほとんど、喋らなかったけどね」

す

「まだ泣いてるしね？」

リ

「しくしく」

レ

「うう……」

未

「どうなるんだろ……？」

しー

「と、まあ自らの行く末にびくつくお二人は置いといて。……では、皆さん♪」

ア、す

「「また次回……」」

タ

「か、刮目あれ……。しかし、次回……。む、むむう……」

リ

「は！？ アリサ道場終わっちゃう！？」

レ

「な、何！？ ちょっと待て！ 俺達なんも話してねえ！」

未

「わゝゝ！ 待った待った！ 久しぶりに俺達に話す機会を——！」

（だか断る！ 終わっとけ♪」

リ、レ、未

「「「鬼ゝゝゝゝ！」「」」

—幕—

番外話「アリサ道場EX3!」(後書き)

ども〜♪ アリサ道場EX3♪

人気投票結果発表でした♪

皆さん本当に、投票ありがとうございます♪

そして三百万PV突破です♪

これも偏に読者の皆さんのおかげです♪

さて、次回は道場で言った通り。『タカトのデート編』でございます♪

誰を相手にするか、皆さんの投票お待ちしております♪

では、また次回に〜♪

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」(午前編)(前書

はい♪ ども〜♪ テスタメントです♪

やった……！ やり遂げたぜ俺は！

オフ会前に「デート編」を書けました♪

……前編をな！(笑)

ど、どうしてこうなった……？

いや、気合い入れて書いたせいかな。文字数がえらい事に(汗)

本当すみません(汗)

てな訳で、デート午前中をお届けします♪

では、どうぞ〜♪

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」（午前編）

《デートしよう？》

「……なに？」

ある日曜日の朝。

夏に相応しき暑さに蝉の声が喧しい中で、伊織タカトはそんな事を言われた。

神庭家である。

やたら非常識な大きさの日本家屋たるこの家でも、タカトの朝は早い。

基本的には休日だろうが平日だろうが慣れたしんだ時間でタカトは起きるのだ。

……まあ、それ以前に神庭家の調理全般を賄うタカトからしてみれば、朝早くに起きて朝食の支度に取り掛かるのは日常の光景にか過ぎない訳だが。

ちなみに今朝は珍しくも和食。鯖さわらの塩焼きが好評であった。

現在午前8時前。

家族揃っての朝食も終わり、タカトは毎週楽しみにしている『仮面○イダーW』を見ると、テレビの前に座り込んでお茶なんぞを啜っていたのだが。

突然の携帯電話に着信が掛かり。何事かと出てみたのである。

そして告げられたのが最初の一言であった。

「もう一度言ってくれるか？　なのは？」

思わず頭を抱えつつ、タカトは電話を掛けてきた相手。

高町なのはに問う。

それに、電話の向こうで、うんと頷く声が来た。

《だからデ・ー・ト。動物園の入場券を新聞屋さんから、お母さんが貰ったんだって。それで、私にくれるって言うから――》

「そう言うのはフェイトと行け。では、さらばだ」

告げるなり、速攻で電話を切ろうとするが。

相手もさる者。それを許さない。

答えがすぐに返って来た。

《フェイトちゃんは今日は執務官のお仕事なんだ。……ちなみに、はやてちゃんは家族でお出かけ》

「なら――」

《他の人も、今日はいろいろと用事があるみたい。……それに、私もタカト君と行きたいし》

最後の台詞に、タカトはうっと唸った。
いろいろな意味で反則な台詞である。

そう言われると頷きたくなる自分もいる。
どちらにせよ、日曜日である。バイトも無いのだ。
外に出るのも悪くない。
だが、しかし！

……か、仮面ラ○ダーが……。

タカトはテレビ画面を見詰める。

もうしばらくすると、始まる時間である。

しかもタカトの目的は仮面ライ○ーに終わらない。

○リキュアに続き、世界的有名アニメのド○ゴンボール。

ワン○ースに続き、30分を挟んでジュエ○・ペットで終わる！

タカトは基本的にアニメにも他にも貴賤をつけない人間なので、必然。それが子供向けだろうと、女兒向けだろうと。面白ければ見るタイプの人間であった。

それが理由でデートの誘いを断るといふのは一般的な高校生としてはどうなのだろうと少し思う。

ちなみに、神庭家には録画機能のある機器は存在していない。

答えに窮していると、電話の向こうから不安そうな声が来た。

《その……。タカト君、都合悪いことあるのかな？ 用事あるとか

……》

「用事……。まあ、用事と言えば用事だが」

正面のテレビ画面を前に、なのはの声を聞いてタカトは再び呻く。
某戦隊ものの次回予告が流れていた。

つまり、後二、三分で始まってしまおう……！

さて、どうするか……。

これから○面ライダーが見るからデートに行けないと、なのはに言うのは、どうか……。

『なの♪』

あまりよろしくない想像が頭を過ぎる。

主にレイジングハートを握りしめた、白い魔王様の素晴らしい姿が。

と、なると嘘をつくしか無い。

動物は好きだが、悲しいかな。仮○ライダーには負ける。

デートはさらにその下である所がタカトラしさを物語っていた。

さて、では……。

早速適当な嘘を、タカトはつこうとして。

「タカ兄い？ もうすぐ仮面○ライダー始まるよ？ 電話していいの？」

そんな声が後ろから発せられた。

それは、神庭家異母末弟。

神庭シオンの声であった。

かなり大きめな声である。

当然、タカトが握る携帯電話はこの声を拾った。

——その次の声も。

「タカ兄いは、日曜日の朝はテレビにかじりついて離れないもんな
あ」

『この後は、仮面ラ○ダーW!』

シオンがそう言い居間から出た直後。テレビの中では次回予告が
終わり、そんな毎度な声が流れた。

当然、これも携帯電話のマイクは拾っている。

お前、絶対狙ってやっただろう？

思わずタカトは、シオンとテレビの両方にツツコミたくなる。
が、今はそれ所では無い。

電話の向こうがやけに無言なままなのが、タカトには気になった。

「なの、は？」

《レイジングハート》

【スタンバイ、レディ？ セット・アップ】

——早くもレイジングハートを起動した！

タカトは久しぶりに背筋がゾツとする感覚を覚える。

《日曜日の朝早くから起きてて偉いなー。て、思ったんだけど……。
なるほどねー……。そういうことだったんだー……。もしかして、
それを見るために？》

「待とう、なのは。落ち着こう。話し合おうじゃないか」

《今日はよく晴れてるね？ レイジングハート。ここからスターライトブレイカー。届くかなあ？》

【問題ありません。次元の果てだろうと、今のマスターならば可能です】

恐ろしくヤバイ会話が向こうで繰り広げられている。

おそらく、いや確実に彼女の一撃は届くだろう。

しかも、おそらくはピンポイントでタカトのみを墜とす。もはや、それは確信であった。

故に、タカトは即座に折れる事を選択した。

「ま、待ち合わせ場所はどこだ？」

《ん……。そうだねー。タカト君のお家から、海鳴駅までどのくらいかかるかな？》

「ふむ……。俺の家から少し離れている。五十分は掛かるな」

無論、その数字は三十分ほどサバを読んでいる。

どこまでも諦めの悪い男。それが、タカトであった。

……だが。

《うん、わかったよ。なら、二十分で来れるね》

相手が悪かった。もはや疑問符ですら無い。

あっさりとタカトの小細工を叩き潰し、なのはは朗らかに言う。

その言葉には、どこか凄まじいまでの強制力があった。

「……はい」

《それじゃあ、待ってるから》

漸く観念したタカトへと満足気な、なのはの頷きの声が来て。

ここに。急遽タカトと、なのはのデートが決定したのであった。



きっかり二十後。タカトの姿は駅前にあった。

白のTシャツに、青と白の上着を羽織り。下はジーンズ。

タカトにしては珍しくも白を基調とした服装であった。

まあ、夏場の動物園に行こうという人間が黒を着ると言うのはなかなか辛いものがあるが。

てくてくと歩き、待ち合わせ場所である改札口前に向かう。

そこでは、なのはが待っていた。

やはり彼女も白を基調とした服装である。

白のワンピースにチェックのミニ。

手には、何やらバスケットを抱えていた。

涼やかな格好のなのはがこちらに気付くと手を振って来る。

タカトはそれにふむと頷き、彼女に向かって歩いた。

「タカト君、おはよ。時間ぴったりだね」

「ああ。おはよう、なのは。奴が渋りさえしなければもう少し早く

来れたんだがな……」

「？」

タカトの台詞に、なのはが思わず疑問符を浮かべる。

さにあらん。わざわざアニメの録画を朝も早くから友人に頼むとは、流石になのはも思わないだろう。

ちなみに、その友人である草薙翔は、『こんな朝早くにんな事で電話してくんなよ、マジに……』などと言っていたが。あれで義理深い男である。

きつと録画してくれているはずだ。

一人うんうんと頷きつつ、タカトはなのはを促して切符を購入。なのはの分も買い。手渡しする。

「あ。ありがと……」

「こう言う時は男が払うものなんだろう？ 気にするな」

「それ、誰から聞いたの？」

「ルシアと兄者からだ？ 後、本」

事も無げにタカトは言う。

やっぱりかーと、なのはは頷いた。

タカトはこう見えて、”日本では”世間知らずの分類に入る。

やたらと世界間を飛びかったり、外国を渡り歩いた生活を送っていたので。時折、突飛な方向に思考が行くのだ。

これが逆の立場だと、なのはが世間知らずになってしまうのだから文化の違いと言うのは馬鹿に出来ない。

そう言った部分を、同居人。ルシア・ラージネスや、彼の異母兄弟達。叶トウヤや、神庭シオン。そして、神庭家家長。神庭アサギが教えていると言うのは、彼と親しくなった人間ならば周知の事実

であった。

「だが、デートにおける女の子のエスコートまで普通教えるものなのか……。」

「？　どうかしたのか？」

「ううん。なんでも無いよ。タカト君はタカト君だなぁって思っただけ」

「……なんだそれは」

意味が分からなかったのか、タカトは顔をしかめる。
それが妙に可笑しくて、なのはは少し吹き出すと微笑んだ。

タカトの手を取る。

「ほら、行こ？　電車来ちゃう」

「それは分かったが手を離せ。暑いだろう？」

「ダメ」

手を引き、改札口に向かうのはが振り返る。

片目をつむってウィンクしながら、笑顔でタカトに理由を告げた。

「今日はデートなんだから。手を繋ぐのが、常識だよ」

電車の中は、日曜日の朝早くなのにも関わらず結構混んでいた。
意外にも、遊びに行く人が多いのか。

まあ、だらけているよりは健康的と言えるだろうが。
そんな混雑する電車内で、なのははタカトと共に立っていた。

席は全部埋まってしまっている。

「混んで来たね……」

「確かにな」

なのはの言葉に、タカトも頷く。

基本、なのははバスを使うし。

タカトは日常では単車を使う。

それ以外では、それぞれ魔法使用だ。

電車は二人共、あまり使わないせいか。その混みように少し驚いていた。

駅に止まる、と。少し人が出て行き。その倍の人が入って来た。

圧迫感が強くなる。

なのはは、小さく悲鳴をあげかけようとして。その前に、タカトが動いた。

なのはの手を引き、扉まで進む。扉に押しやって。その横に手をついた。

すると、タカトが壁になり。なのはから圧迫感が消える。

思わずきょとんと、タカトをなのはは見上げる。

タカトは視線を横に逸らした。

やがて、なのはは微笑む。

「……ありがと。タカト君」

「なんの事だ？」

分からないとばかりに、タカトは返す。

それがやはり可笑しくて、嬉しくて、なのはは笑った。

「なんでもないよ。ただ、お礼を言いたかっただけ」

「……変な奴だな。何もないのに礼を言うのか」

相変わらずぶっきらぼうにタカトは言う。

それが妙に可愛く感じるのは、やはりひいき目になってしまいうのか。

くすりと笑いながら、そんな具にもつかない。しかし、楽しい考えをなのははして――。

二人は動物園近くの駅に到着するまで、混む電車でそうしていた。



「到着したね♪」

「うむ」

午前9時。

なのはとタカトの姿は動物園前にあった。

新しく海鳴市にオープンしたばかりの動物園である。

その為か、周りには家族連れやカップルが非常に多かった。

「それで、新聞屋から貰ったチケットと言うのは？」

「うん。これこれ」

「そうか。——おいこら」

タカトの質問に頷いて、なのははチケットを取り出し――。

――直後、タカトは思わずツツコミを入れた。そのチケットを見て。

そこには、『カップル様ご招待券』とでかでかと書かれていたのだから。

タカトは、なのはを半眼で睨む。

「俺達はカップルでは無いだろう？ 少なくとも付き合っでは無い筈だが？」

「うーん。そんなに細かく言わなくても大丈夫じゃないかな？ カップルって言っても恋人って意味じゃないかもしれないし」

「いや、だが。……そうなのか？」

「うん。今日はデートなんだし、ダメ？」

「む……」

そうまで言われては、拒否する理由は無いかもしれない。確かにこれはデート。別にカップルと言っても恋人を意味する訳では無い。

そう考えると、なのはの言い分が正しい気がする。

いや、だが……。

うーむ、と一人唸るタカトに、なのはは苦笑。

するりとタカトの肘に右手を絡ませると、歩き出した。

「ほーら。ここまで来たんだし、悩んでも仕方ないよ。行こ？」

「うーむ。しかし……。と、言うか。なのは手を離せ。さっきも言ったが暑いだろう」

「ダメ。今日はデートなんだから」

あくまでも、デートをなのはは強調する。

すると、根本的にそれに慣れていないタカトは、『そんなものか……』と頷いてしまうのだ。

なのはは、心の中でごめんと謝りつつ。そのまま腕を引いてゲートに向かう。

チケットを前に立つスタッフのお姉さんに差し出した。

腕を組んで歩く二人にあらと微笑み、お姉さんはチケットの半券をちぎって、パンフレットと共に返してくれた。

受け取りつつ、園内に入る。

「……あれ、絶対に誤解されたぞ？　なのは」

「いいよ。私は困らないもん」

からかうようなタカトの問いに。あっさりと、なのははやり返す。それに、タカトは勝ち目が無い事を悟った。

両手を肘の部分で上げて降参を示す。

「さて、まずはどれを見に行くか」

「あ、タカト君。パンダが居るみたいだよ？」

「なに？」

パンフレットの地図を二人で見る。

なのはが指差す先には、確かにパンダのマークがあった。

「最近、中国からのレンタルで来たのか……。なら、これから見に行くか」

「うん。パンダなんて、久しぶりに見るよ」

「……野性のものであれば見た事があるがな」

「野性って……」

思わぬ方向に話しが飛び、なのはは啞然とする。

そんな彼女に、タカトは昔の話を懐かし気に語り出した。

「中国で修行中に偶然な。お持ち帰りしたら、師匠からしこたま怒られて、殴られて『返して来なさい！ 大熊猫なんてわたくしの家で育てさせません！』と言われて泣く泣く返した」

「泣く泣くって……。そう言えばタカト君のお師匠様って……。女の人の？」

「ああ、仙女でな。今だ頭が上がりらん」

「そうなんだ。一度会ってみたいな」

「やめておいた方がいい。……世界で自分が一番偉いと信じ切っている人だからな。——しかも、酒を水のように飲む人だし」

「――なんて言うか、すごい人なんだね？」

「ああ」

大いに頷く。

思わぬところから出たタカトの昔話しに、なのはは表情を綻ばせた。

――そのお師匠様と言うのはいつか聞かねばならないが。

タカトの仙術における師匠が女の人だなんて、初めて聞いた。
ルシアはこの事を知っているか、少し気になったが。今は置いておく。

取り敢えずは――。

「それじゃあ行こ？」

「ああ。……いや、だから手を引っ張るなど」

今はデートを楽しもう。

そう思いつつ、なのははタカトの腕を引いて。パンダー――。正確にはジャイアント・パンダのケージがある場所に向かった。



ジャイアントパンダは人気者。

それは、常日頃から言われ続けている事である。

だが、なのはもタカトもここまでとは思っていなかった。

ジャイアントパンダのケージ前、十m程にタカトとなのはは居る。何故、こんなに手前に居るのか。

それは、前述の通り。人が多いからであつた。

わらわらと、それこそ元旦の神社のごとく人が居る。

動物園のスタッフが、拡声器片手に『見たら後ろの方と交代して下さい!』と叫んでいる程である。

日本人の悲しき習性。人気があるものに釣られる現象であつた。

それに多分に漏れずに混ざっている二人も同じようなものなのだが。

「ひ、人。多いね」

「先程、電車でも聞いた気がするな。その台詞」

流石にこれだけの人数でこつた返しているのだ。
なのはが呻くように言う。

それに、何より――。

暑い。

炎天下の中でこれだけ人が居る状況と言うのは、それだけでも暑い。
い。

しかし、今更引き返すのも一苦勞である。

なにせ、既に後ろには行列が出来ているのだから。

自分はともかく、なのはが辛いか……。

横のなのはを見て、タカトはそう思う。

基本的にたいいていの場所で暮らせるタカトにとってすれば。この暑さも大した事は無い。

適応力が段違いなのだ、彼は。

だが、当然。なのははそうも行かない。
さてどうするかとタカトは思案して。

「よし、こうするか」

「え？ なに……。て、きゃ!？」

いきなり自分の方を向いたタカトに、なのはは疑問符を浮かべて。
次の瞬間、それどころでは無くなった。

タカトがなのはを抱え上げたからである。

人の目がある所でと。なのはが悲鳴を上げるがタカトは構わない。
なのはを自分の右肩の上に座らせて立ち上がった。

「どうだ？ 見えるか、なのは？」

「あ……」

思わず、声を上げる。

タカトの右肩に乗った、なのはの目にはジャイアントパンダがしっかりと映っていた。

タイヤでごろごろと遊ぶ姿に心が和む。

ちなみに、その下ではタカトが周囲の男共に睨みを効かせ――。

――なのはを右肩に座らせた為。男達がミニのスカートに視線を奪われたのである――。

――まあ、効かせまくっていた。

よほど、その目が怖いのか。

客の男達もさっと視線を逸らす。

そんなタカトになのはが上から声を掛けて来た。

「あ、ありがと。タカト君。でも、これ目立つし恥ずかしいから――」

「む、そうか」

言われて見れば、そうかも知れない。

タカトは頷くと、なのはを下ろした。

そして踵を返す。

「よし、見たな？　なら次に行こう」

「え？　でも、タカト君。まだ見てないよね？」

きょとんと、タカトになのはは問う。

それに、彼はにやりと笑った。

「大丈夫だ。」後でゆつくりと見る”。……ところで、なのはあれは何だ？」

「え？」

そんな台詞と共にあさつての方向へとタカトは指を差す。

釣られて、なのは視線を巡らせた。

そこには、当然。何も無い。

すぐに振り返り――。

「何も無いよ？ タカト君」

「そうか、見間違いだったかも知れんな。では、行こう。なのは」
「うん。――待って」

何事も無く、その場を立ち去ろうとするタカトに、なのはから制止が掛かる。

それにタカトは不満そうに、なのはへと目を向けた。

「なんだ、なのは？ 何かあったのか？」

「うん。取り敢えず、あんまりにも自然に”肩に担ぎ上げた。そのパンダちゃん”を説明してくれるかな？」

そう言いつつ、なのははタカトが左手一本で担ぎ上げたジャイアントパンダを指差す。

その時点で漸く我に返った周りの客が、逃げ出した。

だが、パンダはやけに大人しくタカトに担がれている。

そんなパンダを愛おし気に撫でながらタカトはなのはに答えた。

「伊織ぱん太郎。そう、名付けてみた」

「名前聞かされても、困るんだけど……。どうするつもり、なのかな？」

「ウチで飼う」

迷う事無く彼は言い切った。

半ば想像していた――。実現はして欲しく無かったが。

その答えに、なのはは盛大にため息を吐いた。

「まず最初に。その子、女の子みたいだよ？」

「な、何？　では、伊織ぱんだ娘と！」

最初にツッコむ所がそこかと、遠巻きに見ていた客が心の中だけでツッコミを入れる。

が、二人は構わず話しを続けた。

「その、えーと。ヤンヤンちゃん？　ここのパンダだよね？　返そう」

「違う、伊織ぱんだ娘だ」

「そこはもういいから」

パンフレットに目を落としつつ、なのははタカトに説得を試みる。しかし、やはりと言うか。タカトの解答は『NO』だった。

「なんで？　ぱんだ娘ちゃんを連れて帰っても、タカト君の家には住ませられないよね？」

「いや、大丈夫だ。神庭家の庭は、このケージより遥かに広い！　こんな狭い場所に置いておく方が寧ろ可哀相と言えよう……！」

タカトが堂々と言い切ると同時に、遠くでその発言を聞いた、この動物園の園長が膝から崩れ落ちた。

『ああ！ 園長が！？ 園長が涙を！』

『しっかりして下せえ！ 園長！ 泣いたりなんかしちや駄目ですぜ！』

『……狭いという現実是不変らしいね』

『ああ！？ 園長が！ 園長が膝を抱えて！ 誰だ！ 今余計な事を言った奴！』

わー、わーと遠くで騒ぎが起きる。

それを何となく聞いてた二人も騒ぎが収まる頃に、はっと我を取り戻した。

「と、取り敢えず。ダメったらダメ！」

「むう！ 何故だ！ この動物園より良い暮らしは確実に保証するのに！」

「パンダは世界遺産だからだよ！ タカト君だけのものじゃないの！」

がーんと、最後の台詞にタカトはショックを受けたようにのけ反った。

暫く、そのまま硬直し。

やがて。タカトは、ぽんだ娘（仮）に目を向けた。

「お前もここがいいのか？」

問う――。

当然、言葉が通じる筈も無いのだが。

果たして、ぱんだ娘（仮）はケージに視線を向ける。

そこには、もう一匹のパンダがいた。

タカトがそれを見て、呟く――。

「つがい、か……。俺は余計な事をしたようだ……」

「タカト君……」

「ぱんだ娘を、返そう。なのは」

「うん！」

その答えに、なのはが笑顔で頷く。

タカトはぱんだ娘（仮）に一度抱きつく。

そして、離れた。

「さらばだ。ぱんだ娘……。達者でな」

その台詞に、ぱんだ娘が悲しげに吠える――。

だが、今度こそはタカトは迷わなかった。

背中を向ける。

別れもまた、新しい始まりと信じて――。

そうして、タカトはぱんだ娘（仮）を、その場に置き去りにして歩き出した。

なのはもそれに付いていく。

う。

とても平和な光景であった。

そこで、スタッフさんの目がこちらに向いた。キャベツを差し出して来る。

「カップルさんですか。いいですねえ。どうです？ キリンに餌を上げてみますか？」

「いや、俺達は――」

「はい。やります♪」

タカトが馬鹿正直に否定しようとする前に、なのはがキャベツを受け取る。

タカトもキャベツを差し出されると、渋々受け取った。

「むう……。誤解が広まっているような気がする……」

「何ぶつぶつ言ってるの？ ほら、キリンが来るよー？」

納得行かないような顔となる、タカトになのはは呼び掛けつつ。キリンにキャベツを差し出す。

先程食いそびれたキリンは、今度はと。なのはへと首を伸ばし。手ずからキャベツを、もしやもと食べた。

「わ、わ！ ほら、タカト君！」

「ほう。では、俺も一つ」

なのはの手からキャベツを食べるキリンを見て。タカトも手に持つキャベツを鼻先に差し出す。

すると、なのはのキャベツを食べ終えたキリンがタカトのキャベツを今度は食べ始めた。

「ほう。可愛いものだ――」

「でしょ、でしょ？」

「うむ。ならば」

なのはに頷き、タカトはキャベツを食べ終えたキリンの頭をいきなりぐわしっと抱え込む。

は？ と呆気にとられた一同を無視して。
そのまま、ぽつりと告げた。

「お前の名は、今日から伊織ピョートルだ」
「……また？」

先程の再来である。
しかし、さっきのパンダもそうだったが。
今回のキリンも嫌そうなそぶりをしないのか。

ある意味天性なのかもしれない。
動物に好かれる、だ。

取り敢えず、なのははさっきと同じくタカトへと説得を開始する。

「あのね？ タカト君。そもそも、このキリンさんはこの動物園で飼育されてるから」

「大丈夫だ。世話は俺が万全にしよう。駄もしっしつけかりするぞ？」

「そうじゃなくて！。だいたい餌とかどうするの？　こんなに大きいんだから、餌代とか苦労するよ？」

「ふ……。グノーシス第二位。そして、喫茶翠屋&一条家でバイトしている俺をなめるな。ここより、良い餌を保証する！」

そのタカトの宣言を、再び通り掛かった。動物園の園長が聞き、再び、膝を折った。

『ああ！　漸くさつき立ち直ったばかりなのに！？』

『ダメだ！　園長！　地面に”の”なんて、書いたら俺達まで悲しくなっちゃいますぜ！？』

『——でも、餌がしょぼいのは事実よね？』

『ああ！　園長が！　園長がついに【一人〇っちの夜】なんかを！？　て言うか、さつきから本当に誰だ！？　いたらん事ばかり言うのは！？』

そんな騒ぎがまたもや、遠くで起き。

しかし、二人は何事も無かったかのようにあっさりと無視した。

「そもそも、その麒麟はこの動物園で飼育されてるんだよ！？

勝手に持っていったら盗難だよ？」

「ならば、買おう！　大丈夫。最悪、兄者のへそくりをくすねる事で。足りん分は補う！」

「へ、へそくりって……」

「ちなみに、あの人のへそくりは一兆円だ」

うっと。流石にその額に、なのはは呻いた。

それだけあれば、麒麟の一頭は確実に買える。

ちなみに法律上。麒麟は日本では、”飼える”のだ。

いや、本当に。

麒麟は日本で飼う事が出来る最大の陸上生物として名を馳せている。

維持費が洒落にならないが、彼ならばやり遂げる。

そして、飼育するならば確実にタカトは飼育するだろう。

彼に妥協は無い。

もう、ダメなの……？

ここに来て、ついに。なのはは敗北するのか。

手詰まりの状況に、彼女は言葉を詰まらせる。

そして、タカトは勝利宣言とばかりに。麒麟を買う旨を伝えようとして。

くいっくいっとなんかの裾を掴まれた。

？ と、疑問符を浮かべつつ。タカトはそちらを向く。

そこには、先程麒麟に餌をあげようとして。泣いてしまった男の子が居た。

それだけでは無い。その後ろに沢山の子供達が居た――！

「麒麟さん。つれていっちゃうの？ ボクがさっきないちゃったから……？」

「ぬ、う………！」

「もうなかないから、キリンさんつれていかないで……！」
『『おねがいします！』』

子供達が一斉に頭を下げて、タカトにお願いをする。

何と言う事だろうか。自分が、今まさに子供達が夢を持って会いに来ているキリンを奪おうとしていたなんて……！

夢を奪おうとしていたなんて！

頭を下げる子供達にタカトは膝を着く。

頭を上げさせると、そのまま今度はタカトが頭を下げた。

「済まない、子供達……。俺は間違っていた」

今更気付くなよと、どっからともなくツツコミが入るが。当然、タカトは無視する。

そんな、タカトに子供達は目を輝かせた。

「つれていかないでくれるの？」

「ああ、当然だとも。なあ、ピョートル。お前も子供達と離れたくないよな……」

タカトがそう呟くと、何と滅多に鳴かないとされるキリンであるピョートルが『もー』と、鳴いた。

それに、子供達だけでなく周りにいる一同は仰天した。

”キリン”が鳴いたのだ。

飼育員ですら、殆ど聞けないとされるキリンが。

当然、その場に居る一同は全員初耳である。

子供達が『わぁ!』と喜ぶ中。

タカトはピョートル（仮）に背を向けた。

さらばだ、ピョートル。達者で暮らせよ……。

そうして、タカトは去って行き。なのははホッと胸を撫で下ろして彼に付いていった。

ピョートルと喜ぶ子供達を背にして――。

その日。キリンのスペースは伝説になった。

キリンが鳴いたと。

その立役者は、静かに去って行ったと言われる。
そして、その立役者は。

「いい加減にして下さい」

「……はい」

直後に、動物園スタッフに捕まり。

小一時間、説経されたそうであつたそうなの。

漸く、午前が終わり。デート後半戦が始まる。

（デート話、後編に続く!）

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」(午前編)(後事

はい♪ 午前編。終わりました♪

天然は暴走させると取り返しがつかなくなる事を俺は悟った……。てか、タカト。……はっちゃけ過ぎだろう(汗)

他の天然キャラが同じ道を歩まぬ事を切に祈ります。

主にLVのヴィヴィオとか、メイデンとか(笑)

ちなみにですが、このデート編。

たまにアリサ道場の召喚したゲストの方が匿名で混ざり込んでた

り(笑)

いや、実名もいますけどね(笑)

ではでは♪ 次回も必ず見るべしっ！

このネタ分かる人居るかなあ(笑)

ではでは〜♪

……はい。ども……。テストメントです♪

午後編じゃねえの？　と思われた方々、正解です。

——お昼に時間取られたあ！

いやね？　お昼で書きたい事全部書いたらどえらい量に(汗)

書いてる最中に、なん……だと……？

と、何回言った事か(笑)

てな訳で三部化と化します♪

いや、ごめんなさい(汗)

なお、今回。”甘々もいいところ”なので、そう言った事に耐性が無い方。

オリキャラと原作キャラの甘々劇場が嫌な方はお気を付け下さい♪

悶えて、精神死される可能性があるからなあ……。

ではでは、どうぞ……♪

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」（お昼編）

動物園スタッフから小一時間説教された後。

なのはと、タカトの姿は園内の広場の中にあつた。

現在、十一時半。

まだパンダとキリンを見ただけだが（逆を言えばそれだけで、二時間半も使った事になる）。

ちようどお腹も空いた事もあり、広場で昼ご飯を食べる事にした訳である。

そんな広場では、なのはが鼻歌を歌いながら広げたレジャーシートの上で、バスケットを開いていた。

それを見て、タカトが眉を潜める。

「……時間があれば、俺も作って来たんだが……」

「それだと意味無いの。これは、リベンジだよ！」

ぐっと握りこぶしで彼女はタカトに宣言する。

そのひざ元には、広げられたバスケットの中身……。つまり、なのは手製の弁当が鎮座していた。

かなり豪勢な弁当である。

たまご焼きに、からあげ。

たこさんの形に切り揃えられたウィンナー。

色とりどりの野菜に、俵の形で握られたおにぎり。

それらが、数個づつ入っている。

極めてオーソドックスかつスタンダードな弁当ではあるが、それ

だけに腕が試される代物であった。

それを見て、タカトは苦笑する。

「……まさか、まだ根に持っているとはな……」

「これは、女の子としての矜持プライドの問題なの」

そんなタカトに、なのはは真剣な顔で頷いた。

さて。何故、なのはがこんな風にタカトに挑戦するが如く、弁当を差し出しているのか。

それには当然、理由があった。

タカトの家事……。特に、料理に関してのスキルの高さは既に周知の事実な訳だが。

これは、食べた者を感じに浸らせると同時に。主に女子のプライドに激しいダメージを与える事となるのだ。

それは生徒会メンバー達。つまり、なのは達も例外では無かった。と、言うか1番食らっていた……。二重の意味で。

自分より料理の上手い男の子。

しかも、それがわりと料理の腕前に自信があればある程、ダメージは倍加する。

フェイトは元より、なのは、はやても料理の腕前は相応に自信を持っていた。

持っていたのだが、それをあっさりと叩き壊したのが目の前のブラウニーな訳である。

しかも作るだけならいざしらず、自分達が作った料理の採点までやるのだから堪ったものでは無い。

そして、彼は天然気質だと知れ渡っている伊織タカト。思った事は、はっきりと口に出す人間である。つまり採点に容赦の二文字は無かった。

前回の採点は、フェイト85点。はやて95点。そして、なのは89点。

彼の合格ラインは、一応80点台との事だが。だからと言って素直に喜べる訳も無い。

ちなみに100点の基準はと聞いたたら、あっさり『俺だが?』と言い出しやがったのだから、女性陣のプライドはズタズタであった。

……タカトの改良案で作ると本当に美味くなったし。

そういう訳で、彼女達は隙あらばとタカトにリベンジを誓い。100点を、否。100点以上の評価を貰わんとしている訳であった。

閑話休題。

「ふむ。では、どれくらい腕を上げたか。頂くでしょう」

「うん♪ 食べて食べて♪」

「では……。ん?」

いただきます、と告げようとして。

しかし、そこでタカトは訝しむような顔となった。

今気付いた事だが、箸が無い。

ひょっとして、入れ忘れたのか？

そう思い、なのはに尋ねようとして。

「えっと、はい」

「……一応は聞いておく。なんの積もりだ？」

自分の分は持っていたのか。

手に持つ箸で、こちらへと鳥の唐揚げを差し出す、なのはにタカトは唸るようにして呟いた。

それに、若干なのはは顔を赤らめ――。

「えっと、あーんてしてあげたいなって」

「何故に？」

その行動から、答えは予測出来ていたものの。
いざ告げられた理由に、タカトは頭を抱える。

そんな事をしなくても、箸をもう一つ用意すればいいだけでは無
いのか。

至極当たり前と言えば、当たり前だが。

場の空氣的には全くそぐわないそんな思考をタカトはする。

だが、なのははこちらに唐揚げを差し出したまま。
さて、どうするかとタカトは頭を悩まし。

そんな彼に、なのはは口を開いた。

「えっとね。こうして食べると美味しくなるんだよ？ だから――」

「なに？　そうなのか？」

意外だったのだろう。なのはの言葉に、タカトは驚いた顔となる。それに、ちょっとだけ苦笑しながら、なのはは頷いた。

嘘を言っている訳では無い。無い筈だ。

なにせ、彼女の母と父である桃子と士郎は、毎日あーんをしている。

その時の答えがこれだったのだから。

だけど、こうもあっさりと信じられると。

何と言うか、不安になる。

彼の将来的な意味で。

だが。タカトはそんな、なのはの心配をよそに唐揚げを前にして、ふむと頷いた。

「そうなのか……。はじめて聞いたな。なのは、礼を言おう」

「う、うん」

「では、早速――」

「あ」

はぐっとタカトは顔を寄せると、唐揚げを一口で頬張った。

あんまりにもいきなりだった為か。

なのはも目を丸くする。

が、タカトは構わず弁当に視線を移した。

「ふむ……。これは――」

「ど、どうかな？」

「いや、採点は後にしよう。次はたまご焼きを食べたいが――」

そこで、タカトはちらりとなのはに視線を戻した。
微笑むと、そのまま告げる。

「最後まで食べさせてくれるんだろう？　よろしく頼む」

その一言に、なのはは顔が赤くなった事を自覚した。

「ふむ……」

その後、しっかりおかず全種類とおにぎりを食べ終わると。タカトはふむふむと頷いた。

それを手ずから彼に食べさせた、なのはは緊張した面持ちで言葉を待つ。

いよいよ採点されようとしている事がわかったからだ。

……何故、完食していないのかは気になるが。今は置いておく。

そして、彼はなのはに向き直ると。ぽつりと採点を告げた。

「98点。美味かったぞ」

「きゅ……98点？」

「うむ、98点」

まさかまさかの予想外の高得点に、なのはが目を大きく見開いて呆然と聞き直す。

それに律儀に答えながら、タカトは頷いた。

「唐揚げだが、肉汁を上手く閉じ込めてあったな。保温もばっちりだったし――」

続けて評価した部分をタカトが説明を始めるが。

なのはは、それを半ば聞いていなかった。

ちよつと、どころでは無く。凄い嬉しい。

何せ、”あの”タカトがその評価を下したのだ。

採点にも評価にも一切容赦をしないあのタカトが！

それが、嬉しく無い筈が無い。

100点を取れた訳では無いが、未来の展望が開けた気がする。

そんな風に喜ぶなのはをよそに、タカトの説明は終わりに向かっていった。

「――そして、だが。あのあーんな。あれのおかげか本当に美味しく感じたな……」

「え？　そ、そうなの？」

「ああ、俺も意外だったがな。だから半分残したんだ」

なのはに頷きながら、タカトは言う。

そしておもむろに、なのはから箸をやりわりと奪うと唐揚げを摘み上げ、なのはに差し出した。

「ほら、食べてみる。自分で実際にな。……そもそもお前、なんも食べとらんだろ？」

「え！？ わ、私はいいよ！」

「何を言う。俺だけ食べてお前は食べんなぞ認められるか」

タカトから差し出され唐揚げに、彼女は先の倍は顔を赤くしてタカトを上目付かいで見る。

それにタカトは微笑みながら、更に前へと箸を進めた。

「ほら」

「あ、……その……」

ちらりとタカトと差し出され唐揚げの間で視線を巡らせる。

やる時は意外に度胸が据わるものだが、やられる側になると。こんなに恥ずかしいなんて……。

今更ながらに、これが凄く気恥ずかしい事だとなのはは悟った。が、タカトは構わず唐揚げを差し出したまま。

しばらく彼女はうー、と迷い。

やがて、おずおずと口を開いた。

「あ、あーん」

「うむ、あーん」

唐揚げを半分ほど、——丸一個は流石に大き過ぎたのだ。かじって口に収めた。

もぐもぐと食べると、肉汁が口の中で溢れる。

それを感じながら、なのはは何故美味しく感じるのか少し分かつ

たような気がした。

幸せな感じがしたのだ。

あーんとして貰えて。

タカト君もそう感じてくれたのかなあ……。そうだと嬉しいな。

そう、思いつつ残りの半分も食べる。タカトはそれを見て微笑んだ。

「どうだ？　美味しかったろう？」

「……う、うん。美味しかった……」

顔を赤くして、なのはは頷く。それに、タカトはうむと頷き返し――。

「では、次はたまご焼きだな」

「……………え？」

そう言いながら、今度はたまご焼きを摘むタカトに、なのはは一瞬だけ我を忘れて。

彼の意図に気付いて、慄然とした。

彼は、自分がしたように弁当に入った全種類の料理を食べさせる気だと気付いたからだ。

当然、あーんで！

唐揚げ一つでいっぱいだったのに、全部だなんて……！

一瞬だけ想像してしまい、いやいやと首を振る。
どう考えてもまずい。

気恥ずかしさでどうにかなってしまいそうだったから。

すぐに断ろうと、なのは声を掛ける。

「あの、タカト君？　これ以上は、その……。恥ずかしいから……」
「む？」

あわたたと説明しようとする、なのはにタカトは不思議そうな顔となる。

恥ずかしいかが分からないのだろう。

小首を傾げる彼に、なのはは続けて説明する。

それを聞いて、タカトはむうと唸った。

「つまり、これ以上は嫌だと？」

「……え？」

「嫌なんだろう？」

タカトの問いに、なのはは呆然となる。

それに、タカトは再び問い直した。

その顔は変わらぬ無表情だが、幾分傷付いたようにも見えて――。

「ち、違うよ！　嫌なんかじゃないよ！」

殆ど反射的に、なのはは答える。

きよとんつとこちらを驚いたように見るタカトに、彼女は更にくし立てた。

「その、あーんてして貰って嬉しかったし！　ちよつと幸せかなあ
とか思ったし！　だから……。その……」

「――詰まる所、嫌では無いと？」

自分が大声を出していた事に気付いたのか、段々となのはの声が小さくなる。

それに、タカトは納得したように頷いた。

漸く分かって貰えた……。

そう、なのはが安堵の息を吐く。

すると、タカトはたまご焼きを掴んだ箸を改めて、なのはに差し出した。

それを見て、なのはは再び硬直する。

これは――。

「……えっと。タカト君……？」

「嫌じゃ無いんだろう？　なら、問題無いと言う事では無いか。と
言う訳で続きだ」

――つまり、振り出し。

タカトはなのはの気恥ずかしさなど分かってはいなかったのである。

嫌では無いと言う事が分かったただけなのだ。

しばらく差し出されたたまご焼きに呆然とし。

なのはは、軽く一息吐く。

結局の所、どう回り回ってもあーんで食べさせられると気付いたからだ。

そう考えると、恥ずかしく考えていた事もバカらしく感じる。

こうなったら全部あーんで食べさせて貰おう。

腹が据わり、なのははそう決めた。

そうなるど気恥ずかしさも感じない。

タカトに微笑むと、素直に口を開く。

「あーん」

「うむ、あーん」

——そして結局、なのはは残った弁当を全部タカトにあーんで食べさせられた。

……なお、周りに居た他の動物園の客達が二人に変わり気恥ずかしさで去っていった事は、まあ、余談である。



お昼ご飯を食べ終えて、買って来たお茶を飲み一息。

なのはとタカトは、のほほんと昼下がりを楽しんでいた。

夏にも関わらず、日影に居る二人に吹く風は涼しく気持ちいい。

二人は最初こそ午後からどこを回ろうか話していたのだが。風に吹かれている内にそれも忘れてゆっくりとしていた。

「……気持ちいいねえ……」

「うむ。この季節にしては珍しいな」

眠そうな、とろんとした声で言うなのはにタカトは頷く。

そして瞼が落ちかけたなのを見て。タカトは彼女を引き寄せた。

胡座あぐらをかいた膝に彼女の頭を乗せてやる。

「……え、えっと……!」

「眠そうにしていたからな」

ひざ枕。

しかし、男女逆転状態のそれである。

一瞬だけ、顔を赤くして啞然とした彼女にタカトは笑い。頭を撫でてやった。

「眠いのだろう？　しばし、昼寝している。健康上でも食休みは必要だ」

「で、でも……」

「いいから。三十分程したら起こしてやる」

言いながら、頭を撫でる手を止めない。

それが、気持ち良くて。

ただでさえ眠かったのが、一気に眠くなっていく。

夏の日差しを避けた日影と風の涼しさが、それを助長させた。

ちらりとタカトの顔を盗み見る。

彼は一見、無表情のようでいて。でも、良く見れば薄く微笑んで

いた。

その微笑みは、とても優しくて。

なのはは、それに見惚れながら目をゆっくり閉じていく。
閉じながら、ぽつりと呟いた。

「……タカト君ってさ……」
「うむ？」

小さい呟きだったが、聞こえたのだろう。聞き返して来る。
それを聞きながら、なのはは続けた。

「……『人たらし』、だよね……」

「……何だ。その呆太閣秀吉に付られるべき呼び名は？」

「タカト君の事。女の子でも男の子でも関係無く、優しくて、陥落
させちゃうから」

「陥落……。それだけ聞くと、俺は最低人間なんだが？」

まるで四方八方に手を付けている軟派男のようである。

しかも、性別関係無し。

流石にそんなふざけた人間では無いとタカトは主張したい、が。
なのはは、ふふと笑うだけで取り合わなかった。

「……タカト君だもん。皆に自然に優しくしちゃうのは、何時もの
事だけど」

「残念ながら、俺はお前が言うような人間じゃない。――身内以外

はどうでもいいしな」

なのはの言葉を遮るようにして、彼は告げる。

それは、何より彼の本心だった。

彼は自分が彼女のような人間では無い事を自覚している。

身内や気に入った人間は幸せになって欲しいと思うが。

それ以外は本気でどうでもいいと思う。

嫌いな人間に関しては寧ろ不幸になれと心の奥底で思っている。

だから――。

「なら、私は？」

「……………」

そんな問いに、タカトは言葉を途切らせた。

何と言ったらいいか分からなかったのだ。

そんな彼に、なのはは微笑む。

「タカト君は、私の事――」

「嫌いだ。そんな事を聞くような奴はな」

ぷいっと顔を逸らして彼は告げた。

そんな、あまりにも分かりやす過ぎる仕種と言葉に彼女はやっぱり笑った。

そっぽを向いたタカトの頬に手を伸ばして撫でる。

「嘘つき」

「…………誰がだ」

「タカト君が」

そんな事をされても手を退かそうとしない彼がそう言っても全く説得力は無い。

無勢としたままのタカトの顔がおかしくて。なのはは少しまた笑うと、手を引っ込めた。

それに、タカトは目だけをなのはに向けて。

再び彼女の頭を撫でた。

「いいから、もう寝ろ」

「…………うん」

そんな言葉とは裏腹に、自分の頭を優しく撫でる彼の手になのはは頷くと。

おやすみと告げて、寝息を立てだした。

しばし、優しく吹く風がそんな二人の頬を撫でて。

タカトは、はあとため息を吐いた。

「『人たらし』ね。…………お前には言われたくは無いよ。なのは」

そう言いながら、また彼女の頭を撫でてやる。

いかな意味がその言葉に込められていたか。

タカトはそれっきり何も話さず。なのはの寝顔を眺めながら、昼下がり過ぎしていった。



……む？

あれから少し経ち。

タカトは疑問符を浮かべながら目を覚ました。

なのはに釣られて眠ってしまったか。

タカトにしては珍しい事である。

しまったなと思いながら、目を開いて――。

「あ、起きた」

「……………なのは？」

”見上げる先”で、彼女が微笑んでいるのをタカトは見て、その名を呼んだ。

どうやら、自分が寝てしまった間に起きたのか。

それはともかく――。

タカトは疑問符を浮かべたまま、訝しい顔となる。

見上げる先のなのはだが、どうにも視点がおかしい。

彼女の真下から見るとような視点である。

ちょうど胸を挟んで彼女の微笑む顔がある。

さらに、頭の下には柔らかな感触があつて――。

「……おい」

「ん、何かな？」

現状、自分がどんな状態にあるかを認識して。タカトは呻き声を上げた。

さにあらん。彼は、なのはに横向きにひざ枕されていたのだから。ついさっきまで彼女をひざ枕していたのに、何故に状況が反転しているのか。

……まあ、起きたなのはが、寝た自分に気付きひざ枕を代わったのだろうか。

彼女の太腿に頭を乗せたまま、はあっと息を吐く。

そして、起き上がろうとして。

「まだ、ダ〜〜メ」

「ぬ？」

額を押さえられ、邪魔されてしまった。

何故に？ と、不思議そうな顔となる彼に、なのはは笑う。そしてある物を取り出した。

「じゃん♪」

「……何だ？ 耳かき？」

思わず、取り出された物――。耳かきだが。

それを見て、タカトは問う。

なのはは、そんな彼にえへっと笑って頷いた。

「そう。タカト君、前。耳かき苦手だって言ってたよね？」
「……ああ。そう言えば、そんな事言ったな」

生徒会の仕事をしている時だ。

仕事の合間のちょっとした駄弁りの時に苦手な事をそれぞれ出したのだが。

その時、タカトが言ったのが『耳かき』であった。

何故、彼はそれが苦手なのか？

理由はひどく簡単。自分で上手く出来ないからであった。

基本、乾燥系の彼は風呂上がりに綿棒でちょこちょこやる程度なのだが。

それが、ひどく気に食わない。

やるからには、徹底してが彼の信条である。

だが、事は耳かき。

完全に掃除出来たか確認しようにも、上手く視認出来ない。

空間把握はこう言った事には役に立たないと来ている。

どこかの空間を視認出来るというヘタレな主人公を羨ましく思ったのは、ちょっと内緒であった。

そう言った事で、彼は耳かきがひどく苦手であったのだが――。

「うん。だから、私が今日してあげようと思って」

「……耳かきを？」

「耳かきを♪」

間髪入れずに答えてくれる。

それに、タカトはやはりため息を吐いた。

恥ずかしいから断る事も考えたのだが、先の『あゝゝん』が頭を
ちらりと過ぎる。

自分はある時、何と言ったか？

嫌では無いのなら、構わないだろうか？

確か、そう言った。

それは今の状況と全く同じであった。

嫌では無い。

そう思う、自分がいる。

ならば。

「……お前がいいのなら、頼めるか？」

「え？」

タカトが頷きと共に告げた言葉に、思わずなのは疑問符を浮か
べてしまう。

それに、タカトは眉を潜めた。

「……お前が言い出した事だろう？ 何だ、嫌なのか？」

「う、ううん！ そんな事無いよ。ただ、タカト君が素直だから」

「……いつもは素直じゃないみたいない方だな？」

「それをタカト君が言う？」

逆に呆れたように言われてしまった。

それには肩を竦めて、答えをはぐらかす。

そんなタカトに、彼女は笑うと肩の辺りに取り出したポケットティッシュを広げて置く。

準備が整うと、早速とばかりに手に持つ耳かき棒を、ゆっくりと耳の中へと侵入させて来た。

「苦手で言うわりには、キレイにしてるね？ 結構小まめにしてるの？」

「週一くらいか。いざと言う時に聞こえが悪くては、たまらん」

そうなんだ。と頷きながら、なのはは耳かきの先を奥へと進める。

——何故だろう？ その声がやたらとうきうきとしているように感じるのは。

ただの気のせいかな、それとも——。

「あ、でも奥の方にちよつと大きめなの発見♪」

そう言うのと、耳かき棒の先が中の側面を軽く擦った。

すると。

「う……っ。ぬ……」

「ん、なかなか。しぶとい」

タカトが小さく声をあげる。

それが、少し楽しいのか。なのはは実況なんぞをしながら耳かきを続行した。

更に奥へ。

耳かきの先が奥に奥に進む。

そんなデリケートな場所を彼女に任せていると言う状況にタカトは奇妙な感覚を覚えた。

なのはは、そんなタカトを嬉し気に見ながら続行する。

「これなら、どうかな、な」

「っう、……っ」

こりっこりっとして側面を削っていく耳かき棒の先。

それに、タカトから妙な声を出されて、なのはは苦笑した。

「タカト君のえっち」

「んなっ!?! 何を……!」

「変な声出すんだもん。えっちだよ」

「冤罪だ! そもそも——っん!」

こりっとして再び耳かき棒が中の側面を攻撃する。

ぞりぞりと擦る感覚に、タカトは背筋がぞくぞくするような感覚を強く受けた。

その度に、手や足がびくっと動く。

それを見て、珍しくもなのはが悪戯めいた笑いを見せた。

「どう? 気持ちいい?」

「たわけ……! 答えられるか!」

打てば響くようなタカトの反応に、なのははクスクス笑う。

そして執拗な攻撃に、ついに目標はぽろりと取れた。

「あ、取れた♪」

嬉しそうな声で、なのはは取れた耳垢を広げたティッシュの上に置く。

続けて間を置かずに、タカトの耳へと耳かきを侵入させた。

「次〜♪」

「……もう、好きにしろ——。っ！　う！」

タカトがふて腐れたように唸り。

それを聞きながら、なのはは今度は浅い部分の攻撃を開始する。

入口部分を素早く何度も搔き出して、それに先とは違う感覚を受けてタカトから上擦った声が出た。

暫くそうして、耳掃除は続けられ。

やがて、耳かきがすつと抜かれた。

それに、タカトは漸く終わったと安心し——。

「ふー」

「ふぁ！」

最後に甘い吐息が耳の中に吹き込まれて、タカトは似合わない声を上げた。

おそらく、彼女はこうしているのが普通なんだろうが。全く慣れていないタカトはそれどころでは無い。

「ふー」

「ちよっ……！ 待て、こら！ なのは……っ！」
「ふー」

更に続けて二射。

タカトの耳を、なのはの吐息が舐める。

くすぐったいのか、あるいは――。

ともかくこれ以上はたまらないとばかりにタカトは、なのはを見上げる。

それに、なのははクスリと笑い。

「それじゃあ、タカト君。反対♪」

「……なん……だと？」

「反対の耳♪」

愕然とするタカトに彼女は優しい、しかし有無を言わさぬ声で告げ。

彼はがっくりと首を落とすと言われるままに今度は左耳を上に向ける。

今度は左耳だ。

すると、今度はなのはの身体側に顔が向く事になってしまい、身を固くしてしまう。

更に、柔らかい太陽のような甘い臭いが鼻をくすぐった。

思わず、目を閉じる。

「……ん？ タカト君、ちよっと緊張してる？」

「ひざ枕されて、耳掃除されている。この状況で緊張せぬ男がいるなら、逆に見てみたいわ……」

無勢とした顔で、タカトは言う。

すると、なのははふくふくと、眩きながら耳かき棒を再び侵入させて来た。

「……なら、これが誰でも緊張しちゃうのかな？」

「む？」

「ほら、例えばフェイトちゃんとか、はやてちゃんとか、ルシアちゃんとか。生徒会メンバーの誰でも？」

質問の意図が分からなかったのだろう。

不思議そうな顔をするタカトに、なのはは例えとして生徒会メンバーの皆の名を上げた。

それに、タカトはしばし唸り。

「それは……。まあ、緊張するのでは無いか？」

あっさりと、そう答えた。

と言うか緊張せぬ筈も無いだろうと、タカトは思う。

状況的に、ひざ枕で耳掃除なんてされれば緊張するだろう。

それが当たり前と思う。

だが、しかし。彼は知っておくべきだった。

『正直は美德。しかし、それは時と場合による』と、言う大前提を。

「ふーん」

先と同じ声……？ 否、若干つまらなそうな響きがそこにはある。それと同時に、耳かき棒が侵入を続けて。

「……なのは？ 何か耳かきの先が凄い奥まで入って無いか……？」
「そっかぁ。誰にでも緊張しちゃうんだー」

感情が全くこもらない声と共に、耳かきの先がどんどん入り。
それは、ついに最深度へと潜る――！

「ま、待とう、なのは！ 何を怒っとるんだ！ お前は！？」

なのはは無言。

黙ったまま、耳かきは更に潜り続けて。
タカトはそれに、ぞくりとしながら慌てて何故か機嫌が悪くなっ
た原因を探る。

先の会話、会話だ……！
そこに、何か！

するとあっさりと答えは出た。
あ、と気づき慌てて訂正する。

「いや、違った。誰にでもとかそんな事は無かった」
「ほんと？」

「ああ、本当だ」

その返答に、しばし耳かき棒が止まり。
やがて、ゆっくりと高度を上げ始めた。

それに、本気で安心したのかタカトは全霊を込めたかのようなた
め息を吐いて。

「それじゃあ、続きね」

「ああ」

ぐったりと疲れ果てたようなタカトに、なのはは続けて耳掃除を始めた。



「はい、おしまい♪」

再び、耳に甘い吐息を三度流され。

漸く告げられた、その言葉にタカトは懽然となりながら起き上がった。

……顔が少し赤く見えるのは気のせいでは無い。

そんな彼になのはは微笑み、ティッシュを丸めて片付けながら聞いた。

「どう？ すっきりしたかな？」

「……ああ。大分良くなったがな……」

耳を触りながら彼は答える。

完全に、なのはの手の中で踊ったのが気に食わないのだろう。その彼は仏頂面のままだった。

なのはは、そんなタカトがおかしくて微笑みながら続ける。

「また、やって上げるからね♪」

「二度とごめんだ」

きっぱりと告げる。

そんなタカトの何が可笑しいのか、なのはは笑い続け。

タカトはぶすつとしたまま、パンフレットを取り出した。

現在、午後十三時。

まだまだ時間はある。ただでさえ、パンダとキリンしか見て無いのだ。

せっかく動物園に来たのだから、他のも見たい。

そう思い、午後からは何を見に行くかタカトは思う。

なのはと同じくパンフレットに目を落としながら、ちょっとだけ苦笑した。

「今度はお持ち帰りなんて、しようとしちゃダメだからね？」

「む？ 分かつとるさ、心配性め。次は”バレ無いよう”に――」

「だから、そもそもしちゃダメなの！」

ぴしゃりと告げる。

そんな、なのはの言葉にタカトはむうと呻いた。

「い、一頭くらい……！」

「ダメったらダメ。どうしてもって言うならルシアちゃんかトウヤさんに言っちゃうからね？」

「むう……！」

流石にその名には弱いのか、タカトが目に見えてうろたえる。

なのはは、続けてタカトに告げた。

「動物園の動物は、皆。ここだから、絶対お持ち帰りなんてしちゃダメ。いい？」

「……ぬう、分かった。なら、見て愛でるだけにする」

タカトがついに頷く。それに、ちょっと可哀相かと思うが。こればかりは仕方無い。

なのも頷くと、やがてパンフレットを指差した。

「なら、次はここに行こうか？」

「む？ トラのエリアか……。いいだろう」

なのはが指差した場所にはデフォルトされたトラの絵柄がある。それにタカトが頷くと、よしと二人は早速立ち上がった。

レジャーシートを片付け、行く準備を整えた。

「よし、忘れ物は無いな？」

「うん、大丈夫だよ」

「なら出発と行こう」

言うなり、二人連れだって歩き始める。

動物園デート。午後の部が始まろうとしていた。

（午後編に続く）

はい♪ てな訳で有り得ない事に、お昼ご飯と昼休みのいちやいちやだけで、これだけ文字数を使いましたとさ♪(笑)

いや、ごめんなさい(汗)

い、石は勘弁を(汗)

ちなみに、タカトとなのはの恋愛年齢はいいところウブな高校生レベルでございます(笑)

いや、下手すると中学生レベルですが(笑)

なので、間違っても”えらい事”になったりはしないので安心を♪

……安心させときながら、不意をつくのが俺の主義ですが(ニヤリ)

さて、ではでは午後編をお楽しみに♪

ではでは〜♪

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」(午後編)(前編)

……はい♪ 午後編を漸くお送りします♪

その上で一言。

いや、すみませんでした。

最後まで見ればまあ、謝罪の理由は分かると思われますが(笑)

どうして、こうなった……？

坊やだからさ……。

と、言う訳でデート午後編♪
どぞ〜〜♪

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」(午後編)

広場を抜け、タカトとなのはの二人は連れ立ってトラのブースへと向かった。

パンフレット片手に向かったその先では、檻の中で欠伸をするトラが出迎えてくれる。

それを見て、タカトは隣に立つなのはと苦笑した。

「……随分とゆったりしとるな」

「動物園だもん。あんまり、があーて吠えられるよりずっといいよ」
♪

のんびりとした、しかしある種の貫禄を感じさせるトラを見て二人は感想を言い合う。

その前ではやはりと言うか、子供達がきやいきやい言いながらトラを楽しげに見詰めていた。

肉食獣エリアに居るのに、微笑ましい。

トラも子供達を怯えさせるような真似をせず、のんびりとしたものである。

やがて飼育員だろう。動物園のスタッフの制服を着た男が現れると、ひょいと肉の塊を放る。

おそらくは餌か、トラはごろごろ喉を鳴らすと肉塊に噛り付いた。それを見て、子供達が目を輝かせる。

実際目の前でトラが餌を食べる場面と言うのは、なかなか迫力があるものだ。

なのはもうわあと、声を上げた。

そして、ちらりと横を見ると――。

「いい……。いいな、トラも。今度、サバンナにでも……。いや、いっそロシアにまで出向いて……」

「……タカト君。ちなみに日本の一般家庭じゃ、トラは飼育出来ないからね?」

「な、なにい!?!」

がーん、と目を大きく見開いてタカトが叫ぶ。
それに、なのはため息を吐いた。

「確か、殆どが絶滅危惧種だったかな? そんな事を聞いた事があったよ?」

「ば、馬鹿な……。で、ではライオンは……?」

「基本的に大型の肉食動物は全部ダメ!」

再び、がーん! とショックを受けるタカト。

と、言うか何故にそんな事も知らないのか。

……まあ、タカトだからと言うだけで大体は説明出来てしまいそうで若干怖いが。

そんな風に考えていると――。

「む……? 向こうが何か騒がしいな……」
「え?」

いきなり目つきを変えてタカトは別方向に視線を向けた。
なのはも思わずそちらに目を向ける。

そこでは、結構大柄の男達二人が若い二人の女性と何やら騒いでいた。

一瞬痴話喧嘩とも思ったが、どうにも雰囲気がおかしい。

「おら、ぶつかっというて詫びも無しってか？」

「で、でも、ちゃんと謝って……」

「謝りゃ済む問題かよ？ ああ？」

凄む男達に、ひっと女の子達が怯える。

それを見て男達は下卑た笑いを浮かべた。

ついには手を掴んで、引っ張ろうとして――。

――それら一連のやり取りを聞いて、なのはは一步前に出た。

「どうする気だ？ なのは？」

「どうもこうも無いよ。止めないと……！」

それを聞いて、タカトはやはりかと嘆息。

彼女の性格を考えれば、これは当然の反応と言えた。

だが――。

「落ち着け、なのは。お前が出る必要は無い」

「出る必要は、て……！ でもあの娘達が！」

”お前の手助けは”要らんと言ってるんだ。……”奴”が居る」

奴？

タカトの台詞に一瞬、なのはは啞然として。

「ぐへっ！」

「あべしっ！」

そんな分かりやす過ぎる悲鳴を聞いた。

慌てて視線を戻す。すると、男達があっさりと地面に転がされていた。

絡まれていた女の子達も呆然としている。

何せ、男達をのしたのは――。

「き、狐？」

折り重なる男達の上に二本足でどーんと立つそれを見て、なのははその動物の名を呼んだ。

狐。そう、狐である。

まごうこと無くそれは狐であった。

……前足で腕組み(?)をして、後ろの二本足で立ち、男をぺちぺちと踏ん付けている以外には。

タカトは苦笑を一つ漏らすと狐に向かって歩く。

それに狐も気付き――。

「よう」

「うむ」

『『……狐が喋ったあああああ——！！？』』

気軽に手を上げて挨拶する狐にタカトも手を上げて挨拶する。
それを見て、なのも周囲の客達も迷う事無く叫び声を上げた。
が、二人は構わず朗らかに会話を交わす。

「全く、なんで動物園にこんな陳腐なチンピラが居るんだか……」

「暇だったからじゃないか？」

「暇だったからって動物園に来なくてもいいじゃねえか。ったく」

「あ、あの……？ タカト君？」

「む？」

ぶちぶちと愚痴を言う狐(?)と相槌を打つタカトに、恐る恐る
なのはが声を掛ける。

それに、漸くタカトは目を彼女に向けた。

「どうした？ なのは？」

「どうしたって……。そ、その狐さん喋って……！」

「……？ 狐が喋ったから何だ？ 俺達の世界じゃ大して珍しくも

——」

そこまで言った所で、タカトは狐からくいつくいつと裾を引っ張
られる。

それにタカトは再び狐に目を向けるとほしよほしよ二人で内緒話
しを始めた。

そして頷き合うと、再びなののはに向き直る。

「——腹話術だ。なのは」

「え、ええ！？ ふ、腹話術なの！？」

「うむ、最近ちょっと隠し芸に凝っていてな」
『『えー』』

あかさらさまに嘘だと分かるその言い分に、周りの客達ごとなのはも脱力する。

何故か狐もうんうんと頷いているから始末が悪い。

と、言うかこの二人（？）は信じさせる気はあるのかと言いたくなる。

そんな風に脱力してしまった周囲を余所にタカトは狐に目を向けた。

” にっこりと笑い”、告げる。

「……ところで、隆……じゃなかった。狐よ。何でお前がここに居る？」

「……………」

そこで初めて、狐がやってしまったと言う顔になった。
見るからに焦りまくっている。

——それを見て、タカトは一步を詰め寄った。

「なあ、答えてくれるか？ 答え次第では、悲しいかな。俺はここから少し離れた場所で動物保護団体から説教されるような真似をお前にしなくてはならない訳だが」

「……………」

だらっだら、と冷や汗を狐は全身から流す。
タカトは構わずもう一步を詰め寄った。

「お前の毛皮は、素晴らしいな。ふさふさだ。……これを剥がなくてはならないとは、俺も心苦しいが――」

そこまで聞いた段階で狐は迷う事無く疾走を開始。

鮮やか過ぎる程の逃走を開始した。

それを見て、タカトの口端が吊り上がり、にたありと笑って。

「逃がさん」

「あ、タカト君!？」

直後、その姿が消えて。

それから数秒後。どこからともなく悲鳴が辺りに響き渡った。

……なお、それから数分後。戻って来たタカトいわく。

「……背後関係までは吐かせられなんだ……」

と、怖い台詞を口にしたが。なのはは敢えて聞かなかった事にした。



狐への折檻(?)から戻って来たタカトと合流し、二人は再び動物園を回る。

――回りながら、様々な場所で騒動が起きた。

と、言うか起こした。主にタカトが。

象のブースでは、『象に乗りたいな』と言った近くの子供の我が

儘を聞き届け。衆人監視の中、堂々と縮地で跳躍^とんで。子供と共に象の背中に乗って。

ライオンのブースでは、いつの間にやら檻の中に入り込みライオンを猫でもあやすように、猫じゃらしを使って遊び。

ワニのブースでは、ワニの歯に引っ掛かった異物を見つけたのか。口の中に頭を突っ込んで取っ払い。

ダチョウのブースではどちらの足が速いか気になったのか競争し始める始末（しかも勝った）。

カンガルーのブースでは、何故かカンガルーにボクシングのミット打ちを覚えさせた（前から興味があったらしい）。

そんな大暴走を繰り広げたタカトの隣で、つくづくなのはは思う。

ここの動物園は寛大だと。

普通なら摘み出された上で、出入り禁止にされている事だろう。

周りの客に大受けだったせいか。二人は説教こそ受けたものの、退場されるでも無く。続けて動物園を回っている訳だが。

「うむ。楽しかった」

「……まあ、あんなに自由気ままに遊んだらね……」

気のせいかな、つやつやとした顔のタカトに、なのはは苦笑する。

漸く気付いた事だが、タカトははしゃいでいたのだ。

まるで子供のように。

だからだろう、あんな暴走のような行動をしたのは。いつものタカトとは全く違う面である。

それ故、少し戸惑い。少し嬉しかったのだが。

そんな、なのはの心情を知ってか知らずかタカトはパンフレットを眺める。

「さて、次はどこに行くか……」

「んー。でも、次は変な騒動起こさないでね？」

「何を言う？ 俺ほど真面目に動物園を楽しんでいる人間は居ないと言うのに」

「……それをタカト君は本気で言ってるっぽいからなあ……」

呆れたように苦笑する。

そんな彼女にタカトは疑問符を浮かべて。

「あ、タカト君。あれあれ！」

「む？」

いきなり、なのはが右方向を指差した。

それに、タカトも目を向ける。

そこには、ファンシーな感じの店があった。おそらくは土産物屋か。

なのはが笑いながら、タカトを振り返る。

「ちょっと見ていかない？ 面白そうだよ？」

「……ふむ。そうだな……」

確かに、見るだけなら問題あるまい。

それに、土産をかうのも悪く無い。

そう思うとタカトは頷き、なのはと一緒に店に入る。

そこは、やはりと言うか土産物屋であった。

動物のデフォルトされた縫いぐるみが多数を占めているが、中にはえらくリアルな木彫りまである。

なかなか侮れないラインナップであった。

「ほう……。これなんぞ、ヴィヴィオやヴィータ女史が喜びそうだが」

そう言いながら手に取るは大きなウサギの縫いぐるみ。

一年担任のヴィータや、なのはの娘たるヴィヴィオがウサギ好きなのは周知の事実である。

それに、なのはもうんと頷いた。

「どうする？ それ、買う？」

「ふむ……。しかし、縫いぐるみと言うのも在りきたりだしな……？」

なのはにそう答えながら、タカトは縫いぐるみの横に大量に置かれているものに気付いた。

とりあえず、縫いぐるみを置くとそれを手に取る。

カチューシャに動物の耳を模ったものを取り付けたもの。
ネコミミと言われるものと同種のものであった。

……取り付けられているのは、タヌキミミだが。

それをしばし眺めて、タカトはニヤリと笑った。

「これ、はやてにぴったりと思わないか？」

「そんな事言うと、またはやてちゃん怒るよ？」

苦笑して、なのはは言うが否定して無い辺り似合っているとは思っているのだろう。

それにタカトは笑うと今度はわざわざ動物園に置く必要は無いであらうもの、ネコミミを取り。

やおら、なのはは向き直る。

「ほら、なのは」

「え？ わっ！」

声を掛けられ、振り向いたなのはにタカトはすかさず手に持ったネコミミを取り付ける。

そして、顎に手をやるとうんうんと頷いた。

「やはり、お前はネコミミだな。猫的气性だからよく似合う」

「猫的气性！？ 私が！？」

「お前以外、誰が猫的气性だと言うんだ？ 気まぐれな感じとかな？」

くつくと言いながら、タカトは笑う。

それになのははムツとすると近場のミミを掴み、背伸びをしながらタカトの頭に取り付けた。

「あ、こら」

「お返しだよ。うーくん、やっぱりタカト君はイヌミミだね♪」

イヌミミ……。しかも、秋田犬辺りか茶色のピンと尖ったイヌミミを装着されたタカトを見て、なのははウィンクしながら微笑んだ。

実際、やけにイヌミミが似合っている。

それはタカトの気性が犬であるからなのか。

笑うなのはに、タカトは懽然とした。

「誰が犬か」

「タカト君♪ 何か、タカト君って犬的な感じなんだよね。あ、日本犬ね？ 他は認めません」

「何のこだわりだ、それは」

ぶちぶち言うが、外さない辺り少しは気に入ったか。

そんなタカトになのはは微笑み。他の獣ミミを物色し始めた。タカトも隣で手に取り物色する。

「フェイトだと、やはりキツネミミだろう？ あれは狐の類だ」

「うーん、そうなのかなあ。あ、そう言えばシオン君やトウヤさんだと、どうかな？」

「俺が犬なら、あの二人も犬だろう？ ヨークシャテリアとシベリ

アンハスキーと言った所か」

「ちなみに、どっちがどっち？」

「シオンがヨークシャテリア。兄者がシベリアンハスキーだな」

「あ、やっぱり。それならルシアちゃんは？」

「ライオン」

「……タカト君にとって、ルシアちゃんがどんな位置付けか、よく分かるね……。なら、次は――」

そんな風に二人は獣ミミを手に取り、楽しそうに選んで。

そうやって時間は足早に過ぎて行った。



「うーっん。遊んだねー」

「ああ」

現在、午後四時。

二人は土産物屋で、大量の土産ケモノミミシリーズを購入し。

そこから、動物園をあらかた見て回った二人は満足したように笑った。

ちなみに、その回った先でもタカトが懲りずに騒動を起こしまく

ったりしたが。

それは、まあ余談であった。

若干なりとも疲れたのか、なのはがうぐぐんと伸びをする。それを見てタカトは微笑し、彼女の頭にぽんっと手を置いた。

「ありがとな。なのは」
「ふ、ふえ？」

いきなり頭を撫でられつつ礼を言われて、一瞬なのはは呆然。そのままタカトを見上げた。
彼はそんな、なのはににっと笑う。

当たり前の、年頃の少年の笑みで。

「今日は来てよかった。楽しかったしな。お前が誘ってくれなくて
は、ここには来れなかった。——だから、ありがとう」

見上げる先のタカトは本当に嬉しいそうに笑っていた。
そんな笑いに、なのはも顔を綻ばせる。

——そう、こんな笑顔を見たかったんだ。
彼の当たり前の笑顔が。

だから。

「うーん、でも私は今日は疲れちゃったかな？　タカト君が変な事
ばかりするから」

「……む、それについては謝っただろう？」

「うん。謝ってくれたけど、でも謝られただけじゃあなあ〜」

そう言いながら、悪戯めいた微笑みを浮かべてなのはタカトの前を歩く。

そんな彼女の背中を見ながら、タカトはむうと呻いた。

少しは自覚はしていたのだ。
はしゃぎ過ぎだろうとは。

まあ、止まる積もりも無かったのであまり意味の無い自覚だが。

だが、それでデート相手である、なのはに要らない苦勞を掛けた
と言うのは流石に気が咎めた。

だが、どうすればいいのか。

謝罪は何度もしたし（騒動を起こす度に一回ずつ）

それは彼女も今更だろう。

ならば、どうすればいいか？

タカトはしばし考え。しかし、答えが出ずにがっくりと頭を落とした。

こと、こう言った事に関しては不器用な男である。

いかんともしがたいものであった。

難しいもんだなと呟き、タカトは降参。

なのはに直接聞いて見る事にした。

「う〜む。なら、俺はどうすればいい？」

「教えて欲しい？」

逆に聞かれた。

こちらに背を向けたまま言われた言葉にタカトは一瞬だけ沈黙。そのまま、うむと答える。

それを聞いて、なのはは振り返って――。

「なら、次のお休みもデートしよう？」

そう、言った。

太陽を背に微笑みながら告げた、なのはの姿にタカトは少しだけ見惚れる。

その笑顔が綺麗で、眩しくて。

我を忘れたように呆然としたタカトに、なのははきょとんとした顔で疑問符を浮かべた。

どうしたかな？　と思った直後、タカトが息を吐きながら微笑。

歩き出し、なのはに追い付くと彼女の手をいきなり握って歩き出した。

「ふえ！　た、タカト君……？」

「デートの時はこうするんだろう？」

笑いながら告げる。

そのまま、動物園の出口に向かって歩き――。

「――次も、頼む」

「え？」

呟くような、ほんの小さな声。

けど、その声は確かになのはの耳に届いて。

なのははくすりと笑うと、ちよつとだけ小走りになってタカトに
追い付くと身を寄せた。

「ねえねえ？　今、何て言ったの？」

「さあな……。聞き間違いじゃないか？」

「そんな事無いよー。ほら、教えて？」

「て、こら腕を引っ張るな。危ないだろうが！」

そんな風に、まるで猫が犬に絡んで遊ぶようにして。

二人は動物園を後にした。



動物園から出て、二人して暫く歩く。

電車まで、徒歩5分と言った所か。

その間もわいわい言い合いながら、歩いていたのだが。
突如、タカトが顔をしかめると空を見上げた。

「……？　タカト君？　どうかした？」

「まずい」

唐突なタカトの行動に、なのはは疑問符を浮かべて。
それに、タカトは言葉少な氣に告げる。

何がまずいと言うのか？

その答えはすぐに来た。

土砂降りの雨と言う形で。

一轟一

そんな、表現が似合いそうな勢いで何の脈絡無く雨が降る！
バケツをひっくり返したようなとか、そんな勢いでは無い。
滝の如く、それは周囲に。そして、二人に叩き付けられた。

「きゃ……っ！　すごい雨……！」

「夕立だろうが……。しまったな。俺が見過ごすとは」

一瞬にせず濡れとなり、なのはが悲鳴じみた声を上げ。タカトは嘆息混じりに嘆いて見せた。

つい先程までは快晴だったのだ。それが急に降られては先に分かれと言う方に無理があろう。

とにもかくにも、二人は逃げ出すようにその場を後にして駆け出す。

取り敢えず、駅まで行けば雨宿りも出来ると、そこまで走り。
それが、無理な事を駅に着くなり悟った。

駅は人で溢れ返っていたのだから。

おそらくは動物園に来た人達もちょうど帰る頃合いだったのだらう。

そこにこの雨である。

雨宿りや一刻も早く帰ろうとした人達で駅がごった返すのは、至極当然と言えた。

二人はそんな駅の様子に、駅前で呆然としてしまう。

これはどうしたらいいのか？

誤算に次ぐ誤算に、タカトがはあと天を仰いで嘆息した。

自分はまだ良い。雨に打たれたくらいでどうにかなる身体では無い。

だが、なのははどうか？

流石にこのまま雨に打たれっぱなしでは、まずいだろう。

最悪、風邪を引かせかね無い。

デートがそんな終わりを迎えるのは、何となく嫌だった。

そう、思えた。

だから。

「なのは、先に言って置く。済まない」
「え……？」

そう、なのはに告げるなり答えを待たずに手を握り。

次の瞬間。二人の姿は唐突に消えた。

激しく、降り止む気配すら見せずに降り敷き雨の中で、いきなり消えた二人を周りの人間はついで気付かないままだった。



景色が全く別のものに切り替わる。

なのはは、久しぶりとも言えるそんな感覚を受けた。

駅前から消えた二人は、今。唐突に高町家の門の前に居たのだから。

急に景色が一変した事に、なのはが目を白黒させる。

タカトはただ苦笑していた。

縮地。

あるいは、縮地神功・神足通とも呼ばれるタカトが得意とする空間転移歩法である。

これをもって、タカトはなのはと高町家まで跳躍とんだのだ。

距離にして十数Km。

この程度の距離ならば、タカトにとって造作無いとも言えるが。

問題は、それを人前で堂々と使った事にある。

「タカト君……」

「済まないが説教は後にしてくれ。まずは中に」

「あ、うん」

なのはは、タカトを責めるように見上げる。

それに、タカトは肩を竦めて家の中に入るように促した。

説教は覚悟の上だが、こんな所で話し込んでわざわざ縮地で跳躍んだ意味が無い。

なのはは一瞬だけ迷ったものの、雨の中にいつまでも居る訳にもいかないと判断。

門を潜り、タカトと連れ出って入る。

鍵を使い、扉を開いた。

「ただいまあゝ」

「お邪魔します」

玄関に入ると漸く雨から逃れられる。

二人はびしょびしょになった服で、互いに苦笑した。

「お帰りなさい、なのは。……と、タカト君？」

「あ、お母さん」

「桃子さん。お邪魔しています」

そんな二人に、リビングから出て来たなのはの母。桃子が出迎えてくれる。

二人の姿を見て、あらあらと言うと再び引っ込み、奥からバスタオルを持って来てくれた。

それをありがたく頂戴しながら、二人は濡れた髪や首筋を拭く。

「ちょっと待ってなさいね。すぐにお風呂を沸かすから」
「うん。お母さん、ありがとう」

そんな二人に笑いかけながら、桃子は洗面所の奥にあるのである。風呂場に向かう。

なのはは、そんな母に礼を言うのとタカトへと目を向けた。

「ふう……。大丈夫か？　なのは。寒くないか？」

バスタオルで拭いたとは言え、まだ湿り気を帯びた髪ของタカトが聞いてくる。

雨に濡れたせいか、肌に張り付いた服はやたらと冷たく感じた。肌寒さを感じながら、なのはは自分の身体を抱きしめるようにして頷く。

「ちょっと寒いかも……」
「そうか」

そう言いながら、タカトはこちらへと視線を移して。

一瞬だけ我を忘れたかのようにポカンとした。

そんなタカトに、なのはは、？　と疑問符を浮かべて。

次の瞬間、タカトは凄い勢いで顔を背けた。

同時に自分が使っていたバスタオルを、なのはに押し付ける。

「え……？ タカト君？」

「……あのな、なのは。前も言ったような気もしないでも無いが、俺も男だ」

「……？ うん。それは知ってるけど」

「そうか、なら俺が言えるのはただ一言だけだ」

タカトが何を言ってるのか分からずに首を傾げるなのはに、タカトは頷きながらある一点を指差した。

なのはの胸の部分を。

そのまま、告げる。

「……隠せ」

「え……？」

言われて、なのはは視線を下に移す。

そこには、肌に張り付き、透けた白いワンピースがあった。

その下も白な為か、透けてしまっている。

つまりブラもだが。

それに、なのはは数秒硬直。

やがて、真っ赤になるとタカトから押し付けられた分も含めて身体に巻き付けた。

そのまま目使いで、タカトを睨む。

「み、みみみみ……！ み、見た……？」
「……………わざとじゃないぞ？」

顔を赤くしながら、告げられた。答えでは無いが如実に答えを示唆しているそんなタカトの台詞に、なのはの顔は更に赤くなった。そのまま、うーとタカトを睨み。ぽつりと呟いた。

「タカト君のえっち……」
「ぐ、ぬ……！」

普通ならば、真っ向から反論する台詞だが。
思いつき見てしまいバツが悪いのか、タカトは何も言えずに口ごもる。

そんなタカトにちよつとだけ満足したのか、なのはは微笑むと今度はこちらとタカトの様子を伺った。

顔を赤くして、そっぱを向いた彼は未だ湿っぽい髪の毛のままでいる。それが妙に色っぽく感じて、なのははちよつとだけときまぎしてしまった。

妙な空気が二人の間に流れ――。

「なのは……？ お風呂沸いたわよ？」
「ふえっ！？」
「ぬあっ！？」

唐突に顔を出した桃子に、二人は跳び跳ねんばかりに驚いた。

そんな二人に桃子はきよんとし。だが、すぐに事情を察したのか口に手を当てて微笑んだ。

「あらあら？ お邪魔だったかしら？」

「そ、そそ……！ そんな事無いよ！？ ね、タカト君！」

「ああ！ そうだとも！」

あらゆる意味で分かり易過ぎる反応を返されて、桃子はくすくすと笑う。

それに、二人はううと呻きだけしか上げられ無かった。

「取り敢えず、お風呂。入ってらっしゃい」

「あ、でもタカト君から先に――」

「俺はいい。なのは、お前が入れ。レディファーストと言うだろう？」

もっとも、タカトには高町家でお風呂に入る積もりはさらさら無いのだが。

それを知ってか知らずか、なのははでもと視線を往復させ。

そんな彼女に、桃子から助けが来た。

「こう言われているんだし、まずなのはから入りなさい。女の子なんだから、身体を冷やしちゃダメよ？」

「で、でも……」

「いいから、ほら」

それでもと、タカトを見るなのはに桃子はいつに無く強引に場を進める。

母に促され、なのはは漸くうんと頷くとローファアの靴を脱いで、

たたきの上にあがった。

そのまま風呂場に直行させられる。

タカトは、そんな一幕を最後まで見て苦笑すると戻って来た桃子に一礼した。

「すいません。俺が着いていながら、娘さんを雨に当たらせてしてしましまして……」

「あら、いいのよ。仕方無いわ。急な雨だったものね」

桃子はそう言ってくれるが、タカトとしては忸怩^{じくじ}たる想いがあった。

自分がもう少し、空の様子に気を向けていれば少なくともこんな風にはならなかった筈だ。

動物園が”初めてだからと”浮かれ過ぎていた。
反省すべき事だなとタカトは自嘲して苦笑する。

「さて、それでは俺はここで」

「あら？ 帰るの？」

タカトの台詞に、桃子は首を傾げと問うて来る。
それに、苦笑したままタカトは頷いた。

「ええ。いくら何でも、俺が湯を頂くわけには行きますまい。ここで、帰らせて――」

「ダメよ」

貰います、と言え無かった。

その前に容赦無く、桃子に台詞を切って捨てられたから。

思わず言葉を失ってしまったタカトに桃子は続ける。

「ちゃんと、お風呂入って行きなさい。このままじゃあ風邪引いやうわ」

「いや、俺は並大抵の事では体調を崩したりなど――」

「娘をずぶ濡れになってまで送り届けてくれたお客様を、そのまま帰らせてしまうような真似は出来ません！」

ぴしゃりと、桃子はタカトに言ってのける。

それに、タカトは哑然として頭を抱えた。

ど、どうやって説得すれば桃子さんは納得してくれるか……。

凄まじく絶望的な戦いに挑んでいるような気がしつつ、タカトは口を開いた――。

――なお、その三十分後。

風呂から上がった、なのはが見たのは打ちひしがれたようなタカトと。勝利を収めた母の姿であったと言う。

（お泊り編（？）に続く！）

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」 (午後編) (後編)

はい♪ 午後編をお送りしました〜♪

……ええ、分かっていただけだと思いますが後一部伸びます。

なんつでやねんっ! (笑)

坊やだからさ…… (笑)

やばい……。おまけ編なのに、えらい伸び伸びに (汗)

デート編、恐るべし!

いや、マジに (汗)

ここまで書けるとは思わなんだ……。

つ、次こそは! 次こそはラスト!

お泊り編(?) でございます♪

お楽しみに〜♪

活動報告も、たくさんコメントありがとうございます♪
すぐに返信しますね♪

ではでは♪

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」(お泊り編1)

……ええ、もう何と言うかですね(汗)

マジですみません(汗)

お泊り編”1”でございます。

俺は、どうやらお泊り編と言うのを見くびっていた事を痛感しました(汗)

いや、もう。書いて書いて――。

気付けばこんなありさまだよ(笑)

何故か？ 高町家にタカトを入れただけでエライ事になりました(汗)

書いててびっくりしたよ、俺……。

てな訳でお泊り編1。どうぞ〜♪

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」（お泊り編1）

……何故、俺はここに居るのだろうか？

ある種の哲学的な思考を浮かべながらタカトは雫がしたたる風呂場の天井をぼけらっと見つめた。

高町家、お風呂。

その湯舟に彼は浸かっていた。

高町家のお風呂は一般的なそれより、かなり広かった。

タカトが手足を伸ばしても、なお余るくらいだ。

余裕で二、三人は入れそうなスペースがある。

だが、何故彼がそこに浸かっているのか。

それは当然、なのはの母。高町桃子によって完全敗北させられたからであった。

いや、タカトも抵抗はしたのだ。

いくら何でも湯を頂くのはマズイと。

正論の話をした。

倫理の話をした。

その他、もろもろの話し。

特に自分が男子である事を強調しつつ。それに風呂を入らせる事

についての危機的な話しをした。

その結果、全てを叩き潰された。

正論は正当にあっさり覆され。

倫理は逆説の前に儂く散った。

危機的な部分については、容赦が一切なく。

『あら？ 私が話しているのはあくまでタカト君だもの。他の人の話しを出されても困るなあ』

——その一言に完全に潰されてしまった。

縮地で逃げる事も一瞬考えたが、どう考えても失礼になる。

……結果。現在彼は、高町家の風呂に浸かっている訳なのだが。

タカトはやがてはあと溜息を吐いた。

もう風呂は頂いてしまったのだ。今からあれこれ考えても仕方無い。

早く上がって、早々に帰ろう。

そう思い湯舟から出ようとして。

「……む？」

ガラス戸の向こうからドアが開いた音に気付いて僅かに眉を潜め

た。

ガラス越しに様子を伺うと物音がする。

高町家の浴室は一般的な作りで、隣は洗面所になっているから、誰かが手を洗いに来たのか。

それとも、先ほど自分の服を入れた洗濯機に別の何かを入れに来たか。

どちらにしても、このまま出る訳にも行かないので、タカトは湯舟から出した上半身を戻し湯舟に浸かり直した。
そのまま待とうとして――。

いきなりガラッとガラス戸が開いた。

は？ と、タカトが疑問符を浮かべる暇無く。ガラス戸の向こうに居たと思われる人物は入って来た。

まず目に入ったのは無数の傷痕。
タカトと十分に並ぶ長身に、今でも一切の修練を怠っていない身体。

高町士郎。

なのはの父が、そこに居たのである。

「士郎、さん……？」

「ああ、タカト君。邪魔するよ」

何故に入って来るのか？ そう言った疑問をタカトは顔に浮かべるが士郎は構わず入って来る。

そのまま身体を洗い出し、ますますタカトは困惑した。

出るタイミングを奪われ、どうしたものかと頭を悩ませる。

が、とりあえずは風呂から上がるべきだと判断。

いくらなんでも、今日デートした相手の父親と同じ風呂に入ると言うのは、タカトも気まずい事この上無い。

戦略的撤退を決め、小さく息を吞んでから腰を浮かせて――。

「タカト君」

「っ……！　なんでしよう……？」

まさにそれを見計らったようにいきなり話し掛けられて、タカトは平静を装い答えるも浴室から出るタイミングを逸してしまった。

そんなタカトを余所に、シャワーで泡を洗い流した士郎は立ち上がって湯に入ってきた。

何故にこっちにまで入って来る？

突っ込みを入れたくなるも、そんな空気では無い。

タカトは最優先として、湯舟から出なければと口を開いた。

「……では、俺はそろそろ――」

「まあまあ、まだいいじゃないか。うちの風呂は広いだろう？　やはり家族で一緒に入れるようにと浴室は広くしたんだ。……まあ、君の家程では無いけどね」

「……………いや、あれは……」

士郎の言葉にタカトは苦笑する。

神庭家の風呂は、庭にこんこんと湧く温泉である。

しかも露天だ。

あれは神庭家家長、アサギが殆ど趣味で作り上げた風呂であった。

なので、自慢出来るものではない。

ガス代は非常に助かっているが。

そう思いつつ、タカトは自分が風呂から上がろうとしていた事を
思わず忘れていた。

そのまま、しばしの時間が流れる。

その間、タカトは出るに出れなくなり気まずい時間を過ごした。

確かに広い風呂だ。それは認める。

しかし、それを男二人で入りたいかどうかは完全に別問題であろ
う。

いくらバイト先のマスターとは言え、流石に気まずい。

士郎はタカトから視線を外し、見た目ではゆっくりとしている。
だが、時折感じる妙なプレッシャーは何なのか。

どうしてこうなった……。と、盛大な疑問をタカトが感じている
と。

士郎がこちらに視線を向け、いきなり爆弾を落とした。

「今日は、なのはとデートだったそうだね？」

「は……！」

どこでそれを知ったのか。

タカトは一言だけをなんとか返す。

それに士郎は構わず言葉を続けた。

「楽しかったかい？」

「え、ええ。俺も動物園は初めてでしたし。恥ずかしながらはしゃいでしまいました」

「そうかい。——ところでタカト君。君となのはあくまでも友人だよな？」

「……は」

——いきなり、プレッシャーが数倍増しになって飛んで来る！
その凄まじさ、何とタカトが怯むレベルであった。

思わず、少し下がったタカトに士郎はあくまでも構わない。

続ける。

「それ以上の関係と言う事は——。もしかして、と思わなくも無いんだが。……無い、ね？」

「い、いえ。そんな事はありません」

「そうかい。なら、なんでデートなんかしたのかな？」

ど、どう答えればいいのだ……！

士郎の質問に意図が読み取れず、完全に絶句するタカト。
逃げ出したくなるが、士郎の鋭い瞳は雄弁に語る。

逃がさん、と。

その瞳にタカトは戦慄する。
気のせいかな、殺気めいた気配まで漂っていた。

「こう言うと親バカと思われるけど、なのはは本当に可愛い娘だね。……桃子にも最近良く似て来た。ああ、外見だけじゃなく性格もね。だから色んな人に好かれるのは当然だと思っただが……。君は、どうなのかな？」

「い、いや！ お待ちを！ と言うわれても困ります……！」

「困る……？ 何が困るのかな？」

なんだ……？ 何が起きている……！

自分でも何故、こんなしどろもどろな回答しか出来ないのかタカトは疑問に思う。

しかし、高町士郎。彼の瞳はマジ過ぎた。

半端な答えは許さんとその瞳は語る。

意に沿わない答えを出した場合。どうなるか、想像もしたくない。

タカトはぐくりと息を呑むと、深呼吸を一つ。落ち着けと己に言い聞かせる。

とりあえず、ここは誠実に安全に答えるべきと判断。

タカトは何とか士郎に向き直ると答えを告げた。

「いや、本当に友人です。今日のデートも恋人とかそう言ったものではなく、ただ遊びに言っただけです。士郎さんの考えているような事は……！」

「……本当に？」

「本当です！」

珍しくも必死になってタカトは答える。

それに士郎は、まだ疑わしげに彼を見る、が。暫くして、漸くその視線を外した。

「……なら、いいんだがね」

そう言いながら、士郎は湯舟から上がる。

タカトを置いてそのままガラス戸を開き浴室から出た。

それに、タカトは安堵したのか。ほっと一息吐いて――。

「ちなみに、まだ娘は嫁にやらないから。その積もりでいてくれ」

――そんな、地獄の底から響いたような声にタカトは血の気を凍らされ。

絶句してしまった彼を置いて、士郎は完全に浴室から出た。

ガラス戸を閉められた後でも、タカトは暫くの間。硬直し続けていたのは内緒の話であった。



「あ、タカト君。やっとお風呂から出たんだ？ 結構長湯だったね？」

「いや、まあ。いろいろありすぎて、な」

高町家リビング。

そこでタカトは、ソファに座るなのはにそれだけを告げた。

何やら疲れたような顔の彼に、なのはは疑問符を浮かべるがタカトは黙して語らない。

……決して対面の士郎の眼光が怖かった訳では無い。
と、思いたい。

「それより、だ。なのは」

「え？ なに？」

おそらくは部屋着だろう、ピンク地の丈が長いパジャマのような服を、なのはは着ている。

それについては、若干目の毒と思わなくも無いがタカトが言いたい所は別にあった。

首を傾げるなのはにタカトは自分が今着ている服を親指で差す。

「――これは、一体どう言う事だ？」

「えっと……。お兄ちゃんの部屋着？」

タカトが指し示した服に、なのはが不思議そうな顔で答える。

それは、何がおかしいのかと言わんばかりの顔であった。

タカトはそんな、なのはに頭痛を覚えつつ堪えて続ける。

「……そう言った問題ではなくてだな。俺の服はどうした？ ……」

と、言うか何故用意されているのが恭也さんの部屋着なんだ！？」

「……えっと、男物でタカト君に合うのがそれしか無かったから？」

「それが主題じゃない！」

ついには頭を抱えてタカトは吠える。

そんな二人に、てとてと近寄る小さな影があった。

なのはの義娘、ヴィヴィオである。

彼女は小さな身体で、タカトの足に抱き着いた。

「タカト~~~~」

「……ヴィヴィオか」

抱き着いてきたヴィヴィオの頭に手を乗せて撫でる。

それに、えへへとヴィヴィオは笑い。

タカトはそれに苦笑して。

「あらあら。ヴィヴィオちゃんったら」

くすくすと微笑みつつ、桃子が台所より出て来た。

恐らくは夕飯の支度の最中だったのだろう。

タカトはヴィヴィオから手を離すと彼女に目を向けた。

「桃子さん。まずは服を貸していただいてありがとうございます」

「あら、いいのよ。それ、恭也が置いていったものだもの」

「そうですか。——それとは別に、俺の服なのですが……」

とりあえずは礼を言い、本題に入ろうとして。しかし、桃子はそんなタカトに予想外の台詞を放った。

「タカト君の服、まだ乾いて無いの。ウチの乾燥機、調子が悪くて——だから、今日はウチに泊まっていきなさい」

……その言葉をタカトが理解するのに軽く十秒は必要だった。

気のせいだったかと思い直し、もう一度聞き直そうとして。

「……桃子さん。あの……」

「今日は泊まっていきなさい♪」

今度は音符マークまで付けられた。

それに、愕然としてタカトは漸く反論する！

「何故、そうなるんですか！ 年頃の娘さんがいるのに他人の男を……！」

「あら？ 他人じゃないわ。タカト君ですもの。私達もよく知ってるし、なのはの友人。そして、ヴィヴィオちゃんのお師匠さんでもあるもの。決して他人じゃないわ。ね？ お父さん」
「うん？ そうだなあ……」

桃子から話を振られて、士郎が悩むような仕種をする。
それに、タカトは風呂場での出来事を思い出しちよっただけ安心した。

士郎さんが見せた怒り（？）からすると余所の男を泊めるなぞ言語道断のはず！ ならば、この話しも。

そんな風にタカトは士郎に期待の籠った視線を向けて。

「まあ、いいんじゃないか？」

「な———！？」

期待していたのとは全く別な回答を寄越され、タカトは悲鳴じみた声を上げる。

何故、よりにもよって士郎さんがOKを出すのか。

その答えはすぐに来た。

「……”友達”なんだろう？　なら、何も問題無いはずだしね」
「……………」

瞬間、ギラリと光る眼光。
それにタカトは慄然と悟る。

士郎は、この一夜で完全になのはとタカトの関係を見極める積もりだと。

こうなると、士郎は頼りにならない。

ならば、なのは自身はどうか？

流石に彼女も年頃の娘である。

いくら何でも同じ年の男が一つ屋根の下に居る状況は――。

「えっと。今晚ゆっくりしていつてね？　タカト君」

……そんな事を、頬を赤く染められながら答えられて。タカトは膝をがっくりと折った。

さらに桃子から追撃が走る！

「ちなみに、アサギちゃんには報告済み♪」

《タカト君♪ お話し聞いたよ〜♪　高町家の皆さんには迷惑掛けないようにね♪　あ、ちゃんと合意の上で――》

そこまで聞いた段階で、タカトは桃子が広げた携帯電話の留守電を切って貰う。

……ついでとばかりに後ろの士郎からの視線とプレッシャーが幾

分が強くなっていた事に嘆息。

……こうまでなってしまうと、もう泊まるのは確定事項扱いだろう。

反論すれば、どうなるかは先程玄関先で思い知らされた。

故に、タカトは――。

「……お世話に、なります」

再びがっくりと打ちひしがれ、そう素直に言わざるを得なかった。

なお、直後に帰って来たなのはの姉。高町美由希がそんなタカトを見て不思議そうな顔をしたのは余談である。



午後7時。

閑静な住宅街にある高町家の食卓は、一つの緊張感に包まれていた。

食卓につく、なのはやヴィヴィオ、美由希。かの士郎でさえも凍り付いたように動けない。

何故か？ それは先にも言った通り食卓を包む異様な緊張感。

そして、高町家の広い食卓にこれでもかと乗せられた豪勢な料理と。

それを挟んで対面に座る桃子とタカトから発せられていた。

二人は笑っている。

笑っているのだが、しかし。

その全身からはまごう事無き戦意が発っせられていたのだ。

そんな二人に四人はちよつと引きつつ、何故こうなったのかと頭を抱える。

それは僅か一時間程前まで遡る話であった。

「へへへ。為る程ねへへ。だから恭ちゃん部屋着を着てるんだ？」

「……はあ」

高町家の面々と、我が家の家長。アサギによって本人の意思に係無く高町家にお泊りが決定した直後。

翠屋から後片付けを終えて帰って来た美由希に事情を説明して。

それを聞いて彼女はうんうんと頷いた。

「……なんで、こうなったのか……」

「ウチはそう言った所があるからねへへ。まあ、大人しく諦めて。ゆっくりしていきなよ」

頭を抱えるタカトに自分の家の許容さに苦笑しながら美由希は答えてやる。

彼女の隣に座るなのも、微苦笑していた。

この時間まではタカトもリビングに居たのである。

士郎の隣に座り。たまに来る彼からの微妙な問いに答えつつ、談話を楽しんでいたのだ。

それが変わったのは夕飯を作っていた彼女の行動であった。

「なのは……？」

「は……い。なに……？ お母さん？」

エプロン姿でお玉片手にリビングに入って来た桃子。そんな彼女の呼びかけに、なのはも朗らかに答える。

桃子はなのはに頷きながら近くまで寄って来て、お玉を差し出した。

「ちょっと、味見てちょうだい」

「うん、いいよ」

味見を頼みたかったのか。

タカトとしても、料理に趣向を凝らす時は、ルシアやシオン、トウヤやアサギに味見を頼む時があるので。彼女の行動にふむと頷く。やはり、個人的な嗜好だけで味付けするとマンネリになりやすいものだ。

故に、家族に味見を頼むと言うのも悪く無い。

わりと普通の光景でもあるのか、士郎も美由希も微笑むだけ。

だが……。

「あ、なら。タカト君に味見を頼んだらどうかな？」
「む？」

なのはがお玉に口を付ける前にそんな事を言う。
タカトが何故に？ と思う前に、桃子が頷いた。

「そうね。タカト君は今日のゲストなんだし、タカト君に味見して貰った方が……」

「味見、ですか。それはいいですが……」

言いながら、周りを見る。

すると美由希は苦笑して頷き。

何故か士郎が微妙に顔をしかめていた。

それに疑問を抱く前に桃子からお玉が差し出される。

「なら、お願い出来るかしら？ あ、これ。よく考えたら『あゝん』みたいね。お母さん照れちゃうなゝゝ」

「な……！」

「え……！」

想像もしてなかったそんな言葉に、タカトは目を大きく見開き。なのはがあつと気付いたように口に手を当てる。

確かに言われてみると、これはあゝゝんでは無いか。

そう思うと、タカトは漸くさっきの士郎の様子に思い至る。

……それは、嫌だろう。万年新婚夫婦と噂の高町夫妻である。その妻が娘の友人とは言え、男にあゝゝんをするのは。タカトは顔を引き攣らせると、士郎に振り向く。

彼は笑顔だった。しかし、目が全く笑っていない。

とてもとても怖い笑顔が返って来た。

「どうしたんだい？ タカト君。早く味見をしたらどうかな？」

「いや、あの士郎さん……?」

「ほら、冷めてしまうよ?」

なら、その冷たい目を止めて欲しい。

タカトは心の奥底から切に願う。が、言葉に出して言える筈も無い。

タカトは仕方なく諦めると、恐らくはコンソメスープか。

お玉に汲まれたそれを口に含んだ。

「あ……」

ちよつとだけ、横のなのはの寂し気な顔が気になったもののテイディングに専念する。

コンソメスープは、ちよつとだけ味見に時間が掛かったのが幸いしたか。

比較的、飲みやすい温度であった。

ちようどゼラチンが固まる前の適度な温度。

それがタカトの舌を楽しませる。

そもそも、このコンソメスープ。

見た目は単純に見えて、凄まじいまでの手間と時間が掛かるスープである。

基礎となる出汁フイヨンからして牛肉や鳥肉、魚などを煮込み。それだけでも最低3時間。それから更に数時間は掛かり、上を見れば時間などいくらあっても足りないと言われる程、長丁場となる料理である。

そうやって取った出汁に脂肪の少ない肉や野菜を入れ、さらに煮

込む。

この際に出るアクに卵白をくわえてアクを吸着させ、さらにそれを漉した後、浮いた脂分を取り除いて作るという徹底した調理方法がとられる。

しかも、これをずっと繰り返すのだ。

これらの手順は厳密に行われねばならず。

単純そうに見えて奥が非常に深いスープと言えた。

本場フランスにおいて『完成された』と言う名のスープ。極めたるは、その透明感。

それだけ手間の掛かるスープを翠屋の仕事中に作ったと言うのだから高町桃子、恐るべしであった。

琥珀色の透き通ったスープをタカトはよく吟味。

たった一口で分かる、その香味の味わい深さといい。流石としか言いようが無い。

採点で言えば120点。自身を大きく上回る腕前に、タカトは舌を巻いた。

「どうかしら……」

「言う事はありません……。コンソメ。その名の通り『完成された』と言う名にこれは相応しい……！」

タカト、べた褒めである。

横の、なのはがちよつとだけムツとしたのも目に入らなかった。そんなタカトの様子に桃子は顔を綻ばせる。

「あら、本当？ お口にあったようで嬉しいわ♪」

「いや、俺も大概の料理は食べて来ましたが。このコンソメは五指

に入るレベルです」

世界中の料理及び食材。

これらをタカトは。

『俺が食った事が無いものは無い』
と、公言している。

勿論地球限定の話ではあるが、そんなタカトが五本の指に入る
とまで言わしめる程のコンソメ。

その完成度は推して知るべしであった。

「ぜひレシピを教えて頂きたいものです……！」
「あらあら、主婦の秘密なんだけど……」

そう言いながら満更でも無いのか。

桃子はキッチンに戻りながらタカトを手招きする。

それにタカトは手帳を片手に高町家のキッチンに入った。

……ここまでは、平和だったのだ。
そう、ここまでは。

そんな和気あいあいとした空気が変わったのは、僅か十分程後だ
った。

桃子の腕前に感動したタカトはレシピを教えて貰ったお返しに一
品作って見る事にした。

本日の高町家の献立は洋食である。

それに合わせて、タカトが作ったのはサーモンのパピヨット（紙

包み焼き)。――家にエスカルゴが置いてあったのを思い出し、転送魔法でこちらに持って来て作ったのである。

エスカルゴバターを絡めたその香りは、キッチンを越えてリビングまで届き一同の空腹を煽った。

それを味見として桃子が一口食して出た言葉が次である。

「ふうん……。これは主婦として負けていけないわね……」

その時、彼女の瞳が激しい闘志を宿したのをタカトは確かに見た。

そして桃子は自分のターンとばかりに作っていた一品をタカトに差し出す。

子羊の香草ハーブ仕立て赤ワインソース。

メインとなる一品であり、どこぞの高級レストランに出すのか？と、問いたくなる一品であった。

何故にそんな豪勢な料理が出たのかについては。最初からタカトをゲストとして考えていたらしく、奮発したらしい。

だが、今回はそれが裏目に出た。

それを一口味見して、タカトはくつと呻く――。

――ソースの濃厚な味わい。だがそれに負けじと子羊の肉がその味を主張する。

まさに美味さは、絶品と呼んで過言では無い。

同時に、タカトの料理人としての戦意に火がついた。

その目に宿るは主夫（誤字にあらず）としての気概。

桃子もその目を真っ向から受ける。
ふふ、と二人して笑い合い――。

そして、両者は全く一緒に動いた。

タカトは家に置いてある食材及び、魔法によって改造された特殊な魔法器具を持ち出し（これは桃子も使用可能）。

桃子も追加で更なる腕を奮う――！

結果として、僅か一時間後。

絶技の限りを持ってして作られた豪勢極まる料理が高町家に並べられたのである。

――なお、その間。

リビングに居る四人はただただ立ち込める美味しいそうな香りに、空腹で死にそうになったのは言うまでもなかった。

「ふふ……。流石ね、タカト君……。！ フレンチだけじゃ無く中華にも通じてるなんて……。！」

「そう言う桃子さんこそ、その腕前。恐るべしですな……。！」

高町家の食卓に対面で座る二人は互いの料理を褒め讃える。
が、その目と気配には戦意が漲っていた。

なお、並べられた料理。
フレンチは。

鴨^{かも}のローストと、りんごの赤ワイン煮のサラダ仕立て。
きのこのテリーヌ。

冷たいフレッシュコーンのヴェルテ。

先にも出たコンソメスープに、子羊の香草ハーブ仕立て赤ワイン
ソース。

子牛のタンシチュー。

サーモンのパピヨット。

フォアグラと子牛のステーキの重ね焼き。

更にタカトが中華で、金華ハムと卵白のチャーハンやなまこの葱
油ソース煮。アワビのクリーム煮等の中華を数点作っている。

とてもではないが、一家庭に出て来るような料理では無い。

質もそうだが、量も凶悪なものがあつた。

それらを前にして、四人は固唾を飲む。

——本音を言えば、散々待たされまくった為。早く目の前の豪勢
な料理にありつきたいが、桃子とタカトの二人の様子にそうもいか
なかつたのである。

二人は、ふふと笑いながら一同をゆっくりと眺める。

そのままぼつりと呟いた。

「判定は——」

「——やはり、多数決でしような。ああ、ヴィヴィオは当然除いて」

桃子の言葉をタカトが引き継ぐ。

そんな二人の連携に何故か圧迫感を感じながら、なのは達は息を
飲んだ。

審査員は誰か？ そんなのは決まっている。

当然、なのは、美由希、士郎の三人だった。

桃子とタカトの視線が三人に刺さる――！

「「さあ、どうぞ召し上がれ」」

こうして、味は最高な筈なのに罰ゲームとしか思えない高町家夕食は厳かに始まった――。



あれから一時間後。

あれだけあった料理の数々は消え去り。

夕食は終わっていた。

――結論から言うと桃子とタカトの突如として始まった料理対決は、引き分けに終わった。

どっちが何を作ったか分からないと言う中で。

一票は桃子に、もう一票はタカトに。

最後の一票は、同じくらい美味しかったとの事で、結果として引き分け。

なお無効票を出したのは士郎であり、桃子から般若の笑顔を浮かべられ、小鹿のように震えていたのは余談である。

合掌。

食卓上の料理は綺麗に食べられており、流石にあの量はきつかったのか、美由希となのはお腹に手を当てて深々とため息を吐いていた。

「明日からダイエット頑張らないとなー……」
「……私も……」

言いながら、思い出すは食卓上にあった料理の数々。
その味を思い出して一瞬陶然としかけるが、慌てて頭を振る。
どう考えても許容量オーバーは間違い無い。

明日の体重計が怖い事になりそうな事に二人は再度ため息を吐いた。

そんな二人に、食器の片付けを手伝いながらタカトはふむと頷く。

「――そうか、デザートも用意してあったんだが……」

「で、デザート……!?!?」

「桃子さんとの合作でな」

二人がタカトの言葉に目の色を変える。

二人の合作デザート。

まさかまさかの隠し玉に、二人は身震いして、お腹を摩さする。

モノは二人の合作デザートである。どう考えてもこれを食べなければ後悔するのは間違い無い。

けど……っ！ 今日ばもう、カロリーが……！

そんな乙女ならではの悩みにうんうん二人は唸り。それを余所にヴィヴィオがタカトの裾を引っ張る。

「デザート？」

「ああ、とても美味しいぞ？ なんせここ最近では一番の出来だ」

一番の出来……！

更に告げられる衝撃の事実二人は震撼する！

しかし、ヴィヴィオはそんな二人に気付かずに目を輝かせた。

「ほんとっ？」

「ああ、本当だとも。すぐに持ってこよう。士郎さんはどうします？」

「は、はは。じ、じゃあ頂こうかな」

先程の『般若の微笑み』によって精神的なダメージを受けていた士郎が青い顔で頷く。

そんな士郎にタカトは苦笑しながら頷き返し、その視線はそのまま美由希となのはに移った。

「それで？ 美由希さんと、なのははどうする？」

「「う、うう……！」」

移った視線のままにタカトからどうするかを聞かれて、二人は怯んだように呻いた。

二人の頭上で天使と悪魔が言い争いをしているのが目に見えるようである。

だが、その戦いははつきりと悪魔に分があるように思えた。

—明日からダイエットを頑張れば。デザートの一つや二つ、問題ないよ—

—ダメダメ！ その油断が後々の悲劇に……！ これは乙女の意地だよ！—

—甘いよ……！ 別腹って言葉が世の中にはあるのっ！—

—そ、それは……！—

—お母さんと、タカト君の合作デザート。多分、今日しか食べられないと思うなあ—

—う、うう……！—

そんな、熾烈な戦いが二人の頭上で飛び交い。

そして——。

「「わ、私も食べる！」」

姉妹揃って敗北。

悪魔の提案を聴き入れる事にした。

ちなみに明朝、体重計に乗った二人の悲鳴が高町家に響く事になるのだが、それはまた別の話である。

タカトは、そんな二人に苦笑しながら頷くとキッチンに一度引っ

込む。

そして自分と桃子の分を含めた六つの皿をそれぞれの前に差し出した。

その上に乗っているのはチョコレートケーキ。

小さい円を描く黒色のショコラに桜色の飴細工が乗る。

飾り気はその飴細工だけ、けどそれが堪らなくタカトラしかった。

「Cherry, チェリースイートSuite。……まあ、名を決めたのは桃子さんだが」

「な、名前？」

「だって〜♪ すっごい良く出来たんだもの〜♪」

まさか名があるとは思っても見なかったのか。なのはがチョコレートケーキに目を白黒させる。

それに、桃子がやんやんと嬉しそうに身体をくねらせた。

余程いい出来だったらしい。

そんな桃子にタカトは苦笑。

一同に向けて手を巡らせた。

「さ、どうぞ」

「あ、うん。いただきます〜す」

促され、まずはなのはが一口大にフォークでケーキを切り分け口元に運ぶ。

そして、ケーキは口の中に入り――。

瞬間、なのはを衝撃が襲った。

まず、口の中に溶けるは苦味に控え目な甘さのチョコレート。
それから、柔らかなスポンジの間に挟まれた甘い生クリームと甘
酸っぱいジャムのようなものが舌に溶けた。

それが一口、一口、咀嚼する度に舌を楽しませる。
スポンジにはブランデーを少し混ぜてあるのか、香りが口内に広
がり。それがまた堪らない。

それらが、次々と襲い掛かって来るのである。

なのはが蕩けたような顔となるのも、むべなるかなと言った所か。
それを見てタカトは苦笑し、桃子は微笑む。

「なのは……。すごい顔になっとるぞ？」
「ふえ！？」

横から呆れたような口調でタカトから言われ、なのはは漸く我に
返る。

恥ずかし気に身を縮ませた。

「だって美味しかったんだもん」
「まあ、そう言って貰えんと作った甲斐はあったが」

なのはの反応にタカトは苦笑しながら頷く。
それが若干嬉しそうに見えたのは気のせいか。
見れば美由希も食べて、顔が蕩けている。
流石に士郎はそうはならないが、満足そうな顔で食している辺り
気に入ったらしい。

ヴィヴィオもにこにこしながら、食べていた。

……なお、ヴィヴィオのケーキのみスポンジにブランデーを使用しておらず、甘く作られている。

小さいとは言え、一ホール。

しかし、皿の上のチョコレートケーキは次々と彼女達の口とお腹に収まっていたのであった。



タカトと桃子の合作ケーキも、あっさりと皆のお腹に消え。後片付けも終えて、タカトはリビングでゆったりとしていた。

現在、午後八時。

先程、ヴィヴィオが眠くなったのかうとうとし始め。

なのはと美由希は、そんなヴィヴィオを寝かし付けに行った。

リビングに残るのは、士郎と桃子、タカトのみ。

その三人はと言うと――。

「ははっ。タカト君。飲んでいるかい？」

「ええ、まあ」

ぐいっとワインを飲み干す。

そんな彼にタカトは苦笑して応じ、手に持つグラスを空けた。

そんな二人に、桃子もあらまあと微笑む。その手にもグラスが握られていた。

そう、三人はお酒を飲んでいたので。

正確にはワインを。

銘柄は『LOVE & LOSS』

愛と喪失。そう名付けられたワインである。

ちなみに、タカトが所有していたヴィンテージものの一品。

食聖と呼ばれた男の秘蔵の一品だったりするのだが。

それを知らない（教えていない）二人は、ワインを次々に飲み干す。

そんな二人に苦笑し続けながら、タカトはしまった思った。

事のおこりは、士郎に『一緒にお酒を飲みませんか？』と、タカトが誘った事にある。

タカトは基本的に飲酒には抵抗の無い人間であった。

それに。いい加減、士郎にじっとした目で見られるのが辛かったと言うのもある。

そう言う訳でタカトはお酒と一緒に飲まないか士郎を誘ったのである。

それに士郎も最初こそは、未成年うんたらかんとちよつとだけ説教をした。

まあ、それもすぐに済んだ訳だが。

どうやら建前だったらしい。

士郎もタカトの意図は理解したのだろう。

男同士、腹を割って酒を飲みながら語ろうと言う訳である。

それに桃子が加わるとは予想外であったが。

とにかくにも、そんな訳でタカトの秘蔵の一品は今、空になろうとしている訳であった。

「そう言えば、タカト君はその歳で料理上手ね。一体誰に習ったのかしら？」

「いや、特定の師は居ませんよ」

ワインをちびりと飲みながら、桃子が聞いて来る。

前から聞きたかったのだろう。

その目は輝いていた。

無理も無い。

タカトの年頃で、あれだけ料理が出来れば気にもなる。

彼は苦笑しながら答えて、自分の口元に手を宛がった。

舌を一度口から出して、伸ばした。

「俺の師は、”こいつ”です」

「……舌？」

「はい」

言う前に舌を引っ込めて頷く。

ちよっただけ懐かしい気分に浸りながら、そのままタカトは語り出した。

「俺、ガキの時分は世界中を飛び回ってまして。その時、食いっぱぐれが無かったから主に料理店で働いていたんですよ」

「……？」
じゃあ、そのコックさんが師匠になるんじゃないのか

しら？」

「いえ、……彼等からは何も教えて貰ってません。味は”盗みました”」

言いながら、ワインを煽る。一気に飲み干すと、ぷはと息を吐いた。

そのまま続ける。

「――俺の舌の味蕾^{みらい}はちょっと特殊でして」

「特殊？」

「はい」

味蕾とは、味覚を司る感覚細胞の事である。

それが特殊と言う事は、すなわち――。

ビンを手取る。

いつの間にか聴き入っている高町夫妻のグラスも空だった為、注いで。自分の分は手酌で注ぐ。

流れるワインを見ながら、タカトは様々な店で言われた事を思い出していた。

――こいつ、変だ！――

――俺が十年かけて、漸く出せた味を――

――もう、出て行ってくれ――

そんな、”当たり前”言葉。
俺の舌は料理人の矜持を壊す。

「味覚の閾値いみちが異常に低い上に、どう言う訳か――。」味以外”のものまで感じ取れるんです。その一口で、”何もかも”」

味覚の閾値とは、味を感じる事の出来る最低の濃度の事である。
例えば、彼は水であろうとその主成分によって味を吟味してしまえる。

どんなに、味が薄かろうとだ。

そして、それだけでは無い。

この舌は他のものまで――。他の情報まで手繰り寄せる。

食材も。

作られた環境も。

作った者の感情も。

その舌で味わった全ての過程で含まれるモノ全て！

使われた食材を当てるなんて朝飯前。

どんな調理法を使ったかなんて一口で分かる。

感情ですらをも、この舌は読み取れる――！

「流石に、今でこそは封印しましたがね」

先程、桃子のコンソメのレシピを貰った事をタカトは思い出す。
あれも、本来は必要無い。

タカトが仙術とカラバ式の融合術式。

八極八卦太極図による肉体改造で、強制的に封印していなければ
一口食ただけで調理過程も含めてタカトは手に入れられる。

再び苦笑。

黙り込んでしまった高町夫妻に目を戻した。

「そう言う訳で、俺の師はあえて言うならこの舌でして」

「……そうなの」

桃子はそんなタカトに頷きながら微笑んだ。

タカトは言った。その舌は”感情すらをも読み取れる”と。

それは決して正の感情だけでは無かった筈である。

大変な事もあっただろう。

だが、それをおくびにも彼は出さない。

頑固だと思うが、それはむしろ美德と言うものであろう。

微笑む桃子にタカトは視線を外した。

そしてまだ黙り込んだままの士郎のグラスにワインを注ぐ。

「ほら、士郎さん。グラス空いてますよ」

「うん？ ああ、悪いね」

いへと苦笑して、タカトは首を横に振る。

今度は士郎がビンを掴んだ、タカトに差し出す。

「ほら、タカト君」

「と、これはすみません。有り難く」

グラスを持ち上げると、ワインを士郎は注いでいく。
そのまま、タカトに士郎は微笑んだ。

「君もいろいろあったんだなあ」

「はは、まあ。——この舌のせいで前は拒食症になりかけた事もあったんですがね」

士郎に答えながら微笑する。

注いで貰ったワインを一口煽った。

そんなタカトに士郎は眉を潜める。

「拒食症？ 君がかい？」

「ええ、すぐに治ったんですが。——いや、治さざるを得なかったが正しいか」

意外なタカトの過去に、士郎は興味津々で耳を傾ける。

それにタカトは半分程飲み干すと、そのまま続けた。

「異母弟——。シオンですね。あいつが言うんですよ。『タカ兄いのご飯が食いたい』って。それが断りきれなくて。で、結局料理作るのに、味見やらをしない訳にもいかない。……そんな風にしてたらいつの間にか治ってました」

今でも思い出す。

アサギはあれで忙しい身であったし、トウヤも料理が得意とは言えなかった。

ルシアは論外。

……結局、タカトの拒食症はあっさりと治ってしまった。

「兄バカと思われそうでアレなんですがね」

微笑が苦笑に変わる。

そんなタカトに士郎も微苦笑を浮かべた。
自分のグラスを空けると。

タカトを見る。

それに気付くと、タカトも即座に残り半分を飲み干した。

「——いいじゃないか。僕も親バカだしね。恭也も兄バカだ。親バカ、兄バカ。結構な事だよ」

「そうですか。いや、そうかもしれませんね」

言うなり、二人してビンに残っていたワインを最後までグラスに注ぐ。

そして笑い合うなり。二人してぐいっと一気飲みを開始した。

隣で桃子があらあらと微笑んで、それを見る中。

二人は最後まで飲み切ると同時にグラスを置く。

「士郎さんも強いですね」

「君もね。余程飲み慣れているようだ。——学生なのに、けしからないね」

不適に笑い合う。

タカトは笑いながら、転送魔法で新しいビンを家から取り出した。

清酒『島娘』

そう書かれた一升ビンをテーブルの上にどんと置く。

「――飲^やりますか」

「受けよう」

間髪入れずに士郎が答え、タカトは新しく用意した酒杯に清酒を並々と注いだ。士郎も注ぎ返す。

そして、またもや二人で一氣に酒杯の中身を飲み干した。

なお、この直後。

ヴィヴィオを寝かし付けた、なのはと美由希がリビングに戻って来て。酒なんぞを飲んでいる三人を発見。

もー、と怒って呆れる二人であったが。

何故かタカトがカクテルを作れると判明し、それを作る段階に至って。

なのはも美由希も、いつの間にやら参加していた。

――酒宴と化していく高町家の夜はまだまだ続く。

（お泊り編2に続く）

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」(お泊り編1)

はい♪ お泊り編1。終了でございます♪
ちなみにここまででプロットの半分(汗)

エライこっちゃあ……！

さて、今回はなのはより高町夫妻との絡みが多かったですが。
後編は大丈夫です(笑)
なのは、がんばっ！(笑)

ではでは♪ お楽しみにです♪

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」(お泊り編2)

はい♪ テスタメントです♪
くっ……。少し遅れた……！

とにかくにも、デート編。完結です♪

なお、今回。色んな意味で粹を広げてあるのでお楽しみに♪(笑)

では、どぞ〜♪

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」（お泊り編2）

高町家にて、何故か酒宴が繰り広げられようとしている頃。

伊織タカトの実家たる神庭家には美味しいそうな匂いが漂っていた。

キッチンから聞こえる音が食欲をそそる。

川海老のカルボナーラである。

しかも、どれだけの量があるのか。今キッチンで作られているのは別に大皿にドンと山に乗っている他のパスタまであった。

しかし、それらを作っているのはこのキッチンの主たるタカトにあらず。

と、言うか神庭家の人間では無かった。

シオンの悪友たる、神代銀杏とタカトの友人である草薙翔の二人が、今。神庭家のキッチンに立っているのであった。

「あー。翔さん？ そっちのバター取ってくれます？」

「おう。しかし、まあ……」

更に一品作るのか、銀杏に翔はバターを渡してやる。

ども、と礼を言う銀杏に頷いて。翔はふと遠い目になった。

そのままぼつりと口を開く。

「……なんで、俺達はここで他家の晩御飯の世話してるんだろうな……」

「俺はシオンと遊びに来てた所を捕獲されました。……ルシアさん

に」

「俺なんか、タカトに頼まれたDVD渡しに来ただけだぞ……」

はぁ、と二人して嘆息。やおら遠い目になると二人は同時に呟いた。

「「どうしてこうなった……」」

それは勿論。真名支配と言う反則技を使えるルシアに見つかった為としか言いようが無い訳だが。

『《■■■■》と《■■■■》♪ 私の為に美味しいご飯作りなさい♪ ”命令よ♪”』

たった、その一言。

その一言で彼女はカミすらをも従わせられる。

勿論、彼等は言わずもがなであった。

はぁともう一度ため息を吐いて、二人は日頃このような目に合ってるであろう友人の顔を思い浮かべた。

その友人、タカトは本日帰って来ないそうである。

そのとばっちりを受けている二人は切に願う。

タカト、さっさと帰って来いと。

それは勿論、今日限定で叶わない願いな訳だが。

『『晩御飯まだ〜?』』

「「まだだよこんちくしょう!」」

何故か手伝いに来る様子も無く。――若干一人手伝おうとした”
必殺料理人”が居たが何とか追い返した。

――まあ来ず、食卓にて勢揃いしている神庭家の人間達に吠えながら、苦労人である二人は再度嘆息するのであった。



そんな風に苦労人二名が、ため息を吐いてる頃。
時を同じくして、タカトも深いため息を吐いていた。

その理由は勿論――。

「ほら、見てごらんタカト君。これが、なのはが小学一年生の体育祭の時の写真でね――」

グラス片手にアルバムを持ち出して、娘の魅力を余す事無く、おいに語る高町士郎だったり。

「あらあら〜♪ これも美味しいわ♪ タカト君、おかわり〜♪
」

かっぱかっぱとタカトが作るカクテルを次々と空ける。何気に酒豪であった事が判明した高町桃子だったり。

「……私もさー。こう、この歳でいい人が見付からないて言うのは問題があるのは分かってるのよ。……でも恭ちゃんがさー……」

その隣では、ぶちぶちとぐだを巻きながら、こちらも次々と杯を

空ける美由希。

……そして。

「にやははははは！ ひっくっ！」

笑い上戸だったのか、黙々とカクテルを作るタカトの首筋にかじりつき、ひたすら笑うのはが居た。

どうしてこうなった……。

と、本日何度目になるだろう苦勞人達と同じ台詞を頭に浮かべながらタカトは女性陣のグラスにリキュールを注ぎ、更にオレンジジュースを加えて、カシス・オレンジを作り上げた。

このカシスオレンジは非常に甘い、カクテルである。

その甘さから、女性陣にも人気のあるカクテルな訳だが。

そこは当然、お酒。

飲めば酔っ払うのは自明の理であった。

それを作ると嘆息混じりに高町家三人娘にそれぞれ差し出し、更に士郎には清酒『明鏡止水』を出してやる。

それが終わると、自分はビール（ア○ヒ、スーパー○ライ）500mlのブルトップを開けると一気に飲み干した。

最初こそカクテル作りに専念していたが。自分だけ飲まないのが糺に触り、こうしてガバガバ飲んでいる訳なのだが。

「っと」

「ふえー？」

ビールの空き缶をゴミ袋の中に叩き込むと同時にタカトはくらりとした感覚を覚える。

いくら酒に強いとは言え、流石に飲み過ぎたか。

まあワイン二瓶に日本酒一升。ビールを2、3リットルも飲めば、なんぼ酒に強いと言っても酔いはするだろうが。

「……ちよっと、なのは。一度下りろ」

「ふえー？」

まだ首にかじりついたままの、なのはを下ろす。

同時にふらふらとしたので支えてやり、ソファーに寝かせてやった。

途中参加とは言え、カクテルを飲み過ぎたのがダメだったのか。彼女は早くも潰れつつあった。

赤ら顔な、なのはにタカトは苦笑すると士郎達に向き直る。

見ると、彼や美由希も飲み過ぎたか若干目が据わっている。

美由希はともかく、士郎はタカトと――。否、彼以上に飲んでいる。

いい加減、限界かもしれない――。

「……タカト君？　なのはを抱えて……！」

「……………」

――目が据わっていたのは全然別の理由であつたらしい。

タカトは別の意味で痛くなった頭を振る、と。士郎がいつの間によら目の前に来ていた。

「……そうそう、タカト君にはいろいろ聞かないといけないと思っ

ていたんだったよ」

「いや！ お待ちを！ 土郎さん飲み過ぎです！ と、言うか俺もそろそろ限界……！」

「ふふ……。そんな事いって、まだまだ大丈夫そうじゃない？」

「ぬ……。！ 美由希さんまで！？」

どうやら敵は二人になったらしい。

前門の虎、後門の狼である。

二人は日本酒の瓶を片手にじりじりと近寄り――。

高町家に声無き悲鳴が響いたのは数分後の事であった。

なお、その間。

「こくこくこく……♪」

桃子はただ一人、幸せそうな顔でカクテルを飲み干していた。



「は……。食った、食った……。ごっそさん。銀杏、翔先輩」

「ああ、本当にな」

一方所変わって、神庭家。

居間にて、晩御飯を食べ終えた一同が満足そうにお腹を摩る。

それに、料理を作った当人達はジトつとした目を彼等に向けた。

「まあいいじゃない？ 寧ろ、私にご飯を作った事を光栄に思いなさい？」

「「うわムカつく」」

偉そうに踏ん返り返りながら言うは、ルシア・ラージネス。
建前上は、神庭家養女であった。

ある意味において、真性の女王様気質な彼女のそんな態度に、ただ銀杏も翔も諦めたようにため息を吐いた。

それを見て上座に座っていたトウヤは苦笑する。

「いや、本当に助かったよ二人共。この礼は後に”タカトが”必ず”タカト、が?”」

「元凶はあいつだ。なら、当然あいつが礼をすべきだろう?」

流石、屁理屈こねさせたら天下一品の叶トウヤである。

勝手に異母弟が礼をする事を決めてしまった。

そんな彼に困ったような顔となる二人にトウヤは笑う。

「それにあいつも今頃、お楽しみかもしれないしね?」
「……………」

そんな台詞を聞いて、ぴくっとルシアの目尻が動いた。
知ってか知らずか、トウヤは続ける。

「あいつも成長したものだよ。まさか、女の子の家にお泊りとはね? ひょっとしたら今日は——」

「————。十分だけ呼吸を停止しなさい。”命令よ?”」

ぽつりと響くは真なる名の元に放たれる絶対命令。

直後に、トウヤは一切の呼吸が出来なくなった。

だんだんと顔が青紫に変わっていくが、彼は諦め無い。

懲りずに今度はどこからとも無く取り出したスケッチブック（シオンの）に台詞を書き込もうとして――。

「――！ 一切の筋活動を停止しなさい！ ”命令よ！”」

直後に、全ての筋肉を弛緩させられる命令を放たれてトウヤは崩れ落ちた。

それを、ぞっとした目で見えるシオン、銀杏、翔。
ちなみに筋肉を全て弛緩させられた場合。
心臓も止められる訳だが――。

まあ、トウヤなので三人も心配はしてない。
ほぼ間違い無く死なないだろうし。

問題は自分達にとばかりが来ないか否である。

そんな三人をルシアは一瞥すると、もうと声を漏らして嘆息した。

「たくもー、トウヤ兄さんったら……。義妹の前でセクハラ発言するのは、いい加減にしてよね」

「んー♪ ルシアちゃんが怒っているのは本当にトウヤ君なのかなー？」

突如として、別方向から声が飛んで来る。

それは神庭家、家長。神庭アサギのものであった。
反射的に、ルシアはアサギにキツイ視線を向けるが彼女のニコニ

コした顔に唇を尖らせて沈黙した。
その目は雄弁に語る。

アサギちゃんの意地悪、と。

そんなやり取りを、苦笑しながら聞いていたシオンはお茶を一口
煤って。

「まあ、でも。タカ兄いお泊りだけど、”例の癖”が出なきゃいい
なー。……なんて……ね」

ははっとまるで冗談めかした声が段々と尻すぼみとなる。
その内容に場が一瞬にして静まり返った。

見れば、アサギでさえも笑顔を硬直させてしまっている。
ルシアも顔を引き攣らせ、”経験済み被害者”である翔も顔を青
くしていた。

かたや、この場において”例の癖”を知らない銀杏が不思議そう
な顔となる。

「……なあ、シオン。”例の癖”って？」

「いや、そのー。だな……」

しまったと言う風な顔となるシオン。

銀杏はそれに更に怪訝そうな顔となった。

一同をここまで黙らせるタカトの”例の癖”とはなんなのか。

気になる、が。

そんな銀杏を置いて、一同は深刻そうな顔となっていた。

「―――。一切の命令を破棄するわ。起きなさい、”命令よ”」
「ぶはっ！ ふ、ふふ……！ 流石、我が義妹だね！ 私を的確に殺ろうとする明確な意思を命令に感じたよ……！」

「それは、もーいいから。……トウヤ兄さんはどう思う？」
「そうだね……」

一回だけ咳ばらいしただけで、復活した異母長兄に再び銀杏や翔は青い顔となるが、神庭家の皆は全く構わず話しを続ける。
ルシアの問いに、トウヤは若干考え込み。

そして――。

「まあ、動物園とかで動物との触れ合いではしゃぎ回った末に雨に打たれたり、やたら豪勢な料理を作って更に疲労を増やして、止めとばかりに酒をたらふく飲んだりしなければ大丈夫じゃないかね？」
「そ、そう。何かやけに具体的なのが気になるけど――。そんな事、そうそうある訳無いもんね！？」

「そうだとも。――多分ね？」

それでも上擦る声となる、ルシアにトウヤは頷きながら。
何故か、ふっと不敵な笑いを気になる台詞と共に浮かべた。



「悪いわね……。タカト君」

「いえ……」

夜11時。

日付が変わる1時間前に、高町家で突如勃発した酒宴はそれぞれ酔い潰れる事で終焉した。

なんとか酔い潰れずに済んだ――。

――絡んで来た士郎と美由希が先にK・Oしたためだ――。

――タカトは、酔い潰れた士郎に肩を貸して現在運んでいる真っ最中であつた。

その隣で、桃子が微笑みながら寝室に案内してくれていた。

……ちなみに、桃子は士郎の数倍は飲んでいる筈である。

それなのに平然とした顔な彼女に、タカトは内心戦慄しながら歩く。

彼女のような人を、ウワバミと呼ぶのだなと愚にもつかない事を考えていると。桃子はくるりとこちらを振り向いた。

「あ、そっちよ。その部屋」

「む、了解です」

首肯して、そちらに向かう。

桃子が先に行って扉を開けてくれた。

タカトは一礼すると、そのまま寝室に入る。

士郎と桃子の寝室は簡素な作りであつた。しかし、家具の一つ一つが凝っており、非常に洒落た感じを醸し出している。

それらを見て、タカトはほくくと感じたように部屋を見回す。そんな彼に、くすくすと桃子が笑った声で我に返った。

あわてて士郎をベツトに寝かせる事にした。

「うん、タカト君。お父さん運んでくれて、ありがとうね」

「いえ、これくらいは」

礼を言う桃子にタカトは苦笑する。

そのまま、寝室を出る為に扉に向かった。

「では、俺はこれにて」

「はい。恭也の部屋を使っているから。そこでゆっくりおやすみなさい」

「……そうさせて頂きます」

一瞬だけ、いや俺はリビングのソファで十分ですと言いそうになったが。それだと逆に気を回す事になる。

なので、タカトは素直に頷いた。

そんなタカトに桃子は微笑し、にこやかに手を振ってくれる。

「はい。それじゃあ、タカト君、おやすみなさい。あ、なんなら、なのはの部屋でも大丈夫よ？」

「そちらは丁重にお断りします。では、おやすみなさい」

そう言った冗談は勘弁して欲しいと再び苦笑。

そのまま、一礼して寝室を出て扉を閉める。

「やれやれ、だな」

もう一度だけ苦笑して、踵を返すとそのまま恭也の部屋に向かう。もう美由希も、なのはも床についた筈であった。

”それに、今日は疲れた。

久しぶりに”熟睡”出来そうだなとタカトは思う。

基本的に彼は日常において、完全に眠る事は無い。

——子供の頃から意識下で自分の睡眠をコントロールする癖がついてしまっているのだ。

昼間に、なのはにひざ枕されてしまった時すらも熟睡はしていない。

……まあ、それでも気付かなかったのだが。

それに、”熟睡する事は周りから止められる事が多いし”。

そんな事を思っていると、思わずくぁっと欠伸が零れる。

本格的に眠くなったらしい。

早く寝ようと、そのまま二階に上がる。

二階にはいくつか部屋があり、恭也、美由希、なのはと部屋は連なって並んでいた。

隣の部屋を使わせると言うのは、信頼されているのかタカトは苦笑して。

深く考える事をやめた。

さっさと寝よう。

再びそう思うと、恭也の部屋に入り——。

明かりも点ける間もあらずんば、ベットを見付けるとそのまま倒れ込んだ。

……明日は、早めに起きて——。

目をつむる、と一気に意識が閉じていく。

それを感じながら、寧ろその感覚に身を委ねるようにして、タカトは眠っていき――。

カチャリ、と部屋の扉のノブが回った。

……？

閉じ行く意識の中で疑問符をタカトは浮かべる。

ノブが回ったと言う事は誰か入って来たと言う事であった。

それは、一体誰なのか――。

一度閉じた瞼を、半分だけ開いて誰が入って来たのかを確認する。

それは――。

なの、は……？

そこには髪を解き栗色の髪を下に流した、なのはが居た。

そして、そこがタカトの限界だった。

目は再び閉じ、急速に意識が闇に落ちる。

タカトはこちらを見つめる、なのはの顔を目に焼き付けながら眠っていった――。



本当に寝ちゃった……。

兄。恭也のベットの上で、くかーと寝息を立てだしたタカトを見て、なのはちよつとだけため息を吐いた。

先程まで彼女も酔い潰れていたのだが、今ではすっかり酔いも醒めている。

そこは桃子の血か。なのはも酒に強い体質であった。

なのはは暫く、じーとタカトを眺めて。

やがて意を決したように彼の元に歩く。タカトの脇まで行くと、再びなのはタカトを見つめた。

その顔に浮かぶのは、笑顔では無い。ちよつとだけ拗ねた表情であった。

せつかくのお泊りなのになあ……。

そう、思う。

別になにかを期待していた訳では無い。

ただ、ちよつとだけ彼といられる時間が増えて嬉しかったのだ。

だけど――。

お母さんや、お父さんとはいっぱい話してたのに……。

それが、彼女がちよつとだけ不機嫌になった原因であった。タカトの性格上、こうなるのは百も承知ではあったのだが。いざなってみると、やっぱりちよつと腹が立つ。

だから、少し話せないかと。こうして部屋に来てみたのだが。

すぐ寝ちゃうんだもんない。

なのはは、そう思いながらタカトを見下ろす。
余程疲れていたのか、彼は”熟睡”していた。

考えてみれば、当たり前と言える。

動物園のデートは、はしゃぎまくり。

帰りは帰りで雨に打たれて。

家に来てからは、料理対決に酒宴でバーテンのまね事までやる始末である。

ちなみに、なのはは知らない事であるが。

タカトは昨夜、殆ど眠っていない。

バイトが終わって、すぐに”本業”の仕事が入った為である。

昼間にうたた寝してしまった事もそれが原因であった。

いくら超人のような人間であろうとも、疲労もあれば限界もある。
こうやって眠ってしまうのも無理は無かった。

なのはは眠るタカトをじっと見つめる。

その先で、タカトはんっと呻くと顔を横に倒した。

んぐんぐと呻くと、再びかーと寝息を立てる。

そんなタカトを暫く、なのはは見つめて――。

ぷっと吹き出して笑った。

おかしかったのである。

起きている時とは逆に、百面相のように表情を変えるタカトの寝姿が。

あきないなー。

そう思い、なのはは微笑んだままタカトを眺める。

今度はくーと、やけに可愛いらしい寝息を立てるタカトにまたちよつとだけ微笑む。

先程の不機嫌も何処へやらであった。

そうしてタカトを暫くの間見ていると、なのはも眠くなって来た。

もうちよつと見ていたかったけど、このままでは寝てしまう。

いくら何でもそれはちよつと恥ずかしいし、朝がどうなるかわかったものでも無い。

少しばかり後ろ髪を引かれるような心持ちで、なのはは立ち上がると最後にタカトの鼻先をつついた。

それに、タカトはんがっとう呻き声を上げて――。

「おやすみ、タカトく――」

おやすみと言って離れようとした、なのはを何かが覆って引き寄せた――。

「結局さあ、タカ兄いのアレってルシアのせいなんだよね。6の二枚組」

「仕方ないでしょー。あいつ、あの癖をあのままにしとく訳にはいかないじゃない。8の二枚組」

そんな風にタカトの寝姿を、なのはが見つめている頃。

神庭家の居間で、神庭家一同＋銀杏&翔はトランプをしていた。やっているのは皆さんお馴染みの大富豪である。

それをしながら、シオンがジト目で言うのは先程のタカトの癖であった。

「”あれ”はなー。マジでねえよルシア。と、ジャックの二枚組。これでどうだ！」

「しかし、私は流さない。Aの二枚組で迎え撃とう」

結構な自信があったのだろう。

出したジャックの二枚組をトウヤがAの二枚組で迎撃する。

それに、うげっと翔が呻き声を上げる。

次は、銀杏の番だが流石に2の二枚組等は無かったか。

首を振ってパス。他も同じくパスして、再びトウヤに回って来た。

「まあ、むやみやたらに人の首をねじ切るような真似は無くなったのだから良くなったのだろうがね。……キングの革命」

「」「うげっ!?!」「」

話を引き継ぎながら、トウヤが出すのはカードの強さが逆転する悪魔の組み合わせ。

何と、革命であった。

これを迎撃するには、これより強いカード四枚揃った組み合わせが必要だが。

今回のゲームも既に終盤。

この革命を覆すような手段は誰も持ち合わせていなかった。

当然、皆パス。

それにニヤリと笑ってトウヤが出すのは最弱と成り果てた2のカード。

同時にこれでトウヤは一位決定。

勝負を悠々と決めてトウヤはほくそ笑みながら話しを続ける。

「しかし、それでもやはり困ったものだよ。あいつの”寝相”は」
「寝相って……」

唯一、タカトの癖を知らない銀杏はトウヤのそんな台詞に顔を引き攣らせる。

出したカードは10。

それを見て、今度はシオンが9を出しながら苦笑した。

「タカ兄いさあ。前、地獄に居た時は眠りも知らずに戦ってたろ？
だからなんだろうけど。熟睡中に下手に触ろうとしたら、どうにも身体が勝手に動き出して相手を攻撃しちゃってたらしいんだよな。……眠りながら、誰かの首をねじ切るような真似は楽勝でやってのけてたらしいし」

「それって危険じゃねえの？」

「当然、危険よ」

こちらはルシア。出したカードは何と5。
いきなり飛んだ数字に翔がうわつと声を上げるがそれを無視。
ルシアは深々とため息を吐いた。

「だから、私が真名支配であいつを調教したのよ。……攻撃なんて
せずに、最低でも拘束で済ますように」
「……それで、あれか？」

幾分か迷って、翔が出すは虎ノ子の3。
勝負をつけに来たか。
それに、銀杏、シオンはパス。
しかし、ルシアは迷い無く動いた。

そして出すのは――。

「そう、”抱き着き癖”よ」

ジョーカーのカード。それによって場のカードは流され、ルシア
は最後にQを出して上がった。



え……！ ええ……！？

声無き悲鳴が、なのはから上がる。

”タカトの腕の中に抱えられた、なのはから”。

先程立ち上がったとした、なのはに覆いかぶさったのはタカトの
両腕であったのだ。

彼の手は瞬く間に、なのはを拘束すると自分の元に彼女を引き寄せ。

なのはは抱きしめられたと言う訳である。

「ちよっ……！ タカト君！？」

抱きしめられたまま、なのははタカトに声を上げる、が返って来たのはただ無言。

そのまま彼女を拘束し続ける。

それはそうだろう。

タカトは熟睡しているのだから。

それに気付かず、なのはは両腕を解こうとして。

すかさず、タカトの手が動く。

するりとなのはを抱きしめたまま、彼女の力だけを手で受け流してみせた。

まるで、暖簾に腕押しとばかりに力が入らない。

正確には、ことごとく流されてしまう。

何度やっても結果は同じであった。

それどころか、タカトは更になのはを引き寄せて――。

「タカ、ト、君……！」

もう、ダメ……！

近寄るタカトの顔に、なのはは目を閉じて覚悟を決める。
ぐんぐんと近寄る彼の顔に、なのはは目を閉じて待ち。

「くかー」

そんな当たり前過ぎる寢息を聞いた。

「……え？」

「かー」

なのはが目を開く。

タカトの顔は前に在らず、横に在った。
そのまま可愛いらしく寢息を立ている。

ひょっとして……。寝てる？

「かー」

内心の問いに寢息で返されて、なのははがつくりと首を落とした。
まさか、寝たままこんな真似をしようとは。
先程のドキドキを返せと言いたくなる。

どうやら、彼の寝相はかなり悪いらしい。
まさか抱きしめられるとは思わなかった。

なのはは、はぁともう一度だけため息を吐くが、このままと言う
訳にもいけない。

取り敢えずはタカトの腕の中から脱出しようともぞもぞがいた。

……そのたんびに身体中の至る所が擦れ合うが、それは何とか無
視する。

そうしないと恥ずかしかったのだ。

細身に見えたくせに逞しい胸板や、やけに広く見える肩幅。片足
が差し込まれている内腿の間等。

気になる部分は山ほどあるが、無理矢理意識から排除する。そうして、暫くの間脱出せんとして。

それが無駄な事を、なのは悟った。

どうにもこちらが力を入れる度に、絶妙な力加減でこちらの力をタカトは流すのだ。

抱きしめたまま、なのはが腕や足に込めた力のことごとくを受け流しているのである。

わざわざ寝ている時にまで見せなくてもいい、絶技の冴えであった。

……と、言うより本当に起きてはいないのか。

なのはは疑わしげにタカトの顔を見つめるが、彼はすやすや眠るだけ。

これで寝たフリなら大した役者である。

勿論、彼は寝たフリなぞしていない。

現在進行形で爆睡中であつた。

ちなみにタカトが寝たまま、なのはの力を受け流してみせたのは当然理由がある。

聴勁と言う技法が中国拳法にはあるのだが。

これは、簡単に言えば触覚のみを頼りに相手の動きを看破する技法である。

例えば、目が見えなからうが触れただけで勁の動きを見切り、全体の動きを把握出来る訳だ。

これを熟睡中のタカトは眠ったまま無意識に使ってみせた訳である。

結果として、なのは力を込めた端からそれを見切られたのであった。

なお、この聴勁。

極めると、”空間”あるいは”世界そのもの”にまで触覚を伸ばす事が出来る。

これにより、タカトは例え相手が光速の速度で突っ込んで来ても反応し、見切っている訳だ。

常にタカトの認識範囲内では直接触られているようなものである。ただ速いだけでは、タカトに勝てないと言われる所以であった。

閑話休題。

なのはは、力づくでの脱出を諦めると。今度は声で起こす事にした。

いくら何でも、間近で呼べば起きるだろう。

もう深夜だから大声は出せないが、それで起きない時は起きない時である。

うんと頷き、決めると。なのははタカトの耳に口寄せた。

タカトに呼びかけようとして――。

その直前。

タカトがぱっくりと口を開いたのを彼女は見た。

え？ と、疑問符を、なのはは浮かべて。

そんな彼女に熟睡しているタカトは構わず、口を開いたまま一気に顔を寄せる！

その数秒後、今度こそはまごう事無く。なのはの悲鳴が響き渡った。

一方、こちらは神庭家。

大富豪に飽きたのか、彼等は別のゲームをしていた。ブラックジャックである。

このゲームも有名なので今更説明の必要もあるまい。ようは合計数字を21にすればいいだけである。

なお、10以降は全て10扱い。

Aは規定通り、1か11を選ぶ設定であった。

ジョーカーは1から10までの数字を好きに選択出来る。

そのルール下の元、親はルシア。

カードをシャッフルしそれぞれの元にカードを渡す。

「……でもさ。タカ兄いの抱き着き癖も問題だけど、それ以上に”アレ”があるしな。あ、一枚ちょうだい」

「アレって……。まだ何かあんのか。タカトさんのイメージが崩れていく俺がいるんだが。あ、俺もっ」と

中央に置かれた山からそれぞれシオンと銀杏はカードを取る。

直後に二人は同時にむーと難しい顔となった。

どうやら21には遠いが、次引くとブタになる可能性がそれぞれ高いのだろう。

それを見ながら、トウヤは苦笑した。

「元々が元々だからね、あいつは。寧ろ、あの半生でまともな人間になれるのなら人間まっとうな生活を送る必要は無いさ。……よし」

カードを山から引くと、そのまま頷く。

どうやら21かそれに近い数字に合計でなったか。

それを見て、先にカードを取った銀杏とシオンが見るからに険しい顔がさらに険しくなった。

翔はそんなやり取りに肩を竦めると、ロシアの方を向く。

カードを取らないと言う事は相当良い数字が来ている証拠であった。

「……で？ ”あれ”もお前が仕込んだ訳か？」

「なんでもかんでも私のせいにしないでよ。”あれ”に関しちゃ、私は無実よ」

翔をロシアはぎろりと睨む。

その眼光たるや、凄まじいものがあつた。

翔は再び肩を竦める事になった。

そんな二人の様子に、銀杏は不思議そうな顔となる。

さつきもだが、翔は知っている風情なのだ。”あれ”とやらを。

何故、彼がそんな事を知っているのか。

翔は銀杏の視線に気付くと苦笑を一つだけ浮かべた。

「どうした？」

「あ、いや。翔先輩は何かタカトさんの事を知ってるみたいなんです、なんでですか？」

気になった事をそのまま聞いてみる、と。翔の顔が見るからに引き攣った。

その表情は明確に語る。

話したくない、と。

だが、そんな事を彼女が許す筈も無かった。

「ふふっくん？ それは簡単よ、銀杏。翔はね——」

「てめ、こらルシー——」

「————」。黙ってなさい。ついでに一切その場での行動を禁止するわ。”命令”よ」

にっこりと激昂しかけた翔を鮮やかな真名支配で封じ込める。

翔は身動きが取れなくなり、銀杏に目でやめろ！ とアイコンタクトを送るが、銀杏は気付かぬフリをしてそれを華麗に無視した。

ルシアへと視線を送る。

彼女はそれに、ふふんと笑うと語り出した。

「翔は、林海学校でタカトと同室だったからね。ちょうど、その時。あの馬鹿熟睡しちゃったのよ。で、偶然にも翔がタカトに触れちゃったらしいのよ」

彼女もオープンしたカードと伏せたカードを交互に見て。一枚山から引く。

そして、一気にオープンした。

21。ブラックジャックである。

「で、翔は危うくお嫁に行けない身体になる所だったのよ」
「お嫁って……」

「お婿でも全然構わないわよ。……まあ、私が助けたんだけど」

その結果に笑うルシアに、トウヤがカードを場に出す。

カードの合計20。

ブラックジャックが来なければ楽勝でトウヤの勝ちであったろう。ちなみに、翔は19。銀杏、シオンは18であった。

ルシアの勝ちである。

その結果にため息を吐きながら、銀杏はルシアに頷く。

「で、結局”あれ”って何なんですか？」

「うん。タカトの寝癖、その2」

再び親はルシア。カードを手繰り寄せると、勢いよくシャッフルしていく。

そしてカードを配りながら、ぽそりと”あれ”の正体をついに口にした。

その正体とは――。

「舐め癖&噛み癖よ」

「……………は？」

あんまりと言えば、あんまりな”あれ”とやらの正体に、銀杏の手からランプが零れ落ちた。

なお、まだ翔は真名支配で床に転がされっぱなしである事を追記しておく。



ぴちゃ、ちゃぷ……。

「っん！ あっ！ た、タカト君……！」

暗い室内に、音が鳴る。

同時に響くは、なのはの上擦った声。

今、彼女はタカトに組み伏せられながら。その身体に舌を這わせられていた。

正確には”耳”に。

タカトはその寝癖を遺憾無く発揮し、なのはを舐め回していたのだ。

……なんで、舐めて——！

そう思い、嬌声を上げながらも必死に、なのはは耳を隠そうとするが。

そうすると、今度はタカトの舌が下へと降りていく。

そこに行き着くは、首筋であった。

タカトの唇が顎の下あたりに吸い付く！

「っ……んっ！」

ちゅるっと言う音と共に、彼女の肌を唾液で汚して。流れた汗と交わらせつつタカトはそれを舐めながら、広げていく。

そんな、ただそれだけの行為がたまらなかった。

頭がぼーとしですが、なのはは頭を一振りして気を取り直すと。
無理矢理にでも逃げようと身体をよじる、が。

そこはタカト。寝ながらにして聴勁なんぞをいらん時に使っ
てしまう達人。

なのはの動きを完全に封殺してしまうと、捕らえた獲物を弄ぶ
のように、舌を彼女の身体に這わせていく。

つつつと首筋を経由して、タカトの舌は降りて行き――。

「だ、だめ！ タカト君！ そこから先は――」

聞いて貰えなかった。

舌は、なのはの肌を汚しながら進み。

そこから急に角度を変えた。

舌が進むは、下では無く横。

乱れたパシヤマから出た鎖骨に、その舌は這っていく。

くぼみの所に甘く噛みつく、なのはの身体がびくつと跳ねた。

「あ、っん……！」

嬌声が漏れる。

それは熟睡中のタカトに届く事無く、彼はなのはの鎖骨を舌でな
ぞりに掛かった。

舌先で、つつ……つつつと終点まで辿って行く。

それに、なのはは奇妙な感覚を覚える。

切ない、が。正しいだろうか。

が、次の瞬間。なのははそれどころでは無くなった。
突如として上がったタカトが耳たぶを甘噛みして来たのだ。

「っん……！　だめ……。耳食べちゃ、やだぁ……。っ」

そんな抗議も通らない。

はむ、はむとまるで食感を楽しむように唇で、歯で、舌で彼女の
耳を蹂躪する。

たまにきつく噛まれると、痛みと快感が彼女を通り抜けた。

それを寝たままのタカトは執拗に繰り返して。

やがて、なのはが吐息が荒くなったのを見計らったように、タカ
トは顔を寄せて。

「ふ、あ……。っ!？」

舌が耳の中へと侵入して来た。

唾液のぬるぬる感と共に舌がくちゅりと音を立てて、這いずり回
る。

「だめ……。入れちゃ、だめ……」

なのはは、だめと言い続けるが既に手足からは力が抜けて久しい。
既に抵抗する気力すらも無くしたか、完全にぐったりとしていた。
顔もトロンと蕩けて、息も荒い。

そんな、なのはにタカトは寝息をくーすと立てながら、しかし攻撃の手を休めなかった。

彼女の耳を侵し尽くすと、今度は首筋や鎖骨。更には額や頬に浮かんだ汗を丁寧な舐め取っていく。

まるで犬のような、その仕種。

しかし、それをやっているのはあくまでも犬では無くタカトであった。

一種の背徳感と背中合わせの強烈な快感を、なのはは強制的に舌と共に刷り込まれていく。

そうして、汗を舐め尽くすとタカトの顔は再び下がる。

向かう先は、なのはの喉。

彼の寝息が首筋に掛かり、くすぐったいと思うと同時に。硬い歯が喉をくわえ込んで来た。

そのまま、歯を立てられながらちゅると吸い尽くす！

声は自然に出ていた。

「っあ、ふ、ん……！　だ、め。タカト君……。だめ……！」

段々と嬌声が高くなる。

それと一緒に、彼女の吐息が更に荒くなっていき――。

「っ――――！　ん――――！」

びくっびくっ、なのはの身体が跳ねた。

そのまま、くたっと身体中から力が抜ける。

はぁ、はぁと荒い息で脱力した、なのはにタカトは構わない。

舌が頬をぺろぺろと舐めていく。

まだ、するの……？

蕩けた思考で、そう思うのはに肯定するようにしてタカトの口がぱくりと開き、今度は反対側の耳にかぶりつこうとして。

「はい♪ そこまで♪」

そんな声が聞こえた。

どこかで聞き覚えがある声だけど、今のなには分からない。

声は、タカトの襟首を引っ掴むなり真後ろに放り投げる！

一撃！一

直後、床に重いものが落ちる音がした。

「タカト君ってば。あれほど合意にって言ったじゃない。ダメだよ？」

そう声は続けるが、当のタカトは寝息を立てるのみ。

くーすーかと、ぐっすり眠りこけているのが空気で分かった。

「うん、それじゃあ。私はこれで♪ あ、なのはちゃん。着替えた方がいいよ？ ちょっと大変な事になっちゃってるしね。それじゃあ、ばいばい♪ おやすみ〜♪」

声はそこまで言うと、急に遠ざかっていった。

なのはは、誰だったんだろうと思いつながら声に出せない。
急激な睡魔が襲って来たからである。

そうして、なのははそのまま恭也のベッドの中で静かに眠りにつ
いた。

漸く、一日が終わる――。

それは、彼女とタカトのデートの終わりとも言えた。



ちゅん、ちゅんと鳥の囀る音がする。

それを聞いて、タカトはむくつと身体を起こした。
朝である。

窓から覗く空は、太陽が昇りかけていた。

それを、ぼけらつと見た後。タカトはふぁつと欠伸を一つだけか
く。

随分、よく寝たな……。

久しぶりに熟睡出来たせいかな、まだ頭が若干眠っているような感
覚を受ける。

そして、自分が座っている場所を見て小首を傾げた。

自分が寝たのは、恭也のベッドの上だった筈だ。

眠る直前だったが、そこはきっちり覚えている。

なのに、何故床で寝ているのか？

まあ、諸外国を渡り歩いた経験から雨さえ降らなければ、どこでも眠れる体質なので別にいいと言え言いいのではあるが……。

そう思い。ベッドに振り向いて。

「ん〜。タカト君、おはよ〜」

完全にタカトは数秒、間違い無く気を失った。

そこに居た人間を見て。

暢気に、目を擦りながらタカトに挨拶してくれるのは当然、なのはであつた。

そこはいい。……いや、良くは無いのだが百万歩譲っていいとする。

だが――。

「なの、は……。お、お前なんで――」
「んー？」

まだ彼女も目が覚めきっていないのか、ぼけーとした顔でこちらを見る。

そんな、なのは。見た目がえらい事になっていた。

パジャマは激しく乱れて、肌が露出してしまっている。

それだけでも、あれだが。

さらに彼女の首筋や肌の幾箇所には明らかにキスマークと呼ばれる跡がついていた。

それを付けたのは、はたして誰なのか――。
――と、言うより容疑者は自分しかいなかった。

同じ部屋。

乱れたパジャマ。

キスマーク。

これが、導く答えとは――。

「な、なの、は？ あの、だな。お、俺は昨日、何かしたか……？」

恐る恐る尋ねる。”そう言った事”をした記憶は一切無いのだが、
状況だけ見れば間違い無く”事後”であった。

が、まだ現実逃避をするタカトは、なのはにそう聞いて。

「――責任、取ってね♪」

「……………」

その答えに、膝を折り。

タカトはがつくりと床に沈んだ。

なお、この直後。現場を発見した士郎にタカトは真剣で御神流の
全てを持って追い回される羽目となる訳だが――。

それはまた、別の話であった。

ちゃんちゃん♪

（タカトと、なのはのデート話し。これにて幕！）



——はい♪ テスタメントです♪
もう長くは言うまい……。

デート編。漸く完結です！

いやぁ、長かった……（笑）

考えてみたら一ヶ月は書いてるしなぁ（笑）

なお、今回の見せ場たるあのシーンは”全年齢対象”の限界に挑戦してみました（笑）

いや、頑張ったよ俺……（笑）

さて、次回から漸く本編に戻ります。

第三部後編。お楽しみにですよ♪

ではでは、また次回お会いしましょう♪

なお、今回。第三部後編の予告完全版を載せるので是非見て下さい♪

ではでは♪

番外話「とある天然魔王のおそらくは日常である筈のデート」（お泊り編2）

「……始めよう、シオン。俺と、お前の物語の……」

「“終わり”を、“始めよう”」

あの日からずっと。

泣かないと決めてきたけど。

痛みを、重ねても。

何かを、許せずにいた。

「イギリスについた途端これかよ！」

「第二世代戦闘機人、特殊部隊。『ドッペル・シュナイデ』”隊長”。ギョンター。よろしくねい」

「君、は！？」

「……クリストファ。僕の名はもう、これだ。覚えておくといい。プロジェクトFの忘れ子、もう一人の僕。……偽物の僕」

「……これが？」

「そう。あんた達のDAの動力源になる物よ。”まつろわぬ神”達の魂から生まれた結晶。世間では、精霊石やら賢者の石なんて言うんだけどね」

「行け！ エリオ！ 俺を露払いにしたんだ！ お前の全てを取り戻して来い！」

「はい！」

「WOOOO……！」

「追わせねえよ……！ お前は、ここで俺とタイマン張るんだ……！ ヴォルテール！」

「……行くよ！ マツハキャリバー。ううん、マツハキャリバー、斉天大聖！」

「これが、……なのはさんと同じ空……！ 行くわよ！ クロスミラージュ、フラフナグド！」

「メテオ、スターライト……！」

「シューティング、スターライト……！」

「「ブレイカア——————！」」

「……僕は、僕は、キャロを守る。そう、決めた。決めたんだ！ 君の記憶なんかじゃない！ 僕としての想い！ だからっ！ フリード！」

「ここに！ 仮初めなれど、我が御者たる資格を認めよう……！」

「ドラゴン・ユニゾン
”竜魂融合”！」

【”グラム・フォルム”！】

もう、戻れない。
いくつもの日々。

「久しぶりだな」

「君かい？ 本当に久しぶりだ。タカト」

「……タカト、君は……！」

「ユーノ。勘違いをするな。俺はストラの敵であると同じく。”お前達の敵だ”」

「タカト……。君は、ガキだ」

「……ああ、知ってる」

僕はまだ何も出来ずに。

「これより、我は修羅に入る！」

「人と会っては人を斬り、鬼と会っては鬼を斬り。……仏と会っては仏を斬る！」

「その覚悟があるもののみ！ 俺について来い！」

「戦って死ねなぞ、温い事は言わん……！ 生きて！ 必ず帰って来い！」

君の、居た記憶のかけら。

また一つ、消えていく。

「アルトス・ペンドラゴン。人として英雄となり、剣として神になった男。それがヒントだったんだ。……今、分かったよ。アルトス。お前の、真名は——！」

【エクスカリバーとは、我が剣の名に非ず。我が…… 必殺剣の名だ”！】

今日よりもっと。

強くなりたい。

「あなたの刀。かつての名前は”識刀、霊帰”。神庭アサギが所有していた”知識の刀”」

「知識、の……？」

「そう。知りなさい。『鋼』とは神から王権を奪うための御印。『知識』とは神を”まつろわす”ための力。あなたの刀は『鋼』と『知識』の二つを持ってしてカミ殺しとなる」

「カミ殺し……？ て、ちょっと待て！？ じゃあ、この刀の元はカミなんかじゃなくて——！？」

この声がいつか届くように。

「タカトオっ！」

「兄者アっ！」

「お前の理想は……！」

「あんたの願いは……！」

「「ここで、終われ！」」

歩き続けて、風が止んだら。

「リゲル・アイザック……！ 元、第二位の吸血鬼！ 神祖の、吸血鬼！」

「ははっ……！ だとしたらどうする？ 既にこの都は我が版図。この都の者達は次々と他者の血を吸い、仲間を増やす。貴様に救う術なぞ、無い」

「タカト……。それ……！」

「これが、俺の、666の本当の能力。これならば吸血鬼化を治療出来る……。後、何人居るかは分からないが、な」

「くく……。伊織タカト。貴様の弱点は、”一人では無かった”事だ。一人ならば、そんな事になりはしなかった。誰も救わずに済んだ。滑稽だな」

「貴様は、一人で居るべきだったのだ。最後の、その瞬間まで」

君を探して空、見上げるよ。

「シオン。お前、一度も考えた事は無かったのか……？」

「俺がお前を憎んでいると。そう、思った事は無かったのか？」

「憎んでいた。ただ、一人。綺麗なままにいる、お前がたまらなく憎かった」

「妬んでいた。何も無くしていないのに、全てを手に入れていくお前に嫉妬していた」

「お前なんて、黒く汚れてしまえばいい。そう、願った」

「タ、カ、兄い……？」

「俺はな？ シオン。貴様の事が大嫌いだったよ。……殺したい程に」

夜明けの先に光りが射すよ。

「私は……。僕は……。貫けましたか……。！ クライドさん、テイーダ……。！僕は、自分の想いを……。！」

「……随分と短い付き合いでしたね……」

「……いや、そうでもなかろう。少なくとも、私は楽しかった」

「幸せであれ、私が、お前を、愛し続ける限り」

「かか……！ 悪かねえ……。 悪かねえ！」

「お前の、泣き虫は——」

虹が掛かるよ。

「……これが正しい事だなんて、とてもじゃないけど思え無い。やっていい事の筈が無い……。 でもっ！ 俺は、一緒に居たいと思った。……。この気持ちだけは、本当の事だから！」

「だからっ！」

「これが、俺の答えだと信じてこうするっ！」

「事象概念創造魔法……」

魔法少女、リリカルなのは S t S，E X。第三部、『創誕』後半。

「創誕……。 発動！」

始まります。

「やだよ……。！ こんなのに！ こんなのに、やだよお！」

「なのは。大事な事を忘れていた」

「お前の事を嫌いだと言った事――」

「アルカンシエルを……喰った!？」

「これで！ 奴の魔力はフルになった筈だ!」

「いんや。ただ今、神庭シオン。最終戦技変換中」

「魔力値、” 5億1千万”。SSS++。……” 腹八分目” って
とこかな?」

第五十二話「懐かしき者達」(前編)(前書き)

「あいつと始めて会った時、俺はただの侵入者だった」

「義兄弟であつた――。――もう、過去形だが。奴の導きに従って向かった場所で俺は奴と会った」

「ガジェットとか言うガラクタをただ壊し」

「銀髪眼帯幼女を気絶させ、眼鏡を掛けた妙ちくりんな女をチョークスリーパーで落とす。速度自慢の女を、取り敢えずぶん殴って沈黙させながら進んだ」

「そんな俺にあいつは、何故か薄笑いを浮かべて、こう尋ねた」

「『君は何の為に来たんだい』、と」

「俺はこう答えた。『迷ったら襲われた。出口を教えてください』と」

「それが、どう受けたのか知らないが奴は爆笑した」

「その時だ。奴は俺を気に入ったらしいので俺は奴と友達になった」

「その時の奴が放った別れ際の台詞を、俺は忘れない『君こそが、私の望んだ生命の”究極”だ。私はいつか、君に追い付こう』奴は、そう言った」

「多分それは、紛れも無い。奴の本気の言葉」

「その言葉を、俺は忘れない――」

「魔法少女、リリカルなのはStS，EX。始まります」

第五十二話「懐かしき者達」(前編)

「……本当にいいの？」

夜の神庭家、道場。

そこで、少しばかりの躊躇いを含んだ声が響く。

神庭アサギ、彼女の声が。

それに息子たる神庭シオンはこくりと頷いた。

夜の帳が落ちて、もはや深夜である。

鈴虫の声が辺りに静かな音を澄み渡らせていた。

アサギは一度だけ瞑目すると、また”得物”を取り出す。後ろを向くシオンへと、それを向けて――。

――でも、やっぱり出来なかった。
得物を引っ込める。

「やっぱり、ダメ……。ダメだよ、シオン君……」

「あのね、母さん」

「ママって呼んでくれなきゃ、嫌」

「……………母さん」

シオンはため息を吐きながら、アサギを振り向く。
しかし、アサギはそれでもイヤイヤと首を振った。
何かに追い立てられるような切望する想いが、その目に映る。
シオンはそんなアサギを、じとーと半眼でみつめた。

「母さん。頼むから、早くしてよ」

「出来ない……。出来ないよ！　だって私達母子なんだよ！？」

「母子だから頼んでるんだろ……」

切羽詰まったように、ついには叫んだアサギにシオンは頭痛を覚える。

そして半眼になったままの目で、アサギを見据えた。

「母さん」

「……嫌。嫌だよ……」

「……だ・か・ら……！」

いい加減、勘忍袋の緒が切れたか。

シオンは完全に後ろを振り向き、そのまま口を開いた。彼女を論す為に！　それは――！

「髪を切る」だけで、何でそんなに嫌がるのさ！

「だって……！」

たまらず叫んだシオンにアサギはハサミを片手にだうくと、涙を流した。

それにシオンは再度ため息を吐いてうなだれた。

事の起こりは単純な事だった。

いい加減、前髪がうっとーしくなり。……それに”いろいろ”あったので。気分を入れ替える為と決意を新たにする為に髪を切ろうとしたのだが――。

それを母、アサギに頼んだのが間違いだった。

彼女はシオンが髪を切ると聞いて、目に見えて狼狽。

散髪に大反対したのである。

その理由はと言うと――。

「だって……。しーちゃん、可愛かったのに。このまま髪を伸ばしたらシオン君、しーちゃんみたいになると思って――」

……そう言って、差し出された写真を奪取出来なかった事を、シオンはいつまでも悔やみ続けるだろう。

後、みもりには話しをつけねばなるまい。

ともあれ、その後。アサギをなんとか説得。彼女が髪を切る事で合意を得たのだが――。

事、ここに至って嫌がったと言う訳である。

どんだけぐだぐだだよと言いたくなるが、ぐっと我慢。シオンは、そのまま片手を差し出した。

「……もういい。自分で切るから」

「だ、だめだよ……！ 形が悪くなっちゃうよ！」

「なら、みもりかティアナ辺りに頼んで――」

「それだけは絶対に嫌！」

ならどうすればいいと言うのか。

自分より背が低いアサギがうくと、自分を涙目で上目使いに睨んでいるのを見て、シオンはまた、ため息を吐く。

とにかくにも、このままでは話しも進まない。

明日の出発までにやっておきたい事は他にもあるのだから。

だから――。

「うゝゝ！」

「……はぁ……」

長い夜になりそうだなあと、シオンは一人頷くとアサギに向き直る。

そして説得を開始した。

——なお、この後。

説得が完了するまでに更に一時間を要する事になったのは言うまでもない事だった。



「——のは、なのは」

「ん……」

誰から声が掛けられる。

それを聞きながら、彼女。

高町なのはは、少しだけ目を開けた。

そこに映るのは、仏頂面の青年。伊織タカトだった。

なのはを見下ろしている。

「なのは、いい加減起きろ。貴様、確か今日は朝早いとか言っ
て無かったか？」

「んゝゝ？」

なんだ夢かあ……。

彼がそこに居る訳が無い。

自分を起こしに来る訳が無い。

現実の自分達は敵同士だから。

だからこそ、夢だと彼女は思う。

なら、何してもいいやとも。

そう思うなり、なのはへらへらと寝ぼけた顔で、タカトに笑いかけた。

「……黒い王子様が……。キスしてくれたら起きる……」

「……ほお……」

ぴくり、と。その言葉を聞くなり、タカトのコメカミに怒りマークが浮かんだように見えた。

あれ、と思う間も無くタカトはなのはの傍に顔を寄せると、”優しく”彼女に告げた。

「いいだろう。ならば、存分にキスさせてやろう」

「え、ほん――」

「――ただし」

言うなり、なのはのベッドにある敷き布団をタカトは引っ掴む！
そして、そのまま彼女を投げ転がした。

「にゃっ!?!」

「――床と、な」

ごろごろと転がる音と共に、なのはの悲鳴が響き渡る。
床で顔でも打ったのか、鼻を押さえながら、なのはは涙目となつて起き上がった。

「……ひ、ひどいよ……。タカト君……」

「黙れ、やかましい。いつまでも起きない貴様が悪い。」折角起こしに来てやったのにな」

タカトが呆れたように、そう言って。

瞬間、なのははピシリと固まった。

朝。朝である。そして、ここは高町家のなのはの部屋。

そこに、何故に彼がいるのか。

敷き布団を手を持ったタカトに、なのははゆっくりと振り向いた。

「――タカト君。なんで、ここに？」

「む？ ああ、昨日は俺の誤解のせいで結構遅くに貴様達を帰したろう？ 流石に悪いと思ってな。一人、一人起こしてる真っ最中と言ふ訳だ」

堂々と彼は言つてのける。

それに、なのはは呆然として。

やがて、重々しいため息を吐いた。

昨夜、彼女達は妙な勘違いをした彼に必死にそれは違ふと説明していたのだが。

それが終わったのは何と夜中の事であった。

晩御飯まで世話になりながら夜を徹して行われた説明。

そこまでして、漸く誤解は解けた訳だが。気付けば夜中の二時であつた訳である。

なんで、彼はこう。微妙に常識が無いのか。

がっくりと脱力した、なのはにタカトが不思議そうに首を傾げる。

「なんだ？　どうかしたか？」

「ううん。タカト君はタカト君なんだなあて思っただけ。ちなみに、これ不法侵入なんだけど――」

「なんだそれは。食ったら美味しいのか」

ようは知った事では無いと言いたいのか。なのはは、タカトの言葉にがっくりと肩を落とした。

そんな彼女に、タカトは肩を竦めると窓に目を向ける。

「さて、ではな。なのは」

「え？　あ、うん。タカト君、気をつけて――」

「それは要らない。俺とお前は既に敵同士なのだから。余計な気遣いをするな」

「あ……」

気をつけて。その、たった一言さえも彼は許さなかった。

なのはに向けた目には既に感情が失せている。

つまり、敵として既に彼はなのはを認識していた。

それに気付いて、また。タカトの台詞に、なのはは目に見えて傷ついたように見えて――。

――それを、タカトは全て無視した。

顔を逸らすと縮地で去ろうとして。

「……誰だ？」

「え？」

いきなり、そう言い放つなり振り向いた。

その視線は、なのはに向けられてはいない。真っ直ぐに、”開いた扉”へと注がれていた。

そして、そこには大柄な男性が扉に背を預けて居た。

こちらを興味深そうに見ている。

彼は――。

「お父、さん……？」

「やあ、なのは。おはよう。そちらはボーイフレンドかな？　だっ
たら紹介して欲しいな」

なのはの、呆然とした声に飄々として答える。

彼女の父。

高町士郎が、そこに居た。

タカトを悠然と見据えて、そこに。

それに、なのはが答えようとして。

「いや、違うな。俺は、彼女の”敵”だ。いつか必ず戦う約束を持つな」

「……そうか、予想した中で最悪の答えだよ」

言うなり、士郎の視界はモノクロへと変化した。

御神流奥義之歩法『神速』。

自らの時間感覚を引き伸ばして高速移動を行う歩法である。

それを発動した御神の剣士の視界はモノクロに変化し、相手の動きはスローモーションになると言う。

そのモノクロの世界で士郎は手に持つ二刀で、タカトに襲い掛かり。

直後、タカトが笑った――。



一閃！――

なのはがそれに気付いたのは、全てが終わった後だった。

父、高町士郎の二刀がタカトへと振り放たれた後――。

呆然とした彼女をよそに二人の男は視線を交差する。

タカトは感情の失せた微笑みと共に空となった視線で士郎を見つ

め。

士郎は、そんなタカトに額から汗を一筋流した。

「あ……！ お、お父さん！？」

漸く我に返って、なのはが悲鳴じみた声を上げる。

しかし、二人は気付いていないかのように正面から見合った。

「もう、いいか？」

「……ああ。構わないよ」

何のやり取りなのか、タカトの言葉に士郎は剣を下げる。
そして、タカトは彼に背を向けた。

「それではな、なのは。俺と戦うまで達者でいろ。ではな」
「あ、タカト君！ 待っ——！」

当然、彼は待たなかった。
なのはを無視して、縮地で消える。

そんなあまりにも勝手な真似をしたタカトに、なのははもうと口
を尖らせて。

「なのは。彼は止めておきなさい」
「え……」

そう、士郎から告げられた。
一瞬、何を言われたか分からずに目を丸くする彼女に士郎は構わ
ず続ける。

「今の一撃。素人なら、何があつたか分からずに死んでいる。玄人なら、自分が斬られている事には気付いて、でも死んでいただろう。達人なら少しの挙動で避したかもしれない」

「な、なら。タカト君は……？」

”あれは人間じゃない”

士郎はきつぱりと断言する。

一瞬、何を言われたか分からずに呆然とした、なのはに士郎は掌を広げて見せた。

「……見てごらん。冷や汗だ。さっきの一撃、僕は本気で斬るつもりで放った。奥義まで使ってね。しかし、彼は微動だにしなかった。……僕が外した——。いや、”外されたんだ”。わざとじゃなく。本能的に、彼と殺し合う事を恐れてね。分かるかい？ この意味が？」

「……………」

それは、つまり——。

なのはは、士郎の言葉に固唾を飲んだ。

その意味を、彼女はよく知っているから。

伊織タカトと言う存在の異常性を。

けど、でも。

「——それに、彼は遠くを見据え過ぎてる。女の子じゃ、ついて行けない世界を見ている。……そんな気がするな」

それを知ってる。

ただ自分の家族を取り戻す為に、世界全てに喧嘩を売った青年。
それは家族の為じゃなく、あくまでも彼自身の我欲^{エゴ}。

幸せを喪失ってしまったが故に他者の幸せを守ると言う彼自身ですら気付いていない想いの果てに彼はそうなった。

でも、否。だからこそ――。

「だから、なのは――」

「いいの、お父さん」

心底心配しているのだろう。

優しく言ってくれる士郎に、なのはは首を振る。

そして、微笑んだまま彼に頷いた。

「もう決めたの。タカト君とは必ず戦うって。それは、約束だから」
「――なのは」

それでも心配そうな父に、なのははもう一度頷いてみせる。

それに、士郎は少しばかり呆然として。やがて、ふっと笑った。

踵を返す。

「そうか。なら、僕からは何も言えないな。なのは、彼は多分並大抵じゃないぞ？ 勝てるかい？」

「――勝つよ」

なのはは迷わず断言する。

その言葉には、溢れんばかりの決意があった。

想いがあった。

「勝つ為の努力もするし、勝つ為に頑張る。そして、必ず勝つよ。
——いつだって、そうして来たから」
「そうか」

それだけ。それだけ笑って士郎は頷くと、そのまま部屋を出て階下に降りた。

その背を見ながら、なのはも頷く。

まずは、レイジングハートのロスト・ウェポン化。
それを行った上で、なのはには考えている事があった。

シャイニング・ブラスターモード。

通称、ブラスター”S”。

ロスト・ウェポン化したレイジングハートなら可能かもしれない。
彼女が考えた最終戦闘形態。

完成すれば、あるいはタカトと互するかもしれない。

あるいは、凌駕できるかもしれない——。

それは予感か。

なのはは、窓に目を向ける。
もう去って行った彼に想いを馳せた。

勝つよ。絶対に――。

そう、なのは心の中だけでタカトに宣言する。

現在、午前5時半。

最初の段階たるロスト・ウェポン化を開始する為のチーム集合まで、後一時間半となっていた。



そんな、なのはが決意を新たにしている頃。

神庭家には複数の少女達の姿があった。

スバルに、ティアナとキャロの三人。それに、N2Rの面々を加えた一同達が。

勝手知ったる人の家とばかりに、彼女達は神庭家の廊下を歩く。

……これだけの人数が一斉に歩ける廊下と言うのはそれだけで凄まじいものがあった。

「……しかし、いつの間にかここもセーフハウス状態になってるよな」

「そっすね〜」

苦笑を浮かべるノーヴェにウエンディも同意する。

最初に神庭家に世話になって以来、ついついこの家に泊まり込む事が多くなってしまったのだ。

まあ、やたらめったらと大きい家ではあるし、部屋も余っている上に家主であるアサギは心良く泊めてくれるのでつつい甘い甘えてしまったのだが。

「ふむ。だが、ここの風呂とは別れがたいな」

うむうむと頷くは、N2Rでは1番の年長――。

――外見だけ見れば1番の年下なのだが。

――な、チンクである。

神庭家の風呂は何と庭に湧いた露天風呂。しかも、温泉である。それだけでは無く、彼女は日本家屋の落ち着いた雰囲気が入っていた。

そんな風に頷く彼女にギンガが苦笑する。

「でも、チンク姉さん。私達は今日から別の所よ？」

「――分かっている。だから、少しでも早く装備を受け取って帰って来ればいい」

そんなギンガの台詞に、チンクは事も無げに言う。

一応は余所様の家なのだが、帰って来ると言わしめる辺りが神庭家らしかった。

そんな彼女達に薄く微笑みながら、ディエチが前に出る。

先頭を歩くティアナに追い付いた。

「でも、その前に。シオンを連れて行かなきゃね……」

「そうね、その通りだわ。――でも、あのバカは……!」

そんなディエチにティアナはどんよりとした目を向ける。

そして――。

「どこに居るってのよ!? 集合時間まで後十分よ、十分!」

「あ、あはは……」

「テ、ティアさん。落ち着いて……」

そんな叫びに、隣でスバルが頬をかきながら苦笑して。キャロが宥め始めた。

ちなみにエリオも姿を見せない。

どうやら、シオンにくっついていいるようなのだが。

「ったくも――。朝から全く姿現さないし……」

「まあまあ、ティア。さっき念話入ったし、大丈夫だよ」

「大丈夫じゃない!」

きっとティアナはスバルに睨みを効かせる。

その瞳は明確に、こう言っていた。

甘やかすなど。

それにスバルはたじろぎながらも、いつものように笑顔を浮かべて。

「おー。悪い、悪い。遅くなったな」

「すみません!」

そんな、ここ二ヶ月で聞き慣れた声が響いた。

ティアナは直ぐさま声の方向に振り向き叫ぼうとして。

「あんた! 何処行ってた……の……?」

「いや、ちよつと道場によ。――て、どした？ 皆固まって？」

その場に居る女性陣が皆揃って凍り付く。

シオンを見て、だ。

ただ一人、エリオだけがシオンに苦笑する。

シオンがそんな一同に首を傾げていると、一早く硬直から脱つたスバルがシオンを震える指で差した。そのまま、問う。

「えっと、シオン……？ だよね？」

「ん？ そりゃ、そうだよ。……て。ああ、こいつのせいか」

そんなスバルの反応に、シオンは漸く理解すると自分の頭に手をやる。

一同に、ニヤリと笑いかけた。

「似合うか？」

そう言う、彼の髪が朝の秋風に吹かれる。

その髪は、相当に短くなっていた。

シオンは髪を切って、まるで別人のように、そこに居た――。



「ふーん。じゃあやっぱり、はやてちゃんの所にもフェイトちゃんの所にも来たんだ？ タカト君」

「……うん、来たよ。彼は。——来なくていいのに」
「……ほんまにな」

グノーシス月本部『月夜』

そこで。苦笑する、なのはにフェイトとはやてはどんよりとした目を向けた。

案の定と言うべきか、やはりと言うか。
タカトは彼女達も起こしに来たらしい。

……なのはの時と同じく騒動をきっちり巻き起こしたようだが。

何故かムスツとしたクロノや、主と同じくどんよりとした目のヴォルケン・リッターの面々を見ると、何やらエライ事したのは間違いないが。

なのははあえて聞かない事にした。

『月夜』のブリーフィング・ルームには彼女達とロングアーチ一同。グノーシス出向組。そして、トウヤが集まっている。

だが――。

「スバル達、遅いなあ……」
「そうだね」

なのはが心配そうに呟き、フェイトもそれに同意した。
集合時間まで、後五分。

なのに、神庭家に昨日泊まり込んだ面々はまだ顔を見せていなかった。

一応、十分程前に念話で連絡を取ってはいたので大丈夫とは思うのだが――。

そう思っていると、ブリーフィングルームの扉が開いた。

「すいませ〜ん！」

「遅くなりました！」

謝罪の言葉と共に、雪崩込んで来る少年、少女達。
遅れていた、スバル達であった。

そんな彼女達に苦笑しながら、なのはは一言、言おうとして。

「すみませんっス。なのは先生！ フェイト先生！ はやて先生！」
「……シオン君？」

自分達の所に来て頭を下げる彼女達に、なのは達は目を丸くした。
正確には一番前の、シオンに。

シオンは髪をばっさりと切って、短髪になっていたのである。

一瞬、別人と見間違えた程だ。

元々は、はやてよりちょっと短い程度の髪だったのが数センチ程度短く切られていた。

それにより、若干男の子っぽさが出ている。

ただ髪を切っただけなのに、雰囲気はかなり変わってしまったシオンに、なのは達はぽかんとする。

そんな彼女達の反応に、シオンは苦笑した。

「……似合いませんか？　これ」

「え？　う、ううん！　そんな事無いよ！」

「うん、ちゃんと似合ってる。――けど」

「なんや、いきなりやったからなあ」

そんなシオンの台詞に、三人は慌てて否定する。

いきなり過ぎて、流石にびっくりしたのだろう。

後ろで、スバル達も苦笑していた。

かく言う彼女達も、今のシオンを見て騒いだのだから。

シオンは『男が髪切ったくらいで、騒ぐ事かよ』とは言ったのだが。その髪を切っただけで雰囲気さがらりと変わったので、バカには出来ないものがあつた。

シオンはとりあえず、なのは達を宥めると視線を別方向に向ける。その視線の向こうには、トウヤが居た。

彼はシオンに気付くと苦笑し、そのまま近付いて来る。

「髪を切ったのかね。……ふうむ、しーちゃん化計画にこれは遅れが出てしまうね……」

「うん。そーいう事言いそうな奴らが増えそうってのも髪を切った理由だけどねー」

軽口に、軽口を返してやる。

すると、トウヤはふっと笑って頭に手を置いて来た。

そのまま撫でられる。

「はは。もう、大丈夫のようだね？　まあ、あいつがお前を放っておく訳が無いとは思っていたがね」

「……やっぱり、あれはトウヤ兄いの差し金か。——てか、頭撫でんなよ。恥ずかしい」

疑問に思っていた事に遠回りな解答を示され、シオンは取り敢えず手を払いのけた。

やはりと言うべきか、何と言うべきか。

昨日、タカトが自分の元に來たのは偶然では無かったのである。

あれはトウヤの段取りだった訳だ。

どうやってかは分からないが、タカトに連絡を取って事の次第でも伝えたか。

シオンは知らない事だが、トウヤはアースラチームに『あれを誰の弟だと思っている？』と言う言葉を残している訳だが、”あれ”とはシオンだけで無くタカトまで含まれていた訳であった。

謎が一つ解け、しかしムスツとしたシオンにトウヤは苦笑を続け、また頭に手を置いた。

……今度はシオンも手を払いのけ無かった。

この素直に弟を手助けしない、素直じゃない異母長兄を。

そして。

「……さて、ではちょうど時間だね。——席に着きたまえ、皆。ブリーフィングを始めるとしよう」

それぞれの場所に向かう――。

——力を手にする為の、旅路のブリーフィングが始まった。



ストラの次元航行艦。

現在、この艦は次元潜航の真っ最中である。

……結局、彼。タカトはこの艦の名前を調べる事をしなかった。
何故なら、名前を知ると愛着が湧いてしまうから。

この艦は、既に取り捨てる事が決定している。

何故なら向こうに着いた後は身軽になる為にこの航行艦は不要となるのだから。

だから、名前を彼は調べ無い。

ただ一度の共でしか無いのだから。

そして――。

「……さて、本局も抜けたか。後はミッドチルダに着くだけだな」

次元座標を打ち込んだ艦は自動航行で進んでいる。

その中でタカトは今亡き艦長の席を避けて立っていた。

別に何らかの感情を抱いていた訳でも無い。

ただ、そこに座るのだけは妙な忌避感を彼は抱いていたのだ。

座ってはない気がしたのだ。
そこにだけは。

だから――。

そう思いを馳せていると、いきなり艦が妙な振動を起こした。

……これは？

そう、疑問を抱いた直後。
艦が一斉にアラートを上げる！

「ぬ？　なんだ……？」

即座にウィンドウを展開。
状況を調べる。

そして、タカトは顔を強めた。

展開されたウィンドウには、艦の現在の状況が知らされている。
それは、一つの事実を示していた。

「……次元封鎖されていて、これ以上は航行不能……？　しかし、
これはストラの――」

そこまで言って、タカトは気付く。

今、艦の航行を妨げた次元封鎖はストラのものでは無い事に。

それは、”時空管理局が張った次元封鎖であつたから”。

考えてみれば、当たり前である。

本局決戦で敗北した管理局側が、ストラの侵攻を恐れ無い筈が無い。

ならば、次元封鎖するのは当たり前であった。

しかも、タカトが使っている艦はストラの艦である。

尚更、通す訳が無い。

状況に気付いて、タカトは操舵席に座る。

すぐに次元座標を打ち込んで、艦を操作しようとした。

だが――。

「……間に合わんか……」

タカトは聞こえる艦の軋みの音に歯噛みした。

元々、艦の操舵には専門の資格がいる程に難しいものである。それを、いくらなんでもタカトが即座に操舵出来る訳が無い。

結果として、艦は次元封鎖結界に無理矢理押し入ろうとして今にも自壊しそうな訳だが。

……このままでは、ダメか。

それだけをタカトは悟るなり、右手を掲げる。

そこには666の幾何学模様が生み出す魔法陣が浮いて――！

――煌！――

直後、タカトが乗った次元航行艦は光に包まれた。



第九管理内世界、軌道拘置所。

重犯罪――。しかも、管理局の捜査に否定的な者が収監される事で有名な拘置所である。

更に、ここはある重犯罪者を収監している事で有名であった。

だが、この管理局とストラの戦闘が激化している中で唯一平和を保っていたこの場所に、今。一つの衝撃が走っていた。

局員達が慌ただしく拘置所内を走り回る。

彼等は、あるいは収監している囚人に呼び掛け。あるいは自らを守る為にバリア・ジャケットを展開していた。

その表情は誰もが悲壮に歪んでいる。

それは、そうだろう。たった今齎もたらされたたった一つの報。それがあまりにも絶望的なものだったから。

どこからともなく現れた次元航行艦が、この軌道拘置所に突っ込んで来ると言う信じがたい状況。

それが、今。この軌道拘置所を襲っている現実であった。

「くそ……っ！ どの航行艦だ！ この拘置所に突っ込んで来る

馬鹿野郎は!?!」

「船籍不明! おそらくはストラの艦と……!」
「くそったれ!」

二佐である所長は苛立ちを隠そうともしない。

腹立ち紛れに机を殴りつけた。

「い、いかがしますか……?」

「全囚人の安全を確保! どれだけ重犯罪者だろうが人命は人命だ!
誰一人死なすな! 勿論、局員達も死ぬ事は許さん!」
「は、はい!」

所長の咆哮のごとき命令に、局員は慌てて飛び出す。
それを確認して、彼も突っ込んで来る航行艦に備える為に動き出
そうとして。

《所長!?!》

いきなり念話で叫ばれ、その動きを停止された。
ぐっと奥歯を噛むと、すぐに念話に答える。

「なんだ! どうかしたのか!」

《艦が! 急に速度を上げて! もう――!》

念話は、そこまでだった。

何故なら、それ所では無くなったから。

一撃! 一

最初に所長が感じたのは衝撃だった。
ただの衝撃では無い。それは大柄な所長を浮かばせるほどの衝撃であった。

そして――。

一軋！――

一裂！――

一破！――

一気に視界が反転し、目茶苦茶に飛ばされる！

件の航行艦が突っ込んだ事に気付いたのは、全ての衝撃が収まった後だった。

所長は床の上に倒れている。衝撃で転がされたのである。

そこで一つ呻き、咳込むと所長は立ち上がる。

そのまま叫んだ。

「突っ込んで来た馬鹿共を全員逮捕しろォ！」

その叫びは通信を介して、軌道拘置所の全てに届いた。

しかし、所長は知らない。

その艦に居る人間はたった一人である事を。

一撃！一

ただ殴りつける。

それだけ、それだけで。

全ての射撃が霧散して行く！

続いて放たれた射撃魔法も全く意に介さず蹴散らして行った。
それも平然とした顔でやってのけるのである。

それに射撃魔法を放つ面々は顔を青ざめさせ――。

タカトはそんな彼等に射撃魔法を殴りつけながら、左手の指を上げた。

「天破水迅」

一閃！一

ぽつりと告げられる一言。

それは、彼等にとって死刑宣告に他ならなかった。

一瞬にして水系が、辺りに迅り抜ける！

同時に悲鳴が数百人分上がった。

射撃魔法が停まる――。

たった一撃。

それだけで、その場に居た全員は身体中を切り裂かれ、倒された。

タカトはそれを見ながら平然と歩くと、近くに居た射撃魔法を放

つていた男の襟首をひっ掴み、持ち上げる。

そこで、漸くタカトは彼等が管理局員である事に気付いた。

が、まあどうでもいいかと割り切ると局員に尋ねる。

「一つ聞きたい。ここは何処だ？」

「がっ……。あ……」

タカトの問い。しかし、彼は答えられない。

当然と言える。彼の手は途中から切断されていたから。

激痛と戦う彼に問答する余裕はあるまい。

タカトはふむと頷くと彼を適当な所に投げ捨てる。

そして周りを見渡すが、全員。切り刻まれておりまともに尋問も出来そうに無かった。

しまったな、とタカトは思うが。それは杞憂に終わった事を悟る。

通路らしき所から、局員らしき人物が次々と現れて来たからだ。

彼等はデバイスを片手にタカトへと突っ込んで来て。

「サービス精神旺盛だな？　一つだけ聞くんが――」

一閃！――

再び迅る水系が彼等を襲う！

それは、やはりと言うべきか一瞬で彼等を切り刻んで見せた。

だが、数人は拘束するに留まる。

タカトは拘束した彼等にこそ、そのまま続きを告げた。

「――軍隊式の拷問は好きか？」

そんな、地獄から響いたが如き声を彼等は聞いて。

数分後、その場に絶叫が響いた。

この時、彼はここの場所も何も知らなかったのだが――。

もう一つ、知らない事があった。

ここに彼の旧友が居る事を。

かつてJS事件と呼ばれ、ミッドチルダを震撼させた事件の張本人が居る事を。

タカトは知らなかった――。

（中編に続く）

第五十二話「懐かしき者達」(前編) (後書き)

——はい♪ てな訳で久しぶりの本編でございます♪ (笑)

シオンが髪を切ったり、タカトがアレな今話ですが (笑)
さて、予定は三部。

……終わるんだろうな……？

ちなみに、士郎は本編でタカトと会っていません。

なので、番外編とのギャップに驚かれる方がいるかもしれませんが。
あっちは平和な世界なので♪ (笑)

ではでは、中編をお楽しみに♪

ではでは〜♪

第五十二話「懐かしき者達」(中編)(前書き)

やばい！ ちょっと遅れた(汗)

ど、ども〜。テストメントです♪(汗)

分かる人には分かる諸事情で更新遅れてしまいました(汗)

き、気をつけねば……。

ではでは、中編。どうぞ〜♪

第五十二話「懐かしき者達」(中編)

五年前。

まだJS事件も天使事件も起きる前の事。

”それ”は唐突に、彼。かの、Dr. ジェイル・スカリエッティの元に現れた。

「侵入者かい？」

「はい」

彼の疑問に、秘書にして助手。そして、戦闘機人。ナンバーズ最初の一人。

ウーノは淡々と頷いた。

それに、スカリエッティはふむと頷く。

彼等が居るのは、隠し研究所の一つである。

そこに侵入者が入るなど、滅多に無い。

管理局の局員では有り得ない。

彼等には根回しをしてある。

余程の事が無い限りは、管理局は動かない筈であった。

……まあ数年前に、その余程はあったのだが。

一応、スカリエッティはウーノに尋ねてみる、が答えは否であっ

た。

「侵入者は”おそらく”管理局の局員ではありません」

「おそらく？　またやけに君らしく無い表現だね？」

「申し訳ありません。Dr. 何せ、未だ”捕捉”も出来ていませんので」

「捕捉も……？」

それはどう言う事か？

聞くより先にウーノはウィンドウを展開。

研究所の至る所に設置されたサーチャーを起動して画像を映した。

そこには警備に置いてある、各ガジェットが徘徊している。

このガジェットは研究所をランダムで動き回り、警備に当たっている訳だが。

そのガジェットに突如、異変が起きた。

一閃一

一瞬、たった一瞬である。

そのたった一瞬でガジェットが二つに分かれて倒れた。

「何……？」

異変は止まらない、静謐にただただ静かに警備のガジェットが両断されて行く。

”何も映っていないのに”だ。

そして、最後にはサーチャーをも破壊されたか。ウィンドウは砂嵐となった。

「……こんな状態です。侵入者と思しき存在は、こちらに全く姿を見せないままガジェットを撃破。更にサーチャーをも破壊して、こちらに向かっています」

「――何故、こちらに向かっているの？」

「ガジェットが撃破された形跡が入口からこちらに進んでいるからです」

とても簡潔な推理である。

しかし、その内容はとてもでは無いが笑えるものではない。

こちらは侵入者の姿さえ捉えていないのに、向こうは研究所内を我が物顔で歩き回っているのだ。

ガジェット障害物を破壊しながら。

普通なら血相を変えるだろう。

しかし、彼は違った。

に、と笑う。

「全く姿を見せない侵入者、か。……く、ふふ……！ 面白い。面白いじゃあないか！」

「いかが致しましょう？」

「チンクを迎撃に出したまえ」

即断でスカリエッティは己が片腕に告げる。

笑いを顔に張り付けたまま、楽しげに続けた。

「あの娘なら侵入者の正体を割り出してくれるだろう。研究所内の被害については考えなくていい、存分にやるように言ってくれたまえ」

「はい。了解しました」

スカリエッティの、ある意味においてはとんでもない指示に、ウィノもあっさりと頷く。

普通ならば、研究所の被害を考えなくていいなぞ言わないだろう。

しかも、チンクのIS（先天固有技能）はランブルデトネイターと呼ばれる能力である。

これは彼女が触れた特定金属を爆弾に変える能力であった。

彼女がこの能力を持って被害に構わず戦った場合どこまでの被害が出るか分かったものではない。

スカリエッティは、それに”スポンサー”に新たな援助を頼まねばねと、笑いながら思う。

そして、未だ展開されたウィンドウに目を向けた。

「未だ見ぬ侵入者。――チンクはどれくらいの被害を出すだろうね？」

そう、笑いながらウィンドウをただ注視し続けた――。

結果から言うと、このスカリエッティの懸念は外れる事になる。

何故ならば、被害が殆ど出る事は無かったのだから――。

「くっ……」

一閃一

チンクは呻きながら、固有武装ステインガーを放つ！

――が、それは誰も居ない壁に突き立つだけに終わった。

それを見て、彼女は再び苦々しい顔を浮かべる。

侵入者が研究所内に入り込んだとの報を受け、迎撃に來た訳だが……。

その敵が、居ない。

否、居ない訳では無い。

先程、共に連れて來たガジェットが音も無く両断されて撃破されただけだから。

正確には、全く把握出来ないのだ。

ここに、間近に居る筈の敵が。

彼女の各種センサーにも全く掛からない。

あまりにも異常過ぎる事である。

敵は居る。確実に、ここに。

しかし、どこに居るのか全く分からないのだ。

こちらをじっと見て、隙を伺っている。

獲物を狙う、獣のように。

その獲物は他でも無い、彼女だ。

「っ……。っ……」

ステインガーを構えてチンクは周りに気配を配る。
が、相変わらず侵入者はどこに居るのか分からない。

——緊張の時間が過ぎて行く。

数秒か、あるいは数分か……。

チンクにとっては、それは数時間にも思える時間であった。

そして。

——とん——

唐突に、チンクの背中に何かが当たった。

同時に後頭部へと掌を当てられる——！

「っ————！？」

それに、チンクは振り向こうとして。

——それすらをも、許され無かった。

一撃一

直後、彼女の頭に衝撃が走る！

それは、彼女の意識を容赦無く断ち切った。

ば、かな……！？

薄れ行く視界で、チンクは何とか、敵対すらをも許され無かった敵の顔を見ようとする。

だが、それは叶わなくて。

結局、彼女は侵入者の顔すらをも見られずに昏倒した。

……彼女は知るよしも無い事ではあるが。

この五年後、漸くチンクは彼の顔を見る事が出来る。

その時も、また敵対者としてではあったのだが。

「チンクが撃破された……？」

「はい。——しかも一切交戦させて貰えずに、です」

少しだけ驚いたような顔となるスカリエッティに、ウーノは変わ

らぬ無表情で答えた。

しかし、他ならぬスカリエッティは気付く。

彼女の声に、ほんの僅かだが動揺が混ざっていた事に。

チンクはかつて、オーバーSランクの騎士を限定的な条件下の元
とは言え撃破に成功している。

そんな彼女を、交戦すらも許さずに撃破したのだ。

この侵入者とやらは。

そんなウーノをよそに、スカリエッティは内心の好奇心が首を擡もた
げていくのを自覚した。

その侵入者は果たして、どんな存在なのか。

「侵入者の姿は？」

「相変わらず、不明です。丁寧にサーチャーを念入りに破壊しながら
進んでいます」

彼女の報告に、更に興味が沸いて来る。

その姿が見たくてたまらない。

どんな存在なのか知りたい。

無限の欲望。

アンリミテッド・デザイアと名付けられた彼の欲が、その存在を
欲し始めた。

「……では、次は……」

「クアットロ、トーレ。居るんだろう？」

「は〜い」

「ここに」

スカリエッティの呼び掛けに、直ぐさま二つの応じる声が返ってきた。

一人は、眼鏡にオサゲ、身体にぴったりとしたボディースーツにコートを着ている少女。クアットロ。

一人は、長身痩軀。一見すれば美青年に見えかねないが、そのボディースーツに浮かぶスタイルの良さが、それを否定する女性。トーレ。

その二人にスカリエッティは笑いながら告げる。

「侵入者の件は聞いてるね？」

「はい」

「勿論ですわ」

直ぐに二人は頷く。それは則ち、チンクが撃破された事も知っていると云う事であった。

そんな二人にスカリエッティは笑う。

そして、その笑いのままに問うた。

「この侵入者。君達ならば、捕らえる事が出来るかな？」

まるで挑発するかのような、そんな問い。

それをどう捉えたか、二人は顔を見合わせると笑い合い、スカリエッティへと視線を戻した。

「お任せ下さ〜い」

「必ず、捕らえて見せます」

二人はそれぞれの答えを返して、それにスカリエッティは頷き――。

「――ほう？　大した自信だな？」

――そんな声を、聞いた。

っ――――！？

一同全員に驚愕と戦慄が走り抜ける！

同時、目を大きく見開いたクアットロの首に、するりと腕が掛かった。

真綿のように抵抗無く、未だ驚愕から抜けられない彼女に抵抗無く巻き付く。

そして、一瞬の後には大蛇に変じたように凄まじい圧力で顎ごと首を絞め付けて来た。

「――！？　っ！？　っ！？」

チョークスリーパーホールド。

しかも、気管や頸動脈けいどうみゃくを絞める”落とす”為の技では無い。

それは頸椎けいついを破壊して首を振切る殺人技であった。

一気に混乱の極致に追いやられたクアットロの呼吸が止まり、視界が真っ黒に染まる。

急速に意識が遠退いて――。

一巻一

自分の頸椎が――。

正確には頸椎フレームだが。

何にしても、それが破滅的な音を立てた。

それを彼女は聞きながら、完全に意識が閉じて行く事を自覚した――。

どさり、と音を立ててクアットロが床に沈む。

だが、そんなクアットロを当のスカリエッティも、ウーノも、トーレも見えていなかった。

正確には見る事も出来なかった、が正しいか。

ガジェットを潰し、チンクを倒し。今、クアットロを苦もなく潰してのけた謎の侵入者が、姿を現していたから。

それは、少年だった。

黒髪黒瞳。――もつとも、顔の半分はバリア・ジャケットの垂れ下がったフードが隠していたが。

それに、漆黒の変わった形のバリアジャケットに身を包んでいる。

全身黒で固められた、彼は。いつそ、他を廃した純粹さを醸し出していた。

それは彼自身もまた同じ。

彼もまた、ただ漆黒に純粹な存在であった。

そんな、ただひたすらに純粹さを目指したかのような存在をスカリエッティは初めて知る。

そんな呆然としたスカリエッティに、彼は肩を竦めながら一步を刻んだ。

「……さて、後は貴様か？」

「っ!？」

声を掛けられ、トーレは漸く我に返った。

すぐに、自らの固有武装。虫の羽に似たエネルギー翼、インパルスブレードを展開。

同時に、その身体が加速する！

IS…ライドインパルス。

超高速機動を可能とする、彼女の先天固有技能である。

その速度は、それこそ視認不可領域。

亜音速のレベルにまで到達する。

トーレはその速度のままにインパルスブレードを振るって。

「ふむ」

踏み込みと共に腕を流されて、その一撃は避された。
しかもどうやったのか、亜音速機動で発生した慣性。

そうそう止まれる筈が無いそれが、完全に停止してしまっている！

彼女が知るよしも無い事だが、彼は一撃を流した直後に彼女の亜音速機動で発生した慣性を、膝を”抜く”事で受け止めてしまったのだ。

それこそ、数t onに匹敵する慣性エネルギーが！

呆然とするトーレに、彼はゆらりと踏み込む。

——気付いた時には全てが遅かった。

「天破疾風」

一撃！一

撃ち込まれるは、暴風巻く拳の一打。

真っ正面から正拳の形をもって放たれたそれは迷い無くトーレの中心を穿つ！

次の瞬間、トーレの姿はその部屋から消えた。

一破！一

それこそ、ライドインパルスに匹敵しかねない速度でトーレの身体が壁に叩きつけられ——。止まらない！

その身体は部屋を次々とぶち抜いて、八つ目を数える頃に漸く止

まった。

意識の有無は確かめるまでも無い。

壁にめり込んだトーレは完全に気絶していた。

それら一連の事態を見守っていたスカリエッティは呆然とする。
そんな、彼に少年は振り返った。

悠々と歩いて来る。

既に、この研究所内の全ての戦力は無力化されてしまった。
ウーノは戦えるタイプでは無い。

それでも、彼女は彼を守らんと前に出て。

スカリエッティは、そんな彼女を押し留めた。

代わりに、前に出る。

「Dr……!？」

驚きに彼女が目を見張った事を気配で察する。

でも、スカリエッティは構わなくて。

やがて、彼は侵入者である少年の目の前に居た。

「……一応、聞いて置きたい事があるのだがね……」

「何だ？」

返事は恐ろしく簡素かつ、不遜であった。

スカリエッティも、大概不遜な態度を取ると言われるが、この少年程ではあるまい。

気付くと、彼は苦笑していた。

「君は何の為にここに来たんだい？ 物盗りとも思えないのだがね……」

「ああ、それな？ ——実を言うのだ。道に迷ってな」

は……？

流石に予想外過ぎる答えを返されて、彼はぽかんとする。

そんなスカリエッティに構わず、たった一人で彼の研究所を潰した少年は答え続けた。

「ミッドチルダで美味な特産品が出ると言う噂を嗅ぎ付けてな。」
「おつかい」に来たんだが……。どこをどう間違ったのか。こんな山奥に来てしまったな？ で、相方に頼んでどうするかを聞いたら近くに人が居るから聞けと言われたのでここに来たんだが。まあ、変なガラクタに襲われたもんで、取り敢えず叩き潰したら次から次に沸いて来る始末。——で、元から潰しておくかと来てみたらこうなつたと言う訳だな」

「……………つまり、君はただ迷子で道を聞きに来ただけだと？」

「ああ」

「この研究所をどうこうするつもりは無かったと？」
「そうなるな」

あんまりにもアレ過ぎる理由に、スカリエッティはおろかウーノまで呆然としている。

そんな二人に、少年は小首を傾げた。

「と、言う訳でだ。エルセアとは何処だ？」

次の瞬間、スカリエッティは爆発した。

——正確には、爆発したように爆笑し始めたのだ。

何らかの目的があった訳ですら無い。

ただ道を尋ねたかったと言った彼に。

そんな理不尽過ぎる理由で片手間扱いに潰された訳だ。

自分の研究成果たる、戦闘機人が！

——これが笑わずにいられる筈が無い。

ウーノまでもが、そんなスカリエッティに声を掛けられないでいると。やおら、少年は慥然としたままに、そっぽを向いた。

「……そんなに笑わなくてもいいだろう？ 確かにミッドは初めてだから、”お上りさん”になったのは認めるが……」

そんな、当たり前であり。しかし場の空気とは全くそぐわない反応を返されて、スカリエッティは更に爆笑する。

笑って、笑って、笑って……。

数分程、本気で腹筋が振切れる程笑った彼は、目に涙を浮かべつつ。漸く立ち上がった。

「後で、エルセアまでの道を教えよう。……それと引き換えになるのだが。一つ、頼みを聞いてくれないかね？」

「何だ？ ちなみに正当防衛だから俺が壊したガラクタを弁償する

気は無いぞ？ 治療費もな」

「……君は、毛ほども傷ついていないようだが？」

「知らん。先に手を出したのはそちらだ」

その前に、不法侵入であるのだが。当然とばかりに二人は構わない。

スカリエッティはくっくと笑うと右手を彼に差し出す。

それは、あまりに自然な動作で――。

「――友人に、なってくれないかね？」

そう、スカリエッティは彼に告げた。

これが後にジェイル・スカリエッティが生命に対して、一種の執着を覚える事となる事件。

そして、彼。魔王である、伊織タカトとの出会いであった。



グノーシス『月夜』

複数ある転送ポートの中に、数人の姿がある。

広い転送ポートは、それぞれ二組をそこに乗せていた。

中国、大連行きの、チンク・ナカジマ。ノーヴェ・ナカジマ。デイエチ・ナカジマ。ウェンディ・ナカジマ。

EUIギリス行きの、ギンガ・ナカジマ。スバル・ナカジマ。ティアナ・ランスター。エリオ・モンディアル。キャロ・ル・ルシエ。姫野みもり。

そして神庭シオン。

そんな一同を、グノーシス第一位である叶トウヤを始めとした見送り組が笑みを浮かべて見守っていた。

「準備はいいかね？ これより君達にはそれぞれ、中国大連支部とEUIギリス支部に跳躍^とんでもらう。向こうにはガイドをつけてはいるが、失礼の無いように。——そして、これ以上私の財布を軽くする行為は慎んでくれたまえ。特に、その暴走弟は注意するように！」

「何で、俺だけ名指しだよ！？」

流石の言われように、シオンが喚く。

それに、トウヤはやけに感情が失せた瞳を向けた。

「聞きたいかね？」

「イエ、イーデス……」

必死に目を逸らしながら、片言でシオンは答える。

トウヤの瞳が非常に怖かったのだ。

今すぐにも、『もかもか室』を召喚しかね無いような気配がある。

暫く、目を逸らすシオンをじーと見つめて。

やがてトウヤは嘆息すると視線を外した。

あやうく藪から蛇な状況だった事と、それを脱出した事にシオンはホッとした。

そんなシオンを尻目に、トウヤは気を取り直して話しを続ける。

「後はブリーフィングで話した通りだ。……とは言え、アクシデントは付き物。現場では常に臨機応変に頼むよ。――では、はやて君？」

「――はい」

トウヤがマイクを、はやてに譲る。

彼女は頷きながら、それを受け取り一同の前に出た。

「――皆。これから暫くは別れて行動やけど、私は特に心配はしてない。……皆、あの本局決戦から逃避行まで含めて、何とかやってこれたんや。今回も大丈夫やと信じてる。やから、皆。私が言えるんは一つだけや。――また皆で、ここに強なって集まろ！ 私はここで待ってるからな！ 以上！」

『はい！』

皆、即応で頷く。

それを見て、はやても満足そうに頷き。トウヤにマイクを返した。

トウヤはそれを受け取り、転送ポートの起動を目線だけで命令する。

すぐに転送ポートが起動。

それぞれを、光が包んで――。

「では、幸運を。――頑張っ て来たまえよ」

その声を最後に、転送ポートに居た面々はそれぞれの向かう場所に空間転移された。

向かう先は、中国大連。

そして、EUイギリス支部。

シオン達は知らない。

その先に待ち受けるものを。

まるで運命のように。そこで、ただ彼等を待ち続けるものも。

それを知るまで後僅かとは言え、シオン達はそれを知らなかった――。



何故だ……？ 何故、こうなった……！

軌道拘置所、所長室。

その主たる、所長。カシマ二佐は頭を抱えていた。

つい十分程前に、この軌道拘置所にストラのものと思しき次元航行艦が突っ込んで来た。

それは、まあいい。……いや、よくは無いのだが、それによる人的被害は奇跡的にも無かったのだ。

それだけでも僥倖と言える。

後は航行艦の乗組員を捕まえれば、復旧に取り掛かれた。

その筈であったのだ。

その筈、なのに。

「何故だ……。誰か……。誰かいらないのか!？」

通信で、拘置所内の全局員達に連絡を取る。

しかし、返って来たのはただの無言であった。

当然である。

既に、この軌道拘置所において意識を保っているのは彼以外にはいないのだから。

あれから、たった十分程。

たったそれだけでそこまでの状況に追いやられたのだ。

……たった一人の、侵入者によって。

何故だ……。何故だ……。!？」

繰り返される自問。

しかし、答える声は己の中にすら無い。

そして――。

――撃!――

突如、所長室の床が螺旋状に撃ち抜かれる！

その衝撃で椅子に座っていた彼はもんどり打って床に倒れてしま
う。

痛みに呻いていると、その眼前に人影が落ちた。

誰だ……？

顔を上げる。しかし、その顔には当然見覚えが無い。

何故なら、彼は第一級の次元犯罪者でありながら名はともかく、
顔が全く世間に流布しない存在であったから。

ナンバー・オブ・ザ・ビースト。

魔王、伊織タカトはそんな存在であった。

「後、残るのは貴様だけか……。一つ尋ねたいのだが、ここに次元
航行艦は無いか？ その部品でも構わんが」

「なん、で……」

「ぬ？ ああ、ここの看守だった管理局局員達に”お話し”してい
ろいろ聞いたのだから。だが、結果としては最悪だった。取り敢え
ず、ミッドチルダに行ける方法があれば文句は言わん。よこせ」

全く違う意味での問いに、タカトは平然と答えながら凄まじく理
不尽な要求を叩きつける。

そんな彼の足元で震えながら、カシマは続けた。

「なん、で……？」

「ぬぬ？ 聞きたい事は違ったか？ ……だとすると、何でそんな

事をとかを聞きたいのか。残念ながら目的については話せんから、それは諦めろ。と、言う訳でだ。さっさとよこせ」

「またもや、見当違いの解答をタカトはする。」

しかし、カシマはそんな答えを聞いていなかった。
聞きたい事は”それ”では無かったのだから。

震える手が、拳を握る。

「なん、で。こんな、事を……？」

「――ああ、そっちの方か。何だ、先に言えばよかったものを。有り体に言うと、これが1番手っ取り早かったからだ」

漸く、まともにカシマの問いを理解してタカトは頷く。

しかし、その解答はあまりにも理不尽なものであった。

「いちいち、艦を貸してくれなどと言っても貴様達も聞く耳は持つまい？ と、言う訳で奪いに来た訳だが。……まあ、そう言う事だ。早くよこせ」

そこまで聞いて、カシマは勘忍袋の緒を切った。

握りしめた拳を振るいながら立ち上がる！

「ふざつけるなあああああああああああああああっ！」

怒号と共に唾を飛ばしながら、殴り掛かる！

しかし、タカトはそんなカシマから放たれた拳をあっさり避すと、逆に顔面に拳を入れた。

一撃！一

その一打はあっさりとカシマの鼻を叩き潰し、彼を地面に打ち据える。

彼が幸運だったのは、その一撃で気絶してしまった事だろう。

そうでなければ、激痛でのたうちまわる羽目になっていただろうから。

昏倒したカシマを冷たく見下ろしながら、タカトはぽつりと呟いた。

「浅慮。……貴様達は理不尽だ等と思うのだろうが。それこそ怠慢と知れ。奪われたくなくば、強くあるしか無い。しかも貴様達は他者のそれを守る存在だろう？ そんな存在が”弱い”と言う事。……それ自体がすでに”罪”だ。——まあ、もっとも。人の事は言えた義理では無いがな」

それだけを、既に意識を失ったカシマに叩き付けて、タカトは所長室を出る。

思わず最後の一人までも叩きのめしてしまったが――。

さて、これからどうするかと彼は悩んだ。

正直、ここから次元転移を彼自身が使ってミッドチルダに直接向かう事も考えたのだが。

はつきり言って現実的では無いだろう。

また、あの次元封鎖に往生するのは間違い無い。

いっそ、あれを完全にぶち壊すのも考えたし、可能なのだが。

あれがストラに対する防壁となっている以上、むやみやたらに壊すのは得策とはいえない難かった。

ふむう、と彼は腕組をしながら悩み――。

その足がぴたりと止まった。

くるりと反転して、所長室に戻る。

そして、所長専用の情報端末を引き出すなり、右手を掲げる。
そこに輝くのは、やはり666の魔法陣！

一煌一

そこから飛び出た虹色の帯が情報端末に突き刺さり――。

――直後、情報端末の全てのロックが解除された。

それを確認してタカトは頷く。

「最初からこうしていれば、よかったな。……ついつい、直接人に
”聞く”癖がついてしまっている。自重せねば……」

自重。

その言葉程、彼に似合わない言葉は無い。

そうして、彼は情報端末を操作して。

やがて顔をしかめる事となった。

「次元航行艦、そのものの駐留は無し。……本局決戦に破れた管理局側がミッドで戦力を集め出したのか……。ふん？ 悪く無い手だ。しかし――」

細々とした替えの部品等々は、ある。

しかし、それを使ってタカトが乗って来た次元航行艦を修理出来るかと言えば答えは否であった。

そもそも次元航行艦を修理出来たとして、どうやって次元封鎖を抜けるのか。

悩みは尽きない。

取り敢えず、他の手段を捜すかとタカトは情報端末を操作して――

「む……？」

やおら、その顔が怪訝に染まる。

それは情報端末に出た、あるファイルを見咎めたからであった。

囚人名簿。と、書かれたそれに。

タカトはしばし、そのファイルを眺めて。

やがて、それを開いて表示させた。

自分では次元航行艦を修理も出来ないし、次元封鎖も破壊以外の手段で抜けられ無い。

ならば、いっそ囚人に手伝わせてはと思ったのだ。

脱獄を条件にすれば、大体の奴らは手伝うだろう。

それに、これだけ大きな軌道拘置所である。

ひょっとしたら、ではあるが。次元封鎖を抜けられる手段を講じれる者がいるやも知れない。

そう思いながら、タカトは名簿に目を通して――。

やがて、ぴたりとある名前でその目は止まった。

しばらく呼吸を忘れたかのようにタカトは硬直して――。

「奴がここに……？」

それだけを、彼はぽつりと呟く。

情報端末が出した、その名簿にはある男が表示されていた。

ジェイル・スカリエッティ。

かつて、ミッドチルダを驚愕と恐怖に叩き込んだ男。

JS事件と呼ばれる一連の事件の主犯。

そして、タカトの旧友たる男が情報端末に表示されていた。



— 煌 —

「はわっ？」

「うおっ」

トウヤ達に見送られ、一瞬の浮遊感を覚えた直後。
シオン達は全く違う場所に居た。

空間転移したのである。

EU行きの面々が、いきなり戻って来た重力に少しのバランスを崩しながらも何とか耐える。

そして、辺りを見渡した。

「ふわぁ……！」

「ここって……」

「どうやら、無事に着いたみたいだな」

そこは広い、広い庭のような場所であった。

遠くには、大きな。しかし、年期の入った建物も見える。

グノーシス、EUイギリス支部。『学院』と、そう呼ばれる場所であった。

見慣れぬ景色に感嘆の声を上げる皆にシオンは苦笑して。
やがて、こちらに歩いてくる存在に気付いた。

……見覚えのある顔に。

「どうやら着いたようだな。久しぶりだなシオン」

そう、告げるのは白衣を着た少女であった。
背はかなり低い。

おそらくは、エリオやキャロと同じくらいか。

シヨートの髪に鼻にちょこんと乗った眼鏡が可愛いらしかった。

そんな少女に不思議そうな顔となる一同の視線を感じながらシオンは片手を上げる。

「おう、チビ姉。元気してたかー？」

「き、貴様！　また私をそんな風に……！」

よほど、そう呼ばれるのが嫌なのか。彼女はいきなりシオンに飛び掛かる！

しかし、シオンはそんな彼女に苦笑しながら頭に手を置いてつかえ棒にした。

当然、背の低い彼女の手は届かず空を切る。

「く、くぬう……！」

「はっはっは。人がゴミのようだ……」

「こらこら、小さい子をいじめてどうすんのよ。あんた」

有名過ぎる名台詞を言いながら、笑うシオンを後ろからティアナが近付いて耳を捻り上げる。

それには堪らず、シオンは悲鳴を上げた。

「て、痛ててっ！」

「あんたが悪いんでしょ？　ごめんね、お嬢ちゃん。こいつも悪気があった訳じゃ——」

「……じゃない」

謝ろうとするティアナの声を遮って、少女が何事かを呟く。

それはあんまりにも小さな声で、ティアナは頭に疑問符を浮かべた。

「えっと、ごめんね。もう一回言ってくれるかな？」

やおら、がばりと顔を上げて少女が吠える。

苦笑しながら、一同に告げる。

⌈ ⌈ ⋮ ⋀ ! ? ⌋ ⌋

流石に、その言葉に一同は固まる。
みもりの年齢は今年十八になるのだと言う。
と、言う事は――。

ぶんすかと怒りながら、言う彼女。良子にシオンが追記でとんでも無い事をつき足してくれる。

『え、
ええ
えええ
えええ
えええ
えええ
えええ——！？』

そんな大声を、一同は一斉に上げたのだった。

(後編に続く)

第五十二話「懐かしき者達」(中編)(後書き)

はい♪ 中編をお届けしました♪

意外や意外、スカさんとタカトの出会いで五千文字も食ってしまいました(汗)

いや、元々はPREXに載せる内容だったんですが。

あっちの更新が滞りまくっているので急遽こちらに載せました(笑)

さて、ある意味においてスカさんの、あの思考の元凶だったタカト(笑)

そしてイギリスにて、チビ姉(笑) こと、良子と再会したシオン。

……本当に後編になるんだろうな? とちよつと不安になりつつ

今日はここまで♪

次回もお楽しみにです♪

では~~~~♪

第五十二話「懐かしき者達」(後編)(前書き)

ども……。テストメントです。

うう、右腕痛い(涙)

とりあえず、何とか本編仕上がりでしたが。

正直、痛みを堪えながら書いたので出来はよろしくないやもしれません(汗)

あと、アリサ道場も痛みでお笑いパートが思い付かないで勘弁を(汗)

では、どぞ〜♪

第五十二話「懐かしき者達」(後編)

グノーシス、イギリスEU支部。『学院』

その施設は、首都ロンドンの郊外にひっそりとある。

さほどロンドンから離れている訳でも無いのに、この辺りは比較的のどかであった。

首都と言えど、少し離れるだけでこのような風景が見られる。

東京でも郊外に行けばわりと田舎があるものだ。

おおざっぱに、シオンはそんな風に思いながら『学院』内を歩く。

先頭に立つ鉄納戸良子の膨れっ面に苦笑しながらではあったが。

そんな彼女に、後ろでスバル達がおろおろしているのが手に取るように分かった。

それにもシオンは苦笑を強める。

先程、初対面の時に驚きの声を上げた事を良子が拗ねているのだ。スバル達はそれを気に病んでいるのだろう。

しょうがねえなあと、シオンは胸中呟くと良子に追い付き、声を掛けた。

「……なあ、ちび姉。ちっさい扱いされんのは前からだろ？ スバル達は初対面だったんだし。いい加減許してやれよ」

「き、貴様……！ 誰に一番怒ってると思ってるんだ！」

執り成すように言った言葉に、良子はすぐに反応。こちらをキツと睨んだ。

シオンは、おや？ と首を傾げて。

「……ひょっとして、俺？」

「貴様以外の誰が居る！？ ちび姉と呼ぶな！」

「だって、ちび姉はちび姉だし。前からそう呼んでただろ？」

「その度に訂正しろと言っただろう！ 全くお前は——！」

足を止めて、そのまま説教モードに移行。

良子は、腕組みしてシオンに怒声を浴びせ掛ける。

それにシオンは苦笑して、床に正座して聞く事にした。

——怒られている時に自分より視線が高いと良子が更に怒るからだ。

そんな、懐かしい気持ちになりながら久しぶりに良子の説教を聞いているシオンを見て。スバル達はちよつと呆気に取りられながら、やはり微苦笑しているみもりに尋ねる。

「ねえねえ、みもり。シオンってさ。何で良子ちゃ——。……さんの事をあんな風に呼ぶの？」

「えっと、それはですね」

危うく、ちゃん付けにしそうだったのを何とか堪え——。

——以前、姉であるチンクにしまい、えらい怒られたからだ。

——堪えながら聞いたスバルの問いに、みもりは顎に手を当てて少し思案。

しかし、すぐに頷くとそのまま説明を始めた。

「良子さんは、私達が小学生くらいのお世話になった人なんです。……私と、シン君。ウィル君とカスミちゃんは皆、良子さんに遊んで貰ったんですよ」

みもり達が小学生低学年くらいの頃。

その時、グノーシスが二分に分かれる争いが起きた。

世に言う、『グノーシス事件』である。

これにより、神庭家は殆どの人間が出て行き。みもりの父も表の混乱を押さえる為に家に帰れない日々が続いた。

そんな彼等、彼女達の面倒を見たのが神庭アサギと個人的に友人であった鉄納戸家であり、その家の長女、良子であったのだ。

ああ見えて、シオンは良子には一切頭が上がらない。

あるいは、義理の姉。ルシア・ラージネスと同じくらいであった。

そんな説明を聞きながら、ギンガがみもりの説明にちょっと頷く。

「成程……。シオン君って年上の女性に弱そうな気はしてたけど。やっぱり、そうなのね」

「「「……う……」」」

何となしに呟いた彼女の台詞に、一斉に唸る声が三人分上がる。今更とは言え、やっぱり口に出して言われるときつついものがあった。

スバルは一つ年下。ティアナと、みもりは同年であったから。

そんな一同に、漸く説教が終わったのかシオンが立ち上がって、こちらに近付いて来る。

「悪い、悪い。足止まらせちまって……。て、どした？ スバルも、ティアナも、みもりも？」

場の空気が微妙におかしな事に気付いたのか、シオンは首を傾げる。

だが、それに三人は答えなかった。
それぞれ、そっぽを向いたり微苦笑するだけ。

シオンはそれに、眉を潜めた。

「……何だよ……？」

「別に何でも無いよ」

「別に何でも無いわ」

「別に何でも無いです」

問うシオンに、それぞれ語尾だけ変えて。全く同じ事を言う。
それにこそ何かあったらと、シオンは思うが。三人はやはり答え
ない。

やがて、ギンガが苦笑しながらシオンの肩を叩いた。

「シオン君……。世の中気にしちや、駄目な事があるの」
「はい？」

「今回は私が無用心な事言っちゃったのもあるけどね」

「いや、何の事言ってるんすかギンガさん……？」

「こら——！ 何やってるんだ。早く来い！」

ギンガの台詞も、やはり訳が分からずにシオンは頭に疑問符を浮かべまくり。

そんな一同に、良子が大きな声を上げた。

シオン達は、それに慌てて彼女に続く――。

――これより向かうは『学院』、地下施設。

その一つ、一つが核弾頭並の危険物扱いとされる物が並ぶ場所。

遺失物――。つまり、ロストログア封印施設であった。



『学院』は一般的には、普通の大学として知られている。意外かも知れないが、わりと普通の大学生もここには通っているのだ。

これは、全てのグノーシス支部に言える事ではあるのだが。

例えば、極東日本支部『企業』は何も知らないサラリーマンが働いているし、北米アメリカ支部『正義』は米ペンタゴン内にある為、軍の高官達が普通に入出入りしている。

さらに言うならば、EUフランス支部は『教会』であり文字通り十字教総本山であるフランス内部の世界最小主権国家、バチカン市国”そのもの”がグノーシスの支部となっている。

が、当然。多数の十字教信者達はそんな事を知らない。

木を隠すなら森の中。と、言う訳ではあるまいが。グノーシスはこのように、一般人からひどく近い所で活動している訳である。

そして――。

「――てな訳で、基本的にグノーシスの施設は一般人の目に触れられないように地下に作られてるって訳だな」

『『へ〜〜〜』』

古びた、しかし歴史を感じる重々しい校舎に全く似つかわしく無い、大きなエレベーターで地下に下りながら。

通り一辺を説明したシオンに、スバル達は珍しそうな目を周りに向けながら何度も頷く。

現在、『学院』の隠しエレベーターで地下施設に向かっている訳だが――。

――シオンは毎度の事とは言え、この高速エレベーターに乗ると、まるで投身自殺をしているような錯覚に襲われる。

まあ、地下150m先に下りる高速エレベーターだ。

そんなもの、投身自殺しているのと体感は何も変わらない。

ただ、重力、慣性制御システムがある為。実際死ぬ事はおろか、衝撃も感じない訳だが。

そんなシオンに、スバルが不思議そうな顔をした。

「でも、こんなに深くに施設を作る必要ってあるの？」

「逆だよ。そんだけ下に作らざるを得なかったんだ。――もし、中のもんが暴走しても被害を最小限に出来るようにな」

シオンは苦笑すると、そのまま一同に振り向く。

悪戯っぽい笑いが、そこには張り付いていた。

「よく覚えとけよ。お前達に渡されようとしてるもんは、” そう言った” もんだ。……暴走すると、取り返しの付かないって代物だ。それだけは覚悟しとけよ」

「……………うん」

その言葉に、自分達が扱おうとしているものがどれだけ危険物か悟ったか。

一同は顔を引き締めた。

シオンはそれに満足そうに頷くと前を向く。

同時、チンっと言う懐かしい音が鳴るとエレベーターの扉が開いた。

良子が先導して、最初に中から出ながら一同に告げた。

「ようこそ、『学院』へ。……そして、ここが遺失物封印区域だ」

そこは、ドーム状の場所であった。

恐ろしく広い空間がドームに包まれている。

しかし、中はがらんどろ。

たった一つ台座があるだけで、他は何も無い。

そんな空間に、シオン達は入っていた。

「……これが噂に名高い『学院』の遺失物封印区域か……」
「ふわあ〜」

良子に先導されて、ドームの中央に歩く一同は物珍しい光景に目を奪われる。

それはそうだろう。数十mに渡り、広がる地下ドームなど珍しい事、この上無い。

やがて、中央に到着すると良子が台座に手を翳^{かざ}した。
何ごとかを呟く、と台座が開き、下から何かが迫り出して来た。

「これ、どう言う……?」

「この下にロストログアが封印されてるんだよ。で、ここからオーダーを出してロストログアを呼び出すって訳だ。――来るぞ?」

それらを見て、疑問の声を上げたティアナに、律儀に答えながらシオンは冷や汗を一つ流した。

これから出て来るものが何かを、知っているが故にだ。

それは、遺失物にして遺失物に非ず。

『まつろわぬ神』との戦いに於いて、グノーシス――。否、人間が彼等より”算奪した戦利品”。

故にこそ、シオンは知っている。
それが、いかなるものかを。

そして、”それ”は出た。

新たに現れた台座に載せられて出て来たもの達だ。

まず最初に目についたのは、大きな三つの宝玉である。

蒼、緋、紫の三色の宝玉。

しかし、それはただの宝玉では有り得なかった。

こうして見ているだけで、凄まじいまでの圧力を感じる。

かのエネルギー結晶型ロストロギア、レリックを遥かに上回るエネルギーを秘めているのは間違い無い。

続いて目についたのは、剣であった。

しかし、これもただの剣では無い。

幅広の大剣。しかし、不可思議な事に刃の向こう側が透けている。

ごく薄の刃なのか、それともガラスのような透明な材質で出来ているのか。

判然としない、が。それも通常の剣では無い。

目に見えて分かる程のプレッシャーを感じる物であった。

最後に、これまた四つの宝玉。

しかし、これは前の三つの宝玉と違いえらく小ぶりであった。

四つの宝玉は、それぞれ『東』『南』『西』『北』と方角を表す文字が刻んである。

恐らくは四つセットのロストロギアなのだろう。

他のロストロギアと比べても勝るとも劣らぬ圧力を吹き出していた。

その五つの神宝に驚いたかのように、唾然とする一同。

彼女達を代表するように、シオンは生唾を飲みながら我知らずに
呟く。

「かの岩より生まれし、猿神。齊天大聖、孫悟空！　そして、北欧
神話に於いて卓越した魔術の使い手であったオーディーン。別名、
フラフナクド
鴉神！　更には、かのゼウス神を一度は敗退に追い込んだ嵐神。テ
ュポーン！　そして、ニーベルングンの指輪でお馴染みの鋼の英雄。
ジークフリートの愛剣、封竜剣バルムンク！　最後に、世に言う四
海竜王。東方蒼龍（東海龍王）… 敖廣、廣徳王。南方赤龍（南海
龍王）… 敖欽、廣利王。西方白龍（西海龍王）… 敖閏、廣順王。
北方黒龍（北海龍王）… 敖順、廣澤王。それらの龍玉達！　……
すっげえ……。始めて見たよ……」

『『……はい……？』』

熱っぽく、現れた神宝について呟くシオンに、スバル達は何事か
と聞き直す。

だが、シオンはそんな彼女達の疑問なぞ、どこ吹く風であった。

良子に目を向ける。

「こいつ達を、スバル達に……」

「そうなる。どれも一級品の神奪宝だから、扱いには非常に気を配
らなければならない。取り敢えず、今は封印解除中だ。それが終わ
るまではどれも取り出せない」

「え？　封印？」

話しについていけなかったスバルだが、漸く。語られた台詞を理
解して今度は良子に聞き直す。

それに彼女は頷くと、再び台座に手を翳した。

神宝達が再び格納されて行く。

「第一級の超危険物だから……。最高位の封印を四層も編んでいる。これは、一層解除するのに丸一日掛かる程のものなんだ。……それより、君達は今のシオンの話を理解出来た？」

「い、いや、その……」

「全然、分からなくて……」

丁寧に説明されながら、良子はスバル達に問う。

それに彼女達は困ったような顔を浮かべた。

当然とも言える。

このロストログアは、全て”地球産”のものであるから。

当然、地球育ちな訳でも無いスバル達が、これを知る訳が無かった。

納得したように、良子は頷くとシオンに振り向く。

「シオン」

「分かってるよ、ちび姉——」

「ちび姉と呼ぶな！」

「……細かいなあ。取り敢えず、後で俺も大英図書館に調べ物あるし、スバル達連れてくよ。んで、それぞれの神話のレクチャーして来る」

『『へ?』』

「よし、ならいい。ちゃんと教えるんだぞ?」

『『え?』』

自分達の全く知らない所で話しが進んで行き、スバル達は目を白黒させる。

それに構わず、シオンと良子はお互いに頷き合った。

そして、封印区域から出ようと踵を返して――。

ぞくり、とシオンの背筋を悪寒が突き抜ける！

「……あれ？ これ……？」

「？ 何したの？ キャロ？」

そんなシオンを知ってか知らずか、突然キャロが不思議そうな声を上げた。

自分の間近。すぐ側を、ゆつくりと黒い甲虫が飛んでいた。かぶとむし

虫にしては、少々大きめだが不思議と嫌悪感を感じない。

生き物と呼ぶには単純過ぎる、その輪郭のせいか――。

そんなキャロの声を聞いて、エリオが振り向く。

その頃には、シオンは特級の嫌な予感に包まれていた。

彼もまた、振り向き。

そして――。

「あ、エリオ君。ここに大きな虫がね――」

そう言いながら振り返るキャロに、甲虫が中央から展開。その身体が開き、中から現れたのは小さな針！

「キャロ！ 逃げ――！」

「え？」

一閃一

直後、彼女の白いうなじに向けて、甲虫は針を撃ち出した――。



そこは一見、普通の独房であった。

ジェイル・スカリエッティが入っているそこは。

薄暗く、簡素なベット等が置いてあるだけ。

しかし、彼はそこで度々起こる”振動”をリズムにして鼻歌なんぞをそらんじていた。

今日は、朝から気分がいい。

何故か、と言われても困るのだが。

今日のジェイルは久しぶりに機嫌が良かった。

だが、彼の場合。いつ見ても口元に薄笑いを浮かべているので、傍^{はた}から見れば、その違いは分かるまい。

何にしても、彼は気分が良かった。

それが、この軌道拘置所を特級の衝撃が襲うに当たって絶頂を迎える。

彼は独房の中で、ひっくり返りながらも笑っていた。

看守の一人が不気味そうに笑っていたが、知った事ではない。

その看守も、慌てて何処かに行き――。そして帰って来ない。

「人は賢者と愚者に分けられる。――かつて、君はそう言ったね？」

そんな中、唐突にジェイルは鼻歌を止め、独り言を呟き始めた。
しかし、それは果たして独り言と呼べるのか。

誰かに話し掛けるような、その口調は独り言と思えない。

振動が、さらに強くなった。

「賢者と愚者。人が聞けば、誰でも賢者の方が正しいと思うだろう。
――だがね、私は愚者になりたかった。賢者ならば、そもそもあんな夢を追ったりはしない。だから、私は愚者になりたかったのさ」

正しくなくとも、それを夢見た。

他人の事など、知った事では無い。

他人なんて、所詮は他人。

別の生き物に過ぎない。

ならば、いくら利用しようとも構わない。

だが、勘違いをしてはならない。

自分は人間を愛してる。

あれだけ、未知な存在はそうはいない。

骨を抜きとり、内蔵を改造して、脳髓を引きずり出し、精神――。
記憶までもに手を加え。

足りない。

足りない、足りない、足りない、足りない、足りない、足りない、足りない！

自分は、まだ”人間”と言う存在を説き明かしていない！

”彼”に追い付いていない！

ああ、ああ、なんて狂おしい。

ああ、ああ、なんて妬ましい。

人間――。否、彼を説き明かす事が出来るなら、いくらでも愚者になろう！

そう、思っていた。

だが――。

「だが、私は間違っていたよ。本当の意味で愚者とはそう言った存在じゃないのさ。――考えてみれば、誰だって分かる。誰が好き好んで愚者になりたがる？ 誰が望んで愚者になると言うんだい？ そう、そこから違うのさ。愚者は最初っからとことん愚者だからこそ、愚者なのさ」

本人にその積もりは一片足りとも無かろうとも、その行いは愚を極め。

その思想に他者は非ず。

理解も出来ない。

人格として、最初っから最後まで”間違っ”てしまっている存在。
故に人は言うのだろう。

愚か者、と。

「そう言った意味では、君は極めて愚者だ。先程、航行艦がここに突っ込んで来たそうだが。そんな真似をする人間を私は一人しか思い浮かばなかったよ」

微笑む――。狂気じみた、笑みと共に。

振動は止まる事無く、強くなっている。

そして。

一撃！――

直後、ジェイルの居る独房の天井が”くり抜かれた”。
まるでコルクを抜くが如く、丸く円を描いて。

次の瞬間には、それが落ちて来る！

一轟！――

激音と共に大量の砂埃を立てて、落ちて来た天井。
だが、それは果たして狙ったものなのか、ジェイルを綺麗に避けていた。

その天井の上に立つ人間が居る。

ジェイルは砂埃なぞ、見えていないかのように無視して手を大きく広げた。

それは、まるで歓迎するかのような仕種であった。

そんなジェイルに、”彼”は告げる。

「久しぶりだな。――ジェイル。貴様、こんな所で何をしている？」
「ああ、本当に久しぶりだ。五年振りかね？ タカト」

そうやって、久しぶりに旧友達は顔を合わせる。

最初に会った時以来、会う事が無かった二人は、このように再会を果たしたのであった。



薄暗い独房の中で、向き合う二人。

伊織タカトは、相も変わらぬ無愛想な顔で。対称的に、ジェイル・スカリエッティは薄笑いを浮かべていた。

ジェイルは、その笑いのままにタカトを上から下まで眺めると一人頷いた。

「大分身長も伸びたね。今はいくらだい？」

「ここ最近の計つとらんからな。正解には分からんが180強と言った所ではないか？ ……しかし、そう言う貴様は変わらん」

「若く見られる事に関しては定評があつてね」

ジェイルは年代から考えると歳は三十を超えている――。あるいは四十に届くかもしれないのだが、外見からは全くそうは見えない。二十代と言われても信じてしまえそうであった。

そんな、場に似つかわぬ。しかし、この二人だと納得してしまえ。そんな世間話を二人は交わして。

やおら、ジェイルがにやりと笑った。

「で？ 君は何しにここに来たんだい？」

「わざとじゃないぞ？」

「……………私は何をしに、と聞いたのだがね……………」

いきなり、そんな事を言う辺り。とんでも無い事を彼はやらかしたのか。

じー、とジェイルがタカトを眺めていると、彼は諦めたように嘆息。

ここに來た事情と、今の状況を大ざっぱに説明した。

それを聞き終わるなり、やはりと言うか。ジェイルに爆笑されたが。

「……………くっ……………！ くくく……………っ！ いや、流石だね。君はいつも、

私の考えを斜め向こうに飛び越えてくれる……………！」

「……………素直に馬鹿めと言え」

「ならそう言おう。馬鹿だね、君は」

「死ね」

言われた通りの事を言ったら拳を振り上げられた。

冗談抜きに、ブン殴られそうだったのでジェイルは即座に降参とばかりに両手を上げる。

それに、タカトはふて腐れながら拳を納めた。

「……で、わざわざ私を尋ねて来た理由は？」

「ただ単純に顔を見ようと思ってな。まさか捕まっとするとも思わなんだし。……そう言えばジェイル。お前、航行艦の修理は出来るか？」

「実物を見なければ何とも言えないがね。出来ると思うが？」

ここで、無理と言わない辺りが世に天才と言われる所以であろう。ジェイルの答えに、タカトはふむと頷いた。

更に問い掛ける。

「なら、先程言った管理局が仕掛けた次元封鎖を破壊せずに抜けられる方法は？」

「次元航行システムと、転移システムの応用。それから次元封鎖のデータがあれば、出来るだろうね。……タカト、遠回りなのは君らしく無い。素直に私に何をさせたいか言ってくれないかね？」

「そうだな、その通りだ。ならば、素直に言おう。ジェイル・スカリエッティ、俺と共に来い」

ジェイルに告げられた通り、タカトは素直に告げる。

それに、ジェイルはくくつと笑った。

半ば、それは想像はしていたのだろう。

だからこそ、漏れた笑いだったか。

そのままの薄笑いで、ジェイルはタカトに向き直った。

答えを、告げる。

「嫌だ」

はつきりと、そうとだけジェイルはタカトに告げた――。



「……………」

あまりにも、明瞭に、明確に示された答えにタカトは沈黙。
暫くして、漸く口を開いた。

「……ふむ。嫌か？」

「ああ。私はここから出る積もりは無いよ、タカト。航行艦の修理
くらいは手伝うが、そこから先は自分でやりたまえ」

ジェイルはあくまでも薄笑いを浮かべたまま。
タカトも表情が全く変わらない。

さほど、気にしていないと言う事か。

少しだけ嘆息すると、そのまま次の問いを放った。

「一応、理由を聞いてもいいか？」

「別に構わないさ。まあ、有り体に言うとは私は世界に飽きてしまっ
てね。……私がここに居るのは夢を追いつけ、破れたからさ。もう、

その夢も無い」

ジェイルの長年の夢であった『聖王のゆりかご』。

それによる力で持って、思う存分、生命を研究する。

人と言う存在を説き明かす。

それは、ひょっとしたら誰かに”設定された夢”であったかもしれない。

ジェイル自身の夢であったのか、あるいは違うのか――。

だが、今となってはそんな事はどうでもいい。

重要なのは、ただ一つ。

既に『聖王のゆりかご』は消滅し、ジェイルの夢は無くなってしまったのだ。

それだけであり、それだけでしか無い。

その時点で、ジェイルは全ての熱意を失ってしまった。

だから――。

「だから、タカト。君と行く事は出来ない」

「そうか――」

「ああ、そうだとも。すまないね」

彼にしては珍しく、本当に申し訳無さそうな。しかし、どこか晴々とした表情でジェイルは語り終えた。

そして、タカトに背を向けようとして。

「――本当にそうか？」

その言葉に、足を止めた。

振り向く――。この時、もしフェイト・T・ハラオウンや、ナンバーズの人間がジェイルを見たら驚いたかも知れない。

ジェイルの、いつも浮かんでいた薄笑い。

それが、完全に消えていたのだから。

微かな苛立ちが視線に籠る、それにタカトは微笑した。

「本当にそうか？ ジェイル。お前の夢は終わっているのか？」

「……何が言いたいんだい？」

「俺は、お前が言ったあの言葉を忘れていない」

「君こそが、私の望んだ生命の”究極”だ。私はいつか、君に追いつこう――」

その言葉を。

五年前、ジェイルと出会い、別れ際に言われたその台詞を、タカトは覚えている。

”ジェイルからの、タカトへの挑戦を”。

だから。

「お前の夢が何であったのかを問うつもりは無い。それに破れたと言うのも仕方のない事なのだろう。……だが、お前が世界に飽きたなんぞと言う戯言を信じるつもりは無い」

「……私が嘘を吐いてる、と？」

「あるいは自分自身ですらも気付いていないだけかもしれんがな」
あれほどの執念を込めた夢が終わる？

それも、ただ一度破れただけで？

有り得ない。

他の何でも無い、タカト自身を一瞬だけでも驚かせて見せた程の夢。

それが、あっさりと終わる筈が無い。

「夢が終わったなぞと言う、言い訳なぞいらん。お前はただ、落ち込んでいただけだろう？」

” お前の夢は終わってはいない”。

少なくとも、俺に追い付いてはいないのだしな」

「……………」

きっぱりと言い放つタカトに、ジェイルは無言。

そんな彼にタカトは手を差し出した。

「もう一度、自分で夢を描いてみてはどうだ？ ジェイル・スカリエッティ。少なくとも、お前はここで終われるような、そんな繊細な人間ではあるまいよ」

「——私の夢は、人の道から外れるものであってもかい？」

「構わん。そもそも化学者にとって、倫理感なぞ最も必要なものだろう？ ……まあ、それが俺の身内に危害を加えるようなモノならば、遠慮容赦呵責無しに叩き潰してやるだけだ」

そう言いながら、差し出し続ける手。

ジェイルは、その手をじっと眺め続ける。

その手を取るか否かで、迷っているのだ。

何と言っても、彼は一度負けた身。

――生まれて始めての敗北と共に夢を砕かれた身だ。

逡巡^{しゅんじゅん}するのは、当たり前と言える。

そんなジェイルに、タカトは更に笑った。

「……実を言うとな。もう一つ、お前を確実に説得出来る手段は介在する」

「……一体、何を――」

”魂学”」

その、たった一言の単語がいかような効果を持っていたか――。
ジェイルの身体が強張ったように固まった。

彼の脳が、その単語に反応している。
まるで、ずっと求めて来たものを漸く知ったように！

固まる、ジェイルにタカトは続ける。

「錬金術に於いては人間は三つの要素で構成されているとされる。
一つ、肉体。一つ、精神。

……一つ、魂。

それを説き明かす学問がかってアルハザードと呼ばれる世界にあった。それが則ち魂学」

「……………」

アルハザードに？

だが、そんな単語をジェイルは始めて知る。

あるいは、聞く。

どの文献にも無かった言葉だ。

アルハザードの遺児にして、その知識を全て受け継いだ筈の自分が！

だが、自身の奥深く。根源では、ひどく納得している自分が居た。

これが、答えだと。

「五年前。お前の研究を適当に見た俺は言ったな？」一つ足りない”と。それが、最後の一つだ。もし俺について来るのならば、俺が知る限りの魂学について教えてやろう」

「……………」

「どうだ？」

最後通牒。

おそらく、ここでジェイルが首を横に振れば、タカトはそうかと頷いてあっさり彼を諦めるだろう。

それは、確信。

故にこそジェイルは悟る。

この”魂学”を知る機会は、今を於いて二度と無いと。

だからこそ、タカトは断言したのだ。

ジェイルを説得出来る確実な手段だと。

確かに、その通りだった。

それがいかなるものか、知りたい。

その知識を手に入れたい！

そう、彼の”欲”が疼き出した。

かのJS事件以降、消えてしまった筈のそれが。

ジェイルはそれを自覚しながら、タカトに思い至った事を聞いてみる。

「君」と言う存在は、その”魂学”にルーツがあるത്？」

「ああ、そもそも人は魂にルーツを見出だすものだ」

「魂学を知れば、君に追いつけると？」

「それについては、自分で答えを出すのだな」

あくまでもタカトのスタイルは変わらない。

その気があるならば、手を取れ。

拒むのも手を取るも自由、と――。

タカトの手は、まだ差し出されたままだ。

「……最後に一つ。私はその魂学を知った結果として、君や君の周りに何事か起きた時、君はどうするんだい？」

「先程も言った通りだ。その時は、容赦無く叩き潰してやろう」

その言葉に一切の迷いも逡巡も無い。

ただ、既に決めていた事のみを告げる口調であった。

そんなタカトの台詞に、漸くジェイルの口元に薄笑いが戻る。

手を伸ばした。

「……君は、私と話している時もずっと、手を差し出していた——」
まるで、その手を取ると確信しているように。

だから——。

「そんな風に差し出された手を、拒む手なんて、私は持ち合わせていないよ」

そう言って、ジェイル・スカリエッティは伊織タカトの手を握った——。

ナンバー・オブ・ザ・ビースト。

伊織タカト。

アンリミテッド・デザイア。

ジェイル・スカリエッティ。

ある意味に於いては最悪な二人は、こうして手を組む事になった。

しかし、タカトは気付いていなかった

彼は、本当に久しぶりに仲間を手に入れた事を。

当人だけは、知らなかった——。

(第五十二話に続く)

第五十二話「懐かしき者達」（後編）（後書き）

「突如、シオン達を襲う謎の虫達」

「その軍勢は『学院』内に入り込む」

「その驚きの正体。そして、キャラは――」

「一方、ジェイルを仲間に加えたタカトは彼の依頼で別世界に拘留中のナンバーズを開放に向かう」

「そして、到着したミッドチルダで彼が見たものとは」

「次回、第五十三話。

『強襲』」

「少年は地球にて、青年はミッドにて、それぞれの敵と出会う」

第五十三話「強襲」(前編)(前書き)

「敵、敵対するもの。命を狙うもの」

「大敵、難敵、……色んな意味で敵、て言葉には種類がある」

「……けど、俺にとって敵、てなんなんだろう」

「それはストラなのか、あるいはおっちゃんなのか、……あるいはタカ兄いなのか」

「あの人にとって、敵ってなんなんだろう。でも、その答えはすぐに出た」

「『前に立ち、俺の前に立ち塞がるモノ。往くべき道を塞ぐモノ』」

「『それは、例外無く俺の敵だ』」

「……でも、その生き方は寂しくて」

「魔法少女 リリカルなのはStS, EX。始まります」

第五十三話「強襲」(前編)

一閃一

甲虫から針が、キャロへと撃ち放たれんとした瞬間。
シオンは迷う事無く、キャロに向かって踏み込んだ。
魔力を放出させ、拳に集中。

それを一気に突き出す！

間に合え————！

叫びは声にならず、ただ己の胸中のみで響く。

同時に突き出した拳から魔力の塊が放たれた。

一破！一

それは未だにこちらを向いたままのキャロの脇を抜けて、針を今にも撃ち放たんとした甲虫に叩き込まれ——。

一撃！一

甲殻に包まれた、身体を問答無用に破壊。

さらに軽く爆発した。

そして——。

魔力が叩き込まれる直前に放たれた針が、爆発で僅かに逸れ。キヤロの頬を掠めて通り過ぎる。

それだけ、本当にそれだけで。

キヤロは仰向けにひっくり返った。

「キヤロ！」

「キヤロ！？」

倒れ込むキヤロをシオンが慌てて抱える。

エリオやスバル達も顔色を変えて真っ青になりながら駆け寄る。

ぐったりと脱力してしまったキヤロの口元にシオンは手を当て――
|。

――ぞつとした。息をしていない！

呼吸が止まっている！

「くそっ……！！」

おそらく針に毒でも塗られていたのか。

キヤロは呼吸すらも麻痺させられていたのだ。

おそらくは神経毒……。それも、かなり強力な！

そこまで確認するなり、シオンはキヤロを横たえる。
すぐに皆を振り返った。

「スバル！ 人工呼吸出来るな！？ 頼む！」
「あ、うん！」

スバルに呼びかけながら、シオンはキャロに馬乗りになり、心臓の位置を確かめて強く押し出した。
胸骨圧迫による、心臓マッサージである。

ゆっくりと、しかし確実に行う。

キャロほど華奢だと、下手をすれば肋骨が骨折しかねないが今は構ってられない。

口元では、スバルが気道を確保して人工呼吸を行っていた。

「ティアナ！ A E D（自動体外式除細動器）が確か近くにあった筈だ！ 取って来てくれ！」

「うん！ 分かったわ！」

「シオン君！ 心臓マッサージ代わるわ！」

「お願いします！」

ギンガの申し出に、素直に頷き場所を譲る。
そのまま、今度はみもりに振り返った。

「みもり……！」

「分かっています！ 今、” 視てます” から……！」

シオンの悲鳴じみた声に、みもりも顔に苦渋を張り付けて、じつとキャロを視る。

その間にティアナがA E Dを持って来た。

「シオン、これ……！」

「ああ！」

頷き、ひったくるようにしてAEDを受け取る。

脇に移動して、ギンガとスバルを退かし。AEDを開いて電源を入れた。

そして、キャロに向き直り――。一瞬だけ躊躇。が、すぐに首を振って思い直した。

今は躊躇している場合ではない。

それに、”地球製”のAEDを使えるのは自分しかないのだ。みもりは今動かせないし、良子もみもりの”あれ”を待って中央の台座に居る。

ものが毒である以上、二人は動かせない。

だから。

「……っ！」

「え、シオン………!？」

「ちよっ………! あんた………!」

キャロが着ていた管理局の制服に手を掛ける。

そんな、シオンに後ろでスバル達が声を上げるが構っていられない。

無視して、上着をはだけさせるとAEDの端子を右肩と左の脇腹に取り付け。周りに退がるように手くばせする。

そして、AEDのボタンを押す。

——電気ショックが、キャロの身体を叩く。

それを二回。だが、キャロの状態は変わらない。
呼吸も止まったままだ。

まだか……！

そう思った、直後。

「視え、ました……！」

待ち望んでいた、声が来た。

みもりだ。彼女は疲労を顔に滲ませ、汗でぐっしりとなりながら振り向いたシオンに頷いて見せた。

そのまま、台座に居る良子に顔を向ける。

「良子さん！ これは動物性の神経毒です！ ユニコーンの角を！」
「了解だ！」

良子は、みもりに頷くなり台座に手を翳す。

すぐに目的のものは出て来た。

幻獣、ユニコーンの角——。

竜種と同じく、幻想種として知られる彼の幻獣の角である。

これは、最高峰の薬剤になるとして知られる。

特に動物毒に対しては、優れた毒消しになると言われていた。

——その希少性からグノーシスでは遺失物扱いになる事も珍しくないものであったが、ここにもあってくれたか。

良子が目的の捻れた形が特徴的な角を手にとると、何と投げて寄越した。

ちよつと離れた位置に落ちそうだったが、エリオがギリギリでキヤツチ。

すぐにみもりの元に持って来てくれた。

「み、みもりさん！　これ……！」

「エリオ君、ありがとうございます……？」

差し出された角を、エリオから受け取ろうとして。
みもりは気付いた。エリオの手が震えている事に。

エリオは声も震わせながら、みもりを見上げた。

「キャラを……。助けて下さい……！」

「エリオ君……」

その声にかほどの願いが込められていたか。
すぐに、みもりは頷いた。

「任せて下さい！　キャラちゃんは必ず助けてみせます！」

言うなり、みもりはキャラの傍にしゃがみ込む。

そして、角の調合を始めた。

角を一欠片、手配して置いたナイフで、こちらも手配して用意し

た乳鉢に削り、乳棒で押し潰して粉末にする。

この時、みもりは自身の魔力も一緒に練り合わせる。

角の毒消しの効果を自身が”視た”毒の対効果に特化させる為だ。

今、みもりにはキャロの身体を麻痺させた毒に対する”完璧”な知識が備わっている。

”視た”事により、その知識を手に入れたのだ。

これこそが、みもりが所有する希少技能。

霊視能力、であった。

みもりの目は事象の全てを読み解く霊眼なのである。
オラクル

天啓とも呼ばれるこの能力によって、みもりは毒の成分を見極めたのだ。

「良子さん。温めのお湯を……」

「大丈夫だ、手配してある」

みもりに良子が頷くと同時に、転送魔法でポットが送られて来た。

それをみもりは受け取ると、調合を終えた乳鉢の中に熱湯を加えて粉末を溶かし込む。

今のキャロの状態では、粉末のままでは飲めない為の処置だった。

それら、調合を終えるまで僅か二分。

しかし、キャロが毒を受けて呼吸を止めてから四分は経っていた。

みもりは焦る気持ちを落ち着かせて、AEDを一旦停止。

キャロを抱きかかえると、乳鉢から直接、口に流し込む。
ゆっくりと、確実に。

全て流し込むと、再びAEDを取り付ける。

再び、キャロの身体を電気ショックが叩き。

そして――。

「こふ……！ こふっ！ こふっ！」

――キャロが咳込んだ。

息を吹き返したのだ。

それを確認して、シオンは安堵のあまり膝から崩れ落ちる。

他の皆も同じようにして、しゃがみ込んだ。

「……良かったあ……」

ぽつりと呟くスバルの声に、シオンは黙って頷く。
いきなり妹分が死に掛けたのだ。

何とか助かったものの、ショックは大きい。

そんなシオン達に、みもりも漸く笑顔になるとAEDを取り外した。

「もう、大丈夫だと思います。けど、まだ……」

「分かってる。キャロは下手に起こさない方がいいだろ。――ちび

姉、医務室は？」

「ああ、案内する」

こちらもいつものように、ツツコミを入れる氣力を無くしたのか、すぐに頷いてくれた。

シオンはキャロを、みもりの助けで背中に背負う。

「――まずは、医務室にキャロを連れて行こう。ちび姉、当直の医療官は？」

「……そう言えば、さっき呼んだ筈だが……？」

その問いに、良子はキャロが倒れてすぐに『学院』に常駐している筈の医療官を呼んでいた事を思いだす。

しかし、まだ来ないのは流石におかしい。

これは――。

《鉄納戸博士！？ ご無事ですか……！》

「……？ どうしたのだ、そんなに慌てて……？」

疑問に思っていると、いきなり通信が良子の元に入って来た。

通信をして来た女性は無事な良子の姿にホッとすると、が。その後ろのキャロを背負ったシオンの姿に顔色を変えた。

《そんな……！？ もうそこまで……！》

「おい……？ 何がそこまでなんだ……？」

嫌な予感がする。

シオンは女性の反応に、『直感』で嫌な予感を感じ取っていた。

——つまりそれは、それ程の嫌な予感と言う事でもある。

女性は、不躰なシオンの問いに気を悪くする事も無く頷く。

そして。

《実は——》

女性の口から、現在の『学院』の状況を知らされて。

シオンのみならず、この場に居る一同全員がそれを聞いて、顔色を変えた——。



『学院』医務室。

通信して来た、女性——。

『学院』の管制官だそうだ——。

に、事情を聞いた一同はそこに移動していた。

本来そこに居る筈の、当直医療官も居ない。

現場に駆り出されているのである。

——『学院』地上部。例の”虫”の襲撃を受けた場所に。

シオン達の所に居た虫は一匹しかいなかったが、地上部を襲った虫は一匹二匹では無い。

その数、何と数万匹。

数が多過ぎて、数えられない程の虫が地上部を席卷しているのである。

——もはや、疑うまでも無い。

敵対者からの襲撃であった。

「さて、これからだけど——。リーダー、どうする？」

「そうね……」

キャロをベッドに寝かせて、シオン達は思い思いの場所に座り話し合いを始める。

そして、早速とばかりに放たれたシオンからの問いに、ティアナが眉根を潜めて唸り始めた。

本来ならば、階級が一番高いギンガが指揮を取るべきだが本人の推薦で、このチームではティアナがリーダーとなっている。

いわく、『ティアナが一番向いているわ』との事であった。

「まずなんだけど、あの虫。何なの……？」

「……私見でいいなら俺から。多分機械だな、ありゃあ。ガジェットと似た奴だと思う」

「ガジェットと……？」

「勘だけだな」

魔力を叩き込む直前に見た感覚から、シオンは言う。それに、ティアナが腕組みをして再び思考し始めた。

あの虫がガジェットの種類だとすると、それはそれでまずい事になる。

そう、ガジェットにはAMFがあるのだ。

それを、あの虫が使えるとしたら……。

「――対人用と考えたら、ある意味最悪なものになるわね……」

「あの毒針だけでも最悪だしな……。キャラが即死しなかったのは運が良かっただけって考えた方がいいだろ」

例のキャラを一瞬で死に追いやり掛けた毒。

みもりの話しによれば、”掠った”程度だったから、あれで済んだらしい。

あれは即効性の強力な神経毒であり、本来のように突き刺さっていたならば即死は確定だったそうだ。

そんな毒針持ちの虫が、もしAMFを張れたとしたら――。

フィールド。シールド等の防御はろくに役立つまい。

あのサイズで有り得ないとは思うが、最悪の可能性は常に視野に入れて置く方がいいだろう。

ティアナは頷くと、皆を見渡す。

その誰もが、彼女に頷いて見せた。

ティアナの判断に任せると、そう言っているのだ。

ティアナもまた頷いた。

「これから、グノーシスEU支部『学院』の支援に行くわ。ポジションは、スバル、ギンガさんがFW。シオンがGW。私が、CG、FB兼任」

各自のポジションをティアナは告げていき――。

――だが、そこに名前が無い人間が居た。

エリオである。

名を呼ばれ無かったエリオはティアナを呆然と見上げ――。
そんな、彼にティアナは向き直った。

一度だけ、息を飲む。

そして、意を決するとティアナはエリオを真っ直ぐに見据えて、
告げた。

「……エリオ、あんたはここに居なさい」

「な……!?!? なんですか!?!?」

余程、予想外の答えだったか。エリオは愕然としながら気色ばむ。
しかし、ティアナはすぐに首を横に振った。

「これは、現場のリーダーとしての判断よ。……あんたを今、前に
出す訳には行かない」

「そんな……! 納得出来ません!」

「分からないの? ……」 “そこ” がダメだって言ってるのよ」

そこまで言われて、エリオはティアナに食ってかかろうとして――。

――そのまま悔しげに、ぐっと歯を食いしばり止まった。
漸く理解したのだ。自分が冷静では無かった事に。

「……今あんたはいつかの私や、そのバカと同じよ。そんなあんたを連れて行けない。理由は言うまでも無いわね？」
「……でも……」

それでも納得出来ないのか、エリオは首を振る。
当たり前と言えば当たり前であった。

突如として奪われそうになったのだ。自分の大切な人が。
怒らない方がむしろ、おかしいと言える。

だが、今必要なのは怒り狂って敵に特攻する事では無いのだ。
今は冷静に、虫達を駆除しなくてはならない。

しかも向こうは一撃必殺の手段を有しているのだ。
今のエリオを連れて行ける訳が無かった。

うなだれて、拳を震わせるエリオ。
そんな彼に、ティアナは更に何かを告げようとして。

「エリオ、そうじゃねえよ。お前には、ここを守って欲しいんだよ」
先に彼女の横から彼に告げる声が響いた。

シオンである。

彼はエリオの頭にポンっと手を乗せて笑い掛けた。

「さつき一匹居たんだ。まだ地下に居るかもしれないねえ。……もし、俺達全員がここを離れてキャロやみもりが虫に襲われてみる。どうしようもねえ」

「……………」

「それに、だ」

そこまで言って、シオンは後ろに振り向く。

——今は穏やかな寝息を立てるキャロに。

エリオもそちらを見て——。

「傍に居てやれよ。こう言う時は一緒に居て欲しいもんだぜ？」

その言葉に、エリオは目を大きく見開いてシオンを見る。

シオンは、それにポンポンと頭を叩いてやるだけ。

エリオもされるがままになった。

そして、もう一度だけキャロを見て——。

「……………はい……………」

消え入りそうな声で、エリオは頷いた。

シオンはそんなエリオによし、と呟くと漸く手を離す。
扉に向かい歩き出した。

——その身体を魔力が纏う。

「安心しろよ、エリオ。あんの虫達には相応の報いをくれてやるさ」

魔力は次第に形を成していく。

それは、服であり、鎧。

魔導防護服。則ちバリアジャケットであった。

だが、シオンが着込もうとしているのは今までと全く違うジャケットであった。

全身、黒。

まるで飾り気を嫌うように、そのジャケットは装飾が無い。

下は、黒いGパンのようであり。上は縁に白いラインが入っただけの上着。

その上着は、妙に身体のラインを浮き彫りにしていた。

靴もかなり無骨なブーツに変わっている。

外に露出しているのは、何と首から上だけといった仕様であった。

そう、昨夜シオンは髪を切っただけでなく、バリアジャケットの新調も行っていた訳である。

前のノーマルフォーム時のバリアジャケットと違い、ひどく大人びた印象をそれは与える。

完全にバリアジャケットを展開し終えて、シオンは呆然とした一同に振り向く。

にやりと笑った。

告げる――。

「行こうぜ、皆。――誰の妹分に手を出したか、思い知らせてやる」

それだけを告げると、シオンは医務室から出て地上部に続くエレベーターに向かった。

これより、謎の虫群に対して。

攻撃を始める――。



地下150m下から、今度は再び地上へ。

既にバリアジャケットを展開し、デバイスを起動したシオン達は地上部へ向かう。

その中で、シオンはティアナをじと目で見る。

それに、ティアナは罰が悪そうに目を逸らし。

――しかし、その目をずっと続けられ流石に我慢出来なくなったか。ティアナは漸く口を開いた。

「……何よ？」

「べっつにー。ただ、敢えて悪役になろうなんてしたアホを見てるだけだ」

「う……！」

その言葉に反論しようとして、でも言葉が浮かばずにティアナは再びぷいと余所を向いた。

そんな彼女に、シオンはため息を吐き。スバルとギンガは苦笑する。

「ティア、そう言うの不器用だから」

「だったら俺に言わせりゃいいんだ。ティアナ自身が泥を被る必要なんて無いだろ」

言葉自体はスバルに向けられたものだが、実際はティアナへと放たれた言葉である。

ティアナはまだ余所を向いたままだ。

ティアナの考えも分からないでも無いのだ。

そう言った、人に恨まれるような事を人任せに出来ない性質なのだろう。

だが。だからと言って現状のリーダーである彼女がそう言った真似をする必要は無い。

リーダーに最も必要な素質として、人望がある訳だが。

それを自ら失って、どうしようと言うのか。

シオンは再び嘆息して、気を取り直す。

余所を向いたままのティアナに再び顔を向けた。

「……ま、いいや。で？ ティアナ。ここからどうするんだ？ 真っ正面から特攻って訳にもいかねえだろうし」

「……そうね。一つだけ、考えてる事はあるわ」

こちらも一つ息を吐いて、ティアナは皆に向き直る。

そのティアナの表情に、一同は気を引き締めた。

「数が数だし。まともに戦ってちゃあ、あれは埒があかないわ。だから、”真っ当な手段じゃない方法”で一網打尽にしようと思ってる」

「一網打尽って……。おいおい、出来るのか？　ンな真似……」
「出来るわ」

きっぱりとティアナは断言。

それに一同は面食らったように目を見開いて。

やがて苦笑した。

こう言う所は、なのはさんに似ているなとシオンは思いながら頷く。

「――聞かせろよ。お前の作戦とやらを」

「うん。あのね――」

そして、ティアナは自らが考えた作戦を皆に話し。

それを聞いた一同は思い思いの反応を彼女に返した。

苦笑したり、呆れたりといった反応をだ。

シオンも苦笑していたが、やがてそれは不敵な笑いに変わった。

「こらまた見事にふざけた案だな……。いいぜ、気に入った！」

「やっぱりティアナって、なのはさんの弟子なのね……」

「うん、最近。ティアって、なのはさんに性格似て来たよね」
「……全く褒められてる気がしないのは、何でかしらね……」

その言葉には、勿論誰もが口をつぐんだが。

そんな話をしていると、漸くエレベーターは地上部近くに来る。
それを見て、ティアナはスバルとギンガに頷いてみせた。

二人も応えて頷く。

そして――。

チンッと軽い音を起てて、エレベーターは地上部に到着。

その重い扉が開いていき。

直後、黒い甲虫達がエレベーター内に雪崩込んで来た――。



開いた扉の向こうは真っ黒だった。

びっしりと隙間無くそこに居る例の虫達。それらによって壁のようになり、シオン達からは真っ黒にしか見えないのである。

キチキチッと羽を擦り合わせるような音がして、一気にエレベーター内に虫達は雪崩れ込む！

それは、まさしく濁流。

虫の濁流であった。

その流れは、即座にシオン達を飲み込もうとして。

「「ダブル、リボルバァ———！」」

その直前に虫達へと出る者達があつた。

スバル、ギンガの姉妹コンビである。

二人は前に出ると同時に互いに母の形見であるデバイス。
リボルバーナックルを前に突き出した。

既にカートリッジロードは完了。

タービンが激しい回転を刻み、そして——！

「「シュ———トッ！」」

—轟！—

二人は全く同時に、衝撃波を撃ち放つ！

渦を巻いて放たれた双発の衝撃波は、互いに相互干渉を引き起こし中央に捻れ効果が発生させつつ、互いの勢いを増幅させる。

それはあたかも横向きに発生させられた竜巻のよう。

何より、相互干渉で引き起きた衝撃波は更に効果範囲を倍化させて、虫達を逆に飲み込み——。

—破！—

一気に虫達を駆逐していった。

あれ程扉の前に居た虫達、全てがだ。

その結果にティアナは己の推測が当たった事を確認し、頷いた。

あの虫達は数も多く、小さな体躯も相俟って非常にタチの悪い代物な訳なのだが。

その小柄さ故か、耐久力や防御力は大した事は無かったのだ。

単体で攻撃に使えるレベルではないシオンの魔力放出だけで、破壊出来る程度のものでしかない。

それをキャロの襲撃の際に見たからこそ、この初手を思いついたのだが。

障害物を排除し、開いた突破口を見て。

今度はシオンへとティアナは視線を向ける。

シオンは、その視線を見越したように頷いて見せ。まるで弓を引き絞るかのように、全身を伸ばす構えを取っていた。

刺突の構え――。

その構えから放たれるのは、当然。神覇伍ノ太刀！

「先、行ってるぜ……！ 剣魔ア！」

――轟！――

言うなり、こちらが頷く暇もあらずんば。シオンは魔力を纏ってエレベーターから轟速で突っ込んで出て行く。

同時に幾重にも放たれる一撃必殺の毒針達！

だが、剣魔を使ってエレベーターから出たシオンには針が追いつかず、シオンが通った後を穿つのみであった。

更に。

「スバル！ ギンガさん！ もう一発！」

「おおおおっ！」

「はああああっ！」

—轟！—

叫びを頷きに変えて、再び双発のリボルバーシュートが放たれる！

渦巻く衝撃波は、今度も過たず虫達を駆逐していった。

作戦、第一段階完了。

これより、第二段階に移行する――。



所変わり、グノーシス月本部『月夜』

その第一位執務室で、彼女は部屋の主である叶トウヤに向き直っていた。

高町なのは。彼女が。

やや緊張した面持ちで、なのははトウヤを見る。
そんな彼女に、トウヤは微笑を浮かべた。

「いきなり呼び出して悪いね、なのは君。日本支部に向かう前に君と話して置きたい事があってね」

「いえ……」

すぐに、なのはは首を横に振る。トウヤはそれに微笑を少しだけ苦い物に変えた。

ユウオに入れてもらった紅茶を一口飲む。

なのはも、倣うように出された紅茶に口を付けた。

暖かいダージリンの香りが心を落ち着かせてくれる。

その香りと味を楽しむと、トウヤはカップをマホガニーに戻して、
なのはに向き直った。

「さて、話したい事な訳だが――。単刀直入に聞こうかね。なのは君、プランはどうなってるのかね？」

「……？ 何の事ですか？」

「当然、決まっている。」タカト攻略の為のプランだよ」

直後。ぶっと、それを聞くなりなのはは吹き出した。
器官に入ったか、盛大にむせ返る。

トウヤは、そんななのはに構わず言葉を続けた。

「――あれの手強さは並では無いからね。……ああ、勿論恋愛的な

意味だよ？ 勘違いしないように」

「な、なんで知って……！」

流星に、なのはが声を上げる。

無理も無い。彼女はタカトに告白した事を誰にも言ってはいないのだから。

フェイトや、はやては若干疑っていた節はあったものの。それとて確信していたとは思え無い。

なら、何故トウヤが知っているのか――。

愕然としてこちらを見るなのはに、あくまでも優雅にトウヤは微笑む。

そして、懷に手をつ突っ込むとある物を取り出した。

小振りな録音機器を。

それを、トウヤはぽちっと再生して見せる。

『タカト君を、私が幸せにしてあげる』

『なん、で……』

『好きだから』

「きゃあああああ!？」

録音機から響くのは、いつかの会話。

なのはからタカトへの告白の場面の会話であった。

響いたそれに、悲鳴を上げるなのはにトウヤは優しく微笑んだ。

「いや、いい告白だね？　まるで決闘を申し込むような風情すら感じるよ」

「なんで！？　なんで、なんで！？　ふええええ——！！」

「特にこの場面とか、いい味を出してると思うねえ……」

『タカト君の事が好きだから、だから。タカト君が幸せになれない事が、幸せを分らない事が納得いかない、イヤなの』

「いやあああああ——！！？」

改めて聞かされると、とんでも無く恥ずかしい。

と、言うより自分の告白の場面などを聞かされるなど、精神性の拷問以外何物でも無いのだが。

しばらく、トウヤは録音していた告白場面を流し続け、なのはは恥ずかしさで身もだえる。

やがて、再生が終わるとなのはは疲れ果てたのかぐったりと肩を落としていた。

「うう……。なんで、録音なんてしてるんですか……」

「分かりやすく言うとな私の趣味だ。まあ個人の試聴用にしか使わないので安心してくれたまえ」

無論、そんな事で安心出来る筈も無い。

ちなみに再生されている真っ最中に没収しようとしたのだが。見事に阻止されてしまった。

そこは、流石第一位と言える。

……性格は破綻しているが。

まだ顔を紅潮させてうなだれるなのはを、トウヤは見て。
やがて、その顔はひどく真面目なものとなった。
なのはを静かに見据える。

「……ところで、これは本気かね？」

「え？」

「本気かね？ と、聞いているのだよ。タカトを幸せにしてあげる
と言う君の言葉だ」

問われ、顔を上げたなのはにトウヤは静かに告げた。

その顔は先とまるで違うもの。

どこか、厳しいものを表情に浮かべて、トウヤは続ける。

「あれを幸せにする事は、アサギさんも、シオンも、私も、……ル
シアにさえ、出来なかった。”傷”。タカトの欠落を君は知った筈
だね？ それでも、なお。タカトにこの言葉を叩き付けた君を私は
認めよう。……その上で聞いているのだよ。本気……。いや、”出
来る”と思っているのかね？” タカトを幸せにする事なぞ」

声に感情は籠っていない。

トウヤにしては、ひどく珍しい事に無表情で彼は、なのはに問う
ていたのだ。

なのはは、そんなトウヤに一瞬だけ呆然として。
でも、次の瞬間には迷う事無く頷いていた。

「――はい」

そう、真っ直ぐにトウヤを見据えて。

「出来るかどうかは分かりません。どうやったらいいかなんて考え

つきません。……でも」

真っ直ぐにこちらを見据えるトウヤに応えるかのように、挑むように。

なのはトウヤを見続けたままに言葉を紡ぐ。

だって、そうしたいから。

タカトを幸せにしたいから。

一緒に幸せになりたいから。

だから。

なのは、その言葉を告げる。

想いを、言葉にして。

「タカト君を幸せにしてみせます」

そう、真っ直ぐに彼女はトウヤへと想いを告げた。

トウヤはしばし、それを聞いて余韻に浸るように目を閉じる。

やがて、その口元に笑みを浮かべた。

「——いい答えだね。だが、それは君が思っている以上に困難だよ？
それは、理解して置きたまえ」

「……はい」

トウヤが浮かべた笑みに、なのはも微笑む。

認められたと、そんな気がして安堵したのだ。

そんな彼女に、トウヤは若干温くなった紅茶を口につけた。

「さて、君の答えも聞けた事だし。私も手伝うとしようかね。なのは君、敵を知れば百戦危うからず、と言う言葉がある。――」タカトの女性の好み”を知りたくは無いかね？」

「――っ！？ あるんですか！？」

思わぬ言葉に、なのはは身を乗り出す。

まさか、あのタカトに女性の好みなんてものがあるとは。

あまりに意外過ぎるその言葉を告げたトウヤは、そんななのはを、両手を上げて制止する。

「まあ落ち着きたまえ。――それを聞かせるに当たっては、流石に条件があつてね……。この情報は私しか知らない超重要機密事項なのだよ。故に代価を貰おうと思ってね」

「……代価、ですか……？」

「うむ」

まさか、そんな物を要求してくるとは。

なのはは流石に躊躇する。

そんな彼女に、トウヤは悪代官よろしく邪悪な笑いを浮かべた。

「ふふふ……。知りたくは無いかね？ なにせ、”あの”タカトの好みだ。この機を逃しては、この先聞く事は叶うまい。さて、どうするかね……？」

「う、うう……！」

トウヤの条件とやらの凄まじく嫌な予感を覚えるが、それ以上に

それはあまりにも魅力的過ぎるものであった。

何せ、”あの”タカトの好みである。

恋愛感情抜きにしても、知りたいと言うものであった。

なのは、うんうん唸り。

そして――。

「だ、代価、て何ですか？」

そう、問うた。問うてしまった。

まるで悪魔の取り引きだなあと、なのはは思う。

そして、それはあんまり間違っていない。

トウヤは、そんななのはに、にやりと笑い。

「何、そう難しい事じゃないさ。今すぐにも出来る事だよ。君に要求する代価とは、ただ一つ！」

ずびしっ！ と、何故かトウヤはなのはに手を差し出す。

それはは、まるで貴婦人をダンスに誘う仕種で――。

そして、トウヤはなのはに要求を明かしてみせた。

「今、君が履いているパンティー。それで手を打とうじゃないかね！？」

一撃！一

次の瞬間。どこからともなく現れたユウオ・A・アタナシアの一撃が変態の顎にぶちかまされ。

変態は、そのまま盛大に天井へと頭から突き刺さった。

（中編に続く）

第五十三話「強襲」(前編)(後書き)

ども〜♪ テスタメントです♪

ようやくと更新出来ました〜 (汗)

メッセーじや、メール。感想等など、滞りまくりですが順次返して行きます。

右手は相変わらず痛いですが、頑張ります♪
では、中編でまたお会いしましょう♪

第五十三話「強襲」(中編1)(前書き)

ど、どうも(汗)

お待たせしました。漸く中編1をお届けします♪

いやあ、今回は五部くらい行っちゃうかな!?

……いや、本当すみません。

プロットを組み直したら、こんな事に(汗)

大丈夫か、おい……(汗)

右腕も漸く完治! ばりばり書いていきます!

……と、言いながら次はノクターンの方を書きますが(笑)
では、中編1。どぞ〜♪

第五十三話「強襲」（中編1）

「よっ、と」

剣魔でエレベーターから抜け出し、一気に虫達を突破したシオンは剣魔を解除。

飛行魔法を発動して、空へと飛び上がった。

その頭上ではやはりと言うべきか、視界いっぱいには虫達が飛んでいる。

それらが、飛び上がって来たシオンへと顔（？）を巡らし。

即座に、彼へと飛んで来た。

だが、それを見てシオンは短く舌打ちする。

”こちらに来た数が少ない”。

ティアナの作戦を完了する為には、虫達全てを引き付けなければならない。

それなのに、自分の元に来た虫は約半数程。

後の半分はシオンを無視して降下していた。
そこにいる先には――。

「させるかボケっ！ 剣牙ア！」

一閃！

虫達の行く先を察知して、シオンが振り向きざまに放つは武ノ太刀、剣牙。

放射状に放たれた魔力斬撃は、虫達を複数体飲み込んで破壊する。

虫達の総数から言えば、ほんの僅かな数。

だが、こちらに注意を向けさせる事は出来た。

案の定、降下していた虫達もこちらに向かって来る。

それに、シオンはほくそ笑もうとして。

しかし、そのシオンを悪寒が襲った。

すぐに、また正面に振り向く、が。

それが間に合わない事を察した。

そう、元々シオンに向かって来ていた虫が居た筈である。

当然、その虫の到達速度は後でこちらに來た虫より早い。

シオンが剣牙を放っている間に接近を終わらせていたとしたら――
。

――後は、攻撃するだけ。

――閃――

そんなシオンの想像を肯定するように、彼へと放たれる毒針！

回避は間に合わない！

「ちいっ！」

一壁！一

鋭く舌打ちしながら、シオンは右手を開いて背中に突き出す。そこから展開するのは、カラバの魔法陣――シールドだ。

回避が不可能ならば防御するしかない。

しかし、シオンはシールドを展開しながら顔を歪める。
何故か？ その理由はすぐに来た。

シールドに撃ち放たれた毒針が接触する。
本来ならば、楽に防げる筈の毒針。弾かれて、落ちるのが普通だろう。

が、それは違った。

シールドに毒針が接触するなり、シールドを”中和”していく。
そのまま、毒針はこちらに押し進んで来た。
魔力結合を解いて、シールドを強制的に通り返けようとしているのだ。

――AMF。

それも針に、それが仕込まれていたのである。

ある意味、シオンの単一固有技能『零落零無』に使用方法が似ている。

あれもまた、敵の防御を無効とする能力であったから。

シオンは顔を歪めたままで、こちらに進んで来る毒針を見据え。

突如、シールドを解除した。

そんな真似をすれば、防ぐ物が無くなった毒針はシオンへと殺到する。

当然、その毒針も例外では無い。

シオンへと再度進もうとして。

その前にシオンは動いていた。

シールドを解除した右手を刀の柄に添えて、ゆるりと円を描いて刀が振るわれた。

そこから発生するのは、攻撃性の空間振動波――。

――神覇、四ノ太刀！

「裂波ア！」

一塵！一

咆哮するシオンの叫びのように、破壊振動波は毒針に収束する！

シオンに突き進んでいた無数の毒針は、その波に晒されてあっさりと塵に還り。

さらに振動波は、そのまま突き進み毒針を放った虫達の^{くさくさ}尽くを針

と同じ末路を辿らせた。

それらを尻目に、シオンは振動波で開いた道を飛翔して駆け抜ける。

向かい来る虫達、そのど真ん中。

”最も危険な場所に”。

シオンは自ら飛び込んで行った。

「シオン……」

そんなシオンを地上を疾走しながら見上げて、スバルがぽつりと名前を呼んだ。

ティアナの作戦の中で、最も危険な役割。

それを行っているシオンの名を。

遮る物の無い戦闘空間たる空中戦では、彼しか万を超える虫達相手に空中で渡り合えないと言う判断から、ティアナがシオンにそれを任せたのである。

シオン自身もあっさりと請け負ったのだが……。

そんなシオンが、やはりスバルは心配だった。

相変わらず、無茶を好む彼が。

シオンがああ言った性格だとはよく知っているし、理解もしている。

その無茶に助けられた事だって沢山あった。

だけど、それでも。

そんなシオンが、スバルは心配なのだった。

……無茶をして欲しく無かった。

でも、状況はそれを許さなくて。

彼の無茶に甘えるしかなかった。

やだな……。

強く、そう思う。

シオンに無茶ばかりさせたく無い。

けど、それをさせているのは自分達の力不足のせい。

それが分かっているからこそ、なおさら嫌だった。

「……スバル？」

「……っ。ギン姉？　どうかした？」

そんな風にシオンを見つめていると、隣で同じく走っているギンガから声を掛けられた。

はっと我に返って、スバルが振り向く。

そんなスバルに少しだけギンガは心配そうに眉を寄せた。

「……あまり、気にしない方がいいわ。シオン君はシオン君。スバルはスバルなんだから」

「え……？」

「シオン君。強くなっちゃったものね。けど、そのせいでまた無茶を押し付けてる。……そう思ってたんでしょう？」

ギンガの問い掛けに、スバルは目を大きく見開く。

それは、正しく今。スバルが考えていた事に他ならないから。

ギンガはそんなスバルに微笑する。

「大丈夫。スバルは強くなれるわ。……私達だって、強くなる。その為にここまで来たんだから。——それに、ちょっと悔しいし。ね？」

「あ……」

そう言って、ウィンクしてくれたギンガにスバルは一瞬だけ呆然として。

でも、すぐにいつもの笑みとなった。

「うん！ そうだね。……そうだった。ここに強くなりに来たんだよね！」

嬉しそうに笑うスバルにギンガは微笑み続けながら頷いてくれる。それを見て、スバルもまた頷いた。

そう、強くなりに来たのだ。ここには。

だったら。ううん、だからこそ。

そう思い。スバルは再びシオンを見上げる。

その先でシオンは、空を飛びながら虫を刀で両断していた。

シオンの無茶に甘えない程に。

シオンの無茶に頼らない程に。

”シオンに頼られる程に”！

強く、なる！

自分が強くなるべき理由を得て、スバルはぐっと拳を握った。

今はまだ無理だけど。それでも、いつかそうなりたいと願って。

だから！

「今は、ティアの作戦を成功させるよ……！ 行こう！ ギン姉！」
「ええ！」

叫び、一気にマッハキャリバーの速度を加速させる。

そんなスバルに、ギンガも頷いて後ろに続いた。

ティアナの作戦を完成させる為に。

スバルとギンガは、自分が向かうべき場所へと駆け抜けて行った。

決意を新たにした、スバル。
しかし、彼女はすぐに知る事になる。

その願いは軽々には決して叶わないと言う事を。
それがとても難しい事を。

彼女は知る事になるのだった。



なんだ……？

一閃一

無数にシオンへと放たれた毒針。

それに、しかしシオンは自分がどこまでも落ち着く感覚を得た。

三百六十度、くまなく自分に突き立たんとする殺意の針――。

本来ならば、それを回避する術は無い筈であった。

フィールドを展開して、毒針の速度を遅らせて裂波で塵に帰す。

それくらいしか出来ない。

シオンの空間把握能力を持っても知覚出来ない筈の毒針すら
もあるのだ。

どうにか出来る筈が無い。

その筈、” だった”。

だが――。

” 分かる”。

シオンは迫り来る毒針達を前に、そう思う。

今にも突き刺る筈の毒針達。

更に逃げ場を無くすように、追加で毒針が放たれる。

それら一瞬ごとに起こる全ての事象が、どこまでも致命的に己の命を侵さんと追い掛けて来る――。

その全て、” 発生する事象の必ず一步先をシオンの感覚は知覚する”。

――まるで、知覚だけが時間の速度を超えたかのよう。

その急激な知覚の加速の中で、刀を振るう！

一閃！――

一瞬。たった、一瞬である。

その一瞬で、シオンは” 全ての毒針達を迎撃してのけた”。

毒針達を見もせずに、むしろ物憂げに振るわれた刀が。

まるで、吸い寄せられたように毒針をいなし、さばき、受け止めて見せたのであった。

ぱらぱらと迎撃された毒針が、下に落ちて行く。
その中で、シオンは腰に手をやる。

――すると、そこからするりと刃が滑り落ちてグローブに包まれた手の中に落ちた。

スローイングダガー。

投擲専用の短剣である。

その形状は、かのチンクの固有武装。ステインガーにも似ている。

それを、シオンはバリアジャケットに仕込んでいたのだ。

暗器等の、隠し武器を仕込める仕様のバリアジャケット。

バトルフォーム。それが、シオンの新たな姿の名であった。

取り出したスローイングダガーをシオンは無造作に投げ放ち。

――閃――

迷い無く、虫へと突き立った。

それを合図にしたように、虫達は羽を鳴らしシオンへと襲い掛か
らんとした。

――それより早く、シオンは動いていた。

――裂！――

前へと展開した足場に踏み込みながら、刀を振り落とす。
その一閃は、容赦無く虫を縦に叩き斬り――。

止まらない！

「あああああ……！」

一閃！――

一裂！――

一波！――

縦横無尽！

視認すら許さずに、シオンの刀が虫達を蹂躪する！

見る必要は無い。いらぬ。

自分が感じた場所に虫がいる。その確信があった。

放たれた毒針すらも脅威にならない。容赦無く迎撃していく。

その異様なまでに澄み渡り、冴えて行く知覚。

まるで自分の五感の他に、別の誰かが加わっているかのようにあった。

――その知覚が伸び、空間を支配し、虫の動きが全て読み取れる。

――だが。

あくまで、勘だ……！ この感覚に頼って戦い続けられれば、いつか外れる！

シオンは、その知覚を”勘”と言い切った。

所詮はあやふやな感覚の一つでしか無い、と。

そして外れた時が終わりになる。

一撃決殺の手段を有する、この虫達ならば確実にそうなる！

ならば、可能な限り早く。

一撃で敵を倒していかなければならない。

そうでなくては、この戦い方は続けられない！

そこまで思い至るにあって、シオンは慄然とした。

だからこそ！ 多対一の条件下で”常に初手の一撃で敵を無力化する”タカ兄いや、トウヤ兄いの戦い方があった訳か……！ そら化け物な筈だ。こんな戦い方をずっと続けられているんだからな！

納得すると、思考とは別に虫を断ち斬る。

――それで、近場の虫は全て撃滅していた。

それを確認して、シオンは刀を翻して遠巻きに居る虫に突き付ける。

にいと笑った。

「悪いが――。負ける気がしねえよ」

そう言うなり、シオンは刀を突き付けた虫へと駆ける！

そんなシオンを、まるで恐れるかのように虫達が一気に殺到した。



「あのバカ……」

学院屋上。

そこで、ティアナは遠目に映るシオンを見ながら、ぽつりと呟いた。

自分の作戦通りに、虫達を引き付けるシオン。

いや、正確には”それ以上の仕事”をやっているシオンに。

まさか、あれほどとは思わなかった。

ティアナは胸中、そう思う。

先程の戦いである。

シオンは向かい来る虫達の毒針をあつさりと払いのけて、さらに虫本体達も苦もなく打倒せしめていたのである。

イクスを失い、弱体化していたと思っていたシオン。

——とんでも無かった。今、シオンは明らかに強くなっている。

あるいは、なのは達と同じレベルに。

あるいは、彼の友達と同じレベルに！

今、シオンはそこまでの段階に進もうとしていたのである。

「あいつ、一人で虫全部潰しちゃうんじゃないでしょうね……？」

あながち冗談では無く、それをしかねない。

それほど、今のシオンは圧倒的過ぎた。

だが。

《流石に、それは無理じゃないかな？》

「ギンガさん」

呟いたティアナの眼前にウィンドウが展開して、ギンガが苦笑混じりに言ってくる。通信だ。

向こうでもシオンの大立ち回りを見ているのだろう。

ティアナから視線を時折外しながらギンガは言葉を続けた。

《今のシオン君は凄いいけど……。あんな戦い方、ずっと続けられるとも思えないわ》

「はい。分かってます」

ギンガの台詞に、ティアナは即座に頷く。

あのシオンの戦い方は、一步間違えば致命的な隙を作りかねない戦い方であった。

彼の兄達と同様の戦い方。

逆を言えば、それだけの実力がなければ出来ない戦い方なのだ。

言ってみれば、命懸けの綱渡りをずっと続けているようなものである。

少しのミスも許されない。

そんな戦い方。

体力はともかく。精神が持ちそうに無い。

実際、スバル並の体力バカなシオンの息が若干乱れて来ていた。

精神的な疲労を覚え始めているのだろう。

それを見るなり、ティアナは顔を歪めた。

「GINGAさん。そっちは？」

《こっちは準備完了よ。スバル？》

《……あ……！ うん、ごめんギン姉。こっちも大丈夫だよ！》

繋げた通信に、スバルが慌てて答える。

シオンの様子でも見ていたのか。

ティアナは無理も無いと思いながらもスバルに頷く。

「なら後は、私の番ね……」

そう言うと、ティアナは立ち上がる。

クロスミラージュを両手で構えて虫達を中心点に掲げた。

告げる――。

「散布魔力確認。これより、集束開始！」 スターライト・ブレイカー”で敵を殲滅します。準備はいい？ スバル！ ギンガさん！」

《うん、いいよ！ ティア！》

《こっちも大丈夫よ》

スバルとギンガが、そんなティアナに応えて頷く。
それを聞いて、最後にティアナは叫んだ。

未だ、最も危険な場所で戦っている彼に。

「――シオン！」

その叫びに、シオンは薄っすらと笑った。



ジェイル・スカリエッティを拘留していた軌道拘置所とは、別の世界の軌道拘置所。

その内を、アラートが激しく鳴り響く。

それを聞きながら、伊織タカトは悠々と軌道拘置所内を歩いていた。
た。

こう言った音は基本万国共通なのだと、どうでもいい事を思う。

そして――。

―煌！―

そんなタカトに真正面から撃ち込まれる魔力砲撃！
それは、迷い無くタカトに直撃して。
更に数十発の砲撃と射撃魔法が彼に撃ち込まれる！

―轟！―

―撃！―

それでも、まだ飽き足らないとばかりに撃ち込まれていく光砲達。
数分程もそれは絶える事無く続いた。

やがて、砲撃が収まると周りからぞろぞろとデバイスを手に持つ
者達が現れる。

管理局、局員。武装隊の面々である。

辺りが数千にも及ぶ砲撃と射撃魔法による煙りに包まれる中で、
彼等は油断無くデバイスを構える。

そして、煙りが晴れて――。

「天破光覇弾」

――そんな声が彼等の耳朵を打った。

—轟！—

直後、煙りを突き抜けて現れる特大の光弾！

それは容赦無く、軌道拘置所内に炸裂し。
特級の爆発を一気にぶち撒けた。

—煌！—

—爆！—

爆発は容赦無く、武装隊の面々を巻き込んで吹き飛ばして行く。
光弾自体を直撃された訳でも無いのに、それだけで彼等はまるで
人形のように空中を舞って、床に叩き付けられると動かなくなった。
そんな中で、その光弾を放った当人であるタカトは未だに立ち上
る煙りを切って現れる。

周りを見渡して、肩を竦めた。

直撃はしなかったが、爆発に巻き込まれた武装隊達は見ても悲惨
な状態になっている。

基本的に非殺傷設定を全く使わないタカトだ。

先の光弾も例外では無い。結果として、彼等は死にこそはせずと
も大怪我を負ってしまったっている訳だが。

「……約束は殺さない事な訳だしな。うむ、手足が逆を向いたりし
ているがセーフな筈だ。……多分」

そんな事を言いながら、タカトは一人うんうんと頷いた。

これを、当の光弾を叩き込まれた彼等が聞けば激怒は間違いないだろうが。

肝心の彼等は全員昏倒している。

そんな文句ツッコムが来る筈も無かった。

そして、タカトは誰も彼もが倒れている中を再び歩き始める。

無人の荒野に行くが如く、真っ直ぐに拘置所内を進み。

「……ナンバーズが拘留されている場所はどこだ？」

そんな身も蓋も無い事を呟いた。

何故、彼がナンバーズを探しているのか。

それは僅か三十分程前まで話しは遡る――。

「ナンバーズ？ それを助けて来いと？」

タカトが偶然にも突っ込んだジェイル・スカリエッティを拘留していた軌道拘置所。

そこではジェイルが拘置所内の端末を操作していた。

そんな彼から告げられた言葉をタカトは繰り返す。

ジェイルは端末を操作し、拘置所内のワーカ―ロボット達に拘置所に突っ込んで座礁^{ざしょう}している次元航行艦を起こさせながら頷いた。

「そう、私の大切な娘達なのだがね。君も見ただろう？ 私の研究所に居た彼女達だよ。あの娘達も連れて行きたいから君に助けて来て貰^{もら}いたいのだよ」

「ああ、あいつらか。……必要か？」

漸く思い出し、頷きながらも聞いてみる。

はっきり言うと、タカトは彼女達をさほど評価をしていない。

あくまで、基準が自分となっている為。どうしても彼女達を戦力^{みな}として見做^{みな}す事が出来ないのだ。

言ってしまうえば、自分一人居れば問題無いだろう？ と、言いたい訳だが。

そんなタカトにジェイルは振り向きながら苦笑した。

「君一人ならともかく、私も追われる身となったからねエ。私も身を守りたいのだよ」

「いざとなれば俺が守るが？」

「それは絶対かい？」

逆にそう問われ、タカトは肩を竦める。

確かに、彼にとってジェイルのガードは優先順位が低い。

ユーノやヴィヴィオと比べると、どうしてもそうになってしまう。

目的は彼等を守る事なのだから、これは仕方ない。

タカトは苦笑いを一つ浮かべると立ち上がった。

「いいだろう。了解だ。そいつらはどこに居る？」

「それぞれ別の無人世界の軌道拘置所に拘留されているからね。複数の世界に行って貰うけど、いいかい？」

「構わん。1、2時間もあれば全員連れて来れるだろう」

この軌道拘置所内の看守と武装隊の配置からタカトはそう予測を立てる。

それにこそ、ジェイルは本当に苦笑した。

管理局の誇る、最高レベルの監獄。

それを彼は事もなげに1、2時間程度で”攻略”してのけると言っているのだ。

それも、違う世界にある複数の軌道拘置所を。

改めて自分が目指していた者の凄まじさを思い知らされる台詞であった。

「君が彼女達を連れて来る間に私も次元航行艦の修理を終わらせよう。よろしく頼むよ？」

「ああ、任せろ」

——そうして、彼はジェイルと同じく別の無人世界に拘留されたナンバーズの脱獄に向かう事になった訳である。

時空管理局としては、非常に、そしてとんでもなく迷惑な事にだ。

早々と、この二人が手を組んだ事が最悪な事だと分かるエピソードであった。



「……ここか？」

あれから、出会う武装隊の面々や管理局員達を適当に叩きのめしながらタカトは歩き。

最終的にやはりと言うべきか、ここの所長から専用端末を奪って漸くタカトはそこに着いた。

ナンバーズ、No. 1。

ウーノが囚われている牢獄に。

思ったより時間を喰ったと彼は思うが、それは道に迷った彼が悪い。

とりあえずは、牢獄のごつい扉を破ろうとして。

……はて、どうするか。

よくよく考えれば鍵等を奪い忘れた事をタカトは思い出した。
当然、鍵がなければ開かない訳だが――。

どうでもいいかと思い直した――。

――直後。

一撃！一

問答無用に特殊合金製の扉に叩き付けられる蹴り！

それは一撃で真ん中から扉をへし折り、勢いのままに牢獄の中へと弾き飛ばした。

「……邪魔をする」

扉を文字通りに蹴破ったタカトは礼儀として、それだけを言い中に入る。

そこには、あまりの出来事に普段は切れ目な彼女が目を大きく見開き、こちらを見ていた。

最初のナンバーズ。ウーノが。

彼女はタカトを見るなり、声を上げる。

「貴方は……。伊織タカト？」

「ほう？ ジェイルもそうだが、一度しか顔を見ていない俺をよく覚えてるな？」

「……いえ、それ本気で言ってますか？」

「む？」

顔を合わせて早々にそんな事を言われてタカトは首を傾げた。

そんな彼の様子に、変わってないとジェイルと同じ事を思いながら、ウーノはため息を吐いた。

彼程、インパクトがある人間などそうそう居る筈も無いから出た言葉である。

忘れろと言う方に無理があるだろう。

未だに首を傾げた彼に、ウーノは再び嘆息。
そのまま用件を尋ねる事にした。

「それで、御用件は何でしょう？」

「む。そう言えばそうだったな。単刀直入に言おう、ウーノ。貴様の主人の依頼で来た。ついて来て貰おうか」

「……主人……？ Drの事ですか？」
「そうだ」

問われ、タカトは短い言葉で肯定する。

そして、それを聞いて。彼女はあっさりと頷いた。

にこりと微笑みながら立ち上がる。

「わかりました。行きましょう」

「……またえらく早い決断だな。一応言っておくが、これは脱獄だ。罪がまた大きくなるぞ？」

「構いません」

念を押して解うタカトに、ウーノは即座に答える。

何故なら、答えなんて最初から決まっているのだから。

だって。

「Drが呼んでいるのでしょうか？ なら、私は行くだけです」

その答えにこそ、タカトは肩を竦めて苦笑した。

まずは一人目、ウーノを回収。

残るは、三人――。



「ふ、ふふ……！ 最近のユウオは激しいね！？ あやうくあつちに逝ってしまう所だったよ？」

「……言葉は選ぼうよ！？ 次は『月夜』から放り出すよ？」

『月夜』第一位執務室。

そこで、先程。完璧なセクハラ要求を受けた高町なのはは、目の前で行われている夫婦漫才に乾いた笑いを浮かべた。

そのセクハラ要求は、ユウオのツツコミにより難を逃れたのだが。

しかし、天井に頭から突っ込み。逆八ツ墓村状態だったにも関わらずトウヤは相変わらずである。

その丈夫さは、ある意味尊敬出来なくもない。

そんな風に思っていると、漸くトウヤはなのはに視線を戻した。隣で監視とばかりにユウオが張り付いているのにはとても安心してしまう。

「さて、話を戻そう。……タカトの好みだが。代価は、ブラでいい――。いや！？ 待ちたまえユウオ！ 二度は流石に私も逝き切ってしまうよ！？」

「なら、バカ言っていないで早く言いなよ！？ ほら、ボクも聞きた

いし」

「……結局、君も聞きたいのではないかね……」

即座にユウオが拳を持ち上げたのを見て、流石にトウヤが訴えるが、ならセクハラ要求を止めればいいのにと思わなくもない。

……トウヤなので、今更そこら辺は期待していないが。

コホンと咳ばらいを一つ。

そして、トウヤは漸く語り出した。

「アレの好みはね？ ”強い女性”だよ」

「……え？」

”強い女性”。自分より強い、ね。……それがタカトの好みだと言ったのだよ」

あっさりと言われたものだから。つい、なのはは聞き返す。

それにトウヤは丁寧に教え子に勉強を教える心持ちで繰り返してやった。

が、それにも関わらずなのはは呆然とする。

それは、どう言う事なのか？

ユウオも隣でポカンとしている。

予想外過ぎる答えに二人が我を忘れているのを眺めながら。トウヤは昔、タカトに問うた事を思い出していた。

まるで大切な宝箱から宝物を取り出すような、そんな顔で。

強い女^{ひと}が好きだ。

そう告げた、異母弟の言葉を思い出す。
相変わらざる無表情で、それを自分にだけは教えてくれた異母弟
の言葉を。

心の強い、女^{ひと}が。

もし、俺より強い女^{ひと}がいたならば――。

きっと、俺はその女を好きになる。

――そう告げた、異母弟の言葉を。

やがて、なのはとユウオが我に振り返り始めたのを見てトウヤは微笑
んだ。

「さて、なのは君？ 君はタカトに自分より強いと認めさせる事が
出来るかね？」

そう告げて、トウヤは席を立つ。

最初から答えを期待した訳では無いのだろう。

なのはの方を見ずに、微笑み続け、そして――。

「ゼグンドウス。何があったね？」

唐突に、そんな事を言った。

その言葉に、なのはがえ？ と思った。

瞬間。それは、唐突に現れた。

黒のローブを見に纏う金髪金眼の青年が。

本当に全く突然に現れた為、どのようにして現れたか分からなかったくらいだ。

いきなりの事態に目を丸くするなのは置いて、彼――。ゼグンドゥスはトウヤに口を開いた。

【”ネットワーク”に感ありだ。我が主よ】

「……ネットワークに？ と、するとシオン達の方に何かあったかね？」

問う。しかし、ゼグンドゥスは答えない。

変わりに、手を差し出した。

そこにウィンドウが展開する。

映るのは、必死にキャロに心臓マッサージを施すシオン！

「キャロ！？ トウヤさん、これは――！？」

「ふむ。少々厄介な事態のようだね？ こちらに連絡が来ないと言う事は余程、切羽詰まってるようだ」

そう言うのと、慌てるなのはに手を差し出し制止する。

やがて、画面の中でみもりが何やら処置を施したのか、キャロは息を吹き返したようだった。

それを見て、なのはは漸くホッとする。

しかし場面が変わると、それも消えた。

次に映った画面では、シオンがただ一人。謎の虫と戦っていたからだ。

「どうやらあの虫がキャロ君があのような原因のようだね？
道理で連絡が来ない筈だよ。通信も妨害されていると見た方がいいね。――待ちたまえ、なのは君」

トウヤの台詞を最後まで聞かずに駆け出そうとした、なのはを彼は即座に止める。

なのはは何故と聞こうとして。

それより先に、トウヤが言って来た。

「シオンの方は陽動だよ。本命はこちらだ」

そう言うと、トウヤはウィンドウを指差す。

そこには数隻の次元航行艦が、地球周辺宇宙に次元航行完了している場面が映っていた。

「陽動と言うよりは、どちらも本命かね。悪いが、そう言う訳だよ。こちらの迎撃に参加して貰いたい。――大丈夫さ。今のシオンを倒すのには”第二位レベル”がいる。あの程度、どうしても切り抜けるだろうね」

「……………」

なのはは無言。相当な葛藤があるのだろう。

しばし悩み。やがて、こくりと頷いた。
それを見て、トウヤは動く。

「よし。では、ユウオ。これより『月夜』は第一級戦闘配備。はや
て君にも連絡を取ってくれたまえ。」アレ”を出すよ？」

「うん。分かったよ。任せて」

「さて、では行こうかね？　なのは君」

「あ……。その前に一つだけ。さっきのは一体……？」

前を歩こうとする、トウヤに問うて見る。
先のゼグンドウスに見せられた画像達だ。

あれは、普通の通信等では無い。

全然別物だと、なのはの直感は訴えていた。

そんな、なのはの問いにトウヤは一度だけ苦笑した。

「何。彼は”時の精霊”でね？　少し、”過去の情報を再現”して
もらっただけさ」

「過去……の……？」

「そう、過去の情報距離を零とする魔法。――これを、”ネットワ
ーク”と呼ぶのだよ」

そううそぶくと、彼は早足で執務室を出る。
そんな彼に、なのはも続こうとして。

その前に、続きの言葉が来た。

「私は過去を力とする者。――故に、私に知り得ない過去はそうそ

う無いよ？」

そう言って、トウやは『月夜』の通路を歩き出した――。

(中編2に続く)

第五十三話「強襲」(中編1)(後書き)

はい♪ またもやいい所で終わる中編1(笑)

ええ、これはもはやテストメントクオリティなので、御容赦を♪

……い、いや。石は勘弁したって下さい(汗)

ではでは、次回をお楽しみです♪

第五十三話「強襲」(中編2)(前書き)

——はい、テストメントです♪

長かった……！ 長かったよう！ ようやく本編を更新です(涙)
いや、本当お待たせしてすみません(涙)

と、言っても中編2ですが(笑)

楽しんで頂ければ幸いです♪
では、どうぞ……♪

第五十三話「強襲」（中編2）

—轟！—

風が鳴る。音を引き裂き、空気をぶち抜いて、風が。

—弾！弾！弾！弾！—

その風に撃ち込まれる幾千、幾万の光射。

尾を引き、それは風に疾走。しかし、風は一切構わず。むしろ光射に向かい駆け出し——。

——直後、”風が消えた”。

そして。

—撃・撃・撃・撃・撃—

—撃！—

人が空に舞った。光射を放っていた者達が。

まるで人形のように脱力したまま冗談のように、くるりくるりと回転して。やがて地に落ちる。

落ちた後も、彼らは身動き一つしなかった。

一瞬にして、意識を刈り取られたのである。見れば、彼らは誰も彼も顎骨や頬骨といった箇所を陥没させられてしまっている。

よく見れば彼らは、それぞれ似通ったバリアジャケットを展開していた。

管理局、武装隊の基本的な仕様のそれを。

やがて、風は――。否、風では無い。

”彼”は、全てを睥睨して、その姿を現した。

ナンバー・オブ・ザ・ビースト。

伊織タカトは。

武装隊の面々を叩きのめした彼は、悠々と戦場となった場所を見て。

「……どうして、魔法を使わなかったんです？」

そんな声を背後から聞いた。

振り向くと、そこには冷たい眼差しの女性が居る。

元ナンバーズの一人。ウーノが。

彼女は、昏倒させられた武装隊の人間を踏まないように気をつけながら歩いて来た。

そのまま、続きを問う。

「貴方なら魔法を使えば、一瞬で終わった筈。何故、そうしなかったんですか？」

そう言う彼女の足元には、タカトにぶん殴られて沈黙している彼

らが居る。

それを見もせずに、タカトは肩を竦めた。

「何、つまらん理由だ。水迅が便利だからと、そちらばかり使っていては技も錆びるのでな？　言わば修練だ。こいつらはそれに打ってつけだ」

あっさりとそう答えると、タカトは再び前を向いて歩き出した。

ウーノも、それに慌てず着いて行く。

「……それで？　貴様にはここに居るナンバーズの居場所を探して貰っていた筈だが？」

「はい。既に見つけています。……ここに居るのはセツテ……。貴方とは初顔となりますね」

「と、言うより他の連中は俺の事を知らんだろう？　貴様以外に話した奴はいない」

タカトに言われ。そう言えばと、ウーノも気付く。

最初のインパクトがインパクトだっただけに。あの時、研究所に居た妹達もタカトの事を知ってると思い込んでしまっていたのだ。カメラも破壊されていた為に、一切の記録も残せていないので。実質、タカトの顔を知っているのはトーレと自分。そして、ジェイル・スカリエッティ当人しか居ない。

「すると、ほとんどの妹達は貴方の顔も知らないのですね……」

「その妹とやらは銀髪に眼帯をしている、あの幼女も入るのか？　あれならば見たぞ」

「……なんですって？」

思わぬ言葉に、ウーノは目を見開いてタカトを見る。
それに振り向きもせず、タカトは歩きながら続ける。

「あれならば、何度か顔を合わせたと言った。敵対者としてだがな。
——共闘した事も一度だけあるか……」

「待って下さい。そう言えば聞いてませんでした。貴方。今は何を
をしているのですか？」

銀髪眼帯幼女こと。チンクは確か、時空管理局に今は所属してい
る筈である。

彼女だけでなく、ナンバーズの大半は管理局所属となっていた。

そもそも管理局の軌道拘置所を襲撃して自分達を脱獄させて回っ
ている段階で気付けと言う話ではある。

彼は、ひょっとして——。

「……時空管理局と敵対しているのですか？」
「違うな」

神妙にウーノは聞いて、しかしタカトはあっさりと否定した。
あまりの即答ぶりに、言葉に詰まってしまった程である。

なら何故かを、ウーノは聞こうとして。

「敵対しているのは、時空管理局”だけじゃない”。……そうだな。
現在、管理局本局を占拠し、管理局と敵対しているツアラ・トウ・
ストラ。そして、俺の元所属していた組織、グノーシス。……それ
ら全てと現在敵対中だ」

「……………」

告げられた言葉に問いも忘れて、完全に絶句させられてしまった。
敵対者は管理局だけではない？

それだけでも驚きなのに、どれだけの組織と敵対していると言うのか。

固まってしまったウーノに、タカトは振り向く――。

「俺は今、世界全部に喧嘩を売っている。世界全てが敵と言う訳だな。……どうだ？ やり甲斐があるだろう？」

そう言って、にやりと笑って見せた。

「ここか？」

「……はい、間違いありません」

あれから数分後、タカトとウーノは一つの牢獄の前に居た。
相変わらずの特殊合金製の扉が堅く閉ざされている。

それを見て、タカトはふむと頷き。

「さて、では蹴破るか――」

「そんな真似はいりません。私が今からロックを解除します」

「……………そうか」

自分がやられたような真似を流石に妹にされるのは嫌と感じたか。きっぱりと、ウーノが言うなり前に出る。

それに、タカトは若干いじけながらも場所を譲った。

そんなタカトには目もくれず、ウーノは自分が拘留されていた軌道拘置所の所長からくすねて来た（正確には、タカトがくすねた）端末機を操作し始めた。

僅か数秒で、ここの軌道拘置所内のシステムにハッキング完了。続けて、ロックの解除に取り掛かる。

IS…不可触の秘書。
フローレス・セクレタリー

自分や自分のいる施設をリーダー等の探知から隠す『ステルス能力』と、知能の加速による『情報処理・統括力の向上』。

この二つの能力を総称したものが、彼女のISであった。

特に、情報処理を専門とするこのISからしてみれば施設のハッキングなど容易い事でしかない。

僅か数秒で牢獄のシステムを完全に掌握。

あれ程、堅く閉ざされた牢獄の扉があっさりと開いていく。

「……便利なものだ……」

「そんな事はありません。私の能力は戦闘能力ちからがありませんから。

……セッテ！」

感心したようなタカトに、ウーノは謙遜しながら牢獄内に入り目当ての人物に呼びかける。

はたして、その少女はそこに居た。

牢獄内に設えられた、簡素なベッドにちょこんと座っている。

ウーノの呼びかけに、彼女は硝子のような瞳を向けた。
それを、タカトはウーノの肩越しに見る。

どこことなく、その少女は硝子^{ガラス}細工を彷彿とさせる。

タカトはそんな印象を、彼女に覚えた。

今まで見てきた戦闘機人でも、彼女のように無機質な娘は居なかったように思う。

そんな硝子のような少女は、ウーノを。そしてタカトを見て口を開いた。

「ウーノ……？ どうしてここに？ それに後ろの方は誰でしょう
か？」

「それも説明します。彼は――」

「伊織タカト。ジェイル・スカリエッティの友人だ。あれには俺の
目的に付き合って貰っている。で、ジェイルが貴様達を必要として
いるので俺が呼びに来たと言う訳だ。理解したか？ ならば、共に
来い」

「了解しました」

「伊織タカト……。て、え……？」

セツテが問いに答える間も無く、なんとタカトとセツテは既に同
行の決を取っていた。

啞然とするウーノを余所に、セツテは立ち上がるとタカトは彼女
の手首に目をやり――。

一撃！――

目に止まらぬ速度で貫手を放ち、拘束具のみを破壊してのけた。

セツテは自由になった手を確かめるようにぐると回して、すぐに直立不動となる。

「では、これからどうするのでしょうか？ 伊織タカト様」

「タカトで構わん。ウーノ、貴様もそれで頼む。セツテとか言ったな？ お前を解放した通り、他のナンバーズも解放中だ。で、後二人と言った所だが――。ウーノ？」

「……貴方達、テンポが早過ぎです」

「「……？」」

まだ二人が顔を合わせてから、なんと一分も経っていないのに。既に次の軌道拘置所に行く事になってしまっている。

ため息を吐くウーノを、タカトとセツテは不思議そうに見た。

それに、彼女は諦めたように頭を振り、端末機かぶりを操作する。

「次の軌道拘置所はここです。次元座標は――」

そう言っって端末機に映した次の軌道拘所がある無人世界の次元座標をウーノはタカトに示す。

それにタカトは頷くと同時、その足元に八角形を模した魔法陣が展開した。

次元転移魔法である。その魔法陣は、そのまま広がりセツテとウーノの足元にまで広がった。

「……では、跳躍^とぶぞ。さて、次はどう戦うか……」

「いえ、次からは戦う必要ありません」

「何……？」

最後の部分をウーノに否定され、思わずタカトは彼女に振り向く。
すると、彼女は――。恐ろしく珍しい事に、だが。
なんと、悪戯めいた微笑を浮かべていた。

たまらず、タカトは問う。

「どう言う事だ？」

「百聞は一見にしかず。実際見た方が早いでしょう」

……どうやら話す気は一切無いらしい。

セツテの方をちらりと見ると、彼女は彼女で無表情にこちらをじ
ーと見ているだけ。

それに、タカトはため息を吐き。

「……了解した。では、行くとしよう」

そう言うと次元転移魔法を発動。

彼等の姿は、ゆっくりと光の粒子に包まれるようにして消えてい
った。



『月夜』、格納庫。

月の内部を基地化して作りあげたそこは、従来の格納庫スペース

より遥かに広く出来ている。

そこを進む叶トウヤに高町なのはは着いて行く。

先程、『ネットワーク』でストラの次元航行艦隊を発見した彼は『月夜』に第一級の戦闘配備を発令。

そのまま、ここに直行したのだ。

着いて来たまえと言う彼の言葉に従い、一緒に来たのだが――。

「と、ここだね」

「わぁ……！」

目的地に着いたのか、立ち止まるトウヤに倣いなのはも止まる。そして、目の前にある”もの”を見て感嘆の声を上げた。

全長、数百Mクラス。管理局の基準で言うのならXL級。

縦長の、どこことなく東洋の”龍”を連想させるフォルムの艦がそこにあった。

これは――。

「現在、アースラのシステムをこちらに引っ越しさせて擬装中だったのだがね。紹介しよう。君達に貸し出す予定のアースラに代わる代艦。”バハムート級、次元戦闘艦”だ」

「次元”戦闘”……？」

告げられた単語に、違和感を覚えてなのはが彼を見上げながら怪訝そうに呟く。

それに、トウヤは朗らかに笑って見せた。

「そう。”航行艦”ではなく、”戦闘艦”。……戦闘を主な目的として建造した艦だよ。それ故に、航行艦とは一風変わった装備を持つのだがね」

そう言いながら、彼は艦内に入って行く。それに、なのはも続きながらトウヤの説明を聞きつづけた。

戦闘を主な目的として作られた艦と、トウヤは言うが。この艦の通路は広く取られていた。

一般の航行艦と、さほど違和感が無い程である。

物珍し気に周りを見るなのは尻目にトウヤは先に先にと向かう。

やがて、一つの場所へと行き着いた。

ブリッジへと。

自動扉がトウヤを認識するなり、ぷしゅつと空気を排出して横に開いた。

中に入る、とすぐに声が掛けられた。

「あ、なのはちゃん」

「なのは」

「はやてちゃん、フェイトちゃん」

ブリッジの一番上の席。恐ろしくは艦長席なのだろう。そこに座るはやてが振り向きながら手を振ってくれる。

その横に立つフェイトも微笑んで迎えてくれた。

二人なのはは、トウヤを伴って近寄る。

すると、はやてがトウヤを見るなり苦笑した。

「ども、トウヤさんも今回の迎撃に参加するんや？」

「あくまで保険だがね、私は。……今回の主な目的は、君が”これを扱えるか否かの検分だよ”

「それなんやけど、この艦のシステムなあ……」

「なんだね？ 気に入らないと？」

思わぬ言葉だったのか、トウヤは意外そうな顔となる。

それに、はやては首を横に振った。

苦笑を続けながら、問いに答える。

「いや、なんぼなんぼでも出来過ぎちゃうかな、てな？ イメージ・フィードバック・マギリング・システムやったかな？ あまりに”私向け”のシステムやったから……」

「ああ、そう言う事かね。確かにね。それに関しては、私も驚いたものだよ」

はやての台詞に漸く納得したのか、トウヤは頷きながら微笑む。
そして、振り返ってブリッジを見渡した。

「……まあ、こう言う奇縁もあるものと言う事でいいのではないかね？ あまり気にしても仕方ないよ？」

「いや、それはそうなんやけどな——」

「……あの……？」

そう話していると、横からなのはがひらひらと手を上げて声を二人に掛けた。

それに、すぐに二人は振り向く。

「どうしたね？　なのは君？」

「その、イメージ・フィードバック・マギリング・システムって何ですか？」

「……ああ、なるほど。ブリッジクルー。……君達だとロングアーチだったかね？　ともあれ、ロングアーチにしか話しをしていないのだったね」

どうにも、見知らぬ単語が出た事で気になったのか。

確かに、意味深な名前でもある。

それに、先程トウヤが話していた説明も途中だったのだ。気にならない方がおかしいだろう。

見れば、フェイトも好奇の目をトウヤに向けている。

トウヤは、そんな彼女達に微笑し。

「よろしい！　では、君達が今履いている——」

《……トウヤ。ボクがそこに居ないからってセクハラしたら後が酷いからね？》

何事か言おうとした瞬間に、ブリッジのモニターが起動。ユウオの顔がどでかく現れ、トウヤをジト目で睨んだ。

——トウヤは二秒ほど沈黙し。やがてきらりと白い歯を見せてユウオに笑って見せた。

その笑顔には、一点の曇りも無い。

「フ……。何の事か分かんね？　それでユウオ。どうしたのかね

？」

《あ、そうだった。さっき、敵と目される次元航行艦が四隻、衛星軌道に転移して来たよ。……多分、この後大気圏内に降下する積もりなんだと思う》

「そちらを先に言いたまえよ。……はやて君。準備は？」

「こっちは完了や。なのはちゃんが来た段階でオツケーやよ？」

そちらが本命であったのか、現在の状況をユウオは知らせる。

それにトウヤは肩を竦めて、今度ははやてに問う。

それにも、すぐに彼女は答え。満足したのか、トウヤは頷いた。

「では現時点を持って。この艦は管理局、八神はやて二佐に貸与する事を叶トウヤの名に於いて承認する。……八神二佐。異論は？」

「ありません。確かに、承りました」

急に神妙となったトウヤの言葉に、はやてもまた真面目な顔で頷く。

そして今度は、ユウオの方へとトウヤは振り向いた。

「ユウオ、ゲート起動。発艦用意。空間転移カタパルトの使用を承認する」

《了解、空間転移カタパルト起動。いつでも出港出来るよ》

「うむ。では、はやて君。後はよろしく頼むよ？」

「……はい」

ユウオに指示を飛ばして、するべき事は終えたとトウヤは後ろに下がる。

変わりに、はやてが立ち上がった。

すうつと息を吸う。

「現時点を持って、この艦は私が預かりました。そして、これよりストラ次元航行艦の迎撃に向かいます！ 準備はええな！」

『『はい！』』

はやての台詞に、一斉に応える声が来る。

それに、はやては微笑するとキツと前を見据えた。

「では、これより。バハムート級次元戦闘艦こと、仮称”アースラ2nd”は発艦します！」

《こちら『月夜』管制。了解しました。空間転移カタパルトにアースラ2ndをセットします》

はやてが言うなり、たった今名付けられたばかりの名を持つ艦ふねがゲート内を移動させられる。

やがて、アースラ2ndはゲート内のある区域へと到着した。

空間転移カタパルト。”航行艦・戦闘艦専用の”超巨大カタパルトであった。

このカタパルトは、その名の通り空間転移で艦を打ち出すカタパルトである。

それを使って、一気にストラの次元航行艦に接敵するという訳だ。

一見乱暴ながら、いきなり艦を戦闘速度に持っていけると言う。まさに、戦闘艦での運用を前提としたシステムであった。

やがて、ゴウンと言う音と共にアースラ2ndを固定していたアーム等々が外れる。

《空間転移カタパルトにアースラ2ndセット完了。発艦のタイミングはそちらにお任せします。お気をつけて》

「了解しました。……………ありがとうございます。では、アースラ2nd——」

—轟—

アースラ2ndの艦尾推進システム起動、スラストーに光が灯り。同時、カタパルトが動き出した。

アースラ2ndが僅かに前に動き、そして——。

「発・艦！」

—破!—

はやてが叫ぶと同時にアースラ2ndが一気に加速。直後、空間を”ぶち抜いて”。アースラ2ndの姿が消えた。

これより、アースラ2ndは敵性次元航行艦との戦闘に入る——!



セツテが居た軌道拘置所から、次の軌道拘置所にタカトとウーノ、セツテの三人は次元転移して——。

”そこ”に到着するなり、タカトは啞然とした。

ついでに、そこに居た人物も彼と同じように呆然自失してしまっている。

短い髪に長身の女性。綺麗と言うよりは凛々しいと表現すべきか。

彼女もタカトと同じく固まってしまっていた。

そんな彼等を余所に、ウーノは手に持つ端末機を操作。セツテはと言うと相変わらず無表情のままである。

やがて、何らかの操作を終えたか。ウーノが端末機を閉じた。”
彼女”に呼びかける。

「ステルス、及び。監獄内のシステム掌握完了。……久しぶりね、
トーレ」

「ウーノ……？ それに、セツテ？ お前達。何でここに？ それ
に、確かお前は――」

呼びかけた彼女と、後ろで待機するセツテ。最後にタカトを見て
彼女、ナンバーズ No. 3。トーレは声を上げる。

タカトはそれに構わず、はあとため息を吐いた。
ウーノをきろりと睨む。

「……お前が言っていたのは、こう言う事か……」
「はい、そう言う事です」

よほど驚かされたのが悔しかったか、ウーノをタカトは睨み。そ
れをどこ吹く風とばかりに、彼女はどこか満足そうな顔で頷いた。

つまり彼等が転移したのは、軌道拘置所の”監獄内”であったの
だ。

直接、トーレの監獄内に転移したのである。

ウーノがタカトに示した次元座標によって。
おそらく、先にこちらの拘置所内のシステムにハッキング。
この”監獄内の次元座標”を調べてのけたのであろう。

こう言うと簡単に見えるかもしれないが、実際はとんでも無い。
本来、次元転移はそこまで細かく跳躍出来るものではないのだか
ら。

改めて、彼女のI Sの脅威が分かろうと言うものである。

状況を悟ると、タカトはため息を吐きトーレに向き直った。

「俺の事は覚えているか？ と、言っても名乗った覚えはないが。
ついでだな、今名乗るとしよう。伊織タカトだ」

「……それは皮肉か？ もちろん覚えてる。あれ程鮮やかに瞬殺
されたのは後にも先にもあれだけだから……」

タカトの口ぶりに、トーレは悔しさを滲^{にじ}ませて。しかし、確かに
頷いた。

彼女からしてみれば、敗戦。しかも、名乗りすらさせる事も出来
ずに負けさせられた記憶である。

悔しくて当たり前の事ではあった。

タカトはそんな彼女の反応に頷くと、ウーノ。セツテと同じよう
に説明してやる。

それを聞いて、彼女は苦い顔となった。

「……状況は分かった。つまりDrの要請と言う訳か……」

「そう言う事になる。で、来るのか？ 来ないのか？」

「勿論行くとも。Drの要請ならな。しかし――」

「俺が信用出来んか？」

いきなり本心を突かれ、トーレが息を飲む。

まさに、今トーレが苦い顔をした理由がそれであったから。

だが、タカトはそんなトーレに口の端を歪めて笑って見せた。

「別に構わん。信用される要素は皆無だしな。ならせいぜい貴様が俺を見張って置くのだな。……貴様は俺を監視する為に共に来る。それでいいだろう？」

あっさりと、そう言う。そんなタカトにトーレはまたもや呆然として。

やがて不敵な笑みを浮かべた。

「いいのか？ 状況次第では、私はお前を背後から斬るぞ？」

「構わん。まあ、もつとも？ 貴様に出来るとも思えんがな。その時は容赦無く叩き潰すので忘れぬように」

かかかとタカトは笑い。それに、トーレも構わず不敵に笑い続けた。

声に出さずとも、その笑顔は告げている。

承知した、と。

タカトは一つ頷くと再び貫手を一閃。

トーレの拘束具を破壊した。

同時に彼女も立ち上がる。

「さて、では後一人か。ウーノ？」

「すでにそちらの次元座標も調べてあります。……でも、後一人は――」

「クアットロか。……確かにな……」

タカトに頷き、しかしウーノとトーレは複雑な表情でタカトを見

る。

それに、タカトはきょとんと首を傾げた。

「……なんだ？ そのクアットロとか言うのには、何か問題でもあるのか？」

「……………いえ、覚えているかどうかは分かりませんが。貴方、研究所に来た際に眼鏡を掛けた娘の事を覚えてますか？」

「眼鏡？ ……ああ、いたな。そんなのも」

確か、後ろからチョークスリーパーで頸椎を捻り折って倒した娘である。

あの研究所では、唯一殺しておいた娘のはずだが――。

「なんだ、生きていたのかアレ」

「……………いえ。蘇生に成功したので大丈夫だったんですが。よく、そんな台詞を言えますね……………」

「む？」

やはり分からないとばかりに、タカトは首を傾げたまま。

それに、ウーノとトーレは一緒にため息を吐き。セツテは相変わらずの無表情で後ろに立っている。

ウーノは首を一振りすると、端末機に次の次元座標を表示しタカトに見せる。

それに頷き、タカトは次元転移魔法を起動。

先と同じように、魔法陣が広がり。数秒後には監獄内に居た全員と共に次の軌道拘置所へと跳躍した。

……なお、トーレが脱獄した事にこの軌道拘置所の局員が気付い

たのは、数時間後の事だったと言う。



「――シオン！」

一斬！――

声が、シオンの耳朶を打つ。それを聞きながら、シオンは笑みを浮かべて今まさに、毒針を放たんとした甲虫を両断してみせた。

声は、ここ二ヶ月で聞き慣れた声である。――つまりは、ティアナの声。

このタイミングで呼びかけられたと言う事は――。

そう思うなり、シオンは遠巻きにこちらを伺う無数の虫達を前に棒立ちとなる。

笑いを張り付けたまま、構えもとらずに。ゆらりと、その身体が揺れて。

直後、迷い無くシオンは”落ちた”。

本当に唐突に、空にあったシオンの身体は重力を思い出したように落下を開始したのである。

飛行魔法を解除したのだ。

そんな落下して行くシオンに、遠巻きにそれを見ていた甲虫は何か気付いたかのように、シオンを追って降下を開始。

だが。

シオンは、そんな虫達にむしろ笑った。

「ここまでティアナの予想通り」だと、驚嘆を通り越して笑えて来るな——。スバル！　ギンガさん！」

「うん！」

「了解よ、シオン君！」

落下しながら吠えるシオンに、応える声の下から聞こえて来た。

スバルとギンガである。二人は、大きく左右に分かれて互いのリボルバーナックルを構えている。

同時にカートリッジ・ロード。スピナーが激しい回転を刻み始めた。

それを背に感じながら、シオンは逆さまの状態で刀を振るう！

「四ノ太刀——」

「「ダブル・リボルバー——」」

シオンの声に重なるようにして、スバルとギンガの声が響く。

それに、シオンを追う虫達は中央から展開し毒針を放たんとする、が。もう遅い！

三人は攻撃準備を終えている——！

「裂波！」

「「シュ————トッ！」」

——轟！——

一裂！一

次の瞬間、中央のシオンから放たれた破壊振動波とスバル、ギンガから放たれた衝撃波は問答無用とばかりに甲虫達に叩き付けられ、容赦無く吹き飛ばし。あるいは叩き潰し、あるいは塵に変えていく。

その結果を眺めながら、シオンは裂波を放った反動を利用して体勢を立て直し。地上に着地。

そして、左右に目を配る。

スバルとギンガは、その視線に頷きながらリボルバーナックルを再び振り上げ。

「「ウイングっ！ ロ————ドっ！」」

一気に地面に叩き付ける！

直後、ナックルを叩き付けた場所を基点として光の帯が伸びた。

ウイング・ロード。スバル、ギンガが使う。シューティング・アーツの代名詞とも呼べる魔法である。

飛行魔法と違って、その名の通りに空に”道”を作る魔法であるのだが。それ故に様々な応用が効く魔法とも言える。

例えば、空を飛べない陸戦魔導士の足場となったり。

——例えば、”障害物となって空戦を出来る敵の動きを制限したり”。

そう、ティアナの作戦の肝はまさにそこにあったのだ。

つまりは――。

一轟一

二つの道が戦場を走り、駆け抜ける！

それは、『学院』の空にある甲虫達をまるで繭のように包み込んだ。

そう、甲虫達の毒針にAMFはあれど。甲虫自身にAMFなど無い。

ウィング・ロードで作られた檻を破壊する手段などある訳が無いのだ。

――あの一撃決殺の手段を有する虫達を一匹残らず撃破するにはどうすればいいか――。

答えは単純。”逃げ場を無くした上で一撃で叩き潰してしまえばいい”。

後は、それを可能とする状況を作り上げるだけである。
ティアナが考えたのは、それだけ。

しかし、即興でこれを考えられると言う時点で特異と言える。

そして、既にその状況も整った――。

――後は、叩き潰すのみ！

「「ティアナ！／ティア！／ティアナさん！」「」
シオン、スバル、ギンガが『学院』屋上のティアナに叫ぶ。
それにティアナは頷き、前を静かに見据えた。

彼女が先から集束を開始した散布魔力は”左右の手に持つ”クロ
スミラージュに溢れんばかりに輝いて集まっている。

それは、星――。

”双発の星の光であった”。

ティアナはその輝きを、ウイング・ロードで構成された繭に差し
向けた。

吠える！　なのは直伝のスターライト・ブレイカー。

”そのティアナ、アレンジバージョン”を！

その名は――。

「スターライト……！　ブレイカー――ッ！」

【スターライト・ブレイカー、ファントム・ストライク】

――煌――

直後、双子の星光は膨れ上がり、一気に爆発したが如く驀進を開
始する！

それは、ウイング・ロードで作られた繭のど真ん中に突き刺さり、
貫いて――。

――轟！――

—爆！—

—裂！—

——繭の中心点で、光りが爆発！
容赦無く、炸裂した。

光りは、その名の如く二つの星となりウイング・ロード内に広がっていく。

甲虫達は、何とか星光から逃れんと飛び回るが。
それをウイング・ロードの檻が許さない。

行く先を阻まれた甲虫達は星光に飲み込まれる事を与儀無くされて。

星光は檻を巻き込んで広がり、それを碎きながら広がった。

——数秒後、ようやく星光が消えた後には何も残ってはいなかった。

甲虫もウイング・ロードで作られた檻も一切合財。完璧に消し去られたのである。

ティアナが立てた作戦、これにて完了。

ティアナも、スバルも、ギンガもその甲虫達が消えた空にほっと息を吐いた。

しかし、彼女達はまだ気付かなかった。

その場に居るべき者が居ない事に。

神庭シオン。彼の姿が忽然と消えている事には、まだ誰も気付いていなかった――。

（後編 1 に続く）

第五十三話「強襲」(中編2)(後書き)

はい、てな訳で中編2をお届けしました♪

アースラ2ndについては、某ヒリユウ改がイメージです(笑)

いや、あの艦好きなんですよ(笑)

あのフォルムには魂が震える……! (笑)

ティアナのスターライト・ブレイカーファントム・ストライクはVividで出たアレです(笑)

この際なんで、ティアナ、アレンジバージョンとして見ました(笑)

違ったらごめんなさい(笑)

ではでは、後編1でまたお会いしましょう♪

では~~~~♪

第五十三話「強襲」 (後編1) (前書き)

はい♪ 漸く後編1をお届けします♪
いや、本当時間かかり過ぎだよと (汗)
最近、やたらと忙しくて (汗)
感想も書きに行けてないなあ (涙)

が、頑張ります！

それでは、第五十三話後編1♪ どうぞ〜♪

第五十三話「強襲」（後編1）

次元転移が完了する。

暗い、軌道拘置所内の監獄内に。

それは先と同じ部屋であり、しかし別の部屋であった。

違う無人世界にある軌道拘置所なのだから当たり前なのだが。

そんな事を思いながら、タカトは今度こそは驚かず前を見る。
そこには、眼鏡をかけたおさげの少女が居た。

こちらをぽかんと見ている彼女を見て、俺もこんな間抜けな顔をしていたのか――。と、自己嫌悪に陥りかけ。

「クアットロ、久しぶりね」

「ウーノ姉様！？ それに、トーレ姉様に、セツテまで……！」
うしてここに……？」

ウーノの呼びかけに反応して、猛烈な勢いでこちらに詰め寄った。

……タカトを見事に無視して。

ちらりとウーノはタカトを見て、口端を引き攣らせつつ宥めるように手を上げた。

「ええ、Drが私達を必要としているのよ。彼の目的にDrが協力

するためらしいのだけど――」

そこまで言うと、ウーノはちらりと再びタカトへと視線を向ける。追従する形で、クアットロもタカトに目を向けた。

――胡散臭いものを見るような、目を。

タカトはと言うと、何故かクアットロの方では無く直接転移したために閉まりっぱなしの扉を注視していたが。

「彼は――」

「あゝゝら。あなたが私達を助けて下さったんですかゝゝ？　ありがとうございますゝゝ♪」

説明しようとする、ウーノを遮るようにして、クアットロがタカトへと話し掛ける。

その声には、あからさまなまでの嘲りが込められていた。

更に――。

「けど、調子に乗らないで下さいねゝゝ？　私達にあんまり大きな顔すると、プチッと潰しますんでゝゝ♪」

「く、クアットロ！」

さすがに毒舌が過ぎると、トーレが口を挟む。しかし、クアットロは変わらず不敵な笑いでタカトを見て。

漸くタカトが扉から目を離し、クアットロへと視線を向けた。

「ほう？　プチッと潰されてしまうのか。それは気をつけねばな？」
「でしよう？　だから――」

どれほどの奇声だと言うのか。

クアットロは構わず奇声を上げながら、ベッドに頭から突っ込むと、そこで頭に枕を乗つけてガタガタ震え出した。

——当然、奇声は上げ続けながら。

タカトは汗ジトになりながら声を掛けてみる。

「……おい？」

「うひい い い い い い い い い い ———— ! ! ! !」

「……ちよつと？」

[illegible]

「……あの、だな」

[illegible]

声を一つ掛ける度に、奇声がパワーアップして返って来た。

……さすがに、タカトは珍しくも途方に暮れた凄まじく困った顔となり、ウーノとトーレの方を向く。

彼女達は、そんなタカトにため息を吐いて見せた。

「……つまりは、こう言う事なんだ、伊織」

「いや、全く訳分からんぞ……？」

「ようはトラウマです」

簡潔に、ウーノが答えを告げる。

再びクアットロへと三人は目を向けた。

説明は続く――。

「どうも、あんな風に殺されたのははじめてだったので。変にトラウマを抱えてしまったらしくて。蘇生した後、暫くはこんな感じで」

「やはり、伊織と認識するところなるのだな」

ウーノの説明に、口端をひくりと引き^レ彎^レらせたタカトに、トーレが締めを告げる。

暫く、監獄内に奇声が響き。

そのままと言う訳にも行かず、タカトはクアットロへと近付いた。

「まあ、落ち着け。クアットロとやら。あの時は問答無用に殺してすまんんだ」

「あ、いいいい……？」

「そう。俺達は人間だ。分かり合えるはずだ」

むしろ、人間外に使う言葉じゃないか？　　と言うような言葉を吐き。タカトがクアットロに手を差し出す。

それに、光明を見出だしたようにクアットロは震える手を伸ばして。

ぐわしつと、その手をタカトが掴んだ。

「と、言う訳だから。いい加減、その悲鳴を止めんと今度は首を振切るぞ?」

「うぎよろもぽええええええええええええええええ——
——！！！」

「ちよ——!？」

いきなりとんでも無い事をのたもうたタカトに、クアットロが最大級の奇声を上げる。

それを見て、流石にウーノとトーレが驚きの声を上げた。

……セツテだけは、無表情であったが。

む？ と首を傾げたタカトに二人が詰め寄る。

「何をしているんだお前は！？」

「いや、何と言われてもだな。こう、先のやり取りから見ても嘗められんように締める所は締めておこうと」

「だからと言って、あの台詞は無いでしょう！？」

「むう……」

二人がかりで怒涛の勢いで責められて、タカトも流石にやり過ぎたと感じたか。

二人の怒鳴り声に呻き声だけをもらす。

その間にも、クアットロが人外の奇声を上げ続けてはいたが。

何しろ、このままではまずい。タカトは再び、クアットロの元へと向かうと声を掛け――。

「……おい」

「きよええふもぐにゆくるげやあああああああ――――！！」

「！！」

「……………」

――奇声を上げ続けるクアットロの首に無言で腕を回し。――こきゅつと捻った。

奇声が止まる、と同時にクアットロがベッドに沈んだ。

一同、啞然とする中でタカトは額の汗を拭う仕種をして。

「よし。これで静かになったな」

「「こらこらこらこら！！！」」

いい仕事をしたとばかりに爽やかな笑みを浮かべやがるタカトに、
またもや揃ってウーノとトーレがツツコミを入れる。

いきなり何をしだすのか。

そんな二人のツツコミに、しかしタカトは構わずにあさつての方
を向いた。

「静かになった。……それでいいじゃないか。俺は何も悪くない。
そう、悪いのは世間だ」

「貴方、どこの厨二病患者ですか！？ 世間関係ありませんし！」

「どこからどう考えても悪いのはお前だろう！？」

「と、言うかウーノ。お前の口からその単語が出た事が俺は驚きな
んだが……」

「「話しを誤魔化すな！」」

ついには命令口調で言われてしまう。

タカトは視線を外したままで――。

そこから数分程、タカトは再び責められて。漸く観念したように
両手を上げた。

「分かった分かった。次からは、もう少し大人し目の対応を心掛け
る」

「……殴ったり、窒息させたりもダメですからね？」

「……顎を踏み砕くのは？」

「「論外です！／だ！」」

どこまでもひど過ぎるタカトに、ウーノとトーレはツツコミを斉唱させ、再びため息を吐いた。

なお、つい数時間前に元六課——つまりは現アースラ隊長陣が彼に全く似た感じでツツコミを入れていたのだが——。

——そんな事は流石に知る由も無かった。

ちなみに、ぴくぴくと痙攣しているクアットロをセツテが無表情で介抱していたりする。

なにしろ、彼女達は息を吐き切るとタカトを冷たく見据えた。

「ほんとに……。何でこんなにクアットロだけ対応が酷いのですか？」

「む？」

「確かに……。そもそも研究所襲撃の段階でクアットロのみ殺されているしな……」

ウーノの問いに首を傾げる。

そんなタカトに、トーレも思い出したように呟いた。

確かに、どうにもクアットロのみ酷い目に合わせているような気がする。

これは、果してどう言う事なのか——。

首を傾げていたタカト自身も不思議そうな顔となった。

「ふーむ。何故か気付いたら、ああ言った真似をしているのだから……。こう、顔を見ているだけでイライラすると言うか」

「どう言う理屈だ。どう言う……」

完璧に虐めっ子の理屈である。

呆れたような顔となる、彼女達に。自分でも分かっていないのか
タカトは首を捻り続けた。

……なお、この疑問が解消された時。またもやクアットロに災難
が降り懸かる事となるのだが――。

それはまた、別の話である。

とりあえず、そのままと言う訳にもいかず。まずはクアットロを
起こそうとして。

――爆！――

唐突な爆音が、監獄に響き渡る！

それに、ウーノもトーレもセツテもぎょっと身構える、が。

唯一タカトは構わず、クアットロに気付けを施していた。

「……まさか、向こうに察知されたか……？」

「違うだろう。これは戦闘音だ」

タカトが口を挟み、それに一同。は？ とタカトを見る
が、彼は構わずクアットロの中指を一つ手に取った。
ゆっくりと反対側に反らしていき――。

「襲撃だ。――俺達とは別口のな」

直後、一気に反対側に中指を折り畳んで。

本日何度目かの、クアットロの悲鳴が響き渡った。



地球衛星軌道。

第97管理外世界において、代表とされる母なる青い星。地球。その大きな、青を見下ろしながらゆっくりと降下していく物体があった。

次元航行艦。管理局が誇る、次元世界を渡り歩くための船である。もつとも、その四隻の航行艦達は管理局所属ですらない。

ツアラ・トウ・ストラが所持する次元航行艦であった。

それが地球に降下して何をしようと言うのか。

と、いきなり四隻の艦がぐると向きを変える。

地球に向けて縦へと艦の向きを変えたのだ。

同時、艦首に環状魔法陣が展開した。

――それを、もし魔法に詳しい者や、航行艦の事を知っている者が見たならば血相を変えた事だろう。

アルカンシエル。

数百Kmに渡って空間を歪曲させながら、対象を消滅させる砲。それが、地球に向けられていたのだから。

最初から地球に降下するつもりも無かったのだろう。彼等の目的は、衛星軌道からの砲撃にあった訳だ。

四つの砲は、それぞれ別の方向を向いている。

それは、アメリカ合衆国。中国。ロシア。EUへと、それぞれ狙いを定めている。

アルカンシエルを首都に叩き込んで殲滅する腹なのか――。

――どちらにしろ、被害を想像するだけでぞっとする。

数万の単位では、とても効くまい。

数億――。二次災害を考慮するならば、数十億単位の人的被害は間違い無く引き起こる。

それは、地球と言う星を壊すに至らなくとも人類を始めとした生物を根絶するにあまりある被害であった。

正気の沙汰とは思えない。

しかも、彼等は通告すら出さずにそれを行おうとしていた。

やがて、艦全てのアルカンシエルがチャージ完了。

地球へと、滅びの一打が放たれようとして。

一撃！――

突如、航行艦の一つを光が艦底から貫く！
さらに、その光は貫いた航行艦から一気に炸裂！

—爆！—

光が広がり、残り三隻の航行艦も巻き込んで行く。

だが不思議な事に、最初に一撃を受けた艦も残りの三隻もダメージを受けた様子は無い。

最初に一撃を受けた艦は沈黙。

残り三隻もヨタヨタと不安定な動きを見せながら回転し、光が放たれた方向へと艦首を向けた。

——攻撃を受けた方へと。

そこからは、猛烈な勢いと考えられない速度で疾駆する艦が来ていた。

「敵航行艦に主砲、”フレスヴェルグ”直撃！ 敵艦一隻、沈黙しました！」

「残り三隻、地球からこちらに回頭します！」

「……よし。まずは、成功やね」

アースラ2ndブリッジに、シャーリーとアルトの報告を読み上げる声が響く。

それを艦長である八神はやては聞き、厳しい顔を浮かべて頷いた。

『月夜』から空間転移カタパルトを使用し、地球衛星軌道まで跳躍して来たのだが。

その時、アースラ2ndに居る者達が見たものは、地球へとアルカンシエルを叩きこまんとするストラ次元航行艦だったのである。

既にこちらの射程内だったので、主砲を叩き込みそれを妨害出来たからよかったものの、少しでも遅れたらと考えると冷や汗が止まらない。

アルカンシエルが一発でも地球に打ち込まれれば甚大な被害が出るのだから。

矢継ぎ早に飛び交う管制達の声を聞きながら、はやてはトウヤがうむと頷いたのを見た。

「お見事。やはり、君とIFMSは相性が良いようだね」
「ん、ありがとうな」

素直に褒めてくる、トウヤにはやては謙遜せずに礼を言う。
その彼女は、今。球のような魔法陣に囲まれていた。

球状魔法陣。情報処理を最重要とした特殊な魔法陣である。
元々ミッドにも、ベルカにも無い魔法陣であるが。この艦をはやてが使うと決めた段階でベルカ式用に調整したのだ。

つまりは、それを使わなければならないシステムを使っているのだが。

彼女の周りに展開した球状魔法陣は、あるデータを表示させていた。

はやて専用の魔導書型ストレージデバイス。

『夜天の書』のデータを。

今、かの魔導書はアースラ2nd内に取り込まれている。

そして、”艦から、直接はやての魔法を撃った”のだ。

これが、IFMS。

イメージ・フィードバック・マギリング・システムと呼ばれる、この艦、最大のシステムであり。

航行艦ならず、戦闘艦と呼ばせるに至ったシステムであった。

このシステムの特徴は、ずばり艦の武装を介して、艦長の魔法を艦が使えると言う事に限る。

つまり、はやての長距離炸裂型砲撃魔法。フレスヴェルグを艦の主砲から発射するなどの真似が出来る訳だ。

同時に、このシステムは艦の中枢制御システムを艦長の魔法処理に割く事も出来る。

そう、はやての弱点とも言えた並列処理と高速処理を艦のシステム任せで行えるのだ。

艦内に居ながら、魔法を。しかも、従来の数倍の威力と制御で放てる。

これ程、はやてにうってつけのシステムもあるまい。

先の彼女とトウヤのやり取りも分かろうと言うものであった。

「艦長！ 敵艦、回頭完了！ ……こちらにアルカンシエルを向けてます！」

シャーリーから悲鳴じみた声が上がる。さもありなん。
”あの”アルカンシェルで狙われているのだ。

悲鳴の一つも上げようと言うものであった。

見れば、ブリッジに居る面々は誰も彼もが顔を青くしている。
なのはや、フェイトすらもだ。

だが、それを聞いてなお平然としている者が二人居た。

艦長である、はやてと。その艦を貸し与えたトウヤである。

はやてはシャーリーの報告に頷くと、そのまま次の指示を飛ばす。

「アースラ2ndは、現状速度を維持！ フィールドを展開したまま敵艦に突っ込むよ！」

『『ええ！？』』

まさかのはやての指示に、ブリッジの至る所から驚愕の叫びが響く。

しかし、はやては迷わなかった。更に声を飛ばした。

「大丈夫や……！ この艦のフィールドなら耐えられる！ シャーリー！」

「は、はい！ フィールド、展開します！」

言われ、シャーリーは動揺を滲ませながらはやての指示に頷き。
アースラ2ndのフィールドを展開させる。

加速するアースラ2ndの周囲の空間が歪み、フィールドが発生。

そのフィールドは――。

直後、敵次元航行艦三隻から、一斉に光の帯が解き放たれた。
それは迷い無く、アースラ2ndに殺到し。

―煌！―

―裂！―

―爆！―

光が広がる！

それは、メビウスリングにも似た形を取りながら空間を歪め。周
辺数百Kmを容赦無く消し飛ばした。

空間ごとである。

これが、アルカンシエル。

時空管理局の当事者達ですら、その威力に恐れを覚え、使用を
躊躇うモノであった。

やがて、ゆっくりと光が晴れて――。

そこに、影が射した。

それは！

―轟！―

アルカンシエルの余波を突っ切り、龍を模した艦が現れる！
つまりはアースラ2ndが！

アルカンシエルに見事に耐えて見せたアースラ2ndは、なおも加速。そのブリッジで、当の本人達も啞然とする中。

その結果を予想していた者達――。

――つまりは、はやてとトウヤは頷き合っていた。

「デイメイション・フィールド……。次元歪曲フィールドか。ここまでやなんてね……」

「我々グノーシスは、管理局に数十年単位で技術レベルが劣っている――。が、ただ単に戦闘系技術だけを見れば管理局に勝っているね？ 特に空間、次元系の技術は某馬鹿弟の提唱した”次元・空間に対するエネルギー理論”等がある通り、管理局の更に一歩踏み込んだ技術がある。――まあ、つまり何を言いたいかと言うとだね」

はやての言葉を引き継ぐようにして、トウヤの説明がブリッジに響く。

それを聞きながら、なのははアースラ2ndのフィールドを何処かで見た事を思い出していた。

これは、かのツアラ・トウ・ストラが指導者。ベナレスが有する対界神器、ギガンテイスのフィールドと同じものでは無かったか？

それを思い出しながら、なのはは、トウヤの続きの言葉を聞く。

「アルカンシエル？ 既に時代遅れの武装なぞ、怖くも何とも無いのだよ」

その言葉を、ブリッジに居る面々は聞いた――。

同時、それに頷きながらはやてが更なる指示を飛ばす。

「ぼーとしてる暇はあらへんよ？ シャーリー、アルト！ 主砲斉射用意！ フレスヴェルグ、”非殺傷及び非物理破壊設定”で起動してや！」

「あくまで、そこにこだわるかね？」

その指示に、すかさずトウヤが疑問を飛ばす。
しかし、それにははやては即座に頷いて見せた。

当たり前と言わんばかりに。

「これが私達のやり方や……。文句は言わせへんよ？」

「当然だね。頑張りたまえ」

あっさりと、トウヤは頷く。

既にこの艦を貸与した時点で、それは当たり前のことだと。そう言わんばかりであった。

はやてはそれを聞きながら、管制の報告を待つ。
果たして、すぐにそれは来た。

「主砲、回頭完了！ IFMSリンク……。測距データ確認！ 艦長！」

「主砲発射……！ フレーース、ヴェルグっ！」

—煌！—

はやての叫びが響き、アースラ2ndの主砲砲塔から光が放たれる！

それは、真っ直ぐに伸び行き。三隻ある次元航の内、真ん中の艦に直撃！

敵艦のフィールドを撃ち抜き。貫通。

更に炸裂し、三隻纏めて広がる光が打撃した。

次元航行艦が、びくんとまるで痙攣するが如く震えて。そのまま、先にフレスヴェルグを撃ち込まれた艦同様。今度は三隻共沈黙する。艦には、一切の損傷も無しにだ。

非物理破壊設定の魔法により、対象に一切のダメージを与えずに衝撃のみを叩き込んで中の人員のみを昏倒させたのである。

元々、宇宙空間ならずとも艦に損傷を与えればどうしても死傷者が出る。

それを嫌う管理局――と、言うよりはアースラの面々は非物理破壊設定を使ったと言う訳だ。

中の人員を昏倒させられ、虚空をただただ漂う四隻の次元航行艦をアースラ2ndが減速しながら通り過ぎる。

それを見ながら、アースラ2ndのブリッジではやては安堵の息を吐いた。

ブリッジに居る面々も緊張が緩んでいく。

「よし、警戒レベル引き下げ。念の為に周辺の警戒を怠らんようにな？」

「はい。……え!？」

はやての指示に頷いて、しかしシャーリーから突然驚愕の声が漏れた。

はやては、それを聞いて何故か嫌な予感を覚える。

「シャーリー？」

「艦長！ 新たな転移反応を感知しました！ 場所は……、月の衛星軌道です！」

シャーリーの悲鳴じみた声に、はやてはぞっとした感覚を覚えた。月の衛星軌道に現れた転移反応。

それが示すものは月への敵襲！

つまりは、先の四隻は囚だった訳だ。

陽動。しかし、次元航行艦を使った陽動など誰が考えつくものか。

はやてはくつと呻くと転舵させ、シャーリーに空間転移を命じようとして――。

《こちらは大丈夫だ。任せておきたまえ》

「……え！？」

念話通信が、ブリッジに響く。それも、先程までブリッジに居た人間の。

ブリッジに居る皆は、すぐにトウヤが居た席に目を向ける――。が、そこに居た筈のトウヤは忽然と消えていた。



月、衛星軌道。

そこを新たに現れた六隻の次元航行艦が進む。

彼等の目的は既に問うまでも無い。グノーシス月本部『月夜』。その殲滅か、占拠か――。なんにしても、『月夜』こそが目的だった訳だ。

六隻もの次元航行艦隊など、そうお目に掛かれるものではない。

それに一斉に攻撃を受ければ、さしもの『月夜』と言えども敗戦は必死だったであろう。

そう、”彼”さえ居なければ。

《悪いが、そこで行き止まりだよ。それ以上こちらに来るならば、相応の対処を取らせていただく》

念話が響く。艦隊全てにだ。

それを放った当人は、艦隊の進行方向の真っ正面に居た。

アースラ2ndのブリッジから、どうやってここに来たと言うのか。

既に、その身にはバリアジャケットを展開し左手にはピナカを携えている。

不敵に微笑む彼は、そのまま艦隊に言葉をぶつけた。

《そのまま帰るもよし。投降するもよし。何にしても、今ならば命

の保証くらいはしよう。返事は――》

一煌！一

そこまでトウヤが言った、瞬間。その返事は来た。
六隻全てから放たれた、砲撃で！

それは、真っ正面のトウヤを滅ぼさんと殺到して――。

《――ふむ、それが答えかね？　よく分かった》

一閃！一

ピナカー――。神鳴る破壊を一閃！　十分に一度だけ発生させられる無限攻撃力を持って。放たれた光砲に叩き込む！

それだけ、それだけで全ての光砲は砕かれた。

まるで、硝子のようにあつけ無くだ。

それは流石に予想だにしていなかったのか。艦隊は次撃を用意しておらず、ただ前を進む。

動揺しているのか、中の人員が呆気に取られているのか。
どちらにしろ、それが全てであり。――そして、致命的であった。

トウヤは振るった。ピナカを虚空に突き立てる！

直後、足元にカラバ式の魔法陣が展開した。

更に、右手の指を滑らせ文字を描く。

地、と言う文字を一つ描いて――。

《来たまえ、ノーム》

ぽつりと念話が響き、同時にそれが現れる！

小柄な、子供のような体躯の老人の姿をした精霊。

地の精霊、ノームが。

それは、現れるなりピナカの中に吸い込まれて行く。

精霊装填。がしゃん、とまるで銃に弾丸を装填したが如き音が響き渡り。

同時、それは起きた。

艦隊の真上、そこに魔法陣が展開。

ゆっくりと、それが姿を現す。

石柱。石柱である。何の変哲も無い石の柱。それが現れたのだ。

ただ――。その大きさがとんでも無かった。

”幅、数百m。長さ、数十Km”。

巨大な隕石に匹敵する石柱。

それが何と艦隊の数と同じ数。つまり六つ、艦隊の真上に現れたのだ。

単純に、その質量だけでも相当な破壊力が出るのは間違い無い。

それらは、まるで艦に狙いを定めるようにゆっくりと、先端を巡らせる。

トウヤはそれを眺めながら、ピナカを振り上げて。

同時、艦隊から慌てて念話通信が入った。降伏を告げる旨の内容の、それが。

しかし、トウヤはそれに嫣然と微笑む。

もしここに第三者が居れば、ぞっとするような笑みを。

そして――。

《私は言った筈だね？ 相応の対処を取る、とね？ ――では、さようなら》

ゆっくりとピナカを振り下ろし、同時に呟く。

《真・震えと猛る鳴山》

処刑宣告を。

同時、石柱達が一気に加速！

艦隊達に、音速を超えて突っ込み――！

一撃！――

一轟！――

フィールドを紙のように、叩き割り。石柱達が全ての艦隊に突き立つ！

それは、あっさりと次元航行艦の真ん中に突き刺さった。

他の艦にも容赦無く、石柱は突き刺さって行く。

そして――。

《悪いがね。私は自分の領域を侵されて尚、是と出来る程人間は出来ていないのだよ。——ここで終わって行きたまえ》

ぱちん、と指を鳴らした。直後。

—爆！—

全ての艦が爆発！

中の人員諸共に、虚空に花となって散って行った——。
それを、彼にしては珍しく無表情で眺めて。

《——トウヤさん》

《はやて君かね？　こちらは終わったよ》

唐突に、はやてから念話が来た。

それに、彼は鷹揚に頷く。が、はやてからの念話はどこと無く元気が無い。

《……すみません。向こうの陽動を読めませんでした。トウヤさんの手を煩わせてしまって——》

《何。あれを感知出来るのは、ネットワークを使える者くらいだよ。気にしなくてもいい。——それに、言いたいのはそれでは無いだろう？》

その返事に、向こうではやてが息を飲んだのが分かる。

トウヤは先とは違う、少し苦いものが混じった微笑みを浮かべた。

《君達は人死にを嫌うのだろうがね。——これが私のやり方だ。口

出しは無用だよ》

《——はい。分かってます》

トウヤの念話に、はやてが頷きの念話を返す。

その念話には、少しばかり苦いものが混じっていた。

そう、先のトウヤの一撃は全ての艦隊を完全に撃破してしまっている。

——当然、次元航行艦の中に居た人員も一人残らず死亡していた。

はやて達は、それを気にしているだろう。トウヤを責める訳でも無く、悔し気なのはそれが原因か。

トウヤはそれに、微笑み続けながら『月夜』の方向に振り向く。

《では、『月夜』で合流と行こう》

《はい》

最後にそう告げると、トウヤの姿が消えた——。

「ふう……」

トウヤとの念話を終えると同時、はやては艦長席の背もたれに身を倒す。

目を閉じ、息を吐いた。

その内心にどんな思いがあるのか。
それは、推し量れないままで。

そんな彼女に、席から離れてフェイトとなのはが近付く。
艦長席に手を掛けて、彼女に微笑んだ。

「お疲れ、はやて」

「お疲れ様々。はやてちゃん」

「ん……。ありがとな。最終的にはトウヤさんの手を借りたから、
あんま褒められた結果やないけどな」

苦笑して、そう答える。

それに、フェイトもなのはも微笑に苦いものを混ぜた。

三人共も口にこそ出さないが、結果より人死にを出してしまった
事の方がきついのだろう。

だが、トウヤを責める事は出来ない。

彼は最初に勧告を出している。それにも関わらず戦闘を行ったの
は、向こうなのだから。

殺されても、文句は言えない。

当然の事と言えた。――だが、それでも。それでも――。

《……なのは》

「……え？」

「うん？」

「なのは？」

暗い空気が、三人に流れる中。唐突に、なのはが声を上げた。それに、フェイトもはやても彼女を見る。

だが、なのははそれにも関わらず目を大きく見開いた。

今の、声は――！

「タカ、ト、君……！？」

呆然と呟く。そう、なのはに響いた声は他でも無い。タカトのものであった。

念話では無い。だが、普通の声でも無い。まるで、”なのはの中から響く声”で――。

彼女の声に、しかし響くタカトの声は構わない。

《……すまん。なのは》

「何、何が……！」

何を伝えようと言うのか。

謝るタカトの声に、なのは疑問を飛ばそうとして。

――それより早く、答えは来た。

それは――。

《約束を、破る》

「え……！？」

宣告。

彼女と交わした約束を破ると。そうとだけ、タカトの声は告げた

—。

（後編2に続く）

第五十三話「強襲」（後編1）（後書き）

はい♪ 後編1をお届けしました〜♪
久しぶりに艦隊戦をやったぜ……！（笑）

リリカル分はどこ言った（笑）

さて、次で漸く第五十三話も終わり！

今週中には更新したいと思います♪

それでわ、次話でまた会いましょう♪

では〜♪

第五十三話「強襲」(後編2)(前書き)

はい♪ ども〜♪

テストメントです♪

てな訳で今回早めに更新出来ました♪

久しぶりに一週間に二回更新出来たよ(笑)

さて、ここで一つ謝罪を。

すみません。いや、マジに(汗)

何で謝っているのかは、読んで頂ければ分かるかと♪

ではでは、後編2。

どぞ〜♪

第五十三話「強襲」（後編2）

なのはに宣告が届く、数分前の軌道拘置所。

そこで、すすり泣きが響く。

指を押さえてしくしく泣くのは当然と言うべきか。最近イジメられっ子にクラスチェンジしたクアットロであった。

「う、うう……」

「泣くな。指が反対向いたぐらいで」

「いや十分泣くだろ、それは」

やれやれと嘆息するタカトにすかさずトーレがツツコミを裏手で入れるが、当然ながら彼に気にした様子は無い。

ツツコミと、クアットロに構わずタカトは扉に視線を移した。

そこでは、未だに爆音――。つまりは戦闘音が鳴り響いていた。心無しか、こちらに近付いているような気すらする。

普通ならば、ここで次元転移を行う所――元より戦闘を行っていた所で関係無い。

管理局局員を助ける義理も無ければ、襲撃者を助ける義理も無い。むしろこの期に乗じて、さっさと逃げ出すべきである。

――その筈、だったのだが。

「……例によって次元封鎖か。鬱陶しい事だ」

忌ま忌まし気に嘆息しながら、そう言う。

そう、今この軌道拘置所内は次元封鎖されていたのであった。
なのほど、ナルガに逃げ込んだ時と同じ状況である。

つまり、彼等がここに来た直後に次元封鎖を敷かれた訳だ。

……自分が殊更幸運に見放されているのはいつもの事ではある、
が。

……こうも毎度だといいい加減飽き飽きだな。

タカトはそう思いながら嘆息した。

やり方からすると、ストラの連中か……。何にしても次元封鎖を
解く必要がある。

次元封鎖を直接破壊するのもありと言えはありなのだが。

余波等を考えると、中の連中がどうなるか解ったものではない。

なら、どうするのかと言うと――。

「やはり、こうするのが一番か」

「ああ、やっぱりそうなるのですね……」

扉に近付くタカトを見て、ウーノが盛大にため息を吐いた。

次元封鎖を破壊は却下。しかし、次元封鎖を解かない限りは次元
転移は出来ない。

そうになると、後残る手段は一つだけであった。

つまりは襲撃して来たストラの連中を叩き潰す事。

一撃！――

ウーノの監獄内と同じように、しかし中から叩き込まれるタカトの蹴撃！

それは、当然の如く扉を真ん中からへし折り盛大に空を舞って飛んで行った。

タカトはそれを眺めながら、監獄から出て行く。

「貴様達はここに居ろ。武装も何も無い奴らが居た所で足手まといだ」

「……了解だ」

「はい」

ここに居る中でタカト以外で戦闘が出来る者――。つまりは、トールとセツテが、その台詞に頷く。

彼女達も理解しているのだろう。現状では、自分達が戦える状態では無い事を。

それを確認して、タカトは視線を元に戻し――。

その足が、止まる。

「……？ 伊織？」

「どうかしたのですか？」

突如として止まったタカトに、ウーノとトールが怪訝そうな顔となり尋ねる。

だが、それにタカトは答えなかった。

変わりに、感情が失せた瞳で前を見る。

そこには――。

――地獄が、広がっていた。

世にそれを、屍山血河と呼ぶ。

目の前の光景は、そう呼ぶのに何ら違和感が無かった。

おそらくは、管理局局員”だったであろう”死体が山とそこかしこにある。

そこから流れる血が辺りに溢れ返っていた。

よくよく見ると殺害されているのは、局員だけでは無い。

おそらく、ここに拘留されていたとおぼしき者達も例外なく殺されていたのである。

その光景に、タカトはふと自分が懐かしい気分になっている事を自覚した。

この光景には、覚えがある。

彼が、ずっと居た所。

地獄。あそこもまた、こんな場所であった。

違うのは、あそこは人、化け物、問わずに死体があったのに比べ

てこちらは人間の死体しか無いくらい。

周りが死に包まれていると言う点については何ら変わりが無い。

だからか――。タカトは全く躊躇せず前に歩き出した。

ちやぷつと流れる血で出来た水溜まりを踏み超える。

当然、足が血で汚れるがタカトは一切構わなかった。

そのまま数歩、前へと進み――直後。

一轟！――

空気が渦を巻いてうねりを上げた。それは衝撃波と化し辺りを蹂躪する！

その衝撃波は、空気をぶち貫いた事によって生じたものであった。つまりは、ソニック・ブーム。

辺りに散乱する死体を、それは打ち。当然タカトにも襲い掛かる、が。タカトは向かい来る衝撃波に対して拳の一打で応えて見せた。

一撃！――

渦を巻いた衝撃波が、一撃で潰される。

辺りを蹂躪していた衝撃波も例外無く吹き飛ばされた。

そうして、ようやく風が止み――。

”彼等”が、そこに居た。

最初に目を引くのは、顔をすっぽり覆った仮面だろう。

やたらと細長く白い仮面が、彼等の顔を隠している。
唯一、口元のみ隠れてはいない。

その口は誰も彼もが嘲るような、不敵な笑みを浮かべている。
その下も、また特異なものであった。全身を覆う、ボディスーツ
——。タカトは知らない事であったが、それは、かのナンバーズ達
のかつての装束にも似ていた。

そして——。

「なん、だと……？」

後ろから、声が来る。

監獄の中に居る筈のトーレだ。

彼女は大きく目を見開き、彼等の両手足を呆然と見つめていた。

そこに展開している、虫の羽を思わせる光の刃を。

インパルス・ブレード。

それは、彼女の固有武装ではなかったか？

それを、そこに居る全員。

計6人の人間”全員が”展開していた。

それに、先のソニックブームを起こした現象もトーレには見覚え
がある——と、言うよりは”身に覚え”があると言うべきか。

それは、彼女のISで起きる現象であったから。

亜音速機動を可能とするIS、ライド・インパルス。

今、それを全員が使って見せたのだ。

トーレならず、彼女と共に居る元ナンバーズ全員が驚愕と混乱に陥る中。

一人だけ、全く動揺せずタカトだけは事態を把握していた。

第二世代戦闘機人。

”量産型”の戦闘機人であるならば、同じようなスキルを有していた所で不思議でも何でも無い。

つまり、彼等は――。

「ツアラ・トウ・ストラ。第二世代戦闘機人、特殊部隊『ドッペルシュナイデ』参上。――伊織タカト、我々と共に来て貰おうか」

そう彼等は名乗り。

しかし、タカトは相変わらぬ無表情でそれを聞いていた――。



ドッペルシュナイデ――それは、ドイツ語で双剣を意味する。

それに何の意味があるかは、分からない。分からない、が。

彼等の言葉を決して聞き逃せないものが、タカトの背後にいる者達が居た。

元、ナンバーズの面々である。彼女達は呆然と彼等が放った名乗りを自然と呟いていた。

「戦闘機人……？ 第二世代、の！？ なんだ、それは！」

トーレが叫ぶ。しかし、タカトも含めてその場に居る者達は、叫びを容赦無く無視した。

まるでいないかのように、トーレを黙殺して。互いを見遣る。

——いや、正確には彼。タカトは、ドッペルシュナイデと名乗った彼等を見ていなかった。

彼が見ていたのは、連中の一人が手に持つモノ。

身体中の至る所を無惨に切り裂かれ、片手と片足をちぎられた男。おそらくは、管理局の局員か——。若い青年である。

死んではない。いない、が。その若い命も長くは無いだろう。

青年はただ辛うじて生きているだけであつた。

何より肺を貫かれているのが致命的である。

空気を吸う度に、肺から空気が抜ける音が鳴っていた。

しかも、呼吸の度に激痛が彼を襲っているのだろう。

今にも死にそうな青年は、度々襲われる痛みに顔を歪めていた。

その青年を、タカトは見続け。

やがて、その視線に気付いたか連中の一人が、にたにたと笑いながら青年を床に投げ捨てた。

「何だあ？ へ、こいつがこんなに気になるのかよ？ ったく、こんな玩具をよ？」

そんな事を言う男——男だろう。仮面を被っているが、声からすれば。

何にしろ、彼はタカトの無表情ぶりに余裕とばかりに嘲笑い続けた。

タカトが死体と死にかけの青年に臆おくしたとでも思ったか。だが、タカトはあくまでも彼を見ないで。

それに苛立ちを覚えたか、男は手を振り上げようとして——。

——目の前に、突然タカトが現れた。

全く唐突に、一切の間も無く、彼が。

それこそ後数センチ先。

ぶつかりかね無い距離に現れたタカトに男は固まっていた。

男だけでは無い。ドッペルシュナイデの連中全員が固まっていた。

何せ、見えなかった。いや、そもそも全く認識出来なかった。

まるでコマ落としのように、瞬間でタカトはそこに現れたのだから。

そして、固まってしまった男をタカトはやはり無視。

その場に屈みこみ、死にかけた青年の肩に手を当てて。またもや唐突に、その姿が消える！

直後、タカトは元居た位置に戻っていた。

連中と、トーレ達が入っている監獄のちょうど中間。

未だ固まる一同をさて置き、タカトは青年の容態を見た。

でも、出た結論は変わらない。

遠からず、この青年は死ぬ。……もう助からない。

だからと言う訳でもあるまいが――。彼は青年に呼び掛けた。

たったの一言を。

「……遺言は、何かあるか？」

――あるいは、それは酷く残酷な言葉であつた。

お前は、もう助からない。

そう宣告したと同じなのだから。

だが、タカトの言葉に青年は震える目で笑って見せた。

頷きながら、やはり震える手で懷から写真を取り出した。

――血で濡れた写真を。

そこには、一人の女性が写っている。姉か、妹か。あるいは恋人か、妻か。

どちらにせよ、この青年にとって心の拠り所となる女性であつたのだろう。

懷に写真を忍ばせるとは、そう言う意味だ。

青年は、タカトにそれを差し出す。彼は、青年を手伝わなかった。何故なら、それは青年の手でタカトに手渡さなければならぬから。

ついに差し出された写真を、彼は受け取る。と、同時。青年から小さく――ほんとに消えてしまいそうなほどに小さい声が零れた。タカトは、その言葉を確かに聞き届け。ゆっくりと頷く。

「……分かった。確実に伝える」

その言葉に安堵したのか、青年は満足そうに微笑む。すると気が抜けたのか、再び青年の顔が歪んだ。

身体中を激痛が襲ったのだ。

だが、青年の身体はまだ死を否定し続けている。必死に生きようと、生き足掻いていた。

でも、それは青年の苦痛を長引かせる事にしかならなくて。

そんな青年に、タカトの無表情が僅かに歪む。

それは何かを迷っているような、そんなそぶりであった。

……だが、そんな表情もすぐに止む。

タカトは青年を抱き起こしてやると、ぽつりと呟くようにして聞く――。

「……止めが、欲しいか？」

そう、確かにタカトはそう聞いた。

終わらせて欲しいか、と。

青年はその言葉に、何かを言おうとして。

でも、もう言葉すらも言えないのだらう。だから、青年はタカトに。

微笑んで、見せた。

「分かった」

すまん、なのは。

心の中だけで、彼女に詫げる。

それに、自分を呼ぶ声が聞こえたのは気のせい。

ずっと手を胸に当てた。

掌を介して魔力を心臓に送り込む。

その魔力は、直接心臓を内部から穿ち――。

……約束を、破る。

そして、青年の心臓は鼓動を止めた。

即死だった。青年の心臓を撃ち貫く事で痛みも苦しみも感じさせる事無く終わらせたのである。

僅かほんの数秒。後、数分の命を数秒に縮ませただけ。

だが、青年の顔には笑みが浮かんでいた。

そうして、タカトは青年の息の根を止めた。

名も知らぬ青年の、命を。

殺した。

それは、どんな理由があろうと変わりはない。

タカトは、青年を、殺した――。

かくして、ここに不殺の約束は破られる事になった――。



せめて、心安らかに。

青年を楽しにしたタカトは、まるで神に祈っているかのようにであった。

そうして、ゆっくりと青年の身体を床に下ろしてやり――。

「終わったかあ、茶番はよ？」

軽薄な声が、空気を壊した。

先ほどの男である。彼は、漸く動揺から立ち直ったのか先と同じくタカトをにたにた笑いながら見ていた。

「人が殺しかけた奴をわざわざ殺すなんてよ？　ご苦労な事だぜ」

タカトは動かない。振り向きもしない。

ただ、青年の方を向いて――。

「何にしても、さっきのようにはいかなないぜ？　速さには自信があるようだけど、次は――」

「黙れ」

――軋っ！――

——世界が、揺れる。

ゆっくりとタカトが立ち上がる、と同時に凄まじい音を立てながら”世界”が軋みを上げた。

軋む——、軋む、軋む、軋む、軋む軋む軋む軋む軋む軋む軋む軋む！

軋む！

タカトがただ、一言呟いただけで世界が軋みを上げ、震える！

殺気。世界が軋みを上げる程のそれを叩き付けられ、男達は全身から一気に汗を吹き出した。

彼達だけでは無い。ウーノや、トーレ。セツテ、クアットロも例外無く殺気に晒されて凍り付く。

動けば——。存在を知られれば殺される！

比喻では無く、確実にそうになると、そこに居る誰もが確信した。

やがて、タカトは振り向き——。

唐突に、軋みが止まった。

それだけでは無い。先程の殺気も消えている。

誰も彼もが、唐突に消えた殺気にぽかんとする中。唯一、殺気を放っていた当人。

タカトは、いつものようにそこに居た。

全く変わらず、相変わらずの無表情で。

あまりにも先程のギャップとの違いに拍子抜けしてしまいそうになる。

そんなタカトの様子に、男は恐怖に固まってしまった事を恥と思つたのか、手を大きく広げて叫びを上げ始めた。

「は、ははっ！ 大した殺気じゃねえか。だがよう、俺もこの手で二百人殺した男だ！ びびったりなんか――！」

「恥ずかしくないのか？ そんな事を堂々と自慢して」

男の言葉を切って、タカトの問いが、叫んだ訳でも無いのに大きく響き渡った。

あまりに唐突に告げられた問いに口をぱくぱくと開けたり閉めたりする男に構わずタカトは続きを告げてやる。

「恥ずかしくないのか？ 自分の恥部をそうもあからさまに自慢して」

「な、にを言ってる――」
「勘違いしているようだが」

またもや男に何も言わせる事無く、タカトは言葉を放った。

ゆっくりと、まるで子供に言い聞かせるようにタカトは男に――。
否、その場にいる全員に言ってる。

「人殺しと言うのは、最悪の行為だ。断言してやる。人を殺そうと思う考えは史上最低の劣情だ。他人の死を望み、祈り、願い、念じる行為は、どうやっても救いようの無い悪意なのだから。そんな”

恥”を堂々と自慢か？ 笑わせる。よくそんな恥知らずにそこまで大きくなれたものだ」

「な、な、な……！」

男が、声を漏らす。タカトはそんな男を鼻で嘲笑いながら、さらに続けた。

まるで、自嘲するように。

自分をこそ、嘲笑うかのように。

「分らんか？ ならもっと分かりやすく言ってやろう。自慢行為と言うのは、人間が取る行為の中で最も下劣だが。悪行の自慢なぞ、それに更に劣る。最悪の二乗だな。——つまり、だ」

口端がゆっくりと、ゆっくりと、まるで月の下弦のように、ナイフのように持ち上がる。

そうして、タカトは最後の言葉を。

”最も侮蔑する言葉”を男にぶつけた。

「お前、生きていて恥ずかしくないのか？」

「ぶち殺すっ！」

—轟！—

その最後の言葉に男は当然、逆上！

インパルスブレードを振り上げてタカトに襲い掛かる！

後ろに居た、他の者達もタカトに攻撃を開始しようとして——。

彼はそれに、ニヤリと嘲笑いを不敵な笑いに変えた。

「トーレ、よく見ておけ」

「な、なんだ？」

囲まれ、襲い掛かれながら、背後のトーレに言葉を飛ばす。

同時、男が腕を振り下ろし――！

「いい機会だ。お前達、高速機動型の弱点を教示してやる」

一撃！――

その一撃を纏わり付く蛇のように左腕で受け流し、すかさず男の顔面に拳を叩き込む！

その一撃を契機に戦いが、始まった。

拳を叩き込まれた男は、仮面が碎けるだけに留まった。

タカトが手加減していたのか――。現れた男の顔は思ったより整ってはいらぬ。

顔に拳を入れられた事が余程気に入らなかった、男は更にインパルス・ブレードを振る！が、タカトはすつと後ろに下がる事であっさりその一撃を避けた。

「落ち着け！ フォーメーションを展開しろ――。相手は所詮一人

だ！ 囲め！」

「ほう」

別の男からの叫びが響く。

それに、タカトは思わず感嘆の声を上げた。

てっきり前のアルテムやゲイル達の如く、自分の能力を過信して個別に突っ込んで来ると思ったのだが。今回、彼等は六人全員でタカトを囲もうとしたのだ。

フォーメーションを構築し、連携でタカトを倒そうとしているのである。

仮面が砕かれた男もしぶしぶ一旦下がり、それを援護するように男達から射撃魔法が飛ぶ！

一撃・撃・撃・撃・撃・撃

放れ行く光弾。しかし、当然。Sにも届かない射撃魔法なぞタカトに通じる筈も無い。

持ち前の対魔力と魔力放出で放たれた光弾のこと如くを吹き散らす！

だが、それと引き換えに男は後退を果たし、タカトを囲むようなフォーメーションの構築が完了した。

男達は一斉にインパルス・ブレードを振り上げトーレと同じIS、つまりはライドインパルスを発動しようとして。

「まず、弱点一つ。――高速機動が発生する前と後があまりに隙だらけ過ぎる」

一撃！一

突如として現れたタカトが男の一人の腹に拳を叩き込む！
”ライドインパルスを発動する直前”の男にだ。

鳩尾に深々と突き刺さった拳は風を巻く――。その一撃の名は天
破疾風！

一轟！一

直後、発生した暴風によって男がまるで人形のように吹き飛んだ。
盛大に空を舞って、どこかに飛んで行く。

だが、男達は構わず今度こそはライドインパルスを発動！
タカトに襲い掛かる！ が、タカトはそれに対してただ屈んで見
せた。深く、深く踏み込みながら！

中国拳法の曲芸の一つに”長椅子潜り”と言うものがある。地面
に接触する程に踏み込みながら、長椅子の下を高速で潜ると言うも
のだ。

だが、これは本来曲芸では無い。
”実戦用”の技なのである。

それを、タカトは証明して見せる。

ライドインパルスの亜音速機動で一斉に突っ込んで来た男達――。
その一人の股下を”高速”で潜り抜けながら背後に現れた。

それは、男達にとってすれば瞬間移動のように見えただろう。
何せ、いきなり視界から消えたのだから。

見失ったタカトに男達は互いがぶつかりそうになって、慌ててライドインパルスを解除する。

だが発生した慣性は彼等に急に止まる事を許さず。しかし、何とか止まろうとして――！

その隙だらけの背中にタカトは蹴りを突き込んだ。

軸足を床に突き立てながら、男の一人の背中に突き刺した足を振り上げ、天地逆さまに突き上げる！

同時、ぽつりと呟いた。

「天破紅蓮」

—轟！—

—爆！—

突き立つは炎の柱！

爆炎が男に突き刺さった足から発生し、まともに飲み込んで行く。

やがて、炎の中からタカト”のみ”が現れた。

男はどこに行ったのか――。よくよく見ると天井に人が一人突き刺さっている。

あそこまで吹き飛ばされたのか。

漸く止まる事に成功した四人がタカトを呆然と見る中で、タカトは平然と彼等を見据える。

「貴様達の高速機動が発生するまで、およそ0.3秒。終了も大体同じ時間だ。――数字にすれば短く感じるが、体感で計ればわりと余裕がある。その隙はあまりにも致命的だ」

「く、くそ……！」

残った四人の男達の内一人がタカトに舌打ちし、再びライドインパルスを発動！

タカトに亜音速で突っ込む！

彼が言っているのは、あくまでも発動する前と後のみ。一旦発動してしまえば問題無い！

そう、思っていた。

だが――。

「弱点、その2」

ぽつりと弦きがてら、タカトは身体を半身に反らし――。向かい来る男の”軌道”を見切るなり、拳を突き出す！

一撃！――

拳は、振るわれたインパルスブレードを潜り抜け、男の顔面を貫いていた。

それでもライドインパルスを発動していた彼の身体は止まらず回転しながら弾き飛び、地面に激しく打ち付けられる。

それだけ、それだけで男はぴくりとも動かなくなった。

残り三人はあまりの出来事に全く動けず、タカトはまるで何事も

無かったかのように説明を続けた。

「貴様達、高速機動型は機動が単純過ぎる。しかも、”自分の速度に反応速度が追いついていないのだ”。俺からすればカウンターのカモでしか無い。……せめて鋭角機動か、それが出来無いのなら戦闘機動を少しは考えるのだな。スペック頼りでは速度が光速を超えて来ようと、楽に迎撃出来る」

その台詞に三人は――。いや、三人とトーレこそは戦慄を覚えた。何も、彼等彼女達とて戦闘機動を考え無かった訳では無い。だが、タカトは事もなげに、それを見切って見せたのだ。

見切られた高速機動は、ただカウンターのカモでしか無い。しかし、そんなもの、彼以外に果たして出来るものか――？

タカトが一步を前に進む。しかし、それに男達は後ろに下がった。

どう戦っても、勝ち目が無い。

今のタカトは、それを証明してのけたのだから――。

「どうした？ 来ないのか？」

「う、うう……！」

「困ったな。後2、3点程弱点があるのだが――。まあ、いいか」

そんなにあるのか――。

そう、疑問を覚える暇無くタカトが指を持ち上げる。

そこに水が辺りから集まり――。

「……では、お前達はここで終われ」

一寸っ！

天破水迅。大量の水を凶悪な水圧で束ねた水系が解き放たれる！それを前に、恐慌寸前に追いやられた男達は慌てて散り散りにライドインパルスを発動してまで逃げ出した。

だが、水系はそんな男達に容赦無く襲い掛かる。

水系を制御しながら、タカトは男達とトーレに告げる――。

「お前達の機動は既に見切っている。――逃げられるとは思わん事だ。……」後、四十八手」

その言葉は何を意味するのか――。

答えはすぐに来た。男達は飛翔し、水系を避しながら絶望的な気分陥れられる。

自分達が終わりに向かい突き進んでいる事を理解したから。

そう、放たれた水系――。それは”自分達の限界機動”を見切って放たれたものだったのだから。

疾る――。疾る、疾る、疾る、疾る疾る疾る疾る！

必死に辺りを疾り抜ける水系をライドインパルスを使用して、必死に避す！

だが、それは終わりのゴールに向かってひた走るだけの結果でしか無かった。

やがて、四十八手。

辺りを完全に囲まれ、機動を見切って放たれた避しようの無い水

糸が、走り抜け――。

一斬！――

三人、全てを一刀の元に斬り伏せる。

一瞬だけ、びくりと震えると男達はばたばたと落とされた鳥のよう
うに床に落下した。

タカトは、それを冷たく見据えて。
ゆっくりと水刃を解除する。

同時、誰に向けてでも無い一言だけを告げた。

「……終わりだ」

そう、告げた――。



ドッペルシュナイデの面々――。彼等を一人で叩きのめしたタカ
トは、終わりを告げるなり監獄に戻って来る。

それに、しかし、誰も何も言えない。

ウーノもトーレもセツテもクアットロも――。

まるで口を開く事すら憚られるように、黙りこくっていた。
だが、当の本人。タカトだけは何も気にせず彼女達に話し掛けた。

「どうだ、トーレ。理解したか？」

「あ、ああ……。いや、参考にはする」

不自然にトーレはどもりながら答えた。

それにタカトはふむと頷くと、今度はウーノへの視線を向ける。

「ウーノ。ではさっさとジェイルの元に帰るぞ。次元封鎖も――」

そう言うなり、硝子が割れたが如き音が鳴り響いた。

次元封鎖の術者の一人がドッペルシュナイデの一人であったのか――。

何にせよ、次元封鎖が文字通り音を立てて解除された。

それを確認しながら、タカトは続きを告げる。

「――今、解除された。もう、ここには用も無い」

「その前に、彼等は――」

「後で話す。……ジェイルを交えてな」

ウーノの問いに、そう答え。同時、タカトの足元に八角の魔法陣が展開する。

それは、皆の足元に広がり――。

「……何をやっている、そこの眼鏡」

「え？ あ、あの――」

見れば、クアットロが展開した魔法陣から一人離れていた。

クアットロはタカトに見られ、蛇に睨まれたカエルのような縮こまりながらえへへと笑う。

その顔は見るからに引き攣っていた。

「わ、私はここに残ります。そのく、行きたくないと言うか……」
「……………」

タカトは、そんな事をのたもつたクアットロにこつと笑い――。

一撃！――

直後、その頭頂に問答無用とばかりに拳が落とされる。
衝撃を逃さぬように真上から落とされた拳に声も上げられない程痛かったのか、クアットロが頭を押さえてしゃがみ込んだ。

「……他の奴には聞いたが、貴様は強制だ。では行くぞ」
「い、いやあゝゝ！　こんな人と一緒に居たくないゝゝ！」

当然と言えば、当然の叫びをクアットロは上げ。しかし、タカトは一切構わなかった。

彼女の襟首を引っ掴み、ずるずると引きずって行く。

中央に戻り、今度こそは次元転移魔法を発動しようとして。

「私からも良いでしょうか」
「……今度は貴様か。何だ？」

その直前に、セツテが片手を上げた。
タカトは苛立ちを覚えながら、セツテに向き直る。
当然、クアットロの襟首は捕まえたままで。

それにセツテは頷き、視線を外に移す。

タカトに叩きのめされたドッペルシュナイデの連中へと。

そして――。

「彼等はまだ生きてます。……殺さないのですか？」

そう、問うた。

他のメンバーも気になっていた事なのだろう。

タカトに視線が集中する。それに、タカトはふむと頷く。

「ああ、あれか。別にいい。……破った約束とはいえ、約束は約束だからな。それに――」

面倒くさそうに、タカトは答える。

その約束と言うのは、彼女達には分からないものであったが。タ

カトは構わず続け――。

「――殺す価値も無い。この程度の奴らはな」

そう、最後まで一切彼等に目を向けず。最大級の侮蔑の言葉をタカトは吐いた。

セツテはその答えに満足したのか、後は何も言わない。

他の者達もだ。それに、タカトは問いも終わったと判断。

次元転移魔法を発動し――。彼等の姿が消えた。

後に残るのは、ただ広がる地獄の光景と叩きのめされたドッペルシュナイデの連中だけであった。

かくて、ナンバーズの回収完了。タカト達は、ジェイルの元に戻る事となった――。

（後編3に続く）

第五十三話「強襲」(後編2)(後書き)

はい♪ 後編2が終わりました♪

後編3に続きます♪ ええ、後一部(笑)

伸びちゃいました(汗)

いや、本当申し訳ありません(汗)

タカトのシーンだけで一万文字丸々使ってしまった(涙)

な、なんでこうなった……？(汗)

てな訳で、後一部伸びます。

ご付き合い下さると助かります♪

では~~~~♪

第五十三話「強襲」(後編3)(前書き)

はい♪ 随分時間掛かってしまいましたが、漸く五十三話、完了です！

……ぶっちゃけ、話しは何も終わってませんが♪

うう、すみません(涙)

いや、最初から次話に持ち越す予定だったんですが。思った以上に手間取りまして(汗)

さて、てな訳で今回はアリサ道場がちゃんとあります♪ お楽しみに〜♪

では、五十三話。どぞ〜♪

第五十三話「強襲」(後編3)

「あゝもう！ あのカ！ どこ行ったのよ!？」

『学院』に甲高い叫びが轟く。

その叫びの主は他でもない。ティアナ・ランスターその人の叫びであった。

彼女の他に、スバルとギンガも心配そうに辺りを見渡す。

しかし、どこにも彼の姿は無い。

神庭シオンの姿は。

先程までは確実に居た筈なのだ。ティアナの作戦により、虫を撃滅した時まででは。

正確には、ティアナがスターライトブレイカーFSを叩き込む、その瞬間までは居た筈だ。

なのに、撃ち終わった時には既にシオンの姿は消えていた。

最初は巻き込んだかもしれないと、三人とも顔を青くしたものだ。冷静に考えると、あの時シオンは地面に下りていた筈である。

つまり、シオンが巻き込まれたのであれば、スバルやギンガも巻き込まれていなければおかしい。

都合良くシオンだけが巻き込まれる訳が無いため、これは有り得なかった。

だが、なら何の為にシオンは消えたのか――。

——ひよつとすれば、拐われた可能性も無くは無いのだが……。シオンは何故か、ストラに狙われていた節がある。理由いかんは不明にしろ、ストラもそう簡単に諦めるとも思えない。

だが、あのシオンがそうそう簡単に誘拐されたりするだろうか？

それだけは有り得そうに無かった。

なら、後は——。

《——皆さん！》

「みもり？」

と、そこで念話が三人に来了。

シオンの幼なじみにして、現在キャロに付き添っている姫野みもりから。

だが、彼女からの念話が何故来るのか。

それも、やけに切羽詰まった様子で。

ティアナは訝しみながらも、念話に答える。

「どうしたの？ 慌てたような声を出して……。キャロに何かあった？」

《いえ、キャロちゃんは大丈夫です。すやすや寝てます》

彼女が慌てる用件として、キャロに何かあったのかと思ったが、そうでは無いらしい。

それには、安堵を三人共浮かべ。なら、と思う。

ひょっとしたら、シオンがそこに居るのか――。
しかし、彼女の返答は違うものであり。尚且つ、三人共の顔色を
変えるものであった。

《――エリオ君いなくなってしまつて……》

「つ――！ エリオ”も”！？」

《え……？ ”も”ってどう言う事ですか？》

「こっちは、シオンが居なくなっちゃったんだよ……」

《ええ！？》

ティアナの代わりに、スバルが答え。向こうでみもりが悲鳴を上げた。

それに、ティアナとギンガは頷き合う。

あの二人が同時に居なくなった……。

これに関連性を見出さない方がおかしいだろう。

あるいは、ひょっとして二人は――。

《見付けた！》

直後、更に別の方から念話が入る。他でも無い。ちび姉の愛称で
久しい、鉄納戸良子の声であった。

彼女の台詞に、三人はすぐに飛び掛かる。

『見付かったんですか！？』

《ああ、シオンに――。これは、エリオ・モンディアル君もか？

二人の反応が重なって検出された》

三人の声に、良子がおそらくは頷きながら返答してくれる。
しかし、重なってとはどう言う事なのか――。

それを問う前に、良子から答えが来た。

《多分、シオンが彼を抱えて飛行魔法で飛んでいるんだ。かなりの速度である場所に向かっている》

確かに、それならば辻つまは合う。しかし、何故にシオンはエリオを抱えて何処かに飛んでいるのか。

だがそこまでは、良子も分からないのだろう。

そこからの答えは無い。

だから、ティアナはたった一つだけを彼女に聞く事にした。

「あのバカ達が目指してる場所は、何処ですか？」

《あくまでそれは、予測でしか無い。それでいいなら》

そこで一度言葉を良子は切り、そして暫くの間を挟んで答えを告げた。

おそらくは、場所を正確に予測する為だろう。

シオンの飛行経路を辿っているのだ。

そして、その場所とは――。

《英国首都、ロンドン。――この国の中心だ》

――沈まぬ太陽とまで謳われた国、イギリス。その町の中心、シティと呼ばれる場所にシオン達は向かっていると、そうとだけ良子は三人に告げた――。



イギリスとは四つの国からなる連合王国である。

社会の授業で必ず習う常識だが、これはあまり実感では分からないだろう。

せいぜい都道府県と同じと思われるのが関の山だ。

だが、実際の所は違う。

グレート・ブリテンおよび北アイルランド連合王国と言うのは呼称だけではないのだ。

イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランド。

この四つの国の境にはちゃんと国境が立てられているし、文化も細々と違う。

間違っても同じ国だと思っていると、痛い目を見るのがイギリスと言う国であった。

そんなイギリスの首都、ロンドン。

シティ・オブ・ロンドンと呼ばれる街の中心には世界中の金融資本がなだれ込むビジネス街が広がっている。

セントポール大聖堂やイングランド銀行を擁する、英国最大の金融街。

かつてはロンディニウムと呼ばれた、ロンドンの原型とも言える場所の上空を、彼等は疾駆していた。

神庭シオンと、エリオ・モンディアルである。

シオンが後ろからエリオを抱えるようにして、彼等は超高層ビルの更に上を飛んでいた。

「準備はいいか、エリオ！」

「はい！」

向かう先は、高層ビルの中でも一際高いビル――。

――まるで神殿にも似た荘厳さを醸し出す。とある社名を掲げたビルだ。

その屋上。そこそが、シオン達が目指す場所であった。

一点も迷い無く、そこを睨み。飛翔しながら、シオンとエリオは頷き合う。

「怒りは心の中で！ 頭の中はあくまでもクールに！ いいな！」

「はい！ 大丈夫です！」

「よっしゃ！ んじゃ、後は――。各自突貫！ 突っ込むぞ！」
「了解です！」

言うなり、シオンがエリオを離す！

当然、エリオは下に向かい落ちて行き――！

「ストラーダ！ セット、アップ！」

【セットアップ！ デューゼン・フォルム！】

エリオが叫ぶなり、ストラーダが起動。更に、その形態が2nd
フォルムへと変化する。

そして、ストラーダの各部から突き出したブースターが火を噴き、
一気に加速！ 目当てのビルに突っ込む！

そしてシオンと言えば、エリオを離して更に加速！

刀を顕現させて、刺突の構えを取った。

同時、彼の目前に現れるは、例の甲虫！

”予測通り”に、現れたそれをシオンは一瞥するなり無視を決め込んだ。

吠える！ その叫びでビルのガラスが割れんばかりに！ それは――。

「神覇、伍ノ太刀！ 剣魔ア！」

一轟！――

叫び、高密度の魔力を纏ってシオンが突貫を開始する！

同時に甲虫が例の毒針を射出するが、それも意味を成さない。

例えAMFがあらうと、剣魔の出力の方が遥かに大きいのだ。

言ってみれば、津波を敷板で防ぐようなものである。

当然、針はあっさりと蹴散らされ。それを放った当の虫も例外無く剣魔に巻き込まれて碎かれる！

そのまま、シオンはビルまでひた走り。ビルにぶつかるすんで剣魔を解除した。

まるで墜落するように、ビルに着地する。

さらに、ビルの端からは飛翔してきたエリオが到着していた。

二人は、”あるもの”を挟み込むようにして互いの武装を構える。そして、シオンはにやりと笑うなり告げた――。

「人様の妹分に手を出したんだ――。ただで帰れるなんざ、思っちゃいねえよな？」

そう、そんな問いを。その場に居た”二人の人間”に告げた。



「やれやれ、見付かっちゃったねい」

シオンとエリオが、挟み込み対峙する二人――。

――二人とも、頭をすっぽりと覆うフードを被っている為性別が特定しにくいのだ。まあ、二人の内。背の高い方が肩を竦めて言うてくる。

妙に明るく――。もっと言ってしまったえば、えらく軽薄な声と喋りであつた。

ともあれ、その背の高い方の台詞に、やけに背の小さい――エリオと同じくらいだろう。

そちらも、深々と嘆息するような仕種を見せた。

「隊長がここに残ろうと言うから、こうなったんだよ」

「いやあ、そう言われると弱いねい。まさか、場所が特定されるなんて思ってたし。……どうやって見付けたのか聞きたいくらいだねい」

「……………音だよ」

二人の会話に、シオンが丁寧な返答をやる。

反対側のエリオから責めるような視線が飛ぶが、どちらにせよ向こうが気付いていない筈が無い。

それに、今のはカマかけだ。

シオンは続けて説明を続けた。

「あの虫共と戦ってる最中。どうにも”空間にブレ”が走ってる感覚があった。――最初は何だか分からなかったけど。聞いている内に、そのブレ、”振動”は一つのリズムを刻んでいる事に気付いたのさ。何かしらの曲をな!” 空間を介して音楽を奏でて、それで虫達に命令してたんだろう!” だったら後は空間の振動元を辿れば見付かるって寸法だ!”

「ああ、そうか。君は”悠一”と友達だったんだねい」

シオンの説明に、彼は彼の名前を出した。

それに、シオンは明確に歯噛みする。

そう、空気では無く空間を振動させて曲を奏でる。この方法はシオンの友人にして、グノーシス第四位。一条悠一の技では無かったか――!

「お前……。悠の何だ? まさか――」

「それを聞くのは、野暮ってもんだねい。それに、今はこう名乗ってるよ」

そうシオンに告げた、直後。彼は自らフードを下ろす。

そして、自らの顔を晒した。

黒の髪に細長の顔。やけに整った顔に軽薄な笑いが乗っていた――。目だけは、かけらも笑っていなかったが。

更に取り出すのはU字型の形をした金属製の管楽器――。サキソフォン。俗に、Sax^{サククス}と呼ばれる楽器であった。

だが、それは楽器にして楽器にあらず。シオンは気付く。あれは、彼の武器なのだと。

そう、あれは――。

「第二世代戦闘機人、特殊部隊。『ドッペル・シュナイデ』」隊長”。ギョンター。よろしくねい」

そう言うと、彼はサキソフオーンを高らかに吹く！

ブオオン！ と、言う低音が鳴り響き――。同時、周りから例の甲虫達が現れ。

「紹介するねい。これが俺っちの固有武装、シンクラヴィスと、魔^バ虫^グそして、これが俺っちのIS」

サキソフオーンから口を離して、微笑みながら自己紹介するギョンターに、シオンは内心で冷や汗をかく。

第二世代戦闘機人、だと？

なら、彼もまた――！

「音^{サウンド}界支配者^{マスター}で、言うんだけどねい」

ブオオン、ブオオオオン！

言うなり、サキソフオーンを吹き鳴らし――！

直後、シオンを衝撃が襲った。



第九無人世界、『グリューエン』

軌道拘置所の暗い一面にて、くくくつと笑い声が響いていた。

端末が画像を展開し、それを見て笑うはかのJS事件を起こしたDr、ジェイル・スカリエッティ。

彼は怪しげな笑いを浮かべて、画像を次々と変える。

「ククク……。ふ、くくくくく！ 次は何にしようか、迷う所だね……」

そう言いながら、ジェイルはあるものを手に取る。

その顔に浮かぶのは明らかな狂気――。否、狂喜と言うのが正しいのか。

何にしろ、それらを手に取り。彼は迷うようなそぶりを見せる。

その悩みでさえも、喜びが見え隠れしていた。

そして、ジェイルは悩み抜いた末に片方を選ぶと高々と頭上に掲げた！

恍惚とする表情で、それを嬉しそうに見て――！

「よし！ 次はマク○スFを見ようじゃないか！」

「なーにやっとなるかー」

「ぶぐるっしゃ！？」

一撃！一

叫んだジェイルの背中をどつく蹴り！

どこをどう叩き込まれたのか、ジェイルはその場でくるくると回転して床に転がった。

ぴくぴくと痙攣して床に五体投地するジェイルを見る、蹴りを放ったのは当然と言うべきか、帰って来た伊織タカトであった。

後ろの元ナンバーズ連中もひくひくと顔を引き攣らせている。

そんな彼等に、ジェイルはバネ仕掛けでもしているかのような――平たく言うとキョンシーが立ち上がるような動きである。――を見せ、見せて立ち上がった。

その顔はえらく血だらけであるが、どのような仕組みか。一瞬でそれらも治り、こちらに手を上げて見せた。

「やあ、タカトじゃないか！ それに、ウーノにトーレ、クアットロ、セツテ。……ふふ、上手く助け出してくれたようだね！？」
「…………お前、今のやり取り全てを無かった事にしようとしてないか？」

「何の事だい？ ああ、ちなみに○クロスは、漸くTV版を見終えた所だよ」

「…………あの短時間にか？ 早送りでも無理なんだが……。それと、次はマ○ロス+にしておけ」

ツツコム所が間違ってる！ と、ツツコミ担当(?)のウーノは激しく思うが。

この二人の会話にそんなものを入れるのは無謀だと言う事を五年前に知っている為、早々に諦めた。

代わりに嘆息のみを漏らし、ジェイルの元に近付く。

「Dr。要請に従い、戻ってまいりました。どうか指示を」

「ふふ、最初の言葉がそれかい？ 流石だねウーノ！ 次はミッドチルダに向かうんだったかい？ タカト？」

「ああ。しかし貴様、次元航行艦の修理は…………？」

マクロ○を僅か1時間そこらで、どう見たのかは不明だが、まあ

見たと言うのだ。見たのだろう。

そこはあえて尋ねずに、タカトは別の事を問う。

そもそも、自分がナンバーズの面々を助けている間に、ジェイルは次元航行艦を修理しておく予定だったのだから。

タカトの問いは至極当然のものであった。

そんなタカトの問いに、ジェイルはうーむと唸る。

「修理自体は完了しているのだがね？ 改造がまだ済んでなくてね

……」

「改造？ なぜ改造なんぞを？」

「次元封鎖を突破したいと言ったのは君だよ？ で、これが改造案なのだがね」

ジェイルの返答に、そう言えばとタカトは思う。

そもそも管理局側が仕掛けた次元封鎖を破らずに突破する為にジェイルに依頼したのであったのだから。

つつい忘れていたな、と。タカトは一人ごちて。

ジェイルはそれを知ってか知らずか、端末を操作してタカトに見せる！

そこには――！

「さあ見たまえ、タカト！ これが君の新たな次元航行艦！ ○ト
レマイオス、ガンダー――」

「ガゼルパンチ！」

「ふごひゅー！」

あまりに危険過ぎるネタを披露しようとするマッド野郎の顎に斜

め下から突き上げるようにして炸裂する拳！

それを喰らい、ジェイルはもんどりうって床に転がった。

やがて顎を押さえてタカトを下からふるふる震えて見て――。

「と、父さんにも殴られた事――」

「……次は蹴るぞ」

「さて、話を戻そうか」

タカトの台詞を聞くなり、何事も無かったように立ち上がった。

……なお、プ○レマイオス・ガ○ダムなぞと言うガン○ムは公式には存在しない為、気をつけて頂きたい。

何にしろ、今度こそはジェイルも真面目な顔で話し出した。

「実際、次元封鎖を突破するシステム自体は修理と共に完成しているよ。しかし、まだ取り付けてなくてね」

「後、どれくらい掛かる？」

「ざっと三十分と言った所だね」

ふむ、とタカトはジェイルの言葉に頷く。

そもそも、ウーノのおかげもあってナンバーズを連れて来る事自体、1時間程度で終わってしまったていた。

元々は2時間程の予定だったのだ。むしろ、ジェイルの作業速度を褒めるべきだろう。

「そうか。なら、俺は少しシャワーでも浴びて来る。……戦闘やら何やらあったしな」

「ああ、構わないさ。シャワーは向こうにあるよ」

「そうか。では、行ってくる」

言うなり、くると反転してタカトはシャワー室へと向かった。

タカトをジェイルは見送って、今度はウーノに振り返る。

「さて、ウーノ。少し手伝ってくれるかい？ 装置の取り付けを終わらせよう」

「はい。……ですが、実際はワーカーロボット任せで大丈夫なのは？」

「ああ。だから、そちらは君に任せよう。私は――」

そう言って、ジェイルはくると残る三人――。

トーレやセツテ、クアットロに振り返り。

「君達の固有武装を作ろうか」

笑いを浮かべて。そう、彼女達に告げた――。



シャワー室に入るなり、タカトは頭からシャワーを浴びる。

冷水でだ。

ざあざあと頭に掛かる水は雨のようであり、滝のようでもあった。

その中で、タカトはぼんやりと右手を上げて見る。

666の文字が刻まれた手。人を殺した手だ。

しかも、つい先程に。

そんな手を汚れていると見るべきなのか、苦しみを取り除いたと誇るべきなのか。

タカトは少し、判断に迷い。でも苦笑した。

今更だ。殺人も何も今更。

この手は生まれた、その瞬間から赤に染まっている。

奴達、ストラのドッペルシュナイデに叩き付けた言葉こそ、タカト自身に相応しい言葉であった。

人を殺そうと思う思考も、行動も、何もかもが史上最低最悪の劣情であり、恥だと。

それが例えどんな理由であれ、事情であれ、変わらない。

人殺しは人殺しだ。変わる事なぞあろう筈も無かった。

それに――。

「約束を、破ってしまったな……」

ぐっと右手を握りしめて、タカトは呟いた。

正直、こちらの方がこたえている。――それは、あるいは最低の思考なのかもしれない。

だが、今更タカトは人殺しに何の感慨も浮かばなかった。

――浮かべる事が出来なかった。

そうするには人を殺しすぎたし、慣れすぎた。

あるいは、それもまた一つの欠落なのかも知れない。

伊織タカトと言う存在の根幹を成す、傷なのかもしれない。

だから、タカトは思う。

なのはに、悪いなど。

そう、思っ——。

《そんな事、ないよ》

「っ……!？」

声がした。この数ヶ月で聞き慣れた。——慣れてしまった、声。タカトにしては珍しく、周りを見渡す。

だが、当然誰もいよう筈が無い。

なら、この声は？

《えっと、私だけど。タカト君、分かる？》

「なのは……？」

思わず声に出して名前を呼んだ。

だけど、応える声は無い。代わりに『聞こえてないのかな？』と、言う声が来たからには向こうも聞こえていたないのであろう。

そこで、タカトは気付く。

この声が自分の中。——”魂”から聞こえている事に。

これは——。

気付くなり、タカトはゆっくりと目を閉じる。と、内に、内に、

精神を傾ける。

五感をそちらに向けるように。

やがて、魂を直接触るような手触りと。そこから伸びる縁。――
彼女と自分を繋ぐ霊脈を認識した。

……やはり、これは。

その存在と向こうから、まだ呼び掛ける声に苦い顔となりながら、
タカトは嘆息を一つ吐いて、応える事にした。

「やはりお前か。なのは」

《あ、よかった。今度はちゃんと聞こえた》

今度はこちらの声もちゃんと聞こえたのか、嬉しいそうに、向こう。つまりは、なのはの声が来る。

それに、タカトは明確に顔を歪めた。

「……何の用だ」

《な、何の用って……。えっと、用がなきゃこれしちゃダメ？》

「ダメだ。理由は、鬱陶しい。喧しい。落ち着かない。面倒臭い。

……どれでもいい、あるいは全部でも構わないから持って行け」

《理由って……。そう言うのじゃないと思うけど。……それに、それだと理由を今作ったみたい》

その言葉に、タカトは返す言葉も無く黙り込んだ。

それはそうだろう。何故なら、まさしく今作った理由^{いわけ}なのだから。

タカトはそんな、なのはを避けようとしている自分に気付いて自己嫌悪を覚える。

約束を破った事を、伝え無ければならないのに――。

「それで、何でお前がこれを――。」通神”を知っている？」

《……さっき、タカト君から声が聞こえたんだけど。覚えない？
それでトウヤさんから聞いたんだよ》

「……俺から？」

兄、トウヤからどうもこの特殊念話魔法。”通神”を知ったようだが、それが自分から行ったと言われ、タカトは首を捻った。

そんな事をした覚えは無いのだが――。

《……さっき約束を、破るって……》

「……………」

アレか――。

なのはから聞いたそれに、タカトは珍しくも頭を抱えた。

この魔法、通神は魂から伸びた縁――霊脈を介して行われる個人用の魔法の為、一切の妨害を受けないと言う利便性がある。

――まあ、それと同じくらいの嫌な面もある訳だが。

これも、その一つ。

霊脈が繋がった相手を強く想って何かを思う時。

その心の声が通神となって相手に伝わるのである。

この魔法自体、使用条件が”アレ過ぎる”ので、滅多に使われないのであるのだが――。

何はともあれ、なのはがこの通神を知ったのかは理解出来た。
——ついでに、彼女がこれをして来た理由も。

タカトも、なのはも、二人共沈黙。

だが、そのままにも出来ないと言ふタカトは嘆息して。彼女に伝えるべき事を、伝える事にした。

ゆつくりと、息を吸って。

「……ああ、俺は約束を破った」

《……………》

「人を、殺した」

一つ、一つ。噛んで含めるような、そんな言い方。
だけど、タカトはそれ以上何も言わない。

状況も何もだ。何故なら、人を殺した事には全く変わりはない。
彼女との約束を破った事も変わりはないのだから。

だから——。

「嘘ついたら、針億本だったか——。次会う時に飲み干してやる」

《いいよ……》

「心配するな、針億本など、朝飯前——」

《いいってば!》

タカトの声を遮って、なのはの叫びが響く。それに、タカトは続きを言なくなった。

そんなタカトに、続けてなのはの声が届く。

《どうしようも無い理由が、あったんだよね……？》

「勝手に決め付けるな。俺は——」

《“負けず嫌い”なタカト君が自分から約束破るなんて絶対無い。それくらい、分かるよ》

なんで、この女は——！

ぎりっとついには歯ぎしりをタカトは立てる。

まるで、こちらを見たかのような事を言う、彼女に明確な苛立ちを覚えた。

「分かったような口を聞くな。貴様に何が分かる」

《でも……！》

「でも、かしくも無い。理由は確かにあった。だが、それがどうした。理由があれば人殺しをお前は肯定するのか？ 違うだろう？ 俺に同情するな。俺を肯定するな。それは、俺にとって最大の侮辱だ」

……俺は、何をやっている——？

苛立ちのままに言葉をぶつけながら、タカトはそんな自分に疑問を抱いた。

何故、今。自分は、なのはを責めているのだ。約束を破ったのは、自分なのに——。

だが、止まらない。言葉は止められない。

「そんな、お前が。俺を許す。許してしまう、お前が。俺は、嫌いだ」

最後まで。最後の最後まで、タカトは、なのはにそう告げた。

……沈黙が、辺りを支配する。

シャワーの音のみが、彼の耳朵を打ち。そして――。

《……いいよ。それでも、私はタカト君を肯定し続けるから》

答えが、なのはから返って来た。

タカトの言葉に、全く揺れない。答えが。

だって、そんなの今更。

彼が、自分を嫌いだと言う事なんて。本当に今更なんだから。

だから――。

《それでも、私はタカト君が好きだよ》

そうとだけ、なのははタカトに告げた――。

タカトは息を飲んでそれを聞き。

やがて、盛大にため息を吐いた。

壁に背を預けて、ずるずると座り込む。そうして、一言だけを彼女に告げた。

「――バカめ」

《なら、タカト君はたわけだよ》

………違う。

互いの言葉を交換しながら、心の奥底から、タカトはそう思う。こんな、こんな事で、救われたような。そんな気持ちになる人間など、たわけ以外の何者でも無いだろうと。

だから。

「……悪かった」

《……うん》

たった一言に全部を込めて、タカトはそう彼女に謝った。なのにも短く頷いてくれる。

それに、タカトは微笑んだ。そうして、話を続ける。

「……だが、約束は約束だからな。針億本は覚悟せねば」
《だから、いいってば。そんなの飲んじやったら死んじやうよ》
「だがな。……約束は約束だ。何もお咎め無しなのは気持ち悪い」
《……なら、タカト君。約束破った罰として、なんだけど》
「何だ？ 今なら大抵の事は聞くぞ？」

遠慮するような、小さな声。

それに、タカトは苦笑しながらそう言った。

まあ聞けない事もあるが、約束を破ったのは自分だ。今ならば大体の事は許そうと、そう思っ

《この霊脈だったかな？ これ、切らないで欲しいの》

「……………」

《それで。たまにお話し出来たらなって》

あんまりにも予想外の言葉に、タカトは沈黙する。

確かに、タカトはこれが終わった後。なのはとの霊脈を切るつもりであった。

正直、彼女と繋がっているとと言う状況はあまり良く無い。

先のように、心の声が向こうに届いてしまう事も有り得るのだ。

あまり喜ばしい事では無いだろう。だが――。

「……約束を破ったのは、俺だからな」

《えっと。……いいの、かな？》

「ああ。だからと言っていつも通神で話せる訳では無いからな。…

…それでいいのなら」

《うん！》

弾む声に、向こうでなのはが満面の笑顔となっている事を理解して、タカトは苦笑する。

その上で、ついでに気になる事を彼女に尋ねる事にした。

「ところでなのは。この通神の使用条件を、お前聞いているか？」

《え？ トウヤさんから、霊脈が繋がっているなら出来るって聞いたよ？》

「なら、その霊脈を繋げる条件は？」

《ううん。そっちは聞いてないよ》

そうか、とタカトは頷く。

やはりなのはは、何も聞いていない。

なら、後は――。

「……そこに、兄者は居るか？」

《え？ うん、居るよ。後、はやてちゃんやフェイトちゃんも。……すごいトウヤさんが笑顔なんだけど――》

「そうか、兄者には後で死ねと言っておいてくれ。……その上で、だ。なのは。霊脈を繋ぐ条件は”粘膜接触”だ」

《……え？》

「一般的には、キスと呼ばれる」

そう、タカトは、なのはとルシアに繋がれた霊脈など、当の昔に切っている。

だからこそ、最初分からなかったのだ。

今繋がっているのは、なのはとタカト自身の霊脈――。

《……ごめんね、タカト君。今からちょっとトウヤさんとお話しがあるから》

「ああ、そうこう言ってる内に逃げそうだな――」

《あ！ トウヤさん！？》

「――遅かったか」

流石、ユウオで鳴らした逃げっぷりである。

更に『待つて！ 違うの、はやてちゃん！ フェイトちゃん！』
と言っているのを聞く限り、あの二人には教えていたか。

ともあれ、そのまま通神は切れた。

それを、少し寂しいと思ってしまうのは。やはりおかしいのか――

」。

「……まあ、悪くは無いか」

タカトはそう呟くと、出しっぱなしだったシャワーを止めて、外に出た。

苦笑しながら、服を着込み。待たせているジェイル達の方に向かう。

先とは違う、少しスツとした気持ちのままで。タカトは歩き出した――。

――これより、タカト達はミッドチルダに出發する――。

（第五十四話に続く）



ひゅーっ♪ どんどんぽぽふ♪

ア

「はい♪ 皆さんお久しぶり♪ アリサ！」

す

「すずかの♪」

ア、す

「「アリサ道場」！」

どん♪

しー

「……タカ兄い。いろいろツツコミ入れていいかな？」

タ

「む？ 早いな。まあ、いいだろう。やれ」

しー

「ではー。まず、何ヶ月ぶりだよアリサ道場！ つか、俺またしーちゃんかい！ なんですさ！ なんですさ！ なんですさー！」

タ

「それが宿命だ。諦めろ」

しー

「一言！？ ひどっ！」

ア

「でも、本当に何ヶ月待たせる積もりだったのよ作者は……！」

す

「……驚異の三ヶ月アリサ道場抜きだもんね……」

うふ♪

ア

「気持ち悪いのよ！」

レ

「まあまあ落ち着けて。アリサ」

未

「そうそう、あんまり怒るとせつかくの美人が台なしだぜ？」

しー

「おやレン先輩に未来。前回とは打って変わってえらい機嫌いいです
ね？」

レ、未

「復活したからな！（作品が）」

リ

「しくしくく……。うゝゝらゝゝぎゝゝりゝゝもゝゝのゝゝ！」

しー

「おっわ！ リターナさん！ どこから……！？」

レ

「ちい！ まだアリサ道場に居やがったか亡霊め！ 俺達を巻き添えにすんな！ 行くぞ未来！」

未

「合点承知！」

レ、未

「「おらおらおらあ！」」

リ
「ひきやあああああああ———!?!」

レンと未来二人掛かりでリターナを雪に埋めるイメージ♪

レ
「仕留めろ! 確実に仕留めろお!」

未
「埋めろ! 埋めろ、埋めろ、埋めろお!」

リ
「やあ———!?! 暗いよ———!」

しー
「……えー。何やら醜い争いが展開されましたが。放置して次行きます」

レ、す
「「え!?! スルー!?!」」

リ
「暗いよー。誰か助けてー」

?
「て、おいおい。酷い事すんなよお前達……。大丈夫か?」

レ
「あん?」

未

「誰だお前？」

しー

「あー、やっと来ましたね。この人が今回の召喚者。『魔法少女リカルなのはStS ZEROSTORY―絆(KIZUNA)―』より登場の元帥主人公。八神ゼロ・S・A・ハラオウンさんです」

ゼ

「よろしー」

ア

「名前が長いのよ！」

一撃！一

ゼ

「ぶげらっ!？」

しー

「おー、多分殴られるとは思ってましたが。早いですね？」

レ

「だな。まさか名前で来るとは……」

す

「タカト君、今のタイムは？」

タ

「登場から十秒そこそこ。やりますが、流石にシオンのタイムは越

「せませんな」

未

「二秒だっけ？ 早いよなあ」

ゼ

「……ま、待った。何でそこ。ゲストが殴られたのに、和んでやがる……！」

一
同

『いつもの事だから』

ぜ

「理不尽!?!? めちゃくちゃ理不尽じゃねえか!」

ア

「で？
なんであんな、そんなに名前長いのよ？」

ぜ

「いや、元々ゼロ・S・アームストロング、て名前だったんだけど……」

一
同

「ふんふん」

ぜ

「はやてと、フェイトと結婚したから――」

ア、
レ

「死ねええええええええええ——！！」

一撃！一

ゼ

「うおお！ な、なんで？ アリサは微妙に予測出来てたけど、なんでレン義兄さんまで！？」

レ

「うるせえ！ てめえに義兄なんざ呼ばれてたまるかあ！ フェイトと結婚の上に、はやてと二股重婚だと？ 万死——いや、億死に値する！」

ゼ

「そこまで！？」

ア

「私はハーレム属性持ちが嫌いだからよ！」

ゼ

「それはちよつと予測出来てた！ でも理不尽っ！」

裕

「チェ————リオ————☆」

一破！一

ゼ

「べぐるっしゃ！？ な、なんで裕希奈お前が……！？」

裕

「決まってるわ！ 友が助けを呼んだ時、すかさず現れる。これを、友情と言う……」

ゼ

「ろ、〇ムだとお！？」

裕

「貴様に名乗る名前は無い♪」

ゼ

「いや、最初から知って——」

裕

「と——！」

ゼ

「あべし！」

ア

「た——！」

ゼ

「ひきい！」

レ

「終わりだ……！ その命運……！ ここで尽き果てろ！」

ゼ

「あ、なんかカッコイイ決め台詞——」

—滅!—

ゼ

「きゅう……」

しー

「えー。と言う訳でゲストのゼロさんです」

ゼ

「軽いな!?! 流すんじゃないよ、この惨状を!」

タ

「しかし、それは仕方ない。何故なら、それが貴様の感染結果なのだから」

ゼ

「な、なにに……! ぜえ、ぜえ……! て、何でこんなに息切れ……?」

ア

「ま、まさか、あんたの感染結果って……」

す

「某ドM体質君ばりのM体質、だったり……?」

ゼ

「いや、ちよっ、待っ……!」

レ

「引くわぁ……」

未

「強く生きてくれ……！」

裕

「変態」

ゼ

「ぐふ……。ひ、ひでえ……。！」

しー

「あー、せっかくのゲストを……」

タ

「アリス道場の道場因子を甘く見すぎだ。召喚要請をした皆は、これらに気をつけて欲しい。兄との約束だ！」

ゼ

「てか、本当に好き勝手言い過ぎだろ！ あーくそ……」

しー

「さて、ゼロさんも復活した事ですし。いつものコーナー参ります♪ ゼロさん、今話を一言で♪」

ゼ

「て、やっぱりやんのかこれ……。んー『自由気ままにすんのもいい加減にしろ！』かな」

しー

「だってさー。自由気まま代表ー」

ア、裕

「「……へー？」」

ゼ

「いや、ちよい待て！ 俺が言ってるのはタカトのことで……！」

タ

「……ほう？」

ゼ

「ぎゃーす！ 四面楚歌！？」

一撃！一

ゼ

「ぐ、ぐはあ……！ 我が生涯に一边の悔いなし……」

しー

「こらこら、天に上らないで下さい。さて、ではお次は久しぶりの質問コーナー♪ えー。……却下♪」

レ

「いきなり質問コーナーを却下した！？ 何の質問だったんだよ！」

しー

「教え”て”られません♪」

タ

「……む？」

未

「今なんか、言い方おかしくなかったか？」

しー

「ちっ……！ 嫌な事気付きゃがる……！」

ア

「で？ 質問何だったのよ？」

しー

「いや、これは……」

裕

「タカトー♪」

タ

「イエス、ユア、マジエスティ。……頂く」

しー

「のあ！ タカ兄い待つ……！」

タ

「えー、なにになに？ 『しーちゃんの3サイズを教えてください』 ……との事です」

裕

「……へー？」

しー

「いや、待て！ 待とう裕希奈！ こんなセクハラまがいの質問かな？」

ア

「タカトー？」

タ

「了解。では、発表します。シオン女体化バージョン。つまり、しーちゃん時の3サイズと、ついでに身長は……。

しーちゃん（しおんちゃん）

身長 — 160cm / スリーサイズ — B91（F） / W60 / H88（cm）

と、なっておりますな」

裕

「……………へー」

ゼ

「え？ て事は裕希奈とは10Cm以上も違——」

— 煌！ —

ゼ

「……………（どしゃっ）」

レ

「おいおい、有無を言わず倒したぞ……？」

ア

「今の裕希奈は危険よ……！ 私でも近寄れないわ……！」

未

「どんだけ危険！？」

タ

「シオン。冥福を祈る。さらばだ」

しー

「ちょっと待てー！ 死ぬの確定！？ てか、これ俺のせいじゃな

ー！」

裕

「あ・ん・た・て・ひ・と・はあああああああ———
！」

しー

「その台詞は危険——！？」

—轟！—

—滅！—

タ

「……さて、ちょうど良くオチもついたし。今回はここまで。なお、活動報告のアンケートだが、皆。回答ありがとう。今の書き進め方でこれからも進めるそうだ。時間が無くてあちらにコメントを返せなくて済まない。作者に変わり、謝罪しよう。アリサ道場も最近休載が酷かったが、今回からいつものペースに戻すとの事なのでよろ

しく。ではでは」

一同

『『また次回~~~~~♪』』

一幕！—

ぜ

「は！？ ちょっと待て、俺まともに話して——！」

一幕ったら幕！—

第五十三話「強襲」(後編3)(後書き)

「ストラの第二世代戦闘機人部隊、『ドッペルシュナイデ』隊長、ギョウターの猛攻」

「それに対峙する、シオンとエリオは苦戦を強いられる」

「その中で、もう一人のドッペルシュナイデが動き出した」

「彼の、驚きの正体とは」

「一方、ミッドチルダに到着したタカトはその力を使い存分に暴れ始める」

「そこにはストラも管理局も関係無くて」

「暴虐を繰り返す、彼の前に現れるのは――」

「次回、第五十四話」

『少年の叫び、友の叫び』」

「少年の絶叫が、友の咆哮が、鳴り響く」

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」(前編)(前書き)

「――もし、もう一人の自分が居たら、どう思うだろう」

「正直、僕には想像出来ない」

「自分が、プロジェクトFと言うものから生まれたと分かった時から。僕は『本物のエリオ・モンディアルが居たら、どうなっていたんだろう』……そう、思わない日は無かった」

「シオン兄さんのように、憎しみ合い。戦うのか」

「それとも――」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まります」

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」(前編)

一撃！一

突如、横っ面に炸裂する衝撃！ それをまともに受けて、シオンは屋上に転がる。

痛みと、エリオから声が飛んだ感覚を受けて。

——サキソフオーンが、更に高らかな音を立てた。

「つ————！？ ちい！」

一撃！一

苦しげに唸りながらも、シオンは転がった体勢から側転に移行。回転する彼の身体があった位置を再び衝撃波がぶった叩く！

この攻撃は——。

「エリオ、気をつけろ！ これは音を使った衝撃波だ！」

《へえ、良く分かったねい？》

一撃！一

叫ぶシオンに再び炸裂する一撃！

必死に身体を反らして回避するも、その攻撃範囲の広さ故にどうしても体勢が崩れる。

しかも、だ。この攻撃。ある程度、衝撃波を操れるのか、ギンターとか言ったか。彼ともう一人の周りには一切何も起こらず、変わりにシオンとエリオには衝撃波が襲い掛かっていた。

更に――。

《じゃあ、そろそろ魔虫^{バグ}も使おうかねい》

「ぐ……！」

サキソフオーンを吹き鳴らす、ギンターから飛ぶ念話。

それにシオンは、やはりと思いながらも呻き声を上げずにはいられなかった。

そう、ギンターの固有武装はサキソフオーン型のシンクラヴィスだけにあらず。例の虫達――。魔虫^{バグ}も含まれるのだから。

それを、攻撃に使わない訳が無い！

再びシオンとエリオに叩き付けられる衝撃波に続いて、魔虫が羽音を立てて襲い掛かる！

みちり、と身体の中心部分が開き――。直後、キャロを殺し掛けた一撃決殺の毒針が放たれる！

一閃――

「ぐっ！」

「くっ！」

何とか放たれる無数の毒針を二人は身体を反らし、また側転しな

がら避して。

一撃！一

そんな隙だらけの二人を見逃す訳も無く、炸裂する衝撃波！

直撃を受けた二人は、まるで案山子^{かかし}か何かのように派手に屋上を転がった――。

「ぐっ……かはっ……エリオ……！」

吹き飛ばされ、屋上のセメントに転がったシオンは痛みに喘ぎながら、弟分に呼び掛ける。

それに、無言ながらもエリオは立ち上がって見せた。

痛みを、顔に張り付けながら。

そんな二人を、戦いが始まってから一步も動いていない化け物――。ギュンターが、相変わらぬ軽薄な笑いを浮かべて、二人を見遣った。

《おっとっと。これは、ちょっと実力に差がありすぎかねい？　まあ、二対一だし、こっちも余裕が無いから、許してねい？》

冗談じゃねえぞ……！？

かはっと咳込みながら、シオンはギュンターを睨む。

その顔は明らかに余裕を無くしていた。

先の攻防。自分とエリオは全く何も出来ないまま、転がされてしまった。

どう考えてもレベルが自分達とは一段違う。

第二世代戦闘機人の話し自体は、イギリスに来る前のブリーフィングで聞いた――。聞いてはいたのだが、ここまでなんてのは予想出来なかったのである。

――考えてみれば、彼等と戦闘を行ったのは、あの規格外異母次兄。伊織タカトしかないのだ。

彼等のレベルを計れようはずが無い。

彼等全体はどうだか知らないが、ギュンターの实力は明らかにエースクラス――。

なのは達、隊長陣と同等。つまりは、グノーシス”第三位レベル”の实力の持ち主であった。

その事実にはシオンはぐっと呻く。

自分はどう^{ひいきめ}最上位に見ても第四位レベルがせいぜいだろう。

エリオも第五位から第六位レベルか。

そう考えると、この勝負。どんなにひっくり返ようと勝てるはずが無い。

自分達が、ひどく絶望的な戦いの最中に居る事をシオンは自覚し――。

《それじゃあ、ここらで終わりにしておこうかねい。悪く思わないで欲しいね——》

—雷!—

直後、こちらを向いて笑うギンターの向こうで、莫大な雷光が迸った。



【ウンヴェッター・フォルム!】

——高らかな、声が響く。

それは、エリオのアームドデバイス。ストラーダからの声であった。

ぱりぱりと、辺りを帯電する雷が走る。それは紛れも無く、エリオから放たれた雷。

同時、辺りをぼたぼたと何かが落ちた。

例の虫——。ギンターの固有武装、魔虫^{バグ}である。

それらは全て帯電し、下に落ちたまま——動かない。

《へえ》

「……エリオ」

ギンターからは感心したような声が、シオンからは呆然とした声が漏れ。

——エリオはその全てを無視した。

ストラーダを構える！

「はああああ———！」

【ソニック・ムーブ！】

吠えると同時に、ストラーダが叫び声を上げ。エリオが雷光もかくやと言う速度で駆け出す！

対し、ギューンターは即座にシンクラヴィスを吹き鳴らして。

一撃！一

突如発生する音衝撃波！

それは、超音波によって発生する衝撃波にあらず。

空間を音により歪ませ、発生させる衝撃波であった。

これは、かのゲイルのポイント・アクションにも通じる能力である。

——ただし。ギューンターの能力は、彼を完全に凌駕していた。

何故ならば、ギューンターは衝撃波を彼とは全然別の場所から突然、発生させていたのだから。

これに弾道も何も無い。

いきなり衝撃波が周りに発生するのだから。

そして、今回も例外無くエリオを打たんとして——。

——エリオの動きは、その想像を一步超えた。

空間に足場を設置し、そこに唐突に身を投げ出す。

ソニック・ムーブを発生させたままだ。

ギョんターの音衝撃波は間に合わず、飛んだ彼の足元を打つ。それを感じながら、エリオは高速で身体をよじると天地逆さまに足場に着地。――ギョんターと目が合った。

ぞくりと言う感覚が、”ギョんター”の背筋を走る！

エリオは構わない。ソニック・ムーブで、そのままひた走る！狙いは当然、ギョんター！

ギョんターはさせじと音衝撃波を発生させ――。

一撃、撃、撃、撃、撃――

一撃！――

幾重にも発生する衝撃波。が、辺りに幾つも発生させた足場を足掛かりにして、ジグザグに駆けるエリオはそれを全て回避する！

自分に迫り来る、エリオにギョんターは目を大きく見開き――。

だが、構わず衝撃波を放ちながら、今度は魔虫も飛ばす！

それらは、駆けるエリオに飛翔し――。

一雷！――

そんな魔虫をエリオの身体から溢れる雷が打つ！魔法では無い。ただの魔力変換資質である電撃である。――だが、それは既にアビリティ・スキル・魔力放出に近い威力を伴っていた。

言うならば、魔力放出・雷と言った所か。
何にしても、魔虫からすればたまったものでは無い。
近寄るだけで雷に打たれるのだ。
毒針を撃ち出そうにもエリオが接近するだけで、その前に迎撃される。

それは則ち一つの事実を意味していた。
ギョんターの攻撃全てを破ったと言う事を！

そして――。ギョんターまでの道が、開いた。

「ああああ……！ サンダー――！」
《っ！ これはマズイねい！》

吠え、空に飛び上がりながらエリオはストラダを振り上げる！
そこからは、溢れんばかりに雷光が迸り――！

ギョんターが自身の前方に魔虫を配置するのと、エリオがストラダを振り下ろすのは、全く同時であった。

「レイジ――！！！」

―雷―

叫びと共に、ストラダを中心として雷が跳ね回る！
回避する余裕も無く、ギョんターに。そして、仲間であろう小柄なもう一人の仲間に、それは炸裂し。

―爆！―

辺り一帯を雷と共に、爆発が襲った。

爆発は当然、爆煙を引き起こす。――それを引き裂いて、エリオが後ろに下がりながら飛んで現れた。

「はあはあと肩で息をしながら、エリオは黒煙の中を見遣る。

手応えあり、今のは完全に決まった。

これならば――。

そんなエリオを見て、シオンは呆然とする。

――確かに魔虫に対して、エリオは相性がいいとは予測していたが、ここまでとは思わなかった。

まさか、一人であそこまでやるとは。

何より凄まじいのは、エリオは相性の良さやら実力差やらを、一切考えずに突っ込んだ事にある。

シオンが実力差に呆然としていたにも関わらず、エリオはそこらを全く考えなかったのだ。

――本来ならば、慎重になるだろう。戦場では考えられない行為。しかし、時にその無謀さこそが必要とされる事がある。

エリオは、それをやって見せたのであった。

……うかうかしてられねえな、おい……。

シオンは苦笑を浮かべて立ち上がる。

弟分の、まさかの成長に複雑な気持ちになる彼に、エリオがこちらに振り返った。

「だ、大丈夫ですか？ シオン兄さん！」

「……おう。しっかし、お前……」

「な、何でしょうか？ 僕、何かマズイ事でも……？」

「んにゃ、大したもんだと思ったんだよ。——それより、構えろ」
「え？」

反対側で疑問符を浮かべたエリオに、シオンは苦笑を消すと刀を構える。

——ゆっくりと、黒煙が晴れて行き。

「あの程度でやれるんなら苦労はいらねえさ。——あの野郎、咄嗟に防御しやがった」

「っ————！？」

エリオが、その言葉に息を飲み——。同時、黒煙から二人の影がゆっくりと現れた。



「やれやれ……。参ったねい」

言葉に反し全く参った様子も無く、ギョウターは呟いて来る。
彼も、その横に居るもう一人の仲間もダメージを受けた様子は無い。

そんな彼等の前に展開する三角形の形を取る光があった。

頂点に、それぞれ魔虫が一匹ずつ居る。

あれもまた、魔虫の機能の一つと言う事か――。

シオンとエリオはぐつと息を飲むと己の武器を構える。

そんな二人にギンターは笑いながら、目を細めた。

「……なるほど。そっちも復活しちゃったようだねい。これは、一人じゃ厳しいねい――」

「僕も出ようか」

そこまでギンターが言うと、直後に今の今まで傍観に徹していたギンターの仲間が彼に言い放った。

疑問符ですらない。既に確定事項を言うような、そんな言葉である。

ギンターはそんな彼に振り向き。

「じゃあ、お願いしようかねい」

「分かった」

言うなり、彼が目深に被るマントから伸びるものがあつた。

長柄長斧。

ハルヴァードと呼ばれるそれを、唐突に引き出したのである。どこにそんなものを仕舞っていたのか――。

そんな疑問を抱く前に、彼はこちらに突っ込んで来る。エリオではなく、シオンに！

「っ！」

「君の相手は僕だよ」

一閃一

声と共に放たれる一撃。

シオンはその一撃を刀で斬り流そうとして――。

一撃！一

な、に……！？

彼の一撃を斬り流した方向に身体ごとすっ飛ばされる！
ぐるぐると回転する自分に自覚し、驚愕に目を見開いて。

「IS…ザ・パワー」

一轟！一

次いで放たれた頭上からの一撃が、シオンに容赦無く炸裂！

シオンはビルの屋上へと直下に叩き付けられ、そのまま屋上が陥没。

その姿は、ビルの中へと消えた。

「シオン兄さん！？　っ！？」

「よそ見をしている暇はあるのかい」

そんな光景を目の当たりにして、エリオが悲鳴を上げるも当然敵は構わない。

今度はエリオへと長柄長斧を叩き付けんと振り上げ――。

「させるかボケェ！ 剣魔ア！」

――轟！――

真下から咆哮と共に、魔力をその身に纏ってシオンが突き上がって来た。

その一撃に長柄長斧を弾かれ、フードを被ったままの敵は後退。代わりとばかりに、ギョンターから例の衝撃波が来る！

対し、シオンは空中に足場を展開しながら前方に踏み込んだ。

――自然、刀が頭上に振り上げられる。

そこから放つは、シオンの最速斬撃！

「絶影！」

――斬！――

放たれた斬撃は視認出来なかった。

気付けば、既に振り放たれている。

同時、空気が彼の周りにぶあっと広がった。

――それは、確かに何かを斬った証。

ギョンターが驚きを笑みとして顔に浮かべながら、念話で吠える。

《斬ったのかい！？ 空間衝撃波を！》

「二度も三度も同じ手食らってたまるかボケ！」

ぐいっと口元を手で擦りながら、シオンはギョンターに罵声を浴びせた。

どうもエリオの前で何度も転ばされたのが、よほど業腹だったらしい。

刀をギョンターと、もう一人の斧使いへと差し向けた。

「まったく、何度何度何度何度も！ 俺は起き上がり小法師か！」

《——そのネタが分かる人間はそういないと思うねい。ところで、どうやって衝撃波が発生するポイントを見極めたのか聞いてもいいかねい？》

「うっせえ。勘じゃボケ」

身も蓋も無い台詞を堂々と放ち、シオンは再び刀を構える。

その横でエリオもストラダーダを構えた。

「シオン兄さん。あの斧使いなんですけど……」

「氣いつける。あのガキ、馬鹿みたいな怪力してやがる。まさか、斬り流した威力に身体が持ってかれるなんざ思わなかった」

「——ひどいな。ガキとか、馬鹿みたいな怪力とか。僕は、クリストファと言う名前があるし。怪力じゃなくISだよ」

二人の会話に無理矢理入るようにして、斧使い——。彼の言葉を信じるならクリストファと言う名前か。

何にしても、彼は言ってくる。

その言葉を聞いて、シオンとエリオはやはりか、と納得した。

IS…ザ・パワー。

その名の通り、それは尋常ならざる臂力を使用者に与える能力であつたか。

単純極まりない能力であり――。それ故に厄介と言えた。

シオンとエリオ、ギウンターとクリストファ。

四人は互いの武装を構えたまま、硬直する。

シオンとエリオ側は、ギウンターとの実力差とクリストファの戦闘能力が未知数と言う事もあり、軽々とは仕掛けられず。

ギウンターとクリストファ側は、自分の攻撃をくぐり抜けた事実から仕掛けるのを躊躇っていた。

――が、逆を言えば。きつかけがあれば、いつでも仕掛けられる状況と言う事でもある。

だが、そのきつかけを掴めずに四人は高まる緊張の中で機会を探り。

果たして、そのきつかけはすぐに来た。

シオン達を基点として、” ロンドン中に広がった広域結界によって”！

ギウンターと、クリストファが目に見えて驚き――。

「ナイスちび姉え！」

《ちび姉と言うな！》

その隙を見逃さず、シオンとエリオは二人に襲い掛かる！ すぐに我に返ったギウンターが衝撃波を発生させ、クリストファが斧を

振るうのと。シオンが剣魔を、エリオが電撃斬撃、スピーアシュナイテンを放つの全く同時であった。

それらの一撃は真っ向からぶつかり合い――！

一轟一

一撃一

一爆！一

容赦無く辺りに衝撃をばら撒き、爆碎！
ビルの上が完膚無きまで消し飛び。――そして。

一砕一

衝撃に耐え兼ねたのかロンドンでも随一の高さを誇っていたビルは、そのまま倒壊を始めた。



虚空を進む。一隻の次元航行艦が。

XL級の、その艦は元はストラ所属の船。

しかし、現状ではある個人の持ち物となっていた。
つまりは、その艦を強奪した伊織タカトの。

ゆっくりと進む航行艦の中、ブリッジにてタカトは立ち上がった
ままモニターを見遣る。

その目は何か、ひたすらにひたむきに前のみを見ていた。
まるで、何か遠くを見ているよう……。と言うよりは何かから必死に視線を逸らしているような正しいのか。

……そう、タカトは目を逸らしていた。必死に、自分が行った行為を恥じるように、後悔するように。
何故なら――。

「ふっふふ……！ いいね……！ ラ○・デビ○ークにはライバル心を掻き立てられるよ……！」

彼の背後では、最近とある月刊少年誌で連載を再開したちよつとエッチと噂高いラブコメアニメをジェイル・スカリエッティが熱心に見ていたのだから。

そんなジェイルからタカトは必死に目を逸らす。

……周りに居る、元ナンバーズからの視線が凄まじく痛かった。
何故かと言うと、今ジェイルが見ているアニメはタカトが動画データを提供したものであったのだから。

やがて、視線に耐え切れなくなったのかタカトがぽつりと呟いた。

「……認めたくないものだな。若さ故の過ちと言うものは」
『こらこらこら』

一斉に、それこそタカトを怖がっている筈のクアットロからさえもタカトに裏手でツツコミを入れる。

唯一、セツテのみが無反応であった。

タカトへと、彼女達は更に叫ぶ。

「――どうするのですか？　と言うより、D rをどうするつもりな
んですか！　あんな、あんな……！」

「……いや、ものは試しとアレを見せたら。まさか、ああもハマる
とはな……。まあ、ものは経験だ。ああ言う人間の機微を知るのも
悪くは無かろう」

「それは後付けの理由だな？　そうだな？　そうだと言え……！？」

「――何を馬鹿な。ほら、俺の目を見てみる。これが嘘をつく目か」

「今、一つ間が空きましたですわね？　それに、そこからは背中
しか見えませんわよ！」

三人の叫びも届かない。タカトはあくまで若さのせいと言い切る。
……どうでもいい事ではあるが、この兄弟は何故言い訳をする際
に、ガンダ○ネタに走るのかは一切不明であるので、あしからず。

ともあれ、タカトはそれらの流れを一切ぶった切ると三人に振り
向いた。

「さて、軌道拘置所を出港して早、三十分。そろそろ、次元封鎖に
ぶつかる頃合いだが――」

「……話を逸らしましたね？」
「何の事だか分からんな」

にべも無い。そんなタカトの反応に、ウーノは嘆息。
手元のコンソールを操作し始めた。

「貴方の証言を元にするならば、そろそろですね」

「そうか。行けるか？」

「問題はありません」

即答で答える。

タカトが問うているのは、次元封鎖を突破できるか否かであったが。それに迷う無く、ウーノは頷いた。

ウィンドウを展開し、モニター上にデータを表示する。

「このシステムは、管理局の所属と艦のデータを偽装して、次元封鎖魔法のプログラムに介入する機能です。私のフロールスセクレタリーと、クアットロのシルバーカーテンの応用ですが――。この手の技術は、Drの十八番です。信用して下さい」

「……………」

タカトは無言。一瞬、アレをか？ と『こう言った発明品も悪くないね！』と叫ぶジェイルに指差しそうになり、寸前で止めた。

――わざわざ自分から責められる要因を復活させる必要もあるまい。

そんな風に思っていると、ウーノからそのまま声が来た。

「はい。今、通り抜けました」

「………今か？」

「はい、今」

随分とあっさりとしたものである。

流石にタカトは驚きを隠せずにモニターで周囲の座標を確認し、そして肩を竦めた。

確かに、自分が弾き飛ばされた座標を航行艦は越えていたのだから。

大したものだと、タカトは苦笑する。

「さて、ジェイル」

「ふふ……。しかし、この金色の○と言ったかね。彼女の能力は素晴らしい。いっそ、クアットロかセツテ辺りに――」

「話を聞けい」

「ひでぶ!」

一撃一

ちよつと怖い台詞を呟くジェイルの頭に踵落としを叩き込む。

その一撃に、ジェイルは顔ごと端末に突っ込み――。数秒後には何事も無かったように、タカトに振り向いてみせた。

「何だい、タカト? おおっと、もう次元封鎖は越えたんだね?」

「……………まあ、もういいか」

……一応、似たような能力を持つ輩はいるのだが、その辺はあえて伏せる。

タカトはこちらに戻って来たジェイルを含む、ここに居る皆に話しを始めた。

「次元封鎖も無事越えられた。感謝しよう、ジェイル」

「ふふ、感謝されるような事でもないさ」

「……そう言ってくれるのはありがたい。さて、ここからの予定だが。俺はミッドチルダに向かう。――その上で、だ。貴様達はどうする?」

「当然、ここまで来たのだから付き合うさ」

タカトの問いに、あっさりとジェイルが頷く。他の者達も同様なのか口を挟んで来なかった。それは予想内だったのだろう。タカトも特に反応を見せずに頷く。

「そう言うと思っていた。ならば共に来てもらおう。今、現状でミッドの状況が分からんが、分かり次第ミッドに――」

「いえ、待って下さい！ タカト、これを！」

行く、と。タカトが最後まで言う前にウーノが叫び声を上げた。それに、一同は怪訝な表情となる。

「どうした、ウーノ。何があった？」

「ミッドのサテライトニュースをジャックしたのですが――。これを」

そうウーノは告げると、展開したウィンドウに動画データを展開する。

それは、ミッドで今流れているサテライトニュースであった。

《――今、現在クラナガンでは大規模の戦闘が発生しています。住人の皆様は速やかに避難を――》

「……何？」

大規模の戦闘だと？

予想外のニュースに、タカトが目を細める。モニターでは、クラナガン上空の映像が映されており、そこでは管理局の武装局員と激

しく撃ち合うガジェットの姿があった。

これは――。

「ストラ、か？　しかし、次元封鎖がなされているのに何故――？」
「ツアラ・トウ・ストラ。君の話しによれば、本局を占拠したテロ組織だったね？　く、ふふ……！　彼等にも興味が沸くよ。――それに、私の戦闘機人テクノロジーを勝手に使われた借りもあるしね」

一瞬だけ、タカトはぞくりと言う感覚を受ける。

モニターを見る、ジェイルの目が笑っていなかったから。

軌道拘置所が出る前に、ジェイル達には第二世代戦闘機人の事を話していたのだが――。まさか、こうまで劇的に反応するとは思わなかった。

だが、今はそこを気にしている場合でも無い。

タカトは、彼に疑問を突き付ける事にした。

「ジェイル。貴様の見解を聞かせろ。――ストラはどうやって次元封鎖を突破したと思う？」

「――そんなのは決まっているよ。無理矢理さ」

肩を竦めて、それこそ何でも無いかのようにジェイルは答える。

その答えにこそ、タカトは眉を潜めた。

「無理矢理だと？」

「そう、外殻を強化した航行艦で次元封鎖に突撃を掛けたのだろうね。それならば、五艦に一隻程度ならあれを突破出来るだろう？」

――五艦に一隻。事もなげにジェイルは告げるが、それは自爆覚悟の突貫と全く変わりなかった。

カミカゼではあるまいが、死が確定している作戦である。いくら、ストラ側の戦力がガジェットや因子兵と言う人を極力使わないもので固められているとは言え、航行艦に人が乗っていない筈も無い。

ツアラ・トウ・ストラ。

彼等は、自分達の命でさえも等しく、平等に尊く”扱わない”。
いっそ清々しいまでの徹底ぶりであった。

ともあれ、ストラは次元封鎖を突破してミッドで暴れている。

タカトがあままでして、次元封鎖の破壊を拒否していた意味は無くなってしまった。

ならば。

「ジェイル。俺は今から直接ミッドに跳躍^とぶ。その上で奴達を叩き潰す。お前達は後でゆっくり来い。……管理局の人間には見付からんようにな？」

「その前に一つ。タカト、君はミッドに何をしに行くんだい？ 君の目的は？」

「助けたい奴らが居る」

即答だった。

タカトは、ジェイルに間髪入れずに答える。

同時、彼の足元に魔法陣が展開した。

それは、次元転移魔法。

「助けたい友と、助けたい弟子。そして、そいつらの世界を守ってやりたい。……答えは不服か？」

「いや、十分だよ。けど、名前だけは聞いてもいいかい？ その友

と、弟子の」

「ユーノ・スクライア。……そして、”高町ヴィヴィオ”」

——空気が凍った。完膚無きまでに、タカトの答えによって。あのジェイルですらも目を大きく見開いて、驚愕している。

が、それに構わずタカトは言葉を締め括った。

「あれらのためならば、俺は鬼にも修羅にも化そう。——では、先に行く」

「いや！ タカト待——」

待たなかった。タカトの姿が消える。

後に残されたのは、固まるジェイルと元ナンバーズ達——。

——かつて、”ヴィヴィオを苦しめ、泣かせた者達”——。

——彼等しか残っていなかった。



高空の空に、光が灯る。

クラナガンの空に光が。

それは射撃魔法、砲撃魔法の光であり。ミサイル等の質量兵器からなる光でもある。

また、ガジェットや因子兵。……武装隊の局員達が攻撃を受けて、墜ちる光でもあった。

《こちらブラボー2！ 隊長！ このままでは陣形が食い破られま

す!》

《ホーク4とホーク5を回せ! くそ……! なんだってこいつら……!》

部下の念話に、指示を怒鳴るように返しながら隊長と呼ばれた中年男性が射撃魔法を放つと共に、呻き声を上げた。

敵は例の人もどきのガジェットと因子兵。

つまりは、ツアラ・トゥ・ストラの戦力である。

ガジェットはともかく、因子兵などと言うものを使うものなどストラしかないなかった。

だが、それは本来有り得ない事である。何故ならミッド周辺には次元封鎖が敷かれ、境界を越えるには管理局所属の艦である事を証明するしかない。

つまりストラはミッドを攻められない。――筈、であった。

そんな確信を、ストラは微塵に碎いてくれた訳だが。

まさか、強行突破を図るなど誰も思いはすまい。

結果、次元領界に容易く攻め入れられストラの軍勢は再びクラナガンで蹂躪し始めたのであった。

ミッド航空部隊や、地上でもストラ軍を迎撃はしている。

いる、が。向こうの戦力はガジェットや因子兵が主力。

対魔導士戦闘に特化した兵器であるガジェットや、再生能力を有する因子兵である。

その戦闘能力は、どうも臆目に見ても平均的な魔導士より高い。さらに数は揃えられている上に、犠牲を厭わない戦術行動が可能

と来ている。

管理局航空、地上戦力は善戦しているものの当然とばかりに不利に陥っていた。

《くそ……っ！ 聖王教会からの援軍は！？》

《来てます！ ですが、向こうの戦力が多過ぎて……っ！？》

—煌！—

そこまで部下が叫んだ直後、光が炸裂する！

その光に部下が巻き込まれたのを、隊長は見た。

光を放ったのは、上空から現れた因子兵達！

鎧型のデバイス——。つまりは、デバイス・アーマーを着込んだ因子兵達であった。

彼等の攻撃は魔法ではなく、質量兵器。

つまり、今攻撃に巻き込まれた部下は——。

「くそったれがああああ——！！！」

—轟！—

叫び、砲撃魔法を放つ！

だが、その一撃は易々と因子兵達に回避され逆に光砲と光射を叩き込まれた。

彼も応射し、次々と因子兵達に砲撃魔法を放つ——。が、所詮は多勢に無勢であった。

瞬く間に周囲を包囲される。

そして、因子兵達は隊長に砲撃を放っていたのであろう、背中に担いだ二門の砲台を彼に一斉に向ける。

——もう、彼にこれを回避する手段も防御する手段も、ない。

「くそ……！」

呻くように吠える。けど、もうどうしようも無くて。

「くそつたれ……！」

叫ぶ、叫ぶ。——現状は変わらない。

隊長である、彼の死と言う現実は。

せめてもの抵抗に、彼は杖型のデバイスを持ち上げて因子兵に向ける。同時、因子兵達が向けた砲門が光り輝いた。

「くそつたれ共があああああああああああああああ
っ！」

——轟！——

——爆！——

次の瞬間、隊長が放った砲撃は因子兵の一つに直撃して、それを消し飛ばし。彼には、因子兵達から放たれた光砲が殺到。——砲撃を放って無防備な隊長の身体に次々と撃ち込まれ、爆碎。

……彼は遺体すら残さず、消し飛ばされた。

因子兵はすかさず旋回。

次の標的に向かわんと、飛翔を開始して――。

それを、見た。

上空に広がる雲を突き抜けるように現れた純粹なる黒を。

そして――。

一斬！――

次の瞬間、黒から縦横無尽に放たれた水系が。その身体を両断して行く。

――当然、すぐさま因子兵は再生しようとするものの水系は更に、容赦無く何度切り刻んだ。

計、五回。

因子兵は再生限界数の分だけ、殺害されて結局塵に帰る事となった。

それを尻目に。彼はゆっくりと降下して行く。

伊織タカト。ミッドチルダ首都、クラナガンに現着。

――戦闘を、開始する――。

(中編に続く)

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」（前編）（後書き）

はい♪ いや、本当お待たせしました（汗）

ようやく更新です♪

正直、まだスランプから脱しておらず、文章が所々おかしいかもですが（汗）

御用心いただければ、幸いです。

ではでは♪ 次話をお楽しみに〜♪

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」(中編) (前書き)

はい♪ テスタメントです♪

……ええ、すんません(汗)

また遅れました(涙)

ノクターンの方も書きたいのに、まだ書けてないし(汗)
こ、これがスランプの恐ろしさか……!(汗)

とにかくにも、本編更新♪ 楽しんで下さい♪
では、どぞ〜♪

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」（中編）

ミッドチルダ、クラナガン上空に、疾り抜ける水糸。

それは的確に、確実に。

そして恐るべき速さで、あっという間にクラナガン上空のストラ戦力を駆逐してのけた。

今の今まで、管理局航空部隊がまじめに戦っていたのがバカらしく感じられる程速やかに、その駆逐は行われいく。

取り残された彼等武装隊員達を、それを放った術者であるタカトは全く見もしない。ただ、ただ、因子兵を。そして、ガジェットの掃討だけに集中している。

《お、おい……？ あれ、誰だ……？》

《知るかよ。だが、これで……》

希望が持てる。そう、航空部隊の彼等は頷き合う。

そう、彼等は第一級次元犯罪者である、666たるタカトの顔を知らないのだ。

タカトのバリアジャケットには、『直視でなければ顔を視認出来ない』と言う特殊な概念魔法が掛けられている。

これにより、666はその被害者数に比して顔が全く出回らない犯罪者となっていた。——そして、それ故に。

《誰だか、知らないが協力に感謝——》

一斬！一

そう、念話をタカトに掛けた瞬間。局員達を水系が一刀の元に切り捨てた。

致命傷ではない。が、水系は容赦無く彼等の意識を奪い取る。

な、ぜ……！？

局員達が大きく目を見開いて、こちらを見つめる。それに対して、タカトは視線のみで答えを告げた。

邪魔だ、失せろ。と。

そう、タカトにとって守るべき対象はユーノとヴィヴィオ。そして彼等の住む世界。

それ以外は、例外無く敵。

当然、その敵には”管理局の人間全員が含まれる”。

「……………」

タカトは鮮血を撒き散らしながら落ちる局員を尻目に降下を開始。……当然、この間にも水系はストラ戦力はおろか、管理局局員を適度に戦闘不可まで追いやっている――。

――その状況を尻目に、降下し続け。やがて、一つの場所に目を付けた。

恐らくは高速道路のような道なのだろう。

それは、ミッドチルダ管理局地上本部へと繋がる道だ。

そこをストラの因子兵や、数種のガジェットと管理局武装隊員達が東西に分かれて撃ち合っている。

——どうやら、あそこが最終防衛ラインなのだろう。

二つの勢力が最も激しくぶつかりあっている。

ならば。

タカトは目を細めると迷い無く、そこに高速で降りた。

両者が撃ち合っている、ちょうど真ん中に！

—轟！—

爆音を立てて、真ん中に着地。

そんなタカトに驚いたのか、管理局側からもストラ側からも一瞬射撃が止まった。

そんな二勢力に、タカトは告げる。

「……さて、どちらから先に潰されたい？」

そう、宣戦を告げた。

数秒、時が止まったように場が凍る。

いきなり現れたタカトに咄然とし、戸惑っているのだ。
全く空気を讀まずに現れたタカトに。

管理局側は、呆然とし続け。ストラ側は――。

「――伊織タカト!？」

自分の名を叫び声として出され、タカトは眉を潜める。
前々から常々思っていたのだが、ストラには顔が割れているらしい。

まあ、自分を知る人間なぞ向こうには山ほど居るのだから不思議でも何でも無いのだが。

代わりに、管理局の面々は名前を聞いてもきょんとしている。

――最近では、666と言う呼び名で呼ばれる事の方が稀だが。
本来はそちらの呼び名の方が流布しているのだ。

伊織タカトと言う本名は、管理局の人間の中でも一握りしか知らない。

……ついでにタカトはストラ側にも、人間が居る事を確信した。
必ず司令塔たる人間が居るだろうとは思っていたが、案の定と言った所が。

まあ、この襲撃の指揮者では有り得ないだろうが。
何にしても、潰すのに変わりはない。

そうタカトは思い、まずはストラから潰すかと歩み出して――。

「――アレを展開しろ！」

そんな声を聞いた。直後！

―壁―

辺りを、何らかの力が走り抜ける。

同時にタカトは自身の八卦炉の動きが鈍った事を自覚した。

これは――。

「AMF、と言う奴か」

アンチ・マギリング・フィールド。

対魔導士戦において、絶対的なアドバンテージを誇るジャミングフィールドである。

それがこの戦場を中心に、数十Kmに渡って展開された事をタカトは悟った。

このフィールドに掛ければ、魔素を必要とせずエネルギーの種類が違うタカトオリジナル魔法術式、八極八卦太極図と言えど影響を受ける。

当然、ミッド式を使う武装隊も例外では無い。

一斉に魔法が使え無くなり、総員顔が青に染まり――。

「今だ！ 管理局共々あの魔王を潰せえ！」

とても分かりやすい命令が飛び、因子兵が、ガジェットが、群れ

を成してタカトへと襲い掛かる！

——この一団を、タカトが屠るのは割と楽だ。

水迅を使えば一撃だろう。

しかし、次撃が持たない。

このAMF空間内では魔力の無限精製に限りが出る。

つまり、ここで魔力を使い切っては次の魔力が精製されるまで魔法は使えないと言う事であった。

魔力精製まで素手で切り抜けると言う手段もあるのだが——。

面倒臭い。

そう、タカトは判断した。

故に、残る魔力である魔法を発動する。

両手の指を組み合わせ、口訣こうけつを唱える。

——その魔法を分かる人間が居れば、ひよっとすれば驚愕したかもしれない。

それは、仙術における”空間接続魔法”だったから。

——俗に、その魔法を壺中天こちゅうてんと呼ぶ。

その魔法を自分の後ろに展開し、無造作に手を後ろに突っ込む。

手は、まるで何かに飲み込まれたようにタカトが展開した空間に入り込み——。

よいしょっと、巨大な鉄塊を取り出した。

人間が持つにしては、あまりに巨大過ぎるそれを。

鉄塊は、円筒形の形をしており何やら先端には円に沿って穴が複数空いている。

更に、タカトが持つ取手部分からは大きな――。大きすぎる筒状のものが無数に連なり背中の空間に入り込んでいた。

は？

と、ストラ側、管理局側問わずタカトが取り出したものを見て、目を点にする。

タカトは構わず、
”安全装置”を解除した。

——その鉄塊は、俗にこう呼ばれるものでは無いだろうか？

”ガトリング・ガン”と。

「……魔法はどうしたんだ？」

そんな当然の疑問が、ストラ側から聞こえる。

因子兵や、ガジェットが襲い掛かっている場面からすれば的外れのくせに当たり前過ぎる疑問が。

それに、タカトはふむと頷いて。

「――水曜日は、ガトリング砲の日なんだ」

[illegible]

タカトに、ストラ、管理局問わずにツツコミが叩き込まれ。その
 答えとばかりに巨大なガトリングが回転開始。

——爆音が鳴り響き始めた。



銃は許可さえあれば所持出来る。

これを知る管理内世界の人間は、実はわりと少ない。

一般的には拳銃は立派な質量兵器扱いなのだから。

だが、いくらなんでもこれは立派な質量兵器所持違反であろう。

そう。ガジェット、因子兵にガトリング砲の銃撃――。もう、爆撃と呼んだ方が正しいのかも知れないが、それを叩き込むタカトを見て、管理局武装隊の一人はそう思う。

G A U－8、アヴェンジャー。

それがタカトが今、鼻歌混じりに放っているガトリング砲の名前であった。

口径30mm。7銃身。対戦車攻撃用に開発され、A－10攻撃機に搭載。C I W Sの一種であるゴールキーパーにも使用されているガトリングガンであるが、タカトがかましている”暴拳”を見れば、第97管理外世界、地球の兵器開発者は泡を吹いて倒れるかも知れない。

なにせ、このガトリング。

某アメリカ軍の航空機搭載機関砲のなかで最大、最重。そして攻撃力の点で最強を誇るガトリングなのだから。

主に”対戦車攻撃”に利用されされていると言う段階で、タカトがどれほどめちゃくちゃな真似をやっているか分かるうと言うものである。

間違っても人間が手で持って運用出来るようなものではない。

戦車を紙のように穴だらけにするとする馬鹿げた威力は、当然凶悪な反動を伴う。

何せ、このアヴェンジャー。戦闘機が撃つだけで飛行速度が落ちたとか言う都市伝説を生んでいるのである。

人間が手で持って撃つなど、考えられる訳が無い——筈、なのだが。

そこは、伊織タカト。そんな人間的常識をそおいつ！ とばかりに投げ捨てて直立したまま化け物ガトリングをぶっ放している。

——なお、これは余談だが、一般的にガトリングとは人間が手で持って使うなど有り得ない武装である為注意されたい。

洋画でよくあるような、人間がガトリングを手で持って掃射などはフィクションだから出来る話しなのである。

間違ってもタカトの如く、ター○ネーター2の真似をしたいからと言ってガトリングを手で持って使わないようにされたい。

しかし、アヴェンジャーと言う名前のガトリングをタカトが使っているのは皮肉か何かが込められているとしか思え無い。

とにかくにも、その化け物ガトリングは毎分4200発程も弾丸を吐き出し、ガジェットと因子兵を粉々に碎いていく。

因子兵はともかく、ガジェットは魔法には強いが質量兵器には圧倒的に脆いと言う欠点がある為だ。

まあ、本来の生みの親であるジェイルからしてみても、アホみたいな巨大なガトリングを持ち出す輩など想像出来ないだろうが。

因子兵にしてみても、このガトリング砲の前からしてみれば再生能力など意味は無いようなものである。

次々と、圧倒的な数を誇っていた因子兵やガジェットが撃破され

て行き――。それが、現れた。

「……？」

ガトリング砲の掃射を止めずに、しかしタカトは眉を潜める。
ガトリングから吐き出された大量の銃弾が次々と弾かれたのだから。

それは、ごろりと転がってタカトの前に現れた。

ガジェット？型。

数あるガジェットの中でも最強の防御力を誇るガジェットである。
その防御力は、ガトリング砲の銃撃を軽々と弾いている事からも
分かるうと言うものだ。

それが、ストラ側を守るように総計十機立ち並び――。

「は、ははは！ どうだ！ これで――！」

――爆！――

いきなり、その一機が爆発した。

笑っていた、ストラの人間の声を問答無用に消し飛ばして爆発は
広がる。

――再び固まった彼が目にしたのは、タカトが取り出したもので
あった。

大きな筒にトリガーを付けたようなフォームの銃。が、見た目と
しては正しいだろう。

それは一般的には、こう呼ばれる。

グレネードランチャー。

専門的には、M203グレネードランチャーと呼ばれる物であった。

本来はM16アサルトライフル等の自動小拳銃の下部に取り付けられて運用されるのだが、当然単体運用も可能な単発式グレネードである。

接触してから爆発するその威力は、当然ガトリング砲と単発の威力が違う。

ガジェット？型が、爆砕されるのも、むべなるかな。

タカトは化け物ガトリングを投げ捨てると、滑るような動作でグレネードを再装填。

次のガジェット？型に差し向けながら、ぽつりと呟く。

「確か、こんな場面ではこう言うのが典型だったな」

「あ！ 撃、撃て――」

向こうが、そう叫ぶ前にガジェット？型は既にレーザーを放っている。

だが、それをタカトは半身を反らすだけで避して。

「H a s t a l a v i s t a , B a b y (地獄で会おうぜ、ベイビー)」

某〇ーミネーター2の名台詞を呟きながら、引き金を引く。

しゅぽんっと間抜けな音と共に弾頭が発射され、ガジェット？型の上部にかつんと当たり。

—轟！—

—爆！—

当然の如く爆発！ それを皮切りに、タカトはさらに棍棒型手榴弾ポテトスマッシュを取り出すと五指に挟んで疾駆！

放り投げられたそれらが、空に舞い——。

直後、更なる爆発が辺りを蹂躪した。



それは、ギンター達との戦いから僅かに三分程遡る出来事——。

イギリス首都、ロンドン上空をエリオを抱えてシオンは飛翔する。彼等は、もうそろそろロンドンが誇る雄大なる川——テムズ川に差し掛かる所であった。

ロンドンと海とを繋いで来た、川。

ロンドンという都市はこの川をハジマリとして作られた、と言っても過言ではなからう。

そんな川に差し掛かる辺りで、シオンは抱えるエリオに笑った。

「ここがテムズ川だよ。ああ、こう言う時じゃなけりゃあ観光で見せてやれるんだけどな——」

「はい、僕もゆっくり見たいです」

エリオも頷く。だが、声は硬い。

緊張か、怒りか――。恐らくは後者だ、当然とも言える。

何せ、この少年はたった今さっき、最も大事な人の一人を失いかけたのだから。

その恐怖と、そして怒りは、シオンには馴染み深いものであった。

――だけど。

……お前は、俺と同じようにはなんねえよな……。

エリオは、自分のようにはならない。

シオンはその確信があった。そうでなければ、ティアナやスバル達の隙について念話で呼び出したりしない。

直感に頼るまでも無い。

何故ならエリオは自分を見ている。

怒りに染まり、勘違いの末に復讐者なんてものに酔っていた自分を。

あの自分が犯した愚を、エリオが繰り返す筈も無かった。

だから。

そう思いながら、苦笑する。

エリオが苦笑の気配に、こちらをちらりと見た。

「どうしたんですか？ シオン兄さん」

「いや、またやっちゃったなあーてな？ ティアナやスバルが気付いたら、またうるさいだろう――」

そう言った、直後！

《こんのバカ共おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお——！！》

「どおおおっ!？」

「わ、わ、わ、わ!？ 落ちる!？ 落ちちゃいますよ!？」

響き渡る大音量の念話に、シオンは体勢を崩し、エリオはあわやシオンの腕から落ちかける。

あわたたと体勢をどうにか立て直し、ほっとする暇もあらずんば、シオンとエリオは同時に真っ青になった。

聞き違える筈も無い、今の念話は——！

「てい、てい、てい、ティアナ、さん？」

《言い訳があるなら聞くわよ？ 聞くだけならね？》

ひい!？ 怒ってる——！！

どうやったか、こちらを捕捉したのだろう。

当たり前と言えば当たり前なティアナの反応と、今までに無かった程の声音に、シオンは心底恐怖した。

エリオなぞ、先の怒りもどこかに吹き飛んだかのようにガタガタ震えている。

とにかくにも、ここは言い訳をするべき。そう判断して、シオンは震える唇で言葉を告げた。

「あ、あのティアナさん？ これはですね、立派な策であり、敵を

追い詰めるのと合わせて奇襲を掛ける為に重要な事でしてね？」

《……へえ、何よ、策って？》

「いや、それはこう、アレですよアレ、ひ・み・つ・って言うか——」

《死刑》

告げられた一言に、ぎゃー！ 俺何か間違った——！？ なんぞと叫ぶが最初から最後まで間違っているとしか言いようが無い。

エリオがシオン兄さんのバカ……と、呟くのを聞いてなにおうと言いつ返すが、そんな暇は無いとすぐに気付いた。

頭をふるふると振って、シオンはティアナに呼び掛ける。

「——冗談はここまでだ。ティアナ、いいか、よく聞け！」

《私は——》 私達は”かけら足りとも冗談の積もりは無いわ》

「い、いいから聞けって！」

私達は、と言い直した辺り、今回はスバルやギンガ、みもりもかなり怒っているのだろう。

良子？ 論外だ。既に頭に鬼の角を生やしているのは間違いない。ともかく、話しの方向転換をシオンは計る。——どちらにせよ、”後、数分後には、彼女達に念話を掛けるつもりだったのだから”。

「黙って出てったのは謝る！ けど、お前達に知られるわけにやいかなかったんだよ！」

《何だよ！》

「向こうに気づかれるからだよ！」 こっちの作戦をな！」

そうシオンは叫びながら、あの虫達の事を思い出していた。

……正確には、あの虫達を操っていた”音”の事を。

シオンは戦っている最中に、虫達へと響く音を耳からでは無く、体感として聞いていた。

それは、親しい友人がよく使う技術によく似たものだったから。だから、気付けたのであるが。

何にしろ、あの虫は偵察機としての役割も果たしていた筈だ。

なら、ティアナ達に話してのこの“音”の発生元に向かった所で。全員居なくなった事がバレて逃げられるのがオチである。

だからシオンは、姿を見せなかったエリオと共にティアナ達に黙って音の発生元に向かったのだ。

ティアナ達には、囹になって貰った格好である。

——”が、それだけでも無い”。

「いいか、ティアナ。お前達に頼みたい事がある。——その為に、お前達を残して来たんだしな」

《……どんな事よ》

「うん、それを話す前にちび姉を呼んでくれ——」

《ちび姉と言うな！》

相変わらずの反応の良さで、良子が念話に割り込んで来る。

それに、シオンは明確に笑った。

タイミングばっちし、都合がいいと。

だから——。

「ちび姉。”ロンドン全域に広域結界張るまで”何分かかる？ それと、転移魔法を一つ用意して欲しいんだけど——」

シオンはここに、自分が考えた作戦とあるものを告げ――。

――かくて、その策は成された。

シオンの目論み通りに！ 崩れ落ちるビルの中でシオンは、にんまりと笑う。

本来ならば、高層ビルが崩れると言う事は同時に凄まじいまでの人的被害を覚悟せねばならない。

ビル内外問わずに、だ。

一種の災害にもそれは近しい。――しかし！

今、崩れるビルには人は一人も居ない。正確には、ロンドンに一人も！

何故なら広域結世界を張った段階で、このロンドンは現実のロンドンの正常な時間と空間から切り離されているのだから。

これで、もう周りに気を使う必要も無い。

辺りに数mから数十mクラスのコンクリートの破片が落ちて来る中でシオンは一点、敵のみを注視する。

敵――、ギンターは相変わらざるの笑いを浮かべているものの、その笑みは先と比べて余裕が無い。

そう、結界が敷かれたと言う事はギンター達はこの結界に捕われた事を意味するのだから。

この結界をどうにかしない限りは、ギョウター達に逃走は許されない！

《やってくれるねい！　これが最初からの狙いかい！？》

「おうともよ！　んでもって、これからが――」

瞬間、破片を潜り抜けるようにして三匹の魔虫が飛翔して来る。

魔虫はシオンの元に来ながら、身体を開き――。

一斬！――

そんな魔虫を、シオンの刀が三匹まとめて断ち斬った。

そのままの動きで、破片の上に乗っていた足を前――。正確には、上に進める。

直後、シオンが駆け出し。向こう側でデューゼン・フォルムへとストラーダを変化させたエリオが飛翔したのが見えた。

二人は真っ直ぐ、迷わずに己の敵達へと向かう。

互いの、武器を振るって！

「――本番だ！」

直後、再び両者は互いに衝撃を撒き散らして激突した――。



一戦！――

シオンが向かったのは、ギョウターではなくクリストファだった。彼の長柄長斧と、シオンの刀が正面からぶつり合う。

「正気？ 僕と力比べするつもりか」
「アホか」

未だフードに隠された彼の顔を真っ直ぐに見ながら、シオンは罵声を飛ばす。

同時、空間に展開した足場にある彼の足が後ろに”滑る”。
まるでスケートを見ているかのように。

一見すれば、それはクリストファのIS…ザ・パワーにより押されたようにしか見えないだろう。

——だが、実際の所は違う。

それは何より、見開かれたクリストファの目が証明している。

……手応えが、ない！？

鏝（こ）ぜり合っているのにも関わらず、全くと言っていい程に手応えが感じられなかった。

まるで、暖簾（のれん）に腕押しするかのよう！

その異様な手応えの理由を、クリストファは直後に知る事になる。滑るシオンの足がくると反転。クリストファの凶悪な怪力を利用して、それこそ相当な速度でだ。

そして、クリストファが長柄長斧を振り切った時には、既にシオンの姿は彼の背後にあった。

これは！

「僕の、力を利用して……！」

呻くように吠えるクリストファ。

そう、シオンはクリストファの怪力を無理に斬り流さず、受け止めた上で足を滑らせながらベクトルを変化。

その怪力を利用して、背後に回り込んだのだった。

合気……否、化勁の応用。

シオンは知らず。異母兄、タカトの技術をここに再現する！

長柄長斧を振り切ったクリストファは当然無防備、後はその背中に一撃加えれば終わる！

シオンは無意識に、刀を翻し——峰を向けたのだ——し。背面を首筋に叩き込まんと振り放つ。

その一打は、隙だらけのクリストファに吸い込まれるように打ち込まれ。

突如、彼の姿が消えた。

「……な、ん！？」

驚きで目を見張るシオン。しかし、一度放った斬撃は容易く止まらない。

クリストファの首があった場所を通り抜ける。

その直後、シオンは消えたクリストファの行方を理解した。

真下。——”通り過ぎた刀の真下”に、クリストファはいたのだ。足を180°開脚して屈んでいる！

砕かれたコンクリートの足場にぺたんと股間から足までついた状態で、だ。

尋常な身体の柔らかさではない。

更に、彼はその体勢から真後ろに長柄長斧を放って来た。

それこそ、肩の関節が外れているのではないかと錯覚する程に回して！

……シオンに出来たのは、刀をぎりぎりで振り戻す事だけであつた。

一戟！一

「ぐ……っ！」

爆音の如き音が鳴り響き、シオンがその場からぶっ飛ばされる！
いや、自分から飛んだのだ。

そうでもしなければ刀は容易く弾かれ、シオンは両断されている。

「シオン兄さん!？」

背後から悲鳴に近い声が来た。

それに、シオンはぐっと呻く。

エリオがこちらを見て、そんな悲鳴を上げた事が分かったからだ。

それはつまり――。

シオンは着地した勢いのままに、身体を反転。つまりはクリスト

フアから完全に背中を向ける。

いくら体勢を崩しているとは言え、敵対者に背中を向けるのはシオンも勇気が必要であったが――が、シオンはあえてそれを行う！

回転しながら、魔力を解き放ち。斬り放った。

「式ノ太刀――剣牙ア！」

吠えるシオンの斬撃から伸びるように、魔力で生み出された一撃が伸びる！

それはこちらを向いて目を見開いているエリオ。

その背後に迷う事なく炸裂した。

そこに居たのは、例の魔虫！

――閃！――

剣牙はあっさりと魔虫を両断。

それに気付き、呆然とするエリオにシオンは叫んだ。

「こっちの事はいい！ 自分ん所に集中してろ馬鹿タレ！」

「は、はい！」

先には見事なまでの集中を見せたエリオも、自分以外に何かあると途端にその集中が落ちる――らしい。

仮定でしか無いが、それにシオンは歯噛みした。

元はと言えばシオンがぶっ飛ばされたのが原因なのだが、それとこれとは話しが別であった。

こっちの状況に集中が乱されるようでは、エリオにギョウターを任せられない――。

一閃！――

そこまで思い至りながら、シオンは脇から背後へと刀を突き放つ！

同時、くぐもった悲鳴が響いた。

「……流石に背後への警戒は怠らないか……」

その声に、シオンは肩越しに目を向けた。

そこにいたのは当然クリストファ。頬に刀傷をつけながら下がる。

体勢を立て直してシオンを背後から攻撃しようとしたのだろうが、空間把握能力と直感が突出しているシオンに今更通じる筈も無い。

シオンはクリストファに向き直り――。そのまま後ろに飛ぶ。

一撃！――

直後、シオンが居た空間に衝撃波が叩き込まれた。

ギョウターの音衝撃波だ。

つまりは、向こうにも気付かれたか。――エリオの集中を乱すには、こちらを攻撃する事が一番だと。

更に魔虫が四方八方から落ちるコンクリートを避けてこちらに来る。

シオンはそれにぐつと息を飲んだ。

実質、二対一。本来なら有り得ないが、ギンターの能力はそれを可能としている。

エリオの相手をしながら、クリストファの援護をやったのけているのだ。

つくづく、ギンターの能力は厄介であった。

……この状況、どうにかするためには――。

シオンは考え――。そして、にいつと笑った。

この状況を何とかする手段。それを自分は持っている――！

「エリオ！ ギンターはいい！ こっちのクリストファの相手をしろ！」

「え……？ はい！」

向こうで魔虫の一匹にストラーダを叩き込みながら、エリオは一瞬だけ怪訝そうな顔となる、が。すぐに頷いた。

後は――。

《余裕だねい！ 俺っちは放っておいて大丈夫ってかい？》

構うな。

ギンターの念話が響くが、シオンは相手にしない。

刀を放り投げると、身体に至る所に手を当てた。

そこから出るは、スロージングダガー。

先の魔虫相手にも見せた投擲用短剣。

それを五本の指に挟みこむ。その数、総計八本！

「はっ！」

一閃一

気合いの声と共に、周囲に一斉に放つ。

それは、シオンへと襲い掛からんとした魔虫八匹を狙い違わず貫いた。

それに、よしとシオンは頷いて。

「自分から刀を捨てるなんて、余裕だね！」

直後、正面からクリストファが襲い掛かる！

そう、シオンはスローイングダガーを放つために刀を捨てているのだ。

そんな好機を、彼が見過ごす筈も無い――が。

「させない！」

一轟！一

クリストファの長柄長斧がシオンに叩き込まれる直前、エリオが横合いから魔力刃をストラダーダから発生させて突っ込む！

デューゼン・フォルムの推進力を利用した突撃攻撃魔法――メツサー・アングリフだ。

その一撃は、クリストファのザ・パワーと互するだけの威力を伴っていたか。クリストファの一撃を真っ正面から受け止め、更に二人は絡み合うように落ちて行く。

「こっ……の……！」

「シオン兄さん！」

一炎の民よー

エリオの叫びに、シオンは頷きだけを返した。

《我が手へ》

念話で呼び掛けると同時、放り投げた刀が戻って来る。

それをシオンは左手で引っ掴むなり左手の空間に叩き込んだ。

そこに居たのは、当然魔虫。――シオンの一撃は、当然の如く魔虫を両断した。

「知ってるか？ ギュンター。俺には三人の先生がいる」

《何を……》

一黒の者よ、火祭りの長よ、夏の日にて祭を行う者達よー

一斬、斬、斬、斬、斬ー

一斬！ー

斬る、斬る、斬る、斬る、斬る――！

落ちるコンクリートの隙間を縫って自分に襲い掛かる魔虫のこと如くを斬り断つ！

それだけでは無い。いきなり発生する音衝撃波も例外無くぶつた

斬る！

「一人は高町なのは。この人には、連携戦闘の基礎から戦術機動まで空戦のいろはを叩き込まれた――」

―それは太陽が最も輝く日、豊饒の祈り、願う夏の日、則ち火の日なり、則ち炎が猛る日なり―

斬る、斬る、斬る、斬る――。

それをずっと、ずっと続けながらシオンは言葉を紡ぐ。

それを遠くで聞きながら、ギンターは嫌な予感を覚えた。

彼は、何を言おうとしている？

「一人はフェイト・T・ハラオウン。この人には管理局の法規やら魔法知識やらを教えられた」

これが一番辛かったんだよなあ……。

ほんの二ヶ月程前の事なのに、シオンは懐かしい思いを抱きながら笑う。

―猛ろ。猛ろ、猛ろ、猛ろ猛ろ猛ろ猛ろ！ 祭りはこちらに始まる

――炎の日を祝うために！――

「そして、後一人！」

叫ぶと同時、シオンはその場からいきなり落下した。
大量のコンクリートの破片と共に！

その落ちる先にあるものを見て、ギンターは絶句した。
そこに”魔法陣”が展開されていたから。

カラバ式魔法陣――。セフィロトをイメージする魔法陣だ。
しかし、何故と思った直後。ギンターは気付く。

あのスローイングダガー、それが魔法陣の基点となっている事に！

よく考えれば、あのタイミングでスローイングダガーを放つのは
おかしく無かったか？ シオンほどの技量があれば、刀で十分魔虫
は迎撃出来た筈だ。

それを何故、スローイングダガーで迎撃したのか。

……理由は、ここにあったのだ。

この魔法を放つ！ その布石――！

「八神はやて。この人からは”儀式魔法”を教わっていた――」

そう。シオンは何も刀術一辺倒の人間では無い。

精霊召喚を始めとして、儀式魔法も修めているのだから。

普段は至近距離戦闘の方が得意だから儀式魔法を使わないだけなの
だ。

だが、この状況――。”広域魔法を必要とされる状況で、それを
攻撃に使わない理由が無い”！

《しま――》

ギンターが失策に気付き、吠える。だが、そんなギンターの
念話にシオンはにやりと凶悪な笑みを浮かべた。

右手をすっと上げて、拳を握ると、炎がぼっとそこに灯る！

シオンの笑いは一つの事実をギュンターに告げていた。——もう、遅い！

「——民よ、夏至の祭にて炎の中で踊れ！」

一撃！—

展開した魔法陣に、炎の拳を叩き込む！ 魔法陣が紅に染まり——。

「炎界！」
ムスベル

一轟！—

直後、炎が辺り一面に膨れ上がり炸裂！

崩れ落ちる高層ビルのコンクリートの破片全てをまとめて飲み込み——。

天地に突き立つ炎の柱として、世界に顕現した。

——なお、高層ビルが崩れてからこの炎の柱が現れるまで僅か数秒足らずしか経っていなかった。

（後編に続く）

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」(中編)(後書き)

はい、中編終了でございます♪

ここまでは予定通り。今話は三部で終われそうだぜ……！(笑)

いや、最近一話六部をやっちまったので、まだ心配ですが(笑)

ちなみにタカトが使った反則(笑)は真似しちゃダメですよ(笑)

ではでは、後編をお楽しみに……♪

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」(中編2)(前書き)

はい、ども〜♪

テストメントです。皆さん。お久しぶりです♪

いや、もう本当に(汗)

更新していない日数最長になってしまいました(涙)

いろいろあったし、忙しいかったのもありますが。全てはテストメントの不徳の致す所で、まことに申し訳ありません。

とりあえず、年内までには第五十四話を終わらせる予定で(笑)

……いや、つまり後二部はあと(汗)

年始にはついに二週年突入のアリサ道場EXもやるので楽しみに♪

では、中編2。どぞ〜♪

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」（中編2）

一煌一

——紅に世界が染まる。

その紅は、炎の色。神庭シオンが放った儀式魔法。炎界が^{ムスベル}生み出した炎であった。

発生した炎は天と地を繋ぐかのような巨大な火柱となって崩れいくビルを丸ごと包み込んだ。

地面に落ちて行っていた鉄筋コンクリートも容赦無く巻き込み、弾き飛ばしてだ。

もし、結界が張っていなかったと考えたらゾツとする。それだけの広範囲に渡って火柱は顕現したのだ。

やがて、火柱は空に吸い込まれるようにして消えて——。それを見送りながら、『ドッペルシュナイデ』隊長のギョウターは歯噛みしていた。

先の炎界。威力は大した事はない。せいぜい、A〜Aランク程度の威力しか無かった。

当然、フィールドを張れば防げる威力であるし、ギョウターもクリストフアも。

向こうのエリオも無事だ。

だが、問題はその効果範囲であった。

ビルを丸ごと飲み込むほどの広範囲魔法。つまり、彼等が戦って

いた戦闘空間は丸ごとあの炎に飲み込まれていた事になる。

そう、ビルの破片を悉く焼き払ったように、”あの場に居た全てのモノ”が攻撃を受けたのだ。

それは当然、ギンターの固有武装。魔虫バグも含まれる。

魔力放出だけで墜とされる魔虫も！

「……これで厄介な虫共は消えた——」

真っ正面から放たれた声——。その声を聞いて、ギンターはぞくりと言う感覚を得た。

そこに居るのは、炎界を放ったシオン！

彼はギンターを真っ直ぐ睨みながら刀を緩やかに構えた。ずっと細められた目がギンターを捉える。

空間に足場を展開し、一步を踏み出した。

走る！

「終わりにしようぜ！ この戦いを！」

—轟！—

叫ぶと同時に、シオンは矢の如く弾けた。真っ直ぐに、ギンターに向かう！ 対し、ギンターはシンクラヴィスを吹き鳴らし、衝撃波を発生させ——。

「つせえ！」

一斬！一

一刀の元に斬り払われる！

唐突に任意の空間に発生する音衝撃波がだ。どのような原理かは不明だが、シオンはこちらが発生させる衝撃波の位置を特定出来る。先もそうだったが、今もあっさりと斬られてしまった。

あの衝撃波の利点は、どこでも唐突に発生させられる奇襲性にある。それが位置を特定されるようでは話しにならない。

シオンには、もう音衝撃波は通じない。

魔虫も全滅させられた。

……仕方ない、ねい。

思わず苦笑をギョンターは浮かべる。

まさかここまで追い詰められるとは思わなかったのだ。しかし、結果はこの通り。

ギョンターは今、シオンに追い詰められている。

どうしようもない程に。

ならば。

”こちらも切り札を切らなきゃいけないねい”！

そう思うと同時、シンクラヴィスを吹き鳴らす。
厚く、厚く、重く、重く。

サキソフオーン独特の音色が鳴り響き――。

それは起きた。

周囲の空間が歪み、ギュンターの前方に集束していく。
まるで吹き鳴らされる音に共鳴するように。

――ここで、一つの例え話をしよう。

音と言うのは、空気や水。……あるいは空間そのものを震わせて発生される。

つまりは振動波だ。極論となる事を覚悟して言えば、音は振動波に他ならず。振動波ではない。

だが、逆に言えば振動波であるからこそ出来る事がある。
思い出して欲しい、スバル・ナカジマのIS、震動破壊が何故にあれ程恐れられていたのかを。

振動と言うのは、モノを震わせる事で発生する。

当たり前の事だ。だが、これを高速で発生させればどうなるか？

”分子結合を解く程の高速振動をモノに与えればどうなるか？”

”それを空気では無く、空間を震わせる事によって発動させればどうなるか！？”

音叉。おんぎ

楽器の調律に使われる道具であるが、ギュンターの前方に集束していく空間はまるで、それを思わせるかのように震える。

いいいん……と、静かな音が響き。そして――。

「っ———！？」

——瞬間、シオンはアルセイオ・ハーデンの斬界刀に対峙した時程の寒気と恐気おぞけ——吐き出しそうな程の恐怖を覚え。慌てて、その場の空間に足場を発生させ静止。

全力で、それこそ死に物狂いの全力で左側へと逃げる！

直後、”それ”は発動した。

—轟—

一切の音が、消え——。

—裂！—

ギョんターから放たれた”何か”が、走り貫ける！

—斬！—

そして、結界に覆われたロンドン市内は真っ二つに叩き斬られた。



御遣いの槍——。アポルスティック・ジャベリン。

それが、ギョんターの切り札でもあり、ロンドンを真っ二つに叩き斬った攻撃の名であった。

空間を音により責めぎ合わせ、同時に音による高速振動――。分子結合を分解するほどのそれを与え、一点から放つ――。

御遣いの槍とは、そんな攻撃であった。

分かってしまえば単純な攻撃。――しかし、故にこそ。この攻撃は凶悪極まりなかった。

その射程も凄まじいが、威力はもつと途方も無い。

何せ、触れたものの分子を例外無く分解してしまうのだから。

その威力はロンドン市を真つ二つに斬った跡からも分かる。

破片が一つ足りとも残っていないのだ。

ビルも、その先にある民家も何もかも！

この攻撃に防御は無意味――。その威力はSSSランクに匹敵する。

当然、人間などこの攻撃に曝された時点で倒される――筈、であった。

「ぐ……あ……」

呻き声が、ギューンターの耳に届く。その声を辿り彼は顔をしかめた。

ギューンターが見る先には対峙していた敵、シオンが居たのだから。御遣いの槍が放たれた瞬間、危機を感じたのかシオンは左側に横っ飛びに回避していたのだ。

よく避したねい。

そうギュンターは思い、しかし笑みを顔に浮かべる。

御遣いの槍を回避したとは言え、シオンは余波をまともに受けたのか右手がずたずたに裂け、他の箇所にも決して浅くない傷を負っている。

何より、余波に曝された事で身体が後ろに倒れそうな程体勢を崩していた。

この体勢では次撃は避せまい。

更に、ギュンターの眼前には既に次の御遣いの槍が発動寸前状態になっていた。

予め、次撃を用意していたのだ。

念には念を。まさにそう呼ぶに相応しい徹底ぶりである。

後はシンクラヴィスを一吹きすれば終わる――。

《惜しかったねい？》

念話でシオンに告げてやる。そうしながら、ギュンターは息をシンクラヴィスへと注ぎ込んだ。

これで終わりだと。そう、告げるように！

一轟一

二撃目の――。そして避しようの無いタイミングでの連撃として御遣いの槍が放たれる！ その一撃は今度こそはシオンを仕留めんと真っ直ぐに進み――。

その一撃を前に、シオンは爛々（らんらん）と輝く紅い瞳――。絶命に晒されていると言うのに決して諦めていない生きた目をギョンターへと向けていた。

全身を恐怖が苛む。本能が叫んでいた。逃げろと。

この場から逃げろと身体が叫び、勝手に動き出そうとする。

その身体を、否、本能を、シオンは――。シオンの”理性”は叩き伏せる！

逃げるな！

胸中、全力で叫び。シオンはその場に踏み留まった。

無理矢理、身体を前へと倒す。――もう回避は不可能だった。

迫り来る、御遣いの槍。

死を約束付けられた一撃に、本能と直感がどうしようも無い程の警告をシオンに与える。……無視した。

むしろ、一步を踏み出す！

本能が叫ぶ。その一步を踏み出せば死ぬと。回避も防御も叶わず粉碎されると。

直感が吠える。その一步を踏み込めば、もう逃げられないと。まだ間に合うと。

本能と直感。

構わなかった。その二つを、シオンは鋼の理性で抑え込む！

――原理は同じだ。

一步を踏み込み切った。

同時、ずたずたになった右手を左手で掴む柄にそっと添える。――右手は、添えられるだけでいい。

――剣撃だろうと、拳撃だろうと、槍撃だろうと、空間衝撃波だろうと！

それは攻撃であり、物理現象であり――。それだけでしか無い！ならば！

身体が、ぐると踏み込んだ一步を中心に回る――。その動きに連動して、刀がゆるりと振るわれた。

理想的な角度と速さでなければ死ぬ。そんな事は分かりきっている。

だから、あえて無視した。

沸き上がる恐怖を振り伏せ、本能を叩きのめす。

無念無想。

他の何も考えずに、ただ振るう刀に意識の全てを傾けた。人は、それをこう呼ぶ。

無我の境地と。

シオンはほんの一瞬だけ、そこに至り――。

刀を振り切った。瞬間！

一裂！一

再び、シオンへと御遣いの槍は叩き付けられた――。



一瞬の、空白――。

それを、ギョンターは感じる。

再び放たれた御遣いの槍は、ロンドン市内を再度縦に叩き割り、シオンを今度こそは仕留めた――。

分子結合を分解する、この一撃に防御は無意味。

「何故だい……？」

回避は出来るタイミングでは無かった。

防御も回避も不可能ならば、間違いなく撃破出来ている。

「何故、だい……！」

それでも呻くようにして、ギョンターは吠える！

目の前に居る存在に――。

「何故”防げたんだい！？” 神庭シオン！」

「……簡単なこった」

吠えるギョンターに、御遣いの槍を叩き込まれ倒された筈の人物――。

本来そこにありえる筈の無い存在――。神庭シオンはにいと笑って答えた。

振り切った刀を緩やかに振り戻す。

「空間衝撃波だろうが何だろうが、攻撃は攻撃――。一方向からの直線的な攻撃だろう？　なら、”斬り流せない筈が無いだろうが”！」

有り得ない！

シオンの台詞に、ギンターは強くそう思い。咄嗟に我を忘れる。

そして、そんな隙を逃す程シオンは甘くなかった。

瞬動を発動。一気にギンターの懐に踏み込む！

――ギンターが我に返った時には、既にシオンの刀はひるがえ翻り、反転。抜刀術の応用で放たれていた。

「絶影！」

――斬！――

刀が走り抜ける。

直後、ギンターは慌てて後ろに下がり。しかし、その顔には苦渋が張り付いていた。

ガランと、地面に金物が落ちた音が響く。

――確認するまでも無い。地面に落ちたのは、シンクラヴィスの下半分であった。

シオンが斬ったのはギョントアの固有武装だけであつた訳だ。

全ての攻撃手段を失い、呆然とするギョントアにシオンはとびつきりの笑顔で告げてやる。

そう。

「天才に二度目は効かねえよってな。……俺の勝ちだ」

勝利宣言を。

それを聞きながら、ギョントアは苦笑を浮かべた。

二度目も何もワンツ一の連撃である。それを”二度”とカウントする時点でまともでは無い。

そもそも、御遣いの槍を斬り流すと言う発想からして思考が普通では無いのだ。

理屈上では可能なだろう。実際、シオンは音衝撃波を叩き斬っている。

しかし、音衝撃波と御遣いの槍では威力の桁が違い過ぎる。

Aクラスの射撃魔法と、Sクラスの砲撃魔法を一緒にしたにするようなものだ。

いわば、雪崩をストローに注ぎ込むような行為である。

無理だの無茶だのを問うような問題ですら無い。

角度がコンマ1mmズレていたら。タイミングがコンマ1秒でもズレていたら。

その時点で、シオンは肉片一つ残さず消し飛ばされている。

それをやるくらいなら素直に逃げを打つだろう。

実際に、シオンの身体は——本能は、迫り来る”死”に対して逃避を促していたのだから。

それら本能を理性で無理矢理抑え込んだのだ。

シオンがやった行為は”死”に自ら向かう行為。——自殺に等しい。

死中に活を見出だす。とは、よく言うがねい……。

流石にギンターも呆れ果てるしか無かった。

こんな闘い方をずっと続けてはいくつ命があっても足るまい。

だが、ここぞと言う時にそれを出せたなら。

その効果は問う必要も無い。ギンターはまさにそれによって敗北したのだから。

認めるしか無いだろう。自分は敗北した——。だが！

ここで終わってやる訳にはいかんねい！

ギンターが心の中で叫んだ。直後。

「あ……ああああああああああああああああ——
っ！？」

シオンの背後より、叫び声が響いた。

まるで、この世の終わりを見たかのような叫びが。

その叫びは――。

「エリオ!？」

シオンがあまりの叫び声に、慌てて後ろを振り向く。
そこでは、”フードが外れたクリストファ”の顔を見て。目を大きく見開いたまま、叫ぶエリオが居た――。



時間は少しだけ、遡る。

シオンが発動した炎界。そして、ギウンターが最初に放った御遣いの槍を、エリオは彼等の下――元ビルがあつた場所の地面から見ていた。

途方も無い威力の何かが、放たれた。それだけをエリオは悟る。
シオンがその一撃を辛くも避け、しかし深手を負い。体勢を崩してしまった事を。

そのシオンに二撃目が放たれんとしている事を！

いけない！

「シオン兄さん！」

叫び、デューゼン・フォルムのストラダーを構える。
ブースターを吹かし、ギウンターに突撃しようとして。

「残念。君の相手は僕だ」

「ッ!？」

一撃! —

横合いから突如叩き込まれる長柄長斧の一撃! エリオは、辛くもストラーダでそれを受けるのが精一杯であった。

盛大に跳ね飛ばされる。

更に、そんなエリオにクリストファは追撃をかけて来た。

「隊長の邪魔はさせないよ」

「っこの……!」

踏み込みながら、長柄長斧を振るうクリストファのフードは炎界に晒されたせいかボロボロであった。

引っ掛かるようにして、彼の顔を隠している。

僅かに覗く、その顔にエリオは違和感を覚え——。しかし、すぐに意識から除外した。

ストラーダのブースターを吹かし、速度をつけて真っ正面から彼の長柄長斧と打ち合う!

一戟! —

激しく鳴り響く爆音。

同時に衝撃が辺りを蹂躪する。……構わなかった。

二人は迷わず互いの刃を叩き込む! ——だが、真っ正面からの打ち合いではクリストファの方に分があった。

当たり前である。

彼のIS、ザ・パワーは常人を遥かに超える臂力を与える能力な

のだから。

エリオはクリストファが放った大上段からの一撃に後ろへと流され――。

一轟！――

二撃目の御遣いの槍が放たれた。

それに、エリオは目を見開き――。

「君は……邪魔だあ！」

【スタール・メッサー】

「っ！」

一撃！――

ストラダーの刃から光の刃が現れる。

同時、ブースターから激しく光が吹き出し、エリオは光の刃――魔力刃を迷う事無く、クリストファに叩き付けた。

その一撃に、今度はクリストファが後ろに下がり。

だが、彼も一歩で耐えてのけた。

僅かに離れる間合い――。その中で、クリストファは弾丸を再装填するが如く再び長柄長斧を振り上げ、エリオはストラダーのブースター任せに身体をぐるりと回す。

直後、大上段からの一撃と下方から振るわれた互いの刃が放たれた。

――そして。

一轟！一

一撃！一

轟音を鳴らし、ぶつかり合う！ 一段と激しい衝撃が二人を中心に渦を巻いた。

同時、びきりと言う音がエリオの耳に届く。

その音はストラーダから響いた音だったから。

顔を上げる。ストラーダの刃部分――。クリストファの長柄長斧の刃と打ち合っている部分だ。

そこに亀裂が走っていた。

耐えられなかったのだ。

エリオとクリストファ、両者の攻撃に武器自身が。

対し、クリストファの長柄長斧はストラーダより頑丈に出来ているのか破損は無い。

むしろ、更に押し込まれる刃がストラーダの中に侵入する。

更なる亀裂が走った。

「ストラーダ！？ っ！」

【私の事は気にせずに――】

ストラーダは、そうエリオに言うが、そんな訳にはいかない。

亀裂はどんどん深くなって行く。――ついには、ストラーダの本体部分へまで！

このままでは、ストラーダが破壊される――！

クリストファがそれを見て、にいと唇を吊り上げた。
直後、エリオは覚悟を決める。

右手をストラーダから離した。

すなわち、片手でストラーダを握る。

――力で負けている状態で、打ち合っているのにも関わらずだ。
それは自殺行為にも等しい行為。当然、クリストファのパワーに
負けて、一気に押し込まれる！

長柄長斧の刃が、そのままエリオを両断せんと迫り――。エリオ
は離れた右手で拳を握る！

その拳に雷光が走った。

そう、その一撃はJS事件時。ルーテシアの召喚獣、ガリューと
の闘いで決定打となった一撃であった。

副隊長であり、騎士として師匠ともなる守護騎士シグナムから授
けられた一手。ただ、魔力の雷を付与すると言う単純な魔法――。
故にこそ、その一撃はここぞと言う時に切り札となる――！

クリストファもその拳に気付き、失策を悟った。

押し込んだと言う事は、互いの距離が縮まった事を意味する。

拳が届く間合いまで！ エリオの狙いはそこだったのだ。

クリストファは慌てて後退する――遅い！

エリオは合わせるように一步を踏み込み、拳を放った。

「紫電、一閃！」

一撃！一

一雷！一

叫び、放たれた拳が、クリストファの顔面のど真ん中に突き刺さる！ 同時、雷が拳を中心に吹き荒れた。

雷拳は、クリストファが被っていたフードを微塵に破きながら彼を吹き飛ばす。

だが、彼は倒れる事無く地面に両の足で着地し――。

「あ……」

声が、零れた。クリストファの声では無い。それは、エリオから漏れた声であった。

”クリストファの顔を見た、エリオの”。

その、顔は――。

「……参ったね。まだ、君に顔を見せる積もりじゃなかったんだが」
「き、み、は……」

「自己紹介が必要か？ ……要らないだろう。僕の事を君は知っている筈だ。――そう」

笑う――。あるいは、それは苦笑であった。

あるいは、自嘲であった。

そして、同情の笑いであった。

同病相憐れむ。そんな、笑い――。

「三人目」だよ。そして、プロジェクトFの完成形――それが僕だ」

そう、”自分と全く同じ顔で言われ”。

直後、エリオはあらん限りの声でもって悲鳴を上げた。



響き続ける悲鳴。それを冷たい目で見据えながら、彼は。クリストファは小さくため息を吐いた。

だから、見せたく無かったのにと。

こうなる事は半ば予測出来ていたのだから。
自分と同じ顔。同じ存在。けど、”魂”は違う。

彼と、自分とは――。

そこまで思い至り、クリストファは頭を振った。
まるで、思考を追いつくように。

そして、長柄長斧を振り上げる。

それを見ても、まだ呆然とし続けるエリオに――。 ”偽物”に明確な苛立ちを覚えながら、それでもとクリストファは自分に言い聞かせた。

「こんな決着は望む所じゃないんだ。――でも、命令は命令だ」
「あ……」

それに、自分は命令に逆らうようには出来ていない――。

漸く気付いたように、声を上げるエリオ。でも、もう遅い。

クリストファは冷たい目のまま、長柄長柄を無造作に振り下ろし。

「っおらああああっ！」

一閃――

その一撃を、横合いから放たれた刀が斬り流した。

先はあまりの膂力に、完全に斬り流せなかった一撃を今度こそは完璧にだ。

誰なのかは言うまでも無い。

先程までギョウターと対峙していた神庭シオンであった。

恐らくは瞬動で一氣にここまで走って来たか。

クリストファが放った一撃は斬り流され、横の大地を砕く。

クリストファは少しの安堵と、そして驚きを含んだ目でシオンを見る。そんなクリストファをシオンは見て、次にエリオに視線を移す。

何かに怯えるように、目を震わせるエリオに。

ぐっと息を飲んで、再びクリストファに視線を戻した。

「……てめえもアレか？ 紫苑と同じ、ドッペルゲンガーか？」

問う。それは、つい少し前にシオンが戦った過去の自分の姿をしたロストログアの人形——。対人としては、最高クラスの殺人人形であった。

シオンの後ろに居るエリオも、それを聞いてびくりと身を震わせる。

だが、クリストファはそんなシオンの問いに笑って見せた。

「違うよ。僕は人間さ。……まあ、最も？ 純正な人間とは言い難いけど。——僕は”三人目のエリオ・モンディアル”だ」
「……三人目……？」

クリストファの台詞に、シオンは怪訝そうな顔となった。
それに、おや？ と、クリストファは思い。しかし、次の瞬間には得心したように笑い出した。

シオンの反応に、全てを理解して。

「は、ははは……！ なるほど。あなたは何も知らないんだ？」
「……何の事をだよ」
「プロジェクトF」

びくり、とシオンの片眉が跳ねた。

その言葉を聞いてだ。それは確か、トウヤが言っていた。記憶転写クローニング技術の総称では無かったか？

なら、こいつは——。

「お前……！」

「そう言う事だよ。――そして、彼も」

最後の台詞に、シオンは固唾を飲んだ。

後ろのエリオが硬直した事を空気で悟る。

それは、クリストファの言葉が正しい事を証明していた。

だが。

「――それがどうした」

きっぱりとシオンは、そうクリストファに告げた。

左手一本で刀を握り、突き付ける。

クリストファは、そんなシオンの反応に。へえと感心したような声を上げた。

「いいんだ？ それを秘密にしていたって事は。彼は君に隠し事をしていたと言う事だよ？ 信頼出来るのか？」

「隠し事の一つや二つでがたがた吐かすかボケ。人間内緒の事だつて山程あんだろうがよ。――俺だって、こいつらや皆に昔の事ア話してねえ。”そんな程度”で信頼無くしたり、無くなる程、落ちぶれちゃいねえんだよ」

そこまで一気に言い切ると、シオンは刀をゆるりと構えた。

互いに、互いを間合いを入れたまま二人は向き合う――出来る事ならば、エリオにも声を掛けたかった。

だが、それをみすみすクリストファが許してくれる筈も無い。

シオンはぐつと齒を食いしぼり、そして――。

――ひょいっとクリストファは肩を竦めると、あっさりと構えを解く。

そのまま、後方に跳躍した。

数m程も離れて着地すると、そんな行動に再び怪訝そうな顔となるシオンにクリストファは笑う。

「……残念。僕の役目はここまでだ」

「何のこったよ？」

「分からないか？ 僕の役目は”君を隊長から引き離す事だ”ってんだよ”」

その言葉に、シオンは思わず先程まで戦っていた――。置いてきた、ギウンターに目を向ける。

彼はクリストファの更に後方に居た。

周りの空間に、音を走らせながら！

その魔法をこう呼ぶ。『音素式魔法』^{フォニム}、と。

かの、一条悠一と全く同じ魔法術式である。

それをギウンターが使えると言う事はつまり――。

「助かったよ。”結界を展開してくれて”。……おかげで離脱する手間が省けたからね。後は、”向こう側に居る魔虫を基点に魔法を発動させるだけだ”」

「……っ」

それは、いわばシオンが放った炎界と同じ方法であった。
向こう側に待機させていた、魔虫を基点に魔法陣を展開。それを
媒介に、大規模儀式魔法を発動させる――。

結界――。今、シオン達が居る隔離結界は現実の時間の流れと空
間をズラして二重に発生させて戦闘空間にすると言う特殊な魔法だ。
これにより、現実のロンドン市には人が居ても結界内のロンドン
市には人が居ないという状態になっている。

つまり、結界内で何が起きようと結界を解かない限りは現実世界
には影響を及ぼさないのだ。

――しかし、それはまた逆も言える。

つまり、”現実世界で何が起きようと結界内に何の影響も起きな
い”！

シオン達はギウンター達を手助けしたようなものであった。

そして――。

「詰めを誤ったね。これで、僕達の任務は――」

「――”失敗”だねい」

クリストファが勝利宣言をしようとした矢先、当のギウンターか
らそんな言葉が告げられた。

クリストファは振り向き、驚きの目をギウンターに向けるが、彼
は力無く首を横に振る。

苦笑しながら、シオンを見遣った。

それに、シオンは片目をつむりながら安堵の息を吐く。

「一応、聞くねい。」いつから気付いてたんだい？」

「最初っからだよ。……お前達と戦う前。」ロンドンに入った時にだ」

答えながらシオンは笑う。誇らし気に、嬉し気に。――楽し気に。

そして、胸を張って。こう、言った。

「俺には頼りになる仲間が居るんでな」

「本当に居たわね」

ロンドン市内――。正確には、結界”外”のロンドン市内でティアナ・ランスターはぼつりと呟いた。

その目の前に煙りを吐き出しながら壊れている物体がある。

何をか、を問う必要も無い。

ギューンターの固有武装にして、彼等の作戦の要――。魔虫であった。

少しの苦笑いを浮かべる彼女に、次々に念話が来る。

《ティア！ こっちも居たよ。とりあえず壊したから》

《こっちも。——シオン君の言う通りだったわね……》

「——あいつ、妙な所で頭が回りますから」

スバル・ナカジマ。そして、ギンガ・ナカジマからの報告を聞いて、ティアナは苦笑混じりでそう答える。

そんなティアナの答えに、向こうで二人も苦笑いした事を気配で悟った。

そう、シオンが鉄納戸良子に頼んだ事に結界の展開と、” 転移魔法 ” があったのだ。

その時頼んだ転移魔法と言うのは、彼女達を跳躍^{とば}す為のものだったのである。

シオンの話しによれば、ロンドン市内のあちこちに例の虫の反応がある。

配置から、嫌な予感がするからそっちの方を頼むと言われたのだ
が——。

「ビンゴ、だったわね。……全く、大規模の儀式魔法なんてね」

そう言いながら、ティアナは肩を竦めた。

そして、次のポイントに向かう。

まだ魔虫は全部撃破した訳では無いのだ。

魔法陣展開に必要な魔虫を破壊しただけなのだから。
後顧の憂いを断つ為にも、全て撃破しなければならない。

全く、と。もう一度ティアナは胸中呟き。そして——。

「私達に使いっ走りさせたんだから……。しくじったら承知しない

わよ。シオン」

そう言いながら、ティアナは。そして、スバル、ギンガも次の魔虫を撃破する為に走り出していた――。

（後編に続く）

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」(中編2) (後書き)

はい、中編2。終了でございます。

いや……。スランプはきついですね。ん？ タカトの出番は？
たまにはシオンオンリーでもいいじゃないと言う事で♪

……いや、すみません(汗)

タカトサイドは後編からをお楽しみに♪

感想も返せてないのがありますし、書けに最近行けてないので
ちらが優先になりますが。

なるだけ早目に次回はお送りしたいです。

ではでは、また次回に〜♪

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」（後編1）（前書き）

はい、テストメントです♪

漸く、後編1をお届け出来ます（笑）

いや、長かった……。

さて、いよいよオフ会が明日に迫る中。年末年始もいよいよです（笑）

後一部！ 後一部。何とか今年中にお送り致します。

ですので、感想の返信遅れるやもですが。どうかお許しを（汗）
では、後編1。どうぞ……♪

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」(後編1)

がらん、と言う音がする。

金属製の何かが崩れる音だ。それを何とは無しに聞きながら彼は――伊織タカトは、零距离でデザートイーグルを全弾叩き込み、穴だらけにしたガジェット?型を蹴り剥がして周りを見た。

周辺一体は金属片が転がっている。それは、ガジェットの破片であつた。

タカトが取り出した質量兵器の山により作りだされたもの達だ。

因子兵はいない、と言うより因子兵の場合。撃破すれば塵に帰る為、何も残らないのは至極当然と言えた。

それらを、ぼーと眺めながら。……実際の所は数K m単位で空間把握を走らせ、索敵しているのだが。

それはともかく、タカトはため息を吐いた。

……逃げ足が早い。

そう思いながら。

例の指揮を出していた人物。及び、ストラの兵力の殆どをタカトは取り逃がしてしまったのだ。

突如、発動した空間転移によって。

こちらがAMFを全く気にせず、ガジェットと因子兵を駆逐して回っているのを見て、ストラ側は即座に逃げを打った訳だ。

退却が上手い兵は強い。

かねてから言われる言葉であるが、ストラは正にそれを実行してのけた訳だ。

魔法を使えば問題無かったのであるが、AMF空間内で壺中天を起動しっぱなしであったのが災いした。

結果、タカトは目の前のガジェット、因子兵の駆逐に追われ。退却を許してしまったのであった。

……これが後々に影響しなければいいがな。

そう一人ごちて、タカトは壺中天を停止。

手にあるデザートイーグルを投げ捨てて、くるりと振り向く。

そこに、” デバイスをこちらに向けた管理局局員達が居た”。

「……………」

タカトは無言。しかし、彼等はこちらを陰しく睨み付ける。

その視線に、タカトは彼等に敵であると認識されていると理解した。

——理解しただけであったが。

口端に苦笑を滲ませながら、タカトは局員達の方へと歩き始める。

彼等は一層表情を陰しくして――。

「動くな！ ……援護は感謝するが、貴方には質量兵器使用違反。

並びに、武装局員襲撃の――」
「くだらん前置きはいいい」

一撃！――

そこまで武装隊の隊長だろう。彼が叫んだ所で、唐突に弾けた。

隊長がだ。それこそ巨大なハンマーか何かでぶん殴られたが如く、空を舞う。

それを行ったのは、当然タカトであった。

挙動すら見せずに踏み込みと同時に、これまた一切の予備動作無しで叫んでいる隊長の顎を撃ち抜いたのであった。

周りの武装局員達が呆然とする中で、滞空は終了。

隊長は地面へと落ちる。

叫んでいた最中に、顎を撃ち抜かれた為だろう、自身の歯で噛みちぎる羽目となった舌の先がぼろりと落ちた。

『『……………』』

「さて」

総じて絶句する局員達のだ真ん中でタカトは一人呟く。
指をすつと持ち上げ、そして――。

一破――

直後、それを見計らったようにAMFが解けた。ストラが撤退した為だろう。

局員達にも魔力が戻る――が、それはタカトも同じ事であった。

持ち上げた指に水が対流して行く。

「あ……!？」

「次は、お前達だ。潰させて貰おうか」

一斬一

次の瞬間、水系が走り抜け。世界の蹂躪が始まった。

ユーノ・スクライアは無限書庫、司書長だ。

一応、管理局本局勤務——つまり、本局所属となるのだが。スト
ラによる本局制圧時に彼はミッドチルダに居た為、捕縛を免れたの
である。

その彼の姿は今、管理局地上本部ビルにあった。——飛び交う怒
号の中に。

ビルの中に所狭しと並べられた、怪我人達。そして、その彼等の
治療に当たる者達の叫びである。

怪我人は一般市民、管理局局員問わず並べられている。

——本来ならば、病院に搬入されてしかるべきなのだろう。……
が、そうもいかない事情があった。

既に、”そこ”は存在していないのだから。

ストラが最初に狙い、壊滅させたのは病院や学校。そして、退避シェルターといった場所であったからだ。

一般市民が避難し、そして生活する場所をこそ、最初に彼等は殲滅したのである。

非人道的――。そして、これ程効果的な狙いも無い。

何故なら、これにより大量の避難民と怪我人の全てを地上本部は受け入れざるを得なかったのだから。

まさか、見殺しにも受け入れ無い訳にもいくまい。

そして、地上本部に受け入れた大量の避難民と怪我人により。当然、局員達の動きは鈍り、人手不足に陥った。

避難民もそうなのだが、怪我人と言うのは思った以上に人手を取られるものである。

最低でも怪我人一人に二人は人手を取られる計算となる。いくら治療魔法があり、自然治療よりも遥かに早い治療方法があるとは言え、根本的に人手不足に陥るのは至極当然と言えた。

市民の中から人手を募り、協力を要請しても。それでも足りなかった。

結果、ユーノが見る先では、正にもう一つの戦場とも――地獄とも言える状況が展開されていたのである。

「ユーノさん？」

その声に、はっと我に帰る。振り向くとそこに鮮やかな赤と緑の瞳があった。

同居人、高町ヴィヴィオである。この少女も手伝いを申し出てくれたのだ。

それを申し訳無く思い。しかし、情けない事に今の状況ではたま

らなくありがたい申し出を、ユーノは受け。こうして共に怪我人の治療に当たっていたのであるが。

首を緩やかに、ふるふるとユーノは振るう。

思わず、呆然としてしまったのだ。

目の前の、もう一つの戦場に。

それを苦く感じながら。治療を終えた少年と、その両親であろう。少年を抱きしめる二人の男女にユーノは微笑み、すぐに次の怪我人の元へと向かう。

——ぐずぐずとはしてられない。まだ怪我人は居るのだから。

だから——。

《臨時ニュースです。先程、ミッドチルダ管理局地上本部へと向かっていったツアラ・トウ・ストラと名乗るテロリストは——》

次の怪我人の治療にユーノが当たろうとした、まさにその時。臨時ニュースが大きく展開したウィンドウから流れ始めた。

状況を常に伝える為に管理局が展開したのだ。

情報を伝えられない市民は閉鎖感と不安により、たやすく暴走する。

それを恐れての措置であった。

が、今回ばかりは臨時ニュースで人が湧いた。

そのニュースは、ストラの撤退を伝えるニュースであったからだ。

ユーノもそのニュースに、ほっと胸を撫で下ろし。

《現在、武装局員は新たに現れた謎の魔導士と思われる人物と交戦

く動き続ける。

それは一方的な戦い。……否、戦いとも呼べない。
これは、ただの殲滅戦にしか過ぎない。

天破水迅。

凄まじい射程距離と、緻密極まる制御操作能力を有する、この魔法を回避する事はほぼ不可能と言える。

が、物事に完璧と言う物は存在せぬように。

絶対と言う言葉がただの幻想にしか過ぎないように。

この魔法にも、ある弱点があった。それは――。

「障壁を展開しろ！ 二人がかりでも何でもいい！」

ほう。

突如として飛んだ指示に、タカトは感心したように目を細める。

そんな彼を知ってか知らずか、まだ撃破されていない武装局員達は広域フィールドを展開。

水系に貫かれるような薄いフィールドしか張れない所は、二、三人がかりで多重に展開した。

結果、水系はフィールドを抜けられず。ただ、障壁に張り付くのみとなった。……一応、それでも削ってはいるのだが。効果は薄い。

そう、天破水迅。この魔法の威力はA A ～ A A +相当”しか”無い。

砲撃魔法にも等しい威力があれど、絶対的な破壊力にはほど遠いのだ。

アースラ隊が最初にタカト相手に使った戦法と同じである。
だが、今回はアースラ隊の時と状況が違う。

管理局武装局員達。彼等には、”人手”が山とあるのだから。

「今だ！ ”砲撃魔法”で集中砲火！ 水系ごと蹴散らせえ！」

—轟！—

叫びと共に、一斉砲撃が始まる！

フィールドごしに、幾千もの光砲がタカトめがけて飛来した。

それにタカトは、にいと凶悪な笑いを浮かべると水系をカット。
その場から後ろに飛翔し、砲撃を避す。

が、これにより水系は途切れた。

つまり、武装局員達の動きを縛るものは何も無い！

「全体、構え——。突撃い！」

『『応っ！』』

—轟！—

応える声が地響きもかくやと言う音を鳴らし、武装局員が四方八方から突っ込んで来る！

無論、砲撃、射撃魔法を撃ちまくりながらだ。

これをタカトは拳と蹴りで対応する。が、所詮は単騎。
攻撃をいくら蹴散らそうと、限度と言うものがある。

向かい来る光射と光砲をぶん殴って、弾いている内に突っ込んで来る局員達に距離を詰められてしまった。

目の前に来るのは、槍型のアームド・デバイスの持ち主——。つまりは、騎士！

聖王教会直属の、武装騎士達であった。

彼等が後方から雨霰と降る光射、光砲の援護を受けながらタカトへと突っ込む！

それにタカトは目を細め、騎士達は槍を真っ正面から突き出して来た。

数十と言う槍が一斉にタカトを仕留めんと襲い掛かり——。しかし、その全てをタカトは拳で迎え討つ！

一撃！一

——音は、遅れてから届いた。しかも、”一打のみ”の音しか響いていない。

だが、実際の所は一打であろう筈が無かった。

何故なら突っ込んで来た騎士達全員が、空を舞っていたから。

その全員が身体の何処かに拳を叩きこまれ、失神している。

至近戦——。それも零距离での格闘戦こそがタカトの本領なのだ。援護が多少あろうと、それが数十を超えていようと何の関係も無い。

——それが、格闘戦”だけ”ならば、そうになっていただろう。

だが。

—轟！—

局員達はタカトの間近で失神し、空を舞っている騎士達に”構わず”。光砲、光射を叩き込んで来た。

それには、流石にタカトも目を見開く。

よくよく見れば、騎士達全員は口元に薄っすらと笑みを浮かべて気絶している。

最初っから”自分達ごと”と決めてあったのだろう。

それを躊躇わず実行してのけた訳だ。非殺傷設定であろうとも、仲間ごと撃つのも撃たれるのも。

相当の覚悟が無ければ出来ない。

タカトは見開いた目をすっと細め、しかし迎撃が間に合う筈も無く――。

—煌—

—爆！—

次の瞬間、数千にも及ぶ光射、光砲がタカトごと騎士達を飲み込み。大爆発が、クラナガンの地上に顕現した。



ぶあつと爆煙が広がる。

大量の砲撃魔法により発生した煙りだ。
それは視界を奪うには十分過ぎる程の広域に渡って広がる。

目の前に広がる粉塵に、局員達は一斉に射砲撃を放つ事を止めた。
変わりとばかりにサーチャーを飛ばす。

視界がろくに役に立たない状況では、サーチャーで索敵するのが
定石であるからだ。

タカトやシオン達のごとく、広域に空間把握を自覚的に走らせら
れるのは割と希少なのである。

サーチャーで、敵対していた漆黒の魔導士――タカトの事だ。
の、姿を捉えんと彼等はサーチャーの操作に集中し、そして――。

「見事」

――そんな。そんな、自分達を称賛する声が響いた。”自分達の
真後ろから！”

驚愕を飲み込み、局員達が一斉に振り返る。

そこには、一切のダメージ無し。……バリア・ジャケットを傷付
けてすらいない。

伊織タカトの姿が、そこにあった。

どさどさと、手の中の荷物をタカトは捨てる。

それは、先程タカトによりKOされた騎士達であった。

「縮地、応用編。”禹歩^{うほ}”」

そんな事をタカトはぽつりと呟くが、局員達には何が何だか分からないだろう。

禹歩。縮地による応用魔法の一種だ。

空間を歪めて、周囲一体の空間と空間を接続。

そこに飛ぶと言う魔法であるのだが、タカト単体で跳躍^とぶのならば、こんな魔法は必要あるまい。

騎士達を射砲撃に巻き込ませぬ為に、この魔法を発動したに違い無かった。

それに、タカトは自嘲気味の笑いを浮かべ――。

「さて、では。お前達はここで終われ」

「つ……！ 障壁用意！ 広域魔法、来るぞ！」

誰かの指示の声が飛ぶ。

それは、まさしく適切な指示であった。

タカトはまだ、敵陣の真っ只中にいるのだ。戦術的な効果を狙うならば、広域魔法で一網打尽が最も正しいと言える。

そして広域魔法と言えば、先程の天破水迅であった。

それを、まず第一に防ぐと言うのは冷静な判断である。

……ただ、一つだけ。彼等にも誤算があった。

タカトの”広域魔法は一つだけでは無い”と言う。そんな、誤算が。

「天破疾風、天破震雷。”合わせ改式”」

両の掌を組み合わせ、打ち付ける！ 同時、タカトの身体から光

が溢れ出した。

それは、見るものが見れば風、雷、地の三つの光をイメージ出来たであろう。

その魔法は、タカトがアースラ隊と初戦闘を行った時。彼等を一網打尽にした技。――その名を。

「天破、疾風迅雷撃」

ぽつりと眩き、タカトは両手を広げながら激しく回転開始！ 両の掌から風と雷が吹き出し。

――轟！――

直後、戦場に巨大な雷竜巻が発生。フィールドを容易く叩き割り、その場に居た全てのものを巻き込んで吹き荒れた。

「ふう……」

タカトは頃合いを見計らって雷竜巻を停止。

回転もゆっくりと止めていった。

そうして、ゆるりと戦場を見渡す。

管理局武装局員達は、その全てが雷竜巻に巻き込まれて、ダウンしていた。

一応、誰も死んではないか、空間把握を走らせて確認するが。
全員命に別状は無い。

ただ、誰もが失神するなり、なんなりはしているようだが。そこに頓着とんちやくなどタカトがする筈も無かった。

さて、これからどうするか――。

ストラは1時撤退。管理局も一部戦力撃破。

自分の目的から考えるのならば、撤退したストラを追撃するのが一番だろう。

もしくは、地上本部を壊滅させて後顧の憂いを断っていくか。

さて、どうするかとタカトは少しだけ悩んで。

「ぐ……う……」

そこで驚くべきものを目にした。立ち上がったのだ。

天破疾風迅雷撃を喰らった、武装局員達や騎士達が次々と。

SS＋相当の広範囲攻撃を叩き込まれていながらだ。

これにはタカトも流石に目を丸くする。

「――大したものだ。まさか、立ち上がるとはな」

「何故、だ……!？」

「む？」

その問いを放ったのは、先程まで指示を出した男に相違無かった。今にも崩れそうな身体を杖型のデバイスをその形状通りの使い方をして、支え。こちらを睨んでいる。

よほど悔しいのだろう。目からは涙が滲んでいた。

「何故、こんな真似をする!？」

「邪魔になるだろうからな」

その悔しさも、悲しさも何もかもを、タカトはあっさりと踏み
じって答えを放った。

その答えに愕然とする彼等をタカトは感情が失せた瞳で見つめた。

「な、んだ、と」

「お前達は邪魔なんだ。俺の敵になるだろうから叩き潰した。それ
が、お前達を倒した理由だ」

勘違いするなど、タカトは続けて。

「俺は自分が正しいとか間違っているとか、そんな事はどうでもい
いのでな? が、今回に限っては言ってやる。”お前達は正しい”
そして、”俺は間違っている”」

そんなタカトの言葉を、その場に居た全員は呆然と聞く。

タカトが何を言っているのか、理解出来無いのだ。

——ここに、なのはやもしくは神庭家の人間がいれば、ひよつと
すれば気付けたかもしれない。

これが、タカトなりの謝罪だと。曲がりくねって遠回しにすら、
伝えられていない謝罪だと。そう気付けたのかもしれない。

そこまで言って、タカトは呆然とした彼等を置いて歩き始める。
それに我に帰った彼等は待てと言うが、タカトは止まらない。

むしろ微笑んだ。

「お前達のような奴らは惜しい。そこで寝ている。そうすれば、俺が全てを終わらせてやる」

「そんな事が納得出来るか!？」

彼等だって気付いている。

タカトにとっては、ストラの連中をこそが本命の敵なのであると。

が、だからと言って彼一人に全てを押し付けて――否、持っていて寝ている事なぞ出来よう筈が無い。

”ここ”は彼等の世界で、彼等が守るべき世界なのだ。

それを、それを横から勝手に現れた者などに守る義務を持っていられるなど、我慢出来る話しな訳が無い。

でも、彼等は立てなくて。

タカトは微笑んだまま、その場から立ち去るように歩く。
その足は、ストラが撤退した方に向かい。

「……いえ、そんな話しは我慢も納得も出来ません」

凜、と。涼やか声が流れた。

同時、地面を踏み締める音が響く。

大量の人間が歩く音だ。しかも、ただ歩くだけでは無い。
それは、行進によって鳴り響く歩行の音であった。

タカトは、苦笑を滲ませゆるりと振り向く。

そこに、騎士達が居た。

聖王教会、修道士からなる騎士達が。

その一番前に居るのは、金の髪の女性であった。

彼女の視線はこちらを真っ直ぐに射抜く。

「貴方の話しを私達は、絶対に納得しません。了解も、しません」
「何故だ？ と、問うても？」

「私達は、この世界を守りたいからです。少なくとも、誰かに勝手に守られるなんて――守る事すらも奪われるなんて、認められないからです。それが、ミッドチルダ地上の守護を任せられた者の義務であり――。そして、権利だからです」

それは、ひどく正しい答えであった。

少なくとも、タカトのように勝手に人の守りたいものを勝手に奪い、守るような輩よりは、確かに。

だが、” 最初から最後まで間違っている ” タカトにそんな答えは意味を成さない。

つまり、止まる事など有り得なかった。

「……貴方は、ナンバー・オブ・ザ・ビースト、ですね？」
「そうだ」

タカトはあっさりと認める。

それに、彼女は苦い顔となった。
やはりか、と。その表情は語る。

「貴様の名は？ 聞いても？」

「カリム。カリム・グラシア」

カリム、ね。

タカトは頭の中だけで、その名を反芻する。
響きを楽しみ、笑って――。

「良い名だ。気に入った。――さあ」

笑い、タカトは両手を構える。

それに、カリムの前へと騎士達は出た。
槍を前に突き出し、タカトへと向ける。

更に彼女の横に幾人程風変わりの人物をタカトは見る。

タカトは知るよしも無かったが、彼女達と彼こそは、この場に居る者達の中で最強の者達であった。

シャツハ・ヌエラ。ヴェロッサ・アコース。

そして、かのナンバース最後の三人。NO. 6、セイン。NO. 8、オットー。NO. 12、デイド。

彼女達も、それぞれの武装をタカトに構え、彼の足元から無数の
獵犬が生まれる。

それを見ながらタカトは一步を踏み出して、
続きを彼等へと告げた。

「始めようか」

その言葉に、一斉にそれぞれが動き。
ミッドチルダ、クラナガンにてタカトと管理局側との第二戦の幕
は切って落とされた。



「シャツハ、ロツサ、セイン、オットー、デイド、これより永唱
を開始します！ 時間を！」

『『はい！』』

カリムの叫びに、タカトは眉を潜めた。

彼女の前に出た騎士達が全く動かず、変わりにカリムの側に控えていた者達がこちらに來たのだから。

数は力だ。タカトにとっては、それは大した障害とも成らないが、
それでも数人を向かわせるよりは遙かにマシと言うものだろう。

彼女にとっては精鋭であろうが、それでもタカト相手では無理がある。

故にこそ、タカトは彼女が取った戦術を訝しんだのだ。

理由があるとすれば――。

一偉大なる戦士よ、神の園に導かれし者達よ、戦乙女に認められ
し、聖なる神の使徒達よ――

――あの永唱か。

足元に広域魔法陣を展開し、歌うように呪文を唱えるカリムを見

てタカトはそう思う。

剣十字に、三角形の形を成す魔法陣はベルカ式――。それも、今は担い手が殆ど絶えたとされる古代ベルカ式エンシェントであった。

古代ベルカ式には、近代ベルカ式のような応用力こそ無いものの、かなり強大な呪文がある。

――グノーシスにある、”対界戦略型禁呪魔法”も古代ベルカ式だったしな。

そんな事を思い出しつつ、この魔法の完成は面倒臭い事になるとタカトは判断。まずはカリムから潰すかと、狙いを定めて。

「後ろから失礼」

そんな声を、後ろから聞いた。

同時、背後から光刃がタカトに迫る！　デイドのIS、ツインブレイズである。

タカトがカリムへと歩を向けた事を察知して、わざわざ後ろへと回り込んだのか――。

刃は迷う事無く、タカトへと叩き込まれ――。

一撃！――

次の瞬間、吹き飛んだのはデイドの方であった。

くはっと息を吐き、身体をくの字に曲げる彼女の腹に、いつ放たれたのかタカトの足が突き刺さっている。

「その程度の速度では、都合百回は蹴りを放ってお釣りが来るぞ？」

笑いながらタカトは告げ、即座に追撃に入る。
吹き飛ぶ彼女に一步で追い付きながら拳を放ち。

突如、がくんと体勢が崩れた。

「ぬ？」

「IS、ディープダイバー……。ディードはやらせないよ！」

その声にタカトは足元へと視線を移す。

そこには、自分の足首を掴む手があった。

”地面から現れた手”が。

まるで水中から差し出されたが如く、だ。

その手により、足首が掴まれ体勢を崩したのか。

「セイン、そのまま！ ロッサ！ オットー！」

「ああ！」

「分かりました。騎士シヤツハ」

同時、後方から叫び声が響いた。

応じように無数の獣と、光の線がタカトへと走る！

ヴェロッサの希少技能、無限の猟犬とオットーのIS、レイストームである。

それらは、足首を拘束され動けぬタカトへと容赦無く迫り――。

「ぬん」

「ひょわ！？」

タカトは構わず、掴まれた方の足で蹴り上げた。

その動作に、セインが潜っていた地面から引きずり出される！

蹴りにより空中へと投げ出されセインは驚きに目を見開き――。それ以上に、ヴェロツサとオットーは驚愕する羽目となった。

何故ならセインが投げ出された位置は、彼等が放った猟犬とレイストームの直撃位置であったからだ。

このままでは、セインに直撃する！

二人は慌てて、猟犬を退かせ。レイストームを逸らせる――。セインへと向かうそれらは、間一髪。彼女の身体を掠めるようにして逸れていった。

二人はそれにホッとして。

「気を抜いたな？」

「――っ!？」

そんな声を背後から聞いた。

ぞくり、と悪寒が二人を突き抜け。

一撃！――

それぞれの身体を衝撃が突き抜けた。

ヴェロツサは盛大に吹き飛ばされ、オットーは地面に叩き付けられる。

さらに、オットーの胸へと足が落ちて来た。

誰の足かを問うまでも無い。伊織タカト、彼の足であった。セインごと縮地でも使ったか。

彼女もタカトの足首に掴まったまま、目を白黒させている。

タカトはオットーの胸――。正確には鳩尾当たりを踏み付け、地面に縫い付ける。

と、タカトが何かに気付いたように目を見開いた。

彼にしては、慌てて足を退け――。

「――貴様。女、だったのか」

そんな事を聞いて来た。

だが、オットーは流石にそれに答える余裕は無い。

げほげほと空気を求めて吸い、荒げた咳せきをするだけであった。

タカトはそれに参ったと言う顔をして。

「この……っ！ セクハラですよ、それは！」

次の瞬間、シャツハがタカトの懷に飛び込んで来た。

両手のトンファー。彼女のデバイスである、ヴィンデル・シャフトを回転させ、タカトへと斬撃を叩き込み。

それを、タカトは両掌で捌きながら訴える！

「待て！ 誤解だ、冤罪だ！」

「聞く耳持ちません！」

何やら、乙女の怒りに触れるものでもあったのか。シャツハがいつもの数倍程も苛烈にタカトを攻め立てる。

当のタカトと言えば、罰が悪いのか防御一辺倒に終始し。言い訳じみた事しか言わない。

——それでも、一切打ち込ませ無いのは流石と言えるのではあるうが。

更に復活した、デイドまでもがシャツハに加勢し左右からタカトに襲い掛かる。

だが、それにタカトも我に返ったのか再び目は冷たい眼差しを取り戻していた。

——そして。

一破！一

機を見て放たれたタカトの両掌が二人の腹部に叩き込まれる！

二人は悲鳴すら上げられずに、その場に崩れ落ちた。

タカトはそれを見送り、視線をカリムへと戻す。

彼女の永唱はまだ続いていた。あの手の魔法は永唱時間が長ければ長いほど、強力なものと相場は決まっている。

タカトは再度中断させるべく、縮地で跳躍とぼうとして。

「させないって言ってるだろ！」
「む」

一人、まだノーダメージの——。

……正確には、タカトから攻撃を喰らった者達は全員ダウンしているのだが。

それはともかく、無傷なセインがタカトへと飛び掛かる。

タカトごとディープダイバーで地面に潜ろうとする為だ。
だが、そこはタカトも読めていたのか。あっさりとセインを避け、
おまけとばかりに、背に裏拳を叩き込んでおく。

かはつと息を詰まらせ、地面に倒れる音が聞こえたが知った事では無い。

タカトは再度カリムへと視線を巡らせて、直後彼女と目が合う。

舌打ちを放った。

察したのだ。彼女の強い瞳――。義弟と部下達がやられていく中、
声を掛ける事すら許されずに永唱をし続けた、彼女の瞳に。

決意と、やり遂げた意思が宿っている事を。

永唱が完了した事を、タカトは悟り。

一喜びの野に立つ戦士に、戦乙女よ祝福を！――

「――エインヘリアル聖戦士！」

カリムの、高々と空まで届く清涼な声が辺りに響き、そして。

直後、光が”待機していた騎士達”に降り注いだ――。

（後編2に続く）

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」（後編1）（後書き）

はい、今回はタカトサイドオンリーとなります。

久しぶりに登場の彼や彼女はどうか。

お楽しみにです♪

さてさて、来年の初っ端はStS，EXも二週年となります（笑）

ですので、例の如くアリサ道場EXをやるのでお楽しみに♪

では~~~~♪

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」(後編2) (前書き)

——はい♪ テスタメントです♪
よっしゃあ！ 何とか公約を守ったぜ……！

後編2をここにお届けします！

ちなみに、今回はアリサ道場はありませんが、アリサ道場EXを
次回にやる関係上許して下さい(汗)

いや、道場ネタをここで消耗はきついんです(笑)

次回はアリサ道場EX4！ 二週年&四百万PV記念&、ある作
品の第三部完結&作品完結記念も兼ねるのでお楽しみに♪

て、多すぎるわ！？ (笑)

では、第五十四話後編2。どぞ〜♪

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」（後編2）

——エインヘリアル
聖戦士——

今は亡きレジアス・ゲイズ中将与最高評議会が開発、運用を推薦していた地上防衛用の迎撃兵器と同じ名を冠する魔法である。

古代ベルカにおいて、特別な意味を持つこの魔法は王族専用の魔法との伝承もあるが、現代に於いてはそれを確かめる手段は介在しない。

ただ一つだけ。この魔法の強力さと、ただ一人のみの使い手を残すのみであった。

そして、そのただ一人のみの使い手は——。

——光が降り注ぐ。

同時、カリム・グラシアを守るべく彼女に侍^{はべ}っていた騎士達へと神からの祝福のように、その光は舞い降りた。

直後、彼等の身体を覆うように。半透明な鎧のようなものが纏わり付いた。

まるで硝子を重ね合わせて出来た装甲板のようでもある。

さらに、彼等が手に持つ槍型のデバイスから延長するようにして

光の刀身が生み出された。

それを――。総計、三十を超える騎士、全員に展開された鎧のようなものを見て。タカトは思わず息を飲む。

タカトの特異性の一つとして、目で直接見た魔法の術式を即座に解読する。と、言うものがある。

大概の魔法は一目見ただけで、特性から弱点までも理解してしまえるのだ。

これを応用して、魔法以外のものも即座に弱点をさらけ出させるのであるが――。

そのタカトがこの魔法に対して出した結論は一つだけであった。

”危険”。早急な対処を必要とする――だ。

そんなタカトを、カリムは静かに見据え。

「――構え」

そんな一言を呟いた。直後。その指示に従い、騎士達が槍を構える。

その槍は全てタカトへと向けられている。

一瞬だけ、時が止まったように場が硬直し。――そして！

「Angriff（突撃）！」

――轟！――

カリムの怒号のような号令に従い、騎士達の姿が一斉に矢となり弾けた。

”その場の空気をぶち破って”！

「っ！？」

タカトの目が驚愕に見開かれる――。その時には既に騎士達はタカトへと殺到していた。

光の刃が彼に殺到する！

タカトは縮地を使い、その場から後退。

その姿が消え、光刃が全て空を切る――。

騎士達はタカトの姿を見失い、そして彼は騎士の一人の背後に忽然と現れた。

いつもそうだったように、バリアジャケットもフィールドも無効とし、衝撃のみを透過させる浸透勁で持って拳を叩き込み。

一札一

その一撃が、”あっさりと弾かれた”。

光と音が激しく散る。

防御された訳で切り払われた訳でも無い。

だが、タカトの打撃は完全に止められてしまったのだ。――硝子のような装甲板によって！

そう言う魔法か！？

胸中で叫びながら、タカトは頭を下にさげた。

一閃！一

その頭上を薙ぐように光刃が通り過ぎる！

”自分が攻撃された事に今気付いた騎士”が背後のタカトへと槍を振り放ったのだ。

だが、それはまたもや空を切り、タカトは合わせるように頭上を通り過ぎて行く騎士の腕――。肘の辺りに裏拳を、そつと当てた。

と、一気に騎士の腕が加速される。タカトが当てた手に力を込めた為だ。

結果、騎士は自分の斬撃の勢いに体勢を崩し。わずかに開いた隙間を縫って、タカトは脇腹へと膝を叩き込む！

「死ぬなよ」

そう呟き。その声が騎士に届いたか分からぬ内に爆炎が膝から膨れ上がった。

一爆！一

天破紅蓮。

爆碎し、顕現した炎は一瞬にして膨れ上がり天地を繋ぐ炎柱となる。

軌道拘置所にて、トーレもどき達に使ったものとは比較にならぬ。つまりは、一切の加減なしの紅蓮である。

人相手にまともに使うようなものではない。――それこそ、消し

炭も残さず”焼失”させかねない程の火力の一撃であった。

立ち上がった炎柱の中で、タカトはさてどうなったと意識を集中させ。

次の瞬間、更に驚くべきものを目にした。

「紅蓮を叩き込んだ騎士が、”何でも無かったかのように”。こちらに振り向き、光刃を突き出して来たのだから！

タカトの姿は再び縮地にて消える。

一瞬にして上空数百mまで移動し、タカトは下――。騎士達を置き去りにした地面に視線を移した。

見極める！

聖戦士の能力については、ある程度理解した。

あとはどこまでのものか――。

そうタカトが思うと同時、騎士達がこちらを見付けたのか見上げて来て。

直後、三十の騎士達全員が空気を貫いて――。つまりは、”音速超過”の速度を持って飛び上がる！

「やはりか！」

そう叫んだ頃には、既に騎士達はタカトに到達している！
音速超過の速度を利用して、突き出した槍のままにこちらに突進！

一轟！一

一人一人がミサイルのように、タカトへと突っ込む！

だが、それをタカトは展開した足場を利用して全て避けて見せた。

そうして、勢い余ったまま頭上高く通り過ぎた騎士達をタカトは苦々しい目で見える。

聖戦士――。恐らくは白兵戦用戦術魔法、と言った所か。

その魔法は、平たく言ってしまうえば強化魔法の一種であった。

鎧のような防御圏層を展開し、更に内の被術者の動きを加速。止めとばかりに攻撃力までも強化されている。

だが、その性能は従来の強化魔法とは天と地程も差があった。

まず、加速性能。普通ならば有り得ない事に音速超えの速度を被術者に与えている。これは、かのトーレのIS…ライドインパルスを凌駕する速度であった。

これだけでも大概ではあるが、攻撃性能までも強化されているのだ。

実際受けてはいないし、受けたいとも思わないが。その攻撃力はタカトが見た所、AAAは確実に超えている。

これは、タカトの通常打撃を超える威力であった。

そして、最後。タカトが最も恐ろしいものと判断したのが防御性能であった。

硝子を張り合わせたような防御圏層。あれが何より厄介である。どうも、外側からの力を全て光や音に変換して逃がす――。そう、

”全て”だ。そういう仕様であるらしい。

衝撃を内へと打ち込む浸透勁でさえも、だ。

それだけならまだしも、その防御能力は強固としか言いようが無い。

タカトの天破紅蓮――。威力にして、S+からSSに匹敵する威力全てを光と音にされてしまったのだ。

聖戦士。厄介に厄介な魔法であった。

タカトは知らぬ事であったが、これ程強力な魔法を持つカリムと彼女直属の騎士がJS事件にて動け無かった最大の理由がその強力さにあった。

その使用を当時の管理局地上本部の上層部が恐れたのだ。強大であるが故に、それが自らに振るわれ無いように。

まさしく地上本部に於いて切り札となる魔法であり――。そして、その使い手達であった。

聖戦士、どう攻略するか――。

タカト少しだけ思案し、しかし一番手っ取り早い方法を取る事にした。

つまり、術者本人を打倒する事だ。

卑怯と言えば、卑怯ではあるのだが。あれ程の魔法、まともに相手するのも面倒である。

その手間を考えれば卑怯者と言うそし謗りを受けた方がマシと言うものであった。

幸い、彼女の盾と成り得る騎士達は全員空の上だ。
音速超過の速度は、当然凄まじい慣性となる。
すぐに彼等が戻ってくれはすまい。

タカトは眼下、数百m先のカリムを見下ろし正確に指を差し向ける。

その指に水が対流して行き。

「天破水迅」

ぽつりと呟く声に應えるようにして、差し向けた指から水系が迸った。

水系は迷い無く、そして異常なまでの精緻さで持ってカリムへと走る！

その一撃に対し、デバイスすら持たぬカリムは――。

すつと手を頭上に掲げた。

一其は魔を拒み、邪を拒み、統べからく世界を護り抜く壁なり、
諸王の要請に従い、今ここにそびえ建て！――

「壁よ、存れ！ 塞界！」

――壁！――

同時、叫び声と共に掲げた掌から聖戦士を思わせる、多面体の硝子を重ね合わせて構成されたような防壁が展開される。

そこに水系が一斉に殺到し、しかし塞界により水系は全てそこから進む事が出来ず、張り付くのみとなった。

防がれた――。だが、まだだ！

その結果に、タカトは即座に水系をカット。

両手を浅く開く。そこからは眩ゆいばかりに溢れる光が星雲のよう渦を巻いていた。

腰溜めに構える。

その魔法こそはタカトが唯一有する砲撃魔法であった。

天破光覇弾。SS+ものの威力を誇るこの魔法ならば、あの程度の防壁など物の数では無い！

「天破、光覇あ――っ!？」

叫び、叩き込まんとした直後。タカトはいきなり頭上を振り仰いだ。

広がる空は既に夜闇に包まれんとしている――。

その夜空に、光る星のようなものをタカトは見付けた。

否、星では無い！ それは、先程頭上高くまで飛んで行った騎士達であった。

漸く――。しかし、タカトの予測よりは遙かに早く舞い戻って来たのだ。

こうなっては、カリムへと光覇弾を撃つ暇は無い。
狙いを頭上へと変え、タカトは光を解き放つ！

「――弾！」

――煌！――

直後、タカトの掌から生み出された巨大な光弾は、その名の如く光速で空を切り裂き飛翔した。

真っ直ぐにこちらに音速で向かう騎士達へと、光弾は向かい――。直後、騎士達は驚くべき行動を取った。

いきなりその角度を変えたのだ。タカトへと向かうコースから！音速超過での飛行では、当然。一度コースから逸れると舞い戻るまでに時間が掛かる。

さっきもあれ程時間が掛かったのだ。

タカトはせいぜい防御を固めて、光覇弾を防ぎに掛かると思っていたのだが――。

一天よ、地よ、その狭間に存りし、全てのものよ、今こそ等しく、終焉を与えん――

直後、響いて来た永唱にタカトはかつてない程の悪寒を覚えた。

この、魔法は！？

すぐに声が響く方向、つまりは眼下へと振り向く！そこに居るのは――。永唱を紡ぎ続けているのは、当然カリム！

彼女は塞界を既に解除。

両手を広げて目を閉じ、朗々と唄を読むが如く唱え続けていた。

その魔法は古代ベルカに於いて、終焉の笛とも神々の黄昏とも呼ばれる魔法であった。

そして、これこそが本当の狙いだったのだ。カリムと騎士達の上聖戦士ですらもが、この伏線に過ぎない――。

タカトは舌打ちし、しかし直ぐさま縮地で逃げようとする。

どれだけ極大な威力を持っていようと、当たらなければ意味が無い。

砲撃など、タカトからすればいくらでも回避出来るものにしか過ぎないのだ。

――それが、砲撃だけならば。

――縛！――

「なっ!？」

今まさに縮地を発動しようとしたタカトを光の紐が縛る！

それはひどく基本的な魔法であった。

拘束魔法、ディレイド・バインド。

大した拘束力も無く、対象を拘束する以外に能力も無い魔法である。

タカトからしてみれば力ずくで破れる程度の魔法だ。

だが、それには数秒程度の時間を要する。

いくらタカトとは言えど、無かったが如く蹴散らす事は出来ないのだ。

それに何より、この魔法はミッド式の筈――。

呆然としたタカトは視線をカリムから移す。

そこには、天破疾風迅雷撃によって動けなくなった筈の管理局武装隊の面々が居た。

肩を貸し合い、こちらを睨みながら杖型のデバイスを掲げている。

一度撃破した筈の彼等が再び立ち上がり、魔法を使う――。それは、タカトも想像の埒外であった。

何より、彼等にはもう何も出来ない、出来たとしても大した事は出来ない。タカトを括り過ぎていた。

その油断が、今。タカトを追い詰める――！

「お……！」

吠え、力を込める。直ぐさま、バインドはちぎれて行くが。それは全てでは無い。

解術も、間に合わない。

「お、お……！」

縮地も出来ない。バインドは”空間的に束縛する術”だ。この空間に縫い止められた状態では縮地は使えない……！

応用魔法である罫歩もまた、同じ理由で使用出来ない！

回避する手段は、もう無い！

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……っ！？」

最後の抵抗とばかりにタカトの叫び声が響き、バインドが一気に外れ――。

一神も、魔も、人も！ 全て、ここに滅ぶべし！――

無情にも、その前にカリムの永唱は完了した。

後は、放つのみ！

カリムは迷う事なく、タカトへと掌を向け。同時、剣十字に三角形のベルカ式魔法陣が展開！

タカトを真っ直ぐに見据え、カリムは最後の叫びを放った。

「――響け、終焉の笛――」。破天^{ラグナロク}！」

――煌――

直後、目も眩むような光が三角形の頂点からそれぞれ解き放たれ、螺旋を描いて捻り、驀進を開始！

タカトへと、一直線に突き進み。そして――。

――轟！――

—滅！—

クラナガンの夜空に太陽を生み出し、世界を真昼に変えた——。



所変わって、地球。イギリス首都、ロンドン——。

正確には、結界側のロンドンだ。

辺りに瓦礫が散乱する中で、ズタボロとなったシオンは刀を二人——。

第二世代戦闘機人、特殊部隊。『ドッペルシュナイデ』のギンターとクリストファへと差し向けた。

「もう、終わりだろ。お前達の持ち札はねえ筈だ」

「それは降伏勧告かい？ 俺っち達が大人しく捕まると思ってるのかねい？」

「強がりはやめとけよ」

答えたのはギンター。しかし、その答えすらもシオンはすっぱりと切って捨てる。

向こうの策は完全に潰した。

更に怪我の程度はこちらの方が酷いと言えど、ギンターには既に戦闘能力は無い。……こちらも、エリオが戦える状態とは思えないが、クリストファに負けるとも思えない。

詰んだ。そう、シオンは確信する。

この期に及んで彼等が策を有しているとは、流石に思え無かった。

先の宣告通りである。俺の――。俺達の勝ちだと。

「お前達には聞きたい事が山程あんだ。ここで何の儀式魔法を使おうとしていたかとか。……そのガキの事とかな」

その言葉に背後のエリオがびくりと震えた事が気配で分かる。だが、今は何も言う事は無い。

シオンは視線をあくまでギョンターとクリストファに固定する。それに二人は応じるように、しばし見合い――。

やがてギョンターが肩を竦めた。

「確かにねい。今回は俺っち達の負けだねい。だから――」
「逃げさせてもらうよ」

ギョンターの台詞をクリストファが引き継ぎ、直後。
二人の後ろ、背後の空間が”開いた”。
まるで、扉を開くようにして観音開きにだ。

シオンとエリオは息を呑む。これは――！

「空間、接続！？ ちい！」
「シオン兄さん！？」

魔法では無い――。何らかの方法で持って空間を接続したのだらう。

それが何かは分からないが、このままでは二人を取り逃がしてし

まう！

シオンは半ばそう確信して駆け出した。

この二人をここで逃がせば、後々厄介な事になるのは間違いない。特にギンターは二度やって勝てる自信が全く無い相手であるのだ。

ここで逃がす訳にはいかない！

一氣に瞬動發動、二人の懷に飛び込もうとして。

彈、彈、彈、彈、彈、彈、彈、彈、彈、彈、彈、彈、彈

—彈！—

突如、開いた空間から弾が飛んで来た。

散弾——。ショットガン系の何らかの銃弾である。

シオンは舌打ちを放ち、シールドを展開。

散弾を全て受け止める。

回避しなかったのは、ただ単純な話し。その手間が惜しかったからだ。

一氣にケリを付ける！

シオンは身体を伸ばすと、まるで弓を引き絞るような構えを取った。

刀を引き、ぎりぎりまで捻る。

魔力が立ち上り、噴出！

それを纏い、加速に用いる！

「神覇、伍ノ太刀！ 剣魔ア！」

—轟！—

シオンは刀を一気に突き出すと同時。弾丸となって弾けた。

散弾も何も関係無いとばかりに弾き飛ばしてだ。

魔力を纏い、突撃するこの技に散弾なぞ物の数では無い。

シオンは開いた空間の中に入るギュンターとクリストファへと、その勢いのままに突貫する。

だが！

「IS、インフィニット・トランス」
「っ！？」

—撃！—

そんな言葉が聞こえた、瞬間！ 開いた空間から何かが飛びだして来た。

それはシオンの剣魔と真っ正面からぶつかり、しかし弾かれない！

それは奇妙なものだった。

棒状の何かを捻れ合わせ、ドリルのような形状となり剣魔とぶつかり合っている。

それが何かはシオンには分からないが、剣魔と同威力と言う事はSランクに匹敵する威力がそれにはあると言う事だった。

シオンは歯噛みし、そんな彼を尻目にギョンターとクリストファは開いた空間の中へと入る。

そうして、クリストファは振り向くとシオンからエリオへと視線を移した。

クリストファの視線に、エリオの目が震える。

「君、は……」

「もう一度言うよ。……クリストファ。僕の名は”もう、これだ”。覚えておくといい。プロジェクトFの忘れ子、もう一人の僕。……”偽物の僕”」

その言葉に、エリオは息を飲む。それは果してどう言う意味なのか――。

しかし、クリストファは構わず背を向けた。

それを合図にしたが如く、開いた空間は閉じ。二人を飲み込む。同時に剣魔と攻めぎあっていた何かは根本からちぎれ、支えるものが無くなったせいか剣魔に飲み込まれた。

シオンはそのまま、突き進む――が、既にギョンター達はそこに居ない。

――逃げられた。完膚無きまでに、鮮やかに。

シオンは剣魔を止めると、悔し気に唸る。
腹立ちまぎれに、地面へと刀を叩き込んだ。

「ちつくしょう……！」

結果は勝利――。しかし、到底そうは思え無かった。
結局、取り逃がしてしまったのだから。

シオンはどかっと、その場に座り込む。
エリオもシオンの元に駆け寄って来た。

そうして、座り込みながらシオンを見上げる。
何かを言いたそうな、そんな瞳で。

けど、シオンはそんなエリオに顔を横に振った。
頭にぽんっと手を乗せてやり撫でてやる。

今はいいと、そう言う代わりに。

そうして、シオンは空を見上げた。

空は茜色――。日が沈まんとしている所だった。

一日が終わろうとする。

それを眺めながら、シオンはぽつりと呟いた。

「イギリスについた途端これかよ。……まだ一日目だぞ、こんちくしょう」

それは、イギリス初日の――。そして、これからEU全土で巻き起こる戦いの最初の終結となる言葉だった。



一煌一

クラナガンを真昼に変えた破天の一撃。

太陽を思わせるような巨大な爆発を生み出した、その光をカリムは厳しい瞳で見つめていた。

破天。かの八神はやてが所有する殲滅砲撃魔法の一つである。闇の書事件以来、滅多に使われる事が無かった魔法だが、それもその筈。

この魔法は威力の桁が違い過ぎるのだ。

その使用を術者である、はやてが躊躇うのは当たり前と言えた。

それは同じ古代ベルカ式の使用者であり、はやてと同じく後衛タイプのカリムも同様。

だが、それは時と場合による。

タカト相手に破天の使用は決してやり過ぎとカリムは思わなかった。

やがて爆発は余韻と共に消える。真昼に変わったクラナガンに、夜の暗闇が戻って来た。

そして、タカトは——いない。

「倒した……?」

怪訝そうに、カリムが呟く。そんな彼女に八方に散らばっていた騎士達が戻って来た。

カリムは彼等に微笑のみを送り、すぐに頭上へと再び視線を戻した。

やはりタカトの姿は見えない。

本来ならば、ここで倒したと判断するだろう。しかし、カリムにはどうしてもそう思え無かった。

それが何故かは分からない。だが――。

「……見事」

『『っ!?!?』』

突如、声が一同の背後から響いた。

本日二度目の称賛の声に、一斉に振り返る。

そこにはやはりと言うべきか。

伊織タカトが、そこに居た。まるで、最初からそこに居たように。

「馬鹿な……」

騎士の一人が呆然と呟く。それをカリムは聞きながら、無理も無いと思った。

あれ程の一撃をどうやって防いだと言うのか……?

「防いで無いぞ?」

「え……?」

いきなりタカトがそんな事を言い出した。
まるで、こちらの心を読んだが如くにだ。

——タカトから言わせれば、皆の顔色から大体分かったと言った所なのだろうが。

それはともかく、タカトはため息混じりに右手を挙げて一同に見せた。

「絶・天衝。これで、ぶった斬った。……まあ、爆発の余波はどうにも出来なんだが直撃よりはマシだ」

そうでなければ死んでいたがな。

そう、タカトは告げ。その答えにカリムは絶句した。

タカトの言い分はこうだ。

防御も回避も間に合わないから、迎撃した。

ただそれだけ。これだけならば至極真つ当な言い分に聞こえるが、その実まともな思考で出来る——。行える行動では無かった。

もし迎撃が出来なかったらどうする積もりだったと言うのか。

破天の威力が天衝を少しでも上回っていれば、タカトの命は無い。にも関わらず、タカトは事も無げにそれを行ったのだ。

それが、どれだけ異常な事か——。

「さて、先はしてやられたのでな。今度はこちらから行こう」
「っ！」

そんなタカトの一言に、カリムは思考から引き戻された。
騎士達も同様に、だ。

一斉に気が付いたように、槍を構える。

まだ彼等の聖戦士は続いている。

この魔法をどうにかしない限り、タカトの勝利は無い。

カリムは飲まれていた自分に気づき、頭を振った。

有利なのはこちらである。

タカトが破天を迎撃してのけたと言えど破れた訳では無いのだ。

まだ、まだ！

そう、カリムが思った。

——直後。

「ああ、ちなみにだ。その魔法は既に見切った」

「な……！？」

「それを今、証明しよう」

そう呟くと同時、タカトの姿が消える！

空間転移歩法、縮地。

一瞬にして、タカトは一人の騎士の懷に飛び込むと、拳を無造作に叩き込んだ。——その拳に巻くは暴風！

天破疾風。

一撃！一

台風にも匹敵する風圧を詰め込んだ拳が騎士の腹にぶち込まれ――。しかし、例の如く大量の光と音に変換される。

衝撃も何もかもだ。天破疾風は防御圏層を抜けられず、やはり防がれ――。

くるり、と。その結果に構わずタカトの身体が回転した。

ちょうど騎士を主軸にするように、だ。騎士の目からは、まるでタカトの姿が消えたように映っただろう。

そうして回転しながら、背後に回り込み。その勢いのままにタカトは騎士の後頭部に肘を打ち込む。

その肘に灯るは紅蓮！

一爆！一

肘から膨れ上がった炎は先と同じく、一瞬にして膨れ上がり巨大な炎柱と化する。

――そして。

どさり、と重いものが倒れる音が一同に届いた。
人が一人、倒れたような音が。

炎柱が消える。そこには――。

黒焦げになって倒れる騎士と、ふむと頷くタカトが居た。

「やはりな。いくらなんでも、限度はあると思っていたが」

そう苦笑するタカトを呆然と一同は見る。カリムもだ。

今、彼は何をした？

疾風と紅蓮。つまり、Sクラス以上の攻撃を”連撃”で使わなかったか？

カリムは知らない。”伊織タカトが本来は手数で押すタイプ”だと言う事を。

大威力術式を複数起動出来ると言う事を。

それを”通常打撃と変わらぬ速さ、動作で打ち込める”と言う事を！

ともあれ、これで確実にになった事は一つだけであった。

聖戦士が破られたと言う、その事実だけは。

「さて……。これで、漸く五分だ」
『『っ!?!?』』

タカトが呟くようにして告げた一言に、一斉に我に返る。
しかし、その瞬間にはタカトの姿は消失していた。

縮地だ。

その姿は再び上空にあった。――手の中に星雲の如く、渦を巻く光を集めて！

カリム達が漸くタカトの位置に気付く。そんな彼女達に、タカトは笑い。

「――決着をつけようか！」

一轟！一

叫びと共に、天破光覇弾を撃ち込む！

頭上から放たれた光弾に、騎士達は弾かれたように散開。散り散りになって退避する、が。

それは陣形を崩すと言う事であり、単騎になると言う事であった。

そして、音速超過であろうとタカトには追い付く術がある！

縮地――。三度、タカトの姿が消え。一瞬にして、単騎となった騎士の前に現れると。

一撃！一

一破！一

刹那、天破疾風の二連撃を叩き込み、聖戦士の防御圏層を貫通！

二人目の騎士を昏倒させ、直ぐさま三人目へと縮地で跳躍ぶ――！

聖戦士を打ち破る手段を見出だしたタカトは、それこそ水を得た魚の如く飛び回り、騎士達を打破して行く。

それを、カリムはただ呆然と見ている事しか出来なかった――。



「おおおおお……！」

叫びと共に光刃が突き出される。が、それをタカトは踏み込みながら、体をかわし、避けて見せた。

踏み込みの勢いを逃さず、順手で放った拳がまるで蛇の如く吸い込まれるようにして騎士の鳩尾へと撃ち込まれる。

一撃！――

光と音が激しく散った。疾風の衝撃と威力が変換された証だ。だが、そこでタカトは止まら無い。

更にもう半歩。

踏み込みながら膝をかち上げる！

紫電を纏う、その一撃は疾風を叩き込んだ箇所と寸分変わらず正確に打撃！

一雷！――

一瞬だけ、光と音へと雷光は変換され防御圏層に押し止められるが、それも僅か。

聖戦士の防御圏層はあっさりと限界を迎え、膝から放たれた雷光が騎士の身体を貫く！

びくん、と騎士は身体を震わせ。タカトが身体を離すと同時にその場に崩れ落ちた。

「っのお！」

「ちい！」

そのタカトを、今度は背後から騎士二人が音速超過で強襲を掛ける！

騎士の基本戦術は突撃にある――。それを証明するように、騎士二人は超絶な速度を莫大な破壊力に変えるべく音速超過での突撃を放つ！

だがそれに対しタカトは両掌を広げ、振り返りながら、むしろ踏み込んだ。

その両掌に灯るは再び雷光！

「天破震雷」

一破！一

一雷！一

突撃を身を低くして、光刃を潜り抜けながら両者の胴体にカウンタ―で叩き込まれる震雷！

騎士達は、自身が生み出した速度と震雷の威力を纏めて受ける！

それでも聖戦士は耐えて見せた。

光と音がかって無い程に散らばる。

だが、そこまでだった。

タカトの身体が空へと舞う。

空中をとんぼを切りながら回転。両の踵がまるで斧のように、騎士二人の頭に落ちる！

「天破紅蓮」

一爆！一

声と共に発生するは、炎柱！

天地を繋ぐそれは、一瞬にして騎士二人を飲み込んだ。

防御圏層は限界を迎え、ついに割れる。

炎柱が消える――。その後には、焼き焦がされた騎士の姿しか無かった。

タカトはそれを見もせずに、地面へと着地。

しかし、着地に隙を見出したのか残る四騎――。

――それ以外は、全てタカトに撃破されたのだ――。

――が、タカトを押し包むように包囲を固めて襲い掛かる！

光刃を振り上げ、あるいは突き出し。着地したタカトへと四方から、それを叩き込まんとして。

「天破水迅」

刹那、声が通り。彼等は一斉に万歳をするようにして腕が上へと

引っ張り上げられた。

「な、ん!？」

いきなりの事態に、彼等は驚愕し。慌てて頭上を振り仰ぐ。

腕は、そこに固定されていた。

”巻き付いた水系によって”！

天破水迅は、ただの斬撃魔法では無い。

伊達に糸の形状としている訳ではないのだ。

このような応用力を持たせる為にこそその糸としての形状なのである。

先のお返しとばかりに束縛された騎士に、タカトは拳を持ち上げる。

「よく頑張った。しかし、お前達はここで終われ!」

一撃!一

打音は一発。しかし、放たれた暴風巻く拳は総計八発は確実に超えていた。

防御圏層を貫かれ、吹き飛ぶ騎士達がそれを証明している。

吹き飛んだ騎士達は、激しく地面に叩き付けられ――もう、動かない。

そして、三十も居た騎士達はこれで、全て撃破された。

後残るは、カリムのみ。

「……」

「さて、後残るはお前一人だな？　どうする？」

このまま退くか、それとも戦^やるか――。

言外にそう問うタカトを、カリムはキッと睨み付ける。
同時に、その足元に魔法陣が展開した。

答えるまでも無いと、その行動は語る。

一人だけ逃げようなんて真似が出来る訳が無い。

タカトは、そんなカリムを楽し気に見つめ。

「良い覚悟だ。カリム・グラシア。その名を俺は生涯、忘れん」

管理局の人員としては、クロノしかいない。タカト最大級の称賛の言葉。

それが放たれた瞬間には、既にタカトはカリムの眼前に居る。

そして、拳は真っ直ぐにカリムへと放たれ――。

一壁！――

その拳が、横合いから現れた手に掴まれ止められた。
カリム以外に撃破され、止められる筈が無い。その拳を止めたのは――。

「何をしてるんだ……」

声が響く。誰も彼もが倒れた戦場で、怒りに震える声。その声と共に現れた者に、カリムは目を大きく見開いた。

それが、あまりにも有り得ない人物であつたから。

「何を、してるんだ、君は……！」

タカトは、ただ震える声に無表情となつた。

だが、その目に寂しさと若干の喜びが見えたのは気のせいか――。

声は、そんなタカトの視線に構わない。

声の主は、タカトを緑の瞳で睨み。……その瞳もまた、怒りで震えていた。

タカトが行つた理不尽に、そして間違いに。

そう、声の主は――。

「久しぶりだな。ユーノ」

「君は、ここで！ 何をしているのかって聞いているんだっ！？ 僕は！」

ユーノ・スクライア。タカトの親友となつた男。

タカトを理解しようとして、でも出来なかった。

そんな友の叫びが、戦場に響き渡つた――。

（第五十五話に続く）

第五十四話「少年の叫び、友の叫び」（後編2）（後書き）

「漸くギンター達との戦いが終わり、一息つくシオンとエリオ」

「しかし、彼等にはあるものが待っていた」

「もっかもくかにしめてあげるくく♪　なんて歌が響く時。彼等に真の恐怖が訪れる！」

「一方、ミッドではついにタカトとユーノが再会」

「怒れるユーノと、タカトは果して」

「次回。第五十五話

『男の戦い』」

「男のルールはただ一つ。拳で語り、拳で分かり合う。ただ、それだけだ」

番外話「アリサ道場EX4!」 (前編) (前書き)

皆さん。あけまして、おめでとうございます♪
今年も何卒、よろしく願います♪

またもや前後編と分かれちゃいましたが……。許したって下さい
(笑)

では、1月8日に後編はお届けしますのでよろしく♪

番外話「アリサ道場EX4!」(前編)

ぱんぱらぱん、ぱらりやぱらりやん

ア

「アリサ道場ん」

す

「EんXん」

しー

「4!」

どどん!

しー

「はいんん 皆さん、あけましておめでとうございます♪ 今年もしーちゃんて二週年記念か、このやろーな、司会のシオンです!」

ア

「当道場の道場主、つまりは神! しかもただの神じゃないわ、超神よ♪ アリサししょー、ことアリサよ♪」

す

「それだと、ウル○ラマンとデビ○ガンダムが合体した、某ユー○ス・ゴッツオになっちゃうよ、アリサちゃん? 弟子のすずかです」

しー

「さて今回。……またか、作者。何故にアリサ道場で前編だよ!?!? どんだけ!?!? 何がしたいのさ!」

ア

「いろいろやる事があるのよ。いろいろとね。……ふふふ……」

す

「アリサちゃん、ちょっと怖いよ?」

しー

「……それがデフォ―」

ア

「ちえゝゝりおゝゝ!」

一撃!―

しー

「ぐ、ぐふう! し、七花八裂(○)……!?!?」

す

「もう伏せ字の意味が全然無いね?」

ア

「七発もの奥義を同時に叩き込む、この技に隙は無いわ。で? 誰が怖いのがデフォですって?」

しー

「今の自分の言動鑑みましょうよう(涙)てか、いつの間に虚○流を……?」

ア

「刀〇の最終回を見たら使いたくなったのよ。技は見て覚えたわ！」

しー

「どこの七実ねーさんですか、貴女は……。さて、皆さん。今回のアリサ道場は一味違います。なんせ、二週年記念に、とある作品の第三部終了記念&作品完結記念&四百万PV突破記念&何気に到達していた百五十万文字突破記念となっております♪ ……長いわー」

す

「よくこんなに重なったね？」

ア

「と、言っても半ばこじつけな部分もあるらしいわよ？ まあ、そんな記念がやたらと多いからゲスト召喚者もえらい豪華よ♪ それじゃあ、しーちゃん？」

しー

「もういいっす、しーちゃん。何か慣れたし。てな訳で早速ゲスト召喚と参りましょう♪ 今回のゲストはこの方々です♪」

ぱーぱーぱー♪

しー

「まず登場は、第三部終了♪ しかし、いつの話しやねん。毎度お馴染み、魔法少女リリカルヴィヴィオより、この方——」

裕

「ちえーりおー♪」

一破！一

しー

「げはぁ!?!」

ア

「おお……! わずか0.1秒で飛び蹴りを! やったわねしーちゃん! 新記録よ!」

す

「カナン君を超えたね♪」

しー

「待つ、待った……。新記録とかはどうでもいいとして、何故に蹴り……?」

裕

「そんなの決まってるじゃない。ここに来たら、あんたを一度は蹴らないと♪ と、ゆー訳で皆お久しぶり♪ 一之瀬裕希奈よ♪」

ヴ

「もー、裕希ちゃん、しーちゃん蹴っちゃダメだよ? 高町ヴィヴィオです♪」

カ

「……風間カナンだ……」

しー

「ん? あれ? どうかしたかカナン?」

カ 「……その台詞。白の振袖なんぞを着て、髪をアップにしてやたら色っぽくなったお前に言われたくねーよ」

しー

「う……！ いや、まーそうだけどさ」

ア

「ちなみに、私達女性陣は全員振袖よ♪ 私は当然、赤♪」

す

「私は質素に紺色で♪」

裕

「……こんだけの振袖。よく用意したわよね。私は藍色よ」

ヴ

「……本当にね。また私達、着替えさせられちゃったし。私は碧色です」

メ

「私と姉様もだ。マスターの融合騎、メイデンだ」

レ

「メイデンの姉のレナスです」

しー

「て、さりげなく登場したな二人とも……。まあいいや。で、カナンはなして不機嫌？」

裕

「ほら、アレよ。今日は……」

ア

「タカトと……」

しー

「あー、そういや今回だっけ」

す

「メインイベントだね♪」

カ

「しくしくしく」

メ

「気になる方は後をお楽しみにだぞ」

レ

「それでも気になる方はリリカルヴィヴィオの感想欄をお探し下さい」

しー

「さて、では次の召喚者はこちら♪ 作品完結記念で召喚させていただきます。魔法少女リリカルなのはStrikers はじまりの魔法より、近藤大輔さんと、その融合騎。エレ——」

チ

「チート♪ で、お願いねしーちゃん♪」

しー

「ぬお！？ 何の脈絡無く登場せんといて下さい！」

ア

「てか、そのネタまだ続いてたのね……」

チ

「あくまでチートだから♪」

す

「そっちも危険だね？」

近

「……えーと」

しー

「あ、すいません。チートさんの登場があれだったので、置いてきぼりになっちゃいました。近藤大輔さん。通称、うっだらぁ！ さんです♪」

近

「通称！？ いや、待ってくれないかいしーちゃん！？ てか、それを言い出したのは君だろう！？ ついでに言うといつまでそのネタひっぱるかなぁ！？」

しー

「！？ マークを一つの台詞に四つも……。すみません。俺が間違っていました。うっだらぁ”！？” さんですよね」

う

「何も変わってない！　そして台詞の上の名前変えるのは止めよう！」

チ

「ああ、でもご主人様とこれでお揃いだと思うとうっだらあ！？　でも悪くないです♪」

う

「そんなお揃い少しも嬉しく無いからな！？　しーちゃん頼む。完結記念がこれじゃあいくら何でも……」

しー

「むー、仕方ないですね。では、近藤さんで」

ア

「さて、これで全員かしら？」

す

「……そう言えば、レンさんと未来君は？」

しー

「あの二人なら、ちよっと出てますよ？　何でもメインイベントの用意があるとか——」

カ

「よ、用意……？」

しー

「何でも」世界がぶっ壊れるくらいの激戦でも大丈夫なくらいの戦

場”を用意するとか」

カ

「メイデン！ レナス！ ユニゾンだ！ 今すぐ、ここを脱出——」

ア

「ふふ……」

裕

「逃がさないわよ？」

チ

「おもしろそうだから♪」

がっし

カ

「ぎゃーっす！？ 一瞬で捕まえ……！？ てか、チートさんまで何で！？」

チ

「おもしろそうだから♪」

カ

「さっきと一言も変わってねえ！？」

近

「……彼は何をそんなに怖がってるんだい？」

しー

「ああ、それはあれですよ。第三部完結記念、『タカ兄いVSカナ
ン大模擬戦(?)！ 死んでも恨んじやーよ』を、今回やるので
……」

近

「……………」

しー

「ちなみにタカ兄いは模擬戦に於いて、”非殺傷設定魔法を一切使
いません”♪」

近

「大変だな。彼も……」

カ

「そう思うなら、二人とも助けてくれよう!？」

しー、近

「「無理」」

カ

「断言された!？」

裕

「そう考えると、私達もやばかったのよね……」

ヴ

「……………うん。あれ、全部殺傷設定だったんだと思うと……」

メ

「二人の台詞の意味は、番外話『裕希奈&ヴィヴィオVSタカト。時を超えた師弟対決』を読むと分かるぞ」

レ

「ああ、そんな事を言ってる内にマスターが簀巻きに……」

ア、裕、チ、リ

『『召し捕ったり〜♪』』

カ

「何で正月早々簀巻きに！？ てか、一人関係ねえ奴居たなオイ！？」

しー

「今日のお前は飛ばすなあ……。で？ リターナさん、あんた何やってんすか？」

リ

「だって……。こーでもしないと出番が無いんだよ……」

しー

「扱いに困る人ですねえ。まあ、その内タカ兄いお手製のお節がくるのでそこらで待ってて下さいな」

リ

「うん……」

す

「それで思い出したけど、タカト君は今どこに？」

ヴ

「本当だ。タカトいないね？」

しー

「ああ、今タカ兄いは肩慣らしにちょっと出てるよ。んじゃ、ちょっと呼び出しますか。タツカ兄いくく？」

展開する、ウィンドウ。

そして……。



いんたるーど♪

風が吹く、空に。

天を突き抜ける青空に、白雲のコントラストを見ると人は何故か心が安らぐのか――。

それは、ひよっとすれば空と言うものに人は憧れ続けているからかもしれない。

悠久を思わせる青空に永遠を見るからかもしれない。

そんな青空の下、ただ一人の男が立つ。
言わずと知れた純粋なる漆黒――伊織タカトであった。

彼の目は閉じられている。そうして、深く、深く、呼吸を繰り返していた。

そんなタカトの前に、一つの巨石があった。――否、”石”とはもはや呼べまい。それが例え一枚岩であろうと、その大きさは”山”と呼ぶ方が正しいだろう。

目測で数百mクラスの石――。それがタカトの目の前に鎮座していた。

巨大な――。巨大過ぎる、石。

大きい、と言うのはもはやそれだけで偉大だ。威圧と、畏怖――。その全てを大きさと言うのは兼ね備える。

例えば山に人が挑むと言う場合、それは登山を意味するだろう。

当たり前の事である。それ以外を普通は指さない。

だが、タカトは違った。

彼は、目の前の山――。山石とでも言うべき巨大な石に対し、ただ。

一寸っ！――

渾身の力を込めて、拳を叩き付けた。いつ放たれたのかも分からぬくらいの一撃を持って。

一切の予備動作無し、その一撃は物理的速度を凌駕するとまで言われた”武道”としての極致。

名を無拍子、と言った。

「……」

タカトは無言。ただ、拳を叩き付けた山石を見つめるのみ。しかし、暫くしてタカトはいきなり、石に背を向けた。

そのまま一瞥^{いちべつ}も送らず、歩いていく。

もう、用は済んだとばかりに――。そして、タカトはいつの間にやら展開されているウィンドウに気付いた。

そこから、こちらを眺める面子にタカトはふむと頷く。

「何だ、もう来たのか。早いな」

《うん、まあね。タカ兄いも早く来なよ。……で、今何してたのさ？》

不思議そうにこちらを見るしーちゃん――。完全に、お正月仕様の美女と化した我が弟にタカトは小さく嘆息。

何故こうなったと思いながら、しーちゃんの問いに笑った。

「何、試し打ちだ。……今日の模擬戦の為にな」

《……うん、まあ、そこまで全力込めんでもとは思うけど。カナンがガタガタ震えてるし。でも失敗？ 全く何ともなっていないけど？》

「いや――」

しーちゃんの問いも、さにあらん。山石には傷一つすら入っていない。

直接殴った筈の外面に一切、だ。失敗と思っても、仕方ないだろう。

だがそれに対し、タカトはふっと笑った――。

「成功だ」

――次の瞬間。

一 碎 一

山石が突如、そして唐突に音も無く塵へと変じた。
砕けたのでも無く、どこかに飛んで行ったのでも無く。

ただ、塵に。

塵――。あるいは、砂か。

それに変わった山石は、その膨大な質量全てを変えられ、まるで砂の波のように地面に崩れ落ちる。

タカトはそれを見て、とりあえず飛行魔法で空に昇った。

そうしながら、うんうんと頷き。あまりの事態に沈黙したしーちゃん達に説明してやる。

「浸透勁で一打に何発、限界数の衝撃を叩き付けられるか試したのだが――。ふむ、塵にまでなったか」

《……えーと、ちなみに。一体、何発分の衝撃を叩き付けたの?》
「一万と千七百二十八発」

――ちなみに、だが。タカトの打撃は一発あたりA A＋クラスの打撃――これは、ビルを一撃で破碎出来得る威力だ――と、なる。

その打撃を一打で一万発以上。

しかも、内部に浸透勁でもって衝撃を打ち込んだとあれば、この結果もむべなるかなと言った所か。

満足気なタカトに、一同沈黙。しかし、タカトは朗らかに彼等に――。彼に、告げる。

「そこにカナンは居るな？ いい勝負をしよう。——結果がどうなるうと、な。……カカカカ」

そう笑いながら、タカトはウインドウを閉じ——。その姿は、次元転移でゆっくりと消えていった。

いんたるーど♪ 終わり♪



一同

『『どこがインターロードやねん！』』

しー

「皆さん揃ってのツツコミ。ありがとーございます♪」

カ

「そんな問題じゃねえだろ！？ 何あの人！？ 何で俺との模擬戦程度であんなにやる気出しちゃってんの！？」

ア

「師匠バカだからね♪」

す

「アリサちゃん、そんな嬉しそうに言わなくても……。楽しみだけど」

カ

[illegible]

裕

「さあ！」

— 擊 —
— ！ —

力

「ぺぎゆる!？」

ヴ

「ああ！ カナン君が！ カナン君が裕希ちゃんに踏み付けられて、蛙さんが潰れたような声を！」

近

「ヴィヴィオがそんな事言っていると、なんか妙に違和感があるよな……」

チ

「そこは道場ですから♪」

$$\begin{array}{c} \mathcal{L} \\ 1 \end{array}$$

「チートさんが、それを言いますか？」

チ

「だってチートだもん♪」

『『あけまして、おめでとうございます♪ 今年も、魔法少女リリカルなのはシリーズをよろしく願いします♪』』

近

「おお……！」

カ

「こ、神々しい……！ 三人の後ろに後光が……！」

しー

「流石、原作ヒロイン陣♪ ここまでの流れ、全部持って行きましたね」

フ

「ここが、アリサ道場なんだね」

は

「そやなー。私達はじめてや。なのはちゃんは一度出番あったんやっただけ？」

な

「うん、人気投票の時少しね♪ アリサちゃん、すずかちゃん久しぶり♪ 裕希奈ちゃんと、ヴィヴィオも振袖なんだ？ 可愛いね♪」

は

「メイデンとレナスもかー。これは、私達も――て、私達もいつの間にもやら振袖やん……」

しー

「これがアリサ道場クオリティーでございます」

な

「あ、しーちゃんだ。振袖似合うね？」

しー

「……似合いたかーねーんですよ。男としては」

ア

「こらこら、私達にも話させなさいよ。久しぶりね、なのは、フェイト、はやて」

す

「久しぶり♪ みんな♪」

近

「高町一尉、八神隊長。久しぶりです。……それから、フェイト。振袖、似合ってる」

フ

「あ、ありがとう。大輔……」

ア

「あ、あれ？ な、なんかいきなりピンク色に染まったわよ、この空間？」

す

「どう言う事なのかな？ しーちゃん？」

しー

「はい。説明しましょう。ここアリサ道場においては、原作キャラ

は例外無く召喚された時点で全ての二次創作作品の記憶を保持して召喚されます。で、はじまりの魔法に於いて、近藤さんとフェイト先生はラストで結婚しましたので……」

ア

「なーる程……」

す

「で、あんな状態なんだねー」

ヴ

「おうさま（はじまりの魔法でヴィヴィオは近藤さんの事をこう呼ぶ）とフェイトママ幸せそうでいいなー♪」

裕

「そ、そうね……」

ヴ、裕

（（ちら、ちら））

カ

「……何か、妙な視線を感じるな。気のせいか……」

メ

「ダメな子だな、マスターは」

レ

「ダメダメですね」

カ

「ええー!? め、メイデンとレナスに溜息吐かれたよ俺!？」

チ

「て、言うか。ご主人様もフェイトちゃんも、別作品まで来ていやいちゃすんなー!」

しー

「わあ!? チートさんがキレた!？」

な

「え? チートって……。エレノー——」

ア

「ストップよ、なのは! ここでは、チートなのよ彼女は!」

は

「ど、どう言う流れでそんななったんや!？」

す

「えっと、本人がそう名乗ったんだよ?」

しー

「それよりチートさん止めましょうよ!」

近

「フェイト……」

フ

「あなた……」

チ

「むきいいいいいい——！」

しー

「ぎゃーす！ ど、道場が……！ てか、近藤さんとフェイト先生も空気読んで見つめ合うのやめろよ！」

近、フ

「「無理」」

しー

「そこだけ普通か！？ ああ、もう何だこのカオス！ だ、誰か止め——」

タ

「……何だ。この惨状は……」

しー

「あ、タカ兄い！ タカ兄いが、来たぞ————！」

タ

「何だ、それは……」

しー

「とりあえず止めてくれ、このカオスを！」

タ

「むう、ならば。——今すぐこの騒ぎを止めんと、俺が夜なべして作った豪華お節は没収。全て俺の胃袋に納める事に……」

しー

「て、そんなんで止まる訳ねーだろ——！」

一同

『『はい』』

しー

「て、止まっただとう！？」

な

「だって……」

フ

「ねえ？」

は

「お節食べたいしな♪」

ア

「しかもタカト手製だし」

す

「今回は、どんなお節か楽しみだしね？」

裕

「てか、しーちゃんは毎度タカトの料理食べてるから、それがどんな贅沢か分かんないのよ」

ヴ

「タカトの料理まいにち……。け、ケーキもあるよね？」

タ

「……女の子の召喚者が多いと言う事もあって、デザートに例のケーキ、『vivid cherry』を用意してある」

メ

「た、卵料理は!？」

タ

「だし巻き卵に、カニ卵、卵焼きと、豪勢に三種類も用意した」

レ

「カニは!？」

タ

「まかせろ。先にあげたカニ卵に、カニチャーハン。焼きタラバガニとカニ祭だ」

チ

「ふふふ……。一度食べて見たかったの♪ なのはSS界最高と謳われる貴方の料理を！」

タ

「そう言えば、前回何のもてなしもしてなかったな……」

近

「どれ程のお手前か……。楽しみにさせて貰うよ……?」

タ

「うむ、期待以上の味を保証しよう」

カ

「え、えーと」

タ

「貴様もしっかり食っておけ。――最後の晩餐になるかもしれんな？」

カ

「て、最後の晩餐は嫌だよ!？」

一同

『『じゃあ、カナンはお節抜きで』』

カ

「ひ、ひど……!　それも勘弁!」

しー

「……あー。ま、いいか。んじゃ、まずはお節を皆で頂くとしましょうか?」

タ

「うむ。……その前に、お屠蘇^{とす}を皆で頂くとしよう」

しー

「あいよ。んじゃ、皆さん、それぞれ、お屠蘇を手にとって下さいな♪」

一同

『『はい』』

しー

「全員の手に行き渡りましたね？　では、今年も何卒よろしくお願
いします♪　かんぱーい！」

一同

『『かんぱーい♪』』

（後編に続く）

レ、未

「「え？　待った！　俺達の出番は！？」」

リ

「私なんて、スルーされたよう……」

（後編に続くってば（笑））

番外話「アリサ道場EX4!」(前編)(後書き)

アリサ道場、予告!

「待て〜い!」

アリサ道場でお節を食べる一同に響く声! それは――!

「そう――。私達と勝負しようと言うのだよ!? (ヌギ!)」

『何故、脱ぐ!?』

一同に盛大にツツコミを入れさせる人物とは――!?

……一人しかいないけど、それでも謎の人物は脱ぐ、勝つために!

「関係ねーだろうが!」

そして、ついに模擬戦が始まる――。

「貴様、勘違いしてないか?」

「な、ん……!?!」

「実戦だろうと、模擬戦だろうと、訓練だろうと死ぬ事に何の違いがある? ……少なくとも、俺はお前を”殺す”つもりでやっているぞ?」

果して、カナンは生き残れるのか――!

番外話、アリサ道場EX4! (後編)!

「勝つ――! あいつ達みたいにな、俺もあんたに勝って見せるっ!」

「いい機会だ。とく見ておけ。——これが」

1月8日！ 更新予定！

「EX——。カミ殺しだ！」

こ・う・お・た・の・し・み・に♪

「……え？ やっぱり罰ゲームあんの？」

『『当たり前♪』』

「……うそん」

番外話「アリサ道場EX4!」(後編)(前書き)

しー

「一日遅れ、一日遅れ……」

す、すみません(汗)

頑張ったんですが、8日に投稿出来ませんでした……。

いや、理由は文字数見て貰えれば分かるかと。

アリサ道場史上最長文字数かつ、ページ数になつとります。

てか、皆暴走し過ぎだよ……。

ちなみに、今回読む場合。列車等の人や、ドリンクを飲みながらだと大変危険だと警告しておきます。

理由は、”テストメント本人が爆笑しながら書いた”と言える分かるでしょう(笑)

ではでは、アリサ道場4(後編)

どぞ〜♪

番外話「アリサ道場EX4!」(後編)

しー

「はい♪ 恙つつがな無くかんぱいも出来た所で——て、チートさん! 勝手にお節食べない!」 勝

チ

「うるさいっ! そんな事言ったって、もうこの口は止められないんだよ!」

近

「どこの禁書だお前は……。と、早く食べなきゃお節が無くなるな。じゃあ、頂きまーす」

一同

『『頂きまーす』』

タ

「今回のお節は、スタンダードの和風。そして、それだけではあれなので中華風を用意した。堪能してくれ」

ア

「よくもまあ、こんなに……。と、アワビのクリーム煮もらい!」

す

「ああ!? それ狙ってたのに……。なら、カニ肉とフカヒレのトロみスープを——」

レ
「かに〜♪ かに〜♪」

裕

「ふ、フカヒレとカニが……と言うかカニ関係がレナスの口に消えていくわ……!」

メ

「卵〜♪ 卵〜♪」

ヴ

「こっちは、メイデンが卵を片っ端から食べてるよ!? ま、待って! 卵焼きは! 甘い卵焼きは残して〜!」

カ

「姉妹揃って何やってんだ……。てか、融合騎は皆揃って大食いか!?」

チ、レ、メ

『『ぱくぱくぱくぱく♪』』

しー

「ツツコミ入れてる暇があったら食べた方がいいぞ……。伊勢海老は貰ったあ!」

な

「そう言うしーちゃんも食べるね……。あ、マグロ美味し……」

フ

「マグロの頭焼き（マグロの頭を丸ごと焼いたもの）を、気後れ無

く食べるあたりが、なのはだよね……」

は

「ツバメの巣はどこや！ 肌にええって聞くんやけど——」

フ

「え？ それ、本当はやて！？ なら食べなきゃ——」

チ

「ふふ……。一足遅かったわ、皆……」

女性陣一同（融合騎は除く）

『『っ——！？』』

チ

「今、私の手元にあるツバメの巣がラストよ！」

ア

「い、いつの間に……！」

す

「ゆ、融合騎だからお肌を気にしないでいいのに……！」

な

「エレ——じゃなかったよ。チートさん！ 私達にも少し分け——」

チ

「ダガコトワル！ いただきますーす♪」

女性陣一同

『『ああ!?!』』

近

「これが、マグロの心臓の刺身――。確か、貴方が気に入った男にしか出さないと言う珍味……!」

タ

「アカシックレコードで見たか。うむ、とく味わってくれ。……女性陣に――特にチートに見付からん内にな?」

近

「では……。こりこりとした食感がたまらないね。酒が欲しくなる……!」

チ

「ご主人様が美味しいそうなものを……! ソレモワタシノモノダ!」

近

「て、こらこらこらあ! ああ、まだ一口しか食べてないのに……!」

タ

「むう、大した食欲だな……」

チ

「美味しかった♪ て、言うかこの人くれない? ウチのコックにしたいから♪」

ア、す、な

「「それは却下!」」

タ

「と言うか、俺も断るぞ？ さっきのような甘い空気に耐えられるものか」

カ

「……いや、あのさ。皆食べ過ぎじゃ……？ 太——」

—轟!—

女性陣一同

『『ナニカイツタカナ？ カナン（君）？』』

カ

「い、いえ！ 何でもありません！ どうかお食事の続きを！」

しー

「てーか、お前あんまり食べて無いよな？ タカ兄いもだけど、なして？」

カ

「……模擬戦があるのに腹を重く出来るかよ……」

タ

「右に同じだ」

しー

「あ、なーる。さて、まだまだ皆さん、お節を堪能しまくりなので。その間、StS，EXの追加設定を公表したいと思います♪ まず

は、皆さんお待たせの、おっちゃんから♪」

タ

「最近奴も出番が無いがな」

カ

「トウヤさんに叩きのめされたんだっけ？」

しー

「実は、あれから一週間経ってねえしな。では、どぞ〜♪」

アルセイオ・ハーデン

年齢…三十二歳

魔導士ランク…SSS＋

概要…ツアラ・トウ・ストラに所属する傭兵魔導士。

第三部に入って早々、人気を博した最強中年（笑）

その実力は、本作に於いても最強クラスである。

装備はロストログア剣、魔剣ダインスレイフ。

しかし、彼の攻撃方法は須らく希少技能。無尽刀によってなされている。

その戦い方は我流ながらも『極め』の分類に属しており、タカトやトウヤにひけを取らない。

むしろ、二人に『反則』がなければ、魔導士としての実力は彼の方が上だったりする。

元グノーシスの第二位であるが、実力は第一位クラス。

しかし、本作より十年前に引き起きた『グノーシス事件』により、グノーシスを脱退。傭兵として生きて行く事になる。

そして、第三部開始と同時にシオンに出会い、戦う事となり、有り余る実力で彼を叩きのめす事となる。

だが、そこでシオンが感染者だったと言う事。

そして、彼の可能性に気付き。以来、シオンには強くなって自分に追い付く事を待っているかのように振る舞っている。

地球にアースチームが到達する前に、トウヤにより手傷を負わされて以来、現れてはいないが――。

性格はいい意味でも悪い意味でも大らか。敵である筈のシオンやティアナも気に掛けて、気に入った人物は助ける。

それ故に、副隊長である真藤ソラには苦勞をかけっぱなしであるらしく。

隊以外のストラの者達には、ほぼ例外無く疑惑の視線で見られていたりする。

隊での人望は篤く、ストラの指導者、ベナレスからも信頼されている。が、ストラの真の目的は傭兵であるためか、彼にも彼等にも知らされてはいない模様。

これからどうなるか、活躍が待たれている。

しー

「はい♪ おっちゃん紹介のコーナーでした♪」

カ

「流石、おっちゃんだよなー。てか、タカトさん達より魔導士としては上なんだ……？」

タ

「斬界刀があるからな。世界をただの破壊力だけで斬れるなぞと言う出鱈目魔法がある時点で悟れと言う話しだ」

カ

「そりゃまあ……」

しー

「さて、ではお次は第三部から登場のオリジナル魔法の一部を紹介します♪ てか、カリムさんが使った魔法だけだけど」

近

「古代ベルカの魔法だな。しかし、かの無尽刀の魔法などは紹介しなくていいのかい？」

しー

「……作者から『ダメ♪』って言われました。ちくせう。なんで、今回はこれで我慢したって下さい。では、どぞ〜」

オリジナル魔法。(古代ベルカオンリー)

ムスベル
炎界

威力…A A

射程範囲…百〱千

概要…神庭シオンが、八神はやてから授けられた儀式魔法の一つ。
遠距離砲撃型戦術攻性魔法

魔法陣を展開し、そこから莫大な量の炎を発生させ、範囲空間を燃やし尽くす魔法。

本来は古代ベルカ式だが、シオンに授けるにあたってカラバ式の術式に形式が変更された。

その為か、本来の炎界より威力はかなり低くなっている。

エインヘリアル
聖戦士

威力…―

射程範囲…一〱百

概要…騎士カリムがタカトとの戦いに於いて使用した儀式魔法。
白兵戦型戦術強化防性魔法。

その性能はタカトを持ってして『危険』と言わしめた。

ブースト魔法の一種であり、攻・防・速の三点とも強化されている。

この魔法は使用条件に、『自らを信頼し、付き従う者達のみ使用可能』と言うものがあり、その使用条件故に王族専用の魔法だったのでは無いかと言われる。

カリムがこれを使った状態で他の魔法を使用していたが、これは聖戦士の特性の一つで。

使用した被術者に魔力と術式負担を全て預けると言うものである。

つまり、使用者はこの魔法を一旦発動すると。後は被術者に全ての負担を任せてしまえるのだ。

騎士が他の魔法を使わなかったのは、これが原因。
それぞれのブーストに関しては次の性能となる。

攻撃性能…抵抗や反作用を全て破壊力に変換。身体能力も底上げされる為、通常攻撃がAAA+相当にまで強化される。

速度性能…音速超過。上記の通り、無駄な力の一切を変換し、その全てを速度に変換される。

かつ、極めて高い防御性能によって被術者は発生する空気抵抗や強力なGからも守られる事になる。

防御性能…SS+までの攻撃を、完全にシャットアウト。

タカトが最も攻略が厄介だと言わしめた最大の理由がこれである。

その特性は、被術者を包む防御圏層——『鎧』にあり。これは、熱、エネルギー、衝撃。その他もろもろの外側からの力を、光と音に変換すると言うもの。ただ防ぐのでは無く、変換される事になるので。ほぼ完全な無効化を可能としている。

これを貫く為には、SSS以上の攻撃——。一瞬にしろ、総合的にしろだ——が、必要となると思われる。

タカトはこれを、八極八卦太極図の同時術式起動によるSランク以上の攻撃による”連撃”で崩した。

ミズカルズ
塞界

威力……

射程範囲…一〇〇百

概要…古代ベルカ式による儀式魔法。戦術防性魔法。
フィールド魔法の一種であるが、聖戦士と違いSS+ランクも
の防御性能は流石に無い。

だが、その防御性能は強固の一言に尽きる。
遮蔽密度を上げる事によって防御能力が上がる特異な魔法ではあ
り、防御性能はSランククラスとなる。

ラクナロク
破天

威力…SSS

射程範囲…千〇〇万

概要…八神はやてが、そして騎士カリムが所有する儀式魔法。殲
滅砲撃型戦略攻性魔法。

その威力は、夜のミッドチルダを真昼に変える程の威力となる――
が、実は、あれでも威力は低い方である。

本来、この魔法の使用には数人から数百人単位で行うのが正しく。
はやてや、カリムのように単体で使う魔法では無い。

SSSランクと言うのは、あくまで単体使用での事であり、その
使用条件下によるが本来威力の上限は存在しない――。つまり、使
用状況次第では無限破壊力を発生させる事も可能であるとされる。
その破壊力の為か、はやてはこの魔法を意図的に封印していると思
われる。

しー

「以上、オリジナル魔法（一部原作より）でした〜♪　こう考え
つと、はやて先生って恐いな……」

カ

「ああ……」

近

「なるべく、今後は怒らせない方向で――」

は

「ああ、もー！　タカト君から追加されたツバメの巣も食べるか！
？　チートさん許すまじ！　響け、終焉の笛――！」

しー、カ、近

『『て、言ってるそばから――！？』』

は

「むぎよおおお！？　なんや、しーちゃんにカナンに近藤さんま
で！？　こんなんされても私は止まらへんで！？」

しー

「そこは大人しく止まりましようよ！？」

カ

「しーちゃんの胸揉んでいいから！」

近

「そう、しーちゃんのおっぱい揉んでいいから！」

しー

「て、待てい。その二人。なんで俺の胸!？」

カ、近

「「今のお前がしーちゃん（女体化）だからだ」」

しー

「ぐ……。いや、でも。はやて先生が納得する筈……!」

は

「よっしゃ。それで手え打ったろ」

しー

「て、何iiiiiiiiiiii——!？」

カ、近

「「流石だぜ、おっぱい星人……!」」

しー

「なんで二人共納得してんの!？ てか、ちょっ……! 待っ……!
」」

は

「ふっふっふ……。フェイトちゃんや、シグナムにも負けず劣らずな、そのおっぱい——。一度、心から揉みしだきたいと思ってたんや……。それじゃあ、往生しいやあ……。覚悟!」

しー

「ひにゃあああああああ——！」

な

「あ。またはやてちゃんがセクハラを……」

フ

「私も揉まれたよ」

ア

「私もよ」

す

「私もだよ」

裕

「でも、しーちゃんだし別にいいんじゃない？」

ヴ

「……い、いいのかなあ……？　ちよつと羨ましいけど……」

女性陣一同

『『しーちゃんだし、別にいっか♪』』

しー

「て、こら——！！　なんつつう勝手な事を……て、はやて先生
そこらめえええええ——！！　っ……ん……！！」

近

「青少年には目の毒過ぎる絵だな——」

カ
「そうですね――」

フ、ヴ
「「えい（とす♪）」」

近、カ
「「ぎゃああああああああ――！　め、目が！　目があああああ
ああ――！！」」

ア
「て、手を出す暇も無かったわ……」

裕
「なんて鮮やかな目突き……」

フ
「大輔……？」

ヴ
「カナン君……？」

近、カ
「「ご、ごめんなさい……！！」」

す
「チートちゃん的には、あれはいいのかな？」

チ
「ご主人様もたまには痛い目に合わないと♪　それに、今はナマコ

の葱油煮を食べるのに忙しいし♪」

タ

「……食が、忠に勝ったか——ん？」

？

「待て——い！」

な、ヴ

「「ふえ……？」」

ア

「え？ なになに？ なによ？」

は

「ん——？（もみもみ）」

しー

「っは……！ はやて先生そこは……んっ！」

？

「しーちゃんのおっぱいを揉みしだくなぞ、羨ま——。もとい、許されざる行為！」

？
2

「それが女同士なんて、非生産性極まりないね！」

は

「需要はあるで？」

?、? 2

「「シャーラップっ!　とうっ!」」

くるくると回転しながら、謎の二人が道場へと舞い降りる!

そして――!

タ

「前フリが長すぎる。兄者、ジル。天破光覇弾」

―煌―

?、? 2

「「ぶうるわあああああ――!」」

す

「なんか、こんな場面。前にも見たような……」

裕

「そう言えば、あったわよね……」

近

「うう……。目が見えないから、何が起きたか分からない……」

カ

「……右に同じく……」

ア

「で?　トウヤさん。ジル。あんた達何しに来たのよ?」

ト

「ふ……。いきなり単刀直入を求めるとは……。情熱的だね？」

ア

「……まあ、火の赤は私のフォーマル・カラーだけど」

フ

「赤取っちゃうとヴィータが怒るよ？」

ジ

「つま——」

裕

「ちえええええりおおお——！！」

ト、ジ

「「ぐっはあ！」」

裕

「話しが長いのよ！」

近、カ

「「えー……」」

裕

「何？ 文句あんの？」

近

「いや……」

カ 「な、何でも無いよ？」

タ 「で？ 本当は何しに来た、二人共？ ちなみにお節はレン先輩と未来、そしてお手伝いの分しか無いぞ？」

チ 「マダサンニンブンモアルノっ！？（ぎらり！）」

メ 「タマゴ〜〜♪ タマゴ〜〜♪」

レナ 「カニ〜〜♪ カニ〜〜♪」

近 「て、どんだけ食べるつもりなんだお前達は！ もう、欲望まみれじゃないこの融合騎達！」

カ 「ま、マスターとして（涙）」

タ 「……ちなみに、やらんぞ」

チ、メ、レナ 「「「ナンデっ!？」」「」」

タ

「これは手伝いをしてくれた人の分だからだ。手伝って貰ったのに不義理は駄目だ。……ケーキはあるがな」

ヴ

「ケーキ!？」

す

「ああ……。ヴィヴィオちゃんが、かって無い食いつきよう……」

な

「でも、タカト君お手製のケーキだね? v i v i d c h e r
r y って名前だったような……」

フ

「うん、美味しいそうだ」

タ

「ふむ、お節もあらかた片付いたし。そろそろデザートと行くか」

女性陣一同

『『わあ——い♪』』

ト

「む、無視された? く……! デザートには所詮負ける運命かね
……!」

ジ

「女性陣だしね! デザートにインパクトで負けるのは仕方ないよ
……! これを超えるには——!」

ト、ジ

「「もう脱ぐしか!」」

近、カ

「「脱ぐなよ!」」

レ

「うーす、ただいまあ。て、何だ?」

未

「腹減った……。て、これどんな状況?」

タ

「レン先輩、未来。お帰り。お節、あるぞ」

は

「……つまりー!。私はまだ、しーちゃんのおっぱいを揉み続けてええん? (もみもみ)」

しー

「いいからもう離して下さいっ!」



しー

「……ようやく、はやて先生の魔手から逃れた……」

カ

「しーちゃん、お疲れ」

近

「君は良く頑張った」

しー

「今更慰めの言葉なんて……！ てか、俺を生贄にたくせに——」

タ

「とりあえず、着付けし直せ。振袖乱れまくって、えらい事になってるぞ？」

ト、ジ

「「だがっ！ そここが良い！」」

しー

「うっさいわ！？ つか、本当に何しに来たのさ。……ついでに俺、着付け出来ない……」

タ

「仕方ない。俺が——」

—ゴス—

タ

「……………（どくっどくっ）」

カ

「……タ、タカトさんが血まみれに……」

な

「もし、タカト君だったら――」

フ

「仕方ないね、タカトは」

は

「それはあかなー。タカト君」

ア

「セクハラはダメよ？ セクハラは」

す

「ほら、しーちゃんはこっちに。男の子達はあっち向いててね？」

裕

「じゃなかったら、もれなく川に送るわ」

ヴ

「……分かってるよね？ おうさま？ カナン君？ レンさん？
未来さん？」

男共

『『いえっさー！』』

タ

「さ、さて。話しが逸れたな……。で？ 何用だ、兄者……」

ト

「その怪我で話しを進めるなんて……。流石、我が弟だよ。――同

情していいかね？」

タ

「いらん。さっさと話せ」

ジ

「つまりは、僕達と勝負しようと言う訳だよ！」

一同

『『……はぁ？』』

ト

「……話しが伝わってないようだね？　ならば、ジル！」

ジ

「分かったよ、友よ！」

ト、ジ

「「そう——。つまりは私達と勝負しようと言うのだよ！？」（ヌギ
！）」「」

一同

『『何故、脱ぐ！？　てか、さっきと変わってねえ！？』』

タ

「つまりは——。あれか？　新年早々、勝負して負けた方が罰ゲームを受けると。そういう事か？」

一同

『『通じた！？』』

タ

「……長年、伊達に異母弟はやっとならんからな」

ト

「長年、伊達に異母兄はやってないからね♪」

レ

「なんだ、その妙な以心伝心」

未

「いや、まあ、タカトさんとトウヤさんってだけで納得出来てしま
いそうですけど……」

カ

「まあ、いいや。でも、俺達がそんなのやる意味ないよな？」

近

「後が恐いし——」

ト、
ジ

「「ちなみに、勝負を受けねば我々は今日一日全裸で過ごす！」」

一同

『『『どう言う脅しだよっ！？』』』

ト

「ふっふっふ……。いいのかね？　もうすぐ女性陣が戻って来るが、
我等が全裸でも？」

ジ
「君達が勝負を受けずに我等が全裸になったと知れば——さあ、どうなるかな？」

ト、ジ
「「分かつてはいるだろうが、我々は女性陣の前で全裸となる事に一切の躊躇いは無いっ！」」

カ
「あああ……。分かつちやいたけど、やっぱり変態だ……」

レ
「今更っちゃあ今更だけどな……」

未
「こうなったら……」

タ
「それしかあるまい」

近
「……え？　な、なんで俺の肩を叩くんだ二人共……」

一同
『『あの二人に対抗すべく、近藤さんが全裸に』』

近
「「……………は！？」　ちょっと気が遠くなってたみたいだ。いやあ、すまない。今、なんて言ったか——」

一同

『『近藤さんが、全裸に』』

近

「て、なんつでやねんっ！」

タ

「いや、こうなったら兄者達と肉体美を競って貰うと言う事で」

レ

「マツチヨだし」

未

「筋肉質だし」

カ

「マツチヨだし」

近

「関係ないよね！？　つか脱がないからな！？　後、マツチヨ強調すんな！　そして、その二人は手招きしない！」

ト

「なんだ、同志にならないのかね？」

ジ

「人に見られる事で肉体は美しくなると言うのに……」

近

「嫌に決まってるでしょうが！　あーもう、勝負受けますよ。全裸

になられるよりマシだ」

一同

『『えー……』』

近

「嫌そうな顔しない！ で、勝負って何するんですか？」

ト

「ふっふっふ……。それはだね……。？ て、おや？ 女性陣が戻って来たようだね——」

女性陣一同

『『な、なんでトウヤさんとジルさん裸なの おおおおとおおお——！——』』

——轟！——

ト、ジ

「「のおおおお——！——」」

他男性陣一同

『『俺達も巻き添えか あああああああああああああ——！——』』



しー

「……で？ 勝負を受ける事にしたと？」

カ

「あ、ああ、まあ、そんな感じ」

未

「……吹っ飛ばされるんなら意味無かったつつう話しただけだな……」

しー

「ツツコミ所は山程あるけど……。まあ、いいや。んで？ 勝負は何すんの？」

ト

「うむ！ 今回は――。ドッジボールをしようと思うのだよっ！」

近

「ドッジボール？」

タ

「またえらく懐かしいものを……」

ア

「……まあ、事情は分かったわ。確かに。は、裸で居られるよりはマシよね……」

裕

「川に送っても、すぐ復活しそうだし」

な

「どばーんって、ぶっ飛ばしてもすぐに戻って来ちゃいそうだし」

す

「どばーんって、なのはちゃん……」

チ

「A, S からだね♪」

ト

「そんな事はどうでもいい……。では、男衆。来たまえ」

カ

「……え？ 俺らとやんの？」

ジ

「その通りだよカナ吉君！ そして我等が勝った暁には、一つ願いを叶えて貰おう……！」

ヴ

「お願い？」

裕

「……どうせ、またろくでもないお願いでしょ？ 言っとくけど、私達に何かしたら即座にユウオさん呼び出すわよ？」

ト

「ふ……。何をバカな……」

ジ

「我等はこれでも変態紳士。女性陣には指一本触れないさ」

しー

「あ、なんだ。そこらは常識的——」

ト、ジ

「「タダシ、男ノ娘ハベツダ！（ヌギっ！）」」

しー

「て、うおおおおおおお————い
!?」

一同

『『だから何故脱ぐ!?』』

ト、ジ

「「それは、我等の溢れ出すパ——ッション！が……」」

レ

「もーいい、黙れ」

未

「……いや、本当つくづく……」

タ

「……まあ、大体話しは分かったが……」

しー

「分かんないよ!? 俺は了承してねえだろ!? トウヤ兄いとジル
は変な手つき止める! ってか俺に何するつもりさ!?!」

ト、ジ

「「聞きたいのかね!?!」」

近

「俺も身内には大概ろくなの居なかったけど……。これは別の意味で嫌だなあ……」

メ

「だが、そっちは二人だな？　まさか二人でやるのか？」

ト

「ふ……。まあ、我等二人でも十分だろう」

ジ

「このたぎるリビドーを持っていれば、数の不利なぞ――」

? 3、? 4

「「待て――いっ！」」

ア

「……えー。まだ何か来んの……?」

裕

「ちょっと。これ以上、人増えて大丈夫なんでしょうね……?」

ト

「おおっ！　君達は!？」

? 3

「お呼びとあらば、即参上！　銀○旋風ブラ○ガー」

カ

「ヤバいネタだなオイ!？」

? 4

「なら、月に変わっておしお——」

一同

『『そっちはもっとヤバいわあああああああ—————
!』』

タ

「……で? 片方は召喚した記憶すら無いが……。何しに来た?
フェニックス。そして、隆浩」

フェ

「ふ……。皆、久しぶりだな! 魔法少女 リリカルなのは P H
O E N I Xより。不死鳥な神! フェニックス、ここに推、参!」

ト

「友よ!」

フェ

「久しぶりだな、トウヤ……。連載再開記念も兼ねて来たぜ!」

は

「まだあったんや? 記念……」

フ

「すごいね……」

タ

「……で？ 貴様は何故そちら側についた？ 隆浩？」

隆

「そんなのは決まっている……！ 何故なら、こっちだとしーちゃんに色々出来そうだからだ！」

しー

「て、こらこらこらあ！ あんた、さっき（なのはSS・freedom参照）俺を処刑したばっかじゃんか！？」

隆

「それとこれとは話しが別♪」

しー

「別なのかよっ！？」

タ

「やれやれ……。まあ、いい。では、さっさと勝負を始めるぞ」



ト

「ルールは簡単！ 基本的なドッジボールと変わらない！ ただし、ボールが当たってアウトにならない限り。ボールは交互に投げられるものとする！」

近

「それはまあ、いいんですが……。俺、選手なのか……」

しー

《えー、何故か審判までもおおせ付かったシオンこと、しーちゃんです。さて、参加選手はお互い男のみ四人ずつ。今回はカナンが離脱してます》

カ

「模擬戦があるんで許したって下さい」

レン

「ち……」

未

「うまく逃げやがって……」

カ

「予想してたけど、ひどい扱いだなオイ！」

しー

《はいそこー。文字数押してんだからぐだぐだ喋らない。さて、メンバーを紹介します。まずは変態チーム。トウや兄い、ジル、フェニックス、隆浩ー》

チーム変態紳士

『『我等は勝あつ！（ヌギ！）』』

一同

『『だから脱ぐなっつってんだろうが！』』

しー

《……はい、どんどん行きますよ。お次は、作品ごっちゃ混ぜチー

ム。タカ兄い、近藤さん、レン先輩、未来です」

近

「……あんまり気合い入らないなあ……」

レ

「だな……」

未

「女性陣が巻き込まれるなら話しは別だけど、今回はしーちゃんだけが被害くらうわけだし――」

ト

「ふ……。だ〜れが、女性陣に何もしないなどと言ったのかね？」

一同

『『えゝ……？』』

しー

「おーと、ここで新事実発覚です。てか、俺は自分の扱いの悪さに泣きそうだよ……」

タ

「こらえろ。……で？　どう言う事だ？」

ジ

「タつくんは、分かってないねえ。僕達は先程、こう言った筈だよ？　”指一本触れないと”」

タ

「タツくん言うな。……そうか、ハメられたな。貴様達の狙いは――」

チーム変態紳士

『『逆に言えば、指一本も触れなければ。何をしてもいいと言う事だっ!』』

女性陣一同

『『て、ちょおおおお――!?!?』』

しー

《まさかの展開です。そんな裏があったんですね。……で、何をするつもりさトウヤ兄い?》

ト

「うむ……。とりあえず、女性陣が穿いていたパンティを頂こうかね!」

女性陣一同

『『……………』』

ジ

「着物専用のショーツがあると、我等の耳にしかと入っているのさ」
♪

フェ

「それを頂こうと♪」

隆

「ああ、予備含めて二枚はおくれよ? 一枚は売るから」

しー

《二枚！　またリアルな数字が出て参りました。一枚は売るとの事です、後の一枚は――》

チーム変態紳士（隆浩抜き）

『『まずは見る！　それこそ舐めるように！』』

女性陣一同

『『……………』』

チーム変態紳士（隆浩抜き）

『『次に嗅ぐ！　色々なニオイを肺いっぱい！』』

女性陣一同

『『ジャキッ！（デバイスを構える音）』』

チーム変態紳士（隆浩抜き）

『『そして最後に”食す！”　口に、そして胃の中に君達の色々なのが付いたものを入れる！　我等に取ってパンティはご馳走ですよ！？』』

女性陣一同

『『認められるかあああああああああああああ――』』
――！』』

――轟！――

しー

《おーと、ここで女性陣から猛抗議の砲撃！　無理ありません。

変態っ！ 真性の変っ態っ共がここに居ます！》

タ

「今更過ぎてツツコミを入れたくも無いな……。しかし、あれだけの砲撃喰らってノーダメージっぽいな……。流石変態」

チーム変態紳士

『『天下天下天下天下あっ！』』

ア

「あーもう、こうなったら！」

裕

「その男連中！ なんと少しでも勝ちなさいっ！ もし、負けたら――」

女性陣一同

『『ドウナルカ、ワカッテルヨネ……。？』』

男性陣一同

『『い、イエッサー！』』

しー

《では、勝負開始です。先行は独断と偏見により、作品ごっちゃ混ぜチーム》

一同

『『適当っ！？』』

未

「でも、ラッキー！ ボール貰い！ さて、最初は——ジルさん！ あんたに決めた！」

しー

《サ○シか、お前は……。けど、ボールは轟速球でジルに——！》

ジ

「ふ……。この程度かね！（ずびしっ）」

未

「な、なあにいいいいいいいい——！？」

しー

《おっと、これは凄い。なんと、指二本で未来の全力投球を受け止めた——！》

ジ

「どうしたね！ もっと全力な君の熱いパッションを僕に見せたまえよ！？」

未

「いや、そんなの持ってな——」

ジ

「パ————っ ショッン！」

未

「ぶぐるっしゃ！？」

—轟！—

しー

《ジル速攻！　なんと今の投球は、音速の壁を突破したとの事です。
ソニックブームが会場に吹き荒れております》

近

「く……！　早くも一人脱落か……！？」

レ

「使えねえ……」

タ

「早く外野に行け」

未

「ひ、ひでえ……（がくつ）」

しー

《未来ここで脱落！　気絶した為、未来のお節は自動的に融合騎達
のものになります》

チ、メ、レナ

「「いったきま————す♪」」

レ

「で、ちょっと待てえええええ——！　き、気絶したらお節は没収
なのかつ！？」

しー

《レン先輩と、未来専用のルールだそうです》

レ
「隆浩の分は!？」

しー
《いつの話してんですか。さっき(なのはSS・freedom
最新話参照) 食べてましたよ。俺を処刑しながら》

隆
「いい味出してたぜ……。タカトさん……。!」

タ
「うむ」

レ
「宣伝いっぱいだな!？」

しー
《わめくレン先輩は無視して、先行きます。ボールは再びごっちゃ
混ぜチームに》

レ
「く……っ! こうなったらなんとしてでも生き残ってやる……!」

ト
「しかし、レン。君のその願いは叶わぬ運命だ……」

レ
「う・る・せ! これでも……。食らい——やあがれえええええ——
——!」

—煌！—

しー

《な、なんと！　ここでレン先輩。集束砲撃魔法、ホーリー・ギャラクシー・ブレイカーでボールを撃ったあ！　こ、これは全員一撃で撃破なるかあ——！》

—破！—

しー

《き、決まったあ——！　ホーリー・ギャラクシー・ブレイカーが、変態チームのフィールドに直撃！　これでは誰も……》

レ

「ふう！　ふう！　こ、これで——！」

変態紳士

『『甘いな、お前が撃ち抜いたのは残像だ』』

レ

「な、なん……っ!？」

しー

《え……？　な、なんと変態チーム全員無事です！　残像を残す程の超スピードで、集束砲撃を避けていた——！》

近

「……しかし、しーちゃんは何であんなに実況が上手いんだろう……?」

タ

「道場因子だろう、どうせ」

しー

《そこ、うるさいっ！ 審判も兼ねてんだから文句言うな！ さて、ボールは変態チームのものに！》

ト

「ふ……。レン。君の一撃は見事だった。だが、君には足りないものがある」

レ

「んだとう！？」

ト

「それは熱いパ——シヨッン！（ヌギ！）」

レ

「だからいちいち脱いでんじゃねえよ！」

ト

「と、言う訳で食らいたまえ。とう——！」

しー

《レン先輩がツツコミ入れてる間にボールを投げた——！ でも、わりと平凡なボール——？》

タ

「いや、あれは——！」

レ
「はん！　こんなボール、いくらでも受け止められらあ！」

ト

「だがしかしつ、時は凍りつく！　擬似EX！」

一同

『な、なにぃ——！』

ト

「時間は私の意のままに——。そして、時は動き出す」

レ

「ぶっぐあ！」

一撃！

しー

《おっと？　何故かボールがいきなり瞬間移動してレン先輩をKO
していますよ！？　これは——？》

タ

「……兄者が擬似EX化して時を止めたな……」

近

「じ、時間を止める！？」

タ

「そー言った真似が出来るんだ、あの人は……」

しー

《しかし、投げたボールは平凡だった筈なのに、レン先輩えらい吹き飛びましたね。これは——？ 解説のチートさん、お願いします》

チ

《はいい♪ それじゃあ説明するわ。三次元空間において、時間が止まった状態で物質が動くと言う事は相対理論上、光より速いと言う事で、これは——》

しー

《……長くなりそうなので一言でどうぞ》

チ

《つまり、時を止められると光速超えのボールをぶつけられるって事。ご主人様、頑張って〜♪》

しー

《以上、チートさんでした〜》

近

「気軽だなオイ！」

レ

「ぐ……！ お、俺は……」

タ

「レン先輩。ご無事で？」

しー

《おーっと、光速超えのボールをぶつけられたのに、レン先輩な
と意識があります。素晴らしいガッツです》

チ

《……チッ！ あのまま倒れてくれれば、二つ目のお節も頂けたの
に……！》

しー

《はい、チートさんがやたらと悪魔ちっくな台詞を言ってますが、
俺には聞こえてませんよー。……しかし、レン先輩立ち上がれませ
ん。意識も朦朧としている模様です。試合続行出来なければ、お節
は晴れて融合騎達のものに……！》

チ

《わくわくい♪》

レ

「ぐ……！ しーちゃんと、チートが鬼な事言ってるけど、上手く
聞こえねえ……！」

タ

「レン先輩……！」

レ

「タカト、近藤……！ 後は頼む……！」

近

「……解りました。後の事も、フェイトの事も任せて下さい。お義
兄さん！」

レ
「て、ミトメルモノカ—————！」

タ、近

「「てい！」」

レ

「あべしっ！」

しー

《おーと、ゾンビ化して蘇えった兄バカことレン先輩ですが、タカ兄いと近藤さんに止めを刺されたように見えました……。きっと冬の寒さが生んだ幻影でしょう！》

チ

《て、ことはこれでお節二つ目ゲットー♪》

メ、レナ

《《わ~~~~い♪》》

しー

《おーと、喜び勇んでレン先輩のお節を貪る融合騎達ですが、わたし。ここまで腹黒なメイデンとレナスを見たのは、初めてかもしれません。どうでしょうか、マスターのカナンさん？》

カ

《いや、ほんつとすみません……》

タ

「レン先輩……。安らかに……。貴方の分まで戦ってみせます」

近

「そして、俺とフェイトは貴方の分まで、幸せになってみせます……!!」

しー

《友の死に涙する友……。感動の光景です。手に目薬がなければ、なお感動的だった事でしよう。さて、次の攻撃はごっちゃ混ぜチームからですが、大人気なく擬似EX化したトウヤ兄いにどう対抗するのか! ……一つしか無いですけど》

タ

「まあ、当然だな。と言う訳で真名解放! 我が真名は——!!」

しー

《ものすっごい軽いノリで、EX化しましたタカ兄い! 本編でのシリアスを返せと叫ぶ声が聞こえて来るようです!》

タ

「EX・666・猛速凄乃王命・伏羲……」

しー

《今更シリアスぶっても無駄です! さあEX化したタカ兄いに時止めは通じません! その無限出力に変態チームは耐えられるのか——!》

変態紳士チーム

『『耐えて見せよう……!!』』

タ

「やってみろ……！ 虚空光覇弾、シュート」

一滅一

しー

《これは強烈なのが来た——！ 軽く銀河をぶった斬ったとか噂のある虚空光覇弾！ これは無理では——？》

チ

《ちなみに、会場はどんな攻撃にも耐えられる安心設計です♪ 観客席の皆さんはご安心して、観戦して下さいね♪》

近

「これは——！？ 流星に決まったか……！？」

タ

「いや……。まだだ！ ” 兄者が居る！”」

ト

「おおおおおおおお………っ！？」

一軋！一

しー

《な、なんとトウヤ兄い止めている！ 虚空光覇弾で撃ち出されたボールを止めている——！？》

タ

「やはりな、兄者……。兄者が止めに来ると分かっていた。EXと擬似EXの力関係は五分五分——対消滅の間柄になるからな。……

だが、分かっている筈だ兄者。EXランクに於いて、攻撃と防御では遥かに攻撃の方に分がある事を！」

ト

「くう……！」

しー

《今何気に重要な設定が明かされたような気がします、気にしない方向でいきます。一度は止めた虚空光覇弾。しかし、ここでトウヤ兄いは、そして変態チームはここで終わってしまうのかあ——
——！……てか、終われ》

カ

《貞操が掛かっているから言葉に容赦ねえな、しーちゃん》

ト

「こ、ここで終わる訳にはいかんのだよ……！ 我等の夢の為に！
妄執の為に！ 何より願望の為に！」

タ

「無駄だ兄者！ あんたはここで終われ……。！？」

一壁！一

しー

《おおっと！ 突如トウヤ兄いの前に壁が出現！ これは——？
フェニックスの絶対防御魔法、天ノ岩戸だ——！》

ト

「フ、フェニックス……！？」

フェ

「ふん、水臭えじゃねえか兄弟！ 一人で戦うなんてよ！ 俺も一口乗らせてもらおうか！」

タ

「……無駄だ、フェニックス。神の防壁とは言え——いや、神の防壁”だからこそ”。この一撃は貴様には防げない。カミ殺しとは伊達では無いのだ」

ジ

「なら——」

隆

「神様以外ならどうだ！」

—壁！ 壁！—

しー

《更に二重にシールドが発生！ ジルに隆浩までもが防御に回ったあ——！》

ト

「き、君達までも……！」

ジ

「フェニックスの言う通りさ！ こんな砲撃なぞ、我等が力を合わせれば物の数では無い！」

隆

「おう！ 見せてやる……っ！ 本当のエロスの力って奴を！」

しー

《す、凄まじく熱い展開です！ これがチーム変態で無ければどれだけよかったか……！ 悔やんでも悔やみ切れません！ しかし、無情にも虚空光覇弾が、防壁を切り裂いて……！》

タ

「無駄だ、貴様達。EXの攻撃を防ぐ手段なぞあるものか。……ここで、四人まとめて終わるがいい！」

しー

《完！ 全！ に、悪役の台詞です！ 流石ボスキャラ！ 悪です悪です。タカ兄いの悪役——！》

タ

「やかましい。さあ、終わりの時だ……？」

ト

「私の為に、ここまで……！ こんなに、嬉しい事は無いっ！」

—煌！—

しー

《な、なんとトウヤ兄いが謎の発光現象を起こしております！ そして、虚空光覇弾が、押し返されたあ————！》

タ

「ば、馬鹿な……！ 防げる筈が……！」

ト

「貴様には分かるまい……！ この私の、エロスを通して出る力が！ さあ、私の身体を皆に貸すぞ！ 合・体・だ！」

フエ、ジ、隆

『『応！』』

一同

『『が、合体——！？』』

ーゴッドエロスのあれなテーマー

ゴ

『『完成っ！ ゴーッドっ！ エロスっ！』』

一同

『『う、嘘だあああああああああああああ————
——！？』』

しー

《と、とんでも無い事になりました！ まさかの変態チーム。合体！ 解説のチートさん！ どう思われますか！？》

チ

《……非常識にも限度って言うのがあると思うの》

ゴ

『『そんな事は知った事では無い！ さあ、タカト！ 己の罪を数えろ！』』

ト

《行くぞっ！ フェニックス！ ジル！ 隆浩！》

フェ、ジ、隆

《《《応っ！》》》

一破！一

しー

《ち、直撃っ！ タ、タカ兄いの中にゴッドエロスが入り込んでー
ー！？》

ゴ

『『オープン、エロスっ！』』

タ

「がっは……！？」

しー

《た、タカ兄いが……。EX化したタカ兄いが倒されたああああ
あああああ————！？》

一同

『『う、嘘おおおお————！？』』

しー

《し、信じられません……！ 最強無敵を誇っていたEXタカ兄い
をゴッドエロスが倒してしまいました……！》

チ

《……さ、流石に予想出来無かったわ……》

近

「た、タカト……！」

タ

「く……！ す、済まない近藤……！ ぬ、抜かった……！ まさか合体するとは……！」

近

「いや、いいんだ。俺も、まさか合体するとは思わなかった。だが、俺一人じゃもう……」

タ

「あ、諦めるな……。勝機は必ず来る……っ！ 一撃さえ耐えられれば……っ！」

近

「た、タカト！」

タ

「いいか……っ。一撃だ……！ 一撃、耐え、れば……。ガク」

近

「た、タカトおおおおお——！！！」

しー

《た、タカ兄い、撃！ 沈！ これは……もう……決まっちゃったのしょうか……》

女性陣一同

『『そ、そんな……』』

近

「……いや、まだだ！」

ゴ

『『フ……。まだ立ち上がるか……。！ 仲間は全員倒れ、切り札も失った……。もうお前達に勝ち目は無い！』』

近

「そんな事はない！ タカトは言っていた……。『諦めなければ、いつか届く！』と——」

しー

《……そんな大層な事言っていましたっけ？》

チ

《さあ？ でも、これでいよいよ面白くなるわ……。！ ご主人様が本気を出す！》

一同

『『本気……。？』』

近

「来い……。！ チート——いや！ エレノア！」

チート改め、エレノア

「はい！ ご主人様！」

近、エ

「「ユニゾン・イン！」」

—煌—

しー

《おおーと！　ここで何と近藤さん。チートさん改め、エレノアさんとユニゾンだ！　目には目を！　歯には歯を！　合体には融合をと言う事でしょうか！？　しかし、ユニゾンするとエレノアさんが基礎になるんですか……》

ゴ

『『男の娘枠が一つ増えたっ！』』

しー

《何かゴッドエロスがアホな事言ってますが、放置します。さて、近藤さんはユニゾンには大層な代価がいる筈なんですが——。その所どうなんでしょうか？　当道場の主、アリサししょー？》

ア

《すんごい久しぶりに喋るわよ、全く……。まあ道場だからね？　タカトがEX化しても問題無いように、近藤さんがユニゾンしても何の代価も支払う必要は無いわ》

しー

《そうなんですか。何とも便利な事です！　さあ、ボールは変態チームことゴッドエロスの手の中にあります！　この攻撃を、近藤さんは防げるのか——！》

裕

しー

《おおっ！ 近藤さん耐えた！ はじまりの魔法で神エロススパークを防いでおりますっ！》

ア

《でも、あれじゃあ貫かれるのは時間の問題よ！ 出力が違い過ぎるわ……！》

ゴ

『『ふ、はははははははははははあっ！ 良く堪えるっ！ だが、それだけだ！ もう終わりだろう……！？』』

近

「く……！ まだか……！ まだなのか……！」

エ

【ご主人様！ もう……！】

近

「まだだっ！ あいつは言った……。勝機はあると！ 俺はその言葉信じるっ！」

エ

【ご主人様……】

ゴ

『『何を待っているか知らんが無駄無駄無駄無駄無駄アっ！ 何をどうしようと我等に勝てるものか！』』

タ

「いやあ？　そうでもない……！」

しー

《こ、この声は……？　いや、間違いありません！　タカ兄い！
タカ兄いが復活したあああああ——！！》

ア

《でも、もうタカトはアウトされているわ……！　外野には付ける
けど、それだけじゃあ……》

ゴ

『『その通ウうりっ！　タカト！　貴様にはもはや手立ては無い
っ！　そこで大人しく仲間が散る様を見ているがいい！』』

タ

「……ふん。合体して物忘れでもしたか？　確かにアウトにはなっ
たが、だからと言って手出しが出来なくなる訳でもあるまい？」
ボールがあれば攻撃は出来るのだからな”」

しー

《あ、あれ？　タカ兄いの手にボールがもう一つ？　どう言う事？》

ア

《あ、そうか……！　はじまりの魔法で、ボールをもう一つ作った
んだわ……！　ユニゾンはこの為の布石！》

近

「ご明答！　これでタカトは外から攻撃出来る！」

ゴ

『『味な真似を！？　だが、神エロススパークの前ではタカトの攻撃と言えども無意味！　はははははははははははは！　どちらにしろ、我等の勝利は揺るがな——』』

タ

「それが——普通の攻撃ならばな？」

一軋！—

ゴ

『『こ、これは！　タカト、貴様まさか——！』』

タ

「そう言う事だ。カミ殺しが一撃——。しかと受けろお！」

しー

《おお——と！　あの技はもしや、おっちゃんの斬界刀を一撃で碎いた——！》

タ

「神ん無ああああああああああああああああああっ！」

一撃！—

しー

《タカ兄いの最強攻撃！　神無が炸裂！　しかし、相当場所が離れているのに、よく拳が当たりましたね？》

ア

《忘れてるわよ？ EXに通常の物理法則は通じないわ。当然、距離の概念なんて無視出来る——》”

カ

《相変わらず、チートだなあ……》

しー

《それじゃあ、皆さん一緒に——》

タ

「ゴッドエロスっ！ 貴様の妄執は——！」

一同

『『ここで終われえ————！』』

—滅—

ゴ

『『ば、ばかな……！ ばかなあああああああああつ！』』

』

しー

《ああ！？ ゴッドエロスの形が崩れて……！ 合体が解けたあ——

——！》

ア

《そして、ボールは——。近藤さんの手の中に！》

タ

「決めろ近藤！ 奴らに止めを！」

近

「ああ！ これで終わりだ！ チーム変態！」

ト

「く、くそう……。私達の夢が……」

フェ

「俺達の願望が……！」

ジ

「僕達の出番も……！」

隆

「ついでに稼ぎも！」

チーム変態紳士

『『ち、ちくしょおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお！』』

一轟一

一滅一

一破一

しー

《チーム変態！ 全員揃ってどこに吹き飛んだあ——！》

ア

《まあ、どうせ生きてんでしょうけど。とりあえず——》

タ、近

「俺達の——勝ちだ」

一同

『『わあああああああああああああああ！』』



しー

「さて、漸くドッジボール対決も終わりました！——ここで、ついにメインイベント！ 模擬戦を——」

タ

「……しーちゃん、それなんだが——」

しー

「ほえ？ 何さタカ兄い？」

タ

「……いや。さっきのドッジボール対決で気力を使い果してな……。今日はもう勘弁してくれ……」

しー

「えー？」

ア

「せっかくのメインイベントなのよ？ ここまで来てやらないでど

うするのよ?」

す

「でも、文字数がもう凄い事になってるよ?」

しー

「うーん、確かに……。なら仕方ないか……。模擬戦は次回に持ち越ししよう」

カ

「よっしゃあ! 次回まで生き延びたぜ……!」

裕

「えー? つまんないなー。タカト、ダメ?」

タ

「EX化と神無を使ったせいで、ちょっと……」

ヴ

「タカトでも参る事があるんだね?」

近

「いや……。あれと戦うのは、ちょっときついて……」

フ

「大丈夫、大輔?」

は

「タカト君と、近藤さんが同時に参るなんてなあ……。ゴッドエロス、恐るべしやな……」

夕、近

「「……あれとは二度と戦いたくない……」」

エ

「あれはどう考えても非常識過ぎましたからねー」

な

「でも、合体とか、ちょっと格好良かったかも……」

一同

『『……ないない』』

な

「え？　そ、そうかな……？　格好良くない？」

一同

『『……ないない』』

な

「そ、そうかなー」

しー

「さて、なのは先生がちょうど良くオチを付けてくれましたし、今回はここまで♪　ついに二週年到達、ありがとうございます♪　三週年目があるかどうかは分かりませんが、また来年こうやって会いましょう♪」

ア

「……まあ、本編のあの進み具合じゃ三週年は間違いなさそうだけ

どね……」

す

「進行遅いから……」

一同

『『はあ……』』

しー

「ちなみに、次回の模擬戦では引き続き、近藤さんとエレノアさんに解説をお願いしたいと思います。よろしくお願いしますね♪」

近

「……まあ、いいか」

エ

「ご主人様がいいなら♪」

しー

「さて、次回模擬戦！ カナンは生き残れるのか！ そして、罰ゲームは一体何なのか！」

カ

「え？ ちょ、ちょ待……！ 罰ゲームあんの！？ タカトさんと模擬戦ってだけで十分に罰ゲームなのに！？」

一同

『『当たり前♪』』

カ

「うそん……」

しー

「ではでは、皆さん♪」

一同

『『また次回……♪』』

……アリサ道場4！ 卷……♪

番外話「アリサ道場EX4!」 (後編) (後書き)

す、すみません (汗)

いやあ、ドッジボールで燃え尽きました (汗)

模擬戦はすぐにお届けしますので、よろしく願いします♪

では、今年も何卒お付き合いよろしく願いします♪

ではでは〜♪

番外話「タカトVSカナン大模擬戦(?)! 死んでも恨んじやーよ♪」(前)

よ、漸く書き終えたぜ……!

どもー♪ テスタメントです♪

ついに、タカトVSカナン模擬戦をお送りいたします!(笑)

見よ! 何と文字数一万七千突破! はあはっはっはっは、謝礼
になんねえ!(汗)

まあ、そう言う訳で。ボリュームたっぷりの模擬戦、楽しんで頂
ければ幸いです♪ ではでは、どぞー♪

番外話「タカトVSカナン大模擬戦(?)! 死んでも恨んじやーよ♪」

いんたるーど♪

しー

《はい! 皆さん、数日ぶりでございます! まだしーちゃん化解けねえのかしかもなんでスク水!? 誰だ! リクエストした奴! なシオンことしーちゃんです》

ア

《文句は感想でリクエストしたとある方に言う事ね。アリサです》

す

《最新の感想だね? すずかです♪》

しー

《てか、作者に俺はそろそろキレそうだよ。こんちくしょう……。さ、さてさて。ついにやって参りました。メインイベントなのに今回に持ち越した大模擬戦(?)なんで? がついてるのかって? 模擬戦で終わるかどうか甚だ疑問だからさ! さて、アナウンサーは俺、しーちゃんが。解説はこの方々をお願いします♪》

近

《まだ俺達召喚されっぱなしかい。はじまりの魔法より、近藤大輔です》

チ

《最近、チートからエレノアになったけど、皆は呼んだらダメだか

ら。チートです》

しー

《え？　だ、ダメなんですか？》

チ

《ダメ。ご主人様以外認めません》

しー

《いや、まー、いいですけど……。更に、解説陣にはアリサ道場に引き続き召喚中の現在三人娘。なのは先生、フェイト先生、はやて先生をお呼びしております》

な

《なのはでーす♪》

フ

《フェイトです♪》

は

《はやてやで〜♪》

しー

《そして特別解説陣には、このお方達、裕希奈嬢と、ヴィヴィオ！
総計、九人の解説で行きます！　……て、多いわ！？　何この人数！？》

裕

《うっさい！》

一撃！一

しー

《ぐっふう……！》

裕

《ったく……！ これ見よがしに目の前でたふたふ揺らして……！
嫌がらせのつもり！？ 裕希奈です♪》

しー

《何の話しだ！？ そして唐突な自己紹介だな！？》

ヴ

《あ、あはは……。裕希ちゃんだから……。あ、高町ヴィヴィオで
す♪ そう言えばしーちゃん。レンさんや、未来君はどうしたの？》

しー

《……ああ、あの二人ならお節食べそびれたじゃん？ で、とある
方からお節の代わりに送られて来たものを食べている真っ最中だよ。
……ちなみに、後でレン先輩はトウヤ兄いに復讐する為に旅に出る
らしい。……未来を強制連行して》

ア

《……未来、最近ひどい目にあってばっかね》

す

《最初からじゃないかな？》

しー

《まー、今回欠席な二人は置いとくとして。さて、やって来ました

模擬戦！ 皆さんの意見はどうでしょうか？》

一同

『『カナン、頑張って生きて帰って来てね♪』』

しー

《……一言で済みましたねえ……。さ、さてさてでは模擬戦会場ではどうなっているのか！ 現場のリターナさーん？》

ア

《……いないと思ったらそんな所に居たのね……。》

裕

《神出鬼没ねー》

しー

《はいはい、シャラップ。モニターに向こうの様子が繋がって――》

――爆！――

一同

『『………はい？』』

リ

《あ、あ！？ し、しーちゃん、よかったよー。繋がったよー》

しー

《……えー。リターナさん？ いきなり会場が爆発しているように見えたんですが、これは？》

リ

《そ、それがタカト君がいきなり……!》

一同

『『……はあ?』』



悠久なる青空を、炎の紅が席卷する。

それはまごう事なき、魔法による炎。伊織タカトが一撃、天破紅蓮による炎に違いなかった。

空に突き建つ炎柱に、爆煙が辺りに広がる。と、突っ切るようにして一つの小さな影が踊り出た。

風間カナン。メイデン、レナスのマスターであり、ロストロギア剣。エクスカリバーのマスターである。

彼は顔を苦しそうに歪め、空中に留まった。

幾度かの咳をし、キツと前を見据える。——つまりは、突き建つ炎柱。その中心点を。

【マスター、無事か!?】

「心配いらねえよ……。けど、どう言うつもりだ、あの人は——。
!?!」

メイデンにそう答えると、カナンは周囲の空気がやけに乾いてい

る事に気付いた。

目の前に建つ、炎柱——つまりは、天破紅蓮による一撃で周りの空気が熱っせられたかと思ったが、これは違う。

まるで、空気から水分が丸ごと失われているかのような——。

これ、は！

「……天破水迅」

一寸！—

カナンが目を見開くと同時に走るは、幾千、幾万もの水系！
暴虐なる広範囲精密攻撃、天破水迅であった。

自分へと殺到する水系にカナンは舌打ちを一つ放ち——唐突に、
その姿が消える。

カナンの希少技能、空間突破による転移である。

数m程、後ろに再び現れたカナンであるが水系は執拗に彼へと追
い縋る。

だが、空間突破を使えるカナンはそのこと如くを避した。

鞘に納められたままのエクスカリバーの柄を握りしめる。

「壱式拔刀剣術——」

呟き、その視線の先にあるものはあくまでも炎柱の中心点のみ。
襲い来る水系には一切目もくれない。……もともとカナンは直視
する必要も無いのだ。

彼の空間認識は、空間把握と違い、周囲三百六十度を直接見
るようなものなだから。

特に天破水迅は、狙いが正確――。ここまで来ると精密の方が正しいだろうが、なんにしる狙いがはっきりとし過ぎているせいで軌道が読み易い。

故に、カナンに取って天破水迅ほど与しやすい技も無かった。

「暗夜一閃！」

一裂一

無音の――しかし、空気を突き抜けたかのような音が確かに鳴り響く。

それは空気を突破した音に非ず、空間を突破した音であった。

空間を突き抜けて、カナンは一気に炎柱の中に突入！ 炎に視界が埋め尽くされる中でエクスカリバーを振るう！

一戟！一

抜刀の音と――激突の音は、遅れて響いた。

同時、炎が漸く吹き散らされる。

炎が消えた空間には、エクスカリバーを振り放ったカナンと、それを無手で無造作に掴む伊織タカトが居た。

二人は正面から互いを見遣る――。カナンのこめかみを冷たい汗が伝った。

タカトの、自分を見る凄まじくも冷たい視線に。

いつも冗談混じりにぶん殴っている目とは、まるで違う。

それはまるで、こちらを殺そうとしているかのような目であった。

「……どう言うつもりだ……！」

「何の事だ？」

渾身の力を込めているのに、小揺るぎもしないエクスカリバーを
掴むタカトの手にカナンは悔し気に声を飛ばす。

声も、全く普段と変わり無かった。……ただ、視線だけが、冷た
い。

そんなタカトに、カナンは吠える。

「とぼけんなよ！ こっちに転移したと同時に仕掛けて来ただろう
が！ 不意打ちの上に、手加減無しで紅蓮なんて打ち込んで来やが
って……。殺すつもりか！？」

「その通りだが？」

——さりと、タカトが答えた台詞を一瞬カナンは理解出来なか
った。

まるで世間話しをするような気軽さで、タカトが放った台詞を。
そんなカナンに、タカトはこれもまた無造作に手を挙げる――。

【主！】

「っのお！」

もう一人の融合騎――レナスの声に、我に返ると再度の空間突破。
タカトが放った拳を回避する。

そして、打撃を放った直後で隙だらけとなった、タカトの後ろを
取ろうとして――。

「――貴様、何か勘違いしてないか？」

その声を、カナンは”後ろから”聞いた。

一撃一

響くは、風巻く拳打の一撃。

天破疾風である。その一撃は、空間突破で現れたカナンの背中に打ち込まれた。

そして、続く螺旋を描く風がカナンを襲う！

一轟！一

「がっあああああああああああ！？」

【【マスター！／主！】】

背中に形容しがたい激痛が走り、同時に地面へとカナンは激突する。

——その地面は、岩場であつた。よく見れば、ここら辺は岩山なのか、辺りは全て岩ばかりである。

なんにしろ、その岩場をも碎きながら地面へと叩き付けられたカナンは呻き——直後、それ所では無い事態に仰天しながら慌てて身体を転がした——カナンの頭が在った地点を、現れたタカトの足が踏み抜く！

「天破紅蓮」

「っ！？」

一煌一

閃光が悲鳴も何もかもを飲み込む。そして。

—爆！—

爆音がカナンに、周囲の岩場にも容赦無く叩き付けられる！

カナンは、まるで人形のように吹き飛び。地面をごろごろと転がった。

「がっ……く……！」

呻き声を上げながら、何とか立ち上がろうとする。

メイデンとレナスの呼び掛ける声が無ければ、意識を手放してしまっただった。

そんなカナンに、タカトの声が届く。

「俺は、今まさにお前を殺すつもりでいるぞ」

「な……ん、だと……！」

さも当然とばかりに言うタカトに、カナンは愕然とする。しかし、次の瞬間には再びタカトを睨み据えた。

「殺す、つもり……！？ 模擬戦だぞ、これは——！」

「……ふむ、見解の相違だな。お前の考えが優しいのだから、甘いのだかは知らんが——」

ふむふむと、タカトは頷く。

そんな彼の態度が、カナンの気に触った。吠えるように叫ぶ！

「何を人事みたいに——！ 本当に死んだらどうするつもりだ！？」

「別にどうもせんが？」

「【……はあ？】」

あっさりと出たタカトの答え。それに、カナンと融合騎達は揃って間の抜けた声を上げた。

こちらを呆然とした顔で見るカナンに、タカトはしばらく青空に目をやり——再び、うむと頷くとカナンに目を向けた。

「……うむ。どうしようも無いな。俺の知る限りではあるが、死んだ人間が生き返ったなんぞと言うのは、とんと聞いた事が無い。だから、どうしようもない」

「……え、えーと……………」

やけに胸を張って答える——こう言う時、やけに彼は子供っぽく見えるのだが。

それは、ともかく。あまりに堂々と言われてカナンはしばし言葉を失う。

とても長い沈黙の後。暫く何か思い悩み。やがて漸く絞り出したような口調で問うだけは問うてみた。

「……墓、とかは作ってくれないんですか……？」

「む！　しまった——忘れていたな。安心しろ、カナン。貴様を埋めた後で、しっかり犬の骨を突き立てて墓を作ってやる」

「それ絶対墓じゃねえよな!？」

「何を言う——俺の溢れんばかりの愛が込められているだろう？　ああ、ちなみに犬の骨にはこう書いてやる。『愛弟子に手を出した馬の骨、ここに眠る』」

「文章長えな!？ てか、馬の骨て!？ そんでもってあんたの溢れんばかりの愛ってのは俺じゃなくてヴィヴィオに対してのだ!」

ひとしきりツツコミを放ち——それでも、タカトはあいも変わらずぬ冷たい視線で自分を見る。

そんな視線に、カナンはぐっと息を飲んだ。

「……これは、模擬戦なんですよ。冗談抜きで、俺を殺すつもり——」

「そう言った。……何度も言わせるな。俺にとって模擬戦とはそう言うものだ。……なあ、カナン。お前、理解しているか？ これは、模擬戦。つまりは、”戦闘訓練”なんだぞ?」

「……そんな事は分かってますよ」

「そんな台詞が出ると言う事は分かって無いんだよ」

ふうとタカトは嘆息する。——言うべき事は分かっている。でも、言葉にするのは難しい。

だから、タカトは一つ一つ言葉を選んで話す事にした。

……これは、一応。教導模擬戦なのだからな。

決して、自分の考えが”教え導く”なんぞと言う上品なものでは無いと自覚しながら——苦笑しながら、タカトは話しはじめた。

「例えば——。そう、例えばだ。お前が、誰かに対して魔法で攻撃したでしょう。当然、向こうも黙ってはいない。やり返して来るだ

ろうな。――魔法か、魔法以外の力で。魔法と言うのは強力な力だ。生身の人間が持つ力としては、最強の分類に入るだろう。……当然、向こうの攻撃は苛烈になる」

「……………」

こちらの言わんとしている事を理解し始めたのか――この少年は、頭の回転は早いほうだ。……ただ、たまにそれが悪い方に傾く時があるが。

ともかく、タカトは話を続ける。

「そうすれば、総力戦だ。例えお前が殺しをやらんとしても――向こうは、そうでは無い。むしろ全力で殺しに掛かるだろうな？　そうだろう？」 実戦”と言うものは、そう言うものだ。殺るか、殺られるかの世界なんだからな。そして――」

ぽんと、タカトは手の平と手の平を打ち合わせて開いて見せる。いないいないばあ、をするように――これには、もう一つ意味がある。パア。つまりは、何もかも終わり。

「一度死ねば終わりだ。やり直しは、無い。何をしようと、どうしようとか。――なら、」 訓練で死ぬ事と実戦で死ぬ事にどれ程の違いがある”？」

「そん、な――そんなの！」

慌てて抗弁しようとカナンは身を起こし、しかしそれをタカトは一睨みで抑えた。

紛れも無い殺気が滲んだ視線に、カナンは黙り込む事を余儀なくされる。

「違いがあるように思えるか？　そうだろうな。シオンもそう思っ

ていた時期があった。お前より少し歳が下の頃に。――実際に、戦闘訓練で顎を砕かれて半殺しにされるまではな。……何の事は無い。やったのは俺だが。死後の世界なんぞと言うものがあると思うなよ？ あっても良さそうなものだが、”無いものは、無いんだ”。もう一度言うぞ？”死んだらそこで終わり”なんだ。なら、世界を救って英雄のように死ぬのも、階段から転げ落ちて死ぬのも、”当人にとって”どれ程の違いがあると言うんだ。……どの道、”この程度の戦闘訓練で死ぬ奴が実戦なんぞをやらかしたら、死ぬんだ”。

”いつかは、確実に”」

まくし立てるような――しかし、噛んで含めるような言葉の嵐に、カナンは呆然とする。

そんなカナンにタカトは歩み寄り、いきなり胸ぐらを掴み身体を引き起こした。

覗き込むように、真っ正面から睨みつける。

「その程度の気構えも出来て無い奴が、実戦なんぞに出るな。――いいか？ 特に分かってないようだろうから、これだけははっきりと言っておく」

顔が近づく――同時に、掴まれた襟首に恐ろしいまでの膂力が込められ、カナンは息苦しさを覚えた。――が、当然タカトは構わない。

更に語調を強めて、一言一言を刻みつけるようにして告げる。

「愚行と言うのはな、種類こそ様々だが――ようするに、”取り返しのつかない事をする”と言う事だ。帰り道も分からんくせに進む奴を馬鹿と呼ぶんだ。空も飛べんくせに崖から飛び降りるか？ ”生き返らせる事も出来んくせに人を殺すか！？” ”今のお前は、それをやりかねんだ！” いいか？ この”恐さ”が分からんと

言うのなら、今からでも遅くない。剣を捨てろ」

そこで――そこで、漸くタカトは突き放すように、カナンから手を離れた。

げほげほと咳込むカナンに構わず、タカトは指を突き付ける。

「最後に一つ。」甘く見るな！」以上だ。分かるまで、そうしていろ」

そうして、タカトはカナンを置いて背中を向けとつと歩き出した。

もう、何も言う事は無いとばかりに――。



いんたるーど♪

しー

《……えーと、あまりの事態に会場は静まりかえっておりますが――。てか、俺の話しすんなよタカ兄い……》

近

《……成る程。高町一尉と似ているようで、しかし正反対の考え方か。しかし、君もよくよく酷い目に合ってるね？》

しー

《いや、まあ。俺はまだマシな方です。トウヤ兄いが、あれを言われた時。上半身と下半身が真っ二つだったそうですし》

チ

《うーん、バイオレンス♪》

裕

《て、感心してる場合か——！　　ったく！　　タカトの奴——！》

しー

《おりよ？　　珍しくタカ兄いに怒ってんな？》

裕

《当たたり前でしょ！　　何あの言い方！　　一方的過ぎじゃない！》

ヴ

《タカト……。どうして……》

近

《……でも、考え方としては間違ってる。俺は気に入らないけどね》

裕

《はあ？　　ちょっと、近藤さん正気？》

近

《俺は正気だよ。高町一尉はどう思います？》

な

《……やり過ぎな気もするし。考え方はあまり好きじゃないけど。でも、頷く所も、あるよ》

裕

《えー!?!?》

ヴ

《なのはママ……》

しー

《なのは先生の考え方は、基本的には訓練でも実戦でも『無茶しない』ですからねー。タカ兄いの場合は『無茶をしろ』です。死んだらそこまで、死にたくなければ死なぬようにしろーですから。二人の共通点と言えば、気構えも無いまま模擬戦か実戦をやらかして死なれるより、今の内にきっちり叩きのめして理解させるって所くらいですか?》

な

《うん。……でも、タカト君のあんな考え方でずっと訓練して来たから、しーちゃんはあるなに無茶するようになったんだね……?》

しー

《……あの考え方は、タカ兄だけのじゃないですよ。グノーシス全般ではあんな感じです。ちなみに、十年くらい前までのグノーシスに於ける戦闘訓練の死亡確率は三割を超えていますから》

ア

《三……!?!? それ、百人居たら三十人は死んでる計算よ!?!? あんた、今とんでも無い事さらっと言ったわね……》

しー

《変人ばっかの組織ですけど、人道的な組織なら最初から裏稼業なんてやってないですからねー。まあ、最近はトウヤ兄いのテコ入れで非殺傷設定が取り入れられていますから、死人は少なくなってます

けど》

す

《……それでも死んじゃう人は、いるんだね?》

しー

《タカ兄いの台詞じゃないですけど、” 戦闘訓練”。戦闘のための、訓練ですから。……管理局でも、訓練で死人が出る時くらいはあるでしょ?》

近

《……否定はしないよ》

しー

《なら同じです。いつ死のうが、どこで死のうが同じ事でしょ》

チ

《しーちゃん、虚無主義?》

しー

《違いますよ。ようは、それが怖いと言う事を知らなければいけないって事でしよう。タカ兄いの考え方は。……いつ死のうが、どこで死のうが同じなら——” いつだって死には抗ってなきゃならない” って事じゃないですか? それが模擬戦でも、実戦でも。……俺は、それが分かるまで、もうちょっと遠回りしましたけど》

近

《……成る程ね》

ヴ

《でも、あんな言い方。カナン君が……》

裕

《……》

しー

《いや、まー。そっちは大丈夫だろ》

フ

《え？》

は

《……やけに自信たっぷりやな。その根拠はどこなん？ しーちゃん》

しー

《いや、ただ単純な話し。”あのカナンが”言われっぱなしで黙っている訳が無いって事ですよ。そりゃそうでしょ？ あんだけ言われたんなら、”一言だろうと言い返してやる”のが男ってもんでしょ》



「待てよ」

足が止まる——告げられた言葉に。タカトは、歩み去る足を止めた。しかし、振り向かない。

そんなタカトに、カナンはゆらりと立ち上がった。

「好き放題言うだけ言って、どこ行くつもりですか……？」

「帰るつもりだ——」だった”が正しいか。それで？ 分かるまで、そこらでうなだれていると言った筈だが？ 分かったのか、お前？」

「そんな命令に、俺が従わなきゃならない道理はありません」

きっぱりと、カナンは力強く答える。タカトは僅かばかりに苦笑して振り返った。

——怒っていた。カナンの目は明らかに怒りに染まっている。

「……俺は、馬鹿だから。タカトさんの言い分はちよつとしか分かりません。……納得も、してません」

「ほう？ なら逆に何を分かったんだ？」

「死ぬ事は、怖いって事だけです。……怖いって認めなきゃならない事、それに立ち向かわなきゃならないって事だけです」

カナンは静かに告げて行く——その静けさが、逆に彼の怒りを伝えていた。

……それはそうだろう。タカトの言い分は、自分の考えを押し付けただけに過ぎない。

「後は、分かりません。けど、これだけは言える……！ あんたの考えはともかく、あんたの行動は理不尽だって事だ！」

一撃！ 一

叫び、空間突破でタカトの正面に現れたカナンは右の拳を叩き付ける！

が、その一撃はタカトの左手に包まれて止められた。構わなかった、続ける。

「不意打ちした上に一方的に物を言うだけ言ってブン殴って行きやがって……！ 殴り返せろ！」

「ふん、お断りだ。——だが、少しはマシな目をするようにはなつたか。いいだろう、続けてやる」

「続けてやる？ 上から目線だな——気に入らねえ！」

一破！一

続けてもう一発。しかし、これもあっさりとタカトに防がれ、逆に顔面に拳を叩き込まれた。

だが、それも呻きを一つ上げるだけでカナンは耐える。

エクスカリバーに、再び指を掛けた。

「あんたに絶対、一発叩き込んでやる——！」

「……一発？ すでに勝負を諦めている人間の台詞だぞ、それは。どうせなら、ぶっ倒してやるくらいは言うんだな。そうそう、この模擬戦の勝利条件をお前には伝えていなかったな——」

そう言いながら、タカトは僅かに腰を落とした。

構えない——だが、それがタカトの戦闘体勢だと、カナンは理解していた。

タカトが、笑う——。

「俺を超えろ。一瞬でも、刹那でも良い。それがこの模擬戦に於ける勝利条件だ」

「あんたを、超える……？」

「それが出来なければ、お前は負けるんだ。……では——」

——最後の台詞は聞こえなかった。だが、カナンは構わず振り向

き様に抜刀！ エクスカリバーを振り放つ！

そこにタカトは居た。エクスカリバーを右手で受け止め、笑う。
始めよう。

二人の模擬戦が、本当の始まりを迎える――！



―裂！―

―破！―

周りの景色が、歪む――。

それは光の屈折現象による歪みに非ず。空間が捻れ、曲がり、突
破される事による――空間の歪みによって生まれた景色であった。
タカトとカナン、二人の空間跳躍戦闘によって引き起きた現象――
。

それは、かくも非現実的な美しさを醸し出していた。その中で。

―撃！―

「くあっ！」

「……」

カナンが拳の一打を受けて吹き飛ぶ。無論、防御はしているもの
の元々防御が高いとは言えないカナンに取ってタカトの打撃は――。

……”通常打撃”はあまりに重過ぎた。

これで魔法の恩恵を一切受けていないと言うのだから、たまったものではない。

だが――。

速さなら、こっちが！

「抜刀連術――！ 壱ノ型！」

「ほう？」

膨れ上がるカナンの魔力。そして、こちらを睨み据える目の力にタカトは、ふふんと笑った。

これから、彼が切り札の一枚を切ると理解したから。

出し惜しみ無し。そうで無くては、な。

そんなタカトの笑いに、カナンは構わ無い。その身体が、空間突破により消える――！

「虚夜、七連閃！」

一斬！――

叫び共に放たれるは、暗夜一閃の速度と虚空閃の空間斬撃、その二つの融合技。

その融合技による、七つの斬撃がほぼ同時にタカトを襲う！

だが、それを前にしてタカトはただ一歩のみを踏み込んだ。

「天破、無双闘舞。”応用編”」
「な……!？」

タカトの、そんな言葉にカナンが驚愕の声を上げ――。その直後、カナンの両腕から爆発的な光が発つせられた。

その光は、爆発となってカナンの両腕から弾ける！

一爆！――

「ぎっ……! あああああああああ……!？」

【【マスター！／主！】】

悲鳴を上げるカナンに、メイデンとレナスは呼び掛け。内からすかさず治癒魔法を掛ける。

痛みが和らぎ、傷は治っていく――が、ダメージが抜けた訳でも無い。

痛みと寒気を覚えながら、カナンは今、何が起こったのか。何をタカトにされたのかを呆然と悟った。

虚夜七連閃を、天破無双闘舞で”迎撃”しやがった……！

放たれた七つの斬撃、その全てにタカトは天破疾風、天破紅蓮、天破震雷、天破水迅の四つの属性攻撃を同時に叩き込んだのである。確かに速さそのものはカナンの方が上だ、が。威力はタカトの技の方が上なのである。

だが、何故。速さで上回るこちらの攻撃をタカトは迎撃出来たのか――。

【違います……！ 主！ 彼は、”主が斬撃を放つ前に迎撃行動を行っていた”んです！】
「な、に……？」

レナスから告げられた答えに、カナンは呆然となった。

なんだ、それはと。

いや、理屈は分かる。ようはフライングだ。例えば、カナンが走り出す前より、タカトは走り出していたようなものである。

当然、速度で劣っていようと出だしが速ければその差は無くなる。

――が、これは徒競走では無い。

戦闘、なのだ。タカトが行ったのは未来予知にも等しい程の真似であつた。

「何、こちらら心眼持ちだ。貴様の斬撃軌道くらい見切れんで何とする？」

「っ……！！」

まるでこちらの心を読んだがごとく話す正面のタカトに、カナンは顔を歪める。

タカトは余裕のつもりか、腕組みなんぞをして治療を続けるカナンを見ていた。

「貴様の最も苦手なタイプを教えてやろうか？ 火力が高い人間でも、速さが極限まで入った人間でも無い。ましてや、希少技能に胡座をかく人間ですらも無い。単純な技量、そして経験で上回る人間だよ。お前が最も苦手とするのは」

「分かったように、言うじゃないですか……！」

「分かるさ。実際、お前は俺に苦戦している。裕希奈殿程、防御力がある訳でも無い。ヴィヴィオ程、火力がある訳でも無い。ハルのような右腕を持つ訳でも無い。なのに、今一方的な展開になっている。さて、何故だ？」

そんなの、分かってるさ……！

タカトの問いに、内心だけで答えてカナンは悔し気に唸る。
分かっていた——分かっては、いたのだ。

自分が最も苦手とするタイプの事は。

自分の経験は、非常に浅い。魔法を覚えて数ヶ月、一月程のブランクがあったとは言え修練を欠かした事は無い。

メイデンや、レナスにも才能はあると言われた。

だが、決定的に技量と経験が浅過ぎる。

それは無理も無い事であった。

むしろ数ヶ月でここまで実力を上げられたのだから、カナンの経験と言うのは馬鹿に出来ない。

数多の激戦——それがあったから、今のカナンがある。

死に掛けた事だってあった。

だが、それでも足りない。

ヴィヴィオを持ってして、”致命的”と言わしめた技量と、そして実戦経験の塊のような、この男には。

「さて、切り札の一枚は見せて貰った。後、貴様の切り札は何枚あるかは知らんが——早めに見せる事を勧めよう。何も出来ないままに終わりたいは無いだろう？」

「くっそ……！」

言うなり、無造作にこちらに歩み寄って来る。何の警戒も無しにだ。

そうやって歩いて来るタカトに、カナンは呻き声を一つだけ上げて立ち上がった。

正直、後タカトに通用しそうな技は少ししか無い。

真っ当な抜刀剣術では、確実に通用しないだろう。

先と同じく迎撃されて、最悪KO——それだけで済むかは甚だ疑問だが。

とにかく、敗北は確定する事になる。

ならば——。

「終式、剣舞……！」

「ふむ」

カナンの呟きを聞いて、タカトは足を止める。

何故か、タカトはこちらの攻撃をわざと放たせて迎撃するスタイルを取っていた。

先手なぞ、いくらでも取れる筈なのに——。

余裕か、はたまた慢心か……。構わなかった。むしろ、今は好都合！

行け……！

一裂！一

心の中だけで、囁きながらエクスカリバーを地面へと突き立てる！
すると下の岩場から、まるで剣山の如く岩針が伸びた。

それは違う事無く、タカトを下から突き上げる！……が。タカトは岩針の先端に、事もあるうか乗って何事も無いかのように平然とこちらを見ていた。

体勢を、少しも崩していない。

だが、カナンはそれに構わず。エクスカリバーを地面から引き抜いた。同時、空から雷が剣身に落ちる！

蒼い雷光をエクスカリバーは存分に浴びて帯電。カナンは、迷い無くそれを地面へと振り下ろした。

「蒼覇——！ 天、蓮、華っ！」

一轟！一

一雷！一

叫びと同時に地面に叩き込まれた、雷纏うエクスカリバー。

そこから、まるで茎のように岩針を蒼雷が駆け登る！

一瞬にして——それこそ雷速でタカトに雷は到達し、その威力全てを頂上で顕現させた。

蒼い雷の華が咲く——！

一爆！一

雷は、莫大な爆発を生み出した。

タカトは、それに飲み込まれ——だが、カナンは止まらない。

直ぐさま、エクスカリバーを納刀し空間突破でタカトの元へと跳躍する！

無傷とは思わない。だけど、これで倒せたと思える訳も無かった。

故に、もう一撃！

「金剛——！」

叫び、崩れゆく岩針の頂上に到達したカナンは爆煙の中に人影を認める。

誰かを問うまでも無い。

だから、カナンは迷い無く鞘からエクスカリバーを解き放った。

それは、カナンが単体で放てる最強の一撃——！

「閃、牙ア——！」

一閃！一

渾身の力を込めた、斬撃が放たれたる！ 視認速度を遥かに超え

た一撃はタカトへとひた走り。

「たわけ」

一軌一

そんな声が、カナンの耳朶を打った――。

……爆煙が、晴れる。

そして二人の姿が現れた。

「かつ……は……！」

苦しげな、声が漏れる。

それは、カナンの口から漏れたものであった。

”鳩尾に打ち込まれた、タカトの膝によって”。

「筋はいい。だが、貴様は作戦を根本から間違えた」

”暴風巻く、金剛体により硬質化した両手”でエクスカリバを――挟み込み、止めながらタカトは言う。

それだけでは無い。見れば、空中に展開した足場に立つ左足は炎で真っ赤に染まっていた。

それは、それぞれ天破疾風、金剛体、天破紅蓮の三属性変化技を同時起動した証。

つまり、蒼覇天蓮華を天破紅蓮で迎撃し、金剛閃牙を天破疾風と金剛体の合わせ技で受け止めたという事であった。

そして――。

”雷光がタカトの右膝から走り、カナンの鳩尾を貫く！”

――雷！――

「っ——！　　がああああああああああああああああああああああああああああああああ——っ！」

自分の口から信じられ無い程の声が出る。

身体中を雷が走り回り、侵し尽くして行く。

メイデンとレナスが何か叫んだようだが、それも聞こえない。

ただ、ただただ。熱い。

やがて、永劫に等しい一瞬が終わり。タカトは焦げ臭い黒煙を吐き出したカナンを蹴り剥がして、地面に捨てた。

力無く、カナンは地面に転がる。

胸がゆっくりと上下した。

まだ死んではいない。生きている。だが、模擬戦を実戦と同じと捉えるタカトは容赦しない。

鳩尾に、再び踵が打ち込まれた。

「俺の八極八卦太極図は大威力術式の同時起動を可能とする。俺に手数で挑めば、敗北するのは必定だろう？　……兄者でさえ、俺に手数では勝負はせんのだ」

【マスター！　マスター！　く……！　タカトさん！　これ以上は……！】

【そうです！　これ以上は主が死んでしまいます！】

「だからどうした？　それを決めるのはお前達では無い」

取り付く島も無い。まさか、本当に殺すつもりなのか。

カナンを見下ろす、タカトの瞳には感情は無い。
ただ、底知れない冷たさだけがある。

そこからは、何の感情も読み取れ無かった。

「立て、カナン」

「……………」

「どうした、立てんのか？」

自分でここまでやっておいて——しかも、踏み付けて言う台詞では無い。

だが、タカトは構わずカナンへと言葉を紡ぐ。

「ここで、お前が立て無いのならば——この戦いに、何の意味がある？」

「……………」

それでも答えられない。身体は言う事を聞いてくれない。

「俺を超えられ無いのならば——お前に教える意味は、どこにあると言うのだ」

「……………」

答えられない。でも——。

「カナン、俺を超えろ。そうしてはじめて。この戦いに意味は生まれる——」

自分を踏み付ける足に手を掛けた。
タカトを睨み付け——少しも弱まっていない眼光のままに、睨み

付け。足を押し返す！

「っおおおおお……！」

声は自然に出ていた。押し返す手に力が籠る。だから——と、言う訳でもあるまいが、タカトはあっさりとカナンの上から退いた。

すかさずカナンは立ち上がり、エクスカリバーを掴む。

タカトへと突き付けた。

「勝手な事ばかり……！ 言ってるじゃねえ————！」

叫び、むせ返ったように咳込む。

そんなカナンをタカトはただ見つめた。

漸く息が整う——。カナンはすぐにエクスカリバーを構えた。

タカトが、薄く笑う。

「それで？ 次はどうするつもりだ？」

「決まってるだろ……！ あんたをブチのめすっ！」

……手段を問うたんだがな。

カナンの台詞にタカトは苦笑。しかし、苦笑は直ぐさま不敵な笑いに、それは変わる。

「いいだろう。やって見せてみる」

「言われ、なくても！」

叫び、カナンは己の内にある切り札二枚の事を考える。

一つは抜刀剣術零式、龍神演武。こちらはオーバードライブ時のみ使用可能な技だ。

六属性の斬撃を叩き込み、黒龍を生み出す技――双牙に繋げて、連撃も可能な技だ。

あのハルに一撃を叩き込んだ技でもある。……だが。

この技は通じ無い……！

半ば本能的に、カナンはそう悟った。

先程見せたように、こと手数での勝負では話しにならない。
今度は、天破無双闘舞の”完全版”が来る。

恐らくは――ではあるが、空間突破で持って放つ龍神演武・双牙でも確実にカウンターを決まられるとカナンは見ていた。

連撃では、勝負にならない。なら――。

「【セカンドリミット、ブレイク！】」
「……む」

一轟一

三人の声が重なり、エクスカリバーを納めた鞘が金色の光を放った。

それを見て、この戦いの中で初めてタカトが表情を変える。

今、カナンが使おとしている一撃に、心当たりがあったから。

「成る程、面白い。神降ろしをやろうてか」

「……あんたに通じそうな技は——これ以外、無い！」

連撃は通じ無い——なら、一撃に全てを込める以外に手は無い。
火力の勝負、タカトは先程語った筈だ。ヴィヴィオ程火力がある
訳では無いと。

タカトを相手取る為には、連撃では無く一撃に全てを賭ける戦術
が正しかった訳だ。これは、むしろ裕希奈の戦闘形態スタイルと言えた。

防御も迎撃も、全てブチ貫くと言うスタンスこそがタカトの最も
苦手な相手——！

カナンは口端を歪めて笑うと、柄に手を掛けた。
銀の雷光が、そこから溢れ出す——！

「【今ここに、封じられし祖の力、示せ！】」

朗々たる永唱。タカトは邪魔をしに来ない。
相も変わらず、こちらに技を放たせる気にいるらしい。
大した自信である。だからこそ！

その自信、ここで砕く！

「【雷神よ、汝が力を我らが手に、時をも砕く一撃を——！】」

神が、降りる——。北欧の雷神、トールが。

『硬き雷』と名を持つカラドボルグを媒介に、雷の神を招来した
のだ。

それは——あるいは、精霊融合に似ているかも知れない。

あれもまた、概念存在を自らと融合させる術であったから。

時が、止まったように場が静止した。

二人は真っ正面から互いを見遣る。

どちらも無く理解した。

これが、最後の激突になると。

故に、互いに硬直したのである。

そして――！

「来い」

「っおおおおお――！！！」

タカトの声に応じるように、カナンが叫び。タカトの元へと跳躍^と
ぶ――！

同時、時すらも砕く雷を抜刀したエクスカリバーと共に放たんと
し――。

対し、タカトは右手に溢れんばかりの闇を生み出した。

一神の子は、主の右の座に着かれ――

世界に響くは起源呪文^{オリジナル・スベル}。

タカトだけの、言葉――！

それを持って、放たれる技！

「絶――！！」

「っ――！！ 天、神！」

極限の闇——しかし、カナンは構わず時碎く雷をタカトへとエクスカリバーと共に放った。

時碎く雷が、極限の闇とぶつかる——！

「聖雷！ 降封刃————っ！」

「天っ！ 衝オオオオオオオっ！」

音が、消えた。

続け様に、光も消える。

静かな、静かな静寂が世界を満たし。そして——！

一撃！—

一裂！—

一碎！—

次の瞬間、音も光も世界に一気に膨れ出した。

空間が歪み、破壊され、軋み尽くす！

世界が歪み、歓喜し、悲鳴を上げた——！

二人の一撃に、作られた世界が破滅へと追いやられ声なき声を上げていのである。

その軋みの中心では、まだ二人が互いに必滅の一撃をぶつけ合っていた。

溢れる雷と闇が二人の姿を掻き消す中で、彼等はエクスカリバーと掌を突き付け合う。……だが、その均衡は、徐々に崩れて来た。

雷が闇を押し退け始めたのである。

時すらも砕く雷の前に極限の闇が砕かれはじめたのだ。

勝てる！

カナンはエクスカリバーが、時砕く雷がタカトの切り札たる極限の闇を撃ち貫かんとしている状況にそう確信を得た。

この一撃が通れば、勝てる――！　そう！

「あんたを、超える――！　勝つんだ！　あいつ達みたいに、俺もあんたに勝って見せるっ！」
「ぬ、う……！」

――轟！――

叫ぶと同時に、雷が更に勢いを増した。

一気に闇を吹き散らしていく！

もはや、闇は風前の灯とばかりにタカトの右手で淡く輝くだけ――その闇も、消えんとして。

――太極は、万象を生ず――

そんな、そんな言葉をカナンは聞いた。

「いい機会だ。とく見ておけ。――これが」

集う――。集う、集う、集う集う！

輝く――。輝く、輝く闇が集う！

集う――。集う、集う、集う集う！

暗い――。暗い、暗い光が集う！

タカトの右手、その拘束具に――！

―真名、解放―

「EX――。カミ殺しだ！」

―我が、真名は―

――拘束具が、外れ。世界に堕ちた――

直後、時碎く雷が闇を完全に蹴散らし。世界を雷が席卷した――。



―轟―

時碎く雷は、そこらを爆碎し。辺りを爆煙が舞う――。

【やったか！】

メイデンが叫ぶ、だがカナンは心の内でそれを即座に否定した。

違う……！ 倒していない！ 手応えが、無かった。それに、あの人は――！

一 軋

世界が、軋んだ音を立てた。

空気が、いや、空間が――否！ 次元が、世界が震える――！

痛い、と。世界のどこかで泣き声がした。

それは、自らを殺す――”存在しているだけで殺し続ける化け物が生まれた証。”

軋、軋、と。軋、軋、軋、軋、軋、軋、軋と――！

世界が、殺されて行く――！

煙りが、晴れた。そこには――。

カミ殺しが、居た。

頭を覆っていたフードは弾け、右目が顕になっている。

そこに点るは、紅。

髪もまるで雪のような、白へと変貌し、足元にまで伸びていた。

何より肌が全て漆黒に染まり、その至る所にまるで魔法陣の如く紋様が走っている。

間違いない、彼は――。

「EX・666・猛速凄乃王命・伏羲」

そう、自ら名をタカトは告げた——瞬間。

カナンの全身から滝のように汗が吹き出した。

「っ!？　っ!？　っ!？」

いきなり吹き出した汗に、カナンは驚愕する。

それだけでは無い。動悸がいきなり激しくなった。

視界が、眩む——しかし、カナンは目をタカトから逸らせなかった。

動悸も止まれと、心臓ごと止まれと無意識に願った。

瞳を逸らすのが、怖くて。心臓の音ですらもが、聞かれるのが怖くて——!

【マスター？　マスター！　一体どうしたんだ!？】

【いけない……。混乱してます！　主、しっかり!】

「……違う、恐怖しているんだ。そいつは」

二人の声を否定したのは、カナンでは無くタカトであった。ただ在るだけで、在りと在らゆるモノを殺し続ける化け物。

その瞳が、声が、自分を捉える。——それだけで、気が狂いそうになった。

あの、グラスでさえこんな事にはならなかったのに——!

「逃げ出したいか？」

告げられる——でも、それが何か分からない。
一つも聞き逃せ無いのに、聞き逃す事を身体が怖がっているのに。
何を告げられているのを理解出来ない。

だが、構わずタカトは続けた。

「恥も外聞も無く、逃げてしまいたいのか？ 泣き出してしまいたいのか？ 粗相をしてしまいたい程に辛いのか？」

分からない。

分からない、分からない、分からない分からない分からない分からない分からない分からない分からない！

分から、な——。

「それが、恐怖だ。カナン」

震えが、止まった。

呆然とした瞳でタカトを見る。

彼は、笑っていた。見た事も無い、優しい顔で。

「死ぬ事をお前は恐れた。恐怖した、絶望した。正しい反応だ。生物として、それこそが正しい。むしろ死ぬ事が怖く無いなぞと言うのは、生物失格だ。——その恐怖を忘れるな。そして——」

そこまで言うと、タカトはこちらに歩いて来た。

呆然とするカナンは、それだけで全身が震えた事を悟る。

タカトは、後三步の所までカナンに近付き止まった。

——それだけで、心が折れそうだった。魂が軋みと言う名の悲鳴を上げた気がした。

潰れて、しまいそうだった。

だけど——。

「そこで終わるか？ カナン」

その言葉に、カナンは顔を歪めた。エクスカリバーを握む手に、力が戻る。

「お前は、恐怖した。恐怖した自分を認めた」

そうだ、俺は、怖かった——。

生まれて初めて味わう恐怖。それを、知って。

でも、でも！

「お、れは——。俺は——！」

ガタガタと震える手、指も、まともに動きやしない。

けど、でも、指の一本一本を叱咤し、力を込め直した。

タカトを見る。変わらず、怖かった。

本当の恐怖と言うのが、どれ程のものをカナンは初めて知った。

どれだけ、辛いのかを。

——シオン、お前。こんな恐怖と。ずっと、ずっと、戦って来たんだな——

ぐっと歯を噛み締めた。

気付けば、涙が目端に滲んでいる。

それを拭う事もせずに、カナンはエクスカリバーを鞘に納め、構える。

タカトを、もう一度。睨み据えた。

立ち、向かう……！

その為に——。

「……それでいい」

そんなカナンを見て、タカトは満足気に笑った。
楽しそうに、嬉しそうに、誇らしそうに。

数多の感情を詰め込んだ、そんな笑い。

「大事なものは、そこだ。恐怖した。認めた。——そして、立ち向かった。恐怖に負ければ、もう先は無い。恐怖し、恐怖した自分を認め、でも恐怖に抗う——。人は、それを勇気と呼ぶんだよ。カナン。そして——」

それこそが、俺がたった一つ。お前に教えられるモノ——。

そう告げて、タカトはフツと笑う。

右手を挙げた――。

「餞別だ。受け取れ、カナン。――そして、次こそは――」

――轟――

――静かに、静かに風が集う。それは、一瞬にして莫大な量の風に変貌し、タカトの右腕に吹き荒れた。

台風なぞと言う生易しいものではない。それは、もはや天体規模の風であった。

カナンは、それに震える自分を振り払い。エクスカリバーを鞘から解き放って突っ込む！

戦うために、目の前のタカト（恐怖）に、抗うために――！

「俺を、超えて見せろ」

――撃！――

――滅――

次の瞬間、”黒の風”巻く一撃――。

名を虚空疾風。

その一撃を叩き込まれ、身体が爆ぜたような感覚を得ながら。カナンは意識を盛大にすっ飛ばされた――。



タ

「と、言う訳でただいまだ」

しー

《お、お帰りー。タカ兄い。っと、カナン！》

裕、ヴ

「「カナン！／カナン君！」」

タ

「……大丈夫だ。気絶しているだけだから……。はじめて、非殺傷設定なんぞを使ったぞ」

しー

《あらま、珍しい。でも、なして非殺傷？》

タ

「なんだ？ 肉塊も残さず殺した方が良かったか？」

しー

《いや！ 非殺傷設定でオッケーです！ てか、そんなヤバイ一撃だったのか……》

タ

「リアルに地○割りが出来る一撃だぞ？ ああ、それと、その二人を頼む」

メ

【……………】

レナ

【……………】

しー

《およ？ どしたの、メイデンもレナスも膨れっ面で……………？》

タ

「いや、俺のカナンへの仕打ちでこうなってな。口も聞いてくれん。……………そんなに酷い事をしただろうか……………？」

女性陣一同

『『当たり前だよ！』』

タ

「ぬ、ぬお……………！？ 勢揃いでツツコミを……………！」

な

「タカト君そこに正座！ 今からお話します！」

タ

「な、なに……………？」

フ

「……………そうだね。タカトとは一辺ちゃんと、話をしなきゃと思っ

ていたんだ……」

タ

「待て、落ち着け！ 俺が一体何をしようんだ！」

一同

『『自覚無しかい！？』』

タ

「ぬ、ぬ……？」

しー

《やれやれ、あの分じゃ暫く掛かりそうですねえ。一応、今回の勝者はどっちになるんでしょ？》

近

《勝利条件が、勝利条件だからね……。一応、タカトでいいんじゃないかな？》

チ

《あの様子じゃ、どっちが勝者か分かりませんけどねー》

は

「大体やな……。あれだけの結界や世界を作るのにどんだけ費用掛かかってるんや？」

タ

「……最後の一撃であの世界ごと破壊してしまったんだが――まさかっただろうか？」

女性陣一同

『『だからそんな一撃を打つな———！』』

タ

「……と、言われても……」

女性陣一同

『『言い訳しない！』』

タ

「むう……」

しー

《ああやって、しょんぼりしているとタカ兄いって犬に見えるんですよねー》

近

《そうだな。へたれた耳と尻尾が見えるようだよ》

チ

《それなんて萌えキャラ？》

しー

《さ、さてさて！ では、模擬戦はこれにて終了です！ ヨシユアさん！ ありがとうございます！ そして、はじまりの魔法より、阪本葵さん、ありがとうございます♪ 解説の近藤さんと、チートさんも！ 良い感じにダレた解説をありがとうございます♪ あちらに戻ってもお元気で♪ また機会があれば、是非に♪》

近

《本編は終わったけど、番外編はまだやるそうだからお楽しみに。
こっちこそ、カオスなギャグや模擬戦楽しかったよ。また会おう、
しーちゃん》

チ

《料理美味しかったから、また来るかも♪ それじゃあ、しーちゃんまたね♪》

しー

《最後くらいはシオンと呼んで欲しかった……！ ち、ちくしょう！
しーちゃんて固定かい！》

一同

『『それが運命だから♪』』

しー

《うっせーっす！ ち、ちくしょう戻ってやる……！ で、ではでは……♪》

一同

『『また次回~~~~~♪』』

一幕一

タ

「……いや、だからな？ あれは、俺の考え方で——」

裕

「言い訳なんて男らしくないわよタカト！」

ヴ

「……タカト嫌い」

タ

「が……が——ん!?」

カ

「むにゃむにゃ……」

しー

「こいつ一人幸せそーだなー。ま、いいか。そういや、罰ゲームは？
後、リターナさんは？」

一同

『『………あ………』』

リ

《ひ、ひどいよ————！》（ひどいよー、いよー、よー、『注、
エコー』）《》

（だから、幕だって言ってんだろ（笑））

番外話「タカトVSカナン大模擬戦(?)! 死んでも恨んじやーよ♪」(後

はい♪ 模擬戦終了♪ 次回から本編に戻ります♪

そして、ヨシユアさん。阪本 葵さん。キャラ召喚ありがとうございます♪

キャラをうまく使えたかどうか、甚だ疑問ですが楽しんで頂けたなら幸いです♪

では、次回本編でまたお会いしましょう♪

ではでは♪

第五十五話「男の戦い」(前編)(前書き)

「いつか、なのはとフェイトの戦いを見た事がある」

「十一年前だ。PT事件の時、なのはは、フェイトと分かり合う為に。本当の友達になる為に戦った」

「思いを伝えるための、そして、自らの思いを通すための、戦い――」

「あの時、あの戦いを見ていて。僕は、なのはとフェイトの心配をすると同時に、ひどく羨ましがっていた」

「だって、僕には。あんな風な事が出来る友達がない」

「近い関係として、クロノがいるけど。彼とはまた違う」

「自分を、本当の意味でさらけ出し。感情をぶつけるような、そんな関係じゃなかった」

「だから――なんだろうか？ はじめてタカトと会った、あの日。ヴィヴィオにタカトが連れて来られた日。僕は、何故か確信していた」

「いつか、僕達は戦い合うと。そう、確信していたんだ――」

「魔法少女 リリカルなのは StS, EX。はじまります」

第五十五話「男の戦い」(前編)

時空管理局、本局。

次元の海に浮かぶ、巨大なコロニー。管理局に取って、最も重要な拠点である筈のそこは、今は管理局のものでは無かった。

ツアラ・トウ・ストラの襲撃によって占拠されてしまった本局は、既に彼等のものと言っても差し支えは無い。

そんな本局の一室にて大男が、両手を忙し無く動かしながら執務を行っていた。

ベナレス・龍。

ストラの指導者であり、最高責任者たる彼はストラが行った作戦行動——もしくは、行う予定の作戦行動に素早く目を通し、処理して行く。

本来、彼が行うような責務では無いのだが。あえて彼は書類整理を好んで行っていた。

そう言うと、大抵の人間——特に、旧知の仲であるアルセイオなどには不気味そうに見られるのだが、続く一言によってすぐさま納得させられてしまう。

いわく、人が死なない。

たった一言。故に、全てが込められた台詞であった。

膨大な量に及ぶ、それらにサインを入れ。暗号付きでファイルに閉じて行く作業を黙々とベナレスはこなし――。

「……アルか。何の用だ？」

「気付いてやがったか。なら、顔くらい上げろや」

視線はおろか、眉一つ動かさずに告げた台詞に苦笑が応えた。

アルセイオ・ハーデン。

ストラが雇っている傭兵部隊の隊長である。

彼の苦笑を伴いながら、放たれた言葉をベナレスは聞こえていないかのように反応を示さない。

代わりに、言葉だけはしっかりと返って来た。

「何の用か、と聞いている。私はこれでも今は忙しい。――そう言えば、貴様。先日の叶トウヤとの戦闘。まだ報告書が上がっていないぞ。今日の1500時まで提出しておけ」

「……今、ソラが死ぬ気で上げてる真っ最中だから大丈夫だろ」

自分で報告書を作成する気は一切ゼロらしい――副隊長である、真藤ソラの苦労が偲ばれる台詞にベナレスは嘆息。漸く、視線を上げた。

「お？ 終わったのか？」

「終わるものか。我等の作戦行動が今、いくつ展開していると思っている。……区切りがいい所で、一息付こうと思ってな」

言うなり、ベナレスは大きな身体を立ち上がらせた。

ぐるりと、大きなデスクを避けて歩き。自ら据え付けの炊事場に向かう。

インスタントの豆を用意し、自分でコーヒーを煎れはじめた。

「……相変わらずだな。誰か茶を煎れてくる姉ちゃんでも侍らせろよ」

「人員の無駄だ。茶ぐらい自分で煎れる。——貴様は、自分で煎れるのか？」

「いや、面倒くせえじゃねえか。折角、隊に女が居るんだから、女に煎れさせてるよ。——たまにとんでも無いモン出されるが」

「……貴様も、大概変わらんな」

そこではじめて、ベナレスの顔に苦笑が浮かんだ。

彼にしては珍しいそれに、アルセイオは意外そうな顔となる。だが、すぐに表情を改めた。

何もここに来たのは、世間話をするためでは無い。

「——なんで、奴を使いやがった？」

「唐突だな——と、言いたいが。先程グリムにも詰め寄られた」

ベナレスは苦笑を続行しながら、カップを手に持つ。
ポッドからお湯を注ぎはじめた。

「グリムは、管理局とミッドチルダそのものに復讐心を抱いている。
——無理はからぬ事ではあるがな」

「……………」

アルセイオは無言。その脳裏には、ミッドでグリムが行った市民の虐殺が浮かんでいた。

決して褒められた行為ではない——どころか、批難されてしかるべき行為。

だが、”グリムの境遇を思えば”無理も無いと思わされてしまう。

だが、それはならば、なおの事——。

「なら、なんで奴を——アイザックを使った？ わざわざ呼び寄せてまで——」

「それに関しては、私からの解答は一つしかない。”適任だった”。それだけだ」

簡潔極まりなく——そして、文句のつけようの無い答えである。
アルセイオは嘆息。……わかってはいたのだ。ベナレスが作戦を変えざる事はない。そんな事は理解している。

だが、”理解と納得は全くの別物だ”。

内心の苛立ちを再び吐いた嘆息に混ぜる。

そんなアルセイオに、ベナレスは続けた。

「それに、グリムではやり過ぎる危険があった。標的が死んでは元も子もない。貴様に至っては、逃がす可能性を捨てきれなかった——」

「わあーた、わあーた。この件についてはもう文句をつけねえよ」

観念したように、両手を上げて降参するアルセイオ。

ベナレスは変わらぬ無表情で――しかし、続きを話す事を止めた。その代わりとばかりに、データチップをアルセイオに投げて寄越す。

彼は、それを空中でキャッチした。

「……何か、嫌な予感がすんだけどよ。これ何だ？」

「暇そうだからな。仕事を一つ与えよう。詳しくは、そのデータを参照しろ。閲覧後は、貴様の隊長権限でもってデータを破棄しろ」

げっ……と、アルセイオが呻いた事をベナレスは確認。

だが、彼の反論を許さず言葉を続けた。

「“ゴリアテ”の骸が^{なきから}見つかった。”まつろわぬ神”として再生する可能性がある」

「……ん、だと……？」

さしものアルセイオも、その台詞を聞いて顔色を変えた。まつろわぬ神の顕現。それが、どのような事態を招くかを知っているのだ。

……同時に、ストラの目的の一つに。”まつろわぬ神の捕獲がある事を”。

ベナレスは、アルセイオの動揺にやはり構わない。

「期待はしていなかったが、あるいは保険となるかもしれん。向この部隊と合流後、ただちに捕獲に向かえ」

「……了解」

アルセイオは、今度こそは話しが終わったと判断し背中を向ける。そうして、出口まで歩いて行き――。

「……なあ、ベナレス。お前達の、” ストラの目的ってのは、何だ” ？」

――唐突に、そんな事を聞いた。

それは、傭兵であるために知らされる事が無かった事。

アルセイオ自身も気にしなかった事である。

だが、事ここに至りそうも行かなくなってきた。

ストラの作戦行動が今一、納得出来ないものばかりであったからである。

……だが、ベナレスの答えは変わらない。

いつものように、無表情で。

「それを知りたくば、正式に我等の仲間になれ。そうでないならば教えられるものか」

「……ちっ……」

変わらぬ解答に、アルセイオは舌打ちを一つ打ちながら扉から出る。

その姿は、ゆっくりと自動扉の向こうに消えた。

ベナレスは暫く消えたアルセイオの背中を見続け、やがて苦笑する。

「言えるものか。……言えば、貴様が黙っていないだろうからな」

そう一人呟くなり、再び書類を処理していく。

そんな、ベナレスの前に展開するウィンドウには一つのデータが表示されていた。それは……。

—まつろわぬ神、『聖王神、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの召喚。並びに捕獲に関する資料と、”その器”に関する調査資料』—

……そう、高町ヴィヴィオの写真と共に。そこに表示されていた――。



ユーノ・スクライアの咆哮が辺りに轟く。

それを伊織タカトは無表情に、カリム・グラシアは呆然となりながら聞いた。

普段、物静かな青年なのである。このように、怒りの叫び声を上げるなど到底想像もつかなかった。

カリムが驚いて我を忘れたとしても無理は無いだろう。だが、ユーノとタカトはそんなカリムを完全に無視。

向き合いながら、互いに視線を交差させた。

自らを睨むユーノをタカトは見て、やがて微笑する。

小さく、小さく、だ。それこそ集中していなければ見えない程の微かな笑み。

しかし、それもすぐに消え――。

「一部始終はどうせ知っているんだろう？　今更答える必要も無い」

「っ……！　タカー——」

「勘違いするなよ、ユーノ」

手を差し出し、ユーノの言葉をタカトは制止。

ぐっと呻きと共に黙り込んだユーノを冷たい視線が貫いた。

そして、タカトは冷たい視線のままに。ユーノへと告げるべき言葉
を告げる。

「俺はストラの敵であると同じく。”お前達の敵だ”。——管理局
の、な。そうだろう？」

第一級広域次元犯罪者——。

タカトの肩書き。それを思い出して、ユーノは齒噛みする。

何をどうしようと、タカトにとって管理局は敵であり、敵でしか
無い。

ならば、そこに容赦なぞあろう筈が無かった。

例え、共通の敵がいようと——。敵の敵は味方、とはならない
のだから。

だけど、それなら、なんで——！

「なら、なんで……ミッドに来たんだ……！」

「……目的があった」

「その目的が何かを聞いてるんだっ！　誤魔化すな！」

タカトのあやふやな解答を、ユーノの怒号が切り裂く！

——僅かながらタカトの瞳が揺らいだ。

タカトの、そんな小さな反応にユーノは確信する。

自分達のために、彼はここに來たのだと。

ストラに狙われていた、ヴィヴィオを。その守り手である自分を！
守るために、それだけのためにここに來たのだと——。

だからこそ、ユーノは納得出来なかった。自分達を守る。そのために管理局と敵対し、そしてその人員達を叩きのめした彼の行動が。

タカトの現状を考えれば、ミッドに來ると言う段階で管理局と敵対する事は分かっていた筈だ。

それなのに、あっさりと彼は現れたのだ。

自分の危険も省みずとか、そんな問題では無い。

自分の大切なものを守る。

そのためならば、他人がどうなろうと構わない——。

そんな、タカトの行動が。思考が。何もかもが！

——ユーノは、許せ無かった。

「タカト……。君は、君、は——！」

つかえつつかえの、言葉。それを、ユーノが——彼に守るべき対象とされている自分が言う事は酷く傲慢なのかもしれない。……だが、それでも言わねばならなかった。

タカトを、まだ自分は友達と思っているなら――！

「――タカト……。君は、ガキだ」

「……ああ、知ってる」

抑揚が抑えられた口調の答え、同時にタカトは拳を引いてユーノの腕を振り払った。――まるで、決別を告げるかのように。正しく、それは、その通りの意味だったのだろう。

タカトの目が細められる。

「俺の前に立つか？ ユーノ。ならば、お前も俺の敵として見なすぞ？」

「……意見を違えた男友達って、どうするか知ってる？ タカト」

まだ自分を友達と呼ぶ――。そんな、ユーノにタカトは僅かに黙り込む。

しかし、それも長くは続かなかった。

ユーノを、見据えて口を開く。

「殴り合い、か？」

「喧嘩だ。――君が教えてくれた事だよ、タカト。僕は君に対して怒りを覚えてる。君もだろう？」

「……ああ、そうだな」

かつて、ユーノ宅に居候していた時――タカトは、ユーノにそんな話を話した記憶があった。

確か、ユーノの蔵書を巡って起きた論争の最中である。

まるで、”彼女”みたいだ――。

そう、眩いたユーノの姿を思い出した。

あれは、きっと――。

二人は、もはや無言。互いに視線を交差させ、どちらとも無く明後日の方に向いた。

「場所を変えよう、タカト」

「いいだろう」

一も二も無く、タカトはユーノに頷き。二人は飛空魔法で空に浮く――。

一轟一

――直後、二人揃って何処かに飛んで行った。

その場に、呆然としたままのカリムと。倒れ伏した、騎士と魔導士。修道士を残して。

やがて、我に返ったのかカリムは顔色を蒼白に変える。

「大変……っ！ スクライア司書長が……！」

その声は、誰にも聞かれる事無く。風に溶けて消えた――。



暗い夢を見る。暗い、暗い、夢を。

少年は——エリオ・モンディアルは、直感的にそれが夢だと悟った。

—偽物—

誰かの声で、そんな事を言われる。でも、それが誰かは分からない。

—偽物—

……いや、分からないように自分で思い込んだだけである。——それは、フェイトだった。

—偽物—

あるいは、スバルだった。あるいは、ティアナだった。あるいは、なのはだった。あるいは、はやてだった。あるいは、シグナム。あるいは、ヴィータ。あるいは、シャル。あるいは、ザフィーラ。あるいは、ギンガ。あるいは、ヴァイス。あるいは、アルト。あるいは、ルキノ。あるいは、グリフィス。あるいは、あるいは、あるいは、あるいは、あるいは、あるいは、あるいは、あるいは——！

—偽物—

——たくさんの、声が自分を偽物と呼ぶ。それに、エリオは暗闇の中で一人、拒絶するように首を振った。

ちがう……！ そんな事みんな言わない！ みんな、みんな——。

—偽物—

声が、する。みんなの声で偽物と呼ぶ声が。

違うと、みんながそんな風に思っている筈が無いとエリオは叫びでも、心のどこかでは、そうか？ と、疑問の声がある事に気付いた。

本当に、みんなそう思ってくれているのか？ 確かめたのか？
騙されているだけじゃないのか？

—違う……。違う！—

叫ぶ、叫ぶ——。でも一人きりの暗闇では、その声は誰にも届かなくて。

—偽物—

……シオンの、声で。姿で、そう言われ。エリオはうなだれる。
そして、目の前に一人の少女が現れた。

彼女、は——。

「キャ——」

「偽物」

言葉を、失う。彼女の——キャロの言葉に、エリオはどこかが碎けたような音を、確かに聞いた。

「うわああ———！」

「きゃっ!？」

大声で叫びながら跳ね起きる。

悲鳴が聞こえたような気もしたけど、今のエリオにそれを確かめるような余裕はなかった。

荒げた息で、開いた自分の手を見下ろす。

全身が汗で湿っていた。

……ゆ、め……!？

自分で自分に問い掛け、あれが夢だったと。それだけを理解するとエリオは自分の体を抱きしめた。

まるで、怯えるかのように震えを止めるかのようにぎゅっと力を込める。

——嫌な、嫌な夢であった。悪夢と言ってもいい。
あんな夢を見るだなんて——。

「あの……エリオ君？」

——原因は、はっきりとしている。”彼”だ。

クリストファ。

三人目のエリオ・モンディアルを名乗り。自分を偽物と呼んだ少

年。

彼の台詞——いや、存在そのものが自分の、最も嫌な部分を刺激したのだ。

トラウマを。

だから——。

「エリオ君!？」

「うわぁ!？」

そこまで考えた時、いきなり耳元で大声が炸裂した。
エリオは飛び上がるようにして、我に返る。

そして、左方向——耳元で叫ばれた方に目を向け。

「よかった……。大丈夫、エリオ君? さっきもうなされて——」
「……キャロ?」

ほっとしたのだろう。少女——キャロ・ル・ルシエはエリオに微笑みながら声を掛けて来る。

しかし、その声を遮ってエリオは彼女に呼び掛けた。

キャロはしばし、きょとんとして。やがて、はにかみながら、こくと頷いた。

そこで、エリオは自分がどこに居るのか、またどこで寝ていたのかを思い出した。

グノーシス、イギリス支部『学院』。その医療室である。

姫野みもりの治療を受けたキャロが寝ていたそこに、自分は突っ伏すように寝ていたのだ。

ギョンター達との戦闘後に、すぐにここに向かったから――。

恐らくは戦闘の疲労のせいであろう。こんな所で気付かぬ内に寝てしまったのは。

いや、そんな事はいい。それよりも――。

「キャロ……」

「ごめんね、エリオ君……心配掛けたみたいで――」

キャロは医療室のベッドから半身を起こしたまま、エリオに謝ろうとして。

それどころでは無い事態に、固まった。

抱き着いて来たのである。当のエリオが。

一瞬、何をされたか分からずにキャロは呆然として。しかし、すぐに事態を悟り顔を真っ赤に染める。

「え、エリオ君!？」

「……った……」

慌てて、呼び掛ける。でも、エリオはまるで声が聞こえていないかのようにキャロを抱く力を強めた。

譫言うわごとのように何かを呟く。

より身体が密着し、キャロの顔色は更に赤みを増す。

普段と、まるで立場が逆であった。いつもならキャロがこういった真似をしてエリオが困るという場面が多かったのだが――ひよつとすれば、キャロにも羞恥心が少しは備わってきたのかもしれない。ともあれ、何とか離してもらおうとキャロは訴ようとして――

「え、エリオ君、恥ずかしいよ……！　だ、だから――」

「よかった……！」

「……え……？」

「よかった……た……！　君が、無事で……！」

震えるエリオの身体と声を、キャロは聞いた。

同時に、悟る。自分がどれ程、彼に心配を掛けたのかを。

不安にさせてしまったのかを。

震える肩、ひよつとすれば嗚咽しているのかもしれない。

「……あ……」

私……ばかだ……。

ようやく、エリオの心情を察する事が出来て、キャロは酷くいたたまれない気持ちになる。

身体が、自然に動いていた。

エリオを、そっと抱きしめ返す。

「ごめんね。エリオ君……。もう、大丈夫だから……」

「うん……うん……！」

キャロの言葉に、エリオは何度も頷く。

そんなに心配させてしまったのかと、キャロは内心罪悪感でいっぱいだった。

それに……いつものエリオ君と違うような……。

『『あの~~~~~』』

キャロがそんな風に考えていると、声が別方向から上がる。

エリオは、ふと我に返って振り返り――。

そこに、スバル、ティアナ、ギンガ、みもり。

そしていくつも展開されたウィンドウからこちらを覗く”アースラ前線メンバー女性陣一同”の姿を見た。

「……………」

ぴしり、とエリオ硬直。

そんなエリオを見て、ウィンドウの向こうでフェイトが何故かハシカチを目に当てる。

《……子供だと思ってたのに……！ エリオってば大人になって……！》

《男子三日会わざるば、刮目して見よ。か――。まだ別れて半日しか経っていないが》

と、こちらはシグナム。何故か訳知り顔でうんうんなどと頷いている。

すると、そんなシグナムを追い越すように、シャルが口を挟ん

だ。

《ほら、でも最近の若い子は積極的って言うから。——いいわねえ。若いって》

《シャル——。それ、おぼちゃんの台詞だぞー》

今度はヴィータだ。だが、何故かシャルが向こう側に振り向いた直後に黙り込んでしまった。

その横に居たザフィーラも顔を真っ青にした辺り、何を見たと言うのか……。

だが、一同は構わず話しを続ける。

「でもでも、二人って早過ぎない？　だって、まだ11歳だよ？」

「甘いわ、スバル。こー言うのに歳は関係無いのよ？　……話しを聞いたんだけど」

《うーん、私もそーいった経験ないから分かんないけど、行き過ぎなきゃ大丈夫だと思うよ？》

「て、なのはさん。行き過ぎて……！」

「どうでしょう？　シン君はそんな事無かったですし。むしろ、もっと——」

「むしろ、何？」

「い、いえ……何でもありません！」

他人の恋話は蜜の味——特に、女性にとっては最高のものだろう。

それが、弟分と妹分ともなればなおさらである。

更に、N2Rの面々まで話しに加わり、しっちゃんめっちゃかに話しが膨らんで——それを纏めたのは、やはりこの人。

アースラのボスにして、八神家家長！ 皆さんのお母さん！

《——と、言う訳でや！ エリオ。キャラを泣かしたら承知せんぞ！ 幸せにな！》

『『わぁ~~~~~♪』』

「何の話ですか、何の—————！？」

はやての、祝福の言葉に盛り上がる一同にエリオの渾身のツツコミが叩き込まれた。

シオンの影響か、かなり強烈かつ魂の籠ったツツコミである。

真っ赤になった顔で、エリオのツツコミは続く。

「と、言うか皆さん！ い、一体いつから！？」

『『最初から』』

即答。気持ちのいいくらいの、即答である。

最初から、最後まで見られていたらしい。眠ってた、自分も。キヤロに抱き着いた自分も！

あう、あう、と口をぱくぱく開いたり閉じたりするエリオに一同うんうんと頷いて。

《いやく〜だってなあ？ あんな状況だと声掛けられんし》

「気まづかったですし」

『『何より興味あったし』』

興味あった。面白そうだった、である。

エリオは、キャロに抱き着いていた以上に身体を震わせ、顔が一気に羞恥に染まり――。

《エリオ……お母さんは、応援するからね!》

「つつつつ――!」 わああああああああああ――

――!――!――!

フエイト
保護者の、ボケに全力で叫び声を上げた。



「まったくもう……! ひどいです、みんな……!」

『『まあまあ』』

『学院』廊下――。そこを、エリオはぶんぶん怒りながら進む。
そんなエリオを見て、EU組女性陣一同は苦笑しながら続く。

珍しくも、年相応な子供らしい反応がやけに微笑ましい。
ちなみに、キャロは未だ病室である。もう問題無いとはされているものの、一度は死にかけた身であるのだ。大事を取るのも、無理は無かった。

「ほくくら、エリオ。機嫌治して、ね?」

「そうそう。むくれてると頬っぺた突いちゃうわよく?」

「……やめて下さい」

よほど恥ずかしかったのだろう。膨れっ面なエリオを、フォローの積もりか。スバルとティアナが横からちよっかいを掛けて来た。それもむすつとした顔で、拒否する。

「……それより、シオン兄さんはこっちに居るんですか？」

「うん、こっちに”いて”るよ」

……なんだろう、今言葉使いがちょっとおかしく無かっただろうか？

エリオは不審そうに、スバルに振り向く。でも彼女はニコニコしたままである。

気のせいかとまた、前へと進む。

「でも、シオン兄さんもかなり大怪我負ってたと思うんですけど」

「あ、それは私が治療魔法で治しておきました。エリオ君の怪我也私が治したんですよ？」

と、これはみもりだ。そう言えば、腹部にギョウターの一撃やらクリストファの攻撃やらを受けていた筈なのだが――どうやら、寝ている間にみもりが全部治してくれたらしい。

エリオはすぐに、みもりに向き直り頭を下げた。

「そ、そうだったんですか。ありがとうございます……」

「いえ、いいですよ。……それに、無駄になっちゃうかもしれませんし」

「……え？」

「何か聞こえました？」

ニッコリ♪ まるで、日なたのようなポカポカとする笑みだ。…
…だが何故だろう？ その笑顔が、やけに怖いのは。

そんな事を思っていると――。

―もっか、もくくかにしゅてあげるくく♪―

「……へ？」

――何やら、妙な歌が聞こえて来た。
なんか、こう、妙に間延びした歌が。エリオが疑問符と共に声を
上げる。

だが――。

「どうしたの？ エリオ君？」

「え？ ぎ、ギンガさん。今、変な歌が聞こえませんでした？」
「何の事？」

そう言って、ニコニコ♪

……おかしい、何かがおかしい……！
だが、その何かが分から
なかった。

―毛髪の常識を超えて私は来たのだよ♪―

―ワックスはついてないけど出来れば欲しいね？―

―あのね、早く扉に入りたまえよ♪―

—どうかしたのかい？—

—扉をずっと見つめてる♪—

—君のこと♪—

—もっかも〜〜かにし〜〜てあげる〜〜♪—

—毛深さはまだね、頑張るよ♪—

—もっか、も〜〜かにし〜〜てあげる〜〜♪—

—だからかなーり覚悟をしてたまえ♪—

(してあげるよ♪)

—もっか、も〜〜かにし〜〜てやんよ〜〜♪—

—最後までね、頑張るから♪—

—もっか、も〜〜かにし〜〜てあげる〜〜♪—

—だからえらく油断をしてあげて♪—

—もっか、も〜〜かにし〜〜てあげる〜〜♪—

—世界中の誰、誰より♪—

—もっか、も〜〜かにし〜〜てあげる〜〜♪—

一だからもつと入ってきてね♪――

「……いや、これ絶対どこかで歌ってますよね!?　ねえ!?!」

「何言ってるの?　エリオ?」

「そうそう、歌なんて聞こえないわよ?」

スバルとティアナも、ニコニコ♪　振り返る。ギンガも、みもりもニコニコ♪

全員ニコニコ♪　……おかしい、おかし過ぎる!　戦慄にも似た寒気をエリオは感じ――。

そして、それは現れた。

廊下を抜けた先に休憩室^{ピロテイ}がある。

多人数を目的として作られたそこは、やけに広い。

その休憩室に、”扉”があつた。

扉――扉である。かなり大きめな立派な木製の扉。

だが、それだけに。この休憩室においては違和感バリバリである。エリオは即座に悟る――これは、ヤバいものだ。

入ってはならない。触れてはならない。――否、断じて否だ!　これに、存在を知られてはならない!

この扉は、この、扉は――!

「そこにシオンがいるよ♪」

「ほら、エリオ。シオンに用があるんでしょ?　入らなきゃ♪」

「あ、う、う……！」

一同は相変わらずニコニコ♪ エリオは思わず後ずさる――が、後ろに控えていたギンガとみもりにぶつかった。

「どうしたの？」
エリオ君[♪]

「い、いや、あの……!　こ、この扉。何かおかしく無いですか……!」

「そんな事無いですよ？ 普通の扉です♪ 開けてみれば、分かり
ますよ——」

みもりがそこまで言った、瞬間！

《も、も、もかもあああ——！！》

絶叫が、聞こえた。断末魔っぽい、あれな感じの。

エリオは無言、ごくりと唾を飲み込む。

今は、シオンの声であつた。間違い無い。

あの扉の向こうでは何が行われているのか——エリオは、扉を開ける事はせず、耳をつけて聞き耳を立ててみる。

その先の、声は――。

《あ、ああ　ああああ……！　　もかもかが迫ってくるううう――――！　　助けてえええええ――――！　　ここは、ここは嫌なんだ！　　ここはダメなんだ！　　も、もうしません！　　助けてスバル！　　テ
イアナ！　　ギンガさん！　　みもり！　　いやああつ！？　　もかもかが
ああああああああああ――――――――！　　あああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああああああああッ!? あ、ああ、あ、あ、あ……》

——悲鳴は、尻すぼりに小さくなり。やがて消えた。ただ、もかもかと言葉だけを残して……。

エリオは、汗ジト。ごっくんと唾を飲む。これは——。

「——ところでエリオ」
「っ!？」

声に、慌て振り向く。既に背後、間近に四人は居た。素敵すぎるニコニコ♪ な笑顔のままに——。

「私達言ったわよね? ”死刑” って。まさか——」
『『許されるなんて思ってたないよね♪』』
「ひっ!？」

その台詞と笑顔で、漸くエリオは全てを悟った。最初から全てが罠。つまり、このお仕置きをするために——!

道理でキャロが連れて来られ無かった筈である。

納得すると同時に、エリオは逃げようと駆け出さんとして。その前に、扉が重々しく開いた。

見るな!

内心、強く叫ぶ。だが、この扉から目を逸らす事はあまりに難し過ぎた。

本能のレベルで、それを許しそうにない。

理性の叫び声を見殺して、身体が勝手に動く。

扉の、向こうには。

闇、があった。闇、黒、なんでもいい。とりあえず闇が。

その闇は、何故か表明がごわごわしている。

あれが何かを理解する事を本能が拒絶する！　だけど、目は逸らせなくて。

直後、闇から無数に現れるごつい筋肉質な腕！

それらは、迷う事無くエリオを捕まえんとする。しかし、少年も捕まる訳にはいかないとはかりに回避しようとして。

『『えい♪』』

「――へ！？」

ちょうど四人分の手で背中を押された。空中に浮かんだ身で、首だけを背中に向ける。

そこには、やはりと言うかエリオの背中を一斉に押した悪魔達が居た。

彼女達は、押した手でエリオにひらひらと手を振り――。

『『ばいばい、エリオ♪／君♪』』

その声を聞きながら、エリオは腕達に捕まる！

悲鳴を上げたかったが、それすら許されずに扉の中に引きずり込まれた。

もさっと闇の中にエリオの全身が飲み込まれ——扉が、バタン！と閉まる！

そして——。

「「も、もかもああああああああああ——！！！」」

断末魔の悲鳴が、長く、遠く、どこまでも響いた。

（中編に続く）

第五十五話「男の戦い」(前編)(後書き)

はい、ども〜♪ テスタメントでございます♪

いや、すみません(汗)

リアルがやったらめったら忙しかったので更新遅れました(汗)
く、くそう！ 今回は内容が内容だから早目にお送りしたかったのに！(笑)

……なお、今回。ユーノに惚れちゃダメだぜ？

では〜♪

第五十五話「男の戦い」(中編1)(前書き)

……くっ……！ ちょっと遅れてまいりました(涙)
す、すみません(汗)

さあ、中編1です1(笑)
基本的に説明ばっかですが、楽しんで下さると幸いです♪

——さあ、みんな。スーパーユーノタイムのはじまりだっぜ(笑)
惚れるなよ？ いや、マジで。

ではでは、どぞ〜♪

第五十五話「男の戦い」(中編1)

……ここ、どこだろう？

ふと目覚めると、エリオ・モンディアルは”川のほとり”に居た。綺麗な川である。辺りに咲く様々な”菊”の花が非常に美しい。川も澄み渡っており、心が安らぐ——岸から出る小舟に乘せられた人々のやけに青白い顔が気にはなったが。

ともあれ、エリオは歩き川の近くまで来る。

すると、対岸で宴会をやっている風景が見えた。

何か、面白そうな事やってるなー、なんて思っていると。小舟の船頭がこちらに気付いた。

「……ようこそ、乗って行くかい？ 渡し賃に六錢貰うけど——」

「え？ お金取るんですか？」

「あ？ 当たり前だろ？ ここは忘却^{レテ}の川なんだから——通称、あの世」

……今、船頭さんは何か凄まじく不穏当な事を言わなかっただろうか……？

エリオは汗ジトになりながら、そう言えばと思い出す。

確か、フェイトや、なのは。はやての故郷である第97管理外世界、地球ではあの世とこの世の境目に川が流れてる、そんな話しかなかっただろうか？

つまり、自分は――。

「う、嘘――！ 僕、死んじゃったんですか！？」

「そりゃ、あの世だしねー。一応、渡り切るまでは死んでないけど」

その歳で坊やも可哀相だねー。と、船頭さんは言うが、エリオは聞いちゃいなかった。

なんで！？ そう思うが、理由は一つしかない。

あの、禁断の部屋である。……悍^{おそ}まし過ぎて、決して名前は呼べないがアレが原因なのは間違いない。

とにかく、まだ死ぬ訳に行かないので反対側へと駆け出そうとして。

「おーい、エリオー」

「へ？ し、シオン兄さん！？」

対岸でこちらに呼び掛ける人物に気付き、エリオは目を丸くした。神庭シオン、その人であったから。

彼はやたらと爽やかな顔で手を振っていた。

「お前もこっち来いよー。面白いおじさん達が居て、こっちは楽しいぞう？」

「レジアス。今日もいい飲みっぷりだな」

「ゼスト、お前とまたこう飲める日が来るとはな」

「ほ、本当ですか！？ な、なんか見覚えがあって死んじゃった人が若干二名ほど居るんですけど！？」

手を振るシオンの後ろに、見覚えがありすぎる二人の姿を見て、やはりここはヤバいとエリオはビビる。

そんなエリオにシオンはにこつと優しく微笑んで。

「ああ。ここじゃあ、あの部屋も無いし、怖い女達もないし、楽しいタノシ、タノシイイイイイイ――！」

「……さよなら！」

シオンの豹変に、エリオは迷う事無く反対側にダッシュ。全力の逃走を開始した。

シオン兄さん……助からなかったんですね。貴方の分まで、僕は幸せに生きてみせます……！

きらりと涙を零し、エリオは走る――そう、生きるために！

そんな、エリオに後ろからシオンが迫って来た。川を渡って、こっちを追いかけて来る！

「マテヨウ、エリオウ。イツシヨニ、アツチニ逝コウゼ……？」

「ぎゃあああ――！ 来ないで下さい――！ シオン兄さん、一人で成仏して下さいっ！」

「オマエダケタスカルナンテエノハ、ナットクデキネエンダヨウ……！」

そうやって、二人は止めようとする船頭や頭に角が生えたマツチヨな方々を弾き飛ばしながら走り。やがて、その行き先に光が見えた――。

「……今回ばかりは、ホントに死ぬかと思った……」

エリオとシオンはぐったりと異口同音に呻き声を上げる。

『学院』の休憩室——すでに、例の部屋が消えたそこである。

もかもか室に入れられた二人は1時間程で解放され、精神の死と生の狭間をさ迷い。二人揃って、『もかもかなんぞに負けるかああああ———！』と叫びながら復活を果たしたのであった。

まだ怖かったのか、エリオはうつうと泣き声を上げる。

「うう……。すごい怖かったですよう……」

「……言うなよ。思い出しちまうだろ……」

「あの部屋ですけど、追っかけて来たシオン兄さんも怖かったですよう!？」

「……過去の事は、忘れようぜ……」

男二人、心についた傷を慰め合う。

そんな二人を見下ろしながら、もかもか室に二人を叩き込んだ悪魔の一人。ティアナは、はあと嘆息した。

「大袈裟ねー。情けないわよ、あんた達——」

「「どの口がそんな事言いやがるっ!」」

「エリオにまで怒鳴られた!？」

よほど辛かったのか、エリオすらも敬語抜きの叫び声を上げ、流石にティアナは目を丸くする。

だが、そんなティアナの反応に構わず、二人は肩を寄せ合って涙を流した。

「うっう……！ シオン兄さん。ティアさんが……ティアさんがあ……！」

「ああ……！ ちくしょう、なんて女だ……！ 人でなしにも程があるだろうが……っ！」

「そ、そこまで言われる程！？」

「……ちょ、ちょっと、どんなのか気になるなー」

「そ、そうね……。絶対入りたくはないけど……」

「あ、あはは……」

もかもか室とは、果たしてどれ程のものなのか……。

女性陣は揃って汗ジトとなるが、男二人は黙して語ろうとしない。

ただ、その恐怖だけはばっちりと伝わったが。

「やれやれ、ほら立ちなさい。良子さんが二人とも呼んでたわよ？」

「ぐすん……。て、ちび姉えが――」

「ちび姉と言うな！」

「わ！？」

ようやく泣き止んで、顔を上げたシオンに怒号が突き刺さる。

驚きの声を上げて、そろりと怒鳴られた方を向くと何やらでかいトランクを脇に置いた良子が腰に手を当てて、こちらを睨んでいた。

なんで怒っているのか——理由は一つしかないのだが。

「お前はいつも、いつも、いつも……！」

「はいはい、ストップ。ちび姉、何か用事あったんだろ？」

「だからちび姉と呼ぶなど言ってるんだ！ 全く！ ……ここで話すのも何だから、ついて来い。私の研究室で話すぞ」

最後に呆れたように再び嘆息して、良子は先に行こうと身体を翻す。

トランクに手を掛けて——。

「うぬぬぬぬ……！」

「……ちび姉、非力なんだから。無理しない方がいいぜ……？」

「う、うるさい！」

——重くて持ち上げられないトランクを引きずるようにして、シオンに怒鳴りながら自らの研究室へと向かった。



「ぜえー、……さ、ぜえー、……さて、はな……、ぜえー」

「ちび姉、水、水」

「ちび姉と言うな！」

重いトランクを引きずったせいか、息を荒げる良子にシオンが水を差し出す——ちなみに、シオン達は代わってトランクを持つと言ったのだが、良子は意地でもあるのか、断固として断られた——。まあ、そんな良子は怒鳴りながら差し出された水を一気に飲みほ

して息を整えた。

「ぐきゅ、ごきゅ……。ふうー水美味し……。さて、早速用件だが――」

「早速じゃないけどね、全然」

余計な事を言うシオンを、良子は一睨みして黙らせる。
そして咳ばらいをすると、一同に向かって頭を下げた。

「……すまなかった。こちらのごたごたに巻き込ませて。君達のおかげで『学院』は最小の被害で何とか収める事が出来た。礼を言わせてくれ」

「いえ、そんな……」

「相手はストラだったし……」

いきなり頭を下げた良子に、スバル達は困惑した顔となる。

彼女達からすれば、キャロをあんな目に合わせた敵と戦ったに過ぎないのだ、礼を言われるのは想像の埒外らちがいだったに違いない。

そんな一同達を見て、シオンは良子の台詞を思い出す。

最小の被害――つまりは。

「……何人、やられた……？」

「……………」

シオンの問いに、良子は沈黙。ティアナ達もハッと我に返る。

『学院』を襲ったギューンターの固有武装、魔虫バグ。あの虫には一撃決殺の毒針と言う攻撃方があったのだ。――キャロのような幸運は、そう続くはずもない。

……視線を落としたままの良子に、シオンはため息を深く吐いた。

「……そっか。うん、ごめん」

「いや、いいんだ。あれだけの戦いだったんだ。犠牲が出ない方がおかしい——それに、さっきも言ったが、お前達のおかげで犠牲は最小に抑えられたんだ。だから、あまり気にするな」

顔を上げて、微笑む良子にシオンは頷きだけを返す。

そんなシオンや一同に良子も頷き、話を続けた。

「さて、じゃあ次の話しなんだが。今後の予定を話そうか」

「今後の予定……？」

「ああ、先程封印施設でも話した通り、各遺失物の封印解除まで後四日ほど掛かる。そこで彼女達には、遺失物の勉強をしてもらう予定だったんだが——」

「あの、質問いいですか？」

「ああ、構わない。何でも聞いてくれ」

説明を続ける良子に、スバルが手を上げる。良子は、そんなスバルに向き直って頷いた。

先を促され、スバルは質問を始める。

「えっと……、なんでロスト・ログアの勉強をするんですか……？
あ、勉強が嫌な訳じゃなくて——」

「ああ、そうか。そこから話さなければならんだな。——シオン」「明日、大英図書館で話す予定だったんだけど……。ま、いっか。てな訳で注目——」

良子の指名を受けて、シオンが片手を上げた。呼び掛けられて、一同そちらへと視線を向ける。

シオンは、何から話すか考え——面倒くさいので、地球産ロスト・ロギアの話しから始める事に決めた。

「まず最初に。第97管理外世界、地球は。他に例を見ない程の”多文化国籍世界”って事と。地球産のロスト・ロギアは、須らくまつろわぬ神自身か、その神から篡奪した物品だって事を覚えておいてくれ」

「……えーと……」

「ああ、質問は後にしとけ、面倒くせえし。で、だ」

一旦、言葉を区切る。今言った事を皆が把握した事を確認して、シオンは話しを続けた。

「まつろわぬ神ってのは基本的に、神話とかの物語——それも、信仰されてたりする奴な。そう言ったのをベースにして生まれるんだ。……真偽の程は別にしてな。んで、ここが重要なんだけど、地球は他の世界と比べてまつろわぬ神の発生率が格段に高いんだ。——いっそ、異常なくらいにな」

「……なんで？」

「そこをこっから話すんだよ」

ティアナが真剣な顔で問い、それにシオンは苦笑まじりで応える。

視線をそのまま良子へと向けると、頷いてくれた。

「どうやら、自分の説明はさほど間違っていない——そう認識して、シオンは続ける。」

「さっきも話したと思うけど、地球ってのは多文化国籍世界だ。どんなくらい国があるかは俺も忘れたけど、相当数があるはずなんだよ。これはかなり異常な数だな？ あんまり誰も理解してないけど、ここまで文化の違う国々が一つの星に収まってる——なんてのは、かなり奇跡的な事なんだよ。……本来なら、文化の違いで引き起こる争い。戦争で、人類なんてとつくに滅んでる」

「そ、そこまで言う！？」

「補足説明をすると、人間——私達、ホモサピエンスと言うのは、霊長類の中でも突出した凶暴性、暴力性を持つてる。原始の時代において、別の原始人類であるネアンデルタールを残らず滅ぼしてしまっただのいい例だな。——ついでに言うと、ホモサピエンスである私達くらいだ。同じ種族で大した理由もなく殺し合うなんて言うのはね」

シオンの説明に、良子が補足を付け加えてくれる。
それに一同、ほへへとなりながら聞き入った。

ホモサピエンスがネアンデルタールを滅ぼしたのは自然界における淘汰現象の一つであり、何も人間だけに限った事でもないのだが。基本的に自然界というのは、より強靱な性質——つまりは闘争における強靱性たる、凶暴性、凶悪性と言った部分が強い方が生き残るものである。世に言う弱肉強食だ。

——そして、その凶暴な性質故に、天敵がないホモサピエンス

は同じホモサピエンスを天敵とした訳である。

区別は簡単——価値観の違い、つまりは文化の違いだ。

「……話しが脱線しちまったな。まあ、地球は文化圏がえらく多い
ってのだけ覚えときゃいいよ。んで、まつろわぬ神ってのはこの
文化”が生み出すんだ」

『……はい？』

話を戻したシオンだが、その説明に一同首を傾げる。
何をどうしたら、そうなると言うのか——。

「……それだとまるで、人間が神様を作ってるみたいね……」
「GINGAさん、正解」

ぽつりと呟いたGINGAの言葉に、シオンはしゅぴっとどこから取り出したのやら、指し棒を向ける。

指されたGINGAも含め、一同呆気に取られ——。

「……え？ ええ！？ あ、合ってるの！？」

「はい。まつろわぬ神ってのは人間——正確には、人間の文化によって生まれるとされてます」

シオンはにっこりと彼女に笑う。そして、そのまま呆気に取られた一同に説明を続けた。

「詳しいメカニズムまでは明らかにってないけど、さっきも言った通りまつろわぬ神ってのは神話や英雄譚——信仰されるような物語をベースとして生まれるんだよ。んで、そう言った話しは”どうやって生まれると思う？”」

「……あ！　そ、そっか……！　そう言った物語は宗教とか……！」

「スバル、正解。宗教や価値観——つまり文化だ。文化が神の物語を生み出し、そして物語はまつろわぬ神を生み出すって訳だーな」

これには苦笑して、シオンはスバルの答えを首肯する。

そして、これこそが地球がまつろわぬ神を多数生み出す最大の原因であった。

つまり、ただ単純に文化圏があまりに多いので、比例して神話や英雄譚と言った信仰されるべき物語が他の世界に比べて圧倒的に多いのである。

普通は一つの世界に文化圏が一つが基本だが。地球では数十の文化圏がひしめき合っている状態なのだ。

結果として、まつろわぬ神の出現率が数十倍に——否。一つの神話に一つの神とも限らない。日本においては八百万の神とも言われる程だから、数百倍に跳ね上がる……と、言う訳であった。

「で、だ。こんだけまつろわぬ神が出現すると、その遺品——つまりは武具だな。……とか、まつろわぬ神自身を封印して、その魂をエネルギー結晶化したものとかが残されまくった訳だ。それが地球産のロスト・ロギアなんだよ」

「はあ……なんてゆーか……」

「壮大な話しねえー……」

シオンが説明を締めくくり、スバルとティアナを皮切りに呆れたような顔となる。

いきなり、こんな話を聞かされれば、大体こんな反応となるだろうが。

シオンは再度苦笑すると、良子に視線を向けた。

こちらの説明は終わり、本題をどうぞ。と言った所か。良子は頷きだけを返して、一同に向き直る。

「まあ、大体は今の説明通りだ。そんな訳で地球産の遺失物は基本的に神話や英雄譚等が原典となる。従って、君達にはそれぞれが扱う遺失物の勉強をしてもらう事になるのだが――そこで、一つ相談があつてな。……エリオ・モンディアル君」

「え？ あ、はい！」

いきなり良子に名指しで呼ばれ、エリオはきょとんとしながら返事をする。

そんな少年に、良子は少し申し訳なさそうな顔となった。

「……君のデバイス、ストラーダだが。今日の戦闘で破損していただろう？」

「……はい」

こくりと頷く。例のクリストファとの戦闘でストラーダは破損していたのだ。

こちらに帰って来た際に、良子に破損状況を調べてもらう為に渡して置いたのだが――。

「……結論から言おう。ストラーダは本体部分は無事だ。だが、各パーツ――特にフレームの破損がひどい。正直、一朝一夕で修復出来る状況では無い事が判明した」

「……そう、ですか……」
「うん。そこで、だ――」

良子の報告を聞いたエリオはあからさまに消沈した返事をする。
だが、良子は構わず話しを続け。

「ストラーダを一足早くドイツに送り、バルムンク用のフレームに
差し替えようと思うのだが……。どうだろうか？」
「……え？」

言われた事が今一分からず、顔を上げたエリオは疑問符を浮かべる。
それに、後ろからシオンが頭をポンポンと叩いてやった。

「修復するよりは、新しいパーツに差し替えた方が早いんだろ？
で、バルムンクの封印が解けたらロスト・ウェポン化しようって訳
だよ。よかったじゃんか」

「じ、じゃあ直るんですか！？」
「正確には、直るのでは無く改造するが正しいかな？」

良子は苦笑。しかし、頷いてくれた。エリオはぱっと明るい笑顔を
を浮かべる。

「ありがとうございます」
「まあ、先んじてストラーダだけを向こうに送らせてもらおう事にな
る。だから、君の許可を貰おうと思ってね」
「はい、是非」

良子の言葉に、エリオは即答で返事を返した。
破損状態のままよりは、いち早く直して置きたいのだろう。

良子はエリオの元気のいい返事に頷き、続いてシオンへと視線を移す。

「さて、そちらはこれでいいとして——シオン。お前にトウヤさんから送り物だ」

「……？ 俺に？ トウヤ兄いから？」

シオンは思わず、疑問符を三連続。首を傾げ、？と言った顔となった。

そんなシオンに良子は呆れたとばかりに眉を潜めながらここまで引きずって来たトランクを前に出す。——何かと思えば、トウヤからの送り物だったらしい。

「お前が申請したんだろうが、追加の武装を」

「あ、そういやそうだった……。ついつい忘れてたよ……」

「——あんた、まだ何か装備あるの……？」

良子の台詞に、はっはっはと笑うシオン。そんな彼に、今度は横からティアナが訝し気な顔となって尋ねた。

今日の戦闘でシオンが使ったスローイング・ダガーを見ていたティアナからすれば、まだあるのかと思うのは当然である。

……実は、バトル・フォームのジャケットにはまだまだ暗器が仕込んでいたりもするのだが——。

それはともかく、シオンは笑いを苦笑に変えてティアナに向ける。

「今の俺は、火力不足もいい所だからな。武装の一つや二つは欲しい所なんだよ」

「……ふーん、まあいいわ。で？ どんなもののなの？」

「そいつは見てのお楽しみってな」

告げて、良子からトランクを受け取り、早速とばかりに中を開ける。

ティアナだけでなく、他の皆も何が出てくるのかと周りに集まって来て――。

――そして一同の目の前に、シオンの武装が現れた。



夜の空を二つの光が切り裂いて行く。

クラナガンの町を眼下に飛翔するのは、ユーノ・スクライアと伊織タカトだ。

二人は全く無言。視線すら合わせずに、クラナガン上空を飛んで行く。

――狂える獣よ――

やがて、二人はどちらともなく降下を始めた。

目的の場所に着いたからだ。そこは、クラナガンの周りに無数にある廃棄都市の一つ――今は誰もいない、人影すらない。ゴーストタウンである。

一咆哮し、叫び、歎き、怒れる者よ。ここに、その怒り、解き放つべし――

タカトはビルの一つへと先に降り立つ。それを見ながら、ユーノの身体を光が包んだ。

バリア・ジャケットである。ストラによる最初のクラナガン襲撃

時には状況の関係上、展開出来なかったそれを今回は展開したのだ。

翡翠の光が、眩ばゆく点り——次の瞬間にはすでにバリア・ジャケットの展開は完了していた。

緑を基調とした服装である。ただ、装甲等はついていない。身軽さを追求したタイプの、ジャケットであった。

ユーノはジャケットを展開完了し、そのままアスファルトの地面に降り立つと振り返る。

——自然、二人の目が合った。

月を背にするタカト。地面から見上げるユーノ。

二人はしばし互いを見遣る。まるで、互いを値踏みするかのよう——そして。

「……ユーノ。貴様はヴィヴィオと共にミッドチルダからしばし出ていけ」

「……………」

唐突に、そんな事をタカトは言い出した。本当はこんな事になる前に言いたい事だったのだろう。

前後の脈絡無く、告げられた言葉である。

ユーノは無言。タカトに視線を注ぎ続け——。

「……僕がこの喧嘩に負けたら、君の言う事も聞かす」

「いいだろう。拳で言う事を聞かせるのは、慣れている」

いつだって、いつの時だって、彼はそうして来た。

だからこそ言える台詞である。傲慢な、理不尽な——それでも、タカトのたった一つの訴えるための方法。

だが、それがユーノには堪らなく寂しかった。

こんな方法でしか、彼は人に何かを言う事も出来ないのか——。

だから。

「なら、君が負けたらどうする？」

「俺が？」

ふっ——と、タカトは笑う。そんな事は有り得ないと、その笑い
は語っていた。

主観的にも客観的にも自分とユーノでは戦力差がありすぎる。万
が一にも負ける事は有り得ないと。

そう言えば……。

「俺が負ければ、そうだな——何でも言う事を聞いてやる。貴様の
な」

……こんな約束、誰かともしていたな……。

一瞬、頭の中にある顔が浮かび、すぐに振り払う。
今は、考えるべきでは無い。

ユーノはそんなタカトを見つめ——やがて、ゆっくりと頷いた。

タカトもまた鷹揚に頷く。

「では、はじめ――」

「ところでタカト。君、なのはの事。どう思ってる？」

はじまりを告げようとするタカトを、ユーノの一言がいきなり遮った。

あまりに唐突な、あまりに意味不明な一言が。

タカトはその問いに、眉をしかめる。こんな時に何の意図か――。

「……質問の意味が分からんな」

「いいから、教えてよ。大事な事なんだ」

ユーノはあくまで答えを聞きたがる。その目は真剣なままだった。一体、どう言うつもりなのか……。

タカトは少し黙り込み、だがすぐに答えてやる。

別に内緒にする事でもなんでもない。自分は――。

「嫌いだ。あんな女――人の心の中にずけずけ入って来ては、いちいちこちらに介入しようとする。――放って置いてくれればいいのに、あくまで構って来る、あの無神経さが特にな」

――彼女の事が、嫌いなものだから。

まるで自分に言い聞かせるような、そんな言葉。それを、ユーノにそして心の中で一緒に告げる。

果たしてユーノはと言うと、そんなタカトの答えに黙り込み――

しばらくして頷いた。

「——そう、分かった」

「逆に聞かせろ。貴様はなのはの事をどう思っている？ 幼なじみだそうだが、真実それだけか？」

今度はこちらの番とばかりにタカトが問う。

一種の仕返しのためなりなのだろう——彼からすれば。

ひょっとすれば、動揺を誘う目的もあったかも知れない。

だが——。

「どうした？ 人に聞いたくせに、自分は答えられんか——」

「好きだよ」

ユーノは堂々と、タカトにそう答えた。

……一瞬、何を言われたか分からずタカトの思考が止まる。

今、ユーノは何と答えた？

そんなタカトに、ユーノは苦笑。そして晴々とした笑顔で告げる。

誰にも言った事は無い。誰かに相談した事すら無い。

本人にも話した事は無い。

大切な——大切な、たった一つの、自分の想いを。

「僕は、なのはを一人の女の子として愛してる」

世界中の、誰よりも——。

タカトは、そんなユーノの答えに。たった一つの大切な答えに、完全に自失した。

何も言えず、何も考えられず。ただ呆然とする。

ユーノは、そんなタカトを前にして腕を胸の前に交差させた。

だからこそ、だからこそ……！ この戦い！

「月と星の紋章を抱き、狂える戦士よ。喜びの野を制す、獣と成れ
」！

「っ！ ユー――」

はっと我にタカトは返り――構わずユーノは笑った。
それは、何ともユーノに似合わぬ笑み。

男らしい、笑いだった。

「――狂戦士^{バルセルク}ッ！」

負ける訳には、行かない――！

次の瞬間、ユーノの魔法が発動した。

二人の喧嘩が、はじまる――。

（中編2に続く）

第五十五話「男の戦い」(中編1)(後書き)

はい♪ S t S , E X お馴染みのいい所で終わり(笑)

いつもよりちょっと短いですが、勘弁を(汗)

いや、引きって大事だと思うんだよ。うん(笑)

……言い訳はこれでもいいとして、次回もお楽しみに♪ ではでは♪

第五十五話「男の戦い」 (中編2) (前書き)

さあ、ユーノファンの皆様。ついにユーノ解禁です！ (笑)

いや、このユーノ主役で一本書けね？ と何回思った事か (笑)

てな訳で中編2、どぞぞぞ♪

第五十五話「男の戦い」(中編2)

——ぎちぎちと、音が鳴る——

まるで、多数の虫がうごめくような音が。
その中で思い出すのは、かつての語らい。

『この魔法は——？』

『狂戦士(”ベルセルク)。そして、狂戦士(”バーサーク)です。……無限書庫で発見しました』

ぎちぎち、ぎちぎちと。

それは、どんな音よりも彼——ユーノ・スクライアの間近で響いていた。

『前者は古代ベルカ式、後者はミッド式の強化魔法の一種みたくで……特に狂戦士は聖戦士エインヘリアルと対を成す魔法みたいなんです。狂戦士はベルセルクをミッド式に術式変更した魔法みたいなんですけど——』

『それは分かりました。確かに狂戦士ベルセルクは古代ベルカ式の危険な魔法のようですし、こちらで術式を封印しましょう。……ですが、貴方が使いたいと言うのは……？』

『……後悔が僕には一つあります』

ぎちぎちぎちぎち、ぎちぎちと！

——当たり前である。その音は、他でも無い。ユーノの身体、そ

の内側から鳴り響いていたのだから。

『……僕は、あの時。なのは守れませんでした』

『それは——』

『その場に居なかったとか、そんなのはいいんです。……今でも考えるんですよ。僕が、なのはをこの世界に連れ込んだから、なのははあんな怪我を負ったんです』

ぎちぎちぎちぎちぎちぎちぎちぎちぎちぎちと！

筋肉が——否、”細胞の一片、一片が”膨張していく！ ユーノの身体を作り替えていく——！

それは、ヒトから別のモノへの変貌を意味していた。果たして、ユーノは気付いていただろうか。

人体改造とも言えるその魔法は、目の前に存在する友の使用術式、八極八卦太極図の特性にひどく似通っている事に。

自らを改造する——つまりは、”兵器と化さしめる”と言う一点において同一だった事に！

『今更過ぎた事だって分かってます。なのはが望んでこの世界に来た事も分かってます。——でも、僕が力不足だったせいで、なのはを巻き込んだ。それは間違い無い事だと思いますから』

『……だから、この魔法を……？』

『はい。大切な人を守るための力。……そして、大切な誰かを止めるための力。僕は、それが欲しい』

だから——。

『騎士カリム。僕にこの魔法。古代ベルカ、ミッド。ハイブリット術式、狂戦士（”バ”ルセルク）の術式開発を、許可して下さい』

音が、鳴る――！

「ユーノ、お前……！」

「お……」

タカトが目を見開いて呆然と呟く。それを聞きながら、ユーノは一つ息を吐き出した。

――見た目は何も変わっていない。だが、それは見掛けだけだ。その内側は、筋肉、骨、血管、神経――いや、人間の身体を構築する全ての要素が改造されている。

すでに、ユーノの身体は兵器のレベルまで押し上げられていた――。

片手を振り上げる。

拳を握り、ただ地面へと打ち下ろした。

それだけ、ただそれだけで――！

――轟！――

”廃棄都市が丸ごと陥没する！”

数十Kmの範囲に渡って地下の水路をぶち抜き、陥没したのだ。ただの拳の打ち下ろしだけで！

タカトが立っていたビルも盛大に傾く。……倒壊しなかったのは、

ただ運が良かっただけだろう。

いくつかのビルは基礎ごと破壊され、倒壊をはじめていた。

タカトは未だに呆然、ユーノを見続ける。そして、ユーノは――。

「おおオオオオオおおおおオオオオオオオオオオオッ！」

ミッドチルダ全域に響き渡らんばかりの咆哮を上げた――。



空気が、びりびりと震えた。

ユーノの咆哮でだ。それに対して、タカトは顔をしかめる――ユーノの咆哮は、すでにそれ自体が武器と出来うる威力と化していた。生半可な攻撃は、この叫び声だけで吹き散らされてしまうだろう。

――なら、間接的な声では無く。直接的に身体を使った場合は――。

長い咆哮を終えると、ユーノは膝を5Cm程曲げ、伸ばした。それだけ、それだけで。

ユーノは”音速を突破して、跳躍した”。

一撃！――

「!?　っが！」

超音速で跳躍したユーノは、そのまま頭からタカトに突撃。その

運動エネルギーを全て、タカトに叩き込む。

打撃を捨てて、ただ突っ込んだのである——驚いたのはタカトだ。その挙動から突撃出来るなぞ誰が思うものか。

回避も防御も出来ず、まともに突撃を受けてタカトは砲弾の如くすっ飛ぶ。——そして、悲鳴を上げる暇すら彼には与えられなかった。

タカトを弾き飛ばし、運動エネルギーを彼に預けたユーノは止まらない。

そのまま、身体を折り曲げて飛翔。空気をぶち抜いてタカトに追いつく。

吹き飛び続けるタカトが見たものは、左手を振り上げて追い続けるユーノの姿！

タカトに追いつくと、ユーノはそれをタカトへ放つ！

吹き飛ばされ続けるタカトに出来た事は、ただ両腕をクロスさせて金剛体を発動する事だけであった。

——轟！——

一撃がぶちかまされる。

タカトは直角に弾かれ、真下。地面へと叩き落とされる！ が、タカトは地面へとぶつかる直前で身体を回転。足から着地した。

空歩により、吹き飛ばされた一撃と着地の衝撃全てを地面全域に逃がす——が、それでも足元にはひび割れが生じていた。

ユーノの一撃、どれ程のものだったのか——。

タカトは両腕を見下ろして顔をしかめる。

金剛体により硬質化した筈の両腕は、しかしユーノの一撃によって激しい痺れを残していたのだ。

それが意味するのはただ一つ。ユーノが放った打撃は、Sランクオーバー……あるいは、SSランク以上と言う事であった。

これは、かのアルトス・ペンドラゴン並の威力である。

……狂、戦士。こんな魔法――！

タカトは聖戦士以上の戦慄を、この魔法に覚える。ユーノがSランクオーバーもの戦闘能力があったとは流石に思え無い。

そこまでこの魔法は、ユーノの身体を改造してしまったのだろう。――それが意味するものはただ一つ。術者の――。

そこまで考えた所で、ユーノが下りて来た。今度は右手を振り上げ、放つ！ ……だが、吹き飛んでいる時はいざ知らず、直立しているタカトがそんな大振りの一撃を受ける筈も無い。

僅かに後退し、振り下ろしの一撃を避ける。

ユーノの一撃は、ただ空を切るだけで終わった――そして。

「天破紅蓮」

地面に着地する前に、ユーノの顔面へとタカトは回し蹴りを放つ！ その足は紅蓮の赤に染まり――。

ユーノはそれを前に、右手を掲げた。”ミッド式の魔法陣を展開しながら！”

――爆！――

一壁！一

閃光が膨らみ、直後に爆炎となって世界に顕現する！

だが、タカトが見たものは紅蓮を放った蹴り。それにより碎けたシールドを発動した手で掴むユーノであった。

「な……ん、だと……！」

「驚くような事じゃない。僕は防御には自信があるんだよ——君の一撃を受け止められる程度にはね」

驚くタカトに、ユーノがぽつりと呟く。それにこそ、タカトは真に戦慄した。

この魔法、タカトが見た限りでは自我すらも失う魔法の筈だ。それが魔法を使う？ 話した？

つまり、自我を失っていない。

ユーノはユーノのままに戦っている——！？

「お前、意識が……！？」

「一番に改良したいのが、そこだったからね」

ユーノはさも当然と答える。

二つの狂戦士の術式を融合したのは、まさしくその為であったのだ。

極限とも言える肉体強化を、理性と魔法技能を保ったまま使えるようにする。

ただ、そのためにユーノは二つの術式を融合させたのだ。

それが、どれ程凄まじい事か——。

タカトは愕然とし、しかし呻きを上げると迷わず次の行動に移った。

足が捕えられている状況では、まともな打撃は出来ない。ならば――。

「天破、水迅っ」

一寸っ――

片足立ちの状態でタカトは右手をユーノに差し向ける。すると、そこへ水が対流し始め――無数の水系となりユーノへと殺到！
数千、数万もの水系は全方位からユーノに襲い掛かり。

「邪魔だああああああああああああああああああああああああああああああああっ！」

一轟！――

裂帛咆哮！

とんでもなく大きな叫び声がユーノから放たれ、咆哮は無形の衝撃波となって水系を、タカトを叩く！

水系は一瞬にして須らくちぎり飛ばされ、タカトは衝撃波をまともに受けてのけ反った。

鼓膜もやられたか――耳から血が流れる。

それは同時に、三半器官を激しく揺さぶられた事を意味して。

必然、タカトの身体はぐらりと傾き――ユーノは、そんな彼を右手一本で釣り上げた。

足を捕まえられ、更に平行感覚を一時的に失ったタカトは成す術なく、されるがままになり。

釣り上げたユーノ自身を飛び越えて反対側の地面へと叩き付けられる！

一撃！一

「か、は……！」

アスファルトの地面が爆砕した。タカトが叩き付けられた事によって。

その衝撃により内臓でもやられたか、タカトの口から血が零れ——ユーノは容赦しない！

更に反対側に叩き付け——。

一撃！一

一撃、撃、撃、撃、撃一

一撃！一

——止まらない！

幾度も、幾度も。ユーノはタカトを地面へと叩き落とした。

壊れた人形のようにタカトが宙を舞い、やはり壊れた人形のように地面に落ちる！

それは戦いと言うより、既に処刑のような有様となっていた。

ここまでくれば、勝負の行方よりタカトの安否を心配するだろう。

だが、ユーノは止まらない。

「……この程度か……！」

一撃！一

「……この程度、か……！」

一撃！一

「この程度かアッ！」

一撃！一

吠え、叫び、咆哮し、ユーノはタカトを地面に叩き付ける。

最後の叫びの部分で、ユーノは地面に叩き付ける事を止めた。代わりに横――地面スレスレのアンダーローでタカトをぶん投げる！

その投擲は初速から音速超過。先程が人形ならば、今度は砲弾の如くタカトは地面と平行に飛ぶ。

その進行上には、立ち並ぶ倒壊したビル群があり――。

一轟！一

タカトの身体がビル群に突っ込む！そして、無数にあるビルを貫通しながら進み。

「っ！」

目を見開いたかと思うと、タカトは空中でまたもや回転。ビルへと横に着地する。

音速超過の運動エネルギーを叩き付けられ、倒壊したビルが砕けた。

呆れた事にあれだけの猛攻を受けて置きながらタカトは平然と動いていた。

だが、ダメージが無い訳ではないらしくタカトはぐつと顔を歪め。しかし、すぐに上――本来は前を見据える。

果たして、ユーノの姿は間近にあった。タカトを投げ飛ばして即座に追撃を掛けたのか――。

それを見るなり、タカトは身体を翻して本来の地面に着地。拳を握り込む。

半歩を踏み込んだ。

同時、ユーノがぶつかるように拳を放ちながら突っ込んで来る！
タカトはそんなユーノに、握った拳を迷い無く放り込んだ。

ユーノの拳と交差するように、タカトの拳が彼の鳩尾に突き込まれる――！

一撃！――

浸透勁、打撃の衝撃を内部へと打ち込む打法には、改造された筋肉も意味を成さない。

ユーノは急所を打たれ昏倒する――筈であった。

”ユーノの腹筋が爆発的に膨らむまでは”。

次の瞬間、タカトは浸透勁によって放たれた打撃の衝撃を叩き返され。タカトの右腕は、拳と言わず腕ごと弾け散った。

ピンク色の肉片が散り、骨まで見えている。

それをタカトは愕然と見ながら、ユーノが何をしたのかを悟った。筋肉を瞬間的に膨張させて、打撃の威力を返しただと……!?

無論、本来このような事は有り得ない。筋肉を意識的に、爆発的に膨張でもさせない限りは不可能だ。そして、人間はそのような事が可能なようには出来ていない。

だが、ユーノの狂戦士——意識的に制御された極限の肉体改造は、それを可能にしたのである。

「この、程度、なのか……ッ！ 君の……!」

そんなタカトの驚愕に構わず、ユーノは彼の胸倉を掴んだ。引っ張り上げ、そのままの勢いで傍らのビルに叩き付ける!

— 撃! —

「つぐう!？」

「……チェーン・バインドッ! ストラグル・バインドッ!」

— 縛 —

叩き付けられた衝撃でタカトの口から再び血が溢れた。

だが、ユーノは構わない。その身体を鎖状の捕縛魔法と紐状の捕縛魔法——二つの捕縛魔法で拘束する。

単純捕縛魔法と、強化・変身無効化捕縛魔法。

いくらタカトでも普段無意識に全身に流してる強化魔法を無力化されては抜け出すのに時間が掛かるだろう。

そして、ユーノは直ぐさま後退。永唱する——それは、ストラがSt、ヒルデ魔法学院に現れた時に使った魔法。チェーン・バインドの強化版。

「サウザウンド・チェーンっ！」

—轟!—

叫びと共に、幾千もの鎖がユーノの足元から飛び出る！

それらは現れると同時に辺りへと散らばる——サウザウンド・チェーンを発動して何をしようと言うのか。

タカトはバインドをどうにか解除しようと、もがき……次の瞬間、恐ろしいものを見た。

「ふうふうう……っ！」

ユーノが千の鎖を丸ごと握り、頭上へと振り上げる。

まるで、釣りで大物を釣り上げるかのように——そして、釣り上げたのは確かに大物だった。

ビル。そこらに倒壊していたビルをユーノは釣り上げたのである。

”およそ、千もの”。

ずらりと、頭上に並ぶビルの葬列は天地逆さまとなった町を彷彿とさせた。

あまりの光景に、タカトは唾然となり――やはり、ユーノは構わない。

釣り上げたそれらを、纏めてタカトへと振り下ろす！

ビルの葬列が、音速超過で落ちて来た――。

――轟！――

――爆！――

――破！――

最初に起きたのは地震だった。

それこそ、ミッドチルダそのものを揺るがすような巨大な地震。そして次に引き起きたのは、爆発である。

――正確には爆発したかのように見える程の煙りであった。

音速超過で叩き付けられたビルは当然、全て砕けたのである。その破片が吹き飛んだ光景が爆発を連想させたのであった。

煙りが辺りに充満する――。その中でユーノは叫び続けていた。

――涙を、零しながら。

「この程度なのか……！ 君の想いは！？ 誰かを叩きのめして！

誰かを蹴散らして！ 誰かを踏み付けてまで叶えようとした君の想いは！ こんな程度のものなのか！？」

自分と、ヴィヴィオを助けるためにタカトはミッドチルダに来た——誰かを倒して、蹴散らして、踏みにじってまで！

そんな事……！

「そんな事！ 誰が頼んだって言うんだ！ ふざけるのも——！ 自分勝手なのもいい加減にしろ！ 誰かに迷惑かけてまで助けられたいなんて誰が思うもんか！ 君がやっている事は、ただの我が儘じゃないか！ 考えた事があるのか……！？ 殴られたら痛いんだ！ 蹴散らされたら辛いんだ！ 踏み付けられたら、悲しいんだっ！ それが、何で君は分らない！？」

怒号と共に吐き出される訴えは、止まらない。

煙りが次第に晴れて行く——それでも、ユーノは叫び続けていた。

友への、怒りを吠えながら。

「痛いかい……！？ それが、君が誰かに与えて来た痛みだ。誰かに与えてきた苦しさだっ！ 気付こうよ。そして、止めにしようよ……」

ようやく——ようやく、全てを叫び終えてユーノは荒い息を吐き出す。

煙りは、ようやく全て晴れ——その後には瓦礫の山しか残っていなかった。

ユーノの最後の一撃で、こうなってしまったのである。

他は全て、無くなってしまったのだ。

ユーノは悲しげに瓦礫を見つめ――直後。

一軌一

世界が、胎動するかのように軋んだ。
莫大な、怒りの気配と共に――！



所変わってイギリス支部、『学院』。鉄納戸良子の研究室。

良子から追加武装として渡されたトランクを神庭シオンは開け――
|。

――そして、一同は異様なものを見た。

「……何これ……？」

「だから俺の追加武装だって。いやー、頼んでみるもんだ」

ティアナがぽつりと呟く。それに、にんまりと笑いながら、口を
あんぐり開けた皆の前で、シオンは武装の一つを取り出す。――”
鉄塊”を。

……何、これ？

そんな考えがティアナだけで無く。もろに顔に出ている一同にシ
オンは名前を告げてやった。

「BIG—BENだ」
ビッグベン

そう、まるで黒い煉瓦のような”拳銃”の名前をシオンは告げた——。

BIG—BEN。

口径100。冗談じみた大きさの銃口を持つ拳銃である。

ハンドガンの弾丸としては、現存する最大の弾丸である0.5インチ弾の、”単純に二倍の口径を持つ弾丸”。その弾丸を放つためだけに造られた、ただそれだけの拳銃。

当然、実戦を想定して造られた銃では無い。

制作者が、ただ己の欲求——世界最強の拳銃を造りたいと言う欲求を満たすために造られた拳銃と言われている。

名の由来は、今シオン達が居るイギリス首都、ロンドンのウェストミンスター宮殿にある鐘から取られていた。

この銃は1983年に製作された幻の拳銃であり、この時造られたオリジナルは試し撃ちの段階で銃身にひびが入ったために破棄。その二年後に四丁の完成品が造られたと言われる。

今シオンが手に持っているBIG—BENは、その完成品を更にグノーシスの手によって改造したものであった。

言うならば、BIG—BEN（改）といった所か。

だが、その銃の本質はまるで変わっていない。

限りなく黒く、限りなく無骨な外見——飾り気と言うものを一切

合財排除したかのような、銃と言うよりは工具のような外見が、その全てを語っている。

何故、このような外見となっているのか——答えは、その口径にある。

あまりに巨大過ぎる口径のため、それに応じて銃身も大きくならざるを得ず。まだ発砲の際の衝撃を吸収する必要性から、どうしても肉厚な造りとなっているのである。

強度を増せば当然重量も増す。見た目は鉄の塊であった。

弾丸が二倍になった場合、その威力は単純に二倍になるわけではない。外周と重さに比例して火薬の量が増えるため、弾頭の破壊力は何倍にも跳ね上がる。

その威力は最強のハンドガンであるフリーダム・アームズ製のS Aリボルバー、454カスールをも軽く凌ぐ。カスールが人間の頭を木っ端微塵にするのならば、BIG-BENは人体を肉塊に変える。

その威力、推して計るべしであった。

だが、欠点が無い訳では無い——と言うより欠点だらけな銃であった。

まず重い、えらく重い、とんでも無く重い。

とてもでは無いが、普通の人間が両手で構えられる重さでは無いのだ。……よしんば構える事が出来たとしても、対象に弾を当てる事はまず不可能と言える。

また弾丸一つ一つが巨大なため、弾倉に装弾できる数が少なかった。装弾数、僅か四発。一発で対象を破壊できるとはいえ確実に当たる保証もなく、さらに敵が単独とも限らない戦場において、その装弾数は極めて命取りであった。

更に、回転式拳銃リボルバーにも関わらずブレードオープン式と言う異端な

造形をしていた。普通、強力な威力を持つ回転式拳銃は弾倉を横に出して弾を交換するスイングアウト方式が採用されている。しかし、BIG―BENはあまりに重量のある弾倉が繰り返されるスイングアウトに耐え切れ無いために、フレームを折って弾丸を装填するブレードオープン方式が採用されているのである。

本来ならば強力な弾丸を使用する拳銃に中折れ式を採用する事はまず無い話なのだ。フレームを折ると、銃の強度が落ちるからである。

そのためか、この拳銃は強度を上げるための頑強な造りと、中折れ式の銃身を確実に固定するフックを有していた。

そして、これが最も重大な欠点なのだが――当然、反動である。あまりにも強力すぎる弾丸は、発砲した際の反動もまた凄まじいの一言に尽きた。普通の人間の肉体では、その反動に耐えることは不可能だ。

一発撃つだけで、腕と言わず指を破壊される事であろう。

つまり、実戦うんぬんの前に撃つと言う段階からままならない拳銃なのであった。

――だが、それは”普通の人間に限る”――

「よっ、と」

シオンは身体強化を身体に張り巡らせると、BIG―BENを事もなげに構えて見せた。流石に片手とはいかないものの、真っ直ぐに構えられている。

後はバリア・ジャケットでも展開すれば、反動によるダメージは無くなるといっても過言では無い。

巨大な拳銃を構える少年の図は、どこか冗談じみた光景にも見え

た。

シオンは構えながら、横に居る良子に聞く。

「……流石に重いな……。試射していい？」

「ばっかっ。こんな所で撃つな！ 後で射撃所で撃って来い」

「へーい」

適当な返事をしながら、シオンはBIG―BENを下ろす――すると、じとーとした視線を感じた。

言わずもがな、ティアナである。彼女は何を言いたいのか――。

シオンは苦笑しながら、言う。

「……言つとくけど、地球で質量兵器うんぬんは通じねえからな？」

「分かってるわよ」

ぷいっとティアナはふて腐れたように顔を横に向けた。

そう、BIG―BENは立派な火薬式の拳銃である。

つまりは質量兵器に区分されるものであったのだ。

だが、今シオン達が居るのは質量兵器万歳な地球である。管理内世界による質量兵器保持禁止令は、管理内世界だからこそ通用する法律なのだから。

ちなみに余談だが、グノーシスは質量兵器とデバイスを合わせて持つ場合が多い。

これはただ純粹に使い勝手の良さを求めた結果であつた。とは言え、位階持ち上位位階者の殆どは質量兵器の類を持ち歩く事は無いのだが。

これはただ単純に、普通の質量兵器より魔法の方が強いためであ

る。

一応、グノーススでは射撃訓練が義務課題とされているため、殆どの人間は銃器を扱えるのであった。

閑話休題。

「さって、後は――。お、OICWもあるじゃん」

「OICW？」

「グノーススの一般正式採用小銃――アサルトライフルのこった。世間一般では、次世代兵器の代名詞なんだけどな」

不思議そうな顔をするスバルに、シオンは変わった形のアサルトライフルを取り出しながら笑った。

OICW――Objective――Individual――Combat――Weapon.

アメリカ陸軍が長年に渡って研究開発を続けていたものの、21世紀初等、ロサンゼルス・タイムスに詳細をスッパ抜かれて大騒ぎになった究極の対人銃。それが、シオンが新たに手にしたアサルトライフルの名であった。

未来銃の代名詞とも言われるレーザー銃は技術的には既に実用化の段階に入っている。――ミッドにおいて、ガジェットが普通に装備している事からも、それは明らかとなっているのだが。地球の実働部隊はこのレーザー銃の導入に難色を示している。

何故なら強力でも、その攻撃範囲は直線のみだからだ。このような兵器は、正面からの白兵戦でこそ効果があるのだが――現代の戦争では、そんな場面は皆無に等しいと言われる。

NATO軍がよくやるように、まず爆撃で敵戦力を根こそぎ奪い、しかるのち残党狩りをするために兵士を投入するのが現代戦争のセオリーなのだ。常に敵は物陰に潜んでいる。

そこで、より確実に、効率的に敵兵士を抹殺するために開発されたものが、O I C Wであった。

弾丸自体にある程度の軌道変更能力を持たせて、それを銃のレーザーで誘導するのである。

ミサイルと違って自動性が無いため、どうしても命中率は下がるのだが、弾頭を空中爆裂型にする事によって、敵を確実に仕留めると言う恐ろしい仕組みなのだ。例えば敵が塹壕の中にいようと、銃の誘導で弾道が歪曲し、敵兵士の背中で炸裂するのだ。逃げ場などある筈が無い。

敵兵士を確実に抹殺すると言う非人間性の理念により考え出された銃――B I G―B E Nとは対極とも言える銃であった。

しかも、グノーシス製のものは完全に小型化されている。現在試作されているのは、かなり大型であり口径は20mm。（ちなみに、B I G―B E Nは25・4mm。これより更にでかい）これはN A T Oアサルト・ライフルの約四倍にもなるだが、グノーシス製のものは口径も大きさも普通のアサルト・ライフルと変わらない程にまであっていった。

魔法技術と質量兵器に精通し、その道の天才集団が集まるグノーシスならでは、と言った所である。

シオンはそこらを説明しながら、こちらも構えて見る。

バランスも良い。グノーシスの開発部はいい仕事をしてくれた。

後で射撃所で試射しようと、そうシオンは思いながらO I C WをB I G―B E Nの横に並べる。

後残るは――。

「これか」

そう言いながら取り出したのは、一振りのナイフであった。鞘に納められたそれを、シオンは抜き出す。

鮮やかな白と赤のフィンガーガードに銀色の刃が現れた。

刃渡り30Cm程、片刃のアーミーナイフだ。

一見、普通のナイフ——しかし、当然。これも普通のものでは無かった。

と言っても、変な機能がついている訳でも無い。
魔法的な技術で強化された訳でも無かった。

ただ、その材質が問題であった。

オリハルコン——伝説の金属と言われる超金属で、そのナイフは鍛造されていたのである。

その強度は凄まじいの一言に尽きる。地球で最強の強度を誇る構造分子、カーボン・ナノチューブを超える程の強度を、その金属は有していたのだ。

加えて、錆が浮く心配も無いと来ている。

シオンが、このナイフに求めたのはただ一つ。頑丈さ、それだけに尽きた。

ともあれ、刀身を眺めすがめてシオンは満足したようにナイフを鞘に納めた。

「ふっふっふ、これで俺の武装は完璧だぜ。これからはフルアーマーシオンと呼んでくれ」

『『イヤ』』

笑いながら、シオンはそんな事を言い。当然の如く断られ、いじけたシオンは床に、”の”を書きはじめた。

そんなシオンに、ティアナは頭が痛いとはかりに額を抑えた。

「……一応言っとくけど、管理内世界で使っちゃダメだからね」

「お前が許可出してくれりゃーいいじゃん。確か、拳銃程度なら管理局に届け出たら使えんだろ？ 緊急事態適用って事で――」

「却下」

またもや、きっぱりと断られ。シオンは再び床に、のを。

それを尻目に良子がパンパンと手を打ち――。

「それじゃあ今日は解散。部屋も用意してある。明日に備えてゆっくりしてくれ」

『『はい』』

――シオンを放り出して、解散を告げた。

（後編に続く）

第五十五話「男の戦い」 (中編2) (後書き)

ユーノ、無双——！ (笑)

ええ、あのタカト相手無双かますユーノさん (笑)

そして、シオンサイドはシオンサイドで説明ばっかですみません
(汗)

スーパージュノタイム、さあどうなるか……。

次回もお楽しみに♪ ではでは〜♪

第五十五話「男の戦い」 (後編1) (前書き)

はい♪ テスタメントです♪

いや、超絶的にお待たせしました (汗)

申し訳ない……後編1をお送りします (汗)

まあ、諸事情がたらくあつたりするのですが、それは置いといて。

では、後編1どぞ〜♪

第五十五話「男の戦い」(後編1)

一軌！一

——世界が震える——

その震えをユーノは直に感じながら、ぐっと息を飲み込んだ。
世界の震えは、大気の震えをも誘発する。

その震えをびりびりと浴びて、彼は一つ思い出していた。

666は、出現の際に世界が軋みを上げる程の気配をばら撒いて現れる——それは、誰から聞いた事だったであろうか。

つまり、今の今までタカトは——。

……本気じゃなかったって事だ。

元よりタカトからすれば、敵対しているとは言え、ユーノは守るべき対象なのだ。

本気になる筈が無い——あるいは管理局やストラを含めて、本気になる程でも無かったと言う事か。

なら、これから見せるタカトは——。

そう思いながら、ユーノは一人微苦笑する。

ひょっとして、自分が初めてなのかもしれない。

あのタカトを、まぎれもなく本気で怒らせた人間は——！

—煌！—

直後、瓦礫の山から光柱が立ち上る！

それは、辺り一切合財全てを巻き込んで蒸発させながら上空へと伸びていった。

その威力、どれ程のものなのか。

戦慄するユーノ。そんな彼の前に、ゆっくりと光柱から歩いて来る影があった。

気配の主、伊織タカトが。

全身ズタボロである。バリア・ジャケットは、その至る所に穴が開き、ひきちぎられている部分も少なくない。

だが、当の本人はお構い無しだ。

先と変わった所はないようにすら、見受けられる——否。

一つだけ変わった所があった。視線だ。

先程は、まだ温かみがあった視線は今や絶対零度の冷たさを宿していた。

どこまでも冷たく、どこまでも鋭い、殺気を——。

「——謝罪しよう、ユーノ」

言うなり、タカトはこちらもやはりズタボロとなったフードに手を掛けた。

「貴様を舐めていた。怪我をさせぬように――殺さぬように戦おうなど、ふざけた思考をしていた」

言いながら、タカトはあらわとなつて左目でユーノを見遣る。狂戦士――その効果は、肉体改造だ。

本来ならば有り得ないレベルにまで自らの身体を作り替え、さらにそれを自己の意識で制御している――そんな魔法である。細胞レベルでの人体制御魔法と言った方が正しいだろう。

だが、その負担は当然細胞に掛かって来る。急激な細胞レベルでの改造に、その細胞自体が耐えられないのだ。だとするならば、狂戦士を発動したユーノは――。

この魔法を使ってまで、ユーノは俺と戦おうとした。

その覚悟、どれ程のものであっただろうか。

タカトには想像すら出来ない。

だが、一つだけ言える事があった。

そんなユーノに対して手加減をすると言うのは、侮辱するにも等しい行為と言う事だ。

だから――。

「ユーノ」

名を呼び、タカトはフードをひき剥がす！

バリバリと言う音と共に、ジャケットのフードは欠落していった。同時に、現れたのは今までずっと隠していた右目である。

赤より朱い、紅をともす右目――。

その両目で見据えられ、ユーノは目を見開いて凍りつく。
両目と共に自分を刺し貫く殺気に！

貴様の想いに――。

「……死ね」

――応えよう。

一撃！――

次の瞬間、ユーノの顔面が全く唐突に弾けた――！



「っが！」

な、ん――！？

突然、顔面に受けた衝撃にユーノは目を白黒させる。

一体何を受けたと言うのか――答えは自分の真後ろで拳を振り抜いたタカトの姿が物語っていた。

縮地、そして無拍子を持ってしての天破疾風。それを受けたのだ。

ユーノは振り向こうとして、それより速くタカトは動く！ その動きの何と速い事か、タカトは姿が霞む程の速度でユーノへと踏み

込む！

振り向こうとしたユーノは、死角に入られタカトの姿を見失い――

「っおおお！」

一撃！――

脇腹――肋骨の隙間に”紅に染まる”肘を深々と埋め込まれた。それが意味する所はただ一つ！……次に起きた現象にユーノは息を詰まらせる暇すら与えられなかった。

一爆！――

打ち込んだ肘から起きる爆炎！ユーノは至近距離で受けた爆発により、焼かれながら盛大に吹き飛び――タカトの猛攻はまだ止まらない！

炎の中で、タカトは左手を振るった。

「天破水迅」

一寸っ！――

直後、吹き飛ぶユーノへと全方位から水系が襲う！――今度は咆哮で吹き散らす隙も与えられなかった。

全身を水系が鞭のように打撃し、切り刻んでいく。

……こ、れが……。

更に水系はユーノの身体を縛り上げた。まるで、簡易のバインドである。

ユーノは呻きながらも何とか水系から抜け出さんと、もがく。今のユーノの臂力を持ってすれば、いくら相当の圧力を持って形成された水系であろうとも容易く解ける筈だった。

——タカトが何もしなければ。

次の瞬間、ユーノが見たものは間近で全身に八色の魔力を吹き上げながら、目の前に現れたタカトであった。

目が合う——どこまでも、どこまでも、冷たい目が。そして、彼は一言だけを呟いた。

天破無双闘舞。

その技の名を——！

一撃！——

——疾風が唸り。

一爆！——

——紅蓮が弾け。

一寸！——

——水迅が踊り。

一轟！一

——震雷が走る！

空中で吹き飛び続けながら、八極八卦太極図からなる天破の名を冠する打撃がユーノの全身に秒間数万と打ち込まれていく！

狂戦士により、強化された筈の細胞が”一斉に死滅”していくのをユーノは感じた。

こ、れが、タカ、トの全力——！

薄れゆく意識の中で、ユーノはそれだけを理解する。

たった、たった一瞬である。時間にして十秒も経っていないのにユーノはここまでのダメージを受けていた——狂戦士を使っていないがら！

狂戦士は細胞レベルでの肉体操作——つまりは、自己再生能力すらをも術者にもたらず。

だが、タカトの天破無双闘舞はそれすら許さずに逆に細胞レベルでの破壊を行っていたのだ。

めっちゃくちゃである。彼我の実力差があまりにも違い過ぎた。

「ぐ——っ！」

それでもと、ユーノはタカトの打撃を受けながら拳を放つ！

吹き飛びながらも狂戦士により強化されたユーノの打撃は通常の魔法を遥かに凌駕する。

さしものタカトも攻撃の最中に放たれた一撃はどうにも出来ない——。

だが、やはりタカトは——”本気を出した”タカトはユーノの想像を絶する存在であった。

拳が当たる——瞬間、その身体が消える。

縮地——！

そして、タカトが現れた場所は吹き飛ぶユーノの進行上であった。こちらに背から飛んで来るユーノにタカトは踏み込みながら、右拳を左手で包み右肘をかち上げる！

その先には、ユーノの後頭部——延髄があった。

「な——ぐっ！？」

一撃！—

一雷！—

放たれた肘が延髄を抉るようにして打ち込まれ、留めとばかりに雷が貫く！

ユーノは吹き飛んでいた全ての運動エネルギーと打撃、更には雷をも人体の急所に受け、びくんっただけ震えた。

その身は少しだけ浮き——やがて、地面に落ちる。
ユーノはそのまま、跪くようにして崩れた。

「あ、か……」

がくがくと、膝立ちでユーノの身体が震える。

限界以上の攻撃を受け、神経がやられたのである。

——あるいは、それは大したものであった。

本来ならば確実に死んでいる。そもそも天破無双闘舞は人間に使うような技では無いのだから。

だが、タカトは構わない。

風巻く右手を持ち上げ、ユーノを見下ろした。

ユーノは何も出来ない。見開いた目でタカトを呆然と見るだけであつた。

う、ご、け……。

見開いた目で——ただ震えだけを放つ身体で、ユーノは自分に命令する。

だが、神経すらをも破壊された身体はその命令を聞き入れない。

ただただ、震えるだけ——それでも。

……うごけ……、僕の——だろ。

ユーノは命じ続ける。

こんな所で終わるなど、本気を出した——自分とようやく本当の意味で向き合った友に何も出来ないまままで終わるなど許せる筈が無かつた。

だから動けと、動いてくれと念じ、命じ続ける。

——それでも、身体は動かない。

うごけ、よ……！　ようやく、ようやく、なんだ……！

ようやく——ようやく、タカトが自分に本気になったのだ。応えてくれたのだ！それに、自分が応えないで、どうする！

だから！

「終わりだ、ユーノ——」

うごけよ、僕の——！

「身体だろおオオオオ——————ッ！！！！！」

次の瞬間。タカトが天破疾風を放ち——！まるで、それに合わせるかのように唐突に振り向いたユーノの左拳が放たれる！

——！撃！——

そして、互いの顔面を互いの拳が貫いた。

「か、ぐう！ ユー……！！」

「ぐ、っう！ タカ……！！」

——破！——

二人はまるで示し合わせたかのように名を呼ぼうとして、しかし互いがぶつけた一撃の余剰エネルギーがそこで炸裂した。

無形の衝撃波が二人を貫く！

しかし、二人は一步でそれに耐えて見せた。

見遣る——タカトは驚きに目を見開いて。ユーノは睨みつけるように。

何故、動ける——そう、声に出さず表情で問うタカトにユーノは苛立ちを覚えた。ここで終われるわけが無いだろうと！

細胞分裂促進開始、肉体復元。

各神経接続、いっそ筋肉細胞と融合！

ぎちぎちぎちぎちと、ユーノの身体が狂戦士により再生——否、改造される！

ユーノは復元していく身体のままに、タカトへと踏み込んだ。思いつきり拳を叩き込む！

一撃！一

ハッと気付いたタカトは、その一撃をクロスさせた両腕で受け止めた。

何故、防御したのか——縮地を使えば回避は容易かった筈である。

それなのに、何故——。

自分でも分からない自分の行動に、しかし答えてくれる人間が居た。

目の前の友、ユーノである。

彼は言葉に出さず、ただ目でタカトに語る。

”これ”が”そう”だろう？ ……と。

タカトは、そのアイコンタクトを正確に読み取り——やがてフツ

と笑った。

両の拳を握りしめる――！　そこから吹き出るは風、炎、雷！

互いに一步、拳の射程圏に踏み込む。同時、二人の拳が唸りながら互いの身体に叩きつけられた。

――！ 撃！――

「がっ！」

「ぐう！」

真っ正面。逃げも隠れも技術すらも使わずに叩き込まれた互いの一撃に、二人は呻き――止まらない！　後ろに下がる事すらを己に許さずに、更に拳を放つ！

――！ 撃！――

一撃。

――！ 裂！――

十撃。

――！ 破！――

百撃！

後ろに下がらない、回避もしない――否、そもそも防御もしない！
二人はまるで、互いの拳にどれだけ耐えられるかのように、ただ拳を相手に叩き付け続けた。

ユーノが殴って笑う——そのまま、彼は自らのズタボロとなったジャケットに手を掛けた。

「熱っいねえ！ タカトオ！」

吠えるなり、ジャケットを引き剥がす！
上半身裸となって、ユーノは更に踏み込んだ。

「かっ！ 調子に乗りすぎだ！ たわけが！」

応えるかのように、タカトも自らのジャケットに手を掛け引き剥がす！

こちらも上半身裸となった。

それに、ユーノもにと笑う！ そして互いに引っ付かんばかりに顔に寄せ——吠えるっ！

「タカトオオオオオ——！！！」

「ユーノオオオオオ——！！！」

——！撃！——

再びの拳の交換。衝撃が世界を揺るがせ、しかし構わず二人は更に拳を叩き込みあった。

夜明けが近い。

それは、決着の訪れもまた意味していた——。



「――が――流す――涙――」

夜の空に、歌が流れる。

グノーシス、イギリス支部『学院』の屋上だ。

そこで少年が歌を唄っている。歌は伸びやかに、そして静かに広がる。

まるで海の波のようだ。高く高く高く高く、低く低く低く低く。

一フレーズごとに心を込めて歌が響く。

神庭シオンである。BIG-BEN等の試射を済ませた彼は、一人屋上で満天の空の下、歌を口ずさんでいた。

座り込んだ彼の歌が星を仰ぐ屋上に響いていく――と、いきなりシオンは歌を止めた。苦笑して、首だけを振り向かせる。屋上の入口へと。

「よう、いい夜だな。――でも、子供はもう寝る時間だぜ？」

「……気付いてたんですか？」

入口に居たのは、エリオ・モンディアルであった。

扉に隠れるようにしてこちらを見ている。そんな彼に、シオンは微笑んだ。

「そりゃーな。それでも気配とかを察するのは得意なんだよ。俺は」「はい、それは知ってます」

こくりとエリオは頷く。

シオンは、そんなエリオに笑って手招きする。

「俺に何か用事あんだろ？ 来いよ」

「……はい」

エリオは少しだけ躊躇い——でも、頷くとシオンの傍まで歩いて来た。

座るシオンの後ろに立つ。一緒に座ったりしない。ただ、立つだけ。

しばらく、エリオはシオンの背中を見て、やがてぽつりと呟いた。

「僕の事を——クリストファが話していた、僕の事を話しに来ました」

「いらねえよ。無理して話すこっちゃねえだろ」

シオンは即答、目も合わせず前を向いて答える。

だが、エリオは首を横に振った。ぐっと息を吞んで。

「……聞いて、欲しいんです。——シオン兄さんに……」

そう、シオンにただただ訴えた。本当に聞いて欲しいんだと、そう言うように。

シオンは無言。しばらく黙り込み——やがてエリオへと再び振り向く。

「……お前がそう言うなら、聞かさ。いいぜ、話せよ」

「はい——シオン兄さん」

「なんだよ？」

「ありがとうございます」

いきなりお礼。それに、シオンは眉を潜めた。

何故、このタイミングでお礼を言うのかと。

エリオはそんな彼に薄く微笑む。

「先に言っておきたかったんです。シオン兄さんに、ありがとうございます」

「……礼なんて言われても、何も出てきやしねーぞ」
「それでもです」

照れ臭いのか、シオンは顔を前に戻しながら憎まれ口を叩く。
でもエリオは構わなくて、そして――。

「僕は――僕は、本当のエリオ・モンディアルじゃありません。エリオ・モンディアルの記憶転写クローン体。コピー、なんです」

そうエリオは話しを始めた。自分の始まり――そして、自分の過去を。

エリオは少しだけ、笑みに苦いものを交えながら話し出した――。

何て事は無い、普通の家庭だった。エリオの幼少期は取り立てて言う事の程でも無いそんなはじまりであったのだ。

何の心配も、不安も、絶望も無い。

ただただ普通の幸せを、幼い自分は謳歌していた。

優しい父、優しい母。何の不自由もない生活。ずっと、ずっと続いていくと、そんな風に思っていた――その日が来るまでは。

『本当のエリオ・モンディアルは死んでいる』

突然現れた研究者とおぼしき人と黒いスーツを着た複数の人達は、そう自分達に告げた。

自分を無理矢理連れて行こうとして、それに必死に抗おうとしていた両親はその言葉に、そして次の言葉に崩れ落ちた。

『この子は記憶転写クローン体。プロジェクトFにより、作られた子ですね？ そんな事が、周りに――ましてや管理局に知られると、どうなります事やら。……もう、分かれますね？ 拒否権なんて無いんですよ、貴方達には。この子は貰って行きます』

エリオ・モンディアルの墓――”本当の”、エリオ・モンディアルの墓の写真と共に告げられた言葉に、母は泣き崩れ、父は下を向いて動かなくなり――そして、嫌がる自分を研究者達は強引に連れて行き。

……地獄の日々が始まった。

多分、民間の研究施設か何かだったのだろう。ただ違法な施設だったのは確かだ。

そこで自分は軟禁され――貴重な記憶転写クローン体”サンプル”として、様々な実験と研究を受けた。

何をされたのか、どんな事をさせられたのか。今では、その記憶も朧げ。

ただ――世界の全てが憎かった事だけは覚えてる。

自分の生まれ。勝手に自分を作って置きながら捨てた父と母。毎日のように、自分の身体に何らかの処置をする研究者達――全てが、許せなかった。

結局、一年で自分はそこから保護された。その保護した人物が、

同じ境遇を持つフェイト・T・ハラOWNであった。

……でも、自分は彼女すらも憎悪の対象とした。

「……今考えると、本当バカだったんですけどね」

苦笑する。シオンは、そんな自分を黙って見るだけだ。

だから、と言う訳では無いけれどエリオはあえて軽い口調で話す。フェイトに保護され、医療センターで治療されても、それが実験器具か何かにしか見えなかった。

だから、当たり散らした。魔力を電気に変換し、当たり構わず叩き付け、器具を破壊し、そして看護師や医者を傷付けた。

——そんな事を繰り返して、医療センターも匙を投げそうになって。でも、自分にはそんな事関係なくて。

「——あの時は、ただ悲しくて。自分の不幸を誰も分かってくれない。みんな、みんなみんな、……僕を、実験動物扱いしようとする人にしか見えなかったんです。そして——」

そんな自分の様子を聞いた、フェイトがやって来た。

その日の事を、自分は一生忘れる事は無いだろう。

『ね？ エリオ。だめだよ、あんまり暴れたりしちゃ……』

『うるさいよ……！ 関係ないだろうっ！ ”あんた”には！』

会いに来てくれたフェイトに、自分はそう怒鳴り散らした。

医療施設で、いつものように看護師や医療機器に電気をぶつけて。そんな自分に、彼女は優しく微笑みながら近付いて来た。

『関係なくないよ。私はエリオに幸せになって欲しくてあそこから

連れ出したんだもの』

『そんなの、頼んでないっ！』

あそこに居ようと、ここに居ようと、同じ事だ。

当時の自分はそうとしか思えなかった。向けてくれる優しさも、何もかもが疎ましくて仕方なかったのだ。

看護師さんも、お医者さんも、自分の事を考えて、何とかしてくれようとした筈なのに。

だから、フェイトの事も同じだった。あそこから連れ出した彼女も自分の事を何とも思っていない人間にしか見えなかった。

本当に、自分の事を考えてくれる人なんて居ないと思っていたから。——だから。

『あんただって……！ 僕のことなんて本当はどうでもいいくせにっ！』

そんな言葉を彼女に叩き付けて。

でも、フェイトはそんな自分に首を横に振ってくれた——手を差し出して……。

『どうしてもよくなんてない！ 私は——』

握って、くれて。だけど自分はそんな彼女を信じられなくて。

『さわんなああああああああああっ！』

——魔力を、暴発させた。

電気に変換された魔力は、何も防御手段も講じてないフェイトの手に炸裂。

彼女の手は、白くて柔らかだった手は焼け爛れて。

でも、フェイトは構わず何でも無かったように焼けて煙りを上げる両手を自分の手から離さず、逆に優しく握りしめてくれた。

『ね、エリオ。エリオが今、悲しい気持ちも、許せない気持ちも。私、きっと全部は分かってあげられない』

だけど、と彼女は続けて変わらない笑顔で自分に笑いかけてくれて。

『だけど、少しでも分かりたい。悲しい気持ちも分け合いたいって思う』

そう言って、まだ走る電気も、何も無かったかのように自分の両手を握りしめて振ってくれた。

『私もね。エリオと同じだったんだ』

笑いながら、少しだけ悲しそうな影がそこに浮かぶ。

けど、フェイトは決して笑顔を絶やさないで自分の事を語ってくれた。

『一番大好きだった人にいらない子だって言われて、失敗作だって言われて。……寂しくて、苦しくて、死んじゃいそうだった』

その事を、本当の意味で知るのはずっと後の事。

でも、彼女がとても悲しい経験をした事は――自分と同じだったと言う事だけは、言葉ごしにも伝わって来て。

『だけど。悲しいのは、ずっと永遠になんて続かないから』
『あ……』

そして、優しく抱きしめてくれた。

きゅっと、頭を抱えて自分の胸に抱きかかえて、彼女は続ける。

『楽しい事や嬉しい事、探していけば絶対に見付かるから。私も、探すの手伝うから』

温もりが伝わってきて、本当にそう思ってくれている事が、伝わって来て。

自分の涙を焼けた手で拭ってくれて。

『だからね、お願い。悲しい気持ちで、人を傷付けたりしないでね?』

そう言って、優しく微笑んでくれたのだった。

「……それで、正式に保護責任者にフェイトさんはなってくれて、本当にずっといろんな面倒を見てくれて」

とつとつと語るエリオの口端に、懐かしさが混ざる。

シオンはずっと、黙って聞いてくれるだけだ——でも、それが有り難かった。

「会いに来てくれるたびに、いつもにこにこして、嬉しそうで、いろんな事を教えてくれて、遊んでくれて——なのに、ワガママを言ったりもして」

苦笑する。彼女と、その使い魔であるアルフに遊園地に連れて行って貰った時。すごく楽しかったのに、閉園時間となって、もう帰らなきゃならないと言われて泣いてしまった。その時の事を思い出

してしまう。

「たくさん心配かけて、優しくして貰って。——それが、どれくらい幸せだったのか最近になって、やっと分かって来て」

機動六課の時にもいろいろあったけど。でも、キャロに会えて。皆に会えて、幸せで。

……でも、ずっとずっと、考えていた。

本当のエリオ・モンディアルが居たら、どうなっていたんだろうって。

フェイトや、キャロと会う事はあったんだろうか。

自分はどうなって居たんだろうか。

本当に自分は、ここに居ていいのか。

果たして、自分は——。

「……エリオ・モンディアルでいいのかって、そう思うんです。この名前を名乗っていいのかなって、そう——」

「エリオ」

そこまで言うと、唐突にシオンが自分を呼ぶ。

真っ直ぐに見つめ——やがて立ち上がると、エリオの前まで歩いて来て、そこで膝を抱えるように屈んだ。

エリオを下から覗き込み、告げる。

「これだけは言っとくぞ、エリオ。俺にとっちゃあ”お前がエリオだ”。本物のエリオ・モンディアルなんて知らねえしな。エリオって言ったらお前で、お前と言えばエリオなんだよ。……それだけは

忘れんな」

「……でも……」

「それでも迷いがあんなら、お前はお前になれ。エリオ・モンディアルがどうかじゃねえ。お前って言う人間になれよ。名前なんかに縛られんな。お前は堂々と、エリオ・モンディアルって名乗ればいいんだよ——そんなでな」

そうシオンは笑って、ぽんつと頭に手を置く。

エリオがきよんとするのも構わずに、そのまま撫でて来た。力強く、でも優しく。

「——泣くのを、我慢すんなよ？」

「……え？」

シオンの言葉に、エリオは疑問符を浮かべる。

何故、そんな事を言われたのか分からなかったのだ。

目を見開いた彼に、でもシオンは構わない。ぽんぽんと頭を叩く。

「泣きたいときは、泣けばいいんだよ」

「……僕は泣いたりなんか——」

「なら、なんでそんな泣きそうな面^{ツラ}してんだ？」

「……え？」

言われ、呆然とする。けどシオンは構わず続けた。

「タカ兄いの受け売りだけだな。——痛い時は、痛いって訴えりゃいい」

言いながら、頭を撫でる。

その感触が、やけに心地好くて。

「苦しい時は、苦しいって叫べばいい」

まるで心を解きほぐすような、その感触。

そして、言葉がエリオの耳に届く。

——ああ、そうだと心のどこかで声がした。

「泣きたい時は、泣けばいい。無理して笑ったりすんな。”傷”になるぞ——てよ？　な？」

そう、シオンが笑いかけた。瞬間——ぼろりとエリオの目端から涙が零れ落ちた。

「あ、あれ？　なん、で僕……？」

なんで自分が泣いているのか。

エリオは自問自答する。しかし、分からなくて。

変わりに、シオンがそれに答えてくれた。

「あいつに会って、嫌な事思いだして。……トラウマ刺激されて——我慢し過ぎだ馬鹿たれ。辛かったんだろ？　あいつにあんな風な事言われて、不安になったんだろ？　だったらそう言えばいいんだよ。辛いって、悲しいって、泣けば良かったんだ、お前は」

「……あ」

まるであの時のフェイトと同じ。

シオンはエリオの頭を抱えて、自分の肩に押し付ける。
片手で抱きしめたまま、頭を優しく叩いてくれた。

「泣けよ。胸くらいなら俺が貸してやる。——これでも、俺はお前の兄貴分を自称してんだ。カッコ付けさせろ」

「——っ。ふっ、くっう……！」

少しだけ、エリオはその言葉に笑って。

でも、すぐにそれは嗚咽に変わる。エリオはシオンの肩に縋り付き——。

「う、あっ！ あ、あ、あああああ————っ！」

大声で泣きはじめた。

シオンはそんなエリオに微笑みながら、抱きしめた頭を絶えずぽんぽんと叩く。

——イギリスの夜空の下。満天の星が優しく見守る中で、少年の泣き声だけが辺りに響いた——。

（後編2に続く）

第五十五話「男の戦い」 (後編1) (後書き)

はい、タカトとユーノが熱い熱い (笑)

しかし、やはり男の喧嘩はこうあるべきでしょう♪

ところで、エリオの両親ってどうなってんだろ？ と気になって
みる (笑)

では、後編2にて再びお会いしましょう♪ ではでは〜♪

第五十五話「男の戦い」(後編2)(前書き)

お、お待たせしました……。

いや、すみません(涙)ちょっと更新サボっておりました(汗)
理由はいろいろあるのですが、やはり気が咎めた。と言うのが一番
でしようか……。

『蒼の魔神』とか、もろに海の話ですしね……(汗)
てな訳で、第五十五話。『男の戦い』決着です! どうなるか――
!。

では、第五十五話。どぞ〜♪

第五十五話「男の戦い」(後編2)

グノーシス・イギリス支部『学院』の屋上に風が吹く。柔らかく、しかし肌寒い風だ。

それを感じながら、シオンは胡座をかけた膝の上で眠る少年の頭を撫でてやった。

エリオである。先程、昔話を語り、そして全てを話し終えた少年はこれまで泣かなかった分、全てを吐き出すように思いっきり泣き――泣き疲れて、眠ってしまったのである。

シオンは苦笑しながらも、エリオを退かそうとしない。

ただ、このままでは風邪を引きそうなので、自分の上着を掛けてはやったが。

本当なら起こすなり、部屋に運ぶなりしてやるのが普通だろうがシオンはなんとなく、そうするのに躊躇いを覚えていた。……何故なのかは、彼自身も分からないのだが。

「やれやれ……タカ兄いとかトウヤ兄いも、こんな気持ちだったのかね……」

そう思い、表情に苦いものが混ざる。だけど、あくまでもその顔は優しく。……シオンは気付いていないが、その顔は、どちらかと言えば義姉のルシア・ラージネスや、母の神庭アサギに近いものであった。

父性と言うよりは、母性に近いものなのであろう。……多分、指摘されると全力で嫌がるであろうが。

と、そこでシオンはエリオが小刻みに震えている事に気付いた。寒いのかと、シオンはエリオの顔を覗き込むが、すぐに違う事に気付く。

エリオは唸されていたのだ。泣きながら、シオンのズボンを力いっぱいに掴んで何かに抗うかのように。

悪夢でも見ているのか――シオンは再び思う。この少年は、どれだけの闇を抱えて生きて来たのかと。

……これから先、その闇をどうやって抱えて生きていくのかと。

シオンには想像しか出来ない。……結局の所、全部分かってやる事は出来ないのだ。分かった気になるなんてのは、多分すごく傲慢な事だから。

彼の過去を聞いて、でも、それだけで心の傷が癒える筈も無いのだ。

だから、シオンはただエリオが夢の中だけは安らぎを得られるように祈る事しか出来ない。

だけど、エリオは泣き止まなくて。

どうすればいいのか、シオンは迷う。こう言う時、異母兄や義姉、母はどうしてくれていたのか――すると、あっさりと答えは出た。

シオン自身呆氣に取られる程に、容易く。

それは、シオンの幼少時――まだ、泣き虫だった時に家族全員がしてくれた事だったから。

――トウヤはその時、ピアノを聞かせてくれた――

――タカトはその時、美味しいお菓子を作ってくれた――

――ルシアはその時、楽しい物語を聞かせてくれた――

――アサギは、その時――

「君がー、流すー涙……」

するりと、唄をシオンはそらんじる。ほとんど無意識にだ。

先程歌っていた唄である。これは、トウヤの恋人、ユウオ・A・アタナシアが教えてくれた歌だ。

綺麗な歌だった事を良く覚えている。歌詞が頭を過ぎり、口が勝手にそれを紡ぐ。

そう、母はよく自分に子守唄を聞かせてくれたのだ。……この歌は、子守唄とは言えないが。

シオンは僅かに苦笑し、でも唄を止めない。エリオの頭を撫でながら、むしろ声を高く上げた。

目を閉じ、心からの唄を奏でる。

……それは、ある意味この場、この時に最も相応しい歌であった。彼の涙を止める為の歌。だからなのか、それは優しく、屋上に響いてゆく――。

そして、それはまたシオン自身を指す歌でもあったか……まるで、自分の事のような歌詞にシオンは歌いながら、微苦笑する。

あるいは――それは、誰しもを指す歌であるのかもしれない。

迷い生き、そして世界に溢れる想いに気付けないのは、やはり誰もが同じなのだから。

星空の下で響く歌声はただただ優しい。

気付けば、エリオは泣き止んでいた。安らかな寝息を立てている。シオンはそれに嬉しそうに微笑んで、もう一度膝の上で眠るエリオの頭を撫でてやり、唄を続けた。

彼が眠れるように、夢の中だけでも安らげるように。弟分への、歌は続く――。

……タカ兄い、今、アンタは何してる……？

歌いながら思い出すのは、敵となった異母兄の事だった。
兄貴分になってみて初めて分かる。彼の気持ちを。
守りたいと想い、守りたいと願い——守りたいと、祈る。
そんな、そんな気持ちを持っていたが故に敵となったタカト。
遠く、ミッドチルダで一人居る筈の、あの兄は見つけられたら
うか。

自分にとって、エリオのような存在を——守りたいと願える存在
を。

——ずっと——

……見つけられたのだろうか——。

シオンの歌は響く、学院に、世界に——優しく、優しく月明かり
の下で響いてゆくのだった。
遠く、ミッドに居る兄に届けとばかりに——。



「おおおおおおおおおお……っ！」
「ああああああああ……っ！」

——撃！——

莫大な威力を秘めた拳が、互いの顔面に炸裂する——！
ユーノ・スクライアと伊織タカト。二人の凄絶な殴り合いは夜を
徹して行われていた。骨身に響く一撃に、爆弾でも炸裂したかのよ

うな音が互いの顔から響く。

しかし、それでも二人は止まらない。次撃を構え、ただ相手へと速く打ち込む事に両者の考えは終始していた。

一撃！一

再びの激突。拳が唸りを上げて、互いの身体に打ち込まれる。

呻き声を上げ——しかし、やはり止まらない。二人はすぐさま腕を跳ね上げる。まるで、鏡映しの虚像のように二人は同じ動作で動き、互いの指を組ませてがっぷりと四つに組み合った。

「くぐううう……！」

「ぬうううう……！」

ぎり、と二人の身体が軋みを上げる——。単純な力比べだ。それ故に、ユーノもタカトも退かない！ 組み合う両腕が血管を浮かべて筋肉が膨れ上がった——しかし、単純な力比べでは狂戦士を発動中のユーノの方に分がある。

ゆつくりと、だが確実にユーノの腕はタカトを押し退けていった。

「パワーなら、僕の方が上だ！」

「パワーだけならばな！」

ユーノが吠え、タカトが応える。次の瞬間、ユーノは得も知れぬ妙な感覚にゾッと悪寒を覚えた。力比べの手応え——つまり、タカト側からの力の一切が消失したのである。

化勁——中国拳法における、力を無効とする技能だ。これを聞くと、普通は打撃の威力を腕を独楽のように回す事で逸らして無効とする技だと勘違いされやすいが、化勁の本質は体術による力全ての無効化である。タカトが行ったのは、重心の変化を巧みに使い、膝

をわざと浮かして力を逸らす方法の化勁であった。

結果、ユーノは前のめりに体勢を崩しそうになって、慌てて踏み留まる――が、その隙をタカトが見逃す筈も無い。

組んだ両腕を引き剥がし、ユーノの腹に拳を叩き込む！

一戟！一

「がっ！　　っう！」

鳩尾深くに打ち込まれた拳は、狂戦士の防御を撃ち抜いて直撃。

更に、その拳には暴虐なまでの風が詰め込まれていた。台風に匹敵する風圧が解放、炸裂！

一爆！一

天破疾風――タカトが最も信頼するその一撃に、さしもの狂戦士を発動中のユーノも意識が飛び掛けた。しかし、ぎっと歯を噛み締める意識を無理矢理繋ぎ止め、ユーノは右拳を振り放つ。それをタカトはあえて避けずに、正面。額で受ける！

一轟！一

大質量の物体が弾けるような音がした。

ユーノは目を見開き、タカトは口端を歪め、笑う――直後。

「ぬうおらあああああ！」

「ぶ、あっ！」

一撃！一

これまでで、最大威力の拳がユーノの顔面に炸裂！

ついにユーノはその場から吹き飛び、地面を平行に飛んで瓦礫の山に突っ込んだ。それを見てタカトは一つ息を吐いて、くらりと揺れる頭を抑える。

流石に狂戦士の一撃を額で受けたとは言え、全くの防御抜きは堪えたらしい。……ちなみに常人ならば――否、高レベルの魔導士でさえ障壁ごとミンチになっている威力の打撃である。それに耐えたタカトの頑丈さは並では無い。

それでもやはり、狂戦士による打撃を受け続けたダメージで彼は息を荒げる。タカトはぐっと息を飲んだ。

「ユーノ……？」

「……う、あ……」

タカトの声に呻き声上がる。ユーノだ。彼は瓦礫の山から這い出て来ると、虚な表情でタカトを見る。その目に、力はない。

タカトは怪訝そうに眉を寄せ――ユーノの身体から発せられていた魔力が消失している事に気付いた。……すなわちそれは、”狂戦士の解除”を意味する。つまり――。

「あ……、あ……、あああああああああああああああああああああああああああっ！！！！！」

一巻一

ユーノが悲鳴を上げ、その身体からびきりとガラスが軋むかのよな音が響く――その表現はどこまでも正しかった。

ユーノの身体に至る所から、ひび割れが生じる！そして、ユーノは前のめりに崩れ落ちた。

「あ、あ、あ……」

……あれは狂戦士の副作用、反動だ。

先のタカトが放った天破無双鬨舞のように――否、その数倍のレベルで細胞が死滅してしまっている。

——こうなつては、もう、ユーノに待つのは……。

「ユーノ オオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オっ！！」

叫び声を上げてタカトはユーノへと駆ける。もう、喧嘩がどう等
 と言っている場合ではない。このままでは、ユーノは確実に死んで
 しまう！

だけど、それに対してユーノはぎろりと倒れたままタカトに目を向けた。

「こつち……！ 来るなああああああああ！」

ユーノの咆哮に、タカトは思わず、その場に踏み止まった。目を見張り何故、とユーノに見開いた目で語る。だが彼は構わない。今にも、碎けてしまいそうな――実際、所々が崩れて地面に落

ちていた――身体で、無理矢理立ち上がる。ひび割れは顔にまで及び、頬から顔の半分までひびが走っていた。

ユーノはそのままの状態でくすりと笑う――。

「……まだ、まだ終わっていない……そうだろう……？」

「そんな事を言ってる場合か――」

「――終わってないんだよ、タカト……」

終わっていないと――そう言うユーノにタカトは反論し、しかしユーノは被せるようにして首を横に振った。

さらに拳を振り上げる。崩れ落ちて行く身体で、弱々しく震えながら、それでも、力強く！

タカトはそんなユーノに何かを訴えようとして――だが、ぐつと呻くようにして堪えた。

ユーノが今、命を零しながら、それでも何かを成し遂げようとしている事を理解したから。

……決着を付けるまで、ユーノは止まらない――。

押せば倒れそうなユーノに、しかしタカトはそう確信する。

今のユーノは絶対に止まらない。何があるうとだ。身体を断たれようと、もがれようと、潰されようともユーノは止まらないだろう。それくらいはタカトにも予想出来た。なら、どうすれば良いか――決まっている。

「ユーノ……決着を、付けよう」

「……うん」

タカトの、決着宣言――それに、ユーノは笑って頷く。

そして、ボロボロの身体で両腕を構えて見せた。――走る！ タ

カトに向かつて！

タカトは悲痛な表情で走るユーノを見て、しかし一瞬の後には覚悟を決める。

両腕を浅く広げ、魔力を吹き上げた。

―守りたい、孤独に囲まれ―

―悲しみに、揺れる心を―

ユーノは嬉しそうに笑いながら、崩れ落ちていく身体でタカトへと走り、語り掛ける。

「……覚えてるか……タカト……？ 約束を……？」

「……俺に勝てたら、何でも言う事を聞くと言うアレか……」

「そう……今、決めたよ……」

問いに答えてくれる――そんな義理は無い筈のタカトに、ユーノは笑みを苦笑に一瞬だけ変じて、それでも前へと踏み込んで飛び上がる！

驚いたのはタカトだ。ユーノの身体は、それこそ立ち上がる事すらが奇跡のような状態なのだ。そんな状態で飛び上がるなど、正気の沙汰では無い。

実際、ユーノの身体に更なるひび割れが走った。だが、ユーノは自分の身体にどこまでも構わない！ タカトへと拳を放つ――！

「タカト、君はあ――！！」

「っ。ちいっ」

一瞬、呆然としていたタカトだが、迫り来る拳に我に返ると返しの拳を放つ！

カウンター狙いで放たれる拳は、ユーノが放った拳と交差し――。

「くあっ！」

「っ！？」

その瞬間！ ユーノは拳を開いて、放たれたタカトの拳を掴み取る。更に！

「チェ――ン・バインドっ！」

――縛――

自分の右腕ごとタカトの左拳を封縛する！ いかなタカトと言えど、これでは無理矢理引きちぎる事は出来ない。

だが、まだタカトの拳は残ってる！ 彼は右拳を引くと、迷い無くユーノへと撃ち放った。そして、拳に巻くは暴風！

天破疾風、その一撃をユーノが防げる手段はもう無い。

狂戦士は終わり、身体は崩壊を起こして、シールド等を使える間合いでも無い。

これで、終わりだ……。

暴風巻く拳は真っ直ぐに、ユーノへと打ち込まれ――。しかし、ユーノは高らかに吠える！

「――狂戦士っ！」

「なっ！？」

――撃――

暴風巻く拳が炸裂し、辺りへと爆発的に風が吹き荒れた。……だが。

タカトの拳は、ユーノの左手——”二度目の狂戦士”を発動した左手により包まれ、止められていた。

天破疾風と言えど、パワーだけならば狂戦士を発動したユーノに叶う筈もない！

拳を止められ、愕然とするタカトに構わず、ユーノは再び強化された腕でタカトの腕を開き、思いつきりのけ反った。

タカトは理解する——ユーノの狙いは最初からこれだったのだと。防御も回避も出来ない状態にした上で一撃をぶち込む！　それが、ユーノの——！

「タカトおオオオオオオオオオオオ……っ！　君はああアアアアアアアアアア！」

「ちい！」

迎撃、間に合うか……！

のけ反った状態から、一気にユーノが頭を振り落とす！

頭突き——。両腕を共に封じたユーノの最後の攻撃だ。これを止められたならば自分が勝つ！　タカトはそう確信し、蹴りを放とうとして。

「”なのはの事を好きになれえっ！！”」

——その言葉に完全に我を忘れて自失し——

一撃！——

その顔面、中央へとユーノの頭突きが叩き付けられ、タカトは盛大に地面を転がったのであった――。



「はぁ……っ、はぁ……っ」

荒げた息で、時折走る激痛に顔をしかめながらユーノは地面に大字となつてぶつ倒れたタカト見る。

鼻でも折ったか、その下を血の赤で染めてタカトは空を見たまま動かない。やがて、ぽつりとタカトが呟いて来た。

「……馬鹿なのか、お前は……」

そんな、そんな言葉を。

ユーノはタカトの台詞に、朦朧とする意識にも関わらずムっとした顔となった。

「……何で、……僕が、……馬鹿なのさ？」

「これが馬鹿と言わずに何と言えがいい？　なのはの事を、お前は好きなんだろう？　なのに、俺になのはの事を好きになれ？　意味不明にも程があるだろう……。わざわざ恋敵を増やすつもりか……？」

「……どうなんだろうね……？」

タカトの疑問に、しかしユーノは答えず、疑問で返す。タカトは漸く視線をユーノに向け――思いつき睨む。だがユーノは、そんなタカトの反応にむしろ微笑んだ。その反応が楽しいと言わんばかりである。

ますますタカトの視線はきつくなり、ユーノは参ったとばかりに両腕を上げた。

「……嫌、……だったんだよ。……君が、なのはの事を……嫌いだって言うのが……」

「……何故だ？」

「……さあ？ ……なんとなく、かな……？」

無理矢理肩を竦めるユーノは本当に自分でも分かっているのだろう。

態度がそれを物語っている。タカトは、脱力して首を落とした。

……地面に後頭部がぶつかり、地味に痛い。その痛みか、はたまたユーノの態度にか、タカトは苦笑を漏らす。

そして、再度こう言った。

「馬鹿め」

「馬鹿、……じゃなきゃ、……君と……真っ向から……喧嘩しようなんて……思わないよ……」

眠たそうなユーノの返答、全くもって正論である。

よくよく考えれば、自分と正面からタイマン。しかも、ほとんど無策でやりあったのは、トウヤ以来では無かろうか。

タカトはその事実——そして、”この喧嘩の勝敗”に苦笑を深くした。

喧嘩は、最後まで立っていたものが勝者である。

「馬鹿には敵わん」

そして、ユーノは立っていてタカトは寝転がっている。つまり――

「ユーノ、俺の負けだ」

自らの敗北を認める台詞を聞きながら、ユーノは疲労と狂戦士の反動で意識をぷつぷつりと失ったのであった。



夜空に響く歌が止む――。シオンは唄い終わり、もう一度膝の上で眠るエリオの頭を撫でてやった。

先程うなされていた時とは打って変わり、すやすやと安らかな寝息を立てている。そんなエリオに、シオンは口端を緩め――。

「……で？　そこで覗き見している奴らは何の用なのかな？」
『『ぎくっ』』

シオンの発言に、とてもとても分かりやすい答えが来た。

シオンは薄っすらと笑いながら、首だけを振り向かせる――危険信号だ。シオンに限らず、この異母兄弟達は怒っている時に笑うと言う共通の癖がある。

―ブレイド・――

「て、ちょっと!？」

「わー!　ま、待って待って!」

「し、シン君止まって下さい!」

いきなりキー・スペルが聞こえた時点で屋上の入口から三人が泡を食って出て来る。

上から順に、ティアナ、スバル、みもりだ。

シオンは彼女達に、それはそれは冷たい目を向ける。その視線に、彼女達は一斉に冷や汗を流した。

いつもと完全に立場が逆である――まあ、覗き見なんぞされたら誰しも同じ反応をするだろう。しかし、そこはシオン。彼は我慢はしないタイプの人間であった。

「……盗み聞きたあ、いい度胸だなー、おい」

「え、えーと。ち、違うんだよ？ シオン」

「……ほー、何が？」

「その、ほんのちよつと気になっただけなんだよ……」

「……それが盗み聞きじゃなくて、なんだっつーんだよ？」

「……あれ？」

「「スバル／スバルちゃん、は、黙ってなさい！／黙ってて下さい！」」

見事に自爆してくれたスバルに、シオンの視線の温度が二度程下がった気がした。――ちなみにBIG BENを普通にシオンは携行している。

まさか発砲したりはしないだろうが、それでも怒らせると非常に怖いのがシオンなのだ。

どう言い訳したものと、ティアナとみもりが冷や汗を一層流しながら考えていると、シオンはふうと息を吐いて視線を和らげた。

「……ま、いいか」

「そ、そう？ なら良かったわっ！」

「う、うん！ 流石シオンだよっ！」

「シン君太っ腹ですっ！」

「……後で、お前達三人で俺の飯奢りな？　今から財布の心配してろ」

ぎゃー！　と、三人揃って悲鳴を上げる。前衛組――しかも、戦った後のシオンの食事は半端では無い。スバル級に喰らうのだ。

……三人共、今月の財布は非常に寂しくなりそうであった。ともあれ、シオンはふうと息を吐くと視線をエリオに戻す。しばらくじっとエリオを見つめ、やがて、後ろでしくしくと泣くスバルとティアナにぽつりと呟いた。

「……お前らは、エリオの事情、知ってたのか……？」

「え？　あ、うん。六課時代に、エリオが話してくれて――」
「その時は、ふっ切れてる感じだったんだけど、ね……」

スバルとティアナは言いながら、エリオへと視線を落とす。少年の目端には、まだ涙の後が残っていた。その事に、二人は息を少しだけ飲む。

「……エリオが泣いてるとこ、はじめて見たわ」
「だろーな」

シオンはあっさりと頷く。そんな彼に、三人はきよとした顔となった。

だがシオンは、そんな三人に構わず、エリオの頭を撫でてやる。

「……男、なんだからな。格好くらいは付けてーだろ」

「そんなもののなの？」

「そんなもんだよ」

スバルの疑問に、シオンは笑って頷く。けど、やはりスバル達は

微妙に納得行かないと言う顔をしていた。

無理もない。シオンが理解したのは、男の意地とも呼べるものなのだから。女性に理解できる筈も無い。

シオンは笑みを苦笑に変えて、一度だけふっと息を吐き——やがて、何かに気付いたように怪訝そうな顔となった。スバル達に再度振り向く。

「そーいやキャロは？ お前達と一緒に覗き見してたろ？」

「あ、さっきまでは居たんですけど——」

「そう言えば、そうだね？ どこ行っただろ……？」

「て言うか、あんた。キャロにも気付いてのね……」

「んな事はどーでもいいんだよ。あいつ病み上がりなのに——」

一同、疑問符を浮かべる。しかし、キャロが出て来る筈も無く、彼等の疑問はそのまま取り残される形となったのであった。

——そして。

『学院』の廊下を走る小柄な影があった。

キャロ・ル・ルシエである。彼女は必死に走り、やがて息が切れたのか荒い息を吐きながら、その場に立ち尽くした。

——なんで彼女は去ったのか。それは、彼女自身にも分からなかった。

だけど、シオンに見つかった瞬間、その場に居ても立ってもいられず走り出してしまったのである。

胸を焦がす、焦燥に駆られて。

「なんで……！ 私、逃げて……！」

自問自答する。けど、答えは出ない。

ただ、何か。暗い、暗い、何かが胸の奥底にあった。

シオンを見て、そして彼に泣きつくエリオを見て。キャロは、何か嫌な気持ちとなってしまうたのである。

何故、何故、何故――。

――分からない。

何故、自分はこんなに嫌な気分になってるのか。

何故、自分はある場から逃げてしまったのか。

何故、エリオはシオンに――。

「あ……」

そこまで思い至った瞬間。キャロはこの感情の正体に気付いた。

エリオは一度も、あんな風に泣いてくれた事は無いのだ。泣く姿を見せてくれた事は、無い。

……それはつまり、自分はシオンより信頼されていないと言う事じゃないのか？

そう、キャロは――。

「……私、最低だ……」

シオンに、嫉妬していたのだ――。

一日が終わる。イギリスに着いた初日が、漸く終わろうとしていた――。

（第五十六話に続く）

第五十五話「男の戦い」 (後編2) (後書き)

「ユーノの勝利で終わる喧嘩。そして、負けたタカトは――」

「しかし、決着がついた二人の前に現れるのは新たな存在。グノーシス、元第二位であった」

「彼の存在に、タカトは。そして、ユーノが、まさかの」

「次回、第五十六話

『喪失^{うしな}ったもの』」

「『奪わないでくれ!』その叫びは違う事が無い本心。『これ以上、俺から、何も……! 奪わないでくれ……!』その、訴えは――」

第五十六話「喪失ったもの」(前編) (前書き)

「たくさんのものを失って来た」

「ここまで生き続けて来て、でもその分だけ何かを失い続けて来たと思う」

「強くなればなる程、大切な何かはするりと両手をすり抜けてなくなっていく」

「……そう、俺はいつも。いつも、そうだ」

「俺は、大切な誰かをいつも傷付ける――」

「魔法少女リリカルなのはStS，EX。始まります」

第五十六話「喪失ったもの」(前編)

「う……」

眩しい日の光を感じて、ユーノは目を薄ぼんやりと開けた。
そこに映るのは、ミッドの青い空。そして、自分を仏頂面で見下ろすタカトであった。彼はフンと、一つだけ息を漏らす。

「……ようやく起きたか、たわけめ」

「タカーっ！」

起き上がろうとして、しかし全身に走った激痛にユーノは身悶える。身体中に電気が走ったが如くの痛みだ。

地面を転げ——しかし、その衝撃で再び激痛が走ると言う二重苦。ユーノは声も無く、ぷるぷると震え——やがて、痛む身体を刺激しないようにゆっくりと起き上がった。

「……い、痛たたた……！ な、何なんだ、この痛み……！」

「狂戦士——その反動だ」

「え？」

涙目となりながら呟いた言葉に、タカトが律儀に答えてくれる。しかし、ユーノはその答えにこそ本当の意味で疑問符を浮かべた。

狂戦士——、凶悪な性能を誇る肉体改造魔法である。しかし、当然ではあるが、その反動は尋常では無い。何せ、細胞自体を改造してしまう術式なのだ。

当然、その反動は細胞に来る。無理矢理強化された全身の細胞は一斉に死滅し、ユーノは崩壊。死の危険すらある魔法なのである。

……少なくとも、ユーノはその一步手前であつた筈だ。その覚悟で、この魔法を使ったのだから。

ましてや、二度連続で使用している。……この程度——全身は激烈に痛い、酷い筋肉痛程度な筈はない。これは、どう言う事かとユーノは自分の身体を見下ろし、即座に硬直した。

自分の胸の部分、そこに666の文字が刻まれていたから。これは——!?

「タカト……? これ……?」

「全く、難儀な魔法を使ってくれたものだ。あのままではお前、死んでいたんだぞ……? 狂戦士の反動は、確実にお前を殺していたんだ。いいか、二度とあの魔法は使うな。……次は、俺も含めて命の保障が出来ない」

タカトはユーノを睨みながら、一気にまくし立てる。どうも、その言葉ぶりからすると狂戦士の反動を治療したのはタカトであるらしい。しかし、ユーノにはどうしても聞き逃せない一言があつた。

「俺も含めて」?

「……俺の666（サタン）は、基本的に略奪以外出来んな」

気まづげに視線を逸らすタカト、だがユーノは見逃さなかった。その頬に一筋の亀裂が入っていた事を。それが意味する所はたった一つしか無い。

タカトは、ユーノの反動を——全部とは言わないまでも、殆どを受け持ってしまったのだ。——右手に秘められし、未だ詳細が分からない能力を使って。

絶句するユーノに、タカトは視線を戻した。フッと微笑する。

「……これは、お前に負けた俺のけじめのようなものだ。気にするな」

「気にするな、て……！ 気にするに決まってるだろう！ 何で、そんな真似を——」

「なら、お前が逆の立場ならどうする？ 俺を見捨てたか？」

ぐっと、ユーノはタカトの問いに、呻くようにして息を詰まらせる。

俯いて、齒を噛み締めた。……そんなのは、決まっている。きっと、タカトと同じ行動を取ったに違いない。

「卑怯だろ……！ そんな言い方は……！」

「だが事実だ。俺は、お前に死んで欲しくないと考えた。そして、助けられる手段を持っていた。それだけだ」

そんな事を言われると、もう何も言えないじゃないか……！

ユーノは、震える身体で俯き顔を上げられ無い。その胸中は、いかがばかりのものか——タカトは苦笑すると、立ち上がってユーノの背中に移動した。

そこに後ろ向きで座り込む。必然、ユーノと背中合わせになった。互いの顔が見えない位置でタカトは笑う——。

「俺が気にしていないのに、お前が気にしてどうする？ たわけめ。先程の約束と言い、お人良しに過ぎるぞ」

そう言って、タカトは背中をユーノの背中に預けて押して来る。痛みが走り、ユーノは悲鳴を上げかけた。

「っ——！　そう言う君こそっ。負けたなんて言ってさ！　意識あつたんなら立ち上がったんだろ？　この格好つけ」
「ぬおっ！」

お返しとばかりに背中ユーノが押す。それに、今度はタカトが悲鳴を上げた。……やはり全身に痛みがあるのだろう。
彼もまた、ふるふると震えると肩越しにユーノを睨みつけた。

「貴様……！　誰が格好つけだ！　誰が！　貴様にだけは言われたくは無いわ！　この格好つけめ！」

「あだだだっ！？　だ、誰が格好つけだ！？」

「ぐぬぬぬっ！？　き、貴様以外に誰がいる！　何だ、さっきの約束は！？　『なのはの事を好きになれ！』なんぞと言う奴が格好つけでなくて何だ！」

「痛たたたっ！　き、君こそねえっ！　何が『バカには敵わん』だよ！　あれこそ格好つけ台詞の極みだろう！？」

「あぐぐぐぐっ！　き、貴様言うに事欠いて……！　いい度胸だ！　もう一度ここで雌雄を決してくれようか！」

「はん！　また負かせて上げるよ！」

「吐かせ、このたわけが——」

そうやって背中を押しくら饅頭をしていた二人はそこまで言うど、背中合わせから一気に振り向き——当然、全身に激痛が走って二人揃って地面に七転八倒する羽目となった。

「き、貴様のせいだっ！」

「な、何おうっ！ タカトのせいだね！ 絶対！ 間違いないっ！」

「何だとう！」

「何さ！」

地面に転がって、二人でぐぬぬと睨み合いながら罵倒し続け、やがて息が切れたのか。二人はぜえはあと荒い息を上げる。

ごろりと二人一緒に仰向けとなった。日が昇ったミッドの空は青い。

馬鹿みたいに晴れ渡った空を見て、二人は唐突に笑い出した。突き抜けた青空のように笑う。

そうして暫く笑い合い――二人は一緒に息を吐いた。すっきりとした顔で、寝転がる。どこかで鳥の鳴き声がする。それすらも可笑しくて、二人揃って笑ってしまう。

そして、二人は寝転がったまま取り留めの無い話をした。

本当に何でも無い事から、とんでもない事まで二人は語り合う。

……流石にジェイル・スカリエッティを脱獄させた下りは、ユーノも眉を潜めたが。

そんな話を暫く続け――やがて、タカトの顔から笑みが消えた。いや、表情がと言った方が正しいかもしれない。

そして――。

「……ユーノ、約束の件だが――」

「当然、守ってもらうよ。出来ない、やらないは聞かないから」

「……厳しいな。お前は……」

「勝者だからね」

「ふん」

ユーノの台詞にタカトはふて腐れたようにそっぽを向く。まるで子供の仕種だ。

ユーノは苦笑する。……ああ、これなんだと。多分、なのはも知っている。これこそが、伊織タカトの本来のカチ。

子供のような、老人のような、年相応の青年のような、そんなタカトの在り方。……戦っている時の傲慢な在り方も、また彼の性格の一形態なのだろう。だが、ユーノはこちらのタカトこそが、彼の本来の性格なのだと思う。

そして、タカトがぼつりとそっぽを向いたまま呟く。

「俺は、幸せと言うものが分からない」

「……うん、前も聞いた」

「その俺が、人を好きになるなど——好きになってもいいと思えるか？」

軽い一言。その内容に反して、恐ろしく軽い口調での言葉であった。

タカト自身、諦観と共に放たれた疑問でもある。幸せが分からない人間が、人を好きになるなど有り得ないと、有ってはならないと決めつけてる台詞であった。

だが、そんなタカトにユーノは。

「なっっていいに決まってるじゃないか」

そんな、そんな力強い答えを送った。タカトが驚きに目を見張り、ユーノは微笑する。

そして、歌でもそらんじるように言葉をタカトへとぶつけた。

「君がなんで幸せが分からないのか。それが、どう言う意味なのかを僕は知らない」

ユーノはタカトの魂が”傷”を負っていると言う事を知らない。そして、『幸せ』と言う感情を喪失している事も知らない。

それでも、ユーノは知らなくても、そう断言する。

「だけど、君と言う人間は分かってるつもりだよ。君は人を好きになれる。……そして、君は人を好きになってもいいんだ。だって」

だって、それは人なら当たり前の事なんだから。

当たり前の言葉で、当たり前の答え。

しかし、それはタカトに無かった筈の答えであった。ユーノは、どこまでも当たり前の事をタカトへと告げる。

「……君は、世界中全ての人間に無関心かい？ 違うだろ？ 人を憎いと想う事もあるなら、大切だと想う事もある筈だろ？」

「……だとしたらなんだ」

「少なくとも君は、誰かを想う感情まで無くしていないって事だよ。良かれ悪しかれにしろね。違う？」

タカトは無言。だが、その無言こそが、答えを雄弁に語っていた。ユーノは微笑み続けながら、言葉を続ける。

「だとしたら、君は人を好きになれる筈さ。恋愛感情もある。僕が保障するよ」

「……頼りにならん保障だな」

「そうかい？ ならもう一つ。君は、なのはの事を好きになる。こ

れも保障するよ」

ユーノの台詞に、こればかりはタカトも呆れたような顔となった。何をどうすれば、そんな保障が出ると言うのだ。だけど、ユーノは確信しているとばかりに笑う。

「今に見てなよ。多分、そうなるから」

「吐かせ、あの女は好かん。そう言った筈だ」

「嫌い”から”好かん”に変わってるよ？」

「黙れ、やかましい」

大した違いでは無いだろうが……。そう一人ごちたタカトにユーノはついには声に出して笑う。

そんなユーノにタカトは慚然とし、やがて息を一つだけ吐いた。空を見上げて、ぽつりと呟く。

「……お前との約束は守れるか分からない。なのはとの約束もある」

「なのはとの約束……？」

「あいつとは決着を付けると約束している。……負けたならば、あいつの想いに応えると、そう俺は約束した」

自分に好きだと告げたなのは。

もし彼女と戦い、敗北したならばその想いに応えるとの約束。しかし、ユーノとの約束は、なのはを好きになれと言う事であった。

……だが、ユーノの約束に応えると言う事は、なのはとの約束を破るという事に他ならない、だから。

「お前との約束は、今は守れない」

少なくとも、なのはと決着を付けるまでは――それまでの間は、なのはの事を嫌いでいさせてくれ。

傲慢だと自分でも思う。約束しておきながら、自分で守れないと言うなど。

だが、それでも。これだけは譲れない約束だから――。

「……そっか」

「ああ」

その答えは、口調に反して様々なものが詰め込まれた答えであった。

だが、それをユーノは尋ねる事をしない。ただ頷くだけだ。タカトも頷きを返し、ユーノはため息を吐く。

「なら、いいかな。僕との約束は、なのはに托すよ」

「……自分で言うておいて何だが、いいのか？ 俺が勝てば、お前との約束はご破算だぞ」

「いいさ」

あっけからんと、ユーノは笑う。それを不思議に思っただカトは振り向いた。そこにあるのは、苦笑。

……何故かこちらを哀れむような、呆れたような苦笑であった。

「覚悟しておくといいよ。そんな約束したんだ。なのはは、どんな手を使ってでも勝ちに来る」

「……………例えば？」

「バインド掛けた上で、全力全開の集束砲撃を叩き込んだり」

当時、九歳のなのはがフェイトにかました所業である。……端から見ていて、あれはやり過ぎじゃなかるーかと冷や汗をかいたもの

だ。

タカトも頬をひくりと引き攣らせた。九歳当時でそれならば、二十歳現在は果たしてどれだけの真似をしてくれるやら——ちなみに、去年ヴィヴィオ相手には全方位からバインドを掛けた上でSLB・BSを叩き込んでいたりする。

「少なくとも、僕に負けてるようじゃ、なのはにも負けるよ」

「……………肝に命じておこう」

過大評価と笑い飛ばせない何かをユーノの口調から感じ、タカトは神妙に頷いた。

その顔に、ご愁傷様とユーノは胸中だけで呟いて立ち上がった。身体中、やたらめったらと痛いが構わずタカトに手を差し出す。

「ほら、行くよタカト。約束延期の分は、僕達を手伝ってもらうからね」

「俺に今更、管理局の仲間になれと？ 俺は構わんが——あれらが納得するか？」

「しないだろうね」

きっぱりと気持ちのいいくらいにユーノは即答する。まあ、当たり前ではある。タカトが管理局に対して働いて暴虐は半端なものでは無い。

協力を申し出ようと、即座に突っぱねられ逮捕がオチだろう。だが……。

「僕が説得するさ。大丈夫、管理局も馬鹿じゃない。今は使える戦力は猫の手でも欲しいだろうからね」

「……協力はいい。しかし、俺は管理局に留まるつもりは無いぞ。この件が終われば、俺は再び管理局の敵となる——」

「それでもいいさ」

まるで言い訳のようなタカトの言い分を、ユーノはすっぱりと切る。

あまりにもあっさりとした言われ方に、タカトが苦笑を強めてしまった程だ。――だが、そんな言われ方をタカトは嫌いでは無い。ふっと笑うと、タカトはユーノの手を激しく叩き付けるようにぶつけて握った。

ぱんっ！ とした音が鳴る――。

「それが、最もヴィヴィオを守るのに適切な手段なら――いいだろう。負けたこの身だ。使って見せろ」

「ああっ！」

タカトの返答にユーノは力強く頷き、手を引っ張って立ち上がらせた。二人は同じ目線で、不敵に笑い。

「いいなあ、麗しい友情だ！」

そんな、そんな”聞き覚えのない第三者”の声がまるで割り込むようにして、二人に入り込んだ――！



二人は声がした方向に即座に振り向く。瓦礫の山――その頂上に足を掛けるようにして声の主は居た。

偉丈夫――そう呼ぶに相応しい男が。

濃い青の髪は腰まで伸びており、筋骨隆々。まるで彫像のような完璧な肉体美を持つ男である。身長はユーノやタカトより頭一つ分

も高いだろうか。そして、ユーノやタカトを見て笑うその顔は無骨ながら知性を感じさせる。

ユーノは——そして、それ以上にタカトは驚愕を張り付けたまま固まっていた。何より、ここまで接近され、声を掛けられるまで気付かなかったと言う事実に！

いくらユーノとの戦いが終わった後で気を抜いていたとはいえ、ここまで接近を許す訳が無い。

タカトの空間把握能力は数Kmにも及ぶのだから。

どうやって、俺の聴勁を抜けた——！

「しかし、ただけんなあ。伊織タカト、お前は一人でなくっちゃなあ」

「……貴様、何者だ……」

「おっと？ 私の事を知らない？ ……そう言えば、お前と顔を合わせたのはこれが初であったか！」

呵々大笑しながら、男は瓦礫から滑り降りて来る。タカトはそれを見ながら、齒噛みしていた。

ここにこうして現れ、しかも自分の事を知っていると言う事は、ストラの人間と見て間違いない。

それも、自分に察知されずに接近すると言う離れ技をしてのけたのだ。相当の実力者であった。

男はそんなタカトの思考を知ってか知らずか、笑いを止めず無造作に近付いてくる。

そうして、二人の前で歩みを止めると堂々と名乗りを上げた。

「リゲル。リゲル・アイザックである！ この名、知らんとは言わせんぞ！」

「リゲル……だど？」

その名に、タカトの脳裏に浮かんだのはたった一つの事であった。旧グノーシス、無尽刀アルセイオ・ハーデンと肩を並べた、”もう一人の元第二位”。

「ノーライフ・キング不死王”……！”神祖の吸血鬼”か！」

タカトの叫びに、にやりと男——リゲルは笑う。

その笑みを肯定と受け取り、タカトは顔を歪めた。

よりにもよって、この男が来るとは。最悪のタイミングで最悪の手合いと出会ってしまった。

何より、この男は自分——いや、”神庭家”の人間と因縁まみれであった。何故なら——。

「死んで……なかったのか……！」

「おそらく貴様の異母兄めも、そう思っていたであろうなあ！しかし、私は神祖なのだよ！」

叫びを上げるリゲルにタカトは舌打ちする。十年前——グノーシス事件にて、自分の元にアルセイオが現れたように、トウヤにもまた第二位が立ちはだかったのである。

それこそが、リゲルであったのだ。トウヤの話しによれば完膚無きまでに滅殺したとの話であったのだが——。

「神祖に肉体の死は意味がないのだよ……！灰が一握りでもあれば再生する！」

「化け物め……！」

「ハッ！貴様には——貴様達、兄弟だけには言われたくはないなあ！？ええ！カミ殺しさんよお！」

EXと神祖。確かに、どちらも人の形をしているだけの化け物である。しかし、タカトとしてはリゲルと同じには流石に見られたいは無い。

だが、それよりも問題は――。

この場面……。どう切り抜ける……。！

普段の調子ならば、リゲルが相手であろうが真っ正面からぶつかっても負ける気はしない。

だが、流石に今の状態で勝てるかと言えば、甚だ疑問であった。徹夜で戦い続けた事による肉体的、精神的な疲労。そして何より、ユーノから略奪した狂戦士の反動による細胞死滅現象。それら全てが、タカトの戦闘能力を激減させてしまっていた。

このまま戦っても負けは見えている。ならば――。

「ユーノ！」

「ああ！」

呼び掛けに即答でユーノが応え、こちらの肩に手を置く。タカトはそこから足を一歩踏み出した。

その一歩こそは届かぬ場所無しとまで言われる空間転移歩法。縮地であった。

タカトの考えはとてもシンプルである。現状勝てぬのならば、逃げに徹するまで！

業腹だが、勝ち目の無い戦いをするより逃げた方が遥かにマシと言えた――”それが、成功したのなら”。

「しゃらくさい！ 無駄なんだよお！」

縮地が発動する直前。リゲルはその場で、盛大に足を地面に叩きつけた。

その動作に呼応するように、世界に何かが走り抜ける！ タカトは構わず縮地で跳躍せんと、一步を踏み込み切って。

しかし、”何も起きなかった”。

ただタカトが一步を踏んだ音のみが残るのみ——縮地は発動しない。

「な、に……？」

「驚くような事かい？」 仙術、絶空陣”だ。知らない訳はないだろう？」

知ってる——当たり前だ。仙術は、カラバ式と同じく八極八卦太極図のベースとなった魔法体系である。

それも絶空陣と言えば空間干涉系仙術の一つだ。

特定空間における空間跳躍系概念を封じる陣である。だが、何故それをリゲルが使える——！

「逃がしはせんよお！ 本来のプランには無いが、貴様には”聖杯”になってもらおうかあ！」

「なん……っ！」

聖杯だと……！

その単語にタカトが目に見えて、驚きの表情となる。その隙を待ってましたとばかりにリゲルが襲い掛かる！

一撃！一

直後、タカトはユーノと共にリゲルの拳を受けて盛大に地面を転がったのであった。



「ぐ……っ！？」

「はっはあっ！ どうしたあ？ その程度か！ 本物のEXって奴はあ！」

一轟！一

地面を転がるタカトに容赦無く放たれる追撃！

しかし、タカトはその一撃を受けながらも回転の勢いを利用してリゲルの延髄に蹴りを叩き込む！――だが、リゲルは急所に蹴りを受けてなお、凶悪に顔を歪めて笑っていた。

「効かねえんだよお！」

身体を蹴り上げ、リゲルは目前にタカトの身体を浮かび上げる。

そこは拳を打ち込むのに、ちょうどいい高さであった。

当然、彼がそれを見逃す筈が無い。右拳を浮き上げたタカトの腹にぶち込む！

一撃！一

まるで、爆発したが如き音が鳴り響いた。かはっと息を漏らし、タカトが地面に叩き付けられる。

それを見て、リゲルは堪らないと笑う。

「ははははあ！ いいざまだなあ！ 伊織タカトオ！ しかし、弱すぎるなあ……？ ああ、そうなったから襲ったんだった！ ごめんねえ！」

「ぐ、う……っ！」

笑いながら、リゲルは倒れ込んだタカトの腹に足を連続して打ち付ける。その一撃ごとに、細胞の死滅現象による崩壊がタカトを襲っていた。

そこらに”破片”がばらばらに散る――。

まず、い……！

自分の弱体化は想像していた――いたが、これ程一方的になるとは流石に予想出来なかった。

リゲルが強いのか、自分の弱体化が酷いのか……両者である。

特に狂戦士の反動が酷い、まともに動けるような状態では無かった。

下手に魔法を放てば、それだけで自壊しかね無い。しかし、このままでも敗北は確定だ。ならば、やる事は決まっている！

「あ？」

踏み続ける足をタカトに捕られ、リゲルは疑問の声を上げた。だが、彼を凄絶に睨み付けるタカトは構わない。掴んだ足を全力で跳ね上げる！

直後、リゲルの身体が回転した。ぐるりと縦に。

その隙を逃さず、タカトは跳ね起きると蹴りを放つ、右足に点るは紅蓮！

「喰らえ……！」

天破紅蓮。その一撃が、回転するリゲルの腹へと刺さり――。

「喰らうわきゃねえだろお！」

”突き抜けた”。

文字通り、何の感触も無く蹴りはリゲルの身体を通り過ぎる。
タカトは絶句し――そして見た。

”リゲルの身体が、霧となり自分を通り抜ける所を”。

吸血鬼は、一説には霧に姿を変えられると言う――。

一斬一

「……あ……」

そんな事が頭を過ぎると同時に、胸から刃が突き出ていた。
レイピア細剣、リゲルのデバイスか何かか――それが、タカトの背中から
胸を貫通し突き出ていたのである。

呆然と、タカトは胸から現れた細剣を見下ろして。直後、口から
血が溢れ出て来た。

ごぶり、と大量の血液が地面に落ちる。

「古来より変化は吸血鬼の専売特許なのだ……。神祖レベルともな
るとこの通り、霧に変化するなど造作も無い事よ」

「ぐ、ぐうっ！」

血を吐き出しながら、それでもタカトは止まらない。背後に風巻く肘を放つ――が、それもあっさりと霧に変化したリゲルを突き抜けてしまった。

今度は頭上にリゲルは実体化し、無防備となったタカトの頭へと細剣を突き出す！ 狙い違わず、頭頂部に刃は刺さらんと迫り――。

「さっせるかああああ――っ！」

一壁！――

横合いから突如、ユーノがタカトを突き飛ばすようにして現れた。同時、シールドで細剣を受け止める。

ほお、とりゲルは感嘆の声を漏らした。

「やるじゃあないかあ！ お嬢ちゃんっ！」

「僕は男だ！」

「ゆ、ユー……！」

リゲルの軽口にユーノは叫び返し、その背後からタカトが呼び掛けて来た。

その目は、こう叫ぶ。何をやっている、逃げろと。だが、ユーノはそんなタカトに首を振る。

「さっき君が言った言葉だろ……！ 君を見捨てられるもんか！」
「ばか、ものが……！」

タカトは罵声を飛ばし、だがそこで力尽きたのか崩れ落ちる。ユーノは背後で、タカトが倒れた音を聞いてくつと呻いた。

このままじゃあ、タカトがやばい！ 何とか逃げ出さないと……！

だが目の前の吸血鬼は、それを許してくれそうにも無かった。むしろユーノの乱入に、にたりと笑う。

「はっ……！ さっきも言ったが麗しい友情だなあ！ だが、べたべたした関係は嫌いなんだよおっ！ 出来てんのか、てめえらあ！」
「く……！」

細剣により強く力が込められる。シールドが悲鳴のような音を立てた事にユーノは総毛立った。

自分の魔力もごく僅か、シールドもいつまで維持出来るか分かったものでは無い。このままでは突破される！

どうするかユーノは必死に考え。だが、その前にリゲルが凶悪な笑いを浮かべた。自分を真正面から見る目が光る――！

「邪魔だっつってんだろぅがあ！」

一煌一

直後、ユーノは全身から力が抜けた事を自覚した。シールドも消える――。

な、にが……っ！

驚きを声に出そうとするも、それすら叶わない。

まるで無抵抗となったユーノにリゲルは満足そうに笑った。

「ははははあ！ やはり精神的な防御はおざなりだなあ？ こうもあっさり支配出来るとはな！」

魔眼。俗に視経支配とも呼ばれる精神支配の一形態である。それをリゲルは無造作に使って見せたのだ。

一般的な魔導師は物理的防御が高い側面を持つが、精神支配に対する防御は極めて低い。それはユーノも例外ではない。

結果、ユーノは指一本も動かさなくなってしまったのであった。固まったユーノをリゲルは横に殴打。弾き飛ばして脇にどかす。そして、倒れたままのタカトに目を向けた。

「お・待・た・せ・だなあ！ この世にお別れの時間は済んだかい！？」

「ぐ……！」

リゲルを前に、タカトは何とか起き上がらんとする——しかし、身体に力が入らず起き上がれない。

出血と狂戦士の反動で、目の焦点すら合わなくなっていた。

リゲルはそんなタカトの目の前に進むと、指をぱちりと鳴らす。直後、彼の後ろから二人の女性が唐突に現れた。どこから現れたと言うのか、彼女達はリゲルの後ろに控える。

「我が眷属よ、生贄を前に」

「「はい」」

眷属。つまりはリゲルに吸血鬼とされた者達なのか。彼女達は忠実に命令に従い、タカトの手を左右から捕まえてリゲルの前へと差し出す。

そのタカトの様子にリゲルは頷くと、懷から古びた杯を出した。

タカトはそれを見て、唸りを上げる——。

「それが……聖杯……？」

「く、ははははは……！ 違うさ。これはただの器だ。聖杯は貴様だよ、伊織タカト。” 貴様の魂” が聖杯となるのだ」

俺、の魂……？ そうか！

リゲルの台詞にタカトは聖杯の正体を知る。同時に、何故ストラが自分やシオン——そしてヴィヴィオを捕らえようとしたのか、その理由を理解した。

聖杯とは——！

「では、お別れの時間だ。さようなら伊織タカト、永遠に！」
「っ！」

聖杯の正体に行き突くタカトであったが、リゲルは当然構わない。細剣をタカトの心臓に突き立てんと振り上げ、放つ！ 細剣の刃は真っ直ぐに突き進み——。

一斬一

肉を穿つ音が周囲に響いた。タカトが目を見開いて硬直する。”
目の前の光景に”。

膝き、腕を捕らえられ、心臓に細剣を突き込まれんとしたタカト。

”彼の身代わりに細剣を受けたユーノを見て”。

「ユ、」

「っふ………！」

愕然とするタカトに、ユーノは一度だけ振り向くと微笑み……そして、そのまま地面に崩れ落ちた。大量の血が地面にぶち撒けられる――。

「ユーノォ――――！！？」

咆哮が響く、ミッドに、そして世界に。

タカトの悲痛な叫び声が世界に響いたのであった――。

（中編に続く）

第五十六話「喪失ったもの」(前編) (後書き)

……はい、テストメントです。まず一言。こないだは本当にすみませんでした。

いやもう、我ながら情けなく、また無責任な事を言ってしまったなど後悔しまくりです。

心機一転、これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

さて、てな訳で今話ですがタカトサイドオンリーとなります。

鬱展開……かどうかは分かりませんが、StS, EXの話の中でも突出した暗さの話になると――さ、サブタイトルで分かるよね(笑)

ではでは、中編にてまたお会いしましょう♪

ではでは〜♪

第五十六話「喪失ったもの」 (中編) (前書き)

どもー、テストメントです♪

お待たせしました、第五十六話中編をお届けします♪
ええーうん。いろいろ、覚悟して下さい。

では、中編どうぞ〜♪

第五十六話「喪失したもの」(中編)

どっ、と軽い物が落ちた音が響く。タカトの身代わりとなり、細剣を胸に突き立てられたユーノ・スクライアが崩れ落ちた音である。絶叫し、目を見開いたタカトを、仰向けに倒れながらユーノは見る。その目は安堵に彩られていた。

ああ、良かった。君が、無事で——と。

倒れ伏したユーノから流れ出る血が地面へ水溜まりのように広がっていった。

……ユーノの命が、ゆっくりと零れて行く——。

「ちっ、つまらん真似をしてくれるものよ」

舌打ちしたのは、ユーノを刺したりゲルである。

引き抜いた細剣が血に塗れていた。それが、タカトのものかユーノのものは判然としない。

彼は道端の石ころでも見る目をユーノに向ける。

まるで、歩いていた時に躓いたようにだ。僅かな苛立ちがそこにもつていた。

「まあ、良い。どちらにせよ結末は変わらないのであるからな。では、伊織タカトよ。聖杯に——」

そこまで言った、直後。

どくんっと、まるで心臓の鼓動のような音が鳴り響いた。

怪訝そうな顔となるリゲル、そして眷属達——そんな彼等に、再

び鼓動が鳴り響く。

……今度は、わずかな震動を伴っていた。何だ、これは。

「……ユー……ノ」

零れる声は、未だに呆然としているタカトのもの。

ちょうど、ユーノと上下で目線が繋がっている。

光を失っていく、ユーノの目と。

そして、タカトはユーノの名を呼び続けた――鼓動が、ゆつくりと早くなる。

リゲルは辺りに響く鼓動に不快そうな顔となりながらも、タカトを嘲笑った。

「く、ははははっ！ 何をショックを受けているのだ！？ 今更だろう、そんなもの！ 貴様とて人を殺して来たのであるが！？ 今度はそやつであったと言うだけの事よ……そして、貴様も――」

一転一

――今度は、何かが軋んだ音も同時に響く。

台詞を中断されたリゲルと眷属達は、その音の発生源へと目を向ける。

そこはタカトの右腕、拳を包む拘束具であった。

見れば、大きな亀裂が拘束具に走っている――そして、タカトはユーノの名を呼び続ける。

「……ユーノ……」

「――く、気持ちの悪い奴よな。答える訳が無いだろう！？ 死・

ん・だ・ん・だ・よ、そいつはなあっ！　もう、この世にいねえんだよお！」

絶えず聞こえる鼓動と、拘束具に走った亀裂――何より、全身に走る不吉な予感にリゲルは言葉を荒げた。

タカトがその言葉を聞いて、ぴくりと反応する。

「死、んだ……？」

―タカト―

ユーノの声が頭を過ぎる――。

付き合いは僅かなものだった。でも、友達だった。

先程まで、一緒に笑っていた。怒鳴りあっていた。喧嘩をした――でも、理解^{わか}り合えた友。

自分に、なのはの事を好きになれなんて言ったお人良し。

それが、もう居ない。笑わない。話さない。死んだ、から。死んだから。死んだから！

もう、ユーノは、どこにも、いない。

―軋―

かたかたと、タカトが揺れる。それにリゲルは震えているのかと再び嘲笑を放とうとして、しかし違う事に気付いた。

震えていたのはタカトでは無く、拘束具。金属製のそれが、内側からの圧迫に耐え兼ねるかのように激しく震動していたのである。

鼓動も、早くなっていた。どくん、どくん、どくんどくんどくんどくんどくん！　と――。

そして――。

「あう！」

その瞬間、グノーシス日本支部『企業』に居た高町なのはは、激しい胸の痛みを覚えてうずくまった。

慌てて、近くに居たフェイト・T・ハラOWNと八神はやてが彼女を支える。

「なのは！？」

「なのはちゃん！？ どうしたんや！ 大丈夫か？」

二人の心配そうな声に、しかしなのはは答えない。

ただ胸の激しい痛みにも身もだえしていた――いや、違う。胸では無い。

その奥底にあるものが悲鳴を上げていたのだ。

なのはの、魂が。

これは――。

「タカト、君……？」

痛みは続く――。

その瞬間、グノーシス月本部『月夜』に居た叶トウやは、執務を行っていた机からいきなり立ち上がった。

何事かとユウオ・A・アタナシアとたまたま居たシグナム、ヴィータがこちらを見る。だが、トウやは構わずに叫んだ。

「やめ、たまえ！ タカト——！」

その瞬間、グノーシスイギリス支部『学園』に居た神庭シオンは布団から飛び起きた。

血の気が失せ、真っ青となった顔で呆然と呟く。

「な、んだ、これ……？ 嫌な感じがする……？ 何が——」

その瞬間、いずことも知れない世界で緩やかに微笑む存在が居た。金砂の髪をたなびかせ、夜空に浮かぶ月を見上げながら彼は笑う。

「……これは、” 分からなかったな”。タカト……」

彼の名は、メタトロン。

本名をクロス・ラージネスと言う。タカトと対を成す事象概念超越未知存在——つまりEXは相変わらずの微笑のままで呟いた。

「分からないって事は楽しい。けど、君がいなくなるのは困るんだ

けど、ね」

約束がある。クロスにとって、何物にも代えられない大切な約束が。

それを唯一叶える事が出来るのは、タカトしか居ないのに――。

「ここで壊れるのかい？ タカト？」

ここに居ない彼へのクロスの問いは、風に溶けて消える。

答えは来ない。そんな事は当たり前なのに――。

そして、次の瞬間。

一破！一

拘束具が爆発したかのように碎け、弾け散った。

両腕を捕まえるリゲルの眷属も驚いたかのように固まる。

どくんっ。

鼓動が、聞こえる――先程聞いていたよりも緩やかとなった鼓動が。

しかし、リゲルは息を飲む。変わりにタカトから得も知れぬ不吉な予感が吹き出していた。

頭を垂れて俯くタカトは、ゆっくりと立ち上がる――慌てたのは眷属達である。タカトを再び押さえ込めんと関節を逆に捻ろうとし

て。

しかし、まるで鉄芯でも仕込んだようにびくともしない彼の腕に、愕然となった。

タカトは、全く力を入れていない筈なのに――！

「こ、の……！」

「大人しく――」

それでもどうかしようと、眷属二人は力を込め――内、一人はそれが最後の言葉となった。

一轟一

無造作に、タカトは右腕を一閃。ただ振り払うかのような動作で腕を振る。

それだけ、それだけで――”右腕にかじりついていたりゲルの眷属は消し飛ばされた”。

彼女が残したものは、足首より下だけ。

それ以外は、全て血煙りへと変じられたのである。凄まじい膂力で振るわれた右腕で！

「ひっ！」

それを見ていた左腕を押さえていた眷属が悲鳴を上げる。

だが、タカトは構わない。関節を極められ捕らえられている筈の左腕を、そんな事なんでもないとばかりに動かし、彼女の頭をわし掴みにした。

みしみしと、頭蓋骨が軋む音が響く――。

「ひ、あ！ い、痛い！ 痛い痛い痛いっ！ り、リゲル様！ 助

けて！ 助け——」

助けを呼ぶ声。しかし、リゲルは何も出来なかった。

一歩たりとも、その場から動かす事は出来ず、魅入られたようにタカトへと視線は固定される。

タカトは俯いたままだ。やがて、ゆっくりと左手に握力が込められて行く。

それは、虫でも捕まえるように優しい手つきであった。

子供がゆっくりと力を込め、潰さないように捕らえるかのような。しかし、得てして子供は力を入れすぎで虫を潰してしまうものである。

タカトも、例外では無かった。

「ひ、ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ——！！！」

断末魔の絶叫が響く。同時に、くちゅりと眷属の頭は握り潰された。

リンゴ——いや、ミカンでも握り潰すような柔らかな動作で。

顎から先を失った彼女はぴくりぴくりと痙攣しながら地面に倒れ、動かなくなった。

脳漿のうしょうと血で汚れた左手がぶらんと垂れ下がる。そこから、人体を構成していたピンク色の何かが零れ落ちた——リゲルは、目を離せない。

どくんっ。

ゆっくりと、しかし確かに強くなる鼓動がやけに耳をつく。

それと共にタカトは立ち上がり、俯いた顔を上げていった。

そうして、ゆるりと気怠げにタカトの顔は持ち上がり、リゲルは彼の顔を見る。

絶望と言う無表情になった、伊織タカトの顔を。

その右目、紅い瞳から水滴が零れる。涙だ。だが、その涙は瞳と同じく紅い。

血の涙を、タカトは零していた。

どくん。

響く鼓動。まるで時間が固形化したように凍りつく二人をよそに、血の涙はつつとタカトの頬を流れていく。やがて、それは顎に到達し、そこから下へと落下する。

地面に、ぽちゃんと血涙が落ち――直後。

タカトを中心に、世界が軋みを上げた。

それは一瞬にして、リゲルに到達。足元から頭に、まるで伝播するが如く冷や汗が、ぶあつと溢れ出す！

同時にリゲルが見たものは、自分が惨殺される光景であった。

圧殺、刺殺、絞殺、溺殺、斬殺、焼殺、凍殺――！
ありとあらゆる”殺し”のイメージをリゲルは叩き込まれる！

神祖の吸血鬼故の、天性による精神的な防御がリゲルには備わっているが、そんなものは紙くず程も役に立たなかった。

ただ、タカトから放たれたものにより、殺しのイメージを叩き込まれ、人格を碎かれかける！――それでも、何とか凌いだ辺り

ゲルもただ者では無かった。だがそれは、ただそれだけと言う意味にしかない。

息を荒げ、硬直するリゲルはタカトが放ったものが何かを悟る。

あれは、ただの殺気であった。

タカトが放ったものは殺す気だけだったのである。魔力でも、なんでも無い。

ただ、それだけ——それだけにも関わらず、リゲルの精神防衛を破壊してしまったのだ。

なんだ、こいつは……！

あまりの出来事に戦慄するリゲルは、顔を歪めて心中問う。

カミ殺し。そう呼ばれる存在だと言う事は知っていた。僅か十歳足らずでアルセイオを下した化け物である事は。

だが、神祖の吸血鬼——”世界^{カミ}によりヒトの上位者となる事を定められた”自分に敵う筈が無いとも思っていた。

それでも、弱体化した隙を狙って襲撃したのである。

だが、今のタカトを見て、そんなものは全て無駄であるとさえ思う。

神祖の自分が霞んで見えた——いや、あるいは今まで出会って来た全てのものが、”これ”に敵うとは思えない。

これは、一体、何だ——！

「ふ、ふっはは……！ はははははははっ！ つ、ついに正体を現したと言う事か！」

浮かび上がる恐怖。だが、それをリゲルは認められ無かった。

自分が恐れている……？ そんな筈は無い！ 何故なら自分は神祖なのだから！ ヒトを超越した上位者なのだから！

内心叫び、自らを奮い立たせる！

そして、一気に魔力をリゲルは吹き上げた。

どちらが、より上位の存在なのか——それを証明するために！

「見せてやろうぞ……！ このリゲル・アイザックの、神祖の真の力を——」

一撃一

——決着には、”一瞬すらも掛からなかった”。

吠え叫ぶリゲルの全身は、いつの間にか両腕が引きちぎられ、足は切り落とされ、内臓は全て打撃により爆砕され、最後にタカトが伸ばした右腕がリゲルの胸を貫き、背中側から心臓を挟み、掴み取っていた。

「！？ がばあ！？」

何が！？ 何が起きた！？

気付けば死ぬ一歩手前——と言うより普通ならば死んでいる状態にまでされて、ようやくリゲルは驚愕に目を見開く。

一瞬とか、刹那とか、そんな速度の問題では無い。

まるで、テレビのコマ落としのように、一切の間が無く全身を破壊され尽くしていたのである。

リゲルは知らない。

EX、事象概念超越未知存在は、”時間の流れ”を無視出来る事を。

その中で、”光速以上の速度で歩き、行動出来る”事を！

タカトがやった事は何の事はない。時間を見捨て、リゲルの元まで”光速の数京倍の速度で歩いて行き”。その速度のまま、両腕を引き抜き、足を踏み付けて碎き、全身に思うさま打撃を叩き込んだ後、心臓を抉り出したと言う、ただそれだけの事。

魔法も、魔力も何も使っていない。EXのタカトにとって、時間を止めるなんて事はただの自然現象にしか過ぎないのだから。

「が、ぐ……！」

しかし、そこまでの状態にされておいて、なお死なないと言うのは特筆に値するだろう。

リゲルは血を全身の穴と言う穴から噴水のように吹き出しながらも、まだ生きている。

そんなリゲルに、タカトはぐりんと目を向けた。

その目を見て、リゲルは震える――！

違う……！ こいつは違う！ 自分なんぞとは比べものにならない！ 本物の――。

「化け……物……！」

「お、」

リゲルの言葉に応えた訳でもあるまいが、タカトがようやく声を

”タカトは、完全にEX化した訳でも無いのに――”。

そして。

魔力を放出し終えたタカトはゆっくりと地面に倒れ、ようやくその場は静寂を取り戻したのであった――。



「っ――！　っ！　っ――！」

魔力を放出し終わり、地面に倒れたタカトが声無き悲鳴をあげながら、胸を押さえてもがく。

彼の根本――魂の”傷”が凄まじい痛みを発していたのである。何故、そうなってしまったのか。問題は半暴走状態で発動したEX化によるものであった。元来、EX化をする際には相応の手順を必要とするのである。

一、自分だけの言葉を解放し。

二、真なる名の封印を解き。

三、自らの魂を解放する――。

この手順を踏んで、ようやくEXは”一番安全な方法”で力を解放出来るのである。その過程を全てすっ飛ばしてしまうと、どうなるか――それは、十年前と今の彼が物語っている。

魂の損傷。

それも本来のものより、より激しいものを受けるのである。

魂の損傷は、”傷”となり、傷は痛みを伴う。

その痛みは、常人であれば塩の柱に成り兼ねない程のものであった。いわば、存在が壊れる痛みである。

タカトは存在限界レベルの痛みを受けながら、自分の魂が深く壊れた事を悟る――それでも、完全に壊れなかった事は運が良かったと言えるかもしれない。

今は、死ぬ訳にはいけないのだから――。

「ユー……ノ」

軋む身体と精神、そして魂を無視してタカトは立ち上がると、ユーノの元までふらりふらりと歩み寄る。そのまま、崩れ落ちるようにユーノの側に座ると、胸に手を当てた。

――そこから聞こえるのは、弱く、しかし確かな鼓動。心臓の音だ。

ユーノは、まだ生きている――！

「……ユ……ノ……、 良か……った……！」

歯を食いしばるような表情で、タカトは笑った。

ユーノが生きている。それが嬉しくて、嬉しくて、たまらなかった。

リゲルは思い違いをしていたのだろう。細剣は、心臓と肺を掠める形でユーノを貫いていたのだ。

刺されるあの瞬間に、ユーノが意識して行ったのかどうかはさだかでは無いが、重要な臓器を避けて細剣は通り抜けていたのである。

これならば、即死はしない――だが、それでもユーノは恐ろしく危険な状態であった。

ただでさえ狂戦士の反動等があったのに、この傷である。出血も酷い。このままでは、どちらにせよユーノに待つのは死だけであった。

「……待つ、ていろ、ユーノ……！ 血……だけ……でも……！」

そう言いながら、タカトは仙術、壺中天を発動しようと右手を振る。

空間と空間を繋げるこの魔法で、ジェイル・スカリエッティが居る次元航行艦と繋げるつもりであった。

あそこならば、タカト秘蔵の、なのはにも使った治療符がある。それで、とりあえずは出血は抑えられる筈――。

しかし、壺中天は発動しなかった。

シン、と世界は静まり返っている――。

「な……に……？」

愕然とするタカト。二度、三度と試すが全て同じ結果に終わった。全く発動しない――いや、そもそも魔力が”無い”。

自分には無限に魔力を生成するリンカー・コアを改造した八卦太極炉がある筈なのに！

そこまで思い至り、ようやくタカトは気付いた。

その肝心の八卦太極炉が完全に停止してしまっている事に――！
八素を取り込んでも、炉は全く反応しない。これはどう言う事か。

だが、答えは簡単なものだった。

とても単純なものである。ただ単に、”限界”だと言う事であった。

タカトの肉体、精神、魂——存在そのものの、限界。
さしもの八卦太極炉もこれでは動かない。

そして、炉が動かなければ魔力も生成出来ない！

——必然、仙術など発動出来る訳も無かった。

「く……そオ……！」

凄まじい形相で、タカトが吠える。先の不完全なEX化——あれ
さえ無ければ、何とか出来た筈なのに！ いや、そもそもリゲルが。
それ以前に、自分がユーノと喧嘩さえしなければ。

頭を過ぎる後悔にタカトは歯噛みし、しかしその一切を振り払っ
た。今は、考える事では無い。

今大事なのは、ユーノを助ける事である。

だが、魔法も使えない身でどうすれば良いと言うのか——今のタ
カトは空も飛べないのである。後頼れるものと言えば。

「ぐ……！ くっそつたれがア……！」

——己の、肉体のみ。

疲労しきっているとは言え、タカトはまだ動ける。

ならば、後はユーノを抱えて治療出来る場所に行くしか無かった。
それが、どれだけ無謀な試みか——他でも無い、タカトが一番分

かっている。

ここらは廃棄都市である。一番近い街でも数十K m単位で離れているのは間違いない。

ユーノの出血量から考えても、とても間に合うとは思えなかった。だが、それでもタカトは諦めない。

存在そのものがあがる痛みを無視して、ユーノを抱え上げる。

見据えるのは自分達が来た方向、クラナガンだ。あそこが一番近い。

タカトは視線をユーノに向ける――ユーノは目を閉じたままだった。開ける事は無い。それにぐっと呻き、タカトは一気に走り出した。凄まじい速度である。とても、存在限界の人間が出すとは思えない速度。

だが、それでもなお足りない。

向かう先はクラナガン、タイムリミットは後僅か。

ユーノの命を助ける為の戦いが始まる――！



一轟一

空気が引きちぎられて、散って行く。それは一人の男が走行で起こした現象であった。

ユーノを抱えたタカトの。

魔力の恩恵を全て失ったとは思えない速度である。車やバイクと

すらも十分に対抗出来る速度——つまり、時速数十Km後半を維持したままタカトはミッドチルダを走り抜けていた。
走り出して、数分程でクラナガン近くまで到達する。

だが、それでもなお足りない。

おびただ夥しい血が、ユーノより零れて行く。その度に、抱えている重さが少なくなっている錯覚をタカトは得ていた。

その錯覚はユーノの命そのものである。

ユーノが刺されて数分程度。しかし、その数分があまりに致命的であった。

出血量は既に致死量に近い。ぐっとタカトは呻き、更に足を速くする——それは同時に、タカトを追い詰めて行く事でもあった。

タカトの存在が壊れて行く——。

肉体面に、その兆候は無い。完全では無かったとしても、EX化に近い真似をしているのだ。狂戦士の反動である細胞死滅現象も、リゲルに刺された傷も復元されてしまっている。

だが、それは完全な状態とは、とても言えなかった。

傷が治ったとしても、ダメージが抜けた訳でも無い。その上、疲労は確実にタカトを蝕んでいるのだ。

肉体面だけでさえ、そのダメージである。精神、魂のダメージに至っては比較にならない。

結果、一步を速める毎に、タカトの存在は崩壊を始めていた。

ミッドチルダの街を駆け抜ける。

自分のどこかが、ぼろぼろと崩れて行った事をタカトは知る。

曲がり道は壁走りすらして、無理矢理曲がる。

肉体、精神、魂、その全てが激しい軋みをあげる。

ショートカットを狙い、ビルを駆け上がり高速道路の上に出る！

そして、軋みは尋常では無い痛みをタカトに与え続けた――構うものか！

口端から泡を吹きながらも、タカトは足を止めない。むしろ速度をどんどん上げて行った。

後は、この高速道路を抜ければクラナガンに着く！

もう少し、もう少しで。

……だが、そのもう少しが、足りなかった。

「……タカト……」

「ッ……！」

車並の速度で走るタカトが、その声を聞いたのは奇跡に近い。

自分の腕から響いた声にタカトは慌てて目を向ける。

そこでは、ユーノが目をぼんやりと開いていた。

致死量の出血量にも関わらず、意識を取り戻したと言うのか。有り得ない事である。

だが、その有り得ない事が、タカトの腕の中で起きていた。

タカトはユーノに呼びかけようとして、だが無理矢理それを抑えつけた。今は、喋らせる訳には行かない。

「じつと、している……！　もうすぐクラナガンだ、そこで治療を……！」

「……あのさ、聞いて欲しい事があるんだ……」

「うるさい、黙れ」

「……ダメ、だよ。大切な事なんだ……聞いてよ——」

「黙れと言っているだろうがっ！」

ついにタカトはユーノに怒鳴り声を放つ！

こんな時に、人が何を言うかをタカトは知っている。

反論の余地の無い言葉、だけど、誰かに聞いて貰わなければなら
ない言葉。

遺言。

ユーノの姿が、父の最後の姿と被る——！

「いい加減にしろ……！　話しがあるなら後で聞いてやる！　治療
を終えた後でな！　その後でならいくらでも——！」

「……やっぱり、タカトは、優しいね——」

それが、もう無理だって分かってる癖に。

「っ——！」

たった、たったその一言。

その言葉に、タカトの表情が明確に歪んだ。

……何で、なんだ……？

走りながら、それでも震えるタカトは心中叫ぶ。

父も、ユーノも、何故、何故――！

「……あのさ、ヴィヴィオって、なのはと、フェイトの二人のママが居るんだ……」

「……ああ」

ただ頷く。それだけの行為に、血を吐く程の努力を必要とした。

――神様――

――この世のどこかに居るかも、あるいは、この世そのものの神様――

「……でも、パパっていないんだよ。……はは、二人のどちらかが、パパ代わりらしいんだけどね……」

「ああ」

肯定する言葉を告げるため。心が壊れそうな程の痛みを伴った。

――今、生まれてはじめて、あんたに祈る――

――どうか、どうか、ユーノを――

「……でも、それって寂しいじゃないか、だから、僕がパパになってあげられたらなあ、て、そう、思ってたんだ……。はは、役者不足かも、しれない、けど……」

「そんな事は無い」

そう言ってやるのに、魂が死んでしまいそうな程、辛かった。

——この男を、助けてあげて下さい！——

——俺は、どうなってもいい！——

「……でも……君と会えた」

「……………ああ」

——どうか、ユーノだけは——

「……君と、僕、二人でパパをやれたらなあ、て、そう……思ったんだ……」

「ああ！」

——ユーノだけは、助けて下さい！　こいつは、死んでいい男じゃない！——

——だから、神様！　俺から、全てを奪っていった、神様……！

「……はは、そんなの、悪くないって思わない……？」

「思うっ！　だから！　だから、ユーノ！　死ぬな！　死なないでくれっ！」

——俺から、ユーノを奪わないで下さいっ！——

——どうか——

——どうか——

「……はは、良かった……」

そう、ユーノは、ゆっくりと微笑んで。

「……君に、そう言って貰えて……」

嬉しそうに、嬉しそうに笑って。

「本当に、良かった」

そう言って、ユーノは目をぱたんと閉じた――。

「……ユー、ノ……？」

呼びかける。でも、ユーノはもう答える事は無い。
ただ、微笑み続けるだけ。ずっと、この先、ずっと――。

「ユー、ノ」

それでもタカトは名を呼ぶ。

揺さぶってみた。でも、ユーノは何も反応しない。
いつの間にか、血は止まっていた――もう、流れる事も無い。

「……ユー……ノ……」

なんでだ？

「あ……」

なんで、俺はいつも、いつも……！

「あ、ああ……！」

いつも、いつも！

「ああああああああ……！」

いつも、いつも、いつも、いつも、いつも！ 大切なものを…

「ああああああああああああああああああああ……」

喪失って、
いくんだ……！

「ユ、ノオ……」

俺は、俺は……！

[illegible]

もう動かないユーノを抱えたまま、タカトはうずくまって泣き叫ぶ。

でも、どんなに後悔しても、どんなに泣き叫んでも、もうユーノは動かない。

ユーノ・スクライアは、もう、いなくなってしまったのだから。

その日、伊織タカトは。

全てを喪失ってきた、青年は――。

大切な、大切な友達を喪失った。

（後編に続く）

第五十六話「喪失したもの」(中編)(後書き)

テストメントはユーノ・スクライアと言う存在に、ちょっと思い入れがあります。

いきなり何だと思われそうですが、ユーノの力の入れようからそれが分かると思います。

……それだけに、今話を書くのは辛かった……。
いや、本当、めっさ鬱になりまくりでしたね。

さて、ミッド編は一つのテーマがあります。ここまで来ると分かる通り、”タカトを堕とす”と言う裏テーマですね。

一部の人には教えていたこのテーマ。

分かって頂けたと思います。

さて、次回も鬱満載、タカトはどこまで堕ちて行くのか——お楽しみ입니다。

では。

第五十六話「喪失したもの」(後編) (前書き)

お、遅れに遅れてしまいました(涙)

いや、ほんますみません(汗)

あれから気になってた方々も居るでしょう。あえて言い訳をさせて下さい。

……うん、忙しかった……。

いや、ごめんなさい。石は勘弁を。

ではでは、第五十六話、どぞ〜♪

……なお、最後についてはツツコミぼんぼん放っちゃって下さい
♪(笑)

第五十六話「喪失したもの」(後編)

「はあっ……はあっ！」

草木が生い茂る林の中、若い女性が息を荒げながら、それでも走る。

ミッドチルダ、首都クラナガンから外れた林である。

日も昇っているのに薄暗いのは、林のせいなのか――それとも、後ろから迫るモノのせいなのか”。

そう、女性は”なに”かに追われていたのだ。それがなんなのかは全く分らない。

ただ、本能的にそれが死に直結するモノであろう事ぐらいは容易く想像出来た。

早く……早く逃げなきゃ……。

息が上がる。それでも、必死に足を動かした。そうしなければ追いつかれる。だが、この女性はとことん不運であった。そもそも、”これ”に追われる時点で、それは明らかではあったのだが。最終的に、その不運が女性の命運を決めてしまったのだ。

ずるりと、足を木の根に取られて転倒する。

身体中を木やら地面に打ち付け、女性の口から苦悶の息が漏れた。それでも、女性は地面を這って逃げようとして――。

……結局、それが最後の抵抗であった。

女性の身体に霧が纏わり付く。ひっと悲鳴を上げた時にはもう遅い。

”それ”は”吸血”をはじめている――！

「あああああああ――！！　あ、あ、あ……」

尻すぼみに小さくなる声。それは女性の命、そのものであった。より正確には、命を動かす原動力――血である。

……そして、女性の声が完全に消えると霧はゆっくりと人のカタチを取る。

リゲル・アイザック――神祖の吸血鬼。

先程、タカトにより完膚無きまでに消し飛ばされた彼がそこに居た。あの状態から生き残ったと言うのか、呆れた生命力である。しかし、彼はぐっと歯を軋ませて呻き声を上げた。

「……足りん……！　ぐう、足りん……！」

人一人を死に追いやる程に血を吸いながら、なお足りないのか――。

リゲルは次の獲物を探さんと、踵を返す。

そして浮かぶのは、伊織タカトの事であった。

まさか、あそこまでの化け物とは思わなかった。

白状しよう、侮っていたと言うのもあるが、現状”あの”タカトには逆立ちしても勝てない。

それ程の力の差を見せつけられたのである。では、どうすればいいのか――。

……回復した後に、策を考えねばなるまい……。

タカトと正面切って戦っても勝てないのは、よく理解した。

ならば、搦手^{からめて}で行くしかあるまい。……そう思わされる事自体に屈辱を感じながらも、どうするかリゲルは思考を巡らせ。

瞬間、辺りの空気が一変した。

「っ……!？」

辺りに満ちる濃厚な”死”の気配にリゲルは硬直する。

それは何より、彼が恐ろしいと思わせられる気配であったから。

……リゲルは知らない。その気配は、EX化したタカトに酷似する気配であった事を。

だが、リゲルは考えを巡らせる事無く、その場に跪いた。

頭を垂れる——と、いつの間にか、その先に人影があった。一目見たら絶対に忘れないであろう程の奇怪な人間が。

マスク。頭をすっぽりと覆うマスクだ。しかも、ただのマスクでは無い。

そのマスクは中南米の古代を思わせる黄金で出来ていた。恐らくは純金である。しかし、その重量を考えると恐ろしく重い筈だが、その人物は小揺るぎもなかった。

……だが、マスクだけならともかく、その人物は組み合わせを全く無視した仕立ての良いダークスーツに身を包んでいたのである。どう考えても奇怪に過ぎた。

身長は高く、恐らく190後半。その割りにはスラリとしたスタイルの良さが目につく。

叶トウヤを思わせるスーツの上からでも分かる完璧な肉体美の持ち主であった。

リゲルはひたすら低頭し、油汗を流しながら震える。

彼の存在と自分とでは格が違い過ぎる。同じ高さにある事すらおこがましい。故に跪いたのであった。

リゲルにそう思わせられる人物と言うだけで相当の存在である。

彼は、無言のままにリゲルを見、そしてリゲルは震える――。

「や、ヤマ……様……」

「……………」

ヤマ――。そう呼ばれた人物はしかし無言。マスクの奥に覗く眼光のみが、彼を貫いていた。

やがて、場に一つの声が墜ちる。

【……疑問。なぜ、あれに手を出した？】

「っ――!？」

墜ちた声に、リゲルは声にならない悲鳴を上げる。

ヤマから放たれる気配が一層濃厚さを増したからだ。下手をすれば、ここで滅ぼされかねない。

ガタガタと震えるリゲルに、声は続けて墜ちた。

【回答要請。答えぬつもりならば、汝は不要なり】

「お、お待ち下さい!」

ずっと、差し出された右手に集まる光にリゲルはついに悲鳴を懇願として叫んだ。

それにヤマの右手が止まる。しばらく、リゲルを見遣り、やがて光は消えた。

【……回答至急要請】

「は、は！」

リゲルは、ついに観念してヤマに洗いざらい全てを告白した。

手負いのタカトを襲撃した事、それに失敗し、彼の友人らしき存在を殺した事。

そして、直後に激怒したタカトにより殺されかけた事――。

ヤマは全てを聞き、そして一言のみをリゲルに墜とす。

【愚物】

「っ……っ！」

ぎしり、とりゲルの発達した犬歯が軋む音を立てた。ヤマの一言で、である。

あまりにもきつぱりと告げられた一言は、単純であるが故にリゲルに最大級の屈辱を与えたのだ。

が、ヤマはそんなリゲルを知ってか知らずか、構わず声を墜とし続けた。

【回答。あれは、吾と同じ存在。カミを滅ぼし尽くす存在なり。神祖ごとき存在が敵うと思うたか】

「し、しかし、奴は弱っております……！ 後、今一步の所で――」

【浅慮。結果、汝は敗北。あれにしても、喪失した事により、一層己が執着するものに対して更なる警戒を施す。メインプランの実行すら困難】

リゲルの言い訳も、容赦無くヤマは断じる。結果、それが全てだと。

リゲルとしては、それについて何も言う事は出来ない。

結果はヤマの言う、敗北だったのだから。――更に、メインプラン。

まつろわぬ神、”聖王神、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの召喚”にも影響が出るであろう事は想像に難くなかった。

だが――。

【……許容。だが、吾は汝を許そう】

ヤマから告げられたのは、許しの一言であった。

唐突な許しに、リゲルも呆氣に取られる。最悪、命は無いとまで思っていたのだ。拍子抜けもしようと言うものだろう。

そして、ヤマはそんなリゲルの反応をよそに懷から何かを取り出した。

一つの、宝玉を。

【貸与。これを汝に与える。効果的に使用しろ】

「これは……？」

【愚問。汝なら理解出来る筈。メインプラン、サブプラン共に効力を発揮する】

墜ちる声と共に、ヤマの手から宝玉は一人でに浮かび上がり、リゲルの元までふわふわと飛んで来た。

それをリゲルはキャッチするなり、”それ”が何であるかを悟る。

そう、それは――。

「……く、は……？　は、はは……！」

笑いが零れた。ヤマの御前であるのに関わらずである。

その宝玉がいかなるものを理解したからだ。伊織タカトのミツドに於ける人間関係については把握している。確かに、”これ”ならば、メインにしろサブにしろ効力を発揮するであろう。

”高町ヴィヴィオの拉致”も”伊織タカトの殺害”も……これがあれば成せる！

笑い続けるリゲルに、しかしヤマはどこまでも構わない。

ただ、淡々と告げるべき事を告げていく。

【……謹聴。忘却するな。汝は二度失敗した。二度目は無いと知れ】

「ふ、くくく……。は……。！ お任せを……。次回は必ずや良き報告を期待して頂きたい！」

【肯定。ならば速やかに行動に移れ。汝の価値をこれ以上下げるな。以上——】

そして、ヤマの姿は唐突に消失した。あの気配諸共、完全に消えている。

リゲルはそれでも笑いを口端から漏らす。

ゆつくりと立ち上がった——だが、その目に浮かぶのは憤怒であつた。

口は笑っているが、目は明らかに怒りに染まっている。

その矛先は他でもない、ヤマであつた。

下等生物ごときが……！私を顎で使った借りはしつかと覚えて

おくぞ……！

従順な態度も、ただのフリだったか——取りも直さず、ヤマは”人間”なのだから。

人間を下等生物と見下すりゲルが、付き従う事自体屈辱であろう。

だが、今は従うしか無い。

リゲルは内心の怒りを押し込め、念話通信を起動。

ミッドチルダにて駐留中の、自らの部隊——ストラに念話を繋げ、即座にこう指令を出した。

《今からすぐに》クローン用生命培養槽”を用意しろ！ ああ、そうだ。今すぐにだ！ 私も戻る——》

口早に、命令を下すりゲル。

その手には、ヤマから与えられた宝玉があった。

”翡翠色に光り輝く”、宝玉が——。



クラナガン、管理局地上本部前。

そこに、ずらりと並ぶ騎士と魔導師達の姿があった。

管理局武装隊。及び、聖王教会騎士団の面々である。

その数、百十数人。ミッドの魔導士部隊としては、相当の人数であった。

そして――。

「……………」

「カリム義姉さん？」

部隊の指揮者であるカリム・グラシアが義弟であるヴェロッサ・アコースに呼びかけられ振り向く。

その顔には、少なからぬ疲弊が伺えた――当然と言えよう。

何故なら彼女、徹夜どころか先程まで666。つまり伊織タカトにより無力化された部隊の撤収を不眠不休で行っていたのだから。

更に伊織タカトと戦うと宣言し、共に飛び立ったユーノ・スクライアの救出の為に部隊編成までやってのけたのである。某『ジ○バニ』が一晩でやってくれました』ではあるまいが、相当の作業量である事は想像に難くない。

そんな疲労の陰がちらつくカリムに、ヴェロッサは心配そうな顔を浮かべた。

「……やっぱり、義姉さんは休んでいた方がいい。スクライア司書長の救助の指揮は僕が――」

「ダメよ。ロッサ……これは、私がやらなくちゃいけない事よ」

ヴェロッサの提案に、カリムは首を横に振る。その脳裏に浮かぶのは、ユーノとタカトが対峙していた場面だ。

あの時、あまりに無謀な戦いに赴いたユーノを自分は止められなかった。

その事を、カリムは後悔していたのだ。

報告では廃棄都市の一つが丸ごと潰れるような戦闘であった――とは聞いているが、無事かどうかは全く分かっていない。

一刻も早く、救出に向かわなければならぬ――本当なら、部隊

を編成する暇さえ惜しかったのである。

だが、相手はあの伊織タカト。自分個人でどうにか出来る存在では無い。

だから、逸る気持ちを抑えて部隊編成を優先させたのだ。

それに――。

カリムは視線を、ヴェロッサから空へと向ける。

……より正確には空の遥か上に浮かぶ月を。

ミッドチルダ本星を周回する二つの月。その内の一つがそこにはあった。

そして、そこに空いた大穴も。

つい先程の事だ。突如、地上から突き立った光りの柱が月まで伸び、激突。大穴を空けてしまったのである。

幸いと言うべきか、破片こそほとんど消滅していたものの公転軌道が僅かにズレたとの報告もある。だが、肝心なのはそこでは無い。問題は、その光りの柱がどこから発生したのかであった。

クラナガン郊外の廃棄都市。タカトとユーノが戦っていた場所から発生したのである。

何かがあった。それは間違い無い。

もし、仮にあれを放ったのがタカトでありユーノに向かって放たれたものなら――。

「……急ぎましょう。ロッサ。シスター・シヤツハに通達。これより、スクライア司書長の救出に――」

そこまで、カリムが言った。直後。

ざわざわと、待機していた魔導師、騎士達がざわめき出した。今の今までカリムの号令を待ち、口を閉じていた彼等がである。

何事かと、カリムはヴェロッサと共に振り向き――。

そこで、信じられないものを見た。

ザリツと、舗装されたアスファルトの上を歩く音がやけに大きく響く。

それはゆつくりと、だが確実にカリム達へと近付いて来ていた。

当たり前である。”彼”は、カリム達へと歩いて来ていたのだから。

666――伊織タカト。彼が

随分とズタボロの格好であった。上半身のバリア・ジャケットは無くなり、上は裸。

下も所々が破れている。身体中も、随分汚れていた。

だが、カリム達が驚いたのはそれだけでは無かった。

その腕に抱えられた人物。ぐったりと脱力し、運ばれている青年。

ユーノ・スクライアに驚いていたのだ。

彼もまたボロボロの姿だ。タカトとさして変わらない。

目は閉じられ、口は微笑みの形で固まっている。

そして、呼吸をしていない。胸が上下していなかった。

つまり、ユーノは――。

「……………」

騒然となる場。だが、タカトはそれを全く無視して歩く。
ゆつくりと、確実にカリム達へと。残り十歩の距離までタカトが
近付き、漸く魔導士部隊は我に返った。すぐさまそれぞれのデバ
イスを構え——しかし、カリムがそっと手を伸ばしそれらを制する。

「義姉さん？」

「……………」

いち早く無限の猟犬を発動しようとしたヴェロッサが義姉の行動
に疑問符を飛ばすが、カリムは首を横に振るだけだ。
決して攻撃を許さない。何故なら、タカトは——。

ただ、タカトが歩いて来る音だけが響く。

そして、ついにカリム達との距離が零になった。

タカトは何も言わない、話さない……しかしカリムは彼の目を見
て息を飲んだ。

死んでいる。

目が、どうしようもない程に。救いようがない程に、死んでいる。

そして——。

「……スクライア、司書長は……？」

「……死んだ」

腕の中で全く動かないユーノを見ながら、タカトはたった一言だ
けをカリムに告げた。

綺麗な、綺麗な顔のユーノ。だが、彼の表情は変わらない。

死んで、いるから。

タカトの答えに、その姿を見た時から分かっていた事とは言え、カリム達の表情が凍る——そして、タカトは死んだ目のままで笑った。

あまりにも、暗い。暗い、暗い笑顔で。

「……俺が、殺した」

——次の瞬間。

乾いた音が、その場に甲高く響き渡った。

カリムがタカトの頬を平手打ちにしたのである。

その音は余韻を残し——やがて消えた。後に残ったのは、タカトの頬を張ったまま睨みつけるカリムと、それすらも無抵抗に受け入れるタカトだけ。

暫く、カリムはタカトを睨み続け——やがて、重く、深い吐息をついた。

長い、長いため息を。そして、告げるべき言葉を彼女は告げた。

「……第一級広域次元犯罪者、伊織タカト——貴方を、逮捕します」

カリムから告げられた言葉——それを受けても、タカトは何も抵抗しなかった。

バインドで拘束される時も、ユーノを引き剥がされるように奪わ

れる時も――。

全く、何も。

……こうして、単身で第一級広域次元犯罪者となった、666――伊織タカトは管理局に逮捕されたのであった。実に、呆気なく。だけど確かに、大切なものの喪失って……。



高町ヴィヴィオは寂しがり屋である。

少女が辿って来た経緯もあり、年齢に似合わずしっかりとしているのだが、彼女の本質は愛に飢えているのだ。

そこら辺は、母二人譲りと言えなくも無い。血は繋がっていないくても親子言えるだろう。

そんな彼女は、管理局地上本部のエントランスで、ずっとずっとユーノの帰りを待ち侘びていた。

あの時――タカトを連れて帰ると約束したユーノの帰りを。

『大丈夫』そう言って笑った、ユーノ。

『必ず、タカトを連れて帰って来るよ。……その、タカトはちよっというろあるけど、多分大丈夫。だから、ヴィヴィオ』

君は、ここで待って――。

そう言って、ユーノは一人タカトの所に向かってしまった。

本当は、自分も連れて行って欲しかったのだ。でも、それは何となくダメな事だと彼女は察した。

子供の自分じゃ、ユーノの足を引っ張ると言うのが分かってたから。

それでも、それでも——少女は、嫌な予感を覚えていた。

「……ユーノさん……タカト……」

ぽつりと呟く、二人の名前。

早く帰って来て欲しい、ユーノも、タカトも。

だから、ずっと、ずっと待ってた。夜遅くても、眠らずに。

そんな少女に、カリムが護衛に残した騎士二人も眠るように促したのだが、ヴィヴィオは頑として聴き入れなかった。

ユーノとタカトが帰って来るまで、眠らないと少女は小さな身体で決めていたから。

……そうじゃないと、二人とも帰って来ない錯覚を覚えたから——だから。

そして。

「……ヴィヴィオ……」

声が、少女に届いた。ヴィヴィオは顔を上げる——でも、名を呼んだのは少女の待ち人では無かった。

カリム・グラシア。そして、シャツハ・ヌエラ。

聖王教会、騎士の二人がそこに居たのである。

彼女達は、不寝のヴィヴィオに息を飲む。——確か、二人ともユーノの救助に向かうとか聞いた覚えが少女にはあった。それが、何故ここに居るのか。

——そして、何故、そんな沈痛な面持ちでいるのか。

「……カリム、さん。シャツハさん……?」

ユーノとタカトは?

そう聞こうとした、ヴィヴィオにカリムは目を一旦伏せた。

だけど、それも一瞬の事。カリムは、すぐに目をヴィヴィオに合わせる。

「……ヴィヴィオ、気をしっかり持って聞いて欲しい事があるの……」

「騎士カリム……!」

そこで、後ろに控えていたシャツハが突然叫ぶ。

まるで、カリムを止めるかのように。でも、彼女は首を振ってそれを拒否した。

ヴィヴィオには、ちゃんと伝えなければならぬとその目は告げる。

「……カリムさん……?」

「あのね、ヴィヴィオ――」

……そして、ヴィヴィオは、カリムからたった一つの事を聞いた。

どうやって、ヴィヴィオはここに来たのか覚えて無かった。

気付けば、この薄暗い部屋に居たのだ。……そして、そこには一人の青年が居る。

もう二度と、目を覚まさない青年が。

「……ユーノ……さん……?」

呼び掛ける。でも、青年は何も言わない。話さない。
答えない、笑わない、動かない。

ユーノ・スクライアと言う青年は、もう死んでいたから。

生死の概念も、よく分からない年頃なのに、ヴィヴィオはもうユーノが動かない事を理解していた。

……でも、心はそうじゃない。少女は呆然と、遺体安置所のベッドに置かれたユーノの名を呼ぶ。

でも、答える声は帰って来ない……もう、二度と。

そんな少女を見ていられないと、シャツハは目を伏せ、でもカリムは違った。

……まだ、ヴィヴィオには告げなければならない事がある。

「……なんで……? なんで、ユーノさんは……」

「ヴィヴィオ。……もう一つ、言わなくてはならない事があるの……」

これ以上、何があると言うのか。

まだ呆然としたままのヴィヴィオはのろのろと、カリムに振り向く。

——心のどこかで、それを聞くなと言う声が聞こえた気がした。
でも、もう遅い。カリムは話し出している。

聞くな、聞くな、聞くな、聞くな――。

「スクライア司書長を殺したのは――」

聞くな、聞くな、聞くな聞くな聞くな聞くな聞くな――！

だけど、声は明瞭に少女に届けられた。違う事なく、はっきりと。

少女にとって、認めたくない言葉が。

「666――伊織、タカトよ」

……直後、今度こそは間違いなく。

ヴィヴィオという一人の少女の心は砕け散った。

絶叫と共に。



そして、伊織タカトはそこに居た。

管理局地上本部、特別収容所に。

基本的に監獄等は別の場所に作るものであるが、どうもここにも簡易の収容所はあるらしい。

たった一人。タカトは薄暗いそこに居る――徹底した封印を施されて。

白い拘束服を着せられ、両手は一纏めに拘束され包帯のようなも

のをぐるぐるに巻かれていた。

そこには、びっしりと文字が描かれている。これが封印だろう。さらに両目すらもその封印により塞がれていた。あれでは、何も見えまい。

足には鎖に鉄球――おそらく、見た目通りの重さではないだろう。そして首にはチョーカー。……確認していないが、それら全てがほぼ間違いなく爆弾付きである。

何重にも渡って施された封印は、そのまま管理局上層部にとって、タカトがどれだけ恐れられていたのかを物語っていた。

……だが、タカトとしてはむしろよく逮捕で済んだものだと思うたものである。

自分が巻き起こした事件の数々を考えれば、裁判抜きで即十三階段行きだろう。

そこは管理局が甘いのかどうなのは、タカトの知った事では無かった。

……どうでもいい。それがタカトの偽ざる本心である。

本当に、心の奥底からどうでも良かった。十三階段行きだろうと、その場で銃殺だろうと、今のタカトは受け入れていたであろう。

今は、ただ、何も考えたくない。

何もしたくない、何も話したくない。

あれだけ固執していた自分の目的も、もうやりたく無かった。動きたくない、食べたくない、飲みたくない。……息すら、したくなかった。

いつそ死んでしまえたら、どれだけ楽であつたか。

……俺が、ユーノを殺した……。

カリムに告げた言葉である。そして、タカトにとってはそれは真実だった。

自分の行いが――これまでやって来た全ての行為が、ユーノの命を奪つたのである。それは、間違い無い事だから。

自分にまつわる全ての厄介事。そして、自分の目的。

その全てを暴力で解決して来た自分。――結果、そのツケは払わされた。

それもツケは自分ではなく、ユーノへと来たのである。……まるで、これがお前がして来たことだと言わんばかりに。

……ああ、そうだ……。

認める。そう、その通りだ。

自分は他者を、そして他者の大切なモノを奪い、壊し、殺し続けて生きて来た。その結果がこれである。

……そう、いつか自分の前で自殺したストラの提督。

あれの言葉が思い出される。『そんな事も分らないのか――』と。

ああ、今なら分かる。本当に大切なものは、例え嫌われようと何があろうと遠くにやるべきであつたのだ。

大切なものを側に置くと、自分の行いがそちらに行く――分かっていた筈だった。分かっていた、筈なのに！

……自分は、それが徹底出来なかった。

薄暗い収容所にタカトの自嘲の笑いが響く——でも、それは他者から見れば泣いているようにしか見えなかっただろう。

そして——。

「……タカト……」

——声が聞こえた。一人の少女の、声が。

それは、ユーノが、そしてタカトが守りたかった少女の声。
何を置いても守りたかった少女の声であった。

「……ヴィヴィオ、か……」

「……うん」

この上、俺は何を喪失うんだろうな……？

思わず、タカトは一人呟く。けど、今度の喪失は、きっとタカトの望んだものとなる筈だった。

この少女だけは、絶対に守るために。

……俺は、ヴィヴィオを喪失おう。

そうして、薄暗い牢獄の中と外で。

青年と少女の対決は始まった——。



唐突だが、防衛戦で一番恐ろしい戦法は何か分かるだろうか。

全包囲からの一斉攻撃——確かに、一度に全包囲から攻撃するのは、わりと常套手段と言える。

特出戦力による電撃突貫攻撃——戦力次第では、これも恐ろしい戦法と言える。

だが、それよりも遥かに恐ろしい戦法がある。……波状攻撃だ。こと防衛戦において、休む間を取らせずに押し寄せる波の如く来る波状攻撃ほど嫌な戦法は無い。

特にそれが、替えのある無人兵器ならばなおの事である。

タカトを逮捕してからきっかり三時間後、管理局地上本部はガジェット並びに因子兵による膨大な物量による波状攻撃に晒されていた。

「IS、ツインブレイズ」

一斬一

ガジェット？型を十字に断ち切り、現れたのは元ナンバーズ、デイド。

更に、光線が彼女を援護するように無数に飛び交うガジェット？型を爆砕させていた。

その光線を操るは、一人の少女。

「IS、レイストーム」

「オットー」

デイドが、少女の名を呼ぶ——自分と双子の少女の名を。
オットーはそれに頷きだけを返し、続くレイストームを因子兵に叩き込んで行く。……それでも、数は減らない。と——。

—爆!—

突如、敵ガジェット、因子兵部隊のど真ん中で爆発が巻き起こる。
それは、容赦無く双方を焼き尽くし、吹き飛ばしていった。
敵陣形に穴が空く。それを見逃す筈も無く、管理局武装隊の面々が敵陣に突貫し、敵陣を更に切り崩していく。
その様子を見ながら、デイドとオットーは同時に呟いた。

『『セイン』』

「へへへ〜♪」

によきつと地面からピースしながら現れたのは二人の姉でもあるセインであった。

敵集団のど真ん中に、ISディープダイバーで潜入し手榴弾でも放り込んだのであろう。いつぞやの管理局地上本部を襲撃した際に使った手段でもある。

セインのピースに、二人共少しだけ微笑する。だが、その微笑も戦場を見るなりすぐに曇った。

管理局地上本部への、ストラの波状攻撃——。それが今も絶え間無く行われていたから。

彼女達とはかく、武装隊魔導師や騎士達ではさすがに保つまい。
このままでは、いずれ突破される——。

「……このままでは、埒があきません。どうにかしなくては」
「て、言っても空間転移であいつ達現れてるからなあ……。あれどうにかしないと、どうにもなんないよ」

ディードの言葉に、すかさずセインが反論する。

確かに、空間を飛び越えて戦力を送り込まれては、援軍を遮断する事も難しい。

いくら何でも、敵戦力も無限ではあるまいが、全部を撃破する前にこちらが力尽きる方が恐らくは早いだろう。

なら、どうすればいいのか――。

「敵、空間転移を妨害出来れば、どうにかなりそうですが……」
「それをどうするか、だよなあ……」

いっそ、AMFを周囲一帯に展開すれば、この空間転移戦術も止められるだろう。しかし、それをやると今度はこちらの魔導師と騎士が使いものにならなくなる。

さて、どうするかと三人は頭を悩ませ――しかし、そんな暇さえ与えずに次のガジェット、因子兵群が現れた。

空間を転移して現れた、それらに三人は顔を引き締め――。

「三人とも、伏せていろ……」

――突如、声が響いた。

三人にとって、あまりにも聞き覚えのある声が。

「IS、ライドインパルス」

次の瞬間。

一轟一

戦場に一陣の風が吹く。

それは、現れたガジェット、因子兵群を刹那に破壊してのけた。

亜音速機動による攻撃、それに今の声は――！

『『トーレ！？』』

「久しぶりだな、三人とも」

ふわりと、三人の元に降り立つのはナンバーズ最強の戦士であり、同時に彼女達の姉――そして、今は無人世界の軌道拘置所に拘留されている筈の存在。

ナンバーズ3、トーレに違い無かった。

三人は――特に、セインが口をぱくぱく開けて何かを聞こうとするも、驚きすぎて声に出せない。と、言うか何故ここに居るのか――。

そんな彼女達に、しかしトーレは構わない。更に現れるガジェットと因子兵に向き直る。

「話しは後だ。今は、奴らを叩く！　いくぞ……」

そう言うトーレの背中から、光の翼が広がった。彼女の固有武装である、エネルギー翼インパルス・ブレードを巨大化させたような感じと言えば分かりやすいだろう。

それは広がるなり、トーレの全身を包み——彼女はそのまま突撃を開始する！

一撃！一

斬撃ではなく、突撃。戦場を縦横無尽にライドインパルスで飛ぶトーレは、容赦無くストラの敵陣を蹂躪し尽くしていく。

それを呆然と眺める三人に、更なる衝撃が訪れる。

「……お久しぶりです、セイン、オットー、ディード」
「て、ええ！？」

後ろから、無感情な声と共に、やはり無表情な少女が現れる——当然、彼女の事も三人は知っていた。

ナンバーズ7、セツテである。

驚く三人に軽くぺこりと会釈をして、セツテは前に出ると自身の得物を取り出した。

固有武装、ブーメランブレイド——しかし、それは彼女が使っていたものとはかなり形が違っていた。

三日月のような形をしていたブーメランは、何故か四枚刃となり、刃も直刃——十字手裏剣のような形となっていたのである。

それを彼女は、頭上に掲げるとブーメランブレイドは一人でに浮かび上がり、直後。その刃が四枚とも展開した。

そこから光が刃となって現れる！ 光刃の大きさは、それこそ数十mも到達した。

「IS、スローターアームズ……」

一斬！一

ぽつりと呟くなり、セツテは巨大化したブーメランプレイドを放り投げる！

それは戦場を問答無用に切り裂いていった。

あまりの事態に、セイン達だけでは無く凍りつく武装隊の面々――だが、驚愕はそこで終わりでは無かった。

空の一部に走る揺らぎ――それは、直ぐさま形を成した。一つの舟の形に。

次元航行艦である。よりによって、クラナガン――それも、管理局地上本部直上に現れたのだ。

突然の出来事に、呆然とするしか無いが、やはり事態はそこで終わらなかった。

声が響く――とても、とても聞き慣れた声。

《Dr、ミッドチルダ、クラナガンに到着いたしました》

《敵、ストラとか言いましたっけ？ あちらのシステムにもハッキング完了しました♪ ちょろいもんですわね。これで向こうは援軍を送れません》

《そうかね》

『『……………』』

……最早、ここまで来ると驚き過ぎて、驚くのがバカバカしくなる。

聞こえて来た声は、そのどれもが三人の少女にとって聞き慣れた声であったからだ。……特に、最後のは。

それは、彼女達の生みの親であり、かつてミッドチルダを激震させた次元犯罪者。

狂気の科学者であり、アルハザードの遺児。無限の欲望の名を冠した存在であった。

そう、彼は――。

《太極符印、演算開始――。さあ、派手にいこう》

そして、次の瞬間。

一煌一

クラナガン直上に太陽が生まれた。

太陽は、顕現するなりガジェットも因子兵も容赦無く飲み込んで行く。

この時、この攻撃を正しく理解出来るものがいたならば、泡を吹いて倒れていたかもしれない。

何故ならば、その光はあらゆる意味で危険過ぎる光であったからだ。

それは、核融合――三重水素からなる、水素爆弾の光であった。……正しくは、原爆を起爆剤に使用しない純粋水爆、いわゆる『きれいな水爆』と言われる放射線を格段に減少させたものではあったのだが。

何にしろ、よりにもよってクラナガンで使われて良いようなもの

ではあるまい。

その光をバックに、一人の男が白衣をはためかせて、両腕を広げていた。

その左手には、何故か人差し指と中指だけが異様に伸びた妙なグローブが取り付けられている。背後には、これまた訳の分からない球が浮いていると来た。

だが、それはどうでもいい——問題は彼自身であったのだから。そう、彼は。

《ミッドチルダよ、私は帰って来た——！！》

ジェイル・スカリエッティ。

……いろいろな意味で危険過ぎる台詞を吐く、危険過ぎる人物。Drスカリエッティが、ミッドチルダに再臨したのであった。

（第五十七話に続く）

第五十六話「喪失したもの」(後編) (後書き)

「イギリスに到着して、二日目。シオンとみもりにより始まる勉強会」

「いろいろな意味で大変な――でも、久しぶりの穏やかな日常に皆も笑う」

「しかし、キャラが――」

「そして、シオンは人知れず新たな修練を己に課す」

「追いつくために、超えるために」

「少年の修練とは――？」

「次回、第五十七話

『勉強会と、シオンの修練』」

「命懸け――そんな事は、分かっている。でも、それでも成さなきやならない事がある」

第五十七話「勉強会と、シオンの修練」(前編) (前書き)

「こんな気持ちになるのは初めてでした」

「不安になるような、落ち着かないような、そんな気持ち」

「怒ってるのか、悲しんでるのか、それすらも分からなくて」

「だけど、あの人は。そんな私に、ずっと笑いかけてくれて」

「その笑顔に、どう答えばいいのか、私は分からなくて」

「魔法少女 リリカルなのはStS，EX。はじまります」

第五十七話「勉強会と、シオンの修練」(前編)

たった、と駆ける足音がロンドンに鳴る。それはジョギングのようであり――だが、決してジョギングでは済まない速度で走る足音であった。

つまり、全速力で走る足音だったのである。

その足音の主は、神庭シオンとギンガ・ナカジマ、スバル・ナカジマの姉妹。

そして、エリオ・モンディアルのEU出向組、前線メンバーのものであった。

基本的に、シオンのジョギングとは全速力での疾走の事を言う。これは師匠であるイクスーもとい、現在アルトス・ペンドラゴンが彼に与えた修練の一つである。

なんでも、ジョギングごときで息を切らせるような奴に戦闘が出来るかとか何とか。……人体の構造上、走ったならば息ぐらいは上がるのが普通である――が、身体強化を常とする魔導士となると、そうも行かないらしい。

……まあ、一般論とは程遠いものだとはシオンも分かっているのだ、あえてツツコミを入れてはいない。が、今回驚いたのはスバルやギンガ、エリオが自分のペースに着いて来ている事であった。

シオンの全速力ペースでのジョギングにである。

エリオはもとより、ナカジマ姉妹もキツイ筈だ。息も上がっている。

EU出向組後衛メンバーのティアナ・ランスターやキャロ・ル・ルシエにおいてはシオン達のペースに付き合う事を諦め、かなり後

方を走っていた。

シオンはちらりと、着いて来る三人に視線を向け、とりあえずは言ってやる事にした。

「……無理に着いて来なくていいんだぞー？」

「そ、そうは、いけない、よ！」

全速力ペースで走っているにも関わらず普通に話すシオンに、息を切らせながらスバルが叫ぶ。ギンガやエリオは流石に口を開かない。……つまりは、それだけしんどいと言う事なのだが。

そんな三人の様子にふむと頷き、シオンは”コッ”を教えてやる事にした。……ついでに、ティアナとキャロにも念話を繋げる。

「ただ体力だけで走るから、そうなるんだよ。魔力使え魔力。魔導士なんだからよ」

「だ、だってジョギングで……！」

「……あのな、このジョギングはそもそも魔力を使うのが前提なの」
『『え』』

これは余程意外だったのか、スバルは元よりギンガやエリオ。はたまた、念話でティアナまで声を上げていた。

……ただ一人、キャロだけ声を上げていない事をシオンは少し訝しみ――まあ、問題無いかと話しを続ける。

「身体強化を代謝面に重点的に使って心肺機能を強化。ヘモグロビンを増やして、血中酸素を増やしつつ疲労物質の蓄積を減らすんだよ。……これを意識的に魔力を使っていると、基礎魔力値も増える上に魔力制御の修練にもなるって訳だ」

つまり、このジョギングの最大の目的は魔力の効率的運用の修練

にあったのである。
体力を上げる為と言うのも無くは無いが、本来の目的はそこにある。

前述の言葉の意味は正しくそこにあった。

つまり、ジョギングごときで”魔力”を使い果たす奴に戦闘が務まるか——そう言う事だ。……ちなみに余談だが、シオンがアースラでやらされていたマラソンは純粋な体力オンリー物の為、別物である。

ともあれ、スバル達は得心したように頷くと、早速魔力を身体強化に回す。

シオンに言われた通りに、各部位に魔力を集中しようとして——直後に三人揃って困惑したような顔となった。

「……魔力を全身に回すだけじゃダメ？」

「当然。それだと魔力制御の修練になんねえだろ？」

スバルの困ったような顔に、シオンは意地悪く笑う。

一同——恐らく、ティアナとキャロもだが、身体強化を各部位に意識的に行う事に難儀しているのであろう。普通、身体強化に魔力を使う際は全身に行うのが当たり前である。

それを、やれ心臓、やれ肺、やれ血管、やれ——と分けて行うのだから難しくて当たり前であった。

分かりやすく例を上げるとするなら、両手別々にジャンケンをして別々のものを瞬間的に連続で出しつづけるようなものである。——だからこそ、魔力制御の修練になる訳だが。

苦戦する三人にシオンは笑いながらひらひらと手を振ると、さらにペースを上げて三人の前に出る。

「んじゃ、俺はお先にー。あ、ちゃんと練習しながら来るようになる」
「あ、シオン！」

後ろでスバルが叫ぶ声が聞こえるが、あえてシオンは無視。魔力をさらに回し、足に集中。一気に加速する！

それこそ風のように、シオンの身体は一同を置いて、軽快にロンドンの街を突っ切っていった。

「ほい、ゴール」

グノーシス、イギリス支部『学院』にシオンは到着。

息も切らさずに、身体をうーんと伸ばす。朝のジョギングはとても気持ちの良いものだ。

それが例え、全力疾走のよーなものだろうとである。

スバル達が到着するまで、さらに言うならばティアナ達が到着するまではまだ間があるだと、シオンは一人クールダウンの柔軟を開始する。

本来ならば、ここから地獄もかくやとばかりの修練を行う所ではあるのだが、本日の本命は勉強会である。修練でバテるような鍛え方はしていないが、勉強会に差し支えがでるような真似は避けておきたい。

そんな事を考えながら、シオンは直立の体勢からいきなり股割り。

両足を180°。開脚した状態でぺたりと地面に座り込む。そこから上半身を開脚した足へとそれぞれ伸ばし、それが終わると今度は上半身を地面へと投げ出した。

……これが某異母兄だと、ここから上半身を上に向けて180°回転するのだから、シオンのにはまだまだである。

「到着——て、わ。シオン、身体柔らかいね」

「本当ねー」

五体投地よろしくな柔軟をしていると、ようやく到着したらしいスバル達がシオンを上から覗き込む。

それに、彼はお帰りと簡潔に言いつつ振り向いた。

「ちょーどいいや。スバル、背中に乗ってくれねー？」

「え？ ……いいけど、シオンそんな趣味が——」

「て、ちがうわ！ 単に首を曲げるから重しになって欲しいんだよ！ お前、適度に重いからちょうどいい——ぐしゅっ！」

「シオン？ シオン？ 何か言った？」

「すみませんごめんなさい謝りますんで、どうか背中でジャンピングは止めて下さいませんかでしょうか」

ぴょんとシオンの背中に飛び乗ったスバル（リボルバー・ナックルと、マッハ・キャリバーセットアップ済み）に、シオンは誠心誠意、心を込めて謝った。……じゃないと、次はジャンピングで済みそうな気配が無かったからである。

ニコリと笑うスバルの笑顔に、きらりと輝く彼女のデバイスが怖ひ（誤字にあらず）。

ともかく、乗っかられたままシオンは首をぐぐつと後ろに回転し

て行く。

ゆっくりと、シオンの顔が後ろに向いて行き――。

「……うわ……。シオン、エクソシスト思い出しちゃった……」

「な、なんで、ミッド出身のお前が地球の有名なホラー映画を……」

見事にこちらも180°回転したシオンの首に、スバルが率直な感想を言うが、シオンとしてはツツコまざるを得ない感想であった。だが、スバルはツツコミを見事にスルーするとシオンから降りる。

「それじゃあ、次は私の柔軟手伝ってよシオン」

「……だから何でって……もーいいや」

多分、またスルーされるんだろうな――とシオンは諦め、今度は座り込んだスバルの背中を押してやる。

一瞬、筋肉質ながらも女性特有の柔らかさを手の平に感じたのは内緒だ。

気恥ずかしさを感じて、隣をちらりと見ると、そちらではギンガとエリオが組んで柔軟を行っていた。

「ギンガさんも、身体柔らかいですよね」

「ありがたい、そこそこは鍛えてあるから」

……ギンガのそこそことは、シューティング・アーツSAでスバルを上回るレベルなのかーと思いつつも、エリオの顔を見遣る。そこには、昨日の暗さはどこにもない。

ふっきた訳でもあるまいが、ある程度は自分で踏ん切りを付けたらしい。それを良い事とすべきか、悪い事とすべきかはまた別ではあろうが――まあ、なんにしる明るくなったのだけは良い兆候とすべきであろう。

シオンはうんうんと一人頷き――。

「痛い痛い痛い！ シオン、痛いってばっ」

「お？ ああ、悪い悪い」

思わずスバルの背中を押し続けてしまっていたらしい、彼女の悲鳴で手をパッと離す。

もーと、こちらを涙が滲んだ目で見るスバルにシオンは苦笑。手を合わせて謝った。

そこでようやく、ティアナ、キャロ組も到着。シオンはスバルに謝りつつも、キャロの元に駆け寄る。

「おー、キャロ。お疲れさん。そんなちっこい身体で俺達のコース走るのしんどかったろ？ クールダウン手伝ってやるから――」

「……別にいいです。ティアさん、一緒にやりましょう」

「え？ あ、うん」

シオンの申し出を、キャロは即座に断り、傍らのティアナと一緒にクールダウンを始める。

固まったのはシオンである。彼はキャロに笑いかけた姿勢のまま、所在無く突っ立っていた。

あ……あれ……？

「えー、あの一、キャロ、さん？」

「……シオンお兄さん」

「お、おう、何？」

「私達はクールダウン終わらせてからシャワーに行きますから、シ

オンお兄さん達はシャワーに行ってください」

「……………はい」

言外に邪魔と言われた気がしつつ、シオンはキャロの見たことも無い迫力に押されて、すごすごと『学院』へと入っていったのであった。

後に、スバルとギンガはこう述懐する。『何か、反抗期の娘を持った、お父さんみたいでした』——と。

そんなこんなで、朝一のジョギングは終了するのであった。



「「で、なにをしたの？」」

「……………てめーら」

『学院』食堂。そこで、イギリス料理の朝食を頂きつつ開口一番、スバル&ティアナから放たれた疑問に、シオンはこめかみをひくつかせた。

マフィンにソーセージを挟んだ俗に言うソーセージマフィンを頬張る。

……ちなみに、マフィンはイギリス料理である——アメリカ料理でもあるのだが。

ここで解説すると、イギリスとは世界一料理が不味い国なんぞと言われている。これは割と有名な話であろう。しかしながら、ただ『あの国の料理は不味いんだぜ、へ!』とか言っていると、後々赤

っ恥をかく事必死なので注意が必要である。

まず、大前提としてイギリス料理が不味いのはイギリス人が認める所である。これを理解していなければ、お話しにならない。

イギリス人が自虐ネタとして使う事もしばしばである。

つまり、イギリス人に『(前略)世界一不味い料理で何年覇者だよ』とか言っても怒ってくれるイギリス製金髪お嬢様など、この世に存在しないので気をつけて頂きたい。

さて、イギリス料理が具体的にどのようなに不味いのかと言うと、野菜は本来の食感がわからなくなるほど茹でる。油で食材が黒くなるまで揚げる等などといった、ぶっちゃけてしまうと大雑把な調理法がその原因とも言える。

日曜日は牛を丸焼きにして食べると言った文化や、そもそも美食文化が無かった事が、イギリス料理不味い説の理由である訳だが。

そう言った調理法で作られた料理が他国の人間にただ受け入れ難かったと、それだけの理由なのだ。……そもそもイギリス料理は、食べる人の好みによって、食卓で塩やら酢とかを振って、その場で味付けされることを前提としている事でもあるのだし。

その為、調理段階では味付けしない料理もまた多いのだ。

ここまでで、フォローを入れているのか、けなしているのか分からない説明を入れておいて何だが、イギリス料理も美味しいものはある。あるったらある。

例えば、ローストビーフとかスコーンとか、マフィンとか、挙げれば結構あるものなのだ。……まあ、不味い料理も多いと言えば多いのではあるが。

なお、『イギリスだって大したお国自慢ないだろ』とかほざく野郎は、一辺、イギリスに行ってから言うべきであろう。その国に入った事もないくせに、その国をバカにする人間はただの『世間知らず』『井の中の蛙、大海を知らず』である事を覚えてもらいたいものである。

長文閑話休題。

ともあれ、マフィンのもふっとした食感とソーセージの肉汁を口の中で味わいながら、シオンはムスツと言う顔をした。

二人の疑問——つまりは、キャロの態度の事である。今も、何と別のテーブルにつく有様だ。

嫌われている——とまでは言わなくても、あからさまに不機嫌とゆーか、そんな雰囲気キャロは纏っているのだ。それを向けられているのは、シオンである。

当然、シオンに原因があると思った訳だが——。

「で？ 何やらかしたの？ キャロがお風呂入ってる時に突撃したとか、パンツを一緒に洗ったとか、そー言ったことしたんじゃないでしょーね？」

「……なにそのオヤジ。つか、どれもやるかっ！」

まるで取り調べよろしくに、ライト（どっから持って来たか不明）をシオンに当てるティアナ。こちら辺、ノリでやってるとしか思えない。

と言うか、ミッドでは地球産文化が何故にこんな知れ渡っているのか。

一応、管理外世界なのではないのだろうか？ シオンは思う。

……ちなみに、ミッドでは『プチ第97管理外世界地球ブーム』である事をシオンは知らない。

マフィンの山から、エッグマフィンを奪い取ると口の中に突っ込む。

……意外と、塩胡椒が効いてて美味しい。これは幼なじみである姫野みもり製か。よくシオンの好みを分かっている。

ともあれ、マフィンを一口で咀嚼しつつ、うだーとシオンはうなだれた。

「……だー、全く心当たりがありやしねえ……」
「うーん」

シオンの様子に、スバルやティアナもお手上げといった感じである。

と言うより、昨日の今日で態度が変わりすぎであった。

なら、昨日何があったかと言うと――。

「あ」

「何か思い出したの？ シオン？」

いきなりシオンが上げた声に、スバルがきよんとする。

だが、シオンは構わなかった。そう心当たりはまさに一つだけあったのである。

……そういや、子供とは言え年頃の娘だしなあって、一人顔き。席を立った。

目指すは、キャロの席！

「キャロ、ちよつといいか？」

「……何でしょうか、シオンお兄さん」

……言葉の端々に痛々しいものが感じられ、危うく崩れ落ちそうになるシオン。

しかし、ここで倒れる訳にはいかないと何とか踏み止まった。

ぷるぷると震える足を叱咤し、キャロにもう一度振り返る。直ぐさま頭を下げた。

「すまんっ！」

「へ？」

すぱんつと見事な姿勢での謝罪。

キャロが思わず目を丸くする程のそれである。

シオンは構わず謝罪を続けた。

「その、昨日の事だよな？ お前が怒ってるの。悪気は無かったと言うか、わざと——ではあったんだけど、お前がそこまで傷付くなんて思わなかったんだ。すまん！」

「あ、えっと、その……あ、謝ってもらうような事じゃないですし、私に原因があるって言うか、その、シオンお兄さん、顔上げてください」

「……顔上げた途端、ぐーぱんちとかしない？」

「そんな事しません！」

たじろぐキャロ。ちょっと珍しい図である。

ともあれ、許してくれたのだと判断してシオンは頭を上げた。そこには、キャロのちよつと申し訳なさそうな顔がある。

シオンはほつとしながら、はっはと笑った。

「いや、よかったよかった。キャロが許してくれて。——下手した

ら、一生お嫁に行けなくなるとか、そんな事になるのかと」

「許すも何も無いって言いますか——え？ シオンお兄さん、何のお話しをしてるんですか？」

「え？」

何故にお嫁に行く行かないの話しとなっているのか。

キャラは分らず、小首を傾げる。それにシオンも疑問符を浮かべ——とりあえず、自分が推理した『キャラが怒っている事』を言ってみる事にした。

「いや、ほら。昨日、お前が魔虫の毒にやられた時だよ。あの時AEDを使う為に、お前の服、肌けさせちまったからさ」

「……………え？」

今度の『え？』は前と違うものであった。キャラと同じ席であったギンガがあっちゃーと言う顔をしているのも、シオンは気付かない。

そのまま彼は、地雷源を盛大に突っ走る！

「いやーお前ん家の家訓やら何やらに、『肌を見せたらあかん』とかあったらどーしようかと。あ、胸の事なら気にすんな。お前はまだ子供。その内、大っきくなるって——て、どした？」

この時点で、キャラはぷるぷる震えている。……なお、スバル&ティアナは盛大に顔を引き攣らせていた。

シオンの、あまりの鈍感&勘違いっぷりに。

キャラの震えは次第に大きくなり——そして、地雷は起爆した。

「シオン、お兄さんの……………ばかぁ——っ！」

「ぶっ！」

すぱんっ！ と軽快な音が鳴り、シオンがその場でぶっ倒れる！
見事なまでのジャンピング平手打ちであった。

キャロは涙目となりながら、顔も真っ赤にし、荒い息のままシオンに思いつきり叫ぶ！

「シオンお兄さんのあほお——！！ 唐変木——！！ おたんなす——！！ 大っ嫌いです！」
「あ、キャロ！」

恐らくは、彼女自身初となる罵詈雑言の嵐を叫んだ後、逃げ出すようにキャロは食堂から出て行く。エリオが慌てて追い掛け、二人の姿はすぐに見えなくなった。

それを、シオンはぽかんとした顔で見送り。

「……えーと、俺、何か間違えた？」

「……シオンのほか」

「……この、大ばか！」

「……シオン君、ばかね」

「……シン君、フォローのしようがありません。ばかです」

女性陣からとても分かりやすい回答を頂き。今度こそ、シオンは床に崩れ落ちたのであった。



大英図書館——と言うものがある。

イギリスの国立図書館であり、英国図書館とも言われる場所だ。イギリスには納本制度と言うものがあり。これに基づいて、イギリス国内で流通する出版物は、出版の1ヶ月以内に出版者によりここ、大英図書館に提1部が収められることが義務付けられている。

さて、この大英図書館。1973年に大英博物館図書館や、ロンドンの国立中央図書館を初めとするいくつかのイギリスの国営図書館が、大英図書館法（1972年）に基づいて組織的に統合され、成立した図書館である。

18世紀の創立で、オックスフォード大学ボドレー図書館などに比べると組織の歴史も納本図書館としての歴史も浅い――が、1842年以降にイギリス国内で出版された蔵書を保存しており、古書や外国文献の収集も盛んに行われているのである。

その蔵書量はかなりのものと言われ、有名所では、オーレル・スタインコレクション。グーテンベルク聖書。マグナ・カルタ手稿本。ベオウルフ叙事詩古写本。リンディスファーンの福音書などの、貴重な文献も数多く納められており、まさしく英国の誇る大図書館と言えるのであった。

……なお、上に挙げた書は魔導書とかではないので注意してほしい。

さて、そんな大英図書館の一角――そこで、ペンとノート。そして、数々の神話関連の本を積み重ねた者達が居た。

神庭シオン達である。

一角に陣取ると、借りて来た黒板を使いシオンは講義を行っていた。

「斉天大聖・孫悟空と言えば、西遊記で知られる三蔵法師のお供の猿。ここまではいいな、スバル」

「う、うん。何とか……」

頬にくっつきり紅葉を作ったシオンの呼び掛けに、スバルは何とか頷く。

それによしとシオンは答えながら続きを話し出した。

「だが、この孫悟空は、実際の所は道教、仏教、中国シャーマニズム、他様々な宗教、民間信仰の神話が合わさって生まれた神様なんだ」

「え？ それって違う宗教の神様が混じり合ってたって事？」

シオンの言葉が分からず、？マークを頭に浮かべるスバル。

それにシオンは苦笑する——確かに、ミッド出身ではこの概念はちょっと理解が難しいだろう。

これは、多文化籍世界である地球独自の概念である。

なので、シオンは分かりやすく一から説明する事にした。

「孫悟空は、猿猴——まあ、ようは猿の神様なんだけど、同時に鉄鋼にまつわる戦闘神でもあるんだ。別名は闘仙勝仏だしな。——さて、なんでこんな風にいろんな神話が合わさったいろんな要素を持つ神様となったか。その鍵となるのが、最初に言った『西遊記』の成立過程にあるんだ」

そこで、シオンは積んだ本から一冊の本をスバルの前へと持ってくる。

その本のタイトルは——西遊記。

中国三大——あるいは、四大怪奇小説に並べられる物語であった。シオンは『西遊記』を指差す。

「この西遊記は、孫悟空を主役とする戯曲、小説本、民間伝承をつなぎ合わせて誕生した、言わば孫悟空伝説の集大成なんだ。素材となった伝承には神話、民話であった物語も数多い。例えば、四大の場合に数えられる封神演義に出てくる登場人物が、西遊記に出てくるなんて事もある。ここで重要なのは、中国——つまり漢民族文化は常に外からの世界の影響を受けていたって事だ」

中国の歴史は支配と侵略、そして侵攻が常に付き纏っていた。

他国を襲い、襲われ、侵略し、侵略されを繰り返したのである。特に遊牧民である騎馬民族の影は常にちらついていた。

それこそ春秋時代の北狄・西戎。戦国時代からは匈奴。更には北魏、後裔である隋や唐は漢民族を取り込んだ鮮卑の血族である。

契丹人の遼、元——そしてモンゴル。

「こう言った出来事から民族間での血の混淆が起きていったんだ。それこそ支配層から民間レベルでな。人種と民族の融合は繰り返され、漢人と遊牧民の文化は複雑に入り交じっていく。——当然、崇める神様にも、その影響は及んだ」

結果として起きたのが、神話の融合。神様の融合である。

元より多文化籍世界である地球は、戦争の堪えない世界であった。宗教によって起きた戦争もまた多い。そして勝った国の神様は崇められ、負けた国の神様は悪魔とされる事など珍しくもなかったのだ。

例えば、十字教の大悪魔。そのルーツは他国の神様であったりする。

それがミッド——いや、ベルカにも他世界に無い地球の個性とも言えるものであった。

そして――。

「そして、複雑にハイブリットした神の最高峰。それがすなわち、
齊天大聖・孫悟空って訳だ。……さて、この孫悟空にはある逸話が
ある――」

「シオン、シオン」

「ん？　なんだティアナ――」

横から声を掛けられ、シオンは思わず顔を上げる。

そこで見たものは――ぐっすり眠こけたスバルを指差すティアナ
であった。

「……………」

シオンは無言。しばし眠るスバルを眺めて、手に持つ分厚い西遊
記を持ち上げる。

それをスバルの頭にまで持って行き――離れた。

当然、西遊記は重力に従って落ち――。

がすつ。

後にスバルは言う――カドが痛かったです。

悶絶するスバルにため息を吐くと、齊天大聖の話しをする事は一
端止めにした。

ティアナに向き直る。そこでは、既に数冊の『北欧神話』関連の
書物を読み終えた彼女がいた。

「どうだ？　北欧神話ってか『散文のエッダ』は？」

「……ちよつと興味深いかな。ようは終末思想よね？」

「そ。北欧神話——原典はスノッリ・ストウルルソンの『エッダ（散文のエッダ、新エッダ）』や『ヘイムスクリングラ』。後はサクソ・グラマティクスの『デンマーク人の事績』とかが有名だけど、突き詰めてしまえば未来に必ず起こる終末、『ラグナロク』をいかにようにして迎えるかが焦点となってるんだ」

いつか必ず来る破滅——それに備え、または終末まで享樂的に過ごす神々の物語。

単純に言ってしまうえば、北欧神話はそうなる。

この終末思想はあらゆる神話である話であるのだが、北欧神話が徹底しているのはこの終末までの時間を過ごす神達を人間らしく書いた事か。

例えば、『一年後に世界は滅びます』と言われた際、人間はどうするだろう？

その滅びの対策を練るもの、家族と別れを惜しむもの——様々だろうが、恐らく大半は『滅びるのが分かってるんだから、その時まで面白ろおかしく生きなきゃ損』と享樂的な思考になるのではないだろうか？

北欧神話では、神々がそうなのである。人間界からエインヘリアルと呼ばれる勇者達を募り、闘わせて酒宴に耽り。性奔放に遊び回り——と、常に退廢的な空氣が物語に流れるだ。

その中で人間は、まるで玩具のように弄ばれ、壊され、捨てられていく——。

「——で、最終的には悪神ロキの手引きで、ラグナロクが起きて、神々とその世界は滅ぶ——て訳ね」
ユグドラシル

「補足説明入れるとだ、スルトにより焼き落ちた世界から芽吹いた」
ユグドラシル

新たな世界に賢き子ら、リーヴとリーヴラシルの兄妹が住まい、世界を発展。後の人間はその子孫になる、てのがラストだな」

ティアナの説明に、シオンが補足を入れてやる。

北欧神話で、わりと勘違いされやすいのがそこだ。

ユグドラシル
世界が滅び、そこで物語も終わると思っている人が結構いるのである。

……まあ、日本の『浦島太郎』でも玉手箱を開けて、太郎がじい様になって物語は終わると思ってる人も多かった（最近はトリビアで取り上げられ、有名になった）ので、そこはさして重要ではないかも知れない。

……ティアナは自分で勉強出来るからいけるなとシオンは頷き――だが、そこで唐突に念話が来た。

当のティアナからである。彼女は、うろんげな視線をシオンに向けていた。

《……で？ どーすんのよあんだ、あれ》

《……どーしよう、かなー》

あはは、と乾いた笑いを浮かべるシオン。

ちらりと見る先には、かなり離れた位置でエリオと共に、みもりの講義を受けているキャロの姿があった。

食堂の騒動以来、一言も喋っていない。こちらから話しかけても無視である。

……まあ、さっきの今で、いつものように振る舞えと言われても無理はあるだろうが。

《さっきのは完璧あんたが悪いんだから、あれは謝りなさいよ》

《……そんな悪い事言ったかなあ……？》

そこでティアナは迷う事無く、クロスミラージュをセットアップ。シオンは即座に顔を青ざめる羽目となった。

《分かった！ 謝る！ 謝るから！》

《……よろしい》

ジト目で睨まれつつ、シオンはふうと息を吐く。なんか、最近スバルにしろ、ティアナにしろツツコミが激しくなって来ているのは気のせいなのか……？

ともあれ、それは謝るとしてだ。問題はキャロが最初に怒っていた事である。

あれは、果たして何だったのか――。フェイトや、なのは、はやてに相談しようとしたのだが、三人共忙しいのか念話通信に出ない。

さて、どうするかとシオンは思い。今はどうする事も出来ないかと、再び起き上がったスバルへと講義を開始したのであった。

――だが、シオンは知らない。

キャロの態度がおかしかった理由が、嫉妬によるものだ。

そして、そんな自分の気持ちに戸惑い。嫉妬する先のシオンと、どう話したらいいか分からなかったただけなのだ。

それが原因だと、シオンは知らないのであった――。

（後編に続く）

第五十七話「勉強会と、シオンの修練」(前編) (後書き)

……はい、どもー♪ 最近、週間から月間が変わったテストメン
トです♪

……いや、すみませんでしたマジに。

ISの方を更新しようとも思ったのですが、こちらの方が書きた
くなっちゃいまして(笑)

こちらの更新を優先しちゃいました♪(笑)

……ごめんなさい。石は勘弁を(汗)

さて、今話は日常編です。

タカトサイドが激動にも程がある状態なので、シオンサイドはゆ
ったり日常モードでいってみたい(笑)

まあ、シオンサイドも大概激動ばっかでしたし、たまにはって事
で♪

後編では、久しぶりにあの人の戦闘あります♪ お楽しみに
に〜♪ ではでは♪

第五十七話「勉強会と、シオンの修練」(中編)(前書き)

……うう、どもテストメントであります。お待たせしました——
いや、超マジに。

第五十七話の中編をお送りいたします。いや、二ヶ月更新してないなんてはじめてですよはっはっは……。

うう、ゴメンなさい。次はもうちょい更新頑張ります。

てな訳で、第五十七話(中編)どぞー。

第五十七話「勉強会と、シオンの修練」(中編)

一轟！一

紅が、世界を席卷する――その紅は、炎の色であった。その中央に立つのは、一人の男である。

叶トウヤ。グノーシス第一位にして、最強の男。

彼は、神なる槍、ピナカをぐるりと振り回しながら空を見上げた。そこには、管理局が誇るトップエース達が居る。

高町なのは、フェイト・T・ハラOWN、八神はやて、その守護騎士達――シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル。融合騎である、リインフォース？とアギトまで。

紛れも無く、現在管理局に在る中では最強の面子であろう。これにクロノ・ハラOWNを加えれば完璧である。その筈であった――にも関わらず。

そのトップエース達は、地面から自分達を見遣るたった一人の男、叶トウヤに^お圧^おされていた。

「どうしたね？ 来ないのかね？」

あからさまな挑発が、トウヤより放たれる。しかし、一同はそれを見無視した――当然である。先程はその挑発に乗って、ヴィータとシグナム、ザフィーラが瞬殺されたのだから。

ちなみに、その時かまされたのは、凶がり歪み果てし理想――ブ

ラックホール召喚——である。無論、至近距離で叩き込まれては防御も回避も意味が無かった。

”さっきの戦闘”では、そんな真似をされたと言う事もあり、一同は流石に慎重になっていた——が、だからと言って打開策がある訳でもなく。こうして睨み合いとなってる訳だが。

定石としては、射砲撃で出方を見るのが妥当——だね。

トウヤの一挙手一動に気を配りながら、なのははそう思う。しかし、そこはグノーシス最強の男。定石通りにやったのでは勝てない——絶対に、と言う事を先程、証明されてしまった。主に身体で。具体的に言えば、アクセル・シューターと、トライデント・スマッシュヤー。更には、はやてのフレスヴェルグを瞬動でかい潜られて放たれた、捻れ穿つ螺旋——風属性付与魔法——で、さっくり殺られて思い知らされている。

ちなみに、はやては直後に放たれた、焦がれ尽くす天空——炎属性付与魔法——で、灰にされて、なんとか離脱を図ったフェイトは、追い掛けるのが面倒とばかりの、輝き軋み壊れし幻想——直射爆裂型砲撃——で、消し飛ばされてしまった。後に残ったのは、シャルだけ（リインとアギトは、それぞれヴィータとシグナムにユニゾンしていた）。即座に潰されたのは言うまでもない。戦闘時間、僅か四十九秒。なんと、秒殺である。……流石に、もうそれだけは勘弁願いたかった。

「“ウラヌス”を使ってまで、シュミレーションを行っているのは、何もにらめっこをするためではないのだがね——」

やれやれとため息を吐くトウヤに、しかし彼女達は動かない。大仰に、槍を肩に担ぐ仕種すらも、見逃さないように神経を集中して。

「——と、言う訳で私から来てみた」
『『つ——！?』』

そんなトウヤの声を、真後ろから聞いて一同は仰天する。彼は、とても間近にいた。つまりは、一同のど真ん中に！

どうやって、そこに現れたのか——答えは簡潔に來た。轟槍の一撃と共に！

「じつと見るのは、まあいいがね？ それでは幻術のカモだよ」

一撃！一

捻れ穿つ螺旋——その一撃をともに受けて、全員が綺麗にすっ飛ばされる。

どうにか直撃は避けたが、ダメージをそれぞれ均等に与えられ、なのは達はぐっと奥歯を噛み締めた——すぐに空中で身を翻して体勢を立て直す！

その速度が誰よりも速かったのは、やはり盾の守護獣ザフィーラであった。踏み留まり、トウヤに襲い掛からんとして——その眼前には、既にピナカの穂先がある。

一瞬にも満たない時間の中で、トウヤが指を鳴らして囁く言葉だけが響いた。

「——焦がれ尽くす天空」

一爆一

そして巻き起こるのは、世界を席卷する赤である。

確認するまでもなく、今の一撃でザフィーラは墜ちた——その事実を認め、だが一同は迷い無く動く。

まずはこの爆発により散った仲間と合流する必要があった。トウヤが狙っているのは多人数戦の基本——個別撃破に違いないのだから。

「フェイトちゃん！」

「なのは！」

まずは一番近くにいたフェイトと。二人は高速移動魔法すら使って、合流する。

次に近くに居たのはシャルであった。彼女の元へと、二人は駆けつけようとして——。

—アヘッド・レディ？—

一時すらも、我を縛る事は出来ず—

「輝き軋み、壊れし幻想——」

なのはが見たのはシャルが消える瞬間であった。驚きの顔すら浮かべられず、突如叩き込まれた光に一撃され、消滅する——。

「「……っ!？」」

そして、なのはとフェイトは驚愕を内心で押し込めて、その場でバレルロール。

そこに、爆煙の中から次の光砲が殺到する！ 轟っという音と共に煙を切り裂いて来た光砲は、先ほどまでののは達が居た地点を寸分の違い無く薙いでいった。

あのままだったならば、確実にやられていたであろう。二人はそれを認めながらも、止まらない。

カートリッジロード。周囲に、スフィアが無数に浮かんた。それを爆煙の中へと同時に放つ！

「シューーっ！」

「ファイアッ！」

一閃一

撃ち放たれるは、アクセルシューターとプラズマランサー。無論、トウヤが相手ではただの牽制にしかない――が、牽制にはなる。

案の定、追撃の光砲は止んだ。迎撃か、回避か、防御か――撃破ではあるまい。なんにしろ、これで追撃のタイミングは外した。なのはとフェイトは頷き合い、その場に留まる。二人とも既にエクシードモードと、真・ソニックフォーム（バルデッシュは二刀流のライオットザンバー・ステインガー）である。

なのはに至っては、ブラスタ―1まで解放していた。

だけど――。

二人は同時に思い、晴れてゆく煙りの中に立つ人物を見る。叶トウヤ、その人を。

彼は特殊なシステムを使っている訳でも、ましてや特殊な能力を使っている訳でもない――にも関わらず、自分達はこの有様であった。どれだけ力量差があるかを考えるとぞつとする。

これが、EXランカーの実力……。

つまり伊織タカトを始めとした、最強クラスの実力。

改めて思いしらされた實力差に、しかしそれを考える暇さえ無い。トウヤはピナカをぐるりと回し——唐突に背後の未だ晴れやまぬ煙の中へと突き込む！ そこに居たのはヴィータ！

そして、その小さな手に握るのはグラーフアイゼン、ツェアシュテールングス・フォルムであった。巨大な鎚の先端にあるドリルが高速回転。合わせるように後端のロケットブースターが火を吹く。

【エクスプロージョン！】

「ツェアシュテールングス……！ ハンマアアアアアア——ッ！」

—轟！—

叫びと共に放たれた轟鎚の一撃が、突き込まれたピナカの穂先と激突する！

恐らく捻れ穿つ螺旋でもってピナカは放たれたのであろうが、ツェアシュテールングス・ハンマーが相手では威力の差がありすぎる。当然、ピナカは弾かれる筈であった——だが。

なのは、フェイトは——そして、ヴィータ本人はその光景に絶句する事になった。

放たれた、ヴィータのツェアシュテールングス・ハンマー。その高速回転するドリルを、事もなげに受け止めるピナカという光景を見て。

そんな三人に、トウヤは冷然と告げる。

「扇風機を止めるいい方法を知っているかね？」

「……ッ！？」

声にはっとヴィータは我に返る。すぐさま、ツェアシュテールン
グス・ハンマーの先端を注視した。

そこにはドリルの先端、”そのど真ん中をドリルの回転と順回転
して受け止めるピナカ”があった。

つまり、同回転を与える事により回転による貫通力を殺している
のである。

確かにこれならば、同威力を叩き込む必要もない——だが、それ
を見て、ヴィータは総毛立つ。

言うのは簡単であるが、先端の尖ったドリルの超高速回転の中心
を抑えるなど、針の穴を通すようなものである。もはや、神業の領
域であった。それを平然とやっているのだ。目の前の、この男は。

貫通力を殺されたドリルは意味を成さず——そして、トウヤは当
たり前に次の手を打って来た。ヴィータは慌てて離れようとして。

「凍え鎖せし大河」

—凍—

その前に、トウヤの声が響き渡った。同時にツェアシュテールン
グス・ハンマーが先端から一気に凍り始める——！

「っ、この……！」

「ヴィータちゃん！　だめ！」

それでもなんとか逃れようとするヴィータであったが、そんな彼
女になのはが叫ぶ。

攻撃を防ぎ、しかし撃破ではなく武器を封じたならば次に行う行
動は決まっていた。トウヤはするりと彼女の懷に飛び込むと、背中

に回り込んだ。

そのまま、小柄な身体を抱えると明後日の方向にぶん投げる！
それと同時に、晴れゆく爆煙を切り裂きながら炎翼をはためかせ、
シグナムがレヴァンティンを振りかぶって突っ込んで来ていた。

その目が驚愕に彩られる――何故なら、シグナムが突っ込む先に
居たのは投げられたヴィータであったから。

避けるか、それとも受け止めるか、刹那の躊躇をシグナムは覚え
――その躊躇が致命的となった。

気付けば、ヴィータの背中を追うようにトウヤが瞬動で踏み込んで来ている！

「捻れ穿つ螺旋」

一貫！一

放たれるは、風巻く一閃。

ヴィータを背中から貫いたその一撃は容赦無くシグナムをも貫いていた。

驚愕の表情のままに、彼女達が消える――二人とも、同時に撃破であった。

まさに一瞬の出来事。その一瞬で、守護騎士全員が撃破された――。

「いや、残念ながら彼女達だけではないね。はやて君も、もう撃破済みだよ」

「……な……」

あっさりと言うトウヤに、フェイトが目を丸くする。

すぐになのはが念話で呼び掛けるも、応答が無い。いつ彼女を撃破したというのか。

「……なに、簡単だよ。最初の焦がれ尽くす天空。わざわざあんなもので全員を散開させたのは何のためだったのか——冷静に考えたら分かると思うがね？」

「「っ——!?!」」

まさか……! ぞっと、なのはとフェイトは絶句する。

最初の一撃の狙いは、はやてだったのだ。唯一、” トウヤの射程を超える彼女が——!”

「はやて君が、君達を囚にするとは思えないが——そう言った戦略が一番厄介なのは確かだからね。面倒臭くなる前に、ぷっすりと撃破させてもらったよ。悪く思わないでくれたまえ。そんな訳で残るは君達二人だ」

「「っ——!?!」」

その台詞に、二人は直ぐさまお互いのデバイスを構える。

トウヤはそんな彼女達にくすりと微笑して——指を虚空に滑らせ文字を描いた。たった一文字、” 雷” と。同時に、カラバ式の魔法陣が展開される——!

「では、君達はここで終わりたまえ」

同時に召喚された雷の精霊、ヴォルトがトウヤの身体に吸い込まれ、なのはとフェイトが一気に突っ込む——。

—轟!—

世界に轟音が響き渡り、波紋が広がるように均等に破壊が巻き起こって。

……ほどなく、決着はついたのであった。



「……ふえー」

グノーシス本部『月夜』。そのとある一画にて、なのはは目を覚ますなり脱力感たっぷりの声を出した。

シュミレータールームにある、シュミレーターの一つである。

先程の模擬戦は、それによって行われていたのだ。

自分が横たわっていた鉄製の棺桶のようなものを、彼女はちらりと見る。

なんでも量子演算コンピューターの一つで、最新の魂学理論を導入しており、個人の魂をデータ化して、コンピューターに取り込みシュミレーターを行わせるのだと言っていたが……。

なのはが実際体験してみたところ、シュミレーターの中は、リアルと寸毫も変わらない感覚であった。

味覚こそ試していないが、視覚、触覚、聴覚、さらに嗅覚に至るまで現実と同等であったのである――ついでに痛覚までばっちりであった。まだ胸にピナカが突き刺さっている幻痛を覚えて、なのは顔を少し曇らせる。

そんな彼女にこっん、とひんやりとした冷たいものが押し当てられた。缶のコーヒーが。

「お疲れさまだね？」

「あ、ありがとうございます」

見れば、コーヒーを手渡して来たのはトウヤであった。

先ほど、自分をあっさり殺している（シュミレーターはそれさえもリアルだった）とは思えないほど気さくである。

身体を動かした訳でもないのに、喉の乾きを覚えていた彼女はありがたく頂くことにした。シュミレーターからは出る。

「で、どうだったかね？ 感想は」

「え——あ、凄かったですよ。とってもリアルで」

「……いや、ウラヌスの話しではなくね」

ウラヌス——確か、量子演算コンピューターの名前だったか——の名前を言いながら、トウヤは額を指で抑えた。

彼の様子に、なのははきょんとして——トウヤは一つだけ苦笑を漏らす。

「私と戦りあってみて、どうだったかねと聞いているのだが——」

「——あ！ え、ええと！ その、す、凄かったですよ？」

「えらいとって付けたよ——な言い方だね？」

ふふふと笑うトウヤ——目が笑っていない——を見て、なのははあわわと慌てる。

そんな彼女に、トウヤは息を一つ吐いて苦笑を微笑に変えて話を戻した。

「——あれが、第一位級、タカトレベルの戦いだよ」

「……………」

そう言われ、なのはは押し黙って頷く。

前に一度、タカトと戦った時もそうだったが今回もトウヤに手も足も出なかったのだ。

全力を尽くしたわけではない——いや、むしろ全力を”出せなか

った”。

射砲撃は軌道や思考操作を見切られ、近接組は死角を心理を利用され、バインドを始めとしたトラップの類は逆に使われた。シグナムがいい例である。彼女はトウヤとともに戦わせて貰っていない。そのおかげか、トウヤの向こう側で微妙にふて腐れている彼女が見えた。

それでも文句の一つも言わないのは、彼女自身未熟を自覚しているからだろう。

気付いていないわけでもあるまいが、トウヤは肩を竦める。

「私もそうだがね。タカトの戦い方はあれが普通だよ。反射にはフエイクを、正面には死角を、威力には奇策を。相手の長所をまず殺す——か、逆に短所に変える事により確実に勝利を掴む。言うなれば、見敵必殺と言った所だね。君のポリシーである全力全開とはまったく逆の戦い方と言う訳だ」

「……………」

「その上で、聞いてみているのだよ。……勝てるかね？ あいつに」

あいつ——、それが誰を指しているのかをなのはは正確に理解する。

しかし、その上で思い出したのは朝の事であった。

グノーシス日本支部『企業』に朝、顔を出した彼女を襲った胸の……魂の、鈍痛。

今も、残っているような気がするそれに、なのはは胸をきゅっと押さえた。トウヤを見上げる——。

「……トウヤさん」

「タカトの事ならば、何も分からないよ。何かが起こり、そして、”傷”が深くなった、と言う事以外はね」

何も聞かずに、きっぱりと彼は答える。それに、なのはの瞳が震えた。

トウヤの言わんとしている事が分かったからだ。

……タカトが、またひどく傷ついたと言う事が。

なのはの様子にトウヤは目を細める。

「……ネットワークは完璧ではなくてね。時間と言う概念は空間や次元に束縛されるのだよ。だから次元封鎖の向こう側で何が起きているのか、私にも分からない」

「でも！ トウヤさんも、タカト君の事が分かって……！」

「あいつと私やシオン——家族は一応、霊脈が繋がっているのだよ。君ほど深くはないがね」

だからこそ、タカトは大まかなシオンの様子を知る事も出来た——。

トウヤはそう言うと、微苦笑を漏らす。

家族。そう、家族だ。アサギ、シオン、ルシア、自分。

そして——”彼”。

もうすでに居なくなってしまった、もう一人の家族の事を思い出した。

あなたは、何を望むのかな？ トウヤ兄さん……。

そんな言葉を残した、もう一人の弟。

一瞬だけ脳裏に浮かんだそれを、トウヤは無表情のまま打ち消す。

「逆に私が聞きたいくらいだよ。タカトは通神にも出ないのかね？」

トウヤの問いに、なのははふるふると首を振る。

その彼女の様子に彼はふむとだけ頷いた。

元々、通神なんぞにまともに出るタイプではない。それは分かっている。

何かが起きているとするならば、尚更であった。

……あるいは――。

ちらりと、目を伏せたなのはへと彼は視線を落とす。

彼女は気付いているだろうか？ タカトが霊脈をそのままにしている人間など、家族以外には自分しかない事を。

その魂の繋がりは、自分やシオンより深い。自分達はあくまでも半分だけの血の繋がりを媒介にしているに過ぎないのだ。

シオンに至っては、霊脈がタカトに繋がっている事すら知らない。アサギやルシアにしても、別種のやり方で霊脈を繋いでいる。

様々な意味で、彼女は例外であった。

それだけ深く魂が繋がった彼女が、何も察せられていない事が既に異常なのである。

以前、偶然に通神が繋がった時には、何らかの事情を薄々理解していたというのに。

それが全く分からないと言う事は、つまり――。

”彼女にこそ”、何も知られたく無かった？

当て推量ではあるが、かなりの確信をトウヤは持っていた。

「……タカトの様子を知りたいかね？」

「っ——。分かる、んですか……？」

思わず顔を上げるなのはに、トウヤは静かに頷く。
理論上ではあるが、恐らく可能な筈であった。

”二度目のユウオの感染”、その際に、不死鳥の契約者たる戦友と確立した方法——。

”霊脈を介した、精神世界へのダイブ”。

「準備があるので、明日になるがね。それでいいかね？」

「はい！」

即答であった。

全く迷わずに、なのはは頷いて見せたのである。

それだけ、タカトの事が気になっていたのか——トウヤは苦笑した。

それで話しは終わりと、彼はシュミレータールームから出ていく。
そんな彼の様子を、なのはは見送り一人頷いた。

……明日——明日、タカト君の事が、分かる。

どうやって、とか。気になる事は山とある。だけど、それよりも

遥かにタカトの事が知りたかったのだ。

また、あの時のように魂の傷を負い、痛みに人知れず咽び泣く彼の事を。

よしと彼女は頷き、とりあえず皆と先程の模擬戦の反省点を話し合おうとして――。

「え、ええ！？ キャロが……！」

そんな悲鳴を聞いたのであった。



《え、ええ！？ キャロが……！》

「……フェイト先生、声大っきいっす……」

大英図書館前内の休憩スペース――そこで、ウィンドウに映るフェイトにシオンは呻いた。

勉強会が一段落した午後。シオン達、EU出向組は昼休憩をとっていたのである。

そこで、今まで出なかった――模擬戦をやっていたそうなる――フェイトが通信して来て、キャロの様子を話して今の悲鳴と言う訳である。

……まあ、いきなり娘さんがグレましたとか言えば、一人の親ならば悲鳴の一つも上げるだろうが。

《で、でで、でも、な、な、何で……!?!?》

「いや、それが心当たりが全くなくてですね。昨日の件で、キャラを裸に剥いた事が原因かと思ったんですが」

《それが原因なら、昨日の時点で怒ってるやろ?》

「……そーいやそーすね」

動揺しまくるフェイトに変わり、によきつと顔を出して来るのは、はやてであった。

ちなみに親バカならぬフェイト母さんは、「そんな、なんで、キヤロに限って……」てな感じに思考のループに陥っているよーである。当分は使いものになるまい。

そんな訳で相談相手は、はやてにバトンタッチ。

《とりあえず、昨日の事を一から話しててみよか》

「うい、了解す」

頷き、とりあえずイギリスに來た所からシオンは話し出す。

『学院』に來た事から、トウヤに送って貰った武装を受け取った事まで。

そして、話しはエリオと『学院』の屋上で語り合った事まで差し掛かり、そこで、はやてといつの間にやらウィンドウに來ていた、なのはは口に手を当てて何やら考え込んでいた。

何か分かったのか――?

そう期待しつつ、話しを終える。

「で、朝起きてランニングに行くとき既にあんな感じでして」
《うーん、なのはちゃん、どう思う?》

《……そうだね……、エリオとシオン君が話してた内容次第だと思
うけど》

「それについては内緒っす」

男の友情に賭けて、なのは達には——特にフェイトにはエリオが
涙した事など話す訳にはいかなかった。

男にとって、涙を流すと言うのはそれほどの事なのである。

……いや、しょっちゅう自分達が泣かされてるあれやらこれやら
は別の話しとして。

そんな訳で、はやてとなのはとしては推測で話すしかない。

《……ありそうなのは……》

《……嫉妬、かもなあ……》

「嫉妬？ 誰が？ 誰に？」

《《キャラが、シオン君に》》

二人揃ってそう言うってくる。だが、シオンはその答えにはっはと
笑った。

「いやー、それはないでしょー。キャラに限って」

《そう、なんだよね……》

《うーん》

なのはもはやても若干そう思っていたのか、首を傾げる。

やはりキャラに嫉妬と言うイメージがあまりに結び付かないのだ。

しかし、それでも二人はそれしかないとも思っていた。シオンの
話しを聞く限りではあるのだが——と。

「シオ——ン」

「ん？ スバル？」

図書館だからか、少し声を抑え目にして呼び掛けてくる馴染みの声に振り向く。

すると、こちらに歩み寄って来るスバル・ナカジマの姿を見付けた。先程まで、勉強によりダウンしていたと言うのに。

ともあれシオンは、はやてとなのはに謝ると通信を切り、彼女に向き直った。

「……どーした？ ンなに急いで。まだ昼休み中だぜ——いや、補講を頼みたいなら俺もやぶさかじゃねーけど」

「そ、そーじゃないよ、大変なんだよ。キャロの姿が見えなくて……！」

「はア？」

シオンはスバルのそんな言葉に思いっきり眉を寄せた。詳しく話を聞く。

なんでも昼ご飯が終わった後、ふらりとキャロの姿が見えなくなったそうなのだ。図書館の中を探すもその姿は見つからず、司書の人にも聞き込みしてみるも分からないとしか答えられなかったのである。

……そして、最終的に大英図書館の利用者に話を聞いてみて漸く分かったのは……。

「図書館から出ていっただあ！」

「シオン声！」

思わず叫び出したシオンに、慌てて口を塞いで来るが構っちゃい

られない。

実の所、ロンドンはある区域から一気に治安が悪くなるのである。イーストエンド。そう言えば、とある切り裂き魔の事件を思い浮かべるものも多いだろう。あれは別としても、十歳程度の女の子が一人でぶらぶらと出歩いているいい場所ではないのだ。誘拐してくれと言ってるようなものである。

いくらなんでもキャロがそちら方面に歩いているとは――。

《スバル、シオン捕まえた？》

《あ、ティア！》

《おう、今事情聞いた！ キャロの居場所分かったか！？》

《それが、ここなんだけど――》

念話通信をくれたティアナに最低限の言葉で聞く。

彼女はそれに気を悪くすることもなく、サーチャーで探し出したのであろうキャロの居場所を教えてくれ――即座に、シオンは駆け出した。

キャロの現在地。シティ・オブ・ロンドンの東側――テムズ川の北。

思いつきり、イーストエンドのど真ん中であつた。

（後編に続く）

第五十七話「勉強会と、シオンの修練」(中編)(後書き)

はい、中編終了であります。

タカトルとここで、ちょっとしたリンク(笑)

ちなみに、ユウオが二度目の感染者となったお話はある小説とのリンク話であります(笑)

いつか公開される事はあるのか(笑)

なお、イーストエンドに限らず外国下町を日本人一人で歩くと、マジにえらい目に合います。リアルに、ええ。

なので、外国を出歩く際は”ここは日本ではない”と言う事を心掛けましょう。

女性に触れるだけで、逮捕なんて国もありますので。

ではでは、後編にてまたお会いしましょう♪

第五十七話「勉強会と、シオンの修練」（後編）（前書き）

どもー、テストメントです♪

てな訳で、第五十七話後編であります♪

なお、今回アリサ道場リハビリ編を掲載しております♪

では、第五十七話、どぞー♪

第五十七話「勉強会と、シオンの修練」(後編)

「あれ？」

気付けば、そこに居た。

どうやって、とか。何故、等の過程を一切無視して少女、キャロ・ル・ルシエはそこに。

古い建物が乱立する場所である。おそらくは住宅なのか、一目見て年代物と分かるアパートメントが彼女を囲んでいた。

その為か、昼間にも関わらずやけに薄暗い。

よくよく見ると、建物の隙間、隙間にアジア系の顔立ちの青年達が居る。

揃って不健康そうな顔色で、じっとキャロを見つめていた。

そんな彼等に不気味な感覚を覚えながら、キャロは何故自分がこんな所に居るのかを必死に思い出そうとする――だが。

やっぱり、思い出せない……。

先程までは、間違いなく大英図書館に居た筈なのだ。正確には、その前の広場に。

……シオンとあまり顔を合わせたくなって、図書館を出て、広場で昼食を採ろうとしたのである。

それが、いつの間にかここに來てしまっ居た。

確かに、シオンと色々あったりエリオ・モンディアルの事やらを考えていてボーとしてはいたが、いくら何でもこんな所に來る筈が

ない。

……じゃあ、何で……？

そう思うが、やはり答えは出そうに無かった——そこで、少女ははっと気付く。

例のこちらを見詰めていた、不健康そうな青年がこちらに近寄って来ている事に。

自分を舐め回すような視線に、訳も分からず嫌悪感をキャロは覚えた。

「おい、こんなガキがいいのかよ？」

「分かってねえなあ。こんくらいのがいいんだよ。ちっこい分、”色々狭そうだろ”」

ニタニタと笑いながら、キャロには意味が分からない言葉を青年達は交わす。

「ペド野郎」などと青年は呼ばれているが、やはりキャロには分からない。

ただ、自分にとって、この青年達が友好的とは掛け離れた人達とだけは理解出来た。キャロはゆっくりと、その場から離れようとして——青年達がいきなりキャロへと躍り掛かる！

彼女は反射的に魔法を発動しそうになったが、それに理性が待ったを掛けた。

ここは管理外世界である。いくらグノーシスの保護下にあるとはいえ、無許可で一般人に魔法を使えば立派な違法である。

この場合なら、特例として認められそうなものだが、如何せんキャロにその判断を求めるのは酷と言うものだろう。

どうするか、キャラは迷い。その隙に青年達がキャラを取り押さえて抱え上げる。

「きゃ——っ」

悲鳴を上げ掛けるが、口を手で抑えられて遮られた。その異臭——タバコや体臭の臭いだ——に、気持ち悪さを覚えるキャラに構わず、青年達は下碑た笑いを浮かべて、連れ去ろうとし——。

突然。一斉に、青年達は白目を剥いてぶっ倒れた。

「あうっ。……え……？」

抱えられていた為、倒れた青年の下敷きとなったキャラは思わず目を見開く。青年達は完全に意識を失っていたのだ。

一体何があったと言うのか——その答えはすぐに来た。

「大丈夫かい？」

そう、優しく聞いて、手を差し延べて来る青年によって。

こんな薄暗い場所で、なおも光り輝くような金砂の髪に目を奪われる。

あまりに綺麗で、綺麗で——いっそ”悍ましさ”さえ覚える。そんな青年。

……後に、キャラは——そして、シオン達は後悔する事になる。

少女と青年が会ってしまった事を。

その青年の名は、こう言った。

” クロス・ラージネス ”。

かつて、『天使事件』を引き起こした存在にして、伊織タカトと対を成す存在。

” メタトロンの名を冠するEX ” と――。

キャロは、彼と出会ってしまった。



「立てるかい？」

「あ――はい！」

思わず、目の前の青年に見惚れてしまった事にキャロは赤面しながら慌てて頷く。

差し出された手を取り、立ち上がった。青年は微笑を浮かべたまま、キャロの頭を撫でてくれる。

「大変だったね。怪我はないけど、気をつけなくちゃいけないよ」

「は、はい。どうもすみません……助けて頂いて、ありがとうございます」

「気にしなくてもいいさ。シオンの妹分なら、僕にとっても妹分みたいなものだしね」

え——？ と、その言葉にキャロは疑問符を浮かべながら、顔を上げる。

青年はそんな彼女の頭から手を離して続けた。

「彼とは、古い馴染みなんだ。……そうだね、兄弟って言っても差し支えないかな」

「そう、なんですか……？」

だが、そこで再び脳裏に疑問が浮かぶ。

何故、自分がシオンにとっての妹分だと言う事を彼は知っているのか。

確かに隠したりしている訳ではない——が、だからと言って、初対面の人に分かれるような事でもないはずである。それが何故、彼は知っていることのように話すのか。

怪訝そうな顔となるキャロに、しかし青年は微笑を崩さない。

「それで、シオンは元気にしているかい？ あの跳ねっ返りの事だから、心配だね」

「は、はい。元気ですよ。それに、とっても優しいですし——」

「そうだね。彼は優しい、優しすぎる。」その優しさが、君は許せない”わけだ」

「——え……？」

いきなり言われた言葉を理解出来ずに、キャロは目を見開いた。

青年はそんな彼女へと視線を合わせるように跪く。

「シオンの優しさが、君にとって最も大切な人の信頼を勝ち取ったんだ。……あるいは、君以上に」

「なにを、言って……?」

「でも、彼は優しいから。だから、君にも同じように接しようとする。ひどく無垢だからね、シオンは。時に優しさが、人を傷つける事もあると知らないんだよ」

そこがシオンらしい所なんだけどね。

そう、青年は笑うとキャロの頬を撫でた。……何故だろう。その行為を、拒めない。

そのまま、青年は彼女と目を合わせてゆっくりと尋ね始める。

「それで、君はどうするのかな。このままじゃあ、エリオ・モンデイアル君の隣には居られない。そんな感情を抱いたままではね。なら、どうしようか?」

「わた、しは……そんなんじゃ……」

”君は何を求めているの”?」

もう、キャロは自分が何を考えているかも分からない。

ぼーと、蕩けた頭は思考を許さず、青年の言葉だけが耳に入っていく。

何を、私は何を求めて……?

「僕にはね。全てが視えているんだ。君の感情も、心も、そして運命さえも……。みんな、みんなね。でも残念だよ。君は自分自身の心さえ視えていない。”だから、少しだけ僕が手伝ってあげる”。

さあ……」

君が欲しいものは、なに? そして、何をしたいの?

私が、欲しいもの……。

浮かんだのは、一人の少年の笑顔であった。ずっと隣に居てくれた、少年の。

”その笑顔を、誰にも渡したくない”――。

と、そこで青年は急に立ち上がった。キャロも我に返る。今、自分は何を考えていた……？

「もう、時間のようだ。楽しかったよ。キャロ・ル・ルシエ君。わざわざ来て貰った甲斐があった」

「それ、どう言う……！ あなたは……！」

「ふふ。次会った時に、君の答えを聞かせて貰うよ。その時には、きっといい答えを……ね」

それじゃあ、またね。

そう言った瞬間。青年の姿が忽然と消えた。まるで青年が居た事自体が幻だったように。

キャロは、しばらくその場で呆然として。

「キャロ――！」

自分の名を呼ぶ叫びに、はっと振り向いた。見れば、路地裏らしき所からシオンが走って来ている所である。

彼は倒れているチンピラっぽい連中を避けてキャロの元まで辿り着く――と、安堵の息を吐いた。

そして、やおら眦まなじりを吊り上げたかと思うと、手を振り上げる。

「この……バカたれ！」

ぺしん、と頭を叩かれた。

彼女は、それにキョトンとする——突然叩かれた事がなんでなの
か分かっていないのだろう。シオンはそう決め付けると、一気に怒
声を上げた。

「ここらはクラナガンやら、日本やらと違うんだぞ！ 勝手に一人
でふらふら出歩いてんじゃねえ！」

「ち、違います！ 私、自分で来たんじゃ……！」

「ほおー、んじゃ、何か？ 誰かがお前をここに連れて来たってか
？ 俺やティアナ達、ついでに『学院』のバッジシステムにも悟ら
せずに？ アホ言ってるじゃねえ！ んな事出来る奴はトウヤ兄い
クラスだぞ！」

「で、でも……」

「でももかしこもねえ。後で、フェイト先生にも叱ってもらうかん
な。全く、俺のことが嫌いだからって嘘までつくんじゃねえ。……
ほら、帰んぞ」

「っ！ ———っ！」

そこで——ついにキャロが堪忍袋の尾を切った。

自分の手を取ろうとしたシオンの手を振り払うとキツと睨む。

シオンは、キャロの行動に目を見開いて驚いていた。だが、キャ
ロは当然構わない。

「なんで、シオンお兄さんは、信じてくれないんですか……！？」

「キャロ……？」

「私は、嘘なんかついてませんっ！ 本当に、気付いたらここに居たのに！ さっきだって、訳の分からない人が連れて来たって言うてたのにっ！」

「はア！？ いや、ちょっと待て！ そんなの初耳——」

「シオンお兄さんが喋らせてくれなかったからじゃないですか！ シオンお兄さんはいつもそうです！ 人の話しも聞かないで！ 自分勝手な事ばかりして！」

「っ——、だったら俺も言わして貰うがな！ お前はいつも言葉が足らねえんだよ！ あんな態度取ってて、居なくなったら心配もあるだろうがよ！？ 何が気に入くわねえかくらい言え！」

「”それ”を言いたくないから、何も言わないって事も分からないんですか……！」

「そ……っ！」

理由を言いたくないから。

その可能性を全く思い至らなかったシオンは二の句が告げずに絶句した。

元々、シオンは鈍感であり、人の気持ちの裏を読み取る事を最も苦手とする。故にこそ、キャロの気持ちに気付けなかったのだ。

そして、ついに決定的に彼女を傷つけた——。

キャロは呆然としたシオンに失望を箆めた瞳で睨むと、そのまま横を通り過ぎようとする。彼は慌てて、彼女を引き止めようとし――

！。

「シオンお兄さんなんか、大嫌いです」

——その言葉に凍りつく。

朝とは違う。明確な嫌悪感を持って放たれた言葉に。

キャロはシオンに、もう一瞥も向けない。そのまま去ってしまう。

シオンは、それを見届ける事しか出来なくて——。

——かくして、シオンとキャロの溝は完全に深くなったのであった。



ロンドンの郊外にある『学院』の夜は静かである。

自然に囲まれたここは、夜にあってなお喧騒に包まれたシティとは無縁なのだ。

そんな『学院』の屋上、満天に輝く星空の下で風を斬る音が響く。シオンが刀を振るう音だ。夜も更けてから、シオンは刀を己から抜くと振り出したのである。

まるで、昼間の出来事を振り払うように。

大上段から振るわれた斬撃が、そのまま止まらずに下から上へと跳ね上がり、孤を描く——と、シオンの身体が不自然に下がった。前に体を残したまま、後ろに下がって見せたのである。

そして天へと突き立つかのように残った刀を翻し、真横に薙ぐ。そ

これから更に足を滑らせターン。身体をぐりと回し、一閃を放つ。

一斬一

空気が斬られる音が三条、確かに響いた。放たれた斬線の軌道に真空が生まれる。

あるいは、鎌鼬^{かまいたち}すらも発生させられかねない程の高速斬撃だ。

しかし、シオンは満足いかないように、刀を振り続ける。胸中に浮かぶのは、キャロの叫びであつた――そして、去り際の失望と嫌悪が入り混じった視線。

一応、あれからスバル達と合流したらしく、キャロは『学院』に戻って来ている。……だが、自分とは一切話そうとしなかった。視線すらも合わせようとしらない。

ある程度のあらましを、スバル達にも話したのだが――そこで告げられたのは、やはり『バカ』であつた。

……自分でも、そう思う。

何故、あの時キャロを信じてやれなかったのか。

どうして、それを謝れなかったのか――理由ははっきりとしている。

朝から続くキャロの態度が、自分でも気づかない程に不満だったのだ。それが、キャロが無事だと言う安堵と共に出てしまったのである。

……ガキか、俺は……！

ぎっ、と噛み締める奥歯に力が入る。同時、放たれた上段からの

斬撃に無用な力が込められて、斬線が無様に乱れた。

まるで、その斬撃が自分のようだと思オンは思う。何故かバカバカしくなり、彼はそこで鍛練をやめにした。

ため息を吐くように、深く息を吐き出し――そこで、突如背中に気配を感じ、そのまま斬撃を回転しながら後ろに放つ。

……は？

だがその瞬間、視界に入ったものに、彼は斬撃を変化させた。飛来して来たものに、そっと刀の切っ先を当てて”斬らずに、跳ね上げる”。

突如として、来たものはスポーツ飲料が入ったペットボトルであった。

それを開いた右手でなんとなしに受け取ると、同時にパチパチと拍手が鳴った。

「わあ、すごいねシオン。大道芸でも食べていけるよ！」

「……なんだ、お前か」

拍手していたのは、スバル・ナカジマであった。

ペットボトルを投げたのも彼女なのだろう。呆れたようなシオンの声に、彼女はむっとなる。

「なんだはないよシオン。それ、せっかく持って来て上げたのに」

「へえへえ、サンキューな」

「言葉に感謝が籠ってないよ」

「どうもありがとうございますですスバル様」

「……そっちの方が、なんかイヤだな」

「どないしろっちゅーんじゃ」

苦笑し、シオンは屋上の鉄柵に背中を預けて座り込む。その隣に、スバルもちょこんと正座した。

さっそくとばかりにペットボトルの蓋を開けて口に流し込むと、適度に冷やされた甘味のあるスポーツ飲料が喉を潤す。くびくびっと少し飲んで、口からペットボトルの口を離した。傍らのスバルを見遣る。

「んで、本当は何の用だよ」

「……うん、キャロの事なんだけど——シオン、謝った？」

「口も聞いてくれないのに、どーやって謝れってんだよ」

毒づくようにして言う——が、その言葉が言い訳だと、他ならぬシオン自身が気付いていた。

本当の所は、彼自身もキャロとどう接していいのか分からなくなってしまうたのである。

たった一日。それだけで、急にキャロの気持ちを推し量る事は難しくなっていた。

……いや、違うな。最初から推し量る気なんかなかったかも知れない。

改めて思うと、そちらの方が正しいとシオンは思う。

キャロという妹分が向けてくれる無条件の信頼に甘えすぎていたのかも知れない。そして、結果は——これだ。

「……なあ、スバル……」

「うん、なあに？」

「俺って、ちょっとばっかし鈍感なのかな」

次の瞬間。隣でこん、と鈍い音が鳴る。訝しんでそちらを見ると、スバルが頭を抱えていた。

どーやら、後ろの鉄柵で頭を打ったみたいだが。

「……何してんのお前？」

「シオンのせいだよ！ もー、こぶになっちゃったじゃん！」

「いや、なんで俺のせいだよ」

「なんででも！」

もの凄く理不尽な言われようであるが、スバルとしてシオンのせいなのは確定らしい。

自分で頭打ったのに、なんでやねんと思う——が、おそらく他のどの人間だろうとシオンのせいだと太鼓判を押すのは間違いない。まあ、それはともあれ。

「で、なんでそんな風に思ったの？」

「いや、今回の件でさ。キャロの気持ちとか考えた事、あんまなかったな——ってさ。あいつがどんな気持ちでいたのか、全然気付けなくて——結局あいつを傷つけちゃったし。で、俺って鈍いのかな？ ってさ。やっぱり、悪いのは俺なんだろうし」

「そうだね。シオンは鈍いと思うよ」

「……はつきり言ってくれんじゃねえ——」

「——でも、悪いのはシオンだけじゃないと思う」

文句をつけようと思ったシオンではあるが、それを遮るかのよう
に言われた言葉にきょとんと目を丸くした。

自分だけが、悪いわけではない。そう言ったスバルに。

彼女はシオンの瞳を覗き込むようにして続ける。

「シオンはさ。鈍感で、自分勝手に、天然で、本当に私より一つ年
上なのかたまに疑問に思うくらいなんだけど」

「……好き勝手言ってくれやがんな、てめえ……」

「事実だもん。仕方ないよ。……けど、本当に酷い事はしないんだ
よ。シオンは。多分、無意識にだけど。シオンはちゃんと、人のこ
と考えてる。ちゃんと、思いやってる。だって」

シオンは、私を助けてくれたじゃない。

真っ直ぐに視線を逸らさずに告げられる言葉。

その真摯さに、シオンは思わず息を飲んだ。それが、まるで――
祈りのように聞こえたから。

そんなシオンを知ってか知らずか、スバルは続けて言う。

「だから、今回の事はシオンだけのせいじゃないと思うんだ。それ
に、理由を言えないなら、キャラはシオンに本当は怒っちゃいな
いんだよ」

「……なんで？」

「だってそれ、」 自分は何も言わないけど、怒ってる理由を察して

ね”。て意味じゃない」

……言われてみれば、確かにそうだ。朝からイーストエンドまで的一幕は自分のデリカシーの無さが原因としても、朝一から向けられたキャラの妙な不機嫌さは理不尽なものがある。スバルはそれを言っているのだ。

「……多分、理由はシオンじゃなくてキャラ自身にもあったと思うんだ。だから、誰にも話したく無かったんだと思う」

「キャラ自身の理由って……？」

「それは分かんないよ。けど、多分キャラは……」

そこで、ぽつりと聞き取れないほどの小さな声で、スバルはとある二文字の単語を呟き——しかし、首を振ってしまう。

これは、キャラからシオンに謝って話さなければならない事だと、そう思ったから。

だからと誤魔化す訳でもあるまいが、スバルは立ち上がるとシオンに振り向いた。

「とりあえず、シオンはちゃんとキャラに謝る事。シオンも悪い所はちゃんとあったんだからね！ ……そして、ちゃんと謝ってもらう事。キャラも、それで納得すると思うから」

「なんでなのか——は、聞かない方がいいんだな？」

「うん。ちゃんとキャラ本人が話さないと意味が無い事だと思うよ」

「……そっか」

シオンはそれだけを言うのと頷く。そんな彼にスバルは微笑んだ。

きつと、シオンはキャラと仲直り出来る。彼の素直さに、そう確信したから。

うん、とスバルも頷き返すと、そのまま身を翻す。もう心配はいらない。

「それじゃ、私はもう寝よっかな。……明日も、勉強会やるんでしょ？」

「もちな。今日の復習もきっちりするから覚悟するよーに」

「うう、お手柔らかにお願い……」

「却下」

きっぱりと言われ、スバルはあううと呻きながら屋上の出入口まで歩く。

そんな彼女に、シオンは苦笑して――。

「それじゃあ、シオン。お休み――」

「……ありがとな」

振り向いたスバルに、シオンは優しく微笑みながら礼を言った。そんなシオンに、スバルはしばし呆然として――急に顔を真っ赤に染めた。

「あ、え、ええと……!」

「何、顔赤くしてんだよ、礼言われたくらいで。んじゃまた明日なお休み」

「う、うん。あの、シオン」

「ん？」

「……お休み」

目を伏せるようにそう言って、スバルは顔を赤くしたまま屋上から出て行った。

シオンは苦笑して立ち上がり、うーんと伸びをする。

随分と気が楽になった……。

スバルのおかげか——と、シオンは苦笑を深める。随分、現金だなとも。そして。

「……さって、んじゃ今日も頑張りますかね。コツは掴めて来てんだけどなあ……」

シオンは一人ごちると歌でも諳^{そら}んじるかのように長々と永唱を始める。

ゆつくりと、韻を踏んで紡がれる言葉は一つの確かな意味を持った。世界と世界を隔てる概念——つまり、結界に。

永唱が終了するなり、シオンはそれを一気に展開する。ドーム状に広がった幕は、屋上を丸ごと包み込んだ。

……これで、下の者達には何があったか分からなくなる筈である。今からしようとする事をスバル達が知れば、意地でも止めようとするだろう。

それは——嬉しくはあるが、好ましくない。この修練は他でもない。自分がやらねばならない事なのだから。

「契約の元。我が名、我が血を持って。今、汝の顕現を求めん。汝、世界をたゆたう者。汝、世界に遍く意思を広げる者。汝、常に我と共に在る隣人——」

そして、続けて紡がれるは一つの永唱であった。

シオンが使い続け——しかし、使わなくなった永唱。

則ちそれは、精霊召喚の永唱だった。そう、シオンはイクス——アルトスを失って、精霊融合や精霊装填のアビリティを失った。だが、精霊召喚は元々シオン自身の魔法なのである。

これまで召喚しなかったのは、ただ単に召喚しても使いようがなかっただけなのだ。

……にも関わらず、今召喚する理由とは——。

「今、此処に汝を召喚する。汝が枝属、炎。汝が柱名はイフリート」

そこでシオンは口に親指を持っていき、その先をきつく噛む。がりっと言う音と共に血が滴り落ちた。

真っ赤に染まった右手を握りしめる——同時に展開するは、カラバ式魔法陣。その中央で、シオンは呪文の結尾を叫んだ。

「来たれ。汝、炎の精霊。イフリート！」

——炎が、弾ける。

シオンの呼び掛けに呼応して生まれた炎は、一瞬にして身体を形成した。

炎の精霊——火と言う概念そのものたる存在。イフリートが。

屋上にて屹立する雄々しき炎の巨人は、その眼で召喚主たるシオンを睥睨する。

「よ、毎日すまねえな。イフリート。今日も頼むわ」

軽い調子で、そう言ってくるシオンに、イフリートはただ視線をシオンに向け続ける。

その視線には、明確な心配が込められていた。精霊は人間やらの生物と違い、精神に肉の鎧を纏わない。それ故に、人間より遙かに感情豊かなのだが――。

そんな事を思い出しながら、シオンは苦笑する。

「……心配すんなよ。俺は大丈夫だ。これでも頑丈さには自信があるだぜ？ だから」

言いながら、シオンは血で真っ赤に染まった手をイフリートに翳す。そこに現れたのは、やはりカラバ式魔法陣であった。

空中に展開されたそれに、そっと手をあてがう。

「お前も、全力でかかってこい」

精霊契約、”強制破棄”。

そう、シオンが呟いた次の瞬間、シオンとイフリートの間にあった契約は絶たれ――即座に、屋上を炎が埋め尽くし、席卷したのであった。



――轟！――

炎の海が、『学院』屋上に顕現する――それを突っ切るようにして、シオンは上空へと飛んだ。

「っ！ 熱っ！ いきなりかよ――」

毒づくシオンであるが、その暇も彼には与えられない。

顔を青ざめさせると同時に空中に足場を展開し、それを蹴りつけて真横へと飛ぶ――直後、シオンが居た空間を薙いで走る炎線！

直前に躲す事に成功したシオンはしかし、ぐっと呻きながら視線を炎線の元へと向けた。

そこに居るのは、炎の精霊イフリート。……そう、先の攻撃を仕掛けて来たのは彼の存在であつたのだ。

シオンを見る双眸には、既に心配をしていた感情はない。そこにあるのはただ一つ。”敵意”と”殺意”であつた。

精霊故の生の感情を叩き付けられ、彼は苦笑を漏らす。

「全く……、とんでもない”宿題”をくれたよな、トウヤ兄いも！」

叫び、続けて放たれた炎線――イフリートの腕を再び躲す。

そして、左手の刀を握りしめ、炎の巨人へと踊り掛かりながら、

シオンはトウヤの言葉を思い出していた。

――お前が、属性変換を出来ない原因は魔力制御が下手なだけではないよ――

懷に潜り込もうとするシオンに三度、みたび放たれる炎線。それを速度を殺す事なく、シオンはかい潜る。

真上を通り過ぎた炎へと、下方にゆるりと構えた刀が跳ね上がり、叩き斬る！――しかし、炎線は斬られた端から元に戻っていった。

まだ上手くいかない……！

シオンの表情が歪む。そして、イフリートの攻撃は――止まない。

真上に伸びた炎線が急激に膨らみ、背筋を走る悪寒にシオンは足を止めた。全力でプロテクションを張る。そして。

—爆！—

炎線を中心に、爆発が巻き起こる！ 中心に居たシオンは危うく吹き飛ばされそうになりながらも、何とか踏み止まった。

—お前が、属性変換を使えない理由は、概念を”識”らないからだよ。例えば……そうだね、火と言う概念は何だと思う？ ちなみに、化学反応としての火ではないよ。概念としてのだ—

だが、辛くも直撃を免れたシオンに再びイフリートが襲い掛かる。逆に突っ込んで来た炎の巨人は、迷う事無く炎の腕を掲げた。

—説明出来ないだろう？ まあ、当たり前だね。火の概念など、抽象的な表現を説明出来る筈がない。だがね？ 私は”識”っている”。説明は出来なくとも、理解しているのだよ。火と言う概念の本質を—

そして、炎の腕が振り下ろされる！ シオンは放たれ、真上から落ちてくる炎の塊を見つめ——当たる、直前に体を翻した。

そこから、シオンの体は後方に飛ぶような体勢にも関わらず、斜め前へと滑り落ちた。

緩急方向転換自在の瞬動、胡蝶。

有り得ない角度で踏み込んだシオンは、イフリートの身体を中心に回転。背後を取る——！

—だから、私は属性変換技術を使えるのだよ。”そして、お前に

もそうならもらう”。方法？ 何、簡単さ。それぞれの概念と直接語り合えばいいのさ……平たく言うと、殴り合えばいい。ん？ 概念と殴り合うなど不可能？ 馬鹿かねお前は。ひどく身近に居るだろう？ 精霊と言う”概念が擬神化した存在が”――

――斬！――

次の瞬間、放たれた一閃はイフリートの胴を真つ二つにする。

上下に分かたれた炎人を、しかしシオンはきつく見つめる。――今のでは、駄目だと。その確信があった。

――精霊と戦う方法は単純だよ。契約を強制破棄してやればいい。そうすれば、精霊の意思に関わらず襲い掛かって来る筈さ。――なんだか？ 召喚術の基礎だろう。手順を踏まない契約の破棄は重大なルール違反だからね。結果として、精霊はルールを犯したものを殺しに掛からねばならない――

そして、シオンの確信に応えるかのようにイフリートの胴体はあっさりとくつつく。同時に、爆発が巻き起こる――が、シオンはそれを後ろに逃げる事により、難を逃れた。しかし、その表情は固い。

イフリートは、全くダメージを受けていないのだから。

それはすなわち概念と言う火の本質を、シオンが理解出来ていない事を意味する。

――概念をお前が識る事が叶ったのならば、非物理存在であり、また概念そのものである精霊を斬る事も出来るだろうね。まずは、そこからさ。……シオン、お前に課す命題はただ一つだよ――

イフリートがゆっくりと振り向く――シオンはぐつと奥歯を噛み締めるようにして刀をゆるりと構えた。

一瞬の静寂――そして、再びシオンは駆け出す！ イフリートもまた、シオンへと突っ込み――。

――”全ての精霊を屈服させたまえ”。かって、私が成し遂げたように――

――檄！――

両者の激突により、屋上を爆炎と衝撃が走り尽くすのであった。

（第五十八話に続く）



ひゅー、どんどんどんぱふぱふ。

ア

「皆、久しぶり♪ アリサドーじょー！」

完！

す

「いきなり完にされたよ！？ 作者さんひどいよ！」

ア

「そんなバカ作者に届け、必殺の『執筆遅いのよ駄作者———!』」

ぐっふう!?

しー

「あ、作者くたばりましたなえ……」

ア

「天罰よ。てな訳で、皆久しぶり♪ 当道場の主、アリサです♪
ししょーって呼ぶよーに♪」

す

「弟子のすずかです♪ すずかって呼んでね♪」

しー

「……なんでいきなり説明してんすか、ししょー。あ、司会のシオンです」

ア、す

「「違うわ!／よ! しーちゃんよ!／だよ!」」

しー

「違いますよ!? 確かにアリサ道場EXから、女体化解けてませんけど! 俺はシオンです!」

裕

「それはつまり、私への宣戦布告な訳ね♪（しーちゃんの名付け親は裕希奈です）」

しー

「は!？ いや、てかなんでお前がここに——!」

ア、裕

「「うっさい♪」」

—撃!—

しー

「ぐっふう!」

裕

「あと胸がでかくてムカつくのよ♪」

しー

「それ私怨じゃん! って、痛い痛い痛い! 関節はそっちには曲がらな——!?!」

ア

「はいはい、裕希奈。そこまでにしときなさい。收拾つかなくなっちゃうわ」

裕

「アリサが、そこまで言うなら。……命拾いしたわね」

しー

「そこまで!？ 俺はお前に命取られるよーな真似は何もしてませんよ!?!」

裕

「か、もーやめろって!」

ア

「さて、しーちゃん弄りはこの辺にして。早速本編の感想を一言で、しーちゃんどぞー♪」

しー

「えー……? あ、うーんと、『地雷は軽やかに駆け抜けろ?』」

一同

『『駆け抜けるんだ!?!』』

しー

「だって、俺っすよ……? 地雷回避なんて、そんなの出来るわきやないっすよ」

ア

「何悟ってんのよ……」

す

「自覚のある鈍感って最悪だと思うよ……」

しー

「さて、では今回はアリサ道場リハビリ編なので、この辺で♪次回からキャラ召喚も再開いたします♪ よろしくー♪」

裕

「え? 私は?」

しー

「顔パスを召喚キャラとは呼ばねえよ！ んじゃ、皆さん」

一同

『『また次回〜〜♪』』

ア

「……そーいや、今回罰ゲームなカナンと変態達出なかったわね。どこに居るのよ……？」

しー

「……彼らは遠い星になったんです……キラっ☆」

裕

「キラっ☆は、いいから。で、本当、どこよ？」

しー

「……ヒントは『もかもか』」

す

「あ、うん、もう分かったよ。分かったから、それ以上言わないでね」

しー

「……くう！ 変態兄貴は別として……カナンっ！ お前の骨は、俺が拾ってやるからな……！」

カ

《まだ生きとるわあ！？ ……あ、いや……いやだ。いやだいやだいやだ！ く、来んな、来んなよう！ 開けて！ ここを開けてくれ！ いやあ————もかもかがあ————！》

いいから、終わっとけ♪

第五十七話「勉強会と、シオンの修練」(後編)(後書き)

「一夜明けた、シオン達。でも、まだ謝るキツカケを彼は見つけれなくて」

「そんな彼等の前に彼が再び現れる」

「血に染まり、阿鼻叫喚の渦中に巻き込まれるロンドンで、シオンは、エリオは――」

「そして、キャロの前に修羅の扉は現れる」

「次回、第五十八話。」

『堕ちた巫女』」

「汝が腕は、主が御腕。汝が隻句は、主が御声」

「君の、望むものを、あげよう」

第五十八話「堕ちた巫女」 (前編) (前書き)

「大切だった人がいました」

「最初会った時は、なんだか慌ただしくて。お互い何も知らなくて」

「話しをする事も躊躇うほどで」

「でも、ちよつとずつ変わっていった」

「お兄さんのように、弟くんのように、ずっと思ってた」

「でも、ある人が、その人より深い所で分かりあっているのに気付いて。それが、ショックで」

「だから、私は……」

「私の、望むものは――」

「魔法少女リリカルなのはSとS，EX。始まります」

第五十八話「墮ちた巫女」(前編)

「いい事を思いついたんだ」

暗い、暗い闇の中。光すらも届かぬ濃い闇の中で、それでも輝く青年は笑う。

闇の中であって、なお光り輝く者。メタトロンの名を持つ青年。クロス・ラージネスは出し抜けにそんな事を言ってきたのだ。

その発言は、闇の中に消えていく。しかし、クロスは満足そうに笑っているだけ。

「悪趣味だって？ はは、君に言われたくないね、シェピロ。そちらも大概の真似をしていると思うよ。どちらにしろ、”聖杯は成せない”。すでにそれは決まっている事じゃないか。躍らされる彼は哀れだね」

くすくす……と、クロスは屈託なく笑う。その笑みのなんと純粋な事か。

だが、その純粋さにこそ人は恐怖するだろう。彼はある人物の破壊について笑っているのだから。

それを、こうも純粋に、屈託なく嘲笑えるものなのか。

「そちらは、君に任せるよ。どちらにせよ彼が居る限り、どうにもならないだろうからね。こちらは、そうだね。彼等を使おう。彼等ならトウヤ相手にでも時間稼ぎ程度なら使えるだろうし——もう、分かっているんだろう？ ……そうだね」

確かに、自分には全てが視えていた。今、こうして彼と通神している事も、自分が引き起こそうとしている事も。

その結果さえも。

……全てが、彼には視えていた。

” それの、なんと詰まらない事か”。

「どちらにせよ、この件でシオンは新たなステージに立てる事になる。そうなのでもらわなきゃ困るからね。そう——」

そこでクロスは背後へと視線を移した。見る先には、ある者がいる。

彼が音も気配すらもさせずに闇の中に入って来た事をクロスは識っていた。……恐らくは、” 生まれたその瞬間から”。

そんな闇の住人にくすりと笑みを送り、最後にクロスはこう呟く。

「キャロ・ル・ルシエの命を持って……ね」

それは、シオン達の——キャロの運命が決定された一言。

そして、新たな戦いの予感を孕んだ宣言であった。



神庭シオンの朝は早い。

恐ろしく寝起きが悪いくせに、朝に起きる時間は日の出前と決ま

っているのである。これは、兄とデバイス兼師匠達の教育の賜物であるわけだが、そんな朝早くに起きたシオンはどんよりと目にくまを作っていた。

……と言っても、熊ではないので注意されたし。

「おっはよう〜て、わっ！ シオン、どうしたの、その目？」

「とりあえず、おはよ。……本当、くまがすごいわよ？」

「……………はよ」

昨日と同じく、ランニングの為に『学院』の門に集まったスバルとティアナに揃って聞かれるも、シオンは力無く片手だけを上げて挨拶だけをする。

その胸中、思う事は一つだ。

……調子に、乗りすぎた……。

昨晚、スバルと別れてからイフリートと修練と言う名の殺し合いをやった訳だが、つい調子に乗って徹夜で戦ってしまったのである。あともう少しで閃くものがあり、もうちょっと、もうちょっととやってしまったのが運の尽きであった。

結局、朝4時くらいに重度の火傷を負って修練を中断し、『学院』に一台だけあるナノ・リアクターで回復して、今ここにいるのだ。……つまりは、完璧な徹夜である。

丸半日戦い続けた訳だから、グッタリともするだろう。

そんなシオンをスバルは心配そうに、ティアナは呆れたように見つつ、肩を竦める。

そうこうしていると、エリオとギンガが一緒に出て来て……と、そこでシオンはようやく顔を上げた。

「シオン兄さん、スバルさん、ティアさん、おはようございます。……シオン兄さん、目の下すごいですね……大丈夫ですか？」

「皆、おはよう。……本当ね。きついなら、休んだほうがいいわよ。シオン君」

「いや、大丈夫っす。ところで、キャラは……？」

挨拶してくれた二人に、シオンは即座に尋ねるべき事を聞く。

いつもはエリオと二人並んで一緒に来る事が多いキャラが、今日に限って姿を見せてなかったからだ。

何より、キャラには早く謝っておきたい――。

だが、シオンの問いにエリオは顔を曇らせた。……その様子で大体の事を悟る。

「……その、キャラは……」

「いい。分かった」

口澀むエリオに、シオンは理由も聞かずに即座に頷いた。

なんて事はない。あんな事があったのに、キャラが自分と顔を合わせたいと思う訳が無いではないか。

即断のシオンに、これまた一斉に心配そうな顔となる一同。彼は苦笑すると首を横にだけ振る。

これは、自分とキャラの問題だと。そう、言い聞かせるように。だから變わりに、口ではこうとだけ一同へと言う。

「こうしてても埒あかねえだろ。マラソン、行こうぜ」

「……うん……」

ま、それでも心配するんだろうけどな……。

硬い表情で頷く皆に、シオンはそう思いながらちよつとだけ苦笑し、昨日と同じく先んじて駆け出す。

前途多難。そう言うてくるように、ロンドンの空は曇り模様であった。



結局、キャラはずっと姿を見せなかった。

既に昼前の、大英図書館である。シオンはスバルとティアナにそれぞれの神話関連の書物を渡した後、個人的な調べ物をしつつ胸中溜め息を吐く。

まさか、ここまで拒絶されているとは。

朝食にも来なかったキャラは、勉強会にも現れなかったのである。一応、ちび姉こと鉄納戸良子にはキャラが部屋から出て来たら連絡してくれると頼んであるが――。

……こりゃ、ちよつとまずいかな……？

キャラの徹底した拒絶の態度に、シオンは焦りを覚え始めていた。このままでは、ずるずると長引きそうである。ただでさえ明日は各ロストロギアの封印が解除され、ドイツに移送すると言うのに。

キャラがこのまま引き籠ったままでは、それらにも支障が出かね

ない。何より、シオン自身キャロと陰悪なままでは居たくなかった。が、だからと言って、無理矢理押し入る訳にもいかない――フェイトの時とは訳が違うのだから。

堂々巡りとなった思考に一人悩みつつ、まさかそれで調べ物を疎かにも出来ず、シオンは書物に視線を落とす。

タイトルは『アーサー王の死』。アーサー王伝説の集大成と呼ばれる本であった。

そう、シオンの調べ物とはアーサー……アルトス・ペンドラゴンに関する物だったのだ。

彼が、シオンに与えた試練。アルトスの真名を探す為――だが。

『アーサー王の死』を読み進めるシオンは深く嘆息する。正直、こちらも芳しくなかった。

そもそも、アーサー王と言うのが色々ややこしい存在であるのだ。

まず、アーサー”王”と言う存在は歴史上に存在しない。モデルとなったとおぼしき将軍か戦士は存在するものの、確実に王様ではなかった。

アーサー王の伝記も、それを象徴するかのように彼の王としてのダメっぷりを後半に記している。

まず、国を滅ぼした大元は内乱を静めきれなかった事にある。この時点で、既に王としては脱落だろう。

一代で国を築き、一代で国をダメにした訳だ。いかに内政がガタガタだったのか分かって言うものである。

更にそこで終わらず、夫としても及第点は与えにくい。王妃――

つまり、妻のグィネヴィアは部下たる騎士のランスロットと浮気し、寝取られたと言うあたりで、そこも伺えよう。

アーサー王伝説は創作であり、その歴史は偽史——つまるところ、文学であると解釈するのが正しいと言えた。だが、それは大抵の神話に共通する話である。珍しくもない。

しかし、ここで疑問が生じる。アルトスの存在だ。

彼は自らの過去を語るにあたり、”王”であったと確かに語っていたのである。

”この世界で、そんな事実はないのに”——。

……これは、どう言う事だろうな……？

流石にシオンも頭を抱えてしまう。このズレは一体何なのかと。

そもそも、元々の目的である真名探しもかなり迷宮入りとなっている。アルトリウス、アルトリア、アーサー、……そして、アルトス。

やたらめったら名前が多いのだ。いや、国ごとの発音やら何やらで名前が変わったのは分かるのだが、いくら何でも、ここから真名を探索と言うのは無理がありすぎるだろう。

……そう言えば、トウヤ兄いも、なんか言ってたっけ……？

ふと思いつくのは、イギリスに来る寸前でトウヤがシオンに告げた言葉である。

”イクスカリバー”。その意味を忘れるなど、彼は言ったのである。アルトスが自ら名乗った借名を。

そこに、何の意味があるのか——謎は深まるばかりであった。

……そもそも、カリバーンからしてカリブルヌス——原形を求めるなら、カラドボルグが原形である。

これは『硬き雷』と言う意味であり、ここから変節して『硬き鉄』を意味するカリブルヌスに変わったのだ。

更に、アーサー王伝説が外国に輸出されるにあたりエスカリボールになり、しかし英訳ではe sに該当する格好のいい意味の言葉が無かった為、意味のある”e x”として、”エクスカリボー”となり。逆輸入の末、”エクスカリバー”となったのだ。イクスカリバーとは、これをもじったものであるはず——。

「て、あれ？」

そこで、シオンはふと何かに引つ掛かりを覚えた。

突然、声を出したシオンにティアナとスバルが顔を上げるが、それも目に入らない。

e xの意味は『未知』だ。

これが、英語の意味合いとなったのは、そちらに輸入された際に意味ある言葉とした為である筈。

しかし……わざわざ『未知』なぞとつけるだろうか？

この言葉には何か、別の意味がある……！ それも、重要な！

そこまで思い至ると、シオンはカリバーンにも目を向けた。

カリバーンの意味はカラドボルグを祖とする『硬き鉄』——つまりは、『剣』を意味する言葉だ。

『未知』と『剣』、合わせると『未知の剣』となる……！

その言葉の意味とは？

ぞっと鳥肌が立つ感覚を得ながら、シオンの脳裏に浮かんだのは元服である。

日本に限らず、成人した際に別の名前を授かる文化はどこにでもあった筈だ。

ならば、”人として王となり剣として神となったならば、どうなるのか”。

「……ティアナ、一つ聞いていいか？」

「え？ うん、いいけど――何よ？」

いきなり尋ねられ、ティアナが目を丸くしながら頷く。

本来ならば、”八神はやて”に聞くのが正しいだろう――だが、念話に出るとも限らない。ならば、目の前に居る人物に聞く方が早い。

逸る心を抑えつつ、シオンはたった一つだけある事をティアナに質問した。

彼女は、そんなシオンの質問に訝しみつつ頷く。

「確か、そうだった筈よ。前に八神隊長に教えて貰った事があったから」

「――そっか、やっぱな」

「「???」」

一人頷くシオンに、スバルとティアナは揃って疑問符を浮かべる。だが、シオンはそれに構わない。

ティアナの答えで、一種の確信は持てた。だが、それにも関わら

ずシオンは迷う。

自分が出した解答。それが、あまりにも奇抜過ぎるものであったからだ。

はつきり言おう。荒唐無稽にも程がある。これを他人に言うとは、一瞬で否定される自信がシオンにはあった。

そして、まだ謎も残っている――ついでに、”課題”も。

シオンの想像が正しいならば、必ず考えねばならない事が出来てしまった。

それは、恐らく必要な事。だから。

……まだまだ、足りねえよな。

嘆息と共に、彼は一つ頷く。そんなシオンに、スバルとティアナが明確な表情を送って来ていた……つまりは、心配そうな。

それに対し、彼は苦笑と共に手をパタパタと横に振る事だけを返す。同時に思うのは、この二人には心配ばかりさせてるなあと言う事だ。

キャロの事も、アルトスの事も――そして。

……俺自身の事も、な……。

心のどこかで疼きに近い感情をシオンは得ながらも、しかし無視する。とりあえずはトウヤと話しをする必要がある。アルトスの事もそうだが、キャロの事も相談したい。

なので、シオンは念話を繋げようとして――。

ブツンっと、繊維質を断ち切るような太い音を聞いた。

………は？

「え？ 何、今の音？」

「シオン？」

「いや、俺は知らねえぞ……」

疑問を得たシオンに、スバルもティアナも聞いて来る。

それはつまり、二人も先の音を聞いたと言う事だ。視線を横に流すと、離れた所でエリオやギンガ、みもりも立ち上がっている。

他の図書館利用者達も、怪訝そうな顔となっていた。……何があったと言うのか。

答えはすぐに来た。

” いつの間にか、天井から逆さまになり吊り下がって現れた人型の異形によって”。

「……な」

んだ、こいつ——そう、告げる前に異形は両手を広げる。

大きい手、ではない。その両手には大鎌もかくやと言うべき大刃が備えられていたのである。異形は、ゆっくりと静かに——恐ろしい事に、”シオン以外の誰にも悟らせずに”両手を振りかぶっていた。

大刃が、空間にヴウンっと音を立てる——。

「伏せろ————！」

一斬！—

次の瞬間。シオンが叫ぶのと同時に、斬撃が大英図書館を”輪切り”にした。



大英図書館が傾く――それを理解しながら、しかしシオンは言葉を詰まらせた。

彼の叫びを理解し、伏せたのは仲間内だけだったのである。みもりは、ギンガが伏せさせてくれていた。感謝しなければならない――だが。

「……っ！」

――舞うのは夥しい量の血飛沫と、人体を構成する身体の一部達。手、足、胴体、頭。一切の差別無く、それらは空をくるくると舞っていた。

シオン達が居たのは、一階部分。そこに居た、図書館利用者の全てが身体を断たれていたのである――どれも、即死だ。

だが、問題はそれだけではない。輪切りにされた一階は、当然の如く倒壊を始めたのだ。このままでは、下敷きになる！

「逃げるぞ！」

開口一番、シオンは刀を自身から抜き放ち、近場の壁へと忒ノ太刀、剣牙を叩き込む。

出入口は遥かに遠い。ならば、近場に作るのが妥当と言えた。剣牙は、壁をぶち貫き、人一人が充分に通れる穴を作る。

即座にシオンは潜ろうとして――。

「だめ……！ シオン、だめだよっ！」

スバルの、そんな声を聞いた。何が、だめなのか。

振り向くと、スバルがバリアジャケットも、デバイスも展開する暇も無いとばかりに、図書館中央へと駆けようとしている所だった。ティアナが、その腕を掴んで引き止めているが、それも構わない。

何故、引き返そうとしているのか——答えは、大英図書館の二階にあった。

そこには、”まだ無事な、人達”が残っていたのだ。

輪切りにされたのは、一階のみ。なら上階の人間が生きてるのは、道理であろう。

傾く二階から、転倒し、落ちて行く人達がここからでもはつきり分かる。

「助けなきゃ……っ！」

「無理よ、スバルっ！ 間に合わないわ！」

ティアナが至近で、スバルに叫ぶ。シオンも全く同意であった。

ここからでは遠過ぎるし、時間はもう無い。辿り着く頃には、もう図書館は倒壊しているだろう。

どうあっても、一人すらも助けられない。だが、それでもスバルは行こうとする——それが、彼女の信念故に。

「大丈夫っ！ 私、頑丈だから、何とかなるよ……！」

「なるわけねえだろうが！」

叫び、ティアナを振りほどいたスバルは駆け出そうとする。しかし、その寸前に、シオンは刀で彼女の足を払った。

すぱん、と鮮やかにスバルの身体が宙を舞う——もう、二階部分は頭すれすれにある。時間がない！

なので、シオンは即座に決断した。刀を翻し、背を正面にすると、そこで宙のスバルを一撃する！

一撃！一

一撃が叩き込まれたスバルから、息が吐き出され、盛大に吹き飛ばぶ。

その進行方向には、驚きの目をしたティアナがおり。彼女にスバルは直撃。

二人はごろごろと床を転がり、シオンが開けた穴へと投げ出された。

これでいい……！ 後は！

自分だ。即座に瞬動を使い、外に出ようとして——二階の、人達が目に入った。

このままでは、確実に彼等も死ぬだろう。だが、もはや助けられる猶予なぞ無い。

そう、”助けられる猶予は”。

間に合うか……！ シオンは齒軋りすらしながら、術式を展開、それを発動する——。

後は運任せだ。上手くいってくれるよう天に祈りながら、今度こそ瞬動発動。

高速移動を開始したシオンは、穴にスライディングする形で外に飛び出し——直後、大英図書館は完全な倒壊を果たしたのであった。

倒壊した大英図書館は衝撃を辺りにぶち撒け、自らもその衝撃で崩れる。

煙が広がる中で、ばらばらと大小の瓦礫が散乱を始めていた。それを、スライディングを終えた格好で、もろに煙を浴びたシオンは咳込みながら、よろよろと立ち上がった。

「げほっ！ げほっ！ ……くそったれ……！」
「「シオン！」」

毒づく彼に、声が来る。スバルとティアナだ。彼女達が無事だった事に、シオンは一安心する――だが。

その後ろに、何の前触れも無く先程の異形が現れた事に、彼は息を呑んだ。

異形の大きさは、約3m。その長身から振り上げられた腕は翼にも見えた。

ただし、そこにあるのは羽ではない。刃！

「やらせるか、ボケェっ！」

一轟一

叫びと共に繰り出されるのは、再び剣牙。

魔力で構成された斬撃は、しかしあっけなく異形が振るう大刀に吹き散らされた。

そこではじめて、二人は背後の異形に気付く。

遅い……！ と、途方も無い焦燥をシオンは得るが、それは違う

と理解もしている。

この異形が、とんでもなさ過ぎるのだ。

……音も、気配どころか……！ 空間把握でも認識出来ねえなんて……。

凄まじい手練である。それに、先程の図書館を輪切りにした一斬。シオンは確かに見た。放たれた一撃から、”斬撃が、無数に発生していたのを”。

どうすれば、あんな現象が起きるのか皆目見当もつかない。……ただ、確定しているのはたった一つだけである。

こいつ……俺より、強い……！

スバルとティアナが顔を真っ青にして、振り返るのと同時に、余裕ともとれる程、のっそりと異形は下がる。

シオンはすぐさま二人に合流した。

「シオン……」

「集中を解くな！ 一瞬で殺られるぞ……！」

その発言に、スバルもティアナも息を呑む。どれだけ、シオンが目の前の存在を危険視しているのか理解したからだ。

異形は動かない。あるいは、機を狙うかのように。

三人は頷き合うと、すぐさまセットアップ。バリアジャケットを展開した。

構える。だが、異形は一切構わないとばかりに、悠々としているだけ――。

「……こいつ、一体何なのよ……！」

「俺が知る訳ねえだろ。……ギンガさん達は？」

「それが、さっきので分からなくなっちゃって……。念話も通じないんだよ」

スバルの台詞に、シオンは唇を噛み締める。

念話を通じない、と言う事は明らかに妨害されている証拠だ。自分達——『学院』も含めて——に、一切悟らせずにそれをやっているのである。

かなり、まずいかも知れない。いや、そもそも——。

「……どうやって、こいつらトウヤ兄いのネットワークを抜けてんだ……！」

この地球上——否、第97管理外世界上に居る限り、異母長兄トウヤの得意とする。過去を己のものとする時の情報網から抜ける事は不可能と言える。

そんな真似が出来るのは、シオンが知る限りもう一人の異母兄タカトしかいない筈であった。それが、何故？

いや、そもそも——。

ストラの連中も、紫苑の野郎も、なんで奇襲を毎回こうも掛けられやがったんだ……？

今更のごとく気付き、シオンはぞつとする。

日本に居た時は、紫苑。イギリスでは、ギューンターとクリストファ。そして、この異形。どうやって、彼等は地球に來ていると言うのだ。

あるいは、トウヤのネットワークを抜けられる技術がストラにあると言うのか――。

考えるシオン。しかし異形はそれを待ってはくれなかった。

いきなりくると背を向けたかと思うと、鋭い跳躍を見せたのだ。
――向かう先は、ロンドンの住民街！

「な！？ 野郎……っ！」

唐突な異形の逃走に、シオンは舌打ちを一つ放った。

何故、逃走したのかはどうでもいい。ただ、あんな化け物が住民街に逃げたと言う事が問題であった。住民街と言う事は当然、一般人が居る。そこに、異形が逃げ込んだとあれば、犠牲者が大量に出る可能性があった。

向こうは、一般人だろうが頓着しまい。図書館でそれは示されている。

「くそ！」

「追うわよ、シオン！」

「……いや、奴は俺一人で追う」

な……！？ と、二人はシオンを驚きの顔で見る。

だが、すぐにきつく睨んで来た。次に二人が何を言うのかシオンは察する。だから首を即座に横に振って見せた。

「あいつの速度見たろ？ あれに追いつけんのは、多分俺だけだ」

「で、でも……！」

「それに、お前達には、やって欲しい事があんだ。……ティアナはギンガさん達を探して欲しい。んで、スバルには――」

そこで、ちらりと大英図書館——だったものに視線を移す。

スバルもそちらを向いて、顔を歪めた。さっきの事を思い出したのだろう。……助けられなかった人達を。

それでも、邪魔をしたシオンに何も言わないのは彼女が理解しているからに他ならない。あの時は、もう助けられる事は出来なかった。だが。

「——瓦礫の中に居る人達の救助を頼みたいんだ」

「で、でも……！」

「出る瞬間に、プロテクションを見える範囲で掛けといた。まだ消えてる感覚は無いから、多分大丈夫だろ」

続くシオンの台詞に、二人は目を丸くした。あの一瞬で、シオンはそれだけの事をやってのけたのである。

……全員は無理でも、出来うる限りの人を救う為に。そして——。

「お前は、お前の戦いをしろよ。……俺は、俺の戦いをしてくる」

「シオン……」

「ほっとけねえんだろ。お前だもんな。……それで、いいか？ ティアナ」

「——しようがないわね……」

実質の指揮官であるティアナは、シオンの言葉に苦笑。しかし、頷いてくれた。

悪い、とだけ彼女に告げてシオンは背にマウントしていたOIC Wを右手に下げる。

そして、跳躍しようとして——。一瞬だけ、スバルに目を向けた。

え？　そう、スバルが思うと同時。

「……ごめんな。さっき、思いっきりブン殴って」

「え？」

「そんだけ！ んじゃ、また後でな！」

「あ、シオン！」

言うだけ言うと、シオンは高く跳躍した。そのまま飛翔を開始。異形を追って行く。

スバルは、遠くなっていく彼の姿に唇を尖らせた。

あんなのズルイ。そう思う。だけど――。

……分かって、くれたんだ……。

「……よしっ！ それじゃ、ティア！」

「わかってるわよ。サーチャー、そっちにも飛ばすから。……しっかりやんなさい」

「うん！」

頷き、スバルはきつと瓦礫となった大英図書館を見遣った。

そこに閉じ込められ、まだ救いを求める人達を想う。

……助けるから。

きつと、きつと。

ぐつと、リボルバー・ナックルに包まれた拳を胸の前で握る。それは、まるで一つの誓いのようにであった。そして。

「見つけたわ……！ クロス・ミラージュ、マッハ・キャリバーと

同期して！——スバルっ！」
「うんっ！ 行つくぞお——！」

一撃！一

叫び、放たれる拳が瓦礫を吹き飛ばす。そうして出来た穴から、スバルは一気に崩壊した大英図書館へと侵入した。

これもまた、一つの戦い。

スバルは自分の戦いを果たすため、更に前へと進んだ。



少しだけ、時は遡る。

イギリス、ロンドン郊外にある『学院』に、一人の青年が立っていた。

その青年は、ゆったりとした白いローブを纏い。そして、金砂に流れる髪を風にたなびかせている。

もし、ここにグノーシスの人員が居たならば、誰しもが驚いたであろう。

何故なら、その青年はグノーシスにとってあまりに有名過ぎる人物であったから。

青年は笑う。綺麗な——綺麗過ぎて、恐気を伴う輝く笑顔をもつて。

浅く両手を広げ、天に翳す。その光景の、なんと神聖な事か。

「今日はいいい日だね。だって、全てがここから始まるんだから。……だけど、もっと楽しい方がいいかな？」

そう言った、途端に青年の足元から一気に魔法陣が広がった。

広がる、広がる——どこまでも、どこまでも、八角からなる魔法陣は広がっていく。

『学院』を、そしてロンドン全域すらも包むように魔法陣は展開し——そして、そこから無数に現れるものがあつた。

異形。そう、異形だ。

現れたものは、全て異形だったのである。生命として、間違つた。神を凌辱するかのような姿。

……しかし、これが全て”元は人間であつた”事など、誰が分かるだろう。

そして、異形と成したのが、この青年であるなど、誰が。

異形は、魔法陣が展開した全ての場所から這い出て来る。つまり、ロンドン全てに異形は現れ始めていた。

だが、青年はそれら全てに構わない。構う必要など無いのだ。だって、それらは全て青年にとって、なんの価値も無い患わしいものでしか無いのだから。

だから、ここに居る全ての人が——否、例えば世界全てを破滅させたとしても、青年の心は動かないだろう。

そう、青年は”希望を喪失した”存在。メタトロンの名を持つE X。彼の名は——。

「答えを聞きに来たよ。キャロ・ル・ルシエ。……いい答えを、ね」

クロス・ラージネス。

伊織タカトと対を成すEXにして、グノーシス”元第二位”。そして、ルシア・ラージネスの双子の兄は、そう呟いたのであった。

現地時間、11…45分。

イギリス首都、ロンドンは異形が犇めく魔都と化したのであった。

（中編に続く）

第五十八話「堕ちた巫女」 (前編) (後書き)

ども、テストメントであります♪

ふう……最近月刊状態が続くなあ……。

さて、今話。あえて言わせて下さい。キャロファンの皆様、怒らないでね♪ (汗)

いや、アンチをやりたいわけじゃないんですけど、酷い目に合わせ過ぎじゃね? と (笑)

俺は、あれです。好きなキャラほど、地獄に落とすの大好きなもんで (笑)

ええ、と言う訳で皆様。どうかお覚悟を——以上 (笑)

ではでは、また次回——♪

第五十八話「堕ちた巫女」 (中編1) (前書き)

はい、どもー♪ テスタメントです♪

……うう、月刊から週刊に頑張ってシフトしようと思いました、いろいろあって月刊から抜け出せませんでしたチクセウ。

つ、次こそは！ 次こそは週刊に戻すぞー！

そんな訳で、第五十八話 (中編1) どぞー♪

第五十八話「堕ちた巫女」(中編1)

イギリス首都、ロンドンが異形が徘徊する魔都となる、少し前。

グノーシス本部『月夜』は、一つの緊張に包まれていた。

現在、近隣の無人世界を謎の艦船が突破。地球に、向かって来ていると言う情報を受けてだ。

『月夜』の指令室で、管制官の報告を受けるのは第一位である叶トウヤである。

嘆息混じりに、前面一杯に展開したウィンドウに映る本田ウィルを見遣った。

「……それで、防戦はしたが突破されたと。そう言う訳だね？ ウイル」

《いや、ほんますんません。部隊預かつときながら……》

「構わない。死人をださなかったと言うだけでも僥倖だからね。……時に、ウィル。君は大丈夫かね？」

《……なんの事ですかね？》

「とぼけなくていい。完全融合したのだろう？ フェイル・ノートと。"ユニゾン・コア"の起動に多大な負荷が掛かることくらいは理解しているつもりだよ」

そこまで言われて、ウィンドウ越しにウィルは苦笑する。凶星と言う事だ。

おそらく敵との戦闘から離脱するために使ったのだろうが——ともあれ、これでしばらくウィルは使えないと言う事である。

他の位階持ちについても、周辺世界で今現在、ストラの部隊と交戦中だ。まさか、呼び戻す訳にもいくまい。それに、第四位のウィルが敗れたのだ。

最低でも、突破した艦の戦力は第三位以上の力を有していると見て間違いは無い。

つまりは——。

「突破した艦の迎撃には私が向かおう」

そう言う事であった。相手方の戦力が不明ならば、最大級の戦力をぶつけるのが定石だ。それが最強レベルの魔導士ならば、なおの事である。

……ただ問題は、それが組織の一番上——指揮権を持つ者と言う事だろう。

それが意味するのは、トウヤが敗れたなら則ち地球側の敗退を意味するのだから。

……まあ、それは言っても仕方のない事なのだが。

画面の向こうで、ウィルが一礼するのを見届けて、ウィンドウは閉じた。

それを確認するなり、トウヤは告げる。

「緊急発令。第一種戦闘配置。これより私は敵の迎撃に行く。それまで暫定の指揮権はユウオ・A・アタナシアに譲渡する」

「……うん、了解だよ。トウヤ、頑張ってね」

傍に控えていたユウオが、硬い表情で頷く。それに少しだけ微笑して、トウヤは立ち上がった。

そして振り向くのは、共に来ていたアースラ隊長陣である。彼女達の、何かを言いたそうな顔に、しかし即座にトウヤは首を振って見せた。

「現状、君達に使えない。理由は分かるね？」

「……それは――」

先頭の三人、その内の一人であるフェイト・T・ハラオウンが何かを言おうとして、だがトウヤはそれを許さない。

言うべき事を続けざまに言う。

「なのは君、フェイト君、シグナム君、ヴィータ君。君達四名のデバイスは、昨日から改造中だ。当然、今から戻す事は出来ない」

「やったら……！ 私や、ザフィーラなら！」

「申し訳ないが、足手まといだ。敵は少数、ならば私一人で十分。後は余分だ」

八神はやての反論にも、トウヤはにべも無い。しかし、それはあまりにも正論であった。

はやての真骨頂は、超長距離からの砲撃による撃ち合いにこそある。

しかし、前線に出られる人間が限られていると言う段階で、彼女を出すのは却下であった。

これが複数艦隊による攻撃ならば、トウヤも彼女にアースラ2ndで迎撃に出向いて貰っただろうが、敵は単艦である。

ならば、彼が一人で出る方が”どちらに転ぼうと”話しは早い。

全てを、トウヤは言わない――が、言わずとも、はやては言外に

含まれた意味を悟った。だからこそ、彼女は悔しげに顔を歪める。
だが、トウヤはそんな彼女にこそ満足そうに微笑した。ぽんぽんと、彼女の頭を軽く叩く。

「気持ちには分かるが、ここは任せてくれたまえ。なに、君達の出番は、すぐ後にあるさ」

「……なんか、トウヤさん、お兄ちゃんみたいで嫌やなあ……」

「何を言うかね。私はリアル長兄だよ？ 則ち君達も、私を兄と慕ってくれてよいのさ。さあ、『お兄ちゃん』『お兄様』『お兄さん』『アニキ』。好きなものを選んでくれたまえ……！」
『『遠慮します』』

そこだけはきっぱりと一同、揃って拒否した。……いや、『ふふ、照れ屋だね？』と言われても違うし。

そして、最後にトウヤは苦笑する高町なのはへと顔を向けた。その表情に浮かぶのは、若干の申し訳なさである。

「そんな訳だ。すまないね、なのは君。例の件は後回しと言う事になる」

「いえ、大丈夫です」

トウヤの謝罪に、しかしなのははすぐに首を横に振った。

例の件——つまり、ミッドに居るタカトへの霊脈を介したダイブの事だ。

こちらも重要と言えば重要だが、今は状況が状況である。待ってもらいより他はなかった。

トウヤはなのはの返答を聞いて、笑みに苦いものを混ぜて頷く。

「術式自体はユウオに預けてある。迎撃が終わった後、ダイブを敢行してくれたまえ」

……え？

トウヤの告げた台詞に、しかし聞いたなのは達は疑問を浮かべた。迎撃出来たのならば、彼自身がダイブを行えばいい話である。それが何故、ユウオに術式を託すのか。

彼女達の反応に、トウヤは肩を竦める。

「……どうにもね。嫌な予感があるのだよ。まあ、言わば保険さ。気にする事は無い」

『『はあ……』』

おどけたトウヤの答えに、釈然としないものを感じて——しかし、そう言われては何も言えずに、彼女達は曖昧に頷く。

それを見て、トウヤはもう一度だけ頷き。次の瞬間、バリアジャケットを瞬時に展開した。さらに、どこからともなく神槍ピナカを取り出す。

最強の破壊槍を彼は左手に下げて、上げた右手を振った。

「それでは——行ってくるよ」

笑い。直後、トウヤの姿は消えた。

向かったのだ、敵の迎撃に——そして、戦場に。



そして、イギリス。異母長兄の状況を知らない末弟の神庭シオン

は、全力での飛行魔法を使い、敵——大英図書館を輪切りにした異形を追っていた。

その中で思うのはただ一つである。……速い。それだけだ。

全力での飛行をこちらにはしているにも関わらず、追い付けないでいる——どころか、異形はこちらを引き離さんばかりの速度を出しているのだ。”街中を疾走して”。

障害物がある地面を走っているのに、空を飛んでいる自分より速いのだ。これが、どれだけとんでもない事か。

手に持つアサルトライフル。OICWを構えながら、しかしシオンは舌打ちする。

……これだけの速度で動いているとなると、究極の命中率を誇るOICWと言えど、流石に効果は期待出来そうになかった。

どうするか——そう思った、瞬間。

眼下を疾走していた異形の姿が消えた。

……!?

同時に覚えたのは、ぞっとする悪寒である。殆ど本能的にシオンは左手に握る刀を眼前へと叩き込んだ。

——そこに、閃くのは銀の三閃！

一戟！—

「っ！！ てめえ……！！」

だが、放たれた斬撃は三閃だけでは無かった。同時に引き起きた斬撃は九閃。

それ全てを辛くもシオンは斬り流して止まる――斬り流せたのは、単にまぐれだ。

そして、シオンの前に在るのは一つの異形。三mほどの体躯を持つ化け物であった。

全くこちらに察知させずに現れた異形にシオンは舌打ちする――ついでに、空に立つそれ自体に。

つまり、この異形は最初から空を駆ける事が可能であったと言う事だ。舐められていたのかどうかは知らないが、苛立ちを覚えるのは確かだ。

ようやく立ち止まった異形はと言うと、ぬぼーとこちらを見据えて両の大刀をぶら下げるだけである。今気付いたが、その顔？（首が長く伸びており、そうとしか表現出来ないのだ）は仮面で覆われていた。

一瞬だけ怪訝に思うも、シオンは即座に我に返る。すぐさま右のOICWを構えようとして――その前に、異形が突っ込んで来た。振りかぶられるのは、両の大刀！

「!? にゃろ……!」

刹那にこちらへと踏み込んで来た異形に、OICWを放つ暇は無い。訓練はしていても、専門では無いのだ。

代わりに、シオンは刀による迎撃を選択――しかし、それが悪手であると他ならぬ彼自身が知っていた。

何故なら、先の異形の一撃は”片手で繰り出されたもの”だったから。

片手で九閃の斬撃を同時に放たれるならば――両手になるとどうなるか明白である。倍だ。そして、その通りの斬撃が来た。

その体制から放たれるのは、上段からの斬撃！

下からの斬撃と、上からの斬撃が交差し――そして。

一戦！――

互いは、互いの身体に刃を打ち込んで、それぞれ逆方向に弾け飛んだ。



「があっ……痛っ……！」

逆方向――つまり、真下。アスファルトで舗装された地面に叩き付けられ、シオンは痛みを喘ぐ。

その左肩には、異形の刃を打ち込まれた裂傷が走っていた――深くは無い。だが、痛みは走るだろう事には違いは無い。

くそ、ともう一度シオンは毒づいて立ち上がり――しかし、すぐに眉を潜めた。

街が静か過ぎる事に、今気付いたからだ。空から人が落ちて来たのである。騒ぎが起きてもおかしくない。

いや、そもそも異形が走っていたのに何故、こんなにも静かなのか――答えは目の前にあった。

おそらく十歳くらいの子供が、磯巾着いそぎんちゃくを思わせる異形に丸ごと飲み込まれている現場を見て。

「……!？」

反射的にシオンは右のOICWを向け、発砲する。マズルフラッシュが走り、銃弾は真っ直ぐに礮巾着もどき？ に走り――そこで礮巾着もどきは異様な速度で飛び退いた。

よく見ると、上半身が礮巾着で下半身は人間のものであったのだ。はつきり言って気持ち悪い事この上ない。

しかし、空を数mも飛んだ礮巾着もどきは既に銃弾を躲す位置へと飛んでいた。これでは当たらない――筈であった。だが、ここでOICWの面目躍如である。

放たれた弾はぐると孤を描き、なんと跳躍した礮巾着もどきの背面へとその軌道を変えたのだ。

そして、そこで爆裂する！

一撃！一

これぞ、最悪の殺傷力を誇るエアバースブリットの極悪さである。OICWの命中補正で背に周り込み、そこから回避不可能なように自ら爆裂するのだ。

究極の対人銃と呼ばれる由縁はここにある。とりも直さず殺傷力が高すぎるのだ。しかし、相手が異形ならば、シオンとしてもその殺傷力は頼りになる。

続けて未だに宙へと在る異形に、OICWを連射。これには肝を冷やしたか、礮巾着もどきは迎撃の為に触手を伸ばし――だが、OICWの弾丸はその全てをジグザグにかい潜った。

一斉に礮巾着もどきの背へと回り、そして爆裂！

一撃・撃・撃・撃一

続け様に走る爆裂弾丸が、礮巾着もどきに叩き付けられる。地面に落ちる頃には、礮巾着もどきは既に墜ちていた。

異形の磯巾着が無力化したのに、シオンはようやく一息。O I C Wを掲げて苦笑する。

「……反則くせえなあ……これ。そりゃティアナも許さんわ」

これが一般銃扱いなのだから、グノーシスと言う組織は大概である。

ともあれ、シオンは空へと視線を向ける。だが、そこには自分を地面へと叩き付けた例の異形の姿はもうどこにも無かった。

それに嘆息し、とにかく磯巾着もどきから子供を助け出そうとして――シオンが見たのは、骨だけの子供の姿であった。

既に消化されてしまったのだろう。すまない、と心の中だけでシオンは謝罪する。

どうしようも無かったし、どうしようも出来ない事態だったが……それでも、助けられなかったと言う事には変わりはないのだから。

短い黙祷を終わらせ、シオンはすぐに周りへと感覚を巡らせる……居た。

やはり、周りを囲まれている――それも、全て異形に。

改めてO I C Wを構え直し、シオンは舌打ちした。

これだけの数の異形が、まさか自分の所だけに現れたとは考えにくい……つまり、より最悪な事にロンドン中にこんな化け物が徘徊している事になる。

それも、人を喰うような奴らだ。しかも、この期に及んで結界は張れていないと来ている――『学院』に何かあったのは明白であった。シオンは舌打ちを放つ。

「くっそ……何があったか分からねえが、最悪な事態ってのは間違いないねえな……とりあえずは――」

そう、シオンが呟いた瞬間。

一斉に異形が彼へと襲い掛かる！ その全てがろくな形ではない。そんな異形に向けて、シオンは刀を一閃。

神覇、参ノ太刀・双牙。

シオンを中心にして二条の魔力で形成された斬撃が吹き荒れ、円形状に異形を吹き飛ばす。

そして、即座にO I C Wを連射し何体かの異形を潰してシオンは不敵に笑った。

「てめえら……生きて帰れると思ってんじゃねえぞ！」

叫ぶシオンに、更に続々と現れる異形達。それは、ロンドン中に現れた異形全てであった。その数は千を超える。それら全てを相手取ったシオンの戦いが始まった――。

――だが、シオンは気付いていただろうか？ 自分が異形達を”一人たりとも”殺さずに居る事に。

無意識なのか、それとも直感が働いたのか、それは分からない。しかし、異形を――”異形に変えられた人間”を、彼は殺す事はしなかった。出来なかった。それが無意識的な行動だとしても。

シオンにはそれが出来なかったのである。



長距離の空間転移魔法を抜けて、トウヤは宇宙空間に実体化する。そこは既に太陽系外。地球まで光の速度を持ってしても時間が掛

かる場所であった。彼はふむ、と頷き、前を見た。

その視線の先——と言っても、常人には視認出来ない程遠くにではあるが、そこに一つの影を彼は見出だしていた。

黒の艦である。やたら鋭角な船であるが、次元航行して来たと言う事は、とりも直さず次元航行艦である事を意味していた。

——それが、ウィルの防衛網を抜いて突破して来た艦である事は誰の目から見ても明らかである。だが、一つ奇妙な機動を艦は見せていた。

トウヤが現れるまでは超高速で移動していたのに、突如速度を落としたのである——そして、ついには停止。

距離1100（11Km）程で、艦は完全に停まったのだ。それを無表情の顔で見るトウヤは一つの事実を悟る。

……誘い出された、かね。

この状況で敵がわざわざ停まってくれる理由など、それ以外にない。つまり、向こうの目的は最初っから自分にあった訳だ。

やれやれと嘆息し、とりあえずは定例通りの通達を行う。

《こちら、第97管理外世界代表、グノーシスだ。貴艦はこちらの領界に侵入している。速やかに引き返したまえ。さもなくば——》
《どうすると言うんだ？》

一戦！

突如として念話が投げつけられる。同時に来るのは刀による斬撃だった。

だが、その一撃はと言う事も無いとばかりに、トウヤが無造

作に振るったピナカの穂先により受け止められていた。

つい、と彼は背後へと視線を送る。そこに在ったのは一振りの刀を放った若い女性の姿であった。

漆黒の、身体のラインを浮き彫りにさせたスーツに、白のコート。そして、ボブにした白銀の髪に褐色の肌。

何より目を引いたのは右目の眼帯か。そこには義眼とおぼしきレンズが入っている。

トウヤはふむと頷き、続きの言葉を告げた。

《――貴艦を撃沈する》

《では、その勧告は不要だな。何故なら、貴様はここで死ぬのだから》

……これはまた、大きく出たものだね？

敵――そう、敵だ。それは間違いない――の、女性の言葉にトウヤは少しだけ苦笑する。最近、あまり言われる事の無い言葉だ。

聞き覚えがある限りでは、無尽刀アルセイオ・ハーデンが近い事を言っただくらいか。

ピナカを掴む左手に力を込める。すると、途端に女性が握る刀は跳ね上げられた。

一瞬、女性は目を大きく見開く――だが、直ぐさま刀を構え直した。鞘に納めて、抜刀の構えを取る。

そんな彼女に、トウヤは振り向きがてらピナカをぐりと回して、穂先を差し向けた。

《一応、規則なので問うてはおく。撤退の意思は無いのだね？》

《不要だと言った筈だ》

そうかね、とトウヤは頷き後ろへと回した艦をちらりと見る。
だが、艦は相変わらざる沈黙。……援軍を寄越す気配も無い。侮
られたか、それとも――。

――よほど、この女性を信頼しているか、だね。

大した自信である。その源は、あるいはウィルの報告にあった事
象が原因であろうか？　ともあれ。

《では――貴艦の撃沈及び、君を捕縛させてもらおうかね》
《出来るものならやってみろ――この”凶鳥”^{フツケバイン}を相手にそれが出来
るのならな！》

一閃！一

凶鳥？　と疑問を思う前に抜刀され、放たれたる斬撃！

しかし、横薙ぎの一閃はピナカの穂先に受け止められ――そして、
戦いは開始された。

……せっかちだね。

続く、二閃、三閃。しかし、そのどれもがトウヤがS字を描くよ
うに振るうピナカの穂先に、あるいは柄に受け止められ、流される。
確かに筋はいい。

だが、女性が振るう刀術は真性の刀術とは凡そ呼べないものであ
った。……おそらくは我流。それは、身近に刀術を専門として扱う
女性と異母弟を持ったが故に分かる事であったか。

刀術にあるべき、流麗な動きが彼女には無いのだ。

しかし、それもまた一つの戦法。我流故に、戦いを極めた人間達を知るトウヤは、それらを否定しない――だが。

《申し訳ないがね。その程度の技量で私を殺せると思っているのならば、考えが浅い!》
《なッ!?》

一閃!―

猛攻の僅かな隙を縫うようにして放たれる突きの一閃!
女性が反応出来たのは左の肩口を貫かれた後だった。そして、トウヤは止まらない。

《終わりだよ。捻れ穿つ――》
《ッ――!!》

後退する彼女に、しかしトウヤの前進はそれより遙かに速い。刹那の間を持ってしてトウヤは追い付くと、螺旋を描く一撃を放つ――!

対し、女性は上段からの一撃をカウンターで見舞おうとして。

その全てを、トウヤの一撃の前に潰された。

《螺旋》

一貫!―

其は風巻く螺旋の一閃。
宇宙空間に於いて、なお物理法則を意思によって超越された魔法

は威力を幾分も軽減させずに放たれる。

その貫撃は放たれた斬撃を容赦無く蹴散らし、女性へと疾駆。…
…彼女に出来たのは、僅かに身をよじる事だけであった。

一轟！一

——直撃。放たれた捻れ穿つ螺旋は確実に女性の身を撃ち貫き、その身を盛大に吹き飛ばす。

遮るものなき宇宙空間で、彼女の身は通常を遥かに超えて吹き飛んでいき、そして停止していた敵艦に打ちつけられる。

それらを見るトウヤの周りに走るのは僅かな空間の歪みであった。捻れ穿つ螺旋により、空間が捻切られて起きた余波である。

それだけの一撃を放ったトウヤの表情は、しかし優れないままだった。

僅かに手元のピナカを見る——そして、握る手を。そこには、微かな痺れがあった。

……なんだね。今の異様な手応えは……？

鉄——いや、鋼を撃ち貫いた感触とでも言おうか。間違っても人体の感触ではない。それを、トウヤは女性の身体に感じていた。

近いものは。そう、異母弟の伊織タカトが使う金剛体に近いだろう。自らの身体を鋼とする魔法。……それと近いと言う事は。

《やれやれ……とんでもないな。まるで分断が間に合わなかった…
…》
デイベイド

やはり、と言うべきか女性は生きていた。肩から先を失った右手

に呻きながらも笑っている。

……だが、そんな事はどうでもいい。トウヤからすれば、あの感触からすれば敵が健在であるのは確定事項なのだから。

それより気になったのは彼女の一言である。

……ディバイド分断……？

聞き慣れない言葉だ。少なくとも、初見には違いない。それが彼女の能力だとも言うのか……？

しかし、更に驚く現象が発生する。

《ッ……く》

呻きと共に、女性が力を込めたかと思うと右手が”生えて来た”のだ。……流石に、これにはトウヤも目を見張った。

《……なんだね、君は。万国ビックリ人間かね？》

《これを見ても、その程度の反応とはな。成る程、面白い。久しぶりに本気が出せそうじゃないか》

くく、と笑いながら女性は立ち上がり、刀を艦に突き立てて捨て置いた。

そして取り出したのは、一つの短刀である。おおよそ人を切れるようなものではない凶器としても不適格なものだ。……だが、トウヤはその短刀にこそ嫌な予感を覚える。あれは――。

【ディバイダー944、ケーニツヒ】

ぽつりと届く機械音声。同時に、女性が短刀を右の手の平に突き

刺す。

先の感触からは信じられない程滑らかに、刺さった短刀は根本まで埋め込まれた。

何を――？

そう思った、次の瞬間。

【リアクト】

一轟！――

《――――！！――》

魔力でも、なんでもない。未知のエネルギーの奔流が巻き起こった。

まるで竜巻の如く発生したエネルギーの渦はすぐに消える。そして現れたのは――。

《そう言えば、自己紹介がまだだったな。私の名はサイファー。フツケバイン・ファミリーの一人。そして、”世界を殺す猛毒”だ》
《……世界を殺す、だと？》
《そう、そして》

女性――いや、サイファーと自ら名乗った彼女は、両の手にいつの間にか握られた大刀を振るう。

その刀は、見るからに凶々しいデザインの代物であった。鰐元にリボルバーを思わせる弾倉が取り付けられ、刀身は漆黒。

そこに在ってはならないと――いや、”それは世界に在ってはな

らない”とトウヤは何故か直感した。

それは――。

《これが、ディバイダー944、ケーニツヒ・リアクテッド。”魔導殺しの双剣だ”！》

一轟一

直後、突っ込んで来たサイファアの両の斬撃を見て、今度こそトウヤは驚愕の声を上げたのだった。



「……？」

グノーシス、イギリス支部『学院』の一室でキャロ・ル・ルシエは目を覚ました。

どうやら、寝てしまったらしい。時計を見ると、もう昼であった。朝はちゃんと起きていたのに。

……ううん、ちがう……。

そう、違う。本当の所は朝まで眠れなかったのだ。ずっと、ずっと起きていた。後悔に泣きながら。

昨日の事である。シオンに思いっきり叫んだ事、ずっとその事をキャロは後悔していた。

部屋について、そして自分が何を彼に対して言ってしまったかを

理解して、ずっと泣いていた。

分かっていた。分かっていたのに……。

あの人が、自分の事を思っただけで怒った事。それをキャラは正しく理解していたのだ。

だけど、何故だろう。どうしてもあの時、あの人を自分は許せなかったのだ。

それが何故なのか——今でも分からない。ただ一つだけ言える事は、彼を傷付けたと言う事実だけであった。

素直に謝れたら、ごめんなさいと言えたら、どんなに良かったか。けど、どうしてもその一言が言えなくて。

結局、朝までずっと後悔しながら眠れぬ夜を過ごしたのだった。

……ひどい顔……。

ベッドから起きると、ちょうど姿見に自分の姿を見てキャラはそう思う。

涙で目は真っ赤、くまも酷いし、髪もぼさぼさだった。

いろいろ世間知らずと言われる彼女だが、もう十一にもなる少女である。やはり、そう言った部分が気にならない訳がない。

人前に出れないかも——そんな事を思いキャラは笑ってしまった。つい、自分がそんな事を考えているのが馬鹿らしく思えたからだ。

怒りは長く持続しないその理由を、何となくキャラは理解してしまふ。

元々が大事の事のない事だったのだ。謝ってしまえば、それで終わってしまう事。今までの怒りが、ただ単に意地によるものだと、

キャラは気付いたのだった。

ひとしきり笑うと、うんとキャラは一人頷く。

……ちゃんと、シオンお兄さんに謝ろう。

そう、決めた。だから。

ベッドから立ち上がり、そして――。

「やあ、キャラ・ル・ルシエ」

そんな、声を、彼女は聞いた。

姿見を見る。そこには、自分以外の人間の姿があった。

彼、は――。

「僕は言ったよね？ 君は何を望むの、と。答えを聞きに来たよ。さあ――」

茫然自失となったキャラの肩に手をそっと置き、耳元で囁く。

その声は天使のようで――そして。

「――答えを、聞こう」

最悪の、悪魔の声であった。

その日、キャラ・ル・ルシエは人生最悪の日を迎える――。

(中編2に続く)

第五十八話「墮ちた巫女」(中編1)(後書き)

はい、五十八話(中編1)終了であります♪

フツケバイン勢、ついに参戦！ うん、本格参戦はずっと後だけどね。ごめんよ(笑)

さて、今回多分五部か六部くらいになると思います。

いや、いろいろこの回でやらねばならん事がありまして(笑)
とりあえず予定としては。

・キャロ、人生最悪の日。

・あの人の本気。

・あやつの覚醒その1。

・なのは版、あの人は今(地球編)

と、なっております(笑)

……おいおい、六部で終わるのかーい？(笑)

キャロ人生最悪の日は、某槍使いな主人公は見ない方がよろしいレベルな代物と……うん、プロット組んだ時、マジに止めた方がいか悩むレベルで、うん(笑)

たまーに、思うんですがテストメントってこう明らかに精神病んでるだろと自分で思う時ありますマジに(笑)

引き金メンバーなら、ちょっと納得しそうでアレですが(笑)

あの人は今は、あの人とあの人とあの人とあの人――て、もういいわ！(笑)

まあ、せつかくのイギリス。彼等出さんと嘘でしょうと言う訳で。

キャロの画像に毎日「ごめんなさい」言いつつ執筆頑張ります♪

ではでは〜♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8877f/>

魔法少女 リリカルなのは StS,EX

2011年11月15日05時59分発行